

埼玉医科大学年報

(自己点検・評価報告書)

令和4年度

(2022年4月～2023年3月)



埼玉医科大学



目 次

A. 序 言

B. 総 論

1. 沿革	1
2. 埼玉医科大学の使命	5
3. 組織	6
4. 大学院	16
5. 医学部	20
1) 医学部	20
2) 教員代表者会議各種委員会	23
3) 学事	30
4) 入学、進級、卒業、入試	32
5) 教育カリキュラム (奨学金等)	36
6) 医学部の教員組織について	38
6. 保健医療学部	40
1) 保健医療学部	40
2) 教授会各種委員会	44
3) 学事	46
4) 入学、進級、卒業、入試	47
5) 教育カリキュラム (奨学金等)	52
7. 附属図書館	58
8. 医学教育センター	63
9. 医学研究センター	65
10. 国際交流センター	67
11. 情報技術支援推進センター	68
12. アドミッションセンター	69
13. 医療人育成支援センター	70
14. 教職員・学生健康推進センター	71
15. リサーチアドミニストレーションセンター	72
16. IRセンター	73
17. 学生部	74
18. 埼玉医科大学病院	75
19. 総合医療センター	79
20. 国際医療センター	80

C. 委員会・会議報告

1. 全体委員会	85
1) 倫理審査委員会	85
2) 図書館委員会	89
3) 埼玉医科大学自己点検・評価委員会	92
4) 埼玉医科大学学生部委員会	94
5) 喫煙問題検討委員会	96
6) COI管理委員会	98
7) 動物実験委員会	99
8) 全学RI安全委員会	101
9) 組換えDNA実験安全委員会	103
10) 特許等委員会	105
11) 環境安全委員会	107
12) グラント選考委員会	108
13) 研究活動並びに公的研究費等の適正化推進委員会	111
14) 病原性微生物等管理委員会	112
15) 教員短期留学制度選考委員会	114
16) 寄附研究部門設置委員会	115
17) 埼玉医科大学臨床研究審査委員会	116
18) ポリシー等策定委員会	119
19) 大学運営会議	121
20) 学校法人埼玉医科大学FD・SD統括委員会	124
21) 学校法人埼玉医科大学中央倫理審査委員会	126

	2 2) 全学共通データサイエンス AI 学修プログラム運営委員会	1 2 8
2. 大学院関連委員会	1) 大学院委員会	1 3 0
	2) 大学院医学研究科委員会	1 3 2
	3) 大学院看護学研究科委員会	1 3 6
	4) 大学院博士課程入学・語学試験委員会	1 3 9
	5) 大学院医学研究科博士課程運営委員会	1 4 1
	6) 大学院医学研究科自己点検・評価委員会	1 4 3
	7) 大学院医学研究科修士課程運営委員会	1 4 5
	8) 大学院看護学研究科修士課程運営委員会	1 4 8
	9) 大学院看護学研究科自己点検・評価委員会	1 5 2
3. 医学部関連委員会	1) 教員代表者会議	1 5 3
	2) 医学部教員組織運営会議	1 5 8
	3) 医学部自己点検・評価委員会	1 6 3
	4) 医学部学生部委員会	1 6 6
	5) 毛呂山キャンパス教員棟・会議室・講堂等管理運営委員会	1 6 8
	6) 毛呂山キャンパス整備委員会	1 6 9
	7) 卒前教育委員会	1 7 0
	8) 卒後教育委員会	1 7 6
	9) 医学部カリキュラム委員会	1 7 8
	1 0) 研究医養成プログラム運営委員会	1 8 1
	1 1) 毛呂山キャンパス中央研究施設運営委員会	1 8 3
	1 2) 医学部入学試験委員会	1 8 6
	1 3) 医学部入学試験実施委員会	1 9 2
	1 4) 埼玉県地域中医学士奨学金運営委員会・埼玉医科大学医学部地域医療奨学金運営委員会	1 9 6
	1 5) 地域救急医療連絡会議	1 9 8
	1 6) カリキュラム評価委員会	1 9 9
4. 保健医療学部関連委員会	1) 教授会	2 0 0
	2) 学務委員会 (医学教育センター保健医療学部領域)	2 0 3
	3) 保健医療学部学生部委員会	2 0 8
	4) 図書館委員会	2 1 3
	5) 保健医療学部自己点検・評価委員会	2 1 5
	6) 保健医療学部入学試験委員会	2 1 8
	7) 広報委員会	2 2 2
	8) 保健医療学部教員組織運営会議	2 2 8
5. 各種センター	1) 情報技術支援推進センター運営委員会	2 3 2
	2) 医学教育センター医学部領域運営委員会	2 3 3
	3) 医学研究センター運営会議	2 3 4
	4) リサーチアドミニストレーションセンター運営会議	2 3 6
	5) アドミッションセンター運営委員会	2 3 8
	6) 国際交流センター委員会	2 3 9
	7) 医療人育成支援センター運営会議	2 4 0
	8) IRセンター運営会議	2 4 5

D. 大学院

1. 医学研究科	2 4 7
2. 看護学研究科	2 5 2
3. 臨床腫瘍学 (がんプロ)	2 5 6

E. 医学部

基礎医学部門

1. 教養教育 (英語、物理、生物、化学、総合教育)	2 5 8
2. 解剖学	2 6 6
3. 生理学	2 7 0
4. 生化学	2 7 9
5. 薬理学	2 8 4
6. 病理学	2 8 8

7. 微生物学	2 9 2
8. 免疫学	2 9 7
9. 社会医学	3 0 0
1 0. 法医学	3 0 5
1 1. 医療政策学	3 0 8
1 2. 中央研究施設	
1) 中央研究施設 機能部門	3 1 0
2) 中央研究施設 形態部門	3 1 2
3) 中央研究施設 実験動物部門	3 1 6
4) 中央研究施設 R I 部門	3 1 9
5) 中央研究施設日高ブランチ 実験動物部門	3 2 2
6) 中央研究施設日高ブランチ 機能部門	3 2 4
1 3. 川越キャンパス・研究部	3 2 6
1 4. 医学教育学	3 2 9
1 5. ゲノム基礎医学	3 3 6
1 6. ゲノム応用医学	3 4 1
1 7. 寄附研究部門 (大学病院ゲノム医療科)	3 4 6

F. 臨床医学

毛呂山キャンパス (埼玉医科大学病院)

1. 1) 消化器内科・肝臓内科	3 4 8
1. 2) 消化管内科	3 5 7
1. 3) 心臓内科	3 6 0
1. 4) 呼吸器内科	3 6 2
1. 5) 内分泌内科・糖尿病内科	3 6 8
1. 6) 血液内科	3 7 4
1. 7) 神経内科	3 7 7
1. 8) リウマチ膠原病科	3 8 0
1. 9) 腎臓内科	3 8 6
1. 10) 感染症科・感染制御科	3 9 1
1. 11) 総合診療内科	3 9 4
1. 12) 消化器・一般外科	4 0 2
1. 13) 血管外科	4 0 4
1. 14) 乳腺腫瘍科	4 0 6
1. 15) 呼吸器外科	4 0 9
1. 16) 小児外科	4 1 1
1. 17) 整形外科・脊椎外科	4 1 4
1. 18) 脳神経外科	4 1 9
1. 19) 形成外科・美容外科	4 2 2
1. 20) 小児科 (小児科・新生児科)	4 2 6
1. 21) 皮膚科	4 3 6
1. 22) 泌尿器科	4 4 1
1. 23) 眼科	4 4 4
1. 24) 耳鼻咽喉科 (耳鼻咽喉科・神経耳科)	4 5 1
1. 25) 産科・婦人科	4 5 7
1. 26) 歯科・口腔外科	4 6 3
1. 27) リハビリテーション科	4 6 6
1. 28) 麻酔科	4 7 0
1. 29) 救急科	4 7 5
1. 30) 東洋医学診療科	4 7 8
1. 31) (1) 放射線科 (放射線科)	4 8 3
(2) 放射線科 (放射線腫瘍科)	4 8 7
(3) 放射線科 (核医学診療科)	4 8 9
1. 32) 神経精神科・心療内科	4 9 2
1. 33) 緩和医療科	4 9 8
1. 34) 臨床検査医学 (中央検査部)	5 0 5
1. 35) 中央病理診断部	5 0 9

1. 36)	輸血・細胞移植部	5 1 3
1. 37)	予防医学センター	5 1 5
1. 38)	ゲノム医療科	5 1 8
1. 39)	臨床中毒科	5 2 3
1. 40)	地域医療科	5 2 6
川越キャンパス (総合医療センター)		
2. 1)	消化器・肝臓内科	5 2 8
2. 2)	心臓内科	5 3 5
2. 3)	呼吸器内科	5 3 9
2. 4)	内分泌・糖尿病内科	5 4 3
2. 5)	血液内科	5 4 7
2. 6)	神経内科	5 5 6
2. 7)	リウマチ・膠原病内科	5 6 1
2. 8)	腎・高血圧内科	5 6 5
2. 9)	感染症科・感染制御科	5 7 1
2. 10)	総合診療内科	5 7 4
2. 11)	消化管外科・一般外科	5 7 7
2. 12)	肝胆膵外科・小児外科	5 8 1
2. 13)	血管外科	5 8 4
2. 14)	ブレストケア科 (乳腺腫瘍科)	5 8 7
2. 15)	呼吸器外科	5 8 9
2. 16)	心臓血管外科	5 9 5
2. 17)	整形外科	5 9 8
2. 18)	脳神経外科	6 0 1
2. 19)	形成外科・美容外科	6 0 6
2. 20)	(1) 小児科 (小児科)	6 0 8
	(2) 小児科 (総合周産期母子医療センター新生児科)	6 1 4
	(3) 小児科 (小児救命救急センター)	6 1 8
2. 21)	小児心臓外科	6 2 2
2. 22)	皮膚科	6 2 4
2. 23)	泌尿器科	6 2 7
2. 24)	眼科	6 3 3
2. 25)	耳鼻咽喉科	6 3 7
2. 26)	(1) 産婦人科 (産婦人科)	6 4 0
	(2) 産婦人科 (総合周産期母子医療センター産科)	6 4 6
2. 27)	歯科・口腔外科	6 5 1
2. 28)	リハビリテーション科	6 5 4
2. 29)	麻酔科 (麻酔科・産科麻酔科)	6 5 7
2. 30)	救急科 (ER)	6 6 0
2. 31)	高度救命救急センター	6 6 4
2. 32)	(1) 放射線科 (画像診断・核医学科)	6 6 9
	(2) 放射線科 (放射線腫瘍科)	6 7 6
2. 33)	神経精神科	6 8 0
2. 34)	緩和医療科	6 8 5
2. 35)	臨床検査医学	6 8 8
2. 36)	病理部	6 9 1
2. 37)	輸血部 (輸血細胞医療部・細胞移植療法部)	6 9 6
2. 38)	健康管理科	6 9 9
2. 39)	医療安全管理学	7 0 1
2. 40)	ゲノム診療科	7 0 3
日高キャンパス (国際医療センター)		
3. 1)	消化器内科	7 0 6
3. 2)	心臓内科	7 0 8
3. 3)	呼吸器内科	7 1 4
3. 4)	内分泌内科・糖尿病内科	7 1 8
3. 5)	造血器腫瘍科	7 2 1

3. 6) 神経内科・脳卒中内科	7 3 0
3. 7) 腎臓内科	7 3 4
3. 8) 腫瘍内科 (腫瘍内科・消化器腫瘍科)	7 3 7
3. 9) 感染症科・感染制御科	7 4 0
3. 10) 総合診療内科 (病院診療科)	7 4 2
3. 11) 消化器外科	7 4 4
3. 12) 乳腺腫瘍科	7 5 0
3. 13) 呼吸器外科	7 5 3
3. 14) 心臓血管外科	7 5 6
3. 15) 整形外科 (骨・軟部腫瘍科)	7 6 0
3. 16) 脳神経外科	7 6 2
3. 17) 形成外科	7 8 0
3. 18) (1) 小児心臓科 (小児心臓科)	7 8 3
(2) 小児心臓科 (小児心臓外科)	7 8 7
3. 19) 小児腫瘍科	7 9 1
3. 20) 皮膚科 (皮膚腫瘍科)	7 9 3
3. 21) 泌尿器科	7 9 8
3. 22) 耳鼻咽喉科 (頭頸部腫瘍科)	8 0 3
3. 23) 産婦人科 (婦人科腫瘍科)	8 0 8
3. 24) 歯科・口腔外科	8 1 3
3. 25) リハビリテーション科	8 1 5
3. 26) 麻酔科 (麻酔科、集中治療科)	8 1 8
3. 27) (1) 救急医学科 (救命救急科)	8 2 1
(2) 救急医学科 (小児救命救急科)	8 2 6
(3) 救急医学科 (精神科救命救急科)	8 2 8
3. 28) (1) 放射線科 (画像診断科)	8 3 2
(2) 放射線科 (核医学科)	8 3 5
(3) 放射線科 (放射線腫瘍科)	8 3 9
3. 29) 精神科 (精神腫瘍科)	8 4 4
3. 30) 緩和医療科	8 4 8
3. 31) 臨床検査医学	8 5 2
3. 32) 病理診断科	8 5 6
3. 33) 輸血・細胞移植科	8 6 0
3. 34) 医療安全管理学	8 6 3
3. 35) がんゲノム医療科	8 6 5
3. 36) 地域医療科	8 6 8

G. 保健医療学部

1. 看護学科	8 7 1
2. 臨床検査学科	8 8 5
3. 臨床工学科	8 9 7
4. 理学療法学科	9 0 3
5. 共通教育部門	9 0 9

H. 医学教育センター (医学部領域)

1. 教育主任部門	9 1 1
2. 教養教育部門	9 1 3
3. 卒前医学教育部門	9 2 0
4. 卒後医学教育部門	9 3 2
5. シミュレーション教育部門	9 3 3
6. 教育情報部門	9 3 6
7. Faculty Development 部門	9 3 8
8. 事務部門	9 4 1

I. 医学研究センター

1. 研究主任部門	9 4 3
2. 共同利用施設運営部門	9 4 5

3. 安全管理部門	9 4 7
4. フェローシップ部門	9 4 9
5. 研究評価部門	9 5 1
6. 研究支援管理部門	9 5 2
J. 国際交流センター	
1. 国際交流センター	9 5 4
K. アドミッションセンター	
1. アドミッションセンター	9 5 6
L. 教職員・学生健康推進センター	
1. 教職員・学生健康推進センター	9 5 7
M. 情報技術支援推進センター	
1. 情報技術支援推進センター	9 6 1
N. 医療人育成支援センター	
1. 卒前部門	9 6 4
2. 病院群臨床研修センター	9 6 5
1) 初期臨床研修部門 (大学病院)	9 6 7
2) 初期臨床研修部門 (総合医療センター)	9 7 0
3) 初期臨床研修部門 (国際医療センター)	9 7 1
3. キャリア形成支援部門	9 7 4
4. 生涯学習部門	9 7 5
5. 女性医師支援部門	9 7 6
6. シミュレーション教育部門	9 7 7
7. 地域医学推進センター	9 7 8
8. 地域枠奨学金部門	9 7 9
9. 基礎医学部門	9 8 1
O. リサーチアドミニストレーションセンター	
1. リサーチアドミニストレーションセンター	9 8 2
P. IRセンター	
1. IRセンター	9 9 2
Q. 資料	
1. 1) 人事 (教員異動)	9 9 5
2) 人事 (教員名簿)	1 0 0 0
3) 人事 (事務局)	1 0 0 9
2. 競争的資金・産学連携資金の獲得状況	1 0 1 0
3. 年譜	1 0 1 1

序 言

令和4年度は、COVID-19感染症のパンデミックが継続し、ロシアによるウクライナ侵攻が長期化の様相を示す中、エリザベス女王の死去、安倍元首相襲撃事件、岸田首相のウクライナ電撃訪問、WBCでの3大会ぶり3回目の優勝、世界各地で頻発した異常気象など、国内外で様々な出来事のあった1年間であった。

世界情勢が激動する中において、本学では5月14日に創立50周年記念式典が、盛大な中にも厳粛に開催されるとともに、第5次長期総合計画「挑戦」が策定され、次の50年に向けて歩みだす準備が整えられた。

以下に令和4年度の主な事項について概要を述べるが、詳細については関連委員会・会議の項を参照されたい。

1. COVID-19感染症対策

令和4年度に入るとともに第6波のピークは過ぎたが、7月に入ると新規感染者が急速に増加し、1日当たりの感染者数が東京都で3万人、国内で20万人を超え、いずれも過去最高を更新した。感染の第7波は8月にピークを迎え、その後次第に終息傾向を示したが、11月に入ると第8波が始まった。この間、本学では、理事長を対策本部長とする危機管理対策本部によって種々の対策が講じられた。ワクチンについては、6月に第4回目の接種が行われ、11月からはオミクロン株対応ワクチンの接種が開始された。学生教育に関しては、授業はオンラインと対面のハイブリッド形式で実施された。クラブ活動等の課外活動の制限は続き、各種の行事や式典も中止あるいは参加者を制限しての実施となった。研究活動は感染対策を講じて続けられたが、学術集会や各種講演会はオンライン開催が中心となった。診療面では、3病院ともにCOVID-19感染症患者の診療を行うとともに、通常診療にも注力した。感染対策の具体的な内容については、随時、学内ホームページの「対策本部からのお知らせ」欄を通じて教職員に到達された。

2. 医学教育分野別評価の受審

医学教育分野別評価は、日本医学教育評価機構（JACME）が、国内の医学部を対象に、当該医学部で実施されている医学教育を国際基準に基づいて評価するもので、認証された医学部は世界医学教育連盟（WFME）のリストに掲載され、「国際認証」を受けたものとなる。本学の实地調査は、令和3年の10月19日から22日の4日間にわたって行われたが、令和4年9月に認定証が授与された。認定期間は、令和4月10月1日からの7年間である。

3. 学事の運営

学事に関する重要事項は、学長のほか、「教育・入試等」、「研究等」、「大学院・国際化等」、「卒後・生涯教育等」「総務・渉外等」を担当する5名の副学長、医学部長、保健医療学部長、医学研究科長、看護学研究科長、大学事務部長を構成員とする大学運営会議で審議された。審議内容のうち、学部に関する事項は各学部の運営会議と教授会において、研究科に関する事項は各研究科の運営委員会と研究科委員会において検討され、実施に移された。また、実施内容については、学部および研究科に置かれた自己点検評価書委員会において、その適切性、有効性が検証され、その結果は全学自己点検評価委員会に報告された。全学自己点検・評価委員会は、年報に基づく自己点検・評価を行い、その結果は大学運営会議及び法人理事会に報告されるとともに、ホームページにて公開された。また、大学運営会議にもフィードバックされ、教育・研究活動のさらなる改善・向上のための基礎資料とされた。なお、IRセンターを始めとする各センターは、担当する事項についての情報収集、企画立案を行うとともに、実行部隊としての役割を果たした。

教職員間の情報共有ならびに意見交換を目的とした教授・教員総会は、7月16日（通算22回目）および12月17日（通算17回目）に対面およびオンラインのハイブリッド形式で行われた。両総会では、例年どおり理事長から法人の運営方針や財務状況などについての説明も行われた。

4. 任期制と人事考課

平成16年度に導入された任期制は、教員人事考課とともに、平成17年度以降、評価方法の改良を図りつつ、全教員に範囲を拡大し、継続して実施されている。令和4年度の教員任期制による再任判定については、該当者131名のうち、再任を希望する者は123名、再任を希望しない者は8名であった。再任希望者のうち人事考課で●（問題あり）の評定が付されている者を対象に、再任の可否に関する検討を行った。最終的に再任を希望する者123名全員が再任され、任期が更新された。

5. 文部科学省からの補助金

平成25年度から始まった私立大学等改革総合支援事業は、大学改革に全学的・組織的に取り組む大学に対する支援を強化するため、経常費・設備費・施設費を一体的に支援する文部科学省の事業である。申請カテゴリーのうち、基本となるタイプ1は、当初、「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」に沿った内容であったが、令和元年度から「Society5.0に向けた人材育成」に沿った内容に変更され

た。本学ではタイプ1～4のうち、タイプ1と4に申請を行ったが、昨年に続き、令和4年度はタイプ4のみの採択となった。

上記以外の文部科学省からの補助金については、令和4年度は「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」ならびに「医学部教育・働き方改革支援事業（メニュー1）」に選定された。前者は、「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成事業」と題する群馬大学との連携事業で、令和4年度から7年間にわたって継続する事業である。両県に共通する地域医療に関する問題を解決するため、両大学が連携して取り組む事業であり、メディアでも大きく取り上げられた。

6. 市民公開講座

一般市民を対象とした市民公開講座は、令和4年度で18年目を迎えたが、COVID-19感染拡大防止のため、対面とオンラインの併用での開催を5回行った。対面58名、オンライン175名の計233名の参加があった。今年度は、一般市民向け書籍の刊行はなかった。

7. 医学研究の振興および支援

学内の医学研究の振興、リサーチマインドの涵養を目的として、本年度も、法人、学長、3病院長による5種類の学内グラントの公募を行った。また、全学的な研究発表の場である「研究の日」は、COVID-19の感染拡大防止のため、対面とオンラインとの併用で開催された。

本学と国立大学法人埼玉大学との間で締結した包括連携協定に基づき、両大学間で行う共同研究に対して研究費の支援を行う取り組みは今年度で2回を迎えた。

令和4年度の外部資金の獲得状況は、競争的資金は365件(前期比4件増)、金額は578百万円(前期比115百万円減)、研究受託など産学連携資金は22件(前期比12件減)、金額は214百万円(前期比96百万円増)となり、合計387件、792百万円であった。

8. 国際交流

医学部の交換留学プログラムは28年目を迎えたが、COVID-19によるパンデミックのため、国境を越えた人の移動が制限され、プログラムの中止が続いたが、今年度は一部のプログラムを再開した。教員を対象とした短期留学の新規募集も再開された。

全学的な国際交流事業として平成18年度から始まった低学年を対象とした春季語学研修プログラムは、昨年度まで中断されていたが、今年度から再開された。

9. 埼玉医科大学グループ21世紀ビジョン実行戦略会議

創立50周年を機に、21世紀ビジョン会議と創立50周年事業実行委員会が再編・改組され、「埼玉医科大学グループ21世紀ビジョン実行戦略会議(飛翔会)」が設置されている。これにあわせて、「日本のメイヨークリニックを目指す会」は、飛翔会の下に設置された「埼玉医科大学FD・SD統括委員会」が担当している。令和4年度の「日本のメイヨークリニックを目指す会」全体集会は、5月14日に開催された創立50周年記念式典を充てることとした。

10. 長期総合計画

本学では長期総合計画にもとづいて大学運営が行われている。令和4年度は、第4次長期総合計画「飛翔」の7年目(最終年度)にあたる。これにあわせて、総括が行われ、その結果を踏まえて第5次長期総合計画「挑戦」が策定された。第5次長期総合計画「挑戦」の基本方針は、①教育・研究・診療の更なる質の向上、②国際化の推進、③危機対応の強化、④戦略的連携・情報発信の充、⑤安定した財務基盤の確立、であり、令和5年度から令和9年度までの5年間を、その期間としている。

11. 教員人事

森副学長・医学部長代行が、医学部長に任命された。任期は、令和4年4月1日から令和5年7月末までである。別所学長の任期が令和5年7月末で満了を迎えるため、次期学長の選考委員会が設置され、選考を進めることとなった。病院関係では、国際医療センター病院長の選考が行われ、佐伯病院長の再任が決定された。任期は、令和5年4月から令和7年3月までである。また、屋嘉比かわごえクリニック院長が再任された。任期は、令和4年8月から令和5年7月までである。

令和4年度の教授採用は4名(医学部4、保健医療学部0)、学内から昇格した教授は15名(医学部15、保健医療学部0)、退職した教授は17名(医学部15、保健医療学部2)であった。

12. 総括

令和4年度も、COVID-19感染症が世界中に蔓延する中の1年間であった。新規感染者数は、感染の新たな波を迎えるごとに増加したが、その一方で、ワクチン接種の進展および既感染者の増加によると思われる、重症患者数および死亡者数の減少傾向が認められるようになった。これにともない、感染予防のために設けられた様々な措置が徐々に解除される動きも見られるようになった。このような変化を背景に、感染症法上の位置づけを変更する検討が開始され、令和5年5月8日からCOVID-19感染症を2類から5類へ移行させることが国の

方針として正式に決定された。令和5年度は、本格的にポストコロナ時代を迎えることとなるか、注目される。

令和2年度の大学機関別認証および令和3年度の医学教育分野別評価が終了し、認定証が交付された。また、創立50周年記念式典も無事に終了し、関連する諸事業も順調に進められている。5月8日から感染症法上の位置づけが変更になるといっても、COVID-19によるパンデミックの終息は依然として見通せない状況にある。また、ロシアによる軍事侵攻が長期化の様相を呈し、不安定な世界情勢は当面続くものと思われる。見通しの立たない困難な外部状況が続くが、本学としては、自己点検と自己改革を継続することによって、安定した財務基盤を確立するとともに危機対応能力を高め、国際的に見ても遜色のない質の高い教育と診療を継続し、優れた研究成果を内外に発信し、学生からも、社会からも求められ、支持される大学で有り続けるよう努力を続けていくことが大切である。

1. 沿革

1. 沿革

埼玉医科大学の歴史は、母体となった毛呂病院の歴史にまでさかのぼる。

大学の前身である毛呂病院は、明治25(1892)年に院長 丸木 清太郎の下、毛呂地区に診療所として創立された。その後、大正8(1919)年に第2代院長 丸木 清に代わり、さらに昭和25(1950)年には第3代院長 丸木 清美に引き継がれた。その後、病院となり戦後の昭和27(1952)年より社会福祉法人に改組し、「限りなき愛」を基本理念に地域医療と福祉を連携させて運営してきた。昭和39(1964)年からは、社会福祉法人毛呂病院を総合病院として発展し、整備された。

そして昭和47(1972)年に、社会福祉法人毛呂病院の一部施設を移管して埼玉医科大学が設立された。大学設立後50年を経た、この令和4(2022)年までの沿革並びに主な出来事を以下に記す。

- 昭和47(1972)年4月 埼玉医科大学医学部開学（入学定員80名）
学長 落合 京一郎、理事長 栗原 浩、専務理事 丸木 清美、常務理事 丸木 清浩
- 昭和47(1972)年8月 埼玉医科大学附属病院開設 病院長 大島 良雄
- 昭和51(1976)年1月 神経精神科センター開設
- 昭和51(1976)年4月 入学定員80名より100名に変更（入学定員100名）
- 昭和53(1978)年4月 埼玉医科大学大学院医学研究科博士課程開設（入学定員50名）
- 昭和53(1978)年8月 理事長 丸木 清美
- 昭和57(1982)年8月 専務理事 丸木 清浩
- 昭和58(1983)年6月 附属病院長 宮川 正
- 昭和60(1985)年3月 埼玉医科大学総合医療センターを川崎市鴨田地区に開設 所長 坂元 正一
- 平成元(1989)年5月 附属病院長 東 博彦
- 平成元(1989)年10月 学長代行 宮川 正
- 平成02(1990)年8月 学長 石田 正統
- 平成06(1994)年4月 理事長 丸木 清浩
総合医療センター 所長 遠山 博
- 平成09(1997)年8月 学長 東 博彦、名誉学長 石田 正統、病院長 尾本 良三
- 平成10(1998)年7月 専務理事 濱口 勝彦
- 平成11(1999)年4月 総合医療センター 所長 安倍 達
- 平成12(2000)年4月 キャンパス呼称変更（毛呂山キャンパス、川角キャンパス）
- 平成13(2001)年1月 総合医療センター センター長 濱口 勝彦（専務理事）
6月 埼玉医科大学ゲノム医学研究センターを日高市山根地区に開設 所長 村松 正實
第1次長期総合計画「夢」（平成13(2001)年度～平成17(2005)年度）
- 平成14(2002)年1月 総合医療センター センター長 小川 雄之亮
- 平成14(2002)年6月 埼玉医科大学創立30周年記念式典・祝賀会
- 平成14(2002)年9月 総合医療センター センター長 飯沼 壽孝
- 平成15(2003)年5月 常務理事 丸木 清之、尾本 良三、藤森 貞夫
- 平成15(2003)年8月 医学教育センター設立 センター長 山内 俊雄
- 平成16(2004)年7月 埼玉医科大学かわごえクリニック開設 院長 川添 太郎
- 平成16(2004)年8月 学長 山内 俊雄、名誉学長 東 博彦、大学病院長 横手 祐二
埼玉医科大学附属病院を埼玉医科大学病院と改称
- 平成16(2004)年9月 総合医療センター センター長 吉本 信雄
- 平成17(2005)年2月 日高キャンパス地鎮祭
- 平成17(2005)年8月 総合医療センターセンター長を病院長と改称
医学研究センター設立 センター長 山内 俊雄
国際交流センター設立 センター長 野村 正彦
医学教育センター センター長 別所 正美
- 12月 埼玉医科大学保健医療学部 認可
- 平成18(2006)年3月 埼玉医科大学創立30周年記念講堂竣工

平成18(2006)年4月 埼玉医科大学保健医療学部開設 学部長 大野 良三
 (入学定員：看護学科80名・健康医療科学科80名・医用生体工学科40名)
 医学部教員組織の変革
 第2次長期総合計画「飛躍」(平成18(2006)年度～平成22(2010)年度)

平成18(2006)年7月 副理事長 濱口 勝彦、専務理事 丸木 清之、専務理事 尾本 良三、常務理事・事務局長 堀口 一夫

平成18(2006)年8月 地域医学・医療センター設立 センター長 横手 祐二

平成19(2007)年3月 大学機関別認証評価 適合認定
 医学部(1年次)を川角キャンパスから毛呂山キャンパスに移設

平成19(2007)年4月 埼玉医科大学国際医療センターを日高市山根地区に開設 病院長 松谷 雅生
 保健医療学部 理学療法学科を川角キャンパスに新設(入学定員40名)
 (看護学科・健康医療科学科・医用生体工学科・理学療法学科)

平成19(2007)年8月 アドミッションセンター設立 センター長 山内 俊雄
 医学研究センター センター長 松下 祥

平成20(2008)年4月 ゲノム医学研究センター 所長 岡崎 康司
 保健医療学部 入学定員の変更
 看護学科入学定員80名(入学定員80名)
 健康医療科学科入学定員80名より70名に変更(入学定員70名)
 医用生体工学科40名(入学定員40名)
 理学療法学科入学定員40名より50名に変更(入学定員50名)

8月 大学病院 病院長 片山 茂裕、名誉病院長 横手 祐二
 地域医学・医療センター センター長 鈴木 洋通

平成21(2009)年4月 医学部医学科入学定員100名より110名に変更(入学定員110名)
 アレルギーセンター設立 センター長 永田 真
 東洋医学センター設立 センター長 三村 俊英
 教職員・学生健康推進センター設立 センター長 今井 康雄
 情報技術支援推進センター設立 センター長 椎橋 実智男
 ゲノム医学研究センター 名誉所長 村松 正實

平成22(2010)年4月 医学部 学部長 別所 正美
 医療人育成支援センター設立 センター長 西村 重敬
 先端医療開発センター設立 センター長 西山 正彦
 国際交流センター センター長 松本 万夫
 医学部医学科入学定員110名より115名に変更(入学定員115名)
 埼玉医科大学大学院修士課程開設
 医学研究科医科学専攻(入学定員8名)
 看護学研究科看護学専攻(入学定員10名)

6月 かわごえクリニック 院長 佐々木 望、名誉院長 川添 太郎

平成23(2011)年3月 講義棟15号館 オルコスホール竣工

平成23(2011)年4月 医学部医学科入学定員115名より120名に変更(入学定員120名)
 医学教育センター センター長 荒木 信夫
 国際医療センター 病院長 小山 勇
 国際医療センター 名誉病院長 松谷 雅生
 第3次長期総合計画「誇り」(平成23(2011)年度～平成27(2015)年度)

8月 学長 別所 正美、副学長 吉本 信雄、名誉学長 山内 俊雄
 アドミッションセンター センター長 別所 正美

3月 東洋医学センター 病院組織へ移管
 先端医療開発センター 廃止

平成24(2012)年4月 教職員・学生健康推進センター センター長 池田 斎
 医療人育成センター センター長 三村 俊英

5月 専務理事 吉本 信雄、常務理事 田島 賢司

平成24(2012)年6月 事務局長 田島 賢司

平成24(2012)年9月 総合医療センター 病院長 堤 晴彦、名誉病院長 吉本 信雄

平成25(2013)年3月 学生ホール16号館 落合ホール竣工、学習棟開設

4月 医学部医学科入学定員120名より121名に変更(入学定員121名)

平成26(2014)年1月 教職員・学生推進センター センター長 丸山 義明

3月 大学機関別認証評価 適合認定

4月 医学部医学科入学定員121名より125名に変更(入学定員125名)

国際交流センター センター長 田中 淳司

5月 理事長 丸木 清之、名誉理事長 丸木 清浩

アレルギーセンター 病院組織へ移管

8月 大学病院 病院長 金澤 實

かわごえクリニック 院長 片山 茂裕

地域医学・医療センター センター長 別所 正美

平成27(2015)年3月 副理事長 吉本 信雄、専務理事 棚橋 紀夫

4月 副学長 土田 哲也、松下 祥、木崎 昌弘

医学部医学科入学定員125名より126名に変更(入学定員126名)

保健医療学部 学部長 加藤木 利行

保健医療学部 学科名変更 健康医療科学科より臨床検査学科へ変更

RAセンター設立 センター長 吉本 信雄

平成28(2016)年4月 医学部医学科入学定員126名より127名に変更(入学定員127名)

医学教育センター センター長 土田 哲也

国際交流センター センター長 藤巻 高光

教職員・学生推進センター センター長 富谷 智明

地域医学・推進センター設立 センター長 柴崎 智美

地域医学・医療センター 廃止

第4次長期総合計画「飛翔」(平成28(2016)年度～平成34(2022)年度)

5月 常務理事 茂木 明

6月 事務局長 茂木 明

8月 大学病院 病院長 織田 弘美

平成29(2017)年4月 医学部医学科入学定員127名より128名に変更(入学定員128名)

5月 ゲノム医学研究センター 所長 奥田 晶彦

8月 副学長 森 茂久

平成30(2018)年4月 医学部医学科入学定員128名より129名に変更(入学定員129名)

医学部 学部長 村越 隆之

医学教育センター センター長 森 茂久

保健医療学部 学科名変更 医用生体工学科より臨床工学科へ変更

平成31(2019)年4月 医学部医学科入学定員129名より130名に変更(入学定員130名)

国際医療センター 病院長 佐伯 俊昭

令和元(2019)年8月 かわごえクリニック 院長 屋嘉比 康治

9月 教育実習棟 カタロスタワー竣工

令和2(2020)年4月 ゲノム医学研究センター 所長 松下 祥

6月 専務理事 小山 勇

8月 大学病院 病院長 篠塚 望

副学長 三村 俊英

令和3(2021)年3月 大学機関別認証評価 適合認定

令和4(2022)年1月 医学部長代行 森 茂久

4月 副学長 竹内 勤

医学部長 森 茂久

5月 埼玉医科大学創立50周年記念式典

9月 総合医療センター病院長 別宮 好文

10月 医学教育分野別評価 適合認定

2. 本学の現況

○所在地

毛呂山キャンパス（法人本部、医学部、大学院、埼玉医科大学病院 他）

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38番地

川角キャンパス（保健医療学部 理学療法学科）

埼玉県入間郡毛呂山町川角981番地

川越キャンパス（総合医療センター 他）

埼玉県川越市鴨田1981番地

日高キャンパス（国際医療センター、ゲノム棟、保健医療学部 他）

埼玉県日高市山根1397番地1

川越ビル（かわごえクリニック他）

埼玉県川越市脇田本町21番地7

○学部等の構成

埼玉医科大学大学院

医学研究科 博士課程 生物・医学研究系専攻

社会医学研究系専攻

臨床医学研究系専攻

修士課程 医科学専攻

看護学研究科 修士課程 看護学専攻

埼玉医科大学

医学部 医学科

保健医療学部 看護学科，臨床検査学科，臨床工学科，理学療法学科

2. 埼玉医科大学の使命

埼玉医科大学は、社会の役に立つすぐれた臨床医を育成することを目的として、以下の建学の理念のもとに創立されました。

建学の理念

- 第1. 生命への深い愛情と理解と奉仕に生きるすぐれた実地臨床医家の育成
- 第2. 自らが考え、求め、努め、以て自らの生長を主体的に開展し得る人間の育成
- 第3. 師弟同行の学風の育成

大学の使命については以下のように規定し、学則に記載しています。

埼玉医科大学の使命

埼玉医科大学は教育基本法及び学校教育法の精神に則り、かつ、私学の特性を生かして専門的な知識と技能及び高い倫理性を身につけた実地臨床医家並びに保健医療技術者を育成することを目的とし、更に進んで新しい医学及び関連諸科学の研究並びに保健医療技術の向上に寄与することによって、広く人類の健康と福祉に貢献することを使命とする。

この使命をより明確なものとするため、平成11(1999)年に、建学の理念をさらに敷衍して「高い倫理観と人間性」、「国際水準の医学と医療」、「社会的視点に立った調和と協力」を柱とした「埼玉医科大学の期待する医師像」を定め、本学が育成を使命としている実地臨床医家の具体像を示しました。現在は保健医療学部の設置にあわせ、「埼玉医科大学の期待する医療人像」として以下のように規定し、本学の使命をより明確にしています。

埼玉医科大学の期待する医療人像

■高い倫理観と人間性の涵養

医療人は、生命に対して深い愛情と畏敬の念を持ち、病める人々の心を理解し、その立場に立って、十分な説明と相互理解のもとに医療を行わなければならない。

医療人は、豊かな人間性を育成すべく、常に倫理観を磨き、教養を積むことに努力しなければならない。

■国際水準の医学・医療の実践

医療人は、生涯にわたり常に最新の知識・技術を学び、自信を持って国際的に最も質の高い医療を提供するよう心掛けなければならない。

医療人は、医療における課題を自ら解決する意欲と探求心を持ち、国際的視野をもって医学・医療の進歩に貢献することを心掛けなければならない。

■社会的視点に立った調和と協力

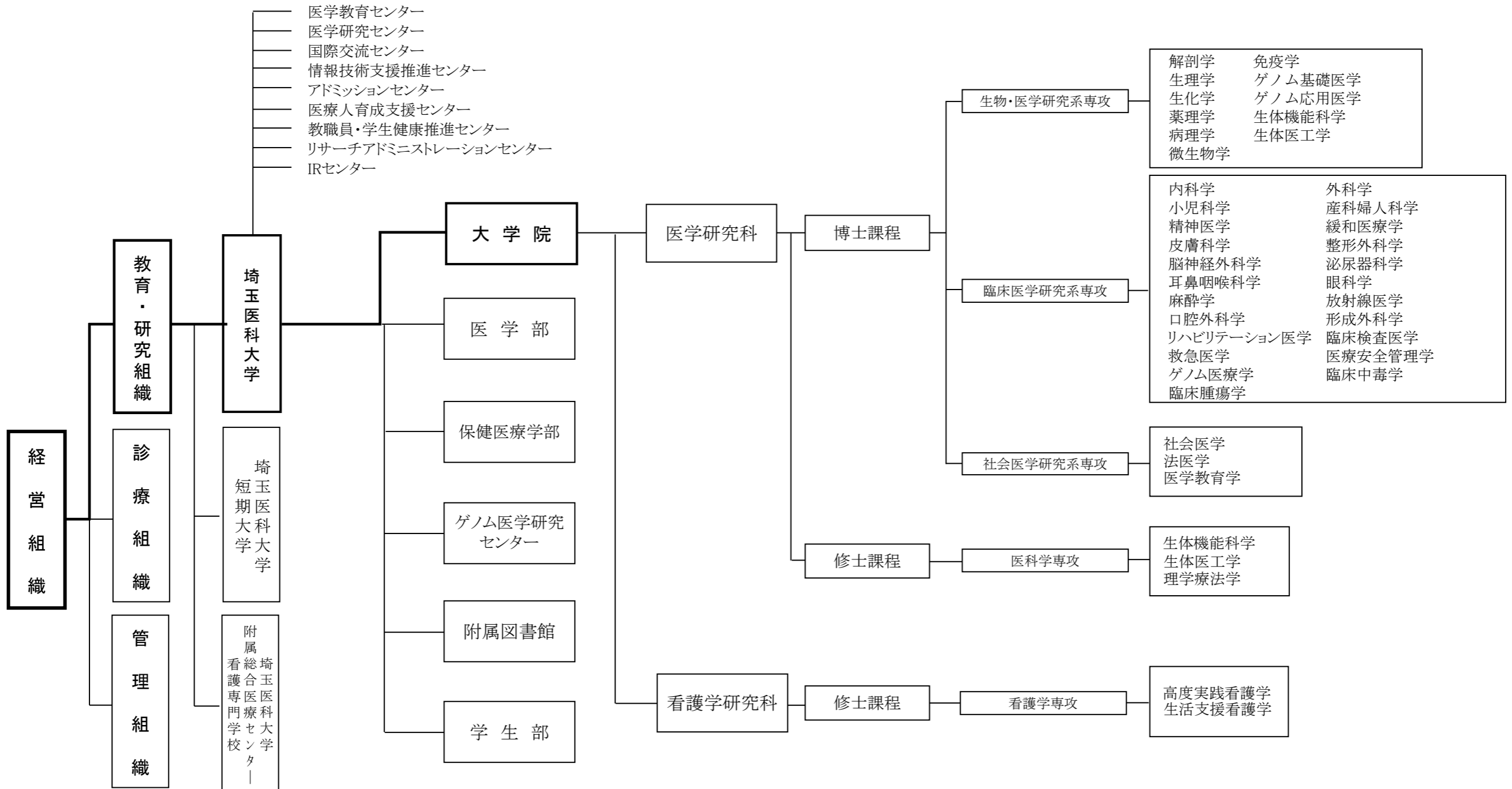
医療人は自らの能力の限界を自覚し、謙虚に他者と協力し、それぞれの立場で患者中心の医療を実践するために、統合力を磨かななければならない。

医療人は、社会的視野を持ち、健康の保持・増進、疾病の予防から社会復帰、さらに社会福祉に至る保健・医療全般に責任を有することを自覚し、地域ならびに国際社会の保健・医療に貢献しなければならない。

3. 組織

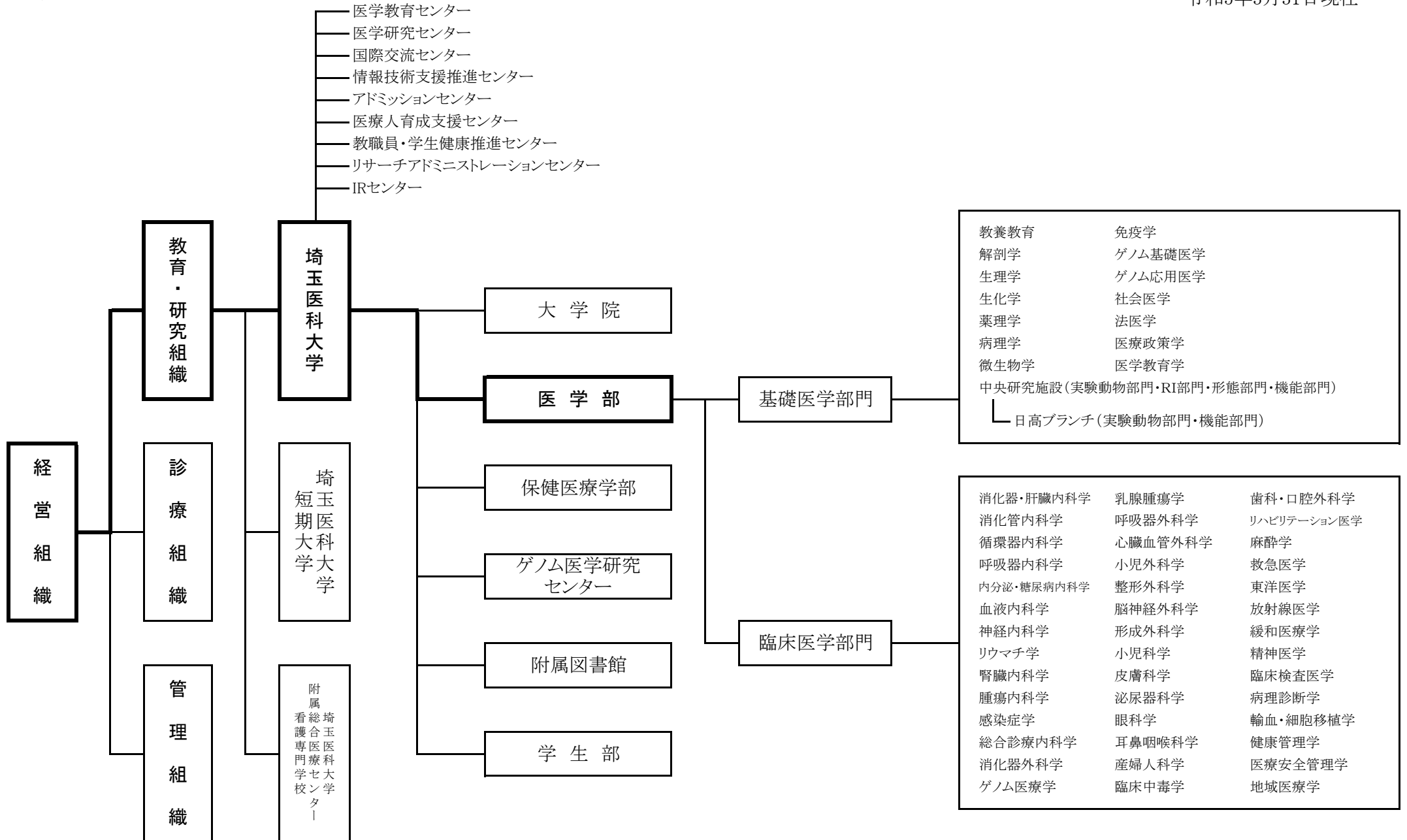
教育・研究組織〔1〕 埼玉医科大学大学院組織図

令和5年3月31日現在



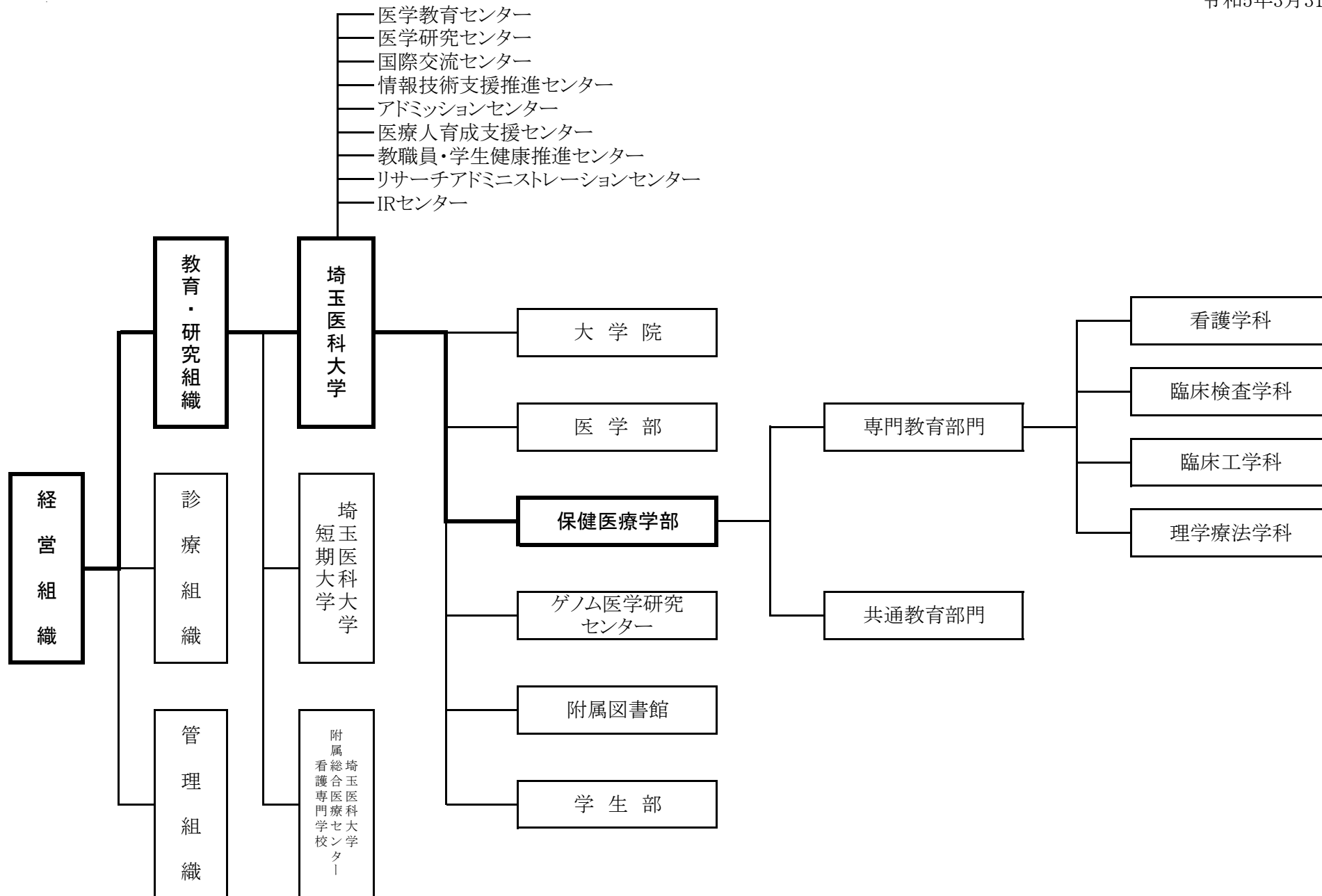
教育・研究組織 [2]
 埼玉医科大学医学部組織図

令和5年3月31日現在



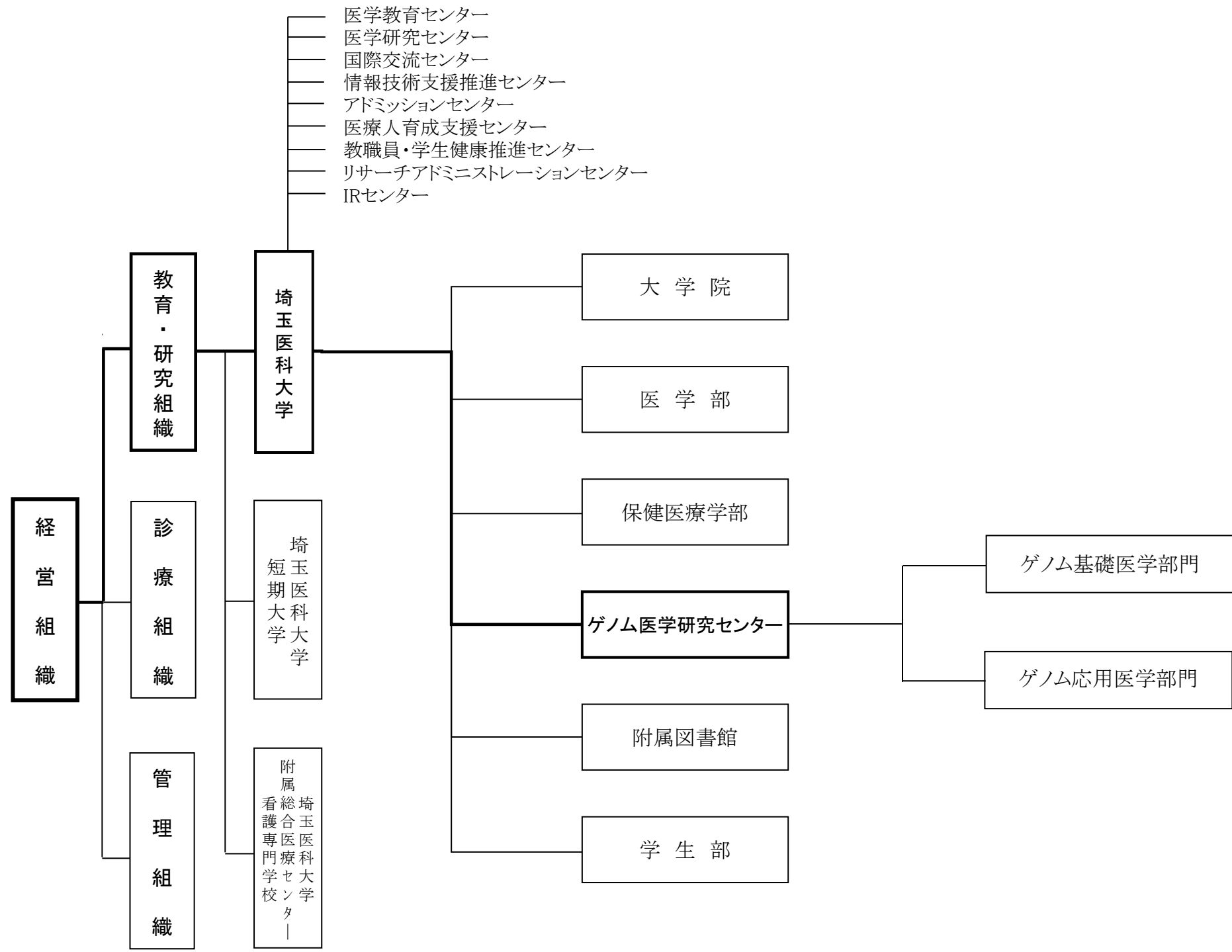
教育・研究組織 [3]
 埼玉医科大学保健医療学部組織図

令和5年3月31日現在

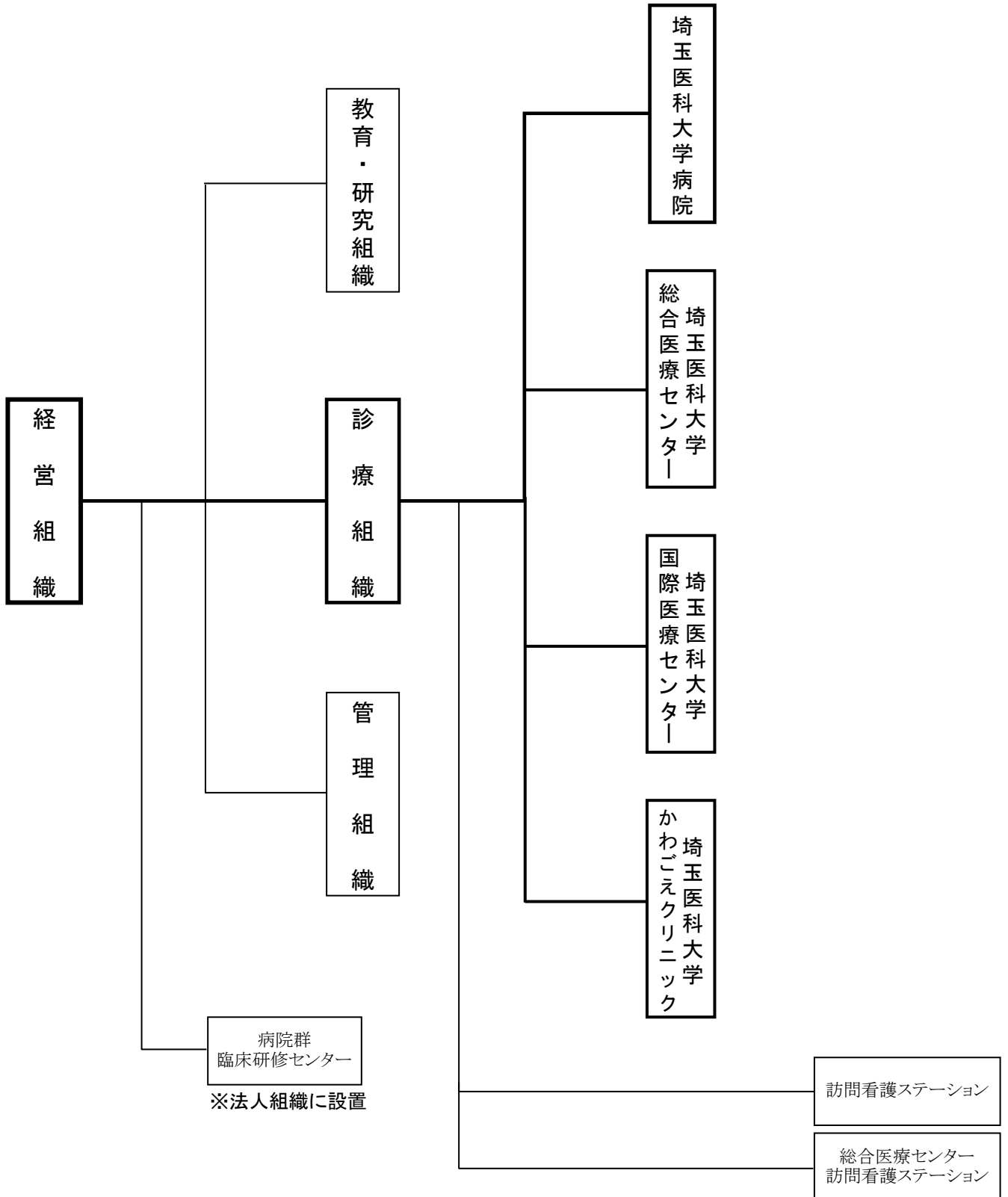


教育・研究組織〔4〕
 埼玉医科大学ゲノム医学研究センター組織図

令和5年3月31日現在

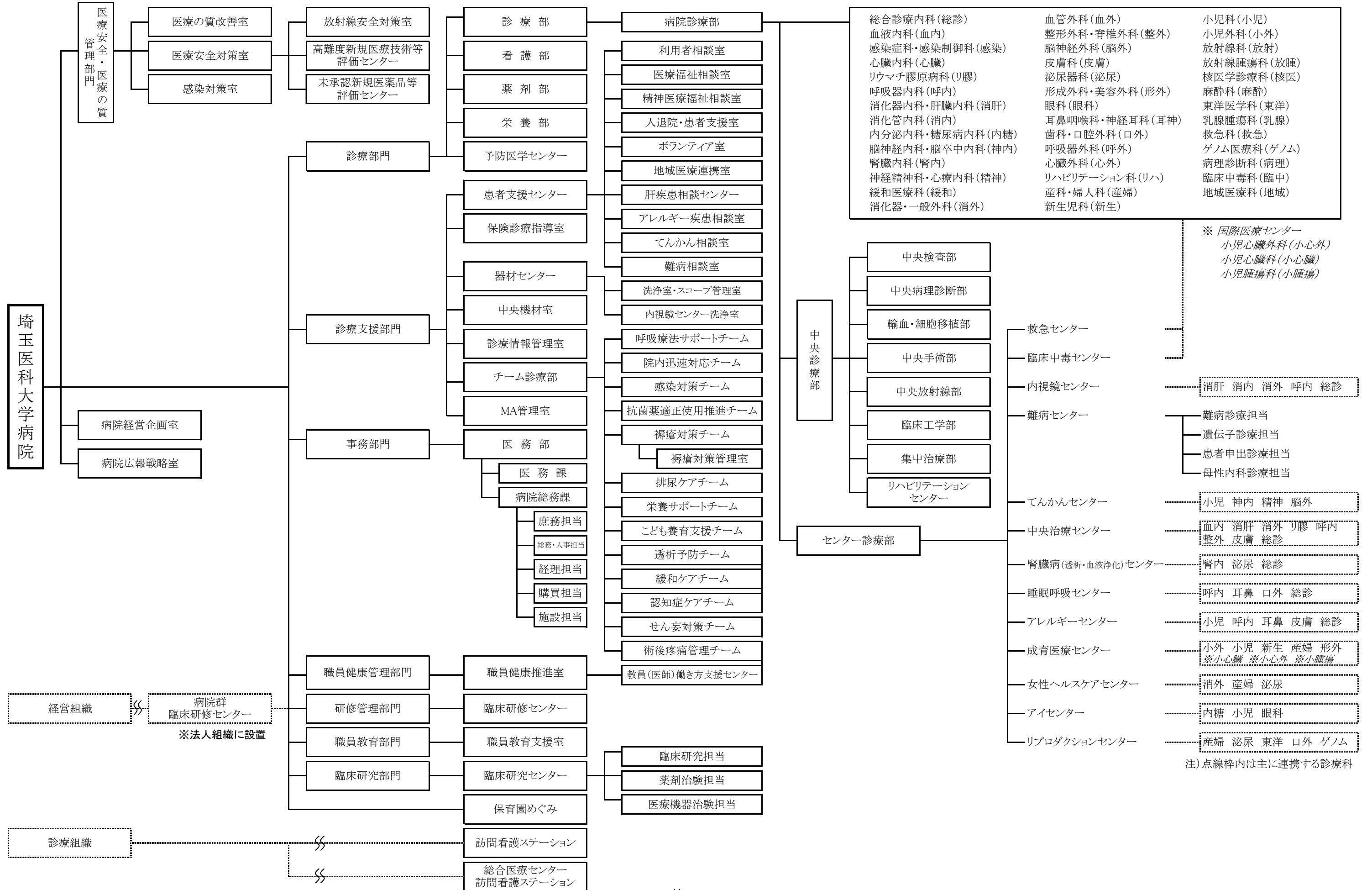


診療組織〔1〕 埼玉医科大学病院群組織図



診療組織〔2〕 埼玉医科大学病院組織図

令和5年3月31日現在

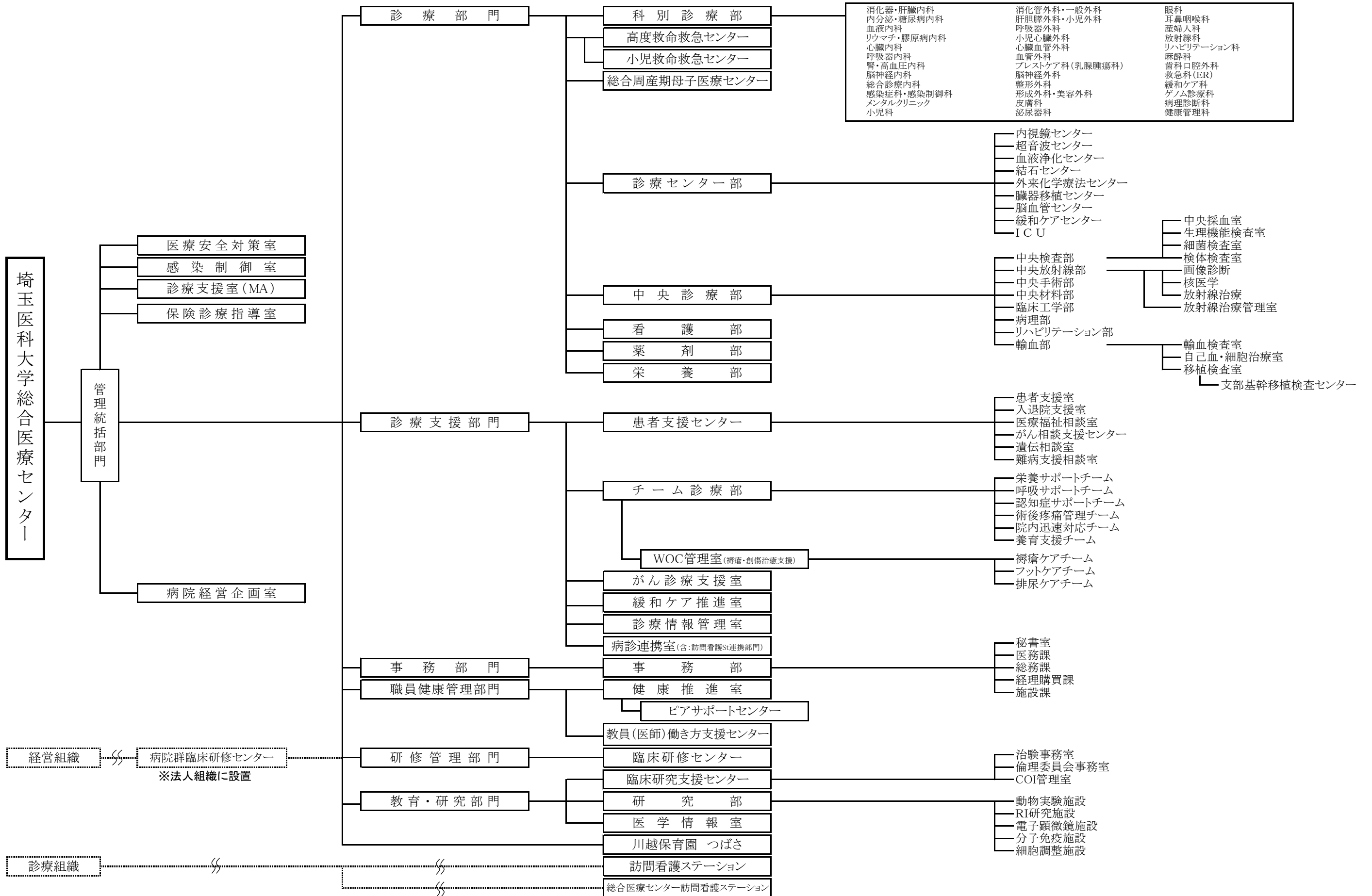


※ 国際医療センター
小児心臓外科(小心中外)
小児心臓科(小心中)
小児腫瘍科(小腫瘍)

注) 点線枠内は主に連携する診療科

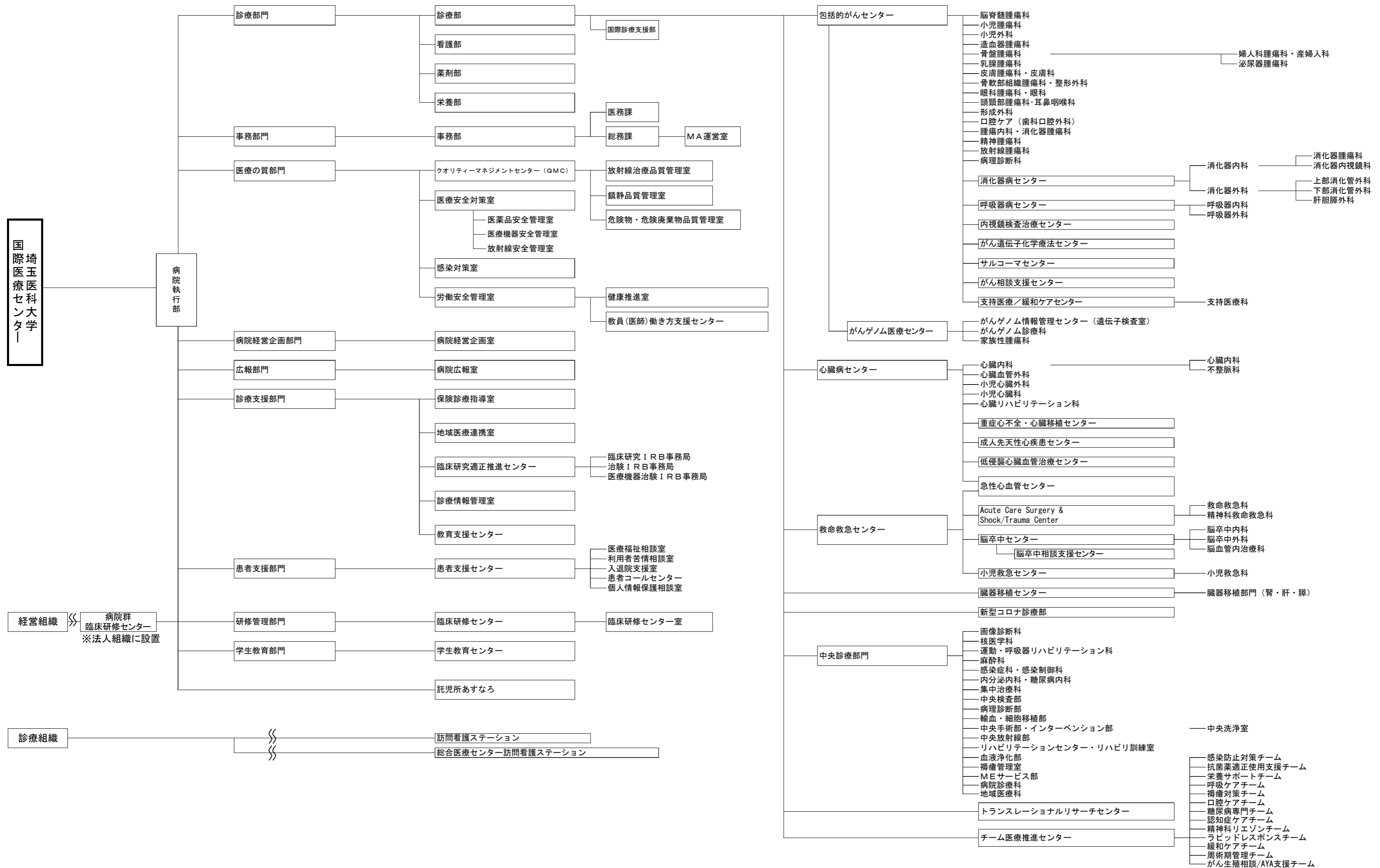
診療組織 [3] 埼玉医科大学総合医療センター組織図

令和5年3月31日現在



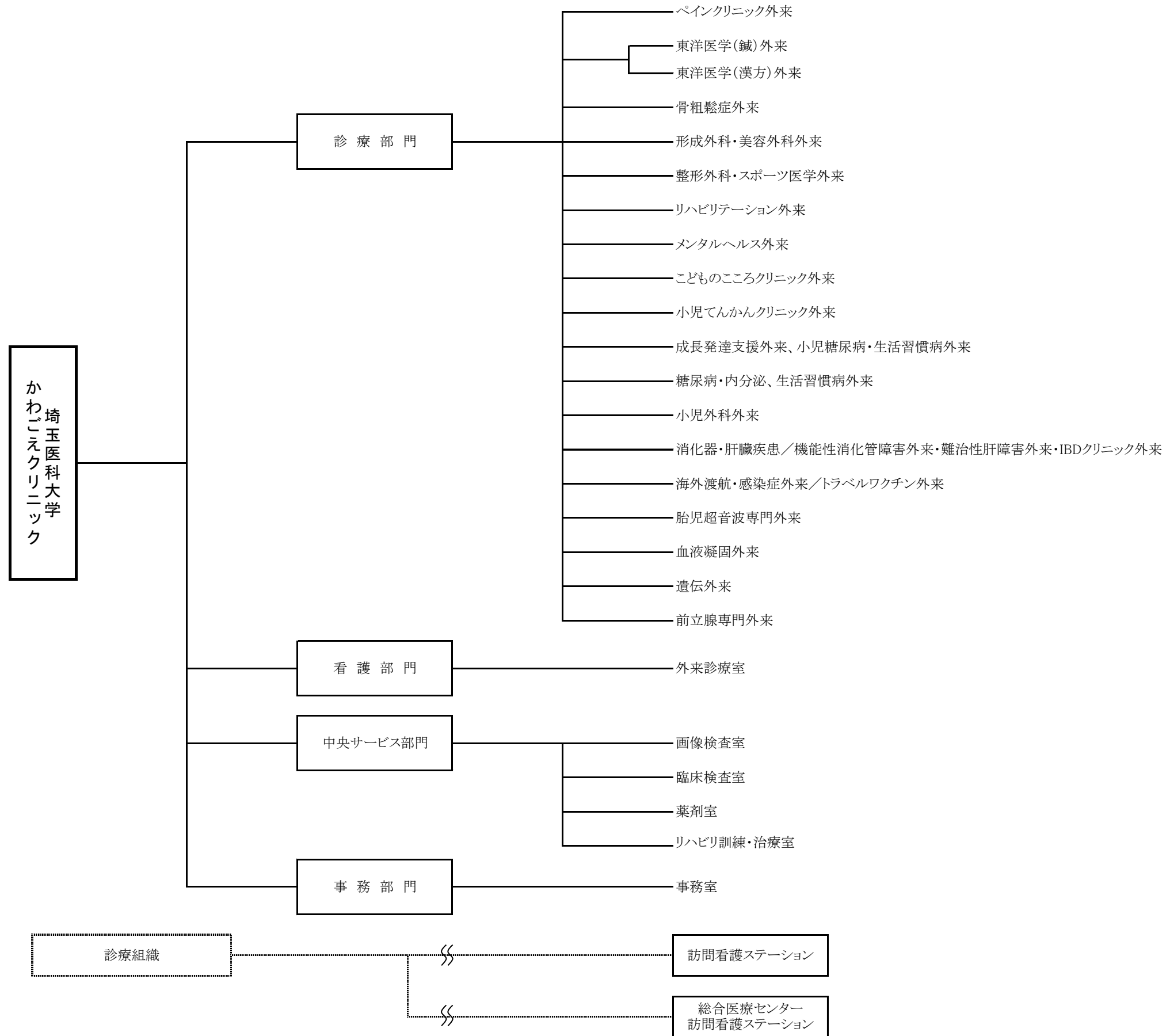
診療組織〔4〕 埼玉医科大学国際医療センター組織図

令和5年3月31日現在



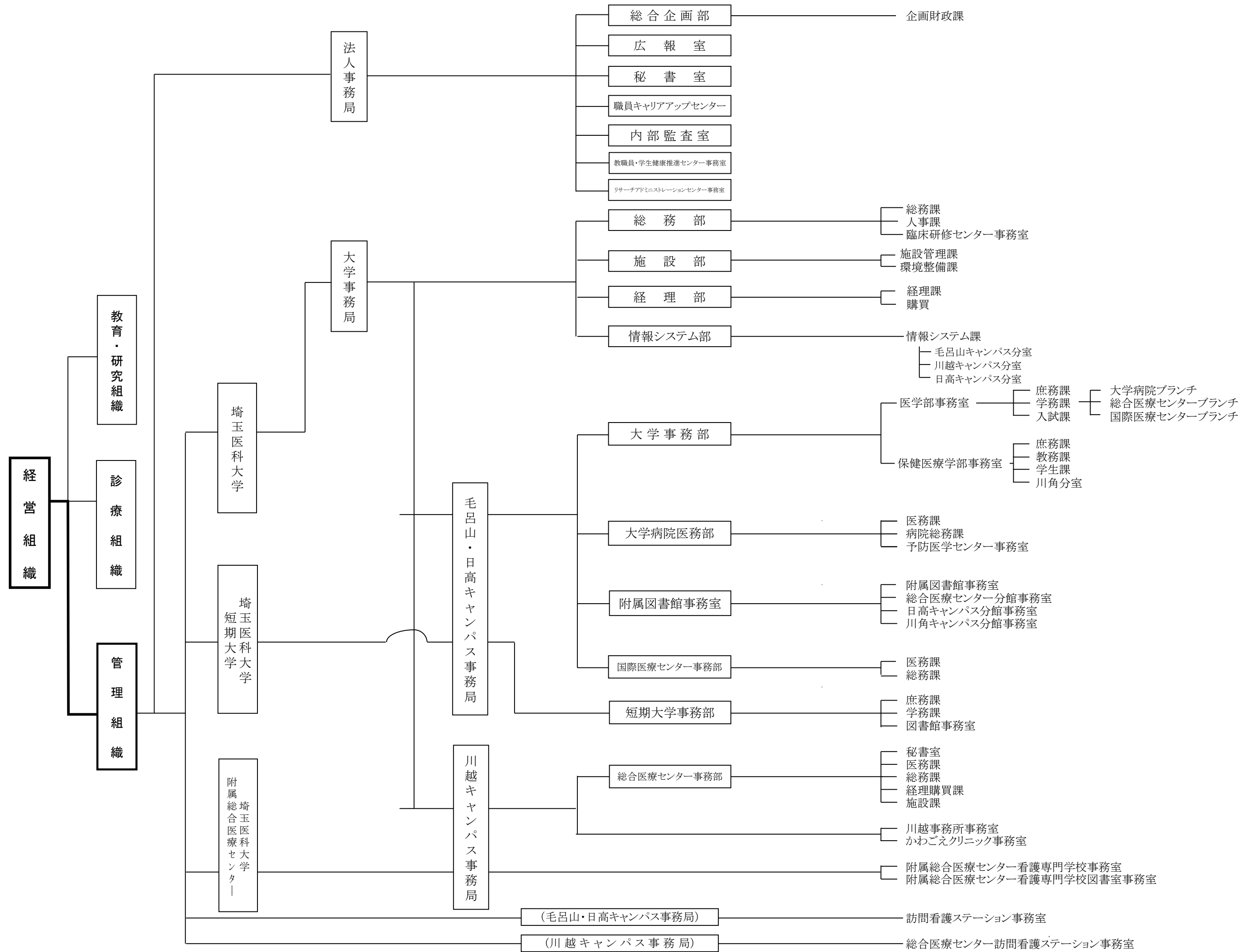
診療組織 [5] 埼玉医科大学かわごえクリニック

令和5年3月31日現在



管理組織
学校法人埼玉医科大学事務組織図

令和5年3月31日現在



4. 大学院

1 入学者

(医学研究科博士課程)
令和4年度大学院志願者

合格者	26名	(一般選抜1名、社会人特別選抜25名、外国人特別選抜0名)
入学者	26名	(一般選抜1名、社会人特別選抜25名、外国人特別選抜0名)

(医学研究科修士課程)

・医科学専攻
令和4年度大学院志願者

合格者	8名	(一般選抜5名、社会人特別選抜3名)
入学者	7名	(一般選抜5名、社会人特別選抜2名)

(看護学研究科修士課程)

・看護学専攻
令和4年度大学院志願者

合格者	11名	(一般選抜0名、社会人特別選抜11名)
入学者	8名	(一般選抜0名、社会人特別選抜8名)

2 大学院学生数内訳

①専攻別内訳

博士課程

令和4年度4月1日現在

	総定員	入学定員	1年次		2年次		3年次		4年次		合計
			男	女	男	女	男	女	男	女	
			生物・医学研究系専攻	40	10	0(0)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	
社会医学研究系専攻	16	4	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	1(1)	0(0)	2(2)
臨床医学研究系専攻	144	36	17(17)	7(7)	10(10)	4(3)	18(17)	10(6)	22(21)	6(6)	94(87)
計	200	50	17(17)	8(8)	11(11)	6(5)	19(18)	10(6)	24(23)	7(7)	102(95)

令和4年度10月1日現在

	総定員	入学定員	1年次		2年次		3年次		4年次		合計
			男	女	男	女	男	女	男	女	
			生物・医学研究系専攻	40	10	0(0)	1(1)	1(1)	1(1)	0(0)	
社会医学研究系専攻	16	4	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	1(1)	0(0)	2(2)
臨床医学研究系専攻	144	36	20(20)	5(5)	10(10)	7(6)	15(14)	7(5)	22(21)	9(7)	95(88)
計	200	50	20(20)	6(6)	11(11)	8(7)	15(14)	8(6)	25(24)	10(8)	103(96)

修士課程

	総定員	入学定員	1年次		2年次		長期履修生		合計
			男	女	男	女	男	女	
			医科学専攻	16	8	5(4)	2(0)	9(8)	
看護学専攻	20	10	0(0)	8(8)	3(3)	2(2)	0(0)	3(3)	16(16)
計	36	18	5(4)	10(8)	12(11)	4(3)	0(0)	3(3)	34(29)

()内は社会人学生

②外国人学生数

国費外国人留学生	1名
私費外国人留学生	2名

③その他

特別研究学生	4名	(男2名、女2名)
協力研究員	11名	(男10名、女1名)
博士課程研究生	54名	(男42名、女12名)

医学研究科博士課程

No.	種	学位記番号	氏名	学位論文タイトル
1	乙	1540	吉田 智昭	Lactobacillus crispatus promotes invasion of the HTR-8/SVneo trophoblast cell line Lactobacillus crispatusは、トロホプラスト細胞株であるHTR-8/SVneoの浸潤を促進させる
2	乙	1541	東 美樹	Long noncoding RNAs transcribed downstream of the human β -globin locus regulate β -globin gene expression ヒト β -グロビン遺伝子座下流で転写される長鎖ノンコーディングRNAは β -グロビン遺伝子発現を制御する
3	乙	1542	川邊 学	電磁環境の収集機能を有した医用テレメータ管理支援システムの構
4	乙	1543	高村 さおり	Interleukin (IL)-13/IL-22/IL-31 skewing within the skin-homing T-cell population in papuloerythroderma 丘疹紅皮症の皮膚指向性T細胞集団におけるインターロイキン(IL)-13/IL-22/IL-31の偏り
5	乙	1544	葭葉 茂樹	Late Recovery of the Cardiopulmonary Exercise Capacity after Transcatheter Amplatzer Device Closures for Atrial Septal Defects in Adults 成人例でのAmplatzer閉鎖栓による心房中隔欠損閉鎖術後運動能力回復に対する
6	乙	1545	野口 翔平	帝王切開術におけるsequential combined spinal epidural anesthesiaの有用性
7	乙	1546	内田 貴裕	Clinical evaluation of rush immunotherapy using house dust mite allergen in Japanese asthmatics 日本人喘息患者に対しての純化ダニ・アレルゲン急速免疫療法の臨床効果
8	甲	1547	石橋 朗	トファシチニブによる潰瘍性大腸炎寛解導入療法における薬剤治療反応性バイオマーカーとしての血清IL2レセプター α の有用性の探索的検討
9	甲	1548	香川 誠	Prevalence and clinicopathological/molecular characteristics of mismatch repair protein-deficient tumours among surgically treated patients with prostate cancer in a Japanese hospital-based population 日本の病院を拠点とする集団における外科的に治療された前立腺癌患者におけるミスマッチ修復タンパク質欠損腫瘍の有病率と臨床病理学的/分子的特徴
10	甲	1549	今井 一男	Rapid and accurate species identification of mitis group streptococci using the MinION nanopore sequencer ナノポア型シーケンサー (MinION) を用いたMitis group streptococcusの迅速かつ正確な同定法の開発
11	乙	1550	池上 方基	Clinical features of ruptured very small intracranial aneurysms (< 3 mm) in patients with subarachnoid hemorrhage 微小脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血の臨床的特徴
12	乙	1551	里村 敦	Clinical Significance of Insulin Peptide-specific Interferon- γ -related Immune Responses in Ketosis-prone Type 2 Diabetes Ketosis-prone Type 2 Diabetes (KPD)におけるインスリンペプチド特異的インターフェロン γ 関連免疫応答の臨床的意義
13	乙	1552	松田 真輝	Single-staged laparotomy versus multiple-staged laparotomy for traumatic massive hemoperitoneum with hemodynamic instability: a single-center, propensity score-matched analysis 単施設傾向スコアマッチング解析を用いた循環動態不安定な外傷性大量腹腔内出血症例に対する一期的手術と二期的手術の治療成績の比較検討
14	乙	1553	鈴木 麻未	治療ガイドラインに沿った大腸癌サーベイランスの妥当性の検討 -特にCEA測定単独検査の意義について-
15	乙	1554	棚橋 伊織	Association between psychotropic prescriptions and the total amount of psychotropics ingested during an intentional overdose: A single-center retrospective study 向精神薬処方と意図的な過量服薬時の向精神薬過量服薬量との関連：単施設後方視的研究
16	乙	1555	原 佑樹	The Utility of Texture Analysis of Kidney MRI for Evaluating Renal Dysfunction with Multiclass Classification Model 多クラス分類モデルを用いた腎臓MRIのテクスチャー解析による腎機能障害評価の有用性
17	乙	1556	石川 昌一	Endovascular therapy and free flap transfer in chronic limb-threatening ischemia 包括的高度慢性下肢虚血に対する血管内治療と遊離皮弁移植

18	甲	1557	三上 慎太郎	Nintedanib induces gene expression changes in the lung of induced-rheumatoid arthritis-associated interstitial lung disease mice 関節リウマチ関連間質性肺疾患マウスの肺におけるニンテダニブが引き起こす遺伝子発現変化
19	甲	1558	金田 光平	埼玉県内4大学による専門職連携実習のコンピテンシーに基づく成果の検討
20	甲	1559	井川 佑郎	Early changes in photopic negative response in eyes with glaucoma with and without choroidal detachment after filtration surgery 脈絡膜剥離の有無における濾過手術後早期の緑内障の明所視陰性反応
21	甲	1560	竹内 優太	Expression of programmed cell death-1 on neuroblastoma cells in TH-MYC transgenic mice TH-MYCトランスジェニックマウスの神経芽腫細胞におけるPD-1の発現について
22	甲	1561	清水 朋実	びまん性大細胞型B細胞リンパ腫における高内皮細静脈の形態学的特徴と臨床病理学的意義
23	甲	1562	高井 彩也華	Application of fluorescence in situ hybridization in distinguishing acral melanoma in situ from acral junctional nevus on the volar skin in Japanese patients 日本人の掌蹠の上皮内悪性黒色腫と境界母斑の鑑別におけるFISH法の応用
24	甲	1563	芳賀 光洋	Changes in in-hospital survival and long-term neurodevelopmental outcomes of extremely preterm infants: A retrospective study of a Japanese tertiary center 超早産児の生存退院率および長期神経学的予後の推移：日本の3次施設の後ろ向き
25	甲	1564	平塚 美由起	Tumor budding and fibrotic focus-proposed grading system for tumor budding in invasive carcinoma no special type of the breast 腫瘍簇出と線維化巣-浸潤性乳管癌の悪性度を正確に評価するための新しい腫瘍細胞の簇出分類
26	乙	1565	山本 梓	Prevalence and molecular characteristics of DNA mismatch repair deficient endometrial cancer in a Japanese hospital-based population 病院ベースの日本人集団における子宮内膜癌のDNAミスマッチ修復欠損の頻度と分子生物学的特徴
27	乙	1566	佐々木 貴優	Automatic Determination of the Center of Macular Hole Using Optical Coherence Tomography En Face Images 光干渉断層撮影のen faceイメージを用いた黄斑円孔中心の自動計測法の検討
28	乙	1567	関根 康雅	The survival rate of patients with burns induced by explosions was significantly higher than that of common burn cases: A nationwide observational study using the Japan Trauma Data Bank 爆発による熱傷患者の生存率は、一般的な熱傷患者より有意に高い：日本外傷データベースを用いた全国規模の観察研究

医学研究科修士課程

No.	学位記番号	氏名	学位論文タイトル
1	修医第100号	小野寺 梓	埼玉医科大学病院で分離された <i>Nocardia</i> 属の菌種同定と薬剤感受性に関する検討
2	修医第101号	川田 真衣	Papanicolaou染色のラット中枢神経組織における色素分布についての研究
3	修医第102号	神林 宏汰	身体活動量に影響を与える要因の検討- 回復期リハビリテーション患者の退院前後の歩数や生活範囲に着目して -
4	修医第103号	久喜 啓誉	低骨密度・低筋肉量の重複が地域在住高齢者のフレイル、ロコモティブシンドロームに与える影響
5	修医第104号	清野 健人	高校生サッカー選手の慢性足関節不安定症に関する身体的特性と足関節捻挫に対するウォーターバッグを用いた神経筋トレーニング効果の検討
6	修医第105号	仲川 穂高	腰痛患者に対して身体的・心理社会的要因からみた徒手療法の効果について
7	修医第106号	樋口 裕大	光相関ファイバーイメージングによるマイクロ内視鏡の開発

8	修医第107号	福田 大空	心臓血管術後の患者における運動耐容能に影響を与えるShort Physical Performance Battery下位項目の検討
9	修医第108号	森 仁志	慢性腰痛患者に対する徒手療法と認知行動療法の有効性に関する基礎研究

看護学研究科修士課程

No.	学位記番号	氏名	学位論文タイトル
1	修看第74号	川端 泰子	市町村保健師の職業的アイデンティティとその関連要因
2	修看第75号	芦澤久美子	脳卒中発作後早期の患者の家族が捉える『生活の見通し』 -テキストマイニングを用いた自由記述からの分析-
3	修看第76号	板垣 卓美	高度実践看護を担う看護師のキャリア志向とワーク・エンゲイジメントの関連-キャリア選択ごとの分析 -
4	修看第77号	島田 敦	青年期炎症性腸疾患患者のレジリエンスと療養生活との関連

5. 1) 医学部

令和4年度の医学部執行部の体制は、医学部長が村越隆之（生化学）から森茂久（医学教育学）に交代となり、副医学部長は継続して高橋健夫（川越、放射線科）、小山政史（日高、泌尿器科）、岡田浩一（毛呂、腎臓病内科）、林健（日高、病院診療科）、椎橋実智男（毛呂、IRセンター）、医学部長補佐は山田健人（毛呂、病理）、吉益晴夫（川越、精神科）、中里良彦（毛呂、神経内科）、片桐岳信（ゲノム基礎）に、執行部に留まる形で村越隆之（生化学）が入る編成となった

今年度は創立50周年を迎えた記念すべき年であり、5月に挙行された50周年記念式典をはじめ、複数の記念事業が準備、実行された。また9月に医学教育分野別評価受審結果が届き、国際基準に適合していると認定を受けた（認定期間 2022年10月1日～2029年9月30日、7年間）。

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策に追われる1年となったが、予防、対応にも慣れてきたこともあり、大きな問題となることは無かった。

入学試験は、新型コロナウイルス感染症対策に注力しつつ、継続して一般選抜二次試験への記述式試験利用、半構造化面接の改訂、推薦入試合格者への入学前オリエンテーション等、構造的改革を行うことができた。

2023年の第117回医師国家試験は、116回と比べると同様な成績で、予想していたレベルよりも良い結果を得ることができた。

以下に令和4年度の医学部の動きについて項目ごとに概要を述べるが、詳細は各組織、部門等からの報告も参照願いたい。

1. 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対応

令和3年度に引き続き、遠隔と対面によるハイブリッド授業を継続した。講義は3、4年生はYouTubeによる講義配信が中心で、1、2年生はWebClass、Vimeo等を用いたオンデマンド配信、演習、実習は必要に応じてできるだけ対面とし、Zoomを用いた遠隔での少人数双方向性授業を行なった。臨床実習は、6年生CC Step3は学外実習を3年ぶりに再開した。5年生CC Step1は散発的に診療科単位、病棟、病院単位で一部自宅学習の対応が必要となったが、全体を中断することなく実施できた。感染のため中止となった実習、体調不良のため欠席した場合の補習は、夏季休暇、また1月からのCC Step2第1クール第1週を利用して該当者に合わせて個別に実施した。12月に部活内感染のため複数の感染が発生したため、クラスター事案として公表、文科省報告を行った。令和4年度の医学部学生の累計感染者数は172名であった。

2. 入学試験

今回から一般入試1次試験会場として長らく利用してきたTOCビルが建て替えのため利用できなくなることから、東京流通センター（東京都大田区平和島）に変更した。入試業務を補助するコンベンションも急遽変更となったため前期では運営に問題を生じたが、迅速に問題点の対応を行い、後期では多くの問題が解消された。新型コロナウイルス感染症対策は昨年度に引き続き、十分な準備を行い対応した。感染により受験不可となった受験生への追試を提供して対応した。

入試問題ミス撲滅のために今年度も多大な努力を行った。出題ミスが無かったことは幸いであったが、試験前点検時に問題訂正が発覚し、入学者選抜当日に受験生への告知を行った。一般入試において昨年度に引き続き、2次試験問題に記述式の「小論文」を取り入れた。点数の分布が広がり、今後本学学生のリテラシー、思考力を底上げする効果を期待したい。高大連携事業に関しては、昨年度に引き続き推薦選抜合格者に対する入学前スクーリングを12月にオンラインにて行い、好評であった。

3. 地域医療奨学金制度

詳しくは「埼玉県地域枠医学生奨学金運営委員会・埼玉医科大学医学部地域医療奨学金運営委員会」報告欄を参照いただきたいが、奨学金受給生達（地域枠学生）の入学後、高学年進級に応じて決意・意識に変容が生じ、離脱者の出現が問題となっている。これには近年の専門医制度の変革に伴う不安や情報不足も寄与している。今後県とともに地域医療推進室を中心に地域枠学生対象に地域医療教育をさらに充実させて、埼玉県の医療を担うマインドの醸成を強化する必要があると考える。

4. 研究医の養成

研究マインド育成プログラムを履修した卒業生1名が、基礎系大学院修了後に基礎医学部門の基本学科の教員として採用された。研究医養成の制度が目指すキャリアであり、文科省によるヒアリングの際にも好評であった。

課外学習プログラムおよび研究マインド育成プログラムが中心的な柱であったが、コロナ禍対策として対面登校の全面または大幅停止の影響で大きな打撃を受けたが、研究マインド育成プログラム学生を考慮し、感染対策を講じることを条件には実験室での研究活動を許可した。11月に開催された「第3回オール埼玉医大研究の日」の中の「第8回学部学生による研究発表会」で、研究医枠対象の学生を含む発表がオンラインにより多くの参加者に発信され、称賛を受けた。研究マインド育成室を中心に、1年生に対して医学部入学の早期から研究紹介の機会を設け、教員および現プログラム履修生1名から発表があった。

5. 卒前教育

卒前教育は、企画、実行部隊として医学教育センター医学部領域が中心となり、決定機関として卒前教育委員会が担当している。特にカリキュラムの大枠の立案、決定はカリキュラム委員会が担当している。卒前教育委員会は医学教育センター卒前医学教育部門に所属する教員と代表教育主任から構成される。平成18年度から卒前教育委員会と医学教育センター教育主任会議、さらにコースディレ

クターとユニットディレクターも参加する形で卒前教育合同会議として開催されていたが、医学教育分野別評価受審にあたり、令和2年度の途中より、会議名称を卒前教育委員会に統一し、8月を除く毎月1回開催されている。卒前医学教育部門と学年小委員会などの各付属委員会からの報告を中心に、卒前教育に関する様々な課題に取り組んだ。また、各学年から学生委員の参加を求め、参加学生には何らかの発言を促し、学生は可能な限り対応している。

6. 医師国家試験

医師国家試験の117回の合格率は新卒93.2%（令和3年度：93.2%）と前年度と同様であり、既卒72.7%（令和3年度：71.4%）で、全体で91.5%（令和3年度：92.0%）であった。新卒合格率は全国医学部・医科大学82校中66位、私学31校中22位、既卒合格率はそれぞれ20位、9位、全体での合格率はそれぞれ58位と20位で、全国、私学とも上位1/2の位置に至らなかった。平成29年度入学した6年生のストレート卒業率71.5%（令和3年度77.7%）と、令和2年度に達成した念願の80%に及ぶどころか明らかに低下した。医師国家試験までのストレート合格率も70.0%（令和3年度：75.4%）と減少した。

7. 卒後教育

卒後教育に関しては、3病院の研修管理センター、医学部の卒後教育委員会、医療人育成支援センターおよび医学教育センター卒後医学教育部門が相互に連携しながら、研修医（前期および後期）の教育および臨床研修後の生涯教育を企画・運営している。卒後教育委員会では今年度も主催・後援する学術集会を開催した。

令和4年度採用の初期臨床研修医は、大学病院27名、総合医療センター32名、国際医療センター5名、合計64名であった。令和5年度採用予定の初期臨床研修医は、大学病院41名、総合医療センター44名、国際医療センター14名、合計99名であった。令和5年度に入職する初期臨床研修医は大幅に増加したが、増加の理由として都内のマッチングに敗れた他大学出身者が埼玉県に転向したことによると考えられる。今後は初期研修を修了して専門研修に入る専攻医の増加が望まれる。

8. 研究活動

今年度もより一層のコンプライアンス遵守のため、公的研究費の適正使用指導がeラーニングを用いて行われた。コンプライアンス教育の未受講者には公的研究費応募資格停止の処置も取られた。

医学研究センターでは文科省科学研究費獲得の支援として設けられた「科研費アドバイザー制度」が推進され、申請調書の記載方式の詳細に踏み込んだ指導を行ない、着実に成果を上げている。令和4年度科研費の採択は、件数、配分額とも過去最高となったが、令和4年度科研費の採択結果は、

「第3回オール埼玉医大研究の日」が11月5日に学内ライブ配信・Zoom配信を併用で開催され、若手を中心に発表会が開催され、活発に討論が行われた。

9. 国際交流

相互交換留学は29年目を迎えた本制度であるが、昨年度に続き4月と夏季の交換留学は受け入れ、訪問のどちらもともに中止となった。新型コロナウイルス感染症の第8波が収束に向かう中、令和5年3月には春期語学研修が再開された。

10. その他

1) 医学教育分野別評価

令和3年10月に受審した医学教育分野別評価受審の結果が令和4年9月末に届き、国際基準に適合していると認定を受けた（認定期間2022年10月1日～2029年9月30日、7年間）。

2) 文科省補助金

令和4年度私立大学等改革総合支援事業は、前年度から引き続いてのタイプ4「社会実装の推進」は採択されたが、タイプ1「特色ある教育の展開」は僅差で採択されなかった。タイプ1は内容が年々複雑になり、また基準がより厳格化されているので、今後さらに全学的戦略的取り組みとして対策を講じたい。

令和4年度予算による7年間の「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」に、群馬大学と連携した「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成事業」を応募して採択された。事業運営体制として埼玉県、群馬県、埼玉県医師会、群馬県医師会、埼玉県立大学、両県の特定地域の基幹病院群を加えて協定を締結し、令和4年度の事業を徐々に開始し、令和5年3月にシンポジウムを開催した。

令和4年度補正予算による「医学部教育・働き方改革支援事業」に選定された。公的化されるOSCE実施のためのビデオカメラ類の設置に利用される。

3) 教員選考

前年度末に医学部教員選考に係る基本理念や選考基準が再確認され、資格審査委員会規則が改定された。これを受けての人事資格審査が進行している。

4) 他大学との連携

課外学習プログラムでは、女子栄養大学と埼玉大学と提携しているが、埼玉大学からプログラムが提案され、学生に加えて教員も参加し、交流を深めた。

5) 令和4年度で終了する第4次長期総合計画「飛翔」が終了することを踏まえて、医学部WGと、その下に研究サブWG、教育WGを

設置して、第5次長期総合計画「挑戦」を策定した。

1.1. 令和4年度の総括

令和4年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症対策が教育・研究・診療、組織運営全般に亘り重要な事案であったが、少しずつ対応に慣れたこともあり、大きな問題なく1年間活動することができた。種々活動の規制は徐々に解除の方向を目指した。臨床実習は時に部分的に実習を中断したが全体的な中断を行わず、足りない部分は補習で補うことができた。種々の学事、式典が軒並み中止となっていたが、一定の規制を設けて入学式の他、スチューデントドクター認定式、卒業式、大学院博士課程学位授与式も対面で実施することができた。課外学習プログラムは病院に入る臨床系を除いて実施が再開され、休止していたクラブ活動も学生が自主的に決めた感染対策を遵守することで再開された。今後中長期的に「ポストコロナ時代」、教育・研究・診療の全てにおける新基準に基づいた適応体制を整える必要がある。その際には、旧来の無駄な慣習、非効率要素を削ぎ落とすなど前向きな姿勢が強く望まれる。

国家試験合格率が一旦改善したものの、その後低下して今回は横ばいで下位半分に入ったことは残念であった。しかし模擬試験等の結果から予想された悪い結果を払拭する結果となり、最後まで学生が頑張ってくれたと言える。今後もこれまでの学力増進室が中心となる対策を継続しつつ、短期（6年生、さらには5年生）、中長期（1-4年生）の学修成果の再確認と、これまでの対策とは異なる方策を検討する必要がある。

医学教育分野別評価は、ようやく国際基準に適合との受審結果が届いた。複数の改善点を指摘されたが、いくつか高い評価もいただき、概ね良好な結果であった。受審の効果で、今後本学の教育の質が向上することを期待している。

1.2. 次年度への改善点

令和5年度より始まる第5次長計総合計画「挑戦」について、年度毎の具体的な計画を検討し、まずは行動を起こして目標に向かって着実に前進したい。5年間の5次長計を進めながら、次の50年を念頭に持続的な発展を目指して次の10年、20年に向けた長期的な目標の検討も並行して行いたい。

教育面については、医学教育分野別評価で指摘された改善点、特に臨床実習の充実、評価の質向上を図り、研究教育の整備に着手し、アウトカム基盤型教育を推進する。診療参加型臨床実習を推進し、卒前、卒後の連携、研究配属を検討する。次年度から対面授業に復帰するが、そのための準備と、問題発生等に迅速な対応が必要である。

研究面については、科研費アドバイザー制度を推進して、学外競争的研究資金のさらなる取得を目指す。学内の臨床研究を推進できる環境をさらに充実させる。

連携面については、教育面ではポストコロナ事業において群馬大学との連携をさらに進め、学外実習施設との連携を深める。埼玉大学と共同研究を進め、また他大学との新たな連携も模索する。

文科省の公募事業などの公的資金獲得を目指し、次年度も引き続き、医学部全体で協力して準備する体制を整備する。

以 上

5. 2) 教員代表者会議各種委員会

【任期：令和4年4月1日～令和6年3月31日】

◎：委員長／ ○：副委員長／ 外：学外委員／ ※：オブザーバー

大学運営会議（全）

◎別所（学長）・松下（副学長）・三村（副学長）・木崎（副学長・医研長）・森（医学部長・副学長）・竹内（副学長）・加藤木（保健医療学部長）・千田（看護学研究課長、看護学科長）・吉本（副理事長）・椎橋（IRセ長）・門野（学生部長）・内田（大事務部長）・事：岩澤（大事務）

教員代表者会議（医）

◎森（医学部長・副学長・医教セ長）・別所（学長）・松下（副学長・RAセ長）・木崎（副学長・医研長）・竹内（副学長）・三村（副学長）・岡田（副医学部長）・高橋（副医学部長、博士運営委員長）・林（副医学部長・医教副セ長）・小山（副医学部長）・椎橋（医学部長補佐・IRセンター長）・村越（医学部長補佐）・山田（医学部長補佐）・吉益（医学部長補佐）・中里（医学部長補佐）・片桐（医研セ長・医学部長補佐）・篠塚（大院長）・堤（総病院長）・佐伯（国病院長）・屋嘉比（かわクリ院長）・持田（図書館長）・門野（学生部長）・藤巻（国交セ長）・魚住（生化学）・向田（教養教育）・中元（大総診）・永島（解剖学）・亀井（社会医学）・佐々木（病理学）・松田（医学教育セ）舟久保（大リウ膠）・三谷（医研セ・安全、グ応医）・亀井（大産婦）・岩永（国心内）・山本（医研セ・ブランチ、総輸血）・坂本（医研セ・共同、中央研）・海老原（医研セ・ブランチ、臨検医）・松尾（大精神）・朝倉（大泌尿）・市岡（大形成）・大宅（脳外）・山元（大神内）・篠田（大眼科）・澤野（総高救急セ）・島田（大内糖内）・加部（総周産母医セ）・北村（麻酔）・石田（総消外）・名越（総消肝内）・根本（国救急）・別宮（総肝外小外）・長谷川（総腎内）・光武（国感染）・鈴木（国小心外）・栗田（国脳外）・奥田（グ基医）・川井（国医安全）・岡本（国消外）・小林（RAセ）・棚橋（専務理事）・小山（専務理事）・永田（大呼内）・中村（大皮膚）・三輪（生理）・丸山（薬理）・千本松（RAセ）・富谷（教・学健康推進セ長）・村上（微生物学）・高田（法医）・中山（大麻酔）・内田（大事務部長）・※：吉本（副理事長）・※：内田（総務部長）・事：下田（大事務）

医学部教員組織運営会議（医）

◎森（医学部長・副学長・医教セ長）・別所（学長）・吉本（副理事長）・棚橋（専務理事）・小山（専務理事）・篠塚（大院長）・堤（総院長）・佐伯（国院長）・木崎（副学長・医研長）・松下（副学長・RAセ長）・三村（副学長）・竹内（副学長）・岡田（副医学部長、大副院長）・小山（副医学部長）・林（副医学部長）・高橋（副医学部長）・村越（医学部長補佐）・門野（学生部長）・別宮（総副院長）・鈴木（国副院長）・椎橋（副医学部長・IRセ長）・片桐（医研セ長）・事：江口（大事務）
事：山下（総務部）
事：亀井（総務部）
事：下田（大事務）

医学部自己点検・評価委員会（医）

◎森（医学部長・副学長・医教セ長）・別所（学長）・吉本（副理事長）・棚橋（専務理事）・小山（専務理事）・篠塚（大院長）・堤（総院長）・佐伯（国院長）・木崎（副学長・医研長）・松下（副学長・RAセ長）・三村（副学長）・竹内（副学長）・岡田（副医学部長、大副院長）・小山（副医学部長）・林（副医学部長）・高橋（副医学部長）・村越（医学部長補佐）・門野（学生部長）・別宮（総副院長）・鈴木（国医セ副院長）・椎橋（副医学部長・IRセ長）・片桐（医研セ長）・事：江口（大事務）
事：山下（総務部）
事：亀井（総務部）
事：下田（大事務）

医学部運営会議（医）

◎森（医学部長・副学長・医教セ長）・別所（学長）・竹内（副学長）・松下（副学長）・木崎（副学長・医研長）・三村（副学長）・高橋（副医学部長）・岡田（副医学部長）・小山（副医学部長）・林（副医学部長）・椎橋（副医学部長）・門野（学生部長）・村越（医学部長補佐）・山田（医学部長補佐）・吉益（医学部長補佐）・中里（医学部長補佐）・片桐（医学部長補佐・医研セ長）・※：吉本（副理事長）・事：江口（大事務）
事：岩澤（大事務）
事：下田（大事務）
事：近藤（大事務）

医学教育センター医学部領域運営委員会（医）

◎森（医学部長・副学長・領域長）・○林（副領域長・試験管理室長）・村越（医学部長補佐）・高橋（卒前医学教育副部門長）・吉益（医教セ川越ブランチ長）・小山（医教セ日高ブランチ長）・椎橋（教育情報部門長）・三村（副学長・

卒後医学教育部門長)・山田(医学部長補佐)・永島(卒前医学教育部門)・向田(教養教育部門長)・種田(教養教育副部門長)・鈴木(教養教育副部門長)・藤森(教養教育副部門長)・松田(学力増進室長)・中里(学力増進室5,6年生担当)・辻(シミュレーション教育部門長)・山田(シミュレーション教育副部門長)・魚住(卒前医学教育副部門長)・石橋(学生支援室長・FD部門長)・柴崎(卒前医学教育部門長・地域医学推進室長)・村上(研究マインド育成室長)・荒関(試験管理副室長)・山崎(卒前医学教育部門)・松下(IRセンター)・米岡(FD部門副部門長)・江口(事務部門長)・近藤(事務部門副部門長)・※:竹内(副学長)・事:安齋(大事務)・事:鴫澤(大事務)

卒前教育合同会議(医)

◎森(医学部長・副学長・医教セ長)・○林(副医学部長・医教副セ長)・○舟久保(大リウ膠)・木崎(副学長・総血内)・小山(副医学部長・日高ランチ長)・村越(副医学部長・生化学)・岡田(副医学部長・大腎内)・椎橋(医学部長補佐・IRセ長)・高橋(副医学部長)・中元(大総診)・山内(大小児)・吉益(医学部長補佐・川越ランチ長)・前崎(大感染症)・佐々木(病理学)・廣岡(大地域医療)・永島(解剖学)・中平(教養教育)・三輪(生理学)・丸山(薬理学)・森吉(大臨床検査医学)・岩永(国心内)・松尾(大精神)・魚住(生化学)・高橋(国リハ)・野田(国放射線)・大崎(国乳腫)・中山(大消化器・肝内)・宮野(大皮膚)・中里(大神内)・高田(法医)・永田(大呼内)・松田(医教セ)・池上(大内糖内)・辻(保健医療学部看護学科)・柴崎(医教セ)・井上(教・学健康推進セ)・根本(国救医)・加瀬(大耳鼻咽喉)・島田(大内糖内)・井上(大腎内)・山元(大神内)・渡會(大整形)・宮川(大総診)・菊池(大小児)・朝倉(大泌尿器)・山本(大心内)・栗崎(解剖学)・藤森(教養教育)・高野(解剖学)・池田(生理学)・向田(教養教育)・山崎(教養教育)・藤田(解剖学)・荒木(生化学)・淡路(薬理学)・横田(大リウ)・石橋(医教セ)・亀井(社会医学)・近藤(大事務)・※:竹内(副学長)・事:安齋(大事務)・事:鴫澤(大事務)

医学部カリキュラム委員会(医)

◎岡田(副医学部長・大腎内)・○森(医学部長・副学長・医教セ長)・松下(副学長)・竹内(副学長)・三村(副学長)・小山(副医学部長)・林(副医学部長)・持田(図書館長)・中里(医学部長補佐)・山田(医学部長補佐)・永島(解剖学)・中平(教養教育)・佐々木(病理学)・辻(保健医療学部看護学)・淡路(薬理学)・藤森(教養教育)・柴崎(医学教育セ)・魚住(生化学)・村上(微生物学)・岩澤(大事務)・外:平形(慶応義塾大学医学部)・外:森本(小川赤十字病院)・外:本多(埼玉県衛生研究所)・外:町田(地域の患者)・学:医学部学生・※:別所(学長)・※:村越(医学部長補佐)・※:亀井(社会医学)・※:椎橋(医学部長補佐・IRセ長)・※:高橋(医学教育セ)・事:近藤(大事務)・事:細田(大事務)

卒後教育委員会(医)

◎三村(副学長)・○山元(大研修管理委員長)・○林(国研修管理委員長)・○木崎(総研修管理委員長)・森(医学部長・副学長・医学教育セ長)・島田(大内糖内)・石橋(医教セ)・岡田(総泌尿器)・藤巻(国際交流セ長)・堀江(ゲノム応用医学)・事:保坂(大事務)・事:吉山(大事務)・事:下田(大事務)

医療人育成支援センター運営会議(全)

◎三村(卒後教育部門長・副学長)・○小川(総腎内)・○岩永(国心内)・森(医学部長・副学長・医教セ長)・山元(大神内)・木崎(総血内)・林(国総診)・名越(総消肝内)・堀江(ゲ心医)・辻(保健医療学部看護学科)・坂口(国呼外)・北脇(医療人育支セ川越ランチ)・稲葉(大病院客員教授)・柴崎(医教セ)・高橋(医教育セ)・村上(微生物学)・事:永島(病院群臨研セ)・事:野口(臨研セ)・事:大澤(臨研セ)・事:川俣(総臨研セ)・事:若松(総臨研セ)・事:後口(総臨研セ)・事:池田(国臨研セ)・事:島田(国臨研セ)・事:岩澤(大事務)

埼玉医科大学学生部委員会(全)

◎門野(学生部長)・藤巻(国交セ長)・松尾(大精神)・向田(教養教育)・黒川(ゲノム基礎医学)・嶋崎(保健医療学部共通教育部門)・山崎(教養教育)・中平(教養教育)・藤田(解剖学)・石橋(医教セ)・井上(教職員・学生健康推進セ)・柴崎(医教セ)・長谷川(総腎高内)・辻(保健医療共通教育部門)・藤原(保健医療臨床検査学)・飯野(保健医療臨床検査学)・小林(保健医療臨床工学)・乙戸(保健医療理学療法学)・石川(保健医療臨床工学)・大澤(保健医療看護学)・澤田(保健医療理学療法学)・櫻庭(保健医療看護学)・※:稲葉(医学部同窓会)・※:森(医学部長・副学長・医教セ長)・江口(大事務部副部長)・岡野(大事務)・事:佐藤(大事務)・事:堀江(保健医療室長)・事:鈴木(保健医療事務室)・事:安齋(大事務)・事:伊藤(保健医療事務室)・事:峰晴(大事務)

医学部学生部委員会（医）

◎門野（学生部長）・○黒川（ゲノム基礎医学）・○向田（教養教育）・中平（教養教育）・山崎（教養教育）・松尾（大精神）・藤巻（国交セ長・大脳外）・長谷川（総腎内）・井上（教職員・学生健康推進セ）・藤田（解剖学）・柴崎（医教セ）・石橋（医教セ）・江口（大事務部副部長）・岡野（大事務）・学：医学部学生（4年生）・学：医学部学生（4年生）・※：森（副学長・医教セ長）・※：稲葉（医学部同窓会）・事：佐藤（大事務）・事：安齋（大事務）・事：峰晴（大事務）

喫煙問題検討委員会（全）

◎門野（学生部長）・篠塚（大院長）・根本（国救医）・山崎（教養教育）・黒川（ゲノム基礎医学）・長谷川（総腎内）・今野（短大看護学生部長）・大野（大看護）・渡邊（大看護）・井上（教職員・学生健康推進セ）・内田（大事務部長）・堀江（保健医療事務室長）・山崎（保健医療川角事務室）・川俣（総事務）・田島（かわくり事務長）・武久（国事務）・小川（総事務）・柳川（医務部）・栗生田（施設）・江田（総務）・事：佐藤（大事務）・事：安齋（大事務）・事：峰晴（大事務）

医学研究センター運営会議（全）

◎片桐（医研セ長）・山本（総輸血）・海老原（国臨床検査医学）・三谷（ゲノム応用医学）・椎橋（IRセ長）・坂本（中央研究施設長）・奥田（ゲノム基礎医学）・小谷（医研セ副セ長）・下岡（保健医療臨床工学）・西本（中研施設日高ブRI部門）・佐藤（大歯科口腔）・村上（微生物学）・高田（法医学）・森（総研究部）・堀内（微生物学）・百瀬（総病理）・徳元（アドミセ）三輪（生理学）・※：竹内（副学長）・※：松下（副学長、RAセ長）・※：千本松（RAセ）・※：菅原（RAセ）・※：町田（医研セ）・※：別所（医研セ）・※：福田（医研セ）・※：佐藤（RAセ）・事：下田（大事務）・事：佐國（大事務）

病原性微生物等管理委員会（全）

◎村上（微生物）・○前田（中研）・○堀内（微生物）・森（総研究部）・光武（国感染）・佐藤（保検査）・池田（ゲ遺伝子情報）・河村（大中検）・今井（微生物）

組換えDNA実験安全委員会（全）

◎三谷（ゲ応医）・○村上（微生物）・○千本松（RAセ）・小谷（生化学）・森（総研究部）・海老原（国検査）・米田（ゲ基医）・脇田（保工学）・荒木（大リウ膠）・百瀬（総病理）・菅原（RAセ）・事：RAセ

動物実験委員会（全）

◎森（総研究部）・三谷（ゲ応医）・千本松（RAセ）・横尾（中研日ブ動物）・坂本（中研）・小野川（保検査）・椎橋（ITセ長）・中島（保工学）・山本（総輸血）・事：富永（中研動物）

全学RI安全委員会（全）

◎松成（大核医学診療科）・○久慈（国核医学）・中野（生化学）・熊倉（総放射線）・森（総研究部）・西本（中研施設日高ブRI部門）・高橋（副医学部長・総放射線）・保坂（総中央放射線）・日詰（中研施設RI部門）・熊崎（国放射線）・一色（中研施設RI部門）・茅野（保健医療臨床検査学）・平野（大中央放射線）・潮田（総研究部）

リサーチアドミニストレーションセンター運営会議（全）

◎松下（副学長・RAセ長・ゲノム所長）・○千本松（RAセ副セ長）・棚橋（専務理事）・小林（RAセ）・菅原（RAセ）・坂本（中央研究施設長）・川口（非常勤講師）・久保田（非常勤講師）・豊田（非常勤講師）・※：竹内（副学長）・※：片桐（医研セ長）・佐藤（RAセ）・浅見（RAセ）・小野寺（RAセ）・深沢（RAセ）・宿谷（RAセ）・石川（RAセ）・福永（RAセ）・長田（RAセ）・中島（RAセ）・事：RAセ

倫理審査委員会（全）

◎千本松（RAセ）・○大竹（大小児/ゲノム医）・○三谷（ゲノム応用医学）・解良（国呼内）・亀井（大産婦）・山田（病理）・小高（総小外）・中村（大皮膚）・種田（教養教育）・茅野（保健医療臨床検査学）・栗生田（保健医療看護）・川邊

(保健医療臨床工学)・奥山(ゲノム医療科)・大久保(保健医療理学療法)・外:野木(弁護士)・外:井上(元埼玉県庁健康福祉部長)・外:和田(患者家族)・事:RAセ

COI管理委員会(全)

◎藤原(国医産婦人科)・○神山(国脳外)・片桐(医研セ長)・千本松(RAセ副セ長)・岩沢(経理部)・外:井上(杏林大学特任教授)・事:RAセ

研究医養成プログラム運営委員会(医)

◎村上(微生物学)・別所(学長)・吉本(副理事長)・森(副学長・医学部長・医教セ長)・松下(副学長)・木崎(副学長・医学研究科長)・三村(副学長・卒後教育部門長)・竹内(副学長)・門野(学生部長)・柴崎(医教卒前教育部門長)・茂木(事務局長)・村越(医学部長補佐)・佐々木(病理学)・片桐(医研セ長)・堀江(ゲノム応用医学)・内田(大事務部長)・事:田村(大事務)・事:新井(大事務)・事:鳥海(大事務)・事:菅沢(大事務)

環境安全委員会(全)

◎別所(学長)・○松下(副学長)・竹内(副学長)・篠塚(大病院長)・堤(総病院長)・佐伯(国病院長)・富谷(教・学健康推進セ長)・片桐(医研セ長)・下岡(保健医療)・藤田(保健医療)・高橋(施設部)・事:施設部

特許等委員会(全)

◎片桐(医研セ長)・別所(学長)・吉本(副理事長)・木崎(副学長・医学研究科長)・小林(国呼内)・小谷(医研セ・生化学)・若松(保健医療臨床)・佐藤(大口外)・内田(大事務部長)・※:松下(副学長・RAC長)・事:菅原(RAセ)・事:石川(RAセ)・事:豊田(RAセ)・事:林(RAセ)

グラント選考委員会(全)

◎片桐(医研セ長)・棚橋(専務理事)・森(医学部長)・小山(副医学部長)・加藤木(保健医療学部長)・村越(医学部長補佐)・篠塚(大病院長)・堤(総病院長)・佐伯(国病院長)・奥田(ゲノム基医)・坂本(中研施設長)・秋岡(大小児)・山本(総輸血)・石田(総消外)・村上(微生物学)・山田(病理)・門野(大整形)・千本松(RAセ副セ長)・解良(国呼内)・※:別所(学長)・※:竹内(副学長)・※:吉本(副理事長)・※:松下(副学長・RAセ長・ゲノム所長)・※:茂木(事務局長)・※:伊藤(経理部)・事:小谷(研究支援管理部門長)・事:堀内(微生物学)

研究活動並びに公的研究費等の適正化推進委員会(全)

◎松下(副学長・RAセ長・ゲノム所長)・茂木(事務局長)・山本(総輸血)・海老原(国臨検医)・奥田(ゲノム基礎医学)・加藤木(保健医療学部長)・久保(短期大学副学長)・小林(シニアURA)・千本松(RAセ副セ長)・野木(法律の専門家)・片桐(医研セ長)・古川(一般)・井上(杏林大学特任講師)・事:RAセ

大学院委員会(全)

◎別所(学長)・木崎(副学長・医学研究科長)・千田(看護学研究科長・看護学科長)・吉本(副理事長)・棚橋(専務理事)・小山(専務理事)・竹内(副学長)・松下(副学長・ゲノム所長)・森(医学部長・副学長・医教セ長)・小林(修士運営委員長・保医・工学)・加藤木(保健医療学部長)・高橋(副医学部長・博士運営委員長)・篠塚(大病院長)・野田(看修士運営委員長)・片桐(医研セ長)・持田(図書館長)・堤(総病院長)・佐伯(国病院長)・解良(国呼内)・三村(副学長)・永島(解剖学)・椎橋(副医学部長・ITセ長)・大賀(保医学部看護学)・赤坂(保医学部理学療法)・事:新井(大事務)・事:鳥海(大事務)・事:菅沢(大事務)・事:下田(大事務)・保健医療学事務室

大学院医学研究科委員会(医)

◎木崎(医学研究科長・副学長)・別所(学長)・森(医学部長・副学長・医教セ長)・松下(副学長・ゲノム所長)・三村(副学長・卒後部門長)・竹内(副学長)・高橋(副医学部長・博士運営委員長)・小林(修士運営委員長・保医・工学)・篠塚(大病院長・消外)・堤(総病院長)・佐伯(国病院長)・藤巻(国交セ長)・坂本(中央研究施設長)・千本松(倫理審査委員長)・棚橋(専務理事)・小山(専務理事)・椎橋(ITセ長・IRセ長)・片桐(医研セ長)・村越(生化学)・永島(解剖学)・淡路(薬理学)・奥田(ゲノム基礎医学)・堀江(ゲノム応用医学)・藤原(保健医療臨床検)・佐々木(病理学)・村上(微生物学)・高橋(国造腫)・亀井(社会医学)・高田(法医学)・畝川(国腫内)・

久保田（総輸血）・大野（総感染）・持田（大消肝内）・荒井（国心内）・永田（大呼内）・山元（大神内）・今枝（大消内）・島田（大内糖内）・鈴木（国小外）・岡田（大腎内）・中元（大総診）・田中（大小外）・中山（総呼外）・大崎（国乳腫瘍）・持木彫（総消外）・秋岡（大小児）・沼倉（大ゲ医）・亀井（大産婦）・松尾（大精神）・常深（大皮膚）・門野（大整外）・上條（臨中毒）・朝倉（大泌尿）・蝦原（国耳鼻）・篠田（大眼科）・北村（国麻酔）・澤野（総救急セ）・小澤（大放射線）・佐藤（大口外）・時岡（大形成外）・倉林（大リハ）・赤坂（保医療療）・高橋（国緩医）・海老原（国臨検医）・川井（国医療安全管理）・解良（国呼内）・池田（生理学）・増谷（総小児）・小谷（医研セ）
※：吉本（副理事長）・事：新井（大事務）・事：鳥海（大事務）・事：菅沢（大事務）・事：保健医療学部事務室・事：下田（大事務）

医学研究科博士課程運営委員会（医）

◎高橋（副医学部長）・木崎（医学研究科長・副学長）・小林（修士運営委員長、保医・工学）・松下（副学長）・森（医学部長・副学長・医教セ長）・三村（副学長・大リウ膠）・岡田（副医学部長・大腎内）・椎橋（副医学部長・IRセ）・片桐（医研セ長）・永島（解剖学）・奥田（ゲノム基礎医学）・亀井（社会医学）・解良（国呼内）・大西（国精神）・堀江（ゲノム応用医学）・持木（総消外）・佐々木（病理学）・増谷（総小児）・村越（医学部長・※：別所（学長）
※：竹内（副学長）・事：新井（大事務）・事：鳥海（大事務）・事：菅沢（大事務）・事：下田（大事務）

医学研究科自己点検評価委員会（医）

◎木崎（医学研究科長・副学長）・高橋（博士運営委員長、副医学部長）・小林（修士運営委員長、保医・工学）・松下（副学長）・森（医学部長・副学長・医教セ長）・三村（副学長・大リウ膠）・岡田（副医学部長・大腎内）・椎橋（副医学部長・IRセ）・片桐（医研セ長）・永島（解剖学）・奥田（ゲノム基礎医学）・亀井（社会医学）・解良（国呼内）・大西（国精神）・堀江（ゲノム応用医学）・持木（総消外）・佐々木（病理学）※：別所（学長）※：竹内（副学長）
事：新井（大事務）・事：鳥海（大事務）・事：菅沢（大事務）・事：下田（大事務）

医学研究科修士課程運営委員会（医）

◎小林（保医・工学）・椎橋（IRセ）・小谷（医研セ）・藤原（保健医療臨検）・奥田（ゲノム基礎医学）・赤坂（保健医療理学療法）
加藤木（保健医療学部長）
事：保健医療学部事務室

国際交流センター委員会（全）

◎藤巻（国交セ長）・○魚住（生化学）・廣岡（大地医療）・木崎（副学長・医学研究科長）・三村（副学長）・難波（大ゲ医）・朝倉（大泌尿）・池田（国心内）・Chad（教養教育）・茅野（保臨検）・千本松（RAセ）・辻（保看護）・井上（大院腎内）・堀江（ゲ応医）・菅（教養教育）・種田（教養教育）・佐々木（病理学）・周防（薬理学）・金井（保理療）・間山（保臨検）・山下（総病理）・近藤（大事務）・細田（大事務）※：丸木（理事長）※：小山（専務理事）※：松本（国心内）※：田中（大学病院客員教授）※：野村（国交セ顧問）※：劉（国交セ顧問）
事：斉藤（国交セ）

教員短期留学制度選考委員会（全）

◎藤巻（国交セ長）・○魚住（生化学）・三村（副学長）・千本松（RAセ）・廣岡（大地医療）・難波（大ゲ医）・山下（総病理）・辻（保看護）・菅（生理学）・周防（薬理学）※：木崎（副学長、医研長）
事：斉藤（国交セ）

図書館委員会（全）

◎持田（図書館長）・各務（国呼内）・山元（大神内）・川野（免疫学）・福田（総皮膚）
片桐（ゲ基医）・大久保（保理学）
池田（保共教）
竹下（総臨検医）
土田（教養教育）
事：田口（図書館）

アドミッションセンター運営委員会（全）

◎別所（アドミセ長）・○森（医学部長、副学長、医教セ長）
○加藤木（保学部長）
茂木（事務局長）
竹内（副学長）
山田（入試実施委員長、病理学）
椎橋（副医学部長・ITセ長）
小室（アドミ・オフィサー）
徳元（アドミ・オフィサー）
吉益（総精神）
久保（短大副学長）
山崎（入試実施副委員長、教養教育）
藤山（埼玉医福看専副校長）
中村（総看専副校長）
向田（入試実施副委員長、教養教育）
三輪（生理学）
森口（教養教育）
藤森（教養教育）
鈴木（教養教育）
米岡（教養教育）
間山（保臨検）
金子（保看護）
若山（保臨工）
山岸（保臨検医）
中島（保臨工）
堀江（保事務長）
内田（大事務部長）
事：村田（大事務）

情報技術支援推進センター運営委員会（全）

◎椎橋（ITセ長）・向田（教養教育）・丸山（薬理学）・片桐（ゲ基医）・茅野（保臨検）・鈴木（ITセ総ブランチ）

IRセンター運営会議（全）

◎椎橋（IRセ長）・小山（IRセ副セ長）・柴崎（IRセ副セ長）・松下（IRセ）・竹内（副学長）・森（医学部長・副学長・医教セ長）・片桐（医研セ長）・宮本（保臨工）・岡田（総泌尿）・荒関（医教セ）・齋藤（医教セ）・町田（総企）・江口（大事務副部長）・馬場（大事務）・山口（保医）・※：別所（学長）・※：村越（医学部長補佐）・※：加藤木（保医長）・事：IRセ

埼玉医科大学自己点検・評価委員会（全）

◎別所（学長）・○森（医学部長・副学長・医教セ長）・○加藤木（保健医療学部長）・木崎（副学長・医研長）・千田（看護学研究科長）・松下（副学長）・三村（副学長）・竹内（副学長）・片桐（医研セ長）・藤巻（国交セ長）・椎橋（IRセ長）・篠塚（大院長）・堤（総院長）・佐伯（国院長）・屋嘉比（かわくり院長）・門野（学生部長）・持田（図書館長）・吉本（副理事長）・棚橋（専務理事）・小山（専務理事）・田島（常務理事）・茂木（事務局長）・下岡（保臨工）・茅野（保医臨検）・高倉（保理療学）・事：内田（大事務）・事：江口（大事務）・事：堀江（保事務室長）・事：村田（大事務）・事：岩澤（大事務）・事：下田（大事務）

医学部入学試験委員会（医）

◎森（医学部長・副学長・医教セ長）・○山田（医学部長補佐・入学試験実施委員長）・○向田（入試実施副委員長）・吉本（副理事長）・別所（学長）・三村（副学長）・竹内（副学長）・岡田（副医学部長）・林（医学部長補佐・医教副セ長）・高橋（副医学部長・博士運営委員長）・小山（副医学部長）・椎橋（副医学部長・入試実施班長）・篠塚（大病院長）・堤（総病院長）・佐伯（国医セ病院長）・吉益（医学部長補佐・面接班長）・村越（医学部長補佐）・門野（学生部長）・名越（総消肝内）・堀江（ゲ応医）・山崎（入試実施副委員長）・小室（アドミ・オフィサー）・徳元（アドミ・オフィサー）・村田（大事務）・事：内田（大事務部長）・事：江口（大事務副部長）・事：下田（大事務）・事：岩澤（大事務）・事：松浦（大事務）・事：河村（大事務）

医学部入学試験実施委員会（医）

◎山田健（医学部長補佐・病理学）・○向田（教養教育）・○山崎（教養教育）・竹内（副学長）・椎橋（副医学部長・IRセ長）・吉益（医学部長補佐・総神精）・森口（教養教育）・鈴木（教養教育）・米岡（教養教育）・山田（医教セ）・三輪（生理学）・藤森（教養教育）・村上（教養教育）・中平（教養教育）・石橋（医教セ）・大間（教養教育）・荒関（医教セ）・魚住（生化学）・徳元（アドミ・オフィサー）・小室（アドミ・オフィサー）・※：別所（学長）・※：森（医学部長・副学長・医教セ長）・※：村越（医学部長補佐）・事：内田（大事務部長）・事：江口（大事務）・事：下田（大事務）・事：岩澤（大事務）・事：村田（大事務）・事：松浦（大事務）・事：河村（大事務）

埼玉県地域枠医学生奨学金運営委員会・医学部地域医療奨学金運営委員会（医）

◎森（医学部長・副学長・医教セ長）・別所（学長）・吉本（副理事長）・三村（副学長）・竹内（副学長）・篠塚（大病院長）・堤（総病院長）・佐伯（国病院長）・高橋（副医学部長）・小山（副医学部長）・林（医学部長補佐）・村越（医学部長補佐）・門野（学生部長）・柴崎（地医推セ長）・加藤（県医療人材課長）・田島（常務理事）・茂木（事務局長）・池和田（経理部長）・皆川（毛呂山会会長）・宮山（医療政策学特任教授）・事：内田（大事務部長）・事：細田（大事務）・事：城田（大事務）

寄附研究部門設置委員会（全）

◎別所（学長）・吉本（副理事長）・棚橋（専務理事）・竹内（副学長）・松下（副学長）・木崎（副学長・医研長）・篠塚（大病院長）・堤（総病院長）・佐伯（国病院長）・菅原（RAセ）・片桐（医研セ長）・茂木（事務局長）・池和田（経理部長）・事：RAセ

中央研究施設運営委員会

◎坂本（中研機能）・○水野（中研日高ブ機能）・中山（大消肝内）・中村（大皮膚）・椎橋（副医学部長・ITセ長）・川野（免疫学）・森口（教養教育）・藤田（解剖学）・荒木（生化学）・三谷（ゲ応医）・千本松（RA副セ）・横尾（中研日高ブ動物）・佐藤（大歯腔外）・西本（中研日高ブRI）・※：松下（副学長）・※：片桐（ゲ基医）・※：日詰（中研RI）・※：水野（中研実動）・※：富永（中研動物）・※：一色（中研RI）・※：池和田（経理部長）・※：馬場（経

理次長)・事:廣澤(中研機能)

毛呂山キャンパス整備委員会

◎亀井(社会医学)・○丸木(理事長)・○篠塚(大病院長)・森(医学部長・副学長・医教セ長)・門野(学生部長)・坂本(医研Cプランチ長)・所(短大学副学長)・香取(施設部長)・内田(大事務部長)・茂木(常務理事・事務局長)・久保(短大)・※:別所(学長)・事:近藤(大事務)・事:安齋(大事務)

毛呂山キャンパス教員棟・会議室・講堂等管理運営委員会

◎篠塚(大病院長)・森(医学部長・副学長・医教セ長)・岡田(副医学部長)・藤田(解剖学)・甲田(経理購買)・事:安齋(大事務)・事:佐藤(大事務)

地域救急医療連絡会議

◎別所(学長)・吉本(副理事長)・棚橋(専務理事)・森(医学部長・副学長・医教セ長)・三村(副学長)・竹内(副学長)・篠塚(大病院長)・堤(総病院長)・佐伯(国病院長)・金子(総救命セ)・茂木(常務理事・事務局長)・事:RAセ

大学院博士課程入学・語学試験委員会(医)

◎木崎(医学研究科長・副学長)・高橋(副医学部長・博士運営委員長)・門野(大整形)・片桐(大学院委員会選出)・澤野(総救急セ)・解良(国呼内)・※:永島(解剖学)・ブ:Godfrey(教養教育)・事:新井(大事務)・事:鳥海(大事務)・事:菅沢(大事務)・事:下田(大事務)

臨床研究審査委員会

◎小林(特定臨床研究推進セ長)・○西川(国脳外)・○山田(医病理)・○神山(国脳血内)・天野(総リウ膠)・大野(大腎内)・※:野木(弁護士)・※:山崎(国際医療保健大学教授)・※:藤田(獨協医科大学教授)・※:井上(杏林大学特任講師)・※:山口(早稲田大学法学部教授)・※:古川(株ABC代表取締役)・※:掛江(国立成育医療研究センター 臨床研究センター 生命倫理研究室長)・事:RAセ

ポリシー等策定委員会(全)

◎別所(学長)・丸木(理事長)・竹内(副学長)・吉本(副理事長)・木崎(副学長・医研長)・松下(副学長)・森(医学部長・副学長・医教セ長)・三村(副学長)・加藤木(保医学部長)・椎橋(副医学部長・IRセ長)・千田(看護学研究科長)・門野(学生部長)・柴崎(IR副セ長)・片桐(医研セ長)・小山(IR副セ長)・武藤(総看護部長)・辻(保医)・茂木(常務理事・事務局長)・学:医学部学生・外:平形(慶應大教授)・外:森本(小川赤十字病院)・外:本多(埼玉県衛生研究所)・外:町田(地域の患者)・内田(大事務部長)・堀江(保事務室長)・事:岩澤(大事務)

カリキュラム評価委員会

◎椎橋(IRセ長)・竹内(副学長)・村上(微生物学)・向田(教養教育)・名越(総消肝内)・松下(医教学)・舟久保(大リウ膠)・荒関(医教学)・黒崎(医教セ)・柳澤(専攻医)・松永(初期臨床研修医)・学:医学部学生・近藤(大事務)・外:平形(慶應大教授)・外:本多(県衛生研究所所長)・外:町田(地域の患者)・※:別所(学長)・※:森(医学部長・副学長・医教育セ長)・※:村越(医学部長補佐)・事:岩澤(大事務)

5. 3) 学事

1. 入学式

入学式：4月11日

新入生オリエンテーション：4月13日～4月15日

2. 授業・試験

1年生

1学期

授業 4月18日～7月7日

定期試験① 7月11日～7月28日

2学期

授業 8月24日～11月11日、11月28日～12月23日

定期試験② 11月15日～11月26日

3学期

授業 1月10日～1月27日

定期試験③ 1月30日～2月6日

定期試験（再試験） 2月7日～2月24日

2年生

1学期

授業 4月12日～7月7日

定期試験① 7月12日～7月20日

2学期

授業 8月24日～11月8日、11月24日～12月23日

定期試験② 11月14日～11月22日

3学期

授業 1月10日～1月13日

定期試験③ 1月16日～1月25日

定期試験（再試験） 1月6日、1月27日～2月24日

総合試験 2月9日

総合試験（再試験） 3月1日

3年生

1学期

授業 4月12日～7月14日

定期試験① 7月20日～7月29日

2学期

授業 8月23日～10月21日、11月22日～12月7日

定期試験② 8月30日～9月5日

定期試験（再試験） 10月22日～12月17日

3学期

授業 1月10日～1月17日

定期試験③ 1月19日～2月6日

定期試験（再試験） 2月10日～2月25日

4年生

1学期

授業 4月12日～6月22日、7月11日～7月28日

定期試験① 6月24日～7月8日

2学期

授業 8月23日～10月21日、11月22日～12月7日

定期試験②	10月24日～12月12日
定期試験（再試験）	9月3日～12月23日
共用試験 CBT	11月16日、11月17日
共用試験 OSCE	12月10日
3学期	
共用試験 CBT（再試験）	1月5日
CC step1 オリエンテーション	1月19日、1月20日
CC Step1	1月23日～3月18日
5年生	
1学期	
CC step1	4月4日～7月30日
2学期	
CC step1	8月29日～12月24日
前期総合試験	9月22日
3学期	
CC オリエンテーション	1月7日
CC step2	1月10日～3月4日
後期総合試験	1月6日
総合試験（再試験）	2月4日
6年生	
1学期	
CC step3	4月4日～6月30日
授業	7月11日～7月30日
実力試験	5月6日、7月1日～7月2日
共用試験 PostCC OSCE	7月9日
2学期	
授業	8月29日～10月19日、11月11日～12月5日
実力試験	8月26日
卒業試験	10月25日～11月2日
定期試験	12月16日
3学期	
定期試験（再試験）	1月10日

3. 卒業式

令和5年3月11日

4. その他

定期健康診断：1年生	4月12日
2年生	4月6日
3年生	4月7日
4年生	4月8日
5年生	3月30日
6年生	3月31日

解剖体慰霊祭：10月8日

越華祭（大学祭）：10月15日～10月16日

オール埼玉医大研究の日：11月5日

スチューデントドクター認定式：1月20日

5. 4) 入学、進級、卒業、入試

1. 進級と卒業

在学者数

学年	進級者	令和3年度留年者 (休学者含む)	再入学	計(男:女)
1年	(入学者) 130	4	—	134 (71:63)
2年	132	7	—	139 (72:67)
3年	127	10	—	137 (82:55)
4年	135	11	—	146 (75:71)
5年	122	5	—	127 (91:36)
6年	120	10	1	131 (84:47)
合計	766	47	1	814 (475:339)

令和4年度 進級(卒業)・留年状況

学年	在学者	進級・卒業	留年	休学	転学	退学
1年	134	123	10	1	0	0
2年	139	131	8	0	0	0
3年	137	125	10	0	0	2
4年	146	141	3	1	0	1
5年	127	125	1	1	0	0
6年	131	118	8	1	0	4
合計	814	763	40	4	0	7

卒業

令和4年10月25日、26日及び11月1日、2日の卒業試験の結果をもとに卒業判定を行い、3月7日付けで118名が卒業した。

なお、この3月の卒業生118名中、留年しないで卒業した者は93名であり、同一年度(平成29年度)入学者130名の71.5%にあたる。

2. 卒業生数

令和5年3月卒業 118名(男76名、女42名)

3. 卒業生進路状況(第116回医師国家試験合格者) 令和4年3月現在

埼玉医科大学病院	25名
埼玉医科大学総合医療センター	22名
埼玉医科大学国際医療センター	0名
他大学附属病院・他指定病院	68名
合計	115名

4. 第117回 医師国家試験

受験者(名)			合格者(名)			合格率(%)		
新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計
118	11	129	110	8	118	93.2	72.7	91.5

5. 入学者選抜と入学者

令和5年度入学者選抜は次のとおり実施された。

(1) 学校推薦型選抜

出願期間 令和4年11月1日～令和4年11月11日

試験日 11月20日

合格発表 12月1日

入学手続期間 12月1日～12月12日

試験科目 適性検査Ⅰ（数学系分野、理科系分野、英語系分野）、適性検査Ⅱ（小論文）、面接

①指定校枠

志願者 18名

受験者 18名

合格者 5名

入学者 5名（男2名、女3名），（現役2名、他3名）

②一般公募枠

志願者 42名

受験者 42名

合格者 14名

入学者 14名（男4名、女10名），（現役8名、他6名）

③埼玉県地域枠

志願者 42名

受験者 42名

合格者 19名

入学者 19名（男5名、女14名），（現役14名、他5名）

④特別枠

志願者 3名

受験者 3名

合格者 1名

入学者 1名（男0名、女1名），（現役1名、他0名）

(2) 帰国生選抜

出願期間 令和4年11月1日～令和4年11月11日

試験日 11月20日

合格発表 12月1日

入学手続期間 12月1日～12月12日

試験科目 適性検査Ⅰ（数学系分野、理科系分野、英語系分野）、適性検査Ⅱ（小論文）、面接

志願者 2名

受験者 2名

合格者 1名

入学者 1名（男1名、女0名），（現役0名、他1名）

(3) 一般選抜

試験科目

1次 数学、理科（物理・化学・生物より2科目選択）、英語、小論文（和文・英文の記述式）

2次 面接

①前期

出願期間 令和4年12月5日～令和5年1月20日

1次試験 1月31日

1次合格発表 2月7日

2次試験 2月11日

2次合格発表 2月16日
入学手続期間 2月16日～2月22日
志願者 1,764名
1次受験者 1,593名
1次合格者 365名
2次受験者 231名 ※2次追試験受験者1名含む
2次合格者 76名
入学者 60名(男37名、女23名), (現役17名、他43名)

②後期

出願期間 令和5年2月1日～令和5年2月21日
1次試験 3月4日
1次合格発表 3月9日
2次試験 3月12日
2次合格発表 3月16日
入学手続期間 3月16日～3月23日
志願者 1,321名
1次受験者 1,118名
1次合格者 126名
2次受験者 119名
2次合格者 25名
入学者 20名(男12名、女8名), (現役4名、他16名)

(4)大学入学共通テスト利用選抜

出願期間 令和4年12月5日～令和4年1月13日
1次試験 1月14日・1月15日
1次合格発表 3月9日
2次試験 3月12日
2次合格発表 3月16日
入学手続期間 3月16日～3月23日
試験科目
1次 国語(古典を含む)、英語(リスニングを含む)、数学(I・A、II・B)、
理科(物理・化学・生物より2科目選択)
2次 小論文(和文)、面接
志願者 581名
1次受験者 576名
1次合格者 252名
2次受験者 85名
2次合格者 14名
入学者 10名(男7名、女3名), (現役6名、他4名)

○入学者(合計)

130名(男68名、女62名)

○入学者の高等学校所在地都道府県別

北海道	0	青森	1	岩手	1
宮城	1	秋田	0	山形	0
福島	3	茨城	9	栃木	7
群馬	7	埼玉	28	千葉	4
東京	28	神奈川	10	新潟	2
富山	0	石川	0	福井	0

山梨	2	長野	0	岐阜	0
静岡	1	愛知	5	三重	1
滋賀	0	京都	1	大阪	6
兵庫	2	奈良	1	和歌山	1
鳥取	0	島根	0	岡山	1
広島	0	山口	0	徳島	0
香川	0	愛媛	1	高知	0
福岡	0	佐賀	0	長崎	1
熊本	2	大分	0	宮崎	0
鹿児島	2	沖縄	1	その他・外国	1

5. 5) 教育カリキュラム (奨学金等)

○奨学金等

令和4年度奨学生状況は以下の通りである。

① 埼玉県地域枠医学生奨学金

1年生 19名 (休学による貸与停止1名)

2年生 19名

3年生 18名

4年生 20名 (留年による貸与停止2名)

5年生 14名

6年生 17名

貸与者 107名

※貸与額 1人20万/月

② 埼玉医科大学医学部地域医療奨学金

1年生 ー

2年生 ー

3年生 ー

4年生 ー

5年生 1名

6年生 4名

貸与者 5名

※各学年定員 10名・貸与額 1人5万円/月

平成31年度入学生から新規募集を停止した

③ 日本学生支援機構 奨学生数

(学部)

(人)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計
第一種	8	4	10	10	2	2	36
第二種	10	10	13	14	6	10	63
給付型	4	0	5	0	0	0	9
計(延数)	22	14	28	24	8	12	108
計(併用者含む)	14	11	16	18	6	10	75

(大学院 博士課程)

(人)

	1年	2年	3年	4年	計
一種	1	1	0	0	2
二種	0	0	0	0	0
合計	1	1	0	0	2

[貸与月額表]

(学部)

第一種奨学金貸与月額 (無利子貸与)

(単位:円)

国・公立		私立	
自宅	自宅外	自宅	自宅外

45,000	51,000	54,000	64,000
30,000 20,000※	40,000※ 30,000 20,000※	40,000※ 30,000 20,000※	50,000※ 40,000※ 30,000 20,000※

※平成30年度入学者より適用。

第二種奨学金

月額	年利（上限）
20,000・30,000・40,000・50,000・60,000・ 70,000・80,000・90,000・100,000・ 110,000・120,000※	3.0%

※私立大学の医・歯学課程は12万円選択の場合のみ、希望により4万円の増額貸与が受けられる。

(大学院)

奨学金貸与月額

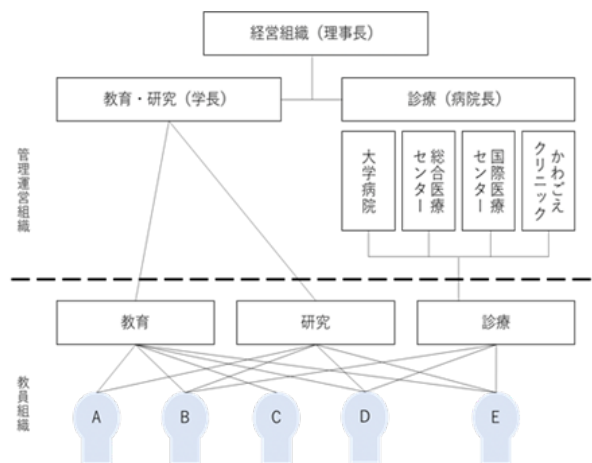
(単位：円)

種類	博士医・歯・薬・獣医学課程
第一種 (無利子)	80,000・122,000
第二種 (年利上限3%)	50,000・80,000・100,000・130,000・150,000

5. 6) 医学部の教員組織について

本学医学部の教員組織については、平成17年度中にその骨子が作られ、理事長・学長による情報宣伝活動を経て、平成18年4月1日より実施に移された。これは、平成15年12月に丸木清浩前理事長による「本学の新しい管理運営方針」に基づく取組みとして行なったものであり、その目的としたところは、① 教育、研究、診療の3本の柱を独立させ、それぞれ自立的に機能させる。② 資格と職位を定め、教員一人ひとりの役割と責任を明確にする。③ 一人の教員に権限と責任が集中することのないように、権限と責任の分散をはかることであった(図1参照)。従って新しい教員組織は、教育、研究、診療の3つの分離自立した組織から成り立つ。また、この組織を構成する教員の基本的姿勢として、① 全ての教員は、教育に参加し、かつ研究的志向を持って、自らの役割を果たすこと、② 全ての教員は、その「資格」と「職位」を明確にし、それに相応しい責任と義務を果たすこと、が定められた。すなわち、大学に奉職する教員はすべて教育の義務があると同時に、診療も教育も、研究的な視野に立って、常により良いものを求め、新たな知識・技能・態度の探求、習得に努めなくてはならないとした。

<図1>



なお、上記②の資格とは、身分的称号と定義されたが、平成19年度から呼称が変更され、教授、准教授、講師、助教、助手が教員の資格として定められた。また、職位とは、任期制のもとで役割と責任を示すものとして定義され、教員組織には代表教育主任、教育主任、教育副主任、教育員、研究組織には代表研究主任、研究主任、研究副主任、研究員とした。

診療組織の長を診療科長と呼称していたが、平成26年度に前理事長より、部長と呼称することの提案があり、診療部長、診療副部長、医長、専門医員、医員と呼称することとした。(図2参照)。また、初期臨床研修中の医師は研修医、後期臨床研修中の医師はシニアレジデントと呼ぶ。

この教員組織では、講座制の見直しも行われ、基本学科という新たな概念を導入し、基本学科において人事ならびに経費の運用にあたり、これを相当する職位として運営責任者(職位)を定め、その機能を最大限発揮できる体制とした。

<図2>

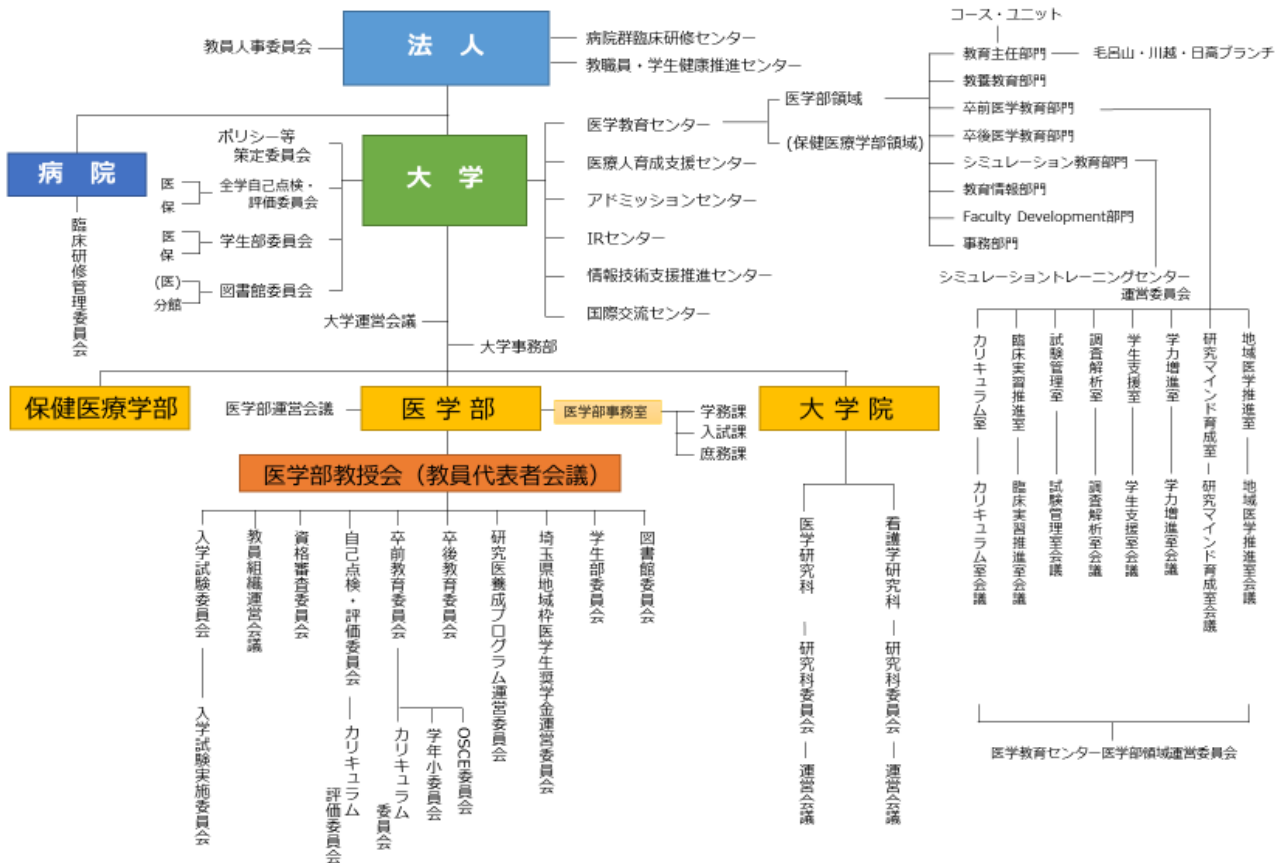
資格	職位
・教授 ・准教授 ・講師 ・助教 ・助手	基本学科 ・運営責任者
	教育組織 ・教育主任 ・教育副主任 ・教育員
	研究組織 ・研究主任 ・研究副主任 ・研究員
・特任(教授、准教授、講師) ・客員(教授、准教授、講師) ・非常勤(講師、医師)	診療組織 ・診療部長 ・診療副部長 ・医長(外来、病棟、研修) ・医員

この教員組織の導入に伴い、教育、研究、診療の各組織は、自立的な機能を尊重しつつも連携を重視した、これまでにない発想に基づく関係の構築が求められることになった。また、従来の教授会のあり方も見直され、各組織から選出された代表者からなる教員代表者会議へと名称が変更された。これに伴い、それまでの学部内のさまざまな会議も見直しが行われた。

幸い大きな混乱もなく新しい教員組織へと移行されたが、実施される中で、手直しが必要な部分や更に充実したものにする必要性に対してはその都度、教員人事委員会、教員組織運営会議等で検討を重ねている。このようにして修正や訂正が行われた結果については、小冊子「埼玉医科大学医学部の教員組織について」として各教員に配布した。また、ホームページには最新の情報を掲載し、教職員は必要に応じて常時閲覧が可能となり、医学部の新しい教員組織は広く周知が図られている。

なお、法人、大学全体の中における全体像を把握する上での俯瞰図として、医学部を中心に医学教育に関わる最新の組織図を末尾に添付するのでご参照願いたい。

医学教育に関わる組織



6. 1) 保健医療学部

1. 令和4年度実績と次年度以降への展望

1) 教授会と各種委員会

保健医療学部教授会の構成員（令和4年4月1日現在）は、看護学科教授5名、臨床検査学科教授6名、臨床工学科教授5名、理学療法学科教授4名、共通教育部門教授6名、学長、大学事務部部長の計28名からなる。

（但し共通教育部門の教員は学部全体の教育を受け持つが、学生のいない部門となるため、認証評価等における区分では各学科に配属する。その観点からは、看護学科教授8名、臨床検査学科教授7名、臨床工学科教授6名、理学療法学科教授5名となる。）令和4年度は定例教授会を11回、入学試験の可否判定等に関する臨時教授会を5回開催した。

二年前からの新型コロナウイルスのパンデミックは第6波、第7波、第8波と波状攻撃の状態であったが、WEB配信授業については前期までとし、後期からは対面授業を復活させた。防疫のため学生間のデイスタンスを取る必要があり、教室の配分に苦勞し、学科の判断で2グループに分割する授業を適宜行った。このためもありまた以前からの教室不足に対応するために、年度の最後に教室の一部に改修工事を行った。階段教室を平らにして利便性を高め、小教室の一つとゼミ室二つをつなげることによって中規模教室を作った。

3年間にわたる新型コロナウイルスのパンデミックに悩まされていたが、教授会については適正かつ円滑に運営され、コロナ対策および教育についての対応策の周知が徹底され学部業務の遂行に支障を来さなかったことは評価できる。教員組織運営会議、学務委員会、入学試験委員会、自己点検・評価委員会、広報委員会、学生部委員会、図書館委員会、倫理委員会の各種委員会活動も順調に行われた。新型コロナウイルスの蔓延は収束に向かいつつあるようだが、5類扱いに変わっても今後も長く影響を及ぼすと考えられるため、WEB配信を交えた授業方法について臨機応変な転換が出来る体制を構築する必要がある。

2) 学事および学生生活

(1) 入学式、新入生オリエンテーション

令和4年4月11日に入学式を行ったが、新型コロナウイルスの防疫体制のため前年と同様に規模を縮小し、新入生および学長、理事長、学部長、学科長、一部教職員だけ参加とし、来賓や家族の参加はご遠慮願った。オリエンテーションの一部は入学式前に行い、特に配信授業に関する連絡方法等を事前に周知して授業開始に備えた。

新入生の人数は看護学科88名、臨床検査学科42名、医用生体工学科28名、理学療法学科50名の計208名と残念ながら今年も定員を満たしていない。学科ガイダンスは対面でのオリエンテーションとして行ったが、病院見学やバーベキューは前年に引き続き中止となった。幸いにも前期授業の開始時期はコロナ感染が下火であったために、順調に予定をこなすことが出来た。

(2) 学生便覧、教員便覧およびシラバス

令和4年度の学生便覧について、教育および学生生活にかかわる各種の事項を改定、追加した。これに伴い、教員便覧の記載事項についても改定した。シラバスは学科、学年別とし、4学科16クラス分の分冊である。シラバスには学習内容のみを記載し講義室と講義日時については記載せず、ホームページ上の学生のページで毎週金曜日に翌週の配信授業および対面による実習の時間割を掲載した。

(3) 課外学習プログラム

予定した課外学習の多くは中止となった。WEB配信で行えるものと、校舎内で行えるものの一部を施行した。

(4) 看護学科の領域別実習要件認定式

令和4年10月1日、看護学科3年生を対象に、第15回目の領域別実習要件認定式を教員と当該学生のみ、来賓来客なしで実施した。3年生の後期から始まる臨地実習に参加する資格を認定するものである。

(5) 解剖体慰霊祭への参加

解剖体慰霊祭が10月8日に行われた。昨年度に続いてご遺族以外は一部教員のみが参加し、学生は代表のみとした。

(6) 学生による授業評価と教員表彰

前期末と後期末の2回、全ての授業科目において学生による授業評価を実施し、各教員へのフィードバックおよび学生・教員への結果開示を行った。また、この評価結果をもとにした教員表彰として、講義科目については、各学科から3名ずつのTeacher of the Year賞および各学科から1名ずつのBest Effort of the Year賞を、演習科目については、各学科から3科目ずつのSubject of the Year賞を授与した。講義については、コロナ以前は3コマ以上の講義を持つ教員をすべて対象としていたが、本年度も対面による通常の講義をしていないので科目責任者のみを対象とした。

(7) 卒業式、謝恩会

令和5年3月11日に卒業式を行ったが、直前のコロナ第8波が過去最大の大きなものであったため、式典には卒業生、学長、理事長、学部長、学科長、教員少数のみの参加とした。来賓、家族の参加はご遠慮いただいた。式典後、各学科に分かれて卒業証書授与を行ったので、そこには多くの教員が参加する事が出来た。謝恩会については本年も中止とした。

看護学科14期生82名、臨床検査学科14期生69名、医用生体工学科14期生31名、理学療法学科13期生42名の合計224名の卒業を認定した。

(8) 学生の海外研修

本学国際交流センターが主催する春休みの海外語学研修が再開され、保健医療学部からは5名が参加した。

(9) 部活動と学園祭の開催

令和4年度の部活動は、クラスター感染を防ぐために年度はじめは活動停止としたが、後期から感染対策を十分に講じる旨の計画書および誓約書を出す部活動に限って再開を許可した。

医学部との合同開催となって15回目の学園祭（第15回越華祭）は、10月15日～10月16日の2日間にわたり今年度もWEB配信で行われた。

(10) 学生の意見くみ上げ

前期は学生との昼食を伴う懇談会を行わず、メールおよびWebClassを利用して意見を聴取した。後期には学生会、部活動、学年代表とそれぞれ1回懇談会を開催した。例年通りに在校生の学校生活全般についてのアンケート調査を行うのに加えて、1から3年生に今年度の遠隔授業についてのアンケート調査を行った。4年生には卒業時アンケートを行い4年間の感想および意見を集め学生部委員会で検討した。

(11) 学生保健室

令和4年度の学生保健室利用状況は計894件（川角校舎を含む）であり、うち心理相談に訪れたのは261件（159例）であった。近年はメンタル問題を抱えた学生が増加しかつ重症化する傾向にある。心理相談の件数も増加の一途をたどっている。大野先生は新しい試みとして、ゼミ室の一つで心の相談室を開始し常時利用できるようにしている。配信授業が多いと引きこもり傾向の学生が重症化する傾向がある。

学生保健室は教職員・学生健康推進センターにより運営されており、体調不良や軽微な外傷への一次対応に加えて、健康診断、ワクチン接種などにつき組織的な取り組みが可能となっている。関連病院での実習等で、ワクチン接種歴の明確な記録が要求されるようになり、いっそうの徹底を目指している。登校後に発熱する場合に備えて、ゼミ室のうち2つを隔離場所として確保している。

3) 広報活動とオープンキャンパス

広報委員会のもとで、昨年同様に学部ホームページ、各種のインターネット媒体、新聞、雑誌による学部紹介、駅構内および電車内へのポスター掲示、学部案内パンフレットの作成と送付等の広報活動を積極的に展開した。

しかしコロナ禍による制約のために、以前のように複数回の来校型オープンキャンパスを行う事が出来なかった。パンデミックの合間を縫って9月25日に本年度唯一のオープンキャンパスを行った。時期的には有効な学生募集の目的には遅すぎたと考えられるがやむを得なかった。その代わりとして本年も個別相談を積極的に受け入れて、1家族ごとに教員が校舎を見せながら対応した。

4) 入学試験

令和5年度入学試験として、編入試験(9月24日、受験者数4名、合格者3名)、学校推薦型選抜(11月27日、受験者数127名、合格者数102名)、総合型選抜(12月11日、受験者数10名、合格者数6名)、一般入学試験前期(2月1日、受験者数224名、合格者数142名)、一般入学試験後期(3月2日、受験者数28名、合格者数16名)を実施した。入試事務、試験監督および採点・集計にとくに問題はなく、円滑に業務が遂行された。受験者数は合計で389名(前年は389名)で前年と同様であった。一般前期入学試験を1日にまとめて受験生の利便を図ったが、直接的な受験生増加の効果は不明である。受験生は看護学科のみが前年よりも増加したが、ほかの3学科とも昨年と比べて減少した。臨床検査学科および臨床工学科の減少は深刻である。推薦入試および総合型入試の拡大などの対策を検討している。

今年も編入試験は志願者が4名と低調であった。看護学校の大学化が進み、存在意義が薄れつつあるようだ。また入学者のための特待生制度はまだ有効に機能していないので、周知して受験生増加につなげていきたい。

5) 国家試験

第112回看護師国家試験では、新卒82名全員が合格(100%)、第109回保健師国家試験では、新卒で22名中21名合格(95.5%)、第69回臨床検査技師国家試験では、新卒53名中52名合格(98.1%)、第36回臨床工学技士国家試験では、新卒36名中31名合格(83.9%)、第58回理学療法士国家試験では、新卒で42名全員が合格(100%)であった。新卒の合格率は臨床工学技士を除いて他は全国平均を上回っている。また、既卒者の合格者は、看護師で3名中1名、臨床検査技師では16名中3名、臨床工学技士で5名中1名、理学療法士で9名中7名であった。昨年がコロナ禍の影響を受けて近年では最も低調であったが、各学科とも教員が対策を講じて努力し大幅な改善を見た。

6) 教員の教育業績評価システム

教員の教育業績評価システムは平成23年度から検討、試行を重ねて、平成26年度3月から本格実施を開始した。今年度も円滑に実施され、令和4年度の教員人事考課の添付資料としても活用できた。

7) 教員の研究業績評価システム

全学的に研究業績評価を定量的にすることが決まり、医学部からの案を参考にして、平成27年度から保健医療学部独自の評価表を作成した。平成30年度から正式に採用し、人事考課と同時に実施していたが、昨年の自己点検評価委員会で研究業績データベースとの関係を見直し、両者がだいぶ近づいてきたことを認め、本年度から研究業績データベースに統一することになった。保健医療学部独自の研究業績評価表作成は終了した。

8) Institutional Research(IR)機能の整備

本学では平成24年にIR準備委員会を設置し、各種データを多角的に集計・分析・視覚化することで、大学全体としての問題点の整理とその解決策を検討する体制構築を目指してきた。現時点では教学部門の様々なデータを、医学部では医学教育センター医学部ブランチの教育情報部門に、保健医療学部では学部事務室に蓄積し、統計表と視覚化した解析結果を出力できる仕組みとなっており、年々、データの選別や処理法について改善を進めている。保健医療学部の検討としては完成年度に達してからの5学年の入学試験成績と、入学後成績の相関についてSPSSを用いた統計処理の結果が出た(担当大野顧問)。GPA制度を採用してから、これを利用して各種の成績評価を行っているが、本年も卒業時の累積GPAと国家試験成績の相関等を検討している。

9) 医療人教育者のためのワークショップ

新人教員のためのワークショップを第27回として8月2・3日に行なった(教員10名、事務室1名)。アドバンスコースIIは、宿泊なしとして、8月24・25の2日間通いで行った(教員20名)。宿泊及び懇親会はコロナ防疫のため中止している。

10) 保健医療学部公開講座の開催

昨年度は開催する事が出来なかったが、本年度は専門職に対する講座を参加人員を限定して数回行った。

11) 学部プロジェクト研究

令和4年度保健医療学部プロジェクト研究について、プロジェクト研究審査委員会による厳正な審査の結果、令和4年5月16日、31件を採択した。

13) 避難訓練

消防署がコロナ対策として公共活動を停止していたが、本年度から再開された。消防署のご協力を得て10月14日にコロナ以前と同様の防災訓練を行うことが出来た。おなじくBLS実習も再開され、1年生全員が講習を受講した。いずれも保健医療学部の学生の心得として重要なものであり継続していきたい。

14) 保護者会(たちばな会)

令和4年度も昨年同様に、入学式後に行われる新入生保護者歓迎会、保護者会総会などの多人数が集まる行事はほぼすべて中止だったが、コロナ禍の合間を縫って秋季連絡会を行って、現況を説明する事が出来た。

本年は昨年に引き続きコロナウイルスの蔓延により、多くの行事を中止するか縮小した。前期はスクール形式の授業をすべてWEB配信授業とし、実習については分散して対面で行った。後期にはWEB配信授業をごく一部に減らし、ほとんどの授業を対面で行うことが出来た。昨年から引き続きコロナウイルス罹患者と濃厚接触者を追跡フォローして、厳格な登校基準のもとに管理した。

まだポストコロナは見えてこないが、次年度からは従来通りの対面授業を再開する。

入学試験受験者の深刻な減少に対して、対策を検討した。少子化による影響とコロナ禍の影響の両方が作用しているものと考えられる。最も受験者の多い一般入試前期は、今まで筆記試験の一次試験と面接の二次試験を中一日置いて行っていた。この方法では受験者は3日間拘束されるに等しいので、その負担を軽減するために、一日で筆記試験と面接試験を行うように入試改革を行った。この変更の効果は著明ではなかったが、一回だけでは評価できないと考える。さらに次々と対策を講じて18歳年齢の減少に対処していく計画である。

6. 2) 教授会各種委員会

令和4年度

委員会名	任期等	委員名 (◎は委員長, ○は副委員長)
教授会	自 R4. 4. 1 至 R5. 3. 31	◎ 加藤木利行 (学部長) 別所正美 (学長) 竹内勤 (副学長) 千田みゆき (看護) 大森智美 (看護) 野田智子 (看護) 大賀淳子 (看護) 栗生田友子 (看護) 茅野秀一 (臨検) 佐藤正夫 (臨検) 小野川傑 (臨検) 藤原智徳 (臨検) 飯野望 (臨検) 山岸敏之 (臨検) 下岡聡行 (臨工) 小林直樹 (臨工) 山下芳久 (臨工) 宮本裕一 (臨工) 若山俊隆 (臨工) 高倉保幸 (理学) 藤田博暁 (理学) 赤坂清和 (理学) 田邊一郎 (共通) 辻美隆 (共通) 池田将樹 (共通) 嶋崎晴雄 (共通) 間山伸 (共通) 内田和利 (大学事務部長) 乙戸崇寛 (理学) (任期 R4. 4. 1~R4. 8. 31)
学務委員会	自 R4. 4. 1 至 R5. 3. 31	◎ 加藤木利行 (学部長) 千田みゆき (看護) 大森智美 (看護) 茅野秀一 (臨検) 小野川傑 (臨検) 下岡聡行 (臨工) 宮本裕一 (臨工) 高倉保幸 (理学) 大久保雄 (理学) 辻美隆 (共通) 嶋崎晴雄 (共通) 金子優子 (看護) 内田康子 (臨検) 是村利幸 (共通)
学生部委員会	自 R4. 4. 1 至 R5. 3. 31	◎ 辻美隆 (共通) ○ 藤原智徳 (臨検) 大澤優子 (看護) 櫻庭奈美 (看護) 飯野望 (臨検) 小林直樹 (臨工) 石川雅浩 (臨工) 澤田豊 (理学) 嶋崎晴雄 (共通) 大野美佐子 (看護) 乙戸崇寛 (理学) (任期 R4. 4. 1~8. 31) 赤坂清和 (理学) (任期 R4. 9. 1~R5. 3. 31)
自己点検・評価委員会	自 R4. 4. 1 至 R5. 3. 31	◎ 加藤木利行 (学部長) 野田智子 (看護) 横山ひろみ (看護) 山岸敏之 (臨検) 黒田真代 (臨検) 宮本裕一 (臨工) 脇田政嘉 (臨工) 新井智之 (理学) 師岡祐輔 (理学) 池田将樹 (共通) 椎橋実智男 (IR) 柴崎智美 (IR)
入学試験委員会	自 R4. 4. 1 至 R5. 3. 31	◎ 加藤木利行 (学部長) ○ 間山伸 (共通) 別所正美 (学長) 千田みゆき (看護) 大森智美 (看護) 本谷久美子 (看護) 茅野秀一 (臨検) 村本良三 (臨検) 黒田真代 (臨検) 下岡聡行 (臨工) 若山俊隆 (臨工) 中島孔志 (臨工) 高倉保幸 (理学) 金井欣秀 (理学) 藤田博暁 (理学) 徳本康人 (アドミッションセンター) 小室秀樹 (大学事務部) 内田和利 (大学事務部長) 乙戸崇寛 (理学) (任期 R4. 4. 1~8. 31) 澤田豊 (理学) (任期 R4. 9. 1~R5. 3. 31)
広報委員会	自 R4. 4. 1	◎ 藤田博暁 (理学) ○ 大賀淳子 (看護) 関根由紀子 (看護)

	至 R5. 3. 31	野寺誠 (臨検) 山本晃司 (臨検) 奥村高広 (臨工) 駒形英樹 (臨工) 國澤洋介 (理学) 小関要作 (理学) 上滝圭介 (共通)
図書館委員会	自 R4. 4. 1 至 R5. 3. 31	◎ 池田将樹 (共通) 山路真佐子 (看) 伴場裕巳 (臨検) 小林直樹 (臨工) 時田幸之輔 (理学)

6. 3) 学事

1. 入学式

- 入学式：令和4年4月11日（月）
- 入学式前学科ガイダンス： 令和4年4月7日（木）～8日（金）
- 新入生オリエンテーション：令和4年4月12日（火）～14日（木）
上記中 4月12日（火） Web 配信

2. 授業・試験（4学年共通）

- 前期授業 令和4年4月15日（金）～7月30日（土）
- 定期試験 令和4年9月1日（木）～9月22日（木）
(追試験・再試験含む)
- 後期授業 令和4年9月26日（月）～令和5年1月27日（金）
- 定期試験 令和5年2月6日（月）～2月28日（火）
(追試験・再試験含む)

3. 卒業式・学位記授与

- 学士：令和5年3月11日（土）
- 修士：令和5年3月25日（土）

4. その他

- 定期健康診断：1年生 令和4年4月20日（水）, 22日（金）
2年生 令和4年3月24日（木）, 4月5日（火）
3年生 令和4年3月29日（金）, 4月1日（金）
4年生 令和4年3月25日（金）, 4月4日（月）
※ 受診率：904/911 99.2%

○公開講座

令和4年度の公開講座は、新型コロナウイルスの感染防止のため、すべての開催を見送った。

- 解剖体慰霊祭： 令和4年10月8日（土）
- 大学祭： 令和4年10月15日（土）, 16日（日）
オンラインで開催(毛呂山キャンパスより配信)

6. 4) 入学、進級、卒業、入試

1. 入学

(1) 学科別入学者数（令和4年度入学者・編入学含む）

看護学科	89名（男17名，女72名）	現役	84名
臨床検査学科	42名（男12名，女30名）	現役	40名
臨床工学科	28名（男13名，女15名）	現役	26名
理学療法学科	50名（男33名，女17名）	現役	49名
計	209名（男75名，女134名）	現役	199名

(2) 出身別入学者数

都道府県名（名）		都道府県名（名）		都道府県名（名）		都道府県名（名）	
青森県	2	城県	4	東京都	19	沖縄県	1
宮城県	3	栃木県	10	山梨県	3		
秋田県	3	群馬県	9	長野県	7		
山形県	4	埼玉県	129	静岡県	2		
福島県	6	千葉県	6	高知県	1	合計	209名

2. 進級と卒業

進級（卒業）・留年状況（令和5年3月31日現在）

○看護学科 (名)

学 年	在学者(男・女)	進級・卒業	留年者	退学
1年	90 (17・73)	88	1	1
2年	87 (8・79)	86	1	0
3年	87 (10・77)	83	2	2
4年	83 (8・75)	82	1	0
計	347 (43・304)	339	5	3

○臨床検査学科 (名)

学 年	在学者(男・女)	進級・卒業	留年者	退学
1年	46 (15・31)	38	1	7
2年	60 (19・41)	45	9	6
3年	55 (10・45)	52	2	1
4年	71 (28・43)	69	2	0
計	232 (72・160)	204	14	14

○臨床工学科 (名)

学 年	在学者(男・女)	進級・卒業	留年者	退学
1 年	33 (18・15)	26	6	1
2 年	28 (22・6)	26	2	0
3 年	50 (31・19)	48	0	2
4 年	34 (21・13)	31	3	0
計	145 (92・53)	131	11	3

○理学療法学科 (名)

学 年	在学者(男・女)	進級・卒業	留年者	退学
1 年	51 (34・17)	51	0	0
2 年	41 (20・21)	37	3	1
3 年	53 (24・29)	50	1	2
4 年	42 (24・18)	42	0	0
計	187 (102・85)	180	4	3

3. 卒業 (第 14 回 令和 5 年 3 月 11 日)

学科別卒業生数

看護学科	82 名 (男 8 名, 女 74 名)
臨床検査学科	69 名 (男 27 名, 女 42 名)
臨床工学科	31 名 (男 19 名, 女 12 名)
理学療法学科	42 名 (男 24 名, 女 18 名)
計	224 名 (男 78 名, 女 146 名)

4. 国家試験結果

○第 112 回看護師国家試験 (名)

受験者			合格者			合格率(%)		
新 卒	既 卒	計	新 卒	既 卒	計	新 卒	既 卒	計
82	3	85	82	1	83	100	33.3	97.6

○第 109 回保健師国家試験 (名)

受験者			合格者			合格率(%)		
新 卒	既 卒	計	新 卒	既 卒	計	新 卒	既 卒	計
22	0	22	21	0	21	95.5	-	95.5

○第 69 回臨床検査技師国家試験 (名)

受験者			合格者			合格率(%)		
新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計
53	16	69	52	3	55	98.1	18.8	79.7

○第36回臨床工学技士国家試験 (名)

受験者			合格者			合格率(%)		
新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計
31	5	36	26	1	27	83.9	20.0	75.0

○第58回理学療法士国家試験 (名)

受験者			合格者			合格率(%)		
新卒	既卒	計	新卒	既卒	計	新卒	既卒	計
42	9	51	42	7	49	100	77.8	96.1

5. 卒業生進路状況 (国家試験合格者) (名)

区分	看護学科	臨床検査学科	臨床工学科	理学療法学科
埼玉医科大学病院	17	3	2	2
埼玉医科大学総合医療センター	7	2	3	1
埼玉医科大学国際医療センター	46	3	4	2
法人関連病院等	1	0	0	3
他の医療機関等	8	40	15	34
進学	3	3	1	0
就職活動中	0	0	1	0
就職意思なし	0	1	0	0
合計	82	52	26	42

6. 入学試験

令和5年度入学試験が次のとおり実施された。

(1) 学校推薦型選抜試験

出願期間： 令和4年11月10日(木)～11月18日(金)

試験日： 11月27日(日)

合格発表： 12月1日(水)

入学手続期間： 12月2日(金)～12月9日(金)

試験科目： 小論文, 面接

合格者数等：

学科名	看護学科	臨床検査学科	臨床工学科	理学療法学科
志願者	62名	27名	13名	25名
受験者	62名	27名	13名	25名

合格者	40名	24名	13名	25名
入学者	40名	24名	13名	25名

(2) 総合型選抜試験

出願期間： 令和4年 11月25日(金)～12月2日(金)
 試験日： 12月11日(日)
 合格発表： 12月13日(火)
 入学手続： 令和4年 12月14日(水)～12月21日(水)
 試験科目： 適性検査Ⅰ(小論文), 適性検査Ⅱ(基礎学力検査), 面接
 合格者数等

学科名	臨床検査学科	臨床工学科
志願者	6名	4名
受験者	6名	4名
合格者	3名	3名
入学者	1名	2名

(3) 一般入学試験

○一般選抜試験(前期)

出願期間： 令和5年 1月5日(木)～1月18日(水)
 試験日： 2月1日(水)
 合格発表： 2月3日(金)
 入学手続期間： 2月4日(土)～2月13日(月)
 試験科目：

看護学科： 理科(物理基礎, 化学基礎, 生物基礎から1科目選択),
 小論文, 面接
 臨床検査学科： 理科・数学(物理基礎, 化学基礎, 生物基礎, 数学から1科
 目選択), 外国語(英語), 面接
 臨床工学科： 理科・外国語(物理基礎, 化学基礎, 生物基礎, 英語から1
 科目選択), 数学, 面接
 理学療法学科： 理科・数学・外国語(物理基礎, 化学基礎, 生物基礎, 数学,
 英語から2科目選択), 面接

合格者数等：

学科名	看護学科	臨床検査学科	臨床工学科	理学療法学科
志願者	130名	51名	16名	35名
受験者	127名	49名	15名	33名
合格者	69名	39名	9名	25名
入学者	41名	17名	7名	15名

○一般入学試験(後期)

出願期間： 令和5年 2月10日(金)～2月20日(月)
 試験日： 3月2日(木)
 合格発表： 3月3日(金)
 入学手続期間： 3月4日(土)～3月10日(金)

試験科目：

看護学科： 理科(化学基礎，生物基礎から1科目選択)，外国語(英語)，面接

臨床検査学科：理科・数学(化学基礎，生物基礎，数学から1科目選択)，
外国語(英語)，面接

臨床工学科： 数学，外国語(英語)，面接

理学療法学科： 理科・数学・外国語(化学基礎，生物基礎，数学，英語から
2科目選択)，面接

合格者数等：

学科名	看護学科	臨床検査学科	臨床工学科	理学療法学科
志願者	24名	9名	2名	2名
受験者	17名	7名	2名	2名
合格者	5名	6名	2名	2名
入学者	8名	4名	2名	2名

(4) 看護学科3年次編入学試験

出願期間：令和4年9月1日(木)～9月9日(金)

試験日： 9月24日(土)

合格発表： 9月27日(火)

入学手続期間： 9月28日(水)～10月5日(水)

試験科目： 英語，専門科目，面接

志願者 3名

受験者 3名

合格者 2名

入学者 1名

(5) 臨床工学科2年次編入学試験

出願期間：令和4年9月1日(木)～9月9日(金)

試験日： 9月24日(土)

合格発表： 9月27日(火)

入学手続期間： 9月28日(水)～10月5日(水)

試験科目： 口頭試問，面接

志願者 1名

受験者 1名

合格者 1名

入学者 1名

(6) 入学予定者 (令和5年度入学者・編入学含む)

看護学科：	90名 (男13名，女77名)	現役	85名
臨床検査学科：	46名 (男16名，女30名)	現役	42名
臨床工学科：	25名 (男15名，女10名)	現役	23名
理学療法学科：	42名 (男28名，女14名)	現役	39名
	計203名 (男72名，女131名)	現役	189名

6. 5) 教育カリキュラム (奨学金等)

1. 教育カリキュラム

(1) 教育研究の理念および目的

本学部においては、本学学則に明示されているように、「社会が求める専門的な知識と技能及び高い倫理性を身につけた保健医療技術者を育成し、更に進んで新しい医学関連諸科学の研究並びに保健医療技術の向上に努力し、もって広く人類の健康と福祉に貢献する」ことを目指している。さらに、医学部とも共通した教育理念の下に、教育目的として、①人間の生命に対する深い愛情と畏敬の念を基盤として高い倫理観と豊かな人間性を涵養すること、②保健医療に関する国際水準の知識と技術の修得を基本とし、未知の課題を自ら解決する意欲と探求心を持つとともに、自らの能力の限界を知り、生涯にわたり自己の資質の向上に努めること、③協調性に富んだ社会人として様々な職種の人々と協力し、また、社会的視点に立って地域の保健医療に積極的に関わることができることの3点を柱として、人材の育成を図っている。上記の教育目的は、そのまま学部のディプロマ・ポリシーに相当するが、さらに学科ごとに、より具体的なディプロマ・ポリシーを掲げて公表し、これを反映したカリキュラム構成としている。

(2) カリキュラム

上述のように、本学部ではディプロマ・ポリシーを反映したカリキュラム・ポリシーのもと、基礎分野において多様な一般教養科目を配し、学生による幅広い選択を促すことで教養教育の充実を図っている。なお、1年次から専門基礎～専門分野を開始するくさび型カリキュラムを取り入れることで、医療系学生としての学習意欲の維持を図り、また、従来型の縦割りの学問分野による知識伝達型の入門教育だけでなく、1年次から段階的に進む医療の基本演習等での少人数の討論型学習を通じて、課題を探求し自ら解決する能力やコミュニケーション能力を育成することを目指している。さらに、専門基礎～専門分野では、各々の学科の専門領域を体系的にバランスよく配置して、高度専門職業人を効率よく育成できる教育課程としている。また、医学関連の科目については、いずれの学科においても、医療人として必要な最低限の医学知識を効率よく学習できるよう、基礎医学と臨床医学のそれぞれで統合型カリキュラムとなるよう工夫している。

a) 看護学科

看護学科では、基礎分野に相当する「生活している人間の理解」、専門基礎分野に相当する「看護の対象としての人間の理解」、から専門分野に相当する「看護専門職者に必要な基本的知識・技術・態度の修得」に至る段階的なカリキュラム構造としている。

令和4年度は、令和4年度入学生に適用する令和4年度改正カリキュラム(卒業要件124単位)を開始した。1年次は、「生活している人間の理解」として哲学、文学、法学、心理学、発達心理学、社会学、教育学、人体の科学、人間工学、スポーツ科学、情報リテラシー、英語Ⅰ・Ⅱ、ドイツ語が、「看護の対象としての人間の理解」として看護におけるコミュニケーション論、医療の基本Ⅰ、看護学生のためのリテラシー、人体の構造と機能Ⅰ～Ⅲ、食物・栄養学Ⅰ・Ⅱ、病原微生物学、免疫学、薬理学、環境論、生活と健康、公衆衛生学、看護関係法規が、「看護専門職者に必要な基本的知識・技術・態度の修得」として看護学概論Ⅰ、看護技術論、基礎看護技術Ⅰ～Ⅲ、看護方法演習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅰが配

置されている。一方、2年次生以上は、平成29年度改定カリキュラム（卒業要件125単位）が適用される。2年次には、「生活している人間の理解」として日本国憲法、文化人類学、カウンセリング論、ジェンダー学、体育実技、英語Ⅲが、「看護の対象としての人間の理解」として看護倫理、病むことの心理、疾病の成り立ちⅠ～Ⅲ、放射線医学概論、社会福祉論、看護関係法規、保健医療行政論、医療情報学、疫学が、「看護専門職者に必要な基本的知識・技術・態度の修得」として基礎看護技術Ⅳ・Ⅴ、看護方法演習、基礎看護学実習Ⅱ、成人看護学概論、成人看護学方法論Ⅰ、老年看護学概論、小児看護学概論、母性看護学概論、母性看護学活動論、精神看護学概論、老年看護学実習Ⅰ、在宅看護学概論、公衆衛生看護学概論、家族看護学、災害看護学、看護過程論、フィジカルアセスメント、リハビリテーション看護、生殖医療と看護が、3年次には、「看護の対象としての人間の理解」として、医療の基本Ⅱ、保健統計学、「看護専門職者に必要な基本的知識・技術・態度の修得」として成人看護学方法論Ⅱ～Ⅳ、老年看護学活動論、小児看護学活動論、精神看護学活動論、在宅看護学活動論、看護研究概論、公衆衛生看護学対象別活動論Ⅰ・Ⅱ、公衆衛生看護学活動展開論Ⅰ・Ⅱ、健康教育論Ⅰ・Ⅱ、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、3年次から4年次に老年看護学実習Ⅱ、小児看護学実習、母性看護学実習、精神看護学実習が、4年次には、「看護の対象としての人間の理解」として、看護政策論、医療経済学が、「看護専門職者に必要な基本的知識・技術・態度の習得」として、看護学概論Ⅱ、学校看護論、産業看護論、看護のマネジメント、国際看護論、看護総合セミナー、成人看護学実習Ⅲ、在宅看護学実習、実践応用の看護学実習、パリアティブケア論、救急看護論、看護研究セミナー、地域診断論Ⅰ・Ⅱ、公衆衛生看護管理論、公衆衛生看護学実習が配置されている。

なお、カリキュラム改定に伴い平成24年度から保健師教育課程は選択制となっている。

b) 臨床検査学科

臨床検査学科では、1年次に基礎分野として科学的思考の基盤となる自然科学系、人間と生活の理解につながる人文・社会科学系および外国語を必修または選択科目として満遍なく配置し、幅広い教養を身につけられるよう工夫している。なお、本学科は高度な専門性を有する医療人としての臨床検査技師の育成とともに、第1種衛生管理者など幅広く保健分野で活動できる職業人の育成も目指している。

令和4年度新入生から臨床検査技師養成のためのカリキュラムが改定されたことにより、一部科目の名称・単位数が順次変更される。1年次には、基礎科目として倫理学、哲学、心理学、文学、法学、社会学、人体の科学入門、統計学、数学、物理学、物理学実験、化学Ⅰ～Ⅱ、化学実験、生物学、生物学実験、英語Ⅰ～Ⅱ、英会話、ドイツ語、スポーツ科学が、専門基礎科目として医療の基本Ⅰ、人体の構造と機能Ⅰ～Ⅲ（解剖学・生理学・生化学）、病理学、血液検査学、情報科学、情報科学実習が、専門科目として臨床検査概論、基礎臨床検査技術、医動物学が置かれている。2年次には基礎科目として社会福祉論、医学英語が、専門基礎科目として医療の基本Ⅱ、人体の構造と機能ⅡB、微生物学、免疫学、薬理学、疫学、医用工学概論、医用工学実習が、専門科目として臨床医学各論（ヒトの病気）Ⅰ～Ⅳ、病理組織細胞検査学、病理組織細胞検査学実習、臨床血液学、臨床血液学実習、臨床検査総論、臨床検査総論実習、医動物学実習、基礎臨床化学、基礎臨床化学実習、臨床免疫学、臨床生理学Ⅰ、臨床生理学Ⅰ実習、臨床生理学Ⅱ、労働衛生法規Ⅰ～Ⅱ、食品学、原書講読の各科目が配置されている。3年次には専門基礎科目として、医療の基本

Ⅲ、公衆衛生学、公衆衛生学実習、保健医療福祉総論が、専門科目として臨床病理学総論、病理細胞検査診断学、臨床化学、臨床化学実習、放射性同位元素検査学、臨床微生物学、臨床微生物学実習、臨床免疫学実習、輸血移植学、輸血移植学実習、遺伝子検査学、臨床生理学Ⅱ実習、臨床生理学Ⅲ、臨床生理学Ⅲ実習、検査管理学、検査情報処理科学、検体採取処理技術、環境保健学、衛生管理学、救急救命論、環境衛生工学、食品衛生学、栄養学、健康食品総論が配置されている。例年、夏期休暇中に実施されてきた企業実習は、COVID19 の影響により各施設での受け入れが困難となり開講されない状況が継続している。4 年次には前期に臨地(病院)実習が実施され、後期に検査学特論、産業保健学、保健社会学、薬事関係法規の各専門科目が配置される。さらに3 年次後期から4 年次後期にかけては専門科目である卒業研究が実施される(選択科目)。

c) 臨床工学科

臨床工学科では、1～3 年次において基礎分野である人文科学系、社会科学系、スポーツ科学、自然科学系、外国語を幅広く開講するとともに、専門基礎および専門科目として医療系・工学系の科目をバランスよく配置したカリキュラム構成とし、先端技術を駆使した医療機器を操作する臨床工学技士を養成する。さらに、医療機器の開発にも従事できる、より高度な専門的人材の育成も目指している。令和5 年度入学生から、臨床工学技士学校養成所指定規則の一部が改正され、下記のカリキュラムで教育が実施される。令和4 年度以前入学の在在学生には、これまでと同じ旧カリキュラムが適用される。

1 年次には、基礎科目として社会の理解、哲学、社会学、法学、倫理学、心理学、医療法規学概論、社会福祉論、スポーツ科学、英語Ⅰ～Ⅱ、ドイツ語Ⅰ、数学Ⅰ～Ⅱ、数学Ⅰ～Ⅱ演習、基礎統計学が、専門基礎科目として人体の構造と機能Ⅰ～Ⅱ、生物化学、細胞生物学、公衆衛生学、電磁気学、電磁気学演習、電気回路、電気回路演習、力学、力学演習、情報と計算機、計算機アーキテクチャ、情報リテラシー実習が、専門科目として臨床工学概論、代謝機能代行機器、生体工学総合演習Ⅰが配置されている。

2 年次には、基礎科目として技術英語、応用数学が、専門基礎科目として医療の基本Ⅰ、病理学総論、薬理学、麻酔学、電子工学、通信工学、電子工学演習、機械工学、機械工学演習、電気・電子実験、プログラミング実習が、専門科目としてセンサ・計測工学、生体物性論、医用音響工学、生体計測機器、医用治療機器学Ⅰ、医用治療機器学Ⅱ、臨床支援技術、循環機能代行機器、呼吸機能代行機器、機能代行機器実習Ⅰ～Ⅲ、医療機器安全管理学Ⅰ～Ⅱ、ヒトの病気Ⅰ～Ⅱ、生体工学総合演習Ⅱの各科目が配置されている。

3 年次には、基礎科目としてドイツ語Ⅰが、専門基礎科目として応用工学実験、デジタル信号処理、システム制御、医療の基本Ⅱが、専門科目として医用材料学、医用超音波工学、医用画像機器、機能代行機器実習Ⅲ、医療機器安全管理学実習、ヒトの病気Ⅲ～Ⅳ、臨床実習、生体工学総合演習Ⅲ(通年)が配置されている。

4 年次前期には基礎科目として英語Ⅲ、英会話、ドイツ語Ⅱが、専門科目として医用情報処理工学、医用工学、臨床工学、生体組織工学、放射線医学概論、救急救命論、動物実験学が配置され、また、前・後期を通じて生体工学総合演習Ⅳおよび卒業論文の作成が実施される。

d) 理学療法学科

理学療法学科では、各種の選択科目を配した基礎分野の学習により、幅広い教養教育の

充実をはかり、さらに専門基礎・専門分野では基礎系、神経系、骨・関節系、内部障害系、生活環境支援系、物理療法、教育・管理系の7分野のバランスを考えるとともに、演習時間を十分配慮したカリキュラム構成により、しっかりした専門的知識および技術を有する理学療法士を育成する。

1年次には基礎分野として物理学、物理学実験、化学、細胞生物学、情報科学演習、社会の理解、教育基礎セミナー、英語Ⅰ～Ⅱ、社会学、スポーツ科学、哲学、ドイツ語が、専門基礎分野として、人体の構造と機能Ⅰ～Ⅱ演習、運動学、人間発達学、リハビリテーション医学、人間発達学、栄養学、公衆衛生学が、専門科目として理学療法学概論、理学療法評価学入門および臨床見学実習が配置されている。

2年次には、専門基礎分野として、人体の構造と機能実習（構造系および機能系）、運動学演習、医療の基本Ⅰ、病理・微生物学演習、ヒトの病気Ⅰ～Ⅵ、骨・関節疾患（総論・各論）、精神疾患、臨床心理学演習、保健医療福祉学が、専門分野として、理学療法評価学Ⅰ～Ⅱ、物理療法学演習、日常生活活動学演習、生活環境学および検査・測定臨床実習が配置されている。

3年次には専門基礎分野として医療の基本Ⅱ、ヒトの病気Ⅶ、および運動学実習が、専門分野として理学療法研究法、臨床運動学、理学療法管理学、地域理学療法学、発達理学療法学演習Ⅰ～Ⅱ、筋骨格系理学療法学演習Ⅰ～Ⅱ、神経筋理学療法学演習、中枢神経系理学療法学演習Ⅰ～Ⅱ、呼吸循環理学療法学演習、義肢装具学演習、理学療法臨床入門、がん理学療法学および総合臨床実習Ⅰが配置されている。

4年次には専門分野として理学療法評価学Ⅲ、理学療法機器技術学、リハビリテーション工学、代謝理学療法学、スポーツ理学療法学、保健科学統計学演習、予防理学療法学、地域理学療法臨床学実習、総合臨床実Ⅱ～Ⅲ、理学療法研究セミナーが配置されている。

2. 令和4年度の実績と自己点検・評価

令和4年度は、看護学科、臨床検査学科、臨床工学科の開設から17年目にあたり、理学療法学科は16年目となる。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、予定していた対面授業はWeb授業を基本としていたが、慎重な検討のうえで後期から対面授業の再開に踏み切った。教室の収容人員については50%を厳密に守ることが不可能であるので制限を緩めた。しかし1学年の人数の多い看護学科では、分割二部制の授業を行って感染防御に努めたために教員の負担は大きかった。

看護学科では、平成21年度からのカリキュラム改訂につづき、平成24年度、及び平成29年度からの新たな指定規則改定を受け、それぞれの年度から新しいカリキュラムをスタートした。また、臨床検査学科および臨床工学科では、平成23年度入学生からカリキュラムの一部改訂を行い、さらに、臨床検査学科では、平成25年度入学生からこれまでのコース制を廃止し、主として臨床検査技師の育成を念頭においた科目の統廃合を行った。理学療法学科も指定規則の変更に対応して、令和4年度から新しいカリキュラムとなった。令和4年度前期は昨年に続いてほとんどの授業がWeb配信（ライブ又は収録）によるものであったため、教室・実習室・ゼミ室等の使用に係る学科間の重複の問題は殆んど発生しなかったが、後期には教室の確保がたいへんに困難であった。

前・後期それぞれ3週間の定期試験は、コロナ禍での実施となったが、30周年記念講堂

2 階の講堂および校舎内の大教室および中教室を使用し日程通りに行えた。実施する上では、感染拡大防止の観点から換気を図りながら収容人員を 50% にして実施することを基本としたため、部屋数と収容人数の点から、4 学科すべての試験会場を決めるまでに難渋した。前期にはコロナ感染第 7 波の影響で自宅待機を余儀なくされた学生が、本試験・追試験とも受けられない事態が複数あり、後期の授業期間に追試験を行わなければならない科目が生じた。後期も第 8 波のために同様の学生が少数あり、進級判定の障碍となった。教員の協力によってなんとか大きな問題に至らずに定期試験が遂行でき、且つ成績評価も無事終了できたことは評価できる。

1～4 年次のカリキュラム構成については、各学科の責任のもとで点検・評価を実施し、改訂にあたっては、学務委員会での検討を経て教授会審議により決定されている。次年度については、コロナ以前の通常の対面での講義を行う予定であるが、新型コロナウイルス感染症の感染状況によっては変更もあり得る。教室における学生の密度を少しでも緩和するために春休みに改修工事を行った。階段教室の平定化によってグループワークをする大教室を増やし、307 教室とゼミ室 2 つを合体することで、従来から必要だった中規模教室を作った。

3. 奨学金等

日本学生支援機構による奨学金

(1) 令和 4 年度奨学生状況

令和 4 年度における保健医療学部の奨学生数は以下のとおりである。

(保健医療学部)

(名)

区分	1 年	2 年	3 年	4 年	計
一種	30	35	44	37	146
二種	64	53	67	50	234
給付	18	14	16	17	65
計	112	102	127	104	445

(大学院修士課程)

(名)

区分	1 年	2 年	計
一種	1	1	2
二種	0	1	1
計	1	2	3

(2) 令和 4 年度奨学金貸与月額表 (保健医療学部)

・ 第一種奨学金貸与月額 (無利子貸与)

(単位: 円)

入学年度	年次	希望額を選択	
		自宅	自宅外
～2017 年 (平成 29 年)	1～4	54,000	64,000
		30,000	30,000

2018年（令和元年）～	1～4	54,000	64,000
		40,000	50,000
		30,000	40,000
		20,000	30,000
			20,000

- ・ 第二種奨学金貸与月額（有利子貸与） （単位：円）

入学年度	年次	希望額を選択	貸与月額の利率 （年）
～2022（令和4年）	1～4	20,000・30,000・40,000・ 50,000・60,000・70,000・ 80,000・90,000・100,000・ 110,000・120,000	3.0%を上限とする 利率固定方式 と利率見直し方 式のどちらか一 方の選択制

- ・ 給付型奨学金 （単位：円）

入学年度	年次	区分	自宅	自宅外
～2022（令和4年）	1～4	I	38,300	75,800
		II	25,600	50,600
		III	12,800	25,300

- ・ 入学時特別増額貸与奨学金（有利子貸与） （単位：円）

入学年度	年次	初回のみ振込	
～2022（令和4年）	入学時	100,000	
		200,000	
		300,000	何れかを選択
		400,000	
		500,000	

- （大学院修士課程） （単位：円）

区分	希望額を選択
第一種奨学金貸与月額（無利子）	50,000・88,000
第二種奨学金貸与月額（有利子）	50,000・80,000・100,000・130,000・150,000

7. 附属図書館

令和4年度特記事項

各館の状況に応じた新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を継続した。内容は、短縮開館、利用制限、座席数削減、来館を伴わない文献複写サービスの提供、館内及び資料の消毒などである。

- 1) 医学部生の自習学習を再開した（7月、附属図書館）
- 2) リモートアクセスツール「RemoteXs」の提供を開始した（8月、附属図書館）
- 3) 2023年外国雑誌購読料は記録的な円安の影響で大幅な値上がりとなった（10月、附属図書館）
- 4) 文献管理ツール「RefWorks」の契約を終了した（3月、附属図書館）
- 5) 入退館ゲート（セキュリティゲート含む）設置検討のための現地調査が実施された（5月、総合医療センター分館）
- 6) 電子ジャーナル2誌の中止を検討し1誌の中止を決定した（9月、総合医療センター分館）
- 7) 11月より平日の夜間開館（19時まで）を再開した（日高キャンパス分館）
- 8) 創立50周年記念展示を実施した（11月～12月、日高キャンパス分館）
- 9) 理学療法学科4年生のみ利用制限を解除した（9月、川角キャンパス分館）

1. 構成

附属図書館（毛呂山）
総合医療センター分館（川越）
日高キャンパス分館（日高）
川角キャンパス分館（川角）

2. 構成員

附属図書館：持田智（MOCHIDA, Satoshi、館長）、内田和利（UCHIDA, Kazutoshi、事務長）、田口宣行（TAGUCHI, Nobuyuki、課長補佐）、忍田純子（OSHIDA, Junko、係長）、百留悦子（HYAKUDOME, Etsuko、主任）、中島裕美子、有期雇用3名、松本加奈子（契約職員、司書）、近藤裕子、内田マキ（以上パート、以上司書）、山梨一、鈴木則雄（以上昼間受付）、若林茂吉（4月まで）、福島武、山田猛（6月から）（以上夜間受付）、宮田進（用務員、以上受付ともシルバー人材センター）

総合医療センター分館：福田知雄（FUKUDA, Tomoo、分館長）、田口宣行（TAGUCHI, Nobuyuki、兼務、課長補佐）、小山有希子、森田晏奈

日高キャンパス分館：池田将樹（IKEDA, Masaki、分館長）、吉田真理（YOSHIDA, Mari、係長）、鈴木智絵、前田智美、松坂敦子（兼担、国際医療センター）

川角キャンパス分館：新井美由紀（ARAI, Miyuki、主任）、有期雇用1名、宮川由梨（パート、司書）

3. 運営状況

3-1. 人事

4月25日付で宮川由梨（新採用、パート）が川角キャンパスに配置された。3月末日付で吉田真理（係長）が定年退職した（日高）。特定非営利活動法人日本医学図書館協会（JMLA）理事（田口宣行）、JMLA 学術情報コンソーシアム委員会委員長（田口宣行）、JMLA 医書電子化検討ワーキンググループ委員（田口宣行）、JMLA 機関誌「医学図書館」編集委員会委員（百留悦子）、JMLA 認定資格運営委員会委員（中島裕美子）。

3-2. 業務（特記事項）

1) 附属図書館

- ・令和4年度図書館委員会（3回開催、Web会議、6月22日、10月19日、3月1日）
- ・8月1日から6日まで臨時休館し蔵書点検を実施した
- ・入退館ゲート（セキュリティゲート含む）設置検討のための現地調査が実施された（6月）
- ・国立情報学研究所目録所在情報サービス「NACSIS-CAT/ILL」更新に伴い図書サービスの一部を停止した（1月13日～31日）

2) 総合医療センター分館

- ・令和4年度総合医療センター分館図書館委員会（2回開催、5月18日、12月7日）
- ・8月8日から13日まで資料貸出を中止し蔵書点検を実施した
- ・2023年購読分から外国雑誌の発注手続きを附属図書館で取りまとめることとした（10月）
- ・学会誌の寄贈依頼文書を各基本学科等へ配付した（1誌申し出あり）（1月）

3) 日高キャンパス分館

- ・令和4年度日高キャンパス分館図書館委員会（3回開催、6月13日、10月20日、2月15日）
- ・来校型大学見学会における図書館見学に対応した（年間を通して定期的に開催）
- ・8月8日から13日まで臨時休館し館内作業（再配架）を実施した

- ・入試のため臨時休館した（8月27日、9月24日、1月7日、3月2日）
- 4) 川角キャンパス分館
- ・来校型大学見学会における図書館見学に対応した（年間を通して定期的に開催）
 - ・理学療法学科3年生（10月）及び4年生（7月）を対象に実習に伴う長期貸出を実施した
 - ・8月17日から19日までを臨時休館し館内作業（書架移動）を実施した
 - ・試験期間中の図書館利用について、4年生は担任許可制、1年生～3年生は試験当日に限り利用可とした（8月）

3-3. 設備ほか

1) 附属図書館

- ・データベース検索用パソコン2台、蔵書検索用パソコン1台を更新した（5月）
- ・利用者用パソコン27台（プリンター3台、スキャナー1台を含む）を更新した（3月）
- ・3階排煙窓開閉装置修繕工事が実施された（3月）

2) 総合医療センター分館

- ・利用者用パソコン5台に環境復元ソフトを適用した（12月）
- ・業務用パソコン1台を更新した（1月）
- ・利用者用パソコン2台を更新した（2月）

3) 日高キャンパス分館

- ・利用者用パソコン25台を更新した（5月）
- ・利用者用プリンター4台を更新した（9月）

4) 川角キャンパス分館

- ・利用者用パソコン4台を更新した（5月）
- ・漏水、浸潤による館内壁面の損傷箇所の現地調査が実施された（11月、12月）
- ・窓回り水漏れ工事が実施された（3月）

4. 利用状況

4-1. 館内利用

4館全体の入館者数は55,138人で前年比120.3%（9,305人増）、貸出者数は7,475人で95.8%（325人減）、貸出冊数は14,742冊で92.1%（1,269冊減）となった。館別では、毛呂山、川越が3項目すべて減少した一方、日高、川角は3項目とも増加した。毛呂山は、7月まで学部生の自習学習を禁止していた影響が大きく、上期の入館者数は前年比65.1%だったが、下期では123.9%で増加に転じており次年度の利用者増が期待できる。川越も上期の入館者数は前年比89.0%、下期は107.2%となっており同様の傾向である。

4-2. 図書館間相互貸借サービス

貸し件数は3,049件（81.1%）、借り件数は1,455件（100.0%、1件増）だった。借し件数は減少傾向が続いているが、貸り件数はこの2年間ほぼ同じ数字である。

4-3. 文献検索サービス

国内医学文献データベースの利用件数は59,424件で前年比92.4%（4,888件減）だった。減少の要因は、医中誌Webが前年比91.8%（4,643件減）と減少したこと、CiNii（無料）の利用統計（前年度1,989件）が取得できなくなったことが全体に影響した。導入2年目のCurrent Decision Supportは前年比160.8%（1,879件増）と増加し学内での認知度が高まっていることが伺える。海外医学文献データベースも50,826件で前年比97.4%（1,330件減）と減少した。個別ではPubMedが28,242件で前年比92.2%（2,376件減）となった。UpToDateは昨年初めて前年割れしたが、今年度は17,991件で前年比103.1%（538件増）と微増した。Scopusは2,877件で前年比137.2%（780件増）と利用が伸びている。

4-4. 電子ジャーナルサービス

国内電子ジャーナルは88,617件で前年比73.2%（32,437件減）と大幅に減少した。メディカルオンラインが前年比74.4%（24,897件減）、MedicalFinderが前年比68.4%（7,540件減）といずれも前年から大きく減少している。海外電子ジャーナルは主要10社で214,338件、前年比87.9%（29,399件減）だった。全体的に減少傾向だが、OUPのみ前年比142.6%（5,424件増）と増加した。海外電子ジャーナルの利用はコロナ禍以降大幅に増加しており、今年度の実績もコロナ禍前の令和元年度比では118%（31,940件増）となっている。

4-5. 電子ブックサービス

国内電子ブックはメディカルオンラインイーブックスが1,945件で前年比79.3%（508件減）、Maruzen eBook Libraryが334件で前年比63.1%（195件減）といずれも減少した。海外電子ブックはAccessMedicineが1,514件で前年比168.0%（613件増）と昨年に続き大幅に増加した。

4-6. 埼玉医科大学リポジトリ

リポジトリのアクセス件数は71,687件で前年比84.9%（12,777件減）と減少した。コンテンツ別の利用率は、看護学科紀要が全体の7割（52,799件）を占めているが前年比80.1%（13,136件減）となった。一方、コンテンツ別利用率2位の学位論文は毎年利用が増加しており、今年度は9,950件で前年比126.7%（2,099件増）と増加傾向が続いている。

5. 教育

5-1. オリエンテーションほか

1) 附属図書館

- ・令和4年度初期研修医オリエンテーション（4月6日）

- ・令和4年度医学部新入生オリエンテーション（4月14日、オンライン）
- ・医学部5年生クリニカル・クラークシップオリエンテーション「UpToDate等の活用法」（1月7日）
- 2) 総合医療センター分館
 - ・令和4年度初期研修医オリエンテーション（4月、資料配付のみ）
- 3) 日高キャンパス分館
 - ・国際医療センター・リハビリテーションセンター新任職員向けオリエンテーション（4月7日）
 - ・令和4年度看護学科新入生オリエンテーション（4月14日）
 - ・国際医療センター・看護部文献入手説明会（7月1日）
- 4) 川角キャンパス分館
 - ・令和4年度理学療法学科新入生オリエンテーション（4月14日）

5-2. 授業

- 1) 附属図書館
 - ・「医科学への道すじ 医科学の探索」図書検索講習、文献検索講習（Web配信、医学部1年生、12月、忍田純子）
- 2) 日高キャンパス分館
 - ・文献検索講義（看護学研究科1年生、4月23日、吉田真理）
 - ・文献検索講義（臨床工学科3年生、4月28日、鈴木智絵）
 - ・文献検索講義（臨床検査学科1年生、6月2日、鈴木智絵）
 - ・文献検索講義（理学療法学科1年生、7月13日、前田智美）
 - ・文献検索講義（看護学科1年生、7月28日、前田智美）

6. 研究

6-1. 研修ほか

- 1) 第93回JMLA総会（5月27日、田口宣行）
- 2) 第93回JMLA総会分科会（オンライン、5月30日、吉田真理、新井美由紀）
- 3) JUSTICE電子資料契約実務研修会（オンライン、7月22日、百留悦子、中島裕美子）
- 4) サンメディア学術情報ソリューションセミナーon the Web（オンライン、9月16日、田口宣行）
- 5) RefWorks管理者説明会（オンライン、10月25日、田口宣行）
- 6) CAT/ILLリプレイス&電子リソースデータ共有サービス説明会（オンライン、10月27日、忍田純子、百留悦子ほか）
- 7) 第24回図書館総合展フォーラム（オンライン、11月1日～30日、各自参加）
- 8) 2022年度JUSTICE転換契約に関する勉強会（オンライン、12月8日、田口宣行、百留悦子、中島裕美子）
- 9) 2022年度JUSTICE総会（オンライン、3月3日、田口宣行、中島裕美子）

6-2. 論文ほか

- 1) 百留悦子. 埼玉医科大学附属図書館におけるPay Per Viewの導入事例. 医学図書館. 2022;69(2)83-88.

7. 補助金

なし

8. 統計（令和4年度）

	毛呂山	川越	日高	川角	計
開館日数	286	275	281	242	
年間入館者数	9,602	11,610	28,373	5,553	55,138
年間受入冊数（注1）					
和	2,048	672	1,996	626	5,342
洋	106	63	79	22	270
計	2,154	735	2,075	648	5,612
視聴覚資料年間受入点数（注1）					
国内	3	5	19	6	33
外国	0	0	0	0	0
計	3	5	19	6	33
蔵書冊数（注1）					
和	132,961	19,237	46,416	14,191	212,805
洋	121,775	4,743	3,122	880	130,520
計	254,736	23,980	49,538	15,071	343,325
視聴覚資料所蔵点数（注1）					

国内	1,640	298	1,513	307	3,758
外国	874	17	7	32	930
計	2,514	315	1,520	339	4,688
受入雑誌種類数 (注2)					
和	385	93	122	28	628
洋	16	2	6	3	27
計	401	95	128	31	655
館外貸出					
貸出者数	2,296	485	3,960	734	7,475
貸出冊数	5,040	843	7,555	1,304	14,742
複写枚数	12,831	16,048	—	206	
相互貸借件数					
貸し件数	3,046				
借り件数	1,455				
データベースサービス (注3)					
国内	59,424				
海外	50,826				
電子ジャーナルサービス (注4)					
国内	88,617				
海外	214,338				
電子ブックサービス (注5)					
国内	2,279				
海外	1,514				
埼玉医科大学リポジトリ	71,687				

注1: 研究費扱い分を含む

注2: 研究費扱い分を含まない

注3: 国内医学文献データベース利用件数の内訳 (医中誌 Web 51,994、JDreamIII 204、今日の診療 Web 656、最新看護索引 Web 1,600、Current Decision Support 4,970)、海外医学文献データベース利用件数の内訳 (Cochrane Library 772、PubMed 28,242、CINAHL with Full Text 162、JCR 465、Scopus 2,877、UpToDate 17,991、Visible Body 317)

注4: 国内電子ジャーナル閲覧件数の内訳 (メディカルオンライン 72,321、MedicalFinder 16,296)、海外電子ジャーナル (主要出版社のみ) 閲覧件数の内訳 (Elsevier 70,893、Wiley 41,597、Springer 28,877、Nature 28,010、LWW 9,055、Oxford University Press 18,165、SAGE Publishing 6,404、Thieme 803、JAMA 4,790件、BMJ 5,744)

注5: 国内電子ブック閲覧件数 (メディカルオンラインイーブックス 1,945、Maruzen eBook Library 334)、海外電子ブック閲覧件数 (AccessMedicine 1,514)

9. 自己評価と次年度計画

9-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- ・感染対策に伴う利用制限の緩和として、附属図書館では7月から医学部生の自習学習を再開した。また川角キャンパス分館でも9月から4年生に限り利用制限を解除した。
- ・2023年外国雑誌購読については、国際情勢の不安定化や国際経済の減速に伴う為替相場の記録的な円安により、大幅な値上がりとなった。対策として、複数年契約による2023年価格の抑制、一部タイトルの中止 (パッケージの見直し含む)、Elsevier PPVの運用変更 (年間3,000論文から500論文へ縮小、登録制による利用抑制効果を反映) を行い可能な範囲で経費削減を試みた。その結果、当初見積額から690万円を減額することができた。
- ・公開から2年が経過した新図書館ホームページは問題なく運用できている。
- ・8月にリモートアクセスツール「RemoteXs」の利用を開始し、学外からも電子ジャーナルやデータベースなどの電子コンテンツが利用できる環境を整備した。

- ・川越キャンパス分館及び日高キャンパス分館の欠員補充については、障害者雇用も視野に入れながら関係部署との交渉を継続した。
 - ・附属図書館及び川越キャンパス分館における入退館ゲートの設置に向けた検討に着手した。
 - ・埼玉医科大学リポジトリの運用を第二段階へ進めることについては、政府方針や他大学の動向の情報収集にとどまった。
- 9-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画
- ・令和5年度も感染防止対策を継続しつつ、各館ごとに大学、病院、各学部の方針に則って図書館運営を行う。一部利用制限を残して附属図書館及び川角キャンパス分館では、利用制限の全面解除に向けた準備を整える。
 - ・2024年外国雑誌購読については、限られた予算で最大の効果が得られるコレクションの整備と見直しを継続する。また、学内の APC (Article Processing Charge: オープンアクセス論文投稿料) 支出額の調査に着手し、購読・出版 (Read & Publish) モデルの導入についても検討する。
 - ・図書館ホームページの評価を行い、改修及びコンテンツと機能の拡充を検討する。また一部保留となっている旧ホームページコンテンツの移行を完了する。
 - ・昨年導入したリモートアクセスツール「RemoeXs」の運用の安定化を図る。
 - ・附属図書館及び川越キャンパス分館における入退館ゲートの設置に向けた検討を継続する。
 - ・埼玉医科大学リポジトリの運用を第二段階へ進めることとしオープンアクセスポリシー及び研究データポリシーの策定に着手する。

8. 医学教育センター

1. 構成員

センター長 森茂久(MORI, Shigehisa)：専任：教授、入試、教育等担当副学長（任期：R. 4. 3. 31）

副センター長 林健(HAYASHI, Takeshi)：兼担：教授（任期：R. 4. 3. 31）

魚住尚紀(UOZUMI, Hisanori)：兼担：准教授（任期：R. 4. 3. 31）

各部門の構成員については、各部門の項を参照されたい。

2. 目的・目標

医学教育センターは、本学の医学教育を円滑かつ効果的に行い、教育目標を達成するための基盤整備を図るとともに、医学教育改革等に対応するための企画立案、管理運営、評価、研究、情報収集その他の教育支援を統括・推進し、医学教育の質の向上を図ることを目的とする。

医学教育センターは医学部領域と保健医療学部領域に分かれる。医学部医学部領域には8部門（教育主任部門、卒前医学教育部門、卒後医学教育部門、教育情報部門、シミュレーション教育部門、Faculty Development 部門、教養教育部門、事務部門）が設置され、そのうち卒前医学教育部門に8室（カリキュラム室、臨床実習推進室、試験管理室、調査解析室、学生支援室、学力増進室、研究マインド育成室、地域医学推進室）が設置されている。保健医療学部領域は保健医療学部学務委員会がその管理運営に当たり、学務委員会には6小委員会（カリキュラム調整小委員会、オリエンテーション実施小委員会、公開講座実施小委員会、課外学習プログラム小委員、FD実施小委員会、国家試験対策小委員会）が設置されている。

医学部の教育は、従来より教育の議決を行うのは卒前教育委員会で、医学教育センター医学部領域は、教育の立案、実行する機関という立場にある。医学教育センター医学部領域は発足以来、医学教育センターの設立時の目標を見失わないよう、注意を払いつつ、医学教育を取り巻く内外の環境の変化に柔軟に対応できるよう、組織や体制を常に最適化してきた。

各部門の目的・目標については、各部門の項を参照されたい。

3. 活動実績

1) 医学教育センターの変遷

埼玉医科大学の医学教育を統括、調整、研究、開発することを目的に平成15年8月に発足した。発足当時は、入学試験、卒前医学教育、卒後医学教育、大学院教育、教育情報、Faculty Development、大学評価、事務の8部門から構成されていた。

平成18年度の保健医療学部開設に伴い、医学教育センターは医学部ランチと保健医療学部ランチに分かれ、従来の医学教育センターの業務は医学教育センター医学部ランチで継続することになった。

平成18年度に教育主任部門が加わって9部門となり、それぞれの部門が協力して「入学から生涯教育までをトータルに考え、埼玉医科大学の明日を創造する」をスローガンに活動を行ってきた。

その後、入試部門はアドミッションセンターへ、大学院部門は大学院へ、大学評価部門は自己点検評価委員会へと機能移転が行われ、平成20年10月1日から、医学教育センターは、教育主任、卒前医学教育、卒後医学教育、教育情報、Faculty Development、企画、事務の7部門からなる新体制で活動を継続してきた。平成21年4月には、シミュレーション教育部門が新設され、8部門5室体制となった。

平成25年度から、これまでの基本学科の一つであった医学基礎を改組した形で、医学教育センター内に教養教育部門が新設され、9部門5室体制で活動を行うこととなった。

平成26年度から企画部門の機能を医学教育センター運営委員会に移す改編が行われ、8部門5室体制となった。

平成28年度から医学教育センター懇談会の名称を医学教育センター運営委員会に変更し、これまでの運営委員会の機能に懇談会の機能を合体させて、オブザーバー参加も可能な形で、広く本学医学部の教育を議論する場とした。

医学部ランチの名称が、川越ランチ、日高ランチの名称と混同しやすいことから、令和元年7月より、「医学部ランチ」の名称を「医学部領域」に変更した。同様に「保健医療学部ランチ」の名称は「保健医療学部領域」に変更になった。また「医学教育センター運営委員会」の名称は「医学教育センター医学部領域運営委員会」に変更となった。

また令和元年7月より、卒前医学教育部門に、新たに「学力増進室」、「研究マインド育成室」、「地域医学推進室」の3室を設置し、8部門8室体制となった。

2) 今年度の活動実績

令和元年度の途中より、卒前医学教育部門に新たに「学力増進室」「研究マインド育成室」、「地域医学推進室」の3室を設置し、8部門8室体制となり、今年度で3年目に入った。

規則を改訂して、川越、日高のブランチは医学教育センターの規則の教育主任部門内に規定し、さらに副ブランチ長を設置して2年目となった。

1名空席となっていた副センター長に、カリキュラム室長を担当する生化学の魚住尚紀准教授が就任した。

各部門の活動実績の詳細については、各部門の項を参照されたい。

4. 自己点検と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

医学教育センター医学部領域の担当する業務に関連する事務作業の増加は著しく、事務作業の効率化を行い、教育支援体制を改善することが継続的な課題となっている。

4年目に入った3室も、活動方針を立てて定期的に会議を開催し、本格的な活動を行っている。

9月末に医学教育分野別評価受審結果が届き、国際基準に適合していると認定を受け、認定期間は2022年10月1日～2029年9月30日の7年間である。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

今後は第5次長期総合計画を基に、目標を達成するために段階的な目標を設置して、PDCAサイクルを回しながら目標に到達するように活動する。必要に応じて担当の増員を検討する。

医学教育分野別評価受審でいただいた改善コメントを検討し、本学医学教育の質向上に向けて卒前教育委員会、カリキュラム委員会、医学教育分野別認証評価受審準備小委員会と協力して、計画を立てて早期に実現可能な部分は実行に移す。

医学教育センターは埼玉医科大学の全学組織として位置づけられているが、実際の活動は医学部領域が中心で、医学部内に限定している。全学的組織としてあり続けるか、医学部に限定する組織とするか、について長らく議論されてきた。期間別認証評価、分野別評価を控えていたため、令和元年度(2019年度)に、医学教育センターは従来通り全学的組織として存続し、医学部、保健医療学部での活動は医学部領域、保健医療学部領域で別個に行うことが決定した。今後も引き続き、全学的組織とするか、医学部に限定する組織とするか、について検討を重ねていく。

各部門の活動実績、自己点検と次年度計画については各部門の項を参照されたい。

9. 医学研究センター

1. 構成員

◇センター長

片桐岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : センター長 (任期: R5. 7. 31)

◇部門長 (医学研究センター運営会議規則第3条2号構成員)

海老原康博 (EBIHARA, Yasuhiro) : 研究主任部門 (任期: R5. 3. 31)

坂本 安 (SAKAMOTO, Yasushi) : 共同利用施設運営部門 (任期: R5. 3. 31)

小谷典弘 (KOTANI, Norihiro) : 研究支援管理部門 (任期: R5. 3. 31)

三谷幸之介 (MITANI, Kohnosuke) : 安全管理部門 (任期: R5. 3. 31)

※片桐岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : フェローシップ部門 (任期: R5. 3. 31)

椎橋実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 研究評価部門 (任期: R5. 3. 31)

◇副部門長 (医学研究センター運営会議規則第3条2号構成員)

百瀬修二 (MOMOSE, Shuji) : 研究主任部門 (任期: R5. 3. 31)

下岡聡行 (SHIMOOKA, Toshiyuki) : 研究主任部門 (任期: R5. 3. 31)

佐藤 毅 (SATO, Tsuyoshi) : 研究主任部門 (任期: R5. 3. 31)

※佐藤 毅 (SATO, Tsuyoshi) : 共同利用施設運営部門 (任期: R5. 3. 31)

堀内 大 (HORIUCHI, Yutaka) (任期: R5. 3. 31)

※三谷幸之介 (MITANI, Kohnosuke) : 安全管理部門 (DNA分野) (任期: R5. 3. 31)

村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 安全管理部門 (感染分野) (任期: R5. 3. 31)

奥田晶彦 (OKUDA, Akihiko) : 安全管理部門 (薬物・廃液等環境分野) (任期: R5. 3. 31)

森 隆 (MORI, Takashi) : 安全管理部門 (動物分野) (任期: R5. 3. 31)

西本正純 (NISHIMOTO, Masazumi) : 安全管理部門 (RI分野) (任期: R5. 3. 31)

高田 綾 (TAKADA, Aya) : フェローシップ部門 (任期: R5. 3. 31)

三輪尚史 (MIWA, Naofumi) : フェローシップ部門 (任期: R5. 3. 31)

徳元康人 (TOKUMOTO, Yasuto) : 研究評価部門 (任期: R5. 3. 31)

◇ランチ長 (医学研究センター運営会議規則第3条3号構成員)

※坂本 安 (SAKAMOTO, Yasushi) : 毛呂山キャンパス担当 (任期: R5. 3. 31)

山本晃士 (YAMAMOTO, Koji) : 総合医療センター担当 (任期: R5. 3. 31)

※海老原康博 (EBIHARA, Yasuhiro) : 日高キャンパス担当 (任期: R5. 3. 31)

※下岡聡行 (SHIMOOKA, Toshiyuki) : 研究主任部門 (任期: R5. 3. 31)

※は重複構成員・・・計18名

◇オブザーバー

松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長

千本松孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : リサーチアドミニストレーションセンター 教授

菅原哲雄 (SUGAHARA, Tetsuo) : リサーチアドミニストレーションセンター 講師

町田早苗 (MACHIDA, Sanae) : 医学研究センター 講師

別所和博 (BESSHO, Kazuhiro) : 医学研究センター 助教

福田枝里子 (FUKUDA, Eriko) : 医学研究センター 助手

◇事務局

下田裕子 (SHIMODA, Yuko) : 大学事務部 医学部事務室 庶務課 課長

佐國真紀 (SAKUNI, Maki) : 大学事務部 医学部事務室 庶務課

2. 目的・目標

医学研究センターは、学校法人埼玉医科大学医学研究センター規定第2条に則り、本学の医学研究を円滑かつ効果的に行い、教育研究上の目的を達成するための基盤整備を図るとともに、当該研究活動に必要な企画立案、管理運営その他の研究支援を統括・推進し、もって本学の研究活動の質的向上、および研究成果の社会への還元に資することを目的とする。

今年度も、本学の研究活動の向上を目指して、全学的なソフト面とハード面での支援を充実させる。また、リサーチアドミニストレーションセンターと協力し、公的競争的研究資金として科研費（文部科学省、日本学術振興会）の申請支援も充実させる。

医学研究センターの目的を達成するために、以下に示す6つの部門で構成され、各部門が異なる視点から本学の研究を支援する。

- 1) 研究主任部門：基本学科と医学研究センターの情報共有に関わる。
- 2) 共同利用施設運営部門：各種共同利用施設の運営に関わる。
- 3) 研究支援管理部門：外部資金獲得の支援や学内グラントに関わる。
- 4) 安全管理部門：RI, DNA, 薬物、環境、動物、感染など、研究活動における安全管理に関わる。

- 5) フェローシップ部門：大学院生以上助手未満への経済的支援に関わる。
- 6) 研究評価部門：研究活動の内部評価や外部評価に関わる。

各部門内で会議を適宜開催し、毎月1回、全キャンパス両学部から選出された構成員からなる運営会議を開催して医学研究センター全体の活動を共有している。運営会議の内容は教員代表者会議と保健医療学部教授会で報告され、本学全体に共有される。

3. 活動実績

令和4年度は、各部門において以下のような活動を行った（それぞれの詳細は、各部門の活動報告を参照）。

- 1) 研究主任部門：第24回学内グラント成果発表会を令和4年7月15日に開催し、第25回学内グラント成果発表会を令和5年3月24日に開催した。
- 2) 共同利用施設運営部門：共同利用実験室を整備し、令和4年度の利用者登録を管理した。研究機器・備品の整備を行った。中央研究施設運営会議、毛呂山キャンパス動物実験小委員会、を開催した。
- 3) 研究支援管理部門：論文剽窃検知ソフト iThenticate の運用・管理を担当した。グラント選考委員会、および庶務課と協力し、令和4年度学内グラント選考委員会を開催した。リサーチアドミニストレーションセンターと共に、科研費アドバイザー制度を始めとする科研費申請支援を行った。
- 4) 安全管理部門：部門内の5分野でそれぞれ活動を行った。DNA分野では、組換えDNA使用実験に関する審査・承認を行うとともに、講習会を実施した。感染分野は、病原性微生物の保有状況の確認、BSL2、BSL3の保有状況の確認を行い、文部科学省へ報告した。病原体等取扱申請書を審議し、BSL2とBSL3実験施設の査察を行った。薬物・廃液等環境分野では、令和4年度研究用麻薬・向精神薬に関する調査・報告を行うと共に、実験廃液と廃棄物を専門業者に依頼し処分した。動物分野では、各動物実験施設を管理・運営するとともに、各キャンパスの動物実験小委員会と本学動物実験委員会において、動物実験計画書の審査・承認を行った。RI分野では、令和4年度の新規RI取扱希望者を対象とした教育訓練を実施した。
- 5) フェローシップ部門：2023年度埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金を募集・選考し、その結果を上程した。
- 6) 研究評価部門：研究業績データベースシステムを管理・運用し、学内の各部署への情報提供、新世代研究基盤リサーチマップ（researchmap）とのデータ交換を行った。令和5年5月現在、本システムには医学部と保健医療学部をあわせて1,460名の研究者が登録されている。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

令和4年度も、前年の計画通り、本学の研究活動の向上と研究成果の社会への還元を目指して、全学的なソフト面とハード面での研究支援を実施できた。研究支援管理部門が中心となり、リサーチアドミニストレーションセンターと共同で実施した「科研費アドバイザー制度」により、本学の科研費（文部科学省、日本学術振興会）の新規採択率は過去最高であった昨年度をさらに上回った。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

来年度も、COVID-19の影響が不透明であるため、各部門で連携しながら適切な対応を検討する。本学の研究活動を促進するために、競争的公的研究費として科研費（文部科学省、日本学術振興会）の申請支援をさらに充実させると共に、学内グラント「一般」枠を「科研費申請支援」枠に改称し、本グラントの目的を明確にする。さらに「科研費申請支援」を充実させるために、科研費アドバイザーによる採点を選考に利用することを計画する。

10. 国際交流センター

国際交流センターは本学と諸外国との学術、文化、教育、研究、診療等に関する交流を支援・推進する事を目的とした部門である。主な事業として、「学生相互交換留学制度」「春季語学研修制度」「教員短期留学制度」を統括している。

「学生相互交換留学制度」は、海外の著名な大学を相手校として開始した。平成7年7月、スウェーデンのリンシェーピング大学、イギリスのリバプール大学、ドイツのベルリン自由大学から6名の医学生が来日し、本学から5年生の12名が上記3校に加えてカナダのマニトバ大学とドイツのポッフム大学の計5校に留学したのが始まりである。今年度のプログラムは新型コロナウイルス感染症蔓延下で世界的に実際の人的な交流が制限されるなか、ワクチン接種等の感染対策の進展による状況改善を期待し、留学を希望する意欲的な5年生20名を留学候補生としスタートした。当該年度で目標とする交換留学のみならず、医学生・医師として国際的な視野にたつて活動を行なっていくよう、英語教育や英語を用いたの医療をテーマとしたさまざまな学習プログラムを企画し、オンラインにて実施した。このような「事前学習」も3年目となり充実した内容を提供することができた。結果として夏季の派遣、受け入れは実施することができなかったが、春季にクリニカルクラークシップ(CC) Step 3期間を利用して6名の学生を、交換留学プログラムとしては「コロナ後初」の留学生として提携校3校に派遣できたことは大きな進展であった。

平成18年度より開始した「春季語学研修制度」は、医学部・保健医療学部学生を対象として医療に関連した英語能力を高め(English for Health Science Purposes)、海外の文化に触れる目的のもとにおこなわれており、ホームステイでの宿泊・語学研修の他、病院や研究室見学、地元学生との交流などのプログラムが組まれている。今年度はサンフランシスコでの対面での実施を念頭に企画、募集を行い、抽選によって選考した20名を派遣することができた。本学休職にて現地大学院留学中の卒業生によるセミナー受講など研修の質はとても高いものであった。実施にあたっては入念な説明会を定期的に行い、担当教員が全日程引率するなど、学生のサポートに注力した。

平成21年度に開始した「教員短期留学制度」は教員の教育、研究、診療の活動と国際的視野に立った文化的、社会的な理解を深めることにより本学に貢献する人材の育成を目的としている。今年度は二期にわたり募集を行うことで、予定人数の上限の5名の教員を海外に派遣することができた。交換留学協定による海外からの教員の受け入れについても提携校であるハンガリー・センメルweis大学からコロナ感染症蔓延後初めてとなる受け入れを実施することができた。また前年度末に留学をした教員の報告会を今年度実施したが、充実した内容の発表と討議が英語で行われ、コロナ禍による中断の後に再開できた国際交流への学内の期待と気運の盛り上がりを感じるようになった。

また学校間提携(MOU)により学生受け入れをおこなっているタイ、ランシット大学の2名の医学生も、十分な感染対策を行なうことで、3年間中断後初めて1ヶ月にわたり受け入れることができたことも付記しておきたい。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響がだいぶ軽減されたとはいえ、ウクライナ情勢も引き続き懸念材料としてあり、国際交流においては時事刻々と状況が変化していた。多くの制限のあるなかでも本学の国際化に資するために国際交流センターの役割を果たすべく、全学的視野に立つて臨機応変に活動を行い、新型コロナウイルス感染症蔓延前にならび、さらにそれを超える国際交流の実があがるように努力していきたいと考えている。

11. 情報技術支援推進センター

情報技術支援推進センターは、本学における情報ならびに情報通信技術を活用した教育・研究活動の推進・発展を目的に設置され、情報技術支援推進センター運営委員会によって管理運営されている。当センターは設置の目的をはたすため下記の活動を行っている。

- (1) 情報機器の整備・運用、利用の推進および安全対策
- (2) コンピュータネットワークの整備・運用、利用の推進および安全対策
- (3) 情報技術ならびにコンピュータネットワークを活用した教育・研究活動の推進および支援
- (4) 情報化推進のための技術支援、研究開発および計画立案

当センターの最も大きな全学的な活動は、学内 LAN の管理運営である。本学の学内 LAN は平成 7 年にインターネットに接続され、平成 8 年度および平成 9 年度の文部科学省の助成金を受けて全学的に整備された。当センターは学内 LAN のサーバやインターネット接続のファイアーウォールなど基幹装置群の管理運営を担当している。本学は地理的には毛呂山キャンパス、日高キャンパス、川越キャンパス、川角キャンパスおよび川越ビルで構成されており、毛呂山キャンパスに位置する当センターを中心に、これらをつなぐ学内 LAN が構築されている。これら遠隔地のキャンパスを含めた全学の円滑な運営のために、当センターの統括のもと、下記のブランチを設置し各々のブランチに責任者を置いている。

- (1) 医学部・短期大学ブランチ（毛呂山キャンパス）
- (2) 保健医療学部ブランチ（日高キャンパス、川角キャンパス）
- (3) ゲノム医学研究センターブランチ（日高キャンパス）
- (4) 大学病院ブランチ（毛呂山キャンパス）
- (5) 国際医療センターブランチ（日高キャンパス）
- (6) 総合医療センター・看護専門学校ブランチ（川越キャンパス）
- (7) かわごえクリニックブランチ（川越ビル）

これに次ぐ全学的な活動は、教育用のコンピュータ実習室などの管理運営である。毛呂山キャンパスについては当センターが、日高キャンパスおよび川角キャンパスにおいては保健医療学部情報機器管理運営委員会が、川越キャンパスにおいては医学情報室がそれぞれ管理運営し、当センターはそれらを統合する役割を果たしている。

令和 3 年度に引き続き、令和 4 年度も新型コロナウイルス感染症感染拡大によるオンライン授業実施のため、非常に多くの支援を行った。令和 4 年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大によるオンライン授業のため、非常に多くの支援を行った。

その中でも、SINET との接続を 100Mbps から 1Gbps に増速した、メールサーバーを Gmail に切り替えた (Google Workspace)、Box の運用を大学全体として開始した、Microsoft 365 の運用を大学全体として開始したことは DX に向けた大きな一歩となった。

当センターのもうひとつの役割は情報技術活用の支援と安全対策である。全学からの質問に対応するとともに、当センター内に設置した情報機器を用いてホームページ作成、データ処理、画像処理など情報技術活用の支援を行っている。また、大型ポスターを印刷できるプリンタによる学会発表資料作成を支援している。また、学長を委員長とするホームページ管理運営委員会の下部組織としてホームページ実務委員会を組織し、その実務にあたっている。安全対策面では、ウィルス対策、情報セキュリティの広報・支援を行っている。近年増加し社会問題となっている「標的型メール攻撃」についても埼玉県警と連携した対応を行っている。今年度も、埼玉県サイバーテロ対策協議会総会、サイバーセキュリティ講演会、定期訪問などを通じて情報交換を行った。

今年度も引き続き、情報システム部と連携して情報セキュリティにあたる。

12. アドミッションセンター

令和2年11月28日改訂（平成20年3月22日制定）された「埼玉医科大学アドミッションセンター規程」は、本学法人の運営する医学部、保健医療学部、短期大学、総合医療センター附属看護専門学校と関連学校である埼玉医療福祉会看護専門学校（以下「各学校」という）が、教育目標を達成しうる学生を受け入れるための入学者受け入れ方針（以下「アドミッションポリシー」という）に即した入学者選抜システムの構築、円滑な入学者選抜の実施について、調査研究及び入学者選抜に関する業務を統括・支援を行うことを目的として、アドミッションセンターの組織及び運営について必要事項を定めたものである。

アドミッションセンターは、年1回「アドミッションセンター拡大会議」を開催し、各学校ならびに本学が設置する学部の入学者選抜に関する業務を支援する組織（以下「ブランチ」という）からの代表者、アドミッションセンター特任講師等が一堂に会し、情報の共有、問題点の把握と検討等を行い、各学校のアドミッションポリシーに即した学生を受け入れるために連携・協力し、円滑な入学者選抜業務遂行の支援に努めている。また、アドミッションセンター内には、調査・研究・解析部門、入試問題統括部門、広報部門、事務部門の4部門があり、各学校ならびにブランチに対して円滑な入学者選抜の実施のための協力的な支援を行うことを主たる目的として活動している。更に、上記4部門に加えて入学者選抜実施体制の充実・強化を図るため第9条に定めるアドミッション・オフィサーを置き、その他アドミッションセンター長が必要と認めたもの（若干名）、医学部と保健医療学部の試験科目出題責任者、オブザーバー（アドミッションセンター特任講師等）を構成員に加えて、第2条目的達成のため相互に連携・協力して円滑な業務遂行に努めている。

4部門の主たる業務を以下に明記し総論とする。

（1）調査・研究・解析部門

- ①本学入学者選抜システムの統括に関すること。
- ②本学入学者選抜システムの自己点検・評価に関すること。
- ③入学者選抜システムの改善策についての調査・研究・解析に関すること。
- ④その他入学者選抜に関する情報の収集や調査・研究・解析に関すること。

（2）入試問題統括部門

- ①入試問題作成に関わる支援と統括に関すること。
- ②入試問題作成に関わる基本情報等の収集に関すること。
- ③入試問題の点検及び入試ミス防止等の調査・研究に関すること。

（3）広報部門

- ①学生募集などの入学者選抜に係る全学的広報に関すること。
- ②アドミッションポリシーの周知等、各学校・ブランチの広報活動の支援に関する
こと。
- ③その他、広報活動に関すること。

（4）事務部門

- ①各部門及び各ブランチの活動支援に関すること。
- ②その他、センターの事務に関すること。

13. 医療人育成支援センター

医療人育成支援センターは、医療系総合大学である埼玉医科大学直属の組織として、卒前教育から卒後研修、専門（医）研修、女性（医師）復職支援、地域医療の連携、埼玉県地域枠奨学金受給者、そして職業人としての自己研鑽など主に医師を中心とした医療人全般のシームレスな生涯教育を統括する。医療人教育は生涯にわたるが、各論的な教育は多くの場で行われているとはいえ、総論的、中長期的な視野に立った総合的な教育が十分に行われているとは言えないのが現状である。医学教育の中心であり、且つ高度先進医療の要である本学が、医療人の生涯教育を担う責務は多大なものがあり、また社会からも多くが期待されている。本センターにおいては、埼玉医科大学の多くの部署の力を結集して、より質の高い、効率的な医療人支援を行う。本センターの活動領域は広域にわたるため、機能的に以下の部門に分け、それぞれに部門長をおき業務の効率的な遂行を目指している。

医療人育成支援センター部門

1. 卒前部門
2. 初期臨床研修部門
3. キャリア形成支援部門
4. 生涯学習部門
5. 女性医師支援部門
6. シミュレーション教育部門
7. 地域医学推進センター
8. 基礎医学部門

具体的には、各部門による活動と、これら部門の統括組織として医療人育成支援センター運営会議を定期的に開催し、3病院間の研修体制の改善、地域枠奨学生対応、地域連携病院、女性医師支援セミナー、シミュレーション教育セミナー、研修修了医師のその後の動向の把握などに取り組んでいる。今後、3キャンパス横断的な視点から、医療人支援をさらに充実させていくことを目指し、将来的には医師以外の医療人の支援も本格的に行うことを視野に入れている。

14. 教職員・学生健康推進センター

学校法人埼玉医科大学に属する全教職員、学生の健康管理を一元的に行うことを目的として、2009年4月、教職員・学生健康推進センター（以下健康推進センター）が開設されました。センター長は初代今井康雄先生、2012年4月からは池田 斉先生、2014年1月からは丸山義明先生が担当され、2016年2月より富谷智明が務めています。

1972年の埼玉医科大学開学時に、主として医学部学生を対象とした埼玉医科大学保健管理室が設置されたのが、本学の健康管理部門の発端となっています。その後学生保健室、医学部学生健康推進室と名称が変更されました。2006年の保健医療学部開学時には、保健医療学部学生を対象とした保健医療学部学生健康推進室が日高キャンパス及び川角キャンパス（分室）に開設されました。教職員に関しては、2004年に川越の総合医療センターに総合医療センター健康推進室が、日高の国際医療センターには開院時の2006年に国際医療センター健康推進室が設けられました。しかし、毛呂山キャンパスでは、大学病院の健康管理センター（人間ドック、現予防医学センター）が大学病院教職員だけでなく医学部教職員、法人職員の健康管理を担当していました。これに対して、2009年4月の健康推進センター設立時に、同センター内に教職員健康推進室が設置され、大学病院教職員、医学部教職員、法人職員を含む毛呂山キャンパスの全教職員の健康管理が移管され、更に川角キャンパスの教職員の健康管理も担当となりました。健康推進センターは毛呂山キャンパス内に所在していますが、医学部学生健康推進室、保健医療学部学生健康推進室（日高キャンパスおよび川角分室）および教職員健康推進室のスタッフとともに一体となって健康診断、ワクチン接種、健康相談、メンタル対策などの業務を行い、また総合医療センターおよび国際医療センターの健康推進室の健康管理も統括しています。埼玉医大全体の健康管理を管理しています。

“良い病院は良い職員から。良い大学は良い学生から。”が健康推進センターのスローガンです。2013年度からは埼玉医大全体の健康管理活動を網羅した年報を毎年発行、公表し、自己評価および第三者からの評価に役立てています。何よりも埼玉医科大学に属する全ての方の積極的なご理解とご参加が必須の部門です。皆様のご支援、ご鞭撻を心からお願い致します。

15. リサーチアドミニストレーションセンター

リサーチアドミニストレーションセンター（以下、「RAセンター」）は、平成 27 年 4 月に本学の研究活動全般を管理することを目的に、法人部門の組織として設置された。

その主たる業務は次の通りである。

- (1) 医学研究に係る諸規程等の整備その他医学研究の管理に関すること。
- (2) 埼玉医科大学倫理審査委員会に関すること。
- (3) 認定臨床研究審査委員会に関すること。
- (4) 埼玉医科大学COI管理委員会に関すること。
- (5) 研究不正の防止に関すること。
- (6) 研究費の適正使用に関すること。
- (7) 研究費の獲得に関すること。
- (8) 医学研究に係る診療組織との連携に関すること。
- (9) 医学研究に係る教育及びモニタリングに関すること。
- (10) 知的財産の管理に関すること。
- (11) リサーチパークに関すること。
- (12) 外国為替及び外国貿易法(昭和 24 年法律第 228 号)の適用を受ける研究用貨物及び技術に関すること。
- (13) その他医学研究等の推進及び管理に関すること。

これら業務を遂行するため、3つの部門を置き、11の委員会・会議体を所管している。これらを統括する会議体としてリサーチアドミニストレーションセンター運営会議を毎月開催している。

担当	所管委員会
研究公正部門	研究活動並びに公的研究費等の適正化推進委員会
研究推進部門	特許委員会 寄附研究部門設置委員会 地域救急医療連絡会議 リサーチパーク運営会議
研究評価部門	大学倫理審査委員会 臨床研究審査委員会 中央倫理審査委員会 倫理審査委員会事務局連絡会議 大学COI管理委員会 組換えDNA実験安全委員会

研究不正防止部署として、コンプライアンス推進／研究倫理教育責任者・副責任者と協力し、適切な研究活動推進のための諸規程の整備、研究倫理に係る教育、研究費の適正使用のためのガイドライン作成・改訂に取り組んでいる。

研究推進部署として医学研究センターと連携し、外部資金獲得のための情報提供や科研費アドバイザーの実施、質の高い研究のため臨床研究コンサルティングの実施、中央研究施設運営支援など研究環境の整備など支援を行っている。研究シーズの把握と育成により産学官連携を促進し、その果実たる知的財産を適切な管理に取り組んでいる。

各研究者が安心して研究活動に取り組み社会への責任を果たしていくために必要な体制の構築と環境の整備、そのための事務支援をすることが重要な任務である。これらの活動により研究インテグリティの自律的な確保を推進する。

また研究活動に関係する組織は、医学部・保健医療学部また各病院にも倫理委員会・IRB、COI管理委員会など多数あるが、その組織間の整合性・連携を推進していくことにより、埼玉医科大学全体として研究活動の方向性を示していくことも、RAセンターの役割の一つである。

これら諸活動により埼玉医科大学における研究活動を活性化し、基礎研究・臨床研究ともに社会へ多大な貢献をなす成果が創出し、大学として責任を果たしていくことを目指す。

16. IR センター

IR センターは、本学における教育・研究・大学運営に関して、データを調査・収集・分析することで得た客観的エビデンスを活用し、本学の質の向上を推進することを目的に設置され、IR センター運営会議によって管理運営されている。IR センターは設置の目的をはたすため下記の活動を行っている。

- (1) 本学における教育・研究・運営に係るデータの調査・収集・分析
- (2) 上記で得た客観的エビデンスの提供による大学改善への支援
- (3) その他、自己点検・評価に係る業務

IR センターは、2017 年 4 月、自己点検評価委員会の実働部隊として設置された全学の組織である。

IR は Institutional Research の略称で、日本語では機関研究と呼ばれることもある。IR とは、機関（会社や大学）の各部署に散らばっているあらゆるデータを一元的に集約し、総合的に解析を行い、機関としての意思決定のための根拠（エビデンス）を創り出していく活動を指す。医療に例えるなら、旧来の在り方から EBM「根拠に基づく医療」へと変わってきたことと同じ方向性と言える。大学における IR には、大きく分けると教育、研究、経営などがあるが、本学の IR センターは、教育に関わる活動、すなわち「教学 IR」を主な任務としている。当面の大きな事業として、2020 年度に受審の大学機関別認証評価、2021 年度に受審の医学教育分野別評価を担当する。この 2 つの評価では IR センターによるエビデンスの提示とそれに基づく改善、すなわち PDCA サイクルの確立が強く求められており、受審に向けてワーキンググループを立ち上げて受審を終了した。大学機関別認証評価については、2021 年度から 7 年間の認定を受けた。医学教育分野別評価委については、2022 年 10 月 1 日から 7 年間の認定を受けた。

17. 学生部

1. 構成員

学生部委員会構成員、医学部学生部委員会構成員、保健医療学部学生部委員会構成員については、各学生部委員会参照。

2. 目的・目標

埼玉医科大学に在籍する学生の全人格に関わる性格を見誤ることなく全学的に取り組み、学生生活の活性化を実現させ、本学の期待する医療人の育成とともに本学の教育目標を達成させることを目的とする。

3. 活動実績

学生部が令和4年度に扱ったのは下記である。

① 学生の生活指導

態度・マナー、喫煙や飲酒に関する事項、SNSの取り扱いに関するガイドラインを遵守するよう周知した。
学生の行動規範を確認した。

② 部活動および東日本医科学学生体育大会（東医体）

埼玉県ならびに東京都で緊急事態宣言が発出されていないこと、まん延防止等重点措置が取られていないことを前提条件として、感染対策を盛り込んだ対面での部活動承諾書を部活ごとに作成し、対面での部活動を許可した。新型コロナウイルス感染症の流行状況を把握しながら、学生内での感染に拡大傾向が見られた8月中旬～9月中旬は対面での部活動を禁止した。令和4年度第65回東医体は、一部の競技で実施された。
各部活動の会計監査および指導を行った。

③ 越華祭

令和3年度越華祭は、新型コロナウイルス感染症の流行を受けて、昨年度に続いてオンラインでの開催を指導した。毛呂山キャンパスのクロードベルナルホールを配信会場とした。
日程：令和4年10月15日（土）～16日（日）
予算の編成、準備、感染対策の指導、パンフレット掲載写真の事前確認を行った。

④ 保健管理

健康診断、一般的な感染症（麻疹、風疹、水痘、ムンプス、結核）についての管理、学生健康推進室カウンセラー通信の作成、学生健康管理室の臨床心理士による学生面談などを実施した。
学生支援室と協同して、新型コロナウイルス感染症に対する対策について学生に指導し、発熱時の対応、登校停止基準の作成、登校再開基準と方法について定めた。

⑤ その他

私立医科大学・医学部学生生活実態調査、飲酒時、薬物使用への注意喚起、学内外での行動に関する注意喚起などを行った。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

点検・評価については、医学部学生部委員会および保健医療学部学生部委員会の項を参照のこと。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度も本年度同様に両学部委員会の活動を基盤に、連携しながら全学学生生活の質の向上を目指していく。

18. 埼玉医科大学病院

当院は、特定機能病院として高度の医療の提供、高度の医療技術の開発・評価、高度の医療の研修を行う能力を有する大学病院としての使命を果たした。また、地域医療の中核病院として地域医療の最後の砦として地域医療にも貢献した。教育病院として医師・看護師等の医療者の教育・育成を行った。

安全で安心な医療を提供するための病院機能の向上及びガバナンスの強化を中心とした管理運営を行った。

1. 人事

- ①4月1日付けで秋山雄次先生がリウマチ膠原病科教授に就任した。
- ②4月1日付けで廣岡伸隆先生が地域医療科教授に就任した。
- ③9月1日付けで井上勉先生が腎臓内科教授に就任した。
- ④12月1日付けで都築義和先生が消化管内科教授に就任した。

2. 診療実績

①診療実績は次のとおりであった。

- (1) 初診患者数 37,462 名
- (2) 延外来患者数 507,527 名
- (3) 新入院患者数 18,850 名、退院患者数 18,865 名、延入院患者数 254,865 名
- (4) 病床稼働率 86.3%
- (5) 紹介率 72.0%、逆紹介率 64.2%
- (6) 手術件数 8,958 件、内視鏡検査治療件数 11,95 件、透析件数 22,172 件
- (7) 平均在院日数（一般病床）12.5 日、（精神病床）67.5 日
- (8) 重症度、医療・看護必要度Ⅱ 29.7%（基準値 28.0%）

②診療報酬上の施設基準新規届け出件数 13 件（診療報酬改定に伴わない）

③新型コロナウイルス感染症に係る埼玉県指定

- (1) 帰国者・接触者外来
- (2) 重点医療機関
- (3) 疑い患者受入協力医療機関

④新型コロナ感染症患者の入院治療

(1) 病床確保

確保病床数（＝最大病床数：感染者急増時体制）

41 床（超重症 2 床、重症 10 床、中等症 29 床）

即応病床数

1) フェーズⅣ（令和 4 年 4 月 1 日～） 38 床（超重症 2 床、重症 10 床、中等症 26 床）

2) フェーズⅢ（令和 4 年 6 月 1 日～） 34 床（超重症 2 床、重症 10 床、中等症 22 床）

3) フェーズⅡ（重症：フェーズⅠ）（令和 4 年 6 月 24 日～） 17 床（超重症 1 床、重症 2 床、中等症 14 床）

4) フェーズⅣ（重症：フェーズⅠ）（令和 4 年 7 月 22 日～） 29 床（超重症 1 床、重症 2 床、中等症 26 床）

5) フェーズⅣ（重症：フェーズⅠ）（令和 4 年 8 月 8 日～） 33 床（超重症 1 床、重症 2 床、中等症 30 床）

6) フェーズⅢ（重症：フェーズⅠ）（令和 4 年 11 月 1 日～） 15 床（超重症 1 床、重症 2 床、中等症 12 床）

7) フェーズⅢ（重症：フェーズⅠ）（令和 4 年 11 月 21 日～） 17 床（超重症 1 床、重症 2 床、中等症 14 床）

8) フェーズⅣ（重症：フェーズⅠ）（令和 4 年 12 月 1 日～） 33 床（超重症 1 床、重症 2 床、中等症 30 床）

9) フェーズⅣ（重症：フェーズⅡ）（令和 5 年 1 月 17 日～） 37 床（超重症 1 床、重症 4 床、中等症 32 床）

- 10) フェーズⅢ（重症：フェーズⅡ）（令和5年2月13日～） 25床（超重症 1床、重症 2床、中等症 22床）
- 11) フェーズⅡ（重症：フェーズⅡ）（令和5年3月10日～） 16床（超重症 1床、重症 2床、中等症 13床）

(2) 疑い患者受入病床 5床

(3) 新規入院患者数 498名

(4) 延べ入院患者数 4,825名

④新型コロナウイルスワクチン接種

(1) 医療従事者接種 4～5回目 5,341件（4回 3,636件、5回 1,705件）

(2) 医療従事者派遣

越生町：医師 114名、看護師 198名、薬剤師 57名

毛呂山町：医師 188名、看護師 376名、薬剤師 94名

⑤先進医療承認状況

(1) 糖鎖ナノテクノロジーを用いた高感度ウイルス検査（R2.2.1）

(2) ウィルスに起因する難治性の眼感染症疾患に対する迅速診断（PCR法）（R3.1.1）

(3) 細菌又は真菌に起因する難治性の眼感染症疾患に対する迅速診断（PCR）（R3.1.1）

(4) 家族性アルツハイマー病の遺伝子診断（R4.3.1）

3. 施設認定等

①厚生労働省より以下の病院に承認されている。

- ・ 特定機能病院（1994.3.1）
- ・ DPC大学病院本院群（2003.6.1）

②現在、埼玉県より以下の拠点病院に指定されている。

- ・ 埼玉県エイズ診療拠点病院
- ・ 埼玉県肝疾患診療連携拠点病院
- ・ 埼玉県アレルギー疾患医療拠点病院
- ・ 埼玉県てんかん診療拠点病院
- ・ 埼玉県難病診療連携拠点病院

③感染症指定医療機関

- ・ 第一種感染症指定医療機関（2床）
- ・ 第二種感染症指定医療機関（4床）

④病院機能評価認定／日本医療機能評価機構

第1回 2003.1.20 Ver.3.1

第2回 2008.4.21 Ver.5.0

第3回 2013.3.1 Ver.6.0

第4回 2019.5.10 3rdG Ver.2.0

4. 治験

治験の実績は次のとおりであった。

① 治験受託件数

- (1) 新規件数 19件
- (2) 継続件数 78件

5. 病院運営・管理

①病院長方針説明会（11月）

②病院ボード会議（月2回開催）で病院運営に関わる事項の決定を行う機関としての機能を果たした。構成員は、法人本部から担当専務理事、常務理事・事務局長、病院から病院長、副院長（看護部長含む）、医務部長である。

③病院戦略会議（月2回開催）で病院運営に関する事項の検討等を行い、病院の使命の達成及び機能の充実を図ることを行った。

構成員は大学病院担当専務理事、病院長、副院長（看護部長含む）、院長補佐、医務部長である。

- ④実務者リーダー会議（月2回開催）を開催し、現場リーダーからの報告及び病院執行部との病院運営方針・情報共有等を図り、職員への周知を図ることでリーダーの病院運営参加を促進した。
- ⑤診療部長会議（月1回開催）で病院運営に係る事項の説明及び報告を行い、周知をおこなった。
- ⑥各種の職員教育を実施し職員の能力・資質の向上を行った。
- ⑦医療法第25条に基づく立入検査（8月）

6. 教育

- ①初期臨床研修医52名に対し臨床研修を行った。
 - (1) 医科：1年目27名、
2年目23名（前年度未修了者1名）
 - (2) 歯科：1年目0名、
2年目2名
- ② 3病院合同新規登録保険医集団指導：コロナ禍のため中止、厚労省厚生局資料配布
- ③ 令和5年度初期研修医採用試験実施（8月）
- ④ 初期研修医ランチョンセミナー38回開催
- ⑤ 臨床研修指導医講習会（11月26・27日、10名参加）
- ⑥臨床研修医修了認定式（24名修了、医科1名未修了）（3月）
 - (1) 修了者：医科22名、歯科2名
 - (2) 優秀研修医4名
 - (3) 優秀指導医4名表彰
 - (4) 優秀講演者（指導医）2名表彰
- ⑦基本的臨床能力評価試験研修医42名受験（1月）
- ⑧「若き卒業生の集い in 東京」：コロナ禍のため中止
- ⑨学位取得者11名（毛呂山キャンパス）
 - (1) 甲種4名
 - (2) 乙種7名
- ⑩令和4年度EPA看護師・介護福祉士候補者受入れ（11月）
 - (1) 看護師候補者2名
 - (2) 看護師国家試験2名合格

7. 研究

- ①公的研究費の採択107件
 - (1) 文部科学省研究費補助金64件
 - (2) 厚生労働省科学研究費23件
 - (3) AMED委託費20件
- ②学内研究費
 - (1) 若手医師育成研究費17件（申請21件）
- ③臨床研究
 - (1) IRB新規審査102件（承認93件）
 - (2) 承認件数内訳
 - (ア) 前向き研究42件
 - (イ) 後方視的観察研究51件
 - (3) 継続件数329件

8. 主な活動

- ①医療安全業務監査委員会（8月1月）
- ②地域医療連携の強化
 - (1) 診療連携シンフォニー（紹介患者報告会）：コロナ禍のため中止
 - (2) 埼玉県西部地域の病院ネットワークを考える会（実務担当者会議）：コロナ禍のため中止
 - (3) 地域医療連携ニュースの発行（14号5月、15号9月、16号1月）

- (4) 外来診療担当表を地域医療機関に配布し連携強化を図った（7月、11月、3月）
- ③市民公開講座等
 - (1) 開催なし
- ④埼玉県肝疾患診療連携拠点病院の活動
 - (1) 肝疾患診療連携拠点病院等連絡協議会市民公開講座（7月、11月）
 - (2) 無料肝炎ウイルス検査実施（巡回検診7月）
 - (3) 埼玉県肝炎地域コーディネーター養成研修（12月）
 - (4) 埼玉県肝炎医療研修会開催（11月）
 - (5) 肝疾患診療連携拠点病院連絡等協議会（2月）
 - (6) 肝臓病教室（年6回：5月、9月、10月、12月、2月、3月）
- ⑤埼玉県アレルギー疾患医療拠点病院としての活動
 - (1) アレルギー疾患相談窓口
 - 1. 電話相談の対応
 - 2. 生活管理指導表相談事業の実施
 - (2) 医療機関調査を実施しホームページへ公表。
 - (3) 市民公開講座を2回開催（1月、2月）
 - (4) アレルギー疾患対策人材育成事業の実施
 - 1. 医療従事者向け研修会開催（9月、11月）
 - 2. 保険福祉・教育担当者向け研修会開催（11月、1月、2月）
- ⑥埼玉県てんかん診療拠点病院としての活動
 - (1) 協議会開催
 - (2) てんかん研修・啓発事業
 - (3) てんかん相談窓口の対応
 - (4) てんかん市民公開講座を開催（11月）
 - (5) 埼玉てんかんなんでもウェブ相談会の実施（9月、1月）
 - (6) てんかんセンターカンファレンス（毎月）
- ⑥ 難病診療拠点病院の活動
 - (1) 埼玉県難病医療連絡協議会主催の講演会への参加（11月、3月）
 - (2) 研修会開催（7月、9月開催）
 - (3) 埼玉県新型コロナワクチン専門医療機関相談窓口委託事業
- ⑦ 災害拠点病院としての防災訓練の実施
 - (1) 災害訓練開催（6月）
 - (2) BCPに基づく院内（病棟・外来）防災訓練実施（5月～3月）
- ⑨癒しのコンサート等：コロナ禍で中止

以上

19. 総合医療センター

令和4年度は新型コロナウイルス感染症の第7波、8波が襲来する中でも、あらゆる病気や怪我に対応できる super general hospital としての責務を果たした1年であった。9月に病院長が交代し新体制となり、ダヴィンチも2台稼働して質の高い医療の提供に努めた。世界情勢が不安定ではあるが、外来改修の検討も再開し新しい時代に向けた診療体制の構築を目指す。

1. 人事

4月1日付教授昇格	腎・高血圧内科	小川智也 先生
	病理部	東 守洋 先生
8月1日付教授昇格	肝胆膵・小児外科	牧 章 先生
10月1日付教授昇格	脳神経外科	飯星智史 先生 (国際医療センターより配転)
11月1日付教授昇格	産婦人科	長井智則 先生
1月1日付教授昇格	血液内科	多林孝之 先生
	病理部	百瀬修二 先生

2. 教職員数(令和4年4月1日現在)

教授	59名	看護職員	1,308名
准教授	34名	薬剤師	71名
講師	56名	事務部門その他	547名
助教	318名		
研修医	65名		
		合計	2,458名

3. 診療実績

初診患者数	49,906名	(紹介率77.7%)
延外来患者数	593,179名	(1日平均患者数2,025名)
延入院患者数	297,367名	(平均在院日数12.9日)
病床稼働率	84.0%	
手術件数	8,469件	
新型コロナ新規入院患者数	495名	(延4,845名)

7月よりフェーズに合わせて44床(中央病棟23床、4階ICU4床、MFICU2床、PICU1床、NICU2床、GICU2床)のうち、4ICUの4床を休止とし、即応病床数を40床とした。

4. 卒後教育

初期研修医	1年目	33名(本学卒業22名 他大学11名)
	2年目	44名
専攻医	65名	(当院初期研修終了20名、大学病院より7名、 国際医療センター1名、他病院より37名)

20. 国際医療センター

国際医療センターは、新型コロナウイルス感染症重点医療機関としての使命を果たすべく、埼玉県からの要請に応え、感染症科・感染制御科、新型コロナ診療部を中心に、組織横断的な診療支援体制の下に最大 42 床のコロナ病床を確保し、重症感染者等 501 人（入院延べ 4,279 人）を受け入れるとともに、ワクチン接種体制を確保し、必要な医療提供体制を整備した。

「アクション 95」の目標達成に向け、地域医療科や患者支援センターを中心に、院内の連携により入退院の促進を図るとともに、「断らない救急」を掲げ、救急救命士による救急車の受入要請に対応し、救急車応需率の向上と新規入院患者数の増加に努めた。

地域がん診療連携拠点病院（高度型）として患者に寄り添った質の高いがん医療の提供に向け、F 棟 4 階がん病棟を 6 月に開設し 38 床を稼働させるとともに、7 月には 1 階に放射線治療センター、2 階に外来化学療法センターの機能を移転した。また、最新型の手術支援ロボットを増設するとともに、MR リニアックを導入し、患者負担の軽減と質の高いがん治療の提供と同時に若手医師の教育への活用を推進した。

1. 人事

- ① 4 月 1 日付けで感染症科教授に関雅文先生が着任した。
- ② 4 月 1 日付けで心臓内科教授に荒井隆秀先生が着任した。
- ③ 4 月 1 日付けで心臓血管外科准教授に木下修先生が着任した。
- ④ 4 月 1 日付けで小児腫瘍科准教授に中尾朋平先生が着任した。
- ⑤ 4 月 1 日付けで皮膚腫瘍科講師に森龍彦先生が着任した。
- ⑥ 4 月 1 日付けで脳血管内治療科講師に吉川信一朗先生が着任した。
- ⑦ 5 月 1 日付けで小児心臓外科教授に帆足孝也先生が着任した。
- ⑧ 6 月 1 日付けで脳脊髄腫瘍科講師に小澤達也先生が着任した。
- ⑨ 6 月 1 日付けで地域医療科教授に眞下由美先生が昇格した。
- ⑩ 6 月 1 日付けで消化器外科教授に合川公康先生が昇格した。
- ⑪ 6 月 1 日付けで呼吸器外科准教授に二反田博之先生が昇格した。
- ⑫ 7 月 1 日付けで消化器外科講師に渡辺雄一郎先生が昇格した。
- ⑬ 8 月 1 日付けで婦人科腫瘍科准教授に黒崎亮先生が昇格した。
- ⑭ 9 月 1 日付けで輸血・細胞移植部准教授に松岡佐保子先生が着任した。
- ⑮ 10 月 1 日付けで放射線腫瘍科准教授に熊崎祐先生が昇格した。
- ⑯ 11 月 1 日付けで呼吸器外科教授に石田博徳先生が昇格した。
- ⑰ 12 月 1 日付けで消化器内科准教授に谷坂優樹先生が昇格した。

2. 診療実績

- ① 診療実績は次のとおりであった。
 - (1) 新入院患者数 16,354 人、(2) 延入院患者数 240,159 人、(3) 稼働率 88.0%、(4) 中央手術部手術件数 6,922 件
 - (5) 初診患者数 17,117 人、(6) 延外来患者数 231,943 人、(7) 救急車受け入れ件数 4,715 件、(8) 紹介率 70.3%、逆紹介率 90.2%
- ② 院内がん登録件数（2021 年症例）5,174 件

3. 病院運営・管理

- ① 国際医療センターでは、法人本部から常務理事、事務局長、病院から病院長、副院長、事務部長から構成される病院経営推進会議（隔週月曜日開催）で病院運営に関わる方針、経営改善等の審議及び決定がなされ法人の方針を踏まえた病院運営を行った。
- ② 病院経営戦略会議（隔週月曜日開催）は病院長、副院長、事務部長から構成され病院経営推進会議に上程する事項の検討を行う機関として機能した。
- ③ 診療部長会議（毎月第 3 水曜日開催）、合同医長連絡会議（毎月第 3 金曜日開催）、リーダーズ会議（毎週火曜日開催）等で病院運営の方針、情報共有等を行い職員への周知を図ることで、すべての職員が同一ベクトルを目指し行動した。
- ④ 病院長による方針説明会を 6 月に開催し、令和 3 年度の医療活動および令和 4 年度の運営方針について職員に周知を図った。

⑥医療法 25 条立ち入り検査*新型コロナウイルス感染症のため中止

⑦救命救急センター運営評価委員会開催

4. 教育

①臨床研修医教育（卒後 1～2 年目）

- (1) 2022 年度臨床研修医 10 名に対して、臨床研修を実施
 - ・ 2022 年度採用（1 年目）5 名（埼玉医科大学卒業生 0 名）
 - ・ 2021 年度採用（2 年目）5 名（埼玉医科大学卒業生 2 名）
- (2) 埼玉医科大学病院、埼玉医科大学総合医療センター、西埼玉中央病院よりそれぞれ臨床研修医を受け入れ、臨床研修を実施
- (3) 指導医・指導者による総合評価実施
- (4) 研修管理委員会開催（3 回、Web・メール会議含む）※外部施設招聘
- (5) 卒後研修運営部会開催（12 回）※毎月第 3 水曜日
- (6) 初期研修医のための講習会開催（35 回）※毎週水曜日
- (7) 新規臨床研修医オリエンテーション実施（4 月 1 日～8 日）
- (8) 厚生労働省へ年次報告並びにプログラム変更届出を届出（4 月）
 - ・ 協力型臨床研修病院の追加、臨床研修協力施設の追加・削除
 - ・ 副プログラム責任者の追加
 - ・ 救急必修分野 国際医療センター4 週義務化、研修可能施設の追加
- (9) 研修管理委員長、プログラム責任者による面談実施（5 月、8～9 月、12 月）
- (10) 病院群臨床研修プログラム WEB 説明会（5～7 月、2 月）
- (11) 臨床研修プログラム WEB 説明会（7 月）
- (12) 新規登録保険医集団指導（8 月）*eラーニング受講
- (13) 基本的臨床能力評価試験進歩事務参加（9 月）
- (14) プログラム責任者養成講習会受講（10 月）*ZOOM 開催
 - ・ プログラム責任者養成講習会受講修了者 8 名（2023 年 3 月 31 日現在）
- (15) 病院群臨床研修指導医講習会 10 名受講（11 月）*ZOOM 開催
 - ・ 臨床研修指導医講習会受講修了者 122 名（2023 年 3 月 31 日現在）
- (16) 緩和ケア研修会受講（12 月）*10 名中 9 名受講完了（2023 年 3 月 31 日現在）
- (17) 基本的臨床能力評価試験受験（1 月）
- (18) 研修医長会議実施（2 月）
- (19) 臨床研修修了認定式（3 月）
 - ・ 臨床研修修了者 5 名
 - ・ 優秀研修医表彰 2 名
 - ・ 優秀上級医表彰 2 名
 - ・ 優秀指導者表彰 2 名
 - ・ 優秀指導医表彰 3 名
- (20) BLS、ICLS もしくは JMECC 受講 *10 名中 8 名受講完了（2023 年 3 月 31 日現在）
- (21) 他大学医学生病院見学 27 名受け入れ

②専攻医教育（専門研修：卒後 3 年目～）

- (1) 2022 年度専攻医 64 名に対して、専門研修を実施
 - ※うち、2022 年度プログラム登録者数 16 名（他施設採用者 3 名）
- (2) 専門研修プログラム申請（4-7 月）
 - ・ プログラム内容、募集定員の見直し
 - ・ 連携施設の追加・削除
- (3) 専門研修プログラム WEB 説明会（8 月）
- (4) 麻酔科専門研修プログラム管理委員会開催（8 月、3 月）
- (5) 放射線科専門研修プログラム管理委員会開催（10 月、3 月）
- (6) 外科専門研修プログラム管理委員会開催（2 月、3 月）
- (7) 内科専門研修プログラム管理委員会開催（3 月）
- (8) 脳神経外科専門研修プログラム（3 月）

(9) 専門研修プログラム統括責任者合同会議 (3月)

(10) 専門研修修了認定証授与 (3月)

- ① 内科領域 3名/8名
- ② 外科領域 3名/4名
- ③ 放射線科領域 4名/5名
- ④ 脳神経外科領域 4名/4名

③職員教育

(1) eラーニング 89講座を開講

- (ア) 職員必須講座 10講座 受講者：19,375名
- (イ) 看護系講座 27講座 受講者：10,470名
- (ウ) 医療機器系講座 22講座 受講者：4,371名
- (エ) 薬剤系講座 9講座 受講者：2,343名
- (オ) 放射線系講座 9講座 受講者：2,242名
- (カ) その他の講座 12講座 受講者：14,804名

(2) 救命講習

- (ア) 一次救命講習 (通常・更新コース) 98回開催 受講者：885名
- (イ) 二次救命講習 (通常・更新・看護師コース) 109回開催 受講者：432名
- (ウ) 小児救命講習 (一次・二次) 29回開催 受講者：88人

(3) シミュレーションセンター利用

- (ア) 利用 639回、利用者数 3,612名

④研修会・講演会等

(1)緩和ケア研修会：2回開催 (7月・12月)

(2)包括的がん教育カンファレンス：包括的がん看護研修 2回開催 (8月・11月)、ELNEC-J (7月)、
がんコミュニケーションスキル研修 (2月)

(3)市民公開講座：2回開催 (9月・2月)

(4)かわせみ教育カンファレンス：3回開催 (9月・12月・3月) 会場とWEBのハイブリッド形式による

(5)感染防止地域連携カンファレンス：5回開催 (5月、8月、10月、2月 Web開催、11月ハイブリッド開催)

(6)死生学勉強会：12回開催 (毎月1回 Web開催)、参加者のべ 299人

その他、多数開催

⑤ 専門看護師等の育成・認定取得

- (1) 専門看護師 6名
- (2) 認定看護師 24名 (新規取得 3名)

⑥ 学位取得者 6名

- (1) 甲種 1名
- (2) 乙種 5名

⑦ オリエンテーション毎月実施 (12回 279名)

5. 研究

①科学研究費の採択は次のとおりであり、合計 94 件の研究費補助金を獲得した。

- (1) 文部科学省科学研究費補助金 62 件
- (2) 厚生労働省科学研究費 5 件
- (3) 日本医療研究開発機構委託研究開発費 27 件

②日高研究プロジェクト 17 件

③治験では、137 件 (うち国際治験 110 件) 実施した。

- (1) 新規 23 件 (うち国際治験 18 件)、
- (2) 前年度からの継続 114 件 (うち国際治験 92 件)

④臨床試験では、1127 件の臨床試験を実施した。

- (1) 病院 I R B で 130 件の臨床試験を承認
- (2) 前年度からの継続 997 件

⑤特定臨床研究を 110 件実施した。

- (1) 新規 17 件

- (2) 前年度からの継続 93 件
- ⑥先進的医療は、7 件の先進医療を実施した。
 - (1) 新規 1 件
 - (2) 前年度からの継続 6 件
- ⑦看護研究発表会：第 15 回看護研究発表会を実施した。
 - (1) 日程：令和 5 年 1 月 28 日（土）
 - (2) 演題数：33 演題

6. 国際医療センターの主な活動

- ①地域医療連携
 - (1) 埼玉医科大学・連携施設懇談会：第 42 回、第 43 回を WEB 配信で開催した。（6 月、10 月）
 - (2) 埼玉医科大学国際医療センター・地域医療懇話会：WEB 配信（7 月、9 月、12 月）
 - (3) 埼玉医科大学国際医療センター・7 地区医師会連絡協議会：コロナ禍のため中止。
 - (4) 埼玉医科大学国際医療センター地域医療支援病院運営会議をハイブリット方式で開催した（5 月、10 月、12 月、3 月）
- ②国際診療支援
 - (1) 外国人患者数 延 893 名（渡航患者受入相談 10 名、うち渡航患者数 1 名）
 - (2) 外国人受診支援 443 件
 - (3) 外国人臨床修練医師支援 1 名
- ③医療安全・感染対策
 - (1) 日本私立医科大学病院 医療安全相互ラウンド（昭和大学江東豊洲病院）（ZOOM、12 月）
 - (2) 日本私立医科大学協会 感染対策相互ラウンド（昭和大学江東豊洲病院）（Zoom、12 月）
 - (3) チームステップス講習（コロナ禍のため中止）
 - (4) 医療安全推進週間（11 月 20～26 日）を開催
ポスター表彰（7 件）
 - (5) 医療の質・医療安全監査委員会開催（6 月）
 - (6) 新型コロナウイルス感染症に対応するために院内対策本部を中心に、各種の取組みをおこなった。
- ④ボランティア活動
 - (1) ホワイエココンサート：コロナ禍のため中止
 - (2) 献血 2 回実施（7 月、11 月）
 - (3) ボランティア清掃 7 回
 - (4) 院内患者案内ボランティア活動：コロナ禍のため中止
- ⑤施設見学実施 176 件
- ⑥防火訓練等
 - (1) 部署別防火防災訓練（69 回 1636 名）実施 受講率 81.8%
*コロナ禍で訓練参加率不足分は e ラーニングで補完
 - (2) 埼玉西部消防組合屋内消火栓操法大会：コロナ禍のため中止
 - (3) 新入職員中途採用者防火防災に関するオリエンテーション 16 回実施
 - (4) 禁煙パトロール（毎月 6 回実施）
 - (5) 保育所あすなろ避難訓練（毎月実施、12 回）
- ⑦職員等懇親活動
 - (1) 職員運動会：コロナ禍のため中止
 - (2) 保育所あすなろ運動会：規模を縮小して実施
 - (3) 新年会（全職員対）：コロナ禍のため中止
- ⑧施設設備改修工事等
 - (1) 国際医療センターCGS 更新工事【令和 5 年 6 月竣工予定】
 - (2) C 棟 2 階 MRI 検査室パッケージエアコン更新工事【令和 4 年 12 月竣工】
 - (3) エコ運動活動 ポスター配布（6 月、12 月）

7. 第三者評価認証等の状況

- ①JCI 認定医療機関 Academic Medical Center Hospital/JCI
- ②病院機能評価認定病院／公益財団法人日本医療評価機構

- ③外国人患者受入れ医療機関認証病院(JMIP)／一般財団法人日本医療教育財団
- ④日本国際病院認証病院(JIH)／一般社団法人 Medical Excellence JAPAN
- ⑤臨床検査室認定 ISO15198／公益財団法人日本適合性認定協会
- ⑥救命救急センター充実段階評価「S」／厚生労働省
- ⑦JCEP 医師臨床研修病院評価／NPO 法人卒後臨床研修評価機構 (JCEP : Japan Council for Evaluation of Postgraduate Clinical Training)

1. 1) 埼玉医科大学倫理審査委員会

1. 構成員

1-1. 埼玉医科大学倫理審査委員会（任期：R6. 3. 31）

委員長	千本松 孝明 (SENBONMATSU, Takaaki)：リサーチアドミニストレーション (RA) センター：センター長・教授
副委員長	大竹 明 (OHTAKE, Akira)：大学病院小児科/ゲノム医療科：特任教授 三谷 幸之介 (MITANI, Kohnosuke)：医学部ゲノム応用医学：教授
委員	中村 晃一郎 (NAKAMURA, Koichiro)：大学病院皮膚科：教授 亀井 良政 (KAMEI, Yoshimasa)：大学病院産科・婦人科：教授 山田 健人 (YAMADA, Taketo)：医学部病理学：教授 種田 佳紀 (OIDA, Yoshiki)：医学部教養教育：講師 粟生田 友子 (AOHDA, Tomoko)：保健医療学部看護学科：特任教授 川邊 学 (KAWABE, Manabu)：保健医療学部臨床工学科：講師 大久保 雄 (OKUBO, Yu)：保健医療学部理学療法学科：講師 (R4. 4～) 茅野 秀一 (KAYANO, Hidekazu)：保健医療学部臨床検査学科：教授 奥山 虎之 (OKUYAMA, Torayuki)：大学病院ゲノム医療科/難病センター：客員教授 小高 明雄 (ODAKA, Akio)：総合医療センター小児外科：教授
学外委員	井上 晶子 (INOUE, Akiko)：研究対象者の観点を含めて一般の立場を代表する者・女性委員 和田 芽衣 (WADA, Mei)：研究対象者の観点を含めて一般の立場を代表する者・女性委員 野木 尚郎 (NOGI, Hisao)：人文・社会科学の学外有識者・サライ法律事務所・法律の専門家

1-2. 埼玉医科大学倫理委員会ヒト幹細胞研究倫理審査専門部会（任期：R6. 3. 31）

部会長	三谷 幸之介 (MITANI, Kohnosuke)：医学部ゲノム応用医学：教授
副部会長	矢部 慎一郎 (YABE, Shinichiro)：総合医療センター産婦人科：講師 (R4. 4～)
部会員	池淵 研二 (IKEBUCHI, Kenji)：大学病院臨床検査医学：客員教授 池園 哲郎 (IKEZONO, Tetsuo)：大学病院耳鼻咽喉科：教授 千本松 孝明 (SENBONMATSU, Takaaki)：RA センター：センター長・教授 茅野 秀一 (KAYANO, Hidekazu)：保健医療学部臨床検査学科：教授 太田 晶子 (OHTA, Akiko)：医学部社会医学：准教授 伴場 裕巳 (BAMBA, Hiromi)：保健医療学部健康医療科学科：講師 種田 佳紀 (OIDA, Yoshiki)：医学部教養教育：講師 井上 晶子 (INOUE, Akiko)：学外委員 野木 尚郎 (NOGI, Hisao)：学外委員
事務局	佐藤 勝茂 (SATO, Katsushige)：RA センター課長 長田 佐絵 (NAGATA, Sae)：RA センター 宿谷 学 (SHUKUYA, Manabu)：RA センター

2. 目的・目標

- 本委員会は、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」（以下、「生命・医学系指針」という。）に則り学校法人埼玉医科大学および関連施設における人を対象とした医学および関連諸科学の研究に関する倫理性を審議する。特に、ヒトに由来した手術残余検体・生検組織・血液などの生体材料を用いた遺伝子解析研究、遺伝子治療に関する研究、先端的医療に該当する研究やトランスレーショナルリサーチに相当する研究及びヒトを対象とする理学・看護学研究の審査を行う。
- 埼玉医科大学ヒト幹細胞研究倫理審査規則により、大学倫理審査委員会の専門部会としてヒト幹細胞研究倫理審査専門部会を置く。専門部会は、学校法人埼玉医科大学において実施されるヒト胚性幹細胞・ヒト人工多能性幹細胞・ヒト組織幹細胞を使用する研究について生命倫理に関する事項などがヘルシンキ宣言、ヒト ES 細胞の使用

に関する指針並びに関連する指針及び法令等を遵守しているかについて審議し、大学倫理審査委員会に報告する。

3. 活動実績

3-1. 大学倫理審査委員会 開催日

令和4年度は以下のとおり定例委員会が開催された（8月は休会）。

- ①第311回（令和4年 4月12日）於：丸木記念館7階会議室 出席者16人 欠席1人 事務局3人
議事：新規申請2件、迅速審査5件
- ②第312回（令和4年 5月10日）於：丸木記念館7階会議室 出席者15人 欠席2人 事務局2人
議事：新規申請2件、迅速審査3件
- ③第313回（令和4年 6月14日）於：丸木記念館7階会議室 出席者17人 欠席0人 事務局3人
議事：新規申請2件、再申請1件、迅速審査6件
- ④第314回（令和4年 7月12日）於：丸木記念館7階会議室 出席者15人 欠席2人 事務局3人
議事：新規申請4件、再申請1件、迅速審査4件
- ⑤第315回（令和4年 9月13日）於：丸木記念館7階会議室 出席者15人 欠席2人 事務局2人
議事：新規申請2件、再申請1件、迅速審査2件
- ⑥第316回（令和4年10月11日）於：丸木記念館7階会議室 出席者15人 欠席2人 事務局3人
議事：新規申請1件、迅速審査3件
- ⑦第317回（令和4年11月 8日）於：丸木記念館7階会議室 出席者14人 欠席3人 事務局3人
議事：新規申請1件、迅速審査3件
- ⑧第318回（令和4年12月13日）於：丸木記念館7階会議室 出席者16人 欠席1人 事務局2人
議事：新規申請1件、再申請1件
- ⑨第319回（令和5年 1月10日）於：丸木記念館7階会議室 出席者16人 欠席1人 事務局3人
議事：新規申請6件、迅速審査（委員会案件）1件、迅速審査3件
- ⑩第320回（令和5年 2月14日）於：丸木記念館7階会議室 出席者15人 欠席2人 事務局3人
議事：新規申請2件、変更申請2件、迅速審査13件
- ⑪第321回（令和5年 3月14日）於：丸木記念館7階会議室 出席者15人 欠席2人 事務局3人
議事：新規申請4件、再申請1件、変更申請2件、迅速審査8件

3-2. ヒト幹細胞研究倫理審査専門部会 開催日

- ①第21回専門部会（令和4年2月2日～2月4日）迅速審査：担当部会員 三谷専門部会長、池淵部会員
議事：変更申請1件
- ②第22回専門部会（令和4年3月8日～3月23日）迅速審査：担当部会員 三谷専門部会長、矢部副部会長
議事：変更申請1件

3-3. 主な審議内容

- 1) 大学倫理審査委員会の主な審議内容は次のとおり。
 - ・ 新規申請27件、再申請5件、変更申請4件、迅速審査（委員会案件）1件、迅速審査50件の審査を行った。審査の詳細は、大学倫理審査委員会ホームページ<http://www.saitama-med.ac.jp/medlinks/rinri/ec/index.html>に掲載している。
- 2) ヒト幹細胞研究倫理審査専門部会の主な審議内容は次のとおり。
 - ・ ヒト ES 細胞を使用する研究実施の変更申請 1 件、ヒト ES 細胞の樹立の胚提供に関する変更申請 1 件について迅速審査し、倫理審査委員会に報告した。

3-4. 教育活動

委員会事務局の教育・研修の一環として以下に参加、実施した。

- ・ 第 65 回医学系大学倫理委員会連絡会議（令和 4 年 6 月 24 日、25 日 Web 開催）：千本松委員長、種田委員、佐藤、長田、宿谷
- ・ 順天堂大学医学部附属順天堂医院 臨床研究・治験センター 臨床研究研修会「臨床研究における個人情報の保護」（令和 4 年 7 月 12 日 Web 開催）：佐藤、長田、宿谷
- ・ 順天堂大学医学部附属順天堂医院 臨床研究・治験センター 臨床研究研修会「臨床研究法と本邦の研究規制」（令和 4 年 9 月 9 日 Web 開催）：佐藤、長田、宿谷

- ・ 大阪大学医学部附属病院 治験・倫理審査委員会委員研修（令和4年9月24日 Web 開催）：佐藤、長田、宿谷
- ・ 日本臨床試験学会 教育セミナー 「第8回 倫理審査委員会を考える！ どうなる？ IC 取得と試料・情報の取扱い～個人情報改正に伴う指針改正の影響～」（令和4年10月8日 Web 開催）：佐藤、宿谷
- ・ 順天堂大学医学部附属順天堂医院 臨床研究・治験センター 臨床研究研修会「医学研究において求められる COI 管理と管理の基準について」（令和4年10月18日 Web 開催）：佐藤、長田、宿谷
- ・ 東北大学病院 治験・倫理審査委員会委員研修「委員長研修」（令和4年10月22日 Web 開催）：千本松委員長、長田、宿谷
- ・ 令和4年度厚生労働省臨床研究総合促進事業 臨床研究・治験従事者に対するプログラム データマネージャー養成研修（令和4年11月18日、19日 Web 開催）長田
- ・ 岡山大学病院 治験・倫理審査委員会委員研修（令和4年11月26日 Web 開催）：宿谷
- ・ 第66回医学系大学倫理委員会連絡会議（令和4年12月16日、17日現地開催および Web 開催）：千本松委員長、種田委員、川邊委員、佐藤、長田、宿谷
- ・ 日本臨床試験学会 第14回学術集会総会 in 金沢（令和5年2月9日、10日）：佐藤
- ・ 第8回「研究倫理を語る会」（令和5年3月4日現地開催および Web 開催）：井上委員、佐藤、長田、宿谷

3-5. その他の委員会活動

1) 令和4年度実施報告について

- ・ 研究責任者に対して、承認された研究の進捗状況に関する実施報告書または終了する研究は終了報告書を委員会に提出させ、研究実施の適否について審査した。

2) 厚生労働省への倫理審査委員会報告等について

- ・ 生命・医学系指針により義務付けされている、厚生労働省への報告については、厚生労働省 臨床研究倫理委員会報告システムにより、設置者、委員会規則、委員一覧、委員会業務手順、議事録を随時更新することにより公表した。

3) 学内説明会の開催について

- ・ 倫理指針改正に関する説明会（令和4年7月29日 Web 開催、オンデマンド配信も実施）

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

委員会を予定通り開催し、医学系研究の倫理審査を適切に行い、科学的かつ倫理的な研究の実施に寄与することができた。また委員および事務局員は、教育や外部研修に積極的に参加し知識習得に努め、関連指針改正に関する情報収集および対応、各病院 IRB との連携など、質向上に取り組むことができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

健全な研究活動を保持するため、大学倫理審査委員会の開催と支援を次の通り実施する。

1) 大学倫理審査委員会の開催

- ・ WEB 会議システムを活用するなど新型コロナウイルス対策を行い、大学倫理審査委員会を原則毎月開催する。（大学倫理審査委員会は8月休会）
- ・ 被験者保護の観点、倫理審査の質向上のため、委員および事務局員の教育のため、積極的に外部研修会への参加、学内講習を実施する。
- ・ ヒト幹細胞に関する指針等の対象となる臨床並びに基礎研究については、申請の都度、ヒト幹細胞研究倫理審査専門部会を招集し審査する。

2) 倫理審査基準の標準化と改善

- ・ 大学倫理審査委員会および各病院 IRB との連携を深め、倫理審査の質向上の取り組みのため、倫理審査委員会事務局連絡協議会を開催する。
- ・ 個人情報保護法の令和5年4月施行に伴い、生命・医学系指針の改訂が予定されるため、情報収集および対応をする。

3) ヒトを対象とした医学研究の倫理教育の実施について

- ・ 生命・医学系指針、臨床研究法に則した総合的な研究倫理教育の実施について、各病院の臨床研究支援センターと連携し、施設契約した ICRweb e ラーニングを活用することとする。

4) 倫理審査業務に関するシステムの運用と改善

- ・ 令和 3 年度から運用開始した倫理審査申請システムについて、データの利活用およびシステムの利便性改善について、各病院 IRB と連携し検討する。

1. 2) 図書館委員会

1. 構成員

- 委員長 持田 智 (MOCHIDA, Satoshi) : 附属図書館館長 (大学病院消化器内科・肝臓内科教授) 令和6年3月まで
委員 土田敦子 (TSUCHIDA, Noriko) : 基礎医学部門教養教育化学講師、令和6年3月まで
川野雅章 (KAWANO, Masaaki) : 基礎医学部門免疫学准教授、令和6年3月まで
山元敏正 (YAMAMOTO, Toshimasa) : 大学病院神経内科教授、令和6年3月まで
福田知雄 (FUKUDA, Tomoo) : 総合医療センター分館分館長 (総合医療センター皮膚科教授) 令和6年3月まで
竹下享典 (TAKESHITA, Kyosuke) : 総合医療センター中央検査部部長 (総合医療センター臨床検査医学教授) 令和6年3月まで
片桐岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : 基礎医学部門ゲノム基礎医学教授、令和6年3月まで
池田将樹 (IKEDA, Masaki) : 日高キャンパス分館分館長 (保健医療学部共通教育部門教授)、令和6年3月まで
時田幸之輔 (OKUBO, Yu) : 保健医療学部理学療法学科講師、令和6年3月まで
各務 博 (KAGAMU, Hiroshi) : 国際医療センター呼吸器内科教授、令和6年3月まで

2. 目的・目標

委員会は、図書館運営の基本方針、同じく予算の要求及び執行に関すること、図書館諸規程の制定及び改廃に関すること、その他図書館に関する重要事項を審議する (図書館委員会規則第2条)。
今年度の重点目標は、記録的な円安より大幅な値上がりが見込まれる2023年外国雑誌購読について、できる限りの経費削減を試みたうえで予算増額の決裁を得ることである。また、上期中にリモートアクセスツール「RemoteXs」の利用を開始し、学外からも電子ジャーナルやデータベースなどの電子コンテンツが利用できる環境を整備することとした。

3. 活動実績

1) 委員会の開催 (議事要録あり)

- 第1回 (令和4年6月21日、Web会議、出席6人、欠席4人(委任状を含む))
第2回 (令和4年10月19日、Web会議、出席8人、欠席2人(委任状を含む))
第3回 (令和5年3月1日、Web会議、出席8人、欠席2人(委任状を含む))

2) 主な協議事項 (報告事項を含む)

第1回

1) 令和3年度事業報告 (附属図書館、総合医療センター分館、日高キャンパス分館、川角キャンパス分館、以上4キャンパス) を承認した。

・令和3年度図書館利用サービスの状況

4館合計の入館者数は45,833人で前年比109.4%(3,948人増)、貸出者数は7,800人で106.4%(469人増)、貸出冊数は16,011冊で103.9%(594冊増)となり、すべての項目で微増となった。図書館間相互貸借サービスは、貸し件数3,758件(87.9%)、借り件数1,454件(108.5%)だった。国内医学文献データベースの利用件数は64,312件で前年比108.8%(5,183件増)だった。海外医学文献データベースは52,156件で前年比106.4%(3,153件増)と増加した。国内電子ジャーナルは121,054件で前年比106.5%(7,434件増)と増加した。海外電子ジャーナルは主要10社で243,737件、前年比104.1%(9,687件増)だった。国内電子ブックはメディカルオンラインイーブックが2,453件で前年比125.0%(490件増)、Maruzen eBook Libraryが529件で前年比154.2%(186件増)といずれも増加した。海外電子ブックはAccessMedicineが901件で前年比448.3%(700件増)と大きく増加した。リポジトリのアクセス件数は14件減少の84,464件で前年とほぼ同じ数字だった。

・各キャンパス特記事項

感染対策としてすべての学生の自習学習を禁止した(8月27日)。2022年外国雑誌購読料は、可能な範囲で削減し前年購読料を上回らない規模とした(25誌中止)。Elsevier PPVは運用方法を登録制に変更し経費削減を図ることとした。リモートアクセスツール「RemoteXs」の新規導入を決定した(10月)。東側テラス外部階段床タイル修繕工事が実施された(2月)。附属図書館4館を統合した新図書館ホームページを正式公開した(2月)。図書館システムリプレイス(クラウド版への移行)が実施された(3月、以上、附属図書館)。

教員転入に伴う大分大学からの図書無償譲渡の手続きを行った(4月、12月)。病院機能評価受審における訪問審査へ対応した(5月)。人事課より患者図書室「かしの木文庫」新規採用者の人事管理について協力要請があり対応することとした(9月)。電動書架の蛍光灯の交換修理が行われた(10月、以上、総合医療センター分館)。

院生及び学部学生を対象に文献検索講義をWeb配信または集合型で実施した(4月、5月、7月)。来校型大学見学会における図書館見学に対応した(7月、8月、10月、1月)。日本医学図書館協会の重複雑誌交換事業で入手した日本看護学会論文集約100冊を受入れ処理した(3月、以上、日高キャンパス分館)。

カビ対策として2階の一部資料を移動し2階書庫に除湿器を2台設置した(6月)。学生の自習利用方法を変更した(1~3年生は対面授業日のみ、4年生は国試勉強利用に限り可、いずれも午前か午後の半日のみ)(10月18日)。館内ゼミ室の運用方法を変更した(4年生は常時利用可、1~3年生は対面授業日のみ可)(1月5日)。視聴覚室及び院生室のカーペットの張り替えが実施された(3月)。閲覧室の椅子56脚が更新された(3月、以上、川角キャンパス分館)。

2) 令和3年度予算執行状況報告(4キャンパス)を承認した。

・各館ごとの執行状況

資料費は、雑誌、図書、視聴覚資料の合計で1331万円が執行され(執行率72.2%)、維持費は2億755万円が執行さ

れた（執行率 90.6%）。合計 2 億 2086 万円が決算額となった（執行率 89.2%）。前年比では 14%減で 3588 万円の減額である。維持費の図書館システムリプレイス費用（予算額 200 万円）は次年度に執行することになったため令和 3 年度は執行なしとなった（以上、附属図書館）。

資料費は 555 万円が執行され（執行率 90.2%）、維持費は 294 万円が執行された（執行 92.3%）。合計 894 万円が決算額となった（執行率 91.0%）。前年比では 15%増で 117 万円の増額である。（以上、総合医療センター分館）。

資料費は 832 万円が執行され（執行率 88.1%）、維持費は 250 万円が執行された（執行率 38.2%）。合計 1083 万円が決算額となった（執行率 67.6%）。前年比では 16%減、211 万円減額である。備品費の予算額 250 万円は予算申請後の令和 2 年度末に入退館ゲートの更新費用として執行済みである。そのため令和 3 年度は執行なしとなり全体の執行率の低さに影響した（以上、日高キャンパス分館）。

資料費は 341 万円が執行され（執行率 92.2%）、維持費は 254 万円が執行された（執行率 32.4%）。合計 596 万円が決算額となった（執行率 51.6%）。前年比では 14.5%増、75 万円の増額である。備品費の予算額 350 万円は入退館ゲートの更新費用として計上したが更新が見送られたため未執行となった。用品費では閲覧室の椅子の更新費用として 225 万円を計上したが費用が予算の半額ほどで更新できたため執行率が 45.7%と低くなった（以上、川角キャンパス分館）。

3) 本館及び総合医療センター分館（川越）における入退館ゲート（セキュリティゲート含む）の設置を検討した。

・前回委員会で本館、川越における入退館ゲートの必要性について質疑があり、本日の委員会で設置の検討に着手することになった。検討にあたり取り扱い業者 2 社へ見積りを依頼し、委員会当日までに 1 社から提案があったのでその内容を確認した。概算見積りでは毛呂山と川越の両方に設置した場合の合計金額が 29,795,000 円（税抜）となった。高額な予算が必要だが、委員会としては将来的に設置が必要であることを確認した。次回委員会では 2 社の提案を比較して今後の進め方を検討する。

第 2 回

1) 2023 年電子コンテンツについて検討した。結論部分は以下のとおり。

・外国雑誌（電子ジャーナル）

2023 年外国雑誌購読料は、国際情勢の不安定化や国際経済の減速に伴う記録的な円安の影響により、前年同内容を継続した場合の見積価格が前年予算比 16%増、2613 万 4449 円増額となった。この値上がりに対して、各出版社・代理店との特別交渉、複数年契約による価格抑制、一部タイトルの中止を行い、可能な範囲で経費削減を試みた。その結果、見積価格は 1 億 8604 万 3474 円となり、当初見積りから 703 万 2429 円減額、前年予算からは 11%増、1910 万 2020 円増額となった。各出版社の契約内容は次のとおり。

Elsevier は利用件数が少ない 2 誌を中止する（PPV で対応可）。さらに PPV の運用を変更する（年間 3,000 論文から 500 論文へ縮小、登録制による利用抑制効果を反映）。

LWW は 1 年目値上がりなしの 3 年契約に変更する。

OUP のパッケージは他社からの移管誌を含めない契約を採用して値上りを抑制する。

SAGE は新たに設定された 3 年契約を採用する。

2) リモートアクセスツール「RemoteXs」の運用状況について報告があった。

・8 月 31 日に RemoteXs の運用を開始した。10 月 14 日時点の申請者数は 329 名となっている。利用開始後にいくつかの問題点が見つかったため、利用者に周知するとともに対応を進めている。

3) 本館及び総合医療センター分館（川越）における入退館ゲート（セキュリティゲート含む）の設置を検討した。

・設置検討にあたり、取り扱い業者 2 社（紀伊國屋書店、丸善雄松堂）の見積りを比較した。紀伊國屋書店 32,774,500 円（税込）、丸善雄松堂 43,392,800 円（税込）。両社の違いは、川越の入退館ゲートの有無（紀伊國屋書店なし、丸善雄松堂あり）であり、この部分が見積りの差になっている。いずれの場合も高額になるため、入退館ゲートとセキュリティゲート（自動貸出機含む）を切り離して検討する案が提示され、まずはセキュリティゲートのみの設置を前提に各社へ再提案を依頼することとした。

第 3 回

1) 令和 5 年度事業計画（4 キャンパス）について、各館からそれぞれ説明が行われ、委員会として承認した。

2) 令和 5 年度予算要求（概算要求一覧、4 キャンパス）について、各館からそれぞれ説明が行われ委員会として承認した。

3) 文献管理ツール「RefWorks」の契約継続の可否を協議し中止を決定した（継続価格 768,000 円）。

・RefWorks は利用者が少なく、図書館で代替ツール（EndNonte Online）を提供しているため中止との判断になった。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

・規定では「委員会は、少なくとも年 4 回招集する（委員会規則第 5 条 2 項）」となっているが、令和 3 年度は 3 回の開催にとどまった。

・2023 年外国雑誌購読については、記録的な円安により大幅な値上がりとなったが、可能な範囲で経費削減を試み、予算増額の決裁を得ることができた。

・8 月にリモートアクセスツール「RemoteXs」の利用を開始し、学外からも電子ジャーナルやデータベースなどの電子コンテンツが利用できる環境を整備した。

・本委員会は、学内各館の役割、サービスをトータルに検討できる全学規模の委員会として機能している。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

・2024 年外国雑誌購読については、限られた予算で最大の効果が得られるコレクションの整備と見直しを継続する。また、学内の APC（Article Processing Charge：オープンアクセス論文投稿料）支出額の調査に着手し、購読・出版（Read & Publish）モデルの導入についても検討する。

- ・ 埼玉医科大学リポジトリの運用を第二段階へ進めることとしオープンアクセスポリシー及び研究データポリシーの策定に着手する。
- ・ 附属図書館及び川越キャンパス分館における入退館ゲートの設置に向けた検討を継続する。

1. 3) 埼玉医科大学自己点検・評価委員会

1. 構成員

委員	別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長 (任期 : R6. 3. 31)
副委員長	森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学部長・医学教育センター長 (任期 : R6. 3. 31)
副委員長	加藤木 利行 (KATOI, Toshiyuki) : 保健医療学部長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	吉本 信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	棚橋 紀夫 (TANAHASHI, NORIO) : 専務理事 (任期 : R6. 3. 31)
委員	小山 勇 (KOYAMA, ISAMU) : 専務理事 (任期 : R6. 3. 31)
委員	堤 晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko) : 理事 (任期 : R6. 3. 31)
委員	竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (任期 : R6. 3. 21)
委員	松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 副学長・医学研究科長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomi) : 大学病院長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	別宮 好文 (BEKKU, Yoshifumi) : 総合医療センター病院長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	佐伯 俊昭 (SAEKI, Toshiyuki) : 国際医療センター病院長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	屋嘉比 康治 (YAKABI, Koji) : かわごえクリニック院長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	持田 智 (MOCHIDA, Satoshi) : 図書館長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	門野 夕峰 (KADONO, Yuhō) : 学生部長 (任期 : R6. 3. 31)
委員長	椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IRセンター長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	藤巻 高光 (FUJIMAKI, Takamitsu) : 国際交流センター長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : 医学研究センター長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	千田 みゆき (CHIDA, Miyuki) : 看護研究科長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	茅野 秀一 (KAYANO, Hidekazu) : 臨床検査学科長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	下岡 聡行 (SHIMOOKA, Toshiyuki) : 臨床工学科長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	高倉 保幸 (TAKAKURA, Yasuyuki) : 理学療法学科長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	田島 賢二 (TAJIMA, Kenji) : 常務理事 (任期 : R6. 3. 31)
委員	茂木 明 (MOGI, Akira) : 常務理事・事務局長 (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : IR副センター長 (RR6. 3. 21)

事務局	内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) 大学事務部 部長
	江口 幹也 (EGUCHI, Mikiya) 大学事務部 次長
	堀江 正人 (HORIE, Masahito) 保健医療学部 事務室長
	村田 正樹 (MURATA, Masaki) 医学部 入試課長
	近藤 有寛 (KONDO, Arihiro) 医学部 学務課長
	下田 裕子 (SHIMODA, Yuko) 医学部 庶務課長

2. 目的・目標

本委員会は、埼玉医科大学自己点検・評価委員会規則に則り、本学の教育研究等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表し、もって本学の教育研究水準の向上を図り、その目的及び使命を達成することを目的とする。

今年度は、①年報を編纂し、それに記される各部局の自己点検・評価内容を検討し、大学の発展に向けて提言を行う、③人事考課の指針・実施内容を検討し、結果を評価することにより、各人・各部局の業務内容改善に役立てることを目標に活動した。

3. 活動実績

- ①第1回定例会議 (令和4年9月27日) コロナ感染防止のためオンラインでの会議とした。出席23名 欠席3名
議事 : 1) 自己点検の客観性を高めるため、規則に則り学長の指名により IRセンター長を委員長とした。2) 大学機関別認証評価受審小委員会を設置するための規則の改正案を承認した。3) 医学部、保健医療学部、医学研究科、看護学研究科の各自己点検・評価委員会からの報告を受け、それぞれの自己点検・評価結果について審議を行い承認した。4) IRセンターより令和3年度のIRレポートについて報告があった。5) FD・SD統括委員会より活動報告があった。6) 毛呂山町からの点検・評価報告があった。
- ②第2回定例会議 (令和5年2月28日) コロナ感染防止のためオンラインでの会議とした。出席23名 欠席3名
議事 : 1) 大学全体の自己点検・評価体制について確認した。2) FD・SD活動の方針について審議した。3) 大学機関別認証評価受審準備小委員会の構成員について審議し承認した。4) IRセンターおよびFD・SD統括委員会からの報告があった。5) 全学共通データサイエンス AI 学修プログラム運営委員会から自己点検・評価結果の報告があり、審議の結果承認した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本年度から、大学年報に基づく各部局（医学部、保健医療学部、医学研究科、看護学研究科）の評価がそれぞれの自己点検・評価委員会で行われ、それに基づいて当委員会において大学としての自己点検・評価結果を実施し、大学運営会議がそれを承認し、学長が理事会に報告して法人として大学の自己点検・評価を承認するという内部質保証の制度が確立された。また、この仕組みの中で、当委員会の役割も実質化された。一方で、アセスメント・ポリシーに基づいた教育に関する自己点検・評価、より多くの部局による自己点検・評価の実施、大学機関別認証評価受審準備小委員会の活動の実質化などに課題を残している。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

今年度の自己点検・評価結果に基づき、次年度は以下の改善を図る。

- ① アセスメント・ポリシーとアセスメント・プランに基づいた教育に関する自己点検・評価の実質化を目指す。
- ② 大学年報に基づく各部局による自己点検・評価に、学生部委員会および図書館委員会も加える。
- ③ 大学機関別認証評価受審準備小委員会による令和9年度の大学機関別認証評価の受審準備を開始する。

1. 4) 埼玉医科大学学生部委員会

1. 構成員

委員長	門野 夕峰 (KADONO, Yuho) : 整形外科・脊椎外科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
副委員長	辻 美隆 (TSUJI, Yoshitaka) : 保健医療学部学生部長、共通教育部門 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	黒川 理樹 (KUROKAWA, Riki) : ゲノム医学研究センター : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	向田 寿光 (MUKAIDA, Toshimitsu) : 教養教育 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	藤巻 高光 (FUJIMAKI, TAKAMITSU) : 脳神経外科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	松尾 幸治 (MATSUO, Koji) : 神経精神科・心療内科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	長谷川 元 (HASEGAWA, Hajime) : 総合医療センター腎・高血圧内科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Tomomi) : 医学教育学 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	井上 郁夫 (INOUE, Ikuo) : 内分泌・糖尿病内科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	中平 健祐 (NAKAHIRA, Kensuke) : 教養教育 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 教養教育 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	藤田 恵子 (FUJITA, Keiko) : 解剖学 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	石橋 敬一郎 (ISHIBASHI, Keiichiro) : 医学教育学 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	藤原 智徳 (FUJIWARA, Tomonori) : 臨床検査学科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	嶋崎 晴雄 (SHIMAZAKI, Haruo) : 共通教育部門 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	小林 直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 臨床工学科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	乙戸 崇寛 (OTSUDO, Takahiro) : 理学療法学科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	飯野 望 (IINO, Nozomi) : 臨床検査学科 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	大澤 優子 (OOSAWA, Yuko) : 看護学科 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	櫻庭 奈美 (SAKURABA, Nami) : 看護学科 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	石川 雅治 (ISHIKAWA, Masahiro) : 臨床工学科 : 講師 (任期: R6. 3. 31)
委員	澤田 豊 (SAWADA, Yutala) : 理学療法学科 : 講師 (任期: R6. 3. 31)
委員	内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部 : 部長 (任期: R6. 3. 31)
委員	岡野 弘 (OKANO, Hiroshi) : 大学事務部 : 参与 (任期: R5. 3. 31)
委員	江口 幹也 (EGUCHI, Mikiya) : 大学事務部 : 副部長 (任期: R6. 3. 31)
委員	川俣 栄希 (KAWAMATA, Eiki) : 大学事務部医学部事務室課長補佐 (任期: R4. 7. 1~R6. 3. 31)
委員	佐藤 瀬奈 (SATO, Sena) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R5. 3. 31)
委員	安齋 宰 (ANZAI, Tsukasa) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R5. 3. 31)
委員	峰晴 嘉政 (MINEHARU, Yoshimasa) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R4. 8. 31)
委員	堀江 正人 (HORIE, Masahito) : 大学事務部保健医療学部事務室長 (任期: R6. 3. 31)
委員	鈴木 利明 (SUZUKI, Toshiaki) : 大学事務部保健医療学部事務室係長 (任期: R6. 3. 31)
委員	伊藤 喬俊 (ITO, Takatoshi) : 大学事務部保健医療学部事務室 (任期: R6. 3. 31)
委員	佐々木千佳 (SASAKI, Chika) : 大学事務部保健医療学部事務室 (任期: R6. 3. 31)
オブザーバー	森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副学長、医学教育学 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
オブザーバー	稲葉 宗通 (INABA, Munemichi) : 医学部同窓会会長 (任期: R6. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は埼玉医科大学の建学の理念および埼玉医科大学の期待する医療人像に則り、医学部、保健医療学部の学生生活が円滑に送れるための支援を目的として下記の事項につき審議する。

- (1) 学生の保健管理に関すること。
- (2) 学生の福利厚生に関すること。
- (3) 学生の課外活動に関すること。
- (4) 学生の異動に関すること。
- (5) 学生の事故その他の事態の処理に関すること。
- (6) 学長、学部長または教授会から委嘱された事項。
- (7) その他学生の生活に関すること。

3. 活動実績

- ①第1回(令和4年6月10日)於:本部棟1階第3講堂 出席21名 欠席10名
議事:学生健康診断の実施報告、部活動の現状報告、越華祭実施計画の提示について
- ②第2回(令和4年12月2日)於:本部棟1階第3講堂 出席21名 欠席10名
議事:令和5年度学生健康診断日程案の提示、部活動の現状報告、越華祭のオンライン開催報告について

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本委員会は6月と12月の年2回開催し、医学部と保健医療学部の情報を共有し、課題を協議した。本年度は新型コ

コロナウイルス感染症の流行により、大幅な活動修正を余儀なくされた。年2回の委員会以外にメール等で情報共有を行った。学生における感染拡大対策を指導した。対面での部活動を再開したが、感染状況に応じて一時中断を指導した。保健医療学部でも感染状況に応じて部活動を許可した。一方で大人数を集めるイベントの開催を禁止した。越華祭は本委員会が協力しながら、オンラインで開催された。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

新型コロナウイルス感染症に関しては、より速やかな情報共有が必要と考えられる。引き続き委員会以外にメール等で情報共有をしていく。また感染対策が学生内で適切に実施されているか確認する。ガイドラインを策定し、感染対策を評価した上で合宿、対外試合が行えるよう整備していく。

1. 5) 喫煙問題検討委員会

1. 構成員

委員長	門野 夕峰 (KADONO, Yuho) : 整形外科・脊椎外科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
病院長	篠塚 望 (SHINODUKA, Nozomi) : 大学病院長 (任期: R6. 3. 31)
委員	根本 学 (NEMOTO, Manabu) 国際医療センター救急医学科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	長谷川 元 (HASEGAWA, Hajime) : 総合医療センター腎・高血圧内科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	黒川 理樹 (KUROKAWA, Riki) : ゲノム医学研究センター : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	井上 郁夫 (INOUE, Ikuo) : 内分泌・糖尿病内科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	今野 葉月 (KONNO, Haduki) : 短期大学看護学科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 教養教育 : 准教授 (任期: R4. 3. 31)
委員	内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部 : 部長 (任期: R4. 3. 31)
委員	堀江 正人 (HORIE, Masahito) : 大学事務部保健医療学部事務室長 (任期: R6. 3. 31)
委員	山崎 豊幸 (YAMAZAKI, Toyoyuki) : 大学事務部保健医療学部事務室川角分室長 (任期: R4. 3. 31)
委員	栗生田 伸之 (AOUDA, Nobuyuki) : 施設部 (任期: R4. 3. 31)
委員	江田 佳菜子 (EDA, Kanako) : 総務部 (任期: R6. 3. 31)
委員	柳川 武彦 (YANAGAWA, Takehiko) : 大学病院医務部 (任期: R6. 3. 31)
委員	川俣 栄希 (KAWAMATA, Eiki) : 総合医療センター事務部 : 課長補佐 (任期: R6. 3. 31)
委員	武久 秀夫 (TAKEHISA, Hideo) : 国際医療センター総務課 : 次長 (任期: R6. 3. 31)
委員	田島 契司 (TAJIMA, Keiji) : かわごえクリニック事務長 (任期: R6. 3. 31)
委員	八木 健太 (YAGI, Kenta) : 大学病院看護部 : 看護師長 (任期: R6. 3. 31)
委員	大野はるの (OHNO, Haruno) : 大学病院看護部 : 副看護師長 (任期: R6. 3. 31)
委員	小川 英明 (OGAWA, Hideaki) : 総合医療センター総務課 : 係長 (任期: R6. 3. 31)
委員	江口 幹也 (EGUCHI, Mikiya) : 大学事務部 : 副部長 (任期: R6. 3. 31)
委員	佐藤 瀬奈 (SATO, Sena) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R4. 3. 31)
委員	安齋 幸 (ANZAI, Tsukasa) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R4. 3. 31)
委員	峰晴 嘉政 (MINEHARU, Yoshimasa) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R4. 8. 31)

2. 目的・目標

学内における喫煙による健康被害を防止し、更に喫煙習慣をもつ教職員及び学生の禁煙を推進することを目的とする。具体的には、敷地内全面禁煙の実施、本学教職員及び学生への禁煙教育を目的とする。

3. 活動実績

- ①第151回委員会 (令和4年5月13日) 於：本部棟2階会議室 出席8名 欠席16名
議事に先立ち、毛呂山キャンパスの禁煙パトロールを実施。
議事：各キャンパスの禁煙パトロールの実施報告について
- ②第152回委員会 (令和4年7月8日) 於：本部棟2階会議室 出席11名 欠席13名
議事に先立ち、毛呂山キャンパスの禁煙パトロールを実施。
議事：各キャンパスの禁煙パトロールの実施報告、毛呂山キャンパス第2ビルの大量の吸い殻について
- ③第153回委員会 (令和4年9月2日) 於：本部棟2階会議室 出席者7名 欠席17名
議事に先立ち、毛呂山キャンパスの禁煙パトロールを実施。
議事：各キャンパスの禁煙パトロールの実施報告、毛呂山キャンパス霊安室付近の喫煙、毛呂山キャンパス第2ビル禁煙ポスター設置について
- ④第154回委員会 (令和4年11月11日) 於：本部棟2階会議室 出席者12名 欠席12名
議事に先立ち、毛呂山キャンパスの禁煙パトロールを実施。
議事：各キャンパスの禁煙パトロールの実施報告について
- ⑤第155回委員会 (令和5年1月13日) 於：本部棟2階会議室 出席者11名 欠席13名
議事に先立ち、毛呂山キャンパスの禁煙パトロールを実施。
議事：各キャンパスの禁煙パトロールの実施報告、毛呂山キャンパス東館前のマンション敷地内での喫煙、南館地下1回ドライエリアでの吸い殻について
- ⑥第156回委員会 (令和4年3月11日) 於：本部棟2階会議室 出席者8名 欠席16名
議事に先立ち、毛呂山キャンパスの禁煙パトロールを実施。
議事：各キャンパスの禁煙パトロールの実施報告、次年度委員会の開催日程確認について

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

各キャンパスの禁煙パトロールを定期的実施し、委員会で状況を報告した。吸殻が落ちているところには禁煙ポスターの掲示し、敷地内全面禁煙に努めた。本学教職員及び学生への禁煙教育を検討し、採用時・入学時オリエンテーションで実施した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度も本学教職員及び学生への禁煙教育を徹底する。職員の採用時・学生の入学時オリエンテーションでは喫煙の健康被害と禁煙の重要性についての啓蒙活動を継続する。次年度以降も引き続き各キャンパスの状況に合わせた禁煙パトロールに取り組む必要がある。また委員会への出席が少ない委員に対しては、事前パトロールへの参加を促していく。

1. 6) COI 管理委員会

1. 構成員(任期: R6. 3. 31)

委員長 藤原 恵一 (FUJIWARA, Keiichi): 国際医療センター婦人科腫瘍科 教授
副委員長 神山 信也 (KOHYAMA, Sinya): 国際医療センター脳神経外科 教授
委員 片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu): ゲノム基礎医学 教授
千本松 孝明 (SENBONMATSU, Takaaki): リサーチアドミニストレーション (RA) センター 教授
岩澤 憲次 (IWASAWA, kenji): 経理部 課長 (R3. 1. 1~)
井上 晶子 (INOUE, Akiko): 立教大学観光研究所: 特任研究員/杏林大学: 特任講師 (学外委員)
事務局 佐藤 勝茂 (SATO, Katsushige): RAセンター 課長
浅見 文子 (ASAMI, Ayako): RAセンター 課長補佐
深沢 博臣 (FUKAZAWA, Hiroomi): RAセンター 参事 (~R4. 8. 31)
中島 奈月 (NAKAJIMA, Natsuki): RAセンター 課員 (R4. 8. 1~)

2. 目的・目標

COI管理委員会は、埼玉医科大学利益相反管理規程第3条に基づき設置され、学長の付託を受けて公的研究費および医学系研究に関する利益相反 (以下、COI (Conflict of Interest) という。) に関する審査を行い、本学の教職員のCOIを適切に管理し、産学官連携を含む社会貢献活動の推進に資することを目的とする。

3. 活動実績

3-1. 開催日

2022年度は、以下の通り委員会を開催した。

- 第28回 Web会議 (令和4年7月54日) 出席6人
- 第29回 メール会議 (令和4年9月26日~9月29日) 出席6人
- 第30回 メール会議 (令和4年12月14日~12月20日) 出席6人
- 第31回 メール会議 (令和5年1月25日~1月31日) 出席6人

3-2. 主な審議内容

- 公的研究費および医学系研究に関する利益相反の申告174件のうち、利益相反がある申告22件について審議し、必要な勧告を行った。特に重大な利益相反は無かった。
- 大学が設置する委員会委員等を対象とした責務相反の申告120件のうち、利益相反がある申告11件について審議し、必要な勧告を行った。特に重大な利益相反は無かった。
- 研究インテグリティの自律的な確保のため、国から研究者・研究機関等に、透明性と説明責任を求めていく方針が示され、利益相反および兼業を含む全ての所属組織と役職(海外の人材登用プログラムへの参加、名誉教授等含む)の管理強化を求められている。これに対応すべく、本学における定期自己申告の対象者の基準を変更し、学校法人埼玉医科大学利益相反(COI)マネジメントポリシー、利益相反管理規程および利益相反管理標準作業手順書の改正を行った。改正にあたっては、大学病院COI管理委員会および総合医療センターCOI管理委員会の事務局と連携し、基本的に運用を統一することとした。

3-3. 教育活動

- RAセンターが毎年開催している、コンプライアンス教育・リスクマネジメント教育において、COI管理の必要性と自己申告について教育を実施した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- COI管理委員会開催実績4回(Web、メール会議)。自己申告書の審査および教育活動により、適切なCOI管理を実施した。
- 利益相反管理の質向上と効率化を目的とした利益相反Web申告システムを令和4年3月からシステムを稼働し、大学、大学病院、総合医療センターでシステムによるCOI自己申告を開始した。これによりCOI管理業務手順が統一され、今後の審査の質向上を期待する。国際医療センターについても、システムによる申告の導入を検討している。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

- 昨年度と同様に委員会を定期的に開催する。また公的研究費に関するコンプライアンス教育のなかで、利益相反管理に関する教育を行い、利益相反管理への理解と周知を進める。
- 各COI管理委員会事務局と連携し、利益相反Web申告システムの安定的な運用に努め、審査業務の質向上につなげていく。

1. 7) 動物実験委員会

1. 構成員

委員長 森 隆 (MORI, Takashi) : 総合医療センター 研究部 : 教授 : 医学研究センター安全管理部門 副部門長 動物分野
(任期 : R6. 3. 31)

委員

坂本 安 (SAKAMOTO, Yasu) : 中央研究施設 機能部門 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

椎橋実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 情報技術支援推進センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

三谷幸之介 (MITANI, Kohnosuke) : ゲノム応用医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

山本晃士 (YAMAMOTO, Kouji) : 総合医療センター 病理部 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

小野川 傑 (ONOGAWA, Tsuyoshi) : 保健医療学部 臨床検査学科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

千本松孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : リサーチアドミニストレーションセンター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

中島孔志 (NAKAJIMA, Kohshi) : 保健医療学部 臨床工学科 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)

横尾友隆 (YOKOO, Tomotaka) : 中央研究施設 日高ランチ 実験動物部門 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)

2. 目的・目標

埼玉医科大学内において実施される全ての動物実験に関して、「埼玉医科大学動物実験規程」を遵守した円滑な施設運営および研究活動（動物実験）が行われるよう指導・教育を行う。さらに、動物実験委員会による動物実験計画書の審査・承認を行い、適切に実施されるよう監視する。また、遺伝子組換え生物等を使用した動物実験を行う場合には、組換え DNA 実験安全委員会による第二種使用等拡散防止措置承認申請書の審査・承認が適切に実施されるよう監視する。

3. 活動実績

- ①令和4年度、各キャンパスから提出された動物実験計画書228件 [注意を要する動物実験計画書：組換えDNA実験（P1A実験：74件、P2A実験：8件）、感染実験（ABSL1実験：4件、ABSL2実験：8件）、毒物使用実験：16件、RI使用実験：8件]、動物実験中間報告書・自己点検票204件、動物実験結果報告書・自己点検票24件、動物実験計画（変更・追加）承認申請書40件、動物実験（終了・中止）報告書24件、実験室設置承認申請書32件について審査を行い承認した。
- ③随時メール審査を開催し、円滑に動物実験計画書、動物実験計画（変更・追加）承認申請書、実験室設置承認申請書の審査を行い承認した。
- ④様式8動物実験の自己点検票、様式9実験動物飼養保管状況の自己点検票を用いた令和4年度の動物実験そして飼養保管状況の自己点検を行った。
- ⑤動物実験計画書を審査する過程で、動物実験に従事する研究者は、教育訓練を受けていないと承認していない。三キャンパス（毛呂山キャンパス・日高キャンパス・川越キャンパス）において、各飼養保管施設の実験動物管理者が教育訓練・施設説明会を随時行っている（教育訓練・施設説明会の実施数：26回、受講人数：287人）。
- ⑥三キャンパス（毛呂山キャンパス・日高キャンパス・川越キャンパス）の飼養保管施設に飼養されている実験動物種毎の飼養保管数（年間飼養保管数）は、マウス（2,189,255匹）、ラット（28,457匹）、ウサギ（576羽）、犬（33匹）、ブタ（162匹）、コモンマーモセット（4,296匹）、カエル（527匹）であった。
- ⑦学内研究マインド支援グラント（共通部門）に申請し、各三キャンパス飼養保管施設の飼育備品の配備を行った。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

「埼玉医科大学動物実験規程」を遵守する精神は、学内に定着したようである。埼玉医科大学内において実施される全ての動物実験に関して、円滑な施設運営および研究活動（動物実験）が行われていた。随時実施したメール審査による各種申請書類の審査から承認にいたるシステムが、各委員の協力により円滑に行えた。動物実験等に関する情報公開の一環として、以下の1-6の内容を外部閲覧可能なホームページ

(<http://www.saitama-med.ac.jp/medlinks/animal/index.html>)に開示している。今後もスムーズに研究活動を開始できるよう委員一丸となって努力したい。

1. 埼玉医科大学動物実験規程

2. 自己点検評価の結果
 3. 外部検証の結果
 4. 飼養及び保管の状況（動物種及び動物数施設の情報）
 5. その他（動物実験計画書等の審査の状況と特に注意を要する動物実験の実施状況、教育訓練の実績、動物実験委員会、動物実験委員会審査手順書）
 6. 動物実験計画書関連書式（様式1動物実験計画書、様式2動物実験計画（変更・追加）承認申請書、様式3動物実験（終了・中止）報告書、様式4動物実験（中間・結果）報告書、様式5飼養保管施設設置承認申請書、様式6実験室設置承認申請書、様式7施設等（飼養保管施設・動物実験室）廃止届、様式8動物実験の自己点検票、様式9実験動物飼養保管状況の自己点検票）
- 4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

三キャンパスの飼養保管施設において、施設の老朽化と飼育動物数の増加に伴い飼育備品が不足している。随時、大学への補修工事の依頼と、学内研究マインド支援グラント（共通部門）等に申請し、飼育備品の補充を行う予定でいる。動物実験に関する外部機構による第三者評価を受診する予定でいる。

1. 8) 全学 RI 安全委員会

1. 構成員

- 委員長 松成一朗 (MATSUNARI, Ichiro) : 大学病院核医学診療科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
副委員長 久慈一英 (KUJI, Ichiei) : 国際医療センター核医学科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員 高橋健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 総合医療センター放射線腫瘍科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
熊倉嘉貴 (KUMAKURA, Yoshitaka) : 総合医療センター放射線科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
森 隆 (MORI, Takashi) : 総合医療センター研究部 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
中野貴成 (NAKANO, Takanari) : 生化学 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
一色政志 (ISSHIKI, Masashi) : 中央研究施設 RI 部門、大学病院内分泌・糖尿病内科兼任 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
西本正純 (NISHIMOTO, Masazumi) : 中央研究施設 RI 部門 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
日詰光治 (HIZUME, Kohji) : 中央研究施設 RI 部門 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
熊崎祐 (KUMAZAKI, Yu) : 国際医療センター放射線腫瘍科 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
茅野秀一 (KAYANO, Hidekazu) : 保健医療学部臨床検査学科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
潮田陽一 (USHIODA, Youichi) : 総合医療センター研究部 : 課長補佐 (任期 : R6. 3. 31)
保坂勝仁 (HOSAKA, Katsuhito) : 総合医療センター中央放射線部 : 主任 (任期 : R6. 3. 31)
平野雅弥 (HIRANO, Masaya) : 大学病院中央放射線部 : 課長 (任期 : R6. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は埼玉医科大学全学 RI 安全委員会運営規則及び放射性同位元素等の規制に関する法律に基づいて RI 使用施設の管理・運営を行い、本学における RI を用いた研究を推進し利用者の利便性を図る。また放射線障害の防止に必要な事項について検討する。

今年度は被ばく測定、放射線測定器の点検及び校正などを行えるよう予防規程改訂なども含めた活動を目標とした。

3. 活動実績

令和4年度全学 RI 安全委員会 : 令和5年3月1日(水)～3月13日(月)電子メールによる会議
各施設からの報告

①総合医療センター保坂委員より

- 1) RALS 装置更新に伴う治療用線源 Ir-192(370GBq)の許可申請を原子力規制委員会へ行い、令和4年10月17日付で許可が下りた。
- 2) 令和5年3月現在、「12 検出器型半導体 SPECT/CT 装置 (Spectrum Dynamics 社製 Veriton-CT)」新規設置に伴う校正用線源 Co-57(444MBq)の許可申請を原子力規制委員会に対し手続きの最中。(令和5年5月1日許可見込み)
- 3) 令和4年10月7日の保健所立ち入りの際に、放射線担当官より水晶体の被ばく線量が多い職員の対応について話題になった。

特に具体的な指示を受けることはなかったが、令和4年12月8日に開催された、総合医療センター放射線安全委員会にて、被ばくが基準線量を超えた職員に対して、委員会よりへ通知を出す方針となった。

②中央研究施設 RI 部門西本委員、日詰委員より

RI 法の改正に伴う、予防規程改訂を進めている。

現在、総合企画部に内容確認を取っている(学内規程のフォーマットに合わせていただくため)。今後の予定として4月の教員組織運営委員会に上程、5月の理事会にて、承認していただくこととしている。

③総合医療センター研究部 潮田委員より

法令改正による放射線測定器の校正を自施設で行うため校正用線源等の購入稟議書を提出し、理事長の許可を得た。測定器の種類が一致をしている川越キャンパス RI 研究施設、毛呂山キャンパス RI 研究施設を現時点では対象としている。

④国際医療センター 熊崎委員より

今年度新たに MR リニアックの導入に伴い、許可使用に係る変更許可申請を行い受理され、施設検査を令和4年12月14日に実施して令和4年12月19日に合格をいただいた。

同時に以前まで治療していた C 棟での放射線治療施設を廃止している。

⑤大学病院 平野委員より

- 1) 新規 SPECT-CT 導入のため、校正用線源 57Co 使用にあたり、許可使用に係る変更許可申請書を3月に原子力規制委員会に提出した。(令和5年6月までに許可見込み)
- 2) 令和5年10月1日施行の RI 規制法「測定の信頼性確保」の項目に対応するため、予防規程の改訂作業を進めている。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

「測定の信頼性確保」に対応するため、放射線測定器の点検及び校正などを行えるよう予防規程の改訂も含め、施設間で情報連携を行った。今後、具体的な管理体制の構築が必要となる。また、原子力規制委員会への放射性同位元素線源使用手続き状況などを共有することができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

放射線測定に関し管理体制を整備し、より安全性を高めた RI 利用が行えるよう全学的な放射線安全管理に貢献していく。

1. 9) 組換え DNA 実験安全委員会

1. 構成員

- 委員長 三谷 幸之介 (MITANI, Kohnosuke) : 医学部ゲノム応用医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
副委員長 千本松 孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : RA センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
副委員長 村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 医学部微生物学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員 荒木 靖人 (ARAKI, Yasuto) : 大学病院リウマチ膠原病科 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員 海老原 康博 (EBIHARA, Yasuhiro) : 国際医療センター臨床検査医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員 菅原 哲雄 (SUGAHARA, Tetsuo) : RA センター : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
委員 小谷 典弘 (KOTANI, Norihiro) : 医学研究センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員 百瀬 修二 (MOMOSE, Shuji) : 総合医療センター病理部 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員 森 隆 (MORI, Takashi) : 総合医療センター研究部 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員 米田 竜馬 (YONEDA, Ryoma) : 医学部ゲノム応用医学 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
委員 脇田 政嘉 (WAKITA, Masayoshi) : 保健医療学部臨床工学科 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は学校法人埼玉医科大学組換え DNA 実験安全管理規則第 3 条並びに第 4 条に則り、本学における組換え DNA 実験の安全かつ適切な実施を確保するため、組換え DNA 使用実験申請書 (第 2 種使用等拡散防止措置承認書) について審議し、学長に助言または勧告するための活動をする。

今年度は、本学における組換え DNA 実験の安全かつ適切な実施を確保するため、新規、変更、譲渡・譲受、年度末報告・終了及び教育訓練に関する管理運営を実施する。

3. 活動実績

- ①第 106 回 定例会議(令和 4 年 4 月 5~9 日) メール会議 出席 11 名 欠席 0 名
第二種拡散防止措置申請書 (承認 2 件)、内容変更 (承認 2 件)、教育訓練受講証明書発行 (1 件)
- ②第 107 回 定例会議(令和 4 年 5 月 9 日) WEB 会議 出席 9 名 欠席 2 名
第二種拡散防止措置申請書 (承認 1 件)、教育訓練受講証明書発行 (2 件)
- ③第 108 回 定例会議(令和 4 年 6 月 6~10 日) メール会議 出席 11 名 欠席 0 名
第二種拡散防止措置申請書 (承認 3 件)、内容変更 (承認 2 件)
- ④第 109 回 定例会議(令和 4 年 7 月 5~11 日) メール会議 出席 11 名 欠席 0 名
第二種拡散防止措置申請書 (承認 2 件)、内容変更 (承認 5 件)、譲渡届 (承認 1 件)、教育訓練受講証明書発行 (1 件)
- ⑤第 110 回 定例会議(令和 4 年 9 月 5~9 日) メール会議 出席 11 名 欠席 0 名
第二種拡散防止措置申請書 (承認 1 件)、教育訓練受講証明書発行 (1 件)
- ⑥第 111 回 定例会議(令和 4 年 10 月 5~7 日) メール会議 出席 11 名 欠席 0 名
第二種拡散防止措置申請書 (承認 1 件)、内容変更 (承認 5 件)
- ⑦第 112 回 定例会議(令和 4 年 11 月 7~11 日) メール会議 出席 11 名 欠席 0 名
第二種拡散防止措置申請書 (承認 4 件)、内容変更 (承認 2 件)、P2 実験室設置 (承認 1 件)、譲渡届 (承認 1 件)、教育訓練受講証明書発行 (1 件)
- ⑧第 113 回 定例会議(令和 3 年 12 月 6~10 日) メール会議 出席 11 名 欠席 0 名
第二種拡散防止措置申請書 (承認 2 件)、教育訓練受講証明書発行 (1 件)
- ⑨第 114 回 定例会議(令和 5 年 2 月 6~10 日) メール会議 出席 11 名 欠席 0 名
第二種拡散防止措置申請書 (承認 5 件)、内容変更 (承認 1 件)、教育訓練受講証明書発行 (3 件)
- ⑩第 115 回 定例会議(令和 5 年 3 月 7~10 日) メール会議、9 日 WEB 会議、出席 11 名 欠席 0 名
第二種拡散防止措置申請書 (承認 7 件)、内容変更 (承認 2 件)、譲渡届 (承認 1 件)、教育訓練受講証明書発行 (3 件)

総括: 今年度の遺伝子組換え生物等の使用等における審査申請状況は、第二種拡散防止措置申請書 (承認 28 件)、内容変更 (承認 19 件)、譲渡届 (承認 3 件)、実験施設設置申請 (承認 1 件)、教育訓練受講証明書発行 (13 件)、大学院博士課程共通科目「実用実験医学特別講義」を 6 月 8 日に実施。文部科学省からの「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」の遵守の徹底について(文科省研究振興局ライフサイエンス課: 4 文科振第 1308 号: 令和 5 年 3 月 8 日) について、教員代表者会議にて、医学研究センター長から研究主任に向け注意喚起した。また、適正な管理運営のために「第二種使用等拡散防止措置承認申請書」の様式を変更した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- ・委員会ホームページを、適宜見直して内容を充実させ、組換え DNA 使用実験を行う研究者に対して情報を掲載した。
- ・通常の審査、承認の業務に関して滞りなく行い、運用フローを見直したことで審査を迅速に対応した。年度末報告書の義務化を徹底して厳密な体制で研究管理を行った。
- ・病原性微生物委員会、動物実験委員会などの関連委員会と適宜情報を共有して連携を図った。

・以上、本委員会において今年度の目標を概ね達成した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

組換え DNA 使用実験の安全管理を推進するため、次の取り組みを行う。

- ・委員会ホームページを改訂するなど情報発信を強化し、組換え DNA 使用実験に伴う安全管理に関する理解を深め、各種申請を適切に提出するよう徹底する。
- ・関連情報を収集し、必要な事項については本学規程・規則や管理手順を改正する。
- ・審査基準のポイントを明確にし、委員会としての審査基準のさらなる統一を推進する。
- ・リサーチアドミニストレーションセンターと連携し、その他業務を着実に推進していく。

1. 10) 特許等委員会

1. 構成員

委員長 片桐岳信(KATAGIRI, Takenobu) : 医学研究センターセンター長 : ゲノム基礎医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員 (五十音順)

内田和利(UCHIIDA, Kazutoshi) : 大学事務部 : 部長 (任期 : R6. 3. 31)

木崎昌弘(KIZAKI, Masahiro) : 総合医療センター、血液内科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

小谷典弘(KOTANI, Norihiro) : 医学研究センター 教授 (任期 : R6. 3. 31)

小林国彦(KOBAYASHI, Kunihiko) : リサーチアドミニストレーション (RA) センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

佐藤 毅 (SATO, Tsuyoshi) : 大学病院、歯科・口腔外科 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)

若山俊隆(WAKAYAMA, Toshitaka) : 保健医療学部、臨床工学科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

別所正美(BESSHO, Masami) : 学長 (任期 : R6. 3. 31)

吉本信雄(YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長 (任期 : R6. 3. 31)

オブザーバー

松下祥(MATSUSHITA, Sho) : 副学長(研究担当) : 免疫学 : 教授

事務局 (順不同)

菅原哲雄(SUGAHARA, Tetsuo) : RA センター、研究推進部門 産学官連携担当 : 講師

豊田浩一(TOYODA, koichi) : RA センター、研究推進部門 産学官連携担当 : 非常勤講師

林利蔵(HAYASHI, Toshizo) : RA センター、研究推進部門 産学官連携担当 : 非常勤講師

石川友美(ISHIKAWA, Tomomi) : RA センター、研究推進部門 産学官連携担当 : 事務員

2. 目的・目標

本委員会は知的財産に関する規程第4条に則り設置されており、知的財産権を確保し社会的活用を図るとともに、学術研究の振興に資する。

今年度は、以下の項目を達成することを目標として活動した。

- ① 知的財産権の啓発および発明の発掘
- ② 出願後に発生する中間処理等の知財管理業務の円滑な実行
- ③ 技術移転等成功例の達成 (目標 2 件)
- ④ 知財をベースとした外部研究資金の獲得

3. 活動実績

- ① 本年度は 11 回の特許等委員会が開催され、合計 23 件の特許出願の申請が審議された。第 168 回特許等委員会 (令和 4 年 4 月 12 日) 於 : WEB 出席 9 人 欠席なし
議事 : 1 件の特許出願、1 件の審査請求、2 件の特許年金納付を審議、9 件の特許年金納付、1 件の特許出願および早期審査請求を報告
- ② 第 169 回特許等委員会 (令和 4 年 5 月 17 日) 於 : WEB 形式 出席 9 人 欠席なし
議事 : 1 件の審査請求、を審議、2 件の特許年金納付、1 件の審査請求、4 件の特許査定を報告
- ③ 第 170 回特許等委員会 (令和 4 年 6 月 14 日) 於 : WEB 形式 出席 8 人 欠席 1 人
議事 : 2 件の特許年金納付を審議、2 件の特許年金納付、1 件の審査請求、2 件の分割出願、1 件の特許査定を報告
- ④ 第 171 回特許等委員会 (令和 4 年 7 月 19 日) 於 : WEB 形式 出席 9 人 欠席なし
議事 : 1 件の審査請求、1 件の特許年金納付を審議、3 件の特許年金納付、1 件の特許査定を報告
- ⑤ 第 172 回特許等委員会 (令和 4 年 9 月 13 日) 於 : WEB 形式 出席 9 人 欠席なし
議事 : 3 件の特許出願、1 件の各国移行、1 件の審査請求、1 件の権利放棄を審議、2 件の特許登録、3 件の特許年金納付を、1 件の権利譲渡を報告
- ⑥ 第 173 回特許等委員会 (令和 4 年 10 月 18 日) 於 : WEB 出席 8 人 欠席 1 人
議事 : 1 件の審査請求を審議、1 件の特許年金納付を報告
- ⑦ 第 174 回特許等委員会 (令和 4 年 11 月 15 日) 於 : WEB 出席 8 人 欠席 1 人
議事 : 1 件の特許出願、3 件の特許年金納付、1 件の各国移行、1 件の特許維持年金の納付および権利譲受、1 件の出願取下げを審議、2 件の特許年金納付、1 件の審査請求、1 件の特許登録及び分割出願、1 件の分割出願を報告
- ⑧ 第 175 回特許等委員会 (令和 4 年 12 月 13 日) 於 : WEB 形式 出席 9 人 欠席なし
議事 : 2 件の特許出願、1 件の特許年金納付を審議、1 件の特許年金納付、1 件の特許登録、1 件の実施許諾契約を報告
- ⑨ 第 176 回特許等委員会 (令和 5 年 1 月 17 日) 於 : WEB 形式 出席 9 人 欠席なし
議事 : 1 件の特許出願、1 件の審査請求、3 件の特許年金納付、1 件の各国移行を審議、1 件

の各国移行、1件の特許査定及び分割出願、1件の特許登録、3件の審査請求、1件の特許年金納付、1件の特許出願を報告

- ⑩ 第177回特許等委員会（令和5年2月14日）於：WEB形式 出席9人 欠席なし
議事：1件の各国移行、3件の特許年金納付を審議、1件の特許年金納付、1件の特許査定及び分割出願を報告
- ⑪ 第178回特許等委員会（令和5年3月14日）於：WEB形式 出席9人 欠席なし
議事：2件の特許年金納付、1件の権利割合の変更、1件の実施許諾契約の内容変更を審議、1件の審査請求、6件の特許年金納付、1件の特許査定を報告

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

知財管理業務については、特許出願後に特許庁に対し適切な対応をすることにより特許権を8件成立させることができた。また、海外で特許を取得するため科学技術振興機構から出願に係る費用の支援を受け円滑に手続きを進めることができた（申請4件、採択1件）。令和4年度は、特許実施許諾契約の一時金及びランニングロイヤルティが5件9558千円あった。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

来年度も出願の中間処理手続きを円滑に行い、特許の権利化を図るとともに、科学技術振興機構の海外特許出願支援制度へ申請する。次年度も、年2件程度の技術移転を目指し、技術移転活動に取り組む。また、知的財産の活用を進めるとともに、知的財産に関する規定等を学内に周知・徹底し、発明を発掘する。

1. 11) 環境安全委員会

1. 構成員

委員長 別所 正美 (BESSYO, Masami) : 学長 (任期: 令和6年3月31日)
副委員長 松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長, 医学部免疫学・教授 (任期: 令和6年3月31日)

委員

竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (任期: 令和6年3月31日)
篠塚 望 (SHINOZUKA Nozomi) : 埼玉医科大学病院・病院長 (任期: 令和6年3月31日)
別宮好文 (BETSUMIYA Yosihumi) : 総合医療センター・病院長 (任期: 令和6年3月31日)
佐伯俊昭 (SAEKI, Toshiaki) : 国際医療センター・病院長 (任期: 令和6年3月31日)
富谷智明 (TOMIYA, Tomoaki) : 教職員学生健康推進センター・教授 (任期: 令和6年3月31日)
片桐岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : 医学研究センター長・教授 (任期: 令和6年3月31日)
下岡聡行 (SHIMOOKA, Toshiyuki) : 保健医療学部 臨床工学科・教授 (任期: 令和6年3月31日)
藤田博暁 (FUZITA, Hiroyuki) : 保健医療学部 理学療法学科・教授 (任期: 令和6年3月31日)
高橋秀夫 (TAKAHASHI, Hideo) : 施設部・副部长 (任期: 令和6年3月31日)

2. 目的・目標

目的

本委員会は「埼玉医科大学環境安全規定 第6条」および「埼玉医科大学毒物・劇物管理規定 第3条」に基づき、学長からの諮問に応ずることのほか、医療廃棄物、毒物や劇物等の化学物質および病原体微生物等の管理の徹底、バイオハザードの防止、資源の再利用の促進、安全な労働環境の保持と向上、教職員の環境安全教育、などを通じて本学の環境安全に資することが目的である。

目標

国や自治体などからの通達・指導に従った対応を医学研究センターと協力して迅速に行うことを目標とする。

3. 活動実績

委員会の開催はなかった。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

医学研究センター安全管理部門が各組織の情報を一元的に管理している。本委員会は規程の見直しなど、調整的な役割を担った。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

引き続き医学研究センターと協力しながら活動する。

1. 12) グラント選考委員会

1. 構成員

委員長

片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : 医学研究セ長 : ゲノム基礎医学:教授 (任期 : R5. 3. 31)

委員

棚橋 紀夫 (TANAHASHI, Norio) : 専務理事:教授 (任期 : R5. 3. 31)

森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学部長:教授 (任期 : R5. 3. 31)

加藤木 利行 (KATOGLI, Toshiyuki) : 保健医療学部長:教授 (任期 : R5. 3. 31)

篠塚 望 (Shinozuka, Nozomi) : 大学病院長:消化器・一般外科:教授 (任期 : R5. 3. 31)

堤 晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko) : 総合医療セ病院長 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

佐伯 俊昭 (SAEKI, Toshiaki) : 国際医療セ病院長:教授 (任期 : R5. 3. 31)

小山 政史 (OYAMA, Masafumi) : 副医学部長 : 国医セ泌尿器:教授 (任期 : R5. 3. 31)

村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 医学部長補佐:生化学:教授 (任期 : R5. 3. 31)

奥田 晶彦 (OKUDA, Akihiko) : ゲノム基礎医学:教授 (任期 : R5. 3. 31)

坂本 安 (SAKAMOTO, Yasushi) : 中央研究施設長:教授 (任期 : R5. 3. 31)

秋岡 祐子 (AKIOKA, Yuko) : 小児科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

山本 晃士 (YAMAMOTO, Koji) : 総合医療セ輸血部 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

石田 秀行 (ISHIDA, Hideyuki) : 総合医療セ消化器一般外科:教授 (任期 : R5. 3. 31)

村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 微生物学:教授 (任期 : R5. 3. 31)

山田 健人 (YAMADA, Taketo) : 病理学:教授 (任期 : R5. 3. 31)

門野 夕峰 (KADONO, Yuuho) : 整形外科学:教授 (任期 : R5. 3. 31)

千本松 孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : RAセ長:教授 (任期 : R5. 3. 31)

解良 恭一 (SENBONMATSU, Takaaki) : 国際医療セ呼吸器病センター:教授 (任期 : R5. 3. 31)

藤田 恵子 (FUJITA, Keiko) 解剖学:教授 (任期 : R5. 3. 31)

オブザーバー

別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長:特任教授 (任期 : R5. 3. 31)

吉本 信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長:特任教授 (任期 : R5. 3. 31)

松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長 : RA セ長:教授 (任期 : R5. 3. 31)

竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 : 特任教授 (任期 : R5. 3. 31)

茂木 明 (MOGI, Akira) : 事務局長 (任期 : R5. 3. 31)

伊藤 富彦 (ITO, Tomihiro) : 経理部係長 (任期 : R5. 3. 31)

事務担当者

小谷 典弘 (KOTANI, Norihiro) : 生化学 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)

堀内 大 (HORIUCHI, Yutaka) : 微生物学:講師 (任期 : R4. 3. 31)

下田裕子 (SHIMODA, Yuko) : 大学事務部 医学部事務室 庶務課 課長

佐國真紀 (SAKUNI, Maki) : 大学事務部 医学部事務室 庶務課

2. 目的・目標

グラント選考委員会は、「埼玉医科大学補助金関連共同研究規則」第1条に定める「研究経費の補助を国庫補助金等から得て、本学の研究活動の活性化、および円滑化を図り、もって本学の研究に発展する」目的を達成するため、同規則第5条に基づいて設置された委員会である。本委員会は、共同研究等審査委員会を引継ぎ、平成18年7月の教員代表者会議で承認され、同年8月発足した。グラント選考委員会は、医学研究センター研究支援管理部門と連携し、「学内グラント」、「財団等から募集される科学研究費を除く研究助成金」、および「私立大学高度化推進特別補助の学外グラント」に対し、学内選考を行うことを目的とする。

本年度も、「2022年度学内グラント」、「2022 (R4)年度 研究マインド支援グラント (両学部における共通部門)」、「2022 (R4)年度 研究マインド支援グラント (医学部基礎若手限定)」の募集と選考、「2021 (R3)年度 研究マインド育成のための教育プログラム実施助成金」の選考、「2022 (R4)年度 研究マインド育成のための教育プログラム実施助成金」の募集、及び財団等が募集する研究助成金等への応募に関する学内選考を行う。さらに、本年度は「埼玉医科大学創立50周年記念特別研究費」の募集と選考にも協力する。

3. 活動実績

1) 学内グラント選考委員会 (2022年5月23日)

於 : Zoom 開催、出席 26 人 (委任状出席 3 人含む)、欠席なし

議事 : 2022 年度学内グラントの選考

丸木記念特別賞と科研費申請支援を募集・選考した。さらに、学内グラント採択課題 (一般枠・科研費申請支援) が翌年、翌々年度に科研費に採択の場合に追加助成される奨励研究費 (20 万円) の対象者を決定した。

応募・審査結果

応募数 : 33 件 (採択数 28 件)

(1) 丸木記念特別賞 : 応募数 5 件 (採択数 1 件 : 助成期間 : 2022 年 9 月 1 日 ~ 2023 年 8 月 31 日)

(2) 科研費申請支援：応募数 28 件（採択数 27 件：助成期間：2022 年 9 月 1 日～2023 年 8 月 31 日）

(3) 科研費採択奨励費：2 件（全件採択：助成期間：2022 年 5 月 1 日～2023 年 3 月 31 日）

・丸木記念特別賞

- 1 倉持 泉（医学部・総合医療セ神経精神科・講師）200 万円
「てんかんに関する知識・スティグマの実態と支援ニーズに関する日独比較調査研究」

・科研費申請支援

- 1 田丸 文信（医学部・生理学・講師）70 万円
「網膜の無軸索ニューロンにおける活動電位の役割」
- 2 板澤 寿子（医学部・大学病院 小児科・准教授）70 万円
「アレルギー性鼻炎における局所 IgE 産生機序の解明と治療への応用」
- 3 相崎 良美（医学部・大学病院 リウマチ膠原病科・助手）70 万円
「成人発症スティル病患者の NK 細胞と単球細胞の機能解析による病態解明」
- 4 谷坂 優樹（医学部・国際医療センター 消化器内科・講師）70 万円
「膵癌の EUS-FNA 生検病理による腫瘍免疫抑制環境と糖硫酸転移酵素の機能解析」
- 5 浜田 芽衣（医学部・病理学・助教）70 万円
「Mantra system による頭頸部癌免疫チェックポイント療法の効果予測」
- 6 難波 文彦（医学部・総合医療センター 小児科・准教授）70 万円
「新生仔肺特異的 KO マウスを用いた肺発達・肺傷害修復における HAPLN1 の役割」
- 7 山崎 真美（医学部・総合医療センター 病理部・助教）70 万円
「口腔癌における TP53 遺伝子異常からとらえるクラステリンの発現意義」
- 8 岡 俊太郎（医学部・総合医療センター 小児科・助教）70 万円
「早産児未熟肺に対する人工呼吸器による機械的ストレッチの影響」
- 9 宮原 直之（医学部・総合医療センター 小児科・助教）70 万円
「低栄養妊娠マウスから出生したマウスの肺発達および肺内エピジェネティック変化の解明」
- 10 和田 琢（医学部・大学病院 リウマチ膠原病科・助教）70 万円
「脊椎関節炎に対する抗サイトカイン治療薬の有効性を予測するバイオマーカーの開発」
- 11 川崎 一史（医学部・大学病院 脳神経内科・助教）70 万円
「パーキンソン病患者の痛みの定量化と抗パーキンソン病薬の痛みに対する効果の検討」
- 12 宮崎 利明（医学部・社会医学・講師）70 万円
「大腸がん肝転移におけるがん微小環境制御メカニズムの解明と臨床応用」
- 13 多林 孝之（医学部・総合医療センター 血液内科・准教授）70 万円
「WEE1 と ARID2 を標的とした難治性骨髄腫に対する新規治療の開発」
- 14 松田 祐典（医学部・総合医療センター 産科麻酔科・准教授）70 万円
「帝王切開出産後回復の可視化と促進」
- 15 浦西 洗介（医学部・ゲノム基礎医学・助教）70 万円
「Mga を足場とした構造的クロマチン形成による減数分裂遺伝子抑制機構の解析」
- 16 森 仁（医学部・国際医療センター 心臓内科・講師）70 万円
「カテーテルアブレーションに於ける水蒸気爆発現象に関する実験的検討」
- 17 増田 渉（医学部・総合医療センター 病理部・助教）70 万円
「Hodgkin 細胞と Reed-Sternberg 細胞の細胞機能と癌微小環境の相違」
- 18 池上 裕一（医学部・大学病院 内分泌内科・糖尿病内科・講師）70 万円
「PPAR γ による胎盤巨細胞の核内倍化制御の解明」
- 19 沢田 圭佑（医学部・総合医療センター 病理部・助教）70 万円
「高悪性度 B 細胞リンパ腫の新規疾患モデルの樹立と病態解明を目指して」
- 20 小野 大輔（医学部・総合医療センター 感染症科・感染制御科・講師）70 万円
「免疫抑制剤を応用した COVID-19 による免疫血栓症に対する新しい治療戦略」
- 21 武者 育麻（医学部・大学病院 小児科・助教）70 万円
「グリコアルブミン/HbA1c 比によるヘモグロビン糖化の遺伝的表現型推定法の確立」
- 22 美山 優（医学部・国際医療センター 病理診断科・助教）35 万円
「遺伝子検査結果を用いた持続可能な膀胱癌特殊型の分子生物学的分類への紐づけ」
- 23 佐藤 大樹（医学部・国際医療センター 脳卒中外科・講師）35 万円
「脳動脈瘤破裂と細胞老化の SIRT1 を介した機序の解明」
- 24 安田 重光（医学部・大学病院 内分泌内科・糖尿病内科・講師）35 万円
「甲状腺機能異常の脂質代謝への影響に関する検討」
- 25 新井 久稔（医学部・大学病院 精神科・心療内科・准教授）35 万円
「認知症患者における脳血管障害・認知機能・行動心理症状の関連性の縦断研究」
- 26 佐々木 恵（医学部・国際医療センター 消化器外科・助教）35 万円
「直腸癌手術における術中 ICG 蛍光法を用いた腸管粘膜面の血流評価」
- 27 南雲 拓海（医学部・大学病院 麻酔科・助教）35 万円
「遺伝子解析を応用したアセトアミノフェンの鎮痛機序の解明」

・科研費採択奨励費

佐藤 弘（医学部 国際医療センター 消化器外科）20 万円

今井 孝（医学部 微生物学）20 万円

2) 研究マインド支援グラント

(1) 2022 (R4)年度 両学部における共通部門

応募件数 8 件、メール会議（2022 年 5 月 16 日～5 月 31 日）、採択 6 件（総額 13,029,168 円）

(2) 2021 (R3)年度 研究マインド育成のための教育プログラム実施助成金

応募件数 21 件、メール会議（2022 年 5 月 16 日～5 月 31 日）、採択 21 件（総額 6,611,456 万円）

・ 通年プログラム（実験）：応募件数 20 名、採択 20 件、（合計 6,499,284 万円）

・ 通年プログラム（体験）：応募件数 1 名、採択 1 件、（合計 112,172 万円）

・ 春期プログラム（実験）：応募件数 0 名

(3) 2022 (R4)年度 研究マインド育成のための教育プログラム実施助成金の募集開始

(4) 2022 (R4)年度 医学部若手限定

応募件数 0 件

3) 財団等の研究助成に関する学内選考

(1) 公益財団法人 川野小児医学奨学財団「令和 4 年度 研究助成金（一般枠）」

応募者数 4 名、メール会議（2022 年 11 月 2 日～11 月 8 日）、推薦 1 名

(2) 公益財団法人 川野小児医学奨学財団「令和 4 年度 研究助成金（若手枠）」

応募者数 3 名、メール会議（2022 年 11 月 2 日～11 月 8 日）、推薦 1 名

4) 埼玉医科大学創立 50 周年特別研究費選考委員会（2022 年 9 月 13 日）

於：Zoom 開催、出席 8 人、欠席なし

議事：埼玉医科大学創立 50 周年特別研究費の選考

応募・審査結果

応募数：28 件（採択数 4 件）

1 片桐 岳信（医学部・ゲノム基礎医学・教授）2,000 万円

「TGF-β ータファミリーによる筋萎縮と腎線維化に対する阻害抗体の開発と学内基盤技術の確立」

2 木崎 昌弘（医学部・総合医療セ血液内科・教授）1,000 万円

「難治性 B 細胞リンパ腫に対する革新的治療法の開発と分子基盤の解明」

3 難波 聡（医学部・大学病院 ゲノム医療科・准教授）1,000 万円

「DNA の配列変異と RNA の発現異常に着目したミトコンドリア病発症メカニズムの解明：理想的着床前診断の実現へ向けて」

4 井上 勤（医学部・大学病院 腎臓内科・教授）1,000 万円

「機能的 MRI と AI を用いた慢性腎臓病の病態診断・予後予測システムの開発」

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

学内グラントの「丸木記念特別賞」は、「長年に渡る、複数の業績に裏付けられたストーリー性を持つ研究テーマ」で、かつ「その主要な成果が本学における研究活動で得られたもの」を対象とする。本年度も、これらに重点を置いた選考を行い、本賞にふさわしい課題を選出できた。昨年度より、従来の「一般枠」を「科研費申請支援」と名称を変更し、科研費への採択支援が目的であることを明確にした。対象課題は昨年度までと同様、今年度の科研費に不採択となった課題の中からとし、科研費アドバイザーに研究計画調査のブラッシュアップと評価を委託した。また、従来の「奨励研究費」は「科研費採択奨励費」とし、過去 2 年以内に学内グラント一般枠の助成を受けた課題の中で、科研費に採択された課題を助成した。本助成は 6 年目となり、順調に本学の科研費獲得に貢献している。財団等の研究助成に関する学内選考も、全て厳格に審査された。本年度は、本学の創立 50 周年の年にあたるため、本学のさらなる研究力向上を目指して「埼玉医科大学創立 50 周年記念特別研究費」が募集された。厳正な選考を行い、4 件の課題を採択した。

財団等の研究助成への応募に際した学内選考も、厳正・公平に行われた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

本学が学外から研究経費を獲得して研究活動を活性化するため、今年度も学内グラント、研究マインド支援グラント、埼玉医科大学創立 50 周年記念特別研究費、及び財団等の研究助成等の選考を厳格に行った。次年度も、医学研究センター研究支援管理部門、及び庶務課と連携しながら、学内グラントの公平な選考と効果的な運用が継続されるよう努める。例年、研究マインド支援グラント（共通部門と医学部基礎若手限定）と研究マインド育成のための教育プログラム実施助成金は、審査が連続して煩雑なため、次年度は同時期に審査できるよう日程を調整する。創立 50 周年記念特別研究費に採択された課題は、毎年 11 月に開催予定の「オール埼玉医大研究の日」で進捗状況を報告していただくこととした。研究活動が学内グラントに止まらず、学外の公的競争的研究資金を獲得してさらに発展できるよう、他の部署と連携して支援する。

1. 13) 研究活動並びに公的研究費等の適正化推進委員会

1. 構成員（任期：R06.3.31）

委員長：松下 祥（MATSUSHITA, Sho）：副学長

委員：千本松 孝明（SENBONMATSU, Takaaki）：リサーチアドミニストレーション（RA）センター・センター長、教授

委員：茂木 明（MOGI, Akira）：法人事務局長

委員：亀井 美登里（KAMEI, Midori）：社会医学・教授

委員：山本 晃士（TAMARU, Junichi）：総医セ病理部・教授

委員：海老原 康博（EBIHARA, Yasuhiro）：国医セ臨床検査医学・教授

委員：奥田 晶彦（OKUDA, Akihiko）：ゲノム基礎医学・教授

委員：加藤木 利行（KATOGLI, Toshiyuki）：保健医療学部・学部長

委員：久保 かほる（TOKORO, Miyoko）：短期大学・副学長

委員：小林 国彦（KOBAYASHI, Kunihiko）：RAセンター・教授・シニアURA

委員：片桐 岳信（KATAGIRI, Takenobu）：医学研究センター・センター長

外部委員：野木 尚郎（NOGI, Hisao）：法律の専門家

外部委員：井上 晶子（INOUE, Akiko）：一般の立場の者

外部委員：古川 隆（FURUKAWA, Takashi）：一般の立場の者

事務局：佐藤 勝茂（SATO, Katsushige）：RAセンター・課長

2. 目的・目標

本委員会は、文部科学省及び厚生労働省による「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」及び「公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」を指針として運営するため、学校法人埼玉医科大学研究活動並びに公的研究費等の適正化推進委員会規則に則り、平成26年10月に設置された委員会である。

各部門における研究活動並びに公的研究費等の適正化のために、研究・産学連携等担当副学長、研究不正防止体制の統括責任者、コンプライアンス推進・研究倫理教育責任者、さらに学内責任体制の各担当者とともに活動する。

3. 活動実績

- ・研究倫理教育および競争的資金の管理・監査の学内責任体制として、コンプライアンス教育として公的研究費に関する説明会を開催した。また研究倫理教育として、APRINeラーニングの受講管理を実施した。
- ・令和4年度は、委員会として審議すべき事案が無く開催していない。前述の教育活動報告は、教員代表者会議でのRAセンター運営会議報告による。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

所管省庁(文部科学省及び厚生労働省)へ、「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」及び「公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」が求める研究者および研究支援者への教育を適切に実施することができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」及び「公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」「研究インテグリティの自律的な確保」に対応した体制の中で、研究者へ過度な負担を課さずに公正な研究活動が維持される管理・運営体制を継続し、実態とルールなどに乖離があれば適宜検討する。

以上

1. 14) 病原性微生物等管理委員会

1. 構成員

- 委員長 村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 医学部微生物学 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 副委員長 前田 卓哉 (MAEDA, Takuya) : 大学病院臨床検査医学 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 堀内 大 (HORIUCHI, Yutaka) : 医学部微生物学 : 講師 (任期 : R5. 3. 31)
- 委員 森 隆 (MORI, Takashi) : 総合医療センター研究部 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 光武 耕太郎 (MITSUTAKE, Kotaro) : 国際医療センター・感染症科・感染制御科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 佐藤 正夫 (SATO, Masao) 保健医療学部臨床検査学科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 池田 和博 (IKEDA, Kazuhiro) : 医学部ゲノム応用医学 : 准教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 河村 亨 (KAWAMURA, Toru) : 大学病院中央検査部 : 係長 (任期 : R5. 3. 31)
- 今井 孝 (IMAI, Takashi) : 医学部微生物学 : 講師 (任期 : R5. 3. 31) [R4. 9. 30 退職]
- 樽本 憲人 (TARUMOTO, Norihito) : 大学病院感染症科・感染制御科 : 准教授 (任期 : R4. 10. 1~R5. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は、学校法人埼玉医科大学病原体等安全管理規則第4条に則り、本学における病原体等の取扱いに係る安全確保の適正な実施のために設置された。今年度は、病原体等取扱申請、感染実験室使用申請等の審査を委員全員で注意深く行うこと、および病原体等新規取扱者への教育訓練を行うことを活動目標として活動した。

3. 活動実績

- ①第51回メール会議(令和4年6月10日~6月15日)出席9人 欠席0人
議事:(1)新規申請書の審査:
指定実験室使用申請書1件、承認
(2)その他
1)令和4年5月18日にR4年度大学院実用実験医学講義第3回「バイオセーフティとバイオテロの動向」を堀内委員(微生物学)が教育訓練を兼ねて担当。
2)文科省から病原性微生物保有状況調査依頼があった。例年通り、研究主任部門から研究主任宛に各基本学科・部署への調査依頼。
- ②第52回メール会議(令和4年7月6日~7月15日)出席9人 欠席0人
議事:(1)新規申請書の審査:
指定実験室使用申請書1件、承認
追加申請書(指定実験室使用)1件、承認
- ③第53回メール会議(令和4年9月1日~9月9日)出席9人 欠席0人
議事:(1)新規申請書の審査:
病原体等取扱申請書1件、承認
病原体等移動(受入)申請書1件、承認
(2)変更申請の審査:
申請者等の身分変更1件、承認
(3)退職予定者に代わる新委員について
樽本憲人氏(大学病院感染症科・感染制御科:准教授)の承認
- ④第54回メール会議(令和4年10月6日~10月26日)出席9人 欠席0人
議事:(1)新規申請書の審査:
病原体等取扱申請書1件、承認
病原体等移動(受入)申請書1件、承認
- ⑤第55回メール会議(令和4年11月14日~11月22日)出席9人 欠席0人
議事:(1)新規申請書の審査:
病原体等取扱申請書1件、承認
- ⑥第56回メール会議(令和4年11月14日~12月15日)出席9人 欠席0人
議事:(1)新規申請書の審査:
指定実験室使用申請書1件、承認(第55回分からの継続審議)
- ⑦第57回メール会議(令和5年1月6日~1月19日)出席9人 欠席0人
議事:(1)R5継続申請書の審査:
病原体等取扱申請書1件、承認
(2)毛呂山キャンパスBSL3施設の運用審議:
新型コロナウイルス等のBSL3臨床検体を安全に取り扱える施設がないため、新興・再興感染症に対応を協議。毛呂山キャンパス基礎医学棟3F・バイオセーフティー室BSL3区画は運用可能な状態に再整備(微生物学管理下)。当面の上記施設運用では微生物培養は行わず、臨床試料(確定診断済み)からの核酸・

タンパク質抽出に限定した運用を行うことに制限し、施設利用者希望者にはその都度、研究対象に沿った運用マニュアルを当委員会に提出していただき、審査・許可する方針とした。

⑧第 58 回メール会議（令和 5 年 2 月 2 日～2 月 20 日）出席 9 人 欠席 0 人

議事：(1) 新規申請書の審査：

指定実験室使用申請書 1 件、承認
病原体等移動（受入）申請書 1 件、承認

(2) R5 年度継続申請書の審査：

病原体等移動（受入）申請書 8 件、承認

(3) 報告事項：

1) R5 年 1 月 10 日付で内閣官房(文部科学省研究振興局ライフサイエンス生命倫理・安全対策室)より病原性微生物等の保有・管理状況等の調査(令和 4 年 10 月 1 日(土)時点の状況)を改めて実施するよう通達があり、委員長ならびに RA センターを介して研究主任宛に調査し、その結果を報告した。

2) 委員に利益相反(COI)に関わる定期申告・随時申告について対応を依頼した。

⑨第 59 回メール会議（令和 5 年 2 月 20 日～3 月 13 日）出席 9 人 欠席 0 人

議事：(1) R5 継続申請書の審査

病原体等移動（受入）申請書 5 件、承認

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

令和 4 年度においても、病原体等取扱申請、指定実験室使用申請等の審査を委員全員で適切に行った。当年度では毛呂山キャンパス BSL3 区画整備を実施し、(制限付きであるが)新興・再興感染症に対する対応が可能になった。従って、本学における利用可能な指定実験施設の整備がさらに進み、本委員会における目標は達成されている。次年度では大学院実用実験医学講義内に教育訓練を設け、VTR 化とともにわかりやすく充実したものに改訂したい。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度も、委員全員で注意深く病原性微生物等に関する申請書の審査を行う。毛呂山キャンパス BSL3 区画運用については、入退出の動線に配慮したシミュレーション訓練を実施していく。また管理対象となるリスク分類を検討しながら、当該委員会管轄のホームページを点検し、利用者にわかりやすい情報発信に努めたい。

1. 15) 教員短期留学制度選考委員会

1. 構成員

委員長	藤巻高光 (FUJIMAKI, Takamitsu) : 大学病院脳神経外科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
副委員長	魚住尚紀 (UOZUMI, Naonori) : 生化学 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	木崎昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 総合医療センター血液内科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
	千本松孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : リサーチ・インフォメーションセンター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
	辻美隆 (TSUJI, Yoshitaka) : 保健医療学部共通教育部門 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
	廣岡伸隆 (HIROOKA, Nobutaka) : 大学病院地域医療科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
	三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 大学病院リウマチ膠原病科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
	菅理江 (SUGE, Rie) : 教養教育 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
	難波聡 (NAMBA, Satoshi) : 大学病院ゲノム医療科 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
	周防諭 (SUO, Satoshi) : 薬理学 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
	山下高久 (YAMASHITA, Takahisa) : 総合医療センター病理部 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は埼玉医科大学教員短期留学制度規則第1条に則り、留学希望者の選考をおこなうことを目的としている。今年度は保留となっていた留学希望者の派遣を再開することとともに、5名の留学希望者を選考、派遣することを目標として活動した。

3. 活動実績

- 令和4年7月6日 於：医学部7号館1階会議室 出席者8人
議事：今年度（令和4年度）に留学を希望する応募者（追加募集枠）の選考をおこなった。
応募者3名について審査を行った。あらかじめ選考委員には応募者の申請書類を送付し、4項目を各5点、合計20点満点での採点を依頼した。また、委員会当日の欠席予定者からは委任状が提出された。委員会当日は全委員の採点結果をもとにさらに細かく内容を吟味（留学施設選択の動機、目的の明瞭さ、推薦状の内容、受け入れ施設からの受け入れ許可の有無、論文発表や国際学会参加の有無、提出書類の全体的な評価、など）し、最終的に3名を合格とした。
- 令和5年2月16日 於：医学部7号館1階会議室 出席者9人
議事：次年度（令和5年度）に留学を希望する応募者の選考をおこなった。
応募者3名について審査を行った。あらかじめ選考委員には応募者の申請書類を送付し、4項目を各5点、合計20点満点での採点を依頼した。また、委員会当日の欠席予定者からは委任状が提出された。委員会当日は全委員の採点結果をもとにさらに細かく内容を吟味（留学施設選択の動機、目的の明瞭さ、推薦状の内容、受け入れ施設からの受け入れ許可の有無、論文発表や国際学会参加の有無、提出書類の全体的な評価、など）し、最終的に2名を合格とした。定員に満たなかったため、後日再募集をおこなうことが確認された。

4. 自己評価と次年度計画

- 4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果
今年度は追加募集をおこなうことにより派遣可能枠5名を円滑に選考することができた。
- 4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画
コロナ前と比べて応募人数は回復したとは言えないが、今後も今制度についての周知を全学的にすすめ、必要に応じて追加募集もおこなうなど柔軟な対応をしたい。今後も引き続き円滑な審査をおこなっていきたいと考えている。

1. 16) 寄附研究部門設置委員会

1. 構成員（任期：R6.3.31）

- 委員長：別所 正美 (BESSHO, Masami)：学長
委員：吉本 信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo)：副理事長
委員：棚橋 紀夫 (TANAHASHI, Norio)：専務理事
委員：松下 祥 (MATSUSHITA, Sho)：副学長
委員：木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) 副学長（～R5.3.31）
委員：竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) 副学長
委員：篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomi)：大学病院：院長
委員：別宮 好文 (TSUTSUMI, Haruhiko)：総合医療センター・病院長
委員：佐伯 俊昭 (SAEKI, Toshiaki)：国際医療センター・病院長
委員：奥田 晶彦 (OKUDA, Akihiko)：ゲノム基礎医学・教授
委員：片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu)：医学研究センター長
委員：茂木 明 (IKEWADA, Tadayuki)：法人事務局長
委員：池和田 忠幸 (IKEWADA, Tadayuki)：経理部長
委員：菅原 哲雄 (SUGAWARA, Tetsuya)：R Aセンター・講師、産学官連携担当
事務局：佐藤 勝茂 (SATO, Katsushige)：R Aセンター・課長

2. 目的・目標

本委員会は、奨学を目的とする個人又は法人若しくは団体からの寄附を有効に活用し、もって本学の特色ある教育研究の推進及び充実を図るために組織される寄附研究部門の設置および運営について審議するため、埼玉医科大学寄附研究部門規程に則り設置された委員会である。

3. 活動実績

3-1. 開催日

- 令和4年度は、委員会を開催していない。

3-2. 主な審議内容

- 令和4年度は、委員会を開催していない

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

- 設置承認した寄附研究部門の開設準備およびその後の運営を支援した。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

- 設置承認した寄附研究部門の円滑な運営のため、適宜報告および支援を行う。
- 寄附研究部門設置または変更に関する申請について適切に審査・助言し、教育研究の推進及び充実を図っていく。

以上

1. 17) 臨床研究審査委員会

1. 構成員 (任期: R6. 3. 31)

委員長	小林 国彦 (KOBAYASHI, Kunihiko) : リサーチアドミニストレーションセンター : 教授
副委員長	西川 亮 (NISHIKAWA, Ryo) : 国際医療センター脳脊髄腫瘍科 : 客員教授
	山田 健人 (YAMADA, Taketo) : 医学部病理学 : 教授
	神山 信也 (KOHYAMA, Shinya) : 国際医療センター脳血管内治療科 : 教授
委員	天野 宏一 (AMANO, Koichi) : 総合医療センターリウマチ・膠原病内科 : 教授
	大野 洋一 (OHNO, Yoichi) : 医学部社会医学 : 客員教授
	山崎 力 (YAMAZAKI, Tsutomu) : 国際福祉大学未来研究支援センター : センター長/教授
	藤田 朋恵 (FUJITA, Tomoe) : 獨協医科大学薬理学 : 教授
	山口 斉昭 (YAMAGUCHI, Nariaki) : 早稲田大学法学学術院 : 教授
	野木 尚郎 (NOGI, Hisao) : 浦和サライ法律事務所 : 弁護士
	掛江 直子 (KAKEE, Naoko) : 国立成育医療研究センター臨床開発監理センター生命倫理研究室 : 室長
	古川 隆 (FURUKAWA, Takashi) : 株式会社ABC : 代表取締役
	井上 晶子 (INOUE, Akiko) : 立教大学観光研究所 : 特任研究員/杏林大学 : 特任講師
事務局	佐藤 勝茂 (SATO, Katsushige) : リサーチアドミニストレーションセンター : 課長
	福永 由佳 (FUKUNAGA, Yuka) : リサーチアドミニストレーションセンター : 課員
	中島 奈月 (NAKAJIMA, Natsuki) : リサーチアドミニストレーションセンター : 課員
	長田 佐絵 (NAGATA, Sae) : リサーチアドミニストレーションセンター : 課員 (兼担)
	宿谷 学 (SHUKUYA, Manabu) : リサーチアドミニストレーションセンター : 課員 (兼担) (R4. 4. 1~)

2. 目的・目標

本委員会は、臨床研究法(平成 29 年法律第 16 号。以下「法」という。)第 23 条に規定する臨床研究審査委員会として厚生労働省の認定を受け、法、臨床研究法施行規則(平成 30 年厚生労働省令第 17 号。以下「省令」という。)の定めるところにより、審査意見業務を行う。また、省令第 66 条 4 項第 4 号に規定される年 12 回以上の委員会開催を予定し、同条 5 項イに更新要件として定める年 7 回以上の委員会開催を下限とする。

臨床研究法施行 5 年後の見直しに係る検討がなされているため、臨床研究部会をはじめ情報収集に努め、適正な委員会運営を継続することを目標に活動した。

3. 活動実績

3-1. 委員会開催日

①第 50 回委員会 (令和 4 年 4 月 26 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 11 名	欠席 2 名
②第 51 回委員会 (令和 4 年 5 月 24 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 11 名	欠席 2 名
③第 52 回委員会 (令和 4 年 6 月 28 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 12 名	欠席 1 名
④第 53 回委員会 (令和 4 年 7 月 26 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 12 名	欠席 1 名
⑤第 54 回委員会 (令和 4 年 8 月 23 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 12 名	欠席 1 名
⑥第 55 回委員会 (令和 4 年 9 月 27 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 12 名	欠席 1 名
⑦第 56 回委員会 (令和 4 年 10 月 25 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 12 名	欠席 1 名
⑧第 57 回委員会 (令和 4 年 11 月 22 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 11 名	欠席 2 名
⑨第 58 回委員会 (令和 4 年 12 月 27 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 10 名	欠席 3 名
⑩第 59 回委員会 (令和 5 年 1 月 24 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 11 名	欠席 2 名
⑪第 60 回委員会 (令和 5 年 3 月 28 日)	毛呂山キャンパス 第 2 ビル 1 階 RAC 前会議室	出席 10 名	欠席 3 名

3-2. 主な審議内容

新規申請 1 件 (学内)、継続審査 2 件、変更申請 27 件、報告等 25 件 合計 55 件の審査意見業務を行った。詳細は、埼玉医科大学臨床研究審査委員会ホームページを参照。(http://www.saitama-med.ac.jp/medlinks/rinshokenkyu/)

なお、ホームページには省令に定める公表情報を含む次の情報を掲載しており、学内外から閲覧可能である。また臨床研究法に基づき、厚生労働大臣に対する認定の申請や変更の届出等の手続を行うための認定臨床研究審査委員会申請・情

報公開システムにも本委員会情報が掲載されている。

1. 開催日程、審査受付状況、審査手数料
2. 臨床研究審査委員会規則、運用ポリシー、業務手順書、研究者向けマニュアル
3. 議事要旨（主な審議内容、審査結果）
4. 委員名簿
5. 審査申請システム
6. 各申請手続きのフロー
7. 各種申請様式
8. 問い合わせ窓口

3-3. 相談業務

学内、外部機関からの各種問い合わせ対応の他、学内の研究者向けに予約制のコンサルテーション窓口を開設しており、特定臨床研究に限らず臨床研究全般の相談に対応している。今年度は41件、累積165課題のコンサルテーションを行った。統計解析の相談については、リサーチアドミニストレーションセンター客員教授および非常勤講師並びに外部委嘱の生物統計家への橋渡しを行い、研究者支援に繋げた。

3-4. 教育活動

- (1) 臨床研究審査委員会委員向けの定期的な教育として、臨床研究法改正の動きについて解説し理解を深めた。
- (2) 臨床研究審査委員会事務局の教育・研修・情報収集の一環として以下に参加した。

- ・日本臨床試験学会教育セミナー（2022.4.27）
- ・臨床研究セミナー「臨床研究法の改正について」（2022.5.13）
- ・第65回医学系大学倫理委員会連絡会議（2022.6.24,25）
- ・順天堂大学主催 臨床研究研修会（2022.7他）
- ・治験・倫理委員会委員研修（大阪大学主催・2022.9.24）
- ・日本臨床試験学会教育セミナー（2022.10.8）
- ・第66回医学系大学倫理委員会連絡会議（2022.12.16,17）
- ・第14回日本臨床試験学会学術集会（2023.2.9,10）
- ・治験・倫理審査委員会委員研修（慶應義塾大学主催2023.2.19）
- ・治験・倫理審査委員会委員研修（千葉大学主催・2023.2.25）
- ・第8回研究倫理を語る会（2023.3.4）
- ・医学系研究をわかりやすく伝えるための手引き成果発表シンポジウム（2023.3.16）

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- ・省令で定める更新要件である年7回以上の委員会開催について達成することができた。
- ・R4年4月の省令改正への対応として、JRCTおよび審査申請手続きで混乱を来した研究者のサポートを行った。
- ・臨床研究コンサルティングの対象を臨床研究全般に広げ、生物統計家への紹介を積極的に行うことにより、相談件数は一昨年比約4倍となった昨年度とほぼ同数で推移した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

(1) 臨床研究審査委員会の開催

- ・認定更新要件である年7回以上の臨床研究審査委員会を開催し、円滑な委員会運営に努める。
- ・臨床研究法実施基準に基づく技術専門員による評価を受け、委員会審査を行う。
- ・被験者保護の観点、審査の質担保と向上および委員・事務局員の教育のため、積極的に外部研修会へ参加する。情報交換会等を通じて、法改正の動向も含め情報収集に努める。
- ・県内で臨床研究審査委員会を設置している機関が本学以外に無いため、近隣医療機関からの審査依頼および特定臨床研究に関する問い合わせに対応する。

(2) 臨床研究支援体制の整備

- ・質の高い臨床研究の実施、また、伸び悩んでいる学内の特定臨床研究が活発に実施されるよう、臨床研究コンサルティングを周知するとともに開催していく。質の高い臨床研究を増やしていくことは、高度な医療を提供する機関とし

での責務と考える。プロトコル作成の支援部門の整備、その中核となる人材確保、育成が急務であり、その実現に向けて積極的に取り組んでいく。

1. 18) ポリシー等策定委員会

1. 構成員

- 委員長 別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 丸木 清之 (MARUKI, Kiyoyuki) : 理事長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 吉本 信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副学長・医学部長・医学教育センター長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 松下 祥 (MATSUSHITA, Shou) : 副学長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 副学長・医学研究科長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 加藤木 利行 (KATOGLI, Toshiyuki) : 保健医療学部長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 千田 みゆき (CHIDA, Miyuki) : 看護研究科長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 門野 夕峰 (KADONO, Yuho) : 学生部長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IRセンター長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 茂木 明 (MOGI, Akira) : 常務理事・事務局長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 武藤 光代 (MUTOU, Mitsuyo) : 総看護部長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 丸井 有佐 (MARUI, Yusa) : 医学部4年生 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 荻原 笑里 (OGIWARA, Eri) : 保健医療学部3年生 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 堀江 正人 (HORIE, Masahito) : 大学事務部次長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : 医学研究センター長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 小山 政史 (OYAMA, Masafumi) : IR副センター長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : IR副センター長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 辻 美隆 (TSUJI, Yoshitaka) : 保健医療学部教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 学外委員 本多 麻夫 (HONDA, Asao) : 埼玉県衛生研究所所長 (任期 : R6. 3. 31)
- 学外委員 平形 道人 (HIRAKATA, Michito) : 慶應義塾大学医学部教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 学外委員 森本 義博 (MORIMOTO, Yoshihiro) : 小川赤十字病院名誉院長 (任期 : R6. 3. 31)
- 学外委員 町田 亘啓 (MACHIDA, Nobuyoshi) : 埼玉医科大学SP会会長 (任期 : R6. 3. 31)
- オブザーバー 村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 医学部長補佐 (任期 : R6. 3. 31)

2. 目的・目標

本学の卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）、入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）、内部質保証に関する全学的な方針（アセスメント・ポリシー）等（以下「ポリシー等」と総称する。）の策定、点検・評価及び改正を図るための運用体制を整備し、これらを実施することにより、本学の教育研究の目的及び使命を達成し、もって教育研究の質的水準の維持・向上に寄与することを目的とする。

3. 活動実績

①令和4年度埼玉医科大学ポリシー等策定委員会（令和4年10月18日）

於：カタロスタワー7階コンシリウムホール（Zoom併用） 出席23人 委任状出席4人

議事：現況報告（現行の使命・ポリシー、大学機関別認証評価受審結果、医学教育分野別認証受審結果）ののち、全学の3ポリシー策定について提案がなされ、意見交換を行った。議事録は整備されている。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

今年度は大学機関別認証評価の受審結果を踏まえ、全学における3ポリシー案を策定し、検討を開始した。医学部ではポリシー改定ワーキンググループを立ち上げ、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、コンピテンシーの見直しに着手した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

今年度の委員会にて検討した内容をもとに全学 3 ポリシー案の修正を行い、次回の委員会に提示する。医学部のポリシー等についても中教審のガイドラインに沿ったものに改定すべく見直しを進める。

以上

1. 19) 大学運営会議

1. 構成員

- 議長 別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 吉本 信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 松下 祥 (MATSUSHITA, Shou) : 副学長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 副学長・医学研究科長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副学長・医学部長・医学教育センター長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 加藤木 利行 (KATOGLI, Toshiyuki) : 保健医療学部長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 学長特別補佐 (任期 : R5. 3. 31)
委員 千田 みゆき (CHIDA, Miyuki) : 看護研究科長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 門野 夕峰 (KADONO, Yuho) : 学生部長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IRセンター長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部長 (任期 : R5. 3. 31)

2. 目的・目標

本会議は、埼玉医科大学運営会議規則に則り、全学的な教学マネジメントの体制を整備推進することを目的とする。
また、審議事項は以下のとおりである。

- (1) 教育課程の編成等に係る基本方針の策定に関する事。
- (2) 教育研究活動の基本方針に関する事。
- (3) 学生の修学指導の基本方針に関する事。
- (4) 教育研究活動の内部質保証に関する事。
- (5) その他本学の教育課程、教育研究活動等の重要事項に関する事。

3. 活動実績

①第 52 回 定例会議 (令和 4 年 5 月 10 日) 丸木記念館 7F 会議室 出席 12 人 欠席なし
議事

- ・令和 3 年度事業報告案について
- ・両学部共通・合同カリキュラム、医学部保健医療学部合同 IPE について
- ・全学共通データサイエンス AI 学修プログラムについて
- ・世界大学ランキング日本版結果について
- ・教育力向上プログラム 2022 教材案について
- ・研究マインド支援 Grant 「両学部における共通部門」募集要項について
- ・令和 3 年度医学研究科博士課程学位授与者および修士課程学位審査結果について
- ・令和 4 年度大学院委員会構成員および医学研究科委員会構成員について
- ・医学研究科博士課程早期修了に関する申し合わせについて
- ・埼玉医科大学全学での 3 ポリシー策定について
- ・医学教育分野別評価指摘事項の対応計画について
- ・令和 3 年度医学部 IR レポートおよび保健医療学部 IR レポートについて
- ・新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について 他

②第 53 回 定例会議 (令和 4 年 7 月 12 日) 丸木記念館 7F 会議室 出席 11 人 欠席 1 人
議事

- ・大学運営会議開催時期および審議内容について
- ・学生生活指導部課長相当者研修会について
- ・埼玉医科大学ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーについて
- ・埼玉医科大学 IR センター規程改定について
- ・埼玉医科大学自己点検・評価委員会規則、埼玉医科大学医学部自己点検・評価委員会規則改定について
- ・埼玉医科大学医学部教員組織運営会議規則改定について 他

- ③第54回 定例会議（令和4年9月6日） 丸木記念館 7F 会議室 出席12人 欠席なし
議事
- ・令和4年度 医学部・保健医療学部 合同教授・教員総会について
 - ・第5次長期総合計画「挑戦」策定に係る組織体制について
 - ・令和4年度研究拠点形成費等補助金（ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業）について
 - ・数理・データサイエンス・AI教育について
 - ・連携大学院について
 - ・医学教育分野別評価の認定結果について
 - ・教育の質に係る客観的指標・私立大学等改革総合支援事業について 他
- ④第55回 定例会議（令和4年11月1日） 丸木記念館 7F 会議室 出席12人 欠席なし
議事
- ・令和4年度中間事業報告書教育研究部門について
 - ・埼玉医科大学全学共通データサイエンスAI学修プログラムについて
 - ・埼玉医科大学両学部横断的カリキュラムについて
 - ・「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成」事業の協定締結式について
 - ・埼玉大学との包括連携について
 - ・大学院生を対象とする研究倫理教育の実施について
 - ・社会実装を目的とした教育の実施について
 - ・第3回「オール埼玉医大 研究の日」について
 - ・令和4年度第1回全学自己点検・評価委員会について
 - ・令和4年度埼玉医科大学ポリシー等策定委員会について
 - ・令和4年度私立大学等改革総合支援事業・教育の質に係る客観的指標の配点区分表について 他
- ⑤第56回 定例会議（令和5年1月10日） 丸木記念館 7F 会議室 出席12人 欠席なし
議事
- ・成長分野をけん引する大学・高専の機能強化に向けた基金による継続的支援について
 - ・大学設置基準等改正について
 - ・データサイエンスAI学修プログラム運営委員会について
 - ・全学共通データサイエンスAI学修プログラム運営委員会の構成員について
 - ・日本のMayo Clinicを目指す会全体集会について
 - ・埼玉医科大学 IRセンター運営会議規則改正について
 - ・大学機関別認証評価受審準備小委員会名簿、医学教育分野別評価受審準備小委員会名簿について
 - ・令和4年度卒業式実施案について
 - ・埼玉医科大学のあゆみ展示パネルについて
 - ・大学運営会議 開催時期および審議内容について
- ⑥第57回 定例会議（令和5年3月7日） 丸木記念館 7F 会議室 出席12人 欠席なし
議事
- ・令和5年度事業計画書 教育・研究部門について
 - ・令和5年度FD・SD活動に係る目標等について
 - ・教学マネジメント指針追補（概要）について
 - ・医学部等教育・働き方改革支援事業について
 - ・科研費採択率について
 - ・化学物質管理について
 - ・令和5年度 保健医療学部入学試験について
 - ・IRセンター報告について
 - ・埼玉医科大学アセスメント・ポリシー、アセスメント・プランについて
 - ・令和4年度医学部6年生学修成果の自己評価調査結果について
 - ・令和4年度医学部卒業時満足度調査結果について
 - ・令和4年度「私立大学等改革総合支援事業」の選定結果について 他

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本学の内部質保証推進のために当会議の位置づけを再確認し、関連委員会等の開催日程等を踏まえた審議、対応を進めた。また、前年度からの継続課題である新型コロナウイルス感染症に伴う授業方針の変更等への対応に加え、両学部で実施するデータサイエンス AI 学修プログラムの申請に向けた取り組みや新たな補助金獲得申請等を審議した。全学における教育研究活動の方針等を検討しており、その役割を十分に果たしたと評価できる。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

全学自己点検・評価委員会と共に、PDCA サイクルの実行性確立のための協議を進める。

以上

1. 20) 学校法人埼玉医科大学FD・SD統括委員会

1. 構成員

委員長	別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長 (任期: R5. 3. 31)
副委員長	茂木 明 (MOGI, Akira) : 法人事務局長 (任期: R5. 3. 31)
委員	松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長・リサーチアドミニストレーションセンター長 (任期: R5. 3. 31)
委員	木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 副学長・医学研究科長 (任期: R5. 3. 31)
委員	森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副学長・医学部長・医学教育センター長 (任期: R5. 3. 31)
委員	三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長・医療人育成支援センター長 (任期: R5. 3. 31)
委員	竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (任期: R5. 3. 31)
委員	加藤木 利行 (KATOGLI, Toshiyuki) : 保健医療学部長 (任期: R5. 3. 31)
委員	千田 みゆき (CHIDA, Miyuki) : 看護学研究科長 (任期: R5. 3. 31)
委員	篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomi) : 大学病院病院長 (任期: R5. 3. 31)
委員	別宮 好文 (BEKKU, Yoshifumi) : 総合医療センター病院長 (任期: R5. 3. 31)
委員	佐伯 俊昭 (SAEKI, Toshiaki) : 国際医療センター病院長 (任期: R5. 3. 31)
委員	屋嘉比 康治 (YAKABI, Koji) : かわごえクリニック院長 (任期: R5. 3. 31)
委員	久保 かほる (KUBO, Kaoru) : 短期大学副学長 (任期: R5. 3. 31)
委員	片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : 医学研究センター長 (任期: R5. 3. 31)
委員	藤巻 高光 (FUJIMAKI, Takamitsu) : 国際交流センター長 (任期: R5. 3. 31)
委員	椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IRセンター長 (任期: R5. 3. 31)
委員	内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部長 (任期: R5. 3. 31)
委員	相田 香 (AIDA, Kaoru) : 短期大学事務部長 (任期: R5. 3. 31)
委員	内田 尚男 (UCHIDA, Hisao) : 総務部長 (任期: R5. 3. 31)
委員	小山 格 (KOYAMA, Itaru) : 総合企画部長 (任期: R5. 3. 31)
委員	武藤 光代 (MUTO, Mitsuyo) : 総看護部長 (任期: R5. 3. 31)
ワザパー	諸田 一雄 (MOROTA, Kazuo) : 埼玉医療福祉会法人事務局長 (任期: R5. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は学校法人埼玉医科大学FD・SD統括委員会運営規則第2条に則り、全学的SDの実施を統括することを目的としている。

今年度はFD・SDそれぞれ以下の目標を掲げ活動した。

○FD人材育成の目標

- ・本学の専任教員全員が、建学の理念、大学の使命・教育目的等を理解していること
- ・すべての教員が必要な資質と教育能力をもつようにすることで、本学の教育のレベルを向上させること
- ・大学院博士課程在籍学生が修了後に自らが有する学識を教授するために必要な基礎的な教育理論、手法を身につけること

○SD人材育成の目標

- ・本学の専任教職員全員が、建学の理念、大学の使命・教育目的等を理解していること
- ・すべての教職員が必要な資質と業務遂行能力をもつようにすることで、本学の教育のレベルを向上させること

3. 活動実績

①第1回 対面会議 ※Zoom併用ハイブリッド開催 (令和4年6月28日) 於: 本部棟2階会議室

出席23人 欠席0人

- 議事: 1 令和3年度第2回 学校法人埼玉医科大学FD・SD統括委員会議事要旨
2 令和4年度第1回 学校法人埼玉医科大学FD・SD統括委員会幹事会議事要旨
3 令和4年度FD・SD統括委員会構成員について
4 令和4年度FD・SD統括委員会幹事会構成員について
5 FD・SD統括委員会運営規則の一部変更について
6 令和4年度全学的FD・SDへの取組みについて
1) 日本のメイヨークリニックを目指す会全体集会について
2) オール埼玉医大研究の日について
7 令和3年度FD活動実績報告及び令和4年度FD活動の計画について
8 令和3年度SD活動実績報告及び令和4年度SD活動の計画について

②第2回 対面会議 ※Zoom併用ハイブリッド開催 (令和5年2月27日) 於: カタロスタワー7階コンシリウムホール

出席22人 欠席1人

- 議事: 1 令和4年度第1回 (通算第7回) 学校法人埼玉医科大学FD・SD統括委員会議事要旨
2 令和4年度FD・SD統括委員会構成員について
3 令和4年度FD・SD統括委員会幹事会構成員について
4 令和5年度FD活動に係る目標等について

- 5 令和5年度SD活動に係る目標等について
- 6 令和4年度部門別研修に係る年間計画・実績表及び令和5年度部門別年間計画表の提出について
- 7 オール埼玉医大研究の日の実施について
- 8 令和4年度の教員のFD活動について
- 9 令和4年度の教職員のSD活動について
- 10 日本の Mayo Clinic を目指す会 企画・運営 WG について

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

全学的SD活動の柱の1つである日本のメイヨークリニックを目指す会をより良い運動として展開していくため、ワーキンググループで検討・企画を重ねた。令和5年6月10日に全体集会を開催する計画を立て、特別講演や総合討論等を含めた具体的なプログラムの方針を決定した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

日本のメイヨークリニックを目指す会をより良い運動として展開していくため、ワーキンググループで検討・企画を継続し、全体集会の開催を目指す。また、全学的FD・SDプログラムの受講率の更なる向上を目指し啓発活動を重ねる。

1. 21) 学校法人埼玉医科大学中央倫理審査委員会

1. 構成員（任期：R6.3.31）

委員長 藤原 恵一 (FUJIWARA, Keiichi)：国際医療センター婦人科腫瘍科：客員教授
副委員長 小林 国彦 (KOBAYASHI, Kunihiko)：リサーチアドミニストレーションセンター：教授
 神山 信也 (KOHYAMA, Shinya)：国際医療センター脳血管内治療科：教授
委員 西川 亮 (NISHIKAWA, Ryo)：国際医療センター脳脊髄腫瘍科：客員教授
 山田 健人 (YAMADA, Taketo)：医学部病理学：教授
 上條 吉人 (KAMIJO, Yoshito)：大学病院臨床中毒科：教授 (R4.1～)
 大野 洋一 (OHNO, Yoichi)：医学部社会医学：客員教授
 天野 宏一 (AMANO, Koichi)：総合医療センターリウマチ・膠原病内科：教授
 東 守洋 (HIGASHI, Morihiro)：総合医療センター病理部：准教授
 佐竹 美千子 (SATAKE, Michiko)：国際医療センター看護部 (～R5.3)
 山崎 力 (YAMAZAKI, Tsutomu)：国際福祉大学未来研究支援センター：センター長/教授
 藤田 朋恵 (FUJITA, Tomoe)：獨協医科大学薬理学：教授
 藤原 紀子 (FUJIWARA, Noriko)：東京大学医科学研究所附属病院 緩和医療科・先端臨床腫瘍科：特任研究員
 野木 尚郎 (NOGI, Hisao)：浦和サライ法律事務所：弁護士
 古川 隆 (FURUKAWA, Takashi)：株式会社ABC：代表取締役
 井上 晶子 (INOUE, Akiko)：立教大学観光研究所：特任研究員/杏林大学：特任講師
事務局 佐藤 勝茂 (SATO, Katsushige)：リサーチアドミニストレーションセンター：課長 (兼担)
 福永 由佳 (FUKUNAGA, Yuka)：リサーチアドミニストレーションセンター：課員 (兼担)
 中島 奈月 (NAKAJIMA, Natsuki)：リサーチアドミニストレーションセンター：課員 (兼担)
 長田 佐絵 (NAGATA, Sae)：リサーチアドミニストレーションセンター：課員 (兼担)
 宿谷 学 (Shukuya, Manabu)：リサーチアドミニストレーションセンター：課員 (兼担)

2. 目的・目標

「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針(令和3年文部科学省・厚生労働省・経済産業省告示第1号。以下「倫理指針」という。)」により、多機関共同研究の倫理審査は、原則一括審査とすることと規定された。本委員会は、学内および外部機関からの多機関共同研究の中央一括審査の審査を専門に行う委員会として、令和3年6月30日に設置された。倫理指針に基づき実施される多機関共同研究の審査にあたっては、学校法人埼玉医科大学中央倫理審査委員会規則に則る。

3. 活動実績

(1) 委員会開催日

- ①第6回委員会 (令和4年6月28日) 毛呂山キャンパス 第2ビル1階 RAC 前会議室 出席12名 欠席4名
- ②第7回委員会 (令和4年7月26日) 毛呂山キャンパス 第2ビル1階 RAC 前会議室 出席15名 欠席1名
- ③第8回委員会 (令和4年8月23日) 毛呂山キャンパス 第2ビル1階 RAC 前会議室 出席15名 欠席1名
- ④第9回委員会 (令和4年11月22日) 毛呂山キャンパス 第2ビル1階 RAC 前会議室 出席14名 欠席2名
- ⑤第10回委員会 (令和4年12月20日) 毛呂山キャンパス 第2ビル1階 RAC 前会議室 出席13名 欠席3名
- ⑥第11回委員会 (令和5年1月24日) 毛呂山キャンパス 第2ビル1階 RAC 前会議室 出席14名 欠席2名
- ⑦第12回委員会 (令和5年2月21日) 毛呂山キャンパス 第2ビル1階 RAC 前会議室 出席11名 欠席5名
- ⑧第13回委員会 (令和5年3月28日) 毛呂山キャンパス 第2ビル1階 RAC 前会議室 出席14名 欠席2名

(2) 主な審議内容

変更申請5件、継続審査4件、実施状況報告2件、重篤な有害事象報告3件の審査意見業務を行った。詳細は、埼玉医科大学中央倫理審査委員会ホームページ (<http://www.saitama-med.ac.jp/medlinks/rinri/irb/index.html>) および研究倫理審査委員会報告システム (<https://rinri.niph.go.jp/>) 参照。

(3) 教育活動

中央倫理審査委員会委員および事務局の教育・研修・情報収集の一環として以下に参加した。

- ・ 生命科学・医学系研究等における個人情報の取扱い等に関する合同会議傍聴 (2022年6月2日、9月22日、2023年1月26日)
- ・ 第65回医学系大学倫理委員会連絡会議 (2022年6月24日～25日)
- ・ 臨床研究研修会 (2022年9月9日、10月18日)
- ・ 日本臨床研究試験学会 教育セミナー「第8回倫理審査委員会を考える！どうなる？IC取得と試料・情報の取扱い～個情法改正に伴う指針改正の影響～」 (2022年10月8日)

- ・ 第 66 回医学系大学倫理委員会連絡会議（2022 年 12 月 16 日～17 日）
- ・ 第 14 回日本臨床試験学会学術集会（2023 年 2 月 9 日～10 日）
- ・ 令和 4 年度 厚生労働省 治験・倫理審査委員会委員研修（2023 年 2 月 19 日、25 日）
- ・ 第 8 回研究倫理を語る会（2023 年 3 月 4 日）

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- ・ 個人情報保護法の改正に伴い倫理指針が一部改正されたため（令和 4 年 3 月 10 日）、全キャンパスの研究者向けに、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針改正説明会」を開催した。この指針改正に伴い、規則および手順書の見直しや運用の再点検を行った。
- ・ 臨床研究中核病院をはじめとする他のアカデミアの動向を見ながら、対外的な通知書類の体裁の見直しを行った。
- ・ 生命科学・医学系研究等における個人情報の取扱い等に関する合同会議の傍聴、各研修会等へ参加し、倫理指針改正に関する情報収集、R5 年 4 月の倫理指針改正への対応を行った。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

- ・ 来年度も倫理指針が一部改正されるため、規則および手順書の見直しや運用の再点検を行う。また、全キャンパスの研究者向けに倫理指針の改正点に関する説明会（web 形式）を開催する。
- ・ 被験者保護の観点、審査の質担保と向上および委員・事務局員の教育のため、積極的に外部研修会へ参加・促進する。

1. 22) 全学共通データサイエンス AI 学修プログラム 運営委員会

1. 構成員

委員長	鈴木 正	(SUZUKI, Sei) : 医学部教養教育 : 准教授 (任期 : R6. 11. 31)
副委員長	茅野秀一	(KAYANO, Hidekazu) : 保健医療学部臨床検査学科 : 特任教授 (任期 : R6. 11. 31)
委員	小林直樹	(KOBAYASHI, Naoki) : 保健医療学部臨床工学科 : 教授 (任期 : R6. 11. 31)
委員	國澤洋介	(KUNISAWA, Yosuke) : 保健医療学部理学療法学科 : 教授 (任期 : R6. 11. 31)
委員	松坂充子	(MATSUZAKA, Atsuko) : 保健医療学部看護学科 : 講師 (任期 : R6. 11. 31)
委員	是村利幸	(KOREMURA, Toshiyuki) : 保健医療学部共通教育部門 : 講師 (任期 : R6. 11. 31)
委員	近藤有寛	(KONDO, Arihiro) : 大学事務部医学部事務室 : 課長 (任期 : R6. 11. 31)
委員	細田さなえ	(HOSODA, Sanae) : 大学事務部医学部事務室 (任期 : R6. 11. 31)
委員	佐藤志音	(SATO, Shion) : 大学事務部医学部事務室 (任期 : R6. 11. 31)
委員	岡田一観	(OKADA, Kazumi) : 大学事務部保健医療学部事務室 : 課長補佐 (任期 : R6. 11. 31)
委員	青木正人	(AOKI, Masato) : 大学事務部保健医療学部事務室 : 係長 (任期 : R6. 11. 31)
協力委員	中島孔志	(NAKAJIMA, Koshi) : 保健医療学部臨床工学科 : 講師
協力委員	脇田政嘉	(WAKITA, Masayoshi) : 保健医療学部臨床工学科 : 講師
協力委員	大村一之	(OMURA, Kazuyuki) : 保健医療学部臨床検査学科 : 講師
協力委員	水谷諭史	(MIZUTANI, Satoshi) : 保健医療学部臨床検査学科 : 講師
アドバイザー	森 茂久	(MORI, Shigehisa) : 医学部長、教育担当副学長、医学教育センター長 : 教授

2. 目的・目標

本委員会は数理・データサイエンス・AI 教育認定制度に基づき、数理・データサイエンス・AI の基礎的な能力を育成するため、本学の医学部及び保健医療学部の学生に必要な知識及び技術を体系的に習得させる埼玉医科大学全学共通データサイエンス AI 学修プログラム (以下「プログラム」という。) の円滑かつ適切な運営を確保するとともに必要な改善を図り、本学の教育水準の向上に寄与することを目的とする。今年度は令和 4 年度より始まったプログラムの適切な運営を行い、数理・データサイエンス・AI 教育認定制度 (以下「認定制度」という。) に応募するために必要な準備を整えることを目標として活動した。

3. 活動実績

- ①第 1 回 定例会議 (令和 4 年 11 月 29 日) 於 : Zoom 出席 11 人 欠席 (正規委員) 3 人
議事 : 今年度の取り組みに関する自己点検について、大学自己点検・評価委員会に提出する資料の作成について打ち合わせた。来年度のシラバスについて確認した。また、数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアムへの参加、および私立大学等経常費特別補助の要件について協議した。議事録あり。
- ②第 2 回 定例会議 (令和 5 年 2 月 6 日) 於 : Zoom 出席 10 人 欠席 (正規委員) 1 人
議事 : 委員会を奇数月に開催することを決めた。認定制度に申請するにあたり、文科省に提出する書類の作成の分担について協議した。議事録あり。
- ③第 3 回 臨時会議 (令和 5 年 2 月 24 日) 於 : Zoom 出席 9 人 欠席 (正規委員) 2 人
議事 : 大学自己点検・評価委員会に提出する資料について承認した。ただし、時期的な事情により、まだ取りまとめが終わっていない項目については、終わり次第更新することとした。プログラム修了認定証について協議した。また、文科省に提出する書類について協議した。議事録あり。
- ④第 4 回 定例会議 (令和 5 年 3 月 15 日) 於 : Zoom 出席 9 人 欠席 (正規委員) 2 人
議事 : 大学自己点検・評価委員会において、今年度のプログラムの取り組みに関する資料が承認されたことが報告された。認定制度への申請にあたり、提出書類の準備状況、ホームページの更新について検討した。議事録あり。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本委員会は、数理・データサイエンス・AI 教育検討ワーキンググループが母体となり、令和 4 年 11 月に発足した。構成員は両学部の教員と職員からなっており、会議は Zoom を用いてオンラインで行われた。今年度は、4 回の会議を開催した。本委員会の主な目的は、医学部及び保健医療学部の両学部で実施されるプログラムを運営することである。また今年度は、次年度に予定されている認定制度への申請に向けたさまざまな準備を行うことも計画されていた。プログラムは今年度から始まり、大きなトラブルもなく 1 年目を終えることができた。プログラムの実施状況、履修者数および修得者数は大学自己点検・評価委員会で承認され、ホームページ (<http://www.saitama-med.ac.jp/medlinks/dsai/index.html>) で学外に公開されている。認定制度申請の準備については、本委員会の設置をはじめとして、履修者数・修得者数の集計、ホームページへの情報の掲載、申請書類の作成などを行った。プログラム運営と申請準備に関して計画されていたことは達成できたと考えている。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度には認定制度への申請が計画されている。認定要件を確実に満たすよう準備した上で申請を行い、次年度中に認定を得ることを目指す。申請の締め切りは令和 5 年 5 月であり、認定の発表は令和 5 年 8 月中である。

ところで、生成的 AI の発展など、データサイエンス AI を取り巻く環境は時々刻々変化している。令和 4 年度改訂の医学教育モデルコアカリキュラムには情報・科学技術を活かす能力という項目が新設された。本委員会にはこのような環境の変化に対応してプログラムを改善していくことが求められる。実データの使用や生成的 AI の説明など、環境変化に対応した教育内容を令和 6 年度のプログラムに取り入れるよう、令和 5 年度中に本委員会で議論を行う。

本委員会は会議を奇数月に開くこととしているが、これまで会議の度に日程調整を行っていた。次年度はある程度日程を固定して会議を開催したい。

2. 1) 大学院委員会

1. 構成員（任期：2024年3月31日）

議長 学長 別所正美 (BESSHO, Masami)	
委員 (埼玉医科大学大学院学則第 33 条 1 号、3 号構成員)	
別所正美 (BESSHO, Masami)	学長, 理事
(埼玉医科大学大学院学則第 33 条 2 号)	
木崎昌弘 (KIZAKI, Masahiro)	医学研究科長, 副学長
千田みゆき (CHIDA, Miyuki)	看護学研究科長, 看護学科長
(埼玉医科大学大学院学則第 33 条 3 号)	
吉本信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo)	理事
棚橋紀夫 (TANAHASHI, Norio)	理事
小山 勇 (KOYAMA, Isamu)	理事
堤 晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko)	理事
(埼玉医科大学大学院学則第 33 条 5 号構成員)	
松下 祥 (MATSUSHITA, Sho)	副学長, ゲノム所長
森 茂久 (MORI, Shigehisa)	副学長, 医学部長, 医学教育センター長
三村俊英 (MIMURA, Toshihide)	副学長, 医療人育成支援センター長
竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu)	副学長
加藤木利行 (KATOHI, Toshiyuki)	保健医療学部長
高橋健夫 (TAKAHASHI, Takeo)	副医学部長, 医学研究科博士課程運営委員長
小林直樹 (KOBAYASHI, Naoki)	医学研究科修士課程運営委員長
野田智子 (NODA, Tomoko)	看護学研究科修士課程運営委員長
片桐岳信 (KATAGIRI, Takenobu)	医学研究センター長
篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomi)	大学病院長
別宮好文 (BEKKU, Yoshifumi)	総合医療センター病院長
佐伯俊昭 (SAEKI, Toshiaki)	国際医療センター病院長
持田 智 (MOCHIDA, Satoshi)	図書館長
(埼玉医科大学大学院学則第 33 条 4 号構成員)	
永島雅文 (NAGASHIMA, Masabumi)	医学研究科博士課程選出代表指導教員
解良恭一 (KAIRA, Kyoichi)	医学研究科博士課程選出代表指導教員
椎橋実智男 (SHIIBASHI, Michio)	医学研究科博士課程選出代表指導教員
赤坂清和 (AKASAKA, Kiyokazu)	医学研究科修士課程選出代表指導教員
大賀淳子 (OGA, Junko)	看護学研究科修士課程選出代表指導教員
事務局等	
◇大学事務部	
堀江正人 (HORIE, Masahito)	保健医療学部事務室 室長
下田裕子 (SHIMODA, Yuko)	医学部事務室 課長
山口明美 (YAMAGUCHI, Akemi)	保健医療学部事務室 係長
新井博志 (ARAI, Hiroshi)	医学部事務室 課長補佐
鳥海佳代 (TORIUMI, Kayo)	医学部事務室 主任
菅沢彩花 (SUGASAWA, Ayaka)	医学部事務室

2. 目的・目標

本委員会は、医学研究科及び看護学研究科を統括する役割の委員会として、各研究科の連絡調整に関する事項、学部等その他の機関との連絡調整に関する事項等の審議にあたることを目的としている。

3. 活動実績

◇委員会の開催

令和 5 年 3 月 14 日

◇主な内容と審議結果

(医学研究科博士課程)

- (1) 学位取得者 39件 (甲種24件、乙種15件) の報告
- (2) 令和4年度後期入学大学院入学者選抜試験及び令和5年度前期入学大学院第1回、第2回入学者選抜試験の実施と合否判定

の報告

- (3) 第81, 82回埼玉医科大学大学院医学研究科語学試験実施と合否判定の報告
- (4) 研究発表会(4月22日、5月20日、6月17日、9月16日、10月21日、11月5日)の実施報告
- (5) 国立がん研究センターと連携大学院協定を締結し、客員教授(2名)、客員准教授(2名)を委嘱した。
- (6) 本学退職後も異動後の外部機関で研究を継続している場合に、博士課程研究生の在籍期間が2年に満たなくとも、医学研究科委員会が認めれば、学位申請を許可することとし、運用細則を改正した。
- (7) 早期修了条件を検討している。
- (8) 医学研究科の第5次長期総合計画を策定した。
- (9) 私立大学等改革総合支援事業「社会実装の推進」に対応する講義を、次年度から最新医学特別講義に2コマ設置することとした。

(医学研究科修士課程)

- (10) 学位取得者9件(生体機能科学分野2件、生体医工学分野1件、理学療法学分野6件)の報告
- (11) 令和5年度大学院医科学専攻修士課程第1回、第2回入学者選抜試験の実施と合否判定の報告
- (12) 中間発表会(5月21日)、研究発表会(11月12日)の実施報告
- (13) 教員のためのFDを開催した(11月12日)。
- (14) 「オール埼玉医大研究の日」において、3課程から1名ずつ研究発表を行った。

(看護学研究科修士課程)

- (15) 学位取得者4件(地域活動看護学領域1件、成人看護学領域2件、小児看護学領域1件)の報告
- (16) 令和5年度大学院看護学専攻修士課程第1回・第2回入学者選抜試験の実施と合否判定の報告
- (17) 科目等履修生申請者1名を合格とした。
- (18) 授業評価に基づき、ベストティーチャーを表彰した。今後に向けて質問用紙の内容について検討している。
- (19) 修了生アンケート結果について検討した。
- (20) 令和5年度学生募集要項について検討した。
- (21) 第4次長期総合計画の検証を行った。
- (22) 新たに企画する修了生の会の検討を行った。
- (23) がんプロ・インテンシブコース研修を主催するにあたり、準備している。
- (24) 「オール埼玉医大研究の日」において、3課程から1名ずつ研究発表を行った。
- (25) 第5次長期総合計画を策定した。
- (26) 修了予定者研究発表会(11月26日)、第1回研究計画発表会(M1)(12月10日)の実施報告
- (27) 教員のためのFDを開催した(3月13日)。

(全体)

- (28) 新型コロナウイルス感染症防止対策を講じた上で、入学式を開催した。また、4年振りとなる学位記授与式を、初めて博士課程、医科学専攻修士課程、看護学専攻修士課程合同による開催を予定している。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

本年度も報告及び活発な意見交換がなされ、両研究科を統括する委員会として適正な運営が行われ十分機能した。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

来年度も更に連携を強化し運営に努めていく。

2. 2) 大学院医学研究科委員会

1. 構成員

(第 454 回-第 464 回)

議長 木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 医学研究科長、副学長、内科学 : 教授

◇役職指定者 (大学院研究科委員会運営規則第2条1号構成員)

木崎昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 医学研究科長

別所正美 (BESSHO, Masami) : 学長

松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長

※木崎昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 副学長

森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副学長

三村俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長

竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長

※森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学部長

高橋健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 医学研究科博士課程運営委員長

小林直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 医学研究科修士課程運営委員長

※森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育センター長

片桐岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : 医学研究センター長

※松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : ゲノム医学研究センター所長

坂本 安 (SAKAMOTO, Yasushi) : 中央研究施設長

篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomi) : 大学病院長

堤 晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko) : 総合医療センター病院長 (7月まで) 研究科長推薦、理事 (9月より)

別宮好文 (BEKKU, Yoshifumi) : 総合医療センター病院長 (9月より)

佐伯俊昭 (SAEKI, Toshiaki) : 国際医療センター病院長

藤巻高光 (FUJIMAKI, Takamitsu) : 国際交流センター長

椎橋実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 情報技術支援推進センター長

◇科目責任者 (大学院研究科委員会運営規則第2条2号構成員)

生物・医学研究系

永島雅文 (NAGASHIMA, Masabumi) : 解剖学

池田正明 (IKEDA, Masaaki) : 生理学

村越隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 生化学

奥田晶彦 (OKUDA, Akihiko) : ゲノム基礎医学

堀江公仁子 (HORIE, Kuniko) : ゲノム応用医学

淡路健雄 (AWAJI, Takeo) : 薬理学

佐々木惇 (SASAKI, Atsushi) : 病理学

村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 微生物学)

※松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 免疫学

藤原智徳 (FUJIWARA, Tomonori) : 生体機能科学

※小林直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 生体医工学

社会医学研究系

亀井美登里 (KAMEI, Midori) : 社会医学

高田 綾 (TAKADA, Aya) : 法医学

※森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育学

臨床医学研究系

高橋直樹 (TAKAHASHI, Naoki) : 血液内科学

久保田寧 (KUBOTA, Yasushi) : 輸血・細胞移植学

大野秀明 (OHNO, Hideaki) : 感染症科・感染制御学

畝川芳彦 (SEGAWA, Yoshihiko) : 腫瘍内科学

荒井隆秀 (ARAI, Takahide) : 循環器内科学

- 永田 真 (NAGATA, Makoto) : 呼吸器内科学
- ※三村俊英 (MIMURA, Toshihide) : リウマチ・膠原病内科学
- 持田 智 (MOCHIDA, Satoshi) : 消化器・肝臓内科学
- 今枝博之 (IMAEDA, Hiroyuki) : 消化管内科学
- 島田 朗 (SHIMADA, Akira) : 内分泌・糖尿病内科学
- 山元敏正 (YAMAMOTO, Toshimasa) : 神経内科学
- 岡田浩一 (OKADA, Hirokazu) : 腎臓内科学
- 中元秀友 (NAKAMOTO, Hidetomo) : 総合内科学
- 鈴木孝明 (SUZUKI, Takaaki) : 心臓血管外科学
- ※篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomi) : 消化器外科学
- 大崎昭彦 (OSAKI, Akihiko) : 乳腺腫瘍学
- 田中裕次郎 (TANAKA, Yujiro) : 小児外科学
- 中山光男 (NAKAYAMA, Mitsuo) : 呼吸器外科学
- 秋岡祐子 (AKIOKA, YUKO) : 小児科学
- 亀井良政 (KAMEI, Yoshimasa) : 産科婦人科学
- 松尾幸治 (MATSUO, Koji) : 精神医学
- 常深祐一郎 (TSUNEMI, Yuichiro) : 皮膚科学
- 門野夕峰 (KADONO, Yuhu) : 整形外科
- ※藤巻高光 (FUJIMAKI, Takamitsu) : 脳神経外科学
- 朝倉博孝 (ASAKURA, Hirotaka) : 泌尿器科学
- 蝦原康宏 (EBIHARA, Yasuhiro) : 耳鼻咽喉科学
- 篠田 啓 (SHINODA, Kei) : 眼科学
- 北村 晶 (KITAMURA, Akira) : 麻酔学
- 小澤栄人 (KOZAWA, Eito) : 放射線医学
- 佐藤 毅 (SATO, Tsuyoshi) : 口腔外科学
- 時岡一幸 (TOKIOKA, Kazuyuki) : 形成外科学
- 倉林 均 (KURABAYASHI, Hitoshi) : リハビリテーション医学
- 赤坂清和 (AKASAKA, Kiyokazu) : 理学療法学
- 高橋孝郎 (TAKAHASHI, Takao) : 緩和医療学
- 海老原康博 (EBIHARA, Yasuhiro) : 臨床検査医学
- 澤野 誠 (SAWANO, Makoto) : 救急医学
- 川井信孝 (KAWAI, Nobutaka) : 医療安全管理学
- 沼倉周彦 (NUMAKURA, Chikahiko) : ゲノム医療学
- 上條吉人 (KAMIJO, Yoshito) : 臨床中毒学
- 解良恭一 (KAIRA, Kyoichi) : 臨床腫瘍学
- ※木崎昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 連携大学院臨床基礎医学
医科学研究系
- ※藤原智徳 (FUJIWARA, Tomonori) : 生体機能科学 (臨床検査学)
- ※奥田晶彦 (OKUDA, Akihiko) : 生体機能科学 (ゲノム)
- ※小林直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 生体医工学
- ※赤坂清和 (AKASAKA, Kiyokazu) : 理学療法学
- ◇その他選出者 (大学院研究科委員会運営規則第2条3号構成員)
- 棚橋紀夫 (TANAHASHI, Norio) : 研究科長推薦、理事
- 小山 勇 (KOYAMA, Isamu) : 研究科長推薦、理事
- 千本松孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : 研究科長推薦
- 増谷 聡 (MASUTANI, Satoshi) : 研究科長推薦
- 持木彫人 (MOCHIKI, Erito) : 研究科長推薦
- 小谷典弘 (KOTANI, Norihiro) : 研究科長推薦
- 計 : 69 名 定足数 : 46名 (4月～7月)
70 名 定足数 : 47名 (9月～3月)

・事務局等

◇オブザーバー:

吉本信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長

◇大学事務部

内田和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 部長

江口幹也 (EGUCHI, Mikiya) : 副部長

堀江正人 (HORIE, Masahito) : 保健医療学部事務室 室長

岩澤昌人 (IWASAWA, Masato) : 医学部事務室 課長 (6月まで)

近藤有寛 (KONDO, Arihiro) : 医学部事務室 課長 (7月より)

下田裕子 (SHIMODA, Yuko) : 医学部事務室 課長

村田正樹 (MURATA, Masaki) : 医学部事務室 課長

新井博志 (ARAI, Hiroshi) : 医学部事務室 課長補佐

山口明美 (YAMAGUCHI, Akemi) : 保健医療学部事務室 係長

鳥海佳代 (TORIUMI, Kayo) : 医学部事務室 主任

菅沢彩花 (SUGASAWA, Ayaka) : 医学部事務室

<任期> 令和4年4月1日～令和6年3月31日

2. 目的・目標

大学院医学研究科委員会は、新しい教員組織の「教育・研究組織」の基、大学院教育の最高決議機関として、運営全般に関わる重要事項を審議することを目的とする。

3. 活動実績

1. 委員会の開催：以下の通り開催した。

第454回：令和4年4月22日 出席58人 欠席11人 学位審査：博士3件 審査設置：博士1件

議事：学位審査報告、学位審査委員会設置、学位申請に関する相談願、国立がん研究センターとの連携大学院打ち合わせ、研究発表会、大学院入試日程の確認、修士課程中間発表会、ティーチングアシスタント申請、大学院委員会構成員等について。

第455回：令和4年5月20日 出席51人 欠席18人 学位審査：博士2件 審査設置：博士3件

議事：学位審査報告、学位審査委員会設置、学位申請に関する相談願、学位規則のうち博士に関する運用細則の改訂、研究発表会、特別協力研究員受託等について。

第456回：令和4年6月17日 出席50人 欠席19人 学位審査：博士1件（早期修了該当者）

議事：学位審査報告、博士課程早期修了に関する申し合わせの見直し、ベストティーチャー賞、授業評価、研究発表会、大学院入試日程の確認、大学院生の退学、特別協力研究員受託、学生数等について。

第457回：令和4年7月15日 出席58人 欠席11人 学位審査：博士3件 審査設置：博士2件

議事：学位審査報告、学位審査委員会設置、専攻分野と科目・大学院基本学科、ティーチングアシスタント申請等について。

第458回：令和4年9月16日 出席63人 欠席7人 学位審査：博士2件 審査設置：博士1件

議事：学位審査報告、学位審査委員会設置、学位申請に関する相談願、大学院入学試験・語学試験合否判定、研究発表会、年報、連携大学院、第5次長期総合計画策定、特別研究学生受託、特別協力研究員受託、大学院委員会構成員等について。

第459回：令和4年10月21日 出席56人 欠席14人 審査設置：博士2件

議事：学位審査委員会設置、研究発表会、連携大学院協定書、「オール埼玉医大研究の日」発表者、大学院修了者等、改革総合支援事業「社会実装の推進」への対応、修士課程教員用FDの実施、大学院学生数等について。

第460回：令和4年11月18日 出席57人 欠席13人 学位審査：博士2件 審査設置：博士3件

議事：学位審査報告、学位審査委員会設置、連携大学院客員教員の選定、特別研究学生受託、修士課程研究発表会、入試日程等について。

第461回：令和4年12月16日 出席60人 欠席10人 学位審査：博士3件 審査設置：博士2件、修士9件

議事：学位審査報告、学位審査委員会設置、学位申請に関する相談願、連携大学院協定、特別協力研究員受託、大学院教員の資格要件等に関する規則の改訂、医学研究科看護学研究科合同学位記授与式等について。

第462回：令和5年1月27日 出席59人 欠席11人 学位審査：博士4件 審査設置：博士8件

議事：学位審査報告、学位審査委員会設置、学位申請に関する相談願、大学院入学試験・語学試験合否判定、入学辞退者の確認、研究発表会等について。

第463回：令和5年2月24日 出席59人 欠席11人 学位審査：博士1件、修士9件 審査設置：博士1件

議事：学位審査報告、学位審査委員会設置、学位申請に関する相談願、研究発表会等について。

第464回：令和5年3月24日 出席58人 欠席12人 学位審査：博士8件

議事：学位審査報告、学位申請に関する相談願、令和5年度大学院関連委員会の構成員、専攻分野と科目・大学院基本学科、大学院修了者等、特別協力研究員受託、長期履修生申請、大学院委員会、日本学生支援機構奨学金返還免除候補者選考報告、医学研究科看護学研究科合同学位授与式、大学院入学式、学生数等について。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

大学院医学研究科委員会は、大学院学生の入学、修了認定に関すること、授業、研究指導に関すること、学位審査に関すること、などが主たる審議事項である。令和4年度も従来通りこれらの審議および検討を、独立した大学院組織として行った。令和3年度は、大学院改革の一貫として導入した大学院4年生を対象に行っている研究成果報告会が定着し、多くの教員の参加のもとに質の高い議論が行われた。その結果、研究成果を学位申請論文としてまとめる一助になったと考えられ、引き続き医学研究科として大学院生の学位申請を応援していきたいと考えている。また、多様な人材を育成することを目的に、学位申請資格をより広い範囲に広げた結果、徐々に多職種からの学位申請も増えつつあるのが現状である。また、多くの分野の研究が進行しており、その一貫として令和4年度は、大学院基本学科に「臨床中毒学」を新設した。一方で、学位審査は大学院のダイプロマポリシーに基づき公正、厳格に行われており、学位審査の質的低下はないと考えている。指導教員の資格の厳格化を検討しているが、研究不正から研究者および大学を守るためにも論文剽窃検知ソフト「iThenticate」を導入し、学位申請論文の質の担保を図るシステムを2019年4月投稿論文から導入することとした。学位申請をThesis論文にて行った場合に、本学図書館にリポジトリとして掲載されているが、論文形式での記録が残らないため、Thesis論文を、原著論文ではないと断った上で埼玉医科大学雑誌への掲載を再開したことも、学位取得者にとって意義あることである。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度については、引き続き魅力ある大学院を目指し、さらに第4次長期総合計画の柱でもある本学の国際化を大学院教育から進めていきたい。学位授与に関してはより公正で客観的な評価を行い、研究倫理のより一層の徹底と独創性のある研究活動を活発に行うことを推奨していきたい。今後開始される、第5次長期総合計画「挑戦」を念頭に、大学院としてもより一層の教育の質向上を目指したいと考えている。そのためにも、指導教員の質をいかに向上させるかは、重要な課題であるとともに早急に改善する必要がある。指導教員資格の見直しやFDを行うことで、大学院生の指導力強化を図りたいと考えている。

2. 3) 大学院看護学研究科委員会

1. 構成員

委員長 千田みゆき (CHIDA, Miyuki) : 研究科長 : 教授 : 代表指導教員 : 地域活動看護学 : 博士(任期 : R5. 3. 31)

委員 別所正美 (BESSHO, Masami) : 学長 : 教授 : 内科学, 血液内科学 : 博士(任期 : R5. 3. 31)

加藤木利行 (KATOHI, Toshiyuki) : 保健医療学部長 : 教授 : 外科学, 小児心臓外科学 : 博士(任期 : R5. 3. 31)

小山政史 (OYAMA, Masafumi) : 教授 : 医学教育センター選出委員 : 泌尿器腫瘍科 : 博士(任期 : R5. 3. 31)

野田智子 (NODA, Tomoko) : 教授 : 代表指導教員 : 小児看護学 : 博士(任期 : R5. 3. 31)

大賀淳子 (OGA, Junko) : 教授 : 代表指導教員 : 精神保健看護学 : 博士(任期 : R5. 3. 31)

粟生田友子 (AOUA, Tomoko) : 教授 : 代表指導教員 : 成人看護学 : 博士(任期 : R5. 3. 31)

大森智美 (OOMORI, Tomomi) : 教授 : 指導教員 : ヒューマン・セクシュアルティ : 修士(任期 : R5. 3. 31)

2. 目的・目標

看護学研究科委員会は、埼玉医科大学大学院学則第 37 条～40 条に則り、看護学研究科の学生の入学、卒業、課程の修了、学位の授与、教育に関する重要な事項で研究科委員会の意見を聞くことが必要なものとして学長が定めるもの、学長等がつかさどる教育に関する事項について審議し、学長の求めに応じて意見を述べることを目的とする。

3. 活動実績

(1) 第 130 回定例会議 (令和 4 年 4 月 28 日) 於 : 保健医療学部 2 階会議室 出席 7 人 欠席 1 人

議事 : ①入学式および式後の新入生ガイダンス実施報告

②履修登録状況及び令和 3 年度後期科目の単位取得科目の確認

③4 月の研究計画発表会の発表学生の確認

④令和 3 年度大学院委員会報告

⑤令和 4 年度大学院入学試験関連日程、各委員会の開催日程、学位審査等の日程の確認と承認

⑥令和 4 年度入学生の確認

⑦令和 4 年度科目等履修生志願者の合否判定

⑧第 5 次長期総合計画看護学研究科ワーキンググループメンバーの選出と承認

(2) 第 131 回定例会議 (令和 4 年 5 月 26 日) 於 : 保健医療学部 2 階会議室 出席 7 人 欠席 1 人

議事 : ①令和 5 年度募集要項の検討と承認

②高度実践看護師のフォローアップ研修担当者の承認

③自己点検・評価委員会から学生による授業評価の結果および表彰教員の承認報告

(3) 第 132 回定例会議 (令和 4 年 6 月 23 日) 出席 7 人 欠席 1 人

議事 : ①学位論文製本作成の進捗状況の報告

②第 3 期がんプロフェッショナル医療人材養成コース終了後の今年度のインテンシブコースの開催を検討した旨の報告

③令和 5 年度入学試験作成マニュアルの確認及び問題作成担当者および準備スケジュールの確認

④「オール埼玉医大研究の日」発表学生への検討 ⑤第 4 次長期総合計画検証報告提出の報告

(4) 第 133 回定例会議 (令和 4 年 7 月 28 日) 於 : 保健医療学部 2 階会議室 出席 7 人 欠席 1 人

議事 : ①令和 5 年度学生募集要項配布の報告

②入試問題作成スケジュールの確認

③11 月の修了予定者研究発表会を修了生に公開することについての承認

④がんプロインテンシブコースの開催準備の報告

⑤令和 5 年度入学試験出願審査の結果 1 名の合格を承認

⑥令和 3 年度ベストティーチャー賞の表彰

(5) 第 134 回定例会議 (令和 4 年 9 月 22 日) 於 : 保健医療学部 2 階会議室 出席 7 人 欠席 1 人

議事 : ①第 4 次長期総合計画検証報告の承認

②がんプロインテンシブコースの進捗状況の報告

③「修了生の会」開催の進捗状況の報告

④令和 5 年度第 1 回入学試験について 2 名合格の承認

⑤第 5 次長期総合計画看護学研究科サブ WG で検討した計画案及び数値目標の説明と承認

- (6)第 135 回定例会議（令和 4 年 10 月 27 日）於：保健医療学部 2 階会議室 出席 6 人 欠席 2 人
 議事：①研究発表会および研究計画発表会の日程の確認
 ②がんプロインテンシブコースの進捗状況の報告
 ③「修了生の会」開催の進捗状況の報告
 ④自己点検・評価委員会における学生による授業評価と修了生アンケートの質問用紙の変更の承認
- (7)第 136 回定例会議（令和 4 年 11 月 24 日）於：保健医療学部 2 階会議室 出席 6 人 欠席 2 人
 議事：①事務よりシラバスの作成依頼
 ②令和 5 年度大学院関係委員会の日程および入学選抜試験日程の承認
 ③学位論文審査の日程と審査手順、審査基準の確認
 ④学位論文審査委員の担当の承認
 ⑤1 名の入学願書出願資格審査を行い、前職在職証明書の追加提出による勤務年数確認ののち、認定することを承認
- (8)第 137 回定例会議（令和 4 年 12 月 22 日）於：保健医療学部 2 階会議室 出席 7 人 欠席 1 人
 議事：①令和 5 年度第 2 回入学試験関連日程及び出願予定者の確認
 ②「修了生の会」、研究発表会、研究計画発表会の終了報告
 ③修了予定者 4 名の学位論文審査申請資格の確認と学位論文審査委員会の設置の承認
 ④がんプロインテンシブコースの進捗状況の報告
 ⑤看護学研究科 FD の検討
 ⑥埼玉医科大学大学院の教員の資格要件等に関する規則の改正についての承認
 ⑦出願資格審査申請者より辞退の申し出があった旨の報告
- (9)第 138 回定例会議（令和 5 年 1 月 26 日）於：保健医療学部 2 階会議室 出席 7 人 欠席 1 人
 議事：①令和 5 年度第 2 回入学試験出願者なしの報告
 ②看護学研究科 FD の日程と内容の確認
 ③がんプロインテンシブコースの開催日程の確認
 ④令和 5 年度研究発表会及び研究計画発表会の日程の確認
 ⑤令和 5 年度科目等履修生募集要項の確認と承認
- (10)第 139 回定例会議（令和 5 年 2 月 22 日）於：保健医療学部 2 階会議室 出席 8 人 欠席なし
 議事：①学位論文提出者 4 名の審査を行い 4 名の合格を承認
 ②次年度看護学研究科運営委員長、大学院委員会委員の選出と承認
 ③第 3 回看護学研究科自己点検・評価委員会として、学生による授業評価、修了生アンケートの用紙の変更、および入学試験に関する振り返りの報告
- (11)第 140 回定例会議（令和 5 年 3 月 16 日）於：保健医療学部 2 階会議室 出席 8 人 欠席なし
 議事：①令和 5 年度入学予定者 2 名の専門領域と指導教員の確認
 ②4 名の修了生の単位取得の確認と修了の承認
 ③研究科 FD の準備状況の確認
 ④令和 5 年度入学式、ガイダンス、授業開始、4 月の研究計画発表会の確認
 ⑤令和 5 年度大学院関係委員会日程及び学位論文審査日程の承認
 ⑥令和 5 年度看護学研究科委員会ならびに運営委員会の構成員の承認
 ⑦令和 5 年度学位申請論文作成・提出・審査の手引きの検討
 ⑧がんプロインテンシブコースの終了報告

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

看護学研究科委員会は、委員の協力の下、目的に沿って円滑に運営することができたと考えます。

前年度の年報で改善計画にあげた第 3 期がん専門医療人材養成プランインテンシブコース終了後の公開講座開催のための組織づくりの目標は達成し、Web による研修を 2 回行うことができた。また、第 5 次長期総合計画について看護学研究科ワーキンググループで検討し策定することができた。「オール埼玉医大研究の日」への看護学研究科学生の参加が要請され、1 名が発表した。高度実践看護師（精神看護）教育課程を修了した学生のフォローアップ研修を実施したが、合格はできなかった。修了生の修了後の継続研修のための組織づくりとして、「修了生の会」を立ち上げ、修了予定者研究発表会への参加を公開した。修了予定学生による研究論文発表会及び低学年学生による研究計画発表会、

教員のFDは予定通り実施できた。令和4年度は修了生4名の論文審査を行い、全員に学位(看護学修士)を授与した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

引き続き、新型コロナウイルス感染症の状況に応じて、委員会の目的に沿って円滑な運営に努める。

高度実践看護師(がん看護・精神看護)教育課程の円滑な運営を行う。また、「修了生の会」との連携を強め、修了生の継続的な学習を支援する体制を作ることを目指す。

2. 4) 大学院博士課程入学・語学試験委員会

1. 構成員

委員

木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 医学研究科長、副学長、内科学 : 教授
高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 博士課程運営委員長、放射線医学 : 教授
(問題作成委員)

片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : 博士課程運営委員会選出 ゲノム基礎医学 : 教授
門野 夕峰 (KADONO, Yuho) : 医学研究科委員会選出 整形外科学 : 教授
解良 恭一 (KAIRA, Kyoichi) : 博士課程運営委員会選出 内科学 : 教授
澤野 誠 (SAWANO, Makoto) : 医学研究科委員会選出 救急医学 : 教授
(ブラッシュアップ委員)

チャド・ゴッドフリー (Chad L. GODFREY) : 医学研究科長推薦、教養教育 : 准教授
(オブザーバー)

永島 雅文 (NAGASHIMA, Masabumi) : 医学研究科長推薦、解剖学 教授

事務局 (大学事務局)

下田 裕子 (SHIMODA, Yuko) : 医学部事務室 課長
新井 博志 (ARAI, Hiroshi) : 医学部事務室 課長補佐
鳥海 佳代 (TORIUMI, Kayo) : 医学部事務室 主任
菅沢 彩花 (SUGASAWA, Ayaka) : 医学部事務室

<任期> 令和4年4月1日～令和6年3月31日
(問題作成委員は平成24年度より2年を目安に半数を改選)

2. 目的・目標

本委員会は医学部大学院博士課程入学希望者の選抜および語学試験受験者の資格認定のために適切な英語による試験を実施し、大学院博士における研究の推進や乙種学位論文の提出に際して必要な学力を考査することを目的とする。

3. 活動実績

委員会の開催：以下の通り開催した。

- 第1回定例会議 (令和4年7月5日) 本部棟2階会議室 出席7人 欠席1人
議事：問題作成、問題内容確認、ブラッシュアップ、試験監督の決定について。
第2回定例会議 (令和4年8月2日) Zoom会議 出席8人 欠席0人
議事：問題内容確認、ブラッシュアップ、試験監督の確認について。
第3回定例会議 (令和4年9月6日) 本部棟2階会議室 出席8人 欠席0人
議事：試験実施報告、採点結果報告、合格基準の検討 (令和4年8月27日実施 試験監督 門野、片桐)
第4回定例会議 (令和4年11月8日) 本部棟2階会議室 出席6人 欠席2人
議事：問題作成、問題内容確認、ブラッシュアップについて。
第5回定例会議 (令和4年12月6日) 本部棟2階会議室 出席7人 欠席1人
議事：問題内容確認、ブラッシュアップ、試験監督の決定について。
第6回定例会議 (令和5年1月17日) Zoom会議 出席7人 欠席1人
議事：試験実施報告、採点結果報告、合格基準の検討 (令和5年1月7日実施 試験監督 高橋、解良)

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

平成22年度より問題作成ワーキンググループにおいて「大学院博士課程入学試験・語学試験実施手順」を策定し、厳格な出題基準に関するルールのもとに語学試験を実施することとしている。今年度も語学試験委員のうち問題作成委員の半数を入れ替えることにより出題傾向に偏りのないよう配慮するとともに、臨床医学や特定の領域に偏重することのないよう、あくまでも医学英語の試験であると出題方針を明確にした。外国人受験生にも配慮し、問題文からすべて英語で出題することとしているが、ブラッシュアップ委員として教養教育 (英語) Godfrey 准教授に加わっていただいている。委員会では作成委員より詳細な出題意図や出典等の説明の後に、Godfrey 委員による校正をはじめとして、問題作成委員、オブザーバーと連携することで活発な議論がなされ良質な作問がなされるとともに、厳正な問題の確認が行われた。また、採点は問題作成委員により行なわれ、解答についての解析を行い、次回の問題作成の参考とした。さらに、平成25年度より開始された初期臨床研修医と社会人大学院生を学部卒業と同時に「研究マインド育成自由選択プログラム」の実行に合わせ、医学部学生3年生からも語学試験の受験は可能となり、制度の定着とともに学部学生の語学試験受験者も増加しており、本学の目指す研究マインド育成の基盤となりつつある。これらの改革により、受験者にとってより公平公正な語学試験が可能となり、大学院博士課程での研究を遂行する際の語学力を図る適正なシステムになったと評価される。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

引き続き、大学院生として研究を遂行し英文論文として情報発信できる能力を見極めるに必要な適切な語学試験となるように、問題の質の向上を目指したい。ここ数年の傾向として、語学試験を受験する学生の成績低下が顕著になっている。全ての学生が語学試験を受験しているわけではないが、受験する学生は将来大学院への進学を考えていることを考慮すると比較的優秀な学生が受験している可能性が高い。したがって、学生の英語能力の低下が懸念される。この点については、学部教育にも関与するため、英語教育に関する医学教育センターとの連携を図りたい。

2. 5) 大学院医学研究科博士課程運営委員会

1. 構成員

委員長

高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 博士課程運営委員長、放射線医学 : 教授

委員

木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 医学研究科長、副学長、内科学 : 教授

小林 直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 修士課程運営委員長、生体医工学 : 教授

椎橋実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IR センター : 教授

片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : ゲノム基礎医学 : 教授

永島 雅文 (NAGASHIMA, Masabumi) : 解剖学 : 教授

奥田 晶彦 (OKUDA, Akihiko) : ゲノム医学 : 教授

亀井 美登里 (KAMEI, Midori) : 社会医学 : 教授

岡田 浩一 (OKADA, Hirokazu) : 内科学 : 教授

三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長、内科学 : 教授

増谷 聡 (MASUTANI, Satoshi) : 小児科学 : 教授

解良 恭一 (KAIRA, Kyoichi) : 内科学 : 教授

大西 秀樹 (ONISHI, Hideki) : 精神医学 : 教授

森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副学長、医学部長、医学教育学 : 教授

松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長、免疫学 : 教授

持木 彫人 (MOCHIKI, Erito) : 外科学 : 教授

堀江 公仁子 (HORIE, Kuniko) : ゲノム医学 : 教授

佐々木 惇 (SASAKI, Atsushi) : 病理学 : 教授

オブザーバー

別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長、内科学 : 教授

竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長、内科学 : 教授

事務局 (大学事務部)

下田 裕子 (SHIMODA, Yuko) : 医学部事務室 課長

新井 博志 (ARAI, Hiroshi) : 医学部事務室 課長補佐

鳥海 佳代 (TORIUMI, Kayo) : 医学部事務室 主任

菅沢 彩花 (SUGASAWA, Ayaka) : 医学部事務室

<任期> 令和4年4月1日～令和6年3月31日

2. 目的・目標

本委員会は医学部大学院医学研究科博士課程における諸事に関わるすべての問題を審議し、審議結果を大学院学則第37条に規定される医学研究科委員会に答申する。すなわち、以下の事項について審議する。

1. 大学院生の入学、留学、休学、転学、退学、除籍及び賞罰に関する事項。
2. 医学研究科における授業及び研究指導に関する事項。
3. 大学院授業科目履修単位の認定に関する事項。
4. 学位論文の審査及び試問に関する事項。
5. その他、博士課程の運営に関わる事項。

以上の諸問題に関して協議、審議した結果を医学研究科委員会に諮ることで医学部大学院博士課程の円滑な運営を目的・目標とする。

3. 活動実績

1. 委員会の開催 : 以下の通り開催した。

第1回定例会議 (令和4年4月12日) 本部棟2階会議室 出席18人 欠席2人

議事 : 学位審査委員会報告、学位審査申請者の申請資格認定及び学位審査委員の選出、大学院運営組織確認、研究発表会、連携大学院 (国立がん研究センターとの打ち合わせ) について。

第2回定例会議 (令和4年5月10日) 本部棟2階会議室 出席19人 欠席1人

議事 : 学位審査委員会報告、学位審査申請者の申請資格認定及び学位審査委員の選出、研究発表会、連携大学院 (国立がん研究センターとの申し合わせ)、特別協力研究員受託について。

第3回定例会議 (令和4年6月7日) 本部棟2階会議室 出席18人 欠席2人

議事 : 学位審査委員会報告 (早期修了該当者)、入試募集要項、連携大学院、研究発表会、大学院生の退学、学生数、特別協力研究員受託について。

第4回定例会議 (令和4年7月5日) 本部棟2階会議室 出席20人 欠席0人

議事 : 学位審査委員会報告、学位審査申請者の申請資格認定及び学位審査委員の選出、専攻分野と基本学科、連携大学院 (国立がん研究センターとの連携教員の取り扱い) について。

- 第5回定例会議（令和4年9月6日）本部棟2階会議室 出席19人 欠席1人
議事：学位審査委員会報告、学位審査申請者の申請資格認定及び学位審査委員の選出、入学試験・語学試験判定、大学院運営組織確認、研究発表会、連携大学院（国立がん研究センターとの協定書）、特別研究学生受託、特別協力研究員受託について。
- 第6回定例会議（令和4年10月11日）本部棟2階会議室 出席17人 欠席3人
議事：学位審査申請者の申請資格認定及び学位審査委員の選出、研究発表会、「オール埼玉医大研究の日」発表者確認、連携大学院（国立がん研究センターとの協定書）、令和4年9月大学院修了者等、学生数について。
- 第7回定例会議（令和4年11月8日）本部棟2階会議室 出席19人 欠席1人
議事：学位審査委員会報告、学位審査申請者の申請資格認定及び学位審査委員の選出、連携大学院（国立がん研究センターとの客員教員の選定）、大学院入試日程、特別研究学生受託について。
- 第8回定例会議（令和4年12月6日）本部棟2階会議室 出席19人 欠席1人
議事：学位審査委員会報告、学位審査申請者の申請資格認定及び学位審査委員の選出、連携大学院（国立がん研究センターとの協定書締結）、大学院合同学位記授与式、次年度共通科目授業方法確認、特別協力研究員受託について。
- 第9回定例会議（令和5年1月17日）本部棟2階会議室 出席20人 欠席0人
議事：学位審査委員会報告、学位審査申請者の申請資格認定及び学位審査委員の選出、入学試験・語学試験判定、入学予定者辞退について。
- 第10回定例会議（令和5年2月14日）本部棟2階会議室 出席20人 欠席0人
議事：学位審査委員会報告、学位審査申請者の申請資格認定及び学位審査委員の選出、次年度委員会構成員の確認、次年度共通科目授業責任者変更の確認について。
- 第11回定例会議（令和5年3月14日）本部棟2階会議室 出席18人 欠席2人
議事：学位審査委員会報告、大学院各種委員会構成員の確認、専攻分野と基本学科、次年度研究発表会日程確認、令和5年度講義について、令和4年度大学院修了者等、令和5年度大学院学生数、次年度本委員会開始時刻の変更、特別協力研究員受託について。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本委員会は大学院博士課程運営に関する諸事を審議する委員会として、大学院博士課程をスムーズに運営するために多くの実務的な役割をこなし、医学研究科委員会の議を経て速やかに諸事を実行に移すことを目的に活動している。学位申請論文の倫理に関する規則のさらなる整備を図り、学位論文の質の担保を図るために細則を整備している。学位申請予定者（乙種）の研究歴に関しては、常勤教員を退職後の研究歴に関して細則を一部改訂した。教員の資格要件に関しても一部改訂した。大学院4年生を対象にした「研究成果報告会」は軌道に乗ってきたが、大学院生の年2回参加を必須としたことで、参加者数が増加し、議論がより活発化している。連携大学院に関しては国立がん研究センターと協定を締結した。今年度後期入学から制度が開始される。以上の様々な項目で改革を行い、着実に大学院の質向上と組織の整備が図れていると考えられる。第3期関東がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プランは昨年度で5年終了となったことにともない、本学の経費で活動が継続している。指導教員の資格に関する見直しは継続的に行っていく。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度以降も、これまで行ってきた本学に置ける研究マインドの醸成と質の高い研究の実践のための基盤整備をさらに推進し、本学大学院のポリシーを全学に周知することにより学生の選抜、教育、学位授与にいたる課程を明確にし、わかりやすく門戸の広い大学院を目指したことにより、定員充足率をさらに向上させ、国際化を推進し、本学の研究レベルのなお一層の向上を目標にしたい。次年度は早期終了要件の見直しや大学院FD（ホームページの充実、eラーニング）の充実をはかり、国立がん研究センターとの連携大学院制度を軌道に乗せる。

2. 6) 医学研究科自己点検・評価委員会

1. 構成員

委員長

木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 医学研究科長、副学長、内科学 : 教授

委員

高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 博士課程運営委員長、放射線医学 : 教授

小林 直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 修士課程運営委員長、生体医工学 : 教授

椎橋実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IR センター : 教授

片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : ゲノム基礎医学 : 教授

永島 雅文 (NAGASHIMA, Masabumi) : 解剖学 : 教授

奥田 晶彦 (OKUDA, Akihiko) : ゲノム医学 : 教授

亀井 美登里 (KAMEI, Midori) : 社会医学 : 教授

岡田 浩一 (OKADA, Hirokazu) : 内科学 : 教授

三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長、内科学 : 教授

増谷 聡 (MASUTANI, Satoshi) : 小児科学 : 教授

解良 恭一 (KAIRA, Kyoichi) : 内科学 : 教授

大西 秀樹 (ONISHI, Hideki) : 精神医学 : 教授

森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副学長、医学部長、医学教育学 : 教授

松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長、免疫学 : 教授

持木 彫人 (MOCHIKI, Erito) : 外科学 : 教授

堀江 公仁子 (HORIE, Kuniko) : ゲノム医学 : 教授

佐々木 惇 (SASAKI, Atsushi) : 病理学 : 教授

オブザーバー

別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長、内科学 : 教授

竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長、内科学 : 教授

事務局 (大学事務部)

下田 裕子 (SHIMODA, Yuko) : 医学部事務室 課長

新井 博志 (ARAI, Hiroshi) : 医学部事務室 課長補佐

鳥海 佳代 (TORIUMI, Kayo) : 医学部事務室 主任

菅沢 彩花 (SUGASAWA, Ayaka) : 医学部事務室

<任期> 令和4年4月1日～令和6年3月31日

2. 目的・目標

本委員会は埼玉医科大学自己点検・評価委員会規則第12条第2項の規定に基づき、大学院医学研究科における自己点検・評価に関わるすべての問題を審議する。すなわち、埼玉医科大学大学院医学研究科自己点検・評価委員会規則第6条に規定される以下の事項について審議し、審議結果を医学研究科委員会及び大学院委員会に答申する。

1. 研究科の自己点検・評価の基本方針及び実施に関すること。
2. 研究科の自己点検・評価の事項・項目に関すること。
3. 研究科の自己点検・評価の報告書の作成及び公表に関すること。
4. その他自己点検・評価に必要な事項に関すること。

以上の諸問題に関して協議、審議した結果を医学研究科委員会及び大学院委員会に答申することで、大学院医学研究科の円滑な運営を目的とする。

3. 活動実績

1. 委員会の開催 : 以下の通り開催した。

第1回定例会議 (令和4年4月12日) 本部棟2階会議室 出席18人 欠席2人

議事 : 学位審査申請に関わる相談願、学位規則のうち博士に関する運用細則の変更、大学院博士課程早期修了要件の見直しについて。

第2回定例会議 (令和4年5月10日) 本部棟2階会議室 出席19人 欠席1人

議事 : 学位審査申請に関わる相談願、学位規則のうち博士に関する運用細則の改訂について。

第3回定例会議 (令和4年6月7日) 本部棟2階会議室 出席18人 欠席2人

議事 : 授業評価と顕彰、大学院博士課程早期修了に関する申し合わせの見直しについて。

第4回定例会議 (令和4年7月5日) 本部棟2階会議室 出席20人 欠席0人

議事 : 大学院博士課程早期修了に関する申し合わせの見直しについて。

第5回定例会議 (令和4年9月6日) 本部棟2階会議室 出席19人 欠席1人

議事 : 学位審査申請に関わる相談願、大学院入学試験専門領域試験結果報告書様式、第5次長期総合計画策定、年報の

点検・評価ならびに次年度への提言について。

第6回定例会議（令和4年10月11日）本部棟2階会議室 出席17人 欠席3人

議事：私立大学等改革総合支援事業「タイプ4：社会実装の推進」への対応について。

第7回定例会議（令和4年11月8日）本部棟2階会議室 出席19人 欠席1人

議事：私立大学等改革総合支援事業「タイプ4：社会実装の推進」への対応、研究発表会への大学院生の出席について。

第8回定例会議（令和4年12月6日）本部棟2階会議室 出席19人 欠席1人

議事：学位審査申請に関わる相談願、大学院教員の資格要件等に関する規則の改訂、次年度研究発表会日程について。

第9回定例会議（令和5年1月17日）本部棟2階会議室 出席20人 欠席0人

議事：学位審査申請に関わる相談願、「オール埼玉研究の日」発表者確認、研究発表会への大学院生の出席について。

第10回定例会議（令和5年2月14日）本部棟2階会議室 出席20人 欠席0人

議事：学位審査申請に関わる相談願、大学院博士課程研究生入学時期、研究発表会への大学院生の出席について。

第11回定例会議（令和5年3月14日）本部棟2階会議室 出席18人 欠席2人

議事：学位審査申請に関わる相談願について。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本委員会は、大学院博士課程の運営に関する諸事を審議する委員会として設立され、大学院博士課程をスムーズに運営するために多くの実務的な役割をこなしている。本委員会は、医学研究科委員会の議を経て速やかに諸事を実行に移すことを目的に活動している。大学院4年生を対象に施行される「研究成果報告会」も軌道に乗り、多くの教員と議論を重ねることにより大学院生への指導がより強化され、発表および学位申請論文のレベルも向上している。今年度は、学位論文に相応しい論文の新たな基準を作成した。また指導教員資格の見直し、連携大学院の設置に関する検討にも着手している。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度以降も、これまで本委員会が行ってきた、本学における研究マインドの醸成と質の高い研究の実践のための基盤整備をさらに推進し、本学大学院のポリシーを全学に周知することにより、大学院の3つのポリシーに基づいた学生の選抜、教育、学位授与にいたる課程を明確にし、わかりやすく門戸の広い大学院を目指したことにより、定員充足率をさらに向上させ本学の研究レベルのなお一層の向上を目標にしたい。また、連携大学院の設置に関する検討を進める。さらに、指導教員の資格認定基準を改め、適切な大学院生の指導や学位審査を遂行できる人材を認定することにより、指導教員の資格の見直しを行い、本学の研究レベルの向上に努めたい。

2. 7) 大学院医学研究科修士課程運営委員会

1. 構成員

委員長	小林直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 生体医工学科目責任者兼務 (任期 : R5. 3. 31)
委員	椎橋実智男 (SHIBASI, Michio) : IRセンター長 (任期 : R5. 3. 31)
	加藤木利行 (KATOI, Toshiyuki) : 保健医療学部学部長 (任期 : R5. 3. 31)
	小谷典弘 (KOTANI, Norihiro) : 医学研究センター (任期 : R5. 3. 31)
	藤原智徳 (FUJIWARA, Tomonori) : 生体機能科学科目責任者 (任期 : R5. 3. 31)
	奥田晶彦 (OKUDA, Akihiko) : 生体機能科学 (ゲノム) 代表指導教員 (任期 : R5. 3. 31)
	赤坂清和 (AKASAKA, Kiyokazu) : 理学療法学科目責任者 (任期 : R5. 3. 31)
事務	堀江正人 : 保健医療学部次長
	山口明美 : 保健医療学部事務室係長

2. 目的・目標

本委員会は、医学研究科修士課程（医科学専攻）における教育目標を達成するために、学位審査を含めた学事、および課程の運営について実際的な問題点を審議し、医学研究科委員会、大学院委員会に適切な提案を行うことを目的とする。

今年度は、多くの入学者数の確保とともに、ティーチング・アシスタント充実、研究倫理の指導の充実、修士論文における研究内容の一層の充実に加え、修士課程教員向けのFDを実施して教員の指導力向上を目標として活動した。

3. 活動実績

本年度は計 11 回の委員会を保健医療学部C棟 2階 会議室 1 において開催した。（一部メール会議）

1) 第 1 回 (令和 4 年 4 月 19 日) 出席者 7 人 欠席者 0 人

議事 : ① 4 月 11 日 (月) に入学式及びオリエンテーションの実施および本年度ティーチングアシスタント (TA) の対象大学院生に向けたFDを実施した旨の報告があった。② 令和 4 年度修士課程中間発表会は 5 月 21 日 (土) 創立 30 周年記念講堂 1 階ホールにて実施することとなった。③ 生体医工学分野 1 年 2 名、2 年 1 名の TA 申請を審議・承認し、研究科委員会へ諮ることとした。

2) 第 2 回 (令和 4 年 5 月 17 日) 出席者 7 人 欠席者 0 人 (メール会議)

議事 : ① 5 月 21 日 (土) 実施予定の令和 4 年度中間発表会について、最終確認を行った。② 令和 5 年度学生募集要項について確認を行った。

3) 第 3 回 (令和 4 年 6 月 14 日) 出席者 7 人 欠席者 0 人

議事 : ① 令和 3 年度授業評価について、教員表彰の検討を行った結果、講義の評価では「リハビリテーション医療学概論」の授業科目責任者である乙戸崇寛教授を、研究発表会 (令和 3 年 11 月実施) の評価では「理学療法学特別研究」の新井智之准教授を表彰することで承認され、研究科へ諮ることとした。② 「オール埼玉医大研究の日」の参加について審議を行い、各分野より各 1 名の発表者を推薦することとなった。③ 令和 5 年度第 1 回入学者選抜試験の日程などについて確認を行った。

4) 第 4 回 (令和 4 年 7 月 12 日) 出席者 7 人 欠席者 0 人

議事 : ① 入学予定者の「指導教員届」について審議し、令和 5 年度より運用することが承認された。② 令和 4 年度の教員用FDは 11 月 12 日 (土) 研究発表会後に実施することで承認された。

5) 第 5 回 (令和 4 年 9 月 13 日) 出席者 6 人 欠席者 1 人

議事 : ① 令和 5 年度医科学専攻修士課程第 1 回入学試験について以下の審議をし、可否判定結果を研究科委員会へ諮ることとした。

- 第 1 回募集人員 8 名、志願者数 5 名 (生体機能分野 1 名、生体医工学分野 1 名、理学療法学分野 3 名)、受験者数 5 名、欠席者数 0 名であった。
- 合格基準は、筆記試験で 60 点以上かつ面接試験で D 以下の評価がないことを合格の目安とし総合的に判定した。
- 学力試験及び面接試験を総合判定し、5 名 (生体機能分野 1 名、生体医工学分野 1 名、理学療法学分野 3 名) を合格候補者とする。

② 令和 4 年度研究発表会を 11 月 12 日 (土) 9 : 00 ~ 15 : 00 創立 30 周年記念講堂 1 階ホールにて実施することが確認された。

6) 第 6 回 (令和 4 年 10 月 18 日) 出席者 6 人 欠席者 1 人

議事：①令和4年度修士課程研究発表会研究発表会プログラムの研究テーマ、進行等の最終案について確認した。
②修士課程教員用FDを11月12日（土）15：30～16：30 創立30周年記念講堂にて、「埼玉医科大学第5次長期総合計画「挑戦」における「研究」の進め方」と題し、松下副学長と千本松RAセンター長に講演いただくことが確認された。③「第3回オール埼玉医大 研究の日」発表者について確認された。④学位審査関係に日程について、学位申請論文提出を学位審査願の1週間後にする旨了承された。

⑦ 第7回（令和4年11月15日） 出席者7人 欠席者0人

議事：1) 学位論文の体裁について審議し、以下の点を確認して承認された。①文章中に図・表を表記する。②参考文献の表記方法について、ホームページからの引用は著作権上の問題を確認する。③略語は、一番初めに掲載するとき正式名称を記載し、カッコにて略語を表記する。④引用文献は埼玉医科大学雑誌投稿規定第4条に則る。

2) 令和5年度医科学専攻修士課程第2回募集入学試験について、日程・運用確認が行われた

⑧ 第8回（令和4年12月13日） 出席者5人 欠席者2人

議事：1) 令和4年度修士課程の学位審査申請者（9名：生体機能科学2名、生体医工学1名、理学療法学6名）の申請資格（一部要確認事項あり）を認め、令和2年度修士課程学位審査委員会の審査委員（主査1名、副査2名）の候補者を選定し、研究科委員会に諮ることとした。

2) 学位審査報告書（主査・副査用）について確認を行い昨年度同様にて承認された。

⑨ 第9回（令和4年1月24日） 出席者7人 欠席者0人

議事：1) 令和5年度医科学専攻修士課程第2回募集入学試験について以下の審議をし、合否判定結果を研究科委員会へ諮ることとした。

a. 募集人員若干名、志願者5名（生体機能分野1名、生体医工学分野1名、理学療法分野3名）、受験者数5名であった。

b. 合格基準については、筆記試験で60点以上かつ面接試験でD以下の評価がないことを合格の目安とし、総合的に判定した。

c. 学力試験及び面接試験を総合判定し、5名（生体機能分野1名、生体医工学分野1名、理学療法分野3名）を合格候補者とする。

⑩ 第10回（令和5年2月7日） 出席者6人 欠席者1人

議事：1) 修了予定者9名の履修状況について演習及び特別研究を含め修了要件を満たしていることが確認された。

2) 学位審査委員会の審査結果について報告が行われ、1)の結果とも合わせて、修了予定者9名の修士課程修了および学位（修士）の取得の要件を満たしていることを承認し、研究科委員会に諮ることとした。

⑪ 第11回（令和4年3月8日） 出席者7人 欠席者0人 （メール会議）

議事：1) 令和5年度より生体医工学分野の代表指導教員を若山俊隆教授へ、理学療法学分野の新井智之准教授を研究科長推薦にて運営委員会の委員への提案があり、運営委員会承認され、研究科委員科へ諮ることとなった。

2) 令和5年度入学予定者（1名）から長期履修生志願書が提出され、メール審議にて承認し研究科委員会へ諮ることとした。

3) 3月25日（土）博士課程、看護学研究科と合同にて修了式を実施予定であることが確認された。また、謝辞を修士課程から1名推薦することとなった

4) 令和5年度入学式およびオリエンテーションを4月11日（月）15：00～創立30周年記念講堂1階ホールにて博士過程、看護学研究科と合同にて実施予定であることを確認した。

5) 令和5年度大学院関係各委員会の日程（案）、学位審査等の日程（案）、令和5年度入学者選抜試験関連日程（案）について確認を行った。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- 引き続き大学院修士課程への入学者数一定レベルで定着し、堅調に伸びており、特に大学（学部）からの進学する学生も一定レベルで定着しつつある。一方、今年度は1年生、2年生に退学者が各1名ずつあり、入学時ならび入学後のきめ細かい指導が今後求められる。
- ティーチング・アシスタント（TA）については、入学時にFDを行い、結果TAへの希望者が一定数増えることとなった。結果、学生実験の補助を中心に教育者、研究者の養育の場としての有効活用が定着しつつある。
- 研究倫理の指導は、入学時に入学時のオリエンテーションを中心に行った。加えて、修士論文向けの倫理審査の重要性を大学院生に理解させ、必要に応じて教職員向けのe-learning（APRIN、ICR-Web）を大学院生にも受講させた。

- 4) 研究は「中間発表会」「研究発表会」を行うことで、学位審査が受けた 10 名は、学位審査前に十分な研究を進めるとともに、対外発表を行うなど質の高い研究結果を出して学位審査に合格し、修士課程を修了した。なお、修士論文の記述方法の様式を定め、統一された記述となった。
 - 5) 今年度も大学院修士課程教員に向けた独自のFD実施し、大学院の今後 5 か年計画でのあり方および研究倫理についての講演を通じて、充実したものとなった。
- 4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画
- 1) 入学者数は在学生の進学希望者、社会人希望者も一定レベルで定着しており、今後の入学者数を保つとともに、入学後の定着を含めた指導のあり方の改善を図る。
 - 2) ティーチング・アシスタントの内容を学生に定着させるために、TA 向けのFD内容を見直して充実させる。
 - 3) 研究倫理の指導は、今後も入学時に加えて、大学院生にも必要に応じて教職員向けの e-learning (APRIN, ICR-Web) を大学院生にも受講を定着させる。
 - 4) 研究は「中間発表会」「研究発表会」を通して、外部からの意見も反映させ、研究内容の一層の充実を図ることで、高度な研究・開発を遂行し、対外的にも発表できる内容を目指す。さらに研究遂行能力および英語能力向上を含む博士課程の人材育成ができる環境を充実させる。
 - 5) 好評であった大学院独自のFDをさらに充実させて実施する。特に、大学院教育での研究指導および学位審査のあり方について講師を選定し、修士課程の大学院教員向けのFDを実施する。

2. 8) 大学院看護学研究科修士課程運営委員会

1. 構成員

野田智子 (NODA, Tomoko) : 教授 : 看護学研究科運営委員長 : 代表指導教員 : 小児看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
千田みゆき (CHIDA, Miyuki) : 教授 : 看護学研究科長 : 代表指導教員 : 地域活動看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
小山政史 (OYAMA, Masafumi) : 教授 : 医学教育センター選出委員 : 泌尿器腫瘍科 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
大森智美 (OOMORI, Tomomi) : 教授 : 指導教員 : ヒューマン・セクシュアルティ : 修士 (任期 : R5. 3. 31)
大賀淳子 (OGA, Junko) : 教授 : 代表指導教員 : 精神保健看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
粟生田友子 (AOHDA, Tomoko) : 特任教授 : 代表指導教員 : 成人看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
山路真佐子 (YAMAJI, Masako) : 准教授 : 指導教員 : 地域活動看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
菊池トトセ (KIKUCHI, Chitose) : 准教授 : 指導教員 : 地域活動看護学 : 修士 (任期 : R5. 3. 31)
横山ひろみ (YOKOYAMA, Hiromi) : 准教授 : 代表指導教員 : 基礎看護学 看護管理学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
桜庭奈美 (SAKURABA, Nami) : 准教授 : 指導教員 : 成人看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)

2. 目的・目標

看護学研究科修士課程運営委員会は、学校法人埼玉医科大学委員会運営規則第4条2項に則り、大学院生の入学、留学、休学、転学、退学、除籍および賞罰に関する事項、課程における授業および研究指導に関する事項、授業科目履修単位の認定に関する事項、学位論文の審査に関する事項、研究科指導教員に関する事項等の提案等を行うことを目的とする。今年度は、がん看護学 CNS コースがスタートする。今年度は1年目となるので、動向を見ながら次年度運営の参考にしていく。大学院公開講座を検討する。科目等履修生の入学決定の流れをマニュアル化することを目標として活動した。

3. 活動実績

1) 第1回定例会議 (令和4年4月14日) 於 : 保健医療学部4階会議室

出席 9名 欠席 1名

議事 : ①新入生オリエンテーションの実施報告を行った。②令和4年度科目等履修生応募者はなしであった。③令和4年度の履修登録期間の確認を行った。④令和3年度後期科目の単位取得について確認を行った。⑤第2回研究計画発表会 (M2) について、4月30日 (土) 9:00 から6名について実施することを確認した。6名のうち雪吹院生は2年目のため発表予定ではないが、運営委員会にて検討し発表を行うことが承認された。しかし、基本的には大学院案内に掲載されている学位論文 (修士) 提出・審査のスケジュール (通常課程、長期履修生課程) に沿うことを確認した。⑥大学院委員会について報告を行った。⑦科目等履修生の合否判定を行った。面接の評価等を基に審議を行い、運営委員会にて承認された。⑧令和4年度看護学研究科看護学専攻入学者一覧を基に領域、指導教員等の確認を行った。⑨令和4年度大学院関係各委員会日程、学位審査等の日程、学事運営担当及び令和5年度入学選抜試験関連日程について最終確認を行った。⑩令和3年度の年報について、看護学研究科運営委員会、研究科委員会、自己点検評価委員会及び看護学研究科の年報確認の依頼を行った。⑪令和3年度看護学研究科のFDについて報告を行った。⑫大学院生の倫理審査時には指導教員も同席する方向になるとの情報提供があった。

2) 第2回定例会議 (令和4年5月19日) 於 : 保健医療学部4階会議室

出席 9名 欠席 1名

議事 : ①令和4年度単位取得状況・履修登録状況について確認を行った。②第14条特例に伴うタクシーチケットの申請の確認を行った。③令和5年度学生募集要項についての最終確認を行った。④第2回「オール埼玉医大研究の日」について、看護学研究科に参加の依頼があり、今後発表対象者検討することとなった。⑤CNS 受験生のフォローアップ研修について報告があった。⑥修了生に対する研修会の企画に向けて、看護学研究科公開講座として実施との提案があった。審議を行い、今年度は修了生を対象とした「修了生研修会」として開催することとなった。⑦学事運営担当に研修会係を追加し、今年度の担当を決めた。

3) 第3回定例会議 (令和4年6月16日) 於 : 保健医療学部4階会議室

出席 8名 欠席 2名

議事 : ①令和3年度修了生学位論文製本の進捗状況について確認した。②今年度のがんプロ・インテンシブコースについて、法人からの意向が伝えられ、今後検討することとなった。③令和5年度入学選抜試験の問題作成マニュアルについて確認を行った。④第2回「オール埼玉医大研究の日」発表者について、令和3年度修了生を第一候補者とした。⑤倫理審査の申請システムが変わる旨の情報があり確認を行った。

4) 第4回定例会議(令和4年7月14日)於:保健医療学部4階会議室

出席 7名 欠席 3名

議事: ①令和4年度学生募集要項配布先病院等のリストの確認を行った。②入試問題作成について依頼と出題会議の日程を決定した。③修了生研修会について、研究発表会に参加していただき、その後今後の在り方について修了生から意見を伺うことになった。案内状送付担当者を決定し8月中に送付することとなった。④がんプロ・インテンシブコースについて、本年度の開催はWebにて実施することを確認したうえで、7月29日(金)に病院側と打ち合わせすることとなった。⑤第5次長期総合計画について研究科長より説明があり、看護学研究科サブWG委員と開催日程を決定した。⑥大学院第1回募集において1名の出願資格審査の申請があり、出願資格審査の基準について確認を行った。学歴及び職歴について再度確認が必要であり至急確認することとなった。⑦第3回「オール埼玉医大研究の日」の発表者については、修了者でなく大学院在籍者であるとの意向が示され、研究の進捗状況を見て次回決定することとした。また、次年度以降のオール埼玉医大研究の日の参加を想定し、発表会の日程、学位審査に関する日程についても検討の必要があるとの意見があり、順次検討していくことにした。

5) 第5回定例会議(令和4年9月15日)於:保健医療学部4階会議室

出席 10名 欠席なし

議事: ①令和4年度前期科目の成績報告日について確認を行った。②第4次長期総合計画検証報告書についての確認を行い承認した。③令和3年度修了予定者について報告があり、確認を行った。④フォローアップ研修について第3回目の報告と、第4回目の説明があった。⑤令和5年度第1回募集入学者選抜者2名の合否判定を行い、2名の合格を承認し、研究科委員会へ諮ることとした。⑥第3回「オール埼玉医大 研究の日」の発表者を決定した。⑦研究科長より、第5次長期総合計画について、第1回サブWGでの意見を基に作成した計画を副学長へ提出したとの報告を行った。また、大学院教員の博士取得率は100%の目標設定の達成については、今後博士課程へ進学するための働きかけを考えていく必要があるという意見が出された。⑧令和4年度がんプロ・インテンシブコースについて打ち合わせを行い、テーマと開催日を決定した。⑨令和4年度後期のタクシーチケット希望者は無しであることを確認した。

6) 第6回定例会議(令和4年10月20日)於:保健医療学部4階会議室

出席 10名 欠席なし

議事: ①令和4年度前期科目の単位取得について確認を行った。②令和5年度第2回入学者選抜試験について日程等の確認を行った。③研究発表会及び第1回研究計画発表会(M1)についての日時、担当の確認を行った。④令和4年度がんインテンシブコースについて、今後の作業を進めるにあたっての役割分担を行った。⑤修了生研修会について、研究発表会参加に際しての留意事項を決めた。⑥令和5年度第2回募集について、日本国籍を有していない希望者の必要書類は事務が確認し、その後本人へ問い合わせすることを確認した。

7) 第7回定例会議(令和4年11月18日)於:保健医療学部4階会議室

出席 8名 欠席 2名

議事: ①学位審査関係の日程確認と提出書類の確認を行った。また、学位審査手続きの詳細について確認を行った。②令和5年度のシラバス作成の依頼を行った。③令和5年度大学院関係委員会の日程、令和5年度学位審査等の日程、令和5年度入学者選抜試験の日程についての確認を行った。④令和4年度学位審査の担当について審議し決定した。⑤第2回募集の1名の出願資格審査について、申請者は日本国籍を有していないことから、事前面接を実施し、日本語能力、日本での勤務年数、また母国での勤務状況について確認を行い、特に問題はなかった旨の報告をした。また、在留資格についても問題のないことを確認した。ただし、勤務経験については5年ぎりぎりであることから、前所属先からも在職証明書を提出してもらうこととした。⑥修了生研修会を「看護学研究科修了生の会」とし、当日の流れについて確認した。⑦研究計画発表会(M1)について、例年、研究計画発表会は午前で終了していたが本年度は研究計画発表会の発表者が多く、午後までかかることとなった。当日の3限目以降講義を予定していた領域もあることから、来年度は発表会が午後まで予定されることを考慮して講義日程を考えてもらうこととなった。

8) 第8回定例会議(令和4年12月15日)於:保健医療学部4階会議室

出席 9名 欠席 1名

議事: ①令和5年度第2回入学者選抜試験の日程と、出願予定者の確認を行った。②「看護学研究科修了生の会」についての実施報告を行った。③研究発表会と研究計画発表会(M1)の実施報告を行った。④令和4年度修了者の終了要件の確認を行い研究科委員会へ図ることとなった。⑤令和4年度の学位論文審査手順についての確認を行い承認された。⑥がんインテンシブコースの進捗状況について各役割の担当から報告があった。⑦令和4年度の修了式について、博士課程・修士課程合同にて実施予定であることを報告した。⑧外国籍の方に求めていた出願資格審査資料が期日までに提出されず、辞退の申し出があったことを報告した。

9) 第9回定例会議（令和5年1月17日）於：保健医療学部4階会議室

出席 10名 欠席 なし

議事：①シラバスチェックの依頼があり、日程等の確認を行った。②令和5年度第2回入学選抜試験について報告があった。③学位審査の進捗状況について報告した。令和5年度科目等履修生の募集についての確認を行った。④令和5年度研究発表会(M2)、研究計画発表会(M1)の日程について審議を行い、次年度は入学試験、学会等の予定を考慮し、研究発表会を令和5年12月2日(土)、研究計画発表会を令和5年4月22日(土)、令和5年12月16日(土)に行うこととした。⑤令和5年度学位審査等の日程(案)について、例年学位申請論文の提出期間が例年は3日間であるが、令和5年度は日祝の関係で5日間とした。⑥令和5年度科目等履修生の募集期間について、昨年の反省を踏まえて確認した。出願資格審査期間を令和5年2月1日(水)～15日(水)とし、16日(木)の運営委員会にて審議、24日(金)研究科委員会にて承認する。その後、出願期間は令和5年2月27日(月)～3月8日(水)とし、3月9日(木)の運営委員会にて審議、16日(木)研究科委員会にて承認とすることによって、履修生は4月からの前期科目より講義へ参加可能であることを確認した。⑦令和5年度の開講科目の確認について依頼を行った。⑧看護学研究科FDについて、日時、テーマ、目的、内容についての確認を行い承認された。⑨がんインテンシブコースについて、事前準備などの詳細の確認を行った。⑩運営委員会共有フォルダーを作成し、次年度に向けて、がんインテンシブコースなどの各役割の詳細について保存することとした。

10) 第10回定例会議（令和5年2月16日）於：保健医療学部4階会議室

出席 9名 欠席 1名

議事：①シラバスチェックの依頼をした。②令和4年度の学位審査報告書と学位論文が全て提出されたとの報告をした。③第11回学位記授与式の式典は3月25日(土)10:00から毛呂山キャンパスのカタロスタワーにて実施することを確認した。④令和5年度科目等履修生出願資格審査への出願者はいなかったことを報告した。⑤学部棟教室改修工事に伴い、看護学研究科ゼミ室は使用できないことを確認した。⑥教員一覧及び授業科目・担当教員一覧について確認を行った。⑦研究科長より、令和5年度の運営委員長と大学院委員会の委員について、次年度の運営委員長は大賀委員が、大学院委員会の委員は大森委員が行うとの報告があり運営委員会で承認され、研究科委員会へ諮ることとした。⑧「令和5年度学位申請論文作成・提出・審査の手引き」についての素案が提出され、次回の会議にて審議することとなった。⑨令和4年度看護学研究科FDについて、テーマ・目的・方法・プログラム等の再確認を行った。⑩第2回がんインテンシブコースについて、第1回目のアンケート回収率が悪かったことから方法を変更することにした。

11) 第11回定例会議（令和4年3月9日）於：保健医療学部4階会議室

出席 9名 欠席 1名

議事：①令和4年度の修了式を、令和5年3月25日(土)10:00より毛呂山キャンパスにて実施予定であり、式典への参加は修了生と修了生の指導教員のみとの報告をした。②令和5年度入学予定者について分野領域及び指導教員等の確認を行った。③入学式につて、4月10日(月)11:30より日高キャンパス創立30周年記念講堂にて医学研究科博士課程と合同で行うことを確認した。④前期開講科目の授業開始は、通常版が4月11日(火)、第14条特例は4月15日(土)であり、履修登録の締切は4月22日(土)であることを確認した。⑤令和4年度前期科目、第14条特例の時間割の確認を行った。次年度から、見やすさを考慮し、専門科目の2年次と1年次開講科目を区別できるように作成することとなった。⑥令和5年度かわごえクリニックの使用予定について、前期科目は4月28日(火)までに事務へ連絡するよう依頼した。⑦令和5年度大学院関係各委員会の日程(案)及び修士課程の学位審査等の日程について確認した。⑧令和5年度入学予定者の長期履修の志願者と令和5年度科目等履修生の募集についての出願者はいなかったことを報告した。⑨令和4年度修了予定者4名の単位取得状況について確認を行った。⑩令和5年度看護学研究科委員会及び運営委員会の委員について、運営委員長が大賀教授となり、基礎看護学・看護管理学の横山准教授と看護学科の丸井教授が研究科委員会の委員となるのが承認され、研究科委員会へ諮ることとなった。⑪令和5年度授業科目・担当教員について説明を行った。看護理論は新任の丸井明美教授が担当、臨床薬理学は牧野好倫非常勤講師へ変更となる。臨床薬理学について1名は新任の先生に担当をお願いする。また、小児看護学領域の野田智子教授が次年度より客員教授となる。⑫4月22日(土)実施予定の研究計画発表会は実施する。しかし、新入生の歓迎会は次年度も中止することとなった。⑬がんプロ・インテンシブコースについて大賀委員より報告があった。今回使用した資料は共有フォルダーにて保管することを確認した。⑭がんインテンシブコースのアンケート結果について報告を行った。アンケート結果は、各講師にもコメント部分について報告することとなった。⑮「令和5年度学位(修士)論文作成・提出・審査の手引き」について、一部修正することとなった。⑯令和5年度新生ガイダンスについて審議を行い、入学式と同日の4月10日(月)入学式後に続けて行うこととなった。なお、ガイダンスのスケジュール表の修士論文に関する日程記載については、わかりにくいため修正することとな

った。また、事務オリエンテーションは医学研究科と合同にて同日の10:00～行うことを確認した。⑰令和5年度の学事運営の役割担当を提示し確認された。最終的には4月に決定するが、M2の研究計画発表会は3月下旬より準備に入るため、担当の院生には、今年度中に担当教員を伝えることとなった。⑱令和4年度看護学研究科FDについて、プログラムとアンケートの一部修正をして実施することとなった。⑲3月25日(土)実施予定の大学院修了式にて各課程から謝辞を行うこととなった。看護学研究科では、地域活動看護学領域の川端泰子院生が推薦され、指導教員である千田研究科長が本人へ意思確認を行うこととなった。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- 1) 今年度からスタートしたがんCNSは順調に講義、演習、実習を進めることができた。
- 2) 科目等履修生が4月から授業に出席できるよう、募集から入学までの日程調整ができた。
- 3) コロナ感染で延期になっていた「看護学研究科修了生の会」を開催することができた。
- 4) 今年度は運営委員会が主催でがんインテンシブコースを開催した。
- 5) 「オール埼玉研究の日」に大学院生が参加し中間報告という形で発表することができた。
- 6) 第4次長期総合計画報告書を作成し、第5次長期総合計画書を作成することができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

- 1) 次年度は修了生が12名と人数が多いことから計画的に論文審査を進めていく。
- 2) オール埼玉医大研究の日の参加を視野に研究を進めていく。
- 3) がん看護学と精神保健看護学の院生のCNS試験合格に向けてフォローアップしていく。

2. 9) 大学院看護学研究科自己点検・評価委員会

1. 構成員

- 委員長 千田みゆき (CHIDA, Miyuki) : 研究科長 : 教授 : 代表指導教員 : 地域活動看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
- 委員 野田智子 (NODA, Tomoko) : 教授 : 看護学研究科運営委員長 : 代表指導教員 : 小児看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
- 小山政史 (OYAMA, Masafumi) : 教授 : 医学教育センター選出委員 : 泌尿器腫瘍科 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
- 大森智美 (OOMORI, Tomomi) : 教授 : 指導教員 : ヒューマン・セクシュアルティ : 修士 (任期 : R5. 3. 31)
- 大賀淳子 (OGA, Junko) : 教授 : 代表指導教員 : 精神保健看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
- 粟生田友子 (AOHDA, Tomoko) : 教授 : 代表指導教員 : 成人看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
- 山路真佐子 (YAMAJI, Masako) : 准教授 : 指導教員 : 地域活動看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
- 菊池チトセ (KIKUCHI, Chitose) : 准教授 : 指導教員 : 地域活動看護学 : 修士 (任期 : R5. 3. 31)
- 横山ひろみ (YOKOYAMA, Hiromi) : 准教授 : 代表指導教員 : 基礎看護学 看護管理学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)
- 櫻庭奈美 (SAKURABA, Nami) : 准教授 : 代表指導教員 : 成人看護学 : 博士 (任期 : R5. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は、埼玉医科大学自己点検・評価委員会規則第2条および第11条第2項に基づき設置され、埼玉医科大学大学院看護学研究科の研究教育等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果を公表し、もって本学の教育研究の水準の向上を図り、その目的及び使命を達成することを目的とし、埼玉医科大学大学院看護学研究科自己点検・評価委員会規則第5条に定める審議事項を審議する。

3. 活動実績

- 1) 第1回定例会議 (令和4年5月19日) 於 : 保健医療学部4階会議室 出席9人 欠席1人
議事 : ①令和3年度「学生による授業評価」集計結果の報告と改善策の検討
②令和3年度教員表彰対象者3科目3名の決定
③「修了生アンケート」の集計結果の報告と改善点の検討
- 2) 第2回定例会議 (令和4年10月20日) 於 : 保健医療学部4階会議室 出席10人 欠席なし
議事 : ①令和4年度「学生による授業評価」の内容を検討し、評価用紙のレイアウトを変更することとなった。
②「修了生アンケート」の内容を検討し、質問紙に直接回答する方法に変更することとなった。
③第5次長期総合計画の原稿を木崎副学長に提出した旨の報告
- 3) 第3回定例会議 (令和5年2月16日) 於 : 保健医療学部4階会議室 出席9人 欠席1人
議事 : ①「学生による授業評価」及び「修了生アンケート」の実施予定の報告
②令和4年度入学試験の振り返り

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

「学生による授業評価」の100%の回収率の維持と、「修了生アンケート」による学生からの意見聴取を改善計画の目標にあげていたが、目標は達成することができた。

今年度も「学生による授業評価」に基づき、高得点者に教員表彰を行い、教員の教育への意欲の維持向上に努めた。

「学生による授業評価」及び「修了生アンケート」の質問用紙を見直し、今年度はレイアウトを変更した。「学生による授業評価」の集計結果は委員会内で公表した。また、「修了生アンケート」を実施し、ディプロマポリシーを達成できていることを確認するとともに、修了生の図書館の利用希望に対し、図書館に修了生の利用が可能であることを確認するなど、PDCAサイクルに沿って運営した。以上から、看護学研究科自己点検・評価委員会は、その目的に沿って適切に運営することができたと考える。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

令和3年度「修了生アンケート」による意見を生かし、修了後の研究マインドの維持を図るため、今年度は研究発表会を修了生に公開するとともに、発表後に「修了生の会」を開催した。次年度も「修了生アンケート」により学生からの意見をくみ上げ、学習環境を整えることに努める。また、第5次長期総合計画の目標値としてあげた「学生による授業評価」の100%の回収率の維持を目指す。

3. 1) 教員代表者会議

1. 構成員（任期 R4. 4. 1～R6. 3. 31）

（第549回：R4. 4月～第559回：R5. 3月）

議長：森 茂久（MORI, Shigehisa）：医学部長（R4. 4より）

◇役職指定者（医学部教授会運営細則第2条1号～12号構成員）

別所正美（BESSHO, Masami）：学長

木崎昌弘（KISAKI, Masahiro）：医学研究科長

松下 祥（MATSUSHITA, Sho）：副学長

※森 茂久（MORI, Shigehisa）：副学長

三村俊英（MIMURA, Toshihide）：副学長

竹内 勤（TAKEUCHI, Tsutomu）：副学長（R4. 4より）

※木崎昌弘（KISAKI, Masahiro）：副学長

高橋健夫（TAKAHASHI, Takeo）：副医学部長

岡田浩一（OKADA, Hirokazu）：副医学部長

小山政史（OYAMA, Masafumi）：副医学部長

椎橋実智男（SHIIBASHI, Michio）：副医学部長、IRセンター長

林 健（HAYASHI, Takeshi）：副医学部長

村越隆之（MURAKOSHI, Takayuki）：医学部長補佐

山田健人（YAMADA, Taketo）：医学部長補佐

吉益晴夫（YOSHIMASU, Haruo）：医学部長補佐

中里良彦（NAKAZATO, Yoshihiko）：医学部長補佐

片桐岳信（KATAGIRI, Takenobu）：医学部長補佐

篠塚 望（SHINOZUKA, Nozomi）：大学病院長

堤 晴彦（TSUTSUMI, Haruhiko）：総合医療センター病院長（R4. 8まで）

別宮好文（BECK, Yoshifumi）：総合医療センター病院長（R4. 9より）

佐伯俊昭（SAEKI, Toshiaki）：国際医療センター病院長

屋嘉比康治（YAKABI, Koji）：かわごえクリニック院長

持田 智（MOCHIDA, Satoshi）：図書館長

門野夕峰（KADONO, Yuhu）：学生部長

※森 茂久（MORI, Shigehisa）：医学教育センター長

※片桐岳信（KATAGIRI, Takenobu）：医学研究センター長

藤巻高光（FUJIMAKI, Takamitsu）：国際交流センター長

◇教育組織 医学教育センター選出者（医学部教授会運営細則第2条13号構成員）

※森 茂久（MORI, Shigehisa）：教育主任部門長

※森 茂久（MORI, Shigehisa）：卒前医学教育部門長

※三村俊英（MIMURA, Toshihide）：卒後医学教育部門長

※椎橋実智男（SHIIBASHI, Michio）：教育情報部門長

※森 茂久（MORI, Shigehisa）：FD部門長

向田寿光（MUKAIDA, Hisamitsu）：教養教育部門長

松田 晃（MUKAIDA, Hisamitsu）：卒前医学教育部門 学力増進室長

魚住尚紀（UOZUMI, Naonori）：卒前医学教育部門 カリキュラム室長

永島雅文（NAGASHIMA, Masabumi）：教育主任部門選出者

亀井良政（KAMEI, Yoshimasa）：教育主任部門選出者

亀井美登里（KAMEI, Midori）：教育主任部門選出者

佐々木惇（SASAKI, Atsushi）：教育主任部門選出者

中元秀友（NAKAMOTO, Hidetomo）：教育主任部門選出者

舟久保ゆう（FUNAKUBO, YU）：教育主任部門選出者

岩永史郎（IWANAGA, Shiro）：教育主任部門選出者

◇研究組織 医学研究センター選出者（医学部教授会運営細則第2条14号構成員）

海老原康博 (EBIHARA, Yasuhiro) : 研究主任部門長
坂本 安 (SAKAMOTO, Yasushi) : 共同利用施設運営部門長
三谷幸之介 (MITANI, Kounosuke) : 安全管理部門長
※片桐岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : フェローシップ部門長
※椎橋実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 研究評価部門長
山本晃士 (YAMAMOTO, Koji) : 総合医療センターブランチ長
※海老原康博 (EBIHARA, Yasuhiro) : 国際医療センターブランチ長

◇診療組織 病院選出者（医学部教授会運営細則第2条15号構成員）

○大学病院

朝倉博孝 (ASAKURA, Hirotaka) : 泌尿器科
市岡 滋 (ICHIOKA, Shigeru) : 副院長
島田 朗 (SHIMADA, Akira) : 内分泌内科・糖尿病内科
山元敏正 (YAMAMOTO, Toshimasa) : 副院長
松尾幸治 (MATHUO, Koji) : 院長補佐
篠田 啓 (SHINODA, Kei) : 眼科
中村晃一郎 (NAKAMURA, Koichiro) : 皮膚科

○総合医療センター

名越澄子 (NAGOSHI, Sumiko) : 消化器肝臓内科 (R4.8まで)
菊池 茂 (KIKUCHI, Shigeru) : 副院長 (R4.9より)
長谷川元 (HASEGAWA, Hajime) : 副院長
石田秀行 (ISHIDA, Masahiro) : 副院長
別宮好文 (BEKKU, Yoshifumi) : 副院長 (R4.8まで)
大宅宗一 (OYA, Souichi) : 副院長
森脇浩一 (MORIWAKI, Koichi) : 院長補佐 (R4.9より)
澤野 誠 (SAWANO, Makoto) : 高度救命救急センター長
加部一彦 (KABE, Kazuhiko) : 総合周産期母子医療センター長

○国際医療センター

鈴木孝明 (SUZUKI, Takaaki) : 副院長
川井信孝 (KAWAI, Nobutaka) : 副院長
岡本光順 (OKAMOTO, Koujyun) : 副院長
栗田浩樹 (KURITA, Hiroki) : 副院長
根本 学 (NEMOTO, Manabu) : 院長補佐
北村 晶 (KITAMURA, Akira) : 院長補佐
光武耕太郎 (MITSUTAKE, Koutaro) : 院長補佐

◇その他選出者（医学部教授会運営細則第2条16号構成員）

棚橋 紀夫 (TANAHASHI, Norio) 専務理事
小山 勇 (KOYAMA, Isamu) : 専務理事
堤 晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko) : 理事 (R4.9より)、常務理事 (R4.11より)
高田 綾 (TAKADA, Aya) : 法医学
丸山 敬 (MARUYAMA, Kei) : 薬理学
永田 真 (NAGATA, Makoto) : 呼吸器内科
中山英人 (NAKAYAMA, Hideto) : 麻酔科
富谷智明 (TOMIYA, Tomoaki) : 教職員・学生健康推進センター長
※別所正美 (BESSHO, Masami) : アドミッションセンター長
千本松孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : リサーチアドミニストレーションセンター長
村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 微生物学
小林国彦 (KOBAYASHI, Kunihiko) : 特定研究審査委員会委員長
奥田晶彦 (OKUDA, Akihiko) : ゲノム応用医学
三輪尚史 (MIWA, Naofumi) : 生理学

内田和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部長
構成員 71名 (4月～8月)、72名 (9月～3月)
(※重複者)

◇オブザーバー

吉本信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長

◇大学事務部

江口幹也 (EGUCHI, Mikiya) : 大学事務部 副部長

下田裕子 (SHIMODA, Yuko) : 庶務課 課長

吉山美穂子 (YOSHIYAMA, Mihoko) : 庶務課 係長

保坂雄志郎 (HOSAKA, Yushiro) : 庶務課員

佐國真紀 (SAKUNI, Maki) : 庶務課員

村田正樹 (MURATA, Masaki) : 入試課 課長

岩澤昌人 (IWASAWA, Masato) : 学務課 課長 (R4.6まで)

近藤有寛 (KONDO, Arihiro) : 学務課 課長

◇総務部

内田尚男 (UCHIDA, Hisao) : 総務部長

2. 目的・目標

平成18年度より施行された医学部の新たな教員組織にともない構成された医学部の最高審議機関として機能する会議である。すなわち、この教員代表者会議は、学校教育法及び同施行規則の定めによる「教授会」に相当する機能を果たすものであり、医学部の教育と研究に関する重要な事項を審議することを目的としている。したがって、構成員は役職指定者のみならず、教育組織、研究組織、診療組織からも、およそ3:1:3の割合で、それぞれを担う代表の教員が構成員として選出されており、役職指定者と併せ、約70名となる。

3. 活動実績

◇定期開催

- ・第549回： 4月22日 (金) 出席者59名
- ・第550回： 5月20日 (金) 出席者58名
- ・第551回： 6月17日 (金) 出席者53名
- ・第552回： 7月15日 (金) 出席者62名
- ・第553回： 9月16日 (金) 出席者68名
- ・第554回：10月21日 (金) 出席者60名
- ・第555回：11月18日 (金) 出席者56名
- ・第556回：12月16日 (金) 出席者63名
- ・第557回： 1月27日 (金) 出席者60名
- ・第558回： 2月24日 (金) 出席者57名
- ・第559回： 3月24日 (金) 出席者63名

◇臨時開催

- ・令和4年度医学部6年生第1回卒業仮内定判定、令和5年度再入学試験判定
11月25日 (金) 出席者68名 (委任状出席者46名)
- ・令和5年度医学部学校推薦型選抜、帰国生選抜の可否判定
12月1日 (木) 出席者68名 (委任状出席者52名)
- ・令和4年度 医学部6年生第1回卒業本内定判定
12月22日 (金) 出席者68名 (委任状出席者48名)
- ・令和4年度医学部4年生スチューデントドクター認定、令和4年度医学部6年生第2回卒業本内定判定
1月13日 (金) 出席者62名 (委任状出席者38名)
- ・令和5年度医学部一般選抜 (前期) 1次試験の可否判定
2月7日 (火) 出席者60名 (委任状出席者32名)
- ・令和5年度医学部一般選抜 (前期) 2次試験の可否判定
2月16日 (木) 出席者69名 (委任状出席者50名)

- ・令和5年度医学部一般選抜（後期）1次試験の合否判定、令和5年度大学入学共通テスト利用選抜1次試験の合否判定
3月9日（木）出席者69名（委任状出席者53名）
- ・令和5年度医学部一般選抜（後期）2次試験の合否判定、令和5年度大学入学共通テスト利用選抜2次試験の合否判定、
令和5年度医学部一般選抜（前期）2次試験追試験合否等判定、令和4年度医学部1年生から5年生の進級判定
3月16日（金）出席者67名（委任状出席者48名）

◇開催回数

定期開催：11回 平均 60名
 臨時開催：8回 平均 66名（委任状平均46名）
 合計：19回 平均 63名

◇議事内容

本会議では、教育、研究、大学院、診療（大学病院・総合医療センター・国際医療センター・かわごえクリニック）各施設からの報告と審議、各種委員会報告、人事の報告や大学全体の基本的方向性やあり方に関する議論を行う場として機能している。すなわち、議事は以下に示すような形態を原則として進行する。

1)教育等

- (1)医学教育センター報告
- (2)医療人育成支援センター報告
- (3)学生部報告
- (4)喫煙問題検討委員会報告

2)研究等

- (1)医学研究センター報告
- (2)リサーチアドミニストレーションセンター報告
- (3)倫理委員会報告
- (4)COI管理委員会報告倫理委員会報告
- (5)研究医養成プログラム運営委員会報告
- (6)環境安全委員会報告
- (7)グラント選考委員会報告
- (8)研究活動並びに公的研究費等の適正化推進委員会報告
- (9)オール埼玉医大研究の日運営会議研

3)大学院・国際化推進等

- (1)医学研究科委員会報告
- (2)国際化推進(教育・研究)報告
- (3)国際交流センター報告

4)診療等

- (1)大学病院報告
- (2)総合医療センター報告
- (3)国際医療センター報告
- (4)かわごえクリニック報告

5)その他の組織、センター、委員会等

- (1)入学試験委員会報告
- (2)図書館報告
- (3)アドミッションセンター報告
- (4)情報技術支援推進センター報告
- (5)教職員・学生健康推進センター報告
- (6)IRセンター報告
- (7)各種委員会等報告

（地域卒医学生奨学金運営委員会、寄附研究部門設置委員会、キャンパス整備委員会）

- (8)自己点検・評価委員会報告
- (9)教員組織運営会議報告
- (10)学長・医学部長報告
- (11)人事報告(教員人事委員会報告等)

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本会議では、教育組織、研究組織、診療組織の3つの組織間で情報を共有しながら、共通認識をもって学事が審議、決定される仕組みが構築されている。令和3年度に引き続き令和4年度も、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に対し、本会議においても常に大学（法人）危機管理対策本部、病院感染対策室、卒前教育委員会の決定事項を伝達し、各基本学科、診療科への周知に貢献してきた。また、随時構成員からの質問、提案を聴取し、検討後フィードバックするシステムを維持してきた。その結果コロナ禍中でも学事において大きな混乱や停滞はなかったものと評価している。

また、常に教育、研究の現場からの問題点の指摘と対応を基礎臨床の双方において継続している。これらの議事内容は大学全体に伝達されるように3病院の診療部長会において報告し、また、議事要約として平成20年4月開催分より学内ホームページにおいて公開されている。

令和3年10月に受審した医学教育分野別評価受審結果が令和4年9月末に届き、国際基準に適合していると認定を受け、認定期間は2022年10月1日～2029年9月30日の7年間である。

以上から総括するならば、十分な進捗のあった年度と評価できる。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度以降も教員代表者会議が本来の目的に添って、医学部の教育と研究に関する重要な事項を審議、決定することを適切に機能すべく、構成員の選出や審議形態等の運営方法など、常に点検・評価されて行かなければならない。

今後の課題として第一に、新型コロナウイルス感染症が収束の見通しの中、ポストコロナ時代に向けて、働き方改革を考慮しつつ、新しい教育、研究の在り方を模索する必要がある。

第二に、令和5年度から開始される第5次長期総合計画を元に、各領域の進捗状況を確認しながら目標達成に向けて推進する。

第三に、医学教育分野別評価で指摘された改善点への対応について現状の分析と対応策を検討し、体制整備と規則整備を継続しながらPDCAを伴う質保証の実現のために、学部内の全教員の共通した当事者意識のもとで教育体制とその内容の進化を推進していく。

今後とも医学部に特化した問題についてはこの組織が臨機応変の解決をすべく果断に対応して行くことが重要である。

3. 2) 医学部教員組織運営会議

1. 構成員（任期：R4. 4. 1～R6. 3. 31）

委員長 森 茂久 (MORI, Shigehisa)：副学長・医学教育センター長、医学部長（R4. 4より）

委員 別所 正美 (BESSHO, Masami)：学長

吉本 信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo)：副理事長

棚橋 紀夫 (TANAHASHI, Norio)：専務理事

小山 勇 (KOYAMA, Isamu)：専務理事

松下 祥 (MATSUSHITA, Shou)：副学長・ゲノム医学研究センター長

木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro)：副学長・医学研究科長（R4. 3まで）

三村 俊英 (MIMURA, Toshihide)：副学長

竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu)：副学長（R4. 4より）

高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo)：副医学部長

林 健 (HAYASHI, Takeshi)：副医学部長

岡田 浩一 (OKADA, Hirokazu)：副医学部長、大学病院副院長

小山 政史 (OYAMA, Masafumi)：副医学部長

椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio)：副医学部長、IRセンター長

村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki)：医学部長補佐

堤 晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko)：総合医療センター病院長（R4. 8まで）、理事（R4. 9より）、常務理事（R4. 11より）

篠塚 望 (SHINODUKA, Nozomi)：大学病院長

別宮 好文 (BECK, Yoshifumi)：総合医療センター副院長（R4. 8まで）、病院長（R4. 9より）

佐伯 俊昭 (SAEKI, Toshiaki)：国際医療センター病院長

石田 秀行 (ISHIDA, Hideyuki)：総合医療センター副院長（R4. 9より）

鈴木 孝明 (SUZUKI, Takaaki)：国際医療センター副院長

門野 夕峰 (KADONO, Yuhō)：学生部長

片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu)：医学研究センター長

※ 医学部長、副医学部長、各診療施設の病院長、同副院長（各1名）、医学教育センター長、医学研究センター長、その他医学部長が必要と認めた者

2. 目的・目標

本委員会は、埼玉医科大学医学部教員組織運営会議規則第1条の規程に基づき、医学部教員代表者会議の円滑な運営に資することを目的とする。教員代表者会議の構成員のうち、各組織の代表者等による会議で、教育・研究・診療各組織の連携に向けての基本方針を定めるとともに教員人事委員会の要請に基づいて人事に関する審議を行う。

- (1) 各組織の状況について、共通の認識を持つ。
- (2) 共通する課題の解決、方向性の基本を協議する。
- (3) 教員人事委員会の要請により教授等候補者資格審査委員会を設置する。教員代表者会議の委嘱を受け、教授および准教授の資格・職位審査を行う審査委員を選出する。
- (4) 職位の変更に関する申請を受け、協議する。その後、結果を教員人事委員会に報告し、承認を得る。
- (5) 教員人事委員会の要請により、講師の資格と職位の審査を行い、その結果を教員人事委員会に報告する。

3. 活動実績

(1) 開催日（令和4年度）

第245回	定例会議（令和4年4月12日）	ZOOM会議	出席21	欠席1
第246回	定例会議（令和4年5月17日）	ZOOM会議	出席21	欠席1
第247回	定例会議（令和4年6月7日）	ZOOM会議	出席21	欠席1
第248回	定例会議（令和4年7月5日）	ZOOM会議	出席22	欠席0
第249回	定例会議（令和4年9月6日）	ZOOM会議	出席21	欠席1
第250回	定例会議（令和4年10月11日）	ZOOM会議	出席21	欠席1

- 第 251 回 定例会議（令和 4 年 11 月 8 日）ZOOM 会議 出席 22 欠席 0
 第 252 回 定例会議（令和 4 年 12 月 6 日）ZOOM 会議 出席 21 欠席 1
 第 253 回 定例会議（令和 5 年 1 月 17 日）ZOOM 会議 出席 20 欠席 2
 第 254 回 定例会議（令和 5 年 2 月 14 日）ZOOM 会議 出席 21 欠席 0
 第 255 回 定例会議（令和 5 年 3 月 14 日）ZOOM 会議 出席 21 欠席 0

以上、11 回の定例会議の開催

(2) 主な活動内容（議事内容）：

◇第 245 回 定例会議

- ・資格審査委員の選出について
- ・講師任用について
- ・客員教員の採用について
- ・基本学科について
- ・役職者について
- ・教員の配置転換・兼任発令・職位変更について
- ・中央研究施設の人事について
- ・医学研究センターの人事について
- ・退職者について
- ・教員人事書類の「申請書類記入上の注意」について
- ・学外兼業許可願の提出について
- ・第 547 回 教員代表者会議 議事要約について
- ・第 452 回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
- ・2022 (R4) 年度「研究マインド支援 Grant（共通部門）」募集について
- ・令和 4 年度 RA センター構成員について
- ・2022 年度入学試験結果について
- ・創立 50 周年記念式典について

◇第 246 回 定例会議

- ・資格審査委員の選出について
- ・講師任用について
- ・客員教員の採用について
- ・役職者について
- ・教員の配置転換・兼任発令・職位変更について
- ・埼玉医科大学における研究業績の考え方、教員人事書類における研究業績一覧について
- ・第 548 回 教員代表者会議 議事要約について
- ・第 453 回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
- ・創立 50 周年記念式典について
- ・創立 50 周年記念特別研究費について

◇第 247 回 定例会議

- ・資格審査委員の選出について
- ・講師任用について
- ・客員教員の採用について
- ・役職者について
- ・教員の配置転換・兼任発令・職位変更について
- ・埼玉医科大学における研究業績の考え方、教員人事書類における研究業績一覧について
- ・第 548 回 教員代表者会議 議事要約について
- ・第 453 回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
- ・創立 50 周年記念式典について
- ・創立 50 周年記念特別研究費について

◇第 248 回 定例会議

- ・資格審査委員の選出について
- ・講師任用について

- ・客員教員の採用について
 - ・役職者について
 - ・資格審査委員会委員について
 - ・教養教育（物理学等担当）教員の公募について
 - ・教員の兼担発令について
 - ・退職者について
 - ・第 550 回 教員代表者会議 議事要約について
 - ・第 455 回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
 - ・医学部基本学科、3 病院診療科等の英語表記について
 - ・2022 (R4)年度 研究マインド支援 Grant「若手限定」募集要項について
 - ・令和 4 年度医学部教授・教員総会について
 - ・ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業選定について
- ◇第 249 回 定例会議
- ・資格審査委員の選出について
 - ・講師任用について
 - ・客員教員の採用について
 - ・教養教育（物理学等担当）教員選考結果について
 - ・中央研究施設 教員候補者の公募について
 - ・総合医療センター名誉病院長称号付与について
 - ・教員の配置転換・職位変更・兼担等について
 - ・退職者について
 - ・埼玉医科大学医学部教員組織運営会議規則の改正について
 - ・第 551 回 教員代表者会議 議事要約について
 - ・第 456 回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
 - ・医学部基本学科、3 病院診療科等の英語表記について
 - ・令和 4 年度研究拠点形成費等補助金（ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業）
交付決定通知について
 - ・令和 4 年度医学部教授・教員総会アンケート集計結果について
 - ・令和 4 年度解剖体慰霊祭について
- ◇第 250 回 定例会議
- ・資格審査委員の選出について
 - ・講師任用について
 - ・客員教員の採用について
 - ・役職者について
 - ・「医学部 非常勤講師等 任用願」について
 - ・教員の配置転換・職位変更・兼担等について
 - ・第 552 回 教員代表者会議 議事要約について
 - ・第 457 回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
 - ・医学部基本学科、3 病院診療科等の英語表記について
 - ・令和 4 年度医学部・保健医療学部合同教授・教員総会について
 - ・外国人留学生受け入れ再開にあたっての対策について
- ◇第 251 回 定例会議
- ・資格審査委員の選出について
 - ・講師任用について
 - ・客員教員の採用について
 - ・役職者について
 - ・教員の配置転換・職位変更・兼担等について
 - ・退職者について
 - ・令和 5 年度各組織の主要会議等日程（案）について
 - ・第 553 回 教員代表者会議 議事要約について

- ・第 458 回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
- ・第 3 回オール埼玉医大研究の日開催報告
- ・医師臨床研修マッチング結果について
- ・「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成」事業協定締結式開催報告
- ・令和 4 年度 医学部・保健医療学部合同教授・教員総会について
- ◇第 252 回 定例会議
 - ・資格審査委員の選出について
 - ・講師任用について
 - ・客員教員の採用について
 - ・教員の配置転換・職位変更について
 - ・退職者について
 - ・令和 5 年度 非常勤教員・非常勤医師の更新および新規採用手続きについて
 - ・客員教員（70 歳超）の次年度資格について
 - ・第 554 回 教員代表者会議 議事要約について
 - ・第 459 回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
 - ・令和 4 年度医学部・保健医療学部合同教授・教員総会について
 - ・令和 4 年度スチューデントドクター認定式開催案について
 - ・令和 5 年度医学部学校推薦型選抜・帰国生選抜報告について
 - ・令和 5 年度各組織の主要会議等日程（案）について
 - ・令和 4 年度教員組織運営会議、自己点検・評価委員会開催日程について
- ◇第 253 回 定例会議
 - ・資格審査委員の選出について
 - ・講師任用について
 - ・客員教員の採用について
 - ・中央研究施設教員の選考について
 - ・リサーチアドミニストレーター（URA）の公募について
 - ・国際医療センター病院長選考委員会の立上げについて
 - ・教員の職位変更・兼任発令について
 - ・中央研究施設の役職者について
 - ・退職者について
 - ・第 555 回 教員代表者会議 議事要約について
 - ・第 460 回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
 - ・大学入学共通テスト利用選抜実施報告について
 - ・スチューデントドクター認定式について
 - ・大学院入学試験、語学試験実施報告について
 - ・令和 4 年度大学院博士課程学位記授与式について
 - ・医学部・保健医療学部合同教授・教員総会アンケート集計結果について
- ◇第 254 回 定例会議
 - ・資格審査委員の選出について
 - ・講師任用について
 - ・特任教員、客員教員の任用について
 - ・中央研究施設教員の選考について
 - ・学長選考委員会の立上げについて
 - ・教員の配置転換・職位変更・兼任発令について
 - ・退職者について
 - ・「医学部教員人事書類確認シート」の変更について
 - ・「非常勤教員任用願」の変更について
 - ・第 556 回 教員代表者会議 議事要約について
 - ・第 461 回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
 - ・医学部一般入試（前期）1 次・2 次試験の概要について

- ・医師国家試験報告について
- ・医学部卒業式について
- ・リサーチアドミニストレーションセンター構成員（2023年2月1日現在）について
- ・2023年度 医学部関連会議・委員会一覧の確認について

◇第255回 定例会議

- ・資格審査委員の選出について
- ・講師任用について
- ・特任教員、客員教員の任用について
- ・役職者について
- ・中央研究施設教員、リサーチアドミニストレーター（URA）の選考について
- ・教員の職位変更・兼担発令について
- ・退職者について
- ・第557回 教員代表者会議 議事要約について
- ・第462回 大学院医学研究科委員会 議事要約について
- ・令和4年度「私立大学等改革総合支援事業」の選定結果について
- ・「医学部等教育・働き方改革支援事業」に関する選定結果について
- ・第25回日本のMayo Clinicを目指す会 全体集会プログラム(案)について
- ・今後の教育部門のマスクの着用について
- ・医学部一般選抜試験（後期）1次・2次試験、大学共通テスト利用入試の概要について
- ・医学部入学式（4/10）について

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

上記に示したように、教育・研究・診療における様々な問題に対応し検討を行った。その中でも、この教員組織運営会議の特徴は、教員人事、すなわち採用と昇格について、教員人事委員会と綿密な関係を維持しつつ審議し、資格審査委員会の日時、委員を設定し、その結果報告等を行っている点である。会議内で講師の新任及び昇格の審査も行っている。特に3病院の院長・副院長等病院執行部が同席することは非常に議論の次元が広がることに貢献している。令和4年度も令和3年度に引き続き、Zoomを用いた遠隔会議を採用し、3キャンパスから多くの委員が参加して各部門から積極的発言、報告がなされることで大学組織全体の風通しが良くなっている。

令和4年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症対策が学事・診療、組織運営全般に亘り一大事案であったが、これを乗り越えたことはそれなりに評価すべきであろう。そのような背景のもと、令和4年度も改善計画については十全な成果を挙げたものと思われる。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度も教育、研究、診療等に係る諸問題を協議し、教員人事委員会、教員代表者会議等に答申、上程、報告等を行い、引き続き教員組織の適正な維持、運営、管理、調整を図って行くことに変わりはない。その方針にて引き続き本会議の運営を図っていきたいと考えている。

具体的な検討課題の一例として年々数が伸び悩んでいた初期臨床研修医獲得の問題は、3病院で採用数が大幅に伸びて、大きな成果が得られた。一方後期臨床研修である専攻医の採用数は伸び悩んでおり、卒前・卒後教育部門と病院研修制度が関係する課題であり、本会議の各方面の連携に強みを持つ組織の役割は大きい。また、医師の「働き方改革」が今や喫緊の課題であり、情報交換も含め一層推進を目指す必要がある。

ポストコロナ時代を見据えて、今後の教育・運営・管理体制の発展努力を続ける必要がある。

3. 3) 医学部自己点検・評価委員会

1. 構成員（任期：R4. 4. 1～R6. 3. 31）

委員長 委員長 森 茂久 (MORI, Shigehisa)：副学長・医学教育センター長、医学部長（R4. 4より）

委員 別所 正美 (BESSHO, Masami)：学長

吉本 信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo)：副理事長

棚橋 紀夫 (TANAHASHI, Norio)：専務理事

小山 勇 (KOYAMA, Isamu)：専務理事

松下 祥 (MATSUSHITA, Shou)：副学長・ゲノム医学研究センター長

木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro)：副学長・医学研究科長（R4. 3まで）

三村 俊英 (MIMURA, Toshihide)：副学長

竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu)：副学長（R4. 4より）

高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo)：副医学部長

林 健 (HAYASHI, Takeshi)：副医学部長

岡田 浩一 (OKADA, Hirokazu)：副医学部長、大学病院副院長

小山 政史 (OYAMA, Masafumi)：副医学部長

椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio)：副医学部長、IRセンター長

村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki)：医学部長補佐

堤 晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko)：総合医療センター病院長（R4. 8まで）、理事（R4. 9より）、常務理事（R4. 11より）

篠塚 望 (SHINODUKA, Nozomi)：大学病院長

別宮 好文 (BECK, Yoshifumi)：総合医療センター副院長（R4. 8まで）、病院長（R4. 9より）

佐伯 俊昭 (SAEKI, Toshiaki)：国際医療センター病院長

石田 秀行 (ISHIDA, Hideyuki)：総合医療センター副院長（R4. 9より）

鈴木 孝明 (SUZUKI, Takaaki)：国際医療センター副院長

門野 夕峰 (KADONO, Yuhō)：学生部長

片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu)：医学研究センター長

※ 医学部長、副医学部長、学長、副学長、各診療施設の病院長、同副院長（各1名）、医学教育センター長、医学研究センター長、その他委員会が必要と認める者

2. 目的・目標

埼玉医科大学自己点検・評価委員会規則第1条に従い医学部における必要な点検評価を自らが行うため、自己点検・評価に係わる様々な事項について審議を行う。大学年報（自己点検・評価報告書）は、「自己点検・評価の実施」を形にしたものであり、その提出に係わる依頼等についても本委員会では審議し承認した上で実施されている。

3. 活動実績

(1) 開催日（令和4年度）

第1回 定例会議（令和4年4月12日）ZOOM会議 出席21 欠席1

第2回 定例会議（令和4年5月17日）ZOOM会議 出席21 欠席1

第3回 定例会議（令和4年6月7日）ZOOM会議 出席20 欠席2

第4回 定例会議（令和4年7月5日）ZOOM会議 出席21 欠席1

第5回 定例会議（令和4年9月6日）ZOOM会議 出席21 欠席1

第6回 定例会議（令和4年10月11日）ZOOM会議 出席21 欠席1

第7回 定例会議（令和4年11月8日）ZOOM会議 出席22 欠席0

第8回 定例会議（令和4年12月6日）ZOOM会議 出席21 欠席1

第9回 定例会議（令和5年1月17日）ZOOM会議 出席19 欠席3

第10回 定例会議（令和5年2月14日）ZOOM会議 出席20 欠席1

第11回 定例会議（令和5年3月14日）ZOOM会議 出席21 欠席0

以上、11回の定例会議の開催

(2) 主な活動内容（議事内容）：

◇第1回 定例会議

- ・第38回 IRセンター運営会議報告
- ・令和3年度定期試験のデータシートのまとめについて
- ・令和3年度ユニット評価調査結果について
- ・令和3年度医学部学修成果の自己評価および卒業時満足度調査結果について
- ・令和3年度医学部1～4年生の学修成果の自己評価調査結果について
- ・学校法人埼玉医科大学医学部組織図の改正について
- ・医学部カリキュラム評価委員会報告

◇第2回 定例会議

- ・第39回 IRセンター運営会議報告
- ・埼玉医科大学全学での3ポリシー策定の提案について
- ・分野別対応計画について
- ・令和3年度医学部 IR レポート
- ・日本高等教育評価機構 意向調査について
- ・「新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について」（審議まとめ）
- ・学校法人埼玉医科大学臨床研究審査委員会規則の改正について
- ・埼玉医科大学学位規則のうち博士に関する運用細則の改正について

◇第3回 定例会議

- ・第40回 IRセンター運営会議報告
- ・態度評価に関するUDへのお伺い文書・回答書について
- ・令和3年度教員の教員人事考課について
- ・令和3年度大学年報作成状況について

◇第4回 定例会議

- ・第41回 IRセンター運営会議報告
- ・令和4年度 医学部定員増（学則の変更）の予定について
- ・令和3年度大学年報の内容の点検・評価、次年度に向けた提言について

◇第5回 定例会議

- ・埼玉医科大学医学部自己点検・評価委員会規則の改正について
- ・令和3年度大学年報の内容の点検・評価、次年度に向けた提言について
- ・令和3（2021）年度医学教育分野別評価認定結果について
- ・埼玉医科大学医学部教員組織運営会議規則の改正について
- ・埼玉医科大学IRセンター規程の改正について
- ・埼玉医科大学医学部中央研究施設規則の改正について

◇第6回 定例会議

- ・第42回 IRセンター運営会議報告
- ・医学教育分野別評価について
- ・埼玉医科大学自己点検・評価委員会規則の改正について
- ・埼玉医科大学全学共通データサイエンスAI学修プログラム運営委員会規則の新設について
- ・埼玉医科大学両学部横断的カリキュラム検討委員会規則の新設について

◇第7回 定例会議

- ・第43回 IRセンター運営会議報告
- ・令和4年度埼玉医科大学ポリシー等策定委員会について
- ・令和3年度 教員人事考課の提出状況について
- ・学校法人埼玉医科大学教員人事委員会規程の改正について
- ・埼玉医科大学医学部教員選考に関わる資格審査委員会規則の改正について

◇第8回 定例会議

- ・教員任期終了者の再任手続きについて
- ・第44回 IRセンター運営会議報告
- ・埼玉医科大学大学院の教員の資格要件等に関する規則の改正について

◇第9回 定例会議

- ・第45回 IRセンター運営会議報告
- ・埼玉医科大学IRセンター運営会議規則の改正について
- ・大学機関別認証評価受審準備小委員会構成員（案）について
- ・医学教育分野別評価受審準備小委員会構成員（案）について
- ・大学運営会議開催時期および審議内容（案）について

◇第10回 定例会議

- ・第46回 IRセンター運営会議報告
- ・教員任期（5年）満了者の再任手続きについて
- ・学校法人埼玉医科大学安全保障輸出管理規則の改正について
- ・学校法人埼玉医科大学利益相反マネジメントポリシーの新設について
- ・学校法人埼玉医科大学利益相反管理規程の改正について

◇第11回 定例会議

- ・第47回 IRセンター運営会議報告
- ・埼玉医科大学アセスメント・ポリシーについて
- ・埼玉医科大学アセスメント・プラン（案）について
- ・令和4年度医学部卒業時満足度調査結果について
- ・令和4年度医学部6年生学修成果の自己評価調査結果について
- ・2022年度ユニット評価調査の結果分析について
- ・学校法人埼玉医科大学病院長等選考規程の変更について
- ・令和4年度大学年報（自己点検・評価報告書）の原稿依頼について

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

医学部自己点検・評価委員会では、諸規程の見直し、教員人事考課、教学マネジメント体制の整備等について様々な点検と評価を実施した。令和3年度10月に受審した医学教育分野別評価の結果が令和4年9月末に届き、国際基準に適合していると認定を受けた。今後の改善、次回受審に向けて本委員会の下に医学教育分野別評価受審小委員会を設置した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度も、各基本学科、各センター組織、委員会・会議等自らが行う「自己点検・評価の実施」を基に大学年報（自己点検・評価報告書）を作成した上で内容的にも充実させ、教員組織運営会議同様、今後さらに本委員会の学内での意義を高めるべく運営を図っていきたいと考えている。

また、PDCAサイクルの機能を高めるために、年報の出版時期を自己点検の成果発揮に繋げるべく、現行よりも前倒しとして、年報提出の締め切りを8月末から5月末にする計画である。

医学教育分野別評価に関しては、医学教育分野別評価受審小委員会を中心に年次報告書の作成、次回令和10年度受審に向けて準備を開始する。

3. 4) 医学部学生部委員会

1. 構成員

委員長	門野 夕峰 (KADONO, Yuho) : 整形外科・脊椎外科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
副委員長	黒川 理樹 (KUROKAWA, Riki) : ゲノム医学研究センター : 教授 (任期: R6. 3. 31)
副委員長	向田 寿光 (MUKAIDA, Toshimitsu) : 教養教育 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	藤巻 高光 (FUJIMAKI, TAKAMITSU) : 脳神経外科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	松尾 幸治 (MATSUO, Koji) : 神経精神科・心療内科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	長谷川 元 (HASEGAWA, Hajime) : 総合医療センター腎・高血圧内科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Tomomi) : 医学教育学 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	井上 郁夫 (INOUE, Ikuo) : 内分泌・糖尿病内科 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	中平 健祐 (NAKAHIRA, Kensuke) : 教養教育 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 教養教育 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	藤田 恵子 (FUJITA, Keiko) : 解剖学 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	石橋 敬一郎 (ISHIBASHI, Keiichiro) : 医学教育学 : 准教授 (任期: R6. 3. 31)
委員	内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部 : 部長 (任期: R6. 3. 31)
委員	岡野 弘 (OKANO, Hiroshi) : 大学事務部 : 参与 (任期: R5. 3. 31)
委員	江口 幹也 (EGUCHI, Mikiya) : 大学事務部 : 副部長 (任期: R6. 3. 31)
委員	川俣 栄希 (KAWAMATA, Eiki) : 大学事務部医学部事務室課長補佐 (任期: R4. 7. 1~R6. 3. 31)
委員	佐藤 瀬奈 (SATO, Sena) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R5. 3. 31)
委員	安齋 宰 (ANZAI, Tsukasa) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R4. 8. 31)
委員	峰晴 嘉政 (MINEHARU, Yoshimasa) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R4. 8. 31)
委員	中嶋 善寛 (NAKAJIMA, Yoshihiro) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R4. 9. 1~R6. 3. 31)
委員	鍋澤 駿介 (TOKIZAWA, Shunsuke) : 大学事務部医学部事務室 (任期: R5. 3. 1~R6. 3. 31)
学生委員	丸井 有佐 (MARUI, Yusa) : 医学部学生 (任期: R4. 4. 1~R4. 11. 30)
学生委員	岡村 明日香 (OKAMURA, Asuka) : 医学部学生 (任期: R4. 4. 1~R4. 11. 30)
学生委員	波多野 思美 (HATANNO, Kotomi) : 医学部学生 (任期: R4. 10. 1~R5. 3. 31)
学生委員	榎澤 もゆる (ENOSAWA, Moyuru) : 医学部学生 (任期: R4. 10. 1~R5. 3. 31)
オブザーバー	森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副学長、医学教育学 : 教授 (任期: R6. 3. 31)
オブザーバー	稲葉 宗通 (INABA, Munemichi) : 医学部同窓会会長 (任期: R6. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は埼玉医科大学医学部学生部委員会規則第2条に則り、学生生活の充実向上を目的とする。

3. 活動実績

- ①第1回(令和4年4月15日)於:本部棟地下1階第4講堂 出席14名 欠席8名
議事:合理的配慮の検討、新型コロナウイルス感染症対策、学生に対する新型コロナワクチン接種計画、対面での部活動の承諾書確認、部活動の新歓予定について
- ②第2回(令和4年5月13日)於:本部棟2階会議室 出席14名 欠席8名
議事:新型コロナウイルス感染症対策、学生に対する新型コロナワクチン接種、部活動の新歓、対面での部活動の承諾書確認、消防・防災訓練実施、越華祭計画について
- ③第3回(令和4年6月10日)於:本部棟1階第3講堂 出席17名 欠席5名
議事:学生健康推進室カウンセラー通信、東医体夏季大会開催計画、対面での部活動の承諾書確認、越華祭開催計画について
- ④第4回(令和4年7月8日)於:本部棟2階会議室 出席17名 欠席5名
議事:クラブ顧問主将会議、対面での部活動の承諾書確認、対面での部活動再開に向けた承諾書審査、夏季期間の熱中症対策、越華祭準備状況、学生生活指導部課長相当者研修会について
- ⑤第5回(令和4年9月2日)於:本部棟2階会議室 出席16名 欠席7名
議事:新型コロナウイルス感染症対策、東医体夏季大会参加、対面での部活動再開に向けた承諾書確認、越華祭準備状況について
- ⑥第6回(令和4年10月7日)於:本部棟地下1階第4講堂 出席10名 欠席12名
議事:対面での部活動再開に向けた承諾書確認、越華祭最終準備状況、第5次長期総合計画について
- ⑦第7回(令和4年11月11日)於:本部棟2階会議室 出席16名 欠席6名
議事:学生健康推進室カウンセラー通信、学生会役員の交代、春季語学研修について
- ⑧第8回(令和4年12月2日)於:本部棟1階第3講堂 出席12名 欠席10名
議事:令和5年度学生健康診断予定、川角キャンパスの部活動での使用、東医体冬季大会開催計画について
- ⑨第9回(令和5年1月13日)於:本部棟2階会議室 出席18名 欠席4名
議事:臨床実習開始前のCOVID19スクリーニング、東医体冬季大会参加、クラブ顧問主将会議、学生生活指導部課長相当者研修会について
- ⑩第10回(令和5年2月10日)於:本部棟2階会議室 出席17名 欠席5名

議事：令和5年度カウンセリング体制、学生会費による卒業アルバム購入補助、毛呂山キャンパスの駐車違反について

⑪第11回（令和5年3月10日）於：本部棟2階会議室 出席17名 欠席6名

議事：新型コロナウイルス感染症対策、出席停止基準ならびに登校再開基準の見直し、部活動の新歓計画、注意喚起ポスター、新年度の委員会開催日程について

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本委員会では、年間を通して学生の保健、福利厚生、課外活動の多岐にわたる諸問題について検討した。年間を通して学生委員が参加した。本年度も新型コロナウイルス感染症の流行により、大幅な活動修正を余儀なくされた。学生支援室と連携しながら学生における感染対策を指導した。対面での部活動を許可しつつ、感染状況に応じて一時中断を指導した。ただし大人数が集めるイベントの開催を禁止した。越華祭は本委員会が協力しながら、オンラインで開催された。学生の健康問題については、例年同様にアルコール、薬物乱用防止の周知徹底をした。定期健康診断については昨年度と時期がずれたもののほぼ全員の学生が受診した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

国の基準として5類に変化したことを受けて、現状に即した新型コロナウイルス感染症対策を学生に周知していく。ガイドラインを策定し、感染対策を評価した上で合宿、対外試合が行えるよう整備していく。学生委員が参加するようになったため、今後も学生からの要望を出来るだけ反映し、学生生活が充実向上するよう努める。

3. 5) 毛呂山キャンパス教員棟・会議室・講堂等管理運営委員会

1. 構成員

顧問 別所 正美 (BESSHO, Masami): 学長(任期: R6. 3. 31)
委員長 篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomi): 病院長 (任期: R6. 3. 31)
委員 森 茂久 (MORI Sigehisa): 副学長・医学教育センター長 (任期: R6. 3. 31)
委員 村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki): 医学部長(任期: R6. 3. 31)
委員 岡田 浩一 (OKADA, Hirokazu): 腎臓内科: 教授(任期: R6. 3. 31)
委員 藤田 恵子 (FUJITA, Keiko): 解剖学: 准教授(任期: R6. 3. 31)
委員 甲田 和博 (KODA, Kazuhiro): 経理部購買課: 課長(任期: R6. 3. 31)
委員 安齋 宰 (ANZAI, Tsukasa): 大学事務部学務課(任期: R4. 7. 31)
委員 佐藤 志音 (SATO, Shion): 大学事務部学務課(任期: R5. 3. 31)
委員 鴫澤 駿介 (TOKIZAWA, Shunsuke): 大学事務部学務課 (任期: R4. 10. 1~R6. 3. 31)
委員 城田 百花 (SHIROTA, Momoka): 大学事務部学務課 (任期: R5. 2. 1~R6. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は埼玉医科大学教員棟・会議室・講堂等管理運営委員会規則第6条に則り、教員棟、会議室、講堂等の有効利用と円滑な管理運営の遂行を目的とする。

3. 活動実績

- ①第110回 定例会議(令和4年5月31日~6月6日) 於: メール会議
出席8人 欠席0人
議事: 利用状況の確認、利用申請及び待機教員の確認
- ②第111回 定例会議(令和4年7月14日~7月21日) 於: メール会議
出席7人 欠席1人
議事: 利用状況の確認、利用申請及び待機教員の確認
- ③第112回 定例会議(令和4年10月3日~10月10日) 於: メール会議
出席8人 欠席0人
議事: 利用状況の確認、利用申請及び待機教員の確認
- ④第113回 定例会議(令和4年11月30日~12月7日) 於: メール会議
出席8人 欠席0人
議事: 利用状況の確認、利用申請及び待機教員の確認
- ④第114回 定例会議(令和5年2月24日~3月3日) 於: メール会議
出席9人 欠席0人
議事: 利用状況の確認、利用申請及び待機教員の確認
- ⑤その他、各室の清掃及び備品確認等、会議形式の変更等による COVID-19 感染対策、各棟へのアルコール除菌液やペーパータオルホルダー設置による衛生管理の強化
- ⑥委員の任期継続確認を行った。

4. 自己評価と次年度計画

- 4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果
退室後の整備を円滑に行い、長期の入居待機者数を軽減した。
会議室や講堂等の貸し出し及び利用状況を確認した。
委員会の構成を見直し、検討した。
- 4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画
教員棟の円滑運営を図るため、委員会規則の見直しおよび退室後の円滑整備に努める。
会議室や講堂については、利用状況を把握し、各部署が有効的に活用できるよう検討する。

3. 6) 毛呂山キャンパス整備委員会

1. 構成員

委員長 亀井美登里：社会医学：教授(任期：R6. 3. 31)
副委員長 丸木清之：理事長(任期：R6. 3. 31)
副委員長 篠塚 望：大学病院長(任期：R6. 3. 31)
委員 森 茂久：副学長・医学教育センター長(任期：R6. 3. 31)
委員 門野夕峰：学生部長(任期：R6. 3. 31)
委員 坂本 安：中央研究施設長：教授(任期：R6. 3. 31)
委員 茂木 明：常務理事・事務局長(任期：R6. 3. 31)
委員 香取光夫：施設部長(任期：R6. 3. 31)
委員 内田和利：大学事務部長(任期：R6. 3. 31)
委員 所ミヨ子：短期大学副学長(任期：R6. 3. 31)
委員 久保かほる：短期大学：教授(任期：R6. 3. 31)
オブザーバー 別所正美：学長
事務局 近藤有寛：大学事務部学務課

2. 目的・目標

本委員会は学校法人埼玉医科大学委員会運営規程第4条2項に則り、毛呂山キャンパスの教育、研究、診療、管理の各部門の環境を整備し、将来を展望したスペースの有効利用を促進させることを目的・目標とする。今年度は毛呂山キャンパスの教育、研究、診療、管理の各部門の環境を整備し、将来を展望したスペースの有効利用を促進させることを目標として活動した。

3. 活動実績

令和4年度は、委員会を開催しなかったが、令和元年度に開催された第2研究棟に関する小委員会に基づき、第2研究棟の運営が一層効率的効果的に運営された。

1. 令和元年度の大きな課題は「教育新棟」の竣工および共用開始であった。これについては大学本部の指導のもと「教育実習棟(カタロスタワー)」がオープンし、その後順調に運営されている。
2. 8号館、11号館と本部棟の教員用スペースについては、「教員棟・会議室・講堂等管理運営委員会」で適宜2ビル2階も援用しつつ調整を諮っている。
3. 第2研究棟の管理体制について、このところ消防から廊下に置かれた備品が指摘される等その管理運営が問題になっていた。このため、第2研究棟に関する小委員会を開催し、関係者で現状の問題を認識すると共に今後の対応について検討した。今後の第2研究棟の管理については、三村副学長に指揮をとっていただき、随時利用者会議を開催し、調整していくこととなった。

その他に、基礎医学棟1階に掲示板が新設された。また、教養教育からの要望に伴い、通知等分かりやすくお知らせできるように掲示等工夫された。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度から引き続き毛呂山キャンパス敷地内で施設の新・改築が進められており、今年度全体構想のなかでその機能向上を図りつつ、法人および総合企画部との連携の上で跡地利用や移転先の検討・決定を続けることが望まれる。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

今年度同様、法人および総合企画部との連携の上で着実な対応を遂行していく計画である。

3. 7) 卒前教育委員会

1. 構成員

委員長：森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育学, 教授, 副学長, 医学部長 (任期: 令和6年3月31日)
副委員長：林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 国際医療センター総合診療内科, 教授 (任期: 令和6年3月31日)
舟久保 ゆう (FUNAKUBO, Yu) : 大学病院リウマチ・膠原病科, 教授 (任期: 令和6年3月31日)

委員：村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 生化学, 教授
木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 総合医療センター血液内科, 教授, 副学長
高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 総合医療センター放射線科, 教授
吉益 晴夫 (YOSHIMASU, Haruo) : 総合医療センター神経精神科, 教授
小山 政史 (OYAMA, Masafumi) : 国際医療センター泌尿器科, 教授

1 年生担当委員：

向田 寿光 (MUKAIDA, Hisamitsu) : 教養教育, 教授
永島 雅文 (NAGASHIMA, Masabumi) : 解剖学, 教授
池田 正明 (IKEDA, Masaaki) : 生理学, 教授
森口 武史 (MORIGUCHI, Takeshi) : 教養教育, 教授
藤森 千尋 (FUJIMORI, Chihiro) : 教養教育, 教授
藤田 恵子 (FUJITA, Keiko) : 解剖学, 教授
山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 教養教育, 准教授

2 年生担当委員：

中平 健祐 (NAKAHIRA, Kensuke) : 教養教育, 准教授
椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IRセンター, 教授
佐々木 惇 (SASAKI, Atsushi) : 病理学, 教授
三輪 尚史 (MIWA, Naofumi) : 生理学, 教授
山本 啓二 (YAMAMOTO, Keiji) : 大学病院心臓内科, 教授
朝倉 博孝 (ASAKURA, Hirotaka) : 大学病院泌尿器科, 教授
荒木 智之 (ARAKI, Tomoyuki) : 生化学, 准教授
淡路 健雄 (AWAJI, Takeo) : 薬理学, 准教授
栗崎 知浩 (KURISAKI, Tomohiro) : 解剖学, 講師
高野 和敬 (TAKANO, Kazuhiro) : 解剖学, 講師

3 年生担当委員：

山元 敏正 (YAMAMOTO, Toshimasa) : 大学病院神経内科, 教授
丸山 敬 (MARUYAMA, Kei) : 薬理学, 教授
島田 朗 (SHIMADA, Akira) : 大学病院内分泌内科・糖尿病内科, 教授
菊池 透 (KIKUCHI, Toru) : 大学病院小児科, 教授
宮川 義隆 (MIYAKAWA, Yoshitaka) : 大学病院総合診療内科, 教授
井上 勉 (INOUE, Tsutomu) : 大学病院腎臓内科, 教授
渡會 恵介 (WATARAI, Keisuke) : 大学病院整形外科・脊椎外科, 講師

4 年生担当委員：

加瀬 康弘 (KASE, Yasuhiro) : 大学病院耳鼻咽喉科, 教授
長坂 浩 (NAGASAKA Hiroshi) : 大学病院麻酔科, 教授
舟久保 ゆう (FUNAKUBO, Yu) : 大学病院リウマチ・膠原病科, 教授
亀井 美登里 (KAMEI, Midori) : 社会医学, 教授
三枝 勉 (MIEDA, Tsutomu) : 大学病院麻酔科, 准教授
宮野 恭平 (MIYANO, Kyouhei) : 大学病院皮膚科, 講師

5 年生担当委員：

森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育学, 教授, 副学長, 医学部長
辻 美隆 (TSUJI, Yoshitaka) : 保健医療学部看護学科, 医学教育センター, 教授
松田 晃 (MATSUDA, Akira) : 医学教育学, 教授
井上 郁夫 (INOUE, Ikuo) : 教職員・学生健康推進センター, 教授

小山 政史 (OYAMA, Masahumi) : 国際医療センター泌尿器科, 教授
吉益 晴夫 (YOSIMASU, Haruo) : 総合医療センター神経精神科, 教授
石橋 敬一郎 (ISHIBASHI, Keiichiro) : 医学教育学, 准教授
柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育学, 教授
廣岡 伸隆 (HIROOKA, Nobutaka) : 大学病院地域医療科, 教授

6 年生担当委員 :

中里 良彦 (NAKAZATO, Yoshihiko) : 大学病院神経内科, 教授
永田 真 (NAGATA, Makoto) : 大学病院呼吸器内科, 教授
中元 秀友 (NAKAMOTO, Hidetomo) : 大学病院総合診療内科, 教授
林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 国際医療センター総合診療内科, 教授
柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育学, 教授
廣岡 伸隆 (HIROOKA, Nobutaka) : 大学病院地域医療科, 教授
井上 勉 (INOUE, Tsutomu) : 大学病院腎臓内科, 教授
横田 和浩 (YOKOTA Kazuhiro) : 大学病院リウマチ膠原病科, 准教授

代表教育主任 :

中平 健祐 (NAKAHIRA, Kensuke) : 教養教育, 准教授
永島 雅文 (NAGASHIMA, Masabumi) : 解剖学, 教授
三輪 尚史 (MIWA, Naohumi) : 生理学, 教授
魚住 尚紀 (UOZUMI, Naonori) : 生化学, 准教授
前崎 繁文 (MAESAKI, Shigefumi) : 大学病院感染症科・感染制御科, 教授
舟久保 ゆう (FUNAKUBO, Yu) : 大学病院リウマチ・膠原病科, 教授
大崎 昭彦 (OSAKI, Akihiko) : 国際医療センター乳腺腫瘍科, 教授
丸山 敬 (MARUYAMA, Kei) : 薬理学, 教授
佐々木 惇 (SASAKI, Atsushi) : 病理学, 教授
森吉 美穂 (MORIYOSHI, Miho) : 大学病院臨床検査医学, 准教授
野田 真永 (NODA, Shinei) : 国際医療センター放射線科, 教授
松田 晃 (MATSUDA, Akira) : 医学教育学, 教授
岩永 史郎 (IWANAGA, Shiro) : 国際医療センター心臓内科, 教授
中山 伸朗 (NAKAYAMA, Nobuaki) : 大学病院消化器内科・肝臓内科, 准教授
池上 裕一 (IKEGAMI, Yuichi) : 大学病院内分泌・糖尿病内科, 講師
岡田 浩一 (OKADA, Hirokazu) : 大学病院腎臓内科, 教授
板澤 寿子 (ITAZAWA, Toshiko) : 大学病院小児科, 准教授
亀井 良政 (KAMEI, Yoshimasa) : 大学病院産科・婦人科, 教授
松尾 幸治 (MATSUO, Koji) : 大学病院神経精神科・心療内科, 教授
仲村 秀俊 (NAKAMURA, Hidetoshi) : 大学病院呼吸器内科, 教授
高橋 秀寿 (TAKAHASHI, Hidetoshi) : 国際医療センターリハビリテーション科, 教授
宮野 恭平 (MIYANO, Kyohei) : 大学病院皮膚科, 講師
高田 綾 (TAKADA, Aya) : 法医学, 教授
中元 秀友 (NAKAMOTO, Hidetomo) : 大学病院総合診療内科, 教授
根本 学 (NEMOTO, Manabu) : 国際医療センター救急医学科, 教授

学生委員 :

- (1 年生) 大下 唯花、木村 亮太、小池 弘隆、志鶴 駿、富山 果純、深見 亮太、町田 仁
(2 年生) 松村 優里、古郡 真希、松本 崇暁、山口 春名、山下 主税
(3 年生) 永井 拓也、新妻 彩、安田 英史、日吉 利隆
(4 年生) 出口 紗子、丹羽 茉友、細川 綾乃、松島 和希、若尾 圭悟
(5 年生) 相羽 弘貴、麻生 真由、新井 聡一郎、飯倉 康貴、五十嵐 敏高、乾 もえり、小笠原 睦、
岡村 吾朗、小川原 蓮、荻本 瑛史、小野 健太、清住 かやの、倉持 智仁、小林 芽生、
高橋 遥奈、田中 美帆、中村 将太郎、晴山 裕太、平岡 侑子、古川 哲也、三上 将生、
宮川 和也、門間 令夏、山田 崇広、由良 順一、工藤 大貴、岩田 亮太郎
(6 年生) 西 秀仁、人見 理紗子

国家試験対策委員：

- (3 年生) 赤沼 勇吾、奈良 智之、新井 悟史、中口 うらら、永井 拓也、新妻 彩、長谷川 広美、
三浦 彩果
- (4 年生) 西村 理芳、坂井 太樹、上野 夏代、須恵 彩理咲、鈴木 杏奈、深井 翔太、堀江 美羽、
丸井 有佐
- (5 年生) 相羽 弘貴、内野 杏那、乾 もえり、荻本 瑛史、岸 宥希、河野 将宏、齋藤 一基、
中野 真耶、増田 吾聞
- (6 年生) 人見 理紗子、武井 公香、川端 伸明、北野 可子、清河 徳州、村山 幹、渡邊 優紀

2. 目的・目標

卒前教育委員会は本学設立の理念および社会的使命に従って、医学部学生を対象とした効果的な医教育を実施するために必要な事項について審議することを目的としている。主たる審議事項は以下の通りである。

- (1) カリキュラムに関すること
- (2) 臨床実習に関すること
- (2) 試験および進級、卒業の評価に関すること
- (3) 教育に関するFD、ワークショップに関すること
- (4) 学生に対する教育指導
- (5) その他、卒前医学教育全般に関すること

3. 活動実績

卒前教育委員会では、医学教育センター医学部領域卒前医学教育部門の「カリキュラム室」、「臨床実習推進室」、「試験管理室」、「調査解析室」、「学生支援室」、「学力増進室」、「研究マインド育成室」、「地域医学推進室」の各室およびOSCE委員会、スキルスラボ運営委員会、カリキュラム委員会における活動報告、1～6年生の学年小委員会における報告などを基にして構成員が討議を行い、卒前医学教育に関する方針を決定している。

本委員会には平成19年度以降は全基本学科の教育主任、コースおよびユニットディレクターも参加し、情報伝達の目的も兼ねた「卒前教育合同会議」として開催している。また、同会議には医学教育センターの専任教員、その他卒前教育委員長が必要とする教員もオブザーバーとして参加している。本委員会は医学部の教育に関する議決を行う機関であり、年々議題が増加することにより会議内で十分な討議をする時間を確保できなくなった。そのため平成20年度から卒前医学教育に関する問題点をより活発、自由に意見交換をすることを目的として「卒前医学教育懇談会」を立ち上げた。その後名称が医学教育センター懇談会に変更となり、平成28年度より、その機能を医学教育センター運営委員会に移管した。同委員会で討論した事項は、月1回開催する卒前教育委員会の定例会議に諮っている。なお、「カリキュラム委員会」は新カリキュラムの立案、コース・ユニット間の調整、試験の在り方などを検討している。本委員会の役割は医学部教育に関する審議機関であることを再認識していただくために、第161回（令和2年10月13日）議事録より卒前教育委員会として記録して開催回数は引き継ぐものとし、卒前教育合同会議の第160回までの記録を卒前教育委員会と同等として扱うことにした。

平成25年5月以降は各学年の学生代表も参加することになり、3キャンパスの全教員のみならず学生も卒前医学教育に関する情報を共有できるようにしている。会議を効率的に進行するため、できるだけ各室、各委員会からの報告は、基本的に報告事項は各自で資料を読んでもらうことにして、重要な情報提供、審議が必要な事項に絞って発言、質疑応答を行う進行としている。

3-1. 委員会の開催

卒前教育委員会

- 第178回卒前教育委員会（令和4年4月5日）
第179回卒前教育委員会（令和4年5月10日）
第180回卒前教育委員会（令和4年6月7日）
第181回卒前教育委員会（令和4年7月5日）
第182回卒前教育委員会（令和4年9月6日）
第183回卒前教育委員会（令和4年10月11日）
第184回卒前教育委員会（令和4年11月8日）
第185回卒前教育委員会（令和4年12月6日）
第186回卒前教育委員会（令和5年1月17日）

第187回卒前教育委員会（令和5年2月14日）

第188回卒前教育委員会（令和5年3月14日）

3-2. 活動の概要と実績

新型コロナウイルスの感染対策として3密を避けるため、昨年度に引き続き、卒前教育委員会の正式メンバー会場参加もしくはZoomシステムからの参加、オブザーバーは学内LANでの視聴とチャットシステムを用いた参加の複合方式を継続した。

(1) 「カリキュラム室」、「臨床実習推進室」、「試験管理室」、「調査解析室」、「学生支援室」、「学力増進室」、「研究マインド育成室」、「地域医学推進室」の活動状況に関しては、年報「卒前医学教育部門」に詳細を記載した。卒前教育委員会の下部組織として、「OSCE委員会」、「シミュレーショントレーニングセンター運営委員会」があり、活動状況は紙面の都合上、医学教育センター医学部領域卒前医学教育部門の年報の中で記載しているので参照されたい。その他に、本委員会に属するWGとして「スマートスカラールWG」、「オンライン評価WG」が設置されており、特定の課題について検討を行っている。また関係するカリキュラム委員会については、カリキュラム委員会の年報を参照されたい。令和4年度予算による「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」の一つとして、群馬大学と連携した「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成事業」が採択されたため、卒前教育委員会の下に卒前ポストコロナWGを設置した。

(2) 「学年小委員会」は学生委員も含めて原則的に2カ月に1回に開催し、1年生は1学期に「全体会」を2回、「5分の1の会」を5回、2学期には懇談会を3回開催することになっている。新型コロナウイルス感染の関係で登校が許可制になったが、学年小委員会は、対面での懇談会を許可し、一部の学年Zoomを利用した遠隔懇談会を継続した。

(3) 1～4年は、昨年度の方針を引き継ぎ、対面と遠隔のハイブリッド授業とした。基本的に、講義はリアルタイム、オンデマンド形式の遠隔とし、演習はZoomを用いた遠隔として教育上必要に応じて対面とし、実習は教育上の必要性が高い場合は対面として、一部は遠隔として実施した。

(4) 1年から6年まで完成した新カリキュラムは2年目に入った。6年生臨床実習、クリニカルクラークシップ(CC Step3)は、前年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止されていた学外実習を、受け入れ可能な指定施設と非指定施設を対象に再開した。2022年の5年生CC Step1は、基本的に全期間実施され、一部の病棟、病院で短期間実習を中止したが、ローテート予定の診療科を全てローテートした。感染のため中止となった期間、体調不良のため欠席した場合の補習は、夏季休暇、また1月からのCC Step2第1クール第1週を利用して該当者に合わせて個別に実施した。

(5) 課外学習プログラムは、昨年度に引き続き今年度も新規にプログラム提案の募集は行わずに、昨年度提案されたプログラムを元に、実施するかどうかを確認した。遠隔で実施できるプログラムと感染対策の条件を満たすことができる基礎系実験のみ実施が許可され、一部のプログラムが実施された。学外では、女子栄養大学と埼玉大学と提携しているが、埼玉大学からプログラムが提案され、学生に加えて教員も参加し、交流を深めた。

(6) 医学教育センター医学部領域FD部門と共同で、6月7日に毛呂山キャンパスを会場とし、Zoomを利用して「新任教員と講師以上に昇格した教員の研修会」を実施した。7月29～30日にZoomを利用して遠隔で「第43回医学教育ワークショップ」を開催した。第12回医学教育フォーラムは9月10日に学内は学内LANによるライブ配信とチャットシステムによる質疑応答とし、学外はZoomによる配信を併用して、全体テーマは「ポストコロナに向けた地域医療教育」で、特別講演は演題名「離島・地域医療 ～今の課題とその対策～」(鹿児島大、大脇哲洋教授)が開催された。

(7) 講義の出欠の取り方は、昨年度と同様に出欠は取るが、欠席数に応じた10点減点は行わない方針となった。COVID-19の影響で、講義は原則的に遠隔授業で、1、2年のオンデマンド講義の場合はWebClassの利用状況で、3、4年のライブ講義は原則SMU passportへの健康状態報告を元に出席確認を行った。

(8) 令和5年2月4日～5日に実施された第117回医師国家試験の合格率は、新卒93.2% (110/118)、既卒72.7% (8/11)、全体で91.5% (118/129)であり、新卒合格率は全国医学部・医科大学82校中66位、私学31校中22位、既卒合格率はそれぞれ20位、9位、全体での合格率はそれぞれ58位と20位であった。

(9) 令和4年度の卒業、進級の状況は下表の通りである。

学年	学生数	進級, 卒業 (条件付)	留年	休学	転学部	退学
1年	134	123 (5)	10	1	0	0
2年	139	131 (20)	8	0	0	0
3年	137	126 (7)	8	0	0	3
4年	146	141 (18)	3	1	0	1
5年	127	125	1	1	0	0

6年	131	118	8	1	0	4
計	814	764 (50)	38	4	0	8

全体での進級、卒業率は93.9%（令和3年度93.4%）であるが、平成29年度入学生130人のうち、令和4年度に卒業した卒業生のストレート卒業率は71.5%（令和3年度77.7%）、医師国家試験までのストレート合格率は70.0%（令和3年度75.4%）であった。

(10) 「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」推進のために、新しく設置された卒前ポストコロナWGは、会議を8回開催し、教育プログラム拡充・開発、連携体制の構築と拠点構築のための取組など事業を運営・推進ための検討を行った。教育プログラム1, 2, 3については、令和4年度には2つの試行と令和5年度に向けてカリキュラム拡充のための検討を行い、令和4年度 PreCC2-1, CCstep1 総合診療内科感染症実習を試行した。映像コンテンツを15本作成し、地域枠医学生の支援計画の立案、連携医療機関との懇談会を1回開催した。広報活動として、1月にパンフレット、1月、3月にニュースレターの発刊、3月30日に川越クリニックでシンポジウムをハイブリッド開催し、150名の参加を得た。第1部には、長崎大学の前田隆浩教授の特別講演を行った。ホームページを開設し、3月30日現在2020件のアクセスを得た。令和5年度から開催する外部評価委員会の設置要綱の作成、候補者の選定を行った。連携校である群馬大学と連携し、11月4日に大宮ソニックシティで協定締結式の開催、同時、及び3月30日に2回目の連携会議を開催し、運営連絡会議を全5回開催した。全国の11拠点と連携して、e-learning構築への参加、全国シンポジウムに参加した。

(11) 大学運営会議の下に 医学部・保健医療学部の委員により組織された数理・データサイエンス・AI教育検討WGにより企画・立案された全学共通データサイエンス AI学修プログラムが今年度4月より医学部・保健医療学部で実施された。WGは12月より発展的に全学共通データサイエンス AI学修プログラム運営委員会に組織化された。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

新カリキュラムは1年から6年までの完成形として2年目に入った。6年生CC Step3では、前年度新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止されていた学外実習を、受け入れ可能な指定施設と非指定施設を対象に再開した。

卒前医学教育の目標の一つとも言える医師国家試験の117回の合格率は新卒93.2%（令和2年度：93.2%）であり、全体で91.5%（令和3年度：92.0%）であり、昨年度と同じレベルで、全国、私学とも上位1/2の位置には入れなかった。平成29年度入学した6年生のストレート卒業率71.5%（令和3年度77.7%）と、令和2年度に達成した念願の80%に及ぶどころか明らかに低下した。医師国家試験までのストレート合格率も70.0%（令和3年度：75.4%）と減少した。最近の回復は、学力増進室5、6年担当の活動が軌道に乗り、5年生から6年生への補習、模試等などの対策が定着し、さらにサポーターによる面談の体制が充実してきたことによるが、学生気質、学年内のまとまりなど、学年毎の特性が関与していると考えられる。さらに医師国家試験に関しては他大学も国試対策を充実させてきており、また昨年度から新型コロナウイルス感染症の影響で部活動が制限され、他大学でも自宅学習に時間に費やす時間が増えたのではないかと推測される。

総留年者数が昨年度は43名であったが今年度は38名と減少し、また退学者は昨年度の6名から今年度8名と増加し、その半数は6年生であった。平成29年度より進級基準の厳密化、CBTの合格基準を引き上げ、講義欠席の場合の減点など、学生にとっては進級の厳密化が進んだ状況にありながらも、留年者数、退学者数が大きく悪化しなかった要因として、学生支援室員のこまめな支援、学力増進室の対策などが挙げられる。学力増進室に空席であった2年生担当が決まり、2年生対策の活動を開始した。

定期試験の問題、解答については公開することが基本方針となったが、まだ全てのユニットの定期試験は公開がなされていない。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度から授業の基本方針が対面授業となるので、講義、演習、実習の内容、手順を見直して、新型コロナウイルス感染の再燃に注意しながら教育効果を高める授業を運営できるようにする。対面授業の復帰による問題発生に迅速に対応する必要がある。

留年者、成績下位者の支援を継続する。医師国家試験に向けた5年生、6年生の学力増進対策を継続するが、各対策の効果を検証し、効果的な対策を強化して、成績が改善するように。6年生下位者に対する若手サポーターによる支援体制をさらに充実させ、その他の対策も検討する。4、3年の対策を継続するとともに効果を検証して内容を充実させる。担当が決まった2年生の学力増進対策を進めていく。

「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」は、卒前ポストコロナWGを中心に教育プログラム拡充・開発、連携体制の構築と拠点構築のための取組などの事業運営のための検討、学内合意形成を行い、補助事業を円滑に運営する。教育プログラム1, 2, 3については、令和5年度には11ユニットが新たに内容を拡充し、特に、群馬大学との共同開催する「はじめて学ぶ地域医療」「利根川プログラム」については、両大学教員の連携による開催を目指す。

次年度より始まる第5次長計総合計画「挑戦」の教育について、年度毎の具体的な計画を検討し、まずは行動を起こして目標に向かって着実に前進したい。

本会では医学教育に関して議題が多く、事前に会議資料を配布して発表方法を指定しているが、それでも予定の会議時間1時間30分では終了せずに超過することが多く、また十分な説明時間、質疑応答を行う時間を取れていない状況は改善できていない。今後も継続して、議事進行等の工夫、会の在り方について検討する必要がある。

3. 8) 卒後教育委員会

1. 構成員

- 委員長 三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 埼玉医科大学病院リウマチ膠原病科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 副委員長 山元 敏正 (YAMAMOTO, Toshimasa) : 埼玉医科大学病院神経内科・脳卒中内科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 副委員長 木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 総合医療センター血液内科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 副委員長 林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 国際医療センター脳卒中センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育センター長 (任期 : R6. 3. 31)
- 中村 晃一郎 (NAKAMURA, Koichiro) : 埼玉医科大学病院皮膚科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 藤巻 高光 (FUJIMAKI, Takamitsu) : 国際交流センター長 (任期 : R6. 3. 31)
- 島田 朗 (SHIMADA, Akira) : 埼玉医科大学病院内分泌・糖尿病内科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 総合医療センター放射線科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 石橋 敬一郎 (ISHIBASHI, Keiichiro) : 総合医療センター消化器外科・一般外科 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 岡田 洋平 (OKADA, Makoto) : 総合医療センター泌尿器科 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 堀江 公仁子 (HORIE, Kuniko) : ゲノム応用医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

2. 目的・目標

当委員会の前身は旧附属病院（現在の大学病院）における卒後教育を担当することを目的に発足した。その後、卒後臨床研修は大学病院、総合医療センターおよび国際医療センターに設置された研修医委員会が担当することになり、当委員会は、卒後臨床研修以外の卒後教育を担当することとなった。現在の当委員会の目的は①卒後教育を目的とした学術集会の主催及び後援、②日本医師会の生涯教育プログラムへの協力を含めた卒後教育の立案と実施、③卒後教育を推進するための研究支援などである。

3. 活動実績

① 委員会開催日

- 第1回 : 令和4年4月5日（火）出席者 : 12人（欠席者なし）
- 第2回 : 令和4年5月10日（火）～5月11日（水）メール会議 出席者 : 12人（欠席者なし）
- 第3回 : 令和4年6月14日（火）～6月15日（水）メール会議 出席者 : 11人（未回答1人）
- 第4回 : 令和4年7月5日（火）～7月6日（水）メール会議 出席者 : 12人（欠席者なし）
- 第5回 : 令和4年9月6日（火）～9月8日（木）メール会議 出席者 : 11人（未回答1人）
- 第6回 : 令和4年10月4日（火）～10月5日（水）メール会議 出席者 : 11人（未回答1人）
- 第7回 : 令和4年11月1日（火）出席者 : 6人（欠席者6人）
- 第8回 : 令和4年12月6日（火）～12月7日（水）メール会議 出席者 : 11人（未回答1人）
- 第9回 : 令和5年1月10日（火）～1月11日（水）メール会議 出席者 : 12人（欠席者なし）
- 第10回 : 令和5年2月7日（火）～2月8日（水）メール会議 出席者 : 11人（未回答1人）
- 第11回 : 令和5年3月7日（火）～3月8日（水）メール会議 出席者 : 12人（欠席者なし）

② 主な議題

- (1) 前回議事録の確認
- (2) 本委員会主催・後援学術集会の申請内容の確認
- (3) 学術集会出席者報告
- (4) 学術集会後のフィードバック内容の確認
- (5) 次年度の委員会開催日程の確認

③ 卒後教育委員会主催学術集会

以下の1件の学術集会を主催した。

第1回 講師 : 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センター 教授 大脇 哲洋 先生

演題 : 離島・地域医療 ～今の課題とその対策

日時 : 令和4年9月10日（土） 14:00～15:00

会場 : カタロスタワー1階 クロードベルナルホール・学内LIVE配信（講師はzoomにより遠隔で参加）

申請 : 医学教育センター

出席者：141名

④ 卒後教育委員会後援学術集会

以下の5件の学術集会を後援した。

第1回 講師：Charles Eberhart 先生（Johns Hopkins 大学 病理学教室）

演題：Pathology - a critical bridge between scientific advance and clinical care

日時：令和4年5月26日（木） 12：00～13：00

会場：カタロス タワー1階クロード・ベルナール ホール・学内LIVE配信

申請：国際交流センター

出席者：69名

第2回 講師：Edwin L. Steele laboratory of Tumor Biology, Department of Radiation Oncology, Massachusetts General Hospital / Harvard Medical School Dan Gabriel Duda 先生

演題：How to Succeed in Translational Cancer Research: Transforming Challenge in Opportunity

日時：令和4年7月5日（火） 17：30～18：30

会場：総合医療センター 会議室2 管理棟4階・学内LIVE配信

申請：総合医療センター 呼吸器外科

出席者：20名

第3回 講師：永松 健 先生（国際医療福祉大学 成田病院 産婦人科 教授）

演題：分娩進行が見えるーすぐに始められる経陰超音波法ー

日時：令和4年12月16日（金） 19：00～20：00

会場：総合医療センター 本館5階 小講堂、Zoom ウェビナー

申請：総合医療センター産婦人科

出席者：150名

第4回 講師：吉岡 恭子 先生（厚生労働省 医政局 研究開発政策課）

中濱 洋子（国立研究開発法人 国立がん研究センター中央病院）

演題：令和4年度臨床研究に関わる倫理研修

日時：令和5年1月13日（金） 17：30～19：30

会場：日高キャンパス 創立30周年記念講堂

申請：臨床研究適正推進センター

出席者：50名

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本年度はより参加しやすい形式での開催方法を申請者側に提案していくこと、LIVE配信を活用のみならずオンライン会議システムの利用や学内周知活動にも力を入れた。教員代表者会議において委員長から他先生方に申請を促すなどの活動を行った。結果として主催学術集会は1件、後援学術集会は5件であった。開催件数は前年度の実績（前年度：主催2件、後援4件）と比べて大きな変化はなかった。一方、主催学術集会においてオンライン会議システムを利用し、遠隔で講師が参加する形式で開催することができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

コロナ禍以降学術集会の開催件数は減少している。学術集会の開催は本学のアカデミズムの根幹にも関わることであるため、申請件数を増やす取り組みを行っていくことが重要である。LIVE配信の活用のみならずオンライン会議システムの利用が可能である旨を周知していく活動にも力を入れていく。

3. 9) 医学部カリキュラム委員会

1. 構成員

- 委員長 岡田浩一 (OKADA, Hirokazu) : 副医学部長 (任期 : R5. 3. 31)
副委員長 森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学部長、副学長、医学教育センター長 (任期 : R5. 3. 31)
委員 松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長 (任期 : R5. 3. 31)
三村俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長、卒後医学教育部門長 (任期 : R5. 3. 31)
竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (任期 : R5. 3. 31)
小山政史 (OYAMA, Masafumi) : 副医学部長、国際医療センターブランチ長 (任期 : R5. 3. 31)
林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 試験管理室室長 (任期 : R5. 3. 31)
持田 智 (MOCHIDA, Satoshi) : 図書館長 (任期 : R5. 3. 31)
辻 美隆 (TSUJI, Yoshitaka) : シミュレーション教育部門長 (任期 : R5. 3. 31)
佐々木 惇 (SASAKI, Atsushi) : 病理学教授 (任期 : R5. 3. 31)
山田 健人 (YAMADA, Taketo) : 病理学教授 (任期 : R5. 3. 31)
永島雅文 (NAGASHIMA, Masabumi) : 解剖学教授 (任期 : R5. 3. 31)
中里良彦 (NAKAZATO, Yoshihiko) : 神経内科教授 (任期 : R5. 3. 31)
廣岡伸隆 (HIROOKADA, Nobutaka) : 地域医療学教授 (任期 : R5. 3. 31)
村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 微生物学教授 (任期 : R5. 3. 31)
柴崎智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育学教授 (任期 : R5. 3. 31)
藤森千尋 (FUJIMORI, Chizuru) : 教養教育教授 (任期 : R5. 3. 31)
淡路健雄 (AWAJI, Takeo) : 薬理学准教授 (任期 : R5. 3. 31)
魚住尚紀 (UOZUMI, Naonori) : カリキュラム室長、生化学准教授 (任期 : R5. 3. 31)
中平健祐 (NAKAHIRA, Kensuke) : 教養教育准教授 (任期 : R5. 3. 31)
石橋敬一郎 (ISHIBASHI, Keiichiro) : 医学教育学准教授 (任期 : R5. 3. 31)
鈴木 正 (SUZUKI, Tadashi) : 教養教育准教授 (任期 : R5. 3. 31)
岩澤昌人 (IWASAWA, Masato) : 学務課長 (任期 : R5. 3. 31)
奥羽 慧 (OOU, Megumi) : 医学部 6 生 (任期 : R5. 3. 31)
丸井有佐 (MARUI, Arisa) : 医学部 4 生 (任期 : R5. 3. 31)
波多野思美 (HATANO, Omomi) : 医学部 3 生 (任期 : R5. 3. 31)
松本崇暁 (MATSUMOTO, Tadaaki) : 医学部 2 生 (任期 : R5. 3. 31)
大下唯花 (OOSHITA, Yuika) : 医学部 1 生 (任期 : R5. 3. 31)

オブザーバー

- 別所正美 (BESSHO, Masami) : 学長
村越隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 医学部長補佐
椎橋実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 副医学部長、教育情報部門長
亀井美登里 (KAMEI, Midori) : 社会医学教授
高橋美穂 (TAKAHASHI, Miho) : カリキュラム室助手

2. 目的・目標

埼玉医科大学における教育理念を実現するため、カリキュラムの運営及び改善に係る事項を審議し、必要事項を講ずることを目的とする。

3. 活動実績

- ① 第 1 回委員会 (R4 年 5 月 25 日開催) Zoom 開催 出席 18 名 (委任状 1 名) 欠席 4 名
- ② 第 2 回委員会 (R4 年 7 月 19 日開催) Zoom 開催 出席 17 名 (委任状 1 名) 欠席 5 名
- ③ 第 3 回委員会 (R4 年 9 月 20 日開催) Zoom 開催 出席 21 名 欠席 6 名
- ④ 第 4 回委員会 (R4 年 11 月 15 日開催) Zoom 開催 出席 20 名 (委任状 3 名) 欠席 8 名
- ⑤ 第 5 回委員会 (R5 年 1 月 24 日開催) Zoom 開催 出席 19 名 (委任状 2 名) 欠席 4 名
- ⑥ 第 6 回拡大委員会 (R5 年 3 月 7 日開催) ハイブリット開催 出席 24 名 (委任状 3 名) 欠席 5 名

令和 4 年度は、計 6 回の会議を上記のように定期的開催し、特に第 6 回は外部の専門家および地域および社会からの代表者 (3 名) にご参加いただく拡大会議とした。また本年度より各学年代表の学生委員が参加することとなった。本

委員会の統括のもとで、1,2年生担当(基礎—臨床講義連携)WG(責任者:山田委員)、3,4,5年生担当(臨床実習検討)WG(責任者:石橋委員)、IPE・行動科学WG(責任者:小山副医学部長)、5,6年生担当(6年ユニット検討)WG(責任者:林委員)、今後の授業の在り方WG(責任者:魚住委員)、数理・データサイエンス・AI教育検討WG(責任者:鈴木委員)と医学英語カリキュラム検討WG(責任者:藤森委員)がそれぞれ活動している。本年度からはさらにポストコロナWG(責任者:柴崎委員)、学習評価WG(責任者:柴崎委員)と研究参画WG(責任者:村上委員)が発足した。

1,2年生担当WGでは、1-2年生から3-4年生への学習移行をスムーズにするための検討を重ね、1-2年生に関しては復習用教材が全て完成し、学生に公開した。また、過去問と定期試験問題の振り返りの公開も進めている。3-4年生に関しても継続するよう提言する。さらに1-2年生から屋根瓦方式の基盤となるような課題の準備を始めている。

3,4,5年生担当WGでは、3,4年生Pre-CCは、週2日間の実習を4日間にするについて各診療科にアンケート調査を実施しており、現在集計中である。

IPE・行動科学WGでは、1-4年生行動科学と医療倫理および地域医療とチーム医療、3-4年生Pre-CCでの演習および実習を通して順調に教育を行うことができた。特に、3年生Pre-CC1-1では、初めて保健医療学部との合同IPE(医療安全管理演習)を実施し学生からの満足度も高かった。

5,6年生担当WGでは、達成度評価ユニットにおいて第4回実力試験の非受験者が多いことから、令和5年度は第4回についても成績評価に組み入れることとした。また令和5年度の総合学習ユニットは、夏休み前および卒業試験前後に対面で実施することとした。卒業試験後の授業に関しては、第117回国家試験の結果を踏まえ社会医学を増やすことを検討している。

今後の授業の在り方WGでは、コロナ対策を行いつつ授業が進行できるよう検討課題を議論し、実際にカリキュラム室で運用しつつ、令和4年11月から3年生を対面授業に切り替えをおこなった。令和5年度は全面的に講義を対面授業として再開する方針で準備を進めている。

数理・データサイエンス・AI教育検討WGでは、自己点検と評価の取りまとめをおこない、文科省の認定への準備を進めている。本プログラムに関する自己点検評価の書類については、令和5年2月に介された全学自己点検・評価委員会で承認された。

医学英語カリキュラム検討WGでは、医学部の正課における学修目標と期待される能力について、正課授業と対応させ検討し、医学部英語教育全体像を概略図にまとめ可視化した。また、医学英語オンラインプログラムについても、医学部全学年を対象として主にWebclassで試行的に実施した。実施後のアンケート結果では、学生の率直な意見が数多く挙げられており、正課教育における量の補完だけではなく学習意欲の向上等にも影響することが推察できた。

ポストコロナWGでは、埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成事業を展開している。プログラム1および2は全学生、プログラム3は地域枠学生を対象としており、まず教育プログラム1では、試行として3年生Pre-CC両学部合同医療安全演習および4年生Pre-CC2-1第3クール導入実習をおこなった。プログラム2では、試行として4年生CCstep1総合診療内科感染実習をおこなった。プログラム3では、試行として利根川プログラムを令和5年3月に実施した。また教材開発として、医学部学生および医療に関心のある高校生を対象とした動画作成をおこなっている。早い時期から埼玉の医療や将来必要となる医療を理解すること、暮らしを支える仕組みを理解することを目的としている。

学修評価WGでは、分野別認証評価での指摘事項について検討を進めている。令和4年度のマイルストーン評価は、1-4年生および6年生(総合学習コース)についてはカリキュラム委員会から依頼し、学務課で回答を集計している。5-6年生に関しては、臨床実習推進室で集計している。いずれも集計後にカリキュラム委員会へ報告する。また今後の成績評価および進級判定への利用、評価の検証等の課題を検討している。

研究参画WGでは、学生の研究室配属をどのように進めるかという点を中心に検討を進めている。新コアカリキュラムでは研究実習実施の目安を4週間としているが、時間の捻出を考慮し1-4年で毎年1週間の研究実習をする案が提示された。研究室配属4週間の構造に柔軟性を持たせる必要がある。引き続きコースや研究マインド醸成も含め検討を続ける。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

コロナ禍も3年目を迎え、ほとんどのユニットでコロナ禍に対応したシラバスを作成し、シラバス通りに講義、実習が実施できた。With Coronaの状況に対応し、オンライン～ハイブリッドの講義、課題管理、出席確認を臨機応変に実施し、極力安全性を担保しつつ実習を行った結果、各学年とも大きなクラスターの発生を認めなかった。またR4年度が初年度となる両学部合同および全学共通プログラムを、予定通り実施することができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

新たに3つのWGの活動が始まったが、ポストコロナWGによるポストコロナ時代に対応した医学教育について、群馬大学医学部と連携しつつ次年度はさらに柔軟かつ有効な講義・実習方法を考案していく。また学修評価WGでは4年目を迎えるマイルストーン評価制度に関して、進級要件化を見据えて、すべてのマイルストーンに対し達成度の評価を行えるようにし、また未達成者に対する補習法についても改良を加えていく。多くのWGによって課題解決のための提案について、できるだけカリキュラムに取り込み、シラバス改訂に反映させていく。

3. 10) 研究医養成プログラム運営委員会

1. 構成員

委員長	村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 医学教育センター医学部領域研究マインド育成室長・医学部微生物学: 教授 (任期: R5. 3. 31)
委員	別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長 (任期: R5. 3. 31)
	吉本 信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長 (任期: R5. 3. 31)
	松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長 (任期: R5. 3. 31)
	木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 副学長・医学研究科長 (任期: R5. 3. 31)
	森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副学長・医学部長・医学教育センター長 (任期: R5. 3. 31)
	三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長・医学教育センター医学部領域卒業後医学教育部門長 (任期: R5. 3. 31)
	竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (任期: R5. 3. 31)
	門野 夕峰 (KADONO, Yuhu) : 学生部長 (任期: R5. 3. 31)
	柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育センター医学部領域卒業前医学教育部門長 (任期: R5. 3. 31)
	村越 隆之 MURAKOSHI, Takayuki) : 医学部長補佐 (任期: R5. 3. 31)
	佐々木 惇 (SASAKI, Atsushi) : 医学部病理学: 教授 (任期: R5. 3. 31)
	片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) 医学研究センター長 (任期: R5. 3. 31)
	堀江 公仁子 (HORIE, Kuniko) : 医学部ゲノム応用医学: 教授 (任期: R5. 3. 31)
	茂木 明 (MOGI, Akira) : 事務局長 (任期: R5. 3. 31)
	内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部長 (任期: R5. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は学校法人埼玉医科大学委員会運営規定に則り、埼玉医科大学研究医養成プログラムの円滑な運営を図るために設置されたものである。活動目標として、1) プログラム履修中の学生に対する指導体制を強化する事、2) 次年度申請者の募集と選考の実施、3) 研究発表の支援、を挙げ、様々な基礎医学分野において医学部医学科卒業の基礎医学研究医の人材育成に向けた活動を行なった。

3. 活動実績

① 第1回 Zoom オンライン会議 (令和4年4月19日) : 出席15名

1) 議事——委員長報告 (1) 令和4年度委員会構成員は、委員長が佐々木教授から村上教授に交代し、竹内副学長、柴崎教授が新たな構成員に加わった。(2) 学生指導について、指導教員から提出された指導報告書 (合計6通) に基づき、履修学生の研究活動の報告がなされた。(3) 第2回オール埼玉医大研究の日・第7回学生による研究発表会について、医学部および保健医療学部より4名の学生発表の申請があった。当日は1名体調不良のため欠席となったが、履修学生M19010 安藤優希枝、M19109 松島和希より発表があった。審査の結果3名の学生 (うち履修者2名) が12月の合同教授教員総会で表彰された。(4) 令和4年度研究医養成プログラム申請者1名に対して、令和4年2月1日に選考面接を行った。今回も新型コロナウイルス感染対策として、密を避けるために村上委員長と佐々木教授 (前委員長) の2名で面接を行い、メール会議による審議の結果、申請者を合格と判定した。(5) 令和4年度研究医養成プログラム履修者について、当該年度より研究医学生は9名となった。卒業生からは4年生3学期から臨床実習が開始されると研究の機会確保が難しいとの意見があった。(6) 研究医養成プログラム年間予定について、4月からの大学院講義開講に伴う希望者の履修登録を行った。11月には第8回学生による研究発表会で履修者が発表する予定である。令和5年度プログラム履修者の募集は、医学部2年生を対象に2022年11-12月の予定である。(7) 研究医奨学金貸与制度について、令和4年度も引き続き1名に研究医養成奨学金を貸与している (M13030 北山聖也)。(8) 佐々木委員、松下委員より免疫学に研究医養成プログラム第一期生であった本学卒業生が臨床を経て、感染症科兼任の助教として配転の報告があった。

2) 審議事項

(1) 研究医養成プログラム履修学生の大学院進学について、佐々木委員より学部生時に本プログラムを履修した学生が本学大学院への進学率が年々低くなっているとの報告があった。現在履修中の学生に大学院への進学を目指してもらう働きかけの提案がなされた。意見として、1) プログラム履修既卒者に大学院進学の案内、2) 臨床研修プログラム研究マインド自由選択プログラムと連動する仕組みの検討、3) 基礎と臨床ならびに学位と専門医取得を同時に進められる制度の早期宣伝、が挙げられた。(2) 研究医養成プログラム履修者の研究時間の確保について、木崎委員より学生の研究時間の確保についてカリキュラムと連動・創出することはできないかの提案があった。意見として、1) 学生からも試験日程がタイトであり、高学年ほど研究の時間的余裕がなくなるため、1年生から研究に触れられるカリキュラムの工夫、2) 新カリキュラムでは研究マインドを意識したカリキュラム構築が挙げられた。(3) 研究マインドの醸成について、キャリアデザインユニットで研究マインド育成室と連携し、研究に対する取り組みを紹介していく。

② 第2回 メール会議 (令和4年7月14-21日) : 出席16名

1) 審議——奨学金被貸与者の大学院進学について: 1) 奨学金貸与手引きには、(進学する) 大学院博士課程の専攻分野を基礎医学系に限定していない。基礎医学系に該当する「生物・医学研究系」と「社会医学研究系」への進学を想定していたが、臨床医学研究系を選ぶことは差し支えない。2) 懸念事項として途中離脱が考えられるが、その場合は奨学金貸与手引きに記載されている通り奨学金の返還義務が発生する。3) 途中離脱のケースでは奨学金返還猶予申請がなされる可能性があるが、申請が認められることが条件になるため、改めて念書の提出は必要ない。4) 奨学金被貸与者に対しては、適宜、返済免除条件を確認してもらう。5) 今後の対応のために、FAQの用意や解釈の確認をしたほうがよい。

③ 第3回 メール会議 (令和5年1月10-17日) : 出席16名

1) 審議——令和5年度研究医養成プログラム履修学生の選考について: (1) 令和5年1月10日 (火)、埼玉医科大学研究医養成プログラム申請者2名に対し、村上委員長と佐々木委員が面談を行なった。COVID-19感染拡大に配慮し、昨年と同様に学生の意思確認の面談を実施した。(2) 面談を基に2名を合格候補とした (奨学金貸与申請なし)。申請者2名の合格について審議の結果承認

された。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

今年度は新しくプログラムに令和5年度生2名を選抜することができた。研究医養成プログラム履修学生・指導報告書からは概ね各学生の希望に沿った研究指導が実施されている。プログラム履修生の研究施設利用について、観察・測定機器類は登録の上で個別に使用可能だが、動物実験施設利用については指導者の監督下での利用に限定することになった。慶應義塾大学学生研究発表会と施設見学については、定期試験や共用試験の日程と重なるために実施できなかった。WebClass内に研究マインド醸成のコースを新たに設け、先輩の取り組みや研究紹介動画を用意したが、ある程度のアクセス数はあったが視聴に至っているケースはごく少数であった。例年2年生を対象とした研究医養成プログラム履修の紹介は「オール埼玉医大研究の日」に実施してきたが、その発表時間の制約から別日程（R4年11月22日 zoom開催・一部体面）での紹介を実施することとした。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度も応募者を確実に選抜できること、各学生の希望に沿った研究指導ができることを目指したい。R5年11月下旬に対面とリモートによるハイブリッド説明会を実施する予定である。プログラム履修生の中には全国規模の学会での2年続けて研究発表を行っている者がいるため、プログラム振興や履修生の努力を評価・奨励する仕組みを検討したい。WebClass内に研究マインド醸成のコースでは先輩医師や履修生の紹介を増やし、研究紹介動画をさらに充実させたい。また卒後のキャリアパスとしてプログラム履修生の初期臨床研修プログラム（研究マインド育成自由選択プログラム）への貢献を図りたい。学務日程から慶應義塾大学学生研究発表会・施設見学が実施できていないが、タイミングが合えば実現したい。

3. 11) 中央研究施設運営委員会

1. 構成員

委員長	坂本 安	(SAKAMOTO, Yasushi) : 中央研究施設機能部門 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
副委員長	水野 洋介	(MIZUNO, Yousuke) : 中央研究施設形態部門 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	荒木 智之	(ARAKI, Tomoyuki) : 生化学 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
委員	佐藤 毅	(SATO, Tsuyoshi) : 歯科・口腔外科 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	中村 晃一郎	(NAKAMURA, Kouichiroh) : 皮膚科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	川野 雅章	(KAWANO, Masaaki) : 免疫学 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	中山 伸朗	(NAKAYAMA, Nobuaki) : 消化器・肝臓内科 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	三谷 幸之介	(MITANI, Kounosuke) : ゲノム応用化学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	藤田 恵子	(FUJITA, Keiko) : 解剖学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	森口 武史	(MORIGUCHI, Takeshi) : 教養教育 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	椎橋 実智男	(SHIIBASHI, Michio) : 情報技術支援推進センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	一色 政志	(ISSIKI, Masashi) : 中央研究施設 RI 部門 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	横尾 友隆	(YOKOO, Tomotaka) : 中央研究施設日高ランチ実験動物部門 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	西本 正純	(NISHIMOTO, Masazumi) : 中央研究施設 RI 部門 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	千本松 孝明	(SENBONMATU, Takaaki) : リサーチアドミニストレーションセンター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	松下 祥	(MATSUSHITA, Shou) : 免疫学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	片桐 岳信	(KATAGIRI, Takenobu) : ゲノム基礎医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	和田 実	(WADA, Minoru) : 経理部第二購買課 : 次長 (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	池和田 忠幸	(IKEWADA, Tadayuki) : 経理部購買課 : 部長 (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	廣澤 成美	(HIROSAWA, Narumi) : 中央研究施設機能部門 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	水野 由美	(MIZUNO, Yumi) : 中央研究施設実験動物部門 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	富永 信子	(TOMINAGA, Nobuko) : 中央研究施設実験動物部門 : 助教 (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	日詰 光治	(HIZUME, Kouji) : 中央研究施設 RI 部門 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は大学法人埼玉医科大学委員会運営規定第4条2項①に則り、中央研究施設の運営について協議し、埼玉医科大学学則(昭和47年2月16日制定)第41条の規定に基づき、最先端の高度な研究を行うための共同利用施設として、研究者が研究を実施するに当たり、その支援を図り、医学部における臨床及び基礎医学研究の推進及び発展の基盤となることを目的とする。

本年度は、設置希望機器及び既に設置されている機器についてのテクニカルセミナーを開催し、施設を利用する研究者に対して研究機器の啓蒙することを目標として活動した。

3. 活動実績

【共同利用実験室利用の啓蒙と整備】

共同利用実験室は、実験室を持たない教員に対し最小限の機器を備えた実験場所を提供し、もって当該教員の研究活動のセットアップに資することを目的として、平成24(2012)年9月10日より運用が開始され、中央研究施設にて機器、設備を整備・管理している。現在、基礎医学棟3階並びにゲノム棟4階に整備されている。それぞれが、12区画の実験ベンチを管理しており、利用申請を行うことができる。またフェローステーションが併設されており、基礎棟に5つのデスク、ゲノム棟には9つのデスクが用意されている。利用者はデータ整理と休息のために使用することができる。

令和4(2022)年度の利用実績は、毛呂山キャンパス : 感染症・感染制御科、小児科、腎臓内科、総合診療内科、耳鼻咽喉科麻酔科、薬剤部、アドミッションセンター、医学教育センター、医学研究センター、教養教育、免疫学、微生物学、RI部門、形態部門 計 : 登録基本講座14、利用登録者人数 : 23名。

日高キャンパス : リウマチ膠原病科、腎臓内科、微生物学、国際/呼吸器内科、脳神経外科、乳腺腫瘍科、がんゲノム医療科、泌尿器腫瘍科、日高ランチ実験動物部門、保健/臨床検査学科、保健/臨床工学科、総合/産婦人科、計 : 基本講座12、リサーチパーク2社、利用登録者人数 : 36名。

【中央研究施設共同利用研究機器・設備整備】

令和4年度 私学助成金「研究設備整備計画」が採択され、マトリックス支援レーザー脱離イオン化飛行時間型質量分析計 型式 : MALDI-8030 令和5(2023)年3月 中央研究施設 機能部門に設置された。

令和4年度 研究マインド支援 Grant(共通部門)の採択により、以下の機器が整備され利用が開始された。

- ① 令和4(2022)年10月28日 ハムリー株式会社 SmartBox(安楽死システム) TT-8100 : 中央研究施設実験動物部門
- ② 令和4(2022)年12月23日 株式会社日立製作所 3H/14C サーベイメータ TPS-313 : 中央研究施設 RI 部門
- ③ 令和4(2022)年10月21日 株式会社ニコン 対物レンズ CFI Plan Apo Lambda D 100X oil : 中央研究施設形態部門

【テクニカルセミナーの開催】

以下のテクニカルセミナーを開催し、機器の取り扱い及び新しい研究技術を紹介した。

- ① 令和4(2022)年5月24日 10:00-17:00 オンライン SH800Z オンライン取扱説明会

- ② 令和4(2022)年6月16日 18:00-19:30 オンライン キーエンス 蛍光顕微鏡 BZ-X700 オンラインセミナー
- ③ 令和4(2022)年7月26日 16:00-17:00 オンライン 「他にはない」横河電機の1細胞ソリューション web セミナー
- ④ 令和4(2022)年10月5日 13:30-14:30 オンライン 新型共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 オンラインセミナー
- ⑤ 令和4(2022)年10月24日 18:00-19:30 オンライン 「Bio-Rad QX200 AutoDG Droplet Digital PCR システム」セミナー(基礎セミナー編)
- ⑥ 令和4(2022)年10月25日 10:15-11:15 オンライン 新型共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 オンラインセミナー(その2)
- ⑦ 令和4(2022)年10月25日 13:00-16:00 ゲノム棟 607 共通機器室 「Bio-Rad QX200 AutoDG Droplet Digital PCR システム」セミナー(実機操作説明会編)
- ⑧ 令和4(2022)年11月11日 14:00-15:00 オンライン 新型共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 オンラインセミナー(その3)
- ⑨ 令和4(2022)年11月16日 16:00-17:00 オンライン/基礎医学棟3階 10x Genomics 社 テクノロジーセミナー
- ⑩ 令和4(2022)年11月21日 10:00- 13:00- 15:00- (計3回) 基礎医学棟2階 Leica Microhub Mica 共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 デモンストレーション
- ⑪ 令和4(2022)年12月6日 10:00- 13:00- 15:00- (計3回) 基礎医学棟2階 エビデント(オリンパス) FV3000 共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 デモンストレーション
- ⑫ 令和4(2022)年12月9日 15:00-16:00 オンライン 新型共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 オンラインセミナー(その4)
- ⑬ 令和4(2022)年12月13日 10:30- 13:30- 15:30- (計3回) 基礎医学棟2階 Nikon AXR 共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 デモンストレーション
- ⑭ 令和4(2022)年12月22日 10:00- 13:00- 15:00- (計3回) 基礎医学棟2階 Zeiss LSM900 Airyscan2 Multiplex 共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 デモンストレーション
- ⑮ 令和5(2023)年1月26日 18:00-18:40 オンライン 「キーエンス 蛍光顕微鏡 BZ-X700」ワンポイントセミナー

【委員会等】

- ① 第76回 中央研究施設運営委員会/共同利用施設運営部門合同会議
日時: 令和4(2022)年6月2日(木) - 6月17日(金) メーリングリスト会議 出席23人

【議題】 1. 埼玉医科大学中央研究施設規則の改正に関して

【議事】資料1_6-15 埼玉医科大学医学部中央研究施設規則(案)(改正後全文:総合企画部校閲済み)、埼玉医科大学中央研究施設規則新旧対照表に関して審議した。

(1)-1 (副施設長)第6条、(施設長補佐)第7条の追記に関して、坂本施設長より以下の説明がなされた。これらの追記の趣旨は、前回の本会議にて説明した「大学等における研究設備・機器の共用化のためのガイドライン」が文部科学省により提示され、“各機関による共用推進の取組を「機関全体の経営課題」として捉え、共用の取組を担う研究現場担当者がその推進を図る際の手引きとし、また、経営層においても活用されることを目的とする旨掲げられた。これに沿って施設の運営戦略を検討する必要があると判断された。ガイドラインにおける管理体制に関して、外部利用者も利用可能とし、利用料金等による機器の維持、あるいは新規購入機器の支援に充てる等の発想も盛り込まれた。現場としての中心組織となる中央研究施設では、各組織間のパイプ役としての人材が必要不可欠になると思われ、必要に応じて「副施設長、施設長補佐を置くことができる。」と追記した。

審議の結果追記事項が承認された。また、資料1_6-15 埼玉医科大学医学部中央研究施設規則(案):第20条の2のタイプミスを修正した。

- ② 第77回 中央研究施設運営委員会/共同利用施設運営部門合同会議
日時: 令和5(2023)年2月21日(木) 15:00-16:00 場所: Zoom 会議 出席18人 欠席5人

【議題】 (1) 医学研究センター共同利用施設運営部門、中央研究施設教員、中央研究施設運営委員会の新体制に関して

(2) 中央研究施設に提出されている設置希望機器に関して(3) 令和3年度の中央研究施設の会計に関して(4) 中央研究施設研究機器(利用)予約プログラム試用版に関して(5) その他: 研究機器・備品の共用化に関するアンケート調査に関して

【議事】(1) 中央研究施設長の退職に伴い、令和5(2023)年度からの医学研究センター共同利用施設運営部門と中央研究施設運営委員会の委員の体制について説明された。また、中央研究施設長、施設長補佐、各部門の部門長の交代に関して紹介と新任予定者の挨拶が成された。(2) 中央研究施設設置希望機器リストの中から、島津製作所 MALDI-TOF-MS 8030 が私学助成金に内定した旨報告された。これに伴い、新規設置希望機器リストの更新に関して説明が有り承認された。また、千本松委員(日高ブラン長)より、中古機器の導入に関して意見があり、施設長より今後の検討が必要である旨回答された。更に、三谷委員よりリスト番号に関して質問され、番号は優先順位ではない旨補足された。

(3) 中央研究施設の令和3(2021)年度の会計報告が行われ、承認された。(4) 中央研究施設研究機器利用予約プログラムの試用版に関して、説明がなされた。令和5(2023)年度4月1日からの運用を予定している。(5) 各基本学科で不要となった研究機器・備品の共用化(供出)に関する学内アンケート調査内容に関して、医学研究センター会議の議を経て調査を開始する旨説明された。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

私学助成金申請「設備整備計画書」が1件採択された。平成28(2016)年度以降、私学助成金への申請が難しい年が続き、中央研究施設に設置される機器が採択されたのは6年ぶりであった。令和3(2021)年より文部科学省では、「大学等における研究設備・機器の共用化のためのガイドライン等の策定に関する検討会(第1~4回)」が開催され、中央研究施設教員(坂本・廣澤)も、「会議傍聴」に参加した。令和4(2022)年3月29日には、「研究設備・機器の共用推進に向けたガイドライン~すべての研究者がいつでもアクセスできる共用システムの構築を目指して~」が正式に策定された。今後、私学助成金へ申請する研究設備・装置は、「共用」を推進するための共用システム構成・運営体制を求められる事となった。本学では、中央研究施設が大きな役割を果たすと期待される。今後はガイドラインに基づき、1. 研究設備・機器を重要な経営資源の一つと捉え、研究設備・機器とそれを支える人材の活用する「経営戦略における明確化」、2. 役員、研究者、技術職員、事務職員、URA等の多様なプロフェッショナルが連携する「チーム共用」の推進、3. 中長期的な「戦略的設備整備・運用計画」の策定、検討を行い、中央研究施設運営委員会の活動のもと、施設の充実を推進していく。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

実験動物施設における感染対策は継続して良好な結果が得られている。実験動物施設、RI施設のある第三研究棟は、築約50年以上が経過し建物の老朽化が進み、4階の水道管から水漏れ事故が発生した。休日(日曜日)夜間に発生したために4階事務室及び建物の階下(地下1階)RI施設まで水漏れが発生した。その後、施設課の適切な対応により水道管の取替え、改修工事が行われた。また施設を利用する実験者からの要望と、施設職員の衛生向上のために1階トイレの改修工事を行った。今後も、施設を維持管理する職員の職場環境及び利用者の実験環境に配慮した整備を推進していく。

3. 12) 医学部入学試験委員会

1. 構成員

- 委員長 森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学部長・副学長・医学教育センター長 (任期 : R6. 3. 31)
- 副委員長 山田 健人 (YAMADA, Taketo) : 医学部長補佐、病理学 : 教授、入試実施委員会委員長 (任期 : R6. 3. 31)
- 副委員長 向田 寿光 (MUKAIDA, Hisamitsu) : 教養教育運営責任者 : 教授、入試実施委員会副委員長 (任期 : R6. 3. 31)
- 委員 吉本 信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長 (任期 : R6. 3. 31)
- 別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長 (任期 : R6. 3. 31)
- 村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 医学部長補佐、生化学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長・大学病院リウマチ膠原病科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (任期 : R4. 4. 1~R6. 3. 31)
- 篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomi) : 大学病院病院長、大学病院消化器・一般外科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 堤 晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko) : 総合医療センター病院長 (任期 : R4. 8. 31)
- 別宮 好文 (BEKKU Yoshifumi) : 総合医療センター病院長 (任期 : R4. 9. 1~R6. 3. 31)
- 佐伯 俊昭 (SAEKI, Toshiaki) : 国際医療センター病院長 (任期 : R6. 3. 31)
- 門野 夕峰 (KADONO, Yuho) : 学生部長、整形外科・脊椎外科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 副医学部長、総合医療センター放射線腫瘍科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 小山 政史 (OYAMA, Masafumi) : 副医学部長、国際医療センター泌尿器科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 岡田 浩一 (OKADA, Hirokazu) : 副医学部長、大学病院腎臓内科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 副医学部長、国際医療センター神経内科・脳卒中内科 : 教授 (任期 R6. 3. 31)
- 椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 副医学部長、情報技術支援推進センター : 教授・入試実施委員会
(任期 : R6. 3. 31)
- 吉益 晴夫 (YOSHIMASU, Haruo) : 医学部長補佐 : 総合医療センター神経精神科 : 教授・入試実施委員会
(任期 : R6. 3. 31)
- 名越 澄子 (NAGOSHI, Sumiko) : 総合医療センター消化器・肝臓内科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 堀江 公仁子 (HORIE, Kuniko) : ゲノム応用医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 教養教育 : 准教授・入試実施委員会副委員長 (任期 : R6. 3. 31)
- 小室 秀樹 (KOMURO, Hideki) : 大学事務部 : 顧問 : アドミッション・オフィサー (任期 : R6. 3. 31)
- 徳元 康人 (TOKUMOTO, Yasuhito) : アドミッションセンター : 講師 : アドミッション・オフィサー (任期 :
R6. 3. 31)
- 村田 正樹 (MURATA, Masaki) : 大学事務部医学部事務室入試課 : 課長 (任期 : R6. 3. 31)
- 事務 内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部 : 部長 : 入試事務室長 (任期 : R6. 3. 31)
- 江口 幹也 (EGUCHI, Mikiya) : 大学事務部 : 副部長 (任期 : R6. 3. 31)
- 下田 裕子 (SHIMODA, Yuko) : 大学事務部医学部事務室庶務課 : 課長 (任期 : R6. 3. 31)
- 岩澤 昌人 (IWASAWA, Masato) : 大学事務部医学部事務室学務課 : 課長 (任期 : R4. 6. 30)
- 近藤 有寛 (KONDO, Arihiro) : 大学事務部医学部事務室学務課 : 課長 (任期 : R4. 7. 1~R6. 3. 31)
- 松浦 直樹 (MATSUURA, Naoki) : 大学事務部医学部事務室入試課 : 課長補佐 (任期 : R6. 3. 31)
- 河村 陽子 (KAWAMURA, Yoko) : 大学事務部医学部事務室入試課 : 係長 (任期 : R6. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は、埼玉医科大学学則第 19 条第 2 項に定める入学者選抜が厳正かつ合理的に実施されることを主たる目的に、埼玉医科大学医学部入学試験委員会規則に基づいて運営される。本委員会は、公正かつ適切な入学者選抜を実施するために、各科目の試験、面接を含む全ての入学者選抜の内容と形式等を検討し、また、入学者選抜の実施の責任を負う。合格判定にあたっては、本学の教育目標に基づいて定められた入学者受け入れ方針 (アドミッション・ポリシー) の下、予め定められた合格判定基準に従って合格候補者 (案) を決定する。本委員会で決定した合格候補者 (案) を、教員代表者会議に諮り、学長が合格者を決定する。なお、本委員会は、選抜方式・選抜成績と入学後の成績を分析・調査し、エビデンスに基づいて試験の方法を絶えず改善する努力を続けている。さらに、社会が求める医師像を視野に入れながら、情報公開や入試広報活動の方針策定を含め、中・長期的な見通しをもって多様な入学者選抜を開拓し、広く有能な学生を確保するための方針と方策を決定するよう努めている。

3. 活動実績

1) 会議日程と議事内容

- ①第1回 定例会議(令和4年4月26日)於:毛呂山キャンパス本部棟2階会議室、川越キャンパス管理棟4階会議室1、日高キャンパス教育研究棟2階会議室2 出席30人 欠席0人
議事:令和4年度医学部入学試験委員会構成員、令和4年度医学部入学試験結果報告、令和5年度埼玉医科大学医学部入学試験日程、令和4年度医学部入学試験委員会開催日程、令和4年度医学部入学試験実施委員会構成員、令和5年度医学部入学試験出題委員等担当者、令和5年度一般選抜試験問題作成のスケジュール、問題点検班構成員および点検委員、入試面接FD、令和5年度一般入学試験問題作成日程、令和4年度オープンキャンパス、令和5年度入試関係書類発送計画、2022年度医学部一般選抜1次試験の成績開示申請、令和5年度の暫定的な医学部入学定員等増加の取扱い、私立医大入試ミス事例、医学部パンフレット・受験サイトデザイン(案)、他
- ②第2回 定例会議(令和4年6月21日)於:毛呂山キャンパス本部棟2階会議室、川越キャンパス管理棟2階カンファレンス3、日高キャンパス教育研究棟2階大講堂 出席30人 欠席0人
議事:問題点検班構成員および点検委員、オープンキャンパス、一般選抜試験会場(東京流通センター)レイアウト、令和5年度大学入学者選抜実施要項、入試広報媒体、著作物からの引用、令和4年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会参加報告書、新入生アンケート、令和5年度入学者選抜概要、埼玉県地域枠医学生奨学金案内・医学部特別奨学金案内、UCARO登録案内、2022年度入試データブック、令和5年度大学入学共通テスト実施要項と不正行為の防止策、令和6年度大学入学共通テスト実施大綱、令和5年度学生募集要項、2023年度選抜問題点検班名簿、医学部パンフレット・受験生サイト、他
- ③第3回 定例会議(令和4年7月19日)於:毛呂山キャンパス本部棟2階会議室、川越キャンパス管理棟2階カンファレンス3、日高キャンパス教育研究棟2階大講堂 出席30人 欠席0人
議事:令和5年度学生募集要項、オープンキャンパスとオンライン個別相談会、医師国家試験について、2022年度高校訪問の報告、医学部パンフレット・受験生サイト開設、入試問題に関する要望書2022(日本文藝家協会)、他
- ④第4回 定例会議(令和4年10月25日)於:毛呂山キャンパス本部棟2階会議室、川越キャンパス管理棟2階カンファレンス3、日高キャンパス教育研究棟2階会議室2 出席30人 欠席0人
議事:学校推薦型選抜推薦書、帰国生選抜の出願書類、埼玉県地域枠奨学金の手引き・誓約書、医学部特別奨学金申請の手続き・申請書、令和5年度学生募集要項(追加分)、面接試験における感染防止策、学校推薦型/帰国生選抜面接、学校推薦型/帰国生選抜実施要項、コロナ禍の広報、推薦/帰国生選抜合格者に対するスクーリング、令和4年度の医学部臨時定員増、医学部健康状態チェックリスト、令和5年度大学入学者選抜実施要項等に関するQ&Aについて、新型コロナウイルス感染症対策等、2022年度推薦/帰国生入試合格者に対する課題、令和3年度大学入学者選抜における好事例集、他
- ⑤第5回 定例会議(令和4年11月30日)於:本部棟2階会議室 出席30人 欠席0人
議事:令和5年度医学部学校推薦型選抜・帰国生選抜の実施状況、令和5年度医学部推薦・帰国生選抜出願者の概要および成績統計、令和5年度医学部学校推薦型選抜・帰国生選抜の可否判定基準、令和5年度医学部学校推薦型選抜・帰国生選抜の可否判定、学校推薦型選抜・帰国生選抜入学予定者に対する入学前学習課題、新型コロナウイルス感染症対策、新型コロナウイルス感染症罹患等による振替受験及び追試験受験、無症状の濃厚接触者の受験申請手続き、2023年度学校推薦型選抜ミス報告書、大学入試センター・シンポジウム2022、令和7年度入学者選抜における経過措置、令和6年度医学部入学者選抜日程(案)、2023年度(令和5年度)入試委員会日程(案)、他
- ⑥第6回 定例会議(令和5年1月10日)於:毛呂山キャンパス本部棟2階会議室、川越キャンパス管理棟2階カンファレンス3、日高キャンパス教育研究棟2階会議室2 出席30人 欠席0人
議事:出題、可否判定ミス等の防止(文科省通知)、半構造化面接の実施方法と内容、スクーリング、一般選抜(前期)の会場レイアウト・誘導警備配置、新型コロナウイルス感染症対策の告知、令和5年度入学選抜大学入学共通テスト、入試実施要領について、前年度一般選抜監督者アンケート結果、降雪や主たる公共交通機関の乱れ等による試験開始時刻の変更について、令和5年度入学者選抜日程、2023年度入試実施委員会日程、令和5年度大学入学選抜実施要項等に関するQ&A、大学入学者選抜に係る受験生の安全対策、令和5年度大学入学選抜における新型コロナウイルス感染拡大防止に係る対応、他
- ⑦第7回 定例会議(令和5年2月6日)於:毛呂山キャンパス本部棟2階会議室、川越キャンパス管理棟2階カンファレンス3、日高キャンパス教育研究棟2階会議室2 出席30人 欠席0人
議題:令和5年度一般選抜(前期)1次試験の実施状況、令和5年度一般選抜(前期)1次試験志願者の概要及び成

績統計、令和5年度一般選抜1次試験の判定基準、令和5年度一般選抜1次試験の判定、新型コロナウイルス感染症罹患等による振替受験、一般選抜（前期）2次試験面接委員班編成、一般選抜（後期）1次試験の新型コロナウイルス感染症による振替追試験の対応、他

⑧第8回 定例会議（令和5年2月15日）於：本部棟2階会議室 出席30人 欠席0人

議題：令和5年度一般選抜（前期）2次試験の実施状況、受験生事案及び本部報告事、令和5年度一般選抜（前期）2次試験の概要及び成績統計、令和5年度一般選抜2次試験の可否判定基準、令和5年度一般選抜（前期）2次試験の判定、新型コロナウイルス感染症罹患等による追試験、共通テスト利用選抜成績速報、一般選抜（後期）1次TRC配置図、一般選抜（後期）1次2次の新型コロナウイルス感染症による振替追試験の対応、他

⑨第9回 定例会議（令和5年3月8日）於：毛呂山キャンパス本部棟2階会議室、川越キャンパス管理棟2階カンファレンス3、日高キャンパス教育研究棟2階会議室2 出席30人 欠席0人

議題：令和5年度一般選抜（前期）1次試験の実施状況、令和5年度一般選抜（後期）1次試験志願者の概要及び成績統計、令和5年度一般選抜（後期）1次試験の判定基準、令和5年度一般選抜（後期）1次試験の判定、共通テスト利用選抜1次試験志願者の概要及び成績統計、共通テスト利用選抜1次試験の判定基準、共通テスト利用選抜1次試験の判定、一般選抜（後期）面接委員、医学部パンフレット・受験生サイト、教学マネジメント指針、他

⑩第10回 定例会議（令和5年3月15日）於：毛呂山キャンパス本部棟2階会議室 出席30人 欠席0人

議題：令和5年度一般選抜（後期）及び共通テスト利用選抜2次試験の実施状況、令和5年度共通テスト利用選抜2次試験志願者の概要及び成績統計、共通テスト利用選抜2次試験の可否判定、令和5年度一般選抜（前期）2次追試験の可否判定、令和5年度一般選抜（後期）2次試験志願者の概要及び成績統計、令和5年度一般選抜（後期）2次試験の可否判定、新型コロナウイルス感染症罹患等による追試験、小論文の評価について、他

2) 令和5年度選抜区分別入学者数の状況

入学者130名（男68名、女62名）

(1) 学校推薦型選抜

- ア. 指定校枠 5名（男子2名、女子3名）
- イ. 一般公募枠 14名（男子4名、女子10名）
- ウ. 埼玉県地域枠 19名（男子5名、女子14名）
- エ. 特別枠 1名（男子0名、女子1名）

(2) 帰国生選抜 1名（男子1名、女子0名）

(3) 一般選抜（前期・後期）

- ア. 一般選抜（前期） 60名（男子37名、女子23名）
- イ. 一般選抜（後期） 20名（男子12名、女子8名）

(4) 大学入学共通テスト利用選抜 10名（男子7名、女子3名）

3) 令和4年度の主な活動内容

- (1) 本委員会の下部組織（医学部入学試験実施委員会）への指示と連携
- (2) 大学入学共通テスト利用選抜実施についての検討
- (3) 入学者選抜合格者決定のための検討
- (4) 入学者選抜試験問題作成のためのアドミッションセンターとの連携
- (5) 一般選抜監督者の改善アンケート結果による検討
- (6) 入学者選抜試験問題作成についての検討
- (7) オープンキャンパス（オンデマンド講演、個別相談会）の開催
- (8) 一般選抜科目試験問題第三者評価についての検討
- (9) 大学入学共通テスト利用選抜の女子栄養大学との共同実施（協力と連携）
- (10) 追試験の検討

4) 令和5年度医学部入学者選抜日程

- (1) 学校推薦型選抜（指定校枠・一般公募枠・埼玉県地域枠・特別枠）
試験日 令和4年11月20日 合格発表日 令和4年12月1日
- (2) 帰国生選抜
試験日 令和4年11月20日 合格発表日 令和4年12月1日
- (3) 一般選抜（前期・後期）
 - ア. 一般選抜（前期）

1次試験日 令和5年1月31日 合格発表日 令和5年2月7日
2次試験日 令和5年2月11日 合格発表日 令和5年2月16日

イ. 一般選抜（後期）

1次試験日 令和5年3月4日 合格発表日 令和5年3月9日
2次試験日 令和5年3月12日（追試含む）合格発表日 令和5年3月16日

（4）大学入学共通テスト利用選抜

1次試験日 令和5年1月14、15日 合格発表日 令和5年3月9日
2次試験日 令和5年3月12日 合格発表日 令和5年3月16日

（5）追試験

試験日 令和5年3月20日（申請者なし）

5）令和5年度募集人員

（1）学校推薦型選抜

ア. 指定校枠 5名
イ. 一般公募枠 14名
ウ. 埼玉県地域枠 19名
エ. 特別枠 2名

（2）帰国生選抜 若干名

（3）一般選抜（前期・後期）

ア. 一般選抜（前期） 60名
イ. 一般選抜（後期） 20名

（4）大学入学共通テスト利用選抜 10名

6）令和5年度選抜区分別の志願者数、受験者数、合格者数

（1）学校推薦型選抜

ア. 指定校枠

・志願者数： 18名（内、男子9名、女子9名）
・受験者数： 18名（内、男子9名、女子9名）
・合格者数： 5名（内、男子2名、女子3名）

イ. 一般公募枠

・志願者数： 42名（内、男子20名、女子22名）
・受験者数： 42名（内、男子20名、女子22名）
・合格者数： 14名（内、男子4名、女子10名）

ウ. 埼玉県地域枠

・志願者数： 42名（内、男子15名、女子27名）
・受験者数： 42名（内、男子15名、女子27名）
・合格者数： 19名（内、男子5名、女子14名）

エ. 特別枠

・志願者数： 3名（内、男子1名、女子2名）
・受験者数： 3名（内、男子1名、女子2名）
・合格者数： 1名（内、男子0名、女子1名）

（2）帰国生選抜

・志願者数： 2名（内、男子1名、女子1名）
・受験者数： 2名（内、男子1名、女子1名）
・合格者数： 1名（内、男子1名、女子0名）

（3）一般選抜（前期・後期）

ア. 一般選抜（前期）

1次試験

・志願者数：1,764名（内、男子1,044名、女子720名）前年比780名減
・受験者数：1,593名（内、男子927名、女子666名）志願者数の90.3%

2次試験

・受験者数： 231名（内、男子137名、女子94名）

追試験対象者 1 名（内、男子 1 名、女子 0 名）含む

・合格者数： 76 名（内、男子 39 名、女子 37 名）

イ. 一般選抜（後期）

1 次試験

・志願者数：1,321 名（内、男子 764 名、女子 557 名）前年比 245 名減

・受験者数：1,118 名（内、男子 639 名、女子 479 名）志願者数の 84.6%

2 次試験

・受験者数： 119 名（内、男子 67 名、女子 52 名）

・合格者数： 25 名（内、男子 12 名、女子 13 名）

（4）大学入学共通テスト利用選抜

1 次試験

・志願者数： 581 名（内、男子 331 名、女子 250 名）前年比 175 名増

・受験者数： 576 名（内、男子 327 名、女子 249 名）志願者数の 99.1%

2 次試験

・受験者数： 85 名（内、男子 56 名、女子 29 名）

・合格者数： 14 名（内、男子 10 名、女子 4 名）

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- 1) 本委員会は、全ての医学部入学者選抜における基本方針を決定し、公正かつ適切な入学者選抜を実施するために、面接を含む全ての入学者選抜の内容と形式等を検討し、委員の合議に基づいて可否の判定を行っている。令和 5 年度入学者選抜においては、医学部入学試験実施委員会とも連携を図り、改善事項については慎重に検討を重ね、本学のアドミッション・ポリシーに謳う学生の受入れを可能とするため、公正で信頼性の高い入学者選抜の実施に向け努めた。医学部入学者選抜の総志願者数は、令和 4 年度選抜 4,604 名から令和 5 年度選抜 3,773 名へと減少（対前年度比 18%減）に転じたが、最終的な結果として、募集定員 130 名（地域枠 19 名、研究医枠 1 名を含む）に対し、新入生 130 名を選抜し、滞ることなく令和 5 年度入学者選抜を終えたことは、本委員会の目的を概ね達成できたと評価している。
- 2) 学生募集活動に関しては、オンライン相談会とオンデマンド動画の配信を組み合わせた「WEB オープンキャンパス」の実施、高大連携の推進に向け指定校である西武学園文理高等学校との連携医療講座の開催をはじめ、城北埼玉高等学校、開智未来中学高等学校を対象としたオンラインによる模擬講義の開催、各種予備校主催の「進学相談会」への参加など、医学部を目指す関係者への情報提供に取り組んできた。加えて、医学部パンフレットのリニューアル及び医学部ホームページ内に「受験生サイト」を開設し、より統一感のある情報提供を通じ、今後更に認知度の向上につながるものと期待している。募集活動では、大学入学者選抜の実施方針や方法を具体的に定め、医学部を目指す関係者に公表し周知を図り、そのルールを遵守した透明性のある入学者選抜に繋げることができたと評価している。
- 3) 医学部入学者選抜の問題作成は、教養教育の担当教員を中心に、入試実施委員会において構成されている問題作成班と問題点検班によって進めている。令和 5 年度選抜の出張校正（初校・再校・念校）では、入稿前の問題完成を目指して念校を省き、校正の段階では誤字・脱字等の訂正に留める方針に変更した。さらに、アドミッションセンター及び外部点検評価者との連携も図り、入試問題の精度向上と出題ミスの防止及び早期発見に努めている。令和 5 年度一般選抜では、出題ミスが無かったことは幸いであったが、試験前点検時に問題訂正が発覚し、入学者選抜当日に受験生への告知を行った。問題訂正が生じたことは、入学者選抜に対する信頼性を揺るがすものとして真摯に反省するとともに、問題の信頼性・妥当性を向上させるためのチェック体制の確立に注力し、再発防止につなげる必要がある。
- 4) 文部科学省主催の「大学入学者選抜・教務関係事項連絡協議会」、大学入試センター主催の「大学入学者選抜大学入試センター試験入試担当者連絡協議会」は、コロナ禍による影響を受け昨年同様中止となり、「令和 5 年度大学入学者選抜実施要項」「試験実施のガイドライン」をはじめ入学者選抜の実施に係る関連資料は、電子メールにて配信された。特筆すべき要請事項として、入学者選抜における不正行為の対策強化や試験会場等での安全確保に向けた対応を各大学が求められた。本学ではこれらの要請に準拠し、不正行為に該当する行為・罰則について学生募集要項による事前周知を図り、試験会場での警備員の配置や有事の避難経路を示した消防計画の策定など、新たな要請事項への対応を通じ、適切な受験環境の確保に繋げることが出来たと評価している。
- 5) 女子栄養大学との令和 5 年度大学入学共通テスト利用選抜は、11 回目の共同実施となったが、円滑な実施運営に向け試験監督・要員（試験室補助・連絡担当）を対象に、対面での事前説明会による情報共有を図った。令和 3 年度及び令和 4 年度大学入学共通テストにおける埼玉県地区の追試験は、世話大学でもある埼玉大学で実施されており、監

督要員及び試験場要員は、同大学と共同実施大学の教職員等で対応していたが、令和5年度同選抜では、埼玉県地区全体の協力体制で要員（監督要員・試験場要員）派遣の要請があり、本学では、試験場要員1名を追試験会場に派遣した。共同実施にあたっては、準備段階より各種の対応を求められてはいたが、出来る限りの対応策を模索し、課題の克服に努め、滞りのない実施運営に繋げることができたと判断している。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

新型コロナウイルス感染症は、本年5月8日より感染症法上の位置づけが「5類感染症」への変更が予定されているが、令和6年度入学者選抜においても、監督官庁からの指針、通知等を踏まえ、感染状況に応じ診療組織との連携も図り、感染防止対策の措置を講じて行く方針である。個人成績の開示については、令和4年度一般選抜（前期・後期）1次試験の不合格者で、希望者を対象に総得点の開示を行ったが、入学者選抜の透明性の向上にもつなげており、引き続き受験生が求める情報公開を模索しながら次年度も検討して行きたい。試験問題については、出題ミスや問題訂正の再発防止に向けたチェック体制の確立を目指し、更に信頼性・妥当性を向上させるため、本会の下部組織である入学試験実施委員会との連携を図り作業スケジュールを組み立て、厳格な管理体制で取り組んで行く。また、合格発表後の入学辞退の発生に伴う欠員補充については、例年に比べ辞退の申し出件数は少なく、結果的に一般選抜（後期）では、補欠合格候補者の繰上げには至らなかった。安定した入学定員の充足に向け、合否判定にあたっては、より慎重な判断が求められることになるが、本学では全ての選抜区分において本委員会を開催し、委員の合議に基づいて合否の判定を行って行く。令和5年度医学部入学者選抜の総志願者数は、対前年度比で18%の減少に転じており、今後のコロナ禍における社会情勢、18歳人口減少に伴う志願者の動向、他大学の対応状況なども注視しつつ、本学の入学者選抜における共通ルールを幅広く関係者に示し、透明性・客観性の確保に重点をおきながら、より効果的な入試広報を戦略的に計画して行く必要がある。来年度も引き続き、新たな入試制度を模索しながら、広い範囲から有能な学生を選抜できるよう、本学の教育目標に基づいて定められた入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に則り、求めるべき学生像を選別する具体的な選抜方法について、受験者や保護者をはじめ広く社会に理解を得られるよう更なる検討を重ねて行く。

3. 13) 医学部入学試験実施委員会

1. 構成員

- 委員長 山田 健人 (YAMADA, Taketo) : 病理学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 副委員長 向田 寿光 (MUKAIDA, Hisamitsu) : 教養教育 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 副委員長 山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 教養教育 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 採点集計担当責任者 椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 情報技術支援推進センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (任期 : R4. 4. 1~R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 中平 健祐 (NAKAHIRA, Kensuke) : 教養教育 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 大間 陽子 (OMA, Yoko) : 教養教育 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 山田 泰子 (YAMADA, Yasuko) : 医学教育センター : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 実施に必要な者 石橋 敬一郎 (ISHIBASHI, Keiichiro) : 医学教育センター : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 村上 元 (MURAKAMI, Hajime) : 教養教育 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 荒閑 かやの (ARAZEKI, Kayano) : 医学教育センター : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 魚住 尚紀 (UOZUMI, Naonori) : 生化学 : 准教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 実施に必要な者 徳元 康人 (TOKUMOTO, Yasuhito) : アドミッションセンター : 講師、アドミッション・オフィサー
(任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 小室 秀樹 (KOMURO, Hideki) : 大学事務部 : 顧問、アドミッション・オフィサー (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部 : 部長、事務責任者 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 江口 幹也 (EGUCHI, Mikiya) : 大学事務部副部長、事務担当 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 村田 正樹 (MURATA, Masaki) : 大学事務部医学部事務室入試課 : 課長、事務担当 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 下田 裕子 (SHIMODA, Yuko) : 大学事務部医学部事務室庶務課 : 課長、事務担当 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 岩澤 昌人 (IWASAWA, Masato) : 大学事務部医学部事務室学務課 : 課長、事務担当 (任期 : R4. 6. 30)
- 実施に必要な者 近藤 有寛 (KONDO, Arihiro) : 大学事務部医学部事務室学務課 : 課長、事務担当
(任期 : R4. 7. 1~R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 松浦 直樹 (MATSUURA, Naoki) : 大学事務部医学部事務室入試課 : 課長補佐、事務担当 (任期 : R6. 3. 31)
- 実施に必要な者 河村 陽子 (KAWAMURA, Yoko) : 大学事務部医学部事務室入試課 : 係長、事務担当 (任期 : R6. 3. 31)
- オブザーバー 別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長 (任期 : R6. 3. 31)
- オブザーバー 森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学部長・副学長・医学教育センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- オブザーバー 村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 医学部長補佐 : 生化学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
- (他に科目責任者 6 名、出題業務を主担当としているため氏名非公表)

2. 目的・目標

本委員会は医学部入学試験委員会で決定された方針により、学校法人埼玉医科大学入学試験実施委員会規則第 4 条に則り、入学者選抜の実施、採点等の入学者選抜業務を円滑に実施する。

3. 活動実績

1) 会議日程と議事内容

- ①第 1 回 定例会議 (令和 4 年 4 月 19 日) 於 : 本部棟 2 階会議室 出席 25 人 欠席 5 人
議事 : 令和 4 年度医学部入試実施委員会構成員、令和 5 年度一般選抜試験問題作成日程、令和 4 年度医学部入試実施委員会の日程、2023 年度入学者選抜点検班名簿、入試面接 FD2021 進行表、入学前学習課題およびオンラインスクーリング報告、2022 年度オープンキャンパス (案)、2023 年度医学部入学者選抜関係書類発送計画 (案)、成績開示申請、令和 5 年度の暫定的な医学部入学定員等の増加の取扱い、私立医大入試ミス事例、他
- ②第 2 回 定例会議 (令和 4 年 6 月 14 日) 於 : 本部棟 2 階会議室 出席 26 人 欠席 4 人
議事 : 2022 年度対面オープンキャンパススケジュール (案)、2022 年度 Web オープンキャンパス (案)、東京流通センターレイアウト、令和 5 年度大学入学者選抜実施要項【見消版】、新入生アンケート結果、2023 年度入試ガイド埼玉県地域枠奨学金案内、医学部特別奨学金案内、UCARO 出願手順、2023 年度入試データブック、著作物からの引用 (御礼)、令和 4 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会参加報告、他
- ③第 3 回 定例会議 (令和 4 年 10 月 18 日) 於 : 本部棟 2 階会議室 出席 26 人 欠席 4 人
議事 : 入試問題の進捗状況と入試問題提出日、問題点検の進捗状況と今後の予定、学校推薦型選抜・帰国生選抜の面

接試験における班編成・感染対策及び半構造化面接に加え MMI (Multiple Mini Interview) の導入、2022 年度オープンキャンパススケジュール、2023 年度学校推薦型選抜・帰国生選抜合格者に対するスクーリング、学校推薦型選抜・帰国生選抜の実施要領、学校推薦型選抜・帰国生選抜の出願必要書類、埼玉県地域枠奨学金の申請の手引き、2023 年度学生募集要項（追加分）、大学入学者選抜実施要領に関する Q&A、大学入学共通テスト新型コロナ感染症対策、他

④第 4 回 定例会議（令和 4 年 12 月 20 日）於：本部棟 2 階会議室 出席 27 人 欠席 3 人

議事：問題作成・作問者点検の実施状況、大学入学者選抜における出題・合否判定ミス等の防止（通知）、半構造化面接の報告、令和 5 年度入学生オンラインスクーリング実施、一般選抜会場（東京流通センター）運営準備、新型コロナウイルス感染症への対策、令和 6 年度医学部入学者選抜日程、令和 5 年度入試実施委員会日程、一般選抜会場（東京流通センター）誘導・警備の配置、大学入試センター・シンポジウム 2022 参加報告、令和 7 年度入学者選抜から導入される『情報 I』利用と旧教育課程履修者に対する経過措置、他

⑤第 5 回 定例会議（令和 5 年 3 月 22 日）於：本部棟 2 階会議室 出席 26 人 欠席 4 人

議事：令和 5 年度医学部入学試験実施委員会構成員（案）、令和 5 年度医学部入学試験実施委員会 構成員 班編成（案）、令和 6 年度医学部入学者選拔出題委員等担当者（案）、令和 6 年度医学部入学者選抜問題点検班構成員および点検委員（案）、点検班の活動、入試面接委員候補者を教育主任に拡大することの提案、2023 年度医学部対面オープンキャンパススケジュール（案）、令和 6 年度医学部入学定員等の臨時的な増加の取扱い、大学入学者選抜改革推進委託事業キックオフシンポジウム、他

2) 各班（問題作成班・問題点検班・面接班・広報班・入試実施班・事務）の活動内容

ア. 一般選抜 1 次試験について

- (1) 入試実施要領の作成
- (2) 一次試験監督者の依頼
- (3) 試験問題の校正
- (4) 試験問題の点検
- (5) 試験問題の袋詰
- (6) 問題点検助言者の確定と依頼
- (7) 問題の最終点検の実施
- (8) 入試実施要領の事前説明会の開催
- (9) 採点と集計
- (10) 合格発表（「UCARO」合否紹介システム）
- (11) 成績開示（一般選抜不合格者対象）

イ. 一般選抜 2 次試験（面接）について

- (1) 入試実施要領の作成
- (2) 面接班の編成と依頼
- (3) 採点と集計
- (4) 合格発表（「UCARO」合否紹介システム）

ウ. 学校推薦型選抜・帰国生選抜について

- (1) 実施要領の作成
- (2) 面接班の編成と依頼
- (3) 適正検査の実施準備
- (4) 採点と集計
- (5) 合格発表（「UCARO」合否紹介システム）

エ. 大学入学共通テスト利用選抜について

- (1) 女子栄養大学へ試験監督者の派遣
- (2) 大学入試センターとの連携協議
- (3) 大学入学共通テスト利用選抜 2 次試験について
実施要領作成
面接班の編成と依頼
記述式小論文の実施準備
採点と集計
合格発表（「UCARO」合否紹介システム）

- (4) 大学入学共通テスト1次試験の成績請求について
- オ. WEB オープンキャンパスの実施
 - (1) 実施内容の検討
(新型コロナウイルス感染症第7波を考慮し対面実施は中止)
 - (2) オンライン個別相談会(令和4年7月29日)
 - (3) 講演動画のオンデマンド配信(令和4年7月27日公開)
- カ. ホームページ(受験生サイト)入学試験関連ページの掲載について
 - (1) アドミッション・ポリシー(入学者受入方針)
 - (2) 2023年度入学者選抜情報の更新
 - (3) 2022年度入学試験結果
 - (4) インターネット出願ページ
 - (5) 2022年度一般(前期・後期)1次試験過去問題
 - (6) 個別入学資格審査の申請方法
- キ. 高大連携講座の開催について
 - (1) タイムスケジュールの検討
 - (2) 高大連携講座の開催
西武学園文理高等学校(開催日:令和4年9月24日)
城北埼玉高等学校(開催日:令和4年10月14日オンライン講義)
開智未来高等学校(開催日:令和4年10月22日オンライン講義)
- ク. 学校推薦型選抜、帰国生選抜合格者へのオンラインスクーリングについて
 - (1) 入学前教育の一環とした学習指導(開催日:令和4年12月27日)
 - (2) 課題解説と教員との懇談会

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- 1) コロナ禍における入学者選抜の本学の対応方針は、「令和5年度大学入学者選抜に係る新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドライン」に準拠して策定した。衛生管理体制の構築に努め、混乱を招くことなく終えることができたことは、診療組織との連携を図り、院内感染対策室の助言も確認し、感染防止にあたった関係教職員の努力の成果と評価している。また、新型コロナウイルス感染症等で受験できなかった場合の救済措置として、一般(前期)1次から一般(後期)1次への振替受験、一般(前期)1次合格者が2次を受験できなかった場合の一般(後期)2次日程での追試験を設定した。加えて一般(後期)1次、2次及び共通テスト利用選抜2次で受験できなくなった場合の追試験も設定し、更なる受験機会の確保につなげることができたと評価している。
- 2) オープンキャンパスは、対面での実施を予定していたが新型コロナ第7波の増加を考慮し、Webオープンキャンパスとしてオンライン個別相談会(7月29日)及び講演動画(医学部紹介・医学部教育紹介・国際交流活動紹介・入学者選抜説明)のオンデマンド配信(7月27日公開)を実施した。個別面談数は延べ26組、オンデマンド配信の講演動画アクセス件数は9月末現在で266件を数えた。また、高大連携の推進に向け西武学園文理高等学校(9月24日)との連携医療講座、城北埼玉高等学校(10月14日)、開智未来中学高等学校(10月22日)を対象としてオンラインによる模擬講義を実施した。さらに、指定校30校(公立12校・私立18校)をはじめ、県内有力校を対象に高校訪問の実施など、志願者の更なる獲得に向け募集活動に鋭意取り組んだと判断している。
- 3) 新たな対応して、令和5年度学生募集用の医学部パンフレットのリニューアル(7月15日)や受験生サイトの開設(8月3日)し、より効果的な情報提供を図るとともに、成績開示については、令和4年度一般選抜(前期・後期)1次不合格者を対象に、受験生の個人成績(総得点)を開示(前期360件、後期300件)し、入学者選抜における公正性・透明性の向上につなげた。面接試験では、令和3年度入学者選抜より半構造化面接を導入し、アドミッション・ポリシーを意識した、より統一感のある面接評価を実施しているが、令和5年度学校推薦型選抜・帰国選抜では、MMI(Multiple Mini Interview)方式を加えた半構造化面接を実施するなど入学者選抜の制度改革に努め、新たな改善計画を概ね達成できたと評価している。
- 4) 一般選抜1次試験では、予定通り試験会場を東京流通センターに移行し、臨床部門との協力も得て前期日程は、日曜から通常診療のある平日に変更した。また、今回は運営補助委託会社の変更もあり、志願者数に応じた会場レイアウト、試験監督の委嘱、補助要員(監督補助・誘導)警備員の配置、災害時の避難経路の確認等、運営方法の変更に伴う実施要領や関連資料の見直しなど、新たな対応を模索しながら受験生の受入れに備えた。前期2次の前日は、気

象庁より大雪警報が発表され、交通への影響も警戒が必要な状況で、受験予定者への注意喚起及び面接委員の宿泊場所の確保などの対応にあたったが、当日は数名の受験者が遅刻した程度で支障なく無事終了した。新たな課題に直面する場面もあったが、関係者其々が相互連携を図り、計画した受験環境の確保に繋げることが出来たと評価している。

- 5) 試験問題の点検では、問題作成班と問題点検班が連携を図り、出題ミスの早期発見及び防止を目指し、一般選抜問題の「草稿点検」「入校前点検」「初校後点検」「前期・後期試験前点検」及び推薦・帰国生選抜点検を実施している。出張校正（初校・再校・念校）では、令和5年度選抜の問題作成スケジュールより念校を省き、入稿前に問題を完成させ、校正段階では誤字脱字等の訂正に留める方針に変更した。令和5年度一般選抜では、出題ミスはなかったものの試験前点検時に問題訂正が発覚し、入学者選抜当日に受験生への告知を行っている。問題訂正が生じたことは、入学者選抜に対する信頼性を揺るがすものとして真摯に反省し、問題の信頼性・妥当性をより向上させるためのチェック体制の確立に向け、再発防止につなげる必要がある。
- 6) 女子栄養大学との令和5年度大学入学共通テスト利用選抜は、11回目の共同実施となったが、円滑な実施運営に向け試験監督・要員（試験室補助・連絡担当）を対象に、対面での事前説明会による情報共有を図った。令和3年度及び令和4年度大学入学共通テストにおける埼玉県地区の追試験は、世話大学の埼玉大学で実施されており、監督要員及び試験場要員は、同大学と共同実施大学の教職員等で対応していたが、令和5年度同選抜では、埼玉県地区全体の協力体制での要員（監督要員・試験場要員）派遣の要請があり、本学は試験場要員1名を追試験会場に派遣した。共同実施にあたっては、準備段階より各種の対応を求められてはいるが、出来る限りの対応策を模索し、課題の克服に努め、滞りのない実施運営に繋げることができたと判断している。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

令和5年度の入学者選抜では、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、今年度も監督官庁より各種の要請事項を求められたが、「令和5年度大学入学者選抜実施要項」をはじめ、試験実施のガイドラインの留意点やFAQの理解に努め、衛生管理体制の構築、情報提供や相談体制の整備など必要な措置を最大限講じ、要請に沿った対応を概ね実践できたと判断している。学校推薦型選抜、帰国生選抜、一般選抜（前期・後期）、大学共通テスト利用選抜の実施にあたっては、今年度も天候、交通機関の影響等による試験日程の変更も無く、滞りなく実施できたことは幸いであった。結果的に130名（男68名、女62名）募集定員通りの新入生を選抜し、無事に令和5年度医学部入学者選抜を終えたことは、本委員会の目的を概ね達成できたと評価している。引き続き、令和6年度入学者選抜では、本委員会が構成する問題作成班・問題点検班・面接班・広報班・入試実施班・事務がより一層連携を図り情報共有に努め、医学部を目指す受験生一人一人が安全で安心して受験できる環境を如何に提供できるかという視点に立ち取り組んで行く。その実現に向け、入学者選抜における公平性を確保するための実施方針や方法を具体的に定め、募集活動にあたっては、その共通ルールを幅広く医学部を目指す関係者に示し、選抜実施にあたっては、公正かつ妥当な方法による選抜体制を構築し、優秀な学生確保に向け本委員会は万全を期してその役割を担っていきたい。

3. 14) 埼玉県地域枠医学生奨学金運営委員会・ 埼玉医科大学医学部地域医療奨学金運営委員会

1. 構成員

森 茂久 (MORI, Sige-hisa) : 医学部長・副学長・医学教育センター長 (任期: R6. 3. 31)	
別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長 (任期: R6. 3. 31)	
吉本 信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長 (任期: R6. 3. 31)	
三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長 (任期: R6. 3. 31)	
竹内 勤 (TAKEUCHI, Tutomu) : 副学長 (任期: R6. 3. 31)	
篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomu) : 大学病院病院長 (任期: R6. 3. 31)	
堤 晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko) : 総合医療センター病院長 (任期: R4. 8. 31)	
別宮 好文 (BEKKU, Yoshifumi) : 総合医療センター病院長 (9月より) (任期: R6. 3. 31)	
佐伯 俊昭 (SAEKI, Toshiaki) : 国際医療センター病院長 (任期: R6. 3. 31)	
門野 夕峰 (KADONO, Yuho) : 学生部長 (任期: R6. 3. 31)	
田島 賢司 (TAJIMA, Kenji) : 常務理事 (任期: R6. 3. 31)	
茂木 明 (MOGI, Akira) : 事務局長 (任期: R6. 3. 31)	
池和田忠幸 (IKEWADA, Tadayuki) : 経理部長 (任期: R6. 3. 31)	
加藤 孝之 (KATO, Takayuki) : 埼玉県保健医療部医療人材課長 (任期: R6. 3. 31)	

【その他理事長及び学長が必要と認めた者】

皆川 真哉 (ITO, Hiroyuki) : 毛呂山会会長 (任期: R6. 3. 31)	
宮山 徳司 (MIYAYAWA, Tokushi) : 医療政策学特任教授 (任期: R6. 3. 31)	

【その他医学部長が必要と認めたもの】

高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 副医学部長 (任期: R6. 3. 31)	
林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 副医学部長 (任期: R6. 3. 31)	
小山 政史 (OYAMA, Masafumi) : 副医学部長 (任期: R6. 3. 31)	
村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 医学部長補佐 (任期: R6. 3. 31)	
柴崎 智美 (SHIBASAKI, Satomi) : 医療人育成支援センター地域医学推進センター長 (任期: R6. 3. 31)	

【事務局】

内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 大学事務部長 (任期: R6. 3. 31)	
近藤 有寛 (KONDO, Arihiro) : 大学事務部医学部事務室学務課長 (任期: R6. 3. 31)	
細田さなえ (HOSODA, Sanae) : 大学事務部医学部事務室学務課 (任期: R6. 3. 31)	
城田 百花 (SHIROTA, Momoka) : 大学事務部医学部事務室学務課 (任期: R6. 3. 31)	

2. 目的・目標

本学では、地域医療を担う医師不足の対策として、医学部を卒業した医師が確実に地域医療に定着するためには奨学金制度の充実が必要と考え、埼玉県と連携して埼玉県地域枠医学生奨学金制度を創設し、平成 22 年度から募集を開始した。埼玉県地域枠医学生奨学金運営委員会は、埼玉県の地域医療に従事する医師を志す本学医学部の学生に奨学金を貸与するために制定した埼玉県地域枠医学生奨学金貸与規程第 4 条に基づき、地域枠医学生奨学金貸与事業の円滑な運営に資することを目的とする。

また、本学は独自に埼玉医科大学医学部地域医療奨学金制度を創設し平成 22 年度から募集を行っていたが、平成 31 年度推薦入試より埼玉県地域枠奨学金制度の選抜方法が入学時選抜に変更となったことに伴い、大学の奨学金制度の見直しが行われ、この制度は廃止された。

3. 活動実績

- 1) 第 1 回委員会 令和 4 年 11 月 30 日 (水) 於: 本部棟 2 階会議室
出席: 14 名、委任状出席: 10 名

議事

- ① 令和3年度第1回埼玉県地域枠医学生奨学金運営委員会・埼玉医科大学医学部地域医療奨学金運営委員会議事録の確認が行われ承認された。
- ② 令和5年度推薦入学試験（埼玉県地域枠）の実施状況
実施期日：令和4年11月20日（日）
試験会場：埼玉医科大学 毛呂山キャンパス
募集人員：19名
志願者数：42名
受験者数：42名
出身高校：埼玉県内21名、埼玉県外21名
- ③ 医学部入学試験委員会の合否判定の方法及び審議結果（合格候補者：19名）の報告があった。
- ④ 以下の提案がなされ審議の結果、承認された。
埼玉医科大学入学試験委員会規則に則り、同委員会の合否判定(案)を臨時教員代表者会議へ報告し、承認を得た合格者に対して、埼玉県地域枠医学生奨学金を貸与する。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度の改善目標としては、十分な数の受験生確保、入試面接方法の検討、入学後地域医療教育の充実、離脱例の分析、などを設定していた。

このうち、令和5年度推薦入学試験においては埼玉県地域枠に42名が志願・受験し、令和4年度を上回る人数となった。高校および高校生への働きかけも受験者数増加に寄与したと考えられる。

また、入試面接においては、県保健医療部の担当職員にも面接に協力いただくとともに、指定診療科の教員を重点的に配置した。アウトカム評価には長期的なフォローが必要だが、入学後の意見などからは、意欲のある学生を確保できたと考えている。

入学後の地域医療教育については、令和4年度から開始された「埼玉・群馬の医療を支える未来医療人の育成」プロジェクトを活用し、さらに充実させてきた。夏季および春季の指定地域医療機関見学も再開し、地域枠医学生には地域医療の実地経験機会をより多く提供することができた。

卒前における離脱者は残念ながら少数存在している。その一方、入学時選抜（別枠推薦入学）となった平成31年度以後の入学者には離脱者はおらず、選抜方法の影響があるものと思われる。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

地域枠医学生の教育のさらなる充実、地域枠医師のキャリア形成と地域医療充実の両立、が大きな目標となる。これらのためには、入学前から卒業後までの長期的なサポートが必要である。また、学外施設、とくに指定地域医療機関との連携が極めて重要となる。これらを考慮に入れて、以下のような改善計画案を設定する。

1) 地域枠入学を志願する受験生を確保する。高校への働きかけ、高校生の参加も可能なシンポジウムの開催、などを通じて、高校生の志の開発を目指す。

2) 令和5年度は「埼玉・群馬の医療を支える未来医療人の育成」プロジェクトが本格的に行われる。課外プロを含めた学内における地域医療の教育のさらなる充実に加え、指定地域医療機関での医療経験をより充実させていく。令和5年度からは群馬大学と共同での県境地域医療機関見学を開始する。

3) 地域枠医学生の将来的なキャリアの不安が離脱の要因の1つとなっていると思われる。このため、地域医療教育を担当する教員による、地域枠医学生個別面談および集団面談（学年ごと）を開始する。

4) 地域枠医師は専門医取得およびキャリア形成と地域勤務の両立に不安を感じている。制度による制約を皆無にはできないが、できる限り両立させるため、地域枠医師へのキャリア形成サポート、卒後2年目地域枠医師への専門医制度の説明会などを開催していく。指定地域医療機関と連絡を取り合い、協力して地域医療充実と地域枠医師の生涯教育を両立していく。

3. 15) 地域救急医療連絡会議

1. 構成員（任期：R6.3.31）

- 委員長 別所正美 (BESHO, Masami) : 学長
委員 吉本信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) : 副理事長
棚橋紀夫 (TANAHASHI, Norio) : 専務理事
篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomi) : 大学病院 : 院長
堤 晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko) : 常務理事
佐伯 俊昭 (SAEKI, Toshiaki) : 国際医療センター・病院長
森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学部長・副学長
三村俊英 (MIMURA, Toshihide) : 副学長
竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長
金子直之 (KANEKO, Naoyuki) : 総合医療センター高度救命救急センター : 客員教授
茂木 明 (MOGI, Akira) : 法人事務局長
事務局 佐藤勝茂 (SATO, Katsushige) : リサーチアドミニストレーション(RA)センター : 課長

2. 目的・目標

本会議は平成27年度まで設置していた救急医療人材育成寄附研究部門運営委員会に代わり、情報共有と意見交換の場を設けることとなり、この地域救急医療連絡会議（以下、「本会議」という。）を設置する。

3. 活動実績

3-1. 開催日

令和4年度は、新型コロナウイルス感染症拡大への対応を優先するため、開催を見送った。

3-2. 主な審議内容

令和4年度未開催のため審議なし。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

- 新型コロナウイルス感染拡大への対応を優先し会議開催を見送った。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

- 埼玉県北部地域の救急医療連携体制支援事業は、第1期（平成23年度～平成27年度）、第2期（平成28年度～）の活動により、目的である深谷赤十字病院における救急医療体制の自立した運営は到達したと考えられる。令和元年度までに当初の目的を達成したこと、県支援事業が令和2年6月末を以て終了したことから、今後の活動について検討していく。

3. 16) カリキュラム評価委員会

1. 構成員

委員長	椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IRセンター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	向田 寿光 (MUKAIDA, Hisamitsu) : 教養教育 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 微生物学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	舟久保ゆう (FUNAKUBO, Yuu) : 大学病院産科・リウマチ膠原病科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	名越 澄子 (NAGOSHI, Sumiko) : 総合医療センター消化器・肝臓内科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	松下 毅彦 (MATSUSHITA, Takehiko) : IRセンター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	黒崎 亮 (KUROSAKI, Akira) : 国際医療センター産婦人科 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
委員	荒関 かやの (ARASEKI, Kayano) : 医学教育センター : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
委員	近藤 有寛 (KONDO, Arihiro) : 大学事務部 : 課長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	柳澤慎之介 (YANAGISAWA, Shinnosuke) : 大学病院専攻医 : (任期 : R6. 3. 31)
委員	松永 洗昂 (MATSUNAGA, Takeaki) : 大学病院初期研修医 : (任期 : R6. 3. 31)
委員	鈴木恵美子 (SUZUKI, Emiko) : 医学部6年生 : (任期 : R6. 3. 31)
委員	相羽 弘貴 (AIBA, Hiroki) : 医学部5年生 : (任期 : R6. 3. 31)
外部委員	平形 道人 (HIRAKATA, Michito) : 慶應義塾大学医学部教授 : (任期 : R6. 3. 31)
外部委員	本多 麻夫 (HONDA, Asao) : 埼玉県衛生研究所所長 : (任期 : R6. 3. 31)
外部委員	森本 義博 (MORIMOTO, Yoshihiro) : 小川赤十字病院名誉院長 : (任期 : R6. 3. 31)
外部委員	町田 亘啓 (MACHIDA, Nobuhiro) : 地域の患者 : (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長
オブザーバー	森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学部長、医学教育センター長
オブザーバー	村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 医学部長補佐
オブザーバー	小山 政史 (OYAMA, Masafumi) : 国際医療センター泌尿器科 : 教授・IRセンター副センター長
オブザーバー	柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育学 : 教授・IRセンター副センター長

2. 目的・目標

カリキュラム評価委員会は、埼玉医科大学医学部カリキュラム評価委員会規則に則り、カリキュラムの自己点検・評価について、基本方針の策定及び実施項目の設定、実施、結果に基づく改善、授業担当教員及び関係委員会との調整、その他カリキュラムの自己点検・評価に関することを審議し、医学部の教育の水準の向上を図ることを目的としている。

3. 活動実績

- ①第1回 定例会議 (令和4年9月22日) 於: カタロスタワー7階コンシリウムホール+Zoom 出席13人 欠席5人
議事: 医学教育分野別評価受審結果について、令和3年度ユニット評価調査の結果分析について、小委員会の設置について、教育プログラム評価・改善について意見交換、他。
- ②第2回 定例会議 (令和5年3月7日) 於: カタロスタワー7階コンシリウムホール+Zoom 出席18人 欠席0人
議事: 令和4年度卒業時満足度調査・学修成果の自己評価調査 集計結果について、令和4年度定期試験データシートについて、令和4年度ユニット評価調査結果について、学習者評価検討小委員会について、教育プログラム評価・改善について意見交換、他。

4. 自己評価と次年度計画

- 4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果
2回の委員会を開催し、医学教育分野別評価の受審結果、IRセンターによる医学部教育活動に係る調査結果、教育プログラム評価・改善について意見交換を行うことができた。学習者評価検討小委員会を設置し、評価の信頼性・妥当性に関する検討を行った。
- 4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画
IR活動による根拠に基づき、関係委員会等に質保証のための提言を行うことにより、本学医学部の教育の水準の向上を図っていく。

4. 1) 教授会

1. 構成員

議長：加藤木利行 (KATOGLI, Toshiyuki)：保健医療学部学部長
別所正美 (BESSHO, Masami)：学長
竹内勤 (TAKEUCHI, Tsutomu)：副学長
千田みゆき (CHIDA, Miyuki)：看護学科 教授・学科長
大森智美 (OMORI, Tomomi)：看護学科 教授
野田智子 (NODA, Tomoko)：看護学科 教授
大賀淳子 (OOGA, Junko)：看護学科 教授
粟生田友子 (AOUDA, Tomoko)：看護学科 教授
茅野秀一 (KAYANO, Hidekazu)：臨床検査学科教授・学科長
佐藤正夫 (SATO, Masao)：臨床検査学科教授
小野川傑 (ONOGAWA, Tsuyoshi)：臨床検査学科教授
藤原智徳 (FUJIWARA, Tomonori)：臨床検査学科教授
飯野望 (IINO, Nozomi)：臨床検査学科教授
山岸敏之 (YAMAGISHI, Toshiyuki)：臨床検査学科教授
下岡聡行 (SHIMOOKA, Toshiyuki)：臨床工学科 教授・学科長
小林直樹 (KOBAYASHI, Naoki)：臨床工学科 教授
山下芳久 (YAMASHITA, Yoshihisa)：臨床工学科 教授
宮本裕一 (MIYAMOTO, Yuuichi)：臨床工学科 教授
若山俊隆 (WAKAYAMA, Toshitaka)：臨床工学科 教授
高倉保幸 (TAKAKURA, Yasuyuki)：理学療法学科 教授・学科長
藤田博暁 (FUJITA, Hiroaki)：理学療法学科 教授
赤坂清和 (AKASAKA, Kiyokazu)：理学療法学科 教授
乙戸崇寛 (OTUDO, Takahiro)：理学療法学科 教授
田邊一郎 (TANABE, Ichirou)：共通教育部門 教授
辻美隆 (TUJI, Yoshitaka)：共通教育部門 教授
間山伸 (MAYAMA, Shin)：共通教育部門 教授
池田将樹 (IKEDA, Masaki)：共通教育部門 教授
嶋崎晴雄 (SHIMAZAKI, Haruo)：共通教育部門 教授
内田和利 (UCHIDA, Kazutoshi)：大学事務部長

計：29名 定足数：21名

事務局

保健医療学部事務室

堀江正人 (HORIE, Masahito) 事務室室長 (令和4年4月より事務室長)

山崎豊幸 (YAMAZAKI, Toyoyuki)：川角分室 室長 (平成28年7月より)

2. 目的・目標

本学の目的及び使命を達成するため、学則第35条および第36条に基づき、学部の教育と研究に関する重要な事項を審議し運営することを目的としている。本年度も例年通りに全学科の国家試験合格率の向上と、アドミッションポリシーに合致した学生をより多く獲得することを目標とする。昨年に引き続きコロナウイルスのパンデミックに臨機応変に対処することが、緊急の目標に加えられた。

3. 活動実績

(1) 定時開催

第176回：令和4年4月28日(木) 出席者23名

第177回：令和4年5月26日(木) 出席者29名

- 第178回：令和4年6月23日（木）出席者27名
- 第179回：令和4年7月28日（木）出席者27名
- 第180回：令和4年9月22日（木）出席者26名
- 第181回：令和4年10月27日（木）出席者23名
- 第182回：令和4年11月24日（木）出席者23名
- 第183回：令和4年12月22日（木）出席者26名
- 第184回：令和5年1月26日（木）出席者23名
- 第185回：令和5年2月22日（木）出席者23名
- 第186回：令和5年3月16日（木）出席者27名

(2) 臨時開催

- 編入学試験合否判定：令和4年9月27日（火）出席者17名（委任状7名、欠席5名）
- 推薦入試合否判定：令和4年11月29日（火）出席者23名（委任状3名、欠席3名）
- 総合型入試合否判定：令和4年12月13日（火）出席者20名（委任状6名、欠席3名）
- 一般入試前期2次合否判定：令和5年2月3日（金）出席者22名（委任状4名、欠席3名）
- 一般入試後期合否判定：令和5年3月4日（金）出席者24名（委任状4名、欠席1名）

(3) 議事内容

定例教授会における議事内容は下記のとおりである。

- ① 学長報告
- ② 学部長報告
- ③ 各種委員会報告および関連事項の審議
 - 1) 学務委員会
 - 2) 学生部委員会
 - 3) 入学試験委員会
 - 4) 自己点検・評価委員会
 - 5) 広報委員会
 - 6) 図書館委員会
 - 7) 倫理委員会
 - 8) その他
- ④ 人事

(4) 主たる審議事項

定例教授会における主要な審議事項として、第176回教授会(4月)では、臨床工学科が指定規則の変更に伴って、次年度のカリキュラムを変更することが報告された。看護学科1名、理学療法学科2名の退学と臨床検査学科1名の休学、理学療法学科1名の復学が承認された。第177回教授会(5月)では、直近2か月で7名のコロナ感染者と18名の濃厚接触者が確認されたとの報告があった。まだ終息は遠いようである。2022年度保健医療学部プロジェクト研究審査結果案を承認した。令和5年度の推薦入試指定校の選定案を承認した。オープンキャンパスについてWEB配信だけでなく対面型について検討中であることが報告された。第178回教授会(6月)では、会議に先立ち、椎橋ITセンター長からメールサーバーをGoogleに切り替える作業を行うことについて説明があった。2022年度学内グラントの審査結果案を承認した。2年ぶりに越華祭前日に防災訓練を行うことについて説明があった。退任する理学療法学科乙戸教授より挨拶があった。第179回教授会(7月)では、後期は講義形式の科目では対面授業を基本とすることが決定された。保健医療学部教員人事書類の改訂が報告された。高橋祐介(臨床検査学科助教)が8月1日付で講師昇格を承認された。臨床検査学科の准教授候補者(採用)与五沢真吾氏の資格審査委員会の設置が承認された。一部の部活動についてコロナ感染症対策を徹底させることを条件に再開を認めた。第180回教授会(9月)では、新型コロナウイルス罹患により、追試験期間中に受験できない学生が数名おり、後期期間中に追試験をせざるを得ない状況であることが報告された。臨床検査学科1年生の1名が、再試験申請書の改ざんをおこなったことで、停学2週間の処分とすることが決定した。自動的に同期内の試験の取得点数は無効となる。臨床工学科の教授候補者(採用)笠松直史氏および看護学科の教授候補者(採用)丸井明美氏の資格審査委員会の設置が認められた。臨床工学科白石直子助教の講師昇格が申請された。臨床検査学科1名の退学および看護学科1名の休学が承認された。第181回教授会(10月)では、埼玉医大メールがGメールに移行したことが報告された。春休みを利用して、教室の改修工事を行うことが報告された。三つの階段教室を平定化し実習対応できるようにすることと、小教室一つとゼミ室二つを合体して中規模教室を作ることが説明された。令和4年度保健師教育課程履修者23名が承認された。看護学科横山ひろみ講師の准教授昇格について資格審査委員が承認された。臨床検査学科3名の退学が承認された。第182回教授会(11月)では、学生との懇談会が3年ぶりに開催されたことが報告された。卒業式について、参加は教員

と卒業生のみとし、来賓や家族の出席はなしとして本年も WEB 配信を検討することになった。謝恩会は今年も中止することが決定した。臨床検査学科の准教授候補者と五沢真吾氏の採用が承認された。臨床工学科白石直子助教の講師昇格が承認され、三輪泰之助教の講師昇格が申請された。理学療法学科1名の退学が承認された。第183回教授会(12月)では、学校推薦型選抜試験と総合型選抜試験の結果が承認された。臨床工学科笠松直史氏および看護学科丸井明美氏の教授採用が承認された。臨床検査学科大村一之助教の講師昇格が承認された。臨床検査学科茅野秀一教授および共通教育部門田邊一郎教授の特任教授就任が報告された。臨床検査学科2名の退学が承認された。第184回教授会(1月)では、労働安全衛生法の改訂により、研究用化学物質の規制が強化されたことが報告された。理学療法学科國澤洋介准教授の教授昇格および大久保雄講師の准教授昇格の資格審査委員会が承認された。臨床工学科三輪泰之助教の講師昇格が承認され、理学療法学科森田泰裕助教の講師昇格が申請された。臨床工学科の退学者1名を承認した。第185回教授会(2月)では、看護学科、臨床検査学科、臨床工学科、理学療法学科の卒業判定案を承認した。看護学科准教授候補者(採用)の資格審査委員会設置が承認された。臨床検査学科小峰伸一講師の定年にともない、特任講師として継続採用が承認された。4年生の学長賞・奨学賞(案)が提示され、承認された。また理学療法学科2名の退学と、看護学科1名の復学が承認された。令和5年度の各種委員会の委員長および副委員長について承認した。第186回教授会(3月)では、各学科の進級判定(案)、1~3年生の奨学賞および特待生案、令和5年度学事予定案、令和4年度教員表彰案を承認した。理学療法学科國澤洋介准教授の教授昇格、大久保雄講師の准教授昇格、森田泰裕助教の講師昇格および看護学科土師しのぶ氏の准教授採用を承認した。看護学科野田智子教授の客員教授就任が報告された。臨床検査学科5名、臨床工学科1名の退学を承認した。

各種の入学試験にともなう臨時教授会を5回開催し、看護学科3年次編入学試験、学校推薦型選抜、総合型選抜、一般選抜試験(前期)、一般選抜(後期)の可否判定等を行った。

今年度も昨年度に引き続きコロナ対策のために、例年の活動のうちで新入生オリエンテーションの際のバーベキューパーティー、保健医療学部公開講座、卒業式の際の謝恩会等を行う事が出来なかった。さらに課外学習プログラム、オープンキャンパス、越華祭等についても大幅な縮小開催となった。学長賞・奨学賞候補者の選定、特待生についての審査、学部内プロジェクト研究の審査は例年通り行なう事が出来た。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

今年度も昨年度に引き続きコロナ禍の渦中にあり、50%ルールを順守するために対面授業は大きく制限された。第7波、第8波と感染蔓延の波状攻撃を受け、なかなか一貫した方針を立てることが出来なかった。短期的に計画をたてても、流行の動向に左右されることが多かった。その中で、なんとか後期から対面授業を復活させることが出来た。50%ルールを守るために二部制で授業をするなど、教員の多大な努力のおかげである。感染症による自宅待機のために、定期試験の受験資格を失いそうになったり、試験に出席できずに追試験になったりと学生も影響を受けた。大学病院の前田教授をはじめとする感染対策室には、しばしば集団で検査を受けるなど大変にお世話になりました。この場を借りて感謝いたします。

昨年はコロナ防疫体制のために4年生に対する大学内での十分な勉強場所の提供が出来なかったためか、国家試験の成績が低調であった。各学科とも昨年の反省に立ち、教員が学生を集めて対策授業を集中的に強化したおかげで、今年度の国家試験成績は向上した。

教授会の審議内容は学生の入退学、休学等に関する事項、カリキュラムに関する事項、学生の指導および厚生に関する事項、学則などの改廃に関する事項、教員人事に関する事項その他多岐にわたったが、非常事態にもかかわらず全体としては適正かつ円滑に運営され、学部業務の遂行に当たれたものと評価できる。さらに、それぞれの学科では国家試験対策や就職支援に一層の努力が必要であり、入学者選抜やカリキュラム構成など様々な領域において、ポストコロナへの展望を見据えたきめ細かな自己点検・評価が重要となる。教授会および各種委員会活動のさらなる活性化を目指すとともに、大学全体としての委員会組織と学部委員会の連携、学内各種センターとの機能的連携などを教授会として検討していく。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

昨年に続いてコロナ対策に翻弄された1年となった。コロナ禍もようやく落ち着きを見せているので、次年度については当初からの完全な対面授業の復活を計画している。新型コロナウイルスの取り扱いが5類となるに伴い、国全体が一気に対策を緩和しようとしているが、医療系大学の責任として病院実習が多いこともあるので、緩和策は慎重に進めて行く方針である。

以前から教室のスペースが十分でないことがしばしば問題となっていたが、防疫体制下でさらに明らかとなったため春休みに教室の改装を行った。3つの階段教室を平らにし、実習等で利用できるようにした。本学部では島をいくつか作ってグループワークをすることが多いが、階段教室が多いことが障碍となっていたためである。さらに大教室に近いサイズの教室が無いことが、教室選択の障碍であったため、小教室とゼミ室を合体して一つの中教室を作った。シラバスを作る際の教室決定が非常に困難であったことが解消されることを期待している。

4. 2) 学務委員会

1. 構成員

- 委員長 加藤木利行 (KATOGL, Toshiyuki) : 学部長 (任期 : R5. 3. 31)
- 委員 : 千田みゆき (CHIDA, Miyuki) : 看護学科 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 大森智美 (OMORI, Tomomi) : 看護学科 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 辻美隆 (TSUJI, Yoshitaka) : 共通教育部門教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 茅野秀一 (KAYANO, Hidekazu) : 臨床検査学科 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 小野川傑 (ONOGAWA, Tsuyoshi) : 臨床検査学科 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 下岡聡行 (SHIMOOKA, Toshiyuki) : 臨床工学科 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 宮本裕一 (MIYAMOTO, Yuichi) : 臨床工学科 教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 高倉保幸 (TAKAKURA, Yasuyuki) : 理学療法学科教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 新井智之 (ARAI, Tomoyuki) : 理学療法学科 准教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 嶋崎晴雄 (SHIMAZAKI, Haruo) : 共通教育部門教授 (任期 : R5. 3. 31)
- 内田康子 (UCHIDA, Yasuko) : 臨床検査学科 講師 (任期 : R5. 3. 31)
- 金子優子 (KANEKO, Yuko) : 看護学科 講師 (任期 : R5. 3. 31)
- 岡田一観 (OKADA, Kazumi) : 大学事務部 (任期 : R5. 3. 31)
- 青木正人 (AOKI, Masato) : 大学事務部 (任期 : R5. 3. 31)
- 滝本巳貴 (TAKIMOTO, Miki) : 大学事務部 (任期 : R5. 3. 31)
- 是村利幸 (KOREMURA, Toshiyuki) : 共通教育部門 講師 (任期 : R5. 3. 31)

2. 目的・目標

- (1) 委員会の設置目的 : 本委員会は本学の建学の理念および埼玉医科大学の期待する医療人像に則り、学部の教育目的を達成するために、下記の事項につき審議する。
- ① カリキュラム全般に関すること
 - ② 学生に対する教育指導に関すること
 - ③ その他教育に関すること
- (2) 令和4年度の活動目標 : (下線付きはコロナ防疫のため困難な項目)
- ① 令和4年度カリキュラム等の実施
 - ・ 新入生オリエンテーションの実施
 - ・ 新入学者の既修得単位の認定
 - ・ 学生名簿の作成
 - ・ Web履修登録の実施
 - ・ 卒業、進級判定案の策定
 - ・ 成績優秀者および特待生の表彰実施
 - ・ 定期試験日程の調整・実施、成績の開示・送付
 - ・ 休学・退学・復学者の認定
 - ・ 課外学習プログラムの実施
 - ・ 解剖体慰霊祭への学生参加
 - ・ 看護学科領域別実習要件認定式の開催
 - ② 令和5年度カリキュラム等の準備
 - ・ 年間学事予定の作成
 - ・ 非常勤講師の依頼と調整、時間割の調整
 - ・ シラバスと学生便覧・教員便覧の内容見直しと作成
 - ・ 新入生オリエンテーションの企画
 - ・ 令和5年度以降のカリキュラム改訂の検討
 - ③ その他の事項
 - ・ 年度ごとの住所録等確認の実施
 - ・ 各種の教育環境整備 (学生部委員会と共同)
 - ・ 学生の海外研修への支援

- ・学部説明会、オープンキャンパスへの参加（広報委員会と共同）
- ・各種国家試験と授業内容の対応チェック
- ・医療人教育者のためのワークショップ開催
- ・公開講座の開催、市民公開講座の開催
- ・Web履修登録手順の見直し
- ・課外学習プログラムの見直し
- ・BLS 実習のサポート
- ・電子シラバス等の見直し
- ・成績不良者への対応策の検討
- ・講義の出欠席管理システムの検討
- ・進級判定基準の見直し

3. 活動実績

(1) 第 177 回学務委員会

(令和 4 年 4 月 22 日、於：2F 会議室、出席 14 名、欠席 3 名、議事録あり)

- ① 委員交代の紹介
- ② 各小委員会の委員長および委員の選定
- ③ 令和 4 年国家試験合格率、就職率、学生数と留年者数の報告
- ④ 各学科・各学年の GPA と、GPA と国家試験成績の関連の報告
- ⑤ 令和 3 年度成績優秀者の表彰報告
- ⑥ 新入生オリエンテーションについて入学前のガイダンス等すべて順調に終了した旨の報告があった。
- ⑦ 令和 4 年度入学生 Web 環境調査結果報告
- ⑧ Web 履修登録状況報告
- ⑨ 退学者 3 名、休学者 1 名、復学者 1 名の承認（教授会上程）
- ⑩ 編入生および新入生の既習得単位の認定 2 件

(2) 第 178 回学務委員会

(令和 4 年 5 月 20 日、於：2F 会議室、出席 16 名、欠席 1 名、議事録あり)

- ① 次年度の非常勤講師の出講確認中の報告
- ② Web 履修登録の確認
- ③ BLS サポート状況の報告：消防署の協力が得られることとなり、1 回 20 名で 12 回予定する。
- ④ 新任の医療人教育者のためのワークショップは 8 月 2～3 日、医療人教育者のためのアドバンスワークショップは 8 月 25～26 日に宿泊なしでの開催を予定している。
- ⑤ 国試対策についての意見交換
- ⑥ 後期授業について、対面授業を増やす予定で検討中。
- ⑦ 臨床工学科の指定規則変更に伴ったカリキュラム改訂について報告
- ⑧ 定期試験中に、カンニングについて学生間で不穏な案件があり、不正行為対策を強化する必要が出てきた。細かい対策を小委員会で検討することに決定。

(3) 第 179 回学務委員会

(令和 4 年 6 月 17 日、於：2F 会議室、出席 15 名、欠席 2 名、議事録あり)

- ① 国家試験問題と講義内容の関連について国家試験対策小委員会の説明と意見交換
- ② BLS サポート：7 月開始のため、一部夏休みにかかる予定でないと入りきらないことが分かった。BLS 未経験の 2 学年については、動画での説明を計画中である。
- ③ 課外学習プログラムの募集開始の報告（昨年と同様に遠隔プログラムを中心とする）
- ④ 前期定期試験日程案の承認（教授会報告）
- ⑤ 定期試験監督要領について、小委員会の提案に沿って以前よりも厳しい対処をすることを承認した。

(4) 第 180 回学務委員会

(令和 4 年 7 月 22 日、於：2F 会議室、出席 17 名、欠席なし、議事録あり)

- ① 臨床工学科のカリキュラム改訂について 7 月の理事会へ上程する報告
- ② 課外学習プログラムの申し込みが開始されたと報告

- ③ 実験動物施設よりマウスが逸走した事案について動物実験小委員会から報告と対策説明
- ④ 令和4年度カリキュラムとシラバス作成について意見交換
- ⑤ 試験に関する規則を見直し、監督要領も更新することが報告された。

(5) 第181回学務委員会

(令和4年9月16日、於：2F会議室、出席17名、欠席なし、議事録あり)

- ① コロナウイルスに罹患もしくは濃厚接触者となったために定期試験の追・再試験期間中に試験を受けられなかった学生が複数いるので、後期授業が始まってから時期を見て追試験をする必要があると報告。
- ② 国試対策小委員会より学科ごとの模擬試験日程等報告
- ③ 看護学科が専門職を対象とした公開講座を9月17日に行うと報告
- ④ 定期試験において監督者の指示に従わなかった事例が報告され処分を検討したが、軽微であるため当該試験の点数無効とし、再試験受験を許可することとした。
- ⑤ 退学者1名、休学者1名の承認（教授会上程）

(6) 第182回学務委員会

(令和4年10月21日、於：2F会議室、出席15名、欠席2名、議事録あり)

- ① 国家試験対策について、各学科の取り組みについて報告
- ② 令和5年度学事予定について報告
- ③ シラバス作成要領に関する意見交換（入稿時期、記載内容等）
- ④ 令和5年度のIPEカリキュラムについて報告
- ⑤ 部活動の一部再開の報告
- ⑥ コロナ防疫体制のため、学生の昼食場所が足りなくなっている件について意見交換
- ⑦ 全学のデータサイエンスAI学修プログラム運営委員会の報告

(7) 第183回学務委員会

(令和4年11月18日、於：2F会議室、出席16名、欠席1名、議事録あり)

- ① 春季語学研修に保健医療学部から5名の申し込みがあった報告
- ② 次年度の新生オリエンテーションについて意見交換
- ③ 国家試験対策について現状報告と意見交換
- ④ 退学者1名の承認（教授会上程）

(8) 第184回学務委員会

(令和4年12月16日、於：2F会議室、出席14名、欠席3名、議事録あり)

- ① 令和5年度新生オリエンテーションおよび健康診断の日程について承認
- ② 国家試験対策小委員会より、現時点での各学科の模擬試験の成績について報告
- ③ 後期定期試験日程について承認
- ④ シラバス、学生便覧の作成状況について報告
- ⑤ 退学者2名の承認（教授会上程）

(9) 第185回学務委員会

(令和4年1月20日、於：2F会議室、出席17名、欠席なし、議事録あり)

- ① オリエンテーションと新生健康診断の日程報告
- ② 国家試験対策小委員会より、現時点での各学科の模擬試験の成績と今後の予定について報告
- ③ 卒業判定、進級判定の日程調整
- ④ 出席カードの代筆事例について処分を検討（今回は当日の欠席扱いのみとする）
- ⑤ 退学者1名の承認（教授会上程）

(10) 令和4年度第1回拡大学務委員会：令和4年度卒業判定会議

(令和5年2月17日、於：2F会議室、出席16名、欠席1名、議事録あり)

- ① 学務委員会委員による卒業判定を実施した。
- ② 看護学科82名の卒業（留年1名）、臨床検査学科69名の卒業（留年2名）、医用生体工学科31名の卒業（留年3名）、理学療法学科42名の卒業（留年なし）となる卒業判定案が承認された。（教授会上程）

(11) 第 186 回学務委員会

(令和 5 年 2 月 17 日、於：2F 会議室、出席 16 名、欠席 1 名、議事録あり)

- ① シラバスおよび学生便覧の作成状況報告
- ② 令和 5 年度新入生オリエンテーションの日程報告
- ③ 学長賞および 4 年生奨学賞候補者の選定
- ④ 国家試験対策小委員会より、現時点での各学科の模擬試験の成績について報告
- ⑤ BLS サポートを受けていない 2 学年に対する補講について報告
- ⑥ 退学者 2 名、復学者 1 名の承認 (教授会上程)

(12) 令和 3 年度第 2 回拡大学務委員会：令和 3 年度進級判定会議

(令和 4 年 3 月 12 日、於：2F 会議室、出席 17 名、欠席 1 名、議事録あり)

- ① 学務委員会委員による進級判定を実施した。看護学科では 1 年生 89 名 (留年 1 名)、2 年生 86 名 (留年 1 名)、3 年生 83 名 (留年 4 名) の進級、臨床検査学科では 1 年生 38 名 (留年 2 名、退学 5 名)、2 年生 45 名 (留年 7 名、退学 2 名)、3 年生 52 名 (留年 2 名) の進級、臨床工学科では 1 年生 26 名 (留年 6 名、退学 1 名)、2 年生 26 名 (留年 2 名)、3 年生 48 名 (退学 1 名) の進級、理学療法学科では 1 年生 51 名 (留年なし)、2 年生 37 名 (留年 3 名、退学 1 名)、3 年生 50 名 (留年 1 名) の進級となる進級判定案が承認された。

(13) 第 187 回学務委員会

(令和 5 年 3 月 10 日、於：2F 会議室、出席 17 名、欠席なし、議事録あり)

- ① 新入生オリエンテーションの日程報告 (入学式は縮小規模で行うことが決まった)
- ② 国家試験自己採点について報告
- ③ 1～3 年生の奨学賞候補者の選定および第 2 種特待生の選定 (教授会上程)
- ④ 退学 6 名の承認 (教授会上程)
- ⑤ 令和 4 年度学務委員会活動概要と令和 5 年度活動予定の報告、意見交換
- ⑥ 次年度学務委員会小委員会委員の選定と承認
- ⑦ 令和 5 年度前期授業について、全面的に対面授業とすることに決定した。教室の割り振りが困難なため、春休みに校舎の改修を行う。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

① 令和 4 年度カリキュラム等の実施：

コロナ禍に翻弄されつつも、WEB 配信授業の実施、WEB による新入生オリエンテーションの実施、休学・退学者の認定、令和 4 年度学長賞および奨学賞の選定、定期試験日程の調整など、カリキュラム運営上の必要事項をなんとか実施する事が出来た。オープンキャンパスは WEB 配信で行い、解剖体慰霊祭、看護学科領域別実習要件認定式は縮小した形で行った。後期からはほぼ全面的に対面授業を復活したが、防疫対策上一部の科目では二部制にするなど教員の負担が大きくなった。

② その他の事項 (設定した目標以外の事項も含む)：

第 29 回医療人教育者のためのワークショップを開催し第 30 回にあたるアドバンスワークショップも行った (宿泊をしない方式とした)。看護学科では、学科単位の FD 活動を実施した。

昨年同様、カリキュラム評価および国家試験対策の一環として、各種国家試験と授業内容の対応について、科目担当者による検証を行った。なお、国家試験終了直後に学生を集め、マークシートによる学生の自己採点結果をデータベース化して個々の科目担当者への情報とした。国家試験対策における新たな試みとして、当大学からの受験者の正答率が 30% から 60% の問題を拾い出し、担当科目での講義に反映していただくようお願いすることとした。改善の可能性が高い問題をしっかりと抑えようという狙いである。GPA 制度を採用してからの卒業生であるため、累積 GPA と国家試験の成績の相関を求め、今後の参考になる資料が得られた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

- ① 令和 4 年度カリキュラム等の評価
- ② 令和 5 年度カリキュラム等の準備
- ③ 成績不良者への対応策の検討 (GPA 制度の成績不良者フォローへの利用)
- ④ WEB 配信授業の改善への検討
- ⑤ 担任制度の見直し (継続)

- ⑥ 進級判定基準の見直し（継続）
- ⑦ Web 履修登録手順の見直し（継続）
- ⑧ キャリアパスセミナーの効果的運用の検討（継続）
- ⑨ 国家試験対策の改善の検討（継続）

4. 3) 保健医療学部学生部委員会

1. 構成員

- 委員長 辻 美隆 (TSUJI, Yoshitaka) : 共通教育部門 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
副委員長 藤原 智徳 (HUJIWARA, Tomonori) : 臨床検査学科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
委員 大澤 優子 (OSAWA, Yuko) : 看護学科 : 准教授 (任期 : R5. 3. 31)
櫻庭 奈美 (SAKURABA, Nami) : 看護学科 : 准教授 (任期 : R5. 3. 31)
飯野 望 (IINO, Nozomi) : 臨床検査学科 : 准教授 (任期 : R5. 3. 31)
小林 直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 臨床工学科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
石川 雅浩 (ISHIKAWA, Masahiro) : 臨床工学科 : 講師 (任期 : R5. 3. 31)
乙戸 崇寛 (OTSUDO, Takahiro) : 理学療法学科 : 教授 (任期 : R4. 4. 1~R4. 8. 31)
赤坂 清和 (AKASAKA, Kiyokazu) : 理学療法学科 : 教授 (任期 : R4. 9. 1~R5. 3. 31)
澤田 豊 (SAWADA, Yutaka) : 理学療法学科 : 講師 (任期 : R5. 3. 31)
嶋崎 晴雄 (SHIMAZAKI, Haruo) : 共通教育部門 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
大野 美佐子 (OHNO, Misako) : 看護学科 : 講師 (任期 : R5. 3. 31)
鈴木 利明 (SUZUKI, Toshiaki) : 保健医療学部事務室学生課 : 係長 (任期 : R5. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は埼玉医科大学保健医療学部学生部委員会規則第5条に則り、学部の学生生活が円滑に送れるための支援を目的として下記の事項につき審議する。

- ① 学生の保健管理に関すること。
- ② 学生の福利厚生に関すること。
- ③ 学生の課外活動に関すること。
- ④ 学生の異動に関すること。
- ⑤ 学生の事故その他の事態の処理に関すること。
- ⑥ 学長、学部長または教授会から委嘱された事項。
- ⑦ その他学生の生活に関すること。

今年度も、埼玉医科大学学生部委員会および医学部学生部委員会とも意見交換をしながら、学生便覧「IV学生生活に関する規定」の各項に対応し、安全に充実した学生生活を送れるよう学生を支援することを目標に活動した。

3. 活動実績

- ① 第1回学生部委員会 (令和4年4月11日) 於 : B棟 1F 大会議室 (出席 12人 欠席 0人)
議事

- ・ 令和3年度の学部学生の COVID-19 感染者数について
- ・ 学生の新型コロナウイルス感染症に関する登校再開基準の改訂
- ・ 新型コロナウイルス感染症対策の徹底についての学生通達の件
- ・ 学生健康診断の実施予定について
- ・ ラウンジヤマネの利用再開について
- ・ 女子栄養大学の若葉祭参加について
- ・ 部活動 15 団体の活動再開および新入部員勧誘開始の許可について
- ・ 学生等の学びを継続するための緊急給付金について
- ・ 西武ライオンズによる生活物資提供支援品について
- ・ 通学バスの運行経路および運行時間の検討
- ・ 令和4年度の学生部委員会開催日程について
- ・ 役割担当者の選出 (保健・健康管理担当、福利厚生担当、越華祭担当、学生会担当、卒業生謝恩会担当、卒業アルバム担当)
- ・ ハラスメント相談員の選出
- ・ 新卒者の卒後の連絡先等を管理する担当者について

- ② 第2回学生部委員会 (令和4年5月18日) 於 : B棟 1F 大会議室 (出席 9人 欠席 3人)

議事

- ・予防接種（B型肝炎・インフルエンザ）の実施予定について
- ・令和3年度の活動報告および令和4年度の活動目標について
- ・昼食会場利用に関する注意喚起について
- ・令和4年度の学生会役員および総会開催について
- ・喫煙問題について（吸殻の投棄）

③ 第3回学生部委員会（令和4年6月15日） 於：B棟1F大会議室（出席12人 欠席0人）

議事

- ・新型コロナウイルス感染症に関する登校再開基準の改定
- ・健康診断結果の配付とその後の保健指導について
- ・令和3年度の卒業時満足度調査の集計結果について
- ・禁止されている川角キャンパス構内および創立30周年記念講堂前への車の乗り入れの多発について
- ・キャンパス構内および門の付近は喫煙禁止である等の教職員・学生への注意喚起について
- ・埼玉医科大学学生部委員会について
- ・学生懇談会の開催について

④ 第4回学生部委員会（令和4年7月20日） 於：B棟1F大会議室（出席12人 欠席0人）

議事

- ・夏季休暇中の基本的な感染対策の徹底についての注意喚起について
- ・学生の新型コロナウイルス感染症に関する登校再開基準の改定
- ・主に節電を目的とした夏季休暇期間中のオスラーホールの利用中止について
- ・越華祭実行委員会の局員が決定した件
- ・各学科の謝恩会委員が決定した件
- ・委員の変更（乙戸委員の退職より赤坂委員が後任となる）

⑤ 第5回学生部委員会（令和4年9月14日） 於：B棟1F大会議室（出席12人 欠席0人）

議事

- ・学生の新型コロナウイルス感染症に関する登校再開基準の改定
- ・オスラーホールの利用再開について
- ・越華祭のオンライン開催について
- ・コロナウイルス感染症の全国的な拡大等による部活動の一時中止について
- ・バスマナーについて

⑥ 第6回学生部委員会（令和4年10月19日） 於：B棟1F大会議室（出席11人 欠席1人）

議事

- ・学生懇談会の開催について
- ・喫煙問題に関するワーキンググループの設置について
- ・「THE世界大学ランキング日本版」の学生調査の協力について
- ・MM教室の利用再開について
- ・部活動の再開について
- ・昼食会場利用に関する注意喚起について

⑦ 第7回学生部委員会（令和4年11月16日） 於：B棟1F大会議室（出席11人 欠席1人）

議事

- ・インフルエンザ予防接種について
- ・新型コロナウイルスワクチンの追加接種について
- ・MM教室の利用再開について
- ・埼玉医科大学学生部委員会の開催について
- ・喫煙問題について（吸殻の投棄）
- ・バスマナーについて
- ・国家試験勉強の為の施設利用について
- ・教室等で食事をするを禁止する通達について

⑧ 第8回学生部委員会（令和4年12月14日） 於：B棟1F大会議室（出席11人 欠席1人）

議事

- ・卒業生に卒業記念品を贈答する件
 - ・卒業満足度調査について
- ⑨ 第9回学生部委員会（令和5年1月18日） 於：B棟1F大会議室（出席11人 欠席1人）
議事
- ・年末年始の新型コロナウイルス感染症対策の徹底についての注意喚起について
 - ・新卒者の卒後の連絡先等を管理する担当者の選定について
- ⑩ 第10回学生部委員会（令和5年2月15日） 於：B棟1F大会議室（出席10人 欠席2人）
議事
- ・ロッカーの明け渡しについて
 - ・謝恩会開催中止の決定について
 - ・喫煙した場合の処分等についての喫煙問題検討ワーキンググループでの検討について
- ⑪ 第11回学生部委員会（令和5年3月8日） 於：B棟1F大会議室（出席12人 欠席0人）
議事
- ・日高キャンパスの駐車場契約について
 - ・MM教室のコンピューター総入れ替えについて
 - ・学生メールをGmailに移行する為に必要な事前手続き案内の件
 - ・ワーキンググループを立ち上げ、同窓会活動再開に向けた検討を開始した件
 - ・コロナ禍以前のように、学生会・部活動紹介を入学式後に実施することについて
 - ・新型コロナウイルス感染症への対応について
 - ・学生の海外旅行について
 - ・新卒者の卒後の連絡先等を管理する担当者の選定

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

① 保健・健康管理

1) 学生定期健康診断

- ・新型コロナウイルスの感染対策として、各学年2日を設けることで人数を分散させ、当日、検温・問診を行った上で、マスクを着用させ実施。
- ・健診結果を配付し、総合評価がD及びEの者については、「医療機関受診報告書」を提出させる等、保健室で事後指導を行った。

2) B型肝炎ワクチン接種

病院実習の受入要件となっていることから、2年生へのワクチン接種並びに3年生への抗体検査（定期健康診断時）及び抗体価が獲得できなかった者への追加ワクチン接種を行った。

3) コロナ禍の登校基準等について

登校時の注意点、健康チェックの必要性や登校できる基準等と学生の発熱時の対応についてマニュアル（学生の新型コロナ感染症に関する登校再開基準）を、状況の変化により、内容を更新して対応した。

4) インフルエンザワクチン接種

確保できるワクチン数に制限があり、病院実習および国家試験を控えた学年に限定し実施した。

看護学科：1年84人、2年70人、3年73人、4年72人

臨床検査学科：1年19人、2年21人、3年40人、4年42人

臨床工学科：1年10人、2年8人、3年41人、4年20人

理学療法学科：1年35人、2年19人、3年42人、4年38人

全学生の70%（637/908名）が接種した。

5) 「こころの相談」について

- ・令和4年度の「こころの相談」利用者は、延393人（実人数71人）で、令和3年度比で、延人数・実人数ともに増加した。

6) その他

- ・新型コロナワクチン追加接種に、保健医療学部生155人（看護63人、臨検33人、臨工23人、理学36人）が申し込み、接種した。

② 学生の行事支援

- 1) 越華祭
 - ・10/15(土)–10/16(日)にオンライン開催した。各日、学外向け企画と学内向け企画を配信した。
- 2) 謝恩会
 - ・COVID-19 感染症の影響で中止となった。
- 3) 卒業アルバム
 - ・卒業生全員分を制作し学生会からの卒業記念品として配布した。
- 4) 学生会・部活動関係
 - ・部活動の再開について、登録されている 23 団体のうち 17 団体に許可をした。
 - ・学生会活動も徐々に再開となり、学生会総会が開催された。

③ 福利厚生

- ・バスマナーに関する苦情があり、注意喚起を行った。
- ・オスラーホールの開館時刻は引き続き 8:45～17:00 とした。
- ・国家試験勉強の為の施設利用については、1/4～3/4 の間、日高キャンパスのオスラーホール（平日の 8:45～17:00）と図書館（開館時間）、川角キャンパスの図書館およびゼミ室（月～金曜日の 8:45～17:00）を開放した。なお、日高キャンパスにおける教室・ゼミ室については、教員の指導・鍵管理のもと 20:00 まで、川角キャンパスにおける教室については、教員の指導・鍵管理のもと 18:40 までとした（学生のみでの利用はできない）。
- ・昨年度に引き続き、卒業時満足度調査アンケートを実施した。

④ 学生懇談会

- ・学生会執行部対象（2 回）および学生会執行部と学科学年代表対象（1 回）の学生懇談会を開催した。

⑤ 表彰の審議

- ・1 件の申請があったが、大会の規模から表彰対象とならなかった。

⑥ 処罰の審議

なし

⑦ その他

- ・今年度のハラスメント相談員を選出した。
- ・新型コロナウイルス感染症の影響により経済的な困難を抱える学生等に対し、緊急的に学資を支援するための給付金について、一時推薦の 54 人および二次推薦の 87 人の全員への給付が決定した。その後、三次推薦枠（35 人分）が示されたが、申請者はいなかった。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

医学部学生部委員会とも意見交換をしながら、充実した学生生活を送れるように支援する。主な対応項目は以下の通りである。

① 保健・健康管理

- 1) 学生健康推進センター・保健室と連携し、学生の健康管理の充実を図る。
- 2) 定期健康診断及び病院実習に必要な抗体価確認・予防接種が円滑に実施できるよう各学科と協同する。
- 3) 体調不良、外傷受傷などの際の対応について、現状を確認し改善を図る。

② 学生の行事支援

- 1) 越華祭・若葉祭をはじめとした学生行事の支援並びに助言を行う。
- 2) 卒業アルバムや謝恩会などの企画への助言を行う。
- 3) 学生会活動への助言を行う。特に、予算・決算・会計に関する事項は監督する。
- 4) 部活動については、各部の顧問と協力し指導・助言を行う。また、保健医療学部学生が参加している医学部の部活動についても医学部学生部委員会と連携し本学部学生への指導・助言を行う。

③ 学生との懇談会

- 1) 学生会執行部・越華祭実行委員会、学科学年代表、部活動等代表及び顧問と活動状況・要望などについて学生部委員会としての対応を検討する為に懇談会を実施する。
- 2) 懇談会は平日の 4 限終了後に行うこととし、出席が難しい理学療法学科の学生代表等には Zoom 参加を促す月・12 月の学生部委員会（川角キャンパスで開催）に参加してもらう。

④ その他

- 1) 新入生オリエンテーション時に学生生活における注意事項について説明する。2～4 年生に対しては、各学科学年オリエンテーションで説明する。
- 2) キャンパスマナー・公共の場でのマナーについて、学生・教職員に周知し、問題があれば、その都度注意する。

- 3) 表彰・処罰対象事例等があった場合、これを審議する。
- 4) ハラスメント委員の選定にあたっては、引き続き、相談者へのヒヤリングを二人一組で対応でき、かつ、学科別や男女別のケースにも対応できる体制とする。
- 5) 同窓会の活動再開に向けたワーキンググループを学部長のもとに設置し、名簿の整備等進めて行く。

4. 4) 図書館委員会

1. 構成員

- 委員長 池田 将樹 (IKEDA, Masaki) : 日高キャンパス分館分館長、保健医療学部共通教育部門 : 教授
委員 山路真佐子 (YAMAJI, Masako) : 保健医療学部看護学科 : 准教授 (任期 : R5. 3. 31)
伴場 裕巳 (BANBA, Hiromi) : 保健医療学部臨床検査学科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
小林 直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 保健医療学部臨床工学科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
時田幸之輔 (TOKITA, Konosuke) : 保健医療学部理学療法学科 : 講師 (任期 : R5. 3. 31)

2. 目的・目標

委員会は、分館運営の基本方針、同じく予算の要求及び執行に関すること、購入図書を選定及び学術情報の収集に関すること、その他分館に関する事項を審議する(日高キャンパス分館図書館委員会規則第3条)。

新型コロナウイルス感染症の収束がみられない中、来館を伴わない文献複写サービスの提供などを行い、以前と変わらないサービスを利用者へ提供できるように活動する。

3. 活動実績

3-1. 委員会の開催(議事要録あり)

- 1) 第1回(令和4年6月13日)於: 日高キャンパスA棟2階図書館情報室、出席8人、欠席なし
議事: 令和3年度事業報告、決算報告、ほか事業報告
- 2) 第2回(令和4年10月20日)於: 日高キャンパスC棟2階会議室、出席6人、欠席2人
議事: 夏期休館中の作業報告、ほか事業報告
- 3) 第3回(令和5年2月15日)於: 日高キャンパスA棟2階図書館情報室、出席9人、欠席なし
議事: 令和4年度事業計画、予算概算要求、ほか事業報告

3-2. 主な協議事項(報告事項を含む)

1) 第1回委員会(令和4年6月13日)

①令和3年度事業報告(日高キャンパス分館、川角キャンパス分館)を承認した。

- ・各キャンパス特記事項は次のとおり。

分館長に共通教育部門の池田将樹教授が就任した(4月)、臨時休館をして蔵書点検を実施した(8月)、日本医学図書館協会の重複雑誌交換事業で「日本看護学会論文集」約100冊を入手した(9月)、年間を通して利用者へのオリエンテーション、学部学生への文献検索講義、教職員への文献入手説明会を実施した(以上、日高キャンパス分館)カビ対策として2階の一部資料を移動した(6月)、臨時休館をして蔵書点検を実施した(7月)、カビ対策と経費削減のため、雑誌購読の見直しを行い、17誌を中止とした(9月)、視聴覚室及び大学院生室のカーペットの張替えと閲覧室の椅子56脚の更新が行われた(3月)、栗本かおる(パート職員)が退職した(3月)(以上、川角キャンパス分館)

②令和3年度決算報告(日高キャンパス分館、川角キャンパス分館)を承認した。各館ごとに執行状況の報告が行われた。

日高キャンパス分館の資料費は832万円、維持費は251万円が執行され、合計1,083万円が決算額となり、予算執行率は67.6%だった。維持費全体の執行率の低さは、令和2年度に購入した入館ゲートが、予算概算要求作成時に未納だったため、令和3年度も予算要求した備品費の残高250万円が影響している。この備品費250万円を含まない場合の日高キャンパス分館全体の率は80.2%となった。

川角キャンパス分館の資料費は341万円、維持費は255万円が執行され、合計596万円で執行率51.6%となった。

資料費のうち国内誌の執行率が75.9%と低いのは購入雑誌の見直しにより17誌を中止したことによる。維持費の執行率の低さは、備品費で計上した入館ゲートの更新が見送られたためであり、用品費では閲覧室用の椅子が予定より100万円ほど安く購入できたことによる。備品費350万円と用品費の残高122万円を差し引いた場合の全体の執行率は87%となった。

③その他

- ・新入生オリエンテーションは、川角キャンパスで理学療法学科を、日高キャンパスで看護学科を対象に実施したと報告された。
- ・学生への文献検索講義、国際医療センター教職員への文献入手説明会の実施状況について報告された。
- ・利用者用パソコンの入れ替え完了が報告された。(日高キャンパス分館25台、川角キャンパス分館4台)

- ・新型コロナウイルス対策として実施している学部学生へのWeb文献申込状況について報告された。令和2年度から令和4年度5月までの学部学生の申込件数は、425件のうちWeb文献申込件数は320件であった。また、自宅郵送は23件であった。

2) 第2回委員会（令和4年10月20日）

①業務報告

- ・本学部学生への文献検索講義、国際医療センター教職員への文献入手説明会の実施状況について報告された。
- ・日高キャンパス分館の利用者用プリンターの入れ替え完了が報告された。
- ・リモートサービス「RemoteXs」の利用開始が報告された。
- ・夏期休館中の作業について報告された
- 日高キャンパス分館、川角キャンパス分館ともに、閲覧室の図書を移動し再配架を行った。
- ・創立50周年に関連する資料の展示の計画について報告と説明がなされた

②その他

日高キャンパス分館の開館時間延長について質問があったが、新型コロナウイルス感染を考慮し、希望を受け付けるに留まった。その後、メール審議と学生部委員会・辻先生との協議により、19時まで開館することとなった。

3) 第3回委員会（令和5年2月15日）

①令和5年度事業計画（事業計画書）について日高キャンパス分館、川角キャンパス分館からそれぞれ説明が行われ、委員会として承認した

②令和5年度予算概算要求について日高キャンパス分館、川角キャンパス分館からそれぞれ説明が行われ、委員会として承認した

③その他

- ・創立50周年記念展示実施が報告された

11月から12月の間、前半後半で展示替をして実施した。期間中の入館者数は、前半2,346人、後半2,470人であった。今後、川角キャンパス分館でも展示予定であると報告された。

- ・日高キャンパス分館は11月から開館時間を19：00まで延長したと報告された。
- ・日高・川角キャンパス分館ともに昨年度と比較すると入館者が増加していると報告された。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- ・図書館委員会の活動目標について円滑に運営ができた。

リモートサービス「RemoteXs」の利用開始に伴い、利用者への利用支援を行った。日高キャンパス分館では、利用者の利便性から閉館時間を19時までとした。川角キャンパス分館では、カビへの対策を継続的に実施し、利用環境の整備に努めた。日高キャンパス分館では、学生や教職員に向けた文献検索の授業や文献入手説明会などの学習支援のため、館員がデータベースや文献検索方法の知識を深め、利用者へのサービス向上に努めた。また、日高キャンパス分館、川角キャンパス分館ともに書架移動を実施し、館内環境を整えた。川角キャンパスでは、入館ゲートの更新ができなかったため次年度、再申請する。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

- ・今年度も日高キャンパス分館、川角キャンパス分館ともに大学図書館としての環境を整備し、学習支援のほか教育および研究活動への支援を強化していきたい。

4. 5) 保健医療学部自己点検・評価委員会

1. 構成員

- 委員長：加藤木利行 (KATOGL, Toshiyuki)：学部長 (任期：R5. 3. 31)
委員：野田智子 (NODA, Tomoko)、看護学科 教授 (任期：R5. 3. 31)
横山ひろみ (YOKOYAMA, Hiromi)、看護学科准教授 (任期：R5. 3. 31)
山岸敏之 (YAMAGISHI, Toshiyuki) 臨床検査学科教授 (任期：R5. 3. 31)
黒田真代 (SHUUTOU, Masayo) 臨床検査学科准教授 (任期：R5. 3. 31)
宮本裕一 (MIYAMOTO, Yuichi)、臨床工学科教授 (任期：R5. 3. 31)
脇田政嘉 (WAKITA, Masayoshi)、臨床工学科講師 (任期：R6. 3. 31)
新井智之 (ARAI, Tomoyuki)、理学療法学科准教授 (任期：R5. 3. 31)
師岡祐輔 (MOROOKA, Yuusuke)、理学療法学科講師 (任期：R6. 3. 31)
堀江正人 (HORIE, Masato)：大学事務部 (任期：R6. 3. 31)
山口明美 (YAMAGUCHI, Akemi)：大学事務部 (任期：R5. 3. 31)
池田将樹 (IKEDA, Masaki)：共通教育部門教授 (任期：R5. 3. 31)
椎橋実智男 (SHIIBASHI, Michio)：IR センター教授 (任期：R6. 3. 31)
柴崎智美 (SHIBAZAKI, Satomi)：IR センター教授 (任期：R6. 3. 31)

2. 目的・目標

- (1) 委員会の設置目的：本委員会は本学の建学の理念および埼玉医科大学の期待する医療人像に則り、学部の教育研究活動の実施状況について自己点検・評価を行うために、下記の事項につき審議する。
- ① 学部の自己点検・評価の基本方針および実施に関すること
 - ② 学部の自己点検・評価の事項・項目に関すること
 - ③ 学部の自己点検・評価の報告書の作成および公表に関すること
 - ④ 教員の研修に関すること
 - ⑤ その他自己点検・評価に必要な事項に関すること
- (2) 令和4年度の活動目標：
- ① 研究業績データベースの運用支援
 - ② 学生による授業評価の実施
 - ③ 教員表彰制度の運営
 - ④ 令和3年度各種委員会の活動評価
 - ⑤ 教育業績評価の運用状況評価
 - ⑥ 学部プロジェクト研究の運用状況評価
 - ⑦ 大学機関別認証評価の検証に基づく点検評価

3. 活動実績

- (1) 第1回自己点検・評価委員会
(令和4年4月6日、於：2F 会議室、出席14名、欠席なし、議事録あり)
- ① 新任委員の紹介
 - ② 令和4年度活動予定に関する意見交換
 - ・各種委員会の活動評価を継続実施する。
 - ・学部プロジェクト研究の運用状況評価に取り組む。
 - ・教育業績評価の運用状況を評価する。
 - ・私立大学改革総合支援事業の検証に基づく点検評価を継続実施する。
 - ③ 4学科卒業生の令和4年の国家試験自己採点と在学中のGPAの相関を基に意見交換
 - ④ 令和4年各種入学試験の受験者数、成績、合格入学比率のデータをもとに意見交換
 - ⑤ 欠席数とGPAの相関、代表的な科目と総合成績であるGPAの相関のデータをもとに意見交換
 - ⑥ 椎橋 IR センター長より、IR センター運営会議の議事録をもとに報告

(2) 第2回自己点検・評価委員会

(令和4年6月8日、於：2F会議室、出席14名、欠席なし、議事録あり)

- ① 学生による授業評価に基づいた教員表彰の報告
- ② 令和3年度大学年報の作成に関する各学科への周知
- ③ 令和3年度の教育業績評価について意見交換
- ④ 危機管理委員会報告とプロジェクト委員会報告の検討
- ⑤ 消防署の対外活動が再開されたので、1年生のBLS講習と本年の防災避難訓練が行われることになった。
- ⑥ 椎橋 IRセンター長より、令和3年度のIRレポートの説明があった。
- ⑦ 椎橋 IRセンター長より、全学の3つのポリシー策定について説明があった。

(3) 第3回自己点検・評価委員会

(令和4年9月7日、於：2F会議室、出席14名、欠席なし、議事録あり)

- ① オープンキャンパスの報告：6月7月はコロナ禍の影響でオンライン開催となった。8月に一部分だけ予約制で来校型のオープンキャンパスが開催できた。
- ② 令和3年度人事考課は還元報告まで終了した
- ③ 令和3年度各種委員会の活動状況評価・担当委員案の承認
- ④ IRセンターより、全学の3ポリシーが両教授会で承認された報告があった。
- ⑤ ITセンター報告として学内メールのGメールへの移行について説明があった。

(4) 第4回自己点検・評価委員会

(令和4年11月9日、於：2F会議室、出席13名、欠席1名、議事録あり)

- ① 領域別実習要件認定式は感染対策に十分配慮し縮小規模で無事終了した
- ② 解剖体慰霊祭についてもご遺族以外は一部教員のみが参加し、学生は不参加とした。
- ③ 越華祭はWEBにて開催された。
- ④ 10月14日に防災訓練を実施した。
- ⑤ 令和3年度各種委員会の活動評価
担当委員からの評価をまとめ、意見が交換された。出席状況や開催状況に若干の問題点が指摘されたが、概ね適切な活動が行われたものと判断し、教授会に報告することとした。
- ⑥ 卒業生アンケートの実施について意見交換
- ⑦ 椎橋 IRセンター長より以下の報告があった。
 - ・ 医学教育分野別評価について、10月1日付で認定された
 - ・ 全学自己点検評価委員会の委員長にIRセンター長の椎橋先生が承認された。
 - ・ 大学機関別認証評価業務に係る規則の改正が承認された。

(5) 第5回自己点検・評価委員会

(令和5年1月11日、出席13名、欠席1名、議事録あり)

- ① 椎橋 IRセンター長より、IRセンター運営会議の議事録をもとに以下の報告があった。
 - ・ 埼玉医科大学 IRセンター運営会議規則の変更が承認された。
 - ・ 大学機関別認証評価受審準備小委員会の構成員について説明。
- ② 令和2年 保健医療学部プロジェクト研究執行状況について報告
- ③ 総合型選抜試験および学校推薦型選抜試験の振り返り
- ④ 次年度の広報活動について、特にコロナ禍における高校訪問等の対外活動について意見交換

(6) 第6回自己点検・評価委員会

(令和5年3月1日、出席12名、欠席2名、議事録あり)

- ① 令和4年度保健医療学部自己点検・評価委員会活動概要について報告
- ② 令和5年度保健医療学部自己点検・評価委員会の活動目標について説明
- ③ 学生による授業評価に基づいた令和4年度教員表彰案を承認
- ④ 令和5年度保健医療学部研究業績データベース説明会は4月4日に決定
- ⑤ 柴崎 IRセンター副センター長より、第46回IRセンター運営会議について報告

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

① 学生による授業評価の実施

例年通り講義科目と演習・実習科目について、前後期とも別個に授業評価を実施し、各教員へのフィードバックと学生への公開（匿名）を行った。

② 教員表彰制度の運営

今年度も資料の整理が迅速に行えた結果、令和5年3月に表彰者案を策定し教授会の承認が得られている。ただし現状では評価を受けるのは科目責任者のみとなっている。対面授業が復活した際には、以前のように3コマ以上を受け持つ教員すべてを対象とする。

③ 令和3年度各種委員会の活動評価

年報および各委員会議事録を基に、令和2年度各種委員会活動の評価を実施した。評価項目は、1) 定期的な開催、2) 委員の出席状況、3) 目標に即した活動、4) 目標の達成度、5) 当該年度の自己点検・評価、6) 次年度目標の設定とした。各委員会とも活動状況は適切と判定されたが、一部の委員会では委員の出席率や開催状況に若干の問題点が指摘された。

④ 教育業績評価の運用状況評価

概ね円滑に運用された。なお、項目により評価の基準が教員間で共有されておらず、一部にポイントの付け方に疑義を唱える教員があった。評価のためのマニュアルを適宜改定するとともに周知を図る必要がある。

⑤ 学部プロジェクト研究の運用状況評価

学科による応募件数の差が大きい。できるだけ多くを採択するために全員の要求額をまんべんなく抑える方法を執っている。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

① GPA制度の運用に伴い、とくにGPA 1.5以下の成績不良者については、進路変更も考慮して担任が面談するという方針としている。GPA 2.0以下の学生についても指導を強化するように要請。

② 今年度の自己点検・評価結果に基づく次年度計画

ア. 学生による授業評価の実施（継続）

イ. 教員表彰制度の運営（継続）

ウ. 令和4年度各種委員会の活動評価（継続）

エ. 教育業績評価の運用状況評価（継続）

オ. 学部プロジェクト研究の運用状況評価（継続）

カ. 人事考課の書式・運用評価（継続）

キ. GPA制度の運用評価（継続）

支援する体制を作ることを目指す。

4. 6) 保健医療学部入学試験委員会

1. 構成員

- 委員長：加藤木利行 (KATO, Toshiyuki)：学部長 (任期：R5. 3. 31)
副委員長：間山伸 (MAYAMA, Shin)：共通教育部門教授 (任期：R5. 3. 31)
委員：別所正美 (BESSHO, Masami)：学長
千田みゆき (CHIDA, Miyuki)：看護学科学科長 (任期：R5. 3. 31)
茅野秀一 (KAYANO, Hidekazu)：臨床検査学科学科長 (任期：R5. 3. 31)
下岡聡行 (SHIMOOKA, Toshiyuki)：臨床工学科学科長 (任期：R5. 3. 31)
高倉保幸 (TAKAKURA, Yasuyuki)：理学療法学科学科長 (任期：R5. 3. 31)
藤田博暁 (FUJITA, Hiroaki)：理学療法学科教授 (任期：R5. 3. 31)
村本良三 (MURAMOTO, Ryouzou)：臨床検査学科准教授 (任期：R5. 3. 31)
国澤洋介 (KUNISAWA, Yousuke)：理学療法学科准教授 (任期：R5. 3. 31)
金井欣秀 (KANAI, Yoshihide)：理学療法学科講師 (任期：R5. 3. 31)
大森智美 (OMORI, Tomomi)：看護学科教授 (任期：R5. 3. 31)
黒田真代 (KURODA, Masayo)：臨床検査学科准教授 (任期：R5. 3. 31)
若山俊隆 (WAKAYAMA, Toshitaka)：臨床工学科教授 (任期：R5. 3. 31)
本谷久美子 (MOTOYA, Kumiko)：看護学科准教授 (任期：R5. 3. 31)
中島孔志 (NAKAJIMA, Koushi)：臨床工学科講師 (任期：R5. 3. 31)
山口明美 (YAMAGUCHI, Akemi)：大学事務部 (任期：R5. 3. 31)
小室秀樹 (KOMURO, Hideki)：大学事務部顧問 (任期：R5. 3. 31)
徳元康人 (TOKUMOTO, Yasuhito)：アドミッションセンター講師 (任期：R5. 3. 31)

2. 目的・目標

- (1) 委員会の設置目的：本委員会は埼玉医科大学学則第 19 条第 2 項に定める入学者選抜試験が厳正かつ合理的に実施されることを目的として、下記の業務を実施する。
- ① 入学試験方針の策定および選抜方法の決定
 - ② 入学試験科目の決定
 - ③ 入学試験要項の作成
 - ④ 入学試験場の設定および運営
 - ⑤ 試験監督者の選定および委嘱
 - ⑥ 出題、採点委員の選定および委嘱
 - ⑦ 入学試験問題の選定および決定
 - ⑧ 入学試験問題の印刷および保管
 - ⑨ 入学試験施行に関わる指導・監督
 - ⑩ 小論文委員、面接委員の選定および委嘱
 - ⑪ 合否判定基準 (学力試験、面接、小論文等) の策定
 - ⑫ 合否判定案の作成
 - ⑬ 入学試験結果の公示
 - ⑭ その他各号に関連する事項
- (2) 令和 4 年度の活動目標：
- ① 令和 4 年度入学試験の見直し
 - ② 令和 5 年度入学試験の募集要項作成
 - ③ 令和 5 年度入学試験の出題・採点委員、面接委員等の選定・委嘱
 - ④ 令和 5 年度入学試験の問題選定、印刷、保管
 - ⑤ 令和 5 年度入学試験の実施 (試験場設営、試験監督者選定)
 - ⑥ 令和 5 年度入学試験の合否判定案の作成、結果の公示
 - ⑦ 令和 5 年度入学試験の見直し
 - ⑧ 令和 6 年度入学試験の方針、選抜方法、科目、試験場の概要検討

3. 活動実績

(1) 第1回入学試験委員会

(令和4年4月8日、於：2F会議室、出席16名、欠席3名、議事録あり)

- ① 新委員の紹介
- ② 令和3年度活動概要と令和4年度活動予定についての説明と意見交換
- ③ 令和4年度入学試験結果の報告と見直し
- ④ 令和4年度委員会日程の確認
- ⑤ 入学試験実施小委員会委員長および委員の選任
入学試験実施小委員会委員長
共通教育部門教授 間山伸 先生
入学試験実施小委員会委員
看護学科准教授 本谷久美子先生、共通教育部門講師 上滝圭介先生、
臨床工学科教授 石川雅浩先生、理学療法学科教授 金井欣秀先生
- ① 入試問題の科目別作成責任者案の策定
- ② 入試問題の内部監査、外部監査に関する方針の決定
- ③ オープンキャンパスでの入試説明は看護学科の大森委員に決定。
- ④ 令和5年度入試募集要項について、変更点の検討

(2) 第2回入学試験委員会

(令和4年5月13日、於：2F会議室、出席18名、欠席なし、議事録あり)

- ① 入試問題の科目別作成責任者案の承認
- ② 推薦入試指定校案の承認
- ③ 令和5年度入試の日程、選抜方法等最終案の承認
- ④ 入試募集要項についての検討

(3) 第3回入学試験委員会

(令和4年6月10日、於：2F会議室、出席17名、欠席1名、議事録あり)

- ① 入試問題の内部監査者への委嘱状送付
- ② 問題の外部監査者（埼玉平成高校）への依頼
- ③ 徳元委員より令和4年5月26～28日にZoom会議にておこなわれた全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会の概要について報告があった。
- ④ コロナウイルスに罹患した受験生への対応について意見交換

(4) 第4回入学試験委員会

(令和4年7月8日、於：2F会議室、出席14名、欠席4名、議事録あり)

- ① 新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドライン説明
- ② 令和5年度学生募集要項最終案の承認
- ③ 受験生に提出させる健康観察表について意見交換

(5) 第5回入学試験委員会

(令和4年9月9日、於：2F会議室、出席14名、欠席4名、議事録あり)

- ① 募集要項のホームページ掲載（報告）
- ② 看護学科3年次編入学試験の志願者は看護学科3名、臨床工学科1名である。
- ③ 各試験の作問状況の報告
- ④ 令和5年度入学者選抜における面接の方法について意見交換

(6) 第1回臨時入学試験委員会

(令和4年9月26日、於：2F会議室、出席16名、欠席2名、議事録あり)

- ① 令和4年度看護学科3年次編入学試験および臨床工学科の2年次編入学試験の合否判定案の作成：
看護学科受験者3名、合格者2名、臨床工学科受験者1名、合格者1名

(7) 第6回入学試験委員会

(令和3年10月7日、於：大会議室、出席16名、欠席2名、議事録あり)

- ① 学校推薦型選抜試験の準備状況報告
- ② 学校推薦型選抜試験合格者への課題準備

③ 「受験生に向けた新型コロナウイルス感染予防対策のお知らせ」を一部更新してホームページに掲載することが報告された。

(8) 第7回入学試験委員会

(令和4年11月11日、於：2F会議室、出席15名、欠席3名、議事録あり)

- ① 学校推薦型選抜試験の応募状況報告
- ② 総合型選抜試験および一般選抜試験（前期）の準備状況報告
- ③ 「大学入学者選抜に係る新型コロナウイルス感染症に対応した試験実施のガイドライン」に則り、学校推薦型選抜試験と総合型選抜試験における、コロナ対策を考慮した試験会場の使い方と誘導方法が提案され承認された。

(9) 第2回臨時入学試験委員会

(令和4年12月9日、於：2F会議室、出席15名、欠席3名、議事録あり)

- ① 学校推薦型選抜試験（11月28日実施）の合否判定案の作成：看護学科40名合格（受験者数62名）、臨床検査学科24名合格（受験者数27名）、臨床工学科13名合格（受験者数13名）、理学療法学科25名合格（受験者数25名）

(10) 第8回入学試験委員会

(令和4年12月9日、於：2F会議室、出席14名、欠席4名、議事録あり)

- ① 学校推薦型選抜試験合格者への課題送付報告
- ② 総合型選抜試験（12月11日実施）の準備状況報告
- ③ 一般入学試験の準備状況報告と入試当日の大雪等の対策について意見交換
- ④ 令和6年度入試における各学科の2科目の指定内容について意見交換

(11) 第3回臨時入学試験委員会

(令和4年12月12日、於：大会議室、出席15名、欠席3名、議事録あり)

総合型選抜試験（12月11日実施）の合否判定案の作成：臨床検査学科3名合格（受験者数6名）、臨床工学科3名合格（受験者数4名）

(12) 第9回入学試験委員会

(令和5年1月13日、於：大会議室、出席16名、欠席2名、議事録あり)

- ① 一般入学試験（前期）の応募状況報告
- ② 試験会場の受付とその後の動線についてコロナ対策を考えて意見交換
- ③ 新型コロナウイルスの濃厚接触者の受験のために別室を設ける。
- ④ 令和6年度入試の方法について意見交換

(13) 第4回臨時入学試験委員会

(令和4年2月2日、於：大会議室、出席16名、欠席2名、議事録あり)

一般入学試験（前期2月1日実施）の合否判定案の作成：看護学科69名合格（受験者数127名）、臨床検査学科39名合格（受験者数49名）、臨床工学科9名合格（受験者数15名）、理学療法学科25名合格（受験者数33名）

(14) 第10回入学試験委員会（令和5年2月2日、於：大会議室、出席16名、2名、議事録あり）

- ① 一般入学試験（後期）の準備状況報告
- ② 一般入学試験（前期）の事後評価

(15) 第5回臨時入学試験委員会

(令和5年3月3日、於：大会議室、出席15名、欠席3名、議事録あり)

一般入学試験（後期、3月2日実施）の合否判定案の作成：看護学科5名合格（受験者数17名）、臨床検査学科6名合格（受験者数7名）、臨床工学科2名合格（受験者数2名）、理学療法学科2名合格（受験者数2名）

(16) 第11回入学試験委員会

(令和4年3月4日、於：大会議室、出席16名、欠席2名、議事録あり)

- ① 一般入学試験（後期）の事後評価
- ② 令和6年度入学試験の日程や区分ごとの定員に関する意見交換が行われ、総合型選抜試験を12月から10月に前倒しすることと、一般入試後期を卒業式の時期を避けて少し早めることに決定した。
- ③ 令和4年度入試委員会の活動概要と令和5年度活動予定の検討

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

令和5年度入試の考察

令和5年度入試の受験者総数は393名と前年と同様であった。コロナ禍が終息せず、対面型の広報が困難であったが、9月に何とか一回だけでもオープンキャンパスを開催した。広報の対策が不十分なこともあるが、やはりコロナ禍によって県境を越えたくないという風潮が強く、以前と比べて遠方からの受験生が減少した。近くでは、東京からの受験生が激減し、入学者が8名と一桁となったのは初めてのことである。看護学科では以前は300名以上が受験していたが、昨年は179名と過去最低であった。本年は209名と昨年よりも改善し、合格ラインの点数も58点から72点へと復旧した。学科別に昨年と比較すると看護学科は179名から209名、臨床検査学科は92名から89名、臨床工学科は61名から35名、理学療法学科は85名から60名と看護学科以外は減少が明らかである。臨床検査学科及び理学療法学科は経年的に漸減が続いている。臨床工学科は令和2年度に受験者が増えて、その入試成績も向上が見られたが令和3年度以降の受験生はまた減少した。臨床工学科は好転しつつあったところを叩かれた感じで、臨床検査学科と理学療法学科は経年的な減少傾向に歯止めがかからない感じである。一般前期入試における合格者入学者比率に注目しているが、本年は60%で、昨年に続きコロナ以前と比べて入学手続き後の辞退の件数が少なかった。受験者動向としては受験校数を絞る傾向にあると考えられ、特定の競合校と天秤にかけられている印象である。

18歳人口の減少に伴う受験生確保の対策を、経年的な傾向から考えていたが、コロナ禍によってその検討が困難になってしまった。本校の良い点を広報して、オープンキャンパスなどを再開して挽回していきたい。

4-2 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

- ① 入学試験改革：令和4年度入学試験委員会での見直し結果をふまえ、令和6年度入試の改善につなげたい。根本的な改革として、従来一般入試前期は一次試験と二次試験を間に1日おいて行っていたが、試験及び面接を同日に行うことで受験が一日で終るように変更した。これによって、特に遠隔地からの受験生の負担を減少させて、受験者数の増加につなげたいと計画したが、本年度の時点では効果は不明であった。次年度は総合型入試の試験日を12月から10月に大きく前倒しするとともに、理学療法学科も参画することになった。
- ② 令和6年度入学試験の出題・採点委員、面接委員等の選定・委嘱：令和5年度に準じる。
- ③ 令和6年度入学試験の問題選定、印刷、保管：令和5年度に準じる。
- ④ 令和6年度入学試験の実施（試験場設営、試験監督者選定）：令和5年度に準じる。
- ⑤ 令和6年度入学試験の可否判定案の作成、結果の公示：令和5年度に準じる。

4. 7) 広報委員会

1. 構成員

- 委員長 藤田 博暁 (FUJITA Hiroaki) : 理学療法学科 : 教授 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)
副委員長 大賀 淳子 (OHGA Jyunko) : 看護学科 : 教授 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)
委員 関根 由紀子 (SEKINE Yukiko) : 看護学科 : 講師 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)
委員 野寺 誠 (NODERA Makoto) : 臨床検査学科 : 准教授 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)
委員 山本 晃司 (YAMAMOTO Kouji) : 臨床検査学科 : 講師 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)
委員 奥村 高広 (OKUMURA Takahiro) : 臨床工学科 : 准教授 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)
委員 駒形 英樹 (KOMAGATA Hideki) : 臨床工学科 : 准教授 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)
委員 國澤 洋介 (KUNISAWA Yousuke) : 理学療法学科 : 准教授 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)
委員 小関 要作 (KOSEKI Yousaku) : 理学療法学科 : 講師 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)
委員 上滝 圭介 (KAMITAKI Keisuke) : 共通教育部門 : 講師 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)
委員 鈴木 利明 (SUZUKI Toshiaki) : 学生課 : 係長 (任期 : 令和 5 年 3 月 31 日)

2. 目的

- (1) 委員会の設置目的 : 本委員会は本学部の広報に関する目的を達成するために、下記の事項につき審議する。
- ① 学部の広報に関する基本的方針の策定に関すること
 - ② 広報に関する具体的な計画の作成及び実施に関すること
 - ③ その他、広報に関すること
- (2) 令和 4 年度の活動目標
- ① Web・来校型オープンキャンパスの実施
 - ② オープンキャンパス時の特別企画の実施
 - ③ 中学生向けオープンキャンパスの実施
 - ④ 授業見学会
 - ⑤ 個別見学者の対応
 - ⑥ 高校教諭・予備校講師対象のキャンパス見学会
 - ⑦ 高校単位のバス見学会
 - ⑧ 学科単位でのキャンパス見学会
 - ⑨ 外部団体主催による進学相談・出張講義・キャンパス見学会等への対応
 - ⑩ インターネット媒体を主とした広報の企画と実施
 - ⑪ 受験雑誌への広告掲載の企画と実施
 - ⑫ 電車広告・新聞広告の企画と実施
 - ⑬ 進学相談会等の説明資料作成 (Q&A)
 - ⑭ 学部パンフレットとオープンキャンパスチラシの制作 (動画コンテンツの制作)
 - ⑮ 一般入試アンケート解析
 - ⑯ ホームページ管理 (管理組織小委員会)
 - ⑰ 学部・学科紹介の動画コンテンツ作成
 - ⑱ 春の広報企画

3. 活動報告

- ① 第 1 回定例会議 (令和 3 年 4 月 13 日) 於 : C 棟 2 階会議室 出席者 11 人、欠席者 1 人
議事 : 大学ポートレートの報告
令和 4 年度委員会開催日程の確認
令和 4 年度入試合格者広報アンケートの報告
Google アナリティクスおよび YouTube 閲覧数の報告
入試・就職・国試データの報告
2023 年度パンフレット制作についての報告
令和 4 年度の進学相談会等の対応についての確認

- 令和3年度活動概要と令和4年度活動目標について
 3/30 Spring Web OPEN CAMPUS の振り返り
 5月高校教諭および予備校関係者来校型見学会について
 令和4年度オープンキャンパスについて
- ② 第2回定例会議(令和4年5月18日) 於:B棟1階大会議室 出席者11人、欠席者0人
 議事:大学ポートレートの報告
 Google アナリティクスおよびYouTube 閲覧数の報告
 YouTube 閲覧データの報告
 広報に関する新入生へのアンケートについての報告
 2022年度版Q&Aについての報告
 5/28 高校教諭および予備校関係者来校型見学会について
 オープンキャンパスの特別企画について
 6月以降のオープンキャンパスについて
- ③ 第3回定例会議(令和4年6月14日) 於:B棟1階大会議室 出席者13人、欠席者1人
 議事:大学ポートレートの報告
 Google アナリティクスおよびYouTube 閲覧数の報告
 2022年度版Q&Aについての報告
 高校教諭および予備校関係者来校型見学会の報告
 新入生に対する広報アンケートについて
 6/19 Web オープンキャンパスについて
 7・8月来校型オープンキャンパスについて
- ④ 第4回定例会議(令和4年7月19日) 於:B棟1階大会議室 出席者13人、欠席者1人
 議事:大学ポートレートの報告
 Google アナリティクスおよびYouTube 閲覧数の報告
 6/19 オープンキャンパスの報告
 2024年版パンフレットの制作業者選定についての報告
 7/24 オープンキャンパススケジュールについて
 高校単位の大学見学会について
 2024年版のパンフレット制作について
 SNSの運用について
- ⑤ 第5回定例会議(令和4年9月13日) 於:B棟1階大会議室 出席者13人、欠席者0人
 議事:大学ポートレートの報告
 Google アナリティクスおよびYouTube 閲覧数の報告
 7/24 オープンキャンパスの報告
 8/21 オープンキャンパスの報告
 「夕涼み見学会」の報告
 高校単位の大学見学会についての報告
 9/25 オープンキャンパスについて
 10/16 オープンキャンパスについて
 2025年度大学案内コンペについて
- ⑥ 第6回定例会議(令和4年10月18日) 於:B棟1階大会議室 出席者13人、欠席者0人
 議事:大学ポートレートの報告
 Google アナリティクスおよびYouTube 閲覧数の報告
 9/25 オープンキャンパスの報告
 10/16 オープンキャンパスの報告
 2025年度大学案内コンペについて
 SNSワーキンググループについて
- ⑦ 第7回定例会議(令和4年11月15日) 於:B棟1階大会議室 出席者10人、欠席者3人
 議事:大学ポートレートの報告
 Google アナリティクスおよびYouTube 閲覧数の報告

パンフレット進捗状況の報告
推薦入試出願状況の報告
次年度企画について
入試合格者に対するアンケートについて
年度末（春）の広報企画について

- ⑧ 第8回定例会議(令和4年12月13日) 於：B棟1階大会議室 出席者12人、欠席者1人
議事：大学ポートレートの報告

Google アナリティクスおよびYouTube 閲覧数の報告
パンフレットおよびHP リニューアルについての報告
DM 発送について
次年度の広報企画について
新入生への広報アンケート調査について

- ⑨ 第9回定例会議(令和5年1月17日) 於：B棟1階大会議室 出席者11人、欠席者1人
議事：大学ポートレートの報告

Google アナリティクスおよびYouTube 閲覧数の報告
埼玉医科大学受験生サイトについての報告
次年度パンフレットについて
3月スクールフェスタの代替え企画について
次年度6月オープンキャンパス日程の変更について

- ⑩ 第10回定例会議(令和5年2月14日) 於：B棟1階大会議室 出席者11人、欠席者1人
議事：大学ポートレートの報告

Google アナリティクスおよびYouTube 閲覧数の報告
次年度パンフレット進捗状況の報告
3月30日実施予定の広報企画について

- ⑪ 第11回定例会議(令和5年3月15日) 於：B棟1階大会議室 出席者10人、欠席者2人
議事：大学ポートレートの報告

Google アナリティクスおよびYouTube 閲覧数の報告
オープンキャンパスにおける入試説明担当学科についての報告
次年度入試日程の変更についての報告
次年度パンフレットの表紙について
高校教員キャンパス説明会について
春の広報企画について
令和4年度活動概要および令和5年度活動目標について
各学科の次年度広報委員についての確認

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

令和4年度活動目標の達成状況は以下のとおりである。

① Web・来校型オープンキャンパスの実施

第1回(6/19) オンライン：HP 閲覧数 743、オープンキャンパス特設ページ訪問数 47

第2回(7/24) コロナ感染者増大によりオンラインに切り替えて実施：HP 閲覧数 614、特設ページ 296

第3回(8/21) 来校型(午前午後入れ替え)：来校者数(看護 185、臨検 85、臨工 28、理学 42)

第4回(9/25) 来校型に切り替えて実施(午前午後入れ替え)：看護 120、臨検 27、臨工 12、理学 9

第5回(10/16) オンライン(越華祭との同時開催)：HP 閲覧数 87、特設ページ 65

今年度は、5回のうち2回を来校型で実施し、高校生と直接、接して講義ライブ、体験コーナー、個別相談を実施でき、教員もやりがいを感じることができた。いっぽうで、10月のオンライン開催は、6・7月に比べて参加者の激減がみられた。例年踏襲してきた越華祭との同時開催企画であるが、この時期はすでに受験生は情報収集を終えているであろうことが予測されること、Web 企画に対する物足りなさを感じていること、などが理由として考えられる。したがって次年度は、集客を見込める8月に複数回実施すること、10月は実施を見送ること、などの変更を行うこととする。

- ② オープンキャンパス時の特別企画の実施
7・8月のオープンキャンパスにおいて、Web 特設ページにて以下の特別企画を催した。いずれも公開期間を1週間とした。HP 訪問者数は、延べ1415人（7月938人、8月477人）であった。
- ・新宿セミナーによる「本学部の入試面接」
 - ・本学特別講師による「本学部の小論文対策」
- ③ 中学生向けオープンキャンパスの実施
コロナ感染予防の観点から、今年度は見送った。
- ④ 授業見学会
コロナ感染予防の観点から、今年度は見送った。ただし、⑨学科単位でのキャンパス見学会の際、授業見学が可能な場合、講義・演習の様子を見学していただくようにした。
- ⑤ 個別見学者の対応
事務主催により、個人を対象とした見学会を実施し、延べ40組の参加を得た。内訳は以下のとおりである。「夕涼み見学会」8/22～9/9（12組）、「一般選抜直前キャンパス見学会」1/6（10組）、一般選抜試験合格者対象キャンパス見学会」2/6～2/10（18組）。内容は、主に施設見学であり、実際に本学の施設設備を見ていただくことで、本学への関心が高まることが期待できる。学科教員の手を煩わせることなく実施可能な企画であり、開催時期を配慮しながら、継続して実施していきたい。
- ⑥ 高校教諭・予備校講師対象のキャンパス見学会
今年度、再開した企画である。当初、高校教諭、予備校講師を別日に開催するよう考えていたが、準備期間が短かったため同一日の開催となった。計13名（高校10校、予備校3校）の参加があった。予備校講師については、今回の反応から、次年度は再考する必要があると考えられた。
- ⑦ 高校単位のバス見学会
指定校を中心として見学会の勧誘を行い、延べ13校の参加を得た。参加校、学年は以下のとおりである。東野3年、武蔵越生1・2年、埼玉平成3年、所沢西1～3年、星野3年、武蔵越生3年、大宮南1・2年、東野1年、聖望学園1・2年、伊勢崎1年、坂戸1・2年、大宮開成1・2年、大妻嵐山（サイエンス部中高生）。受け入れにあたっては、可能な限り、事前に先方の希望を伺い、希望にそえるような内容を企画した。高校からは、コロナ感染予防の観点からも、高校単位で見学、体験ができることを評価していただいている。担当した学科教員からは、高校生だけではなく、引率教員の意識を刺激できているように思う、との意見も聞かれている。各学科の日程調整をはじめ、困難な要素を複数抱えているが、学科間での調整を行いながら、継続して実施する。また、本企画の評価については、受験者数の推移を長期的に追っていくことが重要と思われる。
- ⑧ 学科単位でのキャンパス見学会
コロナ対策のため、来校型オープンキャンパスの開催が制限されたことから、昨年度に引き続き、学科単位で見学会を企画開催した。看護学科・理学療法学科は開催日・定員を設けて、臨床検査学科・臨床工学科は個人単位で日程を指定しない形態をとった。参加者（含、保護者）は、本学への関心を持って参加していることから、積極的な姿勢であった。今後、オープンキャンパスの来校型への移行に伴い、本企画の継続実施については、各学科の事情に合わせることをとする。
- ⑨ 外部団体主催による進学相談・出張講義・キャンパス見学会等への対応
延べ30件（高校20件、新宿セミナー8件、埼玉県看護協会2件）に対応した。
また、例年参加している「夢ナビライブ」（オンライン開催）には、7/9・10、10/15・16、全学科が参加した。
- ⑩ インターネット媒体を主とした広報の企画と実施
- (A) 本学部ホームページ
 - (B) 進学情報サイト
 - ・リクルート「スタディサプリ進路」
 - ・日東システム開発「ベスト進学ネット」
 - ・JS コーポレーション「JS 日本の学校」
 - ・マイナビ「マイナビ進学」
 - ・キッズ・コーポレーション「進学ナビ」
 - ・フロムページ「テレメール進学サイト」
 - (C) YouTube インストリーム広告
 - (D) グーグル検索広告
- ⑪ 受験雑誌への広告掲載の企画と実施
- (A) 専門誌

- ・秀潤社「クリニカルエンジニアリング7月号」
- (B) 高校等で配本する進学情報誌
 - ・リクルート「進学辞典 For SCHOOL 12月号」
 - ・リクルート「進学辞典 For SCHOOL 4月号」
 - ・JS コーポレーション「進路徹底研究(関東甲信越)」
 - ・JS コーポレーション「大学情報 MAP 本」
 - ・JS コーポレーション「面接アドバイスブック」
 - ・JS コーポレーション「進路の手引き(教室内配本)」
 - ・キッズ・コーポレーション「首都圏版 進学の森」
 - ・キッズ・コーポレーション「首都圏版 夏のオープンキャンパスブック」
 - ・メディアプラン「看護の学びとしごと」
 - ・ena 新セミ「プロGRESS 7月号」
 - ・ena 新セミ「プロGRESS 11月号」

⑫ 電車広告・新聞広告の企画と実施

- ・東武東上線沿線キャンパスマップ連合広告

⑬ 進学相談会等の説明資料作成 (Q&A)

各学科より修正加筆が必要な箇所についての情報を集約し、今年度版の資料を作成した。

⑭ 学部パンフレットとオープンキャンパスチラシの制作 (動画コンテンツの制作)

本年度はマイナーチェンジの年にあたっており、表紙および数か所の修正を行った。

⑮ 一般入試アンケート解析

郵送(合格通知に同封)によるアンケートで、回収率が低かったことから、再度実施した。解析結果から、受験校の決定には高校教諭の影響が大きいことが伺われたことから、今後の広報活動を考える際には、進路を担当する高校教諭へのアクセスを重点的に行うことが必要と考える。

⑯ ホームページ管理 (管理組織小委員会)

各学科からの情報提供を受けて、適宜、ホームページの内容を整えた。

⑰ 学部・学科紹介の動画コンテンツ作成

学部紹介、入試説明、学科紹介などの動画コンテンツをリニューアルした。

⑱ 春の広報企画

今年度も大学全体としての広報企画が計画されなかったことから、本学部独自の広報企画(令和5年3月30日予定)を、新宿セミナー大宮校舎を借り受けて実施する方向で案を練っていた。しかし、費用対効果を明確に示すことができず、稟議の段階に至らなかった。次年度の課題として持ち越すこととなった。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

- ① 来校型オープンキャンパスの実施
- ② 来校型オープンキャンパス時の特別企画の実施
- ③ 中学生向けオープンキャンパスの実施
- ④ 授業見学会
- ⑤ 個別見学者の対応
- ⑥ 高校教諭・予備校講師対象のキャンパス見学会
- ⑦ 高校単位のバス見学会
- ⑧ 学科単位でのキャンパス見学会
- ⑨ 外部団体主催による進学相談・主張講義・キャンパス見学会等への対応
- ⑩ インターネット媒体を主とした広報の企画と実施
- ⑪ 受験雑誌への広告掲載の企画と実施
- ⑫ 進学相談会等の説明資料作成 (Q&A)
- ⑬ 学部パンフレットとオープンキャンパスチラシの制作 (動画コンテンツの制作)
- ⑭ 一般入試アンケート解析
- ⑮ ホームページ管理 (管理組織小委員会)
- ⑯ 学部・学科紹介の動画コンテンツ作成
- ⑰ 春の広報企画
- ⑱ DM 発送

- ⑭ 他大学の動向についての情報収集
- ⑮ マーケティングリサーチ

4. 8) 保健医療学部教員組織運営会議

1. 構成員

議長 加藤木利行 (KATO, Toshiyuki) : 学部長 (任期 : R5. 3, 31)

委員 : 千田みゆき (CHIDA, Miyuki) : 看護学科 教授・学科長 (任期 : R5. 3, 31)

茅野秀一 (KAYANO, Hidekazu) : 臨床検査学科 教授・学科長 (任期 : R5. 3, 31)

下岡聡行 (SHIMOOKA, Toshiyuki) : 臨床工学科 教授・学科長 (任期 : R5. 3, 31)

高倉保幸 (TAKAKURA, Yasuyuki) : 理学療法学科 教授・学科長 (任期 : R5. 3, 31)

堀江正人 (HORIE, Masahito) : 事務室室長 (任期 : R6. 3, 31)

2. 目的・目標

(1) 委員会の設置目的 : 本運営会議は保健医療学部の各学科に関して次に掲げる事項を審議する。

- ① 各学科の基本方針に関する事
- ② 各学科に共通する課題に関する事
- ③ 教授会の委嘱を受けた教員選考にかかわる委員の選出に関する事。
- ④ 教員人事委員会の要請に基づく教員の審査に関する事。
- ⑤ 教員の職位の変更に関する事。
- ⑥ その他、教授会並びに教員人事委員会の諮問事項に関する事。

(2) 令和4年度の活動目標 :

- ① 令和4年度以降の各学科の基本方針に関する検討
- ② 教授会での審議事項に関する確認と意見交換
- ③ 教員人事にかかわる選考委員選出と教員の資格審査

3. 活動実績

(1) 令和4年度第1回保健医療学部教員組織運営会議

(令和4年4月20日、於:2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

① 第176回教授会議事内容の確認と意見交換

② 要検討事項について

ア. コロナウイルスによる登校基準の確認

イ. 受験者数の減少傾向への対策

ウ. 国家試験結果の検討と対策

以上について、令和4年度の要検討事項として意見を交換した。

③ 教員人事

ア. 副学科長の選任

看護学科 : 大森智美教授、臨床検査学科 : 佐藤正夫教授、

医用生体工学科 : 山下芳久教授、理学療法学科 : 藤田博暁教授

イ. 教育主任の選任

各学科とも学科長が兼任する

ウ. 研究主任の選任

看護学科 : 野田智子教授、臨床検査学科 : 佐藤正夫教授

臨床工学科 : 小林直樹教授、理学療法学科 : 赤坂清和教授

エ. 各種委員会委員長の選定

④ 教育研究費 (令和4年2月末現在) 執行状況の確認

⑤ 昨年度 GPA をもとに、成績不良者に対する対策について意見交換

⑥ 5月14日に行われる創立50周年記念式典への学生参加について、4学科4学年各2名ずつと決定し、人選を学科長に依頼

(2) 令和4年度第2回保健医療学部教員組織運営会議

(令和4年5月18日、於：2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

- ① 第177回教授会議事内容の確認と意見交換
- ② 教員人事：臨床検査学科高橋祐介助教の講師昇格について資料が配られ、次回審議することになった。
- ③ 学費未納者の状況を確認
- ④ 埼玉医科大学全体としての3ポリシーの策定について報告。
- ⑤ 学生のワクチン接種状況を検討し、対面授業を増やすことについて意見交換し、大学運営会議に上程することになった。

(3) 令和4年度第3回保健医療学部教員組織運営会議

(令和4年6月15日、於：2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

- ① 第5次長期総合計画「飛翔」の計画案作成について意見交換。締め切りは10月末日。
- ② 令和4年度後期の学事予定についての検討しほとんどを対面で行う計画とする。
- ③ 教育研究費（令和4年4月末現在）執行状況の確認
- ④ 学費未納者への対応：未納者の報告
- ⑤ 教員人事：臨床検査学科講師昇格候補者高橋祐介氏について審査し適格と認めて教授会へ上程する。
- ⑥ 学内メールを学内サーバーから学外サーバーへ移行することについて報告
- ⑦ 6月13日に行われた防災訓練小委員会の検討結果、避難訓練は消防署の協力を得て10月14日に行うことになり、詳細について意見交換

(4) 令和4年度第4回保健医療学部教員組織運営会議

(令和4年7月20日、於：2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

- ① 新型コロナウイルス感染の再拡大について、後期授業計画の変更も視野に意見交換
- ② 令和5年度の学事予定について意見交換したが、対面授業中心とする予定で考えていくことになった。
- ③ 教育研究経費執行状況の確認。学費の分納者について報告。
- ④ 教員人事：臨床検査学科と五沢真吾氏の准教授採用について人事委員会に上程する。
- ⑤ 教員人事：臨床工学科白石直子助教の講師昇格について、次回の本会議で審査する
- ⑥ 教員人事書類の一部改訂について報告
- ⑦ 日本臨床検査学教育学会学術集会について茅野学科長（学会会長）より説明

(5) 令和4年度第5回保健医療学部教員組織運営会議

(令和4年9月14日、於：2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

- ① 後期授業については対面を原則とし、有症状者は抗原検査の陰性を出席の条件とする。ただし、病院実習についてはPCR検査陰性が要求されている。
- ② 次年度の学事予定について意見交換
- ③ 教員人事：臨床検査学科と五沢真吾氏の准教授採用について人事委員会で資格審査委員会の設置が承認され、選考委員候補者を選出した。
- ④ 臨床工学科白石直子助教の講師昇格を審査し、承認され教授会に上程する。
- ⑤ 茅野学科長より、第5次長期総合計画「飛翔」の計画案作成について、資料を基に説明があった。
- ⑥ 学費未納者への対応（報告）

(6) 令和4年度第6回保健医療学部教員組織運営会議

(令和4年10月13日、於：2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

- ① 後期の授業は対面で行われているが、新型コロナウイルス感染はおさまらず、人数が多い場合感染対策上分割にする必要があり教員の負担となっている。越華祭については、WEB配信による開催と決定した。
- ② 教員人事：臨床工学科教授候補（採用）笠松直史氏および、看護学科教授候補（採用）丸井明美氏の審査が人事委員会で承認されたので、資格審査委員を選出し教授会に上程する。臨床検査学科大村一之助教の講師昇格審査も承認されたので、次回の本会議で審査する。臨床工学科白石直子助教の講師昇格は11月1付で承認された。
- ③ 学費未納者への対応（報告）
- ④ 第5次長期総合計画の保健医療学部原案について意見交換
- ⑤ 春休みに行われるC棟講義室の改修工事について、施設及び工事業者との打ち合わせを開始した報告
- ⑥ 学期末・国家試験を控えて、オスラーホール2階を4年生優先使用とする。ゼミ室については学生のみ使用は不

可で、教員が指導する場合に使用すると決定。

(7) 令和4年度第7回保健医療学部教員組織運営会議

(令和4年11月16日、於：2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

- ① コロナウイルス感染第8波により、学生の感染率は埼玉医大グループ全体では13%で、保健医療学部も同様である。長引いたためか罹患者の行動にゆりみが見られるため危機管理本部から、一段と感染対策を強化するように注意喚起された。
- ② 教員人事：臨床検査学科准教授候補者と五沢真吾氏の採用が承認された。臨床検査学科講師候補者大村一之助教について本日審査し昇格が妥当と結論し、人事委員会に上程する。臨床工学科三輪泰之助教の講師昇格が申請された。
- ③ 学校推薦型選抜入試および総合型選抜入試について検討
- ④ 教育研究費（令和4年8月末現在）執行状況の確認
- ⑤ 後期定期試験日程について検討
- ⑥ 令和4年度合同教授総会について新任教授等への出席要請

(8) 令和4年度第8回保健医療学部教員組織運営会議

(令和4年12月14日、於：2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

- ① 学校推薦型入試および総合型入試の結果について意見交換
- ② 教員人事：
 - ア. 看護学科丸井明美氏の教授採用が承認された
 - イ. 臨床工学科笠松直史の教授採用が承認された
 - ウ. 臨床検査学科大村一之助教の講師昇格が承認された。
 - エ. 臨床工学科三輪泰之助教の講師昇格について審査し、昇格が妥当と結論、人事委員会に上程する。
- ③ 教育研究費（令和4年10月末現在）執行状況の確認
- ④ 推薦入試の指定校の見直しについて意見交換
- ⑤ 総合型選抜試験（旧A0）の時期を変更することについて意見交換

(9) 令和4年度第9回保健医療学部教員組織運営会議

(令和5年1月18日、於：2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

- ① 一般入試前期の出願状況について意見交換
- ② 教員人事：
 - ア. 臨床工学科三輪泰之助教の講師昇格が教員人事委員会で承認された。
 - イ. 理学療法学科の国澤洋介准教授の教授昇格と、大久保雄講師の准教授昇格の審査が承認されたので、資格審査委員を選出し教授会に上程する。
 - ウ. 各学科の次年度委員会委員について意見交換
- ③ たちばな会の会長賞について意見交換し、本年も該当者なしとした。
- ④ 教育研究費（令和4年12月末現在）執行状況の確認

(10) 令和4年度第10回保健医療学部教員組織運営会議

(令和5年2月15日、於：2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

- ① 教室改修工事について説明。工事期間は2月15日から4月末であるが、教室部分は新学期に間に合う。
- ② 教員人事：
 - ア. 看護学科准教授候補者（採用）土師しのぶ氏審査が人事委員会で承認されたので、資格審査委員会の委員を選出した。
 - イ. 理学療法学科森田泰弘助教の講師昇格を審査し承認、人事委員会に上程する。
 - ウ. 臨床検査学科科学科長茅野秀一教授が保健利用学部副学部長に任命された。
- ③ 教育研究費（令和5年1月末現在）執行状況の確認
- ④ 令和5年度各種委員会委員について検討
- ⑤ 一般入試前期の結果について意見交換
- ⑥ 卒業式の開催形式について意見交換

(11) 令和4年度第11回保健医療学部教員組織運営会議

(令和5年3月8日、於：2F会議室、出席6名、欠席なし、議事録あり)

- ① 入学手続き状況と定員割れについて意見交換
- ② 各種委員会委員長の決定および委員の選任の依頼
- ③ 令和5年度の副学科長および副部門長の選任
- ④ 教員人事：
 - ア. 理学療法学科國澤洋介准教授の教授昇格が承認された。
 - イ. 理学療法学科大久保雄講師の准教授昇格が承認された。
 - ウ. 看護学科土師しのぶ氏の准教授採用が承認された。
 - エ. 理学療法学科森田泰裕助教の講師昇格が承認された。
- ⑤ 入学式、オリエンテーションの方法について意見交換
- ⑥ 教育研究費（令和5年2月末現在）執行状況の確認
- ⑦ 令和4年度進級判定について意見交換

4. 自己評価と次年度計画

4-1 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- ① 各学科の基本方針および各学科に共通する課題について必要な検討を行った。
- ② 教員の人事に関して、教員人事委員会からの要請をうけ、教授・准教授の選考委員選出と講師候補者などの資格審査を適正に行った。
- ③ 今年度は昨年度に引き続きコロナウイルス対策に多大な労力を必要とした。後期には配信授業を減らし、ほとんどの講義を対面とした。各学科長と教員の努力で、何とか例年と変わらない教育実績を上げる事が出来た。国家試験対策をコロナ禍の中で強化し、昨年より成績が向上した。

4-2 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

- ① 令和5年度以降の各学科の基本方針に関する検討
- ② 教授会での審議事項に関する確認と意見交換
- ③ 教員人事にかかわる選考委員選出と教員の資格審査
- ④ 令和5年度前期については、全面的に対面授業とする。そのための教室改修を行っている。
- ⑤ コロナウイルス対策については、本年度と同様に多岐にわたる丁寧な対応が必要である。

5. 1) 情報技術支援推進センター運営委員会

1. 構成員

委員長	椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 情報技術支援推進センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	向田 寿光 (MUKAIDA, Hisamitsu) : 基礎医学部門教養教育 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	丸山 敬 (MARAUYAMA, Kei) : 基礎医学部門薬理学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	藤原 恵一 (FUJIWARA, Keiichi) : 国際医療センター産婦人科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	鈴木 康文 (SUZUKI, Yasufumi) : 情報技術支援推進センター・川越ブランチ : 助教 (任期 : R6. 3. 31)
委員	片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : 基礎医学部門ゲノム基礎医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	茅野 秀一 (KAYANO, Hidekazu) : 保健医療学部・臨床検査学科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

2. 目的・目標

情報技術支援推進センター運営委員会は、埼玉医科大学情報技術支援推進センター運営委員会規則に則り、センター運営の基本方針に関する事、予算の立案および執行に関する事、規程等の制定および改廃に関する事、その他センターの重要事項を審議することを目的としている。

3. 活動実績

該当なし

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

令和4年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大によるオンライン授業のため、非常に多くの支援を行った。その中でも、SINETとの接続を100Mbpsから1Gbpsに増速した、メールサーバーをGmailに切り替えた(Google Workspace)、Boxの運用を大学全体として開始した、Microsoft365の運用を大学全体として開始したことはDXに向けた大きな一歩となった。

メールサーバーをGmailに切り替えたことに伴い、ドメインを下記のように分けた。

大学 : @saitama-med.ac.jp

大学病院 : @1972.saitama-med.ac.jp

総合医療センター : @1985.saitama-med.ac.jp

国際医療センター : @5931.saitama-med.ac.jp

医学部学生 : @fm.saitama-med.ac.jp

保健医療学部学生 : @fhmc.saitama-med.ac.jp

短期大学 : @jc.saitama-med.ac.jp

総合医療センター : @kk.saitama-med.ac.jp

情報技術支援推進センターは順調に機能し、運営されたものと自己評価している。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度は、Google Workspace、Microsoft365 および Box の活用を進展させ、情報システム部とともに法人全体のDX、セキュリティおよび教育への活用を中心に審議を行う。

5. 2) 医学教育センター医学部領域運営委員会

1. 構成員

センター長 森 茂久(MORI, Shigehisa):兼担:医学教育学,教授,医学部長、入試・教育等担当副学長(任期:R.4.3.31)
副センター長 林 健(HAYASHI, Takeshi):兼担:国際医療センター総合診療内科,教授(任期:R.4.3.31)
魚住尚紀(UOZUMI, Hisanori):兼担:生化学、准教授(任期:R.4.3.31)
各部門の部門長、副部門長、各室の室長等、その他の構成員については、各部門の項を参照されたい。

2. 目的・目標

医学教育センター医学部領域の8部門間および卒前医学教育部門内に設置された8室間の意思疎通を図り、各部門、各室、関連する委員会の活動状況をセンター内の構成員が共有し、自由な意見交換を行い、センターの運営が円滑に行われるようにすることを目的とする。

3. 活動実績

令和4年度は毎月定期的に、計11回会議を開催した。医学教育全般にわたって各部門、各室、卒前教育委員会付属の各委員会からの報告をもとに、情報を共有し、問題点を話し合い、主な懸案事項の解決策を検討するとともに、教育に意欲のあるオブザーバーも参加して、本学の医学教育全般にわたってさらに幅広く議論が行われた。会議での審議事項は、卒前教育委員会、次いで教員代表者会議に報告された。

4. 自己評価と次年度目標

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

今年度もCOVID-19感染拡大防止のため、Zoomを利用したWEB会議で開催した。

カリキュラム、試験、授業評価等、医学教育全般にわたり、問題点を適宜話し合い、主な懸案事項を解決することができた。また部門間、卒前医学教育部門の室間をまたがる問題については、特に本委員会では対応を検討した。

9月末に医学教育分野別評価受審結果が届き、国際基準に適合していると認定を受けた
(認定期間は2022年10月1日～2029年9月30日の7年間)。

新型コロナウイルス感染症対策について、学生に発生した感染への対応を協議した。また令和5年度からの全面的に対面授業に復帰する計画について授業の在り方検討WGでの議論内容の検討し、調整を行なった。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

来年度も継続して教育に関する活発な議論を行っていく。特に令和5年度からの対面授業への復帰による問題の発生等に迅速に対応する必要がある。

医学教育センター医学部領域運営委員会で検討された個別の事項等については、卒前医学教育部門の各部門、その他の部門、卒前教育委員会の項を参照されたい。

5. 3) 医学研究センター運営会議

1. 構成員

- ◇議長（医学研究センター運営会議規則第3条1号構成員）
片桐岳信（KATAGIRI, Takenobu）：センター長（任期：R5. 7. 31）
- ◇部門長（医学研究センター運営会議規則第3条2号構成員）
海老原康博（EBIHARA, Yasuhiro）：研究主任部門（任期：R5. 3. 31）
坂本 安（SAKAMOTO, Yasushi）：共同利用施設運営部門（任期：R5. 3. 31）
小谷典弘（KOTANI, Norihiro）：研究支援管理部門（任期：R5. 3. 31）
三谷幸之介（MITANI, Kohnosuke）：安全管理部門（任期：R5. 3. 31）
※片桐岳信（KATAGIRI, Takenobu）：フェローシップ部門（任期：R5. 3. 31）
椎橋実智男（SHIIBASHI, Michio）：研究評価部門（任期：R5. 3. 31）
- ◇副部門長（医学研究センター運営会議規則第3条2号構成員）
百瀬修二（MOMOSE, Shuji）：研究主任部門（任期：R5. 3. 31）
下岡聡行（SHIMOOKA, Toshiyuki）：研究主任部門（任期：R5. 3. 31）
佐藤 毅（SATO, Tsuyoshi）：研究主任部門（任期：R5. 3. 31）
※佐藤 毅（SATO, Tsuyoshi）：共同利用施設運営部門（任期：R5. 3. 31）
堀内 大（HORIUCHI, Yutaka）（任期：R5. 3. 31）
※三谷幸之介（MITANI, Kohnosuke）：安全管理部門（DNA分野）（任期：R5. 3. 31）
村上 孝（MURAKAMI, Takashi）：安全管理部門（感染分野）（任期：R5. 3. 31）
奥田晶彦（OKUDA, Akihiko）：安全管理部門（薬物・廃液等環境分野）（任期：R5. 3. 31）
森 隆（MORI, Takashi）：安全管理部門（動物分野）（任期：R5. 3. 31）
西本正純（NISHIMOTO, Masazumi）：安全管理部門（RI分野）（任期：R5. 3. 31）
高田 綾（TAKADA, Aya）：フェローシップ部門（任期：R5. 3. 31）
三輪尚史（MIWA, Naofumi）：フェローシップ部門（任期：R5. 3. 31）
徳元康人（TOKUMOTO, Yasuto）：研究評価部門（任期：R5. 3. 31）
- ◇ランチ長（医学研究センター運営会議規則第3条3号構成員）
※坂本 安（SAKAMOTO, Yasushi）：毛呂山キャンパス担当（任期：R5. 3. 31）
山本晃士（YAMAMOTO, Koji）：総合医療センター担当（任期：R5. 3. 31）
※海老原康博（EBIHARA, Yasuhiro）：日高キャンパス担当（任期：R5. 3. 31）
※下岡聡行（SHIMOOKA, Toshiyuki）：研究主任部門（任期：R5. 3. 31）
※は重複構成員・・・計18名
- ◇オブザーバー
松下 祥（MATSUSHITA, Sho）：副学長
千本松孝明（SENBONMATSU, Takaaki）：リサーチアドミニストレーションセンター 教授
菅原哲雄（SUGAHARA, Tetsuo）：リサーチアドミニストレーションセンター 講師
町田早苗（MACHIDA, Sanae）：医学研究センター 講師
別所和博（BESSHO, Kazuhiro）：医学研究センター 助教
福田枝里子（FUKUDA, Eriko）：医学研究センター 助手
- ◇事務局
下田裕子（SHIMODA, Yuko）：大学事務部 医学部事務室 庶務課 課長
佐國真紀（SAKUNI, Maki）：大学事務部 医学部事務室 庶務課

2. 目的・目標

医学研究センター運営会議は、学校法人埼玉医科大学医学研究センター運営会議規則第1条に則り、医学研究センターの円滑な運営に資することを目的として、平成17年11月に設置された。医学研究センターは、本学の研究活動を全学的に支援する組織であり、研究体制、研究場所、研究費、安全管理等に関する仕組みを整備し、企画、運用、管理している。医学研究センター運営会議は、これらの実効正当について審議し、医学部教員代表者会議、保健医療学部教授会へ上程する責務を担う。令和3年度の医学研究センター運営会議は、片桐センター長を議長として、6つの部門の各部門長、副部門長、および4つのランチ長と、総勢18名で構成される。

本年度も、毎月（8月を除く）の運営会議を開催し、全学的な研究活動の向上と研究成果の社会への還元を目指す医学研究センターの活動を議論し、その内容を教員代表者会議と保健医療学部教授会に上程する。

3. 活動実績

- ◇定期開催
第182回：4月2日（金）Zoom会議 出席者17名（委任状1名）
第183回：5月13日（金）Zoom会議 出席者14名（委任状4名）
第184回：6月3日（金）Zoom会議 出席者17名（委任状1名）
第185回：7月8日（金）Zoom会議 出席者17名（委任状1名）
第186回：9月2日（金）Zoom会議 出席者15名（委任状1名、欠席2名）

- 第187回： 10月 7日（金）Zoom会議 出席者14名（委任状 3名、欠席 1名）
- 第188回： 11月 4日（金）Zoom会議 出席者17名（委任状 1名）
- 第189回： 12月 3日（金）Zoom会議 出席者13名（委任状 5名）
- 第190回： 1月 6日（金）Zoom会議 出席者16名（委任状 2名）
- 第191回： 2月 3日（金）Zoom会議 出席者16名（委任状 2名）
- 第192回： 3月 3日（金）Zoom会議 出席者14名（委任状 3名、欠席 1名）

◇開催回数

定期開催：11回 出席者平均 15名（委任状平均 2名）

◇議事内容

本会議では、センター長からの報告、各部門や関連する委員会からの報告と審議、研究センター組織内の人事に係る報告等、大学における研究の基本的方向性やあり方に関する議論を行う場として機能している。すなわち、議事は以下に示すような形態を原則として進行する。

1. 医学研究センター長報告
2. 各部門報告
 - ①研究主任部門
 - ②共同利用施設運営部門
 - ③研究支援管理部門
 - ④安全管理部門
 - ⑤フェロシップ部門
 - ⑥研究評価部門
3. 各ランチ報告
 - ①毛呂山ランチ
 - ②総合医療センターランチ
 - ③国際医療センターランチ
 - ④保健医療学部ランチ
4. その他報告

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

令和4年度も COVID-19 の感染拡大が続いたため、運営会議を対面形式ではなく、Zoom を用いたオンライン会議として開催した。毎回の医学研究センター運営会議における報告と審議は恙なく行われ、その内容は教員代表者会議と保健医療学部教授会に上程されて、全学的な研究活動を支援することができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度も、引き続き COVID-19 の感染が継続する可能性がある。そこで、Zoom によるオンライン会議を主とした開催形式とし、各部門で密に連携しながら臨機応変に適切な対応を検討する。運営会議の議事内容を教員代表者会議に上程し、本学の研究活動に必要な情報を適切なタイミングで発信する。

5. 4) リサーチアドミニストレーションセンター運営会議

1. 構成員

議長 千本松 孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : 教授、センター長 (R3. 8. 1~)、シニアURA
棚橋 紀夫 (TANAHASHI, Norio) : 専務理事・RAセンター顧問
小林 国彦 (KOBAYASI, Kunihiro) : 特定臨床研究推進センター室長、国際医療センター呼吸器内科・教授、シニアURA
前田 智也 (MAEDA, Tomoya) : 准教授 (R4. 2. 1~)
菅原 哲雄 (SUGAHARA, Tetsuo) : 講師、産学担当URA
岩澤 昌人 (IWASAWA, Masato) : 次長 (R4. 7. 1~)
坂本 安 (SAKAMOTO, Yasushi) 教授、中央研究施設日高ランチ機能部門(中央研究施設)
佐藤 勝茂 (SATO, Katsushige) : 課長
浅見 文子 (ASAMI, Ayako) : 課長補佐
小野寺 晴美 (ONODERA, Harumi) : 係長
仲村 由紀子 (NAKAMURA, Yukiko) : 主任 (R4. 7. 1~)
福永 由佳 (FUKUNAGA, Yuka) : 課員
長田 佐絵 (NAGATA, Sae) : 課員
宿谷 学 (SHUKUYA, Manabu) : 課員
石川 友美 (ISHIKAWA, Tomomi) : 課員
中島 奈月 (NAKAJIMA, Natsuki) : 課員
川口 勉 (KAWAGUCHI, Tsutomu) : 非常勤講師、シニアURA
豊田 浩一 (TOYODA, Koichi) : 非常勤講師、産学官連携アドバイザー
久保田 晴久 (KUBOTA, Haruhisa) : 非常勤講師
松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長、センター長 (~R3. 7. 31)
竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (R3. 4. 1~)
片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : ゲノム基礎医学・教授、医学研究センター長

2. 目的・目標

本会議は、リサーチアドミニストレーションセンター規程 第7条に則り設置している。埼玉医科大学における研究活動を倫理的かつ科学的に適正なものとし、競争的資金獲得や産学官連携を推進し、その研究成果を適切に管理し社会へ還元することにより大学としての責任を果たしていくため、次に掲げる事項について計画の立案・実行、諸問題への対応について協議する。

- (1) 医学研究に係る諸規程等の整備その他医学研究の管理に関する事。
- (2) 埼玉医科大学倫理審査委員会に関する事。
- (3) 認定臨床研究審査委員会に関する事。
- (4) 埼玉医科大学中央倫理審査委員会に関する事。
- (5) 埼玉医科大学COI管理委員会に関する事。
- (6) 研究不正の防止に関する事。
- (7) 研究費の適正使用に関する事。
- (8) 研究費の獲得に関する事。
- (9) 医学研究に係る診療組織との連携に関する事。
- (10) 医学研究に係る教育及びモニタリングに関する事。
- (11) 知的財産の管理に関する事。
- (12) リサーチパークに関する事。
- (13) 外国為替及び外国貿易法(昭和24年法律第228号)の適用を受ける研究用貨物及び技術に関する事。
- (14) その他医学研究等の推進及び管理に関する事。

3. 活動実績

3-1. 開催日

研究公正に関する事項を協議するため、毎月開催している(8月は休会)。

※新型コロナウイルス感染防止のため、WEB会議で開催。

第67回: 4月 7日(水) 出席者18名

- 第68回： 5月 12日（水）出席者17名 欠席者1名
- 第69回： 6月 2日（水）出席者18名
- 第70回： 7月 7日（水）出席者18
- 第71回： 9月 1日（水）出席者18名
- 第72回：10月 6日（水）出席者16名 欠席者2名
- 第73回：11月10日（水）出席者19名
- 第74回：12月 1日（水）出席者18名 欠席者1名
- 第75回： 1月12日（水）出席者18名 欠席者1名
- 第76回： 2月 2日（水）出席者19名
- 第77回： 3月 2日（水）出席者18名 欠席者1名

3-2. 主な審議内容

- (1) 医学研究に係る諸規程等の整備その他医学研究の管理に関する事。
- (2) 埼玉医科大学倫理審査委員会に関する事。
- (3) 認定臨床研究審査委員会に関する事。
- (4) 埼玉医科大学C O I 管理委員会に関する事。
- (5) 研究不正の防止に関する事。
- (6) 研究費の適正使用に関する事。
- (7) 研究費の獲得に関する事。
- (8) 医学研究に係る診療組織との連携に関する事。
- (9) 医学研究に係る教育及びモニタリングに関する事。
- (10) 知的財産の管理に関する事。
- (11) リサーチパークに関する事。
- (12) 外国為替及び外国貿易法(昭和 24 年法律第 228 号)の適用を受ける研究用貨物及び技術に関する事。
- (13) その他医学研究等の推進及び管理に関する事

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

RAセンターの事業計画や事業報告、諸活動や諸課題への対応について、報告、評価し、計画の修正などを行い研究公正や、競争的資金の更なる獲得や産学官連携など研究推進の取組に反映することができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

RAセンターの事業計画に基づく諸活動、諸課題について、協議し対応していくと共に評価し施策へ反映していく。

以上

5. 5) アドミッションセンター運営委員会

1. 構成員

別所 正美 (BESSHO, Masami) : センター長 (学長)
森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副センター長, 医学部ブランチ長 (医学部長)
加藤木 利行 (KATOUGI, Toshiyuki) : 副センター長, 保健医療学部ブランチ長 (保健医療学部長)
椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 調査・研究・解析部門長 (副医学部長、IR センター長、IT センター長)
山田 健人 (YAMADA, Taketo) : 入試問題統括部門長 (医学部入試実施委員会委員長)
茂木 明 (MOGI, Akira) : 広報部門長 (常務理事・事務局長)
内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 事務部門長, 医学部入試事務室長 (大学事務部長)
小室 秀樹 (KOMURO, Hideki) : アドミッション・オフィサー
徳元 康人 (TOKUMOTO, Yasuhito) : アドミッション・オフィサー
堀江 正人 (HORIE, Masato) : 保健医療学部入試事務室長 (保健医療学部事務室長)
村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 委員 (医学部長補佐)
竹内 勤 (TAKEUCHI, Tutomu) : 委員 (副学長)
向田 寿光 (MUKAIDA, Toshimithu) : 委員 (医学部入試実施委員会副委員長)
山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 委員 (医学部入試実施委員会副委員長)
間山 伸 (MAYAMA, Shin) : 委員 (保健医療学部入試実施小委員会委員長)
久保 かほる (KUBO, Kahoru) : 委員 (短期大学副学長)
中村 美智子 (NAKAMURA, Michiko) : 委員 (総合医療センター附属看護専門学校副校長)
藤山 トキ (FUJIYAMA, Toki) : 委員 (埼玉医療福祉会看護専門学校副校長)
(他に医学部と保健医療学部の科目責任者 10 名、入学試験業務担当のため氏名非公表)

2. 目的・目標

アドミッションセンターの業務目的は、埼玉医科大学アドミッションセンター規程 (令和 2 年 11 月 28 日改訂) 第 2 条に示す通りであるが、アドミッションセンター運営委員会は、アドミッションセンターの目的を円滑に遂行するため、アドミッションセンター拡大会議を年度当初に定期的に開催するものである。

【アドミッションセンターの目的・目標と部門】

埼玉医科大学及び関連する学校における入学者選抜が適切に行われ、本学の教育目標を達成しうる学生を受け入れるために、入学者受け入れ方針 (アドミッションポリシー) に即した入学者選抜システムの構築、円滑な入学者選抜の実施、調査研究および入学者選抜に関する業務を統括し、支援することを目的とする。アドミッションセンターの業務目的達成のため、調査・研究・解析部門、入試問題統括部門、広報部門、アドミッション・オフィサー (令和 2 年 10 月 1 日より新設)、事務部門を置く。

3. 活動実績

新型コロナウイルス感染症防疫の観点から令和 3 年度に引き続き令和 4 年度のアドミッションセンター拡大会議もメール会議方式で行った。令和 4 年 4 月 27 日 (水) に行った会議には 40 名の招請者全員が出席した。令和 4 年度入学者選抜は、新型コロナウイルス感染症パンデミック下での 3 回目の入学者選抜業務であったため、各ブランチともこれまでの経験を十分に生かし業務を無事完了したとの報告がなされた。また森 茂久 医学部長を副センター長兼医学部ブランチ長に、堀江 正人 保健医療学部事務室長を保健医療学部入試事務室長に、村越 隆之 医学部長補佐、竹内 勤 副学長、久保 かほる 短期大学副学長を委員に、それぞれ任命した。また保健医療学部の科目責任者 1 名が交代した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

各科目ごとに配置されたアドミッションセンター特任講師による各関連学校への支援が図られ、各学校の入試問題作成関連業務を円滑に進めることができ、概ね良好な運営ができた。また、各学校の入学者選抜状況等の情報交換 (入試日程、学生確保の取り組み等) を行なったことにより、相互理解が図られた。令和 4 年度における「アドミッションセンター運営委員会」の目的は、ほぼ達成できたと判断している。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

新型コロナウイルス感染症パンデミックも 4 年目に入ったが、相変わらずその終息は全く見通しが立たない状況にある。令和 5 年秋より令和 6 年春にかけて行われる令和 6 年度入学者選抜においても、新型コロナウイルス感染症のパンデミック状況は改善しないとあらかじめ予想して、新型コロナウイルス感染防止対策をこれまでと同様に怠りなく厳重に講じる必要がある。このため令和 5 年度は関連学校の相互連携を一層強化し、情報交換等を図り、各学校の入学者選抜業務が円滑的に実施でき、各学校のアドミッションポリシーに即した学生を受け入れられるよう当委員会の役割を担っていききたい。

5. 6) 国際交流センター委員会

1. 構成員

委員長	藤巻高光 (FUJIMAKI, Takamitsu) : 大学病院脳神経外科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
副委員長	魚住尚紀 (UOZUMI, Naonori) : 生化学 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)
委員	朝倉博孝 (ASAKURA, Hiroataka) : 大学病院泌尿器科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
	茅野秀一 (KAYANO, Hidekazu) : 保健医療学部臨床検査学科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
	木崎昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 総合医療センター血液内科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
	佐々木惇 (SASAKI, Atsushi) : 病理学 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
	千本松孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : リサーチ・インスティテュート : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
	辻美隆 (TSUJI, Yoshitaka) : 保健医療学部共通教育部門 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
	廣岡伸隆 (HIROOKA, Nobutaka) : 大学病院地域医療科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
	堀江公仁子 (HORIE, Kuniko) : ゲノム医学研究センター : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
	間山伸 (MAYAMA, Shin) : 保健医療学部共通教育部門 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
	三村俊英 (MIMURA, Toshihide) : 大学病院リウマチ膠原病科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
	池田礼史 (IKEDA, Yoshifumi) : 国際医療センター心臓内科 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)
	井上勉 (INOUE, Tsutomu) : 大学病院腎臓内科 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)
	ゴッドフリーチャド (GODFREY, Chad) : 教養教育 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)
	菅理江 (SUGE, Rie) : 教養教育 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)
	難波聡 (NAMBA, Satoshi) : 大学病院ゲノム医療科 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)
	種田佳紀 (OIDA, Yoshiki) : 教養教育 : 講師 (任期 : R4. 3. 31)
	金井欣秀 (KANAI, Yoshihide) : 保健医療学部理学療法学科 : 講師 (任期 : R4. 3. 31)
	周防諭 (SUO, Satoshi) : 薬理学 : 講師 (任期 : R4. 3. 31)
	山下高久 (YAMASHITA, Takahisa) : 総合医療センター病理部 : 講師 (任期 : R4. 3. 31)
	近藤有寛 (KONDO, Arihiro) : 大学事務部学務課 : 課長 (任期 : R4. 3. 31)
	細田さなえ (HOSODA, Sanae) : 大学事務部学務課 (任期 : R4. 3. 31)
オブザーバー	小山勇 (KOYAMA, Isamu) : 専務理事 (任期 : R4. 3. 31)
	野村正彦 (NOMURA, Masahiko) : 名誉教授 (任期 : R4. 3. 31)
	松本万夫 (MATSUMOTO, Kazuo) : 名誉教授 (任期 : R4. 3. 31)
	田中淳司 (TANAKA, Junji) : 名誉教授 (任期 : R4. 3. 31)
	丸木清之 (MARUKI, Kiyoyuki) : 理事長 (任期 : R4. 3. 31)

2. 目的・目標

本委員会は埼玉医科大学国際交流センター規程第7条に則り、センターの円滑な管理運営を図るため設置された。今年度はポストコロナの国際交流再開に伴うさまざまな状況に適切に対応することを目標として活動した。

3. 活動実績

- ①第1回 (令和4年4月13日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者14人
- ②第2回 (令和4年5月10日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者19人
- ③第3回 (令和4年6月14日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者16人
- ④第4回 (令和4年7月6日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者16人
- ⑤第5回 (令和4年9月6日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者16人
- ⑥第6回 (令和4年10月11日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者15人
- ⑦第7回 (令和4年11月8日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者15人
- ⑧第8回 (令和4年12月7日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者12人
- ⑨第9回 (令和5年1月17日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者15人
- ⑩第10回 (令和5年2月15日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者19人
- ⑪第11回 (令和5年3月14日) 於 : 医学部7号館1階会議室 出席者12人

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本年は新型コロナウイルス感染症による約3年間の人的交流停止を経て、年度の後半には徐々に全学的な視野に立った交流活動の再開に向けた話し合いなどを展開した。さまざまな状況に対して適切に対応し、しっかりとした議論をおこなうことができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

コロナ収束に向けて今後も急な変更や厳しい状況も予測される。引き続き柔軟な対応を心がけ、反省項目や改善の余地があればそれを取り上げ、改良の方向に向かって討議をおこなっていく考えである。

5. 7) 医療人育成支援センター運営会議

1. 構成員

三村 俊英 (MIMURA Toshihide)	センター長 / キャリア形成支援部門 部門長
小川 智也 (OGAWA Tomonari)	副センター長 / キャリア形成支援部門
岩永 史郎 (IWANAGA Shiro)	副センター長 / キャリア形成支援部門
森 茂久 (MORI Shigehisa)	卒前部門 部門長
山元 敏正 (YAMAMOTO Toshimasa)	初期臨床研修部門 部門長
木崎 昌弘 (KIZAKI masahiro)	初期臨床研修部門
林 健 (HAYASHI Takeshi)	初期臨床研修部門 / 地域枠奨学金制度 部門長
坂口 浩三 (SAKAGUCHI Hirozo)	キャリア形成支援部門
稲葉 宗通 (INABA Munemichi)	生涯学習部門 部門長
名越 澄子 (NAGOSHI Sumiko)	女性医師支援部門 部門長
堀江 公仁子 (HIRIE Kuniko)	女性医師支援部門
柴崎 智美 (SHIBAZAKI Satomi)	地域医学推進センターセンター長
高橋 幸子 (TAKAHASHI Sachiko)	地域医学推進センター
辻 美隆 (TSUJI Yoshitaka)	シミュレーション教育部門 部門長
北脇 丈博 (KITAWAKI Takehiro)	シミュレーション教育部門 兼事務局 総合医療センター 臨床研修センター (令和4年7月から)
村上 孝 (MURAKAMI Takashi)	基礎医学部門 部門長
事務局	
岩澤 昌人 (IWASAWA Masato)	大学事務部医学部事務室学務課 (令和4年6月まで)
川俣 栄希 (KAWAMATA Eiki)	大学事務部医学部事務室学務課 (令和4年7月から)
永島 松男 (EISHIMA Matsuo)	病院群 臨床研修センター / 大学病院 臨床研修センター
野口 恵美子 (NOGUCHI Emiko)	大学病院 臨床研修センター
大澤 みゆき (OSAWA Miyuki)	大学病院 臨床研修センター
川俣 栄希 (KAWAMATA Eiki)	総合医療センター 臨床研修センター (令和4年6月まで)
若松 正子 (WAKAMATSU Masako)	総合医療センター 臨床研修センター
後口 綾香 (USHIROGUCHI Ayaka)	総合医療センター 臨床研修センター
松尾 有裕 (MATSUO Arihiro)	国際医療センター 事務部総務課
池田 美土里 (IKEDA Midori)	国際医療センター 臨床研修センター
島田 祐里 (SHIMADA Yuri)	国際医療センター 臨床研修センター
伊藤 美香 (ITOU Mika)	国際医療センター 臨床研修センター (令和5年1月から)

2. 目的・目標

委員会の設置目的：

本センターは埼玉医科大学医療人育成支援センター規程第1条に則り、地域の医療施設と大学の連携を含む社会貢献活動を推進し、卒前から卒後へと切れ目無く繋がる医療人の育成を支援し、特に地域医療に従事する医療人の育成を推進する。

活動目標：

卒前・卒後教育において地域の医療施設との連携に必要な環境の整備や、地域で活躍する医療人への支援策を企画、実施し、その評価を行う。また、連携大学間の人事交流事業の推進を行い、より広い視野と知識を有する医療人の育成を支援する。

3. 活動実績

1) 委員会開催

平成22年度に発足した医療人育成センターは、令和4年度は全11回の運営会議を開催した。なお、審議内容は教員代表者会議において報告した。また、すべての議事録は整備されている。

- (1) 第 131 回医療人育成支援センター運営会議：令和 4 年 4 月 18 日 Zoom 会議 出席者 11 名、他事務局
議事：基礎医学部門新設について、専攻医募集の広報活動について、医学部学生のカレンダーについて、医学部学生への説明会について、大学病院の基礎研究医プログラムについて、初期研修医の研修開始について、初期研修医募集説明会・3 病院合同 Web 説明会について、「今日の臨床サポート」(Up To Date の日本語版にあたる)について、女性医師支援について(アンケート作成チーム、地域卒学生への講演、女性医師支援のポスター)、新規導入シミュレーター(「内視鏡 VR」本体)の納品状況について、JMECC 等の実施予定について、腹部超音波・内視鏡の実践セミナーについて、「彩の国連携力育成プロジェクト」4 大学連携について、埼玉県内職能団体との意見交換会について、地域枠奨学金制度を考える会開催について、研究マインドの醸成について、等
- (2) 第 132 回医療人育成支援センター運営会議：令和 4 年 5 月 16 日 Zoom 会議 出席者 8 名
議事：専攻医募集の広報活動について、創立 50 周年記念式典について、医学部学生のカレンダーについて、初期研修医募集説明会・3 病院合同 Web 説明会について、「今日の臨床サポート」(Up To Date の日本語版にあたる)について、女性医師支援について(女性医師支援のポスター)、ダイバーシティ推進について、シミュレーショントレーニングセンターの 2021 年度利用状況について、新規導入シミュレーター物品説明について、「彩の国連携力育成プロジェクト」4 大学連携について、埼玉県内職能団体との意見交換会について、埼玉県地域枠奨学生 1 年生へのオリエンテーションについて、地域枠医師が専攻医の義務年限カウントについて、研究マインドを育成するプログラムについて、等
- (3) 第 133 回医療人育成支援センター運営会議：令和 4 年 6 月 20 日 Zoom 会議 出席者 11 名
議事：専攻医募集の広報活動について、埼玉県病院合同オンライン説明会(専門研修プログラム)及び(臨床研修プログラム)への参加意向について、医学部学生のカレンダーについて、初期臨床研修マッチングについて、初期臨床研修医採用試験について、初期研修医募集 Web 説明会について、民間医局レジナビフェアオンライン説明会について、「今日の臨床サポート」(Up To Date の日本語版にあたる)について、民間医局レジナビフェア 2022 東京ビッグサイトの訪問者数について、女性医師支援について(女性医師支援のポスター)、新規導入シミュレーター(「内視鏡 VR」スコープ部分)の納品状況について、腹部超音波・内視鏡の実践セミナーについて、ハンズオンセミナー開催予定について、埼玉県内職能団体との意見交換会について、IPW カフェ開催について、地域枠奨学金制度について(埼玉県知事表敬訪問、埼玉県のキャリアコーディネーター)、研究医養成プログラムを履修された卒業生へのリクルート通知について、専攻医募集案内と募集活動について、医学部学生の部活入部について、等
- (4) 第 134 回医療人育成支援センター運営会議：令和 4 年 7 月 25 日 Zoom 会議 出席者 9 名
議事：専攻医募集の広報活動について、埼玉県病院合同オンライン説明会(専門研修プログラム)及び(臨床研修プログラム)について、初期研修医募集説明会・3 病院合同 Web 説明会について、JMECC 等の実施について、初期研修医採用試験について、埼玉県臨床研修病院ガイドブックについて、女性医師支援について(埼玉県臨床研修病院ガイドブックへの女性医師支援のポスター掲載)、新規導入シミュレーター(「内視鏡 VR」スコープ部分)の納品状況について、研修医向けハンズオンセミナーについて、シミュレーショントレーニングセンターの広報活動(学外ホームページ掲載等)について、IPW カフェ開催について、地域枠奨学金制度について(地域枠奨学生の夏期病院見学、地域枠からの不同意離脱、埼玉県のキャリアコーディネーター)、研究医養成プログラムを履修された卒業生へのリクルート通知について、埼玉医科大学研究マインド育成自由選択プログラム申込について、事務局の人事異動について、等
- (5) 第 135 回医療人育成支援センター運営会議：令和 4 年 9 月 12 日 Zoom 会議 出席者 9 名
議事：専攻医の採用スケジュール(日本専門医機構)について、埼玉県病院合同オンライン説明会(専門研修プログラム)について、医学部学生のカレンダーについて、初期臨床研修医採用面接試験申込者数について、民間医局レジナビフェア 2022 仙台への参加予定について、女性医師支援について(HPV ワクチン接種、子宮頸がん検診の重要性周知のためポスター、ダイバーシティ推進における埼玉大学共催第 6 回彩の国女性研究者ネットワークシンポジウム)、新規導入シミュレーター(「内視鏡 VR」スコープ部分)の納品状況について、シミュレーショントレーニングセンターの広報活動(学外ホームページ掲載等)について、地域枠奨学金制度について(埼玉県のキャリアコーディネーター、卒後 2 年目の地域枠医師への Web 説明会を実施)、オール埼玉医大 研究の日運営会議について、JMECC (10 月)実施予定について、超音波・消化器内視鏡実践セミナーについて、病院群臨床研修指導医講習会について、公益財団法人日米医学医療交流財団と本学共催の「全人的医療をめざしたシステムの構築-総合診療医とホスピタリストの課題と展望-」企画について、病院群臨床研修センターの人員配置について、「今日の臨床サポート」(Up To Date の日本語版にあたる)について、等

- (6) 第 136 回医療人育成支援センター運営会議：令和 4 年 10 月 17 日 Zoom 会議 出席者 9 名
 議事：専攻医の採用スケジュール公表（日本専門医機構）について、埼玉県病院合同オンライン説明会（専門研修プログラム）について、医学部学生の実践スケジュールについて、初期臨床研修医採用面接試験におけるマッチング中間公表について、ダイバーシティ推進について（埼玉大学共催第 6 回彩の国女性研究者ネットワークシンポジウム）、腹部超音波・消化器内視鏡実践セミナーを実施予定について、地域枠奨学金制度について（地域枠学生を対象とした課外学習プログラム、埼玉県のキャリアコーディネーター、埼玉県地域枠奨学生懇談会）、オール埼玉医大 研究の日における 3 病院の研修医 PR 動画について、病院群臨床研修指導医講習会について、オール埼玉医大 研究の日と腹部超音波・消化器内視鏡実践セミナーの次年度日程調整について、公益財団法人日米医学医療交流財団と本学共催の「全人的医療をめざしたシステムの構築-総合診療医とホスピタリストの課題と展望-」への対応について、新型コロナウイルス感染症への本学学生の感染状況について、等
- (7) 第 137 回医療人育成支援センター運営会議：令和 4 年 11 月 21 日 Zoom 会議 出席者 9 名
 議事：専攻医の採用スケジュール延期（日本専門医機構公表）について、医学部学生の実践スケジュールについて、初期臨床研修医採用面接試験におけるマッチング結果について、ダイバーシティ推進について（埼玉大学共催第 6 回彩の国女性研究者ネットワークシンポジウム、ダイバーシティインクルージョン及びビロンギング）、超音波・消化器内視鏡実践セミナーについて、「彩の国連携力育成プロジェクト」4 大学連携について、埼玉県立大学主催の IPW 総合課程について、地域枠奨学金制度について（埼玉県のキャリアコーディネーター、埼玉県地域枠奨学生懇談会）、研究医養成プログラムについて、病院群臨床研修指導医講習会及びチーフタスクフォース世代交代検討について、等
- (8) 第 138 回医療人育成支援センター運営会議：令和 4 年 12 月 19 日 Zoom 会議 出席者 12 名
 議事：専攻医の採用スケジュール延期（日本専門医機構公表）について、医学部学生の実践スケジュールについて、埼玉県病院合同オンライン説明会（臨床研修プログラム）について、初期研修医募集説明会（3 病院合同 Web 説明会）について、病院群臨床研修指導医講習会報告について、ダイバーシティ推進について（AJMC 一般社団法人全国医学部長病院長会議より「ポストコロナ時代における男女共同参画の未来」についてのアンケート調査）、埼玉県内職能団体との意見交換会について、地域枠奨学金制度について（埼玉県地域枠奨学生懇談会）、等
- (9) 第 139 回医療人育成支援センター運営会議：令和 5 年 1 月 17 日 Zoom 会議 出席者 11 名、他委任状 3 名
 議事：埼玉県病院合同オンライン説明会（専門研修プログラム）及び（臨床研修プログラム）について、医学部学生の実践スケジュールについて、初期研修医募集説明会（3 病院合同 Web 説明会）について、病院群臨床研修指導医講習会についての厚生労働省報告書作成状況について、生涯学習について（復職に向けてのスキルの確認やスキルアップトレーニングの機会検討）、女性医師支援活動周知方法検討について、埼玉大学の彩の国女性研究者ネットワークのイベント情報について、新規導入シミュレーター（「内視鏡 VR」スコープ部分）の納品状況について、ICLS 及び JMEC の予定について、ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業協定締結について、地域枠奨学金制度について（埼玉県知事表敬訪問、地域枠奨学生の今年度卒業予定者における埼玉県内臨床研修病院内定状況）、次年度のオール埼玉医大 研究の日開催日程について、研究医養成プログラムの応募状況及び表彰制度の検討について、等
- (10) 第 140 回医療人育成支援センター運営会議：令和 5 年 2 月 20 日 Zoom 会議 出席者 11 名、他委任状 2 名
 議事：埼玉県病院合同オンライン説明会（専門研修プログラム）及び（臨床研修プログラム）報告について、医学部学生の実践スケジュールについて、初期研修医募集説明会（3 病院合同 Web 説明会）について、病院群臨床研修指導医講習会についての厚生労働省報告書について、生涯学習について（復職に向けてのスキルの確認やスキルアップトレーニングの機会検討）、女性医師支援について（地域枠学生の学習会、埼玉県医師会女性医師支援委員会主催の働き方講演会）、超音波・消化器内視鏡実践セミナーについて、新規導入シミュレーター（「内視鏡 VR」スコープ部分）の納品について、古いシミュレーターの廃棄及び長期貸し出し等の検討について、ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業協定締結について、地域枠奨学金制度について（専門研修医育機関について、埼玉県地域枠医学生のための学習会）、研究室配属の実現に向けての活動について、来年度の医療人育成支援センター運営会議日程案について、本学学生への結紮や縫合セミナーの検討について、文科省医学部等教育・働き方改革支援事業選定（採択）について、等
- (11) 第 141 回医療人育成支援センター運営会議：令和 5 年 3 月 20 日 Zoom 会議 出席者 10 名、他委任状 3 名
 議事：3 病院の専攻医採用予定（卒後 3 年目）について、専攻医募集の広報活動について、医学部 6 年生医師国家試験結果について、医学部学生の実践スケジュールについて、初期臨床研修医修了予定者について、次年度採用初期研修医について、民間医局レジナビフェア東京ビッグサイト春出展報告について、埼玉大学を中心とした彩の国女性研究者ネットワーク担当者連絡会について、次年度 JMECC 等の実施予定について、シミュレーショント

レーニングセンター管理室常駐医師について、シミュレーショントレーニングセンター各部屋の収録システム（各部屋2台カメラ設置）予定について、「彩の国連携力育成プロジェクト」報告について、次年度のオール埼玉医大 研究の日ポスター作成について、次年度の医師臨床研修マッチングスケジュールについて、Up To Date 入門オンラインセミナーについて、次年度開催予定の日本の Mayo Clinic を目指す会全体集会について、本学3病院の初期研修医（本学に残らない理由等）へのアンケート調査について、等

2) セミナー等の開催

(1) 腹部超音波・消化器内視鏡実践セミナー

*令和4年11月5日 参加者7名（新型コロナウイルス感染防止対策のため、参加者を絞って1回のみ開催）

(2) 病院群臨床研修指導医講習会（新型コロナウイルス感染防止対策のため Web 開催）

*令和4年11月26日～11月27日 受講者32名

(3) JMECC

*令和4年7月16日 参加者15名

*令和4年10月29日 参加者15名

*令和5年1月28日 参加者14名

(4) 病院群初期臨床研修 Web 説明会

*令和4年5月30日 参加者19名

*令和4年6月9日 参加者18名

*令和5年2月21日 参加者14名

(5) レジナビフェア（初期臨床研修）

オンライン

*令和4年6月13日 視聴者約60名（国際医療センター）

東京ビッグサイト等対面式説明会

*令和4年6月19日 東京 参加者135名（3病院）

*令和4年10月2日 仙台 参加者14名（総合医療センター）

*令和5年3月19日 東京 参加者71名（総合医療センター）

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

埼玉医科大学医療人育成支援センターは、平成22年4月に組織され、以降地域の医療施設と大学の連携を含む社会貢献活動を推進し、それに資する医師を中心とした医療人の卒前から卒後、そして生涯にわたる教育・研修への支援と育成を目指して活動してきた。

前年度は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、卒後教育に関する情報交換の場である活動等には多くの制限があった。今年度は、前年度に引き続き感染拡大防止対策によるオンラインでの対応に加え、新型コロナウイルスの感染状況に注視しながら十分な感染防止対策を行ったうえで対面式の説明会も開催した。

この様な状況下でも3キャンパスをZOOM会議システムで繋いで行ってきた医療人育成支援センター運営会議は、オンライン開催により以前と変わりなく委員の情報交換を活発に行うことができた。

また、Zoom会議のノウハウを活かし病院群初期臨床研修 Web 説明会を令和4年5月・6月と令和5年2月に開催し、埼玉医科大学3病院による初期臨床研修医獲得のための働きかけができた。加えて令和4年6月には外部主催のレジナビオンラインフェア（初期臨床研修）への参加、レジナビ東京ビッグサイトにも参加し3病院で多くの医学生への対面による説明を行い、学内外学生へのアピールに繋がった。

学内外の研修医を対象とした腹部超音波・消化器内視鏡実践セミナーは、参加者を絞って1回のみではあるが安全に開催することができた。

また、病院群臨床研修指導医講習会については、医学教育センター及びITセンター協力のもと前年度同様にZoomを使用して開催し、コロナ禍においても優秀な指導医の養成に努めることができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

卒前・卒後教育に関しては、今年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響が続く中で、情報発信方法、発信内容など試行錯誤的に行ってきた部分があった。前年度と比較して多くの点で改善できたものの、情報発信のコンテンツ作成、発信方法など更なる工夫や改善が必要である。特に、専攻医募集に関する広報活動が十分にできておらず次年度に向けて一層の工夫と改善を目指す。また、初期の研修プログラム説明に関しては、対面式説明会においては学生の対面による参加希望者の減少により次年度以降の対面式説明会の開催を検討する必要がある。この点を踏まえホームページの見直しなどと合わせて病院群主催の Web 説明会の開催や外部主催のオンライン説明会及び感染対策を施し

た対面式説明会において病院群・各病院でバランスよく参加し、3病院が密に連携して埼玉医科大学病院群が魅力ある研修病院であることを学内外に積極的にアピールし研修医の更なる増加を目指す。

その他、社会の多様性に対応した生涯学習やキャリア形成支援を含んだ卒前・卒後教育システムの構築を図ると共に、前年度に引き続き Zoom を活用した病院群臨床研修指導医講習会を通し、より多くの優秀な指導医の養成を図る。

5. 8) 委員会 IR センター運営会議

1. 構成員

委員長	椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IRセンター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	小山 政史 (KOYAMA, Masafumi) : 国際医療センター泌尿器科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	柴崎 智美 (Shibazaki, Satomi) : 医学教育学 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	竹内 勤 (TAKEUCHI, Tsutomu) : 副学長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : ゲノム基礎医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	松下 毅彦 (MATSUSHITA, Takehiko) : IRセンター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	宮本 裕一 (MIYAMOTO, Yuichi) : 保健医療学部臨床工学科 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	岡田 洋平 (OKADA, Yohei) : 総合医療センター泌尿器科 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
委員	荒関 かやの (ARASEKI, Kayano) : 医学教育センター : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
委員	齋藤 恵 (SAITO, Megumi) : 医学教育センター : 助手 (任期 : R6. 3. 31)
委員	江口 幹也 (EGUCHI, Mikiya) : 大学事務部 : 副部長 (任期 : R6. 3. 31)
委員	馬場 菜穂 (BABA, Nao) : 大学事務部医学部事務室学務課 : (任期 : R6. 3. 31)
委員	山口 明美 (YAMAGUCHI, Akemi) : 大学事務部保健医療学部事務室 : (任期 : R6. 3. 31)
委員	町田 紀明 (MACHIDA, Noriaki) : 総合企画部 : (任期 : R6. 3. 31)
委員	鈴木 実和 (SUZUKI, Miwa) : IRセンター (任期 : R6. 3. 31)
オブザーバー	別所 正美 (BESSHO, Masami) : 学長
オブザーバー	村越 隆之 (MUKAKOSHI, Takayuki) : 医学部長
オブザーバー	加藤木利行 (KATOGLI, Toshiyuki) : 保健医療学部長

2. 目的・目標

IR センター運営会議は、埼玉医科大学 IR センター運営会議規則に則り、IR センター運営に関する事、その他 IR センターの運営に関し必要なことを審議することを目的とし、これらの活動を通じて本学の質の向上を推進することを目標としている。

3. 活動実績

- ①第 39 回 定例会議 (令和 4 年 4 月 26 日) 於 : Zoom 出席 13 人 欠席 3 人
議事 : 前会議事録の確認、令和 3 年度医学部 IR レポート、令和 3 年度保健医療学部 IR レポート、IR センター業務見直し・認証評価受審に係る組織と規程規則の改正、他。
- ②第 40 回 定例会議 (令和 4 年 5 月 24 日) 於 : Zoom 出席 15 人 欠席 1 人
議事 : 前会議事録の確認、全学の 3 つのポリシー策定の提案、医学部学生の「態度」評価結果のデータ収集、認証評価受審に係る組織と業務の見直し、認証評価受審に係る組織の規程規則の改正案、他。
- ③第 41 回 定例会議 (令和 4 年 6 月 28 日) 於 : Zoom 出席 16 人 欠席 0 人
議事 : 前会議事録の確認、全学の 3 つのポリシー策定の提案、認証評価受審に係る組織の規程規則の改正案と新旧対照表、医学部教授・教員総会での報告事項 (令和 3 年度医学教育分野別評価受審)、ポリシーの周知方法、他。
- ④第 42 回 定例会議 (令和 4 年 9 月 27 日) 於 : Zoom 出席 16 人 欠席 0 人
議事 : 前会議事録の確認、令和 3 年度医学教育分野別評価の認定結果報告 (結果 : 認定、認定期間 : 令和 4 年 10 月 1 日~令和 11 年 9 月 30 日)、第 5 次長期総合計画、令和 3 年度医学部ユニット評価調査の結果分析、改革総合支援事業タイプ 1 に係る IR センターの活動、他。
- ⑤第 43 回 定例会議 (令和 4 年 10 月 18 日) 於 : Zoom 出席 15 人 欠席 1 人
議事 : 前会議事録の確認、令和 3 年度医学教育分野別評価の認定結果報告 (認定証、評価報告書 (確定版) 等の受領)、令和 4 年度第 1 回埼玉医科大学自己点検・評価委員会報告、医学部 IR レポート、保健医療学部 IR レポート、他。
- ⑥第 44 回 定例会議 (令和 4 年 11 月 22 日) 於 : Zoom 出席 15 人 欠席 1 人
議事 : 前会議事録の確認、IR センター運営会議規則の改正案、大学機関別認証評価・医学教育分野別評価の各受審準備総委員会の構成員素案、令和 4 年度医学部 1~4 年生学修成果の自己評価調査の調査票の見直し、医学部 6 年生学修成果の自己評価および卒業時満足度調査の調査票の見直し、令和 5 年度会議開催日程案、他。
- ⑦第 45 回 定例会議 (令和 4 年 12 月 20 日) 於 : Zoom 出席 12 人 欠席 4 人
議事 : 前会議事録の確認、IR センター運営会議規則改正案、大学機関別認証評価・医学教育分野別評価の各受審準備総委員会の構成員案、他。
- ⑧第 46 回 定例会議 (令和 5 年 1 月 24 日) 於 : Zoom 出席 14 人 欠席 2 人
議事 : 前会議事録の確認、埼玉医科大学アセスメント・ポリシー、埼玉医科大学アセスメント・プラン、令和 4 年度医学部 1~4 年生学修成果の自己評価調査の調査票の実施、医学部 6 年生学修成果の自己評価および卒業時満足度調査の調査票の実施、他。
- ⑨第 47 回 定例会議 (令和 5 年 2 月 28 日) 於 : Zoom 出席 16 人 欠席 0 人
議事 : 前会議事録の確認、埼玉医科大学アセスメント・プラン、令和 4 年度医学部 6 年生学修成果の自己評価調査結果報告、令和 4 年度医学部卒業時満足度調査結果報告、令和 4 年度医学部ユニット評価調査結果分析、他。
- ⑩第 48 回 定例会議 (令和 5 年 3 月 28 日) 於 : Zoom 出席 12 人 欠席 4 人

議事：前回議事録の確認、IRセンター運営会議規則改正報告、令和4年度医学部定期試験データシート、医学部カリキュラム評価委員会 学習者評価検討小委員会の下に設置する3つの分科会、令和5年度会議開催日程・構成員確認、他。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

IRセンターの活動について審議を行い、下記を実施させることによって、本学の質の向上に貢献した。

- ・令和3年度に医学教育分野別評価を受審し、令和4年10月1日付で7年間の認定を受けた。
- ・医学教育分野別評価の評価報告書に基づき、改善事項を確認し、令和5年度から実施する年次報告書の作成と公開の準備を整えた。
- ・内部質保証の体制をより明瞭にするため、大学機関別認証評価については全学の自己点検・評価委員会が、医学教育分野別評価については医学部自己点検・評価委員会が担当するよう規則の改正を行った。
- ・この規則の改正によって、全学の自己点検・評価委員会の下に大学機関別認証評価受審小委員会が、医学部自己点検・評価委員会の下に医学教育分野別評価受審小委員会が、それぞれ設置された。
- ・アセスメント・ポリシーおよびアセスメント・プランの立案と制定。
- ・IRデータベースシステムの構築に向けた準備。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

医学教育分野別評価については、年次報告書を作成し、公開していく活動をさせる。アセスメント・ポリシーおよびアセスメント・プランに基づいた、内部質保証のためのデータ収集と分析を実施させる。それらの結果を責任ある委員会等に提供させ、本学の質の向上に貢献させる。

1. 医学研究科

1. 構成員

医学研究科長 木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 総合医療センター血液内科 : 教授

博士課程運営委員長 高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 総合医療センター放射線腫瘍科 : 教授

修士課程運営委員長 小林 直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 保健医療学部生体医工学 : 教授

大学院教員数 : 647 名 (うち指導教員数 : 539 名) (令和 4 年 5 月 1 日時点)

2. 目的・目標

2-1. 医学研究科博士課程

本学大学院は、昭和 47 年に医学部が創立された後、昭和 53 年 4 月に医学研究科博士課程として開設された。高度で最先端の基礎的・臨床的医学研究に従事し、豊かな学識をもつ優れた医学・医療の指導者を養成することを目標に掲げ、令和 5 年 3 月末現在 1567 件の学位(博士)を授与し、多くの医学・医療のスペシャリストを送り出してきた。博士課程における各専攻分野別の教育目標は、以下に掲げる通りである。

2-1-1. 生物・医学研究系

1) 解剖学

解剖学では生命体としての人体の構造に関する理論とその臨床医学への応用を教授研究し、その学問的修練を極めて基礎医学の発展に寄与することを目標とする。

2) 生理学

生理学ではおもに人体の正常な生理機能に関する基本的知識・概念とそれらの応用を指導し、広く医学研究の発展に寄与できる人材を育成する。

3) 生化学 (生化学)

生体物質の正常代謝を理解し、併せて病態時における異常代謝に関しても物質とエネルギー、情報の流れについて分子、細胞、システムレベルで説明する能力、或いは不明な点に関してはこれを解明する実験的態度と技術を養成する。

4) 生化学 (分子生物学)

分子生物学では最新かつ広範囲の遺伝子転写制御機構に関する理論とその応用に関する知識を深め、医学分子生物学領域の発展に寄与できる基礎的、臨床的研究のできる能力のある人材を育成する。

5) ゲノム基礎医学

ゲノム基礎医学では、ゲノム情報に基づく生命現象を総合的に理解し、加えて、運動器、脳、生殖器を中心とした分野での最先端の研究を遂行する為の実験手技をマスターする。その知識及び技術でもって、世界に通じる研究を展開し、そこから得られる成果を健康の増進や疾患の予防・診断・治療に応用できる人材を育成する。

6) ゲノム応用医学

ゲノム応用医学ではヒトゲノム情報と分子細胞生物学技術に基づき、疾患の病態を分子レベルから生体レベルまで広く深く理解し、遺伝子発現・修飾制御や遺伝子治療・ゲノム編集等の最先端研究を通じて、ゲノム医学・医療への応用ができる力を有し幅広く活躍できる医療人の育成を目標とする。

7) 薬理学

薬理学では薬理学に関する理論とその応用の基本を学習し、疾患の分子病態や治療戦略を独創的な観点から研究し、その学問的修練を極めて薬理学の発展に寄与することを目的とする。

8) 病理学

病理学では、病気の原因と成り立ち・進展・帰結に至る形態学的、機能的変化を解明するために種々の方法を用いて疾患の臓器、組織、細胞、分子の変化を解析し、疾患の理論の確立と診断・治療への応用を研究し、その学問的修練を極めることにより、病理学の発展に寄与することを目的とする。

9) 微生物学

微生物学では、微生物による感染・疾病発症のメカニズムを教授研究し、その成果を感染症や疾患の診断・予防・治療の開発に役立てることを目的とする。

10) 免疫学

免疫学では免疫学・アレルギー学に関する理論とその応用を教授研究し、その学問的修練を極めて免疫学・アレルギー学の発展に寄与することを目的とする。

11) 生体機能科学

生体機能科学では生体機能調節に重要な役割を果たしている神経系、内分泌系および消化器系について学習し、さら

に新たな分野を研究し生体機能の解明に貢献できる人材を育成する。

12) 生体医工学

生体医工学に関する基礎知識、基礎能力をベースに、最新の研究に関する背景、理論、知識について習得し、生体医工学における研究を推進する能力を身につけて研究結果を成果として出すとともに、成果による生体医工学分野への社会貢献を果たせる人材を育成する。

2-1-2. 社会医学研究系

1) 社会医学

社会医学では、パブリックヘルスに関する知識、技能を修得・研究し、その学問および実践能力を究めて、社会の発展に寄与することを目的とする。

2) 法医学

法医学に関する知識、技能を学習・研究し、その学問および実務能力を究めて法医鑑定医として活躍し、もって社会に貢献することを目的とする。

3) 医学教育学

医学教育における基本的な学習理論、教授法、評価法、医学教育に特有の教育特性等を、これまで蓄積されてきた文献上の知見を基盤として理解し、実際の教育にその知識を応用して優れた医療人を育てる能力を身につけ、さらに医学教育研究によって医学教育の発展に貢献できる人材を育成することを目標とする。

2-1-3. 臨床医学研究系

1) 内科学（血液内科学）

血液内科学に関する最先端の知識と技術を修得し、造血器腫瘍の分子病態解析などの基礎的および臨床的研究の実践を通じて、研究能力を有する優れた血液臨床医の育成を目標とする。

2) 内科学（輸血・細胞移植学）

血液型、不規則抗体、血液製剤の種類と特徴、輸血の適応と適正な輸血の在り方、などに関して知識を習得する。細胞治療の知識を習得し必須となる技術を獲得する。輸血に関するデータを利用し論文をまとめる能力を獲得する（例：血液製剤の品質、自己血採血前後の造血状態の変動、末梢血幹細胞の動員など）。

3) 内科学（感染症科・感染制御学）

感染症をテーマとした医学研究を行います。感染症を引き起こす病原微生物は多岐にわたり、臨床病態も多様であるため、さまざまな臨床研究のテーマがあります。さらに微生物学、免疫学、薬理学、分子生物学など関連するため、それぞれの基礎医学の講座と人的・物的共同研究を行います。

4) 内科学（腫瘍内科学）

薬理的知見や包括的ながんドライバー遺伝子の同定に基づいた合理的な抗がん薬物療法に関して臓器横断的な研究を行うことを目的とする。

5) 内科学（循環器内科学）

心臓病、血管病における知識を深めその応用を教授研究し、その学問的かつ実的な修練をきわめて、患者さんの救命、治療、予防、健康増進に寄与する実質的な循環器病学の発展と、人類の幸福に寄与することを目標とする。

6) 内科学（呼吸器内科学）

広範な呼吸器内科領域の中で特に非癌の良性疾患を学習標的とする。アレルギー・臨床免疫学、呼吸生理学、微生物学の関わる領域を中心に、主として免疫学・分子生物学的手法あるいは生理学的手法を用いた研究体験を通じて研究マインドを涵養し、呼吸器領域の病態学・診断学・治療学の発展に貢献できる基礎能力を体得することを目標とする。

7) 内科学（リウマチ・膠原病内科学）

基礎免疫学の知識と技術を基に、臨床免疫学の発展と自己免疫疾患診療の進歩に貢献出来るような科学的力量のある臨床医を育成すること、および、臨床免疫学の領域において世界に通用するような研究を目指す研究者および大学院教員を育成することを目標とする。

8) 内科学（消化器・肝臓内科学）

消化管及び肝・胆・膵疾患の病態、診断、治療に関わる知識と技術を修得し、それらを応用した基礎的・臨床的研究を実施する。

9) 内科学（消化管内科学）

消化管疾患に関わる専門知識、特に消化器内視鏡による診断、治療の知識と指術を修得し、それらを応用した基礎的や臨床的な研究ができる能力を有する人材を育成する。

10) 内科学（内分泌・糖尿病内科学）

内分泌代謝学の専門的な知識を習得することを第一の目標とし、かつ、先端の知識を習得することにより、この分野

における基礎的・臨床的研究を行うことのできる人材を養成する。

11) 内科学（神経内科学）

神経内科学に関する理論とその応用を研究し、その学問的修練を究めて神経学の発展に貢献するとともに、若手研究者の育成を目的とする。

12) 内科学（腎臓内科学）

腎臓内科の大学院教育の特徴は、自分が何をどうしたいかを明確にすることから始まる。目標が決まったら、あらゆる可能な研究スキルを動員して達成させ、その成果を論文化することで科学的考え方を習得する。これにより physicans scientist、すなわち一生涯学徒としての医師を育成することを目標とする。

13) 内科学（総合内科学）

総合内科に関する専門的な知識を深め、内科学一般の基礎的・臨床的な研究ができる能力を有する人材を育成する。

14) 外科学（心臓血管外科学）

成人から小児にわたる心臓血管疾患に関する知識を広く身につけ、血管内治療を含むその外科的治療について理解を深める。

15) 外科学（消化器外科学）

救急を含む一般消化器外科、上部消化管外科、下部消化管外科、肝胆膵外科に関する理論とその応用を教授研究し、その学問的修練を極めて消化器外科学の発展に寄与することを目的とする。

16) 外科学（乳腺外科学）

乳腺専門医、マンモグラフィ読影医、臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医、がん治療認定医に対応できる能力と豊かな教養を備えた医療人として社会に幅広く活躍できる素質を身につける。

17) 外科学（小児外科学）

小児外科疾患に関する知見を広く学んだうえで、病因の解明や診断・治療に関する課題を見つけて、それを解決するための研究を行い、学問的修練を極めることで小児外科学の発展に寄与することを目的とする。

18) 外科学（呼吸器外科学）

呼吸器疾患、すなわち肺・縦隔・胸壁疾患のうち、外科的疾患の病態、診断、治療に関する理論と応用についての知識を獲得し、その臨床応用についての理論と手技を体得する。その上で、学問的側面からも修練を積んで、基礎的、臨床的研究を展開し、呼吸器外科学の発展に寄与することを目的とする。

19) 小児科学

成長・発達・ライフサイクル等に関する小児病学と小児保健学の理論とその応用を教授研究し、その学問的修練を極めて小児科学の発展に寄与することを目的とする。

20) 産科婦人科学

産科婦人科学各領域に必要な理論とその応用を十分に理解・実践できるとともに、医学研究者として独立して研究を遂行できる洞察力と統合力を涵養する。

21) 精神医学

精神医学およびその関連領域における臨床精神医学的および神経科学的知識の習得と科学的思考の鍛錬を通じて、精神科専門医および精神医学研究者としての素養を身につけ、精神医学の発展に寄与することを目的とする。

22) 緩和医療学

がん治療を成功に導くために必須である支持医療、および、すべての人に訪れる死への過程を支えるエンドオブライフケアの理論と実践を学び包括的に緩和医療学を究め、臨床研究を展開できる人材を育成する。

23) 皮膚科学

先天性・遺伝性皮膚疾患、アレルギー・免疫皮膚疾患、膠原病、皮膚悪性腫瘍をはじめとするさまざまな皮膚疾患の病態や検査、診断、治療について理解を深め、皮膚科学研究の技術を習得し、研究課題に取り組み、未知のことを明らかにすることで、皮膚科学の発展に寄与することを目的とする。

24) 整形外科

整形外科に関する理論とその応用について教授・研究し、その学問的修練を極めて整形外科の発展に寄与することを目的とする。

25) 脳神経外科学

脳神経外科学では広く脳科学・神経科学（特に脳血管障害学、脳腫瘍学、脳外傷学、脊椎脊髄学、先天性奇形学、機能的脳神経外科学）に関する理論とその応用を教授研究し、その学問的修練を極めて脳神経外科学の発展に寄与することを目的とする。

26) 泌尿器外科学

泌尿器科学では泌尿器疾患の概念、疫学、病因、診断、治療に関する知識を体系的に習得し、実際の臨床の場においては、習得した知識を応用して、鑑別診断を行い、適切な診断を下す力を養うことを目的とする。

27) 耳鼻咽喉科学

耳鼻咽喉科、頭頸部外科学を体系的に理解し、本領域の基礎的、臨床的研究を遂行出来る人材を養成する。

28) 眼科学

眼科学では視覚に関する理論とその応用を学び、課題解決のための方法論を思考し眼科学の発展に寄与することを目的とする。

29) 麻酔学

麻酔学の基礎的・臨床的研究ができる能力、および問題解決型能力の養成を目標におく。周術期管理、疼痛発生と抑制の研究、集中治療室における重症患者管理と周産期管理、遺伝子解析を応用した麻酔薬の機序解明などを研究の柱とする。そのほか、全身管理のエキスパートを目指す学問であるので、個人の学問興味に応じて幅広い研究テーマを指導する。

30) 放射線医学

放射線医学の研究者として、自立した研究活動を行うのに必要な理論、技術及び発展の方向の修得を目指し、放射線医学の進歩に寄与できるための理論・応用を習得する。

31) 口腔外科学

歯科および口腔外科学に関する理論とその応用を教授研究し、その学問的修練を極めて歯科および口腔外科学の発展に寄与することを目的とする。

32) 形成外科学

創傷治癒・再生医療・組織移植、および先天性疾患の治療などに関する理論とその応用を教授研究し、その学問的修練を極めて形成・再建外科学の発展に寄与することを目的とする。

33) リハビリテーション医学

リハビリテーションに関する理論とその応用を教授研究し、その学問的修練を極めてリハビリテーション医学の発展に寄与することを目的とする。

34) 理学療法学

理学療法学に関連する最先端の基礎的及び臨床的研究を主体的に調べて、その内容を常にupdateする能力を涵養するとともに、理学療法学の基礎的及び臨床的問題に対して適切な研究デザインを構築し、その要素の関連性を科学的に明らかにすることにより、理学療法学の発展に寄与する能力を有する人材を育成することを教育目標とする。

35) 臨床検査医学

臨床検査の基本となる方法・原理について知識を習得する。臨床医が自ら実施できる検査（骨髄像、尿、細菌、心電図、エコー検査など）について技術を獲得する。臨床検査データを利用し論文をまとめる能力を獲得する。

36) 救急医学

救急医学、災害医学、外傷学、集中治療医学など、救急医学に関連する全ての分野に関する理論とその応用を研究し、その学問的修練を極めることで救急医学の発展に寄与することを目的とする。

37) 医療安全管理学

医療安全に関わる専門的知識を習得し、高度で最先端の社会医学研究に従事し、自立して研究活動を行うに必要な研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養う。

38) 臨床中毒学

中毒性疾患における毒物特性、毒物動態、毒性のメカニズム、臨床症状・経過、診断・治療法などに関する理論とその応用を研究し、この分野の発展に寄与することを目的とする。とりわけ、この分野において我が国に初めて開設された講座として、我が国の実情にあった臨床・教育・研究モデルを構築し、全国への普及に努める。

39) ゲノム医療学

ゲノム・染色体・遺伝子の多様性と疾患との関連、および遺伝情報・ゲノム情報の特性を理解し、遺伝情報・ゲノム情報に基づいた診断と治療、未発症者を含む患者・家族の支援ができるようにする。

40) 臨床腫瘍学

臨床腫瘍学の実地研修、E-learningによる共通、専門科目の履修、トランスレーショナルリサーチを意識したがん研究を通じ、高い臨床能力と研究能力を併せ持った外科系、内科系、放射線、緩和ケア、各領域の腫瘍専門医を養成する。

41) 連携大学院臨床基礎医学

高度な研究機関との連携により、本学との双方向的な最先端医療の臨床的・基礎的研究を実践し、医学・医療の発展に寄与できる人材の育成を目的とする。

2-2. 医学研究科修士課程

平成22年4月に修士課程が新設され、医学研究科には従来の博士課程に加えて修士課程が併設された。医学研究科修士課程は、医学に係わる分野において、幅広く深い学識の涵養を図るとともに、生命の尊厳に関する高い倫理性を持ち、学際分野へも対応可能な専門的研究能力と高い専門性が求められる職業等に必要な卓越した能力を担うことを目標に掲げ、令和5年3月末現在108件の学位(修士)を授与した。

2-2-1. 修士課程における各分野人材教育

1) 生体機能科学分野

医療系分野や、医学以外の専門分野の卒業者に、生体機能関連の医科学を教育し、医学・医療関連の多様な分野で活躍できる研究者や専門職業人となる人材の育成を目的とする。

2) 生体医工学分野

医療系や工学系分野の卒業者に、医用工学および生体工学の学習を付加することで、学際的な領域にも対応可能な研究者や高度な専門職者人材の育成を目的とする。

3) 理学療法学分野

理学療法士の資格を持つ者に、専門科目に関する深い知識と技術を修得させることで、研究的な視野を常に欠かさない高度専門職業人人材の育成を目的とする。

3. 活動実績 「大学院医学研究科委員会」報告参照

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

令和2年度は、昨年が続いて博士課程、修士課程の2つの課程について、多様な教育形態に対応しつつ魅力ある大学院づくりを目指し、「新しい教員組織」に基づいた運営を行った。具体的な活動内容については、「大学院委員会」、「大学院医学研究科委員会」、「博士課程運営委員会」、「修士課程運営委員会」の各項に記すので、参照されたい。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

医学研究科の目標である、高度で最先端の基礎的・臨床的医学研究に従事し、豊かな学識をもつ優れた医学・医療の指導者を養成することを実現するために、博士課程、修士課程ともに前年度の自己点検・評価結果に基づいて活動を行いたい。具体的内容に関しては、「大学院委員会」、「大学院医学研究科委員会」、「博士課程運営委員会」、「修士課程運営委員会」の各項を参照されたい。

2. 看護学研究科

1. 構成員

千田みゆき (CHIDA, Miyuki) : 教授 : 運営責任者 : 代表指導教員 (大学院) : 地域活動看護学 : 博士
野田智子 (NODA, Tomoko) : 教授 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 小児看護学 : 博士
大賀淳子 (OGA, Junko) : 教授 : 代表指導教員 (大学院) : 精神保健看護学 : 博士
粟生田友子 (AOHDA, Tomoko) : 教授 : 代表指導教員 (大学院) : 成人看護学 : 博士
大森智美 (OOMORI, Tomomi) : 教授 : 指導教員 (大学院) : ヒューマン・セクシュアリティ : 修士
横山ひろみ (YOKOYAMA, Hiromi) 准教授 : 代表指導教員 (大学院) : 基礎看護学・看護管理学 : 博士
菊池トトセ (KIKUCHI, Chitose) : 准教授 : 指導教員 (大学院) : 地域活動看護学 : 修士
山路真佐子 (YAMAJI, Masako) : 准教授 : 指導教員 (大学院) : 地域活動看護学 : 博士
大澤優子 (OSAWA, Yuko) : 准教授 : 大学院教員 (大学院) : 精神保健看護学 : 修士
櫻庭奈美 (SAKURABA, Nami) : 准教授 : 代表指導教員 (大学院) : 成人看護学 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

成人看護学領域 : 成人看護学領域は成人看護学およびがん看護学、クリティカルケア学の3コースを配置している。がん看護学は、2021年度末に高度実践看護師教育課程38単位での新たな申請が認められ、2022年度より開講した。クリティカルケア学は開講準備中である。成人看護学では、広い成人看護学のすべての領域(急性期・慢性期・がん・生活期・終末期・パリアティブ)等について学修し、この分野の看護を開発していく上で必要な理論、概念を深く学習し、エビデンスの高い知見にもとづく研究に触れ、自らの習熟する専門領域での実践を生かした課題を見出すことを目的とする。そのために、演習ではその実践力を高めるための技術や介入方法について探究する。とくに、がん看護学の高度実践看護の演習・実習においては、がん看護の臨床に必要な高度な実践力を発揮するための知識・技術を広く、深く演習し、実践の場でその基盤となる能力を養う。特別研究、課題研究では、特論、演習、実習での学習を基に、研究課題を設定し、研究プロセスを学び、修士論文を作成する。

小児看護学領域 : 次年度も引き続き修了生の修士論文の論文文化など、研究のフォローアップを行っていく。具体的には過年度修了生の学会誌等への論文掲載を目指す。修士2年生については、演習IIにおいて、着実な論文作成のプロセスを踏むことにより、修士論文の完成を目指す。その際、領域を問わず、大学院生同士のディスカッションの場に積極的に参加し、研究能力が高められるよう配慮していく。修士1年生については、特論Iの講義を通して小児看護領域における課題分析力を高め、研究テーマを明確にしていく。続く演習1では、基本的な研究プロセスを踏んで明確な研究計画書を作成するとともに、倫理審査を受けるための書類作成に取り組む。

精神保健看護学領域 : 精神保健看護学特論および演習では、精神保健医療福祉に関連する諸理論および治療法やアプローチ法に関する知識・技術を修得する。これらの学修を踏まえて、精神保健看護学実習I(役割実習)、II(診断・治療)の実習を有意義に進めることができるよう、臨地実習指導者との連携を密接に行う。また、精神保健看護学特別研究では、特論、演習での学修および文献検討を踏まえ、研究のプロセスを踏んで、修士論文の完成を目指す。加えて、修了生に対してはCNS認定試験に向けてのフォローアップ研修を行う。

基礎看護学・看護管理学領域 : 基礎看護学では、科目目標にそって、看護の専門性に関する文献学習、さらに、教育・臨床現場における具体的な看護に関する実践内容を授業に取り上げ、活発なディスカッションを行い、看護の専門性について考察するなど、学習を深められるよう工夫する。看護管理学では看護管理の理論を学習し、演習を通してその学習を深め、実践現場で活用できる能力を養う。特別研究では、看護管理学特論や看護管理学演習での学びを活用し、基本的な研究のプロセスを踏み、修士論文を作成する。

地域活動看護学領域 : 地域活動看護学特論では、地域看護学の基本となる概念及び理論、個人、家族、コミュニティの健康状況の把握、健康ニーズの分析、地域保健活動あるいは看護介入の方法、地域資源の開発について学び、演習では、特別講師の講義や国内外の文献検討から地域看護活動の課題を考察し、地域看護学研究の動向を把握するとともに、理論と実践を結びつけて、選択した地域看護活動の現場で活動の一部を実施し評価し、理解を深める。特別研究では、前述の学修に基づいて研究課題を明確にし、研究の基本的プロセスを学び修士論文を作成する。

2-2. 教育実績 (担当者)

【共通科目】

- 看護管理学 : 1年後期, 2単位 30時間 (鈴木英子)

- ・ 看護倫理学：1年前期, 2単位 30時間 (荻野 雅)
- ・ 看護理論：1年前期, 2単位 30時間 (野田智子, 非常勤講師)
- ・ 看護継続教育論：1年後期, 2単位 30時間 (富田幸江)
- ・ 看護研究方法論：1年前期, 2単位 30時間 (千田みゆき, 吉田真理)
- ・ ヒューマン・セクシュアリティ：1年前期, 2単位 30時間 (大森智美)
- ・ コンサルテーション論：1年前期, 2単位 30時間 (大賀淳子)
- ・ 看護情報処理論：1年前期, 2単位 30時間 (椎橋実智男)
- ・ 人体統合機能論：1年前期, 2単位 30時間 (金子優子, 藤原智徳)
- ・ 看護政策論：1年後期, 2単位 30時間 (鈴木英子)
- ・ フィジカルアセスメント：1年後期, 2単位 30時間 (辻美隆, 本谷久美子)
- ・ 病態生理学：1年後期, 2単位 30時間 (藤原智徳, 粟生田友子, 関根由起子)
- ・ 臨床薬理：1年後期, 2単位 30時間 (鈴木正彦, 加藤巳佐子)

【専門科目】

- ・ 成人看護学特論Ⅰ：1年前期, 3単位 45時間 (粟生田友子)
- ・ 成人看護学特論Ⅱ：1年後期, 3単位 45時間 (粟生田友子)
- ・ 成人看護学演習Ⅰ：1年通年, 3単位 90時間 (粟生田友子, 非常勤講師)
- ・ 成人看護学演習Ⅱ：1年後期～2年前期, 3単位 90時間 (粟生田友子, 非常勤講師)
- ・ がん看護学特論Ⅰ：1年前期, 1単位 15時間 (粟生田友子, 非常勤講師)
- ・ がん看護学特論Ⅱ：1年前期, 1単位 15時間 (粟生田友子, 櫻庭奈美, 非常勤講師)
- ・ がん看護学特論Ⅲ：1年通年, 2単位 30時間 (粟生田友子, 櫻庭奈美)
- ・ がん看護学特論Ⅳ：2年前期, 2単位 30時間 (粟生田友子, 櫻庭奈美)
- ・ がん看護学演習Ⅰ：1年通年, 2単位 60時間 (粟生田友子, 大賀淳子, 櫻庭奈美, 非常勤講師)
- ・ がん看護学演習Ⅱ：1年後期, 2単位 60時間 (粟生田友子, 櫻庭奈美, 非常勤講師)
- ・ がん看護学演習Ⅲ：1年後期, 2単位 60時間 (粟生田友子, 櫻庭奈美, 非常勤講師)
- ・ がん看護学演習Ⅳ：2年前期, 2単位 60時間 (粟生田友子, 櫻庭奈美, 非常勤講師)
- ・ がん看護学実習Ⅰ：1年後期, 1単位 45時間 (粟生田友子, 櫻庭奈美, 非常勤講師)
- ・ がん看護学実習Ⅱ：1年後期, 2単位 90時間 (粟生田友子, 櫻庭奈美, 非常勤講師)
- ・ がん看護学実習Ⅲ：2年前期, 4単位 180時間 (粟生田友子, 櫻庭奈美, 非常勤講師)
- ・ がん看護学実習Ⅳ：2年前期, 3単位 135時間 (粟生田友子, 櫻庭奈美, 非常勤講師)
- ・ 成人看護学特別研究：2年通年, 8単位 240時間 (粟生田友子)
- ・ 成人看護学課題研究：2年通年, 4単位 120時間 (粟生田友子)
- ・ 小児看護学特論Ⅰ：1年前期, 3単位 45時間 (野田智子)
- ・ 小児看護学特論Ⅱ：2年前期, 3単位 45時間 (野田智子, 非常勤講師)
- ・ 小児看護学演習Ⅰ：1年通年, 3単位 90時間 (野田智子)
- ・ 小児看護学演習Ⅱ：2年通年, 3単位 90時間 (野田智子)
- ・ 小児看護学実習：1年後期～2年後期, 6単位 270時間 (野田智子)
- ・ 小児看護学特別研究：2年通年, 8単位 240時間 (野田智子)
- ・ 精神保健看護学特論Ⅰ：1年前期, 2単位 30時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学特論Ⅱ：1年前期, 2単位 30時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学特論Ⅲ：1年前期, 2単位 30時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学特論Ⅳ：1年後期, 2単位 30時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学演習Ⅰ：1年後期, 2単位 60時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学演習Ⅱ：1年後期, 2単位 60時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学演習Ⅲ：2年前期, 2単位 60時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学実習Ⅰ：1年後期, 1単位 45時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学実習Ⅱ：1年後期, 2単位 90時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学実習Ⅲ：2年前期, 4単位 180時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学実習Ⅳ：2年前期, 3単位 135時間 (大賀淳子, 大澤優子, 非常勤講師)
- ・ 精神保健看護学課題研究：2年通年, 4単位 120時間 (大賀淳子)
- ・ 看護管理学特論Ⅰ：1年前期, 3単位 45時間 (小林由起子, 横山ひろみ, 非常勤講師)

- ・ 看護管理学特論Ⅱ：1年後期, 3単位 45時間(小林由起子)
- ・ 看護管理学演習Ⅰ：1年後期, 3単位 90時間(横山ひろみ, 非常勤講師)
- ・ 地域活動看護学特論Ⅰ：1年前期, 3単位 45時間(千田みゆき, 菊池チトセ, 山路真佐子)
- ・ 地域活動看護学特論Ⅱ：1年前期, 3単位 45時間(千田みゆき, 菊池チトセ, 山路真佐子, 宮山徳司)
- ・ 地域活動看護学演習Ⅰ：1年後期, 3単位 90時間(千田みゆき, 菊池チトセ, 山路真佐子)
- ・ 地域活動看護学演習Ⅱ：1年後期～2年前期, 3単位 90時間(千田みゆき, 菊池チトセ, 山路真佐子)
- ・ 地域活動看護学特別研究：1年後期～2年通年, 8単位 240時間(千田みゆき, 菊池チトセ, 山路真佐子)

2-3. 達成度評価

成人看護学領域：成人看護学分野は、1年生に2名の学生を新たに迎え、「成人看護学」を開講し、成人看護学の基盤となる概念や理論を修学した。学修内容は2名とも深く学ぶことができています。2年生は、2年コース2名、3年コースの1名を含め3名はそれぞれ、covid-19感染拡大の影響を受けながらも質問紙法を用いた研究データを集積し、2名は修士論文を完成し、学位取得に至った。1名は3年コースであり、2年間かけてデータ収集に取り組んでいる。目標は達成している。なお、修了生3名は、修了後に学会発表へと進め、学会誌への投稿へと進めている。

がん看護学分野では本年度より新たに38単位の高度実践看護師教育課程の運用を進めた。1年生に3名の臨床での熟練した経験のある学生を迎え、がん看護の最新のエビデンスや、専門領域の学習を進めた。1年目を修了し、順調に単位の修得を進めることができています。臨床経験の長い学生は、これまでの臨床の振り返りや、新たな課題を見つけることができてきたと思われる。達成度は3月初めの時点で80%である。

なお、がん看護学では入学を希望する臨床の看護師を科目履修生として迎え、1年生とともに3科目を履修し単位を取得した。

小児看護学領域：修了生は、修士論文の研究テーマを埼玉医科大学看護学科紀要16巻に投稿し、原著として発表することができた。修士2年生は、倫理審査の承認後に質問紙調査を実施し、245データを収集・分析して修士論文に仕上げることができた。また、調査協力施設への報告書の作成、さらに学会発表の抄録作成までの指導を行うことができた。修士1年生については、修士の研究テーマを確実にするため、文献検討を行い、その結果を埼玉医科大学看護学科紀要16巻に投稿し資料として発表することができた。今年度は目標より活発な研究指導を展開することができたことから、達成度は100%と思われる。

精神保健看護学領域：2名の学生を迎え、特論、演習を通して精神保健看護学の基盤となる概念・理論、および専門的技法を修得したうえで、実習Ⅰ・Ⅱに臨んだ。特に実習Ⅱ（診断・治療）は、38単位高度実践看護師教育課程であらたに設置された実習であるが、埼玉医大関連病院の医師、臨床心理士などのご指導をいただき、無事に修了することができた。前年度の単位を修得できなかった長期履修3年次生は演習Ⅱを再履修し、単位を修得した。また、特論Ⅱ、演習Ⅰ・Ⅱでは、聴講生1名が加わったことにより、活発なディスカッションが展開され、いっそう学びを深めることができた。前年度、認定試験不合格となった精神看護専門看護師を目指している修了生1名は、今年度も合格が叶わなかった。

以上のことから、達成度は70%程度である。

基礎看護学・看護管理学領域：今年度、看護管理学領域に入学した学生は看護管理学特論と看護管理学演習を通して、研究課題に関する文献検討やディスカッションを行い、学習を深めることができた。そしてその学びを踏まえ、研究課題の明確化を図ることができた。2名の修了生は学位論文を学会発表することができた。以上のことから、達成度は70%程度と思われる。

地域活動看護学領域：今年度は1名の学生が希望した施設でフィールドワークを行い、これまでの学修を統合し今後の専門職としての方向づけを考察することができ、演習Ⅱの単位を取得した。長期履修の3年次生1名は量的研究に取り組み、研究の基本的プロセスを学修し学位を取得した。さらに、次年度の学会発表に向けて抄録を作成した。80%の達成度と考える。

2-4. 次年度改善計画（達成度を踏まえた次年度目標）

成人看護学領域：成人看護学では、広い成人の学習内容をカバーするため、学外の講師の招聘も視野に入れ学外から成人看護学分野の講師を招聘し、さらに広い学習範囲を網羅できるよう構成していく。次年度2年生となる3名と新規入学者2名を迎え、学年を超えた議論の場と学びあいの場を確保できるようにしたい。がん看護学分野は令和4年から38単位での再開講をスタートする。新メンバーでこのコースの順調な開始を目指す。新入学生に向け、さらに互いの学習が深まるようなコースとしたい。現在新規開講にあたり2名の入学者、1名のコース変更学生の受け入れ、さらに科目等履修生を迎え、学習内容を精査しながら、学修一コースの内容を充実させられるように評価しながら進める。

小児看護学領域：次年度も引き続き修了生の修士論文の論文文化など、研究のフォローアップを行っていく。修士2年生

については、演習Ⅱにおける着実な論文作成のプロセスを踏むことにより、修士論文の完成を目指す。また、実際に学会発表体験を行い、学会発表のポスター作製など、学会発表における手順を指導していく。

精神保健看護学領域：2年次生は、実習Ⅲ・Ⅳに向けて、精神保健看護学に関する高度実践看護師に求められる知識・技術をさらに深化させることができるよう、習熟度を細やかに評価しながら進めていく。また、課題研究に計画的に臨み、論文作成のプロセスを着実に進めていけるよう指導助言を行う。前年度、CNS 認定試験に合格できなかった1名の修了生に対して、引き続きフォローアップ研修を継続していく。

基礎看護学・看護管理学領域：次年度については、倫理審査の承認後、研究の基本的なプロセスを踏まえて、学位論文の作成をめざす。また、昨年の学習の成果である文献検討について学会発表を行い、学習成果を伝えるプレゼンテーションの方法などについても支援し、学習が深まるようにする。

地域活動看護学領域：次年度は、1名が倫理審査の認定、学位論文の作成と学位取得をめざすため、研究の基本的なプロセスを学習できるよう指導していく。令和6年度には新入生を迎えられるよう広報活動をしていく。

3. 研究 学部報告に同じ

4. 診療 該当なし

5. その他 学部報告に同じ

6. 業績 学部報告に同じ

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

今年度38単位のがん看護高度実践看護師教育課程を開講し、高度実践看護師教育課程は精神看護と合わせて2コースとなったため、これらのカリキュラムの円滑な運用に努めた。

学生の修了後の学びを継続することを目的に、修了生を対象とする公開講座の開催を改善計画にあげていたが、第1回の修了生の会（仮称）を開催し、今後の会の在り方について、参加した修了生に話し合う場を提供することができた。また、専門看護師の資格取得に向け、コース修了生へのフォローアップ研修を行った。さらに、がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プラン「包括的ライフステージサポート医療人養成コース」を運営委員会事業としてWeb開催し、延べ79人の参加を得、組織的に実施することができた。

日続きコロナ禍にあったが、授業開始より対面での授業を行い、4月及び12月に研究計画発表会、11月に修了予定者による研究発表会を実施した。11月には、今年度から「オール埼玉医科大学研究の日」に看護学研究科の学生が発表をすることになり、学生1名が発表した。修了式は毛呂山キャンパスのカタロスタワーにて博士課程及び医科学、看護学の両修士課程合同で、指導教員の参加のもと修了生に学位記が授与された。また、研究倫理審査の申請準備について講師を招き、コロナ禍以前行っていたように集合形式で看護学研究科FDを実施した。第5次長期総合計画策定については、運営委員会委員でワーキンググループを構成して取り組み、計画の策定及び目標値の設定を行った。以上、感染症予防対策に十分配慮した上で、これらの学事を滞りなく進めることができた。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画（次年度目標）

第5次長期総合計画の今年度の目標値である学生定員充足率70%、学生の授業評価及び修了生アンケート回収率100%、看護学研究科FD参加率100%、教員の博士取得率70%、専門看護師資格取得のためのフォローアップ研修等戦略的情報発信5回を目指す。

3. 臨床腫瘍学（がんプロ）

1. 構成員

組織コーディネーター：解良 恭一（KAIRA, Kyoichi）：国際医療センター 呼吸器内科：教授

コース責任者：

がんゲノム医療人養成コース：堀江 公仁子（HORIE, Kuniko）：ゲノム医学研究センター 遺伝子情報制御部門：教授

包括的ライフステージサポート医療人養成コース（大学院コース）：解良 恭一（同上）

包括的ライフステージサポート医療人養成コース（インテンシブコース）：高橋 孝郎（TAKAHASHI, Takao）：

国際医療センター 支持医療科：教授

ユニット担当者：

外科ユニット担当：大崎 昭彦（OSAKI, Akihiko）：国際医療センター 乳腺腫瘍科：教授

内科ユニット担当：畝川 芳彦（SEGAWA, Yoshihiko）：国際医療センター 腫瘍内科：教授

放射線ユニット担当：加藤 真吾（KATO, Shingo）：国際医療センター 放射線腫瘍科：教授

看護ユニット担当：千田 みゆき（CHIDA, Miyuki）：大学院 看護学研究科：教授

緩和ユニット担当：高橋 孝郎（同上）

基礎がん研究ユニット担当：堀江 公仁子（同上）

実務担当者：

戸塚 典子（TOTSUKA, Noriko）：国際医療センター 乳腺腫瘍科：非常勤特任技術員

秋山 典子（AKIYAMA, Noriko）：国際医療センター 乳腺腫瘍科：非常勤特任研究補助員

2. 目的・目標

本プログラムは、文部科学省補助事業である『多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）養成プラン』関東がん専門医療人養成拠点事業（筑波大学、千葉大学、群馬大学、日本医科大学、独協医科大学、埼玉医科大学、茨城県立医療大学、群馬県立県民健康科学大学、東京慈恵会医科大学、上智大学、星薬科大学、昭和大学の12大学）として平成29年度に採択され、5ヶ年間の事業期間にて令和3年度をもって終了したプログラムを継承し、本年度は大学独自のプログラムとして引き続き遂行した。がん専門医療者の養成システム改善を目的として平成19年度より5ヶ年の間推進された「関東広域多職種がん専門家チーム養成拠点」補助事業および、日本のがん医療の中心で活躍できる国際感覚に富んだがん専門医療人・指導者を育成する大学院コースの構築を目的として平成24年度より5ヶ年間推進された「国際協力型がん臨床指導者養成拠点」補助事業による成果をさらに発展させ、近年求められている『がんゲノム医療の実用化』、『小児・AYA世代に対するがん対策』、『患者のライフステージに応じたがん対策（特に高齢者）』など、新たなニーズに対応し得るさまざまな職種のがん専門医療人を養成する大学院コースの構築を目的とし、大学院医学研究科臨床医学研究系専攻の臨床腫瘍学講座として設置している。

臨床腫瘍学講座には、旧がんプロ事業開始時に開設した腫瘍外科学指導者コース、集学的臨床腫瘍学指導者コース、放射線・粒子線腫瘍学指導者コース、包括的がん治療・ケア医療者・指導者コースがすでに設置されていたが、当事業開始を受け、平成29年度より新規に前述の大学院コースを設置した。それぞれのコースでは各分野における専門医取得に必要な知識と臨床技能、さらに今後がん医療の現場でリーダーとして活躍できるようなスキルを学ぶとともに、博士（医学）の学位取得に向けたカリキュラムで構成されている。

3. 活動実績

令和4年度の大学院コースへの新規入学者は残念ながら0名であった。在籍者に対しては、研究費補助や実験のアドバイスを等、効率的な学位研究支援を行っている。

また、令和5年2月から3月にかけて、「令和4年度包括的ライフステージサポート医療人養成コース（インテンシブコース）」を短期集中型のインテンシブコースとして開講し、本学を含む県内の医療機関・関連施設等から看護師、理学療法士、社会福祉士等、計44名の多職種の医療職者が参加した。

その他、年間5回の放射線腫瘍学セミナーおよび、11月には市民公開講座を開催し、地域医療者や一般市民に向け最新の医療情報の提供を行った。

なお、上記インテンシブコースおよび放射線腫瘍学セミナー、市民公開講座は、新型コロナウイルス感染症の感染状況を踏まえ、すべてオンライン開催とした。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

本大学院コースでは、臨床実習、学位研究を進めるにあたり、がん医療を専門とする国際医療センター包括的がんセンターおよび、埼玉医科大学病院、総合医療センターの3病院の各診療科並びにゲノム医学研究センターが協力・補完する体制がすでに確立されており、国際医療センターに付設された教員研究棟の実験機器やスペースを利用することもできる。

また、本コース所属学生の大半はがん専門診療科の医療職種の社会人大学院生であるが、がんプロにて運営するeラーニングシステムで受講することにより、日々臨床業務を執り行う中、有効に時間を使って専門知識を習得できているものと評価している。このeラーニングの科目は、本学で用意された講義コンテンツのみでなく他大学の講義コンテンツを聴講することも可能で、幅広い知識を習得することができる。また、前年度に続き、このeラーニングの

科目は本大学院コース専攻の学生のみならず、本学大学院医学研究科および看護学研究科の学生の単位取得にも有効に活用されたものと評価している。

また、上述のインテンシブコースの取組は、国際医療センター・支持医療科、精神腫瘍科、緩和ケアチームおよび、保健医療学部などの複数部署の連携によって行われ、様々なライフステージにあるがん患者の治療における多職種連携の更なる強化に貢献できたものとする。

なお、放射線腫瘍学セミナーにおいては、オンライン開催により、全国各地から参加者を集めることができるようになった。次年度以降もより多くの医療者に有益な知識を提供していけるよう開催形態についても検討しながら進めていく。

また、次年度は文部科学省の補助事業として新たながんプロ事業が開始される可能性があるが、その際は新たなテーマに即した内容を取り入れ、柔軟に対応していく必要がある。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

文部科学省の補助事業『多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材（がんプロフェッショナル）」養成プラン』関東がん専門医療人養成拠点事業は昨年度をもって終了し、本年度は本学独自のがんプロとして、引き続き活動を行ってきた。来年度もこれまで同様、広く広報活動を行い、大学院生のリクルートを積極的に推進し、がん専門医療人の育成に努めていく。eラーニングにおいては、学生に新鮮な講義を届けられるよう、講義のブラッシュアップをより強化する。

また、本年度同様各診療科と連携の上、各種セミナーを開催し、地域医療者との多職種連携の強化を図るとともに、学内および地域医療者、一般市民への医療知識の提供を行っていく。がん専門医療人を育成していくために、その社会における重要性だけでなく科学的観点から教育を強化していくため関東がんプロの施設を中心に連携強化をしながら育成できる育成できるプログラムを検討していく。

1. 教養教育（英語、物理、生物、化学、総合教育）

1. 構成員

<物理学>

向田寿光 (MUKAIDA, Hisamitsu) : 教授 : 運営責任者 : 研究員 : 教育員 : 指導教員(大学院) : 統計物理 : 博士
鈴木 正 (SUZUKI, Sei) : 准教授 : 研究員 : 教育員 : 指導教員 (大学院) : 物性理論・統計物理 : 博士
三島 智 (MISHIMA, Satoshi) : 講師 (R5年3月入職) : 研究員 : 教育員 : 指導教員 (大学院) : 素粒子論 : 博士
赤間啓一 (AKAMA, Keiichi) : 名誉教授
赤羽 明 (AKABANE, Akira) : 非常勤講師
勝浦一雄 (KATSUURA, Kazuo) : 非常勤講師

<化学>

森口 武史 (MORIGUCHI, Takeshi) : 教授 (R4年11月より) : 研究員 : 教育員 : 指導教員(大学院) : 有機化学 : 博士
土田 敦子 (TUCHIDA, Noriko) : 講師 : 研究員 : 教育副主任 : 量子化学 : 博士
村上 元 (MURAKAMI, Gen) : 講師 : 研究副主任 : 教育員 : 指導教員(大学院) : 神経科学 : 博士

<生物学>

山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 准教授 : 研究員 : 教育主任 : 脊椎動物の神経解剖学 : 博士
川村 勇樹 (KAWAMURA, Yuuki) : 講師 : 研究員 : 教育員 : 指導教員(大学院) : 微細形態学 : 博士
大間 陽子 (OMA, Yoko) : 講師 : 研究員 : 教育員 : 病態生化学 : 博士

<英語>

藤森千尋 (FUJIMORI, Chihiro) : 教授 : 研究員 : 教育員 : 指導教員(大学院) : 教育学・英語教育 : 博士
Chad Godfrey : 准教授 : 研究員 : 教育員 : CLIL and learner autonomy : 修士
種田佳紀 (OIDA, Yoshiki) : 講師 : 研究員 : 教育員 : 政治思想・医療倫理・英語教育 : 修士
伊澤宜仁 (IZAWA, Yoshihito) : 講師 : 研究員 : 教育員 : 英語学 : 修士
池島宏子 (IKESHIMA, Hiroko) : 非常勤講師
稲川健太郎 (INAGAWA, Kentaro) : 非常勤講師
狩野緑 (KANO, Midori) : 非常勤講師
Martin Woodall : 非常勤講師
Stephen O' Toole : 非常勤講師
Frances Gleeson : 非常勤講師
Steven Morris : 非常勤講師
Lauren Anderson : 非常勤講師
Nathan Taylor : 非常勤講師
Jeremy Owen : 非常勤講師

<総合教育>

中平健祐 (NAKAHIRA, Kensuke) : 准教授 : 研究員 : 教育員 : 指導教員(大学院) : 分子神経生物学 : 博士
菅理江 (SUGE, Rie) : 准教授 : 研究主任 : 教育員 : 指導教員 (大学院) : 行動神経科学 : 博士
米岡裕美 (YONEOKA, Yumi) : 准教授 : 研究員 : 教育員 : 大学院教員 (大学院) : 生涯学習論 : 博士
林禅之 (HAYASHI, Yoshiyuki) : 助教 : 研究員 : 教育員

2. 教育

教養教育基本学科は、教養教育部門の新規設立に併せ、H25年度に大学内基本学科として組織された。医学教育センター下の教養教育部門としての活動と、基本学科としての教養教育の活動を明確に分けることは難しい。そこで以下では教養教育の「研究実績」を中心に報告し、「教育実績」については、医学教育センター組織内の「教養教育部門」において報告する。

3. 研究

教養教育は、大まかに「物理学」「化学」「生物学」「英語」「総合教育」の5つのグループに分かれている。

以下に、個々のグループの活動実績を記載する。

3-1. 目的・目標

<物理学>

- 1) 医学生への放射能・放射線に対する意識・理解度調査
- 2) 物理学史（明治期・大正期における物理学受容過程）：わが国が西洋型自然科学（物理学）を建設時（明治期）及び発展期（大正期）における物理学受容過程を明らかにする
- 3) 孤立系における熱力学第二法則について研究を進める
- 4) レプリカ対称性の破れと有効ポテンシャルの非解析性について研究を進める
- 5) 量子アニーリングの性質を解明する
- 6) 孤立した量子多体系および開放量子多体系の時間発展に関する理論を作る

7) ①複合体の競合選択による自然情報の自己集積および②画面言語による電子教科書の研究を進める
以下、3-2～3-4の1)～7)は本節の1)～7)の研究に対応する。

<化学>

- ・森口武史：無機物質（ヒドロキシアパタイト）を利用した水処理剤の開発
- ・土田敦子：量子化学計算による生体に関連する有機分子の化学変化の追跡と分子設計
- ・村上 元：母体免疫活性化によるドーパミンシステムへの影響の解析

<生物学>

生物学では、各教員が独自にテーマを設定しながら、共同研究も行っている。これにより生物学の広い領域をカバーすることができている。以下 3-2～3-4 に、教員個々について記載する。

<英語>

ESP (English for Specific Purposes) の考え方にに基づき、医学英語カリキュラムの開発と実践に関連して情報交換を行ないながら、4名の専任教員それぞれの研究テーマに応じて、国内外の学会や研究会での発表、紀要や学会誌への投稿、及び図書出版などを行なっている。具体的な各自の研究に関しては以下 3-2～3-4 に記載する。

<総合教育>

- ・中平健祐：Kチャンネルの局在と機能の解明、効果的な初年時教育・基礎医学教育の方法検討
- ・菅理江：初期学習における脳の可塑性のメカニズムの解明
- ・米岡裕美：専門職連携教育及び専門職連携実践、キャリア教育の方法論的検討、専門職教育政策の研究
- ・林禅之：意識の道徳的重要性の検討、情動および合理性と道徳エンハンスメントの関係の検討、脳オルガノイド研究の倫理的問題の整理検討

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

<物理学>

- 1) 医学生放射能・放射線に対する意識・理解度調査：赤羽明、渡辺修一、森茂久、柴崎智美、鈴木健之、荒木信夫(埼玉医大)、飯塚裕幸(東京大学)
- 2) 物理学史(明治期における物理学受容過程)：赤羽明(埼玉医大)、玉置豊美(株数理設計研)、高橋浩(群馬大院理工)、所澤潤(立正大学心理学部)
- 3) 孤立系の熱力学第二法則：鈴木 正(埼玉医大)、糸井千岳(日本大学)
- 4) レプリカ対称性の自発的破れと有効ポテンシャルの非解析性：向田寿光、鈴木 正(埼玉医大)
- 5) 量子アニーリング：鈴木 正(埼玉医大)、西森秀稔(東京工業大)、D. Lidar (University of Southern California)、A. D. King 他(D-Wave Systems)
- 6) 量子多体系の時間発展：鈴木 正(埼玉医大)、押山広樹、柴田尚和(東北大学)
- 7) ①クォークグルオンクォンタ、②画面言語による電子教科書：赤間啓一(埼玉医大)

<化学>

- ・森口武史：太平化学産業(株)との共同研究(Ti処理型アパタイトを合成とその光触媒性能について)
- ・土田敦子：お茶の水女子大学、近畿大学、奈良教育大学との共同研究

<生物学>

- 1) 山崎芳仁：脊椎動物の神経解剖学
- 2) 川村勇樹：脊椎動物の神経解剖学 筋細胞に存在する巨大タンパク質コネクチンの多様性についての探索
- 3) 大間陽子：ポリアラニン伸長疾患の研究(医学部生化学で研究を行っている。また、東海大学工学部、産業技術総合研究所との共同研究である)

<英語>

- ・藤森千尋：中央教育研究所(言語教育分科会)にて「言語教育における高大接続」に関する検討
- ・種田佳紀：意識の道徳的重要性の学際的研究

<総合教育>

- ・中平健祐：Kチャンネルの局在と機能の解明、効果的な初年時教育・基礎医学教育の方法検討
- ・菅理江：(1)ヒヨコの刻印付けを用いた初期学習のメカニズムに関する研究(2)上皮性ナトリウムチャンネルの機能に関するカエル幼生を用いた検討(生理学)(3)ナノ粒子を用いた脳腫瘍への新たなドラッグデリバリーシステムの構築(東洋大学・中央研究施設)(4)脳室周囲白質軟化症に関するモデル動物を用いた研究(小児科・山口大学)(5)恐怖条件付け記憶に対する急性断眠ストレスの影響(生化学)
- ・米岡裕美：専門職連携教育の質保証に関する研究(埼玉県立大学、城西大学、日本工業大学との共同研究)、医学部生のキャリア教育の方法の検討

- ・林禪之：ヒト脳オルガノイド研究に伴う倫理的課題の研究（広島大学、神戸大学、理化学研究所）、意識の道徳的重要性の学際的研究（東京都立大学）

3-3. 達成度評価

<物理学>

- 1) 医学系学生の放射能・放射線に対する意識・理解度調査：これまでに得られた調査データの分析を継続実施した。
- 2) 物理学史：群馬県内の師範学校実地授業研究会紀要から、大正新教育改革の先駆となる児童実験の内容が見出された。
- 3) 前年度までに達成したランダム行列模型におけるプランクの原理の証明を拡張した。また、一般の非可積分系において、固有状態熱化仮説のもとでのプランクの原理を証明した。
- 4) ランダムエネルギー模型の高温相における自由エネルギーの有限サイズ補正の計算を行う準備を進めた。
- 5) 前年度に投稿していた論文が査読を経て出版された。
- 6) 前年度に投稿していた論文が査読を経て出版された。
- 7) ①クォークグルオンクラスター形成における color-singlet 統計効果について検討した。②これまでに蓄えた講義スライドをもとに、画面言語による Web 上の電子教科書を開発して公開し、未来の教科書のありかたとして提案した。

<化学>

- ・森口武史：種々の条件検討の結果、光触媒作用は見られた。
- ・土田敦子：生体関連物質の反応機構の追跡と医薬品の合成基盤となるゼルンボンの反応性に関する解析についてそれぞれ一定の成果が得られた。
- ・村上 元：母体免疫活性化によるドーパミン神経細胞への影響のメカニズムに関して一定の知見が得られた。

<生物学>

- 1) 山崎芳仁、川村勇樹：脊椎動物の神経解剖学：日本固有種であるアカハライモリを材料として、脳内のグリア線維性酸性タンパク質（GFAP）について研究している。GFAP 様遺伝子の全配列を得るために、RACE 法を用いた実験を継続している。それと同時に、遺伝情報より推測されるアミノ酸配列の情報をもとに抗体を作成し、この抗体が標識するタンパク質についての解析を進めている。
- 2) 川村勇樹：動物界の筋細胞に広く存在する巨大タンパク質コネクチンに注目し、それが微細形態において、どのように組込まれて機能しているか、透過型電子顕微鏡を使って研究を進めている。平成 22 年からクラゲ筋組織コネクチン様タンパク質に注目し、その存在を追求している。本研究は山形大学、理学部、生物学科および、山形県、鶴岡市立加茂水族館との共同研究である。また、医学教育の立場から、学生の心肺蘇生法、一次救命処置（BLS）の効果的な習得とその評価法に関する研究も進めている。
- 3) 大間陽子：ゲノム中の繰り返し配列が伸長して起こる遺伝性疾患の研究を行っている。ポリアラニン伸長疾患の原因タンパク質を哺乳類培養細胞、ゼブラフィッシュ受精卵、アフリカツメガエル初期胚で発現させ、疾患機構の解明を目指している。

<英語>

- ・藤森千尋：第二言語習得研究から得られる知見を外国語としての英語教育という日本の英語学習の文脈に応用し、教育心理学的アプローチで、言語学習状況を分析する研究を行っている。医学英語カリキュラム開発の成果についてデータをまとめ直し、分析した結果を、日本教育心理学会とアメリカ応用言語学会において発表した。
- ・Chad Godfrey：実践的な指導に関心があり、CLIL（Content and Language Integrated Learning）の効果的な指導法の研究をおこなっている。CLIL に対する研修の実施や教材開発と調査研究に取り組んだ。また、国際交流センターの留学生プログラムの企画・運営などにおいて中心的な役割を果たした。
- ・種田佳紀：2022 年度では、引き続き科学研究費による意識と道徳的地位の関係についての研究をすすめ、埼玉医科大学学内での研究シンポジウムを主催し、20 名程度の研究者にご参加いただいた。教育研究活動については、行動科学と医療倫理ユニットで高次脳機能障害の当事者を招いての対面形式でのワークショップを開催し、この内容を教育研究として発表する準備を引き続き進めている。また、国際交流センターでは語学研修の取りまとめを引き続き担当し、4 年ぶりの実施を実現し、全日程引率を担当した。また、倫理審査業務では、大学倫理審査委員会の他、国際医療センター臨床研究 IRB の委員としても活動した。
- ・伊澤宜仁：言語表現のデータベースを使って、書きことばや話しことばなど、言語が主体や主題によってどのように変化するかを研究している。また、本学の医学英単語データベースにも活用されているように、接辞や論文での使用頻度といったメタ情報を提示して、学生の学習効率化を図っている。また、カリキュラム室、学力増進室、試験の信頼性・妥当性を検討する分科会の室員としてカリキュラム実施運営の仕事にも携わっている。

<総合教育>

- ・中平健祐：少人数グループワークにおいて、対面実習と遠隔演習を相互に組み合わせることで、学習指導の効率化と質

の向上を図った。

- ・菅理江：(1)ヒヨコの刻印付けに関する行動実験・免疫組織実験を実施（科学研究費補助金基盤研究(c)：初期学習における記憶の固定化のトリガーを探る）。(2)ウシガエルを用いた行動実験による検討の論文作成中 (3)脳腫瘍へのアプローチに関する投稿準備中。(4)低酸素条件でのマーマセット新生児の免疫組織実験は結果をまとめ日本生理学会で発表(5)断眠ストレスによる恐怖条件づけの成績低下と扁桃体のオシレーションの減弱に関する論文を投稿中。
- ・米岡裕美：キャリア教育研究において、本学のキャリアデザインの授業の効果の検証を行った。専門職連携実践については県内の職能団体と連携し、相互理解を深める方法を開発し、試行を実施した。
- ・林禅之：脳オルガノイドの意識についての共同研究を広島大学や神戸大学のグループと引き続き行った（コメンタリ論文が国際誌にアクセプトされ、次年度公刊予定である）。脳オルガノイドの意識と倫理について東京都立大学の佐藤亮司氏と共同研究し、成果の一部を国際ワークショップにて口頭発表した。このプロジェクトの成果として、2本の論文を執筆したので、次年度早めに投稿する。道徳エンハンスメントについての論文を引き続き執筆しつつある。倫理学者が持つ意識についての認知バイアスの存在を指摘し、意識の倫理学の方法論を問い直す論文を執筆しつつある。小学生向けのクリティカルシンキング指南本を分担執筆中である。学内でミニシンポジウムを開催し、報告書を「埼玉医科大学雑誌」に投稿した。

3-4. 次年度改善計画

<物理学>

- 1) 医学生の放射能・放射線に対する意識・理解度調査のデータ分析を実施したが、次年度では分析結果の詳細検討を予定。
- 2) 物理学史：理科児童実験における仮説の導入の実態調査を実施したが、次年度は仮説の意義の検討を予定。
- 3) ランダム行列模型におけるプランクの原理の証明についての結果を論文にまとめる。
- 4) ランダムエネルギー模型の自由エネルギーの有限サイズ補正を求める。
- 5) プロジェクトが終了したため、次年度の研究計画はない。
- 6) 有限温度の環境中の量子ビットの振る舞いについて数値計算による研究を進める。
- 7) 画面言語による Web 上の電子教科書の開発を進める。

<化学>

- ・森口武史：さらに Ti 処理型アパタイトについて検討を進める。
- ・土田敦子：いずれの研究も滞りなく進展している。次年度も継続して実施する。
- ・村上 元：計画に沿って引き続き実験を行う。

<生物学>

山崎と川村は、継続したテーマで研究を続けている。

大間：予定通りに進行している。次年度も、研究計画に従って進めていく予定である。

<英語>

- ・藤森千尋：医学英語カリキュラム開発と実践については一通り完成したため、カリキュラム評価についての研究および正課外プログラムの開発および実践研究を続ける。また、次のテーマとして、メタ認知開発および学習の転移についての研究に取り組む予定である。
- ・Chad Godfrey：CLIL の授業で、より自立した学習者となる機会を学生に提供したい。そのために、協働して、調べ、学んだことを共有する機会を十分に与える。また、オンライン学習を上手く取り入れる方法について検討する。
- ・種田佳紀：新型コロナ感染拡大の影響で研究計画に少なからぬ影響があったが、前述のように、医療倫理についても、国際交流センターについても、新しい試みを 2022 年度に行っており、その成果を 2023 年度は学会等で発表できるものと思われる。
- ・伊澤宜仁：研究論文などのフォーマルな英文における論理構成や頻出表現をふまえて、Writing の授業研究に取り組んだ。また、症例報告 (NEJM) のデータベース化、および特徴表現の分析も行った。今後は、医学論文の構造や特徴語をさらに分析することで、医学英語全般の授業に活用する。

<総合教育>

- ・中平健祐：実習・演習の e-ラーニングシステムと他の方法を組み合わせることで双方向性とグループワークの共同作業機能を持たせ、質の向上を図りたい。
- ・菅理江：実験継続(科学研究費補助金基盤研究(c)：初期学習における記憶の固定化前の記憶表象形成メカニズムを獲得)と採取したサンプルのデータの解析をすすめて行きたい。
- ・米岡裕美：専門職連携実践及び医師のキャリア教育について、学外の研究者とも連携しながら、実践の蓄積及び成果の検証を行いたい。
- ・林禅之：次年度は、現在の研究課題を継続・発展させながら、成果としてさらに結実させることを目標とする。

4. 診療

「該当なし」

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

「該当なし」

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

<物理学>

- ・向田寿光：Journal of Physics A: Mathematical and Theoretical 査読 1 件
- ・鈴木正：Science Advances 査読 1 件、Physical Review Letters 査読 1 件、Philosophical Transactions of the Royal Society A 査読 3 件、Physical Review A 査読 3 件、Physical Review B 査読 1 件、Physical Review Letters 査読 1 件、European Physical Journal B 査読 1 件、Journal of Physics A 査読 1 件、Communications Physics 査読 1 件、Physics Reports 査読 1 件、Nature Communications 査読 1 件
- ・勝浦一雄：物理教育 査読 1 件

<化学>

- ・森口武史：Phosphorus Letter (日本無機リン化学会) 編集委員、Journal of Colloid and Interface Science (Elsevier) 査読 1 件、Colloids and Surfaces A (Elsevier) 査読 1 件
- ・土田敦子：Journal of Molecular Modeling 査読 3 件
- ・村上元：Review Editor for Frontiers in Neuroscience、Review Editor for Frontiers in Endocrinology

<生物学>

- ・川村勇樹：日本シミュレーション医療教育学会誌 査読 1 件

<総合教育>

- ・菅理江：Frontiers publishing group Reviewing Editor

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

<物理学>

- ・学習院大学非常勤講師 (数学) (向田寿光)
- ・日本大学理工学部非常勤講師 (統計物理学演習) (鈴木正)
- ・東洋大学理工学部非常勤講師 (物理学実験) (鈴木正)
- ・成蹊大学非常勤講師 (物理学) (赤間啓一)

<化学>

- ・日本無機リン化学会評議員 (森口武史)

<生物学>

- ・日本シミュレーション医療教育学会評議員 (川村勇樹)

<英語>

- ・明治大学・総合数理学部非常勤講師 (英語) (Chad Godfrey)
- ・中央教育研究所 (鳥飼玖美子研究主任) 言語教育研究グループ 研究員 (英語) (藤森千尋)
- ・55 visio ダイバーシティ研修会 講師 (英語) (種田佳紀)

<総合教育>

- ・日本生理学会評議員 (中平健祐・菅理江)
- ・早稲田大学・教育学部非常勤講師 (教職課程) (米岡裕美)
- ・高崎経済大学・非常勤講師 (ファシリテーション演習) (米岡裕美)
- ・彩の国連携力育成プロジェクト (大学間連携事業) 埼玉医科大学サブリーダー (米岡裕美)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

<物理学>

- ①Rajak A, Suzuki S, Dutta A and Chakrabarti BK “Quantum annealing: an overview” Phil. Trans. R. Soc. A. 381, 20210417, 2022
- ②Suzuki S, Oshiyama H and Shibata N “Statistics of the number of defects after quantum annealing in a thermal environment” Phil. Trans. R. Soc. A. 381, 20210411, 2022
- ③King AD, Suzuki S, Raymond J, Zucca A, Lanting T, Altomare F, Berkley AJ, Ejtemaee S, Hoskinson E, Huang S,

- Ladizinsky E, MacDonald A, Marsden G, Oh T, Poulin-Lamarre G, Reis M, Rich C, Sato Y, Whittaker JD, Yao J, Harris R, Lidar DA, Nishimori H, and Amin MH “Coherent quantum annealing in a programmable 2000-qubit Ising chain” Nat. Phys. 18, 1324-1328, 2022
- ④Oshiyama H, Suzuki S, and Shibata N “Classical simulation and theory of quantum annealing in a thermal environment” Phys. Rev. Lett. 128, 170502, 2022
- ⑤Suzuki S (Invited Talk) “Classical simulation and theory of quantum annealing in a thermal bath” ICTP Conference of Adiabatic Quantum Computaton/Quantum Annealing, 23 June 2022
- ⑥鈴木正「熱浴の影響を受けた量子アニーリングの理論とシミュレーション」量子アニーリング及び関連技術研究会、2023年2月21日、TKP ガーデンシティ PREMIUM 田町
- ⑦糸井千岳、糸井充穂、鈴木正「明解 熱力学」共立出版（2023年3月25日）
- ⑧所澤潤、高橋浩、赤羽明、玉置豊美「神戸伊三郎と科学的発見の論理：当時の論理学からの影響」日本物理学会2022年秋季講演会議、2022年9月、オンライン
- ⑨赤間啓一「quark-gluon cluster の結合 entropy」日本物理学会2022年秋季大会、2022年9月8日、岡山理科大学
- ⑩赤間啓一「画面言語で理解スムーズ 動く電子教科書 力学」日本物理学会2023年春季大会、2023年3月25日、オンライン

【総数：著書1件、論文4件、学会発表5件、講演1件】

<化学>

- ①森口武史、岡野浩明、中川卓哉「チタン処理型アパタイトを触媒とした水中におけるメチルオレンジの光分解」第31回無機リン化学討論会、2022年9月30日、徳島大学
- ②森口武史、中川卓哉「ビスマス処理型アパタイトを触媒とした水中における色素化合物の光分解反応」日本化学会第103春季年会、2023年3月23日、東京理科大学
- ③Yamabe S, Tsuchida N, Yamazaki S “A DFT study on the tautomerization of vitamin B3 (niacin)” Compt. Theor. Chem., 1214, 113800, 2022
- ④Yamabe S, Tsuchida N, Yamazaki S “A DFT study of the active role of the phosphate group of an internal aldimine in a transamination reaction” Org. Biomol. Chem., 20, 5334-5341, 2022
- ⑤土田敦子「ゼルンボンの複雑な反応を計算化学で検証する2」第17回ハナショウガ研究会、招待講演、2022年8月29日、オンライン
- ⑥土田敦子、柏崎玄伍、北山隆「アレン型ゼルンボンを出発とする多環式化合物の合成経路に関する量子化学的研究」日本化学会第103春季年会、2023年3月23日、東京理科大学

【総数：論文2件、学会発表3件、講演1件】

<生物学>

- ①川村勇樹、佐藤義文、清水美砂子、足助和真、大西京子、杉山智江、高平修二、辻美隆、石橋敬一郎、山田泰子、森茂久「BLS 演習における動画撮影の効果」第15回日本医療教授システム学会総会・学術集会、2023年3月、東京
- ②川村勇樹、佐藤義文、大西京子、清水美砂子、高平修二、辻美隆、山田泰子、石橋敬一郎、森茂久「医学部2年生による一次救命処置の自己評価」第10回日本シミュレーション医療教育学会学術大会、2022年10月、京都大学 オンライン
- ③川村勇樹、辻美隆、石橋敬一郎、高平修二、井上勉、清水美砂子、佐藤義文、大西京子、山田泰子、石橋敬一郎、森茂久「初期研修医の導入研修で行った胸骨圧迫の評価」第53回日本医学教育学会大会、ポスター発表、2022年8月、群馬

【総数：学会発表3件】

<英語>

- ①Godfrey C, Anderson L, Gleeson F, O’Toole S, Deshpande G and Oida Y “CLIL Explorations” Sanshusha (March 2023)
- ②Godfrey C, Anderson L, Gleeson F, O’Toole S, Deshpande G and Oida Y “CLIL Explorations (Teacher’s Guide)” Sanshusha (March 2023)
- ③種田佳紀「生み出したものの責務：義務論から考える脳オルガノイドの倫理」埼玉医科大学 ミニシンポジウム「脳オルガノイドが提起するもの」2022年12月15日
- ④林禅之、種田佳紀、村越隆之「シンポジウム報告：脳オルガノイドが提起するもの」埼玉医科大学雑誌49(2):53-61、2023
- ⑤伊澤宜仁「授業、対面やめるってよ：医学英語の遠隔授業における当事者の視点から」『シリーズ学びとビーイング2 授業づくり、授業デザインとの対話』pp.110-113、2023、りょうゆう出版

- ⑥藤森千尋「医学英語カリキュラムに関する学習成果の分析」第64回日本教育心理学会総会、ポスター発表、2022年8月、オンライン
- ⑦藤森千尋「学習者中心の学びにおける教師の役割：適切な場面での適切な働きかけ」『自律した学習者を育てる言語教育の探究』No.99、pp.26-40、2023、中央教育研究所
- ⑧Fujimori C “Curriculum Assessment of Content-Based ESP Curriculum: Value-Added Analyses Focusing on Measuring Improvements in English Proficiency” AAAL (American Association of Applied Linguistics), March 19, 2023, Portland Marriott Hotel Downtown Waterfront, Portland at Oregon, USA.

【総数：論文2件、学会発表2件、学内研究発表1件、書籍寄稿1件、教科書・ガイドブック各1件】

<総合教育>

- ①Suge R, Tao T, Yamanouchi H, Kamei Y, Koshiba M “Effects of hypoxic stress on periventricular glial cells in neonatal common marmosets” 第100回日本生理学会、ポスター発表、2023年3月、京都
- ②Tao T, Suge R, Yamanouchi H, Kamei Y, Koshiba M “Quantitative Evaluation of Glial Cells under Hypoxic-ischemic Stress Using the Common Marmoset Neonatal Model” 16th International Neuroscience and Biological Psychiatry Regional (Asia) ISBS Conference “Stress and Behavior” 口頭発表、2022年9月、オンライン
- ③米岡裕美、柴崎智美、永島雅文、高橋美穂、森茂久「キャリア教育の学修効果—医学部1,2年生の学びの比較—」第54回日本医学教育学会大会、ポスター発表、2022年8月、群馬
- ④柴崎智美、米岡裕美、金田光平、高橋幸子、柴崎由佳、杉山智江、石橋敬一郎、森茂久、田口孝行、勝木祐二「「空間やモノ、体験、関係性のデザイン」に関する教材開発」第54回日本医学教育学会大会、ポスター発表、2022年8月、群馬
- ⑤Sawai T, Erler A, Hayashi Y, Sakaguchi Y, and Isa T. “Ethics of Human Brain Organoid Transplantation in Animals” 16th World Congress of Bioethics 2022, Online. July, 2022.
- ⑥Hayashi, Y. “Human Brain Organoids and Creature Consciousness” International Bioethics Symposium “Ethical, Legal, and Social Issues of Human Brain Organoid Research and Application,” Kyoto. December 2nd, 2022.
- ⑦林禪之、「脳オルガノイドの何が問題なのか」ミニシンポジウム「脳オルガノイドの提起するもの」、2022年12月15日、埼玉医科大学
- ⑧林禪之、種田佳紀、村越隆之「シンポジウム報告：脳オルガノイドが提起するもの」埼玉医科大学雑誌 49(2):53-61、2023

【総数：論文1件、学会発表7件】

6-2. 獲得研究費

<化学>

- ・村上元：文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C)「ドーパミン神経細胞に発現するMHCに着目した発達障害の神経機構の解明」(課題番号20K07089) 研究代表者 1,430,000円

<総合教育>

- ・林禪之：公益財団法人三菱財団人文科学研究助成 (R4年4月～R5年3月)「ヒト脳オルガノイド研究に伴う倫理的課題の研究」研究分担者

6-3. 受賞

「該当なし」

6-4. 特許、実用新案

「該当なし」

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

「該当なし」

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

<物理学>

例年、教育と研究のバランスのとれた業務を目指しているが、今年度もその目標は達せられたと考える。

<化学>

教育面では、新カリキュラム体制5年目となり、Web Class を活用した講義、実習内容の充実化、プレゼンテーションに更に力を入れた。研究面においては、各人が日々努力を続けている。

<生物学>

生物学は主に1年生を対象として、授業および様々な学習・生活支援を担当しており、学生の成長を促していると自己

評価している。また、研究面でも努力を続けている。

<英語>

専任4名がそれぞれの研究上の専門分野や教育上の経験を生かし、安定して、スムーズな運営がなされた。1年から4年までの専門内容と英語運用スキルとを連動させた内容・言語統合型の英語教育を効果的に展開できた。特に1年の医学英語の授業に関しては、各サブユニットリーダーが密に連絡を取り合って協力し合い、オンライン授業を効率良くスムーズに進めるとともに、一部、可能などころで対面授業を組み合わせ、対面と遠隔のそれぞれの良さを生かした教育活動に取り組むことができた。また、カリキュラム委員会内に「医学英語カリキュラム検討ワーキンググループ」を立ち上げ、正課を補完するための正課外プログラムを計画・試行した。

更に、医学英語の授業のみならず、言語系教員として日本語における思考力や表現力を涵養するユニットにも参画したり、行動科学と医療倫理ユニットでの倫理系の科目を担当したりするなど、全体として学生の言語能力及び医学関連知識の学力向上に貢献した。

<総合教育>

今年度は中平、菅、米岡、林がそれぞれの担当領域について活動をおこなったほか、感染拡大防止の遠隔授業も3年目となり、より効果的な遠隔授業手法の開発と運用をおこなった。総合教育として様々なタイプのユニットの運営に関わってきたことが功を奏した。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

<物理学>

教育と研究のバランスのとれた業務が遂行できるよう、続けて努力する。

<化学>

教育面では、さらに Web Class の活用および実習内容の見直しにより講義内容の充実をはかる。また、学年全体の学力の底上げのために成績不良者の別途対応を検討する。研究面においては、研究目標を達成できるよう各人が努力を重ねていく。

<生物学>

授業内容の改善、学生の成績向上のための仕組みを工夫している。研究においては、各人が努力を重ねていく。

<英語>

教育に関しては、対面授業が全面的に再開するのに伴い、遠隔授業ではできなかったような、その場その時の学生の状況に応じて、よりきめの細かい学習面および生活面での指導を行ないたい。また、オンライン授業において獲得した教育システムの利用技術や開発した教材を今後も効果的に利用する方法を考えたい。研究面では各学会活動も対面形式に移行しており、各自のテーマや研究計画に沿って更に活発に取り組みたい。

<総合教育>

専門性の異なるメンバーの意見を合わせて新しいものをつくりだす活動を、今後も積極的に続けたいと考えている。次年度は、遠隔授業で培った技術を対面の授業と組み合わせて効果を拡大する手法を中心に改善をおこなう。

2. 解剖学

1. 構成員

永島雅文 (NAGASHIMA, Masabumi) : 教授 : 運営責任者 : 教育主任、研究員 : 代表指導教員 (大学院) : 臨床解剖学、伝導路の発生 : 博士

藤田恵子 (FUJITA, Keiko) : 教授 : 教育員、研究主任 : 指導教員 (大学院) : 細胞生物学、血管新生 : 博士

高野和敬 (TAKANO, Kazuhiro) : 講師 : 教育副主任、研究員 : 指導教員 (大学院) : 発生生物学 : 博士

栗崎知浩 (KURISAKI, Tomohiro) : 講師 : 教育員、研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 細胞生物学 : 博士

松本英子 (MATSUMOTO, Hideko) : 助教 : 教育員、研究員 : 大学院教員 (大学院) : 博士

青地英和 (AOCHI, Hidekazu) : 助教 : 教育員、研究員 : 修士

助手 : 猪股玲子 (INOMATA, Reiko)、亀澤一 (KAMEZAWA, Hajime)、松澤駿作 (MATSUZAWA, Shunsaku)

嘱託職員 : 矢部勝弘 (YABE, Katsuhiko)、藤田一正 (FUJITA, Kazumasa)

非常勤講師 : 佐藤智美 (SATO, Tomomi)

大学院博士課程研究生 : 市ヶ谷武生 (ICHIGAYA, Takeo)、霞孝行 (KASUMI, Takayuki)

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

【卒前教育】

「人体の構造と機能1、2」コース、「細胞生物学」コース、「良医への道1、2」コース(臨床推論・医学英語・キャリアデザイン)、「医科学への道すじ」コースおよび6年生の講義を担当した。コースの概要はシラバスの記載に譲る。

【卒後教育】 該当なし

【大学院教育】

大学院医学研究科博士課程の共通科目(実用実験医学特別講義と実用実験医学特別実習)の授業担当。各科目の概要はシラバスの記載に譲る。

2-2. 教育実績(担当者)

【卒前教育】

令和4年度は令和3年度に引き続き、新型コロナウイルスの感染リスクに配慮した。なお、すべての講義・演習はオンライン授業により実施した。

1年生

人体の構造と機能1コースでは、1学期の骨学実習は全体を2グループに分けて学生の密度を半減させた上で、観察時間を短縮し、学生・教員ともにマスク、サージカルグローブを着用し実施した。令和4年度は3学期の身体診察実習やプラスティネーション標本観察実習を含めて、感染症対策を徹底したうえで、対面で実施した。

1年生の「人体の構造と機能1」では、永島がコースディレクター、栗崎がコースディレクター補佐を務め、3ユニットのディレクターは栗崎、藤田、高野が務めた。本コースの一般目標は、「人体の構造と機能を学習する上で基幹となる概念を理解する」、「ヒトの体の全体像とそのなりたち(発生と進化)に基づいて把握する」の2点である。特に体験学習として組織学標本および動物発生学標本の顕微鏡観察、骨標本の観察、身体診察の体験などを実施した。「細胞生物学」コースでは、栗崎が「細胞生物学3」のユニットディレクターを務めたほか、20章「細胞のつくる社会: 組織、幹細胞」を担当した。「医科学への道すじ」コースでは、「医科学入門」ユニットで栗崎がユニットディレクター補佐を務めた。「医科学の探索」ユニットでは、青地・松本がテュータを担当した。

2年生

人体の構造と機能2コースでは、構造系実習は感染防止対策を施して実施した。密を避けるためにクロードベルナルホールで説明講義を行い、実習室では従来よりも空調の換気量を増やした上で、大型扇風機を7台使用した。また学生・教員ともにマスク、サージカルグローブ、サージカルキャップ、フェイスシールドを着用した。また、実習実施時間は14:45~17:05を目処とし、実習時間を厳格に管理した。

また、顕微鏡実習は感染防止のため、時間を短縮し、学生を2グループに分散させてカタロスタワーの実習室で実施した。

2年生の「人体の構造と機能2」では、「構造系実習」のユニットディレクターを永島、ユニットディレクター補佐を藤田・高野、「調節系」のユニットディレクターを栗崎、ユニットディレクター補佐を高野、「情報系」のユニットディレクター補佐を永島が務めた。各教員が「エネルギー系」、「調節系」、「情報系」、「構造系実習」、「機能系実習1」

の講義・演習・実習を担当した。

「良医への道1、2」コースでは、「キャリアデザイン」、「臨床推論」、「医学英語」の各ユニットを担当した。「キャリアデザイン」ユニットのユニットディレクター、「医学英語」のユニットディレクター補佐を永島が務め、講義は1年生を藤田、2年生を永島が担当した。1・2年生の「臨床推論」ユニットでは、「人体の構造と機能」で複数のユニットに関わる臨床症例について、小グループ学習(small group discussion)とチーム基盤学習(team-based learning)を組み合わせ、病態生理を理解する学習機会とした。「臨床推論」ユニットでは、永島・高野がユニットディレクター補佐を務め、青地・松本がテュータを担当した。

6年生では「内科総論」の1限を永島が担当した。

例年実施していた課外学習プログラム「臨床解剖セミナー」は感染防止の観点から、今年度も実施を見送った。

【卒後教育】 該当なし

2-3. 達成度評価

【卒前教育】

「人体の構造と機能1」コースおよび「人体の構造と機能2」コースの「調節系」と「構造系実習」の各ユニットを、感染対策による制約の中で大きな問題なく運営したが、体験学習にかける時間が十分でなかったことは否めない。

教育用研究用遺体収集：令和4年度収集遺体数 51 体(通算収集遺体数 2,464 体)、医学部構造系実習での使用遺体数 34 体、保健医療学部の実習(見学を含む)での使用遺体数 10 体、臨床解剖学の共同研究用遺体数 4 体。埼玉医科大学篤志献体登録者(令和5年3月末の登録者総数 3,246 名)。

【卒後教育】 該当なし

【大学院教育】

博士課程と修士課程のシラバスに記載した各科目の教育目標を達成した。

2-4. 次年度改善計画

【卒前教育】

上記を踏まえ、教育成果と問題点について担当者間で相互評価しつつ、改善を図る。

【卒後教育】 該当なし

【大学院教育】

大学院博士課程の運営に携わり、共通科目と授業担当を通じて大学院教育に尽力する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

主要な研究課題は、1) 臨床解剖学、2) がん微小環境、3) 大脳皮質ニューロンの軸索ガイダンス、4) 骨格筋形成、5) 胚形成における形態形成機構、6) 脳の発生・発達である。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 臨床解剖学：模擬手術と適合試験の展開、手術に関連した局所解剖学
2. 肝芽腫細胞における細胞間コミュニケーションの解明
3. 大脳皮質ニューロンの軸索ガイダンス：軸索側枝発芽と軸索伸長の関係
4. 骨格筋形成：筋融合を制御する分子機構の解明
5. 胚形成における形態形成機構の分子細胞生物学的研究
6. ゼブラフィッシュを用いた脳の発生・発達の研究

3-3. 達成度評価

臨床解剖学では、内頸動脈周囲の局所解剖等、脳神経外科との共同研究を継続した(永島)。発生・細胞生物学では、培養技術を用いた肝芽腫細胞間コミュニケーションの解明(藤田)、胚形成における形態形成機構の分子細胞生物学的研究(高野：帝京大学・北里大学との共同研究)、骨格筋形成過程で起きる細胞融合を制御する分子機構の解明(栗崎)、神経軸索の側枝形成と伸長の分子機構(松本)、ゼブラフィッシュを用いた脳の発生・発達の研究(佐藤：東京医科大学生命化学分野との共同研究)、社会行動に関わる神経回路の機能解析(佐藤：埼玉大学大学院理工学研究科生命科学部門との共同研究)などのテーマで研究を進め、それぞれ一定の成果を得た。さらに、生化学との共同研究(青地：Chemogeneticsによる大脳皮質神経活動解析、NPC1L1欠損による脂質代謝への影響)、総合医療センター・脳神経外科との共同研究(青地：髄膜腫脳浸潤における組織学的解明研究)、産婦人科との共同研究(佐藤：ヒト胎盤における薬剤の作用解析)を継続している。

3-4. 次年度改善計画

今後も臨床解剖学に関する共同研究を継続し、臨床現場から発想される検討課題をめぐり、対話の機会を重視する。発

生・細胞生物学研究は本学基礎・臨床各科および学外研究施設との協力のもと、研究を継続していく。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無：該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無：該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

○コメディカル非常勤講師：埼玉医療福祉会看護専門学校・埼玉医科大学附属総合医療センター看護専門学校（青地）

○学会役員：日本解剖学会代議員（永島、藤田）、臨床解剖研究会世話人（永島）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 藤田恵子、松本幸子、藤田一正、梶田真澄、永島雅文. 細胞膜ナノチューブによって連結されたヒト肝芽腫細胞の特性について. 第128回日本解剖学会総会・全国学術集会. 2023年3月. 仙台.
- ② 栗崎知浩、中井雄治、永島雅文. Searching the genes regulating myoblast fusion. 第128回日本解剖学会総会・全国学術集会. 2023年3月. 仙台.
- ③ 松本英子. 脳梁交連ニューロンの各サブポピュレーションに働きかける軸索分岐形成因子の探索. 埼玉医科大学雑誌 2023. 49(2): 133-134.
- ④ 松本英子、永島雅文. 脳梁交連ニューロン軸索におけるネトリン-1 依存的な側枝形成の解析. 第128回日本解剖学会総会・全国学術集会. 2023年3月. 仙台.
- ⑤ 佐藤 智美、齋藤 魁斗、津田 佐知子、梶原 健、永島 雅文. SSRI 処理による胎児発育不全モデルを用いた社会的コミュニケーションに関わる神経回路の行動解析. 第3回オール埼玉医大研究の日. 2022年11月.
- ⑥ 佐藤 智美、栗崎 知浩、梶原 健、永島 雅文. 抗うつ剤 SSRI 処理による発育不全胚で誘導される脳の再構築. 第45回日本分子生物学会年会. 2022年11月. 幕張.
- ⑦ 佐藤 智美、齋藤 魁斗、津田 佐知子、栗崎 知浩、梶原 健、永島 雅文. SSRI 処理による胎児発育不全モデルを用いた神経回路の発達と機能解析. 第128回日本解剖学会総会・全国学術集会. 2023年3月. 仙台.

【総数：論文 1 件、学会発表 6 件】

6-2. 獲得研究費

1. 藤田恵子（代表）：日本学術振興会・科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究C）「肝芽腫細胞間を連結する細胞膜ナノチューブの構造解析とがん悪性化に関わる役割」課題番号 20K0899、78 万円.
2. 松本英子（代表）：日本学術振興会・科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究C）「大脳皮質ニューロンのネトリン-1 に対する反応が発生段階に依存する機構の解明」課題番号 18K06839、期間再延長.
3. 青地英和（分担者）：日本学術振興会・科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究C）「小腸からのコレステロール排出促進による粥状プラーク形成の抑制」課題番号 20K05931.
4. 佐藤智美（代表）：日本学術振興会・科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究C）「母児メンタルヘルスに関わる妊婦バイオマーカーの探索と機能解析」課題番号 22K09625、117 万円.

6-3. 受賞：該当なし：該当なし

6-4. 特許、実用新案：該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績：該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

永島（教授）が基本学科の運営責任者、教育主任、藤田（教授）が研究主任、高野（講師）が教育副主任、栗崎（講師）が研究副主任を務めた。卒前教育に関しては、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大の影響を受けながらも、基本学科として教育の目標はおおむね達成された。大学院教育に関しては、博士課程運営委員会での活動、共通科目の運営と授業担当、学位審査等で貢献できた。研究に関しては、学内外との共同研究を進め、第128回日本解剖学会総会・全国学術集会（宮城県仙台市）は対面で開催され、解剖学からは4題の発表（口頭発表1題、ポスター発表3題）を行った。

担当教員の努力により、感染対策に留意しつつ献体関連の業務は、青地（助教）と松澤（助手）を中心に遂行された。昨年度末に矢部勝弘助教、藤田一正助手が定年退職となり、本年度から「嘱託職員」として勤務するようになった。亀澤（助手）は令和5年3月31日で退職した。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は予断を許さないものの社会全体として収束の傾向にある。卒前教育に関して

は、本来の対面授業が再開されることを踏まえて、オンライン授業を中心に学習してきた学生とのコミュニケーションに、一層の配慮や工夫を重ねる必要があるだろう。教育の質的向上に向けて、学生による授業評価やカリキュラム評価を踏まえて、改善計画を検討したいと考える。大学院教育に関しては、共通科目の授業担当や学位審査に加えて、大学院生の間接発表会などの機会を捉えて、研究の遂行や研究倫理を支援していきたい。研究活動に関しては、引き続き学内外との共同研究を維持・発展するように努めたい。

3. 生理学

1. 構成員

<創造生理学グループ>

三輪尚史 (MIWA, Naofumi) : 教授 : 教育主任 : 研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 生殖生理学、癌生物学、感覚生理学 : 博士

伊丹千晶 (ITAMI, Chiaki) : 講師 : 教育員 : 研究員 : 指導教員 (大学院) : 神経科学 : 博士

田丸文信 (TAMALU, Fuminobu) : 講師 : 教育員 : 研究員 : 指導教員 (大学院) : 神経生理学 : 博士

佐藤寛榮 (SATO, Hiromasa) : 講師 : 教育員 : 研究員 : 指導教員 (大学院) : 神経科学 : 博士

平沢 統 (HIRASAWA, Hajime) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 大学院教員 (大学院) : 博士

青葉香代 (AOBA, Kayo) : 助手

吉川郁子 (YOSHIKAWA, Ikuko) : 事務員

椎橋実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 教授 (情報技術支援推進センター教授, 兼担) : 教育員 : 指導教員 (大学院) : 医学教育 : 博士

吉村和法 (YOSHIMURA, Kazunori) : 非常勤講師

長根光男 (NAGANE, Mitsuo) : 非常勤講師

花上まゆ (HANAUE, Mayu) : 非常勤講師

<生体機能調節研究グループ>

池田正明 (IKEDA, Masaaki) : 教授 (国立精神神経医療研究センター精神保健研究所客員研究員、福島県立医科大学医学部非常勤講師、神戸大学医学部非常勤講師、埼玉県立大学保健医療福祉学部非常勤講師、日本医療科学大学保健医療学部非常勤講師) : 研究主任、教育副主任、指導教員 (大学院) : 生体リズムの分子生物学 : 博士

中尾啓子 (NAKAO, Keiko) : 講師 (埼玉大学非常勤講師) : 教育員 : 研究員 : 指導教員 (大学院) : 発生遺伝学・再生医学 : 博士

熊谷 恵 (KUMAGAI, Megumi) : 助手

北澤 潤 (KITAZAWA, Jun) : 客員教授

赤塚俊隆 (AKATSUKA, Toshitaka) : 非常勤講師

糸川昌成 (ITOKAWA, Masanari) : 非常勤講師

岡野栄之 (OKANO, Hideyuki) : 非常勤講師

小川哲郎 (OGAWA, Tetsuo) : 非常勤講師

内匠 透 (TAKUMI, Toru) : 非常勤講師

服部信孝 (HATTORI, Nobutaka) : 非常勤講師

原(大石) 朱美 (HARA, Akemi) : 非常勤講師

福田公子 (FUKUTA, Kimiko) : 非常勤講師

藤谷与士夫 (FUJITANI, Yoshio) : 非常勤講師

藤田健一 (FUJITA, Ken-Ichi) : 非常勤講師

吉村和法 (YOSHIMURA, Kazunori) : 非常勤講師

渡辺 守 (WATANABE, Mamoru) : 非常勤講師

Benjamin Joseph Edward Raveney : 非常勤講師

Pavel Prosselkov : 非常勤講師

徳田雅明 (TOKUDA, Masaaki) : 非常勤講師

西村 渉 (NISHIMURA, Wataru) : 非常勤講師

大山彦光 (OYAMA, Genko) : 非常勤講師

清水厚志 (SHIMIZU, Atsushi) : 非常勤講師

柳澤慎之介 (YANAGISAWA, Shinnosuke) : 大学院生

東 美樹 (HIGASHI, Miki) : 大学院博士課程研究生

三上将生 (MIKAMI, Masaki) : 研究医

井上勇 (INOUE, Yu) : 研究医

山下祥加 (YAMASHITA, Shohka) : 研究医

松島和希 (MATSUSHIMA, Kazuki) : 研究医

2. 教育

<創造生理学グループ>

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

【卒前教育】

人体の構造と機能2 コースの機能系の内容をおもに担当している。機能系の内容は基本的に生理学であり、学習すべき点は、各臓器・機能系の機能の各論のみならず、機能の「調節」の土台である「統合」が大切である。統合は、臓器相互、内分泌系・神経系によるものが大切である。また、学習は、暗記のみではなく、物理学、化学、細胞生物学、生化学、分子生物学、遺伝学の基礎の上に臓器別の多面的機能を統合的に理解することが求められる。さらに、機能・

調節の異常としての「病態生理学」という統合も大切である。このような「統合」を学生自身が築けるような講義、演習、実習を目標とした。

【大学院教育】

講義においては、研究における論理、実験の計画・手技の実際が分かり、興味が一層湧くようになることを目標とした。

2-2. 教育実績 (担当者)

【卒前教育】

以下の内容についておこなった。人体の構造と機能 2 (2 年) は以下の内容についておこなった。講義、演習はエネルギー系 (三輪、伊丹、青葉)、調節系 (三輪、伊丹)、情報系 (三輪、伊丹、田丸、佐藤、青葉)。機能系実習 2 (三輪) は以下の 4 項目について、1 グループ約 40 名でおこなった。1) 生殖 (ラットの性周期) (青葉)、2) 神経 (神経の興奮伝導) (椎橋、佐藤)、3) 骨格筋 (骨格筋の収縮) (田丸)、4) 心電図 (心臓の電氣的興奮、心電図) (伊丹、平沢)。以上の他に、1 年生では、医科学への道すじコース・医科学入門 1 (佐藤、平沢、青葉)、同・医科学の探索 (佐藤、平沢)、細胞生物学コース・細胞生物学 2 (佐藤)、人体の基礎科学 2 (物理) (三輪、平沢) を担当した。

また、良医への道 1 コース・臨床推論 (三輪、佐藤、田丸)、良医への道 1 コース・臨床入門 (佐藤)、人体の基礎科学コース・人体の基礎科学 1 統計学、2 統計学 (椎橋) を担当した。2 年生では、良医への道 2 コース・臨床推論 (三輪)、良医への道 2 コース・臨床入門 (佐藤)、良医への道 2 コース・医学英語 (三輪)、選択必修 (perl プログラミング入門: 椎橋) を担当した。3 年生では、臨床実習コース・導入クリニカル・クラークシップ 1-2 (佐藤) を担当した。4 年生では、ヒトの病気 2 コース・感覚器 (三輪) を担当した。

【大学院教育】

大学院教育については、統計情報解析特論 (椎橋)、実用実験医学特別講義 (田丸、平沢)、研究方法特論 (伊丹) を担当した。

医学部以外では、以下の科目を担当した。

【卒前教育】

保健医療学部 臨床検査学科 (統計学: 椎橋)、保健医療学部 看護学科 (医療情報学: 椎橋)、埼玉医療福祉社会看護専門学校第一学科 (解剖生理学Ⅲ-Ⅳおよび国家試験対策講義: 伊丹、田丸、佐藤、平沢)、日本医療科学大学保健医療学部 (生理学実習: 田丸)、川越市医師会川越看護専門学校 (機能形態学 I および II: 田丸) 東京医科歯科大学歯学部 (生命維持のための生体機能: 伊丹)

【大学院教育】

医学研究科医科学専攻 (行動科学概論: 椎橋、統計情報解析特論: 椎橋)、大学院看護学研究科 (看護情報処理論: 椎橋)

2-3. 達成度評価

【卒前教育】

目標に向かって進んだが、意欲の高い学生達の意欲・好奇心を一層刺激することと、受動的な学生の意欲を刺激すること、については引き続きの課題である。

【大学院教育】

講義において、学生の意欲・好奇心をもっと刺激することが今後の課題と言える。

2-4. 次年度改善計画

【卒前教育】

一層の改善に向けて授業内容等を関係教員と連携して改革していく。全体として各教員の努力は十分であったと考える。より一層の成果を上げることは、一基本学科だけで達成できるものではなく、医学教育センター・他の基本学科と連携を図りつつ改善に努めたい。また、課外学習プログラムの学生受入れにおいても、プログラムの充実を図り、研究マインドの涵養に貢献していきたい。

【大学院教育】

ある程度目標は達成されたが、一層の充実を図り研究の発展につなげたい。

<生体機能調節研究グループ>

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

【卒前教育】生理学では、人体の正常機能とそれを維持するメカニズムを理解することで、それが損なわれたときの原因究明および対処法 (病態解析および治療法) を開拓する研究テーマに取り組んでもらい、臨床にとっても重要な研究マインドを育成する。

【大学院教育】最新の解析手法を駆使して、最先端の生命科学のテーマに取り組み解明する。

2-2. 教育実績 (担当者)

【卒前教育】

人体の構造と機能 2 コース (2 年生)

池田は、情報系ユニットの神経系の機能に関する講義を担当し、中尾は、エネルギー系ユニットの消化器の機能に関する講義を担当した。また、池田、中尾、熊谷は、他基本学科の西本、横尾、水野、池田和博、佐藤航、米田、浦西、平崎、亀澤、猪股、赤塚各実習指導教員の協力のもと、機能系実習 1 をエネルギー系ユニットの中で担当した。機能系実習 1 は主に血液を材料として血球成分及び血清成分の細胞生物学、生化学的性質を実際に観察または計測することで、人体の生理機能がどのように調節されているか、また維持されているか(ホメオスタシス)そのメカニズムを直に学ばせる事を目的としている。本年度は COVID-19 の感染持続のため、4 項目中 1 項目は zoom によるリモート実習とし、血算、白血球像 (塗抹標本)、溶血、凝固、血液型に関する実習項目を実施した。実習は、24 グループ、1 グループは 5-6 名のグループ編成で、2-3. グループを 1 名の実習指導教員が指導を行い、途中、グループ毎にモデル実験

の結果を検討し、これを各自レポートにまとめて提出し成績評価を行った。

中尾は、1~2年生の選択必修『(科学英語) Science English を使いこなす! (基礎編)』『(科学英語) Science English を使いこなす! (実践編)』の講義を担当した。「最新の医科学研究論文についての英語動画を視聴させたり、国立精神神経センターから自己免疫疾患特に多発性硬化症の研究者 Benjamin Raveney 先生を、ミネソタ大学医学部肝細胞研究所の朝倉淳先生を招き英語で講義をしてもらい、リスニングとディスカッション力を身につけてもらった。こうした手法を採用した根底にあるのは、「人には言葉を生につける能力(普遍文法)が生まれながらにして備わっている」というチョムスキー博士の説でそれを脳科学的に証明した東京大学の酒井邦嘉先生の講義を学生に最初に聞いてもらった。それによって英語の講演会やドラマ、アメリカの解剖生理学の講義を最初は日本語や英語の字幕と共にリスニングして理解してもらい、次に字幕無しでも理解できるように順を追って学んでもらう方式は理にかなっているとの認識を共有してもらった。アウトプットという面ではイギリス人の神経免疫学の研究者である Ben 先生との講義での質疑応答などの対話だけでは、十分ではないことが依然として課題。そこで、酒井先生の理論を取り入れて開発された Gabby メソッドでこれまでの文法・単語をばらばらに教える日本の学校英語教育とは一線を画する「Be Natural」スタイルの英語レッスンを医学部一年生有志3名に6ヶ月体験していただき、開始前と終了後の英語に対する違いをお聞きしたところ2022年10月~2023年5月までの8ヶ月間(定期試験の2ヶ月を除くので実質半年間)に渡り持続的に英語を使うことに取り組んだ3名の学生全員が、それぞれに成果を実感し、自信を得られた事がわかった。

課外学習プログラム (医学部)

池田は「体内時計は糖尿病や脂質異常症などの生活習慣病の発症と関わっているのか? 概日リズムと生活習慣病との関係を分子レベルで探る。」という課外学習プログラムを実施し、3年生(1名)が糖代謝と糖尿病発症に関連する分子と概日リズムとの関係に関する研究論文を抄録し研究方法について学習した。

池田は「神経・精神疾患の病態と概日リズムの関係についての謎に挑む」という課外学習プログラムを実施し、4年生(松島和希)は研究医としてパーキンソン病関連遺伝子の機能と概日リズムの関係を、標的遺伝子ノックダウン細胞を作成し解析する研究を3年生に引き続き実施した。2年生(1名)は、昨年に引き続き、精神疾患に関する主要な研究論文を選択し、Question は何か、仮説の妥当性、どこまでわかっているのか等について、ディスカッションや文献調査を行い、実践的なテーマ設定法について学習した。

中尾は、研究医養成コース(3名)+課外学習プログラム、「糖尿病の新規治療法の開発に挑む!」(5年生井上勇、4年生山下祥加)を実施した。

糖尿病研究のゴールは、血糖依存的にインスリン産生をする機能的 β 細胞の分化・成熟のメカニズムを明らかにし、新たな糖尿病治療に道を拓くことである。我々は、独自に開発した電気穿孔遺伝子導入法を用いた Cre-loxP システムによる細胞系譜解析と BrdU ラベルによる分裂細胞の標識とを組み合わせることによって、膵島内の非 β 細胞から β 細胞が分化する経過を明らかにした。しかし、膵島内でどれくらいの細胞がこうした分化系譜をたどるかを俯瞰的に明らかにするには、単一細胞レベルの系譜解析だけでは不可能である。そこで scRNAseq 解析とこれまでに報告されている膵島内の内分泌細胞の発現プロファイルとを比較検討することにより、膵島全体で分化・成熟あるいは病的な状態(糖尿病モデル)での脱分化がどの頻度とタイミングで起きているかを明らかにしようと DRY 解析を本格的に導入することにした。研究医養成コースの学生も高学年で、WET の実験をすることが難しくなったため、実習等の合間に public database ベースからの発現プロファイルを利用して α 細胞からの正常な分化・成熟過程と糖尿病状態における脱分化機構を解明するべく DRY 解析を進めている。

中尾は「ネイティブスピーカーの研究者と一緒に「Science English」を学ぼう!」を実施した。

卒業まで半年余りの6年生が、研究医養成コース1年目と2年目の3、4年生に Journal club で論文紹介をするという設定で医学研究論文の読み方を学んでもらい臨床医としてあるいは医学研究者としての研究マインドを育成するというのが本プログラムの目標であった。これまで原著論文を殆ど読んでこなかった6年生にとっては“良い論文”をどうやって選ぶかと言うところが最も重大な関門であった。一般的には、教科書や質の高いレビューを数本読み、さらに直近5年間の論文や、雑誌の特集などにも目を通し、そこからもっとも旬で重要度の高い論文を選ぶのが王道であるが、まずは教科書からと言うので、分野を内分泌&糖尿病関係(6年生の専攻希望と研究医養成コースで学ぶ学生の研究テーマに配慮して選択)に絞り、まずは複数の教科書の中からテーマを与えて該当箇所を読み比べてもらった。これまでは、大学から教科書指定された本一冊ずつ購入し、講義に合わせて(講義で触れたところを)参照するというスタイルだったので、教科書を併読して、論理体系を構築するために読むのにかなり時間がかかったようである。当然であるが、同じ領域の教科書を複数読み比べるそれらに共通する本質的なことが見えてくると言う経験もしていただけた。コロナ禍で対面実施が可能になったのが卒業間近だったため、残念ながらアウトプットにあたるリアルなセミナー開催には到らなかったが、それでも、論文を手当たり次第に読むのではなく、教科書で体系立ててから論文を探すことで、これまでとは違った取り組みができたようである。

熊谷と中尾は「糖尿病を時間栄養学的にコントロールする!」を実施した。II型糖尿病を予防または治療するために注目されている TRF(Time-Restricted Feeding)時間制限栄養療法は、実際に体重減少や HbA1c を下げることで効果があるというデータは蓄積してきている。さらに、耐糖能の回復など長期的効果も期待できるのでそのメカニズムを明らかにしたいと考えた。我々は TRF によって16時間という長い絶食 fasting 期にオートファジーが活性化されることで β 細胞の増殖を促進するのではないかという作業仮説を立て、膵島 β 細胞の増殖細胞を BrdU の尾静脈からの注入後の抗体による検出で定量化し、TRF の様々な条件下での長期的な効果を検討するための準備を行った。さらにオートファジーの関与を明らかにする目的で、オートファジー不全を起こす Atg7 の膵島特異的ノックアウトマウスを導入し、fasting による β 細胞の増殖の活性化がオートファジーの活性化を介するののかも明らかにしようと考えている。

また、埼玉大学の学生については対面参加が許可されていない状況のため ZOOM で実施した。特に、日本における時間栄養学の先駆的研究者である早稲田大学の柴田重信先生の研究室の若手原口先生にセミナーを行って頂き活発に議論

させて頂けたことで、課外学習プログラムの学生3名の研究マインドを大いに活性化することができた。池田と中尾は、1年生の医科学の探索ユニットのチューターとして、それぞれ学生7名を担当し、池田の担当したグループのテーマは「iPS細胞-iPS細胞の現状とこれから」、中尾の担当グループは「Fastingの生理学」という学生の興味の中から発掘したQuestionについて、evidence-baseにAnswerを見つけるという問題解決型の少人数教育で研究マインドの涵養につながるトレーニングを行った。

【大学院教育】

大学院医学研究科博士課程学生の指導（池田、熊谷）を担当した。池田が指導を担当していた大学院博士課程研究生の東美樹は、論文「Long noncoding RNAs transcribed downstream of the human β -globin locus regulate β -globin gene expression」がJournal of Biochemistryに掲載され、この論文で医学博士号を取得した。

医学部以外では、以下の科目を担当した。

【卒前教育】

神戸大学医学部（生理学「肝臓の生理学」：池田）

福島県立医科大学医学部（こころと脳「遺伝子と人間行動」：池田）

埼玉県立大学保健医療福祉学部（生理学特論「概日リズムと時計遺伝子」：池田）

日本医療科学大学保健医療学部リハビリテーション科理学・作業療法学専攻（神経内科学：池田）

2-3. 達成度評価

【卒前教育】

機能系実習1は4日間行われ、実習項目や内容を一層充実させ、学内外の教員のご協力により計画通り実施することができた。実習では、血液に関する基本的な項目を、実験を通して理解することを目標とし、達成度についてはレポートにより評価した。レポートの内容が基準に達していない学生には、再レポートを課した。実習の設計通りに運用することができたと考えている。

選択必修の「Science English を使いこなす！（基礎編）」「Science English を使いこなす！（実践編）」では、従来までの英語を単語、文法、作文等とばらばらに学習する学校教育の勉強としての英語ではなく、医学部生、将来の医師として使うための英語を様々な方向から実践的に学んでもらうことを目標にし、国立精神神経センターからネイティブスピーカーの英国人免疫学者、筑波大学睡眠研究所から睡眠学研究者らを招き、学生と一緒にdiscussionを行うという挑戦的な試みを実施したが、学生からの講義後アンケートで、生きた英語を学び、しかも、それ自体非常に楽しく感じられ、今後もより一層英語に接したいと英語に対する意欲をかき立てられたということなので概ね成功したと言えるのではないかと。

選択必修「最先端医学研究の成果を医療に生かすには-研究の現場から未来の医療を探る-」を開講している。これは本学の医学研究者1名、学外5名からなる講師陣が、専門領域の研究や最先端研究分野に関して、細胞生物の基礎から疾患への応用、将来の研究への発展について紹介するもので、1年生時に細胞生物で学んだ内容が、どのような形で疾患の病因や診断・検査、治療法に関連しているのかを具体的な例を通じて学習する機会となった。

選択必修「一生の研究テーマを如何に決めるか-医学史・伝記からたどる研究テーマ選択の真実」では、池田に加えて、学外から1名、学内から1名の講師によって、研究者が研究テーマを選択した経緯・背景について紹介した。特に、学外の2名の講師には、研究者自身がなぜ現在のテーマを選んだのかについて実体験に基づいた講義をしていただく機会を設け、更に課題として医学研究者や生物系研究者の伝記や自叙伝を読んで、主人公がどのような経緯で研究テーマを選ぶに至ったかをまとめてレポートとして提出させた。

課外学習プログラムにおいて、基礎医学部門で行っている研究を見学・体験あるいは実際にプロジェクトを担当することにより、学生は現在進行形で進歩している医学の流れを実際に見ることができ、また、問題意識を持つこと、及びその問題を解決していくための研究手法を学ぶことができた。

【大学院教育】

講義では、担当者が上記目標に向かって十分努力をしたと考える。

研究指導においても、大学院博士課程研究生自身が困難な課題に自ら取り組み、解決手段としての実験手法も改良を加えた結果、論文がJ. Biochemistryに掲載され、この論文で学位審査申請を行い学位を取得した。（池田）

2-4. 次年度改善計画

【卒前教育】

講義の内容や配布資料を、学生からの質問、試験の結果からの学生の理解度の分析を元に、枠組みから細部にわたるまで改良を加えたことにより、履修者の達成度・満足度が上がったと考えている。学生からの質問や意見の内容を分析し一層の改良をはかりたい。

機能系実習1は開始3年度目であったが、学内の教員、非常勤講師の協力により、小グループによる実習を実施する事ができた。昨年度から実習期間が2日から4日に拡大されたことにより、血液の酸塩基調節機構や生化学的性質などを加え包括的な実習内容の充実を行っているが、さらに一層の改良をはかりたい。

【大学院教育】

当初の目標は達成されたが、一層の充実を図り研究の発展につなげたい。

3. 研究

<創造生理学グループ>

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

生殖、癌細胞特性、感覚（網膜）、イオンチャネル、学習について、以下の研究グループに分かれて、基礎メカニズム解明のための研究を行う。特に情報処理等の機能に直結するメカニズムの解明に重点を置く。また、臨床応用を念頭

においた研究も進める。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

1. 網膜の視覚情報処理（田丸）

1) 網膜杆体経路の解析（田丸）

網膜桿体双極細胞に発現している TRPM1 チャネルの特性を調べることを目的として、遺伝子改変動物の網膜桿体双極細胞にパッチクランプ法を用いて薬理的な解析を行っている。

2) ダイレクトリプログラムにより再生した網膜神経の生理学的特徴の検討（田丸）

アデノ随伴ウイルスベクター（AAV）を用いて、遺伝子導入し再生させた網膜神経細胞が、生理学的にどのような特徴を有するのかをマウス網膜を用いて明らかにすることを目的とした。また、電気生理学的記録の後、共焦点レーザー顕微鏡を用いて記録細胞の形態を観察することで、どのようなサブクラスの細胞が再生しているのか、その割合を調べることを目的とした。本年度は、共焦点レーザー顕微鏡を用いる際の、細胞に注入する色素や撮影条件などの検討を行った。

2. 受精・着床成立の分子機構の解析（三輪、佐藤、青葉）

初期胚と子宮内膜の相互作用は、非常に巧妙に調節されている。当グループの三輪がアフリカツメガエルから見出したダイカルシンの受精・着床における機能解析を進めている。

3. 上皮の形態と機能分化の機構（青葉）

アフリカツメガエル (*Xenopus*) に続いて、ウシガエル (*Rana*) の胚/幼生を用いた行動実験を行い、ENaC の活性と機能を検討した。アフリカツメガエル ENaC 抗体の特異性に問題があったので、抗体作製し、追加実験を行っている。

4. 大脳皮質の臨界期可塑性メカニズムの解明（伊丹）

カンナビノイド (CB) は従来、その精神的作用にのみ注目されてきたが、近年、大脳皮質や海馬、小脳において短期的可塑性や長期抑圧を引き起こす伝達物質として、新たな注目を受けてきた。ほ乳類の大脳皮質では、発達の一時期に、入力に依存してシナプスの伝達効率を変化させる可塑性を示し、これは学習や記憶とそのメカニズムを共有していると考えられ、その詳細を解明することは社会的にも強く要請されている。齧歯類の体性感覚野バレル皮質を実験モデルとし、入力依存性の発達期可塑性（臨界期）のメカニズムを明らかにすることを目的としている。

5. がん細胞の機能変化に関する電気生理学的研究（三輪、平沢）

がん細胞の電気活動の変化が、がんの機能変化（転移能・増殖能など）にどのような影響をもたらすのかについて解明することを目指している。今年度は、パッチクランプ法により、2種類のヒト膵がん細胞株の膜電流が活性化される細胞内外環境の詳細を検討した。

3-3. 達成度評価

1. 網膜の視覚情報処理

1) 網膜杆体経路の解析（田丸）

これまでの研究成果を学術論文として投稿しているが受理に至っていない。本年度の目標については達成できていないと評価する。

2) ダイレクトリプログラムにより再生した網膜神経の生理学的特徴の検討（田丸）

共焦点レーザー顕微鏡を用いて出来るだけ短時間で多くの細胞を撮影できる条件を検討中である。進捗はやや遅れている。

2. 受精・着床成立の分子機構の解析（三輪、佐藤、青葉）

令和3年度においては、ダイカルシンによる胚細胞由来細胞株 (BeWo) スフェロイドの子宮内膜癌細胞株 (Ishikawa) への接着に及ぼす影響を解析した。その結果、ダイカルシンは、BeWo スフェロイドの Ishikawa 細胞シートへの接着を阻害し、その分子基盤の一端を解明でき、おおむね研究計画に沿って、順調に進んだものと考えられる。

3. 上皮の形態と機能分化の機構（青葉）

1) 上皮の細胞分化と上皮 Na チャネル (ENaC) の発現、局在調節

アフリカツメガエル、ウシガエルの幼生による吸着行動について論文投稿に向け追加実験が必要である。

4. 大脳皮質の臨界期可塑性メカニズムの解明（伊丹）

これまでの実験結果をまとめて投稿し、論文が受理された。

5. がん細胞の機能変化に関する電気生理学的研究（三輪、平沢）

形質の異なる2種類のヒト膵がん細胞株が、ある特定の細胞内外環境下において、各々特徴的な膜電流を発生するということが判明した。しかしながら、実際の膵がん微小環境下においてその膜電流がどのようにがん細胞の機能に関与するのかについては更なる検討を要する。

3-4. 次年度改善計画

1. 網膜の視覚情報処理

1) 網膜杆体経路の解析（田丸）

実験は全て終了した。来年度は論文内容を練りつつ、論文受理に向けて努力する。

2) ダイレクトリプログラムにより再生した網膜神経の生理学的特徴の検討 (田丸)

共焦点レーザー顕微鏡の最適な撮影条件を決め、再生した網膜神経節細胞から電気生理学的特性と形態のデータを記録する。

2. 受精・着床成立の分子機構の解析 (三輪、佐藤、青葉)

初期胚と子宮内膜の相互作用は、非常に巧妙に調節されている。当グループの三輪がアフリカツメガエルから見出したダイカルシンの機能解析を進めている。引き続き、ダイカルシンの機能解析を進め、ダイカルシンによる着床阻害の分子基盤を解析する予定である

3. 上皮の形態と機能分化の機構 (青葉)

アフリカツメガエルの幼生による吸着行動の実験の結果について学術論文として投稿する。さらに追加実験を行う。

4. 大脳皮質の臨界期可塑性メカニズムの解明 (伊丹)

新たにイメージングや行動実験系を立ち上げ、現在の研究テーマを発展させる。

5. がん細胞の機能変化に関する電気生理学的研究 (三輪、平沢)

様々な細胞内外環境下での生理実験データを積み重ね、膵がん細胞株に発現しているイオンチャンネル (膜タンパク) の種類とそれが活性化される細胞内外環境の条件を明らかにする。そして、膵がん細胞株における膜タンパクの発現様式と膵がんの機能変化 (転移能・増殖能・抗がん剤耐性能等) との関連を検討するための実験に着手していく。

< 生体機能調節研究グループ >

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

臨床の教室 (内分泌・糖尿病内科、泌尿器腫瘍科等) と共同でクリニカルリサーチを展開し、医学部学生に対する課外研究プログラムを通してリサーチマインドを育成する。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

I 分子時計 (池田、熊谷、柳澤、藤田、松島和希 (研究医: 医学部 4 年生))

- 1) 時計遺伝子のリズム発現に影響を与える因子
- 2) マルチカラーシフェラーゼの概日リズム研究への応用
- 3) 代謝機構における時計遺伝子の役割
- 4) 腫瘍増殖の概日リズム調節機構の解明と腫瘍の時間治療に向けた分子基盤の確立

分子時計プロジェクトとして「概日リズムの分子機構の解明と病気との関連について」の研究を展開している。

II β 細胞の成熟とその維持メカニズムの解明～糖尿病新たな治療戦略 (中尾、熊谷、井上勇 (医学部 5 年生)、山下祥加 (医学部 4 年生)、原朱美 (順天堂大医学部糖尿病内科)、藤谷与士夫 (群馬大学生体調節研究所) (特許申請準備中のため一部省略)

糖尿病研究のゴールはインスリンを産生する機能的 β 細胞を補填する方法を開発することにある。そのため β 細胞がどのようなメカニズムで産生され、その分化形質を維持できるかを解明することが重要である

細胞系譜解析によって生理的条件下の β 細胞の再生に関しては、既存の成熟した β 細胞の複製によるという説が 2004 年に Melton らにより提唱されて以来主流となっているが、 β 細胞を多量に失うようなストレス状況下で、膵導管に出現する *Neurogenin3* (*ngn3*) 陽性の内分泌前駆細胞から、あるいは膵島内の非 β 細胞等から分化転換して β 細胞の産生が起こることも報告されており、成体の膵島における β 細胞の数を維持するメカニズムが 1) 既存の β 細胞の複製によるのか、2) 成体膵に存在する前駆細胞からの分化によるのか未だ結論が出ていない。

我々は、この二つの説を両方とも矛盾なく説明できる可能性はないか? を模索し、その理由を膵島細胞のヘテロジェニシティ (heterogeneity) に求めた。なぜなら 1) が正しいとする根拠は一部のインスリン産生 β 細胞のみを標識し、それが時間を経ても標識されていない前駆細胞由来の新生 β 細胞によって薄まらないことだったが、 β 細胞の遺伝子発現が均一でなく、少なくとも未分化なものと成熟したものが存在することが単一細胞の RNAseq 解析で明らかになってきており、そうすると標識された一部の β 細胞にも標識されていない β 細胞にも前駆細胞がある可能性を否定できず、単に薄まらないことが前駆細胞の存在を否定しないと考えたからである。

辺縁部の β 細胞は、インスリンは産生しているが成熟した β 細胞に見られる *Glut2* などを発現せず血液中のグルコース濃度感受性をまだ確立していない未熟な β 細胞である。しかし辺縁部の β 細胞のみで発現する遺伝子が同定されていないため細胞系譜解析ができないことから辺縁部の β 細胞が成熟した β 細胞に分化するかどうかについては証明されていない。そこで我々は、辺縁部の細胞選択的に遺伝子導入可能な方法を開発することにした。しかもラットインスリンプロモーター (Rip)-Cre プラスミッドベクターを *Rosa26R*-YFP マウスの膵臓に導入することにより辺縁部の β 細胞を選択的に標識して系譜を追跡することができる。

我々は辺縁部の β 細胞が、時間経過と共に膵島中核部を構成する成熟した β 細胞に分化することを示唆する結果を得ている。

また、*Rosa26R*-YFP と *Pdx1*-flox を両方導入されたマウス膵臓に同じ Rip-Cre プラスミッドを電気穿孔法で導入して *Pdx1* の発現を低下または欠失させると β 細胞の減少と同時に α 細胞 (膵尾部の場合) または PP 細胞 (膵頭部の場合) の増加が見られ、辺縁部の β 細胞から α 細胞 (膵尾部の場合) または PP 細胞 (膵頭部の場合) への分化が示唆された。*Pdx1* は糖尿病モデルマウスの膵臓でも発現が低下することが我々の研究でも明らかになっており、高血糖 And/Or *Pdx1* の発現低下が辺縁部の β 細胞から α 細胞または PP 細胞へ分化させる可能性が示唆された。

3-3. 達成度評価

I～IIは、埼玉医大発の非常に有望なプロジェクトであり、今年度の研究により今後の方向性が見えてきたという点で非常に成果があり、成果の一部は論文として公表することができた。

3-4. 次年度改善計画

次年度は、新規研究法の開発に関する特許申請手続きを完了し、医学部5年生井上勇（2023年度6年生）と4年生山下祥加（2023年度5年生）を主著者とする論文を含めた二つの論文を発表するべく全力を挙げる。

4. 診療

<創造生理学グループ>

該当なし

<生体機能調節研究グループ>

該当なし

5. その他

<創造生理学グループ>

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本医学教育学会編集委員会委員（椎橋）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本生理学会評議員（三輪、椎橋、伊丹、田丸、椎橋）、日本生理学会教育委員会委員（椎橋）、日本生理学会生理学エドゥケーター認定制度委員会委員（椎橋）、日本医学教育学会評議員（椎橋）、日本医学教育学会理事（椎橋）、日本医学教育学会学会広報・情報基盤委員会委員長（椎橋）、日本医学教育学会医学教育専門家認定制度委員会委員（椎橋）、日本医学教育学会学習者評価委員会委員（椎橋）、日本医学教育評価機構調査・解析委員会委員長（椎橋）、日本医学教育評価機構企画運営部会部会員（椎橋）、日本医学教育評価機構評価委員（椎橋）、医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 CBT 事後評価解析小委員会委員（椎橋）、医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 CBT 機構派遣監督者（椎橋）、群馬大学医学部カリキュラム評価委員会外部委員（椎橋）、東京大学客員研究員（伊丹）東京医科歯科大学歯学部非常勤講師（伊丹）

<生体機能調節研究グループ>

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Frontiers in Physiology (Chronobiology)・Review Editor（池田）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本生理学会評議員（池田）、日本神経化学会評議員（池田）、日本時間生物学会評議員（池田）
第29回日本時間生物学会学術大会 大会準備委員会 組織委員会委員、プログラム委員会委員（池田）
第100回日本生理学会大会 公募シンポジウムオーガナイザー・司会（池田）、神戸大学医学部非常勤講師（池田）、福島県立医科大学医学部非常勤講師（池田）、埼玉県立大学保健医療福祉学部非常勤講師（池田）、日本医療科学大学保健医療学部非常勤講師（池田）

6. 業績

<創造生理学グループ>

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

①Itami C, Uesaka N, Huang JY, Lu HC, Sakimura K, Kano M, Kimura F. Endocannabinoid-dependent formation of columnar axonal projection in the mouse cerebral cortex. Proceedings of the National Academy of Sciences (PNAS): 119, e2122700119. (2022)

②Satoh H*, Tamalu F*, Hirotsawa N, Hirasawa H, Nagane M, Saito R, Watanabe S-I, Miwa N. Positive effect of extending the course duration on dissemination of educational content. Med Sci Educ; 32:641-648. (2022)
*co-first author

③Araki T, Nagashima M, Hirasawa H, Tamalu F, Katagiri Y, Miwa N. Epigenome-wide association analysis of pancreatic exocrine cells from high-fat- and normal diet-fed mice and its potential use for understanding the oncogenesis of human pancreatic cancer. Biochem Biophys Res Commun; 637:50-57. (2022)

④青葉香代, 斎藤良平, 三輪尚史. 新規着床調節因子ダイカルシンの機能解析を通じた着床成立の分子基盤の解明. Medical Science Digest 49(2):46-47. (2023)

⑤吉村和法, 田丸文信, 長根光男, 三輪尚史. カリキュラム評価モデルのトレンド調査. 日本医療科学大学研究紀要

15 : 5-12 (2022)

学会発表

⑥ Itami C, Uesaka N, Huang JY, Lu HC, Sakimura K, Kano M, Kimura F. Endocannabinoid-dependent formation of columnar axonal projection in the mouse cerebral cortex. *Neuroscience* 2022, San Diego(USA), 2022年11月

【総数：論文 5 件、学会発表 1 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

三輪尚史 (研究代表者) : 科学研究費補助金基盤研究 (C) 「新規転移阻害タンパク質の機能解析を通じた癌細胞遊走能調節の分子基盤の解明」

青葉香代 (研究代表者) : 科学研究費補助金基盤研究 (C) 「新規着床阻害タンパク質の機能解析を通じた着床成立の分子基盤の解明」

田丸文信 (研究代表者) : 埼玉医科大学2022年度学内 Grant 「網膜の無軸索介在ニューロンにおける活動電位の役割」

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

PCT 出願完了 (1 件)

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

< 生体機能調節研究グループ >

6-1. 論文・学会発表・著書

論文 :

⑦ Eri Morioka, Yusuke Kasuga, Yuzuki Kanda, Saki Moritama, Hayato Koizumi, Tomoko Yoshikawa, Nobuhiko Miura, Masaaki Ikeda, Haruhiro Higashida, Todd C Holmes, Masayuki Ikeda. Mitochondrial LETM1 drives ionic and molecular clock rhythms in circadian pacemaker neurons. *Cell Reports* 39(6) 110787 (doi:10.1016/j.celrep.2022.110787)

⑧ Yuji Odagaki, Masaki Mikami, Masakazu Kinoshita, J. Javier Meana, Luis F. Callado, Jesús A. García - Sevilla, Dasiel Oscar Borroto - Escuela, Kjell Fuxe. Agonistic properties of a series of psychotropic drugs at 5-HT_{1A} receptors in rat and human brain membranes determined by [³⁵S] GTP γ S binding assay. *Pharmacological Reports* (2023) 75:266-275 (doi.org/10.1007/s43440-023-00448-6)

学会発表 :

⑨ 池田正明. 神経発達症に併発する概日リズム睡眠-覚醒障害 : ふたつの病態をつなぐ生物学的関連性をつなぐ. 第 29 回 日本時間生物学会学術大会 シンポジウム「神経発達症と睡眠覚醒リズム」2022年12月4日、宇都宮市

⑩ 池田正明、柳澤慎之介、熊谷恵、竹中康浩、中島芳浩. Glucocorticoids and Circadian Rhythm Regulation. 第 100 回日本生理学会大会 シンポジウム「概日リズムが基軸となる生命の恒常性・持続性 : 体内時計の乱れが招く健康問題の克服に向けて」2023年3月15日、京都市

【総数：論文 2 件、学会発表 2 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

① 池田正明 (研究代表者)

令和 4 年度 科学研究費 基盤研究 (C) 「睡眠リズム障害の新規治療法の開発 : リズム同調に関与する新規分子を標的として」

② 中尾啓子 (研究代表者)

令和 4 年度 研究マインド育成のための教育プログラム実施助成金
「糖尿病の新規治療法の開発に挑む！」

③ 中尾啓子 (研究代表者)

令和 4 年度 研究マインド育成のための教育プログラム実施助成金
「ネイティブスピーカーの研究者と一緒に「Science English (科学英語)」を学ぼう！」

④ 中尾啓子 (研究代表者)

令和 3~4 年度 埼玉大学との包括連携協定に基づく共同支援研究 Grant
「発生過程の脊椎原基と成体臓器に存在する未分化前駆細胞で共通する増殖・分化制御シグナル」

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

シンポジウムオーガナイザー・司会 : シンポジウム「概日リズムが基軸となる生命の恒常性・持続性 : 体内時計の乱れが招く健康問題の克服に向けて」第 100 回日本生理学会大会、2023年3月15日、京都市

7. 自己点検・評価

< 創造生理学グループ >

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

【卒前教育】

講義・実習において、各教員の努力はみられ、その結果アンケート調査においても良好な結果を得た。また、課外プロにおける補修プログラムにおいても学生を受け入れ、当該学生の修得向上に一定程度の効果をあげた。以上より、学部生の履修内容の到達において、一定程度の効果を上げられたと考えられる。

【大学院教育】

大学院生1名の研究において、堅実に成果を得られている。今後も期待できることから、着実に効果を上げていると考えられる。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

【卒前教育】

目標に向かって進んだが、意欲の高い学生達の意欲・好奇心を一層刺激することと、受動的な学生の意欲を刺激すること、については引き続きの課題である。

【大学院教育】

大学院生の研究進行過程において、適宜適切な研究指導をすることにより、更なる研究スキル・研究マインド向上に資することを狙う。また、大学院講義において、学生の意欲・好奇心をもっと刺激することが今後の課題と言える。

<生体機能調節研究グループ>

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

【卒前教育】においては、医学部3年生以降で学ぶ臨床医学の基盤となる生理学教育に加えて、医学部生としては是非身につけて欲しい科学英語、医学研究の歴史などの一般教養を選択必修の枠で学んでもらう取り組みに力を入れた。さらに、研究マインドの涵養に特に重点を置いて課外学習プログラム、医科学の探索などに積極的に取り組んだ。

中尾が担当した課外学習プロに参加した学生の中から現在3名が研究医養成プログラムを履修中で、今年度も研究医養成コースを視野に入れて新たに課外学習プログラムに学生が参加してくれたことは、我々の研究マインド涵養の方針が正しい方向を向いていることの表れであるので、今後もさらに発展させていきたい。

【大学院教育】においては、長崎大学医学部と本学との共同研究プロジェクトに参加して大学院博士課程研究生の東美樹の論文がJ. Biochemistryに掲載された。東美樹はこの論文で学位審査申請を行い、無事学位を取得することができた。(池田)

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

研究成果に関しては研究方法を特許申請および論文投稿準備中であるので学会発表等を控えている状況であるが、これまでに獲得した成果をベースに公的研究費を獲得できたので、来年度は完結させることに全力を挙げる。

4. 生化学

1. 構成員

村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 教授 : 運営責任者 : 教育副主任 : 研究副主任 : 代表指導教員 (大学院) : 中枢神経の生理生化学 : 博士

魚住 尚紀 (UOZUMI, Naonori) : 准教授 : 教育員 : 指導教員 (大学院) : 生化学・分子免疫学 : 博士

中野 貴成 (NAKANO, Takanari) : 准教授 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 生化学・分子生物学 : 博士

荒木 智之 (ARAKI, Tomoyuki) : 講師 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 生化学・分子生物学 : 博士

北條 泰嗣 (HOJO, Yasushi) : 助教 : 研究員 : 大学院教員 (大学院) : 博士

橋爪 幹 (HASHIZUME, Miki) : 助教 : 研究員 : 大学院教員 (大学院) : 博士

伊藤 吏那 (ITO, Rina) : 助手

平尾 鮎美 (HIRAO, Ayumi) : 実験助手 : 修士

小谷 典弘 (KOTANI, Norihiro) : 医学研究センター : 教授 (兼担) : 研究員 : 指導教員 (大学院) : 生化学・分子生物学・細胞生物学 : 博士

宮崎 利明 (MIYAZAKI, Toshiaki) : 講師 (兼担) : 研究員 : 大学院教員 (大学院) : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

卒前教育

6年一貫教育を柱とする本学医学部の卒前教育において、生化学科は主として医学・生物学の基礎となる細胞生物学と、基礎医学の主要分野の1つである代謝・消化器・血液系(エネルギー系ユニット)を受け持ち、基礎から臨床医学へと進む際の橋渡しとなるべき教育を担っている。学生が講義を通じて、生体の構造や生体分子機能、及びヒトがもつ正常な代謝機能・エネルギー産生機構についての正確な知識を得る事、またその過程で自ら学習する態度を身につけるよう指導に努めている。また、実習や演習を通じて観察力・科学的思考能力を養い、考察力及び批判力を交えて成果を発表できることを目標としている。

卒後教育

該当なし

大学院教育

講義や実験指導、討論を通じて科学的思考能力を養い、考察力及び批判力を交えて研究成果を発表できることを目標としている。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育

魚住が医学教育センター医学部領域卒前医学教育部門カリキュラム室室長を努めた。1年生の「医科学への道すじ」コースでは、「医科学の探索」では魚住がユニットディレクターを務め、テュータを北條が担当した。「細胞生物学」コースでは、小谷がコースディレクターおよび第2ユニットのユニットディレクター、村越、魚住がコースディレクター補佐、中野が第2ユニットのユニットディレクター補佐を務めた。第1ユニットでは、小谷が講義を担当した。第2ユニットでは、講義として村越、小谷、中野、北條が講義を担当し、村越、小谷、中野、北條が演習を担当した。ユニットの最初のコマには第1ユニットの学習内容を確認することを目的とした確認テストをオンラインで実施した。また、第一ユニットの定期試験成績を基に補習が必要な学生およびそれ以外の学生でクラス分けし、一部の講義をそれぞれのクラス別に実施した。第3ユニットでは魚住、荒木が講義を担当した。さらに「細胞生物学実習」では、中野がユニットディレクターを務め、荒木がユニットディレクター補佐を担当した。細胞生物学実習を村越、小谷、魚住、荒木、中野、北條、橋爪、宮崎、伊藤、平尾の10名で受け持った。「人体の基礎科学コース」では、コースディレクター補佐を村越、魚住が務め、小谷、魚住が講義を1コマを、村越、中野、北條が2コマを担当した。「臨床推論」ユニットでは、中野がテュータを担当した。1、2年生共通の選択必修ユニットでは、村越から教養教育森口准教授にユニットディレクターが移動して2年目となっている。サブユニット「(神経倫理) 答えのない医学2」と「AIの基本を知ろう」を村越が、サブユニット「進化と私たち、進化と病」を中野が担当した。思考と表現ユニット、深遠な理解の1班を村越、中野が担当した。

2年生の「人体の構造と機能2」コースでは村越から生理学三輪教授にコースディレクターが移動して2年目となっている。「エネルギー系」ユニットでは、魚住がユニットディレクター、中野がユニットディレクター補佐を務め、

村越、小谷、魚住、中野、荒木が講義を担当した。村越、小谷、荒木、魚住、中野、北條、橋爪、宮崎が「まとめと演習」を担当した。また、「調節系」ユニットでは村越、小谷、魚住、荒木が講義を担当した。「情報系」ユニットでは村越が講義を分担した。「物質系実習」では、荒木がユニットディレクター、中野がユニットディレクター補佐を務め、村越、小谷、魚住、荒木、中野、北條、橋爪、宮崎、伊藤、平尾の10名で受け持った。「医学英語2」では、村越、中野が担当した。

その他、学生アドバイザーを村越、小谷、魚住、荒木、中野が担当した。また、中野が学生支援室委員を担当した。夏期・通年・春期プログラムにおいては、小谷が1名、中野がエネルギー系の補習プログラムで延べ55名、中野が通年プログラムで1名を指導した。

卒業教育

該当なし

大学院教育

村越が大学院医学研究科博士課程学生、魚住、中野が医学研究科博士課程 実用実験医学特別講義への講義を行った。毛呂病院看護専門学校の第一学科は北條が8コマ、橋爪が6コマの講義を担当した。

2-3. 達成度評価

卒業教育

講義、実習ともに全教室員がそれぞれの役割を十分に認識し、相互に情報を交換・共有しながら教育にあたっている。実習に関しては、コロナ禍にあって大きな制約がある中、教室会議において毎回議論を行い、効果の高い実習項目を優先して内容の変更等を実施した。また、従来どおり学生からの意見を取り入れつつ評価の改善を目指している。これらの改善により、その効果は年々現れつつあり、学生の満足度などの手応えを感じている。特にレポートの指導には力を入れており、提出後に入念なチェックと返還、一定水準に達しないものには再提出を求めている。一方十分な内容に達した者には賞を与え、学年全体に対してより高いレベルを目指すようにとのメッセージを与えている。また、令和2年度から取り入れられたオンラインによる教育、特にオンデマンド型配信講義や、オンライン対話型ツールを使った講義・実習・演習については、それらの長所を活かすとともに短所を埋めるべく対応を行った。このように本年度はコロナ禍における講義・実習の形態が大きく変わったにも関わらず、各人がそれに適応し、例年と同等の実績を挙げた。教室全体の教育における卒業教育の達成度は、約90%といったところであろう。

卒業教育

該当なし

大学院教育

講義や特別演習においては、それぞれの役割を十分に認識し、相互に情報を交換・共有しながら教育にあたった。教室全体の教育における大学院教育の達成度は、約90%といったところであろう。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度では以下を目標として活動する。

卒業教育

次年度は更にツールの充実を図ることによって学生の満足度の高いものになるように努力する。そのためにも、講義に関しては村越以下、准教授、講師を中心に分担し、実習はさらに教室員全員の参加でこなしていく。また、医科学の探索、臨床推論等、少人数演習教育には助教も参加し、成果を挙げたい。CD、UD、それらの補佐等、教室員が卒業教育の主要なメンバーになりつつあり、生化学の一教室を超えて大学全体に貢献するとの意識を共有したいと期待している。

大学院教育

修士課程（社会人大学院生）を終えて実験助手を継続している平尾の修論成果をまとめ英文論文文化を図るなど成果を形にする。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

基礎医学的および臨床応用可能な生化学研究として、中枢神経、脂質代謝、免疫応答機構、創薬研究など、様々な分野からのアプローチを行った。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. ストレス応答時の大脳辺縁系のリモデリング機構（研究員：村越、北條、橋爪、中野、伊藤、平尾）
2. 自然免疫受容体TLRの活性化機構の生化学・分子生物学的解明（研究員：魚住、平尾）
3. オミックス解析に基づくがん分子標的薬の開発（研究員：荒木）

4. 小腸からのコレステロール排出促進による粥状プラーク形成の抑制（研究主任：中野）

科研費基盤Cを獲得した。

5. 大腸がん肝転移におけるがん微小環境制御メカニズムの解明（研究員：宮崎）

大腸がん肝転移のメカニズムに関する研究で論文1報を報告した。

6. 分子会合体の医学応用に関する研究（研究員：小谷）

新規腫瘍マーカーの測定法の開発を行うための研究費として、公益財団法人テルモ生命科学振興財団より助成金を獲得した。また、ウイルス受容体の研究で論文1報、Proximity proteomicsの総説を1報報告した。

3-3. 達成度評価

上記の個々の研究グループにおける個別の研究テーマでの研究の進展は元より、互いの知識や技術を持ち寄って構成された共通の研究テーマを遂行する段階にある。脂質代謝や免疫系、抗がん剤の薬理と中枢神経薬理、分子生物学を組み合わせた、本学科特有の研究を実施していく。

1. 様々な心身精神疾患において辺縁系の神経回路-シナプスの可塑的变化が起こることが知られており、病態解明と予防治療戦略の策定が期待されている。我々は種々精神疾患の病態モデルとしてストレス負荷後の動物行動やシナプス変化を解析している。具体的には拘束あるいは断眠ストレス処置後のマウスから前部帯状回（ACC）および扁桃体を含む脳スライス標本を作成し神経回路が発生する律動的（オシレーション）活動の変化を電気生理・薬理的に解析している。中でも各種ストレス負荷の共通作用解析を目的として、グルココルチコイドを投与したマウスを用い、*in vitro* 前部帯状回スライス標本でのカニン酸誘発オシレーションのドーパミン調節を解析し、行動学的異常との相関を求めたところ、興味深い新知見を見出し論文投稿段階に至った。また、扁桃体オシレーションと睡眠-記憶定着の関係、マウス共感行動とACCオシレーション活動との関係を調べている。さらにはLPS投与による全身性炎症のACCオシレーション活動への影響も研究成果を挙げている。

2. Toll-like Receptor (TLR)は、病原体構成成分を感知して自然免疫系を活性化する生体防御の受容体であり、今日では生体恒常性にも重要であることが知られている。細胞内情報伝達経路や、生体での機能解析の研究は進展したが、受容体活性化機序には未解明課題がいくつも残されている。現在、1) TLRが活性化型に変換される機序、2) 活性化TLRが細胞内情報伝達分子と複合体形成する機序を、生化学・分子生物学的手法を駆使して解析・解明を進めている。こうした研究を通して、生体レベルでのTLR・自然免疫系の活性化水準の検出や人為的介入調節が可能となると考えられる。

3. 遺伝子発現（トランスクリプトーム）、タンパク質の構造機能解析（プロテオーム）、遺伝子多型（SNP）、代謝産物解析（メタボローム）等の網羅的分子情報解析から新規がん分子標的薬の開発と遺伝子マーカーの探索を行う。

4. コレステロール代謝異常は動脈硬化促進の主なリスクとなる。私はこれまでに解明した小腸におけるコレステロールフラックス機構（*PLoS ONE* 2016, *Nutrients* 2019）を基盤として、現在小腸からのコレステロール排出促進による動脈硬化抑制の効果について調べている。血中コレステロール濃度がそのリスク評価の中心であるが、小腸からのコレステロール排出の促進でも有意な動脈硬化抑制効果が先行研究ならびに予備的検討から予想される。またこの促進は食品成分でも可能であることから本研究成果は若年期より誰にでも実施可能な、血管病予防の新たな栄養学的手段の理解と発展をもたらすと期待している。

5. 日本における大腸がん罹患率が増加しており、特に若年層の発生率が上昇傾向にあると推定されていることから、新たな早期診断マーカーや治療法開発の重要性が認識されてきている。また、肝臓・肺・リンパ節への転移が予後不良因子である。そこで、大腸がんの肝転移メカニズムを解明するために、大腸がん患者から樹立したがん幹細胞様の特徴を持つスフェロイド細胞やがん細胞株を用いて、がん細胞の浸潤・転移機構について分子生物学的研究を行っている。大腸がんを含む多くの難治性がん（再発・転移・薬剤耐性など）種において、浸潤・転移にがん幹細胞の存在が多数報告されており、がん幹細胞を標的とした再発・転移リスクの少ない治療法の確立に繋げたい。大腸がん肝転移に関する研究で論文1報を報告したことから、目標は十分に達成できたと評価する。

6. がん細胞特異的な細胞膜上2分子会合抗原を標的として抗体医薬を創薬するシステムの開発、2分子会合抗原をがん診断（リキッドバイオプシー）に使用するための研究、および2分子会合体解析法（Proximity labeling）を用いたウイルスの感染に関わるウイルス受容体の同定を実施している。中でも、ウイルス受容体の同定に関しては、今年度論文が受理されており、順調に研究が進行している。

3-4. 次年度改善計画

神経科学の研究や分子生物学的研究について論文や学会発表を通して積極的に成果を発信していく。また、学生教育に対する研究活動については、課外プロなどを通じて研究への興味を持ってもらう試みを続けており、学生による発表も順次計画していきたい。来年度は構成員、学生による研究が効率的に実施できる環境整備を整え、各グループの研究がさらに発展できる基盤を整えたい。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

日本アンチドーピング機構学術委員 (村越 隆之)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

薬理学研究会理事 (村越 隆之)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

①Kotani N*、Araki T、Miyagawa-Yamaguchi A、Amimoto T、Nakano M、Honke K.

Proximity Labeling and Proteomics: Get to Know Neighbors.

Methods in Enzymology、679:131-162 (2023). *corresponding author

②Kotani N*、Nakano T、Kawahara R.

Host cell membrane proteins located near SARS-CoV-2 spike protein attachment sites are identified using proximity labeling and proteomic analysis.

J. Biol Chem. 298(11): 102500 (2022). *corresponding author

③Araki T、Nagashima M、Hirasawa H、Tamalu F、Katagiri Y、Miwa N、

Epigenome-wide association analysis of pancreatic exocrine cells from high-fat- and normal diet-fed mice and its potential use for understanding the oncogenesis of human pancreatic cancer.

Biochem Biophys Res Commun. 2022 Dec 31; 637:50-57

学会発表

④村越隆之、平尾鮎美、村上元、伊藤吏那、魚住尚紀

前帯状回神経回路オシレーションに対する全身性炎症とヒスタミンの作用

第96回日本薬理学会年会 横浜 2022/12/1

⑤村越隆之、伊藤吏那、平尾鮎美、北條泰嗣、橋爪幹、中野貴成、村上元、魚住尚紀

辺縁系における認知・情動機能と神経回路オシレーションの関与

第75回日本自律神経学会総会 さいたま 2022/10/28

⑥小谷 典弘、山口 亜利沙、本家 孝一

糖鎖研究から始まった「近接プロテオミクス」の発展とその展望

第41回日本糖質学会年会 大阪 2022/10/1

⑦橋爪幹、伊藤吏那、北條泰嗣、平尾鮎美、村上元、村越隆之

周期的な外部感覚刺激による扁桃体 BA 核オシレーションの引き込み現象の解析

第45回日本神経科学大会、沖縄 (2022)

⑧平尾鮎美、北條泰嗣、村上元、伊藤吏那、橋爪幹、村越隆之、魚住尚紀

炎症がサイトカイン・前部帯状回ネットワークオシレーション・認知行動に及ぼす影響

第45回日本神経科学大会、沖縄 (2022)

【総数：論文3件、学会発表5件】

6-2. 獲得研究費

①2022年度 村越隆之 埼玉大学との包括連携規定に基づく共同研究支援 Grant

「前部帯状回 (ACC) オシレーション活動の両側同期性は情動・認知機能に必須カーオプトジェネティクスによる皮質活性化を用いた解析」(700千円)

②2022年度 小谷典弘、車両競技公益資金記念財団助成金

「がん細胞上分子会合体を標的とした新規抗体医薬創薬システムの構築」

(1年間：直接経費2,670千円；代表)

③2022年度 小谷典弘 公益財団法人テルモ生命科学振興財団

「エクソソーム内 microRNA を介した SGLT2 阻害薬の心保護メカニズムの解明」

(1 年間：直接経費 2,000 千円；代表)

④2022 年度 小谷典弘 文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 C）

「エクソソーム内 microRNA を介した SGLT2 阻害薬の心保護メカニズムの解明」

(3 年間：直接経費 100 千円；分担)

⑤2022 年度 中野貴成、文部科学省 科研費（基盤研究（C））

小腸からのコレステロール排出促進による粥状プラーク形成の抑制：

(3 年間：直接経費 3,000 千円；代表)

⑥2019 年度 荒木智之、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））

「分子標的薬の開発を目的とした Rho paradox の解明」

(5 年間：直接経費 1,700 千円；代表)

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

学部

当年度は、前年より村越は病気療養もあって関与が減少したが、准教授、講師を中心に分担し、実習はさらに教室員全員の参加でこなしている。また、医科学の探索、臨床推論等、少人数演習教育には助教も参加し、成果を挙げている。教育の他の運営に於いても教室員全員が一致団結してあたり、大学内でも依然として突出した貢献度を達成したと自負している。

大学全体の業務についても村越の関与は軽減された。一方、魚住の業務はカリキュラム室長の他にも「今後の授業のあり方 WG」を始め大学運営の中核に関わる重要なものとなってきている。その点では、研究センター副部門長である小谷（生化学兼任）も同様といえよう。それ以外のメンバーについてもさらに仕事量が増し、全員が一丸となって教室運営に関与することで大学全体への貢献をしている。

大学院

大学院教育は従来通りの講義に貢献している。教室内での研究面では論文抄読会、プログレスレポートを中心とするミーティングを定期的で開催し、教室員の相互理解や業務の効率的な遂行に役立っている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

学部

教室員には CD、UD、それらの補佐にも多く関わっているので、来年度もさらに学生の学修成果を客観的に見直し、マイルストーン上の不足部分にターゲットを絞りカリキュラムを修正し、同時に各自の講義、実習指導に工夫を加えるなどして改善を図りたい。教室員が卒前教育の主要なメンバーになりつつある現状から、生化学の一教室を超えて大学全体に貢献するとの意識を共有したいと期待している。

今年度は村越の赴任 14 年目、任期最終年度にあたるが病気療養もあってさらに体制交代の準備を進める必要を感じている。これまでも教室員スタッフの協力と、大学事務、基礎系関係教室の方々との連携をいただいでなんとか機能させてきた。引き続き、今後も生産性、効率に優れ、尚且つ、風通しと居心地の良い教育研究環境を維持発展させたい。大学を取り巻く社会の環境、特に医学部と地域社会、科学政策全般と医学研究の関係等、複雑で多様化し時に個別層間への分断による深刻な問題を抱える状況下、長く継続でき、しかし改革・革新を常に目指すというスタンスを、たとえ教室運営のレベルであっても常に意識して行きたいと念じている。

大学院

今後、臨床からも含め大学院生が入学することも期待して、教室の研究テーマを整備したい。

以上

5. 薬理学

1. 構成員

丸山 敬 (MARUYAMA, Kei) : 教授 : 運営責任者, 教育主任, 研究副主任 : 代表指導教員 (大学院) : 神経薬理学 : 博士
鈴木 正彦 (SUZUKI, Masahiko) : 保健医療学部客員教授 (薬理学兼担) : 循環呼吸薬理学 : 博士
淡路 健雄 (AWAJI, Takeo) : 准教授 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 分子画像解析学 : 博士
周防 諭 (SUO, Satoshi) : 講師 (2022年9月より准教授) : 教育副主任 : 学位論文審査教員 (大学院) : 博士
吉川 圭介 (YOSIKAWA, Keisuke) : 講師 (2022年9月より准教授) : 研究副主任 : 学位論文審査教員 (大学院) : 博士
柳下-姜 楠 (YAGISHITA-KYO, Nan) : 講師 : 博士
岩佐 健介 (IWASA, Kensuke) : 助手
山本 梓司 (YAMAMOTO, Shinji) : 保健医療学部助教 (2022年4月より講師) (薬理学兼担) : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

本基本学科では、以下を目的として、その達成を目標に教育活動を行った。

<卒前教育> 臨床医に必須な薬物療法の基礎の修得

<卒後教育> 研究能力の習得/評価

<大学院教育> 研究 (実験) 指導と研究能力の習得/評価

2-2. 教育実績

<卒前教育> 全教室員が教育に関与している。薬理学教室の担当する教育内容は、1年次の「細胞生物学」の分担 (16章「細胞の情報伝達」) (柳下-姜)、「医科学入門」(岩佐、柳下-姜)「人体の基礎科学2 (化学)」(吉川)、「医科学の探索」(吉川、周防、岩佐)、臨床推論(柳下-姜)、2年次の「薬理学総論および実習」(薬理学全員)、3年次「医学英語」(周防、丸山)、3年次、4年次、6年次の幾つかのユニットでの薬物療法の分担講義である (淡路、丸山)。丸山は2021年6月に刊行した単著の「休み時間の薬理学」を講義で使用した。藤巻教授 (脳外科) は最新の脳腫瘍の抗癌薬治療、佐々木康綱先生 (前昭和大学医学部教授、現洛和会音羽病院腫瘍内科部長) は抗癌薬一般、井出教授 (麻酔科) は局所麻酔薬の講義を行い、薬理学総論と臨床医学の融合を目指した。新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、本年度は講義、実習、評価をオンラインで行った。特に手書きレポートはコピー/ペースト等の問題も無く、高い学習効果があったと自負している。定期試験 (記述式筆記試験) を1回のみ実施した (欠席学生はいなかった)。概ね問題無く終了したと評価している。実習は3項目のシミュレーションを用いたものとなった。また、保健医療学部3、4年生数名を預かり、卒業論文研究・実験指導を行った。

<卒後教育> 学位審査を行った。淡路 (副査3件)、吉川 (副査1件)

<大学院教育> 保健医療学部 (薬理学兼担) 鈴木正彦客員教授が指導教員となっていた修士課程学生1名は薬理学教室で研究を行い、平成26年に修士取得後に医学部博士課程 (薬理学) に進学した。平成28年度の学術振興会特別研究員DC2に採用された。平成29年度に医学博士を取得し、平成30年度4月より保健医療学部教員に採用され、現職は兼任講師として、医学部の教育にも大いに貢献している。本年度は大学院学生は不在であるが、講義などで貢献できたと自負している。

<他大学教育>

薬理学教員の不足により他教育機関からしばしば講義の要請がある。医療人育成としての社会貢献として、他大学の講義を積極的に行うこととしている。

- ✓ 埼玉医療福祉会看護専門学校 (旧毛呂病院看護専門学校) : 薬理学講義 (吉川、柳下-姜、周防、岩佐)
- ✓ 上福岡高等看護学院 : 薬理学講義 (吉川、柳下-姜、周防)
- ✓ 熊谷市医師会看護専門学校 : 生化学講義 (吉川)
- ✓ 飯能看護専門学校 : 薬理学、生化学講義 (吉川)、人体の機能講義 (山本)
- ✓ 東京医療学院大学 : 臨床薬理学講義 (丸山)
- ✓ 群馬大学医学部 : 薬理学講義 (丸山)
- ✓ 北里大学理学部 : 生物学講義 (丸山)

2-3. 達成度評価

<卒前教育> 限られた時間と人員の条件下で最低限必要な知識を習得させている。全てをオンラインで行ったが、大きな問題は生じなかったが、今後、さらに検討する必要がある。

<卒後教育> 学位審査で研究能力を適切に評価した。

<大学院教育> 神経薬理学の基本を修得させることができた。

2-4. 次年度改善計画

<卒前教育> 講義については、教員が専門領域以外も十分な準備をして一定の成果を得ることが出来た。臨床関連型実習の充実を引き続き模索する。オンライン教育をさらに改善する。新型コロナ修飾後もオンライン講義/実習を積極的に取り入れることとし、さらに内容の検討を行う。

<卒後教育> 適切な学位審査ができたが、さらなる厳正な評価を目指す。

<大学院教育> 博士4年生大学院生は基本的な知識と実験手技を習得し、学位を授与されて卒業した。平成30年4月から保健医療学部教員に採用された。今後とも共同研究を継続しており、十分な成果と言える。大学院生不在であっても、講義などを通じて貢献を目指す。

3. 研究

3-1. 目的・目標

いわゆるゲノム情報に基づく網羅的研究ではなく、いままでの概念を超える新たな研究分野の開拓を目標とする。そのため、効率的ではないとの批判を甘受して、個人がその興味のままに、ある意味では外界の動向から独立して研究を進めることを原則とする。

3-2. 研究プロジェクトと研究実績

1. アルツハイマー病の分子病態 (柳下、丸山)

アルツハイマー病では、脳内に顕著な蓄積が認められる2種類のタンパク質、アミロイドβタンパク質(Aβ)とタウとが、その発症に関与していると考えられている。当研究室では、2つのタンパク質について基礎的な研究を実施している。特に、睡眠時無呼吸症候群のモデルである間欠的低酸素負荷に着目し、このモデルが、加齢と共通性の高い遺伝子発現変化を起こすこと、タウのリン酸化を亢進させることを明らかにした。また、本論文内で用いた網羅的遺伝子解析は共同研究者らの協力により、アルツハイマー病研究に限らず、スタンダードな解析法になる可能性がある。データベース検索を併用することで、得られた解析結果を生物学的観点から解釈できるようになった。さらに、ヒトに近い老化を示すと言われている齧歯類デグー0. degusの脳を入手し、Aβやタウの検出を試みた。また、シナプス関連分子であるNeurologinやNeurexinの0. degusにおける配列を示した(論文発表済み)。

2. 脂肪酸受容体の薬理学的研究(淡路)

京都大学と共同で新規クローニングした不飽和脂肪酸受容体の薬理学的特性の研究ならびに、メタボリック症候群を含む代謝疾患理解のため、細胞レベルでの機能解析を行っている。この研究の延長として新規メタボリック症候群治療薬の新規開発を目指し、シード化合物のスクリーニングを行っている。同時にメタボリック症候群・肥満の発症に関わる不飽和脂肪酸受容体の生理機能を明らかにするために京都大学と共同でノックアウトマウスおよびトランスジェニックマウスの解析を行っている。発現変化を客観的に評価するために、新たな網羅的解析を開発している。また、生殖機能における不飽和脂肪酸受容体の機能の解明のため、本学産婦人科・生理学教室と共同研究を遂行した。

3. 生理活性脂質に着目した神経変性疾患治療(吉川、岩佐、山本)

脂質メディエーターはそれぞれが特異的な受容体に結合し生理活性を発揮し創薬の重要なターゲットである。脂質メディエーターの神経変性疾患における詳細な生理活性を解明し、薬理的治療に応用することを目的としている。生理活性脂質の合成酵素、受容体などのゲノム編集技術を用いた機能解析を始めとして、多発性硬化症の脂質メディエーター生理活性制御による治療(お茶の水女子大学との共同研究)、天然生理活性成分を用いたアミロイドタンパク質クリアランス促進によるアルツハイマー病治療戦略(九州大学農学部との共同研究)などの研究を進めている。

4. 線虫の神経薬理学(周防)

ドーパミンなどのアミンは運動や感情の制御に関わる重要な神経伝達物質である。研究上の様々な利点を持つモデル生物である線虫C. elegansを用いて、アミンの働きを分子・細胞レベルで解析している。カルシウムイメージングなど可視化解析により、アミン受容体が生体内でどのようなシグナル伝達を研究している。さらに、アミン神経伝達物質がどのように行動の性差を制御しているかを解明するために研究を進めている。

3-3. 達成度評価

当事者としては十分なレベルの研究を行い、論文投稿を行ったが、残念ながら、超一流と称される学術誌への掲載は難しかった。PubMedに登録された学術誌に最終的には掲載された。最低限の業績目標には到達したと評価する。

3-4. 次年度改善計画

さらに超一流と称される学術誌への掲載を目指すことを目標として掲げ、達成に向けて取り組む。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

丸山 International Journal of Molecular Sciences (6件)、Metabolites (1件)、Pharmaceutics (1件)、Cells (1件)、Biomedicines (2件)、Neurology International (1件)、Brain Sciences (1件)

吉川 埼玉医科大学雑誌 (1件)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

柳下 第8回高校生国際シンポジウム(主催:一般社団法人Global Academy)生物分野審査員:2023年2月21日、22日、鹿児島宝山ホール

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

① Iwasa K, Yamagishi A, Yamamoto S, Haruta C, Maruyama K, Yoshikawa K

GPR137 inhibits cell proliferation and promotes neuronal differentiation in the Neuro2A cells

Neurochemical Research published online 27 November (2022)

② Yamashina K, Yamamoto S, Matsumoto M, Iwasa K, Takeda N, Haruta C, Maruyama K, Shimizu K, Yoshikawa K

Suppressive effect of fruiting bodies of medicinal mushrooms on demyelination and motor dysfunction in a cuprizone-induced multiple sclerosis mouse model

International Journal of Medicinal Mushrooms 24(9):15-24 (2022)

学会発表

③ 柳下-姜 楠、丸山 敬

高濃度テストステロンはNeurexinとNeurologinとの結合阻害を介して社会性行動異常を呈する
Neuro2022 (ポスター発表) 2022年7月2日 沖縄

④ 周防論

Hermaphrodite behavior is modulated by mating

線虫研究の未来を創る会 2022 (ポスター発表) 2022年8月29日 オンライン

⑤ 周防論

線虫 *C. elegans* 雌雄同体の行動の精子による制御の解析

第45回分子生物学会年会 (ポスター発表) 2022年11月30日 千葉市

⑥ 吉川圭介

神経炎症におけるプロスタグランジンとグリア活性化—依存的か非依存的か?

第45回日本分子生物学会 (ワークショップ、オーガナイザー、発表者) 2022年11月30日 千葉市

⑦ Yamashina K, Yamamoto S, Matsumoto M, Iwasa K, Takeda N, Haruta C, Maruyama K, Shimizu K, Yoshikawa K

Suppressive effect of fruiting bodies of medicinal mushrooms on demyelination and motor dysfunction in a cuprizone-induced multiple sclerosis mouse model

11th Asia Natural Product Conference 2022年6月17日 オンライン発表

⑧ 岩佐健介、山本梓司、春田力、平澤明、丸山敬、吉川圭介

食事性肥満原因遺伝子 GPR120 が神経炎症、海馬発達に及ぼす影響

第31回神経行動薬理若手の集い (口頭発表) 2022年3月6日 福岡

⑨ 山岸杏、岩佐健介、山本梓司、春田力、丸山敬、吉川圭介

神経細胞の増殖・分化におけるオーファン受容体 GPR137 の機能解析

第32回神経行動薬理若手の集い (口頭発表) 2022年11月29日 川越市

著作

⑩ 丸山敬 (編集) 最新トピックスで知る—こころとからだの健康読本 日経サイエンス 2022/12/17

【総数：論文2件、著作1件、学会発表10件】

6-2. 獲得研究費

吉川 科学研究費助成事業 基盤 C 2021~2023 年度 PGD₂ミクログリア神経炎症サイクルを制御する腸脳関連の神経変性疾患治療への応用 (研究代表者) (3,400 千円)

柳下-姜 科学研究費助成事業 基盤 C 2022 年度~2025 年度 シナプス接着因子の結合制御にみる社会性行動異常の共通した分子メカニズムの解明 (研究代表者) (3,200 千円)

周防 科学研究費助成事業 基盤 C 2022~2025 年度 精子による交尾忌避行動の制御 (研究代表者) (3,100 千円)

山本 若手研究 2021~2023 年度 2-カルバ環状ホスファチジン酸の薬理作用の解明 (研究代表者) (3,600 千円)

6-3. 受賞

山岸杏 (保健医療学部臨床検査学科3年、薬理学教室研究生) 第32回神経行動薬理若手研究者の集い 最優秀発表賞

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

吉川 第32回神経行動薬理若手研究者の集い大会長：2022年11月29日埼玉医科大学かわごえクリニック大会議場

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

学部教育に関しては、単なる国家試験対策ではなく、疑問や問題に遭遇したときに、自分で調べて解決する能動的な能力を身につけることを目標とした。ある程度は、活気ある講義や実習ができたかと評価している。単に「楽しい」講義ではなく、卒業後も有用な講義をさらに考えていきたい。実習項目のブラッシュアップを引き続き行っている。オンライン講義/実習/評価は概ね問題無く行われた。定期試験(筆記試験)と普段の学習態度(レポートと出席)による評価をおこなった。また、CBTや医師国家試験の出題傾向にも十分に配慮していく。「FLASH薬理学」と「休み時間の薬理学」を本学および他学での講義で使用し、学生から一定の評価を得ている。

大学院教育については大きな問題はなかったと評価している。

研究に関しては、大規模研究のような画期的な進歩をもたらす成果は残念ながら得られていないが、それぞれ独創的なテーマで基礎研究を行っている。(1)脂肪酸受容体や脂質性情報伝達因子の研究に関しては、近年話題になっているメタボリックシンドローム関連治療薬につながる成果が出ており、京都大学、東京大学、お茶の水大学、九州大学などとの共同研究が進展している。脂質受容体ノックアウトマウスを多面的に解析している。(2)自然老化動物とし

て注目されているチリ原産齧歯類デグーの解析を行っている。本年度は論文発表は学会報告、獲得研究費は平年並と評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育に関しては、ほぼ目標に到達したと評価している。2023年度はオンラインと対面講義を行うハイブリッド授業における評価の方法（正確かつ公平）を検討する。最大の問題はいかに不正行為を防止するかとなる。研究については厳しい環境ではあるが、2023年度はさらに努力し、いわゆる一流誌に論文が掲載されることを目指す。競争的研究費についても、引き続き獲得の努力を継続する。新非常勤講師に新たな観点の講義を依頼した。

6. 病理学

1. 構成員

佐々木 惇 (SASAKI, Atsushi):教授: 運営責任者: 教育主任・研究副主任:代表指導教員(大学院): 神経病理学:博士
山田 健人 (YAMADA, Taketo):教授: 研究主任: 腫瘍病理学: 博士
石澤 圭介 (ISHIZAWA, Keisuke):准教授(神経内科兼任): 神経病理学: 博士
山口 浩 (YAMAGUCHI, Hiroshi):准教授: 消化器病理学: 博士
金 玲 (JIN, Ling):助教: 外科病理学: 博士
浜田 芽衣 (MEI, Hamada):助教: 口腔病理学: 博士
茅野 秀一 (KAYANO, Hidekazu):教授(保健医療学部兼任): 血液病理学: 博士
小森 隆司 (KOMORI, Takashi):客員教授(東京都立神経病院): 神経病理学: 博士
塩田 敬 (SHIODA, Kei):非常勤講師: 神経病理学: 博士
渡辺 宏志 (WATANABE, Hiroshi):非常勤講師(保健医療学部): 循環器病理学: 博士
島田 哲也 (SHIMADA, Tetsuya):非常勤講師(国立埼玉病院科長): 外科病理学
李 治平 (Li, JIHEI):非常勤講師(さいたま赤十字病院・病理診断科): 博士
市村 隆也 (ICHIMURA, Takaya):非常勤講師: 外科病理学: 博士

永井 俊典 (NAGAI, Toshinori):実験助手: 臨床検査技師, 病理学兼任
福島 雅人 (FUKUSHIMA, Masato):実験助手: 臨床検査技師, 病理学兼任, 細胞検査士
村上 忠蔵 (MURAKAMI, Chuzo):実験助手: 臨床検査技師, 病理学兼任

須賀 晶子 (SUGA, Akiko):事務員

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

人体の正常構造や機能に関する知識を基礎に、様々な疾病の原因、形成機序、形態学的特徴、転帰などについて教育する。

病理学総論:臨床医学を理解するために必要不可欠な基本的な疾病の成り立ち・分類と病理形態学について教育する。

臓器別病理各論講義:それぞれの臓器に特有な疾病の形態学的変化を詳細かつ具体的に解説する。

CPC 実習:病変の肉眼所見、組織所見の基礎を身に付け、疾病の臨床像と形態学的変化とを関連づける能力を高める。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育で運営に関わったユニット(科目)は、2年生「病理総論」ユニットのユニットディレクター(佐々木)、講義担当は病理学、国際医療センター病理診断科、総合医療センター病理部教員、4年生「臨床推論実習 CPC 実習剖検例の症例解析 5日間」ユニットのユニットディレクター(石澤)、講義担当は病理学、国際医療センター病理診断科、総合医療センター病理部教員である。

卒前教育で講義を担当したのは、1年生「細胞生物学1」(山田)、3年生「ヒトの病気1」コース病理各論講義 神経(佐々木、石澤、本間)、呼吸器(清水禎)、循環器(清水禎、東、増田)、消化器(山口、本間)、血液(百瀬)、腎・泌尿器(増田)、生殖器(安田)、内分泌・代謝(川崎)、診療の基本(茅野)、4年生「ヒトの病気2」コース病理各論講義: 感覚器(新井、茅野)、皮膚・運動器(新井)、免疫(新井)、医学英語(佐々木)、5年生 CCstep1 隔週(分担 教員全員 2022年1月~2022年12月計20回)、6年生医療総論(石澤)である。

卒後教育においては、Clinico Pathological Conference (CPC) を1回/月・計11回/年(分担、教員全員)で行っている。

2-3. 達成度評価

病理学に総論と各論の双方の講義があった以前と比較して、病理学の講義・実習時間数は減少しているが、バーチャルスライドを導入し、2年生の病理総論は効率のよい講義と実習がほぼ実施できている。平成22年度からは従来のパワーポイントから脱却し、令和2年度より「ロビンス基礎病理学第10版・丸善出版」・「法医学・福島弘文編・南山堂」を指定教科書とした。また、4年生臨床推論CPC実習では、学生をスモールグループに分け、各グループに対して一人の教員がきめ細かく指導にあたった。4年生3学期からスタートする5年生のCCstep1は国際医療センター病理診断科と毛呂山中央病理診断部で主に行い、各班あたり1.5日間と短い、基礎医学的知識と臨床的知識の統合的整理に有用と考えられ、満足度の高いものとなっている。研修医を主な対象とした学内CPCも年11回行われ、卒前卒後の病理学教育カリキュラムは整備されていると考えられる。

2-4. 次年度改善計画

医学部2年の病理総論の教育に際してはプリントと指定教科書によるオンデマンド講義を行い、学生の理解の補助とした。リモート実習では、終了時に教員が学生全員の実習レポートのチェックを行い、学生の理解度の把握に努めた。4年生臨床推論CPC実習では学生をスモールグループに分け、各グループに対して教員がきめ細かく指導にあたっていている。また、研修医を主な対象とする臨床病理検討会(学内CPC)を年間11回開催し、卒後教育にも貢献している。次年度もより専門性が高く、充実度の高いものとする予定である。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床材料を用いて外科病理診断に役立つテーマを主体として取り組んでいる。『神経病理学』『腫瘍病理学』『血液病理学』が大きな柱となっている。神経病理では電顕検索と FISH 検索、血液病理では FISH 検索が頻回に行われている。腫瘍病理では、がん細胞の増殖・浸潤・転移の分子基盤の解明からトランスレーショナル研究を経て、新規分子標的療法の開発から臨床研究まで行っている。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

神経・腫瘍・造血器の病理学的・分子生物学的研究

3-3. 達成度評価

論文 18 件、学会発表 24 件、著書 3 冊の成果があり、活発な研究がなされたものと考えられる。各分野とも多方面にわたる病理学的研究を展開しており、業績にみる如く、成果をあげている。研究費補助金も取得している。

3-4. 次年度改善計画

次年度はさらなる上積みを目指している。

4. 診療

約 9,000 件の外科病理診断、約 9,900 件の細胞診、36 体（院内 31 体：院外 5 体）の病理解剖を行い、臨床各科とのカンファレンスを行なっているなど、十分ではないマンパワーながら臨床の要請には応えているものと考えられる。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

環境省公害健康被害補償不服審査会専門委員：山田 健人

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

【佐々木 惇】

Pathology International：常任刊行委員

Brain Tumor Pathology:査読委員

【山田 健人】

編集委員

Cancers

Pathology International

査読委員

Kinases and phosphatases 1 件

Journal of Clinical Medicine 1 件

Current Oncology 1 件

Cellular and Molecular Neurobiology 1 件

Stem Cell Reports 1 件

Scientific Reports 1 件

Expert Opinion On Biological Therapy 1 件

International Journal of Molecular Science 1 件

Cancers 5 件

Cells 2 件

Applied Science 1 件

Frontiers in Cell and Development Biology 1 件

【石澤 圭介】

査読委員

Asian Journal of Medical Principles and Clinical Practice 1 件

Asian Journal of Medicine and Health 2 件

Brain Tumor Pathology 3 件

Case Reports in Oncology 4 件

International Journal of Molecular Sciences 2 件

Journal of Advances in Medicine and Medical Research 2 件

Journal of Pharmaceutical Research International 2 件

Neuropathology 3 件

Nutrients 1 件

UTTAR PRADESH JOURNAL OF ZOOLOGY 1 件

Viruses 1 件

【山口 浩】

査読委員

Diagnostic cytopathology 1 件

膵臓（日本膵臓学会誌）1 件

【浜田 芽衣】

査読委員

Oncology Letters 1 件

Experimental and Therapeutic Medicine 2件
International Journal of Molecular Sciences 1件
BMC Oral Health 1件

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本脳腫瘍病理学会常任理事・学術委員会委員長：佐々木 惇

第40回日本脳腫瘍病理学会総会 会長：佐々木 惇

認定臨床研究審査委員会副委員長：山田 健人

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① GTN057, a komaroviquinone derivative, induced myeloma cells' death in vivo and inhibited c-MET tyrosine kinase Okatama M, Fujimori K, Sato M, Samata K, Kurita K, Sugiyama H, Ichikawa D, Matsushita M, Suto Y, Iwasaki G, Yamada T, Kiuchi F, Hirao M, Kunieda H, Yamazaki K, Hattori Y Cancer Med 2023 Feb 24. doi: 10.1002/cam4.5691. PMID: 36825580
- ② Humanized anti-IL-26 monoclonal antibody as a novel targeted therapy for chronic graft-versus-host disease Hatano R, Itoh T, Otsuka H, Saeki H, Yamamoto A, Shirakawa Y, Song D, Iyama S, Sato T, Iwao N, Harada N, Aune T, Dang N, Kaneko Y, Yamada T, Morimoto C, Ohnuma K American Journal of Transplantation 2022 Dec;22(12): 2804-2820. doi: 10.1111/ajt.17178. Epub 2022 Sep 9. PMID: 35997569
- ③ Increased pancreatic alpha cell to beta cell ratio in patients with pancreatic cancer Tsuchiya, T, Saisho Y, Inaishi J, Sasaki H, Sato M, Nishikawa M, Masugi Y, Yamada T, Itoh H. Endocrine Journal doi:10.1507/endocrj.EJ22-0170 Endocr J. 2022 Dec 28;69(12):1407-1414. doi: 10.1507/endocrj. EJ22-0170. Epub 2022 Aug 6. PMID: 35934795
- ④ Nakazawa S, Mamiya R, Kawabata-Iwakawa R, Oikawa D, Kaira K, Tokunaga F, Nobusawa S, Sato Y, Sasaki A, Yajima T, Shirabe K. Identification and molecular analysis of RNF31 Q622H germline polymorphism. Oncol Lett. 2022 Sep 21;24(5):394. doi: 10.3892/ol.2022.13514. eCollection 2022 Nov.
- ⑤ Elenia A, Ichimura T, Hamada M, Ishikawa M, Murakami T, Sasaki A, Nakamura K, Kobayashi N, Obi T: Hyperspectral imaging for tumor segmentation on pigmented skin lesions. J Biomedical Optics Open Access Volume 27, Issue 101 October 2022
- ⑥ Diagnostic Categories and Key Features for Pathological Diagnosis of Endoscopic Ultrasound-Guided Fine Needle Aspiration Biopsy Samples of Pancreatic Lesions: A Consensus Study. Naito Y, Notohara K, Omori Y, Aishima S, Itoi T, Ohike N, Okabe Y, Kojima M, Tajiri T, Tanaka M, Tsuneki M, Nakagohri T, Norose T, Hirabayashi K, Fukumura Y, Mitsuhashi T, Yamaguchi H, Fukushima N, Furukawa T. Pancreas. 2022 Oct 1;51(9):1105-1111
- ⑦ Pancreatic hamartoma: detection of harbouring NAB2::STAT6 fusion gene. Tanigawa M, Koga Y, Naito Y, Yamaguchi H, Iwasaki T, Kohashi K, Ohike N, Hanada K, Higashi M, Komatsu M, Imai H, Yamakita K, Nagakawa T, Okabe Y, Kato S, Noguchi H, Nakayama T, Yasuda M, Kusano H, Akiba J, Oda Y, Yano H. Histopathology. 2022 Sep;81(3):319-328.
- ⑧ M. Hamada, Y. Ebihara, Saori Yoshida, N. Saito, Yuichiro Enoki, H. Inoue, Satoko Matsumura, M. Nakahira, Masanori Yasuda, M. Sugawara. Prediction Formula for Pathological Depth of Invasion From Clinical Depth of Invasion in Tongue Squamous Cell Carcinoma (SCC) Stage I/II Cases. 2023 Feb 1. Cureus 15(2): e34516. doi:10.7759/cureus.34516.
- ⑨ K Kusafuka, Y Sato, E Nakatani, S Baba, M Maeda, K Yamanegi, K Ueda, H Inagaki, Y Otsuki, N Kuroda, K Suzuki, H Iwai, Y Imamura, J Itakura, S Yamanaka, H Takahashi, I Ito, T Akashi, T Daa, M Hamada, M Yasuda, R Kawata, H Yamamoto, Y Tachibana, J Fukuoka, A Muramatsu, K Arai, M Suzuki. The implicated clinical factors for outcomes in 304 patients with salivary duct carcinoma: Multi-institutional retrospective analysis in Japan. Head Neck. 2022 Jun;44(6): 1430-1441. doi: 10.1002/hed.27034. Epub 2022 Mar 29.
- ⑩ E Aloupogianni, M. Ishikawa, T. Ichimura, M Hamada, T Murakami, A Sasaki, K Nakamura, N Kobayashi, T Obi. Effects of dimension reduction of hyperspectral images in skin gross pathology. Skin Res Technol. 2023 Feb;29(2): e13270. doi: 10.1111/srt.13270.

【総数：論文 18 件、学会発表 24 件、著書 3 冊】

6-2. 獲得研究費

【山田 健人】

- ① 挑戦的研究(萌芽) 核内へ移行する scFV モノクローナル抗体の開発研究(課題番号 22K19387) 研究代表者 250 万円
- ② 基盤研究(C)(一般) 難治性多発性骨髄腫の CD26 の発現誘導を制御する HDAC アイソフォームの役割(課題番号 20K07682) 研究分担者 0 円
- ③ 基盤研究(C)(一般) 新たな概念によるハイリスク骨髄腫の予後不良に関わる分子機構の探索と克服薬の開発(課題番号 20K08763) 研究分担者 10 万円
- ④ 厚生労働省・労災疾病臨床研究事業 悪性胸膜中皮腫に対するヒト化抗 CD26 抗体と免疫チェックポイント阻害薬との革新的併用療法の開発(課題番号 18065135) 研究分担者 90 万円
- ⑤ 日本医療研究開発機構・革新的がん医療実用化研究事業 核内移行する抗体への RNA ポリメラーゼ II 阻害分子の結合によるがん分子標的療法の開発(課題番号 21ck0106704h0001) 研究代表者 4423 万円

- ⑥ 一般財団法人日本産業科学研究所 令和4年度研究助成 サルコイドーシスにおける CD26 陽性 T 細胞サブセットの病理学的解析 研究代表者 50 万円

【佐々木 惇】

基盤研究 (C) (基金) 天然食品成分による口腔癌幹細胞抑制メカニズムの解析：効果的口腔癌治療を目指して(課題番号 22K10156-1) 研究分担者 10 万円

【山口 浩】

基盤研究 (B) (一般) ゲノム医療が導く究極の膵癌予防法・予防的膵全摘術の適応患者とは？(課題番号 20H03753) 研究分担者 10 万円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

第一の目標である、「臨床医とコミュニケーションをとり、正しい病理診断を行う」については十分に達成された。「臨床病理カンファレンスの定期的開催」も予定通り達成された。

「細胞診と生検診断の迅速性向上」に関しては従来よりも若干改善されたが、未だ不十分な結果であった。研究に関しては、学会発表は日本病理学会などの全国学会で発表でき、論文発表も活発に行われた。

「病理のわかる良き臨床医育成」に関しては、初期研修医への教育でかなり達成できた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

「細胞診と組織診の結果報告までの時間短縮」、「英文論文を含む論文発表の増加」、「病理医のマンパワーの充実」、「医療安全に向けた病理結果報告の確認」。

7. 微生物学

1. 構成員

村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 教授 : 運営責任者・研究副主任 (10月1日から研究主任) : 代表指導教員 (大学院) : 微生物学、免疫学、腫瘍学 : 博士
堀内 大 (HORIUCHI, Yutaka) : 講師 : 教育主任・研究員 (10月1日から研究副主任) : 指導教員 (大学院) : 微生物学、免疫学、腫瘍学 : 博士
市川 朝永 (ICHIKAWA, Tomonaga) : 講師 (11月1日採用) : 教育員・研究員 : 指導教員 (大学院) : ウイルス学、分子生物学、腫瘍学 : 博士
今井 孝 (IMAI, Takashi) : 講師 (9月30日退職)、非常勤講師 (10月1日採用) : 教育員・研究主任 : 指導教員 (大学院) : 微生物学、医動物学 : 博士
中村 彰宏 (NAKAMURA, Akihiro) : 助教 : 教育副主任・研究員 : 博士
小林 信春 (KOBAYASHI, Nobuharu) : 非常勤講師
日野 佳奈恵 (HINO, Kanae) : 研究補助員

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

【卒前教育】

当基本学科では、疾病としての感染症を理解するため、その基礎となる病原微生物の分類、感染・増殖様式、発症の仕方、診断・予防・治療の原理を教育することを目標としている。実習においては微生物の取り扱いとともに、その形態学的な特徴と機能を理解し、感染症対策の基礎を習得することを目指している。

本学では学生が卒業時まで身に付けるべき能力(コンピテンシー)とコンピテンシーを段階ごとに達成評価できるようにした指標(マイルストーン)が制定され、シラバス内容の更なる充実化とマイルストーン評価に対応できるよう準備をしている。3学年「病気の基礎2」コースとして研究マインドに関する「コンピテンシ5-(2)」を担当し、「感染」・「免疫」・「疫学」ユニットと協力して評価を行う計画は当該年度も継続している。

新型コロナウイルスのパンデミックから遠隔リモート化が急速に進んでいるため、これまで対面式で実施してきた実習のあり方を見直し併用する形式を検討してきた。当該年度では社会情勢が許す範囲内で、重要項目の実習が実施できる体制を整備することを目指した。また「感染」ユニットでは自己学習課題を配布しているが、形成的評価を見据えた(リモート)演習の実施を計画した。当該年度でも授業計画通りに進められない可能性を踏まえ、柔軟に対応する方針での授業・実習運用を目指した。

【大学院教育】

病原微生物と宿主の相互作用による病態形成の仕組みから診断・予防・治療についての問題点を抽出し、演習・実習を通してそれらを解決する能力を習得する。

卒前教育と同様に新型コロナウイルス感染拡大防止策としてオンライン式講義を計画した。

2-2. 教育実績

【卒前教育】

医学部1年生「医科学への道すじ」コース「医科学の探索」ユニット・テュータを担当した(市川22コマ、中村22コマ)。

1年生「良医の道1」コース「臨床推論」ユニット・テュータを担当した(堀内6コマ)。

医学部2年生「病気の基礎1」コース「生体防御総論」ユニットでは村上が当該ユニット・ディレクターとして統括し、講義4コマ(オンデマンド;村上3コマ、堀内1コマ)を担当した。

医学部3年生「病気の基礎2」コースでは、村上が同コースディレクターとして「免疫」・「疫学」・「感染」ユニットを統括し、併せて「感染」ユニットのディレクターとして同ユニットを統括した。「感染」ユニットは当基本学科が主体となり講義31コマ(村上12、堀内12、今井5、中村2)を担当した。「感染実習」は新型コロナウイルス蔓延防止措置として登校学生数を制限し、対面実習とオンライン実習課題(レポート提出:村上、堀内、今井、中村、小林)を行った(4日間)。

医学部4年生「良医の道4」コース「臨床入門・Pre-CC2-1実習(医療面接)」では村上がテュータを担当し(6コマ)、共用試験臨床実習前OSCE評価者を担当、中村が模擬患者を担当した。

医学部6年生では村上が臨床実習後OSCE評価者を担当した。

臨床実習前・臨床実習後OSCEの標準模擬患者研修会では村上が5日間担当するとともに、認定標準模擬患者養成担当者として学内養成講習会(6日間)を担当した。

学生支援においては、学生アドバイザー(3年生:村上)、医学教育センター医学部領域卒前医学教育部門・研究マインド育成室長(村上)、同センター・学生支援室員(3年生:村上)を担当した。研究医養成プログラム学生2名を(村上1名、堀内1名)で指導し、課外学習プログラム4名(村上1名、堀内2名)を受け入れ・研究指導に当たった。

他大学等では、今井が群馬大学医学部「寄生虫学実習」(8時間)を担当した。また、医療系教育として、小林が埼玉医療福祉会看護専門学校「微生物学」(36時間)を担当した。女子栄養大学との包括連携協定に基づく課外学習プログラム(埼玉大学:学生2名)を実施し、オンライン形式でのセミナーを実施した(中村)。

【大学院教育】

大学院共通科目の「実用実験医学特別講義」4コマ(村上1、堀内1、今井1、中村1)、「最新医学特別講義」1コマ(村上)を担当した(オンライン実施)。課外学習プログラム1名を受け入れ・研究指導に当たった(堀内)。

2-3. 達成度評価

卒前教育は対面とリモートのハイブリッド、大学院教育は講義科目が主体であったためリモート教育となった。大きなトラブルもなく概ね目標通りに達成された（90%程度）。

2-4. 次年度改善計画

パンデミック対応のためリモート教育が導入され、教育面での IT 利用が大きく進歩した。従来までの対面実施と IT 併用化は教育効果増進が期待できる。実習では対面実施と IT 併用により教員人員が制限された中でも少人数教育によるきめ細やかで迅速な対応ができた。実習内容について量的な制限は止むを得ないという弱点はあるが、内容の工夫で教育効果は十分に得られているようにみえた。この点は継続する方向で進めたい。

収録動画の新たな教育資源としての活用例として、反転授業と演習的要素を試みた。そのアンケート調査では、教育効果が望める一方で、学生側の負担も大きいことがわかった（授業視聴＋演習課題準備）。また追加のフィードバックを行なっても、評価（定期試験）には殆ど反映されていないようであった。反転授業の継続にまだ工夫が必要な段階と考えられた。

パンデミック終焉に近づいてきているが、授業計画通りに進められない可能性を常に考慮し、柔軟に対応する方針で授業・実習を運用する点は変わらない。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

感染病態で問題となる慢性炎症とそれに類似するがん病態について、「宿主-微生物間相互作用」の研究と臨床微生物学的な側面で重要となる迅速な感染症診断の研究を中心に進めている。慢性感染巣における特殊な微小環境は、病原微生物がもつ固有の病原因子による組織障害や宿主免疫を回避する免疫制御の「場」となっている。この微小環境の性質は、悪性腫瘍（がん）の発生やその進展（転移）とも深く関連することから、「感染-炎症(免疫)-がん」における微小環境の理解から、がんの予防や治療に結びつけることを目指している（村上、堀内、中村）。当該年度より市川講師が着任し、上記プロジェクトに参加することになった。さらに、HTLV-1 ウイルス感染によって惹起される ATL の発症機構の解明および治療標的の同定を開始している。今井講師が国立感染症研究所に転出したが、非常勤講師としてがん・感染症ストレスに対する防御メカニズムの研究を継続している。

一方、当基本学科では様々な病原体に対する新規網羅的同定法の開発と薬剤耐性菌の疫学や感受性変化の仕組みの解明にも取り組んでいる（感染症科・臨床検査医学との研究連携）。この連携では、多様な感染症に対して柔軟に対応できるようゲノム科学的アプローチで問題の解決を図り、国内外の研究施設と協力しながら新たな研究シーズ発掘を目指している。

- ① 【微生物感染を介した宿主免疫増強の分子標的化の研究】（村上、堀内、中村）：CRISPR/Cas9 システムによる細胞株ライブラリーの構築からゲノムワイド・スクリーニングを至適化し、実質的な次世代シーケンス(NGS)ゲノム解析から候補分子の抽出を行う。
- ② 【発光細胞資源開発プロジェクト】（村上）：本課題は過年度 AMED 支援で培った高力価レンチウイルスベクター作製技術を当基本学科内で汎用化し、各研究グループの研究高度化につなげていく。
- ③ 【腫瘍の微生物感染が抗腫瘍免疫応答に及ぼす影響についての研究】（堀内、村上、中村）：R3 年度の研究活動により、昨年度までの結果を考察する上で重要な知見を得た。次年度は、論文発表を目指す。
- ④ 【ATL 発症機構の解明および治療標的の研究】（市川）：ATL 特異的ながん発症関連因子によるがん発症機構の解析、情報伝達系や翻訳後修飾の解析および治療標的を同定し ATL 治療薬の開発を進める。
- ⑤ 【腫瘍細胞内に寄生する細菌と腫瘍進展・縮退起点についての研究】（中村、堀内、村上）：今後は細胞への感染とその評価に重点を置き、目標の達成を目指す。特にタンパク質レベルと遺伝子レベルで、いくつかの実質的なターゲット候補を絞り込んでいきたい。
- ⑥ 【がん・感染症ストレスに対する生体防御の研究】（今井）：(a)がんに対する DNA ワクチンの開発、(b)マウスマラリアにおける血液脳脊髄液関門の破壊メカニズム、(c)社会性ストレスと血中細胞外小胞への影響、(d)脳マラリア発症阻止ワクチンの開発を進める。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

- ① 【微生物感染を介した宿主免疫増強の分子標的化の研究】（村上、堀内、中村）：がん細胞株を用いた CRISPR/Cas9 システムによるゲノムワイド・スクリーニングを実施した。さらにタンパク質の 2 次元電気泳動解析により非感染細胞と感染細胞とのタンパク質発現の比較を試みた。細胞内感染による顕著な発現分子群の変動から分子基盤追求の可能性が見えてきた。
- ② 【発光細胞資源開発プロジェクト】（村上）：HTLV-1 Tax を用いた高力価レンチウイルスベクターの安定作製系からマウス由来細胞株の蛍光タンパク質発現に運用できた（論文発表 3 件）。
- ③ 【腫瘍の微生物感染が抗腫瘍免疫応答に及ぼす影響についての研究】（堀内、村上、中村）：ある種の微生物感染により腫瘍細胞に引き起こされる細胞変性（CPE）のメカニズムの解明を進め、関連する分子がどのような生体応答に影響をおよぼすか公的データベースを利用して検討した。また、CPE 形成を阻害した際の感染細胞の挙動を観察し、CPE 形成が感染腫瘍細胞の生存を支持していることが明らかとなった（学会発表 2 件）。
- ④ 【ATL 発症機構の解明および治療標的の研究】（市川）：ATL がん特異的な JAK/STAT 情報伝達系の亢進を明らかにし、農産物抽出液が JAK/STAT 情報伝達系を制御して ATL 発症を抑制することを示した（論文発表 1 件、学会発表 1 件）。
- ⑤ 【腫瘍細胞内に寄生する細菌と腫瘍進展・縮退起点についての研究】（中村、堀内、村上）：がん進展に関わる細菌 *Fusobacterium nucleatum* を嫌気条件下で培養し、がん細胞との共培養を実施した。共培養によりがん細胞株の形質が変化することが確認された（学会発表 1 件）。
- ⑥ 【がん・感染症ストレスに対する生体防御の研究】（今井）

- (a) がんに対する DNA ワクチンの開発:モデル抗原の卵白アルブミンを発現するマウス胸腺腫細胞に対する DNA ワクチンの開発を進めた。
- (b) マウスマラリアにおける血液脳脊髄液関門の破綻メカニズム: マウス脳マラリアモデルに血液脳脊髄液関門が破綻するが、脳マラリアを発症しないマラリアモデルでは、破綻が認められなかった。また破綻にはキラーT細胞が関与していた。
- (c) 社会性ストレスと血中細胞外小胞への影響: マウスモデルによりエクソソーム内のマイクロ RNA の質的な変化が起き、社会性ストレスから脳内炎症をきたすことを突き止めた。
- (d) 脳マラリア発症阻止ワクチンの開発:弱毒株マウスマラリア原虫を生ワクチンとして用いることで、強毒株感染による脳マラリア発症を阻止することができた(論文発表1件)。

⑦ 【細胞傷害を耐過した腫瘍細胞の形質に関する研究】(堀内、中村、村上):④におけるCPE研究の結果から、殺細胞処理を行なった腫瘍細胞のうち、ごく一部の細胞は細胞死を免れ、特異な形態を示しつつ残存することを見出した。昨年度から継続し、この細胞の各種表現形を解析するとともに、免疫学的な意義の検討を重ねている。以上の結果は、「オール埼玉医大研究の日 第8回学部学生による研究発表会」において畑澤(研究医プログラム履修学生3年)が発表し、敢闘賞を獲得した(学会発表2件)。

3-3. 達成度評価

- ① 【微生物感染を介した宿主免疫増強の分子標的化の研究】がん細胞株を用いたCRISPR/Cas9システムを構築し、ゲノムワイド・スクリーニングを実施し、NGS解析により候補因子を抽出した(達成度70%)。
- ② 【発光細胞資源開発プロジェクト】レンチウイルスベクター作製技術の改良により高力価ウイルスが安定して得られる系が確立した(達成度100%)。
- ③ 【腫瘍の微生物感染が抗腫瘍免疫応答に及ぼす影響についての研究】腫瘍細胞内への微生物感染の効率、細胞変性効果の誘導機序とCPEの意義、in vitro および in vivo の免疫学的データが揃い、以上を併せて論文執筆を進めている。(達成度100%)。
- ④ 【腫瘍細胞内に寄生する細菌と腫瘍進展・縮退起点についての研究】一部のがん細胞株で細菌との共培養による遺伝子発現およびタンパク質の発現に変化がみられた(達成度50%)。
- ⑤ 【ATL発症機構の解明および治療標的的研究】論文発表ができた(達成度100%)。
- ⑥ 【がん・感染症ストレスに対する生体防御の研究】脳マラリア発症阻止ワクチンの開発において論文発表ができた(達成度100%)。
- ⑦ 【細胞傷害を耐過した腫瘍細胞の形質に関する研究】細胞死を免れた腫瘍細胞の免疫感受性は、細胞死誘導の原因によって異なることを示唆する所見が得られた。(達成度70%)。

3-4. 次年度改善計画

- ① 【微生物感染を介した宿主免疫増強の分子標的化の研究】実際にゲノムワイド・スクリーニングの結果を得るため、NGS解析により抽出された候補分子の欠損型細胞株を作製し、表現型の解析をすすめる。また、2次元電気泳動により非感染細胞と発現に差異のあったタンパク質を同定し、NGS解析の結果と照合する。
- ② 【発光細胞資源開発プロジェクト】本課題で培ってきた高力価レンチウイルスベクター作製技術を当基本学科内で汎用できるようにし、各研究グループの研究高度化につなげていく。
- ③ 【腫瘍の微生物感染が抗腫瘍免疫応答に及ぼす影響についての研究】論文発表を行う。
- ④ 【腫瘍細胞内に寄生する細菌と腫瘍進展・縮退起点についての研究】細菌と細胞の共培養条件を安定化させた上で、2次元培養で遺伝子発現解析を実施し、さらにオルガノイド(3次元培養系)での共培養を目指す。
- ⑤ 【ATL発症機構の解明および治療標的的研究】ATL特異的な因子を同定し、がん発症機構の解明を行う。ATL阻害剤スクリーニングを開始する。
- ⑥ 【がん・感染症ストレスに対する生体防御の研究】(a)-(d)の研究成果を公表することに注力していく。
- ⑦ 【細胞傷害を耐過した腫瘍細胞の形質に関する研究】細胞傷害を耐過した腫瘍細胞の免疫学的特性について解析を進める。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

【村上】Cancer Science 査読(5件)

【堀内】Molecular Medicine Reports 査読(2件)、Oncology Letters 査読(2件)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

【村上】群馬大学医学部客員教授、北関東医学会評議員、明治大学農学部「人を対象とする生命科学系および医学系研究・実験に関する倫理委員会」医学担当委員

【今井】群馬大学医学部非常勤講師

【小林】中央手術部の落下菌等の検査

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Imai T, Ngo-Thanh H, Suzue K, Shimo A, Nakamura A, Horiuchi Y, Hisaeda H, Murakami T. Live-vaccination with blood-stage *Plasmodium yoelii* 17XNL prevents the development of experimental cerebral malaria. *Vaccines* (Basel). 2022; 10(5): 762(1-18); doi: 10.3390/vaccines10050762.
- ② Sato F, Sagara A, Tajima K, Miura S, Inaba K, Ando Y, Oku T, Murakami T, Kato Y, Yumoto T. COL8A1 facilitates the growth of triple-negative breast cancer via FAK/Src activation. *Breast Cancer Res Treat*. 2022;194(2):243-56. doi: 10.1007/s10549-022-06635-y.
- ③ Iwahashi N, Umakoshi H, Seki T, Gomez-Sanchez CE, Mukai K, Suematsu M, Umezawa Y, Oya M, Kosaka T, Seki M, Suzuki Y, Horiuchi Y, Ogawa Y, Nishimoto K. Characterization of Aldosterone-producing Cell Cluster (APCC) at Single-cell Resolution. *J Clin Endocrinol Metab*. 2022;107(9):2439-48. doi: 10.1210/clinem/dgac394.
- ④ Kusumastuti R, Kumagai Y, Ishihara S, Enomoto A, Murakami T, Yasuda M, Haga H. Mammaglobin 1 mediates progression of trastuzumab-resistant breast cancer cells through regulation of cyclins and NF- κ B. *FEBS Open Bio*. 2022 Oct;12(10):1797-1813. doi: 10.1002/2211-5463.13468.
- ⑤ Suekane A, Ichikawa T, Saito Y, *et al*. The CGRP Receptor Antagonist MK0974 Induces EVI1 high AML Cell Apoptosis by Disrupting ERK Signaling. *Anticancer Res*. 2022, 42:4743-4752. 10.2187/anticancer.15979
- ⑥ Permatasari HK, Nakahata S, Ichikawa T, *et al*. Oncogenic isoform switch of tumor suppressor BCL11B in adult T-cell leukemia/lymphoma. *Exp Hematol*. 2022, 111:41-49. 10.1016/j.exphem.2022.04.004.
- ⑦ Ichikawa T, Sugamoto K, Matsuura Y, *et al*. Inhibition of adult T-cell leukemia cell proliferation by polymerized proanthocyanidin from blueberry leaves through JAK proteolysis. *Cancer Sci*. 2022, 113:1406-1416. 10.1111/cas.15277.
- ⑧ Wang CQ, Choy FC, Sanny A, Murakami T, Tan AH, Lam KP. An inhibitory role for human CD96 endodomain in T cell anti-tumor responses. *Cells*. 2023; 12(2): 309(1-14); doi: 10.3390/cells12020309.
- ⑨ Yukie Ando, Sara Hatazawa, Yutaka Horiuchi, Takashi Murakami. Senescent B16 melanoma cells are recognized by host immunity but not eliminated. 第81回日本癌学会学術総会 横浜 2022年10月1日.
- ⑩ 中村彰宏、堀内大、鈴木興秀、吉田明弘、村上孝. 嫌気性細菌 *Fusobacterium nucleatum* はマウス NMuMG 乳がん細胞の EMT を促進する. 第96回日本細菌学会総会 愛媛 2023年3月17日.

【総数：論文 8 件、学会発表 5 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

1. (独) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C)「進行性メラノーマの腫瘍免疫原性再プログラム化とその分子標的研究」研究代表者(村上)、研究分担者(堀内、今井、中村)
2. 受託研究費(株式会社 Denka)「ヒトレトロウイルス感染症の高感度診断技術開発に基づく共同研究」研究代表者(村上)
3. 受託研究費(株式会社 セレックス)「特定リンパ球亜集団を増殖させる人工的抗原提示細胞の作製」研究代表者(村上)
4. (独) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C)「細菌の嫌気部位集積性を利用した悪性黒色腫に対する新規免疫誘導方法の開発」研究代表者(堀内)、研究分担者(村上)
5. (独) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C)「大腸癌の高度危険度群マウスにおける *Fusobacterium* の役割」研究分担者(堀内)
6. 独) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C)「合成致死性を介した PRMT5 に依存した HSP90 を標的とした阻害剤の開発」研究代表者(市川)
7. (独) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C)「ストレス制御に着目したマラリア重症化機序の解明と新しい治療法の開発」研究代表者(今井)
8. AMED 新興・再興感染症研究基盤創生事業(多分野融合研究領域)「マラリア患者由来臨床サンプルを起点とした熱帯熱マラリア原虫の病原性・蚊への伝播能を決定するメカニズムの理解」研究分担者(今井)
9. (独) 日本学術振興会 科学研究費補助金 若手研究「初期胚因子 Zscan5b によるゲノム安定性に関する研究」研究代表者(中村)
10. 令和4年度 埼玉大学との包括連携協定に基づく共同研究支援 Grant「物理化学的不均一共培養系による細菌とがん細胞の関係解明」研究代表者(中村)

6-3. 受賞

Reviewer Reward (Spandidos Publications) (堀内)

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

学部教育では昨年に引き続きパンデミック対策としてオンデマンド講義やハイブリッド講義となった。少人数教育によってより細やかなフィードバックが可能になり、積極的にオンラインでのディスカッションが充実してきた。ただし、モニター越しの長時間での対応には集中力の限界があり、分かりやすい説明が重要であることに変わりはない。リモート教育では情報過多を避け、よりポイントを絞った教育を実践し、いかに学生がアウトプット（応用力）をできるかが今後の焦点になる。大学院教育ではオムニバス形式でトピックス中心であったため、リモート授業でも十分に対応が可能だったと思われる。

研究については、研究棟利用のルールが定着し、大きなトラブルは発生しなかった。しかし、国内外学会発表はほぼリモート併用のハイブリッド型が踏襲され、発表資料の事前収録など準備に要する時間は変わらなかった。実質的な研究発表の成果は維持できていた。また科研費獲得に向けた教室内調書 review と連携から申請者全員が獲得内定に至った。更なる発展に向けて、引き続き産学を含めた学内外との研究協力体制の強化、研究資源の充実と保管体制と技術協力によって組織的な公的研究費獲得を図る必要がある。

当基本学科では教育・研究上の性質から BSL2 以上の病原微生物を取り扱う機会が多いが、微生物等細胞資源の維持・管理は適切に行われていた。教育用資源を保管する冷凍・冷蔵庫の故障（耐用年数経過）が続いているため昨年度計画に基づきリニューアルを実施した。外部資金獲得による BSL3 病原微生物検体試料を取り扱う P3 施設設備を実施し、稼働準備が整った点は大きな進歩といえる。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

実質的な新型コロナウイルス・パンデミック終焉に向けた対応について検討を進めるが、その対策については継続する方針で進める（授業計画通りに進められない可能性を常に考慮し、柔軟に対応する方針で授業・実習を運用する点是不変）。またリモート講義に配慮した資料作成、過去の収録動画（教育資源）の活用として反転授業等を試みながら今後のユニット運営に活かして行きたい。

研究ハードについては、基本学科内の研究室（内装・設備）や耐用年数を過ぎた保管庫（共通機器にない）研究機器類のリニューアルが依然必要なことから、継続的にリニューアルを実施していく。研究の内容面では、細菌を介した腫瘍進展と抑制については、実質的な論文成果が期待できるところまで進んできたため、独創性や質的な面でも評価されるよう磨き上げたい。実質的な二次元電気泳動と標的タンパク質の質量分析 (TOF-MS) や NGS 解析から “Infectious Neo-Immunology” の創成に向けた物質的な分子基盤を整える計画である。このような新しい研究成果や研究協力を通して学生の研究マインド醸成に向けた啓発にもつなげていきたい。

当基本学科の教育や研究面での特徴や役割が活かせるように人的資源の補充や施設面でのリニューアルを継続し、高い水準の教育・研究の運営を目指す。

8. 免疫学

1. 構成員

松下 祥(MATSUSHITA, Sho) :

教授:運営責任者:教育副主任:代表指導教員(大学院):抗原/抗原提示分子/抗原提示環境の研究:博士

川野 雅章(KAWANO, Masaaki):

准教授:研究主任, 大学院教員(大学院):細胞傷害性 T 細胞誘導剤の開発、潰瘍性大腸炎の解析:博士

三輪 裕幸(MIWA, Hiroyuki):

講師:教育主任, 大学院教員(大学院):間葉系幹細胞の免疫調節機能の獲得と抗炎症作用の発揮における NF- κ B の役割の解明:博士

戸叶 美枝子(TOKANO, Mieko):

助教:教育員、研究員:各種免疫関連疾患(がん、自己免疫疾患、感染症等)における免疫病態の解明:博士:
(兼担:感染症科・感染制御科)

高木 理英(TAKAGI, Rie):助手

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、生物学、免疫学を中心に、充実した教育を目指して各活動を展開した。

2-2. 教育実績(担当者)

「卒前教育」

1 年生 医科学入門:演習担当(三輪)

1 年生 臨床推論:演習担当(三輪)

1 年生 医科学の探索:演習担当(三輪)

2 年生 生体防御総論:講義担当(川野)

3 年生 免疫:ユニットディレクター(松下)、講義・実習担当(松下・川野・三輪・戸叶・高木)

「卒後教育」

該当なし

「大学院教育」

組織・タンパク質の染色・標識法 Staining or Labeling Techniques for Tissues or Proteins:講義担当(川野)

プラスミド調製法・実験法 Plasmid Preparation for Some Experiments:講義担当(川野)

2-3. 達成度評価

WebClass 等を用いた授業のデジタル化は、凡そ完了したものである。

2-4. 次年度改善計画

全面的な対面授業への移行に合わせて、各々最適化を行う。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

新規抗炎症物質の開発を目標とし、3-2 に記した柱を建てて進めた。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

免疫学研究:松下・川野・三輪・戸叶・高木

アレルギー反応における細胞外アデノシンの機能解析:我々は、細胞外アデノシンが抹消の Th17 を活性化し IL-17A 分泌を上昇させる一方、アデノシン A2a 受容体拮抗薬はその分泌を抑制することを示している。本年度は、アレルギー反応における細胞外アデノシンの機能を解析した。これまでに、アデノシンは、好塩基球からのヒスタミン放出の抑制など、急性アレルギー反応を抑制することが知られている。我々の解析により、その一方で、アデノシンがアデノシン A2a 受容体に作用することにより Th2 からの IL-4, IL-10, IL-13, IL-31 産生が更新され、従って、慢性的なアレルギー反応を増悪させる可能性が示された。我々はさらに、これらのサイトカインの産生更新は、アデノシン A2a 受容体拮抗薬により抑制されることも示した。

細胞傷害性 T 細胞誘導剤の開発:我々は、ウイルス粒子を構成しているタンパク質のみで作られた非感染性のウイルス様粒子(VLP, Virus-like particle)が獲得免疫を誘導するメカニズムの解析を行い、VLP の作用により B 細胞における CD86 分子の発現上昇とケモカインである CCL3/CCL4 分子の分泌が誘導されることが明らかとなった。さらに、この CD86 分子の発現上昇は、VLP の作用により CD86 分子の恒常的なユビキチン化が解除されることで誘導されることも明らかとなった。

間葉系幹細胞の免疫調節機能の獲得と抗炎症作用の発揮における NF- κ B の役割の解明:間葉系幹細胞の発生・分化の過程や免疫調節機能・抗炎症作用の機序とそれらにおける発現遺伝子の役割を明らかにすることは臨床応用を目指す

す上でも非常に重要であると考え、研究を行っている。実験に必要な遺伝子改変マウスを得ることができたので、現在はNF- κ Bコンディショナルノックアウトマウスの表現型の解析を進めている。

3-3. 達成度評価

今年度は特許出願と論文投稿を優先して研究活動を進めた。そのため、研究実績から研究を進展させるという点では順調に活動できたが、研究成果を社会に発信するという点で改善点が認められた。以上より、本年度の目標については研究の進展が顕著であったために十分達成できたと評価する。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、研究成果を社会に発信するという点を改善し、次年度には論文発表・学会発表を積極的に進めることを目標として掲げ、達成に向けて取り組む。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

松下 祥：埼玉医科大学雑誌編集委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

松下 祥：副学長(研究・産学連携等担当)/リサーチアドミニストレーション(RA)センター センター長/特許等委員会委員長/研究活動並びに公的研究費等の適正化推進委員会委員長/ゲノム医学研究センター所長/環境安全委員会副委員長/埼玉医科大学医学会顧問/大学運営会議/大学院委員会/大学院医学研究科委員会/医学研究科博士課程運営委員会/教員代表者会議/教員組織運営会議/医学部自己点検評価委員会/全学自己点検評価委員会/医学部運営会議/FD・SD 統括委員会/寄付研究部門設置委員会/研究医養成プログラム運営委員会/ポリシー等策定委員会
川野 雅章：毛呂山キャンパス中央研究施設運営委員会/図書館委員会

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

①松下 祥：胎児が免疫で排除されないのはなぜ？産科と婦人科 89: 1169-1174, 2022.

②Mieko Tokano, Rie Takagi, Masaaki Kawano, Shigefumi Maesaki, Norihito Tarumoto and Sho Matsushita. Signaling via dopamine and adenosine receptors modulate viral peptide-specific and T-cell IL-8 response in COVID-19. Immunol. Med. 45:162-167, 2022 <https://doi.org/10.1080/25785826.2022.2079369>

③Mieko Tokano, Masaaki Kawano, Rie Takagi, and Sho Matsushita. Istradefylline, an adenosine A2a receptor antagonist, inhibits the CD4+T-cell hypersecretion of IL-17A and IL-8 in humans. Immunol. Med. 45: 244-250, 2022 <https://doi.org/10.1080/25785826.2022.2094593>

④Yuta Isozaki, Tsuyoshi Sato, Rie Takagi, Ko Ito, Michihiko Usui, Masaaki Kawano, Sho Matsushita. Ropinirole inhibits inflammatory cytokine production in gingival epithelial cells and suppresses alveolar bone loss in an experimental rat model of periodontitis. Experimental and Therapeutic Medicine 25: 78, 2022 DOI: 10.3892/etm.2022.11777

⑤Mieko Tokano, Sho Matsushita, Rie Takagi, Toshimasa Yamamoto, and Masaaki Kawano. Extracellular adenosine induces hypersecretion of IL-17A by T-helper 17 cells through the adenosine A2a receptor. Brain, Behavior, & Immunity - Health, Volume 26, 100544., 2022

⑥戸叶美枝子, 高木理英, 樽本憲人, 前崎繁文, 松下祥
ドーパミンおよびアデノシン受容体を介したシグナル伝達は COVID-19 のウイルスペプチド特異的な IL-8 応答を調節する
第 71 回日本感染症学会東日本地方会学術集会(札幌) 2022/10/27

【総数：論文 5 件、学会発表 1 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

松下 祥：文部科学省研究費基盤研究(C)一代表

「17 型ヘルパー T 細胞応答の抑制制御法の開発」課題番号 22K08549

川野 雅章：文部科学省研究費基盤研究(C)一代表

「獲得免疫誘導能を有する SV40 VLP がワクチンの効能解析」課題番号 22K06731

戸叶 美枝子：文部科学省研究費若手研究一代表

「アデノシンによる免疫応答調節機構の解析とその応用」課題番号 22K15735

高木 理英：文部科学省研究費若手研究一代表

「ドーパミン D2 受容体活性化による好中球性炎症抑制の解析」課題番号 21K09920

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関してはコロナ禍における対応が十分にできたと考える。大学院教育に関しては、教育プログラムへの参加および教室内で研究を進める大学院生の指導共に十分に遂行できたと考える。戸叶氏は本学研究医養成プログラムの第1期生である。研究に関しては成果があがり特許出願が進行した。その他の事項に関しては、大学・学部運営に関わる委員会組織などの活動を十分に行った。基本学科全体としてはバランスのとれた活動ができたと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

2023年度は卒前教育に関しては免疫学実習の実施方法を改善し、より印象に残る実習を目標として取り組む。大学院教育に関しては、現在の体制を維持し、論文投稿の推進を目標として取り組む。研究に関しては成果発表の方法を改善し、特許出願に用いたデータを発展させた論文発表の推進を目標として取り組む。その他の事項に関しては、大学・学部運営に関わる委員会組織などの活動に引き続き積極的に関与することを目標として取り組む。

9. 社会医学

1. 構成員

亀井 美登里(KAMEI, Midori)：教授、運営責任者：教育主任、研究主任：代表指導教員(大学院)：社会医学全般：博士
太田 晶子(OHTA, Akiko)：准教授：教育副主任、研究副主任：指導教員(大学院)：疫学、公衆衛生学：博士
本橋 千恵美(MOTOHASHI, Chiemi)：特任准教授：公衆衛生行政、母子保健、地域連携
高橋 美保子(TAKAHASHI, Mihoko)：講師：教育員、研究員：指導教員(大学院)：疫学、公衆衛生学：博士
宮崎 利明(MIYAZAKI, Toshiaki)：講師：教育員、研究員：博士
小泉 沙織(KOIZUMI Saori)：助教：教育員、研究員
富永 信子(TOMINAGA, Nobuko)：助教(兼担)：修士
植村 真喜子(UEMURA, Makiko)：助手
桑原 孝子(KUWAHARA, Takako)：実験助手
仁科 基子(NISHINA, Motoko)：実験助手
平子 哲夫(HIRAKO, Tetsuo)：客員教授：公衆衛生学：博士
大野 洋一(OHNO, Yoichi)：客員教授：地域医療、高血圧：博士
林 剛司(HAYASHI, Takeshi)：客員教授：博士
宮崎 孝(MIYAZAKI, Takashi)：客員准教授：教育員、研究員：大学院教員(大学院)：博士
小田 清一(ODA, Seiichi)：非常勤講師：公衆衛生学：博士
武田 光史(TAKEDA, Mitsushi)：非常勤講師(大学院博士課程研究生)
丸木 憲雄(MARUKI, Norio)：非常勤講師
柴田 亜希子(SHIBATA, Akiko)：非常勤講師：博士
望月 徹(MOCHIZUKI, Toru)：非常勤講師：博士
井上 直子(INOUE, Naoko)：非常勤講師：博士
田中 政任(TANAKA, Masanori)：非常勤講師：修士
川南 勝彦(KAWAMINAMI, Katuhiko)：非常勤講師：博士
角田 正史(TUNODA, Masashi)：非常勤講師：博士
中川 徹(NAKAGAWA, Tooru)：非常勤講師：博士
坂田 清美(SAKATA, Kiyomi)：非常勤講師：博士
田中 茂(TANAKA, Sigeru)：非常勤講師：博士
廣 尚成(HIRO, Hisanori)：非常勤講師：博士
町田 宗仁(MACHIDA, Munehito)：非常勤講師：博士
太田 秀樹(OHTA, Hideki)：非常勤講師：博士
春田 力(HARUTA, Chikara)：非常勤講師
大木 いずみ(OKI, IZUMI)：非常勤講師：博士
森田 哲也(MORITA, TETUYA)：非常勤講師：博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、我が国の社会経済的状況等を踏まえ、時代のニーズに即した社会医学教育を目的として、課題解決力および実践力を伴った人材の育成を目標に教育活動を行った。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育で運営に関わったユニット(科目)は、4年生疾病の予防と対策ユニットのユニットディレクター(亀井、補佐:太田)、4年生環境と健康のユニットディレクター(亀井、補佐:宮崎孝)、4年生社会医学実習のユニットディレクター(亀井)、3年生疫学ユニットのユニットディレクター(太田)である。

卒前教育で講義・演習・実習、臨床実習等を担当したのは、1年生臨床推論ユニット(高橋、宮崎利、小泉)、1,2年生臨床入門ユニット(植村)、1,2年生選択必修(本橋)、3年生循環器ユニット(太田)、3年生疫学ユニット(太田、亀井、宮崎孝、小泉)、3年生地域医療とチーム医療ユニット(植村、本橋、宮崎孝)、4年生疾病の予防と対策ユニット(亀井、三浦、太田、高橋、平子、川南、柴田、小田、太田秀、丸木)、4年生環境と健康ユニット(亀井、宮崎孝、太田、高橋、宮崎利、大野、角田、坂田、中川、望月、林、森田、野寺、町田)、4年生社会医学実習ユニット(亀井、太田、高橋、宮崎孝、田中、本橋、宮崎利、小泉)、「臨床実習2」導入クリニカルクラークシップ(本橋)、6年生医療総論ユニット(亀井、高橋)、6年生内科総論ユニット(宮崎孝、大野)、6年生社会医学ユニット(亀井、高橋、宮崎孝、小泉、宮崎利)、6年生医師国家試験に向けての臨床推論(亀井、大野、高橋、宮崎孝)である。

その他、卒前教育として学生支援室員(太田)。

医学部以外では、保健医療学部において、看護学科2年生「疫学」(高橋)、4年生「国家試験対策講義、疫学」、臨床検査学科3年生「公衆衛生学実習」(宮崎孝)、臨床工学科1年生「公衆衛生学」(宮崎孝)を担当した。

短期大学看護学科では、2年生「公衆衛生学」(高橋)「関係法規」(本橋)を担当した。専攻科母子看護学専攻では、「地域母子保健学」(本橋)「国家試験対策補講、地域母子保健学」(本橋)を担当した。埼玉医療福祉社会看護専門学校では、「公衆衛生学」(高橋)、「国家試験対策講義、公衆衛生学」(高橋)を担当した。

大学院教育としては大学院医学研究科修士課程「疫学方法特論」(太田)、「環境衛生科学特論」(宮崎孝)、「最新医学特別講義」(亀井)を担当した。

卒業教育としては、社会医学系専門医プログラム「彩の国埼玉医科大学社会医学系専門医研修プログラム」で、専攻医2人（2年目 辻、3年目 小泉）の研修を行っている。

大学院教育としては、博士課程1人（3年生 小泉）、博士課程研究生1人（武田）が在籍している。

2-3. 達成度評価

教育実績から量および質ともに順調に活動できたが、新型コロナウイルス感染症感染拡大の中、社会医学実習をはじめより良い教育の在り方について検討の必要性が認められた。以上より、本年度の目標については、カリキュラムに対して求められている量および質を十分達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度には新型コロナウイルス感染症との共存の中、より良い教育の在り方を目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、我が国の社会経済的状況等を踏まえ、時代のニーズに即した社会医学研究を行い、予防医学の発展に寄与することを目的として、社会医学として実りのある業績を目標に研究活動を行った。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 地域包括ケアシステムの構築のための社会資本の活用に関する研究(亀井、本橋、太田、高橋、宮崎孝、小泉、宮崎利、植村、仁科、井上)

S市との協働により山間部地区の65歳以上の住民を対象に調査を実施した。時代のニーズに即し、地域の防災、新型コロナウイルス感染症流行下における地域支援活動等の状況を把握し、地域の実情に即した介護予防活動、地域支援活動、防災関連等の有用な成果を挙げた。

2. 特定保健指導における減塩プログラムの評価に関する研究(亀井、太田、本橋、宮崎孝、宮崎利、小泉、辻、植村、仁科、武田)

特定健康診査・特定保健指導の対象者(希望者)について研究を行っている。

3. 令和4年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業「自己免疫疾患に関する調査研究」(太田)

研究班多施設共同研究として、皮膚筋炎・多発性筋炎の国際診断基準の我が国における妥当性評価を行い、成果を公表した。皮膚筋炎・多発性筋炎、シェーグレン症候群、成人スチル病等の診療ガイドラインの作成・改訂を行った。

4. 令和4年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業「特発性造血障害に関する調査研究」(太田)

研究班において、指定難病の再生不良性貧血について、臨床調査個人票に基づく疫学特性を解明するとともに、指定難病患者データベースの有用性評価を行い、成果を公表した。

5. 令和4年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業)「今後の新興感染症の発生時に備えたサーベイランス戦略と枠組みの開発」(太田)

研究班において、我が国の感染症発生動向調査に実装されているインフルエンザ・小児科定点対象疾患の警報・注意報発生システムにおける警報レベル基準値の適切性の検討、RSウイルス感染症の警報システム導入のための基礎的検討を行い、成果を公表した。

6. 我が国の自殺統計にみられる異常変動の原因追究に関する研究(高橋、植村、亀井)

我が国の自殺統計にみられる異常変動の要因を記述疫学的手法により検討している。

7. 我が国における近年の出生性比の低下傾向の原因追究に関する研究(高橋、植村、亀井)

我が国における近年の出生性比の低下傾向の原因を検討する一法として、児の属性別出生性比の動向分析を進めている。

8. 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策の二次的健康影響評価の試みー死亡統計分析(高橋、植村、亀井)

COVID-19対策に伴う副次的健康影響、特に死亡への影響評価を目的として死亡動向分析を進めている。

9. 亜鉛の糖代謝・脂質代謝に関する研究(宮崎孝、植村、望月、亀井)

亜鉛欠乏状態では耐糖能の低下が確認された。その原因の一つに、亜鉛イオンのインスリン受容体に対する親和性に影響している可能性が示唆された。

10. 低糖質ダイエットの糖代謝・脂質代謝に関する研究(宮崎孝、植村、亀井)

ラットが摂取栄養素の組成を糖質からたんぱく質に置き換えた餌を摂取させたところ。血糖値の上昇が緩やかになり、その原因にインスリンシグナル下流のグリコーゲン合成の増加が示唆された。

11. 高たんぱく食の糖代謝・脂質代謝に関する研究(宮崎孝、武田、植村、亀井)

ラットに糖質に変えてタンパク質摂取を摂取した場合、生体防御系のSOD活性の増加と長寿遺伝子のSirtuin-1の発現増加が認められた。高たんぱく食は生体防御系や長寿遺伝子遺伝子を活性化させ健康長寿に関連する可能性が示唆され、学会発表の成果が得られた。

12. EKID 認知症研究班(亀井)

産医連携拠点(EKID)を通じて、認知症治療に向けた関連施策の情報収集等を行い、創薬仮説の一助となる成果を挙げた。中間報告を行った。

13. Klothoによる腎保護作用についての研究(宮崎孝、宮崎利、学外;竹中)

腎線維化モデルマウスでのKlotho蛋白の役割の一つに血圧低下作用と腎機能の改善効果が明らかになり論文として成果が得られた。

14. リウマチ疾患に伴う骨破壊機構の解明(宮崎孝、リウマチ膠原病内科;横田)

炎症性サイトカインにより誘導される骨吸収細胞がリウマチ疾患に伴う骨破壊に関与していることが明らかとなり、論文として成果が得られた。

15. がん細胞の転移に関する研究(宮崎利)

がんセンターとの共同研究で、引き続き大腸がん細胞転移メカニズムの解明を目的として研究を進めている。

3-3. 達成度評価

研究実績から幅広い予防医学の観点に立ち、順調に活動できたが、社会医学として一層実りのある研究の必要性が認められた。以上より、本年度の目標については、十分達成できたと評価する。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、次年度には社会医学として一層実りのある研究の遂行を目標として掲げ、達成に向けて取り組む。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

亀井美登里：厚生労働科学特別研究事前評価委員会委員、厚生労働省政策科学総合研究事業事前企画評価委員、厚生労働省薬事・食品衛生審議会委員、厚生労働省薬事・食品衛生審議会食中毒部会委員、厚生科学審議会生活環境水道部会委員、国立保健医療科学院評価委員会委員、埼玉県地域医療構想推進会議委員会委員、埼玉県ジェネリック医薬品安心使用促進協議会委員、埼玉県感染症発生動向調査検討委員会委員、埼玉県健康長寿プロジェクト評価委員会委員、埼玉県医師会産業保健委員会委員、埼玉県医師会産業医会理事、埼玉県製菓衛生師試験委員会委員、埼玉県公害審査会委員、東京都健康安全研究センター研究評価会議委員、毛呂山町健康づくり推進協議会委員、葛飾区健康医療推進協議会委員、台東区台東病院等運営協議会委員、台東区中核病院運営支援協議会委員、台東区地域医療支援病院運営委員、渋谷区地域保健推進協議会委員、公益財団法人健康・体力づくり事業団監事、公益財団法人ひかり協会評議員、公益財団法人日本理容美容教育センター教科書編纂委員会「衛生管理」小委員会委員、公益財団法人日本理容美容教育センター教員資格認定研修会衛委員、公益財団法人日本医療機能評価機構研究倫理審査委員会委員、公益財団法人日本検疫衛生協会理事、公益財団法人日本建築衛生管理教育センター調査研究助成審査会委員長、公益財団法人日本健康・栄養食品協会評議員、公益財団法人社会福祉振興・試験センター介護支援専門員実務研修受講試験委員、一般財団法人医療関連サービス振興会評価認定制度委員会委員、一般財団法人医療関連サービス振興会評価認定制度委員会院内清掃部会長、一般財団法人日本公衆衛生協会理事、一般財団法人日本環境衛生センター研究倫理委員長

太田 晶子：厚生労働省医師試験委員、埼玉労働局労働衛生指導医

本橋千恵美：埼玉県公務災害補償等審査会委員、

飯能市地域福祉審議会及び飯能市地域福祉活動計画推進委員会委員

飯能市介護予防・生活支援サービスの充実に関する協議体アドバイザー

飯能市自殺対策協議会委員、飯能市地域ケア推進会議アドバイザー

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

亀井美登里：日本社会医学会「社会学研究」査読委員

太田 晶子：日本公衆衛生雑誌査読委員

第33回日本疫学会学術総会演題査読

高橋美保子：EPMA Journal (European Association for Predictive, Preventive and Personalized Medicine (EPMA)), National EPMA Board in Japan, Member

Environmental Health and Preventive Medicine, Editorial Board Member

日本衛生学雑誌 (和文) 編集委員

The Journal of Clinical Hypertension 査読

宮崎 孝：COVID および Anti-Inflammatory & Anti-Allergy Agent in Medical Chemistry、Journal of Primary Care & Community Health 査読

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

亀井美登里：日本公衆衛生学会 (代議員)、日本衛生学会 (理事・代議員)、日本産業衛生学会 (代議員)

亀井美登里：彩の国埼玉医科大学社会医学系専門医研修プログラム統括責任者

亀井美登里：令和4年度4回埼玉県医師会産業医研修会講師 (2022年10月23日)

亀井美登里：埼玉医科大学医師会産業医研修会運営委員会委員、実行委員会委員長

亀井美登里：社会福祉法人共生会 SHOWA (理事)

亀井美登里：「調査結果報告」令和4年第2回ふくしの森・東吾野幹事会 (2022年7月、東吾野地区行政センター)

「調査結果報告」令和4年第3回ささえあい南高麗研修会 (2022年11月、南高麗福祉センター)

「調査結果報告」第二区ふくしを話し合う会 (2023年1月、第二地区行政センター)

太田晶子：日本公衆衛生学会（代議員）、日本疫学会（代議員）
 太田晶子：教育講演「臨床研究のための統計学ABC」第64回日本小児神経学会学術集会（2022年6月、群馬）
 太田晶子：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患政策研究事業 自己免疫疾患に関する調査研究班：皮膚筋炎・多発性筋炎診療ガイドライン作成委員会委員、シェーグレン症候群診療ガイドライン作成委員会委員、成人ステル病診療ガイドライン作成委員会委員
 太田晶子：彩の国埼玉医科大学社会医学系専門医研修プログラム研修基幹施設指導医
 本橋千恵美：「支え合い飯能」活動支援
 高橋美保子：日本公衆衛生学会（代議員）
 高橋美保子：日本公衆衛生学会公衆衛生モニタリング・レポート委員会「疫学グループ」メンバー
 高橋美保子：日本経済新聞取材協力。砂山絵里子。日本人の誕生日9月が多い。日本経済新聞。2023年1月21日
 宮崎 孝：日本衛生学会（代議員）、日本産業衛生学会（代議員）、日本微量栄養素学会（評議員）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1. Nakazawa H, Sakai K, Ohta A, Fujishima N, Matsuda A, Hosokawa K, Nakamura F, Nakao S, Mitani K, Ishida F. Incidence of acquired pure red cell aplasia: a nationwide epidemiologic analysis with 2 registry databases in Japan. *Blood Adv.* 2022;6(24):6282-6290.
2. Kanda Y, Usuki K, Inagaki M, Ohta A, Ogasawara Y, Obara N, Kako S, Kurokawa M, Shimada N, Suzuki T, Hama A, Yamaguchi H, Nakao S, Yamazaki H. Decision analysis of allogeneic bone marrow transplantation versus immunosuppressive therapy for young adult patients with aplastic anemia. *Int J Hematol.* 2023 Jan 3. doi: 10.1007/s12185-022-03530-6. Online ahead of print.
3. 太田晶子. スクリーニング検査の考え方. 診断と治療. 2023; 111 (2) : 170-175.
4. 横川博英、高橋美保子、尾崎米厚、後藤あや、伊藤慎也. 疫学・保健医療情報、保健行動・健康教育、国際保健グループ個別課題①：新型コロナワクチンの接種の優先順位－「若年層」を優先する対策の賛否. 2022年10月. 日本公衆衛生学会モニタリング・レポート委員会 2021/22年度年次報告書. 1-5頁
5. 高橋美保子、亀井美登里. 2021年度学内グラント報告書 COVID-19対策の副次的健康影響評価の試み－死因、属性別超過死亡の動向分析. 埼玉医科大学雑誌 2023; 49: 115-7.
6. 亀井美登里, 仁科 基子, 本橋 千恵美, 太田 晶子, 小泉 沙織, 井上 直子, 宮崎 利明, 宮崎 孝, 高橋 美保子, 植村 真喜子, 辻 翔平, 武田 光史. 地域住民の社会参加に関する調査(第1報) 地域支援活動への参加意向日本公衆衛生学会総会抄録集(1347-8060)81回 Page378(2022.09)
7. Takahashi Mihoko, Uemura Makiko, Kamei Midori. Excess deaths by accident category among late elderly in Japan in 2020. 第81回日本公衆衛生学会総会抄録集 2022; p471
8. 亀井美登里, 太田晶子, 本橋千恵美, 他. 地域住民の社会参加に関する調査 第1報 防災意識と地域支援. 第33回日本疫学会学術総会. 2023
9. 亀井美登里, 仁科基子, 本橋千恵美, 太田晶子他. 地域高齢者の社会参加に関する調査 第1報 地域支援活動への参加意向. 第93回日本衛生学会学術総会. 2023
10. 太田晶子. 保健統計・データベース利活用 出生指標. 日本疫学会(監修)三浦 克之、玉腰 暁子、尾島 俊之(編集). 疫学の事典. 東京: 朝倉書店. 2023; 340-341.

【総数：論文 16件、学会発表 16、講演 2件 著書 2件】

6-2. 獲得研究費

亀井美登里：公益財団法人 総合健康推進財団 第37回 一般研究奨励助成事業「共生社会における住民の地域支援活動参加の決定要因に関する実証分析」、60万円
 太田晶子：令和4年度厚生労働科学研究費補助金難治性疾患政策研究事業「自己免疫疾患に関する調査研究」20万円
 太田晶子：令和4年度厚生労働科学研究費補助金難治性疾患政策研究事業「特発性造血障害に関する調査研究」45万円
 高橋美保子、亀井美登里：2021年度学内グラント「COVID-19対策の副次的健康影響評価の試み－死因、属性別超過死亡の動向分析」、2021年9月-2022年8月、90万円
 宮崎 孝：令和2年度～令和4年度文部科学省研究費助成金「クロト蛋白による腎保護についての研究」15万円
 宮崎利明：2022年度学内グラント「大腸がん肝転移における TDO2-AhR 経路を介したがん免疫抑制機構の解明」、2022年9月-2023年8月、70万円
 小泉沙織：日本生命財団 2022年度高齢社会若手実践的課題研究助成：高齢者の外出促進に向けた「閉じこもり予防モデル」の作成、94万円

- 6-3. 受賞
- 6-4. 特許、実用新案
- 6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、目標通り行った。大学院教育に関しては、目標通り行った。研究に関しては、目標通り行った。その他の事項に関しては、社会活動等目標を満たしていると評価している。基本学科全体としては、目標を達成したと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、新型コロナウイルス感染症との共存が続く中、次年度、より良い教育の在り方を目標として取り組む。大学院教育に関しては、新型コロナウイルス感染症との共存が続く中、次年度、より良い教育の在り方を目標として取り組む。研究に関しては、社会医学として一層実りのある研究を目標として取り組む。その他の事項に関しては、社会医学として一層意義のある活動を目標として取り組む。

10. 法医学

1. 構成員

高田 綾 (TAKADA, Aya) : 教授 : 運営責任者 : 教育主任, 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 突然死の病理, 創傷の法医学診断 : 医学博士

齋藤一之 (SAITO, Kazuyuki) : 客員教授 (順天堂大学教授, 法医) : 指導教員 (大学院) : 突然死の病理, 交通外傷 : 医学博士

原 正昭 (HARA, Masaaki) : 客員准教授 : 遺伝標識の法医学的応用 : 医学博士

中西宏明 (NAKANISHI, Hiroaki) : 客員講師 (順天堂大学准教授, 法医)

非常勤講師 : 舟山真人 (東北大教授, 法医), 村井達哉 (榊原記念病院, 病理), 宮坂祥夫 (元科学警察研究所)

助手・実験助手 : 米山克美 (YONEYAMA, Katsumi), 新井正明 (ARAI, Masaaki), 富山紀子 (TOMIYAMA, Noriko)

2. 教育

2-1. 目的・目標

法医学に関する講義・実習は、4年後半の「異状死の診断」として行われた。その教育目標は、1. 法医学的視点を備えた臨床医となるために、その基盤となる知識・方法論を理解する、2. 典型的な症例について、異状死の診断と法的処理が適切にできるようになる、の2点に集約される。

2-2. 教育実績 (担当者)

異状死の診断 : 4年生, UD : 高田, 講義・実習担当 : 高田, 齋藤, 原, 中西, 米山

救急・麻酔 : 4年生, UD 補佐 : 高田, 講義担当 : 高田

病理総論 : 2年生, 死後変化, 担当 : 高田

臨床入門・CPC 実習 (4年生) : 高田, 齋藤

医療総論 : 6年生 : 高田, 齋藤

そのほか、学業・生活面で課題のある学生への指導、支援にも積極的に関与した。

2-3. 達成度評価

「異状死の診断」については、講義後に実施された学生による講義評価も高く、試験等においても十分に理解が得られており、全体として良好な教育効果が得られているものと判定された。

2-4. 次年度改善計画

おおむね所期の目標は達成されたものと考えているが、教育に万全ということはない。次年度はさらに教育手法の点検と改善を図りたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標

鑑定に根づいた臨床的研究を行うこと。法医学は applied medicine であり、死因究明を柱とした法医実務の質を高めることが学問の社会的使命である。このため法医学領域の研究は、鑑定を出発点とし、つねに鑑定への還元を念頭において行われる。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

法医病理学 : 高田, 齋藤, 法医免疫遺伝学 : 原, 中西。

共同研究は、順天堂大学、山梨大学、東北大学、東京都監察医務院、警察庁科学警察研究所などを行った。

1) 創傷形態からの成傷器推定 : 鈍器や刃物、頸部圧迫の創傷形態の解析例を蓄積した。

2) 非動脈硬化性冠疾患の病理学的解析 : 冠動脈攣縮の原因となる好酸球性冠動脈炎や冠動脈解離の症例の病理学的解析を行った。症例数が限られているので症例の集積には時間を要する。

3) 新型コロナウイルスワクチン接種後心筋炎について、症例の集積、病態の検討を行い、発表した。

4) 乳幼児突然死の病態解明 : 先天性代謝異常症、RS ウイルスなど感染症の関与、無呼吸、不整脈性心疾患などの関与について検討を継続して行った。

5) DNA 多型の法医学的応用 : DNA 多型分析の法医試料への適用に関する研究を続行した。

1) ~ 4) は法医病理、5) は法医免疫遺伝

3-3. 達成度評価

1) については、頸部圧迫症例の解析を行い、法医実務上有益なデータをさらに蓄積した。

2)・4) については、症例集積と解析が進行中である。

3) について学会・論文 (和文・英文) で発表した。

5) については、データの一部を 6-1 記載の英文論文等で発表することができた。小規模ではあるが、着実に成果を上げたものと評価できる。

3-4. 次年度改善計画

教室業務に占める法医鑑定 (解剖) の比率が大きく、しかも少人数であり、研究のための時間的、精神的余裕に乏しい。そのような環境ではあるが、着実にデータを蓄積し、発表した。今後も同様の方向性で進むものと考えられる。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県解剖嘱託医（高田，齋藤）

山梨県解剖嘱託医（高田，齋藤）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Legal Medicine 誌の editorial board（齋藤）

Legal Medicine 誌の査読委員（高田）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

法医学鑑定実務：当教室の主要業務である。令和4年度に当教室で行った解剖は164体（司法150例・行政0例・調査14例・承諾0例）であった。従来の司法解剖、行政解剖に加えて、新法（警察等が取り扱う死体の死因又は身元の調査等に関する法律）に基づく解剖（通称「調査解剖」）を行っている。また、埼玉県警のみでなく、山梨県警の司法・調査解剖についても嘱託されている（全体の1割程度を占める）。

司法関係者・警察医等に対する教育活動：検察・警察関係者の法医学的教養を高め、科学捜査の質的向上に資することは法医学者の重要な社会的責務である。令和4年度も、齋藤が、警察大学校（特別捜査幹部研修）などに出席し、現場での司法関係者への啓蒙にも努め、多くの効果を挙げた。なお、当教室は、警察庁検視官講習の解剖研修機関であり、全国の検視官予定者（幹部警察官）が春秋通算2ヶ月にわたり多数解剖研修を行った。

警察医・救命救急士に対する教育活動：日本医師会 死体検案研修会（上級）の見学実習受け入れ、救命救急士養成講義（齋藤）を行った。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

①齋藤一之，高田 綾，朝倉久美子. 死因究明症例における血管病変. Precision Medicine 2022; 3: 234-237.

②高田 綾，齋藤一之，米山克美，原 正昭，中西宏明，高橋識志，浦邊朱鞠，朝倉久美子，林 紀乃. 新型コロナウイルスワクチン接種後の突然死例にみられた心筋間質の炎症初見：いわゆるワクチン接種後心筋炎の3剖検例. 法医学の実際と研究. 2022; 65: 51-63.

③高田 綾，齋藤一之，米山克美，原 正昭，中西宏明，高橋識志. 小脳顆粒層の融解所見 (cerebellar granular layer autolysis または Status bullosus) について. 法医学の実際と研究. 2022; 65: 243-244.

④Takahashi S, Takada A, Saito K, Hara M, Yoneyama K, Nakanishi H. Diagnostic significance of the histopathology of bone marrow macrophages in forensic autopsies. Leg Med 2022; 58: 102079.

⑤Takada A, Saito K, Takahashi S, Sakai K, Yoneyama K, Nakanishi H. A sudden infant death associated with atrial septal aneurysm and abnormality of the connecting site between the inferior vena cava and right atrium. Leg Med 2022; 58: 102089.

⑥Suzuki H, Ro A, Takada A, Saito K, Hayashi K. Autopsy findings of post-COVID-19 vaccination deaths in Tokyo Metropolis, Japan, 2021. Leg Med 2022; 59: 102134.

⑦Nakanishi H, Yoneyama K, Hara M, Takada A, Sakai K, Saito K. Estimating individual mtDNA haplotypes in mixed DNA samples by combining MinION and MiSeq. Int J Legal Med 2022, 136: 423-432.

⑧中西宏明，米山克美，原 正昭，松川岳久，高田 綾，齋藤一之. 小型次世代シーケンサー「MinION」を用いた動物由来生薬における基原動物推定法. 日本薬学会第142年会. 2022; 日本薬学会第142年会要旨集，愛知.

⑨高田 綾，齋藤一之，木村聡子，朝倉久美子，浦邊朱鞠，中西宏明，米山克美，原 正昭. 新型コロナウイルスワクチン接種後の突然死例にみられた心筋間質の炎症初見. 第106次日本法医学会学術全国集会. 講演要旨集. 2022:p67, 愛知.

⑩Nakanishi H, Pereira V, Tvedebrink T, Børsting C, Takada A, Saito K. Development of an ‘Okinawa panel’ to identify Japanese individuals from Okinawa. 29th Congress of the International Society for Forensic Genetics, Washington, D.C., 2022.

【総数：論文 11 件、学会発表 9 件】

6-2. 獲得研究費：該当なし

6-3. 受賞：該当なし

6-4. 特許、実用新案：該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績：該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

実務：解剖鑑定は教室の中心業務であるが、鑑定件数の増大と事件の複雑化がさらに進み、医師2名、コメディカル4名の体制では限界を超えている。人的・物的体制の整備が急務だが、解剖医は極端に少ない。コメディカルの補充も緊急の課題である。

教育：「異状死の診断」については良好な結果が得られている。学業・生活面で課題のある学生への指導、支援にも積極的に関与したほか、学生の課外活動の振興に積極的に関与するよう努力した。

研究：ひきつづき実務に直結する研究を地道におこなった。寡産ではあるが密度の高い研究を指向した。突然死領域の研究については、臨床領域にも還元されつつある。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

実務：医師スタッフ（解剖医）の確保のための努力を継続する。法医解剖医は全国で 150 名（教授を含む）程度で、若手はとくに少ない。次世代を担える実務肌の医師はさらに稀少であり、当教室の伝統である質の高い法医業務を通じた社会貢献を継続するために、数年計画で人材をもとめていく。

教育：よき臨床医にとって不可欠な法医学的な考え方を効率よく学修できるよう、講義・実習内容の継続的な見直しを行う。法医学的には重要であっても、臨床医にとって不可欠とは言い難い内容の整理を行い、今後の臨床医にとって有用な知見については積極的に取り入る。一方で、試験、CBT、国試といった近視眼的・実利的視点を越えた興味を誘発するためには何ができるのかについても考えていきたい。

研究：蓄積されつつあるデータの整理、公表の努力をさらに続けていく。

11. 医療政策学

1. 構成員

宮山徳司 (MIYAYAMA, Tokushi) : 特任教授 : 運営責任者 : 大学院教員 (大学院) : 保健医療行政論
江利川毅 (ERIKAWA, takesi) : 特任教授 : 保健医療行政論
佐藤好美 (SATO, yoshimi) : 特任教授 : マスコミュニケーション論

2. 教育

2-1. 目的・目標

日本の人口構成の劇的な変化や社会保障財源の枯渇といった社会環境の変化への対応に向けて、医療を地域の生活の問題として捉え、医療のあるべき姿を一人称で考え、実践することができる医療人材を養成する。また、医療法の成り立ちや身分法、医療資源の配置状況、医療保険者の役割などを検証し、地域医療の再構築に向けた取り組みを進める。

2-2. 教育実績 (担当者: 宮山)

医学部 : 地域医療とチーム医療ユニット—「地域医療ビジョン」
: 地域医療とチーム医療ユニット—「地域健康危機管理」
大学院修士課程 : 医学研究科—「医療政策学概論」
保健医療学部 : 看護学科 —「医療経済学」
埼玉医療福祉会看護専門学校 : —「医療概論」
総合医療センター看護専門学校—「医療概論」

2-3. 達成度評価

医療における 2025 年問題を見据え、地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律が成立し、それに伴って医療法、介護保険法、健康保険法の改正が続いた。これらは、社会保障制度成立の背景が激変する中で、新たな仕組みを生み出していくこととするものである。そこで、社会保障制度改革と時代背景との関連を具体的に伝えるとともに、数次にわたる医療制度改革が目指す日本の医療の姿を共に考え、少産多死から人口減へと移行する社会の姿に対応できる姿勢を持つように働きかけた。学生は、社会における出来事と制度の関連、そして自らが中核となって社会を担う時代に強い興味を持っており、関心を高める上で効果があったと評価する。また、看護学科等の学生に対する授業では、医療現場への行政支援や地域活動の実際を具体的に示すとともに、実際に起こった事件などを演習のテーマとして提示し、それぞれが考えることで理解の促進が図られた。2025 年問題の課題となった「需要と供給のマッチング」から「医療人材の確保」が課題となる「2024 年問題」の解決に向けて、その主役となる学生達に、より幅広い視点を持ってもらえたと評価している。

2-4. 次年度改善計画

「医療のあるべき姿を一人称で語れる人材の育成」を目標としていることから「医療制度改革」、「病床機能報告制度」、「新たな病床整備に関する評価」、「経済財政運営と改革の基本方針 2019 (骨太の方針)」、「令和の時代の新社会保障制度」など、実際に進められている事柄に沿って、行政レベル、地域レベルで展開あるいは今後展開しようとしている事例を具体的に伝えるようにする。

3. 研究

3-1. 目的・目標 「該当なし」
3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績 「該当なし」
3-3. 達成度評価 「該当なし」
3-4. 次年度改善計画 「該当なし」

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無
(宮山)

①「毛呂山町総合振興計画審議会委員」(毛呂山町)

- ②「毛呂山町まち・ひと・しごと創生有識者会議委員」(毛呂山町)
- ③「毛呂山越生在宅医療介護連携推進会議委員」(毛呂山町・越生町・埼玉医療福祉会)
- ④「東松山市立市民病院改革プラン評価委員(委員長)」(東松山市)
- ⑤「埼玉県地域医療奨学金運営委員会」(埼玉県・埼玉医大)
- ⑥「川越市介護保険事業推進協議会副会長」(川越市)
- ⑦「川越市健康づくり推進協議会委員」(川越市)
- ⑧「埼玉県地域医療構想推進会議委員」(埼玉県)
- ⑨「埼玉県地域医療構想調整会議アドバイザー」(厚生労働省)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

- ①埼玉医科大学キャリアアップセンター教育運営委員(宮山)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

- ① 埼玉県看護協会が主催する認定看護管理者教育課程のファーストレベル、セカンドレベル、サードレベルごとに「保健・医療・福祉サービスの提供の仕組み」や「保健医療福祉の現況と課題」、「社会保障の概念」・「パブリックコメント」を担当し、職務改善や医療改革の動機づけを行った。(本学所属看護師約20名を含む)
- ② 埼玉医科大学キャリアアップセンターが主催する認定看護管理者教育課程ファーストレベル及びセカンドレベルにおいて「保健医療福祉の動向」及び「我が国におけるヘルスケアシステムの構造」をテーマに講義した。

6. 業績

- | | |
|------------------------|--------|
| 6-1. 論文・学会発表・著書 | 「該当なし」 |
| 6-2. 獲得研究費 | 「該当なし」 |
| 6-3. 受賞 | 「該当なし」 |
| 6-4. 特許、実用新案 | 「該当なし」 |
| 6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績 | 「該当なし」 |

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育については、医学部では「地域」の認識に視点を置き、「地域医療の見える化」に関する指標を提示することで理解の促進が図られた。

大学院においては、医療政策の意義を理解することで、関心のある分野の改革案を作成するという手法を取り入れ、実現性への道のりが確認できたと評価している。

保健医療学部及び埼玉医療福祉会看護専門学校において担当した事業では、「社会との相関」をテーマにし、変革期にある医療の現状を踏まえ、既成概念に捉われることなく、柔軟な思考ができるように働きかけることで、学生自身が一人称で考え、語れるようになった。

自治体関連委員については、埼玉県や近隣市町村との緊密な関係を構築することが学生教育や基幹的医療機能の充実強化に有効であることから、積極的に参加し、緊密な連携の構築によって連携の幅が広がった

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

教育については、「地域医療の見える化」を、大学院においては医療の政策提言を、保健医療学部及び埼玉医療福祉会看護専門学校においては「病理現象と社会の相関」をテーマにし、柔軟性を育むこととしている。

自治体関連委員等については、医療構想アドバイザー(厚生労働省)として埼玉県の地域医療構想の実現に努めていく。本学キャリアアップセンターが行う現任看護師教育(認定看護管理者教育課程等)については地域医療構想の実現に向けた各地の取り組みを紹介することで地域への関心を高め、参加意欲を高めるように努める。

12. 1) 中央研究施設 機能部門

1. 構成員

坂本 安 (SAKAMOTO, Yasushi) : 教授 : 運営責任者 : 施設長 : 指導教員 (大学院) : 機能生物化学 : 博士
廣澤 成美 (HIROSAWA, Narumi) : 講師 : 研究員 教育副主任 : 指導教員 (大学院) : 機能生物化学 : 博士
鈴木 悠子 (SUZUKI, Yuko) : 実験助手

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、主要な血液疾患の症候や病態生理を学習するための基盤として、赤血球、血漿の機能及び血液凝固系の基礎的な知識を修得させ、体液のホメオスタシスに関する血液の多様な役割を理解させることを目的とする。基礎的な実験操作に用いられる器具、機器に関する正しい知識と操作方法を身につける。環境問題をテーマとした実験を行い、その結果はExcelを用いて処理し、データ解析の基礎を学ぶ。解析結果はWordによりレポートを作成し考察することができることを目標に教育活動を行った。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育講義・演習・実習を担当したのは、2年生人体の構造と機能2 エネルギー系ユニット(坂本、廣澤)、末梢血塗抹標本 実習(坂本、廣澤、鈴木)、機能系実習2ユニット 生殖(坂本、廣澤)、1年生人体の基礎科学1、2 人体のユニット 化学実験1、2(坂本、廣澤)、1、2年生 選択必修ユニットAB-4(自然科学)正しいピペットの使い方～分析データの解析の基礎(坂本、廣澤)、1年生良医への道1 臨床推論1、2(廣澤)、医科学への道すじ 医科学の探索(廣澤)、その他、6年生共用試験臨床実習前OSCE 模擬患者(廣澤)を担当した。

大学院教育としては、医学部大学院 医学研究基礎コース 実用実験医学入門(実習編)(坂本)、共通科目 研究方法特論(講義)(坂本、廣澤)を担当した。

2-3. 達成度評価

教育の実績からCOVID-19感染予防対策を講じた講義、実習は順調に達成できたが、オンライン化に伴う弊害もみられた。資料スライドに解説を加え、オンラインに適した内容に変える等の修正を行い、学生の理解を深めるように改善する必要が認められた。選択必修ユニットでは、前年度の経験から模擬的な結果を示し、実験結果をExcelに入力、解析する時間を多くとり結果の考察を行った。全ての講義に履修学生全員が出席し、レポート課題等も提出された。講義初期にはExcelの入力操作に苦手意識のある学生も、講義後半では理解が深まり役に立ったとの意見も多かったため、講義内容の見直しの効果はある程度得られたと思われる。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度には事前の準備として講義シミュレーションを早めに行い、対面講義またはリモート講義のどちらでも対応出来るように早期に行動する予定である。特にリモートの実習や演習では、資料スライドや動画を創意工夫することで内容を適切に伝え理解するための方法を確立することを目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本講座では、他大学と連携し研究を推進することを目的として、引き続き、東洋大学、城西大学との共同研究を行い、研究成果を学会等で発表することを目標とする。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 蛋白/ペプチドの質量分析用マトリックスの合成と解析(城西大学)
フェルラ酸に新たな化合物を修飾し、蛋白/ペプチド分析を行った。
2. マウス脳虚血に効果を示すナノ粒子の開発(東洋大学)
脳虚血モデルマウスを作成し動物実験を行った。脳由来神経栄養因子を抱合させたターゲット粒子、ノンターゲットナノ粒子を調製し、培養細胞及び脳虚血マウスに投与実験を行った。実験結果は国際学会で発表した。
3. 国立大学法人埼玉大学と学校法人埼玉医科大学との包括的共同研究(埼玉大学)
脳虚血を定量化するため、脳虚血モデルマウスを作成し動物実験を行った。

3-3. 達成度評価

研究実績から東洋大学との共同研究では、その成果を10th International Conference on Advanced Materials and Nanotechnology (AMN10) 2023. 02 Rotorua, New Zealand.で発表することができた。脳由来神経栄養因子を抱合させたターゲット粒子、ノンターゲットナノ粒子を投与した脳虚血モデルマウスの脳を摘出し、TTC染色法とin vivo 光イメージング装置により解析を行い、虚血による障害部位を検出し効果の比較を行い良好な結果が得られた。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、次年度には更なる動物実験と詳細な解析を進め、国際学会、論文投稿へ向けた準備に取り組む。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無「該当なし」

- 5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無「該当なし」
- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務「該当なし」

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①H Satoh, F Tamalu, N Hirose, H Hirasawa, M Nagane, R Saito, S Watanabe, N Miwa. Facilitatory Effect of Extending the Course Duration on Dissemination of Educational Content. *Med Sci Educ.* 2022 May 7;32(3):641-648. doi: 10.1007/s40670-022-01563-4. eCollection 2022. 06
- ②M S Mohamed, T Mizuki, K Hattori, N Hirose, Y Sakamoto, T Maekawa. In Vitro Trans-Blood Brain Barrier Delivery of Neurotrophin Loaded Nanoparticles to Address Neuronal Damage. 10th International Conference on Advanced Materials and Nanotechnology (AMN10) 2023. 02 Rotorua, New Zealand.
- ③F Tamalu, H Satoh, N Hirose, H Hirasawa, M Nagane, R Saito, S Watanabe and N Miwa. Extending the course duration facilitates dissemination of educational content. 39th The International Union of Physiological Sciences (IUPS) Congress. 2022. 05 Beijing, China.

【総数：論文 1件、学会発表 2件、講演 0件】

6-2. 獲得研究費

国立大学法人埼玉大学と学校法人埼玉医科大学との包括的共同研究「脳虚血性神経細胞死機構解明及びそれに基づく脳神経細胞死抑制薬剤スクリーニング」(25万円)

6-3. 受賞「該当なし」

6-4. 特許、実用新案「該当なし」

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績「該当なし」

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育、大学院教育等に関しては、オンライン講義が主であり概ね順調であったが、3年目となり教員側も学生側もオンラインの良さや弊害が明らかになってきた。また教育効果に関する論文を発表することができた。研究に関しては、東洋大学、本学臨床（神経内科）、基礎（機能部門）が連携し順調に研究結果を得ることができた。

中央研究施設機能部門としては、令和4年度私学助成金「設備整備計画調書」が1件採択され、6年ぶりに大型機器（MALDI-TOFMS）が整備された。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

今後も重要な課題として、研究設備と機器を更新し充実させることが挙げられる。文部科学省より、「研究設備・機器の共用推進に向けたガイドライン」が策定され、今後、助成金の獲得条件の一つとして機器の共用化が重要なポイントとなる。本学では、中央研究施設がその役割を担っており、今後も学内共用機器の充実を目標とした運営を目指す。

12. 2) 中央研究施設 形態部門

1. 構成員

水野 洋介 (MIZUNO, Yosuke) : 准教授 : 部門長 : 研究主任 : 教育員 : 指導教員(大学院) : 分子生物学 : 博士
小松 久美子 (KOMATSU, Kumiko) : 実験助手
松本 幸子 (MATSUMOTO, Sachiko) : 実験助手
成塚 裕亮 (NARIZUKA, Yusuke) : 実験助手

2. 教育

2-1. 目的・目標

当部門の学生指導では、ゲノム全体の構造や変異と、関連する疾患についての最新情報を盛り込んだ医学・生物学の基礎知識を学生に習得させることを目標として指導にあたっている。学生教育では自らが積極的に生命機能や各種の遺伝子疾患について興味をもち、自主的に調査・研究を行い、成果に結びつけられるようになることを目指して指導している。分子生物学・生化学・細胞生物学等の最新の基本技術や考え方を実際に習得させながら、細胞の分化・増殖といった機能や細胞内小器官等の機能をはじめ、遺伝子と各種臨床疾患との関連性を明らかにすることを目標としている。また、個々の細胞機能や疾患に対して、その原因となる遺伝子をどのように探求していくか、また疾患と原因遺伝子にはどのような機能的リンクがあるかを自ら考える力を養い、学術論文を構成するために必要な論理的思考を身につけさせることを常に意識して指導を行っている。学内各科の大学院生や学部学生を積極的に受け入れて実験指導を行い、研究マインドをもつ医療人や基礎研究者を育てることを意識すると共に、課外学習プログラムや卒業研究、医学部実習など様々な機会を通じて学部学生の指導を積極的に行い、医学・医療に還元できる優れた人材を育成することを目標として教育活動を行っている。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育に関しては、医学部の実習・講義として人体の基礎科学の物理学実習 (1年生)、臨床推論 (1年生)、機能系実習 (2年生)、細胞生物学 (1年生) を担当した。課外学習プログラムでは、(1)「DNA 鑑定をやってみよう」では大学院生 1 名と女子栄養大学の学生 2 名の参加希望があり、(2)「遺伝子の個人差を体感して、ゲノム医療について考えてみよう」では大学院生 1 名、医学部生 1 名、女子栄養大学の学生 2 名の参加希望があり、(3)「細胞の遺伝子発現量を調べてみよう」と (4)「電子顕微鏡で観察してみよう」についてはそれぞれ大学院生 1 名ずつの参加希望があった。全員を受け入れて、それぞれテーマに沿った指導を対面もしくはオンラインにより実施した。

保健医療学部卒業研究では、臨床検査学科 4 年生の 6 名について、令和 3 年度に実施した実験結果をまとめて第 16 回日本臨床検査教育学会学術大会で口頭発表を行われたほか、卒業論文を作成して提出するための指導を行った。大学院教育では、研究方法特論において「ゲノムの個人差や変異の検出 ～その方法と医学的、生物学的、社会的意義について～」と「PCR・リアルタイム PCR と基礎医学」という 2 つのテーマ、さらに実用実験医学特別講義において「次世代シーケンサーやマイクロアレイを用いた遺伝子発現解析」というテーマで講義を担当した。

2-3. 達成度評価

卒前教育及び大学院教育では複数の実習・講義を担当し、本学医学部と大学院の基礎科目の教育活動に大きく貢献することができた。課外学習プログラムについては、感染対策を意識し、当初の計画から実施内容を一部変更・削減しながらも 4 テーマの全てにおいて学生を受け入れて実施することができた。令和 4 年度は延べ 9 名の医学部生、大学院生、女子栄養大学の学生を受け入れて指導を行い、好評を得ることができた。保健医療学部臨床検査学科の卒業研究については、4 年生 6 名に対して学会発表および卒業論文提出の指導を行い、発表と論文提出を完了することができた。これらの活動状況から、令和 4 年度の目標については十分に達成し、本学の教育活動に十分貢献できたと考えている。

2-4. 次年度改善計画

令和 5 年度も引き続き適切な感染対策を行い、講義や実習の内容を常に見直ししながら充実させて、学生の教育効果を更に高められるように工夫をしながら教育活動を鋭意進めていきたいと考えている。

3. 研究

3-1. 目的・目標

当部門では、ゲノム情報から得られる大量のデータを活用した大規模解析と、実験医学によるその検証という両方の手法を駆使することにより、遺伝子制御ネットワークの解明と病態メカニズムに迫る事、さらに疾患遺伝子を同定する事を目標としている。その一つとして、ミトコンドリア病の原因遺伝子とその機能の解明を行う。また、糖尿病、生活習慣病、メタボリック症候群、骨粗鬆症等に関連する遺伝子機能調節ネットワークを解明し、マイクロ RNA や長鎖非コード RNA などの非コード RNA に着目して、脂質代謝及び骨代謝を制御する創薬ターゲットを発見することを目標とする。また、ヒト免疫記憶細胞の作製方法に関する研究とセルソーターによるアダルト型オリゴデンドロサイト前駆細胞の分離とマーカー分子の探索を行う。これらの研究活動を通して、診断や治療、創薬標的に結びつけていけるような研究展開を目指す。さらに、学内各部署との共同研究を通じて、学内の研究活動の発展と研究成果の創出に寄与する。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

1. ミトコンドリア病の原因となる非コード RNA の解析 (水野)

ミトコンドリア機能を制御する機能性転写物を探索するため、いくつかの既知のミトコンドリア関連遺伝子を抑制させた細胞における転写物の網羅的プロファイリングデータを用いて解析を行った結果、マイクロ RNA を含む多く

の非コード RNA がミトコンドリア内外に存在し、ミトコンドリア異常に応じてその量が増加していることが示された。これらの非コード RNA の中にミトコンドリア機能に関連する転写物が存在すると考えられ、実際にこのうちのいくつかはこれまでミトコンドリア機能と関連性が報告されているものが含まれていた。引き続きこれらの非コード RNA の情報検索等を行い、実験により機能的な検証を行っていく予定である。

2. 脂肪、骨芽細胞分化を制御する RNA の探索 (水野、成塚)

骨芽細胞・脂肪細胞分化に関与するマイクロ RNA などの非コード RNA や転写物バリエーションを探索するため、マウス間葉系幹細胞を骨芽細胞・脂肪細胞分化誘導刺激を行い、経時的に採取した細胞を用いて、エクソン発現アレイ、マイクロ RNA 発現アレイ、RNA シーケンス等を用いた網羅的発現解析実験により得られたデータの解析を継続した。分化誘導刺激に応答して発現が変動した新規の RNA を複数同定することができた。

3. ヒト免疫記憶細胞の作製方法の開発 (水野、成塚、本学アドミッションセンター)

抗原特異的メモリー T 細胞の分化メカニズムを解析するため、ヒトナイーブ CD8 陽性 T 細胞とナイーブ CD4 陽性 T 細胞を様々な培養条件下において培養した試料について FACS 解析を行い、論文作成のためのデータを取得した。

4. 走査型電子顕微鏡と蛍光顕微鏡、培養細胞を用いた共同研究と研究指導、研究サポート (松本)

肝芽腫を培養し、ナノチューブの形成に関連する抗体で染色を行い蛍光顕微鏡観察と走査型電子顕微鏡による CLEM 観察を行った (本学 解剖学教室との共同研究)。麻酔科学教室から持ち込まれたダニ目のツツガムシの試料作製と走査型電子顕微鏡観察を行い、形態学的な分類解析のデータ取得を行った (本学 麻酔科学教室との共同研究)。組織培養室の機器類の利用者に対して培養ならびに蛍光顕微鏡観察の手法について指導を行った。また組織培養室の研究環境維持の為、適宜、利用者の培養細胞のマイコプラズマ検査を実施した。本学全体 (毛呂山・日高・川越) に向けたウシ胎児血清の共同購入の取りまとめを行った。機器類の使用説明会ならびに CV1000 後継機種選定に向けての共焦点顕微鏡の WEB セミナーとデモンストレーションの取りまとめを行った。

5. 培養細胞の透過型電子顕微鏡による観察指導 (小松)

本学感染症科学教室、その他研究者に対して、培養細胞等の試料を固定、包埋したものを超薄切し、透過型電子顕微鏡で観察するための一連の手法について指導した。

3-3. 達成度評価

ミトコンドリア病態モデルや分化細胞系を用いたトランスクリプトーム解析や分子生物学、生化学的解析を行い、これまでのデータや保健医療学部生の卒業研究で得られたデータも活用して、論文化し得る有益な知見を得て、学会発表を行うことができた。今後さらに検証・追加実験を行い、論文化を行っていきたいと考えている。他の部署との共同研究においても、当部門で解析したデータをもとに着実に論文化が進められており、今後の展開が期待される。また当部門を利用される研究者に対して、機器設備等の利用ガイド等の研究支援を適切に行うことができたと考えている。これらの事から、令和 4 年度の研究目標については十分達成できたと考えられる。

3-4. 次年度改善計画

次年度も引き続き部門内の研究活動、および多方面の共同研究を鋭意進めていきたいと考えている。また、形態部門として本学研究者が利用しやすい研究環境を引き続き整えるとともに、利用方法の説明や研究データ取得までの機器利用に関する助言等を積極的に行いながら、当部門を利用される研究者の研究活動の支援を積極的に行い、本学の研究活動の発展に寄与していきたいと考えている。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① (学会発表) 高橋守, 三角仁子, 水野洋介, 松本幸子, 馬場裕美, 川田伸一郎. 長崎県対馬のモモジロコウモリに寄生するツツガムシの一種. 第 74 回日本衛生動物学会大会. 2022 年 4 月.
- ② (学会発表) 徳元康人, 荒木靖人, 成塚裕亮, 水野洋介, 大島晋, 三村俊英. ヒトのナイーブ CD8+T 細胞およびナイーブ CD4+T 細胞をメモリー様 T 細胞へ分化誘導する培養技術の開発. 第 74 回日本細胞生物学会大会. 2022 年 6 月.
- ③ (学会発表) 関口奈未, 吉川尚伽, 成塚裕亮, 水野洋介. 共役転写因子 Smad4 が脂肪細胞分化時において発現量に影響を与える RNA の探索. 第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会. 2022 年 8 月.
- ④ (学会発表) 竹村歩莉, 曾我瑛美, 成塚裕亮, 水野洋介. 骨芽細胞分化時に共役転写因子 Smad4 が発現量の変化を与える RNA の探索. 第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会. 2022 年 8 月.
- ⑤ (学会発表) 遠井天音, 鈴木理歩子, 成塚裕亮, 水野洋介. 骨芽細胞分化誘導後、初期に発現変動するマイクロ RNA の同定. 第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会. 2022 年 8 月.
- ⑥ (学会発表) 鈴木理歩子, 遠井天音, 成塚裕亮, 水野洋介. 脂肪細胞分化誘導後初期に発現変動するマイクロ RNA の同定. 第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会. 2022 年 8 月.

- ⑦ (学会発表) 水野洋介. 非コード RNA によるミトコンドリア機能の制御. 第 54 回日本臨床分子形態学会. 2022 年 11 月.
- ⑧ (学会発表) 水野由美, 水野洋介, 梶原 健. セルトリ細胞から分泌されるエクソソームと miRNA についての解析. 第 95 回日本生化学会大会. 2022 年 11 月.
- ⑨ (学会発表) 徳元康人, 荒木靖人, 成塚裕亮, 水野洋介, 大島晋, 三村俊英. 低酸素培養を利用したヒトナイーブ B 細胞からのメモリー B 様細胞の分化誘導. 第 45 回日本分子生物学会年会. 2022 年 12 月.
- ⑩ (学会発表) 藤田恵子, 松本幸子, 藤田一正, 穂田真澄, 永島雅文. 細胞膜ナノチューブによって連結された肝芽腫細胞の特性について. 第 128 回日本解剖学会総会・学術集会. 2023 年 3 月.

【総数：論文 0 件、学会発表 14 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

水野洋介 (代表)

科学研究費補助金 基盤研究(C)「マイクロ RNA と長鎖非コード RNA によるミトコンドリア機能調節メカニズムの解明」

配分額：90 万円

水野洋介 (分担)

科学研究費補助金 基盤研究(C)「子宮内細菌叢と口腔内細菌叢が子宮内膜脱落膜化及び脂質産生に及ぼす影

配分額：90 万円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- ① (機器使用説明会) ライブセルイメージング顕微鏡 共焦点スキャナボックス CellVoyager CV1000、横河電機株式会社 毛呂山キャンパス基礎医学棟地下 2 階 組織培養室 2022 年 6 月 3 日
- ② (WEB セミナー)「他にはない」横河電機の 1 細胞ソリューション web セミナー「細胞内サンプリングシステム SS2000」と「自動ナノデリバリーSU10」の技術紹介、横河電機株式会社 2022 年 7 月 26 日
- ③ (WEB セミナー) AX/AX R 新型共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 オンラインセミナー、株式会社ニコンソリューションズ 2022 年 10 月 5 日
- ④ (WEB セミナー) 共焦点レーザー顕微鏡 FV3000 スピニングディスク型共焦点超解像顕微鏡 SpinSR10 オンライン説明会、株式会社エビデント 2022 年 10 月 25 日
- ⑤ (WEB セミナー) ALL in One ワークフローソリューション Microhub Mica オンライン説明会、ライカマイクロシステムズ株式会社 2022 年 11 月 11 日
- ⑥ (デモンストレーション) Microhub Mica、ライカマイクロシステムズ株式会社 毛呂山キャンパス基礎医学棟 2 階 機器室 2022 年 11 月 21・22・24 日
- ⑦ (デモンストレーション) 共焦点レーザー走査型顕微鏡 FV3000、毛呂山キャンパス基礎医学棟 2 階 機器室 株式会社エビデント 2022 年 12 月 6・7・8 日
- ⑧ (デモンストレーション) AX/AX R 新型共焦点顕微鏡、毛呂山キャンパス基礎医学棟 2 階 機器室 株式会社ニコンソリューションズ 2022 年 12 月 13・14・15・16 日
- ⑨ (WEB セミナー) ライブセル共焦点&超解像イメージングシステムご紹介セミナー、カールツァイス株式会社 2022 年 12 月 9 日
- ⑩ (デモンストレーション) LSM900 Airyscan2 Multiplex、毛呂山キャンパス基礎医学棟 2 階 機器室 カールツァイス株式会社 2022 年 12 月 22・23・26 日
- ⑪ (WEB セミナー) AX/AX R with NSPARC 超解像顕微鏡オンラインセミナー、株式会社ニコンソリューションズ 2023 年 3 月 2 日

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育面では、医学部と保健医療学部の学部学生に対して課外学習プログラムや卒業研究等の指導を行い、ゲノムに存在する様々な個人差や変異があることをはじめ、遺伝子や転写物と細胞機能や病態との関連性に関する知識を中心とした基礎医学を学んでもらった。また電子顕微鏡による観察手法を体験させた。これらの活動を通して、分子遺伝学、分子生物学、細胞生物学、生化学に興味を持ってもらうことができた。令和 4 年度の課外学習プログラムにおいては女子栄養大学から 4 名の学生が当初オンラインで参加し、その後ぜひ対面で実習に参加したいとの強い希望により、本学に来校して対面での実習が実現した。大学院教育ではオンラインによる 3 テーマの講義を担当した他、大学院生の研究指導も行った。これらのことから、令和 4 年度は学生教育に関して大きな貢献ができたと考えている。

研究面では、ミトコンドリア機能にかかわる RNA 探索研究を引き続き行ったほか、細胞分化における転写物の解析においても当研究部門でこれまでに蓄積してきた大量のゲノム情報・発現データ、卒業研究活動で得られたデータ等を統合的に活用して新知見を得ることができ、各種の学会発表を行うことができた。さらに、複数の学内の各科、各部署との共同研究を積極的に行い、論文化に必要な各種データ取得に貢献することができた。また当部門を利用される研究者に対する研究支援活動も適切に行うことができた。

令和 4 年度の形態部門への利用登録者数は 197 名であり、形態部門で管理している機器・設備の令和 4 年度における延べ利用回数は 1,250 件であった。形態部門の機器は令和 4 年度においても学内における研究活動で大いに有効活用されていると評価できる。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

中央研究施設は共同利用機器・設備を維持管理するとともに、学内の研究者に対する技術指導や研究方法についての助言や研究支援を行うことが重要な任務であるが、来年度も引き続き積極的にその役割を果たして行きたいと考えている。また部門内のオリジナルの研究を鋭意進めるとともに、他の部門との共同研究等もこれまで以上に活発に行い、学内における研究活動の推進により一層寄与していきたいと考えている。

12. 3) 中央研究施設 実験動物部門

1. 構成員

坂本 安 (SAKAMOTO Yasushi) : 教授 : 部門長 : 研究員、教育員、大学院教員 (大学院) : 生理学 : 博士
水野 由美 (MIZUNO Yumi) : 講師 : 研究員、教育員、指導教員 (大学院) : 細胞生物学、生殖医学 : 博士
富永 信子 (TOMINAGA Nobuko) : 助教 : 研究員、教育員
石原 由夏 (ISHIHARA Yuka) : 助手 : 研究員、教育員
堀切 一美 (飼育業務係長)、大久保、池田、伊藤、臺場、黒須、中里 (飼育業務)、秋田 (業務員・非常勤)

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

本部門における目的は、実験動物関連法令等に基づく動物福祉の実践および実験動物の飼育管理を行うことであり、動物実験実施者および飼養者は動物福祉の理念を理解・徹底し、実験動物の正しい取り扱いを習得して動物実験を遂行することを目標として教育活動を行った。また、動物実験実施者のための教育訓練は教育内容および受講方法を見直し、動物実験開始にあたり受講者に疑問が残らないよう改善することを目標とした。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育では、医学部 1 年生選択必修 実験動物学入門 (水野、富永、石原、仁科)、医学部 2 年生機能系実習 (水野)、医学部 1 年生臨床推論 (水野、富永)、課外プログラム (通年) では医学部 3 年生 1 名および女子栄養大学 3 年生 2 名が受講した。大学院教育では、修士課程実験動物学概論講義・演習 (水野、富永、石原、堀切) を担当した。また、大学院生 2 名の研究指導をおこなった (水野)。保健医療学部教育では、看護学科 1 年生環境論 (富永)、臨床検査学科 3 年生保健医療福祉総論 (富永) を担当した。また、他大学の教育では、女子栄養大学保健栄養学科 4 年生医動物学実習 (富永) 保健栄養学科 4 年生 2 名の卒業研究・発表・論文作成 (富永) を担当した。さらに、卒後教育の動物実験実施者のための教育訓練はテキスト受講および小テストを行った。

2-3. 達成度評価

実験動物関連の教育は実験動物関連法令および動物福祉の理念について、関連法規の改正点も含め、資料を作成して説明を行った。医学部 1 年生実験動物学入門の評価は動物実験計画書の作成をレポートとし、提出されたレポートにより動物福祉の理念の理解度が向上したと判断した。さらに、卒後教育の動物実験実施者のための教育訓練はテキスト受講および簡単な確認テストを実施したことから理解度は向上している。さらに、動物実験を開始するまでの手順の説明および動物実験に関する動画や写真などの SNS 使用の禁止を資料へ追加した。受講者へは後日、実験開始までの手順についてのメール送付を行うことで教育訓練受講から実験開始までの流れが滞らないようにした。しかし、教育訓練を e-ラーニングへ変更するには至らなかったため、今年度の目標はおおむね達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

動物実験実施者および飼養者への教育は今年度と同様に実験動物関連法令に基づく動物福祉の実践および実験動物の正しい取り扱いを習得することを目標とする。また、動物実験実施者のための教育訓練は教育内容および受講方法を見直し、e-ラーニングなどを用いた方法へ変更することを目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

当部門では、主に細胞内小器官と疾患との関わりや生殖細胞の機能、機能的物質の生体内での動態を解明することを目的として研究を進めている。本年度は昨年度に引き続き、ペルオキシソームプロセッシングプロテアーゼの生殖細胞や肝細胞での機能の解明や子宮内膜細胞の胚の着床における役割の解明を目標とする。また、モニタリング検査において糞便を用いた直接 PCR 検査法を導入できるよう、基礎データの収集を目的とした。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

1. 細胞内小器官とその機能破綻に関連する病態の解明 (水野)

本年度は、昨年度に引き続き、ペルオキシソームの脂質代謝異常が肝臓および精巣の機能にどのような影響を与えるか研究を行い、研究成果について学会で発表した。また、子宮内膜細胞でのミトコンドリア動態についても研究を行った。

2. 不妊症発症メカニズムの解明 (水野)

セルトリ細胞から分泌されるエクソソームについて、内包する miRNA の解析を行い、セルトリ細胞内で働く miRNA と有意に発現量が異なる miRNA を同定した。また、このデータを用いて、同定した miRNA がターゲットと予測される遺伝子について着目し、解析を行った。さらに、子宮内膜細胞の脱落膜化に伴い分泌される中鎖脂肪酸について解析を行い、研究成果を学会にて発表した。

3. 胎盤内絨毛癌のメチル化遺伝子解析 (水野、産科・婦人科共同研究)

胎盤内絨毛癌症例についてメチル化解析を行い、病因の探索を行った。

4. 子宮内膜症の発症機構の解明 (水野、東京薬科大学共同研究)

子宮内膜が、卵巣等の子宮以外の場所で発生する子宮内膜症について、発症メカニズムを解明するため、炎症関連因子に着目し解析を行った。研究成果を論文にて発表した。

5. 実験動物の簡易型微生物検出パネルの作製を目指した技術開発研究 (石原)

実験動物の感染症診断を T-RFLP 法を用いて検出できるシステムを開発する。実験動物の糞便検体からの採材方法および微生物由来核酸を直接 PCR 検査で増幅できる検出限界について検討し、定期的実施している微生物モニタ

リング検査に導入した。

6. フィコシアニンの癌細胞増殖抑制効果に関する研究（富永、石原、女子栄養大学共同研究）
スピルリナおよびスピルリナの色素であるフィコシアニンのマウスの免疫細胞の活性効果について FACS を用いて測定および解析を行い、結果を卒業論文および卒業研究にて発表した。

3-3. 達成度評価

1. 細胞内小器官とその機能破綻に関連する病態の解明（水野）
研究成果について学会発表を行った。一定の達成を得ることができた。
2. 不妊症発症メカニズムの解明（水野）
研究成果について学会発表を行うことができ、一定の達成を得ることができた。
3. 胎盤内絨毛癌のメチル化遺伝子解析（水野、産科・婦人科共同研究）
研究成果について学会発表を行った。一定の達成を得ることができた。
4. 子宮内膜症の発症機構の解明（水野、東京薬科大学共同研究）
研究成果について論文発表を行い、成果を得ることができた（終了）。
5. 実験動物の簡易型微生物検出パネルの作製を目指した技術開発研究（石原）
PCR 検査および現在の微生物モニタリング検査の手法である培養検査の結果と比較・検討し、両検査ともに全検体で陰性を確認した。一定の達成を得ることができた。
6. フィコシアニンの癌細胞増殖抑制効果に関する研究（富永、石原、女子栄養大学共同研究）
研究成果について卒業研究発表および論文作成を行うことができ、一定の達成が得ることができた。

3-4. 次年度改善計画

1. 細胞内小器官とその機能破綻に関連する病態の解明（水野）
ペルオキシソームの機能異常と精子の形態異常との関連を明らかにする。また、ペルオキシソームの機能改善により、精子形態の正常化が可能か試みる。子宮内膜細胞の細胞内小器官の役割について解析する。
2. 不妊症発症メカニズムの解明（水野）
前年度にセルトリ細胞から分泌されるエクソソームについて詳細に解析し、精子の成熟とエクソソームとの関連や、情報伝達機構について明らかにしていく。
3. 胎盤内絨毛癌のメチル化遺伝子解析（水野、産科・婦人科共同研究）
研究成果を論文にして発表する予定である。
4. 実験動物の簡易型微生物検出パネルの作製を目指した技術開発研究（石原）
PCR 検査と培養検査の結果を蓄積し、PCR 検査の有用性を検討する。また、PCR 検査は非侵襲的検査のため本部門を利用している研究者の実験動物の糞便を利用した微生物モニタリング検査について検討したい。
5. フィコシアニンの癌細胞増殖抑制効果に関する研究（富永、女子栄養大学共同研究）
マウスの系統を変更して再度検討する予定である。

4. 診療

該当なし

5. その他

- 5-1. 自治体、政府関連委員の有無 「該当なし」
- 5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無 「該当なし」
- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務 「該当なし」

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①（論文）Kazuya Kusama, Ayaka Satoyoshi, Mana Azumi, Mikihiro Yoshie, Junya Kojima, Yumi Mizuno, Masanori Ono, Hiroataka Nishi, Takeshi Kajihara and Kazuhiro Tamura. Toll-like receptor signaling pathway triggered by inhibition of serpin A1 stimulates production of inflammatory cytokines by endometrial stromal cells. *Frontiers in Endocrinology*, 10. 3389/fendo.2022.966455, 2022
- ②（学会発表）梶原 健, 鷹野 夏子, 市川 大介, 田丸 俊輔, 水野 由美, 水野 洋介, 中村 康平, 相馬 廣明. 胎盤内絨毛癌の網羅的ゲノム解析による病因の検索. 第 54 回日本臨床分子形態学会総会・学術集会 2022 年 11 月 5 日
- ③（学会発表）水野 由美, 水野 洋介, 梶原 健. セルトリ細胞から分泌されるエクソソームと miRNA についての解析. 第 95 回日本生化学会大会. 2022 年 11 月 11 日
- ④（学会発表）丸茂雄太, 水野由美, 山口 哲, 鷹野夏子, 梶原 健, 峯尾松一郎, 國場寛子, 相馬廣明. 絨毛間血栓併存胎盤の病理. 第 30 回日本胎盤学会学術集会 2022. 11. 25-26
- ⑤（学会発表）鷹野夏子, 市川大介, 田丸俊輔, 水野由美, 水野洋介, 中村康平, 相馬廣明, 梶原 健. 胎盤内絨毛癌のゲノム解析による病因の検索. 第 40 回日本絨毛性疾患研究会 2022. 11. 25-26
- ⑥（学会発表）水野由美, 田丸俊輔, 佐藤智美, 梶原 健. 子宮内膜細胞は脱落膜化に伴い中鎖脂肪酸を産生する. 第 45 回日本分子生物学会年会 2022 年 11 月 30 日
- ⑦（学会発表）水野由美, 水野洋介, 梶原 健. ペルオキシソームの脂質代謝異常によって起こる奇形精子の発症機構の解明. 第 45 回日本分子生物学会年会 2022 年 11 月 30 日

【総数：論文 1 件、学会発表 6 件、著書 0 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

- ① 2022年度 文科省科学研究費（基盤研究C）（2021-2023年度）
精子マイクロRNAに着目した不妊症の発症メカニズムの解明。
研究代表者 水野 由美
研究分担者 梶原 健
- ② 2022年度 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究(C))（2020-23年度）
子宮内細菌叢と口腔内細菌叢が子宮内膜脱落膜化及び脂質産生に及ぼす影響。
研究代表者 梶原 健
研究分担者 水野 由美、水野 洋介、佐藤 毅
- ③ 埼玉医科大学創立50周年記念特別研究費（2022年度～2024年度）
DNAの配列変異とRNAの発現異常に着目したミトコンドリア病発症メカニズムの解明:理想的着床 前診断の実現へ向けて
研究代表者 難波 聡
研究分担者 大竹明、沼倉周彦、秋岡祐子、味原さや香、前田卓哉、水野洋介、水野由美

6-3. 受賞 「該当なし」

6-4. 特許、実用新案

（特許）特許第7191361号 「産婦人科疾患の罹患可能性の判定を補助するための方法、産婦人科疾患の罹患可能性を診断するためのデータを収集する方法、及び産婦人科疾患の診断用キット」水野由美、梶原 健 ほか 2022年12月9日

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績「該当なし」

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本部門の利用登録者数は212名、動物実験実施者のための教育訓練は156名が受講した。毛呂山キャンパスの動物実験計画書は129件（継続122件、新規7件）が承認され、動物実験計画書に基づく一年間の延べ飼養匹数は、942,993匹であり、一日平均2,583匹を飼養した。その内訳はマウスが約92%、ラット約2%を占め、マウスの約90%は遺伝子組換え動物であった。昨年度と比較し、飼養数は減少した。微生物モニタリング検査および落下細菌検査はそれぞれ年4回実施し、飼育技術職員は実験動物の基準に基づいた日常の飼育管理業務を心がけ、研究者より飼育依頼を受けた実験動物を良好な状態で飼育し、研究者へ提供することができた。また、公私立大学動物実験施設協議会（公私動協）が主催する研修会「動物実験委員会の教育訓練」を教員1名が受講した。そしてweb開催の「実験動物管理者の教育訓練」には教員3名と飼育技術者1名が受講した。そして、施設利用者への対応などの利便性を考慮し4階から1階へ教員の居室を移動し、利用者の質問や要望などに即時対応が可能となった。これらのことより今年度の目標はおおむね達成された。一方、第三研究棟の建物の老朽化による水漏れや施設修理依頼を出し、その一部の修理は完了したものの、その他の修理は順次対応を待っている状況である。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

次年度においては、今年度と同様に飼育管理を実施すると共に、飼育環境を整え、より良好な実験動物の提供ができるよう努力し、動物実験に関する申請書類について電子申請システムの開発を行うことを目標とする。また、近年問題視され『特定化学物質等障害予防規則』において特定第二類物質（慢性障害、発癌の危険性のある物質）及び特別管理物質（有害性、作業者の健康管理記録の30年保存等の義務がある物質）として規制されているエチレンオキシドガス（EOG）の安全な取り扱いおよび職員教育を行うとともに、EOG滅菌からより安全性の高い滅菌方法に換えるなど、職員の作業環境を安全な快適な場所へと変えること、そして、職員の水場作業での作業負担を軽減するために流し台を変更するなどの作業方法改善についても今後の課題とする。

実験動物施設の特長として建物に窓が設置されていないことから停電の際には施設内が暗闇となる。飼育技術者および利用者の安全を確保するために蓄光テープを各飼育室の扉およびネズミ返しへ貼付けるなどの対策を行った。しかし、巨大地震などの大きな災害発生時の対策は不足している。大災害の際の実験動物の飲水や飼料の確保を含む飼育管理、実験動物の飼育の有無についての振り分け、職員および利用者の避難経路や避難場所などを見直し、今後の災害への備えとしたい。

12. 4) 中央研究施設 RI 部門

1. 構成員

一色 政志 (ISSIKI, Masashi) : 教授 : 教育員・研究員・指導教員 (大学院) : 内分泌糖尿病内科兼担 : 内分泌・糖尿病 : 博士

西本 正純 (NISHIMOTO, Masazumi) : 准教授 : 教育主任・研究員・指導教員 (大学院) : ゲノム基礎医学兼担 : 分子生物学 : 博士

日詰 光治 (HIZUME, Kohji) : 講師 : 教育員・研究員・指導教員 (大学院) : 分子生物学 : 博士

宮下由美 (MIYASHITA, Yumi) : 助手 : 教育員・研究員

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

構成員の以下に記した専門性に基づき、医学部生が将来医師として持つべき知識を提供するとともに、自ら考え学ぶ上で必要な素養を獲得できるような講義・実習・演習を実践することを目標とする。

- ・ 本務である放射線管理業務に基づいた、放射線の安全に係る教育
- ・ 臨床医として、内分泌を主題とした内容に係る臨床教育
- ・ 基礎研究者として、生物学のみならず広く自然科学一般に係る内容の基礎教育
- ・ 細胞生物学・分子生物学の分野のうち、ヒトとしてのみではなく、生命が生命であるために必須なシステムについての大学院教育

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育で運営に係ったユニット : 2年生臨床推論2、ユニットディレクター補佐 (日詰)

卒前教育での講義・実習・演習担当 : 1年生人体の基礎医学1 (日詰)、人体の基礎医学2 (日詰)、細胞生物学1 (日詰)、医科学の探索 (西本)、臨床推論1 (西本・日詰)、1・2年生選択必修“放射線と生命科学” (日詰)、2年生機能系実習1 (西本)、機能系実習2 (日詰)、物質系実習 (西本)、臨床推論2 (日詰)、3年生ヒトの病気1内分泌・代謝 (一色)、3年生ヒトの病気1循環器 (一色)、CCステップ1二次性高血圧 (一色)、CCステップ3臨床と研究 (一色)、BSL二次性高血圧 (一色)、3年生定期試験・6年生実力試験・卒業試験作成 (一色)

卒後教育 : 研修医 降圧薬の使い方 (一色)

大学院教育 : 研究方法特論 (西本・日詰)、実用実験医学特別講義 (西本)

2-3. 達成度評価

臨床系教員である一色、基礎系教員である西本・日詰により、それぞれの専門性に応じた幅広い教育を担当しており、教育実績からみても十分に目標は達成できていると考えられる。

2-4. 次年度改善計画

令和4年度も、十分な活動ができていると考えられ、来年度以降もこの体制で教育業務を担当していきたいと考えている。なお、本務としてRI施設管理業務があり、教育へ費やすことができる時間も限られるところではあるが、今後できる限り教育への貢献も進めていきたいと考えている。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

部門として一つのテーマで研究を遂行しておらず、個々の構成員がその専門性に基づいて、それぞれのテーマに基づいて研究を遂行している。その状況で、できる限りの研究実績を上げることが目標としている。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

原発性アルドステロン症の診断と病態に関する研究、糖尿病合併高血圧治療に関する研究、ACTH産生褐色細胞腫のレビュー (一色)

胎児発育不全 (FGR) に係る原因遺伝子の探索 (埼玉医科大学病院産科・婦人科梶原健教授との共同研究) (西本)

生化学的解析および分子可視化解析から明らかにするDNA複製調節の分子機構 (日詰)

3-3. 達成度評価

順調に副腎静脈サンプリングによって手術、治療に至った原発性アルドステロン症例を積み重ねている。ACTH産生褐色細胞腫のレビューは論文投稿直前まで到達した (一色)。

梶原教授との共同研究は、病院研究費 (代表丸茂雄太) からの財源を使用し、興味ある結果は得られているところであるが、まだ論文完成には至っていない。 (西本)

日詰による研究費獲得は、令和4年度は4件あり、これまでの実績及び研究遂行能力は十分評価を受けていると思われる。DNA複製研究については、計画通り順調に進んでいる。 (日詰)

3-4. 次年度改善計画

それぞれが、十分に研究を遂行していると考えられる。特に日詰は、研究費獲得で十分な実績が得られており、研究遂行能力の面で高い評価を受けていると考えられる。ただし、部門として論文としての形となったものは少なく、来年度はこの点を改善していきたいと考えている。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Genes and Genetic Systems (査読：日誌)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 巨大胎盤に伴う高 vasopressinase 血症により妊娠中に中枢性尿崩症を発症したと考えられた 3 例(会議録) 柳澤 慎之介, 橋本 恭太, 遠藤 茉依, 羽井佐 彬文, 中島 理津子, 井上 和之, 安田 重光, 及川 洋一, 相村 益久, 一色 政志, 島田 朗 日本内分泌学会雑誌(0029-0661)98 巻 4 号 Page869(2023)
- ② クエチアピンフマル酸塩の増量が血糖増悪に関与したと考えられた 1 例(会議録)佐藤 晴彦, 高木 荘太郎, 里村 敦, 一色 政志, 井上 郁夫, 島田 朗 糖尿病(0021-437X)65 巻 7 号 Page388(2022)
- ③ DPP-4 阻害薬による炎症性腸疾患発症リスクの検討(会議録)佐藤 晴彦, 及川 洋一, 都築 義和, 今枝 博之, 持田 智, 山田 健人, 一色 政志, 井上 郁夫, 島田 朗糖尿病(0021-437X)65 巻 Suppl.1 Page S-284(2022)
- ④ 甘草内服再開を契機に著明な低カリウム血症を呈した偽性アルドステロン症の 1 例(会議録)清水 英祐, 鈴木 誠也, 水谷 元, 齋藤 太吾, 一色 政志, 島田 朗日本内分泌学会雑誌(0029-0661)98 巻 1 号 Page386(2022)
- ⑤ くも膜下出血後、下垂体前葉機能低下症が生じ、その約 2 年後に中枢性尿崩症を発症した一例(会議録)井上 和之, 森田 英生, 羽井佐 彬文, 中島 理津子, 安田 重光, 一色 政志, 島田 朗日本内分泌学会雑誌(0029-0661)98 巻 1 号 Page335(2022)
- ⑥ TSH・GH 産生下垂体腫瘍が疑われた 1 例(会議録)森田 英生, 羽井佐 彬文, 中島 理津子, 安田 重光, 栗原 進, 一色 政志, 井上 郁夫, 島田 朗日本内分泌学会雑誌(0029-0661)98 巻 1 号 Page333(2022)
- ⑦ 部分型中枢性尿崩症に巨大胎盤による高 vasopressinase 血症が加わり、完全中枢性尿崩症を呈し緊急帝王切開に至った一例(会議録)小林 由布子, 柳澤 慎之介, 井上 和之, 安田 重光, 及川 洋一, 佐藤 正易, 相村 益久, 一色 政志, 島田 朗日本内分泌学会雑誌(0029-0661)98 巻 1 号 Page278(2022)
- ⑧ Alternative splicing for germ cell-specific Mga transcript can be eliminated without compromising mouse viability or fertility (査読付) Yuka Kitamura, Ayumu Suzuki, Kousuke Uranishi, Masazumi Nishimoto, Seiya Mizuno, Satoru Takahashi, Akihiko Okuda. Development, Growth & Differentiation 64 409-416 (2022)
- ⑨ Mga-Atf7ip の相互作用は減数分裂関連遺伝子領域の構造的ヘテロクロマチン化に寄与する 浦西洗介、鈴木歩、平崎正孝、西本正純、奥田晶彦 (令和 4 年 11 月) 第 45 回日本分子生物学会年会(千葉県千葉市)
- ⑩ 減数分裂遺伝子の発現制御は Max により制御される 鈴木歩、浦西洗介、北村友佳、西本正純、水野聖哉、高橋智、奥田晶彦 (令和 4 年 11 月) 第 45 回日本分子生物学会年会(千葉県千葉市)

【総数：論文 8 件、学会発表 2 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

- ① 「複製新生鎖へのクロマチン形成機構の探索：AFM による新生鎖クロマチンの可視化解析」、文部科学省科学研究費基盤研究 (C)、2019 (令和元) -2022 (令和 4) 年度 (340 万円)
- ② 「DNA 複製に伴うクロマチン構造継承機構の原子間力顕微鏡解析」、武田科学振興財団 医学系研究助成(基礎)、2019 (令和元) 年 9 月 -2022 (令和 4) 年 8 月 (200 万円)
- ③ 「ゲノム安定性維持のために染色体にプログラムされた複製阻害領域の分子機構とその役割」、文部科学省科学研究費基盤研究 (C)、2021 (令和 3) -2023 (令和 5) 年度 (研究分担者：分担金 40 万円)
- ④ 「ヒストンの受け渡し活性測定系の開発から探索するヒストンリサイクルの分子機構」、文部科学省科学研究費基盤研究 (C)、2022 (令和 4) -2024 (令和 6) 年度 (320 万円)

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本務である、共同利用施設として研究遂行に係る研究者に適切な環境を提供する、という目的のため、これまで長年放置されていた施設の設備機器修理更新および施設内の整理を、現在進めている。現時点では、すべきことについて全体像が把握できておらず、また放射性同位元素を含む廃棄物という特殊性もあり、かなりの時間を要すると考えている。そのような状況ではあるが、構成員全員で作業を進めており、利用者にとって利用しやすい施設を目指す、という点では少しずつは改善できていると考えている。

教育では、本務との兼ね合いもあり、十分な貢献ができていないか、という問題点もあるが、各構成員がそのような状況の中で十分に役目を果たしていると考えている。

研究では、本務との兼ね合い、共同利用施設であることによる研究遂行する上でのスペースの問題及び予算との兼ね合いもあり、困難な状況にあるが、それぞれの構成員がその分野での研究への貢献は十分なしえていていると考えている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

本務である共同利用施設としての整備は、始めたばかりで全体像が把握できないという状況にはあるが、少しでも利用者にとって利用しやすい施設を目指し、整備を進めていきたいと考えている。

教育、研究は、そのような困難な状況な中でも十分に大学への貢献はなしていると考えており、来年度以降もこの体制で、これまでと同様に大学への貢献ができるよう努力していきたい。

12. 5) 中央研究施設日高ブランチ 実験動物部門

1. 構成員

横尾 友隆 (YOKOO, Tomotaka) : 准教授 : 部門長 : 研究員、教育員 : 指導教員 (大学院) : 分子生物学 : 博士
豊島 秀男 (TOYOSHIMA, Hideo) : 客員准教授 : 代謝内分泌・糖尿病学 : 博士
村松 大介 (MURAMATSU, Daisuke) : 主任 : 動物飼育員 (実験動物技術者 1 級、実験動物技術指導員)
伊藤 順子 (ITO, Junko) : 動物飼育員 (実験動物技術者 1 級) (R4.9 月まで)
林 明子 (HAYASHI, Akiko) : 動物飼育員 (実験動物技術者 2 級)
庄司 朱里 (SHOUJI, Akari) : 動物飼育員 (実験動物技術者 2 級) (R4.10 月から)
繁田 紘輝 (SHIGETA, Hiroki) : 動物飼育員 (実験動物技術者 2 級)
立石 康太 (TATEISHI, Kota) : 動物飼育員 (実験動物技術者 1 級)

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

卒前教育 : 医学部学生のアドバイザー、実習やテュータでは、演習や実験を通して研究の意義、奥深さを体験してもらおう。基礎医学の面白さを体験し、探究心、問題解決能力を養うことを目標に指導する。

卒後教育 : 生命科学の研究において動物実験は必要不可欠であり、人間に対する安全への配慮や生命倫理の立場からルールに基づいた実験を行うことが求められる。そのため、動物の愛護及び管理に関する法律、なかでも 3Rs の原則に基づいた実験を行えるように、当部門利用者に習得してもらおう。

大学院教育 : 医学研究を通して、問題発見能力、解決能力を身につけた研究者の養成を目指す。また、研究を推進し成果を挙げ、研究発表、論文化ができるように指導し、優れた人材を育成する。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育 : 医学部 1 年 細胞生物学実習 (横尾)、臨床推論 テュータ (横尾)

医学部 2 年 物質系実習 (横尾)、機能系実習 1 (横尾)、人体の構造と機能 2 エネルギー系 演習テュータ (横尾)、アドバイザー (横尾)

医学部 4 年 共用試験臨床実習前 OSCE 補助者 (横尾)

医学部 6 年 共用試験臨床実習後 OSCE 補助者 (横尾)

卒後教育 : 利用者説明会 (文科省告示 : 研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針に基づく教育訓練) (横尾、村松、伊藤、林、庄司、繁田、立石)

動物実験委員会委員 (横尾) オブザーバー (村松)

日高ブランチ動物実験小委員会委員長 (横尾) 事務局 (村松)

大学院教育 : 研究方法特論 (横尾)

2-3. 達成度評価

卒前教育 : 医学部学生の実習、演習等を通して、基礎的知識の必要性、医学への興味を深めてもらうことができた。また、アドバイザーとして相談に乗ることができた。以上により、おおむね目的を達成できた。

卒後教育 : 基本技術・感染防止・関連法規及び機関内規程・動物福祉に関する教育を 4 回、17 人に対して実施、また、日高ブランチ動物小委員会を 43 回開催し、問題なく目標は達成できた。

大学院教育 : 今年度は講義を行い、研究方法のより発表に使える技術を指導することができた。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育 : 学生教育は十分目標を達成したため、次年度は学生教育を継続的、積極的に関わるとともに、魅力ある課外プログラムを提供することを目指して活動する。

卒前教育 : 施設利用者に説明会を行い、動物実験を利用した医学研究への貢献や指導において一定の貢献を果たしたと考える。次年度も持続的に教育訓練を実施するとともに適切な施設管理を継続する。

大学院教育 : 今年度は大学院講義を初めて行ったが、研究指導は行っていない。そのため次年度は、講義、研究指導の両方に積極的に関わること目標とする。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

日高ブランチ実験動物部門では、共同利用施設として実験動物施設の管理・運営が本務であるが、同時に実験動物を用いた研究を推進し、成果を上げることも目標としている。具体的には、糖尿病、脂質代謝を制御する創薬ターゲットを同定し、その機能解析を通して疾患の診断や治療、創薬に結びつけていけるような研究展開を目指す。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

1) 消化管由来分泌因子 Betagenin の機能解析 (横尾、豊島) : 消化管特異的分泌タンパク Betagenin の解析を引き続き進めた。今回、Betagenin 合成ペプチドに対する膵 β 細胞上の受容体遺伝子の K0 マウスを作製した。また同時に膵 β 細胞特異的なコンディショナル K0 マウスを作製し、両マウスともにバッククロスにて遺伝背景をそろえながら膵 β 細胞での解析を進めている。また、肥満、糖尿病と Betagenin の関連についても解析した。

2) 体外受精・胚移植による遺伝子改変マウスの作製、凍結保存法の確立 (横尾、村松、伊藤、立石) : R4 年度は、体外受精・胚移植を 18 回行った。また、凍結はのべ 10 件、2 系統の精子、受精卵を凍結し、1 件個体化した。

3) ロボット外科手術トレーニングのためのブタ飼育管理 (横尾、村松、伊藤、繁田、立石) : 獣医師管理の元、1 回行った。参加人数はのべ 14 人であった。

3-3. 達成度評価

- 1) 現在、受容体遺伝子 K0 マウスに関しては、現在継代、解析匹数を整えている。コンディショナル K0 マウスはバッククロスを行うと共に脾臓における病理解析を実施し、その表現型を確認しつつある。また、肥満糖尿病モデルマウスでの Betagenin の機能を解析した結果、Betagenin と肥満・糖尿病発症との関係を明らかにしつつあるため、ある程度は目標が達成できたと考えている。
- 2) 共同研究施設として遺伝子改変マウス作製、胚操作、生殖工学のサービスを十二分に行えたため、当初の目標以上に達成できたと考える。
- 3) 当初の予定通りのトレーニングが開催でき、目的は達成できていると考える。

3-4. 次年度改善計画

上記のように、研究プロジェクトが軌道に乗り始め、個別の実験データを集めることが出来た。次年度計画として、Betagenin に関しては受容体のシグナル伝達の解析および動物モデルでの表現型解析を行う。さらに糖尿病との関係をつかむべく、脾臓移植等の検討も視野に入れていく。マウス胚操作、ブタ飼育管理についても継続して進めて行くことにより、技術を確立させ、共同研究施設として学内研究者の遺伝子改変マウス作製に貢献することを目標とする。同時に、これらのプロジェクトで成果を論文あるいは知的財産として世の中に発表することを旨とする。

4. 診療

該当無し

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当無し

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当無し

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

横尾友隆：公私立大学実験動物施設協議会 代議員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

該当無し

【総数：論文 0 件、学会発表 0 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

横尾友隆（分担）森隆（代表）

科学研究費補助金 基盤研究(C)「アルツハイマー病：アポリポ蛋白 E を標的とした革新的ペプチド療法の確立」

配分額：110 万円

6-3. 受賞

該当無し

6-4. 特許、実用新案

公開前のため省略

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当無し

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

当部門は共同利用研究施設として感染事故に対し最も注意を払い、研究サポートを主に施設運営を行い今年度も特に問題も無く維持管理することができた。研究支援業務として、採血、解剖、採材などを年間 35 件実施した。微生物モニタリング（内部検査 4 回、外部検査 2 回 [実験動物中央研究所：ICLAS]）の結果から本施設で定義された微生物・ウイルス等は検出されず、基準以上の安全な管理環境が維持され目標は達成された。

また、令和 4 年度における実験計画書の遂行実験数は、マウス 28 件であった（左記の実験のうち組換え DNA 実験 18 件、感染実験 ABSL2 実験 1 件、RI 使用実験 4 件）。そのうち当施設との共同研究として、4 件が遂行中で概ね順調に計画通り実施されている。また、共同利用研究施設として令和 4 年度の利用実績は、動物使用数 3,954 匹、維持管理数 1 日平均 753 ケージ、年間延べ飼育数 857,293 匹であった。搬入・搬出実績に関しては、実験動物中央研究所、九州大学より搬入、日本クレーアへ搬出を実施し、動物飼養保管施設としての役割を果たすことができた。

教育面では医学部生に実習、レポート評価、チュータを通して問題を自ら調べ、考え、解決する力を持つように指導できほぼ目的を達成できたと考える。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

本施設利用者およびスタッフの衛生管理に関する指導及び教育は徹底されており、次年度も現状に慢心することなく、共同利用研究施設として適正な動物実験の実施、関連法規および各指針・機関内規程を遵守した動物実験計画の立案・実施支援、実験環境の更なる整備などを通して医学の発展に貢献したい。さらに、研究支援も充実させることで学内における研究活動の推進にも寄与することを目指す。また、教育にも、特に大学院教育にも力を入れ積極的に関わっていきたいと考えている。

12. 6) 中央研究施設 日高ブランチ機能部門

1. 構成員

坂本安 (SAKAMOTO, Yasushi) : 教授 : 運営責任者 : 施設長 : 指導教員 (大学院) : 機能生物化学 : 博士
平崎由利絵 (HIRASAKI, Yurie) : 実験助手
石田道子 (ISIDA, Michiko) : 事務員

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

医学部学生に主要な血液疾患の症候や病態生理を学習するための基盤として、赤血球、血漿の機能及び血液凝固系の基礎的な知識を修得させ、体液のホメオスターシスに関する血液の多様な役割を理解させることを目的とする。基礎的な実験操作に用いられる器具、機器に関する正しい知識と操作方法を身につける。環境問題をテーマとした実験を行い、その結果はExcel、Power point を用いて整理し、データ解析手法の基礎を学ぶ。解析結果はWordによりレポートを作成し考察する。

2-2. 教育実績(担当者)

2年生エネルギー系(坂本)、塗抹標本作成実習(坂本)ならびに機能系実習(2年生);生殖(坂本)、1年生人体の基礎科学1、2(化学実験1、2)(坂本)を分担した。選択必修ユニット;(基礎医学実験)正しいピペットの扱い方~分析データの解析の基礎(2年生)(坂本)。医学部大学院・医学研究基礎コース・実用実験医学入門(実習編)を分担した(坂本)。

2-3. 達成度評価

COVID-19感染予防対策に伴い、引き続きリモート講義が継続された。スライド数を昨年よりも更に減少させ全体的にゆったりとした講義を心がけたが、学生からの評価は良好であった。選択必修ユニットでは、実習/演習形式の内容としたが引き続きリモート形式となった。学生諸君からの意見も取り入れ、将来どのような事に役立つか説明したうえ、模擬的な結果を示して相互に考察を行った。また、実験結果に基づいた提出物(課題)により理解度を評価した。履修学生の反応は、良好で課題等も全て提出された。前年度同様にExcelの入力操作に苦手意識のある学生も最終講義時には理解は深まっており、役に立ったとの意見も多かった。講義内容の見直しと修正の効果は、ある程度得られたと考える。

2-4. 次年度改善計画

次年度は、退職となるため、講義内容を毛呂山機能部門廣澤准教授に引き継ぐ予定である。必要に応じて準備及び講義を担当することとなる。対面講義或いはリモート講義のどちらでも対応出来るように早期に行動する予定であるが、特に、実習や演習では創意工夫が不可欠であり、講義資料も含め入念な準備を行う予定。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

研究は、引き続き東洋大学バイオナノエレクトロニクスセンターとの共同研究を推進し、学会等で成果を発表する。大学間の連携を重視してこれまでの研究を進めたが、「脳虚血に対するドラッグデリバリーの研究」に関して良好なデータが得られ始めているため、引き続き協力を行うと共に共同研究者達に今後を託したい。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

①東洋大学との共同研究では、「脳虚血に効果を示すナノ粒子の開発」に関して動物実験を開始した。更に、②「国立大学法人埼玉大学と学校法人埼玉医科大学との包括的共同研究」でも脳虚血を定量化するための共同研究をスタートさせたが、今年度の研究費は獲得できなかった。

3-3. 達成度評価

①において、その成果を2023年2月の国際学会。良好な結果が得られており、成果を国際学会(10th International Conference on Advanced Materials and Nanotechnology)にて発表した。

3-4. 次年度改善計画

①は、今後も継続する価値があると判断しているが、基礎的な部分での検討を遂行する予定である。具体的には、ダメージを受けた神経細胞を保護するために神経栄養因子等を投与しているが、これをインドシアニンプルーに変えたナノ粒子を投与し脳虚血によるダメージ部位に粒子が確実に集積することを画像解析により確認することが重要だと考えている。

4. 診療

該当なし

5. その他

- 5-1. 自治体、政府関連委員の有無「該当なし」
- 5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無「該当なし」
- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務「該当なし」

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① M. Sheikh Mohamed, Toru Mizuki, Kimihiko Hattori, Narumi Hirose, Yasushi Sakamoto, Toru Maekawa. In Vitro Trans-Blood Brain Barrier Delivery of Neurotrophin Loaded Nanoparticles to Address Neuronal Damage. 10th International Conference on Advanced Materials and Nanotechnology (AMN10) 2023. 02 Rotorua, New Zealand.

【総数：論文 0 件、学会発表 1 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

6-3. 受賞「該当なし」

6-4. 特許、実用新案「該当なし」

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績「該当なし」

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

中央研究施設日高ランチ機能部門に整備されている大型機器の一部に老朽化が進んでいるが、近年の助成金申請額が小さく申請に値しないことから本年度も更新できていない。今年度も状況が変わらず、次年度の公募内容に期待せざるを得ない状況となっている。しかしながら今年度より、文部科学省にて「大学等における研究設備・機器の共用化のためのガイドライン等の策定に関する検討会」が4回開かれており、このガイドラインは23年度から運営される予定であるため、私学助成金への研究機器の申請内容にある程度影響するものと予想される。日高ランチ機能部門としては、毛呂山キャンパスの機能部門と相互に検討を加え、助成金申請等に協力して行きたい。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

前年度に引き続き中央研究施設日高ランチ機能部門の支援活動が順調に進んでおり、研究機器、設備の運営、管理体制に関して毛呂山キャンパスの機能部門と同期した行動が可能となりつつある。また、ホームページからの利用者登録、研究機器利用予約方法の調製等も概ね良好な状態となった。現状、重要なのは研究設備と機器を更新し、充実化させることである。助成金の獲得は急務となっており、広範囲に文科省助成金の獲得に取り組む必要性は、引き続き残されている。文科省から提唱される「大学等における研究設備・機器の共用化のためのガイドライン」に基づき、詳細を調査中であるが、中央研究施設日高ランチ機能部門の運営方法は、既に多くの面がこのガイドラインに沿って運営されていると思われ、施設長、中央研究施設運営委員会医学研究センター、RAセンターの方針に基づき、円滑な運営を目指す。

13. 川越キャンパス・研究部

1. 構成員

山本晃士 (YAMAMOTO, Kouji) : 川越ブランチ長 (輸血部教授兼務) : 運営責任者 : 代表指導教員 (大学院) : 内科学 : 博士
森 隆 (MORI, Takashi) : 研究部長 : 教授 : 研究主任・教育主任 : 指導教員 (大学院) : 神経病理学 : 博士

動物実験施設 (第1研究棟 1-2F)

森 隆 (MORI, Takashi) : 教授 (施設管理責任者 : 獣医師) : 博士
藤原正和 (FUJIWARA, Masakazu) : 講師 : 研究副主任・教育副主任 : 博士
小山直基 (KOYAMA, Naoki) : 課長補佐 (一級実験動物技術者)
岡田祥子 (OKADA, Sachiko) : 主任 (一級実験動物技術者)
龍前真也 (RYUMAE, Shinya) : 主任 (一級実験動物技術者)

RI 研究施設 (第1研究棟 3F)

潮田陽一 (USHIODA, Youichi) : 課長補佐 : 放射線取扱主任者
秋山慶介 (AKIYAMA, Keisuke) : 実験助手 : 放射線取扱主任者

電子顕微鏡施設 (本館 5F)

青木志津子 (AOKI, Shizuko) : 助手

共同利用研究施設 (第2研究棟 1・3F)

瀬戸山由美子 (SETOYAMA, Yumiko) : 助手

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

動物実験施設は、SPF (指定された病原性微生物が存在しない) 飼育施設・感染実験施設を含む特殊な施設であり、微生物学的に制御された管理状況を維持することが目的である。RI 研究施設は、RI を使用した実験のための特殊な施設であり、RI の取扱・管理や RI 管理区域内外での線量を法令の限度内に維持・管理することを目的とする。共同利用研究施設は、基礎実験 (分子生物学的実験を含む) に対応する分析測定機器を備えた施設であり、各種機器を円滑に作動させるために維持・管理することを目的とする。

2-2. 教育実績

動物実験施設では、文部科学省告示「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針に基づく教育訓練」を行い、基本技術・感染防止・動物福祉に関する教育を実施した。さらに、施設内部での微生物モニタリングに関連して、細菌培養・分離・同定、PCR を利用した各種病原菌の検出法や安全管理に関する教育を実施した。RI 研究施設では、「放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律」に基づき教育および訓練を行った。

2-3. 達成度評価

動物実験施設では、教育訓練を利用者個別に行った (教育訓練・施設説明会の実施数 : 6 回、受講人数 : 24 人)。微生物モニタリングを内部検査 4 回、外部検査 3 回行った。本施設で定義された微生物・ウイルス・外部寄生虫等は何れも検出されず、基準以上の安全な管理環境が維持された。RI 研究施設では、8 回の対面型新規教育および訓練 (受講人数 : 11 人) ・10 月 15 日~11 月 15 日に書面提出型の再教育および訓練 (受講人数 : 20 人) を 1 回行った。RI 管理区域内外での線量を日々法令の限度内に維持・管理した。共同利用研究施設では、利用者個別に研究測定機器の使用説明を行い、円滑に機器を維持・管理した。

2-4. 次年度改善計画 (前年度に立てた改善計画)

各施設での教育・訓練は円滑に行われ、衛生管理および RI モニターを含めた環境管理が滞りなく行われた。今後も感染防止・RI 汚染防止の観点から「研究部」が安全且つ効率よく利用できるよう指導・教育体制を整えたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標

2001 年 1 月に埼玉医科大学総合医療センターの正式な組織として「研究部」が発足した。2015 年に第 2 研究棟の運用が開始され、研究施設が充実した。「研究部」の目的・目標は、学内各診療科が効率よく当施設を利用できるよう日々努力することであり、利用書類・手続きのペーパーレス化および情報活動推進の一環として学内向けにホームページを開示している。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績 該当なし。

3-3. 達成度評価

本項目では、共同利用研究施設として各施設の利用実績・遂行実験件数を記載する。

動物実験施設：マウス9科27件、ラット7科16件、ブタ1科3件、イヌ1科2件の動物実験計画書の提出があった。RI研究施設：3科3件のRI使用計画書の提出があった。電子顕微鏡施設：6科9件の研究計画書の提出があった。共同利用研究施設：15科55件の研究計画書の提出があった。動物実験施設で遂行される全ての動物実験計画書は、動物実験委員会にて審査・承認を受けた。その内訳は、動物実験計画書48件〔注意を要する動物実験計画書：組換えDNA実験（P1A実験：10件、P2A実験：1件、ABSL1実験：1件、ABSL2実験：1件、毒物使用実験：5件、放射線使用実験：1件）〕、中間報告書・自己点検表46件、動物実験結果報告書・自己点検票2件、動物実験（終了・中止）報告書2件、動物実験計画書の追加変更承認申請書8件であった。動物実験施設：実験動物種毎の飼養保管数（年間飼養保管数）は、マウス：377,260匹、ラット：9,240匹、イヌ：33匹であった。飼育室稼働率は、年平均でマウス（86.1%）、ラット（22.1%）で推移した。施設利用頻度は、日に平均2-5グループ（7-10人）が利用した。各科利用頻度の高い順に、年間で小児科（含新生児科）（729回）、胆肝臓外科・小児外科（317回）、リウマチ・膠原病内科（261回）、呼吸器内科（248回）、呼吸器外科（225回）、歯科口腔外科（163回）、消化器・肝臓内科（153回）、病理部（118回）、腎・高血圧内科（107回）、リハビリテーション科（42回）、形成外科・美容外科（17回）、麻酔科（4回）であった。研究部の研究支援も行なわれ、年間で（505回）の支援を行った。利用時間は利用回数に準じ、時間帯では19時以降の夜間そして日曜・祭日に使用するケースも多かった。その他の施設における利用実績は、RI研究施設：内分泌・糖尿病内科（692回）、ゲノム診療科（21回）、研究部（19回）の利用であった。研究部の研究支援も行なわれ、年間で（69回）の支援を行った。電子顕微鏡施設：病理部（284回：49パラフィンブロック薄切支援）、呼吸器外科（10回：40パラフィンブロック薄切支援）、消化管外科・一般外科（7回：11パラフィンブロック薄切支援）、小児科（5回：51パラフィンブロック薄切支援）、消化器・肝臓内科（2回：16パラフィンブロック薄切支援）の利用であった。共同利用研究施設：内分泌・糖尿病内科（145回）、リウマチ・膠原病内科（128回）、胆肝臓外科・小児外科（115回）、歯科・口腔外科（77回）、病理部（55回）、産婦人科（51回）、呼吸器内科（21回）、脳神経外科（16回）、小児科（含新生児科）（16回）、消化管外科・一般外科（10回）、血液内科（4回）、ゲノム診療科（3回）の利用であった。研究部の研究支援も行なわれ、年間で（132回）の支援を行った。

3-4. 次年度改善計画

学位取得のための研究を含めた様々な成果が出始めている。動物実験施設における感染事故、RI研究施設におけるRI汚染事故もなく、各研究施設の利用が問題なく行われた。各研究施設スタッフによる様々な研究支援サービスを行えた。設置機器等の利用説明会を定期的に行い、数多くの研究者の参加があった。次年度計画としては、第1研究棟3F RI研究施設の有効利用を行うために、非RI使用の研究室スペースを確保する予定である。学内研究マインド支援ブランド（共通部門）等に申請し、機器の追加配備を行う予定である。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無 該当なし。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無 該当なし。

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務 該当なし。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

該当なし。

6-2. 獲得研究費

①2019年-2020年(株)グロービア 科学研究費補助金 研究代表者（森 隆）「アルツハイマー病の病態軽減効果を示す化合物の探索」

②2020年-2022年 独立行政法人日本学術振興会 科学研究費補助金（基盤研究（C））研究分担者（森 隆）「FISHに頼らない高悪性度B細胞リンパ腫の診断法の確立とその分子基盤」（研究代表者 埼玉医大 百瀬修二）（20K07396）

6-3. 受賞 該当なし。

6-4. 特許、実用新案 該当なし。

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績 該当なし。

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

「研究部」は、埼玉医科大学総合医療センターの研究部門として位置づけられている。本年も、学位取得の研究を含めた様々な成果が出始めている。多くが学内各診療科に対する研究支援と共同研究の成果である。当研究施設の情報公開活動推進の一環として開設している学内向けホームページ (<http://smswww/dept/doc67/index.html>) を随時更新し、研究部の情報公開に努めた。さらに、各研究施設スタッフによる研究支援サービス、設置機器等の利用説明会を定期的に行った。計画していた第2研究棟への「P2 遺伝子組換え DNA 実験対応培養室」の開設は、クリーンベンチ、CO₂インキュベーター、冷却遠心機を設置し、環境を整え複数年にかけて進めてきた計画を達成することができた。第1研究棟においては、老朽化したエアコンの更新工事を行い、約8割の進捗状況である。

これからも現状に慢心することなく、常に質の高いそして利用しやすい研究施設の運営が行われるよう努力し、「研究部」が益々発展するよう皆で努力を重ねたい。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

研究マインドが高まりその需要に答えるため、第2研究棟に開設した「P2 遺伝子組換え DNA 実験対応培養室」を拡充した。来年度は利用者へ新規施設を周知し、使用頻度を上げていく計画である。第1研究棟3F RI 研究施設に、非 RI 使用の研究室スペースを確保して有効利用する計画である。学内研究マインド支援 Grant (共通部門) 等に申請し、共同利用研究施設の機器を追加配備する計画である。飼育稼働率が示すように、遺伝子改変動物 (マウス) を用いた研究が盛んである。今後もその要望が増える事が予想され、ラット飼育室を改装して、マウス飼育室に転用する計画を立案中である。

14. 医学教育学

1. 構成員

森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 教授 : 博士 : 運営責任者、教育主任、研究主任、代表指導教員 (大学院)、兼担 : 医学教育センター、大学病院血液内科、他
松田 晃 (MATSUDA, Akira) : 教授 : 博士、指導教員 (大学院)、兼担 : 医学教育センター、国際医療センター造血管腫瘍科、大学病院血液内科
柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 教授 : 博士、指導教員 (大学院)、兼担 : 医学教育センター、医療人育成支援センター地域医学推進センター、IR センター
石橋 敬一郎 (ISHIBASHI Keiichiro) : 准教授 : 博士、指導教員 (大学院)、兼担 : 医学教育センター、総合医療センター消化管外科・一般外科
荒関 かやの (ARASEKI, Kayano) : 講師 : 博士、指導教員 (大学院)、兼担 : 医学教育センター、大学病院血液内科

令和元年度に、共通部門である医学教育センターの専任教員が医学教育研究を推進するために、医学博士号を有する教員を中心に「医学教育学」が組織された。教育面は、全員が医学教育センター兼担で、これまで通り医学教育センター専任者と協力して教育を継続して、授業の他、医学教育センター医学部領域各部門、室及び教育関係の委員会活動を担当した。講座研究費配分の関係で、実質的に医学教育学としての研究活動が開始したのは同年 10 月からとなり、令和 2 年度より本格的に活動している。

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

森: 令和 4 年度授業の基本方針も前年度に引き続き対面と遠隔の授業を組み合わせたハイブリッド型授業であり、新型コロナウイルス感染予防対策も継続して、安全で効果的な授業運営に努める。

松田: 学力増進室では、5/6 年生は成績不良者に対し早期に補講や面談を行い卒業試験、国家試験に向けての指導を行う。6 年生成績不良者に対しスペシャルサポーター/アドバイザーとして個別指導を行う。4 年生国試対策委員と連絡を密にして、CBT 対策が順調に行われるように指導する。3 年生国試対策委員と連絡を取り、早めに CBT 対策を開始するように指導する。4 年生学生支援室委員として、成績不良学生に対し面談を行う。血液内科領域の CC Step1 の実習では、顕微鏡を用いた血液疾患の検鏡実習を、新型コロナウイルス感染症拡大のため、令和 2-3 年度はバーチャルな実習とした。令和 5 年度も同様に、バーチャルな実習を継続し、さらに改善を加える。

柴崎: コロナ禍で中断している地域で学ぶ実習については、感染症の流行状況に留意しながら段階的に対面で実施できるように準備を進める。専門職連携教育 (IPE: InterProfessional Education) は、遠隔での実習の質を担保すべく検討を続ける。保健医療学部との合同 IPE の実現に向けてカリキュラムの開発に取り組む。

石橋: 担当する体験学習、基本的手技実習はバーチャルと対面を取り入れて行くことになるが、利点、欠点をうまく融合してハイブリッドな実習をさらにすすめて行く。教育関連部門の活動については、新型コロナウイルス感染症拡大のため登校できない学生が孤立しないように、学修面、生活面からの支援を継続していく。また、学内 FD の充実に努める。

荒関: 感染対策と試験や授業のあり方について引き続き、関係各方面と協力して検討、改善していく。また、特に卒業試験、共用試験 CBT・OSCE、等のハイスタークスの試験については、その妥当性担保に努める。

2-2. 教育実績 (担当者)

森: 教育関係部門・会議: 医学教育センター長、教育主任部門長、臨床実習推進室長、卒前教育委員長、5 年学年小委員会委員長、OSCE 委員会委員長、OSCE 実施委員、カリキュラム委員、入試委員会委員長、入試実施委員会委員、担当授業等: 1、2、3、4 年良医への道コース CD、1、2 年臨床入門 UD 補佐、1 年臨床推論 UD 補佐、2 年臨床推論 UD、3、4 年臨床実習 1、2、3CD、3 年導入クリニカルクラークシップ (Pre-CC) 1-1、1-2、1-3UD 補佐、4 年 Pre-CC2-1、2-3UD、5 年臨床実習 3CD、6 年生臨床実習 4CD、5 年特別演習 UD。埼玉医科大学 SP 会担当 (認定模擬患者養成担当者)。

松田: 教育関係部門・会議: 卒前医学教育部門員、学力増進室長、5 年学年小委員会委員、学生支援室委員 4 年生担当、カリキュラム委員: 基礎臨床連携小 WG、OSCE 実施委員、Pre-CC1-1、1-3、2-1、2-3 の UD 補佐。担当授業等: Pre-CC、CC Step 1、advanced CC。医学部 3 年生血液ユニット講義、4 年生特別授業、6 年生血液学講義。学力増進室 4 年生補講。保健医療学部 (看護学科、臨床検査学科、臨床工学科理学療法学科) の講義。初期研修: 研修医のためのセミナー講師。定期試験監督、入学試験監督。埼玉医科大学 SP 会担当。

柴崎: 教育関係部門・会議: 卒前医学教育部門長、カリキュラム室員、地域医学推進室長、臨床実習推進室副室長、学生支援室員、試験管理室員、学力増進室員、学生部委員、カリキュラム委員会委員、ポリシー等策定委員会委員、埼玉医科大学研修医委員会委員を務めた。担当授業等: 医学部: 1 年～4 年地域医療とチーム医療 UD、1、2 年臨床入門 UD 補佐、1 年臨床推論 UD、2 年臨床推論 UD 補佐、1～3 年キャリアデザイン UD 補佐、3 年 Pre-CC1-1、1-2UD、3 年 1-3UD 補佐、4 年 Pre-CC2-1 UD、4 年 2-3UD 補佐、1、2 年選択必修、地域医学・医療学入門担当、2 年行動科学と医療倫理、6 年総合学習講義担当、保健医療学部臨床検査学科: 1 年人体の科学入門科目責任者、2 年疫学科目責任者。臨床検査学科 4 年生 1 人を卒業研究で指導した。

石橋: 教育関係部門、会議: FD 部門長、卒前医学教育部門員、地域医学推進室員、臨床実習推進室副室長、学生支援室室

長、OSCE 委員会委員、OSCE 実施委員会委員、試験管理室員、学力増進室員、医学部入学試験実施委員会、カリキュラム委員。担当授業等：1、2年臨床入門UD、3年Pre-CC 1-3、4年Pre-CC 2-3UD、3年Pre-CC1-1、1-2UD 補佐、4年Pre-CC2-1UD 補佐。1年生人体の構造と機能講義を担当した。埼玉医科大学 SP 会担当（認定模擬患者養成担当者）。
荒関：教育関係部門・会議：卒前医学教育部門員、教育情報部門長副部門長、試験管理室副室長、カリキュラム評価委員会委員、OSCE 委員会委員、OSCE 実施委員会委員、医学部入学試験実施委員会、IR センター運営会議構成員
担当授業等：3年血液ユニットUD 補佐、6年達成度評価ユニットUD 補佐、共用試験 CBT 会場実施責任者
○ 大学院教育としては、博士課程社会人大学院生1名（金田）が博士号を取得した。

2-3. 達成度評価

森、荒関：ハイブリッド型授業にも慣れてきたことから、感染の発生が見られたが、大きな問題は発生せず、概ね達成できたと考えられる。定期試験、卒業試験、共用試験 CBT 等の試験における感染対策について関係各方面とともに検討し、学生の理解、協力も得て、感染対策を行いながら全員登校で試験を実施できた。

松田：3年生血液ユニット、6年生の造血器領域の講義は学生より高い満足度が得られ、3年生の部で令和4年度埼玉医科大学医学部ベストティーチャー賞に選出された。6年生成績不良者に対しスペシャルサポーター/アドバイザーとして個別指導を行なった。4年生国試対策委員と連絡を密にして、CBT 対策が順調に行われるように指導した。4年生学生支援室委員として、4年生成績不良学生に対し面談を行なった。CC step1 で、顕微鏡を用いた血液疾患の検鏡実習を行っていたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、2020年度からはバーチャルな実習に変更し、十分な教育効果が得られている。また、その教育資料も改訂した。学力増進室では、4年生に対する特別授業・補講（ZOOM）を行なっている。2年生担当教員が不在であったが、荒木智之先生が就任した。

柴崎：地域基盤型の教育方法として、専門職連携や体験実習は一部遠隔を取り入れて実施できた。4年地域医療実習は対面での実習を再開することができた。Pre-CC 1-1 においては、初めて医学部・保健医療学部との合同 IPE を対面で実施した。医学部2年生と保健医療学部臨床検査学科の IPE も実施した。4年生までの教育としては概ね目標を達成できた。地域枠学生対象の課外学習プログラム「埼玉の医療」においては学生同士の交流を活性化した。文部科学省のポストコロナ時代の医療人像養成拠点形成事業に採択され、5年生総合診療内科の感染症実習②をあらたに開発することができた。

石橋：コロナ禍が継続した1年であったが、昨年度の経験を元に、遠隔での体験型実習がさらに充実したと考えられる。バーチャル病院見学、医師業務見学もバーチャルだからできる要素も充分取り入れられ概ね目標は達成できた。学生支援に関しては、コロナ禍であったが、原則対面での支援を始め昨年度以上の支援ができたと考えている。

2-4. 次年度改善計画

森：次年度の授業の基本方針は対面授業となることから、講義、演習、実習の内容、手順を見直して、新型コロナウイルス感染症に注意しながら教育効果を高める授業を運営できるようにする。

松田：学力増進室では、5/6年生は成績不良者に対し早期に補講や面談を行い、定期試験、卒業試験、国家試験に向けての指導を行う。6年生成績不良者に対しスペシャルサポーターとして個別指導を行う。4年生国試対策委員と連絡を密にして、CBT 対策が順調に行われるように指導する。3年生国試対策委員と連絡を取り、早めに CBT 対策を開始するように指導する。4年生学生支援室委員として、成績不良学生に対し面談を行う。血液内科領域の CC step1 の実習では、顕微鏡を用いた血液疾患の検鏡実習を、新型コロナウイルス感染症拡大のため2020年度からはバーチャルな実習とした。2023年度も同様に、バーチャルな実習を継続し、さらに改善を加えたい。

柴崎：コロナ禍で中断している地域で学ぶ実習については、感染症の流行状況に留意しながら段階的に対面で実施する。専門職連携教育（IPE: InterProfessional Education）及び地域医療とチーム医療ユニット、選択必修地域医学・医療学入門は、対面と遠隔のハイブリッドの教育を開発する。診療参加型臨床実習の拡充に向けて、評価方法や学生への指導方法について検討する。文部科学省のポストコロナ時代の医療人像養成拠点形成事業に基づくカリキュラム開発・評価を実施する。

石橋：担当する体験学習、基本的手技実習はコロナ禍以前と同様に対面での実習が主になることが予想される。バーチャルでの利点、欠点をうまく融合してハイブリッドな実習をすすめて行く。教育関連部門の活動については、登校を開始する事で生じる学修面、生活面での問題の支援を継続していく。また、学内FDの充実に努める。

荒関：感染対策と試験や授業のあり方について引き続き、関係各方面と協力して検討、改善していく。また、特に卒業試験、令和5年度から公的試験となった共用試験 CBT・OSCE 等のハイスタークスの試験については、その妥当性担保に努める。

3. 研究

3-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

森：今後さらにテーマを掘り下げて、また別の視点から見ることによってリサーチ・クエスチョンを立てて研究を推進する。早期体験実習で導入した種々のバーチャル実習の効果と利点を解析し、新たなバーチャル実習を構築する。種々のバーチャル実習を組み合わせ、教育用のメタバス病院の構築を検討する。

松田：特発性造血障害に関する調査研究では厚生労働省の研究班の「再生不良性貧血と骨髄異形成症候群のセントラルレビューシステム・遺伝子研究」のセントラルレビュー実施責任医師として活動する。2022年度も、このシステムによる前方視的な予後調査等、さらに充実をはかる。再生不良性貧血と骨髄異形成症候群におけるわが国の診断の質向上に寄与しながら、前方視的な予後調査と関連したエビデンスの充実をはかり、その成果の発表や海外学術誌への公表を2022年度もおこなうように努力する。骨髄異形成症候群と赤芽球癆の「参照ガイド」の改訂を終了させる。

柴崎：専門職連携教育に関する研究は、コンピテンシーを用いた評価の有用性について卒業生調査に関しては、論文を作成する。本学の地域医療教育の変遷と学生の地域医療に対する関心について、経年的なデータの比較を行い成果を明らかにする。地域感染症・学校感染症の時空間疫学大学近隣の小中学校の学校感染症の発生状況については、新型コロナウイルス感染症の報告の特徴を分析する。埼玉県がん検診の精度管理に関する研究とがん登録データの活

用に関する検討を進める。社会資源が限られた市町村が取り組む糖尿病管理予防プログラムの長期的効果の検討長崎県の離島における住民の健康状態を経年的に観察し、過去の糖尿病予防対策の成果を明らかにする研究では、アンケート調査を実施する。

石橋：昨年度の遠隔での経験を生かして、さらに学生が興味を持てるような遠隔実習を行いその成果をまとめていく予定である。また、遠隔での医学教育ワークショップ、臨床指導医講習会をさらに発展させてその成果をまとめていく予定である。その研究のために公的研究費の獲得をめざす。

荒関：MCQによる試験の妥当性に関しては、試験の作成・実施と事後評価とを継続的に繰り返すことによって試験の妥当性を担保する。また、毎回の医師国家試験問題の精査は今後も継続し、さらに、令和5年度から公的化された共用試験 CBT・OSCE を通して、卒前教育における学習者評価法の充実に努める。血液領域については「再生不良性貧血と骨髄異形成症候群のセントラルレビューシステム」の活動を継続する。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究業績

森：

医学教育学：

①臨床推論グループ（医学教育学：森、柴崎、荒関、医学教育センター：杉山、斎藤、金田、大西）

②シミュレーショングループ（医学教育学：森、石橋：医学教育センター：山田、辻、杉山、金田、大西、佐藤、教養教育：川村）

③早期体験実習グループ（医学教育学：森、石橋、柴崎、松田、医学教育センター：杉山、金田、大西、教養教育：米岡）テーマ：看護業務体験実習、チーム医療実習、心身障害者施設実習、病院見学実習、早期体験実習における学生の態度、バーチャル実習の開発

④臨床実習グループ（医学教育学：森、柴崎、石橋、医学教育センター山田、辻、杉山、鈴木、金田）課外学習プログラム（医学教育学：森、石橋、柴崎、松田、医学教育センター：高橋、斎藤）

血液領域：新規細胞株樹立、新規分子標的治療薬開発のための基礎研究（医学教育学：森、大学病院血液内科：中村、照井）

松田：

血液学領域：

①厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業「特発性造血障害に関する調査研究」研究協力者、特発性造血障害に関する調査研究班共同研究「再生不良性貧血/骨髄異形成症候群の前方視的症例登録・セントラルレビュー・追跡調査研究・遺伝子研究」セントラルレビュー実施責任医師を務めている。

②骨髄異形成症候群の本邦のガイドラインである「参照ガイド」の改訂作業が終了し、2023年度に公表が予定されている。

③特発性造血障害に関する調査研究班共同研究の「骨髄異形成症候群の形態学的異形成に基づく診断確度区分」の改訂作業が終了し、2023年度に公表が予定されている。

④「Japan PRCA（赤芽球癆）collaborative study group」のメンバーとして、赤芽球癆の研究に参画し、その成果は2022年度に英文学術誌(Blood Advances 誌)に掲載された。

⑤赤芽球癆の本邦のガイドラインである「参照ガイド」の改訂作業が終了し、2023年度に公表が予定されている。

⑥骨髄異形成症候群の診断に関するAIの作成研究に携わり、その成果の一部が英文学術誌(Sci Rep 誌)に掲載され、その研究を継続する。

⑦「再生不良性貧血に対するトロンボポエチン作動薬療法に関する研究」の委員をつとめている。その成果は英文学術誌(Internal Medicine 誌)に掲載され、2022年度の英文学術誌(Am J Clin Pathol 誌)へ掲載された。

柴崎：

①専門職連携教育/評価・実践の質保証のための研究（医学教育学：柴崎、森、医学教育センター：金田、高橋、教養教育：米岡、埼玉県立大学、城西大学、日本工業大学との共同研究）

②専門職連携教育の効果に関する検討（医学教育学：柴崎、森、医学教育センター：金田、高橋、教養教育：米岡、社会医学：植村、ITセンター：椎橋）

③専門職連携達成度評価表の開発（医学教育学：柴崎、森、医学教育センター：金田、教養教育：米岡）

④地域感染症・学校感染症の時空間疫学（医学教育学：柴崎、森、医学教育センター：荒木、柴崎 由）

⑤埼玉県がん検診の精度管理に関する研究（医学教育学：柴崎、森、医学教育センター：柴崎 由）

⑥社会資源が限られた市町村が取り組む糖尿病管理予防プログラムの長期的効果の検討（医学教育学：柴崎、森、医学教育センター：高橋、金田、大学病院 ER 科：松本、大学病院緩和医療科：岩瀬）

石橋：シミュレーショングループ、早期体験実習グループ、臨床実習グループとして研究活動を行った。医学教育学・医学教育センター教員との共同で、医学教育学会に発表を行った。

荒関：

医学教育学・医学教育センター（医学教育学：荒関、医学教育センター：大西、斎藤、ITセンター：椎橋）。

血液領域では「特発性造血障害に関する調査研究（厚生労働省の研究班）」において松田を中心に構築されている「再生不良性貧血と骨髄異形成症候群のセントラルレビューシステム」の運用および前方視的解析に参加している。

3-3. 達成度評価

森：臨床推論：1、2年の臨床推論ユニットにおける学生の自己評価の解析、シミュレーション：Q-PCRを用いたBLSの評価、臨床実習前 OSCE の成績からみた臨床入門「バイタルサイン」実習の学習効果の分析、早期体験実習：看護業務体験実習における自己評価、臨床実習：学生による実習担当科の評価、など。それぞれ、日本医学教育学会学術大会で発表し、シミュレー

ションに関しては日本シミュレーション医療教育学会で発表した。各テーマについて基本的なデータの収集と分析を行い、学会で発表することができた。

松田：血液学領域：

①骨髄異形成症候群の「参照ガイド」の改訂作業は終了し、2023年度に公表が予定されている。

②「Japan PRCA（赤芽球癆）collaborative study group」の赤芽球癆の研究の成果は2022年度に英文学術誌(Blood Advances 誌)に掲載された。

③赤芽球癆の「参照ガイド」の改訂作業は終了し、2023年度に公表が予定されている。

④骨髄異形成症候群の診断に関するAIの作成研究の成果の一部が英文学術誌(Sci Rep 誌)に掲載されたが、今後もこの研究を継続する。

⑤「再生不良性貧血に対するトロンボポエチン作動薬療法に関する研究」の成果は英文学術誌(Internal Medicine 誌)に掲載され、さらに研究は継続され2022年度の英文学術誌(Am J Clin Pathol 誌)へ掲載された。

⑥特発性造血障害に関する調査研究班共同研究の「骨髄異形成症候群の形態学的異形成に基づく診断確度区分」の改訂作業が終了し、2023年度に公表が予定されている。

柴崎：専門職連携教育に関する研究は、コンピテンシーを用いた評価の有用性について、因子分析を用いて検討し、論文を作成している。地域感染症・学校感染症の時空間疫学大学近隣の小中学校の学校感染症の発生状況について経時的に観察し、その結果を還元することを通して、小中学校の感染症予防、ならびにその教育に貢献した。埼玉県がん検診の精度管理に関する研究埼玉県の市町村が行うがん検診の結果を集計分析し、還元することを通して保健師のスキルの向上と住民の健康保持増進に寄与している。社会資源が限られた市町村が取り組む糖尿病管理予防プログラムの長期的効果の検討については、コロナウイルス感染症の流行により現地で研究が実施できなかった。空間デザインに関するプログラムの構築について検討を行い、医学教育学会に成果を発表した。

石橋：「医学部1年生に対するバーチャル病院見学の試みー医療についての関心は高められたかー」について医学教育学会で発表をした。現在も早期体験実習における遠隔実習、医学教育ワークショップ、臨床指導医講習会についての対面と、遠隔での利点と欠点について検討を継続している。

荒関：MCQによる試験の事後評価を通して、試験の妥当性に関する検討を継続して行っている。また、医師国家試験問題を精査することにより、特に高学年を対象とした試験の妥当性の向上に寄与している。

3-4. 次年度改善計画

森：今後さらにテーマを掘り下げて、また別の視点から見ることによってリサーチ・クエスチョンを立てて研究を推進する。早期体験実習で導入した種々のバーチャル実習の効果と利点を解析し、新たなバーチャル実習を構築する。種々のバーチャル実習を組み合わせることで教育用のメタバース病院の構築に着手する。

松田：厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業 特発性造血障害に関する調査研究では「再生不良性貧血/骨髄異形成症候群の前方視的症例登録・セントラルレビュー・追跡調査研究・遺伝子研究」のセントラルレビュー実施責任医師として活動する。このシステムによる前方視的な予後調査等、さらに充実をはかる。再生不良性貧血と骨髄異形成症候群におけるわが国の診断の質向上に寄与しながら、前方視的な予後調査と関連したエビデンスの充実をはかり、その成果を反映させた骨髄異形成症候群の「参照ガイド」の改訂を公表する。特発性造血障害に関する調査研究班共同研究の「骨髄異形成症候群の形態学的異形成に基づく診断確度区分」の改訂を公表する。「再生不良性貧血に対するトロンボポエチン作動薬療法に関する研究」の成果の学会での発表や海外学術誌への公表を行う。赤芽球癆の「参照ガイド」の改訂を公表する。

柴崎：専門職連携教育に関する研究は、コンピテンシーを用いた評価の有用性についてと達成度自己評価を用いた専門職の特徴について検討を行う。地域感染症・学校感染症の時空間疫学大学近隣の小中学校の学校感染症の発生状況については、新型コロナウイルス感染症の報告の特徴を分析する。埼玉県がん検診の精度管理に関する研究を継続する。社会資源が限られた市町村が取り組む糖尿病管理予防プログラムの長期的効果の検討に関する研究では、アンケート調査を実施する。ポストコロナ事業により新しく開発した教育による地域への愛着や地域医療マインドの育成についての成果を検討する。

石橋：昨年度までの遠隔での経験を生かして、さらに学生が興味を持てるような対面実習を行い、その成果をまとめていく予定である。また、遠隔での医学教育ワークショップ、臨床指導医講習会をさらに発展させてその成果をまとめていく予定である。その研究のために公的研究費の獲得をめざす。

荒関：MCQによる試験の妥当性に関しては、試験の作成・実施と事後評価とを継続的に繰り返すことによって試験の妥当性を担保する。また、毎回の医師国家試験問題の精査は今後も継続し、特に今年度は医師国家試験出題基準改定に伴う問題の変化に注目したい。さらに、公的化を目前に控えた共用試験 CBT・OSCE を通して、卒前教育における学習者評価法の充実を努める。血液領域については「再生不良性貧血と骨髄異形成症候群のセントラルレビューシステム」の活動を継続する。

4. 診療

森：大学病院血液内科で外来診療を行う。

松田：国際医療センター造血器腫瘍科で外来診療を行う。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

柴崎：彩の国「新しい生活様式」評議会委員、埼玉県がん対策推進協議会、埼玉県がん対策推進協議会がん教育部会、埼玉県がん検診精度管理研修会講師、埼玉県生活習慣病検診管理指導協議会委員、埼玉県肝疾患診療拠点病院等連携協議会委員、川越市地域包括支援センター運営協議会委員、毛呂山町健康づくりアドバイザー、毛呂山町いじめ防止対策推進委員会委員長、毛呂山町学校運営協議会委員、長崎県小値賀町健康おぢか21協議会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

松田：International Journal of Hematology 査読委員

柴崎：日本循環器疾患予防学会雑誌編集委員

石橋：日本外科系連合学会雑誌 編集委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

森：日本高等教育評価機構評価員、JACME 評価員、医療系大学間共用試験実施評価機構共用試験医学系臨床実習前 OSCE 評価者、日本私立大学協会卒前医学教育委員会委員、日本医学教育学会代議員、同学術大会運営委員会委員、入学者選抜部会委員、日本血液学会代議員、川越市保健所がん検診担当

松田：松田：医療系大学間共用試験実施評価機構共用試験医学系 OSCE 評価者、公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構 共用試験医学系診療参加型臨床実習後 (post-CC) OSCE 外部評価者、「特発性造血障害に関する調査研究」(主任研究者：三谷絹子) 研究協力者、特発性造血障害に関する調査研究班共同研究「再生不良性貧血/骨髄異形成症候群の前方視的症例登録・セントラルレビュー・追跡調査研究・遺伝子研究」のセントラルレビュー実施責任医師、「特発性造血障害に関する調査研究」骨髄異形成症候群診療の参照ガイド作成のためのワーキンググループ、「特発性造血障害に関する調査研究」赤芽球癆診療の参照ガイド作成のためのワーキンググループ、日本血液学会代議員、日本血液学会関東甲信越地方会幹事、東京骨髄病理研究会世話人

柴崎：医療系大学間共用試験実施評価機構共用試験医学系 OSCE 評価者、公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構 共用試験医学系診療参加型臨床実習後 (post-CC) OSCE 外部評価者、埼玉県医師会女性医師支援検討委員会委員、日本公衆衛生学会研究倫理審査委員会委員、日本公衆衛生学会代議員、日本循環器疾患予防学会評議員、全国地域医療教育協議会代議員、日本疫学会代議員、日本プライマリ・ケア連合学会地域包括ケア委員会委員・日本プライマリ・ケア連合学会多職種連携委員会委員、日本プライマリケア連合学会代議員、日本がん登録協議会外部監査委員会委員、彩の国連携力育成プロジェクト、認知症サポート医

石橋：公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構共用試験医学系 OSCE 評価者、公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構 共用試験医学系診療参加型臨床実習後 (post-CC) OSCE 外部評価者、公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構標準模擬患者養成者、公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構共用試験医学系 CBT 機構派遣監督者、日本消化器外科学会評議員、日本大腸肛門病学会評議員、日本臨床外科学会評議員、日本外科連合学会評議員、日本外科感染症学会評議員、利益相反策定委員会委員、日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会評議員

荒関：共用試験実施評価機構医学系 CBT 実施小委員会委員、同医学系 CBT 実施小委員会タイプ M (診断) 問題作成専門部会委員、同医学系 CBT 実施小委員会機構派遣監督者等講習会専門部会委員、同共用試験医学系 CBT 機構派遣監督者、共用試験医学系臨床実習後 OSCE 認定評価者、日本医学教育学会代議員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1) 医学教育に関する分野

論文等

学会発表

1. 金田 光平, 柴崎智美, 高橋幸子, 本橋千恵美, 米岡裕美, 柴崎由佳, 荒木隆一郎, 石橋敬一郎, 杉山智江, 植村真喜子, 鈴木郁子, 丸木和子, 森 茂久. オンラインでの地域基盤型専門職連携実習の取り組み, 第 54 回日本医学教育学会大会, 高崎, 2022 年 8 月 5 日 (示説), 医学教育 53suppl. 191, 2022

2. 石橋敬一郎, 柴崎智美, 杉山智恵, 米岡裕美, 荒木隆一郎, 植村真喜子, 大西京子, 川村勇樹, 中平健祐, 金田光平, 柴崎由佳, 小山政史, 高橋健夫, 友利浩司, 東 守洋, 森 茂久. 医学部 1 年生に対するバーチャル病院見学の試みー医療についての関心は高められたかー, 第 54 回日本医学教育学会大会, 高崎, 2022 年 8 月 6 日 (口演), 医学教育 53suppl. 165, 2022

3. 杉山智恵, 石橋敬一郎, 柴崎智美, 大西京子, 山田泰子, 川村勇樹, 荒木隆一郎, 金田光平, 柴崎由佳, 佐藤義文, 松田 晃, 森 茂久, 田中辰則, 関口 恵, 山口真季, 村上由美子, 佐々木知佳, 加島聡美, 木内恵子, 武藤光代.

コロナ禍における医学部生の看護業務体験実習の評価, 第 54 回日本医学教育学会大会, 高崎, 2022 年 8 月 6 日 (示説), 医学教育 53suppl. 233, 2022

4. 柴崎智美, 柴崎由佳, 杉山智江, 佐藤義文, 荒木隆一郎, 大西京子, 石橋敬一郎, 森茂久. バーチャル他職種業務見学実習での他職種へのインタビューにおける学生の興味関心についての検討, 第 54 回日本医学教育学会大会, 高崎, 2022 年 8 月 6 日 (示説), 医学教育 53suppl. 233, 2022

5. 荒関かやの: (ワークショップ: 臨地実習前技能修得到達度評価のレイアウト設計) 外部評価にたえるレイアウト設計のための考え方ー医学部 OSCE を例に. 第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会, 埼玉, 2022 年 8 月 19 日, 臨床検査学教育 Vol.15, No.1 .51-54, 2023

著書

1. 安達修一、落合裕隆・金井美恵子・篠原暁子・川村 堅・小田切陽一・柴崎智美・野寺 誠. 公衆衛生学 —社会・環境と健

康一初版、第8章母子保健、第9章学校保健、三共出版、東京、2023年3月

2) 医学教育以外の分野

論文

1. Inada R, Nagasaka T, Shimokawa M, Ojima H, Noura S, Tanioka H, Munemoto Y, Shimada Y, Ishibashi K, Shindo Y, Mishima H, Okajima M, Yamaguchi Y. Phase 3 trial of sequential versus combination treatment in colorectal cancer: The C-cubed study. *Eur J Cancer* 169: 166-178, 2022
2. Miyuki Hiratsuka, Takahiro Hasebe, Yuki Ichinose, Ayaka Sakakibara, Akihiro Fujimoto, Noriko Wakui, Satomi Shibasaki, Masataka Hirasaki, Masanori Yasuda, Akemi Nukui, Hiroko Shimada, Hideki Yokogawa, Kazuo Matsuura, Takashi Hojo, Akihiko Osaki, Toshiaki Saeki, Tumor budding and fibrotic focus-proposed grading system for tumor budding in invasive carcinoma no special type of the breast. *an international journal of pathology*: 481(2):161-190, 2023
3. Nakazawa H, Sakai K, Ohta A, Fujishima N, Matsuda A, Hosokawa K, Nakamura F, Nakao S, Mitani K, Ishida F. Incidence of acquired pure red cell aplasia: a nationwide epidemiologic analysis with 2 registry databases in Japan. *Blood Adv.* 6(24):6282-6290. 2022
4. Matsuda A, Imada K, Obara N, Iida H, Yamazaki H, Tomiyama Y, Miyamura K, Sasaki O, Maeda T, Ohta K, Usuki K, Tokumine Y, Imajo K, Okamoto Y, Murakami M, Nakao S. Dysmegakaryopoiesis and Transient Mild Increase in Bone Marrow Blasts in Patients With Aplastic Anemia Treated With Eltrombopag May Be Signs of Hematologic Improvement and Not Portend Clonal Evolution. *Am J Clin Pathol.* 158(5): 604-615. 2022.

【総数:論文10件、学会発表40件、著書1件】

6-2. 獲得研究費

森:

令和4年度科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)「コロナ後を見据えた新規複合型バーチャル早期体験実習の開発」(新規)
令和4年度国立大学法人埼玉大学との共同研究支援 Grant「AI/IoT/VR/HMI 技術を活用した医学教育バーチャル実習の開発」(継続2年目)

柴崎:

平成31年度科学研究費補助金基盤研究一般(c)「社会資源が限られた市町村が取り組む糖尿病管理予防プログラムの長期的効果の検討」

令和3年度厚生労働科学研究費補助金がん政策研究事業「がん登録を利用したがん検診の精度管理方法の検討のための研究」研究分担者、

令和4年度埼玉県がん検診統一集計結果報告事業 研究責任者、令和4年度文部科学省ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成」

6-3. 受賞

6-4. 特許、実用新案

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

松田:

石橋:

第46回 埼玉ストーマ・排泄リハビリテーション研究会 2023年1月28日 ウエスタ川越

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

1) 教育については、コロナ禍が続く中、医学教育センター各部門、各室の業務をはじめ医学教育センターが中心となり実施すべき教育は、医学教育センター専任者と協力して予定通り実施することができた。また新カリキュラムが6年生まで進み、予定していた学外実習を中止し、全クールを学内実習に変更した6年生臨床実習 CC step3 実施をサポートした。学生の健康管理は、学生支援室担当がマニュアル作成、体調不良者との連絡などを中心となって行なった。大学院教育は、学位取得のためのグループ meeting をほぼ週1回実施し、社会人大学院生1名が博士号を取得した。

2) 医学教育の研究については、令和3年度にはバーチャル実習を含めた遠隔実習、オンライン指導医講習会の実施報告など、複数の論文を発表したが、令和4年度はこれらを発展させるために新たなテーマに着手した年であった。新規複合型バーチャル早期体験実習の開発のテーマで科学研究費補助金(基盤 C)に採択されたことは評価できる。バーチャル実習、シミュレーション教育に関して埼玉大学との共同研究は研究計画の検討を開始し、共同研究支援 Grant も継続することができた。埼玉県からの委託事業が継続するなど、研究を通して地域社会への貢献は継続して行った。専門職連携教育は、学部学生の連携教育から、現場の専門職の教育まで広げており、その評価尺度の開発にも取り組んでいる。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

1) 教育については、次年度はハイブリッド型授業から基本的に対面授業に復帰することから、授業方法、手順を入念に準備して安全に実施できるようにするとともに、ポストコロナ時代を見据えてコロナ禍で得られた遠隔授業のノウハウを利用した新たな形の教育を模索する。

2) 研究については、これまで検討してきたテーマの中から、リサーチクエストを発展させ、研究意義があり、実現可能性の高いテーマについては研究計画を立て、倫理委員会で教育研究審査を受審後、研究を実施する。大学院生の学位取得が修了したことから、今後は、医学教育学だけでなく医学教育センター専任者とともに医学教育研究のた

めの meeting を定期的を開催して、研究活動のさらなる活性化を目指す。
引き続き新規バーチャル実習の教育研究を進める。バーチャル実習、シミュレーション教育に関して埼玉大学との共同研究を進める。専門職連携教育の研究を進めるとともに、ポストコロナ事業により新しく開発した教育の研究を計画する。医学教育領域以外の研究は各構成員が自己点検・評価に基づいて計画を進める。

15. ゲノム基礎医学

1. 構成員

奥田晶彦 (OKUDA, Akihiko) : 教授: 運営責任者: 教育副主任: 研究副主任: 代表指導教員 (大学院) : 幹細胞: 博士
黒川理樹 (KUROKAWA, Riki) : 教授: 教育主任: 研究副主任: 指導教員 (大学院) : 分子生物学: 博士
片桐岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : 教授: 教育副主任: 研究主任: 指導教員 (大学院) : 運動器、骨代謝: 博士
鈴木 歩 (SUZUKI, Ayumu) : 講師: 教育員: 研究員: 指導教員 (大学院) : 幹細胞、生殖細胞: 博士
米田竜馬 (YONEDA, Ryoma) : 講師: 教育員: 研究員: 指導教員 (大学院) : RNA 修飾、神経変性疾患: 博士
塚本 翔 (TSUKAMOTO, Sho) : 講師: 教育員: 研究員: 指導教員 (大学院) : 骨代謝、遺伝子疾患: 博士
浦西洗介 (URANISHI, Kousuke) : 助教: 教育員: 研究員: 大学院教員 (大学院) : 博士
倉谷麻衣 (KURATANI, Mai) : 助教: 教育員: 研究員: 大学院教員 (大学院) : 博士
上田奈緒美 (Ueda, Naomi) : 助手
大久保美里 (OKUBO, Misato) : 特任技術員
関根典子 (SEKINE, Noriko) : 特任技術員
岩長ゆずる (IWANAGA, Yuzuru) : 特任技術員
押田京子 (OSHIDA, Kyoko) : 研究補助員
西本正純 (NISHIMOTO, Masazumi) : 准教授: 兼担 (本務: 中央研究施設) : 博士
平崎正孝 (HIRASAKI, Masataka) : 講師: 兼担 (本務: 国際医療センター・ゲノム医療学科) : 博士
松下明生 (MATSUSHITA, Akio) : 客員講師: 分子生物学、内科学: 博士
水村賢司 (MIZUMURA, Kenji) : 非常勤講師 : 博士
友保昌拓 (TOMOYASU, Akihiro) : 非常勤講師: 博士
仲地ゆたか (NAKACHI, Yutaka) : 非常勤講師: 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

医学部の学部生、大学院、保健医療学部学生への教育は、それぞれ十分に目標を達成したと考えている。次年度も、今まで以上に、基礎医学及び臨床医学について、わかりやすく、かつ好奇心を掻き立てる教育の実践を目指す。なお、次年度以降も、コロナウイルス感染の影響を完全には払拭できない状況を想定して、オンライン教育についての更なる充実と改善にも心掛ける。

2-2. 教育実績 (奥田・黒川・片桐・鈴木・米田・塚本・浦西・倉谷・上田)

黒川は教育主任として本基本学科内における医学部 1 年生対象の臨床推論ほか多くの授業の割り振り等を担当した。加えて、選択必修「医学研究・一生の研究テーマを如何に決めるか-医学史・伝記からたどる研究テーマ選択の真実」を本年度も担当した。内容は、山中伸弥先生のノーベル賞獲得への物語である。また、保健医療学部・臨床検査学科の卒業研究生を受け入れ、神経変性疾患である筋萎縮性側索硬化症関連変異を有する RNA 結合タンパク質 TLS の性状について解析した。また、課外プロでは、本学医学部生ほか、女子栄養大学と埼玉大学の学生の指導も実施した。奥田は、大学院博士課程の最新医学特別講義における「iPS 細胞が持つ無限の可能性と克服すべき問題点」を担当した (黒川、米田、上田)。片桐は、本年度も、細胞生物学 3 の「特別講義」を担当し、我々が研究を進めている難病・進行性骨化性線維異形成症 (FOP) を例に、遺伝子変異による疾患の発症機序の解明から診断法、治療法開発への応用について講義し、学生評価によるベストティーチャー賞に選ばれた。また、課外学習プログラムに参加した医学部 1 年生の学生に対して、骨系統疾患の原因遺伝子を例に、遺伝子変異と遺伝子発現の関係性について実験的に検討し、遺伝子変異と疾患の表現型について一緒に考察した (片桐、塚本、倉谷)。また、課外学習プログラム「プレゼンテーションを考える」では、女子栄養大学からの参加者にオンライン講義を行った (片桐)。保健医療学部・臨床検査学科の卒業研究生 3 名を受け入れ、進行性骨化性線維異形成症 (FOP) の原因分子や骨格筋量を制御する成長因子の分子生物学的及び、組織学的解析を行い、3 名とも第 16 回日本臨床検査学教育学会で口演発表した (片桐、塚本、倉谷)。大学院博士課程の最新医学特別講義で「埼玉医科大学における難病 FOP 研究」を担当するとともに、研究成果発表会に参加し、質問や建設的な意見を述べた。また、鈴木、米田、塚本、浦西、倉谷は、「医科学の探求」や「人体の基礎科学」などの実習や OSCE に参加し、貢献した。

2-3. 達成度評価

本基本学科が誕生した令和 2 年度においては、特に助教や講師の若手の教員がどのように貢献したらよいかかわからず戸惑う部分も多々あったが、発足から 3 年目に当たる令和 4 年度においては、黒川教授を教育主任に据えたゲノム基礎医学として体制が確立されたものになりつつあることにより、若手教員も、もはや戸惑うこともなく、積極的かつ効率的に実習等の教育に取り組むことができたと考えている。その他、本基本学科の 3 名の教授が担当している医学部の系統講義や、修士課程・博士課程の大学院生の講義についても、学生の医学研究に対する意欲を向上させる教育ができたと考えている。中でも、片桐が担当した難病の FOP 研究に関する講義は、医学生からの評価が極めて高く、当該年度においても、医学部 1 年生の部 ベストティーチャー賞を受賞している。学生の医学研究に対する意欲を向上させることができたと考えている。以上より、当該年度は、本基本学科全体として、前年度にも増して、質の高い教育を実施することができたと考えている。

2-4. 次年度改善計画

次年度においては、研究マインドを持った医師や臨床検査技師を育てるということに重きをおいて、今まで以上に、わかりやすく、学生の好奇心を掻き立てる教育を実践したいと考えている。また、過去 3 年間においては、コロナの

こともあり、課外学習プログラムや保健医療学部の卒業研究に対しては十分に貢献したとは考えていないので、次年度及びそれ以降においては、これらの点についてもより積極的に貢献しようと考えている。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

黒川研究グループは、今までに、Nature 誌に発表した研究の発展の基礎を構築した。この研究は、非コード RNA および相分離による転写制御という新たな研究分野開拓を導く斬新なものである。次は、この研究成果を発展させるとともに、臨床応用を念頭においたトランスレーショナル研究へ展開したいと考えている。注目は、TLS の相分離と遺伝子制御である。これからも共同研究による大型予算の獲得にも挑戦するとともに、この挑戦の過程で構築された、京都大学、静岡大学、東京大学、理化学研究所、基礎生物学研究所など国内の主要な研究施設との有機的な共同研究体制を土台としてさらに研究を進めていきたいと考えている。なお、2015 年 4 月に創刊した open-access 学術誌 Biomedical Sciences を引き続き Editor-in-Chief として運営し、同雑誌の質・評価を高めていくことによっても、国内外での学術活動を積極的に推進していきたいと考えている。奥田研究グループとしては、現在、研究遂行中の Max コンディショナルノックアウトマウスの解析を完了させ、論文化することが最大の目標である。私たち及び他の研究グループの研究により、PRC1.6 の不活化が生殖細胞における減数分裂の開始に重要であることが示唆されているが、どのデータもそれを完全に証明するものではなく、本研究の完成により確定的な証拠が得られると考えている。なお、継続的に研究を発展するために今まで以上に競争的資金の獲得に努力したいと考えている。片桐研究グループとしては、研究計画に沿って、着実に FOP 研究を中心に TGF- β ファミリーに関する解析を進めることができたと考えている。次年度も、疾患研究を中心とした運動器の制御機構の解析を進め、臨床応用を見据えた研究に推進する。また、研究を発展させるため、継続して外部資金を獲得し、研究成果を社会へ還元することを目指す。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- 1) cyclin D1 プロモーター非コード RNA の構造と機能の解析(米田)
- 2) 長鎖非コード RNA のエピトランスクリプトーム解析(米田、上田)
- 3) TLS メチル化による機能制御(上田・黒川)
- 4) 筋萎縮性側索硬化症変異 TLS の解析と発症機構の解明(上田、米田)
- 5) TLS 結合性非コード RNA のゲノムレベルでの解析(米田)
- 6) 相分離と RNA 結合タンパク質の機能と関連する疾患の解析(黒川、上田)
- 7) 生体内での TLS の糖化と糖尿病性神経障害の関連性の探索(上田、米田、黒川)
- 8) TLS 相分離の阻害剤の作用機構の解析(上田、黒川)
- 9) 生理的および異所的減数分裂の抑制とその抑制解除の仕組みの解明(鈴木、浦西、北村、奥田)
- 10) ES 細胞の無限の増殖性と分化多能性を規定している分子機構の解明(平崎、鈴木、浦西、奥田)
- 11) 初期胚特異的転写補助因子 UTF1 の生理的役割の解明(西本、奥田)
- 12) 吸入麻酔薬の種類と全身麻酔による肝臓でのダメージのレベルとの関連についての研究(鈴木、浦西、奥田)
- 13) FOP の発症機序の解明と治療法の確立(片桐、塚本、倉谷、大久保、関根、岩長、押田、友保)
- 14) 運動器の制御機構の解明(片桐、塚本、倉谷)
- 15) TGF- β ファミリーの生理的役割の解明と分子メカニズムの解析(片桐、塚本、倉谷、仲地)

3-3. 達成度評価

本基本学科は、研究については、黒川、奥田、片桐のそれぞれが率いる 3 つの研究グループによって構成されている。黒川研究グループでは、国内外から大きな注目を集めた 2008 年の Nature 論文の発表を契機に、多方面へと研究を展開している。同グループは、2021 年度には International Journal of Molecular Sciences(IF6.2)に論文を発表したが、メチル化 RNA が RNA 結合タンパク質に結合増強する現象の細胞増殖への効果を検討している。最近、注目の相分離研究の中心課題である天然変性タンパク質が新規の長鎖非コード RNA で抑制される現象の解明にも取り組み、着実な進歩を遂げている。奥田研究グループは、現状では、ほとんどのマンパワーを、減数分裂開始機構の解明に注いでいる。当該年度における明確な研究成果は、生殖細胞特異的なオールタナティブスプライシングを介して産生される Mga タンパク質に対するドミナントネガティブ体の生理的作用を明らかにすべく、遺伝子改変によりそのタンパク質が産生できないマウスを作製し、そのマウスの変化についてまとめた研究結果を論文として発表できたことのみである。Max 遺伝子コンディショナルノックアウトを用いた解析については、当初予定していたよりかなり完成までの期間が長くなっているが、着実に Big Science として研究の完成へと近づけることができおり、次年度中には、権威ある英文雑誌への報告を達成したいと考えている。また、今年度の途中から、大学病院麻酔科との共同研究を始めており、興味深いデータを得つつあり、本研究を成功裡に完成させることで、私たちが有する最新の遺伝子発現解析技術を加味すれば、従来からの解析では知り得なかった様々な新知見が得られるということを証明したいと考えている。片桐研究グループでは、これまで一貫して、FOP の発症メカニズムの解明と治療法の確立を目指して研究に取り組んでいる。本年度は、医療研究開発機構(AMED)の医療研究開発革新基盤創成事業(CiCLE)支援のもと進めてきた FOP の原因分子に対する抗体の解析から明らかとなった FOP の発症機序とヒト FOP を反映したモデルマウスの樹立について、国際学会で発表し、現在、学術雑誌に投稿中である。また、これまでの産学官連携での共同研究の経験を活かし、九州大学、北里大学、千葉大学等と共に骨形成を促進物質の探索や分子の構造解析を進めており、着実に成果が得られている。

3-4. 次年度改善計画

黒川研究グループは、今までに、Nature 誌に発表した研究の発展の基礎を構築した。この研究は、非コード RNA および相分離による転写制御という新たな研究分野開拓を導く斬新なものである。次は、この研究成果を発展させるとともに、臨床応用を念頭においたトランスレーショナル研究へ展開したいと考えている。疾患としては、ALS などの神

経変性疾患と2型糖尿病を標的としている。注目は、TLSの相分離と遺伝子制御である。これからも共同研究による大型予算の獲得にも挑戦するとともに、この挑戦の過程で構築された、京都大学、静岡大学、東京大学、理化学研究所、基礎生物学研究所など国内の主要な研究施設との有機的な共同研究体制を土台としてさらに研究を進めていきたいと考えている。なお、2015年4月に創刊したopen-access学術誌Biomedical Sciencesを引き続きEditor-in-Chiefとして運営し、最近では投稿論文数を順調に伸ばし同雑誌の質・評価を高めるよう試みている。以上から、国内外での学術活動を積極的に活性化・推進していきたいと考えている。奥田研究グループとしては、現在、研究遂行中のMaxコンディショナルノックアウトマウスの解析を完了させ、論文化することが最大の目標である。私たち及び他の研究グループの研究により、PRC1.6の不活化が生殖細胞における減数分裂の開始に重要であることが示唆されているが、どのデータもそれを完全に証明するものではなく、本研究の完成により確定的な証拠が得られると考えている。なお、継続的に研究を発展するために今まで以上に競争的資金の獲得に努力したいと考えている。片桐研究グループは、これまで、一貫して進めてきたTGF- β ファミリーに関する解析とFOP研究をさらに発展させたいと考えている。次年度は、研究成果を学術論文として発表し、新たな研究計画によって、外部資金を獲得し、一般社会へ貢献することのできる研究成果を得ることを目指す。また、本年度に埼玉医科大学創立50周年記念特別研究費に採択され、これまで以上に、臨床医を含めた学内の研究者と連携できる環境となった。現在、本学の研究に貢献することのできる基盤技術の確立を目指し、共同研究者と密にコミュニケーションを取りプロジェクトを進めており、今後もこの体制は堅持していきたいと考えている。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Biomedical Sciences 編集委員長 (Editor-in-Chief) (黒川)

Scientific Reports (Editorial Board Member) (片桐)

Journal of Bone and Mineral Metabolism (Editorial Board Member) (片桐)

BioMed Research International (Editorial Board Member) (片桐)

その他査読委員多数 (奥田、黒川、片桐、鈴木、米田、塚本)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本内分泌学会 評議員 (黒川)

日本内分泌学会関東甲信越支部 幹事 (黒川)

日本ホルモンステーション 評議員 (黒川)

中富健康科学振興財団 評議員 (奥田)

東京都健康長寿医療センター研究倫理審査委員会 委員 (奥田)

歯科基礎医学会 代議員 (片桐)

日本骨代謝学会 評議員 (片桐)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Kitamura, Y., Suzuki, A., Uranishi, K., Nishimoto, M., Mizuno, S., Takahashi, S., and Okuda, A. (2022). Alternative splicing for germ cell-specific Mga transcript can be eliminated without compromising mouse viability or fertility. *Dev Growth Differ* 64, 409-416.
- ② Jimi, E., and Katagiri, T. (2022). Critical Roles of NF-kappaB Signaling Molecules in Bone Metabolism Revealed by Genetic Mutations in Osteopetrosis. *Int J Mol Sci* 23, 7995.
- ③ Ueda, N., Yoneda, R., Kurokawa, R. (2022). Identification of Long Noncoding RNA Recognized by RNA-Binding Protein TLS/FUS: Purification of RNAs by Affinity Chromatography of GST-TLS. *Biomedical Sciences* 8:144-156.
- ④ Katagiri, T., Tsukamoto, S., Kuratani, M., Tsuji, S., Nakamura, K., Ohte, S., Kawaguchi, Y., Takaishi, K. Mutated ALK2 associated with genetic skeletal disorders facilitate hyper-assembly of ALK2 dimers and induce pathological signaling. ASBMR 2022 Annual meeting (2022年9月、オースティン、テキサス州、アメリカ合衆国、web参加)
- ⑤ Tsukamoto, S., Kuratani, M., Ohte, S., Tsuji, S., Nakamura, K., Kawaguchi, Y., Takaishi, K. Katagiri, T. Establishment of a mouse model of human fibrodysplasia ossificans progressiva. ASBMR 2022 Annual meeting (2022年9月、オースティン、テキサス州、アメリカ合衆国、web参加)
- ⑥ Katagiri, T. ALK2 in fibrodysplasia ossificans progressiva. 13th International BMP Conference (2022年10月、ドゥブロヴニク、クロアチア、web参加)
- ⑦ Tsukamoto, S., Kuratani, M., Ohte, S., Tsuji, S., Nakamura, K., Kawaguchi, Y., Takaishi, K. Katagiri, T. Establishment of a novel mouse model of human fibrodysplasia ossificans progressiva. 13th International BMP Conference (2022年10月、ドゥブロヴニク、クロアチア、web参加)
- ⑧ Kurokawa R. Quest for novel long non-coding RNAs with inhibitory activity against phase separation. 第45回日本分子生物学会年会(2022.12)

- ⑨ 片桐岳信. 進行性骨化性線維異形成症 (FOP) 研究の最前線. 第 40 回 日本骨代謝学会学術集会 (2022 年 7 月、岐阜県岐阜市)
- ⑩ 塚本翔、倉谷麻衣、片桐岳信. 抗 ALK2 阻害抗体は進行性骨化性線維異形成症モデルマウスにおける異所性骨化を抑制する. 第 40 回 日本骨代謝学会学術集会 (2022 年 7 月、岐阜県岐阜市)

【総数：論文 3 件、学会発表 15 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

- ① 片桐岳信 (代表) 文部科学省科学研究費 基盤研究 B
課題名：骨形成および異所性石灰化の分子基盤の解明と骨形成促進物質の開発
配分額：4,200 千円
- ② 片桐岳信 (代表) 文部科学省科学研究費 挑戦的研究 (萌芽)
課題名：上皮細胞の分化制御と発毛制御に共通する新しい分子機構の解明
配分額：2,700 千円
- ③ 黒川理樹 (代表) 文部科学省科学研究費 基盤研究 C
課題名：長鎖非コード RNA による TLS 相分離を介した新規の転写制御機構の解明
配分額：1,100 千円
- ④ 塚本 翔 (代表) 文部科学省科学研究費 基盤研究 C
課題名：Myostatin による新たな骨格筋量制御機構の解明と治療薬への応用
配分額：1,200 千円
- ⑤ 倉谷麻衣 (代表) 文部科学省科学研究費 基盤研究 C
課題名：骨格筋の外傷で誘発される石灰化筋壊死の病態解明
配分額：800 千円
- ⑥ 鈴木 歩 (代表) 文部科学省科学研究費 基盤研究 C
課題名：哺乳類生殖細胞の減数分裂開始機構の解明
配分額：800 千円
- ⑦ 米田竜馬 (代表) 文部科学省科学研究費 若手研究
課題名：lncRNA を基盤とした神経変性疾患に対する核酸医薬シードの開発
配分額：900 千円
- ⑧ 浦西洗介 (代表) 武田科学振興財団
課題名：非生殖細胞における減数分裂関連遺伝子の安定的な発現抑制のための分子基盤の解明
配分額：2,000 千円
- ⑨ 黒川理樹 (代表) 第一三共奨学寄付プログラム
課題名：糖化が誘導する RNA 結合タンパク質 TLS/FUS の沈殿形成が糖尿病性の神経障害を発症させる分子機構の解明と治療法の開発に資する研究
配分額：500 千円
- ⑩ 黒川理樹 (代表) ゼロミッションエネルギー研究拠点 (京都大学エネルギー理工学研究所)
課題名核磁気共鳴分光法を用いたメチル化 RNA による RNA 結合タンパク質 TLS の相分離の制御 機構の解析：
配分額：600 千円
- ⑪ 片桐岳信 (代表) 第一三共株式会社 受託研究 (プロジェクト 1)
配分額：21,473 千円
- ⑫ 片桐岳信 (代表) 第一三共株式会社 受託研究 (プロジェクト 2)
配分額：20,295 千円
- ⑬ 片桐岳信 (分担) (代表：高崎渉) 医療研究開発革新基盤創成事業 (CiCLE)
課題名：進行性骨化性線維異形成症 (FOP) に対する革新的治療薬の創出
配分額：15,960 千円
- ⑭ 片桐岳信 (分担) (代表：自見英治郎) 文科省科学研究費 基盤研究 (B)
課題名：閉経後の骨粗鬆症と体重増加を制御する本質的共通分子機構の解明と治療戦略への展開
配分額：500 千円
- ⑮ 片桐岳信 (分担) (代表：上條竜太郎) 文科省科学研究費 基盤研究 (B)
課題名：新規シグナル伝達物質・活性イオン種による骨リモデリング制御機構の解明
配分額：50 千円
- ⑯ 片桐岳信 (分担) (代表：自見英治郎) 文科省科学研究費 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B))
課題名：感情と免疫学的健康の新しいセンサーとしての骨の働き
配分額：300 千円
- ⑰ 塚本 翔 (分担) (代表：自見英治郎) 文科省科学研究費 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化 (B))
課題名：感情と免疫学的健康の新しいセンサーとしての骨の働き
配分額：300 千円
- ⑱ 片桐岳信 (分担) (代表：自見英治郎) 文科省科学研究費 挑戦的研究 (萌芽)
課題名：タンパク質脱アミド化の新たな制御機構の解明と口腔がん細胞を用いた機能解析

6-3. 受賞

令和 4 年度 埼玉医科大学医学部 1 年生の部 ベストティーチャー賞 (片桐)

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育については、医学部学生に対しては講義や実習を通して、また、保健医療学部学生に対しては卒業研究を通じて、今まで以上に「研究マインドの育成」に貢献することができたと考えている。特に保健医療学部の学生への教育においては、その他の教育と比べて担当する期間が長いということもあって、彼ら・彼女らに、研究の醍醐味・面白さを十分に伝えることができたと考えている。研究については、当該年度は、令和3年度ほど、目に見える形での成果を輩出することはできなかったが、実際の研究の進捗については、3つの研究グループのいずれもが確実に研究を前に進めていくことができしており、令和5年度以降での大きな成果が期待できるような状況になっている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育については、3つのグループのそれぞれが日夜取り組んでいる研究と関連付けて講義等をおこなうことにより、医学部・保健医療学部の学部学生や修士・博士の大学院生の研究マインドの育成に努めてきており、この方針は今後も続けていくつもりである。研究についても、今後も、黒川・奥田・片桐のそれぞれが率いる3つの研究グループが明確な独立性を保ちつつ、協力できる部分においては互いに協力し、研究者のコミュニティーの中だけに留まることなく、一般社会にも大きなインパクト・恩恵を与えることができる研究成果を生み出したいと考えている。

16. ゲノム応用医学

1. 構成員

堀江 公仁子 (HORIE, Kuniko) : 教授 : 運営責任者 : 研究副主任 : 教育員 : 代表指導教員 (大学院) : ゲノム医学・腫瘍学・内分泌学・眼科学 : 博士
三谷 幸之介 (MITANI, Kohnosuke) : 教授 : 研究主任、教育副主任 : 指導教員 (大学院) : 遺伝子治療学・ウイルス学 : 博士
池田 和博 (IKEDA, Kazuhiro) : 准教授 : 研究員 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 分子生物学・代謝学・腫瘍学 : 博士
井上 聡 (INOUE, Satoshi) : 客員教授 : 指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学・老年病学・ゲノム医学 : 博士
佐藤 航 (SATO, Wataru) : 助教 : 博士
奥島 菜々子 (OKUSHIMA, Nanako) : 助手 : 修士
北山 沙知 (KITAYAMA, Sachi) : 大学院生 (博士課程) : 外科学 (がんプロ)
藤本 章博 (FUJIMOTO, Akihiro) : 大学院生 (博士課程) : 外科学 (がんプロ)
鎌田 修平 (KAMADA, Shuhei) : 特別協力研究員
岩渕 英里奈 (IWABUCHI, Erina) : 特別協力研究員
北村 香織 (KITAMURA, Kaori) : 特任技術員
鈴木 友子 (SUZUKI, Tomoko) : 研究補助員
寺本 亜矢子 (TERAMOTO, Ayako) : 研究補助員

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

「卒前教育」: 医学部学生に、「細胞生物学」と「行動科学と医療倫理」とを通して、基礎医学の面白さと研究倫理の重要性を伝える。保健医療学部学生に、卒業研究の指導をする。がん等の疾患および老化におけるホルモン受容体シグナルや転写制御機構の基礎的知識を取得することにより、生体のしくみを理解し、基礎医学研究の面白さを体感する機会を提供する。

「卒後教育」: 疾患・病態に対する分子レベルでの理解を深め、臨床病態と分子標的に基づく個別化医療への臨床応用を可能にする研究者・医療人を育成する。卒後教育委員会後援学術集会の企画などを通して、本学の教職員に世界のトップレベルの基礎医学研究を紹介する。

「大学院教育」: 大学院学生に、組換え DNA 実験や細胞への遺伝子導入法等の基礎医学研究手法や、がん病態関連標的遺伝子探索についての最先端の知識と技術とを提供する。ホルモン受容体シグナルや転写制御機構、がん診断・治療標的の機能解析に関する国際レベルの研究発表を行える、次世代の医学・科学の発展に貢献できる人材を育成する。

2-2. 教育実績 (担当者)

「卒前教育」: 医学部学生に対して、1年生の細胞生物学講義 (三谷)、医科学の探索 (池田)、医科学入門 (池田)、臨床推論 (池田)、アドバイザー (池田)、2年生の機能系実習1 (池田、佐藤)、アドバイザー (堀江)、4年生の「行動科学と医療倫理」講義 (三谷)、ならびに OSCE 補助員 (奥島) を担当した。入試委員会委員、国際交流センター委員会委員として活動した (堀江)。保健医療学部の3年生1名に、卒業研究の指導を行った (奥島、三谷)。

「卒後教育」: 組換え DNA 実験安全委員会委員長 (三谷)、大学倫理審査委員会副委員長 (三谷)、ヒト幹細胞研究倫理審査専門部会会長 (三谷)、医学研究センター安全管理部門部長 (三谷)、動物実験委員会委員 (三谷)、中央研究施設運営委員会委員 (三谷)、卒後教育委員会委員 (堀江)、医療人育成支援センター会議メンバー (堀江)、病原微生物等管理委員 (池田)、中央研究施設日高ブランチ動物実験委員会小委員会 (池田) として活動した。「彩の国女性研究者ネットワーク」の本学担当者として、ネットワーク連絡会議等に参加した (堀江)。週1回研究室主催の若手研究者向け論文抄読会を行い、研究専門領域の知識習得と理解を深めた (池田・堀江・井上)。助教、特別協力研究員に対して、研究技術指導 (池田・堀江)、論文・研究費申請書作成指導を行った (池田・堀江・井上)。科学研究費アドバイザーを務めた (池田・堀江・三谷)。

「大学院教育」: 最新医学特別講義 (堀江) を担当した。本学大学院生2名に研究指導を行った (池田・堀江・井上)。博士課程運営委員会委員 (堀江)、医学研究科委員会委員 (堀江)、研究医養成プログラム委員会委員 (堀江) として活動し、博士課程学位審査主査2件 (堀江)、副査3件 (三谷・池田) を担当した。令和3年度までの「がん専門医療人材 (がんプロ フェッショナル) 養成プラン関東がん専門医療人養成拠点事業」に引き続き、埼玉医科大学における「がんゲノム」領域の教育を担当した (堀江)。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」: 医学部学生の医科学入門、医科学の探索、臨床推論、機能系実習1を通して、臨床医学における基礎的知識の必要性を認識してもらい、医学への興味を深めることができた。細胞生物学などで指導した学生達の理解レベルは、合格レベルに達していたと考える。アドバイザーとして、オンラインを通じて医学部学生との交流を図り、学習等の相談に乗ることができた。卒業研究の学生も順調に結果を出した。国際交流センター委員会では、交換留学生の面接試験等を担当し、国際交流の再開に向けての準備に参画できた。

「卒後教育」: 各担当委員会においては求められる責務を果たすことができた。科学研究費アドバイザーとして、依頼者の研究費申請書に対して建設的なコメントをすることができた。助教 (佐藤) はシニア教員からの学会発表・論文指導を受け、第81回日本癌学会学術総会にて口演発表に採択され、英文原著発表に至った。特別協力研究員 (鎌田) は当学科での研究成果による英文原著等の業績が評価され、米国テキサス大学 (がん生物学) のポスドク採用に至っ

た。東北大学医学系研究科病理診断学・助教の特別協力研究員(岩渕)は、国内留学として、本学科にてがん分子生物学研究を開始し、順調にデータ収集することができた。「彩の国女性研究者ネットワーク」では、本学担当者として、ネットワーク登録機関・企業とのオンライン意見交換を図ることができた。

「大学院教育」：本学大学院生に対して、懇切に研究技術・解析指導や学会発表・論文作成指導等を行った(池田・堀江・井上)。大学院生(北山)は、当学科での研究成果に基づき出版した英文原著にて学位審査に臨み、医学研究科委員会にて博士適格の判定を得た。学位審査にあたっては、申請者の基礎的知識・研究手技を確認する質問の他、今後の研究活動にプラスする前向きな質問を行い、公正な審査を心がけた(堀江・三谷・池田)。

2-4. 次年度改善計画

「卒前教育」：令和5年度も引き続き、学部生に対する講義、実習等の機会には積極的に関わっていききたい。令和5年度は本邦におけるCOVID-19の位置付けが5類感染症へ移行した後は、対面型指導が基本となるため、学生へ直接基礎医学研究の面白さを伝えていく取り組みを行っていききたい。

「卒後教育」：令和5年度は開催してリサーチマインドの涵養に貢献したい。委員会や科研費アドバイザーを通じて、基礎研究・ゲノム医学に関連する卒後教育に貢献していききたい。「彩の国女性研究者ネットワーク」の枠組みを活用して、本学教育・研究活動の取り組みを積極的に発信していききたい。

「大学院教育」：令和5年度も研究倫理を十分に配慮しながら大学院生の研究指導を進め、専門領域での高い評価が得られる研究成果を発表し、国際レベルの見識を有し高い倫理感を持った、将来医学・医療分野でリーダーとなるべき資質を有する医療人・研究者の育成に努めていききたい。最先端の研究技術などを大学院生に紹介することにより、リサーチマインドの涵養に貢献したい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

「遺伝子治療・ゲノム編集プロジェクト」：遺伝子治療は難病治療の新しい概念として注目を浴びている。この概念をより広範な疾患へ適用可能にするためには、遺伝子導入・遺伝子発現技術のさらなる改良が必須である。また、遺伝病の遺伝子治療において、治療遺伝子のランダムな染色体部位への挿入は、がん原遺伝子の活性化をはじめとする挿入変異の原因となるばかりでなく、サイレンシングによる遺伝子発現の不安定化などの原因となる。この問題を克服するために、染色体上の標的DNA配列特異的に安全に遺伝子を挿入する技術の開発が必要である。私たちは、これらの問題を解決し、幹細胞を含むより多様な細胞への応用が可能な方法として、ウイルスベクターを利用した高効率なゲノム編集による染色体操作法の確立と応用を目指している。特に、血液系遺伝病の治療への応用に向けて、造血幹細胞を標的としたゲノム編集法の高率化と安全性の検証に力を入れている。

「がん研究プロジェクト」および「筋骨格・代謝研究プロジェクト」：性ホルモン作用と関連する転写制御および代謝経路の解明を目指し、基礎・トランスレーショナル研究を進める。特に性ホルモンに関わりが深い乳がん・子宮がん・卵巣がん等の女性のがん、前立腺がんや精巣がん等の泌尿器がんにおける性ホルモン受容体標的因子を中心とした新規分子標的の同定と機能解明、加齢疾患や筋骨格系における性ホルモンの作用メカニズムの解明を行っていく。ゲノム医学、分子生物学、生化学、病理組織学等を応用して、令和4年度は特にハイスループットシーケンス解析・マイクロアレイ解析に基づく各種がんにおける統合的な遺伝子制御ネットワークの解析と核酸創薬への応用、遺伝子改変・編集技術を応用した疾患動物モデルと遺伝子治療モデルの開発と応用に力を注ぐ。当学科では、生体におけるがんを再現する実験モデルとして、臨床がん組織から得られるがん細胞を3次元培養条件で増殖させる「患者由来がん細胞」とその「がん異種移植モデル」の確立に成功しており、令和4年度はさらに各種がんの病型を反映するがん細胞の作製とその病態・薬剤応答性解析を進める。大学院生には各種の研究手法を体験してもらい、自ら実験計画・実施、データ解析とプレゼンテーションを行える資質を獲得できるように指導を行う。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

「遺伝子治療・ゲノム編集プロジェクト」：遺伝子治療ならびにゲノム編集に適した新規ウイルスベクターの開発(奥島、三谷)

「がん研究プロジェクト」：性ホルモン依存性がん・泌尿器がんの新しい予防・診断・治療法の開発(池田、佐藤、藤本(院)、北山(院)、鎌田、岩渕、鈴木、北村、堀江、井上)：がん特異的非コードRNAとRNA結合蛋白質によるがん進展メカニズムの解明(池田、佐藤、藤本(院)、堀江、井上)

「筋骨格・代謝研究プロジェクト」：がんと筋骨格系における転写制御機構、代謝経路の解析(池田、北村、寺本、堀江、井上)、遺伝子改変動物を用いた性ホルモン・ビタミンシグナルの*in vivo*解析(池田、佐藤、鈴木、堀江、井上)

令和4年度は性ホルモンの生理的作用ならびに疾患・がんにおける作用機序の解明と臨床応用可能な分子標的の開発をめざし、エストロゲン受容体等の性ホルモン受容体とその標的因子と関連転写因子の作用および代謝経路における役割を中心に研究を遂行した。女性がん病態に関連する長鎖非コードRNAとRNA結合蛋白質の機能解析を精力的に進め、乳がんにおけるホルモン受容体シグナルを制御する新規長鎖非コードRNAを介するエピゲノム制御について論文発表を行った。乳腺外科・婦人科腫瘍科・泌尿器科をはじめとする学内外の臨床部門との共同研究により、独自に樹立した各種がん病型の患者由来がんモデルに基づいて、難治性がん病態メカニズムの解明、新規予防・診断・治療法の開発に取り組むことができた。腎がんにおけるチロシンキナーゼ阻害薬耐性の軽減に寄与する既存薬リポジショニングの臨床的意義について、後ろ向き臨床研究を総合医療センター泌尿器科および千葉大学との共同研究にて進めた。遺伝子改変マウスを用いてエストロゲン受容体およびその標的因子等の機能解析を筋骨格系や生殖器系において進めた。がん細胞および筋骨格系におけるエネルギー代謝経路に注目し、ミトコンドリアにおけるエネルギー産生と疾患・病態との関係について解析を進めることができた。

3-3. 達成度評価

「遺伝子治療・ゲノム編集プロジェクト」：ゲノム編集を利用した遺伝病の遺伝子修復治療の臨床応用を目指し、霊長類モデルである遺伝子ノックアウトマーマーモセットでの検証を目指して、遺伝子修復治療の効率化と安全性の改善およびそれを用いた実用性の評価を行った。まず、人工ヌクレアーゼ CRISPR による標的配列の切断と、アデノ随伴ウイルスベクター (AAV) や新型アデノウイルスベクターを利用した修復用鋳型 DNA の導入によって、ヒト血液細胞株の *IL2RG* 遺伝子座で約 80% の高頻度で遺伝子修復に成功した。さらに、ヒト CD34 陽性造血幹前駆細胞に対して同様の実験を行い、薬剤選択なしでも約 20% の細胞で遺伝子修復に成功した。一方、不正確に染色体に組み込まれた修復用鋳型 DNA を除去するため、誘導性の自殺遺伝子 (iCaspase 9) を利用したストラテジーの開発に取り組んでいる。

また、より安全なゲノム編集技術である prime editing に最新型アデノウイルスベクターが有効であることを示した。「がん研究プロジェクト」および「筋骨格・代謝研究プロジェクト」：令和 4 年度は、独自の手法により樹立した各種患者由来がんモデルに基づき、ハイスループットトランスクリプトーム・エピゲノム解析を遂行し、各種女性がん・泌尿器がんの病態解明に向けてのがん治療標的因子の同定とそれらの機能解析を進め、その研究成果を国内外での学会および英文原著にて発表を行った。既存薬リポジショニングに結びつく腎がんでの薬剤感受性検討は、共同研究として症例数を増やして進めることができ、知財各国移行に向けての基礎データ収集を行うことができた。乳がんの治療抵抗性にかかわるホルモン受容体シグナルを制御する新規長鎖非コード RNA と RNA 結合蛋白質の機能解析を進め、いずれも論文発表を行った。それらの知見を元に、第 30 回日本ステロイドホルモン学会にて招待講演を行い (堀江)、本学科にてポストドクを修了後、都研究所研究員の共同研究者が優秀演題賞を受賞した。各種のがん治療に有効な核酸創薬の開発と薬剤リポジショニング検討を進めた。婦人科腫瘍のがん治療標的因子候補を複数同定しており、機能解析を進めた。独自に機能を明らかにしてきた COX7RP を中心に、ミトコンドリア呼吸鎖超複合体によるマウス個体レベルでの代謝調節について第 95 回日本生化学会大会にて招待講演を行った (池田)。遺伝子改変マウスを用いて性ホルモンの筋骨格系・代謝経路・寿命における機能解析を進めており、論文発表に向け、データ蓄積を図ることができた。

3-4. 次年度改善計画

「遺伝子治療・ゲノム編集プロジェクト」：積極的な共同研究を介して、ウイルスベクターを用いる相同組換え法および人工ヌクレアーゼを用いる方法を用いて、マーモセット造血前駆細胞におけるゲノム編集技術の開発を進める。ヒト細胞株での実験を終え、CD34 陽性細胞での実験も順調に進んでいる。AMED「先端的バイオ創薬等基盤技術開発事業」で開発した最新型アデノウイルスベクターの更なる応用拡大に向けて、ベクター産生系の効率化と知的財産の確保を目指し、産業化への展開を目指す。また、他の研究グループとの積極的な共同研究を推進する。

「がん研究プロジェクト」および「筋骨格・代謝研究プロジェクト」：令和 5 年度は、RNA 結合蛋白質とその標的因子を中心に、ホルモン依存性がんおよび希少がんの新規診断・治療標的の同定と核酸創薬の開発を推進し、臨床応用への展開を目指していく。独自に構築した患者由来がんモデルに基づき、転写・代謝制御機構の解明のために、次世代シーケンサーを用いた各種オミックス解析を推進し、がん病型特異的な病態解明を進めていく。がんおよび筋骨格系を中心に、生理学的・病態生理学的に代謝機構の解析を進め、食生活等の生活習慣を含めたトータルな疾患予防、健康寿命の延伸への応用を目指していく。各プロジェクトにおいて、積極的に知的財産の確保を目指し、産業化への展開、社会実装を目指す。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

三谷 幸之介：厚生科学審議会再生医療等評価部会「遺伝子治療臨床研究に関する審査委員会」委員、

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

井上 聡：Cancer Science (Associate Editor), Endocrinology (Editorial Board), Cancers (Editorial Board), International Journal of Molecular Sciences (Editorial Board)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

三谷 幸之介：国立大学法人広島大学大学院統合生命科学研究科客員教授、日本遺伝子細胞治療学会理事・国際交流委員、日本ゲノム編集学会国際委員、国際協力遺伝病遺伝子治療フォーラム評議員、日本母乳バンク協会理事

堀江 公仁子：日本癌学会評議員、日本内分泌学会評議員、日本抗加齢医学会評議員、山口内分泌疾患研究振興財団審査委員、がん三次元培養研究会幹事、米国内分泌学会年会査読委員

池田 和博：日本ステロイドホルモン学会評議員、日本アンドロロジー学会評議員、がん三次元培養研究会監事

井上 聡：日本老年医学会評議員、日本癌学会評議員、日本内分泌学会代議員、日本骨代謝学会評議員、日本抗加齢医学会評議員、日本骨粗鬆症学会評議員、日本ステロイドホルモン学会評議員、日本末病システム学会評議員、日本性差医学・医療学会評議員、日本生殖内分泌学会評議員、脳心血管抗加齢研究会評議員、オミックス医学会理事、日本アンドロロジー学会理事、ホルモンと癌研究会理事、金原一郎記念医学医療振興財団選考委員、がん三次元培養研究会常任幹事

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 【セミナー】堀江 公仁子、池田 和博、井上 聡 エストロゲン受容体の新しいエピゲノム制御メカニズム 第 30 回日本ステロイドホルモン学会学術集会 第 30 回日本ステロイドホルモン学会学術集会 2023 年 2 月 25 日

- ② 【シンポジウム】池田 和博、堀江 公仁子、井上 聡 ミトコンドリア呼吸鎖超複合体によるマウス個体レベルでの代謝調節 第95回 日本生化学会大会 2022年11月3日
- ③ 佐藤 航、池田 和博、後藤 典子、堀江 公仁子、井上 聡 Efpはトリプル陰性乳がん細胞の増殖と移動能を促進させる 第81回日本癌学会学術総会 2022年10月2日
- ④ Kobayashi A, Azuma K, Takeiwa T, Kitami T, Horie K, Ikeda K, Inoue S. A FRET-based respirasome assembly screen identifies spleen tyrosine kinase as a target to improve muscle mitochondrial respiration and exercise performance in mice. *Nat Commun* 2023;14(1): 312.
- ⑤ Yoh K, Ikeda K, Horie K, Inoue S. Roles of estrogen, estrogen receptors, and estrogen-related receptors in skeletal muscle: regulation of mitochondrial function. *Int J Mol Sci* 2023;24(3):1853.
- ⑥ Horie K, Takagi K, Takeiwa T, Mitobe Y, Kawabata H, Suzuki T, Ikeda K, Inoue S. Estrogen-inducible lncRNA BNAT1 functions as a modulator for estrogen receptor signaling in endocrine-resistant breast cancer cells. *Cells* 2022;11(22): 3610.
- ⑦ Kitayama S, Ikeda K, Sato W, Takeshita H, Kawakami S, Inoue S, Horie K. Testis-expressed gene 11 inhibits cisplatin-induced DNA damage and contributes to chemoresistance in testicular germ cell tumor. *Sci Rep* 2022;12(1): 18423.
- ⑧ Yoh K, Ikeda K, Nagai S, Horie K, Takeda S, Inoue S. Constitutive activation of estrogen receptor α signaling in muscle prolongs exercise endurance in mice. *Biochem Biophys Res Commun* 2022; 628: 11-17.
- ⑨ Sato W, Ikeda K, Gotoh N, Inoue S, Horie K. Efp promotes growth of triple-negative breast cancer cells. *Biochem Biophys Res Commun* 2022; 624: 81-88.
- ⑩ Takeiwa T, Ikeda K, Suzuki T, Sato W, Iino K, Mitobe Y, Kawabata H, Horie K, Inoue S. PSPC1 is a potential prognostic marker for hormone-dependent breast cancer patients and modulates RNA processing of ESR1 and SCFD2. *Sci Rep* 2022;12(1): 9495.

【総数：論文 18 件、学会発表 48 件、講演 11 件】

6-2. 獲得研究費

- 三谷 幸之介（代表）科学研究費助成事業（日本学術振興会）基盤研究(C)「新規ベクターを用いた血液系遺伝病の安全なゲノム編集治療技術の開発」配分額：130万円（内、間接経費30万円）
- 堀江 公仁子（代表）科学研究費助成事業（日本学術振興会）基盤研究(B)「ホルモン依存性女性がん患者由来培養・移植系における病態特異的代謝機構の解明と応用」配分額：416万円（内、間接経費96万円）
- 堀江 公仁子 公益財団法人 車両競技公益資金記念財団 令和4年度 医療の基礎的、先駆的研究助成事業 「女性がん患者由来モデルに基づく性ホルモン作用の解明と臨床応用」助成額：405万円
- 池田 和博（代表）科学研究費助成事業 挑戦的研究（萌芽）「患者由来がんモデルに基づくミトコンドリア代謝変容による治療抵抗性機構の解明と応用」配分額：210万円（内、間接経費60万円）
- 池田 和博（代表）科学研究費助成事業 基盤研究(B)「呼吸鎖超複合体を標的とする性ホルモンのがん多様性・微小環境における役割の解明」配分額：416万円（内、間接経費96万円）
- 池田 和博（分担）井上 聡（代表）科学研究費助成事業 基盤研究(A)「呼吸鎖超複合体形成因子Cox7rpの作用機構の解明と標的臓器・長寿における役割」配分額：145.6万円（内、間接経費33.6万円）
- 池田 和博（分担）柴 祥子（代表）科学研究費助成事業 基盤研究(C)「ミトコンドリア呼吸鎖超複合体による老化関連分泌因子の制御と病態・寿命における役割」配分額：67.6万円（内、間接経費15.6万円）
- 佐藤 航（代表）科学研究費助成事業 基盤研究(C)「エストロゲン制御機構とその逸脱に関わる標的分子による女性がん増悪機構の解明と応用」配分額：130万円（内、間接経費30万円）
- 奥島 菜々子 2021年度研究マインド支援 Grant（若手限定）「自殺遺伝子を利用したヒト造血幹細胞に対する安全な遺伝子修復技術の開発」配分額：30万円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

発明の名称：「二本鎖核酸分子、DNA、ベクター、がん細胞増殖抑制剤、医薬、及びSPON1-TRIM29融合遺伝子の利用」発明者：井上 聡、池田 和博、堀江 公仁子、長澤 さや、長谷川 幸清 出願人：学校法人埼玉医科大学 出願番号：特願 2018-94774 発行日：令和4年7月8日

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育：ほぼ目標を達成し、卒前教育、卒後教育、大学院教育でそれぞれ成果を上げることが出来た。医学部学生に対して、学習内容の理解とともに、自ら学ぶ姿勢を持って医学学習に取り組んでもらうことができた。大学院生の個別研究指導に力を入れ、専門領域の知識・技術習得とプレゼンテーションスキルの向上を図ることができた。

研究：各研究プロジェクトにおいて、国際水準の研究基盤の構築と研究成果発表、知財獲得を進めることができた。

当学科における遺伝子治療・ゲノム編集の研究分野の取組みにより、国内においても当該分野が少しずつ注目されるようになってきており、疾患モデルマーマセットの研究を引き続き進めることが出来た。がん研究プロジェクトに関しては、倫理基準を満たす患者由来がん由来モデルについてオミックス解析を進め、がん治療標的候補因子の同定と機能解析を進めることができた。国内外の学会・研究会を通じて、関係領域の研究者との交流を積極的に行い、常に新しい知識と技術の吸収に務め、人的ネットワークの開拓を図ることができた。大学院生はがん研究において国際水準の研究成果を上げ、英文原著出版に至った。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育：学部学生ならびに大学院生に対して、自主的学習と研究の場を積極的に提供していきたい。学生に講義内容や研究の面白さを伝えられるように、さらに工夫を加えていきたい。また、研究室に出入りする大学院生（医師）や学生をさらに丁寧に指導して、研究の楽しさをうまく伝えたい。

研究：各プロジェクトの研究成果は学会・論文およびホームページ等を通じて広く社会へ還元し、開発した薬剤や技術は知財確保へ結び付け、産業化と社会実装を図る。未発表の研究データは論文文化を進める。研究室に所属する全ての構成員がコンプライアンス教育を通じて研究倫理・研究費適正使用を遵守し、必要書類の提出を遅滞なく行う体制を構築する。令和5年度は、さらに学術と産学連携の両面から、国内外に積極的に発信を行っていきたい。マーマセットを用いる実験などで更に共同研究などを進め、ヒト遺伝子治療におけるゲノム編集において私達の遺伝子導入ベクター技術をさらに改良・応用し、世界の中での私達の研究グループの評価を確立したい。

17. 寄附研究部門(大学病院ゲノム医療科)

1. 構成員

沼倉周彦 (NUMAKURA, Chikahiko) : 准教授 : 運営責任者 : 診療部長
奥山 虎之 (OKUYAMA, Torayuki) : 特任教授 : 遺伝病学 : 博士
大竹 明 (OHTAKE, Akira) : 特任教授 : 小児科学、代謝・遺伝病学
徐 朱玟 (SEO Joo-Hyun) : 助教
山下 和香奈 (YAMASHITA, Wakana) : 助教
【非常勤講師】
四元 淳子 (YOTUMOTO, Jyunko) : 認定遺伝カウンセラー
【特別研究員】
田中 美砂 (TANAKA, Misa) : 特別研究員
大星 航 (OHBOSHI, Wataru) : 特別研究員

2. 教育

- 2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)
研究目的に設置した講座であるため該当しない。
- 2-2. 教育実績(担当者) 該当なし
- 2-3. 達成度評価 該当なし
- 2-4. 次年度改善計画 該当なし

3. 研究

- 3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)
希少遺伝性疾患の診断・治療の開発と改良を目的に設置した講座である。
- 3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績
 - (1) ライソゾーム病患者の治療実態及び症状の経過に関する研究
JaSMIn(先天代謝異常症患者登録制度)に登録されているムコ多糖症 III 型患者(又は保護者)の 30 人に、本研究への参加同意書と調査用紙を配布した。現時点での回収は計 4 例で、回収できたデータを集計している。
 - (2) ライソゾーム病の新生児スクリーニングおよびハイリスクスクリーニングに適した検査法の開発に関する研究
酵素活性によるスクリーニング法が普及しているが、この方法では、偽欠損症がスクリーニング陽性になる可能性が否定できない。そこで、バイオマーカーの簡便測定法を開発し、酵素活性測定法と併用する新たなスクリーニング法を開発する研究に着手した。
- 3-3. 達成度評価
当初計画したスケジュール通りに進行中である。
- 3-4. 次年度改善計画
当初計画したスケジュール通りに進行しており、このまま計画に従って研究を継続する。

4. 診療

該当なし

5. その他

- 5-1. 自治体、政府関連委員の有無
該当なし
- 5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無
該当なし
- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務
該当なし

6. 業績

- 6-1. 論文・学会発表・著書
 - ① 徐じゅひょん、小須賀基通、右田王介、田中藤樹、伏見拓矢、村山圭、高柳正樹、望月弘、大竹明、奥山虎之。オプショナルスクリーニングの実施状況と今後の課題。第 63 回日本先天代謝異常学会学術集会、熊本、2022/11/24~26
 - ② 山下和香奈、徐じゅひょん、酒井規夫、奥山虎之。先天代謝異常症患者登録制度(JaSMIn)の現状:長期運用に向けた取り組みと課題。第 63 回日本先天代謝異常学会学術集会、熊本、2022/11/24~26
 - ③ 徐じゅひょん、小須賀基通、右田王介、田中藤樹、伏見拓矢、村山圭、高柳正樹、望月弘、小野寺雅史、大竹明、奥山虎之。拡大新生児スクリーニング:オプショナルスクリーニングの実施状況と今後の課題。第 49 回日本マススクリーニング学会学術集会、大阪、2022/8/26~27
 - ④ 大竹 明。【CReARID】「新生児オプショナルスクリーニングについて」。埼玉産科婦人科学会・埼玉県産婦人科医

【総数：論文 0 件、学会発表 3 件、講演 1 件】

6-2. 獲得研究費

<厚生労働科学研究費>

20DA1010 出生前検査に関する妊産婦等の意識調査や支援体制構築のための研究

<受託研究費>

12801701 ライソゾーム病患者の治療実態及び症状の経過に関する研究（JCR ファーマ株式会社）

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

計画通りに進行しており、順調であると考えている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

引き続き計画通りに研究を進める。

1. 1) 消化器内科・肝臓内科

1. 構成員

持田 智 (MOCHIDA, Satoshi)	教授：運営責任者：診療科長：教育員：研究主任：代表指導教員（大学院）：消化器病学，肝臓病学，特に急性・慢性肝不全，ウイルス性慢性肝炎・肝硬変・肝癌，難治性肝疾患，肝移植：医学博士
富谷 智明 (TOMIYA, Tomoaki)	教授（教職員・学生健康推進センター兼任）：肝臓病の診断と治療：医学博士
今井 幸紀 (IMAI, Yukinori)	准教授：診療副部長：教育員：研究員：指導教員（大学院）：消化器病学，門脈圧亢進症の内視鏡的治療とIVR治療，肝癌のIVR治療，消化器領域の核医学：博士
水野 卓 (MIZUNO Suguru)	准教授：医員；教育員：副研究主任：指導教員（大学院）：胆道、膵の内視鏡検査・治療、難治性胆道疾患、膵炎と膵癌
中山 伸朗 (NAKAYAMA, Nobuaki)	准教授：医員：教育主任：研究員：指導教員（大学院）：肝臓病学，劇症肝炎と肝移植：医学博士
中尾 将光 (NAKAO, Masamitsu)	助教：医員：教育員：研究員
菅原 通子 (SUGAWARA, Kayoko)	講師：教育員：研究員：指導教員（大学院）：肝臓病学，消化器病学：医学博士
安藤さつき (ANDOU, Satsuki)	助教：医員：教育員：研究員
打矢 紘 (UCHIYA, Hiroshi)	助教：医局長：医員：教育員：研究員
内田 義人 (UCHIDA, Yoshihito)	助教：医員：教育員：研究員：医学博士
塩川 慶典 (SHIOKAWA, Keisuke)	助教：外来医長：医員：教育員：研究員
浅見真衣子 (ASAMI, Maiko)	助教：病棟医長：医員：教育員：研究員
鷹野 雅史 (TAKANO, Masashi)	助教：医員：教育員：研究員
渕上 彰 (FUCHIGAMI, Akira)	助教：研修医長：医員：教育員：研究員
鈴木 隆信 (SUZUKI, Takanobu)	助教：医員：教育員：研究員
山羽 晋平 (YAMABA, Shinpei)	助教：医員：教育員：研究員
植村 隼人 (UEMURA, Hayato)	助教：医員：教育員：研究員：医学博士
相馬 直人 (SOMA, Naoto)	助教：医員：教育員：研究員
濱田 大祐 (HAMADA, Daisuke)	助教：医員：教育員：研究員
辻 翔平 (TSUJI, Shohei)	助教：医員：教育員：研究員
倉田 隼斗 (KURATA, Hayato)	助教：医員：教育員：研究員
牛山 叡 (USHIYAMA, Rui)	助教：医員：教育員：研究員
佐藤 彩 (SATO, Aya)	助教：医員：教育員：研究員
山田 俊介 (YAMADA, Shunsuke)	助教：医員：教育員：研究員
碓氷 七瀬 (USUI, Nanase)	助教：医員：教育員：研究員
本谷 大介 (MOTOYA, Daisuke)	助教：医員：教育員：研究員
齋藤 陽一 (SAITOU, Youichi)	助教：医員：教育員：研究員
稻生 実枝 (INA0, Mie)	客員准教授：専門医員：教育員：研究員：指導教員（大学院）：肝臓病学，消化器病学：医学博士
岡 政志 (OKA, Masashi)	教授：消化器病学，内視鏡的治療：医学博士
森吉 美穂 (MORIYOSHI, Miho)	講師（中央検査部兼任）：指導教員（大学院）：肝臓病学：医学博士
藤盛 健二 (FUJIMORI, Kenji)	非常勤医師
齋藤 詠子 (SAITOU, Eiko)	非常勤医師
中澤 学 (NAKAZAWA, Manabu)	非常勤医師
藤井 庸平 (FUJII, Youhei)	非常勤医師
新井 晋 (ARAI, Shin)	講師：消化器病学，消化器癌の内視鏡的治療：医学博士
山岡 稔 (YAMAOKA, Minoru)	助教（総合診療内科兼任）：教育員：研究員：医員
松井 淳 (MATUI, Atushi)	非常勤講師：医学博士
石川 恵子 (ISHIKAWA, Keiko)	非常勤講師
藤田 尚巳 (FUJITA, Naomi)	非常勤講師
吉野 廉子 (YOSHINO, Kiyoko)	非常勤医師（研究委員）
大森 芳枝 (OMORI, Yoshie)	非常勤医師（研究委員）
南 佳織 (MINAMI, Kaori)	非常勤医師（研究医員）

2. 教育

①「卒前教育」

2-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

3年生の「ヒトの病気コース」と6年生の「総合学習コース」で消化器疾患（肝、胆、膵および消化管）の講義を担当した。3年生では「消化器ユニット」70講義中24講義（34%）を担当しており、臨床実習に際して必要な基礎知識の習得、論理的な診療能力の背景となる病態生理の理解に主眼をおいた講義を行った。講義には、当科で独自に作成した「消化器病学」テキストを中心に、各教員がスライド、プリントなどの配布資料も利用した。6年生の総合学習では8講義中5講義（63%）を担当し、3年生の講義で扱った内容を医師国家試験に向けて切り口を変えて、症例を提示する演習を行った。なお、消化器病学、肝臓病学の領域は進歩が著しいため、3年生の時点では講義の対象とならなかった up-to-date な事項に関しても6年生の講義では言及するようにした。

4-6年生では2ないし4週のCC step-1, step-2を担当した。学生は消化器領域の「必修の疾患」の患者を受け持ち、病歴の聴取、診察を行い、それをSOAPシステムに従ってレポートないし電子カルテにまとめることで、論理的な考え方を習得することを目指している。2週のStep-1 CCではこの間にクルブズ、シミュレーターを用いた腹部超音波検査、上部内視鏡検査などの実習を計16回実施し、消化器疾患関連の検査見学、画像供覧の場を提供し、知識を整理できるようにした。更に、週1回の病棟回診と週2回の全症例を対象としたカンファレンスに参加することで、消化器内科の領域における必修の疾患と症候は全てを経験出来るように配慮した。

2-2. 教育実績（担当者）

<2年生>

消化器系の疾患（中山伸朗）

<3年生>

消化器ユニット：ユニットディレクター（富谷智明）「オリエンテーション」、同補佐（中山伸朗）

「消化器、腹膜、腹壁の構造と機能」、 「肝の構造と機能」、 「肝機能検査」、 「慢性肝炎、肝硬変」（富谷智明）

「食道疾患」、 「食道静脈瘤」、 「肝におけるIVR治療」、 「肝臓の感染症、門脈系の疾患」「肝臓重傷」（今井幸紀）

「便秘、下痢症」、 「腹部腫瘍、肝脾腫」（菅原通子）

「門脈圧亢進、腹水と黄疸」、 「肝不全、肝性脳症」、 「急性肝炎、急性肝不全」（中山伸朗）

{ウイルス肝炎-1}、 「ウイルス肝炎-2」、 「ウイルス肝炎-3」、 「肝移植」（持田 智）

<6年生>

「食道疾患」（今井幸紀）

「腹水、門脈圧亢進症、黄疸、種々の肝疾患、肝性脳症」（富谷智明）

「急性肝炎、急性肝不全、肝炎ウイルス」、 「慢性肝炎、肝硬変」（持田 智）

「肝腫瘍、細菌、寄生虫疾患」（菅原通子）

2-3. 達成度評価

3年生の「消化器ユニット」では筆記試験、MCQによって達成度を評価した。MCQにはCBTに準じてRないしQタイプの出題形式も採用した。不合格者には再試験を1回実施した。4-5年生のStep-1 CCでは病歴をまとめたレポートを基に、口頭試験によって達成度を評価した。Step-2 CCとadvanced CCでは、電子カルテへの記載内容を指導教員が毎日チェックし、情報聴取とプログラムの作成、病態の解析と鑑別診断、初期診療計画などの達成度を評価した。

2-4. 次年度改善計画

3年生の「ヒトの病気」コースで利用する「消化器病学」のテキストは、毎年改訂を行っているため up-to-date な内容をコンパクトにまとめたものであり、市販の教科書にはない独自のものである。消化器内科の領域は画像診断などの検査項目が多いため、このテキストを基盤としてスライド、プリントなどを適時追加し、学生が興味を抱く授業を行なうように各教員が努力した。4-6年生のCCでは、① 患者の病歴を適切に聴取できること、② 問題点をプログラムリストとしてまとめられること、③ 初期計画を設定できること、の3項目に重点をおき、論理的な考え方に習熟することを目指す指導を実施した。また、腹部超音波検査、上下部消化管内視鏡検査、血管造影検査、肝臓のRFA治療とIVR治療など様々な検査と治療手技を見学することで、消化器疾患の最前線を全ての学生が経験できるようにした。なお、腹部超音波検査の実習とシミュレーターを用いた上部内視鏡検査は、特に学生から好評であった。また、6年生では医師国家試験に直結した講義を実施しており、講義内容ないしは卒業試験と類似した問題が医師国家試験には多数出題されている。

令和4年度も今年度と同様の方針で教育活動を行うが、卒前医学教育における臨床実習の重要性がさらに増していることに対応して、CCの質を向上させる努力を継続する必要がある。主に臨床に携わる若手の教員が臨床実習に携わる機会をより多くするとともに、シミュレーターを用いた実習を更に拡充し、これを用いた卒前、卒後の一貫した教育を実施する予定である。

②「卒後教育」

2-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

当院は埼玉県における肝疾患診療連携拠点病院に指定されており、研修医、医局員の消化器病領域における専門医を目指した卒後教育を実施するとともに、埼玉県における消化器病、肝臓病に関する生涯教育の中核として活動している。専門医を目指した卒後教育としては、人口 120 万人を上まわる医療圏から集まる豊富な症例を対象に、プライマリケアから先進医療まで広範な医療行為の研修が可能であり、上下部消化管内視鏡、腹部超音波、血管造影などの各種手技を獲得するとともに、肝炎ウイルス、生活習慣病、難治性消化器疾患、肝移植などに関する広範な専門的知識を習得し、消化器・肝臓疾患はもとより、幅広い内科疾患を診断・治療に対応できるように教育している。また、生涯教育に関しては、埼玉県から委託されて、肝疾患の診療に関する医療研修会と肝炎医療コーディネーターを対象とした研修会を開催し、肝炎治療特別促進事業に関わる県内の医師とメディカルスタッフの教育を担当している。また、多数の講演会に講師として参加し、県内の医師の消化器・肝臓病に関する生涯教育に協力している。

2-2. 教育実績 (担当者)

令和4年度肝疾患医療研修会 (埼玉県)「ウイルス性慢性肝疾患の病態と治療法の実践」は11月3日(木)に開催し、医師は新規が28人、5年ごとの更新90人、メディカルスタッフは新規81人、更新135人が参加した。持田 智、富谷智明、今井幸紀、中山伸朗、菅原通子、中尾将光、内田義人が分担して、肝疾患全般に関する講義を行った。また、12月1日(木)には肝炎地域コーディネーターの研修会を行い、メディカルスタッフ59人が参加し、内田義人が肝炎に関する講義を行った。

2-3. 達成度評価

医局員は基盤学会である日本内科学会の認定医ないし専門医を取得後、日本消化器病学会、日本肝臓学会、日本消化器内視鏡学会の会員として研修を続け、全員が専門医取得を目指している。各種検査法、治療法の手技に関するトレーニングを積むとともに、カンファレンスや指導医とのディスカッションにおいて、病態を整理し、各治療の適応、効果を評価する習慣をつけることで、専門医としての知識、判断力、手技を育成した。令和4年における専門医数は、日本消化器病学会20名、日本肝臓学会19名、日本消化器内視鏡学会15名である。また、医局員はそれぞれ基礎的、臨床的な課題を与えられて、研究活動も実施しており、当該学会の総会および合同学術集会であるJDDWなどで発表し、英文および邦文の学術論文を発表している(研究業績の項を参照)。令和4年度はCOVID-19蔓延のため米国、欧州の肝臓病会議には参加しなかった。

また、令和4年度に開催した研修会によって、埼玉県の肝疾患認定医は517人、肝炎医療コーディネータは640名、肝炎地域コーディネータは268名になった。

2-4. 次年度改善計画

消化器および肝疾患に関して、プライマリケアから緊急性、重症度の高い症例および専門性の高い症例まで幅広く経験できる当院において卒後教育を実施することで、質の高いオールラウンドの消化器病専門医を育成している。今後は、より充実した卒後教育に発展すべく、病棟回診およびカンファレンスを中心に、各領域の専門医が効率的に指導できる環境を整えていきたい。また、卒後10年前後の医師による後期研修医に対する指導を強化し、消化器病専門医を目指す若き医師をさらに増加させることも課題となる。生涯教育に関しては、埼玉県および各種メーカーとの協力で研修会、講演会を継続して実施し、県下の消化器・肝疾患に関する診療レベルを向上させることを目指す。

また、2023年には第30回日本門脈圧亢進症学会総会(会長:持田 智)を、2024年には第29回日本肝がん分子標的治療研究会(当番世話人:持田 智)を開催するため、いずれも今井幸紀を事務局長として、その準備を進めている。

③「大学院教育」

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

大学院生の教育は消化器領域全般に精通した高度専門医の育成の一環と見なしている。専門医として必要な科学的、論理的考察方法を涵養するために、大学院生には適正に応じて臨床的ないし基礎的なテーマを設定し、その研究の推進を指導している。このため基礎的なテーマの研究でも、臨床的な背景に裏付けされたものを設定し、研究活動が専門医になるべく行う修練と密着するように配慮している。

大学院生の研究テーマの概要は以下の通りである。

1. 肝病態の成立におけるウイルス要因の解析
2. 肝・消化器疾患の成立における宿主要因の網羅的解析
3. 急性肝不全の治療法、予防法の確立を目指した疫学的、臨床的研究
4. 門脈圧亢進症の病態解明と新規治療法の開発を目指した臨床研究
5. 難治性の肝・胆道疾患に関する基礎的・臨床的研究
6. 胆道、膵の内視鏡検査・治療に関する臨床研究
7. 膵癌の早期発見に関する臨床研究

8. 消化管内視鏡、腹部超音波および血管造影などの手技を利用した臨床研究

2-2. 教育実績 (担当者)

1名の大学院生が在籍しており、以下の分担で教育を行っている。

研究全体の統括、ウイルス性肝疾患、急性肝障害、肝腫瘍 (持田 智)

消化管疾患、門脈亢進症 (今井幸紀)

急性肝不全、肝移植 (中山伸朗)

胆道疾患、脾疾患 (水野 卓)

肝炎ウイルス (内田義人)

B型肝炎再活性化 (中尾将光)

肝硬変 (内田義人, 富谷智明)

分子生物学実技、動物実験 (神山淳一, 内木佳代子)

2-3. 達成度評価

入院患者の診療を介して、大学院生に必要な消化器疾患に関する基礎的知識、技能を習得する目的は達成した。研究室での実験等による研究活動も開始した。

2-4. 次年度改善計画

在籍している1名の大学院生に対しては、令和4年度の教育を継続し、研究室での実験を主たる業務として、B型肝炎ウイルスの遺伝子解析、門脈圧亢進症肺高血圧などの研究に従事し、1年以内で学会発表、英文誌への報告ができるように指導する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

肝臓病学では、肝炎劇症化の機序やその成因を追究する細胞生物学および分子生物学的な基礎研究と、ウイルス性慢性肝疾患の治療学確立に向けた臨床研究を行っており、その結果は日常診療に生かされている。急性肝不全に関しては、厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究」班において、持田 智が劇症肝炎分科会の分科会長を担当しており、中山伸朗がその事務局を担当して、「わが国における急性肝不全の全国調査 (2021年)」を実施する。また、平成29年度に確立した「わが国における acute-on-chronic liver failure (ACLF) の診断基準 (案)」に準拠して、ACLFの全国調査も実施し、小児の急性肝不全の全国調査も継続する。平成21年度以降は持田が厚生労働科学研究費補助金肝炎等克服緊急対策研究事業「免疫抑制薬、抗悪性腫瘍薬によるB型肝炎ウイルス (HBV) 再活性化の実態解明と対策法の確立」班の研究代表者を務めたが、これを引き継いだ厚生労働科学研究費補助金肝炎等克服緊急対策研究事業「HBV感染の病態別における宿主遺伝因子の探索研究」班の免疫抑制療法分科会 (会長: 持田 智) で、中尾将光を事務局担当として、医療経済効果も考慮したHBV再活性化の対策法を構築することを目指す。

また、研究室では肝炎ウイルスに関する基礎的研究を内田義人を中心に推進する。その他の臨床研究は、急性肝不全、肝移植に関しては中山伸朗、門脈圧亢進症、肝癌および消化管出血は今井幸紀、胆道と脾疾患は水野卓、肝炎ウイルスと肝硬変は内田義人が主体となって推進する。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

- (1) わが国における急性肝不全の実態解明を介して分類、劇症肝炎の診断基準を見直すための疫学的研究
- (2) 劇症肝炎、遅発性肝不全における肝移植適応ガイドラインを修正するための臨床研究
- (3) わが国における acute-on-chronic liver failure (ACLF) の実態に関する疫学・臨床研究
- (4) 急性肝不全の内科的集学的治療の標準化に関する臨床研究
- (5) HBVの再活性化の実態と経済的観点でガイドラインを改訂するための臨床研究
- (6) HBVの増殖能を規定する遺伝子要因の解析に関する基礎的研究
- (7) 難治性B型、C型慢性肝疾患の抗ウイルス療法確立に向けた臨床研究
- (8) HCVの遺伝子変異とDAAs耐性に関する研究
- (9) 肝癌に対する複合免疫療法、分子標的薬による治療の有用性を向上させるための基礎的、臨床的検討
- (10) 進行肝癌に対するIVR治療の位置づけを明確にすることを旨とした臨床研究
- (11) 重症アルコール性肝炎に対する顆粒球除去を副腎ステロイドパルス sequential 療法の確立を旨とした臨床的研究
- (12) 胃食道静脈瘤の病態、血行動態に応じた治療体系の確立を旨とした臨床研究
- (13) 難治性の腹水および肝性脳症の病態、血行動態に応じた治療体系の確立を旨とした臨床研究
- (14) 門脈血栓症における抗凝固療法の有用性に関する臨床研究
- (15) 非アルコール性脂肪性肝疾患における線維化予防、肝機能悪化予防の為の治療法に関する研究
- (16) 小腸疾患診断におけるダブルバルーン法小腸内視鏡の有用性に関する臨床研究
- (17) 消化管出血に対する内視鏡的止血法の有用性に関する臨床研究

(19) 胆道, 膵疾患の内視鏡検査と治療に関する臨床的研究

(20) 難治性の肝・胆道疾患に関する基礎的・臨床的研究

3-3. 達成度評価

1) 急性肝不全の病態解明と治療学の確立

我々が中心となって作成した「わが国における急性肝不全の診断基準」に準拠して, 2010~2021年に発症した急性肝不全, 遅発性肝不全の全国調査を実施し, その実態と治療法上の問題点を明確にした。また, 2009年までの劇症肝炎および遅発性肝不全症例の全国集計を基に, 多変量解析を利用したスコアリングシステムによる予後予測法とデータマイニングを駆使して決定木法, radial basis function (RBF) 法, neural network 法に相当する back propagation (BP) 法を利用した新たな予後予測法を確立したが, 平成24年度は更にこれらを統合したハイブリット型統合モデルも開発し, 平成26年度以降はその有用性の評価を続けている。また, 平成29年度はわが国における acute-on-chronic liver failure (ACLF) の診断基準(案)を確立し, 平成30年以降はその実態に関する全国調査を開始し, 令和3年度は2017~2020年の発症例をまとめた。その結果, わが国の ACLF の診断基準(案)の有用性が明らかとなり, 2022年にはこれを正式な診断基準とした。

2) B型肝炎の再活性化に関する研究

免疫抑制薬, 抗悪性腫瘍薬によるB型肝炎ウイルス (HBV) 再活性化の実態を解明し, 対策法を確立するために, 厚生労働省研究班を組織し, 免疫抑制療法を実施するB型既往感染例の経過を前向きに観察して, 血清HBV-DNA量が20 IU/mL以上になる累積頻度は治療開始6ヶ月後で3.2%であり, その後の再活性化リスクは低下することを明らかにした。この成果に伴って, 日本肝臓学会のB型肝炎診療ガイドラインにおけるHBV再活性化予防の指針も改訂され, さらに経済的効率を考慮して高感度HBs抗原測定法でモニタリングおよびHBV-DNA量に関して核酸アナログの開始基準をより高値にするシステムの確立を目指した検討が進んでいる。

3) C型肝炎に関する基礎的・臨床的研究

C型肝炎は Direct Acting Antivirals (DAAs) が登場し, 経口剤のみによる IFN-free の治療が行われるようになった。この効果を規定するのは, NS5A 領域のアミノ酸変異であるが, その簡易迅速測定法を開発した (埼医 25-012, WO 2015/087945 A1)。これを用いて, NS5A-RASs の成立におけるオセロ現象, 2-ヒット現象などを実証した。また, NS5B 領域のアミノ酸変異についても研究範囲を進めて, bioinformatics と molecular dynamics を応用することで DAA 治療の効果を規定する新たなウイルス学的要因を発見した。また, 第3世代の Nanopore sequencer を用いた網羅的な解析も実施している。さらに, SVR 後の肝機能を規定する要因に関する研究も進めており, 門脈・体循環シャント量および門脈血流量が重要であることを明らかにした。

4) HBV の遺伝子解析に関する検討

わが国固有の genotype B と中南米に多い genotype H の組替えが生じて, この株から進化することによって, 新たな genotype に分類される可能性がある HBV 株を発見した。この新たなウイルスの特性を明らかにするために *in vitro* の検討を進めている。また, 核酸アナログ製剤投与中止後に再燃する HBV の増殖速度の解析から, ポリメラーゼ領域に遺伝子複製の効率を規定する可能性がある変異領域を発見した。HBV 再活性化を規定するウイルス要因でもある可能性があり, その臨床的意義を *in vitro* の実験で確認し, ターミナルドメインにウイルス増殖能を有する事が確認された。現在はウイルス遺伝子の組み換え実験によって, HBV-DNA のポリメラーゼ領域 aa15-17 のアミノ酸に変異を加えたクローンを作成し, *in vitro* 系にてこれら変異の意義を更に明らかにするための実験を進めている。また, B型肝炎では HBs 抗原量を低下させる効率的な抗ウイルス療法の確立を目指した臨床研究を実施し, その目的で pregenome RNA の遺伝子解析も進めている。

5) 肝硬変の病態に関する研究

腹水および肝性脳症の治療効果を規定する要因に関する研究を続けており, 安易に投与されているフロセミドが両病態の治療効果を減退させるのみならず, QOL, 生存率を低下させていることを明らかにした。また, 門脈肺高血圧症の成立機序に関する研究も開始しており, その発症に門脈・体循環シャントが関与することを明らかにした。

6) 肝細胞癌の診断と治療

肝細胞癌の診断では造影剤を用いた超音波検査法の有用性を評価している。一方, 治療法に関しては, 進行肝癌に対しては, 分子標的薬であるレンパチニブおよびアテゾリズマブとベバシズマブを用いた複合免疫療法の有用性と安全性に関する臨床試験を進めている。また, ビーズ製剤を用いた TACE, バルーン閉塞下 TACE などについても検討を継続している。

7) 重症型アルコール性肝炎の治療

重症型アルコール性肝炎に対する副腎皮質ステロイドのパルス投与と, 体外循環を利用した顆粒球除去療法を併用する sequential 療法を考案した。臨床研究としては一定の成果を得て終了し, 現在は該当症例には, IRB 承認下に, 保険外診療として実施し, 高度先進医療として承認されることを目指している。

8) 門脈圧亢進症とその治療

門脈圧亢進症に伴う合併症には食道胃静脈瘤, 異所性静脈瘤, 門脈圧亢進性胃腸症, 腹水, 肝性脳症などの治療体系を確立する臨床研究を行っている。また, 門脈・体循環シャントは肝予備能の低下にも繋がるため, BRTO および PSE を用いた血行改変術で肝血流量

を増加させて、肝機能の向上、肝再生を促す臨床研究を実施している。また、門脈血栓症に関しては、抗凝固療法と血行改善術を併用する新規治療法の開発を進めている。

9) 炎症性腸疾患の病態生理とその治療

潰瘍性大腸炎、クローン病などの炎症性腸疾患に対して血球成分吸着除去療法、5-ASA 注腸、インフリキシマブ（抗 TNF- α ）などの生物学的製剤およびタクロリムスの有用性と適応を明確にするための臨床研究も実施している。

10) 内視鏡と血管造影手技を用いた消化管疾患の治療

食道・胃・直腸静脈瘤、消化性潰瘍、vascular ectasia による消化管出血の治療として、シアノアクリレートを用いた硬化療法、アルゴンプラズマ凝固法（APC）、バルーン閉塞下逆行性経静脈的塞栓術（B-RTO）を併用した止血術の体系を確立した。特に、難治性の vascular ectasia に対しては APC が有用であり、止血効果を得ている。また、血行動態の複雑な胃ないし直腸静脈瘤に対しては micro-balloon カテーテルを用いた BRTO が有効であることを実証し、多数例での検証を進めている。また、胃瘻造設、癌性狭窄に対するステント留置、小腸出血の症例に対するカプセル内視鏡、ダブルバルーン内視鏡の有用性、クローン病による小腸狭窄の症例に対するダブルバルーン内視鏡を用いた拡張術についても検証を進めている。

11) 胆道・膵疾患に関する研究

胆管結石に対する内視鏡治療として乳頭切開術（EST）やバルーン拡張術（EPBD）を行っているが、出血や膵炎といった偶発症を減少させるためにこれらを併用した ESBD（endoscopic sphincterotomy with balloon dilation）を積極的に導入し、その有効性を検証している。また、術後再建腸管や悪性胃排出路閉塞症例に対する内視鏡的胆道ドレナージにおいては ERCP に代わる治療として超音波内視鏡下胆道ドレナージを行っているが、ステント交換や胆管結石除去などのリインターベンションを安全に効率よく行うための方法についても検証を進めている。

3-4. 次年度改善計画

我々が中心となって作成した診断基準に準拠して、急性肝不全、遅発性肝不全、ACLF およびその関連病態の症例の全国調査を進めている。これら症例を基に、肝移植適応ガイドラインを検証し、また、内科的集学的治療の体系を改訂することが、今後の課題になっている。特に予後予測に用いる統合ハイブリットモデルに関しては、ブラウザーサーバー・システムを普及させることが課題である。

C型慢性肝炎における抗ウイルス療法では、我々が開発した NS5A 領域のアミノ酸変異の測定法を、SRL に委託して全国で測定する体制が確立し、すでに5万人が検査を受けている。これによって、DAA 治療の効率的な治療が全国で一律に可能になった。今後は、第3世代の Nanopore sequencer を用いた肝炎ウイルスの遺伝子解析を進めるとともに、肝硬変症例におけるウイルス排除後の肝予備能、門脈圧亢進症の変化を評価する研究もさらに推進する。

HBV の再活性化に関しては、その実態を解明するために全国組織を確立し、そのリツキシマブ以外の免疫抑制・化学療法でもその頻度は決して低率でないことを明らかにし、また、免疫抑制療法に関しては、長期に及んだ場合のハイリスクの時期も明確になってきた。再活性化に関わるウイルス側、宿主側の要因を明らかにするとともに、これを医療経済的な観点も考慮した HBV 再活性化の予防ガイドラインに繋げることが問題点として残っている。

肝硬変、肝細胞癌、炎症性腸疾患、門脈圧亢進症に伴った消化管出血の治療法に関しては、様々な手法を導入してその有用性を検証してきた。アルコール性肝炎、難治性炎症性腸疾患に対する新規治療のプロジェクトを推進するとともに、患者の QOL も考慮して、これら各種治療法の使い分ける個別化医療の体系を確立していくことが、今後の課題である。また、胆道・膵疾患の内視鏡検査と治療に関する研究を推進し、難治性肝・胆道疾患に関する基礎的・臨床的研究も進めていく。

4. 診療

当大学病院は埼玉県における肝疾患診療連携拠点病院に指定されており、県下全域における肝疾患患者の診療連携を円滑にする事業の窓口になるとともに、他の専門施設では診療が困難な難治例、重症例を受け入れている。肝疾患では急性肝不全、ウイルス性慢性肝疾患、肝癌、自己免疫性肝疾患の治療に力を入れている。急性肝不全に関しては基礎的検討の成果と厚生労働省研究班による全国調査の結果を基にして、血漿交換、血液濾過透析などの人工肝補助療法も併用した集学的治療を実施している。C型肝疾患では DAA 治療における HCV の薬物耐性変異を評価する簡易迅速定量法を開発し、これを用いた治療体系を確立し、これに基づいた診療と臨床研究を展開している。一方、B型肝疾患ではウイルスの全遺伝子配列を解析することで、そのウイルス学的特性に基づいた個別化医療を実施している。肝硬変症例に対しては造影超音波検査も含む画像検査を駆使し、肝細胞癌の早期発見を目指している。さらに、肝動脈化学塞栓療法やラジオ波焼灼療法とともに分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬を用いた治療を併用する集学的な治療を実施し、優れた治療成績を得ている。また、症例毎の薬剤効果や QOL も考慮して治療方法を選択するように心がけている。急性肝炎の劇症化阻止、また、劇症化した場合の急性肝不全に対する集学的治療に関しては、基礎的研究データと厚生労働省研究班による全国調査の結果を基にして、最先端の治療を実施している。肝硬変症患者の門脈圧亢進症は側副血行路の発達とそれによる門脈血流減少が原因となっており、胃静脈瘤に対して施行されるバルーン閉塞下逆行性経静脈的塞栓術（BRTO）後に、血流改善による肝予備能改善例を認め、それに伴い腹水や肝性脳症が改善する症例を経験し、今後より有効な治療になっていくものと思われる。また、門脈血栓合併に伴う門脈圧亢

進症状に対しても抗凝固療法と BRTO の血行改変術併用による血流改善にて肝予備能改善を認め、これら門脈圧亢進症状を有する患者に実施し、効果を挙げている。

胆道・膵疾患の内視鏡検査・治療に関しては、症例の病態に応じて最先端の手法を導入しており、優れた成績を上げている、自己免疫性肝・胆道疾患などの難病にも全国調査の結果を基に治療を積極的に行っている。消化管疾患では消化管出血と炎症性腸疾患の治療に力を入れている。食道胃静脈瘤では硬化療法、結紮療法などの内視鏡を用いた治療のみならず、バルーン閉塞逆行性経静脈的塞栓術 (BRTO) も積極的に行っており、micro-balloon カテーテルを用いることで通常は治療が困難な胃静脈瘤、ないしは十二指腸、直腸などの異所性の静脈瘤に関しても良好な治療成績が得られている。また、胃静脈瘤からの緊急止血時にはシアノアクリレート注入による硬化療法も実施している。出血性潰瘍、vascular ectasia に対しては、高濃度塩化ナトリウムやエタノール注入、アルゴンプラズマ凝固 (APC)、クリップによる止血術などを駆使して、高率に止血に成功している。経口摂取不能症例に対する内視鏡的胃瘻造設術などの対症療法も行っている。潰瘍性大腸炎、クローン病などの炎症性腸疾患に対しては、血球成分吸着除去療法、生物学的製剤、5-ASA 製剤、副腎皮質ステロイド、免疫調整薬などと併用することで良好な成績を得ている。また、上部及び下部消化管の良性腫瘍である腺腫病変に対しては内視鏡的粘膜切除術 (EMR)、内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) を行っているが、悪性腫瘍の内視鏡治療は国際医療センターの消化器内科とも連携して実施している。

また、消化器領域全般を担当する診療科の利点を生かして、重症型アルコール性肝炎に対する副腎皮質ステロイドのパルス投与と顆粒球除去療法の sequential 療法、BRTO による血行改変術による肝再生医療など新規考案した治療法、C 型慢性肝炎に対する NS5A、NS5B 領域のアミノ酸変異に基づいた個別化医療等、高度先進医療への移行を念頭に置いた治療を積極的に実施している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

持田 智： 埼玉県肝炎対策協議会 (委員)
埼玉県肝疾患連携拠点病院等協議会 (委員長)
埼玉県肝炎治療審査委員会 (委員長)
埼玉県肝がん集検委員会 (委員)
全国医学部長病院長会議 (国家試験改善検討ワーキンググループ：委員)
脳死肝移植適応評価委員会 (委員)
日本臓器移植ネットワーク (あっせん事業評価委員会：委員)
日本医療機能評価機構 (評価委員会：委員)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

持田 智 日本門脈圧亢進症学会雑誌 (日本門脈圧亢進症学会：編集委員)
消化器・肝臓内科 (科学評論社：編集委員長)

5-3. その他：社会あるいは医学的貢献に関わる業務

持田 智 日本消化器病学会：理事長，第 107 回総会会長
日本肝臓学会：副理事長，東部会支部長，企画広報委員会 (委員長)，在り方検討委員会 (委員)，財務委員会 (委員)，学術集会審議委員会 (委員)，肝移植委員会 (委員)，ガイドライン統括委員会 (委員)，肝がん撲滅運動 (埼玉県責任者)，脳死肝移植適応評価委員会 (委員)，第 55 回総会会長
JDDW：理事，総務委員会 (委員長)
日本内科学会：監事
日本医学会：評議員 (日本消化器病学会から)，医学用語委員会 (委員：日本肝臓学会から)
日本移植学会：幹事
日本門脈圧亢進症学会：理事，編集委員会 (委員)，第 30 回総会会長 (予定)
日本急性肝不全研究会：代表世話人，日本肝移植研究会：常任世話人，日本肝癌研究会：幹事，肝類洞壁細胞研究会：世話人，肝細胞研究会：世話人，犬山シンポジウム：世話人
富谷智明 日本肝臓学会：東部会評議員，日本消化器病学会：評議員，肝細胞研究会：常任世話人
今井幸紀 日本消化器病学会：評議員，門脈圧亢進症学会：評議員，日本消化器内視鏡学会：評議員
中山伸朗 日本肝臓学会：評議員，日本消化器病学会：評議員，関東支部世話人，日本急性肝不全研究会：幹事
水野 卓： 日本内科学会：関東地方会常任幹事
稲生実枝 日本肝臓学会：東部会評議員，日本消化器病学会：関東支部世話人
菅原通子 日本肝臓学会：東部会評議員，門脈圧亢進症学会：評議員，日本消化器内視鏡学会：関東支部評議員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①Mochida S, Nakayama N, Terai S, Yoshiji H, Shimizu M, Ido A, Inoue K, Genda T, Takikawa Y, Takami T, kato N, Abe M, Abe R, Inui A, Ohira H, Kasahara M, Chayama K, Hasegawa K, tanaka A. Diagnostic criteria for acute-on-chronic liver failure and related disease conditions in Japan. *Hepatol Res* 2022; 52 (5): 417-421. doi: 10.1111/hepr.13763.
- ②Uchida Y, Uemura H, Tsuji S, Yamada S, Kouyama JI, Naiki K, Sugawara K, Nakao M, Nakayama N, Imai Y, Tomiya T, Mochida S. Significance of furosemide in patients with cirrhosis treated with or without zinc acetate hydrate supplementation. *Hepatol Res* 2022; 52 (5): 449-461. doi: 10.1111/hepr.13751. Epub 2022 Feb 21.
- ③Iwakiri K, Fujioka Y, Manabe N, Ihara E, Kuribayashi S. Akiyama J, Kondo T, Yamashita H, Ishimura N, Kitasato Y, Iijima K, Koike T, Omura N, Nomura T, Kawamura O, Ohara S, Ozawa S, Kinoshita Y, Mochida S, Enomoto N, Shimosegawa T, Koike K. Evidence-based clinical practice guideline for gastroesophageal reflux disease 2021. *J Gastroenterol* 2022 Apr; 57 (5): 267-285.
- ④Genda T, Ichida F, Tanaka E, Mochida S, Ueno Y, Terai S, Inui A, Ueda Y, Ohden H, Egawa H, Umeshita K, Furulawa H, Inomata Y. Allograft liver failure awaiting liver transplantation in Japan. *J Gastroenterol* 2022; 57 (7): 495-504. doi: 10.1007/s00535-022-01880-w.
- ⑤Sato A, Imai Y, Uchiya H, Uchida Y, Nakazawa M, Sugawara K, Nakayama N, Mochida S. Two cases of intraabdominal bleeding caused by hepatocellular carcinoma rupture soon after the initiation of chemotherapy with lenvatinib. *Inten Med* 2022 Aug; 61 (15): 2301-2305.
- ⑥Takehara T, Izumi N, Mochida S, Genda T, Fujiyama S, Notsumata K, Tamori A, Suzuki F, Suri V, Mercier R-C, Matsuda T, Matsuda K, Kato N, Chayama K, Kumada H. Sofosbuvir-velpatasvir in adults with hepatitis C virus infection and compensated cirrhosis in Japan. *Hepatol Res* 2022 Oct; 52 (10): 833-840. doi: 10.1111/hepr.13810.
- ⑦Shimizu K, Ito T, Irisawa A, Ohtsuka T, Ohara H, Kanno A, Kida M, Sakagami J, Sata N, Takeyama Y, Tahara J, Hirota M, Fujimori N, Masamune A, Mochida S, Enomoto N, Shimosegawa T, Koike K. Evidence-based clinical practice guidelines for chronic pancreatitis 2021. *J Gastroenterol* 2022 Oct; 57 (10): 709-724.
- ⑧Kumagai K, Mawatari S, Moriuchi A, Oda K, Takikawa Y, kato N, Oda S, Inoue K, Terai S, Genda T, Shimizu M, Sakaida I, Mochida S, Ido A. Early-phase prothrombin time international normalized ratio in acute liver injury indicates the timing of therapeutic intervention and predicts prognostic improvement. *Hepatol Res* 2023 Feb; 53 (2): 160-171.
- ⑨持田 智, 中山伸朗, 寺井崇二, 吉治仁志, 清水雅仁, 井戸章雄, 井上和明, 玄田拓哉, 滝川康裕, 高見太郎, 加藤直也, 阿部雅則, 安部隆三, 乾あやの, 大平弘正, 笠原群生, 茶山一彰, 長谷川潔, 田中 篤. わが国における acute-on-chronic liver failure (ACLF) とその関連病態の診断基準: 肝臓 2022; 63 (5): 219-223.
- ⑩Inokuma A, Takahara N, Ishibashi R, Hakuta R, Ishigaki K, Saito K, Saito T, Hamada T, Mizuno S, Yagioka H, Takahashi S, Kogure H, Sasaki T, Hirano K, Ito Y, Isayama H, Nakai Y, Koike K, Fujishiro M. Comparison of novel large-bore and conventional-bore covered self-expandable metal stents for malignant gastric outlet obstruction: Multicenter, retrospective study. *Dig Endosc.* 2023 Jan;35(1):111-121.

【総数：論文 37 件、学会発表 44 件、講演 84 件】

6-2. 獲得研究費

<持田 智>

1. 厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患政策研究事業）「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究」班：「劇症肝炎分科会」分科会長（平成23年度から）
2. AMED（肝炎等克服政策研究事業）「C型肝炎ウイルス排除治療による肝硬変患者のアウトカムに関する研究開発」班，分担研究者（令和元年度から）
3. AMED（肝炎等克服緊急対策研究事業）「がん化学療法および免疫抑制療法中のB型肝炎ウイルス再活性化予防対策法の確立を目指したウイルス要因と宿主要因の包括的研究」班：「免疫抑制療法分科会」分科会長（平成24年度から）

<内田 義人>

1. 厚生労働科学研究費補助金（肝炎等克服政策研究事業）「新たな手法を用いた肝炎ウイルス検査受検率・陽性者受診率の向上に資する研究」班，分担研究者
2. 厚生労働行政推進調査事業費補助金（肝炎等克服政策研究事業）「非ウイルス性を含めた肝疾患のトータルケアに資する人材育成等に関する研究」班，分担研究者
3. AMED（肝炎等克服実用化研究事業）「次世代シーケンス技術を用いたC型肝炎の直接作用型抗ウイルス薬による治療後病態に影響をおよぼす因子に関する研究」班，分担研究者

6-3. 受賞

特記すべき事項なし

6-4. 特許，実用新案

特記すべき事項なし

6-5. 学会, 研究会, セミナー等の開催実績

「5-3. その他: 社会あるいは医学的貢献に関わる業務」を参照

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

埼玉医科大学病院の消化器内科・肝臓内科は、埼玉県西北部地区(人口約120万人)の2次医療機関であるとともに、県下全体(人口約720万人)における3次医療機関として、肝・胆道、膵、消化管疾患の診療を担当している。このため、令和4年度はCOVID-19蔓延下でも難治性症例数は多く、医員は一致団結して最先端の医療を推進した。これら診療による成果は、卒前、卒後医学教育に反映させるとともに、基礎的、臨床的および疫学的研究にも反映させた。令和4年度は「急性肝不全, acute-on-chronic liver failureの全国調査による実態解明」, 「C型肝炎ウイルス排除後の門脈圧亢進症の動態」, 「肝発癌抑制を目指したB型肝炎の治療法」, 「免疫抑制・化学療法によるHBV再活性化の実態と課題」などに関して、新規知見を発信した。また、胆道・膵疾患の内視鏡検査・治療にも診療、研究の範囲を拡充することができた。さらに、COVID-19蔓延下でもWebを併用したHybrid方式で、肝臓病教室、市民公開講座、医療従事者およびメディカルスタッフの研修会など社会的活動も令和3年度までと同様に実施し、埼玉県全体を対象とした医学教育業務も遂行できた。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

令和4年度の経験に基づいて、診療、研究、教育の質向上に努めていく。特に、今年度は肝癌の治療体系が大きく変化しており、その領域でのactivityを高めることが重要になっている。診療実績を反映させた研究および教育に関しても、前年度と同様に多くの成果を得られることが期待されるが、これらに関してactivityが低い医員も存在し、全員が診療以外の業務にも邁進できるようにするのが課題である。今年度は第29回門脈圧亢進症学会総会の開催を担当し、全ての医員がその運営に関与する。これを契機に全員のactivityが向上することを期待している。

1. 2) 消化管内科

1. 構成員

今枝 博之 (IMAEDA, Hiroyuki) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長・総合診療内科兼任、教育副主任、研究主任、代表指導教員 (大学院) : 消化器病学・消化器内視鏡学 : 博士

都築 義和 (TSUDUKI, Yoshikazu) : 教授 : 副診療部長・総合診療内科兼任、研究副主任、代表指導教員 (大学院) : 消化器病学・消化器内視鏡学 : 博士

鏡学 : 博士

大庫 秀樹 (OHGO, Hideki) : 講師 : 総合診療内科兼任 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 消化器病学・消化器内視鏡学 : 博士

宮口 和也 (MIYAGUCHI, Kazuya) : 助教 : 外来医長 : 総合診療内科・消化器内科・肝臓内科兼任 : 消化器病学・消化器内視鏡学

植村 隼人 (UEMURA, Hayato) : 助教 : 外来医長 : 消化器内科・肝臓内科兼任 : 消化器病学・消化器内視鏡学・肝臓病学

倉田 隼斗 (HAMADA, Hayato) : 助教 : 消化器内科・肝臓内科兼任 : 消化器病学・消化器内視鏡学・肝臓病学

2. 教育

2-1. 目的・目標

消化管疾患に関わる専門的知識と診療技術、さらに消化器内視鏡による診断、治療の知識と技術を習得すること。

2-2. 教育内容 (担当者)

卒前教育では、3年生の診療の基本 (今枝)、消化器 (今枝)、4年生の救急・麻酔 (今枝) の講義 (WEB 配信) を担当した。今枝が3年生の診療の基本のユニットサブディレクターを担当した。大庫は OSCE を担当した。卒試問題を今枝と都築が作成した。総合診療内科における消化器診療と消化器内視鏡診療において BSL および CC を担当したが (今枝、都築、大庫)、新型コロナウイルス感染の影響のため、クルズスなどを行った。6年生の担任を担当したが (今枝)、新型コロナウイルス感染の影響のため、情報交換会はできず、適宜、進捗状況や健康面、心身面について短時間での面談を行って確認した。

卒後教育では、総合診療内科にローテートしてきた初期臨床研修医に対して、消化器診療と消化器内視鏡診療について教育・指導を行った (今枝、都築、大庫)。スタッフ間では内視鏡読影会 (毎週1回)、症例カンファレンス (毎週3回) を定期的で開催した。

2-3. 達成度評価

学生、研修医ともに病歴聴取、身体所見のとり方、診断・治療の進め方などの基本的事項を教育した。講義、BSL、CC ともに少ないスタッフで対応したが、基本的知識と診療技術を繰り返し指導する余地がある。また、新型コロナウイルス感染の影響のため、講義はWEB配信のみであり、学生との直接の対話はできなかった。6年生の担任となっていたが、情報交換会ができないため、適宜、進捗状況や健康面、心身面について勉強部屋を訪問して面談した。

2-4. 次年度改善計画

次年度は、新型コロナウイルス感染の影響が軽減されることが予想されるが、感染対策の徹底を継続した状況の下で、①学生に対する講義や実習ではよりいっそう臨床に即した内容とすることにより、国試対策にもつながるものとする。②6年生の担任として卒業試験、国家試験合格に向けて勉学の面と心身の面でサポートする。③研修医教育として実際の患者さんに対する接遇から、消化器疾患の診断のプロセス、治療を指導する。④消化器内視鏡担当医には内視鏡検査や治療を直接指導するとともに、内視鏡カンファレンスおよびチームカンファレンスを定期的で開催することによりレベルアップに努める。

3. 研究

3-1. 目的・目標

日常診療より生じてきた疑問や問題点を研究テーマとし、得られた成果が日常臨床に貢献できることを目標に研究活動を行う。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト)

① 消化器内視鏡を用いた診断、治療に関する臨床研究

- 潰瘍性大腸炎患者の内視鏡的腸管粘膜炎症とバイオマーカーの相関に関する前向き研究
- LCI を用いた大腸内視鏡による大腸腺腫検出率における人工知能の有用性の検討
- 大腸憩室出血に対するロングフード vs ショートフードを用いた内視鏡検出率の無作為化比較試験
- 大腸憩室出血に対するロングフードと開閉式クリップを用いた内視鏡的止血術の検討
- 潰瘍性大腸炎に対する血球成分除去療法のステロイド治療への上乗せ効果の検討
- 好酸球性消化管疾患の臨床像と治療の検討
- 抗血栓薬服用患者における大腸 EMR 後出血の検討
- 化学療法関連腸炎の臨床像と治療の検討
- 超拡大内視鏡観察による血管拡張病変の検討
- 抗血栓薬服用患者における経皮内視鏡的胃瘻造設術後出血の検討

② 多施設共同研究への参加

- ヘリコバクター・ピロリ菌除菌症例の全国前向き調査—全国除菌レジストリー
1. 特発性消化性潰瘍の実態調査 : 多施設後向き共同研究
- m. 血液透析患者における小腸カプセル内視鏡の有効性に関する多施設共同前向き研究
- n. クロウン病に対する生物学的製剤による小腸粘膜治癒検討 (SEBIO study)
- o. アジア地域のセリアック病患者の割合を推定するための試験的調査
- p. 入院を要する活動性潰瘍性大腸炎に対する治療エビデンスの構築

3-3. 達成度評価

b, c, e, は終了。研究にエントリーする目標数に順調に進んだが、中には目標数に達成できず、研究を終了したものもある。終了した研究においてはデータをまとめて学会発表や論文の作成を行う予定である。昨年度終了した研究のうちいくつかは論文もアクセプトされた。ほかの臨床研究で終了したものは論文を作成し、投稿中である(p)。以上より本年度の目標については、ある程度は達成できたと評価する。

3-4. 次年度計画

次年度も常に日常診療における疑問点を研究テーマとして検討して、臨床研究として計画、実行する。終了した研究テーマに関してはその成果を学会発表、論文作成を行うとともに、臨床にフィードバックして診療に役立つよう努める。また、炎症性腸疾患など多施設共同研究にも積極的に参加することにより最先端の診療に携わり、新たな知識を習得するとともに日常診療にフィードバックする。

4. 診療

消化管疾患を中心とした診療を行い、消化器内視鏡を用いた診断、治療を施行している。また、最新の治療を取り入れた炎症性腸疾患診療に力をいれている。しかし、今年度も新型コロナウイルス感染の拡大、蔓延下の状況であったが、初診外来患者数は943人、外来患者数は13,303人、1日平均外来患者数は42.0人と前年度より増加し、内視鏡検査も3,456件(全体の29.7%)と増加した。感染予防対策を徹底して診療を継続し、電話再診や初診電話予約枠を取り入れ、また、内視鏡の予約変更も来院せずに電話で対応し、外来患者の感染予防および患者サービスに心がけた。今年度の病院の骨太でもある逆紹介率の向上に務めるとともに、患者待ち時間の短縮に心がけた。

今枝が内視鏡センター長を兼任し、主に消化管内科医師が内視鏡センターをマネジメントしている。消化管内科の外来診療において内視鏡検査・治療を迅速に対応している。拡大内視鏡を用いた精密検査や経鼻内視鏡や大腸カプセル内視鏡などの低侵襲検査も積極的に導入した。大腸ポリープ切除も小病変は外来で積極的に切除した。さらに、内視鏡的止血や早期消化管癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術にも対応し、胃瘻造設術、バルーン小腸鏡、消化管ステント留置術なども施行した。新しい内視鏡手技や高度な内視鏡手技も積極的に導入し、安全に施行した。また、炎症性腸疾患患者に対して新規薬剤を積極的に導入することにより、難治例にも対応した。

入院が必要な場合には、総合診療内科または消化器内科・肝臓内科に入院し、兼担としてそれぞれの科の主治医と一緒に診療を行った。総合診療内科病棟では常時消化器疾患患者15~20名と消化器内科・肝臓内科病棟では約5名の患者の診療にあたった。

次年度は指導体制をさらに整備して、新型コロナウイルス感染予防の対策を継続しつつ、より安全、確実な内視鏡診療とともに全体のレベルアップに努める。また、最新の医療情報を収集して難病疾患である炎症性腸疾患を含めた消化管疾患に対する最適な診療を提供できるように努める。今年度も逆紹介率の向上に努め、患者待ち時間の短縮にも心がける。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

今枝：埼玉県生活習慣病検診管理指導協議会委員

都築：厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業 「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」(久松班)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

今枝：編集委員：World Journal of Gastroenterology、日本腹部救急医学会、PEG・在宅医療学会、Progress of Digestive Endoscopy

今枝：査読委員：Gastrointestinal Endoscopy, Endoscopy International Open, Journal of Gastroenterology, Digestive Endoscopy, DEN Open, Journal of Gastroenterology and Hepatology, Digestive Disease and Science, Clinical Journal of Gastroenterology, Digestion、日本消化器内視鏡学会雑誌

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

今枝：日本消化器病学会財団評議員、日本消化器病学会関東支部評議員、日本消化器内視鏡学会社団評議員、日本消化器内視鏡学会関東支部運営顧問・評議員、日本消化器内視鏡学会埼玉部会理事、日本腹部救急医学会・学会評議員、総務委員会委員・編集委員会委員、日本胃癌学会代議員、日本消化管学会理事・規約委員会委員長・人事委員会委員・カリキュラム検討部会委員、日本カプセル内視鏡学会理事・規約委員会委員長・広報委員会委員、PEG・在宅医療学会理事・編集委員、日本小腸学会理事・利益相反・倫理委員会委員、日本大腸検査学会評議員、日本小児内視鏡研究会幹事

都築：日本消化器病学会評議員、日本消化器病学会関東支部評議員、日本消化器内視鏡学会関東支部評議員、日本消化管学会代議員、日本微小循環学会理事

大庫：日本消化器病学会関東支部評議員、日本消化器内視鏡学会関東支部評議員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1. Miyaguchi K, Tsuzuki Y, Hirooka N, Shiomi R, Ashitani K, Ohgo H, Nakamoto H, Imaeda H. Endo-wing versus transparent hood-assisted colonoscopy for colorectal adenoma detection: A randomized controlled trial. J Gastroenterol Hepatol 37(4):766-772, 2022
2. Miyaguchi K, Tsuzuki Y, Imaeda H. Amoebic colitis rapidly diagnosed by endocytoscopy. Dig Endosc 34(3): e42-e43, 2022
3. Miyaguchi K, Mizuide M, Tanisaka Y, Fujita A, Jinushi R, Hiromune K, Ogawa T, Saito Y, Tashima T, Mashimo Y, Imaeda H, Ryozaawa. Distinguishing the papilla of Vater during biliary cannulation using texture and color enhancement imaging: A pilot study. DEN Open. 2022 May 15;3(1):e125

4. 青柳龍太郎、草野 武、大庫秀樹、金 玲、石澤圭介、山田健人、茅野秀一、宮川義隆、中元秀友、今枝博之. 多彩な所見を呈した消化管 mantle cell lymphoma の一例. Prog Dig Endosc 101 (1): 45-47, 2022.12
5. Kato, M, Hosoe N, Gotoda T, Kusano C, Kuramochi M, Yoshida H, Kimoto Y, Okamura Y, Imaeda H, Ito T, Miyamoto Y, Horii T, Mori H, Morohoshi Y, Ohno A, Kishino Y, Kubosawa Y, Yoshimura K, Yahagi N, Kanai T. Treatment with vonoprazan for 3 weeks is not inferior to 8 weeks for the management of gastric ESD: a multicenter noninferiority randomized study. J Gastroenterol. 2023 Feb 13. doi: 10.1007/s00535-023-01966-z. Online ahead of print.
6. Tsuzuki Y, Shiomi R, Matsumoto H, Miyaguchi K, Kusano T, Ohgo H, Nakamoto H, Imaeda H. Combined effects of granulocyte and monocyte adsorption apheresis and corticosteroids on ulcerative colitis. J Clin Biochem Nutr. 2023 Jan;72(1):68-73
7. Miyaguchi K, Tsuzuki Y, Ichikawa Y, Shiomi R, Ohgo H, Nakamoto H, Imaeda H. Positive zinc intake and a Japanese diet rich in n-3 fatty acids induces clinical remission in patients with mild active ulcerative colitis: a randomized interventional pilot study. J Clin Biochem Nutr. 2023 Jan;72(1):82-88.
8. Matsumoto K, Miyaguchi K, Tsuzuki Y, Imaeda H. Regression of colorectal mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma without Helicobacter pylori infection after eradication therapy. Gastrointest Endosc. 2022 Dec 23:S0016-5107(22)02228-3. doi: 10.1016/j.gie.2022.12.018. Online ahead of print.
9. Miyaguchi K, Tsuzuki Y, Imaeda H. AdvanCE, a capsule endoscope delivery device, is effective in investigating a waterfall stomach. JGH Open 2023 Feb 1;7(2):165-166
10. Miyaguchi K, Yamaguchi H, Tsuzuki Y, Tokita H, Matsumoto H, Ohgo H, Ban S, Nakamoto H, Imaeda H. Duodenal gastric-type neoplasm with uncertain malignant potential in a lipoma. Clin J Gastroenterol. 2023 Mar 3. doi: 10.1007/s12328-023-01774-1. Online ahead of print.

【総数：論文 10件、学会発表 29件、著書 17件】

6-2. 獲得研究費

該当なし。

6-3. 受賞

該当なし。

6-4. 特許、実用新案

該当なし。

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし。

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育においては、新型コロナウイルス感染の影響でWEBによる講演が中心となり、また、6年生との面談も制限されて、予定通りには遂行が困難となった。研究においては概ね目標は達成され、前年度と比較してそれぞれの領域でより多くの成果が得られた。診療に関しても外来患者数、内視鏡検査数が増加して、検査予約や診療のすばやい対応を心がけた。また、外来患者における内視鏡検査や外来診療の予約変更を電話で対応するようにして患者サービスに心がけた。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度は、今年度以上に教育体制を整備して卒前教育、卒後教育を実りある内容となるよう努める。常に日常診療における疑問点を研究テーマとして検討して、臨床研究として計画、実行していくとともに、臨床にフィードバックして診療に役立つよう努める。臨床研究のデータをまとめて積極的に学会発表とともに論文作成を行う。また、診療に関しては新型コロナウイルス感染予防に努めることを継続し、患者さんに安全、安心、確実な診療を提供できるように心がける。そして、さらに逆紹介率の向上と患者待ち時間の短縮に務める。

1. 3) 心臓内科

1. 構成員

山本 啓二 (YAMAMOTO, Keiji) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 循環器病学、心不全、動脈硬化 : 博士

飯田 慎一郎 (IIDA, Shinichiro) : 准教授 : 総合診療内科・内分泌内科・糖尿病内科兼担 : 診療副部長、外来医長 : 教育副主任 : 研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 循環器病学、心不全、高血圧、糖尿病 : 博士

菅野 龍 (KANNO, Ryu) : 助教 : 総合診療内科兼担 : 医員 : 循環器病

草野 武 (KUSANO, Takeru) : 助教 : 総合診療内科・内分泌内科・糖尿病内科兼担 : 医員 : 循環器病

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

循環器病の基本的な知識と診療技術を習熟すること。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育では、Pre-CC (山本 1 単位) では胸部 (心臓) 診察、3 年診療の基本 (山本 1 単位 : 生体機能検査 2, 飯田 1 単位 : 呼吸困難・息切れ, 菅野 1 単位 : 胸痛)、3 年循環器の講義 (山本 1 単位 : 心膜疾患・心臓腫瘍・外傷)、4 年救急・麻酔の講義 (山本 1 単位 : 急性冠症候群 (不整脈を含む))、6 年特別演習 (飯田 1 単位 : 胸痛)、6 年医療総論の講義 (山本 1 単位 : 治験、ヘルシンキ宣言等)、6 年心臓・脈管疾患の講義 (山本 1 単位 : 感染性心内膜炎) を担当した。総合診療内科における循環器外来・入院診療において BSL およびクリニカルクラークシップを行った (山本、飯田、菅野)。山本は 2 学年小委員会委員、5 年アドバイザーを務めた。飯田は OSCE 評価者を務めた。

卒後教育では、総合診療内科にローテートしてきた初期臨床研修医に対して、循環器外来・入院診療について教育・指導を行った (山本、飯田、菅野)。山本は内科研修委員会委員長を務め、内科専攻医 34 名に対し全般的な教育・指導を行い、心エコーの手技を指導した。

2-3. 達成度評価

卒前・卒後教育では、学生、研修医ともに病歴聴取、身体所見のとり方、心電図所見、心エコー所見などの基本的事項は、さらに習練する余地がある。

2-4. 次年度改善計画

卒前・卒後教育では、講義、BSL、研修医指導ともに少ないスタッフ、不十分な環境のなかで、予想以上に努力したが、基本的知識と診療技術を繰り返し指導する余地がある。次年度も引き続き、循環器病学の基本的知識・技術などの教育を徹底するようにしたい。コメディカルを対象に心不全療養指導士を育成する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

日常診療より生じてきた疑問や問題点を研究テーマとし、得られた成果が日常臨床に貢献できること。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

心不全 : 高齢者心不全の特徴と治療法について解析を行い、在院日数を短縮できる最適な治療法を見出し、心不全における集学的治療による症状改善度や入院日数短縮への影響を検討した。新規心不全治療薬の有用性を検討した。さらに新規心不全の投与率を解析した。

肺高血圧 : 肺高血圧の病態や薬剤による肺高血圧への影響を右心カテーテル (スワン・ガンツカテーテル) 検査や心エコー検査により解析した。

心房細動 : 心房細動に対する薬剤の影響を検討した。

3-3. 達成度評価

心不全 : 達成度 70%

肺高血圧 : 達成度 80%

心房細動 : 達成度 60%

3-4. 次年度改善計画

高齢者心不全における貧血・腎機能と治療法や在院日数との関連の検討、および心不全における集学的治療による症状改善度や入院日数短縮への影響の検討は不十分で、今後も検討する余地がある。また、次年度も心不全患者における tolvaptan 導入やランジオロール、サクビトリルバルサルタン、SGLT2 阻害薬などの新規治療薬の有効性・安全性を検討する。

右心カテーテル (スワン・ガンツカテーテル) 検査や心エコー検査を行い、肺高血圧の病態や薬剤による肺高血圧への影響の解析を継続する。

次年度心不全、肺高血圧、心房細動に関する研究を続けるとともに、COVID-19 感染症における不整脈について研究を行う。

4. 診療

総合診療内科の一部として、循環器疾患に対して総合内科的な診かたを診療の基本とし、的確かつ迅速な治療を行い、大学病院における循環器診療を充実させ、地域医療に貢献することを目標とした。心臓内科入院患者数は 130 例であつ

た。入院患者の基礎心疾患は虚血性心疾患、心不全、不整脈、静脈血栓塞栓症などで、Holter 心電図 890 件、経胸壁心エコー7153 件、経食道心エコー24 件を施行・判読した。冠動脈 CT 検査は 95 件、薬物負荷心筋シンチ検査は 45 件行った。肺循環を解析するための右心カテーテル検査は 12 例行った。大学病院の循環器疾患入院患者数、循環器検査数は新型コロナウイルス感染拡大前に復した。次年度は、循環器疾患入院患者数及び負荷心筋シンチ、冠動脈 CT 検査、右心カテーテル検査などの循環器検査数を増やし、循環器診療のさらなる充実を目指したい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本心臓病学会学術集会演題の査読。

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本動脈硬化学会評議員、日本心不全学会評議員、日本心血管内分泌代謝学会評議員、日本循環器学会関東甲信越地方会評議員、日本心臓病学会特別正会員（山本）。日本高血圧学会特別正会員（飯田）。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①野村和弘、諸貫孝久、飯田慎一郎、山本啓二。急性肺血栓塞栓症にて肺動脈内に血栓を描出しえた 1 例。第 47 回日本超音波検査学会、東京、2022 年 5 月 29 日。
- ②草野 武、斎藤雅也、青柳龍太郎、菅野 龍、飯田慎一郎、山本啓二。余剰腱索との鑑別を要する索状構造物を認めた感染性心内膜炎の 1 例。第 264 回日本循環器学会関東甲信越地方会、2022 年 6 月 4 日。
- ③斎藤雅也、草野 武、青柳龍太郎、菅野 龍、飯田慎一郎、山本啓二。孤立性内臓動脈解離(腹腔動脈、脾動脈、総肝動脈-固有肝動脈)の 1 例。第 264 回日本循環器学会関東甲信越地方会、2022 年 6 月 4 日。
- ④Wada T, Yokota K, Iida S, Kanno Y, Shinozuka N, Sato K, Asanuma Y, Yamamoto K, Mimura T. Transition from Epoprostenol to Selexipag in a Patient with Systemic Sclerosis and Pulmonary Hypertension during the Postoperative Period of Colon Cancer Surgery: A Case Report. J Scleroderma Relat Disord 7:NP4-NP8, 2022.
- ⑤山本啓二。循環器疾患の話題。がんと循環器疾患について考える会、2022 年 7 月 6 日。
- ⑥青柳龍太郎、小林威仁、多田充徳、叶賀 卓、飯田慎一郎、内山昌秋、山本啓二、中元秀友。人工知能解析を用いたウェアラブル機器による推定血圧・脈拍モニタリングシステムの開発。第 44 回日本高血圧学会、2022 年 10 月 16 日。
- ⑦浜田芽衣、飯田慎一郎、松井拓也、金 玲、山口 浩、石澤圭介、草野 武、山田健人、佐々木 惇。肺高血圧症を合併した全身性アミロイドーシスの 1 剖検例。第 68 回日本病理学会秋期特別総会、2022 年 11 月 17 日。
- ⑧Nakamura Y, Itoh Y, Kanno R, Iida S, Yamamoto K. Successful treatment with borteomib for POEMS syndrome, overcoming complicated severe heart block. Clin Case Rep 11:e7004, 2023.
- ⑨時田 一、飯田慎一郎、青柳龍太郎、宮口和也、神山雄貴、宇野天敬、小川朋哉、松本 悠、小林威仁、鈴木朋子、山本啓二、中元秀友。高齢者の Clinical Frailty Scale と予後に関する研究。第 13 回日本腎臓リハビリテーション学会、2023 年 3 月 18 日。
- ⑩小林威仁、青柳龍太郎、多田充徳、叶賀 卓、時田 一、堀内 優、松井拓也、宇野天敬、斎藤雅也、草野 武、飯田慎一郎、内山昌秋、鈴木朋子、山本啓二、中元秀友。より良いリハビリ診療を目指して AI 解析を用いたウェアラブル機器による経時的血行動態把握の可能性と未来。第 13 回日本腎臓リハビリテーション学会、2023 年 3 月 19 日。

【総数：論文 4 件、学会発表 8 件、講演 2 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし。

6-3. 受賞

該当なし。

6-4. 特許、実用新案

該当なし。

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第 39 回病診連携スキルアップセミナー、2023 年 1 月 19 日。

第 28 回新鎌北湖カンファレンス、2023 年 3 月 29 日。

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

大学病院の循環器入院患者数、循環器系検査数は新型コロナウイルスの感染拡大前に復した。当科は少人数のため、徐々に診療・教育・研究を充実させた。本学国際医療センター心臓センターとの病診連携は同センターのご配慮で、非常にスムーズであった。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

次年度、地域医療連携を重視し、大学病院の循環器診療・教育・研究をさらに充実させる。

1. 4) 呼吸器内科

1. 構成員

永田 真 (NAGATA, Makoto) : 教授 : 運営責任者、診療部長、代表指導教員 (大学院) : アレルギー・臨床免疫 : 博士
仲村秀俊 (NAKAMURA, Hidetoshi) : 教授、診療副部長、教育主任、指導教員 (大学院) : 呼吸生理、感染症 : 博士
杣 知行 (SOMA, Tomoyuki) : 教授、研究主任、指導教員 (大学院) : アレルギー・臨床免疫 : 博士
中込一之 (NAKAGOME, Kazuyuki) : 准教授、研修担当医長、教育副主任、指導教員 (大学院) : アレルギー・免疫 : 博士
内田義孝 (UCHIDA, Yoshitaka) : 講師、病棟医長 : アレルギー・肺癌 : 博士
山崎 進 (YAMAZAKI, Susumu) : 助教
宮内幸子 (MIYAUCHI, Sachiko) : 助教
内田貴裕 (UCHIDA, Takahiro) : 助教、外来医長
四宮 俊 (SHINOMIYA, Shun) : 助教
相馬真智香 (SOMA, Machika) : 助教
赤上 巴 (AKAGAMI, Tomoe) : 助教
家村秀俊 (IEMURA, Hidetoshi) : 助教
星野佑貴 (HOSHINO, Yuki) : 助教
佐藤秀彰 (SATO, Hideaki) : 助教
片山和紀 (KATAYAMA, Kazuki) : 助教
関谷 龍 (SEKIYA, Ryu) : 助教
小須田 彩 (KOSUDA, Aya) : 助教
正木健司 (MASAKI, Kenji) : 助教
石井玲奈 (ISHII, Reina) : 助教
宇野達彦 (UNO, Tatsuhiko) : 助教
橋本尚仁 (HASHIMOTO, Naohito) : 助教
朝戸 健 (Asato, Takeshi) : 助教
早津仁美 (HAYATU, Hitomi) : 助教
野村優介 (NOMURA, Yusuke) : 助教
高原雅和 (TAKAHARA, Masakazu) : 助教
山口剛史 (YAMAGUCHI, Takefumi) : 准教授 : 博士 (丸木記念福祉メディカルセンター 出向中)
白畑 亨 (SHIRAHATA, Toru) : 講師、睡眠呼吸障害、呼吸リハビリテーション : 博士 (海外留学中)
與儀実大 (YOGI, Sanehiro) : 助教 (埼玉医科大学国際医療センター出向中)
内藤恵理佳 (NAITOU, Erika) : 助教 (埼玉医科大学国際医療センター出向中)
宮澤仁志 (MIYAZAWA, Hitoshi) : 実験助手
大村一之 (OHMURA, Kazuyuki) : 大学院生 (保険医療学部 助教)

2. 教育

2-1. 目的・目標

医学部での講義と大学病院での臨床実習および国家試験対策により、呼吸器内科領域の十分な知識を備え、診療の基礎を習得した医師を養成する。卒後は内科専門医、呼吸器専門医およびアレルギー専門医の育成を基本的な目標としている。さらに、研究への参加、学会・論文発表も積極的に勤めている。

2-2. 教育実績

卒前教育 : 医学部 3 年ユニット講義、臨床総論、臨床実習とその間のクルズス等、また 6 年の特別演習 (講義)、2 年生の聴診実習は講師以上の教員を中心に担当した。4 年生に対する 1 学期・夏季休暇中の補講も担当した。助教は特に臨床実習において、実際の指導での中心的な役割を担うとともに、臨床入門、OSCE などを担当し、また短期大学、毛呂病院看護専門学校などでの講義等を担当した。医学部 3 年呼吸器ユニットの講義では、呼吸器領域の基本的医学知識と各疾患の知識、とくに診断・治療法を明確に教示することを目標に掲げた。講義担当者と講義内容の一部見直しをおこなった。なお免疫ユニットにおいてもアレルギー診療の講義を担当した。5・6 年生の臨床実習では、胸部の聴診、画像読影、気管支内視鏡検査や侵襲的治療における実技の見学、及び可能なものについては体験、また受け持ち患者の問診・診察所見の記載、鑑別診断、初期検査計画の立案、外来実習、クルズスと多面的な実地教育を行った。さらに初期研修で必要な基本知識の習得と技能の理解を目標として取り組んだ。6 年特別演習 (講義) では主として国家試験合格を主眼とした実践的な演習講義を行った。担当者は過去 3 年間以上の国家試験問題を詳細に分析して積極的に講義に活用することとした。COVID-19 感染拡大が持続しており、臨床実習での聴診を含む診察や検査など、患者に実際に触れる機会が減少している部分については、本年もクルズスなどで補うように努力した。

卒後教育 : 病棟診療において、初期研修医ならびに後期専修医に対して、チーム構成による診療方式をもちいて質と安全の両者を重視した卒後臨床医学教育につとめた。全体の診療カンファランス (火曜日) に加えて、教授職のサポートのもとに各診療チーム別での小規模カンファランスを毎週 (金曜日) 行って補足し、かつ新患・問題症例等については毎朝ミニ・カンファランスをおこなって臨床教育の補足に努めた。科内での卒後教育プログラムとして、2 週に 1 回のペースでアレルギー専門医取得のためのクルズスを定期的に行った。学内あるいは近隣医療圏などで開催する卒後教育講演会には全国から講師を依頼した。各テーマについて専門医のみならず、研修医、開業医、メディカルスタッフの積極的な参加をいただいております、呼吸器臨床の専門的知識についての講演がなされた。実施された卒後教育講演会は、呼吸器

セミナー、アレルギーフォーラム、埼玉喘息アレルギー研究会、埼玉呼吸療法研究会、埼玉膠原病肺研究会などであって、WEBあるいはハイブリッド形式で開催した。また、内科および呼吸器、アレルギー専門医を目指す専攻医に対して、日本内科学会、日本呼吸器学会、日本アレルギー学会等の学術講演会において、症例報告、研究報告を積極的に行うよう指導している。

大学院：当科研究室においては免疫・アレルギー学的実験手法を活用した研究指導を行った。好酸球等の免疫担当細胞の浸潤機構あるいは活性化機序についての実験指導を行った。また重症喘息における気道炎症病態の臨床的研究と、アレルギー免疫療法の基礎的研究等を行い、すべての大学院生たちには日本呼吸器学会あるいは日本アレルギー学会、また国際喘息学会等での発表機会を与えた。また、保険医療学部の大村は当科大学院生として、睡眠呼吸障害に対する鼻腔通気度と唾液アミラーゼ濃度測定の有用性に関する臨床研究を開始し、次年度以降の学会、論文発表を目指している。

2-3. 達成度評価

臨床実習においては、学生からは高評価のフィードバックを受けており、卒前医学教育での必要な目的は達成できていると考える。医学部講義では、6年（国家試験対策を主眼とした講義）でベストティーチャー賞を輩出できるなど、概して高評価であった。とくに3年生対象の講義内容について、必要部分についての強化と不必要部分を整理し、講義のバージョンアップを継続している。卒後教育も大学院教育で多くの発表業績をあげられたこと、また講演会等で若手医師の関心が高いテーマを取り上げることなどで、一定水準以上を達成できた。

2-4. 次年度改善計画

COVID-19 パンデミックによる臨床実習の中断や縮小は、臨床現場での経験の不足をもたらした。次年度での収束が期待されるが、感染対策を継続しながら、昨年度を上回る内容の臨床実習を学生に体験させることが重要と考える。卒前教育において当科はおおむね目標を達成できたが、医師国家試験対策については、引き続き近年の医師国家試験の傾向を十分に鑑みた試験問題作成について教員の間で情報を共有し、より実践的な問題を作成すべく質的向上を図る。それに対応した講義内容へのバージョンアップも継続する。卒後（大学院教育を含む）教育については、当科医師も COVID-19 入院患者の診療や発熱外来にも携わってきており、貴重な臨床経験となっている。本院呼吸器内科ならではのアレルギーセンター領域も含んだプログラムとして、外来診療経験、気管支内視鏡手技、カンファランスおよび教授回診でのプレゼンテーション、広範な領域でのクルズや WEB 研究会の活用など、幅広く呼吸器内科の診療実態を経験し、効果的に知識を学習できるようにしたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標

当科は昨年度と同様にサブスペシャリティ専門医を取得する前の年代が中心となっている。本年度も国内の学会総会での発表経験を積むことをベースとする。さらなる十分な数の論文投稿と掲載を目指す。

免疫・アレルギー領域、とくに気管支喘息の病態解析を基礎および臨床面から研究を継続していく。また呼吸生理・慢性閉塞性肺疾患（COPD）ならびに睡眠無呼吸症候群、感染症領域では臨床研究を中心として研究を進展させていく。びまん性肺疾患および呼吸器悪性腫瘍領域は同様に臨床研究を計画・実施している。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）

1. 免疫・アレルギー（永田、柚、中込、内田（義孝）、宮内、家村、内藤、星野、片山、関谷、石井、宇野、朝戸）
2. 呼吸生理・慢性閉塞性肺疾患（COPD）（仲村、白畑、赤上、佐藤、與儀、小須田、正木、野村、早津）
3. 睡眠時無呼吸症候群（SAS）（仲村、宮下客員准教授、白畑、赤上、佐藤、與儀、小須田、正木、野村、早津、大村）
4. びまん性肺疾患（臼井客員教授、永田、仲村、中込、柚、四宮、相馬）
5. 感染症（仲村、中込、内田（貴裕））
6. 呼吸器悪性腫瘍（四宮、内田（貴裕））

3-3. 研究実績

各研究グループで研究資金獲得額を増やし研究の円滑推進に貢献している。文科省競争的獲得研究資金は前年度を継続し、2学会から新たに獲得を増やした。各々中堅医師が独自の研究を進め、学会発表を行っている。また星野が2022年 KACCI（韓国アレルギー学会）より Best Poster award を受賞した。中堅医師が主体となって進める研究が進展し、学会発表数が増加している。論文報告は7編の英文論文を発表しており順調な実績となった。

1. 免疫・アレルギー

本年度は2編の英文原著、2編の英文総説、2編の和文原著を発表した。また和文著書10編と和文総説21編、書籍2編を発表している。海外学会を2発表、国内学会を18発表、学会招請講演を18講演（うち1講演は国際学会）行っている。運営責任者は、代表世話人となり年次開催しているアレルギー・好酸球研究会を開催し、学術雑誌Biomolecularから proceedings を刊行した。

当科の基盤研究テーマとして、好酸球の組織浸潤と活性化機序の新規メカニズムについて、*in vitro* システムでの研究を継続的に行ってきた。本年は好酸球とともに気道炎症に寄与している好中球に関して、細胞外マトリックスタンパク質のペリオスチンが好中球機能活性化に寄与することを Allergology Internataional に発表した。また抗IgE抗体が好中球性気道炎症を修飾すること、ダニによる好酸球および好中球機能活性化を学会で発表した。

上記の基礎研究に加えアレルギー免疫療法のメカニズムなどの基礎的・臨床的研究を行っている。本年度は、アレルギー

ゲン免疫療法メカニズムの一端として末梢血単核球の2型サイトカイン産生抑制効果に関して学会発表した。気管支喘息の臨床研究に関して、気道由来の臨床検体を用いた重症喘息の炎症病態の解析とバイオマーカーによるエンドタイプ解析を継続して行っている。本年度はFeNOと末梢血好酸球をマーカーとした重症喘息のフェノタイプ分類別の気道炎症タイプと治療内容に関してFrontier In Pharmacologyに発表していた。本研究に関連して、星野が韓国アレルギー学会のBest Poster awardを受賞した。また新規サイトカインの気管支喘息における臨床的意義の一端を学会に発表している。

招請講演では、中込が台湾の学会にて重症喘息に関して講演した。

また当科は日本アレルギー学会地方支部の関東支部の運営を継続して行った。

2. 呼吸生理・COPD

本年度は2編の英文原著を発表した。1つは慶應義塾大学と国立栄養研究所との共同研究で、COPD患者の総エネルギー消費量および身体活動性に関する研究である。二重標識水法により測定した総エネルギー消費量を用い、身体活動レベル(PAL)を正確に評価した上で、COPD患者のPALと非運動性熱産生スコアが関連することをScience Progressに論文発表した。もう1つは、COPD患者では血中HDLコレステロール値が体幹筋量と負の相関を、血中LDLコレステロール値がPALと正の相関を示すことをRespiratory Investigationに論文発表した。

また、リハビリテーション科と千歳科学技術大学との共同研究で、Kinectセンサーによる呼吸器疾患患者の運動中の呼吸運動解析の研究を行っている。呼気ガス分析でしか解析できなかった運動中の呼吸運動を、非接触で解析できる画期的なシステムの開発と臨床的な有用性の検証を目指している。今年度は胸部単純X線動態画像を用いた各種呼吸器疾患患者の呼吸動態解析の研究を開始している。次年度はこれらに加え、総合医療センター小児科、当院予防医学センターおよび日本呼吸器学会の形態・機能および閉塞性肺疾患学術部会と連携した出生時体重とCOPD患者の呼吸機能の関係に関する調査研究を進めるため、準備を開始した。

3. 感染症

当科はCOVID-19診療対策チーム参画の一環で、同疾患に対する感染症科、ER科、他内科との共同診療に従事している。昨年度から進めている他科との共同研究として①COVID-19重症肺炎に対する抗炎症治療の有効性に関する後方視観察研究と、他施設との共同研究として②COVID-19重症化の免疫学的解析に基づく予測バイオマーカー探索研究を継続している。また学会主導のCOVID-19感染患者の疫学研究に参加している。

4. SAS

SASの診療と研究についてはセンター制をとっている。2010～2020年にかけて実施したPSGを中心とした大規模なデータの解析を行い、多数の学会発表を行った。今年度は鼻腔通気度とCPAPアドヒアランスの関係に関する研究を進めている。次年度は原発性アルドステロン血症とOSAの関連など、複数診療科での共同研究を企画している。

5. びまん性肺疾患

今年度は2つの間質性肺炎の多施設共同臨床観察研究に参加している。本学生化学教室と共同で、肺疾患患者血液中extracellular vesicle上分子を指標とした診断マーカーの開発に関する研究を開始している。また、ニンテダニブの忍容性とそのリスク因子についての臨床的検討に関し投稿準備中である。中堅医師主導による気管支肺胞洗浄液(BALF)を活用し、BALF上清中各種メディエーターやCyTOFマスサイトメーターによる分離細胞の解析を行い間質性肺炎の病態解析を計画している。そのための保存BALFの整理を継続して行っている。

6. 呼吸器悪性腫瘍

免疫チェックポイント阻害薬による治療が確立し、他薬剤との併用療法が増えているとともに、その副反応に対する関心も高まっている。今年度は血中炎症細胞と免疫チェックポイント阻害薬効果との関連性に関する発表をした。昨年度から各種薬物治療の多施設共同研究に参加しており、現在も2つの試験が継続中である。また、現時点で今年度中に新たに2つの多施設共同研究に参加する予定である。

3-4. 達成度評価

全体の目標達成度は95%と判断する。学会への発表経験は一定数を継続しており、基礎力が伸びていると判断している。その一つの例として今年度も学会発表に対する賞を受賞した。また英文論文の掲載数を堅実に維持している。医局員全員が研究に対する意欲、思考や計画性、実行性を身につけていると判断する。中堅医師による新規の研究を継続している。競争的獲得研究資金の獲得は堅調で、研究の円滑推進に貢献できた。また中堅フェローの研究環境や研究マインド育成が堅実なものへと進展しつつあると判断する。

3-5. 次年度改善計画

次年度は研究志向を高め、研究実行力を付けることを目標とする。

学会発表を継続して医局員全員が行うことを目標とし、論文化の基盤を育成していく。英文論文化を習慣とするように指導し、論文さらなる掲載をめざす。中堅医師主導による新規研究立案と競争的研究資金獲得申請の獲得を目指す。教室全体で競争的研究資金獲得の増加に注力する。

4. 診療

当科は重症あるいは専門的診療を必要とする呼吸器疾患症例を中心に、県内・外の広大な地域からの紹介および救急患者を積極的に受け入れてきた。特に本年度は COVID-19 診療などによって県内の他の呼吸器専門病院でも受け入れが困難とされた患者を積極的に受け入れ、県の特に西部の医療体制保持には大きく貢献したものとする。重症気管支喘息・COPD・各種呼吸器感染症・肺癌・各種間質性肺疾患・睡眠時無呼吸症候群などの入院患者で、病棟は基本的に高率の稼働状態を維持し、また数字には表れにくい重症肺炎例の COVID-19 症例の担当を行い、大学病院の特に呼吸不全を呈する入院症例について併診体制の構築による貢献を果たしたこともふくめて、十分な診療成績をあげたと考える。外来部門「アレルギーセンター」では関連診療科との連携により、アレルギー疾患を患者中心主義に立ち、包括的かつ専門的なアレルギー診療の我が国におけるリーダー的役割を果たしている。肺癌については国際医療センター呼吸器外科・内科と連携し、外来化学療法、また放射線療法は通常と同等以上には診療活動を行っている。全体に当院呼吸器内科の診療機能は充実し、そして地域の中心的存在としての役割を果たしたと考える。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

環境省中央環境審議会専門委員（石綿肺等審査分科会）：仲村
臨床工学技士国家試験 試験委員（仲村）
埼玉県坂戸保健所感染症診査協議会委員（四宮）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

編集委員

Biomolecules：永田

今日の治療指針（アレルギー疾患）：永田

Allergies：中込

Frontiers in Allergy：中込、柚（査読編集）

International Journal of Molecular Sciences：中込

Respirology case reports：中込

査読委員

Journal of Asthma：柚

Ageing research reviews：柚

Experimental gerontology：柚

Microorganisms：柚

Allergology International：柚、中込

Expert Review of Clinical Immunology：柚、中込

Internal Medicine：中込

Respiratory Investigation：中込

Scientific Reports：仲村

Lancet Respir Med：中込

J Allergy Clin Immunol：中込

Biomolecules：中込

International Journal of Molecular Sciences：中込

Frontiers in Immunology：中込

Respirology case reports：中込

アレルギー：柚

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本アレルギー学会：常務理事（永田）、関東支部長（永田）、総務委員会委員長（永田）、専門医制度委員会委員（永田）、医療問題検討委員会委員長（永田）、アレルギー免疫療法委員会副委員長（永田）、アナフィラキシー対策委員会委員（永田）、アレルギー疾患ガイドライン委員会担当理事（永田）、喘息ガイドライン専門部会副委員長（永田）、皮膚テストの手引き作成委員会副委員長（永田）、アレルギー免疫療法の手引き作成委員会委員長（永田）、学術大会プログラム委員会委員（永田、柚）、代議員（永田、仲村、柚、中込）、理事（柚）、選考推薦委員会委員長（柚）、研究推進委員会委員（柚）、学術大会委員会委員（柚）、喘息予防・管理ガイドライン 2021 作成委員（中込）、皮膚テストの手引き作成委員会委員（中込）、アレルギー免疫療法の手引き作成委員会委員（中込）

日本呼吸器学会：理事（永田）代議員（永田・仲村・中込・柚）、アレルギー・免疫・炎症学術部会将来計画委員（永田）、

形態機能学術部会部会長(仲村)、肺生理専門委員会委員(仲村)、国際委員会委員(中込)、COI・倫理委員会委員(杣)、
 専門医認定・更新資格審査委員会委員(杣)、形態機能学術部会プログラム委員(白畑)
 日本喘息学会：理事(永田)、専門医制度委員会委員長(永田)、ガイドライン委員会委員(永田)、広報委員会委員
 (永田)
 日本職業環境アレルギー学会：理事(永田)
 国際喘息学会日本北アジア部会：代議員(永田)
 アレルギー・好酸球研究会：代表(永田)
 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会：理事(仲村)
 日本画像医学会：理事(仲村)
 日本内科学会試験問題作成委員(中込)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- 1) Akagami T, Nakagome K, Takagi S, Yamazaki S, Minezaki S, Nakamura H, Tsushima K, Nagata M. A case of bunashimeji mushroom-induced hypersensitivity pneumonitis diagnosed by inhalational provocation test in a hospital room. *Respirol Case Rep.* 2023 (in press).
- 2) Uchida T, Ishizawa K, Yogi S, Katayama K, Sekiya R, Takahara M, Hoshino Y, Nakagome K, Soma T, Nakamura H, Nagata M. Simultaneous bilateral spontaneous pneumothorax in a patient with anorexia nervosa. *Respir Med Case Rep.* 2023;43:101841.
- 3) Noguchi T, Nakagome K, Iemura H, Shimizu T, Kobayashi T, Ueda Y, Katayama K, Soma T, Nakamoto H, Nagata M. Periostin upregulates the effector functions of neutrophils. *Allergol Int.* 2022 (in press).
- 4) Hoshino Y, Soma T, Uchida Y, Shiko Y, Nakagome K, Nagata M. Treatment resistance in severe asthma patients with a combination of high fraction of exhaled nitric oxide and low blood eosinophil counts. *Front Pharmacol.* 2022;13:836635.
- 5) Nakagome K, Nagata M. Innate Immune Responses by Respiratory Viruses, Including Rhinovirus, During Asthma Exacerbation. *Front Immunol.* 2022;13:865973.
- 6) Soma T, Nagata M. Immunosenescence, Inflammaging, and Lung Senescence in Asthma in the Elderly. *Biomolecules.* 2022;12:1456.
- 7) Shirahata T, Sato H, Yogi S, Inoue K, Niitsu M, Miyazawa H, Akagami T, Soma M, Mio T, Nagata M, Nishida Y, Tanaka S, Katsukawa F, Nakamura H. Possible association of high-density lipoprotein cholesterol levels with trunk muscle deficits and decrease in energy expenditure in patients with or at risk for COPD: A pilot study. *Respir Investig.* 2022;60:720-724.
- 8) Shirahata T, Nishida Y, Sato H, Yogi S, Akagami T, Nagata M, Tanaka S, Nakamura H, Katsukawa F. Impact of non-exercise activity thermogenesis on physical activity in patients with COPD. *Sci Prog.* 2022;105:368504221117064
- 9) 海老澤元宏、永田真、山口正雄、猪又直子、櫻井大樹、関谷潔史、高林哲司、滝沢琢己、長瀬洋之、中原剛士. 日本アレルギー学会 アレルギー総合診療のための分子標的治療の手引き. 日本アレルギー学会. 2022, pp1-36
- 10) 永田 真. Patient-oriented Allergy Science, Patient-centered Allergy Practice, アレルギー 2022;71:1099-1104

【総数：原著論文英文 8 件、学会発表 44 件、学会招待講演 17 件】

6-2. 獲得研究費

文部科学省科学研究費補助金 2 件 (基盤 C : 研究責任者)
 「IL-36 サブファミリーが誘導する non-Type 2 重症気管支喘息病態の解明」(杣)
 「気管支喘息の増悪におけるウイルス感染の役割とその機序を考慮した治療戦略の立案」(中込)
 日本アレルギー学会 JSA WAO 2020 記念 研究助成プログラム
 「アレルギー免疫療法の抑制機序の解明」(中込)
 日本喘息学会 喘息基礎的研究支援プログラム
 「抗ウイルスサイトカイン interferon- λ のマウス好酸球性気道炎症に対する効果」(中込)

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度、診療面では常に満床に近い状態で重症度、医療・看護必要度なども高水準にあるがこれらの指標が下降しないようしつつ、診療のさらなる質的向上を図ることを目標に掲げた。県内外からの重症患者や専門的診療を必要とする症例を中心に、そして特にCOVID-19診療などによって県内の呼吸器専門病院が機能低下に陥り受け入れが困難とされた呼吸器内科領域の患者を積極的に受け入れ、地域医療また高度専門的医療の上での大きな役割を十分に果たしたと評価する。外来部門のアレルギーセンターは、本学の特色のひとつとしてさらに国内他施設にむけての学術的指導能力の向上を図りたいとしたが、紹介患者は日本の多彩な地域から、アレルゲン免疫療法の施行希望例あるいは各種生物学的製剤治療症例などを中心にきており、本学の特色のひとつとして充分機能したと考える。肺癌診療では外来化学療法が円滑に作動し、免疫チェックポイント阻害薬併用化学療法などを含む、高水準での診療を維持することができたと判断する。全体として一定以上の病床稼働率を維持し、診療実績は充分なものであった。数字には表れにくい当科はCOVID-19疑いの肺炎症例の診療を常に背負い、また入院重症例についての併診体制による貢献も行った。医学教育面では国試対策のさらなる充実、学生の高評価の維持、またCOVID-19診療に関する啓発・教育を含め最先端の医学知識を盛り込むことを目標と立てた。医学部講義ではベストティーチャー賞を輩出し、6年での特別演習(講義)も基本的に高評価であり、また臨床実習でも実地面を重視した臨床教育を行い、学生からの評価数値は持続的に高いものであった。COVID-19診療に関しても最新知識について講義に盛り込み、その内容が医師国家試験にも出題されていた。

研究面では免疫・アレルギー、COPD、睡眠時無呼吸症候群などの領域が中心となり、学会・論文発表等は一定の成果を得ることができたと考える。運営責任者が日本アレルギー学会の初代関東支部長に選出されていることも対外的に評価されていた傍証と考える。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

診療面では常に満床以上の状態で重症度、医療・看護必要度なども高水準にあるがこれらの指標が下降しないよう努力しつつ、診療のさらなる質的向上を図りたい。そのために全体診療カンファレンス、国際医療センターから小林国彦教授を招いての肺癌診療カンファレンス、診療部長あるいは副部長がサポートする診療チーム別カンファレンスを毎週開催し診療水準のさらなる向上につとめる予定である。外来部門のアレルギーセンターも埼玉県で唯一のアレルギー疾患拠点医療機関として、市民あるいは医療者の教育・啓発活動などを含めて、引き続き国内最高水準のアレルギー診療の場として責務を果たしたい。また、睡眠呼吸センターについても、県西部における中心的な診療、研究の拠点として、これまで以上の実績を残してゆきたい。

医学教育面について、臨床実習では学生からの評価数値は高いものであって、医学部講義も基本的に高評価であり、その上方への改善の余地がとぼしいためにその維持こそが重要な目標である。さらに、国家試験の合格率に貢献することを最優先としながらも、クルズスなどを含めて最先端の医学知識を盛り込みたい。

研究面では学会・論文発表等は一定の水準に到達しつつあるが、運営責任者等が指導するアレルギー分野、仲村が指導する睡眠無呼吸症候群・COPDの研究チームも質的にも充実してきており、引き続き特に英文原著数の維持、可能であれば増加を図っていくこととしたい。

なお次年度は運営責任者が日本職業環境アレルギー学会の会長をあずかる予定であり、当科のアレルギー分野は本学の特色のひとつとして国内外他施設にむけての学術的指導能力の向上を図りたい。

1. 5) 内分泌内科・糖尿病内科

1. 構成員

- 島田 朗 (SHIMADA, Akira) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 代表指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 (糖尿病, 内分泌代謝疾患) : 博士
- 片山 茂裕 (KATAYAMA, Shigehiro) : 名誉教授 : 内分泌代謝学 (特に高血圧, 糖尿病) : 博士
- 野田 光彦 (NODA, Mitsuhiko) : 客員教授 : 指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 (糖尿病, 内分泌代謝疾患) : 博士
- 稲葉 宗通 (INABA, Munemichi) : 客員教授 : 内分泌代謝学 (特に高血圧) : 博士
- 井上 郁夫 (INOUE, Ikuo) : 教授 (予防医学センター、教職員・学生健康推進センター 兼任) : 診療副部長 : 教育副主任 : 指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 (特に高脂血症) : 博士
- 一色 政志 (ISSHIKI, Masashi) : 教授 (中央研究施設RI部門 兼任) : 研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 (特に内分泌, 高血圧) : 博士
- 及川 洋一 (OIKAWA, Yoichi) : 准教授 : 研究主任 : 研修医長 : 指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 (糖尿病, 内分泌代謝疾患) : 博士
- 栗原 進 (KURIHARA, Susumu) : 准教授 (国際医療センター内分泌・糖尿病内科 兼任) : 指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 (特に糖尿病) : 博士
- 飯田 慎一郎 (IIDA, Shinichiro) : 准教授 (心臓内科 兼任) : 指導教員 (大学院) : 博士
- 安田 重光 (YASUDA, Shigemitsu) : 講師 : 指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 (特に甲状腺、副甲状腺) : 博士
- 池上 裕一 (IKEGAMI, Yuichi) : 講師 : 教育主任 : 医局長 : 指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 (特に糖尿病) : 博士
- 伊藤 大輔 (ITO, Daisuke) : 講師 : 指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 (特に糖尿病) : 博士 (丸木記念福祉メディカルセンター 出向中)
- 中島 理津子 (NAKAJIMA, Ritsuko) : 助教 : 外来医長
- 井上 和之 (INOUE, Kazuyuki) : 助教
- 里村 敦 (SATOMURA, Atsushi) : 助教 : 病棟医長
- 草野 武 (KUSANO, Takeru) : 助教 (総合診療内科 兼任)
- 水谷 元 (MIZUTANI, Gen) : 助教
- 堀越 雄太 (HORIKOSHI, Yuta) : 助教 (麻酔科 兼任)
- 羽井佐 彬文 (HAISA, Akifumi) : 助教
- 高木 荘太郎 (TAKAGI, Sotaro) : 助教
- 鈴木 誠也 (SUZUKI, Seiya) : 助教 (専攻医)
- 柳澤 慎之介 (YANAGISAWA, Shinnosuke) : 助教 (専攻医)
- 中西 俊平 (NAKANISHI, Shumpei) : 助教 (専攻医)
- 遠藤 茉依 (ENDO, Mai) : 助教 (専攻医)
- 清水 英祐 (SHIMIZU, Eisuke) : 助教 (専攻医)
- 藤澤 柁志 (FUJISAWA, Masashi) : 助教 (専攻医)
- 森田 英生 (MORITA, Hideo) : 助教 (専攻医)
- 杉本 駿 (SUGIMOTO, Shun) : 助教 (専攻医)
- 橋本 恭太 (HASHIMOTO, Kyota) : 助教 (専攻医)
- 三井 絵里花 (MITSUI, Erika) : 助教 (専攻医)
- 新井 保久 (ARAI, Yasuhisa) : 非常勤講師
- 相場 美穂 (AIBA, Miho) : 非常勤講師
- 堀井 剛史 (HORII, Takeshi) : 非常勤講師
- 竹中 康浩 (TAKENAKA, Yasuhiro) : 非常勤講師
- 矢野 裕也 (YANO, Yuya) : 非常勤医師
- 佐藤 晴彦 (SATO, Haruhiko) : 研究医員
- 齊藤 太吾 (SAITO, Daigo) : 研究医員 : 博士
- 引間 雄介 (HIKIMA, Yusuke) : 研究医員
- 井内 卓次郎 (IUCHI, Takujiro) : 研究医員 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

「卒前教育」「卒後教育」「大学院教育」

臨床・研究に役立てるため、医学部全学年の卒前および卒後、大学院教育、以上すべてを通し、内分泌代謝学の病態、内分泌代謝疾患の症候・診断・治療を理解させる。

2-2. 教育実績 (教育主任 : 池上裕一、副主任 : 井上郁夫)

「卒前教育」

本年度は新型コロナウイルス感染症に伴う制限が緩和されてきたこともあり、従来の実習に戻りつつある。1年生のZoomによるキャリアデザインインタビューおよび、2年生の医師業務見学実習は引き続き中止となった。今年度から3

年生Pre-CC (clinical clerkship) -1-1と4年生Pre-CC-2-1が再開された。3年生Pre-CC-1-1では、コロナ禍の影響で一部実習が中止となったことで当科での受け入れはなかった。4年生Pre-CC-2-1では2日間の実習で計6名を受け入れた。5年生のCC step1については、隔週6~7名のsmall groupにて実施し、病棟実習、外来見学、新患の受け持ちとプレゼンテーションに加え、1型糖尿病、2型糖尿病、低血糖、脂質代謝異常、高血圧、下垂体、甲状腺・副甲状腺についてクルズス、および75gOGTTの体験実習を行った。令和4年1月18日から開始された4年生CC Step1からは、4~5名で2週間の実習に変更された。そのため、管理栄養士による栄養指導や看護師による患者教育の見学を盛り込んでいる。5年生CC Step2と6年生CC Step3では、それぞれ6名を約1ヵ月間受け入れた。5年生CC Step2ではコロナ禍の影響で一時実習が中断されたが、レポートと補習にて対応した。CC step2、CC step3においては、毎週の症例の受け持ちとプレゼンテーションに加えて、新患外来見学、副腎静脈サンプリング見学、当科疾患のクルズス、臨床研究に関する講義、英語論文の抄読会などを行った。OSCE関係として4年生に頭頸部診察のテュータを7~8名を対象に4コマ(1コマ40分)担当した。4年生共用試験臨床実習前OSCEと6年生共用試験臨床実習後OSCEの学内認定評価者として3~4名が参加した。また、毎年、課外授業プログラムにも参加し、学生を募集している。

「卒後教育」

当科へは毎月4~8名の研修医がローテートしている。教授回診により、病態把握、鑑別診断、治療法選択などについての考え方を学ばせ、週1回の入院患者報告では、毎週水曜日朝8時から11時頃まで、1年を通じて実施し、研修医に症例プレゼンテーションの仕方、まとめ方などを学ばせた。それ以外に毎週チームカンファレンスを行っており、受け持った個々の症例について指導医を交えて検討を重ねた。また、研修医のクルズスは、糖尿病の診断・分類・検査・合併症・治療、脂質代謝、内分泌疾患を、各々月1回ずつ実施した。加えて、毎週1回、水曜日17時から興味ある症例や診断・治療に苦渋した症例を検討し、最新の臨床を体得させ、病態、診断、治療に関する知識を深めさせた。さらに、週1回の最新論文の抄読会により国内外の最新の臨床・研究面でのtopicsを学ばせた。またコロナ禍のためウェブではあるが学会活動への参加を通じて世の中に向けた情報発信の重要性を学ばせた。

「大学院教育」

上記の卒後教育を実施した。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」

内分泌代謝領域に加え、内分泌薬理、内分泌病理、内分泌外科領域、内分泌小児科領域、皮膚科領域、リウマチ科領域、脳外科領域など、内分泌代謝に関わる広範な分野を対象としている。当科担当試験は1名が休学中である。対象は138名。本試に加えて追試、再試と3回実施した。本試、追試、再試を実施して100名合格。最終的に4人が不合格となった。加えて新型コロナウイルス感染症のため1名が再試を欠席し、条件付き進級となった。

「卒後教育」

ローテートしてきた研修医に対する上記の卒後教育を実施した。

「大学院教育」

上記の卒後教育を実施した。

2-4. 次年度改善計画

「卒前教育」

前年度に比し、新型コロナウイルス感染症に伴う制限が緩和されてきたとはいえ、昨年同様、欠席者を多数認めた。新型コロナウイルスワクチン接種による発熱もあり、学生にとっては大変な状況は続いていると思われる。どのような状況でも対応していける力、危機管理対応能力も、医師として重要な能力と思われる。人との係わり方などの修練の場が減るため、医師としての現場での立ち振る舞いや患者さんとの向き合い方について、卒前教育としてもしっかりと教育していく必要性に迫られている。これから対面授業も定着し、本来のあるべき学生同士のコミュニケーションの機会も増えることを望む。講義に関しては、すべての学生からの評価は良好であった。今後も分かりやすく、ポイントをついた授業を行うよう工夫し、更なる向上を図りたい。特に以下を意識した講義を行う。①丸暗記ではなく、病態生理に基づいた学習を中心に置く。②初期研修において想定外の問題に遭遇した時の対応力をつけさせる。③現在、我々は世の中から何を求めているかを示唆する。教科書一辺倒の教育から生きた医学教育、実践力をつける教育に変えていく必要がある。

臨床実習については学生から「プレゼンテーションは初めての経験であり、勉強になった」「クルズスは知識の整理になった」「75gOGTTを通して患者の気持ちがわかった」「糖尿病・内分泌疾患の全体像がつかめた」などの声が挙がっている。今後も多くの症例や手技を実際に経験させ、学ばせることによって知識習得の効率化を図りたい。

「卒後教育」

当科の症例は豊富であり、内分泌代謝領域について十分な研修が行えると思われる。また、研修医へのクルズスについても好評を得ている。

教授回診は例年同様、毎週水曜日朝8時から開始し、年間を通じて実施する予定である。また、研修医のクルズスは、主に内分泌代謝疾患全般について実施予定である。週1回の症例検討会及び抄読会は、最新の臨床のみならず、研究面でのtopicsを含めた知識を深めさせ、特に、活発な意見が飛び交うよう努力したい。

専攻医制度がスタートしており、次年度からはローテートする専攻医に対しても経験症例のフィードバックを中心に教育を行う。

「大学院教育」

大学院に入る学生が激減している中、研究に興味のある若い学生達を啓発し、研究テクニックなど確かな技術を身につけさせたい。また、臨床だけでなく、学問として医学をとらえることのできる学生を多く育てていきたい。特に、特任研究員による専門的指導も検討したい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

内分泌・糖尿病・代謝学の基礎的・臨床的研究を行い、本分野に貢献することを目標に掲げながら日々活動している。令和4年度は、国内の学会発表数を年間15件以上(学内登壇者に限る)、英文雑誌におけるPublication数(症例報告を含む)を年間7件以上(学内筆頭者に限る)という目標を掲げた。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

積極的に学会発表を行い、令和4年度の発表件数は28件(学内登壇者に限る)を数えた。また、論文発表は英文誌7件(いずれも学内筆頭者)であった。

1. 1型糖尿病グループ:

昨年度に引き続き、1型糖尿病ならびにKetosis-prone type 2 diabetes(以下、KPDと称す)の発症に関する免疫学的機序の解明を目標に研究を進めている。また、昨年度に続き、BCGワクチン療法による1型糖尿病の完治の可能性を探るべく、糖尿病患者を対象としたBCGワクチンに関する免疫学的パイロット研究を進めている。

島田朗教授は日本糖尿病学会理事として糖尿病の病型を問わず様々な対外活動を行っている。昨年度と同様「我が国における1型糖尿病の実態の解析に基づく適正治療の開発に関する研究委員会」の委員長として、日本における1型糖尿病の実態に関する全国調査を実施中である。また、令和4年度はわが国における緩徐進行1型糖尿病の新診断基準の策定の責任者として案をとりまとめ、日本糖尿病学会の関連雑誌への誌上報告に尽力した。研究面では、妊娠に関連した1型糖尿病の動物モデルを確立し、Journal of Diabetes Investigationに誌上報告を行った。

及川洋一准教授は令和4年度から大学院生(藤澤証志助教)の指導を開始した。第65回日本糖尿病学会年次学術集会[2022年5月12日~5月14日(神戸;Hybrid開催)]では、「1型糖尿病における抗原特異的免疫応答」と題してシンポジストを務めた。

里村敦助教はKetosis prone Type 2 diabetes (KPD)の免疫学的な病態を明らかにし、その研究成果を第65回日本糖尿病学会年次学術集会で発表した。また、正常耐糖能に復したことを確認したKPDの一例について症例をまとめ、Diabetology Internationalに誌上報告を行った。

羽井佐彬文助教は、ひきつづきHLAならびに抗GAD抗体価に着目した緩徐進行1型糖尿病の病勢に関する研究を行っており、中間解析結果を第65回日本糖尿病学会年次学術集会で発表した。

鈴木誠也助教は、KPDにおける膵外分泌酵素の上昇について研究を進めており、中間解析結果を第65回日本糖尿病学会年次学術集会で発表した。

中西俊平助教は、KPDの病態形成におけるセロトニン代謝の関連について研究を進めており、その中間解析結果を第65回日本糖尿病学会年次学術集会で発表した。

森田英生助教は、1型糖尿病におけるハネムーン期(インスリン必要量の一時的な減少状態)の免疫学的機序について研究を開始した。

遠藤茉依助教は、1型糖尿病の発症時における膵外分泌酵素の上昇メカニズムについて研究を開始した。

藤澤証志助教は大学院に入学し、1型糖尿病におけるHybrid insulin peptideの免疫学的な意義について研究を開始した。さらに、本研究が優れた萌芽的研究であると認められ、第33回落合記念賞を受賞した。

橋本恭太助教は、「COVID-19罹患後に新規発症した急性発症1型糖尿病の1例」と題して第60回日本糖尿病学会関東甲信越地方会[2023年1月28日~1月29日(長野;Hybrid開催)]で症例発表を行った。

佐藤晴彦助教は、DPP4阻害薬が炎症性腸疾患の病勢に与える影響について検討中であり、中間解析結果を第65回日本糖尿病学会年次学術集会で発表した。

2. 2型糖尿病グループ:

「糖尿病予防のための戦略研究」をはじめとする2型糖尿病治療に関するわが国の代表的な多施設共同臨床研究に参加し、2型糖尿病治療の開発に関する研究を進めている。また、患者データの集積による臨床研究や、商業用DPCデータベース/ナショナルデータベースなどの大規模データベースを用いた解析も進めている。また、国立がん研究センターが主導する多目的コホート研究(JPHCコホート研究)における糖尿病研究を推進し、主に糖尿病の予防や合併症などに関する知見を累積し、あわせて、2型糖尿病の原因遺伝子と糖尿病発症との関連についても解析している。さらに、健診コホート、職域コホート研究にも参加している。

主な研究成果としては、栗原進准教授が、「肥満2型糖尿病におけるリラグルチド1.8mgからセマグルチドに変更の長期の有用性と安全性の検討」について、第65回日本糖尿病学会年次学術集会や第43回日本肥満学会・第40回日本肥満症治療学会学術集会[2022年12月2日~12月3日(沖縄;Hybrid開催)]で発表した。

水谷元助教は、「SGLT2阻害薬による下肢切断のリスクについて商業用DPCデータベースを用いて解析し、Journal of Diabetes Investigationに誌上報告を行った。

柳澤慎之介助教は、「当院で経験したCOVID-19(新型コロナウイルス感染症)症例における酸素療法の危険因子の検討」と題して、第65回日本糖尿病学会年次学術集会で発表した。

3. 内分泌グループ：

一色政志教授の指導のもと、高木荘太郎助教が中心となって二次性高血圧として頻度の高い原発性アルドステロン症の機能と局在を確実に評価・診断する技術の向上に特に力を入れており、日本内分泌学会等で発表を積極的に行っている。また、甲状腺の分野では安田重光講師、中島理津子助教を中心に引き続き甲状腺穿刺吸引細胞診の症例を蓄積中である。

主な研究成果としては、安田重光講師が「HLA typing of patients who developed subacute thyroiditis and Graves' disease after SARS-CoV-2 vaccination: a case report」と題して、BMC Endocrine Disorders に症例報告を行った。

井上和之助教は、「くも膜下出血後、下垂体前葉機能低下症が生じ、その約2年後に中枢性尿崩症を発症した一例」と題して、第95回日本内分泌学会学術総会〔2022年6月2日～6月4日（大分；Hybrid開催）〕で発表した。

清水英祐助教は、「甘草内服再開を契機に著明な低カリウム血症を呈した偽性アルドステロン症の1例」と題して、第95回日本内分泌学会学術総会〔2022年6月2日～6月4日（大分；Hybrid開催）〕で発表した。

杉本駿助教は、「大腸癌を合併した両側大結節性副腎皮質過形成（BMAH）の1例」と題して、第32回臨床内分泌代謝Update〔2022年11月11日～11月12日（東京）〕で発表した。

三井絵里花助教は、「SARS-CoV-2 ワクチン接種後に発症した破壊性甲状腺炎の1例」と題して、第32回臨床内分泌代謝Update〔2022年11月11日～11月12日（東京）〕で発表した。

4. 脂質異常症グループ：

井上郁夫教授が中心となって脂質代謝および関連分子の基礎的・臨的研究を進めている。スプライシングバリエーション PPARgamma1 プロモータ（exon C と exon A）ノックアウトマウスの胎生における解析している。池上裕一講師が学内グラントを獲得し、その予算で、安評センターに依頼し mPPARγ 1.6 遺伝子 cKO マウス（Target Exon C）ヘテロマウス凍結胚の個体復元および凍結胚と凍結精子作製を実施し、当院の生理学教室、口腔外科教室との共同研究を開始した。また、ナノサイズである LDL サイズ測定については新たにアドバンテスト社との共同研究が始まる予定である。主な研究成果としては、竹中康浩非常勤講師が基礎研究としては「Temporal inhibition of the electron transport chain attenuates stress-induced cellular senescence by prolonged disturbance of proteostasis in human fibroblasts」と題して論文をまとめ、FEBS に受理された。現在、当大学国際医療センター心臓内科中埜信太郎教授の共同で、37度2時間 incubation 後 LDL 小粒子化がどのような患者で増加するのか検討している。さらに、当大学予防医学センターの丸山義明教授とは、家族性高コレステロール血症患者のエボロクマブの心不全発症機序について研究を進め、埼玉県立大学の久保田 亮准教授とは新たな 25nm の LDL サイズマーカーを安定作成に成功し、それぞれの結果を雑誌に投稿中である。

3-3. 達成度評価

学会発表は目標の15件を大幅に超える28件（学内登壇者に限る）であった。また、英文による論文発表は目標7件のところ7件（学内筆頭者に限る）を数えた。以上より、令和3年度と同様、令和4年度も目標を達成することができた。

3-4. 次年度改善計画

令和4年度も英文誌による論文発表が数多く行われた。医局員の筆頭論文をより多く主要ジャーナルに公表し、オリジナルで意義のある実績を令和5年度も積み上げていきたい。また、引き続き症例報告についても学会発表だけでなく、積極的に英文雑誌に誌上報告していきたい。令和5年度は、国内の学会発表数を年間20件以上（学内登壇者に限る）、英文雑誌における Publication 数（症例報告を含む）を年間7件以上（学内筆頭者に限る）という目標を掲げる。

4. 診療

当科は、埼玉県西北部の基幹施設として、多くの生活習慣病及び内分泌疾患患者に質の高い医療を提供することを目標としており、そのために糖尿病教育や専門的治療の実績を積み重ねている。外来診療については、前年度からコロナ禍が続いていたにも関わらず、増加した。入院診療については、重症度看護必要度の高い状態を維持し、外来、入院とも稼働は増加した。専門性や合併症を含めた診療を直ちには必要としない症例の逆紹介は引き続き積極的に行っており、今後も、近隣の医療機関との連携を推進し、さらに充実をはかっていく。次年度も、重症度看護必要度の高い疾患、病態を多く入院で診る方向性で対応したい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

片山茂裕：独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員 埼玉県糖尿病協会 理事長 埼玉糖尿病対策推進会議 副会長

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

① 編集委員など：

島田朗：Diabetology International（Editorial Board）、Review of Diabetic Studies（Editorial Board）
プラクティス編集委員、糖尿病診療ガイドライン2024策定委員、小児・思春期糖尿病コンセンサスガイドライン 評価委員

野田光彦：Endocrine Journal 編集委員、プラクティス編集委員長

井上郁夫：Open Journal of Molecular and Integrative Physiology（Editorial Board）、薬理と治療（編集協力者）

一色政志：糖尿病診療ガイドライン2024評価委員

及川洋一：糖尿病診療ガイドライン2024策定協力者

② 査読：

島田朗：The Journal of Clinical Endocrinology and Metabolism など7編

井上郁夫：Nutrients、Life、Journal of Molecular Sciences (MDPI)、薬理と治療など10編

及川洋一：Journal of Diabetes Investigation, Endocrine Journal など11編

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

島田朗：日本糖尿病学会(理事、関東甲信越支部支部長、学術評議員)、Diabetes International 編集委員、我が国における1型糖尿病の実態の解析に基づく適正治療の開発に関する研究委員(委員長)、1型糖尿病における新病態の探索的検討に関する委員会委員、膵臓移植地域適応検討委員(代表委員)、膵・膵島移植に関する常置委員、糖尿病学用語集編集委員、糖尿病医療の情報化に関する合同委員会委員、埼玉県糖尿病協会(理事)、日本糖尿病眼学会(理事)、日本小児思春期糖尿病学会(理事)、日本内分泌学会(関東甲信越支部幹事、評議員)、日本医学会 用語代委員、内科系学会社会保険連合理事(診療領域別委員会糖尿病関連/栄養関連委員長)、厚生労働省 保険医療専門審査員

野田光彦：日本糖尿病学会(学術評議員)、糖尿病と癌に関する合同委員会(日本癌学会との合同委員会)委員、糖尿病医療の情報化に関する合同委員会(日本医療情報学会との合同委員会)委員、糖尿病診療ガイドライン策定委員会評価委員長、日本糖尿病学会データベース構築委員会委員、英語版「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン」委員会委員、「糖尿病治療のエッセンス」改訂ワーキンググループ委員、日本内分泌学会(功労評議員)、独立HbA1c適正運用機構サーベイ検討小委員会委員

井上郁夫：日本糖尿病学会(学術評議員)、日本臨床栄養学会(評議員)、日本肥満症治療学会(理事、評議員、栄養部会委員長、学術集会プログラム委員会委員、教育委員会委員、メンタルヘルス部会委員)、日本動脈硬化学会(評議員、生活習慣栄養部会委員)、特定非営利活動法人(NPO) ヒューマンセンター21(理事)、日本糖尿病・肥満動物学会(評議員)

一色政志：日本高血圧学会(評議員)、日本内分泌学会(代議員)、日本心血管内分泌代謝学会(評議員)

及川洋一：日本糖尿病学会(学術評議員)、日本内分泌学会(評議員)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

- ① Yasuda S, Suzuki S, Yanagisawa S, Morita H, Haisa A, Satomura A, Nakajima R, Oikawa Y, Inoue I, Shimada A. HLA typing of patients who developed subacute thyroiditis and Graves' disease after SARS-CoV-2 vaccination: a case report. BMC Endocr Disord. 2023 Mar 7;23(1):54.
- ② Satomura A, Oikawa Y, Sato H, Takagi S, Yamashita T, Shimada A. A Patient with Ketosis-prone Type 2 Diabetes Showing Nearly Normalized Glucose Tolerance after Recovery from Severe Diabetic Ketoacidosis. Diabetol Int. 2023 Jan 1;14(1):109-113.
- ③ Mizutani G*, Horii T*, Oikawa Y, Atsuda K, Shimada A. Real-world risk of lower-limb amputation associated with sodium-glucose cotransporter 2 inhibitors versus metformin: A propensity score-matched model analysis in Japan. J Diabetes Investig. 2022 Dec;13(12):2000-2009. * These authors contributed equally to this work.
- ④ Shimada A, Toda K, Inoue I, Yamada T, Oikawa Y. Combination of anti-CD25 antibody and poly I:C treatment in pregnant NOD mice may be used as "pregnancy-related" type 1 diabetes model. J Diabetes Investig. 2022 Sep;13(9):1489-1495.
- ⑤ Yanagisawa S, Oikawa Y, Takagi S, Horikoshi Y, Satomura A, Imai K, Sakai J, Ishibashi N, Tarumoto N, Iida S, Nakayama H, Haga Y, Maesaki S, Shimada A. HbA1c level may be a risk factor for oxygen therapy requirement in patients with coronavirus disease 2019. J Diabetes Investig. 2022 May;13(5):909-917.
- ⑥ Satomura A, Oikawa Y, Haisa A, Suzuki S, Nakanishi S, Katsuki T, Shimada A. Clinical significance of insulin peptide-specific interferon- γ -related immune responses in ketosis-prone type 2 diabetes. J Clin Endocrinol Metab. 2022 Apr 19;107(5):e2124-e2132.
- ⑦ Oikawa Y, Hashimoto K, Hara K, Morimoto J, Namai K, Tanaka A, Tanaka S, Shimada A. Current clinical state of type 1 diabetes in Saitama prefecture. Diabetol Int. 2022 April 4;13(2):436-446.

学会発表(主なもののみ記載)

- ⑧ 及川洋一：1型糖尿病における抗原特異的免疫応答【シンポジウム】. 第65回日本糖尿病学会年次学術集会; 2022年5月12日~5月14日(神戸; Hybrid開催)
- ⑨ 島田朗：1型糖尿病の治療ーインスリンの歴史から実際、そして最新治療までー【教育講演】. 第95回日本内

内分泌学会学術総会；2022年6月2日～6月4日（大分；Hybrid開催）

- ⑩ 及川洋一：【教育セミナー（内科）．眼科 Dr のための糖尿病レクチャー】糖尿病の成因と診断．第28回日本糖尿病眼学会総会；2022年10月21日～10月22日（京都；Hybrid開催）

【総数：論文12件、和文総説9件、学会発表36件、和文著書2件、講演20件以上（いずれも学外との共同発表を含む）】

6-2. 獲得研究費

島田朗：文部科学省科学研究費基盤研究C「Ketosis-prone diabetes の膵臓抗原に対する細胞性免疫異常」総額429万円（研究代表者）、国際医療研究開発費「日本人の1型糖尿病の包括的データベースの構築と臨床研究への展開（第3次）」総額770万円（分担研究）

野田光彦：国立がん研究センター研究開発費「多目的コホートに基づくがん予防など健康の維持・増進に役立つエビデンスの構築に関する研究」10万円（分担研究）

及川洋一：文部科学省科学研究費基盤研究C「1型糖尿病の病態形成におけるCペプチド分子の免疫学的機構の解明」総額416万円（研究代表者）、2022（令和4）年度第16回日本IDDネットワーク1型糖尿病研究基金助成（代表）助成額：100万円 「1型糖尿病に[Hybrid Insulin Peptide の免疫学的な意義]

藤澤柁志：第33回落合賞研究助成金100万円、2022年度大学病院若手研究者育成研究費190万円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

竹中康浩、井上郁夫．特許第7062324号．脂質タンパク質複合体を含む多検体試料を分析するための電気泳動用スラブ型ポリアクリルアミドゲル及びその方法．出願日2022/04/11

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

埼玉県糖尿病研究会（ウェブ開催）

埼玉西北部内分泌・糖尿病ネットワークの会（ウェブ開催）

埼玉西北部糖尿病セミナー（ウェブ開催）

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育については、講義に関し、すべての学生からの評価は良好であった。臨床実習については学生から「プレゼンテーションは初めての経験であり、勉強になった」「クルズスは知識の整理になった」「75gOGTTを通して患者の気持ちがあった」「糖尿病・内分泌疾患の全体像がつかめた」などの声が挙げられている。さらに、研修医へのクルズスについても好評を得ている。

診療に関しては、当科は、埼玉県西北部の基幹施設として、多くの生活習慣病および内分泌疾患患者に質の高い医療を提供することを目標としており、そのために糖尿病教育や専門的治療の実績を積み重ねている。外来および入院診療についても安定した実績を継続しており、専門性や合併症を含めた診療を直ちには必要としない症例の逆紹介を積極的に行っている。

研究面では、本年度も英文誌を主とした論文発表が数多く行われた。医局員の筆頭論文をより多く主要ジャーナルに公表し、オリジナルで意義のある実績を来年度以降も積み上げたい。

なお、令和4年度の当科におけるスタッフの入局、退職については次の通り。令和4年4月に、杉本駿、橋本恭太、三井絵里花が入局し、草野武が総合診療内科と兼任となった。また、令和4年3月に井上和之が退職した。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育については、3年生の授業においては、生態学などの基礎的分野を学ばせることになるが、本学の学生の弱点でもある科学的な視野で医学をとらえる力をレベルアップさせていきたい。当科においても学生の学習に取り組む姿勢と能力をよく把握し、モチベーションの上がる授業となるよう、学生とのコミュニケーションを図っていきたい。特に断片的に知識を試すだけではなく、様々な知識をトータルに結び付け、答えを導き出すという、従来にはなかったような「考えさせる」問題作成を心掛けたい。

診療に関しては、昨年度から引き続きコロナ禍ではあったが、外来患者数は増加した。今後は、新患を増やしつ、さらなる地域医療への貢献を目指し、病診連携を推進し、大学でなければ診ることが困難な病態の患者を中心に診療を進める必要がある。特に、入院においては、重症度看護必要度の高い病態を積極的に取り込み、専門性を持ちつつも、全身を管理できるような体制を進めていく。その上で、他の診療科との、また、メディカルスタッフとのこれまで以上の協力体制を構築していきたい。患者中心の、より質の高い、安心、安全な医療を推進するために、より優れた臨床医を育成していける体制を作っていく必要がある。今後も、埼玉西北部の糖尿病・生活習慣病・内分泌疾患の基幹病院として、これまで以上に質の高い診療を目指したい。

研究面では、公的研究費も引き続き取れているが、必ずしも十分ではないため、さらなる獲得を目指したい。質の高い診療をする上で、研究マインドが重要であることを若手医師を含め、医局員全体が認識することが重要と考える。臨床研究と基礎研究の双方をバランスよく推進し、視点を世界に置き、積極的に学会発表や学術誌への発表を行い、情報発信に努める所存である。

1. 6) 血液内科

1. 構成員

別所 正美	(BESSHO, Masami) : 特任教授 : 学長 : 血液 : 博士
中村 裕一	(NAKAMURA, Yuichi) : 教授 : 運営責任者 : 教育主任 : 外来医長 : 研究員 : 指導教員 (大学院) : 血液 : 博士
照井 康仁	(TERUI, Yasuhito) : 教授 : 教育員 : 診療部長 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 血液 : 博士
宮川 義隆	(MIYAKAWA, Yoshitaka) : 教授 : 指導教員 (大学院) : 研究員 : 血液 : 博士
伊藤 善啓	(ITO, Yoshihiro) : 講師 : 診療副部長・病棟医長 : 研究員 : 指導教員 (大学院) : 血液 : 博士
安部 涼平	(ABE, Ryohei) : 講師 : 研究員 : 血液
大崎 篤史	(Ohsaki Atsushi) ; 助教 : 研究員
奥田 糸子	(OKUDA, Itoko) : 助教 : 研究員
鈴木 康大	(SUZUKI Kodai) ; 助教 : 研究員
坂本 朋之	(SAKAMOTO, Tomoyuki) : 助教 : 研究員
脇本 直樹	(WAKIMOTO, Naoki) : 客員教授 ; 博士
室橋 郁生	(MUROHASHI, Ikuo) : 客員教授 : 博士
陣内 逸郎	(JINNAI, Itsuro) : 客員教授 : 博士
辻 守史	(TSUJI, Morifumi) : 非常勤講師 : 博士
伊東 克郎	(ITO, Katsuro) : 非常勤講師 : 博士
須賀原 裕一	(SUGAHARA, Yuichi) : 非常勤講師 : 博士
島田 恒幸	(SHIMADA, Tsuneyuki) : 非常勤医師 : 博士
栗山 善夫	(KUWAYAMA, Yoshio) : 非常勤医師 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、臨床血液学の知識や考え方の伝授や実地臨床の指導を通して本学の卒前・卒後教育に寄与するとともに将来を担う血液内科医を育成することを目的とし、学生や研修医・専攻医が血液疾患について深く理解し診療の基本を習得できることを目標とする。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育で運営に関わったユニットは、3年生血液ユニットのユニットディレクター (中村) である。

卒前教育で講義・演習・実習、臨床実習等を担当したのは、2年生エネルギー系ユニット (中村)、3年生血液ユニット (中村、照井、宮川)、6年生講義 (中村、宮川)、5年生・6年生臨床実習 (中村、照井、宮川、安部、島田) である。

2-3. 達成度評価

卒前教育では、講義に関しては順調に活動できたものと考えられる。臨床実習 (CC Step 1) については、令和4年末までは2週間のうちの2日のみで十分とはいえなかったが、新体制となり医師が増員されたのを機に、令和5年1月からは2週間のうちの前半1週間を担当することになった。

卒後教育では、ローテートする研修医はまだ多くはなかったが、これまでと同様の指導を行うことができた。

2-4. 次年度改善計画

臨床実習 (CC Step 1) の体制が変更となったので、次年度は学生と接する時間を多く取り、こまめな指導ができるように心がけたい。また、実地に即して自ら考え体験する機会を十分に与えることができるよう実習のあり方にさらに工夫を加えたい。

卒後教育においても指導体制を充実させ、多くの研修医にローテートしてもらおうと呼びかけたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

造血器腫瘍 (白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫など) および出血・血栓性疾患の病態を解明し、新規治療法を開発するための基礎研究を行うとともに、多施設共同研究にも積極的に参加する。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

1. B細胞性腫瘍を対象としたウイルス探索 (照井)

B細胞リンパ腫、多発性骨髄腫について、次世代シーケンシングによりウイルスの関与について解析中である。

2. 造血器腫瘍の病態解析 (中村、伊藤)

白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの造血器腫瘍の発症、病期進展や予後に関与する遺伝子変異の解析を行っている。

3. 出血・血栓性疾患の病態・治療に関する臨床共同研究 (宮川、安部)

免疫性血小板減少症における補体系の関与についての研究 (北里大学との共同研究)、血友病に対する遺伝子治療についての研究 (治験)、難治性免疫性血小板減少に対する新規治療の研究 (治験) などを行っている。

3-3. 達成度評価

いくつかのものは学会発表し、一部は論文化もされたが、まだデータ解析中や論文作成中のものもあり、早急にまとめ上げ正式報告とする必要がある。また開始されて間もないものは症例を増やして、今後の解析結果を待つ。

3-4. 次年度計画

データ解析中や論文作成中のものは早急にまとめ上げ正式報告としたい。進行中のものは症例数を増やしてさらなる検討を加えたい。病態の解析とともに、臨床に還元できるようなものに発展させたい。

4. 診療

本年度は当院総合診療内科の宮川チームと併合、診療体制を一新した。人員の増加とともに、症例も増加し、入退院の管理や地域との連携も強化することができた。

近年の新規分子標的薬や抗体薬の開発・導入とともに血液疾患の治療は今なお日々進歩が続いている。当部門では、白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの腫瘍性疾患や造血障害、血小板・凝固系疾患の診療に従事しており、希少疾患も含めて新規薬剤を取り入れた先端医療をさらに積極的に行い、エビデンスの確立に努めるとともに血液疾患全般に柔軟に対応できる体制を維持していきたい。今後も人的資源の確保に努めるとともに他施設との連携を強化していく必要がある。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

照井康仁：埼玉県指定難病（原発性慢性骨髄線維症）認定基準アドバイザー

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

中村裕一：Internal Medicine 査読、Annals of Pharmacotherapy 査読

宮川義隆：International Journal of Hematology 査読、臨床血液 査読

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本癌学会評議員：照井康仁

日本血液学会代議員：照井康仁、宮川義隆、脇本直樹

日本臨床腫瘍学会協議員：照井康仁

日本血栓止血学会評議員：宮川義隆

日本骨髄腫学会代議員：照井康仁

日本がん分子標的治療学会理事・評議員：照井康仁

日本腫瘍循環器学会幹事：照井康仁

日本血液学会診療委員会・委員：宮川義隆

日本血栓止血学会学術標準化委員会・委員：宮川義隆

日本小児・血液がん学会疾患小委員会・委員：宮川義隆

6 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Nakamura Y, Itoh Y, Kakegawa E, Uchida Y, Ichimura T, Sasaki A. Biallelic BCL rearrangements by dual t(3;14)(q27;q32) and t(3;22)(q27;q11) translocations in diffuse large B-cell lymphoma. *J Clin Exp Hematopathol* 62(4):268-262, 2022.
- ② Nakamura Y, Itoh Y, Wakimoto N, Kanno R, Iida S, Yamamoto K. Successful treatment with bortezomib for POEMS syndrome, overcoming complicated severe heart block. *Clin Case Rep* 11(3):e7004, 2023.
- ③ Miyakawa Y, Imada K, Ichikawa S, Uchiyama H, Ueda Y, Yonezawa A, Fujitani S, Handa H, Matsushita T, Asakura H, Nishio K, Suzuki K, Hashimoto Y, Murakami H, Tahara S, Tanaka T, Matsumoto M. Efficacy and safety of caplacizumab in Japanese patients with immune-mediated thrombotic thrombocytopenic purpura: an open-label phase 2/3 study. *Int J Hematol* 117(3):366-377, 2023.
- ④ Terui Y, Abe M, Takano Y, Arima H, Yoshida Y, Tamura K. Impacts of long-term care levels on treating elderly lymphoma patients in the training facilities. 第84回日本血液学会学術集会
- ⑤ Miyakawa Y, Imada K, Ichikawa S, Uchiyama H, Ueda Y, Yonezawa A, Fujitani S, Handa H, Matsushita T, Asakura H, Nishio K, Suzuki K, Hashimoto Y, Murakami H, Tahara S, Tanaka T, Matsumoto M. The efficacy and safety of caplacizumab in thrombotic thrombocytopenic purpura: Japanese patients phase 2/3 study. 第84回日本血液学会学術集会
- ⑥ Wakimoto N, Sakamoto T, Okuda I, Shimada T, Ito Y, Terui Y, Mori S, Bessho M, Nakamura Y. Acute myeloid leukemia with CBFβ-MYH11 presenting with faggot-like cells. 第84回日本血液学会学術集会
- ⑦ Ito Y, Sakamoto T, Okuda I, Terui Y, Kakegawa E, Uchida Y, Mori S, Nakamura Y. A case of heavy chain disease complicated by immune thrombocytopenia. 第84回日本血液学会学術集会
- ⑧ Okuda I, Wakimoto N, Sakamoto T, Shimada T, Ito Y, Uchida Y, Mori S, Bessho M, Terui Y, Nakamura Y, Mimura N, Sakaida E. POEMS syndrome complicated with amyloidoma of the retroperitoneal lymph node. 第84回日本血液学会学術集会
- ⑨ 坂本朋之、奥田糸子、島田恒幸、伊藤善啓、脇本直樹、内田優美子、森茂久、別所正美、照井康仁、中村裕一。成因不明の急性肝炎と同時発症した再生不良性貧血の1例。第17回日本血液学会関東甲信越地方会
- ⑩ 鈴木康大、安部涼平、朝倉博孝、坂本朋之、奥田糸子、大崎篤史、脇本直樹、伊藤善啓、中村裕一、照井康仁、宮川義隆。後天性血友病A患者の出血リスクが高い経皮腎瘻造設術に対するエミシズマブとrFVIIaによる周術期管理。第18回日本血液学会関東甲信越地方会

【総数：著書 4 件、論文 10 件、学会発表 13 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

照井康仁 文部科学省科学研究費 基盤研究(C) B細胞性腫瘍を対象としたウイルス探索と臨床応用 1,600,000円
宮川義隆 厚生労働省科学研究費 難治性疾患政策研究事業 血液凝固異常症等に関する研究 800,000円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育：卒前教育では、これまでと同様に臨床実習への関与が少なかったが、新体制となったので改善すべく鋭意努力する。卒後教育においても、次世代の血液疾患診療を担う人材の育成に最大限努力する。

診療：医師数を鑑みれば、症例数は充足しているが、個々の症例について診療の質（サービスも含め）が十分ではない部分があることも否めない。また他職種や地域の医療機関との連携を深める必要がある。

研究：やはり人数不足で診療や教育が優先される場面も多く、研究実績については目標に達しておらず、今後改善していかなければならない。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育：カリキュラムが改訂され、当科の臨床実習分担も増えたため、スタッフ間で協力し、臨床実習のあり方に工夫を加えたい。また、研修医の指導、若手血液臨床医の養成にも積極的に関わっていききたい。

診療：専門的診療に力点を置きながらも、血液疾患全般に柔軟に対応し、新規薬剤を用いた治療の導入も積極的に行いたい。スタッフ間や他職種・他部署との連携を密にして、効率のよい診療体制を構築するように努めたい。また、近隣の医療機関との連携を深めて、それぞれの病院機能に応じた診療体制を構築していきたい。

研究：臨床研究に引き続き取り組むとともに、基礎研究にも力を入れ、臨床へ還元できるような成果を出したい。そのためにも、人的資源の確保に努めたい。

1. 7) 神経内科

1. 構成員

山元敏正 (YAMAMOTO, Toshimasa) 教授：運営責任者：診療部長：指導教員（大学院）：自律神経学，パーキンソン病、頭痛：博士
中里良彦 (NAKAZATO, Yoshihiko) 教授：診療副部長：研究主任：指導教員（大学院）：自律神経学，発汗障害：博士
伊藤康男 (ITO, Yasuo) 准教授：指導教員（大学院）：脳循環代謝，頭痛：博士
溝井令一 (MIZOI, Yoshikazu) 講師：臨床神経学，東洋医学：博士
光藤 尚 (MITSUHUJI, Takashi) 助教
岡田真里子 (OKADA, Mariko) 助教
川崎一史 (KAWASAKI, Hitoshi) 助教：博士
大田一路 (OHTA, Kazumichi) 助教
瀬尾和秀 (SEO, Kazuhide) 助教
横山 立 (YOKOYAMA, Ryu) 助教
逆井佑太 (SAKASAI, Yuuta) 助教
藤田宗吾 (FUJITA, Syuugo) 助教
見上真吾 (MIKAMI, Shingo) 助教
山口智子 (YAMAGUCHI, Tomoko) 助教
高野陽平 (TAKANO, Youhei) 助教
富永絵里 (TOMINAGA, Eri) 助教
荒木信夫 (ARAKI, Nobuo) 名誉教授・客員教授
高橋一司 (TAKAHASHI, Kazushi) 客員教授
阿部達哉 (ABE, Tatsuya) 客員准教授
田村直俊 (TAMURA, Naotoshi) 非常勤講師
福岡卓也 (FUKUOKA, Takuya) 非常勤講師

2. 教育

2-1. 目的・目標

当教室の目標は大学の理念でもある ” 良き臨床医師の育成 ” であり、当教室の伝統を引き継ぎ、臨床、教育、研究活動をバランスよくおこなってきた。昨今の医療情勢から、臨床と教育に多くの時間が費やされるようになり、研究活動を維持するには一層の努力が必要になってきている。しかしこのような厳しい状況下にあっても研究を続けて行くことで、医局員には研究マインド（科学者の目）を身につけることを念頭に教育活動を行っている。研究マインドは単に研究だけのためにあるのではない。日常臨床で患者の訴えや症状に耳を傾け、病態を考え、それらの解決法を探る中で研究マインドが活き、新しい学術的発見に繋がるものとする。教室員全員がベッドサイドでは真摯な態度で患者に接し、患者に満足度の高い医療を提供できるように努力している。学生、研修医には問診の仕方、神経所見の取り方などの教育を通じて、こうした態度を自然と身につけられるように常に指導している。特に学生に対する神経学的診察方法の教育は、PBLや臨床入門などで学生全員が理解するまで時間をかけて教育している。2021 年度は英文を含む投稿論文数を増やすことを課題としたが、若手医局員が筆頭著者となる英文論文が増えた。

2-2. 教育実績（担当者）

卒前教育：3年生の神経ユニットにおいては、中里がユニットディレクターを務めた。神経ユニットにおいては学生の理解を深めるべく神経学の総論の講義を行い、各論にて、神経疾患の一つ一つについて細かく解説を行っている。臨床実習は令和元年度よりBSLが、4年生の後期から開始となった。令和2年度もこれまで同様に学生は患者さんを受け持ち、チームの一員として診療を行った。クルズスに関しては、脳血管障害や頭痛、認知症などの多彩なテーマで講義を行ったほか、腰椎穿刺の実技指導も行った。6年生には国家試験に向けて知識の整理や解説を行った。中里は6年生の学年担当として、神経内科のみならず国家試験対策を含むカリキュラムの作成や学生面談などの教育活動を行った。

その他、卒前教育においてはOSCEの評価者を山元、中里、伊藤、光藤、岡田、川崎が担当した。

卒後教育：週1回の新入院カンファレンス、症例カンファレンスにおいては、学生、研修医を含めた医局員全員での検討が行われている。症例カンファレンスが若手医局員にとっては最も勉強となる機会である。医局員は、総合内科専門医、神経専門医、脳卒中専門医、老年病専門医、頭痛専門医などの取得を目指しており、毎年合格者を出している。2022年度は新専門医制度の1期生である大田、瀬尾が神経専門医を取得した。また、横山は内科専門医を取得した。

大学院教育：大学院生はすべて学位を取得し2021年度は、大学院生は在籍しなかった。

2-3. 達成度評価

卒前教育では講義は学生からの評価は高く、臨床実習では新型コロナウイルス感染症の影響を受けて学生とのコンタクトに課題を残した。BSLにおいては指導医、専攻医、研修医、医学生と屋根瓦式の指導を心掛けたが、新型コロナウイルス感染症の蔓延によってBSLが中断され、カンファレンスや回診などの制限が生じた。臨床実習において神経診察の

習得のため少人数での病棟回診や外来の陪席など密にならない状況での指導を心掛けた。
卒業教育では、多数の症例を通して豊富な臨床経験が得られ、その成果を神経学会の地方会などの発表で還元した。
症例報告の論文を2022年度の目標に掲げたが、英語論文を含む論文投稿数は増えており、引き続き努力をしたい。
大学院教育：大学院生は2020年度までにすべて学位を取得した。

2-4. 次年度改善計画

卒業教育は概ね満足のいく成果を挙げたと思われるが、前述の通り、新型コロナウイルスの影響のため臨床実習の機会が充分でない部分もあった。コロナあけとなる次年度は病棟での神経診察法の習得に力を入れたい。卒業教育については、多数の救急患者を扱うという特性から、日常臨床は非常に多忙な中、症例報告の論文に若手医局員の取り組みを認めた。次年度は症例報告から原著論文につながるよう努めたい。

大学院教育に関しては臨床研究の充実、基礎医学系研究室との連携がとれており、入学希望者を積極的に受け入れたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標

2022年度も臨床研究を中心に行った。研究の成果を患者や社会に還元できるような研究課題を掲げて、日々研究活動を行っている。臨床研究では患者を深く観察するという観点においても必要不可欠なものと考えて、若手医局員には研究課題を与えて、個々の症例に対する深い洞察が出来るよう配慮している。AMED委託研究「脳脊髄液減少症の病態と治療法の開発」は終了したが、埼玉大学との共同研究を開始し脳脊髄液減少症に関する研究を継続した。各研究グループとも年1回以上の国際学会での発表、年2回以上の国内学会での発表を目標に研究を行うとともに、研究結果を論文にまとめ若手医局員の学位取得を目指している。2022年度は、大学院生は在籍しなかった。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）

1) 錐体外路系疾患に関する臨床研究

錐体外路系疾患の臨床的特徴について注目し、症例報告を中心に発表を行っている。国内の多施設の共同研究を行い、パーキンソン病と疲労、睡眠障害、頭痛に関する研究結果を報告してきた。平成30年度より継続して、大田を中心にパーキンソン病の四肢随意運動に及ぼすdual taskの影響を解析している。瀬尾は学位取得後もパーキンソン病をはじめとする錐体外路症状を呈する変性疾患の脳機能画像解析を継続している。横山は神経変性疾患の画像解析に取り組んだ。

2) 発汗障害に関する臨床研究

特に特発性後天性全身性無汗症の病態解明に関する臨床研究を、中里を中心に行っている。特発性後天性全身性無汗症は国の指定難病となり、全国から患者さんを紹介いただいております。ステロイドパルス療法を中心とする治療を行っている。中里は令和2年8月より日本発汗学会の理事長に就任し、学会誌の編集委員長も務めるなど学会での評価も高い。岡田は特発性後天性全身性無汗症の総説を書いた。

3) 脳脊髄液減少症の病態と治療法に関する臨床研究

脳脊髄液減少症の病態解明に関しては、2016年度より3ヵ年にわたりAMEDの委託研究として脳脊髄液減少症における自律神経機能の関与に関して検討を行い、体位性頻脈症候群の起立性頭痛を訴える患者群において低髄液圧の傾向があることなどを明らかにした。令和元年度からのAMED委託研究「脳脊髄液減少症の病態と診断法の開発」は終了した。新たに埼玉大学との共同研究を開始し、養護教諭を対象とした学校現場での脳脊髄液減少症を含む頭痛の調査を開始した。第2回脳脊髄液漏出症学会の大会長を運営責任者の山元が務めた。

4) 各種疾患における自律神経機能の検討

非観血的心拍・血圧連続測定装置、心拍変動のスペクトル解析、血漿カテコール測定、定量的軸索反射性発汗検査を用いて各種疾患の自律神経機能検査を行ってきた。片頭痛患者における発作中の自律神経機能や起立性調節障害に対する漢方薬の内服の前後での交感神経機能の変化などの検討を行っている。2022年度は運営責任者の山元が第75回日本自律神経学会総会の会長を務めた。

3-3. 達成度評価

錐体外路系疾患に関する臨床研究においては研究の継続を行い順調に活動できた。発汗障害に関する臨床研究では中里が発汗学会の理事長や学会誌の編集委員を務めるなど学会活動に貢献できた。脳脊髄液減少症に関する臨床研究では日本脳脊髄液漏出症学会を主催するなど順調に活動できた。各種疾患における自律神経機能の検討に関しては原著論文の作成にはいたらず研究の進展が充分ではなかった。

3-4. 次年度改善計画

若手医局員の増加に伴い、各研究課題においても活発に研究がなされているが、各種疾患における自律神経機能の検討に関しては、学会発表や論文がなされなかったことから次年度は学会発表や論文を實踐したい。

4. 診療

年間648人の入院患者と1日あたり約70.2人の外来患者の診療にあたった。

脳卒中や変性疾患、頭痛疾患など当科の専門とする疾患のみならず地域の医療機関として神経免疫疾患や神経筋疾患に対しても積極的に治療を行った。令和3年度は新型コロナウイルス感染症の影響で外来患者数の減少した時期もあったが令和4年度の外来患者数・入院患者数は改善の兆しを認めた。近隣の医療機関との連携、特に回復期病院との連携を密にするよう努めたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

荒木信夫 頭痛学会誌 編集委員長
山元敏正 頭痛学会誌 編集委員
中里良彦 発汗学会理事長、発汗学会誌 編集委員長

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

山元敏正 日本自律神経学会副理事長、日本頭痛学会理事、日本髄液漏出症学会理事
中里良彦 日本発汗学会理事長
伊藤康男 頭痛診療ガイドライン編集委員
光藤 尚 日本髄液漏出症学会常務理事、頭痛診療ガイドライン編集委員
荒木信夫 日本自律神経学会理事長、日本髄液漏出症学会理事 頭痛診療ガイドライン編集委員長
田村直俊 自律神経学会誌 編集委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Seok, Matsunari I, Yamamoto T. Cerebral cortical thinning in Parkinson's disease depends on the age of onset. PLOS ONE <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0281987> February 21, 2023
- ② Yoshikazu Mizoi, Kei Ikeda, Masahiro Sonoo, et al. Markedly prolonged compound muscle action potential duration in a patient with coronavirus disease 2019 related critical illness myopathy. Neurol Clin Neurosci. 2023;11:167-169.
- ③ 中里良彦, 岡田真里子, 太田一路, 田村直俊, 山元敏正. 骨髄移植 12 年後に全身性無汗となった慢性皮膚移植片対宿主病 (GVHD) の 1 例. 発汗学 29 : 47-48, 2022
- ④ 岡田真里子, 大田一路, 中里良彦, 田村直俊, 山元敏正. 疼痛を伴う特発性後天性全身性無汗症の特徴. 発汗学 29 : 49-50, 2022
- ⑤ 光藤尚, 田村直俊, 溝井令一, 荒木信夫, 山元敏正. 治打撲一方が脳脊髄液減少症の後頸部痛に有効だった 1 例. 痛みと漢方 31, 127-130, 2022
- ⑥ 田村直俊. 自律神経研究の歴史 情動と自律神経. 自律神経 59 : 197-203, 2022
- ⑦ 山元敏正. 頭痛外来・頭痛センターの役割とは? . jmed mook 82 : 146-147
- ⑧ 荒木信夫, 光藤尚. 検査から見る神経疾患 検査から見る脳脊髄液減少症. Clinical Neuroscience 41 : 420-421, 2023
- ⑨ 伊藤康男, 荒木信夫. 「症状」から診る MUS Q&A 頭痛 一次性頭痛の鑑別のポイントは? 稀な一次性頭痛は?. 総合診療 32, 1322-1323, 2022
- ⑩ 川崎一史, 山元敏正. 危険な頭痛を見分ける. medicina 59:2345-2349, 2022

【総数：論文 14 件、学会発表 36 件、講演 45 件】

6-2. 獲得研究費

厚生科研「発汗異常を伴う稀少難治療性疾患の治療指針作成、疫学調査の研究 (2019 年度～2021 年度, 代表者 横関博雄). AIGA・低汗性外胚葉形成不全症・多汗症研究班 分担研究者: 中里良彦

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第 75 回日本自律神経学会総会 開催 大会長 山元敏正 (2022 年 10 月 29 日 30 日)
第 2 回日本脳脊髄液漏出症学会学術集会 開催 大会長 山元敏正 (2023 年 3 月 11 日 12 日)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては新型コロナウイルス感染症の影響で BSL の縮小があり屋根瓦式の教育で一部不十分な点を課題などで補う努力を行った。研究に関しては臨床研究を中心に活発な研究活動を実施できた。診療に関しては、脳卒中地域連携パスの運用で課題をのこした。

7-2. 次年度の改善計画

卒前教育に関しては BSL の縮小があり屋根瓦式の教育で一部不十分な点があった。大学院教育に関しては次年度も積極的に受け入れを図る。研究に関しては臨床研究を中心に活発な研究活動を実施し、論文化を継続する。診療に関しては、特に脳卒中地域連携パスを通して回復期病院との連携を密にすることで脳神経内科の受診の必要な患者さんの受け入れを積極的に行いたい。

1. 8) リウマチ膠原病科

1. 構成員

三村俊英(MIMURA, Toshihide)：教授：運営責任者：診療部長：教育副主任：代表指導教員（大学院）：リウマチ・膠原病学、臨床免疫学、臓器障害を有するリウマチ・膠原病の治療：博士
秋山雄次(AKIYAMA, Yuji)：教授：研究主任：専門医員：教育員：指導教員（大学院）：リウマチ性疾患、膠原病の治療、臨床免疫学：博士：東洋医学兼任
舟久保ゆう(FUNAKUBO, Yu)：教授：専門医員：診療副部長：教育主任：研究員：指導教員（大学院）：リウマチ・膠原病学、動脈硬化症：博士
荒木靖人(ARAKI, Yasuto)：准教授：専門医員（病棟医長）：教育員：研究副主任：指導教員（大学院）：リウマチ・膠原病学、免疫学：博士
横田和浩(YOKOTA, Kazuhiro)：准教授講師：専門医員(医局長)：教育員：研究員：指導教員（大学院）：リウマチ・膠原病学、臨床免疫学：博士
梶山浩(KAJIYAMA, Hiroshi)：講師：専門医員（外来医長）：教育員：研究員：指導教員（大学院）：リウマチ・膠原病学、腎臓病、臨床免疫学：博士
和田琢(WADA, Takuma)：講師：専門医員：教育員：研究員：博士
矢澤宏晃(YAZAWA, Hiroaki)：助教：医員：教育員：研究員
奥村信人(OKUMURA, Nobuhito)：助教：医員：教育員：研究員
松田真弓(MATSUDA, Mayumi)：助教(時短)：医員：教育員：研究員
岡元啓太(OKAMOTO, Keita)：助教：医員：教育員：研究員：博士
酒井左近(SAKAI, Sakon)：助教：
江本恭平(EMOTO, Kyohei)：助教：
上野丈仁(UENO, Takehito)：助教
吉田佳弘(YOSHIDA, Yoshihiro)：非常勤講師
柳澤麻依子(YANAGISAWA, Maiko)：非常勤講師
丸山崇(MARUYAMA, Takashi)：非常勤医師
佐藤浩二郎(SATO, Kojiro)：客員教授：リウマチ・膠原病学、臨床免疫学、免疫学：博士
野間久史(NOMA, Hisashi)：客員准教授
大野修嗣(OHNO, Shuji)：非常勤講師
神津教倫(KOUDU, Noritune)：非常勤講師
村島温子(MURASHIMA, Atsuko)：非常勤講師
横川直人(YOKOGAWA, Naoto)：非常勤講師
相崎良美(AIZAKI, Yoshimi)：助手：修士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

埼玉医科大学の建学の理念にあるような実社会で実力を発揮出来る良医を育てることが目標である。具体的には、総合力のある臨床医の育成と研究マインドを有する専門医の養成を目的とする。患者を前にして十分な情報を取得し、自力で病態の考察が行える臨床医であり、患者および家族から信頼される知識と人間性を有し、社会全体から期待される医師の育成を目指す。

<卒前教育>

以下の点を目的とする；1) 解剖学、生理学、生化学、免疫学などの基礎知識に立脚した病態生理の考察が出来る、2) 個々の疾病の理解と記憶、および周辺疾患との関係などを説明できる知識を有する、3) 科学的、批判的な考察力を有する、4) 自分の考える理論を言葉でまたは文章で他人に説明できる論理性を有する、5) 医学における研究心の重要性を理解する、6) 他者とのコミュニケーション能力を有する。

<卒後教育>

以下の点を目的とする；1) 医療面接、全身の診察、検査結果などの情報を基により高度な病態生理の考察が出来る、2) 自分の症例に関する文献的検索および考察が出来る、3) 患者・患者家族および医療従事者達との良好なコミュニケーション力を有する、4) 医療安全を意識した注意力と謙虚さを有する。

<大学院教育>

以下の点を目的とする；1) 生命科学領域の十分な基礎学力を有する、2) 臨床的なまたは基礎的な領域における問題点や疑問点を抽出し、解決のための方策を検討する能力を有する、3) 科学的、批判的な高度な考察能力を有する、4) 実験技術や知識を有し、実験結果を科学的に評価することが出来る、5) 実験結果をまとめ、その意味を考察し、論文化するとともに発表することが出来る、6) 国際的な場での発表とともに人間的にも交流を図るための英語力を有する。

2-2. 教育実績(担当者)

<卒前教育>

昨年に続き、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、遠隔講義の多用、臨床実習の変更・中止など講義形態自体が変更を余儀なくされた。その中でも、学生達への情報発信が悪影響を受けないように最大限努力した。

1年生：細胞生物学2の講義を1枠担当し講義した（三村）

2年生：新型コロナウイルス感染拡大の影響で医師業務見学学習は受け入れ中止となった。

3年生：ヒトの病気—1 内分泌・代謝ユニット 38 講義のうち 1 枠でアミロイドーシスを担当し講義した（三村）

3年生：Pre-CC：新型コロナウイルス感染拡大の影響でPre-CCは受け入れ一部中止となった。

4年生：ヒトの病気-2 一昨年度に講義の再編成を行い、免疫 26 講義のうち当科分 16 枠にて基礎免疫学に基づくアレルギー-膠原病の病態の理解から臨床各論まで、スライドを使用して講義した。（三村、秋山、舟久保、荒木、梶山、横田、村島、横川）。また、試験問題は出来る限り記述式問題を増やし、学生に広まっている 1 対 1 対応式の丸暗記学習で良いと考える思考を変えさせるように努力した。

引き続き、総合医療センターリウマチ膠原病内科天野教授と伴に 1 枠を使って症例検討の講義を行った（三村）。それぞれ持ち寄った症例のプレゼンテーションを行い、相互に質問し合いながら学生の知識や理解力、学習意欲を高めた。最後の 1 枠は、免疫ユニットの全ての講義のサマリースライドを各担当教員から譲り受け、ユニット全体のまとめと構造的な理解を則するような講義を行った（三村）。

4年生：Pre-CC：新型コロナウイルス感染拡大のため一時中断されたが、病棟での実際の患者さんに認められる病態を理解させ座学で得た知識との連携を計り、総合的な学習を進めるようにした。

5年生 CC-Step1：新型コロナウイルス感染拡大のため一時中断された。各自が患者 1 人の模擬主治医になって、POMR に従ったレポートを作成した。クルズやディスカッションの時間を十分に確保した。プロブレムリストを作成することを主眼に、医療面接や理学的所見、検査データから多くの情報を得るように指導した。特に病態生理の考察に重点を置き、受け持ち患者においてどのような病態があるのか、自分の力で考えるように指導した。口頭試問による評価と指導、画像スライドでセミナーを行なった（全員）。

CC-step2/3：4 週間に渡り主治医グループに所属し、2-3 人の患者を担当し、受け持ち医と同様に、入院時から、診察、検査計画、検査の評価、病態の解析、治療方針の決定などを行える様に指導した（全員）。外来での医療面接や診察は新型コロナウイルス感染拡大のために中止した。

5年生特別演習において実践的な症例検討と知識の整理が行えるような講義を行なった（三村）。

6年生：免疫・膠原病・アレルギー-4 講義のうち、3 枠を担当、総論および各論において知識の理解と整理を進めるように講義を行った。特に、講義冒頭に講義範囲を網羅するキーワードを中心とした問題を作成し、それに解答することで各人の弱点を見つけ、モチベーションを高めることが出来るような構成にした（三村、秋山、舟久保）。

医師国家試験に向けての臨床推論を 2 枠担当した（舟久保、横田）。

卒業試験問題の作成をおこなった（三村、秋山、舟久保、荒木、梶山、横田）。

その他、卒前教育では共用試験臨床実習前 OSCE 評価（舟久保、横田）、共用試験臨床実習後 OSCE 評価（舟久保、横田）を担当した。

< 卒後教育 >

卒後教育としては、専攻医 3 人（1 年目上野、3 年目江本、4 年目酒井）の研修を行っている。

初期臨床研修医に対しては以下の通り；当科入院患者の受け持ち医の一員となり、入院から退院に至る一連の流れや医師の病棟業務に関して習得できるようにした（全員）。リウマチ膠原病領域の疾患を通して内科全般の診察技術の習得や病態の考察が行えるように指導した。各自の受け持ち患者を通して、文献的検索と考察、ディスカッションが出来るように指導した。症例のまとめと発表が出来るように指導した（以上全員）。New England Journal of Medicine の症例カンファレンスの抄読会を週に 1 回行い、上級医の指導の下、初期臨床研修医およびシニアレジデント（後期臨床研修医）に発表の機会を与えた（矢澤）。

専攻医、シニアレジデント達が、座学とともに診療手技などを積極的に学べるようにした。

< 大学院教育 >

各人の問題意識とそれに対する解決方法開発能力を高めるように、各人が自分で考える習慣を付けるように指導した。指導教官とのコミュニケーションを図るように指導した。月に 1 回のリサーチミーティングを行い順番にそれぞれの研究の進捗状況などを発表する機会を作った（以上、三村、秋山、舟久保、荒木、梶山、横田）。週に 1 回リサーチミーティングを開催し、大学院生のプレゼン力強化や基礎系研究グループの研究進捗の確認、相互のコメントやアイディアによる研究の改善や情報交換を行なった（三村、荒木、梶山、横田、矢澤、相崎）。

2-3. 達成度評価

< 卒前教育 >

80%程度は達成出来たと考える。講義は、学生からの feed back を参考にスライド・資料などの充実を図るように努力した。また、新型コロナウイルス禍ではあったが、CC-Step1 の学生達に対しては 1 週間の短縮実習となった分、過負荷にはならないように予定を配慮し、CC-step2/3 の学生達には診療チームと同様の動きを許可し、実臨床に触れる機会が増えるように配慮した。

< 卒後教育 >

構成員の絶対的な人数不足から指導医や上級医が日常業務に追われている面があり、季節によっては研修医達の指導に十分な時間をかけることが出来ない時期もあったが、概ね上級医達と研修医達の関係は良好で、実臨床での診察、考察、検査、治療計画などを指導することが出来た。資格を満たすシニアレジデント達は、内科学会認定内科医やリウマチ学会専門医を取得することが出来た。

< 大学院教育 >

大学院生は全員が卒業して、次年度には大学院生はいない。若手医師が大学院での研究に積極的にならない理由として、専門医制度の開始が関係していると考えられる。今後若手医師には研究の重要性を認識させ、専門医取得後に研究が行えるような体制を作っていく必要がある。

2-4. 次年度改善計画

全体的には、新型コロナウイルス感染拡大は収まりつつあることから、次年度には対面講義が復活すると考えている。より印象深く、理解が深まるような講義が行えるように検討していく。また、病棟での実習も感染状況を見た上で、可否の判断、患者との接触など検討し、有効な実習が行えるような方策を進める。

<卒前教育>

4年生：次年度も単に記憶するだけではなく、より病態生理を深く考えるような講義を行い様努力したが、更に学生にその意義を理解させる工夫を継続する。定期試験においても筆記試験主体の形式を継続し、思考力、大局的に物事を考察してまとめる力を涵養するように努める。

pre-CC：本年度も新型コロナウイルス感染拡大の予防の観点から、大学の方針により受け入れは中止となった。

5年生特別演習において実践的な症例検討とクリッカーでの解答で興味深く授業を進めることが出来た。

CC：CC-Step1では、本年度は新型コロナウイルス感染拡大の予防の観点から、大学の方針で6月29日からの病棟受け入れとなり、1グループ1週間のみの変則的な体制となった。CC-step2/3に関しては通常通り4週間の受け入れとなったが、CCの学生に関して当科では、教授回診では病室に同時に入室して見学する学生人数を減らし、順番で入室するようにした。短期間ではあるが、より臨床に近い学習が行えるように努力した。学生達は熱心に学んでいた。とかく試験目的の知識修得のみに偏らないように指導した。

6年生：知識のまとめ、弱点の認識が出来るような講義を引き続き行った。演習的な要素も含んで講義内容の改善に努めた。

<卒後教育>

臨床的な考察がより深く出来るように更なる指導を行っていく。より多くの研修医達がローテートを希望するように指導体制を整えたい。

<大学院教育>

一般大学院生は、病棟業務は免除として当直のみの臨床義務を継続している。そのために、その他の病棟医達の負担が増しているがそれぞれの役割で頑張っている。最終学年の大学院生は学位を取得すべく研究のまとめを行った。今後も大学院生に応じてよりきめの細かい対応を継続する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

当科の研究における大きな目標は、リウマチ膠原病、アレルギー、臨床免疫、基礎免疫の領域において、臨床での問題意識を研究面に展開し、基礎と臨床の融合を目指すことである。この大きな目標を達成する為に、具体的には以下のプロジェクトが進んでいる。

1. 全身性エリテマトーデス患者の新規バイオマーカー同定について検討
2. T細胞、特にTh17細胞に関する基礎的検討
3. 生物学的製剤を用いたRA治療に関する臨床的検討
4. 関節リウマチにおける炎症と動脈硬化についての臨床的検討
5. 関節リウマチ患者由来滑膜細胞におけるエピジェネティクス異常の解析
6. 腎障害患者におけるポドサイト傷害の関与に関する研究
7. 末梢血T細胞サイトカイン産生能と関節リウマチの病態に関する検討
8. 新規破骨細胞様細胞の同定と臨床的意義に関する研究
9. 膠原病患者末梢血におけるエピジェネティクス異常の解析
10. 脊椎関節炎の臨床的研究

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 舟久保：関節リウマチにおける炎症と動脈硬化
2. 舟久保：全身性エリテマトーデスにおける動脈硬化
3. 舟久保：関節リウマチにおける血清Pentraxin-3測定の臨床的意義についての検討
4. 梶山：糸球体疾患とポドサイト障害の解析
5. 荒木、三村：関節リウマチにおけるエピジェネティクス(ヒストン修飾を中心に)
6. 横田：破骨細胞分化と関節リウマチの病態に関する検討
7. 相崎、三村：膠原病患者末梢血におけるエピジェネティクス

3-3. 達成度評価

今年度もマンパワーの少なさで、一部のスタッフは研究に当てる精神的及び時間的な余裕が少なかった。その中で、各自の頑張りによって、豊富な患者リソースを用いて臨床的および基礎的研究を行うことができた。それらを基にしていくつかの論文報告が出来た。例年報告している欧州リウマチ学会、アメリカリウマチ学会には今年度も演題が採択された。日本リウマチ学会、日本臨床免疫学会、日本内科学会などで多くの医師たちが発表をおこなった。

3-4. 次年度改善計画

研究に関しては、新型コロナウイルス感染拡大の影響は少ないと想像している。次年度もマンパワーの少なさには大きな改善は見込めないが、各人が研究プロジェクトを持ち、通年的に研究に関与出来るような精神的な余裕を持たせたい。また、ゲノム医学研究センターにおける研究は黒川理樹教授のご協力により研究スペースを使用することが可能となり、引き続きエピゲノム中心の研究を行なっていく。念願の動物実験を行うポストドクが次年度から参加する見込みが付き、動物モデルを用いての研究を進めたい。研究室設備の充実も行いつつある。研究の進行がスピードアップすると期待できる。

4. 診療

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、一昨年春には一時的に外来診療実績が低下したが、本年度はそのようなことはない。地域診療連携に重要である、毎年開催していた当科病診連携の会も再開した。外来患者数および紹介率が上昇した。高度で難治性の病態を有するより多くの患者が紹介されて受診するようになった。総合的に質の高い医療を行えている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

三村俊英：埼玉県難病対策協議会委員

三村俊英：埼玉県指定難病審査会委員

舟久保ゆう：厚生労働省医薬品等安全対策部会員

舟久保ゆう：厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

三村俊英：査読；Therapeutic Advance in Musculoskeletal Disease、Molecular Biology Report、Internal Medicine

舟久保ゆう：編集委員 (Transmitting Editor)；Modern Rheumatology

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

三村俊英：日本内科学会総務委員会委員

三村俊英：日本リウマチ学会教育施設認定委員、倫理委員

三村俊英：公益財団法人沖中記念成人病研究所評議員

舟久保ゆう：日本リウマチ学会評議員、COVID-19 ワクチン調査対策委員会委員、情報化委員会委員

舟久保ゆう：日本臨床免疫学会評議員

舟久保ゆう：日本リウマチ財団リウマチ専門職委員会委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

①Yokota K, Tachibana H, Miyake A, Yamamoto T, Mimura T.

Relapsing Polychondritis and Aseptic Meningoencephalitis.

Intern Med. 2023 Feb 1;62(3):481-486. doi: 10.2169/internalmedicine.9411-22. Epub 2022 Jul 14.

②Wada TT, Yokota K, Sakai S, Soma M, Kajiyama H, Tarumoto N, Maesaki S, Maeda T, Nagata M, Mimura T.

Evaluation of Anti-Severe Acute Respiratory Syndrome Coronavirus 2 Antibody Levels in Coronavirus Disease Breakthrough Infection During Immunosuppressive Therapy in a Patient with Connective Tissue Disease-Related Interstitial Lung Disease.

Mod Rheumatol Case Rep. 2023 Jan 3;7(1):288-292. doi: 10.1093/mrcr/rxac052.

③Matsuda M, Yokota K, Ichimura T, Sakai S, Maruyama T, Wada TT, Araki Y, Asanuma YF, Akiyama Y, Sasaki A, Mimura T.

Encapsulating Peritoneal Sclerosis in Systemic Lupus Erythematosus, Rheumatoid Arthritis, and Systemic Sclerosis

Intern Med. 2022 Oct 26. doi: 10.2169/internalmedicine.9793-22. Online ahead of print. PMID: 36288993

④Nanki T, Kawazoe M, Uno K, Hirose W, Dobashi H, Kataoka H, Mimura T, Hagino H, Kono H.

Improvement in Glucocorticoid-Induced Osteoporosis on Switching from Bisphosphonates to Once-Weekly Teriparatide: A Randomized Open-Label Trial.

J Clin Med. 2022 Dec 30;12(1):292. doi: 10.3390/jcm12010292.

⑤Matsuda M, Asanuma YF, Yokota K, Sakon Sakai, Yazawa H, Maruyama T, Wada TT, Araki Y, Mimura T.

New-onset Adult-onset Still's Disease Following COVID-19 Vaccination: Three Case Reports and a Literature Review

Intern Med. 2023 Jan 15;62(2):299-305. doi: 10.2169/internalmedicine.0590-22. Epub 2022 Nov 9.

⑥Kazuhiro Yokota, Miyoko Sekikawa, Shinya Tanaka, Yoshimi Aizaki, Yuho Kadono, Hiromi Oda, and Toshihide Mimura, "Characteristics of Tumor Necrosis Factor- α and Interleukin-6-Induced Osteoclasts in Peripheral Blood and Bone Tissue from Patients with Rheumatoid Arthritis" EULAR 2022, 1-4 June 2022 (Copenhagen, Denmark)

⑦Hiroshi Kajiyama, Yoshimi Aizaki, Hiroaki Yazawa, Kazuhiro Yokota, Yasuto Araki, Yuji Akiyama and Toshihide Mimura. "JAK Inhibitors Counteract Cellular Toxicity of Hydroxychloroquine in Vitro" 2022 ACR, November 13, 2022 (Philadelphia, USA/Online)

⑧Kazuhiro Yokota, Hayato Nagasawa, Yuji Akiyama and Toshihide Mimura. "Effectiveness of Combination Therapy with Tocilizumab and Low-Dose Prednisolone as an Induction Therapy in Biologics-Naïve Patients with Rheumatoid Arthritis: A Prospective, Randomized, Controlled, Open-Label, Multicenter Study" 2022 ACR, November 13, 2022, (Philadelphia, USA/Online)

⑨三村俊英, 舟久保ゆう, 和田琢：成人スチル病診療ガイドライン。2017年版[2023年 Update] 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患等政策研究事業 自己免疫疾患に関する調査研究班編集 2023年1月

⑩荒木靖人：23. リウマチ性疾患。リウマチ性疾患の臨床検査。ゴールドマン・セシル内科学 原著第26版 日本対応版(電子版), Elsevier. 2023

【総数：論文 11 件、学会発表 24 件、講演 162 件】

6-2. 獲得研究費

1. 厚生労働省科学研究費補助金：
三村俊英（研究分担者）：
難治性疾患等政策研究事業
自己免疫疾患に関する調査研究 300,000 円
 2. 日本医療研究開発機構委託業務（AMED）
三村俊英（研究分担者）：
免疫アレルギー疾患等実用化研究事業
自己免疫性疾患の臓器病変局所におけるシングルセル RNA シークエンスを用いたマルチオミックス解析による病態
解明基盤の構築 100,000 円（直接経費）
 3. 日本医療研究開発機構委託業務（AMED）
三村俊英（研究分担者）：
ゲノム医療実現推進プラットフォーム事業
免疫担当細胞 eQTL データを用いた免疫介在性疾患ゲノム情報からの層別化および予後予測モデルの構築
300,000 円（直接経費）
 4. 文部科学省科学研究費補助金
基盤研究（C）
三村俊英（代表）
「高齢発症炎症疾患の病態解明-inflammaging と epigenome の接点」
1,400,000 円（直接経費） 420,000 円（間接経費）
 5. 文部科学省科学研究費補助金
基盤研究（C）
荒木靖人（代表）
「関節リウマチにおけるヒストンメチル化酵素の機能異常の解明及び治療標的としての確立」
期間延長
 6. 文部科学省科学研究費補助金
基盤研究（C）
横田和浩（代表）
「関節リウマチの病態を担う炎症性破骨細胞のシングルセル解析と同定」
900,000 円（直接経費） 270,000 円（間接経費）
 7. 文部科学省科学研究費補助金
基盤研究（C）
梶山 浩（代表）
「ヒドロキシクロロキンの腎保護効果と細胞毒性の検討」
1,100,000 円（直接経費） 330,000 円（間接経費）
 8. 2022 年度学内グラント研究費
和田 琢
「脊椎関節炎に対する抗サイトカイン治療薬の有効性を予測するバイオマーカーの開発」
700,000 円
 9. 2022 年度 大学病院若手研究者育成研究費
矢澤 宏晃
「自己免疫疾患におけるサイトカイン・ケモカインプロファイル解析」
1,500,000 円
 10. 2022 年度学内グラント研究費
相崎 良美
「成人発症スティル病患者の NK 細胞と単球細胞の機能解析による病態解明」
700,000 円
- 6-3. 受賞
該当なし
- 6-4. 特許、実用新案
該当なし
- 6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績
1. 第 62 回 関東リウマチ研究会 世話人：三村俊英
 2. 第 17 回 北関東 Biologics Forum 世話人会 世話人・幹事：三村俊英
 3. 第 39 回 埼玉膠原病肺研究会 当番世話人：秋山雄次
 4. 第 39 回 埼玉膠原病肺研究会 世話人：三村俊英
 5. 第 39 回 埼玉膠原病肺研究会 世話人：舟久保ゆう
 6. 第 39 回 埼玉膠原病肺研究会 世話人：横田和浩
 7. 第 14 回 埼玉医大膠原病研究会 事務局：三村俊英
 8. 第 40 回 埼玉膠原病肺研究会 世話人・幹事：三村俊英
 9. 第 40 回 埼玉膠原病肺研究会 世話人・幹事：秋山雄次
 10. 第 40 回 埼玉膠原病肺研究会 世話人・幹事：舟久保ゆう

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

新型コロナウイルス感染拡大の影響は大きかった。そのため、前年度の改善計画の一部は達成できていない。

学部：学部教育に関しては、授業時間削減に対応して4年生の講義の体制を再編成して2年目となった。対面での印象深い講義を行いたかったが、学生の反応がreal timeでわからない中での講義となった。特に、症例検討（総合医療センター天野教授と三村の合同講義）では、講義中に学生への質問を積極的に行いたかったが叶わなかった。これは次年度以降の課題である。4年生の試験問題では引き続き記述して解答できる力を育てるように記述問題の比重を増やしている。CC-Step1では、6月29日からの1週間単位の病棟参加となったがクルズス、ディスカッションを増やし、病態生理を深く考察できるように指導した。CC-step2/3においては、より深く一人の患者を診療出来る様にした。研究に関しては、オリジナリティーの高い研究が行われているが、論文化が遅れている。次年度には質の高い掲載論文を増やしたい。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

学部：昨年に講義枠の改革を行い、本年度は地に足がついた構成となった。特に新たに始めた2枠は好評である。次年度では更に講義内容の充実を教員に依頼する。研究に関しては、今後十分な成果が現れるように基礎的研究のさらなる進展とともに、臨床と基礎的研究の融合を目指していく。次年度には論文数を増やしたい。

大学院：大学院において研究マインドを持った臨床医を育てるべく、指導を行ってきた。今後もより多くの当科医師に研究マインドが育つように指導を行っていく。新たな専門医制度のため、臨床経験を優先するため研究に割く時間が減っている。次年度では大学院入学時期の再考も必要と思われる。

1. 9) 腎臓内科

1. 構成員

岡田浩一 (OKADA, Hirokazu) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 教育主任 : 代表指導教員 (大学院) : 腎臓病学, 透析療法 : 博士
井上 勉 (INOUE, Tsutomu) : 准教授 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 腎臓病学, 透析療法 : 博士
渡辺裕輔 (WATANABE, Yusuke) : 准教授 : 指導教員 (大学院) : 腎臓病学, 透析療法 : 博士
友利浩司 (TOMORI, Koji) : 講師 : 大学院教員 : 腎臓病学, 透析療法 : 博士
天野博明 (AMANO, Hiroaki) : 助教
伊藤悠人 (ITO, Yuto) : 助教
近藤立雄 (KONDO, Tatsuo) : 助教
杉山 圭 (SUGIYAMA, Kei) : 助教
金子 悟 (KANEKO, Satoru) : 助教
川崎大記 (KAWASAKI, Daiki) : 助教
樽澤太一 (TARUSAWA, Taichi) : 助教
生澤智宏 (IKUSAWA, Tomohiro) : 助教
古川 尚 (FURUKAWA, Naoshi) : 助教
小原 祥 (OBARA, Shou) : 助教
横山優美 (YOKOYAMA, Yumi) : 助教
飯島淳美 (IIJIMA, Atumi) : 助教
伊藤瑞也 (ITO, Mizuya) : 助教
<大学院生>
深谷大地 (FUKAYA, Daichi) : 助教
志村 (小坂井) 和歌子 (SHIMURA[KOSAKAI], Wakako)
<客員教授>
菅原壮一
<客員講師>
高根裕史
<非常勤講師>
青木宏明, 小林竜也, 小島智亜里, 井上秀二, 中村元信
<出向中>
小野 淳 (ONO, Atsushi) : SUBARU 健康組合太田記念病院
萩原龍太 (HAGIHARA, Ryuta) : SUBARU 健康組合太田記念病院
横田順奈 (YOKOTA, Junna) : 丸木記念福祉メディカルセンター

2. 教育

2-1. 目的・目標

① 卒前教育 :

本基本学科の卒前教育の目標は、臨床医としての基本的な能力を身につけることである。具体的には、適切な病歴聴取や身体診察、医学的な推論などの技能に加え、患者中心のアプローチ、チーム医療に貢献する能力の習得である。そのために本基本学科では、臨床実習や系統講義を通じて教育をおこなっている。

② 卒後教育 :

本基本学科の卒後教育の目的は、腎疾患患者を包括的に診療できる総合的な臨床能力を備え、自己の興味を持った領域において研鑽し、主体的に学び続けることができる専門医の育成である。医局員に対しては①総合内科専門医、②腎臓内科専門医、③透析学会専門医の資格を取得させることを最低限の目標とし教育活動を行っている。

③大学院教育 :

本基本学科の大学院教育では、科学的思考法は臨床医にも必要な素養であると考え、日常臨床の中で抱く疑問点や問題点を自ら抽出し、解決・改善に向けた具体的な科学的方法について立案・実行する能力を養うことを目的としている。臨床系大学院ではあるが、必ず研究に専念する期間を設け、必要に応じて学外研究室への短期留学を行うなど、生涯に渡って自主的な研究活動を継続できる十分な能力を身につける機会を保障する。腎臓病学、腎病理学、血液浄化法については、背景にある学術的理論から最新の知見におよぶ高度な専門的知識を習得する。卒業時の具体的な目標は、①英語で原著を作成し国際誌に受理されるまでの過程を自力で遂行できること、②国内外の雑誌のすべての記事を理解できること、③国内外の学会のすべての演題を理解し、必要に応じて演者と議論出来る能力を身につけ、座長が務められること、以上とする。

2-2. 教育実績 (担当者)

①卒前教育 :

卒前教育で運営に関わったユニットは、3年生腎・泌尿器科ユニットのユニットディレクター（岡田）、4年生クリニカル・クラークシップユニットディレクター補佐（岡田）である。講義・演習・実習、臨床実習等を担当したのは、1年生臨床入門ユニット（友利）、4年生クリニカル・クラークシップユニット（岡田、井上、渡辺、友利、天野、伊藤、近藤、金子、杉山、萩原、樽澤、生澤、古川、小原、横山）である。その他、共用試験臨床実習前 OSCE および臨床実習後 OSCE の 評価者（岡田、井上、渡辺、友利）を担当した。

②卒後教育：

研修医 34 人、専攻医 4 人（1 年目 2、2 年目 2、3 年目 0）の研修を行った。

③ 大学院教育：

大学院教育課程には博士課程 2 人（4 年生 1 人[出向中]、1 年生 1 人）が在籍している。

2-3. 達成度評価

① 卒前教育：

本基本学科では、国家試験の出題傾向や学生を対象としたアンケート結果に基づいて、系統講義およびクルズスの内容、講義資料を改訂した。医局員が多忙なため、臨床実習の際の学生指導が満足に行えないことが稀にあったが、全体としては本年度の目標については十分達成できたと評価する。

④ 卒後教育：

研修医および専攻医教育については、熱意のある指導医によるベツトサイドでの on the job training を行っている。本年度も本基本学科から優秀指導医が選出されており、研修医から高く評価されている。また、各医局員もそれぞれの目標とする専門医資格を取得できており、卒後教育としては目標を達成できたと評価する。

② 大学院教育：

研究室を挙げて全国規模の腎疾患関連バイオバンクの創成に協力している。年度の前半は研究室の移動に関する業務、実験系の再セットアップに費やし、法人のキャンパス整備計画に協力した。本年度の目標については、十分に達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

①卒前教育：

上記を踏まえ、次年度は、医療面接、身体診察、臨床推論そしてプレゼンテーションスキルの教育を充実させることを目標として活動する。また卒前教育に携わる医局員の負担を軽減し、より充実した病棟実習を提供できるようにしたい。

②卒後教育：

上記を踏まえ、次年度はワークライフバランスを意識した卒後教育を実践することを目標として活動する。

③大学院教育：

上記を踏まえ、次年度も引き続き原著論文の投稿・公表を目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標

本基本学科では、腎疾患の予後と、腎疾患患者の社会生活の質の改善を目的として研究活動を行っている。研究費は公的資金であり、成果は社会に還元されるべきであると考え、学会・論文発表は積極的に行う。現在進行中の研究テーマは多数あるが、重点領域は「高齢者慢性腎臓病（CKD）」「CCN2 に注目した慢性腎臓病、急性腎障害の治療法に関する基礎的検討」、「尿細管上皮細胞の細胞周期と慢性腎臓病進行機序との関連」および「機能的核磁気共鳴画像（fMRI）をもちいた慢性腎臓病の評価」である。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 高齢者 CKD に関する臨床研究（小野[出向中]、岡田）

高齢者にとって真に必要な医療を提供するための基礎資料の作成を目的として、複数医療機関で連携した前向き研究を行っている。種々の学会のシンポジウムへの参加にこわえて、原著論文の作成中である。近々の Real World Data に則した新たな生命予後予測法の提案を目指している。

2. 高齢者 CKD に関する基礎研究（天野）

腎臓の加齢性変化の分子機構について明らかにする目的で基礎研究を行い、解析用検体の採取を継続している。

3. CCN2・細胞周期と CKD に関する研究（天野、深谷[出向中]、井上、岡田）

CCN2 に着目した新規 CKD 治療薬の開発を目的として基礎研究を行い、線維化に関わる CCN2 の受容体、細胞内シグナル伝達経路の詳細を明らかにするという成果をあげた。現在、原著論文が査読中である。

4. 腎 MRI に関する研究（井上）

既存の腎 MRI から臨床に役立つ指標を効率よく定量的に生成する技術的改良を目的として基礎研究を行い、特許出願や学会報告、複数施設との共同研究を進めている。

5. 腎代替療法の導入に関わる Shared Decision Making に関する研究（友利）

医学的にも適切で患者満足度の高い腎代替療法の提供を目的として SDM 専門外来を行っている。保存的腎臓療法 (conservative kidney management: CKM) の選択も含め、多施設からの需要にも対応するため受け入れ窓口を拡充している。多職種連携を進めるだけではなく、大学として積極的な情報発信に努め成果を公表した。

6. ブラッドアクセスに関する研究（近藤）

患者・施設負担が少なく長期開存するブラッドアクセスを目的として、臨床研究を立案し、一部の成果を研究会で公表した。今後、原著作成を目標に準備を進めている。

7. 腎硬化症における降圧療法の腎保護効果に関する臨床研究（近藤）

慢性腎臓病患者の高齢化を背景に、今後は腎硬化症による腎機能低下が重要な臨床的課題となる。同症は蛋白尿が無いまま腎機能が低下するため。従来の様な蛋白尿の増減をサロゲートマーカーとした腎保護療法の導入は想定し得ない。糖尿病性腎臓病や慢性腎炎症候群とは異なり、降圧療法自体の腎保護効果も疑問視されている。我々は降圧療法が腎機能予後に及ぼす影響を原疾患別に検討し、腎硬化症の治療適正化を考えており、成果の一部を日本腎臓学会総会に報告した。

3-3. 達成度評価

研究実績から、各自がテーマに沿って研究活動を継続し中間報告も兼ねて複数の学会・研究会で発表を行ったという点では順調に活動できた。原著が不足しているという改善点が認められるものの、継続的な研究実績の蓄積が叶ったという点では、本年度の目標は概ね達成できたと評価する。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、生産性を改善し、次年度には原著や症例報告の公表を目標として掲げ、達成に向けて取り組む。

4. 診療

埼玉西部地区での腎疾患・透析診療の拠点施設として、断らない診療を原則とし、あらゆる腎疾患患者の診療を行った。患者数は例年並みであったが、多くの重症患者を受け入れ、質の高い医療を提供できたと考えている。今後も地域のニーズに応えられるよう精進したい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県身体障害者福祉法指定医師(岡田)

日本医療安全調査機構 埼玉県個別調査部会専門委員(岡田)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本腎臓学会 : Clin Exp Nephrol & CEN Case Report Editor in Chief(岡田)、Associate Editor(井上)、日腎会誌 編集委員長(岡田) 日本透析医学会 : 日透医会誌 編集委員(岡田) 日本医師会 : 日本医師会雑誌 学術企画委員(岡田)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本腎臓学会 理事CKD診療ガイドライン2023改訂準備委員会顧問・委員(岡田)、幹事(井上)

厚生労働省腎疾患政策研究事業 腎疾患対策検討会報告書に基づく慢性腎臓病(CKD)対策の推進に資する研究 研究代表者(岡田)

厚生労働省腎疾患政策研究事業 腎疾患対策検討会報告書に基づく対策の進捗管理および新たな対策の提言に資するエビデンス構築 研究分担者(岡田)

厚生労働省腎疾患政策研究事業 難治性腎疾患に関する調査研究 研究分担者(岡田)、研究協力者(井上)

厚生労働省腎疾患政策研究事業 慢性腎臓病(CKD)患者に特有の健康課題に適合した多職種連携による生活・食事指導等の実証研究 研究分担者(岡田)

国立研究開発法人日本医療研究開発機構 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業 糖尿病性腎症、慢性腎臓病の重症化抑制に資する持続的・自立的エビデンス創出システムの構築と健康寿命延伸・医療最適化への貢献 研究分担者(岡田)

国立研究開発法人日本医療研究開発機構 ゲノム医療実現推進プラットフォーム事業 精緻な疾患レジストリーと遺伝・環境要因の包括的解析による糖尿病性腎臓病、慢性腎臓病の予後層別化と最適化医療の確立 研究分担者(岡田)

国立研究開発法人日本医療研究開発機構 予防・健康づくりの社会実装に向けた研究開発基盤整備事業 ヘルスケア社会実装基盤整備事業 慢性腎臓病の発症・進展に関するヘルスケアサービスやデジタル技術介入の提言に資するエビデンスの構築 研究分担者(岡田)

国立研究開発法人日本医療研究開発機構 予防・健康づくりの社会実装に向けた研究開発基盤整備事業 ヘルスケア社会実装基盤整備事業 デジタル技術を活用した生涯にわたる血圧管理指針の研究開発 研究分担者(岡田)

国立研究開発法人日本医療研究開発機構 医薬品等規制調和・評価研究事業 早期の慢性腎臓病治療薬開発に関する臨床評価ガイドラインの策定に関する研究 研究分担者(岡田)、研究協力者(友利、渡邊)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表

① Amano, H.; Inoue, T.; Kusano, T.; Okada, H. Analysis of the Function of CCN2 in Tubular Epithelium Cells with a Focus on Renal Fibrogenesis. *Methods Mol Biol.* 2023, 2582, 411-426.

② Hara, Y.; Nagawa, K.; Yamamoto, Y.; Inoue, K.; Funakoshi, K.; Inoue, T.; Okada, H.; Ishikawa, M.; Kobayashi, N.; Kozawa, E. The utility of texture analysis of kidney MRI for evaluating renal dysfunction with multiclass classification model. *Sci Rep.* 2022, 12, 14776.

③ Inoue, T.; Kozawa, E.; Ishikawa, M.; Kobayashi, N.; Okada, H. The relationship between imaging features of diffusion-weighted imaging and prognosis of chronic kidney disease. *Kidney Int.* 2022, 101, 1083.

④ Kaneko, S.; Inoue, T.; Tarumoto, N.; Haga, Y.; Yokota, K.; Yamaguchi, H.; Okada, H. A case of hemophagocytic lymphohistiocytosis in a hemodialysis patient with coronavirus disease 2019. *CEN Case Rep.* 2023, 1-7.

- ⑤ Kimura, T.; Yamamoto, R.; Yoshino, M.; Sakate, R.; Imai, E.; Maruyama, S.; Yokoyama, H.; Sugiyama, H.; Nitta, K.; Tsukamoto, T.; et al. Deep learning analysis of clinical course of primary nephrotic syndrome: Japan Nephrotic Syndrome Cohort Study (JNSCS). Clin Exp Nephrol. 2022, 26, 1170-1179.
- ⑥ Nagano, H.; Tomori, K.; Koiwa, M.; Kobayashi, S.; Takahashi, M.; Makabe, H.; Okada, H.; Kushiya, A. Identification of Prescribing Patterns in Hemodialysis Outpatients Taking Multiple Medications. Pharmacy (Basel). 2023, 11.
- ⑦ Sato, R.; Matsuzawa, Y.; Ogawa, H.; Kimura, K.; Tsuboi, N.; Yokoo, T.; Okada, H.; Konishi, M.; Kirigaya, J.; Fukui, K.; et al. Chronic kidney disease and clinical outcomes in patients with COVID-19 in Japan. Clin Exp Nephrol. 2022, 26, 974-981.
- ⑧ Shimizu, S.; Niihata, K.; Nishiwaki, H.; Shibagaki, Y.; Yamamoto, R.; Nitta, K.; Tsukamoto, T.; Uchida, S.; Takeda, A.; Okada, H.; et al. Initiation of renin-angiotensin system inhibitors and first complete remission in patients with primary nephrotic syndrome: a nationwide cohort study. Clin Exp Nephrol. 2023, 27, 480-489.
- ⑨ Yamamoto, R.; Imai, E.; Maruyama, S.; Yokoyama, H.; Sugiyama, H.; Takeda, A.; Tsukamoto, T.; Uchida, S.; Tsuruya, K.; Shoji, T.; et al. Time to remission of proteinuria and incidence of relapse in patients with steroid-sensitive minimal change disease and focal segmental glomerulosclerosis: the Japan Nephrotic Syndrome Cohort Study. J Nephrol. 2022, 35, 1135-1144.

【国内の総説および学会発表の総計 57 件】

6-2. 獲得研究費

研究課題：TGF- β ファミリーによる筋萎縮と腎線維化に対する阻害抗体の開発と学内基盤技術の確立

研究種目：埼玉医科大学創立 50 周年記念特別研究費

研究代表者：片桐 岳信

研究分担者：岡田 浩一

研究期間（年度） 2022-04-01 - 2025-03-31

研究課題：機能的 MRI と AI を用いた慢性腎臓病の病態診断・予後予測システムの開発

研究種目：埼玉医科大学創立 50 周年記念特別研究費

研究代表者：井上 勉

研究分担者：岡田 浩一

研究期間（年度） 2022-04-01 - 2025-03-31

研究課題：文科省科研費 急性腎障害の遷延機序解明を通じた慢性腎臓病の重症化抑制法の開発

研究種目：基盤研究(C)

研究代表者：岡田 浩一

研究期間（年度） 2020-04-01 - 2023-03-31

研究課題：日本医療研究開発機構 精緻な疾患レジストリーと遺伝・環境要因の包括的解析による糖尿病性腎臓病、慢性腎臓病の予後層別化と最適化医療の確立

研究代表者：柏原 直樹(学校法人川崎学園 川崎医科大学 医学部)

研究分担者：岡田 浩一

研究期間（年度） 2019-04-01 - 2024-03-31

研究課題：日本医療研究開発機構 糖尿病性腎症、慢性腎臓病の重症化抑制に資する持続的・自立的エビデンス創出システムの構築と健康寿命延伸・医療最適化への貢献

研究代表者：柏原 直樹(学校法人川崎学園 川崎医科大学 医学部)

研究分担者：岡田 浩一

研究期間（年度） 2020-04-01 - 2023-03-31

研究課題：日本医療研究開発機構 慢性腎臓病の発症・進展に関するヘルスケアサービスやデジタル技術介入の提言に資するエビデンスの構築

研究代表者：猪阪 善隆(大阪大学 医学部)

研究分担者：岡田 浩一

研究期間（年度） 2022-04-01 - 2025-03-31

研究課題：日本医療研究開発機構 デジタル技術を活用した生涯にわたる血圧管理指針の研究開発

研究代表者：有馬 久富(福岡大学 医学部)

研究分担者：岡田 浩一

研究期間（年度）2022-04-01 - 2025-03-31

研究課題：日本医療研究開発機構 早期の慢性腎臓病治療薬開発に関する臨床評価ガイドラインの策定に関する研究

研究代表者：南学 正臣（東京大学 医学部）

研究分担者：岡田 浩一

研究期間（年度）2020-04-01 - 2023-03-31

研究課題：厚生労働省難治性疾患政策研究事業 難治性腎疾患に関する調査研究

研究代表者：成田 一衛（新潟大学）

研究分担者：岡田 浩一

研究期間（年度）2020-04-01 - 2023-03-31

研究課題：厚生労働省難治性疾患政策研究事業 腎疾患対策検討会報告書に基づく慢性腎臓病（CKD）対策の推進に資する研究

研究代表者：岡田 浩一

研究期間（年度）2022-04-01 - 2025-03-31

研究課題：厚生労働省難治性疾患政策研究事業 腎疾患対策検討会報告書に基づく対策の進捗管理および新たな対策の提言に資するエビデンス構築

研究代表者：柏原 直樹（学校法人川崎学園 川崎医科大学 医学部）

研究分担者：岡田 浩一

研究期間（年度）2022-04-01 - 2025-03-31

研究課題：厚生労働省難治性疾患政策研究事業 慢性腎臓病（CKD）患者に特有の健康課題に適合した多職種連携による生活・食事指導等の実証研究

研究代表者：要 伸也（杏林大学）

研究分担者：岡田 浩一

研究期間（年度）2020-04-01 - 2023-03-31

6-3. 受賞

優秀演題：友利浩司，在宅血液透析患者の長期予後の検討. 第24回日本在宅血液透析学会 令和4年11月

6-4. 特許、実用新案 *新規出願は無し

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

令和4年3月第6回SMU透析連携施設研究会

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

上記を踏まえ、卒前教育、卒後教育、大学院教育ともに本年度の目標は達成できたと評価している。また研究に関しても、概ね目標は達成できたと評価している。診療に関しては、埼玉県西部地区の拠点病院として質の高い腎疾患診療を行っていることと評価している。基本学科全体としては、個々の医局員の尽力により教育、研究、診療ともに目標を達成できたと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

卒前教育に関しては、次年度はより充実した臨床実習を提供することを目標として取り組む。大学院教育に関しては生産性を改善し、次年度も複数の学会へ成果の公表を目標として取り組む。研究に関しても同様の改善を目標として、次年度は原著論文の雑誌掲載を目標として取り組む。診療に関しては、医局員の業務環境を改善し、次年度も質の高い腎疾患診療を行うことを目標として取り組む。

1. 10) 感染症科・感染制御科

1. 構成員

前崎 繁文 (MAESAKI, Shigefumi) : 教授 運営責任者 教育主任 診療科長 代表指導教員 (大学院) : 感染症学、感染制御、呼吸器病学 : 博士

樽本 憲人 (TARUMOTO, Norihito) : 准教授 研究主任 : 感染症学、感染制御、真菌感染症学 : 博士

酒井 純 (SAKAI, Jun) 助教 : 内科学、感染症学 : 博士

戸叶 美枝子 (TOKANO, Mieko) 助教 : 内科学、感染症学 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

感染症学は各臓器に発症する疾病を対象とするため、全身の諸臓器を縦断的に理解する必要がある。そのため系統的な感染症学の教育が求められる。さらに感染症学は基礎医学との関わりが大きく、なかでも微生物学および免疫学の理解が不可欠である。そのため、4年生における「感染症総論」のユニットでは小児科学と協力し、系統的な感染症学の教育および評価を行っている。また、院内感染の教育に関しては他の医科大学では実施されていない院内感染対策の病室実習を5年生で行っている。その目的としては実践の医療従事者として現場で仕事をする以前に院内感染対策の基本的な事項を実習から習得することであり、院内感染対策の教育としては極めてユニークなものとする。

2-2. 教育実績

卒前教育では3年生ではヒトの病気コース、消化器を担当。4年生では「感染」ユニットに講義を担当した。5年生では毎週火曜日の午後院内感染対策に関わる実施をBSLの一つとして実施した。6年生では内科総論および外科総論で講義を行った。

大学院教育としては、博士課程1人(3年生)、が在籍している、

2-3. 達成度評価

教育実績から卒前教育および大学院教育という点では順調に活動できたが、専攻医が不在のため、卒後教育には改善点が認められた。以上より、本年度の目標については、卒前教育および大学院教育は十分達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

専攻医を獲得し、卒後教育を充実したいと考えている。

3. 研究

3-1. 目的・目標

薬剤耐性緑膿菌、深在性真菌症に関する研究

3-2. 研究プロジェクトと研究実績

1. 薬剤耐性菌に関する研究

薬剤耐性緑膿菌における基礎的ならびに臨床的研究を行った

2. 深在性真菌症に関する研究

深在性真菌症の診断と治療

3-3. 達成度評価

薬剤耐性緑膿菌の基礎的研究として各種抗菌薬における薬剤感受性成績、各種抗菌薬の併用効果による抗菌活性、薬剤耐性機序の研究を行ってきた。さらに臨床的な研究として感染症疫学、分子生物学的疫学、薬剤耐性緑膿菌感染症患者の治療などが行えた。また、深在性真菌症の診断として新しい血清診断法の臨床的有用性について血液悪性腫瘍患者を対象に行った。また、近年新たに開発された抗真菌薬と既存の抗真菌薬の臨床分離真菌に対する薬剤感受性を測定し、比較検討するとともに新規の抗真菌薬の臨床的有用性を検討した。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、さらに継続してこれらの研究を行う。

4. 診療

感染症科・感染制御科は大学病院の全入院患者を対象として、横断的に感染症の診療にあたる診療科である。その大きな責務は①院内感染対策によって患者を院内感染から守り、また院内感染の事例は発生した際には速やかにその蔓延を防ぐための適切な対応を図る。②外来診療において感染症の診断・治療に関する専門的な診療を行うとともに、他の診療科の感染症の診断・治療に対するコンサルテーションに応じる。③第1種感染症指定医療機関として、1類感染症の診療に携わる。④埼玉県内のHIV診療拠点病院の一つとして、HIV診療の中止的な役割を担うなどがある。まだ、スタッフは限られているが、わが国において感染症診療を標榜する診療科は極めて限られており、その存在意義を考えて研究・診療にあたっている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

厚生労働省薬事審議会 医薬品第2部会委員 (前崎)

厚生労働省薬事審議会 再評価部会委員 (前崎)

厚生労働省生物由来製剤安全対策部委員（前崎）

国民健康保険中央審査会 特別審査員（前崎）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本感染症学会評議員・理事・東日本支部長（前崎）

日本内科学会 評議員・関東支部幹事（前崎）

日本感染症学会評議員（樽本）

日本化学療法学会評議員（前崎、樽本）

日本臨床微生物学会評議員・理事（前崎、樽本）

日本医真菌学会評議員（前崎）

抗生物質学術協会評議員（前崎）

Internal Medicine 編集委員（前崎）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1. Sakai J, Maesaki S. Prevalence, molecular characterization, and drug susceptibility of extended-spectrum β -lactamase-producing *Klebsiella pneumoniae*, *K. quasipneumoniae*, and *K. variicola* in Japan. *Microb Pathog*. 2022 Aug;169:105663. doi: 10.1016/j.micpath.2022.105663.
2. Wada T, Yokota K, Sakai S, Soma M, Kajiyama H, Tarumoto N, Maesaki S, Maeda T, Nagata M, Mimura T. Evaluation of Anti-Severe Acute Respiratory Syndrome Coronavirus 2 Antibody Levels in Coronavirus Disease Breakthrough Infection During Immunosuppressive Therapy in a Patient with Connective Tissue Disease-Related Interstitial Lung Disease. *Mod Rheumatol Case Rep*. 2022 Jun 22:rxac052. doi: 10.1093/mrcr/rxac052
3. Montgomery H, Hobbs FDR, Padilla F, Arbetter D, Templeton A, Seegobin S, Kim K, Campos JAS, Arends RH, Brodek BH, Brooks D, Garbes P, Jimenez J, Koh GCKW, Padilla KW, Streicher K, Viani RM, Alagappan V, Pangalos MN, Esser MT; TACKLE study group. Efficacy and safety of intramuscular administration of tixagevimab-cilgavimab for early outpatient treatment of COVID-19 (TACKLE): a phase 3, randomised, double-blind, placebo-controlled trial. *Lancet Respir Med*. 2022 Oct doi: 10.1016/S2213-2600(22)00180-1.
4. Tokano M, Takagi R, Kawano M, Maesaki S, Tarumoto N, Matsushita S. Signaling via dopamine and adenosine receptors modulate viral peptide-specific and T-cell IL-8 response in COVID-19. *Immunol Med*. 2022 Sep doi: 10.1080/25785826.2022.2079369.
5. Ishibashi N, Pauwels I, Tomori Y, Gu Y, Yamaguchi T, Handa T, Yamaoka M, Ito D, Sakimoto T, Kimura T, Takizawa K, Sato R, Sakashita T, Ooyama A, Versporten A, Goossens H, Tarumoto N, Maesaki S, Tanahashi N. Point Prevalence Surveys of Antimicrobial Prescribing in a Non-Acute Care Hospital in Saitama Prefecture, Japan. *Can J Infect Dis Med Microbiol*. 2022 Mar doi: 10.1155/2022/2497869.
6. Yanagisawa S, Oikawa Y, Takagi S, Horikoshi Y, Satomura A, Imai K, Sakai J, Ishibashi N, Tarumoto N, Iida S, Nakayama H, Haga Y, Maesaki S, Shimada A. HbA1c level may be a risk factor for oxygen therapy requirement in patients with coronavirus disease 2019. *J Diabetes Investig*. 2022 May doi: 10.1111/jdi.13743.
7. Kitagawa Y, Imai K, Matsuoka M, Fukada A, Kubota K, Sato M, Takada T, Noguchi S, Tarumoto N, Maesaki S, Takeuchi S, Maeda T. Evaluation of the correlation between the access SARS-CoV-2 IgM and IgG II antibody tests with the SARS-CoV-2 surrogate virus neutralization test. *J Med Virol*. 2022 Jan doi: 10.1002/jmv.27338.
8. Tokano M, Tarumoto N, Imai K, Sakai J, Maeda T, Kawamura T, Seo K, Takahashi K, Yamamoto T, Maesaki S. A Case of Bacterial Meningitis Caused by *Bacillus subtilis* var. natto. *Intern Med*. 2022 Nov 23. doi: 10.2169/internalmedicine.0768-22.
9. Tokano M, Matsushita S, Takagi R, Yamamoto T, Kawano M. Extracellular adenosine induces hypersecretion of IL-17A by T-helper 17 cells through the adenosine A2a receptor. *Brain Behav Immun Health*. 2022 Oct doi: 10.1016/j.bbih.2022.100544.
10. Tokano M, Kawano M, Takagi R, Matsushita S. Istradefylline, an adenosine A2a receptor antagonist, inhibits the CD4+ T-cell hypersecretion of IL-17A and IL-8 in humans. *Immunol Med*. 2022 Dec doi: 10.1080/25785826.2022.2094593/

【総数：論文 15 件、学会発表 22 件、講演 15 件】

6-2. 獲得研究費

樽本憲人. 2018 年度-2022 年度. 科学研究費補助金. 基盤研究 C. PNA を用いた LAMP 法によるマクロライド耐性梅毒トレポネーマの検出系の開発. (代表)

今井 一男. 2019 年度~2022 年度. 科学研究費補助金. 若手研究. ポータブル Direct RNA シーケンスによる小児呼吸器感染症の迅速診断系の開発. (代表)

戸叶 美枝子. 2022 年度-2024 年度. 文部科学省科学研究費補助金. 若手研究. アデノシンによる免疫応答調節機構の解析とその応用. (代表)

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

4年次に感染症学の講義を独立して行った。5年から6年の講義を通じて国家試験に役立つ内容を目指したが、模擬試験や国家試験の結果からは全国平均を超えていたので目標は達成できたと考えている。臨床面では外来患者数は着実に増加傾向を示し、さらに院内のコンサルテーション数も増加傾向である。今後はより感染症の診療に専門性を持たせることが課題と考えられる。研究面に関してはいくつかの研究課題において着実に成果が得られている。今後、臨床検査部や看護部などともに院内感染対策などより実践的な研究課題に取り組む必要がある。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関してはこれまでの講義および実習を通じてより充実したものとする。卒後教育に関しては専攻医の獲得を目指す。臨床面では、初診患者数や紹介患者数の増加を図る。研究についてはこれまでの研究を継続し、より多くの論文発表を目指す。

1. 11) 総合診療内科

1. 構成員

中元秀友 (Nakamoto, Hidetomo) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任 : 代表指導教員 (大学院)
: 腎臓、透析、高血圧、医療経済、遠隔診療 : 博士

山本啓二 (Yamamoto, Keiji) : 教授 : 心臓内科診療部長 : 指導教員 (大学院) : 循環器 : 博士

今枝博之 (Imaeda, Hiroyuki) : 教授 : 消化管内科診療部長 : 指導教員 (大学院) : 消化器、博士

鈴木朋子 (Suzuki, Tomoko) : 教授 : 副診療部長 : 呼吸器、漢方医学 : 博士

木村琢磨 (Kimura, Takuma) : 教授 : 老年病 : 博士

飯田慎一郎 (Iida, Shinichiro) : 准教授 : 外来医長 : 循環器 : 博士

廣岡伸隆 (Hirooka, Nobutaka) : 教授 : 地域医療科診療部長 : 研修医長 : 総合診療 : 博士

小林威仁 (Kobayashi, Takehito) : 准教授 : 病棟医長 : 呼吸器 : 博士

都築義和 (Tsuzuki, Yoshikazu) : 准教授 : 消化器 : 博士

大庫秀樹 (Oogo, Hideki) : 講師 : 指導教員 (大学院) : 消化器 : 博士

中谷宣章 (Nakaya, Nobuaki) : 講師 : 救急医学

安倍涼平 (Ryouhei Abe) : 講師 : 血液 (令和4年5月より血液内科へ移動)

木下俊介 (Kinoshita, Shunsuke) : 助教 : 医局長 : 指導教員 (大学院) : 神経

菅野 龍 (Kanno, Ryu) : 助教 : 循環器

山岡 稔 (Yamaoka, Minoru) : 助教 : 消化器 (丸木記念福祉医療センターへ出向)

白崎文隆 (Shirasaki, Fumitaka) : 助教 : 透析

草野 武 (Kusano, Takeru) : 助教 : 内分泌 : 博士

青柳龍太郎 (Aoyagi, Ryuutarou) : 助教

塩味里恵 (Shiomi, Rie) : 助教 (埼玉医科大学国際医療センターへ出向)

宮口和也 (Miyaguchi, Kazuya) : 助教

熊川友子 (Kumakawa, Tomoko) : 助教 (米国留学中)

松本 悠 (Matsumoto, Hisashi) : 助教

神山雄基 (Kamiyama, Yuki) : 助教

斎藤雅也 (Saitou, Masaya) : 専攻医

宇野天敬 (Uno, Talatoshi) : 専攻医

松井拓也 (Matsui, Takuya) : 専攻医

水流佐方里 (Tsuru, Saori) : 専攻医

竹川啓介 (Takegawa, Keisuke) : 専攻医

堀内 優 (Horiuchi, Yu) : 専攻医

時田 一 (Tokita, Hajime) : 専攻医

小川朋哉 (Ogawa, Tomoya) : 専攻医

足立瑛彦 (Adachi, Akihiko) : 専攻医

齊藤航平 (Saitou, Kohei) : 助教 : 大学院生 (東松山在宅診療所出向中)

佐々木秀悟 (Sasaki, Shugo) : 助教 : 大学院生 (厚生労働省出向中)

芦谷啓吾 (Ashitani, Keigo) : 助教 : 大学院生 (おゆみの中央病院出向中)

日々紀文 (Hibi, Norifumi) : 客員教授 : 消化器 : 博士

原 晋 (Hara, Susumu) : 客員教授 : 博士

中嶋美智子 (Nakajima, Michiko) : 非常勤講師 : 超音波 : 博士

竜崎崇和 (Ryuuzaki, Munekazu) : 非常勤講師 : 腎臓、透析 : 博士

野口 哲 (Noguchi, Toru) : 非常勤講師 : 呼吸器 : 博士

横山 央 (Yokoyama, Madoka) : 非常勤医師 : 透析

2. 教育 (担当 中元秀友)

2-1. 目的・目標

「総合診療内科」の教育の目的は、患者さんを全身的な観点からとらえ、総合的に診断し判断する能力を持ち、的

確な診断と治療を行うことのできる医師を育成することにある。

卒後教育では、以前より掲げている「総合医」としての臨床能力を基本に、個々が得意とする分野を「専門性」として追求する事の重要性も認識し、各自の目指す方向性の「専門医」を取得する事、さらに科学的な考察力を身につけるため、積極的に研究・発表を行う事を新たな目標として科の運営を行った。さらに具体的な目標として2017年より始まる新たな専門医制度を見据えて、「総合内科医」の専門医、さらに「総合診療医」の専門医、いずれにも対応できる総合的な判断のできる医師の育成を目標として掲げた。そのために「内科学会専門医」、さらに「プライマリケア専門医」を取得する事を医局員の直近の目標とした。

また卒前教育の目的として、医師としての基本的な心構え、態度、さらに礼儀から始まる基本的診療能力の習得を目指す。さらに医療面接、バイタルサインを含めた身体診察能力の習得、そしてそれをカルテとしてきちんと記載し、皆の前でプレゼンテーションできる事、ここまでの基本的診療能力の習得を第一目標として掲げた。

2-2. 教育実績 (担当者 中元秀友)

卒前教育で運営に関わったユニット (科目) は3年生「診療の基本」ユニットのユニットディレクター (廣岡伸隆) である。卒前教育では鈴木朋子教授が中心となり、学生の充実した実習を行った。講義・演習・実習、臨床実習などを担当したのは、3年生「診療の基本」ユニット (中元秀友、山本啓二、今枝博之、廣岡伸隆、飯田慎一郎、都築義和)、3年生、4年生、5年生、6年生の臨床実習 (中元秀友、山本啓二、今枝博之、鈴木朋子、廣岡伸隆、小林威仁、飯田慎一郎、都築義和、大庫秀樹、木下俊介、木下俊介、飯田慎一郎、草野 武、青柳龍太郎、松本 悠、神山雄基、斎藤雅也、宇野天敬、松井拓也、水流佐方里、竹川啓介、堀内 優、時田 一、小川朋哉、足立瑛彦) である。

その他、卒前教育では共用試験臨床実習前 OSCE 評価者 (廣岡伸隆、小林威仁、大庫秀樹、草野 武)、共用試験臨床実習後 OSCE 評価者 (廣岡伸隆、小林威仁、大庫秀樹、草野 武) を担当した。

卒後教育としては、専攻医9名 (1年目竹川啓介、堀内 優、時田 一、小川朋哉、足立瑛彦、2年目松井拓也、水流佐方里、3年目斎藤雅也、宇野天敬) の研修を行っている。大学院教育としては、博士過程3名 (1年生佐々木秀悟、芦谷啓吾、3年生 齊藤航平) が在籍している。

2-3. 達成度評価

卒後教育：

総合診療内科は2006年 (平成18年) 5月発足の若い診療部である。今年で18年目の本年度は、前年度より継続して大学卒業後1、2年目の初期研修医、さらに卒業後3年目以後の後期研修医師 (専攻医) の卒後教育を行った。COVID19の影響も昨年に続き継続しており、不自由な環境下での卒後教育となったが、感染防御をしっかり行い教育は継続して行った。クルズスや勉強会の開催などは、極めて限定された環境下での実施となった。

患者への初期診療として診断能力、鑑別診断、さらに適切なトリアージを勉強する場として埼玉医科大学内科の初診患者の初期診療を中心に研修医師の外来診療指導を行った。またERの救急診療に対しても、積極的に関わった。臨床研修医への教育目標として昨年度と同様以下のような目標設定を決め、研修医教育を行った。さらに鑑別診断から全身管理、治療を中心に学ぶ場として現在東館4階・西館5Fの入院患者を中心に入院診療研修を行った。

総合診療内科が初期研修医に強く求めることは、医師としてきちんとした初期対応ができることであり、これも極めて重要なポイントとした。この点に関しては以前より強調していたが具体的には1) 問診および診察：きちんとした患者対応ができること、患者の問診が取れること、臨床所見を取ることができること、きちんとしたカルテの記載ができること、以上を基本課題とした。さらに可能であれば2) 診療計画： (初期診療の基本的な問診、診察所見から) 適切な検査計画を立てられること、さらに3) 鑑別診断：個々の検査から鑑別診断を列記できること、4) 検査計画：個々の検査を判断できること、個別にはX線写真が読影できること、心電図が判読できること、CT、MRIを読影できること、外来での緊急検査 (血液型判定、グラム染色など)、さらに超音波検査ができること、5) 情報の提供と共有 (報連相) ; 以上の結果を適切に患者、ならびに家族、さらに我々上級医に説明できること (プレゼンテーション)、そして6) トリアージ：以上の診断から適切なトリアージができること、7) 治療計画：適切な治療計画を立案できること、以上の項目が出来る事を目標課題とした。これらの内容に関してはカルテの定期的なチェック、さらにカンファレンスで確認した。重要事例、症例検討会ではケーススタディーを基本とし、診療計画の作成、それに基づいた鑑別診断、治療計画の作成、他科との連携の判断ができるよう教育計画を立て、実行した。さらに定期的に行う専門医による勉強会、ここでは診療に直結する話題を各専門医にお願いした。また各診療科の協力のもと、多くの先生に定期的な講義をお願いした。その他にも定期的にその時期のトピックスである疾患や、実臨床で経験した症例につき可能な限り英文論文を用いた勉強会 (ジャーナルクラブ) を行うことで、研修医たちの知識の把握に努めた。

卒前教育：

今年度も引き続き5年生の病棟実習 (BSL) の中心として、学生の受け入れを行った。今年度もBSL実習は各グループ

2週間でいった。学生教育は鈴木朋子教授が中心となり、充実した臨床実習体制を計画して頂いた。しかしながら、COVID19の大流行によって緊急事態宣言となり、学生の実習参加も極めて限定された状況で行わざるをえなかった。可能な範囲での教育を全医局員で行った。また3年生、6年生のクリニカルクラークシップの実習教育を全医局員で行った。

卒前教育では、BSL 学生さんへの教育方針として、しっかりした問診、診察ができ、それを記録に残せること、そのために「できるだけ多くの患者さんの診療を見学し、積極的に診療参加してもらおうこと」とした。具体的な教育目標としてBSL 学生が、1) 医療面接：きちんと問診がとれること、2) 身体診察：確実な診察技術を身につけること、3) カルテ記載：診察所見をカルテとして記載できること、そして4) プレゼンテーション：その所見を皆の前で発表できること、この4点を到達目標としてBSL 実習を展開した。講師以上の先生には、各自クルズスを行うようにし、さらに外来実習でも教育に参加して頂いた。しかしながらCOVID19の影響もあり、極めて限定された環境下での実施となったのは残念であった。

またCOVID19の環境下、5年、6年のクリニカルクラークシップの学生受け入れを可能な範囲で継続していった。

その他に、個々の医局員の専門分野に関する講義を、専門各課と協同していった。医学教育、特に卒前教育における「総合診療」の重要性は確実に高まっている。今後の教育において「総合診療」は教育の中心となり、益々その重要性を高めて行く事は間違いない方向性であろう。

大学院教育：

大学院教育としては、博士過程3名（1年生佐々木秀悟、芦谷啓吾、3年生 齊藤航平）が在籍している。大学院 s 道教委員を中心に指導を継続していった。

達成度：95%

総合診療内科開設18年目の教育の分野では、昨年に引き続き学生の臨床実習教育（BSL）に積極的に参加した。本年度も継続してCOVID19の影響があり、また医局員数の減少もあり、極めて厳しい環境下での教育となった。しかしながら、医局員達は感染防御を確実にし、継続して教育を行った。また例年とおり、臨床入門、臨床推論等で積極的に卒前教育に関わった。また卒後教育でも積極的に初期ならびに後期の研修医教育を行った。クリニカルクラークシップでの評判は良好であり、かなりの人気を得ているものと確信している。忙しい病棟診療を行いながら、医局員達は可能な限りの学生ならびに研修医の教育を行うよう努力してきた。また卒後教育でも積極的に研修医教育を行い、研修医からの評判も確実に改善している。

自己評価としてはCOVID19の影響下で、少ない医局員で可能な限りの充実した研修を行い95%の達成度と評価したい。マイナス要因としては、医局員が減少したため忙しすぎて教育に十分な時間を取れないとの意見があった点である。今後も継続して改善してゆきたい。この点は今後の「働き方改革」への対応にもつながってくる。

2-4. 自己評価と次年度計画

達成度としては目標の95%と考えている。

総合診療内科に平成22年より循環器診療を専門とする山本教授、平成23年から消化器診療を専門とする今枝教授に赴任して頂いたことから、極めて高いレベルの教育体制が構築された。本年度はさらに呼吸器内科を専門とする鈴木朋子教授で研修医達の教育を積極的に行った。鈴木朋子教授は総合診療の教育経験もあるためより研修が充実した。

当科の特徴として「総合診療」を標榜し、高い診療能力を養い、十分な鑑別能力を持つ医師の育成を第一目標としている。そのためには我々医局員は常に研鑽を積み、総合医としての能力を高めるよう努力して行く必要がある。特に大学病院で行う最も重要な事は「総合診療」の「教育」である。如何に「総合診療」の教育体制を確立し、着実にやって行くのか、今後の大きな課題である。

また、総合医の重要な役割に他の診療科、多職種との連携があげられる。的確な診断を下し、治療を行っていくためには内科専門各科との協力体制の維持が必須である。さらに働き方改革を見据えた多職種との連携が重要となる。今後も埼玉医科大学の全診療科と総合診療内科が連携できる体制を作って行きたい。さらに「ポストコロナ時代の人材養成」にも積極的に関わって行くことは重要である。そのために重要なことはこれまで以上に優秀な指導医スタッフの獲得、そして育成である。そのためにも、しっかりとした教育システムの構築と運営は必須であると考えている。

令和4年度のマイナス要因としては、昨年度に続きCOVID19の影響で十分な教育が達成出来なかったこと。さらに医局員数が減少したため、以前にもまして忙しくて教育に十分な時間を取れないとの意見があった点である。ポストコロナの状況となり、総合診療内科では新たな気持ちで教育に関わって行きたいと考えている。今後医局員の増加、また工夫して効率良い教育ができるように改善してゆきたい。この点は今後の「働き方改革」への対応にもつながってくる重要な点と考えている。

3. 研究（担当者 小林威仁）

3-1. 目的・目的

臨床研究

総合診療内科の研究課題として、前年度より引き続き生活習慣病に関する臨床研究を継続して行った。高血圧、糖尿病、肥満、さらに慢性腎疾患などの心血管合併症の発症誘因となる疾患を中心に、その疫学調査、さらに生活状況の影響、さらに治療の状況、介入試験などの臨床研究を行った。さらに透析医療に関して、貧血の治療状況、CKD-MBDに関する研究、腹膜透析（PD）の管理方法に関する研究を行った。また Telemedicine（遠隔診療）に関する臨床研究を行った。特に病診連携の中心となるべき臨床科として、周囲の開業医や関連病院と連携をし、この地域に根付いた臨床研究として Telemedicine を利用した患者管理に関する研究、PD の貧血治療に関する他施設共同研究を開始した。

基礎研究：腎疾患進展の機序に関して、その発症進展機序、治療に関する基礎研究を継続して行った。また、慢性腎不全の在宅療法として広く普及している PD の腹膜障害進展機序、さらにその保護療法に関する基礎研究を継続して行った。また PD 感染症に関する疫学調査を臨床研究とともに行った。またアレルギーに関する基礎研究を小林准教授が中心となり、アレルギー喘息センターと連携して行った。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

1. Telemedicine を用いた在宅医療の検討（中元秀友、小林威仁）

これまで行っていた遠隔医療監視システム（Telemedicine）を用いた家庭血圧、血糖、体重の監視システムを用いた各種大規模臨床研究を継続して行った。家庭血圧での降圧効果を比較検討する研究成果をこれまでも各学会において発表してきた。さらに各種配合剤の家庭血圧へ及ぼす影響の検討、さらに糖尿病性腎症に対する影響の研究等も糖尿病内科との共同研究として行った。さらに平成 29 年より新しいタイプの腕時計式のモニタリングシステムを用いた新しいタイプの Telemedicine 装置を開発し、その有用性と開発経過、臨床への応用を検討している。このシステムを用いた新たな臨床研究もを継続して行った。

新たなプロジェクトとして Virtual Hospital 体制の確立がある。これは遠隔医療監視システム（Telemedicine）の応用形として、かかりつけ医との連携により、在宅の高齢者をネットシステムを用いることで、病院環境にいるものと同じ医療を提供できるようにするものである。今後の世界の医療体型を大きく変えていく可能性のある規模の大きな研究である。

2. PD ネットワークの運営（中元秀友、小林威仁）

PD は末期腎不全患者に対する重要な在宅医療として広く認識されている。PD 患者等在宅患者のバックアップシステムの構築を行い、広く一般開業医においても在宅患者の診療とモニタリングが可能となるシステムの構築を行っている。

その臨床実績の一つとして、すでにインターネット上に埼玉腹膜透析ネットワークというサイトをオープンしている。これは埼玉県内全域を対象としたインターネット上のネットワークであり、総合診療内科が中心となってサイトの運営を行っている。現在埼玉医科大学、所沢腎クリニック、防衛医科大学、さくら記念病院、武蔵嵐山病院、埼玉中央病院など多数の透析関連施設がこのネットワークに参加しており、医療施設、医師、看護師、栄養士、患者、さらにメーカーなどと一体となった埼玉県中心の地域ネットワークシステムを構築している。このネットワークの事務局は埼玉医科大学総合診療内科にある。この腹膜透析ネットワークを利用した、病診連携による在宅透析患者の管理システムの構築、さらに展開を行った。特に腕時計式の IoT を用いた新しいタイプの Telemedicine 装置を開発し、その有用性と開発経過を学会等で発表した。ネットワークの名称：埼玉腹膜透析ネットワーク

<http://www.saitama-capd.ne./index.html>

3. 慢性腎臓病対策プロジェクト（中元秀友、岡田浩一）

慢性腎臓病（CKD）は末期腎不全（ESRD）の原因として広く知られているが、さらに心臓血管合併症の重要な危険因子であることが認識されるようになってきた。CKD に関しては腎臓専門医ばかりでなく、広く総合医や開業医との連携が重要であることが近年強調されている。総合診療内科では、CKD 撲滅のために幾つかの臨床研究を近隣の開業医と連携を組み行っていく研究を中心とした病診連携をすでに開始しており、今後さらに医療連携を含めて展開全国規模で展開している。

4. 消化管内科プロジェクト（今枝博之）

これまで、早期消化管癌の内視鏡診断・治療の開発をテーマとした研究を行ってきた。内視鏡診断に関しては、特に自家蛍光観察を用いた早期胃癌の検出や早期胃癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）後の異所性再発病変のサーベイランスに関して報告しており、本年も引き続き検出を行った。また、治療に関しては ESD をより簡便に施行が可能となるべく、把持鉗子による counter traction を併用した ESD の手技を開発し、早期胃癌および早期大腸癌に対して継続して報告した。また、内視鏡的止血術の工夫やカプセル内視鏡やパルーン内視鏡を用いた小腸

内視鏡診断・治療、経皮内視鏡的胃瘻造設術後に極細径内視鏡を用いた経胃瘻的な内視鏡観察の有用性に関しても報告した。新たな内視鏡機器の開発や内視鏡手技の開発を継続して行っている。詳細な内要については消化管内科の年報参照。

5. 漢方薬の臨床応用に関する検討（中元秀友、鈴木朋子、小林威仁）

臨床症状に対する漢方薬の有用性を検討している。さらにコンピュータを用いた新しい診断装置、さらに薬剤選択の仕組みを構築している。小林威仁は臨床現場で西洋医学と東洋医学の連携を目指して新たなプロジェクトを開始しており、大野クリニックの大野修嗣医師と共に臨床現場で使い安いマニュアルの作成を行ない発表した。これらの成果は定期的に勉強会などで発表している。

今回新たに鈴木朋子先生を中心に、漢方医薬による西洋医学と東洋医学の融合を目指すプロジェクトが計画されている。

今後治療対象を広げていきたい。

6. 唾液による不顕性誤嚥と IPF 急性増悪との関連に関する検討（鈴木朋子）

特発性肺線維症の予後規定因子の一つである急性増悪の一因として「唾液などによる不顕性誤嚥」が関わるのではないかとのコンセプトで研究を進めている。唾液アミラーゼやペプシンが誤嚥性肺炎患者の気管支肺胞洗浄液中に高容量含まれていることを証明した。本年度も研究成果を報告している。

(Suzuki T, et al. Pulmonology 2022 Jun 14;S2531-0437(22)00104-0)。

7. アレルギー診療プロジェクト（小林威仁）

呼吸器内科アレルギー喘息センターの永田真教授と共にアレルギー疾患の研究プロジェクトをスタートしている。特に好酸球のアレルギー発症における役割に関する検討を積極的に行った。現在大学院生の齊藤航平助教、指導医として小林威仁を中心として基礎研究ならびに臨床研究を活発に行いその成果を各種学会で報告している。

8. 生活習慣と高齢者の生きがいに関する検討（廣岡伸隆、木下俊介）

高齢者社会における生きがいに影響する因子を、多方面から検討している。統計学的手法を用いた検討を行い、その成果を多くの海外雑誌に発表している。今後の高齢化社会を踏まえて、今後さらなる重要性が増すものと思われる。

3-3. 達成度評価：85%

COVID19の影響があり、学会、研究会の開催が極めて難しく、研究発表も機会は限定された。そのような環境下今年度の目標であった年間10編以上の英文論文の発表を達成した。基礎研究に関しては、幾つかのプロジェクトをスタートしており、その成果を学会で発表した。また呼吸器内科との共同研究を引き続き行っている。また企業との共同研究をスタートしている。現在忙しい診療を行いながら全医局員協力のもと、可能な限りの研究業績を上げるよう努力をしている。このような状況下それなりの成果は達成できたものと考えている。

現在はスタッフの増員に伴い、幾つかの研究グループを立ち上げ、臨床研究を中心に研究をスタートしている。今後は、現在行っている研究を継続して行っていく事、さらにそれを論文としてまとめて行く事を目標としたい。今年度の達成率は85%と考えている。

3-4. 次年度改造計画

現在の総合診療内科は医局員数減少で厳しい状況の基人員の確保に努力し、可能な限りの基礎ならびに臨床研究を継続して行っている。今年度は英文論文数も10以上となり、それなりの成果を上げることができた。また邦文論文では原著、著書をあわせて20編以上の論文発表を行っている。また公的研究費の獲得が着実にできるようになったことも大きな進歩である。今年の成果は85%の達成率と評価したい。

次年度目標として、さらに公的研究費をしっかりと取得し基礎研究の成果を英文論文として発表すること、さらに臨床研究は全国規模の大規模臨床研究を幾つかスタートさせたい。具体的な目標として、きちんと成果をまとめて行く事、特に英文雑誌に20編の論文を掲載することと考えている。

4. 診療（診療部長 中元秀友）

令和4年度は「総合診療内科」として引き続き積極的に活動し、病棟運営に力を入れた一年であった。さらに東館GFの初診ならびに再診患者の外来診療、さらに東館4F病棟(35床)を中心に病棟運営を積極的展開してきた。2021年4月には新たに西館5F病棟(32床)を開設し合計67床(他にHCU8床)の病床を運用した。ECPCにおける時間外診療体制も16年目となりECPCとの連携を中心に、Walk in患者の診療を中心に行った。しかしながらCOVID19の年始からの大流行、さらに医局員数の大幅な減少のため、外来患者も入院患者も例年通りの受け入れ数を維持することが出来なかった。このような状況から、本年度の目標達成は70%と評価したい。

この数年の大きな変化は心臓内科山本教授と消化器内科今枝教授、さらに血液内科の宮川教授、老年内科の橋本教授、さ

らに昨年度より呼吸器内科、漢方医学の鈴木朋子教授の参加に伴う、循環器、消化器、呼吸器、腎臓、血液、さらに漢方診療チームの充実を目指してきたが、今年は血液チームの血液内科への移動があった。またその他にも多くの医師の移動があった。このように総合診療内科自体の体制が刻一刻大きく変化しているが、状況に対応しつつ若者が十分成長できる医局を目指して頑張っていきたい。このような激動の中、さらなる診療部門の拡張と充実にむけ、努力をしていきたい。

最後に今後の課題を考える。当科の新しい外来診療の特徴として、臓器に関わらず多くの初診患者を「総合診療内科」で診察し、必要とあれば専門性の高い「専門医」へ紹介する。そして大学病院の総合診療科の重要な役割は、「総合診療」ができる優秀な「総合医」を育成することにある。そのためにきちんとした教育体制の確立、そしてそれを支えるスタッフの充実が急務である。そのためにも次年度も引き続き優秀な専属スタッフの拡充と、入院ベッドの活性化と拡充、スムーズな他科との連携の確立を目標とし頑張っていきたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連役員の有無

中元秀友：厚生労働省腎疾患対策検討会委員（平成29年10月1日より）

中元秀友：国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）ゲノム医療推進プラットフォーム課題評価委員（平成30年2月1日より）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

学術誌編集委員長、編集委員

中元秀友：Renal Replacement Therapy Associate Editor

中元秀友：Ther. Apher. Dial. Associate Editor

中元秀友：日本腹膜透析学会学術誌編集委員長

中元秀友：日本急性血液浄化学会雑誌編集委員

鈴木朋子：Frontiers in Nutrition Associate Editor

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

中元秀友：日本腎代替療法医療専門職推進協会理事長、日本透析医学会理事、日本腹膜透析医学会理事、日本医工学治療学会理事、日本急性血液浄化学会理事、日本腎臓リハビリテーション学会理事、日本臨床工学技師会理事、日本腎不全合併症医学会理事、日本腎臓学会評議員、日本高血圧学会評議員、日本心血管内分泌学会評議員、日本アフェレシス学会評議員、日本プライマリケア連合医学会代議員

今枝博之：日本消化器病学会評議員、日本消化器内視鏡学会評議員、日本消化器内視鏡学会関東支部幹事、日本消化器内視鏡学会埼玉支部理事、日本腹部救急医学会評議員、日本胃癌学会代議員

鈴木朋子：日本東洋医学会代議員

木村琢磨：日本プライマリケア連合学会理事、日本在宅医療連合学会理事、日本老年医学会代議員

廣岡伸隆：日本プライマリケア連合学会理事

小林威仁：日本アレルギー学会代議員、日本腎不全合併症医学会評議員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

① Hirooka N, Kusano T, Kinoshita S, Nakamoto H: Influence of perceived stress and stress coping adequacy on multiple health-related lifestyle behaviors. *International Journal of Environmental Research and Public Health* 19: 284; 2022. <https://doi.org/10.3390/ijerph19010284>

② Miyaguchi K, Tsuzuki Y, Hirooka N, Shiomi R, Ohgo H, Nakamoto H, Imaeda H: Endo-wing versus transparent hood-associated colonoscopy for colorectal adenoma detection: A randomized controlled trial. *J Gastroenterol Hepatol*. 2022 Feb 16. doi: 20.1111/jgh.15805. Online ahead of print.

③ Hyodo T, Hirawa N, Isaka Y, Nakamoto H, Thim P, Phon E, Hy C, Chan S, Kokubo K, Matsubara H, Wakai H, Yamashita AC, Kawanishi H: Current status of renal replacement therapy in Cambodia and Japanese support activities in developing countries in East and Southeast Asia: a report as of June 2018 from the Non-Western World Countries Symposium at the 63rd Annual Meeting of the Japanese Society for Dialysis Therapy. *Renal Replacement Therapy* (2022) 8: 9-20, <https://doi.org/10.1186/s41100-022-00398-4>

④ Yoshifuji A, Ryuzaki M, Uehara Y, Ohmagari N, Kawai T, Kanno Y, Kikuchi K, Kon H, Sakai K, Shinoda T, Takano Y, Tanaka J, Hora K, Nakazawa Y, Hasegawa N, Hanafusa N, Hinoshita F, Morikana K, Wakino S, Nakamoto H, Takemoto Y: Committee report: Questionnaire survey on the treatment of COVID-19 in patients receiving dialysis therapy.

Renal Replacement Therapy 2022 8:18 Content type: ResearchPublished on: 25 April 2022

⑤Hirooka N, Kusano T, Kinoshita T, Aoyagi R, Saito K, Nakamoto H: Association between health literacy and purpose in life and life satisfaction among health management specialists: a cross-sectional study. *Sci Rep*. 2022 May 18;12(1):8310. doi: 10.1038/s41598-022-11838-w. PMID: 35585083

⑥ Kikuchi K, Nangaku M, Ryuzaki M, Yamakawa T, Yoshihiro O, Hanafusa N, Sakai K, Kanno Y, Ando R, Shinoda T, Wakino S, Nakamoto H, Takemoto Y, Akizawa T; COVID-19 Task Force Committee of the Japanese Association of Dialysis Physicians, the Japanese Society for Dialysis Therapy, and the Japanese Society of Nephrology: Effectiveness of SARS-CoV-2 vaccines on hemodialysis patients in Japan: a nationwide cohort study. *Ther Apher Dial*. 2022 May 24. doi: 10.1111/1744-9987.13887. Online ahead of print. PMID: 35610734

⑦Abe M, Masakane I, Wada A, Nakai S, Nitta K, Nakamoto H: Super high-flux membrane dialyzers improve mortality in patients on hemodialysis: a 3-year nationwide cohort study. *Clin Kidney J*. 2021 Sep 28;15(3):473-483. doi: 10.1093/ckj/sfab177. eCollection 2022 Mar. PMID: 35211304

⑧ Yoshifuji A, Toda M, Ryuzaki M, Kikuchi K, Kawai T, Sakai K, Oyama E, Koinuma M, Katayama K, Uehara Y, Ohmagari N, Kanno Y, Kon H, Shinoda T, Takano Y, Tanaka J, Hora K, Nakazawa Y, Hasegawa N, Hanafusa N, Hinoshita F, Morikana K, Wakino S, Nakamoto H, Takemoto Y: Investigation for the efficacy of COVID-19 vaccine in Japanese CKD patients treated with hemodialysis. *Ren Replace Ther*. 2022;8(1): 39. doi: 10.1186/s41100-022-00427-2. Epub 2022 Aug 19. PMID: 35999867

⑨ Xueqing Yu, Vivekanand Jha, Nakamoto H: Should More Patients with Kidney Failure Bring Treatment Home? What We Have Learned from COVID-19. *Kidney Dis. (Basel)* 2022 Nov; 8(5): 357-367. Published online 2022 Jun 15. doi: [10.1159/000525046](https://doi.org/10.1159/000525046)

⑩Hyodo T, Yamashita AC, Hirawa N, Isaka Y, Nakamoto H and Shigematsu T: Present status of renal replacement therapy in lower-middle-income Asian countries: Cambodia, Myanmar, Laos, Vietnam, Mongolia, and Bhutan as of June 2019 (before COVID-19), from the interviews of leading doctors in every country: (duplicated English publication from “the special Japanese edition of educational lectures in the 64th annual meeting of the Japanese Society for Dialysis Therapy”) *Renal Replacement Therapy* 2022 8:54 Content type: Position statementPublished on: 18 October 2022.

【総数：論文 34（英文 10、邦文 24）、学会発表 26、講演 88】

6-2. 獲得研究費

科研費

平成 30 年度(2021 年度) 基盤研究 (C)

「在宅の仮想病床化オンタイム診療管理システムを活用した国民総医療サポート体制の確立」

研究代表者 小林威仁

研究分担者 鈴木朋子、中元秀友 他

2021 年(令和 3 年) より 2025 年(令和 7 年)

交付決定額 5000000 円

令和元年度(2020 年度)

科学研究費助成事業 基盤 (C)「唾液による不顕性誤嚥と IPF 急性増悪との関連」

研究代表者 鈴木朋子

2020 年(令和 3 年) より 2022 年(令和 4 年)

課題番号 19K08628

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

学会開催

第 13 回日本腎臓リハビリテーション学会 (大会長 中元秀友)

(令和 5 年 3 月 18-19 日、埼玉大宮開催) <https://www.congre.co.jp/jsrr2023/>

研究会開催

令和 4 年 4 月 10 日 第 9 回埼玉腹膜透析研究会・総会 (会長 中元秀友)

令和 4 年 11 月 19 日 第 10 回埼玉腹膜透析研究会腹膜透析メデイカルスタッフセミナー (会長 中元秀友)

セミナー開催

スキルアップセミナー6回開催

第35回スキルアップセミナー	2022/5/25 (水)	19:00～	ZOOM
第36回スキルアップセミナー	2022/8/4 (木)	19:00～	ZOOM
第37回スキルアップセミナー	2022/9/8 (木)	18:45～	川越プリンスホテル+ZOOM
第38回スキルアップセミナー	2022/11/24 (木)	19:20～	ZOOM
第39回スキルアップセミナー	2023/1/19 (木)	19:00～	坂戸グランドホテル+ZOOM
第40回スキルアップセミナー	2023/2/16 (木)	19:00～	坂戸グランドホテル+ZOOM

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育：95点

研究：85点

診療：70点

本年度は「総合診療内科」開設後18年目の年であった。これまでの東館4F病棟以外に西館5F病棟の開設し対応してきたが、本年度は昨年度につきCOVID19の影響並びに医局員数の減少で教育、研究、診療に極めて苦労した一年であった。そのような状況下、可能な範囲での診療、教育、研究成績は達成できたと考えている。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

大目標として、COVID19の影響から回復後、環境の整備を目指し業務を確実にこなしていきたい。特にCOVID19の影響で、十分な診療計画を達成できなかった点を反省し、再度の可能な範囲での患者数、診療成績の目標を立案し、達成していきたい。さらに医局員を増員し、診療の質を担保して行きたい。

教育については、総合診療内科の重要性は日々増していることを医局員一同実感している。重要なことは優秀な指導医スタッフの獲得、そして育成である。そのためにも、しっかりとした教育システムの構築と運営を行って行く。特に学生教育、大学院生の教育を充実させる。研修医、医局員教育に関しても引き続き全医局員で取り組んで行く。研究については地域の病院や開業医の先生がたと、この地域に根付いた臨床研究を行う。さらに公的研究費を確実に取得し、それによって幾つかの臨床研究、さらに動物実験を含めた基礎研究を進めて行きたい。研究成果は積極的に学会で発表し、論文として成果を示して行きたい。また若手の医師と指導医が連携して症例報告などの学会発表や論文掲載を積極的に行って行きたい。

診療について来年度は今年度COVID19の影響と医局員数の減少で、低迷した診療面の充実を図りたい。診療の質の向上と充実を最大の目標とし病棟稼働率100%以上を確保する。そのためにも断らない医療を実践する。「総合診療内科」専任の医師の確保と、診療内容特に診療体制、研究体制、教育体制の充実に努めて行く。

1. 12) 消化器一般外科

1. 構成員

篠塚 望 (SHINOZUKA, Nozomi) : 教授 : 運営責任者 : 教育主任 : 消化器一般外科 : 博士
浅野 博 (ASANO, Hiroshi) : 准教授 : 診療部長 : 消化器一般外科 : 博士
小川 展二 (OGAWA Nobuji) : 客員教授 : 消化器一般外科
深野敬之 (FUKANO Hiroyuki) : 講師
伏島雄輔 (FUSEJIMA Yuusuke) : 助教
高木誠 (TAKAGI Makoto) : 助教
高山哲嘉 (TAKAYAMA Tetsuyoshi) : 助教
宇治亮佑 (UJI Ryouyusuke) : 助教
鈴木将臣 (SUZUKI Masaomi) : 助教
刑部洸 (OSAKABE Takeru) : 専攻医
金晟徹 (KIM Seongcheol) : 専攻医

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

卒前教育では外科学に興味を持ってもらうことともに、これまで講義で培った知識を実際に経験することによってより確実なものとしてもらう。また卒後教育では様々の症例を経験することにより一般外科および消化器外科分野において幅広い知識と治療を経験し、primary care を含めた優れた臨床医の育成を行うことを目標としている。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育で講義を担当したのは篠塚、浅野、小川である。その他共用試験臨床実習前評価者 (浅野) を担当した。卒後教育では専攻医4名の研修をおこなった。

2-3. 達成度評価

卒前教育においては当科で行う実習は研修医やレジデントとともに患者回診や症例検討会、定期だけでなく緊急手術を助手として介助する事により数多くの症例を経験する事ができた。

2-4. 次年度改善計画

次年度は研修医、および専攻医に興味を持ってもらい、数多くの研修医が選択してくれることを目標とする。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床応用可能な研究テーマを考案し、外科治療の進歩に貢献出来る結果を出すことが目標である。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

Oncologic emergency

①穿孔性大腸癌の長期成績について学会で報告した。

3-3. 達成度評価

閉塞性大腸癌は今後もデータの蓄積が必要である

3-4. 次年度改善計画

学会での発表件数の増加及び論文文化を進めていく

4. 診療

埼玉県西部をはじめ近接する地域に対し地域医療に貢献することを目標としている。令和4年度の手術総数770件であった。

当教室の特徴はスタッフとレジデント全員が一丸となり患者の治療を行っている。多数の臨床経験をもとにエビデンスに基づいた治療を行いさらに新しい技術を導入により学会活動においても数多くの報告を行っている。新研修医制度においては2ヶ月間の外科研修により定型的な症例以外にも様々な合併症を持つ患者や複雑な病態を持つ患者を経験する事により臨床医としての幅の広い医師の育成に大きく貢献することが目標である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務
該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書 ※10件以内

1. 宇治亮佑、浅野博、刑部洸、金晟徹、鈴木将臣、高山哲嘉、高木誠、伏島雄輔、深野敬之、篠塚望：高度癒着が予想された傍ストーマヘルニアに対して、ストーマ周囲からアプローチし再造設を行った一例、第6回埼玉ヘルニア研究会
2. 刑部洸、宇治亮佑、高山哲嘉、高木誠、伏島雄輔、深野敬之、浅野博：内視鏡的整復によって待機的に手術を施行した虫垂粘液嚢腫による腸重積の1例。第58回日本腹部救急医学会総会
3. 金晟徹、石上順平、鈴木将臣、高山哲嘉、高木誠、伏島雄輔、深野敬之、浅野博：急激な経過で死亡したClostridium perfringens肝膿瘍の1例。第58回日本腹部救急医学会総会
4. 中堤啓太、遠藤彰、大友康裕、浅野博、篠原翔一、黒崎亮、川嶋秀治、石井亘、野澤雅之、多賀谷信美、安松比呂志、栗山桂一：結腸および直腸穿孔に対する緊急手術における予防的創部陰圧閉鎖療法の有用性についての検討。第58回日本腹部救急医学会総会
5. 浅野博、金晟徹、鈴木将臣、宇治亮佑、高山哲嘉、高木誠、伏島雄輔、深野敬之、篠塚望：腹膜炎手術における閉創時器械交換による切開創SSI予防効果。第777回日本消化器外科学会総会
6. 宇治亮佑：CVポート抜去困難であった2例の検討。第23回埼玉県外科医会 外科臨床問題検討会
7. Hiroshi Asano, Hiroyuki Fukano, Makoto Takagi, Tetsuyoshi Takayama : Risk factors for the recurrence of stage II perforated colorectal cancer: A retrospective observational study. Asian journal of surgery 2023 Jan;46(1):201-206.

【総数：論文1件、学会発表6件、講演0件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

診療、研究、教育の各領域において目標はおおむね達成されているものと考えている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育においては外科に興味を持つような学生教育が将来外科研修希望者や将来外科医を目指す若者が増加する要因の一つと考え、今後は学生教育の充実によって研修医の増加や外科の発展につなげていきたい。研究については定期的に学会参加が困難であり発表数も減少した。次年度は状況を見ながら発表数の増加を目指したい。

1. 13) 血管外科

1. 構成員

松本春信 (MATSUMOTO Harunobu) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 血管外科全般 : 博士
野中崇央 (NONAKA Takao) : 講師 : 血管外科一般

2. 教育

2-1. 目的・目標

優れた臨床医の育成とともに、外科基本手技・周術期管理ならびに血管疾患の診断、治療学の習得を目標としている。

2-2. 教育実績 (担当者 : 松本春信)

卒前教育 : 3年生の末梢血管領域の講義を担当。4年生のOSCE前実習に参加し、手洗いガウンテクニックの指導をした。臨床実習に関しては、消化器一般外科実習中に、カンファレンスや実際の症例を通じて疾患の理解を深めるとともに、手術に立ち会った学生に対しては、外科基本手技の指導などを行った。

卒後教育 : 消化器一般外科ローテート中の初期臨床研修医に対し、外科基本手技、周術期管理の実際に加え、臨床医に必要な血管疾患の診断、初期治療の教育を行った。外科修練医に対しては、血管疾患症例の担当医として、一般外科医に必要とされる血管疾患の知識を深めるとともに診療経験・手術手技の指導を行った。

2-3. 達成度評価

卒前教育 : 担当した講義は少ないが、系統講義ならびに臨床実習を通じて末梢血管疾患の教育を行うことができた。また、4年生のOSCE前実習では、例年行っていた縫合・結紮の実習には参加することができなかったが、手洗いガウンテクニックの指導を行った。前年度の目標はある程度達成できた。

卒後教育 : 昨年に引き続き、消化器一般外科研修中の初期臨床研修医ならびに外科修練医の指導を行い、前年度の目標は達成できたと考えている。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育 : 系統講義ならびに実習を通して、血管疾患および診療の理解を深められるような医学教育を目指す。

卒後教育 : 実際の症例を担当し、診断・治療を通じて疾患の理解を深めるとともに、手術手技の習得を目指し、すぐれた外科医育成に努める。

3. 研究

3-1. 目的・目標

対象は四肢末梢血管疾患を対象とした臨床研究を目標としている。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

- 1 包括的重症下肢虚血の至適血行再建法およびその工夫
- 2 難治性静脈性潰瘍の外科治療の検討
- 3 バスキュラーアクセス不全に対する外科治療の検討

昨年度に続き、臨床症例データを蓄積している。

難治性静脈性潰瘍に関しては、不全穿通枝治療に関する他施設共同研究に参加。

3-3. 達成度評価

四肢血管疾患およびバスキュラーアクセス不全治療に取り組みながら、臨床データの蓄積を行っている。難治性静脈性潰瘍に関しては、不全穿通枝治療に関する他施設共同研究に参加し、症例登録を開始した。

3-4. 次年度計画

引き続き臨床データの蓄積を行うとともに、データの解析ならびに研究成果の公表を目指す。

4. 診療

当科は、血管疾患全般、特に四肢末梢血管疾患の診療を中心に診療を行っている。診療目標は、血管疾患治療における地域社会の中核的組織となるよう、専門医として質の高い医療を提供することである。年間手術件数は234件で、その内訳は、下肢動脈閉塞症に対する血行再建、下肢静脈瘤手術、透析アクセス関連手術であった。約半数が透析アクセス関連手術であり、下肢静脈瘤手術は主に血管内焼灼術を施行し、四肢血行再建症例では安静時疼痛や虚血性創傷を伴う重症例が主体であったが、診療内容、治療成績は満足できるものであった。今後も、症例の増加が見込まれるが、さらなる診療の充実と治療成績の向上が課題である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本血管外科学会雑誌、脈管学、Annals of Vascular Diseases 査読

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

松本春信 : 日本脈管学会、日本フットケア・足病医学会 評議員

日本フットケア・足病医学会 ガイドライン委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Hamamoto K, Nonaka T, Tamai K, Chiba E, Oyama-Manabe N, Suyama Y, Watanabe S, Hyoe E, Shinmoto H. Embolization of Deep Femoral Artery Aneurysm with a Ligated Proximal Artery Using the Direct Percutaneous Puncture Technique. Ann Vasc Dis. 2022 ;15(4):329-332.
- ② Akiyoshi K, Arakawa M, Matsumoto H, Adachi K, Nakata H. Successful Crossover Bypass Using a Lateral Femoral Circumflex Artery as an Outflow Vessel for Indirect Revascularization in Critical Limb Ischemia: A Case Report. Ann Vasc Dis. 2022 ;15(4):333-336.
- ③ 橋本 和憲, 松本 春信, 山本 貴裕, 佐藤 哲也, 伊藤 智. 冠動脈バイパス術後の膝窩動脈内膜摘除術の1例. 日心血外雑誌 2022 ; 51 (3) : 183-186
- ④ 野中崇央, 松本春信. 高度屈曲肢に対してバイパス手術を行なった症例 について. 第39回 埼玉県外科集談会. 2022. 11. 19. 埼玉県県民健康センター
- ⑤ 野中崇央, 松本春信. distal bypass 後の急性下肢動脈閉塞に対して2期的に血行再建を行った1例. 第30回日本血管外科学会関東甲信越地方会. 2022. 9. 17. ステーションコンファレンス東京
- ⑥ 松本春信. 私の血管外科修練とCLTI診療の現状、今後の課題(講演). 第10回 関西血管外科倶楽部 . 2022. 10. 8. 第10回. ホテルグランヴィア大阪

【総数：論文 3 件、学会発表 2 件、講演 1 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育では、卒前教育で3年生の系統講義を担当し、4年生のOSCE前実習の指導ならびに臨床実習における学生教育に取り組むことができたが、研究においては、臨床データの蓄積が中心となったが、学術集会における症例報告も行き、不全穿通枝治療の多施設共同研究の症例登録を開始した。診療面では、昨年と比べ手術症例も増え、治療成績も満足のものであった。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育においては、卒前教育における系統講義、実習への介入と卒後教育における血管外科診療指導の充実をはかり、引き続き優れた臨床医の育成に取り組んでゆく。研究面では、臨床データの蓄積を継続と検討を行い、次年度は症例報告も含め、当科における治療成績を学会などで公表することを目標とする。診療においては、さらなる診療の充実と治療成績の向上に取り組み、血管疾患治療における地域社会の中核的組織となるよう、専門医として質の高い医療を提供することを目指す。

1. 14) 乳腺腫瘍科

1. 構成員

松浦 一生 (MATSUURA, Kazuo) : 准教授 : 運営責任者 : 診療副部長 : 教育副主任、研究主任 : 指導教員 (大学院) : 乳癌の外科・薬物療法、遺伝性腫瘍 : 博士
浅野 彩 (ASANO, Aya) : 講師 : 診療部長 : 教育主任、研究副主任 : 博士
平塚 美由起 (HIRATSUKA, Miyuki) : 助教 : 教育員、研究員
島田 浩子 (SHIMADA, Hiroko) : 助教 : 教育員、研究員 : 博士
貫井 麻未 (NUKUI, Asami) : 助教 : 教育員、研究員
藤本 章博 (FUJIMOTO, Akihiro) : 助教 : 教育員、研究員
一瀬 友希 (ICHINOSE, Yuki) : 助教 : 教育員、研究員
杉山 佳奈子 (SUGIYAMA, Kanako) : 助教 : 教育員、研究員
柳川 裕希 (YANAGAWA, Yuki) : 助教 : 教育員、研究員

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、乳癌の疫学に始まり診断における一連の流れを理解し習得する。診断面では乳腺疾患に対する正確な診断能力と診断技術を習得する。治療面では外科的基本手技の習得をするとともに特に乳癌の外科的治療につき理解し技術を習得する。最終的に乳癌患者の治療戦略をひとりで構築できる能力を習得することが目標である。大学院教育においては乳腺外科学・腫瘍学に標準的な知識と技術を習得し、さらに最先端の診療について理解し、乳腺腫瘍学領域の臨床的研究が行える人材の育成を行うことを目標に教育活動を行った。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育で運営に関わったユニット (科目) は、5・6年生内分泌・代謝・腫瘍ユニットのユニットディレクター (松浦・浅野) である。卒前教育で講義・演習・実習、臨床実習等を担当したのは、3・4・6年内分泌・代謝、腫瘍ユニット (松浦・浅野) である。

その他、卒前教育では共用試験臨床実習前 OSCE 評価者 (一瀬)、共用試験臨床実習後 OSCE 評価者 (貫井) を担当した。

2-3. 達成度評価

コロナ禍の状況下で、一時的に短縮ローテを強いられることもあったが、前期研修のローテーターにはクルズスを組み、①乳腺腫瘍科とは②乳癌とは③乳腺疾患患者の診察方法と心得④画像診断⑤組織診断⑥治療方針の考え方⑦手術療法・外科手技⑧乳癌手術に関わる胸部解剖⑨全身薬物療法 (化学療法&ホルモン療法) ⑩遺伝性乳癌および遺伝子パネル検査の内容で講義を行った。個別にマンモグラフィの読影の講義などを行い、基本的なマンモグラフィとエコーの読影を習得させることができた。手術の第2助手を務めさせ、基本的な外科手技である縫合、糸結びを単独で施行可能になるまで指導できた。以上より、本年度の目標については、十分達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度は学生には限られた講義のなかで外科の魅力と臨床腫瘍学の一端を担う乳癌の治療の重要性と将来性を伝え、少しでも興味を持たせたい。5年生のクリニカルクラークシップ、6年生のアダバンストクラークシップでは診療での魅力に加え、自分のキャリアパスを考える場として色々なアドバイスを提供したい。研修医、特に後期研修のローテーターには手術を積極的に指導し、治療面での当科の魅力をさらにアピールしたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

研究の成果が実地臨床の場で反映されることを目標に、基礎と臨床を結びつける translational research を中心に研究を行っている。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

①効果予測遺伝子マーカーを用いた術前予後予測の臨床的意義②ER 関連蛋白とホルモン耐性の基礎的研究③乳癌診療ガイドライン作成のためのデータベース構築④乳癌におけるマウス移植モデルを用いた治療効果に関する研究⑤治療効果の画像診断および病理診断⑥高齢者乳癌の生物学的特徴と予後に関する研究⑦併存疾患を有する乳癌の生物学的特徴に関する研究⑧乳癌間質の組織形態像および生物学的性状に基づく癌悪性度に関する研究⑨若年性乳癌と家族性腫瘍に関する研究⑩形態病理学的 tumor budding (TB) の予後因子としての重要性⑪浸潤性乳管癌における vimentin 発現の有用性および悪性度亢進機序の解明を網羅的遺伝子解析のデータを加えて掘り下げた研究が進行中である。

3-3. 達成度評価

スマートフォンアプリを用いたがん患者支援システムの構築と proactive symptom monitoring 評価を実際に行い、外来診療にて多くの情報を収集し患者への feedback ができた。ホルモン抵抗性乳癌に対する遺伝子学的解析をゲノム医学研究センター遺伝子情報制御部門との共同で行い、新たな因子の臨床的意義について研究を進めている (乳癌における化学療法ならびにホルモン療法耐性に関与する因子の発現に関する臨床病理学的研究)。浸潤性乳癌の形態病理学的因子 (tumor budding、vimentin など) を多くの症例で確認し予後因子としての有用性を再検討する研究を進めている。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえ、次年度は、ゲノム医学研究センター遺伝子情報制御部門と共同して、新規の乳癌遺伝子学的解析を進めていき、がんゲノム医療の発展に寄与できるように取り組んでいく。

4. 診療

コロナ禍の影響下においても、新規患者数及び手術症例数は右方上がりに増えている。診療及び治療には、高性能な最先端機器を導入しており、迅速で正確な診断治療を実施し、地域医療に大いに貢献している。次年度は働き方改革にも通じるべく、女性医師が中心となる持続可能な診療システムの構築を模索する。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

松浦は日本乳癌学会の評議委員とし活動し、地域医療の充実及び遺伝カウンセリングシステム構築に努力している。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

松浦及び医局員は地域の乳がん検診に一部参画しており、近隣の医師会や薬剤師会への学術的講演の依頼もあり、社会的貢献も行っている。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①Matsuura K, Tsurutani J, Inoue K, Tanabe Y, Taira T, Kubota K, Tamura T, Saeki T. A phase 3 safety study of fosnetupitant as an antiemetic in patients receiving anthracycline and cyclophosphamide: CONSOLE-BC. *Cancer*. 2022 Apr 15;128(8):1692-1698.
- ②Fujimoto A, Sakakibara A, Numajiri Y, Matsuura K, Kawasaki T, Osaki A, Saeki T. Carney complex with multiple breast tumours including breast cancer: a case report. *Oxf Med Case Reports*. 2022 Jun 23;2022(6):omac063.
- ③Hiratsuka M, Hasebe T, Ichinose Y, Sakakibara A, Fujimoto A, Wakui N, Shibasaki S, Hirasaki M, Yasuda M, Nukui A, Shimada H, Yokogawa H, Matsuura K, Hojo T, Osaki A, Saeki T. Correction to: Tumor budding and fibrotic focus-proposed grading system for tumor budding in invasive carcinoma no special type of the breast. *Virchows Arch*. 2022 Aug;481(2):161-190.
- ④Hata A, Okamoto I, Inui N, Okada M, Morise M, Akiyoshi K, Takeda M, Watanabe Y, Sugawara S, Shinagawa N, Kubota K, Saeki T, Tamura T. Randomized, Double-Blind, Phase III Study of Fosnetupitant Versus Fosaprepitant for Prevention of Highly Emetogenic Chemotherapy-Induced Nausea and Vomiting: CONSOLE. *J Clin Oncol*. 2022 Jan 10;40(2):180-188.
- ⑤松浦 一生, 大崎 昭彦, 一瀬 友希, 藤本 章博, 貫井 麻未, 佐伯 俊昭: 一次乳房再建を省略した nipple-sparing mastectomy を行った乳癌の 4 例. *日本臨床外科学会雑誌* 2022. 83(2). 293-300
- ⑥佐伯俊昭: 【乳癌診療の最新の知識】 高齢者乳癌の課題: 臨牀と研究 2022. 99(8). 995-998
- ⑦石黒洋: Breast and Endocrine Tumor 乳腺内分泌腫瘍 周術期早期乳がん補助薬物療法の新たな展開 Luminal 乳癌患者の予後を改善のために. *癌と化学療法*. 2022. 49(12). 1312-1316
- ⑧上田 重人, 藤堂 真紀, 島田 杏子, 三原 誠, 原 尚子, 高橋 孝郎, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭: タブレットアプリと加速度センサーを用いた乳癌患者の症状モニタリングの有用性. *乳癌の臨床* 2022. 37(1). 73-81
- ⑨一瀬 友希, 松浦 一生, 黒澤 多英子, 藤本 章博, 榎原 彩花, 貫井 麻未, 平塚 美由起, 浅野 彩, 島田 浩子, 近藤 奈美, 佐野 弘, 横川 秀樹, 小坂 愉賢, 長谷部 孝裕, 高橋 孝郎, 石黒 洋, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭: トリプルネガティブ乳癌患者における免疫チェックポイント阻害剤投与症例の検討. 第 30 回日本乳癌学会総会. 横浜 2022. 06
- ⑩貫井 麻未, 松浦 一生, 黒澤 多英子, 一瀬 友希, 藤本 章博, 浅野 彩, 平塚 美由起, 島田 浩子, 小坂 愉賢, 石黒 洋, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭: HER2 陽性乳癌の術前化学療法症例の検討. 第 30 回日本乳癌学会総会. 横浜 2022. 06

【総数: 論文 8 件、学会発表 18 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

診療面では、超音波ガイド下の乳腺吸引式針生検術 (EleVation および Celero) に加え、ステレオガイド下乳腫吸引式針生検術もコンスタントに行えるようになった。研究面ではスタッフ数が少ないために臨床に時間を費やされる

ことが多く、決して十分とはいえないが、令和5年3月に平塚助教が学位を取得した。基礎と臨床の溝をうめ、橋渡しとなるべくユニークな立場をとり、この点においてさらに特色を鮮明にし、貢献したいと考えている。今後は、国際医療センター及び総合医療センターとのさらなる協力体制を築きたいと考えている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

症例数の増加に対応して、令和5年4月より山口 慧助教が帰局し、大原 正裕准教授（乳腺専門医/遺伝性腫瘍専門医）が新たに加わる事となる。国際医療センターとの連携のもと、臨床への応用が進むがんゲノム医療の充実やBRCA 遺伝学的検査の保険適応追加に伴う遺伝カウンセリング体制の構築を進めていきたい。研究面では学位取得予定者の研究報告が予定されているが、当科の研究として、次世代シーケンサーを用いた網羅的遺伝子解析を加えた新たな基礎研究、臨床研究の発案と実行を行う。

1. 15) 呼吸器外科

1. 構成員

二反田博之 (NITANDA, Hiroyuki) *:准教授: 研究員: 大学院教員 (大学院): 肺癌、気胸、気管支鏡: 博士
*国際医療センター兼任

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

「卒前教育」基本的な医学知識および呼吸器外科領域の専門知識の習得を目的として、分かりやすい講義の実施を目標に設定した。

「卒後教育」外科の基本手技の習得を目標に設定した。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育で講義・演習・実習・臨床実習等を担当したのは3年呼吸器ユニット(二反田)である。

その他、卒前教育では共用試験臨床実習前 OSCE 評価者(二反田)、共用試験臨床実習後 OSCE 評価者(二反田)を担当した。クリニカルクラークシップは国際医療センターで担当したが、大学病院で担当する機会はなかった。

卒後教育に関しても大学病院において初期および後期研修医の指導に携わる機会はなかった。

2-3. 達成度評価

教育実績から卒前教育における講義という点では順調に活動することができたが、卒後教育に関しては活動する機会がなかった。以上より、本年度の目標については実施した項目については概ね達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記をふまえ、次年度は卒前教育において講義内容の充実を目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

胸部疾患に対する外科治療の有用性を探るため、当科で経験した手術症例を検討して外科治療の妥当性を評価する研究計画を立てた。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

日高キャンパスにおいて以下の研究を行った。

1. 気管支瘻に対するステント治療の検討(二反田)

2. 肺乳頭腫から発生した悪性腫瘍の検討(二反田)

いずれも外科治療の有効性が示唆された。

3-3. 達成度評価

研究実績から適切な治療を計画・実践することでリスクの高い症例であっても外科治療により一定の効果が得られることが判明した。以上より、本年度の目標については概ね達成できたと評価する。

3-4. 次年度改善計画

これらの結果をふまえて、対象となる症例を増やしてデータを収集し、次年度にはこれらの研究を論文として発表することを目標として掲げ、達成に向けて取り組む。

4. 診療

当科の診療対象は胸部疾患全般で、主に原発性肺癌、転移性肺腫瘍、気胸などが挙げられる。今年度は気胸と間質性肺炎に対する手術治療を行い、術後経過は満足のものであった。次年度も合併症を起こさない手術と満足度の高い医療の提供を目指していく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本呼吸器内視鏡学会誌の査読委員(二反田)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

東京電子専門学校臨床工学科の非常勤講師(二反田)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

① 二反田博之ら 胃管気管瘻に対してハイブリッドステントへの入れ替えが有効であった一例 第45回日本呼吸器内視鏡学会学術集会 2022/5/27 (Web開催)

② 二反田博之ら 末梢肺の扁平上皮腺上皮性混合型乳頭腫から発生した多形癌の手術例 第63回日本肺癌学会学術集会 2022/12/1 (Web開催)

【総数: 論文 0 件、学会発表 2 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、講義担当者および OSCE 評価者として順調に活動することができたが、臨床実習および卒後教育に関しては活動する機会がなかった。研究に関しては学会発表の段階ではあるが目標を達成できた。診療に関しては昨年と同数の手術を実施し、かつ術後合併症は発生しなかった。基本学科全体としては計画した目標について十分に達成できたと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、講義内容の充実を目標として活動する。研究に関しては、これまでの研究成果を整理し次年度は論文の形での発表を目標として取り組む。診療に関しては、現在の診療体制を維持し次年度もこれまで同様に合併症を起こさない医療提供を目標として取り組む。

1. 16) 小児外科

1. 構成員

田中裕次郎 (TANAKA, Yujiro) : 教授: 運営責任者: 診療部長: 研究主任: 教育副主任: 代表指導教員 (大学院)
小児外科、内視鏡手術: 博士

江村隆起 (EMURA, Takaki) : 准教授: 大学院教員 (大学院): 小児外科: 博士

大島一夫 (OSHIMA, Kazuo) : 助教: 研究員

関 千寿花 (SEKI, Chizuka) : 助教: 研究員

合原 巧 (GOHARA, Takumi) : 助教: 研究員

吉田美奈 (YOSHIDA, Mina) : 助教: 研究員

高橋茂樹 (TAKAHASHI, Sigeki) : 客員教授: 博士

小室広昭 (KOMURO, Hiroaki) : 客員教授: 博士

古村 眞 (KOMURA, Makoto) : 客員教授: 博士

尾花和子 (OBANA, Kazuko) : 客員教授: 博士

浅沼 宏 (ASANUMA, Hiroshi) : 客員教授: 博士

檜 顕成 (HINOKI, Akinari) : 客員教授: 博士

新井真理 (ARAI, Mari) : 客員准教授: 博士

佐竹亮介 (SATAKE, Ryouyusuke) : 客員講師: 研究員: 小児外科: 博士

鈴木啓介 (SUZUKI, Keisuke) : 客員講師: 研究員: 小児外科: 博士

池袋賢一 (IKEBUKURO, Kenichi) : 非常勤講師: 研究員: 博士

米川浩伸 (YONEKAWA, Hironobu) : 非常勤講師: 博士

寺脇 幹 (TERAWAKI, Kan) : 非常勤講師: 博士

中野美和子 (NAKANNO, Miwako) : 非常勤講師: 博士

多田 実 (TADA, Minoru) : 非常勤講師: 博士

川嶋 寛 (KAWASHIMA, Hiroshi) : 非常勤講師: 修士

畑中 玲 (HATANAKA, Rei) : 非常勤医師

2. 教育

2-1. 目的・目標

卒前教育: 小児外科の基本的な疾患について、知識を習得する。BSL では、受け持ち患者の病態・治療方針が理解できるようにする。また、外科基本手技について、縫合や結紮などの実技を学び実施できるようにする。

卒後教育: 初期研修医は、小児外科疾患について広く学び、カンファレンスで受け持ち患者のプレゼンを行い、上級医との討議に参加できるようにする。また、術前・術後管理が実践できるようにする。さらに、基本的な外科手技を一人で行えるようにする。小児外科を専攻する後期研修では、外科専門医ならびに小児外科専門医を習得すべく、術者・助手として手術を行い、学会発表、論文発表を行う。

大学院教育: 研究を行う上で必要な文献検索、文献の読み方、問題点の把握、仮説の立て方を指導する。研究の基本手技を学び、実践できるようにする。また、仮説を実証するための研究法について、自ら考え、それを組み立てることができるようになる。また、研究費獲得の為の基本的な考え方、研究費応募法について学ぶ。

2-2. 教育内容 (担当者)

卒前教育: 小児外科の授業は、田中裕次郎、江村隆起、尾花和子が担当した。BSL の学生は、カンファレンスに参加してもらい、入院中の患者の病態・治療方針について、学んでもらった。また、手術には手洗いをして参加してもらい、結紮、縫合の基本手技をドライラボで学んでもらった。手術の際の指導は、田中裕次郎、江村隆起および術者となった医師によって行った。さらに、江村隆起によるクルズスを通して小児外科の基本的な疾患について学んでもらった。

卒後教育: 初期研修医の指導は、田中裕次郎、江村隆起、大島一夫、関千寿花、合原巧が担当した。

後期研修医に対する指導も同様の体制で行った。

2-3. 達成度

卒前教育に関する授業は、以前当科で作成されたテキストブックに準拠して授業を行い、医師国家試験を正答できるレベルの授業を行った。初期研修医の教育では、外科基本手技の習得の為に、手術の一部を術者として担当させ、また手術の助手を担当させた。小児外科で研修を行った研修医は、基本手技の習得がなされたものと考えている。また、カンファレンスでは、患者のプレゼンを担当し、討議に積極的に参加できるように意見を求めた。救急患者において、患者管理の為の診断方法、治療方針について自身で組み立てさせ、その都度、上級医がきめ細かく指導を行った。

2-4. 自己評価と次年度計画

卒前教育のレベルは、充分である。学生が十分な知識を得たか、試験にて確認した。限られた講義時間内で効率的に授業を行うために、授業内容をさらに吟味し、知識の習得が効率的に行えるようにする。また、外科基本手技を学ぶための卒後教育についても十分行ったが、一人で確実に手技が行えるようにする為に、当科で行うドライラボや実験に参加させ、外科基本手技をマスターできるように機会を増やす予定である。

3. 研究

3-1. 目的・目標

再生医療の研究を行い、小児の外科疾患の病態解明と臨床応用できる組織ならびに臓器を再生することが目的である。また、急性虫垂炎発症に関する臨床研究を行い、病因について検討する。さらに、腎芽腫のバイオマーカーの探索を尿代謝物の解析を通して行う。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）研究実績

気道再生プロジェクトを行っており、東京大学ティッシュエンジニアリング部と緊密な連携を取りながら、臨床応用の為の研究を行っている。

歯科口腔外科教室と共同で急性虫垂炎患児の腸内細菌叢および口腔内細菌叢の網羅的解析を行い、文科省科研費を獲得し、病因の解明につながるかを検討している。

臨床研究として、中心静脈カテーテルエタノールロック療法の多施設共同研究に参加している。

また、名古屋大学をはじめとする多施設共同研究で、腎芽腫患児の尿内代謝物の網羅解析をしてバイオマーカーの探索を行っている。

3-3. 研究内容と達成度

気道再生の前臨床研究が行われた。

中心静脈カテーテルエタノールロック療法の症例収集を行っている。

急性虫垂炎の症例収集を行っている。

腎芽腫患者の尿代謝物の解析を依頼して分析している。

3-4. 自己評価と次年度計画

着実に進んでいると考える。今後、症例収集した臨床研究の解析を行い、結果を導き出す予定である。

4. 診療

令和4年4月から田中裕次郎が診療部長を担っており、高難度内視鏡手術を行える体制が整っている。令和4年には233件の手術（うち国際医療センターで15件）を施行し、そのうち、127件を鏡視下手術で行った。小児外科における疾患の中で最も多い鼠径ヘルニアや急性虫垂炎に対して、臍からの単孔式手術を標準としているほか、高難度技術である腹腔鏡下胆道拡張症手術、腹腔鏡下胆道閉鎖症手術、胸腔鏡下食道閉鎖症根治術も合併症なく、施行できている。新生児外科手術も、内視鏡手術を取り入れた整容性の高い術式を採用しており好評を得ている。尿道下裂、膀胱尿管逆流症、水腎症など、専門性の高い小児泌尿器疾患の診療も行っている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

尾花和子

厚生労働省 小児慢性特定疾患児への支援の在り方に関する専門委員

社会保険審議会専門委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

田中裕次郎

日本小児外科学会雑誌 査読委員

Asian Journal of Pediatric Surgery 査読委員

江村隆起

日本小児外科学会雑誌 査読委員

大島一夫

日本小児外科学会雑誌 査読委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

学会

田中裕次郎

外科系学会社会保険委員会連合（外保連） 手術委員会 副委員長

日本外科学会 学術集会プログラム委員

日本小児外科学会 評議員 ガイドライン委員会副委員長 保険診療委員会委員

日本内視鏡外科学会 評議員

小児内視鏡外科技術講習会 講師

埼玉県養護教員セミナー 講師

江村隆起

日本小児外科学会 評議員

大島一夫

日本小児外科学会 評議員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Laparoscopic definitive surgery for congenital biliary dilatation with aggressive hilar bile ductoplasty and complete resection of the intrapancreatic bile duct in pediatric patients is safe and effective, comparable to open surgery.

Tainaka T, Shirota C, Hinoki A, Sumida W, Yokota K, Makita S, Amano H, Tanaka Y, Uchida H.

Surg Endosc. 2022 Oct;36(10):7352-7359.

- ② 【今考える, 移行期医療】疾患モデルから考えよう これからの移行期医療 希少難治性慢性消化器疾患 移行支援の実際(医療からの視点)
尾花 和子
小児科診療 85 巻秋増刊 Page268-272(2022. 10)
- ③ 標準小児外科学 第8版 上野滋監修 医学書院(2022)
小児外科診療に必要な事項 尾花 和子 Page8-30
急性虫垂炎 田中裕次郎 Page199-202
- ④ ダイヤモンド吻合術後 13 年目にバイパス術を要した先天性十二指腸閉鎖症の 1 例
合原 巧, 田中 裕次郎, 関 千寿花, 江村 隆起, 尾花 和子
第 59 回日本小児外科学会学術集会 東京 2022. 5
- ⑤ 原因部位の同定が困難であった胸腔鏡下肺葉切除術後肺癆の治療経験
関 千寿花, 田中 裕次郎, 合原 巧, 江村 隆起, 尾花 和子, 小室 広昭
第 59 回日本小児外科学会学術集会 東京 2022. 5
- ⑥ 腹腔鏡下小児鼠径ヘルニア手術 精管の解剖と安全な手術手技
江村 隆起, 合原 巧, 関 千寿花, 大島 一夫, 田中 裕次郎, 尾花 和子, 吉田 真理子, 大矢知 昇
第 59 回日本小児外科学会学術集会 東京 2022. 5
- ⑦ 胸壁原発 Ewing 肉腫に対する広範切除と再建法
田中 裕次郎, 尾花 和子, 江村 隆起, 大島 一夫, 関 千寿花, 合原 巧, 福島 敬, 太田 充彦, 石田 博徳
第 59 回日本小児外科学会学術集会 東京 2022. 5
- ⑧ 整容性を保ちつつ手術の安全性を高める工夫 (特別講演)
田中 裕次郎
第 190 回日本小児科学会埼玉地方会学術集会 川口 2023. 2

【総数：論文 2 件、学会発表 5 件、著書 1 件】

6-2. 獲得研究費

田中裕次郎

文部科学研究費 腎芽腫患児の代謝物網羅解析によるバイオマーカーの探索と創薬への挑戦

代表研究者

江村隆起

文部科学研究費 大腸癌の前癌状態と考えられる急性虫垂炎の予防法開発のための基礎的研究

代表研究者

尾花和子

厚生労働科学研究費 小児期から移行期・成人期を包括する希少難治性慢性消化器疾患の医療政策に関する研究

分担研究者

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 今年度の点検・評価結果

教育、研究、診療のいずれにおいても概ねの目標は達成されたものと考えている。

7-2. 次年度の改善計画

教室員の交代などがあるが、お互いをカバーしあってさらにレベルアップを図りたい。

高難度手術を含めた鏡視下手術の拡充、国際医療センターとの共同診療をさらに進めていきたい。

1. 17) 整形外科・脊椎外科

1. 構成員

門野夕峰 (KADONO, Yuhu) : 教授 : 運営責任者、診療部長、教育副主任、研究副主任 : 代表指導教員 (大学院) : リウマチ、関節外科 : 博士

宮島 剛 (MIYAJIMA, Tsuyoshi) : 教授 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 骨粗鬆症 : 博士

鳥尾哲矢 (TORIO, Tetsuya) : 教授 : 診療副部長、教育主任 : 指導教員 (大学院) 脊椎外科、外傷 : 博士

金 潤澤 (KIM, Yoon-Taek) : 客員教授 : 股関節外科 : 博士

立花陽明 (TACHIBANA, Youmei) : 客員教授 : スポーツ整形外科、膝関節外科 : 博士

釘宮典孝 (KUGIMIYA, Fumitaka) : 准教授 : 大学院教員 (大学院) : 脊椎外科 : 博士

坂口勝信 (SAKAGUCHI, Katsunobu) : 准教授 : 肩関節外科、スポーツ整形外科、肩関節外科 : 博士

中田代助 (NAKATA, Daisuke) : 客員准教授 : 小児整形 : 博士

後藤 建 (GOTO, Tatsuru) : 客員准教授 : スポーツ整形外科、膝関節外科

田中伸哉 (TANAKA, shinya) : 客員准教授 : 関節外科 : 博士

杉山聡宏 (SUGIYAMA, Toshihiro) : 講師 : 骨粗鬆症 : 博士

渡會恵介 (WATARAI, Keisuke) : 講師 : 股関節外科 : 博士

伊澤直広 (IZAWA, Naohiro) : 講師 : リウマチ、関節外科 : 博士

上原浩介 (UEHARA, Kosuke) : 講師 : 手の外科 : 博士

丸木秀行 (MARUKI, Hideyuki) : 講師 : 足の外科 : 博士

吉川 淳 (KIKKAWA, Jun) : 講師 : 脊椎外科、講師 : 博士

吉岡浩之 (YOSHIOKA, Hiroyuki) : 非常勤講師 : 足の外科

織田徹也 (ODA, Tetsuya) : 非常勤講師 : 股関節外科

河野義彦 (KONO, Yoshihiko) : 非常勤講師 : 股関節外科

関口浩五郎 (SEKIGUCHI, Kougorou) : 非常勤講師 : 手の外科

永倉大輔 (NAGAKURA, Daisuke) : 非常勤講師 : 脊椎外科

木村文彦 (KIMURA, Fumihiko) : 非常勤講師 : 股関節外科

菅野温子 (KANNO, Atsuko) : 非常勤講師 : リウマチ

正木博 (MASAKI, Hiroshi) : 非常勤講師 : 脊椎外科

助教 : 杉田直樹 (SUGITA, Naoki)、大村泰人 (OOMURA, Yasuto)、鈴木景子 (SUZUKI, Keiko)、岡部眞弓 (OKABE, Mayumi)、

加藤進太郎 (KATO, Shintaro)、関端浩士 (SEKIHATA, Hiroshi)、魚岸誠司 (UOGISHI, Seiji)、岡田信彦 (OKADA, Nobuhiko)、

伊藤賢太郎 (ITO, Kentaro)、岡部裕一 (OKABE, Yuichi)、男澤紘太 (OZAWA, Kota)、関根巧也 (SEKINE, Takuya)、青

山裕次 (AOYAMA, Yuji)、増本椋一 (MASUMOTO, Ryoichi)、桐澤誠浩 (KIRISAWA, Masahiro)、関川三四子 (SEKIKAWA,

Miyoko)

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

卒前教育

医学部学生 4-6 年生に、整形外科で扱う運動器疾患や外傷の病態や症候を理解して、適切に診断して治療を選択できる能力を備えさせるために、臨床実習を通じて整形外科診療の基本を習得することを目的とした。

4 年生の講義では、疾患別または部位別に病態、診断、治療について解説することで、知識の習得のみでなく体系的に理解させることを目標とした。6 年生の講義では、これまでに習得すべき知識の再確認を行うだけでなく、過去の国家試験で出題された整形外科分野の問題を抽出して解説することで、整形外科疾患や外傷を扱うための思考能力を身につけることを目標とした。Pre CC では臨床現場での感覚を体感することで、翌年度以降の CC step1 をこなすための動機づけを目標とした。

CC Step1 では、知識習得は課題を与えることで自宅学習するよう促し、病院ではクルズスを行わずに体験型実習を基本とした。症例を通して整形外科分野だけでなく、併存疾患の含めて広く診察、検査所見の解釈、診断、治療の過程を学び、臨床推論ができることを目標とした。CC Step2、CC Step3 では臨床現場での参加型実習を基本として専門研修医ならびに専門医と行動を共にすることで、診療チームの一員として整形外科分野の知識と技術を学び、外来から入院して手術、リハビリ、退院に至るまでの時間経過を意識すること、将来医師になる者としてのモチベーションを高めることを目標とした。

卒後教育

初期研修医に対しては、運動器の診察法を習得し、外傷に対するプライマリ・ケア、整形外科で扱う種々の疾患に対する診断能力を身につけることを目標とした。

専攻医（後期研修医）に対しては、整形外科すべての分野の症例を幅広く担当し、適切な診断能力と治療の手技を身につけ、4年の専門研修後に専門医試験に合格することを目標とした。

専門医に対しては、整形外科の中でのサブスペシャリティを確立するための技術習得、論理的思考法を習得して研究を計画遂行することを目標とした。

2-2. 教育実績（担当者）

卒前教育

※新型コロナウイルス感染症の流行を受けて、感染対策の一環として学生講義はオンラインで実施した。

・4年生講義

皮膚・運動器ユニット：

整形外科総論（骨・関節の構造と機能、診断）（門野）、スポーツ整形（杉田）、退行性関節疾患(1)総論・膝関節（伊澤）

退行性関節疾患(2)股関節（渡會）、外傷(1)総論・肩関節（坂口）、外傷(2)上肢（上原）、外傷(3)下肢（杉田）、外傷(4)

神経（伊澤）、手の外科（上原）、脊椎疾患(1)頸椎・胸椎（釘宮）、脊椎疾患(2)腰椎（税田（総合セ整形））、脊椎疾患(3)

側弯症（鳥尾）、骨・軟部腫瘍(1)総論（矢澤（国際セ骨軟部））、骨・軟部腫瘍(2)各論（鳥越（国際セ骨軟部））、感染性疾患（伊澤）、小児整形外科・骨系統疾患（渡會）、炎症性疾患（関節リウマチ・強直性脊椎炎）（門野）、代謝性骨疾患（骨粗鬆症、骨軟化症）（宮島）

・5年生講義

特別演習：関節穿刺（門野）

・6年生講義：骨・軟部組織・運動器疾患：

上肢の運動器疾患（立花）、下肢の運動器疾患（立花）、末梢神経障害（大村）、脊髄障害、末梢神経障害のレベル診断（鳥尾）、骨系統・代謝疾患、特発性骨壊死（鳥尾）、脊椎疾患、頸肩腕症候群（鳥尾）、

Cユニット：整形外科の高齢者の医療（門野）

・CC Step1

担当症例の手術には手洗いをし入り、診療チームの一員として手術に参加することを義務づけ、その症例について担当医の指導のもとにレポートを作成させた（病棟医長、病棟担当医）。火曜日朝の症例カンファレンスに参加させ（病棟担当医）、形成的評価と指導を行った。火曜日午後には、ギブス実習を行った（病棟担当医）。金曜日にレポートをもとに試問を行い、理解の程度をチェックした（門野、宮島）。

・CC Step2

診療チームに配属し、入院患者の診察、検査、処置、手術、包帯交換などの日常診療に参加させた（病棟担当医）。症例カンファレンスでは受け持ちとしてプレゼンテーションを行い（病棟担当医）、手術では糸結びなどの基本的な外科手術手技を学んだ（病棟担当医）。

卒後教育

毎週火曜日の午前8時から参加の症例カンファレンスを行い、外来からの入院予約患者、新入院患者、手術患者、相談症例について報告と検討を行った（全員）。

大学院教育

大腿骨近位部骨折症例における股関節臼蓋形状と人工骨頭との適合性に関する多施設共同研究の実行を指導した（門野、渡會）

全国規模の関節リウマチ患者症例データベースを用いて、骨折とステロイド使用との関連性に関する研究の実行を指導した（門野、伊澤）

肩腱板損傷に対する腱板修復術のバイオメカニクスに関する研究を指導した（門野、坂口）

2-3. 達成度評価

卒前教育

Web講義の中、4年生の講義では学生の授業評価ならびに筆記試験による理解度は例年と同程度であり、目標通りの成果が達成できた。6年生の講義は少ないコマ数の中で国家試験も視野に入れたポイントを絞った講義を行うように努め、Cユニットでは過去問の解説を中心の講義を行ったが、学生の習得状況の評価を直接することができなかった。

臨床実習に対する学生の評価は良好であったが、対面実習できなかった班での評価はできなかった。

卒後教育

初期研修医には、整形外科の診察を習得し、適切な検査を行い、手術をはじめとする様々な治療手段を駆使して治療を行うという当科の診療の流れを理解させることができた。可能な限り手術参加を求めたので、基本的な外科手術手技は最低限習得できた。新専攻医は1名であったが、引き続き2カ月ごとに専門グループ単位のローテーションを行い、指導医とマンツーマン指導を行った。

大学院教育

大腿骨近位部骨折症例における股関節臼蓋形状と人工骨頭との適合性に関する多施設共同研究を行うため、多施設の症例を収集した。

全国規模の関節リウマチ患者症例データベースを用いて、骨折とステロイド使用との関連性に関する研究を行い、地方会で結果を報告した。

ブタ肩腱板を用いたバイオメカニクスに関する研究を実施し、国内ならびに国際学会で研究成果を発表した。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育

オンライン授業に適応できる学生と適応できない学生との間の理解度の差が多くなった印象がある。大筋の講義方針は変更せずに、成績下位に対する補講に対する資料作成を検討する。

臨床実習の学生による評価は悪くなく、今後も臨床所見、画像評価、手術時の実際との照合に重点を置いて教育していく。CC Step1の1週間の実習の中で形成的評価を組み込めるように検討する。

卒後教育

初期研修医に対してはスタッフ全員が教育にあたり、処置や手術においては外科系の基本手技が身に付くように指導する。次年度の専攻医は1名であるが、総合医療センターをはじめとする2型研修施設から研修にくる専攻医とともに、チーム制を導入してオーパンのマンツーマン指導を維持しつつ、ローテーション研修を実施する。

大学院教育

大腿骨近位部骨折症例における股関節臼蓋形状と人工骨頭との適合性に関する多施設共同研究の成果をまとめて、論文掲載する。

全国規模の関節リウマチ患者症例データベースを用いて、骨折と疾患活動性との関連解析を行う。

ブタ肩胛板を用いたバイオメカニクスに関する研究成果をまとめて、論文掲載する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床成績の向上を目指す研究を行うことを目的とし、日本整形外科学会学術集会や各関連領域学会での発表や学会誌、専門誌への論文投稿を目標とした。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

リウマチ・股関節グループ：リウマチ性疾患、股関節疾患の病態解明と治療成績改善

脊椎グループ：脊椎・脊髄疾患の病態解明と治療成績改善

スポーツ整形外科グループ：スポーツ障害・外傷、膝・肩疾患の病態解明と成績改善

外傷グループ：骨折や外傷の治療成績改善と周術期管理の問題点解明

骨粗鬆症グループ：骨粗鬆症の病態解明と治療成績改善

手の外科グループ：手の疾患や外傷の治療法の開発と治療成績改善

各グループでオンライン開催された学会で発表を行った。

共同研究を含めて発表した英文論文(原著、総説)は下記の通り。

1. Illustrations of rheumatoid arthritis symptoms to promote communications between patients and physicians. Kaneko Y, Hasegawa M, Ikeda K, Nakano K, Kadono Y, Tanaka Y, Takeuchi T. Mod Rheumatol Mod Rheumatol. 2022 Dec 9;roac152. doi: 10.1093/mr/roac152.
2. Risk factors for residual pain after ligament reconstruction and tendon interposition on osteoarthritis of the first carpometacarpal joint. Komine S, Morizaki Y, Uehara K, Miura T, Ohe T, Tanaka S. J Orthop Surg (Hong Kong) 30 (2) :1-5, 2022
3. Low-Concentration Brachial Plexus Block. Omura Y, Kono S, Nakayama T, Okabe M, Kadono Y. J Hand Surg Am 2022 Aug 4:S0363-5023(22)00332-X. doi: 10.1016/j.jhsa. 2022.06.006.
4. New body surface indexes for germinal matrix: DIP joint extension boundary line and dorsal distal interphalangeal crease. Miyake T, Uehara K, Kohata K, Miura T, Ohe T, Tanaka S, Morizaki Y. J Orthop Sci 15:S0949-2658(22)00229-9. doi: 10.1016/j.jos. 2022.

3-3. 達成度評価

各グループで研究成果を国内学会発表したが、海外発表は1件にとどまった。

和文論文は作成できたが、構成員が筆頭著者となった英文論文は1編だけであった。

3-4. 次年度改善計画

新型コロナウイルス感染症の流行の影響を受けるが、海外学会での発表を行う。学位未取得者を中心に、構成員が筆頭著者となった英文論文を作成する。

4. 診療

十分な感染対策を取ることで年間を通して診療レベルを維持し、他施設からの紹介患者を受け入れ、多くの手術を行った。人的交流として、国際医療センターの救急救命センターにスタッフ3名を派遣し高度外傷にも対応した。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員(門野)

埼玉県総合医局機構キャリアコーディネーター(門野)

埼玉労働局地方労災医員(門野)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

編集委員

・Modern Rheumatology Case Report、Associated Editor(門野)

・International Journal of Rheumatic Disease、Associated Editor(門野)

・脊椎関節炎学会誌、副編集委員長(門野)

査読委員

- Arthritis Research Therapy (門野)
- Rheumatology (門野)
- Rheumatology International (門野)
- Modern Rheumatology (門野、田中)
- Journal of Bone Mineral Metabolism (門野)
- 東日本整形災害外科学会雑誌 (門野、鳥尾)
- 関東整形災害外科学会雑誌 (門野、鳥尾)

プログラム査読委員

- 日本リウマチ学会総会・学術集会 (門野)
- 日本整形外科学会学術総会 (門野)
- 日本整形外科学会基礎学術集会 (門野)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

- 日本整形外科学会：代議員 (門野)
- 日本リウマチ学会：理事 (門野)、評議員 (門野、伊澤)
- 東日本整形災害外科学会：理事 (門野)、評議員 (立花、宮島、鳥尾)
- 関東整形災害外科学会：幹事 (門野)
- 日本臨床リウマチ学会：評議員 (門野)
- 日本股関節学会：評議員 (渡曾)
- 日本脊椎関節炎学会：理事 (門野)
- 日本リウマチ財団：学術助成委員会委員 (門野)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

代表的論文 (原著)

- ① Illustrations of rheumatoid arthritis symptoms to promote communications between patients and physicians. Kaneko Y, Hasegawa M, Ikeda K, Nakano K, Kadono Y, Tanaka Y, Takeuchi T. Mod Rheumatol Mod Rheumatol. 2022 Dec 9;roac152. doi: 10.1093/mr/roac152.
- ② Risk factors for residual pain after ligament reconstruction and tendon interposition on osteoarthritis of the first carpometacarpal joint. Komine S, Morizaki Y, Uehara K, Miura T, Ohe T, Tanaka S. J Orthop Surg (Hong Kong) 30 (2) : 1-5, 2022
- ③ Low-Concentration Brachial Plexus Block. Omura Y, Kono S, Nakayama T, Okabe M, Kadono Y. J Hand Surg Am 2022 Aug 4;S0363-5023(22)00332-X. doi: 10.1016/j.jhsa. 2022.06.006.
- ④ New body surface indexes for germinal matrix: DIP joint extension boundary line and dorsal distal interphalangeal crease. Miyake T, Uehara K, Kohata K, Miura T, Ohe T, Tanaka S, Morizaki Y. J Orthop Sci 15:S0949-2658(22)00229-9. doi: 10.1016/j.jos.2022.

【総数：論文 19 件、学会発表 54 件、講演 50 件】

6-2. 獲得研究費

- 1) 門野夕峰：令和 4 年度厚生労働科学研究委託費（難治性疾患等政策事業（難治性疾患政策研究事業））強直性脊椎炎に代表される関節の疫学調査・診断基準作成と療ガイドライン策定を目指した大規模多施設研究（H30 -難治等（難）一般 -014 014）

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- 1) 埼玉オルソペディックセミナー 2022. 8. 6
- 2) さいたま骨とリウマチ研究会 2022. 9. 3
- 3) Saitama SpA Seminar 2022. 9. 28
- 4) 埼玉 SpA Disease Awareness Program 2022. 10. 24
- 5) 彩の国骨フォーラム 2022. 11. 25

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育：COVID19 の拡大を受け、オンライン授業となり講義中の形成的評価が十分にできなかった。試験問題を開示したところ、学生からの質問があり講義だけで十分に理解させることができない点が残っていることが明らかとなった。臨床実習では、十分に時間をかけることができなかった。

研究：学会発表は増加したが論文発表が減少した状態が続いている。研究費も少額ながら継続して獲得できた。新たに大学院生の研究を開始して、進行中である。

診療：専門研修プログラムの新規登録は 2 名であった。入院患者数は昨年度に比べては増加し、例年の水準まで回復した。治療は難病疾患である脊椎関節炎に絡めて実施できた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育：対面での講義になり、学生が環境の変化に対応できるかどうか懸念される。定期試験の結果をもとに学生が理解しにくい点を解析して、講義内容に反映させていく。引き続き試験問題を開示して質問を受けつけることで対応していく。研修医に対しては、整形外科疾患だけでなく包括的に全身評価を行う習慣を身につけられるよう指導していく。専攻医に対しては、整形外科専門医取得に必要な知識と技術を習得するだけでなく、診療の改善を目標とした科学的思考を身につけられるよう指導していく。

研究：専門誌グループでの研究を進めて英文での原著論文発表を実現する。大学院生の研究を進めて学位を取得する。

診療：COVIDの院内クラスターを引き起こさないよう、感染対策を徹底しながら通常診療を維持する。

1. 18) 脳神経外科

1. 構成員

藤巻高光 (FUJIMAKI, Takamitsu): 教授: 診療部長: 代表指導教員 (大学院): 脳腫瘍の診断と治療、三叉神経痛、顔面痙攣の診断と治療: 医学博士

小林正人 (KOBAYASHI, Masahito): 教授: 診療副部長: 指導教員 (大学院): 機能的脳疾患の診断と治療、定位脳手術: 医学博士

平田幸子 (HIRATA, Sachiko): 講師: てんかんの内科的、外科的治療、一般脳神経外科: 医学博士

高島和彦 (TAKABATAKE, Kazuhiko): 助教: てんかんの内科的、外科的治療、一般脳神経外科

氏原匡樹 (UJIHARA Masaki): 助教 (2020.7月着任): 一般脳神経外科、機能的脳神経外科、画像解析

2. 教育

2-1. 目的・目標

卒前教育では脳神経外科疾患を、その疾患が発生する脳および脊髄の解剖学的特徴と共に総合的に修得させることを目的としている。講義、臨床実習においてはコロナ蔓延前のような学生に評価され臨床現場で役立つ脳神経外科学を修得させることを目標とした。

2-2. 教育実績

講義は新カリキュラムの3年生の「ヒトの病気-2」コースの「神経」ユニットおよび6年生の講義、さらに2年生の薬理学でそれぞれ分担部を担当した。疾患の成り立ち、病態生理、画像診断さらに国家試験問題を理解するために必要な内容を系統的に講義した。講義は主として2名の教授(藤巻、小林)が、実習指導(後述)は講師・助教も含む教員が担当した。小林はOSCEの認定評価者を担当した。また埼玉医科大学短期大学の講義および同一法人下の埼玉福祉会附属看護専門学校の講義も教員が分担して担当した(藤巻、小林、平田)。これらの講義は新型コロナウイルス感染症蔓延にともなって、講義は一部オンラインあるいはハイブリッド(対面とオンラインの併用)となった。

脳神経外科の実習は2グループに別れ、その半分の学生1グループが1週間国際医療センターと大学病院において実習した。大学病院での具体的な実習内容として水曜日に手術見学、手洗い実習、創部の外科的処置の指導、カンファレンス出席および病棟回診への参加を通しての教育・指導を行なった。国際医療センターとの合同カンファレンス(火曜日午後)での指導も併せ行なったが、オンラインを併用しての教育となった。また、木曜日午前の脳脊髄腫瘍科でのカンファレンスでの指導も一部教員が兼担で担当した。さらにCCステップ2,3において、適宜学生指導を行った。卒後教育としては後期研修医(脳神経外科専攻)を国際医療センター脳神経外科とともに教育を担当した。具体的には通常3ヶ月のローテーションで、機能的脳神経外科分野の基礎を指導した(のべ2名)。また初期臨床研修医を希望に応じて受け入れ、外科的基本処置の習得、頭部外傷患者の初期診断と治療、脳神経外科患者の周術期管理の習熟を目標として指導を行っているが本年度は初期研修医の希望者がいなかった。脳神経外科学会の専攻医の指導の一貫として東京大学のプログラムの専攻医の教育も担当した(2名)。

2-3. 達成度評価

前年度、可及的にコロナ感染症蔓延前のような学生に評価される講義、実習を行えるように努力していくことを改善計画としたが、講義ではオンラインでの講義やハイブリッド(対面+オンライン)に慣れてきたこと、また臨床実習では十分な感染対策を行うことで、計画は達成したと考える。

2-4. 次年度改善計画

次年度ではコロナ感染症が5類に移行されるなかでも引き続き十分な感染対策を行い感染症によって教育が妨げられることなく、コロナ感染症蔓延以前と同等あるいはそれ以上の教育内容となること、特に、より実践的となりつつある国家試験問題に対応すべく、卒前教育での臨床実習を工夫することを目標とする。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

脳神経外科の分野のうち機能的脳神経分野について多くの手術が行われているが、その臨床データの解析を行い、学会発表、英文論文発表を行うことを目的としている。前年度においては、学会発表は多く行われたが、当施設筆頭論文の発表がなく、当年度では英文論文の発表を行うことを目的とした。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

当科の全員が機能的脳神経外科研究グループを形成している。ここにおいて脳神経減圧術の臨床データの解析を行なった。手術治療の詳細と結果、さらに術中モニタリングのデータを検討し学会発表を行なった。また脳深部刺激治療データの解析より病態、至適な治療に関する臨床検討を行った。これらの結果は論文や第81回日本脳神経外科学会総会をはじめとする諸学会において発表した。また国際医療センターで当科医師が兼担で治療しているサイバーナイフ治療の結果についても報告を行った。

3-3. 達成度評価

限られた人員のなかで目的としていた内容、質の研究が行えたと自己評価する。また当施設が筆頭の英文報告も前年度ゼロから大幅に増加することができた。

3-4. 次年度改善計画

現在の活動を継続し、本年度と同等の質の学会発表、論文発表を行うことを目標とする。また外科治療が少しずつ軌道にのりつつある、てんかんについても論文発表をめざす。

4. 診療

内外より高く評価されている神経減圧術、定位脳手術を含む機能的脳神経外科手術は令和2年度には新型コロナ感染症蔓延による受診控えのために減少したが、2年度つづいて回復基調であり、また高い診療の質も維持した。てんかん外科手術が年度中10件を安全確実にに行い得たことも特筆すべきである。また一般脳神経外科臨床も、昨年度同様、確実な診療を行う事が出来た。今後もいままで以上に着実に安全な、患者の満足度の高い診療を目指したい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

藤巻高光：独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員

小林正人：独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

藤巻高光(編集委員および査読委員)

Neurology Research International

Neuro-oncology

Journal of Neuro-oncology

JNLS-B, Skull Base

Neurologia Medico Chirurgica

Japanese Journal of Clinical Oncology

小林正人(査読委員)

Neurologia Medico Chirurgica

Interdisciplinary Neurosurgery

Scientific report

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

藤巻高光 日本医師会男女共同参画委員会委員、埼玉県医師会女性医師支援検討委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Hirata S, Kobayashi M, Ujihara M, Takabatake K, Wakiya K, Fujimaki T. Aspiration Surgery with Appropriate Antibiotic Treatment Yields Favorable Outcomes for Bacterial Brain Abscess. World Neurosurg 2022 Sep;165:e317-324
- ② Ujihara M, Kobayashi M, Sasaki A, Ishizawa K, Hirata S, Wakiya K, Fujimaki T. Multiple neuroepithelial cysts of the cerebellopontine angle: Case report and review of the literature. Interdisciplinary Neurosurgery 29, September 2022, 101572
- ③ Ujihara M, Kobayashi M, Yamaguchi H, Hirata S, Takabatake K, Wakiya K, Sasaki A, Fujimaki T. Chronic Osteomyelitis of the Cranial Vault in an Adolescent Female: A Case Report. NMC Case Rep J. 2022 Nov 9;9:383-388.
- ④ Ujihara M, Kobayashi M, Hirata S, Takabatake K, Wakiya K, Fujimaki T. Bilateral Low-Frequency Hearing Impairment After Microvascular Decompression Surgery. Neurosurgery 2023 Mar 28. doi: .1227/neu.0000000000002469.
- ⑤ Takeda A, Kobayashi M, Hasegawa K, Fujimaki T. Regression of Acoustic Tumor After Chemotherapy for Ovarian Cancer in a Patient With a Breast Cancer Susceptibility Gene 1 (BRCA1) Germline Mutation. Cureus 2023 Mar 8;15(3):e35917.
- ⑥ 小林正人, 氏原匡樹, 高島和彦, 平田幸子, 藤巻高光 定位機能脳神経外科医の人材の育成と維持: 他 subspecialty の修得の重要性 機能的脳神経外科 2022 61, 15-19
- ⑦ 藤巻高光、氏原匡樹、平田幸子、高島和彦、脇谷健司、小林正人 解剖を基礎にした片側顔面けいれんの手術 脳神経外科 2022 Mar;50(2):467-479
- ⑧ 平田幸子、氏原匡樹、高島和彦、脇谷健司、小林正人、川合謙介、藤巻高光 回転発作で発症した皮質形成異常を伴う前頭葉てんかんの一例 第53回関東機能的脳外科カンファレンス 2022.4.2 東京
- ⑨ 小林正人、氏原匡樹、平田幸子、藤巻高光. 脳深部治療法におけるターゲットの違いによるデバイスの選択 シンポジウム. 第52回日本臨床神経生理学会学術大会. 2022. 11. 24 京都
- ⑩ 藤巻高光、藤巻わかえ 40年の経験から学んだことと将来への提言 ~ まって、そこは悩むところじゃない ~ 第84回日本臨床外科学会総会 総会特別企画12 医師の Diversity と Inclusion, 2022.11.25 福岡

【総数：論文7件、学会発表20件、講演2件】

6-2. 獲得研究費

なし

6-3. 受賞

なし

6-4. 特許、実用新案

なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

日本脳腫瘍病理学会を藤巻が学会副会長として開催(会長、本学、病理学 佐々木惇教授)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度の改善計画に対して、新型コロナウイルス感染症対策をとりつつ、教育、診療とも目標を達成しえたと考える。てんかん外科治療が一定数の症例で安全、確実に行われたことも重要と考える。臨床研究を中心に学会発表をし、また論文発表を行うことができ、英文論文数は当施設が筆頭のもは前年度0から5と増加したことは教室員全員の努力の成果であり、特筆に値する。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

コロナ感染症が感染症上5類に変更になる予定ではあるが、感染対策を継続する必要はある。感染予防手段を適切にとりつつ教育、診療の成果をあげることは引き続き重要である。教育では人間関係が希薄であった3年間を過ごした学生に対面での学生教育は対話を重視して行うことを目的としたい。研究は、従来行ってきた臨床研究中心の研究を昨年と同程度以上の成果を目指し、引き続き質の高い学会発表および論文発表を行なうことを目的とする。診療では、当院の機能的脳神経外科にあらたに加わったてんかん外科において、導入予定のビデオ脳波モニタリングを活用して、さらに診療実績をあげることを目的とする。

1. 19) 形成外科・美容外科

1. 構成員

市岡滋 (ICHIOKA, Shigeru) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 指導教員(大学院) : 皮膚微小循環、血管新生の機序、再生医学 : 博士
時岡一幸(TOKIOKA, Kazuyuki) : 教授 : 代表指導教員(大学院) : 先天異常、顔面外傷 : 博士
佐藤智也(SATO, Tomoya) : 准教授 : 研究主任 : 教育主任 : 博士
石川昌一(ISHIKAWA, Shoichi) : 助教 : 博士
栗原健(KURIHARA, Takeshi) : 助教 : 修士
齋藤順平(SAITO, Junpei) : 助教 : 修士
佐藤弘樹(SATO, Hiroki) : 助教 : 修士
熊谷智代(KUMAGAI, Tomoyo) : 助教 : 修士
石川洋平(ISHIKAWA, Yohei) : 助教 : 修士
川口辰巳(KAWAGUCHI, Tatsumi) : 助教 : 修士
木村優 (KIMURA, Yu) : 助教 : 修士
宇藤明(UTO, Mei) : 助教 : 修士
岡田恭典(OKADA, Yasunori) : 助教 : 修士
青崎大彦(AOSAKI, Hirohiko) : 助教 : 修士→4~9月
田沼貴大(TANUMA, Takahiro) : 助教 : 修士→10~3月
加藤琴音(KATO, Kotone) : 助教 : 修士
坂田成美(SAKATA, Narumi) : 助教 : 修士
西村花奈(NISHIMURA, Kana) : 助教 : 修士
橋本直美(HASHIMOTO, Naomi) : 助手 : 博士
新井清仁(ARAI, Kiyohito) : 客員講師 : 博士
築由一郎(YANA, Yuichiro) : 非常勤医師 : 修士
河内沙織(KAWAUCHI, Saori) : 非常勤医師 : 修士
吉田有希(YOSHIDA, Yuki) : 非常勤医師 : 修士
新海千裕(SHINKAI, Chihiro) : 非常勤医師 : 修士
森石華子(MORIISHI, Hanako) : 非常勤医師 : 修士
滝本磨理香(TAKIMOTO, Marika) : 非常勤医師 : 修士
寺部雄太(TERABE, Yuta) : 研究医員 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

「卒前教育」 : 4年生において形成外科領域に関する基礎的知識の習得を目的とし、5年生以降でその知識の実践的臨床応用を目的とした。特にクリニカルクラークシップ (CC) では国家試験に頻出する熱傷や外傷を中心に知識をさらに深め、臨床の現場において清潔不潔の概念や、縫合、糸結びなど外科領域のより実践的な基本的手技について指導した。

「卒後教育」 : 初期研修においては、いずれの科に進んでも必要とされ、役立つ知識や技能の習得を目的とし、一般性の高い症例についての知識、創傷治療理論を中心に指導した。後期研修においては、形成外科領域の幅広い疾患に対応できる能力の習得、形成外科専門医取得を目的とし、実践の場を通じて、より専門性の高い指導を行った。

2-2. 教育実績(担当者)

「卒前教育」での講義は、皮膚・運動器ユニットにおいて、市岡滋(創傷治療、難治性潰瘍)、時岡一幸(先天異常)、佐藤智也(形成外科学総論)が担当した。臨床実習においては、医局員全員が分担して担当した。

その他、「卒前教育」では共用試験臨床実習前OSCE及び、共用試験実習後OSCE評価者を、栗原健が担当した。

「卒後教育」としては、専攻医9人(1年目 坂田成美 西村花奈、2年目 青崎大彦 田沼貴大 加藤琴音、3年目 宇藤明 岡田恭典、4年目 木村優 小松崎孝)の研修を行っている。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」 : 4年生の試験では全員が合格し、5年生の実習においても全員が第点を与えることができ、ほぼ目標は達成できたと思われる。

「卒後教育」 : 初期研修医に対しては基本的手技の指導を十分に行った。また後期研修医3名(熊谷智代、石川洋平、川口辰巳)が形成外科専門医を新たに取得しており、形成外科領域に関する基礎的臨床知識を習得したと思われる。

「大学院教育」：石川昌一が新たに博士を取得した。

2-4. 自己評価と次年度計画

「卒前教育」：医学部4年生の講義は「形成外科学総論」、「創傷治癒と難治性創傷」、「外傷の初期治療、皮膚外科、熱傷」、「美容外科、アンチエイジング」、「形成外科で扱う小児先天疾患」、「再建外科」に分かれ、総合医療センター・国際医療センターと分担し共同で行った。講義は学生が興味を持てるよう画像を利用し、視覚に訴えたより理解しやすい授業を心がけた。形成外科領域で国家試験に頻出する部分は授業中にも強調し講義している。また過去問の演習を行い知識の定着に努めている。CCでは限られた時間数でも成果を挙げられるよう、形成外科領域で求められる基本的知識の講義、並びに縫合や糸結び等の手技の練習、手術見学などを行なった。その成果もあり、4年生での筆記試験は全体的に良く理解されていた。COVID-19の影響もあり、ベッドサイドや外来での経験実技は一部制限があったが、その分、座学を充実させた上で、手術見学をしてもらうことで理解も深まり、実習後の感想文では形成外科領域に興味を持てたという学生の感想が多く見られ、一定の成果はあげられたものと思われる。次年度においては、講義やクルズ、自己学習といった内容が、実臨床ではどのように行われているかが手術見学や臨床実習で確認し、少しでも知識や経験として身につけられるよう充実させていきたい。

また、時岡一幸は医学部1年生の講義「人体の構造と機能 1」において「臨床解剖学4（組織欠損の修復と手の形態異常）」を担当した。本講義は解剖学講義の一環として、臨床における解剖学の応用という視点で講義を行った。

「卒後教育」：初期研修医について、当科を選択した者については、積極的に指導を行い、安全に配慮した上で多くの手術に参加し、縫合処置など基本的な手技を習得できたものとする。引き続き、初期研修医が当科の研修に対して興味を持てるよう学内・院内に向けても情報発信していきたい。後期研修医に対しては、形成外科領域に関する基礎的臨床知識を習得するための指導が実施されたと考える。今後の課題として、さらに積極的な学会発表や論文作成につながるよう取り組みをしていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標

臨床に直結した形で微小循環・創傷治癒・再生医療などの基礎研究を行うとともに、難治性創傷の豊富な臨床経験とデータを活用した臨床研究を行う。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

これまで以下の研究プロジェクトを実行した。

I 基礎研究

I -1) 術後感染予防に向けた創傷の迅速細菌定量装置の開発

I -2) 軟部組織感染症における抗MRSA薬の組織移行性の検討

II 臨床研究

II-1) 褥瘡に対する再建手術方法の考察

II-2) 遊離皮弁による足病治療の検証

II-3) 高齢化社会を見据えた褥瘡遠隔診療体制の構築

II-4) 慢性創傷の集学的管理に寄与する栄養ならびに酸化ストレス関連因子を用いた評価指標の検索

3-3. 達成度評価

一部COVID-19の影響もあり、症例の集積に遅れがみられるものの、概ね順調に進行しており、上記プロジェクトは、学術論文、学会発表、メディアなどで公表されている。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、引き続き、症例集積やデータ収集を継続し、以下のように各研究について、達成に向けて取り組む。

I 基礎研究

I -1) 術後感染予防に向けた創傷の迅速細菌定量装置の開発

術後感染の原因となる細菌を定量的に評価できる装置の開発を引き続き行っていく。

I -2) 軟部組織感染症における抗MRSA薬の組織移行性の検討

術後投薬される抗MRSA薬の組織移行性を創部ドレーン内の薬物定量の形で検証しており、症例を集積し定量化、統計解析する。

II 臨床研究

II-1) 褥瘡に対する再建手術方法の考察

部位別、既往別に褥瘡の再建術式として、適切なものを統計的に検証し、すでに学会や論文で発表した。引き続き、他の要因の因果関係について症例・データの集積を継続する。

II-2) 遊離皮弁による足病治療の検証

遊離皮弁移植による足部の再建症例について検証し、その適応や選択すべき皮弁等について考察した。すでに学会や論文で発表している。引き続き、症例の集積を行っていく。

II-3) 高齢化社会を見据えた褥瘡遠隔診療体制の構築

在宅での褥瘡治療を行うに当たり、大病院が地域の訪問診療所と情報共有ツールを用いて遠隔診療を行うための体制作りを模索しており、その有効性・安全性の立証と、必要な制度や枠組みについて、検証するためのデータを集積し、学会にて発表した。現在、論文作成中である。

II-4) 慢性創傷の集学的管理に寄与する栄養ならびに酸化ストレス関連因子を用いた評価指標の検索

栄養状態が治療応答性に及ぼす指標を客観的策定する取り組みで、女子栄養大学生物有機化学研究室との共同研究である。現

在、データ集積中あり、今後学会や論文で発表する。

4. 診療

当科の治療は難治性創傷（褥瘡、糖尿病性足潰瘍、包括的高度慢性下肢虚血）を中心に、先天奇形から外傷（熱傷や顔面骨骨折など）、美容外科に至るまで幅広い分野に及ぶ。

診療実績は、新患数973人→1014人、入院患者数455人→498人、外来患者数（1日平均）7182人→7613人（24.0人→25.4人）といずれの項目も昨年度より改善が見られ、COVID-19の影響から徐々に脱却しつつあるものと思われる。今後、いち早くCOVID-19の流行以前の診療体制に近い形へと回復できるように努めたい。褥瘡や糖尿病性足病変などの難治性創傷、口唇口蓋裂や多合指症などの先天異常、熱傷や顔面外傷、顔面骨骨折などの外傷など幅広い分野の疾患に対して、大学病院として他科・多職種との連携のすそ野を広げること、良好な治療成績が得られた。次年度も周辺の医療機関と連携し地域への貢献度をより高めるとともに、診療内容をさらに充実させていきたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

・市岡滋

外科系学会社会保険委員連合（外保連）委員

独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）専門委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

・市岡滋

日本褥瘡学会理事

日本褥瘡学会渉外・保険委員委員長

日本フットケア・足病医学会理事

日本フットケア・足病医学会社会保険委員長

日本抗加齢医学会評議員

日本創傷治癒学会評議員

・佐藤智也

日本フットケア・足病医学会評議員

日本フットケア・足病医学会雑誌編集委員

日本褥瘡学会評議員

日本褥瘡学会雑誌編集委員

・時岡一幸

日本形成外科学会 評議員

同学会 日形会誌編集委員

日本口蓋裂学会 学術委員

日本形成外科手術手技学会 理事

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

・市岡滋

NPO 法人創傷治癒センター理事

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①Takahiro Tanuma, Shoichi Ishikawa, Junpei Saito, Takeshi Kurihara, Shigeru Ichioka: Ultrasonic Debridement of Fournier Gangrene. *Plast Reconstr Surg Glob Open*, 11(3), e4888, 2023
- ②Yohei Ishikawa, Hideaki Kamochi, Ryuji Ishizaki, Takafumi Wataya: Bone Flap Preservation in Subcutaneous Abdominal Pocket for Decompressive Craniectomy. *Plast Reconstr Surg Glob Open*. 10(7), e4432, 2022
- ③Shoichi Ishikawa, Kiyohito Arai, Takeshi Kurihara, Tomoya Sato, Shigeru Ichioka: Endovascular therapy and free flap transfer in chronic limb-threatening ischemia. *J Plast Surg Hand Surg* 57: 422-426, 2023
- ④Shoichi Ishikawa, Haruno Miyazaki, Shigeru Ichioka: Multiple free dorsal flaps for symmetrical peripheral gangrene of the extremities: A case report. *JPRAS Open* 33: 1-5, 2022
- ⑤Junpei Saito, Shoichi Ishikawa, Shigeru Ichioka: Reconstruction of necrotizing soft tissue infection in the auricle and temporal region: a case report. *Case Reports Plast Surg Hand Surg* 10(1): 2157281, 2022
- ⑥Tatsumi Kawaguchi, Satoshi Kudoh, Shoichi Ishikawa, Shigeru Ichioka: Salvage case of corpus cavernosum necrosis and

urethral perforation associated with infection after penile prosthesis insertion. Plast Reconstr Surg Glob Open 11(3): e4863, 2023

- ⑦Tomoya Sato: Interventions for Co-occurring Cannabis Use and Depression. Cureus, 14(8): e27632. 2022
- ⑧熊谷智代, 石川昌一, 時岡一幸, 市岡 滋, 佐々木惇: 偽カポジ肉腫と診断した下腿潰瘍の1例. 皮膚科の臨床 64(11): 1843-1846, 2022
- ⑨Tomoya Sato: Application and new scientific evidence of anti-biofilm dressing in DFU: Taiwan Society for Wound Care annual conference 2023. 2023.3.11, Taipei, keynote lecture
- ⑩佐藤弘樹「背部からの皮弁による足潰瘍の再建」第28回日本形成外科手術手技学会 ビデオシンポジウム 2023年3月4日 神奈川県川崎市

【総数：論文 8件、学会発表・講演 29件】

6-2. 獲得研究費

- 1) 文部科学省 科学研究費 基盤研究(C)
研究期間(年度)：2021-2023年
課題名：バイオ3Dプリンターと臍帯由来幹細胞を用いた早期顎裂閉鎖の新規ストラテジー
研究代表者：須田 直人
当科研究員：時岡 一幸
研究経費：2021年度直接経費 ¥100,000 間接経費 ¥30,000
- 2) 学術研究寄附（センチュリーメディカル奨学寄付）
研究期間(年度)：2022-2023年
課題名：軟部組織感染症における抗MRSA薬の組織移行性の検討
研究代表者：佐藤 智也
研究経費：35万円
- 3) 学術研究寄附（スミス・アンド・ネフュー学術研究寄付）
研究期間(年度)：2022-2023年
課題名：褥瘡オンライン診療にむけたアプリケーションの開発とその妥当性の評価
研究代表者：栗原 健
研究経費：72万円

6-3. 受賞

- 1) 最優秀演題賞 一般演題（口演）
齋藤 順平, 市岡 滋「出血傾向により生じた皮下血腫の外科的治療と工夫」第14回日本創傷外科学会総会・学術集会 一般口演
2022年7月14日 兵庫県神戸市
- 2) 学術奨励賞
時岡一幸「早期顎裂閉鎖を目標とした口唇口蓋裂のチームアプローチ」第33回東京大学形成外科同門学術集会 2023年1月21日

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検、評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育においては、COVID-19の影響がまだ残る中、座学や感染に配慮した臨床実習を充実させ、理解度や興味の向上を図れたと考えられた。卒後教育、研究においては、臨床に直結した基礎研究を行うとともに、難治性創傷における豊富な臨床経験とデータを活用し臨床研究を行い、多くの業績が残せた。今後、より多くの医局員が研究・発表の場に立てる環境を作り、経験を積む必要があると考えられた。診療においては、COVID-19の影響下でも感染の流行に注意しつつ、診療実績の改善を図るとともに、継続して難症例治療など高度な医療提供を行うことにより、地域の連携強化を行うことができた。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

卒前教育においては、COVID-19が収束に向かうことを期待し、臨床実習の充実を図るとともに、実臨床での実技に耐えうる知識・技能の習得に取り組む。卒後教育、研究に関しては、より多くの医局員に関わり、学会や論文の発表できるように促す。後期研修医（専攻医）にあっては、専門医の取得要件のひとつである論文作成を積極的に促し指導を行っていく。診療に関しては、院内の他診療科と連携し、より安全かつ効果的な治療法を提供すると共に、周辺地域の医療機関・クリニック・訪問診療所との連携を強化していく。

1. 20) 小児科 (小児科・新生児科)

1. 構成員

秋岡 祐子 (AKIOKA, YUKO)	: 教授: 運営責任者(2020. 8. 1~): 診療部長、小児科学、小児腎臓病学: 博士
山内 秀雄 (YAMANOUCI, Hideo)	: 教授: 教育主任: 指導教員(大学院): 小児科学、小児神経学、てんかん学 臨床遺伝学: 博士
國方 徹也 (KUNIKATA, Tetsuya)	: 教授: 新生児科診療部長、: 指導教員(大学院)
小児科学、新生児学: 博士	
菊池 透 (KIKUCHI Toru)	: 教授: 診療副部長: 教育副主任、指導教員(大学院) : 小児科学、内分泌・代謝学(小児)・糖尿病学: 博士
板澤 寿子 (ITAZAWA, Toshiko)	: 准教授: 研究副主任 : 小児科学、小児アレルギー学: 博士
松本 浩 (MATSUMOTO, Hiroshi)	: 准教授 小児科学、小児神経学: 博士
本多 正和 (HONDA, Masakazu)	: 講師: 病棟医長(新生児): 研究員: 小児科学、新生児学: 博士
盛田 英司 (MORITA, Eiji)	: 講師: 小児科学、小児アレルギー学: 博士
古賀 健史 (KOGA, Takeshi)	: 講師: 病棟医長(小児科): : 小児科学、小児アレルギー学: 博士
石井 佐織 (ISHII, Saori)	: 助教: 外来医長: 小児科学
笥 紘子 (KAKEI, Hiroko)	: 助教: 小児科学、新生児学: 博士
武者 育麻 (MUSHA, Ikuma)	: 助教: 小児科学、糖尿病学: 博士
荒尾 正人 (ARAO, Masato)	: 助教: 小児科学
颯佐 かおり (SASSA, Kaori)	: 助教: 小児科学
櫻井 隼人 (SAKURAI, Hayato)	: 助教: 小児科学、新生児学: 博士
味原 さや香 (AJIHARA, Sayaka)	: 助教: 小児科学
川名 宏 (KAWANA, Hiroshi)	: 助教: 小児科学
飛田和えりか (HIDAWA, Erika)	: 助教: 小児科学
堀田 奈緒美 (HOTTA, Naomi)	: 助教: 小児科学
岡田 慶介 (OKADA, Keisuke)	: 助教: 小児科学
清水 貴寛 (SHIMIZU, Takahiro)	: 助教: 小児科学
寺西 宏美 (TERANISI, Hiromi)	: 助教: 小児科学
遠藤 琢也 (ENDO, Takuya)	: 助教: 小児科学
田端 克彦 (TABATA, Katsuhiko)	: 助教: 小児科学
龍野 のぞみ (RYUNO, Nozomi)	: 助教(専攻医): 小児科学
大滝 聡美 (OHTAKI, Satomi)	: 助教(専攻医): 小児科学
吉村 萌 (YOSHIMURA, Moe)	: 助教(専攻医): 小児科学
田中 萌子 (TANAKA, Moeko)	: 助教(専攻医): 小児科学
渡邊 諒子 (WATANABE, Ryoko)	: 助教(専攻医): 小児科学
近藤 聡美 (KONDO, Satomi)	: 助教(専攻医): 小児科学
永井 未来 (NAGAI, Miki)	: 助教(専攻医): 小児科学
水本 峻允 (MIZUMOTO, Takamasa)	: 助教(専攻医): 小児科学
清水 春香 (SHIMIZU, Haruka)	: 助教(専攻医): 小児科学
小泉 紗友里 (KOIZUMI, Sayuri)	: 助教(専攻医): 小児科学
浦丸 知子 (URAMARU, Tomoko)	: 助教(専攻医): 小児科学
原嶋 宏子 (HARASHIMA, Hiroko)	: 助手: 臨床検査技師
大竹 明 (OHTAKE, Akira)	: 特任教授: 小児科学、代謝・遺伝病学: 博士(ゲノム医療科との兼任)
沼倉 周彦 (NUMAKURA, Chikahiko)	: 准教授: 小児科学: 内分泌学代謝学: 博士(ゲノム医療科との兼任)
住友 直方 (SUMITOMO, Naokata)	: 特任教授: 小児循環器病学: 博士(国際医療センター小児心臓科との兼任)
小林 俊樹 (KOBAYASHI, Toshiki)	: 教授: 小児循環器病学: 博士(国際医療センター小児心臓科との兼任)
小島 拓朗 (KOJIMA, Takuro)	: 准教授: 小児循環器病学: 博士: (国際医療センター小児心臓科との兼任)
田中 竜平 (TANAKA, Ryuhei)	: 教授: 小児腫瘍・血液学: 博士(国際医療センターとの兼任)
福島 敬 (HUKUSHIMA, Takashi)	: 准教授: : 小児腫瘍・血液学: 博士(国際医療センターとの兼任)
桑原 斉 (KUWABARA, Hitoshi)	: 教授: 児童青年期精神医学: 博士(神経精神科・心療内科との兼任)

【客員】

佐々木 望(SASAKI, Nozomu)	: 名誉教授: 内分泌・糖尿病学: 博士
宮路 太 (MIYAJI, Tooru)	: 名誉教授: 小児科学、新生児学: 博士
雨宮 伸 (AMEMIYA, Shin)	: 客員教授: 小児科学、内分泌・代謝学(小児)・糖尿病学: 博士
徳山 研一 (TOKUYAMA, Kenichi)	: 客員教授: 小児科学、小児アレルギー学、小児呼吸器学: 博士
三浦 信之 (MIURA, Nobuyuki)	: 客員准教授: 小児血液学: 博士
小柴満美子 (KOSHIBA, Mamiko)	: 客員准教授: 行動神経科学: 博士(工学)

【非常勤講師】

中里 明彦 (NAKAZATO, Akihiko)	新井 克巳 (ARAI, Katsumi)	高柳 正樹 (TAKAYANAGI, Masaki)	岡田 邦之 (OKADA, Kuniyuki)	橋本 和美 (HASHIMOTO, Kazumi)	松永 保 (MATSUNAGA, Tamotsu)	中野 裕史 (NAKANO, Hiroshi)	星野 正也 (HOSHINO, Masaya)	皆川 孝子 (MINAGAWA, Takako)	赤塚 淳弥 (AKATSUKA, Jyunya)	山崎 太郎 (YAMAZAKI, Taro)
---------------------------	-----------------------	----------------------------	-------------------------	---------------------------	---------------------------	-------------------------	-------------------------	--------------------------	--------------------------	------------------------

溝口 史剛 (MIZOGUCHI, Humitake) 森田 佳代 (MORITA, Kayo) 植田 穰 (UEDA, Yutaka)
【非常勤医師】 小川 俊一 (OGAWA, Shunichi) 保母 鑑三 (HOBO, Kanzo)
【新生児科常勤心理士】 田中順子 (TANAKA Junko)
【非常勤講師：臨床心理士】 松寄 くみ子 (MATSUZAKI, kumiko) 戸田 堯裕 (TODA, Takahiro)
松橋 麻裕 (MATSUHASHI, Mayu) 高村 遥 (TAKAMURA, Haruka) 八木 あずさ (YAGI, Azusa)
【専攻生】 大澤 麻登里 (OHSAWA, Matori) 田中順子 (TANAKA, Jyunko)

2. 教育

2-1. 目的・目標

【卒前教育】

講義では、4年生までは、正常小児の成長発達および小児疾患の病態生理を中心に、小児科学の基本的知識の習得を目標にしている。6年生では、医師国家試験での小児科関連の問題に対応および研修医に必要な小児科学の知識とそれに基づく応用力の習得を目標にしている。

【卒後教育】

卒後2年間の臨床研修については滞りなく充実した研修ができ、一般小児科のプライマリケアと基本的な臨床的考察の仕方を習得することを目標とする。小児科診療における基礎能力を集中的に養い、同時に一般初期研修必須科目を効率よく習得することを目標とする。後期小児科研修では各専門領域や地域連携小児医療などの幅広い選択を行い、卒後5年で小児科専門医の取得。さらに専門領域の選択により規定年数後に各々の専門医の取得を目標とする。埼玉医科大学国際医療センターでの研修に加え、新研修制度またがり型研修方式を採用することによって埼玉医科大学総合医療センター小児科における研修も可能とし、結果的にオール埼玉医科大学小児科での研修が可能となるようなプログラムを実行する。

【大学院教育】

2名の大学院生が在籍し、研究活動を続けている。研究を完遂し学位取得までの指導を行う。一方、ここ数年、大学院に入学する医局員が少ない。臨床業務が多く、研究に没頭する時間が少ないことが問題であり、大学院について医局内周知し、研究時間の確保できる体制を組むことを目標にあげた。

2-2. 教育実績

【卒前教育】

担当する講義は基礎医学的な領域から、6年生の国家試験を念頭においた講義まで小児科の幅広さ、奥深さが少しでも学生に分かるように、教授、准教授、講師が担当した。ただし、小児科学の広範囲な講義領域のうち在任教官の専門分野を超える領域については、より充実した講義を提供することを目的として、他科の学内教官、非常勤教官にも担当いただいた。

クリニカルクラークシップ (CC) Step1では、小児センター病棟 (南館4階)、新生児センターNICU・GCU (南館3階) の病棟での実習を各1週間行い、問題解決のアプローチ方法の習得を目的にそれぞれ受け持ち患者をPOMRによるカルテ記載を指導医のもとに行った。病棟実習では取得しづらい予防注射、新生児発達、神経発達については外来実習を行いより実践的な実習ができるように工夫した。小児科領域の知識の整理のための対話式少人数講義を10領域において行った。また実習用人形を用いた新生児および小児の蘇生術の実習を行うなどより実践的な経験をしてもらうように工夫した。さらに、国際医療センター小児腫瘍科での実習も行った。カンファレンスには積極的に参加してもらい、チーム医療を行う一員としての自覚を促すように指導した。CC-Step2, Step3では、原則として初期・後期研修医とともに行動し、いわゆる屋根瓦方式の実習を行い、チーム医療の一員として活躍することの重要性と喜びを体験してもらい、単なる知識・技術のみならずメディカルスタッフとのコミュニケーションの重要性を体得することを図った。

【卒後教育】

小児科を1か月ないし2か月ローテーションする初期研修医に対して、定められた研修目標を達成することができるように定められた週間予定表にしたがって指導医が1対1の指導を行った。入院患者に対する問診、診察の基本、鑑別診断の仕方と最終診断や治療方針の決定とその実行について、きめの細かな指導をした。後期研修医に対しては、大学病院では小児科、新生児科での研修に加え、国際医療センター小児腫瘍科、小児心臓科における各3か月間の研修を行っている。さらに後期研修2年目以降では総合医療センター小児科において6か月以内を原則とする選択研修を行い後期研修のさらなる充実を図った。大学病院小児科は総合診療小児科としての役割に加えて、各専門領域として内分泌・代謝、神経、腎・膠原病、呼吸器・アレルギー、遺伝、感染症専門などの診療研究の役割を担うと考えられるが、教育領域においてもそれは同様である。大学病院小児科における研修週間計画としては教授回診のある火曜日を除く月曜日から土曜日までの朝8時より早朝カンファレンスにおいて24時間以内に入院となった患者(月曜日については48時間以内)の研修医によるプレゼンテーションの指導を主に診療部長、診療副部長、研修担当医長、病棟医長らを中心に行っ

た。小児科総合回診は火曜日に開催され、診療部長をはじめとする研修指導医が研修医に対して症例提示指導、診療指導を行った。また新生児病棟回診は毎日夕刻に開催され、初期研修医、後期研修医の指導を行った。小児科において2人の医長をトップとする2グループが分けられ、それぞれにおいて毎日夕刻に行われる回診時に研修の成果のチェックなどの指導をおこなった。

【大学院教育】

大澤麻登里

指導教官 大竹明特任教授

研究テーマ iPS細胞を用いたDNM1-L遺伝子変異による心筋症発症機構の解明と治療への応用

田中順子

指導教官 山内秀雄教授

研究テーマ 極低出生体重児の発達特性と養育者の育児ストレスおよび育児不安に関する研究

2-3. 達成度評価

【卒前教育】

小児科領域の講義に対する学生の評価は概ね良好と考えられるが、さらなる改善をおこなってゆく必要がある。また系統講義の評価法の一つと考えられる試験については、適切な問題が偏りなく網羅されるように努力してきたが、今後も引き続き継続課題とする。実習は学生の評価もおおむね良好、ほぼ満足のできる実習が行われた。実習の目標に到達できなかった学生が少数認められたが、別途再試験を行うなどの形でその補充を行った。引き続きよりよい実習のできる場を提供できるよう尽力する（達成度80%）

【卒後教育】

上記の目標と内容はおおむね実行することができた。後期研修として小児科を選択する医師は3名であった。後期研修についてはそれぞれの専門領域の専門医・指導医からの充実した指導が行われ、総合小児科医としての知識技能が習得されていると考えられる。（達成度80%）

【大学院教育】

大澤麻登里 実験はすべて終了しており、論文執筆中である（達成度80%）。

田中 順子 データ集積中である（達成度30%）。

2-4. 次年度改善計画

【卒前教育】

講義、実習とも上記のようにある程度の達成されたものがあるものの、さらなる向上を図る必要がある。特に講義の評価としての試験問題について偏りのない、国家試験を念頭においた良問を作成することは、引き続き重要は課題と考えられる。臨床実習については対話式少人数講義をCC-Step1のみにとどめ、CC step1, step2では卒業時OSCEを念頭に置きつつ、診察方法や問題解決能力の取得と共に医療チームの一人として活躍することの大切さを認識させ、医療安全に配慮した医療のあり方、多職種連携診療のためのコミュニケーション能力の取得などを目標とし、患者の気持ちに配慮する人格的にすぐれた良医を育成できるように指導してゆきたい。

【卒後教育】

毎朝行われているカンファレンスは受け持ちの症例を端的にまとめる練習を行いながら研修医全体で共有できるという教育的メリットは大きく、またリアルタイムでの教授をはじめとする指導医からのフィードバックを行っており、その教育的効果は高い。毎日朝夕2回行われるグループ回診時の研修医への指導により十分な前期後期とも適切な研修ができていていると考えられる。後期研修医が個別的に指導教官に対して指導を受けやすいような環境整備が必要であると考えられる。主体的でアカデミックな議論が指導側と研修医の間でより行われることで、研究業績に結び付いてゆくことが期待される。

【大学院教育】

大澤麻登里 論文採択、学位審査申請にむけて指導する

田中 順子 データ解析および論文執筆を指導する

研究時間の確保できる体制を具体化する

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度の建てた改ざん計画)

小児科の専門分野は多岐にわたる。各種疾患の病態、診断および治療で解決すべき事項を挙げ、新しい診断法、治療法を開発して小児医療に貢献する。科研費等競争的研究資金の取得は重要であり、講師以上は必須義務、専門医を取得した助教以上は努力義務とし、申請と獲得を目指す。研究結果として論文の出版を最重要課題の一つと考え年間10本以上の英語論文を目指す。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト) 研究実績

内分泌・代謝

- A. 小児期発症糖尿病に関する新規発症例についての病型と追跡に関する多施設共同研究.
- B. 1型糖尿病の発症および合併症に関する遺伝要因の解明.
- C. 1型糖尿病における効率的療養指導法の確立.
- D. 2型糖尿病におけるインスリン分泌と抵抗性に関する2大発症要因に基づいた治療法の検討.
- E. SGA低身長における成長ホルモン大量投与における代謝・内分泌学的継時的変化に関する検討
- F. 先天性高乳酸血症・ミトコンドリア病の診断と病因および病態解明に関する次世代シーケンシング法を用いた研究.
- G. ミトコンドリア病に対する5-アミノレブリン酸塩酸塩およびクエン酸第一鉄ナトリウムの有効性及び安全性に関する研究
- H. 濾紙血酵素活性測定法によるファブリー病の診断と治療に関する研究.
- I. 進行性骨化性線維異形成症・進行性化骨性筋炎 (Fibrodysplasia Ossificans Progressiva; FOP) の遺伝子診断と新薬の開発についての研究.
- J. 小児肥満症の病態の解明および効果的な治療方法の確立
- K. 胎児期から小児期の成長の軌跡を指標とした生活習慣病への先制医療の確立
- L. ライソソーム病、重症複合免疫不全症、脊髄性筋萎縮症、副腎白質ジストロフィに対する新生児オプションスクリーニング法の確立

アレルギー

- A. 局所性アレルギー性鼻炎に関わるIgEクラススイッチ機序の解明と治療への展開 (科研費基盤研究C)
- B. 食物依存性運動誘発アナフィラキシー児に対する運動負荷試験の意義と原因食物についての考察
- C. 食物アレルギー児に対する食物経口負荷試験の意義と症状発現予知因子の解明
- D. 気管支喘息に対するKinect V2を用いた呼吸パターンのモニタリング
- E. 小児喘息重症度分布と治療の経年推移に関する2022年度の多施設調査 (小児アレルギー学会疫学委員会)
- F. 鶏卵および牛乳アレルギー児における高温加熱食品の定期摂取による耐性獲得の促進に関する検討
- G. 発熱性疾患におけるMxA蛋白の測定意義
- H. アレルギーセンター電話相談事業
- I. 埼玉医科大学小児科における局所麻酔負荷試験の実施状況と臨床での有益性の検討
- J. 吸気性喘鳴を呈する小児に対する喉頭ファイバー検査の有用性の検討
- K. 小児アトピー性皮膚炎の病態把握および治療選択におけるバイオマーカーの探索

腎臓、膠原病

- A. 小児尿路感染症の臨床検討
- B. 低出生体重児の急性腎障害の臨床検討
- C. 血清ガラクトース欠損IgA測定によるIgA血管炎の病勢把握
- D. 小児発熱患者における医原性低ナトリウム血症の発症リスクと適正な維持輸液療法の確立

神経

- A. ハイリスク新生児の発達行動学的研究 (情育環境学)
- B. 薬剤抵抗性小児てんかんの新規抗発作薬の安全性治療効果に関する研究
- C. サルを用いた環境に関わる発達行動学的研究
- D. サルを用いた低酸素性虚血性脳障害の成因と治療に関する研究
- E. 小児の発達行動学・心理学的研究
- F. 小児神経療育システム研究

新生児

- A. 新生児・未熟児に対するリハビリテーションの臨床的特性に関する研究
- B. 新生児血糖測定方法の検討
- C. 新生児において鎮静剤を使用しないMRI撮影の検討
- D. 先天奇形児に対する在宅管理導入の検討
- E. 新生児仮死におけるaEEGの検討
- F. 埼玉県の多施設共同研究で、在胎28週未満で出生した超早産児の予後の検討
- G. 動脈管開存症に対するアセトアミノフェンの有効性の検討

3-3. 達成度評価

内分泌・代謝

- A. 小児思春期 1 型糖尿病の治療に関する多施設共同研究である小児インスリン治療研究会第 5 コホート研究の基盤研究施設を務めている。コホート 5 年間のうち 5 年目が進行中である。収集したデータのクリーニングを開始し、解析の準備中である。(達成度 60%)
- B. 今年 3 月までに日本全国およびアジアの一部の国の 2927 家系 4816 人の検体を受け付け、1319 例をミトコンドリア病と酵素診断した。診断された症例のうち 550 例で次世代シーケンシング法を用いた遺伝子解析が終了し、うち 319 例で既報告の遺伝子異常を、150 例で新規候補遺伝子異常を発見している(達成度 50%)
- C. 5-アミノレブリン酸塩酸塩およびクエン酸第一鉄ナトリウムを用いた医師主導治験(検証試験)は 2020 年 10 月にはキーオープンを行い、現在データ解析中である(達成度 80%)
- D. 心臓内科、神経内科・脳卒中内科との共同で原因不明の心室肥大、不整脈、若年性脳梗塞例を中心に診断を進め、今年は神経内科で新患 1 人を発見し、これまでに 15 例を診断しうち 12 例に酵素補充療法を開始した(達成度 50%)
- E. ゲノム医学研究センター、整形外科、中央検査部との共同で、検査を開始し、14 人の来院患者と他に 36 人の患者検体を得て解析した。今後、治療法の開発にも取り組む(達成度 50%)
- F. 小児肥満症の外来患者に対して、体組成検査と代謝異常の関連を検討中、また、オリジナルの体重、日常生活の記録用紙を用いた行動療法の有効性を検討中である。(達成度 80%)
- G. ライソソーム病と中心とする治療法の確立された病気を対象に 2018 年 2 月から開始した新生児オプションスクリーニングは、徐々に参加病院と対象疾患を増やし、今年度は新たに Fabry 病 2 例とムコ多糖症 II 型の新患 1 例ずつを発見した(達成度 30%)

H. 小児肥満症の病態の解明および効果的な治療方法の確立(80%)

I. 胎児期から小児期の成長の軌跡を指標とした生活習慣病への先制医療の確立(60%)

アレルギー

- A. 局所性アレルギー性鼻炎に関わる IgE クラススイッチ機序の解明と治療への展開(科研費基盤研究 C)(60%)
- B. 食物依存性運動誘発アナフィラキシー児に対する運動負荷試験の意義と原因食物についての考察(30%)
- C. 食物アレルギー児に対する食物経口負荷試験の意義と症状発現予知因子の解明(60%)
- D. 気管支喘息に対する Kinect V2 を用いた呼吸パターンのモニタリング(30%)
- E. 小児喘息重症度分布と治療の経年推移に関する 2022 年度の多施設調査(小児アレルギー学会疫学委員会)(80%)
- F. 鶏卵および牛乳アレルギー児における高温加熱食品の定期摂取による耐性獲得の促進に関する検討(60%)
- G. 発熱性疾患における MxA 蛋白の測定意義(10%)
- H. アレルギーセンター電話相談事業(90%)
- I. 埼玉医科大学小児科における局所麻酔負荷試験の実施状況と臨床での有益性の検討(90%)
- J. 吸気性喘鳴を呈する小児に対する喉頭ファイバー検査の有用性の検討(90%)
- K. 小児アトピー性皮膚炎の病態把握および治療選択におけるバイオマーカーの探索(30%)

腎臓、膠原病

A. 小児尿路感染症の臨床検討

腫瘍形成型尿路感染症の臨床検討:論文受理(達成度 100%)

腫瘍形成型尿路感染症の非侵襲的画像診断の検討:腫瘍形成型尿路感染症の診断には造影 CT が多用されているが、造影剤による有害事象の発生が問題であった。造影 CT によらない、非侵襲的な画像診断の確立を目的に、超音波画像を用いた腎容積測定による患側腎腫大に着目し、診断マーカーとしての有用性を報告した(2022 年、日本小児科学会学術集会で発表)。論文作成中である(達成度 90%)

B. 低出生体重児の急性腎障害の臨床検討

極低出生体重児における急性腎障害の発症要因を検討した。(2022 年、アメリカ腎臓学会で発表)。論文作成中である(達成度 90%)

C. 血清ガラクトース欠損 IgA 測定による IgA 血管炎の病勢把握

IgA 血管炎に伴う腎症はガラクトース欠損 IgA (Gd-IgA) の糸球体沈着により発症する。血管炎の診断と重症度は腎生検で判断されるが、病勢把握のために反復して腎生検を行うことの侵襲性が問題であった。近年、IgA 血管炎の病勢マーカーとして血清 Gd-IgA 値が注目されている。患者腎組織を用いガラクトース欠損 IgA の糸球体発現を蛍光免疫染色で確認するとともに、血清 Gd-IgA 値の測定中である(達成度 30%)

COVID-19 に併発した腎炎で、Gd-IgA の糸球体沈着を認めた 2 例を報告した(2022 年、日本小児科学会埼玉地方会で発表)

D. 小児発熱患者における医原性低ナトリウム血症の発症リスクと適正な維持輸液療法の確立

発熱患者を対象に抗利尿ホルモンの分泌を刺激する要因を検討した(2022 年、日本小児科学会学術集会で発表)。論

文作成中である（達成度 80%）。細胞外液製剤を維持輸液に用いることの安全性と危険性について検討している（データ収集終了）（達成度 80%）

神 経

- A. ハイリスク新生児の発達行動学的研究（情育環境学）：取得したデータを解析中（達成度 80%）
- B. 薬剤抵抗性小児てんかんの新規抗発作薬の安全性治療効果に関する研究：2022 年度学会発表済み、現在論文作成中（達成度 80%）
- C. サルを用いた環境に関わる発達行動学的研究：国際査読付論文（Stress Brain and Behavior）発表（達成度 80%）
- D. サルを用いた低酸素性虚血性脳障害の成因と治療に関する研究：国内外学会（2022 年国際ストレス行動学会、日本生理学会）発表（達成度 80%）
- E. 小児の発達行動学・心理学的研究：国際査読付論文（Stress Brain and Behavior、Journal of Visualized Experiments）発表（達成度 80%）
- F. 小児神経療育システム研究：国際査読付論文（Sensors）発表（達成度 80%）

新生児

- A. リハビリテーションと連携し、画像評価をしながら、哺乳から運動獲得までの達成度を比較する（達成度 40%）
- B. 様々な簡易血糖測定器での新生児血糖の値を比較検討する（達成度 90%）
- C. 新生児を自然睡眠に導く様々な装置の工夫（達成度 80%）
- D. 様々な状況下での様々な疾患・病態に対する・外来でのフォローの検討（達成度 50%）
- E. 新生児仮死や超低出生体重児における aEEG の検討（達成度 50%）
- F. 埼玉県の多施設共同研究で、在胎 28 週未満で出生した超早産児の予後を検討する。症例の登録中である。（達成度 20%）
- G. 全国の共同研究で、来年度から開始する予定（達成度 0%）

3-4. 次年度改善計画

各グループの研究達成度は 10%~100%である。多忙な臨床および教育業務を遂行しながら、すぐれた研究成果結果を得るためには、継続的な個人的努力のみならず、本診療科が主に担当する 1) 内分泌・代謝、2) 腎臓・膠原病、3) アレルギー、4) 神経 5) 新生児のそれぞれの領域内での具体的研究計画に基づく研究協力体制の充実、そして診療科内全体に平等に研究支援を行うことが肝要と考えられる。研究遂行のための倫理的配慮と安全管理に配慮しつつ、使用しやすい研究室の整備や研究指導の充実、公的研究費採択に尽力する。

4. 診療

小児科では、周産期センターと連携し、生後からのシームレスな小児科診療を行っている。夜間は地域連携小児夜間休日診療をふくめて 24 時間体制で小児救急診療体制を整えており、2022 年度受診数は 3422 名、救急車数は 697 件であった。救急車応需率は 90%を超えている。なお、感染対策のため、昨年引き続き発熱患者は小児発熱外来で診療した。サブ・スペシャリティ分野としてアレルギー・呼吸器（板澤）、小児内分泌・糖尿病（菊池）、先天代謝異常・遺伝病（大竹）、小児神経（山内）、腎臓（秋岡）、新生児（國方）の分野を各教授・准教授が主導している。さらに、病院内の各センター（アレルギー、てんかん、難病）や子どもの虐待対応などの運営に中心的役割を果たしている。小児心疾患、小児腫瘍・血液分野については国際医療センターと連携して行っている。さらに、各研究とともに、臨床治験に積極的に参加している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

厚労省：医師国家試験問題作成委委員：秋岡祐子

自治体：埼玉県小児慢性特定疾病審査委員：秋岡祐子

自治体：埼玉県てんかん治療医療連携協議会委員：山内秀雄

厚労省：厚生労働省疾病・障害認定審査会 感染症・予防接種審査分科会委員：山内秀雄

日本政府観光局：MICE アンバサダー：山内秀雄

自治体：埼玉県学校保健会常務理事：菊池透

自治体：埼玉県小児慢性特定疾病審査委員：菊池透

自治体：埼玉県アレルギー疾患医療連絡協議会委員：板澤寿子

板澤寿子：埼玉県児童虐待対応医療ネットワーク実行委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

秋岡祐子：日本小児体液研究会編集委員

査読：日本小児科学会雑誌、Pediatric International、日本小児腎不全学会誌、日本臨床腎移植学会雑誌、Clinical Experimental Nephrology、Renal Failure

山内秀雄：Brain & Development 編集委員

Pediatrics International 編集委員

Journal of Pediatric Epilepsy 編集委員

Frontiers in Neurology 共同編集委員

日本小児神経学会小児急性脳症診療ガイドライン作成委員

査読：Neuropediatrics, Brain & Development, Pediatric International、Frontiers in Neurology、日本小児神経学会雑誌「脳と発達」、日本小児科学会雑誌等

菊池 透：糖尿病・妊娠学会学術誌「糖尿病と妊娠」編集委員

Journal of Atherosclerosis and Thrombosis 編集委員

日本成長学会編集委員

日本糖尿病学会 “糖尿病治療ガイドライン” 策定委員

日本肥満学会 “小児肥満症ガイドライン” 作成委員

査読：Endocrine Journal, Clinical Pediatric Endocrinology, Pediatrics International, Journal of Diabetes Investigation, 小児保健研究

國方徹也：査読 Pediatric international, 日本成育新生児学会誌、日本周産期新生児医学会誌

板澤寿子：学術誌編集委員：「日本小児アレルギー学会誌」

査読：「Allergology International」, 「Pediatric International」, 「日本小児アレルギー学会雑誌」

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

秋岡祐子：日本小児腎臓病学会 代議員事、ダイバーシティ推進委員会オブザーバー

秋岡祐子：日本腎臓病学会 評議員、ダイバーシティ推進委員会委員

秋岡祐子：日本小児科学会 代議員、埼玉地方会理事、学術委員、総務委員

秋岡祐子：関東小児腎臓研究会 運営委員長

秋岡祐子：日本小児腎不全学会 運営委員

秋岡祐子：日本小児体液研究会 運営委員

山内秀雄：日本小児科学会代議員

山内秀雄：日本小児科学会埼玉地方会理事

山内秀雄：日本てんかん学会理事・てんかん専門医療施設検討委員会委員長

山内秀雄：日本てんかん学会関東甲信越地方会評議員

山内秀雄：日本小児神経学会評議員

山内秀雄：日本小児神経学会関東地方会評議員

山内秀雄：Infantile Seizure Society, Chairperson

山内秀雄：小児神経筋疾患懇話会世話人

松本 浩：日本小児科学会 代議員

松本 浩：日本小児科学会 埼玉地方会役員、学術委員長

松本 浩：日本小児神経学会 評議員

菊池 透：A member of Guideline Development Group Childhood Obesity in WHO

菊池 透：日本小児科学会、代議員、

菊池 透：日本小児内分泌学会、理事、糖代謝委員長

菊池 透：日本小児保健協会、学校保健委員長

菊池 透：日本糖尿病学会、学術評議員、専門医認定委員、糖尿病治療ガイドライン策定委員

菊池 透：日本内分泌学会、評議員

菊池 透：日本動脈硬化学会、評議員、編集委員

菊池 透：日本肥満学会、評議員、小児肥満症ガイドライン委員、専門医委員

菊池 透：日本高血圧学会、高血圧治療ガイドライン委員

菊池 透：日本糖尿病・妊娠学会 常任理事

菊池 透：日本小児・思春期糖尿病学会 副理事長

菊池 透：日本成長学会 理事
 菊池 透：日本小児脂質研究会 運営委員長
 菊池 透：日本小児高血圧研究会 世話人
 菊池 透：日本 DOHaD 学会 幹事
 菊池 透：小児インスリン治療研究会 世話人代表
 菊池 透：埼玉糖尿病協会小児糖尿病対策委員
 國方徹也：施設認定委員、社会保険委員会委員、
 國方徹也：日本新生児成育医学会評議員
 國方徹也：日本新生児黄疸管理研究会幹事
 國方徹也：日本ハイリスクフォローアップ研究会評議員
 國方徹也：日本医療機能評価機構、産科医療補償制度、原因分析委員会委員
 國方徹也：日本小児科学会代議員、埼玉地方会学術委員副委員長
 國方徹也：さいたま地方裁判所鑑定人候補者
 板澤寿子：日本アレルギー学会代議員、資格審査委員会委員
 板澤寿子：日本小児アレルギー学会代議員、疫学委員会委員
 板澤寿子：日本小児科学会代議員
 盛田英司：日本アレルギー学会代議員
 本多正和：日本周産期・新生児医学会評議員
 日本新生児成育医学会 代議員
 武者育麻：日本小児内分泌学会、評議員、COI 委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①遠藤琢也、秋岡祐子ら. 高チロシン血症 I 型に伴う腎障害、小児腎不全学会雑誌 42、65-69、2022
- ②秋岡祐子. 小児全身性血管炎に伴う糸球体腎炎の診かた—ANCA 関連腎炎とループス腎炎を中心に—、小児リウマチ 13、3-9、2022
- ③Takuma Ohnishi, Yumi Kang, Yutaka Kawano, Tetsuya Kunikata, Ko Ichihashi : An atypical surge in RSV infections among children in Saitama, Japan in 2021 IJID Regions, 7,124-126, 2023
- ④國方徹也：新生児仮死での低体温療法—aEEG を積極的に使用する. 周産期医学, 53 (1)、63-65、2022
- ⑤Akiko Tsuchida, Toshiko Itazawa, Kenta Matsumura, Hiroshi Yokomichi, Zentaro Yamagata, Yuichi Adachi, Hidekuni Inadera ; Japan Environment and Children's Study Group. Season of birth and atopic dermatitis in early infancy: results from the Japan Environment and Children's Study. BMC Pediatr. 2023;23(1):78. doi: 10.1186/s12887-023-03878-6.
- ⑥Shimizu M, Kato T, Adachi Y, Wada T, Murakami S, Ito Y, Itazawa T, Adachi YS, Tsuchida A, Matsumura K, Hamazaki K, Inadera H; Japan Environment and Children's Study Group. Association between Maternal Vitamin D Intake and Infant Allergies: The Japan Environment and Children's Study. J Nutr Sci Vitaminol (Tokyo). 68(5):375-382, 2022.
- ⑦秀雄. 会長講演「新たなる創造とその調和—35 年前の君に—」 第 64 回日本小児神経学会学術集会. 2022 年 6 月 2 日～5 日、高崎
- ⑧寺西宏美、大滝里美、颯佐かおり、山内秀雄. 小児難治てんかんにおける perampanel の有効性と忍容性に関する後方視的研究、第 64 回日本小児神経学会学術集会、2022 年 6 月 2 日～4 日、高崎
- ⑨Kikuchi T. Pediatric hypertension based on Japanese Society of Hypertension Guidelines (JSH 2019) with actual school blood pressure screening data in Japan. Clin Exp Pediatr. 2022 Jun;65(6):283-290.
各先生

【総数 論文 英文 5 件、和文 11 件、学会発表 海外 8 件、国内 52 件、講演 12 件】

6-2. 獲得研究費

- 令和 3 年 - 4 年厚生労働科学研究費補助金 早産児ビリルビン脳症の診療指針の改訂および包括的診療体制の確立 (研究代表者 奥村彰久) 研究分担者 國方徹也 (200 千円)
- 令和 4 年—令和 6 年文部科学省科学研究費助成事業基盤研究 C 「DNM1L 変異を有する神経細胞におけるミトコンドリア機能および細胞活動電位の評価」研究代表者 松本浩 2,860 千円

- 令和4年厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）（20FA1016）. 糖尿病の実態把握と環境整備のための研究、研究代表者、山内敏正. 分担研究者、菊池透. 研究分担者 500 千円.
- 令和2年-令和4年文部科学省科学研究費助成事業基盤研究C「自分と次世代の健康のための成人式、婚姻時、妊娠時の郵送健診による先制医療の確立」研究者代表 菊池透 3,300 千円
- 令和3年度-令和5年度 ファイザー・ジャパン研究助成. 1型糖尿病診療の適正な治療の推進のための小児内分泌科医および養護教諭に対する教育プロジェクト（JENPAD）. 研究代表者 菊池透. 2,500 千円.
- 平成31年度-令和4年文部科学省科学研究費助成事業基盤研究（C）（一般）「局所性アレルギー性鼻炎に関わる IgE クラススイッチ機序の解明と治療への展開」研究代表者 板澤寿子. 2,600 千円
- 2022年度学内 Grant「アレルギー性鼻炎における局所 IgE 産生機序の解明と治療への応用」研究代表者 板澤寿子. 700 千円

6-3. 受賞

- 大滝里美 第64回日本小児神経学会学術集会 Certificate of Recognition Encouragement Award『An exon skipping therapy by Viltolarsen on a presymptomatic patient with Duchenne muscular dystrophy』2022年6月2日
- 颯佐かおり 第64回日本小児神経学会学術集会 Certificate of Recognition Encouragement Award『Could Nusinersen from the neonatal period prevent the development of spinal muscular atrophy?』2022年6月2日
- 田中萌子. 2021年度 日本小児科学会 埼玉地方会 最優秀演題「当院で過去7年間に分娩した未受診妊婦の検討」

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- 第43回日本小児体液研究会（会長：秋岡祐子）
日 時：2022年7月16日（土）
場 所：ZOOM 開催
- 第43回日本小児腎不全学会（会長：秋岡祐子）
日 時：2022年12月8日（木）～9日（金）
場 所：東京、お茶の水ソラシティカンファレンスセンター
- 埼玉西北部小児科研究会
第46回 2022年7月27日（当番幹事：菊池 透）ハイブリッド開催
第47回 2022年10月26日（当番幹事：國方 徹也）完全 Web 開催
第48回 2023年3月8日（当番幹事：山内 秀雄）完全 Web 配信
- アレルギーフォーラム
第68回 2022年9月8日（当番幹事：板澤 寿子）ハイブリッド開催
第69回 2023年2月2日 ハイブリッド開催
第70回 2023年3月16日 ハイブリッド開催
- 第64回日本小児神経学会学術集会 会長 2022年6月2日～5日（山内秀雄）
- 埼玉県内小中高等学校教職員・校医向けてんかん研修会（担当 山内秀雄）
日時：2022年9月28日
- 第1回埼玉県てんかんなんでもウェブ相談会（担当 山内秀雄）
日時：2022年11月12日
- 第2回埼玉県てんかんなんでもウェブ相談会（担当 山内秀雄）
日時：2023年2月13日
- 埼玉医科大学病院てんかんセンター特別講演会（担当 山内秀雄）
日時：2023年2月21日
- 第3回小児てんかん WEB カンファレンス「けいれんの鑑別 Let's think！」（担当 大滝里美、寺西宏美）
日時：2023年3月28日（火）19:30～20:00
場所：ZOOM 開催
- 子どもてんかんオンライン市民公開講座（担当 寺西宏美）
日時：2023年1月14日（土）13:00～15:00
場所：ZOOM 開催
- 第35回てんかんセンターカンファレンス（担当 颯佐かおり）
日時：2022年6月16日木曜日 18時から19時
- 第39回てんかんセンターカンファレンス（担当 颯佐かおり、寺西宏美、大滝里美）

日時：2022年11月17日木曜日 18時～19時

場所：埼玉医科大学病院

●第38回小児神経筋疾患懇話会(担当 寺西宏美)

日時：2022年8月27日(土) 13:00～17:35

場所：ZOOM開催

●南館4階看護師向け勉強会(担当 颯佐かおり、寺西宏美、大滝里美)

日時：2023年2月8日(水)、3月8日(水)、 8:40～9:00

場所：埼玉医科大学病院

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育、診療、研究について、教授・准教授で役割分担し（秋岡運営責任者・小児科診療部長、菊池同診療副部長、國方新生児科診療部長、山内研究主任、板澤教育主任、菊池研修医長）遂行してきた。運営責任者を歴任され、長らく研究主任であった大竹明教授が3月に退任され、とりわけ研究室を一新することが大きな課題であった。若手医師の研究マインド育成とともに、2022年7月から新たに研究助手を雇用し研究の実践に結び付くよう体制を整えた。一方、実績としては、前年度に引き続き英文論文数が少ない点、科研費の応募実績が少ない点を問題点としてあげる。COVID-19のパンデミックで落ち込んだ診療実績は改善傾向で、小児急性感染症の患者数が増加した。別棟にある発熱外来を運営するため医師不足・看護師不足が問題であったが、医務課の協力と病院を挙げてのCOVID-19診療体制構築が診療の円滑化に寄与した。当院では獲得が難しい診療技術獲得のため専門医2名を国内医療機関に研修に出している。個人の希望に沿うだけでなく、小児科全体の診療力のレベルアップを期待し取り組みを始めたところである。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

小児科体制は、秋岡運営責任者・小児科診療部長、菊池同診療副部長、國方新生児科診療部長、山内研究主任、板澤教育主任、菊池研修医長とする。2023年度から医師国家試験出題基準が改定されており、卒前教育では一般小児疾患に視点をおいた外来実習を組み込んでいく。卒後教育では、小児科は初期研修の必修とされており、専攻医3年目をシニアレジデントとして、学生-初期研修医-専攻医でグループとなり、それぞれの立場で教える診療体制を維持する。

専攻医、専門医に対してはそれぞれの研究マインドを育成し成熟させる。ベッドサイドから抽出したリサーチクエスチョンを研究に結び付けるよう指導し、研究にかかる初期の経費は診療科でサポートする体制を試みる。研究課題について計画書作成を実践し、科研費応募を具体化させる。専門領域を決めた小児科専門医にはその領域の専門医取得を勧め、研究志向の高い専門医には、国内留学・国外留学を勧める。診療では、COVID-19の流行状況に合わせ小児発熱外来を維持することで、慢性疾患の診療を充実させる。ニーズが高いこどものメンタルサポートについて臨床心理士、児童精神科医と連携した診療体制を構築し地域のニーズに応えることを継続目標とする。

1. 21) 皮膚科

1. 構成員

中村晃一郎(NAKAMURA, Koichiro) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 指導教員 (大学院) : 皮膚免疫、皮膚アレルギー性疾患、乾癬 : 博士。

常深祐一郎(TSUNEMI, Yuichiro) : 教授 : 診療副部長、研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 皮膚アレルギー性疾患、乾癬、皮膚真菌症 : 博士。

宮野恭平(MIYANO, Kyohei) : 講師 : 教育主任、外来医長 : 指導教員 (大学院) : 皮膚アレルギー、乾癬 : 博士。

土田哲也(TSUCHIDA, Tetsuya) : 客員教授。

緒方 大(OGATA, Dai), 鈴木 正(SUZUKI, Tadashi), 清原祥夫(KIYOHARA, Yoshio), 大林寛人(OHBAYASHI, Hiroto), 田口理史(TAGUCHI, Masahito), 濱中すみ子(HAMANAKA, Sumiko), 中山佳代子(NAKAYAMA, Kayoko), 長島陽子(NAGASHIMA, Yoko), 馬場由佳里(BABA, Yukari) : 非常勤講師。

青笹尚彦(AOZASA, Naohiko), 柳澤宏人(YANAGISAWA, Hiroto), 吉田幸代(YOSHIDA, Sachio), 竹治真明(TAKEJI, Masaaki), 岡部正和(OKABE, Masakazu), 東郷朋佳(TOGO, Tomoka), 佐々木庸介(SASAKI, Yosuke), 中西佑以子(NAKANISHI, Yuiko), 鈴木芳可(SUZUKI, Yoshika), 池田真弓(IKEDA, Mayumi), 鈴木 唯(SUZUKI, Yui), 椎名雄樹(SHIINA, Yuki), 小林 梓(KOBAYASHI, Azusa), 深江紗央里(HUKAE, Saori) : 助教。

堀江明弘(HORIE, Akihiro), 阿部夏実(ABE, Natsumi), 山田友莉香(YAMADA, Yurika) : 専攻医。

井上 唯(INOUE, Yui) : シニアレジデント。

難波純英(NAMBA, Junei), 村上拓生(MURAKAMI, Takuo), 大野志保(OHNO, Shihō), 町野哲(MACHINO, Satoshi), 土橋隼人(TSUCHIHASHI, Hayato), 高林彩子(TAKABAYASHI, Ayako), 高井彩也華(TAKAI, Sayaka) : 非常勤医師。

根内厚子(NEUCHI, Atsuko) : 実験助手。

清水華子(SHIMIZU, Hanako), 高野和代(TAKANO, Kazuyo), 徳永久美子(TOKUNAGA, Kumiko) : 秘書。

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

《卒前教育》

医学部学生が履修すべき皮膚科の基礎を学ぶ。皮膚の構造と機能、症候学、病理組織学にはじまり、代表的な疾患について学ぶ。

《卒後教育》

外来診療・病棟診療において、炎症性皮膚疾患、膠原病、皮膚腫瘍などの各疾患の問診、診断、治療などに関して正しい知識を習得し、診療に役立てる。診療において患者へのインフォームドコンセントを十分に行うことを身につける。チーム医療の基本を習得する。

《大学院教育》

大学院授業において、皮膚免疫学、皮膚生理学、皮膚形態学などに関する概念を把握し、さらに手技について学ぶ。実験、解析、カンファレンス討論、学会発表、論文作成の一連について習得する。

前年度からの改善計画として、各教育においてより理解度を深める工夫を加えることを念頭においた。

2-2. 教育実績(担当者)

《卒前教育》

2022年度授業は、4年生の講義として、「免疫ユニット」1時限、「皮膚・運動器ユニット」11時限を担当した。5年生のBSLは各グループ1週間行った。6年生の講義数は皮膚科学5時限、外科総論1時限、総合学習Cユニット(卒後試験後)1限であった。また、保健医療学部の講義も、看護学科、臨床検査学科、理学療法学科において各2時限を担当した。なお、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、講義は現地とYouTubeでのライブ配信を併用したハイブリッド形式で実施した。講義資料は事前にPDF化して配布し、スライドを使用して行なわれた。

3年生<内分泌・代謝ユニット>

1. 内・代31 その他の代謝疾患(皮膚の代謝異常症・形成異常症) : (福田知雄)

4年生<皮膚・運動器ユニット>

1. 皮運1 オリエンテーション、皮膚の構造と機能 : (中村晃一郎)

2. 皮運2 皮膚科診断学・症候学 : (常深祐一郎)

3. 皮運3 全身と皮膚 : (大林寛人)

4. 皮運4 湿疹・皮膚炎群、蕁麻疹 : (中村晃一郎)

5. 皮運5 皮膚真菌症 : (中山佳代子)

6. 皮運6 紅斑症・紫斑病、薬疹：(人見勝博)
7. 皮運7 水疱症、膿疱症：(福田知雄)
8. 皮運8 角化症・皮膚付属器疾患：(常深祐一郎)
9. 皮運9 物理化学的皮膚障害(熱傷、凍傷)・光線性皮膚疾患(含レーザー療法)：(宮野恭平)
10. 皮運10 色素異常症：(中村泰大)
11. 皮運11 母斑・母斑症：(宮野恭平)
12. 皮運12 ウイルス性皮膚疾患：(福田知雄)
13. 皮運13 細菌性皮膚疾患(含抗酸菌感染症)、肉芽腫症：(宮野恭平)
14. 皮運14 性感染症、動物性皮膚疾患：(鈴木正)
15. 皮運18 皮膚腫瘍(上皮系腫瘍)：(清原祥夫)
16. 皮運19 皮膚腫瘍(間葉系、メラノサイト系腫瘍)：(中村泰大)
17. 皮運21 〈病理〉皮膚：(新井栄一)

4年生<免疫ユニット>

1. 免疫23 膠原病とアレルギーの皮膚病変(中村晃一郎)
2. 免疫24 膠原病とアレルギーの病理(新井栄一)

4年生<腫瘍ユニット>

1. 腫瘍13 皮膚腫瘍(中村泰大)

6年生総合学習ユニット<皮膚科>

1. 皮膚1 角化症、母斑・母斑症：(宮野恭平)
2. 皮膚2 光線性皮膚疾患、色素異常症、代謝異常、全身と皮膚：(福田知雄)
3. 皮膚3 皮膚感染症(ウイルス性発疹症を除く)：(常深祐一郎)
4. 皮膚4 紅斑症・紫斑病、水疱症・膿疱症、肉芽腫症、皮膚腫瘍：(中村晃一郎)
5. 皮膚5 湿疹、皮膚炎群、蕁麻疹：(常深祐一郎)

6年生総合学習ユニット<外科総論>

1. 外科総論10 熱傷(田口理史)

6年生総合学習ユニット<卒業試験後>

1. 高齢者/要介護者に多い皮膚の病気(宮野恭平)

BSL：外来では学生各自が新来患者を1名以上担当し、皮疹の見方、病歴の記載法、検査法、診断学および治療について指導を受けた。病棟では担当医の指導のもとでチームの一員として患者診療を行った。また、皮疹のみかた、病理組織、入院症例について、検査法、治療法などについてのクルズを7単位設け、小人数討論をおこなった。その他、週2回の病棟総廻診へ参加し、中央手術室では実際に手洗いをして手術の助手として手術に加わった。

《卒業教育》

初期研修医、シニアレジデント(後期研修医、専攻医)を対象とした卒業教育では、外来診療・病棟診療において、種々の検査法、外用療法、光線療法、レーザー治療、外科的処置、内科的治療、全身ケアを経験するとともに、壊死性筋膜炎などの重症感染症、熱傷、壊疽、良性・悪性腫瘍などに対して行う debridement、切除、植皮、皮弁形成などの外科手術にも緊急手術を含めて参加し、皮膚科の診療に不可欠な技術の習得に努めた。

《大学院教育》

大学院では週1回の勉強会を通して専門的な知識の習得に努めた。また、分子生物学的手法や病理組織学的手法を用い、再生医療や悪性腫瘍診断、脂腺細胞についての研究を行い、実験、解析、科内カンファレンス、学会発表、論文作成という研究の一連の流れを習得した。

2-3. 達成度評価

《卒前教育》

4年生はユニット別試験を行いユニットとして学習成果の総括的評価を行なった。臨床実習(BSL, CC)の評価は、出欠、観察記録、レポートおよび口頭試問を総合して判定し、不合格者はいなかった。6年生は卒業試験が行なわれ、卒業の可否は卒業試験の成績において全科的に総合して判定された。

《卒業教育》

研修医・シニアレジデントの評価は、外来・病棟研修における診療、手術、病理標本の観察、カンファレンス発表、学会発表、論文などを総合して判定した。

《大学院教育》

大学院生の評価は大学院授業への出欠、勉強会への出席状況、実験への参加、学会発表、論文作成によって評価を行

った。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度は更に、理解度を深める工夫を加えると共に、皮膚疾患の概念、とらえ方を身につけ、各々の相違について自ら考えられるようにサポートしたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

当科では、様々な皮膚疾患に於いて臨床的・病理組織学的検討をおこない、ならびに全身性皮膚疾患の病態と治療に対する臨床研究を行っている。基礎研究として皮膚病理組織学的研究の他、生化学的研究、免疫学的研究を行う。臨床的研究としては、皮膚病変に対するダーモスコピーを用いた診断、皮膚悪性腫瘍における外科的治療成績、自己免疫水疱症における臨床研究など詳細に検討している。さらに炎症性皮膚疾患の研究では、乾癬などの炎症性皮膚疾患の病態、治療に対する研究を行う。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- (1) 国立がん研究センター研究開発費：成人固形がんに対する標準治療確立のための基盤研究：皮膚悪性腫瘍に対する標準治療確立のための多施設共同研究
「病理病期Ⅱ期およびⅢ期皮膚悪性黒色腫に対するインターフェロンβ局所投与による術後補助療法のランダム化比較第Ⅲ試験」「頭頸部発生初発基底細胞癌縮小マージン切除に関する単群検証的試験」に関して症例の経過を観察している。
- (2) 厚生労働科学研究費補助金特定疾患対策研究事業：ベーチェット病に関する調査研究班
ベーチェット病ガイドラインの作成に向けて準備をしている。
- (3) 厚生労働科学研究費補助金「肝炎等克服緊急対策研究事業」：がん化学療法および免疫抑制療法中のB型肝炎ウイルス再活性化予防対策法の確立を目指したウイルス要因と宿主要因の包括的研究班
研究全体の進捗をフォローし、依頼があり次第対応可能な状況を整えている。
- (4) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(B)看護理工学的手法を用いた足白癬トータルケアシステムの確立
白癬菌由来のケラチナーゼを検出できることを確認し、臨床応用を目指して検出方法の簡便化に向けて取り組んでいる。

3-3. 達成度評価

- (1) がん研究開発費
無色素性悪性黒色腫の dermoscopy 所見では、linear-irregular vessels、dotted vessels が認められた。血管拡張性肉芽腫、基底細胞癌、エクリン汗孔腫の血管拡張パターンとは異なっており、今後有棘細胞癌や、肉芽腫性病変との比較検討がさらに必要であるが、dermoscopy における血管の評価が、無色素性悪性黒色腫の診断に役立つことが期待できる。
- (2) ベーチェット病研究班
2018年にベーチェット病の皮膚粘膜病変診療ガイドラインが作成された。治療指針に関わるガイドライン作成を中心に標準治療の確立に向けて検討し報告している。2019年度にベーチェット病診療ガイドライン2020が作成された。
- (3) 肝炎等克服緊急対策研究事業
皮膚科領域における免疫抑制薬療法施行時のB型肝炎ウイルス再活性化に関する調査研究を行った。
- (4) 看護理工学的手法を用いた足白癬トータルケアシステムの確立
白癬菌の有するケラチナーゼ活性を利用し、足底の白癬菌をシート上でタンパクを分解し、可視化する技術を目指している。完成すれば非侵襲的に白癬を検出でき、フットケア領域で活用されることが期待できる。

3-4. 次年度改善計画

- (1) 皮膚悪性腫瘍症例を解析し、学会発表を目指す。
- (2) ベーチェット病の治療ガイドラインの作成に向けてさらにエビデンス情報を収集し検討する。
- (3) 皮膚科領域における免疫抑制薬療法施行時のB型肝炎ウイルス再活性化に関する調査研究を継続して行う。
- (4) 効率的にケラチナーゼ活性を検出するための条件設定を進める。

4. 診療

皮膚悪性腫瘍、乾癬、皮膚アレルギー疾患、天疱瘡などの自己免疫性水疱症、膠原病などを中心に、専門的診療を行っている。これら諸疾患は皮膚科独特の見地から、注意深く診療をすすめるものであるが、それと同時に、皮膚に症状を

生じる疾患は、全身的な視野から、内科的、外科的に総合的な診療をしていくことが必要で、そのように努めている。したがって、他科とも十分協力しあって診療にあたっている。

臨床上有用性をめざして、悪性腫瘍に対する画像診断を行い、悪性腫瘍に対する化学・免疫療法の治療成果などについて、詳細に検討している。また、膠原病の治療においては種々の観点から検討を加えており、診療ガイドラインの作成などを目指している。アレルギー性疾患や乾癬の治療に関しては患者 QOL の向上を考えながら治療の遂行にあたり、有効な治療法について検討している。自己免疫水疱症の治療についても寛解導入、維持療法における有効な治療の検討を詳細に行っている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉地方裁判所専門委員（土田哲也）

東京地方裁判所専門委員（常深祐一郎）

埼玉県指定難病専門審査委員（土田哲也）

独立行政法人医薬品医療機器総合機構 専門委員（常深祐一郎）

厚生労働省薬事・食品衛生審議会 副作用・感染等被害判定部会委員（常深祐一郎）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

皮膚科の臨床 編集委員（土田哲也）

Medical Mycology Journal 編集委員（常深祐一郎）

日本臨床皮膚科医会雑誌編集委員（常深祐一郎）

Journal of Dermatology, Section Editor（常深祐一郎）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

中村晃一郎： 日本皮膚科学会代議員、日本皮膚免疫アレルギー学会評議員、日本乾癬学会評議員、日本研究皮膚科学会評議員、日本小児皮膚科学会世話人

常深祐一郎： 日本皮膚科学会代議員、日本研究皮膚科学会評議員、日本医真菌学会代議員、日本化粧品学会理事、日本皮膚病理組織学会副理事長、日本小児皮膚科学会事務局長

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書（論文 20 編、著書 32 編、学会発表 95 回）

- Ikeda M, Yabe S, Kiso M, Ishiguro N, Tsunemi Y, Okochi H. TERT/BMI1-transgenic human dermal papilla cells enhance murine hair follicle formation in vivo. *J Dermatol Sci.* 106(2): 78-85, 2022
- Bieber T, Reich K, Paul C, Tsunemi Y, Augustin M, Lacour JP, Ghislain PD, Dutronc Y, Liao R, Yang FE, Brinker D, DeLozier AM, Meskimen E, Janes JM, Eyerich K; BREEZE-AD4 study group. Efficacy and safety of baricitinib in combination with topical corticosteroids in patients with moderate-to-severe atopic dermatitis with inadequate response, intolerance or contraindication to ciclosporin: results from a randomized, placebo-controlled, phase III clinical trial (BREEZE-AD4). *Br J Dermatol.* 187(3): 338-352, 2022
- Saeki H, Ohya Y, Furuta J, Arakawa H, Ichiyama S, Katsunuma T, Katoh N, Tanaka A, Tsunemi Y, Nakahara T, Nagao M, Narita M, Hide M, Fujisawa T, Futamura M, Masuda K, Matsubara T, Murota H, Yamamoto-Hanada K. English Version of Clinical Practice Guidelines for the Management of Atopic Dermatitis 2021. *J Dermatol.* 49(10): e315-e375, 2022
- 中西佑以子、常深祐一郎、中村晃一郎. 著明に好酸球の増加した水疱性類天疱瘡。 *Visual Dermatol* 21(9), 888-890, 2022.
- 上村杏奈、村上拓生、柳澤宏人、常深祐一郎、土田哲也、中村晃一郎. 腫瘤型毛母腫の 2 例 毛母腫のダーモスコピー所見についての考察を加えて。 *臨床皮膚科* 76(8), 593-598, 2022.
- 吉田幸代、村上拓生、鈴木怜、鈴木唯、岡部正和、竹治真明、常深祐一郎、中村晃一郎. 頭部、顔面と下腿に Palpable Purpura が出現した IgA 血管炎の 1 例。 *皮膚科の臨床* 64(11), 1759-1762, 2022.
- 鈴木唯、村上拓生、常深祐一郎、土田哲也、中村晃一郎. Subcutaneous Panniculitis-like T-cell Lymphoma の 1 例。 *皮膚科の臨床* 64(12), 2063-2067, 2022.
- 佐藤詩穂里、竹治真明、青笹尚彦、柳澤宏人、土田哲也、常深祐一郎、中村晃一郎. 全身に多発した皮膚限局性結節性アミロイドーシス。 *皮膚病診療* 44(12), 1074-1078, 2022.
- 佐伯 秀久, 秋山 真志, 安部 正敏, 五十嵐 敦之, 今福 信一, 大矢 幸弘, 加藤 則人, 亀田 秀人, 梶島 健治, 常深 祐一郎, 秀 道広, 大槻 マミ太郎. アトピー性皮膚炎におけるヤヌスキナーゼ (JAK) 阻害内服薬の使用ガイドランス。 *日本皮膚科学会雑誌* 132(8), 1797-1812, 2022.
- 常深 祐一郎, 井川 健, 石氏 陽三, 種瀬 啓士, 二村 昌樹, 加藤 則人. 日本皮膚科学会マニュアル ジファミラスト軟膏(モイゼルト軟膏 0.3%, 1%)安全使用マニュアル。 *日本皮膚科学会雑誌* 132(7), 1627-1635, 2022.

6-2. 獲得研究費

- (1) 厚生労働科学研究難治性疾患等政策研究事業：ペーチェット病に関する調査研究：分担研究者 中村晃一郎（20FC1012 研究代表者 岳野光洋）
- (2) 厚生労働科学研究費補助金「肝炎等克服緊急対策研究事業」：がん化学療法および免疫抑制療法中のB型肝炎ウイルス再活性化予防対策法の確立を目指したウイルス要因と宿主要因の包括的研究班：研究協力者 常深祐一郎
- (3) 難治性疾患実用化研究事業：ペーチェット病の病態解明および治療法開発を目的とした全国レジトリの構築：研究開発担当者 中村晃一郎（22ek0109473h0003：研究代表者 水野信久）
- (4) 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(B)看護理工学的手法を用いた足白癬トータルケアシステムの確立：分担研究者 常深祐一郎（研究代表者：竹原君江：21H03231）

6-3. 受賞

Most Downloaded Articles 2021 (Tsunemi Y, Irisawa R, Yoshiie H, Brotherton B, Ito H, Tsuboi R, Kawashima M, Manyak M; ARI114264 Study Group. Long-term safety and efficacy of dutasteride in the treatment of male patients with androgenetic alopecia. J Dermatol. 43: 1051-8, 2016)

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- (1) 症例検討会の開催：
 - (a) 症例検討会および病理検討会 1ヶ月に8回
 - (b) 院外紹介元医師を対象とした症例検討会（報告会） 4ヶ月に1回

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育では、履修すべき皮膚疾患の基礎を学ぶ機会を提供できた。研究面では、アレルギー性皮膚疾患、膠原病、自己免疫水疱症、および悪性腫瘍に関し臨床研究や文献的な研究を行なった。診療面では、外来、病棟とも多数の患者があり、重症例に対しても優れた治療成績が得られた。基本学科全体として、診療面で皮膚科各分野における診療を十分に遂行することができた。また、臨床試験を多数獲得した。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育では、皮膚科の基礎を教育しながら、次年度では理解度を深める工夫を行い、学生が皮膚疾患の概念をとらえ、各々の相違について自ら考えられることを目標とする。また皮膚科の面白さを伝えられるよう努力する。研究面では、乾癬など炎症性疾患、天疱瘡などの自己免疫水疱症、悪性腫瘍に関し臨床研究を行ない成果が得られたが、来年度はさらに研究での症例を集積し、解析し論文化を目指す。より多くの臨床試験を獲得し、最新の臨床経験を積むと共に新薬開発に貢献する。次年度、診療面ではさらに各分野における診療の質の向上をはかり、また、病診連携の促進、手術件数、入院症例に関しても、診療面での治療成績の向上をはかりたい。

1. 22) 泌尿器科

1. 構成員

朝倉 博孝 (Asakura, Hiroataka) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 教育主任 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) :
排尿障害 : 女性泌尿器 : 博士
矢内原 仁 (Yanaiharu, Hitoshi) : 教授 : 指導教員 (大学院) : 腹腔鏡手術 : 院内感染 : 博士
篠島 利明 (Shinojima, Toshiaki) : 准教授 : 診療副科長 : 指導教員 (大学院) : 排尿障害 : 女性泌尿器 : 腹腔鏡手術 : 博士
中平 洋子 (Nakahira, Yoko) : 講師 : 教育副主任 : 医長 : 女性泌尿器 : 過活動膀胱 : 排尿障害 : 博士
寺西 悠 (Teranishi, Yu) : 助教 : 泌尿器科全般
梅澤 佑太 (Umezawa, Yuta) : 助教 : 泌尿器科全般
高橋 崇志 (Takahashi, Takashi) : 助教 : 泌尿器科全般
星野 佑介 (Hoshino, Yusuke) : 助教 : 泌尿器科全般
齋藤 貴文 (Saito, Takafumi) : 助教 : 泌尿器科全般
五十嵐 大介 (Igarashi, Daisuke) : 助教 : 泌尿器科全般
飯田 正弘 (Iida, Masahiro) : 実験助手

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

医学部学生が履修すべき泌尿器科学の基礎を教える。医師国家試験合格を念頭に指導する。

2-2. 教育実績 (担当者)

系統講義 : 臨床に沿った講義を行う。(朝倉、篠島、中平)

BSL : 期間は1週間で、担当医師が指導する。病棟回診で患者の訴えを聴取し問題を提起する。担当患者の状態をカルテから収集し、検査内容や診断に至る手順を修得する。手術や検査を見学し、臨床の現場を経験する。担当患者についてレポートを作成する。(朝倉、篠島、中平、寺西)

実習では手術見学が中心である。担当症例を割り当て、内容の充実に努めている。大学病院の特質上、良性疾患の占める割合が比較的多いが、泌尿器科領域の悪性腫瘍もカバーするようにクルズスを行っている。

高齢化社会に伴い内視鏡手術や低侵襲手術が今後も普及する傾向にある。臨床全般の標準的な内容に加え、新しい知見も適時教育できるように努める必要がある。後継者の育成につながるように、熱意をもって学生教育の現場で臨床の魅力を伝えるように努力する。近年国家試験の合格が難しくなっており、受験指導を徹底する。

2-3. 達成度評価

医療面接など若干不足がちな実習もあるが、ほぼ目的は達成していると思われる。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育については、国家試験に対応できる能力を養うといくことを第一目標にし、分かりやすい講義・BSLをめざした。卒後教育については前期研修医・後期研修医ともに、検査・手術など中心に多くの経験をつませ、すぐにでも実戦に通用する医師教育をめざす。ほぼ完遂できたと考える。また、多くの学会(国内・国外)にも積極的に参加させ、発表の機会を設けた。次年度計画も、本年同様な方向で行う。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

臨床に役立つ基礎研究と、新たなevidenceを示す臨床研究を行う。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

A : 結節性硬化症に合併した腎血管脂肪腫(TSC-AML:tuberous sclerosis complex -angiomyolipoma)に対するエベロリムスの有用性

B : 過活動膀胱

過活動膀胱患者に対する磁気療法、ボツリヌス毒素膀胱壁内注入療法の有効性

C : 排尿機能

排尿障害患者に対する尿流動態検査(空気式カテーテルを使用したUDS)

D : 尿路結石症

尿路結石と尿路感染症

3-3. 達成度評価

A: 結節性硬化症に合併した腎血管脂肪腫(TSC-AML:tuberous sclerosis complex -angiomyolipoma)

TSC-AMLに対するエベロリムスの有用性は証明されている。現在、長期投与症例について経過観察中である。エベロリムス投与2年以上の症例では、副作用と医療費の関係で8割以上の症例で減量している。しかし、エベロリムス減量によりAMLが再増大傾向を示す症例があるため、増量している症例もある。今後も経過観察を継続する。最近、エベロリムスにより白血球減少をおこし、中断に至った症例も経験している。

B: 難治性過活動膀胱に対する磁気療法

難治性過活動膀胱女性患者に限り、磁気療法を行っている。副作用のために薬物療法を継続できなかった症例では磁気療法はやや有効性を示しているが、薬物療法無効症例では、磁気療法は無効なことが多い。しかし、有害事象を発

症することはなく、少なくともその点は評価できる。更に、ボツリヌス毒素膀胱内注入療法症例も蓄積している。

C: 排尿機能

下部尿路症状を呈した排尿障害患者に尿流動態検査を行っており、最近では低活動膀胱患者の診断方法について検討している。米国で多用されている空気式カテーテルを使用した UDS にも積極的に取り組み、従来の水式カテーテルを用いた UDS との比較検討を検討した。膀胱内圧測定、内圧尿流測定、尿道内圧測定については、空気式カテーテルは、その特性をいかされ、そのある程度の有用性があることが判明した。

D: 尿路結石症

尿路結石症はしばしば重症尿路感染症を合併することがある。現在、尿路結石患者の尿と尿路結石患者より細菌検出を試みており、その因果関係と臨床症状との関連について検討している。

3-4. 次年度改善計画

将来われわれの研究が臨床応用され、患者に貢献できることを目標にする Clinical Basic Research が中心である。今後さらなる力を進めていかなければならないと考えている。基本的には従来の研究項目を踏襲する。現在の問題は研究スピードが遅いことであり、それを打開するために、スタッフの責任分担を明瞭にして研究が進むように努力する。来年度はボツリヌス毒素膀胱内注入療法の有効性を検討する。

多くの研究がまだ継続中でありその成果を適宜学会にて発表している。しかし、論文作成までに至っていない状況にあるので、今後は作成できるレベルまでもっていきたいと考える。

4. 診療

一般的な泌尿器科疾患を扱う通常外来に加え専門外来（排尿機能外来、前立腺精査外来、女性ヘルスセンター）を開いており、埼玉西部地区における泌尿器科拠点病院として、地域医療へ貢献している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無 朝倉：排尿機能学会評議委員

International Journal of Urology

LUTS

矢内原：International Journal of Urology

Internal Medicine

日本泌尿器科学会雑誌査読委員

篠島：排尿機能学会評議委員

International Journal of Urology

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務 該当なし。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Masuda T, Tanaka N, Takamatsu K, Hakozaki K, Takahashi R, Anno T, Kufukihara R, Shoji K, Mikami S, Shinojima T, Kakimi K, Tsunoda T, Aimon E, Nishihara H, Mizuno R, Oya M: Unique characteristics of tertiary lymphoid structures in kidney clear cell carcinoma: prognostic outcome and comparison with bladder cancer. J Immunother Cancer, 10(3): e003883, 2022
- ② Sanjo T, Tanaka N, Shinojima T, Yasumizu Y, Takeda T, Matsumoto K, Morita S, Kosaka T, Mizuno R, Asanuma H, Oya M: Endoscopic vaporization of benign prostatic hyperplasia using a contact 980 nm diode laser under antithrombotic therapy: A prospective survey. Asian J Endosc Surg, 15(3):585-590, 2022
- ③ 朝倉 博孝, 篠島 利明: 尿失禁に対する神経変調療法。泌尿器科 16(3): 313-318, 2022
- ④ 峰崎 敦大, 篠島 利明, 星野 佑介, 梅澤 佑太, 寺西 悠, 中平 洋子, 矢内原 仁, 朝倉 博孝: 特異な画像所見を呈した精嚢膿瘍の1例: 第87回日本泌尿器科学会東部総会 (2022.10, 軽井沢)
- ⑤ 朝倉 博孝, 篠島 利明: Functional Urology と Placebo/Nocebo について プラセボ効果とは? 排尿蓄尿障害の薬物療法におけるプラセボ効果: 第75回日本自律神経学会総会 (2022.10, 埼玉)
- ⑥ 篠島 利明, 小堀 紀英, 寺西 悠, 朝倉 博孝: 夜間多尿患者における就寝後夜間第一尿浸透圧とデスマプレッションの治療効果の関連: 第29回日本排尿機能学会 (2022.9, 札幌)
- ⑦ 村田 康彰, 篠島 利明, 中平 洋子, 峰崎 敦大, 星野 佑介, 梅澤 佑太, 寺西 悠, 矢内原 仁, 朝倉 博孝: 神経内分泌化を伴う尿道再発をきたした女性膀胱癌の1例: 第24回日本女性骨盤底医学会 (2022.7, 埼玉)
- ⑧ 林 泰樹, 朝倉 博孝, 星野 佑介, 峰岸 淳大, 寺西 悠, 篠島 利明: 過去5年間のTVT手術の治療成績: 第24回日本女性骨盤底医学会 (2022.7, 埼玉)
- ⑨ 梅澤 佑太, 朝倉 博孝, 峰岸 敦大, 星野 佑介, 寺西 悠, 篠島 利明: 尿流動態検査による女性排尿筋低活動: 第24回日本女性骨盤底医学会 (2022.7, 埼玉)
- ⑩ 横山 陽一, 寺西 悠, 山田 祥岳, 山田 稔, 田中 伸之, 篠島 利明, 朝倉 博孝, 大家 基嗣, 陣崎 雅弘: 全身撮影可能な立位CTを用いた骨盤臓器脱評価の初期経験: 第24回日本女性骨盤底医学会 (2022.7, 埼玉)

【総数: 論文 4 件、学会発表 9 件、講演 2 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第24回日本女性骨盤底医学会（2022年7月2-3日、埼玉）

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育においては目標レベルに達していると思われる。次年度は、講義担当者の適正配置と、BSL 実習における教育システムの改善により、より高い成果を上げられるように努力する必要がある。より多くの医学生が泌尿器科への興味を高めるよう、熱意をもって泌尿器科学の魅力を学生に教育していきたい。研究において、限られた泌尿器科スタッフ数に比して臨床業務が多く、研究を追求する時間が不足しがちである。次年度も努力が必要である。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

臨床において、外来、入院における患者数、手術症例数ともほぼ目標を達成できたものと考えている。西埼玉地区地域医療への貢献を今後も継続する。次年度は、低侵襲手術の導入や新しい治療法にも積極的に取り組むことが必要である。「さらなる人員の確保」、ここ数年入局者が無い事より、臨床・教育・研究に支障をきたしている。学生あるいは研修医により魅力的に見えるように、研究・教育など熱意が伝わるように努力したい。また、研究については、臨床研究だけでなく、基礎研究にもコミットできるように努力する。

1. 23) 眼科

1. 構成員

篠田 啓 (SHINODA, Kei) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 代表指導教員(大学院) : 網膜硝子体疾患、視覚生理学 : 博士
堀江公仁子 (HORIE, Kuniko) : 教授 : ゲノム医学研究センター : 博士
蒔田 潤 (MAKITA, Jun) : 准教授 : 診療副部長 : 教育主任 : 網膜硝子体疾患、ロービジョンケア : 博士
渋谷雅之 (SHIBUYA, Masayuki) : 講師 : 網膜硝子体疾患 : 博士
石川 聖 (ISHIKAWA, Sho) : 講師 : 研修担当医長 : 涙道、涙液、ドライアイ、前眼部疾患 : 博士
吉川祐司 (YOSHIKAWA, Yuji) : 講師 : 黄斑変性 : 博士
勝本武志 (KATSUMOTO, Takeshi) : 助教 : 網膜硝子体疾患、斜視・弱視
榮木 悠 (SAKAKI, Yuu) : 助教
佐々木貴優 (SASAKI, Takanori) : 助教
石井宏和 (ISHII, Hirokazu) : 助教 : 博士
菊地俊介 (KIKUCHI, Shunsuke) : 助教
宮坂洋輔 (MIYASAKA, Yousuke) : 助教
伊波 航 (INAMI, Wataru) : 助教
西山友理 (NISHIYAMA, Yuri) : 助教
丸山貴史 (MARUYAMA, Takafumi) : 助教
井川祐郎 (IGAWA, Yuro) : 助教
高野俊一郎 (TAKANO, Shunichiro) : 助教
古味優季 (KOMI, Yuki) : 助教
千野 南 (CHINO, Minami) : 助教
橋本 真歩 (HASHIMOTO, Miho) : 助教
横谷 駿 (YOKOTANI, Shun) : 助教
成田 康仁 (NARITA, Yasuhito) : 助教
石川 宗元 (ISHIKAWA, Munemoto) : 助教
坂田 公毅 (SAKATA, Kouki) : 助教
林 恒輝 (HAYASHI, Kouki) : 助教
山口彩織 (YAMAGUCHI, Saori) : 助教
小島孚允 (KOJIMA, Takayoshi) : 客員教授 : 眼腫瘍 : 博士
石川 弘 (ISHIKAWA, Hiroshi) : 客員教授 : 神経眼科 : 博士
米谷 新 (YONEYA, Shin) : 客員教授 : 博士
新家 眞 (ARAIE, Makoto) : 客員教授 : 博士
村山耕一郎 (MURAYAMA Koichiro) : 客員教授 : 緑内障 : 博士
松本惣一 (MATSUMOTO, Souichi) : 客員教授 : 網膜硝子体疾患、屈折矯正、視覚生理学、眼瞼疾患 : 博士
木村 至 (KIMURA, Itaru) : 客員教授 : 緑内障、眼循環 : 博士
庄司拓平 (SHOJI, Takuhei) : 教授客員教授 : 指導教員(大学院) : 研究主任 : 緑内障、網膜硝子体疾患 : 博士
権澤 昌 (KABASAWA, Sho) : 客員准教授 : 網膜硝子体疾患、眼科疾患全般
野寄 忍 (NOYORI, Shinobu) : 非常勤講師 : 眼科疾患全般
大木隆太郎 (OOKI, Ryutaro) : 非常勤講師 : 糖尿病網膜症、ぶどう膜炎、涙道疾患 : 博士
眞鍋洋一 (MANABE, Youichi) : 非常勤講師 : 屈折矯正、白内障 : 博士
鮎澤伸介 (EBISAWA, Nobusuke) : 非常勤講師 : 網膜硝子体疾患、網脈絡膜微小循環
土橋尊志 (TSUCHIHASHI, Takashi) : 非常勤講師 : 加齢黄斑変性 : 博士
今井大介 (IMAI, Daisuke) : 非常勤講師 : 網膜硝子体疾患 : 博士
小島照夫 (KOJIMA, Teruo) : 非常勤講師
福本光樹 (FUKUMOTO, Teruki) : 非常勤講師 : 特殊コンタクトレンズ
上山教弘 (UEYAMA, Kazuhiro) : 非常勤講師 : 斜視弱視 : 博士
奥田晴美 (OKUDA, Harumi) : 非常勤医師 : 博士
袖山丈男 (SODEYAMA, Takeo) : 非常勤医師 : 眼科疾患全般

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

一般的な目標：臨床実習に際して感覚器疾患の診察に参加するために、眼科の主要な疾患の病態、症候、診断に関する基礎的な知識を習得する。

具体的な目標：

- (1) 眼器官局所解剖が具体的にイメージすることができ、生理機能について説明ができる。
- (2) 眼感覚器における主要な自覚・他覚的徴候を挙げ、その病態を説明できる。
- (3) 主要疾患の原因、病態別の分類が列挙できる
- (4) 主要疾患の病態生理を理解し、説明できる。
- (5) 主要疾患の診断の手順、検査法の理解と診断における必要性を理解し、説明できる。
- (6) 主要な疾患の治療方針を概説できる。
- (7) 主要な手術について概説できる。
- (8) 眼科疾患で使用する主たる薬剤について、作用、副作用について説明できる

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育

眼科学(感覚器)は4年生、6年生に講義形式の授業。令和4年度は新型コロナウイルス感染症対策のため、対面授業ではなくすべてWEB講義となった。5年生にはCC Step1および共通プログラムとしての講義を担当した。4年生に対しては基礎的必要知識や治療についてだけでなく、最新の治療、検査を講義に取り入れ、眼科学の魅力をわかりやすく講義を行い、幅広い知識を習得出来るように努めた。6年生講義では、国家試験対策として画像をより有効に利用し、眼底写真や蛍光眼底造影、手術ビデオを利用して判りやすく講義を行った。

5年生のCC Step1では、各自入院して手術を受ける患者さんを担当し、問診から手術前の検査とその持つ意味について、指導医から説明を受け、実際の手術場にも立会い、眼科手術について見学した。また白内障手術の体験として豚眼を使用した実習を行った。CC Step1では自己評価目標に到達したか自己評価を行なうと同時に、レポート提出が義務づけられ、指導医との試問が行われた。

(4年生講義内容)

篠田 視機能(視力、屈折と調節、視野、色覚)
 蒔田 眼科医療の進歩
 庄司 緑内障・視神経疾患
 渋谷 網膜疾患(2)
 勝本 眼の発生とその異常・外眼部疾患
 石川 角膜疾患
 石川 眼科薬理学
 柴木 網膜疾患(1)
 村山 視機能の異常・視神経障害
 大木 ぶどう膜疾患
 土橋 眼の解剖と機能
 小島(照) 全身疾患と眼
 眞鍋 水晶体と白内障
 小幡 眼窩疾患・眼部の腫瘍
 山崎 眼外傷・救急疾患

(5年生)

眼科臨床実習

	午前	午後	
月	9:30～ オリエンテーション 渋谷 手術患振り分け、レポート説明 10:00～自分の眼について 本館9F病棟・月曜病棟班	13:30～蛍光眼底造影(クルズス) 眼底疾患一般(クルズス) 本部棟6F医局・野寄	
火	9:30～緑内障(クルズス) 本部棟6F医局・奥田	13:00～手術見学・白内障助手、 担当患者診察・ムンテラ 本館9階アイセンター手術室、診察室・各担当	
水	9:30～診断学・担当患者・疾患の説明本 部棟6F医局・大木、	13:00～担当患者の疾患について 自習(レポート準備)	16:00～屈折・視野検査説明 東館2F外来 視能訓練士

木	手術見学・助手（実習） 9：00～本館 9F アイセンター手術室・各 担当医師の指導を受ける	15：30～ ウェットラボ 第二研究室 成田
金	10：00～総回診見学 本館 9F 病棟・篠田	15：30～試問・総括 蒔田 本部棟 6F 医局

（6年生講義内容）

蒔田 眼底疾患
庄司 緑内障・視神経疾患
石川 白内障・前眼部疾患
鮎澤 眼外傷・ぶどう膜疾患

卒後教育

5年間の眼科研修を行う事により、眼科医としての基礎的臨床力を身につけ、日本眼科学会専門医制度の眼科専門医試験受験資格を得ることが可能である。当科は日本眼科学会専門医制度による眼科研修プログラム施行施設（認定第1032号）として承認されており、本プログラムにより、眼科臨床医として基礎をしっかりと身につけることができるとともに、キャリア形成の方向性を見だし、それに応じて大学院、海外留学、国内留学など幅広い選択肢の中から選んで自分に合ったキャリア形成を開始することができる。基礎として、幅広い症例を経験していただくことで診断力と治療と周術期管理を身につけられるようにした。特にプログラム初年度から上級医の指導の下、白内障手術の執刀完投を目指した。

大学院教育

<カリキュラム>

シニアレジデントカリキュラムに準じ、最初の2年間は、まず一般眼科医の基礎として必要な、解剖、生理、病理などについて講義を受ける。同時に臨床医として外来、病棟で診療にあたり、眼科の内科的側面、外科的側面について学ぶ。特に手術学理論を学ぶとともに、あらゆる眼科手術の介助を実践して手術手技を学ぶ。1年目より白内障手術の模擬手術トレーニングを経て、実際の白内障手術の執刀を開始し完投を目指す。

後半の2年間では、前半の2年間に基に、指導教官と相談の上、興味のある点を研究テーマとして構想する。研究グループに属して行われ、実験およびデータ採取、整理と管理、論文のまとめ方など一貫した丁寧な指導をする。

2-3. 達成度評価

卒前教育

4年生、5年生、6年生に対する講義は対面ではなくweb講義となったが、全て予定どおり実施された。

5・6年生のCC Step1、CC Step2では新型コロナウイルス感染症対策により、実習期間が短縮となったものも一部あったが、予定された内容についてはほぼ習熟できたと考える。

卒後教育、大学院教育

従来のシステムより数段、臨床での経験値を積むことができた。また、大学院としてのテーマにそって早くもデータ採取、整理、学会発表ができた。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育

以前に増して講義内容より、多くの画像や具体的な症例を提示することで、学生に理解しやすく興味を持てるように講義することができた。眼疾患では救急での対応や全身疾患に伴う眼疾患については、その重要性和眼科疾患の理解が全身疾患の窓口になるように説明した。指導を受けたレジデント医師による、実際の臨床、救急外来の場面でもその結果が反映できていると実感できる機会があった。

次年度の教育の計画は本年度のプログラムを基本にして構成する。CC Step1期間では十分に眼科学の習得することは難しいが、検査の意味や結果の解釈ができるように指導したい。また、学生の希望するクルズスをより多くとりいれながら、実際の臨床をより多く触れる機会として豚眼を用いた白内障手術実習は学生に好評だった。

卒後教育

指導医の増加や専門分野が以前より多岐にわたるようになったことから、幅広い眼科知識に触れるようになったが、まだ十分な教育プログラムとはいえないため十分習熟できるように専門外来を検討していきたい。

大学院教育

医局員に大学院生が複数在籍しているため、サポートしながら研究や学会発表にも繋げていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

目標は、教室の研究テーマに沿って、個々それぞれのグループで着実に成果をあげることとした。論文や発表の数を競うのではなく、将来的な眼科医療の発展に寄与することを目的とした研究計画を立て、その上で、きちんとしたデータを積み重ねることを目標とした。その具体案は、以下の研究内容の項に記載する。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

- (1) 術中黄斑機能評価システムの確立 研究代表者 篠田 啓
皮膚電極による ERG 記録法を用いて手術直後や手術前後における網膜機能評価の可能性の探索を行った。細菌性ないし内因性眼内炎の治療前機能評価を継続中である。これまでは ERG は主に網膜疾患に対する網膜機能評価が行われてきたが、今回、皮膚電極を用いた記録方法を用いた緑内障の眼圧下降手術前後における神経節細胞機能評価を行い新知見を得た。
- (2) 日常視を反映した新規緑内障機能評価指標の開発 研究代表者 庄司拓平
両眼開放下で被験者がどちらの眼に視標が提示されているか自覚することなく検査を行う両眼ランダム検査を用いて、従来の単眼遮蔽での視野感度と比較した。視力と中心視野閾値に基づいて両眼をそれぞれ better eye、worse eye に割り当て、単眼毎視野検査と両眼ランダム単眼視野検査によって得られた中心視野感度の結果を比較した。その結果、両眼ランダム単眼視野検査では単眼毎視野検査と比べて、better eye の中心感度は有意に高かった反面、worse eye の中心感度は有意に低かった。単眼毎視野検査は依然として臨床現場で緑内障の検出や進行評価に最も有用な手段であるが、両眼ランダム単眼視野検査は、患者の日常生活に近い両眼視での Quality of Vision (QOV) を評価にする上で今後有用な臨床ツールであることが示唆された。
- (3) 涙道閉塞眼における眼表面涙液組成変化の検討による閉塞原因の解明 研究代表者 石川聖
液中のサイトカインを測定するために、サンプル抽出のための簡便かつ量も確保できる最もよい測定方法の模索を去年確立し（測定に要する時間が5秒と簡便なストリップメナスコメトリー紙を使用し、100g(gravity)の条件で1分間遠心分離をかけ、液体を抽出する方法）、この方法を用いて涙道閉塞患者の涙液中サイトカインを抽出し解析を行ったところ、涙道閉塞患者は正常者と比較し、涙液中の IL-6 量が正常眼 0.5 ± 0.4 pg/ml に対し、涙道閉塞眼では 1.58 ± 1.78 pg/ml と有意に上昇していることがわかった。

3-3. 達成度評価

- (1) 近年急増している硝子体注射手技の直前直後の iFFERG を記録し、同時に記録した眼圧変化との関連を探索したところ、注射直後に眼圧が急激に上昇し、ERG は著しく低下する。そして前房水を吸引すると眼圧が低下して ERG は改善することが分かったが、この順番を変えて、先に前房水を吸引して眼圧を下げた場合 ERG は大きな低下を呈さず、次に注射して眼圧が上昇した際に ERG を著しい低下がみられないことが分かった。
- (2) 片眼遮蔽状態と両眼開放状態における感度の違いについて2本の論文を査読付きの国際雑誌で発表した。また、眼位移動プログラムの作成もおおむね完了し、1本の論文を査読付きの国際雑誌に受理された。しかし、疾患眼に対する臨床研究においては、症例募集が当初の想定より遅れが生じた。
- (3) サンプル数を増やしこの結果が妥当であるか、また術後も IL-6 量が高い症例に対しては、術後の予後（再開塞）との相関があるのかを確認している。

3-4. 次年度改善計画

それぞれのテーマが既に方法論が確立しており、データを蓄積し、解析する作業に大きな困難はないものと考えられる。次年度も各研究テーマを粛々と進める。

- (1) 手術手技による網膜の温度変化が FFERG, FMERG などと示される網膜機能に影響している可能性が考えられ、これは今後の課題と考えられた。
- (2) 次年(R5年)度は蓄積された症例を解析し、解析結果を査読付き国際学術雑誌に投稿予定である
- (3) 新型コロナウイルス感染拡大の影響で、涙液のサンプル数の確保がやや遅れていたが、手術希望患者が戻ってきており、あと1回測定すれば解析に必要な検査数が満たせるところまでできている。最後の解析が終わり次第結果を論文作成していく。

4. 診療

当教室では地域医療の中核としての役割を担うべく、難治性あるいは重症の眼疾患症例に対して、最先端技術を駆使した診療を数多く行った。重症症例が多いことを反映し、本年度も硝子体手術や緊急手術の占める割合が高かった。このような状況の中で、十分なインフォームドコンセントとしっかりとした理論に基づいた診療を行なうことによって、最終的には患者様に満足度の高い医療を提供することを診療の目標とした。今後は個々の診療内容の充実に加え、地域の医療従事者との適切な医療連携をはかり、より体系的な地域医療社会を確立することが必要であると考えている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

- 日本眼科学会評議員（篠田 啓）
- 日本眼科学会専門医認定試験試問委員（篠田 啓）
- 日本眼科学会戦略企画会議第一委員会「人材育成・専門医制度」委員（篠田 啓）
- 日本視野画像学会理事（篠田 啓）
- 日本視野画像学会評議員（篠田 啓）
- 日本臨床視覚電気生理学会理事（篠田 啓）
- 日本臨床視覚電気生理学会プログラム委員（篠田 啓）
- 埼玉県眼科手術談話会世話人（篠田 啓）
- 埼玉県眼科医会学術担当理事（篠田 啓）

(公財) 埼玉県腎・アイバンク協会理事 (篠田 啓)

埼玉県眼科医会理事 (蒔田潤)

日本ロービジョン学会学術委員 (蒔田潤)

日本レーザー医学会評議員 (庄司拓平)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

(編集委員)

日本眼科学会編集委員 (篠田 啓)

(査読)

日本眼科学会雑誌

Seminars In Ophthalmology (篠田 啓)

Japanese Journal of Ophthalmology (篠田 啓)

Documenta Ophthalmologica (篠田 啓)

Acta Ophthalmologica (篠田 啓)

Graefe's Archive for Clinical and Experimental Ophthalmology (篠田 啓)

American Journal of Ophthalmology (篠田 啓)

Retina (篠田 啓)

Investigative Ophthalmology & Visual Science (篠田 啓)

Clinical Ophthalmology (篠田 啓)

Case Reports in Ophthalmology (篠田 啓)

British Journal of Ophthalmology (篠田 啓)

Ophthalmic Research (篠田 啓)

Journal of Clinical Medicine (篠田 啓)

Translational Vision Science & Technology (篠田 啓)

International Ophthalmology (篠田 啓)

Journal of Ophthalmology (篠田 啓)

American Journal of Ophthalmology Case Reports (篠田 啓)

International Medical Case Reports Journal (篠田 啓)

Restorative Neurology and Neuroscience (篠田 啓)

Ophthalmology Retina (篠田 啓)

European Journal of Ophthalmology (篠田 啓)

Pharmaceuticals (篠田 啓)

Arquivos Brasileiros de Oftalmologia (篠田 啓)

Investigative Ophthalmology & Visual Science (庄司拓平)

Journal of Cataract & Refractive Surgery (庄司拓平)

British Journal of Ophthalmology (庄司拓平)

Translational Vision Science & Technology (庄司拓平)

Optometry and Vision Science (庄司拓平)

Japanese Journal of Ophthalmology (庄司拓平)

Laboratory Investigation (庄司拓平)

Journal of Ophthalmology (庄司拓平)

Case Reports in Ophthalmology (庄司拓平)

Plos One (庄司拓平)

Clinical & Experimental Ophthalmology (庄司拓平)

American Journal of Ophthalmology (庄司拓平)

Scientific Reports (庄司拓平)

Journal of the American Heart Association (庄司拓平)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

さいたま医事関係事件鑑定人 (篠田 啓)

医療事故調査制度における院内医療事故調査への院外専門委員 (篠田 啓)

独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員 (篠田 啓)

緑内障診療ガイドライン改訂委員 (庄司拓平)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Yuro Igawa, Takuhei Shoji, Robert Weinreb, Yozo Miyake, Yuji Yoshikawa, Shunichiro Takano, Kei Shinoda : Early changes in photopic negative response in eyes with glaucoma with and without choroidal detachment after filtration surgery. Br J Ophthalmol 2022;0:1-8. doi:10.1136/bjophthalmol-2021-320730
- ② Wataru Inami, Masayuki Shibuya, Tomoyuki Kumagai, Jun Makita, Kei Shinoda : A Case of Intraocular Lymphoma Diagnosed by Subretinal Fluid Biopsy. International Medical Case Reports Journal 2022;15 111-115
- ③ Kei Shinoda, Soiti C. Matsumoto, Kazuma Yagura, Gaku Terauchi, Takuhei Shoji, Yuji Yoshikawa, Yuro Igawa, Atsushi Mizota and Yozo Miyake : Intraocular Temperature Distribution in Eyes Undergoing Different

Types of Surgical Procedures during Vitreous Surgery. J. Clin. Med. 2022, 11, 2053.

- ④ Yuji Yoshikawa, Takuhei Shoji, Junji Kanno, Hirokazu Ishii, Minami Chino, Yuro Igawa, Kei Shinoda, and Yoza Miyake : Relationship Between Deep Retinal Macular Vessel Density and Bipolar Cell Function in Glaucomatous Eyes. TVST | October 2022 | Vol. 11 | No. 10 | Article 4 |
- ⑤ Yuji Yoshikawa, Takashi Koto, Tomoka Ishida, Tomoko Uehara, Mamiko Yamada, Kenjiro Kosaki and Makoto Inoue : Rhegmatogenous Retinal Detachment in Musculocontractural Ehlers-Danlos Syndrome Caused by Biallelic Loss-of-Function Variants of Gene for Dermatan Sulfate Epimerase. J. Clin. Med. 2023, 12, 1728.
- ⑥ Takanori Sasaki, Takuhei Shoji, Junji Kanno, Hirokazu Ishii, Yuji Yoshikawa, Hisashi Ibuki and Kei Shinoda : Automatic Determination of the Center of Macular Hole Using Optical Coherence Tomography En Face Images. J. Clin. Med. 2022, 11, 3167
- ⑦ Sho Ishikawa, Minami Chino, Kei Shinoda : A rigid gas permeable contact lens discovered embedded in the upper eyelid 7 years after trauma: A case report. International Journal of Surgery Case Reports 96 (2022) 107316
- ⑧ 伊波 航, 吉川 祐司, 篠田 啓 : ゲージシステムを用いた硝子体手術後に生じた毛様体剥離の 1 例 日本眼科学会雑誌 126 巻 6 号 (令和 4 年 6 月 10 日)
- ⑨ Jun Makita, Yuji Yoshikawa, Tomoyuki Kumagai, Yuro Igawa, Shunichiro Takano, Takeshi Katsumoto, Takuhei Shoji, Masayuki Shibuya, Kei Shinoda : Electrorretinographic evaluation with skin electrodes in eyes with intraocular lymphoma 59th ISCEV Symposium Liverpool 2022. 3~6 リバプール/イギリス
- ⑩ Saori Yamaguchi, Minami Chino, Jun Makita, Yuro Igawa, Satomi Konno, Takashi Matsushima, Yuji Yoshikawa, Yu Sakaki, Takeshi Katsumoto, Masayuki Shibuya, Kei Shinoda, Soiti Matsumoto : Investigation of the effect of posture on the electrorretinogram in half-gas-filled eyes 第 69 回日本臨床視覚電気生理学学会・60th ISCEV 2023. 13~18 国立京都国際会館

【総数：論文 10 件、学会発表 35 件（国内学会 26 件、国際学会 9 件）、講演 30 件】

6-2. 獲得研究費

- ・大塚製薬奨学寄付金
- ・科学研究費
「多局所瞳孔視野計の開発」篠田 啓
- ・埼玉医大若手研究者育成研究費
「光干渉断層計を用いた黄斑部網膜血流に対するリパズジル塩酸塩点眼薬の影響の検討」石井宏和
- ・埼玉医大若手研究者育成研究費
「皮膚電極網膜電位計を用いた緑内障の網膜神経節細胞機能と網膜血流の関係の評価」井川佑郎
- ・埼玉医大若手研究者育成研究費
「中心性漿液性脈絡網膜症患者における PDT 療法前後での網膜下液と視機能の関係性について」橋本真歩
- ・参天製薬 奨学寄付金
「白内障手術時の眼内レンズ度数決定における新しい計算方法の開発」

6-3. 受賞

- ・第 76 回日本臨床眼科学会学術展示優秀賞
「全エクソーム解析で診断された常染色体潜性ベストロフィノパチーの女兒」佐々木貴優
- ・ベストティーチャー賞 石川 聖

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- 第 86 回埼玉眼科講習会開催 2022 年 8 月 (web)
- 第 87 回埼玉眼科講習会開催 2023 年 3 月 (web)
- 第 16 回若葉の会開催 2022 年 6 月 丸木記念館 (ハイブリッド)
- 第 17 回若葉の会開催 2022 年 9 月 丸木記念館 (ハイブリッド)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

※学部

教育、研究、診療のいずれにおいても概ね目標に達した。昨年からの継続で、メディカルレチナ、角膜、緑内障、腫瘍、小児眼科、神経眼科、涙道疾患の診療、ロービジョンケアはより専門性の高いものになった。専門班ごとの研究、教育も充実していた。

※大学院

令和 4 年度は大学院生が学位を取得するための準備期間として、診療にも十分携わりながら、研究面でも OCT アンギオグラフィーおよびヘッドマウント型視野計を用いた画像および機能解析等をすすめ、データ収集および分析が順調に行われている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

日本で 2 施設目、世界で 3 例目の再生医療を利用した角膜輪部移植を成功させ、さらに継続的に行っている。日帰り手術システムは安定して継続している。他にも様々な症例の手術が多く、今後も術前カンファレンス、術後カンファレンスを充実させるなど一層の臨床教育の充実化を目指している。

複数の大学院生が報告会での発表を控えており、それに向けてデータの解析とまとめの段階に入る。定期的な研究ミーティングを継続し新たな研究テーマを模索していく。

- 1 黄斑部イメージング技術を利用した自動解析プログラム
- 2 上記の1を利用した各種疾患の黄斑部微細構造の解析
- 3 ヘッドマウント式視野計による両眼同時視野計測の臨床応用
- 4 同ヘッドマウント式視野計による新しいコントラスト視力感度の臨床的意義の検討
- 5 ポータブル型網膜電図（ERG）記録装置を用いた簡便迅速な周術期の網膜機能評価法の確立
- 6 視野検査結果の新しい定量評価法の開発
- 7 術前温罨法による眼表面環境の安定化の検討

1. 24) 耳鼻咽喉科 (耳鼻咽喉科・神経耳科)

1. 構成員

池園 哲郎 (IKEZONO, Tetsuo) : 教授 : 教育員 : 診療部長 : 副教育主任 : 指導教員 (大学院) : 中耳炎, 人工内耳, 外リンパ瘻, 遺伝カウンセリング : 博士

加瀬 康弘 (KASE, Yasuhiro) : 教授 : 教育員 : 研究主任 : 副診療科長 : 指導教員 (大学院) : 頭頸部外科学, 鼻腔生理学, 鼻副鼻腔手術 : 博士

中嶋 正人 (NAKASHIMA, Masato) : 講師 : 教育員 : 専門医員 : 研究員 : 大学院教員 (大学院) : 中耳手術 : 博士

松田 帆 (MATSUDA, Han) : 講師 : 教育員 : 専門医員 : 研究員

細川 悠 (HOSOKAWA, Yu) : 講師 : 教育員 : 専門医員 : 研究員 : 博士

関根 達朗 (SEKINE, Taturou) : 助教 : 教育員 : 専門医員 : 研究員

丹沢 泰彦 (TANZAWA, Yasuhiko) : 助教 : 教育員 : 専門医員 : 研究員

吉村 美歩 (YOSHIMURA, Miho) : 助教 : 教育員 : 専門医員 : 研究員

北原 智康 (KITAHARA, Tomoyasu) : 助教 : 教育員 : 専門医員 : 研究員

澤田 政史 (SAWADA, Masafumi) : 助教 : 教育員 : 専門医員 : 研究員

阿部 陽夏 (ABE, Haruka) : 助教 : 教育員 : 専門医員 : 研究員

辻 翔平 (TSUJI, Shohei) : 助教 : 教育員 : 専門医員 : 研究員

客員教授

善浪 弘善 (YOSHINAMI, Hiroyoshi) : 耳鼻咽喉科手術 : 博士

福島 邦博 (FUKUSHIMA, Kunihiro) : 耳鼻咽喉科手術 : 博士

田山 二郎 (TAYAMA, Niro) : 耳鼻咽喉科手術 : 博士

伊藤 彰紀 (ITO, Akinori) : 神経耳科学 : 博士

上條 篤 (KAMIJYO, Atsushi) : アレルギー性鼻炎, 慢性副鼻腔炎 : 博士

非常勤講師

杉崎一樹 (SUGIZAKI, Kazuki) : 一般耳鼻咽喉科 : 博士

三島陽人 (MISHIMA, Haruto) : 博士

新藤 晋 (SHINDOU, Susumu) : 講師 : 教育員 : 専門医員 : 研究員, 大学院教員 (大学院) : 内耳疾患, めまい : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

耳鼻咽喉科、頭頸部外科の専門教育を行い、将来の医師としての十分な臨床的基礎知識ならびに深い洞察力を身につけることを達成目標とする。

2-2. 教育実績 (担当者)

埼玉医科大学耳鼻咽喉科学教室、埼玉医科大学国際医療センターおよび埼玉医科大学総合医療センターの教授、准教授、講師陣が、各自の専門分野を分担して、教育にあたる。2年生から4年生の系統講義は、感覚器、呼吸器、免疫、救急、症候鑑別のユニットに分かれ、27時限を使用して、耳科学、神経耳科学、鼻科学、口腔咽頭科学、喉頭科学、音声言語医学、頭頸部外科学の各分野に関する講義を行う。まずは、基本的な解剖、生理、疾患の診断、治療を十分に理解することに重点がおかれる。これに若干の国内外の高度先進医療についての紹介を加え、将来の医師としての向上心を刺激するように心がけている。また、特に4年生については、平行して耳鼻咽喉科領域の診察の基本実習が行われる。5年生の教育は、積極的な臨床参加型のBSL実技実習を主体とする。実習生は、各自小グループごとに、埼玉医科大学病院(耳鼻咽喉科および神経耳科部門)、または国際医療センターにおいて、臨床実地の現場を訪れ、指導医のもとでチーム医療の一員として診療に立会い、常に厳しい小口頭試験により、学生は自己到達度、教員は教育効果を互いに細かく評価しあいながら、実習が行われる。外来、病棟、手術室において、耳鼻咽喉科領域の診断、治療のみならず、インフォームドコンセントなど患者、家族との接遇の実際についても学ぶ。分野ごとの節目のレビュークルズ、担当症例のレポート作成と最終面接によるその内容の合同検討会では、基本的な耳鼻咽喉科の診療過程が理解できたかを評価検討する。6年生には、11時限を使用して、3年生から4年生の学習内容を復習しながら、さらに総合強化し、同時に医師国家試験に準じた問題の演習とその解説を行う。以上の学生教育の評価は大学の共通評価基準による。教育方法の改善と自己評価は学生教育への積極的参加を促す方策の検討、一貫教育における当科の役割の評価による。

卒後教育については、診療の項目とも一部重複するが、救急医療をはじめ、当科が扱う症例は極めて豊富であり、臨床実地医家としての臨床研修施設としても恵まれた環境にある。チーム医療の一員として、研鑽を重ねながら、6年目には日本耳鼻咽喉科学会認定専門医の取得を目指す。同時に、こうした成果は、積極的に国内外の学会に報告を行いながら、基礎的あるいは臨床的な研究課題を選んで、学位取得を目指す。

大学院教育については外リンパ瘻の新しい診断法の確立と普及に向けた研究、中耳炎手術の新しい術式の開発、新

しいめまいの検査法の開発、睡眠時無呼吸症と鼻呼吸の生理学的関係の解明について研究を推進している。

2-3. 達成度評価

令和4年度の講義では、大部分がITを駆使して講義がなされたことにより、学生の評判は良好で、授業中の態度の改善や試験成績の向上を認めた。5年次のBSLでは教授を中心としたスタッフ全員で、密着した指導を行い、学生に臨床実習への意欲的な取り組みを引き出した。

2-4. 次年度改善計画

以上の如く、教育には十分努力し、目標を達成したと自己評価している。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本学学生、卒業生のほとんどは実地臨床家を希望していることと、鼻科学については伝統的な背景があるので、鼻科学を題材とした、臨床と密接に関連したテーマを中心に基礎研究と、当大学病院の特性である豊富な臨床例を題材にした臨床研究を継続している。また近年はめまい、難聴、アレルギーをテーマとした研究にも重点が置かれている。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

音響鼻腔計測法の臨床応用に関する研究、深頸部感染症治療予後の臨床的研究に加え、眼窩壁骨折の術式、予後の研究、従来からのテーマである、頭頸部画像診断、頭頸部の異物症、アレルギー性鼻炎に対する外科治療、急性感染症に対する抗菌薬治療についても継続している。また、アレルギーセンターと協力して、アレルギー性鼻炎と喘息との関連についての研究を開始した。また、耳科学に関して外耳道に対する新しい局所治療法の開発、中耳炎術式の改良の研究に取り組んでいる。内耳の研究では、人工内耳の臨床研究、非症候性遺伝性難聴、症候性遺伝性難聴(アッシュャー症候群)の臨床研究ならびに遺伝子診断に取り組んでいる。また難聴遺伝子とその蛋白産物に関する基礎研究、トランスレーショナルスタディーとして外リンパ瘻診断技術の開発研究も行った。その結果本検査はSRLの受託検査となり全国の病院で検査が可能となった。

3-3. 達成度評価

音響鼻腔計測法による鼻腔生理学の研究では、国際的にも先駆的な役割を担っているが、さらに一般診療への普及を図るべく、鼻腔通気度委員会を通じ、保険診療審査などで必要とされる基礎データの収集解析を行っている。これに関連し、睡眠障害における鼻閉の関連の研究も行って、学会シンポジウムで講演を行っている。

眼窩壁骨折については、手術適応や術式について研究がなされており、その成果は学会の特別講演にて報告している。その他、頭頸部画像診断、頭頸部領域の異物症、アレルギー性鼻炎に対する外科的治療についても継続して臨床研究がなされており、学会、研究会、講演などでその成果を発表している。

耳科学研究では、中耳炎術式の改良の研究は順調にすすみ、症例数も増え、その成果を学会、研究会にて報告して高い評価を得た。外リンパ瘻診断技術の開発研究では、新たに開発したCTP蛋白検査法が外リンパ瘻診断基準に正式に採用され、更に保険収載された。まためまい診療領域においても当教室の研究成果によりvHIT検査も保険収載された。

3-4. 次年度改善計画

鼻腔生理学の分野においては、音響鼻腔測定装置を用いた鼻副鼻腔手術の客観的効果判定、疾患が鼻腔生理に及ぼす影響などを検討し、国内外に先駆け報告しているので、本研究は、教室の代表的な研究課題として、地道に継続され、発展し続けていくと思われる。これらの成果は、鼻科学会鼻腔通気度委員会でも取り上げられている。さらに、耳鼻咽喉科領域の異物症での学位をはじめ、顔面外傷、アレルギー性鼻炎と喘息の関連、深頸部感染症および鼻副鼻腔腫瘍の画像診断に関する研究などが行われている。これらの研究成果は、常に国内外の学会へ積極的に報告が行われていて、次年度もそれを継続することになると思われる。難聴・めまいの生化学的な診断技術(CTP検査)は2016年に診断基準に採用され2018年に診療の手引きが出版された。臨床的に活用するため先進医療新規申請へむけ外リンパ瘻診断技術をひろく臨床的に活用するため先進医療新規申請へむけて準備を進めている。また外リンパ瘻診療ガイドラインの作成にも取り組み、国際的に広めていきたい。

4. 診療

当科の置かれた環境から地域医療への貢献が主眼であり、その目的は達成されている。

当科の診療の主たる特徴は、一般慢性疾患に加え、救急措置を必要とする症例、殊に異物症、鼻出血、深頸部膿瘍などにおける呼吸困難、重篤なる感染症に対する入院治療、気管切開などの手術であり、学生教育、研修医教育、専門医教育にとっても臨床的な環境が充実している。学生教育、卒業後教育、並びに患者へのインフォームドコンセントについては、特に重点をおいて、各種内視鏡装置を充実させ、診療記録の供覧と保管のために、ビデオモニター、ビデオプリンタおよびビデオ記録などを活用している。また、PCを用いた情報処理装置も、臨床研究ならびに学生実習に活用している。新しい治療法としては、鼻腔疾患用レーザー、外来手術用の鼻茸切除機器(パワーシェーバー)、コプレーター装置を導入し、社会的なニーズに応え、日帰り手術なども安全に行なえるようになった。さらにナビゲーションシステムとハイビジョンモードの導入により、鼻、副鼻腔、耳の危険部位への操作、病変の正確な固定が容易になり、内視鏡

や顕微鏡と併せて使用することにより、以前と比較すると手術操作のトレーニングが画期的にやすくなった。
先駆的な役割を果たしている音響鼻腔計測法による鼻腔開存性の客観的評価法は、国内外より高い評価を得ており、質の高い医療の提供に貢献している。中耳炎における鼓膜穿孔閉鎖率はほぼ100%に達し、また真珠腫性中耳炎の治療成績も良好で、特に再手術を要する例は少なく、他専門施設と比較しても優れた手術成績である。顔面外傷、特に眼窩壁骨折における複視の治療成績は90%以上で治癒が達成され、良好な成績を誇る。さらに、深頸部感染症の症例数は全国有数であり、豊富な治療経験を有するのみならず、従来致死率が高いとされる本疾患に対して、救命率はほぼ100%に達している。他の頭頸部領域の外科的治療についても豊富な手術件数があり、県内外より多数例の紹介患者を受けている。耳科学においては新たに人工内耳手術、アプミ骨手術、難聴遺伝子相談、補聴器外来を開始した。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

厚生労働省医薬・生活衛生局医薬品副作用被害審査申立検討会委員

関東信越厚生局保険指導医

社会保険診療報酬支払基金埼玉支部主任審査委員

埼玉県医師会救急医療体制整備委員会委員

埼玉県医学会運営委員

さいたま地方裁判所専門委員

埼玉県耳鼻咽喉科医会副会長

日本耳鼻咽喉科学会埼玉県地方部会顧問

(以上、加瀬康弘)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本耳鼻咽喉科学会幹事

日本耳科学会理事

日本めまい平衡医学会 評議員

Frontiers in Neurology (Guest Editor)

論文査読：日本耳鼻咽喉科学会会報、日本耳科学会誌、日本めまい平衡医学会雑誌、ANL (Auris Nasus Larynx)

(以上、池園哲郎)

日本耳鼻咽喉科学会代議員

日本頭頸部外科学会評議委員

耳鼻咽喉科臨床学会運営委員

論文査読：日本耳鼻咽喉科学会会報、日本鼻科学会誌、耳鼻咽喉科臨床学会誌、頭頸部外科学会誌、日本口腔咽頭学誌、ANL (Auris Nasus Larynx)

(以上、加瀬康弘)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

①Iwasa YI, Nishio SY, Yoshimura H, Sugaya A, Kataoka Y, Maeda Y, Kanda Y, Nagai K, Naito Y, Yamazaki H, Ikezono T, Matsuda H, Nakai M, Tona R, Sakurai Y, Motegi R, Takeda H, Kobayashi M, Kihara C, Ishino T, Morita SY, Iwasaki S, Takahashi M, Furutate S, Oka SI, Kubota T, Arai Y, Kobayashi Y, Kikuchi D, Shintani T, Ogasawara N, Honkura Y, Izumi S, Hyogo M, Ninoyu Y, Suematsu M, Nakayama J, Tsuchihashi N, Okami M, Sakata H, Yoshihashi H, Kobayashi T, Kumakawa K, Yoshida T, Esaki T, Usami SI.

Correction to: Detailed clinical features and genotype-phenotype correlation in an OTOF-related hearing loss cohort in Japan

Hum Genet. 141(3-4):993-995. 2022/4

②Iwasa YI, Nishio SY, Yoshimura H, Sugaya A, Kataoka Y, Maeda Y, Kanda Y, Nagai K, Naito Y, Yamazaki H, Ikezono T, Matsuda H, Nakai M, Tona R, Sakurai Y, Motegi R, Takeda H, Kobayashi M, Kihara C, Ishino T, Morita SY, Iwasaki S, Takahashi M, Furutate S, Oka SI, Kubota T, Arai Y, Kobayashi Y, Kikuchi D, Shintani T, Ogasawara N, Honkura Y, Izumi S, Hyogo M, Ninoyu Y, Suematsu M, Nakayama J, Tsuchihashi N, Okami M, Sakata H, Yoshihashi H, Kobayashi T, Kumakawa K, Yoshida T, Esaki T, Usami SI.

Detailed clinical features and genotype-phenotype correlation in an OTOF-related hearing loss cohort in Japan

Hum Genet. 141(3-4):865-875. 2022/4

③Ito S, Takakura H, Akaogi K, Shojaku H, Takeda N, Suzuki M, Watanabe Y, Aoki M, Doi K, Ikezono T, Kakigi

- A, Kitahara T, Koizuka I, Murofushi T, Naganuma H, Omori K, Takahashi K, Takumida M, Usami SI, Yamashita H. A 14-year nationwide epidemiological analysis of delayed endolymphatic hydrops in Japan
Acta Otolaryngol. 142(7-8):568-574. 2022/7
- ④Wiederkehr I, Kawabata Y, Tsumiyama S, Hosokawa Y, Iimura J, Otori N, Miyawaki T.
Caudal Septal Deviation: A Computed Tomography-Based Evaluation Method
Ann Plast Surg. 89(1):95-99. 2022/7
- ⑤Morishita M, Okubo M, Sekine T.
Effects of Carbonated Thickened Drinks on Pharyngeal Swallowing with a Flexible Endoscopic Evaluation of Swallowing in Older Patients with Oropharyngeal Dysphagia
Healthcare (Basel).10(9):1769. 2022/9
- ⑥Hosokawa Y, Miyawaki T, Omura K, Akutsu T, Kimura R, Ikezono T, Otori N.
Surgical Treatment for Empty Nose Syndrome Using Autologous Dermal Fat: Evaluation of Symptomatic Improvement
Ear Nose Throat J. 1455613221130885, 2022/9
- ⑦吉村 美歩, 新藤 晋, 林 智恵, 池園 哲郎
前庭機能評価を行ったムンブス難聴の2症例
Equilibrium Research 81 巻2号 59-66, 2022/4
- ⑧丹沢 泰彦, 北原 智康, 松田 帆, 樽本 憲人, 坂本 圭, 関根 達朗, 新藤 晋, 伊藤 彰紀, 中嶋 正人, 加瀬 康弘
池園 哲郎
両側急性感音難聴を呈した内耳梅毒の1例
耳鼻と臨床 68 巻3号 190-195, 2022/5
- ⑨北原 智康, 関根 達朗, 星野 文隆, 田山 二郎, 池園 哲郎
気道狭窄を伴った Madelung 病(良性対称性脂肪腫症)の1例
耳鼻と臨床 68 巻3号 203-207, 2022/5
- ⑩澤田 政史, 蝦原 康宏, 井上 準, 久場 潔実, 林 崇弘, 中平 光彦, 菅澤 正
甲状腺手術における術後反回神経麻痺の臨床的検討
喉頭 34 巻1号 19-24, 2022/6

【総数：論文 17 件、学会発表 26 件、講演 12 件】

6-2. 獲得研究費

池園哲郎

令和4年度厚生労働省科学研究費補助金(難治性疾患等政策研究事業)

難治性聴覚障害に関する調査研究

分担研究者

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

【日本】発明の名称：外リンパ瘻の検出方法

特許権者：学校法人埼玉医科大学

発明者：池園哲郎、八木聰明、大森彬

特許番号：特許第4172777号(2008年8月22日)

公開番号：特開2004-85552(2004年3月18日)

出願番号：特願2003-182860(2003年6月26日)

【外国 中国】発明の名称：外リンパ瘻の検出方法

特許権者：学校法人埼玉医科大学

発明者：池園哲郎、八木聰明、大森彬

特許番号：ZL03815172.3(2007年9月5日)

公告番号：CN100335502-C(2007年9月5日)

出願番号：03815172.3(2003年6月26日)

【外国 オーストラリア】発明の名称：外リンパ瘻の検出方法

特許権者：学校法人埼玉医科大学 Saitama Medical University

発明者：池園哲郎、八木聰明、大森彬

出願番号：2003243985(2003年6月26日)

特許番号：2003243985(2009年7月3日)

【外国 米国】発明の名称：外リンパ瘻の検出方法

特許権者：学校法人埼玉医科大学 Saitama Medical University

発明者：池園哲郎、八木聰明、大森彬

特許番号：US 7,863,005 B2(2011年1月4日)

公開番号 : US 2006/246516 A1 (2006年11月2日)

出願番号 : 10/517,778 (2003年6月26日)

【外国 欧州 EP/IT (イタリア)】

発明の名称: 外リンパ瘻の検出方法

特許権者: 学校法人埼玉医科大学 Saitama Medical University

発明者: 池園哲郎、八木聡明、大森彬

特許番号 : 502011901925691 (2011年1月12日)

公開番号 : EP 1533319 A1 (2005年5月25日)

出願番号 : 03736265.4 (2003年6月26日)

【外国 欧州 EP/GB (イギリス)】

発明の名称: 外リンパ瘻の検出方法

特許権者: 学校法人埼玉医科大学 Saitama Medical University

発明者: 池園哲郎、八木聡明、大森彬

特許番号 : 1533319 (2011年1月12日)

公開番号 : EP 1533319 A1 (2005年5月25日)

出願番号 : 03736265.4 (2003年6月26日)

【外国 米国】 発明の名称: ANTIBODY REACTING WITH NATIVE COCHLIN-TOMOPROTEIN (CTP) AND METHOD FOR MEASURING CTP USING SAME

出願人: Saitama Medical University

発明者: IKEZONO, Tetsuo, SHIKAZE, Satomi

特許番号: US9458210 (2016年10月4日)

公開番号: US2014030742 (A1) (2014年1月30日)

出願番号: US 14/008,677 (2012年4月2日: 優先日: 2011年3月31日)

【日本】 発明の名称: 未変性 Cochlin-tomoprotein (CTP) に反応する抗体及びそれを用いた CTP の測定方法

出願人: 学校法人埼玉医科大学

発明者: 池園哲郎、志風沙登美

特許番号: 特許第 6000239 号 (2016年9月9日)

公開番号: 再公表 2012-133898 (2014年7月28日)

出願番号: 特願 2013-507843 (2012年4月2日: 優先日: 2011年3月31日)

【外国 欧州 EP/DE (ドイツ)】

発明の名称: ANTIBODY REACTING WITH NATIVE COCHLIN-TOMOPROTEIN (CTP) AND METHOD FOR MEASURING CTP USING SAME

出願人: Saitama Medical University

発明者: IKEZONO, Tetsuo, SHIKAZE, Satomi 特許番号: 602012028315.7 (2017年2月21日) 公開番号:

EP2692735A1 (2014年2月5日) 出願番号: 2012-763119 (2012年4月2日: 優先日: 2011年3月31日)

【外国 欧州 EP/IT (イタリア)】

発明の名称: ANTIBODY REACTING WITH NATIVE COCHLIN-TOMOPROTEIN (CTP) AND METHOD FOR MEASURING CTP USING SAME

出願人: Saitama Medical University

発明者: IKEZONO, Tetsuo, SHIKAZE, Satomi

特許番号: 502017000023576 (2017年2月1日)

公開番号: EP2692735A1 (2014年2月5日)

出願番号: 2012-763119 (2012年4月2日: 優先日: 2011年3月31日)

【外国 欧州 EP/FR (フランス)】

発明の名称: ANTIBODY REACTING WITH NATIVE COCHLIN-TOMOPROTEIN (CTP) AND METHOD FOR MEASURING CTP USING SAME

出願人: Saitama Medical University

発明者: IKEZONO, Tetsuo, SHIKAZE, Satomi

特許番号: 2692735 (2017年2月1日)

公開番号: EP2692735A1 (2014年2月5日)

出願番号: 2012-763119 (2012年4月2日: 優先日: 2011年3月31日)

【外国 欧州 EP/GB (イギリス)】

発明の名称: ANTIBODY REACTING WITH NATIVE COCHLIN-TOMOPROTEIN (CTP) AND METHOD FOR MEASURING CTP USING SAME

出願人：Saitama Medical University

発明者：IKEZONO, Tetsuo, SHIKAZE, Satomi

特許番号：2692735（2017年2月1日）

公開番号：EP2692735A1(2014年2月5日)

出願番号：2012-763119（2012年4月2日；優先日：2011年3月31日）

【日本】発明の名称：解析システム、解析方法、解析用データ取得装置、及び解析用プログラム

特許権者：学校法人埼玉医科大学

発明者：新藤 晋

特許番号：

公開番号：

出願番号：特願 2020-213471（2020年12月23日）

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育については特にBSL、CCにおいて、充実した内容を提供でき、学生には好評であった。研究については鼻アレルギー関連、鼻腔通気性関連、難聴・めまいの生化学的な診断や難聴遺伝子のテーマで継続している。診療については、地域の需要に応えるのみならず、一層高度な診療レベルをめざしていきたい。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育においては、一人一人の特性にあった指導を行っていきたい。医学の奥深さに興味を持てるような教育が理想的である。卒後教育においては、専攻医募集と獲得が先ず第1の優先事項であり、教室ホームページを充実させたい。

1. 25) 産科・婦人科

1. 構成員

- 亀井 良政 (KAMEI, Yoshimasa) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 周産期医学、遺伝医学、超音波医学 : 博士
- 梶原 健 (KAJIHARA, Takeshi) : 教授 : 診療部長 : 研究主任 : 教育副主任 : 指導教員 (大学院) : 生殖内分泌学、不妊症治療学 : 博士
- 永田 一郎 (NAGATA, Ichiro) : 客員教授 : 婦人科腫瘍学、婦人科手術学 : 博士
- 石原 理 (ISHIHARA, Osamu) : 客員教授 : 不妊症治療学、生殖内分泌学 : 博士
- 關 博之 (SEKI, Hiroyuki) : 客員教授 : 周産期学、妊娠高血圧症候群、プロスタグランディン代謝、産婦人科手術学 : 博士
- 岡垣 竜吾 (OKAGAKI, Ryugo) : 客員教授 : 生殖内分泌学、女性骨盤底医学 : 博士
- 難波 聡 (NAMBA, Akira) : 准教授 : 指導教員 (大学院) : 遺伝医学 : 生殖内分泌学、不妊症治療学、スポーツ医学 : 博士 : ゲノム医療科兼任
- 高村 将司 (TAKAMURA, Masashi) : 准教授 : 指導教員 (大学院) : 生殖内分泌学、婦人科内視鏡学、不妊症治療学 : 博士
- 田丸 俊輔 (TAMARU, Shunsuke) : 准教授 : 診療副部長 : 研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 周産期医学、遺伝医学、超音波医学 : 博士
- 左 勝則 (JWA Seung Chik) : 准教授 : 病棟医長 : 指導教員 (大学院) : 遺伝医学、生殖内分泌学、不妊症治療学、臨床疫学、生物統計学 : 博士
- 宮崎 加寿子 (MIYAZAKI, Kazuko) : 講師 : 外来医長 : 教育員・研究員
- 鈴木 裕之 (SUZUKI, Hiroyuki) : 講師 : 研修医長 : 教育員・研究員 : 博士
- 水野 由美 (MIZUNO, Yumi) : 講師 : 指導教員 (大学院) : 博士 : 中央研究施設兼任
- 高橋 幸子 (TAKAHASHI, Sachiko) : 助教 : 教育員・専門医員・研究員 : 地域医学推進センター兼任
- 上村 のぞみ (UEMURA, Nozomi) : 助教 : 教育員・専門医員・研究員 : ゲノム医療科兼任
- 市川 大介 (ICHIKAWA, Daisuke) : 助教 : 教育員・専門医員・研究員
- 鷹野 夏子 (TAKANO, Natsuko) : 助教 : 教育員・専門医員・研究員
- 霞澤 匠 (KASUMIZAWA, Takumi) : 助教 : 教育員・専門医員・研究員
- 松田 尚子 (MATSUDA, Naoko) : 助教 : 教育員・専門医員・研究員
- 山口 哲 (YAMAGUCHI, Tetsu) : 助教 : 教育員・専門医員・研究員 : 社会人大学院生
- 吉田 智昭 (YOSHIDA, Tomoaki) : 助教 : 教育員・専門委員・研究員 : 博士
- 川嶋 直之 (KAWASHIMA, Naoyuki) : 助教 : 教育員・専門委員・研究員 : 博士
- 佐藤 はづき (SATO, Hazuki) : 助教 : 教育員・専門医員・研究員 : 社会人大学院生 : ゲノム医療科兼任
- 霞澤 亘 (KASUMIZAWA, Wataru) : 助教 : 専攻医
- 齋藤 良平 (SAITO, Ryohei) : 助教 : 専攻医 : 博士
- 丸茂 雄太 (MARUMO, Yuta) : 助教 : 専攻医
- 川崎 絵理 (KAWASAKI, Eri) : 助教 : 専攻医 (出向中)
- 熊谷 奈美 (KUMAGAI, Nami) : 助教 : 専攻医 (出向中)
- 前田 ありさ (MAEDA, Arisa) : 助教 : 専攻医 (出向中)
- 板倉 桜子 (ITAKURA, Sakurako) : 助教 : 専攻医
- 山口 友基 (YAMAGUCHI, Tomoki) : 助教 : 専攻医
- 府藤 藍 (FUDO, Ai) : 胚培養士
- 佐藤 麻弥 (SATO, Maya) : 胚培養士
- 堀越 嗣博 (HORIKOSHI, Tsuguhiro) : 客員講師 : 博士
- 田谷 順子 (TAYA, Junko) : 客員講師 : 胚培養士
- 相馬 廣明 (SOMA, Hiroaki) : 非常勤講師 : 博士
- 小川 博和 (OGAWA, Hirokazu) : 非常勤講師 : 博士
- 三木 明德 (MIKI, Akinori) : 非常勤講師 : 博士
- 大澤 洋之 (OSAWA, Hiroyuki) : 非常勤講師 : 博士
- 西林 学 (NISHIBAYASHI, Manabu) : 非常勤講師 : 博士 保母 順造 (HOB0, Junzo) : 非常勤講師 : 博士
- 山下 真理子 (YAMASHITA, Mariko) : 非常勤講師
- 栗崎 智美 (KURISAKI, Tomomi) : 非常勤講師 : 博士
- 水上 順智 (MIZUGAMI, Yoshinori) : 非常勤医師
- 栃木 秀乃 (TOCHIGI, Hiden0) : 非常勤医師 : 博士
- 岡島 多希 (OKAJIMA, Taki) : 非常勤医師
- 平林 絵里子 (HIRABAYASHI, Eriko) : 非常勤医師
- 田村 早希 (TAMURA, Saki) : 非常勤医師
- 左 淳奈 (JWA, Junna) : 非常勤医師
- 串田 未央 (KUSHIDA, Mio) : 非常勤臨床心理士
- 田丸 香寿代 (TAMARU, Kazuyo) : 非常勤臨床心理士

2. 教育

2-1. 目的・目標

「卒前教育」生殖医学、周産期医学、婦人科腫瘍学、女性骨盤底医学から構成される産科婦人科学は、生物学・生理学としての「生殖のしくみの解明」から癌、不妊症など高度な集学的治療を要する「疾患治療医学」に至る幅広い守備範囲を持つ。卒前教育では、これら広範な学問的基盤に基づき、学生の興味と関心を引く多彩な基礎的および臨床的な知識と技術を紹介教授するとともに、臨床現場における実務体験と経験により、創造力溢れる人間性と国際性の豊かな医師を養成することを目標とする。

「卒後教育」研修医・専門医教育では、産科婦人科学の特性を活かし、産婦人科専門医資格取得に十分な臨床的経験と知識を積むとともに、サブスペシャリティ資格取得を見据えて、分野を超えた最先端の知識と技術を幅広く習得した研究マインドに溢れる産婦人科医師を養成することを目標とする。

「大学院教育」大学院教育では、研究テーマを徹底的に解明するための方法論と技術論を取得し、自ら研究計画を立案することができる自主独立の研究者を養成するために、部門・分野を超えた学際的交流と支援を進め、臨床マインドに溢れる産婦人科研究者を養成することを目標とする。

2-2. 教育実績（担当者）

「卒前教育」医学部 3 年生：ヒトの病気 I（生殖器）（梶原ら）講義。ユニット試験による評価。医学部 4 年生：ヒトの病気 II（母体胎児・新生児）（亀井ら）講義。ユニット試験および総合試験による評価。医学部 5 年生：BSL および CC（亀井ら）。総合試験による評価。医学部 6 年生：産婦人科疾患（亀井ら）。総合試験および卒業試験による評価。医学部 5 年生および 6 年生（CC Step 1-3）：カタロスタワー4 階シミュレーショントレーニングセンターでの超音波 VR トレーニングシミュレータ U/S Mentor を用いた経膈・経腹超音波検査体験実習および周産期全身シミュレーター-Konoha を用いた内診体験実習。全学年を対象：通年実習プログラムなど。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」、「卒後教育」、「大学院教育」講義、実習、その他について、予定通り達成された。

2-4. 次年度改善計画

「卒前教育」各分野の専門家による講義および実習を行ない、学生の満足度の高い学生教育を提供できた。初期研修医教育さらに後期研修教育と連続的に構成された教育を推進する。

「卒後教育」臨床研修指導医、産婦人科専門医、各分野専門医による丁寧な指導が行われ、臨床トレーニングと臨床研究の融合された十分な成果をあげた。引き続き教育体制の整備を進める。

「大学院教育」各研究テーマに適合した環境を整備し基礎研究に専念する時間を確保できた。今後の発展が期待できる。

3. 研究

3-1. 目的・目標

「臨床マインドを持った基礎研究」あるいは「研究マインドを持った臨床研究」を研究の基本方針とする。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

研究グループ（研究プロジェクト）：

- a) 子宮内膜細胞転写因子に関する国際共同研究プロジェクト（梶原、Warwick University、Prof. Brosens との共同研究）
- b) 子宮脱・排尿障害における超音波診断の検討（西林、永田、埼玉医大泌尿器科との共同研究）
- c) 子宮内膜脱落膜化におけるミトコンドリアダイナミクスの解明と病態への関与（田丸、日本学術振興会科研費、若手研究）
- d) 新生児低酸素性虚血性脳症の予防に向けた胎児治療戦略に関する基礎的研究（亀井、日本学術振興会科研費基盤研究（C））
- e) 子宮内膜脱落膜化過程で産生される中鎖脂肪酸の同定とその役割の解析（梶原、水野、日本学術振興会科研費基盤研究（C））
- f) 遠隔胎児心拍数陣痛図を用いた在宅リアルタイム胎児サポートシステム確立に向けた予備的研究（亀井、田丸）
- g) 遠隔胎児心拍数陣痛図使用による母体搬送中の胎児心拍モニターの有用性に関する検討（亀井、田丸）
- h) 妊婦における家庭血圧の基準値作成および妊娠前後への影響に関する検討（亀井、左）
- i) 日本における体外受精・胚移植後の妊娠・生産率予測モデルの開発（左）
- j) 生殖補助医療における、排卵誘発方法の選択が累積生産率および治療費における影響の検討（左）
- k) 卵子活性化・タイムラプス・ERA の有効性・安全性検証による生殖補助医療のエビデンス創出（左）

研究実績：

- a) 子宮内膜細胞の脱落膜化に重要な microRNA を同定した。
- b) 経会陰超音波断層法の臨床応用と研究を継続した。
- c) ミトコンドリアの分裂に関わる遺伝子群に関して RT-qPCR 法による発現量の評価を行った。その結果、ミトコンドリアの分裂に重要な DRP1、DRP1 と協調して働く MiD51、Mif の発現が脱落膜化群で上昇し、MiD49 は発現が低下することがわかった。一方で、DRP1 の分解に重要な役割を果たす MITOL の発現は不変であった。
- d) 概日リズム環境破綻を照明により誘導した雄 19、雌 9 頭のコモン・マーモセットの同世代社会環境への応答行動の発達推移を定量的に追跡可視化し、変異の発見と留意すべき候補病因を探索し、① 12 時間明暗制御群（対照群）に対し、②生後から恒常照明リズム破綻、③離乳（約 2 ヶ月齢）～児童相同期（約 5 ヶ月齢）の特異期リズム破綻、④推定児童相同期以降～思春期相同期（約 8 ヶ月齢）破綻の 4 群について、若齢成体期（約 1 年）の発達結

果を社会行動応答パターンで定量比較した。各群の社会行動が全群間で有意に異なり、各概日リズム破綻のストレス応答基盤の特異年齢依存性が示唆された。①対照群に対し、②生後早期破綻群は霊長類の典型活動である高位指向活動の減弱とネガティブな情動性行動の亢進、③離乳前後期の破綻群は低位嗜好性と不動傾向、④児童期相同期の破綻群は不動傾向や高位でも逃避指向の傾向を示し、神経機能発達支援において、段階的かつ連続した概日リズム環境因子の考慮の重要性が明らかとした。

- e) 子宮内膜脱落膜化過程で、産生が上昇する中鎖脂肪酸を網羅的解析で、明らかとした。
- f) 在宅妊婦が、自身で容易に小型モバイル CTG を使用でき、十分に評価可能なデータを得られることが明らかとなった。
- g) 母体搬送中に容易に小型モバイル CTG を使用でき、十分に評価可能なデータを得られることが明らかとなった。
- h) 日本全国の分娩施設でリクルートされた妊婦における妊娠中の家庭血圧のデータを集計し、診察室血圧と比較して、家庭血圧は有意に低く、妊娠時期に応じて診察室血圧との差が異なることを明らかにした。
- i) 初回体外受精治療者を対象に前向きコホート研究を立ち上げ、全国から 750 名を超える体外受精治療者の治療情報の登録を得た。
- j) 生殖補助医療の助成金に関わる行政データを用い、生殖補助医療が保険適用となった際の年齢別医療費の試算を行った。
- k) 多施設の生殖補助医療実施施設における卵子活性化・ERA 検査の後方視データを作成・解析し、保険収載に向けたエビデンス創出のための検討を行った。

3-3. 達成度評価

各プロジェクトに関して、ほぼ予定通りの遂行が行われた。

3-4. 次年度改善計画(亀井担当)

新型コロナウイルス蔓延に伴う特に周産期医療への影響の解決のために、上記遠隔医療の 2 つのプロジェクトを推進し、その成果を各種学会で公表してゆく。

臨床研究として、当院における各種疾患の統計学的解析を引き続き行う。

4. 診療

産婦人科各分野における高度医療と救急疾患のプライマリーケアを含む治療を提供し、良好な成績を上げるとともに地域医療に貢献した。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

文部科学省科学技術・学術審議会生命倫理・安全部会委員(生殖補助医療研究専門委員会主査および特定胚及びヒト ES 細胞等研究専門委員会委員)、厚生労働省厚生科学審議会科学技術部会専門委員(ヒト胚研究に関する審査専門委員会委員)、内閣府生命倫理調査会タスクフォース構成員、医薬品医療機器総合機構専門委員、最高裁判所専門委員(さいたま地方裁判所所属)、埼玉県母子保健運営協議会委員長、埼玉県特定不妊治療費助成事業実施医療機関指定調査会副会長:以上石原

埼玉県医師会 母子保健委員会委員、子育て相談窓口運営委員会委員、母体保護法指定医師審査委員会委員:以上亀井

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無編集委員

査読委員の有無編集委員

日本周産期・新生児医学会雑誌 副編集長、埼玉産科婦人科学会雑誌編集委員長:以上亀井

埼玉産科婦人科学会雑誌編集委員、Associate Editor Journal of Obstetrics & Gynecology Research、

Associate Editor Medical Molecular Morphology:以上梶原

臨床スポーツ医学会誌編集委員:以上難波

埼玉産科婦人科学会雑誌編集委員:以上高

村、田丸、左査読委員

Human Reproduction、Journal of Obstetrics、Gynecology & Research、Am J Obstet Gynecol、Reproductive Biomedicine Online、埼玉産科婦人科学会雑誌:以上石原

Journal of Obstetrics、Gynecology & Research、Journal of Medical Ultrasonics、Archives of

Obstetrics & Gynecology、Hypertension Research in Pregnancy、母性衛生:以上亀井

埼玉産科婦人科学会雑誌:以上梶原

Hypertension Research in Pregnancy、Journal of Visualized Experiments:以上田丸

BMC Pregnancy & Childbirth、Journal of Obstetrics、Gynecology & Research、Reproductive

Biomedicine Online:以上左

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本産科婦人科学会代議員、同倫理委員会委員および登録・調査小委員会委員、日本生殖医学会常任理事および同倫理委員会委員長、日本受精着床学会常任理事、日本卵子学会常任理事、日本内分泌学会評議員、日本医事法学会理事、GID 学会理事、日本生殖内分泌学会評議員、日本胎盤学会評議員、埼玉県産婦人科

医会理事、埼玉県医師会母体保護法指定医審査委員会委員、同母子保健委員会委員、同周産期医療運営委員会委員、埼玉県母性衛生学会理事、Executive Board Member、International Committee for Monitoring ART、WHO、Executive Board Member、International Federation of Fertility Societies：以上石原

日本産科婦人科学会理事・医療安全推進委員会委員長、日本周産期・新生児医学会副理事長・学術委員会委員長、日本産科麻酔科学会副理事長、日本産婦人科医会理事、日本母性衛生学会理事、日本胎児心臓病学会理事、日本超音波医学会編集委員会査読委員及び菊池賞・伊藤賞（論文賞）審査委員、日本分娩監視研究会幹事、埼玉産科婦人科学会会長、埼玉県母性衛生学会理事、埼玉県産婦人科医会副理事長、埼玉産科婦人科学会雑誌編集長、日本医療機能評価機構産科医療補償制度原因分析委員会委員、埼玉県医師会子育て相談窓口運営委員会委員：以上亀井

日本臨床分子形態学会理事、日本生殖医学会幹事および同代議員、日本受精着床学会評議員、日本内分泌学会評議員：以上梶原

日本人類遺伝学会評議員、日本臨床スポーツ医学会評議員：以上難波

日本周産期・新生児医学会幹事、日本臨床分子形態学会評議員、埼玉県産婦人科医会超音波研究会幹事：以上田丸 日本産科婦人科学会登録・調査小委員会委員、日本産婦人科医会情報技術委員会委員、日本生殖医学会評議員、International Committee for Monitoring ART、WHO、Regional Representative：以上左

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①Tamaru S, Jwa SC, Ono Y, Seki H, Matsui H, Fujii T, Iriyama T, Doi K, Sameshima H, Naruse K, Kobayashi H, Yoshida R, Nishi H, Hirata Y, Fukushima K, Hirakawa T, Nakano Y, Asakawa Y, Tsunoda Y, Oda T, Nii S, Fujii T, Kinoshita K, Kamei Y: Feasibility of a mobile cardiocogram device for fetal heart rate self-monitoring in low-risk singleton pregnant women. J Obstet Gynaecol Res. 48(2): 385-392, 2022
- ②Jwa SC, Namba A, Tamaru S, Kuwahara A, Sago H, Ishihara O, Kamei Y: Down syndrome live births following assisted reproductive technology in Japan: a nationwide survey between 2007 and 2016. J Assist Reprod Genet. 39(7): 1625-1631, 2022
- ③Miyazaki K, Jwa SC, Katayama E, Tamaru S, Ishihara O, Kamei Y: Postoperative C-reactive protein as a predictive marker for surgical site infection after cesarean section: Retrospective analysis of 748 patients at a Japanese academic institution. PLoS One. 17(9): e0273683, 2022
- ④Matsuda N, Jwa SC, Tamura S, Suzuki H, Takamura M, Namba A, Kajihara T, Okagaki R, Kamei Y, Ishihara O: Factors associated with an unfavorable clinical course in hospitalized patients with pelvic inflammatory disease: a retrospective cohort study of 117 patients from a Japanese academic institution BMC Womens Health. 22(1): 348, 2022
- ⑤梶原 健、鷹野夏子、市川大介、田丸俊輔、水野由美、水野洋介、中村康平、相馬廣明：胎盤内絨毛癌の網羅的ゲノム解析による病因の検索
第54回日本臨床分子形態学会総会・学術集会（長崎） 2022.11.5
- ⑥田丸俊輔、田村早希、霞澤 亘、山口 哲、霞澤 匠、鷹野夏子、宮崎加寿子、左 勝則、難波 聡、亀井良政：GBS保菌状態確認のための細菌培養検査の至適時期設定に向けた施設別在胎35週と41週の分娩割合の比較検討
第58回日本周産期・新生児医学会学術集会（横浜） 2022.7.10-12
- ⑦左 勝則、前田恵理、丸茂雄太、齋藤良平、市川大介、上村のぞみ、高村将司、難波 聡、梶原 健、石原 理：生殖補助医療の治療情報からなる医療費予測モデルを用いた年齢別生産あたり医療費の検討
第67回日本生殖医学会学術講演会・総会（横浜） 2022.11.3-4
- ⑧鈴木裕之、永田一郎、亀井良政：当院で行っている仙棘靭帯子宮固定術および仙骨子宮靭帯子宮固定術の短期成績
第24回日本女性骨盤底医学会（さいたま） 2022.7.2-3
- ⑨霞澤 匠、難波 聡、田丸俊輔、梶原 健、亀井良政：待機療法の対象となりうる部位不明妊娠、異所性妊娠の取り扱い
第144回関東連合産科婦人科学会総会・学術集会（甲府） 2022.10.15-16
- ⑩吉田智昭、宮崎加寿子、左 勝則、田丸俊輔、高村将司、梶原 健、石原 理、亀井良政：当院で経験したCOVID-19妊婦の検討
第59回埼玉県医学会総会（さいたま） 2022.2.27

（2022年1月～2022年12月の件数）

【総数：論文・著書 53件、学会発表 43件、講演 30件】

6-2. 獲得研究費

2022年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））

コモン・マーモセットモデルを用いた低酸素・虚血負荷に対する薬物治療の有用性の検討（2019-22年度）

研究代表者 埼玉医科大学教授 亀井良政

2022年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））

子宮内細菌叢と口腔内細菌叢が子宮内膜脱落膜化及び脂質産生に及ぼす影響（2020-22年度）

研究代表者 埼玉医科大学教授 梶原 健

埼玉医科大学創立50周年記念特別研究費

DNAの配列変異とRNAの発現異常に着目したミトコンドリア病発症メカニズムの解明：理想的着床前診断の実現へ向けて

研究代表者 埼玉医科大学准教授 難波 聡

2022年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究）

子宮内膜脱落膜化におけるミトコンドリアダイナミクスの解明と病態への関与（2019-22年度）

研究者 埼玉医科大学准教授 田丸俊輔

2022年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究）

日本における体外受精・胚移植後の妊娠・生産率予測モデルの開発（2019-22年度）

研究者 埼玉医科大学准教授 左 勝則

2022年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B））

本邦における不妊症有病率の推定と未受診要因の解明（2021-22年度）

研究代表者 秋田大学准教授 前田恵里

研究分担者 埼玉医科大学准教授 左 勝則

2022年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構（成育疾患克服等総合研究事業－BIRTHDAY）

卵子活性化・タイムラプス・ERAの有効性・安全性検証による生殖補助医療のエビデンス創出（2021-23年度）

研究代表者 東京大学教授 大須賀穰

研究分担者 埼玉医科大学准教授 左 勝則

2022年第3回SMF生殖医療振興助成金

生殖補助医療における、排卵誘発方法の選択が累積生産率および治療費用における影響の検討（2021-22年度）

研究者 埼玉医科大学准教授 左 勝則

2022年度（第32回）医療科学研究所研究助成

生殖補助医療の保険適用に対する医療経済学的検討

研究者 埼玉医科大学准教授 左 勝則

2022年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））

精子マイクロRNAに着目した不妊症の発症メカニズムの解明（2021-23年度）

研究代表者 埼玉医科大学講師 水野由美

2022年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究）

母体と胎児の分子生物学的コミュニケーションツールとしてのエクソソームの役割の解析（2020-22年度）

研究者 埼玉医科大学非常勤医師 栃木秀乃

2022年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））

母児メンタルヘルスに関わる妊婦バイオマーカーの探索と機能解析（2022-25年度）

研究者 埼玉医科大学非常勤講師 佐藤智美

6-3. 受賞

左 勝則：第40回日本受精着床学会総会・学術講演会 世界体外受精会議記念賞（臨床）

6-4. 特

許、実
用新案
該当な
し

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第32回 ゆづの木周産期病診連携セミナー 2022.7.4 WEB開催：代表世話人 亀井良政

第33回 ゆづの木周産期病診連携セミナー 2023.1.23 WEB開催：代表世話人 亀井良政

第16回 埼玉県西部産婦人科臨床研究会 2023.2.16 川越ウエスタ：代表世話人 梶原 健

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

「医学部」学生と研修医、専攻医の教育システムがさらに充実し、高い教員の意識を反映し、ほとんどの学生と研修医、専攻医が満足度の高い教育と研修を受けることができた。

研究は内外各機関、教室との共同研究を継続し、研究成果は順調に公刊されつつある。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

研究の目標を達成し、所属する医師も徐々に増加しており、臨床教室としてその研究の質と効率を維持するために現在の方針を次年度も堅持する予定である。

「大学院」大学院入学者が新たなコラボレーションのもとに新規研究を開始し、今後の成果期待される。

1. 26) 歯科・口腔外科

1. 構成員

- 佐藤 毅 (SATO Tsuyoshi) : 准教授 : 運営責任者 : 診療部長・研究主任・副教育主任 : 代表指導教員 (大学院) : 咀嚼筋
腱膜過形成症, 顎関節症 : 博士
- 伊藤 耕 (ITO Ko) : 准教授 : 診療副部長・教育主任・病棟医長・研究員・教育員 : 顎変形症, 顎関節症, 顔面外傷 :
博士
- 山崎 文恵 (YAMAZAKI Fumie) : 助教 : 研究副主任・研究員・教育員 : 顎関節症, 顔面外傷 : 博士
- 高久 裕紀 (TAKAKU Yuki) : 助教 : 外来医長・医員・研究員・教育員
- 柏俣 玲於奈 (KASHIMATA Reona) : 助教 : 医員・研究員・教育員
- 岡村 朋宙 (OKAMURA Tomomichi) : 助教 : 医員・研究員・教育員
- 畠山 祐希恵 (HATAKEYAMA Yukie) : シニアレジデント : 医員・研究員・教育員

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

医学部教育における歯科医学の知識修得を目的として、わかりやすい講義を目標に教育活動を行った。大学院教育では他教室との共同研究を積極的に行った。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育で講義を担当したのは、4年生感覚器ユニット(佐藤、伊藤)、5年生 特別演習(佐藤)である。大学院教育としては、博士課程1名(3年生1名)が在籍している。

2-3. 達成度評価

教育実績からユニットをとりまとめるという点では順調に活動できた。わかりやすい講義を目指すために一部の講師を刷新した。以上より本年度の目標については、概ね達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度には再度ユニットディレクターとして卒前教育の運営に関わり、講義の質を維持することを目標に活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、教員全員が研究に従事することを目標に研究活動を行った。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

【基本学科の業績】

1. 骨代謝グループ[佐藤、山崎、柏俣]

臓器間相互作用における骨代謝の関わりを解明するために、神経系と骨代謝の関係を調べた。とくに骨代謝機能における自閉症遺伝子の役割の解析を行った。科研費基盤研究Bが継続となっており、自閉症遺伝子Xの骨芽細胞特異的コンディショナルノックアウトマウスと神経細胞特異的コンディショナルノックアウトマウスの作出をおこなった。骨芽細胞における自閉症遺伝子の役割を解析するために、loss of functionとして遺伝子のノックアウト細胞を作製した。

今後は更に唾液腺組織との関連を解析するため、明海大学(薬理学講座)との共同研究も計画している。

2. 咀嚼筋腱・腱膜過形成症グループ[佐藤、伊藤]

咀嚼筋腱・腱膜過形成症の病態解明を目的として、東京医科歯科大学および理化学研究所との共同研究で患者検体を用いた遺伝子解析研究を行った(IRB委員会にて審査済)。サンプリングを進行中である。また、京都大学および自然科学研究機構との共同研究でサル検体を用いた腱組織の性質の解析を行った。次世代シーケンサーを用いた研究を施行し、論文を作成している。

【大学院生の業績】

3. 口腔扁平苔癬グループ[佐藤、小林(院)]

口腔扁平苔癬のモデル動物の作製を目的として、臨床検体の評価を行った。病理学教室との共同研究でIRB委員会への申請を行った。過去の口腔扁平苔癬患者の病理標本について免疫染色を行っている。モデル動物作製のために実験動物委員会へ申請を行った。

4. ニューキノロン系抗菌薬・腱組織グループ[佐藤、小林(院)]

ニューキノロン系抗菌薬の長期使用による腱組織断裂モデル動物の作製を目的として、臨床検体の評価を行った。モデル動物作製のために実験動物委員会へ申請を行った。

3-3. 達成度評価

研究実績から全グループともに研究は順調にすすんだと考えるが、2022年度より3名の新たな構成員が増員したこともあり、教員全員が研究に従事するという点では達成できなかった。

3-4. 次年度改善計画

次年度は教員全員が研究に従事するように、教員が取り組みやすい臨床研究テーマを多くすることを目標とする。

4. 診療

咀嚼筋腱・腱膜過形成症の治療を行っており、倫理委員会承認の下、咀嚼筋腱・腱膜過形成症の遺伝子解析研究も行う

ている。顎関節症、外傷、急性炎症、顎骨壊死、歯周病等さまざまな疾患に対応できている。顎変形症の外科的矯正治療も昨年度と比較し手術件数は徐々に増加している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

さいたま医事関係事件鑑定人：佐藤毅

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

International Journal of Molecular Medicine, 編集委員 (Editorial Academy)：佐藤毅

International Journal of Molecular Sciences, 編集委員 (Editorial Board)：佐藤毅

Stomatological Disease and Science, 編集委員 (Associate Editor)：佐藤毅, 伊藤耕

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

社団法人日本口腔外科学会 代議員：佐藤毅

日本臨床分子形態学会 評議員：佐藤毅

日本顎関節学会 代議員：佐藤毅

日本顎変形症学会 評議員：伊藤耕

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

① Yumoto M, Mizuno Y, Isozaki Y, Ito K, Yoda T, Sato T. Analysis of masticatory muscle tendon-aponeurosis hyperplasia by using Next-Generation Sequencing. *In Vivo* 2022 Mar-Apr;36(2):563-569.

② Takaku Y, Ito K, Chida D, Sato T. Vascular endothelial growth factor-D upregulation in mesenchymal stem cells derived from melanocortin 2 receptor-deficient mice during osteoblast differentiation. *J Oral Maxillofac Surg Med Pathol* 2022; 34(6): 679-682.

③ Ito K, Yoshihara M, Aoki A, Shimizu H, Takaku Y, Sato T. Silicone-faced gel patch on nose bridge prevent wearing N95 respirators from pressure ulcers. *Oral Care* 2022 (in press)

④ Isozaki Y, Sato T, Takagi R, Ito K, Usui M, Kawano M, Matsushita S. Ropinirole inhibits inflammatory cytokine production in gingival epithelial cells and suppresses alveolar bone loss in an experimental rat model of periodontitis. *Exp Ther Med* 2022 Dec 29;25(2):78.

⑤ Ito K, Takaku Y, Yamazaki F, Kobayashi T, Sato T. Development of an oral aerosol-suction device that reduces particle scattering: a technical note. *Advances in Oral and Maxillofacial Surgery* 2022; 8: 100364.

⑥ 伊藤耕 佐藤毅 口腔内手術に伴う particle 飛散対策としての吸引器具の開発

第76回日本口腔科学会学術集会 web開催 福岡 2022年4月

⑦ 高久裕紀 伊藤耕 畠山裕希恵 岡村朋宙 小林聖司 柏俣玲於奈 山崎文恵 佐藤毅 頬骨下稜の骨切りを併用した筋突起切除術 第35回日本顎関節学会総会・学術大会 札幌 2022年7月

⑧ 斎藤諒 山崎文恵 高久裕紀 柏俣玲於奈 岡村朋宙 畠山裕希恵 西村光正 川田由美子 伊藤耕 佐藤毅 複数の精神疾患を有する患者の自己ピアシングにより舌にニードルが迷入した1例 第23回日本口腔顎顔面外傷学会総会・学術大会 東京 2022年7月

⑨ 岡村朋宙 山崎文恵 柏俣玲於奈 畠山裕希恵 高久裕紀 伊藤耕 佐藤毅 急性間欠性ポリフェリン症を有する患者の抜歯経験 第56回日本口腔科学会関東地方部会 web開催 2022年9月

⑩ 山崎文恵 伊藤耕 高橋康輔 友木里沙 青木暁宣 小倉直美 枝卓志 亀井和利 近藤壽郎 佐藤毅 5歳児の上下顎に発生した特発性歯肉線維腫症の1例 第67回日本口腔外科学会総会・学術大会 幕張 現地・オンデマンド 2022年11月

【総数：論文 11 件、学会発表 10 件、講演 6 件】

6-2. 獲得研究費

① 佐藤毅 (研究代表者) 文部科学省科学研究費研究助成 基盤研究 B 「運動器疾患治療のための中枢・末梢機能の活性化を担う分子基盤の解明と治療法の開発」 1,300 千円

② 伊藤耕 (研究代表者) 文部科学省科学研究費研究助成 基盤研究 C 「口腔扁平苔癬モデル動物の確立と dopamine シグナル制御治療薬の開発」 520 千円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関して、講師の変更により講義内容への取り組みを改善できた。大学院教育に関して、他教室との共同研究を引き続き行うことができた。研究については、教員全員の研究への関わりが困難であったが、論文数を増やすことができた。診療に関して、COVID-19 感染拡大の中、前年度よりも売り上げをあげることができた。基本学科全体としては、概ね改善できたと評価する。その他として、英語論文業績を増やすために、教員が英語論文に関心をもつよう英語論文抄読会を定期的(1ヶ月に1回)に開催できた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関して、医学生に対する講義の質を維持することを目標とする。大学院教育に関して、他教室との共同研究を引き続き行っていく。研究に関して、教員全員が研究マインドをもつように臨床研究を取り入れる。診療に関して、顎変形症患者をリクルートし、売り上げ向上につなげる。

1. 27) リハビリテーション科

1. 構成員

篠田 裕介 (SHINODA, Yusuke) 教授：運営責任者：診療部長、教育主任、研究副主任、代表指導教員（大学院）：リハビリテーション医学、整形外科、がん患者の運動器管理（骨転移など）：博士
倉林 均 (KURABAYASHI, Hitoshi) 教授：研究主任、代表指導教員（大学院）：動脈硬化、血栓症、温泉医学：博士
前田 恭子 (MAEDA, Kyoko) 助教：診療副部長：リハビリテーション医学、嚥下リハビリテーション、サルコペニア
間嶋 満 (MAJIMA, Mitsuru) 名誉教授：リハビリテーション医学：博士
山内 洋子 (YAMANOUCI, Yoko) 兼担准教授：教育副主任：リハビリテーション医学、内科学、脳神経内科学、予防医学：博士
鈴木 英二 (SUZUKI, Eiji) 客員准教授：嚥下リハビリテーション：博士
鈴木 郁子 (SUZUKI, Ikuko) 非常勤医師：小児リハビリテーション
理学療法士 25 人、作業療法士 14 人、言語聴覚士 2 人

2. 教育

2-1. 目的・目標

リハビリテーションの理念の理解を講義と臨床で実践することを目的とする。

2-2. 教育実績（担当者）

卒前教育で、講義・実習を担当したのは、4年生「皮膚・運動器」ユニット（篠田、倉林）、6年生「医療総論」と「内科総論」ユニット（篠田、倉林、前田）である。臨床実習としては、CCstep1（篠田、倉林、山内）の他、step2（篠田、倉林、前田、山内）2名の指導を行った。卒後教育としては、研修医3名（2年目前期研修医）に対して4週間研修指導を行った（篠田、倉林、前田、間嶋、山内）。大学院教育は、3ヶ月間リハビリテーション医学特別講義を行った（倉林）。専攻医1名（埼玉医大リハビリ科専門研修プログラム1年目）に対して1年間の期間で研修指導を行った（篠田、倉林、前田、間嶋、山内）。埼玉医療福祉会看護専門学校で3ヶ月間リハビリテーション論の講義を行った（前田、倉林）。

2-3. 達成度評価

講義内容はモデルコア・カリキュラムで求められている内容を網羅している。学生のアンケート調査による評価を受けて、毎年改善に努めており、目的を十分に達していると評価している。

2-4. 次年度改善計画

カリキュラム改訂にあわせて臨床実習の形式は見学型から参加型へと段階的に変えて改善に努めてきた。次年度は完全に参加型に移行する。

3. 研究

3-1. 目的・目標

基本学科では、大学病院の使命である急性期医療と高度先進医療に対し付加価値をつけることを目的として、運動療法によるサルコペニア、廃用症候群、脳梗塞などの疾患の発症予防・二次予防、がん転移に対するリハビリテーションなどの研究活動を行った。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

1. 動脈硬化における血管内皮、血小板、サイトカインの関与に関する研究（倉林）
文科省科研費を継続して獲得し、その成果を学会や学術雑誌に発表してきた。
2. 温熱物理療法・温泉医学研究（倉林）
厚労省科研費および環境省委託事業費で得た成果を環境省等の研修会で講演した。
3. がん患者の運動管理についてのエビデンスの構築（篠田）
文科省科研費を獲得し、その成果を学会、講演会、学術雑誌に発表してきた。
4. 脳梗塞生活期におけるがん発症とメタボリック症候群との関連（間嶋）
後ろ向きコホート研究として実施中である
5. 脳出血生活期における脳梗塞発症、心筋梗塞発症とメタボリック症候群との関連（間嶋）
後ろ向きコホート研究として実施中である
6. 脳卒中患者における摂食・嚥下障害の評価とリハビリテーション（前田、鈴木英）

嚥下に関する各種の指標を解析して、その研究結果を学会や学会誌などに発表してきた。

7. サルコペニアの発症因子と機能的予後の解析（前田）

現在、症例を蓄積している最中であるが、その解析の途中結果は学会にて報告した。

8. リハビリテーション施行中のリスク管理（山内）

海外の学術雑誌に Covid-19 のリハビリ管理について解析結果を発表した。

3-3. 達成度評価

1. 動脈硬化における血管内皮、血小板、サイトカインの関与に関する研究（倉林）

運動療法における血小板・凝固線溶・血管内皮の機能、アディポネクチン、アポトーシスの解析を行い、運動療法による動脈硬化抑制、脳梗塞二次予防、神経細胞死抑制の解析をしている。本課題は平成 16-17、20-22、23-25、26-28、29 - 令和 2、2 - 5 年度に文科省研究費を獲得して継続した研究を行っている。

2. 温熱物理療法・温泉医学研究（倉林）

温泉の科学と医学を研究し、安全な入浴法を啓蒙している。厚労省科研費、環境省委託事業などによる研究成果を報告した。今年度も引き続き環境省後援の温泉保護管理研修会、健康開発財団主催の温泉利用指導者養成講習会の講師を務めた。また埼玉県薬務課の委嘱で温泉の禁忌・適応症の判定を行った。

3. がん患者の運動管理についてのエビデンスの構築（篠田）

2021 年度の学内グラントの成果を埼玉医科大学雑誌に発表した。2022 年度は、新規に文科省科学研究費を獲得し、東京大学、国際医療センター等との共同研究により、さらなるエビデンスの構築を目指している。

4. 脳梗塞生活期におけるがん発症とメタボリック症候群との関連（間嶋）

成果の一部は、日本リハビリテーション医学会や日本肥満学会などの関連学会で、発表を行ってきた。

5. 脳出血生活期における脳梗塞発症、心筋梗塞発症とメタボリック症候群との関連（間嶋）

成果の一部は、日本リハビリテーション医学会や日本肥満学会などの関連学会で、発表を行ってきた。

6. 脳卒中患者における摂食・嚥下障害の評価とリハビリテーション（前田、鈴木英）.

日本リハビリテーション医学会や日本摂食嚥下リハビリテーション学会などの関連学会で研究成果の発表を行った。

7. サルコペニアの発症因子と機能的予後の解析（前田）

各種疾患におけるサルコペニア発症因子を解析し、機能的予後・転帰を分析し、サルコペニアの発症予防と治療に最適な運動療法のモダリティを開発している。成果の一部を日本リハビリテーション医学会で発表した。次年度はさらに解析を加えて発表していく。

8. リハビリテーション施行中のリスク管理（山内）

2021 年度に成果の一部を日本リハビリテーション医学会で発表した。今後も、外来リハビリテーションを中心に、訓練でのリスクを管理していく。

3-4. 次年度改善計画

1. さらに検討を重ね、運動療法による動脈硬化抑制効果や脳梗塞再発予防の研究を行う。平成 16 年度から継続した課題で文科省科研費を獲得し続けているので、さらに研究を進めていく。

2. 科学的証拠により環境省の定めた温泉禁忌・適応症の改訂を行い、環境省委嘱事業による温泉成分の解析を行い、同省共催の研修会で結果を報告した。

3. 2022 年度は文科省科研費を獲得しており、さらに継続した研究を行っていく。

4. 研究対象としている脳梗塞、脳出血患者のデータ収集を終了し、統計学的検討を実施する

5. 研究対象としている脳梗塞、脳出血患者のデータ収集を終了し、統計学的検討を実施する

6. 次年度は更に症例数を増やすとともに、嚥下障害患者への治療介入効果についても検討する。また、嚥下圧測定検査を継続し、嚥下障害の病態解明と治療に役立てる。

7. 現在症例を蓄積し解析を進めている。途中報告であるが成果の一部を学会報告した。

8. 2019、2020 年度に研究結果の一部を学会に、2021 年度は研究成果を海外学術雑誌に発表した。

4. 診療

急性期一回復期前半に特化した集中的・包括的リハビリテーション：埼玉医大病院および国際医療センターからの亜急性期の患者に対し、1) 悪性疾患や骨転移がんの包括的リハ、2) 脳卒中・心筋梗塞の二次予防を目標とした維持期～回復期での包括的リハ、3) 神経の変性疾患、慢性閉塞性呼吸器疾患を対象とした包括的リハ、4) 脳卒中に対する先端治療（超早期血栓溶解、血管内手術、血管吻合など）や関節リウマチに対する生物学的製剤による治療を受けた患者、5) NICU で治療された超低出生体重児を対象とした包括的リハ、6) 廃用症候群・サルコペニアを対象とした包括的リハ、などを行ってきた。リハビリテーション医療の現場では地域包括ケアシステムと回復期リハビリテーション病院を含め

た機能分担が進んでいる一方で、各病院の機能統合や連携も進行している。本学大学病院でも他科入院中で当科にリハビリテーションを依頼される患者数は増加しており、がんリハビリテーション、呼吸ケア、NST、排尿ケアなど他診療科との合同カンファレンスも増加している。本学の3病院1クリニックとの合同研究会や人事交流はコロナ禍で中止されていたが、研究会を令和6年2月より再開する予定である。

新専門医制度ではリハビリテーション科専門医プログラムの基幹施設として近隣の急性期・回復期リハビリテーション病院および重度心身障害児リハビリテーション施設と統合した研修プログラムを組んでいる。また、東京大学リハビリテーション科専門医プログラム、埼玉東部地域リハビリテーション科専門医プログラム（獨協医大）、国立病院機構埼玉病院専門医プログラム、など他大学等との相互乗り入れをし、広域の医療圏での研修連携をしている。

5. その他.

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

環境省委託事業：温泉経営者管理指導講習会講師（倉林）。環境省「温泉利用施設における硫化水素事故防止策検討委託業務に係る設備構造等基準検討会」座長（倉林）。埼玉県庁委嘱業務：温泉の禁忌症、適応症及び入浴上の注意に係る医学的判定（倉林）。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Japanese Journal of Clinical Oncology Reviewer Board（篠田）、Scientific Reports 査読員（篠田）、PLoS One 査読員（篠田）、Supportive Care in Cancer 査読員（篠田）、Oncology Letters 査読員（篠田）、BMJ Case Reports 査読員（篠田）、Molecular and Clinical Oncology 査読員（篠田）、Journal of Back and Musculoskeletal Rehabilitation 査読員（篠田）、Japanese Journal of Rehabilitation Medicine 査読員（篠田）、Progress in Rehabilitation Medicine 査読員（篠田、倉林）、Advances in Physical Education 査読員（倉林）、Dysphagia 査読員（倉林）、Journal of Neurosciences in Rural Practice 査読員（倉林）、Frontiers in Neuroscience 査読員（倉林）、International Journal of Cerebrovascular Diseases and Stroke 査読員（倉林）、日本老年医学会雑誌査読員（倉林）、日本温泉気候物理医学会雑誌査読員（倉林）。

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

第59回日本リハビリテーション医学会学術集會事務局長（篠田）

東京がんのリハビリテーション研修会講師（篠田）

埼玉県がんリハビリテーション研修会委員長（篠田）

骨転移診療ガイドライン改訂版WG（篠田）

日本リハビリテーション医学会専門医試験委員（篠田）

環境省後援温泉利用指導者養成講習会講師（倉林）

日本温泉気候物理医学会専門医研修会講師（倉林）

日本リハビリテーション医学会学術集會教育講演講師（倉林）

埼玉県薬務課温泉適応・禁忌判定医（倉林）

日本リハビリテーション医学会学術集會教育講演講師（倉林）

日本リハビリテーション医学会学術集會教育講演講師（篠田）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

①Matsubashi A, Tanaka S, Takami H, Nomura M, Ikemura M, Matsubayashi Y, Shinoda Y, Yamada K, Sakai Y, Karasawa Y, Takayanagi S, Saito N: Recurrent glioblastoma metastatic to the lumbar vertebra: A case report and literature review: Surgical oncology. Front Oncol. 16;13:1101552, 2023

②Inooka Y, Yamana H, Shinoda Y, Inokuchi H, Matsui H, Fushimi K, Yasunaga H, Haga N: Predictive Factors for Oral Intake Recovery After Acute Stroke: Analysis of a Japanese Nationwide Inpatient Database. Dysphagia. 37(6):1623-1632, 2023

③Matsunaga A, Yoshida M, Shinoda Y, Sato Y, Kamei J, Niimi A, Fujimura T, Kume H, Igawa Y: Effectiveness of ultrasound-guided pelvic floor muscle training in improving prolonged urinary incontinence after robot-assisted radical prostatectomy. Drug Discov Ther. 16(1):37-42, 2022

④Ando M, Sumitani M, Fuyuki M, Abe H, Shinoda Y, Matsubayashi Y, Oshima Y, Inoue R, Tsuchida R, Uchida K: Imaging features inferring symptom onset due to spinal metastasis progression: a preliminary study. Ann Palliat Med. 11(7):2247-2256, 2022

⑤Yamanouchi Y, Maeda K, Shinoda Y, Majima M, Lee J, Inoue I, Maruyama Y, Kurabayashi H: Can Outpatient Rehabilitation Be Continued During the COVID-19 Pandemic? A Report from a Japanese Regional Medical University Hospital. Arch Rehabil Res Clin Transl. 4(3):100199, 2022

⑥山本悦子, 仲俣菜都美, 間嶋満, 倉林均, 高橋一司, 荒木信夫, 山元敏正: 進行期 Parkinson 病者の嚥下障害に関連する因子の検討. 神経治療学, 39 (3), 408-411, 2022

⑦篠田裕介: 骨・運動器疾患 多発性外骨腫症, 小児疾患診療のための病態生理 3 改訂第 6 版, 小児内科 54 増刊, 677-682, 2022

⑧篠田裕介: C 肩関節 (肩関節周囲炎, 他), 標準リハビリテーション医学 第 4 版, 第 10 章骨・関節疾患, 304-308, 2023

⑨篠田裕介: チームで行う頭頸部癌診療の多職種連携 骨転移診療の立場から, チームで支える頭頸部癌診療. JOHNS 38(12), 1593-1597, 2022

⑩篠田裕介: がん骨転移患者に対するリハビリテーション診療, 骨脆弱性とリハビリテーション診療-脆弱性骨折からがんの転移まで- MEDICAL REHABILITATION 283, 40-47, 2023

【総数: 論文 10 件、学会発表 18 件、学会シンポジウム 5 件、講演 12 件】

6-2. 獲得研究費

文科省科学研究費:

倉林均: 基盤研究(C) 20K11191 運動療法の継続がアポトーシスを抑制し脳梗塞後の神経細胞死を軽減する機序の解析 R2-R4 年度

篠田 裕介: 基盤研究(C) 22K11400 脊椎転移による切迫麻痺病変を CT 画像で検出する AI プログラムの開発 R3-R5 年度

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会開催

第 59 回日本リハビリテーション医学会学術集会 (事務局長) 2023. 6. 23-25 (篠田)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、学生の評価に相応して改善を進め、目標をほぼ達成したと評価している。卒後教育に関しては、新臨床研修医制度や新専門医制度などに相応し、概ね目標を達成したと評価している。研究に関しては、常勤医 3 人 (専攻医除く) で 2 件の文科省科学研究費を取得しており、目標を達成したと評価している。診療に関しては、新規に呼吸器内科がんカンファレンスに参加し、ICU 早期加算も開始しており、目標をほぼ達成したと評価している。その他事項としては、自治体・政府関連委員などへも貢献し、また生涯学習や市民講座などで当科の教育・研究を発信してきて、十分に目標を達成したと評価している。基本学科全体としては、教育、研究、診療、その他についての達成度は約 80%であったと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、講義・実習のさらなる改善を進め、学生からの評価の高い教育を目標として取り組む。卒後教育に関しては、新臨床研修医制度や新専門医制度などに相応した教育を目標とし、初期研修 1 年目の先生も受け入れる体制に変更した。研究に関しては、引き続き競争的研究資金などの獲得をし、運動療法による脳卒中の 2 次予防やサルコペニアの抑制、脊椎転移を自動的に検出する AI プログラムの開発など先端研究に継続して取り組む。診療に関しては、他診療科や他大学、他施設との交流・連携をさらに充実させ、骨転移腫瘍への積極的な運動療法などに取り組む。また、新型コロナウイルス感染症の 5 類移行に伴い、埼玉医大 3 病院 1 クリニックの合同研究会を再開する。その他事項としては、自治体・政府関連委員、生涯学習や市民講座などへのさらなる貢献を目標に取り組む。

1. 28) 麻酔科

1. 構成員

長坂 浩 (NAGASAKA, Hiroshi) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 代表指導教員 (大学院) : 臨床麻酔 : 麻酔指導医 : 医学博士
土井克史 (DOI, Katsushi) : 教授 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 臨床麻酔 : 麻酔指導医 : 医学博士
岩瀬良範 (IWASE, Yoshinori) : 教授 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 臨床麻酔 : 麻酔指導医 : 医学博士
中山英人 (NAKAYAMA, Hideto) : 教授 : 集中治療部専任 : 指導教員 (大学院) : 麻酔指導医 : 医学博士
前山昭彦 (MAEYAMA, Akihiko) : 准教授 : 指導教員 (大学院、短期大学) : 臨床麻酔 : 麻酔指導医 : 医学博士
三枝 勉 (MIEDA, Tsutomu) : 准教授 : 副診療部長 : 指導教員 (大学院) : 臨床麻酔 : 麻酔指導医 : 医学博士
紫藤明美 (SHIDO, Akemi) : 准教授 : 臨床麻酔 : 麻酔指導医 : 医学博士
尾崎道郎 (OZAKI, Michiro) : 講師 : 臨床麻酔 : 麻酔指導医 : 医学博士
納谷一郎太 (NAYA, Ichirota) : 講師 : 臨床麻酔 : 医学博士
西澤秀哉 (NISHIZAWA, Shuya) : 講師 : 外来医長 : 臨床麻酔 : 歯学博士
堀越雄太 (HORIKOSHI, Yuta) : 助教 : 教育副主任 : 臨床麻酔
中村智奈 (NAKAMURA, Tina) : 助教 : 研究副主任 : 臨床麻酔
臣永麻子 (TOMINAGA, Asako) : 助教 : 臨床麻酔
相崎邦雄 (AISAKI, Kunio) : 助教 : 臨床麻酔 : 歯学博士
伊藤直樹 (ITO, Naoki) : 助教 : 臨床麻酔 : 歯学博士
館野 健 (TATENNO, Ken) : 助教 : 臨床麻酔 : 歯学博士
野木武洋 (NOGI, Takehiro) : 助教 : 臨床麻酔
南雲拓海 (NAGUMO, Takumi) : 助教 : 臨床麻酔
岡 泰浩 (OKA, Yasuhiro) : 専攻医 : 臨床麻酔
小肩史佳 (OGATA, Fumika) : 大学院生 : 臨床麻酔
中原なほみ (NAKAHARA, Nahomi) : 研究助手
松本郁子 (MATSUMOTO, Ikuko) : 秘書
井手康雄 (IDE, Yasuo) : 客員教授 : 指導教員 (大学院) : 麻酔指導医 : 医学博士
水上 智 (MIZUKAMI, Satoshi) : 客員准教授 : 術前コンサルト : 医学博士
松本延幸 (MATSUMOTO, Nobuyuki) : 非常勤医師 : ペインクリニック : 医学博士
客員教授 9 名、客員准教授 2 名、客員講師 1 名、非常勤講師 17 名、非常勤医師 27 名

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

麻酔科では、周術期麻酔科学の基礎的知識の習得を目的として、下記内容を目標に教育活動を行った。

目的 : 麻酔科学は解剖学、生理学、薬理学等の知識を必要とし、その上に成り立つ生命機能管理学と考えることができる。臨床解剖学、臨床生理学、臨床薬理学の知識の習得と、これを踏まえた臨床麻酔科学の基礎的な知識の習得を目的とする。更に、近年の臨床麻酔におけるモニターの進歩は著しい。しかし、モニターを過信したために起こる医療事故は後を絶たない。このことから実際の患者の刻一刻と変化する生体変化を五感で感じとり、それに対処する麻酔管理の姿勢の習得を併せて目標とする。臨床実習では、臨床麻酔を麻酔科医と共に実際に見学する。心電図、血圧計、パルス・オキシメータ、BIS モニター、筋弛緩モニター等のモニターからの生体情報と自分自身の五感を働かせ、刻一刻と変化する人体の様子を見学し、それに対処する麻酔管理の経験を目指とする。麻酔科研修医には上級医と共に臨床麻酔に参加し、実際に患者に触れ、脈、体温、皮膚の状態を診察し、実地麻酔を経験することを目的とする。

目標 : 臨床麻酔科学に必要な解剖学 (特に口腔、咽頭、気道、心臓循環等)、生理学 (特に呼吸生理、輸液、酸塩基平衡、代謝の管理等)、薬理学 (吸入麻酔薬、静脈麻酔薬、局所麻酔薬、筋弛緩薬、オピオイド等) を学ぶ。更にペインクリニックについて、痛みの生理と薬理について学び、臨床麻酔を理解することを目標とする。更に、医学生の臨床実習では上級医の麻酔を見学し臨床麻酔を実地に理解する。また心肺蘇生法を学び、人形を用いて心肺蘇生法が実施できることを目標とする。麻酔科臨床研修医においては、上級医と共に実地臨床麻酔に参加し、術前術後診察、臨床麻酔を通じて、点滴確保、気管挿管、麻酔維持等、臨床麻酔において五感を使った安全な麻酔管理の習得を安全に目標とする。

2-2. 教育実績

「卒前教育」

埼玉医科大学医学部生の講義、クリニカル・クラークシップ、医学部 5 年生の実習 [BSL]、並びに埼玉医科大学短期大学看護学科 1 年生の講義を担当した。

2022 年度も新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、当施設に於いてもマスク、ゴーグル、アルコール消毒、パーテーション等の厳重な感染対策の下、講義室での講義が計画された。しかし、緊急事態宣言が継続するため、そ

の多くがインターネットを用いた遠隔講義となった。実習に際しては院内では必ず常時マスク、ゴーグル、アルコール消毒、密にならないよう全員で感染防止に努め、講義と実習を実施した。以下担当者を示す。

(1)2022年度 埼玉医科大学医学部4年生講義

- ①2022年8月30日2時限 心肺停止 [成人BLS, ACLS] (小山 薫)
- ②2022年8月30日3時限 心肺停止 [小児BLS, ACLS] (小山 薫)
- ③2022年9月27日2時限 導入 麻酔の歴史と総論 (長坂 浩)
- ④2022年9月27日3時限 術前評価[予定手術の麻酔・緊急手術の麻酔] (長坂 浩)
- ⑤2022年9月28日4時限 輸液・酸塩基平衡 (照井克夫)
- ⑥2022年9月28日5時限 麻酔における気道・呼吸管理 (北村 晶)
- ⑦2022年9月28日6時限 麻酔における循環管理 (北村 晶)
- ⑧2022年10月11日1時限 全身麻酔(吸入麻酔・静脈麻酔・筋弛緩薬) (土井克史)
- ⑨2022年10月11日2時限 局所麻酔(局所麻酔薬など) (土井克史)
- ⑩2022年10月11日3時限 産科麻酔・小児麻酔 (土井克史)
- ⑪2022年10月11日4時限 麻酔に伴う重大な合併症 (三枝 勉)
- ⑫2022年10月11日5時限 鎮静と疼痛管理(術後痛・ペインクリニック・緩和医療) (三枝 勉)

・埼玉医科大学医学部医学科4年生には診療基礎(救急・麻酔)としての試験と再試験を行った。

(2)2022年度 埼玉医科大学医学部6年生講義

- ①2022年9月4日2時限 外科総論4 (土井克史)
- ②2022年9月12日1時限 外科総論6 (土井克史)
- ③2022年9月12日3時限 外科総論8 (小山 薫)

・埼玉医科大学医学部医学科6年生には総合試験、各卒業試験問題を出題した。国際医療センター、総合医療センターと分担した。

(3)2022年度 埼玉医科大学短期大学看護学科1年生講義

- ①2022年7月21日5時限 疾病治療論I 生体侵襲5[院内感染対策・ME機器の管理]WEB講義 . . . (前山昭彦)
- ②2022年7月25日5時限 疾病治療論I 生体侵襲6[外傷とショック・救急医療]対面講義 . . . (前山昭彦)
- ③2022年8月1日2時限 疾病治療論I 生体侵襲7[麻酔科学]WEB講義 (前山昭彦)

・埼玉医科大学短期大学看護学科1年生には「外科総論(感染症・救急・麻酔)」として、本試験と再試験用の筆記試験問題を作成し、試験を実施した。点数配分は外科総論100点満点の内、麻酔・救急は20点分であった。

(4)埼玉医科大学医学部医学科5年生BSL指導

4名を1グループとしてBSL5日間のうち火、水、木曜日は大学病院と国際医療センターに2名ずつに分かれて実習を行った(総合医療センターでは2~3名を個別に分担)。実習5日間の内に各自数例の麻酔症例を担当し1症例についてレポート作成を実施した。

月 . . . 症例検討会、臨床麻酔実習(担当教員:全指導医)

オリエンテーション、麻酔科学概論、救急蘇生等(担当教員:土井、三枝、中村)

火 . . . 症例検討会、臨床麻酔実習(担当教員:全指導医)

水 . . . 症例検討会、臨床麻酔実習(担当:全指導医) ペインクルズス(担当教員:三枝、井手)

木 . . . 症例検討会、臨床麻酔実習(全指導医) レポート作成指導(担当教員:尾崎、中村、土井)

金 . . . 症例検討会、臨床麻酔実習(担当教員:全指導医)

ペインクリニック実習、レポート評価・実習総括(担当教員:土井、尾崎、長坂)

・埼玉医科大学医学部医学科5年生BSLには実習レポートと期末および総合試験を行った。

(5)クリニカル・クラークシップ

医学部3年生から6年生まで各学年に応じた臨床実習が行われた。小講義と手術室での臨床麻酔に接し、臨床への興味と臨床能力を養った。医局員全員が臨床麻酔時に指導を担当した。

クリニカル・クラークシップに関しては埼玉医科大学の評価方法(学則第12条第3項)に従い、A・B・C・Dをもって総括的評価基準で、100~80点をA、79~70点をB、69~65点をC、65点未満をDとし、A・B・Cを合格、Dを不合格とした。再試験で合格の場合には65点(C)とした。ただし、臨床実習3コースのクリニカル・クラークシップ Step1の各ユニット、クリニカル・クラークシップ Step2の5年次分は、評価基準AをS・Aの2段階に分けた。さらにB・C・Dとして、S・A・B・Cを合格、Dを不合格とした。なお、複数の診療科で実習を行うユニットでは、ユニット全体で評価した。

「卒後教育」

臨床研修医に対する教育は、手術室での実際の麻酔を中心に、外来での術前患者診察、評価(術前回診)およびペ

インクリニック外来の見学を行った。

「大学院教育」

大学院生1名の臨床麻酔と研究指導を実施した。

「気管挿管認定救急救命士」取得を目指した救急救命士の気管挿管実習

手術室にて、全身麻酔症例の患者に全身麻酔導入時、気管挿管実習指導をし、30例成功による認定資格取得に協力した。必ず事前に患者に説明し承諾書を得て実施した。気管挿管実習には麻酔科指導医が立ち会い、実施した。

気管挿管認定救急救命士取得のための気管挿管実習では、30症例以上を目標とし、安全に気管挿管できた場合「合格」とし、「1症例」としてカウントした。気管挿管困難症例では患者安全第一とし、交代し麻酔科医師が気管挿管した。この場合は症例数にカウントしなかった。全員が30例の目標に達した。

2-3. 達成度評価

教育実績から、医学生、看護学生、救急救命士の教育について、解剖学、薬理学、生理学的な麻酔科学に必要な知識の習得と、モニター下と五感を使っての実習を安全に実施できたという点で、順調に活動できた。特に、新型コロナウイルス感染症の続く中、上記の教育が順調に実施できたことは、医局員一人一人の感染症意識の高まりによる成果と考えられる。以上より、本年度の目標については十分達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度は、依然として新型コロナウイルス感染症が続く中、常にマスク、ゴーグル、アルコール消毒等の感染症対策を万全にして、2023年度も教育に全力で取り組むことを目標として活動する。

「卒前教育」

上記を踏まえ、次年度は臨床実習では気管挿管実習、臨床麻酔実習、心肺蘇生実習、クルズスを実施する。新型コロナウイルス感染症の対策をしながら、周術期麻酔科学の基礎的知識の習得、並びに五感を使った麻酔管理の習得を目標として活動する。

「卒後教育」

上記を踏まえ、次年度は麻酔科研修医に対し、周術期麻酔科学の基礎的知識の習得、並びに五感を使った麻酔管理の習得を目的とする。更に麻酔の術前診察に際して、医師としての基本的な診察態度、方法、記録のまとめ方を指導し、その上で麻酔を実施するための問題点のピックアップと処理の仕方を指導する。実際の臨床麻酔に際しては、心電図、血圧計、パルス・オキシメータ、BISモニター、筋弛緩モニター等からの生体情報と自分自身の五感を活用し、患者に触れ、脈、体温、皮膚の状態等を診察し、消化器外科、産婦人科、整形外科、形成外科、耳鼻科、小児外科等、症例配分を工夫し幅広い手術麻酔と全身管理を体験する。常時、新型コロナウイルスの感染対策を十分に、次年度は当麻酔科オリジナルの改訂版麻酔科研修のテキストを使用し、より満足度の高い麻酔科研修になることを目標として活動する。

「大学院教育」

上記を踏まえ、次年度は更に複数の大学院生を迎え、幅広く、更に多様な症例麻酔の中から興味ある研究分野を提供し、学位取得をめざし指導することを目標として活動する。

「救急救命士気管挿管実習」

上記を踏まえ、気管挿管認定救急救命士取得のための救急救命士の気管挿管実習では、今後も積極的に各消防署からの要請を受け入れ、全員の所定の症例数獲得と気管挿管技術の向上を目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

目的：大学医学部の機関として、基礎医学から臨床医学まで幅広い麻酔領域の中から、新しい医療に相応しい研究を実施し、最新医療に貢献することを目的とする。

目標：研究成果を学会発表、論文発表することを目標とする。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. デスフルラン曝露後のラットの肝臓に対する網羅的遺伝子発現解析(野木武洋、奥田晶彦、他)：大学雑誌掲載
2. インフルエンザワクチン接種後の全身麻酔が免疫の獲得に与える影響(野木武洋、奥田晶彦) 進行中
3. 悪性高熱症の発症機序の解明(市原靖子) 外来における筋生検：進行中
4. 遺伝子解析によるアセトアミノフェンの鎮痛機序(南雲拓海、星島宏、三枝勉、井手康雄、長坂浩、土井克史) 進行中
5. PONVについて(小肩史佳)：進行中
6. 微小循環障害に対する神経ブロックの治療効果(松本延幸)：進行中
7. ビデオ喉頭鏡の臨床応用(岩瀬良範)：日本麻酔・集中治療テクノロジー学会にて発表した
8. 麻酔と血液凝固機能(東 俊晴, 星島 宏)：進行中
9. 脊髄幹麻酔による帝王切開術における合併症についての研究(土井克史)：進行中
10. 筋弛緩薬と筋弛緩拮抗剤(前山昭彦、土井克史)：症例発表を作成中である。次年度学会発表予定

3-3. 達成度評価

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、日本麻酔科学会、日本臨床麻酔学会、日本ペインクリニック学会、日本小児麻酔学会ほか、各種麻酔科関連学会が中止、またはインターネットを用いた形式の開催となり、現地参加や発表の

機会が縮小、または失われたことは残念であった。しかし、そのような状況の中で、本年度も各研究が進められ、学会発表、論文発表が行われたことは高く評価できる。以上より、本年度の目標については、研究実績が十分に達成できた」と評価する。

3-4. 次年度改善計画

2023 年度は、新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症へ移行となり、学会の形態も変化していくことが考えられる。今後も新しい時代に即した研究と発表を継続することを掲げ、達成に向けて取り組む。

1. デスフルラン曝露後のラットの肝臓に対する網羅的遺伝子発現解析（野木武洋、奥田晶彦）：論文作成中
2. インフルエンザワクチン接種後の全身麻酔が免疫の獲得に与える影響（野木武洋、奥田晶彦）：研究実施開始
3. 術後の悪心・嘔吐について（小肩史佳）：データ取得し、論文作成中
4. 遺伝子解析によるアセトアミノフェンの鎮痛機序の解明（南雲拓海・他）：学会発表・論文作成
5. 悪性高熱症の発症機序の解明（市原靖子）：悪性高熱症友の会を主催し悪性高熱症患者データベースの蓄積、患者-医師、患者-患者間の交流を通して悪性高熱の予防を図ると共に、CICR 診断法の精度向上と白血球を使用した侵襲度の少ないスクリーニング法の開発に向けて基礎的研究を進めている。
6. 微小循環障害に対する神経ブロックの治療効果（松本延幸）：星状神経節ブロックや上頸神経節近傍レーザー照射の突発性難聴と顔面神経麻痺治療への応用効果を臨床で検討している。
7. ビデオ喉頭鏡の臨床応用（岩瀬良範）：より有用性かつ安全性の高いビデオ喉頭鏡の開発に携わり現在も進行中。
8. 麻酔と血液凝固機能（東 俊晴, 星島 宏）：麻酔薬の血液凝固に及ぼす影響を臨床と基礎研究で検討している。
9. 脊髄幹麻酔による帝王切開術における合併症についての研究（土井克史）：帝王切開術の安全性を検討して行く。
10. 筋弛緩薬と筋弛緩拮抗剤（前山昭彦）：筋弛緩剤と筋弛緩回復剤の患者への安全な使用についてそのエビデンスを求め、研究を進めている。次年度学会発表予定

4. 診療

新型コロナウイルスの感染拡大の中、臨床麻酔部門では中央手術室での各科手術や検査の全身麻酔、硬膜外麻酔、脊髄くも膜下麻酔、伝達麻酔を担当した。当病院では夜間緊急手術が多いので、可能な限り 2 名以上の麻酔科医（うち 1 名は標榜医以上）による当直体制で 24 時間診療に臨んでいる。令和 4 年度における埼玉医科大学病院総手術症例数は 6,394 症例（昨年度 6,152 症例）であった。その中で全身麻酔管理症例は 4,536 症例（昨年度 4,419 症例）でその全例を麻酔科が管理した。外来部門では通院の疼痛患者を中心に他科入院患者も含めて持続硬膜外ブロック、星状神経節ブロック、透視下ブロックなどを主体とした神経ブロック法やレーザーなどの光線治療、鍼灸、漢方などの東洋医学的方法を用いて治療している。新患者数は 172 名（昨年 126 名）で増加した。臨床麻酔部門、ペインクリニック部門とも総力を挙げて可能な限りの診療ができた。当麻酔科では医局員一人一人の感染対策により、安全で高度な麻酔業務の提供ができた。次年度以降も感染対策に努め、更にスタッフの増員、診療内容の充実と小児、産科、脊椎外科麻酔部門や集中治療部門などの専門分野の拡充を目指す。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

長坂 浩：Journal of Anesthesia、日本歯科麻酔学会誌 等

土井克史：Journal of Anesthesia、JA Clinical Reports、Clinical and Experimental Obstetrics and Gynecology、日本臨床麻酔学会誌、日本ペインクリニック学会誌、埼玉医科大学雑誌等

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

- ① 日本麻酔科学会代議員（岩瀬良範、土井克史）
- ② 日本麻酔集中治療テクノロジー学会 常任理事・評議員（岩瀬良範）
- ③ 外科系学会社会保険委員会連合麻酔委員（岩瀬良範）
- ④ 日本麻酔科学会総務委員会社会保険専門部会員（岩瀬良範）
- ⑤ 埼玉県西部第二地域メディカルコントロール協議会委員（岩瀬良範）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 野木武洋「デスフルラン曝露後のラットの肝臓に対する網羅的遺伝子発現解析」埼玉医科大学雑誌 Vol149 No2
- ② 臣永麻子、土井克史、岡泰浩、中村智奈、三枝勉、尾崎道郎、長坂浩「口腔内アフタを有するペーチェット病患者の子宮鏡下内膜切除術に対してマスクを用いた全身麻酔によって管理した経験：麻酔 71(4)426-428. 2022
- ③ Katsusi DOI, Yoko UEDA, Noritaka IWAMACHI. Use of EMLA cream for skin anesthesia and epidural insertion

in the patients with cesarean delivery: A prospective double-blind randomized clinical trial. Saudi J Anesth 2022;16(2): 145-149

④Takumi NAGUMO, Hiroshi NAGASAKA, Koichi MARUYAMA, Takahiro MIHIRA, Tsutomu MUEDA, Aiji SATO; Hemodynamic response related to the Airway Scope versus the Macintosh laryngoscope. A systematic review and meta-analysis with trial sequential analysis. Medicine; 102(89); e33047.2023

⑤小肩史佳「平山病を合併した患者に対する歯科治療時の歯科麻酔時の全身麻酔」日本歯科麻酔科学会総会学術集会 2022年10月・東京

⑥岡泰浩、土井克史、臣永麻子、三枝勉、長坂浩「脊髄くも膜下麻酔での帝王切開手術中の低酸素血症の頻度と危険因子の検討―後向き研究」日本麻酔科学会第69回学術集会 神戸 2022年6月

⑦土井克史「31 硬膜外麻酔と脊くも膜下麻酔」山陰道明、廣田和美監修 最新主要文献とガイドラインで見る麻酔学レビュー2022、総合医学社、東京 p174-177、2022年6月25日

⑧三枝勉、井手康雄「慢性疼痛と光線療法」麻酔; 72: 250-256. 2023

⑨井手康雄「LLLTに関する海外の研究の現状」日本レーザー治療学会 浦安・千葉 2022年6月

⑩前山昭彦「修正型電気痙攣療法(mECT)で多数の頭頂部紫斑を認めた麻酔から教訓を得た1症例」日本麻酔科学会・関東甲信越・東京支部学術集会 2022年10月WEB発表

【総数：論文 9件、学会発表 9件、講演 1件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、医学部学生、看護学生に対する講義、実習を十分に実施でき、本年度も医師国家試験、看護師国家試験の高い合格率に寄与できたと評価している。大学院教育に関しては、興味のある分野に即した研究題材から研究を進め、論文作成につなげたと評価している。救急救命士の気管挿管実習に関しては、所定の症例数獲得に貢献できたと評価している。研究に関しては、医療の現場に即した題材からの研究、学会発表、論文発表ができたことと評価している。診療に関しては、今年度も新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大の中で、常時、感染対策として、マスク、ゴーグル、アルコール消毒、密にならないよう配慮した結果、麻酔科のクラスター感染による閉鎖が一度もなく、無事手術麻酔を提供できたと評価している。その他の事項に関しては、安全に麻酔業務を実施し、病院機能を保つことができたことと評価している。麻酔科全体としては、医局員全員が努力し、講義、臨床教育、学会発表、論文発表ができたことと評価している。コロナ禍にも関わらず、手術症例が昨年よりも増加し、高度で安全な医療を多くの患者に提供できたと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、麻酔方法だけでなく、次年度、安全で快適な全身管理を目標としてモニターと五感を駆使し、更に安全な麻酔管理を目標として取り組む。大学院教育に関しては、教育体制を改善し、臨床の他に自己研鑽をする時間を設け、次年度、新しい知見の論文発表ができる事を目標に取り組む。研究に関しては、国内の麻酔科学会での発表、論文作成は勿論、2018年まで毎年のように海外での国際麻酔科学会で発表していたが、ここ数年間、新型コロナウイルス感染症でそれが困難であった。現時点ではまだ新型コロナウイルス感染症の方向性が不確定であるが、次年度、Euroanaesthesia (ESA)等の国際学会への演題応募、発表することを目標として取り組む。また勤務体制を改善し、次年度、臨床業務の他、個々が研究発表や論文作成の時間が取れるよう、体制の構築を目標として取り組む。診療に関しては、次年度、さらに安全で高度な臨床麻酔の提供を目標として取り組む。その他の事項に関しては、次年度、医局員全員が心身共に健康で、安心して勤務できる職場の構築を目標として取り組む。

1. 29) 救急科

1. 構成員

高平修二 (TAKAHIRA Shuji) : 准教授: 診療部長: 運営責任者: 教育主任: 研究副主任: 救急医学: 博士
芳賀佳之 (HAGA Yoshiyuki) : 教授: 教育主任: 集中治療部部長: 救急医学・集中治療: 博士
石黒睦子 (ISHIGURO Chikako) : 助教: 救急医学
松本佳祐 (MATSUMOTO Keisuke) : 助教: 救急医学・緩和医療: 博士
内藤友亮 (NAITO Yusuke) : 助教: 救急医学
清水美砂子 (SHIMIZU Misako) : 救急救命士
足助和真 (ASUKE Kazuma) : 救急救命士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、卒前教育への積極的参加、講義、問題作成、入学試験等を担当し、卒後教育としてER型救急での正確な診断・トリアージ、初期治療を行い専門科医師へ診療を引き継ぐ能力の育成に力を入れるべく教育活動を行った。

2-2. 教育実績(担当者)

救急センターで救急患者の鑑別診断、様々な病態に対する初期治療の修練
救急医学一般を中心としたセミナー・講義
外傷の初期診断と縫合・創処置
ICUにおける重症患者管理

2-3. 達成度評価

卒前教育については前年度と同様で、医学部1年、4年生および6年生の講義も担当している。
また保健医療学部や関連施設、埼玉県救急救命士養成所での講義を行っている。
患者数が多く初期臨床研修には適した環境であるといえるが、初期臨床研修2年間のうち3ヶ月の救急部門ローテーションが義務付けられたため、配属される研修医数が多く、一人一人に手厚く指導できていない部分もある。

2-4. 次年度改善計画

卒後教育における on-the-job training に関してはすべての研修医に最低限の修練を積ませることはできているが、医局内のセミナー・講義など off-the-job training はまだ不十分な水準と言わざるを得ない。
次年度はさらにスタッフの増員を図り、きめ細かい教育、指導を行い、医療技術の伝達を第一に考えてゆきたい。さらに災害医療、環境異常(熱中症など)など救急に関連した知識を研修医だけでなく、看護師、薬剤師を含めた医療スタッフ全体に普及させることに努力したい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

オートプシーイメージング(Ai)のさらなる普及

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

Aiの実施と結果の解析

死後の解剖率が極端に低い我が国では解剖の代替策としてAiの普及が図られるべきで、死因特定が困難な急患センターECPCでの外来死亡症例を中心に死後のCT撮影を積極的に施行している。ECPCだけでなく臨床各科においてもAiの重要性が認知され、ECPCでのAi施行率は60%以上に上昇している。

3-3. 達成度評価

院内でのAiの認知度を高めることに成功していると評価でき、次年度以降も施行率を高めてゆくためAiに関する死後画像読影に関する知識普及の努力を続ける。

3-4. 次年度改善計画

外来死亡が多いECPCを中心に症例を蓄積し、死後画像診断技術の向上を目指す。

4. 診療

① 卒前教育への関与を深め、より広範な教育業務を担当するよう努める。

- ② ER 型救急医療を実践することで軽症～重症の多彩な救急患者に対応してゆく。救急科は地域の救急医療のニーズにこたえることを第一に、増加する救急搬送患者に対応すべく医局のスタッフ増員を図る。
- ③ 大学病院の災害拠点病院指定に伴う災害医療体制の整備もまだ道半ばであるため、資器材の整備、職員の教育、DMAT の災害への即応体制整備を図る。BCP の策定にも積極的に関与する。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

- ① 埼玉西部第二メディカルコントロール協議会委員：高平修二
- ② 埼玉県地域災害医療コーディネーター：芳賀佳之：高平修二
- ③ 埼玉DMA T 運用協議会委員：芳賀佳之

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

- ① 日本救急医学会 ICLS コース企画運営委委員：高平修二
- ② 日本内科学会 JMECC 評価委員会委員：高平修二
- ③ 日本救急医学会関東地方会 幹事：高平修二

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 高平修二、清水美砂子、矢野裕也、井上勉、長坂浩、芳賀佳之、川村勇樹、コロナ禍での院内 BLS 講習会の報告、第 50 回日本救急医学会総会、東京、2022 年 10 月 19～21 日
- ② 芳賀佳之、松本佳祐、石黒睦子、内藤有亮、喜屋武玲子、上條吉人、高平修二、AI（人工知能）による救急再搬送の予測可能性、第 50 回日本救急医学会、東京、2022 年 10 月 19 日
- ③ 清水美砂子、川村勇樹、矢野裕也、井上勉、長坂浩、芳賀佳之、高平修二、院内 BLS 講習会受講率 100%への取り組み、第 50 回日本救急医学会総会、東京、2022 年 10 月 19～21 日
- ④ 内藤友亮、高平修二、石黒睦子、松本佳祐、喜屋武玲子、上條吉人、中谷宣章、白崎文隆、新野捺美、岩崎由希子、岩瀬哲、芳賀佳之、アルコール性ケトアシドーシスは見逃されている！第 73 回日本救急医学会関東地方会学術集会、東京、2023 年 2 月 18 日
- ⑤ 石黒睦子、喜屋武玲子、中山英人、芳賀佳之、救命に成功し、神経学的後遺症を認めなかった重症一酸化炭素中毒の 1 例、第 50 回日本集中治療医学会、京都、2023 年 3 月 3 日
- ⑥ 清水美砂子、石倉力、中村大海、鈴木善樹、野口清人、喜屋武玲子、芳賀佳之、第 28 回日本災害医学会総会、岩手、2023 年 3 月 9 日
- ⑦ 喜屋武玲子、芳賀佳之、石黒睦子、診断に苦慮した一酸化炭素暴露後の呼吸不全の 1 例、第 50 回日本集中治療医学会、京都、2023 年 3 月 3 日
- ⑧ 川村 勇樹、石橋 敬一郎、辻 美隆、高平 修二、作山 洋貴、金田 光平、杉山 智江、佐藤 義文、大西 京子、高橋 美穂、山田 泰子、森 茂久、Zoom ミーティングを利用して行った医学部 1 年生に対する BLS 演習、第 14 回日本医療教授システム学会総会、2022 年 3 月 17～18 日
- ⑨ 川村 勇樹、辻 美隆、石橋 敬一郎、高平 修二、井上 勉、清水 美砂子、佐藤 義文、大西 京子、山田 泰子、森 茂久、初期研修医の導入研修で行った胸骨圧迫の評価、医学教育(0386-9644)53 卷 Suppl. Page227(2022. 07)
- ⑩ 中谷 宣章、白崎 文隆、佐々木 秀悟、横山 尚人、青柳 龍太郎、草野 武、木下 俊介、小林 威仁、高平 修二、廣岡 伸隆、中元 秀友、COVID-19 ワクチンの小児接種における大人との相違点、日本救急医学会雑誌(0915-924X)33 卷 10 号 Page767(2022. 10)

【総数：論文 0 件、学会発表 10 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、改善の余地あり。

研究に関しては、不十分である。

診療に関しては、ある程度、行っている。

基本学科全体としては特に研究分野で不十分と評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、授業内容を改善し、次年度、国家試験に準じた内容の授業を目標として取り組む。

研究に関しては、次年度、

- ・アルコール性ケトーシスの疫学研究
- ・心肺蘇生講習会に対する研究
- ・BLS や ICLS 講習会でのアンケート結果の統計学的解析
- ・症例発表における文献的考察を纏めて英語論文の作成に取り組む。

診療に関しては、働き方改革を推し進め次年度、救急車応需率の上昇を目標として取り組む。

また医療事故・医療過誤のない診療。感染対策の徹底。病歴作成期間の短縮と質の向上。パラメディカルからの信用・信頼関係の構築。救急科入院患者の在院日数の短縮、売り上げの上昇、保険査定の減少を目指す。

1. 30) 東洋医学診療科

1. 構成員

(専任職員・医師)

三村俊英 (MIMURA, Toshihide) : 教授 : 運営責任者 : リウマチ膠原病、臨床免疫学 : 博士

磯部秀之 (ISOBE, Hideyuki) : 講師、診療部長 : 教育主任 : 研究主任 : 漢方診療、内科疾患 : 博士 (2022.8 月末まで)

鈴木朋子 (SUZUKI, Tomoko) : 教授 : 総合診療内科兼任 : 漢方診療、呼吸器疾患 : 博士

秋山雄次 (AKIYAMA YUJI) : 教授 : リウマチ膠原病科兼任 : リウマチ膠原病、漢方診療 : 博士

(専任職員・鍼灸師)

山口 智 (YAMAGUCHI, Satoru) : 准教授、教育副主任 : 研究副主任 : 鍼灸診療、内科・神経内科疾患・整形外科疾患・支持医療 : 博士

小内 愛 (KOUCHI, Ai) : 鍼灸師

堀部 豪 (HORIBE, Go) : 鍼灸師 : 修士

井畑真太郎 (IBATA, Shintaro) : 鍼灸師 : 修士

(非常勤職員・医師)

石井弘子 (ISHI, Hiroko) : 非常勤講師 : 平成クリニック 院長 : 漢方診療、麻酔科疾患

磯部八郎 (ISOBE, Hachiro) : 非常勤講師 : 漢方診療、内科・整形外科疾患

関谷 剛 (SEKIYA, Takeshi) : 非常勤講師 : 東京大学未来ビジョン研究センター客員准教授 : 漢方診療、アレルギー疾患 : 博士

齋藤晶 (SAITO, Akira) : 非常勤講師 : 和光耳鼻咽喉科 : 漢方診療、耳鼻咽喉科疾患 : 博士

佐藤知穂 (SATO, Chiho) : 非常勤医師

(非常勤職員・鍼灸師)

久保亜紗子 (KUBO, Asako) : 非常勤鍼灸師 : 日本大学歯学部生理学講座 兼任講師 : 博士

松浦悠人 (MATSUURA, Yuto) : 非常勤鍼灸師 東京有明医療大学 保健医療学部 鍼灸学科 助教 : 博士

藤田洋輔 (FUJITA, Yosuke) : 非常勤鍼灸師 : 学校法人呉竹学園東京医療専門学校鍼灸科・鍼灸マッサージ科教員 : 修士

村橋昌樹 (MURAHASHI, Masaki) : 非常勤鍼灸師 : 修士

浅香 隆 (ASAKA, Takashi) : 非常勤鍼灸師

中原 崇 (NAKAHARA, Takashi) : 非常勤鍼灸師

黛 奈奈 (MAYUZUMI, Nana) : 非常勤鍼灸師

田口知子 (TAGUCHI, Tomoko) : 非常勤鍼灸師

皆方英樹 (MINAKATA, Hideki) : 非常勤鍼灸師

山本彩子 (YAMAMOTO, Ayako) : 非常勤鍼灸師

(研究員・鍼灸師)

金子聡一郎 (KANEKO, Soichiro) : 研究員 鍼灸師 : 東北大学大学院医学系研究科 地域総合診療医育成寄附講座 (東北大学大学院医学系研究科 漢方・統合医療学寄附講座) 助教 : 博士

井瀬美由季 (INOSE, Miyuki) : 研究員 鍼灸師

田中夏美 (TANAKA Natsumi) : 研究員 鍼灸師

井上学 (INOUE Manabu) : 研究員 鍼灸師

佐藤千尋 (SATOU Tihiro) : 研究員 鍼灸師

南雲明美 (NAGUMO Akemi) : 研究員 鍼灸師

吉岡馨 (YOSIOKA Kaori) : 研究員 鍼灸師

山田真希 (YAMADA Maki) : 研究員 鍼灸師

正木和歌枝 (MASAKI Wakae) : 研究員 鍼灸師

河村直子 (KAWAMURA Naoko) : 研究員 鍼灸師

浅田裕子 (ASADA Yuko) : 研究員 鍼灸師

藤倉光慈 (FUZIKURA Koji) : 研究員 鍼灸師

2. 教育

2-1. 目的・目標

2001年3月、医学教育モデルコアカリキュラムの「診療に必要な薬物の基本」という一般目標の中に、到達目標として「和漢薬を概説できる」との一文が盛り込まれ、2011年3月には、「和漢薬（漢方薬）の特徴や使用の現状について概説できる」と改訂された。その結果、医学部の講義の中に漢方医学や漢方薬に関する教育が正式に含まれることになった。その後、新しい基盤カリキュラムが2016年に公表され、漢方薬とともに鍼灸の項も含まれている。

埼玉医科大学では、幾つかの医学部の講義の中で、漢方医学や漢方薬の講義が含まれているが、当科では、漢方医学全般に対する講義を行い、漢方に対する正しい認識を構築出来る医学生を育てることを目標としている。同時に鍼灸治療に関しても講義を行っているが、漢方と鍼灸は東洋医学の「車の両輪」とも言われていて、両者を併用することの重要性についても理解してもらおう。

また、教育は医学部の学生だけでなく、卒後教育も大変重要であり、当科で卒後教育を行うと共に、他大学等の外部の講師も務め、本領域の普及に努めて行きたい。

2-2. 教育実績（担当者）

低学年のうちから臨床で役立つ理論的思考力や批評力を養うため、昨年度までと同様、医学部 1.2 年生を対象として、医学部の選択必修講義・良医への道 1 「（東洋医学）東洋医学と西洋医学の比較文化論」の講義を担当した。また、医学部 5 年生に補完医療として、漢方医学の講義を行った。

1.2 年生の選択講義では、西洋医学と比較しながら東洋医学の特徴について考察し、ディスカッションを多く取り入れた。1 年生も対象に含まれるため、平易な講義を心掛け、漢方や鍼灸の特徴を理解してもらうことに重点を置いた。

医学部 5 年生の講義では、なぜ、漢方医学が必要なのか？や主要な漢方処方とその運用、EBM と漢方など、より実践的な講義を行った。

卒後教育としては、鍼灸部門の卒後教育（研修生課程、特別研修生課程、長期特別研修生課程、施設派遣研修生課程等）を平成 24 年度より開始しているが、令和 4 年度も順調に行われた。学外においては、外部（東京医科大学、筑波大学、東京有明医療大学等）の非常勤講師も務め、東洋医学の啓発・普及に努めた。さらに、鍼灸部門と関係する外部教育機関（呉竹医療専門学校）からの病院見学実習も受け入れた。

2-3. 達成度評価

1.2 年生の講義では、受講前後での東洋医学に対する認識の変化や疑問点等をレポートで提出させ、その内容を踏まえ、最後の講義ではディスカッションを中心とした。受講前後での東洋医学に対する認識は大きく変わり、東洋医学に対する理解が向上した。また、医学部 5 年生に対する講義後には、具体的な症候に対して、個別ではあるが質問に訪れる学生が 10 名強みられ、西洋医学同様に関心の有る学生が存在することが示された。

2-4. 次年度改善計画

次年度以降は、講義内容の充実および高学年に対する実習等の実施を目標としたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標

現代医療における漢方や鍼灸の有効性と有用性を明確にすることを目的とする。漢方や鍼灸を現代医学的観点から検討、評価するため、他科との共同研究を積極的に推進し、現代医療における漢方や鍼灸の位置づけ、その役割を明確にする。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

① 日本温泉気候物理医学会研究助成

鍼刺激が慢性腰痛患者の脳血流に及ぼす影響—Arterial spin-labeled MRI を用いた検討—

② 鍼刺激がうつ病患者の脳血流に及ぼす影響—Arterial spin-labeled MRI を用いた検討—：共同研究施設

③ 中枢性疼痛に対する鍼治療効果の検討 神経内科と共同研究

④ 当科における末梢性顔面神経麻痺に対する鍼治療の効果 神経耳科、神経内科と共同研究（論文投稿済）

末梢性顔面神経麻痺患者の顔面神経を目標とした鍼通電刺激と ENoG 値の関係：横断研究

⑤ 薬剤で期待すべき効果の得られなかった片頭痛患者の鍼治療の有用性の検討 神経内科と共同研究

⑥ 国立研究開発法人 日本医療研究開発機構（AMED）：タキサン系抗癌剤治療による末梢神経障害に対する鍼治療の有効性に関するランダム化比較試験（多施設共同研究）

⑦ 金属アレルギー患者に対する鍼治療について

⑧ 埼玉医科大学病院若手研究者育成研究費

鍼通電療法を行った末梢性顔面神経麻痺症例の長期予後

3-3. 達成度評価

- ① 本学総合医療センターIRBの承認を得て、同センター整形外科税田教授らと連携し、研究を推進し現在データを解析中。
- ② 本学総合医療センターIRBの承認を得て、健康成人15名、うつ病患者11名のデータを取得し、専門医学会に報告および論文作成中。
- ③ 後方視的観察研究として本院IRBの承認を得て、診療録からデータを取得中。日本神経学会に英語論文として作成中。
- ④ 末梢性顔面神経麻痺の実態分析を行い、顔面神経学会をはじめ関係医学会に発表し、論文投稿し全日本鍼灸学会雑誌に原著として掲載。
- ⑤ 入院中の頭痛患者の実態分析を行い、日本頭痛学会をはじめ関係医学会に発表し、現在論文作成中。
- ⑥ AMEDとしての研究は終了となったが、島根大学医学部附属病院高度医療推進等基金で継続となり、本学国際医療センター支持医療科と共同で研究を推進している。
- ⑦ 後方視的観察研究として本院IRBの承認を得て、金属接触アレルギーについて診療録からデータを取得、日本温泉気候物理医学会をはじめ発表し、現在論文作成中。
- ⑧ 研究助成に採択され、埼玉医科大学病院IRBの承認を得た。現在はデータを収集中。

3-4. 次年度改善計画

次年度以降も、鍼灸関連の基礎・臨床研究をさらに発展させると共に、その成果を海外に発信していきたい。また、漢方関連、漢方と鍼灸の併用等の研究成果を示せるような研究も目標としたい。

4. 診療

西洋医学的な治療で期待すべき効果の得られない患者を中心に漢方や鍼灸の併用を行い、症状の軽減とQOLの向上が示され、患者満足度を高めることが可能であった。今後はこの特質を生かしつつ、他科や他の医療機関とも十分連携を行い、開かれた東洋医学科を目指す

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

齋藤：埼玉県国民健康保険診療報酬委員会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

磯部：（一社）日本東洋医学会 編集幹事（2022.8月末まで）

鈴木：Frontiers in Nutrition associate editor

山口：日本東洋医学会雑誌 査読委員

現代鍼灸学 編集顧問

久保：（公社）全日本鍼灸学会 編集委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

磯部：（一社）日本東洋医学会 代議員

（一社）日本東洋医学会 関東甲信越支部 副支部長

（一社）日本東洋医学会 専門医制度委員会 関東甲信越支部 地区委員長

（一社）日本東洋医学会 関東甲信越支部 埼玉県部会 会長

埼玉鍼灸学会 副会長

現代医療鍼灸臨床研究会 監事

鈴木：（一社）日本東洋医学会 代議員（理事長推薦）

（一社）日本東洋医学会 渉外担当委員

（一社）日本東洋医学会 辞書編纂委員

齋藤：（一社）日本東洋医学会 代議員

（一社）日本東洋医学会 関東甲信越支部 埼玉県部会 会長

（一社）日本耳鼻咽喉科学会埼玉県地方部会 常任理事

（一社）日本耳鼻咽喉科学会埼玉県保険医療委員長

（一社）日本臨床耳鼻咽喉科医会代議員

（一社）埼玉県医師会保険委員会委員

山口：(公社) 日本鍼灸師会 代議員
 (公社) 埼玉県鍼灸師会 理事・副会長
 (一社) 日本東洋医学会 代議員
 (一社) 日本東洋医学会 学術教育委員
 (一社) 日本東洋医学会 関東甲信越支部 埼玉県部会 幹事
 (公社) 全日本鍼灸学会 代表理事・副会長
 (公社) 全日本鍼灸学会 関東支部長
 埼玉鍼灸学会 会長
 日本自律神経学会 評議員
 (一社) 日本温泉気候物理医学会 評議員・学術委員
 日本頭痛学会 評議員
 (一社) 日本東洋医学系物理療法学会 会長
 日本疼痛心身医学会 理事
 日本神経治療学会 評議員
 日本良導絡自律神経学会 名誉理事
 現代医療鍼灸臨床研究会 副会長
 維持透析患者の補完・代替医療研究会 世話人副代表
 学校法人城西医療学園 評議員
 小内：現代医療鍼灸臨床研究会 理事
 埼玉鍼灸学会 幹事
 堀部：(公社) 埼玉県鍼灸師会 学術委員会委員
 (公社) 全日本鍼灸学会 学術部員・教育研修部員・関東支部学術委員
 現代医療鍼灸臨床研究会 評議員
 埼玉鍼灸学会 幹事
 鍼灸臨床研究トレーニング ファシリテーター
 井畑：(一社) 日本東洋医学系物理療法学会 学術部員
 (一社) 日本東洋医学会 関東甲信越支部 埼玉県部会 事務局長
 現代医療鍼灸臨床研究会 評議員
 久保：日本生理学会 評議員
 松浦(悠)：(公社) 全日本鍼灸学会 臨床情報部 エビデンス委員会委員
 藤田：(公社) 日本鍼灸師会 代議員
 (公社) 神奈川県鍼灸師会 理事・副会長・総務部長
 (公社) 全日本鍼灸学会 学術部員・40周年記念誌編集委員・鍼灸臨床研究トレーニングファシリテーター
 金子：(公社) 全日本鍼灸学会 教育研修部員・診療ガイドライン委員・鍼灸臨床研究トレーニングファシリテーター
 村橋：(公社) 全日本鍼灸学会 電子カルテ作業部会

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① TAKAYAMA S, YOSHINO T, SUZUKI T, ET AL. CONVENTIONAL AND KAMPO MEDICINE TREATMENT FOR MILD-TO-MODERATE COVID-19 *INTERN MED.* 62(2): 187-199, 2023
- ② TATSUMI K, SUZUKI T, SEKIYA T ET AL. : EFFICACY OF KAMPO MEDICINE IN RESPIRATORY DISEASE *TRADIT KAMPO MED.* 9(3):198-199, 2022
- ③ ASAKO KUBO, SHIORI SUGAWARA, KOICHI IWATA, SATORU YAMAGUCHI, KAZUE MIZUMURA (2022): MASSETER MUSCLE CONTRACTION AND CERVICAL MUSCLE SENSITIZATION BY NERVE GROWTH FACTOR CAUSE MECHANICAL HYPERALGESIA IN MASTICATORY MUSCLE WITH ACTIVATION OF THE TRIGEMINO-LATERAL PARABRACHIAL NUCLEUS SYSTEM IN FEMALE RATS. *HEADACHE.* 62:1365-1375.
- ④ 山口 智, 久保 亜抄子. 鍼治療の適応症とその作用機序. *ペインクリニック.* 2022. 44. 2. 169-176.
- ⑤ SUZUKI T SYMPOSIUM S1-16 KAMPO MEDICINE FOR NON-TUBERCULOUS MYCOBACTERIAL PULMONARY DISEASE AUG. 26, 2022 1ST INT' L SYMPOSIUM ON KAMPO MEDICINE
- ⑥ 井畑 真太郎, 山口 智, 山元 敏正. 当科において鍼治療の対象となった頭痛患者の実態調査. 第 50 回日本頭痛学会総会. 2022 年 11 月. 東京.
- ⑦ 斉藤晶. めまい・耳鳴り. 日本東洋医学漢方医学書籍編纂委員会編. 漢方医学大全. 東京. 静風社 2022 : 178-180

⑧公益社団法人東洋療法学校協会編集. 山口智、堀部豪、松浦悠人、久保亜抄子（執筆協力）. 新版 東洋医学臨床論（はりきゅう編）. 2022年. 南江堂.

⑨ 齋藤品. 耳鳴り・難聴・めまいの基礎と臨床、第54回現代医療鍼灸研究会、オンライン配信、2022年10月

⑩山口 智. 鍼灸治療の適応症とその効果のメカニズム. 第75回日本自律神経学会総会. 2022年10月. 埼玉.

【総数：論文 13 件、学会発表 15 件、講演 16 件、著書 4 件】

6-2. 獲得研究費

山口（研究協力者）：島根大学医学部附属病院高度医療推進等基金 タキサン系抗癌剤治療による末梢神経障害に対する鍼治療の有効性に関するランダム化比較試験（多施設共同研究）

6-3. 受賞

堀部豪 全日本鍼灸学会 高木賞奨励賞

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

1) 第1回埼玉鍼灸学会認定研修C講座開催（（公社）埼玉県鍼灸師会 第1回学術講習会）

令和5年1月28日（日） オンライン

2) 令和4年度 全日本鍼灸学会関東支部認定A講座

令和4年5月28日（日） オンライン

3) （社）第29回日本東洋医学会埼玉県部会

令和5年2月26日（日） オンライン

4) 第40回全日本鍼灸学会関東支部学術集会

令和4年11月26日（日） オンライン

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

・教育について

医学部1.2年生に対する講義は、限られたコマ数で、漢方医学や鍼灸治療についての講義を行い、学生の東洋医学に対する理解を向上させることができた。また、高学年（医学部5年生）に対する漢方医学の講義を実施し、東洋医学科の存在意義を示すことが出来た。

・研究について

鍼灸関連は外部資金の獲得、基礎・臨床研究が順調に行えており、研究成果の関係医学会誌への論文掲載も進んでいる。漢方関連は、レビュー、症例報告を中心に英文誌も含め掲載されている。

・診療について

西洋医学的に難治性疾患や治療法のない症候を中心に、当科へ紹介された患者は、漢方薬や鍼灸治療を併用することで症状の軽減やQOLの向上がみられている。受け入れにはまだ余裕があり、今後さらなる患者数の増加が必要であると考えている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

・教育について

次年度は、講義内容の充実や高学年に対する実習の導入等を検討していきたい。また漢方教育に関連したグラントへの申請を検討しており、卒前・卒後教育の充実を図っていく。

・研究について

着手している研究をさらに発展させると共に、その成果を国内のみならず海外にも発信していきたい。また、漢方関連、漢方と鍼灸の併用に関する研究や、多職種連携の研究も検討していきたい。

・診療について

漢方および鍼灸とも、より安定・充実した診療を行うと伴に、他科や他の医療機関との連携を深め、患者数の増加を目指していきたい。そのためには、受け身の診療だけでなく、積極的に他科コンサルトを当科から働きかけ相互理解を深め、開かれた東洋医学科を示すことが重要である。また一般の方々にもわかりやすい漢方や鍼灸の有用性の紹介を示すことも必要であり、東洋医学科のホームページの充実など漢方や鍼灸の啓発・普及活動にも務めていきたい。

1. 31) (1) 放射線科 (放射線科)

1. 構成員

小澤 栄人 (KOZAWA, Eito) : 教授 : 診療部長 : 教育主任, 研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 放射線診断学 : 博士
新津 守 (NIITSU, Mamoru) : 教授 : 副診療部長 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 放射線診断学 : 博士
井上 快児 (INOUE, Kaiji) : 准教授 : 研修担当医長 : 放射線診断学 : 博士
大澤 威一郎 (OOSAWA, Ichiro) : 講師 : 放射線診断学 : 大学院生
猿谷 真二 (SARUYA, Shinji) : 講師 : 放射線診断学 : 博士
原 佑樹 (HARA, Yuki) : 助教 : 放射線診断学 : 博士
高橋 大雄 (TAKAHASHI, Masao) : 助教 : 放射線診断学, IVR
松浦 紘一郎 (MATSUURA, Koichiro) : 助教 : 放射線診断学 : 大学院生 : 博士
土橋 佐紀 (TSUCHIHASHI, Saki) : 助教 : 放射線診断学 : 大学院生
星野 江里 (HOSHINO, Eri) : 助教 : 放射線診断学
清水 宏一 (SHIMIZU, Hirokazu) : 助教 : 放射線診断学
田中 小百合 (TANAKA, Sayuri) : 助教 : 放射線診断学
山本 裕也 (YAMAMOTO, Yuuya) : 助教 : 放射線診断学
海津 茜 (KAIZU, Akane) : 助教 : 放射線診断学
白鳥 泰良 (SHIRATORI, Taira) : 助教 : 放射線診断学
渡邊 環 (WATANABE, Meguru) : 客員教授 : 放射線診断学 : 博士
田中 淳司 (TANAKA, Junji) : 客員教授 : 放射線診断学 : 博士
牛見 尚史 (USHIMI, Takashi) : 客員准教授 : 放射線診断学 : 博士
根岸 幾 (NEGISHI, Chikashi) : 非常勤講師 : 放射線診断学 : 博士
谷坂 愛 (TANISAKA, Megumi) : 非常勤講師
名川 恵太 (NAGAWA, Keita) : 非常勤講師 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

卒前医学教育における放射線医学の基本方針は、放射線医学の考え方を理解し、臨床医学において正しく応用できるようにすることである。そのため、少人数の講義と実習体制ならびに自主的な学習プログラムを作成して運用している。卒業教育についても、日常臨床以外にも定期的なクルズスや症例報告を行うことで、専攻医の診断専門医への学習プログラムとしている。博士課程の履修者も、各自本人の希望分野を選ばせて、その分野のスペシャリストになるべく、指導を行なっている。

2-2. 教育実績 (小澤栄人)

講義は原則として講師以上の教員が担当するが、より専門知識の豊富な医師は助教でも講義を担当している。4年生の画像 unit では、小澤教授がユニットディレクターを、井上講師がサブユニットディレクターを担っている。4及び5年生のCC Step1ではプログラムに従って若手医師の助教も積極的に参画している。CCの基本方針は自主的な画像診断への参加と能動的な学習意欲の高揚であり、画像診断端末に直接触れることを通じて実際の症例を数多く経験することを第一義とする。また7年前より5年生対象のCC Step2を開始し、4週間の画像診断の実習を計2回(計4名)行っている。

その他:保健医療学部における放射線医学概論講義を担当。卒業教育としては、専攻医3人(1年目海津助教、2年目山本助教、田中助教)の研修を行っている。大学院教育としては、博士課程4人(4年生松浦助教、大澤講師、土橋助教、3年生名川非常勤医師)が在籍しており、今年3人が学位を取得した。

2-3. 達成度評価

学生各自の画像診断の知識向上に成果が見られた。学生の講義は各教員ごとに人事考課において自己評価を行い一定の水準を維持している。CCについては出席と履修態度によって個別評価を行っている。

2-4. 次年度改善計画

講義で得た知識はそのままでは実践に結び付かない。CCでの実習の場で、自ら考える姿勢での実地教育を行っている。次年度はこの自立学習方式をさらに発展させる。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

放射線、磁気共鳴の技術と方法論を用いて形態と機能の両面からの病態の画像化をはかる研究。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 婦人科の研究グループ Nagawa K, Kishigami T, Yokoyama F, Murakami S, Yasugi T, Takaki Y, Inoue K, Tsuchihashi S, Seki S, Okada Y, Baba Y, Hasegawa K, Yasuda M, Kozawa E Diagnostic utility of a conventional MRI-based analysis and texture analysis for discriminating between ovarian thecoma-fibroma groups and ovarian granulosa cell tumors. J Ovarian Res. 2022 May 25;15(1):65. の論文を報告
2. 慢性腎臓病に関するMRIに関する研究グループ Hara Y, Nagawa K, Yamamoto Y, Inoue K, Funakoshi K, Inoue T, Okada H, Ishikawa M, Kobayashi N, Kozawa E. The utility of texture analysis of kidney MRI for evaluating renal dysfunction with multiclass classification model. Sci Rep. 2022 Aug 30;12(1):14776. の論文を報告
3. 骨のMRIによる解析についての研究グループ Niitsu M, Saruya S, Sakaguchi K, Watarai K, Yoneyama M, Katsumata Y, Inoue K, Kozawa E. Motion-robust MR imaging of the shoulder using compressed SENSE MultiVane. Eur J Radiol Open. 2022 Nov 5;9:100450. の論文を報告
4. 脳神経の研究グループ Osawa I, Kozawa E, Yamamoto Y, Tanaka S, Shiratori T, Kaizu A, Inoue K, Niitsu M. Contrast Enhancement of the Normal Infundibular Recess Using Heavily T2-weighted 3D FLAIR. Magn Reson Med Sci. 2022 Jul 1;21(3):469-476. の論文を報告。

3-3. 達成度評価

各教室員はそれぞれの専門分野に応じたプロジェクトを持ち、個々のプロジェクトが教室全体に周知されることにより教室全体としての取り組みとなる。既存の診断モダリティごとのプロジェクトの他に、小澤教授の担当する、腎臓のFunction MRIや婦人科のMRIのテクスチャ解析の研究や、新津教授の担当する関節軟骨の高分解能、高コントラスト詳細MR画像の研究、大澤講師の担当するガドリニウム造影剤の脳脊髄液減少症への応用が、基礎と臨床の両面で進められ、昨年までの国際学会での発表及び論文による発表も多数行われ、世界をリードしている。本年度は5つの論文発表が行えており、今後もこの数字を維持していきたい。

3-4. 次年度改善計画

放射線医学の領域は機器・知見ともに進歩がきわめて早く、かつ領域が臨床医学のほぼ全域にわたる。したがって限られた人数ですべてをカバーすることは難しいが、臨床診療と並行しつつ上述したような基礎的研究も進められている。各教室員の研究成果は国内および国際学会で発表するとともに英文または和文の論文として順次刊行していきたい。

4. 診療

令和4年度CTは約3.2万件、MRIは約1.4万件を実施した。今後も迅速、正確な画像診断を目指し、臨床各科の期待、信頼に応えるように効率的な運用を目指す。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本医学放射線学会誌編集委員(新津)

JJR, MRMS, Clinical radiology, JMRI, Radiology Case Report 査読委員(小澤)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本医学放射線学会代議員(小澤)

日本磁気共鳴医学会代議員(新津)

日本磁気共鳴医学会選奨委員会委員長(新津)

関東地方会世話人(小澤)

関東地方会世話人(新津)

日本医学放射線学会編集委員会委員(新津)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Niitsu M, Saruya S, Sakaguchi K, Watarai K, Yoneyama M, Katsumata Y, Inoue K, Kozawa E. Motion-robust MR imaging of the shoulder using compressed SENSE MultiVane. *Eur J Radiol Open.* 2022 Nov 5;9:100450.
 - ② Hara Y, Nagawa K, Yamamoto Y, Inoue K, Funakoshi K, Inoue T, Okada H, Ishikawa M, Kobayashi N, Kozawa E. The utility of texture analysis of kidney MRI for evaluating renal dysfunction with multiclass classification model. *Sci Rep.* 2022 Aug 30;12(1):14776.
 - ③ Nagawa K, Kishigami T, Yokoyama F, Murakami S, Yasugi T, Takaki Y, Inoue K, Tsuchihashi S, Seki S, Okada Y, Baba Y, Hasegawa K, Yasuda M, Kozawa E. Diagnostic utility of a conventional MRI-based analysis and texture analysis for discriminating between ovarian thecoma-fibroma groups and ovarian granulosa cell tumors. *J Ovarian Res.* 2022 May 25;15(1):65.
 - ④ Osawa I, Kozawa E, Yamamoto Y, Tanaka S, Shiratori T, Kaizu A, Inoue K, Niitsu M. Contrast Enhancement of the Normal Infundibular Recess Using Heavily T2-weighted 3D FLAIR. *Magn Reson Med Sci.* 2022 Jul 1;21(3):469-476.
 - ⑤ Inoue T, Kozawa E, Ishikawa M, Kobayashi N, Okada H. The relationship between imaging features of diffusion-weighted imaging and prognosis of chronic kidney disease. *Kidney Int.* 2022 May;101(5):1083.
 - ⑥ Mashimo Y, Tsuchihashi S, Tsutsui K, Arai K, Tsuji Y, Numai T, Kameda K, Nishizawa K, Kovacs M, Tanaka S, Watanabe H, Naruse Y, Ohmura M, Ishida N, Iwasaki T, Hiruma G, Miyazaki N, Takemura R, Nagashima K, Sato Y, Ohtsu Y, Nakano T, Aida N, Iizuka I, Kato H, Kobayashi Y, Senbonmatsu T. Synergistic Effect of Motivation for the Elderly and Support for Going out. *J Pers Med.* 2022 Jul 30;12(8):1257.
 - ⑦ 大澤威一郎. 特別講演 「脳脊髄液漏出症のMRI -Leak に灯 (フレア) を」 第1回日本脳脊髄液漏出症学術学会. 2022年4月. 姫路.
 - ⑧ 小澤栄人、教育講演 「子宮筋腫ありだけでない画像診断」第58回日本医学放射線学会秋季大会 東京
 - ⑨ 原 佑樹, 名川恵太, 關 智史, 井上 勉, 岡田浩一, 石川雅浩, 小澤栄人. Texture Analysis of Kidney MRI : Machine Learning-based Evaluation of Renal Dysfunction, 第81回日本医学放射線学会総会, 2022年4月. 横浜
 - ⑩ 土橋佐紀, 清水宏一, 関智史, 井上快児, 長谷川幸清, 美山優, 安田政実, 馬場康貴, 小澤栄人. MRI テクスチャ解析を利用した子宮癌肉腫と子宮内膜癌の診断能 Evaluation of uterine carcinosarcoma and uterine endometrioid carcinoma using MR Imaging-based texture analysis. 第81回日本医学放射線学会総会, 2022年4月
- 【総数：論文 6 件、学会発表 2 件、講演 2 件】

6-2. 獲得研究費

- AMED 脳脊髄液減少症班 大澤 威一郎 分担
科学研究費基盤研究 B 双極性障害トリオ試料におけるポリジェニックリスクスコアを用いた画像一遺伝子研究
小澤栄人 分担
科学研究費 基盤研究費 C 個別化治療戦略のための子宮内膜癌のMRI テクスチャ解析に基づく診断法の確立
小澤栄人 研究代表者
科学研究費 若手研究 MRI を用いた脳脊髄液減少症に伴う内リンパ水腫の可視化と耳症状の発症機序の解明
大澤威一郎 研究代表者
病院若手研究者育成研究費 3D FLAIR を用いた嗅窩における造影効果の解析 松浦鉦一郎
バイエルアカデミックサポート 3 テスラ MRI を用いた慢性腎臓病患者の個別化治療戦略に向けたテクスチャ解析に関する研究 原佑樹 研究代表者
埼玉医科大学 50 周年記念特別研究費 腎 functional MRI と AI による慢性腎臓病の進行リスク評価システムの構築
小澤栄人 分担

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

推定器学習装置、推定器学習方法、及び、推定器学習プログラム PCT/JP2021/037615

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育、研究、診療のいずれにおいても概ねの目標は達成された。また教室員の増加とともに、いずれの活動も充実化

している。本年度は、1名の学位授与者が誕生した。本年度は、科学研究費を基盤(c)及び若手研究で新たに2名獲得できた。研究また新たな独自の研究テーマに着手し、今年は4つの論文を出すことができた。診療業務においては臨床各科への迅速・正確な画像診断サービスを最優先事項として努力し、よく診療日までにはほぼ100%の読影を達成した。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

さらに当科の発展のためには医局員特に診断専門医の増員は必須であり、そのため若い医師への指導及び獲得に努めたい。そのために卒前・卒後教育に注力するとともに、内外から注目される研究をまい進する。また臨床各科との協調・協力診療を前進させ、その期待に応えられる放射線科を目指したい。

1. 31) (2) 放射線科 (放射線腫瘍科)

1. 構成員

阿部 孝憲 (ABE, Takanori) : 准教授 : 博士
斎藤 哲 (SAITO, Satoshi) : 助教
川俣 郁馬 (KAWAMATA, Ikuma) : 助教
鈴木 健之 (SUZUKI, Kenji) : 客員准教授 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

放射線治療は癌治療の三大療法のうちの一つとして非常に大きな役割を持っている。近年、高齢化社会の進行などで放射線治療に対する期待は高まっており、全ての学生に放射線治療の基本原則を理解してもらい、学生がどのような科に進むとしても自身が担当する患者に適切な治療法を選択できるよう知識を持ってもらう。また、放射線治療の分野は治療法の進化が早く、様々な最先端治療が開発され、臨床研究も盛んである、学生には最先端の治療に触れてもらい、臨床研究や治療法開発についてもその雰囲気を感じてもらえればと考えている。

2-2. 教育実績 (担当者)

放射線腫瘍学教室では医学部三年生にたいして診療の基本としての放射線生物学・放射線治療・被曝と防護についてと血液系疾患における放射線治療 (関 智史) の2単位を担当した。保健医療学部では放射線防護・健康管理 (川俣郁馬)、放射線治療の基礎 (関智史) が1単位ずつ講義をおこなった。看護学部では放射線治療の基礎および防護 (川俣郁馬)、放射線の基礎 I 総論 (舟越和人)、放射線治療 II 各論 (関智史) が担当した。看護専門学校では電離放射線とヒトとの関わり、電離放射線の臨床への応用 (関智史) の2単位の講義を行った。少人数のBSLでは放射線治療計画装置を使った臨床実習を鈴木健之・関智史が担当した。クリニカルクラークシップにおいても少人数で放射線治療の現場に触れて理解を深める実習を行った。

2-3. 達成度評価

前年度から引き続いての体制で教育・指導に当たることとなったが、現在の構成員の中で分担を行い学生への教育を行うことができたと考える。

2-4. 次年度改善計画

放射線治療の基礎と臨床における実際を理解しやすいような講義や実習・指導を行い放射線治療への興味・関心を高めることを目指す。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

1) 新規照射法の安全性、有効性を解明する

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

III 期肺癌に対する治療計画の最適化に関する機械学習の研究

III 期肺癌に対する新規薬物療法と放射線治療の相互作用の解明

3-3. 達成度評価

1) 新規照射法の安全性、有効性を解明する

III 期肺癌に対する治療計画作成の自動化に向けて、機械学習用のデータの抽出を完了し、治療計画作成支援アルゴリズムを開発中である。

III 期肺癌に対する強度変調放射線治療の安全性と有効性について複数の英語原著論文を発表した

I 期肺癌に対する定位放射線治療について、高線量を用いた新規照射法の安全性と有効性について複数の英語原著論文を発表した。

進行子宮頸癌に対する新規照射法について安全性と有効性について英語原著論文を発表した

3-4. 次年度改善計画

放射線治療における AI、遠隔医療、IoT の活用について研究を行っていきたい。

4. 診療

通常の照射に加えて、体幹部定位照射、前立腺癌に対する強度変調放射線治療を行っている。件数は例年 350 件前後であるが、2022 年度は 489 件と増加した。次年度は埼玉医科大学国際医療センター放射線腫瘍科との連携をさらに密にし、また院内での適応症例の掘り起こしにも取り組み、高精度放射線治療を含めた件数を増加させていく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

① Abe T, Iino M, Saito S, Aoshika T, Ryuno Y, Ohta T, Igari M, Hirai R, Kumazaki YU, Miura YU, Kaira K, Kagamu H, Noda SE, Kato S. Comparison of the Efficacy and Toxicity of Concurrent Chemoradiotherapy and Durvalumab and Concurrent Chemoradiotherapy Alone for Locally Advanced Non-small Cell Lung Cancer With N3 Lymph Node Metastasis.

Anticancer Res. 2023 Feb;43(2):675-682.

② Aoshika T, Abe T, Iino M, Saito S, Ryuno Y, Ohta T, Igari M, Hirai R, Kumazaki YU, Noda SE, Kato S. Safety and Efficacy of Palliative Radiotherapy (25 Gy × 5 Fractions) for Symptomatic Pelvic Tumors. Anticancer Res. 2022 Dec;42(12):6099-6103.

③ Abe T, Iino M, Saito S, Aoshika T, Ryuno Y, Ohta T, Igari M, Hirai R, Kumazaki Y, Miura Y, Kaira K, Kagamu H, Noda S, Kato S. Simple method for evaluating achievement degree of lung dose optimization in individual patients with locally advanced non-small cell lung cancer treated with intensity modulated radiotherapy. Thorac Cancer. 2022 Oct;13(20):2890-2896.

④ Aoshika T, Noda SE, Abe T, Kumazaki Y, Hirai R, Igari M, Saito S, Ryuno Y, Iino M, Ohta T, Kato S. Results of computer tomography-based adaptive brachytherapy in combination with whole-pelvic- and central-shielding-external beam radiotherapy for cervical cancer. Brachytherapy. 2022 Nov-Dec;21(6):783-791.

⑤ Ryuno Y, Abe T, Iino M, Saito S, Aoshika T, Oota T, Igari M, Hirai R, Kumazaki Y, Kaira K, Kagamu H, Ishida H, Noda SE, Kato S. High-dose stereotactic body radiotherapy using CyberKnife® for stage I peripheral lung cancer: a single-center retrospective study. Radiat Oncol. 2022 Jul 19;17(1):128.

【総数：論文 5 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育については前年度に引き続き、医学部、保健医療学部、看護学科の講義およびBSLを構成員で分担し、放射線診療の基礎、放射線治療一般について講義・実習を通じて体得できるよう心掛けた。診療においては、常勤医退職の影響で減少があったが、その後、常勤医は確保されたため、患者数の回復を目指す。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

診療において高精度放射線治療の件数を増やし、より短期間で安全かつ効果的な放射線治療を行うよう心掛ける。

1. 31) (3) 放射線科 (核医学診療科)

1. 構成員

松成一朗 (MATSUNARI, Ichiro):教授、診療部長、外来医長、教育員、研究員:脳核医学、心臓核医学:博士
久慈一英 (KUJI, Ichiei):教授:(埼玉医科大学国際医療センターとの兼担):指導教員(大学院):脳核医学、心臓核医学、腫瘍核医学:博士
瀬戸 陽 (SETO, Akira):講師:(埼玉医科大学国際医療センターとの兼担):教育員、研究員:脳核医学、腫瘍核医学:博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

卒前教育では、放射性トレーサを用いた核医学画像診断・治療の基礎的知識を学ぶ。卒後教育では検査適応を含めた臨床核医学診断技術を習得し、専門医習得を目指す。大学院では、さらに核医学研究者として英語で論文作成することを目的とする。

2-2. 教育内容 (担当者)

卒前教育

- ・放射性トレーサを用いた核医学画像診断・治療の基礎的知識の習得 (久慈一英)
- ・放射性医薬品の体内動態と各種病態における変化の理解と解釈 (久慈一英)
- ・Bedside learning, CC (久慈一英)

卒後教育

- ・検査適応を含めた核医学診断技術の習得 (山根登茂彦)
- ・適応を含めた核医学治療技術の習得 (久慈一英)
- ・放射性トレーサを用いた核医学画像診断の臓器別専門的知識の習得 (久慈一英)

大学院教育

- ・実用実験医学講義 (核医学を用いた統計画像解析) (松成一朗)
- ・放射性トレーサを用いた核医学画像診断に関する研究 (久慈一英)
- ・心臓分子イメージング研究 (樋口隆弘)
- ・専門医教育 (松成一朗、久慈一英、瀬戸 陽)

その他

- ・保健医療学科放射線概論核医学講義 (久慈一英)
- ・日本医療科学大学腫瘍放射線核医学講義 (久慈一英)

2-3. 達成度評価

卒前教育:50%、卒後教育:70%、大学院教育、70%

2-4. 次年度改善計画

卒前教育:CC step 1 では、現場を見て体験することにより核医学に興味をもってもらい、ティーチングファイルの画像を実際に見て考えてもらうことから学習につなげている。講義でも、学生が興味を持つように限られた講義時間内で内容を絞って行った。今後も内容を厳選して、講義後の問題提示などを行って、核医学への興味を喚起し、自主的に核医学の勉強をできるようにしていく。クリニカルクラークシップでは、SPECTやFDG-PET/CTの検査実施から読影を体験することで、核医学を実践する。ただ、昨年度と同様、新型コロナウイルスの影響で多大な影響が出た。講義については、ハイブリッド配信で行った。今後は、現場での実習が多くなることが予想されるので、それに対応したい。

卒後教育:実際の核医学検査の適応や実施法について、指導医の元で経験を積んでいる。読影を実際に行い、臨床経験を蓄積し、専門医資格の習得につなげている。専門医取得のためのプログラムを具体的なものにしていくことが求められている。

大学院教育:大学院講義を1コマ担当した。

全ての活動は、国際医療センター核医学科と一体的に運用する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

臨床核医学に関して、他科との共同研究を推進し、診断・治療に直結した臨床研究を行う。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト)

半導体検出器を用いた全身用 SPECT/CT 装置による検査時間の大幅な短縮の検討

3-3. 達成度評価

・現在の SPECT で主流となっているのはアンガー型ガンマカメラであり、ヨウ化ナトリウムクリスタルに光電子増倍管を組み合わせ、ガンマ線を電気信号に変換することで画像を得ている。Cadmium zinc telluride (CZT) 検出器は、ガンマ線を直接電気信号に変換するため、エネルギー分解能が高くコントラストの良い画像が得られる。また、光電子増倍管を必要としないため、非常にコンパクトである。CZT 検出器を用いた SPECT は、小動物用装置や心臓専用装置、乳房専用装置などが開発され、その優れた性能により高画質であるのみならず短時間収集や被曝量低減などの面でも従来型 SPECT を凌駕することが様々な報告で明らかになっている。当診療科では、日本での第1号機として本装置を導入し、基礎的性能評価を行うとともに2核種同時収集心筋 SPECT や検査時間短縮などに関する研究を実施して

きた。前年度は、心筋 SPECT や骨スキャンの超短時間収集の可能性を検討した。本年度は、これを更に進め、骨 SPECT など種々の検査時間の短縮や被曝量の軽減に加え、定量化による診断精度の向上などに関する研究を進めた。達成度 90%。

3-4. 次年度改善計画

次世代型検出器である CZT 検出器を用いた最新型 SPECT/CT 装置の日本で 1 号機が導入され、既に研究を実施している。2023 年度は、最新型のリング型 SPECT 装置を導入予定であり、種々の検査時間の短縮や被曝量の軽減などに関する研究をさらに進める予定である。

4. 診療

核医学科は、放射性同位元素を利用した診断、治療、臨床研究を行う部門である。核医学診断の利点は、静注のみで低侵襲で安全であること、臓器の機能を局所的に測定できること、全身を対象とする検査では全身を一度に調べられることである。放射性同位元素を用いた治療では、甲状腺機能亢進症に対する放射性ヨードに加え、放射性ラジウム（ゾーフィゴ）による前立腺癌骨転移治療、放射性モノクローナル抗体（ゼパリン）による悪性リンパ腫の内照射療法を行っている。本年度当院では、2,512 件の検査、治療が行われた。最新型 SPECT/CT が 1 台導入され、検査時間の短縮など患者負担の軽減を計っている。2023 年度はリング型 SPECT の導入が予定されており、更に患者負担の軽減を図る予定である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

松成一朗

査読委員 Annals of Nuclear Medicine, European Journal of Nuclear Medicine and Molecular Imaging, European Heart Journal: Cardiovascular Imaging, Journal of Nuclear Medicine

久慈一英

編集委員 核医学, Annals of Nuclear Medicine, International Journal of Radiology

査読委員 日本医学放射線学会, Japanese Journal of Radiology, Journal of Clinical Oncology and Therapeutics

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

松成一朗

日本核医学会評議員、埼玉核医学研究会世話人、日本心臓核医学会理事、日本核医学会関東甲信越地方会幹事

久慈一英

日本核医学会理事、金沢大学十全医学会評議員、埼玉核医学研究会世話人、小児核医学研究会幹事、西部放射線医学セミナー幹事、日本医学物理学会「医学物理士ミニマム講習会」講師

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1. Yamane T, Matsusaka Y, Fukushima K, Seto A, Matsunari I, Kuji I. Atlas of non-pathological solitary or asymmetrical skeletal muscle uptake in [(18)F]FDG-PET. Japanese journal of radiology 2022.
2. Yamane T, Takahashi M, Matsusaka Y et al. Satisfied quantitative value can be acquired by short-time bone SPECT/CT using a whole-body cadmium-zinc-telluride gamma camera. Scientific reports 2021;11:24320.

【総数：論文 2 件、学会発表 0 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第 91 回日本核医学会関東甲信越地方会（2019 年 6 月 29 日、東京）

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

・教育：

- ・学部教育：BSL(CC step 1)では、現場を見て体験することにより核医学に興味をもってもらい、ティーチングファイルの画像を実際に見て考えてもらうことから学習につなげている。講義でも、学生が興味を持つように限られた講義時間内で内容を絞って行った。しかし、新型コロナの影響で多大な影響が出た。
- ・卒後教育：実際の核医学検査の適応や実施法について、指導医の元で経験を積んでいる。読影を実際に行い、臨床経験を蓄積し、専門医資格の習得につなげている。専門医取得のためのプログラムを具体的なものにしていくことが求められている。

- ・大学院教育：大学院講義を1コマ担当した
- ・研究：次世代型検出器である CZT 検出器を用いた最新型 SPECT/CT 装置の日本で1号機が導入され、既に研究を実施し、論文などの成果を上げている。
- ・診療：大学病院では、半導体検出器を用いた最新型 SPECT/CT が1台導入され平成29年7月より検査を開始した。2020年度は新型コロナの影響で検査数が減少する傾向が見られたが、2021-2022年度は回復傾向であった。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

- ・教育：
 - ・学部教育：2023年度は対面での講義や実習が増えることが予想され、多彩な状況に対応できるようにする必要がある。
 - ・卒後教育：卒後教育でもカンファレンスなど対面での教育機会の増えることが予想され、これに対応する必要がある。
 - ・大学院教育：リモートでの講義であっても十分な学習効果が得られるよう工夫する必要がある。
- ・研究：2023年度は最新型のリング型 SPECT 装置を導入予定であり、短時間検査や被曝量低減, 定量による診断精度の向上など、患者負担の大幅な軽減に繋がる研究をさらに推進する。
- ・診療：2023年度は最新型のリング型 SPECT 装置を導入予定であり、本装置を用いて検査時間の短縮や被曝量低減など患者負担の軽減を計ることで検査数の正常化を目指す。

1. 32) 神経精神科・心療内科

1. 構成員

松尾幸治 (MATSUO, Koji) 教授：診療部長：代表指導教員(大学院)：神経画像学：博士
桑原斉 (KUWABARA, Hitoshi) 教授：診療副部長：教育主任：指導教員(大学院)：児童青年期精神医学：博士
松岡孝裕 (MATSUOKA, Takahiro) 准教授：研究主任：指導教員(大学院)：精神科救急医学、神経生理学(脳波)：博士
新井久稔 (ARAI, Hisatoshi) 准教授：医長(病棟)：指導教員(大学院)：老年精神医学：博士
渡邊さつき (WATANABE, Satsuki) 准教授：医長(外来・研修)：指導教員(大学院)：てんかん学：博士
村田佳子 (MURATA, Yoshiko) 講師：指導教員(大学院)：てんかん学：博士
名誉教授：山縣 博(YAMAGATA, Hiroshi)、皆川正男 (MINAGAWA, Masao)、豊嶋良一 (TOYOSHIMA, Ryoichi)、太田敏男 (OTA, Toshio)
助教(医師)：15名、(言語治療)：2名、(心理)：6名、客員教授：4名、非常勤講師：4名、非常勤医師：4名、助手：2名

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、臨床現場で多彩な症例を経験しつつ学術的視点を持ち幅広い知識を身につけた臨床精神科医の育成を目的として、卒前・卒後・大学院教育のいっそうの充実を目標に教育活動を行った。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育で運営に関わったユニット(科目)は、4年生精神ユニットのユニットディレクター(松尾)である。卒前教育で講義・演習・実習、臨床実習等を担当したのは、1, 2年生選択必修講義(渡邊、高井(臨床中毒科)、横山、太田、桑原、松尾、外部施設より3名)、4年生精神医学ユニット講義・演習・実習、臨床実習等(松尾、桑原、松岡、新井、渡邊、当科講師1名、助教15名、外部施設より10名)、6年生総合学習コース講義(松尾、桑原、松岡、渡邊、外部施設より2名)である。ほか他科のユニットの一部も担当した(3年生神経ユニット講義(松岡)、4年生救急・麻酔ユニット講義(松岡)、4年生小児ユニット講義(桑原))。

その他、卒前教育では共用試験臨床実習前 OSCE 評価者(原田、海老原)、共用試験臨床実習後 OSCE 評価者(横山(尚)、清水、河合、木下)を担当した。また、法人内のコ・メディカルを対象とした以下の学部・学科においても講義を担当した：埼玉医科大学保健医療学部 看護学科2年生講義(渡邊、庄野)、埼玉医科大学短期大学 看護学科2年生講義(佐藤)、埼玉医科大学保健医療学部理学療法学科2年生、4年生講義(松岡、新井、谷木、大島、上村、佐々木)。

2-3. 達成度評価

卒前教育については、2022年度も引き続きコロナ禍において対面講義ができない等多くの制約が課せられるなか、ライブ配信やオンデマンド配信等の形式にあわせ教材を改良する等の工夫を凝らし教育の質を低下させないように努め、4年生講義、6年生講義でそれぞれ当科教員がベストティーチャー賞を受賞した(松岡、松尾)。

卒後教育、大学院教育についても、WEB 会議システムを用いるなど感染対策を十分に施したうえで、ミーティングやカンファレンスを絶やすことなく行い教育の質の維持を図った。初期研修医については、研修医による診療科・指導医評価43項目中41項目(95%)で平均以上の評価を獲得できた。専攻医については学会専門医、精神保健指定医の資格申請をするに十分な症例を経験させることができ、医局カンファレンスで症例レポートの細かい指導を行い、資格取得へとつなげることができた。なお、基幹学会である日本精神神経学会の専門医のみならず、多様な領域の専門医・認定医が取得できるよう学会研修施設認定取得にとりくみ、日本総合病院精神医学会の研修施設認定取得に必要な修正型電気けいれん療法の施行件数(3年連続で100件以上/年以上)に関する要件を満たすことができた。これにより、すでに認定を取得していた日本てんかん学会、日本臨床神経生理学会、日本老年精神医学会、日本精神科救急学会、子どものこころ専門医機構に加え、日本総合病院精神医学会の研修施設認定申請が可能となった。

大学院教育については、学位を取得した院生1名(上村)の研究計画書に基づいたフォローアップ研究を指導する一方、他の院生1名(岡井)につき被験者リクルート・解析を指導し学会シンポジウムでの中間成果発表につなげることができた。また、他の院生2名(清水、原田)についても、研究計画書の作成を指導し病院 IRB の承認を取得につなげることができ、それぞれの院生の研究を推進させることができた。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度、COVID-19が5類となり対面講義が再開される見込みのなか、卒前・卒後・大学院教育をあらためて充実したものとしていく。卒前教育については授業評価の結果を踏まえ講義の質をいっそう高めていく。卒後教育については次年度も初期研修医の指導を遺漏なく行うとともに、専攻については学会専門医、精神保健指定医の取得年限に到達する者が多くでるので、引き続き症例レポート指導に注力していく。学会研修施設認定については日本総合病院精神医学会の研修施設認定取得手続きを進めていく。大学院教育については、1名(岡井)が被験者リクルートを終え解析のち論文執筆へと移行する予定であるので集中的に指導するとともに、他の院生の研究についてもそれぞれ指導しさらに推進させていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、神経細胞群、神経回路網の水準から、行動・心理の水準に至るまで様々な水準から精神・神経疾患の病態を解明することを目的として、各研究グループから英文論文を発表することを目標に研究活動を行った。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

1. 神経生理・画像グループ

- 1) 2015年度に開始した「ワーキングメモリー課題/自己参照課題遂行中の脳波 α 帯域事象関連同期/脱同期について —ヒト健常者における検討—」に関する研究をさらに発展させるべく、「ワーキングメモリー課題/自己参照課題遂行中の脳波 α 帯域事象関連変動について —健常者と ADHD 患者における検討—」の研究計画書を作成し 2021 年 12 月病院に IRB の承認を得たうえで、2022 年度被験者リクルートが進められた（清水（大学院生）、松岡、松尾）。
- 2) 2019 年度より開始した Near-Infrared Spectroscopy (NIRS) をもちいた「抑うつと自殺関連行動の脳メカニズムの解明研究」に関して、健常群及び患者群のデータ収集・解析を終え、テーシス論文を作成し 2022 年 3 月学位取得のち、英文論文を作成し 2022 年 10 月同論文受理へとつなげた。引き続き同研究計画書に基づくフォローアップ研究を継続中である（上村（大学院生）、岡井（大学院生）、松岡、松尾）。
- 3) 2020 年度、名古屋大学との共同研究として当院が基盤施設とした NIRS を用いた「気分障害患者における自動車運転能力と脳機能の関連研究」が、病院 IRB の承認を得たのちデータ集積段階に入ったが、2022 年度もこれを推進するとともに中間成果を全国学会シンポジウムにおいて発表した（岡井（大学院生）、上村（大学院生）、松岡、松尾）。
- 4) 順天堂大学を基盤施設とした共同研究である遺伝子研究の「精神神経疾患の原因解明および診断法・治療法の開発に関する研究」については、病院 IRB から承認は得たものの、コロナ禍において唾液を採取するという方法が問題となっていた。そのため、修正した研究計画書を作成しあらためて病院 IRB の承認を得たうえでデータ集積段階へと移行した（原田（大学院生）、上村（大学院生）、岡井（大学院生）、松岡、松尾）。
- 5) 2021 年度、「双極性障害の病態解明のための脳画像研究」を立ち上げ、病院 IRB の承認を得たのちデータ集積段階に入っていたが、2022 年度引き続きデータ集積が進められた（原田（大学院生）、清水（大学院生）、岡井（大学院生）、上村（大学院生）、渡邊、新井、松岡、桑原、松尾）。
- 6) 当院脳神経内科・脳卒中内科との共同研究である MRI を用いた「神経・精神疾患の病態解明のための MRI 研究」については、病院 IRB の承認を得て、撮像プロトコルの検討などを行った（松尾）。

2. てんかんグループ

- 1) 2018 年度より東京農工大学との共同研究として開始された「動画像によるてんかん発作検知システムの研究開発」について、データ解析および発作検知デバイスの試作が進められた（渡邊）。
- 2) 「精神疾患を有する患者の診療実態分析と効果的な診断・治療方法の開発」については、病院 IRB から承認を得て、てんかん患者に関する後方視的な調査等が進められた（村田、渡邊）。

3. 神経発達症グループ

2019 年度より継続してきた「模擬カウンセリング面接のビデオクリップと POMS2 (Profile of Mood States Second Edition) を用いた自閉スペクトラム症の他者感情認知の障害の研究」につき、引き続きデータ収集を行った（高杉、太田、松尾）。

4. 神経心理グループ

国立精神・神経医療研究センターを基盤施設とした共同研究である「The Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry (SCIP)、The Brief Assessment of Cognition in Affective Disorders (BAC-A) 日本語版信頼性・妥当性に関する研究」は病院 IRB から承認を得て、基盤施設の被験者リクルートが開始され、当院でもデータ収集が進められた（長谷川（大学院生）、末吉（大学院生）、松尾）。

5. その他

専攻医を含む当科のスタッフにより、学会における臨床的な症例報告や活動報告、学術雑誌における総説の発表等が活発に行われた。

3-3. 達成度評価

神経生理グループの大学院生 1 名（上村）の英文論文が受理された他、大学院生 1 名（原田）の中間成果が全国学会シンポジウムで発表される等引き続き成果を上げることができた。ただし、他の研究はデータ収集段階のものが多く、学会・論文発表等の成果は次年度以降に達成される見込みである。

3-4. 次年度改善計画

1. 神経生理・画像グループ

- 1) 「ワーキングメモリー課題/自己参照課題遂行中の脳波 α 帯域事象関連変動について —健常者と ADHD 患者における検討—」について、引き続き被験者データ収集を進めるとともに、中間成果を全国学会で発表する。
- 2) 「抑うつと自殺関連行動の脳メカニズムの解明研究」について、引き続きフォローアップ研究のデータ集積を進めていく。
- 3) 「気分障害患者における自動車運転能力と脳機能の関連研究」について、引き続き被験者データ収集を進めていくとともに、成果を学会で発表したうえで英文論文作成へと移行していく。
- 4) 「精神神経疾患の原因解明および診断法・治療法の開発に関する研究」について、引き続き被験者データ収集を進めていく。
- 5) 「双極性障害の病態解明のための脳画像研究」につき、引き続き被験者データ収集を進めていく。
- 6) 「神経・精神疾患の病態解明のための MRI 研究」について、撮像条件を整備し、被験者リクルートに向け体制を整えていく。

以上、次年度は引き続きデータ収集が中心となるものの、いくつかの研究について学会発表を行ったうえで、一部は論文作成へと移行できる見通しである。引き続き被験者の安心・安全に配慮したうえで研究の推進を図っていく。

2. てんかん

「動画像によるてんかん発作検知システムの研究開発」について、論文作成を進めていく。

「精神疾患を有する患者の診療実態分析と効果的な診断・治療方法の開発」について、引き続き後方視的調査を進めて

いく。

4. 診療

当科は1) 精神科救急、2) 気分障害、3) てんかん、4) 児童青年期、5) 認知症・老年期の5領域の診療を5本柱としている。1) 精神科救急については、西館4階病棟で精神科救急入院料、西館3階病棟で精神科急性期医師配置加算をともに算定しており、大学病院精神科としては他に類をみない水準で稼働しており、日本精神科救急学会の研修施設認定にも認定されている。2) 気分障害については、光トポグラフィー (NIRS) 検査も活用して専門的に診断を行ったうえで、薬物療法、心理社会的治療から修正型電気けいれん療法 (mECT)、さらには反復経頭蓋磁気刺激治療 (rTMS) までをも含めた包括的な治療体制を整え地域の治療抵抗性の難治症例にも対応している。3) てんかんについては、てんかんセンターとして院内の内科系・外科系各科と連携し、長時間ビデオ脳波検査等を用いて専門的に診断を行ったうえで、薬物療法のみならず外科的治療まで含めた包括的な治療体制を整え地域の治療抵抗性の難治症例にも対応している。埼玉県てんかん診療拠点機関にも指定されているほか、日本てんかん学会、日本臨床神経生理学会の研修施設にも認定されている。4) 児童青年期については、埼玉医科大学かわごえクリニックの児童精神部門と連携し、専門コメディカル・スタッフと協調しながら、Evidence Based Medicine (EBM) を高い水準で実践すべく体制整備が進められている。特に神経発達症の診療については、成人期に至るまでとひとつながりとしてとらえ、一般精神科医も参加して診療を展開している。5) 認知症・老年期については、脳波、頭部CT、MRIのみならず脳血流シンチグラフィ (SPECT)、トールパミントランスポーター・シンチグラフィ (DaT Scan) までをも施行できる当院の診療設備を最大限活用し、認知症・老年期の診療を高い水準で展開しており、日本老年精神医学会の研修施設に認定されている。このほか、精神身体合併症についても、県内で極めて希少な精神科病床を有する総合病院の精神科として、院内各科と連携しつつ「最後の砦」としての役割を果たしており、日本総合病院精神医学会の研修施設認定も2023年度に取得する見込みである。

精神科急性期医師配置加算の算定開始以降、精神科リエゾン診療チームを積極的に稼働させ、せん妄や抑うつ、不穏・興奮等の精神的諸症候に遺漏なく対応した。とりわけコロナ禍のなか、COVID-19 陽性患者専用病棟・疑い病棟における精神科リエゾン診療の要請にも引き続き対応した。また当院の救急センター・中毒センターの機能が充実するなか同センターにおけるリエゾン診療は拡充を続けており、精神身体合併例で救急センターへ搬送後12時間以内に精神科医が対応した件数は2022年度も100件/年以上となっていた。また、従前より継続してきた国際医療センター救命救急科への院外往診診療についてはその機能を維持しつつも年々規模が縮小してきていたが、2022年度は64件とむしろ増加していた。このほか、COVID-19 こころのケアチームによる啓発、スクリーニング、メンタルヘルス相談等の活動は引き続きこれを継続した。

2022年度の診療実績は以下の通りであった。※[]内は2021年度データ

1) 入院診療

(1) 入院数：299[263]件/年 (うち精神科3次救急[措置入院]：30[23]件/年、(2) 稼働率：76[81]% (通年平均)、(3) 平均在院日数：68[73]日 (通年平均)

2) 外来診療

(1) 外来数：126[129]人/日 (通年平均)、37144[37872]件/年 (延べ人数) (2) 新患者数：475[507]人/年、(3) 逆紹介率 (逆紹介数/新患者数)：114[110]% (4) 院外往診 (本学国際医療センターへ) 64件[38]件/年

3) 休日時間外診療

(1) 診察：121[164]件/年 (うち①初診患者：35[47]件、②精神身体合併例で救急センターへ搬送後12時間以内に精神科医が対応したものの：110[120]件/年)、(2) 入院：41[43]件/年 (うち精神科救急情報センター・他医療機関・県・保健所・警察・消防からの依頼によるもの：18[10]件/年)

4) 専門的検査・治療

(1) 光トポグラフィー検査 (NIRS)：100[112]件/年、(2) 修正型電気けいれん療法 (mECT)：174[120]件/年、(3) 長時間ビデオ脳波検査：19[19]件/年、(4) 心理検査：80[55]件/年

診療に関しては、COVID-19 が蔓延し緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置等が発出されるような状況下、入院において稼働率は通年で76%に留まったものの、精神科救急入院料、精神科急性期医師配置加算の施設基準を満たす水準で稼働しつつ、平均在院日数5日短縮し高回転とし、さらに外来の逆紹介率を4%高めることができた点は評価されるべきととらえている。とはいえ、次年度も精神科救急入院料、精神科急性期医師配置加算の施設基準を満たす高回転を維持ながら、稼働率をコロナ禍前の2019年度の水準に戻すことを目標とする。また、修正型電気通電療法 (mECT) については、3年連続で100件/年以上を達成できたので、日本総合病院精神医学会のmECT 研修施設認定申請手続きを進めていく。さらに光トポグラフィー検査 (NIRS) についても100件/年以上を目指すとともに、臨床導入を開始した反復性経頭蓋磁気刺激療法 (rTMS) についても先進医療として登録すべく実施件数を増やし、気分障害の専門的治療につき一層の充実を図っていく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

- ①埼玉県精神科救急医療システム運営委員会委員
- ②埼玉県精神医療審査会委員
- ③埼玉県総合医局機構講師
- ④埼玉県精神保健福祉審議会委員
- ⑤医療観察法 精神保健審判員
- ⑥埼玉県医療観察制度運営連絡協議会

- ⑦埼玉県メディカルコントロール協議会委員
- ⑧埼玉県災害派遣精神医療チーム連絡調整会議委員
- ⑨措置入院者等実地審査における精神保健指定医
- ⑩医療観察法入院病棟倫理会議外部委員
- ⑪日本医療研究開発機構 AMED 課題評価委員
- ⑫埼玉県自殺防止対策検討委員会委員
- ⑬所沢市特別支援教育専門家チーム委員会委員
- ⑭静岡県発達障害者支援センター 成人期支援事例検討会
- ⑮飯能市自殺対策推進協議会委員
- ⑯毛呂山町立小・中学校児童生徒就学支援委員会委員
- ⑰毛呂山町いじめ防止対策推進委員会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

- ①Journal of Affective Disorders editorial board member 松尾幸治
- ②精神科治療学 編集委員 松尾幸治
- ③てんかん研究 編集委員 渡邊さつき

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

- 日本精神神経学会薬事委員会委員<松尾>
- 日本精神神経学会専門医試験委員会副委員長<松尾>
- 日本精神神経学会 ECT・rTMS 等検討委員会委員<松尾>
- 日本精神神経学会医療経済委員会委員<松尾>
- 精神科専門医認定試験 面接委員<松尾・渡邊>
- 埼玉県立精神医療センター職員への技術指導<松尾>
- 東京都立松沢病院 精神科専門研修プログラム管理委員会委員<松尾>
- 国際双極性障害学会 (ISBD) アジア地域ディレクター<松尾>
- 所沢市教育委員会 所沢市教育相談アドバイザー <桑原>
- 所沢市立教育センター ゲートキーパー養成研修会 指導者 <桑原>
- 所沢市立教育センター教育相談室 事例カンファレンススーパーバイザー <桑原>
- 浜松医科大学 FD 講演会 講師 <桑原>
- 埼玉医科大学 管理者対象メンタルヘルスケア研修講習会 講師 <桑原>
- 埼玉医科大学短期大学 SD 活動研修会 講師 <松岡>
- 埼玉県西部第一地域 MC 協議会 救急活動事後事例研究会 講師 <松岡>
- 日本医療ソーシャルワーカー協会 医療ソーシャルワーカー基幹研修 講師<新井>
- 横浜メンタルクリニック戸塚 理事経営会議 <新井>
- rTMS 療法 UP-TO-DATE 全国セミナーレポート制作 記事内容の校閲 <新井>
- 医療関係者向け会員制 Web サイト『cnsinfo.jp』 原稿執筆および校閲<新井>
- 日本てんかん学会 理事 幹事<渡邊>
- 日本てんかん学会 VNS 資格認定委員会委員<渡邊>
- 日本てんかん学会 薬事委員会委員<渡邊>
- 日本てんかん学会 選挙委員会委員<村田>
- 日本てんかん学会 移行期医療検討委員会委員<村田>
- 深谷市教育委員会 教育研究所での相談業務 (深谷市) <公認心理師: 庄野>
- 飯能看護専門学校高等看護科 講義<公認心理師: 庄野>
- 埼玉医科大学看護学生実習指導講習会 教育心理 非常勤講師<公認心理師: 庄野>
- 深谷市生徒指導推進協議会 講演会 講師 <公認心理師: 庄野>
- 飯能地区医師会 埼玉県在宅医療提供体制充実支援事業 講師 <公認心理師: 庄野>
- 埼玉医科大学保健医療学部看護学科 FD 講師 <庄野>
- 埼玉医療福祉会看護専門学校第一学科 1 年生講義<公認心理師: 庄野、萩原>
- 毛呂山町保健センター母子保健事業 子供の発育発達相談 (毛呂山町) <言語聴覚士: 一宮>
- 川越市医師会 川越看護専門学校 講義<公認心理師: 越智>
- 放送大学 講義・演習 非常勤講師<公認心理師: 越智、翁長>
- 東京家政大学 ゲストスピーカー<公認心理師: 越智>
- 国立精神・神経医療研究センター 認知行動療法センター (CBT) 客員研究員 <公認心理師: 野崎>
- お茶の水女子大学 演習 非常勤講師<公認心理師: 翁長>
- 中部学院大学 通信教育部 非常勤講師<公認心理師: 翁長>
- 所沢市健康推進部保健センター こころの健康講座 講師 <公認心理師: 翁長>

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①Hisatoshi A, Katsuo I, Takeya T, Tatsuhiro Y, Yasushi A, Hitoshi M. Psychological stress of emergency medical staff after the largest mass murder incident in post-World War II era. Neuropsychopharmacol Rep. 2022 6. 42 (2):142-147

- ②Kamimura H, Matsuoka T, Okai H, Shimizu N, Harada S, Matsuo K. The associations between suicide-related behaviors, prefrontal dysfunction in emotional cognition, and personality traits in mood disorders. *Sci Rep*. 2022.10. 12(1):17377
- ③Matsubara T, Chen C, Hirotsu M, Watanuki T, Harada K, Watanabe Y, Matsuo K, Nakagawa S. Prefrontal cortex activities during verbal fluency and emotional words tasks in major depressive, adjustment, and bipolar disorders with depressive states. *J Affect Disord*. 2022 11. 316:109-117
- ④Tajika A, Hori H, Iga JI, Koshikawa Y, Ogata H, Ogawa Y, Watanabe K, Kato T, Matsuo K, Kato M. Mood Stabilizers and Antipsychotics for Acute Mania: Systematic Review and Meta-Analysis of Augmentation Therapy vs Monotherapy From the Perspective of Time to the Onset of Treatment Effects. *Int J Neuropsychopharmacol*. 2022.10. 25(10):839-852
- ⑤石川章、渡邊さつき、水村亮介、北詰愛歩、須貝昌平、宮本政宗、倉持泉、村田佳子、岡島宏明、松尾幸治、真壁秀樹 バルプロ酸ナトリウム投与患者におけるカルニチン濃度およびアンモニア濃度の検討 *精神科治療学* 2023.2 38(2):241-247
- ⑥小田寛、翁長伸司、越智栄太、佐藤礼子、庄野伸幸、横山富士男 逸脱行動を繰り返す青年期女性への心理療法 青年期精神療法 2022 18(1):17-31
- ⑦松岡孝裕、横山富士男、岩波明 第3章薬物療法 これ一冊で大人の発達障害がわかる本 診断と治療社 2023.3 66-81
- ⑧水村亮介、石川章、伊藤護之、宇都宮暁、真壁秀樹、佐美三怜佳、須賀建太郎、黒澤洋志、小和瀬由美子、喜屋武玲子、草野武、鈴木景子、松岡孝裕、松尾幸治 埼玉医科大学病院における睡眠薬フォーミュラリの作成と運用 *精神科治療学* 2023.1 38増刊:113-120
- ⑨桑原斉 発達障害 自閉スペクトラム症(小児) *精神医学* 2022.5 64(5):713-718
- ⑩渡邊さつき てんかんにおける性差と薬物療法 *臨床精神薬理* 2022.7 25(7):777-780

【総数：論文 20 件、学会発表 35 件、講演 83 件】

6-2. 獲得研究費

- 松尾幸治：2020 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B)「双極性障害トリオ試料におけるポリジェニックリスクコアを用いた画像-遺伝子研究」
- 松尾幸治：2021 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C)「気分障害における認知機能評価バッテリー日本語版の信頼性・妥当性に関する研究」
- 松岡孝裕：2020 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C)「脳波事象関連 α 帯域パワー値変動を用いた外的および内的注意の増大に関する脳機能研究」
- 桑原斉：2020 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B)「セロトニン-オキシトシン相互作用の多角的検討：自閉症中核症状の治療シズ創出」
- 渡邊さつき：2022 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C)「てんかん部分発作の動画像による自動検知システム」
- 松尾幸治：住友ファーマ製薬奨学寄附金
- 松尾幸治：持田製薬奨学寄附金「気分障害における自動車運転能力と脳機能の関連研究-NIRS を用いて」
- 松尾幸治：エーザイ奨学寄附金
- 松尾幸治：大塚製薬奨学寄附金「双極性障害の画像研究」

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- 第 30 回日本精神科救急学会 さいたま市 埼玉会館 2022 年 09 月 30 日、10 月 01 日
- 第 3 回日本発達障害臨床医学会 川越市 ウェスタ川越 2023 年 01 月 28 日、29 日
- 第 125 回東京精神医学会 東京 ステーションコンファレンス東京 2022 年 07 月 02 日

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育については、引き続きコロナ禍のなか、対面講義ができない等多くの制約が課せられたが、ライブ配信やオンデマンド配信等の形式にあわせ教材を改良する等の工夫を凝らし卒前教育の質を低下させないように努め、4 年生講義、6 年生講義でそれぞれ当科教員がベストティーチャー賞を受賞した(松岡、松尾)。卒後教育、大学院教育についても、感染対策を十分に施したり、WEB 会議システムを用いる等の工夫により、ミーティングやカンファレンスを絶やすことなく行い質の維持を図った。これらの点は評価している。

研究については、神経生理グループから大学院生 1 名の研究につき英文論文を発表することができた。また、新たに病院 IRB の承認を得た複数の研究について、コロナ禍にあってもデータ収集を推進し、大学院生 1 名の研究については中間成果を全国学会のシンポジウムで発表することができた。これらの点は評価している。

診療については、(1)精神科救急、(2)気分障害、(3)てんかん、(4)児童青年期、(5)認知症・老年期の 5 領域の診療を柱とし、専門性を維持しながら地域のニーズにこたえることができた。とりわけコロナ禍においても精神科救急入院料、精神科急性期医師配置加算の施設基準をともに満たしつつ平均在院日数 5 日短縮し高回転とし、さらに外来の逆紹介率を 4%高めることができた点は評価されるべきととらえている。また、救急センター・中毒センターにおける

リエゾン診療を充実させ、精神身体合併例で救急センターへ搬送後 12 時間以内に精神科医が対応した件数を 2022 年度も引き続き 100 件/年以上とできた点も評価している。

さらに、専門的診断を支援する光トポグラフィー（NIRS）検査、専門的治療としての修正型電気けいれん療法（mECT）をそれぞれ 100 件/年以上実施する目標を 2022 年度も達成し、特に mECT については対前年度比で+45%と大幅に増加させることができた。さらに先端的治療としての反復経頭蓋磁気刺激療法を開始できたことも特筆に値し、これらを通じて気分障害の専門的診断の充実を図ることができた点を評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育については講義の配信コンテンツの質をいっそう高めていく。卒後教育については、次年度も学会専門医、精神保健指定医の取得年限に到達する者が多くでるので、症例レポート指導に注力していく。学会研修施設認定については日本総合病院精神医学会の研修施設認定申請を進めていく。大学院教育については中間成果を学会発表する予定の大学院生がでてくることに加え、1 名が英文論文執筆を開始する予定であるのでこれを集中的に指導していく。教育に関しては以上を次年度の目標とする。

研究については、上記大学院生の研究につき、データ収集や解析をすすめ一部については中間成果の学会発表、論文執筆開始へつなげていく。その他、てんかん、神経発達症各グループの研究については、それぞれ被験者データ収集（ないし後方指摘調査）を推進していく。研究に関しては以上を次年度の目標とする。

診療に関しては、引き続きコロナ禍のなか、入院において稼働率は通年で 76%に留まったものの、精神科救急入院料、精神科急性期医師配置加算の施設基準を満たしつつ、平均在院日数 5 日短縮し高回転とし、さらに外来の逆紹介率を 4%高めることができた。次年度も精神科救急入院料、精神科急性期医師配置加算の施設基準を満たす高回転を維持しながら、稼働率をコロナ禍前の 2019 年度の水準に戻すことを目標とする。また、修正型電気通電療法（mECT）については、3 年連続で 100 件/年以上を達成できたので、日本総合病院精神医学会の mECT 研修施設認定申請手続きを進めていく。さらに光トポグラフィー検査（NIRS）についても 100 件/年以上を目指すとともに、臨床導入を開始した反復性経頭蓋磁気刺激療法（rTMS）についても先進医療として登録すべく実施件数を増やし、気分障害の専門的治療につき一層の充実を図っていく。

1. 33) 緩和医療科

1. 構成員

岩瀬 哲 (IWASE, Satoru)	:教授:運営責任者:診療科長:研究主任:緩和医療学:博士
芳賀 佳之 (HAGA, Yoshiyuki)	:兼担教授:救急医学:博士
上條 吉人 (KAMIJO, Yoshito)	:兼担教授:中毒学:博士
篠田 祐介 (SHINODA, Yusuke)	:兼担教授:整形外科/リハビリテーション学:博士
神山 哲也 (KAMIYAMA Tetsuya)	:准教授 :心臓内科学:博士
岩崎 由希 (IWASAKI, Yukiko)	:講師:リウマチ・膠原病学:診療副科長:研究副主任:緩和医療学:博士
松本 佳祐 (MATSUMOTO, Keisuke)	:兼担助教:救急医学/緩和医療学:博士
新野 捺美 (NIINO, Natsumi)	:助教:緩和医療学/地域医療学
高井 美智子 (TAKAI, Michiko)	:客員講師:臨床心理学:臨床心理士
島貫 友香 (SHIMANUKI, Yuka)	:研究補助員 :医療事務作業補助者

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

- ・基本的緩和ケアの理解(目的)と習得(目標)
- ・専門的緩和ケアの理解(目的)と実践(目標)
- ・緩和ケア・コンサルテーションの理解(目的)と実践(目標)
- ・地域医療介護連携の理解 (目的)
- ・ロコモ/フレイル予防の理解 (目的)

2-2. 教育実績 (担当者)

(1) 緩和ケア総論講義 (岩瀬)

(2) 緩和ケア各論講義 (岩瀬、神山、岩崎、松本、新野)

(内容) 疼痛、倦怠感、不眠、せん妄、嘔気/嘔吐、食欲不振、呼吸困難、抑うつ、不安、ロコモ、がんロコモ、フレイル、サルコペニア、カヘキシー

(3) 緩和ケア・コンサルテーション演習 (岩瀬)

①院内コンサルテーション ②地域コンサルテーション

(4) ロコモ/フレイル外来 (岩瀬、神山、松本、新野)

2-3. 達成評価度

1) 緩和ケア講義

医学部4年生講義 地域11

日時:令和4年10月13日(木)、担当者:岩瀬 哲

その他 医学部講義収録:地域医療における緩和医療

2) 緩和ケア・コンサルテーション

緩和ケアチーム(医師、看護師、薬剤師、管理栄養士)を結成、平成30年4月よりコンサルト活動を開始。

依頼のあった入院患者の主科および病棟に対し、基本的緩和ケアの実践指導、専門的緩和ケアを提供した

(令和4年度の依頼件数は415件)。

3) 緩和ケア(ロコモ/フレイル)外来

令和4年度は1477件を診察。全症例において在宅医療を推奨、連携したソーシャル・ワーカー、ケア・マネージャ、訪問看護師、介護福祉士にADL(日常生活動作)モニタリングの意義についての情報提供し、SNSプラットフォーム(Medical Care Station: MCS)によるリアルタイムの情報共有を行った。

2-4. 次年度改善計画

次年度の計画としては、1)医学生に対して緩和医療学の系統講義を担当し、基本的緩和ケアの理解と習得を求め、

2)緩和ケアチームに研修医と専攻医を受け入れ、専門的緩和ケアの理解と実践を目指していく。

また、地域の訪問看護師、ケア・マネージャ、介護福祉士に対してはADL(日常生活動作)のモニタリングを通して医療-介護連携の啓発を促進していく。

そして、地域包括ケアの充実を図るために高齢者の救急搬送の低減を目的とした医療-介護連携を強化していく。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

①地域医療サイバー・フィジカル・システム(CPS)を開発し、地域医療の最適化を目指し、地域の救急搬の低減、医療費の削減を目標とする。

②がん患者の疼痛に対する標準的薬物療法の開発

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

令和4年度(2022年度)国立研究開発法人日本医療研究開発機構(AMED)研究分担者
課題名「がん患者の難治性神経障害性疼痛へのエビデンスに基づく標準的薬物療法の開発」

3-3. 達成度評価

①についての内容

総務省統計局によると、我が国における65歳以上の高齢者人口割合は2040年に推計35.3%に達し、超高齢化社会を見据えた医療体制の整備と健康長寿を目指した高齢者未病対策は喫緊の課題である。特に地域医療の現場では家族支援力低下に加え医療資源不足があり、地域医療体制の逼迫を打開する機器やシステムを開発することは、将来的な医療費・人件費削減においても重要である。

本研究課題では、地域高齢者の救急搬送や入院といった容態悪化リスクを予測し、高齢者の健康寿命の延伸と医療費の削減を実現するアプリケーションの開発を目的とする。Lunneyらは65歳以上の高齢者14,456人を6年間前向きにフォローし、人生の終末期における日常生活動作(Activities of Daily Living, 以下ADL)の軌跡は病態により多様で、軌跡の予測と適切な介入が個別ケアの改善に繋がる可能性を提示した(June R. Lunney, *et al.* *JAMA*. 2003;289:2387)。ADL評価方法には複数の尺度(Functional Independence Measure: FIM, Barthel Index等)が存在するが、いずれも実臨床における日々のADL変化の鋭敏な検知は難しい。本研究課題分担者である岩瀬は、客観的かつリアルタイムなADLモニターを可能とする、新規振戦センサーを開発し現在初号機が完成間近である(図1)。在宅訪問看護・診療の現場において取得される血圧、体温、脈拍といったバイタルサインや服薬情報、基礎疾患情報、採血データ等と、この新規センサーを介して得られるデータを統合して収集することで、在宅療養患者の容態変化を感度・精度よく判別できるアルゴリズムを構築し、地域高齢者の緊急受診リスクを予測し適切なタイミングでの訪問看護・診療の介入を可能とする、新規センサーならびに新規ヘルスケアアプリとして事業化を目指す。

歩行運動分析手法の研究開発は進んでおり、モーションキャプチャ等を併用して健康寿命延伸のための歩行動作を解明するアプリも多く存在し、そのセンサーとしては加速度・角速度センサーの原理が用いられることが多い。これらは、健常者あるいは自立歩行に大きな支障を来す前的高齢者・患者では有用である一方、既にADLが低下し歩行に支障が生じている高齢者の場合、四肢に大きな加速度を生じる動作が少なくなり、従来の運動センサーでは活動量が過少評価されることとなる。我々は、相対筋力と相関する生理的振戦の振幅と周波数を測定することができるセンサー(圧電素子)を用いて、わずかな筋活動も検出する手法を考案した(特許申請準備中)。このセンサーを下肢に装着することにより、下肢を中心とした運動を小さなものから検出することが可能である。

さらに長期的な目的として、地域医療現場にサイバーフィジカルシステム(Cyber-physical system, 以下CPS)を実装するための臨床研究に繋がるシステム構築・モデル事業への発展を目標とする。CPSとは、フィジカル空間(現実世界)で収集されたビッグデータを、サイバー空間上で集積・分析し、フィジカル空間では不可能な仮想的な実験検討や解探索を行い、最適化設計したプロセスを現実世界にフィードバックするシステムである(図2)。特徴は情報収集→分析→介入のサイクルを常時繰り返すことで、現実世界の最適化状態がリアルタイムに生成・維持される点である。本研究課題を通じて開発された新規センサーアプリは、AMED 泉田班(埼玉医科大学総合医療センター 内分泌・糖尿病内科)がKDDI 総合研究所と共同で開発したIoT 流通プラットフォームに連結し、ウェアラブルデバイス(Fitbit)からのバイタルサインデータ(心拍数、呼吸数、酸素飽和度、皮膚温度など)と、将来我々が前向きに収集していく認知機能・採血検査結果・投薬・基礎疾患情報と新規振戦センサーデータの時系列(理想的にはリアルタイム)データベースを構築する。そのクラウド上のデータベースにおいてCPSを走らせ最適解(救急搬送件数の低下等)を得るために重要な要素の同定を行い、実世界にフィードバックし、新たな臨床研究にも展開していく。新規ヘルスケアアプリを介して、リアルタイムに地域医療の最適化が実現できる医療システムを構築することで、地域における訪問看護・医療施設、老人保健施設、特別養護老人ホームなどへセンサーとヘルスケアアプリの導入を行い安定的な事業の継続を目指す。

日豪国際共同試験(1月27日 jRTC 登録、2月6日試験開始)

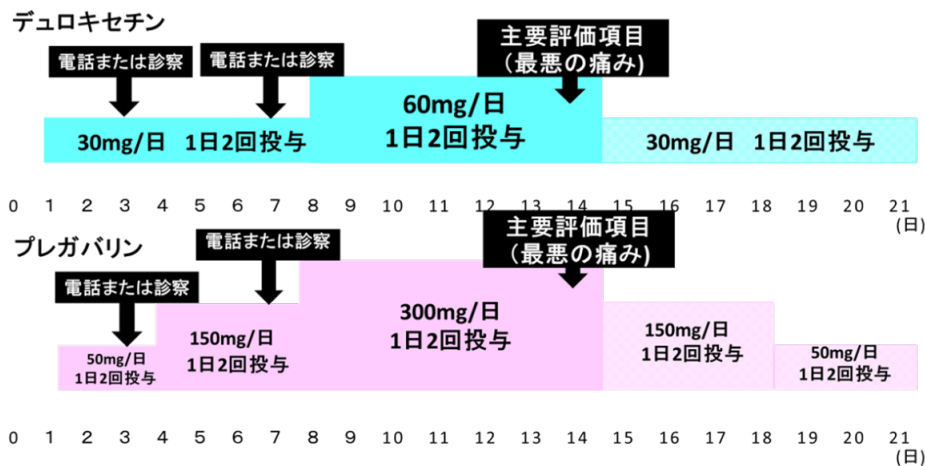
主要評価項目：Day14 の疼痛 NRS (直近 24 時間最悪 NRS の群間比較)

副次評価項目：HADS、SF-MPQ-2、EORTC QLQ-C15-PAL 等

※使用する評価尺度の多くは、患者報告アウトカム (Patient Reported Outcome: PRO) であり、患者会の評価を事前に受けている

対象症例：160 例 (日本 100 例、豪州 60 例)

投与スケジュール



3-4. 次年度改善計画

2023 年度 AMED (日本医療研究開発機構) 予防・健康づくりの社会実装に向けた研究開発基盤整備事業の健康・医療情報活用技術開発課題に応募し、公的研究費の獲得を目指す。

4. 診療

臨床では、多職種により構成された緩和ケアチーム (医師、看護師、薬剤師、管理栄養士) を設置、入院患者さんの疼痛緩和や、退院時に向けた在宅環境調整、患者さんの治療方針の決定を支援する為の ACP (人生会議) 支援などを中心とした診療を行なっている。

研究では、文科省科研費 (基盤 B) を獲得しており、在宅緩和ケアの臨床試験 (RCT) を実施している。

教育では、医学生に対して系統講義を担当し、緩和ケアチームに研修医と専攻医を受け入れて、研修医は基本的緩和ケアの理解と習得を、専攻医は専門的緩和ケアの理解と実践を目標とする。また、地域の訪問看護師、ケア・マネージャ、介護福祉士に対して ADL (日常生活動作) のモニタリングを推奨し、地域包括ケアの充実を図るために救急搬送の低減を目的とした医療-介護連携システムの開発を行っている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本リンパ浮腫学会 学術委員会委員長 (岩瀬)

日本リンパ浮腫学会 ガイドライン委員会副委員長 (岩瀬)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

令和 4 年 8 月 第 6 回 日本キャンサーフォーラム 実行責任者：岩瀬 哲

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

① Kitamura K, Iwase S. et al.

Evidence-Based Practice Guideline for the Management of Lymphedema Proposed by the Japanese Lymphedema Society.

Lymphat Res Biol. 2022.

② Yasuo Nagafuchi, Mineto Ota, Hiroaki Hatano, Mariko Inoue, Satomi Kobayashi, Mai Okubo, Yusuke Sugimori,

Masahiro Nakano, Saeko Yamada, Ryochi Yoshida, Yumi Tsuchida, Yukiko Iwasaki, Hirofumi Shoda, Yukinori Okada, Kazuhiko Yamamoto, Kazuyoshi Ishigaki, Tomohisa Okamura, Keishi Fujio

“Control of naive and effector CD4 T cell receptor repertoires by rheumatoid-arthritis-risk HLA alleles”
Journal of Autoimmunity. 133. 102907 (2022)

③Masahiro Nakano, Mineto Ota, Yusuke Takeshima, Yukiko Iwasaki, Hiroaki Hatano, Yasuo Nagafuchi, Takahiro Itamiya, Junko Maeda, Ryochi Yoshida, Saeko Yamada, Aya Nishiwaki, Haruka Takahashi, Hideyuki Takahashi, Yuko Akutsu, Takeshi Kusuda, Hiroyuki Suetsugu, Lu Li, Kwangoo Kim, Xianyong Yin, So-Young Bang, Yong Cui, Hye-Soon Lee, Hirofumi Shoda, Xuejun Zhang, Sang-Cheol Bae, Chikashi Terao, Kazuhiko Yamamoto, Tomohisa Okamura, Kazuyoshi Ishigaki, Keishi Fujio

“Distinct transcriptome architectures underlying lupus establishment and exacerbation”
Cell. 185. 3375-3389 (2022)

④Mai Okubo, Shuji Sumitomo, Yumi Tsuchida, Yasuo Nagafuchi, Yusuke Takeshima, Haruyuki Yanaoka, Harumi Shirai, Satomi Kobayashi, Yusuke Sugimori, Junko Maeda, Hiroaki Hatano, Yukiko Iwasaki, Hirofumi Shoda, Tomohisa Okamura, Kazuhiko Yamamoto, Mineto Ota and Keishi Fujio

“Transcriptome Analysis of Immune Cells from Behçet’s Syndrome Patients: The Importance of IL-17 Producing Cells and Antigen Presenting Cells in the Pathogenesis of Behçet’s Syndrome” Arthritis Research & Therapy. 24. 186 (2022)

⑤Yukiko Iwasaki*, Yusuke Takeshima, Masahiro Nakano, Mai Okubo, Mineto Ota, Akari Suzuki, Yuta Kochi, Tomohisa Okamura, Takaho Endo, Ichiro Miki, Kazuhiro Sakurada, Kazuhiko Yamamoto, Keishi Fujio

*Corresponding author

“Combined plasma metabolomic and transcriptomic analysis identify histidine as a biomarker and potential contributor in SLE pathogenesis” Rheumatology doi: 10.1093/rheumatology/keac338 (2022)

⑥Yusuke Takeshima, Yukiko Iwasaki*, Masahiro Nakano, Yuta Narushima, Mineto Ota, Yasuo Nagafuchi, Shuji Sumitomo, Tomohisa Okamura, Keith B Elkon, Kazuyoshi Ishigaki, Akari Suzuki, Yuta Kochi, Kazuhiko Yamamoto, Keishi Fujio*

*Corresponding author

“Immune cell multi-omics analysis reveals contribution of oxidative phosphorylation to B cell functions and organ damage of lupus” Annals of the Rheumatic Diseases. 81. 845-853 (2022)

⑦Naoki Kimura, Takuya Kawahara, Yukari Uemura, Tatsuya Atsumi, Takayuki Sumida, Toshihide Mimura, Yasushi Kawaguchi, Yukiko Iwasaki, Yuko Kaneko, Toshihiro Matsui, Yoshihiro Muro, Yoshitaka Imura, Takashi Kanda, Yoshiya Tanaka, Atsushi Kawakami, Masatoshi Jinnin, Tomonori Ishii, Keiju Hiromura, Yusuke Miwa, Hiroshi Nakajima, Masataka Kuwana, Yasuhiko Nishioka, Akio Morinobu, Hideto Kameda, Hitoshi Kosaka

“Branched chain amino acids in the treatment of polymyositis and dermatomyositis: a phase II/III, multi-center, randomized controlled trial” Rheumatology. 61. 4445-4454 (2022)

⑧Satomi Kobayashi, Yasuo Nagafuchi, Mai Okubo, Yusuke Sugimori, Hiroaki Hatano, Saeko Yamada, Masahiro Nakano, Ryochi Yoshida, Yusuke Takeshima, Mineto Ota, Yumi Tsuchida, Yukiko Iwasaki, Keigo Setoguchi, Kanae Kubo, Tomohisa Okamura, Kazuhiko Yamamoto, Hirofumi Shoda, Keishi Fujio

“Dysregulation of the gene signature of effector regulatory T cells in the early phase of systemic sclerosis” Rheumatology. 61. 4163-4174 (2022)

6-2. 獲得研究費

- ① 令和元年度（2021年度）国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）研究分担者
課題名「がん患者の難治性神経障害性疼痛へのエビデンスに基づく標準的薬物療法の開発」

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

当診療科については、2017年10月より基本学科として診療と研究、教育を行っており、多職種協働でのチームコンサルテーションについては2018年4月より診療体制を整えた。救急科などの他の診療科との協力体制が整う中で、外来患者については順調にその数が増加傾向にある。また病院内でのチームコンサルテーションにおいては、各診療科へ認知されるようになり、依頼件数は増加傾向にある。

研究における活動については、獲得した科研費をベースに研究出口に向けて体制を維持していきたい。教育については次年度より大学院教育がはじまるに至った。大学院生の指導、そして、専攻医の指導を充実させていきたい。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

臨床（緩和ケアチーム）

2018年4月に緩和ケアチーム（医師2名、看護師1名、薬剤師3名、管理栄養士2名）発足、2019年4月から緩和ケア診療加算（390点/日）と個別栄養食事加算（70点/日）の算定を開始した。当緩和ケアチームは、入院患者さんの疼痛/苦痛緩和や、退院時に向けた在宅環境調整、患者さんの治療方針/療養環境の意思決定支援する為のACP（人生会議）開催などを中心とした診療を行なっている。2022年は415人に介入、緩和ケア診療加算は26万520点、個別栄養食事加算は4万3260点を算定した。

緩和ケア診療加算+個別栄養管理加算 件数 303780点/年

緩和ケア診療加算+個別栄養管理加算 3,037,800円

緩和ケアチームの院内での認知度が上がっていると考えられる。したがって、次年度は現在の体制を維持しつつ、依頼件数と診療加算算定の増加に取り組みたい。

臨床（外来）

当科では2025年問題に備え、地域高齢者の「ロコモ」と「フレイル」を早期に同定し、地域高齢者の日常生活を支援して「ロコモ」と「フレイル」の予防を推進、地域高齢者の健康寿命を延伸して、個々の、そして地域の医療費削減を目指している。2018年度は389人であったのに対し、2019年度の外來患者数は881人、2021年度は1260人、2022年は1477人であった。現体制を維持しつつ、2023年度はさらに外來関数を増加させたい。

臨床（入院管理）

2018年度下半期から当科は救急科とベッドを共有しており（西館6階全5床）、2019年度はのべ1,696人（1日平均4.6人）の患者を診療した。2020年度は病棟を南館5階に移し、全10床で病床運営を開始した。2022年は外來患者数がさらに増加しており、次年度は入院患者数の増加が期待できる。

研究

超高齢化社会を迎える日本社会において、特に少子高齢化が進み医療資源の乏しい地域医療の場では、在宅で急な容態変化をする独居生活の高齢者の増加により、看護・医療の現場は多大な影響を受けることが想定される。本研究課題の掲げる最終目標は、申請者らが開発した新規振戦センサーと日々のバイタルサイン、訪問医療で行われる採血結果、認知機能評価、訪問看護で管理されるADL、疾病や投薬内容などの臨床情報を統合解析することで、在宅で生活する高齢者の重症化・救急搬送リスクを予測し、オンライン診療等の保険収載医療の適切な介入を可能とするアプリケーションを開発し、高齢者の健康寿命の延伸と医療費の削減を実現することである。埼玉医科大学病院の存在する毛呂山町における高齢化率は32.8%と埼玉県全体の26.3%を大きく上回っており（2020年国勢調査データ）、管轄する西入間広域消防組合がカバーする圏内には大学病院を除く救急指定病院・中規模急性期病院がなく、高齢者の救急医療に関する対策は今後更に重要になると考えられる。

研究協力者である松本（埼玉医科大学）が、2016~2018年にかけて埼玉医科大学病院の救急科を救急車による搬送で受診となった症例（総計12,758件）を後方視的に解析し、90日以内の救急再搬送率に繋がる要因を探索したところ、65

図3 90日以内の再搬送に関連する因子

	推定値	p値	オッズ比	95%信頼区間	
				下限	上限
性別	0.142	0.061	1.15	0.994	1.337
65歳以上	0.303	<0.001*	1.35	1.163	1.574
消化器	-1.664	0.149	0.85	0.676	1.061
外傷	-0.543	<0.001*	0.58	0.454	0.744
脳神経	0.524	<0.001*	1.69	1.363	2.093
精神	0.673	<0.001*	1.96	1.408	2.728
生活保護受給	1.230	<0.001*	3.42	2.709	4.320
重症度	-0.506	<0.001*	0.60	0.520	0.699

*p<0.05(多変量ロジスティック回帰分析)

歳以上や重症度が関連する因子として同定された（図3）。この研究は、救急受診症例に限定して解析されたものであるが、高齢者や重症度が高い患者が、再搬送に繋がりやすい要因を抱えたまま、在宅で生活していることを示唆している。そうした患者を在宅でケアしていく上で、日常生活動作能力の低下、すなわちADLの低下は、特に救急搬送を予測する因子として重要であると考えられる。そのためには、ADLの客観的評価が望まれるが、現在のところADL評価は目視による評価方法しか確立していない（FIM、Barthel Indexなど）。昨今加速器によるADLの定量

が試みられているが、加速器はスピード（加速）を定量することが得意であり、基本的には「歩行」をセンシングする目的で使用されている。我々の研究対象である在宅医療を受けている患者の多くは、一程度以上のADLの低下が既に存在し、歩行に何らかの支障、或いは、車椅子生活など、大きな加速度を伴う動作は難しいことが多い。そうした患者で加速器を用いたADL評価を行うと、過少評価をしてしまうことが想像される。そこで我々は、加速度に依存しない方法でADLを評価するためのセンサーの開発を行ってきた。圧電素子を用いた当該センサーは、皮膚に接触させることで、筋活動によって生じる振戦を検知する。ADLのうち、容態変化に大きく関与すると想定されるものは、運動項目と考えられることから、我々はまず脚力を支える筋群に着目した。一般的に脚力にとって大切な筋群は、内転筋、大腿四頭筋、ハムストリングス、ヒラメ筋、腸腰筋と言われており、下肢の振り上げ動作には、前脛骨筋の働きも重要である。我々は、高齢者へのセンサー装着の容易性など実用面も考慮にいれ、下腿筋群の活動をモニターすることで運動量の定量化、即ちADL（運動項目）の定量化を行うこととし、新規振戦センサーを片足首に装着することでその活動量を計測し、新たな臨床パラメーターとして扱うこととした（データはBluetooth接続によりインターネットを介してC@RNA Connect（富士フィルムメディカル）の地域医療連携サービスシステムにより埼玉医科大学緩和医療科のスタンドアロンパソコン（PC）に転送される）。長期的目標は、連続時間測定（理想的には24時間測定）であるが、初めは下腿筋群の一定時間（30秒~1分程度）等尺性収縮（関節の運動を伴わない筋収縮）時のセンサー波形から得られる“振動エネルギー”を脚力のパラメーターとし、そのモニタリングを行うアプリケーションの開発を行う。

新規振戦センサーが検知する振動をもたらす詳細なメカニズムは未解明であるが、筋音に近い、ないしは同等と考えている。臨床的に認知度の高い筋電図は、筋線維の活動電位の総和を示すことで知られる。これに対し、筋音図については、筋肉の機械的活動の総和を反映することに加えて、随意収縮時には筋の収縮特性以外に、支配神経による力調節機構も反映すると考えられている。筋音図については、主に上腕二頭筋に対してピエゾ接触型センサーで研究されてきた。現時点で、筋音図は筋の単一運動単位の情報であると考えられているが、規定因子の詳細は未解明で、周波数構成成分の生理学的解釈には不明な点が多い。また、筋音図はトランスデューサーの特性に応じて、変位・速度・加速度、として検出されるため、測定に用いられたトランスデューサーの特性毎に周波数成分が異なることが知られている。上腕二頭筋に対してピエゾ接触型センサーを用いた研究では、軽度の収縮（10% Maximal voluntary contraction: MVC）では殆どの成分が60~70Hz以下に存在し、20Hz以下にいくつかのスペクトルピークが発生し、最大ピークは10Hz前後にみられた。また、種々のトランスデューサーによる検討の結果、発揮筋力増大に伴い、平均周波数の上昇が認められることが報告されている（三田ら、”随意収縮時の筋音図特性” バイオメカニズム学会誌 vol 37 No1 (2013)）。我々の新規振戦センサーの長時間測定の周波数解析から、装着場所の筋群の総計発揮筋力の推定も可能となることが期待される。

新規振戦センサーを用いたモニタリングにより、在宅医療患者の重症化・救急搬送予測が可能となることを検証するため、臨床研究を行う。この新規振戦センサーによる筋力パラメーターと、種々の臨床パラメーターを統合解析することにより、訪問看護・診療の場で、容態悪化・救急搬送に繋がる重要な因子や組み合わせを同定し、新規振戦センサーによる下腿筋群の活動量のモニタリングの重要性につき、科学的エビデンスの構築を目指す。例えば、センサーデータから計算される振動エネルギー⇐脚力の、測定開始時からの減少率や減少速度と救急搬送との関連性が明らかとなれば、訪問看護師・医療者のビューワーアプリの開発により、これまで目視に依存していたADL評価が、評価者によらず、かつ短時間で客観的に評価可能となるばかりでなく、より適切な看護・診療の介入が可能となり、人件費の節約・救急医療費の削減につながると考えられる。

研究終了後の将来構想としては、新規振戦センサーのアプリケーションをAMED泉田班（埼玉医科大学総合医療センター 内分泌・糖尿病内科）がKDDI総合研究所と共同で開発したIoT流通プラットフォームに連結し、ヘルスケア連携アプリHOSPILINKを介して、他のウェアラブルデバイス（Fitbitなど）からのバイタルサインデータ（心拍数、呼吸数、酸素飽和度、皮膚温度など）や、訪問看護・医療の現場からモバイル端末にて入力される臨床データ（採血結果や疾患・投薬情報など）と統合し、クラウドデータベースを構築する。個々の患者の時系列データの集積が進めば、データベースからのAI(Artificial Intelligence)解析を行い、その結果をもとに最適化モデル（例：救急搬送件数の低下）を作成し、最適解を現場にフィードバックするという、“サイバーフィジカルシステム(CPS)の地域医療現場における社会実装モデル”として事業化する。プログラム最適解を新規振戦センサーにフィードバックすることで、プログラム医療機器としての発展も見込める機器として活用が期待される。また、研究分担者である長島（浜松医科大学）を主体に、静岡県浜松市周辺地域を新たな実証研究フィールドとして、本研究課題で開発したアプリケーションを適応させる臨床研究を開始し、センサーアプリを活用した訪問看護・診療現場における重症化・救急搬送予測モデルの、異なる地域特性における汎用性の検証を行う。更にその先には、24時間リアルタイムモニターのシステム運用を目指し、24時間最適化された地域医療現場の実現を目指す。現在日本の高齢化率は世界主要国の中でもトップであるが、高齢化社会に伴う医療現場の問題は、欧米諸国・中国・韓国など世界中に同様に拡大すると考えられる。高齢化先進国の日本において、本研究課題を通じて開発されるセンサーとそのアプリケーションや、地域医療CPSシステムは、海外にも需要があることが見込まれ、日本国内だけでなく世界にも潜在的な市場もった事業と考えている。

教育

次年度の改善計画としては、引き続き医学生に対する系統講義を担当し、研修医と専攻医を受け入れて基本的緩和ケアの理解と習得、専門的緩和ケアの理解と実践を目指していく。また、地域の訪問看護師、ケア・マネージャ、介護福祉士に対してADL（日常生活動作）のモニタリングを指導し、医療-介護連携を推進していく。

1. 34) 臨床検査医学（中央検査部）

1. 構成員

前田卓哉 (MAEDA, Takuya) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 検査医学 : 博士
森吉美穂 (MORIYOSHI, Miho) : 准教授 : 教育主任 : 検査医学、超音波診断学、肝臓内科学 : 博士
今井一男 (IMAI, Kazuo) : 講師 : 感染症学・検査医学 : 博士
小林清子 (KOBAYASHI, Kiyoko) : 講師(兼担) : 輸血学 : 博士
竹内慶太 (TAKEUCHI, Keita) : 助手(兼担) : 検査医学 : 学士
川田真衣 (KAWATA, Mai) : 助手(兼担) : 検査医学 : 学士

2. 教育

2-1. 目的・目標

【卒前教育】

疾病の病態生理を正しく理解し、臨床検査を総合的にとらえることができる、問題解決能力の高い臨床医および臨床検査技師の育成を目指す。さらに、研究マインドの育成に力を注ぎ、将来の優れた教育・研究者を育成する。

【卒後教育】

中央検査部で持てる診療・検査・研究リソースを積極的に共有し、医療者としての臨床能力向上に資するとともに、さまざまな研究活動にも貢献する。

【大学院教育】

臨床検査医学を通じて科学的な思考能力を培い、生物科学を超えた総合的な人間の学問としての医学を自律的に実践できる人材育成を目標とする。特に、高い臨床能力と研究能力を有し、将来の指導者となる医師および臨床検査技師の育成は我々の使命である。

2-2. 教育実績 (担当者)

実践教育を重視し、大学病院中央検査部と一体化となり教育を行っている。基礎医学と臨床医学の融合、研究マインドの育成が我々のテーマである。基礎医学系教室と連携しながら、医学部および保健医療学部学生に対する積極的な指導を心がけ、複数の課外学習プログラムならびに課外に補講を適宜開講している。保健医療学部と大学病院との連携を強化し、大学院教育を一体化させることで、高い基礎研究能力と優れた臨床能力を持つ臨床検査技師の育成に注力する。大学や組織の枠組みを超えた教育活動には惜しむことなく全力で協力し、我が国における中心的な教育機関になりたいと願う。

【卒前教育】

医学部3年生の「診療の基本」では、臨床医学の導入の役割を果たす。化学・免疫血清、尿・便、細菌・遺伝子、輸血、超音波検査について担当した(前田・森吉)。「病気の基礎2」コースでは、「感染」ユニットを分担しており、細菌学・ウイルス学・寄生虫学の系統講義、ならびに「感染」実習を担当した(前田)。医学部4年生には、Pre-CC実習「感染」を担当し、学生をスモールグループに分け、臨床実習に必要な感染対策に関する実習指導を行なった(前田)。医学部CC Step-1では、採血実習のほか、血液検査室では末梢血塗抹標本の作成・顕微鏡観察を指導し、細菌検査室ではグラム染色の実践と、さまざまな固定標本の観察指導を実施した(全員)。生理機能検査室では心電図、呼吸機能、超音波検査を学生同士で体験させ、検査法の理解と共に検査を受ける患者の立場の理解を深めた(全員)。Reversed Clinico-pathological Conference (R-CPC) 形式の検査データの解釈演習を取り入れ、臨床に即した教育を実践した(前田)。さらに、感染症人材養成事業として開始した感染症実践教育について、総合診療内科の実習時間を使用し4,5年生全員を小グループに分け実習講義を行い、手指衛生、個人防護具の着脱、検体採取実習を継続している(前田・今井)。「ポストコロナ時代の地域感染症対応人材養成事業、プログラム2」においては、シナリオベースに感染症診療と遠隔診療に関する「感染症・シミュレーション実習」を担当している(前田・今井)。なお、本事業では臨床推論1(感染症)の映像資料作成も担当した(前田)。この他、埼玉医大SP研修会も分担しており、標準模擬患者の養成およびOSCE(医療面接)の課題責任者(前田)を担当した。なお、検体観察およびR-CPC演習については、課外時間を活用した補習講義・実習を適宜実施している。本年度は、塗抹標本の観察実習、寄生虫標本観察実習など、理解するまで徹底的に時間をかけて実施してきた(前田)。

研究マインド育成について、研究医養成プログラム学生1名を受け入れ、研究指導を実施したほか、保健医療学部(臨床検査学科)の卒業研究生(1名)を指導した(前田)。

保健医療学部生(12名)の臨地実習を中央検査部全体として受け入れ、指導をした。さらに、外部の臨床検査技師成機関(4施設、10名)の臨地実習学生を受け入れ、指導した(全員)。他大学薬学部学生への実習・講義も積極的に実施している(全員)。

他大学では、前田が慶應義塾大学医学部「寄生虫学」(3時間)を担当した。

【卒後教育】

希望する研修医に対して、超音波検査(主として腹部)を約1カ月間教育指導し、診断力の向上に貢献した(森吉)。中央検査部では、臨床検査技師による若手医師を対象とした腹部超音波、心臓超音波検査のハンズオンセミナーを実施した(全員)。放射線科医師の専門医取得のため超音波検査所見の読影を指導した(森吉)。中央検査部の臨床検査技師に対する研究指導を行い、引き続き海外学術論文に成果報告を継続する。さらに、臨床検査技師の技術力の向上とモチベーション維持のため、あらゆる専門資格取得をサポートし、どの施設よりも高い資格取得率を目指す(全員)。

【大学院教育】

博士課程大学院生(社会人)2名(うち1名は早期修了)および修士課程大学院生1名に対する研究指導を実施し、引き続き多くの海外学術論文として成果を報告した(前田)。なお、修士課程大学院生には、研究指導のほか、中央検査部における実務教育を実施している(全員)。2023年には、博士課程大学院生2名、修士課程大学院生2名が在籍しており、指導を継続する。

2-3. 達成度評価

教育において、目標の100%で達成できたと考える。

2-4. 次年度改善

2022年10月に新たに講師1名が着任した。2023年度においても、引き続き「基礎」-「臨床」の隔たりのないシームレスな教育に積極的に参加し、卒前・卒後教育への貢献強化に注力する。学内外に多くの優れた人材を輩出できる組織を目指し、さまざまな領域において各部門と協力し、幅広く卒前・卒後教育に取り組む。引き続き大学院教育の活性化を重点強化課題とし、優秀な修士課程および博士課程大学院生の確保に努め、院生による学術成果を抛り所とした自己評価を徹底したいと考える。

3. 研究

3-1. 目的・目標

日々の診療の中から克服すべき課題を拾い上げ、科学的手法を用いて解決する。基礎-臨床融合型のトランスレーショナル・リサーチに取り組み、患者の医療に貢献することを研究の目的としている。学内外の研究機関および企業との共同研究ならびに受託研究を推進するとともに、本学で行われる臨床研究にも積極的に支援し、中央検査部のレファレンス機能を確立させる。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- ①新型コロナウイルス感染症の診断体制の確立を目指した開発研究(前田・今井)
- ②シャーガス病の診断技術の新規開発と、我が国における実態解明(前田・今井)
- ③感染症の遺伝子診断に関する開発研究(前田・今井)
- ④超音波診断法の開発(森吉)

3-3. 達成度評価

- ①当研究室では、2020年1月から新型コロナウイルスの研究開発に取り組み、当研究室からすでに海外英文雑誌に数多くの論文報告を行なったほか、引き続き活動を継続している。国立研究施設、大学、民間企業との数多くの共同研究ならびに臨床試験に取り組んだ。これら診断試薬の開発研究と臨床試験の結果、多くの試験試薬を体外診断薬として上市させ、臨床現場で緊急的に活用させることができた。また、これらの成果は、臨床検査技師の研究・開発能力向上に計り知れない財産となり、研究施設としてのハード面での充実にも大きく貢献できた。今後の検査室全体の発展につながる大きな力となった。
- ②これまでの成果を海外学術雑誌で公表した。次年度は本成果をもとにした先進医療の新規立ち上げを目指しており、埼玉医科大学発のシーズとなるよう継続的に取り組んでいる。
- ③文科省科研費の支援をうけ、大学院生とともにシーケンスを基本とする新しい感染症診断ツールの開発とともに、病原体検査のパラダイム・シフトを目指し研究を継続している。

3-4. 次年度改善計画

2023年度は1名の教員増員に伴い、大学院生の学位取得、臨床検査技師による英文海外学術雑誌への投稿、国内外での学術発表、専門資格取得をより一層支援し、それらの数をベンチマークとして定量的にその成果を評価する。臨床検査技師の基礎的技術力の向上と職域拡大、さらにはモチベーションの底上げを目指し、資格試験取得への支援、学会・研究会での活動支援、研究指導を強化する。

4. 診療

専任医師2名、臨床検査技師72名(常勤)が所属し、非常に多様性に富む組織である。精確かつ信頼性のある検体検査・生理機能検査を迅速に提供し、大学病院の診療全体に貢献することを目的とする。さらに、大学病院が担うあらゆる高度・先進医療に協力し、検査医学の進歩に貢献するために活動している。検査をキーワードとした「医療の質」への貢献、「患者サービス」への貢献、そして、結果的に「病院収益」にも貢献できる組織となることが目標である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本感染症学会雑誌編集委員(前田)、Clinical Parasitology 編集委員(前田)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本臨床寄生虫学会理事(前田)、日本感染症学会評議員(前田)、日本寄生虫学会評議員(前田)、日本熱帯医学会評議員(前田)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

1. Rodríguez I, Miura S, Maeda T, Imai K, Smith C, Velasquez C, Honda S, Hirayama K. Analysis of the Chagas disease situation in Japan: A cross sectional study and cost-effectiveness analysis of a Chagas disease screening program. **Lancet Reg Health West Pac.** In Press.
2. Nomura K, Moronuki T, Takeuchi S, Maeda T, Iida S, Yamamoto K. Practical approach of transthoracic echocardiography for pericardial cyst: a case report. **J Echocardiogr.** In Press.
3. Imai K, Tanaka F, Kawano S, Esaki K, Arakawa J, Nishiyama T, Seno S, Hatanaka K, Sugiura T, Kodama Y, Yamada S, Iwamoto S, Takesima S, Abe N, Kamae C, Aono S, Ito T, Yamamoto T, Mizuguchi Y. Incidence and Risk Factors of Immediate Hypersensitivity Reactions and Immunisation Stress-related Responses with COVID-19 mRNA Vaccine. **J Allergy Clin Immunol Pract.** 2022; 10: 21-30.
4. Higashino T, Yamazaki Y, Senda S, Satou Y, Yonekura Y, Imai K, Arakawa J, Kawano S, Horinosono H, Miura Y. Assessment of Delayed Large Local Reactions After the First Dose of the SARS-CoV-2 mRNA-1273 Vaccine in Japan. **JAMA dermatology.** 2022; 158(8); 923-927.
5. Nomura K, Moronuki T, Takeuchi S, Maeda T, Toda K, Kobayashi T. Role of Transthoracic Echocardiography in Early Diagnosis of Williams Syndrome in the Neonatal Period. **CASE.** 2022; 6(10): 462-466.
6. Hanai T, Nishimura K, Miwa T, Maeda T, Nakahata Y, Imai K, Suetsugu A, Takai K, Shimizu M. Characterization of serotonin as a candidate biomarker of severity and prognosis of COVID-19 using LC/MS analysis. **J Pharmacol Sci.** 2022; 150(2): 49-55.
7. Arakawa N, Matsuyama S, Matsuoka M, Kitamura I, Miyashita K, Kitagawa Y, Imai K, Ogawa K, Maeda T, Saito Y, Hasegawa C. Serum stratifin and presepsin as candidate biomarkers for early detection of COVID-19 disease progression. **J Pharmacol Sci.** 2022; 150(1): 21-30.
8. Yoshinari T, Hayashi K, Hirose S, Ohya K, Ohnishi T, Watanabe M, Taharaguchi S, Mekata H, Taniguchi T, Maeda T, Orihara Y, Kawamura R, Arai S, Saito Y, Goda Y, Hara-Kudo Y. MALDI-ToF MS analysis for direct detection of SARS-CoV-2 in nasopharyngeal swabs. **Analytical Chemistry.** 2022; 94(10): 4218-4226.
9. Nomura K, Moronuki T, Takeuchi S, Maeda T, Muramatsu T, Iida S, Yamamoto K. Giant mobile thrombi in both the left ventricle and left atrium. **J Echocardiogr.** In Press.
10. Kitagawa Y, Imai K, Matsuoka M, Fukada A, Kubota K, Sato M, Takada T, Noguchi S, Tarumoto N, Maesaki S, Takeuchi S, Maeda T. Evaluation of the correlation between the access SARS-CoV-2 IgM and IgG II antibody tests with the SARS-CoV-2 surrogate virus neutralization test. **J Med Virol.** 2022; 94(1): 335-341.

【総数：論文 15 件、学会発表 28 件】

6-2. 獲得研究費

公的研究費・競争的資金

1. 前田卓哉. 2021 年度-2023 年度 科学研究費補助金. 基盤研究 C. ナノポア・シーケンサーを用いた網羅的な病原体検査法の実証. (代表) 4,290 千円
2. 今井一男. 2022 年度-2023 年度 公益財団法人 宮田心臓病研究振興基金 (代表) 我が国における妊婦のシャーガス病罹患率調査と診療支援体制の構築 (代表) 1,100 千円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

少人数の基本学科ではあるが、病院中央検査部としての機能維持(検査業務、精度管理、臨床医とのインターフェース、新規検査技術の導入検証など)のほか、学部・大学院教育、研修医教育、さらには臨床検査技師への教育にも一層の強化が必要である。

医学部教育においては、臨床検査医学の系統講義および CC Step-1 にとどまらず、基本学科の特性を活かせる教育プログラムは多岐にわたり、より一層教育に貢献できると考えている。大学院教育においては、特に臨床検査技師の卒業後教育の一環と捉える必要がある。大学院教育の充実には病院機能強化に直結するため、特に本学保健医療学部と連携し、積極的に推進することが重要である。高度な技術をもち、国内で指導的役割を果たす臨床検査技師の育成は重要な機能であり、全力で取り組む必要がある。

研究においては、病院全体のリサーチ・レファレンス機能をもつことが求められており、先進医療のほか、さまざまな診療科との共同研究・治験に対して、積極的に協力・支援ができる体制を構築する。臨床検査技師の高い専門性を育成するため、検査技師に対する研究指導を積極的に行うとともに、さまざまな支援を実施する。組織的な公的研究費獲得を図る必要があり、他診療科と連携し、継続した外部資金獲得を目指す。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

大学病院中央検査室では、認定(ISO 15189)取得に向け活動を進めている。すべての検査業務の見直しと施設改修計画が引き続き 2023 年度の課題である。持続的な教室の発展を維持するため、若手教員の確保が課題であるほか、学内外と研究機関・医療機関との連携を一層強化したい。臨床検査技師のエンゲージメント向上のため、職場環境の改

善、業務効率の改善・部内会議のスリム化、専門資格取得のためのサポート、積極的な研究指導に取り組む。法令を遵守し、透明性の高い運営を行う。

1. 35) 中央病理診断部

1. 構成員

佐々木 惇 (SASAKI, Atsushi):教授: 運営責任者: 教育主任・研究副主任:代表指導教員(大学院): 神経病理学:博士
山田 健人 (YAMADA, Taketo): 教授: 研究主任: 腫瘍病理学: 博士
石澤 圭介 (ISHIZAWA, Keisuke): 准教授(神経内科兼任): 神経病理学: 博士
山口 浩 (YAMAGUCHI, Hiroshi): 准教授: 消化器病理学: 博士
金 玲 (JIN, Ling): 助教: 外科病理学: 博士
浜田 芽衣 (MEI, Hamada): 助教: 口腔病理学: 博士
茅野 秀一 (KAYANO, Hidekazu): 教授(保健医療学部兼任): 血液病理学: 博士
小森 隆司 (KOMORI, Takashi): 客員教授(東京都立神経病院): 神経病理学: 博士
塩田 敬 (SHIODA, Kei): 非常勤講師: 神経病理学: 博士
渡辺 宏志 (WATANABE, Hiroshi): 非常勤講師(保健医療学部): 循環器病理学: 博士
島田 哲也 (SHIMADA, Tetsuya): 非常勤講師(国立埼玉病院科長): 外科病理学
李 治平 (JIHEI, Ri): 非常勤講師(さいたま赤十字病院・病理診断科): 博士
市村 隆也 (ICHIMURA, Takaya): 非常勤講師: 外科病理学: 博士
黒田 真代 (KURODA, Masayo): 准教授(保健医療学部兼任): 博士

土居 美枝子 (DOI, Mieko): 臨床検査技師: 細胞検査士
政岡 秀彦 (MASAOKA, Hidehiko): 臨床検査技師: 細胞検査士
稲田 博輝 (INADA, Hiroki): 臨床検査技師, 細胞検査士
本木 麻莉菜 (MOTOKI, Marina): 臨床検査技師
早坂 楓 (HAYASAKA, Kaede): 臨床検査技師
阿部 楓 (ABE, Kaede): 臨床検査技師
石井 優花 (ISHII, Yuka): 臨床検査技師
松川 大樹 (MATSUKAWA, Taiki): 臨床検査技師
斎藤 悠生 (SAITOU, Yu): 臨床検査技師
福島 葉子 (FUKUSHIMA, Youko): 臨床検査技師, 細胞検査士
永井 俊典 (NAGAI, Toshinori): 実験助手: 臨床検査技師, 病理学兼任
福島 雅人 (FUKUSHIMA, Masato): 実験助手: 臨床検査技師, 細胞検査士, 病理学兼任
村上 忠蔵 (MURAKAMI, Chuzo): 実験助手: 臨床検査技師, 病理学兼任

須賀 晶子 (SUGA, Akiko): 事務員

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

人体の正常構造や機能に関する知識を基礎に、様々な疾病の原因、形成機序、形態学的特徴、転帰などについて教育する。

病理学総論: 臨床医学を理解するために必要不可欠な基本的な疾病の成り立ち・分類と病理形態学について教育する。

臓器別病理各論講義: それぞれの臓器に特有な疾病の形態学的変化を詳細かつ具体的に解説する。

CPC 実習: 病変の肉眼所見、組織所見の基礎を身に付け、疾病の臨床像と形態学的変化とを関連づける能力を高める。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育で運営に関わったユニット(科目)は、2年生「病理総論」ユニットのユニットディレクター(佐々木)、講義担当は病理学、国際医療センター病理診断科、総合医療センター病理部教員、4年生「臨床推論実習 CPC 実習剖検例の症例解析 5日間」ユニットのユニットディレクター(石澤)、講義担当は病理学、国際医療センター病理診断科、総合医療センター病理部教員である。

卒前教育で講義を担当したのは、1年生「細胞生物学1」(山田)、3年生「ヒトの病気1」コース病理各論講義 神経(佐々木、石澤、本間)、呼吸器(清水禎)、循環器(清水禎、東、増田)、消化器(山口、本間)、血液(百瀬)、腎・泌尿器(増田)、生殖器(安田)、内分泌・代謝(川崎)、診療の基本(茅野)、4年生「ヒトの病気2」コース病理各論講義: 感覚器(新井、茅野)、皮膚・運動器(新井)、免疫(新井)、医学英語(佐々木)、5年生 CCstep1 隔週(分担 教員全員 2022年1月~2022年12月計20回)、6年生医療総論(石澤)である。

卒後教育においては、Clinico Pathological Conference (CPC) を1回/月・計11回/年(分担、教員全員)で行っている。

2-3. 達成度評価

病理学に総論と各論の双方の講義があった以前と比較して、病理学の講義・実習時間数は減少しているが、バーチャルスライドを導入し、2年生の病理総論は効率のよい講義と実習がほぼ実施できている。平成22年度からは従来のパワーポイントから脱却し、令和2年度より「ロビンス基礎病理学第10版・丸善出版」・「法医学・福島弘文編・南山堂」を指定教科書とした。また、4年生臨床推論CPC実習では、学生をスモールグループに分け、各グループに対して一人の教員がきめ細かく指導にあたった。4年生3学期からスタートする5年生のCCstep1は国際医療センター病理診断科と毛呂山中央病理診断部で主に行い、各班あたり1.5日間と短い、基礎医学的知識と臨床的知識の統合的整

理に有用と考えられ、満足度の高いものとなっている。研修医を主な対象とした学内 CPC も年 11 回行われ、卒前卒後の病理学教育カリキュラムは整備されていると考えられる。

2-4. 次年度改善計画

医学部 2 年の病理総論の教育に際してはプリントと指定教科書によるオンデマンド講義を行い、学生の理解の補助とした。リモート実習では、終了時に教員が学生全員の实習レポートのチェックを行い、学生の理解度の把握に努めた。4 年生臨床推論 CPC 実習では学生をスモールグループに分け、各グループに対して教員がきめ細かく指導にあたっている。また、研修医を主な対象とする臨床病理検討会(学内 CPC)を年間 11 回開催し、卒後教育にも貢献している。次年度もより専門性が高く、充実度の高いものとする予定である。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床材料を用いて外科病理診断に役立つテーマを主体として取り組んでいる。『神経病理学』『腫瘍病理学』『血液病理学』が大きな柱となっている。神経病理では電顕検索と FISH 検索、血液病理では FISH 検索が頻回に行われている。腫瘍病理では、がん細胞の増殖・浸潤・転移の分子基盤の解明からトランスレーショナル研究を経て、新規分子標的療法の開発から臨床研究まで行っている。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

神経・腫瘍・造血器の病理学的・分子生物学的研究

3-3. 達成度評価

論文 18 件、学会発表 24 件、著書 3 冊の成果があり、活発な研究がなされたものと考えられる。各分野とも多方面にわたる病理学的研究を展開しており、業績にみる如く、成果をあげている。研究費補助金も取得している。

3-4. 次年度改善計画

次年度はさらなる上積みを目指している。

4. 診療

約 9,000 件の外科病理診断、約 9,900 件の細胞診、36 体(院内 31 体：院外 5 体)の病理解剖を行い、臨床各科とのカンファレンスを行なっているなど、十分ではないマンパワーながら臨床の要請には応えているものと考えられる。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

環境省公害健康被害補償不服審査会専門委員：山田 健人

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

【佐々木 惇】

Pathology International：常任刊行委員

Brain Tumor Pathology:査読委員

【山田 健人】

編集委員

Cancers

Pathology International

査読委員

Kinases and phosphatases 1 件

Journal of Clinical Medicine 1 件

Current Oncology 1 件

Cellular and Molecular Neurobiology 1 件

Stem Cell Reports 1 件

Scientific Reports 1 件

Expert Opinion On Biological Therapy 1 件

International Journal of Molecular Science 1 件

Cancers 5 件

Cells 2 件

Applied Science 1 件

Frontiers in Cell and Development Biology 1 件

【石澤 圭介】

査読委員

Asian Journal of Medical Principles and Clinical Practice 1 件

Asian Journal of Medicine and Health 2 件

Brain Tumor Pathology 3 件

Case Reports in Oncology 4 件

International Journal of Molecular Sciences 2 件

Journal of Advances in Medicine and Medical Research 2 件

Journal of Pharmaceutical Research International 2 件

Neuropathology 3件
Nutrients 1件
UTTAR PRADESH JOURNAL OF ZOOLOGY 1件
Viruses 1件

【山口 浩】

査読委員

Diagnostic cytopathology 1件

膵臓 (日本膵臓学会誌) 1件

【浜田 芽衣】

査読委員

Oncology Letters 1件

Experimental and Therapeutic Medicine 2件

International Journal of Molecular Sciences 1件

BMC Oral Health 1件

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本脳腫瘍病理学会常任理事・学術委員会委員長：佐々木 惇

第40回日本脳腫瘍病理学会総会 会長：佐々木 惇

認定臨床研究審査委員会副委員長：山田 健人

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① GTN057, a komaroviquinone derivative, induced myeloma cells' death in vivo and inhibited c-MET tyrosine kinase Okatama M, Fujimori K, Sato M, Samata K, Kurita K, Sugiyama H, Ichikawa D, Matsushita M, Suto Y, Iwasaki G, Yamada T, Kiuchi F, Hirao M, Kunieda H, Yamazaki K, Hattori Y *Cancer Med* 2023 Feb 24. doi: 10.1002/cam4.5691. PMID: 36825580
- ② Humanized anti-IL-26 monoclonal antibody as a novel targeted therapy for chronic graft-versus-host disease Hatano R, Itoh T, Otsuka H, Saeki H, Yamamoto A, Shirakawa Y, Song D, Iyama S, Sato T, Iwao N, Harada N, Aune T, Dang N, Kaneko Y, Yamada T, Morimoto C, Ohnuma K *American Journal of Transplantation* 2022 Dec;22(12): 2804-2820. doi: 10.1111/ajt.17178. Epub 2022 Sep 9. PMID: 35997569
- ③ Increased pancreatic alpha cell to beta cell ratio in patients with pancreatic cancer Tsuchiya, T, Saisho Y, Inaishi J, Sasaki H, Sato M, Nishikawa M, Masugi Y, Yamada T, Itoh H. *Endocrine Journal* doi:10.1507/endocrj.EJ22-0170 *Endocr J.* 2022 Dec 28;69(12):1407-1414. doi: 10.1507/endocrj. EJ22-0170. Epub 2022 Aug 6. PMID: 35934795
- ④ Nakazawa S, Mamiya R, Kawabata-Iwakawa R, Oikawa D, Kaira K, Tokunaga F, Nobusawa S, Sato Y, Sasaki A, Yajima T, Shirabe K. Identification and molecular analysis of RNF31 Q622H germline polymorphism. *Oncol Lett.* 2022 Sep 21;24(5):394. doi: 10.3892/ol.2022.13514. eCollection 2022 Nov.
- ⑤ Elenia A, Ichimura T, Hamada M, Ishikawa M, Murakami T, Sasaki A, Nakamura K, Kobayashi N, Obi T: Hyperspectral imaging for tumor segmentation on pigmented skin lesions. *J Biomedical Optics Open Access* Volume 27, Issue 101 October 2022
- ⑥ Diagnostic Categories and Key Features for Pathological Diagnosis of Endoscopic Ultrasound-Guided Fine Needle Aspiration Biopsy Samples of Pancreatic Lesions: A Consensus Study. Naito Y, Notohara K, Omori Y, Aishima S, Itoi T, Ohike N, Okabe Y, Kojima M, Tajiri T, Tanaka M, Tsuneki M, Nakagohri T, Norose T, Hirabayashi K, Fukumura Y, Mitsunashi T, Yamaguchi H, Fukushima N, Furukawa T. *Pancreas.* 2022 Oct 1;51(9):1105-1111
- ⑦ Pancreatic hamartoma: detection of harbouring NAB2::STAT6 fusion gene. Tanigawa M, Koga Y, Naito Y, Yamaguchi H, Iwasaki T, Kohashi K, Ohike N, Hanada K, Higashi M, Komatsu M, Imai H, Yamakita K, Nagakawa T, Okabe Y, Kato S, Noguchi H, Nakayama T, Yasuda M, Kusano H, Akiba J, Oda Y, Yano H. *Histopathology.* 2022 Sep;81(3):319-328.
- ⑧ M. Hamada, Y. Ebihara, Saori Yoshida, N. Saito, Yuichiro Enoki, H. Inoue, Satoko Matsumura, M. Nakahira, Masanori Yasuda, M. Sugawara. Prediction Formula for Pathological Depth of Invasion From Clinical Depth of Invasion in Tongue Squamous Cell Carcinoma (SCC) Stage I/II Cases. 2023 Feb 1. *Cureus* 15(2): e34516. doi:10.7759/cureus.34516.
- ⑨ K Kusafuka, Y Sato, E Nakatani, S Baba, M Maeda, K Yamanegi, K Ueda, H Inagaki, Y Otsuki, N Kuroda, K Suzuki, H Iwai, Y Imamura, J Itakura, S Yamanaka, H Takahashi, I Ito, T Akashi, T Daa, M Hamada, M Yasuda, R Kawata, H Yamamoto, Y Tachibana, J Fukuoka, A Muramatsu, K Arai, M Suzuki. The implicated clinical factors for outcomes in 304 patients with salivary duct carcinoma: Multi-institutional retrospective analysis in Japan. *Head Neck.* 2022 Jun;44(6): 1430-1441. doi: 10.1002/hed.27034. Epub 2022 Mar 29.
- ⑩ E Aloupogianni, M. Ishikawa, T. Ichimura, M Hamada, T Murakami, A Sasaki, K Nakamura, N Kobayashi, T Obi. Effects of dimension reduction of hyperspectral images in skin gross pathology. *Skin Res Technol.* 2023 Feb;29(2): e13270. doi: 10.1111/srt.13270.

6-2. 獲得研究費

【山田 健人】

- ① 挑戦的研究(萌芽) 核内へ移行する scFV モノクローナル抗体の開発研究(課題番号 22K19387) 研究代表者 250 万円
- ② 基盤研究(C)(一般) 難治性多発性骨髄腫の CD26 の発現誘導を制御する HDAC アイソフォームの役割(課題番号 20K07682) 研究分担者 0 円
- ③ 基盤研究(C)(一般) 新たな概念によるハイリスク骨髄腫の予後不良に関わる分子機構の探索と克服薬の開発(課題番号 20K08763) 研究分担者 10 万円
- ④ 厚生労働省・労災疾病臨床研究事業 悪性胸膜中皮腫に対するヒト化抗 CD26 抗体と免疫チェックポイント阻害薬との革新的併用療法の開発(課題番号 18065135) 研究分担者 90 万円
- ⑤ 日本医療研究開発機構・革新的がん医療実用化研究事業 核内移行する抗体への RNA ポリメラーゼ II 阻害分子の結合によるがん分子標的療法の開発(課題番号 21ck0106704h0001) 研究代表者 4423 万円
- ⑥ 一般財団法人日本産業科学研究所 令和 4 年度研究助成 サルコイドーシスにおける CD26 陽性 T 細胞サブセットの病理学的解析 研究代表者 50 万円

【佐々木 惇】

基盤研究(C)(基金) 天然食品成分による口腔癌幹細胞抑制メカニズムの解析：効果的口腔癌治療を目指して(課題番号 22K10156-1) 研究分担者 10 万円

【山口 浩】

基盤研究(B)(一般) ゲノム医療が導く究極の肺癌予防法・予防的膺全摘術の適応患者とは?(課題番号 20H03753) 研究分担者 10 万円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

第一の目標である、「臨床医とコミュニケーションをとり、正しい病理診断を行う」については十分に達成された。「臨床病理カンファレンスの定期的開催」も予定通り達成された。

「細胞診と生検診断の迅速性向上」に関しては従来よりも若干改善されたが、未だ不十分な結果であった。研究に関しては、学会発表は日本病理学会などの全国学会で発表でき、論文発表も活発に行われた。

「病理のわかる良き臨床医育成」に関しては、初期研修医への教育でかなり達成できた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

「細胞診と組織診の結果報告までの時間短縮」、「英文論文を含む論文発表の増加」、「病理医のマンパワーの充実」、「医療安全に向けた病理結果報告の確認」。

1. 36) 輸血・細胞移植部

1. 構成員

前田卓哉 (MAEDA, Takuya) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 検査医学 : 博士
小林清子 (KOBAYASHI, Kiyoko) : 講師 : 教育主任 : 輸血学 : 博士
岡田義昭 (OKADA, Yoshiaki) : 客員准教授 : 輸血学 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

【卒前教育】

安全で適正な輸血療法の実施について見識を深めるとともに、輸血による副反応・感染症とその対策について指導する。血液事業ならびに関連法規を理解し、エビデンスに基づいた安全な輸血医療を遂行できる医療者の育成を目標とする。

【卒後教育】

輸血検査室勤務の臨床検査技師と一体となり、職種を越えた院内教育に積極的に取り組む。臨床検査技師に対する検査指導はもとより、一人でも多くの輸血認定医師および臨床検査技師の育成に取り組むとともに、本学における輸血医学の教育を牽引する人材の育成を狙う。

【大学院教育】

該当なし

2-2. 教育実績 (担当者)

【卒前教育】

医学部4・5年生のCC Step1では、採血手技の実習と血液型検査、交差適合試験、不規則抗体検査などを実習した。このほか、血液製剤の種類と留意点、輸血副反応の解説、輸血トリガー値、輸血効果の評価法についても指導している(全員)。

医学部6年生の医学総論では、診療録について講義を行った。ここでは、診療録の基本的事項の他に、検査結果に対する評価、輸血準備量の根拠や効果についても診療録に記載するよう指導している(小林)。

保健医療学部臨床検査学科3年生の臨地実習にも取り組んでいる。では、実践に即した指導を心がけており、実際の臨床検体を用いた血液型検査、交差適合試験などの習熟を目指し指導している(全員)。

【卒後教育】

輸血検査室と一体となり、研修医を含む大学病院の新人職員教育を実施した。ここでは実際の臨床場面を想定し、製剤の選択と投与量の決定、輸血オーダー方法、予測される治療効果と副反応について解説した(全員)。

【大学院教育】

該当なし。

2-3. 達成度評価

引き続き、卒前・卒後教育および大学院教育の充実に取り組み、診療科としてのプレゼンスを高める努力が必要であると考え。学生からのフィードバックを受け入れ、時代に即した新しい教育体制の構築が急務である。新たな達成目標をたて、その到達度を客観的に評価する枠組みも必須である。

2-4. 自己評価と次年度計画

限られた人員ではあるが、中央検査部を含むキャンパス内関連部門との連携のみならず、国際医療センターなど法人内での連携を強化し、次年度以降は一体となった教育体制を構築したいと考える。

3. 研究

3-1. 目的・目標

日常臨床の中で、安全な輸血環境の整備に向けた取り組みや、稀な血液型、複雑な不規則抗体、製剤選択が難しい事例について調査し、その結果を学会にて公表することで輸血医療の進歩に貢献するべく努力している。今後は、診療科内において継続可能なプロジェクト研究を立ち上げ、研究指導體制の構築を目指す。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト)

該当なし。

3-3. 研究内容と達成度

今年度は、当院での遅発性溶血性副反応について輸血学会で報告した。外部資金の獲得・論文業績のいずれにも不足しており、今後の課題とする。

3-4. 自己評価と次年度計画

研究環境の整備、指導體制の確立が急務である。まずは国際雑誌における成果公表を目標とする。

3-5. 上記3-1～3-4の要約 (病院要覧用)

日常臨床での稀な血液型、複雑な不規則抗体、製剤選択が難しい事例について調査し、診療科に安全な血液製剤を提供する。これらの経験は学会発表や論文公表を行い、輸血医学の進歩に貢献している。

4. 診療

安全で適正な輸血医療を目指し、血療法委員会を通じて診療科への情報提供および指導を実施している。また、輸血監

査の実施とともに、全ての血液製剤の使用済みバッグの回収を行なっている。不規則抗体陽性者、自己抗体陽性者などへの製剤選択について、輸血検査室と協力し各診療科へのアドバイスを実施している。整形外科や産科の予定手術症例の自己血輸血を推進し、多くの患者さんが自己血のみで手術を受けられるよう務めている。

5. その他

- 5-1. 自治体、政府関連委員の有無
埼玉県合同輸血療法委員会世話人（岡田）
厚生労働省薬事・食品衛生審議会血液事業部会委員（岡田）
- 5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無
該当なし
- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務
該当なし

6. 業績

- 6-1. 論文・学会発表
論文発表
該当なし
学会発表
山麻衣子、玉栄建次、加藤由佳、鈴木雅之、内野富美子、山田攻、小原祥、天野博明、小林清子、岡田浩一、岡田義昭 カラム凝集法で検出感度以下であった不規則抗体による遅発性溶血性副反応の一例
第70回日本輸血・細胞治療学会総会，名古屋，2022.
1. 岡田義昭、小林清子、野島清子 B型肝炎ウイルスのin vitro培養系を用いた血液製剤の不活化効果の評価と抗HBs免疫グロブリンの中和活性の測定 第70回日本輸血・細胞治療学会総会，名古屋，2022.
2. 岡田義昭、渡士幸一、野島清子 In vitro感染系とB型肝炎ウイルス陽性血漿を用いた血漿分画製剤における液状加熱による不活化と抗HBs免疫グロブリン製剤による中和活性の評価 第70回日本ウイルス学会学術総会、長崎、2022.

(総数：論文0件、学会発表3件)

- 6-2. 獲得研究費
厚生労働科学研究費補助金 研究代表者 1件
厚生労働科学研究費補助金 分担研究者 2件
- 6-3. 受賞
該当なし
- 6-4. 特許、実用新案
該当なし
- 6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績
該当なし

7. 自己点検・評価

- 7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果
医師と臨床検査技師、看護師が協力し、安全な輸血実施の環境整備に取り組むことができた。今年度は医療安全対策室との連携を密に取ることで、具体的な対策を講じることができた。一方、学会発表や論文発表は不十分であり、アカデミックマインドを定着させることが必要である。
- 7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画
検査室移転に向けた準備・調整、ISO15189受審に向けての準備を計画的に行う。医師のみならず臨床検査技師が積極的に学会発表や論文発表を行うよう指導を行う。

1. 37) 予防医学センター

1. 構成員

村松俊裕 (MURAMATSU, Toshihiro) :教授 :センター長(診療部長) 研究/教育主任 :循環器病学 :博士
山内洋子 (YAMANOUCI, Yoko) :准教授 :内科学(脳神経内科) 健康管理学 リハビリテーション学 :博士
後藤誠一 (GOTOH, Seiichi) :講師 :内分泌・糖尿病学 健康管理学 :博士
(兼担) 井上郁夫 (INOUE, Ikuo) :教授 :副センター長 内分泌・糖尿病学 動脈硬化学 :博士
(兼担) 杣 知之 (SOMA, Tomoyuki) :教授 :呼吸器病学 アレルギー病学 :博士
(客員教授) 足立雅樹 (ADACHI, Masaki) :放射線医学 健康管理学 :博士
(客員教授) 倉光 薫 (KURAMITSU, Kaoru) :呼吸器病学 健康管理学 :博士
(客員教授) 丸山義明 (MARUYAMA, Yoshiaki) :循環器病学 動脈硬化学 :博士
(客員講師) 佐竹亮介 (SATAKE Ryosuke) :外科学, 小児外科学 :博士
(非常勤) 清水正雄 (SHIMIZU, Masao) :放射線医学 健康管理学 画像医学
(非常勤) 矢澤真佐子 (YAZAWA, Masako) :内科学(内分泌糖尿病学)
(非常勤) 関口浩子 (SEKIGUCHI, Hiroko) :眼科学 :博士
(非常勤) 野口史 (NOGUCHI, Fumi) :眼科学
(非常勤) 颯佐正俊 (SASSA, Masatoshi) :内科学(循環器病学)
(非常勤) 左 淳奈 (CHA, Junna) :産婦人科学
(非常勤) 飯田真理子 (IIDA, Mariko) :内科学(呼吸器病学)
(保健師・看護師) 内村常子副師長、嶋田佳子主任、石井みき、鈴木愛美、竹治翔太、藤原富美子、神戸麻衣子、
長谷部洋子、柴田明子、内田綾那(2022年12月退職)、木島正子
(非常勤) 谷藤とも子、小澤久子
(看護助手) 窪山雅子
(Medical Assistant) 市川淳弥
(放射線技師) 成田政広、河崎浩明、小堀舞
(検査技師) 黒岩比呂美、有田信和、永島かおり、伊藤愛恵
(管理栄養士) 西方ゆい(大学病院兼務)
(事務) 松井裕行事務室長、原公郎係長、武田麻里子、椿本旨美、宮田さおり、福田あかり
(非常勤) 水村順孝、南茂男、戸館陽子、柴田明子
(業務員) 松本聡

2. 教育

2-1. 目的・目標

1. 大学病院から予防医学の重要性を発信し発展を推進していく。具体的には社会医学系・地域診療における生活習慣病の予防と悪性腫瘍の早期発見の重要性を鑑み、画像診断や各種検査結果を基に個々の病態を把握し、受診者によりわかり易く面接、健康維持の大切さを理解していただくことを目標とする。
2. 埼玉医科大学病院医学生・研修医のローテーションと、毛呂看護学生の予防医学センター実習の受け入れを行い、予防医学の学習をする。
医学生の実習には人間ドックの体験や産業医活動・労働安全委員会参加体験、企業バス検診巡回などと保健師による栄養指導を経験する。後期研修医においては予防医学の重要性を理解し、大学病院内で経験できない胃透視検査の経験や各種健診画像について理解する。また巡回検診のバス検診に参加し地域医療の大切さとチーム医療を経験する。また医師、臨床検査技師や診療放射線技師による各種超音波(腹部・甲状腺・頸動脈・心臓・婦人科領域)、心電図、胃透視検査などの実地指導をする。
毛呂看護学生の实習指導に関しては看護師・保健師スタッフから直接指導が行われる。
3. 産業医活動の重要性を理解し、埼玉医科大学医師会主催の産業医研修会開催企画に協力して産業衛生学に関して学ぶ。

2-2. 教育実績

2022年度は1名の研修医を受け入れ、学習計画に従い指導した。

2-3. 達成度評価

2022年度は1名の研修医を受け入れ、学習計画に従いスタッフによる丁寧な教育が行われた。

2-4. 次年度改善計画

教員スタッフとして新たに慈恵医大放射線科非常勤講師・鎌倉湘南病院非常勤医師の入江健夫先生を非常勤講師に迎えて、医学生・研修医の教育に専念いただくことで教育も充実させる予定であり、多くの医学生・研修医のローテーションを待っている。

3. 研究

3-1. 目的・目標

開設以来25年以上のデータの集積があり、疾病予防および健康推進と加齢現象の画像診断、ならびにその評価の解析を研究課題としている。医師だけでなくスタッフ全員が日常業務の中から問題点を抽出し、その解決策の検討を研究テーマとしている。実践した結果は人間ドック学会、総合健診学会、院内研究会などで報告することを目標としている。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究業績

2022年度に新規研究はなかったが、2023年新年度から山内らが「大学病院予防医学センターにおける紹介後経過の追跡調査と、がん早期発見への寄与の検討」の研究を開始した。

3-3. 達成度評価

コロナ感染下での健診という特殊な環境の中で、研究に関して十分な時間が割くことが出来なかった。

3-4. 次年度改善計画

今までデータ活用は不十分であったため、まず蓄積されたデータベースを構築する作業から開始、これらのデータを使って学会発表、論文に努める予定である。また、従来個々の医師で進められた研究体制をセンター内共有して研究テーマや抄読会などミーティングの時間を構築することから始める予定である。

4. 診療

予防医学センターは人間ドック、生活習慣病予防健診や教職員学生の健康、バス健診を介して疾患の一次予防を業務としている。この理念のもとに質の高い信頼のおける健診を提供してきた。しかしCOVID19感染症に加え、人間ドックの健診項目として人気のある内視鏡検査、婦人科健診に関する常勤医師不在が運営に大きく影響しており、マンパワー解決が次年度最重要課題である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県がん検診読影委員（倉光）
埼玉県医師会産業医会理事（村松、足立）
埼玉県生活習慣病検診管理指導協議会委員（村松）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本人間ドック医学会理事（足立） 社員（清水）
総合健診学会編集委員（足立） 実査委員（足立・清水・有田）
総合健診学会・日本ドック学会の査読委員（足立・清水・有田・丸山）
Hypertension Research 査読委員（丸山）
Annals of Vascular Diseases (AVD) 査読委員（丸山）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

産業医研修会開催（足立、清水、松井、有田）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1. 論文

- ① Yoko Yamanouchi, Kyoko Maeda, Yusuke Shinoda, Mitsuru Majima, Jongseok Lee, Ikuo Inoue, Yoshiaki Maruyama, Hitoshi Kurabayashi. Can Outpatient Rehabilitation Be Continued During the COVID-19 Pandemic? A Report from a Japanese Regional Medical University Hospital. Archives of Rehabilitation Research and Clinical Translation (2022) 4, 100199, Available online 2 May 2022,
- ② Yoko Yamanouchi, Ikuo Inoue, Seiichi Goto, Yoshiaki Maruyama. Obesity, atherosclerotic risk

factors, and metabolic syndrome in vascular aging and treatment in the elderly. 総合健診
<https://doi.org/10.7143/jhep.2021-33>.

③ Seichi Goto, Yoshiaki Maruyama, Masao Shimizu, Masaki Adachi. Relationship between bone mineral density and aortic calcification or arterial stiffness(Ca triangle). J. Clin. Physiol. Vol53, No1, 2023
2. 学会発表

①村松俊裕 第8回和温療法研修会(講演)；「慢性心不全に対する和温療法の臨床経験」(2022年11月26日、東京)

②山内洋子、前田恭子、李宗錫、間嶋満、篠田裕介、倉林均. 予防医学の担い手としての外来リハビリテーション担当医師の役割. 第59回日本リハビリテーション医学会学術集会(横浜) 2022年6月25日

③石井みき、藤原富美子、神戸麻衣子、木島正子、小澤久子、嶋田佳子、内村常子. 人間ドッグにおける栄養指導を受けた受診者の生活改善の実態調査. 第55回看護研究発表(2023年1月21日)

3. 著書

村松俊裕(分担執筆). 不整脈・心房細動；自分で治す最強事典、マキノ出版(2023年3月7日 初版)

【総数：論文3件、学会発表2件、講演1件 著書1件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

村松俊裕. 第264回日本循環器学会関東甲信越地方会(2022年5/30~6/4 web開催)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育に関しては新たな教育人員を確保でき、研究に関してはデータベース作成を開始して基盤形成はされつつある。診療に関しては、マンパワー不足が改善計画達成に支障を来しているが、スタッフ一同その不足分を補う活動をしてきている。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

2022年度もCOVID19感染症の終息は不明であったが、2023年5月には感染症5類となる予定である。今年も過去の経験から学んだ多くの知見に基づき、教育、研究、診療において今後の在り方を模索しつつ、さらに内容を充実させていく予定である。当センターでは毎週行われる全体会議やスタッフ会議、受診者アンケートを通して、感染対策と受診者満足度をさらに上げるための方法についてスタッフ全員の声を吸い上げ、引き続き対策していく方針である。

1. 38) ゲノム医療科

1. 構成員

沼倉 周彦 (NUMAKURA, Chikahiko)	: 准教授: 運営責任者: 診療部長: 指導教員 (大学院) 小児科学, 臨床遺伝学, 先天代謝異常学, 小児内分泌学: 博士
難波 聡 (NAMBA, Akira)	: 准教授: 教育主任, 研究主任 産科婦人科学, 臨床遺伝学, 生殖内分泌学: 博士
上村 のぞみ (UEMURA, Nozomi)	: 助教: 研究員: 産科婦人科学
佐藤 はづき (SATOU, Haduki)	: 助教: 研究員: 産科婦人科学
味原 さや香 (AJIHARA Sayaka)	: 助教: 研究員: 小児科学
武者 育麻 (MUSYA Ikuma)	: 助教: 研究員: 小児科学
鶴岡 恵 (TSURUOKA, Megumi)	: 助教: 認定遺伝カウンセラー
志食 絵理 (SHIJIKI Eri)	: 助教: 認定遺伝カウンセラー, 生殖補助医療胚培養士
水野 洋介 (MIZUNO, Yosuke)	: 准教授: 指導教員 (大学院): 分子生物学: 博士
成塚 裕亮 (NARIZUKA, Yusuke)	: 実験助手: 臨床検査技師
原嶋 宏子 (HARASHIMA, Hiroko)	: 助手: 臨床検査技師
【特任教授】	
大竹 明 (OHTAKE, Akira)	: 特任教授: 小児科学, 代謝・遺伝病学, 分子生物学: 博士
【客員】	
西村 玄 (NISHIMURA, Gen)	: 客員教授: 放射線学: 博士
林 直樹 (HAYASHI, Naoki)	: 客員准教授: 産婦人科学: 博士
【非常勤医師】	
木下 善仁 (KISHITA Yoshihito)	
新田 和広 (NITUTA Kazuhiro)	
四元 淳子 (YOTUMOTO Jyunko)	
【研究医員】	
阿部 裕一 (ABE Yuichi)	
荒木 和浩 (ARAKI Kazuhiro)	
川邊 絢香 (KAWABE Ayaka)	

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

【卒前教育】

将来的な臨床遺伝学ユニット設置を目的に、各ユニットに遺伝学関連講義が散らばっている現状での講義内容を把握し、担当教官の協力を得て順番・内容の整理を図ること、また、2022年から臨床実習(CC step1)においてゲノム医療科実習を1日組み入れられるよう働きかけることを目標とした。

【卒後教育】

臨床遺伝専門医をめざす医師の研修の場を整備することを目的に、昨年度中に人類遺伝学会認定の臨床遺伝専門医研修施設に認可されるべく申請を行うことを目標としたが果たせず、2022年度中には達成する。

【大学院教育】

大学院教育に段階的に参画することを目的に、1名迎えた社会人大学院生に対する教育体制の充実を目標とした。保健医療学部にて認定遺伝カウンセラー養成コースを樹立する準備を始め、2022年度中の完成を目指す。

2-2. 教育実績(担当者)

【卒前教育】

医学部2年生のエネルギー系ユニットにおいて大竹が先天代謝異常症を2コマ、医学部3年生の内分泌・代謝学ユニットにおいて沼倉が先天代謝異常症を1コマ、婦人科疾患ユニットにおいて難波が「婦人科遺伝」を1コマ、4年生の周産期ユニットにおいて、沼倉が「先天異常」を1コマ、難波が「周産期臨床遺伝」を1コマ担当した。5年生の臨床実習においては毛呂の産婦人科実習の中で遺伝外来見学を必須としており、主にNIPTや出生前診断を希望する妊婦に対する周産期遺伝カウンセリングの見学およびミニレクチャー、ディスカッションを行った(難波・上村・佐藤・志食)。6年生の小児科総論ユニットにおいて沼倉が「小児特有の全身症状」「染色体異常、先天代謝異常症」の2コマを担当した。

【卒後教育】

小児科・産婦人科をローテーション中の初期研修医、両科の専攻医に対しては、毎月第3火曜日の臨床遺伝カンファレンスと毎月第3水曜日のNICU遺伝カンファレンスにおいて、臨床遺伝学教育を行った。大学病院以外の病院からも複数の医師の臨床遺伝専門医取得のための研修を受け入れた(沼倉・難波・大竹・鶴岡)。

臨床遺伝専門医に味原、荒木が合格、認定遺伝カウンセラーに志食が合格した。2022年度中に人類遺伝学会認定の臨床遺伝専門医研修施設に認可されるべく申請を行うことを目標としたが果たせず、2023度中には達成する。

【大学院教育】

保健医療学部の遺伝医学コースの受講希望1名に対して、プログラムに則り講義を行った。医学部の社会人大学院生を1名、博士課程研究生を1名迎えた（大竹）。保健医療学部に認定遺伝カウンセラー養成コースを樹立する準備を始め、2024年度からの開講を目指す（大竹・難波）。

2-3. 達成度評価

【卒前教育】

講義内容の把握・整理はできず、ゲノム医療科実習導入への働きかけもできなかったため、目標は十分達成できなかった。

【卒後教育】

臨床遺伝専門医研修施設の認可申請ができなかったため、目標は十分達成できなかった。

【大学院教育】

保健医療学部の遺伝医学コースを1名迎えた。大学院生と博士課程研究生を1名ずつ迎え、教育・研究活動が行えているため、目標は達成できた。

2-4. 次年度改善計画

【卒前教育】

前年度と同様、将来的に臨床遺伝学ユニット設置を働きかけるべく、各ユニットに遺伝学関連講義が散らばっている現状での講義内容を把握し、担当教官の協力を得て内容の整理を図る。また、2024年から臨床実習（CC step1）においてゲノム医療科実習を1日組み入れられるよう働きかける。

【卒後教育】

人類遺伝学会認定の臨床遺伝専門医研修施設に認可申請を行う。

【大学院教育】

1名ずつ所属する医学部大学院生と博士課程研究生の教育体制・研究体制を整備する。また、保健医療学部の大学院として認定遺伝カウンセラー養成コースを設置する準備をすすめる。

3. 研究

3-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

ミトコンドリア病の分野では、引き続き世界のリーダーとしての役割を果たし続けることを目的に、学会・論文発表を継続することを目標とした。また NIPT 関連の研究について、結果発表まで進めることを目標とした。重篤な遺伝性疾患に対する着床前遺伝学的検査（PGT-M）関連の研究を立ち上げることを目標とした。シトリン欠損症については新生児マススクリーニングに有用な新指標の策定を目標とした。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）

1. 先天性高乳酸血症・ミトコンドリア病の診断と病因および病態解明に関する次世代シーケンス法を用いた研究
2. ミトコンドリア病に対する 5-アミノレブリン酸塩酸塩およびクエン酸第一鉄ナトリウムの有効性及び安全性に関する研究
3. 進行性骨化性線維異形成症・進行性化骨性筋炎（Fibrodysplasia Ossificans Progressiva; FOP）の遺伝子診断と新薬の開発についての研究
4. ライソソーム病、重症複合免疫不全症、脊髄筋萎縮症、副腎白質ジストロフィーに対する新生児オプションスクリーニング法の確立
5. 出生前診断、特に NIPT の応用
6. 着床前診断、培養液を用いた PGT-M の確立に向け研究を行う
7. 新生児マススクリーニングにおけるシトリン欠損症の指標の探求

3-3. 達成度評価

1. 2022 年度までに日本全国およびアジアの一部の国の 3253 家系 5528 人の検体を受け付け、1894 例をミトコンドリア病と酵素診断した。診断された症例のうち 1003 例で次世代シーケンス法を用いた遺伝子解析が終了し、うち 872 例で既報告の遺伝子異常を、131 例で新規候補遺伝子異常を発見している（達成度 50%）
2. 5-アミノレブリン酸塩酸塩およびクエン酸第一鉄ナトリウムを用いた医師主導治験（検証試験）は 2020 年 10 月にはキーオープンを行い、論文投稿準備中である（達成度 80%）
3. ゲノム医学研究センター、整形外科、中央検査部との共同で検査を継続中で、2022 年度までに 14 人の来院患者と他病院から 36 人の患者検体を得て解析した。今後、治療法の開発にも取り組む（達成度 70%）

4. ライソソーム病と中心とする治療法の確立された病気を対象に2018年2月から開始した新生児オプショナルスクリーニングは、徐々に参加病院と対象疾患を増やし、今年度は新たにFabry病の新患1例を発見した（達成度40%）
5. 全ゲノムNIPT結果の後方視的解析、胎児発育遅延症例の前方視的全ゲノムNIPT解析を行い、学会発表を行った。また、当院での実績が評価され、全ゲノムNIPTと胎児発育遅延の関連を調査する多施設共同研究の幹事を任せられ準備中である（難波）（達成度40%）
6. 非侵襲的PGT-Mの実現に向けて、培養液から全ゲノム増幅ができることを確認した。（佐藤、難波）（達成度15%）
7. シトリン欠損症に対する新生児マススクリーニングの新指標について人工知能を用いて解析したが、有用な新指標は見いだせなかった。（沼倉）（達成度100%）

総括するとミトコンドリア病の分野では、学会・論文発表を行えたが、NIPT関連の研究については学会発表を行ったものの論文発表には至らなかったため、十分には達成できなかった。

3-4. 次年度改善計画

ミトコンドリア病の分野では、引き続き世界のリーダーとしての役割を果たし続けることを目的に、学会・論文発表を継続することを目標とする。またNIPT関連の研究については、複数の論文発表まで進めることを目標とする。

上記3-1~3-5の要約(大学病院の病院要覧用)

ゲノム医療科はまだ立ち上がったばかりの診療科であり、多忙な臨床業務の合間に今後も精進を続け、研究成果の上積みを図るためには一層の努力を続ける必要がある。特にミトコンドリア病の分野では、今後も引き続き世界のリーダーとしての役割を果たし続けると共に、NIPTも、その応用研究まで含めて次年度は速やかに結果発表まで進める。シトリン欠損症については成人発症例の危険因子の探索を行う予定である。

4. 診療

ゲノム医療科の扱う分野は胎児期から成人まで多岐にわたる。基本的に全ての分野の遺伝子診断、遺伝カウンセリングに対応しており、各診療科と連携し、遺伝性疾患を持つ患者とその家族が適切な医療とサポートを受けられるように診療を行う。診療と研究の中心分野をミトコンドリア病に定め、その新規病因遺伝子の発見や出生前診断、着床前診断の分野で新しい知見を世界に発信していく。患者・家族からの要望を受け、着床前診断や出生前診断を含めた診療を引き続き行っていく。今後はがんゲノム医療の中で、特に家族性腫瘍の遺伝カウンセリングも手がけていきたい。また診療と研究の境界領域ではあるが、今後もIRUD（未診断疾患イニシアチブ）、CREARID（希少疾患の医療と研究を推進する会）、2022年度から開講した寄付研究講座（希少遺伝性疾患先進ゲノム医療開発講座）との連携も引き続き進める

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

自治体；埼玉県指定難病審査専門委員：大竹 明

自治体；埼玉県マス・スクリーニング運営協議会専門委員：大竹 明

自治体；埼玉県母子保健運営協議会 乳児マス・スクリーニング検査事業検討専門部会委員：大竹 明

自治体；さいたま市先天性代謝異常等検査事業顧問医師：大竹 明

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

大竹 明：日本先天代謝異常学会オンラインジャーナル委員会委員長

査読；Mitochondrion, Annals of Neurology, Biochim Biophys Acta, Journal of Human Genetics、Pediatrics International, Clinical Pediatric Endocrinology, Brain & Development、日本小児科学会雑誌、日本マス・スクリーニング学会雑誌等

難波 聡：臨床スポーツ医学会誌編集委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

大竹 明：日本先天代謝異常学会理事 オンラインジャーナル委員会委員長、臨床研究推委員会委員長

大竹 明：日本マス・スクリーニング学会理事 患者登録・支援委員会委員長、財務委員、将来計画委員会委員

大竹 明：日本ミトコンドリア学会理事

大竹 明：日本小児科学会埼玉地方会理事 常務委員

大竹 明：北関東遺伝診療フォーラム代表世話人・事務局

大竹 明：埼玉酵素補充療法研究会代表世話人・事務局

Akira Ohtake:SAB (Scientific Advisory Board) KHONDRION

沼倉 周彦：日本小児内分泌学会評議員

沼倉 周彦：日本マス・スクリーニング学会学会評議員

沼倉 周彦：全国遺伝子医療部門連絡会議委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- 1) Nagasaki K, Minamitani K, Nakamura A, Kobayashi H, Numakura C, Itoh M, Mushimoto Y, Fujikura K, Fukushi M, Tajima T: Guidelines for Newborn Screening of Congenital Hypothyroidism (2021 Revision). *Mol Genet Metab Rep.* 2023 Mar 17;35:100966. doi: 10.1016/j.yngmr.2023.100966. eCollection 2023 Jun. PMID: 36967720
- 2) Kido J, Häberle J, Sugawara K, Tanaka T, Nagao M, Sawada T, Wada Y, Numakura C, Murayama K, Watanabe Y, Kojima-Ishii K, Sasai H, Kosugiyama K, Nakamura K. Clinical manifestation and long-term outcome of citrin deficiency: Report from a nationwide study in Japan. *J Inherit Metab Dis.* 2022 May;45(3):431-444. doi: 10.1002/jimd.12483. Epub 2022 Feb 25. PMID: 35142380
- 3) Kanno M, Suzuki M, Tanikawa K, Numakura C, Matsuzawa SI, Niihori T, Aoki Y, Matsubara Y, Makino S, Tamiya G, Nakano S, Funayama R, Shirota M, Nakayama K, Mitsui T, Hayasaka K: Heterozygous calcyclin-binding protein/Siah1-interacting protein (CACYPB/SIP) gene pathogenic variant linked to a dominant family with paucity of interlobular bile duct. *J Hum Genet.* 2022 Jul;67(7):393-397. doi: 10.1038/s10038-022-01017-0. Epub 2022 Jan 28. PMID: 35087201
- 4) Yépez VA, Gusic M, Kopajtich R, Mertes C, Smith NH, Alston CL, Ban R, Beblo S, Berutti R, B lessing H, Ciara E, Distelmaier F, Freisinger P, Häberle J, Hayflick SJ, Hempel M, Itkis YS, Kishita Y, Klopstock T, Krylova TD, Lamperti C, Lenz D, Makowski C, Mosegaard S, Müller MF, Muñoz-Pujol G, Nadel A, Ohtake A, Okazaki Y, Procopio E, Schwarzmayr T, Smet J, Staufner C, Stenton SL, Strom TM, Terrile C, Tort F, Van Coster R, Vanlander A, Wagner M, Xu M, Fang F, Ghezzi D, Mayr JA, Piekutowska-Abramczuk D, Ribes A, Rötig A, Taylor RW, Wortmann SB, Murayama K, Meitinger T, Gagneur J, Prokisch H: Clinical implementation of RNA sequencing for Mendelian disease diagnostics. *Genome Med.* 2022 Apr 5;14(1):38. doi: 10.1186/s13073-022-01019-9.
- 5) Imai-Okazaki A, Nitta KR, Yatsuka Y, Sugiura A, Arao M, Shimura M, Ebihara T, Onuki T, Ichimoto K, Ohtake A, Murayama K, Okazaki Y: Impact of measuring single-cell heteroplasmy of causative mitochondrial DNA variants in patients with MELAS. *J Inherit Metab Dis.* 2022 Aug 13. Doi: 10.1002/jimd.12547. Online ahead of print. PMID: 36053827
- 6) Burgin H, Sharpe AJ, Nie S, Ziemann M, Crameri JJ, Stojanovski D, Pitt J, Ohtake A, Murayama K, McKenzie M: Loss of Mitochondrial Fatty Acid β -Oxidation Protein Short Chain Enoyl-CoA Hydratase Disrupts Oxidative Phosphorylation Protein Complex Stability and Function. *FEBS J.* 2022 Aug 13. doi: 10.1111/febs.16595. Online ahead of print. PMID: 35962613
- 7) Ebihara T, Nagatomo T, Sugiyama Y, Tsuruoka T, Osone Y, Shimura M, Tajika M, Ichimoto K, Naruke Y, Akiyama N, Lim SC, Yatsuka Y, Nitta KR, Kishita Y, Fushimi T, Okazaki A, Ohtake A, Okazaki Y, Murayama K: Severe spinal cord hypoplasia due to a novel *ATAD3A* compound heterozygous deletion. *Mol Genet Metab Rep.* 2022 Aug 24;33:100912. doi: 10.1016/j.yngmr.2022.100912. eCollection 2022 Dec. PMID: 36061954
- 8) Harada-Shiba M, Ohtake A, Sugiyama D, Tada H, Dobashi K, Matsuki K, Minamino T, Yamashita S, Yamamoto Y. Joint Working Group of the Japan Pediatric Society and the Japan Atherosclerosis Society for the Development of Guidelines for the Treatment of Pediatric Familial Hypercholesterolemia: Guidelines for the Diagnosis and Treatment of Pediatric Familial Hypercholesterolemia 2022. *J Atheroscler Thromb.* 2023 Jan 20. doi: 10.5551/jat.CR006. Online ahead of print. PMID: 36682777
- 9) Burgin MJ, Murayama K, Ohtake A, and McKenzie M: Mitochondrial Short-Chain Enoyl-CoA Hydratase 1 Deficiency (ECHS1D). *Genetic Syndromes* (Ed. by Rezaei), Springer Nature Switzerland AG. https://doi.org/10.1007/978-3-319-66816-1_1343-1, 2022
- 10) wa SC, Namba A, Tamaru S, Kuwahara A, Sago H, Ishihara O, Kamei Y: Down syndrome live births following assisted reproductive technology in Japan: a nationwide survey between 2007 and 2016. *J Assist Reprod Genet.* 2022 Jul;39(7):1625-1631. doi: 10.1007/s10815-022-02501-4. Epub 2022 May 21. PMID: 3559785

【総数：論文 17 件、学会発表 海外 0 件、国内 13 件、講演 13 件】

6-2. 獲得研究費

- 難治性疾患実用化研究事業（令和3年度～5年度, AMED）：アポモルフィンの Leigh 脳症に対する治験準備（代表者：小坂 仁、分担研究者：大竹 明）分担研究費 R4, 1,300 千円
- 難治性疾患実用化研究事業（令和3年度～5年度, AMED）：チトクロム C オキシダーゼを標的としたミトコンドリア病の新規治療薬開発（代表者：新谷泰範、分担研究者：大竹 明）分担研究費 R4, 650 千円

- 希少難治性疾患に対する画期的な医薬品の実用化に関する研究分野 医薬品のシーズ探索研究（医薬品ステップ 0）：変異 mtDNA 標的薬剤による変異ミトコンドリア除去治療法開発（代表者：Jason Lin（ジェイソン リン）、分担研究者：大竹 明）分担研究費 R4, 650 千円
- 難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）（令和 2 年度～4 年度 厚生労働省科学研究費補助金）：ミトコンドリア病、レット症候群の調査研究（代表者：後藤雄一、分担研究者：大竹 明）分担研究費 R4, 250 千円
- 難治性疾患実用化研究事業（令和 2 年度～4 年度, AMED）：多様なミトコンドリア病の遺伝子型/表現型/自然歴等をガイドラインに反映させていくエビデンス創出研究（代表者：村山圭、分担研究者：大竹 明）分担研究費 R4, 325 千円
- ゲノム創薬基盤推進研究事業（令和 2 年度～4 年度, AMED）：日本人小児ミトコンドリア病の固有 VUS に対する網羅的な機能的アノテーション（代表者：岡崎康司、分担研究者：大竹 明）分担研究費 R4, 1300 千円
- 難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）（平成 31 年度～令和 3 年度 厚生労働省科学研究費補助金）：小児慢性特定疾病対策の推進に寄与する実践的基盤提供にむけた研究（代表者：秋丸裕司、分担研究者：大竹 明）分担研究費 R4, 0 千円
- 難治性疾患等政策研究事業（令和 3 年度～5 年度 厚生労働行政推進調査事業補助金）：指定難病の普及・啓発に向けた統合研究（代表者：和田 隆志、分担研究者：大竹 明）分担研究費 R4, 1,000 千円
- 難治性疾患実用化研究事業（令和 2 年度～4 年度, AMED）：人工知能を用いたシトリン欠損症の指標の探索（代表者：笹井 英雄、分担研究者：沼倉 周彦）分担研究費 R4, 559 千円
- 埼玉医科大学創立 50 周年記念特別研究費（令和 4 年度～6 年度 埼玉医科大学）：DNA の配列変異と RNA の発現異常に着目したミトコンドリア病発症メカニズムの解明：理想的着床前診断の実現へ向けて（代表者：難波 聡、分担研究者：大竹 明、沼倉 周彦、秋岡 祐子、味原 さや香、前田 卓哉、水野 洋介、水野 由美）代表研究費 R4-6, 10,000 千円
- 基盤研究(C)（令和 3 年度～5 年度 科学研究費補助金）：マイクロ RNA と長鎖非コード RNA によるミトコンドリア機能調節メカニズムの解明（代表者：水野洋介）代表研究費 R4, 900 千円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- 埼玉難病フォーラム 2022（事務局：大竹 明）

日 時：2022 年 7 月 15 日（月）19：00 ～ 20：30

場所：丸木記念館 ハイブリッド

- 第 18 回北関東遺伝診療フォーラム（事務局、代表世話人：大竹 明）

日 時：2022 年 12 月 28 日（月）18：30 ～ 21：10

場所：パレスホテル大宮 ハイブリッド

- 第 17 回埼玉酵素補充療法講演会（事務局、代表世話人：大竹 明）

日 時：2023 年 3 月 13 日（月）19:00～20:50

場所：パレスホテル大宮 ハイブリッド

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

ゲノム医療科の扱う分野は胎児期から成人まで多岐にわたり、全ての分野の遺伝子診断、遺伝カウンセリングに対応しつつ、出生前診断等の患者・家族からの要望にも応える必要がある。当科に求められる第一の課題はゲノム医療を通じて病院全体の医療の質を高めることであり、これについては埼玉県難病診療連携拠点病院への指定を獲得しているが、臨床遺伝専門医研修施設の認可が得られていない点は改善すべきである。実質の診療面でも、少人数の体制で、患者 1 人当たりの医療費も平均より高く、合格点と思う。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

臨床遺伝専門医研修施設の認可を得ることを最大の目標とする。診療と研究の中心分野を難病全体、その中でもミトコンドリア病に定め、その新規病因遺伝子の発見や出生前診断の分野で新しい知見を国内外に示していく。今までのところ難病の診断、着床前診断を含む出生前診断を重点的に診療しているが、今後はがんゲノム医療の中で、特に家族性腫瘍の遺伝カウンセリングも手がけていきたい。

1. 39) 臨床中毒科

1. 構成員

上條吉人 (KAMIJO Yoshito) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 臨床中毒学 : 救急医学 : 精神医学 : 博士

喜屋武玲子 (KYAN Ryoko) : 講師 : 教育主任 : 救急医学 : 臨床中毒学 : 集中治療

大下敏隆 (Ohshta Toshitaka) : 講師 : 薬剤師 : 薬毒物分析 : 博士

成瀬暢也 (NARUSE Nobuya) : 客員教授 : 精神医学 : 薬物依存症

白井聖尊 (USUI Kiyotaka) : 客員准教授 : 法医学 : 薬毒物分析 : 博士

高井美智子 (TAKAI Michiko) : 客員講師 : 心理学 : 自殺予防 : 博士

千葉 拓世 (CHIBA Takuyo) : 客員講師 : 救急医療 : 臨床中毒

花澤朋樹 (HANAZAWA Tomoki) : 非常勤講師 : 臨床中毒学 : 内科学 : 薬毒物分析 : 博士

芳澤朋大 (YOSHIZAWA Tomohiro) : 非常勤講師 : 臨床中毒学 : 薬学 : 薬毒物分析 : 博士

長野佑紀 (NAGANO Yuki) : 非常勤講師 : 弁護士

小原佐衣子 (KOHARA Saeko) : 非常勤医師 : 臨床中毒学 : 救急医学 : 集中治療

香月洋紀 (KATSUKI Hironori) : 非常勤医師 : 臨床中毒学 : 救急医学

永山智久 (NAGAYAMA Tomohisa) : 非常勤医師 : 臨床中毒学 : 救急医学

安部寛子 (ABE Hiroko) : 特別研究員 : 薬毒物分析

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

① 卒前教育への積極的参加。講義、問題作成、入学試験等を担当する

② 急性中毒患者の診断、初期治療、および集中治療を含む入院加療、トリアージを行う能力の育成に力を入れる

2-2. 教育実績 (担当者 : 上條、喜屋武、成瀬)

① 初療室での急性中毒患者の診断、初期治療の修練

② 急性中毒患者の集中治療を含む入院加療の修練

③ 臨床中毒学を中心としたセミナー、講義

2-3. 達成度評価

① 卒前教育については、医学部4年生および6年生の講義も担当している

② 多施設に比べ急性中毒患者数が多く初期臨床研修には適した環境であるといえる

2-4. 次年度改善計画

卒前教育は着実に貢献度を向上させている。以前は中毒性疾患の卒前教育は国際医療センターに依存していたが、現在は大学病院臨床中毒科がほぼ100%担当している。

卒後教育におけるon-the-job trainingに関しては総ての研修医に最低限の修練を積ませることが今後の目標である。次年度はさらにスタッフの増員を図り、きめ細かい教育、指導を行い、医療技術の伝達を第一に考えてゆきたい。さらに臨床中毒学に関連した知識を研修医だけでなく、看護師、薬剤師を含めた医療スタッフ全体に普及させることに努力する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

① 急性中毒の病態に関する臨床研究

② 眠気・怠さ防止薬、解熱鎮痛薬、鎮咳薬などの市販薬などの過量服用に関する多施設共同研究

③ 抗認知症薬中毒に関する多施設共同調査研究

④ 薬毒物の迅速測定法の開発に関する研究

⑤ 薬毒物の尿の迅速定性キットの開発

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

上條吉人、花澤朋樹、芳澤朋大、小原佐衣子 : 急性カフェイン中毒に関する多施設共同調査・研究

上條吉人、喜屋武玲子、花澤朋樹、芳澤朋大、小原佐衣子 : 急性市販薬中毒に関する多施設共同調査・研究

花澤朋樹 : 抗認知症薬中毒に関する病態解析、治療法の評価

芳澤朋大、花澤朋樹、喜屋武玲子 : 薬毒物の迅速測定法の開発

喜屋武玲子、小原佐衣子、安部寛子 : 薬毒物の尿の迅速定性キットの開発

高井美智子、喜屋武玲子、上條吉人 : 児童・青年期の希死念慮を生起させる心理社会的特徴の検討

3-3. 達成度評価

① 急性カフェイン中毒に関する多施設共同調査・研究

カフェインの迅速分析法の開発を行った (花澤ら)。

② 全国の救急医療施設に救急搬送された急性カフェイン中毒症例の薬毒物分析を行い、診療情報を集積し、重症と非重症を最も鋭敏に区別する血中濃度を決定し、血液透析法の導入基準とした (芳澤ら)。

③ 全国の救急医療施設に救急搬送された急性カフェイン中毒症例の背景、臨床経過、予後などについて後方視的多施設共同研究を施行した (小原ら)。

④ 全国の救急医療施設に救急搬送された急性市販薬中毒症例の背景、臨床経過、予後などについて前方視的多施設共

同研究を施行した（小原ら）。

3-4. 次年度改善計画

- ①研究成果を英語論文として着実に発表できる体制ができた。
- ②これまでのGC/MSおよびLC/MS/MSという分析機器に加えて、新たにTOF/MSを導入し中毒患者の生体試料の一括分析による研究ができる体制ができた。

4. 診療

- ①急性期中毒診療：医薬品、違法薬物、家庭用品、農薬、化学製品・工業製品、自然毒、有毒ガスなど様々な物質に関する急性中毒症例の診療に尽力する。
- ②急性期中毒患者に対する精神的ケア及び自殺再企図予防を適切に実施する。
- ③臨床への反映や学術的貢献を目的とした、中毒物質の分析方法や治療方法などの検討を行う。
- ④薬毒物中毒の予防を目的とした、中毒情報の発信をする。
- ⑤臨床中毒に興味を持つ人材を育成するとともに、臨床・教育にかかわるスタッフの増員を図る。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

- ①自殺未遂者再企図防止事業評価委員会（厚生労働省）委員：上條吉人
- ②さいたま市教育委員会いじめのない学校づくり推進委員会 調査専門員：高井美智子

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

- ① 日本臨床・分析中毒学会代表理事：上條吉人
- ② 日本臨床・分析中毒学会評議員：喜屋武玲子、花澤朋樹
- ③ 日本救急医学会評議員：喜屋武玲子
- ④ 日本中毒学会評議員：喜屋武玲子
- ⑤ 日本臨床・分析中毒学会監事：長野佑紀
- ⑥ 日本総合病院精神医学会 身体救急連携委員会委員：高井美智子
- ⑦ 日本臨床心理士会自死予防専門委員会協力委員：高井美智子
- ⑧ 日本救急医学会指導医認定委員：喜屋武玲子

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

<論文>

- ① Hatanaka K, Kamiyo Y, Kitamoto T, Hanazawa T, Yoshizawa T, Ochiai H, Haga Y. Effectiveness of multiple-dose activated charcoal in lamotrigine poisoning: a case series. Clin Toxicol 2022;60:379-381.
- ② Kobashi D, Kamiyo Y, Hanazawa T, Yoshizawa T, Nakamura M. Severe caffeine poisoning successfully treated with high flow continuous hemodialysis. Am J Emerg Med 2022;58:351.e3-351.e5.
- ③ 小高真美, 高井美智子, 立森久照, 太刀川弘和, 眞崎直子, 高橋あすみ, 竹島正. 自殺予防ゲートキーパーとして最小限求められる知識やスキルの検討とその評価尺度「自殺予防ゲートキーパー知識・スキル評価尺度 (Suicide Prevention Gatekeeper Knowledge and Skills Assessment Scale (GKS))」の開発. 自殺予防と危機介入 2022 ; 42(1) : 36-46.
- ④ 喜屋武玲子. 救急外来における精神科的問題と身体科的問題. 臨床精神医学; 51 巻 11 号 Page1285-1290(2022. 11)

<学会発表>

- ① 小原 佐衣子, 喜屋武 玲子, 高井 美智子, 上條 吉人: 市販薬の依存・乱用, 過量服用 救急医療施設に搬送となった急性カフェイン中毒の疫学的・臨床学的特徴に関する追跡調査. 第35回日本総合病院精神医学会総会(東京), 2022年10月28-29日
- ② 喜屋武 玲子, 花澤 朋樹, 芳澤 朋大: 心身総合の中毒診療の必要性. 第44回日本中毒学会総会・学術集会(Web), 2022年7月15-16日
- ③ 喜屋武玲子, 上條吉人, 内藤友亮, 松本圭佑, 芳賀佳之, 高平修二, 石黒睦子. 診断に苦慮した一酸化炭素暴露後の呼吸不全の1例. 第50回日本集中治療学会総会・学術集会(京都) 2023. 3. 2-4
- ④ 喜屋武玲子. 救急医療施設に搬送となった急性市販薬中毒の 疫学および臨床の特徴に関する調査 中間報告 2022. 第6回日本臨床・分析中毒学会(神奈川)2023. 3. 11

<著作>

今日の治療指針など分かっているものの挿入をお願いします。

- ① 上條 吉人: 中毒治療薬. 今日の治療薬 2022, 南江堂, 1119-1131, 2022.
- ② 喜屋武玲子. 中毒にご用心 身近にある危険植物・動物イヌサフラン、グルリオサ(コルヒチン) 球根や塊茎を誤って食べると… 別冊医学のあゆみ: 178-182 2023. 1

【総数：論文 6 件、学会発表 13 件、著作 8 件】

6-2. 獲得研究費

厚生労働行政推進調査事業費補助金

科学研究費助成事業 若手研究 B

科学研究費助成事業 基盤研究 (C)

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

①第3回日本臨床・分析中毒学会 総会・学術集会の開催（令和4年3月16日ハイブリッド開催）

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

なし

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく次年度の改善計画

今年度は南館5階を中心に急性中毒患者の入院加療を行った。入院患者は年々右肩上がりに増加し、次年度は埼玉県広域から搬送困難に陥りやすい急性中毒患者を受け入れさらなる患者数の増加を目指したい。卒後教育に関しても毎週毎の症例検討、月1の英語論文抄読会などにより充実させたい。

1. 40) 地域医療科

1. 構成員

廣岡伸隆 (HIROOKA, Nobutaka) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 総合診療 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

今年度開設された基本診療科であるため前年度の改善計画はない。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育の運営に関わったユニットは、3年生診療の基本ユニットのユニットディレクター(廣岡)である。

卒前教育で講義・演習・実習を担当したのは、4年生英語ユニット(廣岡)、5年生特別演習(廣岡)、6年生特別演習(廣岡)である。

その他、卒前教育では共用試験臨床実習前 OSCE 評価者(廣岡)、共用試験臨床実習後 OSCE ステーションリーダー(廣岡)である。

卒後教育の運営に関しては、総合診療専門医プログラムの統括責任者(廣岡)である。

卒後教育として、専攻医4名(1年目1人、2年目1人、3年目2人)の研修を行っている。

2-3. 達成度評価

今年度開設のため達成度評価は、次年度以降行う。

2-4. 次年度改善計画

次年度は、卒前教育において複数のユニットの運営に関わり、講義数を50%程度増やし関与する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

今年度開設された基本診療科であるため前年度の改善計画はない。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

生活習慣の改善による生活習慣病予防、心血管疾患予防、生きがい醸成に係る疫学研究を継続している。また、多施設共同での咽頭画像のAI活用研究に携わるべく準備を進めた。

3-3. 達成度評価

今年度開設のため達成度評価は、次年度以降行う。

3-4. 次年度改善計画

咽頭画像のAI活用による多施設研究を実施する。生活習慣疾患予防の疫学研究を継続し、学会発表及び論文発表を行う。

4. 診療

地域医療科は、プライマリ・ケアの考え方に基づく診療、教育、研究を行い、専門領域として、プライマリ・ケア総合診療、家庭医療、病院総合医療を含む。教育に関しては、該当する領域の卒前卒後教育に当たり、診療に関しては、大学病院高齢者総合外来(プラチナ外来)を専門外来として行い、また病院診療部及び総合診療内科と連携し、ジェネラルな診療が必要な患者の外来診療及び入院診療を実施している。加えて、大学病院内外の部署や医療機関との連し、入院患者及び外来患者の診療支援や移行ケアにも当たる。研究に関しても、高齢者総合機能評価に基づく疾病予防及びQOL・生きがい向上プログラムの開発を計画する。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

日本専門医機構総合診療領域専門医・指導医部会部会員、認定・更新部会、専門医試験委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

査読: Journal of General and Family Medicine, International Journal of Environmental Research and Public Health

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本プライマリ・ケア連合学会国際委員会委員長、高齢者委員会副委員長

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

① Hirooka N, Kusano T, Kinoshita S, Aoyagi R, Saito K, Nakamoto H. Association between health literacy and purpose in life and life satisfaction among health management specialists: a cross-sectional study. Scientific Reports. 2022;12:8310. <https://doi.org/10.1038/s41598-022-11838-w>

② Hirooka N, Kusano T, Kinoshita S, Nakamoto H. Influence of perceived stress and stress coping adequacy on multiple health-related lifestyle behaviors. International Journal of Environmental Research and Public Health. 2022;19(1):284. <https://doi.org/10.3390/ijerph19010284>

③ 廣岡伸隆. 外来や在宅診療での高齢者診療の注意点. ライフ・サイエンス Geriatric Medicine. 2023;61(2):135-138.

- ④廣岡伸隆. 健診・検診 Dos & Don' ts. 南山堂 治療. 2022;104(9):1061-1064.
- ⑤神山雄基、宇野天敬、廣岡伸隆. 腫瘍マーカー. 南山堂 治療. 2022;104(9):1065-1070.
- ⑥齋藤雅也、水流佐方里、廣岡伸隆. 血圧. 南山堂 治療. 2022;104(9):1108-1111.
- ⑦廣岡伸隆. 生活習慣を通じた疾病予防, 健康寿命延伸, そして生きがいの醸成. 埼玉医科大学雑誌 2022;48(2):98-101.
- ⑧廣岡伸隆. 診断の推論. 埼玉プライマリ・ケア研究会. 令和5年3月5日、毛呂山、埼玉.
- ⑨廣岡伸隆、小幡篤. 高血圧症. 第13回日本プライマリ・ケア連合学会学術集会. 2022.6.11, 横浜、神奈川県.
【総数：論文7件、講演2件】

6-2. 獲得研究費

日本学術振興会学術研究助成金（若手研究 20K19645；令和2年から令和5年）

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

日米医学交流財団共催 医学交流セミナー（令和4年10月22日、埼玉医科大学）

日本プライマリケア連合学会支部埼玉プライマリケア研究会主催（令和5年3月5日、埼玉医科大学）

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

新設診療科のため、今後の目標及び2022年度実施事項中心に上記記載した。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

診療においては、スタッフ確保を進め、プラチナ外来での診療件数の向上、大学病院内での連携コンサルテーションサービスの開始を目指す。

2. 1) 消化器・肝臓内科

1. 構成員

名越澄子 (NAGOSHI, Sumiko) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 消化器病学 : 博士
岡 政志 (OKA, Masashi) : 教授 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 内視鏡センター長 : 消化器病学 : 博士
屋嘉比康治 (YAKABI, Koji) : 特任教授 : 兼担 : 指導教員 (大学院) : 消化器病学 : 博士
加藤真吾 (KATO, Shingo) : 准教授 : 総務医長 : 指導教員 (大学院) : 消化器病学 : 博士
松原三郎 (MATSUBARA, Saburo) : 准教授 : 研修医長 : 指導教員 (大学院) : 消化器病学 : 博士
高林英日己 (TAKABAYASHI, Hidehiko) : 准教授 : 外来医長 : 指導教員 (大学院) : 消化器病学 : 博士
山口菜緒美 (YAMAGUCHI, Naomi) : 講師 : 大学院教員 (大学院) : 消化器病学 : 博士
細見英里子 (HOSOMI, Eriko) : 助教 : 大学院教員 (大学院) : 消化器病学 : 博士
大塚武史 (OTSUKA, Takeshi) : 助教 : 医員
寺井悠二 (TERAI, Yuji) : 助教 : 医員 : 社会人大学院生
石橋 朗 (ISHIBASHI, Akira) : 助教 : 医員 : 社会人大学院生 : 博士
須田健太郎 (SUDA, Kentaro) : 助教 : 医員
内田党央 (UCHIDA, Kumichika) : 助教 : 医員
山鹿 渚 (YAMAGA, Nagisa) : 助教 (シニア)
中川慧人 (NAKAGAWA, Keito) : 助教 (シニア)
加藤秀輔 (KATO, Shusuke) : 助教 (シニア)
鈴木 美緒 (SUZUKI, Mio) : 助教 (シニア)
田川 慧 (TAGAWA, Kei) : 助教 (シニア) : 社会人大学院生
田中孝幸 (TANAKA, Takayuki) : 助教 (シニア)
石垣佑樹 (ISHIGAKI, Yusuke) : 助教 (シニア)
内田信介 (UCHIDA, Shinsuke) : 助教 (シニア)
酒井 駿 (SAKAI, Shun) : 助教 (シニア)
高橋久一郎 (TAKAHASHI, Kyuichiro) : 助教 (シニア)
岸 寛士 (KISHI, Kanji) : 助教 (シニア)
鈴木一世 (SUZUKI, Kazutoshi) : 助教 (シニア)
寺田有一郎 (TERADA, Yuichirou) : 助教 (シニア)
鴫田正樹 (TOKITA, Masaki) : 助教 (シニア)
増渕悟志 (MASUBUCHI, Satoshi) : 助教 (シニア)

客員教授 : 西川 稿、和田友則、非常勤講師 : 青山 徹、可児和仁、非常勤医師 : 荒井亮士、藤田徹郎

2. 教育

2-1. 目的・目標

本基本学科では、「良き臨床医の育成」を目的として教育活動を行っている。卒前・卒後教育では消化器領域全般の知識と経験を集積すること、大学院教育では基礎・臨床研究を進めていく過程で自ら考えて課題を解決することにより、実臨床に必須な科学的・論理的思考過程を学ばせることを目標としている。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育で講義・演習・実習・臨床実習等を担当したのは、3年消化器ユニット(名越、岡、松原)、4年キャリアデザインユニット(名越)、6年消化管と腹壁・腹膜疾患ユニット(岡)、Pre-CC(石垣、内田信介、酒井、高橋)、CC-step1(名越、岡、加藤真吾、松原、高林、石垣、内田信介、酒井、高橋)、CC-step2(高林、細見、大塚、寺井、石橋、須田、内田党央、堀、中川、加藤秀輔、石垣、内田信介、酒井、高橋)である。その他、卒前教育では共用試験臨床実習前 OSCE 評価者(名越、加藤真吾、細見)、共用試験臨床実習後 OSCE 評価者(名越、松原、細見)を担当した。卒後教育としては、専攻医6人(1年目岸、鈴木一世、寺田、鴫田、増渕、2年目石垣、内田、酒井、高橋)の研修を行っている。

大学院教育としては、博士課程4人(5年生 石橋、3年生 寺井、堀、1年生 田川)、が在籍しており、1人(石橋)が学位を取得した。

2-3. 達成度評価

卒前教育の講義では、すべてハイブリッドの講義を行い、一部の講義ではWeb Class を利用して講義中にアンケートを行い、双方向の講義を試みた。臨床実習では、学生にも屋根瓦方式をとっている診療チームの一員として診療および朝

夕のチームラウンド、カンファレンスに参加してもらい、診療チーム上級医（細見、大塚、寺井）及びチーム内担当医師の指導のもと、病状把握の基本、検査データの解析を学ぶとともに、受け持ち患者を指定し、正しく臨床症状や検査成績を他の医師に伝える事ができるように指導し、クルズスも行った。超音波センターでは密を避けるために見学や診療へのより実践的な参画は不十分であったが、内視鏡センターにおいては昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症対策を確実にを行い、見学実習を行った。

卒後教育としては、各診療チームのカンファレンスに初期臨床研修医も参加し、チーム全員の考えや意見を聴くことにより知識を増やし論理的な思考を養い、教授回診においてチームの担当症例のプレゼンテーションを行い、教授とdiscussionを行った。内視鏡を用いた検査・治療を体験する機会も昨年度と同様に行うことができた。また、内科専攻医研修では、1年間で上部消化管内視鏡検査の実施・診断を指導医の指導の下で行えるようになっている。また、消化器関連の症状を主訴とする初診の症例を外来で診察し、診断・治療計画を自ら立案することができている。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度には新型コロナウイルス感染症対策を確実にいっつ、卒前教育ではなるべく多くの消化器関連疾患の診療を体験できるような体制を構築し、初期臨床研修には上下部消化管・肝胆膵と広範囲の臓器に関連する疾患の診断と化学療法も含めた様々な治療を体験できる体制、内科専攻医には消化管内視鏡検査・治療に長期間継続して取り組める体制を堅持することを目標として活動する。大学院教育では、次年度中に2人（寺井、堀）の学会発表および論文作成と新たな大学院進学者を目標とする。

3. 研究

3-1. 目的・目標

本基本学科では、上下部消化管・肝胆膵疾患の病態解明と有効な治療法の構築を目的として、各領域において臨床研究と基礎研究を推進することを目標に研究活動を行った。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

1. 消化管ホルモンと食欲・消化管運動や脳腸相関に関する研究（屋嘉比、山口、細見、堀（院））
ストレス時における脳内の変化や血中コルチゾール、ACTH 値の変化を観察し機能性ディスペプシア症発症の機序を解明する研究を行い、論文を作成中である。
2. 食欲低下と漢方薬に関する研究（屋嘉比、山口、細見）
六君子湯の食欲亢進作用の機序を解明することを目的として動物実験を行い、六君子湯が消化管ホルモンのグレリン依存性に脳内食欲中枢と報酬獲得系に作用するとの成果を公表した。
3. AI による内視鏡診断に関する研究（寺井（院）、高林、岡、名越）
早期胃癌を中心に AI による内視鏡所見の診断能を検討する目的で、内視鏡画像の収集と AI による解析を行い、その成果を次年度公表予定である。
4. トファシチニブの潰瘍性大腸炎治療におけるバイオマーカーに関する研究（加藤真吾、可児、石橋、山鹿）
潰瘍性大腸炎に対するトファシチニブの治療効果を早期判定に有用なバイオマーカーを見出し、論文の作成中である。本研究成果により石橋が学位を取得した。
5. ウステキヌマブのクローン病・潰瘍性大腸炎治療における有用性とバイオマーカーの研究（加藤真吾、可児、石橋（院）、山鹿）
クローン病に対するウステキヌマブ投与の寛解維持率と粘膜治癒率効果を調査し、治療反応性のバイオマーカーを探索した。活動期潰瘍性大腸炎に対してウステキヌマブ投与中の患者の臨床症状の推移を調査し、効果発現時期を検討した。
6. ペン型アダリムマブ製剤およびゴリムマブ皮下注射型製剤の寛解期炎症性腸疾患患者に対する前向きアドヒアランス調査研究（加藤真吾、可児、石橋（院）、山鹿）
アダリムマブ自己注射製剤のアドヒアランスを調査し、良好なアドヒアランスの要因を検討した。また、ゴリムマブ皮下注射型製剤の痛みに関するアンケート調査を行い、良好なアドヒアランスの要因について検討した。
7. 亜鉛欠乏を伴う炎症性腸疾患患者の臨床症状の推移の検討（加藤真吾、可児、石橋（院）、山鹿）
亜鉛欠乏を伴う炎症性腸疾患患者の割合と亜鉛製剤投与後の臨床症状の推移を調査した。
8. ベドリズマブの炎症性腸疾患患者に対する有効性と安全性の前向きコホート研究（加藤真吾、可児、石橋（院）、山鹿）
炎症性腸疾患に対するベドリズマブの有効性と安全性を調査した。
9. インフリキシマブ投与中の炎症性腸疾患患者のバイオ・スイッチ症例の前向き観察研究（加藤真吾、可児、石橋（院）、山鹿）
炎症性腸疾患に対する治療をインフリキシマブから他のバイオ製剤に変更後の有効性と変更理由を調査した。
10. 日本人炎症性腸疾患患者における COVID-19 感染者の多施設共同レジストリ研究（加藤真吾、可児、石橋（院）、山鹿）
共同研究機関として COVID-19 感染者炎症性腸疾患患者を登録し予後を調査中である。
11. 日本人炎症性腸疾患患者における COVID-19 ワクチン接種に対する免疫応答と安全性の検討によるワクチン接種の適正化；多施設前向き研究（加藤真吾、可児、石橋（院）、山鹿）
共同研究機関として炎症性腸疾患患者における COVID-19 ワクチンの接種状況とワクチン抗体価の推移を多施設で検討している。
12. ウステキヌマブおよびベドリズマブ加療炎症性腸疾患患者の有効性評価（加藤・名越・屋嘉比・可児・山鹿）
ウステキヌマブおよびベドリズマブ加療を開始する炎症性腸疾患患者を登録し前向きに1年目の継続率を比較して、その要因につき検討した。
13. ウステキヌマブ 8 週維持投与クローン病患者の1 2 週以降後の寛解維持および粘膜治癒率の検討（加藤・名越・屋

嘉比・可児・山鹿)

8 週間隔のウステキヌマブ寛解維持投与を行ったクローン病患者を 12 週間隔維持投与に延長した場合の継続率と再燃患者の 8 週間隔に戻した場合の再寛解導入率につき検討した。

14. 核酸アナログ製剤を用いた治療反応性に関わる宿主因子に関する研究 (名越)
多施設共同研究における検体収集と診療情報の解析を行い、トランスクリプトーム解析により治療反応性に関わると推測される因子について解析を進めた。
15. 肝細胞癌に対する肝がん分子標的薬を用いた治療効果に関する研究 (内田党央、須田、高林、名越)
肝がん分子標的薬のレンパチニブ投与の治療効果と副作用に関する解析を行い、公表した。また、レンパチニブ短期投与中止後に破裂した肝細胞癌例についての症例報告を学会和文誌に掲載した。
16. 特発性細菌性腹膜炎のバイオマーカーの検索 (内田、須田、寺井、山口、名越)
特発性細菌性腹膜炎のバイオマーカーの検索目的で、非代償性肝硬変症例の検体収集を開始し、解析を進めた。
17. 内視鏡的逆行性膵胆管造影関連手技に関する研究 (松原)
内視鏡的逆行性膵胆管造影およびその関連手技における胆管深部挿管成功率および偶発症を検討する多施設共同研究に参加し、症例登録を継続中である。
18. 超音波内視鏡下穿刺吸引/生検 (EUS-FNA/B) に関する後方視的観察研究 (松原、須田、中川、大塚)
EUS-FNA/B における吸引あり/なしの成績を比較し、論文投稿準備中である。
19. 胆道・膵疾患に対する超音波内視鏡下治療に関する後方視的観察研究 (松原、須田、中川、大塚)
内視鏡的逆行性胆管造影における胆管挿管困難例に対する EUS-ランデブーのアルゴリズムを検討した。
20. 悪性胃十二指腸閉塞に関する研究 (松原)
悪性胃十二指腸閉塞の既存情報を用いた多施設共同観察研究に参加し、症例登録を継続中である。
21. 胃切除後 Roux-en-Y 再建術後の総胆管結石に対する内視鏡的治療に関する研究 (松原、大塚、須田、可児、石橋 (院)、山鹿) 胃切除後 Roux-en-Y 再建術後の総胆管結石患者に対する超音波内視鏡下インターベンション治療とバルーン内視鏡下 ERCP の比較解析-多施設前向き共同研究に参加し、症例登録の継続中である。
22. 胆道閉塞に対する金属ステント留置術の有用性と安全性に関する検討 (松原)
胆道閉塞に対する金属ステント留置術の有用性と安全性に関する多施設共同研究に参加し、症例登録を継続中である。
23. 切除不能進行性又は転移性の胆管癌患者における FGFR2 遺伝子融合の頻度に関する研究 (松原、須田、大塚、中川)
切除不能進行性又は転移性の胆管癌患者における FGFR2 遺伝子融合の頻度を調査する他施設共同観察研究に参加した。
24. 胆道・膵疾患に対する内視鏡を用いた診断・治療に関する後方視的観察研究 (松原、須田、中川、大塚、可児、石橋 (院)、山鹿、岡、名越)
ERCP 関連手技、EUS 関連手技のデータをまとめ、4 学会で発表した。肝門部悪性胆道閉塞に対するフルカバー金属ステントを用いたドレナージについて学会発表および論文として英文雑誌に掲載された。
25. 悪性遠位胆道閉塞に対する超音波内視鏡下胆管胃吻合術と胆管胃吻合術/順行的ステント留置術同時施行に関する多施設共同後ろ向き観察研究 (松原、中川、大塚、須田)
悪性遠位胆道閉塞に対する超音波内視鏡下胆管胃吻合術と胆管胃吻合術/順行的ステント留置術同時施行に関する多施設共同後ろ向き観察研究に参加し、症例を登録中である。
26. 肝門部悪性胆管狭窄に対する plastic stent 胆管内留置法の有用性の検討～多施設共同ランダム化比較試験～ (松原、中川、須田、大塚)
肝門部悪性胆管狭窄に対する plastic stent 胆管内留置法の有用性の検討～多施設共同ランダム化比較試験～に参加し、症例登録中である。
27. 超音波内視鏡下胃-胆管吻合術 (EUS-HGS) におけるバネ型アンカー付き金属ステントの安全性と有効性の検討—多施設共同後方視的観察研究— (松原、中川、須田、大塚)
超音波内視鏡下胃-胆管吻合術 (EUS-HGS) におけるバネ型アンカー付き金属ステントの安全性と有効性の検討—多施設共同後方視的観察研究—に参加し、症例を登録中である。また共著者として学会発表、英文雑誌への論文掲載を行った。
28. 急性膵炎に伴う局所合併症の臨床的な特徴と治療アウトカムを検討する多施設共同研究 (松原、中川、須田、大塚)
急性膵炎に伴う局所合併症の臨床的な特徴と治療アウトカムを検討する多施設共同研究に参加し、症例を登録中である。また共著者として学会発表、英文雑誌への論文掲載を行った。
29. 非切除悪性肝門部胆管閉塞における YABUSAME®(uncovered self expandable metallic stent) の有用性に関する多施設共同前向き観察研究 (松原、中川、須田、大塚)
非切除悪性肝門部胆管閉塞における YABUSAME®(uncovered self expandable metallic stent) の有用性に関する多施設共同前向き観察研究に参加し、症例を集積中である。
30. 膵腺房細胞癌の実態調査-多施設共同研究- (松原)
膵腺房細胞癌の実態調査-多施設共同研究- に参加し、症例を登録した。
31. 切除不能進行膵癌に対する化学療法予後因子の多施設共同後ろ向き検討 (松原、中川、須田、大塚)
切除不能進行膵癌に対する化学療法予後因子の多施設共同後ろ向き検討に参加し、症例を登録した。また共著者として学会発表、英文雑誌への論文掲載を行った。
32. Roux-en-Y 再建術後患者の総胆管結石治療におけるバルーン内視鏡下 ERCP と超音波内視鏡ガイド下順行性治療の多施設共同後ろ向き比較研究 (松原、須田、中川、大塚)
Roux-en-Y 再建術後患者の総胆管結石治療におけるバルーン内視鏡下 ERCP と超音波内視鏡ガイド下順行性治療の多施設共同後ろ向き比較研究に参加し、11 例の症例を登録した。

33. 膵胆道疾患における、閉塞性黄疸等に対する内視鏡的ドレナージの既存情報を用いた多機関共同観察研究（松原、中川、須田、大塚、岡、名越）
当院を基盤機関とする多機関共同研究を立ち上げ、学会発表・論文投稿準備中である。
34. 超音波内視鏡下肝胃吻合術（EUS-HGS）における Segmental Balloon Dilation（SBD）の有用性に関する後方視的観察研究（松原、中川、須田、大塚、岡、名越）
EUS-HGS における瘻孔拡張法の研究を行い学会において主題で発表した。現在論文投稿準備中である。
35. 局所炎症所見に注目した急性胆嚢炎に対する超音波内視鏡下胆嚢ドレナージの有効性と安全性に関する検討（松原、中川、須田、大塚、岡、名越）
急性胆嚢炎に対する超音波内視鏡下ドレナージの有効性・安全性について、局所の CT 所見に着目して検討し、主題での学会発表に採択された。また論文投稿準備中である。
36. 自己免疫性膵炎、IgG4 関連疾患に関する後方視的観察研究（松原・中川・須田・大塚・岡・名越）
自己免疫性膵炎の再燃の因子に関して検討し、学会に応募した。
37. 悪性遠位胆管狭窄に対する経乳頭的ドレナージにおけるダンベル型フレアを有する金属ステントと従来型金属ステントの後方視的比較研究（松原、中川、須田、大塚、岡、名越）
悪性遠位胆管狭窄に対する経乳頭的ドレナージについてステント間の成績を比較し、学会に応募した。
38. 膵腫瘍に対する超音波内視鏡下穿刺吸引生検（EUS-FNA）後の穿刺経路腫瘍細胞播種（Needle tract seeding）の前向き全国調査（松原、中川、須田、大塚）
膵臓学会が行う前向き全国調査に参加し、症例集積中である。
39. 急性膵炎後の被包化壊死に対する超音波内視鏡下ドレナージ後の治療戦略を検討する多施設共同無作為化比較試験（松原、中川、須田、大塚）
急性膵炎後の被包化壊死に対する早期のネクロセクトミーとステップアップ治療の前向き無作為化比較試験に参加し、症例集積中である。
40. 膵癌術前胆道ドレナージにおける金属ステントの有用性と安全性に関する多施設共同無作為化比較試験（松原、中川、須田、大塚）
膵癌術前ドレナージにおける金属ステントとプラスチックステントの前向き無作為化比較試験に参加し、症例集積中である。
41. 十二指腸浸潤を伴う切除不能進行膵癌による中下部悪性胆道閉塞に対する EUS-HGS vs. ERC-BS の多施設共同無作為化比較試験（松原、中川、須田、大塚）
十二指腸浸潤を伴う切除不能進行膵癌による中下部悪性胆道閉塞に対する EUS-HGS vs. ERC-BS の多施設共同無作為化比較試験に参加し、症例集積中である。

3-3. 達成度評価

社会人大学院生 1 名が学位を取得し、3 名の研究が確実に進行中である点、および新型コロナ禍にもかかわらず、英文原著論文 15 編、和文症例報告 1 編、学会発表も多数行い、新たな研究も開始された点で順調に活動したと考える。本年度の目標は、これまでの研究成果をまとめて原著論文、症例報告、総説も含め研究成果の論文化と研究をさらに発展させることであったので、十分達成されたと評価する。

3-4. 次年度改善計画

次年度にはさらに原著論文、症例報告、総説も含め研究成果の論文化と研究を発展させることを目標とし、達成に向けて取り組む。

4. 診療

消化管疾患は、岡教授、加藤真吾准教授、高林准教授、肝疾患は名越教授、胆膵疾患は松原准教授を中心に、消化器関連の全領域にわたり最先端の診療を提供できることが当診療科の特色である。すべての消化器疾患に対応できる地域医療の拠点となるように、診療内容の充実と人材育成の達成を目指して日々の診療に励んでいる。入院患者延数は 1,907 人、外来患者延数は 35,711 人であった。新型コロナ感染症対策を確実にを行い、内視鏡検査数を回復させた。

上・下部消化管疾患の内視鏡的診断だけでなく、食道、胃、大腸の早期癌の内視鏡的粘膜下剥離術（ESD）が多数行われている。さらに、ダブルバルーン小腸内視鏡検査やカプセル内視鏡を日常的に行っており、ダブルバルーン小腸内視鏡の技術は術後再建腸管に対する ERCP にも生かされている。胆膵疾患に対する内視鏡的診断・治療では、従来の内視鏡的逆行性膵胆管造影（ERCP）だけでなく、最新式のデジタル式経口胆道鏡を導入し、巨大胆管結石に対する治療や胆管癌の精密な術前検査などを積極的に施行している。また、病理診断のための EUS-FNA に始まり、胆道、膵管、膵仮性嚢胞、胆嚢、肝膿瘍、腹腔内膿瘍等に対するドレナージ、術後再建腸管を有する胆管結石など超音波内視鏡（EUS）を用いた最先端の診断・治療を施行している。さらにウイルス性肝炎に対する抗ウイルス療法や肝硬変の合併症に対する集学的治療、肝細胞癌に対するラジオ波焼灼療法、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬を用いた化学療法、肝動脈化学塞栓療法との sequential 療法などが多数行われている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

名越澄子

社会保障審議会専門委員（疾病、傷害及び死因分類専門委員会）

厚生科学審議会臨時委員（がん登録部会）

独立行政法人医薬品医療機器総合機構運営評議会専門委員

医師の働き方改革における C-2 水準関連審査の統括委員会委員

第25期日本学術会議会員：臨床医学委員会委員長、臨床医学委員会臨床研究分科会委員長、科学者委員会男女共同参画分科会副委員長

埼玉県医師会女性医師支援検討委員会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

名越澄子

埼玉医科大学雑誌 編集委員

日本呼吸器学会誌 査読委員

加藤真吾

日本消化器内視鏡学会雑誌 査読委員

Digestion 査読委員

Internal Medicine 査読委員

松原三郎

Digestive Endoscopy 査読委員

DEN Open 査読委員

Journal of Hepato-Biliary-Pancreatic Sciences 査読委員

Cancers 査読委員

Internal Medicine 査読委員

BMC Research Notes 査読委員

World Journal of Gastroenterology 編集委員

日本胆道学会 編集委員会、学術賞選考委員

日本胆道学会雑誌 査読委員

Journal of Clinical Medicine 編集委員

Journal of Clinical Medicine 査読委員

Diagnostics 査読委員

Clinical Journal of Gastroenterology 査読委員

World Journal of Gastrointestinal Endoscopy 査読委員

World Journal of Clinical Cases 査読委員

World Journal of Gastrointestinal Oncology 査読委員

World Journal of Gastroenterology 査読委員

BMC Gastroenterology 査読委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

名越澄子

A member of the Medical Scientific Advisory Committee (MSAC) (World Health Organization)

日本医学会連合：業務執行理事、ダイバーシティ&インクルージョン推進委員会委員長、労働環境検討委員会委員

日本医学会：幹事、第31回日本医学会総会男女共同参画委員会副委員長

全国医学部長病院長会議：男女共同参画推進委員会委員

日本私立医科大学協会：女性医師キャリア支援委員会委員

日本内科学会：評議員、男女共同参画・働き方改革WG世話人、関東支部幹事・評議員

日本消化器病学会：理事、財団評議員、学会評議員、関東支部評議員、医学用語委員会担当理事、ICD-11検討委員会担当理事、キャリア支援委員会担当理事、ガイドライン委員会「肝硬変」作成委員会副委員長、「NAFLD/NASH」評価委員会委員

日本消化器関連学会機構：学術集会委員会委員、統合プログラム委員会委員、日本消化器病学女性医師・研究者に関する委員会委員

日本肝臓学会：評議員、東部会評議員、専門医制度審議会委員、男女共同参画・キャリア支援委員会オブザーバー

日本高齢消化器病学会：副理事長

日本性差医学・医療学会：理事

日本診療情報管理学会：評議員

肝細胞研究会：常任世話人

岡 政志

日本消化器病学会：学会評議員、関東支部評議員

日本消化器内視鏡学会：評議員、関東地方会評議員

加藤真吾

日本消化器病学会：学会評議員、関東支部評議員

日本消化器内視鏡学会：本部評議員、関東地方会評議員

日本消化管学会：代議員

日本潰瘍学会：評議員

日本消化器免疫学会：評議員
日本神経消化器病学会：評議員
日本消化吸収学会：評議員
日本カプセル内視鏡学会：代議員
日本小腸学会：評議員
日本炎症性腸疾患学会：評議員

松原三郎

日本消化器病学会：関東支部評議員
日本消化器内視鏡学会：学術評議員、関東支部評議員
日本胆道学会 評議員

高林英日己

日本消化器内視鏡学会：関東支部評議員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1. Ishii S, Isayama H, Sasahira N, Matsubara S, Nakai Y, Fujisawa T, Tomishima K, Sasaki T, Ishigaki K, Kogure H, Okamoto T, Otsuka T, Takasaki Y, Suzuki A. A pilot study of Spring Stopper Stents: Novel partially covered self-expandable metallic stents with anti-migration properties for EUS-guided hepaticogastrostomy. *Endosc Ultrasound*. 2023 Mar-Apr;12(2):266-272.
2. Matsubara S. Clinical Advances in the Diagnosis and Treatment of Biliary Tract Diseases. *J Clin Med*. 2023 Mar 15;12(6):2282.
3. Matsubara S, Nakagawa K, Suda K, Otsuka T, Oka M, Nagoshi S. A novel tapered plastic stent with an ultrafine delivery system for one-step endoscopic ultrasound-guided hepaticogastrostomy. *Endoscopy*. 2023 Dec;55(S 01):E354-E355.
4. Matsubara S, Nakagawa K, Suda K, Otsuka T, Oka M, Nagoshi S. Removal of a small pancreatic stone in thin main pancreatic duct using an ultrafine balloon catheter (with video). *J Hepatobiliary Pancreat Sci*. 2022 Nov 20. doi:10.1002/jhbp.1277. Epub ahead of print.
5. Iwashita T, Iwata K, Hamada T, Saito T, Shiomi H, Takenaka M, Maruta A, Uemura S, Masuda A, Matsubara S, Mukai T, Takahashi S, Hayashi N, Isayama H, Yasuda I, Nakai Y. Supportive treatment during the periprocedural period of endoscopic treatment for pancreatic fluid collections: a critical review of current knowledge and future perspectives. *J Gastroenterol*. 2023 Feb;58(2):98-111.
6. Matsubara S, Nakagawa K, Suda K, Otsuka T, Oka M, Nagoshi S. The Feasibility of Whole-Liver Drainage with a Novel 8 mm Fully Covered Self-Expandable Metal Stent Possessing an Ultra-Slim Introducer for Malignant Hilar Biliary Obstructions. *J Clin Med*. 2022 Oct 17;11(20):6110.
7. Nakai Y, Shiomi H, Hamada T, Ota S, Takenaka M, Iwashita T, Sato T, Saito T, Masuda A, Matsubara S, Iwata K, Mukai T, Isayama H, Yasuda I; WONDERFUL study group in Japan. Early versus delayed interventions for necrotizing pancreatitis: A systematic review and meta-analysis. *DEN Open*. 2022 Oct 10;3(1):e171.
8. Matsubara S, Tanaka T, Nakagawa K, Suda K, Otsuka T, Oka M, Nagoshi S. Transmural cystoscopy with an ultra-slim basket for migrated stent removal after endosonography-guided hepatic cyst drainage. *Endoscopy*. 2022 May;54(5):E220-E221. doi: 10.1055/a-1488-6332.
9. Takabayashi H, Ji T, Peng L, Li X, Shinohara M, Mao M, Eaton KA, Shah YM, and Todisco A. Regulation of Parietal Cell Homeostasis by Bone Morphogenetic Protein Signaling. *Gastro Hep Advances* 2023; 2:221-231.
10. Nakase H, Hayashi Y, Hirayama D, Matsumoto T, Matsuura M, Iijima H, Matsuoka K, Ohmiya N, Ishihara S, Hirai F, Abukawa D, Hisamatsu T; J-COSMOS group (including Kato S): Interim analysis of a multicenter registry study of COVID-19 patients with inflammatory bowel disease in Japan (J-COSMOS). *J Gastroenterol* 2022;57(3):174-184.

【総数：論文 15 件、学会発表 41 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、講義はハイブリッドだけでなく双方向性の講義も試み、臨床実習は新型コロナ感染対策として、朝夕のチームラウンド、カンファレンスはサブチームに分かれて参加することで密を避けながら、なるべく多くの消化器関連疾患の診療を体験できるような体制で行えた。大学院教育に関しては、1名が学位を取得し、2名の学位取得は延期となったが次年度には学位取得の予定である。研究に関しては、英文原著論文15編、和文症例報告1編が掲載され、昨年度と同様に英文原著論文が掲載された。学会での発表も精力的に行われている。診療に関しては、新型コロナ感染対策を確実に言いながら、上下部消化管疾患、肝疾患、胆膵疾患の全消化器領域にわたり、高度な医療を提供し、昨年以上の診療実績を残した。その他の事項に関しては、多方面にわたり社会あるいは医学貢献に関わる業務を遂行したと評価している。基本学科全体としては、全員が心血を注いで最先端の医療を提供するとともに、地域医療の拠点として診療を行うなかで、各スタッフが学部学生、大学院生の教育に積極的にに関わり、臨床研究のみならず基礎研究にも従事し、多くの成果をあげられたと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

卒前教育に関しては、内視鏡センターや超音波センターなどでの学生の見学や診療への参画体制をさらに改善し、次年度は消化器疾患全般の診療をさらに広く体験させることを目標として取り組む。大学院教育に関しては、次年度は2名の学位取得を目標とする。研究に関しては、これまでの研究成果をまとめて原著論文、症例報告、総説も含め研究成果の論文化と研究をさらに発展させることを目標として取り組み、新しいテーマの臨床研究・基礎研究に着手することで研究の楽しさを多くの医員に体験させる。診療に関しては、次年度は現指導体制のもと、スタッフ全員が高いモチベーションを維持し安全な医療を提供することを目標として人員の拡充に取り組む。

2. 2) 心臓内科

1. 構成員

松陰 崇 (MASTUKAGE, Takashi) :	教授：運営責任者、診療部長、研究主任、指導教員(大学院循環器病学)：博士
重城 健太郎 (JYUJO, Kentaro) :	准教授：副診療部長、教育主任：指導教員(大学院循環器病学)：博士
井上 芳郎 (INOUE, Yoshiro) :	講師：教育員、研究員
小宮山英徳 (KOMIYAMA, Hidenori) :	講師：研究副主任：指導教員(大学院循環器病学)：博士
阿部 拓朗 (ABE, Takuro) :	助教：教育員、研究員、専門医員
安藤敏行 (ANDO, Toshiyuki) :	助教：教育員、研究員、医員
江畑 希子 (EBATA, Nozomiko) :	助教：教育員、研究員、医員
河原 勇貴 (KAWAHARA, Yuki) :	助教：教育員、研究員、医員
小形円香 (OGATA, Madoka) :	助教：教育員、研究員、医員
長堀 寛司 (NAGAHORI, Hiroshi) :	助教：教育員、研究員、医員
-兼任・非常勤-	
吉本信雄 (YOSHIMOTO, Nobuo) :	名誉院長：名誉教授
竹下亨典 (TAKESHITA, Kyosuke) :	教授（臨床検査科兼任）
石川昌弘 (ISHIKAWA, Masahiro) :	非常勤
田中慎司 (TANAKA, Shinji) :	非常勤

2. 教育

2-1. 目的・目標

卒前教育

1. 循環器病患者の身体所見の取り方を身につけ、主な弁膜症、先天性心疾患の聴診所見を述べられる。
2. 虚血性心疾患、心不全の病態生理と治療薬の作用機序を説明できる。
3. 急性心筋梗塞の心電図変化と主な頻脈性・徐脈性不整脈の心電図を判読できる。
4. 1-3 を通じて診断力を身に付け、医師国家試験合格に十分な能力を付与する。

卒後教育

初期研修医として一般内科初診外来ならびに救急外来で循環器病患者の初期診療ができ、適切なマネージメントができる。
循環器病学を理解した上で生命の尊さを常に意識し得る医師を育てる。
後期研修医としては循環器専門医を取得するに十分な知識と臨床経験を付与する。

2-2. 教育実績（担当者）

卒前教育

1. 講義；3年生ヒトの病気2回（井上）、6年生特別演習1回（重城）、
2. 3年生PBL（重城）
3. 4年生CC1（1回3-4名、2週間×16回）およびCC2（1回2名、4週間×2回）
診療チームに配属され1-2名の患者を受け持ってレポートを作成（各チーム医師）
その内容に沿った小テストを実施（重城）
回診：電子カルテによる（松陰）、心臓カテーテル検査/治療（松陰、井上）、デバイス植込手術（安藤、阿部）
運動負荷心電図検査
外来初診患者の間診/診察と鑑別診断の考察（井上）
クルズス10回（松陰、重城、井上、小宮山）
CC2は配属チームの初期研修医とともに行動し上級医が指導
4. 講義；看護学校1年生 成人看護学循環器（松陰、井上、小宮山）

卒後教育

各病棟チームに所属し、上級医指導下での患者診療（各チーム医師）
クルズス（心電図、画像診断、輸液など 井上）
入院患者カンファレンス（火曜日 PM3:00）
心臓カテーテル・救急カンファレンス（月・火・水・木・金曜日 AM8:30）
循環器科心臓血管外科合同カンファレンス（火曜日 PM3:00）

2-3. 達成度評価

卒前教育

CC1は知識の確認・補強を目的に、解剖・生理・薬理と臨床の関連を強調してクルズスを中心に行った。各チームに学生は2人とし病棟回診を共に行った。また救急初期診療の見学ができるように努めた。CC2では初期研修医と共に行動しつつベッドサイド実習ならびに血管撮影室を中心とし、適時クルズスを行った。

卒後教育

本年度より「埼玉医科大学総合医療センター心臓内科研修医マニュアル」を独自に作成・導入し、病態生理への理解を深めつつ、分かりやすく理にかなった治療を教育プログラム上意識的に行った。
初期研修医は、各疾患の急性期、慢性期を通じて十分な症例経験を積むことが可能であった。特に不安定狭心症・

急性心筋梗塞の初期緊急対応、ならびにカテーテルインターベンションとその後の管理については一連の流れを十分に経験することが可能であった。また Impella 導入により心原性ショックの管理についても学ぶ幅が増え、救急患者対応を率先して行い可能な限り初期治療に関与できるようにした。卒前卒後ともに現在のプログラムでは夜間循環器救急への積極的介入が不十分であると思われるが、実地医療の理解度は深まったと考えられる

2-4. 次年度改善計画

卒前教育

CC1 は基礎学力ならびに自己意識の向上に努めつつ、医療従事者になるものとしての覚悟についても伝えていけるようにしたい。また CC2 は更に臨床に寄り添ったプログラムにしたいと考えているが、学生プログラム制限もあり当科の特色である時間外救急対応を積極的にベッドサイドで教育できない点は残念である。

卒後教育

他施設と同研修医と比較して客観的に自身の能力を見極める力を持てるよう、意識の高い研修を心掛ける。初期研修医としては必要なことを精選して教育し、ローテート終了時に達成度を評価するシステムを確立する必要がある。可能ならば1年目、2年目の研修医が年間を通してバランスよく配分されることが望ましい。

後期研修医については今後の自身のキャリアプランを意識したビジョンを持った研修を、自ら提示できるような機会を与えたい。他に地域の医療機関において独力で問題を解決するような研修や、他の専門機関における研修も考慮する必要がある。

当施設のみでの慣例にとらわれない柔軟な対応力を、学術集会・研究会への参加を促すことで身に着ける。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

日常診療における疑問点を拾い上げて検討し、診療の質向上につながる臨床研究を行う。また教育的・希少な症例報告を行うことで多くの医師と情報共有できるように努める。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 遠位橈骨動脈アプローチによる低侵襲インターベンション
2. インターベンション領域カテーテルデバイス開発と臨床応用
3. IVUS、OCT を用いた冠動脈プラークの性状と薬物治療の効果、インターベンションの予後の関連の検討
4. 超薄型ストラット薬剤溶出ステントと薄型ストラット薬剤溶出ステントの実臨床条件下における無作為化比較研究
5. 不全患者に対するトルバプタン投与による急激な血清ナトリウム濃度変動のリスク予測モデル

研究実績本年度なし

3-3. 達成度評価

埼玉県最大の医療センターとして非常に低い達成度

3-4. 次年度改善計画

新規スタッフを迎えることで不整脈・心不全部門への各領域に対する実績を上げていきたい

4. 診療

川越及び周辺地区の循環器救急を積極的に受け入れ、可能な限り低侵襲かつ迅速な医療を行うよう努めた。入院の過半数は生命の切迫する時間外緊急入院であった。急性心筋梗塞、致死性不整脈、急性大動脈解離その他の重症疾患は24時間365日受け入れと診療を行ない、常に2名体制を整えたことで救急患者に対応した。治療成績は概ね良好であったが、受け入れ可能なカテーテル室が1室であるため、複数同時発症の受け入れが困難であることが課題である。また「健康寿命の延伸等を図るための脳卒中、心臓病その他の循環器病に係る対策に関する基本法(平成30年12月14日法律第105号)」が制定され、増え続ける循環器救急症例数からは心臓病センター化を要する時期に来ていると考えられる。ハイブリッド手術室計画は進行中であり TAVI を含めたストラクチャー部門の開設と、来年度のカテーテルアブレーション実施に向けて環境整備を行っている。経皮的補助循環装置 Impella を積極的に使用することにより、心原性ショックを伴う重症例の救命に寄与出来ている、更に多くの患者を受け入れ、総合医療センターとしての役目を果たすべく質の高い医療を目指す。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県医療事故調査制度委員：松陰

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

編集委員：JACC Case Reports (松陰)

査読委員：Catheter and Cardiovascular Interventions (松陰)

Journal of Interventional Cardiology (松陰)

Journal of Invasive Cardiology (松陰)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本心血管インターベンション治療学会関東甲信越地方会委員 (松陰、重城、井上)

臨床治験委員

- ・心臓再同期の継続的自動適応を目的とする BIOTRONIK 社製 AutoAdapt アルゴリズムの評価：評価委員 (松陰)
- ・超薄型ストラット薬剤溶出ステントと薄型ストラット薬剤溶出ステントの実臨床条件下における無作為化比較研

究：安全評価委員（松陰）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

① Abe T, Jujo K, Matsukage T.

Myocardial bridging may shed light on one aspect of unexplained MINOCA.

Eur Heart J Acute Cardiovasc Care. 2022 Jun 13;zuac074. doi: 10.1093/ehjacc/zuac074. Editorial.

② 重城健太郎, 松陰 崇

特集「パラダイムシフト -DES から DCB への時代は来るのか-」

3. DCB の種類および特徴.

「Coronary Intervention」Vol.19, No.2. 中村茂. 2023.3.31 メディアアルファ

③ 田中慎司、松陰 崇

2. アプローチと止血法

(1) 橈骨動脈アプローチ (TRI) P.78-79

(2) 遠位橈骨動脈アプローチ (dRA) P.80

PCI・EVT・SHD インターベンションスペシヤルハンドブック. 南都信介、中村正人. 2023.3.15 南江堂

④ Hidenori Komiyama, Hiroshi Nagahori, Nozomiko Ebata, Yuuki Kawahara, Takuro Abe, Toshiyuki Ando, Shinji

Tanaka, Tetsuo Kamiyama, Yoshiro Inoue, Kentaro Juhjoh, Takashi Matsukage

Department of Cardiology, Saitama Medical Center, Saitama Medical University, Saitama

Scraping Noise as New Parameter for Safety and Efficacy Appraisal on Rotational Atherectomy

第 87 回日本循環器学会学術集会総会

2023.3.11 福岡

⑤ 江畑希子, 小宮山 英徳, 長堀 寛司, 河原 勇貴, 阿部 拓朗, 神山 哲男, 井上 芳郎, 重城 健太郎, 松陰 崇

埼玉医科大学総合医療センター 心臓内科

Assessment of Sanding Noise for Efficient Calcification Removal with Orbital Atherectomy System

第 87 回日本循環器学会学術集会総会

2023.3.11 福岡

⑥ 松陰 崇

CTO Video Live 6

Tokyo Percutaneous Intervention Conference: TOPIC 2022

2022.7.7 東京

⑦ 松陰 崇

The Answer is Onyx!

Shizuoka Catheter Intervention Group: SING Live

2022.8.27 静岡

⑧ Takashi Matsukage

PCI Live Operator

Slender Club Japan 2022

2022.10.8 Tokyo

⑨ 松陰 崇

市民公開講座 「狭心症とは? ~診断から治療まで~」

Slender Club Japan 2022

2022.10.9 東京 (YouTube 配信)

⑩ Giovanni Amoroso, Takashi Matsukage.

Chapter 18. Slender Techniques for Percutaneous Coronary Interventions by Distal Transradial Approach

Distal Radial Access, Gregory A. Sgueglia. Elsevier. InPress

【総数：論文 1 件、学会発表 2 件、講演 9 件、著書 3 件】

6-2. 獲得研究費

日本ベーリンガーインゲルハイム 300,000

持田製薬 200,000

ニプロ	500,000
テルモ	1,000,000
オーパスネイチメディカル	1,000,000
ボストンサイエンティフィック	1,000,000
カネカメディックス	1,300,000

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

国内の招聘手術（Live Demonstration）を中心に低侵襲カテーテル治療の啓蒙を行った。また COVID-19 パンデミックのため川越市病診連携事業の一環としての川越医師会との共催で川越循環器談話会（年2回）は中止となったが、川越地区で循環器診療に従事されている病医院の方々に直接出向くことで意見を頂戴した。加えてリモートによる症例検討・講演会を実施し、同会を通じて連携の充実を図った。

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育についてはより優しく理解しやすい指導が必要であると思われる。同時に医療に携わることの神聖さを実地医療を通じて伝えていくことを意識し、医学への更なる興味と共に質の高い教育が提供できる方向を目指した。症例は充実しており、基礎的な病態生理に繋がる教育は達成された

卒後教育に関しては臨床能力の向上に主眼が置かれがちであるが、臨床研究に携わる能力が身に付くように教育する必要がある。

残念ではあるが研究においては基本的な目標は達成されなかった。これは圧倒的な人材不足によるものであり、緊急対応に追われる中で日々の診療をこなすことに終始してしまう傾向にあった。しかしながら総合医療センター創設以来最大である330例の冠動脈インターベンションを施行し、内106例の緊急症例に対応し得たことは卒後卒後を問わず臨床教育への大きな貢献に繋がったと感じている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

学生教育に関しては、より早期から直接患者に触れる機会を増やすことで、その後の医学教育をより充実したものへ繋げていきたい。個々の症例ベースでより深く患者介入することが、自己意識を含めた学生の質を向上することになると考えている。

診療に関しては救急患者を複数同時に可能な限り受け入れられるようにした。来年度は心臓血管外科が再編され、循環器疾患を系統だった指導が期待される。当科としての最大限の使命は、虚血性心疾患に対するカテーテル治療の向上にある。Shock Wave等の次世代デバイスを導入し、心原性ショックにおける Impella を含めた結構動態の管理など、自己研鑽を要する課題は山積している。TAVI に関してはハイブリッド手術室決定したため、2023年度中の導入見込みである。またカテーテルアブレーションも可能となる為、学生教育範囲が広がることになるが、入局者の確保に繋がることを信じて丁寧に指導することを心掛ける。

救急対応などで多忙であり研究に費やす時間の余裕が少ないが、一症例一症例を大事にし、日々の臨床の中で実施可能なものを立案する。現状の最大の課題は何よりも新規医局員の充足にある。施設内医療機器への刷新することは重要と考えるが、我々としては「魅力ある明るい開かれた教室づくり」を目指していく。

2. 3) 呼吸器内科

1. 構成員

植松 和嗣 (UEMATSU, Kazutsugu) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育副主任 :

研究主任 : 外来医長 : 代表指導教員 (大学院) : 呼吸器疾患、肺癌、胸膜疾患、びまん性肺疾患 : 博士

小山 信之 (KOYAMA Nobuyuki) : 教授 : 診療副部長 : 研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 呼吸器疾患、肺癌、びまん性肺疾患 : 博士

森山 岳 (MORIYAMA, Gaku) : 准教授 : 病棟医長 : 教育主任 : 診療副部長 : 呼吸器疾患、肺癌、慢性呼吸不全 : 博士

教山 紘之 (KYOYAMA, Hiroyuki) : 助教 : 博士

坂井 浩佑 (SAKAI, Kosuke) : 助教 : 博士

菊池 聡 (KIKUCHI, Satoshi) : 助教

平田 優介 (HIRATA, Yusuke) : 助教

小林 由美子 (KOBAYASHI, Yumiko) : 助教

桑原 由樹 (KUWABARA, Yoshiki) : 助教

戸田 麻衣子 (TODA, Maiko) : 助教

西村 博明 (NISHIMURA, Hiroaki) : 助教 : 博士

川野 悠一郎 (KAWANO Yuichiro) : 助教

高橋 智之 (TAKAHASHI, Tomoyuki) : 助教

石井 繁 (ISHII, Shigeru) : 助教

横須賀 伸 (YOKOSUKA, Shin) : 助教

三上 慎太郎 (MIKAMI, Shintaro) : 大学院生

三上 友理子 (MIKAMI, Yuriko) : 非常勤医師

小島 章歳 (KOJIMA, Akitoshi) : 非常勤医師

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

(卒前教育)

1. 種々の呼吸器疾患の病態生理、診断法、治療法の基本を理解する。
2. 呼吸器疾患患者の身体所見の取り方を身につけ、画像診断の基本を習熟する。
3. 肺癌、びまん性肺疾患、各種呼吸器感染症の胸部X線、胸部CT所見を理解する。
4. COPD、喘息などの慢性呼吸器疾患の管理・治療法を理解する。
5. 急性呼吸不全などの急性期疾患の呼吸管理、診断・治療法について理解する。
6. 肺癌をはじめとする呼吸器腫瘍性疾患について診断、治療法について理解する。
7. 上記の理解度、習熟度を確認しながら実習に取り組んでいきたい。

(卒後教育)

1. 病棟担当チームの一員として入院症例を受け持ち、その診断、治療計画を立て、実践していく。
2. 臨床カンファレンスにおいて、受け持ち症例のプレゼンテーションを簡潔および的確に行い、質疑にも応答する。
3. 入院症例の検査、治療に関して、患者さんおよびご家族へ説明を行い、同意を得る場に指導医とともに積極的に参加する。
4. 気管支鏡検査、胸腔穿刺、胸腔ドレナージなどの検査、治療手技に積極的に参加する。
5. 以上を通して、呼吸器疾患全般の病態、診断、治療の理解を深める。

(大学院教育)

1. 難治性疾患である肺癌、中皮腫、間質性肺炎の臨床的な知識を蓄え、新たな治療法開発への社会的ニーズを理解し、基礎的な研究手技を用いて発症のメカニズムの解明およびそのメカニズムを応用した治療法を追求する。
2. 研究を通して得られたデータを解析し、論文としてまとめる。

2-2. 教育実績 (担当者)

1. 3、5年生講義 (植松、小山、森山)
2. 4、5年生のBSL (2週間) (担当医)

担当医のもとで1-2名の患者を受け持ち、呼吸器疾患患者の主訴、現病歴から身体所見までの取り方、診断までの検査計画、検査結果の評価、診断、治療について学び、関連した事項についてレポートする (担当 主治医)。また

初診外来、再診外来の見学を通じて呼吸器外来診療について理解を深める。気管支鏡検査の見学を通じて内視鏡診断学にふれる。クルズスにより呼吸器疾患の理解を促し口頭試問にて評価を行う。

(卒後教育)

初期研修医および内科専攻医の研修を行っている。加えて呼吸器内科領域専門研修を行っている。

1. 研修医は病棟担当チームに所属し、入院症例を担当し、その診断、治療を上級医とともに計画し実施にあたる。
2. 気管支鏡検査、胸腔穿刺、胸腔ドレナージを上級医とともにに行い習得する。

(大学院教育)

博士課程に2名が在籍している。

1. 肺癌、中皮腫、間質性肺炎に関わる知識を、臨床および文献の抄読を通して習得する。
2. 上記疾患の発症メカニズムの解明や、新たな治療法の開発のための研究計画をたて、その実施に必要な実験手技を習得する。

2-3. 達成度評価

(卒前教育)

4、5年生のBSLにおいては、受け持った患者のレポート作成を通しての疾患の理解、外来での診療の流れの把握、気管支鏡検査の意義および実施手順の把握は、達成されていた。Covid-19蔓延下で、しばしば実習予定を変更せざるを得なくなった。

(卒後教育)

外来、病棟での臨床を通して、各種呼吸器疾患に関する知識の習得を試みる機会を与えることができた。それら知識の習得状況を確認する方法を工夫していきたい。

(大学院教育)

大学院生の三上の研究成果を論文としてまとめ誌上発表することができ、医学博士を取得した。桑原は研究計画も基づき研究を継続している。

定期的に研究関連のミーティングおよび文献抄読会を開催することで、肺癌、中皮腫、間質性肺炎の病態解明に関する新規知識を学ぶことができた。

当科でこれまで行ってきた肺癌、中皮腫の新たな治療法開発のための基礎的研究を継続した。

間質性肺炎モデルマウスを用いて、発症に関連する遺伝子変化を網羅的に解析できる研究システムの構築に取り組んでいる。

2-4. 次年度改善計画

(卒前教育) Covid-19蔓延下でもあり、各スタッフの負担が増えつつあるが、次年度からは更に充実した教育を行っていきたい。

(卒後教育) 初期研修医には、病棟担当チームの一員として、診断、治療に関する多様な機会を与えることができた。今後も、診断、治療の各種知識、技術を習得していけるように工夫していきたい。

(大学院教育) 肺癌、中皮腫の新たな治療法開発のための基礎的研究を継続したい。間質性肺炎モデルマウスを用い、間質性肺炎の病態解明を試みたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

呼吸器疾患診療において重要な課題を取り上げ、その解決のために基礎と臨床の観点から有用な研究を行う。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 肺癌化学療法の有用性に関する研究

各種臨床試験に参加している。

2. 間質性肺炎モデルマウスを用いた間質性肺炎発症に関与する遺伝子の同定

関節リウマチおよび間質性肺炎発症モデルマウス肺における抗線維化薬ニンテダニブによる遺伝子発現の変化を網羅的に解析し、その成果を論文として発表した。

3. 肺癌、中皮腫の新たな治療法開発のための基礎的研究

①Wnt シグナル中の Dvl-3 発現阻害による抗腫瘍効果の検討

中皮腫および肺癌細胞株で、Dvl-3 発現抑制による各種タンパク発現の変化を確認している。

②新規 miRNA による AMPK 経路活性化の EZH2 を介した小細胞肺癌増殖抑制に関する研究

新規 miRNA (miR-X) が AMPK 経路を活性化させ、EZH2 発現を抑制して小細胞肺癌増殖を抑制することを示し、論文準備中である。

③喫煙者早期肺癌におけるポリコーム蛋白 EZH2 のクロマチン修飾を介したゲノム異常 — クロマチン修飾と喫煙、ゲノム異常の関連 — に関する研究

肺癌外科切除検体を用いた全ゲノム解析から、早期肺癌におけるゲノム異常を喫煙の有無、エピゲノムの違いにより比較して、早期肺癌発症におけるゲノム異常へのエピゲノムの関与を解析した。その結果、Copy number variant (CNV)

異常を示した遺伝子群に対するクラスター解析、蛋白相互作用解析からメチル化関連遺伝子群を同定し、早期肺癌における発現を確認している。さらに、非喫煙者早期肺癌において、MUC3A 遺伝子のミスセンス変異が高頻度に検出されたため、発現解析、遺伝子変異解析を進めている。

4. 間質性肺炎からの肺癌発症機序の解明

①肺癌と間質性肺炎の共通発症・進展因子となるマイクロ RNA の同定に関する研究

間質性肺炎合併肺癌の肺癌組織と間質性肺炎組織で共通して発現異常を示す新規 miRNA (miR-Y) を同定し、in vitro および in vivo 実験により、miR-Y が分子 Z の発現抑制を介して肺癌増殖及び肺線維化へ関与していることを示した。

②lncRNA を介した間質性肺炎合併肺癌の発症・進展機構解明とバイオマーカー開発に関する研究

RNA-seq 解析を用いて、間質性肺炎合併肺癌の肺癌組織と間質性肺炎組織で共通の発現変化を示す新規 lncRNA 群を同定し、その機能を検証している。さらに、同定した lncRNA 群の血液中エクソソームにおける発現解析から、間質性肺炎合併肺癌におけるバイオマーカーとなる可能性を探索している。

③間質性肺炎合併肺癌における RNA 発現を制御する遺伝子群、転写制御ネットワークの解明

間質性肺炎合併肺癌の間質性肺炎と肺癌からゲノム DNA を抽出して ATAC-seq 解析を行い、先行研究で特定した両病変に共通かつ特徴的な発現変化を示した RNA 群を制御する遺伝子群、転写制御ネットワークを同定する。その後、ネットワークにて中核をなすゲノム部位、因子を検出し、CRISPR/Cas9 を用いた発現制御により機能を解析する。

3-3. 達成度評価

1 について多施設共同研究を施行している。3 に関して、各種細胞株を用いて研究を継続している。2 に関して、これまでの成果を論文としてまとめ誌上発表した (6-1①)。3, 4 に関して今後も引き続き取り組んでいきたい。

3-4. 次年度改善計画

さらに研究成果を得ることで論文作成に努めたい。

多施設共同研究に関しては現在症例が蓄積されつつある。今後さらに当センターの研究棟を使用させて頂きながら基礎的研究を継続したい。

4. 診療

COVID-19 が蔓延し、これまでとは異なる対処を求められる診療環境となった。川越地区医療機関から紹介を受けた呼吸器疾患患者は積極的に受け入れを行い、エビデンスに基づく良質な呼吸器内科診療を行うよう努めた。他職種とのチーム医療に心がけ、また他科との協力的関係に基づく包括的医療に努め、実践できたものとする。病病連携、病診連携を進展し、地域完結型の医療モデルの確立を目標とした。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

植松和嗣

日本学術振興会 科研費専門委員

小山信之

埼玉県医師会 院内医療事故調査 院外専門委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

編集委員 小山信之

Frontiers in Oncology (Associate Editor), Case Reports in Pulmonology (Associate Editor), World Journal of Respiriology

査読 植松和嗣

日本呼吸器学会誌 1 報

査読 小山信之

BMJ Case Reports 6 報 Acta Pharmacologica Sinica 1 報 Thoracic Cancer 1 報 Biomarker Research 1 報

Handling_editor: Case Reports in Pulmonology 3 報 Frontiers in Oncology 6 報

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

①Mikami S, Miura Y, Kondo S, Sakai K, Nishimura H, Kyoyama H, Moriyama G, Koyama N, Noguchi H, Ohkubo H, Kanazawa S, Uematsu K. Nintedanib induces gene expression changes in the lung of induced-rheumatoid arthritis-associated interstitial lung disease mice. PLoS One 2022;17(6):e0270056.

②Kasai T, Mori K, Sugiyama T, Koyama N, Nakamura Y, Ohyanagi F, Fukuda H, Hoshi E, Kobayashi K, Nakayama M. Phase I/II study of nedaplatin and nab-paclitaxel for patients with previously untreated advanced squamous cell lung cancer: Kanto Respiratory Disease Study Group (KRSG) 1302. International Journal of Clinical Oncology 2022;27(12):1841-1848.

③Terai H, Soejima K, Shimokawa A, Horinouchi H, Shimizu J, Hase T, Kanemaru R, Watanabe K, Ninomiya K, Aragane

N, Yanagitani N, Sakata Y, Seike M, Fujimoto D, Kasajima M, Kubo A, Kusumoto S, Oyamada Y, Fujiwara K, Mori M, Hashimoto M, Shingyoji M, Kodani M, Sakamoto J, Agatsuma T, Kashiwabara K, Inomata M, Tachihara M, Tanaka K, Hayashihara K, Koyama N, Matsui K, Minato K, Jingu D, Sakashita H, Hara S, Naito T, Okada A, Tanahashi M, Sato Y, Asano K, Takeda T, Nakazawa K, Harada T, Shibata K, Kato T, Miyaoka E, Yoshino I, Gemma A, Mitsudomi T. Real-world data analysis of pembrolizumab monotherapy for non-small cell lung cancer utilizing Japanese post-marketing all-case surveillance data. JTO Clinical and Research Reports 2022;3(11):100404.

④Shiozawa T, Numata T, Tamura T, Endo T, Kaburagi T, Yamamoto Y, Yamada H, Kikuchi N, Saito K, Inagaki M, Kurishima K, Funayama Y, Miyazaki K, Koyama N, Furukawa K, Nakamura H, Kikuchi S, Ichimura H, Sato Y, Sekine I, Satoh H, Hizawa N. Prognostic Implication of PD-L1 Expression on Osimertinib Treatment for EGFR-mutated Non-Small Cell Lung Cancer. Anticancer Research 2022;42(5):2583-2590.

⑤Mimori T, Shukuya T, Ko R, Okuma Y, Koizumi T, Imai H, Yakiguchi Y, Miyauchi E, Kagamu H, Sugiyama T, Azuma K, Yamasaki M, Tanaka H, Takashima Y, Soda S, Ishimoto O, Koyama N, Kobayashi K, Yakahashi K. Clinical Significance of Tumor Markers for Advanced Thymic Carcinoma: A Retrospective Analysis from the NEJ023 Study. Cancers (Basel) 2022;14(2):331.

⑥川野 悠一郎, 坂井 浩佑, 高橋 智之, 西村 博明, 桑原 由樹, 小島 章歳, 佐々木 麻衣子, 小川 由美子, 菊池 聡, 平田 優介, 教山 紘之, 森山 岳, 小山 信之, 中山 光男, 植松 和嗣. 次世代シーケンサーを用いた肺癌遺伝子検査の採取方法による成否の検討. 第62回日本呼吸器学会学術講演会(京都)2022年4月23日

⑦三浦 弘之, 後藤 慎一, 三浦 隼, 小山 信之. 発熱外来でのCTで発見された肺癌症例の検討. 第62回日本呼吸器学会学術講演会(京都)2022年4月24日

⑧小島 章歳, 川野 悠一郎, 高橋 智之, 西村 博明, 桑原 由樹, 小林 由美子, 菊池 聡, 平田 優介, 教山 紘之, 坂井 浩佑, 森山 岳, 小山 信之, 植松 和嗣. PerViewFLEXを用いてGS-TBNAを施行した20例の検討. 第45回日本呼吸器内視鏡学会学術集会(岐阜)2022年5月27日

⑨三浦 弘之, 後藤 慎一, 三浦 隼, 小山 信之. 経気管支肺生検で診断した限局性結節型アミロイドーシスの1例. 第45回日本呼吸器内視鏡学会学術集会(岐阜)2022年5月27-28日(オンデマンド配信)

⑩小山 信之, 小島 章歳, 川野 悠一郎, 高橋 智之, 西村 博明, 桑原 由樹, 小林 由美子, 菊池 聡, 平田 優介, 坂井 浩佑, 教山 紘之, 森山 岳, 植松 和嗣. 末梢肺結核病変に対するPeriView FLEX TBNAの有効性. 第97回日本結核・非結核性抗酸菌症学会学術講演会(旭川)2022年7月1日

【総数：論文 5 件、学会発表 6 件、講演 26 件】

6-2. 獲得研究費

1. 文部科学省科学研究費補助金基盤研究C (代表) 小山信之 令和4年度 117万円
LncRNAを介した間質性肺炎合併肺癌の発症・進展機構解明とバイオマーカー開発
2. (財)喫煙科学研究財団 特定研究助成 (代表) 小山信之 令和4年度 200万円
早期肺癌の全ゲノム解析 -喫煙を主とした原因別のゲノム変化の同定-
喫煙者早期肺癌におけるポリコーム蛋白EZH2のクロマチン修飾を介したゲノム異常

6-3. 受賞

なし

6-4. 特許、実用新案

なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前、卒後、大学院教育に関しては、限られた人員の中、年間を通して目標を達成できるように努めた。研究に関しては、これまでの臨床、基礎研究の成果が蓄積しつつあり、誌上発表することができた。診療に関しては、近隣の病院と連携を取りながら、診療の効率化を図っていくように努めた。川越地区の病病、病診連携を目指し、近隣の病院との協力体制が徐々に構築されつつある。基本学科全体としては、COVID-19の広がる厳しい環境下で、目標に向けて少ないながら成果を集積できたと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、限られた人員の中、役割の分担および効率化を図りたい。卒前、卒後教育に関して、教育内容を病態、手技、手法などに分け担当を決め、当科研修期間中の習得を目指したい。

大学院教育に関しては、実験成果に関して、大学院生と指導教員、共同研究者で討論する時間の確保に努め、研究の質を高めていきたい。その上で、研究成果の誌上発表を目指したい。

診療に関しては、COVID-19が広がる中、呼吸器疾患診療においては、本疾患の可能性を常に考える必要があり、日常診療をこれまで通り継続するのが困難な状況にある。その中であって、近隣の病院とうまく連携を取りながら、診療の効率化を図っていくように引き続き努めていきたい。

2. 4) 内分泌・糖尿病内科

1. 構成員

泉田 欣彦 (IZUMIDA, Yoshihiko) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 教育主任 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 : 博士
足立 淳一郎 (ADACHI, Junichiro) : 病棟医長、外来医長 研修担当医長 : 教育副主任 : 研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 内分泌代謝学 MPH
山崎 悠理子 (YAMASAKI, Yuriko) : 助教
大村 卓士 (OMURA, Takashi) : 助教
大谷 亮二 (OTANI, Ryoji) : 助教
奥野 雄貴 (OKUNO, Yuki) : 内分泌・代謝学 (糖尿病, 内分泌)
宮下 将 (MIYASHITA, Sho) : 内分泌・代謝学 (糖尿病, 内分泌)
村岡 和 (MURAOKA, Wataru) : 内分泌・代謝学 (糖尿病, 内分泌)
呼延 宜人 (YIREN Huyan) : 助手 : 分子生物学 : 博士、医師 (中国)
N A Sanjeevani : 大学院生 : Pharmacy、Biotechnology、薬剤師 (スリランカ)、Senior Lecturer in Pharmacy, Faculty of Allied Health Sciences, General Sir John Kotelawala Defence University, Sri Lanka
古川 清 (FURUKAWA, Kiyoshi) : 客員教授 : 糖鎖生物学、細胞生物学 : 博士
松田 昌文 (MATSUDA, Masafumi) : 客員教授 : 内分泌代謝学 : 博士
大村 栄治 (OHMURA, Eiji) : 客員教授 : 大学院教員 : 内分泌代謝学, 成長因子, 腫瘍学 : 博士
和田 誠基 (WADA, Seiki) : 客員教授 : 内分泌代謝学, 副甲状腺ホルモン : 博士
中島 啓 (NAKAJIMA, Kei) : 客員教授 : 生活習慣病 : 博士
梅原 敏弘 (Umehara, Toshihiro) : 非常勤講師 : 生活習慣病 : 博士
秋山 義隆 (AKIYAMA, Yoshitaka) : 非常勤医師 : 内分泌代謝学 : 博士
矢澤 麻佐子 (YAZAWA, Masako) : 非常勤医師 : 内分泌代謝学 : 博士
皆川 真哉 (MINAGAWA, Shinya) : 非常勤医師
大竹 啓之 (OTAKE, Hiroyuki) : 非常勤医師 : 内分泌代謝学 : 博士
小泉 千恵 (KOIZUMI, Chie) : 非常勤医師 : 内分泌代謝学 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

学生教育 : 臨床実習を通じ内科疾患、とくに糖尿病などの代謝疾患、内分泌疾患について基本的な診断、治療のプロセスを通じ患者管理について習得する。また、糖尿病の患者教育についてチーム医療の面から理解する。小講義を通じ基本的な医学知識を習得する。

研修医教育 : 初期研修においては内科疾患、とくに糖尿病などの代謝疾患、内分泌疾患について診断、治療のプロセスを通じ患者管理について習得する。後期研修においては糖尿病などの代謝疾患、内分泌疾患について診療を自分で進め、学会発表や論文作成を行う。

診療スタッフ教育 : 代謝メディカルチーム養成講座などを看護部と協力して企画運営し、看護師をはじめとした病棟スタッフの代謝疾患 (糖尿病など) の診療レベルを向上に寄与する。

2-2. 教育実績

学生教育 : 主に教育入院患者を受け持ち、診療記録を作成し評価する。また小講義を糖尿病、甲状腺、副腎、脳下垂体について受け知識の確認を行う。抄読会に参加し、病棟症例検討会では発表を行う。代謝メディカルチーム回診、糖尿病教室などでパラメディカルスタッフとのチーム医療の現場を見学する。

初期研修医 : 入院患者を指導医や後期研修医と一緒に病棟患者を受け持ち、診療を行う。

後期研修医 : 日本糖尿病学会、日本内分泌学会の研修項目について病棟と外来において患者の診療を行い習得する。

外来では新患担当をまず受け持つ。また臨床研究を行う。症例報告や研究発表、論文作成なども行う。

診療スタッフ : 看護師特定行為研修 (2区分 : 「栄養および水分管理に係る薬剤投与関連」「血糖コントロールに係る薬剤と魚関連」) の講義と実習を担当する。代謝メディカルチーム養成講座で病棟看護師への講義を担当する。

2-3. 達成度評価

学生教育 : 医学生 5 年のベッドサイド実習, 5, 6 年のクリニカルクラークシップについては初期研修医に近い実習を行い、予診もとってもらい、学会 (糖尿病学会地方会、内分泌学会地方会) への出席も自発的に促した。医学生の 5, 6 年の臨床講義の一部を担当した。2022 年 1 月以降はカリキュラムの変更と当科スタッフの変更により、クリニカルクラークシップの再開を行っている。

初期研修 : 2021 年コロナ禍にあり、感染に気を付けながら研修を続けている。また On the job training を中心とした参加型の研修を進めた。

後期研修 / 専門医研修 : 診療科としては日本糖尿病学会、日本内分泌学会、日本甲状腺学会の研修施設として認定されている。看護師特定行為研修に係る特定行為区分のうち「栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連」「血糖コントロールに係る薬剤投与関連」の 2 区分の研修が昨年度に引き続き実施した。

2-4. 次年度改善計画

初期研修の実習について、iPad を利用し遠隔教育等による高効率な教育システムを用いて実施している。また、丁寧な on the job training を中心とした臨床研修体制を強化し、さらに新たな治療及び診断技術基盤の理解や高

度専門教育を中心とした本来のアカデミアの持つ臨床教育基盤の強化を行う。
来年度から研究マインド育成コースの初期研修医が大学院に入る事から、基礎研究のスキームをプログラムに外挿し研究の基礎を体現できるように教育強化を行う。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

いち早く研究の成果を臨床の場へ届ける為、基礎研究と臨床研究を両軸とする二つの領域を融合する研究体制を構築する。また、大学院における高度教育を行える研究実施体制を整え、開発研究と並行して新たな人材育成の為の体制整備を進める。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- ・核酸医薬品開発プロジェクト
- ・代謝学的休眠誘導性の糖鎖認識受容体機能解明プロジェクト
- ・人工β細胞再生プロジェクト
- ・糖尿病治療デジタルデバイス開発プロジェクト
- ・新型コロナウイルス感染症克服プロジェクト

3-3. 達成度評価

- ・民間企業との産学連携事業契約を結び、公的資金を獲得し各種プロジェクトを進め、京都大学本庶佑教授との新型コロナウイルス感染症に対する治療薬開発共同研究において、検査科及び感染症内科と引き続き事業展開を続けた。
- ・令和3年度「循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策実用化研究事業」(2次公募)において、生活習慣病領域におけるICT・IoTの利活用のための研究が採択され、ダイナミック・コンセントを実装する先進的糖尿病デジタルデバイスの開発研究を推進している。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、分子生物学的解析に耐えうる研究室の整備及び研究組織連携等を学外と構築し研究開発基盤の構築を進めている。次年度はさらに本取り組みを加速し本格始動を進めていく。

4. 診療

糖尿病診療についてはパラダイムシフトとして血糖管理を低血糖なく長期血糖が維持でき膵β細胞保護が主となり合併症の進展を抑制するという治療が主流となってきた。

糖尿病は医療法の5大疾病の1つであり埼玉県の地域医療計画に従い中核病院としての役割を継続する。地域からの期待と需要が非常に多く医療教育の場の提供という大きな使命も担っており糖尿病教室と糖尿病教育入院を医療チームで実施している。埼玉医科大学総合医療センター内のCDEJ(糖尿病療養指導士)認定者数も日本でもトップクラスとなっている。大学病院などの基幹病院で病棟診療において各病棟に代謝メディカルチームが配置されたがこれは日本で最初の試みであろう。

CGM(持続血糖モニター)は入院で主に実施していたが、外来診療において積極的に持続血糖モニターを実施を開始している。外来患者は新患も多数で、また入院診療においても併科で診療していることが多く非常に多忙であるが、スタッフの質と量の両面の充実に地域から信頼される医療に努めたい。

5. その他

5-1. 日本医療研究開発機構(AMED) 科学技術評価委員長、課題選考委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

論文査読: 英文3論文(泉田 欣彦)

研究会・協会主催講演会 演者 6件泉田 欣彦)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

ACCJ 米国商工会議所 HxD 基調講演

世界糖尿病デー 川越ブルーライトアップ

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

①Daisuke Ono, Kyosuke Takeshita, Yuko Ohno, Yoshihiko Izumida, Hideaki Ohno, Hideaki Oka. Inflammation as an exacerbation marker and target for prophylaxis against Coronavirus Disease 2019-related thrombosis. International Journal of Medical Sciences 2023 in press

②Pentraxin 4の強制発現によるHepa1-6マウス肝癌細胞のエネルギー代謝の変化

Changes in the energy metabolism of mouse hepatoma Hepa 1-6 cells upon over-expression of mouse pentraxin 4 gene

呼延宜人1、升田紫2、武内謙憲3、矢作直也3、古川清1、泉田欣彦1

Yiren Huyan1, Yukari Masuda2, Yoshinori Takeuchi3, Naoya Yahagi3, Kiyoshi Furukawa1, Yoshihiko Izumida1

1 埼玉医大総合医療センター・内分泌糖尿病内科、2 東大医・糖尿病代謝内科、3 筑波大医・内分泌代謝糖尿病内科
第95回 日本生化学会 2022年11月9日-11日

③APPMによるダイナミック・コンセントを採用した国際標準

IoT データ流通基盤と妊娠糖尿病向けアプリ開発

米山暁夫*1, 藤原正弘*1, 水口恵美子*1, 目黒巧巳*1, 大村卓士*2, 中山志麻*2, 高井泰*2, 泉田欣彦*2

*1 株式会社 KDDI 総合研究所、*2 埼玉医科大学 総合医療センター

第 42 回 医療情報学連合大会 (第 23 回日本医療情報学会学術大会) 2022 年 11 月 17 日 (木) ~20 日 (日) 札幌

④コエンザイム Q10 の摂取が原因と考えられた低血糖

大村卓士 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌糖尿病内科), 奥野雄貴 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌糖尿病内科), 宮下将 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌糖尿病内科), 村岡和 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌糖尿病内科), 山崎悠理子 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌糖尿病内科), 足立淳一郎 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌糖尿病内科), 大竹啓之 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌糖尿病内科), 泉田欣彦 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌糖尿病内科)

資料名: 日本内科学会関東支部関東東地方会 (日本内科学会関東支部主催関東東地方会)

巻: 681st ページ: 37 発行年: 2022 年

⑤モバイル・アプリ MLink を利用した周産期糖代謝異常を対象とした多施設共同研究

大村卓士 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌・糖尿病内科), 奥野雄貴 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌・糖尿病内科), 宮下将 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌・糖尿病内科), 村岡和 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌・糖尿病内科), 中山志麻 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌・糖尿病内科), 大谷亮二 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌・糖尿病内科), 山崎悠理子 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌・糖尿病内科), 足立淳一郎 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌・糖尿病内科), 大竹啓之 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌・糖尿病内科), 高井泰 (埼玉医大 総合医療セ 産婦人科部門), 水口恵美子 (KDDI 総合研究所), 藤原正弘 (KDDI 総合研究所), 米山暁夫 (KDDI 総合研究所), 泉田欣彦 (埼玉医大 総合医療セ 内分泌・糖尿病内科)

資料名: 糖尿病と妊娠 (日本糖尿病・妊娠学会誌)

巻: 22 号: 3 ページ: S.82 発行年: 2022 年 11 月

⑥次世代型国際標準データ流通プラットフォームによる新たな妊娠糖尿病管理

~Mobile-based network が産み出す未来の医療~

泉田 欣彦 1, 米山 暁夫 2, 高井 泰 3

1 埼玉医科大学 総合医療センター 内分泌糖尿病内科, 2KDDI 総合研究所, 3 埼玉医科大学 総合医療センター 産婦人科

第 57 回糖尿病の進歩 招待講演 2023 年 2 月 17 日

⑦「糖尿病の克服に向けた新たな理学療法による治療戦略への期待 一臨床と研究の橋渡し一」

泉田 欣彦 (埼玉医科大学 医学部 総合医療センター 内分泌・糖尿病内科)

第 8 回日本糖尿病理学療法学会学術大会 2022 年 9 月 4 日 (2 日目)

特別講演 オンデマンド配信

⑧美味しいものは脂と糖でできている?~代謝で読み解く脂と糖の深い関係~

泉田 欣彦 (埼玉医科大学 医学部 総合医療センター 内分泌・糖尿病内科)

第 43 回 埼玉内分泌代謝研究会 特別講演 2022 年 6 月 11 日

⑨『次世代情報プラットフォームを駆動する先進的糖尿病デバイスの研究開発』

泉田 欣彦 (埼玉医科大学 医学部 総合医療センター 内分泌・糖尿病内科)

令和 4 年度川越市医師会学術講演会

第 2 回小江戸 Network Meeting~糖尿病の地域医療連携を考える~川越医師会 Special Lecture 11 月 30 日

⑩Digital Gestational Medicine on a Global standardized IoT platform for narrowing the regional gaps in health care service Nov 11th, 2022 i2.jp Yoshihiko IZUMIDA Prof, Dpt of Endocrinology and Diabetology, Saitama Medical Center, Saitama Medical University Representative Director, Chairman, Life Course Design Association Boubacar SOW Software Developer / Project Manager LANEX Corporation

【総数: 論文 1 件、学会発表 6 件、講演 4 件】

6-2. 獲得研究費

・日本医療研究開発機構 (AMED) COVID-19 の重症化を阻止し反復パンデミックを防止する免疫制御治療薬の開発競争的資金等の外部資金による研究 2020 年

・日本医療研究開発機構 (AMED) COVID-19 感染症の臨床情報データベースを活用した病態変容に伴う全オミックスと免疫応答解明に基づく重症化阻止法の開発 競争的資金等の外部資金による研究 2021 年

・産学連携 AeroSwitch(米国サンディエゴ) Ptx4 による脂肪性肝炎治療薬開発 2019 年, コージンバイオ (日本) Direct-reprogramming による人工 β 細胞開発 2019-、COVID19 の臨床情報及びオミックスデータによるディープ・フェノタイプ解析の共同研究 2022 年-

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、本年度は新型コロナもあり貢献は少なかった。大学院教育に関しては、スリランカからの大学院生がコロナ禍にあったが、本格始動することができた。研究についても基盤づくりが進み、新たな実験データも出てきて良好に進んでいる。診療に関しては、新型コロナの影響を鑑みた体制へシフトし、高度医療の提供及び高付加価値医療の提供へ体制を変更している。基本学科全体としては、医療、教育、研究の三本柱を基礎から立ち上げてお

り新体制で新たに進めている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては令和2年度から臨床クラークシップを再開し、令和5年度に繋げていく。特に On the job training を重視した活きた学習を提供していく。大学院教育については、研究施設のさらなる拡充を基盤として核心となる実験が可能となる施設整備を進めていく。さらにそれに伴い、指導体制も拡充していく。研究に関しては、大学院生の基礎研究とともに、各種開発研究を立ち上げており、産学連携を通じた社会実装可能な骨太な研究をさらに進めていく。診療に関しては、専門外来の拡充と入院・外来診療において高度医療の供給を目指し体制づくりを進めていく。

2. 5) 血液内科

1. 構成員

木崎昌弘 (KIZAKI, Masahiro) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) 、指導教員 (大学院) : 血液内科一般、造血器腫瘍の発症機序の解明、分子標的療法の開発 : 医学博士

森茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育センター教授 (兼任) : 血液内科一般、分子標的療法の開発 : 医学博士

久保田寧 (KUBOTA, Yasushi) : 輸血部教授 (兼任) : 代表指導教員 (大学院) 、指導教員 (大学院) : 輸血学、造血幹細胞移植、造血器腫瘍の治療 : 博士 (医学)

多林孝之 (TABAYASHI, Takayuki) : 教授 : 教育員 : 研究副主任 : 病棟医長 : 指導教員 (大学院) 血液内科一般、造血器腫瘍の発症機序の解明 : 博士 (医学)

阿南朋恵 (ANAN, Tomoe) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 血液内科一般、造血幹細胞移植、至適な移植前処置の開発 : 博士 (医学)

高橋康之 (TAKAHASHI Yasuyuki) : 助教 : 教育副主任 : 研究員 : 血液内科一般、骨髄性白血病の病態解析 : 博士 (医学)

永沼謙 (NAGANUMA, Ken) : 専攻医 : 血液内科一般、造血器腫瘍の治療

川田泰輔 (KAWADA, Taisuke) : 専攻医 : 血液内科一般、造血器腫瘍の治療

平田公美 (HIRATA, Kumi) : 専攻医 : 血液内科一般、造血器腫瘍の治療

吉田滯奈 (YOSHIDA, Mina) : 専攻医 : 血液内科一般、造血器腫瘍の治療

大月俊輔 (OTSUKI, Shunsuke) : 専攻医 : 血液内科一般、造血器腫瘍の治療

富川武樹 (TOMIKAWA, Tatsuki) : 客員講師 : 血液内科一般、造血幹細胞移植 : 博士 (医学)

三ツ橋雄之 (MITSUHASHI, Katsuyuki) : 客員講師 : 白血病細胞学

2. 教育

2-1. 目的・目標

・卒前教育

モデルコアカリキュラムに基づく血液内科学に対する必要な基本的知識のみならず、実診療に必要な医学・科学を学ぶ際の思考過程や研究マインドを育成し、柔軟性の高い学生教育を目的として、病態の理解や症候学を中心とした実診療に即した実践的な疾患の理解と能動的学習を身につけることを目標として教育活動を行なった。

・卒後教育

血液内科学を通じて、内科全般的な知識、技術、接遇について学び、基礎研究を含めた基本的な思考過程の育成を目的とし、実践的な診療技術および知識を習得することを目標に教育活動を行なった。また、最先端の血液学に関するトピックスを提供することも目的とし、積極的な学会活動に参加することを目的とした教育活動も行なった。

・大学院教育

血液内科学の *state of art* に精通し、自ら考え実践することで新たな発見に繋がる研究を推進し、医学の発展に寄与する研究成果を追求することを目的に、学位論文作成を目標とした教育活動を行なった。

2-2. 教育実績

・卒前教育

卒前教育で講義を担当したのは、3年生血液ユニット (木崎、多林)、6年生総合学習血液・造血器疾患ユニット (木崎) である。臨床実習を担当したのは (木崎、多林、高橋、永沼、川田、平田、吉田、大月) である。その他、卒前教育では共用試験臨床実習前 OSCE 評価者 (高橋) を担当した。

医学部 CC においては、病棟では患者 1 名を担当し、病歴、診察、血液データ、画像などの読影、鑑別疾患、治療方法などについて学ぶ。研修終了時には担当患者のレポートを提出させて、理解度の確認を行った。外来では外来診療を見学することにより、外来でしか見ることの出来ない血液疾患を中心の学習を行った、また、スタッフからは種々の血液疾患に関するクルズス (小講義) を受け、疾患に対する理解を深めるとともに、担当患者の診療においては主治医より診察などのスキルを学んだ。5年生の CC Step3 においては、CC Step1 と同様の内容に加え、1ヶ月に及ぶ期間があることから、患者への IC (informed consent) の仕方、化学療法における管理方法や急変時の対応なども学んだ。また、木崎教授/多林教授が慢性骨髄性白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫類縁疾患などの血液学の講義を行った。

また、総合医療センター看護専門学校の生理学・血液病、病態学Ⅰ・血液内科領域の講義を木崎教授/多林教授/久保田教授（兼担）が担当した。森教授（兼担）は平成21年度より医学教育センター教授となり、当方との兼任を行いながら学生教育を行っている。

・ 卒後教育

卒後教育としては、ローテーションしてくる初期臨床研修医の教育の他に、専攻医（3年目永沼、2年目川田、1年目平田）の研修を行なっている。

臨床研修教育責任者は木崎教授/高橋助教が担当した。初期臨床研修では、内科診療の全般的な知識および技術を取得すると同時に、血液疾患全般に渡る診断と治療の基本が学べるよう教育を行った。血液内科では、抗がん剤による大量化学療法、造血幹細胞移植、輸血など学ぶ重要な機会であることから、積極的に参画し学習できるよう患者などを考慮した。また、木崎教授を筆頭に病棟総回診、カルテ回診、カンファレンス、クルズス、抄読会等を通じて血液学に対するさらなる理解を深めた。週2回の外来骨髄検査には、研修医を積極的に参加させ、骨髄穿刺や髄液検査、髄注などの血液疾患の診療に必要な基本手技を習得させた。後期研修では、さらなる内科学における知識、技術の向上とともに、血液学全般に渡る知識、技術、接遇を身につけ、血液専門医の資格取得を目指すべく、自分のテーマを見つけて学会発表を行った。

・ 大学院教育

大学院教育としては、博士課程1名（社会人大学院2年生永沼）が在籍しており、血液内科における診療に従事しながら研究を行っている。

大学院教育の責任者は木崎教授が担当した。血液内科では造血器腫瘍の病態解明や新たな治療法開発のための基礎研究を始め、豊富な臨床症例からの臨床研究も積極的に行っており、本人が興味あるテーマを見だし、学位取得のみならず医学界に寄与できる研究を積極的な展開を行っている。

2-3. 達成度評価

・ 卒前教育

系統講義およびCCともに予定通りの内容の教育を行い、学生における講義、CCの評価はおおむね良好であり、教育目標は達成できたと考えている。

・ 卒後教育

初期臨床研修医に対して予定通りの内容の教育は行えたものと考えている。

・ 大学院教育

令和4年度に血液内科に在籍する大学院生は、永沼謙のみであるが、社会人大学院生として臨床業務に従事しながら、多発性骨髄腫の分子病態に基づく新たな治療法開発に関する基礎研究を開始した。大学院の教育活動に関する目標については、学生の理解度の向上と能動的学習の推進を掲げており、概ね達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

・ 卒前教育

今年の結果を踏まえ、次年度は構成員個々においては、分かりやすい資料を作成することを目標にスライドや講義資料の改善を目標として活動する。学生教育においては、積極的な臨床実習への参加を促し、深い理解を求めるようにオールマイティな臨床および研究に接触することによって内科学、血液学を超えて学問を学ぶきっかけになるようなプログラム構築を目標に活動する。

・ 卒後教育

初期臨床研修医に対しては、血液内科学の知識をより深く学習させることを目標に、日常診療への積極的な参加と日本血液学会学術集会や日本血液学会関東甲信越地方会などの学会等に積極的に参加させ、1つの症例を深く掘り下げ病態の解明や新たな治療に関する考察を行うことのできる医師の育成を目標に活動する。さらに、専攻医に対しては、個々人が能動的に興味ある研究テーマを見出し、単なる知識の蓄積のみならず、積極的にかつ独創的な研究を遂行し、臨床的にも優れた心豊かな人格ある医師を育てることも目標として魅力あるプログラムのもとに活動する。合わせて、血液内科としては、国内外へ情報を発信できるように学会や論文発表を積極的に行うことを目標に活動する。

・ 大学院教育

木崎は本学大学院医学研究科長として大学院運営の責任者として本学における大学院教育を牽引しているが、血液内科ではほぼ毎年大学院生を迎えており、これまで順調な経過を辿っていると理解している。次年度は、さらに血液学のエキスパートの育成と最先端の学問を推進することを目標に活動する。多職種の人材を迎え、血液学における幅広い内容の研究を推進することも目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標

血液内科では、基礎研究においては、これまで一貫して推進してきた造血器腫瘍の分子病態の解明とそれらを基盤とする新たな治療法を開発するための研究を目的として、学会発表や多くの論文作成による国内外への情報発信を目標に研究活動を行なった。白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの造血器腫瘍の治療は抗がん剤による化学療法が主体である。しかしながら、抗がん剤による治療は侵襲が大きく、時として致命的な合併症を惹起する。そこで、血液内科においては侵襲が少なく、疾患の分子病態に即した新たな分子標的治療薬の開発を基礎研究の目的とした研究活動を展開している。

臨床研究においては白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫など多岐に渡る臨床治験を行い、本邦における新たな治療法の開発や、実臨床に即した治療方法の提言など目的として研究活動を行なった。さらに、日常の診療の中で疑問となったことや解決されていない点を Clinical Question として検討し、臨床的意義や治療法開発を目的とした研究活動も行なっている。また、病棟では看護師や理学療法士と共同で、日常診療における問題点を解決することを目的に、チーム医療の推進を目標とした研究活動も行なっている。

3-2. 研究プロジェクトと研究実績

1. 基礎研究（継続研究）

- 1) 分子病態を基盤とする造血器腫瘍に対する新規治療法の開発（木崎、多林、高橋、永沼）
- 2) 高悪性度悪性リンパ腫に対する CDK4/6 阻害薬による新たな治療法の開発（木崎、多林、永沼）
- 3) 造血器腫瘍幹細胞/前駆細胞の同定とそれらを標的とした新たな治療法の開発（木崎、多林）
- 4) 分子基盤に基づいた多発性骨髄腫に対する新たな治療法の開発（木崎、多林、永沼）
- 5) 造血器腫瘍データベースの構築による分子病態の解明（木崎、阿南、木村）

2. 特定臨床研究・臨床研究

<多発性骨髄腫関係>

JCOG（日本臨床腫瘍研究グループ）：JCOG1911, JCOG1911A1

JSH（日本血液学会）：JSH-MM15

W-JHS（西日本血液臨床研究グループ）：WJHS-MM01, WJHS-MM02

JSCT（日本細胞移植研究会）：JSCT-MM20, JSCT-EMM21

- ・再発または難治性の多発性骨髄腫患者を対象としたイキサゾミブとレナリドミドおよびデキサメタゾン併用療法の多施設共同前向き観察研究

<白血病関係>

JALSG（日本成人白血病治療共同研究グループ）：JALSG-AML209GS, JALSG-CS11, JALSG-ALL-CS-12, JALSG-AML209GWS, JALSG-CS-17, JALSG-D-STOP216, JALSG-CS-17-Molecular, JALSG-PhALL219, JALSG-APL219R, JALSG-CML-RE-STOP219, JALSG-APL220, JALSG-Ph(-)B-ALL213-CS, JALSG-RR-FLT3-AML220

KSGCT（関東造血幹細胞移植共同研究グループ）：KSGCT1702, KSGCT1901,

- ・KSGCT 小児プロトコールにて治療後に同種移植を行った AYA 世代 Ph(-)-ALL における TBI を含む骨破壊の前処置の安全性の検討
- ・KSGCT キザルチニブ投与を予定している同種造血幹細胞移植可能な FLT3-ITD 変異陽性の再発または難治性急性骨髄性白血病患者の多施設共同前向き観察研究 (KSGCT2101)
- ・全身性の初回治療またはベストサポータティブケアを受けた、強化治療に非適応の AML 患者を対象とした実臨床下における治療パターンおよび治療結果
- ・新規免疫化学療法時代における同種造血幹細胞移植後再発 B 細胞性急性リンパ性白血病の検討（二次調査）

JSCT（日本細胞移植研究会）：JSCT-ALL/MRD2019, JSCT-ALL Precision Medicine, JSCT-ALL/MRD2023

JDCHCT（日本造血幹移植データセンター）：

- ・治療関連急性骨髄性白血病において原発性悪性腫瘍に対する治療が同種移植成績に及ぼす影響の検討
- ・FLT3 遺伝子変異を有する再発または難治性の急性骨髄性白血病患者における、ギルテリチニブが同種造血幹細胞移植後成績に及ぼす影響に関する観察研究（多施設、非介入、後ろ向き研究）
- ・「FLT3 遺伝子変異を有する再発または難治性の急性骨髄性白血病患者における、ギルテリチニブが同種造血幹細胞移植後成績に及ぼす影響」研究のためのヒストリカルデータ取得

<リンパ腫関係>

JCOG：JCOG0601, JCOG0908, JCOG1305, JCOG1411, JCOG1411A1, JCOG2008

KSGCT：KSGCT1301

W-JHS : W-JHS-HL01、W-NHL03 (POLASTAR)

その他グループ研究

- ・新たに診断された濾胞性リンパ腫患者に関する多施設前方視的観察研究 (FOREST)
- ・高齢者古典的ホジキンリンパ腫の臨床病理学的特徴と治療に関する多施設共同後方視的観察研究 (HORIZON study)
- ・自家造血幹細胞移植併用大量化学療法に適応となる再発または再燃びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫を対象としたベンダムスチンとリツキシマブ併用による第Ⅱ相臨床試験 (Harvest-DLBCL)
- ・再発・難治性末梢性 T 細胞リンパ腫に対する tucdinostat 単剤治療の第Ⅱ相試験 (HMCSG-rrPTCL)
- ・ALK 陽性未分大細胞型リンパ腫における TP53 欠失が与える臨床的影響
- ・高齢がん患者の医療と介護の連携に関する研究～介護を必要とする悪性リンパ腫患者の治療に関するアンケート調査～当院単独
- ・難治性ホジキンリンパ腫における救援化学療法・自家移植併用大量化学療法の後方視的検討 (当院単独研究)

<骨髄異形成症候群、骨髄増殖性腫瘍関係>

JSH : JSH-MPN15、JSH-MPN-R18

JALSG : JALSG-CS11-MDS-SCT

- ・慢性期慢性骨髄性白血病 (CP-CML) 患者におけるポナチニブの血中濃度と治療アウトカムに関する研究
- ・JSH-J-SKI

CML-CSG

- ・CML-CSG チロシンキナーゼ阻害剤治療を受けた慢性骨髄性白血病患者における長期予後および有害事象に関する探索的研究

KSGCT

- ・挙児希望のある慢性骨髄性白血病の治療実態調査
- ・KSGCT 骨髄異形成症候群に対する同種造血幹細胞移植の予後予測研究

その他

- ・日本における真性多血症患者の症状が QOL に及ぼす影響：医師・患者アンケート調査研究

<移植関係、その他>

JSHCT (日本造血細胞移植学会) :

- ・造血細胞移植および細胞治療の全国調査 (TRUMP)
- ・JDCHCT 同種臍帯血移植における methotrexate (MTX) および mycophenolate mofetil (MMF) の投与量に関する後方視的検討

KSGCT

- ・KSGCT 移植データベース作成 後方視的研究、KSGCT1701
- ・非血縁者間骨髄・末梢血幹細胞移植における検体保存事業
- ・KSGCT 同種移植後のインフルエンザウイルス感染症の二次調査研究
- ・KSGCT 同種造血幹細胞移植後のサイトメガロウイルス感染予防に関する

多施設共同後方視研究

- ・KSGCT DDP-4 阻害薬が同種造血幹細胞移植後の GVHD に与える影響 (二次調査)

JCOG: JCOG-バイオバンク・ジャパン連携バイオバンク

W-JHS: WJHS-AA02

JSH: JSH 日本における血液疾患患者を対象とする COVID-19 罹患状況、予後に関する横断研究

その他

- ・HBV 既往感染歴を有する同種造血幹細胞移植レシピエントに対する、HB ワクチンによる HBV 再活性化予防法のランダム化検証試験 (PREBENT-HBV)
- ・免疫抑制療法未治療の再生不良性貧血患者を対象とした治験終了後の観察研究
- ・造血器腫瘍における遺伝子異常の網羅的解析

3-3. 達成度評価

1. 基礎研究

血液内科における基礎研究は、いまだ難治である白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの造血器腫瘍の発症や進展に関する分子病態を明らかにし、病態に基づく新たな概念の治療法を開発し、臨床応用を目指すことにある。Cyclin D3 を標的とする悪性リンパ腫に対する治療開発を目的とした基盤研究や多発性骨髄腫細胞に発現する CD38 分

子の生物学的特性を生かした新たな治療開発研究を推進するなど、これまでの研究に加え、革新的な一層の臨床応用を目指した研究を行い種々の成果をあげることができた。

1) 高悪性度悪性リンパ腫に対する CDK4/6 阻害薬による新たな治療法の開発

これまでの先行研究により、われわれは Cyclin D3 がリンパ節胚中心の形成に必須であり、正常胚中心 B 細胞と同様に濾胞性リンパ腫 (Follicular lymphoma; FL) にも Cyclin D3 をコードする *CCND3* 遺伝子が高発現することを見出している。FL は、進行は緩徐であるが化学療法への感受性が低く、高悪性度リンパ腫にしばしば形質転換する予後不良の悪性リンパ腫である。さらに、パーキットリンパ腫や高悪性度びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫 (Diffuse large B-cell lymphoma; DLBCL) は、難治な悪性リンパ腫である。本研究は、治療の難しいこれらの高悪性度悪性リンパ腫に対し、Cyclin D3 の共役因子である CDK4/6 複合体を標的とした新たな分子標的療法開発を目的として行われた。CDK4/6 阻害薬 Abemaciclib 及び Palbociclib を基軸とする高悪性度悪性リンパ腫に対する分子標的療法の有効性とその分子作用機序を明らかにすることができた。さらにマウスを用いた *in vivo* での検討を加え、生体内でも CDK4/6 阻害薬の効果を確認することができた。

2) CD38 を介する骨髄微小環境との相互作用を基盤とする多発性骨髄腫の新規治療法開発

多発性骨髄腫の病態解析研究の進歩は目覚ましいものがあり、分子病態に基づく多くの新規治療薬が開発されている。

しかし、多発性骨髄腫は今なお治療を得ることが難しい難治性造血器腫瘍であり、治療成績向上のためには新たな概念の治療法の開発が必要である。骨髄腫細胞は骨髄微小環境との相互関係の中で病態形成されるため、骨髄腫細胞のみを標的にするのではなく、骨髄腫前駆細胞の生存維持に重要な役割を果たす骨髄微小環境を含めた治療標的を選択することは理論的妥当性を有する。骨髄腫細胞に高発現する CD38 に対するモノクローナル抗体は、新たな抗体医薬として治療成績の向上に寄与しているが、CD38 分子の機能的側面は不明な点も多い。CD38 は細胞間の接着/ホーミングに関する受容体としての機能を有することも明らかにされており、骨髄腫細胞に高発現する CD38 と骨髄微小環境を構成する種々の細胞との相互作用については明らかでない点も多く興味深い。CD38 分子の接着/ホーミング分子としての新たな機能的側面に注目し、申請者がこれまでに多くの成果をあげてきた多発性骨髄腫に対する分子標的治療薬の開発に関する知見を基に、CD38 を介する骨髄腫細胞と骨髄微小環境の生物学的相互作用についての研究を行なった。

3) 造血器腫瘍幹細胞/前駆細胞の同定とそれらを標的とした新たな治療法の開発

造血器幹細胞/前駆細胞分画を分離する系を確立し、これら分画を標的にするような低分子化合物や生理活性物質の同定を行い、成果をあげることができた。

4) 分子基盤に基づいた多発性骨髄腫に対する新たな治療法の開発

本研究においては、これまでに教室が多くの成果をあげてきた多発性骨髄腫に対する分子標的治療薬の開発と活性酸素 (Reactive oxygen species; ROS) による白血病細胞の細胞死に関する知見を基に多発性骨髄腫における骨髄腫前駆細胞と微小環境の生物学的特性を明確にし、ROS を介する骨髄腫前駆細胞および骨髄微小環境を標的にした生体侵襲の少ない新たな治療理念を確立することを目的とした。その結果、免疫チェックポイント阻害薬や細胞周期チェックポイント阻害を行う WEE-1 が骨髄腫細胞の細胞周期を止め、細胞死を誘導することを明らかにした。

5) 造血器腫瘍データベースの構築による分子病態の解明

病理学教室と共同で、当科が有する豊富な造血器腫瘍症例の詳細なデータベースを構築し、臨床病理学的な病態解析研究の基盤を確立することができた。

以上のように多くの研究課題について、一定の成果を上げることができたが、さらに詳細な研究を進め、成果の論文化を進める必要がある。極めて忙しい診療の中での基礎研究遂行という条件の中では、ある程度の目標は達成できたと考えるが、論文化という面ではまだ十分ではないと評価する。

2. 臨床研究

「多発性骨髄腫関係」

新たな治療法の開発を目的に、種々の多発性骨髄腫に関する研究プロジェクトを推進している。これまで、血液内科においては生体に優しい造血器腫瘍の治療法の開発を目的とし、多くの生理活性物質による腫瘍細胞のアポトーシス誘導機構を明らかにし、それらに基づく治療法開発に関する基盤研究を行ってきた。特にサリドマイド、レナリドミドにおける重要蛋白の一つであるセレブロンに焦点を当て、継続して検討を行い、一定の成果を得た。さらに、ポマリドミドに対する新たなネオ基質として同定された ARID2 の臨床的意義に関する研究も進めている。

「白血病関係」

我が国の白血病治療における重要な臨床研究組織である JALSG に参加し、ほぼ全ての臨床研究に参加し、本邦における白血病のエビデンス構築に取り組んでいる。また、CML 患者の後方視的解析グループでは、日本のエビデンスとして、チロシンキナーゼ阻害剤の有効性と安全性に関して解析を行い、多数の学会報告、論文報告を行うことができた。

「リンパ腫関係」

リンパ腫関係の臨床試験には、JCOG (日本臨床腫瘍研究グループ) の一員として参加している。JCOG は、国立がん研究センターがん研究開発費研究班を中心とする共同研究グループで、国立がん研究センター多施設臨床試験支援センターが研究を直接支援する研究班の集合体であり、がんに対する標準治療の確立と進歩を目的として様々な研究活動 (多施設共同臨床試験) を行っている。血液疾患においては、悪性リンパ腫を主体とした多くの臨床研究が行われて

おり積極的に参加をすることで、本邦における悪性リンパ腫の新たな知見の集積に寄与する方針である。また、以前より注視しているメトトレキサート惹起リンパ増殖性疾患の症例集積を行い、本邦では最も多い症例を有し、種々の臨床研究を進め論文化を行った。さらに新たな知見が得られており、継続して研究を進める予定である。

「移植関連」

同種造血幹細胞移植は、白血病や悪性リンパ腫などの造血器腫瘍に対して治療を期待できる唯一の治療法である。しかしながら、前処置に大量抗がん剤や全身照射を用いるために、その治療過程においては常に感染症との戦いといっても過言ではない。令和元年度に無菌病棟が新たに開設されたこともあり、造血幹細胞移植の治療成績を向上させるために、個々の免疫能に合わせた効果的な感染症の予防や治療法開発を目的とした研究を推進している。リハビリ科小林を中心に、無菌病棟内での移植あるいは大量化学療法後のリハビリに積極的の取り組み、リハビリと免疫能の回復についての成果を論文化した。国内の主要な臨床試験のグループに参加しているが、臨床試験全てに患者登録はできなかつた。症例は豊富であるので、これからも積極的に症例登録し、臨床試験に参加することで我が国の臨床エビデンス構築に寄与したい。その意味では、目標の達成は不十分であったと評価する。

3-4. 次年度改善計画

基礎研究から臨床研究まで幅広く血液学に関する研究を行っている。さらに次年度以降、造血器腫瘍の分子病態解とそれらを基盤とした新規治療法開発に関する研究をより推進したいと考えている。臨床研究に関しては、日々の診療の中での Clinical Question を解明すべく症例の集積と数理的な解析を発展させたいと考えている。上記の点を踏まえ、次年度は基礎研究および臨床研究とも様々なプロジェクトを推進し、研究成果を国内外の学会にて発表し、さらに英文論文化することを目標として掲げ、達成に取り組む。

4. 診療

令和元年に無菌病棟が開設し、これまで以上に大規模な移植医療を推進することができるようになった。診療面では年々患者数が増加しており、合わせて臨床研究、基礎研究の充実、さらには卒前卒後の教育システムの確立がなされており、名実ともに埼玉県では有数の血液内科となった。診断から最終的な治療まで、あらゆる血液疾患に対するトータルな血液診療が可能であり、豊富な患者数に加えて先端医療に対応できることにより、全国規模での血液疾患の対する新規治療薬の早期臨床試験の実地施設に選定されることもしばしばあり、新しい治療薬や治療法開発に関する治験や臨床研究にも積極的に参加している。血液疾患の診療においては、エビデンスや質の高い臨床試験の成果を基にしたトップレベルの臨床が実践されている。血液内科開設以来、豊富な血液疾患患者数を有しており、特に悪性リンパ腫に関しては全症例のデータベースを構築し、病理部との共同研究を積極的に行い人的な交流も盛んである。このように、総合医療センター血液内科は、全国でも有数の規模を誇り、最先端の無菌病棟を有する施設として年々発展している。症例数も豊富であり、総合的な診療を行うことが可能な血液内科である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

木崎

独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）専門委員

国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）課題評価委員

科学研究費委員会専門委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

学術誌：

木崎教授

血液内科（編集委員長）Japanese Journal of Clinical Oncology (Review Board), Open Leukemia Journal (Editorial Board), Anti-Cancer Drugs (Editorial Board), International Journal of Oncology (Editorial Board), International Journal of Myeloma (Associate Editor), Annals of Hematology & Oncology (Editorial Board)

査読：

木崎教授

International Journal of Hematology, Cancer Science, Japanese Journal of Clinical Oncology, Oncogene, Internal Medicine, Leukemia, Leukemia Research, FEBS letter, Apoptosis, International Journal of Molecular Science, Cancer Letters, International Journal of Clinical Oncology, Experimental Hematology.

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関する業務

久保田教授（兼任）、木村助教が骨髄移植推進財団の調整医師として活動中である。また、木崎教授をはじめ全員で「日本多発性骨髄腫患者会」、「血液情報広場 つばさ」、「慢性骨髄性白血病 CML 患者と家族の会 いずみの会」、「キャンサーネットジャパン」などの血液疾患患者会主催の講演会や活動をサポートしている。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表

英文論文

1. Nishiyama-Fujita Y, Nakazato T, Iriyama N, Tokuhira M, Ishikawa M, Sato E, Takaku T, Sugimoto K, Fujita H, Fujioka I, Tsuchiya S, Kimura Y, Iwanaga E, Komatsu N, Asou N, Kizaki M, Hatta Y, Kawaguchi T: Outcomes of adolescents and young adults with chronic phase chronic myeloid leukemia treated with tyrosine kinase inhibitors. *Annals of Medicine* 54 (1): 1244-1254, 2022.
2. Ueda Y, Usuki K, Fujita J, Matsumura I, Aotsuka N, Sekiguchi N, Nakazato Iwasaki H, Takahara-Mastubara M, Sugimoto S, Goto M, Naoe T, Kizaki M, Miyazaki Y, Akashi K: Phase 1/2 study evaluating the safety and efficacy of DSP-7888 dosing emulsion in myelodysplastic syndromes. *Cancer Science* 113 (4): 1377-1392, 2022.
3. Tanaka Y, Momose S, Takayanagi N, Tabayashi T, Tokuhira M, Tamaru J, Kizaki M: Rapid deterioration of intravascular large B-cell lymphoma with mass formation in the trigeminal nerve and multiple organ infiltration: An autopsy case report. *Journal of Clinical and Experimental Hematopathology*. 62 (1): 41-45, 2022.
4. Nishiyama-Fujita Y, Nakazato T, Iriyama N, Tokuhira M, Ishikawa M, Sato E, Takaku T, Sugimoto K, Fujita H, Fujioka I, Tsuchiya S, Kimura Y, Iwanaga E, Komatsu N, Asou N, Kizaki M, Hatta Y, Kawaguchi T: Outcomes of adolescents and young adults with chronic-phase chronic myeloid leukemia treated with tyrosine kinase inhibitors. *Annals of Medicine*, 54 (1): 1244-1254, 2022.
5. Yoshida C, Kondo T, Ito T, Kizaki K, Yamamoto K, Miyamoto T, Morita Y, Eto T, Katsuoka Y, Takezako N, Uoshima N, Imada K, Ando J, Komeno T, Mori K, Ishikawa Y, Satake A, Watanabe J, Kawakami Y, Morita T, Taneike I, Nakayama M, Duan Y, Guijarro BD, Delgado A, Llamas C, Kiyoi H: Real-world treatment patterns and clinical outcomes in patients with AML in Japan who were ineligible for first-line intensive chemotherapy. *International Journal of Hematology*, 116 (1): 89-101, 2022.
6. Ikezoe T, Ando K, Teshima T, Yamane T, Hosono N, Morita Y, Kiguchi T, Iwasaki H, Miyamoto T, Matsubara K, Sugimoto S, Miyazaki Y, Kizaki M, Akashi K: Phase I study of alvociclib plus cytarabine/mitoxantrone or cytarabine/ daunorubicin for acute myeloid leukemia in Japan. *Cancer Science*, 113 (12): 4258-4266, 2022.
7. Kawasaki A, Murakami H, Chou T, Matsushita M, Kizaki M: Real-world evidence of carfilzomib in Japanese patients with relapsed or refractory multiple myeloma: All-case post-marketing surveillance study. *Future Oncology*, 18 (24): 609-614, 2022.
8. Ono T, Takahashi N, Kizaki M, Kawaguchi T, Suzuki R, Yamamoto K, Ohnishi K, Naoe T, Matsumura I: Clinical outcomes of second-generation tyrosine kinase inhibitors versus imatinib in older patients with CML. *Cancer Science*, 114 (3): 995-1006, 2023.
9. Umrau K, Naganuma K, Gao Q, Dogan A, Kizaki M, Roshal M, Liu Y, Yabe M: Activating STAT5B mutation can cause both primary hypereosinophilia and lymphocyte-variant hypereosinophilia. *Leukemia and Lymphoma*, 64 (1): 238-241, 2023.
10. Tsuchiya S, Takaku T, Watanabe N, Iriyama N, Kimura Y, Iwanaga E, Sugimoto K, Mitsumori T, Ishikawa M, Nakazato T, Fujita H, Sato E, Hatta Y, Asou N, Kizaki M, Tokuhira M, Ando M, Kawaguchi T: Management and risk factors of pleural effusion in Japanese chronic myeloid leukemia patients treated with first-line dasatinib in real-world clinical practice. *Internal Medicine*, 2023 Mar 31. doi: 10.2169/internalmedicine.1611-23. Online ahead of print. PMID: 37005261

【総数：英文論文 12 件、邦文論文 7 件、著書 2 件、学会報告 19 件、講演 3 件】

6-2. 獲得研究費（2022 年 4 月～2023 年 3 月）

1. 木崎昌弘

埼玉医科大学創立 50 周年記念特別研究費（令和 4 年 10 月-令和 7 年 9 月）1000 万円
難治性 B 細胞リンパ腫に対する革新的治療法の開発と分子基盤の解明

2. 平田公美

令和 4 年度「若手医師育成研究助成費」かもだ特別賞（令和 4 年 10 月-令和 5 年 9 月）100 万円

急性前骨髄球性白血病におけるポマリドミドによる細胞増殖抑制機構の解明と新規治療戦略の開発

3. 多林孝之

令和4年度 学内 Grant 科研費申請支援（令和4年7月-令和5年6月）70万円

WEE1 と ARID2 を標的とした難治性骨髄腫に対する新規治療の開発

4. 永沼謙

令和3年度「若手医師育成研究助成費」かもだ特別賞（令和3年10月-令和4年9月）200万円

多発性骨髄腫におけるポマリドミド耐性機構の解明と新規治療戦略の開発

5. 高橋康之

令和3年度「若手医師育成研究助成費」かもだ研究支援賞（令和3年10月-令和4年9月）100万円

B細胞性リンパ腫における MUC16 発現による免疫回避と薬剤耐性の解明

6. 木村勇太

令和3年度「若手医師育成研究助成費」かもだ研究支援賞（令和3年10月-令和4年9月）100万円

高リスク骨髄異形成症候群に対するメチル化阻害薬の効果と予後を予測する新たな因子の解析

6-3. 受賞 該当なし

6-4. 特許, 実用新案 該当なし

6-5. 学会, 研究会, セミナー等の開催実績 該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

診療においては県内でも有数の血液診療施設であり、多くの血液疾患の診療を行ったと評価している。エビデンスに基づく標準治療のみならず、新規治療薬の早期臨床試験（治験）にも積極的に参加し、多くの患者を登録し新規治療薬の臨床への導入に大きく寄与した。診療方針として造血器腫瘍から一般血液疾患まで、すべての血液疾患を対象とした診療を展開し、治癒を目指した積極的な医療を心がけている。造血幹細胞移植についても適応を慎重に判断し、あらゆる移植に対応できる施設となった。常に患者ファーストの姿勢で血液診療を推進しており、その意味での内外からの評価は高いと考えている。これまで要望してきた無菌病棟の設置を実現させ、より質の高い診療を実践できていると評価している。

研究については、令和4年度も多くの臨床研究を行ったと評価している。その成果を国内外の学会に報告し、高い評価を受けたと考えている。基礎研究については、造血器腫瘍の発症機構の解明とそれらを基盤とした新規治療法開発を主軸として研究活動を行ったと評価している。反面、人員の問題や臨床に費やす時間が多いなどの課題を抱えており、十分な研究が遂行できたとは言いがたい状況とも評価している。研究成果をより優れた英文論文として報告することもより積極的に行う必要があり、今後の課題と考えている。

卒前、卒後教育に関しては、血液内科スタッフ全員で行い高い評価を得ていると考えている。学部学生に対しては、特に5年生CCなどの少人数教育では患者中心に実際の臨床に即した教育を推進しており、学生に病態解明、鑑別診断、治療の判断などについて論理的な思考により結論を導き出すような教育を実践していると考えている。コロナ禍にあっての病棟実習は制限され、小講義（クルズス）を中心とした教育がなされた。クルズスにおいては血液疾患のすべての領域をカバーしているが、より能動的な学生教育の推進が必要と考えている。卒後の初期臨床研修医に対しては、疾患のみならず患者環境などの社会的背景も踏まえた診療を心がけるような指導を行なっている。血液診療を通してより良い医療の実践と研究マインドの醸成を目的に症例に基づく学会発表の機会を設けることも積極的に行なっている。興味を持つ若手には、よりレベルの高い最先端の血液教育を施したいと考えており、卒後教育も充実したものになっていると評価している。

以上のように、血液内科全体としては、少ない人員で診療、研究、教育のすべての分野を各人の能力を十分に発揮し、高いレベルで実践するように努めていると評価している。知識、技術のみならず患者の立場に立って診療のできるオールマイティな若手血液内科医を育てるとともに、社会にも還元できる魅力ある診療科を目指すことはわれわれの責務である。高齢化社会を迎えて緩和ケアなど終末期医療の充実化も大切である。周辺医療機関との連携を深め、この地域の血液診療コンソーシアムを構築し、ハード面での整備を行うとともに、全人的な医療に向けてさらに努力を行い、われわれの技量を社会に還元していけるよう鋭意邁進したいと考えている。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

今年度の自己点検・評価として、血液内科における活動は十分に評価し得るものと考えている。血液内科の課題は診療、研究、教育の3分野を極めて少人数でこなしている点である。3分野において大学病院として相応しい活動を行

い、成果を上げ、全国的にも高い評価を受けていると考えているが、それらを支えているのは少数のスタッフであり、個々人の能力を最大限に発揮しているものの体力的、精神的にもそろそろ限界に来ている。現在のところ、診療、研究、教育に対する活動を縮小することは考えていないので、血液内科に興味をもつ若手を少しでも勧誘し、育成することが例年と同じくわれわれの最大の課題であると考えている。

卒前教育に関しては、学生にとって疾患を理解する上で分かりやすい資料を作成することを目標に、スライドや講義資料の改善を目標として活動する。学生の積極的な臨床実習への参加を促し、深い理解を求めるように日常の臨床および研究活動に接触することによって内科学、血液学を超えて学問を学ぶきっかけになるようなプログラム構築を目標に取り組む。

卒後教育に関しては、血液内科学の知識をより深く学習させることを目標に、1つの症例を深く掘り下げ病態の解明や新たな治療に関する考察を行うことのできる医師の育成を目標として取り組む。さらに、専攻医に対しては、個々人が能動的に興味ある研究テーマを見出し、単なる知識の蓄積のみならず、積極的にかつ独創的な研究を遂行し、臨床的にも優れた心豊かな人格ある医師を育てることも目標として取り組む。

大学院教育に関しては、血液学のエキスパートの育成と最先端の学問を推進することを目標に取り組む。そして、多職種の人材を迎え、血液学における幅広い内容の研究を推進することも目標として取り組む。

研究に関しては、造血器腫瘍の分子病態解明とそれらを基盤とした新規治療法開発に関する研究の推進を目標に取り組む。臨床研究に関しては、日々の診療の中での Clinical Question を解明すべく症例の集積と数理的な解析を進展させるべく取り組む。以上を踏まえ、基礎研究および臨床研究とも様々なプロジェクトを推進し、研究成果を国内外の学会にて発表し、さらに英文論文化することを目標として掲げ達成に取り組む。

診療に関しては、これまで通り診療内容の一層の充実を図り、エビデンスに基づいた基本的な診療とともに臨床試験や治験も取り入れた先進的な治療を実践することを目標として取り組む。さらに、造血幹細胞移植医療のさらなる拡充も目標として取り組む。

2. 6) 神経内科

1. 構成員

海田賢一 (KAIDA, Kenichi) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 研究主任 : 教育副主任 : 代表指導教員(大学院) : 免疫性神経疾患, 末梢神経疾患 : 博士
傳法倫久 (DEMPO, Tomohisa) : 准教授 : 研究副主任 : 脳血管障害 : 博士
王子 聡 (OHJI, Satoru) : 准教授 : 教育主任 : 免疫性神経疾患, 血液浄化療法 : 博士
門間一成 (MONMA, Kazunari) : 講師 : 神経筋疾患 : 博士
原 涉 (HARA, Wataru) : 助教 : 頭痛
宮内敦生 (MIYAUCHI, Atsuo) : 助教 : 変性疾患, 脳血管障害
橋本ばく (HASHIMOTO, Baku) : 助教 : 免疫性神経疾患 : 大学院
山元正臣 (YAMAMOTO, Masaomi) : 助教 : 免疫性神経疾患, 末梢神経疾患
古川義浩 (FURUKAWA, Yoshihiro) : 助教 : 神経疾患
野村恭一 (NOMURA, Kyoichi) : 客員教授 : 免疫性神経疾患 : 博士
深浦彦彰 (FUKAURA, Hikoaki) : 客員教授 : 免疫性神経疾患 : 博士
市川 忠 (ICHIKAWA, Tadashi) : 客員教授 : パーキンソン病 : 博士
篠江 隆 (SHINOE, Yakashi) : 非常勤講師 : 神経疾患 : 博士
荒木 学 (ARAKI, Manabu) : 非常勤講師 : 免疫性神経疾患 : 博士
畑中裕己 (HATANAKA, Yuki) : 非常勤講師 : 神経筋疾患, 電気生理学 : 博士
木下正信 (KINOSHITA, Masanobu) : 非常勤講師 : 筋緊張性ジストロフィー : 博士
伊崎祥子 (IZAKI, Shoko) : 非常勤講師 : 重症筋無力症 : 博士
成川真也 (NARUKAWA, Shinya) : 非常勤講師 : 電気生理学, 末梢神経疾患
三井隆男 (MITSUI, Takao) : 非常勤講師 : 電気生理学, 末梢神経疾患
山里将瑞 (YAMAZATO, Masazumi) : 非常勤医師 : 脳血管障害
小島美紀 (KOJIMA, Miki) : 非常勤医師 : 視神経脊髄炎 : 博士
吉田典史 (YOSHIDA, Norihito) : 非常勤医師 : パーキンソン病
堀内 碧 (HORIUCHI, Midori) : 非常勤医師 : 神経疾患 : 大学院

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

卒前教育 : 国家試験合格を得るためだけでなく、将来現場に立ち患者を診察する際に役立つ実践に沿った知識の習得を目指す。また、チーム医療の一旦を担う存在であることを理解してもらえよう努める。

卒後教育 : 患者にとって満足度の高い医療を提供することを目標とし、常に教室員が質の高い医療を習得するよう努力する。同時に、患者との人間関係のみならず、教室員や医療スタッフ全員がお互いに信頼・尊敬し合える人間性を身につけるように心掛け、常に人間性の向上を目指す。研修医・教室員の教育・指導に当たる際にも、単に診療技術を指導するだけでなく、人間性のレベルを向上することを意識して指導する。

大学院教育 : 臨床系の大学院であるため、主に神経疾患の病態解明、治療効果、予後に重点をおく。臨床研究のみならず免疫学の基礎知識を習得することも意識して研究指導を行う。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育(担当:海田、傳法、王子) : 講義以外に、実習では外来や病棟での医師としての基本的な態度、神経疾患の間診のとり方、神経診察方法を指導し、シミュレーターを用いた腰椎穿刺の実習や誘発筋電図の実地体験を行っている。また、臨床実習生のために各神経疾患をテーマとしたクルズスも同時に行っている。

卒後教育(担当:海田、傳法、王子) : 医師としての基本的な態度、神経疾患の間診のとり方、神経診察方法、神経内科領域全般の指導を実際の臨床に沿って行っている。全員が後期研修医中に日本内科学会認定内科医を取得する様に指導すると同時に、日本神経学会神経内科専門医取得のための勉強会も週に1回開催している。また、臨床研究を含めた学会活動も積極的に参加する様に指導している。

大学院教育(担当:海田) : 神経免疫学の基本的な知識の整理を行い、新たな神経免疫検査法を取得するため大学病院、中央研究施設、機能部門との協力の基に研究を行っている。また、当施設では、自己抗体測定系の開発、T細胞、B細胞の測定系の確立を行っている。博士課程については、橋本ばくが「Guillain-Barré症候群急性期における末梢血リンパ球サブセットの解析」のテーマで研究を進め、論文化を目指している。堀内 碧は国立精神・神経医療研究センター神経研究所の協力のもと、免疫性中枢神経疾患の病態解明に関する研究を行っている。

2-3. 達成度評価

卒前教育 : 主に試験結果とBSL修了時に施行する口頭試問と学生からのアンケートを基に常に指導方法の確認を行っている。達成率 : 80%

卒後教育 : 指導医は常に指導方法の確認を行い、研修医の習熟度についてディスカッションを行い、必要に応じて適切な修正や新たな指導の試みにも取り組んでいる。達成度 : 85%

大学院教育 :

本年度は、基礎的知識の習得、新たな研究、実験方法の習得を主観とした。達成度 : 80%

2-4. 次年度改善計画

Covid-19 流行が収束傾向であり、対面講義が増えると予想される。そのメリットを活かした講義を展開する。オンラ

インミーティングの利用法にも習熟し、その利点を活かした教育法も考案する。次年度は、さらに教室員の指導体制（屋根瓦式）を強化し、研修医教育・BSL 学生教育を充実させる。

卒前教育：各学生に担当指導医をつけ、病棟実習のスケジュールをマネジメントし、効率の良い実習を心がける。6年生は実習する4週間において、上級医の指導のもと1本の症例報告を論文形式で作成する。クルズスの内容を臨床に応用できるものとする。クルズスの時間帯を調節し、就業時間内に学生が十分実習できるよう工夫する。

卒後教育：また、各人に臨床研究のテーマを与えて最低でも年に1回は学会報告を行う。研修医教育として、最新の情報を収集し、リサーチマインドを持って診療に当たるように、英文誌抄読会を毎月施行し、文献検索、論文読解と臨床への応用に関して指導を行う。

大学院教育：令和4年4月より大学院生は2年目1名、4年目1名となる。4年生は卒業論文作成に向け、当科研究室で免疫性ニューロパチーにおけるリンパ球解析を中心とした研究を継続する。2年生は免疫性中枢神経疾患の病態解明をテーマに国立精神・神経医療研究センター神経研究所免疫研究部との共同研究を継続する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

下記の各研究テーマについて、臨床研究・基礎研究を継続し、免疫性神経疾患、脳血管障害などの病態解明を目指す。研究内容を定期的に学会報告し、常に新たな知見を得るために積極的に参加する。免疫性神経疾患に対する血液浄化療法では腎・高血圧内科(人工腎臓部)、臨床工学技士との定期的な研究会を開催する。大学院生を中心に、定期的にリサーチカンファレンスを開催し、研究の進捗を促す環境を整備する。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

研究テーマ(研究プロジェクト)

- 1) 免疫性神経疾患に関する研究：多発性硬化症、視神経脊髄炎関連疾患における臨床研究と治療介入試験を施行。
- 2) 脳血管障害に関する研究
- 3) パーキンソン病に関する研究：イストラデフィリンの有効性に関する臨床研究を施行。
- 4) 免疫性神経疾患に対する血液浄化療法に関する研究：辺縁系脳炎例の意識改善への効果を検証している。ギラン・バレー症候群の予後改善に関する臨床研究を施行している。
- 5) 末梢神経障害に関する研究：急性発症型の慢性炎症性脱髄性多発神経炎と脱髄型ギラン・バレー症候群の鑑別に関する臨床研究、免疫学的研究を行っている。

上述の各テーマに対する研究内容を定期的に学会報告し、常に新たな知見を得るために積極的に学会に参加した。当該年度も covid-19 の流行が継続し、オンラインあるいは現地とのハイブリッドで参加、発表した。日本神経学会学術大会、日本神経学会関東甲信越地方会、日本神経免疫学会、日本末梢神経学会、日本アフェレシス学会、日本神経感染症学会、日本神経治療学会等で発表した。免疫性神経疾患に対する血液浄化療法では腎・高血圧内科(人工腎臓部)、臨床工学技士との定期的な研究会を開催している。

3-3. 達成度評価

研究結果を論文化に向けてまとめている段階である。全体として80%の達成度である。

3-4. 次年度改善計画

学会・研究会報告、論文発表などを通して客観的な評価を行い、研究内容を論文化し、社会に発信していく。免疫性神経疾患の病態解明について、急性期および回復期の末梢血リンパ球サブセット解析、自己抗体と臨床像、治療反応性との相関を検証し、有効な治療法の確立に繋がる成果を出す。当院の人工腎臓部との連携のもと、免疫性神経疾患に対する血液浄化療法に関する研究を通じて、予後改善に向けた新たな治療エビデンスの確立を目指す。

4. 診療

令和4年度はスタッフ数減少のため初診患者数、救急車受け入れ・入院患者数が減少したが、難病診療および抗体医薬治療を含む高度先進医療は増加した。学会・研究会、論文、ハンズオンセミナーなどを通して最新の情報を得ると同時に客観的な評価を行い、さらにカンファレンスで定期的に診療内容を評価・検討した。

次年度は、より高度な医療の提供を目指す。また、次年度も約20の近隣医療施設の病診連携担当者と毎週定期的にオンラインミーティングを行い、患者受け入れ協議を行っていく。地域リハビリテーション連携パスを活用し脳卒中患者に対する円滑な病診連携を展開する。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

#海田賢一

免疫性神経疾患に関する調査研究班員

1. 免疫性ニューロパチーの治療反応性予測に基づく有効な治療戦略の構築
2. 平成29年度「エビデンスに基づいた神経免疫疾患の早期診断基準・重症度分類・治療アルゴリズムの確立」研究班
3. 埼玉県難病対策協議会及び埼玉県難病審査部会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

#海田賢一

編集委員

日本神経免疫学会(学会誌 Clinical and Experimental Neuroimmunology : Associate Editor)

日本末梢神経学会（学会誌 末梢神経 Peripheral Nerve：編集委員）

Peripheral Nerve Society（学会誌 Journal of Peripheral Nervous System: Editorial board）

ガイドライン作成委員

日本神経学会 CIDP/MMN 治療ガイドライン作成委員会委員

日本神経学会ギラン・バレー症候群、フィッシャー症候群治療ガイドライン作成委員会委員長

その他

日本神経学会免疫性神経疾患セクションコアメンバー、同末梢神経セクションコアメンバー

日本神経免疫学会広報委員会委員長

査読委員 Internal Medicine, Neurology and Clinical Neuroscience, Journal of Neurology, Neurosurgery and Psychiatry, Annals of Neurology, Neurology, Annals of Clinical and Translational Neurology, Journal of the Peripheral Nervous System, BMC Neurology, Biomedical Journal, Journal of Neuroimmunology
臨床神経

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

- (1) 海田賢一 重症筋無力症患者会、日本神経学会代議員、日本末梢神経学会理事、日本神経免疫学会評議員、日本神経治療学会評議員、パーキンソン病・運動障害疾患学会評議員
- (2) 王子 聡 重症筋無力症患者会、MS キャンピン（難病患者会への支援）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 王子 聡, 山元正臣, 橋本ばく, 宮内敦生, 原 渉, 伊崎祥子, 深浦彦彰, 野村恭一, 海田賢一. 視神経脊髄炎関連疾患におけるクラスター再発と関連する臨床的特徴. 第 63 回日本神経学会学術集会, 2022 年 5 月 18 日, 東京.
- ② 海田賢一. CIDP の診断と治療～現状と展望～(LS-47-1). ランチョンセミナー. 第 63 回日本神経学会学術集会, 2022 年 5 月 21 日, 東京.
- ③ 山元正臣, 古川義浩, 橋本ばく, 杉本恒平, 宮内敦生, 原 渉, 王子 聡, 傳法倫久, 海田賢一. 当初 GBS として治療し, その後急性発症 CIDP と診断された 3 症例の臨床的・電気生理学的検討。(症例報告賞候補) 第 33 回日本末梢神経学会学術集会. 令和 3 年 9 月 9 日 (金)、東京.
- ④ Kinoshita M, Hara W, Yoshida N, Miyauchi A, Yamamoto M, Oji S, Fukaura H, Kaida K, Ohno K. Painful muscle spasm with marked hyper-creatine kinase (CK) level after more than twenty weeks of four pregnant women with myotonic dystrophy type 1 (DM1) and a pregnant woman with paramyotonia congenita (PMC). the 13th International Myotonic Dystrophy Consortium (IMDC) Meeting. June 21 - 25, 2022, Osaka, Japan.
- ⑤ Kaida K. Dysautonomia in immune-mediated neuropathies. Neurol Clin Neurosci 2022; 10:124-129.
- ⑥ Horiuchi M, Hongo Y, Yamazaki K, Komuta Y, Kadoya M, Takazaki H, Furuya Y, Mastui T, Sakamoto N, Ikewaki K, Suzuki K, Kaida K. An Atypical Phenotype of Chronic Inflammatory Demyelinating Polyradiculoneuropathy Associated with Ocular Palsy, IgM-anti Ganglioside Antibody, and Fever-induced Recurrence. Intern Med 2022;61(8):1247-1252.
- ⑦ 阪本直広, 本郷 悠, 高崎 寛, 海田賢一, 池脇克則, 鈴木一詩. 海綿静脈洞近傍の動眼神経に MRI 造影効果を認め, 頭痛, 複視を繰り返した再発性有痛性眼筋麻痺性ニューロパチー類似の 14 歳男性例. 臨床神経 2022;62:281-285.
- ⑧ 古谷真由美, 王子 聡, 杉本恒平, 木崎昌弘, 山下高久, 海田賢一. 複視で発症し, 多発小脳出血を合併した Epstein-Barr virus 関連亜急性運動感覚ニューロパチーの 1 例. 臨床神経 2022;62:609-614.
- ⑨ 海田賢一. 3 種類の mainstay 治療に反応しない CIDP. 適切な寛解導入療法と治療効果判定. BRAIN and NERVE 2022;74(5):510-516. 2022 年 5 月 1 日発行. 医学書院.
- ⑩ 海田賢一. CIDP の治療戦略. III. 末梢神経脱髄疾患. 「増刊 免疫性神経疾患 (第 2 版)」日本臨床 2022;80(5):253-259. 80 巻、増刊号 5、pp -253-259. 2022 年 5 月 31 日発行. 日本臨床社.

【総数：論文 6 件、学会発表 11 件、講演 19 件】

6-2. 獲得研究費

1. 厚生労働科学研究費：難治性疾患政策研究事業
神経免疫疾患のエビデンスに基づく診断基準・重症度分類・ガイドラインの妥当性と患者 QOL の検証(FC1030) (分担研究者)
2. 難治性疾患実用化研究事業：新規発見ノド抗原に基づいたノド抗体陽性慢性炎症性脱髄性多発神経炎/中枢末梢連合脱髄症の診断基準・診療ガイドライン作成のためのエビデンスの創出とバイオバンク・レジストリ構築 (分担研究者：22ek0109547s0202)

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育：

令和4年度は covid-19 流行が遷延し、学生指導（講義、実習）においてはオンライン講義、病棟回診・実習の縮小など例年より規模を縮小して行った。指導医は互いの指導内容を検討し合い、統一した指導体制が継続するよう心掛け、学生、研修医教育を可能な限り遂行した。

卒前教育：昨年の達成度 90 %を基にクルズスの内容の一部変更と担当者の変更を行った。クルズスの時間帯の変更も行い、就業時間内に学生が実習できる時間を増やした。

卒後教育：指導医はお互いの指導内容を検討し合い、統一した指導体制を継続した。当科に特異的な筋電図や脳波、脳脊髄液検査を習得出来る様にローテーションを組み、実施した。

大学院教育：令和4年度の大学院生は2年目1名、5年目1名（期間延長）である。卒業論文作成に向け、当科研究室で免疫性ニューロパチーにおけるリンパ球解析を中心とした研究を継続している。

研究：

学会・研究会報告、論文発表などを通して客観的な評価を行い、更に医局会で定期的に研究内容を評価・検討した。免疫性神経疾患の病態解明について、治療反応性と末梢血リンパ球サブセットの相関に関する研究を行っている。特に当院の人工腎臓部との連携のもと、免疫性神経疾患に対する血液浄化療法に関する研究を通じて、新たな治療エビデンスの確立を目指している。成果は日本アフェレシス学会等で報告している。

診療：

令和4年度は covid-19 の影響に加えて、新患外来を紹介状ありの完全予約制としたため、見かけ上外来患者数、入院患者数は減少したが、難病診療および抗体医薬治療を含む高度先進医療を要する症例は著明に増加した。約20の近隣医療施設の病診連携担当者と毎週定期的にオンラインミーティングを通じて患者受け入れ協議を行っている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育：

Covid-19 流行は完全には収束していないため、オンライン講義、オンラインミーティングの利用を一部継続し、その利点を活かした教育法を導入する。次年度は、さらに教室員の指導体制（屋根瓦式）を強化し、研修医教育・BSL 学生教育を充実させる。

卒前教育：各学生に担当指導医をつけ、病棟実習のスケジュールをマネジメントし、効率の良い実習を心がける。6年生は実習する4週間において、上級医の指導のもと1本の症例報告を論文形式で作成する。クルズスの内容を臨床に応用できるものとする。クルズスの時間帯を調節し、就業時間内に学生が十分実習できるよう工夫する。

卒後教育：また、各人に臨床研究のテーマを与えて最低でも年に1回は学会報告を行う。研修医教育として、最新の情報を収集し、リサーチマインドを持って診療に当たるように、英文誌抄読会を毎月施行し、文献検索、論文読解と臨床への応用に関して指導を行う。

大学院教育：令和5年4月より大学院生は3年目1名となる。当科研究室で免疫性ニューロパチーにおけるリンパ球解析を中心とした研究を継続すると同時に、免疫性中枢神経疾患の病態解明をテーマに国立精神・神経医療研究センター神経研究所免疫研究部との共同研究を継続する。

研究：

神経免疫疾患研究：AMED 研究費を用いた免疫性神経疾患に対する医師主導治験に参加するための研究基盤を整備する。当科の膨大な症例の臨床情報、検体を下に、自己抗体、リンパ球サブセットに関する情報を網羅的に解析し、その臨床応用をさらに勧めていく。他施設との共同研究を通して、当科において自己抗体測定法を整備する。

令和5年度も、AMED の支援を受けている「新規発見ノド抗原に基づいたノド抗体陽性 CIDP/中枢末梢連合脱髄症の診断基準・診療ガイドライン作成のためのエビデンスの創出とバイオバンク・レジストリ構築（主管校、国際医療福祉大学）」に研究分担者として参加する。文科省科研費の獲得を目指して申請の準備を行う。過去5年間に着手した研究を見直し、発展性のある見込める内容・テーマに関しては申請に向けて準備する。

脳卒中研究：当科の入院患者の4割は脳卒中である。次年度より、搬送されてくる患者情報を基盤に、脳卒中に関する予防医学的研究を行い、研究結果を還元して地域住民の福祉向上に努める。埼玉県西部、北部地域を中心に、当科で蓄積してきた診療情報を基に各症例の病態分析、疫学的調査研究、環境因子調査研究を経年的に行い、発症抑制に介入できる因子を探索する。

診療：

医局員の増員が喫緊の課題である。役割分担の改変など診療体制の修正によって少なくとも現状を維持する計画である。外来診療に対する covid-19 の影響はしばらく続くと思われるため、初診外来は2診を維持し、病棟・救急診療体制、および教育体制を維持する。病棟担当チームを2チーム制に編成し直し、人員減少の中でも診療の効率化を進める。次年度は、患者目線のより高度な医療の提供を目指し、地域リハビリテーション連携パスを活用し脳卒中患者に対する円滑な病診連携を引き続き展開する。

難病ドックの推進：難病診療に対する当科の取り組みとして慢性神経難病の定期評価入院を行っていることを、近隣の医療施設にさらに広めていく。

病床稼働率の維持：病床利用率は現在平均して100%を越えているが、今後も95%以上を維持する。脳卒中診療体制も縮小することなく例年通りに維持する。現在、20近い脳卒中連携病院とネットワークを構築しているが、紹介、搬送

のさらなる利便化を目指し、逆紹介率の上昇を目指す。近隣医療施設の病診連携：オンラインミーティングを通じて現在のネットワークを維持しながら、各施設の医療状況・能力に基づいて体系的に整備し、患者状況に応じた紹介・逆紹介の連携を進めていく。

2. 7) リウマチ・膠原病内科

1. 構成員

天野 宏一 (AMANO, Koichi) : 教授: 運営責任者: 診療部長: 教育副主任: 研究主任:
代表指導教員 (大学院): 膠原病: 博士

近藤 恒夫 (KONDO, Tsuneo) : 講師: 博士、教育主任

倉沢 隆彦 (KURASAWA, Takahiko) : 講師

酒井 亮太 (SAKAI, Ryota) : 助教: 博士

柴田 明子 (SHIBATA, Akiko) : 助教

岡田 悠介 (OKADA, Yusuke) : 助教

吉永 正一 (YOSHINAGA, Shoichi) : 専攻医 (助教)

<非常勤>

伊藤 達也 (ITO, Tatsuya) : 非常勤講師: 博士

高野 泰秀 (TAKANO, Yasuhide) : 非常勤講師

青木 和利 (AOKI, Kazutoshi) : 非常勤講師: 博士

長澤 逸人 (NAGASAWA, Hayato) : 非常勤講師: 博士

小川 祥江 (OGAWA, Hiroe) : 非常勤講師: 博士

高木 賢治 (TAKAGI, Kenji) : 非常勤講師: 博士

奥山 あゆみ (OKUYAMA, Ayumi) : 非常勤講師: 博士

八子 徹 (YAGO, Toru) : 非常勤講師: 博士

武井 博文 (TAKEI, Hirofumi) : 研究医員

関口 直哉 (SEKIGUCHI, Naoya) : 研究医員

飯塚 篤 (IIZUKA, Atsushi) : 研究医員: 博士

西村 幸治 (NISHIMURA, Koji) : 研究医員

菊池 潤 (KIKUCHI, Jun) : 研究医員: 博士

齋藤 俊太郎 (SAITO, Shuntaro) : 研究医員: 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

医師としての倫理観、使命感をもって患者の治療にあたることのできるリウマチ膠原病専門医を育成することを目標とする。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育

6年生の領域別疾患コースの免疫・膠原病・アレルギー性疾患ユニットの講義を天野が担当した。4年生のヒトの病気コースの免疫ユニットの講義を担当したのは、天野、近藤、青木、倉沢である。

共用試験臨床実習前 OSCE 評価者、共用試験臨床実習後 OSCE 評価者を近藤が担当した。

卒後教育

専攻医1人(吉永正一)の研修を行っている。

2-3. 達成度評価

卒前教育ではClinical clerkshipなども含めて順調に活動できたが、卒後教育に十分な時間が取れなかった。

以上より、本年度の目標については、卒後の教育が十分には達成できなかつたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度には卒後教育の充実を図ることを目標として活動する。

具体的には、カンファレンスの継続に加え、抄読会を再開し、知識の習得をはかる。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、臨床現場で問題となっている課題を取り上げ、各人が研究目標を明確にしてその達成をめざす。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 全身性血管炎に関する臨床研究

厚労省難治性血管炎調査研究班の臨床研究

千葉大学を基盤施設とする多施設共同研究

ANCA 関連血管炎と大型血管炎の前向き観察研究 (RADDAR-J)

2. 特発性大腿骨頭壊死症調査研究班におけるステロイド性大腿骨頭壊死の成因と予防治療に関する研究
 - 1) 成因に関する研究で一部成果が得られた
 - 2) 予防に関する研究は先進医療として現在進行中
3. トシリズマブ単独療法メカニズムに関する研究
4. 関節リウマチに関する臨床研究
 - 1) プロペンシティブスコア・マッチング法による tofacitinib と abatacept の臨床的有用性の比較
 - 2) 日本人関節リウマチを対象とした多施設共同、長期、前向き、非介入観察研究
(一部途中経過を学会で発表、現在進行中)

3-3. 達成度評価

研究実績から多施設共同研究への協力という点では順調に活動できたが、当科の original の研究ができてない、という点が認められた。以上より、本年度の目標については、多施設共同の臨床研究はいくつか論文による成果も得られ、十分達成できたと評価するが、original の研究、特に基礎研究が全くできていなかったと評価する。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、基礎研究の環境を整備し、次年度には基礎研究の充実を図る。また、臨床研究では新たな project を立ち上げるとともに、特に AI を使った研究を開始し、臨床現場に役立つ成果を上げることを目標として掲げ、達成に向けて取り組む。

1. 関節リウマチに関する臨床研究 (新たに開始した project : 全員)
 - 1) Sarilumab の多施設共同前向き観察研究 (PROFILE-J)
 - 2) Golimumab の予後評価に関する研究
 - 3) Baricitinib の治療継続率に関する前向き観察研究
2. 進行性線維化を伴う間質性肺炎を合併する膠原病患者に対する nintedanib の有用性に関する研究 (柴田)
3. 統合レジストリーによる多発性筋炎/皮膚筋炎関連間質性肺疾患の個別化医療基盤の構築
(AMED の多施設共同研究、共同研究期間として参加 : 天野、柴田)
4. AI (人工知能) の顔認証システムによる膠原病疾患の新たな診断補助ツールの開発 (酒井、岡田)
5. 基礎研究 (酒井)
 - 1) 腎疾患における免疫細胞と腎固有細胞とのクロストーク (動物実験)
 - 2) 自己免疫疾患 survivor (サバイバー) における自己寛容の維持機構や炎症収束・修復再生機構の解明

4. 診療

リウマチ・膠原病領域において、質量とも国内で 1、2 を争うと言って過言ではない診療実績を誇る。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県疾病対策課 ; 特定疾患審査会委員 (天野、近藤)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

リウマチ科 (科学評論社) 編集委員 (天野)

Mod Rheumatol、Int J Rheum Dis などのリウマチ関連雑誌の査読 (天野)

Mod Rheumatol Case Report、Internal Medicine の査読 MRCR Top Reviewer Award 2022 受賞 (近藤)

Mod Rheumatol、Annals of Medicine、Ther Adv Chronic Dis、J Clin Pharm Ther、Renal Failure などの査読 (酒井)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本リウマチ財団 医療情報委員会委員 (天野)

日本リウマチ学会関東支部運営委員 (天野)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

<著書>

- ① 天野宏一 : 関節リウマチ～関節外症状の治療。今日の治療指針～私はこう治療している 2023 年版 (vol. 65)、p. 849-850、2023. 1. 1 発行、医学書院

<原著論文>

- ② Tanaka Y, Yamaguchi A, Miyamoto T, Tanimura K, Iwai H, Kaneko Y, Takeuchi T, Amano K, Iwamoto N, Kawakami A, Murakami M, Nishimoto N, Atsumi T, Sumida T, Ohmura K, Mimori T, Yamanaka H, Fujio K, Fujino Y, Saito K, Nakano K, Hirata S, Nakayama S: Selection of treatment regimens based on shared decision-making in patients with rheumatoid arthritis on remission in the FREE-J study. Rheumatology 2022; 61(11): 4273-4285
- ③ Nagasaka K, Kaname S, Amano K, Kato M, Katsumata Y, Komagata Y, Sada KE, Tanaka E, Tamura N, Dobashi H, Nanki T, Harabuchi Y, Bando M, Homma S, Wada T, Harigai M: Nation-wide survey of the treatment trend of microscopic polyangiitis and granulomatosis with polyangiitis in Japan using the Japanese Ministry of Health, Labour and Welfare Database. Mod Rheumatol. 2022 Aug 20; 32(5): 915-922

- ④ Hirose W, Harigai M, Amano K, Hidaka T, Itoh K, Aoki K, Nakashima M, Nagasawa H, Komano Y, Nanki T: Real-world effectiveness and safety of tofacitinib and abatacept in patients with rheumatoid arthritis. Rheumatol Adv Pract. 2022 Oct 29;6(3): rkac090
- ⑤ Nagasaka K, Amano K, Dobashi H, Nagafuchi H, Sada K-E, Komagata Y, Yamamura M, Kato M, Endo T, Nakaya I, Takeuchi T, Murakawa Y, Sugihara T, Saito M, Hayashi T, Furuta F, Tamura N, Karasawa K, Banno S, Endo S, Majima M, Kaname S, Arimura Y, 24 and Harigai M: Nation-wide Cohort Study of Remission Induction Therapy using Rituximab in Japanese patients with ANCA-Associated Vasculitis: effectiveness and safety in the first six months. Mod Rheumatol 2022; Dec 8; roac150

<総説>

- ⑥ 近藤恒夫：膠原病・リウマチ診療における薬剤使用上の注意：T細胞阻害薬（アバタセプト）リウマチ科、68(1):58-66, 2022 科学評論社

<学会発表>

- ⑦ 酒井 亮太, 柴田 明子, 岡田 悠介, 吉永 正一, 齋藤 俊太郎, 倉沢 隆彦, 近藤 恒夫, 天野 宏一 ループス腎炎に対するシクロホスファミド・タクロリムス併用療法の有用性と安全性 第66回日本リウマチ学会総会・学術集会 2022.4.26 横浜 ワークショップ
- ⑧ 柴田 明子, 吉永 正一, 岡田 悠介, 酒井 亮太, 倉沢 隆彦, 近藤 恒夫, 天野 宏一 当科におけるベリムマブを併用した全身性エリテマトーデスの臨床的特徴とステロイド減量効果の検討 第66回日本リウマチ学会総会・学術集会 2022.4.27 横浜 ワークショップ
- ⑨ 倉沢 隆彦, 酒井 亮太, 近藤 恒夫, 天野 宏一, メボリズマブ (MEP) を併用した好酸球性多発血管炎性肉芽腫症 (EGPA) 治療 第50回日本臨床免疫学総会、東京、2022年10月14日、口演
- ⑩ Ryota Sakai, Mariko Toguchi, Koichi Amano: Immune homeostasis, Thymus-derived Treg WS16 Tolerance and Immune Suppression-1 The survival factors of GATA3+ Tregs in the convalescence stage of glomerulonephritis WS16-14-P, 2022/12/08 The 51st Annual Meeting of the Japanese Society for Immunology 熊本

【総数：原著12件、総説3件、著書1件、国内学会発表14件】

6-2. 獲得研究費

【厚生労働行政推進調査事業費補助金；難治性疾患等政策研究事業】

難治性血管炎に関する調査研究（分担者；天野宏一、主任；針谷正祥）

【日本医療研究開発機構研究費；難治性疾患実用化研究事業】

難治性血管炎診療のCQ解決のための多層的研究班（分担者；天野宏一、主任；針谷正祥）

6-3. 受賞

該当無し

6-4. 特許、実用新案

該当無し

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当無し

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

診療：総勢7人で、多数の外来患者の診療をこなし、入院患者の多少の減少はあったものの大きなトラブルもなく、十分な診療が行えたという評価できる。

教育：知識の伝達のみにならないよう、診療に対する考え方などを伝えるように努めたが、研修医の興味をそそるような内容に欠けていたようで、専攻医の獲得は十分にできなかった。

研究：臨床研究では多くの多施設共同研究に積極的に参加し、その成果は一部論文化され、十分な成果があった。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

診療：2023年度は、病棟診療では病床稼働率を高く維持する。外来診療では病診連携を強化し、逆紹介を推進するとともに、逆に新規患者の受け入れを推進していきたい。

教育：近藤教育主任を中心に、学生教育を充実させ、研修医教育についても診療を通じた教育のみでは知識が散漫になりがちであるので、クルズスなどで系統的な知識を持てるような教育を加えたい。

研究：酒井亮太講師を指導者とし、基礎研究を進めていく。また、臨床研究では、RAの治療に関する研究（主にJAK阻害薬に関するもの）を近藤講師を中心に教室全員で推進するとともに、倉沢隆彦講師を中心に血管炎症候群の

臨床研究、柴田明子助教を中心に膠原病に合併する進行性間質性肺炎の臨床研究、岡田助教を中心に強皮症関連の研究、その他炎症性筋疾患、リウマチ性多発筋痛症などについても研究をしたい。

2. 8) 腎・高血圧内科

1. 構成員

- 長谷川 元 (HASEGAWA, Hajime) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長、研究副主任、教育副主任 : 代表指導教員 (大学院) : 腎生理学 (水電解質代謝・酸塩基平衡)、腎不全、多発性嚢胞腎、高血圧 : 博士 (医学)
- 前嶋 明人 (MAESHIMA, Akito) : 教授 : 診療副部長、研究主任、教育副主任 : 指導教員 (大学院) : 間質性腎炎、急性腎障害、膠原病、血管炎 : 博士 (医学)
- 小川 智也 (OGAWA, Tomonari) : 准教授 : 診療副部長、血液浄化センター長 : 指導教員 (大学院) : 腎不全、血液浄化療法 : 博士 (医学)
- 田山 陽資 (TAYAMA, Yosuke) : 非常勤講師 (派遣中) : : (-) : : 博士 (医学)
- 清水 泰輔 (SHIMIZU, Taisuke) : 助教 : 診療副部長、研究副主任、教育副主任 : 大学院教員 (大学院) : 水電解質異常、腎不全 : 博士 (医学)
- 岩下 山連 (IWASHITA, Takatsugu) : 助教 : 診療副部長、研究副主任、教育主任 : (-) : : 学位無し
- 岩永 みずき (IWANAGA, Mizuki) : 非常勤 (派遣中) : : (-) : : 学位無し
- 原 宏明 (HARA, Hiroaki) : 非常勤 (派遣中) : 外来医長 : (-) : 高血圧、栄養学 : 博士 (医学)
- 岡崎 晋平 (OKAZAKI, Shinpei) : 非常勤 (派遣中) : : (-) : : 学位無し
- 肥田 徹 (HIDA, Toru) : 非常勤 (派遣中) : : (-) : : 学位無し
- 小西 良美 (OKADA, Yoshimi) : 非常勤 (派遣中) : : (-) : : 学位無し
- 塩田 裕也 (SHIODA, Yuya) : 助教 : : (-) : : 学位無し
- 安田 邦彦 (YASUDA, Kunihiko) : 非常勤 (派遣中) : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 山本 亮 (YAMAMOTO, Ryo) : 助教 : 診療医員 : (-) : 腹膜透析 : 学位無し
- 河合 雄一郎 (KAWAI, Yuichiro) : 助教 : : (-) : 原発性アルドステロン症 : 学位無し
- 永山 泉 (NAGAYAMA, Izumi) : 一般大学院生 : : (-) : 急性腎障害、間質性腎炎 : 学位無し
- 小川 公己 (OGAWA, Koki) : 助教 : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 廣瀬 賢人 (HIROSE, Kento) : 助教 : (時短) : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 寺尾 政昭 (TERAO, Masaaki) : 助教 (社会人大学院) : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 中村 裕美子 (NAKAMURA, Yumiko) : 非常勤 (派遣中) : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 下郷 優 (SHIMOZATO, Yu) : 助教 : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 佐藤 真理子 (SATO, Mariko) : 助教 : 診療医員 : (-) : 妊娠高血圧症候群 : 学位無し
- 岡本 茉樹 (OKAMOTO, Maki) : 専攻医 (学外研修) : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 関口 桃子 (SEKIGUCHI, Momoko) : 専攻医 (学外研修) : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 濱田 隆行 (HAMADA, Takayuki) : 専攻医 : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 澤田 衣里香 (SAWADA, Erika) : 専攻医 : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 安井 温子 (YASUI, Atsuko) : 専攻医 : 診療医員 : (-) : : 学位無し
- 小野 裕子 (ONO, Yuko) : 客員教授 : : (-) : 腎組織病理学 : 博士 (医学)
- 深澤 瑞也 (FUKAZAWA, Mizuya) : 客員教授 : : (-) : 泌尿器科学、アクセス手術、腹膜透析 : 博士 (医学)
- 小暮 裕太 (KOGURE, Yuta) : 非常勤 : : (-) : 多発性嚢胞腎 : 学位無し
- 佐野 達郎 (SANO, Tatsuro) : 非常勤 : : (-) : アクセス手術 : 学位無し
- 黒澤 明 (KUROSAWA, Akira) : 非常勤 (社会人大学院) : : (-) : : 学位無し
- 金子 修 (KANeko, Osamu) : 非常勤 : : (-) : : 学位無し
- 御手洗 哲也 (MITARAI, Tetsuya) : 客員教授・名誉教授 : : (-) : 糸球体病理学 : 博士 (医学)
- 松田 昭彦 (MATSUDA, Akihiko) : 非常勤講師 : : (-) : 血液浄化療法、腹膜透析 : 博士 (医学)
- 吉川 賢 (KIKKAWA, Masaru) : 非常勤講師 : : (-) : : 学位無し
- 野入 千絵 (NOIRI, Chie) : 研究医員 : : (-) : : 博士 (医学)
- 関本 綾子 (HOSHI, Ayako) : 研究医員 : : (-) : : 学位無し
- 羽田野 実 (HATANo, Minoru) : 研究医員 : : (-) : : 学位無し
- 佐藤 紗映子 (SATO, Saeko) : 研究医員 : : (-) : 糖尿病 : 博士 (医学)

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

当学科では、卒前教育においては「腎臓内科学全般の基礎知識を身につけさせ、併せて知的好奇心を喚起すること」を目標として掲げている。また初期研修医に対する卒後教育では「①内科全般あるいは臨床医学全般に関わる基本スキルの修得、②論理的な内科診断法の修得、③医療安全と多職種医療連携に対する意識の向上」を重視して指導にあたっている。CC 学生の指導については、数年前から参加型、見学型中心のカリキュラムへ3年前から切り替えているが、学生の満足度は高い様である。M5-6のCC-2, 3では国試対策の視点も盛り込んでいる。

2-2. 教育実績 (講義担当)

【卒前教育】卒前教育として、当科は医学部、保険医療学部の講義、実習を担当している。講義ではM2の調節系ユニットで3コマ (長谷川)、M3の腎泌ユニットで8コマ (長谷川 4、前嶋 2、岩下 2)、M6の内科総論で2コマ (長谷川)を担当し、試験問題作問も担当している。

実習では pre-CC を担当し、また CC-1 では 3-4 名 2 週間 19 グループを受け入れ、CC-2、3 も 3-4 人ずつ 4 グループを受け入れている。当科での卒前教育の担当は教育主任である岩下山連 助教であるが、直接の学生指導担当として河合雄一郎 助教（研修医長）を選任し、実習の円滑な進行に配慮している。いずれの実習でも診療チームの一員としての行動を促し、実習前半にクルズスを集中させ、後半の参加型実習の実効性を上げるよう配慮している。また総合医療センター看護学校で 4 コマの授業を担当し（前嶋）、埼玉県立常盤高等学校看護専攻科での授業（長谷川、清水、岩下）、川越市医師会看護専門学校での授業（小川智也）も担当している。

【卒業教育】22 年度、当科では 1 年目初期研修医 26 名、2 年目研修医 15 名を受け入れた。初期研修医の指導は配属先の各診療チームで責任を持つ体制としており、特定の指導医の経験、スキルによる指導の偏りを防いでいる。また指導内容の均霑化、救急対応や基本手技を確実に修得させることに加え各指導医の負担軽減をも考慮し、当科独自の多数の研修医クルズスを毎月実施している。内容は以下の通りである。

- ① 水・電解質代謝異常の基本・輸液の基本的考え方：長谷川教授
- ② AKI の基礎と臨床：前嶋教授
- ③ 体外循環療法の基本（種類と導入時のポイント）：小川（智）准教授
 - ・血液浄化療法の種類と特徴、その方式
 - ・ドライウェイトや食事管理などの維持透析の注意、設定方法
 - ・貧血、Ca、P 管理
- ④ エコーの使い方、見方を含め、腹膜透析の基本：清水講師
- ⑤ 病理組織標本の見方：小暮助教
- ⑥ 腎と栄養管理：原助教
 - ・栄養管理の注意点
 - ・食事・点滴作成の実際
- ⑦ 移植の基本：岩下助教、腎移植の適応と実際
- ⑧ 腎炎症候群と急速進行性糸球体腎炎：山本助教、腎炎の定義と分類

2-3. 達成度評価

当科で実施しているアンケート結果、及び大学から公表されている学生アンケートなどからは、当科の実習は概ね好評を得ているものと考えている。

2-4. 次年度改善計画

研修医並びに学生実習における発表会の開催については、稼働人員減少から中止せざるを得ず、再びレポート提出に戻ってしまったことは残念であった。

CC-2、3 でのレポート提出がやや形骸化している点も否めず、これに代わる方策を検討中である。また研修医教育に関しては時間外労働の縮小、土曜の休務などの実施に伴い、病棟での臨床兼研修特やカンファレンスでの意見交換などの時間確保が十分に取れない状況が生まれている。研修医教育の質を確保しつつ労務管理との整合性をどの様に取っていくかが課題と考えている。

3. 研究

3-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

腎・高血圧内科では、①創造性のある、客観的視野を持った臨床医の育成に資すること、②現在及び近未来の腎疾患臨床に貢献すること、の 2 点を研究活動の主眼に据えている。臨床上の諸問題を自ら解決しうる創造性を持ち、論理的かつ科学的な臨床を行いうる医師の育成には研究の経験が必要かつ有益であるとの信念のもと、当学科構成員にはそれぞれ個別の研究テーマを持って研究を行い、英文原著の発表に最大限の努力を傾注すること、その結果として出来る限り学位を取得すること、また大学院進学を積極的に推進すること、を指導原則としている。

テーマの選定に当たっては進行性腎障害の進展抑制を共通目標としながら、教室全体としての研究テーマの多様性維持や、臨床への貢献度の高い研究テーマを選定するよう心がけている。

21 年度は、大学院生の学位取得を完了すること、構成員の研究・診療解析テーマ取得率の上昇を改善目標とした。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

基礎研究

基礎研究ではモデル動物を用いた解析が中心で、vivo 実験は第 1 研究棟で行い、解析を第 2 研究棟内の当学科研究室で行っている。

- (1) 急性腎障害における新規バイオマーカーとしてのフォリスタチンの有用性に関する基礎的検討
研究担当：永山 泉 一般大学院生
- (2) 低酸素性腎障害の解析
研究担当者：寺尾 政昭 助教、社会人大学院生
- (3) 腎線維化、腎障害進展に関する CaSR と claudin の生理的・病的意義の解析
研究担当者：黒澤 明 助教、社会人大学院生
- (4) マグネシウム負荷による進行性腎障害進展抑制の可能性の検討
研究担当者：高柳 佳織 専任研究員（理学修士、徳島大学分子栄養学社会人大学院生）
- (5) Claudin-16 の制御機構（岐阜薬科大学との共同研究）

臨床研究

- (6) 妊娠高血圧症候群（HDP）への腎尿細管・間質障害の関与の検討
研究担当者：佐藤 真理子 助教、社会人大学院生
- (7) 機械学習（Ai）を用いた CKD 予後予測、病態進展寄与因子の解析（NEC ソリューションズとの共同研究）
研究担当者：小川 公己 助教

- (8) 尿ウロモジュリンの臨床的意義に関する研究
研究担当者：岩下 山連 助教
- (9) 進行性腎障害に与える尿酸代謝異常の関与と治療適応に関する解析
研究担当者：中村 裕美子 助教
- (10) 腎血管超音波を用いた尿細管間質障害重症度予測に関する研究
研究担当者：羽田野 実 研究医員
- (11) 遺伝性多発性嚢胞腎(ADPKD)の腎障害進展に関する臨床的パラメーターに関する研究
研究担当者：小暮 裕太 研究医員

診療成績解析

- (13) 遺伝性多発性嚢胞腎に対する tolvaptan による治療効果の解析
解析担当者：小暮 裕太 研究医員
- (14) IgA 腎症に対する扁桃摘除術の治療効果予測因子の解析
解析担当者：山本 亮 助教
- (15) 頻回再発型及びステロイド依存型ネフローゼ症候群に対するリツキシマブの臨床的効果の解析
解析担当者：小川 公己 助教
- (16) 顕微鏡的多発血管炎治療の予後規定因子に関する解析
解析担当者：佐藤 真理子 専攻医
- (17) 内シャントPTA治療後の開存期間予測に関する検討
解析担当者：安田 邦彦 助教
- (18) 経皮ガスモニタを用いて血液浄化療法における血圧低下予測に対するモニタとしての有用性の検討
解析担当者：廣瀬 賢人 助教

日本腎臓学会学術総会、日本透析医学会学術総会、日本高血圧学会総会、高血圧関連モデル学会、米国腎臓学会年次集会、欧州腎臓学会総会などの国内外の学会、及び氷川フォーラム、日本アクセス研究会などの研究会等で成果の発表を行った。また学位を取得した大学院生（佐藤紗映子）及び学位取得予定の大学院生（永山 泉）の原著論文が英文学術誌に採択された。

3-3. 達成度評価

年限超過の大学院生の研究進捗が遅れており、次年度の最優先課題と認識している。若手教室員が増加し、研究活動も活発になってきているが、研究指導を行いうる人材が不足しており、次年度の課題と考える。

3-4. 次年度改善計画

研究活動の主体となっている社会人大学院生について、診療や教育関連業務とのワークバランスを見直していく。

4. 診療

感染拡大の影響を強く受けた 20 年度に比較し、概ね全ての診療成績が改善した。入院・外来とも重症例や診療密度の濃い症例の紹介が増加し、絶対数の変化に比して稼働額の上昇が目立った。特に血液浄化領域ではこの傾向が顕著であった。当教室独自の連携ネットワークが機能し、急性期治療あるいは特殊治療終了後比較的速やかな転院が可能となっていることが、紹介例の診療密度上昇と在院日数短縮との両立に寄与する部分が大いものと考えている。当科診療担当領域は原発性腎疾患、二次性腎疾患、腎不全・血液浄化、シャント用血管手術、腎移植など多岐にわたる領域をカバーしている点の特徴であるが、この点は 21 年度も変化はなかった。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県慢性腎臓病対策協議会 代表：長谷川元
 埼玉県糖尿病対策推進会議 幹事：長谷川元
 埼玉県疾病対策協議会 委員：長谷川元
 埼玉県指定難病審査会 委員：長谷川元
 埼玉県医療事故調査専門委員 長谷川元
 埼玉県指定難病審査専門委員 前嶋明人
 埼玉県災害時透析医療確保マニュアル検討委員、第3ブロック長：小川智也

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

学術誌編集委員

Frontiers in Nephrology 前嶋明人
 Cells 前嶋明人
 透析医会誌 小川智也
 Fluid Management Renaissance 長谷川元
 学術誌査読委員：
 PLoS One 長谷川 元
 Magnesium Res 長谷川元
 Tohoku J Exp Med 長谷川元
 Clin Exp Nephrol 長谷川元、小川智也
 Clin Exp Nephrol Case Rep 長谷川 元、前嶋明人、小川智也
 J Vasc Access 小川智也

Renal Replacement Ther 小川智也
Journal of Artificial Organs 小川智也
ASAI0 journal 小川智也
Therapeutic Apheresis and Dialysis 小川智也

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本腎臓病協会埼玉県支部 代表 長谷川元
日本腎臓学会 評議員：長谷川元、前嶋明人、小川智也
日本透析医学会 理事：小川智也
日本透析医学会 評議員：長谷川元
日本リウマチ学会 評議員：前嶋明人
日本臨床生理学会 評議員：長谷川元
高血圧関連疾患モデル学会 理事：長谷川元
日本医工学治療学会 理事：小川智也
日本アフエレンシス学会 評議員：小川智也
日本急性血液浄化学会 理事：小川智也
日本腹膜透析医学会 評議員：小川智也
日本人工臓器学会 評議員：小川智也
日本透析アクセス医学会 理事：小川智也
日本HDF医学会 評議員：小川智也
日本在宅血液透析学会 理事：小川智也
日本透析バスキュラーアクセスインターベンション治療医学会 評議員：小川智也
日本サイコネフロロジー学会 理事、代議員：小川智也
日本腎臓学会 広報委員会連絡委員：長谷川元
日本腎臓学会 症例評価委員：前嶋明人
日本透析医学会 学術委員会学術専門部小委員会委員：小川智也
日本透析医学会 専門医制度委員会研修プログラム小委員会委員：小川智也
日本透析医学会 学術委員会ガイドライン手順書作成WG委員：小川智也
日本透析医学会 総務委員会HP・電算機小委員会委員：小川智也
日本透析医学会 統計調査委員会地域委員：小川智也
日本アフエレンシス学会 認定制度委員会委員：小川智也
氷川フォーラム 代表幹事：長谷川元
氷川フォーラム 世話人：前嶋明人
関東腎研究会 代表幹事：長谷川元
関東腎研究会 事務局：前嶋明人
腎と妊娠研究会 理事、研究会事務局長：長谷川元、事務局：岩下山連
埼玉体液カンファレンス 代表世話人：長谷川元
埼玉腹膜透析研究会 筆頭幹事：長谷川元、事務局長：小川智也
腎間質障害研究会 幹事：長谷川元
多発性嚢胞腎研究会 幹事：長谷川元
臨床体液研究会 世話人：長谷川元
トランスポーター研究会 医学系幹事：長谷川元
腎臓病と栄養・代謝・食事フォーラム 世話人：長谷川元
日本透析機能評価研究会 会長：小川智也
日本腎不全栄養研究会 幹事：小川智也
日本ハイパフォーマンスメンブレン研究会 プログラム委員：小川智也
バスキュラーアクセス超音波研究会 世話人：小川智也
日本クリアランスギャップ研究会 幹事：小川智也
埼玉透析医学会 幹事：小川智也、長谷川元
埼玉サイコネフロロジー研究会 世話人：小川智也
埼玉アクセス研究会 世話人、事務局：小川智也
埼玉腹膜透析研究会 幹事、事務局：小川智也
城北腎疾患セミナー 世話人：小川智也
埼玉南西部透析懇話会 世話人：小川智也
初雁腎・透析セミナー 代表：長谷川元、副代表：小川智也、幹事：前嶋明人
むさしの国心腎連携セミナー 代表：長谷川元、幹事：前嶋明人、小川智也、事務局：清水泰輔
彩の国腎疾患懇話会 代表：長谷川元、幹事：前嶋明人、小川智也

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Nagayama I, Takayanagi K, Hasegawa H, Maeshima A. Tubule-Derived Follistatin Is Increased in the Urine of Rats with Renal Ischemia and Reflects the Severity of Acute Tubular Damage. *Cells* 4:12:801, 2023.

- ② Haruguchi H, Suemitsu K, Isogai N, Murakami M, Fujihara M, Iwadoh K, Menk J, Ookubo H, Ogawa T. IN.PACT AV access randomized trial: Japan cohort outcomes through 12 months. *Ther Apher Dial* 2023 Jan 6.
- ③ Sato S, Takayanagi K, Shimizu T, Kanozawa K, Iwashita T, Hasegawa H. Correlation between albuminuria and interstitial injury marker reductions associated with SGLT2 inhibitor treatment in diabetic patients with renal dysfunction. *Eur J Med Res* 27:140, 2022.
- ④ Nagayama I, Maeshima A, Nagata D. Urinary Activin A: A Novel Biomarker for Human Acute Kidney Injury. *Diagnostics (Basel)* 12:661, 2022.
- ⑤ Ryohei Yamamoto · Enyu Imai · Shoichi Maruyama · Hitoshi Yokoyama · Hitoshi Sugiyama · Asami Takeda · Tatsuo Tsukamoto · Shunya Uchida · Kazuhiko Tsuruya · Tatsuya Shoji · Hiroki Hayashi · Yasuhiro Akai · Megumu Fukunaga · Tsuneo Konta · Saori Nishio · Shunsuke Goto · Hirofumi Tamai · Kojiro Nagai · Ritsuko Katafuchi · Kosuke Masutani · Takashi Wada · Tomoya Nishino · Arimasa Shirasaki · Hiroshi Sobajima · Kosaku Nitta · Kunihiro Yamagata · Junichiro J. Kazama · Keiju Hiromura · Hideo Yasuda · Makoto Mizutani · Toshiyuki Akahori · Tomohiko Naruse³³ · Takeyuki Hiramatsu · Kunio Morozumi · Tetsushi Mimura · Yosuke Saka · Eiji Ishimura · Hajime Hasegawa · Daisuke Ichikawa · Takashi Shigematsu · Hiroshi Sato · Ichiei Narita · Yoshitaka Isaka on behalf of the Japan Nephrotic Syndrome Cohort Study investigators. Time to remission of proteinuria and incidence of relapse in patients with steroid-sensitive minimal change disease and focal segmental glomerulosclerosis: the Japan Nephrotic Syndrome Cohort Study. *Clin Exp Nephrol* 35:1135-1144, 2022.
- ⑥ Yamamoto R, Imai E, Maruyama S, Yokoyama H, Sugiyama H, Takeda A, Uchida S, Tsukamoto T, Tsuruya K, Akai Y, Nitta K, Fukunaga M, Hayashi H, Masutani K, Wada T, Konta T, Katafuchi R, Nishio S, Goto S, Tamai H, Shirasaki A, Shoji T, Nagai K, Nishino T, Yamagata K, Kazama JJ, Hiromura K, Yasuda H, Mizutani M, Naruse T, Hiramatsu T, Morozumi K, Sobajima H, Saka Y, Ishimura E, Ichikawa D, Shigematsu T, Sofue T, Fujimoto S, Ito T, Sato H, Narita I, Isaka Y. Predictors of early remission of proteinuria in adult patients with minimal change disease: a retrospective cohort study. *Sci Rep.* 13:12:9782, 2022.

【総数：原著論文 8 件、学会発表 18 件】

6-2. 獲得研究費

文部科学省科学研究費補助金（基盤 C）課題番号 20K08596（研究代表者：前嶋明人）429 万円
「腎幹細胞を起点とする尿細管再生システムを利用した加齢腎再生の試み」2020 年～2022 年
文部科学省科学研究費補助金（基盤 C）課題番号 21K08221（研究分担者：前嶋明人）30 万円
「慢性腎臓病における Tgm2-p62-p53 複合体とオートファジー調節機構」2021 年～2023 年
企業設立研究助成団体からの獲得研究費（外部審査あり）（代表者：長谷川元）12 団体合計 540 万円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第 9 回埼玉腹膜透析研究会・事務局：小川智也、長谷川元（2022 年 4 月 10 日 Web 開催）
第 67 回埼玉腎臓研究会・代表幹事 長谷川元（2022 年 4 月 23 日 Web 開催）
第 5 回彩の国腎疾患懇話会・代表幹事 長谷川元（2022 年 4 月 23 日 Web 開催）
第 21 回氷川フォーラム・代表幹事 長谷川元（2022 年 5 月 7 日 Web 開催）
第 10 回初雁腎・透析療法セミナー・代表：長谷川元、事務局：小川智也、長谷川元（2022 年 6 月 18 日 Web 開催）
第 8 回日本透析機能評価研究会学術集会 会長：小川智也（2022 年 7 月 10 日 埼玉医科大学かわごえクリニック、ハイブリッド開催）
第 33 回日本サイコネフロロジー学会学術集会・事務局：小川智也（2022 年 7 月 23, 24 日、Web 開催）
第 5 回オンライン透析セミナー・代表：長谷川元（2022 年 7 月 21 日、Web 開催）
第 7 回むさしの国心腎連携フォーラム・代表幹事：長谷川元（2022 年 8 月 25 日、Web 開催）
第 12 回埼玉アクセス研究会学術集会・事務局：小川智也（2022 年 7 月 31 日、大宮、ハイブリッド開催）
第 54 回臨床体液研究会学術大会 大会長 長谷川元（2022 年 10 月 29 日 Web 開催）
第 6 回オンライン透析セミナー・代表：長谷川元（2022 年 11 月 17 日、Web 開催）
第 22 回氷川フォーラム・代表幹事 長谷川元（2022 年 11 月 19 日 Web 開催）
第 10 回埼玉腹膜透析研究会メディカルスタッフセミナー・事務局：小川智也、長谷川元（2022 年 11 月 19 日 Web 開催）
第 1 回腎代替療法施設連携研修会・代表：小川智也（2022 年 11 月 28 日、大講堂）
第 32 回日本サイコネフロロジー学会学術集会・事務局：小川智也（2021 年 12 月 11 日、Web 開催）
第 9 回初雁腎・透析療法セミナー・代表：長谷川元、事務局：小川智也（2022 年 1 月 8 日、Web 開催）
第 51 回関東腎研究会・代表幹事：長谷川元（2023 年 1 月 21 日、東京）*現地開催
第 30 回埼玉臨床体液カンファレンス・代表幹事：長谷川元（2022 年 1 月 22 日、Web 開催）
第 32 回腎と妊娠研究会・理事・研究会事務局 長谷川元（2023 年 3 月 4 日 松山市）*現地開催
第 8 回むさしの国心腎連携フォーラム・代表幹事：長谷川元（2023 年 3 月 9 日、Web 開催）
第 7 回オンライン透析セミナー・代表：長谷川元（2023 年 3 月 16 日、Web 開催）

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

研究については、昨年度改善計画で学位取得、原著論文発表の推進を挙げたが、成果不十分と言わざるを得ない。大学院生の数、乙種での学位取得を目指す教室員数の増加傾向は続いており、研究活動への関心度は増していると思われる。テーマ選定、業績としての完成度より「研究活動を通じて医師としてのスキル向上」をより重視する教室の研究指導方針に対する理解と共感が得られていることが、研究活動の活性化に寄与していると思われる。卒前教育については、学内外での講義・じゅぎょの担当、実習の受け入れ、試験問題作成などで貢献している。卒後教育では、初期研修医教育、専攻医指導を中心に、教室員が多くの時間を使いながら満足のでられる指導を行えるよう努力している。診療面では急性期疾患の比率を一定に保ち、在院日数の短縮を図りながら病床利用率を上げ、1) 各種加算を得ながら、適切な医療報酬を獲得していくこと、2) 若手を中心とした教室員の腎専門医としての技量を上げていくこと、3) 研修医や専攻医に内科医、臨床医として求められる基本スキルを習得する機会を提供すること、の3点を念頭に置きつつ、長年にわたり構築、拡充してきた教室独自の医療連携ネットワークを最大限活用し、上記のバランスを取りながら運営にあたっている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

学生教育、研修医教育、専攻医教育には多田名時間と労力を必要とし、特定の個人に負担を強いることは出来るだけ避けていきたい。このため22年度より開始した診療チーム制を教育面でも活用し、負担の均等化と全体としての指導内容の向上を両立させていきたい。研究面では大学院生の確実な学位取得、教室員のテーマが偏らないような配慮、症例報告論文への積極的な取り組みを進めていきたい。診療面では、23年度より教室の新たな関連施設として人口稠密地域の基幹施設であるさいたま市立病院が加わることから、医療連携の一層の充実が期待される。大学病院に相応しい、多様な急性期の疾患を中心とした診療体制の維持、拡充に努めていく。

2. 9) 感染症科・感染制御科

1. 構成員

- 岡 秀昭 (OKA, Hideaki) : 教授 (兼担: 総合診療内科所属) : 運営責任者 (令和5年3月より) : 診療科長 (令和5年3月より) : 感染症学 : 博士
- 大野 秀明 (OHNO, Hideaki) (令和5年2月まで) : 教授 : 運営責任者 : 教育主任 : 研究主任 : 診療科長 : 指導教員 (大学院) : 客員教授 (令和5年3月より) : 感染症学 : 博士
- 三村 一行 (MIMURA, Kazuyuki) : 講師 (兼担: 総合診療内科所属) (令和5年3月より) : 感染症学 : 博士
- 小野 大輔 (ONO, Daisuke) (海外留学中) : 講師 : 研究副主任 : 診療副科長 : 指導教員 (大学院) : 感染症学 : 博士
- 西田 裕介 (NISHIDA, Yusuke) : 助教 (兼担: 総合診療内科所属) (令和5年3月より) : 感染症学
- 川村 隆之 (KAWAMURA, Takayuki) : 助教 : 教育責任者 (令和5年3月より) : 研究責任者 (令和5年3月より) : 感染症学
- 川村 繭子 (KAWAMURA Mayuko) : 助教 (専攻医) : 感染症学
- 酒井 純 (SAKAI, Jun) : 助教 (兼担: 毛呂山キャンパス感染症科所属) : 感染症学 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

感染症はすべての臓器に発症しうるものであり、その理解に当たっては全身的な医学的知識の整理が必要となる。また、微生物学や免疫学など基礎医学的な知識も要求される分野である。感染症学の教育においては単に知識の詰め込みではなく、これら知識を融合させ、臓器や疾患のみでなく個人として広く疾病を俯瞰する能力の習得を目的としながら、感染症分野における医師国家試験レベルを十分クリアできる水準に到達することを目標とする。

2-2. 教育実績 (担当者: 大野秀明、川村隆之)

卒前教育としては、毛呂山キャンパス、日高キャンパスの感染症科・感染制御科と分担して学部教育を担当しているため、詳細はこちらを参照されたい。令和4年度は医学部6年生 (2コマ)、4年生 (6コマ) の講義を分担した。卒後教育として、研修医を対象とした抗菌薬の使用法、結核院内感染対策などの講義を行った。大学院教育は総合診療内科、臨床検査医学の院生を対象に行った。

2-3. 達成度評価

分担分野については概ね教育できたとは考える。

2-4. 次年度改善計画

令和5年度も卒前教育は感染症総論、各論等の講義分担を行い、問題演習も交え確実な知識の習得を目指す。特に、過去の医師国家試験問題を分析し、正答への導き方についての教育を行う。卒後教育も研修医を主な対象として感染症関連の講義や、セミナー等を開催したい。さらに、臨床感染症センターとも協力しながら、広く大学院教育も行っていきたいと考える。

3. 研究

3-1. 目的・目標

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の検査・病態・治療についての検討、難治性微生物 (細菌・真菌・抗酸菌) の病態・病原性・治療についての検討

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)

- ① COVID-19 患者における細菌性肺炎の合併率およびその要因・影響についての臨床研究 (当院 総合診療内科との共同研究)
- ② COVID-19 の病態解明および新規治療方法の開発のための研究 (京都大学、横浜市立大学、自治医科大学附属さいたま医療センター、当院 総合診療内科・内分泌糖尿病内科・中央検査部との共同研究)
- ③ COVID-19 の新規抗原定性検査キットの性能評価研究 (企業、青梅市立総合病院との共同研究)
- ④ メチシリン耐性黄色ブドウ球菌の薬剤併用療法についての研究 (東邦大学との共同研究)

3-3. 達成度評価

- ① 流行性の変化やワクチンの普及などの背景因子がCOVID-19の発生当初とは変わってきているなかで、流行株がオミクロン株となる前と比較して、オミクロン株の流行以降では、当院に入院したCOVID-19患者における細菌性肺炎の合併率が上昇したことを明らかにした。この知見については、デンマークで開催された欧州臨床微生物感染症学会の総会で発表した。
- ② COVID-19患者の重症化と関連する炎症マーカーのひとつであるC反応性タンパクの値が設定したカットオフ値 (3mg/dL) よりも高かった患者群では、低かった群と比較して、プラスミン- $\alpha 2$ プラスミンインヒビター複合体やトロンビン-アンチトロンビン複合体といった通常の臨床検査では測定を行わない凝固系の検査値が優位に上昇していた。加えて、複数の免疫抑制剤が投与されていた患者において、PICやTATを含む凝固系の検査値が有意に低下しており、複数の免疫抑制剤の使用がCOVID-19に合併する免疫血栓症の発症の抑制に関与している可能性が示唆された。この知見について論文化した (Int J Med Sci. 2023 Jan 1;20(1):136-141.)
- ③ 新規に開発されたイムノクロマト法を用いた新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) の迅速抗原定性検査キットの性能評価を、発症からの病期が異なるCOVID-19患者の鼻咽頭ぬぐい液・鼻腔ぬぐい液をそれぞれ用いて、標準法であるRT-PCR法などと比較し、同検査キットの感度・特異度・陽性的中率・陰性的中率を算出することで、その性能を比較した。その結果、鼻咽頭ぬぐい液と比べて患者侵襲が少ない鼻腔ぬぐい液を検体として用いた場合でも、発症早期であれば、一定の検査性能が得られることを明らかにした。
- ④ 血液培養から分離された全ゲノムデータが既知であるメチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) 菌株、メチシリン感受性黄色ブドウ球菌 (MSSA) 菌株を用いて、薬剤併用効果の評価目的に作成した新規フローズンプレートを用いて、薬剤併用効果を *in vitro* で検討した。その結果、本来は抗MRSA活性がない抗菌薬である β ラクタム系薬に、抗菌薬であるホスホマイシンまたは抗血小板薬であるクロピドグレルをそれぞれ併用した際に、抗菌活性増強効果が認められることを、MSSA菌株に対してだけでなく、MRSA菌株

に対しても確認した。現在、Hollow-Fiber モデルにおける追加検討などを行っている。

3-4. 次年度改善計画

これまで得られたデータの解析に追加検討も加えて、各種研究から得られた知見の論文化を進めていく。COVID-19 以外の難治性感染症についての新しい研究テーマについても検討したうえで、研究を開始していきたい。

4. 診療

感染症科・感染制御科は、総合診療科と合同ではあるが、外来診療と入院診療、新型コロナウイルス診療を行い、加えて入院患者を主な対象とした感染症診療（院内紹介、コンサルテーション）、感染症科カンファレンス、抗菌薬適正使用ラウンドなどを行っている。令和4年度の実績では新型コロナウイルス感染症入院症例 70 症例、感染症診療依頼（各診療科からの紹介診療）494 症例、抗菌薬ラウンド 257 回、血液培養陽性者モニタリング症例：605 例などである。令和5年度も引き続き総合診療内科と合同で感染症外来、入院診療を行うことなど、更なる感染症診療の充実を図る予定である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

・川越市感染症審査協議会委員長（大野）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

・学会誌（J Infect Chemother）査読 2 件（大野）

・日本内科学会英文誌（Internal Medicine）編集委員（大野）

・日本感染症教育研究会（IDATEN）メールマガジン（KANSEN JOURNAL）編集委員（小野）

・学会誌査読 2 件（小野）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本感染症学会評議員（大野）、日本医真菌学会代議員・教育委員会副委員長・用語委員（大野）、日本臨床微生物学会評議員（大野）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

（論文発表）

① Ono D, Ohno Y, Izumida Y, Ohno H, Oka H, Takeshita K. Inflammation as an exacerbation marker and target for prophylaxis against Coronavirus Disease 2019-related thrombosis. *Int J Med Sci.* 2023 Jan 1;20(1):136-141. doi: 10.7150/ijms.78911. eCollection 2023.

② Sawano M, Takeshita K, Ohno H, Oka H. SARS-CoV-2 RNA load and detection rate in exhaled breath condensate collected from COVID-19 patients infected with Delta variant. *J Breath Res.* 2022 Jun 7;16(3). doi: 10.1088/1752-7163/ac706b.

③ Jun Sakai, Norihito Tarumoto, Hideaki Ohno, Shigefumi Maesaki. Ellagic acid induced the apoptosis of *Candida* species in vitro. The 32nd European Congress of Clinical Microbiology & Infectious Diseases, Lisbon, Portugal on 23 - 26 April 2022.

（学会発表）

④ 大野秀明. 特別講演 生物学的製剤と感染症—結核、COVID-19 に与える影響について. 第 104 回川越東入間クリニカルカンファレンス、川越市医師会館、川越、2022.

⑤ 村田 諭、若月秀明、三村一行、大野秀明、大木孝夫. 市中病院におけるカンジダ属の抗菌薬感受性とカンジダ眼内炎の検討. 第 70 回日本化学療法学会学術集会合同学会、長良川国際会議場、岐阜、2022.

⑥ 山口哲夫、小野大輔、濱田将風、佐々木雅一、村上日奈子、大野秀明、石井良和、舘田一博. MRSA に対する β ラクトム系抗菌薬の fosfomycin 併用効果に関する検討. 第 70 回日本化学療法学会学術集会合同学会、長良川国際会議場、岐阜、2022.

⑦ 川村隆之、川村繭子、佐藤央基、片山理智、小野大輔、三村 一行、岡 秀昭、大野 秀明. エクリズマブ投与後に淋菌による菌血症を発症した 1 例. 第 71 回日本感染症学会・東日本地方会学術集会、京王プラザホテル札幌、北海道、2022.

⑧ 長谷川 哲平、河合 夏美、片山 理智、山下 裕敬、西田 裕介、三村 一行、川村 繭子、川村 隆之、小野 大輔、大野 秀明、岡 秀昭. COVID-19 を複数回再燃した濾胞性リンパ腫患者の 1 例. 第 71 回日本感染症学会・東日本地方会学術集会、京王プラザホテル札幌、北海道、2022.

⑨ 河合 夏美、長谷川 哲平、片山 理智、山下 裕敬、西田 裕介、三村 一行、川村 繭子、川村 隆之、小野 大輔、大野 秀明、岡 秀昭. 頸管ポリープ切除後にトキシックショック症候群となり診断に腹水培養が有用であった 1 例. 第 71 回日本感染症学会・東日本地方会学術集会、京王プラザホテル札幌、北海道、2022.

【総数：論文 3 件、共著 3 件、学会発表 7 件】

6-2. 獲得研究費

競争的研究費：AMED 新興・再興感染症に対する革新的医薬品等開発推進研究事業（分担研究） 1 件

奨学寄附金：1 社

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績
該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度からスタッフが4名体制となり、診療体制が充実してきている。また、総合診療内科との引き続きの協力体制のもと、感染症の外来診療、入院診療についてもさらに充実してきたものと考えている。そのなかでも、とくに新型コロナウイルス感染症については、総合診療内科と我々が引き続き先頭に立って診療を行ってきたと考えている。一方、研究に関しては、他施設との複数の共同研究に加えて、自施設の他科とも共同で研究を行ってきており、今後これらを更なる発展させていく。教育に関しては、3キャンパスでの分担の形となっており、担当分に関しては職責を全うできたと考えている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく次年度の改善計画

今年度における当科体制の大きな変更点としては、前任の運営責任者である大野の退職（当科在籍は、名誉教授として今後も継続）に伴い、総合診療内科・教授である岡が新たに当科の運営責任者（兼担）として着任した。上述のように、当科は以前より総合診療内科と協力体制のもとで業務を行っており、運営責任者の変更はあるものの、スムーズに体制移行できるものと考えている。また体制についての他の変更点としては、2022年7月より当科・講師の小野が米国に留学している。これらの変更やスタッフ数などを考慮しつつも、今後、さらなる外来・入院診療を拡充していきたい。

COVID-19の世界的なパンデミックを受けて、いままでも増して感染症診療に対する社会的ニーズが高まっているものと考えられるなか、当院の地域医療の中核となる大規模専門医療機関としての役割を考慮し、今後も引き続き感染症専門医を志す若いスタッフの指導など、更なる発展に努めていきたい。

2. 10) 総合診療内科

1. 構成員

- 岡 秀昭 (おか ひであき Hideaki Oka)
診療部長、代表指導教員(大学院)、教授、感染症、HIV、総合診療、博士
- 三村 一行 (みむら かずゆき Kazuyuki Mimura)
副診療部長、指導教員(大学院)、教育主任、講師、感染症、総合診療、博士
- 西田 裕介 (にしだ ゆうすけ Yusuke Nishida)
医局長、助教、大学院生、感染症、総合診療
- 山下 裕敬 (やました ひろたか Hirotaka Yamashita)
助教、感染症、総合診療
- 片山 理智 (かたやま まさのり Masanori Katayama)
助教、感染症、総合診療
- 白井 絢子 (しらい あやこ Ayako Sirai)
助教、感染症、総合診療
- 河合 夏美 (かわい なつみ Natsumi Kawai)
助教、感染症、総合診療
- 長谷川 哲平 (はせがわ てっぺい Tepei Hasegawa)
助教、感染症、総合診療
- 坂本 壮 (さかもと そう Sou Sakamoto)
非常勤講師、救急医学、集中治療、総合診療、博士
- 金澤 晶雄 (かなざわ あきお Akio Kanazawa)
非常勤医師、感染症、総合診療
- 山本慧 (やまもと けい Kei Yamamoto)
非常勤医師、大学院生、感染症、総合診療

本年度は「埼玉医科大学総合医療センター総合診療内科」開設6年目の年であり、河合夏美助教(新入局)、長谷川哲平助教(新入局)も加わり医局員の数も増加した。また、坂本壮先生を非常勤講師に迎えカンファレンスを通してご指導を受け、診療の更なる向上を図っている。当科の研修医ローテートを希望される医師も多く、教育にも力を注いでいる。

2. 教育

2-1. 目的・目標

本基本学科では、感染症を中心とした臓器非特異的な内科診療を行い感染症への高いサブスペシャリティを有した総合内科専門医を養成することを目的として、COVID-19 流行状況下における COVID-19 患者診療および院内・院外からの感染症コンサルテーション診療を通して、COVID-19 後を視野に入れた感染症診療を担える人材の育成を目標に教育活動を行った。

2-2. 教育実績

卒前教育で講義・演習・実習、臨床実習等を担当したのは、4年生感染ユニット(岡、三村)である。

その他、卒前教育では共用試験臨床実習前 OSCE 評価者(三村、西田、片山、白井)を担当した。

卒後教育としては、当科にローテーションする初期研修医と専攻医5人(1年目河合、長谷川、2年目片山、白井、3年目山下)の研修指導を行った。

大学院教育としては、博士過程2人(山本、西田)が在籍している。

2-3. 達成度評価

徐々に増員され体制が構築されているが、内科専攻医スタッフの複数名が外部研修中でもあったことや COVID-19 診療忙殺された現状からは、卒前・卒後教育に対応する体制としてはまだ不十分であると評価する。

2-4. 次年度改善計画

外部研修中の内科専攻医が復職することや COVID-19 の感染症法5類移行の状況を踏まえて、卒前教育および卒後教育において感染症診療を担える人材を養成するため、より積極的に教育に関わるよう努める。まず卒前教育に関しては、過去の医師国家試験問題を分析し、正答への導き方についての教育を行う。一方、卒後教育に関しては初期研修医を主な対象として総合診療や感染症領域の講義やセミナー等を開催したい。

3. 研究

3-1. 目的・目標

本基本学科では、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の検査・病態・治療についての検討を中心に研究活動を行った。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- ① COVID-19 患者における細菌性肺炎の合併率およびその要因・影響についての臨床研究(当院感染症科/感染制御科との共同研究)
- ② COVID-19 の病態解明および新規治療方法の開発のための研究(京都大学、横浜市立大学、自治医科大学附属さいた

ま医療センター、当院感染症科/感染制御科・内分泌糖尿病内科・中央検査部との共同研究

③ COVID-19 の新規抗原定性検査キットの性能評価研究（企業、青梅市立総合病院との共同研究）

④多項目自動血球計数装置と有形成分自動分析装置から得られる情報と感染症病態の比較検討（川崎医療福祉大学、当院中央検査部、感染症科/感染制御科との共同研究）

3-3. 達成度評価

① 流行性の変化やワクチンの普及などの背景因子が COVID-19 の発生当初とは変わってきているなかで、流行株がオミクロン株となる前と比較して、オミクロン株の流行以降では、当院に入院した COVID-19 患者における細菌性肺炎の合併率が上昇したことを明らかにした。この知見については、デンマークで開催された欧州臨床微生物感染症学会の総会で発表した。

② COVID-19 患者の重症化と関連する炎症マーカーのひとつである C 反応性タンパクの値が設定したカットオフ値（3 mg/dL）よりも高かった患者群では、低かった群と比較して、プラスミン- $\alpha 2$ プラスミンインヒビター複合体やトリノビン-アンチトリノビン複合体といった通常の臨床検査では測定を行わない凝固系の検査値が優位に上昇していた。加えて、複数の免疫抑制剤が投与されていた患者において、PIC や TAT を含む凝固系の検査値が有意に低下しており、複数の免疫抑制剤の使用が COVID-19 に合併する免疫血栓症の発症の抑制に関与している可能性が示唆された。この知見について論文化した（Int J Med Sci. 2023 Jan 1;20(1):136-141.）

③ 新規に開発されたイムノクロマト法を用いた新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）の迅速抗原定性検査キットの性能評価を、発症からの病期が異なる COVID-19 患者の鼻咽頭ぬぐい液・鼻腔ぬぐい液をそれぞれ用いて、標準法である RT-PCR 法などと比較し、同検査キットの感度・特異度・陽性的中率・陰性的中率を算出することで、その性能を比較した。その結果、鼻咽頭ぬぐい液と比べて患者侵襲が少ない鼻腔ぬぐい液を検体として用いた場合でも、発症早期であれば、一定の検査性能が得られることを明らかにした。

④ MRSA 菌血症患者において、抗菌薬の投与前後における白血球粒度と cell population data の検査値の変化について後方視的に解析し、早期の治療効果判定に用いることができる診断特性の高い測定項目を同定することを目的に、データの解析を行っている。

3-4. 次年度改善計画

これまで得られたデータの解析に追加検討も加えて各研究から得られた知見の論文化を進めていく。また COVID-19 以外の感染症について、新しい研究テーマについても検討したうえで、研究を開始していきたい。

4. 診療

感染症コンサルテーションと、外来での不明熱、不明炎症、HIV など特殊感染症外来や病棟診療をより充実させていく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文（総説）

①三村一行，岡秀昭．「臨床ではどのように抗菌薬を選択しているか」．日本臨床微生物学会雑誌．32(2):94-101，2022．

論文（症例報告）

②Kawamura T, Ono D, Shirai A, Mimura K, Iida S, Saita K, Oka H, Ohno H. Acute femoral osteomyelitis due to hypermucoviscous

Klebsiella pneumoniae. IDCases. 27:e01404, 2022. doi: 10.1016/j.idcr.2022.e01404. eCollection 2022.

学会発表（国内）

③三村一行．「整形外科系人工物感染症のコンサルテーション」 第96回日本感染症学会総会・学術講演会，2022年4月22日，埼玉川越．

④片山理智，佐藤央基，川村繭子，川村隆之，小野大輔，三村一行，大野秀明，岡秀昭．「S状結腸穿孔による腸閉塞に対して経肛門的イレウス管挿入ののち、血液培養陽性となった侵襲性肺炎球菌感染症の一例」 第96回日本感染症学会総会・学術講演会，2022年4月22日，埼玉川越．

⑤山本慧，西田裕介，小野大輔，三村一行，大野秀明，岡秀昭．「ステロイド治療を受けたCOVID-19患者における抗ウイルス薬温存治療の評価」 第71回日本感染症学会東日本地方会学術集会・第69回日本化学療法学会東日本支部総会 合同学会，2022年10月27日，北海道札幌．

⑥長谷川哲平，河合夏美，片山理智，山下裕敬，西田裕介，三村一行，川村繭子，川村隆之，小野大輔，大野秀明，岡秀昭．「COVID-19を複数回再燃した濾胞性リンパ腫の1例」 第71回日本感染症学会東日本地方会学術集会・第69回日本化学療法学会東日本支部総会 合同学会，2022年10月27日，北海道札幌．

⑦河合夏美，長谷川哲平，片山理智，山下裕敬，西田裕介，三村一行，川村繭子，川村隆之，小野大輔，大野秀明，岡秀昭．「頸管ポリープ切除後にトキシックショック症候群となり診断に腹水培養が有用であった一例」 第71回日本感

感染症学会東日本地方会学術集会・第69回日本化学療法学会東日本支部総会 合同学会, 2022年10月27日, 北海道札幌.
⑧川村 繭子, 佐藤 央基, 片山 理智, 小野 大輔, 三村 一行, 岡 秀昭, 大野 秀明. 「エクリズマブ投与後に淋菌による菌血症を発症した一例」 第71回日本感染症学会東日本地方会学術集会・第69回日本化学療法学会東日本支部総会 合同学会, 2022年10月27日, 北海道札幌.

学会発表 (国外)

⑨Kei Yamamoto, Daisuke Ono, Yusuke Nishida, Kazuyuki Mimura, Hideaki Ohno, Hideaki Oka. Evaluation of antimicrobial drug-sparing treatment for patients who received steroid therapy to treat COVID-19. 32nd European Congress of Clinical Microbiology & Infectious Diseases. 2022/4/25, Lisbon, Portugal.

書籍

⑩河合夏美, 西田裕介, 岡秀昭. 「ポストコロナ時代の感染症診療」 診断と治療. 111:45-50, 2023. 診断と治療社.

【総数：論文2件、学会発表7件、講演21件、書籍2件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

当科は2017年に新規開設された。順調にスタッフ増員し、診療および教育については業務拡大できていると評価するが、研究に対する実績は乏しいため、学術的側面についての充実も図っていきたい。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

COVID-19 終息後には、より感染症の人材育成を中心に注目を集めるものと思われる。当科が新しい時代の総合診療感染症診療教育研究体制の全国的なモデルとなるように体制を構築していきたい。

2. 11) 消化管外科・一般外科

1. 構成員

石田秀行 (ISHIDA, Hideyuki) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 代表指導教員 (大学院) : 消化器外科 (特に下部消化管外科、胃外科、遺伝性大腸癌、癌化学療法) : 博士
持木彫人 (MOCHIKI, Erito) : 教授 : 副診療部長 : 臨床工学部長 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 消化器外科 (特に食道・胃外科、腹腔鏡手術、癌化学療法) : 博士
辻 美隆 (TSUJI, Yoshitaka) : 教授 (兼担) : 指導教員 (大学院) : 腫瘍外科学、外科侵襲学、消化器内視鏡、医学教育 : 博士
石橋敬一郎 (ISHIBASHI, Keiichiro) : 准教授 (兼担) : 指導教員 (大学院) : 消化器外科 (特に下部消化管外科、癌化学療法)、医学教育 : 博士
熊谷洋一 (KUMAGAI, Youichi) : 准教授 : 病棟医長 : 大学院教員 (大学院) : 消化器外科 (特に食道外科) : 博士
松山貴俊 (MATSUYAMA, Takatoshi) : 准教授 : 研究主任 : 大学院教員 (大学院) : 消化器外科 (特に下部消化管外科) : 博士
中島日出夫 (NAKAJIMA, Hideo) : 客員准教授 : 癌化学療法 : 博士
石畝 亨 (ISHIGURO, Toru) : 講師 : 研修医長 : 消化器外科 (食道・胃、癌化学療法)
鈴木興秀 (SUZUKI, Okihide) : 講師 (兼担) : 研究主任 : 博士
母里淑子 (MORI, Yoshiko) : 講師 (兼担) : 博士
幡野 哲 (HATANO, Satoshi) : 助教 : 博士 (講師 : 外来医長)
豊増嘉高 (TOYOMASU, Yoshitaka) : 助教 : 博士 (講師)
山本 梓 (YAMAMOTO, Azusa) : 助教
伊藤徹哉 (ITO, Tetsuya) : 助教
牟田 優 (MUTA, Yuu) : 助教
千代延記道 (CHIYONOBU, Norimichi) : 助教
石川博康 (ISHIKAWA, Hiroyasu) : 助教
杉野 葵 (SUGINO, Aoi) : 助教
熊倉真澄 (KUMAKURA, Masumi) : 助教 (令和4年7月まで)
非常勤講師 : 全29名 非常勤医師 : 全3名

2. 教育

主に医学部5年生の各グループに対して2週間のclinical clerkship(CC)Step1を行っている。また、5年6年生CCStep2・3では、医療チームの一員として、より自覚をもって参加できる4週間の臨床実習も行っている。

卒前教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

消化管・一般外科疾患 (食道癌、胃癌、大腸癌、炎症性腸疾患、腹部外傷、虫垂炎、鼠径ヘルニアなど) の患者を受け持ち、その病態を理解したうえで手術および周術期管理について学ぶこと。

目標

- 1) 外科的処置の適応を判断し、リスク評価ができる。
- 2) 外科の基本的診療手技を実施できる。
- 3) 基本的な術前術後管理ができる。

2-2. 教育実績 (持木彫人・熊谷洋一)

CC期間中、学生は病棟診療チームの一員となり朝8時30分からの病棟チーム回診から診療終了時刻まで担当医と行動をともにして、病歴聴取、診察、検査、手術 (術前準備から術後管理)、診療記録の記載や電子カルテの使用法、チーム医療のあり方などを指導した。月曜日朝と水曜日の朝夕のカンファレンス (術前・術後カンファレンス、Clinical Conference、抄読会) に参加し、消化管・一般外科疾患の病態、診断、治療に関する知識を深める。クルズスは2回で、外科総論および消化器・一般外科の知識を確認する問題形式のレポートの解説、手術に参加する前に解剖学的事項の確認と糸結びの講習を行っている。

2-3. 達成度評価

2週間を通じて病棟チームの一員として行動することにより、外科医の一日を連日体験することで、当該領域への理解も深まっているものと考えられる。

2-4. 次年度改善計画

今後の実習内容改善の目的でCC最終日に実際に学生から感想を聞く時間を設け、またアンケートを行っている。当科の実習に対する学生からの反響やアンケート結果はある程度満足のいく結果である。

卒後教育

前期研修医が選択で、1ヶ月単位で当科にて研修を行っている。

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

医師として、当科で診療にあたっている消化管・一般外科疾患 (食道癌、胃癌、大腸癌、炎症性腸疾患、腹部外傷、急性虫垂炎、鼠径ヘルニアなど) の患者の受け持ちグループの一員として、その病態を理解した上で手術、周術期管理について学ぶこと。

2-2. 教育実績 (持木彫人・熊谷洋一)

上級医と共に臨床グループの一員として、朝8時30分からの病棟回診を行い、受け持ち患者の手術に助手として参加する。病歴聴取、診察、検査、手術(術前準備から術後管理)、診療記録の記載、外科チーム治療について教育する。月曜日朝と水曜日の朝夕のカンファレンスに参加し、受け持ち患者の術前プレゼンテーションを行う。また、水曜午後の診療部長回診にも参加する。鼠径ヘルニアに関しては、十分な助手経験の後、術者として執刀する。また、アニマル・ラボ等にも積極的に参加している。

2-3. 達成度評価

1ヶ月間にわたり、消化管・一般外科の臨床グループの一員として行動することで、外科医の仕事を理解すると共に、消化管・一般外科領域への理解が深まると考えられる。

2-4. 次年度改善計画

術者として執刀することで、病態、解剖の理解を深めることができると共に、医師としての責任感が芽生えるものと考えられる。

大学院教育

2名の社会人大学院生が研究に従事した。遺伝性大腸癌/消化管ポリポシスの原因遺伝子解析(パネル検査)の評価及び、家族性大腸腺腫症患者の十二指腸病変の十二指腸病変の遺伝子変異について解析を行った。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

消化管疾患の発生、病態、治療の研究および開発。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

上部消化管グループ、下部消化管グループ、腫瘍学グループ、鏡視下手術グループ、外科感染症グループ等。

3-3. 達成度評価

1. 大腸癌の予後予測因子(臨床病理学的因子)の解明
2. 進行・再発大腸癌の各種化学療法と臨床的効果予測因子との関係
3. 大腸癌における新規癌関連遺伝子の網羅的解析
4. 大腸癌化学療法の効果予測因子の研究
5. 遺伝性大腸癌(リンチ症候群、家族性大腸腺腫症など)の臨床病理学的検討と遺伝学的解析
6. 胃癌の予後予測因子の解明
7. 進行胃癌に対する集学的治療の開発
8. 腹腔鏡補助下胃切除術における神経温存の研究
9. 胃切除術における迷走神経温存の消化管運動およびホルモン分泌からみた生理学的評価
10. 術後逆流性食道炎発生における胃切除術後の食道運動機能評価
11. 食道癌術後合併症のリスク因子の解明
12. 食道癌に対する拡大内視鏡(エンドサイト)の有用性
13. 高齢者消化器癌手術における適切な術式選択とその妥当性の評価
14. 消化器外科領域の腹腔鏡手術の低侵襲性とその評価と新たな手術手技、器具の開発
15. 稀な腫瘍(小腸癌、後腹膜腫瘍)の臨床病理学的検討と治療成績
16. 家族性大腸腺腫症・潰瘍性大腸炎に対する大腸全摘術の工夫と成績
17. 消化器癌の悪性度評価と転移能の研究

上記のいずれの研究にも着手しており、一部では論文化も終了している。

3-4. 次年度改善計画

H17年度からの新体制となり業績が徐々に結実している。安定した研究環境、研究体制の確立を目指している。低侵襲手術、消化管関連ホルモンの研究を継続している。また、進行大腸癌に対する化学療法の感受性予測因子に関する基礎的研究にも一定の成果を収めている。また、遺伝性大腸癌(家族性大腸腺腫症、リンチ症候群)の基礎的研究にも着手し、リンチ症候群の網羅的スクリーニングを行っている。これらの検討項目について次年度解析および発表していく予定である。消化管外科としての独創性のある従来の臨床研究と平行して基礎的な研究をバックグラウンドに置いた真に臨床に還元できるエビデンスレベルの高い研究を追及している。

4. 診療

急性虫垂炎・鼠径ヘルニア・肛門疾患などの一般外科的疾患から、食道・胃・大腸の悪性疾患・炎症性腸疾患・緊急性の高い急性腹症・急性消化管出血・腹部外傷など幅広い範囲でそれぞれの専門医が診療を担当している。手術に関しては、機能温存手術や、腹腔鏡補助下手術などの低侵襲手術も積極的に取り入れて行っており、治療成績の向上に努めている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Surgery Today、Case Report 編集委員(持木)

日本外科系連合学会誌 編集委員(石橋)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務
該当なし。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Suzuki Y, Ishida F, Ishida H, Ueno H, Kobayashi H, Yamaguchi T, Konishi T, Kanemitsu Y, Hinoi T, Inoue Y, Tomita N, Sugihara K.
Morphological Analyses of Colorectal Adenocarcinomas in Japanese Familial Adenomatous Polyposis Patients.
J Anus Rectum Colon 27: 121-128, 2022
- ② Ishiyama S, Yamada T, Nakamura M, Enomoto M, Sugimoto K, Yokomizo H, Kosugi C, Ohta R, Ishimaru K, Sonoda H, Ishibashi K, Kuramochi H, Yoshida Y, Ichikawa D, Hirata K, Yoshida H, Hashiguchi Y, Ishida H, Koda K, Katsumata K, Sakamoto K.
Efficacy and safety of regorafenib dose-escalation therapy for Japanese patients with refractory metastatic colorectal cancer (RECC study).
Int J Clin Oncol 27(8): 1300-1308, 2022
- ③ Kumagai Y, Takubo K, Sato T, Ishikawa H, Yamamoto E, Ishiguro T, Hatano S, Toyomasu Y, Kawada K, Matsuyama T, Mochiki E, Ishida H, Tada T.
AI analysis and modified type classification for endocytoscopic observation of esophageal lesions.
Dis Esophagus 14: 2022
- ④ Yoshida N, Ishikawa H, Eguchi H, Okazaki Y, Hirose R, Inoue K, Dohi O, Itoh Y, Mutoh M, Ishiguro S, Ishida H.
Promotion Effects of Smoking in Polyp Development in Monozygotic Twins with Atypical Colorectal Polyposis.
Case Rep Gastroenterol 16(2): 375-381, 2022
- ⑤ I Mori Y, Amano K, Chikatani K, Ito T, Suzuki O, Kamae N, Hatano S, Chika N, Yamamoto A, Ishibashi K, Eguchi H, Okazaki Y, Iwama T, Ishida H.
Int J Clin Oncol ;27(6), 1034-1042, 2022
- ⑥ Inada R, Nagasaka T, Shimokawa M, Ojima H, Noura S, Tanioka H, Munemoto Y, Shimada Y, Ishibashi K, Shindo Y, Mishima H, Okajima M, Yamaguchi Y.
Phase 3 trial of sequential versus combination treatment in colorectal cancer: The C-cubed study.
Eur J Cancer 169: 166-178, 2022
- ⑦ Yamada K, Saiki Y, Komori K, Shiomi A, Ueno M, Ito M, Hida K, Yamamoto S, Shiozawa M, Ishihara S, Kanemitsu Y, Ueno H, Kinjo T, Maeda K, Kawamura J, Fujita F, Takahashi K, Mizushima T, Shimada Y, Sasaki S, Sunami E, Ishida F, Hirata K, Ohnuma S, Funahashi K, Watanabe J, Kinugasa Y, Yamaguchi S, Hashiguchi Y, Ikeda M, Sudo T, Komatsu Y, Koda K, Sakamoto K, Okajima M, Ishida H, Hisamatsu Y, Masuda T, Mori S, Minami K, Hasegawa S, Endo S, Iwashita A, Hamada M, Ajioka Y, Usuku K, Ikeda T, Sugihara K.
Characteristics of anal canal cancer in Japan.
Cancer Med 11(14): 2735-2743, 2022
- ⑧ Matsuyama T, Toiyama Y, Ishikawa T, Okugawa Y, Yasuno M, Maurel J, Kinugasa Y, Uetake H, Goel A.
A metastasis-associated microRNA-based liquid biopsy signature for risk-stratification in colorectal cancer: a multicenter cohort study.
Clin Transl Med 12(12): e998, 2022
- ⑨ Kumagai Y, Takubo K, Kawada K, Ohue M, Higashi M, Ishiguro T, Hatano S, Toyomasu Y, Matsuyama T, Mochiki E, Ishida H.
Endocytoscopic Observation of Esophageal Lesions: Our Own Experience and a Review of the Literature.
Diagnostics (Basel) 12(9): 2022
- ⑩ Toyomasu Y, Mochiki E, Ito T, Ishiguro T, Suzuki O, Kumagai Y, Ishibashi K, Saeki H, Shirabe K, Ishida H.
Gastric Emptying is Accelerated in Patients With Gastric Tube Reconstruction Following Laparoscopic Proximal Gastrectomy.
Surg Laparosc Endosc Percutan Tech: 32(6), 683-687, 2022

【総数：論文 32 件、学会発表 58 件、講演 18 件】

6-2. 獲得研究費

- | | | |
|-------|-------------------|-------------------------|
| 令和4年度 | 埼玉医科大学若手医師育成研究助成費 | かもだ研究特別賞 (200万円) 牟田 優 |
| 令和4年度 | 埼玉医科大学若手医師育成研究助成費 | かもだ研究研究支援賞 (100万円) 豊増嘉高 |
| 令和4年度 | 埼玉医科大学若手医師育成研究助成費 | かもだ研究研究奨励賞 (50万円) 石川博康 |
| 令和4年度 | 埼玉医科大学若手医師育成研究助成費 | かもだ研究研究奨励賞 (50万円) 千代延記道 |

6-3. 受賞

第 20 回日本ヘルニア学会学術集会 支部推薦演題セッション 優秀演題賞 石川博康

6-4. 特許、実用新案

該当なし。

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

令和 4 年 7 月 第 97 回大腸癌研究会学術集会（当番世話人 石田秀行）

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

診療面では、診療科構成員が一丸となって緊急手術、待機手術にあたった。良・悪性疾患に関わらず、高度かつ専門的な外科治療を遂行することに心がけた。腹腔鏡補助下手術(ロボット支援下手術が主体)が増加し、患者および近隣の医療機関のニーズに対応している。治療成績も満足できるものと考えている。尚、COVID-19 の感染拡大により高リスクで待機手術の対象となる一般外科領域の手術件数が減少していたが、昨年度は従来件数まで復活した。

教育面では、CC の充実に関しては、学生の希望をリアルタイムで把握した。

研究面では、臨床研究においてデータの一部、その一部を英文誌等で報告した。遺伝性大腸癌に関する遺伝学的研究においては多施設共同研究の代表として、着実な成果をおさめ同様に英文誌等で報告した。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

診療面では、診療の質のさらなる向上と診療件数の増加に努めたい。ロボット支援下手術の安全な遂行を継続的に実施する。

教育面では、より充実した臨床実習を目指すべく若手スタッフの啓発に努める。

研究面では、成果をさらに公表し続けるとともに基礎医学とのコラボレーションをさらにすすめる。

2. 12) 肝胆膵外科・小児外科

1. 構成員

(肝胆膵外科部門)

別宮好文 (BECK, Yoshifumi) : 教授 : 運営責任者、診療部長 : 大学院教員 (大学院) : 肝胆膵外科 : 博士

牧 章 (MAKI, Akira) : 教授 : 診療副部長、教育主任、病棟医長 : 指導教員 (大学院) : 肝胆膵外科 : 博士

浦橋泰然 (URAHASHI, Taizen) : 准教授 : 研究副主任 : 大学院教員 (大学院) : 肝胆膵外科 : 博士

木村暁史 (KIMURA, Akifumi) : 講師 : 肝胆膵外科 : 博士

助教 : 駒込昌彦 (外来医長)、二宮理貴、長田梨比人 (研修医長)、森 一洋、小暮亮太、山田永徳、布川靖啓、平埜貴久 (兼担)

非常勤講師 : 赤松延久、浅川真巳、帯津良一、長谷川潔、三井哲弥

非常勤医師 : 藤田麻依子

研究医員 : 千代田武大

(小児外科部門)

小高明雄 (ODAKA, Akio) : 教授 : 診療副部長、外来医長 : 指導教員 (大学院) : 小児外科 : 博士

井上成一朗 (INOUE, Seiichiro) : 准教授 : 病棟・研修医長 : 大学院教員 (大学院) : 小児外科 : 博士

助教 : 牟田裕紀 (教育副主任)、竹内優太

客員准教授 : 川嶋 寛

非常勤講師 : 池田理恵、池袋賢一

修練医 : 若松克侑

2. 教育

2-1. 目的・目標

卒前教育は主に CC の学生を、卒後教育は初期研修医と専攻医 (後期研修医) をそれぞれ対象にして、肝胆膵外科・小児外科の幅広い基礎的な臨床能力がつくように教育している。肝胆膵外科、小児外科共に、今年度はクルズスなどの教育内容をさらに充実させることを目標とした。

2-2. 教育実績 (担当者)

学生は、患者の入院から手術、退院まで受持ちとして共に診療、各種検査に加わる。初期研修医と専攻医に対しては、連日のカンファレンスと回診を中心として、術前診断、手術、および周術期管理について教育している。肝胆膵外科では、月～金の 8 時 15 分から入院全症例のカンファレンスを行い、引き続き病棟の回診を行っている。また、症例のプレゼンテーションを実演させ、また個々の実技についてもスタッフ全員で教育の達成度を確認した。小児外科では、CCstep1 の実習を大学病院と共同して行った。具体的には 1 週間の内、月・水・木を大学病院小児外科で行い、火・金を当科で担当した。火曜日には症例カンファレンス、造影検査実習、および外来実習を行い、金曜日には手術実習、医師国家試験対策のクルズス、および 1 週間のまとめを行い、大学病院小児外科の田中裕次郎教授と話し合っ教育の達成度を評価した。今年度の主な教育担当者は、肝胆膵外科では別宮好文、牧 章、浦橋泰然、木村暁史、駒込昌彦で、小児外科では小高明雄、井上成一朗、牟田裕紀であった。

2-3. 達成度評価

卒前教育と卒後教育において、今年度も肝胆膵外科・小児外科の幅広い基礎的な臨床能力がつくように教育を行った。また、クルズスに関しては、肝胆膵外科では移植関連を、小児外科では医師国家試験対策に加えて、日常疾患と画像診断をそれぞれ継続して実施することができた。

2-4. 次年度改善計画

次年度も肝胆膵外科と小児外科がそれぞれの科に実習に来た学生や研修医を教育するシステムを維持していく。教育内容については、今年度から始めたクルズスを継続し、さらに学生や研修医の希望も取り入れながら、幅広い基礎的な臨床能力が身に付くように教育を行っていききたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標

研究テーマを充実させて実績を出していくことであるが、その中で肝胆膵外科と小児外科に共通する目標は、臨床において安全確実で真に低侵襲な手術法を確立することにある。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

肝胆膵外科グループと小児外科グループがあり、互いに領域を超えて協力し合う方針を取っている。

- ① 肝胆膵外科における安全な肝切除、膵切除の確立

- ② 膵癌に対する新規抗癌剤の安全な投与方法の確立
- ③ 術中ナビゲーションを用いた安全・正確な肝切除術の研究
- ④ 肝胆膵外科・小児外科領域における安全な鏡視下外科手術の確立
- ⑤ 腹腔鏡下肝切除、膵切除の確立
- ⑥ 肝胆膵外科領域におけるロボット支援下手術の導入
- ⑦ 超低出生体重児における新生児外科疾患の病態解明と至適外科治療法の開発
- ⑧ 先天性横隔膜ヘルニアの欠損孔形態と臨床経過の関連性について
- ⑨ マウス神経芽腫モデルを用いた抗腫瘍免疫応答の解明と新しい免疫療法の開発
- ⑩ 腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復時の子宮傾斜に関する検討
- ⑪ 小児腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術（LPEC法）における予防的抗菌薬投与に関する検討
- ⑫ 新生児における stoma 造設法の改良
- ⑬ 胆道閉鎖症の年次登録と予後追跡調査による疫学研究

以上の内容を重点的に研究して、その成果は学会発表し、論文として公表または準備をしている。

3-3. 達成度評価

肝胆膵外科では、これまで築いてきた研究を継続しつつ成果を論文にまとめ、ロボット支援下手術の導入など新しい研究も開始することができた。小児外科では、新生児外科疾患を中心に臨床研究を行うと共に、大学院生の牟田裕紀と竹内優太がそれぞれ学位論文を小児外科の英文誌に投稿して掲載された。

3-4. 次年度改善計画

次年度も現在進行している研究プロジェクトをさらに進めていくと共に、それぞれの成果を論文にまとめることに重点を置きたい。

4. 診療

当科では肝胆膵外科と小児外科の二つのグループに分かれて、よりレベルの高い外科治療ができるように工夫している。また、これらグループの枠組みを超えて、教室全体のテーマとして、“正確・丁寧な手術”に取り組んでいる。肝胆膵外科では今年度も高難度肝胆膵手術に加えて、生体肝移植と脳死膵腎同時移植を施行することができた。来年度も移植手術の件数を増やすと共に、今年度から導入したロボット支援下手術の適応と件数を増やしたい。小児外科ではNICUの増床とPICUの開設に伴い、新生児を中心に今年度も順調に症例数を増やすことができた。小児内視鏡手術の件数も増加しており、来年度も発展させて行きたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

小高明雄：厚生労働省、診断群分類（DPC）検討ワーキンググループ作業班会議、MDC14,15 班員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

小高明雄：小切開・鏡視外科学会誌編集委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

別宮好文：日本門脈圧亢進症学会保険委員会処置委員

小高明雄：日本小児外科学会保険診療委員会顧問

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Ninomiya R, Abe S, Chiyoda T, Kogure R, Kimura A, Komagome M, Maki A, Beck Y. Predicting conversion surgery in patients with locally advanced pancreatic cancer after modified FOLFIRINOX treatment. *Asian Journal of Surgery* doi:10.1016/j.asjsur.2023.03.162. Online ahead of print.
- ② Muta Y, Odaka A, Inoue S, Takeuchi Y, Beck Y Thoracoscopic removal with fluoroscopic radiographic guidance of thoracoamniotic shunting catheters in newborns *Surg Today* 52:1504-1508, 2022
- ③ Takeuchi Y, Inoue S, Odaka A. A Expression of programmed cell death-1 on neuroblastoma cells in TH-MYCN transgenic mice. *Pediatr Surg Int.* 2022 Nov 28;39(1):6. doi: 10.1007/s00383-022-05292-y.
- ④ Muta Y, Odaka A, Inoue S, Takeuchi Y, Beck Y: Minimally invasive fenestration for congenital hepatic cyst in infant. *Oxford Medical Case Reports* 9(7):265-267, 2022
- ⑤ Takeuchi Y, Inoue S, Odaka A, Muta Y, Beck Y, Yamashita T. Anterolateral defect of left congenital diaphragmatic hernia with hepatic herniation. *Journal of Pediatric Surgery Case Reports* 81: 102292, 2022
- ⑥ Inoue S, Horiuchi Y, Takeuchi Y, Murakami T, Odaka A, Increased CD11b+CD49b+natural killer (NK) cell tumor infiltration after co-administration of anti-PD-1/PD-L1 antibodies in a murine neuroblastoma model

- 54th congress of the International Society of Pediatric Oncology Sep 28-Oct 1, 2022, Virtual Congress
- ⑦ Takeuchi Y, Inoue S, Odaka A, Expression of Programmed cell death 1 (PD-1) molecule on neuroblastoma cells in TH-MYCN transgenic mice 35th International Symposium of Pediatric Surgical Research Oct. 21-23, 2022 (Osaka)

(英文論文と国際学会発表のみ上記に記載)

【総数：論文 5 件、学会発表 15 件】

6-2. 獲得研究費

- ① 井上成一郎：文部科学省科学研究費助成金，基盤研究（C），腫瘍組織浸潤免疫細胞解析に基づく新たな神経芽腫免疫チェックポイント阻害療法の開発，課題番号 21K08626：4,160,000 円（2021-2023 年度）
- ② 竹内優太：第 32 回落合記念賞研究助成金，神経芽腫に対する免疫チェックポイント阻害と ω 3 系脂肪酸経口免疫療法を応用した新規免疫治療法の開発に向けた基礎研究：800,000 円（2021-2022 年度）
- ③ 竹内優太：令和 4 年度埼玉医科大学若手研究者育成研究助成費，かもだ特別賞，神経芽腫に対する不飽和脂肪酸摂取による炎症惹起がもたらす抗腫瘍効果のメカニズム解析：2,000,000 円（2022 年度）

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

肝胆膵外科・小児外科は 2005 年に総合医療センター外科の細分化が行われて誕生した。発足以来、肝胆膵外科と小児外科の二つのグループに分かれて教育、研究、診療のどの分野も発展させてきた。特に肝胆膵外科グループは、2013 年に別宮好文教授が就任し、新しく移植医療を開始し、腎移植を軌道に乗せ、生体肝移植（2018 年）と膵臓移植（2020 年）を開始し、今年度も目標としていた膵腎同時移植を開始することができた。小児外科グループでは NICU の増床と PICU の開設に伴い、新生児手術を中心に手術件数を増やすと共に、小児内視鏡手術の導入にも力を入れており、今年度も目標通り症例数を順調に増やすことができた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

肝胆膵外科グループは移植手術の件数を増やすと共に、今年度から導入したロボット支援下手術の適応と件数を増やしたい。小児外科では内視鏡手術の件数も増加しており、引き続きこの分野を発展させて行きたい。どちらのグループも教育、研究、診療のいずれにおいても内容を充実させ、次年度はそれぞれの成果を論文としてまとめるように努力したい。

2. 13) 血管外科

1. 構成員

出口 順夫 (DEGUCHI, Juno) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 教育主任 : 代表指導教員 (大学院) : 血管外科学 : 博士
橋本 拓弥 (HASHIMOTO, Takuya) : 准教授 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 血管外科学 : 博士
木村 賢 (KIMURA, Masaru) : 助教 : 大学院教員 (大学院) : 博士
佐野 允也 (SANO, Masaya) : 助教 : 大学院教員 (大学院) : 博士
佐藤 紀 (SATO, Osamu) : 客員教授 : 血管外科学 : 博士
山本 諭 (YAMAMOTO, Satoshi) : 非常勤講師 : 血管外科学 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

本基本学科では、血管疾患の診断学および治療学を習熟し、幅広い知識と安定した技術を身につけ、地域社会に貢献できる臨床医の育成を目標に教育活動を行った。

2-2. 教育実績

- ・ 卒前教育 : 学部学生に対しては、臨床実習を担当し病棟および手術室での実習を行った (出口、橋本、木村、佐野)。実習期間内に患者の接し方から始め、診断や治療における考え方から個別の疾患の知識の体得、及び診療技術などの実践的な教育を行った。また共用試験臨床実習前 OSCE (橋本) を担当した。
- ・ 卒後教育 : 専攻医 3 人 (1 年目) に対して、また研修医 1 人 (2 年目) に対して研修を行った (出口、橋本、木村、佐野)。血管疾患の理解と治療における基本的な概念を学んで貰っている。また、基本的な画像診断ができるように教育し、患者ごとに緊急性や選択など病態に沿った最先端だが標準化された治療ができるよう指導した。大学院教育は前年度対象者がいなかった。

2-3. 達成度評価

- ・ 卒前教育 : CC ステップとともに実習自体に制限があったが、実習の最終段階でのレポートは疾患の病態について標準をクリアされており目標は概ね達成できていた。より実技を重視した実習を行った方がよいという改善点がある
- ・ 卒後教育 : 専攻医中心であったため入院患者の指示および術後管理の技術は達成されていた。また、殆どの手術に参加して貰うなかで、基本手技の向上がみられた。

2-4. 次年度改善計画

- ・ 卒前教育 : 閉塞性動脈硬化症や動脈瘤など主要疾患に対し、基本的な病態の理解を得られているため概ね目標に到達していると考え。実習が主体なので、手術以外にもビデオや講演などの題材も取り入れて、より幅広い理解が定着することを計画している。
- ・ 卒後教育 : 終了前に、血管疾患に対するアプローチの著しい向上が見られていることが多く概ね良好な結果と考える。卒前教育と同じように、ビデオや講演などの題材もそろえて、手術外で落ち着いて学修する機会を提供することを予定している。

3. 研究

3-1. 目的・目標

研究対象は血管疾患全般であり、具体的には閉塞性動脈疾患および、胸部・腹部大動脈瘤を中心とした臨床研究、基礎研究をおこなっている。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

研究プロジェクトは、閉塞性動脈疾患、胸部・腹部大動脈瘤、静脈血栓 に大きく分けられ、それぞれに病態解明、リスク因子解析を行っている。

研究実績として、現在進行中の研究課題は以下の通りである。

- 1) 破裂性腹部大動脈瘤に対する開腹手術とステントグラフト内挿術の治療選択に関する全国多施設観察研究
 - 2) 感染性動脈瘤の治療選択に関する全国多施設観察研究
 - 3) 外傷性胸部大動脈解離に対する血管内治療の有用性の検討
 - 4) 重症虚血死患者に対するアンギオサムに基づいた血行再建術の有効性に関する多施設・前向き観察研究 (WARRIORS study)
 - 5) 担がん患者に合併した静脈血栓塞栓症における非ビタミン K 阻害経口抗凝固薬リバーロキサパン治療の前向き臨床研究
 - 6) Chronic limb threatening ischemia 患者に対する、バイパス手術における外科手術創における予防的陰圧吸引療法の有用性の検討
 - 7) 包括的慢性高度下肢虚血の血流代謝異常を可視化定量する、新しい核医学検査法の開発
 - 8) 術前栄養状態による血行再建成績の予測に関する研究
 - 9) 日本における重症虚血肢患者の血行再建後のリスク予測モデルの検討 (JCLIMB 参加研究)
 - 10) 包括的慢性高度虚血肢 (CLTI) に対する下腿動脈血行再建術における、患者自立効果に関する実態調査
- これらは、現在進行形であるが、一部は論文化されている。

3-3. 達成度評価

達成度評価としては、本施設での研究課題と多施設共同のものを分けて行っている。本施設での達成度は、まずは全

国規模の学会での発表を達成度 50 として、論文投稿 達成度 75、投稿受理 達成度 100 として評価している。また、多施設共同のものは、目標症例数登録を達成度 50 全国規模での学会発表を達成度 75 投稿を達成度 100 としている。主な研究としては、本施設 研究 3) 達成度 50、研究 6) 達成度 100、研究 7) 達成度 50、研究 8) 達成度 50 共同研究 研究 1) 達成度 50、研究 2) 達成度 100、研究 4) 達成度 50

3-4. 次年度改善計画

研究の進行は比較的順調であるが、本施設研究の多くは学会発表レベルに止まっており、論文化を進める必要がある。次年度は少なくとも学会発表を行ったものを投稿まで持って行く予定で、当院から情報を発信するようなプロジェクトが増加するように改善を試みている。その為に次年度より 2 週間毎の研究カンファを開くことにしており、各自 2 週間毎の進捗状況及び、滞っている問題点などを議論する機会を作る。

多施設共同のものは、COVID で学会時に集合することができなかったが、次年度より密に対応して行く。

4. 診療

当科の診療は血管疾患全般にわたり、特に腹部以下の動脈疾患に対して高度で専門的な治療を提供している。治療成績は概ね良好であるが、高齢化や糖尿病・透析患者の増加に伴い、疾患自体の重症化と緊急度が高くなり、治療自体の難易度が上昇している。我々の診療目標は、血管疾患治療における地域社会の中核として質の高い医療を提供することであり、診療スタッフの量的な充実を図り更なる治療成績の向上を目指したい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

橋本拓弥：厚生労働省：難治性血管炎 班会議 委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

出口順夫：Annals of Vascular Diseases 編集長、脈管学編集委員、以下査読委員 PLOS ONE, Journal of Vascular Surgery, Arteriosclerosis Thrombosis and Vascular Biology, Circulation Journal, Surgery Today, Surgical case reports, Journal of Cardiology cases, 日本心臓血管外科学会雑誌、日本血管外科学会雑誌、静脈学

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

出口順夫：日本血管外科学会理事・評議員、日本脈管学会理事・評議員、日本静脈学会理事・評議員、日本心臓血管外科学会評議員、米国血管外科学会正会員、欧州血管外科学会正会員

橋本拓弥：日本脈管学会理評議員、米国血管外科学会正会員、欧州血管外科学会正会員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Prediction models for two-year overall survival and amputation free survival after revascularization for chronic limb threatening ischaemia. Miyata T, Kumamaru H, Mii S, Kinukawa N, Miyata H, Shigematsu K, Azuma N, Ishida A, Izumi Y, Inoue Y, Uchida H, Ohki T, Kuma S, Kurosawa K, Kodama, Komai H, Komori K, Shibuya T, Shindo S, Sugimoto I, Deguchi J, Hoshina K, Maeda H, Midorikawa H, Yamaoka T, Yamashita H, Yunoki Y. *Eur J Vasc Endovasc Surg.* 2022; 64: 367-376
- ② Audit and Feedback from sustained improvement of overall surgical outcomes after abdominal aortic aneurysms Shirasu T, Hoshina K, and Deguchi J. *European Journal of Vascular and Endovascular Surgery.* 2022 July 64 (1) 137
- ③ Long-term outcomes following common femoral endarterectomy Hashimoto T, Yamamoto S, Kimura M, Sano M, Sato O and Deguchi J. *J Clin Med.* 2022, 11:6873
- ④ The infrapopliteal Global Limb Anatomic Staging System predicts wound healing and pain relief after partial revascularization. Matuura S, Hashimoto T, Suhara M, Deguchi J. *Ann Vasc Surgery.* 2023;88: 174-181
- ⑤ Successful treatment of a patient with a 'flow-through' type II endoleak associated with an aberrant renal artery after endovascular aneurysm repair. Sano M, Hashimoto T, Saito M, Kimura M, Miyazaki M, and Deguchi J. *Journal of Surgical case reports.* 2023 in press

講演、学会発表

- ① 腓骨動脈バイパスにおいて non-dissection 法を技術面から評価する 出口順夫 video workshop 第 52 回日本心臓血管外科学会学術集会 2022/3/5 横浜
- ② 上腕尺側非静脈転位内シャント転位部狭窄へのステント留置後に MRSA 多発血行感染を来した一例 佐野允哉、木村賢、橋本拓弥、出口順夫 第 42 回日本静脈学会学術集会 2022/7/7 一般演題 東京

- ③ 転位内シャントの有用性の検討—当施設における長期成績から— 佐野允哉、木村賢、橋本拓弥、出口順夫 第 63 回日本脈管学会学術総会 2022/10/28 会長要望演題 横浜
- ④ 膝窩動脈瘤や瘤由来塞栓症治療の up-to-date 出口順夫 日本循環器連合 up-to-date セミナー 第 87 回日本循環器学会 2023/3/10-12 福岡
- ⑤ 024-4 包括性高度慢性下肢虚血における鼠径靭帯以下のバイパス手術成績とリンパ球数の検討 山本諭、佐野允哉、木村賢、橋本拓弥、佐藤紀、出口順夫 埼玉医科大学総合医療センター血管外科 / 青梅私立病院 外科 第 53 回 日本心臓血管外科学会 2023/3/23-25 旭川

【総数：論文 5 件、講演 10 件】

6-2. 獲得研究費

橋本拓弥、熊倉嘉貴、出口順夫、佐藤紀 包括的高津慢性下肢虚血の血流代謝異常を可視化定量する、新しい核医学検査法の開発 2020 年度基盤研究 (C) 継続

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育に関しては、一定数の学生が実習を希望しており、今年度はその要望を取り入れたカリキュラムも作成することを目指す。研究に関しては、前年度は臨床研究を充実させることを目標に挙げていたが、全国レベルの多施設観察研究に多数参加することができている。来年度はそれらが成果がでるように努力する。診療における前年度の目標は「地域における血管疾患に対して質の高い医療を十分に提供すること」であるが、原則として緊急要請に対して対応しており、また緊急入院や緊急手術に対して対応はできていると考えている。ただ、そのなかで医師一人あたりの医療収入は着実に伸びており、平均の 1.5 倍となっていることは評価されるものとする。次年度は、ハイブリッド手術室が導入されることが決まり、少ない人員での手術が可能となり効率化を更に進めることで現状を少しでも改善したいと考えている。更に、厳しい現状であるが、目標としては数年前からスタッフの増員を達成したい。

7-2. 今年度の自己典型・評価結果に基づく改善計画

卒前教育に関しては、到達目標を明確して、疾患の内容のみならず、実技的な教育を次年度の目標とする。研究に関しては、現在進行中の他施設共同研究を継続するだけでなく、今年度は当院独自の臨床研究を少なくとも 2 題は開始し、可能なら他施設共同に広げて行きたい。診療に関しては、地域医療に対する貢献を維持しつつ、スタッフの増員を図り、労働環境にも配慮した安定した地域貢献を図りたい。

2. 14) ブレストケア科（乳腺腫瘍科）

1. 構成員

北條 隆 (HOJO, Takashi) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 代表指導教員 (大学院) : 乳腺外科 : 博士
荒井 学 (ARAI, Manabu) : 講師 : 乳腺外科 : 博士
松田 正典 (MATSUDA, Masanori) : 講師 : 腫瘍内科 : 博士
杉山 佳奈子 (SUGIYAMA, Kanako) : 助教 : 乳腺外科
吉澤 真成美 (YOSHIZAWA, Manami) : 助教 : 乳腺外科
樋野 興夫 (HINO, Okio) : 客員教授 : 病理学 : 博士
黒野 健司 (KURONO, Kenji) : 非常勤講師
福田 貴代 (FUKUDA, Takayo) : 非常勤講師 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

(卒前教育) 教育全般における目的・目標 : これまでに学習してきた基礎知識を実際の臨床において確認し、乳腺疾患、特に乳癌の診断、外科的治療、薬物療法を中心に専門的知識の習得を目的として、さらに、単に乳癌の診断と治療だけに目を向けるのではなく、患者が診断、治療を受けた後も社会の中で安心して生活できるような支援の実験を経験することを目標に教育活動を行った。

(卒後教育) 初期研修医は患者の社会的背景や合併症を含めたケアを重視した全人的な問診を行うことができ、画像の読影ができる。病理診断を評価し治療の適応について理解できる。手術の助手を務めることができるといったような、診断から治療までの経過を十分に理解することを目的とし、指導医のもとで実施した。

専攻医は病棟主治医として指導医の指導を受けながら、症例への対応を十分に経験する。卒後8年目までには外科専門医、日本乳癌学会乳腺専門医の取得を目標に、指導医のもとで術者として手術を行っていく。

(大学院教育) 臨床において、乳腺に関する標準的な診療を実施し、この領域で適切に患者対応ができる能力を得ることを目的とし、育成する。また、研究の方向性を指導教員と議論、計画し、学位取得のための指導を実施していく必要がある。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育で運営にかかわったユニット(乳腺)は、乳腺外科ユニット(外科系)のユニットディレクター(荒井)、薬物療法ユニット(内科系)のユニットディレクター(松田)である。

卒前教育で講義・実習、臨床実習等を担当したのも、乳腺外科ユニット(荒井)、薬物療法ユニット(松田)である。その他、卒前教育では共用試験臨床実習前・実習後OSCE評価者(北條)が担当した。

卒後教育としては、研修医1人(1年目三好 晃太郎)、専攻医1人(4年目吉澤(花田)真成美)の研修を行った。

2-3. 達成度評価

教育実績から、

(卒前教育) 引き続き人員不足による激務の中、医師間で協力しながら丁寧に指導を行った。短い実習期間ではあるが、症例をもとに患者の全身管理や乳腺腫瘍学の理解と手術手技が深められたとの評価が得られており十分達成できたと評価する。

(卒後教育) 研修医・専攻医に対する卒後教育も医師間で協力(乳腺外科・腫瘍内科)しながら、手術手技・画像診断・薬物療法の選択・緩和医療という点につき丁寧に指導を行った。短い実習期間(2か月)ではあるが、症例をもとに乳腺腫瘍学の理解と手術手技、薬物療法や緩和医療に対する知見が深められたと考える。

以上より、本年度の目標達成度については、特に専攻医に対しては手術執刀も行うことができたことから十分達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度には手術手技・画像診断の習得、科学的根拠に基づいた薬物療法選択・適切な緩和医療の選択と実施ができること、さらには学会等に参加することでプレゼンテーション能力の向上やスライド作成も目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

ブレストケア科では、乳腺領域を中心とした医療の質及び、患者のQOL向上を目的として、臨床試験のプロトコール作成と実施、臨床研究結果の学会発表や論文発表を目標に研究活動を行った。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- ・JCOG 乳がんグループ(JCOG1204 試験 : 早期転移発見による予後の向上を目指した乳がん術後の新たな標準的フォローアップ法開発に関する研究)(主任研究者 : 北條)
症例登録は2020年1月に登録が終了(1053症例)しており、現在データ集積中であり、2026年に最終解析予定である。
- ・JCOG 乳がんグループ(JCOG1505 試験 : エストロゲン受容体陽性・低リスク非浸潤癌に対する非切除+内分泌療法の有用性に関する単群検証的試験)(分担研究)
適格患者を抽出し、症例登録予定。当院からの登録は0症例である。
- ・JCOG 乳がんグループ(JCOG1607 試験 : 高齢者HER2陽性進行乳癌に対するTDM-1療法とペルツズマブ+トラスツズマ

+タキサン療法ランダム化比較試験(分担研究)

適格患者を抽出し、症例登録予定。当院からの登録は1症例である。

- ・ JCOG乳がんグループ(JCOG1806試験:薬物療法により臨床的完全奏功が得られたHER2陽性原発乳癌に対する非切除療法の有用性に関する単群検証的試験)(分担研究)
適格患者を抽出し、症例登録予定。当院からの登録は3症例である。
- ・ 化学療法による脱毛に対するケアプランニング確立のための観察研究(研究代表:北條)
22症例からのアンケートを回収している。さらにアンケートを行い令和5年度末に解析を予定。

3-3. 達成度評価

北條:令和4年度に開始された研究もあり順調に進んでいる。

荒井、松田は研究テーマを模索中であり、達成度は不十分である。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、研究体制を改善し、次年度には各スタッフの研究テーマの確立と実施、研究計画中の臨床試験に関しては症例登録開始を目標として、達成に向けて取り組む。

- ・ 松田: JCOG1204試験の副次解析としてCOVID-19パンデミック前後の登録状況についての研究を行う予定。
- ・ 荒井: 新しい医療用クリップの開発及び安全性・有効性の研究を検討中。

4. 診療

川越地域での世界水準の乳がん診療ができるよう、常に体制を整えている最中である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Brest Cancer誌の査読:1報(Initial experience with targeted axillary dissection after neoadjuvant therapy in breast cancer patients)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本乳癌学会評議員(北條)、日本乳癌学会保険診療委員会 委員(北條)、日本乳癌学会 乳腺専門医セミナー(北條) e-ラーニング講義担当(乳がん術後フォロー)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 乳腺腫瘍学 第4班:M. 原発乳癌術後フォローアップ
- ② 日本癌治療学会 2022:ホルモン陽性HER2陰性転移・再発乳癌、化学療法後のパルボシクリブとホルモン療法、杉山 佳奈子

【総数:論文0件、学会発表1件、講演0件】

6-2. 獲得研究費

なし

6-3. 受賞

なし

6-4. 特許、実用新案

なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては学生より一定の評価をいただいておりますが更なる改良を検討する。大学院教育に関しては該当者がいないため評価はできません。研究に関しては継続の研究を行い、新しい臨床試験が試験開始されており評価できると考える。診療に関しては手術件数200(乳腺外科一人100症例)以上を目標としていることから十分とは言えない、今年度は目標に向けて効率の良い診療を心掛ける。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては 対応生徒数を改善するためスタッフを増加して、次年度当科での教育を希望するすべての生徒の受入を目標として取り組む。大学院教育に関しては、大学院にて研究を希望する若手医師の入局を目標として取り組む。研究に関しては研究の定期的報告会の実施を改善することで研究のブラッシュアップを行い、次年度研究成果の発表(学会、論文作成)を目標として取り組む。診療に関しては人員の確保や整備を改善し、初診患者を増やし、次年度手術件数200症例以上を目標として取り組む。その他の事項に関しては遺伝性乳癌卵巣癌症候群患者への対応を改善し、施設の認定をとり、次年度リスク低減手術(遺伝性乳癌卵巣癌症候群患者の健側乳房切除)ができる事を目標として取り組む。

2. 15) 呼吸器外科

1. 構成員

中山 光男 (NAKAYAMA, Mitsuo) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 代表指導教員(大学院) : 呼吸器外科全般、気管気管支外科 : 博士

河野 光智 (KOHNO, Mitsutomo) : 教授 : 教育副主任 : 研究副主任 : 診療副部長 : 指導教員(大学院) : 呼吸器外科全般、肺移植 : 博士

福田 祐樹 (FUKUDA, Hiroki) : 講師 : 教育主任 : 大学院教員(大学院) : 呼吸器外科全般 : 博士

羽藤 泰 (HATOU, Tai) : 講師 : 研究主任 : 指導教員(大学院) : 呼吸器外科全般、癌免疫 : 博士

青木 耕平 (AOKI, Kohei) : 助教 : 病棟医長 : 博士

井上 慶明 (INOUE, Yoshiaki) : 助教 : 博士 (留学中)

杉山 亜斗 (SUGIYAMA, Ato) : 助教 : 大学院生 (社会人枠)

山口 雅利 (YAMAGUCHI, Masatoshi) : 助教

鹿島田 寛明 (KASHIMADA, Hiroaki) : 助教 (後期研修医)

儀賀 理暁 (GIKA, Masatoshi) : 緩和医療科教授 : 呼吸器外科兼任 : 指導教員(大学院) : 呼吸器外科全般、緩和医療 : 博士

泉 陽太郎 (IZUMI, Yotaro) : 客員准教授

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本学科では真に社会から信頼され必要とされる臨床外科医の育成を目的とし、特に呼吸器外科領域の疾患に精通する医師の育成に力を注いでいる。また、研究能力を兼ね備えた臨床医の育成も同時に目標としている。卒前教育では、それまでに学んできた基礎医学や診察技能に関するバラバラの知識を統合し、実際の臨に結び付ける能力を養成する目的で、受け持ち患者を通して問題点の発見、分析、基礎的知識との照合、それらを統合しての問題解決、といった臨床医に必要とされる能力の育成を目標とした実習を行なっている。また、患者および他の医療スタッフとの信頼関係を構築するための心構えや、患者中心の医療を実践するための患者の立場に立った考え方なども実際の診療を体験する中で会得できるように配慮している。卒後教育では、初期研修医には外科医としての基本的手技を体得することや呼吸器外科疾患の診断から治療までの大筋の流れを理解することを目標とし、切開縫合や胸腔ドレーン挿入など外科医に不可欠な手技や画像診断、気管支鏡診断などが習得できるよう指導を行っている。後期研修から卒後8年目までの医師には外科専門医および呼吸器外科専門医の資格の取得を目標として、年次ごとの到達目標を明らかにし、それを達成するための支援システムを作り、病棟入院患者の受け持ちから手術の助手、手術の執刀までが行えるよう指導している。大学院教育では、臨床医学研究分野に関する研究者並びに職能人として、高度で最先端の臨床医学研究に従事し、自立して研究・医療活動を行うに必要な能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的として教育を行っている。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育では、主に呼吸器外科分野のクリニカルクラークシップ(CC)および課外プログラムを担当している。CC Step1の学生は月曜日朝のガイダンス時に、呼吸器外科実習期間中の1週間で病棟や手術室で学んでほしいことや意識すべき点をまとめた小テストの実施をしている。国家試験にも頻出する肺癌の診断から治療への流れに関する問題や、手術中に使用するガーゼの特徴などに関する問題である。また、肺癌の手術動画を3分ほどに編集し、肺葉や大血管、大事な神経など、胸腔内解剖を解説するビデオを新たに作成し、手術参加の前に予め学習出来るようにした(担当:福田、河野、杉山)。月曜日と水曜日は手術への参加や見学が中心であるが、興味が持てるよう、脈管や気管支、神経などを記載した術野のシェーマを配布し、手術内容の説明に使用している。コロナ感染拡大予防のため、学生が直接触れて診察することは控えているが、手術日以外では患者を受持ち医師と共に回診や処置、気管支鏡検査などに加わり、担当した疾患に対する教科書的知識の総括を含めた症例レポートを作成する(担当者:福田、羽藤、井上、杉山、山口)。火曜日午前と木曜日午前にはクルズズを行い(担当者:福田、羽藤)、呼吸器外科疾患の診断や治療に関する知識の整理や、基本的な外科手技である縫合手技の練習を行っている(担当者:福田)。胸腔鏡下手術のシミュレーションや自動縫合器の使用体験も人気があり、好評である。金曜日午前にはビデオ動画を含めた肺移植や臓器提供に関するクルズズを行っている(担当:河野)。また、CC Step1の成果確認のため、CC Step1終了時に症例レポートのフィードバックと共に試問を行っている(担当者:河野、福田)。

CC Step2, Advanced CC では呼吸器外科患者 1~2名の受持ちとして医師と共に入院から退院までの診察、外科治療、

気管支鏡検査などに加わり、診断、治療方針の決定、治療（手術、周術期管理、化学療法など）など呼吸器外科診療の流れが理解できるよう実習を進めている（担当者：福田、河野、中山）。特に意欲のある学生には手術で胸腔鏡操作を担当させている。また、胸部X線写真と胸部CTの読影練習にも時間を割き、肺区域の学習も行っている。学生が外科学的研究に興味を持つことを期待し、当科の人工赤血球や肺移植に関する動物実験の紹介も行っている。希望者に対してブタ肺を用いた肺切除や気管支縫合の体験を行い、大変好評であった（担当者：羽藤、福田、井上、杉山、山口）。4、5、6年生向けに胸部X線読影および気管支鏡検査や手術の見学など呼吸器外科への興味を醸成するプログラムを企画した（担当者：中山）。

卒後教育では、初期研修医には研修プログラムに沿い、呼吸器外科疾患の診断と病態の評価の実践および基本手技の習得の指導を行っている。ブタ肺を用いた肺切除や気管支縫合、吻合も行った（担当者：羽藤、福田、井上、杉山、山口）。後期研修から8年目までの医師を対象に、関連施設での研修も含め、外科診断、手術手技、周術期管理など呼吸器外科に必要な臨床能力が身につくように教育し、外科専門医、呼吸器外科専門医、気管支鏡専門医の資格を取得することができるように指導している（担当者：中山）。大学院研究では、呼吸器外科分野の臨床医学研究を教育指導し、研究成果の論文発表並びに学位取得に向けた指導を行っている（担当者：羽藤、中山、河野）。

2-3. 達成度評価

卒前教育のCC Step1は、新型コロナ感染拡大の影響があり、依然として患者に接する機会は最小限に制限された状況であったが、手術参加や見学、レポート作成やクルズスなどは計画通りに実施出来た。新たに作成した胸腔内解剖の解説ビデオを手術参加前に視聴することで、効率よく学習出来るようになった。最終日のフィードバックと共に行う症例レポートの審査でも、学習目標の達成を確認することが出来た。CC Step2、Advanced CCについて6年生の4名、5年生の4名が実習に参加して、呼吸器外科患者1~2名を受持ち、医師と共に入院から退院までの診察、外科治療、気管支鏡検査などに加わり、術前カンファレンスにおいて受け持ち患者のプレゼンテーションも行った。呼吸器外科診療の流れをより深く理解できるような実習が行われ、予定通りの目標を達成できたと考えている。卒後教育では、山口助教が外科専門医筆記試験に合格した。鹿島田医師が外科専攻医として外科専門医取得に向けた研修を継続し、修了している。大学院教育では、社会人榎埼玉医科大学大学院の杉山助教が学位取得に向けた研究を継続した。

2-4. 次年度改善計画

気管支鏡検査では新型コロナ感染拡大防止のため、現在は別室からモニター画面で見学するのみである。そこで気管・気管支の実物大模型を3Dプリンターを用いて作成し、実験用に購入した気管支鏡を用いて、模擬検査体験を実現させたい。また、CC Step2、Advanced CCの学生、研修医に人工赤血球や肺移植の動物実験にぜひ参加してもらい、外科学的研究にも興味を持ってもらいたいと考えている。

卒後教育では鹿島田医師が外科専門医取得に向けた研修を継続する。山口助教は呼吸器外科専門医の取得を目指すとともに、大学院に入学し肺移植に関する動物実験を実施する。大学院教育では杉山助教が研究から得たデータの解析を行い、論文を完成させ、学位取得を達成する見込みである。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

日常の臨床から生じる問題点を研究テーマとして臨床研究を行い、成果を日々の臨床にフィードバックしていく事を目的としている。特に呼吸器疾患の手術・診断技術の向上や肺癌を中心とする肺悪性腫瘍の治療成績向上に寄与する臨床研究を行うことが目標である。また、肺移植実施施設認定申請に必要な研究や、人工赤血球の術中出血に対する使用を目指した動物実験を行う。看護部との共同研究として「肺癌術後のQOLアンケート調査」を実施する。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 葉切非耐容症例の臨床病期I期非小細胞肺癌に対する縮小肺切除の多施設前向き研究(中山, 福田)

関東甲信越肺癌研究会(慶應義塾大学、大阪大学、埼玉医科大学国際医療センター、埼玉医科大学総合医療センター、東京女子医科大学、独協医科大学、都立駒込病院、埼玉循環器病・呼吸器病センター、新潟県立がんセンター)での多施設共同研究。症例集積を完了し、現在経過観察期間中である。

2. TNM分類第8版を用いた非小細胞肺癌に対する術後補助化学療法の多施設共同前向き観察研究(IL01804)(羽藤、中山)

進行肺癌の術後補助化学療法の再検証を行う、帝京大学医学部呼吸器外科を基幹施設とした前向き多施設共同研究で、症例の集積を完了した。今後、予後の観察期間に入る。

3. 胸腺上皮性腫瘍の前方視的データベース研究(羽藤、中山)

症例の集積期間を完了し、当院からは43例が登録された。今後2035年まで観察が継続する。

4. 腫瘍血管内皮細胞のimmune set point 制御スイッチとしての機能の解明(羽藤、中山)

本研究で文部科学省科学研究費(基盤C)(令和3年度から5年度)を獲得した。マウスをもちいた動物実験で、腫瘍

を移植したマウスの腫瘍切除および再移植に腫瘍血管内皮細胞による免疫セットポイントスイッチがいかに重要かを検証する研究である。マウスモデルを用いて、がん関連血管内皮細胞が腫瘍細胞株と共存すると、増殖速度が早くなることを確認した。令和4年度に *in vitro* 実験へ移行した。

5. 高速シーケンサーを用いた非小細胞肺癌に対する癌関連遺伝子変異検索の臨床応用とその実用化（井上、中山）
埼玉医科大学（現自治医科大学）呼吸器内科萩原教授との共同研究で、高速シーケンサーを用いて少量の癌細胞から複数の癌関連遺伝子変異を検索する方法を確立している。

6. 転移性肺腫瘍に対する肺切除症例データベース作成のための多施設共同コホート研究（羽藤、福田、中山）
症例を前向きに集積している。後方視研究として、子宮癌、肉腫、食道癌、大腸癌についてのデータの論文化が進行中である。

7. 胸部悪性腫瘍新鮮凍結針生検検体保存の妥当性・有用性の検討（羽藤、中山）

切除検体の針生検凍結検体と、ホルマリン固定パラフィン包埋後の検体を用いて、そこに含まれる核酸および蛋白質の質について検討を行う研究である。現在までに10例を集積した。5年保存の後に質的評価を行う。

8. 原発性非小細胞肺癌切除例の高位血管内皮細胞新生とその腫瘍免疫における意義の検討（杉山(院)、羽藤、中山）
2012年4月～2017年3月までに当院で根治的肺切除を受けた原発性肺腺癌症例を対象として免疫組織学的に評価を行う。PNA陽性高位血管内皮細胞の出現頻度、CD31陽性血管内皮細胞の密度や組織構築、CD4およびCD8陽性Tリンパ球の局在、CD11c陽性樹状細胞の定量を行い、臨床的指標との間での相関を統計学的に解析する。本研究は杉山亜斗助教（社会人大学院生）が主体となり進めている。予後解析により、線維化をElastica Masson Goldner染色から定量すると、線維割合に応じて予後が不良となることを確認した。今後、血管密度および免疫細胞密度との関連を定量的に検討し、論文作成予定である。

9. 肺切除術後の超音波ネブライザー使用の有用性の検証（羽藤、中山）

肺切除後の術後管理に超音波ネブライザーを使用すべきかどうかを後方視的に解析する研究である。症例の解析を終了し、成果の論文作成中である。

10. ラバー様材料を用いた3次元プリンティング技術を用いた手術シミュレーション（羽藤、河野、中山）

術前CT画像を用いて、ラバー様素材を用いた術前シミュレーションを実施し、手術に役立てる研究である。上海のスタートアップ企業から購入した特殊なプリンターで、国内の他の機種では利用できない熱可塑性エラストマーを用いたモデル作成が可能である。気管支形成術の症例報告を国内の学術集会総会で実施した。今後は、気管支形成術のみならず、区域切除の術前モデルとしてマルチカラー素材の出力にチャレンジする計画である。

11. 胸腺腫手術症例の臨床病理組織学的特徴、画像所見と治療成績についての単施設後方視的検討

胸腺腫の胸膜播種は、積極的に切除を繰り返すことで生命予後の改善効果があることが知られている。しかし、どのような症例に、どのタイミングで切除を実施すべきかが不明瞭であった。単施設後方視的に検討を実施し、長径4cm以下で切除に踏み切るべきで、術前の化学療法は腫瘍の増殖足止め効果はあるが、終了後にすぐに腫瘍が増大してしまうことなどを新たな知見として得た。成果を国内の学術集会総会で発表した。

12. 肺癌術後のQOLアンケート調査（福田、河野、中山、儀賀、羽藤、井上、杉山、山口）

総合医療センター10階西病棟（市川副師長）、外科外来（青木看護師）らとの共同研究である。肺癌症例における治療後の生活の質 Quality of Life (QOL) は地域ごとに患者の年齢分布や産業構造が異なるため、その状況も地域ごとに異なると考えられる。当院で治療する肺癌患者の中には高齢の農業従事者が目立つが、術後の就労に関して調査したことはない。本研究では肺癌に対する手術前後のQOLの変化や就労状況を明らかにし、それらに影響を与える臨床因子を明らかにすることを目的とする。前向き観察研究で2年間、約240例の登録を行い、術前後と術後1、3、6、12ヶ月にアンケート調査を行う。

13. イヌ肺切除周術期出血モデルでの人工赤血球（ヘモグロビン小胞体）の評価（河野、山口）

人工赤血球として開発されたヘモグロビン小胞体（HbV：ヘモグロビンを内包させたリポソーム）は血液型がなく、長期備蓄が可能などの多くの利点がある。出血性ショックモデルなどで有効性と安全性が確認され、2020年には第1相臨床試験が実施された。外科手術中の大量出血に対する投与に対しても有効であると期待されている。本研究では肺切除+周術期出血モデルにおいてヘモグロビン小胞体投与の有効性を検討する。AMED研究費（橋渡し研究プログラム、研究開発課題名：備蓄・緊急投与が可能な人工赤血球製剤の実用化を目指す研究）により実施している。

14. イヌ肺移植モデルを用いたマイクロサンプリング法による移植肺モニタリング（河野、山口）

慢性進行性肺疾患に対して行われる肺移植は他の臓器と比較して虚血再灌流傷害や拒絶反応或いは感染が生じ易い。動物に肺移植を行い、気管支鏡下マイクロサンプリング法を用いて非侵襲的に気道上皮被覆液を採取する。サイトカインや炎症性メディエーター、或いは薬物濃度を測定して、移植肺の虚血再灌流障害や免疫状態を把握することが可能か否かを検討する。

15. 酸素運搬能を有する人工赤血球（ヘモアクト）の前臨床研究（河野、山口）

中央大学理工学部応用化学科生命分子化学研究室（小松晃之教授）との共同研究である。人工酸素運搬体ヘモアクト HemoAct™（ヘモグロビン-アルブミンクラスター）は血液型がなく、ウイルスなどの感染源を排除、長期備蓄が可能などの利点があり、人工赤血球として臨床応用が期待されている。血液中で酸素運搬体として機能することは出血性ショックモデルなどで確認され、良好な成績が得られている。本研究の目的は肺切除+周術期出血モデルを作製し、ヘモアクト投与の有効性を検討することである。科学研究費（基盤 C）（令和 2 年度-4 年度）により実施している。

3-3. 達成度評価

昨年に引き続いて実施している課題に継続して取り組んだ。テーマ 1 は術後 3 年までの短期的な評価は完了し、長期予後の経過観察期間中である。2 および 3 は症例集積を完了し、今後は経過観察に入る。テーマ 4 は、腫瘍細胞から感化された血管内皮細胞の挙動を追求する研究で、文部科学省科学研究費（基盤 C）（令和 3 年度から 5 年度）を獲得し、*in vivo* 実験が終了した。これに関連して、令和 4 年 7 月に Harvard 大学から学外講師（Dan G. Duda 准教授）を招いて招請講演を行い、学内にライブ配信した。テーマ 5、6 は研究者である井上助教が海外留学から帰国し、継続中である。テーマ 9 は前向きに興味深いデータを回収する研究で、中間経過を学術集会で発表している。テーマ 11 について、技術的部分の確立が終え、血管密度および免疫細胞密度との関連を定量的に検討し解析中である。テーマ 12 は看護部との共同研究で、2022 年度から新たに開始した。10 階西病棟と外来看護師と協力し、症例の登録が順調に進んでいる。テーマ 13、14、15 は新たに開始した人工赤血球或いは肺移植に関する動物実験である。概ね予定通りの目標を達成できたと考えている。

3-4. 次年度改善計画

来年度は、テーマ 1、2、3 は経過観察を継続する。テーマ 4 は文部科学省科学研究費（基盤 C）（令和 3 年度から 5 年度）を獲得した研究で、スフェロイド培養をもちいて分子メカニズムに踏み込んだ検討を行う計画である。テーマ 5、6、7、9、10 は研究を継続する。テーマ 8 については来年度中に論文投稿を完了する計画である。テーマ 11 は国内雑誌報告を計画している。テーマ 12 は調査を継続する。テーマ 13、14、15 は動物実験を継続する。

4. 診療

総合医療センター呼吸器外科では、肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、自然気胸、胸部外傷、膿胸、気管・気管支狭窄など呼吸器外科領域の疾患全般を対象に専門的な診療を行っている。合併疾患を有する症例も含め、他施設では治療に難渋する症例が数多く紹介されてくるが、手術療法では合併症の発生率、治療成績ともに良好な結果を残している。さらに、気管・気管支疾患に対しては気管気管支再建手術、YAG レーザー治療、ステント治療など最先端の治療を数多く行っている。2022 年度の年間手術件数は総手術数（全麻症例のみ）286 例で、開胸手術 29 例（うち気管気管支再建手術 3 例）、胸腔鏡下手術 200 例、ロボット支援下手術 57 例であった。主な疾患では原発性肺癌 144 例、転移性肺腫瘍 33 例、気胸・嚢胞性疾患 49 例、縦隔腫瘍 28 例、炎症性疾患 17 例、胸膜腫瘍 5 例などであった。術後 5 年以上が経過した肺癌手術症例（1997-2016）の 5 年生存率は、IA 92%、IB 87%、IIA 82%、IIB 55%、IIIA 55%、IIIB 36% である。外科的治療の適応がない進行肺癌症例に対しては遺伝子検査や PD-L1 検査結果をもとに分子標的薬剤や免疫チェックポイント阻害剤などの選択も含めた薬物療法、放射線治療を中心とした集学的治療を積極的に行い、支持療法、緩和医療も取り入れて、肺癌患者の予後延長、および、QOL の改善、維持に寄与している。新型コロナウイルス感染拡大第 8 波の影響を受け、総診療稼働額は昨年よりも若干減少したものの、感染拡大以前のレベルを維持しており、影響は最小限に抑えることが出来たと考えている。

当科では埼玉県内の慢性進行性肺疾患の患者が遠く県外の施設で手術を受けざるを得ない現状を解決すべく、肺移植実施施設の認定を受けることを目指して、院内外の協力体制の構築と研究を行って準備を進めている。また、肺悪性腫瘍に対する経気管支的凍結融解壊死療法の開発や人工赤血球の臨床応用を目指した研究を行っている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県外科医会常任理事（中山）
埼玉県生活習慣病検診管理指導協議会委員（中山）
埼玉県肺がん検診委員会委員長（中山）
川越市肺がん検診委員（中山）
医療事故調査委員会外部委員（中山）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本外科学会、日本胸部外科学会、日本呼吸器外科学会、日本呼吸器内視鏡学会、日本気管食道科学会 学術集会査読委員（中山）

日本外科学会、日本胸部外科学会、日本呼吸器外科学会、日本呼吸器内視鏡学会 学術集会査読委員（河野）
日本呼吸器外科学会雑誌編集委員（河野）

Frontiers in Immunology 査読委員（羽藤）、Frontiers in Oncology 査読委員（羽藤）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務
該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

- ① Hato T, Yamaguchi M, Sugiyama A, Aoki K, Fukuda H, Kohno M, Nakayama M. A case of cerebral infarction due to aplastic or twig-like middle cerebral artery after lung cancer surgery. *J Surg Case Rep.* 2022 Sep 20;2022(9):rjac430. doi: 10.1093/jscr/rjac430. PMID: 36158252; PMCID: PMC9491863.
- ② Onozawa H, Kohno M, Hashimoto R, Oiwa K, Masuda R, Yamaguchi M, Hato T, Watanabe M, Horinouchi H, Sakai H, Kobayashi K, Iwazaki M. Early reperfusion with hemoglobin vesicles into tracheal subepithelial capillaries in a mouse tracheal transplant model. *Biomed Res.* 2022;43(4):137-144. doi: 10.2220/biomedres.43.137. PMID: 35989289.
- ③ Hato T, Fukuda H, Mitsutomo K, Nakayama M. Surgical resection of a thymoma developed in a case with isolated persistent left superior vena cava. *Int J Surg Case Rep.* 2022 Sep;98:107503. doi: 10.1016/j.ijscr.2022.107503. Epub 2022 Aug 17. PMID: 35988502; PMCID: PMC9420509.
- ④ Yamada T, Morita Y, Takada R, Funamoto M, Okamoto W, Kohno M, Komatsu T. Zinc Substituted Myoglobin-Albumin Fusion Protein: A Photosensitizer for Cancer Therapy. *Chemistry.* 2023 Apr 18;29(22):e202203952. doi: 10.1002/chem.202203952. Epub 2023 Mar 8. PMID: 36689636.
- ⑤ Okamoto W, Hasegawa M, Kohyama N, Kobayashi T, Usui T, Onozawa H, Hashimoto R, Iwazaki M, Kohno M, Georgieva R, Bäuml H, Komatsu T. Core-Shell Structured Hemoglobin Nanoparticles as Artificial O₂ Carriers. *ACS Appl Bio Mater.* 2022 Dec 19;5(12):5844-5853. doi: 10.1021/acsabm.2c00813. Epub 2022 Nov 18. PMID: 36399036.
- ⑥ Okamoto W, Hasegawa M, Usui T, Kashima T, Sakata S, Hamano T, Onozawa H, Hashimoto R, Iwazaki M, Kohno M, Komatsu T. Hemoglobin-albumin clusters as an artificial O₂ carrier: Physicochemical properties and resuscitation from hemorrhagic shock in rats. *J Biomed Mater Res B Appl Biomater.* 2022 Aug;110(8):1827-1838. doi: 10.1002/jbm.b.35040. Epub 2022 Feb 22. PMID: 35191606.
- ⑦ Kasai T, Mori K, Sugiyama T, Koyama N, Nakamura Y, Ohyanagi F, Fukuda H, Hoshi E, Kobayashi K, Nakayama M. Phase I/II study of nedaplatin and nab-paclitaxel for patients with previously untreated advanced squamous cell lung cancer: Kanto Respiratory Disease Study Group (KRSG) 1302. *Int J Clin Oncol.* 2022 Dec;27(12):1841-1848. doi: 10.1007/s10147-022-02241-6. Epub 2022 Oct 14. PMID: 36241930.
- ⑧ Matsuguma H, Mun M, Sano A, Yoshino I, Hashimoto H, Shintani Y, Iida T, Shiono S, Chida M, Kuroda H, Nakayama M, Shiraishi Y, Funai K, Kawamura M. Time to Incurable Recurrence for Patients Treated With Pulmonary Metastasectomy for Colorectal Cancer. *Ann Surg Oncol.* 2022 Oct;29(11):6909-6917. doi: 10.1245/s10434-022-11904-7. Epub 2022 Jun 18. PMID: 35717520.
- ⑨ Nobori Y, Anraku M, Yamauchi Y, Mun M, Yoshino I, Nakajima J, Ikeda N, Matsuguma H, Iwata T, Shintani Y, Nakayama M, Oyama T, Chida M, Kuroda H, Hashimoto H, Azuma Y, Funai K, Endoh M, Uemura Y, Kawamura M. Risk-adjusted hazard analysis of survival after pulmonary metastasectomy for uterine malignancies in 319 cases. *JTCVS Open.* 2023 Jan 30;13:411-422. doi: 10.1016/j.xjon.2023.01.014. PMID: 37063124; PMCID: PMC10091388.

学会発表

- ① 肺悪性腫瘍に対するロボット支援手術導入 35 例の検討と術者 3 名のラーニングカーブ 福田 祐樹, 鹿島田 寛明, 山口 雅利, 杉山 亜斗, 井上 慶明, 青木 耕平, 羽藤 泰, 儀賀 理暁, 河野 光智, 中山 光男. 第 75 回 日本胸部外科学会定期学術集会 2022 年 10 月 5-8 日 横浜

【総数：論文 9 件、学会発表 10 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

2022 年度 文部科学省科学研究費（基盤 C）2020-2022 年度 330 万（研究代表者 羽藤）

2022 年度 文部科学省科学研究費（基盤 C）2021-2023 年度 375 万（研究代表者 河野）

2022 年度 AMED 橋渡し研究プログラム 104 万（研究分担者 河野）

6-3. 受賞

優秀ポスター賞 福田 祐樹 第75回 日本胸部外科学会定期学術集会 2022年10月5-8日 横浜
肺悪性腫瘍に対するロボット支援手術導入35例の検討と術者3名のラーニングカーブ

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

肺移植オンラインセミナー 2023年3月23日 総合医療センター

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

1997年4月に診療を開始してから26年、2008年8月に中山が教授に就任してから14年半が経過し、病診連携や病病連携を通じて地域に根ざした診療体制が確立されている。構成員は中山教授、河野教授、儀賀緩と医療科教授（呼吸器外科兼任）、福田講師、羽藤講師、青木助教、井上助教、杉山助教（社会人枠大学院生）、山口助教、鹿島田助教（後期研修医）の10名となった。但し、儀賀緩と医療科教授が呼吸器外科に従事する余裕がほとんどなく、井上助教が留学中（2023年2月帰国）で、杉山助教が社会人枠大学院生であり、鹿島田助教は外科ローテート中のため、実質6.5名体制であったが、マンパワーは徐々に充実しつつある。卒前教育のCC Step1は、新型コロナ感染拡大の影響があり、患者に接する機会は最小限に制限された状況であったが、手術中の解剖や手技の解説では手術動画を用いたビデオを作成し、予習をさせるなどして理解を深めるための工夫を実施した。手術参加や見学、レポート作成やクルズなどは概ね計画通りに実施出来た。最終日のフィードバックと共に行う症例レポートの審査でも、学習目標の達成を確認することが出来た。CC Step2、Advanced CCについては6年生の4名、5年生の4名が実習に参加して、呼吸器外科患者1~2名を受持ち、医師と共に入院から退院までの診察、外科治療、気管支鏡検査などに加わり、術前カンファレンスにおいて受け持ち患者のプレゼンテーションも行った。呼吸器外科診療の流れをより深く理解できるような実習が行われ、予定通りの目標を達成できたと考えている。一方、気管支鏡検査の実習では新型コロナ感染拡大防止のため、別室からモニター画面で見学するのみであり、解決すべき点が残されている。卒後教育では、山口助教が外科専門医を取得し、現在は呼吸器外科専門医取得を目指し研鑽を継続している。鹿島田医師が外科専攻医として外科専門医取得に向けた研修を継続した。大学院教育では、社会人枠埼玉医科大学大学院の杉山助教が学位取得に向けた研究を継続した。研究に関しては、研究主任の羽藤講師を中心に、基礎研究、臨床研究、研究発表などを積極的に行っており、現在進行中の研究についての学会発表、論文掲載などがなされた。また、文部科学省科学研究費（基盤C）2件とAMED研究費を獲得し、肺移植や人工赤血球に関する動物実験も開始している。概ね今年度の目標は達成されたと評価している。診療に関しては、新型コロナ感染症拡大第8波の影響により入院患者数は若干の減少、外来患者数と全身麻酔手術件数は横ばいであったが、影響は最小限に抑えることができたと考えている。新型コロナ感染の第5類への移行やda Vinci手術の導入により、今後の増加が期待できる。治療成績の面では良好な結果を収めており、地域医療の中核病院として患者中心の安全で質の高い診療が行なわれていると考えている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては今年度同様呼吸器外科診療の流れをより深く理解できるような実習を行う予定であるが、気管支鏡検査実習では新型コロナ感染拡大防止のため別室からモニター画面で見学するのみであったため、気管・気管支の実物大模型を3Dプリンターを用いて作成し、実験用に購入した気管支鏡を用いて、模擬検査体験を実施する予定である。卒後教育では山口助教が呼吸器外科専門医の取得、鹿島田医師が外科専門医取得に向けた研修を継続する予定である。大学院教育では杉山助教が研究から得たデータの解析を行い、論文を完成させ、学位取得を達成する見込みである。研究に関しては、継続中の研究の集積したデータを解析し、本年度以上に学会や論文で発表することを目指す予定である。併せて文部科学省科学研究費以外にも更なる研究費の獲得に向けた努力を積み重ねる所存である。また、河野教授を中心に肺移植実施に向けた準備として、動物実験を継続する予定である。診療に関しては、次年度も新型コロナ感染症の影響は予測不能ではあるものの、引続きda Vinci手術、胸腔鏡下手術、気管気管支再建手術など、患者さんのニーズに合った手術方法を選択し、継続して安全で質の高い診療を行ない、手術症例数の更なる増加を目指す所存である。また、呼吸器センター開設に向けた準備を進めて行く予定である。

2. 16) 心臓血管外科

1. 構成員

今中和人(IMANAKA, Kazuhito) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長、研究主任 : 代表指導教員(大学院) : 心臓血管外科
全般 : 博士

山火秀明(YAMABI, Hideaki) : 講師 : 教育主任 : 指導教員(大学院) : 心臓血管外科全般 : 博士

松岡貴裕(MATSUOKA, Takahiro) : 助教 : 心臓血管外科全般

友成崇葵(TOMONARI, Takaki) : 助教 : 心臓血管外科全般

岡田至弘(OKADA, Norihiro) : 助教 : 心臓血管外科全般

2. 教育

2-1. 目的・目標

(卒前教育) 全体講義は担当していない。心臓内科と合同の臨床実習プログラムにおいて、人工心肺をはじめとした心臓大血管手術のprincipleと、絶妙な人体のメカニズムに配慮しつつ診療が行われなければならないことを十分に理解させる。内容をクルズスで懇切に示したうえで、手術見学実習に参加させる。

(卒後教育) 修練目標は、臨床においては心臓血管外科専門医認定基準を満たす技量に加え、高い倫理観を持ち、医療事故防止対策、感染対策、医療経済等にも十分に配慮できる有能で、信頼される心臓血管外科専門医を育成することにある。この領域における医学の進歩に貢献する着眼・創意工夫の能力を養うとともに、その実施の機会を提供する。高齢者、ハイリスク患者を含む各種の心臓疾患・血管疾患症例を、担当医として十分に経験する。心臓疾患・血管疾患に関する症状と理学的所見、画像診断、生理学的検査などの検査結果を解析する。心臓血管外科専門医取得に必要な修練すべき手術を経験するとともに、一定の業績(学会発表、論文)および研修実績(学会参加)を獲得する。

(大学院教育) 上記、卒後教育に同じ。

2-2. 教育実績

(卒前教育) 該当なし。

(卒後教育) 後期専攻医に対して、研修医担当の今中を中心に全体で分担して指導。

(大学院教育) 該当なし。

2-3. 達成度評価

(卒前教育) 該当なし

(卒後教育) 助教は、多様な症例を経験できる。若干名の専攻医は多領域の外科志望者で、在籍期間は短く公正に評価できない。

(大学院教育) 該当なし

2-4. 次年度改善計画

(卒前教育) 変更なし

(卒後教育) 変更なし

心臓血管外科領域に対する理解度と関心を高める。

3. 研究

3-1. 目的・目標

臨床科であることから、特に心臓血管外科手術症例の治療成績向上を目的とした研究を行ってきた。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

グループ分けはなく、全員が担当者。

①低侵襲胸部大動脈手術

弓部大動脈手術の低侵襲化を推進し、良好な成績をおさめた。

②心臓血管手術と脳・臓器保護の研究

脳保護に関する積極的方針に基づく手術を、特にハイリスク症例においていくつか実施した。

3-3. 達成度評価

本年は成果を学会や論文に発表する機会がなかった。

3-4. 次年度改善計画

特に研究①、②については、臨床応用を行い始めており、積極的脳保護については症例を積み重ねつつある段階である。引き続き、上記研究を中心にすすめてゆく予定であるが、新しいアイデアとプロジェクトを模索する必要がある。

4. 診療

手術症例数は31例だった。疾患の内訳は、冠動脈疾患4例、弁膜症15例、大動脈疾患9例、その他3例だった。

5. その他

5-1. 自治体・政府関係委員

該当なし

5-2. 学会誌、編集委員、査読委員

編集委員

雑誌「胸部外科」

On line journal “Case report in emergency medicine”

査読委員

European Journal of Cardio-Thoracic Surgery

Circulation Journal

Journal of Cardiology

General Thoracic and Cardiovascular Surgery

日本心臓血管外科学会雑誌

雑誌「心臓」

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表

論文・総説 該当なし

学会発表・その他 該当なし

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許

該当なし

6-5. 学会・研究会等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1 今年度の点検・評価結果

人員の少ない中、安全な治療を第一にこころがけ、許容しうる成績を挙げた。また、最新技術も積極的に取り入れることにより、治療困難な症例を救命することができた。手術症例数は減少し、人員増加は得られなかった。論文と学会活動が十分でなかった。大学院生は在籍なし。

7-2 次年度の改善計画

手術症例数、人員の増加を目標とする。診療内容をさらに向上させ、全構成員が後進を指導できる心臓血管外科専門医となることを目標とする。基本方針には特に変更はない。

2. 17) 整形外科

1. 構成員

税田和夫 (SAITA, Kazuo) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育副主任 : 研究副主任 : 代表指導教員 (大学院) : 脊椎外科 : 博士
乾 洋 (INUI, Hiroshi) : 准教授 : 診療副部長 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 膝関節外科、人工関節 : 博士
星川淳人 (HOSHIKAWA, Atsuto) : 准教授 : 指導教員 (大学院) : 膝関節外科、スポーツ医学 : 博士
荻原 哲 (OGIHARA, Satoshi) : 准教授 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 脊椎外科、周術期感染 : 博士
井口浩一 (INOKUCHI, Kouichi) : 教授 : 外傷学 (救命救急センターと兼担)
中曾根功 (NAKASONE, Isao) (~R4年9月) : 講師 : 大学院教員 (大学院) : 人工関節、足の外科
中村春彦 (NAKAMURA, Haruhiko) : 講師 : 指導教員 (大学院) : 膝関節外科 : 博士
島田憲明 (SHIMADA, Noriaki) : 助教 : 肩関節外科
金澤貴仁 (KANAZAWA, Takahito) : 助教
武井良太 (TAKEI, Ryota) : 助教
松本理沙 (MATSUMIOTO, Risa) : 助教
山下 哲 (YAMASHITA, Tetsu) : 助教
佐藤 慧 (SATO, Kei) : 助教 : 博士
深堀賢斗 (FUKABORI, Kento) : 助教
池宗 慧 (IKEMUNE, Satoshi) : 助教
宮本廣大 (MIYAMOTO, Kodai) : 助教
木村知博 (KIMURA, Tomohiro) : 助教
辻本大輔 (TSUJIMOTO, Daisuke) : 助教
景山貴史 (KAGEYAMA, Takafumi) : 助教 (R5年1月~3月)

[非常勤講師]

関谷繁樹 (SEKIYA, Shigeki) : 非常勤講師 : 博士
石上浩庸 (ISHIGAMI, Hironobu) : 非常勤講師
井上純一 (INOUE, Junichi) : 非常勤講師
加藤直樹 (KATO, Naoki) : 非常勤講師 : 博士
伊藤順一 (ITO, Junichi) : 非常勤講師 : 小児整形外科 : 博士
中曾根功 (NAKASONE, Isao) (R4年10月~) : 非常勤講師

[非常勤医師] : 山本邦彦 (YAMAMOTO, Kunihiko)、吉澤貴弘 (YOSHIZAWA, Takahiro)、小林陽介 (KOBAYASHI, Yousuke)、増田隆三 (MASUDA, Ryuzou)、黒畑順子 (KUROHATA, Junko)、高村一豊 (TAKAMURA, Kazutoyo)、野村英介 (NOMURA, Eisuke)、田沼優一 (TANUMA, Yuichi)、林進 (HAYASHI, Susumu)、井上良輔 (INOUE, Ryosuke)、丸峻典 (MARU, Takanori)、小林史明 (KOBAYASHI, Fumiaki)、西村圭司 (NISHIMURA, Keiji)、田部雅之 (TANABE, Masayuki)、岡部文子 (OKABE, Fumiko)、飯田隼平 (IIDA, Shunpei)、大谷武史 (OTANI, Takeshi)、林承煥 (HAYASHI, Shokan)

2. 教育

2-1. 目的・目標

卒前教育

医学部学生に対して整形外科の知識と診断および治療方針決定の考え方を理解させることを目的とした。4年生の系統的講義では、腰椎疾患の病態、診断、治療について解説した。CC-Step1実習では、症例を通して単なる知識ではなく医療面接、診察、診断、治療がどのように関連しているかの過程を理解することを目標とした。

総合医療センター看護学校の学生に対しても整形外科の考え方、注意点を習得させることを目標にした。

卒後教育

初期研修医に対して、整形外科の基本的身体診察法、基本的臨床検査、基本的手技、診断および治療方針決定の考え方を理解し、習得させることを目標にした。

専攻医に対しては、整形外科すべての分野を幅広く担当し、実践を通じて適切な診断と治療法を身につけることを目的とし、4年目には専門医資格を取得することを目標とした。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育で講義を担当したのは、5月23日4年講義(税田)、臨床実習のCC-stpe1、CC-step2、CC-step3(常勤医全員)である。

その他、卒前教育では4年生共用試験臨床実習前 OSCE 評価者(中村)、6年生共用試験臨床実習後 OSCE 評価者(乾)、卒業試験監督(乾)を担当した。

卒後教育としては、初期研修医8名(導入研修1名、1年目5名、2年目2名)、専攻医5名(R4新規専攻医3名)の研修を行った。

初期研修医に対しては、3つの診療チームをローテーションさせてチーム別疾患の指導を行い、さらにカンファレンスなどでは全スタッフが指導にあたった。月曜夕方、火曜朝、金曜朝のカンファレンスと火曜朝の教授回診を行い、月曜日には抄読会を行った。

2-3. 達成度評価

卒前教育に関しては教育実績から多くの CC-step2、CC-step3 の学生を受け入れた点は順調に活動できたが、学生実習の満足度をさらに向上させる改善点があった。

卒後教育は、多くの初期教育、専攻医教育を實踐できた点で順調に活動できた。

以上より、本年度の目標については、教育の機会が多かったために十分達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度には学生からの評価の向上を目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標

四肢および脊椎の運動器に関する実績をまとめ臨床研究を行いそれを論文の実績に残すこと、あわせて基礎的研究も開始するという目標を立てた。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

膝・スポーツグループ（乾、星川、中村、武井、佐藤）：膝前十字靭帯損傷の診断法および治療法に関する研究、変形性膝関節症に対する脛骨骨切り術後の骨癒合、人工骨の吸収および関節面の術後変化に関する研究、人工膝関節の成績向上に関する研究を行った。これらに関連し 10 件の学会発表と、5 件の論文掲載がなされた。さらに乾は前職の研究を中心に 20 件の学会、研究会発表、16 件の論文発表を行った。また、星川准教授は初期の変形性膝関節症の研究で文部科学省科研費を獲得した。

脊椎グループ（税田、荻原）：骨粗鬆症性椎体骨折の治療法に関する研究、感染性脊椎炎に関する研究、腰部脊柱管狭窄症に対する手術法の研究、感染性脊椎炎の治療法に関する研究、データベースを用いた脊椎手術の成績分析、多施設との共同研究（脊椎手術における手術部位感染に関する研究）を行った。これらに関連し 6 件の学会発表と、3 件の論文掲載がなされた。

人工関節グループ（乾、中曾根、田沼、金澤、山下）：人工股関節置換術の解剖学的研究、人工膝関節手術、人工股関節手術の手術成績改善に関する研究を行った。5 件の学会、研究会発表、3 件の論文発表がなされた。

肩グループ（島田、武井）肩関節鏡視下手術手技の研究、リバー型人工関節置換術の研究を行った。これらに関連し 4 件の学会、研究会発表、1 件の論文発表がなされた。

3-3. 達成度評価

乾准教授の参加により研究実績が増加した。コロナ禍での影響も残っている中で、業績の量と質の向上があったために十分達成できたと評価する。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、研究指導體制を改善し、次年度には、多くの教室員による広い範囲での論文、発表数の増加を目標として掲げ、達成に向けて取り組む。

4. 診療

四肢の運動器と脊椎という広範囲にわたる領域の外傷と変性疾患を主に扱うことが特徴であり、運動器の機能再建を主目的としている。臨床実績は、外来患者総数：23,788 人、入院患者総数：807 人、手術総数：781 件であり、手術件数は少し減少した。これには、まだコロナ禍の影響があると思われる。R4 年度は、3 名の新専攻医があった。今後、彼らの成長とともに、手術件数の増加を目指したい。今後とも診療の質のさらなる向上を目指すのと同時に、さらに多くの患者に質の高い医療を提供することを目標とする。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

無し

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

税田：Journal of Spinal Research、Spine Surgery and Related Research、Journal of Orthopaedic Science、埼玉医科大学雑誌査読

乾：Arthroplasty (Knee section Editor in Chief)、査読：Journal of arthroplasty, The knee, Journal of knee surgery, BMC musculoskeletal disorders, JOSKAS 誌、東日本整形災害外科雑誌

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

税田：令和 4 年度 埼玉県難病相談支援センター事業 患者向け医療講演会（2022/9/12～30 Web 配信）

星川：日本スケート連盟医事委員会選手強化部会部員

乾：日本整形外科学会 代議員選挙管理委員会委員長、日本人工関節学会 広報委員会委員長、編集委員会委員、外保担当委員会委員、日本関節病学会 教育委員会委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

① 荻原 哲, 山崎 隆志, 田中 栄, 税田 和夫：【手術部位感染 (SSI) アップデート】後方脊椎手術における SSI の危険因子 頸椎. 脊椎脊髄ジャーナル 34(7)：409-414、2022

② 荻原 哲, 山崎 隆志, 田中 栄, 税田 和夫：【手術部位感染 (SSI) アップデート】後方脊椎手術における SSI の危険因子 胸腰椎 特に変性疾患について. 脊椎脊髄ジャーナル 34(7)：415-419、2022

③ Inui H, Yamagami R, Kono K, Kawaguchi K. What are the causes of failure after total knee

arthroplasty? Journal of Joint Surgery and Research. 1: 32-40, 2023

④Inui H, Yamagami R, Kono K, Kawaguchi K, Sameshima S, Kage T, Tanaka T, Taketomi S, Tanaka S. Comparison of the joint laxity of total knee arthroplasty evaluated by the distraction force and the varus-valgus force. Knee. 34:98-107, 2022

⑤島田憲明, 井上 純一, 武井 良太, 税田 和夫: 腱板修復術後再断裂例へのリパース人工肩関節置換術と鏡視下上方関節包再建術の比較. 肩関節 46: 129-132, 2022

⑥星川淳人, 中村春彦, 武井良太, 松本理沙, 税田和夫: 内側半月板後根損傷に伴う内側半月板の逸脱量は 肢位により大きく変化する—超音波検査による診断の可能性— 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会誌 47(3):525-530, 2022

⑦中村春彦, 武井良太, 松本理沙, 星川淳人, 税田和夫 UKA と HTO の費用対効果の比較と適応症例の検討 日本人工関節学会誌 52: 747-748, 2022.

⑧赤川 玲: 肺癌骨転移として治療された大腿骨骨肉腫病的骨折の 1 例. 主題 骨転移に伴う病的骨折. 第 48 回日本骨折治療学会学術集会、2022/06/24、横浜

⑨荻原 哲, 山崎 隆志, 田中 栄, 税田 和夫: シンポジウム: 脊椎手術 SSI サーベイランスおよび SSI リスク因子の同定. 第 37 回日本整形外科学会基礎学術集会、2022/10/13、宮崎

⑩税田和夫, 荻原哲, 深堀賢斗, 池宗慧: 脊椎術後硬膜外血腫の原因分析と対策. 第 30 回日本腰痛学会、2022/10/21、盛岡

【総数: 論文 23 件、学会発表 45 件】

6-2. 獲得研究費

令和 3 年度科学研究費基盤研究(C) (一般) (継続中)

早期変形性膝関節症からの変性進行が予測されるハイリスク群に生じる力学的因子の特定.

研究代表者 星川淳人 研究分担者 中村春彦 4,030 千円

6-3. 受賞

辻本大輔: 第 30 回日本腰痛学会、ケースレポートアワード最優秀演題、2022/10/22

6-4. 特許、実用新案

無し

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

税田和夫: 第 17 回小江戸整形外科セミナー. 2022/07/7

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては CC-step1 の後に多くの CC-step2、CC-step3 の学生が実習を希望してくれた点はよかったと評価している。

研究に関しては、比較的多くの学会発表と論文発表ができた。コロナ禍の影響で、学会参加が Web 上になることが多く、発表の魅力が少なくなったり、意見交換が難しい中で多くの業績を残せたと評価している。

診療に関しては、コロナ禍の影響で屋外活動が減ったり、学校活動が減ったりして患者数が減少している。一方、高齢者の手術希望患者は増加傾向であり、一定の手術件数を行うことができた。

基本学科全体としては、計画を達成できたと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、学生実習の空き時間ができるという問題点があり、次年度、この空き時間を少なくし満足度をさらに向上させることを目標として取り組む。

研究に関しては、研究指導の時間を増加させて指導体制を改善し、次年度、論文数維持を目標として取り組む。

診療に関しては、夜間手術を減少させるよう改善し、ポストコロナ禍であること、中心的スタッフの退職がある中で手術数維持を目標として取り組む。

2. 18) 脳神経外科

1. 構成員

大宅 宗一(OYA, Soichi) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 研究主任 : 学位論文審査教員 (大学院) : 脳血管障害 : 良性脳腫瘍 : 博士
飯星 智史 (IIHOSHI, Satoshi) : 教授 : 脳血管センター長 : 教育主任 : 診療副部長 : 脳血管障害 : 脳血管内治療 : 博士
印東 雅大 (INDO, Masahiro) : 講師 : 外来医長 : 研究員 : 教育員 : 指導教員 (大学院) : 脳血管障害 : 脳腫瘍 : 博士
花北 俊哉 (HANAKITA, Shunya) : 講師 : 病棟医長 : 専門医員 : 研究員 : 教育副主任 : 指導教員 (大学院) : 博士
中村 巧 (NAKAMURA, Takumi) : 助教 : 研修医長 : 研究員 : 教育員 : 大学院教員 (大学院)
吉田 信介 (YOSHIDA, Shinsuke) : 助教 : 研修医長 : 研究員 : 教育員 : 大学院教員 (大学院)
齊藤 徹 (SAITO, Akira) : 助教 : 専門医員 : 研究員 : 教育員 : 大学院教員 (大学院)
井上 瑞穂 (INOUE, Mizuho) : 助教 : 専門医員 : 研究員 : 教育員 : 大学院教員 (大学院)
遠藤 昌亨 (ENDO, Masamichi) : 助教 : 医員 : 研究員 : 教育員
西山 佳恵 (NISHIYAMA, Kae) : 助教 : 医員 : 研究員 : 教育員
池本 知子 (IKEMTO, Tomoko) : 助教 : 医員 : 研究員 : 教育員
大塚 のぞみ (OTSUKA, Nozomi) : 助教 : 医員 : 研究員 : 教育員
菊池 洋大 (KIKUCHI, Yodai) : 助教 : 医員 : 研究員 : 教育員
下山 龍慈 (SHIMOYAMA, Ryuji) : 助教 : 医員 : 研究員 : 教育員
松居 徹 (MATSUI, Toru) : 名誉教授
庄島 正明 (SHOJIMA, Masaaki) : 客員教授
海津 啓之 (KAIZU, Hiroyuki) : 非常勤講師 武蔵野総合病院理事長 (現 霞ヶ関南病院病院長)
小原 琢磨 (OBARA, Takuma) : 非常勤講師 三愛病院脳神経外科部長・さいたまガンマナイフセンター長
平川 亘 (HIRAKAWA, Wataru) : 非常勤講師 池袋病院副院長
藤澤 直顕 (FUJISAWA, Naoaki) : 非常勤医師 武蔵野総合病院脳神経外科

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

卒前 : 卒前教育としての脳神経外科のBSLでは、入院患者を担当し問診・診察を通して基本的な診療技術を学ぶとともに、手術見学、レポート作成、カンファレンス参加を通して、知識を深める機会を提供している。ほとんどの医学部学生はその後脳神経外科以外の科を専攻するが、他科の医師にとっても重要な脳神経外科疾患を中心に小講義(クルズス)も行っている。さらに一昨年は医学部学生を対象に、バイパス手術・頭蓋底骨ドリリング・内視鏡手術を体験できるハンズオンセミナーを当科で初めて主催することができた。今後も検討したいと考えている。

卒後 : 卒後教育としては、卒後7年間で脳神経外科の標準的臨床が出来る教育を目指しており、具体的には脳神経外科専門医を取得することを目標とする。さらに卒後10年までには、学位を取得し個人の専門性を高める指導を行っている。また当科には血管内治療指導医、脳卒中の外科技術指導医、神経内視鏡認定医等の指導医が在籍しており、これらの資格取得が可能である。結果として、卒後15年で施設の長として独り立ちする実力を確保することが目標としている。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育 : 医学部学生の授業を担当 大宅宗一、飯星智史

医学部学生実習 (CC step1, step2) 大宅宗一、飯星智史、花北俊哉

卒後教育 : 専攻医6名(5年目1名、2年目1名、1年目4名)の研修を行っている。また、施設間ローテーションで4年目1名、3年目の専攻医3名、1年目の専攻医1名、が他施設にて研修を行っている。

大学院教育 : 該当なし

2-3. 達成度評価

卒前 : CC step1は丁寧な手術実習と脳神経外科の基本領域をカバーしたクルズスによる指導をほぼ毎日取り入れており、学生が日々の学習成果を実感できる実習となったと考える。

卒後 : 大学病院は、診療、研究、教育をバランスよく実施することが要求される。当院は高度医療を提供する大学病院であると同時に、地域の基幹救急病院の側面もあり、そのため研修教育施設としては十分な入院患者数や手術数を有している。そのためこの6年間で16人の脳神経外科専攻医を受け入れており全国の脳神経外科研修プログラム中7—8位の専攻医数となっているが、十分な教育機会を良好に達成できており、研修プログラムとしての質が高いと考えている。

2-4. 次年度改善計画

卒前 : 今後も引き続き学生に対してきめ細かく、満足度の高い教育を目指していきたい。ハンズオンセミナーは再開したい。

卒後 : 本学の初期研修医および当科と提携している関連施設からの専攻医は、数ヶ月から1年間のローテーションを受け入れており、当科の手術教育は非常に好評を得ている。当科にて研修を行う専攻医のうち、令和4年度は轟助教を仙台市の広南病院脳血管内治療科へ派遣した。令和5年度も令和4年度と同様に新たに5人の専攻医を受け入れ、全国の脳

神経外科専攻医プログラムを有する100施設中第7位であった。当科の卒後研修が全国的に認められてきていると考える。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

当科では臨床に根ざした研究を基本的な姿勢としており、主に研究を通して論理的思考と臨床への還元方法を学ぶことを目標としている。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- ①全国高悪性度髄膜腫レジストリ研究(基盤研究機関)
- ②頭蓋底部の手術アプローチ
- ③髄膜腫・神経鞘腫に対する術中迅速増殖能評価法
- ④頸動脈狭窄症による網膜慢性虚血で生じる視力障害の病態と血行再建術の治療効果の解明
- ⑤未破裂脳動脈瘤のより高度な悉皆研究
- ⑥三叉神経痛のphase contrast MRIによる病因診断法の開発

3-3. 達成度評価

①全国高悪性度髄膜腫レジストリ研究

全国17大学・病院が参加する高悪性度髄膜腫レジストリ研究を開始した。今後再発リスクの高いWHO grade 2/3の髄膜腫における新たな治療法・方針の開発へ向けて、臨床情報・腫瘍検体・血液検体の収集を開始した。

②頭蓋底部の手術アプローチ

当科の脳腫瘍手術数は年間100件を超え、頭蓋底技術が必要な手術リスクの高い症例が多い。埼玉医科大学解剖学教室の多大なるご協力のもと、頭蓋底部のcadaver studyを積極的に手術教育に取り入れている。また新たなアプローチの開発にも取り組んでいる。聴神経腫瘍や頭蓋底髄膜腫に関する手術テクニックに関して、それぞれ英文医学雑誌に令和4年度に掲載された。

③髄膜腫・神経鞘腫に対する術中迅速増殖能評価法

髄膜腫や神経鞘腫などは良性腫瘍ではあるが、ときに急速な再発や悪性化も経験する。しかし、多くの手術技術や手術支援機器が発達した現在でも、こうした個々の腫瘍の生物学的特性を術中に推測し手術戦略に取り入れる方法がない。当科では髄膜腫の摘出組織を用いて術中にフローサイトメトリー検査を行い、個々の腫瘍の増殖能・浸潤性との関連を調べてきたが、令和4年度には聴神経腫瘍に関する術中フローサイトメトリーによる増殖能評価に関する論文が英文医学雑誌に掲載された。

④内頸動脈内膜剥離術後の網脈絡膜血流動態の変化と視力の関連について

内頸動脈内膜剥離術(CEA)によって眼動脈血流増加を介して網脈絡膜血流動態が改善することで視力が改善すると仮説を立て、当院眼科と協力し、コントラスト法(CSV-1000)を導入して正確な視力測定を行った。研究成果として、初めてCEAによって網脈絡膜血流が定量的に増加すること、そしてその増加と術後視力改善の間に関連があること、を示すことができた。研究内容は令和2年に医学雑誌に掲載された。その結果を踏まえ、CEAとステント術を比較する研究が令和3年度科研費に採択され、現在埼玉医科大学国際医療センター、埼玉県立循環器呼吸器病センターとの多機関共同研究として実施中であり、順調に症例数が増加している。

⑤未破裂脳動脈瘤のより高度な悉皆研究

未破裂脳動脈瘤の自然歴の報告は日本でも大規模のものが存在するが、その悉皆性は決して高いとはいえず追跡から漏れる症例が存在する。そこで、悉皆性をより可能な限り高めた自然歴を追跡するため、外来患者に協力を仰ぎ5年間の追跡調査中である。真の破裂率を求めて未破裂脳動脈瘤を有する患者の不安の軽減に資することを目的とし、すでに250個以上の動脈瘤の登録が終了している。

⑥三叉神経痛のphase contrast MRIによる病因診断法の開発

血管圧迫のない三叉神経痛でも、開頭により三叉神経周囲のくも膜を切開することにより劇的に症状が改善する症例が存在する。血管圧迫がない場合の手術適応を決定するために術前に髄液の流れをphase contrast MRIにて評価し診断基準となるか、利用可能性を検討している。現在までに約60人のデータを蓄積している。

3-4. 次年度改善計画

①全国高悪性度髄膜腫レジストリ研究

さらに検体数を収集しレジストリの充実を図るとともに研究費を獲得して、研究を加速させていきたい。

②頭蓋底部の手術アプローチ

困難な臨床例の手術に応用して、低侵襲な手術を行い、良好な成果を上げている。

③髄膜腫・神経鞘腫に対する術中迅速増殖能評価法

今後は長期的な経過観察データによる評価を予定している。

④内頸動脈内膜剥離術後の網脈絡膜血流動態の変化と視力の関連について

前研究結果を踏まえ、治療内容を頸動脈ステント術（CAS）にまで広げて頸動脈血行再建術の慢性虚血性眼症に対する治療効果を検討する研究課題を掲げ、令和3年度科研費基盤Cを獲得した。引き続き多機関共同研究を進める。

⑤未破裂脳動脈瘤の悉皆研究

症例を蓄積している段階である、現段階で200例強の登録がある。今後も登録数を増やしつつ5年の追跡期間中の出血率を明らかにする予定である。

⑥三叉神経痛のphase contrast MRIによる病因診断法の開発

症例をさらに蓄積する。

4. 診療

単科としての手術件数は埼玉県で最大となった。血栓回収療法の対象となる急性期脳卒中患者の受け入れに関しては、当院神経内科と脳血管センターを立ち上げ協体制を確立したことは重要な改革であったと考えている。

今後はさらに高い臨床能力をアピールし、埼玉県西部・中部だけではなく県外の患者が高度手術治療を希望し来院するような病院を目指すとともに、病院の体制としてより広域の患者が定期通院しやすいようなシステムの構築を図りたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

①教授 大宅 宗一 Oya, Soichi

1. 都道府県脳卒中対策推進委員会 埼玉県副委員長（令和3年4月より）
2. 日本脳神経外科学会脳神経外科医療均霑化に関する委員会都道府県委員
3. 埼玉脳神経外科医会 理事（令和3年8月より）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

①教授 大宅 宗一 OYA, Soichi

Neurologia Medicochirurgica, 2011- (Review Board Member)

1. 脳神経外科速報（査読委員 2016年10月-, 査読委員長 2021年1月-）
2. Journal of Critical Care, 2012, 2013 (Ad hoc)
3. Journal of Neurosurgical Sciences, 2013, 2015, 2016-2021, 2023
4. NeuroMolecular Medicine, 2013 (Ad hoc)
5. Journal of Neurosciences in Rural Practice, 2014 (Ad hoc)
6. Journal of Neurological Surgery - Part B Skull Base, 2015, 2017, 2018, 2021 (Ad hoc)
7. World Neurosurgery, 2015-2023 (Ad hoc)
8. The International Journal of Neuroscience 2015, 2020, 2021 (Ad hoc)
9. Journal of Neurology and Neurological Disorders 2017 (Ad hoc)
10. British Journal of Neurosurgery 2017 (Ad hoc)
11. QJM 2017 (Ad hoc)
12. Surgical Neurology International 2018-2022 (Ad hoc)
13. BMC Neurology 2018, 2019, 2020 (Ad hoc)
14. Iranian Journal of Neurosurgery 2020 (Ad hoc)
15. Journal of Clinical Neuroscience 2020-2022 (Ad hoc)
16. Neurosurgery Open 2020, 2021 (Ad hoc)
17. Journal of Neuro-Oncology 2021 (Ad hoc)
18. Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases 2021, 2022 (Ad hoc)
19. Journal of Nippon Medical School 2021 (Ad hoc)
20. Frontiers in Oncology 2021 (Ad hoc)
21. Interdisciplinary Neurosurgery 2021 (Ad hoc)
22. Scientific Reports 2021 (Ad hoc)
23. 脳神経外科ジャーナル 2021-2022 (Review Board Member)
24. Acta Neurologica Belgica 2022 (Ad hoc)
25. Operative Neurosurgery 2022 (Ad hoc)
26. Translational Cancer Research 2022 (Ad hoc)
27. JAMA Network Open 2022 (Ad hoc)
28. Acta Ophthalmologica 2022 (Ad hoc)
29. Journal of Investigative Surgery 2022 (Ad hoc)
30. World Journal of Surgical Oncology 2022 (Ad hoc)
31. Cureus 2022 (Ad hoc)
32. Cancer 2022 (Ad hoc)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

1. 大宅宗一、WFNS（世界脳神経外科会議）監査委員会委員（2021 Sep-2025 Aug）

2. 大宅宗一、WFNS（世界脳神経外科会議）神経腫瘍委員会委員(2019-2021, 2021 Nov-2023 Sep)
3. 大宅宗一、WFNS（世界脳神経外科会議）頭蓋底外科委員会委員（2022 Jan-）
4. 大宅宗一、日本脳神経外科コンgres 理事 2021年6月1日～
5. 大宅宗一、日本脳神経外科学会 代議員 2019年9月1日～
6. 大宅宗一、日本脳神経外科学会 国際委員会 委員 2021年10月27日～2023年10月25日
7. 大宅宗一、日本脳卒中学会 評議員 2016年8月1日～2020年7月31日, 代議員 2022年8月1日～
8. 大宅宗一、日本脳卒中の外科学会 代議員 2017年～
9. 大宅宗一、日本頭蓋底外科学会 理事 2020年10月～
10. 大宅宗一、日本脳腫瘍の外科学会 評議員 2022年11月～
11. 大宅宗一、日本脳神経外科同時通訳団 団長 2019年8月1日～
12. 大宅宗一、日本脳神経外科国際学会フォーラム 運営委員 2016年7月22日～
13. 大宅宗一、日本脳神経外科財団 学術委員 2018年4月1日～
14. 大宅宗一、日本性差医学・医療学会 評議員 2021年2月6日～
15. 大宅宗一、日本CI学会 世話人 2022年3月～
16. 大宅宗一、The Mt. Fuji Workshop on CVD 運営委員 2019年8月～
17. 大宅宗一、手技にこだわる脳神経外科ビデオカンファランス 世話人 2023年1月～
18. 大宅宗一、末梢神経の外科学会 世話人 2017年5月～
19. 大宅宗一、脳神経外科速報 編集委員 2016年～

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1. Oya S, Hanakita S, Inoue M, Matsui T. Resection of a vestibular schwannoma via retrosigmoid approach in a patient with a high jugular bulb: 2-Dimensional Operative Video. Oper Neurosurg (Hagerstown). Apr 1;22(4):e172, 2022
2. Endo M, Hanakita S, Oya S. Ventriculoperitoneal shunt malfunction in a pediatric patient due to compression by skull growth: A case report. NMC Case Report. Apr 21;9:73-76, 2022
3. Oya S, Yoshida S, Hanakita S, Inoue M. Quantitative evaluation of proliferative potential using flow cytometry reveals intratumoral heterogeneity and its relevance to tumor characteristics in vestibular schwannomas. Curr Oncol. Mar 3;29(3):1594-1604, 2022
4. Indo M, Oya S, Nagashima M. Modified intradural anterior clinoidectomy to protect the paraclinoid neurovascular structures: a technical note. Interdiscip. Neurosurg.: Adv. Tech. Case Manag. Volume 29, September 101569, 2022
5. Hana T, Lavadi RS, Niwa R, Nakamura S, Oya S. A Case of Enigmatic Stroke Caused by Severe Systemic Sepsis: The Importance of Careful Assessment of Insidious Systemic Infection. Cureus 14(7): e26537, 2022
6. Hanakita S, Endo M, Saito A, Oya S. Trigeminal neuralgia due to intracranial venous reflux following central venous disease in a patient on hemodialysis: A case report. Surg Neurol Int. 13:419, 2022
7. Oya S, Yoshida S, Saito A, Shojima M, Yoshikawa G, Ota T, Ono H, Kurita H, Kohyama S, Miyawaki S, Koizumi S, Saito N, Matsui T. The optimal management of ruptured basilar artery dissecting aneurysms: a case series and scoping review. Neurosurg Rev. 45(5):3427-3436. 2022
8. Indo M, Oya S, Nakamura S, Shojima M. Anomalous posterior meningeal artery arising from the anterior medullary segment of the posterior inferior cerebellar artery. Acta Neurol Belg. 2022 Sep 12. Epub ahead of print, 2022
9. Oya S, Ikawa F, Ichihara N, Wanibuchi M, Akiyama Y, Nakatomi H, Mikuni N, Narita Y. Male sex and presence of preoperative symptoms are associated with early recurrence of WHO grade I meningiomas after surgical resection: analysis from the nation-wide Brain Tumor Registry of Japan. Neurosurg Rev. 2022 Dec 9;46(1):10.
10. Endo M, Adachi J, Murakami C, Inomoto C, Komatsu M, Hanakita S, Oyama K, Matsuno A, Nishikawa R, Oya S. A case of aggressive pituitary neuroendocrine tumour with extremely rapid progression: Possible diagnostic value of *TERT* promoter methylation. Br J Neurosurg. Dec 5:1-7, 2022

【総数：論文 13 件、著書 3 件、学会発表 52 件（うち国際学会 2 件）、講演 19 件（うち国際学会 7 件）】

6-2. 獲得研究費

令和3年度 頸動脈狭窄症による網膜慢性虚血で生じる視力障害の病態と血行再建術の治療効果の解明. 科研費基盤研究(C) (一般) 直接経費 310 万円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- ①令和4年11月2日 第4回埼玉若手脳神経外科手術WEB研究会

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

当科には令和4年現在、脳神経外科専門医8人、脳卒中の外科学会技術指導医3人、同認定医1人、血管内治療指導医1人、同専門医2人、脳卒中専門医7人、神経内視鏡専門医3人、日本脊髄外科学会認定医1人、が所属している。

当脳神経外科における代表的手術は、脳動脈瘤(破裂、未破裂を含む)および脳腫瘍(原発性および転移性を含む)である。当科における総手術件数は令和2年は649件、令和3年は617件、令和4年度640件であった。脳動脈瘤への当科の基本姿勢としては、動脈瘤の特徴と患者の状態に応じて、開頭術と血管内手術を適切に使い分けることとしている。結果として、破裂例・未破裂例ともにほぼ同数の手術数となっているが、本邦全体の傾向を考慮して適切な治療適応の決定が成されていると考えている。今後はさらに血管内治療の割合が増えることが予想されているが、当科の診療体制もそのような変化に対応できる形を整えていく。

脳腫瘍に関しては、全ての種類の脳腫瘍に対応可能であり、なかでも髄膜腫・聴神経腫瘍などの頭蓋底良性腫瘍および悪性腫瘍の中でも手術技術レベルの高い症例、の手術治療が可能であることが当科の特色である。平成29年10月に開始された神経内科と当科との合同カンファレンスも引き続き月1回のペースで開催され、また令和5年度からは当院病理部のご協力を得て脳腫瘍病理カンファレンスも再開する予定である。

後期研修医の指導にも力を入れており、早期から執刀する機会を与えている。指導医は適宜アドバイスや術者交代などで患者に最善の治療を行うことは当然の前提である。全国から医学生や初期研修医の見学も多くなっており、令和5年度には5人の専攻医を当科研修プログラムに迎えることができた。この人数は全国100の脳神経外科研修プログラム中の第7位の数字である。全国的に脳神経外科を専攻する若手医師が減少する中で、当科にこれだけ多くの若手医師が集まってくれることはたいへん喜ばしいことであると同時に、きわめて責任が重いと考えている。

7-2. 自己点検・評価に基づく今年度の改善計画

研究面では、令和4年度から高悪性度髄膜腫レジストリ研究が埼玉医科大学中央倫理審査委員会の承認を得て本格的に始動した。幸い、長年の髄膜腫に関する複数の研究報告が評価され全国の多くの大学病院の協力をいただいている。令和4年度はこの多機関共同研究を推進し、当院が全国の髄膜腫臨床をリードしていきたい。臨床面では、さらに地域との脳卒中連携を高めることにより、さらなる虚血性脳卒中の症例の増加を期待している。教育面では、近年増えつつある専攻医の教育を重視し、全国でもトップクラスの知識と技術の習得が可能となる環境を整えたい。

2. 19) 形成外科・美容外科

1. 構成員

三鍋俊春 (MINABE, Toshiharu) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 代表指導教員 (大学院) : 悪性腫瘍・外傷後の皮弁・再建外科、乳房再建、褥瘡・難治性潰瘍、熱傷創傷治癒、顔面骨折・顔面腫瘍の内視鏡手術、体幹・四肢軟部腫瘍 : 博士
大西文夫 (ONISHI, Fumio) : 准教授 : 教育主任 : 外来医長 : 大学院教員 : マイクロサージャリー、再建外科、リンパ浮腫の外科治療、悪性腫瘍・外傷後の皮弁・再建外科 : 博士
加賀谷優 (KAGAYA, Yu) : 講師 : 研究主任 : 病棟医長 : マイクロサージャリー、難治性創傷、悪性腫瘍・外傷後の皮弁・再建外科 : 博士
鈴木愛弓 (SUZUKI, Ayumi) : 助教 : 教育副主任 : 医局長
河野暉 (KONO, Hikaru) : 助教 : 研究副主任
喜多村勇大朗 (KITAMURA, Yutaro) : 助教
牧野潤 (MAKINO, Jun) : 助教
中嶋麻有里 (NAKAJIMA, Mayuri) : 助教
酒井麻未 (SAKAI, Mami) : 助教
三村眞鈴 (MIMURA, Marin) : 助教
佐々木玲奈 (SASAKI, Reina) : 助教
落合かおる (OCHIAI, Kaoru) : 助教
山川知巳 (YAMAKAWA, Tomomi) : (非常勤) 助教
樋野忠司 (HINO, Tadashi) : (非常勤) 講師
荻島信也 (OGISHIMA, Shinya) : (非常勤) 講師
福澤見菜子 (FUKUZAWA, Minako) : (非常勤) 助教

2. 教育

2-1. 目的・目標

(卒前教育) CC を通して形成外科臨床の理解を深める
(卒後教育) 選択による研修医の形成外科的知識・基本手技の習得を目指す。

2-2. 教育実績 (担当者)

(卒前教育) 4年生の形成外科講義では、三鍋教授が「外傷の初期治療、皮膚外科、熱傷」を担当した。学生実習では、手術・外来見学とし、適宜縫合練習器を用いて器械縫合の実習を行った (大西、担当者)。
(卒後教育) 外来・病棟・手術・当直など実際の診療業務に参加し研修を行った。

2-3. 達成度評価

(卒前教育) 形成外科の理解度は達成している
(卒後教育) 形成外科の基本知識・手技を習得している。

2-4. 次年度改善計画

(卒前教育) 学生講義、CC で系統的な知識・基本手技を習得させる。
(卒後教育) 形成外科疾患について自ら考え、実践できる臨床力を養う。

3. 研究

3-1. 目的・目標

臨床に結び付いた基礎研究を行い、研究結果を臨床へフィードバックする。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

- 1) 皮膚・皮下脂肪内の微細血管網を利用するハイブリッド人工皮弁の開発
- 2) 3DCTA を用いた血流評価研究
- 3) PRP (多血小板血漿) の難治創治療への応用
- 4) リンパ浮腫の新しい診断・治療法の開発
- 5) ICG 蛍光造影を用いた皮弁の血行動態の研究
- 6) 画像診断による皮弁穿通枝評価
- 7) 乳房インプラントと乳房形態に関する研究
- 8) NBI を用いた創傷評価
- 9) 脂肪腫の発生と神経血管束の解剖学的関連性についての研究

全般的に臨床研究は盛んに行われており、学会発表が多数なされている。

3-3. 達成度評価

乳房再建領域では臨床でより良い結果を出すための研究がおこなわれており、学会発表も多数行った。リンパ浮腫の画像診断と病態研究、それに基づく外科的治療を積極的に行っており、国内外で学会発表も行っている。また、皮弁の血行動態に関する研究は症例データを蓄積中であり、今後の研究成果が待たれる。

3-4. 次年度改善計画

現状では臨床研究中心であり、継続的な基礎研究は行えていないが、日々の臨床疑問から研究を展開する努力を続ける。また現在進行中の論文執筆・投稿も継続的に行っていく。

4. 診療

全体的に診療について幅広くかつ専門的に行なっており、安定した治療成績を提供している。今後は大学病院として先進医療の開発や治験にもかかわっていただけるよう努力をしたい。

5. その他

- 5-1. 自治体、政府関連委員の有無
該当なし
- 5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無
日本形成外科学会誌編集委員（三鍋教授）
- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務
該当なし

6. 業績

- 6-1. 論文・学会発表・著書
 - ① Onishi F, Suzuki A, Yamakawa T, Makino J, Minabe T. Animation Deformity: Evaluating the Role of Morphotopologic Features in Suggesting Preventive Surgical Procedures. *Plast Reconstr Surg*. 2022;150(6):1189-1198.
 - ② Nakao K, Onishi F, Kiyama M, Minabe T. The Growth Factors of Subcutaneous Benign Lipoma: Consideration from Anatomical Position of Occurrence. *Plast Reconstr Surg Glob Open*. 2022;10(9):e4524. Published 2022 Sep 23.
 - ③ 大西 文夫, 曾我 茂義, 三鍋 俊春 【患者に寄り添うリンパ浮腫診療-診断と治療-】患者に寄り添うリンパ浮腫診断 MR lymphangiography の特性とそれに基づいた診断・病態評価. PEPARS188号 Page23-28(2022.08)
 - ④ 安田 圭, 三鍋 俊春 【私の乳房再建選択アルゴリズム】私の乳房再建選択アルゴリズム 当科における乳癌治療と乳房再建の選択. 形成外科 65 巻 9 号 Page1043-1053(2022.09)
 - ⑤ 山川 知巳, 鈴木 愛弓, 大西 文夫, 三鍋 俊春 小児広範囲熱傷の治療において頭部から複数回の分層採皮を実施した1例. 創傷 14 巻 1 号 Page30-35(2023.01)
 - ⑥ 加賀谷優 CLTI 血流評価と創傷治癒予測指標 ～温故知新、さらに新たなスタンダードへ～ 第14回日本創傷外科学会(2022.7)
 - ⑦ 加賀谷優 腹部ケロイド治療に対する臍横部 perforator を利用した展開図様 V 型遠隔皮下茎皮弁臍形成法 第28回日本形成外科手術手技学会(2023.3)
 - ⑧ 鈴木愛弓, 他 上肢リンパ浮腫における ICG リンパドレナージパターンの数値指標化の検討 第31回日本形成外科学会基礎学術集会(2022.10)
 - ⑨ 河野暉, 他 DIEP flap における術中 ICG 動画-動的血行 phase 分類についての考察 第31回日本形成外科学会基礎学術集会(2022.10)
 - ⑩ 喜多村勇大朗, 他 DIEP flap における術中 ICG 動画-perforasome と Zone 分類の考察 第31回日本形成外科学会基礎学術集会(2022.10)

【総数：論文 5 件、学会発表 20 件、講演 2 件】

6-2. 獲得研究費

令和 3(2021)年度 基盤研究(C) 課題番号 21K09798 研究課題名：リンパ浮腫におけるリンパ排液効率を数値化する：インジゴクリアランス法の確立 交付決定額 117 万円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

顔面や四肢の外傷の治療に加えて、眼瞼下垂などの変性疾患、下肢難治性潰瘍の治療や腫瘍切除後・外傷後の再建手術（乳房再建含む）、今まで有効な治療法がなかったリンパ浮腫に対する外科治療など幅広く、バランスの良い症例・治療実績を有している。また前年度に掲げた論文業績についても増加傾向である。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

診療に関しては診療内容の充実を図るとともに患者満足度の高い治療を心がけ、安定した治療成績を維持する。教育については学生の形成外科に対するリテラシーを高め、次世代を担う若手医師の獲得・育成、充実した専門医教育を目指す。研究については引き続き臨床研究を主体とし、新たな治療法の開発や産学連携を進め論文業績も伸ばすことにも継続的に取り組む。

2. 20) (1) 小児科 (小児科)

1. 構成員

- 森脇 浩一 (MORIWAKI Koichi) : 教授 : 運営責任者、診療部長 : 指導教員 (大学院) : 小児血液学 : 博士
- 櫻井 淑男 (SAKURAI Yoshio) : 教授 : 研究副主任、診療副部長、小児救命救急センター長 : 指導教員 (大学院) :
小児集中治療 : 博士
- 増谷 聡 (MASUTANI Satoshi) : 教授 : 研究副主任、診療副部長、小児総合医療センター長 : 代表指導教員 (大学院) :
小児循環器学 : 博士
- 是松 聖悟 (KOREMATSU Seigo) : 教授 : 教育主任、診療副部長 : 小児神経学、小児アレルギー学 : 博士
- 高田 栄子 (TAKADA Eiko) : 准教授 : 外来医長 : 小児神経学
- 石戸 博隆 (ISHIDO Hirotaka) : 准教授 (2022年4月昇格) : 小児循環器部門外来医長 : 小児循環器学 : 博士
- 奈倉 道明 (NAKURA Michiaki) : 講師 : 研究副主任 : 小児神経学
- 岩本 洋一 (IWAMOTO Yoichi) : 講師 (新生児部門と兼担) : 教育副主任、研修医長、小児循環器部門病棟医長、
医局長 : 小児循環器学
- 長田 浩平 (OSADA Kohei) : 講師 : 専門医員 : 小児集中治療学
- 水田 桂子 (MIZUTA Keiko) : 助教 : 専門医員 : 小児神経
- 漆原 康子 (URUSHIHARA Yasuko) : 助教 : 病棟医長、専門医員 : 小児腎臓
- 小林 信吾 (KOBAYASHI Shingo) : 助教 : PICU 病棟医長 : 小児集中治療
- 谷川 祥陽 (TANIKAWA Shoyo) : 助教 : 専門医員 : 小児内分泌
- 小牧 健 (KOMAKI Takeshi) : 助教 : 専門医員 : 小児血液
- 百瀬 太一 (MOMOSE Taichi) : 助教 : 専門医員 : 小児アレルギー (2023年2月末退職)
- 内田 悠太 (UCHIDA Yuta) : 助教 (PICU) : 専門医員 : 小児集中治療
- 坂本 航 (SAKAMOTO Wataru) : 助教 (PICU) : 専門医員 : 小児集中治療
- 小澤 純一 (OZAWA Jun-ichi) : 助教 (PICU) : 専門医員 : 小児科一般 (2023年2月末退職)
- 関根 麻衣 (SEKINE Mai) : 助教 (PICU) : 専門医員 : 小児科一般 (6-7月麻酔科に出向)
- 林 亮 (HAYASHI Ryou) : 助教 (PICU) : 専門医員 : 小児科一般
- 齋藤 孝美 (SAITO Takami) : 助教 (時短) : 専門医員、小児栄養学
- 石井 邦哉 (ISHII kuniya) : 後期研修医 3年目 (2022年4-6月, 2023年2月 PICU, 7-9月埼玉医科大学病院に出向, 10-12月カルガモの家に出向、2023年1,3月小児循環器部門)
- 友利 伸也 (TOMORI Shinya) : 後期研修医 3年目 (2022年4-6月 NICU, 7月カルガモの家に出向, 2022年8月-2023年3月 PICU)
- 杉山 幸輝 (SUGIYAMA Kohki) : 後期研修医 2年目
- 藤本 耕司 (FUJIMOTO Koji) : 後期研修医 1年目
- 矢野 孝明 (YANO Takaaki) : 後期研修医 1年目 (2022年4月小児循環器, 5月以後一般小児部門)
- 小峯 柊野 (KOMINE Shuya) : 後期研修医 1年目 (2022年4-6月 PICU, 2022年7月以後 NICU)
- 浅妻 佑衣 (ASADUMA Yui) : 後期研修医 1年目 (2022年9月までは東大病院小児科, 10月から一般小児部門)
非常勤
- 田村 正徳 (TAMURA Masanori) : 客員教授, 名誉教授 : 指導教員 (大学院) : 新生児学、小児呼吸器病学、小児集中治療学 : 博士
- 阪井 裕一 (SAKAI Hirokazu) : 客員教授 : 小児総合医療センター長 : 指導教員 (大学院) : 小児集中治療学 : 博士
- 山内 秀雄 (YAMANOUCI Hideo) : 教授 (兼担) : 小児神経学
- 井上 信明 (INOUE Nobuaki) : 非常勤講師 : 小児救急医学
- 新井 幸男 (ARAI Yukio) : 非常勤講師 : 小児神経学
- 山崎 崇志 (YAMAZAKI Takashi) : 非常勤講師 : 小児免疫学
- 山崎 和子 (YAMAZAKI Kazuko) : 非常勤講師 : 小児免疫学
- 奈須 康子 (NASU Yasuko) : 非常勤講師 : 障害児医療
- 猪野 直美 (INO Naomi) : 助教 : 専門医員 : 小児内分泌
- 今井 智子 (IMAI Tomoko) : 非常勤医、小児集中治療部門

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

当科は大学病院としての機能に加え、埼玉県西部地区の人口100万人を超える医療圏の中核病院小児科として一次から三次を兼ねたあらゆる疾患や異常、相談に対処すべく、新生児、発達、血液、神経、循環器、内分泌、予防接種、乳幼児健診、育児相談などの専門外来の他、小児一般および救急など幅広く診療を行っている。そのため安全で質の高い医療を提供し、地域から信頼される小児科医の養成を目指す。

昨年度立てた改善計画

退局者が一定程度おり後期研修以降の on the job training が困難となっているが、2021年4月に着任した是松教授とともに体制を整えていきたい。内容的には、学生教育・初期研修医教育では学生や初期研修医の理解度に合わせた説明に努める。初期研修に関しては小児科が必修になったため、ローテートしてくる人数が増えるが丁寧な指導に努める。前年は専攻医については記載しなかったが、専門医試験受験を考えた指導を行う。

2-2. 教育実績(担当者 教育主任 是松教授(卒前)、副主任 岩本講師(卒後)、谷川助教(卒後)、百瀬助教(卒後))

1) 卒前教育

2022年度は、例年の新生児部門の側島久典客員教授の4年生「母体・胎児・新生児」ユニット、1年生「良医への道：地域医療とチーム医療」ユニットの担当及び加部一彦教授の6年生、および4年生「母体・胎児・新生児」ユニットの担当の他、新たに是松聖悟教授が「アレルギー」、「神経」を担当した。

臨床実習では3年生、4年生のPre CC、4年生、5年生のCC step-1、5年生のCC step-2、6年生のCC step-3を受け入れている。CC step-1では一般小児部門と新生児部門で実習期間の半分ずつを担当している。病棟で担当患者を決めてレポートを作成するほか、小児科の色々な分野について医師国家試験にも役立つクルズスを行っている。CC step-2、3ではPICU、小児循環器部門、医療型障害児入所施設カルガモの家での実習も行い、外来実習や、医師となった後に何を指すかを考える時間になるためのクルズスを実施している。

また、森脇教授が7月の6年生Post-CC OSCEでステーションリーダー補佐を、12月の4年生のOSCE前の身体診察のまとめとOSCEの胸部ステーションリーダーを務めた。

更に、森脇教授、櫻井教授、高田准教授、石戸准教授、奈倉講師らが総合医療センター看護専門学校の小児科の講義を分担して担当し、病棟実習にも協力している。

2) 卒後教育

・小児科の初期臨床研修

新生児部門、小児集中治療部門、小児循環器部門のある当科では初期研修においても研修医の興味に合わせた多彩な研修が可能である。一般小児部門での研修が基本であるが、1か月の研修期間の中で希望があれば他の部門で研修できるように配慮している。小児科研修が再度必須になり、また総合医療センター全体の初期研修医の増加もあって、1か月にローテートしてくる初期研修医も増えてきた。そのため、2023年度からは一般小児部門の病棟の他、初期研修医の希望を聞いて1週間単位で外来・PICU・小児循環器部門の研修を行うようにしている。

一般小児部門では病棟にて指導医のもとで受け持ち医として、患者の管理、基本的検査法などについて研修する。新入院受け持ち症例は毎日、翌朝にプレゼンテーションを行う。当直は救急医療研修として必須である。

・後期研修

2022年度は、6人が当科に入り、一般小児部門中心のローテーション2人と新生児部門中心のローテーション3人、他施設の半年のローテーションから開始した1人とそれぞれ後期研修を行なった。後期研修2年目は2人で、一般小児部門と新生児部門を前年から入れ替わって研修した。後期研修3年目も2人で、各自の希望等により、新生児部門、PICU、小児循環器部門、カルガモの家、他、埼玉医科大学病院のNICUで研修を行った。

・症例検討会・抄読会・予演会：重症患者や新生児部門から一般小児部門に引き継ぐ患者、後期研修医を中心とした抄読会、学会発表の予演会、研究内容の紹介などを全小児科（一般小児科・新生児・PICU・小児循環器各部門）で毎週（金）13:00-14:00に行っている。

・その他の卒後教育に関連する行事

有志を中心とした早朝勉強会（小児循環器、UpToDate）、是松教授の論文勉強会、専門医勉強会、PICUの重症症例検討会など多彩な活動を行なっている。PICUの重症症例検討会は紹介元の他施設の医師にも参加してもらっている。当小児科は、米国心臓学会と連携したPALS（Pediatric Advanced Life Support）の普及活動に積極的に取り組んでおり、関東・東北・北海道をカバーするTraining Centerに定期的にインストラクターを派遣している。後期研修医は医局の全面的支援の元にこのPALSのProvider講習会（2日間コース）を受講させている。初期研修医には当科のAHA公認インストラクターによるMini PALSを実習させている。

2-3. 達成度評価

新型コロナウイルス感染症の影響が引き続きあったが、卒前教育・卒後教育ともほぼ予定通りの指導は行なった。学生や初期研修医の理解度に合わせた説明に努めるとした点についても、カンファレンスなどで意識している。後期研修医の熱意にもよるが、初期研修も含めた5年間の研修で一般的な小児科で診る疾患には充分対処できるようになっている。ただ、2022年の小児科専門医試験の合格率は悪く、試験対策もある程度は必要と考えている。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育：学生には臨床推論の重要性を指導していきたい。OSCEの認定評価者を増やしていきたい。

卒後教育：初期研修医 今後数年で臨床研修指導医講習会修了者の定年退職が予定されているので、世代交代に向けて新たに受講者を増やしていきたい。EPOCの評価についても多くのスタッフで行うようにしていきたい。

後期研修医 専門医試験の合格率改善に向けて、勉強会を充実していく。症例報告を中心とした論文執筆の指導も続けていきたい。

学生や初期研修医の理解度に合わせた説明に努めるとした点は継続していきたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

安全で質の高い、地域から信頼される小児科医となるには、既に確立された医学や医療を学ぶだけでなく、新しい知識を発見したり新しい治療法を開発したりする資質が必要である。当科はそのような臨床に即した研究が施行できる医師を養成することを目的としている。

昨年度立てた改善計画

2021年4月に着任した是松教授とともに臨床研究を中心とした体制を整えていきたい。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

研究グループ

新生児学、小児呼吸病学、小児循環器学、小児集中治療学、発達小児科学、在宅医療に関する研究グループがある。

研究プロジェクト 埼玉県小児在宅医療推進事業、喘息サーベイランス、AESD 前向き研究

研究実績 6. の業績のところに記載。

埼玉医科大学総合医療センター研究倫理委員会への申請実績(試験番号 課題名 研究責任者)

総 2022-001 小児救命救急センターにおけるヒューマンエラーの現状と今後の対策について 櫻井教授

総 2022-002 小児救命救急センターで対応した重症の虐待患者の治療と予後について 櫻井教授

総 2022-005 小児の脳死下臓器提供における家族ケアについての研究 別所助教

総 2022-072 小児科の摂食障害診療における成人科移行例の検討 水田助教

総 2022-080 極低出生体重児における慢性腎臓病発症の危険因子の検討 漆原助教

総 2022-081 小児に予防接種を受けさせるかについて、保護者の意識に影響する因子の研究 是松教授

総 2022-131 小児救命救急センターに入院したCovid-19陽性患者の臨床的特徴 櫻井教授

3-3. 達成度評価

新生児部門では難波准教授が着実に研究成果を挙げ、小児循環器部門では増谷教授が後期研修医の論文指導を行っており、それらに関しては昨年に続き達成度90%と評価できる。一般小児部門でも是松教授指導のもと、論文発表も少しずつ出てきており、またこれまで研究倫理委員会に課題を申請した経験がない助教が申請を始めたこともあり、達成度70%と評価したい。

3-4. 次年度改善計画

中心となっている小児在宅医療のプロジェクトで英文の論文を出す。

研究倫理委員会に提出するようなプロジェクトを継続していく。

4. 診療

一般小児部門の当直体制が厳しくなったが、PICUと連携して診療の質は保っていると考えている。新型コロナウイルス感染症の影響で受診者数、一般小児部門の入院数に関しては他の医療機関同様大きな影響を受けているが、2021年夏頃から少し回復傾向にある。今後も救急疾患を中心に対応していきたい。一般小児部門の当直体制が厳しくなっているが、PICUと連携しながら診療の質を保っていきたい。また2020年度から始まった開心術をさらに発展させていく。是松教授の専門である神経、アレルギーを中心に診療の幅を広げていく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

厚生労働省障害福祉サービス等報酬改定検討チームアドバイザー(田村正徳)

産科医療補償制度再発防止委員会(田村正徳)

独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員(田村正徳、是松聖悟)

埼玉県下の母子保健運営に関する協議（田村正徳）
埼玉県医師会小児在宅医療小委員会（田村正徳、森脇浩一、奈倉道明）
埼玉県立病院運営協議会委員（森脇浩一）
埼玉県医療的ケア児支援センターあり方検討会議（森脇浩一）
埼玉県災害時小児周産期リエゾン（森脇浩一、長田浩平、小林信吾）
日本医療安全調査機構（医療事故調査・支援センター）センター調査個別調査部会 部会員（増谷 聡）
川越市保健センター 子どもの心の健康相談 相談医（高田栄子）
ふじみ野市就学支援委員会委員（高田栄子）
埼玉県立川島ひばりが丘養護学校 巡回指導医（高田栄子）
埼玉県地域医療構想検討会（奈倉道明）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Journal of Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery 学術雑誌(英文誌)編集委員（増谷聡）
日本新生児成育医学会雑誌 学術雑誌(国内誌) 編集委員（増谷聡）
Pediatrics International 学術雑誌(英文誌) 査読委員（増谷聡）
日本小児科学会雑誌 学術雑誌(国内誌) 査読委員（増谷聡）
日本小児循環器学会雑誌 学術雑誌(国内誌) 編集委員（増谷聡）
Circulation Journal 学術雑誌(英文誌) 査読委員（増谷聡）
Journal of Cardiology, Journal of cardiology cases, International heart journal 学術雑誌(英文誌) 査読委員（増谷聡）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本集中治療医学会 国際交流委員会, 日本呼吸療法医学会 評議員, 三学会(日本胸部外科学会、日本呼吸器学会、日本麻酔学会) 合同呼吸療法士認定試験委員会委員, 小児科専門医制度での新生児研修医カリキュラムの作成等, 日本看護協会小児在宅移行支援指導者育成事業研修会 本の新生児医療の現状と課題～NICU から在宅に移行する児の特性と発達支援（田村正徳）
日本小児科学会代議員（森脇浩一、増谷聡）
日本小児科学会小児医療委員会委員長（是松聖悟）
日本小児科学会社会保険委員会（奈倉道明）
日本小児神経学会医療安全委員会委員長、システムティックレビュー小委員会委員長、脳波等生理検査鎮静の医療安全に関する指針・提言ワーキンググループ委員長、ガイドライン統括委員会委員（是松聖悟）
日本小児科学会埼玉地方会会長（森脇浩一）
日本小児科学会埼玉地方会理事（側島久典、加部一彦、森脇浩一、櫻井淑男、高田栄子、増谷聡）
日本小児科学会専門医試験症例要約評価委員, 日本小児科学会埼玉地方会総務委員, 埼玉県小児血液同好会代表幹事,
北関東小児がん研究会幹事（森脇浩一）
日本集中治療学会新生児・小児集中治療委員会委員（櫻井淑男）
日本小児循環器学会評議員、専門医制度・認定委員会委員、日本成人先天性心疾患学会評議員・試験問題作成部会・倫理委員会・財務委員、日本新生児成育医学会代議員、日本抗加齢医学会評議員、JCIC学会 JCIC レジストリーWG データ利用検討部会委員、日本超音波医学会プログラム委員、日本小児循環動態研究会副代表幹事、日本周産期循環管理研究会副代表幹事、彩の国川崎病セミナー世話人、埼玉県小児循環器談話会幹事、多施設共同研究 PLASE 研究事務局、つばさ保育園園医（増谷聡）
日本小児医療保健協議会合同委員会重症心身障害児（者）・在宅医療委員会（高田栄子）
PALS(pediatric advanced life support)講習会インストラクター（櫻井淑男、石戸博隆、長田浩平）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①論文 Tomori S, Korematsu S, Momose T, Urushihara Y, Momose S, Moriwaki K. A case of Kikuchi's disease without cervical lymphadenopathy Case Reports in Pediatrics 2022. 12; 2022:1-3.
- ②論文 Tomori S, Korematsu S, Tanigawa S, Urushihara Y, Moriwaki K. Paraspinal muscle abscesses in children - a case report and the review of literatures Surgical Neurology International 2022. 12; 14(3):1-5.
- ③論文 Ryo Hayashi, Yasuko Urushihara, Hiroataka Ishido, Yoichi Iwamoto, Seigo Korematsu, Satoshi Masutani First pediatric case of clinically-diagnosed penicillin G-induced hemorrhagic cystitis Cureus 2022. 12; 14(12):e32246.

- ④論文 友利伸也, 萩原教文, 是松聖悟, 元山華穂子, 豊田彰史, 柳川幸重, 三牧正和 カテコラミン誘発多形性心室頻拍の遺伝子異常を伴う血管迷走神経性失神の1例 小児科臨床 2022. 12; 75(2):287-289.
- ⑤論文 是松聖悟 with コロナ時代の病児・病後児保育における感染症対策 病児保育研究 2022. 07; 13:16-19.
- ⑥論文 是松聖悟, 久保田恵巳, 松山剛, 黒木春郎, 中野貴司, 開場慶博 なぜ今、さらなるポリオ予防が必要なのか? 日本小児科学会雑誌 2022. 04; 126(4):646-650.
- ⑦学会発表 水田桂子, 奈倉道明, 高田栄子, 是松聖悟, 小林清香, 梅村智樹, 安田貴昭, 吉益晴夫, 平田吾一, 松尾幸治 当科の摂食障害診療における成人科移行例の検討第25回日本摂食障害学会学術集会 2022. 10; さいたま市
- ⑧学会発表 小澤純一, 矢野孝明, 坂本航, 内田悠太, 百瀬太一, 小林信吾, 長田浩平, 是松聖悟, 櫻井淑男, 森脇浩一 川崎病に可逆性脳梁膨大部病変を有する軽症脳炎/脳症と川崎病ショック症候群を合併した一例第42回日本川崎病学会 2022. 09; さいたま市
- ⑨学会発表 藤本耕司, 是松聖悟, 漆原康子, 水田桂子, 岩本洋一, 森脇浩一 SARS-CoV-2 ワクチン接種後に小児多系統炎症性症候群 (MIS-C)を発症した一症例第42回日本川崎病学会 2022. 09; さいたま市
- ⑩学会発表 櫻井淑男, 小澤純一, 小島英雄, 内田悠太, 坂本航, 河野彬子, 小林信吾, 長田浩平, 阪井裕一, 森脇浩一 重症の被虐待児症例の集約化によりみえてくるもの第35回日本小児救急医学会 2022. 07; 東京都大田区等

【総数：論文 7 件、学会発表 29 件、講演 19 件】

6-2. 獲得研究費

なし

6-3. 受賞

日本小児アレルギー学会座長推薦優秀演題賞（是松聖悟）

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- ・第49回川越小児科臨床検討会 令和5年3月23日 埼玉医科大学総合医療センター
WEB開催 特別講演「地域から始まる小児救急医療」 是松聖悟教授
- ・第44回埼玉県小児在宅医療支援研究会 令和4年5月18日 埼玉医科大学総合医療センター
WEB開催 「意思決定支援のあり方-小児のACPについて知ろう！」
- ・第45回埼玉県小児在宅医療支援研究会 令和4年8月25日 埼玉医科大学総合医療センター
WEB開催 「幼稚園に入園した医療的ケア児からの学び」
- ・第46回埼玉県小児在宅医療支援研究会 令和4年11月16日 埼玉医科大学総合医療センター
WEB開催 「経腸栄養コネクタのその後」
- ・第47回埼玉県小児在宅医療支援研究会 令和5年2月15日 埼玉医科大学総合医療センター
WEB開催 「保育園は医療的ケア児を受け入れるには」
- ・第117回埼玉県小児血液同好会 令和4年4月21日
WEB開催 特別講演「血友病の遺伝子治療」 自治医科大学医学部生化学講座病態生化学部門 教授 大森 司先生
- ・第118回埼玉県小児血液同好会 令和4年7月26日
WEB開催 特別講演「実臨床に役に立つ本態性血小板血症の最新知見2022」
日本医科大学大学院医学研究科血液内科学分野 大学院教授 山口博樹先生
- ・第119回埼玉県小児血液同好会 令和4年12月2日
WEB開催 教育講演「血友病治療の課題と今後の展開」
聖マリアンナ医科大学小児科講師 長江千愛先生
特別講演「Early-onset Thrombophilia/Thrombosis (EOT)の診断と治療」
九州大学大学院医学研究院成長発達医学分野 教授 大賀正一先生

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

昨年度の記載（抜粋）

当科の診療科の特色は下記の通りである。

- ・急性期疾患が入院患者の多くを占める。
- ・小児集中治療に力を入れている。
- ・NICU や小児科 HCU 病床の有効活用のために小児在宅医療推進に力をいれている。
- ・小児部門・NICU・PICU・小児循環器部門がひとつの科である。

以上の特色は今後も失わずに継続できるようにしたい。人材確保については岩本医局長を中心にした専攻医勧誘体制を続けていきたい。

- ・教育 学生教育・初期研修医教育 学生や初期研修医の理解度に合わせた説明に勤める。初期研修に関しては小児科

が必修になったため、ローテートしている人数が増えるが丁寧な指導に努める。昨年は専攻医については記載しなかったが、専門医試験受験を考えた指導を行う。

- ・研究 まだ論文は多くなく、まれな疾病の症例を論文で報告することから始める。また学位取得についても配慮していきたい。
- ・診療 開心術の症例を少しずつ増やしたい。アレルギーの診療をさらに進めていく。約10年ぶりに作成した診療マニュアルをさらに改善してきたい。

以上が昨年度の記載であるが、令和5年も専攻医プログラムに入った新人が7名と良い流れが続いている。これは岩本医局長を中心とした勧誘体制の効果と考えている。魅力ある小児科学教室とするために、指導体制充実して若手の人材確保と人材教育に務め、臨床能力の向上とともに研究意欲も促進していきたいと考えている。

人材については病床数の多いNICU、病棟内に医師の常駐が求められるPICUと一体で運営しており、また隣接している重度心身障害児施設「カルガモの家」の支援もしており、人材が必要な状態は続いている。

教育：学生教育の担当者が交代し、是松教授が積極的に取り組んでおられる。初期研修医教育についてはEPOC2での評価となっているが、まず実際の指導医に評価してもらい、責任者が取りまとめるようにしている。教育の質は従来通り保っていると考えている。専攻医の教育に関しては是松教授を中心に論文指導、専門医試験に向けた勉強会を始めた。ただ、専門医試験の不合格者が多かったので立て直しが必要である。

研究：一般小児科部門でも是松教授の指導で若手の症例の論文が少しずつ出てきた。またこれまで研究倫理委員会に課題を申請した経験がない助教が申請を始めた

診療：一般小児部門の診療体制は厳しい状態が続いているが、専攻医が増えているので、おり、当直者が1人の日が月に数日ある状態が続いている。前年度開始された開心術はまだ症例数は少ないものの順調に進んでいる。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

当科の特色である

- ・急性期疾患が入院患者の多くを占めること
- ・小児集中治療に力を入れていること
- ・NICUや小児科HCU病床の有効活用のために小児在宅医療推進に力をいれていること
- ・小児部門・NICU・PICU・小児循環器部門がひとつの科として運営されていることを今後も失わないようにしたい。人材確保については岩本医局長を中心とした専攻医勧誘体制を続けていきたい。
- ・教育 学生教育・初期研修医教育 引き続きカンファレンス等で学生や初期研修医の理解度に合わせた説明に努める。初期研修に関しては小児科が必修になったため、ローテートしている人数が増えるが丁寧な指導に努める。専攻医については、専門医試験受験を考えた指導を行う。
- ・研究 世代交代を見据えて学位取得を指導していく。
- ・診療 開心術、アレルギーなどの診療の分野をさらに広げていく。2022年に作成した診療マニュアルをさらに改善してきたい。

2. 20) (2) 小児科 (総合周産期母子医療センター新生児科)

1. 構成員

加部一彦 (KABE Kazuhiko)	: 教授: 診療副科長: 総合周産期センターセンター長: 指導 教員 (大学院): 学位論文審査教員 (大学院): 新生児学、臨 床倫理学: 博士
石黒秋生 (ISHIGURO Akio)	: 准教授: 病棟医長: 新生児学、循環管理: 博士
難波文彦 (NANBA Fumihiko)	: 准教授: 研究企画担当: 博士
金井雅代 (KANAI Masayo)	: 准教授: 外来医長: 博士
伊藤加奈子 (ITO Kanako)	: 講師: 研修医長
本島由紀子 (MOTOJIMA Yukiko)	: 助教
藤沼澄江 (FUJINUMA Sumie)	: 助教
西村恵理 (NISHIMURA Eri)	: 助教
岩谷綾香 (IWATANI Ayaka)	: 助教
齋藤可奈 (SAITO Kana)	: 助教
中川遼太 (NAKAGAWA Ryota)	: 助教
芳賀光洋 (HAGA Mitsuhiro)	: 助教
佐藤竜太郎 (SATO Ryutarou)	: 助教
南谷 曜平 (MINAMITANI Yohei)	: 助教
宮原直之 (MIYAHARA Naoyuki)	: 助教
國方徹也 (KUNIKATA Tetsuya)	: 兼担教授: 指導教員 (大学院): 学位論文審査教員 (大学 院): 新生児学、HIV 感染症、脳モタリング: 博士
秋岡祐子 (AKIOKA Yuko)	: 兼担准教授
モハメッド・ハットゥン・フセイン・サレー	: 特任講師
星 順 (HOSHI Jun)	: 客員准教授: 新生児学、新生児神経学: 博士 (カルガモの 家 施設長)
総合周産期センター小児循環器部門	: 准教授: 外来医長: 博士
増谷 聡 (MASUTANI Satoshi)	: 講師: 病棟医長
石戸博隆 (ISHIDO Hirotaka)	: 講師: 研修医長
岩本洋一 (IWAMOTO Youichi)	
非常勤	
側島久典 (SOBAJIMA Hisanori)	: 客員教授: 新生児学、脳、神経モタリング、周産期の QOL: 指 導教員 (大学院): 学位論文審査員 (大学院): 博士
長谷川久弥 (HASEGAWA Hisaya)	: 非常勤講師: 東京女子医科大学東医療センター 臨床教授
田中広輔 (TANAKA Kousuke)	: 非常勤研究員
松村 峻 (MATSUMURA Syun)	: 非常勤研究員
長澤純子 (NAGASAWA Junko)	: 非常勤研究員
齋藤 綾 (SAITO Aya)	: 非常勤研究員

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

社会、地域の周産期医療に対する幅広いニーズに応え、多くの子供たちと家族の幸福な生活に寄与し、周産期医療に必要な医療知識と、後遺症なき生存への治療技術の向上のための医療技術の修得を目的とする。新生児病棟に勤務する医師の技能及び知識の向上に向け、周産期 (新生児) 専門医の育成とともに、指導内容の充実を図るため、構成員の学会等での積極的な発表を促すとともに、院内のカンファレンスの充実をはかる。日本周産期新生児医学会の主催する日本版新生児蘇生法 (NCPR) 普及事業に準拠した新生児蘇生法講習会を定期的に

開催し、NCPR 講習会インストラクターの養成と、講習会や研修を通じて周産期医療における倫理観の育成を、広く医師、助産師、看護師、メディカルスタッフ、医学生に対して実施し、幅広い豊かな医療人の育成を行う。

周産期の母子関係を支援するための臨床心理士、メディカルソーシャルワーカーの充実を目指した。加えて、MA (Medical Assistant) の果たす役割は年ごとに充実しており、とくに小児在宅医療支援事業への参加、調査解析は厚労科研報告には寄与するところが大きいと、引き続き人員確保と効率的な業務分担を図って行く。初期研修医、後期研修医の育成、周産期専門医取得に向けた人材養成を進める。

2-2. 教育実績 (加部一彦、石黒秋生、金井雅代、難波文彦、伊藤加奈子、齋藤可奈)

医学生：1年生 early exposure の周産期センター訪問は10名ずつ4組で、彼らにとって非常に特殊な場所ながら、興味を示す学生は極めて多く印象的であった様だ。

2年生：early exposure 導入後8年目となる。臨床場面での若手医師と対話する機会を持てることは、2年生にとって効果的であり、将来、自ら目指す医師像の形成に有効であった。

3年生：pre-CC は短時間ではあるが、臨床現場のイメージをより明確にするために有効であった。周産期医療の魅力を交えた講義、蘇生法への理解を基礎にした講義を計画し、計4限を終了した。

4・5年生：CC-Step1：1週間 (もう1週間は小児科)、計16組の新生児科での目標を明記した週間予定表の作成配布、正期産新生児のケア実習も取り入れた新しい実習計画を立案した。COVID-19 流行による実習中断もなく順調に実習が実施できた。カルテ記入やシミュレーター実習を導入し、学生も関心を持って取り組んでいた。

6年生：CC-Step2：本年も1グループ全4週間のうち2週間はNICU 実習にあてる。BSL より臨床に近く、また英語に親しむプログラムと、クリニカルクエストを自分で考え解決する課題を与えるなど、モチベーションを上げるための企画と学生の反応を見た。例年になく意欲的な学生が参加し、現場の担当医師からの評判も良かった。今後、CC Step-3 実習が卒前教育の中で十四字名位置を占めると思われるが、今後のカリキュラム作成に向けて良い経験が積めた。

初期研修医：研修プログラムに沿ってすすめる。研修予定期間内では、上級医との交流と新生児医療の魅力が伝わるような解説に心がけた。初期研修医からのフィードバックは概ね良好であった。

後期研修医 (専攻医)：小児科後期研修プログラムに従い、NICU 病棟に1年間配属し、小児科医として最低限必要な新生児臨床の手技や知識を習得できるように、症例の受け持ちとカンファランス等による学習の機会を持てるようにしている。また、各人に学会発表課題を与え、それに向かって研修の充実を図った。

日本小児科学会専門医の取得：卒後5年以上の小児科研修 (初期研修を含む) 実績修了者を対象に、専門医試験受験資格に必要な新生児臨床症例の抽出とまとめを行った。

日本周産期・新生児医学会による周産期 (新生児) 専門医の取得：

小児科学会専門医を取得後、周産期 [新生児] 専門医の取得を希望する医師に対して、研修開始届を確認し、経験症例のまとめ、学会発表経験数の追加、受験条件に必要な査読論文の完成と積極的な治療計画、関連論文の抄読の遂行を促した

2-3. 達成度評価

COVID-19 流行の影響緒一段落し、各学年とも落ち着いて病棟実習が実施できた。事前に予定した実習計画での臨床実習をほぼ実施する事ができた。

新生児科1週間のCC-Step1では、教務課HPに以下の様な到達目標を明示している。2021年1月から順次NICUでの1週間の実習を行った。本年度から、学生には初日に担当患者を割り当て、毎日カルテを記入することと、木曜午後の病棟回診時に、担当患者のプレゼンテーションを課し、全てのグループで実施することができた。クルズは全体に内容の見直しを行い、講義以外にシミュレーション実習も取り入れた。引き続き、石黒准教授、金井講師、伊藤講師、難波講師が担当したほか、学生のカルテチェックは、本来の主治医である助教が毎日行った。

1) クリニカルクエストの継続。学生1名につき1題のクエストをいくつかの項目の中から選択し、自分なりの表現で数日後の朝回診後説明する。チーム医に尋ねる、自分で調べるなど自由に行い、担当教官が解答を聞いた後フィードバックする。2週間の間、いくつかのクエストを課題として、受け答えを続ける。

2) 院外実習：近隣の産科施設での新生児・乳児健診に同行見学し、子を持つ母、家族が子育てをする中での質問と対応を学習する。生後2週間から2歳までの発達と児の身体診察法を見学、時に実習を交える。

初期研修医：

周産期教育プログラム選択の研修医を中心に、地方会、研究会等への1演題の発表を目指した。標準プログラムで2年目では希望に沿って研修期間を設定し、医療チームの一員かつ、副主治医として上級医とともに日常採血、緊急帝王切開、分娩などへの立会、初期処置、新生児蘇生法についてその基本的知識、技術の修得を目標とした。

小児科専門医制度：卒後5年以上の小児科研修 (初期研修を含む) 実績をもとに書類を作成し、専門医試験受験資格が得られる。新生児症例経験も必須である。

周産期 (新生児) 専門医制度：小児科専門医取得後に、サブスペシャリティとして新生児を選択する医師に対して、日本周産期新生児医学会が実施している周産期 (新生児) 専門医制度の研修に登録し、研修を行った。本年度は3年間の研修年限を終了する医師はいなかった。

初期研修医、専攻医の教育に関しては、例年同様の臨床経験を積むことが概ねできたと考える。

2-4. 次年度改善計画

CC 学生への週間計画表と、2週間の課題をきちんと表にして初日のオリエンテーションで渡し、週間予定を把握させる。新生児病棟では、実際に新生児に触れ手診察を行うとともに、電子カルテに所見と評価の記入を継続して行わせる。また、外来の見学実習では、家族とくに母からの訴えをどのように聞き取り、対応するかを実際に見て医師の診察の実際を間近に学ぶ機会とする。次年度以降においては、医学生の病棟実習、特にCC-Step1、Step-2でローテーションしてくる学生に対して、よりも参加型を意識し、これまで以上に実際の医行為についても行わせることを検討す

る。CC-Step3 参加学生に対しては、スタッフ医師と同様の受け持ち患者プレゼンテーションができる事を目標に指導して行く。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床研究、基礎研究を通じて日常診療に対する理解を深め、医療の質を向上させる。中でも、極低出生体重児の長期予後の改善を目指す。

周産期医療、新生児医療の向上のために、当センター独自の臨床研究の計画、全国調査と多施設共同研究で当教室で吟味されたものには積極的に参加してゆく。

長期入院児を円滑に家庭生活に移行するための小児在宅医療支援に向けて、実態調査をもとに、NICU でできる家族の実生活に即した具体的行動に向けて、対策を検討する。

動物を用いた基礎研究にも力を入れて、臨床に結びつくリサーチマインドを養成する。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

新生児仮死と新生児心肺蘇生法に関する研究

- 動物実験グループ：難波文彦講師、モハメド特任講師、大学院生を中心に実施

- 臨床研究 調査、登録事業の開始

ハイリスク新生児フォローアップ研究：加部一彦教授、石黒講師、金井講師を中心に、NRN リサーチネットワークハイリスク児登録事業に参加

NICU を含む病院医師向け教育プログラムの作成と実施

小児在宅医療への移行に向けた NICU、小児科病棟での長期入院児の疾患、病状、問題点の共有

埼玉大学との共同研究：加部一彦教授を中心に、埼玉大学人類学教室との共同研究として、NICU に働く医療従事者のモチベーション形成に関する参与研究を継続する。

難波准教授が新たに AMED 成育疾患克服等総合研究事業(BIRTHDAY)において「未熟児動脈管開存症に対するアセトアミノフェン静注療法に関する研究開発」で研究グラントを獲得した。

3-3. 達成度評価

それぞれの研究グループを中心に課題に取り組んだ。学術集会等へのハッピー婦も再開され、小児科学会、小児科学会地方界、日本周産期新生児学会、日本新生児成育医学会へ説教的な参加と演題発表を行った。

3-4. 次年度改善計画

学術集会等も徐々に増えており、これまで以上に研究成果を積極的に発表して行く計画である。また、本年度も引き続き低酸素性虚血性脳症児への低体温療法症例登録事業を継続し、さらに次年度以降に向けて Web サイトの充実と、参加施設での問題提示や講習会参加を促し、データ解析から、低体温開始時の心拍数・血圧と長期予後の関係を分析し、論文等により国内外に発信してゆく予定。

4. 診療

新生児科は81床と日本でも最大規模の病床を有する新生児医療施設であり、埼玉県内でも、県立小児医療センターと共に総合周産期母子医療センターに指定されている。COVID-19流行下で、分娩数全体が減少傾向の中でも、2022年も引き続き県内のみならず、群馬県など他県からも多くのハイリスク新生児を受け入れている。2022年の入院数は642名、うち院外出生は92名と、昨年比べて入院数は12名(2%)の減少に留まった。極低出生体重児の入院数は75名と昨年よりも11名減少し、1000g未満の超低出生体重児は38名と、昨年比6名の減少、さらに出生体重500g未満の極めて未熟性の高い児の入院は昨年と同じく3名であった。減少しているとは言え、引き続き極低出生体重児の入院数が多い事が当科の特徴の一つであり、当科の2022年極低出生体重児の入院数は、全国の総合周産期センター104施設中4位であった

COVID-19 感染流行の影響もあり、当センターで扱う分娩数も漸減傾向に転じている。そのため、今後は県全体の分娩数の減少に比例するハイリスク妊婦の割合も減って来る事が予想され、それが当科の入院患児減少につながって行くと考えられ、この傾向は今後も続いて行くであろう。現在、当センターでは中等症から重症のハイリスク妊娠、ハイリスク新生児を主に受け持っているが、今後は比較的軽症の切迫早産事例の受入れなど、分娩数を増やす方策を検討して行く。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

加部一彦：埼玉県周産期医療協議会委員

加部一彦：埼玉県助産師出向支援導入事業児湯議会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

加部一彦：日本小児科学会 学会誌査読委員

加部一彦：日本周産期新生児医学会 学会誌査読委員

加部一彦：日本新生児成育医学会 学会誌査読委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

加部一彦：日本生命倫理学会 理事

加部一彦：日本医事法学会 理事

加部一彦：日本新生児成育医学会 評議員、倫理委員会委員

加部一彦：日本小児科学会埼玉地方会 学術委員会 委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書（基本学科である総合医療センター小児科と重複していないもの）

- ①加部一彦：「重篤な疾患を持つ子どもの医療をめぐる話し合いのガイドライン」の作成の経緯と今後 小児看護 45 巻 7 号
- ②加部一彦：成育限界の生命倫理 周産期学シンポジウム 40 巻
- ③加部一彦：子どもや家族との協働関係 小児看護 45 巻 12 号
- ④桜井浩子：18 トリソミーの子どもの家族と医師との話し合いにおける心理社会的体験 周産期医学 52 巻 3 号
- ⑤加部一彦：新生児スクリーニング 退院時の母親への指導 臨床婦人科産科(0386-9865)74 巻 9 号
- ⑥加部一彦：病院・臨床倫理委員会の役割 第 4 回病院・臨床倫理委員会連携会議
- ⑦加部一彦：新生児のフィジカルアセスメント 日本助産師会 アドバンス助産師研修会
- ⑧加部一彦：小児医療と臨床倫理 大阪府立母子総合医療センター研修会
- ⑨加部一彦：NICU と医療的ケア 日本助産診断研究会学術集会
- ⑩加部一彦：白衣授与式の概要と今日的意義 第 34 回日本生命倫理学会 学術集会

【総数：論文 18 件、学会発表 25 件、講演 13 件】

6-2. 獲得研究費

AMED 成育疾患克服等総合研究事業(BIRTHDAY)「未熟児動脈管開存症に対するアセトアミノフェン静注療法に関する研究開発」

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第 48 回川越小児科臨床検討会

第 11 回埼玉県西部地区新生児臨床検討会

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、昨年度実施した CC-Step1 の学生カリキュラムに沿って実施し、今年も引き続き学生より高評価を得ることができた。卒後教育に関しては、例年通り小児科にローテーションした初期研修医の内、NICU 研修を希望する研修医を受け入れた。専攻医は、基本学科である小児科の全体計画に基づき、NICU 病棟にて 1 年間の研修を行っており、1 年間の研修目標に対しても、順調に習得できていた。

研究については、研究部門における新生児慢性肺疾患に関する研究内容が徐々に定着、充実し、他施設からの見学や、当科での研究を目指す希望者が増え、社会人大学院生の在籍者数が増え、その結果、研究活動が活発化した。

診療においては、2022 年は極低出生体重児の入院数は 75 名と昨年よりも 11 名減少し、1000 g 未満の超低出生体重児は 38 名と、昨年比 6 名の減少、出生体重 500g 未満の極めて未熟性の高い児の入院は昨年と同じ 3 名であった。分娩数の減少に伴い、総入院数は減少傾向にあるが、ハイオリスク妊娠・分娩の割合及び、出生数に対知る低出生体重児の割合に大きな変化はなく、引き続き今より在胎週数の短い、出生体重の小さな児、すなわち、重症度が高く、NICU 入院が長期間に及び、退院後も何らかの医療的ケアが必要となる可能性が高いケースは減少しないものと予想される。今後も引き続き極低出生体重児の救命率を維持するとともに、安定して質の高い治療の継続に注力して行きたい。2017 年に県内二総合周産期医療センター体制となった以後、県内の母体搬送、新生児搬送の受け入れは格段とスムーズとなり、何よりも長年の懸案であった県内から東京都内へ搬送される母体・新生児が大幅に減少した。本年度も埼玉県母体新生児搬送周産期応需情報 Web サイトへ施設の状態の入力を適時に行なっており、引き続き搬送コーディネーターとの密な連携を保つことができたことも搬送状況の大幅な改善に寄与したと考える。

その他、小児在宅医療は全国的広がりがあり、患児が自宅に戻った地域での多職種からの多くの支援が得られるよう、NICU からの情報発信と連携の充実が望まれる。また本年も引き続き日本小児在宅医療研究会、埼玉気炎小児在宅医療研究会の運営に積極的に参加した。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育については、医学生、研修医、専門医の学習、研修へのプログラムを充実し、2024 年度から予定されている医師の働き方改革に向けて、人材の発掘と育成に一層の努力を行ってゆく。

研究については、社会人大学院生を中心とした研究体制も充実してきており、COVID-19 感染流行によって研究発表の機会が少なくなっているが、次年度に関しては、研究成果の積極的な発表を国内外に向けて行う予定である。また、原著論文の作成を促し、研究業績の向上を目指して行く。

診療については、次年度も引き続き県西部を中心とする担当区域内の周産期医療体制の維持に努力すると同時に、加えて、豊富な症例を活かして、臨床研究にも積極的に取り組んで行きたいと考える。

2. 20) (3) 小児科 (小児救命救急センター)

1. 構成員

櫻井 淑男 (SAKURAI Yoshio) : 教授 : 研究副主任、診療副部長、小児救命救急センター長 : 指導教員 (大学院) : 小児集中治療 : 博士

長田 浩平 (OSADA Kohei) : 講師 (2020年7月留学から帰国) : PICU 病棟医長 : 小児集中治療

小林 信吾 (KOBAYASHI Shingo) : 助教 : PICU 医局長 : 小児集中治療

内田 悠太 (UCHIDA Yuta) : 助教 (PICU) : 医員 : 小児集中治療

坂本 航 (SAKAMOTO Wataru) : 助教 (PICU) : 医員 : 小児集中治療

石井 邦哉 : 助教 (PICU) : 医員 : 小児集中治療

横張 博也 : 助教 (PICU) : 医員 : 小児集中治療

非常勤

河野 彬子 (KAWANO Akiko) : 助教 (PICU) : 専門医員 : 小児集中治療

2. 教育

2-1. 目的・目標

当科は大学病院としての機能に加え、埼玉県西部地区の人口100万人を超える医療圏の小児救命救急センターとして三次のあらゆる疾患や異常、相談に対処すべく幅広く診療を行っている。そのため安全で質の高い医療を提供し、地域から信頼される小児救急・集中治療医の養成を目指す。

2-2. 教育実績 (担当者: 長田浩平、小林信吾)

1) 卒前教育

2022年度は、長田浩平講師、小林信吾助教が担当した。

通常の実習では5年生のCC step-1 および5年生、6年生のAdvanced CCを受け入れている。病棟回診、小児救急シミュレーション教育などを行っている。

2) 卒後教育

・小児科の初期臨床研修

一般小児科研修の一部として小児救命救急センターでの研修を行っている。病棟にて指導医のもとで受け持ち医として、患者の管理、基本的検査法などについて研修する。新入院受け持ち症例は毎日、翌朝にプレゼンテーションを行う。当直は救急医療研修として必須である。

・後期研修

PICUでは、各自最低3か月ずつ研修した。希望に応じて研修期間の延長は可能である。

・卒後教育に関連する行事

指導医の指導を受け、抄読会で主として英語文献を抄読発表する。その他、当科主催のセミナー・講演会が年に数回開催されるほか、地域の小児科関連の臨床検討会や研究会が月に1回程度開催されるのでその参加と症例報告などを発表することが推奨されている。有志の勉強会も適宜開かれている。

当小児科は、米国心臓学会と連携したPALS (Pediatric Advanced Life Support) の普及活動に積極的に取り組んでおり、関東・東北・北海道をカバーするTraining Centerに定期的にインストラクターを派遣している。後期研修医は医局の全面的支援の元にこのPALSのProvider講習会(2日間コース)を受講させている。初期研修医には当科のAHA公認インストラクターによるMini PALSを実習させている。

2-3. 達成度評価

初期研修医においては、小児救急・集中治療の概観を理解してもらい、将来の進路決定の一助としてもらっている。また、後期研修医においては、小児救急・集中治療の基本を学んでもらい、小児の緊急時の対応が各自でできるように研修を行ってきた。

2-4. 次年度改善計画

昨年度に他施設からの小児集中治療専門医を目指すSUBSPECILITYに対して入局者があった。1年間コース、2年間コース、3年間コースの内容を充実して行きたいと考えている。

3. 研究

3-1. 目的・目標

安全で質の高い、地域から信頼される小児集中治療医となるには、既に確立された医学や医療を学ぶだけでなく、新しい知識を発見したり新しい治療法を開発したりする資質が必要である。当科はそのような臨床に即した研究が施行できる医師を養成することを目的としている。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

研究グループ

小児呼吸病学、小児循環器学、小児神経学、小児集中治療学などを中心とした臨床的研究を行っている。

研究実績 6. の業績のところに記載。

3-3. 達成度評価

学会発表はもとより、論文発表も精力的に行っている。

3-4. 次年度改善計画

各医員にそれぞれの研究テーマを割り当てて、研究体制を整えていきたい。

4. 診療

当科は大学病院としての機能に加え、埼玉県西部地域の小児の三次医療機関として機能している。2020年度から始まった開心術をさらに発展させていく。本センターは、県内の小児重症患者の最後の砦として24時間365日院外からいつでも重症患者に対応できる体制を取っている。特に迎え搬送を積極的に行うことで搬送元の負担の軽減も行っている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県 MC 協議会委員（櫻井淑男）

埼玉県医師会母子保健委員会委員（櫻井淑男）

埼玉県小児災害リエゾン委員（長田浩平）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

櫻井 淑男 日本小児科学会査読委員、日本小児救急医学会査読委員、日本集中治療医学会査読委員

日本小児集中治療研究会編集委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本小児科学会埼玉地方会理事（櫻井淑男）

日本小児救急医学会代議員（櫻井淑男）

日本小児集中治療研究会理事（櫻井淑男）

PALS (pediatric advanced life support) 講習会インストラクター（櫻井淑男、長田浩平、小林信吾）

小児 POINT OF CARE ULTRASOUND 講習会インストラクター（櫻井淑男）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

1. （※編集委員会のため執筆タイトルなし）

櫻井 淑男（日本小児集中治療研究会 編集委員会）

小児救命救急・ICUピックアップシリーズ第6巻『血液浄化』

メデイカル・サイエンス・インターナショナル（2022）

2. ショック

櫻井 淑男

小児科診療ガイドライン -最新の診療指針- 第5版 総合医学社

編集 加藤元博 2023/1/25 発行

3. （※責任編集のため執筆タイトルなし）

小児のビデオ喉頭鏡 ビデオで見ながら楽々挿管！

櫻井 淑男（責任編集）

監修 日本小児集中治療研究会 2023/3/17 発行

4. Efficacy of cEEG and hepatic function to diagnose early acute encephalopathy.

Sakurai Y, Osada K, Sakamoto W, Uchida Y, Kawano A, Kobayashi S, Chikaishi M, Kojima H, Ozawa J, Sakai H, Moriwaki K, Yamanouchi H.
Pediatr Int. 2023 Jan;65(1):e15494. doi: 10.1111/ped.15494.

学会発表

1. MRIでBright Tree Appearance(BTA)を認めた急性硬膜下血腫(会議録)
河野 彬子(埼玉医科大学総合医療センター 小児救命救急センター), 内田 悠太, 坂本 航, 小林 信吾, 長田 浩平, 櫻井 淑男, 阪井 裕一, 森脇 浩一
日本小児科学会雑誌(0001-6543)126巻5号 Page837(2022.05)
第181回日本小児科学会埼玉地方会 2020/12/6 埼玉県県民健康センター
 2. 小児集中治療医から見た有熱時けいれん重積発作患者への対応(会議録)
櫻井 淑男(埼玉医科大学総合医療センター 小児救命救急センター)
脳と発達(0029-0831)54巻 Suppl. Page S101(2022.05)
第64回日本小児神経学会学術集会 2022/6/5 Gメッセ群馬
 3. 急性脳炎・脳症の早期鑑別方法について(会議録)
櫻井 淑男(埼玉医科大学総合医療センター 小児救命救急センター), 小島 英雄, 小澤 純一, 内田 悠太, 河野 彬子, 小林 信吾, 長田 浩平, 阪井 裕一, 森脇 浩一, 山内 秀雄
脳と発達(0029-0831)54巻 Suppl. Page S253(2022.05)
第64回日本小児神経学会学術集会 2022/6/4 Gメッセ群馬
 4. 重症の被虐待児症例の集約化により見えてくるもの(会議録)
櫻井 淑男(埼玉医科大学総合医療センター 小児救命救急センター), 小澤 純一, 小島 英雄, 内田 悠太, 坂本 航, 河野 彬子, 小林 信吾, 長田 浩平, 阪井 裕一, 森脇 浩一
日本小児 救急医学会雑誌(1346-8162)21巻2号 Page269(2022.06)
第35回日本小児救急医学会学術集会 2022/7/31 東京工科大学蒲田キャンパス、東邦大学医療センター大森病院
 5. 集中治療室の痛み治療の現状と課題 小児集中治療室における鎮静・鎮痛管理について(会議録)
櫻井 淑男(埼玉医科大学総合医療センター)
日本ペインクリニック学会誌(1340-4903)29巻プログラム号 Page62(2022.06)
日本ペインクリニック学会第56回学術集会 2022/7/8 東京国際フォーラム
 6. 医療安全のために集中治療スタッフがすべきこと、学会がすべきこと 当小児救命救急センターの医療事故関連報告書の解析から分かってきた医療安全対策について(会議録)
櫻井 淑男(埼玉医科大学総合医療センター 小児救命救急センター), 小島 英雄, 小澤 純一, 内田 悠太, 坂本 航, 河野 彬子, 小林 信吾, 長田 浩平, 阪井 裕一, 森脇 浩一
日本集中治療医学会雑誌(1340-7988)29巻 Suppl. 1 Page274(2022.11)
第49回 日本集中治療医学会学術集会 2022/3/18 仙台国際センター
- 【総数：論文 4件、学会発表 6件】
- 6-2. 獲得研究費
なし
 - 6-3. 受賞
なし
 - 6-4. 特許、実用新案
なし
 - 6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績
なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育：学生教育・初期研修医教育は従来通りの質は保っていると考え。専攻医の教育に関してはコロナ禍も一段落しており症例数が増加してきており、各自経験を積めたと考えている。

研究：人材の少なさから研究が進んでいるとは言い難い。その一方論文発表は一定程度できている。

診療：新型コロナウイルス感染症の影響で診療実績は低下した。一方、開心術が開始され、症例数も順調に増加している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

診療：働き方改革を見据えて、いかに医師が医師以外にできない仕事に集中できるようにする環境を作るかが大きな問題と考えられる。例えば、欠勤表を各自毎月3種類作成しなければいけないなどこういう問題は大学として改善をご検討いただきたいと考える。

教育：当科には高性能シミュレーターがあるのでこれを最大限利用して初期・後期研修医や看護師の off the job training に役立てたいと考える。

研究：臨床と同時に研究をすることは、これからの働き方改革の導入を考慮するとかなり困難が予想されると考える。できる限り各自の研究時間をとるためにテーマを決めて各自の研究時間をとるための方策を検討する。

2. 21) 小児心臓外科

1. 構成員

鈴木孝明 (SUZUKI, Takaaki) : 教授、運営責任者、診療部長、博士 (国際医療センター副院長 : 兼任)
宇野吉雅 (UNO, Yoshimasa) : 准教授、診療副部長、教育主任、研究主任、博士
以下、国際医療センター小児心臓外科兼任
帆足孝也、保土田健太郎、永瀬晴啓、細田隆介、瀧上裕司

2. 教育

2-1. 目的・目標

当科は 2020 年 4 月に新規開設されたため、現時点では卒前教育対象となる学生のローテーションに含まれておらず、また卒業後教育における初期研修医と専攻医 (後期研修医) も、関連各診療科 (小児科、小児循環器科、小児集中治療部門、麻酔科) に所属する医師をそれぞれ対象にして、小児心臓外科領域の術前・術中・術後管理において幅広い基礎的な臨床能力がつくように教育している。

2-2. 教育実績

学生については、関連各診療科ローテイト中に主にベッドサイドにて患者の原疾患・手術内容・術後経過等を説明することにより学習の助けとなるように指導、初期研修医と専攻医に対しては、処置や手技の見学・助手を中心として、術前診断、手術、および周術期管理について教育していく。教育担当者は、常勤医である宇野が務める。

2-3. 達成度評価

上記の現状のため、当科単独としての到達度を個々に評価することが難しいため、関連各診療科の教育担当者を介して各学生、研修医・専攻医の理解度・到達度を参考としながら日々の教育に活かしていく。

2-4. 次年度計画

関連各診療科ローテイト中の医学生に主にベッドサイドにて患者の原疾患・手術内容・術後経過等を説明することにより学習の助けとなるように指導を行い、また初期研修医と専攻医に対しては、処置や手技の見学・助手を中心として、術前診断、手術、および周術期管理について教育を適宜行っている。

大学全体の教育業務においては、共用試験 OSCE ならびに卒業時 OSCE 評価者として試験に参加するだけではなく、OSCE 試験前講習においてはインストラクターを務めている。また大学医学部入学試験に際しては、入試監督官として参加している。(医療系大学間共用試験実施評価機構認定評価者の資格を有する)

次年度においても、ベッドサイドにおける個々の教育と、大学全体としての教育行事により一層の協力をしていきたいと考えている。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

総合医療センターでは施設的环境より、症例を積み重ねての臨床研究を行っていくことを目標とするが、同時に症数の多い国際医療センター小児心臓外科スタッフとも協力し、研究テーマを設けていく。現時点では症例数の増加を図っているところであり、テーマ選択についても検討中である。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

新生児、乳幼児疾患を対象とするグループと成人先天性心疾患を対象とするグループにおいて上記内容について計画。なお学会発表については徐々に開始しているところである (6-1 参照)。

3-3. 達成度評価

現在、学会発表を開始したところであり、今後徐々に業績を重ねていく予定である。

3-4. 次年度計画

上記研究テーマについては、すでに国際医療センター小児心臓外科より発表を行っているが、当施設の症例経験も併せて積み重ねていき、さらなる学会発表や論文執筆につなげていきたい。

4. 診療

埼玉県内において小児心臓手術に対応できる第三の施設として、2020 年 4 月に新規診療科として開設させていただいた。当科をはじめ関連各部門とともに初めての経験としての第一例を無事に終了することができ、さらにこれまでの 3 年間で計 26 例の手術を合併症なく施行することができている。今後も、各部門とともに経験を積みながら少しずつ症例数を増やしていくことに加え、より重症例にも対応できる施設となるよう努力していきたい。また、小児不整脈治療としてのペースメーカーや埋込型除細動器を用いた治療ならびに重症心機能不全に対する補助循環 (ECMO) 治療等にも対応できるように、引き続き関連各部門と協力しながら診療技術の向上に努めていきたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

宇野吉雅：日本成人先天性心疾患学会雑誌査読委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

宇野吉雅：“当施設における Heterotaxy 症例の術後経過と予後に関する検討” 第 52 回日本心臓血管外科学会学術総会
(2022 年 3 月 横浜)

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

鈴木孝明：第 52 回日本心臓血管外科学会学術総会会長 (2022 年 3 月 横浜)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

小児開心術を開始するにあたり関連各部署（小児循環器科、麻酔科、小児集中治療部門、手術部、臨床工学部）の多大な協力をいただいた。初年度から 2 年度はコロナ禍の影響もあり手術件数 10 件であったが、3 年目となった今年度は年間で 12 例の小児心大血管手術を行い、全例術後の合併症なく良好な経過を得られている。これまで経験のなかった各部署との連携を第一に、安全な手術を最優先に行ってきたため手術数としてはまだ少数ではあるが、徐々に手術件数の増加が得られており、今後も手術成績の安定を維持するとともに徐々に症例数と適応疾患の拡大を目指していきたい。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

2020 年 4 月に新規診療科として開設後、総計 26 例（うち開心術 16 例）の小児心臓手術を施行している。全例良好な術後経過であり、今後も各部門とともに経験を積みながら今年度以上に症例数を増やしていくことに加え、より重症例にも対応できる施設となるよう努力していきたい。また、小児不整脈治療としてのペースメーカーや埋込型除細動器を用いた治療ならびに重症心機能不全に対する補助循環（ECMO）治療等にも対応できるように、関連各部門と協力しながら診療技術の向上に努めていきたい。

2. 22) 皮膚科

1. 構成員

- 福田 知雄 (FUKUDA, Tomoo) : 教授: 運営責任者: 診療科長: 教育主任: 指導教員(大学院): 真菌症、皮膚腫瘍、皮膚外科: 博士
- 北村 啓次郎 (KITAMURA, Keijiro): 名誉教授: 皮膚内科学, 皮膚病理学: 博士
- 伊崎 誠一 (IZAKI, Seiichi) : 名誉教授: 炎症学、皮膚病態生理学、生化学: 博士
- 寺木 祐一 (TERAKI, Yuichi) : 准教授: 研究主任: 指導教員(大学院): 皮膚免疫学、アレルギー学: 博士
- 人見 勝博 (HITOMI, Katsuhiko) : 講師: 教育員・研究員: 医局長: 血管炎、皮膚科学一般: 博士
- 高村 さおり (TAKAMURA, Saori) : 講師: 教育員・研究員・外来医長: 乾癬、アレルギー性皮膚疾患: 博士
- 田口 良吉 (TAGUCHI, Ryokichi) : 助教: 教育員・研究員・病棟長
- 菅井 奏良 (SUGAI, Sora) : 助教: 教育員・研究員・医員
- 齋藤 聡一郎 (SAITO, Souichirou): 助教: 教育員・研究員・医員
- 佐藤 あゆみ (SATO, Ayumi) : 助教: 教育員・研究員・医員
- 寺尾 茜 (TERAO, Akane) : 助教: 教育員・研究員・医員
- 大谷地 慶太 (OYACHI, Keita) : 助教: 教育員・研究員・医員
- 加藤 有紀 (KATO, Yuki) : 助教: 教育員・研究員・医員
- 菅原 成美 (SUGAHARA, Narumi) : 助教: 教育員・研究員・医員
- 林 理奈 (HAYASHI, Rina) : 助教: 教育員・研究員・医員
- 中村 かおり (NAKAMURA, Kaori) : 助教: 教育員・研究員・医員
- 平井 昭男、仲 弥、須山 孝雪、平原 和久 各非常勤講師計4名、その他非常勤医師3名。

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

埼玉医科大学における医学教育を担う総合医療センターとして、医学生講義・医学生臨床実習に積極的に貢献し、同時にセンター設立の目的である卒業教育の充実を担う。医学教育環境が近年変容しているが、教育環境の変化に的確に対応できるよう臨床を充実し、個々の医療人としての実力を涵養し、柔軟な準備を怠らない。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒業教育で講義・演習・実習、臨床実習を担当したのは、

医学部3年生講義 内分泌・代謝ユニット 皮膚の代謝異常・皮膚の形成異常	(担当 福田)
医学部4年生講義 皮膚・運動器分野 ウィルス性皮膚疾患	(担当 福田)
医学部4年生講義 皮膚・運動器分野 水疱症・膿疱症	(担当 福田)
医学部4年生講義 皮膚・運動器分野 紅斑症・紫斑病・薬疹	(担当 人見)
医学部6年生講義 皮膚・運動器分野 光・メラニン・代謝異常	(担当 福田)
医学部5年生臨床実習 (CCstep1) 年間合計 13週間, 合計 60名	(担当 福田, 寺木, 人見 ほか)
医学部5年生臨床実習 (CCstep2) 年間合計 8週間, 合計 4名	(担当 福田, 寺木, 人見 ほか)

卒業教育としては、専攻医10人(1年目4、2年目2、3年目3、4年目1)の研修を行っている。

2-3. 達成度評価

講義については内容を毎年リニューアルし、最新の情報を取り込むとともに、学生の要望を適宜取り入れた改善を行っている。分かりやすく、かつ内容の充実した臨床実習ガイドを作製し、学生の実体験を重視した実地参加型の臨床実習カリキュラムを組んでおり、学生からの評価は高い。学生からの建設的提言を受け入れ臨床実習ガイドは適宜改良を加えている。学生からの要望としてクルズスの更なる充実があげられている。教育スタッフ全員で協力し、定期的クルズスをより充実させるとともに、学生が希望する分野のクルズスも不定期開催で臨機応変に行ってきた。令和4年度の達成度は約75%である。

2-4. 次年度改善計画

当科の学生臨床実習ならびに卒業研修では、アトピー性皮膚炎や尋常性乾癬など皮膚病変を主体とする疾患、全身性エリテマトーデスや皮膚筋炎などの内臓病変を伴う疾患、薬剤アレルギー・重症型薬疹などの他臓器との関係の深い疾患、あるいは悪性黒色腫や有棘細胞癌などの皮膚外科手技を要する悪性腫瘍など広範囲な領域にわたって責任ある診療を行いながら、広い視野を持つ実力のある皮膚科専門医を世に送り出すことを教育の主眼としている。並びに「病態のメカニズムを考えて治療する実力」また安易に臨床検査や病理検査に頼ることなく、「皮疹を正確に観察する眼」

の育成に力を注いでいる。令和4年度は概ね目標としていた項目はクリアできたと考えているが、令和5年度は教室の人的資源の更なる充実を計り、一層の向上を目指す。また、真菌症、美容皮膚科など、これまで不十分であった分野にも積極的に取り組んでいきたいと考えている。これまで同様、教育体制と教育内容の充実に向けていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

主要なテーマは、皮膚疾患と全身との関係を明らかにすること、すなわち内臓諸臓器の異常を反映する皮膚病変を主題として選択し、これに関係する臨床研究を主たる目標とする。平成17年度から寺木准教授が教室に加わり、リンパ球サブセット、表面マーカーに関する免疫学的研究を行う基盤が飛躍的に充実し、各種皮膚疾患における免疫学的・アレルギー学的研究が一段と進歩してきた。当教室では、現在、薬疹・中毒疹、血管・血流系の関与する疾患、皮膚の炎症と感染防御、真菌症、皮膚悪性腫瘍などに関するテーマを中心に研究を行っている。これらに関して更なる充実を図るのは当然のこととして、今後は、より幅広い領域の研究を行っていききたいと考えている。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

少人数の体制であるので研究グループは常に変更され、流動的であるが、責任者とテーマを示す。

- a 薬疹 (担当 寺木)
- b 各種皮膚疾患の免疫・アレルギー学的研究 (担当 寺木)
- c 肉芽腫性炎症 (担当 寺木)
- d 血管炎、IgA血管炎 (担当 人見)
- e 皮膚悪性腫瘍 (担当 福田)
- f 真菌症 (担当 福田)

臨床に関わる時間に比し研究のための時間が不足しており、そのため研究の達成度は充分とは言えない。しかしながら：

- a. 薬疹は主要なテーマとして継続的に研究を続け、成果を発表している；
- b. 各種皮膚疾患から採取した血中あるいは組織に浸潤したリンパ球表面マーカーを解析することによる免疫・アレルギー学的研究で成果をあげている；
- c. d サルコイドーシス、肉芽腫性血管炎に関する臨床研究を行い、特にサルコイドーシスでは皮膚症状に対するミノサイクリンの有用性を示すデータを継続的に発表している；
- e. 悪性黒色腫に関する臨床研究を行い、毎年悪性腫瘍学会で報告、論文化している；
- f. 真菌症に関する研究を平成28年度より開始した。2021年次皮膚真菌症疫学調査の集計・分析を行い、学会にて発表をした。

3-3. 達成度評価

研究についての自己評価は決して充分とは言えない。達成度は計画の70%程度である。慢性的な人員不足が続き、マンパワーが減っていても、診療・教育業務の総量は変わらないため、研究に回す余裕が生まれてこない。令和4年度は4人の新入局員を迎え入れることが出来た。人材の充実により、教室の活動を一層活発に展開し、底上げをしていきたいと考えている。

3-4. 次年度改善計画

皮膚疾患と全身との関係を明らかにすることを主題とし、引き続き、薬疹・中毒疹、皮膚の免疫・アレルギー、サルコイドーシス、血管炎、IgA血管炎、皮膚悪性腫瘍、真菌症を研究の中心テーマとして扱っていく。余裕があれば、より幅広い領域の研究を行っていききたいと考えている。人的充実を計り、一層の進歩を遂げる予定である。

4. 診療

難治性あるいは重症皮膚疾患の紹介患者を広く受け入れ、皮膚病に関する地域のセンター機能を果たすことを目的とする。令和4年度の初診患者数は2,397名、再診患者数は28,422名、入院患者の外来診察を含め総数32,405名であった。入院患者数は285名、入院手術件数は129件、平均在院日数は16.68日であった。入院患者の内訳は重症薬疹、乾癬、皮膚腫瘍など多岐にわたる。毎週病棟カンファレンス、教授回診、外来・入院患者の症例検討会、病理組織検討会（皮膚科CPC）を行ない、診療に万全を期している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県社会保険診療報酬審査委員会委員（伊崎、福田）
内科系学会社会保険連合委員（福田）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

査読：日本皮膚科学会雑誌、J Dermatol、Medical Mycology J その他（福田、寺木）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本皮膚科学会東京支部代議員、運営委員（福田、寺木）
日本医真菌学会、理事（福田）
埼玉県皮膚科治療学会、副会長（福田）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Takamura S, Teraki Y, Katayama E, Kawaguchi T, Kawaguchi M, Nakano D, Tsutsumi T, Nagoshi S, Nakama T, Torimura T. Effects of interleukin-17 inhibitors on hepatic fibrosis index in patients with psoriasis and metabolic dysfunction-associated fatty liver disease: Directed acyclic graphs. Clin Mol Hepatol 28(2); 269-272, 2022. 4
- ② Takamura S, Teraki Y. Treatment of bullous pemphigoid with dupilumab: Dupilumab exerts its effect by primarily suppressing T-helper 2 cytokines. J Dermatol 49, 845-850, 2022.
- ③ 福田 知雄. 顔面腫脹から遺伝性血管浮腫を見抜く. MB Derma 320; 41-46, 2022.
- ④ 寺木 祐一. 好酸球性膿疱性毛包炎(EPP)を見極める. MB Derma 320; 81-86, 2022.
- ⑤ 高村 さおり, 福田 知雄. 【病態から考える薬物療法】(第11章)蕁麻疹・血管性浮腫 血管性浮腫(解説). 皮膚科の臨床 64(5); 658-661, 2022.
- ⑥ 福田 知雄. 新ガイドラインに基づく白癬の治療. 日本皮膚科学会雑誌 132(9); 2125-2131, 2022.
- ⑦ 福田 知雄. 1. 一症例から学ぶハンセン病の現況 2. 高齢者施設で注意すべき皮膚疾患. 日本ハンセン病学会雑誌 91(2); 45-49, 2022.
- ⑧ 菅井 奏良, 人見 勝博, 福田 知雄. COVID-19 ワクチン接種後に多彩な臨床像を呈した皮膚障害の9例. 皮膚科の臨床 64(3); 2137-2141, 2022.
- ⑨ 寺尾 茜, 田口 良吉, 寺木 祐一, 福田 知雄. 当院における抗 TIF- γ 抗体陽性皮膚筋炎と悪性腫瘍に関する臨床的検討. Skin Cancer 37(3); 173-180, 2023.
- ⑩ 佐藤 あゆみ, 田口 良吉, 齋藤 聡一郎, 福田 知雄. 右頬に浮腫状浸潤性紅斑を呈したリンパ管系分化を有する脈管肉腫の1例. Skin Cancer 37(3); 197-202, 2023.

【総数：論文・著書 23 件、学会発表 21 件、講演 8 件】

6-2. 獲得研究費 : 該当なし

6-3. 受賞 : 該当なし

6-4. 特許, 実用新案: 該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

令和4年4月21日 第59回 川越 Dermatology Club

令和4年12月8日 第60回 川越 Dermatology Club

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

令和4年度の当教室は、毎年退職者のある中、何とか現状を維持しており、前年度と同等の診療実績をあげることが出来た。コロナ禍で外来患者数、入院手術件数が減る中、入院患者数は減らさず、前年度と同等の総診療稼働額を維持したのは評価されてもよいと考える。教育にも力を入れており、特に例年予診取りなど実地の臨床を豊富に体験できるBSLの評判はとても高いものがある。人員の確保としては、初期研修医に積極的に声かけを行うことで、皮膚科に興味を持った専攻医を令和元年度は1人、令和2年度は3人、令和3年度は2人、令和4年度は4人、令和5年度は1人と連続で新入局員を迎え入れることが出来た。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

中長期展望として、皮膚科専門医を保持している指導医が3人と少なく、これを倍加したい。人材の充実により、これまで蓄積した教室の活動を一層活発に展開し、教育、診療、研究いずれの領域に関しても底上げしていきたいと考えている。

2. 23) 泌尿器科

1. 構成員

川上 理 (KAWAKAMI, Satoru) : 教授 : 診療部長 : 代表指導教員 (大学院) : 運営責任者 : 尿路性器腫瘍、排尿障害 : 博士
矢野 晶大 (YANO, Akihiro) : 准教授 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 尿路性器腫瘍 : 博士
岡田 洋平 (OKADA, Yohei) : 准教授 : 教育主任 : 尿路性器腫瘍 : 博士
竹下 英毅 (TAKESHITA, Hideki) : 講師 : 外来医長 : 尿路性器腫瘍、尿路結石、排尿障害、急性陰囊症 : 博士
北山 沙知 (KITAYAMA, Sachi) : 助教 : 医局長 : 尿路性器腫瘍、がんゲノム : 社会人大学院生
中山 貴之 (NAKAYAMA, Takayuki) : 助教 : 博士
香川 誠 (KAGAWA, Makoto) : 助教 : 病棟医長 : 社会人大学院生
立花 康次郎 (TACHIBANA, Kojiro) : 助教
平田 渉 (HIRATA, Wataru) : 助教
諸角 誠人 (MOROZUMI, Makoto) : 客員教授 : 尿路結石 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

「卒前教育」では、臨床講義により泌尿器科的疾患の病態生理を習得する。また、診療参加型臨床実習 (クリニカルクラークシップ) により泌尿器科疾患における知識・技能・態度の教育を行い、臨床的問題解決能力の向上を図る。

「卒後教育」では、診療現場での主治医としての強い責任感を持ち、一つ一つの症例に対する指導をきめ細かく行うと共に、定期的な症例発表や臨床研究を通して泌尿器科診療知識・技術の向上を図る。人との関わりに対する根源的な興味を持ち、患者さんへの共感を深めることで、医療者としての成長を促す。

「大学院教育」では、泌尿器科領域の未知の課題をテーマに研究を進め結果を発表することで、科学的思考をもった医療人とし力を蓄え、研究テーマと社会的な接点を明確にする。

2-2. 教育実績 (担当者)

2-2-1. 「卒前教育」 (川上 理、岡田 洋平、矢野 晶大、竹下 英毅、北山 沙知、中山 貴之、香川 誠)

患者の症状や各種臨床情報より疾病を診断し治療計画をたてることを可能とするため、以下の項目を目標にする。

1. 正確な医学用語を用いて病態を説明し記載できる (知識)
2. 患者およびコメディカルと意思疎通できる (態度)
3. 必要な診察および検査を計画でき、それらの所見を理解し記載できる (知識・技能)
4. 得られた診療情報を統合し、診断に到達できる (知識・技能)

本年度は医学部臨床実習として、Pre-CC (M3、M4)、CC-Step1 (M4-M5)、CC-Step2 (M5)、CC-Step3 (M6) の学生を受け入れた。

2-2-2. 「卒後教育」 (川上 理、岡田 洋平、矢野 晶大、竹下 英毅、北山 沙知、中山 貴之、香川 誠)

研修医は初期研修プログラムの選択必修期間中に研修医 1 名につき複数人の指導医で臨床研修指導を行い、基本的な泌尿器科領域の疾患病態を重点的に経験した。

初期臨床研修終了後に、泌尿器科専門医になるための専門研修プログラムを選択し、指導医のもとに泌尿器科専門医として必要な基本的知識・手技の習得をめざした。日本泌尿器科学会などへの各種関連学会に出席参加・発表を行うとともに、論文作成の基本を学んだ。初期研修医のローテーションで泌尿器科研修を選択する初期研修医が多くいるため、それぞれの研修医のニーズと能力に即した臨床研修を遂行した。

2-2-3. 「大学院教育」 (川上 理、岡田 洋平、矢野 晶大、竹下 英毅)

泌尿器科領域における未知のテーマに対する仮説を提示し、臨床経過および臨床検体より得られた情報をもとに実験計画を立案し実行することで、社会的な重要性をもつ研究結果を発表した。北山沙知医師の博士論文が国際誌に発表され、大学院博士課程学位審査を終了した。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」: 臨床講義では泌尿器科の基礎的知識の習得と、臨床情報の統合整理を行った。臨床実習では少人数 (2-3 人) でおこなわれ、泌尿器科特有の疾患に対して臨床実習で十分な経験をした。学習評価ツールである WebClass を活用し、評価者と学生の情報共有を深め、形成的評価・総括評価を綿密に行うことで正しく学習到達度を判定した。

「卒後教育」: 初期研修では希望に沿った日程で前期研修医の在籍が可能であり、多様な臨床技術を取得した。泌尿器科専門研修 (専攻医) においては、臨床・学会活動を通して専門医取得のための十分な経験と知識を得た。初期研修の臨床的評価は EPOC2 を用いて随時行った。

「大学院教育」:限られた時間のなかで研究成果を得るために時間管理を徹底する。得られた情報を指導医と共に検討し、綿密な計画をたてたうえで研究をすすめていく。

2-4. 次年度改善計画

「卒前教育」:医学部学生における診療参加型臨床実習の法的な位置づけがなされるため、臨床実習の現場での体験と技術・知識の深い学びを計画する。

「卒後教育」:患者さんの生活と命を預かる責任の大きさ(=主治医の責任)を自覚し、診療技術・知識の向上と共に自己の人間的な成長を促す。

「大学院教育」:研究課題を診療科全体で共有し討議を繰り返す行うことで、研究テーマの発展的な改善を行い、社会に貢献する課題を完成させる。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

泌尿器悪性腫瘍、腫瘍マーカー、急性陰嚢症、排尿障害、経尿道的手術、経会陰的手技に関わる研究を進め発展させる。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

当教室における研究プロジェクトは泌尿器悪性腫瘍、腫瘍マーカー、尿路結石、急性陰嚢症、排尿障害、経尿道的手術に分けられる。以下に現在当科が取り組んでいる臨床研究のうち、当院倫理委員会へ申請された主なものを研究実績の一部とともに示す。

1) 泌尿器がん由来のがん幹細胞の制御機構の解明(申請番号1363)

研究実績:がん幹細胞を用いた精巣癌モデル、腎癌モデルを教室で新たに作成した。昨年までの成果を、発展させ、精巣癌シスプラチン治療耐性のメカニズムについて明らかにした。

実績1) Kitayama S, Ikeda K, Sato W, Takeshita H, Kawakami S, Inoue S, Horie K. Testis-expressed gene 11 inhibits cisplatin-induced DNA damage and contributes to chemoresistance in testicular germ cell tumor. *Sci Rep.* 12:18423, 2022

実績2) 北山 沙知、池田 和博、川上 理、井上 聡、堀江 公仁子. 患者由来細胞・移植モデルを活用した精巣がんシスプラチン耐性関連因子の探索. 第31回泌尿器科分子・細胞研究会 2022年2月25日、Web

実績3) 北山 沙知、池田 和博、佐藤 航、竹下 英毅、川上 理、井上 聡、堀江 公仁子. 患者由来細胞・移植モデルを活用した精巣がんにおけるシスプラチン治療抵抗性獲得のメカニズムの解明. オール埼玉研究の日、2022年11月5日、埼玉

2) 進行性腎癌に対するイピリムマブ+ニボルマブの免疫関連有害事象の検討(申請番号2442)

研究実績:昨年の国際学会発表を発展させ国際誌へ報告(1)、さらに、副作用の有無と予後の関連について、血液炎症反応の有無と予後の関係、国際学会にて報告した(2, 3, 4)。

実績1) Izumi K, Inoue M, Washino S, Shirotake S, Kagawa M, Takeshita H, Miura Y, Hyodo Y, Oyama M, Kawakami S, Miyagawa T, Saito K, Kageyama Y. Clinical outcomes of nivolumab plus ipilimumab in patients with metastatic non-clear cell renal cell carcinoma: Real-world data from a Japanese multicenter retrospective study. *Int J Urol.* 2022 Dec 21. doi: 10.1111/iju.15128. Epub ahead of print. PMID: 36541136.

実績2) Hayase T, Washino S, Shirotake S, Inoue M, Kagawa M, Takeshita H, Miura Y, Hyodo Y, Izumi K, Kawakami S, Saito K, Kageyama Y, Oyama M, Miyagawa T. 144P Association between immune-related adverse events and survival in metastatic renal cell carcinoma treated with nivolumab plus ipilimumab 2022 *Annals of Oncology* 33:S1488-S1489

実績3) Nakayama T, Takeshita H, Kagawa M, Washino S, Shirotake S, Miura Y, Hyodo Y, Izumi K, Inoue M, Miyagawa T, Oyama M, Saito K, Kageyama Y, Kawakami S. 139MO Prognostic significance of the mechanism of inflammatory markers in advanced renal cell carcinoma patients treated with nivolumab plus ipilimumab. *2022Annals of Oncology* 33:S1487

実績4) Kizawa R, Kuno M, Washino S, Shirotake S, Izumi K, Inoue M, Kagawa M, Takeshita H, Hyodo Y, Kawakami S, Saito K, Y. Kageyama, M. Oyama, T. Miyagawa, Y. Miura. 142P The predictive biomarker for immune-related adverse events (irAEs) in patients with metastatic renal cell carcinoma treated with the combination therapy of nivolumab plus ipilimumab: Musashino study-irAE. *2022Annals of Oncology* 33:S1488

3) 日本の高リスク転移性ホルモン療法感受性前立腺癌患者の臨床転帰を観察するレジストリ試験(J-ROCK 試験)(申請番号:2257-IV)

研究実績:昨年の学会発表の内容を発展させ、国際誌への報告を行った。

実績1) Uemura H, Matsumoto R, Mizokami A, Miyake H, Uemura H, Matsuyama H, Nakamura K, Saito K, Kawakita M, Takeshita H, Koroki Y, Ono S, Murota M, Ito M, Kamoto T, Fujimoto K. Treatment strategies and outcomes

in a long-term registry study of patients with high-risk metastatic hormone-naïve prostate cancer in Japan: An interim analysis of the J-ROCK study. *Int J Urol.* 2022 Sep;29(9):1061-1070. doi: 10.1111/iju.14993. Epub 2022 Aug 26. PMID: 36018236; PMCID: PMC9540816.

- 4) 進行腎癌に対する薬物療法の効果に DPP4 阻害薬が与える影響：多施設共同臨床研究（申請番号：総 2021-167）
研究実績：昨年度の研究実績に基づき、腎がんの薬剤抵抗性に DPP4 阻害薬が有効である可能性をしめし報告した。
実績 1) 鎌田 修平、滑川 剛史、池田 和博、鈴木 貴、香川 誠、竹下 英毅、矢野 晶大、市川 智彦、堀江 公仁子、川上 理、井上 聡. 2 型糖尿病治療薬である DPP4 阻害薬は腎がんのチロシンキナーゼ阻害薬治療抵抗性を緩和する. 第 31 回泌尿器科分子・細胞研究会 2022 年 2 月 26 日、Web
- 5) 転移を有する前立腺癌に関する多施設共同後ろ向き臨床研究：初回ホルモン療法の効果判定を活用した予後予測解析（申請番号 2559）
研究実績：現在進行中
- 6) 精巣捻転症における陰囊冷却+精巣白膜切開法+虚血ポストコンディショニング法の精巣温存効果・安全性の検討（申請番号 2010-II）
研究実績：精巣捻転を予測するノモグラムを国際誌に発表した。またコロナ禍における精巣捻転の診断・治療の特殊性について症例報告した。
実績 1) Arai M, Okada Y, Takeshita H et al. Rare case of a patient with testicular torsion complicated by acute pneumonia, requiring emergency surgery, during the COVID-19 pandemic. *IJU Case Rep.* 2022; 5: 99-101. <https://doi.org/10.1002/iju5.12404>.
実績 2) Takeshita H, Tachibana K, Sugiyama H, Kagawa M, Yano A, Okada Y, Morozumi M and Kawakami S. (2022), Nomogram predicting testicular torsion in Japanese patients with acute scrotal pain using physical examination findings and environmental conditions: Development and prospective external validation. *Int. J. Urol.*, 29: 42-48. <https://doi.org/10.1111/iju.14710>
実績 3) 新井 昌弘、岡田 洋平、竹下 英毅、立花 康次郎、香川 誠、中山 貴之、矢野 晶大、諸角 誠人、川上 理. COVID-19 が疑われた急性肺炎合併精巣捻転症の 1 例 *泌尿器外科*(0914-6180)35 巻 2 号 Page175(2022. 02)
- 7) T1 膀胱癌に対する経尿道的膀胱腫瘍一塊切除術の予後に関する多施設共同後ろ向き研究（申請番号 2467）
研究実績：経尿道的膀胱腫瘍一塊切除術を施行し pT1 と診断された症例の pT1 亜分類および垂直断端と 2nd TUR の腫瘍残存率ならびに再発率・進展率といった予後を検討する多施設共同研究で一塊切除の有用性を示した。
実績 1) Yanagisawa T, Sato S, Hayashida Y, Okada Y, Iwatani K, Matsukawa A, Kimura T, Takahashi H, Egawa S, Shariat SF, Miki J. Do we need repeat transurethral resection after en bloc resection for pathological T1 bladder cancer? *BJU Int.* 2023 Feb;131(2):190-197. doi: 10.1111/bju.15760. Epub 2022 May 13. PMID: 35488409

3-3. 達成度評価

3-3-1. 悪性腫瘍

新規抗癌剤、分子標的治療薬、免疫チェックポイント阻害薬、新規ホルモン治療薬などの登場により、泌尿器科領域の悪性腫瘍に対する治療が大きく変革している。当教室では、ゲノム医学研究センターと共同研究も行いながら、泌尿器進行癌における薬剤耐性のメカニズムの解明、それに基づいた新たな治療展開などについても、各学会、国際雑誌などで報告した。共同研究の内容についてはオール埼玉研究の日でも報告し、科を超えて広い分野からの質問、討議を得ることができた。以上より、本年度の目標については達成できたと評価する。

3-3-2. 腫瘍マーカー

転移性尿路上皮癌は診断から癌死まで約 1 年と予後不良の疾患であり、確立した予後予測マーカーが存在しない。血清 CYFRA 21-1 は肺扁平上皮癌のマーカーとして知られているが、当教室では尿路上皮癌における有用性に着目し、化学療法時代における CYFRA 21-1 の有用性を国際学会等で報告してきた。現在、尿路上皮癌の薬物治療は、化学療法に加え、免疫チェックポイント阻害薬が広く使用されており、免疫チェックポイント阻害薬時代における CYFRA 21-1 の有用性について検討を行っている。まだ症例の蓄積が不十分のため、その評価には至らず、十分には達成できなかった。

3-3-3. 精巣捻転症（急性陰囊症：泌尿器救急疾患）

精巣捻転症は、診断や捻転解除の緊急手術が遅れると、精巣虚血から壊死をきたし精巣を喪失する泌尿器科救急疾患である。生命には影響を及ぼさないが、思春期に好発するため、精巣喪失が起こった場合、心的外傷を来したり訴訟問題に発展したりする可能性があり、泌尿器科医・小児科医にとって特に注意すべき社会的に重要な疾患である。急激な陰囊痛とともに発症するが、特異的な所見に乏しく、診断は時に困難であり、試験切開が必要になることもある。簡便かつ有用な診断法と、捻転した虚血精巣を可能な限り温存する方法が求められており、当教室ではその開発に取り組んで

いる。前向きに症例を蓄積し、精巣捻転の予測プログラムを新たに開発し、国際誌へ報告した。精巣温存の可否については長期間の観察が必要であるが本年度の目標を十分達成できた。

3-3-4. 排尿障害

令和3年度埼玉大学との包括連携協定に基づく共同研究支援 Grant (21-J-01)「泌尿器系疾患診断のための尿流計測技術およびモニタリングシステムの開発」について共同研究者と試作・討議を重ね、実用にむけ開発中である。実用には至っていないが、引き続き継続研究中であり、本年度の目標は達成できた。

3-3-5. 経尿道的手術

膀胱全摘を回避し、内視鏡手術による根治を目指す術式である「経尿道的膀胱腫瘍一塊切除術」を実施した結果を検証し、安全かつ有効であることを示した。目標を達成できたと評価する。

3-4. 次年度改善計画

各関連分野において、国内学会・国際学会、及び国内雑誌・国際雑誌で継続的に発表されており、引き続き発展的に研究をすすめていく。また大学内の他教室との共同研究、他施設との共同研究も精力的に推進し、日本の泌尿器科学の発展に努めていく予定である。

4. 診療

尿路感染症、尿路結石症、泌尿器科悪性腫瘍、排尿障害、泌尿器救急疾患（急性陰嚢症）を網羅した総合泌尿器科として診療にあたる。QOLを考慮した尿路癌に対する低侵襲手術（ロボット支援手術、腹腔鏡手術、ミニマム創内視鏡手術）、尿路結石症に対するレーザーなどのエネルギーを用いた内視鏡的尿路結石手術は安定した成績が得られている。次年度も各人の診療能力を向上させ、科内の協力をはかることにより、グループとして泌尿器科全体の診療能力を向上させることを目標とする。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

川上 理

日本泌尿器科学会雑誌 編集委員

International Journal of Urology 編集委員

泌尿器外科 編集委員

日本泌尿器科学会 前立腺癌診療ガイドライン第4版改訂委員会協力委員

日本泌尿器科学会埼玉地方会 副会長

竹下 英毅

日本泌尿器科学会急性陰嚢症診療ガイドライン委員 2021年～

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

竹下英毅、中山貴之、香川誠

埼玉県常盤高等学校非常勤講師。講義を担当した。

岡田洋平

公益社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構 医学系 OSCE 課題作成・管理小委員会委員

埼玉医科大学医学教育センター総合医療センターランチ副ランチ長

埼玉医科大学医学教育センター卒前医学教育部門員及び臨床実習推進室員

埼玉医科大学卒業教育委員

埼玉医科大学 IR センター運営会議委員

臨床実習後 OSCE 機構派遣監督者【日本医科大学】

医学系 OSCE 合否判定基準 WG 合否判定基準設定作業 (Angoff 合宿) 委員

共用試験医学系臨床実習前 OSCE 認定評価者更新 (医療面接領域; 切り替え) 講習会運営委員

高大連携 (埼玉医科大学一開智未来高校) 出張授業

埼玉医科大学医学部入試課 週刊朝日 MOOK 取材対応

令和4年度 埼玉医科大学 第二回指定学外施設懇談会司会進行

令和4年度 埼玉・群馬未来医療人材育成シンポジウム司会進行

竹下 英毅

院内スタッフ、研修医むけセミナーを担当した。

排尿障害をきたす疾患. 排尿ケア リンクナース講義 2022/9/7

実践! 血尿/排尿障害. 研修医アフタヌーンセミナー 2022/9/8

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

学会発表

1. 新井 昌弘、竹下 英毅、立花 康次郎、香川 誠、中山 貴之、岡田 洋平、矢野 晶大、諸角 誠人、川上 理、膀胱穿孔を伴った膀胱異物の一例. 第 87 回日本泌尿器科学会埼玉地方会、2022 年 2 月 9 日、埼玉
2. 北山 沙知、池田 和博、川上 理、井上 聡、堀江 公仁子. 患者由来細胞・移植モデルを活用した精巣がんシスプラチン耐性関連因子の探索. 第 31 回泌尿器科分子・細胞研究会、2022 年 2 月 25 日、Web
3. 香川 誠、川上 理、平田 渉、新井 昌弘、立花 康次郎、中山 貴之、北山 沙知、竹下 英毅、矢野 晶大、岡田 洋平. 腎原発ガストリノーマの一例（第二報）. 第 88 回日本泌尿器科学会埼玉地方会、2022 年 6 月 18 日、埼玉
4. 平田 渉、竹下 英毅、新井 昌弘、立花 康次郎、香川 誠、中山 貴之、北山 沙知、矢野 晶大、岡田 洋平、諸角 誠人、山下 高久、東 守洋、田丸 淳一、川上 理. 右腎癌腎摘後 5 年で、左副腎転移との鑑別が困難であった副腎器質化血腫の 1 例. 第 88 回日本泌尿器科学会埼玉地方会、2022 年 6 月 18 日、埼玉
5. 岡田 洋平、吉益 晴夫、石橋 敬一郎、柴崎 智美、高橋 健夫、森 茂久. 医学部臨床実習の質改善を目的とした診療科間の情報共有. 第 54 回医学教育学会、2022 年 8 月 6 日、群馬
6. 中山 貴之、平田 渉、新井 昌弘、立花 康次郎、香川 誠、竹下 英毅、北山 沙知、矢野 晶大、岡田 洋平、川上 理. エアシールアクセスポートにポートサイトヘルニアを発生した症例の報告と予防法の検討. 第 36 回日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会総会、2022 年 11 月 11 日、神戸
7. Takayuki Nakayama, Hideki Takeshita, Makoto Kagawa, Satoshi Washino, Suguru Shirotake, Yuji Miura, Yoji Hyodo, Keita Izumi, Masaharu Inoue, Tomoaki Miyagawa, Masafumi Oyama, Kazutaka Saito, Yukio Kageyama, Satoru Kawakami. Prognostic significance of the mechanism of inflammatory markers in advanced renal cell carcinoma patients treated with nivolumab plus ipilimumab, ESMO Asia 2022 Congress, 2022/12/2, Singapore

論文、症例報告

1. Takeshita H, Tachibana K, Sugiyama H, Kagawa M, Yano A, Okada Y, Morozumi M, Kawakami S. Nomogram predicting testicular torsion in Japanese patients with acute scrotal pain using physical examination findings and environmental conditions: Development and prospective external validation. Int J Urol. 2022 Jan;29(1):42-48. doi: 10.1111/iju.14710. Epub 2021 Oct 2. PMID: 34599531.
2. Kitayama S, Ikeda K, Sato W, Takeshita H, Kawakami S, Inoue S, Horie K. Testis-expressed gene 11 inhibits cisplatin-induced DNA damage and contributes to chemoresistance in testicular germ cell tumor. Sci Rep. 2022 Nov 1;12(1):18423. doi: 10.1038/s41598-022-21856-3. PMID: 36319719; PMCID: PMC9626550.
3. 岡田洋平. 1973 年ナポリコレラ大流行と民間信仰. 臨床雑誌内科. 2022; 129: 149-152

【総数：論文 9 件、学会発表 12 件、ほか講演 13 件、パネリスト登壇 1 件】

6-2. 獲得研究費

竹下 英毅：平成 31 年度科学研究費 若手研究(19K18597) 「精巣捻転症における精巣温存率向上のための治療戦略」(2019-2023)

竹下 英毅：令和 3 年度埼玉大学との包括連携協定に基づく共同研究支援グラント (21-J-01)「泌尿器系疾患診断のための尿流計測技術およびモニタリングシステムの開発」

竹下 英毅. スマートフォン画像による新規尿流量測定システムの臨床応用. 令和 4 年度埼玉医科大学総合医療センター若手研究者育成研究費 (04-F-1-15) (2022/10~)

6-3. 受賞

竹下 英毅 2022/4 JUA/AUA Academic Exchange Program

水田 瞳美、竹下 英毅 2022/12 埼玉医科大学医学会奨励賞

「全身拡散強調 MRI で病勢評価し、ペムブロリズマブおよび放射線療法を含む集学的治療を行うことで完全寛解が得られた進行上部尿路上皮癌(cT4N2M0)の 1 例」

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

2023 年 1 月より日本泌尿器科学会埼玉地方会事務局を担当予定

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

「卒前教育」では講義、臨床実習を通じて学生からのフィードバックを受けつつ教育効果の高い講義及び実習を遂行した。「卒後教育」では初期臨床研修医に対して泌尿器科基本知識・手技の指導を行い、学会発表・論文作成の指導を行った。さらに内視鏡操作や手術機械の操作、ロボットコンソールのデモなど実践的な指導を取り入れた。「大学院」では当科研究テーマをもとに研究をすすめ、主要な泌尿器科関連の国内外の学会、論文での発表を継続的に行い、1名が博士課程学位を取得し、1名が博士課程学位審査を終了した。学位論文の成果はオール埼玉研究の日を含め、学会で報告し幅広い分野にまたがる討議を行うことができた。診療では、腹腔鏡手術やロボット支援手術の導入により低侵襲治療を実現し、さらに進行泌尿器癌に対してQOLを維持したより治療効果の高い集学的治療法を実践した。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

「卒前教育」は泌尿器科臨床への興味が深まるように講義内容を教室内で討議し、改善を行う。診療参加型臨床実習を実現するために、コメディカルを含め臨床実習のプログラム、および評価方法を検討する。「卒後教育」では、泌尿器科基本手技の獲得だけでなく、医師としての心構えを身につけ、患者さんに寄り添った臨床医としての成長を促す。

「大学院教育」では、学位取得後も意欲をもって研究を継続できるよう支援し、さらに学位取得者が後進の指導にあたることでさらなる発展を目指す。診療では、腹腔鏡手術やロボット支援手術の拡充をはかるとともに、日進月歩の最先端治療を積極的に取り入れ、「病気を治したい」という患者さんのお気持ちに応えることができるよう、日々最善を尽くし診療を行う。

2. 24) 眼 科

1. 構成員

- 小幡 博人 (OBATA, Hiroto) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長、教育主任、研究主任、代表指導教員 (大学院) : 角結膜疾患、眼瞼疾患、眼窩疾患、眼腫瘍、眼形成、眼病理 : 日本眼科学会専門医、博士
- 山崎 厚志 (YAMASAKI, Atsushi) : 教授 : 診療副部長、教育副主任、研究副主任、指導教員 (大学院)、網膜剥離、網膜黄斑部疾患、糖尿病網膜症 : 日本眼科学会専門医、博士
- 河井 信一郎 (KAWAI, Shin-ichiro) : 客員教授 : 未熟児網膜症、眼形成、眼薬理 : 日本眼科学会専門医、博士
- 星 太 (HOSHI, Futoshi) : 助教 : 眼科一般 : 糖尿病網膜症、日本眼科学会専門医
- 小泉 宇弘 (KOIZUMI, Takahiro) : 助教 : 大学院 : 眼科一般、網膜硝子体疾患 : 日本眼科学会専門医
- 阿部 竜三郎 (ABE, Ryuzaburou) : 助教 : 眼科一般、網膜硝子体疾患 : 日本眼科学会専門医
- 山田 布沙絵 (YAMADA, Fusae) : 助教 : 眼科一般 : 日本眼科学会専門医
- 田中 崇広 (TANAKA, Takahiro) : 助教 : 眼科一般 : 日本眼科学会専門医
- 飯淵 顕 (IIBUCHI, Ken) : 助教 : 眼科一般
- 梅田 宗希 (UMEDA, Kazuki) : 助教 : 眼科一般
- 小宮山 大輔 (KOMIYAMA, Daisuke) : 助教 : 眼科一般
- 下野 龍 (SHIMONO, Ryu) : 助教 : 眼科一般
- 柳 翔涼 (YANAGI, Shosuke) : 助教 : 眼科一般
- 村上 仁司 (MURAKAMI, Hitoshi) : 非常勤講師
- 渡辺 久 (WATANABE, Hisashi) : 非常勤講師
- 広瀬 育隆 (HIROSE, Ikutaka) : 非常勤講師
- 佐谷 充 (SATANI, Mitsuru) : 非常勤講師

2. 教育

眼科は眼球と眼付属器の疾患の予防、診断と治療、視機能回復などを主として行う外科系診療科である。

A. 卒前教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

医師国家試験合格のための知識の習得のみならず、将来、医師として知っておいて欲しい眼科の基礎知識を学ぶことを目標とする。プライマリ・ケアにおいて必要な眼科領域の疾患とその病態を理解する。

2-2. 教育実績 (担当者 : 小幡 博人)

CC step 1 は、1 週間で、細隙灯顕微鏡検査や眼底検査の実習、豚眼を用いた wet lab、外来見学、種々の眼科検査の原理の理解と体験、手術見学、医師国家試験過去問から眼科学を学ぶクルズス、英文和訳などを行った。CC step 2・3 では、これらに加え、手術助手、医師として知っておいて欲しい眼と全身疾患のクルズスなどを行った。

2-3. 達成度評価

CC step 1・2・3 は、眼科学とは何か、眼科の主要疾患と検査にはどのようなものがあるか、という観点で実習を通して知識を取得し、目標を達成できたと考える。教育スタッフが少ないなか、本学医学生のために、熱意をもって臨んだ。学生からの総合評価の平均は、3 病院全診療科の中でベスト 10 に入った。

2-4. 次年度計画

次年度は、講師、准教授などの教育のできるアカデミックスタッフの増員が必要である。

B. 卒後教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

初期研修では、医師として知っておいて欲しい眼科疾患の基礎知識の修得、各種検査の理解、外来患者の医療面接、細隙灯顕微鏡検査、眼底検査、豚眼による wet lab、手術助手などを行う。後期研修では、眼科専門医として地域住民ならびに国民の眼科医療に貢献することを目指し、眼科専門医認定試験に合格するのに十分な知識の習得と眼科専門医として相応しい手術手技の習得を中心に医療人としての基本的姿勢を身につける。

2-2. 教育実績 (担当者 : 小幡 博人)

眼科では、研修医 1 名に対し 1 名の上級医がついて、患者を受け持ち、外来、病棟、手術などの一連の診療にあたりつつ、外来医長、病棟医長、診療部長・副部長の指導、監督を受ける。下記の研修内容を主なカリキュラムの柱とする。

- (1) 眼科臨床に必要な基礎的知識、特に解剖、組織、病理の習得
- (2) 眼科診断、特に検査に関する原理の理解、技能の習得、所見の読み方
- (3) 眼科治療に関する知識と技能の習得：関与する眼科手術 100 例以上（外眼手術、内眼手術、およびレーザー手術がそれぞれ執刀者として 20 例以上を含む）
- (4) 学会、集談会、講演会などの出席
- (5) 英語論文の抄読会での発表
- (6) 眼科に関する論文を筆頭著者として 1 篇以上
- (7) 学会（集談会など学会認定の会を含む）発表を演者として 2 報以上

2-3. 達成度評価

各自が手術手技の習得に積極的に取り組んだ。臨床研究を行い、学会発表を行った。知識習得のためのクルズス、抄読会を定期的に行った。眼科の主要な疾患の知識と検査の意義をしっかりと身につけてもらうという観点で目標は概ね達成できた。眼科部門システムを利用した症例検討会やカンファレンスを行った。

2-4. 次年度計画

次年度も、クルズス、眼科部門システムを利用した症例検討会やカンファレンスを定期的に行い、眼科医に必要な知識、経験、技術を高めていく。

C. 大学院教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

眼科は専門性の高い診療科であるが、さらに専門の細分化が顕著になってきている。このような流れの中で、広い視野を持ち、眼科診療全般を俯瞰できる基礎的能力を養い、ひいては眼科学の発展と進歩に貢献し得る人材を育成することを目標とする。

2-2. 教育内容

- (1) 眼科医として必要な解剖、組織、生理、病理などについて講義を受ける。
- (2) 臨床医として外来・病棟で診療にあたり、眼科の内科的・外科的両側面についての理解と診療技術の習得をすすめる。
- (3) 手術手技修得の一環として、白内障手術、網膜硝子体手術、眼瞼・結膜手術、レーザー治療などの理論と実際について学ぶ。
- (4) 基礎研究や臨床研究の成果を学会発表し、論文執筆を通して、論理的・科学的思考を養い、専門性を高める。

2-3. 達成度評価

臨床研究を行い、学会発表を行った。大学院生 2 人の指導を行った。研究テーマのデータ収集、解析を行った。

2-4. 次年度改善計画

次年度は、論文を執筆し、雑誌に投稿する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

個々の患者の病態にあったより良い治療を目指して、臨床研究を行った。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 翼状片の病態と治療
2. 眼部腫瘍の臨床病理学的研究
3. 眼球の生態計測に関する研究：田中崇広(院)
4. 甲状腺眼症の MRI 所見と甲状腺自己抗体の関連：小泉宇弘(院)
5. 網膜黄斑部疾患の病態と治療

3-3. 達成度評価

上記 1)-5) に関して学会や研究会で発表を行った。研究面は講師・准教授がいなかったため臨床や教育に時間が費やされることが多く、十分な時間がとれない。

3-4. 次年度計画

論文の作成が少ないので次年度は積極的に publish していく。今後も臨床に直結した研究を推し進めていく。

4. 診療

当科の診療は、角膜、結膜、眼瞼、眼窩などの前眼部・外眼部疾患の診療と網膜硝子体疾患や黄斑疾患の診療を 2 つの専門の柱とする。また、未熟児網膜症と眼部の腫瘍に関する症例が多いのは、他の病院にない特色である。具体的

には、難易度の高い白内障手術、全身麻酔が必要な白内障手術、網膜剥離、黄斑前膜、黄斑円孔の手術、若年性の網膜剥離や増殖糖尿病網膜症などの難易度の高い網膜硝子体手術、眼部腫瘍の治療、眼内レンズ強膜内固定術、未熟児網膜症の治療など大学病院として高度医療の提供を行った。中央手術室の手術日を毎日できるように増やした結果、手術件数が増加した。初診患者数、外来および入院の診療稼動額も増加した。次年度は網膜硝子体外科が専門の新しい教授が着任するので、診療科のさらなる発展が期待される。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Japanese Journal of Ophthalmology, Section Editor: 小幡博人

Japanese Journal of Ophthalmology、日本眼科学会雑誌の査読: 小幡博人

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本眼科学会評議員: 小幡博人

日本眼科学会専門医制度委員会委員: 小幡博人

日本眼科学会試験委員会副委員長: 小幡博人

日本眼腫瘍学会理事: 小幡博人

日本眼病理研究会世話人: 小幡博人

日本病理学会コンサルテーションシステム臓器別チーム責任者: 小幡博人

日本臨床分子形態学会評議員: 小幡博人

日本アイバンク協会 海外研究助成制度選考委員: 小幡博人

網膜芽細胞腫全国登録委員会: 小幡博人

マイボーム腺機能不全診療ガイドライン作成委員: 小幡博人

北関東医学会評議員: 小幡博人

埼玉県眼科医会顧問: 小幡博人

埼玉県眼科医会理事: 山崎厚志

埼玉県眼科医会理事: 河井信一郎

埼玉臨床眼科セミナー世話人: 小幡博人

彩の国眼科研究会世話人: 小幡博人

Visual Function Seminar in Saitama 世話人: 小幡博人

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 飯渕顕、小幡博人、田中崇広、小泉宇弘、阿部竜三郎、山田布沙絵、星太、山崎厚志: 眼窩内容除去術を施行した眼瞼悪性腫瘍の3例. 臨床眼科76:939-944, 2022
- ② 小幡博人: 眼表面腫瘍に対する局所化学療法の現状と未来. 日眼会誌127: 3-5, 2023
- ③ 小幡博人、臼井智彦: マイボーム腺機能不全の病態生理はどのように考えられているか? マイボーム腺機能不全診療ガイドライン. 日眼会誌127: 127-136, 2023
- ④ 小幡博人: 角膜知覚検査. 今日の眼疾患治療指針 第4版. 医学書院、東京、71-72、2022
- ⑤ 小幡博人、田中崇広: 白内障手術に必要な解剖と理論. 白内障手術、眼科グラフィック 2022年増刊、70-77、2022
- ⑥ 梅田宗希、山田布沙絵、山崎厚志、小幡博人: 霰粒腫として治療されていたメルケル細胞癌の1例. 第125回日本眼科学会総会、大阪、ポスター発表、2022. 4. 14-17
- ⑦ 小宮山大輔、小泉宇弘、山崎厚志、小幡博人: ぶどう膜炎症状を呈したCD5陽性びまん性大細胞型B細胞リンパ腫の虹彩転移の1例. 第125回日本眼科学会総会、大阪、ポスター発表、2022. 4. 14-17
- ⑧ 下野龍、阿部竜三郎、星太、山崎厚志、小幡博人: 両側巨大内頸動脈瘤による圧迫性視神経症の1例. 第68回埼玉県眼科集談会、web開催、2022. 9. 4.
- ⑨ 田中崇広、丸林彩子、山崎厚志、小幡博人: 短眼軸眼と正常眼軸眼の眼球生態計測における相違. 第76回日本臨床眼科学会、東京、一般講演、2022. 10. 15.

- ⑩ 下野龍、阿部竜三郎、星太、山崎厚志、小幡博人：緑内障と診断されていた両側巨大内頸動脈瘤による圧迫性視神経症の1例. 第76回日本臨床眼科学会、東京、ポスター発表、2022.10.13-16.

【総数：論文1件、著書・総説10件、学会発表5件、講演4件】

6-2. 獲得研究費

参天製薬：甲状腺眼症における甲状腺自己抗体と外眼筋所見の関連

6-3. 受賞

Best Doctors in Japan 2022-2023：小幡博人

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第5回 Visual Function Seminar in Saitama、web開催、2023.3.24.

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教室員が少ないなか、数多くの患者の診療を行ってきた。中央手術室の手術日を毎日できるように増やした結果、手術件数が増加した。また、初診患者数、外来および入院の診療稼動額なども前年度に比べて増加した。過去4年と比べても最も数値が高くなった。卒前教育は、年間を通して熱意をもって臨んだ結果、学生からの評価も高かった。研究に関しては、講師、准教授などの研究が指導できるスタッフの不足と臨床と教育に費やされる時間が多いという問題があり、十分とは言えない。一昨年度から、部門システム（電子カルテ、画像ファイリングシステム）や広角眼底カメラ、OCTアンギオグラフィーという新しい診療機器が導入され、効率の良い診療と患者サービスの向上につながった。また、部門システムや新しい診療機器は卒前・卒後教育にも有益であった。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

より多くの疾患、難症例に対応し、患者さんに満足して頂けるように、大学病院としての使命を果たしていく。臨床研究の結果を論文として発表する。医学生、初期研修医、専攻医、大学院生の教育に引き続き力を注ぎ、良い人材を育成していく。

2. 25) 耳鼻咽喉科

1. 構成員

菊地 茂 (KIKUCHI, Shigeru) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 代表指導教員 (大学院) : 耳科学、鼻科学、頭頸部外科学 : 博士

二藤隆春 (NITO, Takaharu) : 准教授 : 指導教員 (大学院) : 診療副部長、病棟医長 : 喉頭科学、気管食道科学 : 博士

大木雅文 (OHKI, Masafumi) : 准教授 : 指導教員 (大学院) : 診療副部長、外来医長、研究主任 : 耳科学、平衡神経科学 : 博士

田中 是 (TANAKA, Sunao) : 講師 : 教育主任 : 鼻科学、気管食道科学 : 博士

竹内成夫 (TAKENOUCI, Shigeo) : 助教

杉木 司 (SUGIKI, Tsukasa) : 助教

堀越友美 (HORIKOSHI, Tomomi) : 助教

高嶋正利 (TAKASHIMA, Masatoshi) : 助教

藤網 舞 (FUJITSUNA, Mai) : 助教

多賀谷亮甫 (TAGAYA, Ryosuke) : 助教

佐野奈央 (SANO, Nao) : 助教

石川翔也 (ISHIKAWA, Shoya) : 助教

井口元貴 (IGUCHI, Genki) : 助教

河野由香里 (KONO, Yukari) : 助教

山本レナ (YAMAMOTO, Rena) : 助教

坂田英明 (SAKATA, Hideaki) 客員教授 : 博士

大畑 敦 (OHATA, Atsushi) : 客員准教授 : 博士

青木大輔 (AOKI, Daisuke) : 非常勤講師 : 博士

尾関英徳 (OZEKI, Hidenori) : 非常勤講師 : 博士

重田恵一 (SHIGETA, Keiichi) : 非常勤講師 : 博士

林 聡子 (HAYASHI Satoko) : 非常勤医師

大野俊哉 (OHNO Toshiya) : 非常勤医師 : 博士

馬場有加 (BABA, Yuka) : 非常勤医師

石川淳一 (ISHIKAWA, Junichi) : 非常勤医師

仲山佑果 (NAKAYAMA, Yuka) : 非常勤医師

堀越友美 (HORIKOSHI, Tomomi) : 非常勤医師

望月 慧 (MOCHIZUKI, Kei) : 非常勤医師

葉山奈々 (HAYAMA, Nana) : 非常勤医師

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

日常診療に追われる毎日であるが、本来優れた臨床教育は豊富な症例から得られるものであり、本基本学科では卒前教育においても卒後教育においても懇切丁寧に指導し、耳鼻咽喉科の重要性和魅力を伝えるように努めている。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育においては、令和4年度は3年呼吸器ユニット (菊地、二藤)、4年感覚器ユニット (大木、大畑)、6年感覚器ユニット (菊地) を担当した。埼玉医科大学総合医療センター看護専門学校の講義を菊地が担当した。新臨床研修制度も18年目を迎え、十名前後のローテーターが初期研修における選択科目として耳鼻咽喉科を選択し研修した。卒後教育においては専攻医 (望月、藤網、多賀谷、佐野) に対しては日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会の認定専門医制度に従って行き、学会認定専門医の資格習得を目的とし、医局全体でこれをサポートした。さらに、手術報告会、症例検討会などを頻回に行い、耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の優れたオールラウンドプレーヤーとなるための教育を日々行っている。

2-3. 達成度評価

卒前教育においては、講義・BSLともにカラーアトラスを付けた資料 (プリント) を配布し、好評であった。BSLにおいては指導者と学生がグループとなって診療にあたり、手術、外来、病棟の各実習、画像診断のクルズスなど、日常の講義や学習では学べないことを十分に指導できたかと思う。また卒後教育においても初期研修医に対する教育もある程度実習成果が得られたと思う。半面、若手医師が研究成果を学会発表、論文発表という形で公表する機会がやや少なかったかと思う。

2-4. 次年度改善計画

次年度においては、卒前教育では機能外科としての耳鼻咽喉科を理解してもらうため、オリジナルなアトラスや動画

などを作成し供覧したい。また、助教以下の教員にも積極的に教育に寄与してもうように指導したい。さらに、卒後教育では多数の症例に触れてもらい、丁寧にかつ熱心に指導し、その成果を学会発表や論文発表の形で積極的に公表したい。

3. 研究

3-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

本基本学科では豊富で多岐にわたる臨床例を背景とした臨床研究を中心に研究を行っている。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

1. 音声・嚥下医学に関する研究（二藤）

音声障害に対する音響分析、嚥下障害に対する外科的治療の開発に取り組んだ。

2. 平衡神経科学に関する研究（大木）

VEMP や head impulse test など新しい前庭機能検査の臨床応用を行った。

3. 耳鼻咽喉科領域の感染症の研究（菊地、田中）

深頸部感染症や急性喉頭蓋炎などの重篤な感染症についての臨床的解析を行った。

3-3. 達成度評価

咽喉頭疾患（音声障害、嚥下障害）の解析、神経耳科疾患（末梢性ならびに中枢性平衡障害、顔面神経麻痺、急性感音難聴）の解析、音声医学、嚥下医学、副鼻腔内視鏡治療、深頸部感染症、急性喉頭蓋炎などの臨床研究を中心に研究を進めた。しかし、その成果を学会発表や論文発表にする機会がやや少なかったように思う。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえて、耳鼻咽喉科領域の炎症性疾患、神経耳科領域の疾患、音声・嚥下領域の疾患に関する臨床的解析をさらに進めていき、その成果を国内外に発表していきたい。

4. 診療

令和4年度において取り扱った疾患は、急性感音難聴、慢性中耳炎、内耳性めまいなどの耳疾患、慢性副鼻腔炎などの鼻疾患、扁桃・アデノイドなどの咽頭疾患、嚥下障害・喉頭癌・声帯ポリープなどの喉頭疾患が挙げられる。さらに唾液腺疾患、甲状腺疾患、深頸部感染症などの頸部の症例についても積極的に治療を行った。このような豊富で多彩な症例へ対応可能な点は当科の特長であり、次年度以降も安全で質の高い耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の医療を提供したい。

5. その他

5-1. 自治体，政府関連委員の有無：該当なし

5-2. 学術誌，編集委員，査読委員の有無

菊地 茂：J O H N S (Editor)

菊地 茂：日本耳鼻咽喉科学会会報（査読委員）

菊地 茂：日本鼻科学会誌（査読委員）

菊地 茂：頭頸部外科学会誌（査読委員）

菊地 茂：Auris・Nasus・Larynx（査読委員）

5-3. その他，社会的あるいは医学貢献に関わる業務

埼玉感染症アレルギー研究会の主催、埼玉県耳鼻咽喉科医会、川越市医師会、東入間医師会との病診連携、学術講演会共催など。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表

①Sanuki T, Oridate N, Tateya I, Nito T, Mizoguchi K, Tanabe K. Validity of intraoperative voice monitoring undergoing type 2 thyroplasty with titanium bridges for adductor spasmodic dysphonia. Laryngoscope Investig Otolaryngol 7: 1481-1490, 2022

②Sugito R, Yamauchi A, Sato T, Goto T, Ueha R, Nito T, Yamasoba T. Sex-and Age-Based Etiological Analysis of 2901 Patients With Dysphonia in a Japanese Tertiary Medical Institute. J Voice 2022 Sep 6;S0892-1997(22)00236-3. doi: 10.1016/j.jvoice.2022.08.003.

③大木雅文：顔面神経麻痺患者における側頭骨内顔面神経のCTでの評価. Facial N Res Jpn 42:108-110, 2022

④菊地茂：耳鼻咽喉科的minor emergency 急性喉頭蓋炎. Medical Practice 39巻 臨増 214-215, 2022

⑤大木 雅文：往診時の診療のポイント 咽頭痛. JOHNS39(3):285-287, 2023

⑥大木 雅文：：重心動揺検査. 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 94(5): 101-108, 2022

⑦二藤隆春：音声障害の検査 聴覚印象評価. 耳鼻咽喉科・頭頸部外科94(5): 274-276, 2022

- ⑧二藤隆春：嚥下専門外来を開設するノウハウ．耳鼻咽喉科 1；770-775, 2022
- ⑨二藤隆春：音声障害の診断と治療 音声障害の診断．日耳鼻会報 125；1028-1031, 2022
- ⑩二藤隆春、杉本真美、熊井良彦、平田 文：食道癌術後の嚥下障害．嚥下医学 11；42-51, 2022

【総数：論文 14 件、学会発表 11 件、講演 10 件】

6-2. 獲得研究費：該当なし

6-3. 受賞：該当なし

6-4. 特許，実用新案：該当なし

6-5. 学会，研究会，セミナー等の開催実績：

研究会開催：第 18 回埼玉耳鼻咽喉科感染症・アレルギー研究会、2023 年 10 月 27 日、さいたま市

7. 自己点検・自己評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育においては、講義・BSL とともにカラーアトラスを付けた資料を配布し、好評であった。BSL においては指導者と学生がグループとなって診療にあたり、手術、外来、病棟の各実習、画像診断のクルズスなど、日常の講義や学習では学べないことを十分に指導できたかと思う。また卒業教育においても初期研修医に対する教育もある程度実習成果が得られたと思う。研究面においては、咽喉頭疾患や神経耳科疾患の解析、音声医学、嚥下医学、副鼻腔内視鏡治療、深頸部感染症、急性喉頭蓋炎などの臨床研究を中心に研究を進めたが、その成果を学会発表や論文発表にする機会がやや少なかったように思う。診療においては耳鼻咽喉科全般の多岐にわたる疾患に対して多くの症例に対応してきた。また、令和 3 年度も医療安全の面から、耳鼻咽喉科内におけるチーム医療と責任体制を高め、毎朝 8 時より教授以下医局員全員と看護師による病棟回診を行った。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度においては、卒前教育では機能外科としての耳鼻咽喉科を理解してもらうため、オリジナルなアトラスや動画などをさらに充実させたい。また、助教以下の教員にも積極的に教育に寄与してもらうように指導したい。さらに、卒業教育では多数の症例に触れてもらい、丁寧にかつ熱心に指導したい。研究面では、耳鼻咽喉科領域の炎症性疾患、神経耳科領域の疾患、音声・嚥下領域の疾患に関する臨床的解析をさらに進めていき、その成果を国内外に発表していきたい。

令和 5 年度も患者さんと地域のために安全・安心な医療を提供し続け、患者さんのために診療チームが一丸となって頑張りたいと考えている。

2. 26) (1) 産婦人科 (産婦人科)

1. 構成員

高井 泰 (TAKAI, Yasushi) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 研究主任 : 教育副主任 : 代表指導教員 (大学院) : 臨床遺伝学, 生殖内分泌, 不妊症治療学, 内視鏡手術 : 博士
長井 智則 (NAGAI, Tomonori) : 教授 : 指導教員 (大学院) : 教育副主任 : 外来医長 : 研究員 : 婦人科腫瘍学 : 博士
關 博之 (SEKI, Hiroyuki) : 客員教授 : 周産期学, 妊娠高血圧症候群, プロスタグランジン代謝, 産婦人科手術学 : 博士
馬場 一憲 (BABA, Kazunori) : 客員教授 : 胎児医学, 周産期医学, 超音波診断, 医用電子工学 : 博士
竹田 省 (TAKEDA, Satoru) : 客員教授 : 産科救急医学, 婦人科腫瘍治療学, 周産期医学 : 博士
高木健次郎 (TAKAGI, Kenjiro) : 客員教授 : 周産期医学, 婦人科一般 : 博士
松永 茂剛 (MATSUNAGA, Shigetaka) : 准教授 : 研究副主任 : 研修医長 : 産科大量出血 : 博士
林 直樹 (HAYASHI, Naoki) : 客員准教授 : 不妊症治療学, 内視鏡手術 : 博士
赤堀 太一 (AKAHORI, Taichi) : 講師 : 病棟医長 : 教育員 : 研究員 : 婦人科腫瘍学 : 博士
板谷 雪子 (ITAYA, Yukiko) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員
一瀬俊一郎 (ICHINOSE, Syunitiro) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員
魚谷 隆弘 (UOTANI, Takahiro) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員
黒瀬 喜子 (KUROSE, Yoshiko) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員
木崎雄一朗 (KIZAKI Yuuichirou) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員
重松 幸佑 (SHIGEMATSU, Kosuke) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員
黄 海鵬 (HUANG, HAIPENG) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員
山田 祐士 (YAMADA, Yuji) : 非常勤講師 : 博士
高木 章美 (TAKAGI, Akiyoshi) : 非常勤講師 : 博士
山本 智子 (YAMAMOTO, Tomoko) : 非常勤講師 : 博士
斎藤 麻紀 (SAITO, Maki) : 非常勤講師 : 博士
岩田 睦 (IWATA, Atsushi) : 非常勤講師 : 博士
松村 英祥 (MATSUMURA, Hideyoshi) : 非常勤講師 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

深い愛情と奉仕の精神を持ち、鋭い洞察力によって自ら問題を見つけ考え探求していく、優れた実施臨床医家の育成をより一層めざすことを目標とする。特に、学生、初期研修医に対しては、産婦人科の魅力ややりがいを体得させ、なり手の減少が著しい産婦人科医を目指す者を増やすことを目標に教育活動を行った。

令和4年度は当院は周産期、生殖内分泌、婦人科腫瘍、女性ヘルスケアを一つの施設で総合的に研修できる施設の利点を生かし、若手医師を中心に産婦人科全般を積極的に経験することを励行している。特に、ロボット支援下手術や内視鏡手術など各種手術、生殖補助技術、合併症や重症症例の管理、生命の誕生する出産などを経験し管理、治療を通し、やりがい、達成感など体得することでモチベーションを高く持ってもらえるように、スタッフをはじめ医局員一同、学生、初期・後期研修に関わっていく。

2-2. 教育実績 (担当者)

[卒前教育]

本学医学部学生、短期大学学生、看護専門学校学生を対象に講義を行った。医学部5年生のCC Step1とCC Step2、6年生のCC Step2を行った。特に2週間のCC Step1では、下記のように明確な目標を示し、医局員全員が学生教育に尽力した。

◎2週間のCC Step1期間中に最低限行うべきこと

1. 正常分娩に立ち会う
2. 婦人科リプロ外来、婦人科腫瘍外来、産科外来を見学する (各半日程度)
3. 帝王切開手術、子宮全摘手術、腹腔鏡下手術に立ち会う
4. 生殖補助技術の現場を見学する
5. 不妊治療の基本概念を理解するため不妊症患者向けDVD『望妊治療』を視聴する
6. MFICU病棟、母子3階病棟、3階西病棟 (婦人科病棟) の朝の病棟医回診に参加する
7. 割り当てられた医師チームの一員として診療を見学・実習する

8. 割り当てられた産科1症例、婦人科1症例に関して、それぞれA4 2-3枚程度（計4-6枚程度）のレポートにまとめて提出する
9. 医局カンファレンスに参加する
10. クルズに参加する

◎2週間のBSL期間中に行うクルズの担当者と内容

担当者	内容
齋藤教授／菊池教授	オリエンテーション
菊池教授	分娩の正常経過と異常分娩
齋藤教授	症例検討（各自受け持ち症例2例）
高井教授	不妊症、不育症、 婦人科救急疾患の診断と治療など

◎2週間のCC Step1の期間中により興味を深めるために参加・見学を勧める。

1. 鉗子分娩、双胎分娩帝王切開を見学する
2. ロボット支援下手術、内視鏡手術、広汎子宮全摘術などの開腹手術に立ち会う
3. 可能なら、体外受精、顕微授精の現場に立ち会う
4. ヒト卵子、精子、初期胚を観察する
5. 母体搬送、産褥搬送、緊急手術症例などを見学する

[卒後教育－前期研修医]

産婦人科専門医と後期研修医（産婦人科専攻医）3～4人で構成される医師チームの1つに配属し、チームの一員として臨床を行いながら、将来、他科医師になった場合でも必要な産婦人科領域の知識や技術を教育した。また、チームのリーダーとなれるように、医師としての責任感と自覚を持たせることを目標に、病気ではなく人としての患者に積極的に関わり向き合うことや他職種を尊重したチーム医療を行える人間性を身につけていくように指導した。興味のある者には、学会などでの発表、論文作成も積極的に行わせた。

[卒後教育－後期研修医（産婦人科専攻医）]

当センターは人口720万の埼玉県の基幹病院の一つであり、産婦人科（総合周産期母子医療センター母体胎児部門を含む）には、産婦人科領域すべての疾患の患者が多数集まってきている。また、日本周産期・新生児医学会基幹研修施設、日本婦人科腫瘍学会修練施設、日本生殖医学会研修施設、日本超音波医学会研修施設、日本産科婦人科内視鏡学会研修施設に指定されており、産婦人科領域のすべての分野において専門的な研修を受けることができる体制や人員が整っている。

これらの好条件を生かし、産婦人科専門医を長とする医師チームの1員として臨床を行うだけでなく、産婦人科専門医を目指して、周産期、腫瘍、不妊・内分泌を中心とした産婦人科領域すべての分野において、自ら診断、治療方針決定、治療ができるよう実施臨床を通じて指導を行った。さらに、周産期専門医、婦人科腫瘍専門医、生殖医療専門医、超音波専門医などのサブスペシャリティーや日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医を視野に入れて、それぞれの専門医が専門的な立場から教育を行った。

2-3. 達成度評価

教授以下、医局員全員が積極的に教育に参加した。特、種々の改善点が出てきた際には、適宜、考察し、改善を繰り返していき、CC Step1, 2, Pre CCの学生、初期研修医、後期研修医に対しては、臨床を通して十分な景観や教育を行い、今年度教育目標は十分に達成できた。

2-4. 次年度改善計画

深い愛情と奉仕の精神を持ち、鋭い洞察力によって自ら問題を見つけ考え探求していく、優れた実施臨床医家の育成をより一層めざすことを目標とする。特に、学生、初期研修医に対しては、診療参加の機会を増やし種々の処置、手技を経験できる機会をさらに増やし、産婦人科の魅力ややりがいを体験し、産婦人科、本学の魅力を知る機会を増やしていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標

腫瘍学部門では、総合周産期センターを併設した施設という特色を生かし、周産期部門とコラボレーションしたユニークな研究や、施設の特徴として多くの合併症を有する悪性腫瘍症例や高齢者の悪性腫瘍症例も多いため、こうした患者に対する安全かつ有効な治療法を確立するための研究に取り組み、臨床現場に還元するとともに、学会および論文発表、学位取得へと導く。

不妊・内分泌部門では、体外受精などの生殖補助医療の更なる発展と安全性の確立、悪性腫瘍患者の妊孕性温存を目的とした卵子・受精卵や卵巣組織の凍結保存とその応用、腹腔鏡下手術などの内視鏡下手術の更なる発展と安全性の確立などを主な研究課題として、学会および論文発表、学位取得へと導く。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

・婦人科腫瘍部門（長井、赤堀、魚谷、黒瀬、重松）

腫瘍学部門では、臨床研究として「妊娠に合併した子宮頸部上皮内新生物の取り扱いに関する研究」「妊娠に合併した卵巣悪性腫瘍の診断精度向上に関する研究」「高齢者に対する婦人科悪性腫瘍の治療に関する研究」といった研究を行っている。

・不妊・内分泌部門（高井、斉藤、一瀬、板谷、五味、黄）

妊孕性温存症例の全国データベースである日本がん・生殖医療登録システム（JOFR）を基幹研究施設として立ち上げ、妊孕性温存症例の予後や妊娠率等の成績に関する研究が進行中である。その他、短期間での卵子採取を目指したランダム・スタート法など新しい卵巣刺激法の開発と改良に関する研究を行っている。内視鏡下手術では、麻酔科との共同研究で「高度肥満症例に対する腹腔鏡下手術への HAL (Hybrid Abdominal Lifting) 法の応用とその有用性」などが進行中である。

・基礎研究（赤堀、矢部）

Hammersmith Hospital (London)、大阪バイオサイエンス研究所、東京医科歯科大学分子細胞機能学教室、慶応義塾大学腎臓内分泌代謝内科学教室、埼玉医科大学ゲノム医学センター遺伝子情報制御部門、当センター輸血細胞治療部、埼玉医科大学医学部解剖学教室、帯広畜産大学原虫病研究センター、城西大学薬学部薬科学科皮膚生理学部門、順天堂大学医学部産婦人科学教室、東京大学医学部産科婦人科学教室、加藤レディスクリニック先端生殖医学研究所、国立成育医療研究センター研究所再生医療センター、米国ノースイースタン大学生物学部などとの共同研究。近年では、卵巣組織から抽出した卵子幹細胞を用いた人工卵巣構築を目指した研究が進行中である。

3-3. 達成度評価

婦人科腫瘍学部門では、上記の研究の他、「局所再発卵巣癌に対する放射線療法の治療効果に関する研究」といった臨床研究に対し、国内外で研究成果の発表を行った。またこれらの研究内容に関して、現在、論文化を進めている。

不妊・内分泌部門では、生殖補助医療で得られた余剰の凍結胚盤胞を用いて、国内2例目となる胚性幹細胞（ES細胞）

4系列を樹立した。性同一性障害患者を対象としたヒト卵巣凍結保存技術を確立し、これから卵子幹細胞の抽出に世界で初めて成功し、内外のメディアで広く報道された。このヒト卵巣凍結保存技術は思春期前の小児がん患者に対して臨床応用され、多くの症例の妊孕性温存に対応し、国内外の学会で成果を発表している。当院が基幹施設として立ち上げた日本がん・生殖医療登録システム（JOFR）は全国150以上の施設から9000例以上の症例登録を達成し、2021年4月から国が開始した「小児・AYA世代のがん患者等の妊孕性温存療法研究促進事業」の患者登録システムとして採用され、更なる拡充が予定されている。JOFRから得られた全国規模のデータを学会や論文で報告した。その他、「子宮内膜症合併妊娠に対する経腔的穿刺」「妊孕性温存目的に投与されたレトロゾールによる卵巣破裂症例」「妊孕性温存を目的としたランダム・スタート法」などに関する学会報告、論文報告を行った。

達成度70%。

3-4. 次年度改善計画

臨床研究は着実に成果を挙げ、各学会にて成果を発表し、論文化し、学位取得を目指す。埼玉医科大学中央研究施設日高プランクの協力を仰ぎながら基礎研究も充実してきており、来年度も継続して進める。

4. 診療

婦人科・腫瘍部門：2022年度の年間の婦人科入院症例は1,332件である。また婦人科手術件数は1,603件（うちうち内視鏡手術は482件）、産婦人科救急疾患センター、がんセンターとしての機能も果たしている。2022年度の悪性腫瘍の新規症例は180例、悪性腫瘍低侵襲手術も41例実施している。ロボット支援下手術も開始して43例実施し、悪性腫瘍にも応用している。

不妊・内分泌部門：217周期の採卵と211周期の凍結融解、計428周期の生殖補助医療を実施している他、悪性腫瘍等に罹患した若年がん患者に対する生殖機能温存療法としての卵子・受精卵凍結も施行しており、大学病院ならではの多様性に富んだ不妊症診療を展開している。

その他、高齢者の骨盤臓器脱に対する新しい治療としてロボット支援下仙骨脛固定術を実施するなど、幅広い産婦人科領域に対応し、地域医療にとって不可欠な診療を行っている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

1. 埼玉県周産期医療対策協議会委員
2. 埼玉県成人病検診管理指導協議会委員
3. 埼玉県医学会運営委員
4. 埼玉県消防学校救急科教育訓練講師
5. 埼玉産婦人科研修学院講師
6. 国家試験（保健師助産師看護師）委員
7. 厚生労働省医師国家試験出題委員
8. 埼玉県不妊治療費助成事業に係る実施医療機関指定調査会・専門委員
9. 厚生労働省医師試験委員（日本語診療能力調査委員）
10. 公益財団法人日本医療機能評価機構 産科医療補償制度 原因分析委員会部会 委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

1. 日本産婦人科医会・NIPTに関するテキスト作成のための委員会・委員
2. 埼玉産科婦人科学会雑誌編集員
3. 関東連合産科婦人科学会査読委員

4. 日本産科婦人科学会 The Journal of Obstetrics and Gynaecology Research Associate Editor
5. 日本産婦人科医会研修ノート編集委員
6. Journal of Medical Ultrasonics, Editorial Board
7. 日本周産期・新生児医学会 学術委員会委員
8. 埼玉産科婦人科学会雑誌査読委員
9. American Journal of Perinatology
10. Hypertension Research in Pregnancy
- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務
 1. 日本母性衛生学会理事、埼玉県支部長
 2. 日本妊娠高血圧学会理事
 3. 日本産婦人科学会代議員
 4. 日本内分泌学会評議員
 5. 日本新生児学会評議員
 6. PSI-Japan 研究会顧問
 7. 日本産科婦人科学会教育委員会委員
 8. 日本産科婦人科学会教育委員会用語小委員会委員
 9. 日本産科婦人科学会埼玉認定医委員会委員
 10. 日本産科婦人科学会埼玉地方部会長
 11. 埼玉県母性衛生学会会長
 12. 埼玉県産婦人科医会理事、幹事
 13. 埼玉県産婦人科医会周産期研究会代表幹事
 14. 埼玉県産婦人科医会学術企画委員
 15. 埼玉県産婦人科医会医療事故安全対策委員
 16. 埼玉県医師会周産期医療運営委員会委員
 17. 埼玉県医師会母体保護法指定医審査委員会委員
 18. 埼玉県医師会母子保健委員会委員
 19. 埼玉県医師会子育て相談窓口運営委員会委員
 20. 埼玉医科大学短期大学非常勤講師
 21. 埼玉県医師会母体保護法指定医審査委員会委員
 22. 日本がん・生殖医療研究会・副理事長
 23. 日本産科婦人科学会ガイドライン婦人科外来編作成委員
 24. 厚生労働科学研究費補助金（第3次対がん総合戦略事業）「乳癌患者における妊孕性保持支援のための治療選択および患者支援プログラム・関係ガイドライン策定の開発」班・ガイドライン策定委員
 25. 関東連合産科婦人科学会庶務委員会・委員
 26. 日本産科婦人科内視鏡学会・評議員
 27. 日本生殖医学会・代議員
 28. 日本受精着床学会・評議員
 29. 日本卵子学会評議員
 30. AFSUMB（アジア超音波医学連合）Website/Newsletter Editor
 31. 日本超音波医学会理事
 32. 日本周産期・新生児医学会評議員
 33. 日本産科婦人科学会 専門医認定筆記試験問題作成委員会委員
 34. 日本脳神経超音波学会評議員
 35. 日本分娩監視研究会幹事
 36. 新胎児学研究会 世話人
 37. AFSUMB（アジア超音波医学連合）Councilor（理事）
 38. 日本脳神経超音波学会 評議員
 39. 日本母体胎児医学会 評議員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Samejima K, Takai Y, Matsunaga S, Nagai T, Kikuchi A: The safety and effectiveness of elective laparoscopic surgery for benign ovarian cysts during pregnancy—Comparison with emergency surgery. J Obstet Gynaecol Res 48:2603-2609, 2022
- ② Nakamura E, Matsunaga S, Kikuchi A, Takai Y: Comparative retrospective study on the validity of point of care testing device for massive obstetric hemorrhage: dry-hematology vs thromboelastography, Am J Obstet Gynecol MFM 5:100778, 2023
- ③ Haga M, Kanai M, Ishiguro A, Nishimura E, Minamitani Y, Iwatani A, Nishiguchi R, Miyahara N, Oka S, Sasaki A, Motojima Y, Saito K, Itoh K, Era S, Yabe S, Kikuchi A, Fuji M, Matsumoto M, Namba F, Sobajima H, Tamura M, Kabe K: Changes in in-hospital survival and long-term neurodevelopmental outcomes of extremely preterm infants: A retrospective study of a Japanese tertiary center. J Pediatr (in press)

- ④ Ishii K, Horikoshi T, Kanai M, Ishiguro A, Iwamoto Y, Ishido H, Kikuchi A, Masutani S: Transient Recovery of Complete Atrioventricular Block Due to Maternal Anti-SS-A Antibody Through Antenatal Steroid Administration After 27 Weeks of Gestation. Cureus (in press)
- ⑤ Shigematsu K, Shimizu C, Furui T, Kataoka S, Kawai K, Kishida T, Kuwahara A, Maeda N, Makino A, Mizunuma N, Morishige KI, Nakajima TE, Ota K, Ono M, Shiga N, Tada Y, Takae S, Tamura N, Watanabe C, Yumura Y, Suzuki N, Takai Y: Current Status and Issues of the Japan Oncofertility Registry: J Adolesc Young Adult Oncol. 2022 Dec 13.
- ⑥ Suzuki N, Takai Y, Yonemura M, Negoro H, Motonaga S, Fujishiro N, Nakamura E, Takae S, Yoshida S, Uesugi K, Ohira T: Katsura A, Fujiwara M, Horiguchi I, Kosaki K, Onodera H. Nishiyama H: Guidance on the need for contraception related to use of pharmaceuticals: the Japan Agency for Medical Research and Development Study Group for providing information on the proper use of pharmaceuticals in patients with reproductive potential: Int J Clin Oncol. 2022 May;27(5):829-839.
- ⑦ Yuichiro Kizaki, Kouki Samejima, Shigetaka Matsunaga, Tomonori Nagai, Yasushi Takai An old uterine rupture repaired 2 months postpartum using laparoscopy aided by hysteroscopy: A case report Laparoscopic, Endoscopic and Robotic Surgery 2022. 07; inpress.
- ⑧ 五味陽亮、菊池昭彦：胎児異常（先天性横隔膜ヘルニア）—帝王切開、周産期医学、52:1706-1708, 2022
- ⑨ 菊池昭彦：「脳性麻痺事例における注意すべき胎児心拍数陣痛図所見—妊娠・分娩管理を行う産科医・助産師・看護師に向けて—」、令和4年度 埼玉県産婦人科医会メディカルスタッフ研修会 「分娩監視装置モニターの見方と対応」講習会、さいたま、12月、2022
- ⑩ 菊池昭彦：「他科の皆様にも楽しんでいただく産科超音波」、日本超音波医学会第32回四国地方会、徳島、10月、2022

【総数：論文 45 件、著書 5 件、学会発表 42 件、講演 17 件】

6-2. 獲得研究費

厚生労働科学研究費 がん対策推進総合研究事業 19EA1015 (研究分担者：高井泰)
 厚生労働科学研究費 がん対策推進総合研究事業 20EA1004 (研究分担者：高井泰)
 厚生労働科学研究費 健やか次世代育成総合研究事業 19DA1004 (研究分担者：高井泰)
 AMED 医薬品等規制調和・評価研究事業 20mk0101139h0002 (研究分担者：高井泰)
 AMED 革新的がん医療実用化研究事業 20ck0106592h0001 (研究分担者：關 博之)
 文部科学省科学研究費 基盤研究(C) 20K09629 (研究代表者：赤堀太一)
 文部科学省科学研究費 基盤研究(C) 19K09830 (研究代表者：菊池昭彦)
 文部科学省科学研究費 基盤研究(C) 20K09606 (研究分担者：菊池昭彦)
 厚生労働科学研究費 女性の健康の包括的支援政策研究事業 20FB1001 (研究分担者：菊池昭彦)

6-3. 受賞

坂口史奈、岡野真大、助川幸、石戸博隆、成田達哉、江良澄子、赤堀太一、矢部慎一郎、松永茂剛、長井智則、齋藤正博、菊池昭彦、高井泰：「経胎盤的抗不整脈薬治療が有効であった胎児頻脈性不整脈の一例」、第101回埼玉県産婦人科医会・埼玉産科婦人科学会令和4年度後期学術集会、さいたま、11月、2022

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

埼玉県周産期医療関係者育成研修事業研修会
 埼玉県不妊専門相談センター事業研修会
 がん妊孕性温存治療研究会
 第10回新胎児学研究会(会長 菊池昭彦、川越)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

腫瘍学部門では、県内屈指のがん診療連携拠点病院であり、また総合周産期センターを併設した施設という特色をいかし、臨床、研究、教育に力を注いでいる。不妊・内分泌部門では、体外受精などの生殖補助医療の更なる発展と安全性の確立、悪性腫瘍患者の妊孕性温存、腹腔鏡下手術などの内視鏡下手術の更なる発展と安全性の確立のため日々努力している。県内の医療機関から期待や依頼が年々急速に増加してきており、これらのニーズに応えることができているのは、医師としての良心のもと、一人一人の献身的な努力にほかならない。教育に関しては初期、後期研修医、学生教育にスタッフが熱心に参加している。

研究面では、当センターならではの、豊富かつ多彩な症例経験から臨床研究を積極的に行ない、学会発表、論文発表などを指導し多くの実績を重ね上げてきている。全国でも多彩な症例の報告や先進的な治療を行なう施設と注目されている。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく次年度の改善計画

①2014年に子宮体がん腹腔鏡下手術が保険収載となり、当科でも2017年に保険診療が可能となり、大きな合併症もなく順調に症例数が増えている。糖尿病などの合併症症例や肥満症例など当科の強みが生かせるハイリスク症例に対

しても、安全性に配慮しながら施行していきたい。

②2018年度からは、子宮頸がんに対する腹腔鏡下手術も保険適用となったが、開腹術に比べて治療成績が不良であるとのエビデンスがある。現在、治療成績を改善する取り組みが国内外で進められているが、当科ではこうした動きを注視しつつ、保険診療を目指して施設基準及び実施責任医師の要件等を満たすために手続きを進めていく所存である。

③2016年にプレストケア科、消化管・一般外科と協力して、遺伝性乳がん卵巣癌（HBOC）やリンチ症候群などを扱う家族性腫瘍外来が発足し、予防的卵巣・卵管切除術の倫理委員会承認や医務課での診療費設定が完了した。2017年度には埼玉医科大学3病院で認定遺伝カウンセラーを雇用し、臨床遺伝診療部が発足した。2020年度からは予防的卵巣・卵管切除術（RRSO）が保険適用となったため、院内各所と連携しながら積極的に取り組んでいる。なお、本学国際医療センターではRRSOを予防的乳腺切除術（RRM）を同時施行することも可能となっているが、RRMの施設基準における「乳房MRI加算」の施設要件を満たすことが放射線科のマニパワー上難しいため、引き続き検討中である。

④抗がん剤や放射線療法による卵巣機能廃絶に対して卵子凍結や卵巣組織凍結などを行う、「がん・生殖医療」が注目されてきている。当科診療部長である高井は日本がん・生殖医療研究会副理事長としてその普及に取り組んでいる。また、当科には生殖医療専門医研修施設としての実績の蓄積がある。2016年には埼玉医大3病院を中心として埼玉県がん・生殖医療ネットワーク（SORNET）を設立し、県内のがん治療施設からの相談や患者紹介を受けており、2018年度からは埼玉県からの公的支援を受けている。2022年度からはがん診療連携拠点病院等の要件にがん・生殖医療ネットワークへの参加が明記されたため、今後も適応や安全性に配慮しながら症例を蓄積していきたい。また、凍結した卵巣組織を用いた再生医療研究にも取り組んでおり、2020年度から文科省科学研究費にも採択して戴いた。当院細胞治療部とも連携し、こうした先進的医療にも取り組んでいきたい。

⑤がん・生殖医療を含む思春期・若年成人（AYA）がん患者に対する診療支援体制は、がん診療連携拠点病院の指定要件の一つとなる予定である。関連各診療科、がん診療支援室、がん看護認定看護師、心理士などと連携して、AYAがん患者診療支援体制を構築していきたい。なお、2018年9月には公認心理師法に基づく国家試験が施行され、心理師が国家資格となった。当院では既に多くの心理士が非常勤で雇用されているが、優秀で真摯な心理士が他施設の常勤として流出しないよう、良好な関係を維持しつつ常勤採用を目指していくことが重要と思われる。

⑥生物学的知見に基づき改良を重ねた受精卵培養システムを2016年度に導入し、2017年度から運用を開始した。これを更に2022年11月に更新し、受精卵のAI診断が可能となった。診療内容の改善はもちろんであるが、患者サービス・臨床研究・採算性など多面的なメリットが見込まれるため、本格的に活用していきたい。また、受精卵に対する遺伝学的検査、いわゆる「着床前診断」に関する臨床試験への参加するため、着床前診断に必要な機器の導入や胚培養士の研修などを開始している。

⑦埼玉医科大学病院骨盤底センターでは骨盤臓器脱に長らく取り組んでいるが、高齢者の増加に伴って患者が増加することが予想されている。また、骨盤臓器脱に対する腹腔鏡下手術がガイドラインなどで推奨されるようになり、当科の強みを生かせると思われる。2017年度から腹腔鏡下仙骨陰固定術（LSC）への取り組みを開始し、埼玉医大病院等との勉強会を開催し、症例も順調に増加している。2020年度からはロボット支援下仙骨陰固定術（RSC）も開始した。地域住民のニーズや収益性に鑑み、今後この領域へも積極的に関わっていきたくと考えている。

⑧2018年度から、性同一性障害に対する性別適合手術が保険適用となったが、薬物療法を既に開始しているほとんどの症例に対して保険適用とならず、手術がほとんど行われないう矛盾した状況が続いている。こうした社会的状況を注視しつつ、当院は保険適用の施設基準を満たす全国わずか数施設の中の一つであるため、マンパワーと医療資源に配慮しながら取り組んでいきたい。

⑨当科は、周産期はもちろん、生殖医療、悪性腫瘍、臨床遺伝、超音波診断など多くのサブスペシャリティー分野の専門医資格が取得可能な、大学病院でも数少ない研修施設である。これを訴求ポイントとして、短期的あるいは中長期的に研修する後期研修医を募集したい。2016年度に研修医募集用ホームページ（<http://og-smc.com>）を立ち上げたところ、毎年数名ずつの専攻医を迎えることができています。一過性に終わらせることの無いよう、今後の「働き方改革」の動向を注視しながら、十分な指導・教育体制を整えていきたい。

⑩現在、日本産科婦人科学会では、妊婦血液を用いた「新型出生前診断」の実施施設を増やすことを検討している。総合周産期母子医療センターである当院としてもこうした動きに対応することが求められており、収益性も良好とされるため、2022年度から当科かかりつけの妊婦を対象として開始した。近隣の妊婦を広く対象とするかどうかについては、上記の「臨床遺伝診療部」の活動も念頭におきながら、限られたマンパワーと医療資源をどのように配分するか、引き続き検討していきたい。

⑪2018年度から産婦人科におけるロボット支援下手術が保険適用となり、当院でも2020年度から開始した。当科でも研究会などに参加して積極的に取り組んでいきたい。ロボット支援下手術は採算性が問題となっているが、診療施設や研修施設としての訴求ポイントになっているとの指摘もあるため、中長期的な当院へのメリットは決して小さくないと思われる。

2. 26) (2) 産婦人科（総合周産期母子医療センター産科）

1. 構成員

菊池 昭彦 (KIKUCHI, Akihiko) : 教授 : 診療科長 : 教育副主任 : 研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 周産期学 : 超音波診断学 : 出生前診断 : 博士

齋藤 正博 (SAITO, Masahiro) : 教授 : 教育主任 : 研究員 : 研修医長 : 指導教員 (大学院) : 不育症, 不妊症治療学, ART, 内視鏡手術 : 博士

亀井 良政 (KAMEI, Yoshimasa) : 教授 : 埼玉医科大学産婦人科学教室教授兼任 : 胎児超音波診断 : 博士

小野 義久 (ONO, Yoshihisa) : 客員准教授 : 周産期医学 : 博士

矢部慎一郎 (YABE, Shinichiro) : 講師 : 教育員 : 研究員 : 外来医長 : 指導教員 (大学院) : 妊娠高血圧症候群 : 博士

江良 澄子 (ERA, Sumiko) : 講師 : 教育員 : 研究員 : 病棟医長 : 博士

成田 達哉 (NARITA, Tatsuya) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 医局長 : 博士

五味 陽亮 (GOMI, Yousuke) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

鮫島 浩輝 (SAMEJIMA, Koki) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

酒井あゆみ (SAKAI, Ayumi) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

武井かほり (TAKEI Kahori) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

木島 幸 (KIJIMA, Sachi) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

柏原総一郎 (KASHIWABARA, Souichiro) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

宮澤 祐樹 (MIYAZAWA, Yuki) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

佐藤 翔 (SATO, Shou) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

岡野 真大 (OKANO, Masahiro) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

品川 裕伯 (SHINAGAWA, Hironori) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

佐藤はづき (SATO, Haduki) : 助教 : 埼玉医科大学ゲノム医療科兼任 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

高橋 葉子 (TAKAHASHI, Yoko) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 医員

源 祥子 (MINAMOTO, Shoko) : 助教 : 教育員 : 研究員 : 専門医員

宮下 大輔 (MIYASHITA, Daisuke) : 助教 (専攻医)

野口 梨佳 (NOGUCHI, Rika) : 助教 (専攻医)

齋藤 隼 (SAITO, Hayato) : 助教 (専攻医)

宇佐美拓哉 (USAMI, Takuya) : 助教 (専攻医)

厚川 紗愛 (ATSUKAWA, Sae) : 助教 (専攻医)

清水 元治 (SHIMIZU, Motoharu) : 助教 (専攻医)

井上 健太 (INOUE, Kenta) : 助教 (専攻医)

坂口 史奈 (SAKAGUCHI, Shina) : 助教 (専攻医)

宮下真奈美 (MIYASHITA, Manami) : 助教 (専攻医)

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

深い愛情と奉仕の精神を持ち、鋭い洞察力によって自ら問題を見つけ考え探求していく、優れた実施臨床医家の育成をより一層めざすことを目標とする。特に、学生、初期研修医に対しては、産婦人科の魅力ややりがいを体得させ、なり手の減少が著しい産婦人科医を目指す者を増やすことを目標に教育活動を行った。

令和4年度は当院は周産期、生殖内分泌、婦人科腫瘍、女性ヘルスケアを一つの施設で総合的に研修できる施設の利点を生かし、若手医師を中心に産婦人科全般を積極的に経験することを励行している。特に、ロボット支援下手術や内視鏡手術など各種手術、生殖補助技術、合併症や重症症例の管理、生命の誕生する出産などを経験し管理、治療を通し、やりがい、達成感など体得することでモチベーションを高く持ってもらえるように、スタッフをはじめ医局員一同、学生、初期・後期研修に関わっていく。

2-2. 教育実績 (担当者)

[卒前教育]

本学医学部学生、短期大学学生、看護専門学校学生を対象に講義を行った。医学部5年生のCC Step1とCC Step2、6年生のCC Step2を行った。特に2週間のCC Step1では、下記のように明確な目標を示し、医局員全員が学生教育に尽力した。

◎2週間のCC Step1期間中に最低限行うべきこと

1. 正常分娩に立ち会う

2. 婦人科リプロ外来、婦人科腫瘍外来、産科外来を見学する（各半日程度）
3. 帝王切開手術、子宮全摘手術、腹腔鏡下手術に立ち会う
4. 生殖補助技術の現場を見学する
5. 不妊治療の基本概念を理解するため不妊症患者向けDVD『望妊治療』を視聴する
6. MFICU病棟、母子3階病棟、3階西病棟（婦人科病棟）の朝の病棟医回診に参加する
7. 割り当てられた医師チームの一員として診療を見学・実習する
8. 割り当てられた産科1症例、婦人科1症例に関して、それぞれA4 2-3枚程度（計4-6枚程度）のレポートにまとめて提出する
9. 医局カンファレンスに参加する
10. クルズに参加する

◎2週間のBSL期間中に行うクルズの担当者と内容

担当者	内容
齋藤教授/菊池教授	オリエンテーション
菊池教授	分娩の正常経過と異常分娩
齋藤教授	症例検討（各自受け持ち症例2例）
高井教授	不妊症、不育症、 婦人科救急疾患の診断と治療など

◎2週間のCC Step1の期間中により興味を深めるために参加・見学を勧める。

1. 鉗子分娩、双胎分娩帝王切開を見学する
2. ロボット支援下手術、内視鏡手術、広汎子宮全摘術などの開腹手術に立ち会う
3. 可能なら、体外受精、顕微授精の現場に立ち会う
4. ヒト卵子、精子、初期胚を観察する
5. 母体搬送、産褥搬送、緊急手術症例などを見学する

[卒業教育－前期研修医]

産婦人科専門医と後期研修医（産婦人科専攻医）3～4人で構成される医師チームの1つに配属し、チームの一員として臨床を行いながら、将来、他科医師になった場合でも必要な産婦人科領域の知識や技術を教育した。また、チームのリーダーとなれるように、医師としての責任感と自覚を持たせることを目標に、病気ではなく人としての患者に積極的に関わり向き合うことや他職種を尊重したチーム医療を行える人間性を身につけていくように指導した。興味のある者には、学会などでの発表、論文作成も積極的に行わせた。

[卒業教育－後期研修医（産婦人科専攻医）]

当センターは人口720万の埼玉県の基幹病院の一つであり、産婦人科（総合周産期母子医療センター母体胎児部門を含む）には、産婦人科領域すべての疾患の患者が多数集まってきている。また、日本周産期・新生児医学会基幹研修施設、日本婦人科腫瘍学会修練施設、日本生殖医学会研修施設、日本超音波医学会研修施設、日本産科婦人科内視鏡学会研修施設に指定されており、産婦人科領域のすべての分野において専門的な研修を受けることができる体制や人員が整っている。

これらの好条件を生かし、産婦人科専門医を長とする医師チームの1員として臨床を行うだけでなく、産婦人科専門医を目指して、周産期、腫瘍、不妊・内分泌を中心とした産婦人科領域すべての分野において、自ら診断、治療方針決定、治療ができるよう実施臨床を通じて指導を行った。さらに、周産期専門医、婦人科腫瘍専門医、生殖医療専門医、超音波専門医などのサブスペシャリティーや日本産科婦人科内視鏡学会技術認定医を視野に入れて、それぞれの専門医が専門的な立場から教育を行った。

2-3. 達成度評価

教授以下、医局員全員が積極的に教育に参加した。特、種々の改善点が出てきた際には、適宜、考察し、改善を繰り返していき、CC Step1, 2, Pre CCの学生、初期研修医、後期研修医に対しては、臨床を通して十分な景観や教育を行い、今年度教育目標は十分に達成できた。

2-4. 次年度改善計画

深い愛情と奉仕の精神を持ち、鋭い洞察力によって自ら問題を見つけ考え探求していく、優れた実施臨床医家の育成をより一層めざすことを目標とする。特に、学生、初期研修医に対しては、診療参加の機会を増やし種々の処置、手技を経験できる機会をさらに増やし、産婦人科の魅力ややりがいを体験し、産婦人科、本学の魅力を知る機会を増やしていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標

腫瘍学部門では、総合周産期センターを併設した施設という特色を生かし、周産期部門とコラボレーションしたユニ

ークな研究や、施設の特徴として多くの合併症を有する悪性腫瘍症例や高齢者の悪性腫瘍症例も多いため、こうした患者に対する安全かつ有効な治療法を確立するための研究に取り組み、臨床現場に還元するとともに、学会および論文発表、学位取得へと導く。

不妊・内分泌部門では、体外受精などの生殖補助医療の更なる発展と安全性の確立、悪性腫瘍患者の妊孕性温存を目的とした卵子・受精卵や卵巣組織の凍結保存とその応用、腹腔鏡下手術などの内視鏡下手術の更なる発展と安全性の確立などを主な研究課題として、学会および論文発表、学位取得へと導く。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

・婦人科腫瘍部門（長井、赤堀、魚谷、黒瀬、重松）

腫瘍学部門では、臨床研究として「妊娠に合併した子宮頸部上皮内新生物の取り扱いに関する研究」「妊娠に合併した卵巣悪性腫瘍の診断精度向上に関する研究」「高齢者に対する婦人科悪性腫瘍の治療に関する研究」といった研究を行っている。

・不妊・内分泌部門（高井、斉藤、一瀬、板谷、五味、黄）

妊孕性温存症例の全国データベースである日本がん・生殖医療登録システム（JOFR）を基幹研究施設として立ち上げ、妊孕性温存症例の予後や妊娠率等の成績に関する研究が進行中である。その他、短期間での卵子採取を目指したランダム・スタート法など新しい卵巣刺激法の開発と改良に関する研究を行っている。内視鏡下手術では、麻酔科との共同研究で「高度肥満症例に対する腹腔鏡下手術への HAL（Hybrid Abdominal Lifting）法の応用とその有用性」などが進行中である。

・基礎研究（赤堀、矢部）

Hammersmith Hospital (London)、大阪バイオサイエンス研究所、東京医科歯科大学分子細胞機能学教室、慶応義塾大学腎臓内分泌代謝内科学教室、埼玉医科大学ゲノム医学センター遺伝子情報制御部門、当センター輸血細胞治療部、埼玉医科大学医学部解剖学教室、帯広畜産大学原虫病研究センター、城西大学薬学部薬科学科皮膚生理学部門、順天堂大学医学部産婦人科学教室、東京大学医学部産科婦人科学教室、加藤レディスクリニック先端生殖医学研究所、国立成育医療研究センター研究所再生医療センター、米国ノースイースタン大学生物学部などとの共同研究。

近年では、卵巣組織から抽出した卵子幹細胞を用いた人工卵巣構築を目指した研究が進行中である。

3-3. 達成度評価

婦人科腫瘍学部門では、上記の研究の他、「局所再発卵巣癌に対する放射線療法の治療効果に関する研究」といった臨床研究に対し、国内外で研究成果の発表を行った。またこれらの研究内容に関して、現在、論文化を進めている。

不妊・内分泌部門では、生殖補助医療で得られた余剰の凍結胚盤胞を用いて、国内2例目となる胚性幹細胞（ES細胞）4系列を樹立した。性同一性障害患者を対象としたヒト卵巣凍結保存技術を確立し、これから卵子幹細胞の抽出に世界で初めて成功し、内外のメディアで広く報道された。このヒト卵巣凍結保存技術は思春期前の小児がん患者に対して臨床応用され、多くの症例の妊孕性温存に対応し、国内外の学会で成果を発表している。当院が基幹施設として立ち上げた日本がん・生殖医療登録システム（JOFR）は全国150以上の施設から9000例以上の症例登録を達成し、2021年4月から国が開始した「小児・AYA世代のがん患者等の妊孕性温存療法研究促進事業」の患者登録システムとして採用され、更なる拡充が予定されている。JOFRから得られた全国規模のデータを学会や論文で報告した。その他、「子宮内膜症合併妊娠に対する経腔的穿刺」「妊孕性温存目的に投与されたレトロゾールによる卵巣破裂症例」「妊孕性温存を目的としたランダム・スタート法」などに関する学会報告、論文報告を行った。

達成度70%。

3-4. 次年度改善計画

臨床研究は着実に成果を挙げ、各学会にて成果を発表し、論文化し、学位取得を目指す。埼玉医科大学中央研究施設日高ランチの協力を仰ぎながら基礎研究も充実してきており、来年度も継続して進める。

4. 診療

我々の施設の主な実績は、総分娩数975、多胎妊娠108（双胎104、品胎4）、帝王切開530、母体搬送応需数183、母体救命応需数52で、症例の重症度、重症症例の数は全国トップと言っても過言ではない。埼玉県の周産期医療の「最後の砦」としての役割を果たしている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

1. 厚生労働省医師試験委員（日本語診療能力調査委員）
2. 公益財団法人日本医療機能評価機構 産科医療補償制度 原因分析委員会部会 委員
3. 埼玉県周産期医療対策協議会委員
4. 埼玉県成人病検診管理指導協議会委員
5. 埼玉県医学会運営委員
6. 埼玉県消防学校救急科教育訓練講師
7. 埼玉産婦人科研修学院講師
8. 国家試験（保健師助産師看護師）委員
9. 厚生労働省医師国家試験出題委員
10. 埼玉県不妊治療費助成事業に係る実施医療機関指定調査会・専門委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

1. Journal of Medical Ultrasonics, Editorial Board
2. 埼玉産科婦人科学会雑誌査読委員

3. 関東連合産科婦人科学会査読委員
4. 日本産婦人科医会・NIPTに関するテキスト作成のための委員会・委員
5. 埼玉産科婦人科学会雑誌編集員
6. 日本産科婦人科学会 The Journal of Obstetrics and Gynaecology Research Associate Editor
7. 日本産婦人科医会研修ノート編集委員
8. 日本周産期・新生児医学会 学術委員会委員
9. American Journal of Perinatology
10. Hypertension Research in Pregnancy
- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務
 1. AFSUMB (アジア超音波医学連合) Councilor (理事)
 2. 日本超音波医学会 理事
 3. 日本脳神経超音波学会評議員
 4. 日本母体胎児医学会評議員
 5. 日本分娩監視研究会幹事
 6. 新胎児学研究会世話人
 7. 日本産婦人科学会代議員
 8. 日本母性衛生学会理事、埼玉県支部長
 9. 日本妊娠高血圧学会理事
 10. 日本内分泌学会評議員
 11. 日本新生児学会評議員
 12. PSI-Japan 研究会顧問
 13. 日本産科婦人科学会教育委員会委員
 14. 日本産科婦人科学会教育委員会用語小委員会委員
 15. 日本産科婦人科学会埼玉認定医委員会委員
 16. 日本産科婦人科学会埼玉地方部会長
 17. 埼玉県母性衛生学会会長
 18. 埼玉県産婦人科医会理事、幹事
 19. 埼玉県産婦人科医会周産期研究会代表幹事
 20. 埼玉県産婦人科医会学術企画委員
 21. 埼玉県産婦人科医会医療事故安全対策委員
 22. 埼玉県医師会周産期医療運営委員会委員
 23. 埼玉県医師会母体保護法指定医審査委員会委員
 24. 埼玉県医師会母子保健委員会委員
 25. 埼玉県医師会子育て相談窓口運営委員会委員
 26. 埼玉医科大学短期大学非常勤講師
 27. 埼玉県医師会母体保護法指定医審査委員会委員
 28. 日本がん・生殖医療研究会・副理事長
 29. 日本産科婦人科学会ガイドライン婦人科外来編作成委員
 30. 厚生労働科学研究費補助金(第3次対がん総合戦略事業)「乳癌患者における妊孕性保持支援のための治療選択および患者支援プログラム・関係ガイドライン策定の開発」班・ガイドライン策定委員
 31. 関東連合産科婦人科学会庶務委員会・委員
 32. 日本産科婦人科内視鏡学会・評議員
 33. 日本生殖医学会・代議員
 34. 日本受精着床学会・評議員
 35. 日本卵子学会評議員
 36. AFSUMB (アジア超音波医学連合) Website/Newsletter Editor
 37. 日本周産期・新生児医学会 評議員
 38. 日本産科婦人科学会 専門医認定筆記試験問題作成委員会委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Samejima K, Takai Y, Matsunaga S, Nagai T, Kikuchi A: The safety and effectiveness of elective laparoscopic surgery for benign ovarian cysts during pregnancy—Comparison with emergency surgery. J Obstet Gynaecol Res 48:2603-2609, 2022
- ② Nakamura E, Matsunaga S, Kikuchi A, Takai Y: Comparative retrospective study on the validity of point of care testing device for massive obstetric hemorrhage: dry-hematology vs thromboelastography, Am J Obstet Gynecol MFM 5:100778, 2023
- ③ Haga M, Kanai M, Ishiguro A, Nishimura E, Minamitani Y, Iwatani A, Nishiguchi R, Miyahara N, Oka S, Sasaki A, Motojima Y, Saito K, Itoh K, Era S, Yabe S, Kikuchi A, Fuji M, Matsumoto M, Namba F, Sobajima H, Tamura M, Kabe K: Changes in in-hospital survival and long-term neurodevelopmental outcomes of extremely preterm infants: A retrospective study of a Japanese tertiary center. J Pediatr (in press)

- ④ Ishii K, Horikoshi T, Kanai M, Ishiguro A, Iwamoto Y, Ishido H, Kikuchi A, Masutani S: Transient Recovery of Complete Atrioventricular Block Due to Maternal Anti-SS-A Antibody Through Antenatal Steroid Administration After 27 Weeks of Gestation. Cureus (in press)
- ⑤ Shigematsu K, Shimizu C, Furui T, Kataoka S, Kawai K, Kishida T, Kuwahara A, Maeda N, Makino A, Mizunuma N, Morishige KI, Nakajima TE, Ota K, Ono M, Shiga N, Tada Y, Takae S, Tamura N, Watanabe C, Yumura Y, Suzuki N, Takai Y: Current Status and Issues of the Japan Oncofertility Registry: J Adolesc Young Adult Oncol. 2022 Dec 13.
- ⑥ Suzuki N, Takai Y, Yonemura M, Negoro H, Motonaga S, Fujishiro N, Nakamura E, Takae S, Yoshida S, Uesugi K, Ohira T: Katsura A, Fujiwara M, Horiguchi I, Kosaki K, Onodera H. Nishiyama H: Guidance on the need for contraception related to use of pharmaceuticals: the Japan Agency for Medical Research and Development Study Group for providing information on the proper use of pharmaceuticals in patients with reproductive potential: Int J Clin Oncol. 2022 May;27(5):829-839.
- ⑦ YuichiroKizaki, KoukiSamejima, ShigetakaMatsunaga, TomonoriNagai, YasushiTakai An old uterine rupture repaired 2 months postpartum using laparoscopy aided by hysteroscopy: A case report Laparoscopic, Endoscopic and Robotic Surgery 2022. 07; inpress.
- ⑧ 五味陽亮、菊池昭彦：胎児異常（先天性横隔膜ヘルニア）—帝王切開、周産期医学、52:1706-1708, 2022
- ⑨ 菊池昭彦：「脳性麻痺事例における注意すべき胎児心拍数陣痛図所見—妊娠・分娩管理を行う産科医・助産師・看護師に向けて—」、令和4年度 埼玉県産婦人科医会メディカルスタッフ研修会 「分娩監視装置モニターの見方と対応」講習会、さいたま、12月、2022
- ⑩ 菊池昭彦：「他科の皆様にも楽しんでいただく産科超音波」、日本超音波医学会第32回四国地方会、徳島、10月、2022

【総数：論文 45 件、著書 5 件、学会発表 42 件、講演 17 件】

6-2. 獲得研究費

文部科学省科学研究費 基盤研究(C) 19K09830 (研究代表者：菊池昭彦)

文部科学省科学研究費 基盤研究(C) 20K09606 (研究分担者：菊池昭彦)

厚生労働省科学研究費 女性の健康の包括的支援政策研究事業 20FB1001 (研究分担者：菊池昭彦)

6-3. 受賞

坂口史奈、岡野真大、助川幸、石戸博隆、成田達哉、江良澄子、赤堀太一、矢部慎一郎、松永茂剛、長井智則、齋藤正博、菊池昭彦、高井泰：「経胎盤の抗不整脈薬治療が有効であった胎児頻脈性不整脈の一例」、第101回埼玉県産婦人科医会・埼玉産科婦人科学会令和4年度後期学術集会、さいたま、11月、2022

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

2022年11月12日 第10回新胎児学研究会（会長 菊池昭彦、川越）

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

埼玉県の総合周産期母子医療センターとして、県内の医療機関から期待や依頼が年々急速に増加してきた。少ないスタッフにも関わらず、これらのニーズに応えうることができているのは、医師としての良心のもと、ひとりひとりの献身的な努力にほかならない。この点は我々医局の伝統的な美德であり、今後も維持できるよう努力する。

教育に関しては、特に、BSLの学生教育にスタッフ一人ひとりが、熱心に参加している。

研究面では、当センターならではの、豊富かつ多彩な症例経験から臨床研究を積極的に行ない、学会発表、論文発表など義務づけ、多くの実績を重ね、英文論文として報告できるようになってきている。全国でも、多彩な症例の報告や先進的な治療を行なう施設と注目されている。また、基礎研究も他施設と共同して継続的に行い、英文論文による発表を行っている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

診療においては、2024年に施行される働き方改革に対応できるよう、勤務の効率化を目指すとともに、働き方改革で崩壊の危機にある周産期の地域医療維持という相反する目的を何とか両立できる施策を模索する。

研究においては、若手による公的研究費の獲得、当科を基盤とする多施設共同研究（妊婦の家庭血圧基準値の構築）のさらなる推進を目指す。

教育においては、これまでも行ってきた最新の医療の提供と研修医・学生のニーズに合わせた教育を up date させ、研修医・学生に対する教育のさらなるレベルアップを目指す。

2. 27) 歯科・口腔外科

1. 構成員

金子貴広 (KANeko, Takahiro) : 教授 : 診療部長 : 代表指導教員(大学院) :
顎顔面外傷, 口腔インプラント : 博士(医学)

日野峻輔 (HINO, Shunsuke) : 准教授 : 指導教員(大学院) : 教育主任 : 顎顔面外傷 : 博士(医学)

那須大介 (NASU, Daisuke) : 講師 : 小児口腔外科, 障害者歯科 : 博士(歯学)

飯島洋介 (IIJIMA, Yousuke) : 講師 : 指導教員(大学院) : 研究主任 : 口腔粘膜疾患 : 博士(医学)

中村悟士 (NAKAMURA, Satoshi) : 助教 : 研究員

山田美喜 (YAMADA, Miki) : 助教 : 研究員

仲山奈見 (NAKAYAMA, Nami) : 助教 : 研究員

高橋 匠 (TAKAHASHI, Takumi) : 助教 : 研究員

酒井貫舟 (SAKAI, Kansyu) : 助教(シニアレジデント)

牛窪健太 (USHIKUBO, Kenta) : 助教(シニアレジデント)

岡田大史 (OKADA, Daishi) : 初期研修医

望月秀人 (MOCHIZUKI, Shuto) : 初期研修医

本郷 良 (HONDA, Ryo) : 初期研修医

吉本義幸 (YOSHIMOTO, Yoshiyuki) : 初期研修医

下山哲夫 (SHIMOYAMA, Tetsuo) : 名誉教授 : 顎顔面外傷, 口腔腫瘍 : 博士(歯学)

堀江憲夫 (HORIE, Norio) : 名誉教授, 客員教授 : 嚥胞, 口腔粘膜疾患 : 博士(歯学)

菊池元宏 (KIKUCHI, Motohiro) : 非常勤講師 : 小児歯科 : 博士

増田一生 (MASUDA, Issei) : 非常勤講師 : スポーツ歯科, 口腔インプラント

宮 恒男 (MIYA, Tsuneo) : 非常勤講師 : 口腔腫瘍 : 博士

永田 温 (NAGATA, Atsushi) : 非常勤講師 : 歯科矯正 : 博士

高橋雅幸 (TAKAHASHI, I Masayuki) : 非常勤講師 : 口腔腫瘍 : 博士

大沼昭彦 (OHNUMA, Akihiko) : 歯科技工士長

渡辺太一 (WATANABE, Taichi) : 歯科技工士

吉澤円花 (YOSHIZAWA, Madoka) : 歯科技工士

山岸 清 (YAMAGISHI, Kiyoshi) : 歯科技工士 (非常勤)

遠藤美樹 (ENDO Miki) : 歯科衛生士

植松綾子 (UEMATSU, Ayako) : 歯科衛生士

秦千菜津 (HATA, Chinatsu) : 歯科衛生士

夏井ちとせ (NATSUI, Chitose) : 歯科衛生士

2. 教育

2-1. 目的・目標

歯科疾患を含めた顎顔面領域の疾患についての診断、治療法を理解するとともに、口腔疾患と全身疾患との関連について学生が理解しやすい講義を実施すること、卒後教育の強化と大学院教育への介入を目標として教育活動を行った。

2-2. 教育実績 (金子貴広、日野峻輔)

卒前教育で講義を担当したのは、4年生感覚器ユニット(金子、日野)である。

その他、卒前教育では共用試験臨床実習前OSCE評価者(日野、山田)を担当した。

卒後教育としては、4名の研修歯科医師、2名のシニアレジデントの卒後研修を行っている。

大学院教育としては、博士課程2名(2年生山田、2年生高橋)が在籍している。

2-3. 達成度評価

教育実績から卒前教育では歯科口腔外科領域の講義を忠実に担当しており順調に活動できた。コロナ禍であり、対面講義ではなく録画による遠隔実施が基本であったが、学生に理解しやすい講義を心がけた。卒後教育においてもコロナ禍という環境下でありながら臨床症例数の改善が認められ、平常通りの教育が可能であった。本年度の目標については、講義において忠実に担当でき、大学院教育を進行することができたために達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度には本年度同様に学生が理解しやすい講義の実施と OSCE 評価者等への参加、大学院教育の一層の強化（学会発表、論文作成）を目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標

大学病院としての立場を生かし、臨床的研究、基礎的研究を行うことで、歯科口腔外科学の発展に寄与することを目標に研究活動を行った。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

1. 欠損補綴に対する歯科用インプラントの研究（金子、中村）
症例の集積を目標として、研究継続中であり、今後学会発表の予定である。
2. 抗がん剤誘発性末梢神経障害を緩和する薬剤の探索（飯島）
該当薬剤の検索を目的として実験継続中であり、一部の成果を公表した。
3. コンピューターガイドを応用した自家歯牙移植の臨床的研究（中村、金子）
安全な手術手技確立を目的に、ガイド手術の臨床応用を行い、成果を公表した。
4. 下顎骨骨折と歯牙損傷の関連と傾向について（日野・山田（院））
一部論文掲載済みで現在も継続研究中である。
5. 抗がん剤に伴う口腔内色素沈着の観察（飯島、山田（院）、遠藤）
データ解析が終了し、論文投稿中である。
6. *Ddx3x* を介した扁平上皮がん発生機構の解明（飯島）
研究テーマのモデルマウスを作製した。今後腫瘍形成の過程を観察予定である。
7. *Ddx3x* を介したB細胞リンパ腫発症機構の解明（高橋（院））
研究テーマのモデルマウスを作製した。今後解析を進める予定である。
8. 顎骨骨折と頭部外傷の関係について（山田（院））
関係性解明を目的として、データ集積を行い、現在統計解析中である。
9. 自転車、幼児座席同乗中の口腔外傷の観察（山田（院）、高橋（院））
データ解析中である。

3-3. 達成度評価

研究実績から各研究においてのデータ蓄積という点においては順調に活動できているが、統計解析が終了したテーマに関しては、今後成果をまとめて学会発表、論文発表につなげていく必要がある。本年度は、臨床的研究においてその成果を公表し、論文も掲載できたため、目標は達成できたと評価する。

3-4. 次年度改善計画

臨床研究は、成果を公表できる段階であり、新たな研究グループを立ち上げる予定である。基礎研究では、データの集積を進め、次年度には各研究成果の公表や一部論文掲載を目標に掲げ、達成に向けて取り組む。

4. 診療

顎顔面外傷、腫瘍、嚢胞、インプラント、有病者患者の歯科治療、がん患者の周術期口腔機能管理等、地域拠点病院歯科口腔外科の役割をふまえた診療を行っている。

5. その他

5-1 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3 その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本顎顔面インプラント学会専門医制度委員；金子貴広

日本口腔インプラント学会認定委員会委員；金子貴広

日本口腔インプラント学会・関東甲信越支部選挙委員会委員；金子貴広

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

【論文】

- ① Hino S, Yamada M, Araki R, Kaneko T, Iizuka T, Horie N. What Are Possible Contributors to Associated Dental Injury in Mandibular Fractures? J Oral Maxillofac Surg. 2022 Jan;80(1):127-136.
- ② Hino S, Iizuka T, Saulacic N, Lang NP, Burkhard JM. No apparent association between dental implants and mandibular fractures resulting from external forces. Clin Oral Investig. 2022 Feb;26(2):2065-2072.
- ③ Fujioka-Kobayashi M, Marjanowski SD, Kono M, Hino S, Saulacic N, Schaller B. Osteoinductive potential of recombinant BMP-9 in bone defects of mice treated with antiresorptive agents. Int J Oral Maxillofac Surg. 2022 Apr;51(4):566-575.
- ④ Nakamura S, Yamada M, Iijima Y, Sawada K, Hino S, Kaneko T, Horie N. Hemodialysis-Related Amyloidosis in the Tongue. Case Rep Dent. 2022 May 22;2022:9098201.
- ⑤ Yamada M, Suzuki K, Iijima Y, Hino S, Kaneko T, Horie N. Accidental oral bleeding in a dementia patient taking anticoagulants: A case report. Gerodontology. 2022; 39(2):218-221.

【総数：論文10件、学会発表13件、講演3件】

6-2. 獲得研究費

科学研究費助成事業（若手研究）研究代表者：飯島洋介

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

1. 令和4年度（一社）川越市歯科医師会学術定例会、
川越歯科医師会館、2022年5月15日
2. 令和4年度NPO法人埼玉インプラント研究会認定講習会、
JA共済埼玉ビル、2022年7月31日
3. 第100回（一社）川越市歯科医師会学術講演会、
ウエスタ川越、2022年10月30日

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、講義において忠実に担当でき、医学生に対する歯科的知識普及の一助となり得たと評価している。大学院教育に関しては、大学院教育を進行することができたために達成できたと評価する。研究に関しては、口腔インプラント、顎顔面外傷、歯牙移植、口腔ケア、口腔内有害事象において研究成果の公表、一部論文化を行うことができた。診療に関しては、周術期口腔機能管理における患者件数は安定して経過しており、手術においては顎顔面骨骨折の手術件数も増加傾向にある。その他の事項に関しては、地域歯科医師会と診療および学術面での連携も定期的に行っており、診療科全体としては、コロナ渦の影響下にありながらも過去の業績を上回っているため、順調な実績を積んでいると評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

卒前教育に関しては、講義内容を改善し、次年度要点を絞ったわかりやすい講義で学生に対する歯科的知識の普及を目標として取り組む。大学院教育に関しては、これまでの研究業績をまとめて誌上発表することを目標として取り組む。研究に関しては、今後主研究における解析が進むよう実験方法および内容を改善し、各研究成果の公表を目標に掲げ、達成に向けて取り組む。また、臨床研究では症例数増加に努める。診療に関しては、次年度地域における口腔衛生状態の改善に寄与することを目標として口腔ケアの普及に取り組む。また、顎顔面骨骨折手術への積極的介入と治療成績向上を目標に取り組む。その他の事項に関しては、地域歯科医師会等と診療および学術面での連携をさらに強化し、次年度地域歯科医療の発展を目標として取り組む。

2. 28) リハビリテーション科

1. 構成員

【医師】

大林 茂 (Obayashi Shigeru) : 教授 : 運営責任者 (1/25~) : 診療部長 : 教育主任、研究副主任 : 代表指導教員 (大学院) : 中枢神経、高次脳機能障害のリハビリテーション、脳機能画像 : 博士

藤本幹雄 (Fujimoto Mikio) : 講師 : 外来医長、病棟医長 : 教育副主任 : 研究主任 ; 中枢神経、嚥下障害・痙縮のリハビリテーション

新名啓 (Simmyo Kei) : 助教 : 脳神経外科、リハビリテーション医学全般 (7/1~)

田口一恵 (Taguchi Kazue) : 非常勤講師 : 嚥下障害のリハビリテーション : 博士

山本 満 (Yamamoto Mitsuru) : 教授 ; 中枢神経、呼吸器・心臓・腎臓などの内部疾患のリハビリテーション : 博士 1/24 逝去

【看護師】

新木美奈子

【セラピスト】 : 國友淳子 (統括責任者) : 課長補佐

<理学療法士>

大隈統 (主任)、藪崎純 (主任)、野々垣直子、森本貴之 (主任)、野々垣政志 (主任)、守岡義紀 (主任)、小林大祐 (主任)、樺山有香、鈴木翔太、丸山侑里子、三本木光、西元淳司 (主任)、長谷部悠葵、飯村晴香、小山智世、大久保裕也 (主任)、大久保恵美、岩田一輝、萩原郁美、石川由樹、荒木心太、加藤星也、富樫健太、藤井優梨子、岩田萌美、鈴木健太 (9月末退職)、岩崎萌子、後藤ちひろ、久喜啓啓、小野功介、濱田麻由、大沢巧、飯塚早沙織、増田みのり、吉澤瞳子、峯崎亮磨、斎藤光志、河瀬朱加、瓜尾終、小松晴香、梅澤莉可、倉橋陸光、勝見紘也、上芝香穂、宮崎里紗、工藤克樹、斎藤康広

<作業療法士>

國友淳子 (課長補佐)、平田樹伸 (主任)、東謙一、石動友里、加藤なつき、鈴木美咲、小林歩、飯塚航平、大川航洋、秋澤亮、山本美咲、坂村あゆみ、関雪乃、山崎結生、上妻由依、菅野夏海、石水大、小野真央

<言語聴覚士>

伊藤智彰 (係長)、伊藤淳子 (主任)、杉本真美 (主任)、中辻勝一、片貝百花、橋本安里、荒木愛理、高岡真衣、増田有希、村田紗也佳

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

- ・WHO / ICF に基づき、リハ医学の理念と実際、および急性期から社会復帰・社会生活に至る一連の流れを理解する。
- ・専門医研修プログラム (リハビリテーション) に基幹研修施設として令和4年度承認され、平成5年度専攻医を募集、2名 (新名啓、笹川麻由) の応募があった。笹川麻由は平成5年4月着任。

2-2. 教育実績 (担当者)

<医学生への教育>

大林 茂 ; 3年生, 4年生, 5年生 pre-CCstep1 担当、川越教育主任会議出席、卒前教育会議オブザーバー参加

藤本 幹雄 ; 脳卒中・小児のリハ医学

卒後教育 初期研修医8名が当科へローテーションし研修した。

<看護学生への教育>大林茂、藤本幹雄、新名啓、田口一恵、森本貴之、國友淳子、伊藤智彰の7名がリハビリテーション医学について年間30時間の教育を行った。

2-3. 達成度評価

医学生、看護学生共にリハ医学の理念は理解できたと思われる。しかしリハ医学に関しては専門性が高く、医学全般の基礎知識を習得していることが前提となるため、学生にはリハ医学の必要性を理解するように努めた。

2-4. 次年度改善計画

医学生の臨床実習指導・講義、看護学生への講義を継続する。

系統的な診察を通して障害の病態を理解する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

リハビリテーション医学を基礎と臨床に分け、医師とセラピストが研究チームを編成し、各専門分野からみた研究を

行い、各々評価と今後の検討課題をまとめる。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

1. 急性期脳損傷に伴う高次脳機能障害に関する実態調査研究：大林茂、田口一恵、新名啓、平田樹伸、東謙一、飯塚航平
2. 頸髄損傷に伴う嚥下障害の特性に関する研究：田口一恵、大林茂、中辻勝一
研究実績：1, 2. とも研究継続中。

3-3. 達成度評価

以下の内容に集約される

- ① リハ医学に必要な基礎運動学の研究：70%
- ② 脳損傷者に伴う認知・高次脳機能障害：80%
- ③ 脳損傷者の機能回復度と予測因子：50%
- ④ がん患者の運動耐容能：80%
- ⑤ 障害者のスポーツと運動生理学的機能：70%

3-4. 次年度改善計画

次年度研究を継続する。

1. 高次脳機能障害の解明のための基礎的研究を継続する。
2. 頸髄損傷四肢麻痺改善促進のための治療法の開発。
3. 頸髄損傷に伴う嚥下障害の実態と特性の解明と新たな治療法の開発。
4. 小児運動発達遅滞に対する補装具の効果の運動動作解析による科学的検証。

4. 診療

診療面では、新規コロナ感染による病棟閉鎖、スタッフあるいは家族の感染、あるいは濃厚接触による出勤停止など様々な影響を受けた。特殊外来の新設など、より幅広く患者のニーズに応える体制もできてきた。新たな先進医療の開発に向けた、臨床研究も始まろうとしている。当科を特徴付けるブランド力を確立し、一層高めていきたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

- ・全国障害者スポーツ大会・内部障害者の参加検討委員会：厚生労働省・日本障害者スポーツ協会（山本 満）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

- ・日本ヒューマンケア・ネットワーク学会；査読・編集委員：山本満
- ・埼玉包括的リハビリテーション研究会；編集委員・査読委員：山本満
- ・埼玉県医学会雑誌・査読委員：大林茂
- ・Applied sciences, Special issue: Advances of Neurorehabilitation and the neural basis, Guest editor : 大林茂
- ・国際専門雑誌査読依頼・Brain research（大林茂）・Applied sciences（大林茂）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

《山本満》

- ・日本リハビリテーション医学会・代議員
- ・日本ヒューマンケア・ネットワーク学会・常任理事
- ・埼玉包括的リハビリテーション研究会・理事
- ・日本障害者スポーツ協会・医学委員
- ・国際障害者バドミントン協会・International Classifier
- ・日本義肢装具学会・正会員
- ・埼玉アスレチックリハビリテーション研究会・理事
- ・埼玉県脊髄脊椎研究会・幹事
- ・埼玉県リハビリテーション医会・幹事

《大林茂》

- ・日本リハビリテーション医学会・代議員
- ・埼玉県リハビリテーション医会・副会長
- ・日本PMS（末梢磁気刺激）研究会・理事

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

- ① Nishimoto J, Shiraoka T, Takiguchi Y, Imamura R, Hirohama R, Inoue Y, Obayashi S, Tanaka R. Derivation of a clinical prediction rule for chronic post-surgical pain after total knee arthroplasty considering biopsychosocial factors: A prospective cohort study. *The Knee* 42 364-372, 2023.
- ② Taguchi K, Wakabayashi H, Fujimoto M, Obayashi S, Yamamoto M, Nishioka S, Momosaki R: Association between malnutrition severity and changes in swallowing function at convalescent rehabilitation wards: a multi-center cohort study in malnourished patients with sarcopenic dysphagia. *J Nutrition, Health & Aging* 26, 469-476, 2022.
- ③ Obayashi S, Saito H. Neuromuscular stimulation as an intervention tool to recovery from upper limb paresis after stroke and the neural basis. Special Issue: Advances of Neurorehabilitation and the Neural Basis, *Applied Sciences* 2022, 12, 810. <https://doi.org/10.3390/app12020810>
- ④ Obayashi S. Cognitive and linguistic dysfunction after thalamic stroke and recovery process: possible mechanism. Special issue: Modulation of sensory processing and cognitive function via higher-order thalamic nuclei, *AIMS Neuroscience* 9(1): 1-11, 2022.
- ⑤ Junji Nishimoto, Koji Ono, Takeshi Imura, Tsubasa Mitsutake, Shigeharu Tanaka, Yu Inoue, Hungu Jung, Ryo Tanaka: Effects of combined exercise and psychological interventions on psychological factors after total knee arthroplasty: a systematic review. *Int J Gerontol*, 17:82-88, 2023.
- ⑥ Yuki Hasebe, Kenta Suzuki, Kiyokazu Akasaka, Kazuo Saita, Satoshi Ogihara. Inter-examiner reliability in identifying lumbar paraspinal muscle atrophy by lumbar paraspinal muscle atrophy index, a novel parameter. *JPTS*. 2022; 34(11): 737-740.
- ⑦ Saito H, Kobayashi H, Yatsu J, Obayashi S. (2022) Right Unilateral Spatial Neglect Improves with Intrinsic Motivation Case Reports in Neurological Medicine ID 4828549, <https://doi.org/10.1155/2022/4828549>
- ⑧ 野々垣 政志, 阪井 裕一, 大林 茂, 山本 満: 髄芽腫摘出後の5歳児に対する理学療法-術後に重度の運動麻痺と精神症状を呈した症例の運動機能の変化について-. *理学療法学*. 2022; 49 (3) : 234-240
- ⑨ 鈴木翔太, 高倉保幸, 山本満: 急性期病院を退院した高齢脳卒中患者の生活像. *日本ヒューマンケア・ネットワーク学会誌*. 20 (1) : 84-90, 2022.
- ⑩ 田口一恵, 大林茂, 藤本幹雄, 山本満: Videofluoroscopic Dysphasia Scaleを用いた高齢嚥下障害と退院時経口摂取との関連. *埼玉県医学会雑誌* 57(1):281-287, 2023.

【総数：論文 10 件、学会発表 27 件、講演 17 件】

6-2. 獲得研究費

- ・日本学術振興会・科学研究費・基盤研究C(令和4年-6年度新規採択)「頸髄損傷急性期患者上肢神経筋肉ハイブリッド刺激の効果検証と脳内機序の探索」(研究代表)・大林茂
- ・日本学術振興会・科学研究費・基盤研究C(令和3年度継続)「急性期脳卒中重度上肢麻痺への短時間介入型ハイブリッド末梢神経筋肉刺激併用作業療法」(研究代表)・大林茂
- ・日本学術振興会・科学研究費・基盤研究C(令和3年度継続)「人工呼吸器離脱後の嚥下障害に対するリスク評価と電気刺激療法の効果」(研究分担)・大林茂

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- 1) 診療：各科のご協力により治療患者数が着実に増加しており、ほぼ満足すべき結果である。
- 2) 教育：学生のリハビリテーション医学に対する理解が不十分であり、今後教育の方法を検討する必要がある。
- 3) 研究：コロナ禍のため各学会が中止・オンデマンド開催となり、研究発表の機会が減った1年であった。
- 4) その他(学会、社会貢献)：充分行っている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

- 1) 診療：今後もリスクマネジメントに基づく安全・安心な医療の提供を継続する。
- 2) 教育：将来的に役立つ臨床力を身につけるための医学教育を継続する。専門医教育体制の強化。
- 3) 研究：次年度は、論文数の増加を視野に研究を継続する。

2. 29) 麻酔科 (麻酔科・産科麻酔科)

1. 構成員

小山 薫 (KOYAMA, Kaoru) : 教授 : 運営責任者、麻酔科診療部長、教育主任、研究員、代表指導教員 (大学院) : 麻酔、集中治療、疼痛管理、心臓麻酔 : 医学博士
照井克生 (TERUI, Katsuo) : 教授 : 産科麻酔診療副部長、教育員、研究副主任、指導教員 (大学院) : 麻酔、産科麻酔、小児麻酔 : 医学博士
小幡英章 (OBATA, Hideaki) : 教授、専門医員、教育員、研究副主任、指導教員 (大学院) : 麻酔、ペインクリニック、医学博士
鈴木俊成 (SUZUKI, Toshinari) : 准教授 : 麻酔科診療副部長、教育副主任、研究員、大学院教員 (大学院) : 麻酔、輸液管理 : 医学博士
松田祐典 (MATSUDA, Yusuke) : 准教授 : 産科麻酔診療部長、教育員、研究員、指導教員 (大学院) : 麻酔、産科麻酔、小児麻酔 : 医学博士
丸尾俊彦 (MARUO, Toshihiko) : 講師 : 外来医長、教育員、研究員、大学院教員 (大学院) : 麻酔、疼痛管理 : 医学博士
清水健次 (SHIMIZU, Kenji) : 講師 : かわごえクリニック医長、教育員、研究員、大学院教員 (大学院) : 麻酔、疼痛管理 : 医学博士
山家陽児 (YANBE, Yoji) : 講師 : 病棟医長、教育員、研究員、大学院教員 (大学院) : 麻酔、疼痛管理 : 医学博士
加藤崇生 (KATO, Takao) : 講師 : ICU医長、教育員、研究主任、大学院教員 (大学院)

田村和美 (TAMURA, Kazumi) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、田澤和雅 (TAZAWA, Kazumasa) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、北岡良樹 (KITAOKA, Yoshiki) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、佐々木華子 (SASAKI, Hanako) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院) 原口靖比古 (HARAGUCHI, Yasuhiko) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、金子恒樹 (KANEKO, Koki) : 専門医員、教育員、研究員、研究員、大学院教員 (大学院)、野口翔平 (NOGUCHI, Shohei) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院) : 医学博士、伊野田絢子 (INODA, Ayako) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院) : 医学博士、杉本真由 (SUGUMOTO, Mayu) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、渡辺 楓 (WATANABE Kaede) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、金子友美 (KANEKO, Tomomi) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、坂本尚子 (SAKAMOTO, Shoko) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、岡田啓 (OKADA, Akira) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、黒川右基 (KUROKAWA, Yusuke) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、結城由香子 (YUKI, Yukako) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院) : 医学博士、大久保訓秀 (OOKUBO, Kunihide) : 専門医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院) 住井啓介 (SUMII, Keisuke) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、松浦千穂 (MATSUURA, Chiho) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、坂巻大輔 (SAKAMAKI, Daisuke) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、二宮 裕 (NIMOMIYA, Hiroshi) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、小嶋宏幸 (KOJIMA, Hirouyuki) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、高橋綾子 (TAKAHASHI, Ayako) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、武藤広大 (MUTO, Kodai) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、永井隆文 (NAGAI, Takahumi) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、高山瑠衣 (TAKAYAMA, Rui) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、木村亜紀子 (KIMURA, akiko) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、横谷 円 (YOKOTANI, Madoka) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、松本木綿子 (MATSUMOTO, Yuko) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、田中浩平 (TANAKA, Kohei) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、市村拓哉 (ICHMURA, Takuya) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、小島拓也 (KOJIMA, Takuya) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、境田文威 (SAKAIDA, Humitaka) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)、吉田賢一 (YOSHIDA, Kenichi) : 医員、教育員、研究員、大学院教員 (大学院)
客員教授 : 宮尾秀樹 (MIYAO, Hideki) 客員准教授 : 川崎洋平 (KAWASAKI, Yohei)
非常勤 : 官川 響 (HIROKAWA, Toru)、源田 正 (GENDA, Tadashi)、萩原大士 (HAGIWARA, Daishi)、前島和美 (MAESHIMA, Kazumi)、須藤貴世子 (SUDO, Kiyoko)、斉藤利恵 (SAITO, Toshie)、佐々木麻美子 (SASAKI, Mamiko)、成田優子 (NARITA, Yuko)、

2. 教育

2-1. 目的・目標 :

全身管理を理解～実践できる医師の育成を目的として教育を行っている。卒前教育では4年生6年生の講義は麻酔科領域の基本的な知識を習得させることを目標とした。BSL は医療センター麻酔科4部門 (手術室麻酔管理、ICU、ペインクリニック、周産期麻酔) の診療内容の理解、卒後教育では研修医は主に手術室麻酔研修、ICU・周産期・ペインクリニックの内容理解、集中治療室での全身管理の基礎の理解、スタッフ教育は最新の知識の取得と専門医に必要な項目の理解を目標とした。開院以来使用している「麻酔科研修のために」は適宜改訂を行い教育の指針として使用、定期的に改訂を行っている (ver6. 4. 4)。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育では4年生、6年生の系統講義を小山、照井が担当した。小山は4年生麻酔・救急ユニットのサブユニットディレクターである。ベッドサイド実習 (CC) は小山、照井、小幡、清水、丸尾、山家、鈴木、加藤らが担当した。手術室は実習を主体とし、薬液注入、気道確保、静脈確保、シミュレーション人形での気管挿管練習、BSL 練習等を行った。ICU、周産期では症例ベースの実習、ペインはかわごえクリニックでのペイン外来見学を行った。BSL 終了時に4部門それぞれの到達目標に関する小テストを行った。夏期学生プログラム (課外プロ) を提示、医学部学生を受け入れた。卒後教育では初期研修医教育では毎年4月第1土曜日に初期研修医全員を対象としてアメリカ心臓協会認定心肺蘇生講習会 (AHA BLS プロバイダーコース、小山コースディレクター、毛呂山会後援) を開催しており、令和4年度は新型コロナ感染に注意しつつ行った (令和3年度は中止)。麻酔科研修中は日々の臨床麻酔を通して呼吸循環管理や急性期の輸液管理を教育した。その他としては、救命救急士の挿管実習を継続した (3ヶ月毎)。救命救急士の気管挿管プログラム (埼玉西部第2地区気管挿管生涯教育ならびに埼玉県ビ

デブ喉頭鏡講習、小山担当)を実施した。後期研修医、他施設からの産科麻酔研修(フェローシップ含め)を随時受け入れている。スタッフ教育では平日朝の症例カンファレンス後のミニレクチャーを継続し、最新の知見から研修医向けの基礎的な内容まで幅広くカバーした。土曜医局会開催時は症例検討および後期研修医向けの講義を継続し、教育システムの充実を図った。年に1回開催となった埼玉医大3病院麻酔科研究会(SMU-CAN、代表世話人小山)は、3病院麻酔科の情報交換およびエキスパートからの講義を受ける貴重な研究会である。同じく年1回開催となった埼玉麻酔科専門医会は、埼玉県内麻酔科専門医の意見交換と同時に1年目後期研修医の学会発表デビューの場になっている。

2-3. 達成度評価

BSLの教育は成果をあげた。研修医教育1年目では、より充実した教育を行なった。2年目麻酔科を選択した研修医には希望により4部門のうちの希望部門の研修を行った。スタッフ教育は毎朝の症例検討、クルズス、抄読会が十分成果をあげている。教育主任小山教授、教育副主任鈴木准教授、後期研修担当原口助教、初期研修担当田澤助教を中心にBSLおよび研修医教育、救急救命士教育の充実を図った。4年生、6年生の講義では医師国家試験の出題傾向を考慮し学生からのフィードバック結果を基に内容をブラッシュアップしている。後期研修医はオペ室での全身管理から研修を開始、後半は集中治療管理、産科麻酔も加え幅広く全身管理を教育した。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度も全身管理を理解・実践できる、優れた、骨太の実地臨床医家の育成を目標として活動する。

3. 研究

3-1. 目的・目標

大学院の学位論文作成、臨床での臨床研究を車の両輪として、学会発表のみならず、なるべく多くの研究を論文化することに努めている。研究カンファを定期的開催し、研究の方向性を探り、研究の推進をはかる(従来の基本方針を堅持)。埼玉医科大学東洋医学講座、防衛医科大学校麻酔科学教室などと共同で研究を行い、複数の分野で博士号論文につながる研究を継続している。小幡教授就任に伴いペイン領域の臨床研究も行っている。

3-2. 研究グループと研究実績

麻酔：心臓外科術後の急性腎障害早期指標(尿中酸素分圧 P_{uO_2})の検討、周術期イオン化マグネシウムの推移・総マグネシウムとの比較、周術期心房細動発生危険因子の検討、大手術における代用血漿剤(ボルベン)の臨床的検討、等。尿中酸素分圧、イオン化マグネシウムと術後不整脈の関連の研究で学位取得、さらに研究を継続している。

周産期：帝王切開術での昇圧薬の検討、急性出血時の血液代替療法(動物妊娠モデル)、帝王切開術での麻酔薬および輸液製剤の胎児移行、臍帯血イオン化マグネシウム値、妊娠高血圧症候群の循環動態、妊婦ストレスのHPLCによる評価、帝王切開術後の悪心・嘔吐および掻痒感に対する円皮鍼の効果、帝王切開術後のアセトアミノフェン投与の有用性、帝王切開術時の腰椎くも膜下ブロックの低血圧予防および新生児への影響、妊婦の循環血液量の測定、帝王切開術時の昇圧薬の検討、等。動物妊娠モデルの研究で学位取得、動物実験モデル、昇圧薬の検討で学位研究を行なっている。

ICU：ICU患者のイオン化マグネシウム値の推移、術後腎不全の早期診断、人工呼吸中の加温加湿、新しい人工呼吸モードの検討、重症患者での酸素需給バランスの評価($ScvO_2$ ・乳酸値)、術後悪心・嘔吐、目標志向型マグネシウム投与を応用した全身管理、等。イオン化マグネシウムの研究での学位研究を継続中である。

ペイン：脊髄損傷急性期手術における麻酔薬の慢性痛への影響、帯状疱疹後神経痛の臨床経過、抗凝固療法中の神経ブロック、等。脊髄損傷急性患者では学位研究を行なっている。

以上の4部門の研究グループで臨床研究を中心に学会発表、論文化を行っている。

3-3. 達成度評価

代用血漿製剤：60%、血液凝固：達成度60%、

急性出血モデル：90%、帝王切開術での胎児移行：達成度90%、臍帯血イオン化マグネシウム値：90%、妊娠高血圧症候群：80%、悪心・嘔吐：90%、HPLCを使用したストレス検討：70%、イオン化マグネシウム値の推移：90%、悪心・嘔吐：90%
酸素需給バランスの評価：70%

3-4. 次年度計画

各研究グループの活動を継続、学会発表を積極的に行うと同時に、発表内容の論文化(特に学位論文作成)に取り組む。

4. 診療

総合医療センター麻酔科は、手術室麻酔管理、集中治療室管理、産科麻酔、ペインクリニックの4部門に加え、ドクターヘリでの救急医療など、おおよそ麻酔科医が関与しうる全ての分野をカバーしていることが最大の特徴である。3D心エコーも導入され心臓血管麻酔の充実も期待されることである。各分野で、最新の知見も視野に入れた、質の高い医療を提供すると同時に、医学部学生、研修医の教育にも力を注いでおり、チーム医療やマンパワーの充実も目標に掲げている。安全で質の高い麻酔を介して病院全体の安全管理、病院経営に寄与すべく医局員一丸となって取り組んでいる。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県西部第2地区MC協議会委員(小山)

ISO-Technical Committee121-Subcommittee3の日本メンバー(宮尾名誉教授)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本麻酔科学会機関誌 Journal of Anesthesia, editorial board(照井、松田)/査読委員(小山、宮尾)、Drug Safety 査読委員(小山、照井、小幡)、日本集中治療医学会雑誌査読委員(小山)、日本臨床麻酔学会誌査読委員(宮尾、小山)、International Journal of Obstetric Anesthesia, occasional editor(照井、松田)、International Anesthesiology Clinic, contributing editor(照井)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

小山はアメリカ心臓協会認定の川越ACLSトレーニングサイトのサイト長およびファカルティとして、Basic Life Support (BLS)、Advanced Cardiac Life Support (ACLS)、およびPediatric Advance Life Support (PALS)プロバイダーコースを定期開催し、地域での蘇生教育の普及に貢献した。日本麻酔科学会代議員、日本臨床麻酔学会評議員、日本心臓麻酔学会評議員、日本集中治療医学会評議員、日本臨床モニター学会評議員、体液代謝研究会理事として活躍した。

照井は、日本麻酔科学会代議員、体液代謝研究会評議員、Obstetric Anesthesia subcommittee member、World Federation of the Societies of Anesthesiologistsのactive memberとして活躍した。

6. 業績

6-1. 論文・著書

- ① Okubo K, Kato T, et al: Two cases of liver transplantation with a high ionized magnesium to total magnesium ratio of surgery. Cureus 2022; 14 (3): e23524
- ② Kikuchi K, Kato T, et al: A case report of Takotsubo cardiomyopathy diagnosed after postponement of surgery due to hypotension and ECG abnormality upon entering the OR. Cureus 2022; 14 (5): e25389
- ③ Hiroki T, Suto T, Ohta J, Saito S, Obata H. Spinal γ -aminobutyric acid interneuron plasticity is involved in the reduced analgesic effects of morphine on neuropathic pain. J Pain 2022 23(4); 547
- ④ 小幡英章、「痛覚変調性疼痛」によせて、基礎研究-下行性抑制系からの考察、ペインクリニック 2022; 43 (12): 1328
- ⑤ 小幡英章、他：弱オピオイド。手術患者の術前使用薬コントロール、小竹良文編、克誠堂出版、東京、2022、29
- ⑥ 小山 薫：利尿薬、手術患者の術前使用薬コントロール、小竹良文編、克誠堂出版、東京、2022、107
- ⑦ 鈴木俊成、小山 薫：輸液、輸血、灌流液の加温。臨床麻酔 2022; 46: 947
- ⑧ 長根亜佐子、鈴木俊成、他：ダンディウォーカー症候群患児の高度循環不全および気道管理に難渋した経験。麻酔 2022; 71: 1013
- ⑨ 黒川右基、加藤崇央、他：リトドリン長期投与後に反跳性高カリウム血症をきたし集中治療管理が必要となった1例。麻酔 2022; 71: 1120
- ⑩ 加藤崇央、小山 薫：ICUでの鎮痛薬。臨床麻酔 2022; 47: 171

6-2. 獲得研究費

科研費（小幡、加藤崇）、大塚製薬工場、エドワーズライフサイエンス、旭化成ファーマ、ノババイオメディカル、等

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当無し

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- 6-5-1. 埼玉医大臨床麻酔ネットワーク（SMU-CAN：毛呂、日高、川越麻酔科の合同研究会）：代表世話人小山、埼玉県麻酔専門医会世話人：小山
- 6-5-2. 体液代謝管理研究会：理事長小山、評議員鈴木、松田、名誉会員宮尾
- 6-5-3. AHA 認定 BLS、ACLS、PALS 講習会定期開催：川越トレーニングサイト長小山

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

鈴木、松田、丸尾、清水、加藤、北岡、原口、金子ら若いメンバーが総合医療センター麻酔科の5部門（4部門+心臓血管麻酔）のさらなる充実を図っている。産科麻酔では照井の指導の下、他大学を含めた産科麻酔研修の希望者を本年度も受け入れた。教育は4年生、6年生の系統講義、5年生のBSLを担当、BSL、CC含め高い評価を得た。研修医の教育では、改訂された「麻酔科研修のために」を初期～後期研修医の教区でも有効活用し、優れた実地臨床医の育成に寄与した。BLS/ACLS/PALSの教育では小山が埼玉医大の学生、研修医、看護師に加え、地域での普及教育も積極的に行った。救命新棟手術室置オープンに伴い手術室増室、昼夜を問わない緊急手術へ柔軟に対応し、手術件数は増加した。ICUも救命新棟2階に移動、入室患者も増加した。ペインクリニックでは2つの外来診療（当院・かわごえクリニック）を継続している。地域での急変患者の蘇生率向上に貢献すべく、AHA 認定心肺蘇生講習会を本年度も定期開催した。このように総合医療センター麻酔科は、麻酔科の関与しうる、おおよそ全ての分野で活動しているが、多忙な臨床の中でもリサーチマインドを忘れることなく学会活動などを継続、博士論文の作成に向けて努力した。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

卒前教育での4～5年生ベッドサイド実習は毎年高い評価を得ているが、引き続き実習最後の総括小テストで理解度を把握、医師国家試験合格、さらには優れた実地臨床医教育育成に取り組む。研究に関しては当院麻酔科の特徴である、イオン化マグネシウム、代用血漿製剤、産科麻酔領域での研究を継続して、専門医員の学位取得に繋がる研究に取り組む。診療に関しては多方面での周術期全身管理の継続に加えて、集中治療領域での重症患者管理加算を確実に取得すべく関係職種との連携を深める。

このように次年度も安全で質の高い全身管理を通じて教育、研究、医療安全、病院経営に寄与する所存であるが、麻酔科の関与しうるおおよそ全ての分野を24時間365日カバーするには人材確保が必要不可欠である。新入局者確保に加えて、＜辞めない＞医局体制を維持、人材を確保、きたる働き方改革にも対処できる体制を目指す。

2. 30) 救急科 (ER)

1. 構成員

久村 正樹 (HISAMURA Masaki) : 准教授 : 運営責任者, 診療副部長, 研究主任, 教育主任 : 教員 (大学院) : 精神科救急 : 博士
田口 博一 (TAGUCHI Hirokazu) : 講師 : 診療部長, 研究副主任 : 救急医学全般, 蘇生, 外傷外科 : 大学院教員 : 博士
安藤 陽児 (ANDOU Youji) : 講師 : 頭頸部外傷外科, 航空医療
中村 元洋 (NAKAMURA Motohiro) : 講師 : 教育副主任, 研究副主任 : 教員 (大学院) : 航空医療, 周術期管理 : 博士
園田 健一郎 (SONODA Kenichiroo) : 助教 : 専門委員 : 災害医療
安齋 勝人 (ANNZAI Masato) : 救急救命士 : 蘇生教育, 病院前救護 : 修士
野木 裕介 (NOGI Yusuke) : 救急救命士 : 蘇生教育, 病院前救護

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

「卒前教育」

三次救急患者の初期評価、外傷初期診療およびドクターヘリなどにおける病院前医療について見学し、その意義を理解する。心肺停止症例においてはBLSを体験し、ACLSの内容を理解する。一次、二次救急患者については初期診療に参加し、簡単な処置について指導を受けながら経験する。

「卒後教育」

初期研修1年目では救急患者の初期診療において、蘇生処置、体表の外傷処置、中心静脈確保および総合的な救急診療の基礎を修得する。また、救急車に同乗して病院前救護の意義を理解する。2年目では1年目研修医および学生の指導ができ、ACLSおよびJATECが実行できる。また、希望があればドクターヘリに同乗し、病院前救護の内容を考察する。後期研修では救急科専門医を取得する。1年目、2年目を通じ、英文論文を読み、学会発表し、その内容を論文にする習慣を身に着ける。

2-2. 教育実績 (担当者)

「卒前教育」

SARS-Cov2 感染対策のため参加型臨床実習が十分に行なえず、クルズス中心となった。

「卒後教育」

初期研修に対しては、初期診療において、当科ローテーション中の研修医が主体をもって診療を実践できる機会は少なかった。これは、当院高度救命救急センター独自の分業制による診療体制にも依る。患者の重症度が高くなるにつれ、この傾向は強まった。

Off the job trainingについては、JATECを指導したが、スキルスラボを使えない時期があり、クルズスが中心となった。BLS、ICLS/ACLSについては、感染対策からほとんどコース開催できなかった。

学会発表では、研修医の発表演題は2題、研修医が筆頭著者の論文は1編だった。抄読会は毎月1回実施し、ローテーションしたすべての研修医が発表出来た。

専攻医は在籍しなかったため評価できない。

「大学院教育」

当科の大学院生は在籍していないが、博士課程2年に在学中の、歯科口腔外科所属医師の博士論文を指導した。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」

教育実績から、SARS-CoV2 感染のため十分に行うことはできなかった。

「卒後教育」

教育実績から、初期研修医が主体となる診療を十分に行うことはできなかった。学会発表と論文は、目標を達成できた。抄読会も目標を達成できた。

「大学院教育」

データは集まったが、分析方法を検討中であり、論文化にはいたらなかった。

2-4. 次年度改善計画

「卒前教育」

SARS-Cov2 感染対策そのものを実習に含める。さらにしっかりした感染対策を行ったうえで、参加型臨床実習を行っていく。

「卒後教育」

研修医が主体的に診療できる機会を増やすため、当科中心で対応できる、内因性救急患者の受け入れを増加させる。学会発表や論文執筆の指導はこれまで通り継続し、数を増やす。抄読会は ZOOM を併用し、他施設の指導者も含めて、内容の充実を図っていく。

「大学院教育」

論文化を急ぐ。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

- 1) ドクターヘリ活動内容をデータベース化し、多施設共同研究に参加する。
- 2) 小中学生に対する蘇生教育の効果検証を継続する。
- 3) 病院前医療における治療内容が救急患者の予後に与える影響について検証する。
- 4) 重症外傷患者の初期対応がその後の経過に及ぼす影響について検証し、戦略を見直す。
- 5) 救急ワークステーションが患者予後に与える効果を検証する。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- 1) ドクターヘリに関する研究
多施設共同研究でデータを集積中である。
ドクターヘリの費用対効果を明らかにすることを目的とした研究計画書を、科学研究費助成事業に応募した。「研究経費の内容に問題がある」など評定され不採択となったが、評定内容を踏まえ、本年度に再度応募予定である。
- 2) 蘇生教育検証に関する研究
蘇生教育が小中学生の生命に対する考え方にどのような影響を与えるか評価することを目的として、シミュレーション教育を行った。データ集積中である。
- 3) 病院前医療に関する研究
救急救命士の自立と専門性を目指した全国規模のフォーラムが、基本学科所属の安齋救急救命士により開催された。ワークステーションは SARS-Cov2 感染対策のため実績を積みなかった。
- 4) 外傷診療に関する研究
高度救命救急センターにより、重症外傷の転帰改善を目的とした戦略会議が月に 1 回程度開催されている。この会議に参加し、外傷診療の振り返りと、当科としてのデータ集積方法を検討中である。
- 5) 心肺蘇生に関する研究
多施設共同前向き研究を行っている。当施設のデータを加え、現在解析中である。
- 6) 精神科救急に関する研究
精神科の救急患者に対する対応能力の向上と、患者をより円滑に受け入れるシステム作りを目的に、学会活動や著書で成果を公表した。現在、論文を投稿中である。
- 7) 中毒に関する研究
スタッフの学位研究として、カフェイン摂取量と症状の関連を調べる研究を行っている。

3-3. 達成度評価

- 1) ドクターヘリに関する研究
研究実績から多施設共同研究については、データは集積できつつあるが、論文化にはいたっていない。
ドクターヘリ費用対効果の研究については、科学研究費助成事業に応募した以外は進展がない。
- 2) 蘇生教育に関する研究
研究実績からデータは集まりつつあるが、論文化にはいたっていない。
- 3) 病院前医療に関する研究
研究実績から救急救命士が対象のフォーラムを開催するなど、学会活動は充実した。
- 4) 外傷診療に関する研究
研究実績から、当科としてデータ集積できておらず、論文化にはいたっていない。
- 5) 心肺蘇生に関する研究
研究実績から、現在データ解析中であり、論文化を目指している。
- 6) 精神科救急に関する研究
研究実績から、学会ではシンポジストとして提言と議論を行った。著書とともに、医療者向けの医学動画を作成し、発表した。投稿した論文は現在査読中であり、結果は未定である。
- 7) 中毒に関する研究

研究計画書は当院の倫理審査を通過し、現在データ集積中である。

3-4. 次年度改善計画

1) ドクターヘリに関する研究

多施設共同研究でのデータを分析し、学会や論文で発表する。
費用対効果に関する研究は、再度、科学研究費助成事業に応募する。

2) 蘇生教育に関する研究

蘇生教育に対する受講者の行動変容につき、データを揃えて論文化する。

3) 病院前医療に関する研究

救急救命士教育やワークステーションで得られた知見を学会や論文で発表する。

4) 外傷診療に関する研究

当科としてのデータ集積内容と方法を決定する。

5) 心肺蘇生に関する研究

論文化する。

6) 精神科救急に関する研究

論文数や著書を増やす。

7) 中毒に関する研究

論文化する。

4. 診療

あらゆる救急患者を受け入れる救急医療体制を確立し、救急応需率向上、診療の質向上を目指していたが、内因性救急の充実を実践することができなかった。また、所属医師の減少もあり、一時的に一次救急対応から撤退せざるを得ない時期もあった。2021年12月にER型救急志向の医師が入職したことにより、少しずつ、内因性救急患者を応需するようになった。また2022年2月から曜日限定で、外科系の一次救急患者診療を再開した。重症外傷や急性冠症候群など緊急度と重症度が高く、かつ速やかな専門治療が必要な疾患には、これまで通り高度救命救急センターや心臓内科、脳神経外科と連携し、初療に関わる体制を維持した。

病院前救急医療については、ドクターヘリ事業を中心に、埼玉県全域の消防機関や医療機関と連携している。

今後は、内因性救急はもちろん、ほとんどの救急患者の初療をERが担える、ないし関わられる体制を目指していく。これにはマンパワーが必要であり、臓器専門科と連携を深め、当科と臓器専門科で人員交流なども目標にするとともに、外部から広く医師をリクルートしていく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県救急救命士養成所運営検討委員会
埼玉県メディカルコントロール委員会
埼玉県ドクターヘリ運営管理(責任者:中村元洋)
埼玉県DMAT

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本行動療法学会編集委員、査読委員
Cureus 査読
Recent Patents on Engineering 査読

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

川越市内小中学生の蘇生教育授業
埼玉県救急救命士養成所専任教員・講師
日本救急医学会関東地方会幹事
日本航空医療学会評議員
日本心身医学会代議員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

①安齋勝人 当院における脳卒中患者受け入れと救急隊の現場観察について：第25回日本臨床救急医学会：2022

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

安齋勝人 大会長：第1回救急救命士フォーラム, 2022. 3.

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、SARS-Cov2感染対策のため十分な参加型臨床実習指導ができなかった。

卒後教育に関しては、初期診療において、研修医が主体的に診療する機会は少なかった。学会および論文発表指導は概ね目標を達成することができた。抄読会についても目標を達成できた。

研究に関しては、データ集積中の共同研究もあり、十分な実績は出ていないが、刊行された著書や、論文化されたものもあり、ある程度実績を出すことができた。

診療に関しては、これまで内因性救急にかかわる体制を作ることができなかつたため、内因性救急患者の応需を増やし、ER型救急体制を目指していく。

基本学科全体としては、1000床を超える大学病院の救急部門という立場の中で、少人数ながら、各人は教育・研究・診療に十分尽力したと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、感染症対策の方法を指導し、それにより次年度は参加型臨床実習の機会を増やしていく。

卒後教育に関しては、初期診療において、内因性救急患者など当科で中心に対応する患者を増やし、これにより次年度に当科をローテーションする研修医が、主体的に診療できる症例数を増やす。学会や論文発表指導は継続し、次年度は数を増やす。抄読会は質の向上を目指す。

研究に関しては、次年度は学会や論文に発表する数を増やす。また競争的資金獲得を目指す。

診療に関しては、次年度は、内因性救急患者の受け入れを増やす。このため、必要となる臓器専門家の指導と協力を仰いでいく。緊急度と重症度が極めて高く、速やかな専門治療が必要な際は、これまで通り高度救命救急センター/心臓内科/脳神経外科などと連携し対応していく。

中長期的には、内因性救急はもちろん、ほとんどの救急患者の初療をERが担える、ないし関わられる体制を目指していく。このためにはマンパワーが必要であるが、現在の基本学科スタッフ数は少なく、医師の獲得が喫緊の課題である。新専門医制度により、当科のみを志望する卒後3年目の医師を採用することは困難となった。さらに新専門医制度施行以降、当院の救急科専門研修プログラム採用者が当科をローテートした実績はなく、現時点で予定もない。このため救急科に限らず、何らかの専門医を取得した、新専門医制度の影響が比較的少ない医師を当科専従としてリクルートし、マンパワーの充実を図っていきたい。

2. 31) 高度救命救急センター

1. 構成員

堤晴彦 (TSUTSUMI, Haruhiko) : 特任教授 : 理事 : 脳神経外科学(頭部外傷、脳血管障害、一般)、救急医学 : 博士
澤野誠 (SAWANO, Makoto) : 教授 : 高度救命救急センター長(運営責任者) : 診療部長 : 研究副主任 : 代表指導教員 (大学院) : 学位論文審査教員 (大学院) : 外科学(消化器外科、血管外科、一般)、救急医学 : 博士
井口浩一 (INOKUCHI, Kouichi) : 教授 : 診療副部長 : 整形外科(脊椎、外傷、一般)、救急医学 : 博士
中田一之 (NAKATA, Kazuyuki) : 准教授 : 診療副部長、HCU 病棟医長 : 内科学(循環器、一般)、救急医学 : 博士
大河原健人 (OKAWARA, Kento) : 講師 : 教育主任 : 外来医長 : 外科学(消化器外科、一般)、救急医学 : 博士
森井北斗 (MORII, Hokuto) : 講師、診療専門員、一般病棟医長
八幡直志 (YAHATA, Tadashi) : 講師、診療専門員
上田泰久 (UEDA, Yasuhisa) : 講師、診療専門員
上村直子 (KAMIMURA, Naoko) : 助教、教育副主任、診療専門員
松田真輝 (MATSUDA, Masaki) : 助教、診療専門員
高橋翼 (TAKAHASHI, Tsubasa) : 助教、診療専門員
大井秀則 (OI, Hidenori) : 助教、診療専門員
原敬 (HARA, Kei) : 助教、診療専門員
平松玄太郎 (HIRAMATSU, Gentarou) : 助教、診療専門員、災害担当医長
今本俊郎 (IMAMOTO, Toshiro) : 助教、診療専門員、総務担当医長
笠原智樹 (KASAHARA, Tomoki) : 助教、診療専門員
村瀬真 (MURASE, Makoto) : 助教、診療専門員
久木原由里子 (KUKIHARA, Yuriko) : 助教、診療専門員
佐藤雅史 (SATOU, Masashi) : 助教、診療員
平埜貴久 (HIRANO, Takahisa) : 助教、診療専門員
田沼悠太 (TANUMA, Yuuta) : 助教、診療員
景山貴史 (KAGEYAMA, Takashi) : 助教 (シ)、診療員
徳田充宏 (TOKUDA, Mitsuhiro) : 助教 (シ)、診療員
米津雅之 (YONEDU, Masayuki) : 助教 (シ)、診療員

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

- 卒前教育 (学生) においては、クルズスによって救急医療に対する基礎知識を身につけてもらう一方、救急医療の第一線の現場を自ら体験し、救急医療体制の現状と問題点についても十分な理解が得られることを目標とした。
- 卒後教育 (初期臨床研修) に対しては、上述した目標以外にも、さらに各種重症疾患に対する集中治療についての実践的な知識や技能の習得にも重点を置いた。
- 大学院教育においては、救急医療の実践の中で見出した問題意識や疑問点を整理し、新しい知見へと結び付ける研究の方法論や技能を身につけさせることを目標とした。また、基礎領域の学術集会の企画・準備・運営への参画を通じて、研究成果公表の方法論などの習得を目標とした。
- 救急救命士教育においては、当直実習も含めて救急医療およびそのシステムについての、救急救命士としての実践的な知識や技能の習得とともに、医療現場への理解を深めることを目標とした。

2-2. 教育実績 (担当者)

(1) 卒前教育

- ① 卒前教育は大河原健人講師が教育主任 (責任者)、上村直子助教が教育副主任 (副責任者) として担当したが、それ以外にもほとんどのスタッフが関与した。C.C. step 1, 2 においては、クルズスによって救急医療に対する基礎知識を身につけてもらう一方、救急医療の第一線の現場を自ら体験し、救急医療体制の現状と問題点についても十分な理解が得られることを目標とした。具体的には救急医療現場への参加。昼間のみならず、希望者には夜間も許可している。ほぼ全員夜間研修を希望し参加した。
- ② 人形を用いた心マッサージ、点滴ライン確保、気管挿管などの実技実習や外傷・ACLS に対するシミュレーション実習の実施
- ③ 急性中毒、急性冠症候群、外傷などのクルズス、などを中心に教育を行った。さらに C.C. step 3 においては、3 週間外科チーム、整形外科チーム、ER の各部門 1 週間ずつに所属して文字通り昼夜を問わず密度の高い実習をおこなった。
- ④ C.C. step 3 においては、実習期間の最後に、指導医の指導・教育のもとに実習中に経験した症例に基づいた学会発表形式のプレゼンテーションを皆の前で行った。

(2) 卒後教育 (初期臨床研修)

澤野誠教授がプログラム責任者、大河原健人講師が研修指導責任者として担当したが、それ以外にもほとんどのスタッフが臨床研修医に対する卒後教育に関与した。澤野誠教授は研修管理委員、三病院自由選択プログラムのプログラム責任者も担当した。高度救命救急センター初期研修プログラムの理念は以下のとおりである。

- ① すべての医師が、救急部門(高度救命救急センター・救急科 ER)の研修を通じて、救急患者の緊急性および重症度の評価を行うことができ、そのための診断能力・知識・技術を身につけることを目標とする。
- ② 外傷、熱傷、中毒、心臓大血管疾患、脳血管障害など多岐にわたる最重症の三次救急患者の、初期治療から手術、

集中治療、リハビリテーションそして退院まで含めた一貫した診療に、主治医の一人として参画する。

③一人の患者の救命から社会復帰、時には死亡までの全ての過程に関わり、緊急時の対応に必要な知識や技術を身につけるとともに、地域の救急医療体制や、介護の体制、生命倫理などの問題についても理解を深め、一人の医師として自分なりの医療観・生命観をはぐくむことも目標となる。

④救急科 ERにおける研修と、高度救命救急センターにおける研修とが、連携し、相互に補完することにより、一次救急、二次救急、三次救急の全てをカバーする広範な救急部門研修を実践する。

このような理念を実現・実践する為に高度救命救急センター初期研修プログラムには以下の特色がある。

・重症救急患者の初療から退院まで一貫して高度救命救急センターの専従医師が診療にあたるシステムをとっているため、多くの救急医療施設における研修のように初療や急性期に限定されることなく、慢性期の手術、治療、リハビリまで経験することができる。

・専従医師(指導医)は臨床経験 10 年以上、脳神経外科、外科、整形外科、集中治療、麻酔、内科、循環器、形成外科、救急など各学会の専門医ないし指導医の資格を有し、高度救命救急センターに収容された患者の手術や検査などは原則的に専従医師が施行するまた心臓外科や循環器内科など他の診療科と協同して診療にあたることも多い。したがって、研修中は極めて多岐にわたる手技、手術、検査などを経験することができる。

・当高度救命救急センターは、地域救急医療、災害医療、ドクターヘリ事業、国際、緊急医療援助などでも中心的な役割を担っており、他の施設では機会の少ないこれらの分野の研修ができる。

後期(専門)研修については、2023 年度よりの新しい専門医研修制度に対する取り組みとして、救急専門医の専門研修プログラムを作成、日本救急医学会に提出し承認を得た。

(3) 大学院教育

澤野誠教授を代表指導教員、堤晴彦教授、中田一之准教授が指導教員として担当した。以上 5 名は学位論文審査教員として担当した。

(4) 救急隊員・消防隊員教育

救急隊員・消防隊員教育は救急科(ER)安齋勝人(責任者)として担当したが他のスタッフもほとんど全員関与した。県内の救急隊員の教育にも力を注いでおり、埼玉県委託を受けて総合医療センター内で施行されている年 3 回の救急標準課程の講義・教育の大半を救急科(ER)とともに当科のスタッフが担当しており、また埼玉県救急救命士養成所(さいたま市)にも出張し、講義・教育を行っている。救急救命士病院実習を定期的に受け入れており、救急救命士の当直実習のない日は週末のみという日々が続いている。BLS(Basic Life Support)、ACLS(Advanced Cardiovascular Life Support)、JATEC.C. Japan Advanced Trauma Evaluation And Care)などをもとにした心肺蘇生法や外傷初期治療の普及も、救急医に課せられた任務と考えており、適宜研修会を開催している。2018 年 5 月より救急ワークショップが稼働し、救急科(ER)医師とともに現場も含め、救急隊員のプレホスピタル活動の教育・指導に当たった。

2-3. 達成度評価

(1) 卒前教育

C.C. step1, 2 は 5 日間のみに限られたが、緊迫した救急医療現場の雰囲気を堪能してもらい、それ以外の時間を利用して、臨床に即したクルズスや実践的な実習が行われ、おおむね好評であった学生教育は短期間に限定され、その結果救急搬送される症例に偏りが生じ、心肺蘇生法などの現場実習ができない学生も存在したが、己れを克服すべく、人形を用いた BSL では ACLS の実技実習を積極的に取り入れた。クリニカルクラークシップ C.C. step 3 では、大河原健人講師(教育主任)ならびに各指導医の指導のもと、実習期間中各人に実際の症例に基づいた研究テーマを与え、これを最後に研究発表形式で発表する試みを行った。実習期間中にモチベーションの高い学生が多かったこと、さらには実習期間が長期であったことが功を奏したことから今後とも力を入れたい。

(2) 卒後教育

初期研修医教育では、必修 2 か月間(高度救命救急センター 4 週間、救急科 ER4 週間)という短期間のローテートではあったが、積極的な研修医に対しては幅広い知識を習得できるよう指導できたと考えている。研修医に対しては、上述したような個人差をなるべく解消させる意味からも、チェックシートを活用して厚生労働省の指導する必修項目が漏れなく習得できるような体制をとった。2 年目の選択期間に高度救命救急センター ICU 部門での研修を希望する初期研修医の数も着実に増加しており、より高度な集中治療を中心とした研修をおこなった。

(3) 大学院教育

本年度、澤野誠教授が代表指導教員、井口浩一教授、中田一之准教授が指導教員として大学院教育に当たった。

(4) 救急隊員・消防隊教育

救急隊員教育では、地域のプレホスピタルケアの充実はまさに日進月歩の感があるが、教育面では、消防学校・救命士養成所などの講義を通じて貢献した。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育では、短期間の C.C. step1, 2 では人形を用いた BSL・ACLS の実技実習を積極的に取り入れた。C.C. step 3 では、実習期間中各人に実際の症例に基づいた研究テーマを与え、これを最後に研究発表形式で発表する試みを行い。日本救急医学会総会の学生・研修医セッションでの発表にまでつながったものもあった。実習期間中にモチベーションの高い学生が多かったこと、さらには実習期間が 4 週間と長期であったことが功を奏したことから今後とも力を入れたい。卒後教育では、2 年目の選択研修期間に高度救命救急センターなかでも ICU チーム研修を選択する研修医が引き続き増加してきているのも卒後教育の成果と考えている。大学院教育では、引き続き充実した教育体制を構築していくべく努力したい。救急隊員教育では、地域のプレホスピタルケアの充実はまさに日進月歩の感があるが、われわれも側面から多少なりとも貢献しているものとする。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

中田一之准教授を研究主任(責任者)澤野誠教授を研究副主任(副責任者)として、救急患者の予後を改善することを

目的・目標として各種研究を行っているが、既存の科と違って診療分野が多岐にわたる。したがって、特に研究分野を絞り込むことをせず、基礎研究から臨床研究まで世界標準 (Global Standard) のエビデンスを発信できる研究を展開することを目標としている。さらに、その研究成果の発信も国内外を問わず、主要な学会あるいは Journal にて行うことを目標としている。特に学会発表については国際学会、論文については原著および英文誌を重視した。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

1. 澤野教授 (呼吸凝縮液による RT-PCR 法を用いた SARS-CoV-2 RNA 検出に関する研究)
総合診療内科岡教授、三村講師、感染症科・感染制御科大野教授、中央検査部竹下教授とともに Journal of Breath Research 誌 (Impact factor 4.538) に原著論文 2 篇を含む 4 篇の論文が掲載された。
2. 井口講師、澤野教授 (頸髄損傷の超急性期手術の予後改善効果に関する研究)
井口教授が THESIS にて学位論文を取得後も、研究を継続中。
3. 今本助教、澤野教授 (外傷性大量出血に対する血清カルシウム補正の予後改善効果に関する研究)
4. 森井助教、澤野教授 (重度四肢外傷における微小血行再建手術に関する研究)
5. 松田助教、澤野教授 (ダメージコントロール手術の重症外傷患者の予後に対する悪影響に関する研究)
英文論文 1 篇 (松田助教の学位論文) が BMC Surgery 誌 (Impact factor 4.538) に掲載された。同論文にて松田助教は学位 (博士) を 11 月に取得している。
6. 福島非常勤講師、澤野教授 (13C を用いた災害時要救助者捜索技術の開発に関する研究)

3-3. 達成度評価

救急医療分野を中心としつつ、基礎医学も含め医学全体の発展に貢献することを目的とし、上述した多方面の研究を行っている。すでに論文公表、学位取得、競争的資金の獲得につながっている研究がある一方で、学会発表のレベルに止まっているものも多く、今後の課題である。

3-4. 次年度改善計画

上述したように学会発表レベルで留まっているものが多いが、漸次原著論文も増加しつつある。またこれらの論文をベースとして、より多くの教室員の学位取得を目指す。堤晴彦教授、澤野誠教授、井口浩一教授は多くの国内外の学会の役員として活発に活動しており、今後数年間にわたり全国大会レベルの学会開催を複数予定している。今後全国大会レベルの学会あるいは国際学会の開催数も増加してゆくものとおもわれ、事務面や人員面での負担も増加することも課題である。

4. 診療

2022 年度実績としては、入院患者延数 32140 人・日、手術件数 (K コード) 2170 件 (うち全身麻酔手術件数 1246 件) であった。さらに重症外傷症例 (Injury Severity Score 16 以上) 症例数は 350 例と米国レベル 1 外傷センターの基準 (年間 240 例) を大きく上回っている。重症外傷症例 (Injury Severity Score 16 以上) の入院中死亡率は 6.6% と日本外相データバンク 2019-2020 平均の 20.9% を大きく下回った。入院延患者数は新病棟が稼働開始した 2016 年度以降ほぼ横ばいであったが 2022 年度には過去最高となった (全診療科中首位)。一方手術件数 (K コード) は、2020 年度は新型コロナウイルス (COVID-19) 禍の影響もあり減少したが、2022 年度は過去最高となった。 (全診療科中首位)。高度救命救急センターの診療機能・診療成績・医療安全の全ての面を完全に維持しつつ COVID-19 重症診療 (成績) との両立が図れた。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

堤晴彦教授が日本救急医療財団研修教育事業委員会委員、澤野誠教授が埼玉県医療対策協議会救急医療部会委員、埼玉県メディカルコントロール協議会委員、埼玉県救急救命士養成所運営検討委員会委員を委嘱されている。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

堤晴彦教授が救急医学会雑誌査読委員、救急医療ジャーナルの編集委員を委嘱されている。澤野誠教授が Journal of Breath Research, Medical Gas Research, Acute Medicine and Surgery の編集委員を委嘱されている。澤野誠教授が文部科学省・学術振興会科学研究費補助金の審査委員ならびに救急医学会雑誌、安定同位体と医学応用 (日本安定同位体・生体ガス医学応用学会機関誌)、British Journal of Anaesthesia, Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition, Artificial Organs, Acute Medicine and Surgery Physiological Measurement の査読委員を委嘱されている。

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

医学貢献に関わる活動としては、堤晴彦教授が日本脳死脳蘇生学会理事、日本臨床医学リスクマネジメント学会理事、日本脳神経外科救急学会理事、日本航空医療学会評議員に、澤野誠教授が日本救急医学会評議員、日本臨床医学リスクマネジメント学会理事、日本安定同位体・生体ガス医学応用学会理事に、井口浩一教授が日本外傷学会理事に就任している。このように主要スタッフは多くの国内外の学会の役員として活発に活動しており、本年度と同様に今後数年間にわたり全国大会レベルの学会開催を複数予定している。

平成 20 (2007) 年度より、埼玉医科大学総合医療センターは救急科 (ER) ならびに高度救命救急センターの医師、看護師が中心となって埼玉県ドクターヘリの基地病院として 365 日体制でその運営を担っている。人口あたりの医師数が全国でも最低レベルである埼玉県において、広い県域さらには北関東一帯から傷病者を迅速に搬送可能であることだけでなく、救急現場から医師や看護師によって医療処置を開始できるという大きなメリットがあり、救急患者の救命に多大な利益をもたらすものである。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1. Matsuda M, Sawano M. Successful artificial pneumothorax thoracoscopic repair of a right-sided diaphragmatic injury with hemothorax. A case report. Int J Surg Case Rep. 2023 Mar;104:107913.
2. Sawano M, Beauchamp J. Limitations and opportunities in breath research in the face of the COVID-19 pandemic. J Breath Res. 2022 Nov 3;17(1).
3. Imamoto T, Sawano M, Ueta I. Infant Caudate Lobe Injury With Retroperitoneal Hematoma: A Case Report. Cureus. 2022 Jul 27;14(7):e27327.
4. Matsuda M, Sawano M. Single-staged laparotomy versus multiple-staged laparotomy for traumatic massive hemoperitoneum with hemodynamic instability: a single-center, propensity score-matched analysis. BMC Surg. 2022 Jun 2;22(1):210.
5. Sawano M, Takeshita K, Ohno H, Oka H. SARS-CoV-2 RNA load and detection rate in exhaled breath condensate collected from COVID-19 patients infected with Delta variant. J Breath Res. 2022 Jun 7;16(3).
6. 井口 浩一(埼玉医科大学総合医療センター 高度救命救急センター), 森井 北斗. 治療法の再整理とアップデートのために 専門家による私の治療 四肢外傷. 日本医事新報(0385-9215)5155号 Page46(2023.02)
7. 松田 真輝(埼玉医科大学総合医療センター 高度救命救急センター), 澤野 誠. 肝損傷 IIIb および右腎動脈損傷に対し肝右葉切除かつ右腎動脈再建を同時に施行した 1 例. 日本外傷学会雑誌(1340-6264)36 巻 4 号 Page349-352(2022.10)
8. 上田 泰久(埼玉医科大学総合医療センター 高度救命救急センター). 【四肢骨折プレート固定術の創意工夫】骨盤骨折に対するプレート固定の工夫. Orthopaedics(0914-8124)35 巻 10 号 Page131-145(2022.10)
9. 上田 泰久(埼玉医科大学総合医療センター 高度救命救急センター). 【わかる! 骨盤骨折(骨盤輪損傷)-診断+治療+エビデンスの Update】骨盤輪損傷の初期治療, 初期固定. 臨床整形外科(0557-0433)57 巻 9 号 Page1067-1074(2022.09)
10. 森井 北斗(埼玉医科大学総合医療センター 高度救命救急センター). 【新鮮骨折に対する内固定以外の治療法 人工関節手術・関節固定術・切断術】切断術 重度上肢外傷に対する切断術. 整形外科 Surgical Technique(2185-7733)12 巻 4 号 Page476-481(2022.08).

【総数：論文 14 件（英文 5 件、和文 12 件、学会発表（国際学会 4 件、国内学会 20 件）】

6-2. 獲得研究費

1. 澤野誠教授 Horizon Europe Framework Programme (HORIZON) Disaster-Resilient Society 2021 (HORIZON-CL3-2021-DRS-01) Orchestrating next-generation mobile modular laboratories for pandemic monitoring preparedness (ONELAB) 2022-2025
2. 荒木尚客員教授 科学研究費補助金 基盤 (C) 救急・集中治療領域における脳死患者対応の教育システムに関する研究 2021-2023

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育面、特に卒前教育で短期間の C.C. step1, 2, 3 では人形を用いた BSL・ACLS の実技実習を積極的に取り入れた。C.C. step3 では新しい試みも行い、モチベーションの高い学生が多かったこと、さらには実習期間が 4 週間と長期であったことが功を奏したことから今後とも力を入れたい。卒後教育では、2 年目の選択研修期間に高度救命救急センターなかでも ICU チーム研修を選択する研修医が引き続き増加してきているのも卒後教育の成果と考えている。大学院教育では、引き続き充実した教育体制を構築していくべく努力したい。救急隊員教育では、地域のプレホスピタルケアの充実はまさに日進月歩の感があるが、われわれも側面から多少なりとも貢献しているものとする。研究面では、救急医療分野を中心としつつ、基礎医学も含め医学全体の発展に貢献することを目的とし、多方面の研究を行っている。論文数や学会発表数も年々増加しており、その内容も高度化している。すでに論文公表、学位取得、競争的資金の獲得につながっている研究がある一方で、学会発表のレベルに止まっているものも多く、今後の課題である。

診療面では、重傷多発外傷、熱傷、中毒、循環器救急疾患などを中心とした入院患者を 24 時間体制で診療している。本年は総数約 1400 例と安定して推移しつつ、全身麻酔下手術件数は年間約 1200 例超のハイペースを維持した。各々の患者の重症度は確実にアップしている。病床数は ICU 16 床、HCU 32 床に加え常に後方病床を 30 床以上を維持しており、当科の専任医師が主治医として診療に当たっている。特に「外傷センター」ならびに「ドクターヘリ基地病院」として、重傷外傷患者の全県から集約に努め、頸椎・頸髄損傷の手術件数で、全国 DPC 病院中圧倒的首位、Injury Severity Score (ISS) 16 以上の重傷外傷患者数も 321 名と、世界最高峰と言われる米国 Level1 Trauma Center の基準 ISS16 以上の重傷外傷 240 例を遥かに凌駕する症例規模を維持している。このように当院高度救命救急センターは、入院患者の数、重症度、手術件数のいずれの観点でも全国随一の本格的重症外傷センターである。高度救命救急センターはどう COVID-19 パンデミックに向き合うのか、COVID-19 重症診療と三次救急診療機能をどう両立するのか、そして県内最大の基幹病院の救急部門として今何をなすべきか本当に手探りの運営を続けてきた。その中で、高度救命救急センターの診療機能・診療成績・医療安全の全ての面を完全に維持しつつ COVID-19 重症診療（成績）との両立

が図れたと自負している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育面では、大河原健人講師を中心にさらなる充実を目指す。これまで構築してきた、卒前教育すなわちC.C.のプロ
プログラムは学生からも好評であり、この後これをベースにさらなる充実を教室員全員の協力のもと目指したい。

研究面では、漸次原著論文も増加しつつある。またこれらの論文をベースとして、複数の教室員が学位取得にいたっ
ており、これをさらに増加させることを目指す。また、堤晴彦教授、澤野誠教授、井口浩一教授教授は多くの国内外
の学会の役員として活発に活動しており、今後数年間にわたり全国大会レベル・国際レベルの学会開催を複数予定し
ている。今後全国大会レベルの学会あるいは国際学会の開催数も増加してゆくものとおもわれ、事務面や人員面での
負担も増加することも課題である。

診療面では、現在の質的にも量的にも高度な診療体制は、スタッフのプライベートタイムの犠牲の上にかろうじて成
り立っているが、今後もこの体制を維持していくためには、スタッフの大幅な増員は不可欠なものと考えている。こ
のように各医師の診療成績向上へのこだわりと献身的な勤務によって右肩上がりの診療実績に対応してきた当科の診
療体制を、今後も持続することは不可能であり、むしろ医師数の減少につながりかねない危険もはらんでいる。こ
のような現状から、当科の利点である外科、整形外科、脳外科、集中治療各チームの専門性を活かしつつ、これまで培
ってきたチーム内の相互補完をチーム間（チームの枠を超えて）に拡張するなどの方策にて業務の効率化を図り、個々
の医師の負担軽減に向けて動き出すことが2023（令和5）年度の課題と展望である。そのためには変化を恐れるので
はなく、「変われなければ生き残れない」ことを皆で共有することも不可欠と考えている。

2. 32) (1) 放射線科 (画像診断科・核医学科)

1. 構成員

宮崎 将也 (Miyazaki Masaya) : 教授 : 診療部長 : 教育副主任 : 指導教員(大学院) : IVR、放射線診断学 : 医学博士
熊倉 嘉貴 (Kumakura Yoshitaka) : 教授 : 診療副部長 : 研究主任 : 指導教員(大学院) : 核医学 : 医学博士
清水 裕次 (Shimizu Yuji) : 講師 : 医局長 : 核医学 : 医学博士
渡部 涉 (Watanabe Wataru) : 講師 : 外来医長 : 大学院教員(大学院) : 放射線診断学、IVR : 医学博士
中橋万須美(Nakahashi Masumi) : 助教 : 放射線診断学、医学博士
後藤 俊 (Goto Shun) : 助教
近藤 修一(Kondo Shuichi) : 助教
友金 佐光 (Tomogane Sako) : 助教
中治 春香 (Nakaji Haruka) : 助教

(名誉教授)

町田喜久雄(Kikuo Machida) : 医学博士
本田 憲業 (Norinari Honda) : 医学博士

(客員教授)

荒井 保明(Arai Yasuaki) : 医学博士
長田 久人(Osada Hisato) : 医学博士
土屋 一洋(Tsuchiya Kazuhiro) : 医学博士

(非常勤講師)

薄井 庸孝 (Usui Nobutaka) : 医学博士
大野 仁司 (Ohno Hitoshi) : 医学博士
岡内 研三 (Okouchi Kenzo) : 医学博士
岡田 武倫 (Okada Takemichi)
鹿島田明夫(Kashimada Akio) : 医学博士
河辺 哲哉 (Kawabe Tetsuya)
久保田 潤 (Kubota Jun) : 医学博士
河野 正志 (Kono Masashi)
五明 美穂 (Gomyo Miho) : 医学博士
佐貫 榮一 (Sanuki Eiichi) : 医学博士
瀧島 輝雄 (Takishima Teruo) : 医学博士
中田 桂 (Nakada Kei) : 医学博士
中野 祥子(Nakano Sachiko) : 医学博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

放射線科としての全般的な広い知識に加え各自の専門領域での高度な知識と技術を備えた画像診断医・IVR 医を養成する。

2-2. 教育実績(担当者)

- 胸部・乳腺領域の画像診断(渡部、中橋、中田) ,
- 腹部領域の画像診断(宮崎、渡部、長田)
- 脳神経・頭頸部領域の画像診断(中橋、岡内、久保田、五明)
- I V R (宮崎、渡部)
- シンチグラフィ(熊倉、清水)
- PET (熊倉、清水)

2-3. 達成度評価

達成度は約70%である。

2-4. 次年度改善計画

●卒前教育

放射線医学に関して、放射線被曝・防護についての基礎を教育する。CT, MRI, シンチグラフィ, PET を中心とした画像診断学や IVR の基礎的知識について教育する。また、近年医師国家試験では画像診断の知識を踏まえた臨床問題が多数出題されているため、これを念頭に置いた画像診断から実臨床につながるような総合的な知識を身に付けることができるように教育を行っていく。

●卒後教育

初期研修医については、CT や MRI の画像診断における撮像プロトコールや読影の基礎、IVR の適応や実際の手技など、より実践的知識を指導医が中心となって教育する。後期研修医・専攻医には、まずは4年目に受験可能な放射線科専

門医取得を目指し、「放射線科専門医研修プログラム」に沿って各疾患の画像読影や IVR 治療を指導医の教育のもと実践する。放射線科専門医取得後は、さらに専門性の高い画像診断および IVR を学び、放射線診断専門医や IVR 専門医や核医学専門医を取得できるように教育を実施する。また、他科と合同で行うカンファレンスやカンサーボードにも参加し発言できる人材を育成する。画像診断・IVR に関連する学会・研究会での発表や論文作成が行えるような人材を育成する。

●大学院生教育

現在、画像診断・IVR を専攻する大学院生は在籍していないため、専攻医や診療放射線技師を中心に大学院へ入学し学位取得できる環境を整える。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

画像診断・IVR に関連した臨床診療に即した実用性の高い研究を行うことを目指す。国内・国際学会での発表や英文雑誌への論文掲載を目標とする。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

凍結療法における画像ナビゲーションシステムの活用に関する研究(宮崎、友金)

凍結療法における至適治療プロトコルの開発に関する基礎研究(宮崎)

肝細胞癌に対する肝動脈化学塞栓療法における肝予備能変化に関する後方視的観察研究(宮崎、友金)

中心静脈ポートの安全性・有効性に関する後方視的観察研究(宮崎、中治)

中心静脈ポートの前向き観察研究(多施設共同)(宮崎)

CT 検査における低管電圧撮影による造影剤減量および被ばく低減に関する研究(宮崎、後藤、中治)

¹²³I-MIBG 心筋シンチグラフィの短時間撮像の検討(熊倉)

重症下肢虚血の病態評価のための核医学定量イメージング法の開発(熊倉)

腹膜播種などを対象とするα線放出核種を用いた新しい核医学治療法の開発(熊倉)

3-3. 達成度評価

達成度は約 60%である。

3-4. 次年度改善計画

引き続き、画像診断・IVR に関する研究を推進し研究結果を国内・国際学会等で発表を行い、論文公表へつなげていくことを目標とする。また、今年度は多施設共同研究の結果を論文公表につなげることができたが、次年度は IVR に関する新たな多施設共同研究に参加し学会発表や論文公表につなげるように環境を整備していく。

4. 診療

各科診療を向上させるような放射線画像、画像レポート、IVR 治療の提供を行う。

オーダ数		令和4年度 装置別検査人数(オーダ数)													合計	担当者数	検査室名
部門	装置名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月				
一般撮影	CS-7 1号室	1,598	1,709	1,817	1,776	1,671	1,676	1,734	1,683	1,599	1,607	1,511	1,761	20,142		1号室 2号室 3号室 4号室 5号室	
	CS-7 2号室	1,501	1,341	1,580	1,446	1,450	1,505	1,524	1,508	1,383	1,397	1,331	1,613	17,579			
	CS-7 3号室	1,714	1,511	1,759	1,657	1,724	1,641	1,483	1,104	1,636	1,559	1,635	1,816	19,239			
	CS-7 4号室	702	797	888	777	684	735	793	874	671	683	759	841	9,204			
	CS-7 5号室	44	44	55	70	74	54	62	133	25	29	61	66	717			
													66,881				
乳房	Dimensions	57	59	43	59	65	55	69	56	52	66	59	73	713		5号室	
														713			
骨塩	QDR-DiscoveryA	129	145	131	143	120	125	129	132	126	114	129	144	1,567		11号室	
														1,567			
透視	HDR-08A	31	40	34	33	37	21	43	46	51	27	22	41	426		8号室 9号室 10号室 内視鏡C 内視鏡C 11号室	
	ZEXIRA	5	0	4	0	3	3	0	0	5	0	4	5	29			
	SONIAL VISION G4	143	134	141	131	154	131	162	150	137	120	130	142	1,675			
	ZEXIRA FPD	59	78	72	61	72	71	58	64	69	70	76	70	820			
	ULTIMAX	29	31	46	38	38	36	29	46	38	39	41	32	443			
CS-3 TV	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1				
														3,394			
CT	Definition Flash	744	795	869	787	793	797	739	747	786	761	737	837	9,392		14号室 12A号室 12B号室 13号室	
	Emotion 16A	762	774	805	734	754	714	715	726	659	668	628	701	8,640			
	Emotion 16B	332	265	368	336	363	408	463	383	406	307	446	498	4,575			
	X.cite	791	844	867	807	853	825	825	850	857	904	788	871	10,082			
														32,689			
AG	AXIOM Artis dBA	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		15号室 16号室	
	Artis zee ITA	46	43	49	53	59	43	45	36	43	54	60	56	587			
	ARIET TA850	3	4	1	1	1	4	0	1	0	0	0	0	15			
														602			
MR	MAGNETOM Avanto fit	272	274	294	275	274	257	286	309	261	271	265	299	3,337		東MR1 東MR2 東MR3 東MR4	
	MAGNETOM Skyra fit	233	232	244	234	242	231	250	245	209	244	279	299	2,888			
	Ingenia	218	228	253	226	262	231	269	249	262	240	256	279	2,973			
	Ingenia Elition	248	238	268	287	299	269	299	277	301	268	299	337	3,390			
														12,588			
核医学	Discovery NM630	108	118	124	116	124	106	114	106	114	104	100	116	1,350		核医学	
	PRISM AXIS	26	19	24	30	21	22	20	18	17	27	23	3	250			
	Biograph TP16	125	122	127	127	143	129	123	127	123	128	120	146	1,540			
	治療(投与)	3	3	2	4	3	5	3	4	4	3	3	2	39			
														3,179			
治療	STx3162	×線	62	66	70	63	64	65	113	72	65	55	55	67	817		治療室1
	電子線	3	2	2	8	6	4	3	5	2	2	7	7	51			
	TrueBeam2945	×線	63	58	56	60	63	54	86	64	61	50	43	58	716		治療室2
	電子線	1	4	5	2	0	1	0	0	2	2	1	2	20			
	Optima CT 580W(16列)	67	69	78	71	71	65	76	68	49	67	54	75	810			
	アプターローディング	6	7	4	3	6	5	1	0	0	0	0	1	33			
	照合撮影	120	118	114	115	125	118	199	136	124	104	97	125	1,495			
治療計画透視	6	7	4	3	6	5	1	0	0	0	0	0	32				
														3,974			
救命救急	CT750HD FREEdom	464	530	463	445	467	463	510	528	604	543	371	420	5,808		救命	
	Perspective 64	359	446	398	352	354	344	362	359	383	437	350	308	4,452			
	Artis zeego	37	26	42	35	36	32	39	35	27	42	36	49	436			
	Allura Clarity FD20/15	35	31	36	32	31	31	37	36	36	35	38	51	429			
	Azurion 7 B12	66	66	63	76	66	63	62	57	68	70	68	70	795			
	CS-7 QQ 1	331	302	327	293	307	295	313	319	376	356	249	265	3,733			
	CS-7 QQ 2	355	437	389	404	368	346	389	390	379	389	336	323	4,505			
	QQ Po.1	119	159	167	148	148	117	167	108	141	208	153	233	1,886			
	QQ Po.2	298	336	312	360	267	269	287	235	233	264	263	132	3,276			
	QQ Po.3	125	190	164	157	148	144	203	192	150	133	92	142	1,840			
	QQ Po4 Ope	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	QQ Po Cable 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	QQ Po Cable 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	QQ Po Cable 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
QQ Po Cable 4 Ope	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
														27,140			
結石破砕	Delta III Pro	1	1	2	6	8	3	4	4	4	8	5	7	53		6号室	
														53			
ホータル その他	ホータル CS-3 PO(無菌)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		その他	
	ホータル CS-3 病棟2(無菌)	20	14	22	18	31	24	18	40	28	25	18	21	279			
	ホータル CS-7 病棟1	26	30	33	32	37	32	23	45	38	69	17	9	391			
	ホータル CS-7 病棟2(本館)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	ホータル CS-7 病棟3	416	487	450	515	507	478	529	418	521	575	509	478	5,883			
	ホータル CS-7 NICU	403	428	373	438	530	556	494	594	644	577	515	536	6,090			
	ホータル CS-7 OPE 1	212	232	193	209	199	217	217	174	207	195	185	198	2,438			
	ホータル CS-7 OPE 2	125	130	168	173	173	140	144	180	160	164	162	179	1,898			
	ホータル CS-7 病棟(4階・ICU)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	ホータル CS-7 病棟(4階中央)	1	0	0	33	18	0	0	3	28	5	12	0	100			
	ホータル CS-7 病棟(5階中央)	2	6	3	2	41	12	4	51	76	58	16	0	271			
	ホータル CS-7 病棟(1階中央)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	一般撮影 CS-7(1階中央)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	CT go.Top(1階中央)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	OPE SCOPE	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
	FILM COPY(フィルム出力)	6	5	10	19	17	8	7	9	5	4	4	0	94			
	FILM COPY(AG室作成DVD)	1	2	1	1	1	2	1	0	1	0	3	2	15			
	FILM COPY(TV室作成DVD)	6	4	5	1	8	7	6	6	3	3	4	2	55			
	FILM COPY(DVD・POP・Net)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
ID680HM(DVD・受付)	643	698	712	738	780	683	698	699	728	714	638	793	8,524				
ID680HM(連携取込)	698	668	737	721	647	649	669	673	669	674	627	707	8,139				
														34,177			

撮影数(ショット数)

令和4年度 装置別検査数(撮影数)

部門	装置名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	担当者数	検査室名		
一般撮影	CS-7 1号室	2,624	2,807	2,966	2,875	2,711	2,641	2,817	2,772	2,556	2,600	2,403	2,752	32,524		1号室		
	CS-7 2号室	4,114	3,756	4,202	3,898	3,879	4,021	4,075	3,923	3,583	3,649	3,708	4,391	47,199		2号室		
	CS-7 3号室	3,522	3,085	3,517	3,289	3,352	3,223	2,994	2,035	3,148	3,135	3,248	3,597	38,146		3号室		
	CS-7 4号室	1,989	2,204	2,367	2,148	1,926	1,875	2,063	2,287	1,954	1,802	2,037	2,240	24,892		4号室		
	CS-7 5号室	108	129	164	161	165	123	145	318	63	139	167	196	1,878		5号室		
														144,639				
乳房	Dimensions	218	208	153	214	225	200	251	196	190	219	208	255	2,537		5号室		
														2,537				
骨塩	QDR-DiscoveryA	267	296	260	293	238	248	257	264	256	227	260	285	3,151		11号室		
														3,151				
透視	HDR-08A	35	45	36	33	39	22	46	47	54	31	23	42	453		8号室		
	ZEXIRA	5	0	4	0	4	3	0	0	5	0	4	5	30		9号室		
	SONIAL VISION G4	165	155	163	146	186	150	180	165	156	128	140	156	1,890		10号室		
	ZEXIRA FPD	63	78	72	61	72	71	58	64	74	70	76	70	829		内視鏡C		
	ULTIMAX	29	32	48	38	38	37	29	46	38	40	41	32	448		内視鏡C		
CS-3 TV	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2		11号室			
														3,652				
CT	Definition Flash	2,248	2,225	2,494	2,314	2,362	2,371	2,217	2,287	2,229	2,206	2,208	2,523	27,684		14号室		
	Emotion 16A	1,381	1,427	1,406	1,367	1,370	1,321	1,343	1,384	1,246	1,237	1,124	1,260	15,866		12A号室		
	Emotion 16B	674	474	690	665	658	773	870	740	793	602	846	977	8,762		12B号室		
	X.cite	2,416	2,432	2,523	2,514	2,636	2,467	2,679	2,558	2,549	2,594	2,377	2,667	30,412		13号室		
														82,724				
AG	AXIOM Artis dBA	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		15号室		
	Artis zee ITA	125	112	114	116	175	117	110	97	106	159	158	150	1,539		16号室		
	ARIEtta850	3	18	1	1	1	19	0	4	0	0	0	0	47				
														1,586				
MR	MAGNETOM Avanto fit	403	415	442	416	407	384	424	462	384	393	390	434	4,954		東MR1		
	MAGNETOM Skyra fit	451	436	455	427	445	419	470	442	470	395	454	528	5,392		東MR2		
	Ingenia	332	361	373	342	398	340	387	382	389	355	370	412	4,441		東MR3		
	Ingenia Eilition	491	471	519	544	561	523	588	541	571	528	591	648	6,576		東MR4		
														21,963				
核医学	Discovery NM630	187	210	212	207	219	194	206	190	199	185	183	208	2,400		核医学		
	PRISM AXIS	39	30	34	49	32	29	27	24	32	47	38	3	384				
	BiographTP16	126	123	127	127	143	131	126	128	123	131	121	147	1,553				
														4,337				
治療	STx3162	X線	2836	2,756	2683	2553	2975	2952	2954	3455	2671	1684	2272	2685	32,476		治療室1	
		電子線	7	14	19	32	32	23	20	26	11	25	44	39	291			
	TrueBeam2945	X線	1845	1,958	2204	2365	2028	1626	2188	2172	2001	1609	1534	1718	23,248			治療室2
		電子線	5	17	23	8	0	4	0	9	8	2	8	84				
	Optima CT 580W(16列)	69	71	81	74	72	70	76	68	49	77	55	78	840				
	アフターローディング	17	15	6	9	16	8	2	0	0	0	0	2	75				
	照合撮影	774	841	896	1015	1340	1284	1458	1435	1232	1019	1099	1256	13,649				
治療計画透視	17	15	6	9	16	8	2	0	0	0	0	0	73					
														70,736				
救命救急	CS-3 QQ	0	0	0	0	0	0	27	0	0	0	0	0	27		救命		
	CT750HD_FREEdom	944	1,107	958	1,010	963	1,049	1,180	1,094	1,236	1,138	789	920	12,388				
	Perspective 64	686	884	803	702	729	683	763	712	696	827	675	617	8,777				
	Artis zee go	40	27	48	50	43	41	43	39	28	48	51	51	509				
	Allura Clarity FD20/15	100	86	108	108	103	89	112	116	110	106	113	163	1,314				
	Azurion 7 B12	258	257	268	274	237	275	212	202	254	280	263	300	3,080				
	CS-7 QQ 1	620	565	635	559	585	550	606	621	719	659	469	545	7,133				
	CS-7 QQ 2	796	1,027	949	885	808	861	904	948	838	838	724	760	10,338				
	QQ Po 1	125	179	177	160	156	130	182	113	150	222	170	318	2,082				
	QQ Po 2	392	465	430	512	383	378	369	312	307	357	343	145	4,393				
	QQ Po 3	161	219	197	193	173	182	243	215	195	140	101	168	2,187				
	QQ Po4 Ope	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	QQ Po Cable 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	QQ Po Cable 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	QQ Po Cable 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
QQ Po Cable 4 Ope	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
														52,228				
結石破砕	Delta III Pro	1	1	2	6	8	3	4	4	4	8	5	7	53		6号室		
														53				
ホータル その他	ホータル CS-3 PO(無菌)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		その他		
	ホータル CS-3 病棟2(無菌)	20	15	24	18	32	26	20	43	28	25	18	21	290				
	ホータル CS-7 病棟1	30	33	37	37	40	36	23	49	39	81	17	9	431				
	ホータル CS-7 病棟2(本館)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	ホータル CS-7 病棟3	491	552	517	608	582	541	599	463	599	671	568	523	6,714				
	ホータル CS-7 NICU	496	517	456	534	672	735	654	729	760	702	594	605	7,454				
	ホータル CS-7 OPE 1	397	432	360	354	355	379	377	293	379	357	326	359	4,368				
	ホータル CS-7 OPE 2	256	264	332	347	347	263	300	369	315	318	293	371	3,775				
	ホータル CS-7 病棟(4階・ICU)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	ホータル CS-7 病棟(4階中央)	1	0	0	33	20	0	0	3	0	6	12	0	106				
	ホータル CS-7 病棟(5階中央)	2	9	3	2	43	12	4	53	83	60	17	0	288				
	ホータル CS-7 病棟(1階中央)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	一般撮影 CS-7(1階中央)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	CT go.Top(1階中央)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	OPE SCOPE	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	FILM COPY(フィルム出力)	6	5	10	19	17	8	7	9	5	4	4	0	94				
	FILM COPY(AG室作成DVD)	1	2	1	1	1	2	1	0	1	0	3	2	15				
	FILM COPY(TV室作成DVD)	6	4	5	1	8	7	6	6	3	3	4	2	55				
FILM COPY(DVD・POP-Net)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
ID680HM(DVD・受付)	643	698	712	738	780	683	698	699	728	714	638	793	8,524					
ID680HM(連携取込)	698	668	737	721	647	649	669	673	669	674	627	707	8,139					
														40,253				

撮影数(ショット数)

令和4年度 装置別検査数(撮影数)

部門	装置名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	担当者数	検査室名		
一般撮影	CS-7 1号室	2,624	2,807	2,966	2,875	2,711	2,641	2,817	2,772	2,556	2,600	2,403	2,752	32,524		1号室		
	CS-7 2号室	4,114	3,756	4,202	3,898	3,879	4,021	4,075	3,923	3,583	3,649	3,708	4,391	47,199		2号室		
	CS-7 3号室	3,522	3,085	3,517	3,289	3,352	3,223	2,994	2,035	3,148	3,135	3,248	3,597	38,146		3号室		
	CS-7 4号室	1,989	2,204	2,367	2,148	1,926	1,875	2,063	2,287	1,954	1,802	2,037	2,240	24,892		4号室		
	CS-7 5号室	108	129	164	161	165	123	145	318	63	139	167	196	1,878		5号室		
														144,639				
乳房	Dimensions	218	208	153	214	225	200	251	196	190	219	208	255	2,537		5号室		
														2,537				
骨塩	QDR-DiscoveryA	267	296	260	293	238	248	257	264	256	227	260	285	3,151		11号室		
														3,151				
透視	HDR-08A	35	45	36	33	39	22	46	47	54	31	23	42	453		8号室		
	ZEXIRA	5	0	4	0	4	3	0	0	5	0	4	5	30		9号室		
	SONIAL VISION G4	165	155	163	146	186	150	180	165	156	128	140	156	1,890		10号室		
	ZEXIRA FPD	63	78	72	61	72	71	58	64	74	70	76	70	829		内視鏡C		
	ULTIMAX	29	32	48	38	38	37	29	46	38	40	41	32	448		内視鏡C		
CS-3 TV	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2		11号室			
														3,652				
CT	Definition Flash	2,248	2,225	2,494	2,314	2,362	2,371	2,217	2,287	2,229	2,206	2,208	2,523	27,684		14号室		
	Emotion 16A	1,381	1,427	1,406	1,367	1,370	1,321	1,343	1,384	1,246	1,237	1,124	1,260	15,866		12A号室		
	Emotion 16B	674	474	690	665	658	773	870	740	793	602	846	977	8,762		12B号室		
	X.cite	2,416	2,432	2,523	2,514	2,636	2,467	2,679	2,558	2,549	2,594	2,377	2,667	30,412		13号室		
														82,724				
AG	AXIOM Artis dBA	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		15号室		
	Artis zee ITA	125	112	114	116	175	117	110	97	106	159	158	150	1,539		16号室		
	ARIETTA850	3	18	1	1	1	19	0	4	0	0	0	0	47				
														1,586				
MR	MAGNETOM Avanto fit	403	415	442	416	407	384	424	462	384	393	390	434	4,954		東MR1		
	MAGNETOM Skyra fit	451	436	455	427	445	419	470	442	470	395	454	528	5,392		東MR2		
	Ingenia	332	361	373	342	398	340	387	382	389	355	370	412	4,441		東MR3		
	Ingenia Eilition	491	471	519	544	561	523	588	541	571	528	591	648	6,576		東MR4		
														21,963				
核医学	Discovery NM630	187	210	212	207	219	194	206	190	199	185	183	208	2,400		核医学		
	PRISM AXIS	39	30	34	49	32	29	27	24	32	47	38	3	384				
	BiographTP16	126	123	127	127	143	131	126	128	123	131	121	147	1,553				
														4,337				
治療	STx3162	X線	2836	2,756	2683	2553	2975	2952	2954	3455	2671	1684	2272	2685	32,476		治療室1	
		電子線	7	14	19	32	32	23	20	26	11	25	44	39	291			
	TrueBeam2945	X線	1845	1,958	2204	2365	2028	1626	2188	2172	2001	1609	1534	1718	23,248			治療室2
		電子線	5	17	23	8	0	4	0	9	8	2	8	84				
	Optima CT 580W(16列)	69	71	81	74	72	70	76	68	49	77	55	78	840				
	アフターローディング	17	15	6	9	16	8	2	0	0	0	0	2	75				
	照合撮影	774	841	896	1015	1340	1284	1458	1435	1232	1019	1099	1256	13,649				
治療計画透視	17	15	6	9	16	8	2	0	0	0	0	0	73					
														70,736				
救命救急	CS-3 QQ	0	0	0	0	0	0	27	0	0	0	0	0	27		救命		
	CT750HD_FREEdom	944	1,107	958	1,010	963	1,049	1,180	1,094	1,236	1,138	789	920	12,388				
	Perspective 64	686	884	803	702	729	683	763	712	696	827	675	617	8,777				
	Artis zeego	40	27	48	50	43	41	43	39	28	48	51	51	509				
	Allura Clarity FD20/15	100	86	108	108	103	89	112	116	110	106	113	163	1,314				
	Azurion 7 B12	258	257	268	274	237	275	212	202	254	280	263	300	3,080				
	CS-7 QQ 1	620	565	635	559	585	550	606	621	719	659	469	545	7,133				
	CS-7 QQ 2	796	1,027	949	885	808	861	904	848	838	838	724	760	10,338				
	QQ Po 1	125	179	177	160	156	130	182	113	150	222	170	318	2,082				
	QQ Po 2	392	465	430	512	383	378	369	312	307	357	343	145	4,393				
	QQ Po 3	161	219	197	193	173	182	243	215	195	140	101	168	2,187				
	QQ Po4 Ope	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	QQ Po Cable 1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	QQ Po Cable 2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	QQ Po Cable 3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
QQ Po Cable 4 Ope	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
														52,228				
結石破砕	Delta III Pro	1	1	2	6	8	3	4	4	4	8	5	7	53		6号室		
														53				
ホータル その他	ホータル CS-3 PO(無菌)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		その他		
	ホータル CS-3 病棟2(無菌)	20	15	24	18	32	26	20	43	28	25	18	21	290				
	ホータル CS-7 病棟1	30	33	37	37	40	36	23	49	39	81	17	9	431				
	ホータル CS-7 病棟2(本館)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	ホータル CS-7 病棟3	491	552	517	608	582	541	599	463	599	671	568	523	6,714				
	ホータル CS-7 NICU	496	517	456	534	672	735	654	729	760	702	594	605	7,454				
	ホータル CS-7 OPE 1	397	432	360	354	355	379	377	293	379	357	326	359	4,368				
	ホータル CS-7 OPE 2	256	264	332	347	347	263	300	369	315	318	293	371	3,775				
	ホータル CS-7 病棟(4階・ICU)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	ホータル CS-7 病棟(4階中央)	1	0	0	33	20	0	3	31	6	12	0	0	106				
	ホータル CS-7 病棟(5階中央)	2	9	3	2	43	12	4	53	83	60	17	0	288				
	ホータル CS-7 病棟(1階中央)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	一般撮影 CS-7(1階中央)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	CT go.Top(1階中央)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	OPE SCOPE	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
	FILM COPY(フィルム出力)	6	5	10	19	17	8	7	9	5	4	4	0	94				
	FILM COPY(AG室作成DVD)	1	2	1	1	1	2	1	0	1	0	3	2	15				
	FILM COPY(TV室作成DVD)	6	4	5	1	8	7	6	6	3	3	4	2	55				
FILM COPY(DVD・POP-Net)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
ID680HM(DVD・受付)	643	698	712	738	780	683	698	699	728	714	638	793	8,524					
ID680HM(連携取込)	698	668	737	721	647	649	669	673	669	674	627	707	8,139					
														40,253				

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

厚生労働省 保険医療専門審査員 (宮崎)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Journal of Vascular and Interventional Radiology, Japanese Journal of Radiology, Asia-Pacific Journal of Clinical Oncology 査読委員(宮崎)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本 IVR 学会 学術・教育委員 (宮崎)

日本腫瘍 IVR 研究グループ(JIVROSG) 運営委員、教育・研修委員会委員長、監査委員会副委員長、プロトコル委員会委員 (宮崎)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Ikeda M, Arai Y, Inaba Y, Tanaka T, Sugawara S, Kodama Y, Aramaki T, Anai H, Morita S, Tsukahara Y, Seki H, Sato M, Kamimura K, Azama K, Tsurusaki M, Sugihara E, Miyazaki M, Kobayashi T, Sone M. Conventional or Drug-Eluting Beads? Randomized Controlled Study of Chemoembolization for Hepatocellular Carcinoma: JIVROSG-1302. Liver Cancer 2022. DOI: 10.1159/000525500
- ② Jenny-Ann Phan, Dean F. Wong, Natalie H. S. Chang, Kumakura Y, William R. Bauer and Albert Gjedde. Transient equilibrium determination of dopamine D2/D3 receptor densities and affinities in brain. Front. Nucl. Med., 2022 DOI 10.3389/fnume.2022.1030387
- ③ 清水裕次、土屋一洋. 症例 50 肺癌新出の所見を指摘できますか?、解答 50. 画像診断道場 胸部編 アップデート版 : 59・170、日本医事新報社 2023
- ④ 宮崎将也. 特集「低侵襲治療」小児への適応と可能性 ラジオ波焼灼療法 (RFA)・凍結療法. 小児外科 54(8) : 822-827、2022
- ⑤ 宮崎将也. 類骨骨腫に対する RFA. 第 51 回日本 I V R 学会総会. 2022 年 6 月 4 日～6 日、神戸国際展示場
- ⑥ 宮崎将也. その他のがん. 市民公開講座 第 1 回がん診療と IVR:RFA の適応拡大を含めて 第 51 回日本 I V R 学会総会. 2022 年 6 月 4 日～6 日、神戸国際展示場
- ⑦ Sako Tomogane, Haruka Nakaji, Akihito Nakajima, Shun Goto, Haruka Tanaka, Takahisa Hirano, Toshiro Imamoto, Wataru Watanabe, Masaya Miyazaki. Changes of liver function after TACE using miriplatin for HCC patients evaluated by m-ALBI grade. 第 51 回日本 I V R 学会総会. 2022 年 6 月 4 日～6 日、神戸国際展示場
- ⑧ 熊倉嘉貴. 30 分 MIBG ダイナミックプランナー法による定量は、レビー小体病の心筋交感神経機能異常を高精度に同定する. 第 62 回日本核医学会学術総会. 2022 年 9 月 9 日～11 日、国立京都国際会館
- ⑨ 後藤俊、友金佐光、中治春香、近藤修一、中橋万須美、渡部渉、宮崎将也. 内視鏡処置後に十二指腸憩室結石落下嵌頓を生じ腸石イレウスとなった 1 例. 第 50 回断層映像研究会. 2022 年 9 月 30 日～10 月 1 日、東京大学伊藤謝恩ホール
- ⑩ Masaya Miyazaki. Percutaneous cryoablation for bone tumor. 第 48 回日本低温医学会総会. 2022 年 10 月 21 日～22 日、東医健保会館

【総数：論文 2 件、学会発表 10 件、講演 10 件】

6-2. 獲得研究費

- 宮崎将也：基盤研究(C)．ルシフェラーゼ遺伝子導入担癌マウスを用いた凍結療法適応拡大のための前臨床研究
- 熊倉嘉貴：新学術領域研究(研究領域提案型)．微小胃がん腹膜播種の検出を可能とする放射線イメージング技術の開発．
- 熊倉嘉貴：基盤研究(B)一般．研究代表者：野村幸世．超選択的デリバリー短寿命 α 線を用いた胃癌腹膜播種内照射療法の実験的検討
- 熊倉嘉貴：国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))．研究代表者：和田洋一郎．治療用同位体製造と放射性医薬品合成の共同研究
- 熊倉嘉貴：基盤研究(C)一般．研究代表者：橋本拓弥．包括的高度慢性下肢虚血の血流代謝異常を可視化定量する、新しい核医学検査法の開発

6-3. 受賞

優秀賞：熊倉嘉貴、清水裕次、針生将嗣、市川賢一、梅田賢一、野村恭一．30 分 MIBG ダイナミックプランナー法による定量は、レビー小体病の心筋交感神経機能異常を高精度に同定する．第 16 回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス．2022 年 7 月 21 日～23 日、浜松町コンベンションホール

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度は放射線診断専門医 1 名増員の目標を掲げたが、今年度中の増員はできなかった。しかし、次年度には放射線診断専門医 1 名の増員が可能となるよう調整することができた。また、今年度は当科専攻医 1 名が放射線科専門医に合格したため、専門医資格者は 1 名増員することができた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

今年度、放射線科専門医は 1 名増員できたが、放射線診断専門医の増員はできなかったため、次年度は放射線診断専門医を増員し画像診断・IVR 部門の充実を図っていく。今年度は CT 部門での低電圧撮影の開始や IVR 部門での肺ラジオ波治療の開始など新たな画像診断・IVR の提供を開始することができたため、次年度はこの新たな技術をさらに定着・改善できるように環境を整備していくことを目標とする。

2. 32) (2) 放射線科 (放射線腫瘍科)

1. 構成員

高橋 健夫(TAKAHASHI, Takeo) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 研究副主任 : 教育主任 : 指導教員(大学院) : 放射線腫瘍学 : 医学博士
新保 宗史(SHINBO, Munefumi) : 准教授 : 研究副主任 : 放射線医学物理 : 工学博士、放射線治療管理室室長
山野 貴史(YAMANO, Takafumi) : 講師 : 副診療部長 : 外来医長 : 総務医長 : 放射線腫瘍学 : 医学博士
畑中 星吾(HATANAKA, Shogo) : 講師 : 放射線医学物理、放射線治療管理室副室長 : 放射線医学物理 : 博士
早川 豊和(HAYAKAWA, Toyokazu) : 助教 : 研修医長 : 医学博士
惣田 梨加奈(SODA, Rikana) : 助教
齊藤 美音(SAITO, Mio) : 助教
金森 信祐(KANAMORI, Shinsuke) : 助教
町田 史晴(MACHIDA, Fumiharu) : 助教
梅田 真梨子(UMEDA Mariko) : 助教 : 放射線医学物理
河合 大輔(KAWAI, Daisuke) : 大学院生
天沼 修人(AMANUMA, Syuto) : 大学院生
(名誉教授)
町田 喜久雄(MACHIDA, Kikuo) : 放射線医学 : 医学博士
(非常勤講師)
村田 修(MURATA, Osamu) : 放射線腫瘍学、医学博士
本戸 幹人(HONDO, Mikito) : 放射線腫瘍学、緩和ケア
木谷 哲(KITANI, Akira) : 放射線腫瘍学、乳腺腫瘍学、緩和ケア
北本 佳住(KITAMOTO, Yoshizumi) : 放射線腫瘍学、医学博士
黒崎 弘正(KUROSAKI, Hiromasa) : 放射線腫瘍学、医学博士
中村 香織(NAKAMURA, Kaori) : 放射線腫瘍学、医学博士
上野 周一(UENO, Shuichi) : 放射線腫瘍学
内海 暢子(UTSUMI, Nobuko) : 放射線腫瘍学、医学博士
針生 将嗣(HARIU Masatsugu) : 放射線医学物理 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

●卒前教育 :

腫瘍学の教育を重点的に行い、その中で放射線腫瘍学、画像腫瘍医学について教育する。放射線医学に関して被曝・防護、放射線生物学ならびに医学物理の基礎を教育する。

●卒後教育 :

臨床腫瘍学ならびに放射線腫瘍学の基礎・実践を学ぶことを目標とする。臨床腫瘍学をよく理解したうえで質の高い放射線治療を実践できる医師を育成する。高精度放射線治療を含む根治的放射線治療から、緩和的放射線治療に至るまであらゆる状況に対応できる放射線腫瘍医(放射線治療医)を養成する。実践的トレーニングとしては精度の高い放射線治療計画の作成ができる全国レベルの臨床医を育成する。また放射線治療部門はもとより、担当診療科や緩和ケアチーム、他施設スタッフともチーム医療が実践できる良き実地医家を育てる。

●大学院教育 :

現在2名の大学院生(博士課程)が所属している。高い研究マインドを持つ臨床腫瘍医を育成する。放射線腫瘍学、放射線生物学、医学物理に腫瘍画像医学の分野を加え、最新放射線治療戦略の開発、品質管理や治療効果に関する分子生物学的解明、治療計画における機能画像情報の融合による有害反応予測、放射線治療によるQOL改善効果、等に関する国際的レベルの研究を行う。臨床、研究両面のバランスのとれた実地医療をリードできる医師を、大学院での教育を通じて育成する

2-2. 教育実績(担当者)

●卒前教育(担当 : 高橋 健夫、新保 宗史、山野 貴史、惣田 梨加奈、齊藤 美音、金森 信祐、畑中 星吾、上野 周一)

○講義 ; 放射線治療の基礎、臨床腫瘍学の中での放射線腫瘍学の位置づけを明確にして、放射線治療の適応、治療効果、さらには放射線生物学・物理学の基礎を含めた講義を行う。各臓器別の特色も踏まえた講義を行う(担当 : 高橋 健夫、西村敬一郎、山野 貴史)。医学物理の基礎、被曝に関する講義を行う(担当 : 新保 宗史、畑中 星吾、梅田 真梨子)

○クリニカル・クラークシップ（担当：高橋 健夫、新保 宗史、山野 貴史、惣田 梨加奈、齊藤 美音、畑中 星吾、針生 将嗣、上野 周一）；

放射線医学、放射線腫瘍学、腫瘍画像医学の基礎知識を整理しながら（スライド小講義含む）、症例閲覧を交えた実践的な臨床教育を行う。学生に自主的に考える時間を作りながら、診療参加型実習を進め、学習効率のよい臨床実習を実践する。クリニカル・クラークシップでは各種カンファレンスに参加し担当患者サマリーを作成し、プレゼンテーションをしてもらい、臨床の現場を体験しながら多くの症例を経験させ学習の向上を図る。

- 卒業教育（担当：高橋 健夫、新保 宗史、西村 敬一郎、山野 貴史、惣田 梨加奈、齊藤 美音、畑中 星吾、梅田 真梨子、上野 周一）

腫瘍学を十分理解した中での放射線腫瘍学を習得できるように努める。放射線腫瘍学で学ぶ領域はきわめて広範囲であるため、臨床腫瘍学、緩和ケア、腫瘍画像医学、腫瘍病理学の基礎を理解しつつ放射線治療を実践できる医師を養成する。外来における通常診察、ならびに放射線治療計画の実践、さらに放射線治療品質管理を学ぶ。国内の第一線で活躍できる放射線腫瘍医の育成を行っている。

- 大学院教育（担当：高橋 健夫、新保 宗史、山野 貴史、畑中 星吾、梅田 真梨子）

国際的に通用する臨床・基礎研究を推進しつつ、研究マインドを持った優れた臨床医ならびに研究者を育成する。がんプロフェッショナル養成プランに大学院を入学させ、基礎・臨床の両面に精通するリーダーとなれる良医ならびに研究者を育成する。

2-3. 達成度評価

卒前教育はおおむね目標が達成されている。達成度 80%。

学生の自主性を引き出し、スタッフ全員でより密度の高い臨床実習（クリニカル・クラークシップ）を行えるよう努める。卒業教育に関しては画像診断・核医学科と連携して放射線科全体の教育を行いつつ、腫瘍学に根差した放射線腫瘍学の教育を行う。わが国において放射線治療患者数が増加する中、放射線治療医数が大幅に不足している。一人でも多くの高い臨床レベルを身に着けた放射線腫瘍医（放射線治療医）を継続的に育成することが重要ある。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育はより診療参加型の教育内容を充実させていくことが目標である。学生の自主性を引き出す教育を行う。卒業教育に関しては腫瘍学、画像医学ならびに放射線腫瘍学の臨床能力を高められるよう、濃密な教育体制を作り上げていく。大学院教育においては国際的かつ独創的な研究が継続的に行えるように努めていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

放射線腫瘍学は放射線医学、臨床腫瘍学、医学物理学、放射線生物学、等と密接に関連する学問であり、臨床ならびに基礎面から研究を進める。臨床的には現在の治療内容の成績を解析しつつ、新規放射線治療法の開発を目指す。その際の付随研究としての治療効果判定予測や予後予測に関する画像医学的研究、臨床-基礎の連携によるトランスレーショナル・リサーチ、医学物理的な品質保証に関する研究、QOL 解析等を推進する。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

- ・脳グループ（高橋健夫、畑中星吾、梅田真梨子、山野貴史、上野周一）
- ・呼吸器グループ（高橋健夫、梅田真梨子、畑中星吾、内海暢子）
- ・泌尿器グループ（高橋健夫、畑中星吾、山野貴史、上野周一）
- ・婦人科グループ（高橋健夫、梅田真梨子、畑中星吾、山野貴史、惣田梨加奈）
- ・消化器グループ（高橋健夫、山野貴史、惣田梨加奈）
- ・高精度治療グループ（高橋健夫、梅田真梨子、畑中星吾、山野貴史）
- ・緩和グループ（高橋健夫、山野貴史、上野周一）
- ・医学物理グループ（高橋健夫、新保宗史、畑中星吾、梅田真梨子）

- 研究プロジェクト：機能画像を融合させた有害反応予測を可能とする放射線治療の開発、機能画像融合による放射線治療効果予測、放射線治療線量分布の新規検証法開発、緩和的放射線治療における QOL への影響効果、寡分割定位放射線治療・VMAT の開発、VR の放射線治療への応用、等。

3-3. 達成度評価

おおむね目標が達成されている。論文も発表でき、学会の賞受賞もあり達成度 90%。

放射線腫瘍学は放射線医学、臨床腫瘍学、医学物理学、腫瘍画像医学、放射線生物学、等と密接に関連する学問であり、臨床ならびに基礎面（生物、物理）の両方から研究を進める。治療内容・成績の解析をもとに多くの臨床研究、臨床試験（院内、多施設共同、日本放射線腫瘍学臨床研究機構ら）を実施している。また付随研究としての治療効果判定予測や予後予測に関する画像医学的研究、高精度治療に関する医学物理的な解析による研究等を推進している。日本放射線腫瘍学会、日本医学放射線学会、日本癌治療学会をはじめとする関連学会に演題を発表し、各研究グループでの治療成績解析、トランスレーショナル・リサーチを推進する。また院内や多施設共同研究を通して、臨床研究・

臨床試験を推進している。

3-4. 次年度改善計画

次年度はそれぞれの研究の論文をさらに推進する。多くの臨床研究・臨床試験ならびにトランスレーショナル・リサーチが開始されているので、その確実な実施を結果の解析を準備行い、エビデンスを発信していく。

4. 診療

腫瘍学に根差した放射線治療を推進し高い治療効果、QOL の向上を目指した治療を行っている。放射線治療のみならず院内・院外の腫瘍外科学、腫瘍内科学、緩和ケア領域との密接な連携のもと包括的な治療（診断含む）を実施し、地域がん診療連携拠点病院としての機能を果たす。通常3次元放射線治療に加え、定位放射線治療、強度変調回転放射線治療（VMAT）、画像誘導小線源治療などの高精度放射線治療を推進。また緩和的放射線治療には力を注いでいる。国内・海外に向けエビデンスを発信し、地域連携のモデル施設としての役割を果たし放射線治療の推進し、地域におけるがん放射線治療を牽引している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

（高橋健夫）厚生省がんの緩和ケアに係る部会。参考人、（高橋健夫）がん放射線治療領域における放射線防護の基準作成。厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）。研究代表者：細野眞。新規及び既存の放射線診療に対応する放射線防護の基準策定のための研究。ならびに、（高橋健夫）厚生労働科学研究費補助金（がん政策研究事業）。研究代表者：大西洋。放射線療法の提供体制構築に資する研究、（高橋健夫）厚生労働科学研究費補助金（がん政策研究事業）。研究代表者：里見絵理子。がん関連苦痛症状の体系的治療の開発と実践及び専門的がん疼痛治療の地域連携体制モデル構築に関する研究。で行政への政策提言で社会・医学の両面において貢献している。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

International Cancer Conference Journal（編集委員）；高橋健夫
Journal of Radiology & Radiation Therapy（編集委員）；高橋健夫
Journal of Clinical Oncology & Research（編集委員）；高橋健夫
Thermal Medicine（編集委員）；高橋健夫

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

特定非営利活動法人放射線医療国際協力推進機構、特定非営利活動法人日本ネパール医療協力機構に加わり社会貢献を行っている。後者では理事を務めておりネパールにおける放射線診療の発展に貢献している（高橋健夫）。医用原子力技術研究振興財団・医療用線量等校正部会委員ならびに放射線治療品質管理部会委員（新保宗史）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Utsumi N, Takahashi T, Yamano T, Machida F, Kanamori S, Saito M, Soda R, Ueno S, Hayakawa T, Hatanaka S, Shimbo M. A Retrospective Study of Patients Undergoing Palliative Radiotherapy for Airway Obstruction due to Lung Cancer. *Cancer Diagn Progn.* 2023 3(1):61-66. doi: 10.21873/cdp.10180.
- ② hane K, Kako S, Suzuki M, Takahashi Y, Hatanaka S, Kawahara M, Nakada Y, Ogawad K, Takahashi S, Fukuda Y, Endo M, Oyama-Manabe N, Kanda Y, Shirai K, Dosimetric Evaluation of the Uterus in Patients Receiving Total Body Irradiation with Ovarian Shielding. *Case Rep Oncol* 2023 15(3):809-815. doi: 10.1159/000526536DOI: 10.1159/000526536
- ③ Kawamoto T, Saito T, Kosugi T, Nakamura N, Wada H, Tonari A, Ogawa H, Mitsuhashi N, Yamada K, Takahashi T, Ito K, Sekii S, Araki N, Nozaki M, Heianna J, Murotani K, Hirano Y, Satoh A, Onoe T, Shikama N. Temporal Profiles of Symptom Scores After Palliative Radiotherapy for Bleeding Gastric Cancer With Adjustment for the Palliative Prognostic Index: An Exploratory Analysis of a Multicentre Prospective Observational Study (JROSG 17-3). *Clin Oncol (R Coll Radiol)*. 2022 34(12):e505-e514. doi: 10.1016/j.clon.2022.05.009.
- ④ Saito T, Kosugi T, Nakamura N, Wada H, Tonari A, Ogawa H, Mitsuhashi N, Yamada K, Takahashi T, Ito K, Sekii S, Araki N, Nozaki M, Heianna J, Murotani K, Hirano Y, Satoh A, Onoe T, Watakabe T, Shikama N. Treatment response after palliative radiotherapy for bleeding gastric cancer: a multicenter prospective observational study (JROSG 17-3). *Gastric Cancer*. 2022 25(2):411-421. doi: 10.1007/s10120-021-01254-w.
- ⑤ 江原威、鹿間直人、木場律子、高橋健夫、茂松直之。一般市民における緩和ケアおよび放射線治療の認知度とニーズがん経験の有無による検討一。癌の臨床 66(4) : 261-267、2022
- ⑥ 小島徹、高橋健夫、遠山尚紀、川守田龍、小高喜久雄、新保宗史、谷正司、友田達伸、島田秀樹、大栗隆行、生島仁史、細野眞。診療用放射線照射装置使用室（RALS 室）に併設された診療用 CT エックス線撮影装置の単独使用に関するアンケート報告。Radioisotopes 71(3) : 225-232、2022

- ⑦ 早川豊和、上野周一、山野貴史、西村敬一郎、金森信祐、齊藤美音、近藤修一、惣田梨加奈、内海暢子、高橋健夫。前立腺癌術後放射線治療および術後 PSA 再発に対する救済放射線治療の治療成績。第 81 回日本医学放射線学会総会。2022 年 4 月 14 日～17 日、パシフィコ横浜
- ⑧ 金森信祐、安居文音、町田史晴、友金佐光、齊藤美音、惣田梨加奈、早川豊和、山野貴史、高橋健夫。聴神経腫瘍と鑑別が困難であった spindle cell sarcoma の一例。第 50 回断層映像研究会。2022 年 9 月 30 日～10 月 1 日、東京大学伊藤謝恩ホール
- ⑨ 高橋健夫。エビデンスに基づくハイパーサーミア。第 60 回日本癌治療学会学術集会。2022 年 10 月 20 日～22 日、神戸コンベンションセンター
- ⑩ 早川豊和、山野貴史、惣田梨加奈、町田史晴、金森信祐、齊藤美音、梅田真梨子、畑中星吾、新保宗史、高橋健夫。68 歳で発症した髄芽腫の 1 例。第 459 回日本医学放射線学会関東地方会定期大会。2023 年 2 月 4～28 日、Web 開催

【総数：論文 8 件、学会発表 11 件、講演 11 件】

6-2. 獲得研究費

- ・高橋健夫。放射線治療領域における放射線防護の基準作成。厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）。研究代表者：細野眞。新規及び既存の放射線診療に対応する放射線防護の基準策定のための研究。
- ・高橋健夫。がん関連苦痛症状の体系的治療の開発と実践および専門的がん疼痛治療の地域連携体制モデル構築に関する研究。厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）。研究代表者：里見絵理子。専門的がん疼痛治療連携体制モデル構築
- ・高橋健夫。緩和的放射線治療の適切な提供体制の検討。厚生労働科学研究費補助金（がん政策推進総合研究事業）。研究代表者：大西洋。放射線療法の提供体制構築に資する研究。

6-3. 受賞

- ・優秀賞。熊倉嘉貴、清水裕次、針生将嗣、市川賢一、梅田賢一、野村恭一。30 分 MIBG ダイナミックプランナー法による定量は、レビー小体病の心筋交感神経機能異常を高精度に同定する。第 16 回パーキンソン病・運動障害疾患コンGRESS。2022 年 7 月 21 日～23 日、浜松町コンベンションホール

6-4. 特許、実用新案

1 件申請中

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

2022 年 7 月 28 日	2022 年度放射線腫瘍学セミナー(第 1 回)	web 開催
2022 年 9 月 29 日	2022 年度放射線腫瘍学セミナー(第 2 回)	web 開催
2023 年 2 月 6 日	2022 年度放射線腫瘍学セミナー(第 3 回)	web 開催
2023 年 3 月 16 日	2022 年度放射線腫瘍学セミナー(第 4 回)	web 開催
2023 年 3 月 20 日	2022 年度放射線腫瘍学セミナー(第 5 回)	web 開催

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

学生の臨床実習におけるアンケート調査の評価は良好であり、水準以上の学生教育が実行できていると考えられる。若手医師の学会発表回数も着実に増え、専門医の取得を目指しており、診療の質ならびに体制の向上が認められる。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

次年度も引き続き、臨床実習の充実（参加型臨床実習の実践）をはかり、若手医師の診療・教育・研究に対するモチベーションを向上させ、継続的な診療の質ならびに体制の向上に努める。診療・教育・研究のさらなる充実と規模の拡大をはかり多くの学生、若手医師に放射線腫瘍学に興味をもってもらい、診療の質ならびに体制の向上に継続的に努める。

2. 33) 神経精神科

1. 構成員

吉益晴夫 (YOSHIMASU, Haruo) : 教授 : 診療部長 : 代表指導教員 (大学院) : かわごえクリニック兼担 : 神経心理学、高次脳機能障害、記憶障害、解離症 : 医学博士
安田貴昭 (YASUDA, Takaaki) : 准教授 : 診療副部長 : 外来医長 : 病棟医長 : 研究副主任 : 指導教員 (大学院) : コンサルテーション・リエゾン精神医学、周産期メンタルヘルス、生殖精神医学、地域連携 : 医学博士
小林清香 (KOBAYASHI, Sayaka) : 准教授 (公認心理師・臨床心理士) : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : かわごえクリニック/教職員・学生健康推進センター兼担 : 認知行動療法、コンサルテーション・リエゾン心理学 : 医学博士
倉持 泉 (KURAMOCHI, Izumi) : 講師 : 埼玉医科大学病院兼担 : てんかん、老年精神医学、コンサルテーション・リエゾン精神医学 : 医学博士 (留学中)
樋渡豊彦 (HIWATASHI, Toyohiko) : 助教 (出向中)
志賀浪貴文 (SHIGANAMI, Takafumi) : 助教 : 教育副主任 : 研修医長
梅村智樹 (UMEMURA, Tomoki) : 助教 : 教育主任
塚本一帆 (TSUKAMOTO, Kazuho) : 助教 (専攻医)
原田 舟 (HARADA, Shu) : 助教 (専攻医) : 埼玉医科大学病院兼担
水野公仁 (MIZUNO, Kimihito) : 助教 (専攻医)
橋本卓哉 (HASHIMOTO, Takuya) : 助教 (専攻医)
飯田健太 (IIDA, Kenta) : 助教 (専攻医)
山邊 歩 (YAMABE, Ayumu) : 助教 (専攻医)
佐々木剛 (SASAKI, Go) : 助教 : 兼担医師 : 埼玉医科大学病院
横山尚人 (YOKOYAMA, Naoto) : 助教 : 兼担医師 : 埼玉医科大学病院
越智栄太 (OCHI, Eita) : 助教 : 兼担心理士 (公認心理師・臨床心理士) : 埼玉医科大学病院 : 修士
藤井良隆 (FUJII, Yoshitaka) : 心理士 (公認心理師・臨床心理士) : 修士
宮脇優子 (MIYAWAKI, Yuko) : 精神保健福祉士
深津 亮 (FUKATSU, Ryo) : 客員教授 : 指導教員 (大学院)
仙波純一 (SENBA, Junichi) : 客員教授
堀川直史 (HORIKAWA, Naoshi) : 客員教授 : 指導教員 (大学院)
松木秀幸 (MATSUKI, Hideyuki) : 客員准教授
内田貴光 (UCHIDA, Takamitsu) : 非常勤講師
棚橋伊織 (TANAHASHI, Iori) : 非常勤講師
五十嵐友里 (IGARASHI, Yuri) : 非常勤講師 (公認心理師・臨床心理士) : 指導教員 (大学院) : 人間科学博士
中村菜々子 (NAKAMURA-TAIRA, Nanako) : 非常勤講師 (公認心理師・臨床心理士) : 人間科学博士、医学博士
岩山孝幸 (IWAYAMA, Takayuki) : 非常勤講師 (公認心理師・臨床心理士) : 臨床心理学博士
畠田順一 (HATAKEDA, Junichi) : 非常勤医師
嶋崎広海 (SHIMAZAKI, Hiroumi) : 非常勤医師
栗原瑛大 (KURIHARA, Akihiro) : 非常勤医師
中島崇博 (NAKASHIMA, Takahiro) : 非常勤医師
浦田 実 (URATA, Minoru) : 非常勤医師
松原 理 (MATSUBARA, Osamu) : 非常勤医師
小林周平 (KOBAYASHI, Shuhei) : 非常勤公認心理師・臨床心理士 : 修士

2. 教育

2-1. 目的・目標

卒前教育 : 学生は外来予診などの診療の一端を担いながら、患者との直接的な関わりを経験し、精神医学的問題を抱える患者と、それを支える家族の苦悩の大きさを知る。そして、精神科的な診断や見立てがどのように行われるか、どのように患者や家族の意向が汲み取られ、合理的な介入が進んでいくかを、実際の診療に立ち会いながら体得していく。さらに、精神障害や精神医療に対する正しい知識と理解を得るための機会とする。また、精神科リエゾンチームをはじめとした様々な専門多職種チームのカンファレンス、回診に参加し、精神科チーム医療が多職種多領域の協同によって成り立っていることを知り、自らがチームの一員として医療に参加する心構えを養う。

卒後教育 : 臨床初期研修においては、上述した卒前教育の内容に加え、プライマリケア診療での頻度が高い精神障害について、診断と治療を行うための具体的な知識を身につけ、経験を積む。また、医師として必要な他者とのコミュニケーション能力を拡充する。心身ともに病める人に寄り添い、安心感を与えられるような、包括的な人間力の向上も期待する。後期研修において専攻医 (シニアレジデント) は、精神医学を自らの専門分野として学びながら、さらに深い知識と経験、見識を持つことを目指す。精神科リエゾンチーム、緩和ケアチームや認知症ケアチームなどの多職種多領域によるチームの中での協同を経験し、必要に応じてリーダーシップを発揮でき、スタッフのメンタルケアも含め、サポーター・フォロワーの役割を果たせることを目指す。相手の意向を汲みとる推察力と、全体を俯瞰できる視野の広さ、これらを併せ持つことができる精神科医師像を理想とする。また、臨床経験の中から各自が興味のある分野を見出し、後のサブスペシャリティの確立につなげられるようにする。

2-2. 教育実績（担当者）

卒前教育：医学部 4 年生に対し、精神医学のユニットで、心因性精神疾患領域(吉益、安田)、心理検査 (小林)について講義を行った。また、地域医療とチーム医療のユニットで、地域と職場の精神医学についての講義を行った(吉益)。医学部 6 年生に対し、大人の発達障害、リエゾン・自殺・精神科救急、心的外傷とストレスによる精神疾患について講義を行った(吉益)。医学部 1 年生から 4 年生に対し、行動科学と医療倫理について講義を行った(小林)。医学部 1 年生と 2 年生の選択科目として、こころの医療に関する講義を行った(小林)。臨床実習では、医学部 3 年生から 6 年生のプレクリニカルクラークシップ (pre-CC)、クリニカルクラークシップ (CCstep1, 2, 3)、および複数の大学の臨床心理学の大学院および学部学生の実習を受け入れた。前述の目標を念頭に、医学部 3 年生、4 年生の pre-CC、医学部 4 年生～5 年生にかけての CCstep1 では、医療者としての病院内での立ち振る舞いを身に着けるとともに、実際の総合病院における精神科リエゾン医療の見学を通して、今後の臨床実習に向けての動機づけが進むように指導を行った。医学部 5 年生、6 年生の CCstep2, 3 では、主に外来初診患者の予診および本診への陪席を通して精神科の臨床指導を行った。また、チーム医療に参加し、多職種と協同して包括的に患者と関わる姿勢を学んだ。OSCE 評価者として 3 名の医師が参加した(水野、橋本、山邊)。また、医学教育センター川越ブランチャ長として、川越キャンパスでの実習全体の調整を行った(吉益)。

卒後教育：初期研修では、精神科病床のない総合病院である当院の特徴を生かし、主に外来診療とコンサルテーション・リエゾン精神医学に関する研修を行った。精神科入院診療、精神科救急に関する研修は研修協力病院で行うことができ、研修医は事前に研修先を選択することができる。近年では精神科研修期間のうち 1 週間程度を埼玉精神神経センターでの研修に充てる研修医が多い。後期研修では、精神保健指定医と日本精神神経学会専門医の取得を目標とし、3 年間で一通りの精神科の臨床経験を積むことを基本としている。当院での研修を主とし、入院診療や精神科救急の研修については精神科病床のある研修協力病院にて行う。具体的には、埼玉精神神経センター、埼玉医科大学病院などに 1～2 年程度出向し、当院とは異なる医療施設での臨床や業務を経験しながら、資格取得に必要な症例を担当する。研修協力病院に出向している期間も週 1 日は当院で診療を行い、勉強会に出席することによって研修の連続性が途切れないように配慮している。本年度は 3 名の専攻医が研修協力病院に出向し、現在も研修を継続している。また、臨床実習に加えて教育、研究活動にも研修医から意識して参加をするように促しており、専攻医は年に 1 回の学術集会での発表や、論文執筆を行った。

大学院教育：主にコンサルテーション・リエゾン精神医学と老年精神医学について、講義、実習、臨床研究の指導を行っている。その他の教育活動として、埼玉医科大学短期大学と埼玉医科大学附属総合医療センター看護専門学校において精神看護などの講義を医局員（非常勤を含む）で分担して行った。

2-3. 達成度評価

卒前教育：各種講義においては、医局内で内容を相互に確認し、連続性や一貫性に配慮することができた。臨床実習を通じて、精神科医療の特色や多職種との連携の重要性、総合病院における精神科の役割を伝えることができた。

卒後教育：初期研修医教育において、全人的な視点で患者と家族にとって何が大切であるかを考え、患者中心の医療を実践することへの理解を深めることができた。また、初期研修医にはカンファレンスの際に積極的に発言してもらい、チームの一員としての自覚を持ち、問題解決能力を向上させることができた。後期研修医教育において、上級医が自らの診療に研修医を同伴させ、規範を示しながら見て学ばせることと、上級医の見守りのもとで専攻医が主体的に診療に取り組んで学ぶことの 2 つのバランスが重要である。各人の個性や特性に合わせた研修が行えるよう配慮することができ、それぞれの医師は目的を明確に次のステップへと進むことができた。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育：前年度に引き続き、臨床実習においては実際の診療に立ち会いながら、精神障害や精神医療に対する正しい知識と理解を得られるように実習を構成してきた。来年度も引き続き、学生がチームの一員として積極的に実習に取り組むことができるようにプログラムを調整する。

卒後教育：初期研修においては、リエゾン診療を中心に、どの専門科に進んだとしても必要となる精神科的初期対応が確実に身につくよう意識して指導を行っていく。次年度も引き続き、臨床研修を通して実践的な精神医学を身につけられるように指導を行っていく。初期研修、後期研修ともに、新たにチーム制を導入し、6 か月ごとにチームが交代する体制での指導を継続する。

3. 研究

3-1. 目的・目標

メンタルヘルスの問題にはさまざまな要因が複雑に関与する。医療の専門化・高度化、社会構造の変化などにより、精神疾患と身体疾患が併存する事例、社会的脆弱性が顕在化する事例などが増加している。2019 年以降の Covid-19 感染拡大では、まさにこのようなメンタルヘルスの問題の難しさが浮き彫りになった。総合病院においても、さまざまな局面で精神医療の積極的関与が期待され、包括的なアプローチが求められている。こうした背景のもと、当科では従来の精神科外来診療だけでなく、コンサルテーション・リエゾン精神医学や医療倫理コンサルテーションの実践と研究にも注力している。

症例報告は自らの日常臨床を振り返るだけでなく、事例の客観的吟味や批判的検証のプロセスを学ぶ機会ともなる。若手を中心に学会発表や論文にて積極的に臨床経験を発信していくことを目指す。臨床研究では見出された臨床疑問を検証し、その知見を臨床に還元していくことで自らの専門性を高めていくことを目指す。

これらの実践により研究マインドを併せ持つ医療者としての資質を高めていくことが当科の研究活動における目的である。これらの研究活動は、多領域多職種との連携を重視して展開していく。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

主な研究プロジェクトの領域は、「自殺企図患者への包括的支援」「周産期メンタルヘルスでの地域リエゾン」「てんかん患者のスティグマ」「身体疾患患者のメンタルヘルスへの支援」である。複数の課題で競争的研究資金を獲得しており、いくつかの課題について学会発表、論文投稿の形で成果を示すことができた。特に、倉持講師は留学先のドイツで精力的にてんかんに関する研究活動を行い、多くの成果を得た。さらに、自殺企図をテーマとした研究が学位論文となった。

3-3. 達成度評価

上記の研究プロジェクトにおいて、医師・心理師・看護師・精神保健福祉士らで構成される多職種が互いに意見交換をしながら、継続的に研究活動に取り組むことができた。月1回の研究ミーティングでは活動の進捗状況をお互いに共有し、問題点などについて相談することができた。また、若手医師を中心に症例発表を行うことができた。

3-4. 次年度改善計画

相互支援体制のもとで調査や研究を実施し、外部に発信していく環境が整っている。次年度も引き続きこれらに取り組み、さらに他部門と連携し、多領域へと展開を図っていく。研究で得られた知見を積極的に臨床と教育に生かしていくことも取り組むべき課題である。

4. 診療

今年度の初診患者数は年間 307 名、再診患者数 14,183 名、リエゾン初診患者数 677 名、リエゾン再診患者数 5,445 名、精神科リエゾンチーム加算件数 1,214 件、1 日平均患者数は 70.35 名であった。

当科データベースに基づく外来初診患者 472 名の初診時主診断は DSM-5 の診断カテゴリで神経発達障害 82 名、精神病的障害 34 名、双極性障害 22 名、抑うつ障害 67 名、不安障害 39 名、強迫性障害 9 名、心的外傷 69 名、解離性障害 16 名、身体症状症 29 名、摂食障害 7 名、睡眠障害 14 名、神経認知障害 16 名、物質関連障害 2 名、パーソナリティ障害 8 名、てんかん 4 名、その他（診断なし、保留など）54 名であった。リエゾン初診患者数 942 名の初診時主診断は DSM-5 の診断カテゴリで神経発達障害 41 名、精神病的障害 64 名、双極性障害 22 名、抑うつ障害 65 名、不安障害 22 名、強迫性障害 3 名、心的外傷 132 名、解離性障害 4 名、身体症状症 9 名、睡眠障害 22 名、神経認知障害 457 名、素行症群 1 名、物質関連障害 20 名、パーソナリティ障害 8 名、その他 72 名であった。

外来診療については、一般診療に加えて専門外来を継続しており、当科の専門性を内外に示し、地域の医療機関との効果的な連携に取り組むことができた。次年度も引き続き確かな専門性のもとで連携強化に取り組んでいく。

リエゾン診療については、前年度に引き続きリエゾンチームが稼働した。また、令和 4 年の診療報酬改定を受け、自殺企図で救急搬送されて入院した患者に対する精神疾患診断治療初回加算、退院時指導、救急患者精神科継続支援などの算定を目指し、院内の組織作り、指定された研修会への参加などの準備を進めることができた。次年度は自殺対策チームの本格的な運用を開始する。自殺未遂患者に対する初回診断、退院指導、継続支援に重点的に取り組み、自殺再企図防止への効果を期待する。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

川越市自殺対策連絡協議会（吉益）
埼玉労働局地方労災委員（吉益）
精神保健福祉士試験委員（吉益）
埼玉県精神疾患合併症妊婦等支援事業運営部会委員（安田）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本周産期メンタルヘルス学会 学会誌編集委員（安田）
日本認知療法・認知行動療法学会 学会誌編集委員（中村）
日本健康心理学会 学会誌編集委員（中村）
日本サイコネフロロジー学会編集委員（小林）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本高次脳機能障害学会 社会保険・障害認定検討委員会（吉益）
日本サイコオンコロジー学会 気持ちのつらさガイドライン策定委員会小委員会（五十嵐）
日本産婦人科医会 妊産婦死亡症例検討評価委員会（安田）
日本周産期メンタルヘルス学会 評議員・情報関連委員会・学会誌編集委員会（安田）
日本精神神経学会 代議員（吉益）
日本医療安全学会 代議員（吉益）
日本高次脳機能障害学会 評議員（吉益）
日本神経心理学会 評議員（吉益）
日本総合病院精神医学会 リエゾン多職種委員会（小林・五十嵐）
日本総合病院精神医学会 臓器不全臓器移植関連委員会・専門医制度委員会・診療報酬問題委員会（小林）
日本総合病院精神医学会 治療戦略委員会 てんかん小委員会（倉持）
日本総合病院精神医学会 周産期メンタルヘルス委員会（安田）
日本総合病院精神医学会 医療者支援委員会（安田・小林）
日本神経精神薬理学会 統合失調症薬物治療ガイドラインタスクフォース（安田）
日本うつ病学会 双極性障害治療ガイドラインワーキンググループ（安田）
日本てんかん学会 評議員（倉持）

日本精神神経学会 研究推進委員会委員・事務局員（倉持）
 日本精神神経学会 アンチスティグマ委員会委員（倉持）
 日本サイコネフロロジー学会 理事（小林） 代議員（志賀浪・小林） 診療ガイド作成委員会（小林） 臨床研究推進委員会（志賀浪・中村）
 日本認知・行動療法学会 将来検討委員会（小林）
 埼玉サイコネフロロジー研究会 世話人（志賀浪・小林）
 埼玉周産期メンタルヘルス研究会 事務局長（安田）・世話人（安田・五十嵐・小林）
 日本行動医学会 評議員（中村）
 生活習慣病認知行動療法研究会 世話人（中村）
 日本公認心理師協会 医療保健領域委員会（小林）
 東京公認心理師協会 理事・代議員・医療保健領域委員会・倫理委員会（小林）
 一般社団法人 公認心理師の会 運営委員（五十嵐・小林）
 埼玉医科大学短期大学 非常勤講師（吉益・安田・棚橋・倉持・志賀浪・梅村・五十嵐・藤井（良））
 埼玉医科大学附属総合医療センター看護専門学校 非常勤講師（吉益・安田・棚橋・倉持・志賀浪・梅村・五十嵐・藤井（良）・和氣）
 さいたま看護専門学校 心理学 講師（五十嵐）
 東京大学大学院医学系研究科母性看護学・助産学分野 非常勤講師（安田）
 西武文理大学看護学部 非常勤講師（安田）
 東京女子医科大学医学部精神医学教室 非常勤講師（小林）
 早稲田大学人間科学学術院心理相談室 臨床指導員（五十嵐）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- 1 Kuramochi I, Iwayama T, Oga K, Shiganami T, Umemura T, Kobayashi S, Yasuda T, Yoshimasu H A study of factors influencing self-stigma in people with epilepsy: A nationwide online questionnaire survey in Japan *Epilepsia Open* 2022.10; 2022 Dec;7(4):792-801.
- 2 浦田実, 志賀浪貴文, 倉持泉, 渡邊衡一郎, 吉益晴夫 Mirtazapine の増量後からの食欲亢進を主訴に自殺企図を至ったうつ病患者 総合病院精神医学 2022.07; 34(3):284-288.
- 3 Kuramochi I, Iwayama T, Oga K, Shiganami T, Umemura T, Kobayashi S, Yasuda T, Yoshimasu H Internet survey on knowledge and perceptions of epilepsy among the general public in Japan *Heliyon* 2022.12; *Heliyon* 8 (2022) (e12254).
- 4 Kuroda N, Kubota T, Horinouchi T, Ikegaya N, Kitazawa Y, Kodama S, Kuramochi I, Matsubara T, Nagino N, Neshige S, Soga T, Takayama Y, Sone D IMPACT-J EPILEPSY In-depth Multicenter analysis during Pandemic of Covid19 Throughout Japan for Epilepsy practice study group Impact of COVID-19 pandemic on epilepsy care in Japan: A national-level multicenter retrospective cohort study *Epilepsia Open*. 2022.05; 2022 May 28;7(3):431-441.
- 5 石川章, 渡邊さつき, 水村亮介, 北詰愛歩, 須貝昌平, 宮本政宗, 倉持泉, 村田佳子, 岡島宏明, 松尾幸治, 眞壁秀樹 バルプロ酸ナトリウム投与患者におけるカルニチン濃度およびアンモニア濃度の検討 精神科治療学 2023.02; 38(2):241-247.
- 6 中島崇博, 志賀浪貴文, 山邊歩, 飯田健太, 浦田実, 橋本卓哉, 塚本一帆, 横山尚人, 水野公仁, 梅村智樹, 小林清香, 安田貴昭, 大宅宗一, 吉益晴夫 せん妄下で自殺企図を行った脳腫瘍患者の一例第 35 回日本総合病院精神医学会総会 2022.10;
- 7 塚本一帆, 志賀浪貴文, 小林清香, 倉持泉, 浦田実, 中島崇博, 横山尚人, 水野公仁, 荒瀧千絵子, 栗原瑛大, 梅村智樹, 森田美穂, 安田貴昭, 澤野誠, 吉益晴夫 新型コロナウイルス感染症の流行が自殺企図者に及ぼす影響に関する実態調査第 35 回日本総合病院精神医学会総会 2022.10;
- 8 棚橋伊織, 志賀浪貴文, 岩山孝幸, 和氣大成, 小林清香, 吉益晴夫 向精神薬処方と向精神薬の過量服薬錠数との関連について第 35 回日本総合病院精神医学会総会 2022.10
- 9 岩山孝幸, サービス管理責任者, 棚橋伊織, 志賀浪貴文, 栗原瑛大, 吉益晴夫 精神科外来における ASD 当事者の就労支援で果たせる公認心理師の役割とは一就労移行支援施設との連携に着目して一第 2 回日本公認心理師学会学術集会 2022.12
- 10 原田舟, 渡邊さつき, 佐々木剛, 谷木夏妃, 横山香, 松岡孝裕, 桑原晋, 横山富士男, 松尾幸治 自殺企図で搬送され診断・治療に難渋した中高年男性の 1 症例第 3 回日本成人期発達障害臨床医学会 2023.01

【総数：論文 9 件、学会発表 19 件、講演 3 件】

6-2. 獲得研究費

- 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金：若手）「てんかん患者への段階的ケア開発を目指した心理教育プログラムの開発と効果検証」（倉持・研究代表者）
 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金：基盤（C））「心不全に伴う不眠症への段階的ケアシステム構築を目指した非薬物療法の開発と効果検証」（小林・研究代表者）
 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金：基盤（C））「共同意思決定に向けた、アルツハイマー病発症前診断の効果的な告知マニュアルの開発」（和氣・研究代表者）
 Oxford Uehiro-St Cross Visiting Programme 「Exploring the ethical rationale of disclosing amyloid status

for a risk of developing Alzheimer's disease to cognitively normal older adults in clinical settings beyond research settings」(和氣・研究代表者)

科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金:基盤(C))「慢性腎臓病の腎代替療法における患者と医療者双方向性の意思決定支援モデルの開発」(小林・研究分担者)

科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金:基盤(C))「臓器不全患者の治療選択支援と予後予測のための心理社会的評価尺度の開発」(小林・研究分担者)

科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金:基盤(C))「CKD 医療従事者のメンタルケアスキル向上のための遠隔教育・支援システムの開発」(小林・研究分担者)

科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金:基盤(C))「糖尿病患者のメンタルヘルスを支える多職種協働ケアのための遠隔教育・支援システム」(小林・研究分担者)

埼玉医科大学令和4年度学内グラント 丸木記念特別賞(倉持・研究代表者)

Der Bökenkamp-Stiftung der Gesellschaft für Epilepsieforschung e.V. (ベーゲンキャンプ財団) てんかん研究助成金“Einstellungen und Befinden von Menschen mit Epilepsie in Deutschland und Japan”(倉持・研究代表者)

6-3. 受賞

小林清香他 生体腎移植直前の進行期腎不全患者の認知機能の実際 第33回日本サイコネフロロジー学会総会 2022.07 野原記念賞

6-4. 特許、実用新案

なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

当科では、構成員のひとりひとりが、得意分野を活かして、診療科、病院、大学に貢献することを目指している。

教育: CCstep1 では、精神科の実習に充てられる期間は2週間であり、川越キャンパスでは前半の1週を担当した(1週間のうち1日は、日高キャンパスで実習を行った)。教育主任を中心に、参加型の臨床実習になるようにプログラムと教材を作成した。学生への指導は、指導医、専攻医、初期研修医が屋根瓦方式を意識しながら、コミニカルの意見も取り入れつつ行った。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、実習が中断した時期もあったが、前年度に比べると現場の混乱は少なく、おおむね予定していたプログラムの通りに実習を進めることができた。

CCstep2,3 では、4週間という実習期間の長さを生かし、学生にチームの一員として一定の役割を与えることで、実践的な教育を行うことができた。毛呂山キャンパス、日高キャンパスと連携し、相補的な実習を行うことができた。

研究: 月1回の研究ミーティングを継続しており、さまざまな意見を取り入れながら協力して研究を進めていく体制が定着した。学会活動や自己啓発を自由に行えない社会情勢ではあるものの、リモート開催などにも慣れ、学びやアウトプットを多く得ることもできた。医局員1名がドイツに留学し、てんかんに関連した研究に取り組んでいる。

診療: 外来診療では専門外来(解離・高次機能障害(吉益)、周産期メンタルヘルス(安田)、地域リエゾン(志賀浪))によって当科の専門性を内外に示すことができた。引き続きリエゾンチームが稼働しており、多職種連携による院内でのメンタルヘルスケアの向上を図った。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

引き続き、構成員のひとりひとりが、得意分野を活かして、診療科、病院、大学に貢献することを目指していく。教育、研究、診療とも1人で行うのではなく、診療科内、病院内、学内の誰かと一緒に行うことで、「師弟同行」の見学の理念の実践を目指す。

教育: 卒前教育においては、より診療参加型にすることが求められている。医師法が改正され、医学生が医療行為を行うことが正式に法律に盛り込まれたことをふまえ、学生にしてもらうことを診療科として徐々に広げて、診療チームの中で役割を得る体験を提供したい。

研究: 日々の臨床のなかで疑問に思ったことを研究テーマへと落とし込み、また研究で得られた経験を臨床の場で生かしていくよう、臨床と研究との相乗効果を高めていくことに引き続き取り組んでいく。他科や他部署と連動する分野で研修や研究を行うなど、研究の幅を広げたい。

診療: 令和4年の診療報酬改定を受け、自殺企図による入院患者の精神疾患診断治療、退院時指導、継続支援に重点的に取り組む。院内の組織作りなどの準備を進め、自殺対策チームの本格的な運用を開始し、自殺再企図防止への効果を期待するとともに適切な診療報酬算定を目指す。

また、令和6年4月に施行される法律に合わせた医師の働き方改革の最終段階を詰める。

2. 34) 緩和医療科

1. 構成員

儀賀 理暁 (GIKA, Masatoshi) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長、教育主任、研究主任 : 代表指導教員 (大学院) :
緩和ケア : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

- ① 卒前教育 : 緩和医療を通して医療と医療者のあり方を学ぶこと。
- ② 卒後教育 : 上記をふまえた実践について学ぶこと。
- ③ 大学院教育 : 実践から得た知識と経験を言語化し教育者としての能力を習得、実践すること。

2-2. 教育実績 (儀賀)

- ① 卒前教育 : 医学部 1・6 年生の系統講義を担当。1 年生の講義では、喪失体験やグリーフケアについて深く考察する機会を提供、6 年生の講義では、全人的な対応についての解説の後に実臨床と国家試験に関する情報を提供している。また、医学生の実習や他施設からの見学希望者にも対応。県内外の小・中・高等学校・大学にて主に「がんと命の授業」を担当。
- ② 卒後教育 : 希望する職員やリンクナースに対する、カンファレンス、病棟・外来などの現場、勉強会における教育・指導・見学研修。地域に開放している緩和ケア研究会 (1 回/月) は感染症の影響で縮小せざるを得ない状況だが、オンラインにて再開。また、緩和ケア研修会 (1 回/年) を実施。昭和大学、東京家政大学と連携し、学内外を問わずに参加可能な医療と教育についての啓発プログラムを YouTube にて実施 (1~2 回/月)。
- ③ 大学院教育 : 該当なし。

2-3. 達成度評価

- ① 卒前教育 : 系統講義はオンラインであり、2~3 名の学生と現場で対話を重ねる形式の臨床実習 (CC Step1) が主たる教育の場となった。医療者のあり方を問いながらの実習は概ね好評。また、「がんと命の授業」を受けた児童・生徒の中から医学部・看護学部・薬学部等の医療系大学への進学者が現れた。
- ② 卒後教育 : 明確な評価基準はないが、一例として全人的視点や家族・遺族への配慮に関するカルテ記載が多くの病棟や診療科で増加。医療と教育についての啓発プログラムの配信は 42 回 (各回の再生回数は 100 前後) を数え、医療者、教育者のみならず広く一般の方々にも情報を提供し得る機会となっている。
- ③ 大学院教育 : 該当なし。

2-4. 次年度改善計画

- ① 卒前教育 : 多職種が協働するチームとしての特色を生かしつつなお一層の充実を図る目的で、現在協力して頂いている薬剤師、看護師、MSW 以外の職種に関与を求める予定。また、「がん教育総合支援事業 (文部科学省委託事業)」についても、埼玉県教育委員会・埼玉大学教育学部と連携しながら対応を継続する。文部科学省の「がん教育」に関する懇談会委員に就任。
- ② 卒後教育 : 学内にとどまらず地域全体の「学びを止めない」という姿勢を貫く。「ICT に頼る」のではなく「ICT を活用する」新たな形として開始した医療と教育についての啓発プログラムを、より幅広くかつ深められる内容とする。
- ③ 大学院教育 : 1 名が新規入学した、初年度は、本学のみならず慶應義塾大学、昭和大学、東京家政大学、埼玉大学と連携しつつ病児教育、がん教育等に関する研究計画を策定してゆく。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

全人的対応ならびに一人の人として生きることを言語化し、もって臨床現場のみならず日常生活の場である社会へと貢献すること。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

- ① 文部科学省委託事業である「がん教育総合支援事業」ならびに埼玉大学教育学部と連携する教育研究は、概ね予定通りに進捗した。
- ② 子育て中のがん患者の包括的心理支援システムの開発と効果検証は、感染症により休止を余儀なくされている。

3-3. 達成度評価

- ① 県教育委員会が文部科学省より委託を受けて実施。県内の小・中・高等学校におけるがん教育に関する教育研究を推進する協議会のメンバーとして関与している。限られた授業時間の中で、何をどの様にどこまで伝えるかという枠組みや具体的なコンテンツを確立してきた。また、県疾病対策課の協力を得て外部講師のリストを作成し、県内全域において順調に運用が開始された。
- ② 「親と子のがん教室 (くれよんの会)」は休止中。

3-4. 次年度改善計画

- ① 教育内容のさらなる充実とともに、今年度の授業研究会で実践した教員と外部講師の Team teaching の普及啓発に努める。また、文部科学省の「がん教育」に関する懇談会委員として、国のレベルでの拡充を図る。
- ② 感染症の影響により「親と子のがん教室 (くれよんの会)」の院内開催が困難な状況となっているが、web3 時代を迎え、VR 空間を活用するプログラムの開発を、大学院生の研究の一環とする。

4. 診療

緩和ケアセンターは、緩和ケア（遺族）外来、看護外来、各診療科・部門・職種からの依頼への対応、病棟（症例・退院前・倫理・death）カンファレンスへの参加、訪問診療、リンクナース活動等を行っている。緩和医療科は、「がん診療連携拠点病院（高度型）の緩和ケアセンターの運営を担う立場として、「病気になって大変だね、でも川越でよかったね」と言ってもらえる街づくりを目標とし、「あなた」の専門家として皆さまと一緒に考え、悩み、歩み続ける」存在として、川越ならびに近隣の方々の治癒の過程をあるいはいのちの限界とその後を多職種で支え続けてゆくことを旨としている。次年度以降は、地域の緩和ケアセンターとして様々な場面で活用して頂くことを目標として、医療界のみならず自治体、教育機関、NPO等との協働をさらに進めることで、街づくりという観点からのアウトリーチを充実させる。また、未曾有の災害や感染症、遺伝子治療の進化、安楽死問題、Advance care planningの普及等の背景をふまえ、生命倫理に関する軸足を充足させてゆく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

儀賀理暁：埼玉県保健医療部疾病対策課がん対策推進協議会がん教育部会

儀賀理暁：埼玉県教育局教育委員会「がん教育総合支援事業（文部科学省委託）」がん教育推進協議会

儀賀理暁：埼玉県保健医療部医療整備課在宅緩和ケア推進検討委員会

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

儀賀理暁：フェリス学院大学音楽学部非常勤講師

儀賀理暁：国立大学法人埼玉大学教育学部非常勤講師

儀賀理暁：NPO法人日本がんサバイバーシップネットワーク理事

儀賀理暁：NPO法人くまがやピンクリボンの会顧問

儀賀理暁：かわごえ緩和ケアネットワーク代表世話人

儀賀理暁：リレーフォーライフジャパン川越実行委員会顧問

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 儀賀理暁：「OBから①大切なこと。」慶應義塾医学部新聞 2022年4月20日発行 三師会医学部新聞編集室発行
- ② 儀賀理暁：「3か国の子どもたちかつての笑顔を知って」埼玉新聞 p11 2022年5月2日(月)
- ③ 儀賀理暁：「ワークショップ4 がん治療と緩和ケア統合の現状と課題」2022年6月16日(木) 第47回日本外科学系連合学会学術集会（アイーナ）岩手
- ④ 儀賀理暁：「今とこれからの生きる君たちへ～学びの本質にせまるがん教育～」2022年6月24日(金) 大里深谷養護教諭会(深谷市 藤沢公民館) 埼玉
- ⑤ 儀賀理暁、他：第4回日本緩和医療学会関東・甲信越支部学術大会（10月10日：ウエスタ川越大ホール）主催
- ⑥ 儀賀理暁：「今とこれからの生きる君たちへ～学びの本質に迫るがん教育」2022年10月14日(金) 令和4年度鳥取県がん教育啓発研修会（とりぎん文化会館）鳥取
- ⑦ 儀賀理暁：「がん教育の効果的な進め方について」2023年2月10日(金) 令和4年度埼玉県がん教育外部講師研修会(埼玉会館) 埼玉

【総数：論文1件、学会発表1件、講演53件】

6-2. 獲得研究費

・文部科学省科学研究費(種目：基盤研究(C)) 子育て中のがん患者の包括的心理支援システムの開発と効果検証

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第4回日本緩和医療学会関東・甲信越支部学術大会（10月10日：ウエスタ川越大ホール）、緩和ケア研究会（1回/月）、緩和ケア研修会（1回/年）、ELNEC-J（1回/年）、埼玉県教育委員会後援 SMC がん教育セミナー（1回/年）、かわごえ緩和ケアネットワーク（1回/年）、リレー・フォー・ライフ川越への関与（実行委員顧問）、がんサロンかわごえ（リレー・フォー・ライフ川越・かわごえ緩和ケアネットワーク・川越市共催）のサポート

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

*教育

- ①卒前教育：学生が教員との関係性からさらなる学びを求めるケースがあった。また、「がんと命の授業」を受けた児童・生徒の中から医学部・看護学部・薬学部等の医療系大学への進学者が現れた。
- ②卒後教育：明確な評価基準はないが、一例として全人的視点や家族・遺族への配慮に関するカルテ記載が多くの病

棟や診療科で増加。医療と教育についての啓発プログラムの配信は42回(各回の再生回数は平均100前後)を数え、医療者、教育者のみならず広く一般の方々にも情報を提供し得る機会となっている。

③大学院教育：該当なし。

*研究

①県教育委員会が文部科学省より委託を受けて実施。県内の小・中・高等学校におけるがん教育に関する教育研究を推進する協議会のメンバーとして関与している。限られた授業時間の中で、何をどの様にどこまで伝えるかという枠組みや具体的なコンテンツを確立してきた。また、県疾病対策課の協力を得て外部講師のリストを作成し、県内全域における実際の運用が可能となった。

②「親と子のがん教室(くれよんの会)」は従来の形式では開催が難しい状況が続いているため、VR空間を活用するプログラムを開発する予定。

*診療

院内の連携は比較的充実しているが、外来や地域社会という枠組みでの機能は十分とは言い難い。特に感染症による影響が大きい。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

①卒前教育：多職種が協働するチームとしての特色を生かしつつなお一層の充実を図る。前年度新たに参画を依頼したMSWのみならず、より多くの職種に関与を求める予定。また、「がん教育総合支援事業(文部科学省委託事業)」についても、埼玉県教育委員会・埼玉大学教育学部と連携しながら対応を継続する。文部科学省の「がん教育」に関する懇談会委員に就任。

②卒後教育：学内にとどまらず地域全体の「学びを止めない」という姿勢を貫く。「ICTに頼る」のではなく「ICTを活用する」新たな形として開始した医療と教育についての啓発プログラムを、より幅広くかつ深められる内容とする。

③大学院教育：1名が新規入学した、初年度は、本学のみならず慶應義塾大学、昭和大学、東京家政大学、埼玉大学と連携しつつ病児教育、がん教育等に関する研究計画を策定してゆく。

*研究

①教育内容のさらなる充実とともに、今年度の授業研究会では教員と外部講師のTeam teachingを実践する。また、文部科学省の「がん教育」に関する懇談会委員として、国のレベルでの拡充を図る。

②感染症の影響により「親と子のがん教室(くれよんの会)」の院内開催が困難な状況となっているが、web3時代を迎え、VR空間を活用するプログラムの開発を、大学院生の研究の一環とする。

③1名が新規入学した、初年度は、本学のみならず慶應義塾大学、昭和大学、東京家政大学、埼玉大学と連携しつつ病児教育、がん教育等に関する研究計画を策定してゆく。

*診療

地域の緩和ケアセンターとして様々な場面で活用して頂くことを目標として、自治体、教育機関、NPO等との協働をさらに進めることで、街づくりという観点からのアウトリーチを充実させる。また、未曾有の災害や感染症、遺伝子治療の進化、安楽死問題、Advance care planningの普及等の背景をふまえ、生命倫理に関する軸足を充足させてゆく。そのためには、引き続き構成員の増員が喫緊の課題である。

2. 35) 臨床検査医学

1. 構成員

- 竹下 享典 (TAKESHITA, Kyouusuke) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任 :
研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 臨床検査医学、循環器内科学 : 博士
- 山本 晃司 (YAMAMOTO, Koji) : 兼担教授 : 血液学 : 博士
- 三橋 知明 (MITSUHASHI, Tomoaki) : 客員教授 : 内分泌学 : 博士
- 小川 真澄 (OGAWA, Masumi) : 大学院生 : 内分泌学
- 室谷 孝志 (MUROYA, Takashi) : 技師長
- [総合受付] 大木浩子、藤宮敏、金島奈津子、谷合希和、千田健斗
- [分析検査] 関根和江、庄司和春、島田崇史、渡辺剛 (修士)、酒井瑠璃、上林大晃、片野和佳奈、三戸部采佳
- [形態検査] 奈良豊、大野優子、鈴木美子、石塚めぐみ、中野博貴、森脇友香、石田あいり、宮森魁人、武田乃ノ佳
- [微生物・遺伝子検査] 松尾千賀子、笛木知子、松村敬依子、江端英祐、渡邊裕樹 (修士)、酒井良太郎、根本彩子、佐藤帆乃香
- [生理機能検査] 山下美奈子、伊藤友彦、波木井清夏、安田あさみ、矢島市淑、中野咲、綾部真知子、新井雅人、江原由美香
- [出向 (超音波センター)] 三村弘司、吉田和広、瀬戸山昌宏、黒田正徳、高田雅代、西牧悦、田中映美、松浦実帆、芳野友里恵、前田実帆
- [中央採血室] 廣瀬久美、井上彩子、鈴木勤、多田佳美、大塚聖也、今瀬貴子
- [輸血部] 野呂光恵、安田絵里子、鈴木康巴、大出淳、高橋諒采
- [出向 (かわごえクリニック)] 東田久美子、広瀬ヒロ子 (非常勤)
- [非常勤 (中央採血室)] 吉野恵美 [非常勤 (輸血部)] 今井厚子

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

臨床検査医学科・中央検査部は、研修医、看護師の臨床検査にかかわる教育、医学部6年生の講義、医学部4-5年生のBSL、保健医療学部4年生の臨地実習、看護学生に対する講義などの教育を担当している。目的・目標は、検査のオーダーから結果が出るまでの一連の過程の理解、各検査の方法と特性および限界・機器等の概略理解、基本的検査手技の実習などを通じて、各種臨床検査を的確にかつ効率よく使いこなし、検査結果を正しくかつ総合的に判定する技量を身につけることである。臨床検査技師に対しては、資格取得、skill-up、新たな知識・技術の習得、能力開発を目標とする。大学院生については臨床検査分野の研究についての考え方と方法論を勉強していただく。

2-2. 教育実績

「卒前教育」では臨床検査医学のBSL(CC step1)を担当した。医学部学生に対して臨床検査医学の試験問題作成・6年生講義を担当した。総合医療センター看護学校非常勤講師として看護学校1年生講義「臨床検査」を担当した。技師長以下臨床検査技師が中心となって保健医療学部4年生の臨地実習を行うとともに、BSLにおいても医学部学生教育に大きく貢献した。「卒後教育」では新研修医に対する臨床検査関連のガイダンス、超音波検査のハンズオンセミナー、エコー読影についてのアフタヌーンセミナーを行った。大学院生を1名迎え医学博士取得に向けて研究指導を行っている。「臨床検査技師教育・能力開発」では、部内及び他科と共同での定期的勉強会開催、学会・各種研究会・セミナーへの発表・出席を奨励・支援した。愛知医科大学、千葉科学大学において非常勤講師として授業を行っている。

2-3. 達成度評価

中央検査部BSLでは実習中および終了後にディスカッションを行い理解度を確認し、概ね目標を達成できた。臨地実習・看護学生教育では所定の目標を達成できた。大学院生は指定の講義を終え、研究を進めている。検査技師教育では定期的勉強会をIS015189の規格に基づき運用し、内容の充実が達成でき、良好な出席率が得られた。また、各種学会・研究会・セミナーへの出席も活発に行われた。

2-4. 次年度改善計画

BSL、臨地実習、看護学生教育、職員教育・能力開発のそれぞれにおいて年度目標を達成できた。学生・受講者からも好評を得ている。2022年度はこれらの教育活動の一層の充実を目指す。大学院教育により研究を促進する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

- 1) 臨床検査にかかわる院内リアルワールドデータの解析。
- 2) 尿毒素の心血管系への細胞シグナルの影響を解析する。
- 3) COVID-19患者検体にかかわるバイオバンクを構築し解析する。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

- 1) 川崎医科大学との共同研究で院内の臨床検査ビッグデータを整理し、解析するためのシステムを構築する。
- 2) 名古屋大学との共同研究で尿毒素負荷動物モデルについて心血管系への細胞シグナルの影響を解析する。
- 3) 院内共同チーム (感染症科・内分泌内科) とともにCOVID-19病態解析を行う。
- 4) 「COVID-19に対する新規診断・治療法開発を効率的に実施するための研究基盤構築」研究で医薬基盤・健康・栄養研究所と共同研究を行う。

3-3. 達成度評価

- 1) 院内リアルワールドデータの解析のためのデータクレンジングを行っている。データウェアハウスを構築している最中である(基盤研究(C) 白血球粒度分布分析による COVID-19 の免疫応答ダイナミクスの解明)。
 - 2) 科学研究費を獲得して次の検討を行った(基盤研究(B) 尿毒素による Notch シグナルと代謝リプログラミングを介した血管障害の病態解明)。ラット尿毒症モデルについて動物実験と臓器の解析を終了し、論文で報告した(Cardiovasc Toxicol. 2022 Apr;22(4):365-377.)。ラット尿毒症モデルにおける石灰化血管病変の Notch シグナルの減弱、肥大心における炎症性シグナルの活性化の所見を報告した。
 - 3) バイオバンクの設備は整い、検体を収納し、サイトカインアレーにより血清を解析中である。感染症科との共同研究で、炎症反応は COVID-19 感染症による血栓傾向を増悪させることを報告した(Int J Med Sci. 2023 Jan 1;20(1):136-141.)。
 - 4) 随時会議を開催してデータを共有している。
- 3-4. 次年度改善計画
- 1) データウェアハウスの構築には大変時間がかかっているが取り組んでいくのみである。次年度は COVID-19 以外の疾患にかかわる解析も進めている。
 - 2) 計画は順調に進み終了した。
 - 3) 炎症反応についてさらなる詳細な解析を進める。
 - 4) 電子カルテデータ、血清サイトカインアレーデータについて解析を進めている。

4. 診療

臨床検査室の技術能力にかかわる国際認定である国際規格「ISO 15189」取得した結果、国際標準検査管理加算の追加、臨床治験の増加に寄与し、結果増収にも貢献した。次年度は今年度以上に現在行っている検査の精度・迅速性を高めていく。検査の質を担保すべく、「ISO 15189」の維持、外部制度管理と学会参加に努め、教育にフィードバックする。院内リアルワールドデータの整備・解析の結果を臨床各科にフィードバックし、学内の研究活動を支援・活発化する。得られた臨床知見を蓄積し、バイオデータバンクの解析を行い、新しいバイオマーカーの創出を行う。院内の要請に伴い、超音波分野、細菌・微生物分野、がんゲノム医療に重要な位置を占める遺伝子解析分野の拡充を図る。

5. その他

- 5-1. 自治体、政府関連委員の有無
該当なし。
- 5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無
査読委員 ; Future microbiology, Biomedicine & Pharmacotherapy, International Journal of Hematology, International Journal of Cardiology, Environmental Research, Associate editor; Cardiovascular toxicology
Academic editor; Plos One
- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務
日本血栓止血学会評議員 学術標準化委員会(血栓溶解部会会長) 日本循環器学会関東甲信越支部評議員

6. 業績

- 6-1. 論文・学会発表・著書
 - ① Yamaguchi K, Yisireyili M, Goto S, Cheng XW, Nakayama T, Matsushita T, Niwa T, Murohara T, Takeshita K. Indoxyl Sulfate Activates NLRP3 Inflammasome to Induce Cardiac Contractile Dysfunction Accompanied by Myocardial Fibrosis and Hypertrophy. *Cardiovasc Toxicol.* 2022 Apr;22(4):365-377.
 - ② Ono D, Ohno Y, Izumida Y, Ohno H, Oka H, Takeshita K. Inflammation as an exacerbation marker and target for prophylaxis against Coronavirus Disease 2019-related thrombosis. *Int J Med Sci.* 2023 Jan 1;20(1):136-141.
 - ③ Suzuki M, Takeshita K, Kitamura Y, Kuribayashi M, Huang Z, Ichihara G, Oikawa S, Ichihara S. In Vitro Exposure to Glucose Alters the Expression of Phosphorylated Proteins in Platelets. *Biomedicine.* 2023 Feb 13;11(2):543.
 - ④ インドキシル硫酸による血管石灰化は血管平滑筋細胞における Notch シグナル伝達経路の変化を介して行われる 第 69 回日本臨床検査医学会学術集会 竹下享典
 - ⑤ Notch1 ヘテロ欠損マウスにおいて脂肪生成は促進する 第 69 回日本臨床検査医学会学術集会 竹下享典
 - ⑥ インドキシル硫酸が NLRP3 インフラマソームを活性化し、心筋線維化と心筋肥大を伴う心筋収縮不全を誘発する 第 69 回日本臨床検査医学会学術集会 竹下享典
 - ⑦ V.P シェントが原因でクリプトコッカス髄膜炎を発症した一例 第 50 回 埼玉県医学検査学会 石田あいり、鈴木美子、石塚めぐみ、渡邊裕樹、奈良豊、大野優子、室谷孝志、竹下享典
 - ⑧ 当院で経験したジアルジア症の 1 症例 第 71 回 日本医学検査学会 新井雅人、奈良豊、渡邊裕樹、室谷孝志、竹下享典
 - ⑨ 当院におけるフィブリノゲン製剤運用の実態 第 70 回 輸血・細胞治療学会学術総会 野呂光恵、鈴木康巴、安田絵里子、阿南昌弘、久保田寧、山本晃士
 - ⑩ 好酸球性多発血管炎性肉芽腫症で見られた僧帽弁位人工弁(生体弁)血栓弁の一例 第 95 回 日本超音波学会 三村弘司、芳野友里恵、多田佳美、竹下享典、西岡利彦、神山哲男

6-2. 獲得研究費

①2022年04月1日～2025年3月31日 基盤研究(C) 白血球粒度分布分析によるCOVID-19の免疫応答ダイナミクスの解明 代表

6-3. 受賞

①第50回 埼玉県医学検査学会 優秀賞 「V.P シヤントが原因でクリプトコッカス髄膜炎を発症した一症例」 石田あいり

②臨床衛生検査業務功労者 厚生労働大臣表彰 奈良豊

6-4. 特許、実用新案

該当なし。

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし。

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

医学部6年生の講義、5年生のBSL、保健医療学部4年生の臨地実習、看護学生に対する講義に関しては、実習および講義・ディスカッションを通じて成果を上げている。検査技師教育については、今後の臨床検査の一層の高度化に対応できるよう、修士・博士、専門技師資格の取得を目指す教育を推進し、能力開発を進めている。実際専門技師資格の取得は過去にない数の取得者であった。スキルアップについてもISO15189の運用を利用して可視化して意欲を向上させている。

研究に関しては名古屋大学との共同研究である尿毒症動物モデルの解析は終了し、昨年度は3報英文誌を報告した。COVID-19にかかわる臨床データ、検体の集積に対応して臨床研究を立ち上げた。解析のために院内の検査データと診療情報を集めて、統計処理に耐えるようにデータをクレンジングする、データウェアハウスの構築に着手した。技師のリサーチマインドの涵養にも努め積極的に学会発表を奨励した結果、発表演題も急増した。

臨床については、各臨床科の要望に十分応えるよう、技師の教育訓練、業務改善を行い効率化に努めた。今年度もCOVID-19対策についてICTと協調して新型コロナウイルスの核酸検査・抗体検査を精力的に行った。突発的なクラスター発生にかかわる解析も滞りなく行うことができた。より良い患者サービスの提供・検査結果の質の向上・人的資源の有効活用・業務の合理化・人材育成の効率化・安全な職場環境の構築を目指し、ISO15189認証を維持に努めた。臨床検査室の品質と能力に関する国際規格であるISO15189認証を維持した結果、国際標準検査管理加算取得のほか治験件数も大幅に増加し、収益に貢献した。臨床各科の要望に応え、細菌検査に結核菌を早期に培養同定できる液体培地システム、核酸増幅装置を新たに備えた。当院の臨床・研究体制構築に貢献できるよう努力を続けている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

医学部学生教育については今年度同様実習および講義・ディスカッションを通じて、国家試験に対応した内容と実臨床に重要なポイントをわかりやすく伝えていく。卒後教育についてはハンズオンセミナーなど臨床に即した技術教育を提供する。本セミナーは救急外来やベッドサイドで役立つと好評である。検査技師教育については、今後の臨床検査の一層の高度化に対応できるよう、修士・博士、専門技師資格の取得を目指す教育を引き続き推進し、能力開発を進める。スキルアップのために資格取得とそれに対応したキャリアパスを示す。大学院生教育については豊富な研究材料から一日も早く研究をまともな指導を受けるよう指導していく。現在日本超音波学会の研修施設であるが、教育をレベルアップするために基幹施設入りを目指す。

研究に関しては病院内の検査データを整備してビッグデータ解析にたえるものとする。またこれと呼応してCOVID-19にかかわる研究を継続するほか臨床各科との共同研究を立ち上げ、院内の研究環境を整える。今年度よりがん診療にかかわる研究基盤も立ち上げる予定である。生活習慣病・感染症・がんのバイオマーカーの創出に取り組んでいく。内分泌内科とも共同してこれに取り組む、ウェアラブルデバイスからのデータとデータウェアハウスを解析してデジタルバイオマーカーの創出に取り組む。

臨床に関しては、細菌検査・がんゲノム・遺伝子検査・生理検査の分野で臨床の要求にこたえて最新の設備、システムを導入していく。より良い患者サービスの提供・検査結果の質の向上・人的資源の有効活用・業務の合理化・人材育成の効率化・安全な職場環境の構築を目指し、臨床検査室の品質と能力に関する国際規格であるISO15189の維持に努め、臨床各科の要望に鋭敏に対応していく。感染症科・総合内科・救命救急科・呼吸器内科・小児科の要望に応え、結核菌の液体培地システム、SARS-CoV-2の抗原・抗体検出システムに加え、SARS-CoV-2のほか肺炎球菌などの複数の病原菌遺伝子を同時に検出できるシステムの運用している。通常検査では分類が困難な細菌の同定・希少疾患とがんゲノム診療のため必要となる高性能遺伝子解析装置の運用を開始している。今後がんゲノム診療にも寄与するものとする。超音波検査も人員・設備ともに拡充を図り、心臓内科ほか臨床各科の需要を満たすよう努力する。

上述の設備の拡充については病院執行部と協調して臨床各科の需要に見合ったものをつくり上げていく。

2. 36) 病理部

1. 構成員

東 守洋 (HIGASHI, Morihiro) : 教授 : 研究主任、教育副主任、診療部長 : 指導教員 (大学院) : 人体病理学、分子病理学 : 博士
百瀬 修二 (MOMOSE, Shuji) : 教授 : 研究副主任、教育主任、診療副部長 : 指導教員 (大学院) : 人体病理学、分子病理学 : 博士
山下 高久 (YAMASHITA, Takahisa) : 講師、研究副主任、教育員、医員、 : 人体病理学、分子病理学 : 博士
今田 浩生 (IMADA, Hiroki) : 助教、研究員、教育員、医員、大学院
菊地 淳 (KIKUCHI, Jun) : 助教、研究員、教育副主任、医員、博士
沢田 圭佑 (SAWADA, Keisuke) : 助教、研究員、教育員、医員、博士
高柳 奈津子 (TAKAYANAGI, Natsuko) : 助教、研究員、教育員、医員、博士
山崎 真美 (YAMAZAKI, Mami) : 助教、研究員、教育員、医員、博士
伊藤 梢絵 (ITO, Kozue) : 助教、研究員、教育員、医員、大学院
村上 千明 (MURAKAMI, Chiaki) : 助教、研究員、教育員、医員、博士
清水 朋実 (SHIMIZU, Tomomi) : 助教、研究員、教育員、医員、大学院
菊地 由季菜 (KIKUCHI, Yukina) : 助教
山本 渉 (YAMAMOTO, Wataru) : 助教
糸山 進次 (ITOYAMA, Shinji) : 名誉教授、客員教授 : 人体病理学、造血器の病理学 : 博士
田丸 淳一 (TAMARU, Jun-ichi) : 名誉教授、客員教授 : 人体病理学、造血器の病理学 : 博士
黒住 昌史 (KUROZUMI, Masafumi) : 客員教授 : 乳腺病理 : 博士
秋草 文四郎 (AKIKUSA, Bunshiro) : 客員教授 : 腎病理 : 博士
岸 宏久 (KISHI, Hirohisa) : 客員准教授 : 博士
中澤 温子 (NAKAZAWA, Atsuko) : 客員准教授 : 博士
元井 紀子 (MOTOI, Noriko) : 客員准教授 : 呼吸器病理 : 博士
岡 輝明 (OKA, Teruaki) : 非常勤講師 : 呼吸器病理
久米 絢子 (KUME, Ayako) : 非常勤医師、外科病理
阿部倫子 (ABE, Michiko), 木内恭子 (KIUCHI, Kyouko), 大澤久美子 (OHSAWA, Kumiko), 松野和子 (MATSUNO, Kazuko), 大野優子 (OHNO, Yuko), 青木智章 (AOKI, Tomoaki), 日下卓万 (KUSAKA, Takuma), 秋山慶介 (AKIYAMA, Keisuke), 佐藤達也 (SATO, Tatsuya), 笹谷愛結 (SASAYA, Ayu), 石澤 綾 (ISHIZAWA, Aya), 針谷佳那 (HARIGAI, Kana), 戸田成美 (TODA, Narumi), 上田 稜 (Ueda, Ryo), 諏訪日向子 (SUWA, Hinako). 以上臨床検査技師

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

卒前教育としては、医学系総合大学の一員として、疾患の本態について、病理学に基づく細胞学的、組織学的な理解を深めることを目的とし、将来、医療現場で役に立つ実践的な病理学を教育の目標としている。卒業教育としては、カンファレンス、CPC を通して、疾患の成因と進展を形態学で捉えることにより診断・治療に直結する病理学を目標としている。また学位未取得者には積極的に大学院進学を勧め、研究の実践を通して論理的に考え、問題解決に至るプロセスを学び、さらに病理診断業務からの問題発見能力を養うことを目標としている。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育として、医学部1年生病院見学 (東), 医学部2年生医師業務見学 (東, 清水)、2年生の病理学総論講義 (百瀬)、3年生の病理学各論講義 (百瀬、山下、菊地)、5年生、6年生のCC (医師全員)、埼玉医科大学総合医療センター看護学校1年生の病理学講義 (今田、山本、山下)、埼玉医科大学保健医療学部、女子栄養大学、東武医療技術専門学校、西武医療技術専門学校、東京電子専門学校などの病院実習 (臨床検査技師)、千葉大学医学部3年生の血液病理講義 (東)、順天堂大学医学部3年生の腫瘍学総論講義 (百瀬)を行っている。

卒業教育として、CPC、CC (年11回)、臨床とのカンファレンス (血液内科、泌尿器科、腎臓内科、消化器肝臓内科、肝胆膵外科、脳神経外科、プレストケア科)を行っている。大学院教育としては医学部大学院講義 (田丸)、保健医療学部修士講義 (東、百瀬)、大学院生の研究指導 (田丸、東、百瀬)を行っている。

また、都内、埼玉県内の病理専攻医、病理専門医の血液病理診断の研修、株式会社ニチレイバイオサイエンスから社員の研修を受け入れている。

2-3. 達成度評価

これまで行なってきたことを継続しているが、令和3年度はオンライン、対面をハイブリッドした実習を取り入れ、柔軟性のある授業、実習が行えた。実習に関しては密を避けるため、病理部内であっても、Webを併用した実習を行った。CCについては病理はその業務の特性から必然的に座学が多くなるが、参加型の実習とするため、学生が症例を選択し、みずからHE標本を作成し、その疾患について学習し、プレゼンテーションをするという方法をとった。反応は学生によりまちまちであったが、作業の意義が伝わっていない可能性もあるため、今後は解説と作業のバランスを工夫する必要があると考える。

卒業教育としては臨床とのカンファレンス、CPCを行ったが、カンファレンスについてはWebを利用し、Covid前と同じ程度のカンファレンスが行えた。臨床医と個々の症例につきディスカッションを行う機会もあり概ね達成されている。大学院教育としては、実際の研究を通して目標は達成しつつあると考える。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育では CC や病院実習をとおして、医療における病理学の役割について概ね目標とする内容が達成されていると思われる。CC では、学生の反応、評価を参考にし、概ね半年で実習内容、実習方法を検討しなおしている。今後も定期的に部内ミーティングを行い実習方法、内容について見直しを行っていく。現在 CC で学生が選択する症例に限られているが、徐々に選択肢を増やしたいと考えている。卒業教育としてはカンファレンス、CPC が主となるが、カンファレンスに関しては Web と対面を併用したハイブリッド方式で行っていく。大学院教育は概ね順調であり、4年以内に学位取得できるよう研究内容をまとめていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

当センターにおけるすべての病理組織検体、細胞検体症例に対し、適切で質の高い分析と報告をすることが全ての前提条件としてあり、研究もそれに沿ったものとなっている。特にリンパ血液系疾患に関して症例集積がなされているため、症例の解析を中心とした研究を行っている。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

- 1) 悪性リンパ腫の臨床病理学的特徴と腫瘍発生メカニズムの解明
- 2) 各種悪性腫瘍の臨床病理学的研究
- 3) 非腫瘍性骨関節疾患における臨床病理学的研究
- 4) 細胞診検査における組織診との不一致及び診断困難例の臨床細胞学研究

3-3. 達成度評価

1-1) [悪性リンパ腫における転写因子 NF- κ B signal の役割]

B 細胞性リンパ腫ではその病態形成に転写因子である NF- κ B の活性化が重要と考えられており、新薬のターゲットとして注目されている。近年、この分子は“細胞質-核振動”という動きをしていることが見出されてきた。この細胞内の移動がホジキンリンパ腫においていかなる挙動を示すか、生きた細胞を用いたタイムラプス観察を行ない細胞内の NF- κ B との挙動と NF- κ B により調節される分子の発現を解析している。新規画像解析技術の導入を試みているが、本研究に応用するまでには至っていない。

1-2) [びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫と高悪性度 B 細胞リンパ腫の鑑別診断と分子基盤の解明]

びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫 (DLBCL) の一部を占める高悪性度 B 細胞リンパ腫 (HGBL) は形態的に DLBCL と区別がつかず、FISH や G-band による染色体検査によって初めて診断が確定する。形態的に DLBCL と区別しうるバイオマーカーの同定を目的とし、さらには分子基盤の解明を併せて行う。さらに分子生物学的、遺伝学的さらには遺伝子学的に多くのことは明らかとなってきたが、DLBCL の臨床的階層化にはまだ未解明な点が多い。そこで、DLBCL そのもので Key molecule と考えられる複数のマーカーを基軸に治療戦略を見据えた病態における役割明らかにする。

1-3) [がん発生における性指向分子の役割]

腫瘍発生における性差はよく知られており、性ホルモンとの関連は古くから研究されている。しかしながら、性ホルモン依存性でない細胞種を起源とする腫瘍発生の性差についてはほとんどわかっていないのが現状である。われわれは悪性リンパ腫の遺伝子変異探索の過程において、性指向性に変異を認める遺伝子を新たに見出した。現在マウスモデルをもちいて機能解析を行っている。今後、この遺伝子を、リンパ腫発症にかかわる分子メカニズム・分子標的治療への展望とともに、分子疫学的観点からの解明を目指す。

1-4) [Hodgkin リンパ腫におけるがん微小環境の解明]

Hodgkin リンパ腫は、多数の非腫瘍性細胞を背景に少数の腫瘍細胞が生存する特異な微小環境を構築している。この微小環境の一端を解明するため、組織検体から nCounter を用いた分子発現解析を行い、予後に影響を与える分子および免疫系細胞を同定した。現在、論文発表準備中である。また、培養細胞をもちいて、ホジキンリンパ腫細胞同士の相互作用についての研究も行っている。

1-5) [濾胞性リンパ腫における腫瘍微小環境の役割]

濾胞性リンパ腫 (DL) は、胚中心 B 細胞リンパ腫の Prototype の一つで、古典的には BCL2 の転座を基軸とした低悪性度 B 細胞リンパ腫である。近年の分子生物学的の発展とともに FL における病態の一旦が明らかとなり、治療選択を見据えた薬剤の開発・研究も進んできた。本研究では分子調節薬である IMiDs の FL における役割を解明するとともに、IMiDs の適応のバイオマーカーの同定を目標とする。

2-1) [口腔内白板症診断のためのバイオマーカーの探索]

口腔内白板症は一部悪性化の転機をたどる病変であるが、その診断は主に病理形態診断によるところが大きい。また境界悪性と思われる症例や自然消退する症例もあり、その診断根拠として形態的変化以外のバイオマーカーが求められている。われわれは、実際の患者検体にて遺伝子検索を行い、遺伝子変異による層別化を行っている。TP53 の変異の種類とタンパク発現の関係に新たな知見を見出した。

2-2) [尿路上皮癌における薬剤耐性能獲得機序の解明]

これまで我々は尿路上皮癌において薬剤耐性分子 YB-1 の発現と癌抑制遺伝子である p53 や膜型薬剤耐性分子 p-glycoprotein の発現間に関連があることを示し、さらに YB-1 がゲムシタビンの薬剤耐性分子の一つであることを報告した。現在尿路上皮癌のゲムシタビン耐性機序を解明すべく、ゲムシタビン耐性尿路上皮癌モデルを作製し、癌幹細胞や薬剤耐性分子を中心とした分子機構の解明を行っている。ゲムシタビンは尿路上皮癌の標準的な化学療法の中核薬剤であるが、その耐性獲得が臨床上問題となっているため、ゲムシタビン耐性機序としてムチンタンパクが関与することを明らかにした。

3 [非腫瘍性骨関節疾患における臨床病理学的研究]

非腫瘍性骨関節疾患に対して病理組織学的観点から研究を行っている施設は全国的にも稀である。その中でも大腿

骨頭検体を用いて、特発性大腿骨頭壊死症や急速破壊型股関節症の病態解明を試みている。特に急速破壊型股関節症は臨床的に定義された疾患体系であり、病理学的な観点からの研究はほとんどない。これまでの症例検討では脆弱性骨折と急速破壊型股関節症が有意に関連していることを示した。現在大腿骨頭壊死症との比較などを含め更に解析を進めている。

4 [細胞診検査における組織診との不一致及び診断困難例の臨床細胞学研究]

かつて細胞診はスクリーニングと言われたが、現在では脱却し組織診と並ぶ重要な病理学的検索として考えられており、甲状腺や唾液腺、膵臓などでは細胞診断をもとに臨床的に治療方針が決定されることもある。以上の背景から細胞診の制度を上げるために組織診との不一致例を中心に臨床細胞学的検討を行っている。これまで高異型度の膵癌、唾液腺の基底細胞癌・腺腫において有意な知見を得た。

3-4. 次年度改善計画

現在、研究がほぼ終了し論文作成中のプロジェクトが複数あるためこれを完成させたい。これまで、各プロジェクトがバラバラに動いていたが、各プロジェクトの進行にともなってプロジェクト間に繋がりが出てきている。今後、この繋がりをより効果的にアレンジして全体として研究を推進していく。悪性リンパ腫関連で国内の研究者との共同作業による論文が数編発表された。今後も悪性リンパ腫の症例集積により新たな展開を考えたい。今年度は共同研究を含む複数の研究課題が開始もしくは遂行されている。

4. 診療

病理部は患者に直接接してはいないが、細胞診や組織診、手術標本に関する診断、病理解剖が病理部の基本診療に相当する業務である。形態診断のほか電顕、免疫染色、in situ hybridization、PCR等のタンパク、遺伝子解析もその中に含まれている。これらの基本業務を適正に、確実にこなすことが当然のこととして求められており、標本作製から診断にいたる精度管理を確実に高い質の高い診断を行うことを目標とする。開院以来、病理診断、迅速診断数が伸びてきている。このことは臨床各科の信頼を（少なくとも）損なっていないと評価できる。精度管理に関しては標本作製時のダブルチェック、診断時ダブルチェックを全例行っており、今後も継続していく。また非常勤講師を多数招聘しconsultationも随時行い、診断精度を担保している。切り出し室はホルマリン対策、染色室は有機溶媒対策を施しておりまた解剖室についてもホルマリン対策、有機溶媒対策、感染症対策を行っており安全な作業環境を維持している。さらに標本作製過程について効率化をはかっていく。現在、血液内科、泌尿器科、腎臓内科、消化器肝臓内科、肝胆膵外科、脳神経外科、プレストケア科とカンファレンスや勉強会を通してdiscussionの機会がある。院内CPCについても同様に継続しオープンな病理学をめざす。エキスパートパネルへの参加を行っている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Editorial Board in Pathology International. 田丸淳一、百瀬修二

Editorial Board in Journal of Clinical and Experimental Hematopathology. 百瀬修二

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本病理学会評議員：東 守洋、百瀬修二

日本病理学会：希少がん診断のための病理医育成事業リンパ腫ワーキンググループ委員、病理専門医試験面接委員、第16回診断病理サマーフェスト講師：百瀬修二

日本リンパ網内系学会理事：百瀬修二

日本リンパ網内系学会評議員：田丸淳一、東 守洋、百瀬修二、山下高久

日本リンパ網内系学会将来構想実施委員：高柳奈津子、百瀬修二

日本リンパ網内系学会血液病理認定医制度委員会：百瀬修二

JCOG 病理中央診断委員：JCOG1305 田丸淳一、JCOG1411 百瀬修二

日本医学物理士会 ミニマム講習会 講師：百瀬修二

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- 1 Yano H, Fujiwara Y, Horlad H, Pan C, Kai K, Niino D, Ohsawa K, Higashi M, Nosaka K, Okuno Y, Tamaru JI, Mukasa A, Matsuoka M, Komohara Y. Blocking cholesterol efflux mechanism is a potential target for antilymphoma therapy. *Cancer Sci.* 2022 Jun;113(6):2129-2143
- 2 Haga M, Motojima Y, Masuda W, Fujino T, Tamaru JI, Nakamura T, Oya S, Amikura T, Higashino M, Kanai M, Moriwaki K. Primitive Myxoid Mesenchymal Tumor of Infancy With Fatal Hemorrhage In Utero: A Case Report and Literature Review. *J Pediatr Hematol Oncol.* 2022 May 3.
- 3 Kumagai Y, Takubo K, Kawada K, Ohue M, Higashi M, Ishiguro T, Hatano S, Toyomasu Y, Matsuyama T, Mochiki E, Ishida H. Endocytoscopic Observation of Esophageal Lesions: Our Own Experience and a Review of the Literature. *Diagnostics (Basel).* 2022 Sep 14;12(9):2222.
- 4 Higashi M, Momose S, Takayanagi N, Tanaka Y, Anan T, Yamashita T, Kikuchi J, Tokuhira M, Kizaki M, Tamaru JI. CD24 is a surrogate for 'immune-cold' phenotype in aggressive large B-cell lymphoma. *J Pathol Clin Res.* 2022 Jul;8(4):340-354.
- 5 Yamashita T, Higashi M, Sugiyama H, Morozumi M, Momose S, Tamaru JI. Cancer Antigen 125 Expression

Enhances the Gemcitabine/Cisplatin-Resistant Tumor Microenvironment in Bladder Cancer. *Am J Pathol.* 2023 Mar;193(3):350-361.

- 6 Fukatsu S, Ogihara S, Imada H, Ikemune S, Tamaru JI, Saita K. Chronic spontaneous epidural hematoma in the lumbar spine with cauda equina syndrome and severe vertebral scalloping mimicking a spinal tumor: a case report. *BMC Musculoskelet Disord.* 2022 May 30;23(1):508.
- 7 Haga M, Motojima Y, Masuda W, Fujino T, Tamaru JI, Nakamura T, Oya S, Amikura T, Higashino M, Kanai M, Moriwaki K. Primitive Myxoid Mesenchymal Tumor of Infancy With Fatal Hemorrhage In Utero: A Case Report and Literature Review. *J Pediatr Hematol Oncol.* 2023 Jan 1;45(1):e135-e138.
- 8 Taniguchi G, Kajino K, Momose S, Saeki H, Yue L, Ohtsuji N, Abe M, Shibuya T, Orimo A, Nagahara A, Watanabe S, Hino O. The Inhibitory Effects of Anti-ERC/Mesothelin Antibody 22A31 on Colorectal Adenocarcinoma Cells, within a Mouse Xenograft Model. *Cancers (Basel).* 2022 Apr 28;14(9):2198.
- 9 Tooze R, Rosenwald A, Leoncini L, Macon WR, Momose S, Lenz G, Tamaru JI, Gopal A, Li S, Dunleavy K, Barrans SL, Davies AJ. Diffuse large B-cell lymphoma/high grade B-cell lymphoma with MYC and BCL2 rearrangements. In: WHO Classification of Tumours Editorial Board. *Haematolymphoid tumours* [Internet; beta version ahead of print]. Lyon (France): IARC; 2022. (WHO classification of tumours series, 5th ed.; vol. 11).
- 10 百瀬修二: 血液・造血器. 標準病理学 第7版, 医学書院, 東京, 2023. p288-320

【総数: 論文 16 件、学会発表 23 件、講演 3 件】

6-2. 獲得研究費

文部科学省科学研究費補助金 基盤 (C) 22K06966 2022-04-01 - 2025-03-31 「CD24 を起点とした DLBCL 腫瘍免疫微環境改変機構の解明と治療開発基盤の構築」研究代表: 東 守洋

文部科学省科学研究費補助金 若手研究 22K15413 2022-04-01 - 2025-03-31 「びまん性大細胞型 B リンパ腫における中枢神経系浸潤の機序」研究代表: 山本 渉

文部科学省科学研究費補助金 若手研究 22K15427 2022-04-01 - 2025-03-31 「Double expressor lymphoma の分子基盤の解析」研究代表: 高柳奈津子

文部科学省科学研究費補助金 若手研究 22K15428 2022-04-01 - 2025-03-31 「髄膜腫の放射線感受性を制御する遺伝子の同定と予測モデルの作成」研究代表: 村上千明

文部科学省科学研究費補助金 基盤 (C) 20K07396 2020-04-01 - 2024-03-31 「FISH に頼らない高悪性度 B 細胞リンパ腫の診断法の確立とその分子基盤」研究代表: 百瀬修二

文部科学省科学研究費補助金 若手研究 20K16200 2020-04-01 - 2023-03-31 「MYC 関連蛋白 MAX からとらえなおす DLBCL の分子動態」研究代表: 山下高久

文部科学省科学研究費補助金 基盤 (C) 19K07467 2019-04-01 - 2023-03-31 「悪性リンパ腫の脂質代謝経路における LR11 の分子機能」研究代表: 東 守洋

文部科学省科学研究費補助金 若手研究 19K16566 2019-04-01 - 2023-03-31 「ADAM10 に着目した Hodgkin リンパ腫の癌微小環境解析」研究代表: 増田 渉

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第 62 回日本リンパ網内系学会総会会長: 田丸淳一

第 25 回日本血液病理研究会会長: 百瀬修二

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育については、CC について参加型の実習とするため、学生が症例を選択し、みずから HE 標本を作成し、その疾患について学習し、プレゼンテーションをするという方法をとった。しかしながら学生評価はむしろ低く、おそらく、内容を詰め込みすぎたものと考えられる。大学院教育に関しては、3 名ともプロジェクトは完了し大学院を修了することができた。現在、2 名の大学院生のプロジェクトは順調にすすんでいる。また、当院他科からの大学院生も受け入れ、多様な研究のニーズに対応できるよう務めている。その他の研究プロジェクトのものに関しても概ねの目標は達成されているものと考えられる。診療に関しては、全例ダブルチェック、turn around time の短縮により正確かつ遅延のない診断を目標としてきたが、一部の難解症例をのぞき概ね達成できたと思われる。とくに IS015189 が目標通り取得できた。

病理部全体としては、全国的に病理医不足が問題視されているなかで、より魅力ある施設を目指し、職場環境の充実を一つ重要な課題として提言してきた。このことはすぐには解決しないまでも、その方向性がみえてきていると考えられる。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育については、とくに CC について学生の満足度の高い教育を目指す。学生参加型の実習を行ったが、学生にとって消化不良であった感否めない。医療における病理学の意義を考えさせるよう、症例をより深く理解する方法にしていきたいと考えている。大学院教育に関しては、プロジェクト間につながりが出てくるようにミーティング等で指導していく。診療に関して、正確かつ迅速な診断を目指す。IS015189 取得および取得後の主に事務作業がと

くに技師の業務に負担となっている。これを効率化することも目標の一つとなる。埼玉医科大学は造血器リンパ系疾患において、国内で存在感を示しつつあり、当病理部もその中で重要な役割を担っている。今後も造血器リンパ系の病理診断、研究について重点的に行うとともに、現在進行中の標本アーカイブの作成ならびに研究プロジェクトをすすめていきたい。

当院では全員が「スーパージェネラル・ホスピタル」の一員であることを自覚し、ジェネラルかつ高い専門性の両立を目指している。全員が全臓器の病理診断を行いつつ造血器リンパ系に加え骨軟部、神経、泌尿器、口腔など、各自が専門とする領域の研鑽にも努めている。このことは翻って、各領域で専門的な病理診断・研究を進めると併せて相乗的かつ学際的な研究が推進されることにもつながるものと考えている。この他にも同時に、すべての症例において、一例として比重の軽いものはない、ということを肝に銘じ、教育、研究、診療において、病理部が果たしている役割について正しい評価が得られるように努力する。このため、診断前工程、診断、診断後工程いずれにおいても標準化をすすめ効率的かつ正確な診断につながるような業務改善を行う。

2. 37) 輸血部

1. 構成員

- 山本晃士 (YAMAMOTO, Koji) : 教授 : 運営責任者
輸血細胞医療部診療部長 : 教育主任 : 研究副主任
医学博士 : 輸血学、血液凝固学、血栓止血学、幹細胞学
- 久保田寧 (KUBOTA, Yasushi) : 教授
細胞移植療法部診療部長 : 教育副主任 : 研究主任
医学博士 : 血液学、造血幹細胞学、造血細胞移植学
- 別宮好文 (BEKKU, Yoshifumi) : 肝胆膵外科・小児外科教授 (兼)
- 駒込昌彦 (KOMAGOME, Masahiko) : 肝胆膵外科・小児外科助教 (兼)
- 前田平生 (MAEDA, Hiroo) : 客員教授
- 阿南昌弘 (ANAN, Masahiro) : 主任 : 薬剤師 : 修士
- 野呂光恵 (NORO, Mitsue) : 主任 : 臨床検査技師
- 安田絵理子 (YASUDA, Eriko) : 臨床検査技師
- 鈴木康巴 (SUZUKI, Yasuha) : 臨床検査技師
- 関 佐織 (SEKI, Saori) : 臨床検査技師
- 鈴木康文 (SUZUKI, Yasufumi) : 薬剤師 (兼)
- 平田蘭子 (HIRATA, Ranko) : 実験助手

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

「卒前教育」 : 輸血部では座学や見学のみならず、実際の輸血医療に必要な手技と輸血過誤防止のための知識を初期臨床研修に先んじて実習にて習得させることを目標としている。

「卒後教育」 : 輸血に関する知識はすべての診療科の医師に必須である。適切な輸血医療は病院の医療安全対策と密接に関わる。これらの背景のもと医師と看護師に適切な輸血療法を指導するとともに、資格取得のための研修も行うことを目的とする。

「大学院教育」 : 輸血学に関する学術業績をあげるための指導を行うことを目的としている (本年度は該当無し)。

2-2. 教育実績 (担当者 : 山本, 久保田, 前田)

「卒前教育」 : 5年生に対する CC step-1 にて輸血医学の講義と実習が期間の 1 日間 9:00-17:00 が割り当てられている。講義内容は、輸血の歴史、本邦の血液事業、血液製剤の種類・製法・特性・適応、適正な輸血療法、血液型検査・不規則抗体検査・交差適合試験など赤血球輸血に関する免疫血液学、血小板輸血と大量血小板採取法、白血球型 (HLA)・血小板型と同種免疫、輸血後 GVHD、輸血感染症等の副作用・合併症である。実習は、自己血輸血、血液型、交差適合試験の実践である。また、3年生の血液内科学および6年生の医療総論内で輸血学の系統的講義を行っている。

「卒後教育」 : 4月の新研修医のオリエンテーションにて、血液製剤の適正使用を中心に講義を行っている。また、輸血療法委員会から指名を受けた医師に対して、血液型判定の再実習を行っている。この他、資格取得などの目的で研修の依頼があった医師、看護師および臨床検査技師に指導を行っている。現在、当院は日本輸血・細胞治療学会、日本血液学会、日本外科学会、日本産科婦人科学会、日本麻酔科学会協議会と日本看護協会推薦による学会認定・臨床輸血看護師制度の研修認定施設である。また、認定輸血検査技師制度指定施設と日本輸血・細胞治療学会認定医制度指定施設でもあり、それぞれの研修・教育に協力している。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」 : CC step-1 では、実習に確認試験を導入し、指導が確実に達成されていることを確認している。講義・実習終了時には回収する学生の感想・評価の内容、教育センターからのフィードバックにより確認している。評価は毎年向上しており、目標は達成されていると判断される。

「卒後教育」 : 個々の事例に対し、該当する個人に教育と指導をおこなうとともに、院内全体へは、院内セミナーや輸血療法委員会を通じて教育を行っている。

2-4. 次年度改善計画

「卒前教育」 : 実習の充実に努めている。例えば、写真を加えた専用のテキストの作成。さらに実習内容を教員が実演する DVD を作成している。これにより、実習に対する学生からの評価は高くなっている。学生は口頭試問を苦手としており、質問を促しても自ら質問をすることはほとんどない。そこで、学生の知識整理と習熟の手助けとなるように、過去に学生から質問のあった事項や実習で誤りやすい事項をまとめた自学自習用のプリントを配布することとした。また、到達度確認試験を充実させることも次年度計画とする。

「卒後教育」：輸血部門の卒後教育の成果は輸血療法の診療内容に反映するものと考えられる。今年度から当院では輸血管理料の適正使用加算の申請ができるようになった。このレベルにまで当院の適正輸血が到達したことは、各診療科の協力と広い意味での「卒後教育」の成果であると考えられるため、今後もこれらを推進してゆく。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

輸血部では輸血医療のみならず細胞治療、移植医療、遺伝子に関連する広い分野の研究を行っている。たとえば、HLA と疾患の関係、悪性疾患の幹細胞治療、大量出血患者における血中フィブリノゲン値の調査などである。その目的は最先端の研究成果を臨床に応用し患者に還元することである。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1) 末梢血幹細胞移植併用化学療法は血液内科との臨床研究。2) 輸血管理、血液製剤適正使用については埼玉県合同輸血療法委員会世話人施設と共同して行っている。

3-3. 達成度評価

1) 末梢血幹細胞移植併用化学療法については、末梢血への幹細胞動員の至適条件を検討している。2) 県内の適正輸血推進のための方策を検討する埼玉県合同輸血療法委員会における活動成果は「埼玉輸血フォーラム」にて継続して報告している。

3-4. 次年度改善計画

共同研究者として参加している全ての研究において、十分な役割を果たしている。しかし、診療科の対象患者数の増減に左右される共同研究は次年度の計画を立てるのが難しい。

4. 診療

輸血部は診療科と協力し、血液製剤の安全で適正な使用の推進と、末梢血幹細胞移植等の先進的な治療において重要な役割を果たしている。本年度の診療実績は、血液型検査：時間内 9,312 件 + 時間外 1,845 件、交差適合試験：時間内 12,319 単位 + 時間外 3,930 単位、HLA 検査は 76 件である。実使用量は RBC 14,596 単位、自己血 312 単位(+不使用 29.62 単位)、FFP6,236 単位：うち血漿交換 1,120 単位、PC 27,675 単位、アルブミン 64,400g=21,466.7 単位。末梢血幹細胞 17 回採取、移植 14 回。O 型赤血球濃厚液の緊急輸血に対応。24 時間体制で輸血用血液製剤と全血漿分画製剤の受注、払出しに対応。FFP/RBC=0.38、アルブミン/RBC =1.08 (輸血管理料 I；施設および適正使用加算を満たす)。

日本臓器移植ネットワークの支部基幹移植検査センターとしてドナー及び腎臓移植希望者の HLA 等の検査と移植外来を実施。学会認定・臨床輸血看護師研修認定施設、認定輸血検査技師制度指定施設および日本輸血・細胞治療学会認定医制度指定施設であり、日本輸血・細胞治療学会認定医、学会認定・自己血輸血責任医師、学会認定輸血検査技師、学会認定・臨床輸血看護師、学会認定 HLA 検査技術者が常勤している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県輸血療法委員会：世話人(山本, 阿南)、小委員会委員(安田)。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本輸血細胞治療学会誌：編集委員および査読者(山本)。

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

一般社団法人日本輸血・細胞治療学会：特任理事(山本)、評議員(山本、久保田)。

一般社団法人日本輸血・細胞治療学会：学会認定・アフエレーシスナース制度審議会議長(山本)。

一般社団法人日本血液学会：評議員(山本、久保田)。

一般社団法人日本血栓止血学会：理事、代議員(山本)。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Kitamura H, Kubota Y, Tomimasu R, Akashi M, Mori T, Mine Y, Ando J, Yamagata Murayama S, Kimura S, Miyahara M: Non-valvular infective endocarditis caused by *Sarocladium kiliense* in an immunocompromised patient with aplastic anemia. Intern Med 61(8): 1279-1283, 2022.
- ② 山本晃士：産科大量出血の病態と止血戦略。臨床麻酔 46: 787-796 (2022)
- ③ 久保田寧：ドナークローン性造血と移植成績。血液内科 85: 416-424 (2022)
- ④ 山本晃士：輸血療法。学会認定・アフエレーシスナース制度 指定カリキュラム (学会認定・アフエレーシスナース制度審議会議カリキュラム委員会 編): 131-141 (2022)
- ⑤ 久保田寧：高齢者 AML の治療。EBM 血液疾患の治療 2023-2024: 111-116, 中外医学社 (2022)
- ⑥ 鈴木康巴、野呂光恵、安田絵理子、阿南昌弘、山本晃士：緊急輸血後に RhD 不適合輸血が判明した RhD 陰性の 1 症例。第 153 回日本輸血・細胞治療学会関東甲信越支部例会 (2022)
- ⑦ 久保田寧、田中洋介、Ivo Lieberam、丸山俊昭、芥照夫、木村晋也、北村俊雄：高純度の造血幹細胞分離を可能とするマウス・ヒトに共通するマーカー、Plxdc2 の同定。第 70 回日本輸血・細胞治療学会学術総会 (2022)

- ⑧ 野呂光恵、鈴木康巴、安田絵理子、阿南昌弘、久保田 寧、山本晃士：フィブリノゲン製剤とクリオの適応 当院におけるフィブリノゲン製剤運用の実際。第 70 回日本輸血・細胞治療学会学術総会（2022）
- ⑨ 久保田寧、田中洋介、Ivo Lieberam、丸山俊昭、芥照夫、木村晋也、北村俊雄：ヒト・マウス造血幹細胞に共通する新規細胞表面分子、Plxdc2 の同定。第 44 回日本造血・免疫細胞療法学会総会（2022）
- ⑩ 山本晃士：産科大量出血の病態と止血戦略。第 32 回日本産婦人科・新生児血液学会学術集会産科 DIC セミナー（2022）

【総数：論文 14 件、学会発表 17 件、講演 〇 件】

6-2. 獲得研究費

1. 文部科学省科学研究費 基盤研究 (C) 研究代表者：久保田寧
新規核酸医薬技術と葉酸修飾シクロデキストリンを用いる白血病治療法の開発
2. 文部科学省科学研究費 基盤研究 (C) 研究分担者：久保田寧
全ての慢性骨髄性白血病患者の治療を目指した新規薬剤の開発と免疫状態の解明

6-3. 受賞

「該当なし」

6-4. 特許、実用新案

「該当なし」

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

「該当なし」

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

輸血部はその高い専門性（輸血認定医、自己血輸血責任医師、細胞治療認定管理師、学会認定・臨床輸血／自己血輸血／アフターケア看護師、輸血認定技師）を生かして、少ない人員ながら着実に運営されている。特に診療実績は良好に推移している。1) 診療に関しては、末梢血幹細胞採取を過去 30 年近く（平成 5 年～令和 4 年 3 月末）安全に実施して、延べ 600 人以上に達した。さらに細胞の処理は GMP 準拠の施設で無菌的に行っている。2) 自己血採血は件数が増加しているため、自己血外来を週 8 コマ実施して対応している。なお、貯血のみならず（自己血採血が手術前 4 週間ほど前から始まるため）術前検査の再確認や患者の合併症の把握などで診療各科に協力している。3) 日本臓器移植ネットワークにおける支部基幹移植検査センターとして、24 時間体制でドナー検査に対応していることと移植外来は評価されている。4) 教育では講義と実習に関して自己学習用冊子と専用テキストの貸し出し、DVD などの視覚的教材を提供して、実習終了後には達成度確認テストを行うなど、きめ細かい指導を行ってきた。5) 研究に関しては、院内のみならず他大学との共同研究を行っている。このように、教育、研究においても概ね目標は達成されている。また、6) 学会認定・輸血看護師研修認定施設、認定輸血検査技師制度指定施設と日本輸血・細胞治療学会認定医制度指定施設、HLA 研修施設として、さらには埼玉県合同輸血療法委員会の中心として社会的にも貢献している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

- 1) 輸血監視体制の強化：各血液製剤が使用指針に基づいて適正に使用されているか、輸血電子オーダーリングシステムを用いて監視する。
- 2) 輸血療法や止血不全、凝固障害に関する診療科からのコンサルテーションに対し、積極的に応じる。
- 3) e-ラーニングや院内セミナー等を活用し、院内の医師、看護師、検査技師を始めとした医療スタッフの輸血教育を行う機会を設け、病院全体として適正輸血を推進する。
- 4) アルブミン製剤、アンチトロンビン製剤を始めとする凝固因子関連製剤、グロブリン製剤などのオーダーに対して輸血部スタッフによる監視を行い、過剰オーダーや医学的意義に乏しいケースには照会をして、適正使用を推進する。
- 5) 造血幹細胞移植の対象となる症例について診療科と密な情報交換を行い、特に末梢血幹細胞採取に際しては、事前の回診などを通じて、より効率的で患者負担の少ない末梢血幹細胞採取を目指す。

2. 38) 健康管理科

1. 構成員

伊藤 博之 (ITO, Hiroyuki) : 教授 (心臓内科兼任) : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 循環器、心電学 : 博士
井上 芳郎 (INOUE, Yoshiro) : 講師 (心臓内科兼任) : 循環器

2. 教育

2-1. 目的・目標

心臓内科参照。健康管理科は卒前教育・卒後教育への関与はなく、心臓内科の卒前教育の一部を担当している。

2-2. 教育実績 (担当者)

1. 4年生 Pre-CC2-1 実習チューター (伊藤)
2. 心臓内科 BSL のクルズス 2 枠を担当 (伊藤)
3. 4年生 共用試験臨床実習前 OSCE 評価者 (伊藤)
4. 6年生 共用試験臨床実習後 OSCE 評価者 (伊藤)

2-3. 達成度評価

心臓内科参照。また夏季プロ「心電図を読めるようになりたい」は残念ながらコロナのため行えなかった。

2-4. 次年度改善計画

コロナの状況をみつつ夏季プロも行いたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標

心臓内科：院外心停止蘇生例および心原性失神例の診断と予後評価、特に除細動器植込みの適応を検討する。

健康管理科：動脈硬化性疾患のさらなる一次予防の臨床研究を行う。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

心臓内科：院外心停止蘇生例における冠攣縮性狭心症の寄与を検討する。さらに退院後の致死的不整脈再発リスクを検討し、植込み型除細動器の適応を明らかにする。

健康管理科：ドック受診者の経年データから、古典的心血管リスク因子に追加して中期の心血管病発症を予測できる因子を見出し、より有効な動脈硬化性疾患の予防戦略を検討する。

3-3. 達成度評価

心臓内科：心停止から蘇生し除細動器を植込み退院した冠攣縮性狭心症例の致死的不整脈再発状況を調査し再発予測因子を検討したが有意なものを見いだせず、現時点では全例除細動器植込みが妥当と結論した。

3-4. 次年度改善計画

心臓内科：心停止蘇生後冠攣縮性狭心症の予後評価を行い、除細動器植込みの適応を検討する。

健康管理科：古典的心血管リスク因子に追加して中期の心血管病発症を予測できる因子を見出し、動脈硬化性疾患のさらなる一次予防の臨床研究を行う。

4. 診療

当院人間ドックでは、一泊二日で通常の間ドック健診より精密に悪性腫瘍の早期発見と心血管疾患のリスク評価を行い、結果説明も十分に行っている。要精査・治療の場合は各診療科に情報を共有して紹介できる。本年度は COVID-19 の影響もあり例年の 65% 程度の 117 名が受検し、48 名が要精査・治療として院内各科に紹介となった。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

心電図 (日本不整脈心電学会) 査読委員 (伊藤)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

学会評議員：日本不整脈心電学会 (伊藤)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

該当なし

【総数：論文 0 件、学会発表 0 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

心臓内科参照

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

人間ドックは各診療科・検査部・2階西病棟のご協力で、精密かつ効率的に行われているが、主に COVID-19 の影響で受検者は減少した。教育活動も影響を受けた。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

本年度末で1995年7月に始まった当院人間ドックは中止の予定である。健康管理科は健康推進室と一緒に教職員・附属看護学校学生の産業保健・健康管理を担当していくこととなる。

2. 39) 医療安全管理学

1. 構成員

中島 勲 (NAKAJIMA, Susumu) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任 : 研究主任 : 医療安全管理学 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

卒前教育では、医学生として臨床現場に出る際に必要な医療安全上の知識を習得してもらうことを目指す。特に医師が法的に定められた資格であり、法を守ることの重要性について認識を強めていただきたい。

卒後教育では、主体的に診療を行う際に安全な医療を提供するために必要な態度・知識・技術を習得してもらうことを目指す。医療の実践には法令のみでなく、院内ルールや学会等の定めたガイドラインなどを総合的に適用する必要があるため、円滑な診療を行うことを前提とした知識や技術の習得を目指す。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育としては、12月に医学部3年生に対して、行動科学と医療倫理の一環として、医療安全「医療安全II:医療事故の定義、緊急処置、記録・報告方法と医療現場における記録の重要性とカルテ改ざんの違法性」について講義を行った。内容は、高学年になってBSLに参加する前に、医療安全上の各種ルールができた経緯を知っておいていただき、理解を深めることを目指した。

卒後教育としては、総合医療センター医療安全対策室長として、同室のメンバーと共に日常的な安全管理、ヒヤリハットレポート提出を通じた部署のリスク管理などを多職種で実践する手法の指導を行った。

2-3. 達成度評価

卒前教育として医学部生への教育は、成果が表れるのが初期臨床研修医としての業務を開始した後となる。ただし学生医としての活動の中で、医療安全に関わる問題が生じた場合は、内容をフィードバックしながら再検討する予定である。

卒後教育としては、診療科や病院全体に対しては、ヒヤリハットレポート数や、安全対策報告書の提出数、紛争事例の数などで評価ができると考える。しかし今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で診療自体が例年より縮小されていること、新規に開設された講座であることより評価は難しい。個人に対しては、短期間で成果を出すのは難しい領域であり、長期的な視野に立って評価を行う予定である。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育としては、医学生は学生医としての活動を行うこととなっているが、基本的には医療チームの一員として自発的な活動が行われるには至っていない。その点で卒前教育の成果が表れるのは、医学生から医師になって活動を開始した後となるため、現時点では評価できていない。

次年度計画としては、幅広い職種、経験年数の学生から医療従事者に至るまで、共通して医療安全文化を理解し、実践につなげられるよう指導を行う予定である。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

医療機関における医療安全情報の活用等管理のあり方に関する研究を行っている。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

厚生労働科学研究費の研究班で研究を行った。内容的には前年度のAMEDの研究の継続である。医療安全情報の中でも特に医療機器安全情報について検討した。医療機器とは薬機法で定められており、いわゆる機器に加えて医療材料まで含まれている。院内に導入された数や導入経路は薬剤と比べてはるかに多く、管理のみならず、不具合や使用方法についての情報の医療現場への有効な周知法は定まっていない。また特定機能病院および大学病院の中で、医療安全部門に臨床工学技士が専従配置されている施設は5施設であり、その全てに対して、専従配置の有効性についてのヒアリングを行った。本研究費は研究期間が1年間であり、AMED3年間の調査内容の再検討により、医療機器安全情報が有効に周知・活用されている医療機関の特性を抽出した。

結果については、次年度の論文執筆を予定している。

3-3. 達成度評価

AMEDの研究で収集されたアンケート調査の再解析は完了し、当初想定された結果が確認できたと考えている。

3-4. 次年度改善計画

前年度までのAMED及び今年度の厚生科学研究の成果を活かし、医療機器安全情報の周知及び活用における臨床工学技士の役割を明らかにし、臨床現場へフィードバックしたい。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

日本医療安全調査機構 総合調査委員会委員

日本医療機能評価機構 評価項目改定部会・部会員、患者安全部会・部会員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本臨床医学リスクマネジメント学会 編集委員

日本コンピュータ外科学会 編集委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

全国医学部長病院長会議 患者安全推進委員会委員

私立医科大学協会 医療安全・感染対策委員会委員、医療安全連絡会議運営委員会委員長

日本整形外科学会 安全医療推進・感染対策委員会委員長

日本臨床医学リスクマネジメント学会 常務理事、評議員、広報委員会委員長、企画・シンポジウム委員会委員長、セミナー委員会委員

看護理工学会 理事、評議員

医療の質・安全学会 代議員

日本コンピュータ外科学会 代議員

日本救急医学会 保険委員会委員・倫理委員会委員

国立大学法人東京医科歯科大学医学部附属病院 監査委員会委員長

財団法人 生存科学研究所 医療政策研究会研究員

日本看護協会神戸研修センター 特定行為研修講師（医療安全）

院内事故調査委員会 複数施設において委員長として参加

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

①中村伸理子、中島勸、他. 大学病院の医療事故調査制度への対応 大学病院の支援実績、日本医師会雑誌 151(5):819-822、2022年8月

②森武俊、中島勸、他. ナースコールデータの調査と解析の(報告1) 15年間のナースコール履歴記録の解析、看護理工学会誌9(Sup): S18-S25、2022年9月

③長江祐吾、中島勸、他. 設置15年を迎えた医療機器安全管理責任者の現状と課題 医療機器安全管理業務を推進する際の障壁となりうる課題抽出のための調査結果、第97回日本医療機器学会大会、2022年6月、横浜

④中島勸. 医療安全の最近の考え方、第59回日本リハビリテーション医学会学術集会、2022年6月、横浜

⑤中島勸. 心理的安全性に配慮した院内検討会の運営、日本医療マネジメント学会学術総会、2022年7月、神戸

【総数：論文2件、学会発表2件、講演1件】

6-2. 獲得研究費

厚生科学研究費

550,000円 医療機関における医療安全情報の活用等管理のあり方に関する研究（研究分担者）

6-3. 受賞

なし

6-4. 特許、実用新案

なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度同様に、学外の医療安全に関しては社会全体として多くの課題があり、他施設の医療事故調査委員会委員や各種団体での委員会活動等に忙殺されていた。この状況は新型コロナウイルス感染症の蔓延によって、コミュニケーションが難しくなるとともに、さらに困難になりつつある。

学内の医療安全管理体制については、前年度の問題点を踏まえて組織の改変に着手し、標準的な医療安全管理体制に近づくことができた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

学外の医療安全に関しては、年々より重要な役割が増加しており、昨年度以上にわが国の医療界全体の医療安全管理体制の充実と、安全文化の醸成の努める予定である。

学内の医療安全管理については、年々充実する医療安全管理体制に対して、新たな業務や検討方法を追加しながら、より高度な医療安全管理が行えることを目指している。

2. 40) ゲノム診療科

1. 構成員

石田秀行 (ISHIDA Hideyuki) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 (兼任) : 代表指導教員 (大学院) : ゲノム診療科 (遺伝性腫瘍、ゲノム診療) : 医学博士

鈴木興秀 (SUZUKI Okihide) : 講師 (兼任) : 教育主任 : 外来医長 : 研究主任 : 医学博士

母里淑子 (MORI Yoshiko) : 講師 (兼任) : 研修医長 : 研究副主任 : 医学博士

2. 教育

2-1 卒前教育

2-1-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

目的 : ゲノム医療の概要を理解すること

目標 : ゲノム診療科実習を希望する学生が、以下の点について習得できる

- 1) 実地臨床におけるゲノム診療の必要性と概要を理解する
- 2) 疾患特異的ながん治療と、臓器横断的ながん治療について理解する

2-1-2. 教育実績 (担当者 : 鈴木興秀)

令和4年度は該当者無し

2-1-3. 達成度評価

令和4年度は該当者無し

2-1-4. 次年度改善計画

自己評価 : 該当なし

次年度計画 : ゲノム診療科実習を希望する学生に対し、具体例を提示しつつ学ぶ機会を提供する。

2-2 卒後教育

2-2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

目的 : ゲノム診療科ローテーションを希望する医師 (初期・後期研修医を含む) に対し、ゲノム医療の実装の一端を経験する機会を提供する。

目標 :

- 1) がんゲノムパネル検査の流れを理解する
- 2) ゲノム医療に関わるデータベース検索や多職種での症例カンファレンスに参加する

2-2-2. 教育実績 (担当者 : 母里淑子)

令和4年度は該当者無し

2-2-3. 達成度評価

令和4年度は初期・後期研修医教育の該当者無し

2-2-4. 次年度改善計画

自己評価 : 該当なし

当診療科は平成31年4月に設置され、まだ当院の職員に対する卒後教育は行っていない。

次年度計画 : 次年度以降も希望者に対して上記のような実臨床におけるゲノム医療を共に経験し、共に学ぶ機会を提供できるように準備する。

2-3 大学院教育 (担当者 : 鈴木興秀)

2-3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

目的 : ゲノム医療の概要を理解すること

目標 : 消化管癌、遺伝性腫瘍 (家族性大腸腺腫症、リンチ症候群等) を主な研究テーマとし、遺伝学的検査結果 (生殖細胞系列および体細胞変異 (バリエーション) 解析、エピゲノム異常等) と表現型との関係等を解析することにより、臨床がんゲノム医学の基礎と臨床についての最新知見を習得し、臨床現場で取得した技能と知識を発揮できることを目指す。また、臨床ゲノム領域のみならず、あらゆる臨床分野においてモチベーションを高く維持し、問題解決能力に優れた人材を育成することを目的とする。

2-3-2. 教育実績 (担当者 : 母里淑子)

令和4年度は3名の大学院生に、小講義、およびがんゲノム医療のエキスパートパネル実習を行った。

2-3-3. 達成度評価

臨床がんゲノム医学の臨床について教育できた。

2-3-4. 次年度改善計画

自己評価 : 臨床がんゲノム医学の臨床について教育できたが、ゲノム医学の基礎知識の教育は不十分であった。

次年度計画 : 次年度以降も希望者に対して上記のような実臨床におけるゲノム医療を共に経験し、共に学ぶ機会を提供できるように準備する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

遺伝性疾患の発生、病態、疫学、治療の研究及び開発。悪性腫瘍における微生物感染の影響の研究。悪性腫瘍のゲノム・エピゲノムプロファイリングの研究。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

・大腸癌と腸内微生物研究

平成 31 年度に基盤研究 (C) を獲得した。マイクロサテライト不安定性から大腸癌を自然発生するマウスに *Fusobacterium nucleate* を感染させたモデルマウス、およびミニ臓器（腸管オルガノイド）を用いた 3 次元感染モデルを作製し、大腸癌進展や治療への関連についての研究に着手している。本研究は研究期間延長が承認され、研究継続中である。

・大腸癌のメチル化研究

令和 2 年度に基盤研究 (C) に応募し獲得した。大腸癌細胞株を利用した研究を行った。

・遺伝性腫瘍の病態・疫学の研究：

リンチ症候群や家族性大腸腺腫症についての学会発表や、論文作成を行った。

・悪性腫瘍におけるがんゲノム検査の意義についての研究

113 人にがんゲノム検査およびエキスパートパネルを行った。その後の転帰情報を集積中である。

・多施設共同研究「次世代型統合的がん診断システムの精度向上のために、約 1 万症例の全エクソン解析を行い、日本人がんゲノムデータベースを構築する研究」に参加し、大腸癌を中心とした領域を担当している。

3-3. 達成度評価

・大腸癌と腸内微生物研究

モデルマウスの作成に難渋しているが、研究進行中である。

・大腸癌のメチル化研究

今年度の目標を達成できなかった。

・悪性腫瘍におけるがんゲノム検査の意義についての研究

おおむね順調に進行中である。

・「次世代型統合的がん診断システムの精度向上のために、約 1 万症例の全エクソン解析を行い、

日本人がんゲノムデータベースを構築する研究」症例集積・解析を完了しており、概ね順調に進行中である。

3-4. 次年度改善計画

・自己評価：消化管・一般外科と共同で遺伝性腫瘍の研究や大腸癌と腸内微生物の研究を行い、成果の一部を学会発表・論文発表した。

・次年度計画：次年度はさらに大腸癌エクソームの研究、大腸癌のメチル化研究、悪性腫瘍におけるがんゲノム検査の意義についても研究をまとめる。

4. 診療

遺伝学的検査目的、遺伝性疾患の診療目的の近隣医療機関からの紹介も増えている。今後も当院におけるさらなるゲノム医療の充実に努める所存である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本遺伝性腫瘍学会 査読委員（鈴木興秀）、PLOS ONE 査読委員（母里淑子）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

遺伝性大腸がん診療ガイドライン 編集責任者（石田秀行）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

①石田秀行, 近 範泰.

大腸腺腫症

胃と腸 57(5): 664, 2022 May

②近谷賢一, 母里淑子, 鈴木興秀, 石田秀行.

【小腸疾患-診断・治療の最新動向-】消化管ポリポシス 総論(疫学他)

日本臨床 80(7): 218-224, 2022.7

③鈴木興秀, 天野邦彦, 近 範泰, 山野貴史, 江口英孝, 中島日出夫, 大宅宗一, 岡崎康司, 持木彫人, 高橋健夫, 石田秀行.

集学的治療を必要とした Li-Fraumeni 症候群の姉妹例

癌と化学療法 49(13): 1947-1949, 2022.12

④Kananazawa Y, Yamada T, Yamaguchi T, Saito Y, Kakinuma D, Masuda Y, Ando F, Ohashi R, Eguchi H, Okazaki Y, Ishida H, Yoshida H.

A novel germline SMAD4 variant detected in a Japanese family with juvenile polyposis syndrome and hereditary hemorrhagic telangiectasia. *Jpn J Clin Oncol* 53(3):275-279, 2023

⑤Suzuki Y, Ishida F, Ishida H, Ueno H, Kobayashi H, Yamaguchi T, Konishi T, Kanemitsu Y, Hinoi T, Inoue Y, Tomita N, Sugihara K.

Morphological Analyses of Colorectal Adenocarcinomas in Japanese Familial Adenomatous Polyposis Patients. J Anus Rectum Colon 27: 121-128, 2022

⑥Yoshida N, Ishikawa H, Eguchi H, Okazaki Y, Hirose R, Inoue K, Dohi O, Itoh Y, Mutoh M, Ishiguro S, Ishida H.

Promotion Effects of Smoking in Polyp Development in Monozygotic Twins with Atypical Colorectal Polyposis. Case Rep Gastroenterol 16(2): 375-381, 2022 Jun

⑦Suzuki K, Suzuki O, Ishida H, et al.

Multiple cancer type classification by small RNA expression profiles with plasma samples from multiple facilities.

Cancer Science 113(6) 2144-2166, 2022

⑧Mori Y, Amano K, Chikatani K, Ito T, Suzuki O, Kamae N, Hatano S, Chika N, Yamamoto A, Ishibashi K, Eguchi H, Okazaki Y, Iwama T, Ishida H.

Recent trends in the morbidity and mortality in patients with familial adenomatous polyposis: a retrospective single institutional study in Japan.

International journal of clinical oncology 27(6): 1034-1042, 2022

⑨Matsubara T, Beppu N, Ikeda M, Ishida H, Takeuchi Y, Nagasaki T, Takao A, Sasaki K, Akagi K, Sudo T, Ueno H, Yamaguchi T, Tomita N, Ajioka Y.

Current clinical practice for familial adenomatous polyposis in Japan: A nationwide multicenter study. Annals of gastroenterological surgery 6(6): 778-787, 2022

⑩Miyakura Y, Chino A, Tanakaya K, Lefor AK, Akagi K, Takao A, Yamada M, Ishida H, Komori K, Sasaki K, Miguchi M, Hirata K, Sudo T, Ishikawa T, Yamaguchi T, Tomita N, Ajioka Y.

Current practice of colonoscopy surveillance in patients with lynch syndrome: A multicenter retrospective cohort study in Japan. DEN open 3(1): e179, 2022

【総数：論文 20 件、学会発表 54 件、講演 9 件】

6-2. 獲得研究費

日本学術振興会 学術研究助成金 基盤研究 (C) (鈴木)

日本学術振興会 学術研究助成金 基盤研究 (C) (母里)

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育については、3名の大学院生に対してがんゲノム領域の実習および講義を行った。また、遺伝性腫瘍外来研修の依頼に対しては、引き続き継続し、学内外の医師に遺伝性腫瘍の理解を広めるべく教育予定である。

研究については、臨床研究についての学会発表・論文発表を行いつつ、悪性腫瘍における微生物感染の影響のような基礎研究も進めており、成果発表に向けて鋭意対応中である。

診療については、遺伝学的検査やがんゲノム検査を行いやすいシステムの構築が行えたことで、患者数や検査数が増加した。また、非腫瘍性遺伝性疾患への対応も、遺伝相談室と連携し対応を開始している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育について、近年ではがんゲノム検査や一部の遺伝性疾患の遺伝学的検査等、保険診療でも行えるゲノム医療が新しく増えたため、卒後6年目以降の医師や医療従事者に対する生涯教育の有用性もあると考える。他の診療科など異なる分野の専門家と情報共有しながら当科担当医も共に学び、治療法の選択肢について熟慮することで患者の利益につなげたい。

研究については、引き続き悪性腫瘍の基礎研究およびゲノム診療の臨床研究を計画している。

診療については、さらなる診療実績を積むべく、患者・家族や地域医療機関への広報を行う。

3. 1) 消化器内科

1. 構成員

- 良沢昭銘 (RYOZAWA, Shomei) : 教授 : 運営責任者 : 消化器内視鏡科診療部長 : 教育副主任 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 消化器内視鏡 : 博士
- 真下由美 (MASHIMO, Yumi) : 准教授 : 指導教員 (大学院) : 消化器内視鏡 : 博士
- 水出雅文 (MIZUIDE, Masafumi) : 教授 : 消化器内視鏡科診療副部長 : 教育主任 : 研修医長 : 指導教員 (大学院) : 消化器内視鏡 : 博士
- 谷坂優樹 (TANISAKA, Yuki) : 講師 : 外来医長 : 指導教員 (大学院) : 消化器内視鏡 : 博士
- 田島知明 (TASHIMA, Tomoaki) : 講師 : 研究副主任 : 病棟医長 : 消化器内視鏡 : 博士
- 藤田 曜 (FUJITA, Akashi) : 講師 : 博士
- 石川 翼 (ISHIKAWA, Tsubasa) : 助教
- 村松孝洋 (MURAMATSU, Takahiro) : 助教
- 塩味里恵 (SHIOMI, Rie) : 助教
- 申 貴広 (SHIN, Takahiro) : 助教
- 寺田里絵 (TERADA, Rie) : 助教
- 杉本 啓 (SUGIMOTO, Kei) : 助教 (専攻医)
- 地主龍平 (JINUSHI, Ryuhei) : 助教 (専攻医)
- 小森健吾 (KOMORI, Kengo) : 助教 (専攻医)
- 佐藤 遼 (SATO, Ryo) : 助教 (専攻医)

2. 教育

2-1. 目的・目標

「卒前教育」消化器腫瘍の診断, 治療に関して, 学生の意欲を引き出し, ひとりの学生もドロップアウトすることのない教育, 学生指導を実践する。

「卒後教育」消化器腫瘍の診断, 治療に関して, 内視鏡関連知識および技術の指導を行い優れた臨床医の育成を目指す。

2-2. 教育実績 (担当者)

「卒前教育」消化器腫瘍の診断, 治療に関して教育した。

「卒後教育」消化器腫瘍の診断, 治療に関して, 主として内視鏡関連知識および技術, ならびにがん薬物療法につき教育した。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」目標はほぼ達成された。

「卒後教育」目標はほぼ達成された。

2-4. 次年度改善計画

「卒前教育」学生の意欲を引き出すことができた。次年度も同様の目標を継続する。

「卒後教育」所属医師の臨床能力を高めることができた。次年度も同様の目標を継続する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

消化器腫瘍について新規診断, 治療に関する研究を行う

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

内視鏡的画像解析, 内視鏡治療の開発

3-3. 達成度評価

消化器腫瘍における新規診断・治療に関する研究について目標を達成できた。

3-4. 次年度改善計画

消化器腫瘍の新規診断・治療について継続して行う。

4. 診療

消化器腫瘍の診断について, 消化管領域においては, 一般的な内視鏡検査のほかに, NBI をはじめとする特殊光や共焦点レーザー内視鏡を用いた診断を行っている。胆膵領域においては, 一般的な ERCP 関連検査のほかに, 超音波内視鏡や共焦点レーザー内視鏡を用いた診断を行っている。内視鏡治療については, 消化管領域では ESD を中心とした低侵襲治療を, 胆膵領域では一般的な ERCP 関連治療のほかに, 超音波内視鏡ガイド下治療やバルーン内視鏡を用いた術後再建腸管に対する治療を行っている。

5. その他

5-1. 自治体, 政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌, 編集委員, 査読委員の有無

『消化器内視鏡』編集幹事, 日本消化器内視鏡学会関東支部機関誌編集委員

以下査読委員：

Endoscopy、American Journal of Gastroenterology、Journal of Gastroenterology、Journal of Hepato-Biliary-Pancreatic Science (JHBP)、Clinical Journal of Gastroenterology、Digestive Endoscopy、Hepatobiliary & Pancreatic Diseases International、Endoscopic Ultrasound、Scandinavian Journal of Gastroenterology、Pancreatology、日本消化器病学会雑誌、日本消化器内視鏡学会雑誌、日本胆道学会雑誌、日本膵臓病学会雑誌

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本消化器病学会専門医試験実施・判定委員会委員、日本消化器病学会学術集会検討委員会委員、日本消化器内視鏡学会理事・社会保険委員会委員、日本胆道学会社会保険委員会委員、(以上 良沢)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Ryoza S. Pancreato-hepatobiliary endoscopy: Intervention for pancreatic diseases. Dig Endosc. 2022 May;34 Suppl 2:120-123.
- ② Tanisaka Y, Mizuide M, Fujita A, Ogawa T, Katsuda H, Saito Y, Ryoza S. Hemorrhage after laser-cut covered self-expandable metal stent removal. Endoscopy. 2022 Jul;54(7):E378-E379.
- ③ Tanisaka Y, Mizuide M, Fujita A, Ogawa T, Katsuda H, Miyaguchi K, Ryoza S. A novel sphincterotome facilitates endoscopic sphincterotomy in patients with Roux-en-Y gastrectomy. Endoscopy. 2022 Dec;54(S 02):E780-E781.
- ④ Tashima T, Miyaguchi K, Tanisaka Y, Ryoza S. Complete resection of a previously unsuspected 5 mm duodenal submucosal carcinoma. Dig Liver Dis. 2022 May;54(5):707-708.
- ⑤ Miyaguchi K, Tanisaka Y, Fujita A, Ryoza S. Ileum Tumor Diagnosed by an Endoscopic Ultrasound-fine-needle Biopsy Using a Forward-viewing Echoendoscope. Intern Med. 2022 Aug 15;61(16):2543-2544.
- ⑥ Tanisaka Y, Mizuide M, Fujita A, Jinushi R, Ogawa T, Katsuda H, Saito Y, Miyaguchi K, Terada R, Tashima T, Mashimo Y, Ryoza S. Factors affecting complete stone extraction in the initial procedure in short type single-balloon enteroscopy-assisted endoscopic retrograde cholangiography for patients with Roux-en-Y gastrectomy. Scand J Gastroenterol. 2022 Nov;57(11):1390-1396.
- ⑦ Jinushi R, Tashima T, Ryoza S. Unexpected minor duodenal papilla during endoscopic submucosal dissection. Dig Endosc. Dig Endosc. 2022 May;34(4):875.
- ⑧ Miyaguchi K, Mizuide M, Tanisaka Y, Fujita A, Jinushi R, Hiromune K, Ogawa T, Saito Y, Tashima T, Mashimo Y, Imaeda H, Ryoza S. Distinguishing the papilla of Vater during biliary cannulation using texture and color enhancement imaging: A pilot study. DEN Open. 2022 May 15;3(1):e125.
- ⑨ Fujisawa T, Tsuchiya T, Kato M, Mizuide M, Takakura K, Nishimura M, Kutsumi H, Matsuda Y, Arai T, Ryoza S, Itoi T, Isayama H, Saya H, Yahagi N. STNM01, the RNA oligonucleotide targeting carbohydrate sulfotransferase 15, as second-line therapy for chemotherapy-refractory patients with unresectable pancreatic cancer: An open label, phase I/IIa trial. EclinicalMedicine. 2022 Nov 17;55:101731.
- ⑩ Jinushi R, Tashima T, Terada R, Miyaguchi K, Katsuda H, Ogawa T, Nakano Y, Saito Y, Fujita A, Tanisaka Y, Mizuide M, Mashimo Y, Kawasaki T, Ryoza S. Effectiveness of a multi-loop traction device for colorectal endoscopic submucosal dissection performed by trainees: a pilot study. Sci Rep. 2022 Jun 17;12(1):10197.

【総数：英論文 35 件, 和論文 10 件, 学会発表 21 件, 講演 15 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許, 実用新案

該当なし

6-5. 学会, 研究会, セミナー等の開催実績

第 58 回日本胆道学会開催

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育, 研究, 診療のいずれにおいても概ねの目標は達成された。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

次年度も教育, 研究, 診療のいずれにおいても目標達成に努め, さらなる業績の向上を目指したい。

3. 2) 心臓内科

1. 構成員

中埜信太郎 (NAKANO Shintaro) 教授：運営責任者：病棟・外来医長：指導教員(大学院)：循環器病学：小児循環器病学：救急医学：虚血性心疾患：カテーテル治療：博士

加藤律史 (KATO Ritsushi) 教授：診療部長（不整脈科）：研究副主任：指導教員（大学院）：循環器病学：不整脈：カテーテルアブレーション：博士

岩永史郎 (IWANAGA Shiro) 教授：診療副部長：教育主任：指導教員（大学院）：循環器病学：器質的心疾患：心不全：心エコー図学：博士

荒井隆秀 (ARAI Takahide) 教授：2023/1～診療部長（心臓内科）：代表指導教員（大学院）研究主任：循環器病学：カテーテル治療：虚血性心疾患：博士

中島淑江 (NAKAJIMA Yoshie) 准教授：教育副主任：循環器病学：画像診断、心エコー図学：博士

池田礼史 (IKEDA Yoshifumi) 准教授：指導教員（大学院）：循環器病学：不整脈：カテーテルアブレーション：博士

筒井健太 (TSUTSUI Kenta) 講師：研修医長：指導教員(大学院)：循環器病学：不整脈：カテーテルアブレーション デバイス治療：博士

森 仁 (MORI Hitoshi) 講師：指導教員（大学院）：循環器病学：不整脈：カテーテルアブレーション デバイス治療：博士

有山幸紀 (ARIYAMA Miyuki) 助教：博士

松本和久 (MATSUMOTO Kazuhisa) 助教：博士

鈴木馨子 (SUZUKI Kyoko) 助教

関 要 (SEKI Kaname) 助教：博士

成田昌隆 (NARITA Masataka) 助教

長谷川早紀 (HASEGAWA Saki) 助教：博士

保谷洋貴 (HOYA Hiroki) 助教

佐々木渉 (SASAKI Wataru) 助教

松尾圭祐 (MATSUO Keisuke) 助教

田中尚道 (TANAKA Naomichi) 助教（専攻医）

工藤大輔 (KUDO Daisuke) 助教（専攻医）

永井充伸 (NAGAI Mitsunobu) 助教（専攻医）

松本 慧 (MATSUMOTO Kei) 助教（専攻医）

非常勤医師

吉本晴美 (YOSHIMOTO Harumi) 循環器病学：画像診断、心エコー図学：博士

田中沙綾香 (TANAKA Sayaka)：循環器病学：不整脈：カテーテルアブレーション

潟手庸道 (GATATE Yodo)：循環器病学：虚血性心疾患：カテーテル治療

名誉教授

西村重敬 (NISHIMURA Shigeyuki) 名誉教授：指導教員(大学院)：循環器病学：虚血性心疾患：心臓核医学：博士

客員教授

清水 渉 (SHIMIZU Wataru)：日本医科大学循環器科教授：指導教員（大学院）：不整脈：博士

松本万夫 (MATSUMOTO Kazuo)：東松山医師会病院院長：指導教員（大学院）：循環器病学：不整脈：カテーテルアブレーション：博士

村松俊裕 (MURAMATSU Toshihiro)

小宮山伸之 (KOMIYAMA Nobuyuki)：聖路加病院心血管センター長：指導教員（大学院）：虚血性心疾患：カテーテル治療：博士

小泉智三 (KOIZUMI Tomomi)：水戸医療センター循環器病センター長：指導教員（大学院）：虚血性心疾患：カテーテル治療：博士

客員准教授

丹野 巡 (TANNO Jun)：たんのハートクリニック：循環器病学：虚血性心疾患：カテーテル治療：博士

客員講師

山田裕一 (YAMADA Yuichi)：高坂醫院；循環器病学：虚血性心疾患：カテーテル治療

原 幹 (HARA Motoki) : 国立病院東広島医療センター : 指導教員 (大学院) : 循環器病学 : 不整脈 : 博士
非常勤講師

加藤隆一 (KATOH Ryuichi) : 東大和病院心臓血管センター長 : 虚血性心疾患 : カテーテル治療指導 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

「卒前教育」: 3年生は循環器ユニット中の症候論や検査・治療の基本を、病態生理に基づいて講義している。また新カリキュラムの進行に伴い、従来の4年生「臨床入門」実習にあたる「pre-CC 1-3」実習が開始され担当している。4年生は臨床入門(臨床推論)を分担・担当、共用試験 OSCE に向けた講義も担当している。5年生の Bed side learning (BSL) および Clinical Clerkship (CC step1) では、学生を医療チームの一員として、診断と治療に関して能動的な経験を行うことを目標としている。SL 循環器ユニットのプログラムでは、循環器系 3 診療科(心臓内科、心臓血管外科、小児心臓科)を2週間でローテートし、心臓血管外科と小児心臓科にそれぞれ2日間をかける。このユニットでは心臓内科の実習を中心とし、総括も当科で行っている。6年生の講義は、第一に医師国家試験に合格することを目標として企画、補講やナイトセッションも担当、一部は初期臨床研修で求められる事項も含んでいる。新専門医制度に伴ってプログラムを変更した。

「卒後教育」: 初期研修医は主に緊急入院する救急患者の受持医となり、医療チームの一員として症例の診断・検査に携わり、治療方針を立案できることを目標としている。当科は緊急および重症を含めたあらゆる心血管疾患の症例が経験できる

「大学院教育」: 現在、医局員松尾圭祐先生が学位取得を目指しており、社会人大学院生にも対応して川野大輔先生が学位取得を目指している。

2-2. 教育実績 (担当者)

「卒前教育」: 教育主任の岩永教授を責任者として実施している。3年生は系統講義を26コマ、6年生は4コマを担当した。5年生 BSL は学生自身のチェックリストによる自己評価、新入院患者のプレゼンテーション、教授回診時の聴診実習、終了時の諮問などを通して学習させている。臨床実習に関しては、心臓内科・不整脈科の各担当医師にて実技などの見学、体験を行っている。

「卒後教育」: 初期臨床研修のローテートを最大6名受け入れている。主に緊急入院患者を受け持ち、プライマリーケアに限らず、循環器疾患の専門研修を指導医の下で行っている。COVID19 感染症の影響で従来施行していた月曜日の研究カンファレンスなどは中止しているが、毎日8:00からCCU回診を施行、火曜日午前7:30から行われている心臓血管外科との合同カンファレンスや、木曜日午前7:30からの不整脈カンファレンス、その他、CPCなどにも自主的参加させている。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」: 5年生 BSL をローテートする学生の知識や理解度などで、臨床実習を問題なく受けることができるレベルに達していないものもあり、勉強会(心電図診断など)を補講として行っている。臨床実習は、今後要求される国際標準レベルに到達するためには、時間数と質ともに向上が望まれるが、COVID19の問題から十分な成果には至っていない。

「卒後教育」: チームでの受け持ち患者は15-20名/月であり、急性冠症候群や急性心不全など緊急入院患者を主に担当させている。このため、循環器領域の救急医療や緊急時の対処法を理解することができていると考えるが COVID19の問題から十分な成果には至っていない可能性がある。

「大学院教育」: 現在社会人大学院生4名在籍

2-4. 次年度改善計画

「卒前教育」: 概ね目標を達成できたと考え、今年度は、COVID19の問題が生じて予定変更が余儀なくされた。系統的講義は基礎となる解剖学や生理学を理解した上で、循環器疾患の病態生理を学べるように行っている。胸部診察は臨床医学入門の中で重要な部分を占めるため、OSCEへの対応として指導医が十分な内容の教育を行えるように今後、指導医にさらに指導者としての研鑽を積ませる必要がある。心臓内科でのBSL実習期間は7日間と少なくなり、循環器内科全般の知識を復習する時間的余裕がなかったが、新カリキュラム変更となり解決が期待される。BSLでは一般内科の診断や治療に関する技能の習得は賄えているが、循環器領域の専門技能の取得にはさらなる努力を要する。5年生後半から6年生初頭にかけてのCC step1では、各チームで4名の学生を受け入れ、医療チームの一員として診療に当たらせ卒後臨床研修と同等のレベルを目指した指導を行う予定であったがCOVID19の問題が生じて予定変更が余儀なくされた。

「卒後教育」: 到達目標の大部分を達成できた。初期臨床研修において新専門医制度に伴って、すべての到達目標を達成する必要があるため、他診療科と協力して教育を行った。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

循環器診療から発見される臨床課題の中で、その解決により診療の質向上に貢献できる臨床研究テーマを選んで研究させている。大学・医療機関と共同で行う多施設研究への参加、translational researchの推進を目標とした。門研修および初期臨床研修中の医師には、経験した症例を深く掘り下げて検討し学術集会などで積極的に症例報告させ、さらに論文とすることを義務づけている。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

虚血グループ、不整脈グループ、心不全グループ、画像診断グループに分かれて、関連する診療科とも共同で研究している。

心不全グループでは、埼玉医科大学リサーチアドミニストレーションセンターとの兼任千本松教授が中心となり、心不全モデルを用いた研究を行っている。また、心臓血管外科と共同研究で、同意を得た手術症例の摘出組織からiPS細胞を誘導し、疾患の病因を解明する研究を行っている。

- ① 安定狭心症に関する保存的または侵襲的アプローチの健康効果に関する国際共同比較研究
- ② AMED J-PCI レジストリー「レジストリー登録データを用いた統合的解析に係る長期予後調査」
- ③ J-PCI 「日本心血管インターベンション学会内登録データを用いた統合的解析」
- ④ 経皮的左心耳閉鎖システムを用いた非弁膜症性心房細動患者の塞栓予防の有効性と安全性に関する多施設レジストリー研究: J-LAAO レジストリー (watchman)
- ⑤ リード除去症例の実態調査 Japan Lead extraction registry (J-LEX レジストリー)
- ⑥ Spark registry
- ⑦ ICD 込んだ一次予防患者の評価: ATP の系統的評価(Appraise-ATP レジストリー)
- ⑧ 深部静脈血栓症及び肺血栓塞栓症の治療及び再発抑制に対するリバーロキサバンの有効性及び安全性に関する登録観察研究
- ⑨ 経皮的僧帽弁接合不全修復システムを用いた僧帽弁閉鎖不全に対する治療介入の有効性と安全性に関する多施設レジストリー研究
- ⑩ 非弁膜症性心房細動を合併する冠動脈インターベンション施行患者の経口抗凝固薬と抗血小板薬の至適併用療法前向き、多施設、無作為化比較、非劣性試験 (OPTIMA-AF)
- ⑪ 脳梗塞の既往を有する非弁膜症性心房細動患者に対し、エドキサバンによる抗凝固療法を基礎治療にカテーテルアブレーションの有用性を検証する多施設共同ランダム化比較研究
- ⑫ Cryo AF グローバルレジストリー研究
- ⑬ 免疫チェックポイント阻害薬使用に伴う心筋障害に対する全国多施設共同レジストリー
- ⑭ 着用型除細動器 (WCD: Wearable Cardioverter Defibrillator) 遠隔モニタリング機能の心イベント早期心臓突然死高リスク患者における有用性に関する研究
- ⑮ 心臓再同期の継続的自動適応を目的とする BIOTRONIK 社製 AutoAdapt アルゴリズムの評価
- ⑯ Mid-Q Response 試験
- ⑰ 遺伝的素因に基づく心房細動アブレーション後の長期的予後と予測因子の評価
- ⑱ 循環器疾患診療実態調査 (JROAD) のデータベースによる心臓サルコイドーシスの診療実態調査と二次調査に基づく診断・治療プロトコールの策定に関する研究
- ⑲ 心不全患者アウトカムに対する利尿薬と神経体液性調節薬のランダム化比較試験
- ⑳ 植込み型心臓電気デバイス治療に関する登録調査
などの医師主導国内研究・国際研究に参加をしている。

3-3. 達成度評価

虚血グループは中塾教授を中心に薬物溶出性ステントなどによる経皮的冠動脈形成術と抗血栓療法について、また、冠動脈内超音波 (IVUS) による動脈硬化病変の性状診断の研究などを行っている。

不整脈グループは、加藤教授を中心に心室頻拍や心房細動へのカテーテルアブレーションの症例を積み重ね、その治療成績を研究している。心室細動など致死性不整脈のハイリスク症例へ一次的自動除細動器植込みの研究、左室収縮障害例へのデバイスによる心室再同期治療の研究も継続している。房細動アブレーション後の再発予測因子を解析研究も継続しており左房機能の影響を検討している。

心不全グループでは、村松教授を中心に重症心不全、特に心移植前後の評価と管理について検討している。

基礎研究グループでは、千本松教授が中心に iPS 細胞一心筋細胞誘導研究をまとめ、SGLT2 阻害薬研究は杉講師が中心となり細胞実験を進めています。

3-4. 次年度改善計画

それぞれの研究の主テーマは、前年度から継続して研究してきたものである。徐々にではあるが、その成果を原著論文としてまとめている。新たに structural heart disease 部門、Oncocardiology 部門、Adult congenital heart disease 部門が誕生、広域臨床研究を準備している。

4. 診療

緊急を含めたすべての循環器疾患に 24 時間対応できるように、最先端の診療を行える医療チームが形成されつつある。診療する体制の強化は行っているが、まだ症例数の増加に対応できる十分なキャパシティではない。冠動脈インターベンション、不整脈アブレーション、デバイス治療に加えて、器質的心疾患を対象とする低侵襲治療の導入を継続している。画像診断は症例数の増加に満足することなく、診断制度の向上を目指した方策を検討している。心臓移植が必要となり得る重症心不全症例の診断、内科的および外科的治療、術後管理を拡充し、他医療機関からのコンサルテーションにも当たっており、当科は循環器疾患一般から心臓移植までの幅広い分野を診療対象にした医療機関として臨床との橋渡しの役割を担う translational research も積極的に行っている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

村松俊裕：埼玉県生活習慣病検診管理指導協議会委員、埼玉県医師会産業医会理事

加藤律史：埼玉県公安委員会指定医師

千本松孝明：科学研究費助成事業審査員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

岩永史郎：Journal of Cardiology Cases

加藤律史：Journal of Arrhythmia (associate editor)、査読：Circulation Journal、International Heart Journal、Journal of Cardiology、Journal of Cardiology Cases、心電図、

西村重敬：厚生労働省労働基準局中央労災委員、埼玉県国民健康保険診療報酬審査委員会常務処理審査委員、さいたま地方裁判所専門委員

松本万夫：Journal of Arrhythmia Co Chief editor、APHS news(編集委員)

千本松孝明：日本臨床検査自動化学会誌編集員、査読：antioxidants、BMC Geriatrics、Open Pharmaceutical Sciences Journal、International Journal of Molecular Sciences、Molecules、Hypertension Research、Journal of Cardiovascular Development and Disease、日本臨床検査自動化学会誌、Journal of International Medical Research Scientific Reports、臨床薬理 (JSCPT)、日本臨床検査自動化学会誌、Vascular Biology Innovation Conference

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

村松俊裕：日本循環器学会関東甲信越地方会評議員、和温療法学会理事

加藤律史：日本不整脈心電学会理事・評議員、日本不整脈心電学会；編集委員会委員長・心電図検定委員・健康保険委員会委員・財務委員・植込み型デバイス委員会部会員・学術委員会部会員、日本循環器学会関東甲信越地方会評議員、

岩永史郎：日本循環器学会 代議員(社員)、チーム医療委員会委員・プログラム部会長、保険診療委員会委員、成人先天性心疾患の横断的検討委員会委員、日本心臓病学会 代議員(社員)、Journal of Cardiology Cases Associate editor、

日本心エコー学会 理事、代議員、健康保険委員会委員長、国内交流委員会委員長、日本心臓血管麻酔学会 評議員、

JB-POT 試験認定委員会委員、日本超音波医学会 副理事長、代議員、奨励賞選考委員会委員、技術賞選考委員会委員

千本松孝明：日本薬理学会代議員、臨床薬理学会評議員、日本医療検査科学会編集委員、首都圏 AR コンソーシアム 実務者構成員、Working group 1 リーダー、Working group 4 委員、一般社団法人血圧とホルモン科学協会理事、Journal of Cardiovascular Development and Disease Editorial board member、International Journal of Molecular Sciences Editorial board member

中埜 信太郎：日本成人先天性疾患学会 学術委員会委員、教育部会部会員、保健委員会委員、日本循環器学会認定試験部会委員

松本万夫：日本不整脈心電学会保険委員会オブザーバー、日本循環器学会保険委員会オブザーバー、日本医師会疑義解釈委員会委員、日本診療情報管理学会理事、日本診療情報管理学会国際統計分類委員会委員長、埼玉不整脈ペーシング研究会会長、関東アブレーションフロンティア顧問、日本臨床電気生理研究会顧問

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

(原著論文・症例報告論文・著書)

- ① Shintaro Nakano, Shun Kohsaka, Taishiro Chikamori, Kenji Fukushima, Yoshio Kobayashi, Ken Kozuma, Susumu Manabe, Hitoshi Matsuo, Masato Nakamura, Takayuki Ohno, Mitsuaki Sawano, Koichi Toda, Yasunori Ueda, Hiroyoshi Yokoi, Yodo Gatate, Tokuo Kasai, Yoshiaki Kawase, Naoya Matsumoto, Hitoshi Mori, Ryo Nakazato, Nozomi Niimi, Yuichi Saito, Ayumi Shintani, Ipppei Watanabe, Yusuke Watanabe, Yuji Ikari, Masahiro Jinzaki, Masami Kosuge, Kenichi Nakajima, Takeshi Kimura, JCS Joint Working Group : JCS 2022 Guideline Focused Update on Diagnosis and Treatment in Patients With Stable Coronary Artery Disease. *Circ J.* 86(5):882-915. 2022 Apr
- ② Daisuke Kawano, Hitoshi Mori, Kenta Tsutsui, Hidehira Fukaya, Naomichi Tanaka, Masataka Narita, Wataru Sasaki, Kazuhisa Matsumoto, Yoshifumi Ikeda, Takahide Arai, Shintaro Nakano, Ritsushi Kato : Time dependency in the radiofrequency lesion formation for a local impedance guided catheter in an ex vivo experimental model. *J Arrhythm.* 38(6):1080-1087. 2022 Oct
- ③ Kenta Tsutsui, Hitoshi Mori, Daisuke Kawano, Naomichi Tanaka, Yoshifumi Ikeda, Naokata Sumitomo, Shiro Iwanaga, Shintaro Nakano, Toshihiro Muramatsu, Kazuo Matsumoto, Ritsushi Kato : Ablation characteristics and incidence of steam pops with a novel, surface temperature-controlled ablation system in an ex vivo experimental model. *Pacing Clin Electrophysiol.* 45(12):1390-1400. 2022 Dec
- ④ Tsukasa Naganuma, Hitoshi Mori, Kenta Tsutsui, Haruka Yamazaki, Ritsuhi Kato : Premature ventricular contraction originating from a papillary muscle-chordae transition inside the left ventricle. *J Arrhythm.* 38(5):809-812. 2022 Aug
- ⑤ Yoshifumi Ikeda, Ritsushi Kato : Clinical implication of device-based algorithm that optimize atrioventricular delay during cardiac resynchronization therapy: author's reply. *Heart Vessels.* doi: 10.1007/s00380-022-02205-w. 2022 Nov
- ⑥ Tomonori Takeda, Atsuhiko Tsubaki, Yoshifumi Ikeda, Ritsushi Kato, Kazuki Hotta, Tatsuro Inoue, Sho Kojima, Risa Kanai, Yoshitaka Terazaki, Ryusei Uchida, Shigeru Makita : The impacts of preoperative frailty on readmission after cardiac implantable electrical device implantation. *PLoS One.* 17(11):e0277115. 2022 Nov
- ⑦ Toshiki Chishiki, Yuji Nagatomo, Mike Saji, Makoto Takei, Ayumi Goda, Takashi Kohno, Shintaro Nakano, Yosuke Nishihata, Yukinori Ikegami, Yasuyuki Shiraishi, Shun Kohsaka, Takeshi Adachi, Tsutomu Yoshikawa; for WET-HF Investigators : Divergent effect of blood glucose dysregulation on long-term clinical outcome in acute decompensated heart failure: A reappraisal in contemporary practice. : *Int J Cardiol.* 365:91-99. 2022 Oct
- ⑧ Kenta Tsutsui, Hitoshi Mori, Daisuke Kawano, Naomichi Tanaka, Yoshifumi Ikeda, Naokata Sumitomo, Shiro Iwanaga, Shintaro Nakano, Toshihiro Muramatsu, Kazuo Matsumoto, Ritsushi Kato : Ablation characteristics and incidence of steam pops with a novel, surface temperature-controlled ablation system in an ex vivo experimental model. *Pacing Clin Electrophysiol.* 45(12):1390-1400. 2022 Dec
(学会発表)
- ⑨ ◎松尾 圭祐、中埜 信太郎、保谷 洋貴、長谷川 早紀、関 要、荒井 隆秀 : 食道癌患者における放射線治療後の冠動脈石灰化の進行 : 第 70 回日本心臓病学会学術集会 : 京都 : 2022/9
- ⑩ ◎川野 大輔、森 仁、加藤 律史、田中 尚道、佐々木 渉、成田 昌隆、松本 和久、筒井 健太、池田 礼史、岩永 史郎、中埜 信太郎、松本 万夫 : Local Impedance (LI) カテーテル (StablePoint) の lesion formation と焼灼時間、Local Impedance に関する検討 : カテーテルアブレーション関連秋季大会 2022 : 朱鷺メッセ : 2022/11

【総数 : 論文 43 件、学会発表 51 件、講演 59 件】

6-2. 獲得研究費

基盤研究 (C) 代表 千本松 孝明 分担 : 井口、吉武、中嶋 mRNA を用いた高効率患者由来 iPS 細胞誘導法の確立
基盤研究 (C) 代表 関 要 分担 : 千本松、小谷、杉 エクソソーム内 microRNA を介した SGLT2 阻害薬の心保護メカニズムの解明
基盤研究 (C) 代表 筒井 健太 分担 : 千本松、住友、池田、加藤、森 心拍揺らぎを用いたヒト心臓老化の診断確立
基盤研究 (C) 代表 池田 礼史 分担 : 千本松、筒井、加藤、森 ウィズコロナ時代における遠隔診療の有用性の実証研究

日高研究プロジェクト 代表 松尾 圭祐 分担：中埜、吉武、荒井、筒井達也 ベクターフローマッピングを用いた経カテーテル的大動脈弁植え込み術前後の左室内血流

学内グラント 代表 森 仁 分担：加藤、千本松、池田、筒井 カテーテルアブレーションに於ける水蒸気爆発現象に関する実験的検討

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

埼玉不整脈ペーシング研究会主宰（加藤律史）

新鎌北湖カンファレンス、日高ハートカンファレンス開催

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育、研究、診療のいずれにおいてもほぼ目標は達成できた。

卒前教育では3年生への循環器ユニットの講義の主たる部分、4年生の臨床入門、5年生のBSL、6年生の総まとめ講義を医学部学生のものである医師国家試験合格に加えて、医師となった後に必要な病態生理の理解を目標として行い達成できたと考えている。広範囲にわたる循環器病学のすべてを6年生に理解させることは困難であるため、重要な点に絞りこんで講義を行った。CCではで初期臨床研修とリンクした臨床実習を行う予定であったがCOVID19の問題があり十分達成はされなかった可能性はある。

卒後教育において、初期臨床研修で当科の研修期間は1-2か月にすぎないため、緊急症例をできるだけ多く診療できるように配慮した。初期臨床研修医および後期臨床研修医には、自身が経験した症例を、可能な限り学会で少なくともカンファレンスでプレゼンテーションさせた。後期臨床研修医には、循環器専門医試験資格に合格できるように、専門的な教育を行い、資格数に見合う症例を担当させた。

研究では、虚血性心疾患の病態、不整脈の治療、心不全治療に関する臨床研究を継続している。症例報告も英文あるいは邦文で学会や学術誌に報告した。

診療では地域基幹病院として、緊急および重症を含めたあらゆる心血管疾患に1年365日24時間対応できる体制を維持している。大学病院としてのアカデミアとして心臓移植、高度不整脈治療、TAVIやMitarClip術でのstructural heart disease、oncocardiology, adult congenital heart diseaseに関して、各科と協力して対応している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

今年度教育に関してはCOVID19の影響を多く受けたので、今後は大学と協力してweb教育など新たな学習法も取り入れ考えていきたい。研究、診療では心臓移植術も毎年安定した数が施行出来ており、structural heart disease、oncocardiology, adult congenital heart diseaseなども開始され、さらに医療の質の向上に邁進、外部に有効にこれらの活動を伝達することで新たな医師のリクルート、新たな研究に繋がって行ければと考えている。

3. 3) 呼吸器内科

1. 構成員

各務博 (KAGAMU, Hiroshi) : 教授 : 運営責任者、研究主任 : 診療部長 : 指導教員 (大学院) : 腫瘍免疫 : 博士
解良恭一 (KAIRA Kyoichi) 教授 : 診療副部長 : 指導教員 (大学院) : 肺癌 : 博士
今井久雄 (IMAI Hisao) : 准教授 : 教育主任 : 肺癌 : 博士
小林国彦 (KOBAYASHI, Kunihiko) : 兼担教授 : 肺癌 : 博士
毛利篤人 (MOURI, Atsuto) : 講師 : 研究員 : 肺癌 : 博士
山口央 (YAMAGUCHI, Ou) : 講師 : 研究員 : 肺癌 : 博士
塩野文子 (SHIONO, Ayako) : 助教 : 研究員 : 肺癌
三浦雄 (MIURA, Yu) : 助教 : 研究員 : 呼吸器内科
橋本康佑 (HASHIMOTO, Kousuke) : 助教 : 研究員 : 呼吸器内科 : 博士
佐藤秀彰 (SATO, Hideaki) : 助教 : 研究員 : 呼吸器内科
関谷龍 (SEKIYA Ryu) : 助教 : 研究員 : 呼吸器内科
西原冬実 (NISHIHARA, Fuyumi) : 非常勤一類 : 研究員 : 肺癌
北野滋久 (KITANO, Shigehisa) : 客員教授 : 腫瘍内科 : 博士
堀本勝久 (HORIMOTO, Katsuhisa) : 客員教授 : 医学統計・数理学 : 博士
山崎智 (YAMASAKI, Satoshi) : 助教 : 医学統計・数理学 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

卒前教育について、学生が呼吸器悪性疾患を中心に学習する際にただ単に学内試験や国家試験対策の知識を暗記するのではなく、系統立てて理解し知識の本質を習得することを目的とした。臨床実習に意欲的・主体的に参加して取り組み、臨床現場に出た際に実際に必要な知識を習得することを目標とした。卒後教育では、研修医が呼吸器悪性疾患の診断から治療までを一通り経験するとともに、日常臨床で遭遇する免疫チェックポイント阻害薬による有害事象や腫瘍緊急症などさまざまな状況に臨機応変に対応できるよう指導することを目標とした。

2-2. 教育実績 (担当者 今井久雄)

卒前教育においては、担当講義については事前の準備に時間をかけて入念にして本質を理解できる講義を実施するように努めた。重要な知識については繰り返し説明し小テストなども行い、学生たちに体得できるように重要ポイントを分かりやすく解説した。5年生のCCstep1では、胸部単純写真や胸部CTなどの画像診断と並行して呼吸器悪性疾患の診断から治療にいたるまで、典型的で教育的な症例について深く理解できるように指導した。また、胸部腫瘍に関する治療の最新の知識についてもわかりやすく説明し、最近の遺伝子パネルや免疫チェックポイント阻害薬の導入なども含め胸部腫瘍の薬物療法の生存延長効果など学生に興味を持ってもらえるように工夫した。CCstep2およびCCstep3においては、担当症例について実臨床に基づいた教育を一線のスタッフとともに実施するとともに、活発な議論ができるように実習を進めた。試験問題作成に関しては、最近の国家試験の傾向を入念に分析し、国家試験対策にも役立てられ実臨床にでてからも有用な知識が整理できるような問題作成を心がけた。

卒後教育において、当科で研修する初期研修医に対しては、障壁なく臨床研修が実施できるように科一同で準備するとともに、カンファレンスにおけるプレゼンテーションについても指導医とディスカッションをしつつ指導した。また、臨床研修医の習得具合に応じて気管支内視鏡をはじめとした実技についてもあわせて指導した。さらに、胸部画像診断については、実臨床において有用なレベルに到達することを目標として、胸部単純写真と胸部CTの読影指導を実際の症例などを用いて行なった。あわせて胸部悪性腫瘍に対する薬物療法についても遺伝子パネルを用いた薬剤選択や免疫チェックポイント阻害薬などの最新の薬物療法について概要を取得できるように指導を実施した。

2-3. 達成度評価

卒前教育の講義では、学生が無理なく実臨床でも有用な最低限の知識を習得させることができた。CCstep1では、胸部悪性腫瘍を中心に、画像診断を基にして体系的に理解させることができた。CCstep2およびCCstep3では、診断から治療への流れについて実例を通して体験させることができた。3年生のユニット試験では学生の知識習得を確認するために適切な問題を出题することができた。6年生の実力試験・卒業試験の問題については、過度な難問を避け、国家試験合格を念頭に置いた学生の知識が一定以上の水準に達しているかどうかを評価するために実臨床にも実際的な適切な問題を出题した。

卒後教育の初期研修では、呼吸器内科の領域だけでなく一般内科としても、重要かつ必要な知識や技術を習得させることができた。

2-4. 次年度改善計画

現状ではコロナ禍の中で時間的・場所的な制約はあったが徐々にコロナの感染も鎮静化しつつありそのような中で卒前・卒後教育とも概ね習得目標は達成したと考えられる。具体的には、卒前教育のCCstep1は、実質、2週間に2回のクルズスのみであるが、各クルズスの中に胸部腫瘍性疾患を中心に学生との双方向性のディスカッションを実施し画像読影と診断・治療については十分理解・習得させることができたと考えられる。次年度も同様のシステムで教育を行うが学生がさらなる学習ができるように改善を心がけていく。CCstep2およびstep3は、コロナ禍であっても1か月間の病棟実習で研修医について病棟や外来での実習を行うことで業務を体感することができたと学生からの感想が多く好評であり概ね到達点に達していると考えられる。3年生のpre-CCについては、各症例について重要な知識は提示できた。講義は、胸部悪性腫瘍を中心に十分な理解が得られたと考えている。次年度も引き続き最近の国家試験の傾向を十分に把握した上で、必要十分な内容の講義を行いたいと考えている。

卒後教育の初期研修については、胸部悪性腫瘍を中心に診断から治療までにわたり重要な事項を習得させまた実臨床上で重要な手技等を経験できたと考える。次年度は、コロナ感染も徐々に鎮静化していく中で一般内科的な知識・技能も含みより質の高い教育を心がけていく方針である。

3. 研究

3-1. 目的・目標

進行期非小細胞肺癌のみならず、局所進行非小細胞肺癌、進行期小細胞肺癌、手術可能非小細胞肺癌術後薬物治療と免疫チェックポイント阻害薬が活躍する場合は益々拡大している。しかしながら、長期生存という抗腫瘍効果を享受できる症例は限られている。この原因は、免疫チェックポイント阻害薬治療により十分に活性化できる抗腫瘍免疫細胞の準備状態が整っているかどうかにより、その効果が大きく異なっているためである。

当科では、免疫チェックポイント阻害薬効果と関連するT細胞クラスターを明らかにすることを目的に、肺癌患者の末梢血、腫瘍浸潤リンパ球を用いて、マスマイトメトリー解析、single cell RNAseq解析を行っている。がん免疫サイクルを理解した抗腫瘍免疫細胞のモニタリングは、優れたバイオマーカー性能を発揮し適切な治療選択に結びつくことが期待される。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 腫瘍免疫グループ

1) PD-1・PD-L1 blockade 治療の効果予測バイオマーカー研究

末梢血中のCD62L^{low} CD4⁺ T細胞に着目した研究を進め、この細胞分画が短期的奏効のみならず、無増悪生存期間と直接の相関関係を有することをあきらかにし、特許出願を終え、2019年12月 *Cancer Immunology Research* 誌に論文発表した。この結果を踏まえたAMEDプロジェクト申請を採択され、single cell RNA sequence, methylome, TCR clonotype 解析を行った。この結果、CD62L^{low} CD4⁺ T細胞亜分画に抗PD-1抗体治療効果と関連する新規CD4⁺ T細胞クラスターを発見した(H. Kagamu et al., *Cancer Res*, 2022)。この結果を踏まえて特許出願を行っている。

さらに、手術により得られた肺癌組織を用いて、tumor microenvironment (TME)組織解析、TILのsingle cell RNAseq, CyTOF解析を行った。TMEには、CD8 T細胞クラスターとしてGZMB, PRF1, NKG7などを発現するcytotoxic typeとTCF7, LEF1, IL7R, GZMKなどを発現するstem cell-like subset of memory typeが存在することが複数の論文で報告されている。私達の研究の結果、TMEに存在するCD4 T細胞クラスターとしても同様なcytotoxic typeとstem cell-like subsetに分かれること、前者はTh1であり、後者はTh7Rであることを見出した。

2) EGFR-TKI がT細胞免疫に与える影響の研究

第1, 2世代EGFR-TKIの無増悪生存期間が末梢血免疫モニタリングにより明らかとなったT細胞クラスターと関連することを見出してきた。EGFR遺伝子変異陽性肺癌の初回標準治療として用いられている第3世代EGFR-TKIであるオシメルチニブについて検討した結果、PD-1阻害薬効果と関連するTh7Rの末梢血存在割合とオシメルチニブ治療無増悪生存期間が関連することを発見した。抗腫瘍免疫によるがん免疫編集効果がEGFR-TKI効果を持続させる結果になっているものと考えられた。この結果は論文文化を進めている。

3) 放射線治療がT細胞免疫に与える影響の研究

放射線治療を受けた後のPD-1阻害薬治療効果は、放射線治療を受けたことがない症例よりも優れていることが臨床的に知られている。しかし、この効果を媒介しているT細胞の評価はこれまで成功していない。肺癌に対する胸部放射線治療前後の末梢血T細胞クラスターを詳細に解析することにより、放射線治療後増加するTCR clonotypeやT細胞クラスターの経時的変化を捉えることに成功している。経時的変化を受けるT細胞クラスターの中には、1)研究で明らかとなったPD-1阻害薬効果と関連するTh7Rが含まれていた。Durvalumab治療後PFSと関連するCD4 T細胞クラスターを見出している。

3-3. 達成度評価

各研究グループの研究課題について順調に研究が進捗しており、2022年度も学会発表、論文発表も多数行うことができた。競争的研究資金として獲得しているAMED研究の4年目となり、全く新規のバイオマーカーを発見し、論文文化および特許出願をなし得た。この成果を基に、連続3回目の基盤研究(B)の採択に結びつけることもできた。競争的資金獲得と研究成果が好循環を生むという目標が達成できている。

3-4. 次年度改善計画

2015年着任以来、免疫チェックポイント阻害薬の効果を予測するバイオマーカーをT細胞免疫解析の面から進めてきた。末梢血単核球検体数は、のべ8000検体を超え、世界にも類を見ない末梢血免疫細胞バイオバンク化している。AMED資金により獲得したCyTOF, scRNAseqを用いることで、末梢血T細胞全体をマッピングして解析する手法を確立している。protein level, transcriptome, methylome, TCR clonotypeと重層的な解析が可能となったことで、精細な解析が可能となっている。末梢血T細胞クラスター解析により得られた情報は、産業技術総合研究所AIセンター堀本先生、日立製作所研究所におけるAI解析及びネットワーク解析を行うことで、免疫動態方程式の完成に向けた解析が進んでいる。以上の成果を臨床におけるバイオマーカーとすべく、シスメックス社との共同研究で末梢血自動解析機の開発も進んでいる。新規抗腫瘍CD4⁺ T細胞クラスターの発見は、単にバイオマーカーとして用いるだけでなく、細胞療法に結びつくものと考えられる。Th7Rに特徴的なサイトカインレセプター発現解析などをもとに、独自の培養法を開発し、次年度は細胞療法の基礎を確立したい。

4. 診療

当科は、肺癌を中心とした胸部悪性腫瘍患者の診断、薬物療法を担当している。肺癌薬物治療は大きく変革し、進行期であっても治癒に近い効果が得られる症例もみられている。しかし、このような効果が認められる症例はまだ20-30%に過ぎない。当

科は、この変化の最前線に立ち、新たな治療を広く、適切、安全に行うことで、患者さんに最良の治療機会提供を行うとともに、さらに多くの症例が奏効するために何が必要か研究を続けている。

AMED より大規模資金の提供を受けた研究を継続しており、世界的にも先進的な腫瘍免疫研究を行っている。研究成果は特許出願、論文・学会発表により公知することができている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当無し

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

- ①各務博：Respiratory Investigation (日本呼吸器学会英文誌) 編集委員
肺癌 (肺癌学会機関誌) 編集委員
International Journal of Clinical Oncology Editorial Board
- ②解良恭一 Japanese Journal of Clinical Oncology, Editorial Board
American Journal of Translational Research, Editorial Board
Journal of Tumor, Editorial Board
World Academy of Science Journal, Editorial Board
World Journal of Respiriology, Editorial Board
Journal of Respiratory Research, Editorial Board
Discover Oncology, Editorial Board
International Journal of Oncology, Editorial Academy
Journal of Medical Diagnostic Methods, Editor in Chief

③今井久雄: Canadian Respiratory Journal, Editorial Board

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

KISTEC 市民公開講座 2022

「がんは自分？自分じゃない？～免疫チェックポイント阻害薬はなぜ効くのか～」各務博

「肺癌治療と臨床研究」今井久雄

毛呂山町がん予防教室 今井久雄

埼玉医科大学 市民公開講座 2022 「がんの在宅医療」 解良恭一

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

主な論文

1. Yamaguchi O, Kaira K, Naruse I, Umeda Y, Honda T, Watanabe S, *et al.* Prospective assessment using (18)F-FDG PET/CT as a novel predictor for early response to PD-1 blockade in non-small-cell lung cancer. *Sci Rep* 2022;12(1):11832 doi 10.1038/s41598-022-15964-3.
2. Yamaguchi O, Atarashi K, Yoshimura K, Shiono A, Mouri A, Nishihara F, *et al.* Establishing a whole blood CD4(+) T cell immunity measurement to predict response to anti-PD-1. *BMC Cancer* 2022;22(1):1325 doi 10.1186/s12885-022-10445-2.
3. Shiono A, Imai H, Satou T, Taguchi R, Takahashi N, Azuma R, *et al.* Metachronous lesions in the orbit, retroperitoneum, and pleura of mucosa-associated lymphoid tissue lymphoma: A case report. *Cancer Rep (Hoboken)* 2022;5(10):e1689 doi 10.1002/cnr2.1689.
4. Kaira K, Imai H, Kawasaki T, Hashimoto K, Miura Y, Shiono A, *et al.* Potential of VEGFR2 expression as a predictive marker of PD-1 blockade in patients with advanced NSCLC. *Oncol Rep* 2022;48(6) doi 10.3892/or.2022.8429.
5. Kagamu H, Yamasaki S, Kitano S, Yamaguchi O, Mouri A, Shiono A, *et al.* Single-Cell Analysis Reveals a CD4+ T-cell Cluster That Correlates with PD-1 Blockade Efficacy. *Cancer Res* 2022;82(24):4641-53 doi 10.1158/0008-5472.CAN-22-0112.
6. Imai H, Naito E, Yamaguchi O, Hashimoto K, Iemura H, Miura Y, *et al.* Pretreatment body mass index predicts survival among patients administered nivolumab monotherapy for pretreated non-small cell lung cancer. *Thorac Cancer* 2022;13(10):1479-89 doi 10.1111/1759-7714.14417.
7. Imai H, Nagai Y, Minemura H, Tsuda T, Yamada Y, Wasamoto S, *et al.* Efficacy and safety of amrubicin monotherapy after atezolizumab plus carboplatin and etoposide in patients with relapsed small-cell lung cancer. *Invest New Drugs* 2022;40(5):1066-79 doi 10.1007/s10637-022-01269-9.
8. Imai H, Kaira K, Kagamu H. Advanced Research on Immune Checkpoint Inhibitor Therapy. *J Clin Med* 2022;11(18) doi 10.3390/jcm11185392.
9. Hashimoto K, Kaira K, Yamaguchi O, Shiono A, Mouri A, Miura Y, *et al.* Visual Assessment of 18F-FDG Uptake on PET to Predict Survival Benefit to PD-1 Blockade in Non-Small Cell Lung Cancer. *Clin Nucl Med*

2022;47(2):108-16 doi 10.1097/RLU.0000000000004009.

10. Hashimoto K, Kaira K, Imai H, Mouri A, Shiono A, Miura Y, *et al.* Prognostic Potential of Metabolic Activity on 18 F-FDG Accumulation in Advanced NSCLC Receiving Combining Chemotherapy Plus PD-1 Blockade. *J Immunother* 2022;45(8):349-57 doi 10.1097/CJI.000000000000434.

【総数：論文 19 件、学会発表 10 件（国際学会 2 件、シンポジウム 3 件）、講演 1 件（教育講演 1 件）】

6-2. 獲得研究費

継続

- 基盤研究 (B) (令和 4-8 年度)、「末梢血を用いた肺癌の免疫プレジジョン・メディシン開発」、研究代表者 各務博
2022 年度 4,500 千円、期間全体 13,000 千円
- 基盤研究 (C) (令和 4-6 年度)、「PBMC を用いた irAE 発症予測システムの開発」、研究代表者、山口央
2022 年度 1,300 千円、期間全体 2,300 千円
- 基盤研究 (C) (令和 2-5 年度)、「肺神経内分泌腫瘍に対する免疫チェックポイント阻害剤効果予測としての PET イメージ」、研究代表者、今井久雄
2022 年度 1,300 千円、期間全体 3,200 千円
- AMED (平成31-令和5年度)、「患者層別化マーカー探索技術の開発/がん免疫モニタリングによる患者層別化を行う基盤技術の開発」、「がん患者末梢血免疫細胞解析による免疫システム全容の数理的理解」研究責任者 各務 博、2022年度 62,000 千円

6-3. 受賞

該当無し

6-4. 特許、実用新案

特許第 7175068 号 癌治療に対する応答を予測するためのバイオマーカー、特許権者 学校法人埼玉医科大学、発明者 各務 博、出願番号 特願 2022-517281、出願日 令和 3 年 9 月 7 日、登録日 令和 4 年 11 月 10 日

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- ① 2022 年 10 月 29 日、第 9 回がん免疫道場、大宮

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

コロナ禍にありながら、初診症例数、外来初診、外来再診患者数とも順調に推移している。進行期肺癌の治療は、細胞障害性抗がん剤から分子標的治療薬、免疫チェックポイント阻害薬に移り、治療の主体も入院から外来に移っている。この結果、入院患者数は減少傾向にある。

当科の免疫チェックポイント阻害薬使用経験数は、日本で有数であり、イピリムマブ+ニボルマブ処方数は日本一であった。実臨床に基づいた臨床論文は多数の論文発表、学会発表を続けている。免疫治療の実臨床から得られるサンプルを用いたトランスレーショナル・リサーチも順調に進んでおり、今年度は *Cancer Research* 誌において発表することができ、特許登録まで完了することができた。AMED 研究として、消化器がん、悪性黒色腫、乳癌、泌尿器科癌を含めた多癌腫でのバイオマーカー性能試験を遂行することができている。来年度は AMED 研究最終年度にあたり、実臨床での応用に向けた研究をさらに進める。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

今年度は順調に目標を達成できており、診療、教育、研究において次年度も同様な成果を上げるように運営を継続する。

3. 4) 内分泌内科・糖尿病内科

1. 構成員

栗原 進 (Kurihara Susumu) : 准教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任 : 研究主任 : 大学院教員 (大学院) : 糖尿病 : 博士

中島 理津子 (Nakajima Ritsuko) : 助教 : 副診療部長 : 副教育主任 : 副研究主任

井上 和之 (Inoue Kazuyuki) : 助教

2. 教育

2-1. 目的・目標

本基本学科では、糖尿病、内分泌疾患の理解習得、担がん患者の血糖コントロール、抗がん剤治療の血糖管理、免疫チェックポイント阻害薬使用時の1型糖尿病、下垂体炎、甲状腺機能障害、副腎機能低下症の発症に対してのマネジメント、大血管症を合併している糖尿病患者のマネジメントの理解、肥満や糖尿病を合併しているがん患者のマネジメントの理解、また他科との連携、他職種連携によるチーム医療の実践と理解習得を目標として教育活動を行った。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育で講義・演習・実習、臨床実習等を担当したのは、医学部6年、保健医療学部2年、5年生、6年生の臨床実習、臨床実習前OSCEの評価であった。(栗原)

卒後教育としては研修医のクルズスを月に1回担当した。また糖尿病リンクナースのレクチャーも開催した。(栗原)

2-3. 達成度評価

教育実績から糖尿病、内分泌疾患の理解習得という点では順調に活動できたが、新型コロナウイルス感染のため親身な教育が出来なかったという改善点が認められたが、本年度の目標については新型コロナウイルス感染のため不十分な面はあったが十分に達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度には親身な教育の実践を目標として活動する。また当科の担う役割の重要性もアピールしていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標

本基本学科では、担がん患者の血糖コントロール、抗がん剤治療の血糖管理、免疫チェックポイント阻害薬使用時の1型糖尿病、下垂体炎、甲状腺機能障害、副腎機能低下症の発症に対してのマネジメント、肥満や糖尿病を合併しているがん患者のマネジメントの理解、新たなGLP1受容体作動薬を使用した肥満2型糖尿病の治療を目的として、学会発表、論文投稿を目的に研究活動を行った。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 新たなGLP1受容体作動薬を使用した肥満2型糖尿病の治療に関する研究 (栗原)

肥満2型糖尿病におけるリラグルチド1.8mgからセマグルチドに変更の有用性と安全性を目的として臨床研究を行い、学会発表をした。

2. DPP4阻害剤にて治療効果不十分な肥満2型糖尿病に対する経口セマグルチド(リベルサス)の有用性の検討を目的として、臨床研究を行っており、糖尿病学会に発表予定である。

3. チーム医療で加療中に新型コロナウイルス蔓延で身体活動性低下により糖尿病を発症し、経口セマグルチドの投与を試みたPrader Willi症候群の1例を小児思春期糖尿病学会で発表した。

3-3. 達成度評価

研究業績から肥満2型糖尿病の治療に貢献するという点では順調に活動できたが、がん患者の免疫チェックポイント阻害薬使用時の1型糖尿病、下垂体炎、甲状腺機能障害、副腎機能低下症の発症に対してのマネジメントについても貢献はしたが学会発表はできなかったという改善点が認められたが、本年度の目標については新たな知見をを発表できたため概ね達成できたと評価する。

3-4. 次年度計画

これらを踏まえて、国際医療センターの各科と連携を密にして、次年度には国際医療センターの各科と関連した研究発表を目標に掲げ、達成に取り組むたい。

4. 診療

国際医療センター入院患者の手術成績の向上、周術期の感染症などに対する安全管理を目標とし、数字では表れないものの、裏方としての役割を十分果たせたと考えている。また免疫チェックポイント阻害薬投与後に発症する1型糖尿病や下垂体炎、甲状腺疾患、副腎機能低下症に対して他科と連携して十分役割を果たしている。SGLT2阻害薬、GLP-1受容体作動薬を他科との連携で使用していき糖尿病患者の心血管イベントが減少するように治療にあたっていき十分役割を果たしている。今年度は週6日当科の医師が勤務している体制が更に軌道にのりコンサルト件数が外来病棟ともに更に増加した。糖尿病リンクナースを立ち上げてインスリンのインシデント数が非常に減少した。糖尿病専門チームが軌道にのり、糖尿病診療の充実と医療スタッフの教育や糖尿病療養指導士が増えるように勉強会を開催しサポートした。糖尿病専門チームによる血糖コントロール不良患者に対する院内巡回が開始された。糖尿病リンクナースが各部署に配置し院内の糖尿病チーム医療を更に発展させていく。免疫チェックポイント阻害薬投与後に発症する1型糖尿病や下垂体炎、甲状腺疾患、副腎機能低下症に関する調査研究を他科や薬剤部と協力して推進していく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

ブラクティスのアドバイザー査読委員。

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

医師会などと連携し、糖尿病の勉強会を開催し地域連携を強化していく。

埼玉県糖尿病協会理事

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

日本糖尿病学会

第65回（2022年5月13日、神戸Hybrid開催）

① 栗原 進, 波田祐生子, 島田 朗:

肥満2型糖尿病におけるリラグルチド1.8mgからセマグルチドに変更の有用性と安全性の検討。

日本肥満学会

第43回（2022年12月3日、沖縄Hybrid開催）

② 栗原 進, 波田祐生子, 島田 朗:

肥満2型糖尿病におけるリラグルチド1.8mgからセマグルチドに変更の長期の有用性と安全性の検討

日本糖尿病学会関東甲信越地方会

第60回（2023年1月28日、長野Hybrid開催）

③ 橋本 恭太, 柳澤 慎之介, 遠藤 茉依, 羽井佐 彬文, 中島 理津子, 池上 裕一, 島田 朗: COVID-19罹患後に新規発症した急性発症1型糖尿病の1例。

日本内分泌学会学術総会

第95回（2022年6月3日、大分; Hybrid開催）

④ 森田 英生, 羽井佐 彬文, 中島 理津子, 安田 重光, 栗原 進, 一色 政志, 井上 郁夫, 島田 朗: TSH・GH産生下垂体腫瘍が疑われた1例。

⑤ 小林 由布子, 柳澤 慎之介, 井上 和之, 安田 重光, 及川 洋一, 佐藤 正易, 梶村 益久, 一色 政志, 島田 朗: 部分型中枢性尿崩症に巨大胎盤による高 vasopressinase 血症が加わり、完全中枢性尿崩症を停止緊急帝王切開に至った一例。

⑥ 井上 和之, 森田 英生, 羽井佐 彬文, 中島 理津子, 安田 重光, 一色 政志, 島田 朗: くも膜下出血後、下垂体前葉機能低下症が生じ、その約2年後に中枢性尿崩症を発症した一例。

臨床内分泌代謝 Update

第32回;（2022年11月11日～11月12日東京）

⑦ 三井 絵里花, 安田 重光, 柳澤 慎之介, 鈴木 誠也, 羽井佐 彬文, 里村 敦, 中島 理津子, 及川 洋一, 一色 政志, 井上 郁夫, 島田 朗: SARS-CoV-2 ワクチン接種後に発症した破壊性甲状腺炎の1例。

⑧ 杉本 駿, 井上 和之, 森田 英生, 清水 英祐, 高木 荘太郎, 草野 武, 安田 重光, 島田 朗: 大腸癌を合併した両

側大結節性副腎皮質過形成 (BMAH) の 1 例.

日本小児・思春期糖尿病学会

第 27 回 (2022 年 7 月 18 日、東京)

⑨ 栗原 進, 波田 祐生子, 相場 美穂, 皆川 孝子, 島田 朗: チーム医療で加療中に新型コロナウイルス蔓延で身体活動性低下により糖尿病を発症し、経口セマグルチドの投与を試みた Prader Willi 症候群の 1 例.

【総数: 学会発表 9 件、講演 3 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

西北部糖尿病セミナー、埼玉糖尿病研究会

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、clinical clerkship の学生実習、保健医療学部と医学部 6 年の講義、5 年生、6 年生の臨床実習、共用試験臨床実習前 OSCE 評価者、総合試験、卒業試験の作問を担当し十分な活動と評価している。研究に関しては、国際医療センターとしての研究成果が出なかった。診療に関しては少人数ながら十分な活動ができたと評価している。基本学科全体としては概ね良好な活動実績として評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

卒前教育に関しては、現状維持を改善し、更に活性化し、次年度国際医療センターでの臨床実習を終日を目指して取り組む。研究に関しては、自己満足を改善し、活性化し、次年度他科との共同研究を目標として取り組む。診療に関しては、外来中心を改善し、チーム医療を更に充実し、次年度病棟患者のマネジメントの促進を目標として取り組む。その他の事項に関しては、マンパワー不足を改善し、構成員を増員し、次年度糖尿病専門チームの活性化を目標として取り組む。当科の役割の重要性をアピールし常勤医が増えるよう努力していく。

3. 5) 造血器腫瘍科

1. 構成員

別所 正美 (BESSHO, Masami) : 教授 : 学長 : 臨床血液学、造血因子、貧血 : 博士

麻生 範雄 (ASOU, Norio) : 客員教授 : 臨床血液学、白血病 : 博士

塚崎 邦弘 (TSUKASAKI, Kunihiro) : 教授 : 副診療部長、外来医長、教育主任、大学院教員 (大学院) : 臨床血液学、造血器腫瘍、リンパ系腫瘍 : 博士

高橋 直樹 (TAKAHASHI, Naoki) : 教授 : 運営責任者、診療部長、研究副主任、研修医長 : 大学院教員 (大学院) : 臨床血液学、造血器腫瘍、悪性リンパ腫 : 博士

前田 智也 (MAEDA, Tomoya) : 准教授 : 専門医員、病棟医長、研究主任、教育副主任 : 大学院教員 (大学院) : 臨床血液学、白血病、特発性造血障害、造血幹細胞移植 : 博士

石川 真穂 (ISHIKAWA, Maho) : 講師 : 専門医員 : 大学院教員 (大学院) : 造血器腫瘍、白血病 : 博士

郡 美佳 (KOHRI, Mika) : 講師 : 専門医員 : 博士

岡村 大輔 (OKAMURA, Daisuke) : 助教 : 医員

麻生 智愛 (ASOU Chie) : 助教 : 医員

松田 晃 (MATSUDA, Akira) : (兼任) 教授 : 専門医員 : 指導教員 (大学院) : 臨床血液学、骨髄異形成症候群 : 博士

川井 信孝 (KAWAI, Nobutaka) : (兼任) 教授 : 大学院教員 (大学院) : 医療安全管理学、臨床血液学、造血幹細胞移植 : 博士

石田 明 (ISHIDA Akaru) : (兼任) (輸血・細胞移植科) 教授 : 専門医員 : 臨床血液学、輸血学、細胞治療 : 博士

中村 裕一 (NAKAMURA, Yuichi) : (兼任) 教授 : 専門医員 : 臨床血液学、多発性骨髄腫 : 博士

脇本 直樹 (WAKIMOTO, Naoki) : (兼任) 客員教授 : 専門医員 : 臨床血液学 : 博士

照井 康仁 (TERUI, Yasuhito) : (兼任) 教授 : 専門医員 : 臨床血液学、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

3年生では主に講義で病態生理に基づいて代表的な血液疾患の診断と治療を理解する。4年生前半では内科的診療技能と臨床推論の基本を身につけ、Pre-CCで症候をより深く学び、CCに対応できる総合的な学力を形成する。4年生後半と5年生前半ではCC Step 1を通じて、医学教育の国際基準に準拠した認証評価であるPost-CC OSCEに対応できる基礎的知識や技能・態度、血液疾患の診断と治療の知識を実例に則して深く理解する。5年生後半と6年生ではCC Step 2と講義を通じて、医師国家試験と初期臨床研修に対応できる総合的な学力を形成する。初期臨床研修では、内科診療の全般と代表的な血液疾患の診断と治療の基本を身につける。後期臨床研修では、医学博士の取得、日本内科学会認定内科医、日本内科学会総合内科専門医、日本血液学会認定血液専門医、日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医の資格取得を目指す。学会の主導する血液専門医の養成企画にも積極的に協力する。大学院教育では、主に造血器腫瘍の病態解析をテーマに、診断や治療の進歩に貢献する新発見を目指した研究を行い、学会発表や論文作成を指導医とともに進めて博士号を取得する過程において、血液学の最先端の知見に触れるとともに広く血液内科の診療能力を身につける。

2-2. 教育実績 (担当者)

実習ではPre CC、CC Step 1、CC Step 2、CC Step 3、OSCE、臨床推論ユニット実習の実施に協力した。OSCE評価者、Post-CC OSCE評価者、卒業試験監督、入学試験監督を務めた。3年生では血液ユニットの講義 (総時限数43、うち大学病院血液内科を含む血液内科担当は27) とPre-CCを担当した。4年生前半では臨床推論ユニットの講義とPre-CCを担当した。4年生後半と5年生前半のCC Step 1では2週間血液学を担当した。大学病院の血液内科とその内容を検討し、1月からは2科での時間配分は1週間ずつとし、それぞれの科での実習内容に工夫することとした。当科で学生は、2週間ごとに2名の患者を受け持って診療実習を行うとともに、入院患者カンファランスへの参加、ガイドライン抄読会 (第三相比較試験についてのNEJM英文論文を分担して紹介) などを設けている。ただし昨年度に引き続きCOVID-19の影響のため、この感染症のリスクが高い血液腫瘍患者への医学生の直接実習は避け、教育棟でのクルブス、電子カルテを用いた実習とWeb会議システムを用いた入院患者カンファランスへの参加を行った。5年生後半のCC Step 2では1回4週間で2回担当した。塚崎、前田、岡村、石川、川井は4年生OSCE評価者をつとめた。6年生には臨床科目の総仕上げと国家試験への対応を主眼に血液学の演習を実施した。6年生前半のCC Step 3では1回4週間で1回担当した。塚崎は6年生OSCE評価者をつとめた。松田は4年生と6年生OSCEの運営を行なった。各学年の実習には、教授から助教までが参加した。松田は、5年生学年小委員会委員、学力増進室長を努めた。中村は3年生血液ユニットのユニットディレ

クターを務めた。松田、塚崎、前田、岡村、川井は、OSCEの外部評価者である。松田は4年生補講/特別授業、6年生授業/補講の講師を担当した。高橋、前田、郡、石川は臨床研修指導医として、初期研修医の指導を担当した。松田は研修医のためのセミナーの講師を担当した。松田は6年生の部で令和4年度埼玉医科大学医学部ベストティーチャー賞に選出された。

2-3. 達成度評価

3年生血液ユニット、Pre-CCと4年生Pre-CCは学生より高い満足度が得られた。5年生でもCC Step 1は、学生より高い満足度が得られ不合格者はいなかった。6年生の造血管領域の講義も学生より高い満足度が得られた。特に、6年生の造血管領域の講義の学生からの評価は、全領域の常に上位である。研修医の指導に関しても、研修医から高い評価を得た。当科の教育活動実績登録システムの登録ポイントは1,018.04と前年度の1,082.99と同等であった。

2-4. 次年度改善計画

令和3年度の4年生の臨床実習(CC Step 1)の血液学への1組当たりの割り当ては2週間、5年生では4週間(CC Step 2)、6年生では4週間(CC Step 3)であった。そこでは、臨床推論のトレーニングを主眼とし、今まで学んだ血液学の知識を整理し、さらに理解を深めることを目的として実習が行なわれた。COVID-19の影響のため、この感染症のリスクが高い血液腫瘍患者への医学生の実習は避け、教育棟での電子カルテを用いた実習とWeb会議システムを用いた入院患者カンファランスへの参加を行った。臨床実習の主旨を生かすためには、知識だけでなく、体験の機会を十分に与えることが重要と思われた。パワーポイントを用いた血液疾患の検鏡実習も行っている。多能性造血幹細胞と骨髄検査の理解を深める目的としてDVDを用いた講習も行っている。次年度は、さらに実習のあり方に工夫を加える予定である。研修医の指導に関しては、指導医の負担が大きいため、指導医の数を増やし、負担の分散をはかりたい。学会等の教育関連企画にも引き続き積極的に協力したい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

再生不良性貧血、骨髄異形成症候群、白血病、悪性リンパ腫等の血液疾患に関する多施設共同研究や治験に積極的に参加するとともに、これら疾患の病態を解明し、新規治療法を開発するための基礎的研究を行う。

1) 特発性造血障害に関する調査研究に関しては、引き続き松田を中心として構築されたシステムによる班員各施設からの血液標本のセントラルレビューを松田、前田が行い、厚生労働省の研究班の一員として骨髄不全症を対象とする研究である「再生不良性貧血/骨髄異形成症候群の前方視的症例登録・セントラルレビュー・追跡調査研究・遺伝子研究G1268/RADDAR-J」を継続する。特に再生不良性貧血と骨髄異形成症候群におけるわが国の形態診断の質向上に寄与しながら前方視的な予後調査と関連したエビデンスの充実をはかるべく、その成果の発表や海外学術誌への公表をおこなうように努力する。骨髄異形成症候群の本邦のガイドラインである「参照ガイド」の改訂作業が開始され、松田が参画している。また、赤芽球癆の本邦のガイドラインである「参照ガイド」の改訂作業も開始され、松田が参画している。松田はJapan PRCA collaborative study groupのメンバーとしての活動と赤芽球癆の病態解明に向けた研究に参画する。松田、前田は骨髄異形成症候群の診断のためのAI作成の研究を継続する。松田は「再生不良性貧血に対するトロンボポエチン作動薬療法に関する研究」を継続し、成果の論文化を目指す。

2) 白血病に関する研究に関しては、より良い治療戦略の開発に貢献することを目的として、Japan Adult Leukemia Study Group; JALSG(成人白血病治療共同研究機構)の参加施設として積極的に共同研究へ参加するとともに、治験や臨床研究、基礎的研究を行うことを目標に研究活動を行う。

3) 悪性リンパ腫の研究については、今後も継続中の臨床研究に登録した患者の試験治療・追跡を続行し、新たな適格患者が出れば積極的に登録するとともに、新たな診断・治療研究を進めていく。

4) 造血幹細胞移植に関する多施設共同治療研究に関しては、日本造血・免疫細胞療法学会(JSTCT)認定移植医である前田、川井を中心として、JSTCT主導の研究やJSTCT/JDCHCTの全国調査に加え、KSGCTの共同研究、さらにはお茶の水血液検討会の臨床研究に積極的に参加する。これらのエビデンス発信では、そのベースとなる移植診療の質とバランス(移植と採取の実施数も含めて)を崩すことなく行うことを目標とする。さらに、多施設共同参画に向けたデータ供与と医療の質維持として研究およびJSTCTが定める施設認定カテゴリ1の維持を含め、移植医療のスタッフ育成に向けた教育の充実を図るべく努力する。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1) 特発性造血障害に関する研究: 厚生労働省の研究班の一員として特に再生不良性貧血、骨髄異形成症候群を対象とした多施設共同研究や治験に積極的に参加し、疾患の病態解明と新規治療法開発を目的とする基礎的研究を行った。松田を中心として構築された再生不良性貧血と骨髄異形成症候群のセントラルレビューシステムは厚生労働省の研究班(特発性造血障害に関する調査研究)の中で重要な役割を果たした。さらにシステムによる前方視的な予後調査等をさらに充実させ、厚生労働省の研究班の一員として、主として骨髄異形成症候群を対象に研究を行ない、その成果

の一部を前田が班会議で報告した。前田はこれらの成果を日本血液学会学術集会（福岡・Web開催）で報告した。セントラルレビューシステムにおいて松田は班員各施設からの血液標本を同セントラルレビュー委員の前田と共に評価・総括し、班研究における中央診断の責任者を担った。骨髓異形成症候群の本邦のガイドラインである「参照ガイド」の改訂作業が開始され、松田が参画した。また、松田、前田は「骨髓異形成症候群の形態学的異形成に基づく診断確度区分」の改訂作業を行なった。松田は「Japan PRCA（赤芽球癆）collaborative study group」のメンバーとして活動し、赤芽球癆の病態解明に向けた研究に参画し、その成果を英文学術誌(Blood Advances 誌)で報告した。赤芽球癆の本邦のガイドラインである「参照ガイド」の改訂作業が開始され、松田が参画した。研究成果の一部として一昨年度に英文学術誌(Sci Rep 誌)に骨髓異形成症候群の診断に関する AI の作成研究に関する報告が掲載された。松田、前田はその AI 作成研究を継続した。松田は、平成 26 年度から開始された再生不良性貧血の治験の委員と平成 27 年度から開始された再生不良性貧血の治験である「再生不良性貧血に対するトロンボポエチン作動薬療法に関する研究」の委員をつとめ、その成果を英文学術誌(Am J Clin Pathol 誌)で報告した。

2) 白血病に関する研究：JALSG で進行中の特定臨床研究、観察研究、付随研究へ積極的に参加した。前田は JALSG 常設委員会のうち、検体保存・付随研究委員会委員長として JALSG における各研究の検体管理と付随研究の審査に関与し、全臨床試験の遂行に重要な職務を継続的に担った。前田が分担研究者を務める AMED 革新的がん医療実用化研究事業「高齢者急性骨髄性白血病の化学療法が可能な症例に対して若年成人標準化学療法の近似用量を用いる第Ⅱ相臨床試験：JALSG-GML219 試験」および「本邦における初発急性前骨髄球性白血病に対する ATRA・ATO 併用分化誘導療法の確立」では各試験における遺伝子解析付随研究の立案と必要な検体を収集し、適正に管理を行うと共に学外の分担研究者、研究協力者とともに研究を進めた。前田は前年度に引き続き、急性白血病を主とする骨髄系腫瘍の疫学研究 CS-07、CS-11 に登録された治療関連急性前骨髄球性白血病の予後を解析する JALSG CS-07/11-tAPL 研究の研究代表者としてデータ収集を行い、研究を遂行している。前田、石川、岡村、麻生(智)は JALSG 臨床研究データ収集を行い、また前田、石川は解析にも参加した。前田、石川は、JALSG と日本小児白血病リンパ腫研究グループ(JPLSG)の共同特定臨床研究となる「小児・AYA・成人に発症した B 前駆細胞性急性リンパ性白血病に対する多剤併用化学療法の多施設共同第Ⅲ相臨床試験」および「小児、AYA 世代および成人 T 細胞性急性リンパ性白血病に対する多施設共同後期第Ⅱ相臨床試験」の実施に向け、小児腫瘍科と連携を強化し、院内実施体制の構築に貢献した。前田、石川、岡村、麻生(智)は、臨床研究の遂行、遺伝学的解析を中心とした随伴研究および疫学調査協力を含めた基礎的研究を行い、臨床で生じる問題や課題の解明に努め、研究体制の構築を目指した。石川は慢性骨髄性白血病の多施設共同研究グループ(CML-CSG)のメンバーとして活動し、後方視的調査を行っている。前田は平成 30 年度から開始された一般社団法人日本癌治療学会 がん診療ガイドライン作成・改訂委員会 G-CSF 適正使用ガイドライン改訂ワーキンググループの急性骨髄性白血病におけるシステムティック・レビューチーム委員をつとめ、改訂作業に携わった。

3) 悪性リンパ腫の基礎的研究と治療に関する多施設共同研究:2018 年度より、日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG)のリンパ腫グループ(LSG)に正式に加入し参加し、多施設共同臨床研究を積極的に進め、今年度まで数多くの学会発表と論文文化を行ってきた。JCOG1411:「未治療低腫瘍量進行期濾胞性リンパ腫に対するリツキシマブ療法早期介入に関するランダム化比較第Ⅲ相試験」に合計 8 例登録した。JCOG2008:「未治療高腫瘍量濾胞性リンパ腫に対するオビヌツズマブ+ベンダムスチン療法後のオビヌツズマブ維持療法の省略に関するランダム化第Ⅲ相試験」に今年度 3 例登録した。(合計 5 例)

高橋、郡、塚崎が中心となり「未治療 CD5 陽性びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫に対する Dose-adjusted EPOCH-R/HD-MTX 療法の第Ⅱ相試験について」の多施設共同第Ⅱ相臨床試験に参加し、現在新規登録は終了しているが、付随研究「CD5 陽性びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫における遺伝子発現解析と遺伝子変異の検討」に参加している。

塚崎、高橋、郡が中心となり、「再発又は難治の血管免疫芽球性 T 細胞リンパ腫患者を対象とした CC-486 (経口アザシジン)と治験責任医師による選択治療の有効性及び安全性を比較するパイロット試験/第Ⅲ相ランダム化試験」の企業と仏の LYSARC による国際共同治験(塚崎は日本側の Primary investigator)に参加し、3 例登録し、今年度に最終解析を行い、12 月の米国血液学会で口演発表し、現在 J Clin Oncol 誌への投稿準備中である。

塚崎、高橋、郡が中心となり、PI3kinase 阻害剤である ME401 の「再発・難治性低悪性度 B 細胞性非ホジキンリンパ腫(NHL)患者を対象とする ME401 の第Ⅱ相臨床試験」に参加し、1 例の登録患者をフォロー中である。

塚崎、高橋、郡が中心となり、「再発性の低悪性度 B 細胞非ホジキンリンパ腫を対象とした PI3Kinase 阻害剤(Copanlisib)と標準的な免疫化学療法単独と比較する無作為化、二重盲検、プラセボ対象多施設共同第Ⅲ相試験」に参加し、1 例の登録患者をフォロー中である。

塚崎、高橋、郡が中心となり、「再発又は難治性成人 T 細胞性白血病/リンパ腫患者を対象とした Valemetostat Tosylate(DS-3201b)の多施設共同、非盲検、単独、第Ⅱ相試験」に参加し、1 例を登録しその主たる解析結果を今年 Blood 誌に報告した。

塚崎、高橋、郡が中心となり、「再発又は難治性の B 細胞性非ホジキンリンパ腫患者を対象に、抗 CD20 x 抗 CD3 二重

特異性抗体であるREGN1979の抗腫瘍活性及び安全性を評価する非盲検試験（ELM-2）」に参加している。

塚崎、高橋、郡が中心となり、「再発・難治性末梢性T細胞リンパ腫に対するtucidinostat 単剤治療の第II相試験」に参加している。

高橋、塚崎、郡が中心となり、「日常診療においてイブルチニブ治療を受けた日本人慢性リンパ性白血病患者を対象とした観察研究（CLL-Orbit Study）」に参加し、今年度6例登録した。（合計6例）

塚崎、高橋、郡が中心となり、「新たに診断された濾胞性リンパ腫患者に関する多施設前方視的観察研究」の臨床研究に51例を登録、「造血器腫瘍における臨床ゲノム情報統合データベース構築に関する研究 リンパ腫分野」の臨床研究に24例を登録、「高齢者古典的ホジキンリンパ腫の臨床病理学的特徴と治療に関する多施設共同後方視的観察研究」の臨床研究に16例を登録し、それぞれの最終解析に向けて共同している。

塚崎、高橋が中心となり、当科で経験した希少症例の臨床研究「家族性節外性NK/T細胞リンパ腫 鼻型における原因遺伝子の同定」を立ち上げ、国立がん研究センターと共同研究で血液、病理検体を用いて全エクソーム遺伝子変異解析、結果を10月の日本血液学会学術集会（福岡市）で報告し、優秀ポスター賞を得た。

塚崎、高橋、郡が中心となり、「アグレッシブATLにおける予後因子の検討と個別化医療の確立を目的とした全国一元化レジストリおよびバイオレポジトリの構築」の臨床研究に参加し、今年度に1例を登録した。（合計1例）

塚崎が分担研究者を務めている国立がん研究センター開発費「成人固形がんに対する標準治療確立のための基盤研究（JCOG）」班（大江班）による「未治療indolent患者に対するインターフェロン α （IFN）+ジドブジン（AZT）療法とwatchful waiting（WW）療法とのランダム化比較第III相試験（JCOG1111C）」と「成人T細胞白血病・リンパ腫に対する同種造血幹細胞移植療法を組み込んだ治療法に関する非ランダム化検証的試験（JCOG0907）」は、学外の分担研究者、研究協力者とともに研究を進めている。

塚崎、高橋、郡が中心となり、「High grade B-cell lymphoma の免疫組織化学および遺伝子学的研究」の臨床研究に参加し、14例の病理検体を用いて現在解析中である。

高橋が中心となり、「日本人骨髄増殖性腫瘍患者における二次がんとしてリンパ球系腫瘍の発症に関する全国調査」に参加し、1例登録した。

高橋、塚崎、郡が中心となり、「未治療 CD5 陽性びまん性大細胞型 B 細胞リンパ腫における 新治療導入後の診療実態と予後に関する国内多機関共同観察研究」の臨床研究に参加し、今年度 7 例登録した。（合計 7 例）

悪性リンパ腫の治療研究については、JCOG-LSG による多施設共同研究に適格患者を積極的に登録しており、バイオバンクを活用したゲノム付随研究、副次的解析などを含めて、その成果の学会発表と論文に貢献する。また、積極的に新薬の治験に参加を行っていきたい。

4) 造血幹細胞移植に関する多施設共同治療研究については、前田、川井を中心として JSTCT 主導の研究や JSTCT/日本造血細胞移植データセンター(JDCHCT)の全国調査、関東造血幹細胞移植共同研究グループ(KSGCT)、お茶の水血液検討会などの共同研究に多数参加することで多施設治療研究による成果を世界に向けて発信した。また、研究参加に求められる施設の体制を含めた医療の質を維持する上で JSTCT の認定造血細胞移植コーディネーター (HCTC) と移植後長期フォローアップ外来専任看護師と協調した診療と共に JSTCT の認定カテゴリー1の施設として移植治療の向上にも寄与した。このカテゴリー1を保持し、当院の輸血・細胞移植科とともに公益財団法人日本骨髄バンク認定非血縁者間末梢血幹細胞採取施設としてバンクドナーの幹細胞採取を実施することで全国・地域の移植医療に貢献した。また参加した JALSG の「骨髄異形成症候群における同種移植までの橋渡し治療と移植成績を検討する前向き観察研究 (JALSG-CS-11-MDS-SCT)」の成果は論文で公表の予定である。KSGCT の「キザルチニブの投与を予定している同種造血幹細胞移植可能な FLT3-ITD 変異陽性の再発又は難治性急性骨髄性白血病患者の多施設共同前方視的観察研究」に参加し、症例を登録した。

3-3. 達成度評価

1) 特発性造血障害に関する研究：骨髄不全症を代表する再生不良性貧血と骨髄異形成症候群におけるわが国の形態診断における質の向上に寄与し、前方視的な予後調査との関連を基に本邦における診療ガイドラインの根拠となりうるエビデンスを作成できた。本研究班が主催する検鏡会 Web 開催で国内研究者との有意義な血球形態学に関わる症例ディスカッションが行えた。これらの成果物は班会議ならびに日本血液学会での発表に加え、論文により広く国内外の骨髄不全症の診療に貢献すると思われた。また、「再生不良性貧血に対するトロンボポエチン作動薬療法に関する研究」の研究の成果が英文学術誌 (Internal Medicine 誌、Am J Clin Pathol 誌) に掲載された。赤芽球癆の病態解明に向けた研究の成果も英文学術誌 (Blood Advances 誌) に掲載され、エビデンス発信が行えた。

2) 白血病に関する研究：JALSG の共同研究へ積極的に症例を登録し順調に活動できた。前田は、JALSG の研究活動において複数の重要な任務を担い、合同班会議で研究支援部門ならびに研究進捗状況に関する報告を定期的に行った。またシステマティック・レビューチーム委員 (急性骨髄性白血病) をつとめ、G-CSF 適正使用ガイドライン改訂ワーキ

ンググループの成果が Minds に準拠したガイドラインとして一般社団法人日本癌治療学会より発刊され、適正ながん治療の普及に貢献した。石川は CML-CSG において 2 報の論文に貢献した。以上の成果は、造血器腫瘍における最適な治療法の選択と治療成績の向上、新しい疾患概念・分類の提唱や治療薬開発へ向けた企業への提案、日本発の新規治療薬の開発や臨床応用に大きく寄与した。今年度の目標は十分に達成し、期待水準を上回る活動ができたと評価する。

3) 悪性リンパ腫に関する研究: 悪性リンパ腫の治療研究については、JCOG-LSG による多施設共同研究に適格患者を積極的に登録しており、バイオバンクを活用したゲノム付随研究、副次的解析などを含めて、その成果の学会発表と論文に貢献する。また、積極的に新薬の治験に参加を行っていきたい。現在も継続中のアグレッシブ ATL における予後因子の検討と個別化医療の確立を目的とした全国一元化レジストリおよびバイオレポジトリの構築および新規の多施設共同の観察研究についても、当科で適格患者があれば積極的に参加していく。「家族性節外性NK/T細胞リンパ腫 鼻型における原因遺伝子の同定」は、国立がん研究センターと共同研究で血液、病理検体を用いて遺伝子解析を行い、結果を第84回日本血液学会学術集会 2022年10月16日福岡市で報告し、優秀ポスター賞を得た。塚崎の JCOG1111C、JCOG0907 ほかの JCOG-LSG 研究は、引き続き学外の分担研究者、研究協力者とともに研究を進める。塚崎は、主任研究者を務めた AMED「臨床試験と全国患者実態把握による indolent ATL に対する標準治療の開発研究」研究班による「第12次 ATL 全国実態調査研究」研究の低悪性度 ATL に対する予後予測モデルの副次的解析結果を今年度 Int J Hematol 誌に論文化した。塚崎は末梢性 T 細胞リンパ腫に対する HDAC 阻害剤の P2 試験と ATL に対する EZH1/2 阻害剤の P2 試験結果を今年度にそれぞれ Haematologica 誌と Blood 誌に論文化した。

4) 造血幹細胞移植に関する研究: 前田、川井を中心に JSTCT/日本造血細胞移植データセンター(JDCHCT)の全国調査、JALSJG ならびに KSGCT の共同研究に参加することで世界に向けた多施設治療研究の成果発信に寄与した。研究参加に求められる施設の体制を含めた医療の質を維持する上で JSTCT の認定造血細胞移植コーディネーター(HCTC)と移植後長期フォローアップ外来専任看護師と協調した診療と共に JSTCT の認定カテゴリ1の認定施設を維持し、移植治療の向上に寄与した。当院の輸血・細胞移植科とともに公益財団法人日本骨髄バンク認定非血縁者間末梢血幹細胞採取施設としてバンクドナーの幹細胞採取を実施することで自施設だけでなく、全国・地域の移植医療にも貢献することができた。

3-4. 次年度改善計画

1) に関しては、引き続き松田を中心として構築されたシステムによる班員各施設からの血液標本のセントラルレビューを行い、厚生労働省の研究班の一員として松田、前田を中心とした骨髄不全症を対象とする研究を継続する。特に再生不良性貧血と骨髄異形成症候群におけるわが国の形態診断の質向上に寄与しながら前方視的な予後調査と関連したエビデンスの充実をはかるべく、その成果の発表や海外学術誌への公表を次年度もおこなうよう努力する。骨髄異形成症候群の本邦のガイドラインである「参照ガイド」の改訂作業が開始されている。松田が参画しており、2023年度に公表を予定する。松田、前田が改訂作業を行なった「骨髄異形成症候群の形態学的異形成に基づく診断確度区分」は2023年度に公表を予定する。また、赤芽球癆の本邦のガイドラインである「参照ガイド」の改訂作業も開始され、松田が参画し2023年度に公表を予定する。

2) に関しては、次年度も引き続き JALSJG の参加施設として積極的に共同研究へ参加するとともに、治験や臨床研究、基礎的研究を行い、より良い治療戦略の開発に貢献できるよう取り組む。また、学会発表や論文化を目指し、共同研究者と協力して研究の成果公表に貢献出来るよう努める。

3) に関しては塚崎、高橋を中心に、JCOGのリンパ腫グループの一員として、進行中の高腫瘍量の濾胞性リンパ腫に対する JCOG2008 試験、新たに開始される JCOG 試験への積極的登録と登録症例のフォローを進める。そして、バイオバンクを活用したゲノム付随研究、副次的解析などを含めて、その成果の学会発表と論文化に貢献する。その他の全国調査研究にも積極的に参加しており、そのうち2023年度も継続中のものには登録を継続する。参加した治験ではそれぞれの目標症例数の登録を達成しており、次年度はさらに多くの治験へ参加予定である。

4) に関しては、JSTCT 認定移植医である前田、川井を中心として、JSTCT 主導の研究や JSTCT/ JDCHCT の全国調査に加え、KSGCT の共同研究を含めた臨床研究に積極的な参加を推進する。エビデンス発信では、そのベースとなる移植診療の質とバランス(移植と採取の実施数も含めて)を崩すことなく行うことを目標に当院の輸血・細胞移植科とともに公益財団法人日本骨髄バンク非血縁者間末梢血幹細胞採取認定施設としてバンクドナーの幹細胞採取を安全に行うことで骨髄採取も含めて全国の移植医療に貢献するようさらに務める。さらに JSTCT が定める施設認定カテゴリ1を維持するため、移植医療の質の維持と共にそれに求められる移植医療スタッフの育成を医師以外にも充実させるべく、教育内容の改善を図る。

4. 診療

当科は血液疾患の中でも、特に再生不良性貧血、骨髄異形成症候群などの特発性造血障害と、白血病、悪性リンパ腫などの造血器腫瘍に力を入れている。厚生労働省研究班、JALSG、JCOG-LSG、KSGCTなどの共同研究グループの一員として、また日本造血・免疫細胞療法学会、公益財団法人日本骨髄バンク、さい帯血バンクの認定施設として造血幹細胞移植や多施設共同臨床試験を含む先端医療の実践を目指している。血液疾患の診療は専門性が高く、また当院の置かれている地域の特異性から近隣の医療施設からの紹介患者が多い。これら疾患の当科における治療成績は、国際的に先進的な治療を行っている施設の治療成績と比べて遜色のないものである。問題点としては、地域での血液疾患患者の当科への受け入れの要望は増加傾向にあるが、これに対応する病床および専門医の確保が困難になっている点あげられる。今後も人的資源の確保に努めるとともに、近隣の病院との連携を深めて、病院機能に応じた診療体制を構築する必要がある。また、高齢の患者が増加しており、高齢者血液疾患患者に対する最適化治療を開発していく必要がある。今後も治験や多施設共同臨床研究へ積極的に参加し、患者に最先端医療を提供するとともに地域医療に貢献することが目標である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

別所正美：埼玉県総合医局機構運営委員、埼玉県医療対策協議会委員、文部科学省私立医科大学改革総合支援事業委員

塚崎邦弘：厚生労働省 HTLV-1 対策推進協議会委員

石田 明：厚生労働省薬事・食品衛生審議会薬事分科会専門委員、同血液事業部献血推進調査会委員

石田 明：臨床検査技師試験委員会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Annals of Oncology 副編集長、査読委員；塚崎邦弘

Applied Sciences；査読委員；塚崎邦弘

Blood；査読委員；塚崎邦弘

Blood Reviews；査読委員；塚崎邦弘

Cancer Management and Research；査読委員；塚崎邦弘

Cancers 査読委員；塚崎邦弘

Case Reports in Oncology；査読委員；塚崎邦弘

Case Reports in Nephrology；査読委員；塚崎邦弘

Chinese Medical Journal；査読委員；塚崎邦弘

Clinical, Cosmetic and Investigational Dermatology；査読委員；塚崎邦弘

Current Medicinal Chemistry；査読委員；塚崎邦弘

Diagnostic Pathology；査読委員；塚崎邦弘

Hematology；査読委員；塚崎邦弘

International Journal of Clinical Practice；査読委員；塚崎邦弘

International Journal of Molecular Sciences；査読委員；塚崎邦弘

Life；査読委員；塚崎邦弘

International Journal of Hematology 査読委員；松田 晃

International Immunopharmacology；査読委員；塚崎邦弘

Japan Journal of Transfusion Medicine 査読委員；石田 明

Journal of Clinical Medicine；塚崎邦弘

Lancet Oncology；査読委員；塚崎邦弘

Leukemia；査読委員；塚崎邦弘

PLoS Neglected Tropical Diseases 査読委員；塚崎邦弘

英文誌査読業績：Publons (<http://prw.publons.com/>) 6件、他3件 計9件：前田智也

PNH Frontier 編集アドバイザー；前田智也

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

一般社団法人日本医学教育評価機構副理事長：別所正美

公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構理事：別所正美

公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構 共用試験医学系臨床実習前 OSCE 認定評価者：松田 晃、石田 明、塚崎邦弘、前田智也、岡村大輔

公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構 共用試験医学系診療参加型臨床実習後(post-CC) OSCE 外部評価者：前田智也、岡村大輔、松田 晃
医療系大学倫理委員会連絡協議会理事：別所正美
彩の国大学コンソーシアム会長：別所正美
一般社団法人全国医学部長病院長会議監事：別所正美
全国がん患者団体連合会 がん教育外部講師：前田智也
学校法人香川栄養学園評議員：別所正美
埼玉県立高等看護学院 非常勤講師：前田智也
飯能看護専門学校 非常勤講師：高橋直樹
公益財団法人ライフサイエンス振興財団評議員：別所正美
公益財団法人医学教育振興財団運営委員：別所正美
一般社団法人さいしんコラボ産学官理事：別所正美
埼玉県立大学研究評価委員会委員長：別所正美
日本輸血・細胞治療学会 認定医制度審議会委員：石田 明
日本輸血・細胞治療学会 認定医資格審査委員会委員長：石田 明
MDS Center of Excellence (MDS Foundation) 施設責任医師：前田智也
特発性造血障害に関する調査研究（主任研究者：三谷絹子）研究協力者：松田 晃
特発性造血障害に関する調査研究班共同研究「再生不良性貧血／骨髄異形成症候群の前方視症例登録：セントラルレビュー」セントラルレビュー実施責任医師：松田 晃
特発性造血障害に関する調査研究班共同研究「再生不良性貧血／骨髄異形成症候群の前方視症例登録：セントラルレビュー」検鏡担当施設・検鏡担当者：前田智也
特発性造血障害に関する調査研究 AA/MDS 境界例と低リスク MDS 症例における自己免疫病態・免疫抑制療法の位置づけについての検討部会メンバー：前田智也
特発性造血障害に関する調査研究 骨髄異形成症候群診療の参照ガイド作成のためのワーキンググループ：松田 晃
特発性造血障害に関する調査研究 赤芽球瘍診療の参照ガイド作成のためのワーキンググループ：松田 晃
東京骨髄病理研究会世話人：松田 晃、前田智也
成人白血病治療共同研究支援機構 (JALSG) 外部理事：麻生範雄
JALSG 検体保存・付随研究委員会委員長：前田智也
JALSG 施設正会員：石川真穂、連絡員：岡村大輔
日本リンパ網内系学会理事、COI 委員会副委員長、プログラム委員会委員：塚崎邦弘
日本リンパ網内系学会評議員、プログラム委員会委員：高橋直樹
日本癌学会評議員：塚崎邦弘
日本 HTLV-1 学会理事、財務委員会委員長、総務委員会委員、診療委員会委員：塚崎邦弘
日本臨床腫瘍研究グループ (JCOG) リンパ腫グループ プロトコル検討委員会メンバー、JCOG0907 研究代表者、JCOG1111C 研究事務局、施設研究責任者：塚崎邦弘
JCOG リンパ腫グループ 施設コーディネーター：高橋直樹
日本小児白血病リンパ腫研究グループ (JPLSG) 小児ランゲルハンス細胞組織球 (LCH) に対するリスク別臨床研究 LCH-12 効果安全性評価委員会委員：高橋直樹
日本造血・免疫細胞療法学会移植認定施設診療科責任医師：前田智也
公益財団法人日本骨髄バンク非血縁者間末梢血幹細胞採取認定施設診療科責任医師：前田智也
公益財団法人日本骨髄移植推進財団 調整医師：高橋直樹、川井信孝
日本血液学会評議員：松田 晃、脇本直樹、中村裕一、塚崎邦弘
日本血液学会プログラム企画委員：塚崎邦弘
日本血液学会関東甲信越地方会幹事：松田 晃、塚崎邦弘
日本血液学会 造血器腫瘍診療ガイドライン(第2版) 作成委員：塚崎邦弘
日本血液学会 造血器腫瘍診療ガイドライン(第3版) システムティック・レビューチーム委員：前田智也
日本輸血・細胞治療学会評議員：石田 明
日本輸血・細胞治療学会製剤委員会委員：石田 明
日本輸血・細胞治療学会血小板小委員会委員：石田 明
日本輸血・細胞治療学会細胞治療委員会委員：石田 明

日本輸血・細胞治療学会サイタフェレーシス小委員会委員：石田 明
埼玉県合同輸血療法委員会代表世話人：石田 明
埼玉県合同輸血療法委員会適正化推進小委員会委員：石田 明
日本臨床腫瘍学会協議員：塚崎邦弘
日本癌治療学会 G-CSF 適正使用ガイドライン改訂ワーキンググループ委員：前田智也

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Matsuda A, Imada K, Obara N, Iida H, Yamazaki H, Tomiyama Y, Miyamura K, Sasaki O, Maeda T, Ohta K, Usuki K, Tokumine Y, Imajo K, Okamoto Y, Murakami M, Nakao S. Dysmegakaryopoiesis and Transient Mild Increase in Bone Marrow Blasts in Patients With Aplastic Anemia Treated With Eltrombopag May Be Signs of Hematologic Improvement and Not Portend Clonal Evolution. *Am J Clin Pathol.* 158(5): 604-615. 2022.
- ② Yuriko Nishiyama-Fujita, Tomonori Nakazato, Noriyoshi Iriyama, Michihide Tokuhira, Maho Ishikawa, Eriko Sato, Tomoiku Takaku, Keiji Sugimoto, Hiroyuki Fujita, Isao Fujioka, Shun Tsuchiya, Yuta Kimura, Eisaku Iwanaga, Norio Komatsu, Norio Asou, Masahiro Kizaki, Yoshihiro Hatta, Tatsuya Kawaguchi. Outcomes of adolescents and young adults with chronic-phase chronic myeloid leukaemia treated with tyrosine kinase inhibitors. *Ann Med.* 2022Dec;54(1):1244-1254.
- ③ Shun Tsuchiya, Tomoiku Takaku, Naoki Watanabe, Noriyoshi Iriyama, Yuta Kimura, Eisaku Iwanaga, Kei-Ji Sugimoto, Toru Mitsumori, Maho Ishikawa, Tomonori Nakazato, Hiroyuki Fujita, Eriko Sato, Yoshihiro Hatta, Norio Asou, Masahiro Kizaki, Michihide Tokuhira, Miki Ando, Tatsuya Kawaguchi. Management and Risk Factors for Pleural Effusion in Japanese Patients with Chronic Myeloid Leukemia Treated with First-line Dasatinib in Real-world Clinical Practice. *Intern Med.* 2023 Mar 31.
- ④ Izutsu K, Makita S, Nosaka K, Yoshimitsu M, Utsunomiya A, Kusumoto S, Morishima S, Tsukasaki K, Kawamata T, Ono T, Rai S, Katsuya H, Ishikawa J, Yamada H, Kato K, Tachibana M, Kakurai Y, Adachi N, Tobinai K, Yonekura K, Ishitsuka K. An Open-Label, Single-Arm, Phase 2 Trial of Valemetostat in Relapsed or Refractory Adult T-Cell Leukemia/Lymphoma. *Blood.* 2023 Mar 9;141(10):1159-1168. doi: 10.1182/blood.2022016862. PMID: 36150143
- ⑤ Imaizumi Y, Iwanaga M, Nosaka K, Ishitsuka K, Ishizawa K, Ito S, Amano M, Ishida T, Uike N, Utsunomiya A, Ohshima K, Tanaka J, Tokura Y, Tobinai K, Watanabe T, Uchimaru K, Tsukasaki K. Validation of the iATL-PI prognostic index in therapeutic decision-making for patients with smoldering and chronic ATL: a multicenter study. *Int J Hematol.* 2023 Feb;117(2):206-215. doi: 10.1007/s12185-022-03473-y. Epub 2022 Oct 29. PMID: 36308678
- ⑥ Miyazaki Y, Kiguchi T, Sato S, Usuki K, Ishiyama K, Ito Y, Suzuki T, Taguchi J, Chiba S, Dobashi N, Tomita A, Harada H, Handa H, Horiike S, Maeda T, Matsuda M, Ichikawa M, Hata T, Honda S, Iyama S, Suzushima H, Moriuchi Y, Kurokawa T, Yokota K, Ohtake S, Yamauchi T, Matsumura I, Kiyoi H, Naoe T; Japan Adult Leukemia Study Group. Prospective comparison of 5- and 7-day administration of azacitidine for myelodysplastic syndromes: a JALSG MDS212 trial. *Int J Hematol.* 2022 Aug;116(2):228-238. doi: 10.1007/s12185-022-03347-3. Epub 2022 May 4.
- ⑦ 前田智也：特集 クロウン性血球減少症および関連病態（CHIP/ICUS/CCUS）の定義と臨床的意義、「血液内科」第86巻 第1号：pp.27-33, 2023, 科学評論社。
- ⑧ 前田智也, 松田晃, 諫田淳也, 川端浩, 石川隆之, 通山薫, 北中明, 荒関かやの, 新保敬, 波多智子, 鈴木隆浩, 茅野秀一, 白杵憲祐, 新堂真紀, 有馬靖佳, 直川 匡晴, 太田晶子, 千葉滋, 宮崎泰司, 中尾眞二, 小澤敬也, 荒井俊也, 黒川峰夫, 高折晃史, 三谷絹子. Characteristic and prognostic impact of erythroid dysplasia in aplastic anemia: a prospective cohort. 第84回日本血液学会学術集会 2022.10.15. 福岡。
- ⑨ Kohri M, Indolent T-cell lymphoproliferative disorders of gastrointestinal tract, standard treatment in front-line, How I treat. 2018-2022 T-Cell Lymphomas:finally vision and mission! Bologna, Oct 25, 2022.
- ⑩ Takahashi N, Ito Y, Sato T, Kohri M, Kogure Y, Horie S, Asou C, Okamura D, Maeda T, Ishikawa M, Tsukasaki K, Kataoka K. Familial extranodal NK/T-cell lymphoma: a case report and genetic analysis. 第84回日本血液学会学術集会 優秀ポスター-2022.10.16 福岡国際会議場

【総数：論文 19 件、学会発表 18 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

- ① AMED、革新的がん医療実用化研究事業「高齢者急性骨髄性白血病の化学療法が可能な症例に対して若年成人標準化学療法の近似用量を用いる第Ⅱ相臨床試験：JALSG-GML219 試験：(研究代表者：山内高弘)」研究分担者：前田智也
- ② AMED、革新的がん医療実用化研究事業「本邦における初発急性前骨髄球性白血病に対する ATRA・ATO 併用分化誘導

療法の確立：(研究代表者：横山泰久) 研究分担者：前田智也

- ③ 厚労科研費、レギュラトリーサイエンス政策研究事業「地域における包括的な輸血管理体制構築に関する研究」研究代表者：田中朝志、分担研究者：石田 明
- ④ 国立がん研究センター開発費「成人固形がんに対する標準治療確立のための基盤研究(JCOG)」班(大江班)の分担研究者：塚崎邦弘
- ⑤ AMED、革新的がん医療実用化研究事業「未治療高腫瘍量濾胞性リンパ腫に対するオビヌツズマブ+ベンダムスチン療法後のオビヌツズマブ維持療法の省略に関するランダム化第Ⅲ相試験：(研究代表者：石澤 賢一) 研究分担者：高橋直樹

6-3. 受賞

該当無し

6-4. 特許、実用新案

該当無し

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当無し

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

特発性造血障害(骨髄不全症)の研究面では、松田が再生不良性貧血および骨髄異形成症候群のセントラルレビューの責任者を、前田もセントラルレビューに参加し、特発性造血障害の班研究で重要な役割を果たした。その成果は、骨髄異形成症候群の診断基準の作成の一助となった。セントラルレビューの成果は学会で公表され、前年度に引き続き今年度も論文化に向けた準備を進めている。

白血病例の多くは JALSG の治療プロトコールへ登録し、多施設共同研究の遂行、新規治療法の開発への貢献、臨床的課題の改善に努めることができたと評価している。

悪性リンパ腫の治療研究については、2018 年度から正式参加施設となった JCOG-LSG による多施設共同試験に適格患者を積極的に登録している。また、複数の新薬の治験に参加しその大多数に登録している。進行中の多施設共同の観察研究についても、当科で適格患者がいれば積極的に参加している。JCOG1411：「未治療低腫瘍量進行期濾胞性リンパ腫に対するリツキシマブ療法早期介入に関するランダム化比較第Ⅲ相試験」に合計 8 例登録した。症例登録数は上位施設となっている。塚崎はがん研究開発費大江班による JCOG-LSG のコアメンバーとして、ATL を含むリンパ系腫瘍の臨床研究を進めている。

造血幹細胞移植については、前田、川井を中心として、JSTCT 主導の研究や JSTCT/JDCHCT の全国調査、JALSG や KSGCT の共同研究、お茶の水血液検討会の臨床研究に積極的に参加した。その診療面では施設要件を満たす造血幹細胞移植件数を維持し、非血縁者間同種造血幹細胞の採取で採取目標例数(3 例/年)を超え、いずれも目標をクリアした。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

特発性造血障害に関する調査研究では、松田、前田が骨髄不全症を代表する再生不良性貧血と骨髄異形成症候群における班研究の中央診断の質向上へ寄与するとともに見出された前方視的な予後調査との知見について国内発表だけでなく、英文学術誌への論文化により広く国外へも発信して骨髄不全症の診療に貢献できるよう計画する。また、骨髄異形成症候群の形態診断に関する研究に引き続き参加する。松田は、赤芽球瘍に関しても Japan PRCA collaborative study group のメンバーとして活動し、研究を継続する。

白血病については引き続き、新規薬剤を駆使した治療戦略を取り入れ、更なる予後改善を目標に次年度も真摯に診療に取り組む。地域医療機関とのより良い連携体制の構築は、依然として改善を要する課題である。研究については、治験や臨床研究に積極的に取り組み最先端医療を提供するとともに、より良い治療法の開発へ貢献する努力を継続する。

悪性リンパ腫の診療、研究については、今後も継続中の研究に登録した患者の試験治療・追跡を続行し、新たな適格患者が出れば積極的に登録するとともに、新たな診断、治療研究を進めていきたい。

造血幹細胞移植については、JSTCT 主導の研究や JSTCT/JDCHCT の全国調査、KSGCT の共同研究、お茶の水血液検討会の臨床研究に積極的な参加を継続する。また、その診療面においてはバンクドナーでの末梢血幹細胞および骨髄採取例数を 3 ヶ月に 1 回以上症例を受けることとして、年間目標例数を維持して全国の移植医療に貢献する。

3. 6) 神経内科・脳卒中内科

1. 構成員

高橋 慎一 (TAKAHASHI, Shinichi) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 研究主任 : 教育主任 : 代表指導教員 (大学院) : 脳卒中医学, 臨床神経学, トランスレーショナルリサーチ : 博士
棚橋 紀夫 (TANAHASHI, Norio) : 特任教授 : 専務理事 : 指導教員 (大学院) : 脳卒中医学 : 博士
池田 将樹 (IKEDA, Masaki) : 教授 (兼担) : 指導教員 (大学院) : 脳卒中医学, 臨床神経学, 認知症 : 博士
高尾 昌樹 (TAKAO, Masaki) : 客員教授 (非常勤) : 脳卒中医学, 臨床神経学, 神経病理学 : 博士
林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 教授 (兼担) : 指導教員 (大学院) : 脳卒中医学, 臨床神経学 : 博士
佐々木 貴浩 (SASAKI, Takahiro) : 教授 (出向中) : 指導教員 (大学院) : 脳卒中医学, 臨床神経学 : 博士
加藤 裕司 (KATO, Yuji) : 准教授 : 外来医長 : 指導教員 (大学院) : 脳卒中医学, 臨床神経学, 頭痛診療 : 博士
出口 一郎 (DEGUCHI, Ichiro) : 客員准教授 (非常勤) : 指導教員 (大学院) : 脳卒中医学, 臨床神経学 : 博士
長田 高志 (OSADA, Takashi) : 准教授 : 副診療部長, 病棟医長 : 大学院教員 (大学院) : 脳卒中医学, 臨床神経学, 運動障害疾患 : 博士
水野 諭児 (MIZUNO, Satoko) : 助教 (非常勤)
新井 徳子 (ARAI, Noriko) : 助教 : 脳卒中医学
藤原 史奈子 (FUJIWARA, Shinako) : 助教 (専攻医)
尾立 樹一郎 (ORYU, Kiichiro) : 助教 (専攻医)

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

「卒前教育」、「卒後教育」、「大学院教育」とも共通で、脳卒中をはじめとする神経救急疾患の専門的・多角的・効率的な診療経験を積むことが出来る体制を整える。また、教室員は、各種専門医資格および学位を最短期間で取得することを目指して教育活動を行った。

2-2. 教育実績 (担当者)

「卒前教育」: 4年生の講義では、神経疾患について詳細に解説し深い理解を求めている。5年生のBSLでは、総回診をしながら、患者へ接する態度、問診の取り方、神経学的所見の取り方、画像診断などについて詳細に指導している。6年生に対しては、国家試験に向けて知識の整理を行っている。またOSCE実習での指導を行っている(担当者: 高橋慎一、長田高志、加藤裕司)。

「卒後教育」: 週1回(火曜の昼)の脳卒中センター全入院患者の症例プレゼンテーション、週3回(月・水・金曜の朝)の新入院カンファレンス、週1回(月曜日の夕)の症例検討会、スタッフレクチャー、抄読会を通じて、研修医および教室員の神経疾患への理解を深めている(担当者: 高橋慎一、長田高志、加藤裕司、新井徳子)。

「大学院教育」: 積極的に大学院生の受け入れを行っているが、該当者なし。基礎もしくは臨床研究の指導を行い、成果を国際雑誌に発表し、最短期間の学位取得を目指している(高橋慎一、長田高志、加藤裕司、棚橋紀夫、池田将樹、高尾昌樹)。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」、「卒後教育」、「大学院教育」とも共通で、病棟・外来では神経疾患の患者を研修医とともに診療し、診断や治療の考え方を直接指導できた。とくに、厚生労働省の指定した経験目標および到達目標(下記)を、大学病院の神経内科と協力することでほとんどの研修医に修得させることができた。

経験目標

1) 頭痛、2) めまい、3) 失神、4) けいれん発作、5) 視力障害、視野狭窄、6) 聴覚障害、7) 四肢のしびれ、8) 排尿障害、9) 意識障害、10) 脳・脊髄血管障害(脳梗塞、脳内出血、くも膜下出血)、11) 認知症、12) 脳・脊髄外傷(頭部外傷、急性硬膜外・硬膜下出血)、13) 変性疾患、14) 脳炎・髄膜炎

到達目標

1) 神経学的診察ができ、記載できる。
2) 髄液検査の適応や検査結果の評価を行うことができる。
3) 神経生理学的検査(脳波・筋電図など)の適応の判断や検査結果の評価を行うことができる。
4) 穿刺法(腰椎)を合併症なく実施できる。

2-4. 次年度改善計画

「卒前教育」、「卒後教育」、「大学院教育」とも共通で、脳血管障害を中心に重要事項についてはベッドサイドのみでなく、カンファレンスを行い、最新の知見を共有し、理解を深めることができた。教室員においては、日本神経学会専門医および脳卒中学会専門医の合格者を輩出できた。このような傾向を次年度以降も継続していきたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

教室員全員が、研究に携わり新しい知見を世の中に発信することを目標とした。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 脳血管障害の臨床研究

急性期脳血管障害の予後規定因子の検討、超急性期脳梗塞におけるrt-PA静注療法の治療効果に関する検討、心原性脳塞栓症と新規抗凝固薬内服についての検討、抗血小板薬の血小板凝集能についての検討などを行って

いる。多施設共同研究も積極的に行った。

2. 神経変性疾患、プリオン病、高齢者神経疾患における臨床・神経病理学的研究

特に高齢者神経変性疾患としてパーキンソン病、プリオン病、認知症を中心に臨床データを解析し、病理所見との対比を行った。

3-3. 達成度評価

各研究グループとも精力的に国内外で学会発表を行った。投稿した多数の学術論文が国際誌に publish された。

3-4. 次年度改善計画

学会発表、論文発表のアクティビティーを維持していく。さらに発表論文数を増やす。

4. 診療

4-1. 診療科の特色と診療目的（目標）

当科では、脳卒中を中心に神経救急疾患の診療を行う。患者中心主義のもと安心で安全な満足度の高い医療の提供を行い、かつ最も高度の医療水準を維持できるように、教室員全員が不断の努力をしている。

4-2. 診療実績データ

入院：患者総数 568 例、うち虚血性脳卒中 441 例。以下、てんかん、めまい症、頭痛、髄膜炎・脳炎、脱髄疾患、パーキンソン病ほか（127 例）。急性期脳梗塞に対する静脈的血栓溶解療法（rtPA）実施例は 37 例であった。

外来：患者総数 3,530 例、うち新患 644 例であった。

4-3. 診療内容、治療成績

超急性期脳梗塞に対する rt-PA（アルテプラゼ）を用いた静注血栓溶解療法単独、もしくは経皮的脳血栓回収療法（脳血管内治療）を組み合わせることで治療効果を高める取り組みを行っている。また、分枝粥腫病（BAD）の急性期の神経症状の増悪を抑制するための既存薬による最適化治療の開発を進めている（論文投稿中）。

4-4. 先進医療の開発

- ① 先進医療 B として、T-FLAVOR 試験：脳梗塞急性期の経静脈的血栓溶解療法におけるテネクテプラゼの安全性と有効性をアルテプラゼとの比較する国内多施設医師主導治験を実施中。

4-5. 実施治験内容

- ① TREASURE 試験：脳梗塞患者を対象とした HLCO51 (MultiStem) の有効性及び安全性を検討するプラセボ対照二重盲検第 II/III 相試験
- ② AXIOMATIC-SSP 試験：急性期虚血性脳卒中又は一過性脳虚血発作（TIA）を発症しアスピリン及びクロピドグレルの投与を受けている患者を対象に経口 FXIa 阻害剤 BMS-986177 による虚血性脳卒中又は無症候性脳梗塞の再発抑制効果を検討する国際共同、第 2 相、ランダム化、二重盲検、プラセボ対照、用量反応試験
- ③ T-FLAVOR 試験：脳梗塞超急性期経静脈的血栓溶解療法におけるテネクテプラゼの安全性と有効性を従来薬であるアルテプラゼと比較する国内多施設医師主導治験（先進 B）

4-6. 自己評価と次年度目標

昼夜を問わず搬送される、脳卒中をはじめとする神経救急疾患患者に対して、教室員が協力し合い、安全かつ質の高い医療を提供できたものと自負している。発症 4.5 時間以内の超急性期脳梗塞に対して rt-PA（アルテプラゼ）静注療法が 2005 年 10 月に認可され、当院でも年間 40 例程度の施行実績があるものの、脳梗塞患者全体から見ると、少数であるのが現状である。現在、救急隊員への脳卒中プレホスピタルケアの指導、市民公開講座を通じての脳卒中の啓発活動、脳卒中ホットラインによる開業医との連携により、ひとりでも多くの脳梗塞患者が rt-PA 静注療法の恩恵に与れるように努めている。

4-7. 上記 4-1～4-6 の要約（大学年報用）

当科の診療実績は、TIA、脳梗塞といった虚血性脳卒中が年間 500 例以上を占める。虚血性脳卒中の症例数については、全国屈指の数で、昼夜を問わず搬送される急患に対して、教室員が協力し合い、安全かつ質の高い医療を提供している。診療実績をさらに積み上げ、地域医療で信頼される脳卒中センターを目指している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

厚生労働省 医師国家試験出題委員会 委員（高橋）

埼玉県脳卒中・心臓病その他の循環器病対策推進協議会 委員（高橋）

埼玉県脳卒中・心臓病その他の循環器病対策推進協議会脳卒中部会 委員（高橋）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

編集委員：日本神経学会英文誌 Neurology and Clinical Neuroscience（高橋）、日本動脈硬化化学会機関紙 Journal of Atherosclerosis and Thrombosis（高橋）、

査読委員：日本脳卒中学会機関誌「脳卒中」（高橋）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

社団法人医療系大学間共用試験実施評価機構 医学系 OSCE 実施小委員会 外部評価者認定専門部会（高橋）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書 ※10 件以内

- ① Takahashi S. Metabolic Contribution and Cerebral Blood Flow Regulation by Astrocytes in the Neurovascular Unit. *Cells*. 2022 Feb 25;11(5):813. doi:10.3390/cells11050813. PMID: 35269435; PMCID: PMC8909328.
- ② Takahashi S, Mashima K. Neuroprotection and Disease Modification by Astrocytes and Microglia in Parkinson Disease. *Antioxidants (Basel)*. 2022 Jan 17;11(1):170. doi: 10.3390/antiox11010170. PMID: 35052674; PMCID: PMC8773262.
- ③ Kato Y, Takahashi S. Atrial Cardiopathy and Cryptogenic Stroke. *Front Neurol*. 2022 Feb 22;13:839398. doi: 10.3389/fneur.2022.839398. PMID: 35273560; PMCID: PMC8901724.
- ④ Deguchi I, Osada T, Kohyama S, Takahashi S: Status of neurological deficits after mechanical thrombectomy in elderly patients with ischemia. *J Clin Neurosci*. 2022 Nov;105:16-21. doi: 10.1016/j.jocn.2022.08.016. PMID: 36055120
- ⑤ Deguchi I, Osada T, Arai N, Takahashi S: Differences in oral anticoagulant prescriptions between specialists and non-specialists in patients with cardioembolic stroke caused by non-valvular atrial fibrillation. *Heart Vessels*. 2022 May;37(5):867-874. doi: 10.1007/s00380-021-01984-y. PMID: 34797401
- ⑥ Kuribara T, Sato H, Iihoshi S, Tsukagoshi E, Teranishi A, Kinoshita Y, Sugawara S, Kohyama S, Takahashi S, Kurita H: Preprocedural Prediction of Underlying Atherosclerotic Lesions in Cerebral Large-Vessel Occlusions: Clinical Backgrounds, Radiological Findings, and Treatment Outcomes. *J Atheroscler Thromb*. 2022 Nov 1;29(11):1613-1624. doi: 10.5551/jat.63135. PMID: 34937834
- ⑦ Kuribara T, Iihoshi S, Tsukagoshi E, Teranishi A, Kinoshita Y, Sugawara S, Kohyama S, Takahashi S, Kurita H: Thrombectomy for acute large vessel occlusion in posterior and anterior circulation: a single institutional retrospective observational study. *Neuroradiology*. 2022 Mar;64(3):565-574. doi: 10.1007/s00234-021-02799-4. PMID: 34477913
- ⑧ Sata M, Kakino A, Hirata A, Iida M, Usami Y, Harada S, Fujita Y, Kohsaka S, Izawa Y, Sawano M, Oki K, Sugiyama D, Takahashi S, Takebayashi T, Sawamura T, Okamura T: Serum modified high-density lipoprotein and risk of atherosclerotic cardiovascular disease in a Japanese community-based nested case-control study. *Eur J Prev Cardiol*. 2022 May 5;29(5):e193-e195. doi: 10.1093/eurjpc/zwab142. PMID: 34472612
- ⑨ Tezuka T, Takahata K, Tagai K, Ueda R, Ito D, Takeda H, Takahashi S, Nakahara J, Higuchi M, Seki M: Progressive Ataxia and Palatal Tremor Showing Characteristic Tau Depositions in [18 F]PM-PBB3 PET. *Mov Disord*. 2022 Jun;37(6):1317-1319. doi: 10.1002/mds.28983. PMID: 35274378
- ⑩ Ito D, Morimoto S, Takahashi S, Okada K, Nakahara J, Okano H: Maiden voyage: induced pluripotent stem cell-based drug screening for amyotrophic lateral sclerosis. *Brain*. 2023 Jan 5;146(1):13-19. doi: 10.1093/brain/awac306. PMID: 36004509

【総数：論文 20 件、学会発表 20 件、講演 30 件】

6-2. 獲得研究費

- ① 科学研究費補助金・基盤研究(C) (R4~R6 年度・日本学術振興会)
“ALS 運動ニューロン標的 iPS 細胞創薬から同定された薬物のグリア細胞疾患修飾作用”
(代表 高橋慎一) R4 年度 1,200 千円、期間全体[3,200]千円、総額 4,160 千円
- ② 日本医療研究開発機構研究費・臨床研究・治験推進研究事業(委託事業) (R3~R5 年度・AMED)
“新規血栓溶解薬テネクトプレーゼの脳梗塞急性期再灌流療法への臨床応用を目指した研究”
(代表 豊田一則) R4 年度 30,000、期間全体[141,387]千円
- ③ 日本医療研究開発機構研究費・難治性疾患等実用化研究事業、診療に直結するエビデンス創出研究分野/超希少難治性疾患の疾患レジストリ構築および診療に直結するエビデンス創出研究(エビデンス創出) (R4~R6 年度・AMED)
“患者レジストリを活用した沖縄型神経原性筋萎縮症のエビデンス創出研究”
(代表 谷口雅彦) R4 年度 500 千円、期間全体[1,500]千円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育、研究、診療のいずれにおいても概ね目標は達成された。教育面では、研修医に対して教授が直接的に指導し、カンファレンスやレクチャーを通じて、病巣診断、病態の考え方を中心に脳血管障害について理解を深めさせるよ

う努力した。中堅クラスの指導医が充足しつつあり、研修医への指導に十分な指導時間をとることができた。研究面では、学会活動や論文投稿を通じて、国内のみならず、世界に新しい知見を発信する下地ができつつあり、次年度以降さらなる飛躍が期待される。診療面では、限られたベッドを最大限有効に使うことで、虚血性脳卒中の入院患者数が年間約 500 例を数え、国内最大級の症例数である。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育、研究、診療のいずれの面においても、国内屈指の脳卒中センターを目指している。さらに高齢化に伴い、多くの合併症をかかえる症例に対応するため、総合内科としての診療、広く神経疾患に対応できる体制の構築を目指し、引き続き魅力ある教室作りを心掛けたい。

3. 7) 腎臓内科

1. 構成員

岡田浩一 (OkADA, Hirokazu) : 教授 : 統合責任者 : 代表指導教員 (大学院) : 腎臓病学・透析療法・高血圧 : 医学博士
渡辺裕輔 (WATANABE, Yusuke) : 准教授 : 運営責任者・診療部長 : 教育主任 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 腎臓病学・透析療法 : 医学博士

(以下、大学腎臓内科と兼任) 井上勉、友利浩司、天野博明、伊藤悠人、杉山圭、近藤立雄、深谷大地、川崎大記、萩原龍太、横田順奈、梅澤太一、生澤智宏、古川尚、小原祥、横山優美、伊藤瑞也、飯嶋淳美
非常勤医師) 高根裕史、末吉慶多、小島恵理子

岡田教授を埼玉医科大学病院腎臓内科との統合責任者、渡辺准教授を国際医療センター腎臓内科・血液浄化部部長とし、以下兼任医師も含め 24 時間常に専門的な血液浄化療法を施行出来る体制を整えている。

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

埼玉医科大学病院腎臓内科と連携して質の高い臨床腎臓病学の教育を目指している。医師卒前教育では主に急性腎障害、急性血液浄化療法、Onco-nephrology を担当し、基礎的内容から最新の知見までを分かり易く伝えることを目標としている。また保健医療学部の系統講義も担当しており、腎臓病学全般を分かり易く伝えることを目標としている。卒前教育の改善計画として、学生からのより高い授業・実習評価を得るために、講義・実習資料の一層の充実を図ることを計画している。医師卒後教育として、日本内科学会総合内科専門医及び日本腎臓学会腎臓専門医・日本透析医学会透析専門医の資格取得を最初の目標とし、最終的に臨床腎臓病学・透析療法学の指導的立場となることを目指している。大学院教育では臨床研究の手法を身につけ、医学博士号取得と共にその後研究活動を続けていくための基盤を作ることを目標としている。

2-2. 教育実績(渡辺裕輔)

埼玉医科大学病院腎臓内科と連携し、定期的なクルズ(少人数講義)、臨床講義、試験問題作成、クリニカルワークショップ、交換留学生の受け入れ等、専門分野を生かして卒前教育の重要な一翼を担っている。大学を挙げて取り組んでいる夏期プログラムにおいても、医学部生に限らず保健医療学部生、大学院生にも臨床現場を体験して頂ける様に広く門戸を開き、実際に見学を希望する学生は多い。また保健医療学部の系統講義も担当しており、腎臓病学全般の講義を行っている。

また卒後教育に関しては、現在、急性血液浄化療法の施行件数は埼玉医科大学病院を大きく上回っており、腎臓内科医の介入が必要な緊急疾患である急性腎障害、電解質・酸塩基平衡異常や、急性血液浄化療法に関する分野の教育を担っている。他科と併診中の症例に関して各研修医・担当医と discussion する中で、実践的な教育を実行している。また、構成員が積極的に専門医資格を取得するだけでなく、急性血液浄化療法に関する教育を希望する医師・臨床工学士を広く受け入れる準備がある。大学院教育では、「実臨床に役立つ臨床研究」のデザイン法、効率的なデータ収集、周囲に理解されやすい研究発表の手法など、research-mind を持った社会に役立つ医師の育成を目指している。

2-3. 達成度評価

卒前、卒後、大学院教育ともに 90%以上の達成率はあるものと考えられる。卒前教育では、実症例の呈示など、より実践に近い教材を取り入れており、年々改善が図られている。卒後教育として、専門医資格の習得や、医師の指導に関しては大学病院腎臓内科と内容が共通する部分が多い。臨床工学技士の教育に関しては、慢性疾患を主体とする大学病院とは異なる当院血液浄化部の特徴を最大限に活用し、日本でもトップクラスの急性血液浄化件数を武器に、実践的な教育を実施している。他施設で指導的立場となる人材を輩出している。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育：前述のごとく毎年改善を図っている。医学部腎臓内科学講座の実習として「維持血液透析を埼玉医科大学病院で、急性血液浄化療法を国際医療センターで」実習することで、広く血液浄化療法の分野を理解して頂くだけではなく、双方の医療機関の有機的なつながりを体験して貰っている。次年度も学生からの高い評価を得よう、講義実習内容の一層の充実を図る。

卒後教育：多くの診療科の担当スタッフと有機的な連携をとることができる「総合内科専門医・腎臓内科専門医・透析専門医」の育成を目指して、構成員自らそのあるべき姿を模索中である。

大学院教育：臨床研究での英文論文掲載、学位取得を継続的に行っていく

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

当院当科の主な診療対象であり、豊富な症例数を有する、急性腎障害、慢性腎臓病の心血管系合併症、Onco-nephrology などの領域における質の高い臨床研究を継続し、知見を発信していくことが目標である。前年度と比較し、論文・学会発表の質と量を毎年着実に改善していくことが具体的な指標となる。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

急性血液浄化療法に関する研究が、当腎臓内科・血液浄化部の主要課題であることはいまでもないが、維持血液透析や他の腎疾患に関わる臨床研究にも寄与している。維持透析患者における心・脳血管系合併症の予後調査、急性腎障害発症後の長期予後調査、心腎連関と急性腎障害、Onco-nephrology(透析患者のがん治療、抗がん治療に伴う腎障害など)などの臨床研究も行っている。本年度も国内外の学会での発表および論文投稿を継続的に行った。

3-3. 達成度評価

研究内容に関しては上述のように、急性腎障害、急性血液浄化療法、維持透析患者の心血管系合併症、Onco-nephrology などの臨床研究が主体である。持続透析に関連する研究発表は、国内最大規模の症例数に裏打ちされているため、非常に信頼度の高いデータとして、他院のみならずメーカー側からも注目を集めている。持続的腎代替療法を要した心腎症候群の予後研究に関しては、英文誌掲載を得ている。達成度は90%以上と自負している。

3-4. 次年度改善計画

小規模の体制ながら各自が興味を持って熱心に研究に取り組んでいる。大学病院腎臓内科学講座とは互いに綿密な協力体制をとっている。次年度改善計画として、心腎連関と急性腎障害、Onco-nephrology などについての学会発表、論文作成数を増やすために、複数の新たな研究テーマの設定を行う予定である。

4. 診療

国際医療センター腎臓内科・血液浄化部では周術期急性腎障害と、入院中の透析患者の維持透析、Consultation Nephrology が主たる業務と成っている。持続的血液濾過透析の延べ施行回数は年間1000-1500件、症例数は150-200件、その他、血漿交換やエンドトキシン吸着などのアフエーシス施行回数が延べ50件である。同時に入院中の慢性腎不全患者に対する間歇的・通常透析も専用の透析室(最大同時透析施行件数5件)提供している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

AMED 医薬品等規制緩和・評価研究事業 腎領域における慢性疾患に関する臨床評価ガイドライン 腎領域における慢性疾患に関する臨床評価ガイドラインの策定に関する研究班(渡辺)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本透析医学会の英文誌、和文誌の査読および日本腎臓学会の英文誌の査読を担当した。

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

(該当無し)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 渡辺 裕輔, 葉 秀寿, 小島 恵理子, 末吉 慶多, 塚本 功, 岡田 浩一 血液透析の Quality Indicator(QI)としての透析低血圧についての検討 第67回日本透析医学会総会
- ② 渡辺裕輔 急性腎障害の病態と急性血液浄化療法 第33回 日本急性血液浄化学会よくわかるセミナー
- ③ 渡辺裕輔 岡田浩一 分子標的薬と腎障害(解説) 循環器内科 2:169-175
- ④ 渡辺裕輔 岡田浩一 【これだけは知っておきたい! 泌尿器科診療でも活きる腎臓内科の必須知識】腎疾患とがん診療 抗がん剤と腎 抗 VEGF 製剤とマルチキナーゼ阻害薬 臨床泌尿器科 13, 986-991
- ⑤ 渡辺裕輔 岡田浩一 【腎臓症候群(第3版)-その他の腎臓疾患を含めて-[IV]] 中毒性腎障害(薬物性腎障害, 化学物質による腎障害) マルチキナーゼ阻害薬による腎障害 日本臨床 348-351
- ⑥ 渡辺裕輔 岡田浩一 【多臓器不全と急性腎障害(AKI)]臓器障害と AKI TMA(解説) 2022年 90-95 腎と透析
- ⑦ 渡辺裕輔 岡田浩一 【専門性と多様性を両立させる! 泌尿器科外来ベスト NAVI]腎不全 急性腎障害(薬剤性)(解説) 臨床泌尿器科 2022 4:230-233
- ⑧ 宇田 晋 柿沼 望江 関口 安孝 高瀬 久光 渡辺 裕輔 透析医療をささえる人びと 透析患者さんのがんを見つけたら 治療の現場から伝えたいこと 腎不全を生きる 2022 65:25-37
- ⑨ 渡辺裕輔 岡田浩一 【Onco-nephrology:悪性腫瘍治療と腎機能障害】 成人CKD患者におけるがん発生の疫学と特徴 腎と透析 2022 3:533-537

【総数:論文7件、学会発表6件、講演1件】

6-2. 獲得研究費

Baxter(株)奨学研究費

6-3. 受賞

(該当無し)

6-4. 特許、実用新案

(該当無し)

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

日本急性血液浄化学会、埼玉県内科専門医会

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育では、急性腎障害や onco-nephrology などの consultation nephrology に加え、急性血液浄化療法の多様性と可能性を印象深く学んで頂く事に成功している。卒後教育では、具体的目標として各種専門医資格の取得を掲げることで生涯教育にも積極的に取り組んでいる。大学院教育では、豊富な臨床データを基にした臨床研究による論文作成・学位取得を進めている。研究面では臨床研究によるアウトプットとして、論文発表・学会発表を継続的に行っている。診療面で国際医療センター各診療科からの Consultation・併診要請には十分に応えていると自己評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

当院での豊富な症例数を背景に、教育・診療・研究全てにおいて、昨年以上に積極的なアウトプットが可能であると考えている。医学部の教育では、実症例を用いた教育教材・教育方法の改善を行う。大学院教育では、大学病院腎臓内科と協力し博士論文作成を積極的に補助する。診療では、最先端の知見を基にした診療レベルの更なる向上を図る。透析療法では Quality Indicator(QI)を用いて質の評価を客観的に行い、QIの改善を図る。研究では、論文数・学会発表数の増加などが具体的な改善計画になる。

3. 8) 腫瘍内科（腫瘍内科・消化器腫瘍科）

1. 構成員

濱口 哲弥 (HAMAGUCHI Tetsuya)：教授：腫瘍内科診療部長：研究主任：診療主任：指導教員（大学院）：消化器がん薬物療法：博士
畝川 芳彦 (SEGAWA, Yoshihiko)：教授（腫瘍内科）：代表指導教員（大学院）：腫瘍内科学：博士
堀田 洋介 (HORITA Yosuke)：准教授：外来医長：教員（大学院）：消化器がん薬物療法：博士：教育主任
三原 良明 (MIHARA Yoshiaki)：講師：研修医長：病棟医長：消化器がん薬物療法
米盛 勸 (YONEMORI, Kan)：非常勤講師：腫瘍内科学：博士
渡邊 清高 (WATANABE, Kiyotaka)：非常勤講師：腫瘍内科学：博士

2. 教育

2-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

臨床腫瘍内科学に関する卒前・卒後教育を充実する。とくに卒前教育として「腫瘍内科学」という分野が存在すること、なかでもがんゲノム医療や免疫腫瘍学について理解を深められるよう活動していく。

2-2. 教育実績（担当者）

卒前教育では、3年生「診療の基本」及び4年生「腫瘍」の各ユニットで講義を担当した。「腫瘍」では、畝川がユニットディレクターとして運営に関わり、本診療科が担当した以下の講義に加え、その他の腫瘍総論及び各論の講義をマネジメントした。

3年生 診療総論：がん・緩和医療	（畝川）
4年生 腫瘍（総論）：オリエンテーション・薬物療法 1	（畝川）
腫瘍（総論）：がん医療における医療倫理	（渡邊）
腫瘍（各論）：消化器がん	（濱口）
腫瘍（各論）：希少がん	（米盛）

卒後教育としては、毎月定期開催される包括的がんセンター教育カンファレンスのマネジメントを担当（畝川）。大学院教育としては、博士課程の在籍者はいないものの、がんプロフェッショナル養成プランに「がんゲノム医療人養成コース：がんゲノム医療」のe-learning教材をアップロードしており（畝川）、2023年3月末日現在で190名が受講している。保健医療学部の修士課程では「がん看護学特論1：希少がんの診断と治療」の講義を担当した（畝川）。本年度の学位取得者はいなかった。学位審査委員会では主査として1名の審査を担当した（畝川）。

2-3. 達成度評価

卒前、卒後教育は今年度の目標を概ね達成できた。診療で多くのエフォートを割いているために、教育の質の向上が喫緊の課題である。

2-4. 次年度改善計画

来年度からは、卒前教育の中でもとくに臨床実習での内容を充実すること、さらに当院のみならず近隣病院との連携を強化して初期研修および後期研修のシステムを構築していくことを進めていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

対外的には多施設臨床研究グループ活動に積極的に参加して国内臨床腫瘍学の発展に寄与する。参加する臨床試験では積極的に協力し登録上位を目指す。また診療科としても診療に繋がるトランスレーショナルリサーチを、がんゲノム医療科などと共同しておこない論文化することを目指す。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

本診療科では西日本がん研究機構（West Japan Oncology Group：WJOG）に参加し臨床研究を行っている。2022年度は「原発不明癌に対する Nivolumab (ONO-4538) の有効性を検討する第 II 相試験（近畿大学を中核施設とする医師主導型治験）における附随研究」を継続中であり（2024年2月1日まで）、本診療科からは2例を登録。

1. 原発不明癌に対する Nivolumab (ONO-4538) の有効性を検討する第 II 相試験（近畿大学を中核施設とする医師主導型治験）
2. 「原発不明癌に対する Nivolumab (ONO-4538) の有効性を検討する第 II 相試験（医師主導型治験）」における附随研究
研究タイトル1は2018年9月より2021年11月まで実施し、本診療科からは2例を登録した（試験全体の症例数56例）。研究タイトル2は2018年9月より研究を継続中であり（2024年2月1日まで）、本診療科からは2例を登録（試験全体の症例数は研究タイトル1と同じ）。本研究では原発不明がんに対するニボルマブの有用性が示され、希少疾患用医薬品の指定に基づく優先審査の結果、2021年12月24日付で薬事承認された。研究成果は Ann Oncol 誌に公表された（2022年2月）。
3. Stage III 治癒切除大腸癌に対する術後補助療法としてのアスピリンの有効性を検証する二重盲検ランダム化比較試験 (JCOG1503C)
4. 局所切除後の垂直断端陰性かつ高リスク下部直腸粘膜下層浸潤癌 (pT1 癌) に対するカペシタビン併用放射線療法単群検証的試験 (JCOG1612)
5. 「再発リスク因子」を有する Stage II 大腸癌に対する術後補助化学療法の有用性に関するランダム化第 III 相比較試験 (JCOG1805)

6. 切除可能な局所高度進行結腸癌に対する術前 mFOLFOX6 療法と術前 FOLFOXIRI 療法のランダム化第 II 相試験 (JCOG2004)

3-3. 達成度評価

多施設共同研究への登録のみならず業績に示すように論文が進んだ。とくに当科堀田准教授が進めてきたトランスレーショナルリサーチが論文化され公表することができた。本業績により学位を取得することができた。

3-4. 次年度改善計画

次年度も同様に研究活動を積極的に進めていく。

4. 診療

今年度より、これまでの消化器腫瘍科と原発不明癌・希少がん科が統合して、腫瘍内科・消化器腫瘍科とひとつの診療科になった。西埼玉地域の当該領域のがん薬物療法を担う施設として国際標準レベルの質の高い医療を提供できるようにスタッフ一丸となって診療を行ってきた。またがんゲノム医療にも積極的に取り組んで来た。さらに先進医療や治験にも積極的に取り組むことで、当該患者の治療選択肢を増やすとともに、国際的標準治療の確立に注力してきた。次年度は近隣施設との連携を深めて、より効率的に診療を展開できるように体制を整備していきたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

さいたま地方裁判所 さいたま医事関係事件鑑定人候補者
埼玉県生活習慣病検診管理指導協議会大腸がん部会委員
埼玉県がん患者の就労等部会部会長
埼玉県がん対策推進協議会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Japanese Journal of Clinical Oncology の査読委員
日本臨床腫瘍学会「新臨床腫瘍学改定第5版」編集委員会委員
Japanese Journal of Clinical Oncology (査読委員)
第19回日本臨床腫瘍学会学術集会(査読委員)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本老年腫瘍研究会 発起人 濱口
腹膜播種ガイドライン委員 堀田
日本臨床腫瘍学会 協議員・教育企画部会委員 畝川
日本臨床腫瘍学会 協議員・保険委員会 濱口
腫瘍内科医会(内科学会内に設置)運営委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

<論文>

- ① Naganuma, K., Y. Horita, K. Matsuo, Y. Miyama, Y. Mihara, M. Yasuda, S. Nakano and T. Hamaguchi (2022). "An Autopsy Case of Late-onset Fulminant Myocarditis Induced by Nivolumab in Gastric Cancer." Intern Med
- ② 福元 剛, 三原良明, 堀田洋介, 畝川 芳彦, 濱口 哲弥. 大腸癌に対するがんゲノムプロファイリング検査とは. 消化器・肝臓内科 第11巻第3号, 2022年3月発刊.

<学会発表>

- ① A randomized phase III trial of mFOLFOX7 or CapeOX plus bevacizumab versus 5-FU/ LV or capecitabine plus bevacizumab as initial therapy in elderly patients with metastatic colorectal cancer: JCOG1018 study (RESPECT). Tetsuya Hamaguchi, Atsuo Takashima, Junki Mizusawa, Yasuhiro Shimada, Fumio Nagashima, Masahiko Ando, Hitoshi Ojima, Tadamichi Denda, Jun Watanabe, Katsunori Shinozaki, Hideo Baba, Masako Asayama, Tadao Fukushima, Toshiki Masuishi, Ken Nakata, Shunsuke Tsukamoto, Hiroshi Katayama, Kenichi Nakamura, Haruhiko Fukuda, Yukihide Kanemitsu, Colorectal Cancer Study Group in Japan Clinical Oncology Group (JCOG). ASCO Gastrointestinal Cancer Symposium 2022. 2022/01/23 サンフランシスコ(米国)with virtual meeting
- ② 三原良明 Encorafenib plus binimetinib for BRAF V600E mutation-positive colon cancer in case of cetuximab hypersensitivity 第19回 日本臨床腫瘍学会学術集会 2022年2月 京都
- ③ 平崎正孝, 三原良明, 濱口哲弥 大腸癌に対する5-FUを基盤とした術後補助化学療法後の非再発を予測する新規因子の同定, 第81回日本癌学会学術総会 2022年10月1日 横浜
- ④ 堀田洋介 パネルディスカッション2 胆道癌に対する化学療法の現状と展望 コメンテーター 第58回日本胆道学会学術集会 2022年10月14日 横浜
- ⑤ Y. Funakoshi, J. Tanizaki, K. Yonemori, K. Akiyoshi, H. Ueda H, Y. Takiguchi, Y. Miura, Y. Segawa, Komine K, Y. Okikawa, K. Kidera, K. Fukuoka, A. Ito, Y. Chiba, K. Sakai, H. Minami, K. Nishio, K. Nakagawa, H.

Hayashi. Updated analysis from a phase II study on the efficacy of Nivolumab in patients with cancer of unknown primary (NivoCUP). 第20回日本臨床腫瘍学会学術集会. 福岡市. 2023年2月.

【総数：論文2件、学会発表5件】

6-2. 獲得研究費

- ① 令和4年度4月
患者・家族の意思決定能力に応じた適切な意思決定支援の実践に資する簡便で効果的な支援プログラムの開発に関する研究
- ② 令和4年度4月
Stage III 治癒切除大腸癌に対する術後補助療法としてのアスピリンの有用性を検証する二重盲検ランダム化比較試験
- ③ 令和4年度4月
薬物動態/薬力学的指標を変動要因とする用量-反応関係に基づくアムルピシン療法の好中球減少 重篤化回避のための治療薬物モニタリング試験
- ④ 令和4年度4月
成人固形がんに対する標準治療確立のための基盤研究
- ⑤ 令和4年度4月
切除不能または再発食道癌に対するCF（シスプラチン+5FU）療法とbDCF（biweekly ドセタキセル+CF）療法のランダム化第III相比較試験

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

昨年度より、消化器腫瘍科と原発不明癌・希少がん科を統合して腫瘍内科・消化器腫瘍科としてスタートし、原発不明がんの診療体制を構築し安定して運営できるようになった。また初期研修医のローテーション教育、診療および研究の三本柱をバランス良く活動することができた。引き続き教育・診療・研究の三本柱をバランス良く活動できるように体制整備を進めていく。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

今年度から診療スタッフの拡充に向けて勧誘を進めていく。また原発不明がんが疑われる症例の初期診断に関しては総合内科との連携を強化してより迅速に確定診断し治療開始できる体制整備をおこなう。初期研修医への教育、専攻医獲得に向けて活動を広げていく。またF棟で放射線同位元素標識ソマトスタチン類似物質（ルタテラ）の導入に向けて核医学教室と協働して進めていく。また近隣施設との連携を強化して診療活動を拡充していくことを目指す。また研究領域では筆頭著者論文年三本を目標にする。

3. 9) 感染症科・感染制御科

1. 構成員

光武耕太郎 (MITSUTAKE Kotaro) : 教授 : 診療部長 : 感染症、感染制御 : 博士
関 雅文 (SEKI Masafumi) : 教授 : 教育主任 : 感染症、感染制御 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

コアカリキュラムに準拠して、臨床に即した内容とし(臨床実習場を想定など)、専門的になりすぎず“基本事項を確実に”を心掛ける。

2-2. 教育実績(担当者)

光武耕太郎、関 雅文 2人

2-3. 達成度評価

Webが主であり評価は難しいが、試験による評価を行った。

2-4. 次年度改善計画

対面での講義に復帰するのでコアカリキュラムに準拠した基本的な内容と臨床に留意した内容とする。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床感染症センターの活動を、検査室を含めてコロナ前の水準に回復させ、さらにコロナ関連の研究を含めて投稿論文を増やし前年度を上回る数を目標とする。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

呼吸器科と共同で行ったCOVID-19に関する研究が投稿準備中である。新型コロナウイルス感染症に関する英文論文が2本アクセプトされ、さらに投稿準備中である。

3-3. 達成度評価

2022年度は英文論文5編

3-4. 次年度改善計画

臨床感染症センターの活動を維持する。多施設研究(MRSAに関する後ろ向き症例調査)を仕上げる。

呼吸器科と連携して行っているCOVID-19に関する研究を論文投稿する。

4. 診療

新型コロナウイルス感染診療と対策は、地域のみならず県内外の医療にとってきわめて重要であり、埼玉医大や地域の病院と連携しながら病院を挙げて取り組んできた。引き続き、県内外の流行状況を鑑みて柔軟に対応していく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県感染症専門家会議委員、埼玉県コロナ対策COVMATメンバー、東京都iCDC専門家メンバー

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Journal of Infection and Chemotherapy 編集委員・査読委員(光武、関)、Internal Medicine(関)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Chest Wall Tuberculosis After Bacillus Calmette-Guérin Vaccination. *Pediatr Infect Dis J* 2022; 41(11):e504
- ② A Mycobacterium tuberculosis-Infected Patient Who Could Not Tolerate Oral Intake Successfully Treated Using an Intravenous Tedizolid Containing Regimen *Am J Case Rep*, 2022; 23: e937485
- ③ Use of Molnupiravir for COVID-19 Patients in Japan. *Journal of Clinical and Medical Research* 10.37191/Mapsci-2582-4333-4(5)-121
- ④ Sequential Treatment by Antiviral Drugs Followed by Immunosuppressive Agents for COVID-19 Patients with Hematological Malignancy. *Infect Drug Resist.* 2022; 15:7117-7124.
- ⑤ Otitis externa caused by *Malassezia slooffiae* complicated with mastoiditis: A case report. *Journal of Infection and Chemotherapy* 2022; 29:353-356
- ⑥ 当院における細菌性髄膜炎症例の髄液乳酸値の検討 第71回日本感染症学会東日本地方会・第69回日本化学療法学会東日本 合同学会
- ⑦ 白血病治療中に発症した *Rothia mucilaginosa* による髄膜炎の一例 第70回日本化学療法学会総会
- ⑧ *Bacillus cereus* による胃蜂窩織炎の1例 第96回日本感染症学会総会・学術講演会

⑨ COVID-19 専用仮設病棟におけるシミュレーション訓練 第 37 回日本環境感染学会総会・学術集会

⑩ 心臓血管外科緊急手術患者の CLABSI 低減対策 第 10 回日本感染管理ネットワーク学会学術集会

【総数：英文論文 5 件、学会発表 8 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

新型コロナウイルス感染症の影響で計画の実行は難しかった。とくに第 7 波、8 波の時期は地域・県内および近隣県から主に中等症以上の患者を受け入れた。また院内クラスター含め困難な状況であったが、病院を挙げての対応でどうにか乗り切った。教育や学会活動もコロナの影響を強く受けたが、最低限は維持できた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

コロナの流行状況をみながら、通常の診療・研究・教育体制へ戻していく。

3. 10) 総合診療内科（病院診療科）

1. 構成員

林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 (病院診療科)、研究主任 : 総合診療、神経疾患 : 博士
坂本 博文 (SAKAMOTO, Hirofumi) : 助教 : 教育主任 : 総合診療、救命救急医療

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

- ・ 卒前医学については、コロナで中止していた夏季および春季の指定地域医療機関見学の再開を目標としていたが、それぞれについて感染対策を十分にしようとして実施できた。夏季についてはのべ25名、春季についてはのべ19名が参加した。見学後アンケートでは、見学者からは好評であった。
- ・ 以前から取り組んでいた、課外プロ(埼玉の医療)での学習機会のさらなる拡充、地域枠奨学生のコミュニティ形成については、先輩医師の関与も推進できたものと考えている。
- ・ 卒後教育については、地域医療機関とのさらなる密な連携構築と、到達目標達成のための情報共有を目標としていた。地域連携については研修プログラムにおける協力機関の増加ができた。研修医の到達目標達成については、結果的にはできたが、進行は遅く、研修医への度重なる働きかけを要した。

2-2. 教育実績(担当者)

- ・ 卒前教育については、地域医学推進室および医療人育成支援センター地域枠奨学金部門と連携しながら、地域枠奨学生の勉強会の開催にかかわった。また、地域枠奨学生のオリエンテーション、県知事表敬訪問、地域枠奨学生懇談会なども、当科教員がかかわり実施した(林)。
- ・ 卒後教育については、国際医療センター研修管理委員長は当科教員が担い、研修管理、プログラムの検討、地域医療機関との研修目標および評価の共有などを行った(林)。これらを通じ、すべての研修医の到達目標が達成された。救命・救急科において、研修医教育に中心的に深く寄与した(坂本)。

2-3. 達成度評価

卒前卒後教育ともにおおむね目標は達成した。

2-4. 次年度改善計画

- ・ 卒前地域医療教育については、「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成プロジェクト」の本格始動に伴い、地域医療機関と連携して、地域医療、総合診療の教育を推進する。
- ・ 卒後教育については、地域医療機関とのさらなる密な連携構築、到達目標達成のための情報共有、を行っていく。また、卒後臨床研修評価機構の認証更新を目指す。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

- ・ 病院診療に関連しての研究テーマでの研究成果発出は、論文としては未達成であった。
- ・ 日米医学医療交流財団と埼玉医科大学の共催で開催された「医学医療交流セミナー2022」に、コーディネーターとしてかかわった(林)。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- ・ 日米医学医療交流セミナー2022にて演題発表(林)。

3-3. 達成度評価

- ・ 研究については、十分な達成はできていないと考えている。

3-4. 次年度改善計画

- ・ 病院診療に関連しての研究テーマを設定し、発信することを目標とする。

4. 診療

診療科としての目に見える活動実績を残すことを目指す。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県総合医局機構 キャリアコーディネーター(林)

同 専任医師(林)

共用試験医学系 CBT 実施小委員会 ブラッシュアップ専門部会 委員(林)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

J Stroke Cerebrovasc Dis, J Neurosci Res, Brain Res, Intern Med, Neurol Clin Neurosci の査読委員(林)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 大学専門病院における全人的医療実現のシステム作り. 林 健. 2022年医学医療交流セミナー 2022年10月22日
【総数:論文 0件、学会発表0件、講演1件】

6-2. 獲得研究費

なし

6-3. 受賞

6-4. 特許、実用新案

なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

医学医療交流セミナー2022 (日米医学医療交流財団・埼玉医科大学 共催)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育については卒前卒後とも広く目標達成していると考えます。研究については診療科オリジナルな研究実績は不十分と考えています。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

総合診療内科としての研究発表テーマを考えていきたい。

3. 11) 消化器外科

1. 構成員

岡本 光順 (OKAMOTO, Kojun): 教授: 運営責任者: 診療部長: 教育員研究員専門医: 医長: 指導教員(大学院): 消化器外科(肝胆膵): 博士

小山 勇 (KOYAMA, Isamu): 特任教授: 指導教員(大学院): 消化器外科(肝胆膵)・臓器移植: 博士

櫻本 信一 (SAKURAMOTO, Shinichi): 教授: 診療部長: 教育員研究員専門医: 指導教員(大学院): 消化器外科(上部消化管): 博士

佐藤 弘 (SATO, Hiroshi): 教授: 副診療部長: 教育員研究員専門医: 指導教員(大学院): 消化器外科(上部消化管): 博士

平能 康充 (HIRANO, Yasumitsu): 教授: 診療部長: 教育員研究員専門医: 指導教員(大学院): 消化器外科(下部消化管): 博士

合川 公康 (AIKAWA, Masayasu): 教授 (R4.6月～): 研究主任: 副診療部長: 教育員専門医: 指導教員(大学院): 消化器外科(肝胆膵): 博士

榻田 浩文 (SUGITA, Hirofumi): 准教授: 教育主任: 外来医長: 研究員専門医: 教員(大学院): 消化器外科(上部消化管): 博士

宮脇 豊 (MIYAWAKI, Yuataka): 講師: 病棟医長: 教育員研究員専門医: 指導教員(大学院): 消化器外科(上部消化管)

岡田 克也 (OKADA, Katsuya): 講師: 副研究主任: 外来医長: 教育員専門医: 指導教員(大学院): 消化器外科(肝胆膵): 博士

出口 勝也 (DEGUCHI, Katsuya): 講師: 診療副部長: 病棟医長: 教育員研究員専門医: 消化器外科(下部消化管)

渡邊 幸博 (WATANABE, Yukihiro): 講師: 病棟医長: 教育員研究員専門医: 消化器外科(肝胆膵)

渡邊 雄一郎 (WATANABE Yuuichirou): 講師 (R4.7月～): 教育副主任: 研究員専門医: 消化器外科(肝胆膵)

岡崎 直人 (OKAZAKI, Naoto): 助教: 外来医長: 教育員研究員医員: 消化器外科(下部消化管)

高瀬 健一郎 (TAKASE, Kenichiro): 助教: 教育副主任: 研究員専門医: 消化器外科(肝胆膵): 博士

江原 玄 (EBARA, Gen): 助教: 教育員研究員専門医: 消化器外科(上部消化管)

藤井 能嗣 (FUJII, Takatsugu): 助教: 研修医長: 教育員研究員専門医: 消化器外科(下部消化管)

李 世翼 (LEE, Seigi): 助教: 教育員研究員専門医: 消化器外科(上部消化管)

佐々木 恵 (SASAKI, Megumi): 助教: 教育員研究員専門医: 消化器外科(下部消化管)

鳥海 哲郎 (TORIUMI, Tetsuro): 助教: 教育員研究員専門医: 消化器外科(上部消化管)

鈴木 将臣 (SUZUI, Masaomi): 助教: 教育員研究員専門医: 消化器外科(上部消化管) (R4.11月～12月)

田中 裕人 (TANAKA, Hiroto): 助教(臨床フェロー): 教育員研究員医員: 消化器外科(部消化管)

加藤 智敬 (KATO, Tomotaka): 助教(臨床フェロー): 教育員研究員医員: 消化器外科(肝胆膵)

久岡 和彦 (HISAOKA, Kazuhiko): 助教(臨床フェロー): 教育員研究員医員: 消化器外科(上部消化管)

高島 和也 (TAKABATAKE, Kazuya): 助教(臨床フェロー): 教育員研究員専門医: 消化器外科(上部消化管)

米沢 博貴 (YONEZAWA, Hiroki): 助教(臨床フェロー): 教育員研究員医員: 消化器外科

大嶋 侑平 (OOSIMA, Yuuhei): 助教(専攻医): 消化器外科(肝胆膵) (R4.6月～)

石井 利昌 (ISHII, Toshimasa): 非常勤講師: 博士

ディートマー ステファン (Dietmar Stephan): 客員教授

絹笠祐介 (KINUGASA, Yuseke): 客員教授

秋元 尚枝 (AKIMOTO, Naoe): 研究補助員: 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

消化器外科の年間手術件数は約1,400例を超え、がん専門機関として多数の症例を経験することができる。卒前教育では基礎的な知識を修得させ疾患の多様性を認識できる医師になること、卒後教育では、消化器外科領域における幅広い知識と専門性の高い治療法を修得させ、日本の消化器外科をリードする優れた臨床医を育成することが目標である。大学院教育では、消化器外科に関する新たな知見を模索する研究を通じて、外科学の発展に寄与できる基礎をつくり、さらに将来の指導者としての資質向上をめざしている。

2-2. 教育実績(担当者)

当包括的がんセンター消化器病センターでは、内科と外科の垣根がなく連携して診療を行っていることが他施設と比べ大きな特徴である。これにより消化器癌の診断および治療は、外科学、内科学の両面から学ぶことができる。消化器外科では、上部消化管、下部消化管、肝胆膵の臓器別専門チームに分かれ、診療部長を中心にそれぞれ6名ほどのスタッフにより実臨床が行われている。また、スタッフの指導の下、専攻医および専門医取得前後のフェローが教育を受けている。当科ではそれぞれの専門学会の専門医、日本内視鏡外科学会の技術認定医、日本肝胆膵外科学会の高度技能指導医・専門医などの修得をめざす医師への教育に特に力を入れている。

卒前教育では、食道外科を佐藤教授、胃外科を櫻本教授、大腸外科を平能教授、肝胆膵外科を岡本教授が担当してい

る。臨床実習（医学部5年生に対するCCStep1、6年生に対する臨床実習CCStep2,3）は助教を含めた全員で学生の教育・指導を行っている。卒業教育においては、臨床フェロー制度により外部から原則2年間、臓器別にその専門分野で修練を希望する外科医を受け入れている。大学院教育では、研究のデザイン、研究の方法、結果の導き方などを指導し、データの科学的分析法とともに論文作成を指導している。

2-3. 達成度評価

卒業教育では、医学部3,4年生に各講師が講義を行っており、いずれも平均以上の授業評価を受けた。臨床実習（医学部5年生に対するCCStep1、6年生に対する臨床実習CCStep2,3）では手術参加、カンファレンスでのプレゼンテーション、クルズスを通じて消化器疾患の診断から治療の流れを理解させた。また手術手技実習として人工皮膚モデルを用いた皮膚縫合やドライボックスを用いた鏡視下縫合実習も行った。

卒業教育では、研修医に対する教育は大学病院と連携して行い、総論的な外科学の基礎は主に大学病院で行われた。当院では、食道癌、胃癌、大腸・直腸癌、肝臓癌、胆道癌、膵臓癌などの数多くの症例を経験するなかで、縫合や周術期管理などの基礎的な知識や技術を教育し習得させた。また日本外科学会専門医育成に必要な手術経験を積むことができた。専攻医では外科学会専門医取得、臨床フェローの内視鏡外科学会技術認定取得を達成し、高度技能医修得に向けては継続的な教育が実施された。

2-4. 次年度改善計画

卒業教育では、医師国家試験を念頭に消化器外科領域の代表的疾患の診断・治療を臨床実習・クルズスを通して学習させ、国家試験合格率を上げるよう、既出問題を精査し教育に反映させていきたい。

卒業教育では、2022年度に当科を選択した研修医は4名、専攻医は1名であった。当科が悪性腫瘍の診療に特化しているため研修医・専攻医には選択されにくいものと思われる。一方、2022年度の臨床フェローは計4名であった。スタッフから十分な教育を受け多数の手術を経験することにより、定型的な手術を安全に執刀できるようになった。また、難関である内視鏡外科学会技術認定医合格者も輩出した。全国的に外科医不足であるが、次年度も引き続き多数の症例を確保し、研修医を勧誘するとともに、専攻医・臨床フェローに魅力的な教育システムを構築させていきたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

当センターにおける研究は、外科治療の進歩に貢献できる結果を出すことが目標であり、外科臨床の問題点を解決するための研究テーマを重点に研究を行っている。毛呂山の第3実験棟には大動物の手術室があり、通常の臨床に近い麻酔と手術がブタを用いて施行可能である。さらに、国際医療センターの教育研究棟1Fには大動物のウェットラボがあり、若手の外科トレーニングプログラムを検討中である。基礎研究においては、ゲノム医学研究所とのさまざまなコラボレーションを計画中である。

臨床研究では、各グループがさまざまな多施設共同スタディに参加し治療の妥当性有効性を検証している。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

大学病院の動物実験室を利用しながら、教員棟の研究室で臨床の合間をみて研究を行った。

平能班：当院が研究事務局を務める右側結腸癌のリンパ節郭清に関する多施設観察研究をはじめ、炎症性腸疾患合併消化管癌の臨床病理学的研究、大動脈周囲リンパ節転移に関する研究、肛門管癌に関する研究など種々の大腸癌研究会プロジェクト研究に参加している。また、化学療法に関する他施設共同研究(がん集学的治療財団)や、AMED(Stage II 大腸癌に対する術後補助化学療法に関する試験(JCOG1805)、局所切除後の下部直腸粘膜下層浸潤癌(Pt1 癌)に対するカペシタビン併用放射線療法の検証的試験(JCOG1612))、Stage III 治療切除大腸癌に対するアスピリンの有用性を検証する試験(JCOG1503C)に参加し積極的に症例登録を行っている。また、当院のデータベースを用いた後方視的な臨床研究は勿論、鉗子保持によるリンパ組織の障害やセンハンス・デジタルラパロスコーピー・システムのシミュレーター、大腸癌術後の腸管内細菌叢や疲労度の客観的評価に関する基礎的研究も推進している。

櫻本班：JCOG 胃癌グループの臨床試験では、病理学的 Stage II/III で“vulnerable”な80歳以上の高齢者胃癌に対する開始量を減量したS-1術後補助化学療法に関するランダム化比較第III相試験(JCOG 1507)、局所進行胃癌における術後補助化学療法に対する周術期化学療法の優越性を検証することを目的としたランダム化比較第III相試験(JCOG 1509)、進行胃癌を対象とした大網切除に対する大網温存の非劣性を検証するランダム化比較第III相試験(JCOG1711)に参加し症例登録を行っている。また、治験ではONO-4538 第III相試験：胃がんに対する術後補助化学療法における多施設共同二重盲検無作為化試験、ONO-3458 第II/III相試験：切除不能な進行又は再発胃がんに対する多施設共同無作為化試験、MATTERHORN 試験：切除可能な胃及び胃食道接合部がん(GC/GEJC)患者において術前術後補助療法としてデュルバルマブ及びFLOT 化学療法を併用後、術後補助療法としてデュルバルマブを単独投与したときの有効性及び安全性を評価する第III相無作為化二重盲検プラセボ対照試験に参加し症例登録を行っている。当院の胃癌データベースを作成し、腹腔鏡下手術と開腹術の術後成績の比較、各ステージの治療成績の検討、高齢者胃癌の特徴、栄養状態と予後の関係など幅広く臨床研究を推進している。

合川班：生体吸収性材料を用いた組織再生療法(グンゼと共同実験)、大動物を用いた実験栄養学(協和発酵と共同実験)、ナノテクノロジーを応用した新規ステントの開発(リソテックジャパンと共同研究)、臨床検体を用いたがん抗原の探索(北里大学と共同研究)を主なテーマとして行っている。また、産学協同研究において医療版「下町ロケット」を目指した「モノづくり」企画を、埼玉県産業振興公社マッチングにより進めている。

佐藤班：積極的に多施設共同研究を進めている。JCOG 関連では(JCOG1409) 臨床病期 I/II/III 食道癌(T4を除く)に対する胸腔鏡下手術と開胸手術のランダム化比較第III相試験、(JCOG1510) 切除不能局所進行胸部食

道扁平上皮癌に対する根治的化学放射線療法と導入 Docetaxel+CDDP+5-FU 療法後の Conversion Surgery を比較するランダム化第 III 相試験に参加し、登録が終了した。JCOG2013 試験の“臨床病期 I-IVA (T4 を除く) 胸部上中部食道扁平上皮癌に対する予防的鎖骨上リンパ節郭清省略に関するランダム化比較試験”を新たに登録を開始した。治験として、局所進行切除不能食道扁平上皮癌患者を対象とした、デュルバルマブと根治的化学放射線療法との同時併用を検討する第 III 相ランダム化二重盲検プラセボ対照国際共同多施設共同試験（登録中）および A Study of Atezolizumab With or Without Tiragolumab in Participants With Unresectable Esophageal Squamous Cell Carcinoma Whose Cancers Have Not Progressed Following Definitive Concurrent Chemoradiotherapy (SKYSCRAPER-07)（登録終了）である。また AMED の外来がんリハビリテーションプログラムの開発に関する研究（分担研究）の食道癌の外来リハビリテーション（忍容性試験）は当院が基盤施設となり、現在登録が終了し、データ追跡中である。新たに AMED の食道癌術後患者を対象とした外来リハビリテーション介入の多施設共同ランダム化比較試験を、当院が基盤施設となり登録を開始した。採択された科研費で新たに食道がん術後のテーラメード医療を目指した長期的リハビリテーションと栄養管理の検討も登録を開始した。

3-3. 達成度評価

平能班：AMED、大腸癌研究会のプロジェクト研究、がん集学的治療財団および JCOG 大腸癌グループの臨床試験には継続して積極的に参加し、多くの症例を登録した。当院が参加する大腸癌研究会のプロジェクト研究での肥満患者に対する腹腔鏡下手術の安全性の検討と JCOG でのステージIV患者に対する腹腔鏡下手術に関する論文が掲載された。また、当院で施行したセンハンス・デジタルラパロスコピー・システムによる大腸がん手術の短期成績の英文 (Asian Journal of Endoscopic Surgery 15(3) 613-618 2022 年 7 月) や日高プロジェクトによる研究が 4 件で進行中である。

櫻本班：臨床試験・臨床研究を積極的に行った。胃癌に対する腹腔鏡下手術の短期成績および長期成績、噴門側胃切除術の再建法、食道胃接合部癌に対する適正な切除範囲決定と再建法の開発、進行胃癌に対する腹腔鏡下手術の適応拡大、高度進行胃癌に対する術前補助化学療法と conversion surgery の成績などについて、学会発表・講演を積極的に行った。当院の症例をもとに 5 編の英文論文が accept され掲載された。また、JCOG 胃がんグループの臨床試験に積極的に症例登録を行った。

合川班：当院オリジナルの臨床研究として、腹腔鏡下肝切除における ERAS の効果等、後ろ向き試験を含めると多数の臨床研究を行い、成果を発表してきた。基礎研究では、大静脈、肝外胆管、食道、胃、大腸、膀胱再生に関する実験において、研究結果を国内外に報告した。大学院の加藤先生を中心に、創傷治癒促進栄養素の消化管吻合部創傷治癒促進効果について論文作成中である（平成 28 年科学研究費獲得）。立命館大学とバイオミメティクス構造を応用した防汚効果を持つ生体内チューブを開発中であり、本研究にて平成 31 年度の科学研究費を獲得し研究を進めている。このテーマについて大学院生の大嶋侑平先生が追加検討、論文作成中である。産学協同研究も進めており、日本ピストンリング（株）と atraumatic なトロッカー針（BLAKE ドレーンの金属部分）を共同開発中である。公益財団法人 埼玉県産業振興公社 新産業振興部とのマッチング企画では、「腹腔鏡手術におけるサージカルチェアの開発」を行っている。

佐藤班：臨床試験・研究を積極的に施行している。食道癌手術の再建に関する研究、高齢者食道癌に対する研究、感染性合併症に関する研究、食道癌に対する胸腔鏡手術に関する研究、食道癌に対する根治的化学放射線療法後の救済手術に関する研究、周術期管理のプログラムに関する研究・栄養管理の研究を中心に学会発表・講演を積極的に行った。JCOG 試験のほか、AMED・科研費に採択された各臨床研究や臨床治験その他の研究を積極的に施行した。

3-4. 次年度改善計画

上部消化管：

食道癌に対する胸腔鏡下食道切除を積極的に実施し、術後入院期間の短縮および肺炎のリスクの軽減に寄与した。食道癌術後の外来リハビリテーションの介入研究を開始し、保険収載を目指した重要な第一歩となると考えられる。当科は事務局を担当している。胃癌領域、食道癌領域共に JCOG グループの、前向き多施設共同研究に参加している。また、当科で行った胃癌切除例のデータベースを構築し臨床研究を積極的に行ってきた。来年度も、引き続き臨床試験には積極的に参加し、自験例を対象とした臨床研究を推進する方針である。

下部消化管：

当院のデータを使用した臨床研究を積極的に行い、英語論文を多く掲載することができた。多施設臨床試験に関しては、積極的に症例を登録してきたが登録がほとんどできていない試験もあった。次年度は、センハンスに関しては、臨床研究にとどまらず術者の疲労度の評価などの基礎的な研究にも取り組みたいと思っている。その他、個人個人にテーマを与え、単なるデータベースの後ろ向き検討にとどまらず、少し規模の大きい研究費の獲得を狙えるような研究を行い、英語論文を次年度も積極的に作成していく。また、当院が研究事務局を務める大腸癌研究会のプロジェクト研究・右側結腸癌のリンパ節郭清に関する多施設観察研究については論文化を目指す。

肝胆膵外科：

日本肝胆膵外科学会高度技能修練施設として肝胆膵癌の外科的治療と肝胆膵外科医養成に取り組んでいる。これまで 3 名の高度技能専門医を排出することができた。現在さらに 3 名の専門医を目指す若手医師が在籍しており、専門医試験合格に向けてサポートをしていきたい。また、引き続き難治性癌の外科的治療に取り組み、安全確実な手術と周術期管理を念頭に診療にあたりたい。また治療成績向上を目指して術前化学治療の導入のエビデンスを構築し、新たな治療方針を発信していきたい。

4. 診療

消化器系臓器の悪性疾患および悪性類似疾患について、埼玉県全県や近県を対象に「手術」を中心とした診療を行っている。特に、Center of Excellence として、低侵襲手術、腹腔鏡下手術を積極的に取り入れ、手術の安全性の上に患者のQOLを重視してきた。また高難度な手術や合併症をもつハイリスク症例を積極的に受け入れ、こうした症例にも安全な外科治療を心がけている。さらにセンハンス・デジタルラパロスコピーシステムによる新しい手術も各チームで開始された。

上部消化管外科、下部消化管外科、肝胆膵外科、の3診療科ともに全国有数の手術数を誇る施設を維持している。特に腹腔鏡手術の増加は際立っており、センハンスシステムによるロボット手術も増加している。今後も全体のレベルアップを図り、合格率 25%前後と一段ときびしくなった日本内視鏡外科学会技術認定取得医のさらなる増加に努めていく。消化器癌手術の成績向上のために術前術後の全身化学療法の重要性が高まっており、消化器腫瘍科と連携を強めて成績向上に尽くす。手術の安全確保と医療の質の維持向上のために十分な人員の補充を図りつつ、患者満足度の高い診療を行っていく。また消化器外科で研修する若い外科医やフェローの専門医資格取得に向けた技術的指導や、他施設や諸外国からの研修を希望する医師を受け入れて教育病院としての使命を果たしたい。さらに関連科と協力して臨床試験に加わり、あらたなエビデンス構築にも貢献していく。

上部消化管：

2021年度の胃癌に対する胃切除術は194例で、腹腔鏡下手術・ダビンチ手術・開腹術がそれぞれ86例・30例・77例で、術式別には幽門側胃切除術が70例・25例・34例、胃全摘術が8例・3例・40例、噴門側胃切除術が8例・2例・4例であった。胃空腸バイパス術が15例であった。胃GISTに対する手術は14例で、腹腔鏡下手術6例、センハンスロボット支援下手術4例、開腹4例であった。胃癌切除例は2020年が207例で全国5位であった(手術数でわかるいい病院2022 朝日新聞出版)。食道癌に対する食道切除は88例で、胸腔鏡下手術が78例、ダビンチ支援下手術が6例、開胸手術が4例であった。食道バイパス術が3例、その他7例であった。食道良性疾患では大動脈食道瘻手術が4例であった。食道癌切除例は2020年が66例で全国15位であった(同手術数でわかるいい病院2022)。胃癌、食道癌ともガイドラインに沿った診療を行っており、消化器内視鏡科、消化器腫瘍科、放射線腫瘍科とともにチーム医療を展開した。また、大規模臨床試験(JCOG 胃癌グループ・食道癌グループ)にも積極的に症例を登録した。実臨床においては切除不能高度進行癌に対する化学療法の奏功により、R0手術が増加した。さらに高度な手術手技を修得させる教育施設としての役割、臨床研究などによる最先端の研究施設としての役割を達成できるよう体制強化に努め、臨床・研究・教育をバランスよく実施したい。

下部消化管：

2022年の結腸癌切除335例、直腸癌切除158例。結腸癌切除のうち開腹が16例、腹腔鏡が319例、直腸癌切除は開腹1例、腹腔鏡157例で、大腸癌切除総数は493例と前年度とほぼ同様の結果であった。手術数でわかるいい病院2022で大腸がん切除例が全国4位であった(朝日新聞出版)。多くの症例で低侵襲性を生かし合併症も少なく管理できた。研究に関しては、がん集学的治療財団およびJCOGのグループなどの他施設共同研究に臨床試験には継続参加しており、多くの症例を登録した。センハンス手術、経肛門的内視鏡手術や単孔式腹腔鏡下手術などに加えダビンチ手術も積極的に適応拡大し、治療成績を向上させるとともに患者の満足度の高い治療を行っていく

肝胆膵外科：

全手術症例は221例。肝細胞癌56例、肝内胆管癌10例、転移性肝癌54例、等。

胆道癌根治切除は42例。膵癌切除46例。

C型慢性肝炎の薬物治療の進歩により肝胆膵外科手術、特に肝切除は全国的に減少傾向が著明である。膵癌は全てのステージで治療の開始は化学療法からと標準治療で定められた。その結果、手術適応症例が減少しており膵癌の手術例は今後も減少する可能性がある。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

小山：埼玉県難病指定医(2019年11月より)

岡本：埼玉県難病指定医(2019年11月より)

合川：埼玉県難病指定医(2019年11月より)、埼玉県肝がん集団検診医会担当理事(平成28年4月より)

平能：埼玉県がん検診委員(2022年2月より)

櫻本：埼玉県がん集団検診医会胃がん担当(2022年4月より)

佐藤：埼玉県難病指定医(2019年11月より)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

World Journal of Surgery 査読委員(小山)、日本ヘルニア学会誌顧問(小山)、Scientific Reports 査読委員(小山)

Journal of the Pancreas 査読委員(岡本)、Journal of Huazhong University of Science Research 編集委員

(平能)、nce and Technology 査読委員(岡本)、World Journal of Clinical Oncology 編集委員(岡本)、Digestive

Medicine Research 編集委員(平能)、Journal of Clinical Oncology 査読委員(佐藤)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

①理事

埼玉県腎・アイバンク協会副理事長(小山)、日本外科代謝栄養学会(佐藤)、埼玉県外科医会理事(岡本)

②評議員

日本臨床外科学会（岡本、平能、佐藤）、日本手術医学会（小山）、日本外科学会（櫻本）、日本肝胆膵外科学会（岡本、合川、岡田、渡邊、渡辺、加藤）、日本胃癌学会（櫻本）、日本食道学会（櫻本、佐藤、宮脇）日本内視鏡外科学会（櫻本、平能、梶田）、日本外科系連合学会（小山、岡本、佐藤）、日本外科感染症学会（佐藤）、日本臨床栄養代謝学会（佐藤）、日本臨床代謝栄養学会関東支部（佐藤）、日本外科代謝栄養学会（佐藤）、日本胸部外科学会（佐藤）、日本胸部外科学会関東甲信越地方会（佐藤）、日本消化管学会（佐藤）、日本がんサポーターティブケア学会（佐藤）

③その他

日本ヘルニア学会名誉会長（小山）、日本胸部外科学会専門医会員選出委員・チーム医療推進委員（佐藤）、日本外科代謝栄養学会保険診療検討委員会委員長・財務委員委員長・学術交流推進委員会委員・周術期管理検討委員会委員（佐藤）、日本臨床栄養代謝学会臨床栄養コンセンサス検討委員会ワーキンググループ委員（がん）・医師・歯科医師セミナーWG委員：（佐藤）、東京家政大学大学院非常勤講師（佐藤）、日本胃癌学会倫理委員会委員（櫻本）、日本内視鏡外科学会技術審査委員会委員（櫻本）、日本内視鏡外科学会 E ラーニング検討委員会委員（櫻本）、関東腹腔鏡下胃切除研究会常任世話人（櫻本）、埼玉胃癌研究会代表世話人（櫻本）、埼玉消化管セミナー代表世話人（櫻本）、北里大学医学部客員教授（櫻本）、埼玉食道疾患懇話会世話人（佐藤）日本がんサポーターティブケア学会リハビリテーション部会副会長（佐藤）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①Relative dose intensity and 1 - year psoas muscle index reduction rate as prognostic factors in gastric cancer patients with postoperative adjuvant chemotherapy
Shohei Fujita, Shinichi Sakuramoto, Kazuaki Matsui, Gen Ebara, Keiji Nishibeppu, Shuichiro Oya, Shiro Fujihata, Seigi Lee, Yutaka Miyawaki, Hirofumi Sugita, Hiroshi Sato, Keishi Yamashita.
International Journal of Clinical Oncology 2023 Jan;28(1):110-120
- ②Keiji Nishibeppu, Shinichi Sakuramoto, Kazuaki Matsui, Gen Ebara, Shohei Fujita, Shiro Fujihata, Shuichiro Oya, Seigi Lee, Yutaka Miyawaki, Hirofumi Sugita, Hiroshi Sato, Keishi Yamashita. Dismal prognosis of elderly gastric cancer patients who underwent gastrectomy with American Society of Anesthesiologists (ASA) 3, Langenbeck's Archives of Surgery 2022 Dec 407(8):3413-3421
- ③Miyawaki Y, Sato H, Lee S, Fujita S, Oya S, Sugita H, Hirano Y, Okamoto K, Koyama I, Sakuramoto S. Impact of the coronavirus disease 2019 pandemic on first-visit patients with oesophageal cancer in the first infection wave in Saitama prefecture near Tokyo: a single-centre retrospective study, Japanese Journal of Clinical Oncology, 52(5):456-465, 2022 May 5.
- ④Short-term results of robot-assisted colorectal cancer surgery using Senhance Digital Laparoscopy System. Megumi Sasaki, Yasumitsu Hirano, Hiroki Yonezawa, Satoshi Shimamura, Atsuko Kataoka, Takatsugu Fujii, Naoto Okazaki, Shintaro Ishikawa, Toshimasa Ishii, Katsuya Deguchi, Hiroshi Sato, Shinichi Sakuramoto, Kojun Okamoto, Isamu Koyama.
Asian J Endosc Surg 2022 Jul;15(3):613-618.
- ⑤Risk Factors for Lymph Node Metastasis and Recurrence in T1 Colorectal Cancer: Analysis of 801 Patients in a Single Institute.
Shintaro Ishikawa, Yasumitsu Hirano, Katsuya Deguchi, Toshimasa Ishii, Yasuhiro Ishiyama, Naoto Okazaki, Takatsugu Fujii, Atsuko Kataoka, Megumi Sasaki, Satoshi Shimamura, and Hiroki Yonezawa.
The American Surgeon 2022, Vol. 0(0) 1-6
Research article First published online December 20, 2022
- ⑥Does pathological T-factor affect the long-term prognosis of locally advanced colorectal cancer treated with Laparoscopic multi-visceral resection?
Yasuhiro Ishiyama, Yasumitsu Hirano, Hiroki Yonezawa, Megumi Sasaki, Takatsugu Fujii, Naoto Okazaki, Toshimasa Ishii, Katsuya Deguchi.
Cancer Diagn Progn. (Cancer Diagnosis & Prognosis) 2023 Mar-Apr; 3(2): 236-243.
- ⑦QI 活動を通じて行う外科医療の質改善と医療安全確保への取り組み
岡本光順, 小山 勇, 加藤智敬, 渡辺雄一郎, 高瀬健一郎, 渡邊幸博, 岡田克也, 合川公康, 櫻本信一, 平能康充, 佐藤 弘.
第 84 回日本臨床外科学会総会：2022 年 11 月 25 日
- ⑧肝臓外科領域におけるロボット支援下手術
合川公康.
第 35 回日本内視鏡外科学会総会/アジアロボット・内視鏡外科学会 (ACRLS2022)：2022 年 12 月 9 日
- ⑨肝細胞癌に対する腹腔鏡下肝切除術の切除断端距離と再発の関連について
渡邊幸博, 合川公康, 岡本光順.
第 44 回日本肝臓学会東部会：2022 年 11 月 25 日

【総数：論文 23 件、学会発表 140 件、講演 17 件】

6-2. 獲得研究費

- ①合川公康：平成 31-令和 3 年度 文部科学省科学研究費(基盤研究 C)：バイオミメティクス構造を応用した防汚機能を有する生体内チューブの開発
- ②櫻本信一：令和 2-令和 4 年度 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) 革新的がん医療実用化研究事業:病理学的 Stage II/III で“vulnerable”な 80 歳以上の高齢者胃癌に対する開始量を減量した S-1 術後補助化学療法に関するランダム化比較第 III 相試験 (JCOG1507)
- ③櫻本信一：令和 2 年度-令和 4 年度 国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) 革新的がん医療実用化研究事業:進行胃癌を対象とした大網切除に対する大網温存の非劣性を検証するランダム化比較第 III 相試験 (JCOG1711)
- ④佐藤 弘：2022 年度 科研費 基盤研究(C)食道がん術後のテーラメード医療を目指した長期的リハビリテーションと栄養管理の構築
- ⑤平能康充：国立研究開発法人日本医療研究開発機構 (AMED) 革新的がん医療実用化研究事業「局所切除後の垂直断端陰性かつ高リスク下部直腸粘膜下層浸潤癌 (pT1 癌) に対するカペシタビン併用放射線療法の単群検証的試験 (JCOG1612)」

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

櫻本信一：第 31 回消化器疾患病態治療研究会当番会長 (2022 年 9 月)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

国際医療センターの開設後 16 年となり、内科・外科の垣根のない消化器病センターを掲げて活動を続けてきた。上部消化管外科、下部消化管外科、肝胆膵外科の 3 診療科の体制も安定した。症例数は増加から横ばいであるが、土曜日の手術枠をそれぞれの診療科が恒常的かつ有効に利用することでこの数を維持している。外科診療、臨床教育についてはほぼ満足のいく成果が上げられたと評価している。下部消化器外科のスタッフの多くが入れ替わったが、手術件数は、増加傾向であり、いずれの部門でも全国トップレベルを維持している。またロボット手術を昨年度より開始した。研究面では、腫瘍外科、再生医療の領域における基礎研究を継続しているとともに低侵襲手術に関する臨床研究を推進している。薬物治療や癒着防止剤の治験にも取り組んでおり、これを継続していく。学会活動では日本外科学会学術集会や日本消化器外科学会総会といった主要な学会に多くのスタッフが発表し意欲的に活動しているが、英文発表が要約増加傾向となってきたが、今後も増加を図る。毎年恒例の外科・内科合同の消化器病センター年次報告会では、各部門からの教育・研究・臨床の業績報告を行っている。1 年の業績を振り返って、次年度の教育・研究・臨床の事業を計画的に行っていくとともに、診療科の交流の場として継続してゆく。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

低侵襲手術の充実として、腹腔鏡手術の安全性と効率性を高めてゆく。ロボット手術の診療科を超えたチームを結成する。婦人科腫瘍科、泌尿器腫瘍科も交えて手術手技の問題点や有効な点を共有して、安全な手技を確立してゆく。長年の課題だった英文論文作成がようやく増加傾向となってきたが、消化器外科の全診療科で増加を図っていく

3. 12) 乳腺腫瘍科

1. 構成員

佐伯 俊昭 (SAEKI, Toshiaki) : 教授 : 病院長 : 診療副部長 : 指導教員 (大学院) : 乳癌薬物療法、薬剤感受性 : 博士
大崎 昭彦 (OSAKI, Akihiko) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任、研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 乳癌予後因子と効果予測因子、手術手技 : 博士
長谷部 孝裕 (HASEBE, Takahiro) : 教授 : 教育員、研究主任 : 指導教員 (大学院) : 乳癌病理診断、乳癌予後因子 : 博士
石黒 洋 (ISHIGURO, Hiroshi) : 教授 : 診療副部長 : 教育主任、研究副主任 : 指導教員 (大学院) : 乳癌薬物療法・有害事象、薬剤耐性、薬物動態・代謝 : 博士
松浦 一生 (MATSUURA, Kazuo) : 准教授 : 教育員、研究員 : 指導教員 (大学院) : 乳癌の外科・薬物療法、遺伝性腫瘍 : 博士
横川 秀樹 (YOKOGAWA, Hideki) : 講師 : 教育員、研究員 : 形成外科学、手術手技
浅野 彩 (ASANO, Aya) : 講師 : 教育員、研究員 : 博士
島田 浩子 (SHIMADA, Hiroko) : 助教 : 教育員、研究員 : 博士
平塚 美由起 (HIRATSUKA, Miyuki) : 助教 : 教育員、研究員
貫井 麻未 (NUKUI, Asami) : 助教 : 教育員、研究員
藤本 章博 (FUJIMOTO, Akihiro) : 助教 : 教育員、研究員
一瀬 友希 (ICHINOSE, Yuki) : 助教 : 教育員、研究員
榊原 彩花 (SAKAKIBARA, Ayaka) : 助教 : 教育員、研究員
杉山 佳奈子 (SUGIYAMA, Kanako) : 助教 : 教育員、研究員
柳川 裕希 (YANAGAWA, Yuki) : 助教 : 教育員、研究員
中目 絢子 (NAKAME, Ayako) : 助教 : 教育員、研究員
黒澤 多英子 (KUROSAWA Taeko) 助教 : 教育員、研究員

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

本基本学科では、乳癌の疫学に始まり診断における一連の流れを理解し習得する。診断面では乳腺疾患に対する正確な診断能力と診断技術を習得する。治療面では外科的基本手技の習得をするとともに特に乳癌の外科的治療につき理解し技術を習得する。最終的に乳癌患者の治療戦略をひとりで構築できる能力を習得することが目標である。大学院教育においては乳腺外科学・腫瘍学に標準的な知識と技術を習得し、さらに最先端の診療について理解し、乳腺腫瘍学領域の臨床的研究が行える人材の育成を行うことを目標に教育活動を行った。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育で運営に関わったユニット (科目) は、5・6年生内分泌・代謝・腫瘍ユニットのユニットディレクター (大崎・石黒) である。卒前教育で講義・演習・実習、臨床実習等を担当したのは、3・4・6年生内分泌・代謝、腫瘍ユニット (石黒・松浦・島田・浅野) である。

その他、卒前教育では共用試験臨床実習前 OSCE 評価者 (一瀬)、共用試験臨床実習後 OSCE 評価者 (貫井) を担当した。

卒後教育としては、専攻医 4 人 (2 年目黒澤、3 年目中目、4 年目杉山・柳川) の研修を行っており、3 人が外科専門医・1 人が乳腺専門医を取得した。大学院教育としては、博士課程 4 人 (4 年生平塚、3 年生一瀬・藤本・榊原・2 年生横川・1 年中目) が在籍している。

2-3. 達成度評価

コロナ禍で、一時的に短縮ローテを強いられることもあったが、前期研修のローテターにはクルズスを組み、①乳腺腫瘍科とは②乳癌とは③乳腺疾患患者の診察方法と心得④画像診断⑤組織診断⑥治療方針の考え方⑦手術療法・外科手技⑧乳癌手術に関わる胸部解剖⑨全身薬物療法 (化学療法&ホルモン療法) ⑩遺伝性乳癌および遺伝子パネル検査の内容で講義を行った。個別にマンモグラフィの読影の講義などを行い、基本的なマンモグラフィとエコーの読影を習得させることができた。手術の第 2 助手を務めさせ、基本的な外科手技である縫合、糸結びを単独で施行可能になるまで指導できた。以上より、本年度の目標については、十分達成できたと評価する。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度は学生には限られた講義のなかで外科の魅力と臨床腫瘍学の一端を担う乳癌の治療の重要性と将来性を伝え、少しでも興味を持たせたい。5 年生のクリニカルクラークシップ、6 年生のアダバンストクラークシップでは診療での魅力に加え、自分のキャリアパスを考える場として色々なアドバイスを提供したい。研修医、特に後期研修のローテターには手術を積極的に指導し、治療面での当科の魅力をさらにアピールしたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

研究の成果が実地臨床の場で反映されることを目標に、基礎と臨床を結びつける translational research を中心に研究を行っている。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

①効果予測遺伝子マーカーを用いた術前予後予測の臨床的意義②ER 関連蛋白とホルモン耐性の基礎的研究③乳癌診

療ガイドライン作成のためのデータベース構築④乳癌におけるマウス移植モデルを用いた治療効果に関する研究⑤治療効果の画像診断および病理診断⑥高齢者乳癌の生物学的特徴と予後に関する研究⑨併存疾患を有する乳癌の生物学的特徴に関する研究⑦乳癌間質の組織形態像および生物学的性状に基づく癌悪性度に関する研究⑧若年性乳癌と家族性腫瘍に関する研究⑩形態病理学的 tumor budding (TB) の予後因子としての重要性⑩浸潤性乳管癌における vimentin 発現の有用性および悪性度亢進機序の解明を網羅的遺伝子解析のデータを加えて掘り下げた研究が進行中である。

3-3. 達成度評価

ホルモン抵抗性乳癌に対する遺伝子学的解析をゲノム医学研究センター遺伝子情報制御部門との共同で行い、新たな因子の臨床的意義について研究を進めている(乳癌における化学療法ならびにホルモン療法耐性に関与する因子の発現に関する臨床病理学的研究)。浸潤性乳癌の形態病理学的因子(tumor budding、vimentin など)を多くの症例で確認し予後因子としての有用性を再検討する研究を進めている。

3-4. 次年度改善計画

これらを踏まえ、次年度は、ゲノム医学研究センター遺伝子情報制御部門と共同して、新規の乳癌遺伝子学的解析を進めていき、がんゲノム医療の発展に寄与できるように取り組んでいく。

4. 診療

コロナ禍の影響下においても、新規患者数及び手術症例数は右方上がりに増えている。診療及び治療には、高性能な最先端機器を導入しており、迅速で正確な診断の後に低侵襲手術を実施し、入院日数の短縮に大いに貢献している。一方で、遺伝性乳癌卵巣癌総合診療機関施設であるため、遺伝カウンセリングを行う施設として県の中核的な役割を担っている。次年度は働き方改革にも通じるべく、新規カルテ導入に合わせて教育・研究が一体となる診療システムの構築を模索する。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

佐伯俊昭は埼玉県医師会がん診療連携検討部会、埼玉県がん対策推進協議会の委員を務め、日本がんサポーターブケア学会の理事長として活動し、大崎昭彦は日本乳癌検診学会理事、学会誌編集委員長、日本がんサポーターブケア学会の理事として活動し乳癌の診断、治療両面から活躍している。松浦一生は日本乳癌学会の評議委員として活動し、地域医療の充実及び遺伝カウンセリングシステム構築に努力している。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

佐伯俊昭は International Journal Clinical Oncology, Breast Cancer の査読委員を務めている。大崎昭彦は Breast Cancer の査読委員、日本乳房オンコプラスティックサージャリー学会誌の編集委員、日本乳癌検診学会誌の編集委員長を務めている。

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

大崎は埼玉県生活習慣病検診管理指導協議会乳がん部会委員を務め、医局員は地域の乳がん検診に一部参画しており、近隣の医師会や薬剤師会への学術的講演の依頼もあり、社会的貢献も行っている。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書 ※10件以内

- ① Matsuura K, Tsurutani J, Inoue K, Tanabe Y, Taira T, Kubota K, Tamura T, Saeki T. A phase 3 safety study of fosnetupitant as an antiemetic in patients receiving anthracycline and cyclophosphamide: CONSOLE-BC. Cancer. 2022 Apr 15;128(8):1692-1698.
- ② Fujimoto A, Sakakibara A, Numajiri Y, Matsuura K, Kawasaki T, Osaki A, Saeki T. Carney complex with multiple breast tumours including breast cancer: a case report. Oxf Med Case Reports. 2022 Jun 23;2022(6):omac063.
- ③ Hiratsuka M, Hasebe T, Ichinose Y, Sakakibara A, Fujimoto A, Wakui N, Shibasaki S, Hirasaki M, Yasuda M, Nukui A, Shimada H, Yokogawa H, Matsuura K, Hojo T, Osaki A, Saeki T. Correction to: Tumor budding and fibrotic focus-proposed grading system for tumor budding in invasive carcinoma no special type of the breast. Virchows Arch. 2022 Aug;481(2):161-190.
- ④ Hata A, Okamoto I, Inui N, Okada M, Morise M, Akiyoshi K, Takeda M, Watanabe Y, Sugawara S, Shinagawa N, Kubota K, Saeki T, Tamura T. Randomized, Double-Blind, Phase III Study of Fosnetupitant Versus Fosaprepitant for Prevention of Highly Emetogenic Chemotherapy-Induced Nausea and Vomiting: CONSOLE. J Clin Oncol. 2022 Jan 10;40(2):180-188.
- ⑤ 松浦 一生, 大崎 昭彦, 一瀬 友希, 藤本 章博, 貫井 麻未, 佐伯 俊昭: 一次乳房再建を省略した nipple-sparing mastectomy を行った乳癌の 4 例. 日本臨床外科学会雑誌 2022. 83(2). 293-300
- ⑥ 佐伯俊昭: 【乳癌診療の最新の知識】 高齢者乳癌の課題: 臨牀と研究 2022. 99(8). 995-998
- ⑦ 石黒洋: Breast and Endocrine Tumor 乳腺内分泌腫瘍 周術期早期乳がん補助薬物療法の新たな展開 Luminal 乳癌患者の予後を改善のために. 癌と化学療法. 2022. 49(12). 1312-1316

- ⑧ 上田 重人, 藤堂 真紀, 島田 杏子, 三原 誠, 原 尚子, 高橋 孝郎, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭: タブレットアプリと加速度センサーを用いた乳癌患者の症状モニターリングの有用性. 乳癌の臨床 2022. 37(1). 73-81
- ⑨ 一瀬 友希, 松浦 一生, 黒澤 多英子, 藤本 章博, 榎原 彩花, 貫井 麻未, 平塚 美由起, 浅野 彩, 島田 浩子, 近藤 奈美, 佐野 弘, 横川 秀樹, 小坂 愉賢, 長谷部 孝裕, 高橋 孝郎, 石黒 洋, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭: トリプルネガティブ乳癌患者における免疫チェックポイント阻害剤投与症例の検討. 第 30 回日本乳癌学会総会. 横浜 2022. 06
- ⑩ 貫井 麻未, 松浦 一生, 黒澤 多英子, 一瀬 友希, 藤本 章博, 浅野 彩, 平塚 美由起, 島田 浩子, 小坂 愉賢, 石黒 洋, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭: HER2 陽性乳癌の術前化学療法症例の検討. 第 30 回日本乳癌学会総会. 横浜 2022. 06

【総数: 論文 8 件、学会発表 18 件、講演 0 件

6-2. 獲得研究費

- (1) 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C)「エストロゲン受容体 PET による進行転移乳癌の CDK4/6 阻害剤併用療法評価」課題番号: 19K08207 研究分担者 佐伯俊昭、大崎昭彦、松浦一生 0 円
- (2) 文部科学省科学研究費補助金 挑戦的研究(萌芽)「患者由来がんモデルに基づくミトコンドリア代謝変容による治療抵抗性機構の解明と応用」課題番号: 22K19572 研究分担者: 佐伯 俊昭 500 千円
- (3) 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C)「がん性創傷のにおいに関する在宅版マネジメントモデル(患者・医療従事者用)の構築」課題番号: 19K10861 研究分担者: 小坂愉賢 100 千円
- (4) 厚生労働省科学研究費補助金 がん対策推進総合研究事業 「高齢者がん診療ガイドライン策定とその普及のための研究」課題番号: 21EA1004 9200 千円
- (5) 厚生労働省科学研究費補助金 がん対策推進総合研究事業 「がん診療連携拠点病院等の施設間の支持療法の均てん化の実現に資する研究」課題番号: 21EA1006 0 円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

診療面では、平成 16 年 7 月開設以来、紹介患者数も含めた新規患者数は着実に増え、セカンドオピニオンを求めて当科を受診する患者も増加し、乳癌関連手術が 500 例を超えたことは評価できる。令和 2 年 4 月 1 日より横川秀樹講師(形成外科医)、令和 2 年 8 月 1 日より石黒 洋教授(腫瘍内科医)が加わり、さらに、新しく始まった外科専門研修プログラムに則り、埼玉医科大学外科専門研修プログラムのローテーションにを選択し令和 2 年 4 月 1 日より専攻医として中目絢子助教(シエルレジデント) 令和 3 年 4 月 1 日より黒澤多英子助教が入局した。

研究面でも令和 5 年 3 月に平塚助教が学位を取得した。また、新たな研究プロジェクトも立ち上がり、promising なデータが蓄積されており、学会発表や論文発表も積極的に行えた。基礎と臨床の溝をうめ、橋渡しとなるべくユニークな立場をとり、この点においてさらに特色を鮮明にし、貢献したいと考えている。今後は、質のいい臨床研究をデザインし積極的に推し進めたい。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

症例数の増加に対応して、令和 5 年 4 月より山口 慧助教が帰局し、大原 正裕准教授(乳腺専門医)が新たに加わることとなる。臨床への応用が進むがんゲノム医療の充実や BRCA 遺伝学的検査の保険適応追加に伴う遺伝カウンセリング体制の構築を進めていきたい。研究面では学位取得予定者の研究報告が予定されているが、当科の研究として、次世代シーケンサーを用いた網羅的遺伝子解析を加えた新たな基礎研究、臨床研究の発案と実行を行う。

3. 13) 呼吸器外科

1. 構成員

- 石田 博徳 (ISHIDA, Hironori) : 准教授/教授: 運営責任者: 診療部長/診療副部長: 研究主任
: 代表指導教員 (大学院): 肺癌、縦隔腫瘍、気胸: 博士
- 坂口 浩三 (SAKAGUCHI, Hirozo) : 准教授: 副診療部長/-: 教育主任/-: 指導教員 (大学院): 肺癌、縦隔腫瘍、中皮腫
: 博士
- 二反田 博之 (NITANDA, Hiroyuki) : 講師/准教授: 研究員/診療部長: -/教育主任: 大学院教員 (大学院)
: 肺癌、縦隔腫瘍、気管支鏡: 博士
- 柳原 章寿 (YANAGIHARA, Akitoshi) : 助教: 研究員: 大学院教員 (大学院): 修士
- 田口 亮 (TAGUCHI, Ryo) : 助教: 研究員: 大学院教員 (大学院): 修士
- 梅咲 徹也 (UMESAKI, Tetsuya) : 助教: 研究員: 大学院教員 (大学院): 修士
- 市来 嘉伸 (ICHIKI, Yoshinobu) : 助教: 研究員: 大学院教員 (大学院): 修士: 令和4年6月1日～
- 濱田 洋輔 (HAMADA, Yosuke) : 非常医師: 令和5年1月1日～

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

「卒前教育」医学生は実臨床に必要な基本的医学知識と呼吸器外科特有の知識を学び、手術見学・参加により外科の基本手技を学ぶ。また、クリニカルクラークシップ(CC)においては患者を受け持ち、医療面接や診察、周術期の管理を体験する。

「卒後教育」初期研修医は臨床医として必要不可欠な外科一般および呼吸器外科領域の診療技術を診療チームの一員として習得する。第2助手として胸腔鏡手術のカメラワークを学ぶ。肺部分切除・自然気胸の手術(胸腔鏡手術)の術者経験を一つの目標とする。担当症例の診断と外科治療の経験・考察を地方会や研究会などの学会で発表する。後期研修医(専修医)は初期研修の習得事項に加えて多様な症例を経験し第2、第1助手となる。縦隔腫瘍摘出や肺葉切除などの術者経験を目標とする。外科専門医資格を取得する(卒後5-6年目)

「大学院教育」呼吸器関連の専門医の資格習得、疾患知識の充実、手術技術のさらなる向上を目指し、研修医へ指導が可能になる。

2-2. 教育実績(担当者)

「卒前教育」①医学生3年、5年、6年の臨床講義、試験問題の作成(坂口、石田、二反田)。②臨床実習、CC1: 教育指導(医局員全員): 胸部画像の読影、患者診察、手術参加、受け持ち症例のプレゼンテーション。患者から学ぶ姿勢を身に着ける。CC2とCC3: CC1に加えて複数の患者を受け持ちスタッフの一員に準じてチーム医療に参加する。ブタの心肺を用いた肺切除の実習。興味ある症例の地方会発表(指導します)③特別カリキュラムにおける呼吸器外科実習(医局員全員)。④卒前教育会議への出席した(坂口)。

「卒後教育」初期ないし後期研修医は、前記2-1目的・目標に沿って外科の基本手技を習得し、実臨床の中で呼吸器外科領域の検査、診断、治療を経験する。後期研修医には、複数の手術を執刀する機会を与える(医局員全員)。研修管理委員会での活動(坂口)。

「大学院教育」大学院教員4名と非常勤医師に、執刀医として手術技術の向上のための指導を行った(石田、坂口、二反田)。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」コロナの影響で、一時中断になることもあったが補修で調整し、医局員の熱心な教育指導により80%は達成した。5年生CC1の半数が日高の呼吸器外科を1週間ローテし、評価は5段階評価で5が最も多く、高評価であった。CC2,3では希望者が地方会発表を行った(表彰された)。「卒後教育」当科ローテーターの研修後のアンケートでは80%以上の満足度得た。特に臨床実技習得の満足度が高い。「大学院教育」1名(梅咲)が呼吸器外科専門医の資格を習得した。

2-4. 次年度改善計画

「卒前教育」学生・研修医からの感想・要望を参考に、医局全員による教育指導を継続する。「卒後教育」当科ローテーターの研修医の数を増やし、専攻医の外科専門医取得のため指導を行う。「大学院教育」術者としての手術技術の向上と指導医としての育成を継続する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

原発性肺癌、転移性肺腫瘍、中皮腫、自然気胸に関する基礎研究およびその診断・治療・予後の臨床研究を行い、データを整理し、学会報告し、論文発表を目標とした。また、手術で用いる、新たな工夫や新規手術機器の開発を行い、学会報告をめざした。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

1. 肺癌の病理組織学と疫学研究(石田ら): 臨床研究(18-023)「原発性肺癌切除例における上皮内腺癌、微少浸潤性腺癌、浸潤性腺癌の臨床病理学的特徴と予後」に関して、データ解析と結果をまとめ、論文作成中である。次年度には完成予定である。
2. 気道ステントに関する研究と臨床での適応と工夫(二反田ら): 学会で報告(以下6-1-①)した。
3. 手術機器の開発と臨床現場での使用レビュー(坂口): 学会発表(以下6-1-②④)した。
4. 日常臨床で経験したまれな腫瘍や気管支形成などの手術の工夫に関して研究(田口): (以下6-1-③) 発表した。
5. 肺癌における癌免疫の研究(柳原ら): 肺癌手術症例における抗腫瘍T細胞免疫の調査「Immunological impact of surgery in NSCLC patients」手術材料を用いた呼吸器内科との共同の臨床研究で、データ収集後の解析結果を論文文化し投稿中である。: 学会発表(以下6-1-⑥)
6. 低肺機能に対する周術期の気管支拡張薬の有効性に関して(田口ら): 術前術後の肺機能データの評価と長期経過観察における有用性の検討中である。
7. 難治性気胸に対する胸膜癒着術の工夫(田口、梅咲): 高リスクで手術の不可能な難治性気胸に対する治療法の検討
8. 電動式デジタル低圧吸引器(Thopaz)を用いた持続胸腔ドレナージの臨床使用(梅咲): 1) エアリークの定量評価による術後管理の有用性、2) 術後病棟管理における他職種(看護・リハビリ)の業務改善度に関して研究計画中。
9. 呼吸器外科研修中の医学生や研修医の研究論文(症例報告の指導)(医局員全員): (以下6-1-⑦⑧)
10. 肺癌に対する免疫療法後の手術検体や血液中の免疫応答に関する研究(市来): (以下6-1-⑨)

3-3. 達成度評価

研究1、2、3では、データ収集と解析、結論に至り、報告したと言う点では順調に活動できたといえる。研究4は結果が出た点では、目標に達成したといえる。研究5、6、9はデータを追加し、有効性と有用性の証明途中であるが、研究は前進している。研究8は手術器具の新規改良を行い、試作機の有用性を再評価中である。

3-4. 次年度改善計画

研究1と4は、論文作成とともに全国または国際学会での発表に取り組む。研究5、6、9は追加したデータをもとに、臨床上の有用性・有効性の結論を出し、学会報告と論文文化に取りかかる。

4. 診療

呼吸器外科では、胸部に関する多くの疾患に対する手術治療や外科的処置を行っているが、原発性肺癌に対する治療は重要な課題であり、令和4年末からコロナ収束に合わせて、原発性肺癌手術や気胸・嚢胞性疾患の保村的ないし外科的治療症例は右肩上がりである。その他胸部疾患に対する手術では、とくに重篤な合併症は無く、安全な治療ができた。また、当科医師間のチームワークも良く、他職種との連携で、患者さんの満足できる治療ができたと思われる。紹介医療機関との連携にも力を入れ、患者中心の医療を実践した。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本呼吸器内視鏡学会誌査読委員(坂口、二反田)、日本気管食道科学会誌編集委員(坂口)、英語論文査読[Publons, ORCID](General Thoracic and cardiovascular Surgery, Thoracic cancer, Journal of Thoracic diseaseなど)(石田)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

東京電子専門学校臨床工学科の非常勤講師(二反田、坂口)、明海大学歯学部非常勤講師(坂口)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

【学会発表】

- ① 二反田博之ら、「胃管気管瘻に対してハイブリッドステントへの入れ替えが有効であった一例」第45回日本呼吸器内視鏡学会学術集会、2022.5.27 岐阜県(Web発表)
- ② 坂口浩三ら、「4孔式VATSでのテーピング及び剪刀・エネルギーデバイスを用いたND2a-2 郭清範囲と手技の確認」第45回日本呼吸器内視鏡学会学術集会 2022.5.27 岐阜県
- ③ 田口亮ら、「左下葉切除で切除し得た左主気管支進展 B6 原発カルチノイドの一例」第45回日本呼吸器内視鏡学会学術集会 2022.5.27-28 岐阜県
- ④ 坂口浩三ら、「肋間神経痛で発症し4.5年経過した比較的限局した上皮型胸膜中皮腫の1治療例」第3回日本石綿・中皮腫学会学術集会 2022.9.17 兵庫県
- ⑤ 田口亮ら、「上縦隔に発生したミューラー管嚢胞の一例」第190回日本胸部外科学会関東甲信越地方会 2022.11.5 港区
- ⑥ 柳原章寿ら、「周術期の末梢血 CD4⁺T 細胞免疫評価による非小細胞肺癌術後の無病生存期間の予測」第63回日本肺癌学会学術集会 2022.12.1-3 福岡県
- ⑦ 宮崎茉莉(研修医口頭発表)ら、「前胸部創感染を契機に生じた降下性縦隔炎の1例」第39回埼玉県外科集団会 2022.11.19 さいたま市
- ⑧ 岸宥希(医学生口頭発表)ら、「悪性リンパ腫寛解、右胸膜中皮腫手術の後に左肺腺癌を切除した1例」第191回日本胸部外科学会関東甲信越地方会 2023.2.25 横浜市

【論文・著書】

- ⑨ Ichiki Y, Fukuyama T, Ueno M, Kanasaki Y, Goto H, Takahash M, Mikami S, Kobayashi N, Nakanishi K, Hayashi S, Ishida T. Immune profile analysis of peripheral blood and tumors of lung cancer patients treated with immune checkpoint inhibitors. *Transl Lung Cancer Res.*11(11): 2192-207. 2022.
- ⑩ 坂口浩三 執筆(監修)呼吸器の構造—胸膜 縦隔『からだが見える第1版 人体の構造と機能 MEDIC MEDIA

【総数：論文1件、著書1、学会発表13件、講演1件、座長7】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

把持機能付き有鉤攝子の開発(坂口)

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、坂口→二反田教育主任のもと医局員全員での教育指導を行い、CCでは臨床の合間にクルズスを行い、手術見学と参加を介して、外科的な診療を体験し、アンケートでは80%以上の満足度得た。診療に関しては、コロナ下のため、肺癌の手術症例は伸びなかったが、この症例に対して真摯に向きあい、安全な治療ができた。

研究に関しては、基礎から臨床の幅広い研究を行い、データの収集と解析は、前進した。

臨床、教育、研究に関して全医局員が努力、協力しながら、概ね目標は達成されたと思われる。特に、臨床において総手術数は増し、原発性肺癌の手術症例も増加、胸腔鏡手術の比率も上昇した。また、手術死亡・手術関連死亡がなく、安全性が確保できたことは、当科の総合的臨床能力が向上していると判断する。新医局員として梅咲助教が加わったことも関係する。教育に関して、学生講義やBSLに力を入れ、学生からの高い評価を得た。臨床研修医に対しても、診断学の指導や外科の手技や実技の指導に重点を置き、好評であった。他施設から助教フェロー(吉村)を迎え、専門医育成として他施設と連携ができた。研究に関して、限られた医局員数のために臨床と教育にやや時間とられたが、それでも学会発表は維持しているが、論文発表は今後の課題である。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、現状を維持しクルズスは継続し、基本的な医療知識、ベッドサイドの診察能力、コミュニケーションなどの指導に取り組む。研究に関して、今年度で得られた研究結果をまとめて学会報告し、さらに論文化まで行うことを目標とする。また、新たな研究テーマと研究費獲得も試みる。診療に関しては、患者さんの満足する、完全な外科治療を継続しつつ、次年度は、地域連携をさらに強化し、肺癌症例数を増やすことを目標とする。また、呼吸器内科と連携し、進行肺癌に対する導入化学療法後の手術症例も経験する。

3. 14) 心臓血管外科

1. 構成員

吉武 明弘 (YOSHITAKE, Akihiro) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 大動脈 : 血管内治療 : 弁膜症 : 博士
中嶋 博之 (NAKAJIMA, Hiroyuki) : 教授 : 副診療部長 : 代表指導教員 : 弁膜症 : ロボット手術 : 博士
朝倉 利久 (ASAKURA, Toshihisa) : 教授 : 血管内治療 : 成人心臓血管外科 : 博士
木下 修 (KINOSHITA, Osamu) : 准教授 : 研究主任 : 外来医長 : 重症心不全 : 博士
中嶋 智美 (NAKAJIMA, Tomomi) : 講師 : 教育主任 : 病棟医長 : 大動脈疾患 : 博士
高澤 晃利 (TAKAZAWA, Akitoshi) : 助教
折居 衛 (ORII, Mamoru) : 助教
昼八 史也 (CHUBACHI, Fumiya) : 助教
田邊 由理子 (TANABE, Yuriko) : 助教
赤津 堯之 (AKATU, Takayuki) : 専攻医
西村 元延 (NISHIMURA, Motonobu) : 客員教授
福嶋 教偉 (FUKUSHIMA, Norihide) : 客員教授
齋木 佳克 (SAIKI, Yoshikatsu) : 客員教授
小野 稔 (ONO, Minoru) : 客員教授
徳永 千穂 (TOKUNAGA, Chiho) : 非常勤講師
金行 大介 (KANEYUKI, Daisuke) : 研究医員

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

卒前教育

卒後に心臓血管外科を専門とするか否かに関わらず日常の臨床を行うにあたって必要な心臓血管外科の教育を行う。心臓血管外科以外の診療科で、心臓大血管に問題のある場合に適切な診断ができること、どのような疾患は重篤であると考えべきか、また早急に対応しなければならぬかという基本的なことを習得する。また、心臓血管外科術後の集中治療を通じて循環器疾患を有する患者管理について学ぶ。

卒後教育

外科専門医および心臓血管外科医の取得を最大の目標としている。代表的な循環器疾患の診断とその外科的適応、外科的治療の実践を学び、基本的な臨床能力を身に付けさせた上で、豊かな教養を兼ね備えた医療人として、社会に幅広く活躍できる素質を身に付けられる心臓血管外科医を養成できるよう研修プログラムを組んでいる。外科専門医の資格は5年目終了時に、心臓血管外科専門医は最短で7年目終了時には取得することができる。

大学院教育

大学院生は研究に専念する。心臓血管外科領域の臨床を行う上で解決されていない問題から研究テーマを決定し、場合によっては基礎医学の研究室との共同研究により研究を進める。学位論文の作成、学位の所得を最終目的とするが国際的にも通用する研究者を育成することを目標とする。

2-2. 教育実績(担当者: 中嶋 智美)

卒前教育

心臓血管外科領域の疾患について病態、診断方法、治療方法を理解する。特にそれぞれの疾患の手術適応について理解し、病気の重症度と外科手術の至適時期、複数の治療法がある場合は、患者の状態に応じた治療方法の適応について具体例から習得し、正しい治療法の選択ができるようにする。術後管理の実際に接して、各種薬剤の使用法、補液、輸血、感染対策などを学ぶ。

卒後教育

心臓血管外科医としての専門養成教育に徹している。一般業務以外に心臓大血管外科の手術適応決定に必要な特殊検査に参加し、データの読み方や診断基準などについて学習する。また、積極的に手術に参加できるよう配慮し、手術手技では、グラフト採取法や簡単な末梢血管手術を術者として経験する。患者を術前検査から術後管理まで責任を持って担当し、指導医や上級医師とも自由に討論できる体制を取ることで、上記目標を達成できるようスタッフ一同で教育にあたる。

大学院教育

研究テーマにそって実験研究を進める。何が問題点かを自分で明らかにし、これまで既に解決されていると思われる問題についても固定概念にとらわれない新たな観点から再検討し、問題点をどのような方法で証明したらよいかを考えて研究方法を組み立てる。研究の過程で得たデータについて、そのデータをもっとも矛盾のないように説明できる理論を構築してゆき、更に新しい手法を用いて説明することができるように教育する。

2-3. 達成度評価

卒前教育

心臓血管外科領域の疾患について基礎的な解剖学、生理学などの知識を習熟し、臨床に即した対応ができる。周術期管理、外科的感染症、輸液と輸血について習熟する。臨床実習での手術見学にさいして、症例の病態、手術適応となった病態、治療方法の選択について説明できる。病棟に入院中の患者の病態の説明ができ、どのような治療を行うか説明できる。

卒後教育

本邦での専門医認定は手術症例数と論文業績に依拠しており、心臓血管外科専門医は3編以上の論文業績と50例の手術実績を必要とする。その認定基準をクリアするよう手術スケジュールを作成する。

大学院教育

研究結果をもとに学術論文を作成する。論文は英文で作成し、結論の導き方、統計方法などについて十分に研鑽し、それぞれの専門家がみても誤りがない論文を作成することが必須である。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育

疾患に対する理解、病態生理、手術適応、周術期管理、外科的感染症、輸液と輸血について正しく理解している。

卒後教育

学術集会に出席して、討論に参加することができる。学術研究の目的で資料の収集、文献の検索を行うことができる。臨床の現場で、診断方法、重症度の判定、手術方法の具体的な計画を立てることができる。

大学院教育

基礎的な研究を対象としている学術集会に参加して、積極的に討論に参加する。他施設から提出された学術論文を読み、内容について批判的に吟味する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床研究として、心臓血管外科手術症例の治療成績向上を目的とした研究を行っており、再生医療を目的とした基礎的研も行っている。

特に焦点を当てている研究領域として、①重症心不全の外科治療、②心臓大血管外科領域の臨床に関する諸問題、③大血管疾患に対するステントグラフト治療、④経皮的動脈弁置換術 TAVI、⑤ヒト組織を用いた再生医療などの研究。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

①重症心不全の外科治療(補助人工心臓治療、心臓移植治療)

②大血管疾患に対するステントグラフト治療の研究

③経皮的動脈弁置換術の臨床的問題に関する研究

3-3. 達成度評価

①重症心不全の外科治療(補助人工心臓治療、心臓移植治療)の研究

平成14年、埼玉医科大学病院時に心臓移植実施施設に認定され、平成16年埼玉県で1例目の心臓移植手術を実施した。当院においては、平成22年7月に心臓移植実施施設の認定を受け、同年9月に第1例目の心臓移植手術を実施した。また、補助人工心臓治療症例の自己心機能の回復を目的とした薬物治療・心臓再同期治療・心臓再生医療も実施し、LVAS 離脱成功症例も増加しつつある。植込み型補助人工心臓を装着した患者は増加している。現在、植込み型補助人工心臓として、HeartMate III、EVAHEART、DuraHeart、Javik 2000 が使用されており、これらの植込み手順、操作方法については熟知する必要がある。

②心臓血管外科領域の臨床研究

1) 心臓大血管手術後に発症する心房細動の機序解明と予防方法の確立

2) 腎機能が低下した症例の心臓大血管手術と周術期の問題点

3) 人工心肺を使用する心臓手術の諸問題

4) 心臓大血管外科領域の臨床に関する研究として、術後感染症のバイオマーカーの検討

心房細動の機序解明はゲノムセンターとの共同研究を行うことより、新しい手法でこの問題に取り組んでいる。

③大血管疾患に対するステントグラフト治療の研究

近年台頭してきているステントグラフトも、本邦では着実に症例数を伸ばし、国際医療センターとしては平成19年度にステントグラフト実施施設として認定を受けた。今後も血管内治療や手術治療におけるステントグラフトの臨床応用は増加すると考えられる。

④経皮的動脈弁置換術 TAVI に関する臨床研究

臨床治験：症候性重度大動脈弁狭窄症を有する患者に対する MDT-2111 の臨床評価は既に植込み手技を終了し、臨床経過を観察している。当施設はサピエン 3、Evolute 生体弁の実施施設となっており、施行症例数は増加している。安全に TAVI を施行するための臨床研究を行っており、合併症のない手技の確立を目指している。

3-4. 次年度改善計画

今まで蓄積したデータをもとに、学会等を通じて積極的に臨床データを発表した。また、重症心不全の外科治療に関しても、更に研究に注力し、成果を出していきたい。

4. 診療

成人心臓血管疾患全般(末梢血管を含む)の外科治療を行っている。大動脈解離、不安定狭心症に対する緊急手術も積極的に実施し、豊富な臨床症例に恵まれている。冠動脈疾患に対する off-pump バイパス lower-end sternal splitting (LESS) 手術、弁疾患に対する小切開心臓手術(低侵襲心臓手術 Minimally Invasive Cardiac Surgery: MICS) など低侵襲の治療に特化し、大血管疾患に関しては、ステントグラフトを用いた血管内治療も行っている。当診療科は、外科手術の適応外とされる合併症等がなければ、低左心機能、慢性維持透析患者なども手術適応と考えており、特に維持透析患者の開心術は全体のほぼ10%に及ぶ。また、当院は心臓移植の認定施設であり、心臓移植以外では救命できない患者に対しては心臓移植手術を実施している。昨年度から引き続き、24時間体制での緊急手術の対応や、重症患者などの手術にも積極的に対応した結果、2019年度の総手術件数は、621件だった。更なる高みを目指すべく、他科との連携を更

に深め、手術症例数の増加と重症患者の成績向上を目標としている。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県社会保険診療報酬請求書審査委員会審査委員(吉武)

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Journal of Coronary Artery Disease(中嶋)

General Thoracic and Cardiovascular Surgery (吉武)

Annals of Vascular Disease (吉武)

Annals of Vascular Surgery (吉武)

Japanese Journal of Cardiovascular Surgery (吉武)

日本血管外科学会雑誌(吉武)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

①命にかかわる胸痛—急性大動脈解離・大動脈瘤破裂. 第25回埼玉医科大学国際医療センター市民公開講座. 「脳と心臓の赤信号: 危険な頭痛、命にかかわる胸痛」2023. 2. 4. 日高(吉武)

②大動脈解離に対する治療戦略. 第74回日本胸部外科学会定期学術集会「JATS 74 Satellite Lecture」2022. 6. 14. WEB開催(吉武)

③B型解離の Tailor-Made 治療. 第132回日本循環器学会九州地方会. 2022. 6. 25. WEB開催(朝倉)

④大動脈緊急症治療ネットワークについて. 第90回埼玉医科大学国際医療センター地域医療連携懇話会. 2022. 9. 21 埼玉(吉武)

⑤急性大動脈解離と診断されたら～入院から退院後の治療まで～. 第90回埼玉医科大学国際医療センター地域医療連携懇話会. 2022. 9. 21 埼玉(中嶋智)

⑥日本の心臓移植における良好な生存率と長期化し続ける待機期間. 第58回日本移植学会総会. 2022. 10. 14. 名古屋(木下)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Hayashi J: Safety and arch complications after hemiarch and total arch replacement with scented elephant trunk in acute type 1 dissection: Is a stent graft always beneficial?. JTCVS Open. 2022. May. 26. 1(1), 1-8.
- ② Tokunaga C: Fenestrated Fontan-like circulation under durable left-ventricular assist device support in fulminant myocarditis. Journal of Artificial Organs. 2022 Aug 24. s10047-022-01357.
- ③ Nakajima H: Reversal flow in the left anterior descending artery after internal thoracic artery grafting. Journal of Cardiothoracic Surgery (2022) 17:264
- ④ Yoshitake A: One-stage operation for aorto-esophageal fistula. JTCVS Techniques 2022;16:11-3.
- ⑤ 中嶋智美: Stanford B型慢性大動脈解離に対する Frozen Elephant Trunk 法の治療成績. 第31回日本大動脈外科研究会. 2023/4/28. 東京.
- ⑥ Yohitake A: One-stage radical operation for aorto-esophageal fistula. AATS 102nd Annual Meeting. May 14 - 17, 2022. Online.
- ⑦ Takazawa A: Long Term Results of Thoracic Endovascular Aortic Repair by Etiology. 36th EACTS annual meeting. 5-8 October 2022. Milan.
- ⑧ 昼八史也: 当院における Stanford B型大動脈解離の破裂症例に対する外科的治療戦略. 第50回日本血管外科学会学術総会. 2022. 5. 25~27. 福岡.
- ⑨ 木下修: 心臓移植待機期間の長期化は待機中死亡の増加と移植後成績の悪化につながる. 第58回日本移植学会総会. 2022. 10. 13~15. 名古屋.
- ⑩ 吉武明弘: Malperfusionを伴う急性A型解離に対する治療戦略. 第63回日本脈管学会総会. 2022. 10. 27~29. 横浜.

【総数: 論文 5 件、学会発表 38 件、講演 17 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第90回埼玉医科大学国際医療センター地域医療連携懇話会(WEB)9月21日

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本年度は、今までの診療体制を変えることなく積極的に臨床研究、基礎研究などの学術にも取り組み、様々な成果が見られたと考える。診療に関しては、重症心不全の分野では心臓移植も大きな合併症を起こすことなく治療でき、また植込み型補助人工心臓の本邦で使用できるすべての機種を導入し、良好な成績を納めている。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

当院での急性期治療を終えた患者様のアフターフォローを、近隣の病院で見えて頂ける緊密な体制をより構築していき、遠隔期も含めた外科治療の成績について世界に発信していく必要があると考える。また、世界基準の医療レベルに見合う診療体制、教育のレベルアップを計ることを目標としている。

3. 15) 整形外科（骨・軟部腫瘍科）

1. 構成員

鳥越知明 (TORIGOE, Tomoaki) : 教授、運営責任者、骨軟部組織腫瘍科・整形外科 部長、代表指導教員 (大学院)、骨軟部腫瘍、博士

矢澤康男 (YAZAWA, Yasuo) : 客員教授、骨軟部組織腫瘍科・整形外科、骨転移、博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

まず臨床に従事する一般医、整形外科医が必要な骨軟部腫瘍の知識を伝達する。専攻医については臨床の実体験を通してこれらを会得する。他科、看護師、技師をふくめた仕事場の同僚と意志疎通、共同作業を学ぶ。学生・専攻医は臨床経験を通して問題点を明らかにする。解決法について考察し提示できる能力を得る。解決法の実施方法、妥当性、倫理性について考察する。解決法の実施に必要な諸手続を理解する。解決法を実践し自己評価が出来る。学術的発表を行い討論する能力を付ける。

2-2. 教育内容 (担当者)

鳥越が医学部4年生に「骨軟部腫瘍の総論」、「骨軟部腫瘍の各論」の講義を各1時間担当した。Pre-CCとして医学部学生を医療現場見学に受け入れた。専門医専攻医を5名受け入れた。Pre-CCでは外来、病棟、手術の見学をしていただいたが、症状と診断の考え方について説明を行った。鳥越が整形外科試験問題を作製した。専攻医には病棟、手術、カンファレンスに参加していただいた。講義形式で腫瘍総論、診断について教えた。学会報告、論文作成もしていただいた。

2-3. 達成度

医学生にたいしてどの程度達成したかは不明である。彼らもどう評価して良いのか分からないだろう。専攻医には覚えることが多すぎて、これも知識を消化して自分のものになるまでかなり時間がかかると思われた。

2-4. 自己評価と次年度計画

2022年3月末の矢澤教授の退職、客員教授への変更に伴いマンパワーが低下し、症例数が減少したが、その後は徐々に回復している。今後も専攻医に対して臨床および学会活動の指導を継続する方針である。

3. 研究

3-1. 目的・目標

骨軟部腫瘍について臨床、基礎の面から解析する。診断、検査、治療の改善方法を検討、実施し、更にその結果を評価して行く。各医師が問題意識を元に研究する。また他科との連携で研究する。さらに日本骨軟部肉腫治療研究会(JMOG)、JCOG研究班のプロジェクトも行う。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト)

1. サルコーマセンターにおける腫瘍遺伝子の網羅的解析 (責任: 鳥越)
2. JCOG1802: ドキソルピシン治療後の進行性軟部肉腫に対する二次治療におけるトラベクテジン、エリブリン、パゾパニブのランダム化第II相試験 (責任: 鳥越)
3. JCOG2102: 切除可能高悪性度非円形細胞軟部肉腫に対する術前術後補助化学療法と術後補助化学療法とのランダム化比較第III相試験 (責任: 鳥越)
4. 骨軟部腫瘍症例におけるビタミンB1欠乏 (責任: 矢澤)

3-3. 研究内容と達成度

網羅的解析のために組織の凍結保存を行っている。サルコーマセンターでの凍結組織保存も稼働している。JCOG試験に参加している。マンパワー低下により研究については7割程度の達成度と感じている。

3-4. 自己評価と次年度計画

症例データの蓄積は充分である。マンパワーに限りがあり、今後更に若手医師の参入を画策している。

4. 診療

症例数は充分にある。先進的医療の基盤も出来た。今後も後任を勧誘・育成していく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

重粒子線治療多施設共同臨床研究組織 (J-CROS) 運営委員会 骨軟部腫瘍分科会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Journal of Orthopaedic Science 査読

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

1. 関谷麻実, 矢澤康男, 鳥越知明, 飯田隼平, 渡邊温子, 新井栄一, 門野夕峰. 両側網膜芽細胞腫治療後に発生した大腿骨骨肉腫の1例. 整形外科 73 卷 4 号 : 340-343, 2022
2. Yumi Arai, Yasuo Yazawa, Tomoaki Torigoe et al. Rare Case of BCOR::CCNB3 Sarcoma of Bone. Am J Case Rep 2023; 24:e938158 :: DOI: 10.12659/AJCR.938158

学会発表

1. 第 95 回日本整形外科学会学術総会 (2022. 5)
高カルシウム血症を伴う初診時原発不明がん骨転移症例の予後
鳥越知明、矢澤康男、今西淳悟、門野夕峰、税田和夫
2. 第 706 回関東整形災害外科学会 集談会東京地方会 (2022. 9)
腰椎転移を生じたエナメル上皮腫の 1 例
桐澤誠浩、山本悠矢、吉川淳、加藤進太郎、東島啓仁、鳥越知明
3. 第 55 回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会 (2022. 7)
精索発生軟部肉腫症例の治療結果
鳥越知明、矢澤康男
4. 第 55 回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会 (2022. 7)
胸郭切除を要する胸壁肉腫の臨床的検討
矢澤康男、鳥越知明、坂口浩三、二反田博之、木村武一郎、喜多村勇大朗、横川秀樹、去川俊二
5. 第 55 回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会 (2022. 7)
大腿骨頭軟骨芽細胞腫治療後の機能障害 JMOG 多施設共同研究
今西淳悟、矢澤康男、鳥越知明
6. 第 55 回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会 (2022. 7)
骨・軟部腫瘍患者におけるせん妄発生の要因と予後への影響
美原徳明、矢澤康男、今西淳悟、大西秀樹、石田真弓、鳥越 知明
7. 第 48 回骨折治療学会学術集会 (2022. 6)
肺癌骨転移として治療された大腿骨骨肉腫病的骨折の 1 例
赤川玲、矢澤康男、鳥越知明、税田和夫

国際学会

1. 21th General Meeting of the International Society of Limb Salvage (2022.9)
Synchronous Multicentric Giant Cell Tumor of Bone with Multiple Lung Metastases : A Case Report
Yasuo YAZAWA, Jungo IMANISHI, Tomoaki TORIGOE, Atsuko WATANABE, Atsuhiko OHTA, Ryuhei TANAKA, Masanori YASUDA

講演

【総数 16 : 論文 2 件、学会発表 12 件、講演 2 件】

- 6-2. 獲得研究費
該当なし。
- 6-3. 受賞
該当なし。
- 6-4. 特許、実用新案
該当なし。
- 6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績
該当なし。

7. 自己点検・評価

- 7-1. 今年度の点検・評価結果
今年度は矢澤教授の退職、客員教授への変更に伴いマンパワーが低下した。
- 7-2. 次年度の改善計画
今後も継続可能な新体制を発展的に構築していきたい。
若手の専攻医に対し学会発表、論文執筆に力を入れて指導していく。

3. 16) 脳神経外科

1. 構成員

1-1 脳卒中外科

(常勤)

栗田 浩樹 (KURITA, Hiroki) : 教授、診療部長 : 指導教員 : 脳血管障害 : 博士
大井川秀聡 (OOIGAWA, Hidetoshi) : 教授 : 診療副部長 : 研究副主任 : 教育主任 : 脳血管障害 : 博士
吉川信一郎 (YOSHIKAWA, Shin-ichiro) : (4-6月) 講師 : 指導教員 : 脳血管障害 : 博士
鈴木 海馬 (SUZUKI, Kaima) : 講師 : 病棟医長、研修担当医長 : 指導教員 : 脳血管障害 : 博士
佐藤 大樹 (SATO, Hiroki) : (7-3月) : 講師 : 外来医長、指導教員 : 脳血管障害 : 博士
木村 辰規 (KIMURA, Tatsuki) : (10-3月) : 助教 : 脳血管障害 : 学士
田端 晋也 (TABATA, Shinya) : (4-9月) : 助教 : 脳血管障害 : 学士
小野寺康暉 (ONODWRA, Koki) : (4-6月) : 助教 : 脳血管障害 : 学士
山村奈津美 (YAMAMURA, Natsumi) : (4-3月) 助教 (臨床フェロー) : 脳血管障害 : 学士
ミラン レピック (LEPIC, Milan) : (7月-) : 留学生 (臨床修練士) : 脳血管障害 : 博士
福岡 真惟 (FUKUOKA, Masayoshi) : 助教 : 専攻医 (G6) : 済生会熊本病院出向中 : 脳外科一般 : 学士
吉田馨次朗 (YOSHIDA, Keijirou) : 助教 : 専攻医 (G6) : 都立神経病院出向中 : 脳外科一般 : 学士
小林 広樹 (KOBAYASHI, Hiroki) : 助教 : 専攻医 (G6) : 国立循環器病研究センター出向中 : 脳外科一般 : 学士
矢作 宣之 (YAHAGI, Noriyuki) : 助教 : 専攻医 (G6) : 千葉西総合病院出向中 : 脳外科一般 : 学士
橋尾 篤 (HASHIO, Atsushi) : 助教 : 専攻医 (G5) : 黒沢病院脳卒中センター出向中 : 脳外科一般 : 学士
望月 賢紀 (MOCHIZUKI, Yoshiki) : 助教 : 専攻医 (G5) : 横浜新都市脳神経外科病院出向中 : 脳外科一般 : 学士
櫻田 響冴 (SAKURADA, Kokyo) : 助教 : 専攻医 (G5) : 国立循環器病研究センター出向中 : 脳外科一般 : 学士
谷川 大介 (TANIKAWA, Daisuke) : 助教 : 専攻医 (G5) : 脳脊髄腫瘍科出向中 : 脳外科一般 : 学士
岩崎 朗奈 (IWASAKI, Akina) : 助教 : 専攻医 (G5) : 神戸市立医療センター中央市民病院出向中 : 脳外科一般 : 学士
栗原 聖治 (KURIBARA, Seiji) : 助教 : 専攻医 (G5) : 旭川日赤病院出向中 : 脳外科一般 : 学士
根本 慎 (NEMOTO, Shin) : 助教 : 専攻医 (G5) : 脳脊髄腫瘍科出向中 : 脳外科一般 : 学士
酒井 紫帆 (SAKAI, Shiho) : 助教 : 専攻医 (G4) : 埼玉県立小児医療センター出向中 : 脳外科一般 : 学士
菅澤 真 (SUGASAWA, Shin) : 助教 : 専攻医 (G4) : 日赤医療センター出向中 : 脳外科一般 : 学士
佐藤 政哉 (SATO, Masaya) : 助教 : 専攻医 (G4) : 虎の門病院出向中 : 脳外科一般 : 学士
吉富 昌太 (YOSHITOMI, Shohta) : 助教 : 専攻医 (G4) : 相模原協同病院脳卒中センター出向中 : 脳外科一般 : 学士
塩飽 宙也 (SHIWAKU, Hiroya) : (7-9月) : 助教 : 専攻医 (G3) : 脳外科一般 : 学士
西方 雅哉 (NISHIKATA, Masaya) : (4-6, 10-12月) : 助教 : 専攻医 (G3) : 脳外科一般 : 学士
台 もなみ (DAI, Monami) : (4-6, 10-12月) : 助教 : 専攻医 (G3) : 脳外科一般 : 学士
久米 遼 (KUME, Haruka) : (7-9, 1-3月) : 助教 : 専攻医 (G3) : 脳外科一般 : 学士
玉田 啓太 (TAMADA, Keita) : (7-12月) : 助教 : 専攻医 (G3) : 脳外科一般 : 学士

(非常勤)

竹田理々子 (TAKEDA, Ririko) : 客員教授 : 帝京大学溝口病院教授 : 脳血管障害 : 博士
吉川雄一郎 (KIKKAWA, Yuichiro) : 客員准教授 : 埼玉県立循環器呼吸器病センター部長 : 脳血管障害 : 博士
古峰 弘之 (KOMINE, Hiroyuki) : 客員准教授 : 准教授 : JR 東京総合病院部長 : 頭部外傷 : 博士
小野 秀明 (ONO, Hideaki) : 客員准教授 : 富士脳障害研究所附属病院部長 : 脳血管障害 : 博士
小倉 丈司 (OGURA, Takeshi) : 非常勤講師 : 黒沢病院脳卒中センター長 : 脳血管障害 : 博士
伏原 豪司 (FUSHIHARA, Goji) : 非常勤講師 : プレインピア坂戸西院長 : 脳血管障害 : 博士
湯山 隆次 (YUYAMA, Ryuji) : 非常勤講師 : 入間川病院部長・副院長 : 脳血管障害 : 学士
高井 啓介 (TAKAI, Keisuke) : 非常勤講師 : 都立神経病院部長 : 脳血管障害 : 博士
栗原 淳 (KURIHARA, Jyun) : 非常勤講師 : 埼玉県立小児医療センター部長 : 小児脳神経外科 : 博士

1-2 脳・脊髄腫瘍科

(常勤)

三島 一彦 (MISHIMA, Kazuhiko) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 指導教員 : 脳腫瘍 : 博士
鈴木 智成 (SUZUKI, Tomonari) : 准教授 : 診療副部長 : 外来医長 : 研究副主任 : 脳腫瘍 : 博士

白畑 充章 (SHIRAHATA, Mitsuaki) : 講師 : 病棟医長 : 指導教員 : 脳腫瘍 : 博士

小澤 達也 (OZAWA, Tatsuya) : 講師 : 指導教員 : 脳腫瘍 : 博士

水野 玲奈 (MIZUNO, Reina) : 助教 : 脳外科一般 : 学士

(非常勤)

西川 亮 (NISHIKAWA, Ryo) : 客員教授 : 脳腫瘍 : 博士

柳澤 隆昭 (YANAGISAWA, Takaaki) : 客員教授 : 東京慈恵会医科大学教授 : 小児脳腫瘍 : 博士

安達 淳一 (ADACHI, Jun-ichi) : 客員准教授 : 脳腫瘍 : 博士

内田 栄太 (UCHIDA EITA) : 研究委員 : 脳腫瘍 : 博士

1-3 脳血管内治療科

(常勤)

神山 信也 (KOHYAMA, Shinya) : 教授 : 診療科長 : 研究主任(10月～) : 教育副主任 : 代表指導教員(大学院) : 脳血管内治療 : 博士

飯星 智史 (IIHOSHI, Satoshi) : (～9月) : 准教授 : 診療副部長 : 研究主任 : 指導教員(大学院) : 脳血管内治療 : 博士

佐藤 大樹 (SATO, Hiroki) : (4～6月) : 講師 : 大学院教員(大学院) : 脳血管障害 : 博士

吉川 信一郎 (YOSHIKAWA, Shinichiro) : (7月～) : 講師 : 副診療部長(10月～) : 大学院教員(大学院) : 脳血管内治療 : 博士

今岡 幸弘 (IMAOKA, Yukihiro) : 助教 : 外来医長

飯島 昌平 (IIJIMA, Shohei) : 臨床フェロー : 病棟医長

山村 奈津美 (YAMAMUA, Natsumi) : (8～9月) : 臨床フェロー

小野寺 康暉 (ONODERA, Koki) : (6～9月) : 助教

矢作 宜之 (YAHAGI, Noriyuki) : (10～3月) : 専攻医

塩飽 宙也 (SHIWAKU, Hiroya) : (4～6月) : 専攻医

玉田 啓太 (TAMADA, Keita) : (4～6月) : 専攻医

西方 雅哉 (NISHIKATA, Masaya) : (7～9月) : 専攻医

久米 遼 (KUME, Haruka) : (10～12月) : 専攻医

臺 もなみ (DAI, Monami) : (1～3月) : 専攻医

(非常勤)

米澤 あづさ (YONEZAWA, Azusa) : 非常勤医師 研究医員 : 佐久総合医療センター 脳神経外科

栗原 伴佳 (KURIBARA, Tomoyoshi) : 非常勤医師 客員講師 : 所沢中央病院 脳神経外科

塚越 瑛介 (TSUKAGOSHI, Eisuke) : 非常勤医師 修練医 : 黒沢病院 脳血管内治療科

掛樋 善明 (KAKEHI, Yoshiaki) : 非常勤医師 修練医 : 埼玉石心会病院 脳血管内治療科

笠倉 至言 (KASAKURA, Shigen) : 非常勤医師 研究医員 : 埼玉県循環器呼吸器病センター

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

本学の教育目標は「すぐれた臨床医の育成」である。すなわち、しっかりした専門性を持ち、豊かな人間性と社会的視野に裏打ちされた実践を行う医師の養成である。脳神経外科の学生教育においては、脳神経外科学について、脳神経外科を専門としない医師にも必要な、しっかりした知識を持つことを目標とし、同時に実習等によって探求心と科学的思考能力、さらに患者への接し方について学んでもらうことを目的としている。特に、頭部外傷や脳卒中の初療など、一般内科医、外科医にとっても重要な神経救急疾患のマネージメントを重要視している。

卒前教育においては、脳脊髄解剖、意識障害や種々の神経症候など、当科と関連する基礎知識を習得し、手術や病棟・外来の見学によって臨床現場の理解を深めることが主たる目標とし、卒後教育においては、高いレベルの手術技術の習得は勿論のこと、患者管理、画像診断、病態を理解し治療方針を組み立てる方法論を理解すると同時に、医療チームの一員として、看護師、薬剤師、リハビリ、検査技士達との協調性を養うこと、その中でリーダーシップを取ることの意味を理解し体得することを目標としており、特に後者を重視してマンツーマンで徹底的に指導している。大学院教育においては、脳神経外科内における専門性の取得の基礎となる専門知識取得の学問的方法論を学ぶことに重点を置き、医局員全員の学位取得を目標としている。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育 :

(1) 講義：

栗田 浩樹 (脳卒中外科)	ヒトの病気1 神経 19 脳血管障害 (4) 3年生	虚血性疾患の外科的治療
三島 一彦 (脳脊髄腫瘍科)	ヒトの病気1 神経 11 頭蓋内圧亢進 3年生	頭蓋内圧亢進の病態・診断
栗田 浩樹 (脳卒中外科)	ヒトの病気1 神経 20 脳血管障害 (5) 3年生	出血性疾患の外科的治療
神山 信也 (脳血管内治療科)	ヒトの病気1 神経 21 脳血管障害 (6) 3年生	出血性疾患の血管内治療
神山 信也 (脳血管内治療科)	ヒトの病気1 神経 22 脳血管障害 (7) 3年生	虚血性疾患の血管内治療
三島 一彦 (脳脊髄腫瘍科)	ヒトの病気1 神経 25 脳腫瘍 (1) (総論-悪性1) 3年生	脳腫瘍とは何か 脳実質内腫瘍と実質外腫瘍の重要性 神経膠腫総論—Neuro-Oncology
柳澤 隆昭 (客員教授)	ヒトの病気1 神経 26 脳腫瘍 (2) 悪性脳腫瘍 (2) 3年生	小児がん・小児脳腫瘍の特徴 小児脳腫瘍の種類 小児脳腫瘍の診断と治療
大井川 秀聡 (脳卒中外科)	ヒトの病気1 神経 39 頭部外傷 1 3年生	頭部外傷の特殊性 脳損傷発生の機序と病態 頭部外傷における頭蓋内圧管理の意義
大井川 秀聡 (脳卒中外科)	ヒトの病気1 神経 40 頭部外傷 2 3年生	緊急手術を要する頭部外傷 脳挫傷の治療 急性頭蓋内血腫の分類とその治療
栗原 淳 (非常勤講師)	ヒトの病気1 神経 48 小児脳神経外科 3年生	脳・脊髄の先天性奇形 小児脳腫瘍・脳血管障害 水頭症の診断と治療
鈴木智成 (脳脊髄腫瘍科)	ヒトの病気1 内代 4 下垂体腫瘍・頭蓋咽頭腫) 3年生	下垂体腺腫の画像診断 下垂体腺腫の治療 頭蓋咽頭腫の病態と治療
栗田 浩樹 (脳卒中外科)	ヒトの病気2 救麻 8 緊急を要する病態とその初期治療 脳血管障害 4年生	超急性期脳卒中患者の初期治療 神経救急患者の救命処置 脳卒中の病態

栗田 浩樹 (脳卒中外科)	ヒトの病気 2 救麻 10 緊急を要する病態とその初期治療 頭部外傷 4 年生	急性期頭部外傷患者の初期治療 神経救急患者の救命処置 頭部外傷の病
古峰 弘之 (客員准教授)	ヒトの病気 2 救麻 24 脳死 4 年生	脳死の定義と脳死判定 脳死下臓器移植
三島 一彦 (脳脊髄腫瘍科)	ヒトの病気 2 腫瘍 06 神経系腫瘍 4 年生	脳. 脊髄腫瘍、転移性脳腫瘍
大井川 秀聡 (脳卒中外科)	医療総論 医療総 10 死の概念・臓器移植 (必 4-H) 6 年生	脳死と心臓死の違い 脳死判定基準 脳死後臓器移植の手順
栗田 浩樹 (脳卒中外科)	保健医療学部理学療法科・系統講義 脳神経の外科治療 2 年生	脳卒中患者の初期治療 脳神経外科手術総論・各論

(2) PBL : 3つの課題を担当.

(3) 臨床推論 : 教員が順に担当.

(4) BSL : 全教員がクルズス, 手術解説, レポート指導, カンファレンス解説などを分担して指導.

(5) CC : BS 全教員が担当患者を決めてカンファレンスでの症例提示などを指導.

(6) 他大学学生の見学の受け入れ (7 名、脳卒中外科、脳血管内治療科)

卒後教育 : 日々の手術や患者管理の指導に加え、以下の教育セミナーを主催、あるいは専攻医、教員を派遣。

(1) 日本脳卒中の外科学会技術認定医教育セミナー

(2) 国循環脳血管外科フォーラム 2022

(3) 埼玉医科大学医学教育ワークショップ.

(4) OSCE 評価者講習、医学教育フォーラム

(5) 埼玉医科大学臨床指導医セミナー

(6) 埼玉医大国際医療センター脳卒中外科手術手技セミナー

また、脳卒中外科は他施設からの研修者を臨床フェローとして 1 名受け入れた (関西医科大学)。

2-3. 達成度評価

講義, PBL, BSL・卒後教育全てにおいて責任を全うすることが出来た。2022 年度は医局員 5 名が日本脳神経外科学会専門医 (鈴木隼、小野寺康暉、木村辰規、田端晋也、水野玲奈) を取得した。当科 program における過去 10 年間で全受験者 (23/23) が脳神経外科専門医試験に合格しており (全国平均は 60-70%)、高いレベルの卒後教育が施されている事が本結果からも理解される。また、本年度は 1 名 (池上方基) が学位 (博士 [医学]、埼玉医科大学) を取得した。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育 : 講義については、本年度も新型コロナ感染拡大禍により、原則リモートとなり、従来より採用してきた 3D- の動画や手術 video を多用した visual な「体験的な講義」は難しかったが、国家試験で重要な point を集中的に講義する一方、細かい医学的な専門知識の詰め込みではなく、将来どの診療科に進んでも役立つような「どういう症状や神経学的所見がある時にどういう疾患を疑い脳神経外科医へ紹介するのか? それはどのくらい急ぐか」という臨床センスが培われるように工夫した。BSL についても、従来の実践的で体験的なプログラムを提供するように努力した。具体的には開頭術に実際に参加し、本物の髄膜や脳に触れてその質感や解剖学的構造・機能を実感として理解する事、また顕微鏡下血管吻合の実技指導を通して、脳神経外科医に求められる技術レベルやその臨床応用について理解が深まるように配慮した。系統講義から BSL を通して、脳神経外科を希望する研修医の昨今の減少に歯止めをかけるために、学生の興味と意欲をかき立てるような内容に brush up した結果、本学から過去 10 年間に 11 名、さらに 2022 年度も 2 名の新入医局員を迎えることができた。

卒後教育 :

脳卒中外科においては、手術技術の向上をその教育の核とし、診療科で行われたすべての手術について、ビデオカンファレンスを行って術前・術後の検討を行った。毎年診療部長が講師を務める学会や関連訓練施設で行われるご遺体

や動物を使用した手術トレーニングコース（日本脳卒中の外科学会技術認定医教育セミナー、杏林大学微小解剖セミナー、等）は COVID-19 で中止されたが、国立循環器病研究センター脳血管外科セミナーや当科専攻医を対象とする講習(Bypass Boot Camp)は厳重な感染対策の下、開催が可能であった。本年度も他施設からの手術研修希望者 1 名を助教・臨床 fellow として受け入れた（関西医科大学）。

脳脊髄腫瘍科では脳腫瘍・脊髄腫瘍全般において、患者の神経学的所見を重視するとともに、画像所見に始まる基礎に立ち返り、世界に通用する教育をモットーに専攻医の指導を行った。当科で脳腫瘍症例の治療に従事した専攻医はすべて日本脳神経外科学会専門医を取得した。また術前に手術方針について検討し、術後のビデオカンファレンスを通じて、個々の症例の集学的な治療方針をきちんと立てることができるよう教育を行った。各専攻医のプリビレッジに沿い、積極的に手術経験の機会を与えた。また神経内視鏡手術においては、認定医を取得することを念頭に置き、知識、技術を取得し、助手と術者の双方のトレーニングを行った。また院内並びに学外の研究会や学会に積極的な参加を促すと共に、学会発表の指導、論文作成について指導を行った。

脳血管内治療科では、2017 年以降、希望する全ての専攻医が脳神経外科学会専門医取得後 1 年以内に脳神経血管内治療学会専門医を取得することを目標として脳血管造影の術者・脳血管内手術の術者・助手のトレーニングを実施しており、その方針下で教育した最初の 1 名が脳神経外科学会専門医取得直後に脳神経血管内治療学会専門医を取得した。またそれ以外に、当院で研修を受けた 4 名が脳神経血管内治療学会専門医を取得し、2 名が指導医を取得した。週 3 回行われるカンファレンスにおいては疾患毎の脳血管造影の撮像法・読影所見・治療適応・手技・デバイスの選択や術後管理等の教育を行った。1 年目の専攻医に対しては、3 か月間のローテーション期間中に 100 件の脳血管造影を経験させることを目標とし、最低でも 80 件以上の脳血管造影を全員に経験させ、ほぼすべての脳疾患に対する脳血管造影の知識・技術を取得し、合併症なく最良の脳血管造影を独立して行えるようになった。

今年度もスタッフメンバーが大きく入れ替わるため、昨年度の教育手順を引き継いで、どの時期にも一定した同レベルの教育を行えるように定期的な反省会・打ち合わせを行いつつ個々の教育を行う。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

脳神経外科学に関係する基礎科学，診断，治療の全てにわたって新知見を探求することを目的とする。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

当科には 3 つの研究グループがあり、活発な基礎・臨床研究が 2022 年度も継続された。また昨年度からの他学との共同研究 (Barrow Neurological Institute、国立循環器病研究センター、浜松医科大学細胞分子解剖学講座、室蘭工業大学、等) も発展的に継続する事が可能であった。各研究グループの代表的研究 project を 5 題紹介し、他の研究は論文 list を提示する。

脳血管障害研究グループ

(1) 脳血管内皮細胞に対するアミロイド β の作用に関する研究（武、栗田。室蘭工科大学との共同研究

Abstract

Cerebral amyloid angiopathy (CAA) is a disease in which amyloid β ($A\beta$) is deposited on the walls of blood vessels in the brain, making those walls brittle and causing cerebral hemorrhage. However, the mechanism underlying its onset is not well understood. The aggregation and accumulation of $A\beta$ cause the occlusion and fragility of blood vessels due to endothelial cell damage, breakdown of the blood-brain barrier, and replacement with elements constituting the blood vessel wall. In this study, we observed the effect of $A\beta$ on human primary brain microvascular endothelial cells (hBMECs) in real-time using quantum dot nanoprobe to elucidate the mechanism of vascular weakening by $A\beta$. It was observed that $A\beta$ began to aggregate around hBMECs after the start of incubation and that the cells were covered with aggregates. $A\beta$ aggregates firmly anchored the cells on the plate surface, and eventually suppressed cell motility and caused cell death. Furthermore, $A\beta$ aggregation induced the organization of abnormal actin, resulting in a significant increase in intracellular actin dots over $10 \mu m^2$. These results suggest that the mechanism by which $A\beta$ forms a fragile vessel wall is as follows: $A\beta$ aggregation around vascular endothelial cells anchors them to the substrate, induces abnormal actin organization, and leads to cell death.

【達成度】100%、論文として出版 (Biochem Biophys Rep 2022)

(2) 微小動脈瘤の破裂因子に関する研究（池上、栗田）

Objective: Although small unruptured aneurysms rarely rupture, many patients with subarachnoid hemorrhage (SAH) have ruptured small, especially very small intracranial aneurysms (VSIA; <3 mm) in clinical practice. We aimed to clarify the proportion and clinical features of patients with SAH with ruptured VSIA.

Methods: 609 patients with ruptured intracranial aneurysms diagnosed at our institution from January 2012 to December 2018 were retrospectively analyzed. We classified patients into 2 groups based on ruptured aneurysm size: VSIA or non-VSIA (≥ 3 mm). We analyzed age, sex, location of aneurysms, World Federation of Neurological Surgeons grade on admission, treatment modality, and outcome at discharge.

Results: Among 609 patients, 103 had ruptured VSIA. The proportion of young patients (age <40 years) was greater in the VSIA group than the non-VSIA group (10.7% vs. 3.6%, $P = 0.002$). The proportions of VSIA located in the middle cerebral and vertebrobasilar arteries were relatively low and high, respectively ($P = 0.002$, 0.005). Significantly more patients with VSIA than those with non-VSIA were classified under World Federation of Neurological Surgeons grade I-III (70.9% vs. 56.3%, $P = 0.006$). Coil embolization was preferred for VSIA (68.0% vs. 32.0%, $P = 0.006$). Outcomes were more favorable in the VSIA group than in the non-VSIA group.

Conclusions: Small unruptured aneurysms rarely rupture; however, many patients with SAH have ruptured VSIA in clinical practice. We observed that VSIA rates among ruptured aneurysms were fairly high. Age, posterior circulation location, and preferable outcome may be important clinical characteristics of ruptured VSIA.

【達成度】100%、論文として出版 (World Neurosurg 2022)

(3) くも膜下出血患者に対する最適な栄養提供に関する研究 (鈴木、栗田。)

Abstract

Background and Objectives: Nutritional management in patients with subarachnoid hemorrhage (SAH) during the acute phase is important; however, there is no proper evidence or recommendations on the appropriate nutrients for early enteral nutrition. This study compared the influence the two different tube-feeding liquid diets for early enteral nutrition might have on the prognosis of patients with SAH. *Materials and Methods:* In a seven-year period, this single-center retrospective study included 245 patients with aneurysmal SAH who underwent craniotomy and aneurysm neck clipping and received enteral nutrition. The patients were divided into two groups according to the nutrient received: (1) high-protein whey peptide oligomeric formula diet (oligomeric group, 109 patients); and (2) high eicosapentaenoic acid-containing polymeric formula diet (polymeric group, 136 patients). The modified Rankin Scale (mRS) score at discharge was evaluated as the primary outcome. The presence or absence of diarrhea (watery stool and mushy stool) during the period from initiation of enteral nutrition to discharge from the stroke unit was also evaluated. *Results:* There were no significant differences in patient characteristics between groups. The time until initiation of enteral feeding in the oligomeric and polymeric groups was 2.8 ± 2.3 and 2.9 ± 2.2 days, respectively. The proportion of patients with mRS scores of 0-1 was significantly higher in the oligomeric group (25.7%) than in the polymeric group (14.7%) ($p = 0.036$), while the incidence of watery stool was significantly lower in the oligomeric group (15.8% to 34.3% in the polymeric group) ($p = 0.003$). Multivariate analyses confirmed that the oligomeric diet and the presence or absence of diarrhea significantly affected the mRS scores. *Conclusions:* The adoption of early enteral nutrition with high-protein whey peptide digestive nutrients might be associated with superior mRS scores at discharge and decreased diarrhea in patients with SA, indicating that the choice of nutrients might affect the outcome and prognosis.

【達成度】100%、論文として出版 (Medicina 2022)

(4) 頭蓋形成術における移植骨片感染の risk 因子の解析 (田端、栗田)

Abstract

Bone flap infection is often experienced as a complication of cranioplasty. The aim of this study was to investigate predictors of graft infection, including patient-specific and surgery-specific factors. We retrospectively reviewed cases at our institution who underwent cranioplasty following craniectomy for traumatic brain injury, epidural hematoma, subdural hematoma, intracranial hemorrhage, cerebral

infarction, subarachnoid hemorrhage, arteriovenous malformation, and bone flap infection after craniotomy. A total of 192 patients were included in this analysis. The graft infection rate was 8.3% (16/192). Smoking (odds ratio [OR] 3.09, 95% confidence interval [CI] 1.03–12.24; $p = 0.04$), allergy (OR 6.15, 95% CI 1.50–17.31; $p < 0.01$), and body temperature on postoperative day 1 (OR 2.57, 95% CI 1.14–5.78; $p = 0.02$) were found to be independent predictors for graft infection. Based on receiver operating characteristic analysis, a body temperature on a postoperative day 1 higher than 38.0 ° C was selected as the optimal cut-off value for predicting infection after cranioplasty. The sensitivity and specificity were 68% and 72%, respectively. Smoking, allergy, and body temperature on postoperative day 1 predicted complications leading to graft infection. Patients with a fever of 38 ° C or higher on day 1 after cranioplasty should be carefully monitored for graft infection.

【達成度】100%、論文として出版 (J Clin Neurosci 2022)

(5) 内頸動脈-前脈絡叢動脈分岐部動脈瘤の治療成績を左右する因子の研究 (前田、栗田)

Background: Treatment of anterior choroidal artery (AchoA) aneurysms is challenging because of the risk of artery injury. The objective of the study was to evaluate the incidence and predictors of AchoA infarction in patients who underwent surgical or endovascular procedure.

Methods: We included 123 patients with AchoA aneurysms treated by surgical clipping ($n = 62$; 50.4%) or endovascular coiling, including flow diverter placement ($n = 61$; 49.6%). The clinical and radiological data were retrospectively analyzed. AchoA infarction was defined as the presence of a hyperintense signal on diffusion-weighted imaging in the area of AchoA, including the posterior limb of the internal capsule. Results: AchoA infarction was detected in 8 cases (6.5%), with similar incidence in both groups (6.5% [4/62] vs. 6.6% [4/61]). It occurred in ruptured aneurysms more frequently than in unruptured aneurysms (14.3% [6/42] vs. 2.5% [2/81], $P = 0.019$). In the surgical group, all 4 affected patients had a non-proximal type AchoA, whereas in the non-infarction group, 9 patients (15.5%) had a non-proximal type AchoA ($P = 0.001$). In the endovascular group, the incidence was higher in patients with ruptured aneurysms (17.3% [4/23] vs. 0% [0/38], $P = 0.017$) and lower in patients with pre-admission antiplatelet therapy (0% [0/39] vs. 18.8% [4/22], $P = 0.014$).

Conclusions: Repair of an AchoA aneurysm is associated with the risk of incurring post-procedural AchoA infarction. Surgical clipping and endovascular coiling have similar complication rates, but risk factors specific to each intervention exist. Careful surgical planning to avoid these risk factors in each therapeutic modality may improve patient outcomes.

【達成度】100%、論文として出版 (World Neurosurg 2022)

さらに、以下の研究成果を論文として発表した。

1. Kikkawa Y, Kurita H: Management of wide-necked basilar apex aneurysms. *Adv Tech Stand Neurosurg* 44:297-307, 2022
2. Kimura T, Ikedo T, Ohta-Ogo K, Hamano E, Ohta T, Mori H, Satow T, Sumi M, Hashimura N, Hara T, Shimonaga K, Kushi Y, Ikeda Y, Hatakeyama K, Iihara K, Kataoka H: A pathologically verified case of peripheral intracranial aneurysmal formation with massively infiltrating meningioma cells. *J Neuropathol Exp Neurol* 81: 242-245, 2022
3. Sakurada K, Teranishi A, Tsukakoshi E, Iihoshi S, Kurita H, Koyama S: Stent-assisted coil embolization using a transcirculation technique for superior cerebellar artery aneurysm: a report of two cases. *NMC Case Rep J* 9:37-41, 2022
4. Sugawara S, Kimura T, Bae Y, Kumasaka T, Ishi S: Two cases of rare intratumoral hemorrhage following COVID-19 vaccination. *Cureus* 14:e32400. doi: 10.7759/cureus.32400. eCollection 2022 Dec.
5. Kayahara T, Ono I, Kawashima A, Okada A, Miyamoto S, Kataoka H, Kurita H, Ishii A, Aoki T: Hypoxic microenvironment as a crucial factor triggering events leading to rupture of intracranial artery aneurysm. *Sci Rep* (in press)
6. Sato H, Lepic M, Suzuki K, Tamada K, Tabata S, Ooigawa H, Kurita H: Reversible splenic lesion in a teenager after a surgery for distant arteriovenous malformation: case report. *Acta Neurochir (Wien)* (in press)
7. Yoshida K, Suzuki T, Sato H, Kobayashi H, Mizuno R, Shirahata M, Ozawa T, Mishima K: A case of pituitary lymphoma successfully treated with a Bruton's tyrosine kinase inhibitor. *Ser J Neurosurg* (in press)

8. Suzuki K, Sato H, Suzuki S, Ooigawa H, Kurita H: Insonation angle in micro-Doppler-sonographic evaluation in cerebrovascular surgery: technical note. Ser J Neurosurg (in press)
9. Kobayashi H, Ogura T, Kowata K, Nakajima M, Oomori S, Kurita H: Intracerebral hemorrhage due to basal ganglia cavernous malformation mimic hypertensive hemorrhage: report of two cases. Cureus (in press)
10. Yanagawa T, Sato H, Suzuki K, Ooigawa H, Takao M, Kurita H: The association of antithrombotic therapy with postoperative rebleeding in patients with cerebral amyloid angiopathy. Chi Neurosurg J (in press)
11. Onodera K, Sato H, Lepic M, Suzuki K, Ooigawa H, Kurita H: Disappearance of hemichorea as the initial presentation of moyamoya disease after revascularization surgery regardless of residual hypoperfusion evaluated by quantitative 123I-IMP SPECT. Neurochirurgie (in press)
12. Suzuki K, Lepic M, Sato H, Tabata S, Kimura T, Kobayashi H, Yoshida K, Fukuoka M, Yahagi N, Maeda T, Ooigawa H, Kurita H: Delayed cerebral vasospasm following traumatic acute subdural hematoma: case report. Ser J Neurosurg. (in press)
13. Maeda T, Ooigawa H, Suzuki K, Kurita H: Initial Experience and Perspective of Exoscopic Cerebral Bypass Surgery. Acta Neurochir. Suppl (in press)
14. Take Y, Shirahata M, Sakai J, Kubota Y, Suzuki T, Adachi J, Maesaki S, Mishima K, Nishikawa R: Miliary tuberculosis during R-MPV therapy in an elderly patient with primary central nerve system lymphoma: a case report. Case Rep Oncol (in press)
15. Shimamura N, Fujiwara N, Katagai T, Ohkuma H, Nakahara I, Morioka J, Kawamata T, Ishikawa T, Kurita H, Suzuki K, Chin M, Uezato M, Sorimachi T, Shiokawa Y, Murayama Y, Ikawa F: Analysis of factors influencing delayed presentation in Japanese patients with subarachnoid hemorrhage. World Neurosurg. (in press)
16. Suga Y, Watanabe N, Suzuki K, Koyama S, Taji Y, Hayashi T, Miyazaki Y, Baba Y, Kurita H, Mitsutake K, Ebihara Y: Otitis externa caused by *Malassezia slooffiae* complicated with mastoiditis: a case report. J Infect Chemother. (in press)
17. Sujino Y, Nakajima S, Katoa Y, Iwasa T, Sakaguchi H, Shimahara Y, Tabata S, Ikedo T, Shiraishi I, Kurosaki K: Successful treatment of primary central nervous system lymphoproliferative disorder post-heart transplantation with modification of the immunosuppressive regimen used: a case report. J Heart Lung Transplant 41: 265-267, 2022
18. Toyoshima Y, Tsuda E, Katoa Y, Iwasa T, Sakaguchi H, Shimamura Y, Tabata S, Ikedo T, Shiraishi I, Kurisaki K: Coronary artery aneurysms of unknown origin in a 14-year-old girl. J Cardiol Case 25: 106-109, 2022
19. Oya S, Yoshida S, Shojima M, Yoshikawa G, Ota T, Ono H, Kurita H, Kohyama S, Miyawaki S, Koizumi S, Saito N, Matsui T: The optimal treatment of ruptured basilar artery dissecting aneurysms: a case series and scoping review. Neurosurg. Rev 45: 3427-3436, 2022
20. Okada A, Koseki H, Ono I, Kayahara T, Kurita H, Miyamoto S, Kataoka H, Aoki T: Identification of the unique subtype of macrophages in enlarging intracranial aneurysm lesions. J Stroke Cerebrovasc Dis 31: 106848. doi: 10.1016/j.jstrokecerebrovasdis.2022.106848. Epub 2022 Oct 29.
21. 栗田浩樹：外国での手術経験から日本の若手脳神経外科医に伝えたいこと。脳外 50:480-485, 2022
22. 栗田浩樹：MCA 症例-エキスパートからのコメント。脳動脈瘤手術トラブル例。若手術者へのアドバイス。あなたの手術はもっと上手くなる。脳外速報 32 : 651, 2022
23. 栗田浩樹：特別寄稿・黒沢病院 2021 年度年報に寄せて。医療法人社団美心会 2021 年度年報 p 47.
24. 吉川雄一郎、柴田碧人、古峰弘之、根木宏明、寺西亮雄、鈴木海馬、上出智也、池田俊貴、栗田浩樹：大型/巨大脳動脈瘤に対する直達手術の治療成績と問題点。脳卒中の外科 50: 370-376, 2022
25. 鈴木海馬、佐藤大樹、水野玲奈、酒井紫帆、吉富昌太、佐藤政哉、菅澤真、前田拓真、小峰弘之、大井川秀聡、栗田浩樹：脳動脈奇形破裂のバイオマーカーとしての可溶性 RAGE に関する検討。埼玉医科大学雑誌 48: 137-139, 2022
26. 鈴木海馬、栗田浩樹：開頭術③：脳動脈奇形の開頭摘出術。脳神経外科の手術。吉村紳一（編）、メディカ出版、東京、2022, pp.119-123.
27. 土屋亮輔、三島一彦、佐々木惇、本間琢、水野玲奈、内田栄太、白畑充章、鈴木智成、安達淳一、西川亮：全身性エリテマトーデス、関節リウマチ、関節性肺炎に対してミコフェノール酸モフェチル内服中に発症した頭蓋内リンパ球増殖性疾患の 1 例。脳外誌 31 : 42-49, 2022
28. 水野玲奈、鈴木海馬、佐藤大樹、小林広樹、望月賢紀、古峰弘之、大井川秀聡、栗田浩樹：非重症外傷性くも膜下出血後、血腫分布に一致した脳血管攣縮を認めた一例。日本神経救急学会雑誌 34 : 65-69, 2022

29. 前田拓真、栗田浩樹：埼玉医科大学国際医療センターにおけるバイパス手術の工夫：ORBEYE を用いた STA-MCA bypass の現状と展望. 脳外 50：851-853, 2022
30. 小野寺康暉、鈴木海馬、栗田浩樹：IC-PC 症例。脳動脈瘤手術トラブル例. 若気術者へのアドバイス. あなたの手術はもっと上手くなる. 脳外速報 32：661-669, 2022
31. 古峰弘之、鈴木海馬、佐藤大樹、吉川雄一郎、小倉丈司、竹田理々子、大井川秀聡、栗田浩樹：重症くも膜下出血の開頭直後の再出血に対する治療戦略. くも膜下出血と脳血管攣縮 (in press)
32. 大井川秀聡、鈴木海馬、佐藤大樹、前田拓真、古峰弘之、竹田理々子、吉川雄一郎、小倉丈司、栗田浩樹：前方循環未破裂脳動脈瘤クリッピング術における 'three-hand surgery' の実際とトラブル対処法. 脳卒中の外科 (in press)
33. 吉川雄一郎、木村辰規、寺西亮雄、鈴木海馬、大井川秀聡、栗田浩樹：クリッピング/コイル塞栓術後の再発脳動脈瘤に対する直達術の治療戦略. 脳卒中の外科 (in press)
34. 前田拓真、大井川秀聡、小野寺康暉、鈴木海馬、佐藤大樹、栗田浩樹：神経外視鏡による開頭クリッピング術の利点と課題. 脳卒中の外科 (in press)
35. 前田拓真、大川原舞、越阪部学、山口裕之、栗田浩樹、前田高宏：頭部外傷後 4 カ月を経過して発症した内頸動脈海綿静脈洞瘻の 1 例. 神経外傷 (in press)
36. 前田拓真：合格体験記：脳血管内治療専門医受験に向けた勉強の仕方. 脳外速報 33：92-95, 2022
37. 青木友浩、栢原智道、小野功朗、岡田明大：脳動脈瘤：遺伝子解析と治療薬開発の現状. 脳外 50：179-195, 2022
38. 細野篤、大川原舞、山口裕之、鈴木隼、越阪部学、上田幹也、前田高宏：MRI を用いた頸動脈ステント留置術後再狭窄の評価について. 脳卒中 44：285-289, 2022
39. 森ひろみ、佐藤弘、永田早紀、上村聡、佐藤雅子、高木敏之、間野政行、鈴木海馬、小田島太：NST 介入時における栄養状態の判定に影響する要因の検討. 外科と代謝・栄養 56：90-97, 2022
40. 原田洋一、山下圭一、今井大也、江原拓郎、鳥居正則、池上方基、林基高、佐藤栄志、畑山徹、河野拓司：疼痛のみで発症した椎骨動脈解離の臨床像-特に瘤状変化した症例の経過について-. 脳卒中の外科 50：266-273, 2022

脳腫瘍研究グループ

- (1) 予後不良の神経膠腫に対する標準治療の確立と希少癌組織のバイオバンクを目的とした多施設共同研究（三島、鈴木、白畑、内田）

【研究内容】

本研究は日本臨床腫瘍研究グループ (JCOG) 脳腫瘍グループにおける再発膠芽腫 (JCOG1308)、初発膠芽腫 (JCOG1703)、高齢者初発膠芽腫 (JCOG1910)、退形成性神経膠腫 (JCOG1016)、ならびに低悪性度神経膠腫 (JCOG1303) を対象とした全国規模の多施設共同試験である。各研究においては分担研究者として積極的に参加した。プロトコール作成の段階から関わり、登録開始以降は積極的に症例登録を行った。退形成性神経膠腫 (JCOG1016) 低悪性度神経膠腫 (JCOG1303)、再発膠芽腫 (JCOG1308) は症例登録を終了し、経過観察中である。

【達成度】50%、症例登録及び経過観察中

- (2) 中枢神経系胚細胞腫瘍のゲノムワイド関連解析に関する研究（鈴木）

【研究内容】

中枢神経系原発胚細胞腫瘍患者の末梢血の DNA を抽出し、患者ゲノムの遺伝子多型を SNP マイクロアレイによって網羅的に解析した。関連解析を中心とした遺伝的解析を行い、本疾患の感受性遺伝子を探索したところ BAK1 遺伝子近傍における common variant が IGCTs の発症要因となることが明らかとなった。この関連について機能的解析を進めた結果、非コード領域上の欠失多型である rs3831846 が BAK1 に隣接するエンハンサーの活性を減弱させ、アポトーシス促進性に作用する BAK1 の発現量が低下することで IGCTs の発症リスクにつながるという分子メカニズムが示唆された。

【達成度】100%、Nature Communications に投稿中。

- (3) 高齢者膠芽腫に対する MGMT メチル化を指標とした個別化治療第 2 相試（白畑、小澤、三島、鈴木）

【研究内容】

背景：膠芽腫において MGMT のメチル化がテモゾロミドによる効果予測因子であることが明らかとなり、特に高齢者においては、ドイツの臨床試験の後解析によって、MGMT メチル化症例では、テモゾロミド単独治療が放射線治療に優る事が示唆される結果が示され、MGMT メチル化を有する高齢者においては放射線治療を省略しテモゾロミド単独療法で初期治療を開始できる可能性が示された。我々は、高齢者膠芽腫において、MGMT メチル化状態によって治療を層別化することの有用性を検討することを目的として多施設共同第 2 相試験を行った。

方法：手術摘出試料から DNA を抽出し、パイロシーケンス法を用いて MGMT 遺伝子プロモーター領域の DNA メチル化状態を定量的に解析し、MGMT のメチル化割合 30% を閾値として治療を層別化して、MGMT 高メチル化症例ではテ

モノゾロミド単独療法、MGMT 低メチル化症例では放射線療法にて治療を行った。

結果：70名を登録し、1名は解析除外。MGMT 高メチル化-テモゾロミド治療群 18名（平均年齢 77.6 歳、年齢中央値 76.5 歳、KPS 中央値 60、MMSE 中央値 23）における 1 年生存割合 51.4% (95%CI 31.9-82.6)、生存期間中央値 399 日 (95%CI 348-NA)、MGMT 低メチル化-放射線治療群 51 名（平均年齢 77.6 歳、年齢中央値 78 歳、KPS 中央値 60、MMSE 中央値 19）における 1 年生存割合 43.4% (95%CI 29.7-63.4)、生存期間中央値 311 日 (95%CI 228-416)であった。テモゾロミド治療群は計 128 コース、中央値 7 コースにて施行し、主な Grade2 以上の有害事象としてリンパ球減少 50%、便秘 38.9%、食欲不振 38.9%を認め、Grade3 以上の有害事象の発現割合は 22.2%で、内訳はリンパ球減少、食欲不振、発熱性好中球減少、倦怠感、肺炎であった。放射線治療群では主な Grade2 以上の有害事象として認知機能低下 38%、食欲低下 22%を認め、Grade3 以上の有害事象の発現割合は 32%で、内訳は認知機能低下、食欲不振、悪心、傾眠、白血球減少、脳梗塞、肺炎などであった。放射線治療群における認知機能低下の出現は年齢と相関を認め、78 歳以上で有意に頻度が高かった。QOL 解析ではテモゾロミド治療群において Role, Social 機能スケールにおいて治療経過とともに統計学的に有意な改善傾向を認めたが、放射線治療群では各スケールに有意な変化は認めなかった。

結論：高齢者膠芽腫に対しパイロシークエンス法による MGMT メチル化の定量的判定による層別化治療は有用な治療戦略であり、MGMT 高メチル化群に対する放射線療法を省略したテモゾロミド 単独療法は生存成績を損なうことなく QOL 改善を期待できる。

【達成度】95%、投稿中。

- (4) 高齢者中枢神経系原発悪性リンパ腫に対する導入免疫化学療法と維持化学療法により照射を回避した治療戦略ならびに診断・治療に関するバイオマーカーの探索研究（白畑、三島）

【研究内容】

高齢者中枢神経系原発悪性リンパ腫（ePCNSL）は予後不良な悪性脳腫瘍で、標準治療の大量メトトレキサート（HD-MTX）基盤化学療法と全脳照射では遅発性神経障害を高率にきたすため新たな治療法の開発が必要である。我々はePCNSLに対し、寛解導入療法としてR-MPVレジメンを6サイクル施行後、奏効例は1ヵ月毎にR-MPVによる地固め療法を2サイクル施行、CR例にはMPVによる維持療法を3ヵ月毎に2年間施行し、部分奏効(PR)例には減量照射23.4Gyを施行している。全20例の年齢中央値は72歳、KPS中央値70、寛解導入・地固め療法後のCR割合は92%、PR割合は8%、CRを得るのに要したR-MPVサイクル中央値は4.5であった。全20例のmPFS: 33.9ヵ月、2年PFS割合: 53.9%、mOS: 未到達、3年OS割合: 71.5%であった。Grade 3/4の有害事象は、好中球減少: 75%、リンパ球減少: 45%、血清トランスアミラーゼ上昇: 5%、低ナトリウム血症: 5%、腎不全: 5%、尿路感染症: 5%、痙攣: 5%で、維持療法を行った(M+)8例と行わなかった(M-)8例のmPFSは、M+: 33.9ヵ月 vs. M-: 18.3ヵ月 (P=0.179)、mOSはM+: 未到達 vs. M-: 21ヵ月 (P=0.016)であった。ePCNSL においてR-MPV療法後MPV維持治療を行うことで予後が改善する可能性がある。またPCNSL患者髄液より微量DNAを抽出し、デジタルPCR法にてMyD88の遺伝子変異(L265P)が検出できるかを試みた。PCNSL患者 20例中12例(69%)でMyD88の遺伝子変異が検出可能で、全例で腫瘍組織のMyD88遺伝子変異新が確認された。髄液の微量DNAのMyD88遺伝子変異はPCNSL の診断マーカーになる可能性が示された。

【達成度】60%、投稿準備中。

- (5) 脳脊髄腫瘍の分子病理統合診断の確立（小澤、白畑、三島）

【研究内容】

【概要】現在の脳腫瘍診断には、病理組織診断に分子診断を加えた統合診断が必須となった。病理診断科にて行われる病理組織診断に対して、本邦では分子診断は主に個々の脳腫瘍診療科単位で解析が進められているため、その整備が喫緊の課題となっている。脳腫瘍の遺伝子異常の同定は、診断に必要であるのみならず治療法の決定や予後予測、さらにその遺伝子異常を標的にした新たな治療標的の探索研究等に必須である。本研究では悪性脳腫瘍の代表である神経膠腫を始めとして、様々な脳腫瘍タイプの遺伝子検査を整備し、本学における病理組織診断と分子診断を統合した系統的診断の確立を目指す。そして、遺伝子異常の背景を明らかにしたヒト由来の希少脳腫瘍モデルシステムの作成や臨床応用を目指した脳腫瘍の治療標的の探索研究への発展に繋げていくことを目標とする。

【達成度】30%、当該年度12月に本研究課題のIRBが承認され研究活動を開始した状況にある。現在、当科における神経膠腫に対する分子診断アルゴリズムの作成を目指し、関連する遺伝子異常に対する最適の解析法の確立を進め解析プロトコール作成を進めている。

さらに、以下の研究成果を論文として発表した。

1. Siobhan S Pattwell, Sonali Arora, Nicholas Nuechterlein, Michael Zager, Keith R Loeb, Patrick J Cimino, Nikolas C Holland, Noemi Reche-Ley, Hamid Bolouri, Damian A Almiron Bonnin, Frank Szulzewsky, Vaishnavi V Phadnis, Tatsuya Ozawa, Michael J Wagner, Michael C Haffner, Junyue Cao, Jay Shendure, Eric C Holland

Oncogenic role of a developmentally regulated *NTRK2* splice variant. *Sci Adv.* 2022 Oct 7;8(40):eabo6789. doi: 10.1126/sciadv.abo6789.

2. Kyuto Sonehara, Yui Kimura, Yoshiko Nakano, Tatsuya Ozawa, Meiko Takahashi, Ken Suzuki, Takashi Fujii, Yuko Matsushita, Arata Tomiyama, Toshihiro Kishikawa, Kenichi Yamamoto, Tatsuhiko Naito, Tomonari Suzuki, Shigeru Yamaguchi, Tomoru Miwa, Hikaru Sasaki, Masashi Kitagawa, Naoyuki Ohe, Junya Fukai, Hideki Ogiwara, Atsufumi Kawamura, Satoru Miyawaki, Fumihiko Matsuda, Nobutaka Kiyokawa, Koichi Ichimura, Ryo Nishikawa, Yukinori Okada, Keita Terashima. A common deletion at BAK1 reduces enhancer activity and confers risk of intracranial germ cell tumors. *Nat Commun.* 2022 Aug 2;13(1):4478. doi: 10.1038/s41467-022-32005-9.
3. Suzuki T, Shirahata M, Adachi JI, Mishima K, Nishikawa R. Clinical significance and pitfalls of human chorionic gonadotropin-related tumor markers for intracranial germinomas. *Child's Nerv Syst.* Published online 2023. doi:10.1007/S00381-023-05856-W
4. Plant-Fox AS, Suzuki T, Diaz Coronado RY, et al. An international study evaluating the epidemiology of intracranial germ cell tumors in the native versus immigrant Japanese populations: the need for an international registry. *J Neurooncol.* 2022;159(3):563-570. doi:10.1007/S11060-022-04094-5
5. Takami H, Elzawahry A, Mamatjan Y, Suzuki T. et al. Transcriptome and methylome analysis of CNS germ cell tumor finds its cell-of-origin in embryogenesis and reveals shared similarities with testicular counterparts. *Neuro Oncol.* 2022;24(8):1246-1258. doi:10.1093/NEUONC/NOAC021
6. Satomi K, Takami H, Fukushima S, Suzuki T. et al. 12p gain is predominantly observed in non-germinomatous germ cell tumors and identifies an unfavorable subgroup of central nervous system germ cell tumors. *Neuro Oncol.* 2022;24(5):834-846. doi:10.1093/NEUONC/NOAB246
7. Nakamura H, Takami H, Yanagisawa T, Suzuki T. et al. The Japan Society for Neuro-Oncology guideline on the diagnosis and treatment of central nervous system germ cell tumors. *Neuro Oncol.* 2022;24(4):503-515. doi:10.1093/NEUONC/NOAB242
8. Sonehara K, Kimura Y, Nakano Y, Suzuki T. et al. A common deletion at BAK1 reduces enhancer activity and confers risk of intracranial germ cell tumors. *Nat. Commun.* 2022;13(1). doi:10.1038/S41467-022-32005-9
9. Uchida E, Sasaki A, Shirahata M, et al. Role of proliferative marker index and KBTBD4 mutation in the pathological diagnosis of pineal parenchymal tumors. *Brain Tumor Pathol.* 2022;39(3):130-138. doi:10.1007/S10014-021-00421-2
10. Mizuno R, Homma T, Adachi J ichi, et al. True anaplastic oligoastrocytoma with dual genotype: illustrative case. *J Neurosurg Case Lessons.* 2022;4(3). doi:10.3171/CASE22146
11. Ohno M, Kitanaka C, Miyakita Y, Tanaka S, Sonoda Y, Mishima K, Ishikawa E, Takahashi M, Yanagisawa S, Ohashi K, Nagane M, Narita Y. Metformin with Temozolomide for Newly Diagnosed Glioblastoma: Results of Phase I Study and a Brief Review of Relevant Studies. *Cancers (Basel).* 2022, 14 :4222. doi: 10.3390/cancers14174222.
12. Kawasaki T, Takayama M, Kobayashi T, Maki Y, Shirahata M, Adachi JI, Homma T, Ioroi Y. J. Primary intramedullary spinal cord pilocytic astrocytoma with anaplasia in an adult: illustrative case. *J Neurosurg Case Lessons.* 2022;3(12):CASE21702.
13. 土屋 亮輔, 三島 一彦, 佐々木 惇, 本間 琢, 水野 玲奈, 内田 栄太, 白畑 充章, 鈴木 智成, 安達 淳一, 西川 亮. 全身性エリテマトーデス, 関節リウマチ, 間質性肺炎に対してミコフェノール酸モフェチル内服中に発症した頭蓋内リンパ球増殖性疾患の1例. *脳神経外科ジャーナル* 2022 31(1): 42-49
14. 照井康仁, 成田善孝, 永根基雄, 三島一彦, 荒川芳輝, 米澤 大, 浅井克則, 福原規子, 杉山一彦, 篠島直樹, 葵新, 西川 亮. 再発又は難治性の中樞神経系原発リンパ腫を対象とした国内第1/2相試験におけるチラブルチニブ投与期間中のQuality of Life及びKarnofsky Performance Statusの経時的変化の報告 *日本リンパ網内系学会会誌* 2022. 62. 95-95

脳血管内治療研究グループ

- (1) 急性期破裂脳動脈瘤の塞栓術における術前アスピリン投与の効果と安全性に関する多施設共同二重盲検比較試験 (神山・今岡・吉川)

【研究内容】破裂脳動脈瘤に対する脳血管内手術の虚血性合併症予防を目的とした術前抗血小板剤投与の是非は証明されていない。術前アスピリン投与によって虚血性合併症と出血性合併症のどちらがより問題となるかを焦点とした予後改善の評価を行う研究を、共同研究施設として行った。当院からは期間中3例の症例を登録し、問

題なく経過観察が行われている。

【達成度】30% 症例登録中

(2) 血小板凝集能抑制効果と脳血管内手術周術期合併症の関連について (飯星・神山)

【研究内容】脳血管内治療時に抗血小板剤の術前投与を行うことが多いが、抗血小板剤の効果は個人差が大きく、それが周術期の虚血性合併症と関与している可能性が示唆されている。血小板凝集抑制効果の計測については臨床成績と結びついた確立したものがない。これまで我々は、当院における Born 法と VerifyNow System による測定により血小板凝集能抑制効果を計測し、治療成績との関連を調べ、抗血小板剤の適切な使用方法を検証するための研究を行ってきた。最近、より簡便な Thromboestgram 法を用いた TEG6s が保険適応となっており、その有用性を調べる研究を開始し、現在多施設共同研究の申し入れがあり参画して継続している。

【達成度】80%、症例経過観察中

(3) 不安定プラークを有する頸部内頸動脈狭窄症に対する頸動脈ステント留置術の安全性に関する研究 (米澤 (院)・神山)

【研究内容】

頸部内頸動脈狭窄症に対する外科治療は、頸動脈内膜剥離術と頸動脈ステント留置術がある。不安定プラークは頸動脈ステント留置術時に末梢にプラークが流出して脳梗塞を生じやすいため危険因子として知られており、頸動脈内膜剥離術を行うべきであるとされている。我々はステント留置前の前拡張時に十分にバルーンにてプラークを圧排・回収することにより、不安定プラークでも安全に治療する方法を見出し実行している。これまでに行われた症例を登録し、その治療成績を解析することにより、当治療法の有効性と問題点を解析することとしている。途中解析データを脳卒中の外科学会誌に報告した (脳卒中の外科 2022 50(6)461-466)。

【達成度】80%、データ解析中

(4) 新規血栓溶解薬テネクテプラゼの脳梗塞急性期再灌流療法への臨床応用を目指した研究 (先進医療・特定臨床研究) (神山・吉川・今岡)

【研究内容】

急性期脳梗塞の tPA 療法に用いる薬剤は国内ではアルテプラゼのみであるが、海外ではテネクテプラゼのアルテプラゼに対する優越性が証明され、今後アルテプラゼの生産が終了する可能性が示唆されている。国内での tPA 療法を維持するためにテネクテプラゼの薬事承認が必要となるため、医師主導治験と同等の研究が必要とされ、本研究が開始された。当院は共同研究施設として参画しており、現在当院からは3例登録し、全体として症例の集積が進んでいる。

【達成度】30%、症例集積中

(5) フローダイバーター治療後の未破裂脳動脈瘤の MRI による血栓化の評価に関する研究 (塚越 (院)・神山)

【研究内容】未破裂脳動脈瘤のフローダイバーター治療は大型広頸脳動脈瘤に対する治療としてその有効性が証明されているが、瘤の完全血栓化には数週から数年の時間がかかり、瘤の血栓化の変化を確認しつつ経過観察を行う必要がある。侵襲性の少ない MRI での経過観察が望ましいが、血栓の信号と残存血流の信号強度の区別が一般に用いられている画像 (TOF-MRA, T1・T2WI 等) では判断が難しい。これらを区別する新たな MRI 撮像法が提案されているが、それらの撮像法と実際の血管撮影による評価との解離もあり、いずれの撮像法が優れているか未だ確実な評価が行われていない。当院でのデータを集積し、各撮像法の有用性につき検討することを目的としている。

【達成度】50%、症例集積中

その他以下の研究成果を発表した

1. 井上真秀, 藤野雄次, 高橋秀寿, 神山信也 脳血管内治療と理学療法 理学療法ジャーナル 2022 Feb 56(2) 154-158
2. Kokyo Sakurada, Akio Teranishi, Eisuke Tsukagoshi, Satoshi Iihoshi, Hiroki Kurita, Shinya Kohyama. Stent-Assisted Coil Embolization Using A Trans-Circulation Technique For Superior Cerebellar Artery Aneurysm: A Report Of Two Cases. NMC Case Report Journal. 2022 Apr 9:37-41
3. Masaki Ikegami, Tomoya Kamide, Hidetoshi Ooigawa, Yushiro Take, Akio Teranishi, Kaima Suzuki, Shinya Kohyama, Hiroki Kurita. Clinical features of ruptured very small intracranial aneurysms (< 3 mm) in patients with subarachnoid hemorrhage. WORLD NEUROSURGERY. 2022 Aug 164 : e1087-1093
4. Soichi Oya, Shinsuke Yoshida, Akira Saito, Masaaki Shojima, Gakushi Yoshikawa, Takahiro Ota, Hideaki Ono, Hiroki Kurita, Shinya Kohyama, Satoru Miyawaki, Satoshi Koizumi, Nobuhito Saito, Toru Matsui. The optimal management of ruptured basilar artery dissecting. Neurosurgical Review. 2022 Sep 45:3427-3436
5. Fumitaka Yamane, Yuhei Michiwaki, Tatsuya Tanaka, Akira Matsuno, Shinya Kohyama, Takeshi Uno, Yuta Oyama,

Akihiro Ito. Structural Analysis of Tentorial Dural Arteriovenous Fistulae with Special Considerations of Venous Ectasia: Proposing a Simpler Classification. Springer. 2022 Sep 187-202

6. Yu Otaki, Azusa Yonezawa, Kaie Kagoshima, Takaaki Yoshida, Shinya Kohyama, Yuhei Yoshimoto. Intra-aneurysmal embolization for subarachnoid hemorrhage due to rupture of aneurysm located at the anterior spinal artery and vertebral artery: illustrative case. JOURNAL OF NEUROSURGERY Case Lesson. 2022 Oct 4(17)
7. Eisuke Tsukagoshi, Hiroki Sato, Shinya Kohyama. Delayed aneurysm rupture in a patient treated with flow redirection endoluminal device: a case report and literature review. Surgical Neurology International. 2022 Nov 13:506
8. Takuma Maeda, Hidetoshi Ooigawa, Kaima Suzuki, Hiroki Sato, Satoshi Iihoshi, Shinya Kohyama, Hiroki Kurita. Predictors of Ischemic Complication in Anterior Choroidal Artery Aneurysm Repair. WORLD NEUROSURGERY. 2022 Nov 16: e157-164
9. Ichiro Deguchi, Takahashi Osada, Shinya Kohyama, Shinichi Takahashi. Status of neurological deficits after mechanical thrombectomy in elderly patients with ischemia. WORLD NEUROSURGERY. 2022 Nov 105:16-21
10. 石原秀章、神山信也、西田翔、熊谷光祐、林真司、加藤裕 頸部頸動脈狭窄症に対する Staged Angioplasty の 1 期目 経皮的血管形成術における弾性反跳の危機因子および臨床的意義の検討. NKC 2022 Dec 7(3)107-114
11. Eisuke Tsukagoshi, Hiroki Sato, Shinya Kohyama. Unique guiding catheter induction technique using aspiration catheter and Amplatz super-stiff guidewire for thrombectomy. Interdisciplinary Neurosurgery. 2023 Mar. <https://doi.org/10.1016/j.inat.2022.101667>

3-3. 達成度評価

各グループとも着実に研究が進行しており、本年も多くの学術論文が出版され、満足できる達成度であった。

3-4. 次年度改善計画

脳血管障害研究グループ

本年も複数の科学研究費の支援下に、各プロジェクトは概ね順調に成果を上げ、多数の臨床論文は出版された。一方、基礎研究に関しては学外のラボの協力が今まで不可欠であったが、昨年度に Barrow Neurological Institute から帰学した佐藤講師が「脳血管研究 labo」を立ち上げ、基礎研究を開始した。今後の研究の飛躍的發展が期待される。次年度も現在継続中のプロジェクトを進行させると同時に、治療困難な脳血管障害の外科治療法に関する複数の臨床プロジェクト、並びに脳血管内皮障害に関する基礎研究のプロジェクトを立ち上げる予定である。

脳腫瘍研究グループ

これまで行ってきた研究を基盤とし、引き続き継続するとともに以下の点について進めていく。

1. 可能なプロジェクトについては終了報告をまとめ論文化する。
2. AMED や文科省科研費をはじめとする研究費については会計報告を公正に行うとともに次年度の研究費獲得プランを作成する。あらたな研究費も獲得できるように脳腫瘍基礎研究のプロジェクトを立ち上げる。
3. 若手のプロジェクトの立ち上げ、これまでの研究成果の論文を積極的に促し、次のステップに進めるようにする。
4. 神経膠腫に対する分子診断アルゴリズムの作成を目指し、関連する遺伝子異常に対する最適の解析法の確立を進める。

脳血管内治療研究グループ

新たなデバイスや治療方法に伴う共同研究への参加依頼が増加しており、症例数の多さを生かして積極的にに関して参加研究数を増やす。また、当院独自のシステムとしても、関連施設を結ぶ脳血管内治療データベースの構築を行い、今後の研究に利用できる状態として完成させたい。また、新たなデバイスに関して学会主導の承認後臨床研究のデータベース蓄積が行われており、積極的に貢献する。

4. 診療

脳卒中外科および脳血管内治療科は、日本最大の脳血管外科手術数を維持し、脳卒中内科やリハビリテーション科との強い連携のもと、脳卒中センター内で有機的に機能できたと思われる。また、多くの英文学術論文を出版する事ができた。手術数は脳卒中外科、において漸減傾向は回復できず、コロナ禍で我慢の1年となったが、脳脊髄腫瘍科では増加しており、3診療科を合わせた手術数は年間 984 例と、脳神経外科学会認定基幹施設として、全国最多の手術数を本年度も維持する事ができた。来年度は最低でも 1000 例の回復を目指したい。今後も手術数、成績とも日本の leading hospital としての役割を維持し、近い将来にアジアをはじめとする世界各国より患者を受け入れる国際競争力を備えたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県医事裁判鑑定人（栗田浩樹）
独立行政法人医療品医療機器総合機構 専門医員（神山信也、三島一彦）
国立がん研究センター先進医療評価委員会 技術委員（西川亮）
厚生労働省医療ニーズの高い医療機器等の早期導入に関する検討会ワーキンググループ委員（神山信也）
埼玉県急性期脳梗塞治療ネットワーク ワーキンググループ座長（神山信也）
埼玉県循環器病対策推進協議会 脳卒中部会委員（栗田浩樹、神山信也）
埼玉県小児がん診療病院連携協議会 委員（鈴木智成）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Neurologia medico-chirurgica（栗田浩樹、三島一彦、柳澤隆昭：Review Board）
脳卒中（栗田浩樹：Editorial Board、吉川雄一郎、神山信也：Review Board）
神経外傷（栗田浩樹：Editorial Board）
脳卒中の外科（栗田浩樹：Editorial Board）
神経救急学会雑誌（栗田浩樹：副編集長）
Neurosurgical Emergency（栗田浩樹、神山信也：Review Board）
J Neurosurg Sci（栗田浩樹：Review Board）
Clin Neurol Neurosurg（栗田浩樹：Review Board）
World Neurosurg（栗田浩樹：Review Board）
Neuro-Oncology（柳澤隆昭、三島一彦：ad hoc reviewer）
Pediatric International（柳澤隆昭：Review Board）
Neuropathology（三島一彦：Review Board）
小児の脳神経（柳澤隆昭：編集委員）
日本小児科学会雑誌（柳澤隆昭：Review Board）
小児がん（柳澤隆昭：Review Board）
小児血液・がん学会誌（柳澤隆昭：Review Board）
Expert Review Anticancer Therapy（柳澤隆昭：Review Board）
Pediatric Blood and Cancer（柳澤隆昭：Editorial Board）
脳神経外科速報（竹田理々子：編集同人）
ACUTE MEDICINE & SURGERY（神山信也：Review Board）
Journal of NeuroInterventional Surgery（神山信也：Review Board）
JNET Journal of Neuroendovascular Therapy（神山信也：編集委員）
脳血管内治療（神山信也：編集委員）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本脳神経外科学会・代議員（栗田浩樹、神山信也、三島一彦、吉川雄一郎、小倉丈司、森本将史）
日本脳神経外科学会・国際教育小委員会委員長（栗田浩樹）
日本脳神経外科学会・専門医試験委員（栗田浩樹）
日本脳腫瘍学会（12月まで事務局長 1月から副事務局長、理事：三島一彦）
日本脳腫瘍学会 渉外委員会 副委員長（三島一彦）
日本脳腫瘍学会 交流電場腫瘍治療システム適正使用検討会 委員（三島一彦）
日本脳腫瘍学会 腫瘍内科系領域推進委員会 副委員長（三島一彦）
日本脳卒中学会・理事（栗田浩樹）
日本脳卒中学会・代議員（栗田浩樹、神山信也、吉川雄一郎、小倉丈司、森本将史）
日本脳卒中学会・専門医試験委員（栗田浩樹）
日本脳卒中の外科学会・理事（栗田浩樹）
日本脳卒中の外科学会・技術認定副委員長（栗田浩樹）
日本脳卒中の外科学会・代議員（池田俊貴、吉川雄一郎、小倉丈司、竹田理々子、池田俊貴、森本将史）
日本脳神経外科救急学会・常務理事（栗田浩樹：2020年度会長）
日本脳神経外科救急学会・理事（竹田理々子）
日本脳神経外科救急学会・評議員（古峰弘之）

日本神経外傷学会・理事（栗田浩樹）
 日本神経外傷学会・学術評議員（鈴木海馬）
 日本神経救急学会・世話人（栗田浩樹：2023 年会長）
 日本老年脳神経外科学会・世話人（栗田浩樹：2024 年会長）
 日本心・脳卒中学会・学術評議員（栗田浩樹）
 脳神経外科手術と機器学会・学術評議員（栗田浩樹）
 日本神経内視鏡学会・学術評議員（栗田浩樹）
 スパズム・シンポジウム・世話人（栗田浩樹：2026 年会長、吉川雄一郎）
 Mt. Fuji Workshop on CVD 事務局長（栗田浩樹：2016 年会長）
 Mt. Fuji Workshop on CVD 運営委員（竹田理々子）
 白馬脳神経外科セミナー運営委員（栗田浩樹：2017 年会長）
 手技にこだわる脳神経外科ビデオカンファレンス・代表世話人（栗田浩樹：2023 年会長）
 関東脳神経外科懇話会幹事（栗田浩樹：2024 年会長）
 日中脳神経外科連盟・世話人（栗田浩樹）
 労働政策研究・研修機構(JILPT)労働大学校非常勤講師（三島一彦）
 日本脳神経外科学会 個別調査部会委員（三島一彦）
 日本脳神経外科学会個別調査部会委員（三島一彦）
 小児血液・がん学会専門医制度委員会（柳澤隆昭）
 埼玉県立日高特別支援学校相談医（柳澤隆昭）
 日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG)脳腫瘍グループ代表委員（三島一彦）
 日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG)効果安全評価委員（三島一彦）
 埼玉脳神経外科医会・理事（栗田浩樹、西川亮）
 埼玉脳神経外科懇話会世話人（栗田浩樹）
 埼玉ブレインセミナー世話人（栗田浩樹、吉川雄一郎、池田俊貴）
 埼玉中枢神経画像診断研究会・世話人（栗田浩樹）
 脳腫瘍の基礎シンポジウム・世話人（三島一彦）
 ニューロオンコロジーの会・世話人（三島一彦）
 日本脳神経外科光線力学学会監事（三島一彦）
 武蔵野脳卒中外科研究会・代表世話人（栗田浩樹）、同・事務局（鈴木海馬）
 日高脳血管障害セミナー・代表世話人（栗田浩樹）、同・事務局（鈴木海馬）
 埼玉西部地区脳血管障害病診連携の会・世話人（栗田浩樹）
 石尊山神経懇話会・世話人（栗田浩樹、三島一彦、神山信也）
 日本脳神経血管内治療学会関東地方会幹事（神山信也）
 東京脳卒中の血管内治療セミナー(TSNET)世話人（神山信也）
 日本脳神経血管内治療学会 理事 専門医試験委員（神山信也）
 日本脳卒中学会埼玉県 IVR 委員（神山信也）
 小児脳腫瘍カンファレンス・世話人・事務局（鈴木智成）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Suzuki K, Sato H, Mori H, Matsumoto R, Arimoto Y, Sato H, Kamide T, Ikeda T, Kikkawa Y, Kurita H. Early enteral nutrition using high-protein digestive nutrients may improve prognosis in subarachnoid hemorrhage patients. *Medicina (Kaunas)* 58:1264 doi: 10.3390/medicina58091264, 2022
- ② Maeda T, Ooigawa H, Suzuki K, Sato H, Iihoshi S, Koyama S, Kurita H. Predictor of ischemic complication in anterior choroidal artery aneurysm repair. *World Neurosurg* 2022 Aug 5:S1878-8750(22)01064-6. doi: 10.1016/j.wneu.2022.07.111. Online ahead of print. PMID: 35934295
- ③ Ikegami M, Kamide T, Ooigawa H, Take Y, Teranishi A, Suzuki K, Koyama S, Kurita H. Clinical features of ruptured tiny (<3mm) aneurysms in patients with subarachnoid hemorrhage. *World Neurosurg* 164: e1087-e1093, 2022

- ④ [Mishima K](#), [Nishikawa R](#), Narita Y, Mizusawa J, Sumi M, Koga T, Sasaki N, Kinoshita M, Nagane M, Arakawa Y, Yoshimoto K, Shibahara I, Shinojima N, Asano K, Tsurubuchi T, Sasaki H, Asai A, Sasayama T, Momii Y, Sasaki A, Nakamura S, Kojima M, Tamaru JI, Tsuchiya K, Gomyo M, Abe K, Natsumeda M, Yamasaki F, Katayama H, Fukuda H. Randomized phase III study of high-dose methotrexate and whole-brain radiotherapy with/without temozolomide for newly diagnosed primary CNS lymphoma: JCOG1114C. *Neuro Oncol.* 2023, 25, 687–698. doi: 10.1093/neuonc/noac246.
- ⑤ [Suzuki T](#), [Shirahata M](#), [Adachi JI](#), [Mishima K](#), [Nishikawa R](#). Clinical significance and pitfalls of human chorionic gonadotropin-related tumor markers for intracranial germinomas. *Childs Nerv Syst.* 2023, Feb 6. doi: 10.1007/s00381-023-05856-w.
- ⑥ Ohno M, Kitanaka C, Miyakita Y, Tanaka S, Sonoda Y, [Mishima K](#), Ishikawa E, Takahashi M, Yanagisawa S, Ohashi K, Nagane M, Narita Y. Metformin with Temozolomide for Newly Diagnosed Glioblastoma: Results of Phase I Study and a Brief Review of Relevant Studies. *Cancers (Basel).* 2022, 14 :4222. doi: 10.3390/cancers14174222.
- ⑦ Eisuke Tsukagoshi, Hiroki Sato, Shinya Kohyama. Unique guiding catheter induction technique using aspiration catheter and Amplatz super-stiff guidewire for thrombectomy. *Interdisciplinary Neurosurgery.* 2023 Mar. <https://doi.org/10.1016/j.inat.2022.101667>
- ⑧ Kokyo Sakurada, Akio Teranishi, Eisuke Tsukagoshi, Satoshi Iihoshi, Hiroki Kurita, Shinya Kohyama. Stent-Assisted Coil Embolization Using A Trans-Circulation Technique For Superior Cerebellar Artery Aneurysm: A Report Of Two Cases. *NMC Case Report Journal.* 2022 Apr 9:37-41
- ⑨ Eisuke Tsukagoshi, Hiroki Sato, Shinya Kohyama. Delayed aneurysm rupture in a patient treated with flow redirection endoluminal device: a case report and literature review. *Surgical Neurology International.* 2022 Nov 13:506

【総数：論文 60 件、学会発表 178 件、講演 57 件】

6-2. 獲得研究費

1. 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C) 課題番号 17K10849：質量顕微鏡によるヒト脳動脈瘤組織 解析：増大・破裂に関与する特異な分子局在の同定（主任研究者：竹田理々子、分担研究者：栗田浩樹）
2. 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C) 課題番号 18K09003：グリオーマにおける HRM 法を用いた高感度 TERT 遺伝子変異検出法の確立。（主任研究者：安達淳一）
3. 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C) 課題番号 21K07606：光感受性物質による放射線増強効果を用いた悪性脳腫瘍に対する新規治療の開発（主任研究者：三島眞代、分担研究者：三島一彦）
4. 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C) 課題番号 19K09514 中枢神経系原発悪性リンパ腫の診断・治療に関するバイオマーカーの探索（主任研究者：三島一彦、分担研究者：落合孝広）
5. 文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 19K09535：IDH 変異型星細胞腫における悪性転化の分子背景の解明（主任研究者：白畑充章）
6. AMED 委託費：可及的摘出術が行われた初発膠芽腫に対するカルムスチン脳内留置用剤を用いた標準治療確立に関する研究（主任研究者：隈部俊宏、分担研究者：三島一彦）隈部班
7. AMED 委託費：高齢者初発膠芽腫に対するテモゾロミド併用寡分割放射線治療の最適化に関する研究（主任研究者：荒川芳輝、分担研究者：三島一彦、研究参加者：鈴木智成、白畑充章）荒川班
8. AMED 委託費：NovoTTF-100A の小児膠芽腫への適応拡大を目指した先進医療臨床試験（主任研究者：湯坐有希、分担研究者：西川亮、研究参加者：安達淳一、鈴木智成）
9. AMED 委託費：がん遺伝的素因を有する小児・AYA 世代へのフォローアップ体制確立を目指した Li-Fraumeni 症候群におけるがんサーベイランスプログラムの実行可能性と新規バイオマーカー探索に関する研究（主任研究者：服部浩佳、分担研究者：鈴木智成）
10. AMED 委託費：がん幹細胞を標的とした初発膠芽腫の放射線+テモゾロミド+メトホルミン併用療法の第 I・II 相臨床試験（主任研究者：成田善孝、分担研究者：三島一彦、研究参加者：鈴木智成、内田栄太）
11. AMED 委託費：初発中枢神経原発胚細胞腫瘍に対する化学療法併用放射線治療の低侵襲化に関する研究開発（主任研究者：荒川芳輝、分担研究者：鈴木智成、研究参加者：三島一彦、白畑充章）
12. 文部科学省科学研究費補助金 若手研究 (B) 課題番号 20K15933 仮想血管閉塞モデルを用いた非侵襲的側副血路の評価法の開発（主任研究者：栗原伴佳）

6-3. 受賞

栗田浩樹：Best Doctors in Japan 2014-2023

栗田浩樹：Honorary Member, Southwest Europe Neurosurgical Society (2022-終身)

栗田浩樹：埼玉医科大学国際医療センター 病院長賞

前田拓真：関東脳神経外科懇話会、年次奨学賞

武裕士郎：第47回日本脳神経外傷学会、最優秀ポスター賞

三島一彦：6th Quadrennial Meeting of the world Federation of Neuro-Oncology Societies (WFNOS 2022) Best Abstract Award

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- (1) 第1回関東脳神経外科ハンズオンセミナー(2022.5.21-22,川崎)
- (2) 第10回武蔵野脳卒中外科カンファレンス(2022.6.11,大宮)
- (3) 埼玉県北西部地区クラブゼンタン発売記念講演会(2022.6.15,川越)
- (4) 脳血管障害と高脂血症(2022.6.16 WEB)
- (5) Neurosurgery Network Web Seminar(2022.6.17,深谷)
- (6) WEBセミナー MEP Monitoring Conference(2022.7.8,WEB)
- (7) 第17回埼玉脳神経外科ソサエティ(2022.7.16,川越)
- (8) Clinical Simulation Program(2022.9.11,成田)
- (9) SAH SPASM in Tokyo EAST(2022.9.13,日本橋)
- (10) D-clip 記念講演会(2022.9.28,横浜)
- (11) 第4回脳神経外科眼科病連携の会(2022.9.30,WEB)
- (12) 埼玉・亜鉛外科フォーラム(2022.10.3,WEB)
- (13) 高齢者トータルケアを考える講演会(2022.10.27,WEB)
- (14) 第4回埼玉若手脳神経外科手術研究会(2022.11.2,川越)
- (15) 埼玉県てんかんセミナー(2022.11.10,WEB)
- (16) SAH ネットワーク in Saitama(2023.1.19,さいたま)
- (17) 関埼 Neurosurgery Meeting(2023.1.26,WEB)
- (18) 第10回手技にこだわる脳神経外科ヒューマンカンファレンス(2023.1.28,東京、栗田浩樹会長)
- (19) 首都圏てんかん重積状態セミナー(2022.2.9,WEB)
- (20) 第18回埼玉脳神経外科ソサエティ(2023.2.13,川越)
- (21) 埼玉県西部・血糖管理を紐解く会(2023.2.28,WEB)
- (22) SAH ネットワーク Expert Meeting(2023.3.3,高崎)
- (23) 第42回日高・飯能地区病診連携薬剤師会(2023.3.7,WEB)
- (24) STROKE 手術手技セミナー in 埼玉西部(2023.3.8,WEB)
- (25) Young Stroke Leaders Exchange Meeting(2023.3.9,WEB)
- (26) 第10回日高脳血管障害セミナー(2023.3.25,飯能)
- (27) 県北脳卒中連携セミナー(2023.3.30,熊谷)
- (28) PSLS コース(年4回、埼玉県急性期脳卒中治療治療ネットワーク支援業務)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

脳卒中外科：教育に関しては、講義には staff が、BSL には診療部長以下全員が熱意を持ってあたり、専攻医が 2020 年度に 8 名、2021 年度の 4 名、2022 年度に 5 名入局し、他施設から臨床フェロー 3 名も受け入れた。2022 年度からはコロナ禍で中止されていた外国人臨床修練士の受け入れが開始され、2023 年度も継続する予定である。研究に関しては、複数の科研費を含む競争的研究費を獲得し、複数の他学との共同研究の成果を出版する事ができた。国際学会でも 14 演題が採択され、国内学会には学会でも 123 回(シンポジウム 18、一般演題 115)の発表を行った。また診療部長・staff の講演数も 23 回を数えた。論文に関しては、和文を含めると 38 篇(うち英文 9)を出版した。これらはすべて、前年度とほぼ同等であった。診療に関しては、本年度も引き続きコロナ禍のため手術数の漸減傾向にあったが、全国一の脳血管外科治療数を維持する事は可能であった。(診療部長 栗田浩樹)

脳・脊髄腫瘍科：教育、研究、診療の各分野において一応満足すべき成果(前年度の目標をクリア)を残せた。特に

手術数は漸増傾向を維持し、過去最多となった。教育においては学生教育、特に実習を強化し、脳神経外科に興味を持ってもらい、全国的にもいわば社会問題ともなっている脳神経外科医の減少傾向に少しでも歯止めをかけるべく努力した。研究においては、WHO 2022 の脳腫瘍診断に加えられた分子遺伝学的診断ができる体制を構築した。また JCOG 試験において多施設共同研究の成果を筆頭著者として論文化し出版する事ができた。研究プロジェクトの進行状況、研究発表の論文においても、質にこだわり十分な成果が挙げられた。(診療部長 三島一彦)

脳血管内治療科：未破裂脳動脈瘤の症例は減少したものの国内最先端となる新しいデバイスも遅滞なく導入され、大きな合併症もなく治療成績は良好な状態を維持している。教育においては、脳神経外科学会専門医取得直後に脳神経血管内治療学会専門医を取得させるという目標が達成され、当院で教育を受けた専門医・指導医数も順当に増加した。研究に関しては、共同研究への参画が増えて着実に貢献した。(診療部長 神山信也)

脳神経外科(全体)：脳神経外科全体としては、コロナ禍の影響で手術数は漸減したが、手術成績は高く維持する事が可能であった。3科それぞれが我が国におけるトップクラスの症例数を有しトップクラスの治療を行っており、専攻医も2022年度は5名の入局があり、若い力に満ち、世代交代も順調に進み、前年度の目標達成されている。(運営責任者 三島一彦)

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

脳卒中外科：今後も、通常の大学病院では手術不可能な高難度病変を全国からより多く受け入れると同時に、埼玉県における神経救急の最後の砦として、救急患者を無条件に全例受け入れる体制を維持したい。また、コロナ禍で漸減傾向が続く手術数のV字回復が喫緊の課題である。そのためには、今後も救急医学科、脳卒中内科、脳血管内治療科との密接な関係を維持しながら、「治療戦略の統合化」と「技能分担の細分化」を継続的に進めると同時に、2023年度に脳卒中・心臓病等総合支援センターモデル事業の選定を受ける事ができたため、2023年には一層の医療連携を図る所存である。(診療部長 栗田浩樹)

脳・脊髄腫瘍科：研究においては、人員、予算、また特に臨床に従事しながら研究時間を見つけていることには限界があるので、今後はさらに productive な国内外の他施設との共同研究を展開していきたい。診療においては、次年度は更なる症例数の増加、手術件数の増加と治療成績の向上、質の向上を伴ったものにしていきたい。脳腫瘍治療は地道にはあるが、遺伝子パネル検査によるゲノム医療、分子標的薬治療などの先進的な検査や治療が導入されており、積極的に利用するように努力しているが、未だ治療に結び付いたものは1例にとどまる。引き続き治験への参加や標準治療の確立に関わる臨床試験・臨床研究、各種脳腫瘍ガイドラインの作成に参加、立案し、研究・教育を含めて本邦の脳腫瘍診療を牽引すべく努力したい。(診療部長 三島一彦)

脳血管内治療科：教育について：学生教育については授業とBSLにて実臨床と医師国家試験の両方に役にたつ教育資料を提供できたものとする。大学院においては2名が論文作成の状態まで進んでいる。専攻医教育も脳血管内治療専門医・指導医取得を順当に達成した。次年度も現在の教育体系を維持しつつ、大学院においては博士号取得ができるように指導したい。臨床について：定時手術は依然減少傾向にあるものの、脳血栓回収術の増加に伴い症例数はコロナ禍前に回復した。教育を行いつつも重篤な合併症は回避できた。次年度は手術室工事に伴う定時手術減少を最小限にとどめるよう努め、救急症例受け入れを増加させる。研究について：データベースの構築はまだ中途であるが、共同試験への参画が進み貢献できたものとする。次年度もさらに参加する共同研究を増やし、データベース構築を進める。(診療部長 神山信也)

脳神経外科(全体)：今後も世界に通用する脳神経外科医を継続的に輩出すると同時に、研究・教育を含めて、日本の leading hospital / university としての責務を果たせるよう、努力を重ねて参りたい。来年度の手術件数は3科合わせて1000例以上を目指すとともに、治療成績と質の向上を top priority とする。(運営責任者 三島一彦)

3. 17) 形成外科

1. 構成員

去川 俊二 (SARUKAWA, Shunji) : 教授 : 診療科長 : 代表指導教員(大学院) : 口腔顎顔面再建外科 : 博士
木村 武一郎 (KIMURA, Takeichiro) : 助教 : 再建外科
小松崎 孝 (KOMATSUZAKI, Takashi) : 助教 : 一般形成外科
神谷 佳亮 (KAMIYA, Keisuke) : 助教 : 一般形成外科
勅使河原 大輔 (TESHIGAWARA, Daisuke) : 非常勤講師 : 歯科・医科補綴 : 博士
早坂 純一 (HAYASAKA, Junichi) : 非常勤講師 : 顎顔面外科 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

形成外科では、数少ない教育機会を積極的に活用して、具体的な臨床手技のみならず、そこに至る過程や回避可能性などの議論を交えて治療者としての質向上を心掛けた教育を行うことを目標とした。

2-2. 教育実績(担当者)

卒前教育としては、4年生の皮膚・運動器ユニットの再建外科の講義を木村が担当した。

卒後教育としては、専攻医2名(3年目小松崎、3年目神谷)の研修を行った。

大学院教育として、去川が頭頸部腫瘍科塘田医師の指導教官を務めた。

その他、臨床研修センター主催のランチョンセミナーで木村が2度、外傷における縫合について講義を行った。

2-3. 達成度評価

本年度は新型コロナウイルス流行の影響で、臨床実習などの実地教育が制限されたため、WEBでの教育講習会などに積極的に参加することを目標としたが、おおむね達成できた。

2-4. 次年度改善計画

引き続き卒前・卒後教育の場を重視し、講義の品質向上を狙う。外科一般に向けた参考書の執筆なども行っている。また、本年度3月から木村医師がパリの形成外科に6か月予定で留学しており、今後の発展につなげたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床研究の土台作りを目的として、データベースの構築と積極的なアウトプット、早期からの臨床研究への取り組み、他領域との連携を目標に研究活動を行っている。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

・ 頭頸部再建患者データベース構築(去川)

統計学的データを基にした評価を行える環境造りを目的として、術後機能や臨床画像を含めたデータベースを構築している。また、整容評価法として3次元カメラを導入している。

・ 実体模型と顎義歯を用いた手術シミュレーションの評価(去川、勅使河原、早坂)

顎再建患者の機能向上を目標に、術後早期義歯着用のための手術シミュレーションを行っている。これまでは実体模型を用いたシミュレーションをメインに行っていたが、一昨年度から一部コンピューター上でを行い、骨切りテンプレートなどの造形も行っている。

・ 頭頸部腫瘍科塘田医師の学位取得のための臨床研究を補佐した。内容は下顎骨再建後の顎位の評価で、放射線、年齢、補綴状況、残存咀嚼筋群筋数などを変数とし、咀嚼筋群が顎位に大きな影響を与えることが分かった。

・ 腓骨による再建下顎骨の骨癒合評価(小松崎)

・ 顔面神経麻痺のコンピューター解析による状態評価(木村)

3-3. 達成度評価

研究実績からデータベースの構築という点では順調に活動でき、アウトプットという点でも新型コロナウイルスの影響で学会が少ない環境の中では活動でき、これらの点では達成できたが、他領域の連携では活動制限で達成できなかったと評価する。

3-4. 次年度改善計画

以上より、データベース構築の対象疾患を拡げ、他領域との連携を目標として掲げ、現行の研究を完遂して発表や論文などによるアウトプットを意識しつつ、達成に取り組む。

4. 診療

形成再建外科は他科の外科的補助が主たる診療である。その補助は、創部被覆、重要臓器もしくは人工物の被覆などの創治癒や救命目的、拘縮予防や組織増量、筋肉移植や支持組織移植などの機能的回復、整容性の回復など、目的が多岐にわたり、それに応じた術式が選択される。目的を明確にした上で再建治療を行い、術後評価でフィードバックすることが大切である。次年度の目標は、より高度な治療目標の設定と術式の選択・評価、二次再建症例数の増加である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本頭蓋顎顔面外科学会評議員 去川俊二
日本口腔腫瘍学会評議員 去川俊二
日本顎顔面補綴学会代議員 去川俊二、勅使河原大輔

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Hirai E, Sarukawa S, Park J, Fujii S, Nishikawa T, Yamamoto K. Short ramus reconstruction for hemi-mandibulectomy defect: Case reports. JPRAS Open. 33: 125-130, 2022
- ② Sugiura Y, Sarukawa S, Kamochi H, Takamatsu K, Ohta K, Mori Y, Yoshimura K, Inoue K. A novel method of end-to-side microvascular anastomosis using T-shaped metal stents: A porcine study. J Craniofac Surg. 33: 1222-1226, 2022.
- ③ 木村武一郎, 成田圭吾, 多久嶋亮彦. Facial Keypoint Detectionによる顔面神経麻痺の評価 - 深層学習を用いた特徴点抽出改善の試み. FACIAL NERVE RESEARCH JAPAN 42: 48-50, 2022.
- ④ 矢澤康男, 鳥越知明, 坂口浩三, 二反田博之, 木村武一郎, 喜多村勇大朗, 横川秀樹, 去川俊二. 胸郭切除を要する胸壁肉腫の臨床的検討. 日本整形外科学会雑誌 96: S1342-S1342, 2022
- ⑤ 木村武一郎, 成田圭吾, 多久嶋亮彦. AIを用いたFacial Keypoint Detectionによる顔面神経麻痺の評価. 第65日本形成外科学会総会・学術集会. シンポジウム 形成外科診療における人工知能(AI)の応用. 2022/4/22. 大阪
- ⑥ 勅使河原大輔, 去川俊二, 榎木祐一郎, 浅野悠, 藤澤政紀. 下顎骨再建に対する即時義歯の適応を検討する. 第39回日本顎顔面補綴学会総会・学術大会. 一般口演. 2022/6/25. 宮崎
- ⑦ 木村武一郎, 成田圭吾, 多久嶋亮彦. AIによる顔面神経麻痺の「笑い」の評価. パネルディスカッション 笑顔の再現 その評価 - 計測があり、評価が出る -. 2022/7/29. 大田区
- ⑧ Kimura T, Narita K, Takushima A. Elaborating computer-assisted keypoint detection through machine learning; toward an automated evaluation of facial palsy patients. The 31st Research Council Meeting of the Japan Society of Plastic and Reconstructive Surgery. 2022/10/13. Okayama
- ⑨ 去川俊二, 塘田健人, 榎木祐一郎, 勅使河原大輔, 木村武一郎. HCL下顎欠損分類の再考. 第31回日本形成外科基礎学術集会. 一般口演. 2022/10/14 岡山
- ⑩ 榎木祐一郎, 塘田健人, 勅使河原大輔, 去川俊二. 術後早期の口腔機能と整容面の回復を目指した顎骨再建. 第32回日本口腔内科学会・第35回日本口腔診断学会・第33回日本臨床病理学会総会. 2022/9/24. 札幌.

【総数：論文 4 件、学会発表 7 件、講演 1 件】

6-2. 獲得研究費

- ① 科学研究費基盤研究(C)、2020-2023年度、総額429万円、代表者：早坂純一（自治医大）、分担者：去川俊二、能動的な人工顎関節の開発（研究課題番号：20K10168）

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、教育の機会を最大限に活かすことを目標として、4年生講義などを担当し、コロナで教育機会が少なく、達成は不十分であった。研究に関しては、土台となるデータベース構築が頭頸部分野に置いて完成し、アウトプットの機会は増えてきた。診療に関しては形成外科独自の二次再建の症例が目標の10例に達成せず、不十分であったと評価している。基本学科全体としての目標達成は不十分であったが、コロナの影響があったと考える。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては教育機会が少ないことを念頭に、国家試験対策の講義に取り組む。研究に関しては、他領域との交流が少ないことを改善してWEBの活用を行い、新たな臨床研究を1件以上立ち上げることを目標として取り組む。診療に関しては、形成外科独自の二次再建の紹介患者が少ないことを改善するために他組織へのアピールなどを行い、次年度は二次再建紹介患者10件以上を目標として取り組む。その他の事項に関しては、スタッフが少ないので、1人以上の増員を目標とする。

3. 18) (1) 小児心臓科 (小児心臓科)

1. 構成員

小島 拓朗 (KOJIMA, Takuro) : 准教授 : 診療部長 : 病棟医長 : 小児循環器病学 : 博士
小林 俊樹 (KOBAYASHI, Toshiki) : 教授 : 診療副部長 : 小児循環器病学 : 博士
住友 直方 (SUMITOMO, Naokata) : 特任教授 : 代表指導教員(大学院) : 小児循環器病学 : 博士
葭葉 茂樹 (YOSHIBA, Shigeki) : 講師 : 外来医長 : 小児循環器病学
鍋嶋 泰典 (NABESHIMA, Taisuke) : 助教 : 小児循環器病学
戸田 紘一 (TODA, Kouichi) : 助教 : 小児循環器病学
野々宮 瑞紀 (NONOMIYA, Mizuki) : 助教 : 小児循環器病学
高尾 浩之 (TAKAO, Hiroyuki) : 助教 : 小児循環器病学
森 仁 (MORI, Hitoshi) : 兼任講師 : 循環器病学 : 博士
増谷 聡 (MASUTANI, Satoshi) : 兼担医師 : 総合医療センター教授 : 小児循環器学 : 博士
松永 保 (MATSUNAGA, Tamotsu) : 非常勤講師 : 小児循環器病学 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

本基本学科では卒前教育として先天性心疾患の病理・病状や治療を理解させる。小児心電図の読み方、心疾患患者の診察方法、胸部エックス線写真の読み方などを理解させる目的で教育活動を行なった。また卒後教育としては、小児心臓病の診断と治療、各疾患における血行動態の理解と治療を学び、集中治療学の研修を行い、得られた臨床データを学会、論文に発表できるよう教育を行なった。

2-2. 教育実績

卒前教育で講義・演習・実習・臨床実習などを担当したのは、3年 Pre-CC(住友直方)、4年 Pre-CC(住友直方)、5年 CC-step1(住友直方)である。3年講義では循環器ユニットで、先天性心疾患(小林俊樹)を、4年講義ではヒトの病気2、小児ユニットで、川崎病その他の小児心疾患(小島拓朗)を担当した。小児の心筋症、左右短絡性、右左短絡性、非短絡性先天性心疾患、川崎病など各疾患での病状や症状、治療について理解させた。5年生のBSL中に録音された心音を聴取させ、胸部エックス線写真、心電図を提示してその読み方を教えた。

卒後教育としては、埼玉医科大学病院、埼玉医科大学総合医療センターからの助教の研修を受け入れた。

2-3. 達成度評価

教育実績から、卒前教育では代表的な先天性心疾患の理解は60%程度、小児心疾患の心電図、雑音、胸部エックス線写真の読み方は80%程度達成できた。卒後教育としては、小児心臓病の診断学は80%、集中治療学としては70%、心不全学としては60%程度達成できた。また、専攻医1名が地方会で発表を行っている。一方で、全国的な学術集会での発表や論文の目的は果たせなかった。

2-4. 次年度改善計画

上記を踏まえ、次年度は卒前教育としては限られた時限数(循環器病学としても小児科学としても)の中で学生に小児循環器学に興味を持たせ、心疾患の診察方法、心電図の読み方、胸部エックス線写真の読み方などに自信が持てるよう、さらには国家試験の合格率を上昇させるよう教育を行う。卒後教育としては、研修医に対し、心不全や手術前後の集中治療学と、病態の評価、各疾患での治療適応とその時期の判断が正確に出来るように教育する。後期研修医、助教に対しては、日本小児科専門医の取得もできるよう教育を行う。また、研究会や学会などでの発表や査読付き論文への投稿など学術的な活動も積極的に行っていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標

本基本学科では以下のタイトルで研究を行い、論文化することを計画した。

1. Ablation characteristics and incidence of steam pops with a novel, surface temperature-controlled ablation system in an ex vivo experimental model.
2. Control of Heart Rate in Infant and Child Tachyarrhythmia With Reduced Cardiac Function Using Landiolol (HEARTFUL) - Results of a Prospective, Multicenter, Uncontrolled Clinical Study.
3. Efficacy of Subcutaneous implantable cardioverter-defibrillators in ≤18 year-old CHILDREN: SAVE-CHILDREN registry.

4. Novel Ablation Strategy Targeting the Slow Pathway Visualized by Ultrahigh-Resolution Mapping in Typical Slow-Fast Atrioventricular Nodal Reentrant Tachycardia.
5. Longitudinal Cardiac Outcomes of Multisystem Inflammatory Syndrome in Children: A Systematic Review and Meta-Analysis.
6. Response to Para-Hisian Pacing in the Setting of Presence of a Concealed Nodoventricular/Nodofascicular Pathway.
7. Extracorporeal Membrane Oxygenation in Children With COVID-19: A Systematic Review and Meta-Analysis.
8. Pulmonary vasodilator therapies in pulmonary arterial hypertension associated with CHD: a systematic review and network meta-analysis. *Cardiol Young*.
9. A novel mechanism of sudden infant death syndrome during atrioventricular reentrant tachycardia: a case report.
10. Successful Ablation of a Batrial Tachycardia from the Superior Vena Cava after a Senning Operation for Complete Transposition of the Great Arteries.
11. Paradoxical Continuous Left-to-Right Ductal Shunt during Circulatory Collapse due to Ductal Closure in an Infant with Duct-Dependent Systemic Circulation.
12. Japanese Circulation Society and Japanese Heart Rhythm Society Joint Working Group. JCS/JHRS 2020 Guideline on Pharmacotherapy of Cardiac Arrhythmias.
13. Japanese Circulation Society/the Japanese Association of Cardiac Rehabilitation Joint Working Group. JCS/JACR 2021 Guideline on Rehabilitation in Patients With Cardiovascular Disease.

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

上記1~13の全ての課題に関して英語論文化を行うことができた。これ以外に下記の研究グループで研究活動を行っている。

1. 左心低形成症候群（小林俊樹、葭葉茂樹、小島拓朗）
小児心臓外科との合同で、カテーテル治療と手術のハイブリッド治療の効果を検討している。
2. カテーテル治療の導入や保険適応の拡大（小林俊樹、小島拓朗、葭葉茂樹）
日本小児循環器学会及びJCIC学会によるPiccoco Duct Occluderによる新生児動脈間閉鎖の医師主導治験は現進行中である。また、Harmony valveを用いた経皮的肺動脈弁形成術の施設認定を取得した。今年度より、適応患者に対し順次治療を開始していく予定である。
3. QT延長症候群、カテコラミン誘発多形性心室頻拍、Brugada症候群、QT短縮症候群、家族性心臓伝導障害などの遺伝性不整脈に関する多施設共同研究（住友直方）
厚労科研費「遺伝性不整脈の診断基準・重症度分類・診療ガイドライン等の作成に関する研究」を中心に遺伝性不整脈の診断基準・重症度分類・診療ガイドラインが作成された。また、それぞれの項目をまとめ、科研の報告書を提出した。
4. 小児不整脈原性右室心筋症（住友直方）
厚労科研費『小児期心筋症の心電図学的抽出基準、心臓超音波学的診断基準の作成と遺伝学的検査を反映した診療ガイドラインの作成に関する研究』を中心に日本の小児心筋症の診断基準を作成している。論文としてはImpact of the T-wave characteristics on distinguishing arrhythmogenic right ventricular cardiomyopathy from healthy childrenという演題名でInt J Cardiolに掲載された。
5. 房室回帰性頻拍におけるRhythmiaを用いたdual chamber mappingの有効性に関する検討（森 仁、住友直方）
Ultra-high Density Atrio-Ventricular Dual Chamber Mapping as a Next Generation Tool for Ablation of Accessory Pathwaysという演題名でJournal of Cardiovascular Electrophysiologyに掲載された。
6. 小児S-ICDの有効性に関する検討に関して（森 仁、住友直方）
多施設共同研究として、全国の30余りの施設から症例を集積し論文化。

3-3. 達成度評価

ほとんど全ての研究目標、研究グループによる研究は、英文論文、もしくはガイドラインとして発表できた点で大いに評価できる。未だ発表できていない課題に関しては、引き続き指導を行う。

3-4. 次年度改善計画

2023年度は、前年度を上回る原著論文、症例報告、総説、著書の出版、学会発表を目指す。

4. 診療

カテーテル総数及びカテーテル治療の数は、全国的な出生数の減少のためか徐々に減少傾向である一方、外来患者数、入院患者数は前年と比較し減少していた。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

無し

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

編集委員：Heart & Vessels、Heart Rhythm Cases、臨床心臓電気生理、心臓

査読委員：Journal of Arrhythmia、Heart and Vessels、Heart、European Journal of Medical Genetics、PLOS ONE、Congenital Heart Disease、Pacing and Clinical Electrophysiology、Heart Rhythm、American Journal of Cardiology、ESC Heart Failure、Internal Medicine、Cardiology in the Young、British Medical Journal Cases、Journal of Arrhythmia Cases、Heart Rhythm Cases、Pediatric International、Journal of Cardiology Cases、Journal of Pediatrics、Circulation Journal、Journal of Cardiology、International Heart Journal、心電図、心臓、日本小児科学会雑誌、日本小児循環器学会雑誌

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本小児循環器学会：社会制度委員会学校検診部会オブザーバー

日本不整脈心電学会：健康保険委員会オブザーバー、植込み型デバイス関連社会問題対策委員会 小児・先天性心疾患部会 オブザーバー、カテーテルアブレーション委員会協力員

日本循環器学会：専門医制度認定試験委員会委員、蘇生科学小委員会オブザーバー

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1. Tsutsui K, Mori H, Kawano D, Tanaka N, Ikeda Y, Sumitomo N, Iwanaga S, Nakano S, Muramatsu T, Matsumoto K, Kato R: Ablation characteristics and incidence of steam pops with a novel, surface temperature-controlled ablation system in an ex vivo experimental model. *Pacing Clin Electrophysiol.* 2022 Dec;45(12):1390-1400.
2. Sagawa K, Suzuki T, Takei K, Miura M, Ueda H, Horigome H, Ono H, Ohashi N, Sato S, Fukunaga H, Aoki H, Miyazaki A, Sakaguchi H, Morishima E, Oki K, Sumitomo N. Control of Heart Rate in Infant and Child Tachyarrhythmia With Reduced Cardiac Function Using Landiolol (HEARTFUL) - Results of a Prospective, Multicenter, Uncontrolled Clinical Study, *Circ J.* 2023; 87: 130-138
3. Mori H, Sumitomo N, Tsutsui K, Fukunaga H, Hayashi H, Nakajima H, Muraji S, Nabeshima T, Kawano D, Ikeda Y, Asano S, Nitta J, Watanabe S, Hokosaki T, Sato S, Chisaka T, Higaki T, Nakajima T, Tamura S, Kaneko Y, Ikeda K, Okada A, Kobayashi H, Motoki H, Minamiguchi H, Imamura T, Shizuta S, Kawamura M, Munetsugu Y, Suzuki T, Murakami T, Horigome H, Wada T, Takamuro M, Ozawa J, Suzuki H, Izumi D, Otsuki S, Chinushi M, Kato K, Miura M, Maeda J, Fukunaga M, Kondo H, Takahashi N, Tobiume T, Morishima I, Kuraishi K, Nakamura K, Hayashi H, Suzuki H, Yoshida Y, Fukamizu S, Hojo R, Nuruki N, Yoshinaga M, Hayashi K, Fukaya H, Kishihara J, Kobayashi T, Kato R. Efficacy of Subcutaneous implantable cardioverter-defibrillators in ≤18 year-old CHILDREN: SAVE-CHILDREN registry. *Int J Cardiol.* 2023 Jan 15;371:204-210.
4. Wakamatsu Y, Nagashima K, Mori H, Maegaki M, Kaneko Y, Sonoda K, Sumitomo N, Okumura Y: Novel Ablation Strategy Targeting the Slow Pathway Visualized by Ultrahigh-Resolution Mapping in Typical Slow-Fast Atrioventricular Nodal Reentrant Tachycardia, *Circ Arrhythm Electrophysiol.* 2023 Mar;16(3):e011497.
5. Yasuhara J, Masuda K, Watanabe K, Shirasu T, Takagi H, Sumitomo N, Kuno T: Longitudinal Cardiac Outcomes of Multisystem Inflammatory Syndrome in Children: A Systematic Review and Meta-Analysis, *Ped Cardiol*, 2022
6. Nagashima K, Maruyama M, Kaneko Y, Nogami A, Mori H, Sumitomo N, Tanimoto K, Hayashida S, Wakamatsu Y, Hirata S, Hirata M, Okumura Y. Response to Para-Hisian Pacing in the Setting of Presence of a Concealed Nodoventricular/Nodofascicular Pathway. *JACC Clin Electrophysiol.* 2023 Feb;9(2):283-296.
7. Watanabe A, Yasuhara J, Karube T, Watanabe K, Shirasu T, Takagi H, Sumitomo N, Lee S, Kuno T: Extracorporeal Membrane Oxygenation in Children With COVID-19: A Systematic Review and Meta-Analysis, *Pediatric Critical Care Medicine*, 2022, Nov 17
8. Yasuhara J, Watanabe K, Watanabe A, Shirasu T, Matsuzaki Y, Watanabe H, Takagi H, Sumitomo N, Kuno T. Pulmonary vasodilator therapies in pulmonary arterial hypertension associated with CHD: a systematic review and network

meta-analysis. *Cardiol Young*. 2023 Feb 1:1-15.

【総数：論文 13 件、学会発表 31 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

1. 令和 3(2021)年度文部科学省基盤研究 (C) 『心拍揺らぎを用いたヒト心臓老化の診断確立 (研究代表者；筒井健太)』研究協力者、住友直方、鍋嶋泰典
2. 令和 4 年度 厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患等政策研究事業) 『QT 延長症候群の突然死予防に関する多施設登録研究 (研究代表者；相庭武司)』研究協力者 住友直方
3. 令和 4 年度 テルモ株式会社 医療の発展に寄与する研究活動への支援 『心房中隔欠損症閉鎖術後の妊娠における心機能への影響』研究代表者 小島拓朗

6-3. 受賞

無し

6-4. 特許、実用新案

無し

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

無し

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育、研究においては毎年確実に目標を達成している。診療においては、外来患者数と入院患者数のいずれも増加しており、近年の患者減少傾向い歯止めがかかりつつある。さらに周辺医療機関との病診連携を強化し、多くの患者の紹介を得て、心臓病センター小児心臓科の入院患者増加に努力する。当院では新生児、乳児早期で、極めて重症な複雑心奇形の患者が多いため、術後も種々の緊急処置、緊急カテーテルインターベンション、緊急カテーテルアブレーションなどが必要となることが多い。また、術後に心内修復が必要な状況が発生し、再手術を行うこともしばしばである。このため、入院患者の術前の管理のみならず、術後の管理、患者情報の把握体制を徹底し、患者がトラブルなく手術に望め、術後も問題なく退院できるように体制を整えるためにさらなる努力を重ねる。また、家族との関係構築も重要で、信頼される医師、患者関係を築いて行く努力を行う。しかし、これらを達成する上で医師の数は不十分であり、体制を維持することは極めて困難な状況にある。他施設に働きかけ、積極的にスタッフの増員を計る努力も必要である。

初期臨床研修医に対する指導は高く評価されている。医学部学生教育に関しては、毎週の BSL 学生に対し、懇切丁寧にクルーズを行い、学生からの評判も上々である。今後、学内からのスタッフが定着するよう努力する。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

新型コロナウイルス流行および出生数減少に伴う小児心疾患患者の減少が、外来患者数と入院患者数の減少に反映されている。近隣の医療施設との連携をさらに深め、紹介患者増加に努力する。また、初期研修医、後期研修医を始めとする教育にもこれまで以上に力を入れ、医師スタッフの増加に努める所存である。

3. 18) (2) 小児心臓科 (小児心臓外科)

1. 構成員

鈴木孝明 (SUZUKI, Takaaki) : 教授, 運営責任者, 副院長, 心臓病センター長, 研究副主任, 代表指導教員 (大学院), 先天性心疾患・重症心不全, 博士

帆足孝也 (HOASHI, Takaya) : 教授, 指導教員 (大学院), 診療部長, 研究主任, 教育主任, 先天性心疾患・重症心不全, 博士

柘岡 歩 (MASUOKA, Ayumu) : 准教授, 指導教員 (大学院), 先天性心疾患・重症心不全, 博士

保土田健太郎 (HOTODA, Kentaro) : 講師, 教育副主任, 病棟医長, 外来医長, 先天性心疾患

細田隆介 (HOSODA, Ryusuke) : 助教

永瀬晴啓 (NAGASE, Haruhiro) : 助教

淵上裕司 (Fuchigami, Yuji) : 助教

飯島至乃 (IIJIMA, Yukino) : 助教

加藤木利行 (KATOGLI, Toshiyuki) : 特任教授, 保健医療学部学部長, 先天性心疾患, 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

先天性心疾患の外科治療は、現在においてもまだ刻々と発展しつつある分野である。卒前教育においてはまず基礎となる先天性心疾患の解剖と血行動態を系統講義において理解させるとともに、標準的な手術方法および最新の手術方法についても講義する。BSL, クリニカルクラークシップでは、担当する手術症例の術前診断方法, 術前術後管理, 手術方法を含めた治療戦略について患者を前に実践的に学ぶことを目標としている。卒後教育は外科専門医, 心臓血管外科専門医の取得を目標とした臨床と研究両面の教育を行う。

2-2. 教育実績

卒前教育では主な先天性心疾患の外科治療について、手術適応と手術方法、注意すべき合併症を中心に講義している。さらに体外循環の基本的な知識と小児での特殊性, 複雑心奇形に対する最新の治療戦略や手術方法を講義している。また、近年増加傾向の成人先天性心疾患についても座学講義を設けている。

卒後教育は手術症例の病態生理と手術の必要性の理解、手術基本手技の習得、術後集中治療の実践が主たる教育内容である。

大学院教育においては、卒前教育では時間的にカバー出来ない複雑先天性心疾患についての系統講義と進行中の研究課題についても講義内容に含め、新たな研究課題の探究に導けるようにしている。

2-3. 達成度評価

卒前教育においては担当時間が少ないこともあって多種の疾患について短時間につめこむ形になるが、講義内での小テストの結果を見ると要点は十分に理解されていると思われる。卒後教育においては順調に専門医の取得が進んでいる。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育における系統講義については常にUp-to-date に心がけて続けていく。クリニカルクラークシップについては、小児心臓科と協力して術前後を通して治療に参加してもらい、また手術にも参加することで統合された実習を行うことができると考えている。多くの研修医, 専攻医の獲得を目指す。

3. 研究

3-1. 目的・目標

先天性心疾患の外科治療はますます低年齢化し、新生児期の心内修復術が日常となった。この手術対象の低年齢化にともなって、体外循環の新生児に対する影響の分野ではまだ多くの臨床研究課題がある。また、先天性心疾患に対する外科治療成績は著しく向上して来ており、今後はいかに術後のQOLを改善するかが課題である。その為の新しい手術方法の開発にも取り組むとともに、術後の血流解析を行いより良い血行動態を得られる再建術式の改善に取り組む。基礎研究としてはiPS細胞を用いてファロー四徴症の発生と小児拡張型心筋症の評価法に迫る。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

1. 左心低形成症候群に対する Hybrid 治療戦略の改良と他疾患への応用。
2. 再建手術後の血流解析と再建術式の改良
3. iPS 細胞技術を用いた発生分化異常であるファロー四徴症の病因解明。
4. iPS 細胞を利用した新しい小児拡張型心筋症の評価法の研究。

3-3. 達成度評価

Hybrid 治療については国内で最も多い症例数を経験しており、良好な成績をおさめている。先天性心疾患に対する手術の多くは血流路の再建手術であり、術後の血流解析は術式の改良に繋がる可能性がある。現在 4D flow MRI を用いてデータの蓄積中である。ファロー四徴症の患者から採取した胸腺細胞を用いて iPS 細胞の誘導に成功した。現在は中胚葉への誘導を試みている。小児拡張型心筋症の評価法についても検体を採取し iPS 細胞の誘導に成功した。

3-4. 次年度改善計画

Hybrid 治療は継続中である。血流解析についてはデータの分析を開始する。誘導に成功した iPS 細胞を用いてファロー四徴症の病因解明を進める。採取した検体をもとに iPS 細胞の誘導を行い評価方法を検討する。

4. 診療

大学病院としては数少ない独立した診療科としての小児心臓外科である。大学病院の特色を活かした高度先進医療を、先天性心疾患に対して提供している。

外来は週三回月曜日、水曜日、木曜日に行っている。小児の心臓病患者は小児循環器科の外来に通うのが原則なので、小児心臓外科では成人になった先天性心疾患患者と他院からの紹介患者を外来診察している。

手術は週 3 例（火曜日、水曜日、金曜日）を原則としている。今年度の手術症例数は体外循環下の手術が 79 例で、全手術が 134 例であった。出生前診断の精度が向上し、新生児期、乳児期早期の複雑心奇形の手術の占める割合が多くなっており、約 5 割の症例が新生児期、乳児期の症例であった。年々重症例が多く集まる傾向にある。ハイブリッド専用手術室を駆使して侵襲度の少ない、手術とカテーテル治療を統合したハイブリッド治療を先進医療として、左心低形成症候群に対して国内では最も多く行い実績を挙げている。また小児用補助人工心臓を使った重症心不全治療を開始し今年度までに 10 例に植え込みを行い、うち 3 例は心臓移植に到達した。来年度は年間 200 例以上の手術数と小児心臓移植実施施設認定を目標としている。

5. その他

5-1. 自治体, 政府関連委員の有無

埼玉県循環器病対策推進協議会心疾患部会委員（鈴木）

5-2. 学術誌, 編集委員, 査読委員の有無

General Thoracic and Cardiovascular Surgery(日本胸部外科学会機関紙):編集委員（鈴木）

Heart and Vessels: Editorial Board（鈴木）

Annals of Thoracic and Cardiovascular Surgery: Editorial Board（鈴木）

Pediatric Cardiology and Cardiac Surgery(日本小児循環器学会機関紙): 査読委員（鈴木）

日本心臓血管外科学会雑誌:査読委員（鈴木）

Annals of Thoracic and Cardiovascular Surgery: ad hoc査読委員（鈴木）

Cardiology in the Young: ad hoc査読委員（鈴木）

5-3. その他, 社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本胸部外科学会評議員（鈴木）

日本胸部外科学会理事（鈴木）

日本胸部外科学会財務委員会委員長（鈴木）

日本胸部外科学会地方会幹事（鈴木）

日本心臓血管外科学会評議員（鈴木, 帆足）

日本心臓血管外科学会理事（鈴木）

日本心臓血管外科学会保健委員会委員長（鈴木）

日本小児循環器学会理事（鈴木）

日本小児循環器学会臓器移植担当理事（鈴木）

日本小児循環器学会医療安全委員会委員長（鈴木）

日本小児循環器学会評議員（鈴木, 帆足, 柘岡, 保土田）

日本心臓血管外科専門医認定機構委員（鈴木）

一般社団法人 VAD 関連学会協議会理事（鈴木）

心臓移植・心肺同時移植関連学会協議会世話人（鈴木）

日本心臓移植研究会幹事（鈴木）

日本移植学会評議員(鈴木)
日本外科学会代議員(鈴木)
日本循環器学会社員(鈴木)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表

1. 澁上裕司、保土田健太郎、永瀬晴啓、飯島至乃、枘岡歩、鈴木孝明
Cone 手術/VSD 閉鎖/ASD 部分閉鎖を実施後にチアノーゼを生じ One and a half repair を要した Ebstein 病の一例
第 189 回 日本胸部外科学会関東甲信越地方会 (ハイブリッド)
2022/6/25 (東京)
2. 飯島至乃、澁上裕司、永瀬晴啓、保土田健太郎、帆足孝也、鈴木孝明
三心房心を合併した左心低形成症候群 (HLHS) に対して、両側肺動脈絞扼 (b PAB) を先行し Norwood を施行した 2 例
第 191 回 日本胸部外科学会関東甲信越地方会
2023/2/25 (横浜)
3. 鈴木孝明
動脈スイッチ手術における冠動脈移植の工夫
Various coronary transfer techniques for arterial switch operation
第 75 回 日本胸部外科学会定期学術集会
2022/10/5 (横浜)
4. 土屋美代子、小高知里、島野みゆき、高山志乃、高木敏之、吉田譲、大西秀樹、戸田紘一、帆足孝也、鈴木孝明
小児心臓移植待機中の患者・家族へのレシピエント移植コーディネーターの役割
第 28 回 日本臨床補助人工心臓研究会学術集会
2022/11/3 (愛媛)
5. 鈴木孝明
「循環器 2022 年の進歩」心臓血管外科領域の進歩
-第 52 回日本心臓血管外科学会学術総会報告-
日本循環器学会専門医誌 循環器専門医第 31 巻
2022/8
6. Yuji Fuchigami, Takaya Hoashi, Shigeki Yoshida, Kentaro Hotoda, Haruhiro Nagase, Yukino Iijima, Takaaki Suzuki
Severe form of Ebstein's anomaly associated with ventricular septal defect.
General Thoracic and Cardiovascular Surgery Cases
Doi: org/10.1186/s44215-023-00039-0
2023/2
7. Haruhiro Nagase, Takaya Hoashi, Ayumu Masuoka, Kentaro Hotoda, Koichi Toda, Akihiro Yoshitake, Takaaki Suzuki
Completely detached mechanical aortic valve prosthesis stuck to aortic arch in a patient with Behcet's disease.
Surgical Case Reports 2022 8:143
2022/7

【総数：学会発表 4件 論文 3件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

第52回日本心臓血管外科学会学術総会会長 (鈴木)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育における講義, BSTについては、与えられた時間内としては十分に出来たと思われる。卒後教育についても後期研修医を指導して専門医取得に向けて学会発表や手術症例の経験を積ませることができた。手術成績は良好で満足できる結果を残すことができた。また新たに開始した小児に対する重症心不全治療が軌道に乗った。総合医療センターにおいて小児心臓外科治療が軌道に乗った。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

今年度は手術症例数が減少したが、今後更なる症例数の増加のためには、地域連携を密にし、母体搬送による新生児手術の増加が重要と考える。このため総合医療センターにおいて小児心臓外科治療件数を増やしたい。研究をより充実して学会発表と論文、特に英文論文を増やしていきたいと考えている。

3. 19) 小児腫瘍科

1. 構成員

田中竜平 (TANAKA, Ryuhei) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 代表指導教員 (大学院) : 腫瘍、血液 : 博士
福島 敬 (FUKUSHIMA, Takashi) : 准教授 : 研究主任 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 腫瘍、血液 : 博士
中尾朋平 (NAKAO, Tomohei) : 准教授 : 研修主任 : 指導教員 (大学院) : 腫瘍、血液 : 博士
渡邊温子 (WATANABE Atsuko) : 准教授 : 教育副主任 : 腫瘍、血液、代謝異常 : 博士
太田充彦 (OHTA, Atsuhiko) : 助教 : 研究員
清水優輝 (SHMIZU, Yuki) : 助教 : 研究員

2. 教育

2-1. 目的・目標

当科の一貫した目標は「良き医療人」、「良き生命科学者」の育成を挙げている。このような指標は数値化して客観評価は出来ないが、助教達の働きぶりに顕著な進歩が認められている。当科の卒後教育の目標とした助教らによる主体性を持った診療活動は、かなり達成されてきたと感じている。次年度にはさらなる進歩を期待したい。

2-2. 教育実績 (担当者)

昨年同様、田中、福島と渡辺がBSL、ローテーター、および初期研修医の現場教育を担当し、教室での座学は田中が担当した。実際の症例の主訴と理学所見から鑑別診断を挙げ、さらに緊急を要する症候への迅速な対応を並行して行い、最も確実に侵襲性の少ない方法論で正確な診断に一刻も早くたどり着き、それに基づいた世界レベルの医療を提供するにはどのようにしたらよいか、を教育の主眼としている。毎年同様であるが、特に強調して指導している点は「プレゼンテーション能力」の向上である。当科での限られた実習時間を最大限活用して、それらの修練への動機付けの機会を提供している。

2-3. 達成度評価

毎年同様であるが、実習生から受ける感触では、我々の意図がかなり正確に学生・研修医に受け入れられていると思われる。特段、小児腫瘍学に特化して教育に当たるわけではなく、全ての臨床医学の実際に役立つ自己修練法と、その実際応用に役立つ教育が行えていると自己評価している。

2-4. 次年度改善計画

充分な成果を上げている。が、肝要なことは「小児血液・がん専門医資格」を取得し、若年者がんの臨床・研究に従事する人材を継続的に養成することである。その基盤となる小児科専門医を目指す専攻医に対して、小児血液疾患・がん診療最前線のチーム診療に深く携わる経験を提供した。血液・がん専門診療のスキルを有する小児科専門医を継続的に輩出することで、診療連携体制の強化につながることを期待できる。次年度も、これまでの方針を継続・推進する。

3. 研究

3-1. 目的・目標

望ましくは、小児期の発がん機構、造血細胞移植に関連する移植免疫学、(腫瘍)幹細胞生物学などの基礎的研究などを指導・遂行し、実臨床での経験を基礎医学の視点から生物学的に理解する(理解しようとする)感覚を教育していきたいが、未だ目に見える成果は達成できていない。

臨床研究としては、日本小児がん研究グループ(JCCG)が実施中である複数の全国共同研究に参画し、侵襲を伴う介入研究(特定臨床研究)を積極的に推進する。一方で、福島はJCCG効果安全性評価委員会副委員長として、小児造血器腫瘍を対象とした特定臨床研究の進捗を管理する立場として貢献する。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)

該当無し

3-3. 達成度評価

複数のJCCG臨床研究が、研究期間を終了して成果を公表しつつある。

3-4. 次年度改善計画

希少疾患である小児がんを対象とする多施設臨床研究に、high volume centerの当院が参画することで、症例集積・診療レベルの側面から貢献中である。希少な症例を経験する機会が少数会であるが、それらを症例報告として学術的に発信した。次年度も、さらに推進の方針である。

4. 診療

小児の腫瘍性疾患というと、とかく血液疾患が中心と思われがちであるが、実は血液腫瘍は若年者の悪性疾患の1/3程度である。他は固形腫瘍であり、特に多いのは中枢神経腫瘍である。さらにAYA世代では骨軟部腫瘍も頻度が高くなる。当科は脳脊髄腫瘍科および骨軟部腫瘍科と同じ病棟で、各診療科の医師達と常に連携しており、外科的対応を含む集学的治療が必要な固形腫瘍群の診療は本邦有数のレベルにあると自負している。つまり、小児外科、頭頸部腫瘍科、婦人科腫瘍科、泌尿器腫瘍科、呼吸器外科、腹部一般外科から画像診断科、放射線腫瘍科および、固形腫瘍診断に最も重要な病理診断科等々、その集学的診断・治療に必要なほぼ全てが当施設内に揃っており、かつ各診療科との関連性も良好である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本小児血液・がん学会査読担当・評議員：福島敬、渡邊温子

日本小児科学会専門医受験時症例要約査読担当：福島敬

Pediatric International 査読：田中竜平、福島敬

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文：

1. Iwai, Mayu MT; Fukushima, Takashi MD, PhD; Watanabe, Noriyuki MT; Ohta, Atsuhiko MD; Watanabe, Atsuko MD, PhD; Takii, Takamasa PhD; Mitsutake, Kotaro MD, PhD; Tanaka, Ryuhei MD, PhD; Ebihara, Yasuhiro MD, PhD. Chest Wall Tuberculosis After Bacillus Calmette-Guérin Vaccination. The Pediatric Infectious Disease Journal 41(11):p e504-e505, November 2022. | DOI: 10.1097/INF.0000000000003676
2. Aiko Sato-Otsubo, Tomoo Osumi, Masanori Yoshida, Akihiro Iguchi, Takashi Fukushima, Kazuhiko Nakabayashi, Seishi Ogawa, Kenichiro Hata, Motohiro Kato. Genomic analysis of two rare cases of pediatric Ph-positive T-ALL. Pediatr Blood Cancer 2022 Mar;69(3):e29427. doi:10.1002/pbc.29427. Epub 2021 Oct 31.
3. Morio Hasegawa, Hiroko Fukushima, Ryoko Suzuki, Yuni Yamaki, Sho Hosaka, Masako Inaba, Tomohei Nakao, Chie Kobayashi, Ai Yoshimi, Masahiro Tsuchida, Kazutoshi Koike, Takashi Fukushima, Hidetoshi Takada. Effect of Germline MEFV Polymorphisms on the Prognosis of Japanese Children with Cancer: A Regional Analysis. Oncology 2022;100(7):376-383. doi: 10.1159/000524833. Epub 2022 May 12.
4. Yumi Arai, Yasuo Yazawa, Tomoaki Torigoe, Jungo Imanishi, Toru Motoi, Masanori Yasuda, Ryuhei Tanaka, Takashi Fukushima, Atsuko Watanabe, Atsuhiko Ohta, Yuki Shimizu, Yuho Kadono, Kazuo Saita. Rare Case of BCOR::CCNB3 Sarcoma of Bone. J Case Rep 2023 Mar 14;24:e938158. doi: 10.12659/AJCR.938158.
5. Atsuko Watanabe, Tohru Fujiwara, Atsuhiko Ohta, Yuki Shimizu, Ryuhei Tanaka. HSPA9 frameshift and loss-of-function mutations in a patient manifesting syndromic sideroblastic anemia and congenital anomalies. Pediatr Blood Cancer 2023 Mar;70(3):e29971. doi: 10.1002/pbc.29971. Epub 2022 Sep 12.
6. Hiroko Fukushima, Masashi Mizumoto, Ryoko Suzuki, Yuni Yamaki, Sho Hosaka, Masako Inaba, Manabu Tagawa, Atsuko Watanabe, Tomoko Okunushi, Kouji Masumoto, Ai Muroi, Hideyuki Sakurai, Hidetoshi Takada. Gastrointestinal bleeding/ulcer among paediatric cancer patients after proton beam therapy. Jpn J Clin Oncol 2023 Mar 27;hyad024. doi: 10.1093/jjco/hyad024. Online ahead of print.
7. 関谷麻美、矢澤康男、鳥越知明、飯田隼平、渡邊温子、新井栄一、門野夕峰。両側網膜芽細胞腫治療後に発生した大腿骨骨肉腫の1例。整形外科 73 巻 4 号 340-343, 2022

【総数：論文 7 件】

6-2. 獲得研究費

科研費基盤 (C) 採択決定 (2022~2026 年度)：福島 敬

課題番号：22K10394

タイトル：最善の小児保険診療を受ける権利の格差およびその解消のための探索的調査研究

6-3. 受賞

なし。

6-4. 特許、実用新案

なし。

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

なし。

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

臨床業務が極めて多忙な中、このアクティビティは十分評価できる。

大学院院生は在籍者無し。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

次年度にはこれまでの蓄積を論文化していきたい。

3. 20) 皮膚科（皮膚腫瘍科）

1. 構成員

中村 泰大 (NAKAMURA Yasuhiro) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長、研究主任、教育主任 : 代表指導教員 (大学院) : 皮膚外科、皮膚悪性腫瘍、がん薬物療法 : 博士
森 龍彦 (MORI Tatsuhiko) : 講師 : 専門医員 : 皮膚外科、皮膚悪性腫瘍、リンパ腫、がん薬物療法 : 博士
高井 彩也華 (TAKAI Sayaka) : 修練医
土居 礼一 (DOI Reiichi) : 助教 (臨床フェロー) : 医員
和泉 光晃 (IZUMI Buntaro) : 助教 (臨床フェロー) : 医員
上村 杏奈 (KAMIMURA Anna) : 助教 (シニアレジデント) : 医員 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

卒前教育 : 医学的見識を高め、皮膚腫瘍学およびその診療に興味を持つことで知識を深め、積極的に医学を探究する精神を育成することを目標に教育活動を行った。

卒後教育 : 一般皮膚科および皮膚腫瘍学の臨床・研究を積極的に学び、高度な専門的知識および技術を有する医療人の形成を図る。日本皮膚科学会認定皮膚科専門医および皮膚悪性腫瘍指導専門医の資格、ならびに日本がん治療認定医機構がん治療認定医の資格を取得することを目標に教育活動を行った。

2-2. 教育実績 (中村、森、高井、土居、和泉、上村)

卒前教育 : 講義、臨床実習を担当したのは3年生の導入クリニカルクラークシップ (CC) (中村)、4年生の Pre-CC (中村、森、高井、土居、和泉、上村)、4年生の皮膚・運動器ユニット (中村、森) と腫瘍ユニット (中村)、6年生のクリニカルクラークシップ Step3 (中村、森、高井、土居、和泉、上村) である。

卒後教育 : 助教2名 (クリニカルフェロー)、助教1名 (シニアレジデント) 計3の研修を行っている。1名は日本皮膚科学会認定皮膚科専門医を取得した。

2-3. 達成度評価

卒前教育 : 昨年同様、担当講義は例年より update を加えた内容で臨み、学生の講義評価も平均程度であったが、コロナ禍での講義のため、学生の face to face での反応については把握することができなかった。このような時勢においては、自己学習のための配布資料などの充実をはかる必要があり、配付資料の学生評価も平均程度であった。臨床実習についても学生の日々の振り返りの記載からは実地診療へ興味深く参加しているように見て取れ、当初の目標 (コロナ禍にも対応する学習コンテンツ・プログラムの再構築) は達成できているものと考えた。

卒後教育 : 当科所属以前には経験数が十分でなかった疾患の手術や治療について着実に経験を積むことができ、診断の向上、手術技術の向上、化学療法 of 適切な使用、学会発表・論文作成のスキル向上など、全般にわたり進歩がみられた。2名は皮膚科専門試験受験資格を学年的に満たさないため達成度評価としては、受験資格となる手術件数や疾患経験数、学会発表件数、および論文発表数は着実に積み重ねることができた。1名は日本皮膚科学会認定皮膚科専門医を取得したことから、当初の目標 (専門医受験資格要件達成へ近づく) は達成できているものと評価した。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育 : 引き続き、コロナ禍による実習制限やオンライン講義でも学生が十分学習できるようなプログラムを再構築する。近年の治療法の進歩など、講義や実習内容が時代遅れとならないように update する。

卒後教育 : 専門医試験受験資格に満たない学年での専門医取得や癌治療認定資格を達成目標とすることは現実的ではないため、引き続き受験資格に必要な診療、治療スキルを身につけて、受験資格要件の達成に近づくことを目標とする。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

皮膚腫瘍、とくにメラノーマに関する臨床研究を進め、その研究成果により助教の業績をあげ、その結果として各種専門医取得をめざすことを目標に研究活動を行った。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

1. 皮膚悪性腫瘍の予後統計調査 (中村、森、高井、土居、和泉、上村)

本邦皮膚悪性腫瘍患者の予後解析目的で、日本皮膚悪性腫瘍学会予後統計調査委員会の研究事業としてメラノーマ患者の診療内容・予後に関するデータを提供した。

2. 爪部悪性黒色腫に対する指趾骨温存切除の非ランダム化検証的試験 (JCOG1602) (中村、森、高井、土居、和泉、上村)

爪部メラノーマの指趾骨温存手術の安全性・有効性検証を目的として多施設共同前向き試験を当科が基盤研究施設として計画し、患者登録を行った。関連する解析として進行期爪部メラノーマ患者の免疫チェックポイント阻害薬の効果に関する成果を論文公表した。

3. パクリタキセル既治療原発性皮膚血管肉腫に対するパゾパニブ療法の非ランダム化検証的試験 (JCOG1605) (中村、森、高井、土居、和泉、上村)

血管肉腫患者に対するパクリタキセル増悪後二次治療としてのパゾパニブの安全性・有効性検証を目的として計画された多施設共同前向き試験 (基盤研究施設 : 埼玉県立がんセンター皮膚科) に関して患者登録を行った。

4. 頭頸部発生初発基底細胞癌縮小マージン切除に関する単群検証的試験 (JCOG2005) (中村、森、高井、土居、和泉、上村)
頭頸部基底細胞癌の縮小切除マージン切除に関する安全性・有効性検証を目的として多施設共同前向き試験を当科が基盤研究施設として計画し、患者登録を行った。Trial in Progress として 2022 ASCO Annual Meeting に採択され、シカゴ現地で取材を受けた。
5. メルケル細胞癌における免疫チェックポイント阻害薬治療の効果予測に関する研究 (中村、森)
メルケル細胞癌における抗 PD-L1 交替 avelumab の効果予測を目的として基盤研究施設 (名古屋市立大学皮膚科) に患者情報および組織検体を提供する研究であるが、当該年度は該当症例がなかった。
6. 皮膚有棘細胞癌の修正切除範囲と予後に関する後方視的観察研究 (中村、森、高井、土居、和泉、上村)
皮膚有棘細胞癌の狭小マージン切除に関する安全性・有効性を検証する目的で多施設後ろ向き研究を当科が基盤研究施設として計画、集積データについて副次解析を行い、リンパ節転移を有さない症例に対する新たな予後予測モデルを構築した (現在英文論文投稿中)。
7. 免疫チェックポイント阻害薬による免疫関連有害事象(irAE)のバイオマーカー開発—探索的研究 (中村、森、高井、土居、和泉、上村)
免疫チェックポイント阻害薬有害事象のバイオマーカー開発を目的として基盤研究施設 (昭和大学医学部皮膚科、免疫学教室) に患者情報および血清を提供した。
8. 皮膚腫瘍画像データセットの構築と診断支援プログラムの開発 (中村)
ダーモスコピーによる皮膚腫瘍の診断 AI 開発を目的として基盤研究施設 (信州大学医学部皮膚科) に画像データ提供を行った。
9. 粘膜型/末端黒子型メラノーマにおけるニボルマブ+イピリムマブ併用療法の一次治療と抗 PD-1 抗体単剤療法の一次治療 (無効後
ニボルマブ+イピリムマブを含む) の効果に関する多施設共同後ろ向き研究 (中村、森)
免疫チェックポイント阻害薬が他のメラノーマ病型と比較して不良と考えられている粘膜型および末端黒子型メラノーマにつき、その効果を検証する目的として当科が基盤研究施設として多施設共同後ろ向き研究を計画し、集積データの副次解析を行った。末端黒子型メラノーマに関する抗 PD-1 抗体不応後の二次治療に関するデータを解析した (現在英文論文投稿中)。
10. 進行期悪性黒色腫に対するニボルマブ・イピリムマブ併用療法についての後ろ向き観察研究 (中村)
進行期メラノーマに対するニボルマブ+イピリムマブ併用療法の本邦患者における効果を検証する目的で基盤研究施設 (筑波大学皮膚科) に患者情報を提供した。本研究は英文論文として受理・発表された (British Journal of Dermatology (中村: 共同著者))。
11. 皮膚悪性腫瘍の培養細胞・末梢血集積保存 (中村、寺本、川原、梅田、山口、上村)
皮膚悪性腫瘍患者の治療前末梢血より単核細胞を分離・凍結保存する集積研究であり、当該患者の検体凍結保存を継続して行った。
12. ニボルマブ+イピリムマブで治療される悪性黒色腫患者における腸内細菌代謝産物の臨床的意義に関する前向き観察研究 (中村、森、高井、土居、和泉、上村)
メラノーマに対するニボルマブ+イピリムマブ併用療法患者の腸内細菌代謝産物の意義を探索する目的で基盤研究施設 (京都大学腫瘍内科) に当該患者の検体および患者情報を提供した。
13. メラノーマ等、皮膚腫瘍病変の免疫状態の解析 (中村、森)
皮膚悪性腫瘍治療の免疫チェックポイント阻害薬無効腫瘍の腫瘍微小環境を解析することで mixed response や免疫逃避のメカニズムを解明する目的で、基盤研究施設 (千葉大学) に当該患者の組織検体を提供をするものであるが、本年は対象症例がなかった。一方で、基盤研究施設での副次解析については現在論文投稿中である。
14. Clinical models to predict response and survival in mucosal melanoma (MM) patients (pts) treated with anti-PD-1 alone (PD1) or combined with ipilimumab (IPI+PD1) (中村)
オーストラリア、ヨーロッパ、北米、中国、日本から成る国際共同後ろ向き研究であり、粘膜メラノーマに対する抗 PD-1 抗体単剤、ニボルマブ+イピリムマブ併用療法の効果を検証する目的で基盤研究施設 (Melanoma Institute Australia, Sydney) に患者情報を提供した。本研究成果は英文論文として Annals of Oncology に受理・発表された (中村: 共同演者)
15. 本邦乳房外 Paget 病の予後調査 (上村、中村)
JCOG 皮膚腫瘍グループによる多施設共同後ろ向き研究で、乳房外 Paget 病予後因子の探索を目的に基盤研究施設 (富山県立中央病院皮膚科) に当科当該患者情報を提供し、現在基盤研究元より英文論文として投稿中である。
16. Efficacy of PD-1 monotherapy or MAPKis in the adjuvant setting between the Caucasian and non-Caucasian patients with melanoma (中村)
中国、北米、オーストラリア、ヨーロッパ、日本から成る国際共同後ろ向き研究であり、白人および非白人におけるメラノーマ術後補助療法 (抗 PD-1 抗体、マップキナーゼ阻害薬) の効果差の検証のために基盤研究施設 (Peking Cancer Center Hospital) に当科当該患者情報を提供した。2022 年 ESMO Congress に採択され、基盤研究元より発表された (中村: 共同演者)。
17. Outcomes of patients with resected acral or mucosal resected stage III/IV melanoma treated with adjuvant anti-PD1 based therapy (中村)
オーストラリア、ヨーロッパ、北米、中国、日本から成る国際共同後ろ向き研究であり、粘膜メラノーマに対する抗 PD-1 抗体単剤術後補助療法効果を検証する目的で基盤研究施設 (Melanoma Institute Australia, Sydney) に患者情報を提供した。本研究の成果は 2022 ESMO Congress に採択され、基盤研究もとより発表された (中村: 共同演者)。

18. 皮膚科医・形成外科医における基底細胞癌病変境界判定の一致率に関する研究（上村、中村）
JCOG2005 試験に先立って行った preliminary study であり、基底細胞癌の病変境界の判定（境界明瞭・不明瞭）における各皮膚科医、形成外科医の判定の差異がどれくらいあるかを検証するために当科が基盤研究施設として基底細胞癌臨床・ダーモスコピー写真をデータセットとして多施設共同研究を行った。本研究の成果は英文論文として Journal of Dermatology に受理・掲載された（上村：筆頭著者）。
19. 皮膚悪性腫瘍領域鼠径・鼠径骨盤内リンパ節郭清術におけるリガシユアの有用性に関する単施設後向き研究（中村）
皮膚悪性腫瘍鼠径あるいは鼠径骨盤内リンパ節郭清における合併症低減の目的で使用したリガシユアの有用性につき検証した。術後のリンパ漏が有意に低下することが示された。本研究は 2022 年度日本皮膚悪性腫瘍学会に発表し、英文論文として Journal of Dermatology に受理・発表された（中村：共同著者）。
20. 露光部（非粘膜型/非末端黒子型）メラノーマにおけるニボルマブ＋イピリムマブ併用療法と抗 PD-1 抗体単剤療法の一次治療（無効後ニボルマブ＋イピリムマブを含む）の効果に関する多施設共同後向き研究（中村）
国内多機関後向き共同研究であり、進行期 BRAF wild type メラノーマの免疫チェックポイント阻害薬効果をみる目的で行われており、基盤研究施設（千葉大学皮膚科）に当科当該患者情報を提供した。本研究は英文論文として Journal of Dermatological Science に受理・掲載された（中村：共同著者）。
21. センチネルリンパ節陽性メラノーマの治療選択と予後に関する多機関共同観察研究（中村）
本邦メラノーマ患者におけるセンチネルリンパ節陽性患者の治療選択および予後をみる多機関共同研究であり、基盤研究施設（国立がん研究センター中央病院皮膚腫瘍科）に当科当該患者情報を提供した。
22. 進行期乳房外パジェット病に対する全身薬物療法の効果に関する多施設共同後向き研究（中村）
標準治療の確立していない進行期乳房外パジェット病の投薬状況に関する多機関共同研究であり、基盤研究施設（熊本大学皮膚科）に当科当該患者情報を提供した。
23. 爪部・掌蹠末端黒子型メラノーマにおける腫瘍関連高内皮細静脈分布の差異に関する pilot study
爪部・掌蹠末端黒子型メラノーマにおける腫瘍関連高内皮細静脈分布の差異を免疫染色によりその差異を検討する単施設研究であり、染色実験が進行中である。

3-3. 達成度評価

上記複数の研究プロジェクトは昨年度に比べてさらに増加しており、研究進行度あるいは研究成果の公表としての達成はできたものも増加してきた。当初の目的である研究成果により助教の業績を上げるという点においては、学会発表、論文ととも増加しており、当初の目標（助教の学会発表、論文成果 3 報以上）を達成しつつある。

3-4. 次年度計画

現在進行中の研究の進捗および公表の内容を目標とし、多施設共同研究においては予定登録症例数の登録遂行、および学会発表、論文成果 5 報以上を目標とする。

4. 診療

希少がんである皮膚悪性腫瘍患者の高度専門的診療を中心として行い、さらに当院全科における皮膚疾患を有する患者の診療依頼にも対応している。皮膚悪性腫瘍患者症例数も多く、その内訳も多岐に及んでおり、国際水準の専門的診療を遅滞なく update して施行することを目標に診療を実践している。手術症例数、化学療法試行数およびその難易度・種類も多岐にわたり、本領域の対象患者に幅広く対応している。次年度も、日々刻々と変化する皮膚悪性腫瘍の診療につき、国際水準の専門的診療について遅滞することなく学習・update して、患者に最大の利益をもたらすことを目的・目標とする。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Skin Surgery 編集委員、International Journal of Clinical Oncology 査読委員、日本皮膚科学会誌、The Journal of Dermatology、International Journal of Clinical Oncology、European Journal of Cancer、Annals of Oncology、British Journal of Dermatology 投稿論文を査読（中村）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

中村：日本皮膚外科学会理事、日本臨床皮膚外科学会理事、日本皮膚悪性腫瘍学会理事、日本レックリングハウゼン病学会評議員、日本研究皮膚科学会評議員、日本皮膚科学会皮膚悪性腫瘍指導専門医委員会委員（資格審査担当）、日本皮膚科学会皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン改訂委員会委員（統括委員長）、日本皮膚科学会・血管腫血管奇形診療ガイドライン作成ワーキンググループ委員、日本臨床腫瘍研究グループ（Japan Clinical Oncology Group: JCOG）主任研究者、JCOG 効果・安全性評価委員会委員、一般社団法人 日本癌医療翻訳アソシエーツ (JAMT) 海外がん情報クイックリファレンス 監修者（担当：皮膚悪性腫瘍）

森：日本皮膚科学会皮膚悪性腫瘍診療ガイドライン改訂委員会委員（担当：乳房外 Paget 病）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書（主なもの）

- ① Inozume T, Namikawa K, Kato H, Yoshikawa S, Kiniwa Y, Yoshino K, Mizuhashi S, Ito T, Takenouchi T, Matsushita S, Fujisawa Y, Matsuzawa T, Sugihara S, Asai J, Kitagawa H, Maekawa T, Isei T, Yasuda M, Yamazaki N, Uhara H, Nakamura Y. Analyzing the relationship between the efficacy of first-line immune checkpoint inhibitors

and cumulative sun damage in Japanese patients with advanced BRAF wild-type nonacral cutaneous melanoma: A retrospective real-world, multicenter study. *J Dermatol Sci*. 2023 Mar 31;S0923-1811(23)00077-4. doi: 10.1016/j.jdermsci.2023.03.008. Online ahead of print.

- ② Morinaga T, Inozume T, Kawazu M, Ueda Y, Sax N, Yamashita K, Kawashima S, Nagasaki J, Ueno T, Lin J, Ohara Y, Kuwata T, Yukami H, Kawazoe A, Shitara K, Honobe-Tabuchi A, Ohnuma T, Kawamura T, Umeda Y, Kawahara Y, Nakamura Y, Kiniwa Y, Morita A, Ichihara E, Kiura K, Enokida T, Tahara M, Hasegawa Y, Mano H, Suzuki Y, Nishikawa H, Togashi Y. Mixed Response to Cancer Immunotherapy is Driven by Intratumor Heterogeneity and Differential Interlesion Immune Infiltration. *Cancer Res Commun*. 2022 Jul 28;2(7):739-753. doi: 10.1158/2767-9764.CRC-22-0050. eCollection 2022 Jul.
- ③ Mori T, Izumi T, Doi R, Kamimura A, Takai S, Teramoto Y, Nakamura Y (corresponding author). Immune checkpoint inhibitor-based therapy for advanced acral and mucosal melanoma. *Exp Dermatol*. 2023 Mar;32(3):276-289. doi: 10.1111/exd.14725. Epub 2022 Dec 16.
- ④ Baba N, Kato H, Nakamura M, Matsushita S, Aoki M, Fujimoto N, Kato T, Iino S, Saito S, Yasuda M, Asai J, Ishikawa M, Yatsushiro H, Kawahara Y, Matsuya T, Araki R, Teramoto Y, Hasegawa M, Tokunaga T, Nakamura Y (corresponding author). Narrower clinical margin in high or very high-risk squamous cell carcinoma: a retrospective, multicenter study of 1,000 patients. *J Dtsch Dermatol Ges*. 2022 Aug;20(8):1088-1099. doi: 10.1111/ddg.14810. Epub 2022 Aug 4.
- ⑤ Umeda Y, Teramoto Y, Asami Y, Matsuya T, Saito S, Sasaki K, Baba N, Ishizuki S, Kamimura A, Yamaguchi B, Kawahara Y, Takai S, Izumi T, Doi R, Mori T, Nakamura Y (corresponding author). Comparison of surgical morbidities between LigaSure[™] and conventional techniques in inguinal or ilioinguinal lymph node dissection for skin cancer: A single center retrospective study. *J Dermatol*. 2022 Oct;49(10):1020-1026. doi: 10.1111/1346-8138.16502. Epub 2022 Jun 27.
- ⑥ Kamimura A, Nakamura Y (corresponding author), Takenouchi T, Matsushita S, Omodaka T, Yamamura K, Uchi H, Yoshikawa S, Yanagisawa H, Ito T, Kiyohara Y, Nakamura Y, Aoki M, Ishizuki S, Oashi K, Miyagawa T, Maeda T, Ogata D, Hatta N, Ohe S, Isei T, Takahashi A, Umeda Y, Yamaguchi B, Ishikawa M, Horimoto K, Fujsawa Y, Uehara J, Shibayama Y, Kiniwa Y, Kawahara Y, Matsuya T, Uhara H, Kato J, Nakamura Y, Murakami T, Namikawa K, Yoshino K, Funakoshi T, Takatsuka S, Matsui Y, Sasaki J, Koga H, Yokota K, Komori T, Fukushima S, Yamazaki N. Concordance in judgment of clinical borders of basal cell carcinomas in Japanese patients: A preliminary study of JCOG2005 (J-BASE-MARGIN). *J Dermatol*. 2022 Sep;49(9):837-844. doi: 10.1111/1346-8138.16422. Epub 2022 May 5.
- ⑦ Kato J, Namikawa K, Uehara J, Nomura M, Nakamura Y, Uhara H, Uchi H, Yoshikawa S, Kiniwa Y, Nakamura Y, Miyagawa T, Matsushita S, Takenouchi T, Hatta N, Ohno F, Maeda T, Fukushima S, Yamazaki N. Prognoses of patients with melanoma who continue/discontinue anti-programmed death-1 therapy after achieving a complete response in a real-world setting: a multicentre retrospective study. *Br J Dermatol*. 2022 Oct;187(4):594-596. doi: 10.1111/bjd.21276. Epub 2022 Jun 7.
- ⑧ Kamimura A, Nakamura Y, Matsushita S, Fujisawa Y, Matsuya T, Maeda T, Uhara H, Oashi K, Yanagisawa S, Yoshino K, Funakoshi T, Miyagawa T, Takenouchi T, Hatta N, Kiniwa Y, Kiyohara Y, Yokota K, Isei T, Uchi H, Shibayama Y, Ito T, Fukushima S, Yamazaki N. Concordance in judgement of clinical borders of basal cell carcinomas in Japanese patients: a preliminary study of JCOG2005 (J-BASE-MARGIN). 18th EADO Congress; April 21-23, 2022, Spain.
- ⑨ Nakamura Y, Sano Y, Kataoka T, Shibata T, Fukuda H, Matsushita S, Fujisawa Y, Takenouchi T, Omodaka T, Yamamura K, Aoki M, Uchi H, Tsutsui K, Yoshikawa S, Namikawa K, Yamazaki N. Confirmatory trial of narrower side margins for head and neck basal cell carcinoma in East Asian population: JCOG2005 (J-BASE-MARGIN). 2022 American Society for Clinical Oncology (ASCO) Annual Meeting, Chicago, USA.
- ⑩ Nakamura Y. Surgical management for melanoma-The role of dermatologic surgeons in Japan. The 12th Asian Dermatological Congress. Aug 4-5, 2023, Tokyo.

【総数：論文・著書（英文 7 件、邦文 17 件）、講演 15 件、学会発表 26 件】

6-2. 獲得研究費

国立がん研究センター研究開発費 金額：研究代表者一括（中村：研究分担者）

国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）革新的がん医療実用化研究事業「爪部悪性黒色腫への指趾骨温存切除による新たな低侵襲標準治療の開発」 金額：9,630,000 円（中村：研究代表者）

国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）革新的がん医療実用化研究事業「頭頸部基底細胞癌縮小マージン切除による新たな低侵襲標準治療の開発」 金額：16,441,100 円（中村：研究代表者）

6-3. 受賞

Japan Clinical Oncology Group Best Study Coordinator Award（中村）

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

埼玉難治性皮膚疾患臨床研究会（2022年4月2日開催）（当番世話人）

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果：

卒前教育としては、担当講義は例年同様 update を加えた内容で臨み学生の講義評価も平均程度であった。昨年度同様にコロナ禍での状況では、自己学習のための配布資料などの充実をはかる必要があったものの、配付資料の学生評価も平均より高かった。臨床実習についても学生は実地診療へ興味深く参加しているように見て取れ、当初の目標は達成できているものと評価している。卒後教育としては、手術や薬物療法について着実に経験を積むことができ、診断・治療の向上、学会発表・論文作成のスキル向上など、全般にわたり進歩がみられ、当初の目標は達成できているものと評価している。

研究に関しては、複数の研究プロジェクトにおいて、進行度あるいは研究成果の公表としての達成はできているが、成果により当初目標としていた助教の業績を上げるという点においては、学会発表は複数行うことができたものの、助教による論文は当該年度においては2報を筆頭著者論文として発表、執筆後投稿中の者もあることから目標の3報には届かなかったものの当初の目標は達成しつつあると評価している。また、多施設共同研究の研究代表者としてAMEDからの競争的資金も2研究で獲得している。

診療に関しては、国際水準の高水準な専門的診療を行っていることで、地域の先生方より継続的に患者紹介を頂き、かつ当該学術領域においても当該領域の各種委員を務めさせて頂いている。若手医師の研修希望も複数頂いていることより、診療については高い水準で行えており、当面の目的は達成できているものと評価している。

基本学科全体としては、少ないスタッフ数ながら教育、研究、診療を高水準で行っており、その活動内容としてまだまだ満足していないもの、及第点ではないかと評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画：

卒前教育については、コロナ禍による学生への十分な対応という視点を持つことを改善し、次年度は実習制限やオンライン講義でも学生が十分学習できるようなプログラムを再構築することを目標として取り組む。卒後教育については、そもそも専門医試験受験資格に満たない学年での専門医取得や癌治療認定資格を達成目標とすることは現実的ではないため、この点を鑑みて目標を改善変更し、受験資格に必要な診療、治療スキルを身につけて、受験資格要件の達成に近づくことを次年度の目標として取り組む。また、皮膚悪性腫瘍指導専門医取得学年者も在籍することから、2年間かけての取得を目指し、資格要件を満たせるように臨床経験を蓄積する。

研究については、研究の進捗および成果公表の有無を目標とし、多施設共同研究においては予定登録症例数の登録遂行を、成果が見込める研究においては学会発表、論文成果5報以上を次年度の目標として取り組む。

診療については、現在大きな改善点はないものの、現在刻々と皮膚悪性腫瘍領域の治療は変貌を遂げており、次年度も、日々刻々と変化する皮膚悪性腫瘍の診療につき、国際水準の専門的診療を遅滞することなく学習・updateして、患者に利益をもたらすことを引き続き次年度の目標として取り組む。

3. 21) 泌尿器科

1. 構成員

小山 政史 (OYAMA, Masafumi) : 教授 : 運営責任者 : 診療副部長 : 教育主任 : 代表指導教員 (大学院) : 光力学的診断、分子標的療法 : 博士

金尾 健人 (KANAOKI, Kento) : 准教授 : 診療部長 : 大学院教員 (大学院) : 博士

西本 紘嗣郎 (NISHIMOTO, Koshiro) : 准教授 : 研究主任 : 教育副主任 : 外来医長 : 大学院教員 (大学院) : 副腎腫瘍 : 博士

城武 卓 (SHIROTAKE, Suguru) : 准教授 : 研修医長 : 研究主任 : 大学院教員 (大学院) : 博士

金子 剛 (KANAKO, Go) : 講師 : 研修医長 : 外来医長

高橋 崇志 (TAKAHASHI, Takayuki) : 助教 (専攻医)

五十嵐 大介 (IGARASHI, Daisuke) : 助教 (専攻医)

齋藤 貴文 (SAITO, Takafumi) : 助教 (専攻医)

鈴木 賢次郎 (SUZUKI, Kenjiro) : 非常勤講師

大野 美里香 (OHNO, Mirika) : 事務員

久米 千香 (KUME, Chika) : CRC

上野 美菜 (UENO, Mina) : 秘書

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

埼玉医科大学は建学の理念のもと、社会の役に立つすぐれた臨床医を育成することを目的として創立された。本学の使命は学則第1条に「埼玉医科大学は教育基本法及び学校教育法の精神に則り、かつ、私学の特性を生かして専門的な知識と技能及び高い倫理性を身につけた実地臨床医家並びに保健医療技術者を育成することを目的とし、更に進んで新しい医学及び関連諸科学の研究並びに保健医療技術の向上に寄与することによって、広く人類の健康と福祉に貢献することを使命とする。」と記載されており、専門的な知識と技能及び高い倫理性を身につけた実地臨床医家を育成するとともに高い研究マインドを学生達に醸成させることは教員のミッションである。この使命をより明確なものとするために、「埼玉医科大学の期待する医療人像」が規定されている。本学医学部がどのような学生に学士を授与するかはディプロマポリシーに明確に記載されている。

2-2. 教育実績 (担当者)

臨床実習においては、医学教育モデル・コア・カリキュラムに示されている症候、疾患を経験させ、知識の修得のみならず、臨床推論、手技、コミュニケーション能力を育むことにも力を入れている。手技としては、特に尿道カテーテル留置を経験させることに力を入れている。CCstep2、CCstep3においては実習最終週に学生と面談をし、診療科実習の問題点、改善案について学生と話し合い、さらに学生自身の問題点や良い点などのフィードバックを行うことを心がけている。

2-3. 達成度評価

WebClass 上の全診療科評価項目と診療科評価項目で形成的評価を行う。日々の振り返りに対する指導医からのアドバイスを欄に指導的アドバイスを記載し、総括評価内にある学生へのフィードバック欄に総合的な指導内容を記載する。

2-4. 次年度改善計画

学生と面談の上、教員が学生を評価した評価項目と学生自身が自ら評価した評価項目を擦り合わせてフィードバックを行う。実際の診療の流れと順番を学生が修得できるように教授する。手技として、可能な限り多くの尿道カテーテル留置の手技を経験させる。年々、直腸診をする機会が減少しているため、前立腺針生検など処置や検査がある時には積極的に学生に直腸診を実施させるよう意識したい。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

臨床研究および治験を積極的に推進するとともに、それらに必要な助成金を、科を挙げて獲得する。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

腎癌プロジェクト

前立腺癌プロジェクト

尿路上皮癌プロジェクト

3-3. 達成度評価

腎癌プロジェクト

1. 分子標的治療もしくは免疫チェックポイント阻害薬が施行された転移/再発性腎細胞がん患者の予後解析 (多施

設後方視的観察研究) (#14-049、城武)。順調に解析を行っている。

2. 分子標的薬無効症例の予測による新たな進行腎細胞癌のネオアジュバント治療戦略 (#16-158-1、西本)。研究計画書の見直しを行ったことで順調に症例登録ができた。有用な解析結果が得られなかったため本研究は終了した。
 3. 転移性腎細胞癌患者を対象としたニボルマブの有効性と安全性の検討—メディカルチャートレビューによる後方視的観察研究— (#18-036、城武)。多施設共同研究である。当院からは 18 例を登録し、論文投稿中である。
 4. 未治療日本人転移性腎細胞癌患者を対象としたニボルマブ・イピリムマブ併用療法の有効性と安全性に関する前向き観察研究 (J-ENCORE) (#19-107、城武)。多施設共同研究である。症例登録を終え、解析を進めている。
 5. 腎細胞癌に対する 5-アミノレブリン酸による術中光力学診断の有用性の検討 (#19-159、西本)。これまで 4 例を登録した。責任医師退職に伴い本研究は終了した。
 6. 制御性 T 細胞の機能に着目した進行腎癌一次治療の選択に有用なバイオマーカーの探索 (埼玉医科大学国際医療センター、愛知医科大学共同研究) (#20-258、金尾)。順調に解析を行っている。
 7. 進行性腎癌に対するイピリムマブ+ニボルマブ併用療法の免疫関連有害事象と治療効果に関する検討 (多施設後方視的観察研究) (国 2021-029、城武)。順調に解析を行っている。
 8. 進行性腎細胞がん症例における検体の保存に関するプロトコール (#国 2022-119、城武)。症例集積中である。
- 前立腺癌プロジェクト
9. 骨転移を有する去勢抵抗性前立腺癌を対象とした多施設共同前向き観察研究 (JMB0) (#17-245、小山)。多施設共同研究である。すでに症例登録を終え解析を進めている。
 10. 高リスク前立腺癌症例に対する根治的前立腺摘出及び放射線治療の治療成績に関する前向き比較 (#17-274、西本)。研究計画書の見直しを行い、その後は順調に症例を登録した。責任医師の退職に伴い本研究は終了した。
 11. 去勢抵抗性前立腺がん患者 (CRPC) における Ra-223 に対する治療満足度研究 (#19-045、西本)。多施設共同研究である。順調に症例登録を行った。今後学会発表予定である。本研究は終了した。
 12. 日本の高リスク転移性ホルモン療法感受性前立腺癌患者の臨床転帰を観察するレジストリ試験 (#19-108、金尾)。多施設共同研究である。すでに症例登録を終え、解析を進めている。
 13. MRI 撮影及び超音波検査融合画像に基づく前立腺針生検法の有用性に関する研究 (#19-236、金尾)。順調に解析を行っている。
 14. 前立腺癌に対する薬物療法の選択と予後に関する観察研究 (#19-237、金尾)。順調に解析を行っている。
 15. 前立腺癌のリンパ節前転移ニッチ形成に関与する microRNA の探索 (#20-257、金尾)。順調に解析を行っている。
 16. MRI-US 融合ガイド下生検と陰茎背静脈叢温存ロボット支援下手術を行った前立腺癌患者の早期尿禁制と癌制御の状態を評価する研究 (#2021-045、金尾)。順調に解析を行っている。

尿路上皮癌プロジェクト

17. 膀胱全摘術、腎尿管全摘術、経尿道的膀胱腫瘍切除術が施行された尿路上皮癌患者の予後解析 (多施設後方視的観察研究) (#14-123、城武)。多施設共同研究である。順調に解析を行っている。
18. 高リスク筋層非浸潤性膀胱がんに対する PDD-TUR による残存腫瘍減少効果の検討 (BRIGHT study) (#18-309、小山)。多施設共同研究である。症例登録は終了し主な解析結果は論文化され学会発表された。本研究は終了した。
19. 転移性および術後再発性浸潤性尿路上皮癌患者の予後解析 (多施設後方視的観察研究) (#19-013、西本)。多施設共同研究である。順調に解析を行っている。
20. 5-アミノレブリン酸を用いた蛍光膀胱鏡ガイド下経尿道的膀胱腫瘍切除術の治療成績、安全性および医療経済学的意義に関する多施設共同研究 (国 2021-050、小山)。多施設共同研究である。本研究は終了した。
21. 膀胱癌に対する膀胱全摘後の予後予測因子に関する研究—後ろ向き研究— (#国 2022-060、金尾)。順調に解析を行っている。

副腎プロジェクト

22. ヒト副腎組織におけるアルドステロン・コルチゾル産生異常の病態解明と診断法 (#18-185、西本)。多施設共同研究である。症例登録、解析ともに順調である。
23. 片側性原発性アルドステロン症の診断に副腎静脈サンプリングが必要か否かを判別するソフトウェア (Uni-APA Predictor) の有用性を確立するための前向き観察研究 (#18-310、西本)。研究②および③の成果からソフトウェアを開発し、そのソフトウェアは埼玉医科大学から特許出願を行った (6-4. 特許、実用新案参照)。本研究はそのソフトウェアの有用性を前向きに検討する多施設共同研究である。
24. 遺伝性褐色細胞腫・パラガングリオーマ症候群 (HPPS) の遺伝子解析の方法と評価に関する研究 (未発症保因者診断用) (#19-046、西本)。筑波大学を主幹とした多施設共同研究である。責任医師退職に伴い本研究は終了した。

25. 遺伝性褐色細胞腫・パラガングリオーマ症候群（HPPS）の遺伝子解析の方法と評価に関する研究（発端者用）（#19-047、西本）。責任医師退職に伴い本研究は終了した。

その他のプロジェクト

26. 「臨床研究者向け総合管理システム」のクラウド化およびデータ接続（#19-318、西本）。企業との共同研究である。当科で作成したデータベースソフトのクラウド化を行う。データベースソフトは埼玉医科大学にて著作権の登録を行い（6-4. 特許、実用新案参照）、現在クラウド化の特許出願中である。

3-4. 次年度改善計画

臨床研究の推進、基礎研究の推進、学会発表、論文作成、治験の推進など、いずれも科として全力を挙げて取り組んだ。次年度は業務改善を行い、信頼性の高い臨床研究や治験を遂行したい。

4. 診療

泌尿器科癌に対して手術、放射線治療、薬物治療などあらゆる治療法の中から、患者一人一人に適切な治療を提示し、完遂できることが当科における何よりの特色であり、最大の診療目的でもある。鏡視下手術においては、豊富な経験と高度な手術手技によりダビンチ手術に匹敵する治療成績を得ている。また、進行癌や重篤な合併症を有する高難度症例に対する手術経験も豊富である。免疫療法を含む最新の薬物療法も積極的に行っており、日本有数の症例数を誇る。今後も治験を含め、患者にとって最善かつ最先端の治療を、患者の満足度と安全性を担保しながら行っていく。本年度は常勤医の退職により、前年度に比して、外来・入院患者数、手術症例数がやや減少した。しかしながら、限られた人員の中で今後も引き続き最新医療を導入し、安全性を担保しつつ現在の患者数、症例数を維持していくことを目標とする。本年度以上に近隣施設や他診療科、他職種との連携を密にし、業務の効率化を図ることを徹底していく。

来年度は当院でもダビンチ Xi が導入されることから前立腺癌、膀胱癌、腎癌の手術に対しロボット手術を積極的に導入していく。これらのロボット手術に精通したスタッフも在籍することから安全かつスムーズな導入を進めて行く。

前立腺癌においては、来年度から Trinity®を用いた前立腺ターゲット生検が保険収載され、加算が認められたことから引き続き積極的に行っていく。また、転移性去勢感受性前立腺癌に対する遺伝子パネル検査による precision medicine を引き続き積極的に行う。膀胱癌においては、膀胱全摘除術における新膀胱造設術の積極的な施行と nivolumab による術後補助免疫療法を導入する。進行症例に対しては、新規薬剤（enfortumab vedotin）を用いた治療を積極的に行っていく。

腎癌においては、転移性腎癌に対する新規治療（nivolumab+cabozantinib, pembrolizumab+lenvatinib 併用療法）の積極的な使用を目標とする。

同時に、得られた臨床成績を国内外に発信し、日本人における泌尿器科癌の治療戦略の構築に寄与することを目標とする。また、今後期待される分子標的治療薬や新たな免疫チェックポイント阻害剤などの臨床治験への参加を引き続き積極的に行なっていく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本内分泌外科学会雑誌編集委員会（西本）

日本泌尿器内視鏡学会誌査読委員（金尾）

International Cancer Conference Journal Editorial board（金尾）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

1. Impact of Cytoreductive Nephrectomy Following Nivolumab Plus Ipilimumab Therapy for Patients With Advanced Renal Cell Carcinoma.

Shirotake S, Miyama YU, Baba Y, Tajima H, Okada Y, Nakazawa K, Usami Y, Yasuda M, Igarashi D, Kaneko GO, Kanao K, Oyama M, Nishimoto K. Anticancer Res. 2022 May;42(5):2727-2735.

2. Efficacy of abiraterone acetate for high-risk hormone-naïve metastatic prostate cancer: A comparison with combined androgen blockade therapy with bicalutamide and androgen deprivation therapy alone.

Kanao K, Takahashi T, Umezawa Y, Okabe T, Kaneko G, Shirotake S, Nishimoto K, Oyama M. PLoS One. 2022 Oct 20;17(10):e0276081.

3. Additional oncological benefit of photodynamic diagnosis with blue light cystoscopy in transurethral resection for primary non-muscle-invasive bladder cancer: A comparative study from experienced institutes. Miyake M, Nishimura N, Nakahama T, Nishimoto K, Oyama M, Matsushita Y, Miyake H, Fukuhara H, Inoue K, Kobayashi K, Matsumoto H, Mat suyama H, Fujii T, Hirao Y, Fujimoto K. BJUI Compass. 2023 Jan 13;4(3):305-313
4. Progressive metastatic pheochromocytoma induced by multiple endocrine neoplasia type 2A with a lethal outcome. Nishimoto K, Santo NL, Yonamine M, Takekoshi K, Kaneko G, Shirotake S, Fukushima H, Okada Y, Yasuda M, Sakurai A, Oyama M, Kanao K. IJU Case Rep. 2022 Sep 6;5(6):459-463.
5. Case Study: A Japanese patient with metastatic renal cell carcinoma who achieved long-term treatment-free survival with pembrolizumab and axitinib in the KEYNOTE-426 phase III trial of pembrolizumab and axitinib versus sunitinib. Nishimoto K, Shirotake S, Miyama Y, Kaneko G, Kanao K, Igarashi D, Takahashi T, Umezawa Y, Yasuda M, Oyama M. IJU Case Rep. 2022 Feb 18;5(3):149-152.
6. Progressive metastatic pheochromocytoma induced by multiple endocrine neoplasia type 2A with a lethal outcome. Nishimoto K, Santo NL, Yonamine M, Takekoshi K, Kaneko G, Shirotake S, Fukushima H, Okada Y, Yasuda M, Sakurai A, Oyama M, Kanao K. IJU Case Rep. 2022 Sep 6;5(6):459-463.

【総数：論文 6 件】

6-2. 獲得研究

1. 文部科学省科学研究費基盤研究 C：令和 4 年度～令和 8 年度
病変に着目した原発性アルドステロン症進展メカニズムの解明
研究代表者：西本 紘嗣郎
2. 文部科学省科学研究費基盤研究 C：令和 4 年度～令和 8 年度
制御性 T 細胞の機能に着目した進行腎癌一次治療の選択に有用なバイオマーカーの探索
研究代表者：金尾 健人

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

名称：判定装置、判定方法、判定プログラム

出願番号：特願 2019-89266

アルドステロン産生腺腫と非機能副腎腫瘍を鑑別するためのソフトウェア (Uni-APA Predictor)。本出願は国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) より、特許協力条約に基づく国際出願 (PCT、米国) の支援の対象となった。

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

日本泌尿器科学会埼玉地方会第 90 回日本泌尿器科学会埼玉地方会学術集会 (2023. 2. 18)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果 (教育)

CCstep2、CCstep3 においては全科共通のルーブリック評価ならびに診療科別のルーブリック評価は概ね良好に行うことが出来た。しかし、CCstep1 では臨床実習期間が 1 週間と短いため、どうしても学生に経験させる機会が少なくなってしまう、十分な評価を行えなかったものがあった。また、コロナ禍の影響により、学生を患者に密接に接触させる機会が減ったのは事実である。

(研究)

上述の点(論文作成、学会発表、研究費獲得など)に関して、期待以上の成果を得た。

(診療)

本年度は Da Vinci Xi 導入により手術療法の内容が大きく変わった一年であったが、有害事象もなく安全に導入することが出来た。また、昨年度に大幅に増加した外来・入院患者数、手術症例数を維持することができた。しかしながら、限られた人員の中で今後も引き続き最新医療を導入し、安全性を担保しつつ現在の患者数、症例数を維持していくことは容易ではないと考えており、安全性な新規医療導入に全力で取り組む。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

(教育)

特に1週間と実習期間が短いCCstep1に関しては、診療科別のルーブリックで最低限評価を行うべきものを5項目選定したため、評価を絞って学生に経験させる機会をつくっていく。CCstep2、CCstep3に関しては医師法の一部改正にともない医師の指導監督の下、学生の医業可能範囲が広がるため、積極的に学生の医行為機会を増やしていく。

学生が担当患者に対してプレゼンテーションする機会を増やす。

学生が適切にカルテ記載できるよう指導機会を増やす。

(研究)

診療のエフォートが多いため研究のために要する時間の確保が困難であるが、効率的な研究を行うための議論を積極的に行い、研究を科全体として進める。

(診療)

診療業務においては、本年度以上に近隣施設や他診療科、他職種との連携を密にし、業務の効率化を図ることを徹底していく。今後ダビンチ Xi の術者を増やすことからロボット支援下手術がさらに増えることが予想され、安全に手術数を増やしていくことを目標にする。同時に、得られた臨床成績を国内外に発信し、日本人における泌尿器科癌の治療戦略の構築に寄与することを目標とする。また、今後期待される分子標的治療薬や新たな免疫チェックポイント阻害剤などの臨床治験への参加を引き続き積極的に行なっていく。

3. 22) 耳鼻咽喉科（頭頸部腫瘍科）

1. 構成員

中平 光彦 (NAKAHIRA, Mitsuhiro) : 教授 : 運営責任者 : 診療副部長 : 教育副主任 : 指導教員 (大学院) : 頭頸部腫瘍 : 喉頭機能外科 : 医学博士

蝦原 康宏 (EBIHARA, Yasuhiro) : 教授 (2022/1~) : 診療部長 : 研究主任 : 研修担当医長 : 医療安全対策室副室長 : 指導教員 (大学院) : 頭頸部腫瘍 : 医学博士

山崎 知子 (YAMAZAKI, Tomoko) : 教授 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 頭頸部内科 : 医学博士

松村 聡子 (MATSUMURA, Satoko) : 助教 : 病棟医長 : 専門医員 : 頭頸部腫瘍

井上 準 (INOUE, Hitoshi) : 助教 : 医局長 : 専門医員 : 頭頸部腫瘍

小川 剛 (OGAWA, Go) : 助教 : 医員 (2021/4~2022/12)

吉村 美歩 (YOSHIMURA, Miho) : 助教 : 医員 (2022/1~6)

澤田 政史 (SAWADA, Masafumi) : 助教 : 医員 (2021/10~2022/9)

金本 開 (KANEMOTO, Kai) : 助教 : 医員

佐藤 尊陽 (SATO, Takaaki) : 助教 : 医員

佐藤 瞭 (SATO, Ryo) : 助教 : 医員

伊藤 瑞貴 (ITO, Mizuki) : 助教 : 医員 (2022/9~)

榎木 祐一郎 (ENOKI, Yuichiro) : 助教 : 専門医員 : 口腔外科 : 医学博士

塘田 健人 (TOMODA, Taketo) : 助教 : 医員 : 口腔外科 : 医学博士 (~2023/3/10)

菅澤 正 (SUGASAWA, Masashi) : 客員教授

小柏 靖直 (KOGASHIWA, Yasunao) : 非常勤講師

南 和彦 (MINAMI, Kazuhiko) : 非常勤講師

久場 潔実 (KUBA, Kiyomi) : 非常勤講師

林 崇弘 (HAYASHI, Takahiro) : 非常勤医員

林 直樹 (HAYASHI, Naoki) : 非常勤医員 : 口腔外科

岩崎 良恵 (IWASAKI, Yoshie) : 研究員 : 口腔外科

高松 俊輔 (TAKAMATSU, Shunsuke) : 大学院研究生

石木 寛人 (ISHIKI, Hiroto) : 大学院生

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

埼玉医科大学で頭頸部外科診療、教育を行っているのは当科のみであり、卒前教育においては短期間であるがダイナミックな頭頸部癌手術の体験を通して頭頸部の機能の重要性や現在の治療の実際や問題点を振り返ってもらおう。大学院教育については若手医局員が日常の中のクリニカルエクステーションを持ちリサーチエクステーションとして研究したいというマインド作りを日々の臨床カンファレンスやジャーナルクラブの開催、リサーチカンファレンスの定期開催などを通じて図っていききたい。卒後教育については、新専門医制度開始と共に、後期研修中に当科での半年から1年前後の研修を義務化しており、3病院の交流を継続して行う。その一環として県内若手医師を対象とした、頭頸部外科を主題とした研究会を継続して開催する予定である。本年度も入局希望者が無く、積極的に当科の特異性、面白さをCC学生、初期研修医に研修中の頭頸部癌患者の診断・治療方針策定、実際の手術や保存的加療を通じてアピールし、後期研修医獲得に努めたい。基幹施設として、頭頸部外科に特化した、耳鼻咽喉科専門医養成プログラム実現可能性について、検討中である。

2-2. 教育実績(担当者) 中平、蝦原、山崎、松村、井上

卒前教育 : 学部学生教育は頭頸部腫瘍学、喉頭、嚥下障害及び甲状腺外科を担当している。

臨床実習 : 国際医療センターでは、扁桃炎、中耳炎、副鼻腔炎等の国家試験ガイドラインに含まれる耳鼻咽喉科の必須疾患を体験することは不可能であることから、耳鼻咽喉科のクリニカルクラークシップ (CC) 受け入れは中止し、選択科目の一部として外科系に興味ある学生を中心に年間10数名ほどの学生を受け入れている。手術実習を通じて再建手術を中心に頸部郭清術、喉頭全摘術などを中心とする頭頸部外科の基本術式を供覧し、頸部機能解剖、頭頸部癌治療における機能温存治療の重要性を教育した。当科でのCC中には担当症例を決め、症例報告プレゼンテーションの指導を行った。外来診療に関して、外来ブースが手狭なため学生が問診、診察するスペースがなく外来診療時の学習が十分行えないが、頭頸部内科の外来を1日体験してもらい頭頸部がんにおける薬物治療の実際、irAEをはじめとする有害事象への対応、がんゲノム診療の実際、そして標準治療が終了した場合の地域連携への意向の実際などをリアルな体験を提供できる体制としている。

卒後教育 : 附属3病院中、唯一の耳鼻咽喉科専門医、頭頸部がん専門医、及び気管食道科専門医認定教育施設として、後期研修医に対する耳鼻咽喉科専門医教育、専門医取得後の頭頸部癌専門医、気管食道科専門医獲得のため、専門教育を担当している。合同カンファとして放射線カンファ (放射線腫瘍科、口腔外科)、多職種カンファ (看護師、病棟薬剤師、言語聴覚士、理学療法士)、頭頸部病理カンファ (病理診断科、画像診断科)、死亡症例カンファを定期的で開催すると共に、科内で抄読会、病棟カンファ、新患検討カンファ、リサーチカンファを開催した。また、積極的に学会発表を指導し、論文投稿を勧めているが、本年度はCOVID-19も徐々に克服され対面での学会活動も再開した。学位希望者に対しては、臨床研究を指導し基礎研究課題を与えた。教員研究棟7Fブースを確保し、基礎研究設備を充実させた。学内外で開催される、指導医研修、研究技術講習会、鼻内視鏡手術セミナー、頭蓋底解剖セミナー等に

当科若手を積極的に参加する機会を与えた。新専門医制度導入後も制度の枠組み内で継続予定である。がん治療認定医、頭頸部がん専門医など2階建て部分の専門医取得を目標として、研修プログラムを作成しており、現在まで6名が取得している。頭頸部癌専門医取得後希望者には、がんセンター等での研修機会を与えている。

大学院教育：現在大学院生の在籍はない。教育研究棟7Fの研究室の整備は終了し、ゲノム研などの基礎分野との協力の下、後期研修医を中心に様々な基礎臨床研究が開始されている。呼吸器内科と臨床材料を使用した共同研究も開始した。非常勤医員2名、大学院研究生が2名在籍しており、論文博士による学位取得を目指し臨床研究を行っている。

2-3. 達成度評価

卒前教育の在り方として見学から参加型の実習を模索している。耳鼻咽喉科頭頸部外科学の系統的な知識不足、診断手技不足のため、1週間では患者を総合的に診察、評価する事は困難である。そのため、ファイバーなどの基本手技の習得ならびに頸部郭清などの頭頸部基本的な外科手技の理解にとどまっている。今後、学習資料の充実と、小講義の機会を若手医師に屋根瓦方式で教育体制を整備したい。但し、学生側も意識改革が必要で、積極的に病棟業務に関与する態度の涵養が必要である。

後期研修医に対しては、到達点の一つ目は耳鼻咽喉科専門医でありそのための教育を行っている。耳鼻咽喉科専門医教育の一貫として、ローテート研修した者の目標は頭頸部癌の診断法、標準的治療法を理解し、患者に説明出来る事である。さらに希望があれば専門医取得後の頭頸部癌専門医、気管食道専門医獲得のため、その後の専門教育を行う。日本耳鼻咽喉科学会専門医制度では、連携施設として、埼玉医科大学病院、埼玉医科大学総合医療センター、東京大学、帝京大学、国立国際医療研究センター、亀田病院の研修プログラムに参加し頭頸部外科分野の教育を提供している。当科入局者に対しては、頭頸部癌専門医を取得し、標準的頭頸部がん治療を実践でき、臨床研究を企画推進する能力を持つ指導的医師になることが最終的な目標となる。

2-4. 次年度改善計画

昨年度と同様卒前教育においては短期間であるがダイナミックな頭頸部癌手術の体験を通して頭頸部の機能の重要性や現在の治療の実際や問題点を振り返ってもらおう。大学院教育については若手医局員が日常の中のクリニカルケースを持ちリサーチケースとして研究したいというマインド作りを日々の臨床カンファレンスやジャーナルクラブの開催、リサーチカンファレンスの定期開催などを通じて図っていききたい。卒後教育については、新専門医制度開始と共に、後期研修中に当科での半年から1年前後の研修を義務化しており、3病院の交流を継続して行う。その一環として県内若手医師を対象とした、頭頸部外科を主題とした研究会を継続して開催する予定である。入局希望者が増加するよう、学生や初期研修医とのかかわりの中で積極的に当科の特異性、面白さを頭頸部癌患者の診断・治療方針策定、実際の手術や保存的加療を通じてアピールし、後期研修医獲得に努めたい。基幹施設として、頭頸部外科に特化した、耳鼻咽喉科専門医養成プログラム実現可能性について、検討中である。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

頭頸部癌治療のエビデンスを確立するための臨床研究を中心に、新しい治療法、検査法を開発し、頭頸部外科領域で世界に情報を発信できる施設を目指している。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

頭頸部腫瘍科単独および呼吸器内科、病理診断科やがんゲノム医療センターとの共同研究として下記の臨床研究テーマで研究を行っている。

- ① 簇出と上皮間葉関連遺伝子発現による早期舌癌における新規リスク因子の探索
舌癌における精確な頸部リンパ節転移予測因子は未確立である。上皮間葉転換(EMT)と関連づけられる腫瘍先進部の簇出はリスク因子として有用であり、近年の別研究から腫瘍辺縁でのEMT(peripheral-EMT)関連遺伝子発現が癌悪性度に関連することが報告されている。ここから、簇出部癌細胞におけるpEMT関連遺伝子の発現を多重免疫染色にて複数同時解析することで、これらを用いたアルゴリズムによる早期舌癌症例のリスク層別化を最終目標とする(蝦原、榎木、金本、病理診断科浜田医師との共同研究)。2022年は課題番号22K09712「簇出と上皮間葉関連遺伝子発現による早期舌癌における新規リスク因子の探索」として基盤研究(C)(一般)に採択された。また、浜田の報告はCureus誌に投稿、受理された。
- ② 甲状腺術後の反回神経麻痺と副甲状腺機能低下
甲状腺手術の合併症として反回神経麻痺と副甲状腺機能低下は重要である。当科では院内Quality indicatorとして、甲状腺術後合併症を継続的にモニターしており、術後反回神経麻痺と副甲状腺機能低下のリスク因子同定を目標として、患者因子・疾患因子・手術因子にて解析する(蝦原、澤田、三輪)。澤田の報告は喉頭科学会誌に投稿、受理された。
- ③ 高齢・非喫煙者の口腔がんの発がん因子解明に関する研究
口腔癌のリスク因子としては喫煙が最も重要であり従前は口腔癌の多くは喫煙者に生じることが多い癌と考えられてきたが、近年非喫煙かつ高齢の口腔癌が増加している。我が国においては他国と比較して急速に高齢化が進行しており、高齢者で増加している癌のリスク因子の研究を進めていくことは予防法を検討する上で極めて大きな意味がある。(井上、小柏、がんゲノム医療センター平崎講師との共同研究)。井上の報告は、最終投稿中である。
- ④ 手術治療を行った進行口腔がん患者の術前因子に基づく術後機能および入院期間予測
口腔がんは高齢者に多くまた頭頸部癌の亜部位のなかで最も数が多い。局所進行口腔がんに対する根治治療は外科的切除であり、さらに組織学的ハイリスク症例では放射線などの追加治療が必要となる。それらの集学的治療により術後嚥下機能は著しく障害をうけ経口摂取が困難となる。日本は世界一の高齢国家であり、がんが死因の

第一位である。また亡くなる人の約 8 割が病院で亡くなっており有効な病床運営に支障をきたしている。さらには日本の世帯構成は平成の 30 年間に大きく変化し高齢者の約 6 割は独居あるいは夫婦のみの世帯となっている。当科においても、口腔がん患者に対して根治治療を行った結果、経口摂取が困難となり自宅への退院が困難な症例が増加している現実がある。口腔がん治療において治療前より退院困難な症例を予測できれば、早期より退院連携が可能になり効果的な病床運営を行うことができると考え、危険因子の解析と今後の対応が研究されている(中平、榎木、塘田)。中平による学会報告がなされた。

⑤ 甲状腺腫瘍に対する遺伝子解析を用いた補助的診断法の確立に関する研究

甲状腺腫瘍において最終診断は切除検体の病理診断によってなされる。切除検体の最終病理診断が腺腫様甲状腺腫(過形成)であった症例が、数年後に遠隔転移、あるいは頸部リンパ節転移再発の出現により最終的に甲状腺癌と診断変更される症例が存在することが報告されており、当院においてもこのようなケースが複数存在する。腺腫様甲状腺腫は日常的に経験する非常に数の多い病態であり、最終病理診断が再発によって覆ることは、患者にとっても臨床医にとっても悲劇といえることから、診断精度向上を目指した新たな検査方法の確立が望まれる。本研究では、このように最終病理診断と臨床経過に乖離を生じた症例の手術検体と血液検体の全エクソーム解析を用い、その後の悪性化の潜在性を遺伝子異常の観点から検討することにより、病理診断の正確性を向上させる新しい診断システムの確立を目標としている。また、他の類似した症例や良好な経過を辿った症例と比較検討を行うことで、病理学的所見と臨床経過の差異の原因について明らかにしたい。本研究が全がん症例の 1%を占める甲状腺分化癌の補助的診断法の確立につながることを期待する(中平、井上、澤田、小柏、がんゲノム医療センター平崎講師との共同研究)。澤田による学会報告がなされた。

⑥ 頭頸部腫瘍における免疫微小環境の関連性解明の研究

近年免疫チェックポイント阻害薬が臨床応用され、多数の症例に投与されているが、効果予測因子に関しては不明点が多い。当科症例を用いて、この難題を解決すべく、呼吸器内科と共同研究がなされており(久場、松村、蝦原、山崎、呼吸器内科との共同研究)、松村による学会報告がなされた。また、久場による報告は Scientific Report に投稿、受理された。

⑦ その他：日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG)に参加し、前向き臨床試験を行っている。

JCOG1601(Stage I/II 舌癌に対する予防的頸部郭清省略の意義を検証するランダム化比較第 III 相試験)および JCOG1912(頭頸部癌化学放射線療法における予防領域照射の線量低減に関するランダム化比較試験 NEW BRIDGE 試験)はいずれも症例集積中であり、継続的に JCOG による会議・意見交換がなされている。

3-3. 達成度評価

研究室は基礎実験を行える設備の設置ができており、多重免疫染色、遺伝子解析を中心に多くの基礎研究が軌道に乗っており、複数の成果が論文化された。次年度以降も成果が期待される。一部ローテーター医局員にも研究に参加してもらうことが可能となった。

3-4. 次年度改善計画

十分な研究時間の確保を目指し、労務管理を行う。若手医師に研究に対する意欲を動機づけるためにも、日々の臨床業務の中での知的問いかけや、リサーチカンファの再開、積極的な学会参加を促す。これまで通りに呼吸器内科、病理診断科、ゲノム研などの臨床検体を使用した共同研究を推進する。

4. 診療

当科は 2005 年 7 月に本邦に於いて 2 番目に開設された、頭頸部癌専門診療講座である。2021 年度の実績では 386 名の頭頸部悪性腫瘍の新患と 479 件の手術件数を誇る本邦有数の頭頸部癌治療専門施設である。上縦隔より鎖骨上で脳腫瘍・脊髄腫瘍などを除く全ての腫瘍性疾患を治療対象としている。頭頸部癌は日常のコミュニケーション機能に密接に関わる部位から発生するため、その治療に際して、生命の維持のみでなく、音声、嚥下機能などの機能温存を図ることが重要であり、形成外科、放射線腫瘍科、腫瘍内科と共同して、治療をすすめている。手術治療を基本として、腫瘍の種類・性質・進行度によっては放射線治療(化学療法併用)を選択している。手術治療においては、耳鼻咽喉科、形成外科、口腔外科による共同診療体制のもと、腫瘍を切除した部位を再建する際にも可能な限り機能及び形態の温存を試みる方針である。

当院において頭頸部腫瘍科立ち上げから 16 年が経過し埼玉県西部地区のみならず北関東一円から患者が診療を希望し来院されるようになっており我々のこれまで行ってきた診療に対して一定の評価を得たものと考えている。次年度以降の目標として、高齢者の多い頭頸部癌患者に満足のいく治療を届けるために、術前より高齢者評価機能検査などを用いて身体的、精神的、社会的な健康アセスメントを行い、治療後の社会での活動予測をあらかじめ行うことで患者、家族とともに治療方針の決定が出来るような支援手段を整えていきたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

中平光彦 Auris Nasus Larynx 査読委員

日本耳鼻咽喉科学頭頸部外科会報査読委員

日本頭頸部癌編集委員、査読委員

日本気管食道科学会編集委員、査読委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

中平光彦 日本頭頸部癌学会代議員

- 日本口腔・咽頭科学会評議員
日本耳鼻咽喉科学会埼玉地方会理事
- 山崎知子 日本がん口腔支持療法学会理事
日本臨床腫瘍学会保険委員会委員
日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医試験委員
日本がん口腔支持療法学会理事
日本頭頸部癌学会評議員
日本臨床腫瘍学会キャリアエンパワーメント委員会委員
- 蝦原康宏 日本頭頸部癌学会教育委員会委員
日本喉頭科学会評議員
日本耳鼻咽喉科学会埼玉地方会広報委員会委員
- 小柏靖直 日本頭頸部外科学会利益相反委員会委員
倫理委員会委員
日本頭頸部癌学会選挙管理委員会

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 山崎知子. 医学と薬学 79: 1581-1589, 2022. 咽頭癌-最新の治療戦略 再発・転移性頭頸部扁平上皮癌に対する薬物治療法, および現状
- ② 矢内敬子. 頭頸部癌 48: 351-355, 2022. 唾液嚥下時の舌骨移動距離測定における超音波診断装置の有用性: 健常ボランティアでの検討
- ③ 山崎知子. The Quintessence 41: 2027-2028, 2022. 抗がん薬治療中の患者さんへの対応とポイント 腫瘍内科医からのメッセージ
- ④ 蝦原康宏. 喉頭 34: 77-80, 2022. 進行喉頭癌治療の有害事象とその対策 一埼玉医大国際医療センターより
- ⑤ Kuba K. Scientific report 12: 22557, 2022. A retrospective analysis of tumor infiltrating lymphocytes in head and neck squamous cell carcinoma patients treated with nivolumab
- ⑥ 澤田政史. 喉頭 34: 19-24, 2022. 甲状腺手術における術後反回神経麻痺の臨床的検討
- ⑦ Kawata-Shimamura Y. BMC Cancer Jul 16; 22(1):779, 2022. Biomarker discovery for practice of precision medicine in hypopharyngeal cancer: a theranostic study on response prediction of the key therapeutic agents
- ⑧ 中平光彦. 癌と化学療法 49(7):756-760, 2022. 高齢者頭頸部癌の年次推移について
- ⑨ 中平光彦. 今日の治療指針 2022年版 口腔癌, 中咽頭癌
- ⑩ 加藤光彦. 頭頸部外科 32(3); 271-275, 2023. 口蓋扁桃腫瘍を呈した polymorphous adenocarcinoma の1例
- ⑪ Hamada M. Cureus 15(2): e34516. Prediction formula for pathological depth of invasion from clinical depth of invasion in tongue squamous cell carcinoma (SCC) stage I/II cases
- ⑫ 中平光彦. 耳鼻臨床 116: 97-103, 2023. これからの日本における局所進行口腔癌治療を考察する

【総数: 論文 30 件、学会発表 28 件、講演 10 件】

6-2. 獲得研究費

蝦原康宏: 基盤研究 C(22K09712), R4 年度~R7 年度、簇出と上皮間葉関連遺伝子発現による早期舌癌における新規リスク因子の探索、代表者、4,290 千円

6-3. 受賞

なし

6-4. 特許、実用新案

なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

埼玉医科大学で頭頸部外科診療、教育を行っているのは当科のみである。卒前教育においては短期間であるがダイナミックな頭頸部癌手術の体験を通して頭頸部の機能の重要性や現在の治療の実際や問題点を振り返ってもらっており、学生との面談でも一定の成果が得られている。大学院教育については、若手医局員のリサーチマインド醸成が不十分であり大学院進学者が現れていない。ジャーナルクラブ（論文抄読会）の開催、リサーチカンファレンスの定期開催などが叶わなかった。卒後教育については、新専門医制度開始と共に、後期研修中に当科での半年から1年前後の研修を義務化しており、3病院の交流を継続できている。

研究に関しては、臨床が非常に多忙なため研究活動のためのタイムマネジメントが個人個人できていない。呼吸器内科、病理診断科、ゲノム研などの臨床検体を使用した共同研究が開始されており評価できる。学会発表が多いものの筆頭著者論文の数が十分でない。診療に関しては、頭頸部がん治療は益々複雑化しており、光免疫療法など新

規治療も保険適応となったが実際の治療には至っていない。単身世帯の増加や高齢者の増加とともに理解力の低下した患者に対する意思決定の支援体制が不十分である。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育においてはこれまでと同様、短期間であるがダイナミックな頭頸部癌手術の体験を通して頭頸部の機能の重要性や現在の治療の実際や問題点を振り返ってもらおう。山崎教授による薬物治療を含めた頭頸部がん集学的治療体系や支持療法・地域連携などの多職種との連携などについての理解も目標として取り組んでいく。大学院教育については、次年度は若手医局員が日常の中のクリニカルクエストを持ちリサーチクエストとして研究したいというマインド作りを日々の臨床カンファレンスやジャーナルクラブ（論文抄読会）の開催、リサーチカンファレンスの定期開催などを通じて図っていきたい。卒後教育については、引き続き後期研修中に当科での半年から1年前後の研修を義務化しており、3病院の交流を継続して行う。その一環として県内若手医師を対象とした、頭頸部外科を主題とした研究会を継続して開催する予定である。

研究に関しては、次年度は医師の働き方改革の推進と共にタスクシフトを現実化し十分な研究時間の確保をめざし、業務の見直しを行う。リサーチカンファが十分に行われていないので、定期的で開催するとともに、ジャーナルクラブ（論文抄読会）も再開する。呼吸器内科、病理診断科、ゲノム研などとの臨床検体を使用した共同研究が開始されており引き続きこれを推進する。科研費等の外部研究費の応募を必須とし、年間2回の学会発表、論文執筆1編以上を目標とする。

診療に関しては、次年度は光免疫療法など新規治療について積極的に適応と実施に向けチーム医療体制を整えていく。またICI、分子標的薬などの薬物療法に関して山崎教授を中心として安全に効率的な投与について研鑽を図っていく。

3. 23) 産婦人科（婦人科腫瘍科）

1. 構成員

長谷川幸清 (HASEGAWA, Kosei) 教授：運営責任者、診療部長：代表指導教員(大学院)：婦人科腫瘍学・癌免疫・遺伝子治療：博士

吉田裕之 (YOSHIDA, Hiroyuki) 教授：診療副部長、研究主任：指導教員(大学院)：産婦人科学、婦人科腫瘍学：博士

黒崎亮 (KUROSAKI, Akira) 准教授：教育主任：医局長・研修医担当：婦人科腫瘍学・研修医長：博士

藪野彰 (YABUNO, Akira) 講師：婦人科腫瘍学・病棟医長：博士

三輪真唯子 (MIWA, Maiko) 助教：婦人科腫瘍学・外来医長

佐藤翔 (SATO, Sho) 助教：婦人科腫瘍学：博士

新谷大輔 (SHINTANI, Daisuke) 助教：婦人科腫瘍学：博士

山口翔吾 (YAMAGUCHI, Shogo) 助教：産婦人科学、日本婦人科腫瘍学会修練医（令和4年9月退職）

乾 宏彰 (INUI, Hiroaki) 助教：産婦人科学、日本婦人科腫瘍学会修練医

新崎雅乃 (ARASAKI, Miyano) 助教：産婦人科学、日本婦人科腫瘍学会修練医

佐藤正易 (SATO, Masayasu) 助教：産婦人科学、日本産科婦人科学会専攻医

小島恵里 (KOJIMA, Eri) 助教：産婦人科学、日本産科婦人科学会専攻医（令和4年9月退職）

清元志穂 (KIYOMOTO, Shiho)：産婦人科学、日本産科婦人科学会専攻医

客員教授

藤原恵一 (FUJIWARA, Keiichi) 教授：代表指導教員(大学院)：婦人科腫瘍学・婦人科手術・癌臨床試験：博士

宮木康成 (MIYAGI, Yasunari)：三宅大福クリニック院長：婦人科内視鏡手術、婦人科腫瘍学、Medical Artificial Intelligence：博士

長尾昌二 (NAGAO, Shoji)：岡山大学 周産期講座教授、婦人科腫瘍学：博士

客員准教授

黒島弘法 (KUROSHIMA, Hironori)：新百合ヶ丘総合病院 産婦人科統括部長：婦人科低侵襲手術：博士

非常勤医師

花岡美枝子 (HANAOKA, Mieko) 助教：産婦人科学、日本婦人科腫瘍学会修練医

2. 教育

2-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

婦人科腫瘍科は産婦人科（基本学科）として、産婦人科の婦人科腫瘍以外の分野を担当する埼玉医科大学病院の産婦人科と綿密な連携のもとで、婦人科悪性腫瘍に特化した教育を担当する。

卒然教育の目標は、婦人科悪性腫瘍全般知識と主たる疾患(子宮頸癌、子宮体癌、卵巣癌、外陰癌、絨毛癌など)の病態・疫学・診断・治療に関する知識を体系的に理解させることにある。また、婦人科悪性腫瘍に対する手術療法を遂行するに必要な解剖を講義・BSLを通じて理解させる。

卒後教育では、婦人科悪性腫瘍患者の診断治療を担当し、それぞれの技量を高めることを目標とする。特に後期研修医は日本産科婦人科学会専門医、修練医は日本婦人科腫瘍学会専門医取得に必要な教育カリキュラムを達成することを目標とする。

2-2. 教育実績（担当者）

長谷川、吉田、黒崎、藪野が全体講義を、長谷川、吉田、藪野、三輪、佐藤（翔）、花岡、新谷、山口、乾、新崎、佐藤（正）がBSLを担当している。BSLは埼玉医科大学病院産婦人科をローテーションしているグループが、婦人科腫瘍科の外来および手術に参加するという形をとっている。後期研修医の教育には長谷川、吉田、藪野、三輪、佐藤（翔）、新谷、山口、乾が、婦人科腫瘍学会専門医修練医の教育には長谷川、吉田、黒崎、藪野、三輪が当たった。大学病院産婦人科所属の卒後3年前後の後期研修医のローテーションは順調に遂行されている。これら臨床経験が劣る後期研修医のトレーニングには長谷川、吉田、黒崎、藪野、小笠原、佐藤（翔）、新谷、山口、乾が中心となって当たった。

2-3. 達成度評価

卒前教育では、産婦人科全体のBSL期間が2週間という極めて短期間であり、当科へのローテーションはわずか2日であり、さらにコロナパンデミックの影響もあり、婦人科腫瘍を系統的に教育することが困難であった。

卒後教育としては、小島、佐藤(正)、清元は専攻医として、産婦人科専門医取得を目指しており、花岡、山口、乾、新崎が婦人科腫瘍学会専門医取得を目指す修練医として研修している。次年度には、花岡が婦人科腫瘍専門医師試験を受けられる予定である。小島が産婦人科学会専門医を取得した。

2-4. 次年度改善計画

講義では学生の評価は昨年度と比較して向上している。さらに充実した内容を提供できるように努力したい。BSLでは短時間ではあるが、手術参加、外来実習を通じて満足な実習であったとの評価を受けている。特にCC参加者からの評価は高いので、次年度は特に対話とフィードバックを重視し、充実した実習教育を提供していきたい。

卒後教育は、産婦人科医、特に婦人科腫瘍専門医、あるいは最新の診療技術開発を行っている経験十分のスタッフによる教育で、高度専門知識と技術の習得に専念すればよいという、恵まれた状況を生かし、専門医教育、後期研修に十分な成果を上げられるように科内で情報共有を密にしたい。

今後は初期研修医がチームに参加してくることが期待される。それにむけて、より基本的な事項を確実に教育できるようなガイダンスの整備などシステムを構築していく必要があると考えている。ロボット手術も開始となったので、教育システムの構築を検討する。

3. 研究

3-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

婦人科癌に対する新しい標準療法確立を目指した臨床試験を院内、地域、全国、国際レベルで遂行する。

革新的な治療法開発を目指してトランスレーショナルリサーチを行う

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

以下の共同研究を行っている。

米国 NRG Oncology との国際共同試験

- ・ NRG GY005 試験（プラチナ抵抗性再発卵巣癌症例に対する、olaparib と cediranib 併用の有用性を検討する、国際共同第Ⅲ相比較試験、医師主導治験）
- ・ NRG GY018 試験（再発、転移の子宮体癌症例に対する、化学療法にペンプロリズマブの上乗せの有用性を検討する、国際共同第Ⅲ相比較試験、医師主導治験）

北関東婦人科がん臨床試験コンソーシアム(GOTIC)での多施設共同試験

- ・ GOTIC-002 LUFT 試験（局所進行子宮頸がんに対するケモラジ後のUFT 2年間内服投与の有効性を検証する第Ⅲ相比較試験）ESMOにて発表
- ・ GOTIC-018 試験（局所進行子宮頸癌に対するCCRT時のnivolumabの併用、CCRT前投与の安全性を検証する第Ⅰ相試験：医師主導治験）ASCOにて発表
- ・ GOTIC-025 試験（プラチナ製剤の治療後に増悪した再発、子宮頸がんに対するペンプロリズマブとオラパリブ併用のⅡ相試験：医師主導治験）

3-3. 達成度評価

平成21年度に藤原が獲得した厚生労働科研もとに立案していた、カルボプラチンの腹腔内投与の有効性を検証する第Ⅲ相比較試験(GOTIC-001 iPocc 試験)は令和4年3月に国際学会で発表となった。本試験の運営に当たっては大学のRAセンターの支援も十分いただけるようになったので、運営が楽になった。この試験には、適切なデータマネージメントが必要とされているので、医局雇用のCRCを教育し、業務を担当させてきたが、その経験を生かし、他の臨床研究の支援が可能となった。

トランスレーショナルリサーチ(TR)に関しては、長谷川が中心となって確立した組織バンクの運営が順調に運営できている。現在は組織バンクから、初代細胞や3次元培養のバイオリソースバンクへと発展した。長谷川、吉田の指導の下、藪野、小笠原、新谷、川嶋が学位を取得した。三輪が次年度には学位取得予定である。大学院生と研究技術員の尽力により、成果が上がりつつある。また、iPocc試験に関連したTRとしてシンガポール国立大学との共同研究が順調に遂行されており、今後の発展が期待される。また、企業との非臨床試験の共同研究を多く行い、一部はESMOでも発表した。

3-4. 次年度改善計画

科内の臨床研究、TRに対するモチベーションは向上してきているが、多忙な診療に加えての研究を遂行するには時間的に限界を越えており、健全な臨床研究を支援できるインフラ整備が必須である状況は、昨年と変わっていない。医師定員の見直しを大学にお願いしたい。当科雇用のCRCに関しては、これまでの研究での経験を生かすため雇用を

継続していきたい。また、臨床研究に関する書類業務がかなり多くなってきているので、当科雇用の秘書の業務の一部となっているため、病院での支援体制を構築していただきたい。

4. 診療

開院 16 年目を迎えた婦人科腫瘍科は、婦人科腫瘍に特化した高度先進医療提供を目標に、包括的がんセンターの一員として他科と共同して婦人科癌の診断治療にあたった。先進医療の開発にも着手し、実績を上げている。診療実績も我が国有数の症例数を取り扱っており、地域連携も定着してきた。来年度もさらなる飛躍を目指す。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

長谷川幸清

Journal of Gynecologic Oncology, Principal Editor

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

長谷川幸清

日本婦人科腫瘍学会 理事

婦人科がん臨床試験コンソーシアム 理事

NRG Oncology, Endometrial Cancer Committee 委員

抗悪性腫瘍薬開発フォーラム 幹事

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Yagishita S, Nishikawa T, Yoshida H, Shintani D, Sato S, Miwa M, Suzuki M, Yasuda M, Ogitani Y, Jikoh T, Yonemori K, Hasegawa K, Hamada A. Co-clinical study of [fam-] trastuzumab deruxtecan (DS8201a) in patient-derived xenograft models of uterine carcinosarcoma and its association with clinical efficacy. *Clin Cancer Res.* 2023 Mar 28;CCR-22-3861. doi: 10.1158/1078-0432.CCR-22-3861. Epub ahead of print. PMID: 36976261.
- ② Takeda A, Kobayashi M, Hasegawa K, Fujimaki T. Regression of Acoustic Tumor After Chemotherapy for Ovarian Cancer in a Patient With a Breast Cancer Susceptibility Gene 1 (BRCA1) Germline Mutation. *Cureus.* 2023 Mar 8;15(3):e35917. doi: 10.7759/cureus.35917. PMID: 36911580; PMCID: PMC9995742.
- ③ Ishida M, Uchida N, Yabuno A, Hasegawa K, Mizunuma N, Takahashi T, Onishi H. Opioid withdrawal syndrome developing after long-term administration of naldemedine. *Palliat Support Care.* 2022 Dec;20(6):897-899. doi: 10.1017/S147895152200044X. PMID: 35543119.
- ④ Nishio S, Yonemori K, Usami T, Minobe S, Yunokawa M, Iwata T, Okamoto A, Aoki Y, Itamochi H, Takekuma M, Harano K, Yamamoto K, Maruko T, Ugai H, Tekin C, Colombo N, Fujiwara K, Hasegawa K, Ushijima K. Pembrolizumab plus chemotherapy in Japanese patients with persistent, recurrent or metastatic cervical cancer: Results from KEYNOTE-826. *Cancer Sci.* 2022 Nov;113(11):3877-3887. doi: 10.1111/cas.15479. Epub 2022 Sep 15. PMID: 35792064; PMCID: PMC9633308.
- ⑤ Yonemori K, Kuboki Y, Hasegawa K, Iwata T, Kato H, Takehara K, Hirashima Y, Kato H, Passey C, Buchbjerg JK, Harris JR, Andreassen CM, Nicacio L, Soumaoro I, Fujiwara K. Tisotumab vedotin in Japanese patients with recurrent/metastatic cervical cancer: Results from the innovaTV 206 study. *Cancer Sci.* 2022 Aug;113(8):2788-2797. doi: 10.1111/cas.15443. Epub 2022 Jun 15. PMID: 35633184; PMCID: PMC9357646.
- ⑥ Yonemori K, Yunokawa M, Ushijima K, Sakata J, Shikama A, Minobe S, Usami T, Enomoto T, Takehara K, Hasegawa K, Yamagami W, Yamamoto K, Han S, Dutta L, Orlowski R, Miura T, Makker V, Fujiwara K. Lenvatinib plus pembrolizumab in Japanese patients with endometrial cancer: Results from Study 309/KEYNOTE-775. *Cancer Sci.* 2022 Oct;113(10):3489-3497. doi: 10.1111/cas.15436. Epub 2022 Jul 26. PMID: 35612971; PMCID: PMC9530883.
- ⑦ Nagawa K, Kishigami T, Yokoyama F, Murakami S, Yasugi T, Takaki Y, Inoue K, Tsuchihashi S, Seki S, Okada Y, Baba Y, Hasegawa K, Yasuda M, Kozawa E. Diagnostic utility of a conventional MRI-based analysis and texture analysis for discriminating between ovarian thecoma-fibroma groups and ovarian granulosa cell

tumors. J Ovarian Res. 2022 May 25;15(1):65. doi: 10.1186/s13048-022-00989-z. PMID: 35610706; PMCID: PMC9131674.

- ⑧ Sato S, Matsushita H, Shintani D, Kobayashi Y, Fujieda N, Yabuno A, Nishikawa T, Fujiwara K, Kakimi K, Hasegawa K. Association between effector-type regulatory T cells and immune checkpoint expression on CD8+ T cells in malignant ascites from epithelial ovarian cancer. BMC Cancer. 2022 Apr 21;22(1):437. doi: 10.1186/s12885-022-09534-z. PMID: 35449092; PMCID: PMC9026673.

【総数：論文 8 件】

6-2. 獲得研究費

長谷川幸清

研究開発課題名：進行卵巣癌・卵管癌・腹膜癌に対する腹腔内化学療法確立のための研究（分担）

課題管理番号：221k0201110h0003

獲得金額直接経費 0 円

研究開発課題名：卵巣癌の個別化治療を目指した免疫プロファイルに基づく包括的バイオマーカーの開発（代表）

課題管理番号：19K09786

獲得金額直接経費 1,000,000 円

研究開発課題名：全ゲノム解析による難治性卵巣がんの本態解明と新規治療標的の同定（分担）

課題管理番号：22ck0106694h0002

獲得金額直接経費 2,000,000 円

研究課題名：抗レトロウイルス薬のドラッグリバーバシングによる LINE 1 発現子宮体癌の治療戦略（若手 佐藤翔、代表）

課題管理番号：20K18230

獲得金額直接経費 600,000 円

研究開発課題名：個別化治療戦略のための子宮内膜癌の MRI テスクチャ解析に基づく診断法の確立（分担）

課題管理番号：21k07604

獲得金額直接経費 300,000 円

研究開発課題名：卵巣癌における低酸素関連因子の発現からみた組織型の意義：化学療法抵抗性の分別化（分担）

課題管理番号：18K06997

研究開発課題名：卵巣癌における低酸素誘導因子（HIF）の抑制機構の解明と治療応用への試み

課題管理番号：21k06928

獲得金額直接経費 50,000 円

研究開発課題名：卵巣癌におけるゲノム解析とオルガノイドによる薬剤感受性試験の臨床的有用性の検証（分担）

課題管理番号：21H03074

獲得金額直接経費 300,000 円

吉田裕之

研究開発課題名：思春期女性への HPV ワクチン公費助成開始後における子宮頸癌の HPV16/18 陽性割合の推移に関する疫学研究（分担）

課題管理番号：22fk0108651s0701

獲得金額直接経費 200,000 円

研究開発課題名：DNA ヘリカーゼを標的とした PARP 阻害剤抵抗性卵巣癌に対する新規治療法の開発（代表）

課題管理番号：22k09552

獲得金額直接経費 900,000 円

新谷大輔

研究開発題名：転写因子 STAT3 を標的とした子宮体癌に対する新規治療法の開発

課題管理番号：22K15610

獲得金額直接経費 1,100,000 円

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

開設 15 年目として、患者数はこれまで順調に増加してきたが、プラトーに達している感がある。さらに県内外からは併存合併症例や難治症例が多く搬送され、科員の負担は大きい。また医師の働き方改革準備に伴い臨床フェローが予定より早く帰局となり、リソース不足がさらに顕著となった。その中で診療面では前年度とほぼ同じ手術数を達成した。

教育は大学病院産婦人科との連携が充実してきており学生、研修医の満足度も向上してきている。しかし、婦人科そのものの実習時間が欧米と比べて3分の1という貧弱な時間割なので、婦人科腫瘍科の重要性を十分伝えられないのは極めて残念である。

臨床および基礎研究面の体制整備は長谷川の努力により順調に進んでいる。しかし、トランスレーショナルリサーチ、臨床試験の将来を担う人材育成にはまだまだ時間がかかりそうである。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

地域連携を強化すること、他病院、他のがんセンターでは行えない研究的な先端医療を行うことができる体制の整備されてきているが、十分とはいえない。

今後、適正な労務管理ができるよう、人材確保に全力を尽くすとともに、引き続き診療、研究補助人員の配置を要望していきたい。秘書、技術員、CRC などタスクシフトを進め、医師の働き方改革に対応する必要がある。

卒前教育が適正に行われるよう、産婦人科実習時間の増加を大学に要望できるよう、大学、総合医療センターの産婦人科と協調していきたい。

教育のみならず、診療、研究においても大学、病院の関係部署との連携を強化し、人的資源の共有など新たな取り組みを試みていく必要性を感じている。次年度はこれらの目標を達成するために業務の改善を行いさらなる飛躍を目指したい。

3. 24) 歯科・口腔外科

1. 構成員

坂田康彰 (SAKATA, Yasuaki) : 准教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) ; 顎変形症 : 博士

志田裕子 (SHIDA, Hiroko) : 助教 : 診療副部長 : 教育副主任 : 研究副主任 : 大学院教員 (大学院) ; 先天奇形 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

医学部における歯科医学の習得ならびに口腔外科領域医療の知識と理解を深めた

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育 : 口腔外科学講義 医学部 4 年 (坂田康彰)

卒後教育 : 口腔衛生管理等に関する講習会の実施 (坂田康彰)

大学院教育 : 大学院生に対する臨床実習 (坂田康彰)

2-3. 達成度評価

口腔外科学に関する基本的な理解が卒前、卒後を通じて十分ではないと評価する

2-4. 次年度改善計画

4 年次の座学のあり方の改善と次年度は卒後の講習会の充実を図る

3. 研究

3-1. 目的・目標

周術期口腔機能管理の方法を検討し、そのマネージメント法などの確立、さらには入院患者に対する介入効果の検証を比較検討した

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

1. 周術期口腔機能管理の有用性と誤嚥性肺炎のリスク因子に関する研究 (坂田、志田)

2. 高用量注射骨吸収抑制薬が投与されている患者における口腔管理と顎骨壊死発症に関する多施設共同研究 (坂田、志田)

3-3. 達成度評価

当院での肺炎発生率等を後方視的に解析し、その効果が確認できた

3-4. 次年度改善計画

口腔ケア介入により肺炎発症リスクの抑制効果の前向き研究を検討

4. 診療

入院患者の周術期口腔機能管理を中心に年間 600 人ほど診察し、今後は人員、設備等のさらなる充実を図り入院患者の口腔内の有害事象の減少を図りたい

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県医科歯科連携推進委員会委員。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本口腔看護研究会埼玉支部 世話人

日本口腔ケア学会 評議員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

① 血液腫瘍における周術期口腔ケア施行中の肺炎発症に関する統計学的検討 平山超教 志田裕子 坂田康彰
第 19 回日本口腔ケア学会総会 2022 年 4 月 大阪

② Postoperative pneumonia suppression effect by oral care in patients with gastrointestinal cancer
SAKATA Yasuaki, SHIDA Hiroko, HIRAYAMA Tatsunori, Hospital Dentistry & Oral-Maxillofacial Surgery 2022 in press

【総数 : 論文 1 件、学会発表 1 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

- 6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績
該当なし

7. 自己点検・評価

- 7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果
学部教育では、当学科の教育内容が国家試験の出題にはないこともあり、学生への理解を徹底させることが難しく、卒後研修や大学院においても、診療、実習、研究を通じて医学に携わる者として必要な知識であることを徹底して伝えることが重要と思われた
- 7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画
学部教育で関連帷幄としての重要性を強調し、卒後、大学院では講習会、実習を通して口腔外科学の浸透を図る

3. 25) リハビリテーション科

1. 構成員

牧田茂 (MAKITA, Shigeru) : 教授 : 運営責任者 : 研究主任 : 診療部長 :
代表指導教員 (大学院) : 心臓リハ、がんリハ : 博士
高橋秀寿 (TAKAHASHI, Hidetoshi) : 教授 : 教育主任 : 診療部長 :
指導教員 (大学院) : 脳卒中リハ : 博士
内田龍制 (UCHIDA, Ryusei) : 講師 : 研究員、教育員 : 診療副部長 : 博士
丸山 元 (MARUYAMA, Hajime) : 講師 : 研究員、教育員 : 医員 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

「卒前教育」: リハビリテーション医学を理解し、臨床の場面で必要な知識を習得する。

「卒後教育」: リハビリテーション医学に関連する疾患や合併症を幅広く理解し、リハビリテーション医療に必要な知識と技術を習得し、リハビリテーション専門医取得を目指す。

「大学院教育」: リハビリテーションに関する理論とその応用を研究し、その学問的修練を極めて、学術業績を積んでリハビリテーション医学の発展に寄与する。

2-2. 教育実績 (担当者)

「卒前教育」: 3年生に対し講義を4回 (心臓リハビリテーション:「循環器」のユニット 牧田担当), (脳血管障害8: リハビリテーション:「神経」のユニット 高橋担当), (リハビリテーション概論:「地域医療とチーム医療」のユニット、高橋担当), (リハビリテーションとチーム医療:「地域医療とチーム医療」のユニット、高橋担当)、4年生に対し講義を2回 (リハビリテーションと運動生理:「皮膚・運動器」のユニット 牧田担当), (小児のリハビリテーション:「皮膚・運動器」のユニット 高橋担当), を行った。5年生に対してはBSLを大学病院リハビリテーション科ならびに総合医療センターリハビリテーション科と共同して行った。国際医療センターの担当は、脳卒中リハ (高橋担当) と運動生理・運動負荷試験である (牧田、内田担当)。さらに、循環器BSLカリキュラムに心臓リハビリテーションが導入された (牧田、内田担当)、6年生に対し講義を1回 (回復期、地域のリハビリテーション:「医師国家試験に向けての臨床推論」のユニット 高橋担当) を行った。

「卒前教育」: 3年生に対し臨床推論ユニット (PBL (問題基盤型学習) 形式) のチュータを1回 (胸痛について: 内田担当)。3年生を対象に臨床入門として、リハビリテーション (療法士) の実施場面の見学を実施した。また2年生が医師業務見学として半日リハビリテーション科の診療を見学した。OSCE 共用試験ならびに post OSCE 試運用に参加した (牧田、高橋、内田)。

「大学院教育」: 今年度該当者はいなかった。

2-3. 達成度評価

「卒前教育」: リハビリテーション医学の概論的知識については修得できたと思われる。

2-4. 次年度改善計画

目的を十分に達していると判断している。次年度も引き続き、大学病院リハビリテーション科および総合医療センターリハビリテーション科と共同して教育カリキュラムを実施していきたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標

がん、脳卒中、心臓病に対する高度専門領域に特化した救命救急医療を提供する当院において、他診療科と連携した高度の医療水準を満たしたリハビリテーションの研究を行っていく。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

- ・心臓リハビリテーションの効果に関する研究 (牧田、内田)
- ・がんのリハビリテーションに関する研究 (牧田、内田)
- ・ノルディックポールを用いた脳卒中患者の運動効果 (高橋)
- ・会話ロボットを用いた急性期脳卒中患者のコミュニケーション改善の試み (高橋)

心臓リハビリテーションにおいては、作業療法士や言語聴覚士をスタッフに加え、ADL 障害や嚥下障害ならびに認知機能障害に着目して介入していくことを開始した。とくに高齢心不全患者や左室補助人工心臓患者に重要であると考えている。トレーニング方法の開発も手掛けている。また、がんのリハビリテーションでは、肺がん・食道癌術後リハビリテーションに加えて、造血器腫瘍、乳腺腫瘍と骨軟部腫瘍の領域において、新たな取り組みを開始した。脳卒中のリハビリテーションでは、脳卒中センターにおける各科診療医師と協力し、ノルディックポールを用いた脳卒中患者の運動効果、会話ロボットを用いた急性期脳卒中患者のコミュニケーション改善の試み、などの研究を行った。

3-3. 達成度評価

研究実績から学会発表という点では昨年度と比較して遜色ない結果と思われたが、さらに発表を増やしていくことが望ましいと思われる。総論等の執筆に関しては十分達成できていると考える。

3-4. 次年度改善計画

次年度計画としては、現在の研究内容をさらに発展させていく予定である。

4. 診療

心臓リハビリテーション実施件数は、2022年心臓内科は667件、心臓血管外科は609件であった。多発外傷を含む救命救急関係では603件の新規リハビリテーションを行った。がん関係では周術期リハビリテーションや造血幹細胞移植患者の予防的リハビリテーションを含み計1476例を実施した。

脳卒中のリハビリテーションでは1516名を実施した。内訳は、脳梗塞537名、脳出血244名、くも膜下出血72名、てんかん発作70名、慢性硬膜下血腫122名、未破裂脳動脈瘤術後44名、脳腫瘍261名、その他166名であった。年齢別では70歳代が最も多かった。発症からリハビリ開始までの日数は1.36日で、脳卒中ガイドライン2015が推奨する2日以内の実施を達成することができた。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

臨床スポーツ医学会誌編集委員、Journal of Cardiology associate editor (牧田)

日本脊髄障害医学会査読委員 (高橋)

日本リハビリテーション医学会外部査読者 (高橋)

Japanese Journal of Comprehensive Rehabilitation Science の査読 (高橋)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本心臓リハビリテーション学会理事長 (牧田)、日本臨床スポーツ医学会理事 (牧田)、日本運動療法学会理事 (牧田)、日本腎臓リハビリテーション学会理事 (牧田)、日本体力医学会評議員 (牧田)、日本リハビリテーション医学会代議員 (高橋)、日本リハビリテーション医学会専門医委員会小児リハビリテーションSIG委員 (高橋)、日本運動療法学会理事 (高橋)、日本脊髄障害医学会保険問題等委員会委員長 (高橋)、日本ノルデックウォーク学会理事 (高橋)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 牧田茂ほか：2021年改訂版 心血管疾患におけるリハビリテーションに関するガイドライン。
日本循環器学会/日本リハビリテーション学会合同ガイドライン 2021年3月27日発表
日本循環器学会 HP: https://www.j-circ.or.jp/cms/wp-content/uploads/2021/03/JCS2021_Makita.pdf
- ② T Kaihara, M Scherrenberg, M Falter, I Frederix, H Itoh, S Makita, Y Akashi, P Dendale: Cardiac telerehabilitation -A solution for cardiovascular care in Japan-. Circ Rep 2021; 3: 733-736
- ③ 高橋 秀寿: 定型発達 (1) 運動発達、15 レクチャーシリーズ、理学療法テキスト、小児理学療法学、石川朗総編集、東京、中山書店、2022, p1-10.
- ④ 高橋 秀寿: 定型発達 (2) 精神発達、15 レクチャーシリーズ、理学療法テキスト、小児理学療法学、石川朗総編集、東京、中山書店、2022, p11-22.
- ⑤ 高橋秀寿, 丸山 元、海津 伶: 脳卒中急性期リハビリテーションにおける合併症の対応について、脳卒中トータルケアセミナー, 令和4年3月14日, 日高、
- ⑥ 高橋秀寿, 丸山 元: 脳卒中急性期リハビリテーションにおける合併症の対応について、第59回日本リハビリテーション医学会学術集会, 令和4年6月24日, 横浜
- ⑦ 高橋秀寿: 回復期リハビリテーションのQ&A、令和4年埼玉県看護連盟第9支部研修会, 令和4年12月9日, 日高

【総数：論文4件、学会発表0件、講演3件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- ① 第27回日本心臓リハビリテーション学会 (幕張メッセ：会長 牧田茂) 2021年6月19日～20日 (ハイブリッド開催)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育、研究、診療のいずれにおいても目標はほぼ達成された。心臓リハビリテーション、がんリハビリテーション、脳卒中リハビリテーションともに患者数が増えるとともに新たな課題に向かって挑戦しており、病院経営に貢献して

いるといえる。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

次年度は診療面では365日リハビリテーション維持のためにスタッフ増を申請する。教育面では医学生の実習教育に積極的に参加していく。研究面では引き続き脳卒中リハビリテーション領域、心臓リハビリテーション領域、がんリハビリテーション領域を中心に学会発表と臨床研究を行っていく。

3. 26) 麻酔科（麻酔科、集中治療科）

1. 構成員

北村 晶(KITAMURA, Akira) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 代表指導教員 (大学院) : 臨床麻酔 : 博士
古田島 太(KOTAJIMA, Hutoshi) : 教授 : 診療部長 (集中治療科) : 指導教員 (大学院) 集中治療 : 博士
辻田 美紀(TSUJITA, Miki) : 准教授 : 教育主任 : 大学院教員 (大学院) : 小児心臓麻酔 : 博士
中川 秀之(NAKAGAWA, Hideyuki) : 准教授 : 研究主任 : 大学院教員 (大学院) : 心臓血管麻酔 : 博士
釜田 峰都(KAMATA, Mineto) : 講師 : 医員 : 大学院教員 (大学院) 小児心臓麻酔 : 博士
佐々木 陽子 (SASAKI, Yoko) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
大野 聖加(ONO, Seika) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
関口 淳裕(SEKIGUCHI, Atsuhiko) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
能美 隆臣(NOUMI, Takaomi) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
足立 佳也(ADACHI, Yoshiya) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
内田 賢太郎(UCHIDA, Kentaro) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
鈴木 真純(MASUMI, Suzuki) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
市村 拓也(ICHIMURA, Takuya) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
小泉 皓子 (HIROKO, Koizumi) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
住井 啓介(KEISUKE, Muto) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
横瀬 勇樹(YUKI, Yokose) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
華岡 万貴(MAKI, Hanaoka) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
加島 汀子(TOKO, Kajima) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
武藤 広大(KODAI, Muto) : 助教 : 医員 : 臨床麻酔
以上 19 名のほか、非常勤医師あり

2. 教育

2-1. 目的・目標

麻酔科学は呼吸、循環管理のみならず、術後患者や重症患者の集中治療管理および急性、慢性疼痛の治療を対象とする総合臨床医学である。それは生理学、薬理学、解剖学、精神心理学を基礎としており、その臨床応用という面からの理解と実践が教育の目的である。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育 : 前年度と同様に、4年生で「診療の基本」に含まれる系統講義 (救急麻酔部門中の麻酔 : 麻酔における循環管理、全身麻酔について) は、北村が担当した。5年生における臨床実習 (Step 1) では大学病院麻酔科と連携して、教育主任の辻田を中心として臨床に直結した教育を目標として、心臓麻酔、周術期集中治療管理などに積極的に参加させた。

卒後教育 : 前年度と同様に、教室員全員が1対1で対応して、種々の手技の施行、心臓麻酔、周術期集中治療管理などに積極的に参加させた。問題解決能力の養成と技能の習得を基本に教育を行っている。

2-3. 達成度評価

大学病院麻酔科と合同で4年生には麻酔科独自の口頭試問を、Step1 およびクリニカルクラークシップにはレポートおよび口頭試問による評価を行った。6年生は総合試験、卒業試験に救急麻酔部門として出題した。対象者 (卒前卒後) から個別に評価を行い高評価を得た。教育主任の辻田は国際医療センター内の初期研修医を対象にして優秀指導者に選出された。

2-4. 次年度改善計画

所属麻酔科職員に比して手術件数が多く、日常診療に非常に多忙であったが、可能な限り学生教育に貢献したと総括している。次年度はスタッフのいっそうの充実をはかり、術前、術後管理を含めた周術期管理の充実や臨床現場での患者対応と実習などについて臨床研修医と合同で教育を行う予定である。

3. 研究

3-1. 目的・目標

臨床麻酔および周術期管理に直結した研究と、大学病院麻酔科と連携した循環、呼吸、代謝管理の基礎実験研究を行い、安全で予後の良い全身管理を迫及する。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

- ・ 心臓血管手術における人工心肺管理時の総頸静脈血流の評価に関する研究（足立、釜田）
学会発表を行い、論文をすすめている。
- ・ 乳児における開心術前後の挿管チューブの位置変化に関する検討（関口、北村）
開心手術中の気管挿管チューブの位置ずれについての後ろ向き研究を行い、カフ使用が有効であることを証明し、研究論文として国際誌に掲載された。
- ・ マネキンを用いて3種類の声門上器具における胃管挿入の操作性についての研究（足立、釜田）
数十人の麻酔科医においてのマネキンスタディを行い研究論文として投稿予定である。
- ・ 疼痛・鎮痛関連遺伝子多型が腹腔鏡補助下大腸切除術における術中・術後の麻薬性鎮痛薬必要量に及ぼす影響に関する研究（辻田、中川、北村）
すでに学会、論文発表された。
- ・ 全身麻酔薬が、中枢組織および末梢組織までの循環時間および筋弛緩薬の作用発現に及ぼす影響に関する研究（北村）
新しい静脈麻酔薬の筋弛緩効果発現時間についての研究を継続中である。
- ・ ビデオ喉頭鏡による挿管成功率を向上させるための研究（佐々木、中川、北村）
- ・ 開心術とカテーテル治療における術後腎機能への影響（能美、北村）
術後腎機能低下に及ぼすリスク因子についての研究を後方視的に調査し研究論文として投稿中である。
- ・ 静脈麻酔薬における気道開通性と麻酔深度の相関について（佐々木、中川）
後方視的研究を開始した。
- ・ 麻酔薬の種類が術中の出血量に与える影響について（佐々木、北村）
視的研究として研究発表して論文を目指している。

3-3. 達成評価

研究実績から、上記研究プロジェクトにおける進行度について毎月検討会を開き協議しており、データの集積中である。しかしながら、診療業務の多忙さがあり、達成度は高くないことを自覚している。

3-4. 次年度改善計画

診療業務の多忙さがあり研究活動が十分とはいえない。次年度には上記論文について、国内外のジャーナルに投稿する予定である。

4. 診療

業務の多忙さがあるが、丁寧な仕事と医療安全に留意して活動している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

北村 晶：PMDA 専門委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

北村 晶：日本医療安全調査機構個別調査部会員（日本麻酔科学会担当）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

北村晶：気管挿管認定救急救命士を対象に気管挿管再教育講習会（埼玉県西部第一地域メディカルコントロール協議会）

6. 業績

6-1. 論文・著書・学会発表

- ① 神山孝憲, 釜田峰都. 完全アウェイでの挿管には系統立った患者評価と物品持参で素早い対応を. LiSA 29 巻 4 号 P. 313-315 (2022. 04)
- ② 釜田峰都. 乳幼児に対する脊髄くも膜下麻酔 A Less Risky Anesthesia for Babies ? LiSA 29 巻 5 号 P. 454-459 (2022. 05)
- ③ Taichi Onimaru, Mineto Kamata, Hideyuki Nakagawa. One-lung ventilation and 3D image analysis in a case of tracheal bronchus with steeply angled branching of left main bronchus: a case report. JA Clin Rep. 2022 Jul 25;8(1):55
- ④ 白木直子, 北村晶, 関口淳裕, 中川秀之, 辻田美紀, 宮脇豊, 佐藤弘. 食道外科手術における分離肺換気中の位置異常が原因で頻回に換気困難に陥った1症例. 麻酔. 71 巻 8 号 P. 852-855 (2022. 08)
- ⑤ Atsuhiko Sekiguchi, Akira Kitamura, Miki Tsujita, Yuki Shiko, Hideyuki Nakagawa. Endotracheal Tube Displacement during Cardiac Surgery in Infants: A Retrospective Cohort Study of Its Incidence and Predictors. Open Journal of Anesthesiology. 2022 12(07):219-228

- ⑥ 前田はるか, 中川秀之, 北村晶. 多発肺転移による低酸素血症患者にクアドラライト麻酔用マスクを用いて pressure support ventilation で管理した経験. 麻酔. 72 巻1号 P.87-91 (2023. 01)
- ⑦ 釜田峰都. 術中輸液管理: 新生児・小児におけるグルコース添加. 日本麻酔科学会 第 69 回学術集会にて シンポジウム (2022/6/16~18) 神戸
- ⑧ 釜田峰都, 玉井智久. 経心膜エコーで診た経食道心エコープローブ操作による肺静脈狭窄. 日本心臓血管麻酔学会 第 27 回学術大会. 2022. 9. 京都
- ⑨ 市村拓哉, 鬼丸大知, 釜田峰都. 緊急手術での肺動脈カテーテル挿入: 術中に診断された isolated PLSVC. 日本心臓血管麻酔学会 第 27 回学術大会. 2022. 9. 京都
- ⑩ 中川秀之, 北村晶. 体血圧の違いで AR を生じた DCM 患者の LVAD 装着術における反省点と注意点. 日本心臓血管麻酔学会 第 27 回学術大会. 2022. 9. 京都

他

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

上記診療業務が非常に多忙であることさらに教室員の不足がある中で、個々人が結束よく努力した。教育に関しては、卒前、卒後ともに各教室員が特に努力して、学生あるいは研修医からの満足度も高評価を得た。一方、研究に関しては、コロナ禍で軒並み学会活動が制限され、業績が大きく低迷した。

7-2. 今年度の自己点検・評価悔過に基づく改善計画

教育に関しては、教育主任を中心に学生には試験対策に通じる知識教育、研修医には臨床に密着した問題解決型学習を通して満足度を向上させる。研究では、上記予定研究を論文化する。3人の学位取得を目指している。診療は相変わらず多忙であることが予想されるが、上記を総合しての自己、他者評価を行い、個人ごとに改善計画をたてる。

3. 27) (1) 救急医学科 (救命救急科)

1. 構成員

根本 学 (NEMOTO Manabu) : 教授、運営責任者、教育主任、研究主任

救急医学全般、外傷外科、ショック、災害医療、院外心肺停止に関する多施設共同研究、外傷初期診療の教育・研究、医学博士

主な資格：日本救急医学会専門医・指導医、日本外傷学会専門医、麻酔標榜医、JPTEC・JATEC・MCLS インストラクター 他

大原 泰宏 (OOHARA Yasuhiro) : 講師 (兼担：消化器・一般外科)、診療副部長、教育副主任、専門医員、教育員、研究員

消化器外科、急性期外科治療 (Acute car surgery)、一般外科、医学博士

主な資格：日本外科学会専門医、JATEC インストラクター 他

大谷 義孝 (OHYA Yoshitaka) : 講師、診療部長、研究副主任、専門医員、教育員、研究員

救急医学全般、外傷外科、災害医療、医学博士

主な資格：日本救急医学会専門医、JPTEC・JATEC プロバイダー、ICLS インストラクター、日本 DMAT 隊員 他

吉川 淳 (KIKKAWA Jun) : 講師、(兼担：整形外科)、専門医員、教育員

骨損傷急性期治療、外傷整形外科、救急一般

主な資格：日本整形外科学会専門医、JPTEC・JATEC プロバイダー

守 麻理子 (MORI Mariko) : 助教、専門医員、教育員、研究員

消化器外科、急性期外科治療 (Acute car surgery)、一般外科

主な資格：日本外科学会専門医、JPTEC インストラクター 他

小川 博史 (OGAWA Hiroshi) : 助教、専門医員、教育員 救急医学全般

主な資格：日本救急医学会専門医 他

加藤 進太郎 (KATO Shintarou) : 助教、(兼担：整形外科)、専門医員、教育員 骨損傷急性期治療、外傷整形外科、救急一般

主な資格：日本整形外科学会専門医

坂本 博史 (SAKAMOTO Hirofumi) : 助教、専門医員、教育員 救急医学全般

主な資格：日本泌尿器学会泌尿器科専門医、JATEC・JPTEC プロバイダー 他

足立 智子 (ADACHI Tomoko) : 助教、専門医員、教育員 救急医学全般

主な資格：日本救急医学会専門医、PALS・JATEC・JPTEC プロバイダー 他

宮田 秀平 (MIYATA Shuhei) : 助教、専門医員、教育員 救急医学全般

主な資格：日本救急医学会専門医、JATEC・JPTEC プロバイダー 他

東島 啓仁 (TOJIMA Hirohito) : 助教、(兼担：整形外科)、専門医員、教育員 骨損傷急性期治療、外傷整形外科、救急一般

小幡 雄三 (OBATA Yuzo) : 助教、専門医員、教育員 救急医学全般

主な資格：JATEC・JPTEC プロバイダー 他

土屋 亮輔 (TSUCHIYA Ryosuke) : 助教、専門医員、教育員 救急医学全般 脳神経外科全般

主な資格：日本脳神経外科学会専門医、JATEC・JPTEC プロバイダー 他

近江 光 (OMI Hikaru) : 助教、専門医員、教育員 救急医学全般

主な資格：JATEC・JPTEC プロバイダー 他

奈良 愛 (NARA Megu) : 助教、専門医員、教育員 救急医学全般

主な資格：JATEC・JPTEC プロバイダー 他

岸田 全人 (KISHIDA Yoshito) : 救急救命士

プレホスピタルケア、救急隊教育、DMAT 隊員、シミュレーション教育

作山 洋貴 (SAKUYAMA Hiroki) : 救急救命士

プレホスピタルケア、救急隊教育、シミュレーション教育

遠山 笑里 (TOUYAMA Emiri) : 救急救命士

プレホスピタルケア、救急隊教育、シミュレーション教育

海道 陸 (KAIDO Riku) : 救急救命士

プレホスピタルケア、救急隊教育、シミュレーション教育

佐藤 直 (SATO Nao) : 救急救命士

プレホスピタルケア、救急隊教育、シミュレーション教育

吉田 奈央 (YOSHIDA Nao) : 救急救命士

プレホスピタルケア、救急隊教育、シミュレーション教育

非常勤医師

小井土 雄一 (KOIDO Yuichi) 非常勤教授、救急医学全般、外科一般、災害医療、医学博士

主な資格：日本救急医学会専門医、日本外科学会専門医 他

齋藤 大蔵 (SAITO Daizo) 客員教授、救急医学全般、熱傷、医学博士

主な資格：日本救急医学会専門医・指導医、日本熱傷学会専門医 他

野村 侑史 (NOMURA Yushi) : 救急医学全般

主な資格：日本救急医学会専門医・指導医、JATEC・JPTEC プロバイダー 他

石上 順平 (ISHIGAMI Junpei) : 助教、専門医員、教育員 救急医学全般

主な資格：JATEC・JPTEC プロバイダー 他

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

目的：救急医学の臨床的・社会的異議を理解・習得させ、実臨床に役立つ人材を育成する。

目標：学生（医学部および保健医療学部）、研修医、看護師、消防職員（救急救命士および標準課程修了者）および救急救命士養成教育機関の学生などを対象に、それぞれの職種に必要な救急医学の基本的内容の教育を行う。また、海外留学生・研修生に対しても対応できる体制の構築を図る。社会的活動としては、学外および院内の全職員を対象として、BLS および ICLS 講習による一次・二次救命処置の普及を図る。日本救急医学会救急科専門医・指導医指定施設認定ならびに日本外傷学会外傷専門医研修施設認定を受けていることから、専門医教育も充実させる。また、シミュレーション教育に関しては、主に卒後教育を中心に医師、看護師、コ・メディカルを対象に実施する。

2-2. 教育実績(担当者)

- 1) 1年生：救急医学の基礎および一次救命処置（根本、大原、大谷、岸田、作山）
4年生：救急疾患の診断と治療（ヒトの病気2 救急・麻酔ユニット）（根本、大原、吉川）
5年生：BLS 実習を含む、救急一般の講義および臨床実習と見学（根本、大谷、大原、守、足立、宮田ほか）
6年生：CC指導、講義：内科的、外科的救急疾患の診断全般（根本、大谷、大原、守、足立、宮田ほか）
- 2) 臨床研修医の教育：指導医の監督下に救急全般の初期診療および急性期治療（根本、大谷、大原、守、足立、宮田ほか）
- 3) 研修医および病院内職員に対するBLS、ICLS、院内ALS コース開催による一次・二次救命処置実習教育（根本、大谷、岸田、作山、遠山、海道、佐藤、吉田）
- 4) 3年目以降の救急専任医の教育：後期研修プログラムに基づく救急医学会専門医資格取得と、学位を含めた臨床研究の指導・教育（根本、大谷、大原ほか）
- 5) 外部からの研修者（救急救命士、救急救命士研修所研修生、救急救命士養成学校生徒、交換留学生など）に対する見学・教育指導（根本、大原、大谷、岸田、作山、遠山、海道、佐藤、吉田）
- 6) 学外：毛呂病院付属高等看護学院（救急医学講義）、埼玉県救急救命士養成所（医学の基礎講義、救急処置シミュレーション実習、気管挿管実習など）、埼玉県西部第一・第二地域メディカルコントロール協議会による救急隊活動の二次検証会議、救急救命東京研修所（外傷総論）、東京消防庁消防学校（心肺停止）、JPTEC、JATECならびにMCLSプロバイダーコースの開催担当（根本、大谷、野村、岸田、作山、遠山、海道、佐藤、吉田）

2-3. 達成度評価

新型コロナウイルス感染症による講義のWeb化や臨床実習の中断などがあったが、医学部学生、研修医、交換留学生などの臨床教育については、多忙のなか医局員の努力により、満足できる設定目標に到達したと評価する。また、消防職員（主に救急救命士）や救急救命士養成機関の学生教育は岸田、作山、遠山、海道、佐藤、吉田の努力によりほぼ満足できる達成度に到達した。

2-4. 次年度改善計画

目的：救急医学の臨床的・社会的異議を理解・習得させ、実臨床に役立つ人材を育成する。

改善計画：教育者の育成とWebおよびシミュレーションを用いた教育技法の確立。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

目的：臨床的研究と社会的研究を進めることで社会基盤である救急医学の発展に貢献する。

目標：昨年度に引き続き、院外心肺停止症例の Utstein 方式による登録、および外傷データバンク登録を継続し、これらの基礎データをもとに、当院の医療圏における院外心肺停止症例および重症外傷患者の実態と予後調査を行うことで当科の研究基盤構築を目指す。また、その結果を埼玉県西部第一・第二地域メディカルコントロール協議会による事後検証会を通して消防機関に還元し、病院前救護も含めた地域救急医療の充実と治療成績の向上を図る。また、社会の高齢化により施設や在宅での看取りが重要視されており、傷病者・家族の意思に沿った救急医療のあり方についても埼玉県西部第一地域メディカルコントロール協議会で運用している DNAR プロトコルの検証を進めたい。埼玉県西部第一地域メディカルコントロール協議会では、防ぎ得る外傷死（PTD）発生率を調査し、地域の外相治療成績向上を目的にワーキンググループを設置した。根本が委員として参画し、調査・研究を担っている。整形外科グループによる骨折に対する超急性期治療については、豊富な症例から臨床研究を進めており、今後さらに発展させていきたい。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

- ①Utstein 方式登録による院外心肺停止症例の予後調査
- ②外傷データバンク登録症例を基礎とした外傷患者の重症度と予後調査
- ③整形外科領域における超急性期治療に関する臨床的研究
- ④救命センターICU における全身管理に関する臨床的研究
- ⑤外傷予防学
- ⑥傷病者・家族の意思に沿った救急医療のあり方に関する研究
- ⑦急性期外科治療（Acute car surgery）における腹部開放管理（OAM：open abdominal management）の臨床的検討
- ⑧防ぎ得る外傷死（PTD）の疫学調査

3-3. 達成度評価

- ①Utstein 登録、社会復帰に影響を与える因子の多変量解析や蘇生後脳症に対する軽度低体温療法の臨床データ収集を実施した。
- ②根本、大谷を中心に、外傷データバンクに症例を登録し、外傷症例の重症度と予後の調査研究を継続して行う。2022年の防ぎ得る外傷死発生率は4.0%（標準：20%未満、目標値：5%未満）であった。
- ③吉川を中心に、鳥尾哲矢教授の指導の下、学会発表を主体として研究を進めてきた。今後は発表内容を論文として纏めながらさらに研究を深めていく予定。
- ④主に外傷患者における凝固異常や重症壊死性膵炎に対する蛋白分解酵素阻害薬および抗菌薬の持続動注療法の臨床データの蓄積と治療の選択等を実施した。
- ⑤主にヘルメット着用による頭部外傷予防とシートベルト着用による胸・腹部外傷発生の要因に関して臨床データを基に基礎情報の収集と企業への情報提供を実施継続中である。
- ⑥埼玉県西部第一地域メディカルコントロール協議会に DNAR 委員会（委員長：根本）を設置し、DNAR プロトコルの対象となった事案の検証作業を継続し、地域医師会等に現状報告を行うと同時にアドバンス・ケア・プランニング普及に努めた。
- ⑦症例数は徐々に増加しており、腹部救急医学会等において発表・論文投稿しつつある。
- ⑧地域における外傷死を第三者も交えて検証し、その結果を学会発表した。今後も継続し、論文投稿する予定である。

3-4. 次年度改善計画

日本救急医学会総会、救急医学会関東地方会、日本臨床救急医学会、日本外傷学会などを中心に、学会発表ならびに論文投稿を行う。大量出血に伴う血液凝固系異常や全身性炎症反応症候群、および急性期呼吸不全の病態とその治療に関する研究を開始したが、救命救急センターとして臨床面での業務負担が大きく、研究については十分に時間を割くことができなかった。一方、日本救急医学会では、外傷、熱傷、敗血症等において多施設共同研究を実施しており、当科もこれらの研究に参加し新たな診療基準の作成に取り組む予定である。人事考課で研究実績がない、もしくは低い構成員が散見されたため、それぞれが研究テーマを見いだし、研究に取り組むようにした。また、防衛医科大学校病院の齋藤大蔵客員教授とデータバンクを用いた疫学研究を開始し、海外学術誌に論文を投稿する。2023年4月に井上孝隆教授が赴任した。米国ボストンの Massachusetts General Hospital 留学中にマイクロ流体デバイスを用いた研究に取り組んできたため、本学赴任後も好中球機能が免疫学的血栓や臨床経過に及ぼす影響について、デバイスを用いた研究を継続する。

4. 診療

救命救急センターとして地域救急医療に応分の対応ができたものとする。今後は、埼玉医科大学病院、埼玉医科大学総合医療センターとの連携をより一層強化し、埼玉県全域を対象とした救急医療体制の構築がなされるよう取り組んでいく必要があると考える。初期・二次救急に対応する医療機関の対応能力が低下しているためか、特に二次救急患者で複数回収容要請しても受入先が決まらず、当院に搬送される症例が増加傾向であり、初期診療後の転送や早期転院が円滑に行えるように地域医療連携室と協働して後方支援を強化する必要がある。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

根本が埼玉県メディカルコントロール協議会、埼玉県西部第一・第二メディカルコントロール協議会委員、厚生労働省薬事・食品衛生審議会 毒物劇物部会委員を務めた。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

根本が日本救急学会誌および日本外傷学会誌の論文査読を務めた。また、日本救急医学会関東地方会誌の編集委員長を拝命した。

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

守が JPTEC コース世話人、根本が JPTEC・JATEC コース世話人を務めた。

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Sekine Y, Saitoh D, Terayama T, Nakamura T, Nemoto M. The survival rate of patients with burns induced by explosions was significantly higher than that of common burn cases: A nationwide observational study using the Japan Trauma Data Bank. 2022 Aug 22;S0305-4179(22)00203-0. doi: 10.1016/j.burns.2022.08.001. Online ahead of print. PMID: 36058755
- ② 加藤進太郎, 吉川 淳, 男澤紘太, 他. 外傷後異所性骨化に対する術後放射線治療の臨床成績. 整形外科 2022. 73 ; 9 : 934-937.
- ③ 加藤進太郎, 吉川 淳, 小川博史, 他. 寛骨臼骨折手術時の一時的腸骨動脈バルーン遮断による出血量軽減の取り組み. 骨折 2022. 44 ; 3:648-653.
- ④ 吉川 淳, 加藤進太郎, 堀越隆二, 他. 脛骨プラトー骨折に対して術中 3D-CT を利用した整復内固定術の治療経験. 骨折 2023. 45 ; 2:499-503.
- ⑤ 加藤進太郎, 吉川 淳, 男澤 紘太, 他. 経験と考察 外傷後異所性骨化に対する術後放射線治療の臨床成績. 整形外科 2022. 73 ; 9:934-937
- ⑥ 根本 学. 智の探求:プレホスピタルと医療機関における心肺蘇生を望まない患者への対応 地域包括ケアシステムを円滑に行うには、地域メディカルコントロール協議会の積極的参画が重要である. 第 25 回日本臨床救急医学会総会・学術集会 大阪, 5月 2022
- ⑦ 加藤進太郎, 吉川 淳, 堀越隆二, 他. 大腿骨インプラント周囲骨折に対して NCB periprosthetic femur plate system を用いた治療経験. 第 48 回日本骨折治療学会 横浜, 6月 2022
- ⑧ 土屋 亮輔, 大谷 義孝, 宮田 秀平, 他. サイトメガロウイルス感染症の診断に苦慮し血栓性微小血管症で死亡した 1 例. 第 50 回日本救急医学会総会・学術集会 東京, 10月 2022
- ⑨ 齋藤 菜子, 小川 博史, 近江 光, 他. CO₂ ナルコーシスの原因検索から重症筋無力症の診断に至った高齢女性の 1 例 第 73 回日本救急医学会関東地方会 東京, 2月 2023
- ⑩ 近江 光, 大谷 義孝, 奈良 愛, 他. 2 ヶ月以上経過した気管内異物に対して Intubating Introducer を用いて気道確保し緊急気管切開で異物除去した一例. 第 73 回日本救急医学会関東地方会 東京, 2月 2023

【総数：論文 5 件、学会発表 21 件、口演 1 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

特定非営利活動法人 日本外傷診療研究機構 JATEC™ コース

コースディレクター：根本 学 コースコーディネーター：関根 康雅

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育面では、新型コロナウイルス感染症の影響で学外活動は大幅に制限され、学外 off the Job Training は JATEC™ コース開催 1 件に止まったが、教育支援センターのブランチであるシミュレーションセンターの委員を中心に、院内 BLS・ALS 通常および更新コースを開催し、教育活動が展開できた。初期・後期研修医の教育では、研修期間を含め、彼らの希望に添った教育を実践していくことが重要と考える。また、新型コロナウイルス感染症対策として Web 講義が導入されたため、今後は対面式教育と Web 講義を用いたりリモート教育の内容と質の向上が求められると考える。

研究面では、豊富な臨床症例からデータを蓄積し、研究成果をあげて論文に纏めることが必要であり、これらに対して全医局員で自己研鑽に努めていきたい。

診療面では、現状の救命救急センターの設備、人員、院内支援体制の下で概ね対応できていると考えるが、スタッフ不足もあり、研究、治験、先端医療などの分野では十分な実績を出すことができていないのが現状である。新たに始動したドクターカー 24 時間運用に対しては、症例を重ねて地域メディカルコントロール協議会で検討を行い、より良い体制を構築したい。

近年、気候変動に伴い各地で豪雨等の自然災害が発生していることから、大規模災害に備えて救命救急センター・災害拠点病院には更なる充実が求められているため、院内外と連携を強化し、埼玉県基幹病院として体制を強化していく意味でも、医局員一同、それぞれが応分の役割を果たすことができるように努めていきたい。また、新型コロナウイルス感染症に対しても国の対策や県の方針に沿った対応に関与していきたい。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育

- ① 医学部学生、初期研修医から魅力ある診療科として認識されるようにより丁寧な指導を実施する。
- ② 教育手法として Web 講義が導入されていることから、Web 講義資料作成に努める。
- ③ 標準化教育に関しては、従来通り、BLS・ALS・PALS を中心に院内研修を充実していく。
- ④ 院内だけでなく、学外からも受講生が参加する JPTEC、JATEC および MCLS 等の開催も感染症対策をしっかりと行いながら継続していく。

研究

- ① 臨床的研究を軸として症例報告を中心に学会発表を多く行う。
- ② データベースを用いた疫学研究に取り組み、学会誌（英文雑誌を含む）への原著論文投稿を進める。

診療

- ① 24 時間体制となったドクターカー運用を円滑に行うために、病院前救急医療に必要な知識・手技の研鑽に務め、病院前から初期治療が適切に実施される体制を構築する。
- ② 地域連携室と協働して、特に二次救急患者の転送や円滑な転院を進める。
- ③ 高齢者救急への対応を地域連携室と協働して検討する。
- ④ 急性腹症が増加傾向であるため、急性期外科治療（Acute car surgery）の向上に努める。
- ⑤ 急変予防、早期急変対応を看護部と協働して行い、Rapid Response Team の対応能力向上に努める。

3. 27) (2) 救急医学科 (小児救命救急科)

1. 構成員

柘岡 歩 (MASUOKA Ayumu) : 准教授, 診療部長

心臓血管外科, 小児集中治療, 小児を含む補助循環治療, 人工心臓治療, 医学博士

主な資格 : 日本外科学会専門医, 日本心臓血管外科専門医, 心臓血管外科修練指導者, 小児補助人工心臓実施医
臨床研修指導医, 他

2. 教育

2-1. 目的・目標

小児の発育と発達を理解し、病態を考察し適切な検査や鑑別を行い得るよう指導する。小児の事故の特性を理解し、予防の重要性を体得する。

2-2. 教育実績 (柘岡、根本、大谷、岸田)

研修医の臨床指導 : 小児救急医学 (特に小児の外傷) の実践。

国際医療センターは JCI 認定医療機関であるため、小児診療に従事する医師には PBLs、PALS 受講が必須となっており、救命救急科および小児救命救急科が軸となって講習会の開催および調整を担っている。

2-3. 達成度評価

臨床指導では、外傷初期診療および入院後の身体的治療と小児に対する精神面での支援に関して指導することができた。PBLs および PALS に関しては国際医療センター内のシミュレーションセンターで開催することができた。今後も継続していく。

2-4. 次年度改善計画

次年度も外傷を中心とした臨床と、PBLs および PALS 講習会を継続する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

小児に関しては“予防”が重要であるため、小児外傷の予防を目的に、臨床結果から社会に向けて啓発する。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

小児の外傷予防、特に自転車乗車時のヘルメット着用と自動車乗車時のチャイルドシート使用等に関する研究 (根本、大谷)

小児の外傷受傷機転と受傷部位ならびに重症度に関する研究 (柘岡、根本)

3-3. 達成度評価

自転車乗車時のヘルメット着用に関しては、論文として纏めたあとも統計を取り、自転車事故で搬送されてきた患児の保護者に説明する資料とした。小児の受傷機転と受傷部位ならびに重症度に関しては学会で報告し、原著論文として掲載された。

3-4. 次年度改善計画

研究に関しては概ね遂行できたと考える。次年度も引き続き臨床統計に基づいた研究を継続する。

4. 診療

救急領域では小児症例数は少ないが、地域に必要な小児外傷医療を提供している。また、国際医療センター小児心臓内科・外科が小児人工心臓治療等の高度補助循環治療に関与しているため、県内外から患児の搬送が行われている。特に補助循環装置が装着されている場合は、当院所有の緊急車両を利用することが多く、機関員として救命救急科所属の救急救命士が乗務していることから、今後も小児救急医療に関与していく。また、埼玉医科大学総合医療センターとの連携も深め、地域小児救急医療に取り組んでいきたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

【総数 : 論文 0 件、学会発表 0 件、講演 0 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

教育支援センターと協働して院内 PBLs および PALS 講習会を開催した（根本、大谷、岸田、作山、遠山、海道、佐藤、吉田）。

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

小児救急の軸は大学病院であるが、外傷や心臓病では当院に搬送されるため、適切な対応を維持していくためにも小児の特性を理解し、適切な医療が提供できた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

次年度も大学病院および総合医療センターと連携し、地域小児救急に適切に対応していくことが求められているが、ドクターカーの 24 時間運用においても積極的に小児救急に関与していくことが重要であり、大学病院小児科と体制構築を進める。また、院内 PBLs および PALS 講習会を継続する。

3. 27) (3) 救急医学科 (精神科救命救急科)

1. 構成員

松岡孝裕 (MATSUOKA, Takahiro) 准教授 診療部長

(専門分野 精神科救急医学 神経生理学 (脳波)): 博士

非常勤医師: 21名

(※大学病院神経精神科・心療内科医員の協力を得て24時間カバーシフトを構成)

2. 教育

本科は大学病院神経精神科・心療内科の診療活動のうち、自殺企図等により国際医療センター救命救急科に搬送された患者の精神科往診診療を独立した診療科として担うことを目的として、平成19年度に設立された。病棟・外来機能は有さず、必要時に 'On Call' で駆けつけるという診療科の特性上、大学病院神経精神科・心療内科医員の全面的協力 (24時間カバーシフト) を得て、いわば一体となって運営されている。このため、教育機能の大部分は、大学病院神経精神科・心療内科のカリキュラムに包含されているので、そちらを参照されたい。

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

救急医学領域のうち、特に精神科救急について十分な知識と経験を有し学術的視点も備えつつ精神科救急場面に対処できる医師を育成する。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育については、救急・麻酔ユニット内において「精神科救急」の講義を担当した(松岡)。卒後教育においては、初期研修に大学病院神経精神科・心療内科をローテーション時に、当科医師が往診診療として行う国際医療センター救命救急科に自殺企図等で搬送された患者のこころのケア場面を当科医員とともに経験してもらった。また、専攻医には当科常勤・非常勤医師の指導のもとで、自殺企図等で国際医療センター救命救急科に搬送された患者のこころのケアを指導医のもとで主体的に行ってもらい、再企図危険性等につきアセスメントした上でプランを作成し各方面と連携をとりながら適正に対処する経験をしてもらった。

2-3. 達成度評価

卒前教育については、「精神科救急」の講義を円滑に実施できた。これまでの授業評価は良好で、平成28、29年度、令和元年度に続き令和4年度も当科部長がベストティーチャー賞を受賞した。

卒後教育については、多くの初期研修に、大学病院神経精神科・心療内科をローテーション時に国際医療センター救命救急科に自殺企図等で搬送された患者のこころのケア場面を当科医員とともに経験してもらうことができた。またすべての専攻医に、指導医の指導のもとで自殺企図等で国際医療センター救命救急科に搬送された患者のこころのケアを主体的に行ってもらい、再企図危険性等につきアセスメントした上でプランを作成し各方面と連携をとりながら適正に対処する経験をもらうことができた。令和4年度、コロナ禍が続くなかでも、十分に感染対策をしたうえで可能な範囲で上記のような研修を行うことができた。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育については、次年度にはCOVID-19が5類となり対面講義が再開される見込みのなか、あらためて「精神科救急」の講義内容の充実を図っていく。卒後教育については、引き続き初期研修医、専攻医に自殺企図後のこころのケアを経験してもらうよう指導していく。引指導内容についてもいっそう充実を図っていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

- 1) 自殺企図患者についてクラスターごとの特徴や予後を調査することでより良い初動対応がとれるようにしていく。
- 2) 精神科救急医療システムについて調査するとともに運営的視点もふくめて検討を行うことで、当科が貢献を継続していけるようにしていく。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

- 1) 自殺企図事例の類型化と自殺企図要因の検討。
- 2) 大学病院型「精神科スーパー救急」の継続的運営のための検討。

3-3. 達成度評価

1) に関する研究をまとめ平成24年には国際学会、令和2年度には総合病院精神医学会において学会発表を行ってきたが、その後も調査を続け令和4年度もこれを継続した。2) に関しても研究をまとめ学会発表を行ってきたが(平成22

年には学会賞を受賞)、その後も調査を続け令和3年度、令和4年度はコロナ禍における大学病院型「精神科スーパー救急」の在り方に焦点をあてた発表を学会、学術雑誌において行った。

3-4. 次年度改善計画

1)、2)につき、これまで国内・国際学会等で学会発表、論文発表を積み重ねてきた。今後もこれらを継続して発展させ学術発表の蓄積を行っていききたい。

4. 診療

当科は大学病院神経精神科・心療内科の診療活動のうち、自殺企図等により国際医療センター救命救急科に搬送された患者への精神科往診診療を、独立した診療科として担うことを目的として、平成19年度に設立された。必要時に‘On Call’で駆けつけるという診療科の特性上、大学病院神経精神科・心療内科医員の全面的協力(24時間カバーシフト)を得て、いわば一体となって運営されている。これにより、救命救急病床における自殺企図患者のこころのケアを常時対応(24時間カバー)で行なえるとともに、精神科的重症例については大学病院精神科病棟へ円滑に入院して頂き、継続性をもって治療できる体制となっている。

令和3年度、救命救急センターにおける当科の診療実績は以下の如くであった：当科診療件数64件/年(日勤帯：60件、当直帯：4件)。診療内容としては、自殺再企図後の対応が例年通り約8割(令和4年度：81%)を占め、他は精神症状の管理や精神科病床への転科調整等であった。毛呂山キャンパスの救急センター・中毒センターで急性薬物中毒等の自殺企図例の受け入れが行われるようになったことに伴い、国際医療センター救命救急科で受け入れる自殺企図例は縊頸未遂、転落に伴う多発外傷、重症の刺創・切創、練炭や農薬による中毒等が中心となっており令和4年度も例年どおりこれらが約7割(令和4年度：77%)を占め、急性薬物中毒は約20%(令和4年度：23%)と減少してきていた。国際医療センターで当科が精神的に対応する症例は、当科クラスター分類におけるクラスター3(中高年単回重症型)が優勢となっており、クラスター1(若年反復軽症型)、クラスター2(若年単回軽症型)は主に大学病院で対応する構造へと変化してきている。なお、令和4年度もコロナ禍のなか、埼玉県におけるCOVID-19の疑いがある精神科救急症例の適正なトリアージシステムの構築につき、精神科救急医療システム運営会議の委員として当科部長が積極的に関与したことを付記する。

令和4年度、上記の如くコロナ禍においても可能な範囲で当科の活動を継続することができた。また、埼玉県における精神科救急症例の適正なトリアージシステムの構築につき、精神科救急医療システム運営会議の委員として当科部長が積極的に関与した。次年度はCOVID-19が5類となる見込みであり、あらためてこのシステムを維持しより適切なものとするに院内外において注力するとともに、診療内容の充実も図っていききたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

- ①埼玉県精神科救急医療システム運営委員会委員
- ②埼玉県メディカルコントロール協議会委員
- ③飯能市自殺対策推進協議会委員
- ④埼玉県自殺防止対策検討委員会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

埼玉県西部第一地域MC協議会 第123回救急活動事後事例研究会 講師 <松岡>
埼玉医科大学短期大学 SD 活動研修会 講師 <松岡>

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Kamimura H, Matsuoka T, Okai H, Shimizu N, Harada S, Matsuo K. The associations between suicide-related behaviors, prefrontal dysfunction in emotional cognition, and personality traits in mood disorders. Sci Rep. 2022. 10. 12(1):17377
- ② 松岡孝裕、松尾幸治 日常診療業務(情報提供者、診断書など)<診断開始にあたって>入院時説明文書 臨床精神医学 2023. 2 52増刊:16-23
- ③ 松岡孝裕、横山富士男、岩波明 第3章薬物療法 これ一冊で大人の発達障害がわかる本 診断と治療社 2023. 3 66-81

- ④ 松岡孝裕、渡邊さつき、松尾幸治 シンポジウム COVID-19状況下における精神科救急医療体制と基幹病院の機能 埼玉県と埼玉医科大学病院におけるコロナ禍での精神科救急医療体制の変化 第30回日本精神科救急学会 2022.9-10 さいたま
- ⑤ 松岡孝裕 シンポジウム 精神科救急における医療安全 精神科救急における「見落とし」を防ぐために ―スーパー救急算定大学病院精神科の役割― 第30回日本精神科救急学会 2022.9-10 さいたま
- ⑥ 松岡孝裕 シンポジウム 発達障害臨床の研修について 一般外来における発達障害診療 ―対応医育成プログラム整備の経緯と今後の展望― 第3回日本成人期発達障害臨床医学会 2023.1 川越
- ⑦ 新井久稔、松岡孝裕、松尾幸治 シンポジウム 総合病院における精神科救急 当院の休日夜間の精神科救急入院例における臨床的特徴と今後の課題 ―身体合併症を中心に― 第30回日本精神科救急学会 2022.9-10 さいたま
- ⑧ 上村永、松尾幸治、松岡孝裕、渡邊さつき、下出崇輝、岡井公志、清水直樹 NIRSを用いた抑うつと自殺関連行動に関する脳メカニズム研究 第19回日本うつ病学会／第5回日本うつ病リワーク協会年次大会 2022.07 大分
- ⑨ 原田舟、渡邊さつき、佐々木剛、谷木夏妃、横山香、松岡孝裕、桑原斉、横山富士男、松尾幸治 自殺企図で搬送され診断・治療に難渋した中高年男性の1例 第3回日本成人期発達障害臨床医学会 2023.1 川越

【総数：論文2件、著書1件、学会発表12件】

6-2. 獲得研究費

松岡孝裕：2020年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）「脳波事象関連α帯域パワー値変動を用いた外的および内的注意の増大に関する脳機能研究」)

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

以下を当科部長が事務局長となって開催した。

第3回日本発達障害臨床医学会 川越市 ウェスタ川越 2023年01月28日、29日

第125回東京精神医学会 東京 ステーションコンファレンス東京 2022年07月02日

(※大学病院神経精神科・心療内科が開催：第30回日本精神科救急学会 さいたま市 埼玉会館 2022年09月30日、10月01日)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

令和4年度、卒前教育については「精神科救急」の講義を円滑に実施できた。平成28、29年度、令和元年度に続き令和4年度も当科部長がベストティーチャー賞を受賞した。卒後教育については、多くの初期研修に大学病院神経精神科・心療内科をローテーション時に国際医療センター救命救急科に自殺企図等で搬送された患者のこころのケア場面を当科医員とともに経験してもらうことができた。またすべての専攻医に指導医の指導のもとで、自殺企図等で国際医療センター救命救急科に搬送された患者のこころのケアを主体的に行ってもらい、再企図危険性等につきアセスメントした上でプランを作成し各方面と連携ととりながら適正に対処する経験をしてもらうことができた。令和4年度、コロナ禍のなかでも、十分に感染対策をしたうえで可能な範囲で上記のような研修を行うことができた点を評価している。

研究については、1) 自殺企図事例の類型化と自殺企図要因の検討、2) 大学病院型「精神科スーパー救急」の継続的運営のための検討につきそれぞれ調査を継続し、2) に関連する学会・論文発表を行うことができた。これらの点については評価している。

診療については、令和4年度もコロナ禍が続いたが、救命救急科における自殺企図患者等のこころのケアについて、「On Call」で診療し必要があれば大学精神科病床に入院させる診療システムを維持し、診療活動を継続することができた。なお、埼玉県におけるCOVID-19の疑いがある精神科救急症例の適正なトリアージシステムの構築につき、精神科救急医療システム運営会議の委員として当科部長が積極的に関与することができた。これらの点については評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育については、次年度にはCOVID-19が5類となり対面講義が再開される見込みのなか、あらためて「精神科救急」の講義内容の充実を図っていく。卒後教育については、引き続き初期研修医、専攻医に自殺企図後のこころのケ

アを経験してもらうよう指導していく。指導内容についてもいっそう充実を図っていく。

研究については、1) 自殺企図事例の類型化と自殺企図要因の検討、2) 大学病院型「精神科スーパー救急」の継続的運営のための検討につきそれぞれ調査を続け、学術発表の蓄積を行っていく。

診療については、次年度はCOVID-19が5類となる見込みであり、あらためてこのシステムを維持しより適切なものとするに注力するとともに診療内容の充実も図っていく。また、埼玉県における精神科救急症例の適正なトリアージシステムの構築につき、精神科救急医療システム運営会議の委員として引き続き積極的に関与していきたい。

3. 28) (1) 放射線科 (画像診断科)

1. 構成員

馬場 康貴 (BABA, Yasutaka) : 教授 : 診療部長 : 画像診断一般、IVR : 博士
田島 廣之 (TAJIMA, Hiroyuki) : 特任教授 : 画像診断一般、腹部画像診断 : 博士
岡田 吉隆 (OKADA, Yoshitaka) : 教授 : 研究主任、副診療部長、教育副主任 : 画像診断一般、腹部画像診断 : 博士
中澤 賢 (NAKAZAWA, Ken) : 准教授 : 専門医員、IVR : 博士
宇佐見陽子 (USAMI, Yoko) : 講師 : 画像診断一般、IVR : 博士
夏山 雄揮 (NATSUYAMA, Yuki) : 助教 (後期研修医) : 医員 : 画像診断一般
塚本 裕一 (TSUKAMOTO, Hirokazu) : 助教 (後期研修医) : 医員 : 画像診断一般
鈴木 淳 (SUZUKI, Jyun) : 助教 (専攻医) : 医員 : 画像診断一般
園田 優貴 (SONODA, Yuki) : 助教 (専攻医) : 医員 : 画像診断一般
春日 悠希 (KASUGA, Yuki) : 助教 (専攻医) : 医員 : 画像診断一般
安居 文音 (KONISHIIE, Mao) : 助教 (専攻医) : 医員 : 画像診断一般 (2021.10.1~12.28)
斎藤 美音 (KONISHIIE, Mao) : 助教 (専攻医) : 医員 : 画像診断一般 (2022.1.4~3.31)
竹田 雄雅 (KONISHIIE, Mao) : 助教 (専攻医) : 医員 : 画像診断一般 (2022.4.1~10.31)
新津 守 (兼担・大学病院) (NIITSU, Mamoru) : 教授 : 研究主任 : 専門医員 : 骨軟部画像診断 : 博士
非常勤
内野 晃 (UCHINO, Akira) : 教授 : 教育主任 : 神経画像診断 : 博士
森下 (長谷川) 瑞江 (MORISHITA (HASEGAWA, Mizue) : 医師 2 類 : 画像診断一般 : 博士
石亀 恵一 (ISHIKAME, Kiichi) : 非常勤医師 : 画像診断一般 : 博士
謝 毅宏 (SHA, Takahiro) : 非常勤医師 : 画像診断一般
橋田 和靖 (HASHIDA, Kazunobu) : 非常勤医師 : 画像診断一般
竹内 均 (TAKEUCHI, Hitoshi) : 非常勤医師 : 画像診断一般
富田 康介 (TOMITA, Keisuke) : 非常勤医師 : 画像診断一般
亀井 俊佑 (KAMEI, Syunsuke) : 非常勤医師 : 画像診断一般
関根 鉄朗 (SEKINE, Tetsuro) : 非常勤医師 : 画像診断一般 : 博士
一色 彩子 (ISSHIKI, Saiko) : 非常勤医師 : 画像診断一般
市川 太郎 (ICHIKAWA, Taro) : 非常勤医師 : 画像診断一般 : 博士
町田 治彦 (MACHIDA, Haruhiko) : 非常勤医師 : 画像診断一般 : 博士
苅安 俊哉 (KARIYASU, Toshiya) : 非常勤医師 : 画像診断一般
山崎 美保子 (YAMAZAKI, Mihoko) : 研究医員 : 画像診断一般

2. 教育

2-1. 目的・目標

- ① 全身臓器の解剖および疾患についての知識を取得し、最適な検査法・撮像法を選択、施行し、それを簡潔にレポートし他科の医師へ伝える技術、能力が得られること (学生、初期研修医、後期研修医、医員)。
- ② 日本医学放射線学会専門医、診断専門医試験に合格できる能力を得ること (医員)。

2-2. 教育内容 (担当者)

馬場 康貴 (一般画像診断、IVR、放射線被曝)
内野 晃 (神経画像診断)
岡田 吉隆 (消化器単純 X 線、腎・泌尿器の画像診断、胆・膵の画像診断、泌尿器・男性生殖器の画像診断)
中澤 賢 (血管造影診断と IVR)
宇佐見陽子 (乳腺、婦人科画像診断、IVR)

2-3. 達成度評価

学生 CC step 1 および 2、講義、初期研修医、後期研修医に対して、十分な教育を行うことができた。

2-4. 次年度改善計画

初期研修医、後期研修医に対しては、十分な教育を行うことができた。次年度も同様に施行の予定。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

CT・MRI を中心とした画像診断による臨床研究を行い、国内外でその成果を発表すること。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

神経、腹部、IVR、頭頸部、人工知能グループ、胸部 (新規)

3-3. 達成度評価

- ① 神経グループ : 頭部 CT、頸部～頭部 CTA、頭部 MRI、頸部～頭部 MRA の臨床的有用性の検討 (継続)
- ② 腹部グループ : 消化器癌の術前検査における 3D 画像などを用いた血管解剖評価、肝および腎悪性腫瘍の質的診断に

おける MRI 拡散強調画像の有用性、膵・胆道悪性腫瘍の画像と病理所見の比較検討。

- ③ IVR グループ：ステントグラフト留置後エンドリークに対する IVR の有用性の検討（継続）。閉塞性動脈硬化症に対する新たなデバイスの有用性の検討（継続）。
- ④ 頭頸部グループ：頭頸部腫瘍の CT perfusion、IVIM を用いた検討（継続）、
- ⑤ 人工知能グループ：人工知能を用いた画像解析開発（継続）
- ⑥ 胸部グループ：texture 解析を用いた切除不能肺癌の分子標的薬における予後解析（継続）
これらの研究内容について検討し、国内外で成果を発表した。

3-4. 次年度改善計画

各研究グループともに、研究結果について国内外で成果を発表できた。

次年度計画

- ① 神経グループ：頭部 CT、頸部～頭部 CTA、頭部 MRI、頸部～頭部 MRA の臨床的有用性の検討（継続）
- ② 腹部グループ：消化器癌の術前検査における 3D 画像などを用いた血管解剖評価、肝悪性腫瘍の質的診断における MRI 拡散強調画像の有用性、膵・胆道悪性腫瘍の画像と病理所見の比較検討（継続）
- ③ IVR グループ：ステントグラフト留置後エンドリークに対する IVR の有用性の検討（継続）。閉塞性動脈硬化症に対する新たなデバイスの有用性の検討（継続）。
- ④ 頭頸部グループ：頭頸部腫瘍の CT perfusion、IVIM を用いた検討（継続）、texture 解析を用いた HP16 陽性中咽頭癌の予後解析（継続）、新しい拡散強調画像を用いた中下咽頭癌の予後解析（継続）
- ⑤ 人工知能グループ：人工知能を用いた画像解析開発（継続）
- ⑥ 胸部グループ：texture 解析を用いた切除不能肺癌の分子標的薬における予後解析（継続）

4. 診療

令和 4 年度の診療目標は、①迅速かつ適切な検査の施行と専門医による報告書の作成、②最先端の画像解析技術、③迅速で適切な IVR の施行、④CT と MRI の効率的利用であるであったが、概ね達成することができた。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

田島廣之：独立行政法人医薬品医療機器総合機構 専門委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

- ・ Japanese Journal of Radiology：中澤賢
- ・ BMC Medical Imaging 論文査読：岡田吉隆
- ・ 臨床画像 編集委員：田島廣之

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

該当なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 論文：Masuda T, Baba Y, Nakaura T, Funama Y, Sato T, Masuda S, Gotanda R, Arao K, Imaizumi H, Arao S, Ono A, Hiratsuka J, Awai K. Applying patient characteristics, stent-graft selection, and pre-operative computed tomographic angiography data to a machine learning algorithm: Is endoleak prediction possible? Radiography (Lond). 2022 Nov;28(4):906-911. doi: 10.1016/j.radi.2022.06.004. Epub 2022 Jul 1. PMID: 35785641.
- ② 論文：Impact of Cytoreductive Nephrectomy Following Nivolumab Plus Ipilimumab Therapy for Patients With Advanced Renal Cell Carcinoma. Shirotake S, Miyama YU, Baba Y, Tajima H, Okada Y, Nakazawa K, Usami Y, Yasuda M, Igarashi D, Kaneko GO, Kanao K, Oyama M, Nishimoto K. Anticancer Res. 2022 May;42(5):2727-2735.
- ③ 論文：Elective endovascular stentgraft implantation for external iliac artery injury after blunt pelvic trauma. Noshiro M, Tagami T, Watanabe A, Hamaguchi A, Nakayama F, Unemoto K, Takenoshita N, Kawamata H, Tajima H, Matsuda K. J Nippon Med Sch 89(3):342-346, 2022
- ④ 【著書（分担執筆）】
岡田吉隆：胆嚢静脈瘤、脾動脈瘤。山下康行、伊東克能、藤永康成（編著）：『画像診断別冊 KEY BOOK シリーズ』肝胆膵の画像診断—CT・MRI を中心に—（第 2 版）。学研メディカル秀潤社，2022。P. 582-585.
- ⑤ 【学会発表】
小西池真緒，岡田吉隆，宇佐見陽子，中澤賢，田島廣之，馬場康貴：Common and uncommon anatomic variations of the celiac artery and the proximal superior mesenteric artery: diagnostic clue in conventional CT. 第 81 回日本医学放射線学会総会。
- ⑥ 【学会発表】2022 年 4 月 22 日：第 81 回日本医学放射線学会総会：パシフィコ横浜
『MRI Findings of Granular Cell Tumor Observation on Deep Transfer Learning Model: Comparison between CNNs and Transformer based Model』
Yoko Usami, Yasutaka Baba, Ken Nakazawa, Hiroyuki Tajima, Yoshitaka Okada

- ⑦ 【学会発表】2022年7月9日：第33回関東IVR研究会：順天堂大学
膝窩動脈以下（BTK）のステント開発における血管内視鏡を用いたウサギ大動脈実験モデルの確立』
宇佐見陽子、亀井俊佑、前川駿人、尾藤健太、岡本穰、石川卓、馬場康貴、長谷部光泉
【総数：論文9件、学会発表33件、講演5件】

6-2. 獲得研究費

- ① 馬場康貴 2020年度科研費基盤C CFDと人工知能を用いた門脈圧亢進症の門脈血流評価と異常探知法の開発
② 宇佐見陽子 2021年度科研費若手研究 薬剤溶出性ハイブリッドナノコーティング下肢ステントにおける早期内皮化様式の解明

6-3. 受賞

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

学部：学生・研修医に対して画像診断の基礎的知識が取得できるように教育を行った。画像診断科の各研究グループとともに、国際医療センターにおける豊富な症例と最先端の診断装置を用いて、多く研究成果の発表と論文作成を行うことができた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

学部：学生・研修医に対する画像診断の教育に関しては体験型学習が行える様に配慮する。令和4年度に達成出来たことに満足することなく、引き続き国際医療センターにおける豊富な症例と最先端の診断装置を用いて、多くの研究成果の発表と論文作成を行う。

3. 28) (2) 放射線科 (核医学科)

1. 構成員

久慈 一英 (KUJI, Ichiei) : 教授:診療部長:教育員:研究員:指導教員 (大学院) :腫瘍核医学、一般臨床核医学:博士
瀬戸 陽 (SETO, Akira) : 講師:専門医員:教育員:研究員:脳核医学:博士
松坂 陽至 (MATSUSAKA, Youji) : 講師:専門医員:教育員:研究員:腫瘍核医学:博士
松成 一朗 (ICHIRO, Matsunari) : 教授 (大学病院から兼任) : 心臓・脳核医学:博士
松田 博史 (MATSUDA, Hiroshi) : 客員教授:指導教員 (大学院) : 脳核医学、画像解析学:博士
樋口 隆弘 (HIGUCHI, Takahiro) : 客員教授:心臓核医学、分子イメージング:博士
今林 悦子 (IMABAYASHI, Etsuko) : 客員准教授:脳核医学、腫瘍核医学:博士
島野 靖正 (SHIMANO, Yasumasa) : 非常勤講師:一般核医学:博士
河野 正志 (KOUNO, Masashi) : 非常勤講師:大学院専攻生:画像診断学、核医学
山根 登茂彦 (YAMANE, Tomohiko) : 非常勤医師:腫瘍核医学:博士
越野 一博 (KOSHINO, Kazuhiro) : 非常勤研究員:画像解析学:博士
渡邊 華帆 (WATANABE, Kaho) : 非常勤医師:社会人大学院生

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

卒前教育:CC step1 では現場を見て体験することにより核医学に興味をもってもらい、ティーチングファイルの画像を実際に見て考えてもらうことから学習につなげる。新しい読影室を使えるようになったので、大型液晶ディスプレイで簡単に症例検討や講義ができるようになった。講義はコロナのためWeb講義となっているが、学生が興味を持つように限られた講義時間内で内容を絞って行った。今後も内容を厳選して核医学への興味を喚起し、自主的に核医学の勉強をできるようにしていく。CC step2 では、FDG-PET/CTの検査実施から読影を体験することで、核医学を実践する。

卒後教育:実際の核医学検査の適応や実施法について、指導医の元で経験を積む。読影を実際に行い、臨床経験を蓄積し、専門医資格の習得につなげていく。専門医取得のためのプログラムは、放射線科専門医の新しい日本専門医機構のプログラムから埼玉医科大学放射線科専門研修プログラムを基幹病院として開始し、核医学領域を担当する。専攻生が毎年順調に加入している。核医学科専門医についてはこれまでの研修プログラムを継続する。

大学院教育:専属の大学院生が入るように勧誘を継続している。来年度は1名希望者があるので、研究内容を具体化していく。

臨床・研究・教育活動は、大学病院核医学診療科と一体的に運用を継続する。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育

- ・ 卒前教育で講義を担当したユニット (科目) は、3年生の診療の基本ユニット (久慈)、呼吸器ユニット (久慈)、消化器ユニット (久慈)、血液ユニット (久慈)、内分泌・代謝ユニット (久慈)、脳神経ユニット (松成)、心臓ユニット (松成)、4年生の画像ユニット (久慈、松成)
- ・ CC step1 の核医学を担当 (久慈) した。
- ・ CC step2 の核医学を担当 (久慈) した。

卒後教育

- ・ 埼玉医科大学放射線専門研修プログラムに沿った後期研修医 (1年目6名、3年目1名) への指導 (久慈、松成) を行った。
- ・ 埼玉医科大学放射線専門研修プログラム委員として、プログラムの運営に関与した (久慈)。

大学院教育

- ・ 大学院生1名への研究指導している (久慈)。

その他

- ・ 保健医療学科放射線概論科目責任者 (久慈) として科目の運営に関与した。
- ・ 日本医療科学大学腫瘍放射線医学核医学講義 (久慈) を行った。

2-3. 達成度評価

卒前教育:90%、卒後教育:90%、大学院教育:30%

2-4. 次年度改善計画

卒前教育:CC step1 では現場を見て体験することにより核医学に興味をもってもらい、症例画像を実際に見て考えてもらい核医学に興味をもつことから学習につなげる。新しい読影室の大型液晶ディスプレイで簡単に症例検討や講義を行っている。講義はコロナのためWeb講義となっているが、次年度は対面授業に戻ると考えられる。今後も内容を厳選して核医学への興味を喚起し、自主的に核医学の勉強をできるようにしていく。CC step2 では、前年度と同様にFDG-PET/CTの検査実施から読影を体験することで、核医学を実践する。

卒後教育:実際の核医学検査の適応や実施法について、指導医の元で経験を積む。読影を実際に行い、臨床経験を蓄積し、専門医資格の習得につなげていく。専門医取得のためのプログラムは、放射線科専門医の新しい日本専門医機構のプログラムから埼玉医科大学放射線科専門研修プログラムを基幹病院として開始し、核医学領域を担当する。専攻生が順調に加入し、核医学科にもローテーションで研修に来ている。核医学科専門医についてはこれまでの研修プログラムを継続する。

大学院教育：大学院生の研究課題について検討した。まず、進行悪性腫瘍での FDG-PET の分布変化を、検査時の採血と新しい PET/CT によるパラメトリック解析で検討開始している。学会発表から論文にまとめていく。
臨床・研究・教育活動は、引き続き大学病院核医学診療科と一体的に運用を継続する。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

PET/CT および SPECT/CT の研究の基盤が整い、臨床と関連深い研究が推進しやすい環境ができています。大学院生が新しく加わる予定なので、主に大腸癌での研究目標を立てて検討する。当科では FMISO による低酸素イメージングを各種腫瘍にて調べてきており、さらに肺癌で免疫チェックポイント阻害剤治療効果との関連を研究する。乳癌にてエストロゲン受容体 PET 画像による多発転移の治療前後の変化に主眼をおいた研究を継続している。エントリーが遅れているため、研究期間を延長した。定量可能な SPECT/CT による検討を核種 SPECT に広げて検討する。骨シンチグラフィ定量に関する研究も進めていく。アミロイドーシスと悪液質に関する核医学画像研究を進めている。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- ① PET/CT による悪性腫瘍治療効果判定および腫瘍低酸素状態に関する研究：肺癌で継続中。
- ② SPECT/CT 定量の臨床的有用性に関する研究：英語論文化した。
- ③ PET/CT によるエストロゲン受容体測定に関する研究：コロナのため遅れ気味であるが継続中で、症例数は少ないが発表予定。
- ④ アミロイドーシスと悪液質に関する核医学画像研究：IRB 申請し研究をスタートしている。まずは、食道癌と悪性リンパ腫にて FDG 投与時に採血を追加する研究を新しい PET/CT で開始した。
- ⑤ 心臓画像研究：これまでの心アミロイドーシスの核医学画像研究をまとめている。
- ⑥ 量子光イメージングの開発：初期検討を開始した。

3-3. 達成度評価

- ・ PET/CT による悪性腫瘍治療効果判定および腫瘍低酸素状態に関する研究
PET/CT による FDG の悪性腫瘍への集積指標である Standardized Uptake Value (SUV) を用いて治療効果判定を行っている。低酸素イメージング用剤である ¹⁸F-FMISO は乳癌での成果を応用して、肺癌における低酸素の研究に進めている。文部科学省科学研究費も獲得できた。達成度 90%。
- ・ PET/CT によるエストロゲン受容体画像の臨床応用に関する研究
FES による臨床研究を実施中である。乳癌多発転移の内分泌治療前後での変化の PET による観察研究として実施中である。コロナのためエントリーが停滞しているが、データをまとめ中。達成度 60%
- ・ SPECT/CT の臨床的有用性に関する研究
高精度 SPECT/CT 装置の定量的利用法について検討している。骨 SUV の有用性について研究を進め、論文化した。さらに、他の核種での定量について検討を開始している。達成度 90%。
- ・ 骨シンチグラフィによるアミロイドーシスの研究
心臓や腎臓への集積と原因物質や治療効果との関連を検討中。達成度 60%
- ・ 悪液質の核医学画像研究
進行癌や悪液質と考えられる状態での核医学画像と栄養状態の関連を研究する研究を進めている。科研費を申請し採択され、食道癌と悪性リンパ腫にて開始した。達成度 50%
- ・ 負荷脳血流 SPECT 画像の AI 研究
AI による画像生成を試みて、検討した。英語論文化された。達成度 100%
- ・ 量子光イメージングの可能性について埼玉大学との共同研究を開始した。達成度：10%

3-4. 次年度改善計画

最新型半導体 PET/CT が導入されたので、新しい研究の基盤が整い、臨床と関連深い研究が推進しやすい環境ができた。大学院生の研究として、悪性腫瘍の FDG-PET の代謝変化について進めている。さらに肺癌で FDG および FMISO-PET 画像の治療効果との関連を研究継続している。定量可能な SPECT/CT による検討を核種 SPECT に広げて検討する。アミロイドーシスと悪液質に関する核医学画像研究を進めている。スタッフが減少しているので、研究分野を整理して行っているが、来年度は人数も回復するので、研究をまとめることに注力する。

4. 診療

核医学科は、放射性同位元素を利用した診断、治療、臨床研究を行う部門である。核医学診断の利点は、静注のみで低侵襲で安全であること、臓器の機能を局所的に測定できること、全身を対象とする検査では全身を一度に調べられることである。治療では、骨転移患者に対する除痛のためβ線照射を行う甲状腺癌術後の甲状腺 I-131 アブレーション、去勢抵抗性前立腺癌に対するα線照射による放射性ラジウム治療、B 細胞性非ホジキンリンパ腫に対するゼヴァリン治療を行っている。新規核医学イメージング製剤や治療薬の効果判定などに関する臨床試験を行っている。新型コロナ感染症の影響があり、本年度全体では核医学 5,895 件の検査および治療が行われ、前年度と比較して 4.1%の減少であった。来年度は新規 PET/CT 装置が 1 台増設されたので、一時的に若干増加すると考えられる。しかし、他の 2 台が古いため、近い将来に故障する可能性がある。少なくとももう 1 台の PET/CT 更新を要望していく。サイクロトロン、FDG 自動合成装置は更新できたが、その他の自動合成装置の改修を目指す。新しい神経内分泌腫瘍核医学治療が承認されたので、当院でも導入に向けて準備している。今後も核医学治療は新しい治療が開発されており、増加が予想されるため、体制を整えていく必要がある。引き続き心臓 CT および MRI も担当しているので、長期的に継続して新人とスタッフの増員を目指す。脳アミロイド PET や新たな治療に対応するためにも PET 件数を増加させる必要がある。そのためには看護師や臨床検査技師の増員が必要である。また、読影室と読影端末の増加は実施できたが、治療用の診療スペースが足

りないので、長期的に診療スペースの確保を目指していく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

久慈一英

編集委員：Asia Oceania Journal of Nuclear Medicine and Biology

査読委員：Japanese Journal of Radiology

松坂 陽至

査読委員：Asia Oceania Journal of Nuclear Medicine and Biology

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

久慈一英

日本核医学会：理事・評議員、PET 核医学委員会委員、第 62 回日本核医学会学術総会実行委員長、日本医学放射線学会：代議員、放射線科専門医制度委員会委員、教育委員会委員、第 82、83 回日本医学放射線学会総会プログラム委員、金沢大学十全医学会：評議員、埼玉支部支部長、埼玉核医学研究会代表世話人、小児核医学研究会幹事、埼玉西部放射線医学セミナー幹事、日本医学物理士会認定機構試験委員会委員、日本アイソトープ協会：企画専門委員会委員、放射性医薬品安全性専門委員、核医学診療推進国民会議監事、クリニカル PET フォーラム世話人、国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構放射線医学総合研究所臨床研究審査委員会外部委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文：

- ① Yamane T, Matsusaka Y, Fukushima K, Seto A, Matsunari I, Kuji I. Quantification of bone metabolic activity in the natural course of fractural lesions measured by quantitative SPECT/CT. Asia Ocean J Nucl Med Biol, 11 (1), 30-36, 2023
- ② Kaira K, Yamaguchi O, Naruse I, Umeda Y, Honda T, Watanabe S, Ichikawa K, Yanagisawa S, Kasahara N, Higuchi T, Hashimoto K, Miura Y, Shiono A, Mouri A, Imai H, Iizuka K, Ishizuka T, Minato K, Suda S, Kagamu H, Mori K, Seki N, Kuji I. Comparative analysis of different response criteria at early phase after PD-1 blockade in non-small lung cancer. Cancer Imaging, 23 (1), 23, 2023
- ③ 久慈一英. 骨 SPECT/CT における SUV 測定の臨床応用. Rad Fan, 20 (5), 56-59, 2022
- ④ 岡沢 秀彦, 上原 知也, 久慈一英, 東 達也, 吉村 真奈, 日本アイソトープ協会医学・薬学部会放射性医薬品安全性専門委員会. 放射性医薬品副作用事例調査報告(第 43 報) 2020 年度第 46 回調査. 核医学, 59 (1), 1-12, 2022
- ⑤ Yamane T, Matsusaka Y, Fukushima K, Seto A, Matsunari I, Kuji I. Atlas of non-pathological solitary or asymmetrical skeletal muscle uptake in [¹⁸F]FDG-PET. Jpn J Radiol, 40 (8), 755-767, 2022
- ⑥ Yamaguchi O, Kaira K, Naruse I, Umeda Y, Honda T, Watanabe S, Ichikawa K, Tateishi K, Kasahara N, Higuchi T, Hashimoto K, Shinomiya S, Miura Y, Shiono A, Mouri A, Imai H, Iizuka K, Ishizuka T, Minato K, Suda S, Kagamu H, Mori K, Kuji I, Seki N. Prospective assessment using ¹⁸F-FDG PET/CT as a novel predictor for early response to PD-1 blockade in non-small-cell lung cancer. Sci Rep, 12 (1), 11832, 2022
- ⑦ Werner R A, Higuchi T, Nose N, Toriumi F, Matsusaka Y, Kuji I, Kazuhiro K. Generative adversarial network-created brain SPECTs of cerebral ischemia are indistinguishable to scans from real patients. Sci Rep, 12 (1), 18787, 2022
- ⑧ Shintaku T, Inui S, Ikegami H, Yoshizawa S, Ishii H, Sakamoto M, Musha Y, Okuno Y, Kuji I. Alteration of chronic inflammatory status by trans-arterial embolization in frozen shoulder evaluated by ¹⁸F-FDG-PET/CT. J Shoulder Elbow Surg, 2022
- ⑨ Hashimoto K, Kaira K, Yamaguchi O, Shiono A, Mouri A, Miura Y, Kobayashi K, Imai H, Matsusaka Y, Kuji I, Kagamu H. Visual Assessment of ¹⁸F-FDG Uptake on PET to Predict Survival Benefit to PD-1 Blockade in Non-Small Cell Lung Cancer. Clin Nucl Med, 47 (2), 108-116, 2022
- ⑩ Hashimoto K, Kaira K, Imai H, Mouri A, Shiono A, Miura Y, Yamaguchi O, Kobayashi K, Kagamu H, Kuji I. Prognostic Potential of Metabolic Activity on ¹⁸F-FDG Accumulation in Advanced NSCLC Receiving Combining Chemotherapy Plus PD-1 Blockade. J Immunother, 45 (8), 349-357, 2022

【総数：論文 11 件、学会発表 1 件、講演 2 件】

6-2. 獲得研究費

- 1) 令和元-4 年度文部科学省科学研究費 基盤研究 (C) 一般、エストロゲン受容体 PET による進行転移乳癌の CDK4/6 阻害剤併用療法評価、研究代表者、久慈一英、442 万円
- 2) 令和 4-8 年度文部科学省科学研究費 基盤研究 (C) 一般、がん悪液質の代謝画像診断法の開発、研究代表者、久慈一英、429 万円
- 3) 令和 4 年度 PDR ファーマ株式会社研究奨学金、乳癌多発骨転移における定量的核医学画像の検討、研究代表者、久慈一英、70 万円
- 4) 令和 4 年度 埼玉大学との包括連携協定に基づく共同研究支援グラント、量子光源を用いた超解像度生体イメージングの実現、研究代表者、久慈一英、25 万円

- 6-3. 受賞
該当なし
- 6-4. 特許、実用新案
該当なし
- 6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績
埼玉核医学研究会事務局

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

学部教育において、卒前教育：CC step1 では現場を見て体験することにより核医学に興味をもってもらい、ティーチングファイルの画像を実際に見て考えてもらうことから学習につなげてきた。講義でも、学生が興味を持つように限られた講義時間内で内容を絞って行った。今後も内容を厳選して、講義後の問題提示などを行って、核医学への興味を喚起し、自主的に核医学の勉強をできるように努めた。CC step2 では、FDG-PET/CT の検査実施から読影を体験することで、核医学を実践した。卒後教育では、実際の核医学検査の適応や実施法について、指導医の元で経験を積んでいる。読影を実際に行い、臨床経験を蓄積し、専門医資格の習得につなげている。専門医取得のためのプログラムは、放射線科専門医の新しい日本専門医機構のプログラムから埼玉医科大学放射線科専門研修プログラムを基幹病院として開始し、核医学領域を担当する。専攻生が順調に加入している。今後もプログラムの核医学科専門医についてはこれまでの研修プログラムを継続する。大学院教育では、専属の大学院生が1名、悪性腫瘍におけるFDG-PET/CTの腫瘍による変化の検討する研究を開始している。

臨床・研究・教育活動は、大学病院核医学診療科と一体的に運用を継続する。臨床・研究・教育活動は、大学病院核医学診療科と一体的に運用する。新型コロナ感染症の影響があるが、一昨年同様の実績は残せた。

研究に関しては、臨床核医学に関して、他科との共同研究を推進し、治療に直結した臨床研究を行う。低酸素PET研究を肺癌で継続している。乳癌にてエストロゲン受容体PET画像による多発転移の治療前後の変化に主眼をおいた研究をまとめて発表していく。定量可能なSPECT/CTによる骨SPECT/CTによる研究継続する。アミロイドーシスと悪液質に関する核医学画像研究を行っていく。スタッフが減少したため、研究を整理したが、来年度は人員が回復するので、研究を進める予定である。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

学部教育では、卒前教育：CC step1 では現場を見て体験することにより核医学に興味をもってもらい、ティーチングファイルの画像を実際に見て考えてもらうことから学習につなげる。講義はコロナのためWeb講義となっているが、学生が興味を持つように限られた講義時間内で内容を絞って行った。今後も内容を厳選して核医学への興味を喚起し、自主的に核医学の勉強をできるようにしていく。CC step2 では、FDG-PET/CT の検査実施から読影を体験することで、核医学を実践する。卒後教育では、実際の核医学検査の適応や実施法について、指導医の元で基本的にマンツーマンの経験を積む。読影を実際に行い、臨床経験を蓄積し、専門医資格の習得につなげていく。専門医取得のためのプログラムは、放射線科専門医の新しい日本専門医機構のプログラムから埼玉医科大学放射線科専門研修プログラムを基幹病院として開始し、核医学領域を担当する。大学院教育では大学院生が研究を開始している。進行悪性腫瘍でのFDG-PETの分布変化の詳細について、検査時の採血と新しいPET/CTによるパラメトリック解析で検討する予定である。

臨床・研究・教育活動は、引き続き大学病院核医学診療科と一体的に運用を継続する。

研究に関しては、FMISO-PETにて肺癌で免疫チェックポイント阻害剤治療効果と点酸素の関連を研究する。アミロイドーシスと悪液質に関する核医学画像研究を進めている。スタッフが減少するため、整理して絞り込む予定である。核医学科診療では、新型コロナ感染症の影響があり、本年度全体では核医学5,895件の検査および治療が行われ、前年度と比較して残念ながら4.1%の減少であったが、PET/CT検査は2.3%増加したので、SPECT/CTの減少が影響した。新規PET/CT装置が1台増設されたので、一時的に増加すると考えられる。しかし、他の2台が古いため、近い将来に故障する可能性がある。少なくとももう1台のPET/CT更新を要望していく。また、古いSPECT/CTの更新も必要である。サイクロトロン、自動合成装置については部品交換や更新を実施できた。FDG自動合成装置は更新できたが、その他の自動合成装置の改修を目指す。新しい神経内分泌腫瘍核医学治療が承認されたので、当院でも年度内での導入に向けて準備していく。今後も核医学治療は新しい治療が開発されており、増加が予想されるため、治療体制を整えていく必要がある。引き続き心臓CTおよびMRIも担当しているので、長期的に継続して新人と全体の核医学スタッフの増員と診療スペースの確保を目指していく。また、読影室と読影端末の増加は実施できたが、治療用の診療スペースが足りないため、長期的に診療スペースの確保を目指していく。

3. 28) (3) 放射線科 (放射線腫瘍科)

1. 構成員

加藤 眞吾 (KATO, Shingo) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 代表指導教員 (大学院) : 放射線治療 : 博士
野田 眞永 (NODA, Shinei) : 教授 : 診療副部長 : 指導教官 (大学院) : 放射線治療 : 博士
熊崎 祐 (KUMAZAKI, Yu) : 准教授 : 研究員 : 教育員 : 医学物理 : 博士
阿部 孝憲 (ABE, Takanori) : 准教授 : 研究員 : 教育員 : 放射線治療 : 博士
平井 隆太 (HIRAI, Ryuta) : 助教 : 研究員 : 教育員 : 博士
猪狩 光紳 (IGARI, Mitsunobu) : 助教 : 大学院生 : 研究員 : 教育員
青鹿 友美 (AOSHIKA, Tomomi) : 助教 : 大学院生
斉藤 哲 (SAITO, Satoshi) : 助教 : 大学院生
龍野 康弘 (RYUNO, Yasuhiro) : 助教 : 大学院生
飯野 美咲 (IINO, Misaki) : 助教 : 専攻医
竹田 雄雅 (TAKEDA, Yuga) : 助教 : 専攻医
大田 朝宏 (OTA, Tomohiro) : 助教

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

卒前教育 : 臨床腫瘍学と放射線腫瘍学の基礎知識を教育する。がん診療における放射線治療の位置付け、放射線治療の種類、方法、利点と欠点について理解するための基礎的な教育を行う。

卒後教育 : 後期研修医に対しては、埼玉医科大学後期研修3病院合同プログラムに準拠して、画像診断、核医学、放射線治療の3領域を包括的に教育する。目標は日本医学放射線学会認定放射線科専門医の資格取得とする。その後は放射線治療に関するより専門的な教育を行い、日本医学放射線学会・日本放射線腫瘍学会合同認定放射線治療専門医の資格を取得させる。放射線治療専門医の資格取得後は、様々な腫瘍に対する臨床研究を遂行させ、国際的に通用する放射線腫瘍学のエキスパートを養成する。

大学院教育 : がんの放射線治療に関する臨床的・基礎的研究を行う。学会発表および論文作成を指導する。目標は国際的に通用する放射線腫瘍学のエキスパートを養成することである。

2-2. 教育内容 (担当者)

卒前教育 : 講義を通じて各疾患における集学的治療における放射線治療の位置付け、低侵襲で有効な放射線治療の取り組みを理解させる (加藤、野田、阿部)。BSLでは模擬症例を用いてがんの治療戦略を学生自身に考えさせ、また実際の放射線治療計画装置を用いた実習を行い学生の興味を引き出す (加藤、野田、阿部、熊崎)。

卒後教育 : 指導医の下で、外来診療、放射線治療計画、経過観察が行える診療能力を身につけるとともに、各疾患におけるエビデンスを十分に理解し、臨床の現場でそのエビデンスが外挿できるかを検討し、質の高い診療能力を身につける (加藤、野田、阿部)。自らが放射線治療計画装置を用いて治療計画を行い、その後指導医と共に最適な治療計画を立案する (加藤、野田、阿部、熊崎)。放射線治療専門医の資格取得後は、様々な腫瘍に対する臨床研究を指導する (加藤、野田、阿部、熊崎)。

大学院教育 : がんの放射線治療に関する医学物理の臨床的・基礎的研究について、研究指導、学会発表および論文作成を指導する (加藤、野田、阿部、熊崎)。

2-3. 達成度評価

卒前教育 : 3年生の臨床講義 (呼吸器) で肺がんの放射線治療、4年生の臨床講義 (腫瘍) で放射線治療全般、乳腺腫瘍、婦人科腫瘍、泌尿器腫瘍の各領域、6年生の臨床講義 (内科総論) で放射線治療のトピックスの講義を行った。BSLではシステマティックな教育体制を構築し、教育担当者毎に役割を決めて指導した。

卒後教育 : 指導教官は個々の症例において各疾患に対する放射線治療方法および併用療法を指導した。また重要な論文を用いて必須と考えられる知識を習得させた。さらに研究発表および科学論文作成の指導を行った。

大学院教育 : 高精度放射線治療に関する臨床的・基礎的研究を行い、研究テーマの論文は国際誌に掲載された。

2-4. 次年度改善計画

卒前教育では、臨床腫瘍学と放射線腫瘍学の基礎知識を効果的に習得できるよう、BSLをさらに充実させる。

卒後教育では、前年と同様に、埼玉医科大学後期研修3病院合同プログラムに準拠して、画像診断、核医学、放射線治療の3領域を包括的に教育する。

大学院教育では、大学院生4名に対してそれぞれの研究テーマを与え、がんの放射線治療に関する臨床的・基礎的研究を進めている。学会発表および論文作成を指導する。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

- ・低侵襲で高精度の外部放射線治療方法および小線源治療方法を確立する。
- ・国内外の多施設共同臨床試験を基に、有効な集学的治療方法を開発して、がんの治療成績の向上を目指す。
- ・国内および海外 (特にアジア地域) における放射線治療技術の向上に貢献する。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

加藤眞吾

- ・婦人科腫瘍に対する有効な放射線治療方法の確立に関する研究

- ・婦人科腫瘍に対する重粒子線治療に関する研究（放医研、群馬大学）
- ・アジア地域の放射線治療の技術向上に関する国際共同研究（IAEA、FNCA）
- ・高精度放射線治療の最適化に関する研究（JCOG, NRG-Oncology）
- ・MR 画像誘導即時適応定位放射線治療の臨床応用を目指す研究（井垣班）

野田真永

- ・前立腺癌に対する MR 画像誘導即時適応定位放射線治療の臨床応用を目指す研究（井垣班）
- ・婦人科腫瘍に対する有効な放射線治療方法の確立に関する研究（群馬大学）
- ・婦人科腫瘍に対する重粒子線治療に関する研究（放医研、群馬大学）
- ・食道癌に対する重粒子線治療に関する研究（放医研）
- ・頭蓋底腫瘍に対する重粒子線治療の臨床試験を立案・運営する（群馬大学）
- ・高精度放射線治療の最適化に関する研究（JCOG, NRG-Oncology）

熊崎祐

- ・放射線治療多施設共同試験における包括的医学物理検証体制の構築と投与線量の品質保証に関する研究（JCOG 医学物理ワーキンググループ, NRG-Oncology）
- ・HDR 画像誘導小線源治療の均てん化に関する研究

阿部孝憲

- ・肺癌に対する重粒子線治療に関する研究（群馬大学）
- ・高精度放射線治療の最適化に関する研究（JCOG, NRG-Oncology）

平井隆太

- ・高精度外部放射線治療に関する研究（JCOG, NRG-Oncology）

猪狩光紳

- ・高精度外部放射線治療に関する研究（JCOG, NRG-Oncology）

青鹿友美

- ・婦人科腫瘍に対する治療成績向上のための研究
- ・前立腺癌に対する放射線治療に伴う有害事象軽減のためのモダリティについての研究

斎藤哲

- ・肺癌に対する有効な放射線治療方法に関する研究
- ・頭頸部癌に対する有効な放射線治療方法に関する研究

龍野康宏

- ・肺癌に対する有効な放射線治療方法に関する研究

飯野美咲

- ・高精度放射線治療に関する研究

竹田雄雅

- ・高精度放射線治療に関する研究

大田朝宏

- ・高精度放射線治療に関する研究

3-3. 達成度評価

各分野における研究は概ね順調に進行している。

3-4. 次年度改善計画

放射線治療に関する国際および国内での多施設共同臨床試験を継続する。がん放射線治療の地域格差是正のための研究やデータベースの構築に関する研究、および新たな放射線治療技術の開発を継続する。国際的な活動も継続する。

4. 診療

2022年7月のF棟開設により、新たに高精度放射線治療機器（リニアック2台、サイバーナイフ1台、MRIリニアック1台、小線源治療装置1台）が更新され、高精度放射線治療を積極的に行っている。放射線治療部門内のチーム医療および他診療科との密なる連携により、高度の集学的治療を推進している。また放射線治療の品質管理と安全管理に積極的に取り組んでいる。放射線治療の需要は年々高まっており、放射線治療装置および人員の更なる拡充が必要である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

加藤真吾

- ・アジア原子力協力フォーラム（FNCA）放射線治療プロジェクトのプロジェクトリーダー（内閣府・文部科学省）
- ・国際原子力機関の地域協力協定（IAEA/RCA）健康福祉分野国内対応委員（IAEA・外務省）

野田真永

- ・国際原子力機関の地域協力協定（IAEA/RCA）健康福祉分野国内対応委員会事務局（IAEA・外務省）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

加藤真吾

- ・編集委員

Japanese Journal of Clinical Oncology (JJCO)

- ・査読委員

Journal of Radiation Research (JRR)

Radiation Oncology
International Journal of Radiation Oncology, Biology, Physics
Journal of Obstetrics and Gynaecology Research
Japanese Journal of Clinical Oncology (JJCO)

野田真永

・査読委員

Journal of Radiation Research (JRR)

Japanese Journal of Gynecological Oncology (JJGO)

熊崎祐

・査読委員

Journal of Radiation Research (JRR)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

加藤真吾

- ・日本医学放射線学会代議員（国際委員）
- ・日本放射線腫瘍学会小線源治療部会常任幹事
- ・日本放射線腫瘍学会高精度外部照射部会幹事
- ・日本医学放射線学会代議員
- ・日本婦人科腫瘍学会理事（教育委員、学術委員）
- ・日本放射線腫瘍学研究機構（JROSG）婦人科腫瘍委員
- ・日本婦人科腫瘍学会子宮頸癌診療ガイドライン編集委員
- ・放射線医学総合研究所重粒子線がん治療臨床研究班 婦人科腫瘍研究班班員
- ・群馬大学重粒子線がん治療臨床研究班 婦人科腫瘍研究班班員

野田真永

- ・日本医学放射線学会代議員（教育委員、がん放射線治療推進委員）
- ・日本放射線腫瘍学会小線源治療部会幹事
- ・日本放射線腫瘍学研究機構（JROSG）婦人科腫瘍委員
- ・日本婦人科腫瘍学会評議員
- ・日本婦人科腫瘍学会卵巣がん診療ガイドライン編集委員
- ・重粒子線治療多施設共同臨床研究組織（J-CROS）運営委員会 婦人科腫瘍分科会委員
- ・重粒子線治療多施設共同臨床研究組織（J-CROS）運営委員会 上部消化管腫瘍分科会委員
- ・QST 病院重粒子線治療臨床研究検討会婦人科腫瘍班会議員
- ・群馬大学重粒子線治療検討委員会 婦人科腫瘍専門部会員
- ・群馬大学重粒子線治療検討委員会 頭頸部腫瘍専門部会員

熊崎祐

- ・日本医学物理学会代議員（QA/QC 委員）
- ・日本放射線腫瘍学会高精度外部照射部会幹事
- ・臨床医学物理研究会（理事）

平井隆太

- ・日本医学物理士会編集委員
- ・日本放射線腫瘍学会高精度外部照射部会幹事
- ・臨床医学物理研究会（理事）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

1. Takanori Abe, Misaki Iino, Satoshi Saito, Tomomi Aoshika, Yasuhiro Ryuno, Tomohiro Ohta, Mitsunobu Igari, Ryuta Hirai, Yu Kumazaki, Yu Miura, Kyoichi Kaira, Hiroshi Kagamu, Shinei Noda, Shingo Kato. Simple method for evaluating achievement degree of lung dose optimization in individual patients with locally advanced non-small cell lung cancer treated with intensity modulated radiotherapy. Thoracic Cancer 13(20): 2890-2896, 2022.
2. Tomomi Aoshika, Shin-Ei Noda, Takanori Abe, Yu Kumazaki, Ryuta Hirai, Mitsunobu Igari, Satoshi Saito, Yasuhiro Ryuno, Misaki Iino, Tomohiro Ohta, Shingo Kato. Results of computer tomography-based adaptive brachytherapy in combination with whole-pelvic- and central-shielding-external beam radiotherapy for cervical cancer. Brachytherapy 21(6): 783-791, 2022.
3. Yasuhiro Ryuno, Takanori Abe, Misaki Iino, Satoshi Saito, Tomomi Aoshika, Tomohiro Oota, Mitsunobu Igari, Ryuta Hirai, Yu Kumazaki, Kyoichi Kaira, Hiroshi Kagamu, Hironori Ishida, Shin-ei Noda, Shingo Kato. High-dose stereotactic body radiotherapy using CyberKnife® for stage I peripheral lung cancer: a single-center retrospective study. Radiat Oncol 17(1): 128, 2022.

4. Tomomi Aoshika, Takanori Abe, Shin-ei Noda, Yu Kumazaki, Ryuta Hirai, Mitsunobu Igari, Satoshi Saito, Yasuhiro Ryuno, Misaki Iino, Tomohiro Ohta, Shingo Kato. Safety and Efficacy of Palliative Radiotherapy (25 Gy × 5 Fractions) for Symptomatic Pelvic Tumors. *Anticancer Res.* 2022 Dec; 42 (12) 6099-6103.
5. Abe T, Iino M, Saito S, Aoshika T, Ryuno Y, Ohta T, Igari M, Hirai R, Kumazaki YU, Miura YU, Kaira K, Kagamu H, Noda SE, Kato S. Comparison of the Efficacy and Toxicity of Concurrent Chemoradiotherapy and Durvalumab and Concurrent Chemoradiotherapy Alone for Locally Advanced Non-small Cell Lung Cancer With N3 Lymph Node Metastasis. *Anticancer Res.* 2023 Feb;43(2):675-682. doi: 10.21873/anticancer.16205. PMID: 36697072.
6. Hirofumi Sugita, Shinichi Sakuramoto, Yoshiaki Mihara, Kazuaki Matsui, Keiji Nishibeppu, Gen Ebara, Shohei Fuijta, Shiro Fujihata, Shuichiro Oya, Yutaka Miyawaki, Hiroshi Sato, Yosuke Horita, Tetsuya Hamaguchi, Shin-Ei Noda, Shingo Kato, Yasumitsu Hirano, Kojun Okamoto, Isamu Koyama. Verification of the Utility of Palliative Radiotherapy for Hemostasis of Gastric Cancer Bleeding: a Case Control Study. *J. Gastrointest Cancer* 53(): 420-426, 2022.
7. Naoya Murakami, Ken Ando, Masumi Murata, Kazutoshi Murata, Tatsuya Ohno, Tomomi Aoshika, Shingo Kato, Noriyuki Okonogi, Anneyuko I. Saito, Joo-Young Kim, Yasuo Yoshioka, Shuhei Sekii, Kayoko Tsujino, Chairat Lowanichkiattikul, Poompis Pattaranutaporn, Yuko Kaneyasu, Tomio Nakagawa, Miho Watanabe, Takashi Uno, Rei Umezawa, Keiichi Jingu, Ayae Kanemoto, Masaru Wakatsuki, Katsuyuki Shirai, Hiroshi Igaki, Jun Itami. An Asian multi-national multi-institutional retrospective study comparing intracavitary versus the hybrid of intracavitary and interstitial brachytherapy for locally advanced uterine cervical carcinoma. *J. Radiat Res* 63(2): 412-427, 2022.
8. Yuki Nitta, Hiroto Murata, Noriyuki Okonogi, Kazutoshi Murata, Masaru Wakatsuki, Kumiko Karasawa, Shingo Kato, Shigeru Yamada, Takashi Nakano, Hiroshi Tsuji. Secondary cancers after carbon-ion radiotherapy and photon beam radiotherapy for uterine cervical cancer: A comparative study. *Cancer Medicine* 11(12):2445-2452, 2022.
9. Noriyuki Okonogi, Naoya Murakami, Ken Ando, Masumi Murata, Kazutoshi Murata, Tomomi Aoshika, Shingo Kato, Anneyuko I Saito, Joo-Young Kim, Yasuo Yoshioka, Shuhei Sekii, Kayoko Tsujino, Chairat Lowanichkiattikul, Poompis Pattaranutaporn, Yuko Kaneyasu, Tomio Nakagawa, Miho Watanabe, Takashi Uno, Rei Umezawa, Keiichi Jingu, Ayae Kanemoto, Masaru Wakatsuki, Katsuyuki Shirai, Hiroshi Igaki, Tatsuya Ohno, Jun Itami. An Asian multi-national, multi-institutional, retrospective study on image-guided brachytherapy in cervical adenocarcinoma and adenosquamous carcinoma. *J. Contemp Brachytherapy* 14(4): 311-320, 2022.
10. Okamoto H, Igaki H, Chiba T, Shibuya K, Sakasai T, Jingu K, Inaba K, Kuroda K, Aoki S, Tatsumi D, Nakamura M, Kadoya N, Furuyama Y, Kumazaki Y, Tohyama N, Tsuneda M, Nishioka S, Itami J, Onishi H, Shigematsu N and Uno T. Practical guidelines of online MR-guided adaptive radiotherapy. *J Radiat Res.* 63(5):730-740, 2022.

【総数：論文 16 件、学会発表 8 件、総説 5 件】

6-2. 獲得研究費

文部科学省

野田真永

平成 30 年度～令和 4 年度 文部科学省科学研究費助成事業 学術研究助成基金助成金 (C)

「マルチモダリティ画像誘導小線源治療による巨大子宮頸癌治療戦略」(主任研究者)

平井隆太

令和 4 年度～令和 6 年度 文部科学省科学研究費助成事業 学術研究助成基金助成金 (若手研究)

「複合現実を用いた巨大子宮頸癌に対する腔内／組織内併用照射の術中支援システム開発」(主任研究者) 325 万円

6-3. 受賞

平井隆太

第 124 回日本医学物理学会学術大会 大会長賞 (銀賞)

「子宮頸癌に対する強度変調腔内照射のための回転機構を有するタンデムアプリケーションの開発」

6-4. 特許、実用新案

平井隆太

子宮頸癌の放射線治療支援システム、子宮頸癌の放射線治療支援方法、及び子宮頸癌の放射線治療支援プログラム (特願 2022-016883, PCT/JP2023/ 3666)

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

加藤眞吾

FNCA Workshop on Radiation Oncology. Ulaanbaatar, Mongolia, 2022. 9.29-10.2

熊崎祐

第12回サイバーナイフQAセミナー, 2023年1月21日

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育：卒前教育では、医学部学生に対して臨床腫瘍学と放射線腫瘍学の基礎知識を教育した。卒後教育では、埼玉医科大学後期研修3病院合同プログラムに準拠して、画像診断、核医学、放射線治療の3領域を包括的に教育した。大学院教育では、高精度放射線治療に関する臨床的・基礎的研究を行った。青鹿、斎藤、龍野助教はそれぞれ大学院での研究成果を学会で報告するとともに、国際誌に掲載した。

研究：放射線治療に関する国際（NRG-Oncology）および国内（JCOG）での多施設共同臨床試験を積極的に推進した。高精度放射線治療技術の開発を積極的に推進した。国際的にはIAEA/RCAおよびFNCAのアジア諸国の放射線治療技術の向上を目的としたプロジェクトを中心メンバーとして推進した。

診療：2022年度には1436症例の患者に対して放射線治療を行った。2022年7月のF棟開設により高精度放射線治療装置を更新・増設された。高精度放射線治療（IMRT/VMAT、SRS/SRT、3D-IGBT）を積極的に実施した。放射線腫瘍医、医学物理士、診療放射線技師、看護師によるチーム医療を推進した。放射線治療品質管理委員会を設置し、放射線治療の品質管理と安全管理を行った。放射線治療品質管理室が、放射線治療機器や放射線治療計画システムの品質管理と品質保証に関わる業務、および医療関係者へ放射線治療機器等に関する情報提供の業務を行った。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育：卒前教育では、臨床腫瘍学と放射線腫瘍学の基礎知識を効果的に習得できるよう、BSLをさらに充実させる。卒後教育では、前年と同様に、埼玉医科大学後期研修3病院合同プログラムに準拠して、画像診断、核医学、放射線治療の3領域を包括的に教育する。大学院教育では、4名が大学院に進学し、それぞれの研究テーマでがんの放射線治療に関する臨床的・基礎的研究を行っており、学会発表および論文作成を指導する。

研究：放射線治療に関する国際および国内での多施設共同臨床試験を継続する。MRIリニアックを含めた高精度放射線治療技術の開発を継続する。国際的な活動を継続する。

診療：2022年7月にF棟が開設され、高精度放射線治療機器（リニアック2台、サイバーナイフ1台、MRIリニアック1台、小線源治療装置1台）が更新された。診療チームで協力しながら、更に安全で有効な高精度放射線治療を行っていく。

3. 29) 精神腫瘍科

1. 構成員

大西 秀樹 (ONISHI, Hideki) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 代表指導教員 (大学院) : 精神腫瘍学、死生学 : 博士
石田 真弓 (ISHIDA, Mayumi) : 准教授 : 大学院指導教員 (大学院) : 精神腫瘍学、臨床心理学 : 博士
棚橋 伊織 (TANAHASHI, Iori) : 助教 (兼担) : 博士
新井 学 (ARAI, Gaku) : 非常勤講師 : 博士
堤千 寿子 (TSUTSUMI, Chizuko) : 非常勤講師 : 博士
村上 忠 (MURAKAMI, Tadashi) : 非常勤講師 : 博士
遠山 啓亮 (TOYAMA, Hiroaki) : 非常勤講師
伊東 洋 (ITO, Hiroshi) : 非常勤講師
井垣 弘 (IGAKI, Hiroshi) : 非常勤講師
水沼 直樹 (MIZUNUMA, Naoki) : 非常勤講師

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

- ① 卒前教育 : がん医療における心のケアの大切さを学ぶ
- ② 卒後教育 : がん医療における心のケアの大切さを学び、実地臨床に生かす
- ③ 大学院教育 : がん医療における心のケアの大切さを学び、実地臨床と研究に生かす

2-2. 教育実績 (担当者)

① 卒前教育 (大西秀樹、石田真弓)

3年次の「良医への道」、4年次の講義「精神医学」、選択必修「こころと医療・医学」において、精神医学の基礎から精神腫瘍学、心理学の臨床に至るまでを系統的に担当し、臨床現場で心の問題の存在に気づく医師の養成を心がけた。

また、CC Step1、および CC Step2,3 の学生実習、さらには医学生の見学希望者にも随時対応しており、学年により知識の取得程度が異なることを考慮した教育を行った。また、2022年度は韓国から医学生を迎え、講義や研究会の中で医学生同士の意見交換の場を複数回設けることができた。

② 卒後教育 (大西秀樹、石田真弓)

緩和ケアチーム・リエゾン精神医学など、それぞれのカンファレンス・回診などを通して、病棟・外来など実践の現場で教育・指導した。

センター内における医療従事者向けの研修会を積極的に開催し、精神腫瘍学の普及、啓発活動を行う。その一環として、緩和ケア研修会において精神腫瘍学、コミュニケーションスキルトレーニング、医師・看護師らを対象とした「精神症状」「心理状態」「ストレスマネジメント」「せん妄」の研修を行っている。特筆すべき活動として、自殺予防プロジェクトを実行段階に移行させ、学生・職員を対象に e-learning も活用した教育を行った。また、臨床的な困難事例に対しても随時教育的なカンファレンスを開催、さらには学内外の医療従事者・学生を対象に月1回「死生学勉強会」をオンライン開催し、死生学の学びを深めつつ、多職種共働の考え方にふれてきた。

研究面においてはリサーチカンファレンスへの参加も促し、研究への関心を高め、希望者には国内外における学会発表、症例報告や研究論文作成、および国際誌への投稿指導もおこなった。

③ 大学院教育 (大西秀樹、石田真弓)

精神腫瘍学の学びを希望した学内外の医師・歯科医師・看護師・薬剤師がそれぞれ大学院生として在学している。研究生として在籍する者には学位取得を目標とした研究計画作成、論文執筆、学会発表指導などの教育も行った。積極的な研究指導を週1回程度の頻度で実施し、研究グループによるカンファレンスは月に1-2回、オンラインで開催した。また、大学院のカリキュラムとしては「最新医学特別講義」を担当し、臨床的な講義にとどまらず、研究として発展させ論文発表に至る過程についても踏まえた講義を行っている。

2-3. 達成度評価

① 卒前教育

講義や CC Step2 で精神腫瘍学を学んだ学生が CC Step3 として当科での実習を希望することが多く、講義の内容を理解して引き続き関心を持ちつつ、精神腫瘍学的な視点を踏まえながらその後の実習に取り組んでいる様子がうかがえた。

② 卒後教育

日常臨床および院内研修会・死生学勉強会などの活動を丁寧におこなった結果、心のケアの重要性が理解されるようになり、臨床現場における心の問題への関心が高まりつつある。これまでも当科で学んだ内容を学会・研究会等で発表する研修医もあり、成果として形に残すことにもつなげている。自殺予防プロジェクトを開始し、教育を中心に様々な活動を継続して行ったところ、スクリーニングの必要性や重要性について共有できている印象があり、自殺予防への関心の高まりだけでなく、そのための具体的な実践についても考え行動に移す姿勢が感じられる。

③ 大学院教育

講義後、当科の臨床に興味をもつ学生による質問、見学希望があり、多職種の学生を受け入れ教育の機会を引き続き提供できている。

2-4. 次年度改善計画

① 卒前教育

学生講義の評価では良い結果が報告されているが、精神腫瘍学に限らず、リエゾン精神医学全般の理解が深まるような教育のために、今後も臨床的・実践的な観点も取り入れつつ、教育プログラムを発展的に改良してゆく必要がある。

② 卒後教育

大学病院という性質上、スタッフの入れ替わりも多く、基礎教育が重要になる。緩和ケアチームやリエゾンチームの活動でその役割も周知されつつあり、今後は精神腫瘍学の基礎を身につけたスタッフが教育にあたる場面も想定し、更なるスキル向上を目指すための研修体制および指導法を工夫する必要がある。

③ 大学院教育

精神腫瘍学の視点や考え方が、講義を通して学生、および受講者の学びに繋がっている。今後も、大学院生と研究を立案・実施・論文化することを継続し、関心のある者や多職種での研究グループを発展させ、研究立案、実行を通して論文執筆の成果を上げたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床の現場で生じた疑問を、研究により明らかにして社会に還元することを目的とする。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- ① がん患者のせん妄に関する研究
- ② がん患者の心理社会的研究
- ③ がん患者遺族に対する精神・心理学的治療効果の検討
- ④ がん患者家族・遺族の心理社会的研究
- ⑤ 高齢者のビタミン B1 欠乏症発症予防のための臨床栄養学的研究
- ⑥ 一地方都市におけるビタミン B 1 欠乏の割合とその要因に関する横断研究 : Ogano Study 1
- ⑦ 一地方都市における身体・精神面の健康維持、疾病予防のための研究 : Ogano Study 2
- ⑧ 施設入所高齢者におけるビタミン B1 欠乏の割合と患者背景に関する横断研究
- ⑨ 遺伝性腫瘍患者および家族(遺族)に対する継続的医療の提供に関する実証研究
- ⑩ 治癒不能がん患者の心的外傷後成長を目指した集団精神療法プログラムの開発と普及

①～⑩の各研究プロジェクトについては、データ収集、リサーチカンファレンス、論文執筆などを定期的に行っており、着実に研究業績として発表している。

3-3. 達成度評価

上記の研究はそれぞれ科研費等を取得し、国際誌に論文としてその成果が掲載されている。また、国際学会・国内学会等でも多く発表の機会を持ち、得られた研究内容の発信も含めて達成していると評価できる。

3-4. 次年度改善計画

より質の高い研究を行ない、その成果を国際誌、国際学会にて発表したい。

4. 診療

がんという病気、あるいはその他の身体疾患の罹患に伴う精神的な問題に対し、適切な精神医学的な対応が迅速にとれることが目標である。がん医療では、患者、家族に様々な精神的な問題が生じることは広く知られており、当科では精神医学的な見地からそのそれぞれに対応を行っている。がん患者だけでなく、その家族や遺族にも対応する診療体制を整えている。また、入院患者を対象に、リエゾンチーム、緩和ケアチームとしての活動も行っており、院内の精神腫瘍に関する活動の幅を広げている。

また、community based study として地域におけるビタミン B1 欠乏の研究も継続しており、院内外における活動にも積極的に取り組んでいる。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Palliative and Supportive care (Associate Editor)

BMJ Supportive and Palliative Care (Associate Editor)

Japanese Journal of Clinical Oncology (査読委員)

Palliative Care Research (査読委員)

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本臨床死生学会 (代表理事：大西秀樹、理事・事務局長：石田真弓)

日本サイコオンコロジー学会 (理事：大西秀樹、石田真弓)

日本グリーフ&ベリブメント学会 (理事：大西秀樹、石田真弓)

がん緩和ケアに関する国際研究学会 (副理事長：大西秀樹、理事：石田真弓)

日本自殺予防学会 (理事：大西秀樹)

日本緩和医療学会 (代議員：大西秀樹、石田真弓)

日本心身医学会 (代議員：石田真弓)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Uchida, N., Ishida, M., Sato, I., Yoshioka, A., Takahashi, T., Furuya, D., Ebihara, Y., Ito, H. & Onishi, H. The prevalence of thiamine deficiency among elderly nursing home residents: A cross-sectional study. *Journal of General and Family Medicine*. Online ahead of print, 2023
- ② Uchida N, Ishida M, Yoshioka A, Sato I, Ito H, Onizawa N, Sato R, Mizunuma N, Onishi H: Can depressed cancer patients with a borderline thiamine concentration develop deficiency within a short time period?. *Palliative & Supportive Care*. Online ahead of print.
- ③ Ishida M, Uchida N, Yabuno A, Hasegawa K, Mizunuma N, Takahashi T, Onishi H: Opioid withdrawal syndrome developing after long-term administration of naldemedine. *Palliative & Supportive Care*. 20(6):897-899, 2022
- ④ Onizawa N, Ishida M, Uchida N, Sato I, Yoshioka A, Ito H, Onishi H: Is a decrease in activities of daily living in the elderly irreversible? A case report of Wernicke encephalopathy in home medical care. *Journal of General and Family Medicine*. 23(3):180-182, 2022
- ⑤ Seto N, Ishida M, Hamano T, Onishi H, Uchida N: A case of Wernicke encephalopathy arising in the early stage after the start of hemodialysis. *CEN Case Reports*. 11(3):314-320, 2022
- ⑥ Onishi H, Uchida N, Yoshioka A, Sato I, Ishida M: Clinical diagnosis, outcomes and treatment of thiamine deficiency in a tertiary hospital. *Clinical nutrition*, 41(9):2052-2053, 2022
- ⑦ Yasuo Yazawa, Junjo Imanishi, Tomoaki Torigoe, Hideki Onishi, Mayumi Ishida: Delirium and malnutrition in musculoskeletal oncology patients. *The Congress of the Hungarian Orthopaedic Association*. 2022. 6. 15. Hungary.
- ⑧ 石田真弓: シンポジウム 1 地域におけるサイコオンコロジー. SY01-2 心理職としてのアウトリーチ活動. 第 35 回日本サイコオンコロジー学会総会 2022. 10. 14 船堀.
- ⑨ 石田真弓: シンポジウム 7 がん患者の心理社会的ケア. S7-3 がんで大切な人を亡くした遺族へのケア. 第 63 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会 2022. 6. 25 幕張
- ⑩ 第 5 回日本グリーフ&ベリブメント学会学術大会開催 (オンデマンド配信)
 - ・大西秀樹 (大会長講演): 「いま、私たちができること ~グリーフケアの持続的な発展のために~」
 - ・大西秀樹 (シンポジウム 2): 「遺族外来の現状と課題」
 - ・大西秀樹 (シンポジウム 3): 「『家族が自殺しました』と言われたとき」

【総数：論文 6 件、学会発表 13 件、講演 5 件】

6-2. 獲得研究費

- ① 2018-2022 年度 文部科学省 科学研究費助成事業 若手研究 (B) (18K13327) 「治癒不能がん患者の心的外傷後成長を目指した集団精神療法プログラムの開発と普及」 研究代表者 (石田)
- ② 2021-2025 年度 文部科学省 科学研究費助成事業 基盤研究 (C) (21K03091) 「遺伝性腫瘍患者および家族 (遺族) に対する継続的医療の提供に関する実証研究」 研究代表者 (石田) 分担研究者 (大西)

③ 2019- 2022 年度 文部科学省 科学研究費助成事業 基盤研究(C) (19K11722) 「高齢者のビタミン B1 欠乏症発症予防のための臨床栄養学的研究」 研究代表者 (大西)・分担研究者 (石田)

6-3. 受賞

日本サイコオンコロジー学会 教育功労賞 2022 年 10 月 14 日 (石田)

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- ・死生学勉強会 (毎月第 2 水曜の開催) Zoom を用い、これまで通りに開催した。2023 年 3 月までに 153 回の開催実績。
- ・第 5 回日本グリーン&ビリーブメント学会学術大会のオンデマンド web 開催

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度の改善計画に対する今年度の評価は概ね良好である。特に研究面に関しては、論文投稿・症例発表に積極的に取り組み、その実績を残すことができた。論文に関しては、原著論文のみならず、Letter の投稿にも取り組みその幅を広げた。研究活動の実績として、また当科で得られた知見の社会的に有益な共有として今後も発表を続けていきたい。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

2022 年度はオンライン環境を活用したリサーチミーティングの定期開催を行い、これまでよりも多くの研究を開始、論文執筆に取り組むことができた。今年度も同様の方法を用い、死生学勉強会などを通して本学の学生や職員、地域の医療福祉従事者の学びに貢献する計画をたてている。

3. 30) 緩和医療科

1. 構成員

高橋孝郎 (TAKAHASHI, Takao) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長、研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 緩和医療学 : 博士
龍神秀穂 (RYUJIN, Hideho) : 講師 : 教育員、研究員 : 緩和医療学 : 博士
島田祐樹 (SHIMADA, Yuuki) : 助教 : 教育主任、研究員 : 緩和医療学 : 博士
近藤奈美 (KONDO, Nami) : 助教、教育員、研究員 : 緩和医療学

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

1. 卒前教育 : がん診療における緩和医療の大切さを学ぶ。
2. 卒後教育 : がん診療における緩和医療の大切さを学び、実地臨床に生かす。
3. 大学院教育 : がん診療における緩和医療の大切さを学び、実地臨床と研究に生かす。

2-2. 教育実績 (担当者)

- ① 卒前教育 : 3, 4, 6 年次の講義「緩和医療学」において、緩和医療学の基礎から臨床までを系統的に担当している。また、医学生の臨床実習・見学希望者に対しても対応しており、学年により知識の取得程度が異なることを考慮した教育を行った。特に6年生の講義は、ここ数年の緩和医療関連の医師国家試験出題問題をレビューした。
- ② 卒後教育 : 研修医・専攻医の希望者に対して、緩和ケアチームカンファレンス、病棟・外来など実践の現場で教育・指導した。センター内における医療従事者向けの研修会などで緩和医療学の普及、啓発活動を行った。その一環として、緩和ケア研修会 (PEACE 研修会) において緩和医療学、コミュニケーションスキルトレーニング、地域連携について研修を提供した。
- ③ 大学院教育 : 関東がんプロの一環として大学院生へ緩和医療について講義した。
また、保健医療学部にてがん専門看護のコースが開始となり、講義および演習をおこなった。

2-3. 達成度評価

- ①②③ とも、WEB 使用の遠隔教育で、研修時の手応えが不明で、緩和ケアの重要性が理解できたかどうか不明である。PEACE 研修会では、対面でおこない、事後アンケート調査があり、知識の習得があったことがわかっている。

2-4. 次年度改善計画

次年度は、対面授業がおおくなるであろうから、緩和ケアの習得について、WEB のみよりわかると思われる。
大学院教育は、次年度も、保健医療学部の講義が継続される。十分な準備をして講義・演習に臨みたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床の現場で生じた疑問を、研究により明らかにして社会に還元することを目的とする。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

1. Advance Care Planning (ACP) に関する研究 (緩和ケアチーム 日高プロジェクト)
2. 癌患者における免疫学的反応の臨床的研究
3. 高齢者がん診療における包括的機能評価およびその評価に従って支援する多職種チームの実証研究
4. リンパ浮腫に対する、リンパ管シンチの有用性
5. タキサン系抗がん剤による末梢神経障害に対する鍼灸治療の効果を見る臨床研究 (AMED)
6. がん患者の漢方治療の適応についての研究
7. 救急隊にたいする、病院前対応の研修の効果についての研究 (日高プロジェクト)

3-3. 達成度評価

- ① 緩和ケアチームにて、日高プロジェクトに採用され、具体的に研究がすすむことになった
- ③ 院内プロジェクトが高齢者がん医療対策部会となり、院内での周知を進める必要となった
- ⑤ 予想外に症例数があつまらず苦戦している。患者のリクルートにつとめる。
- ⑦ 日本がんサポーターズケア学会、埼玉県の後援を受け、3 回の研修を行なった。

3-4. 次年度改善計画

より質の高い研究を行ない、その成果を国内外学会、雑誌に発表したい

⑤は次年度で終了として、一定の成果を発表したい

4. 診療

緩和ケアは、がん診療においては、必須であり、すべてのがん診療に関わる医師・医療スタッフは実施しなければならない。基本的な緩和ケアを提供しても解決できない場合には当科が専門的緩和ケアの知識・スキルを提供して解決を図っている。2018年度より、科名を支持医療科と変更したので、早期からの緩和ケアが提供できるようになっており、さらにサバイバーシップケアも充実してきている。心不全の緩和ケア診療についても徐々についてであるが診療経験を積み重ねている。来年度はさらに当院での支持医療および緩和ケアの充実をはかりたい。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

BMA palliative 査読委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本がんサポーターシップケア学会理事 (高橋孝郎)

日本リンパ浮腫治療学会評議員 (高橋孝郎)

日本サイコオンコロジー学会代議員 (高橋孝郎)

日本臨床死生学会評議員 (高橋孝郎)

CST ファシリテーター (高橋孝郎, 近藤奈美)

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① -1 がん支持医療テキストブック 日本がんサポーターシップケア学会編 東洋医学的治療 (近藤奈美共著)、金原出版 2022
- ① -2 がん支持医療テキストブック 日本がんサポーターシップケア学会編 支持医療のデリバリー (高橋孝郎)、金原出版 2022
- ② がんサバイバーシップ学 高橋都、佐々木治一郎、久村和穂監訳 第 19 章包括的ヘルスケア (高橋孝郎訳) メディカル・サイエンス・インターナショナル 2022
- ③ 緩和ケアに使える漢方治療
近藤 奈美(埼玉医科大学国際医療センター)
Palliative Care Research(1880-5302)17 卷 Suppl. Page S.160(2022.07) 会議録
- ④ 初診時乳がん患者の挙児希望の意向と意思決定の実態(会議録)
小島 真奈美(埼玉医科大学国際医療センター 看護部), 岡部 みどり, 榊原 彩花, 浅野 彩, 一瀬 友希, 近藤 奈美, 黒澤 多英子, 佐野 弘, 島田 浩子, 貫井 麻未, 藤本 章博, 平塚 美由紀, 横川 秀樹, 小坂 愉賢, 松浦 一生, 高橋 孝郎, 石黒 洋, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭
日本乳癌学会総会プログラム抄録集 30 回 Page EP22-1(2022.06) 会議録
- ⑤ トリプルネガティブ乳癌患者における免疫チェックポイント阻害剤投与症例の検討
一瀬 友希(埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科), 松浦 一生, 黒澤 多英子, 藤本 章博, 榊原 彩花, 貫井 麻未, 平塚 美由起, 浅野 彩, 島田 浩子, 近藤 奈美, 佐野 弘, 横川 秀樹, 小坂 愉賢, 長谷部 孝裕, 高橋 孝郎, 石黒 洋, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭
日本乳癌学会総会プログラム抄録集 30 回 Page EP16-185(2022.06) 会議録
- ⑥ 乳癌手術症例における出血リスク因子の検討(会議録)
島田 浩子(埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科), 松浦 一生, 黒澤 多英子, 一瀬 友希, 藤本 章博, 貫井 麻未, 浅野 彩, 平塚 美由起, 佐野 弘, 近藤 奈美, 小坂 愉賢, 石黒 洋, 長谷部 孝裕, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭, 横川 秀樹, 榊原 彩花
日本乳癌学会総会プログラム抄録集 30 回 Page EP12-69(2022.06)
- ⑦ 転移・再発トリプルネガティブ乳癌患者に対するコンパニオン診断目的の遺伝カウンセリング(会議録)
榊原 彩花(埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科), 松浦 一生, 岡部 みどり, 小島 真奈美, 黒澤 多英子, 藤本 章博, 一瀬 友希, 貫井 麻未, 平塚 美由起, 浅野 彩, 島田 浩子, 近藤 奈美, 佐野 弘, 横川 秀樹, 小坂 愉賢, 高橋 孝郎, 長谷部 孝裕, 石黒 洋, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭

日本乳癌学会総会プログラム抄録集 30 回 Page EP11-76 (2022. 06)

⑧ HBOC 診断目的の BRCA 遺伝学的検査の現状(会議録)

平塚 美由起(埼玉医科大学国際医療センター 乳腺腫瘍科), 小坂 愉賢, 榎原 彩花, 黒澤 多英子, 中目 絢子, 藤本章博, 一瀬 友希, 貫井 麻未, 浅野 彩, 島田 浩子, 佐野 弘, 近藤 奈美, 横川 秀樹, 松浦 一生, 高橋 孝郎, 長谷部 考裕, 石黒 洋, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭

日本外科学会定期学術集会抄録集 122 回 Page DP-114-1 (2022. 04)

⑨ がん患者のためのチーム医療促進プロジェクト 本邦医療者へのがんサバイバーシップ教育の展開(会議録/英語)

青儀 健二郎(国立病院機構四国がんセンター 臨床研究推進部), 高橋 都, 佐々木 治一郎, 押川 勝太郎, 桜井 なおみ, 久村 和穂, 牧野 あずみ, 高橋 孝郎, 柴田 喜幸

日本癌治療学会学術集会抄録集 60 回 Page SP1-4 (2022. 10)

⑩ ケミカルコーピングを離脱し、疼痛コントロールができた膵臓がん患者の 1 症例(会議録)

近藤 夏貴(埼玉医科大学国際医療センター 緩和ケアチーム), 矢吹 みどり, 榎原 由紀乃, 大関 ちはや, 龍神 秀穂, 石田 真弓, 塩井 厚子, 大西 秀樹, 高橋 孝郎

Palliative Care Research(1880-5302)17 巻 Suppl. Page S. 223 (2022. 07)

⑪ マンモグラフィーにおける動脈壁の石灰化と虚血性心疾患との関連性について(会議録)

廣川 詠子(丸山記念総合病院 外科), 丸山 正堇, 丸山 泰幸, 芦葉 弘志, 高橋 孝郎, 柳 亜希子

日本乳癌学会総会プログラム抄録集 30 回 Page PD2-3 (2022. 06)

⑫ タブレットアプリと加速度センサーを用いた乳癌患者の症状モニタリングの有用性(原著論文)

上田 重人(JR 東京総合病院 乳腺外科・緩和ケア科), 藤堂 真紀, 島田 杏子, 三原 誠, 原 尚子, 高橋 孝郎, 大崎 昭彦, 佐伯 俊昭

乳癌の臨床(0911-2251)37 巻 1 号 Page73-81 (2022. 03)

⑬ 手術後にリウマチ性多発筋痛症を発症し治療に難渋した口底癌の治療経験(原著論文)

榎木 祐一郎(埼玉医科大学総合医療センター 頭頸部腫瘍科・耳鼻咽喉科), 浅野 悠, 勅使河原 大輔, 島田 祐樹, 塘田 健人, 去川 俊二, 蝦原 康宏, 中平 光彦, 菅澤 正

日本口腔腫瘍学会誌(0915-5988)34 巻 1 号 Page7-14 (2022. 03)

⑭ Opioid withdrawal syndrome developing after long-term administration of naldemedine.

Ishida M, Uchida N, Yabuno A, Hasegawa K, Mizunuma N, Takahashi T, Onishi H. Palliat Support Care. 2022 Dec;20(6):897-899.

⑮ A Japanese prospective multi-institutional feasibility study on accelerated partial breast irradiation using multicatheter interstitial brachytherapy: clinical results with a median follow-up of 60 months.

Yoshida K, Nose T, Otani Y, Asahi S, Tsukiyama I, Dokiya T, Saeki T, Fukuda I, Sekine H, Kumazaki Y, Takahashi T, Kotsuma T, Masuda N, Yoden E, Nakashima K, Matsumura T, Nakagawa S, Tachiiri S, Moriguchi Y, Itami J, Oguchi M. Breast Cancer. 2022 Jul;29(4):636-644.

【総数：論文 4 件、学会発表 9 件、著書 3 件】

6-2. 獲得研究費

AMED 研究費・「統合医療」に係る医療の質向上・科学的根拠収集研究事業(03)「タキサン系抗癌剤治療による抹消神経障害に対する鍼治療の有効性に関するランダム化比較試験(多施設共同研究)」研究分担者

日高プロジェクト 「救急隊を対象とした、がん救急の病院前対応研修会の実施」研究分担者

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

以下のような研究会の世話人を担当している

PEACE 緩和ケア研修会 開催 2 回、開催責任者

地域の緩和ケアを考える会 世話人、

関越がんサポーターシップ研究会 世話人

埼玉乳癌懇話会 世話人

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

2014年10月に高橋、2016年4月に小山（2019年8月退職）、同年10月に島田が、2018年6月に龍神が、2019年10月に近藤が就任した。2018年4月には診療科名を緩和医療科から支持医療科に変えたため、より oncology の範疇で診療・研究をおこなうことに専念できるようになった。当科体制は整備されて間もないが診療実績は着実に向上している。教育・研究に関し目標は達成途上である。科のメンバーすべては、診療スキルアップを目指して努力している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

診療においては、より高いレベルでの、supportive care in cancer をめざして、科のメンバーすべてのさらなるレベルアップを図る。慢性疼痛症候群・リンパ浮腫・末梢性神経障害などのサバイバーシップ包括的診療体制の確立、高齢者がん患者のサポート体制の確立、アドバンスケアプランの実施スキル研修は、次年度も課題である。支持医療だけでなく、教育については、卒前教育は埼玉医大の体制で行う。一般臨床医や医療スタッフ向けの講演会活動も積極的に行いたい。我々自身も更なる高いレベルの達成に向け、研鑽を積まなければならない。

3. 31) 臨床検査医学

1. 構成員

海老原康博 (EBIHARA, Yasuhiro) : 教授 : 運営責任者 : 診療科長 : 代表指導教員 (大学院) 小児科学 : 博士
小林清子 (KOBAYASHI, Kiyoko) : 講師 : 内科学 : 博士 (兼任)

2. 教育

2-1. 目的・目標

① 卒前教育 :

医学部 3 年生を対象に授業として血液ユニット「血液系の構造と機能(2)と血液検査」を担当し、6 年生の実力試験問題作成を行う。また、埼玉医科大学保健医療学部 4 年生、東京工科大学医療保健学部 3 年生、大東文化大学スポーツ・健康科学部 3 年生、杏林大学保健学部 3 年生の臨地実習を中央検査部と輸血細胞移植部で担当する。

② 卒後教育 :

初期研修医と他の施設から来る研修生 (すでに病院職員として勤務している検査技師) の指導を行う。

③ 大学院教育 :

臨床検査科修士学生に選択者に造血幹細胞移植、血液検査、輸血検査について講義と実習を行う。

2-2. 教育実績 (担当者)

① 卒前教育 :

授業と試験問題作成を海老原が担当

埼玉医科大学保健医療学部 4 年生、東京工科大学医療保健学部 3 年生、大東文化大学スポーツ・健康科学部 3 年生、杏林大学保健学部 3 年生の臨地実習は田地、木下、網野、久保、小山、河原、岡原が担当し、病院の検査部という大学内では体験できない環境で 7 週から 10 週間で見学と実習を行っている。

② 卒後教育 :

エコー検査を五十嵐、三村が担当。包括がんセンターと心臓病センターでは症例が多く豊富な症例を提示できている。

③ 大学院教育 :

コースを選択した修士学生に造血幹細胞移植、血液検査、輸血検査について講義と実習を行う。

2-3. 達成度評価

① 卒前教育 :

埼玉医科大学保健医療学部 4 年生、東京工科大学医療保健学部 3 年生、大東文化大学スポーツ・健康科学部 3 年生、杏林大学保健学部 3 年生 : 病院の検査部門の実感を経験できたと良い感想をもらっている。

② 卒後教育 :

初期研修医 3 名の研修を受け入れることができた。心臓エコー検査、腹部エコー検査を希望科目に沿って検査技師が指導できた。研修医からは達成感があったとコメントを聞くことができた。

③ 大学院教育 :

2022 年度は希望者が出なかった。

2-4. 次年度改善計画

① 卒前教育 :

大学病院と連携して卒前教育に努める。

臨地実習は実習の時間が限られており、学習項目はこれ以上増やせないと考えている。

② 卒後教育 :

超音波検査を希望科目に沿って検査技師が指導する。

来年度も希望者には現場の負担にならない限り研修を受け入れる予定である。

③ 大学院教育 :

2022 年度は希望者が出なかった。次年度は希望者があれば積極的な指導を心がけたいと考えている。

3. 研究

3-1. 目的・研究

検査技師スタッフが試薬の検討、交換、検査迅速化に向けた、ルーチン業務に加えて検討作業を行い、適宜、検査学会や他の専門学会へ発表することを目的に活動している。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

- ① 試薬検討グループ：海老原、田地、内田、諸貫、室谷
- ② 超音波検討グループ：海老原、小林、三村、五十嵐、山本
- ③ NST 活動：佐藤、木下、小山、田中、久保
- ④ 感染症検討グループ：海老原、田地、渡辺、小山
- ⑤ 血液症例検討グループ：海老原、田地、網野、木下、青木

3-3. 達成度評価

- ① 試薬検討グループでは、1) 検体検査部門のF棟移設に伴い、検体前処理システムを含む生化学、免疫分析装置の大幅な入れ替えを行った。LABOSPECT008 α （日立）2台、ARCHITECTi2000SR（アボット）2台、Dimension EXL200（シメンス）1台、IMMULITE2000XPi（LSIメディエンス）1台、AIA360（東ソー）1台、cobas e801（ロシュ）1台、LaboFLEX2600（日立）1台を検体前処理搬送システム RDA CCM（ロシュ）2台、cobas8000（ロシュ）2台、cobasP501（ロシュ）1台に変更し、それに伴う測定試薬の変更も行った。この変更により、大学病院で測定していたプレアルブミンを院内検査に導入した。また、血液凝固分析装置を CP3000（積水メディカル）から cobas t711（ロシュ）に変更した。

6月に血液培養装置バクテック FX40をF棟3階に設置し、夜間、日祭日に提出される血液培養ボトルの即時培養開始に対応した。

2023年3月にエンドトキシン、 β -D グルカンの測定装置を、トキシノメーターMT-5500からトキシノメーターMT-7500（富士フィルム和光純薬）に変更した。

- ② 超音波検討グループでは血管内エコーに習熟した技師が部内の教育を充実させている。教育と重なるが、初期研修医と学外からの技師研修生の研修を受入れ、しっかりと実施できた。
- ③ NST 活動では、入院患者をラウンドして、栄養状態を評価しているが、検査技師として、専門分野を生かした検査データの解釈・評価を行い、患者の早期病態改善のために貢献している。
- ④ 感染症検討グループでは、2023年1月に全自動遺伝子解析装置 FilmArray（BIOMERIEUX）を導入し、SARS-CoV-2 PCR 検査とインフルエンザウイルス PCR 同時検査を、ドライブスルーによる職員の PCR 検査、患者の PCR 検査に対応した。また、病棟等で COVID-19 陽性者が出た時は、大量の PCR 検査を行って感染制御に貢献した。また、日常診療から得られた検査データを元に、積極的に学会発表や論文投稿を行い、外部への発信を行っている。
- ⑤ 血液症例検討グループ：習熟した技師が血液像など部内教育の充実を図って、検査の標準化に努めている。また、日常診療から得られた検査データを元に、積極的に学会発表や論文投稿を行い、外部への発信を行っている。

3-4. 次年度改善計画

F棟移設後の IS015189 の審査を受ける目的で、変更届を日本適合性認定協会（JAB）に提出したところ、次年度に IS015189 の更新審査（第1回再審査）を受審することが決まったため、中央検査部全体で更新審査のための準備を行っていく。

次年度は、電子カルテシステム更新と検体検査システム、細菌検査システム、輸血検査システム、生理機能システムの更新が5月のゴールデンウィークに決まっているため、更新準備を進めている。

4. 診療

検査部として、国際認証である IS015189 認証を取得して3年が経過した。次年度は認定継続のための第1回再審査を受審する必要があるため、しっかりと準備を行っていく。超音波検査や骨髄検査の報告が遅滞なくできるよう体制を整備した。検査試薬と検査機器の変更にあたり、十分な基礎検討ができ、問題なく変更に進めた。気送管システムが安心して利用できるよう体制整備に努力した。また、臨床科で実施している先進医療や臨床治験に対して協力体制を構築している。また、新型コロナウイルス感染症に対して、SARS-CoV-2 PCR 検査や SARS-CoV-2 抗原検査を導入して、職員のドライブスルー検査やクラスター時の検査に対応し、コロナ禍の診療をサポートした。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Journal of Clinical Laboratory Analysis 査読委員（海老原）

埼玉医科大学雑誌（編集委員長）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献にかかわる業務

日本血液学会評議委員（海老原）

日本造血細胞移植学会評議委員（海老原）

日本小児血液・がん学会評議委員（海老原）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表（論文総数、学会発表総数と代表的なもの10編以内を記載）

論文発表

1. Watanabe N, Koyama S, Taji Y, Mitsutake K, Ebihara Y. Direct microorganism species identification and antimicrobial susceptibility tests from positive blood culture bottles using Rapid Sepsityper Kit. *J infect Chemother*. 28: 563-568, 2022.
 2. Iwai M, Fukushima T, Watanabe N, Ohta A, Watanabe A, Takii T, Mitsutake K Tanaka R, Ebihara Y. Chest wall tuberculosis after bacillus Calmette-Guerin vaccination. *Pediatr Infect Dis J*. 41: e504-e505, 2022.
 3. Suga Y, Watanabe N, Suzuki K, Koyama S, Taji Y, Hirano H, Hayashi T, Abe M, Miyazaki Y, Baba Y, Kurita H, Mitsutake K, Ebihara Y. Otitis externa caused by *Malassezia slooffiae* complicated with mastoiditis: A case report. *J infect Chemother*. 29: 353-356, 2023.
 4. Hirai M, Yagasaki H, Kanezawa K, Ueno M, Shimozawa K, Imaib K, Morio T, Kato M, Gocho Y, Narumi S, Ebihara Y, Morioka I. Cord blood transplantation in two infants presenting monosomy 7 clonal hematopoiesis; *SAMD9/SAMD9L* germ-line mutation. *J Pediatr Hematol Oncol*. 45: e290-293, 2023.
 5. Uchida N, Ishida M, Sato I, Yoshioka A, Takahashi T, Furuya D, Ebihara Y, Ito H, Onishi H. The prevalence of thiamine deficiency among elderly nursing home residents: A cross-sectional study. *J Gen Fam Med*. 2023. <https://doi.org/10.1002/jgf2.609>.
 6. 木下博美、室谷明子、古川敏基、田中沙知、田地功忠、海老原康博 血液凝固分析装置コバスト 711 の基礎的性能評価 医療検査と自動化 Vol. 47-No. 5. 2022
- 学会・研究会発表
1. 室谷明子、木下博美、田中沙知、荻原安純、田地功忠、海老原康博：尿自動分析装置 US-2300 の基礎的検討 日本医療検査科学会第 54 回大会、2022
 2. 荻原安純、室谷明子、木下博美、新倉奈緒美、田地功忠、海老原康博 当センターにおける OC センサー Ceres の基礎的検討第 50 回埼玉県医学検査学会 2022
 3. 松野紗由美、鎌倉靖男、福島久代、田地功忠、藤野節、濱口哲弥、海老原康博 当院における遺伝子パネル検査の運用と検査技師の役割 第 50 回埼玉県医学検査学会 2022
 4. 渡辺典之、小山幸枝、田地功忠、光武耕太郎、海老原康博 血液培養陽性ボトルから直接菌種同定と薬剤感受性の検討 第 96 回日本感染症学会総会・学術集会 Web 開催 2023

（総数：論文 6 件、学会発表 14 件、著書 1 件）

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

卒前教育に関しては、臨地実習はしっかり指導ができていていると考える。卒後教育においては超音波検査実習希望者が多いため、現場の負担を考えて人数調整を行った。研究に関しては、学会発表や発表論文数も増え、着実にアカデミックマインドが身につけてきていると考えられた。検査部として、国際認証である ISO15189 第 1 回定期サーベイランス（第二段階審査）の準備を行って、無事認証継続が確認された。診療に関しては、個別または臨床検査適正化委員会を通じて、臨床側のニーズに対して、しっかりと対応できた。基本学科全体としては、少人数の基本学科ではあ

るが、検査技師スタッフと共同作業で、教育と臨床に努力し、臨床検査と超音波検査を実施し検査精度や検査レベル維持およびアップに貢献できていると考える。

7-2. 今年度の自己採点・評価結果に基づく改善計画

卒前教育に関しては、今年度同様に大学病院と連携して、卒前教育に努め、臨地実習を継続して受け入れる。卒後教育においては今年度同様に現場の負担を考慮しながら実習を受け入れる。研究に関しては、中央検査部の技師と協力して、今後も学会発表や発表論文の論文文化を進めることで、外部への発信を図るとともに、今後数年計画となるが、検査技師が学位取得できるよう指導をしていきたい。また、来年度予定されている認定継続のための第1回再審査の準備を進め、認証継続することを目標に取り組む。診療に関しては、個別または臨床検査適正化委員会を通じて、臨床側のニーズに対して、しっかりと対応することに取り組みたい。

3. 32) 病理診断科

1. 構成員

<医師>

安田政実 (YASUDA、 Masanori) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 研究主任 : 教育副主任 : 代表指導教員 (大学院) : 専門医員 : 診断病理、婦人科病理、細胞診 : 医学博士

新井栄一 (ARAI、 Eiichi) : 教授 : 学位論文審査教員 (大学院) : 専門医員 : 診断病理、皮膚病理 : 医学博士

川崎朋範 (KAWASAKI、 Tomonori) : 教授 : 教育主任 : 研究副主任 : 医長 : 学位論文審査教員 (大学院) : 専門医員 : 乳腺病理 : 医学博士

本間 琢 (HOMMA、 Taku) : 准教授 : 診療副部長 : 学位論文審査教員 (大学院) : 専門医員 : 神経病理、細胞診 : 医学博士

佐藤次生 (SATOU、 Tsugumi) : 講師 : 専門医員 : 血液病理 : 医学博士

小路口 (佐藤) 奈帆子 (SYOJIGUCHI、 Naoko) : 講師 : 専門医員 : 皮膚病理 : 医学博士

美山 優 (MIYAMA、 Yuu) : 助教 : 専門医員 : 医学博士

大森悠加 (OOMORI、 Haruka) : 助教 (臨床フェロー) : 医員

松下傑 (MATSUSHITA、 Suguru) : 助教 (専攻医) : 医員

<臨床検査技師>

扇田智彦 (OUGIDA、 Tomohiko)、鎌田孝一 (KAMADA、 Kouichi)、細沼佑介 (HOSONUMA、 Yusuke)、加藤智美 (KATO、 Tomomi)、菅野恵士 (KANNO、 Satoshi)、鈴木展行 (SUZUKI、 Nobuyuki)、北島俊輝 (KITAJIMA、 Toshiki)、小窪亜理紗 (KOKUBO、 Arisa)、戸澤直登 (Tozawa、 Naoto)、長谷部優弥 (HASEBE、 Yuuya)、小鮎美穂 (KOBUNA、 Miho)、石山恵望 (ISHIYAMA、 Emi)、長谷川大地 (HSEGAWA、 Daichi)

<兼担 (乳腺腫瘍科)>

長谷部孝裕 (HASEBE、 Takahiro) : 教授 : 診断病理、乳腺病理、消化管病理、膵・胆道病理 : 医学博士

<兼担 (ゲノム医療科)>

藤野 節 (FUJINO、 Takashi) : 教授 : 専門医員 : 骨軟部病理 : 医学博士

鎌倉靖夫 (KAMAKURA、 Yasuo)

<兼担 (病理学教室)>

佐々木 惇 (SASAKI、 Atsushi) : 教授 : 診断病理、中枢神経病理 : 医学博士

山口 浩 (Yamaguchi、 Hiroshi) : 准教授、浜田芽衣 (Hamada、 Mei) : 助教、金 玲 (KIN、 Rei) : 助教

<兼担 (保健医療学部)>

茅野秀一 (KAYANO、 Hidekazu) : 教授 : 診断病理、血液・リンパ節病理、分子病理 : 医学博士

<非常勤事務>

本間明美 (HONMA、 Akemi) : 事務

<非常勤医師>

清水禎彦 (SHIMIZU、 Yoshihiko) : 非常勤講師

寺戸雄一 (TERADO、 Yuichi) : 非常勤講師

菊地良直 (KIKUCHI、 Yoshinao) : 非常勤講師

相田久美 (AITA、 Kumi) : 非常勤講師

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

人体の正常構造や機能に関する知識を基礎として、様々な疾病の「概念、病因・病態、病理学的特徴、および臨床的意義」などについて講義する。病理総論では、臨床医学を理解するために必要不可欠な「疾病の成り立ちについての基本的知識」を病理形態学の立場から教育する。病理総論実習においては、病変の肉眼および組織所見の特徴を実際に観察し、病理総論の理解につなげる。近年バーチャルスライドを取り入れ、学生個人のコンピュータ上でも標本観察を可能とした。臓器別病理各論講義では、病理総論的知識に基づき、それぞれの臓器に固有な疾病の病態や病理学的形態学変化を詳細かつ具体的に解説し、臨床像を理解するための一助とする。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育で講義・演習・実習、臨床実習等を担当したのは、2年病理総論ユニット (安田、新井、川崎、藤野、本間、

佐藤)、3年呼吸器ユニット(清水)、循環器ユニット(清水)、消化器ユニット(本間)、生殖器ユニット(安田)、内分泌・代謝ユニット(川崎)、4年実習(安田、新井、佐藤)、感覚器ユニット(新井)、皮膚・運動器ユニット(新井、藤野)、免疫ユニット(新井)、5年臨床実習 CC Step1(安田、新井、川崎、本間、佐藤、小路口、美山)、である。
〈研修医〉 Clinicopathological conference (CPC) 年 24 例 (安田、新井、川崎、本間、佐藤、小路口、美山、)

2-3. 達成度評価

2年生の病理総論では、効率のよい講義と実習が実施されている。病理総論は、病理学の基幹であるだけでなく、臨床的見地からも疾患を理解する上で医学の根幹をなしており、疾患の概念や病態を中心に講義を行っている。病理総論実習では複数の教官が学生に対して一対一の密接な指導を行っている。3年生の病理各論では、臨床各科の講義内容を踏まえながら、疾患の臨床像を理解できるよう病理学的見地から解説を行っている。4年生における臨床病理実習(CPC実習)では、剖検例を対象に、学生を10人程度の小グループに分け、各グループに担当教官をおき細かく指導にあたっている。5年生の病理診断科におけるCC Step1は各班あたり2日間と短い、この実地学習は基礎医学的知識と臨床的知識の統合的整理に有用で、医療現場に直結する病理診断の位置づけを学ぶための貴重な時間とも言える。また、随時行っている剖検カンファレンスは、卒前卒後教育にとって各症例をより深く理解し、今後の医療に役立つ実践的な検討会となっている。以上、病理学は、臨床医を育てる教育の基幹的科目として、病理学教育カリキュラムの整備がなされ、医療の質的向上に直結する教育効果を上げていると考えられる。

2-4. 次年度改善計画

大学医学部病理学講座のスタッフとの協調性をベースに、講義の充実度を増すことができた。幅広い専門領域のエキスパートを講師陣として有しており、全国的な病理医不足からみれば、本学の教育環境はおよそトップレベルにあると思われる。しかしながら、講義や実習の環境に関しては、近年の教育機材の発達によるティーチング顕微鏡の導入など、学生の理解をより身につけさせるための、革新的な局面の展開も求められている。学外にも発信できる卒前卒後教育の新境地を模索していきたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

臨床検体を有益に用いて病理診断学に寄与する成果を得ることを共通のテーマに、個々にあるいはチームを編成して研究に取り組んでいる。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

国際医療センター病理診断科には、皮膚・消化器・婦人科・乳腺・造血管などほぼ全身臓器を対象とした専門病理医が所属しており、それぞれの専門分野で、人体病理学および分子病理学的見地から研究を遂行している。

3-3. 達成度評価

学会発表および論文作成に示すがとく成果が、各分野においてあげられている。研究費や補助金の獲得においても目標が達成されている。

3-4. 次年度改善計画

著書5編 論文は計83編を発表した。論文の内訳は英文74編、邦文9編である。学会発表は、海外19回(Web)、国内85回、講演11回、講師11回を行った。いずれもスタッフ個々の活動性の高さの表れであると評価される。次年度も既に大きな研究成果の発表を予定している。なお、昨年度来、コロナ感染拡大の影響により海外での活動が難しい状況にあったが、状況が許されれば、次年度以降、これまでの研究成果を積極的に海外で発信することが望まれる。

4. 診療

令和4年度の病理診断数は、組織診13,356件、迅速組織診1,409件、細胞診8,368件、迅速細胞診519件であった。病理解剖数は23体であった。科内のカンファレンスが週5回実施され、他科(脳脊髄腫瘍科、皮膚腫瘍科・皮膚科、消化器病センター、呼吸器病センター、婦人科腫瘍科、泌尿器腫瘍科、乳腺腫瘍科、造血管腫瘍科、頭頸部腫瘍科・耳鼻咽喉科、骨軟部腫瘍科、心臓内科)とのカンファレンスも定期的に行われている。CPC臨床病理検討会(年12回・24例)である。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無:該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

安田政実

日本病理学会 「診断病理」編集委員会委員

日本病理学会 「診断病理」査読委員

日本病理学会 癌取扱い規約委員会委員

日本病理学会 Pathology International 刊行委員会委員

日本臨床細胞学会 細胞診専門医委員会委員、細胞診専門医教育研修指導要綱改訂ワーキンググループ委員長、
 日本臨床細胞学会 細胞診ガイドライン改訂ワーキンググループ 卵巣小委員会委員
 埼玉県臨床検査精度管理専門委員
 日本臨床細胞学会評議員
 第60回日本臨床細胞学会秋期大会プログラム委員
 第62回日本臨床細胞学会総会（春期大会）プログラム委員、細胞診専門医委員会
 第63回日本臨床細胞学会総会春期大会コアプログラム委員
 黒住医学研究振興財団「小島三郎記念技術賞」選考委員
 日本産婦人科学会・日本病理学会 子宮頸癌取扱い規約委員会委員 子宮頸癌・体癌・卵巣癌取扱い規約委員会委員
 日本産婦人科学会・日本病理学会 子宮頸癌取扱い規約（病理編）委員
 埼玉県臨床細胞学会 学術委員会委員
 日本婦人科腫瘍学会理事（編集委員会理事、専門医制度委員会理事、資格認定小委員会理事、指定修練施設認定小委員会理事、専門医試験小委員会理事）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本婦人科病理学会理事長（安田政実）
 埼玉県臨床細胞学会会長（安田政実）
 日本病理学会コンサルテーションコンサルタンツ（安田政実、新井栄一）
 国立がん研究センター病理診断コンサルテーション委員（安田政実、新井栄一、川崎朋範）
 JCCG 病理診断委員会委員（本間 琢）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Miyama Y, Kaneko G, Nishimoto K, Yasuda M. Lower neutrophil-to-lymphocyte ratio and positive programmed cell death ligand-1 expression are favorable prognostic markers in patients treated with pembrolizumab for urothelial carcinoma. *Cancer Med.* 2022 Nov;11(22):4236-4245. doi: 10.1002/cam4.4779. Epub 2022 Jun 14. PMID: 35699000
- ② Miyama Y, Kanao K, Uranishi K, Hirasaki M, Yasuda M. Complete response to pembrolizumab in a patient with recurrent and metastatic urothelial bladder carcinoma reflecting coexisting sarcomatoid subtype and glandular differentiation: a case report. *Int Cancer Conf J.* 2022 Aug 6;12(1):24-30. doi: 10.1007/s13691-022-00568-5. eCollection 2023 Jan. PMID: 36605848
- ③ Shojiguchi N, Takai S, Arai E. Hyperplastic melanocytes with chromosomal aberrations in surrounding skin of subungual melanoma: fluorescence in situ hybridization analysis using whole-slide digital imaging. *Histopathology.* 2022 Sep 12. doi: 10.1111/his.14793. Online ahead of print. PMID: 36094779
- ④ Tsugumi Satoh, Hidekazu Kayano, Naoki Takahashi, Kunihiro Tsukasaki, Masanori Yasuda. Diagnostic utility of the aberrant immunohistochemical expression of CD3 molecules for peripheral T-cell lymphoma” *Annals of Diagnostic Pathology* 22(60), pp.152013-152013, 2022.
- ⑤ Homma T, Mochizuki Y, Tobisawa S, Komori T, Takahashi K. Differential immunophenotypes of neuronal cytoplasmic inclusions in the dentate gyrus of multiple system atrophy and their association with clinicopathological features. *J Neuropathol Exp Neurol.* 2023 Feb 25;nlad013. doi:10.1093/jnen/nlad013
- ⑥ Homma T, Nagaoka U, Nakata Y, Sone J, Funai A, Murayama A, Tamai C, Komori T, Takahashi K. Neuropathological features of adult-onset neuronal intranuclear inclusion disease with fluid-attenuated inversion recovery high-intensity signals in the cerebellar paravermal area from an early stage: a case report. *Clinical Neuropathology.* 2022 Dec 2. doi:10/5414/NP301499.
- ⑦ Kawasaki T, Tashima T, Muramatsu C, Fujimoto A, Usami Y, Kodama H, Ichikawa J, Nagai H, Taniyama K. Neuroendocrine tumor of the breast showing invasive micropapillary features and multiple lymph node metastases. *Cancer Rep (Hoboken).* 2023 Feb;6(2):e1775. doi: 10.1002/cnr2.1775. Epub 2022 Dec 26. PMID: 36572422 Free PMC article.
- ⑧ Kawasaki T, Tashima T, Nakamura Y, Kondo T, Enomoto A, Kaira K. Letter to Editor Regarding “Nuclear Insulinoma-Associated Protein 1 Expression as a Marker of Neuroendocrine Differentiation in Neoplasms of

the Breast” by Seijnhaeve et al. Int J Surg Pathol. 2022 Jun;30(4):470-471. doi: 10.1177/10668969211067764. Epub 2021 Dec 27. PMID: 34955068 No abstract available.

- ⑨ Takai S, Arai E, Shojiguchi N, Nakamura Y, Momose S, Fukuda T, Ishizawa K, Ogata D, Tsunemi Y, Nakamura K, Tsuchida T. Application of fluorescence in situ hybridization in distinguishing acral melanoma in situ from acral junctional melanocytic nevus on the volar skin in Japanese patients. J Dermatol. 2022 Dec 20. doi: 10.1111/1346-8138.16681. Online ahead of print. PMID: 36539950
- ⑩ Pan CC, Tseng CE, Kuroda N, Yano M, Yasuda M, Nagashima Y, Yeh YC, Wang YC, Chang YH, Epstein JI. :Molecular Characterization of Metanephric Adenoma, Epithelial Wilms Tumor, and Overlap Lesions: An Integrated Whole-exome and Transcriptome Sequencing Analysis. Appl Immunohistochem Mol Morphol. 2022 Apr 1;30(4):257-263. doi: 10.1097/PAI.0000000000000996. PMID: 35384875

【総数：論文 83 件、学会発表 104 件、講演 11 件、講師 11 件】

6-2. 獲得研究費

- ① 安田 政実：基盤研究(C) 18K06997：卵巣癌における、低酸素関連因子の発現からみた組織型の意義：化学療法抵抗性の分別化 2018-2021 基金 延長
- ② 安田 政実：基盤研究(C) 21K06928 卵巣癌における低酸素関連因子 (HIF) の抑制機構の解明と治療応用への試み 2021-2023 基金
- ③ 安田 政実：基盤研究(C) 21K07604 個別化治療戦略ための子宮内膜癌の MRI テクスチャ解析に基づく診断法の確立 2021-2024 基金分担
- ④ 川崎 朋範：基盤研究(C) 21K06910 乳腺神経内分泌腫瘍の新規治療と発生機構の解明 -臓器横断的な概念の確立を目指して 2021-2023 3-5 基金
- ⑤ 川崎 朋範 (研究代表者). 運動界面に基づく新規がん細胞分類法の確立および診断治療への展望. 令和 4 年度 埼玉大学との包括連携協定に基づく共同研究支援 Grant (2022/10/01 ~ 2023/09/30)
- ⑥ 美山 優：2022 年度学内 Grant：科研費申請支援：遺伝子検査結果を用いた持続可能な膀胱癌特殊型の分子生物学的分類への紐づけ 35 万円

6-3. 受賞：川崎 朋範. Teacher of the Year Award 2021 Saitama Medical University (ベストティーチャー賞 2 年生の部) (2022/7/14)

6-4. 特許、実用新案：なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- ① 安田政実：第 12 回婦人科病理診断講習会 2023 年 2 月 4 日 東京慈恵会医科大学
- ② 安田政実：The 24th Korea-Taiwan-Japan Joint Meeting for Gynecological Pathology 第 24 回韓台日合同婦人科病理会議・日本開催 2023 年 2 月 18 日 ウェスタ川越

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

大学医学部病理学のスタッフとの協調により、教育は 2 年生に対する病理学総論、3 年生、4 年生に対する病理学各論および CPC 実習、5 年生に対する BSL とも混乱なく行われた。外科病理診断はダブルチェックを基本とし、かつ連日実施している consensus meeting (内部カンファレンス) によって緻密な精度管理を実現している。また、定期的な臨床各科とのカンファレンスによっても臨床医との連携を計ると同時に、スタッフ全員が診断レベルの向上に自己研鑽を怠っていない。病理解剖はマクロ、ミクロカンファレンスとも充実し、全剖検例に対して CPC を実行してきた。さらに、毎日行われている科内のカンファレンスや、毎週行われている抄読会、研究打合などでお互いを鼓舞することが、研究を推進する原動力として機能している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、これまで同様に大学医学部病理学のスタッフとの協調のもとに取り組んでいく。外科病理診断に関しては、引き続きダブルチェックおよび consensus meeting を行なってゆくことに加えて、定期的な臨床各科とのカンファレンスでの臨床医との連携をより徹底し、より厳密な精度管理を実現してゆく。病理解剖に関しても、引き続き全剖検例に対して CPC を開催し、病理スタッフはもとより臨床医に対してもより良いフィードバックができるように努める。その他、外科病理診断、臨床各科とのカンファレンス、病理解剖、また、毎週行われている抄読会、研究打合せなどを通して、引き続き研究を推進する様に努める。

3. 33) 輸血・細胞移植科

1. 構成員

石田明 (ISHIDA Akaru) : 教授 : 診療科長 : 研究副主任 : 教育主任 : 代表指導教員 (大学院) : 輸血学、血液学 : 博士
松岡佐保子 (MATSUOKA Sahoko) : 准教授 : 診療副科長 : 研究主任 : 教育副主任 : 輸血学、血液学、博士
浅見育子 (ASAMI Ikuko) : 助手

2. 教育

2-1. 目的・目標

1. 卒前教育 : 医学生に以下の四点を習得してもらうことを目標に教育活動を行った。①血液製剤及び血漿分画製剤の種類と適応を説明できる、②血液型 (ABO、RhD) 検査、血液交差適合 (クロスマッチ) 試験、不規則抗体検査を説明できる、③輸血副反応、輸血使用記録保管義務、不適合輸血の防止手順を説明できる、④輸血の適正使用、成分輸血、自己血輸血、緊急時の輸血を説明できる。
2. 卒後教育 : 研修医に以下の四点を習得してもらうことを目標に教育活動を行った。①輸血実施手順を習得する、②輸血療法の適応と副作用を理解し安全で適正な輸血に向けての実践的な能力を身に付ける、③献血から製剤供給までの過程を理解できる、④国際医療センターの特色である高度救急救命医療、心臓血管外科手術、造血器腫瘍治療に関連した特殊な輸血療法について理解を深める。
3. 大学院教育 : 大学院生に以下の三点について学んでもらうことを目標に教育活動を行った。①輸血学の基礎と輸血療法の科学的な見方を身に付ける、②安全で適正な輸血に向けての施策や管理を経験する、③輸血領域の未解決分野に関する基礎的研究を自ら計画し結果を導いて論文化する能力を身に付ける。
4. その他 : 当科診療部門に所属している臨床検査技師スタッフに以下の五点を達成してもらうことを目標に教育活動を行った。①中堅以上の職員がルチン以外の特殊検査を習得する、②PDCA サイクルに沿った輸血管理ができる、③非専任スタッフや後輩への指導能力を養成する、④検査結果や輸血療法について診療科医師と対等にディスカッションする能力を身に付ける、⑤勉強会や研修会に積極的に参加して学会発表や論文作成にチャレンジする。また輸血療法に関わる医師と看護師に以下の二点を習得してもらうことを目標に教育活動を行った。①輸血療法の基礎的知識と実施手順を習得する、②安全で適正な輸血を行うために必要となる実践的な能力を身に付ける。さらに当部署には院外から実習生を受け入れていることから、実習生には以下の二点を経験してもらうことを目標に教育活動を行った。①輸血検査、輸血管理、輸血医療の現場に直接触れる、②目的に沿った能力を身に付ける。

2-2. 教育実績 (担当者)

1. 卒前教育 : 医学部 3 年生を対象に講義を行った (石田)。医学部 4 年生を対象に臨床実習を行った (松岡)。実習前 OSCE にチューターとして参加した (石田、松岡)。
2. 卒後教育 : 研修医を対象に輸血実施手順と輸血時の注意事項についてオリエンテーションを行った (石田)。輸血療法について講義を行った (石田)。
3. 大学院教育 : 昨年度は該当者なし。
4. その他 : スタッフを対象に部内勉強会を月 2 回ペースで行い、講師をスタッフ同士で担当してもらった。学会発表の指導を行った (石田)。埼玉医科大学医科大学保健医療学部学生 11 名、大東文化大学学生 5 名、東京工科大学学生 1 名、杏林大学学生 1 名の研修を受け入れ、専任検査技師が指導して研修生に現場見学実習、血液製剤の保管状況や輸血検査の見学をしてもらった。

2-3. 達成度評価

1. 卒前教育 : 講義目標を達成でき、平均を上回る学生評価を得ることができた。
2. 卒後教育 : 与えられた機会の範囲で指導することができた。
3. 大学院教育 : 昨年度は該当者なし。
4. その他 : 部内勉強会を企画し実施することができた。スタッフに対して学会発表の指導をすることができた。実習生を受け入れて実習を行うことができた。

2-4. 次年度改善計画

1. 卒前教育 : 学生の知識習得と興味につながる講義を目指していく。
2. 卒後教育 : 安全で適正な輸血療法に向けて実践的な知識や能力を身に付けるべく、指導の機会を増やしていく。
3. その他 : スタッフに対して経験に応じた卒後教育体制を構築する。チーム医療や多職種との連携を進め、院内勉強会などの企画を実践していく。院外の実習生や研修生を引き続き受け入れていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標

以下の二点について研究活動を進めた。①輸血適正化に関する研究、②細胞プロセッシングセンターの体制整備に関する研究。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

厚生労働省レギュラトリーサイエンス研究事業松本班「医療環境に応じた適正な輸血療法の実施体制確立のための研究」の研究協力者として、2つの調査研究を研究代表者として調査研究を実施した（石田、松岡）。

3-3. 達成度評価

- ①について2つの調査研究を実施した。一つは病態別血小板輸血の現状と輸血トリガー値に関する調査研究であり、その研究成果を第70回日本輸血・細胞治療学会で報告した（石田）。もう一つは周術期輸血と手術前貧血の現状把握に関する調査研究であり、研究成果を第70回日本輸血・細胞治療学会で報告した（石田）。
- 松本班の研究協力者として、「術前貧血と赤血球輸血に関する多施設調査分析」および「血小板輸血に関する多施設調査分析」を主体的に計画して実施し、その調査結果を整理して報告した。内容の一部は第71回日本輸血・細胞治療学会で報告した。
- ②については引き続き体制整備を継続中である。

3-4. 次年度計画

次年度も引き続き研究活動を進めていく予定である。

4. 診療

当部署の診療活動は患者診療実績や治験・臨床研究と異なり、輸血医療に対する安全かつ適正な実施を支援することである。したがって、輸血実施体制全般を監視し、輸血療法について診療科や看護師からの相談に応じ、必要に応じて助言を行うこと、輸血検査結果や製剤選択について輸血検査技師とディスカッションを行い、適宜指示やアドバイスをを行うことが主な診療業務となる。診療実績新規事業につながるものではなく、新規事業を計画することも難しいが、モチベーションを高く維持すべく、絶えず新たな取り組みに挑戦するようにしている。

造血器腫瘍科、小児腫瘍科、脳脊髄腫瘍科の診療に必要な細胞処理・保管管理をはじめ、術前自己血採血、瀉血療法なども重要な診療業務であることから引き続き継続していく他、各診療科の細胞治療関連の治験や臨床研究についても適宜サポートしていく。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

厚生労働省薬事・食品衛生審議会薬事分科会専門委員・血液事業部献血推進調査会委員（石田）
臨床検査技師試験委員会委員（石田）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本輸血・細胞治療学会雑誌査読委員（石田）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本輸血・細胞治療学会評議員（石田）
日本輸血・細胞治療学会認定医制度審議会委員（石田）
日本輸血・細胞治療学会認定医資格審査委員会委員長（石田）
日本輸血・細胞治療学会細胞治療委員会委員（石田）
日本輸血・細胞治療学会サイタフェレーシス小委員会委員（石田）
日本輸血・細胞治療学会製剤委員会委員（石田）
日本輸血・細胞治療学会血小板小委員会委員（石田）
日本輸血・細胞治療学会ヘモビジランス小委員会委員（松岡）
埼玉県合同輸血療法委員会代表世話人（石田）
埼玉県合同輸血療法委員会適正推進小委員会委員（石田）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① 小林祥一、石田明. 日本輸血・細胞治療学会誌 67(6)573-588、2021
- ② A Tanaka, H Fujita, K Ohashi, A Tsujikawa, K Uchiyama, T Ito, K Kawashima, R Kodama, T Mine, M Okuda, T Endoh, Y Fukuyoshi, J Kitazawa, E Suehiro, K Nagai, A Ishida, K Matsuzaki, T Kato, K Takanashi, and K Takahashi. Management system of home transfusion in Japan: A nationwide survey in 2019. Vox Sang 118:59-67, 2023
- ③ 石田明. HLA 適合血小板の供給から使用までの現状と課題. 第70回日本輸血・細胞治療学会学術総会シンポジウム、東京 2022年5月28日
- ④ 石田明. 当院における術中輸血の現状と課題. 第70回日本輸血・細胞治療学会学術総会シンポジウム、東京 2022

年 5 月 28 日

- ⑤ 石田明、佐藤隆博、塚原晃. 埼玉県合同輸血療法委員会が行った血液製剤使用実態調査結果について. 第 70 回日本輸血・細胞治療学会学術総会シンポジウム、東京 2022 年 5 月 27-29 日
- ⑥ 松本慎二、河原志帆、小林瑞紀、須藤保加、前田麻衣、棚澤敬志、石田明. 埼玉医科大学国際医療センターにおける血小板輸血のパイロット的実態調査. 第 70 回日本輸血・細胞治療学会学術総会ポスター、東京 2022 年 5 月 27-29 日
- ⑦ 松岡佐保子. ヘモビジュランス-国内外における進歩と課題. 第 70 回日本輸血・細胞治療学会学術総会シンポジウム、東京 2022 年 5 月 29 日
- ⑧ 石田明. 赤血球製剤の有効期限延長によるメリットについて. 第 33 回北海道輸血シンポジウム、札幌、2022 年 7 月 2 日
- ⑨ 石田明. 血小板同種抗体の臨床的意義と血小板輸血不応状態へのマネージメント. 令和 4 年度赤十字血液シンポジウム関東甲信越、東京、2023 年 1 月 28 日

【論文 2 件、学会発表 6 件】

6-2. 獲得研究費

厚生労働行政推進調査事業補助金 輸血医療の安全性向上のためのデータ構築研究 研究代表 (松岡)

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 (C) HTLV-1 ぶどう膜炎の発症機序と病態の解明 研究代表 (松岡)

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 今年度の点検・評価結果

教育面については、限られた機会と体制の中で目標を十分達成することができた。研究面については、多施設共同した調査研究に主体的に関わり、その成果を報告することができた。診療面については、第一目標であった輸血関連事故発生ゼロ、および第二目標であった輸血適正化指標達成 (FFP/RBC<0.54) はいずれも達成できた。診療科支援として自己血採血、瀉血療法、末梢血幹細胞採取、骨髓処理、リンパ球輸注、間葉系細胞療法支援等を行った。

7-2. 次年度の改善計画

- ① 卒前・卒後教育に今まで以上に関わる。部内スタッフの能力維持および新たな能力修得を確実に達成するための教育体制の見直しを図り、持続可能な教育体制を構築する。
- ② 学内他診療科との共同研究テーマを模索する。研究成果の論文化作業を積極的に進める。
- ③ 輸血適正化推進に向けて新たな課題を検討する。
- ④ 造血幹細胞移植および細胞治療治験の臨床支援を行う。細胞プロセッシングセンターの体制整備を進める。
- ⑤ アカデミアの一員として研究教育活動をさらに推し進め、部署職員一同の研究意欲を高める。

以上

3. 34) 医療安全管理学

1. 構成員

川井 信孝 (KAWAI, Nobutaka) : 教授 : 運営責任者 : 診療部長 : 教育主任 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 医療安全対策室室長 : 医療安全管理学、血液内科学、造血幹細胞移植 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

本学科は平成 28 年度より本学に新たに設置された。卒前医学教育の出発点は医師としての基本的な資質を育むことにある。それにはコミュニケーションに代表されるノンテクニカルスキルを習得し、チーム医療を学ぶ必要がある。加えて、医の原則である患者の権利、医師の義務、インフォームドコンセントはもとより、医療における安全性確保、医療上の事故への対処と予防についても早期から教育が必要と考えられる。本講座では系統的な医療安全学・医療管理学の講義を行うとともに、それが単なる知識の習得に終わることなく、思考過程を重視した教育にする。

卒後教育においては、JCI 認定レベルでのリスク管理、投薬の安全確認、感染管理、インシデントの認識、報告、管理、活用を実践することにより、医師としての礎を培えるような教育を目指している。

令和 4 年度は、令和 3 年度の内容に加え、卒前教育においてはクリニカルクラークシップで国際医療センターを訪れる医学生に対し、卒後教育では初期研修医に対し、医療安全管理の考え方を実体験で教育し、限られた時間でより有効な意識付けができるよう努めた。

2-2. 教育実績 (担当者)

卒前教育に関しては、川井が医学部 2 年に対し 12 月 13 日に「良医への道 2 行動科学と医療倫理 行動 11 医療安全 I : 医療安全管理体制の概説」の講義を行った。具体的な内容としては、医療安全の歴史、ニアミス・インシデント・警鐘事例の定義、インシデント報告、分析手法、医療事故調査制度、チームステップスからなるものである。特に、コミュニケーションについては医師国家試験にも既出であり、2 チャレンジルール、CUS、SBAR について詳細に解説した。また、医学部 4 年に対してはクリニカルクラークシップで国際医療センターを訪れた医学生に対し、医療安全管理体制について解説した。画像診断報告の見逃しや PTP シートの誤飲など、直近の話題についても言及し学生の興味を引く工夫を加えた。国際医療センターは JCI においてアカデミックホスピタルの認証を受けていることから、医学生においても JCI の意義を理解する必要があり、またそれに則った行動が必要であることを教育した。

卒後教育としては、4 月に川井が新採用の国際医療センター初期研修医医師を対象に、当院の医療安全管理体制に関する概説と JCI における IPSPG、QPS に関する基本的事項について教育した。また、大学病院および総合医療センター所属の初期研修医に対しても、当院で研修する前に中途採用者向けの研修として同様の教育を行った。

2-3. 達成度評価

卒前、卒後ともに医療安全管理学に割り当てられた授業時間が非常に少ないため十分な教育ができたとはいえない。一方で、他の講座に類する内容はないことから一定の効果は得られたと考えている。

2-4. 次年度改善計画

令和 4 年度は COVID-19 への対応によりチームステップス研修が行えなかった。医療者が有効なコミュニケーションを図り、結果として患者安全を向上させるためにも、次年度は確実に開催したいと考えている。

3. 研究

3-1. 目的・目標 (前年度に立てた改善計画)

2015 年来、国際医療センターは大学医療機関としては国内初の JCI 承認を受け、令和 6 年度には第三回目の更新認定を受ける。これに伴い多くの医療安全関連ポリシーの策定および更新が必要となる。更新認定を受審することにより、国際基準が要求している医療安全対策に、国際医療センターが応えることができるか挑戦する。また、前年度の実績を保ちつつ、さらに前方視的な研究課題も加えたいと考える。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

該当なし

3-3. 達成度評価

令和 4 年度も COVID-19 により、多くの学会がウェブ開催となった。その影響により学会はウェブ参加が中心で、実際に会場での参加は限られた学会のみとなった。第 17 回医療の質・安全学会学術集会では、川井が企画したパネルディスカッション「インスリン製剤・注射用カリウム製剤の適切な管理 ～認定病院患者安全推進協議会 薬剤安全部会の活動でわかったこと～」が採択され、川井は座長を務めた。また、杉本と坂本の一般演題も採択され、演者を務めることにより国際医療センターの安全管理を発信した。公益財団法人日本医療機能評価機構の認定病院患者安全推進協議会では、広報部会、薬剤部会の活動を積極的に行うことができた。広報部会では医療安全対策室の土肥が部会員として部会誌の発行を、薬剤部会では川井が部会長として 2 回の薬剤安全セミナーをウェブ開催し、その成果物を日本医療機能評価機構の HP に掲載した。

3-4. 次年度改善計画

次年度も今年度と同様に COVID-19 の影響をある程度は受けることが予想されるが、今年度の実績を保ちつつ、さらに前方視的な研究課題も加えたいと考える。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

該当なし

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本医療機能評価機構 認定病院患者安全推進協議会 薬剤部会 部会長（川井信孝）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① インスリン製剤・注射用カリウム製剤の適切な管理 ～認定病院患者安全推進協議会 薬剤安全部会の活動でわかったこと～ ○赤木 晋介、川井 信孝、菅野 浩、高橋 香織、宅和 真由美、佐藤 康弘、横山 容子 第17回医療の質・安全学会学術集会 2022年11月 神戸
- ② 急性期病院における転倒転落アセスメントプランニングシートの分析と改訂 ○杉本 直樹、坂本 優介、平山 美津江、土肥 大典、横谷 翔、高山 和貴、藤澤 明子、川井 信孝 第17回医療の質・安全学会学術集会 2022年11月 神戸
- ③ 埼玉医科大学国際医療センターにおける CACT (Clinical Alarm Control Team) の活動について ○坂本 優介、平山 美津江、土肥 大典、杉本 直樹、横谷 翔、高山 和貴、藤澤 明子、二反田 博之、蝦原 康宏、川井 信孝 第17回医療の質・安全学会学術集会 2022年11月 神戸
- ④ 日本医療機能評価機構 認定病院患者安全推進協議会 薬剤安全部会 活動トピックス ○川井信孝 2022年度患者安全推進全体フォーラム 2023年3月4日 Web開催
- ⑤ 医師の自主的インシデントレポート提出数増加への取り組み ○横谷 翔、坂本 優介、平山 美津江、土肥 大典、杉本 直樹、高山 和貴、藤澤 明子、川井 信孝 第72回日本病院学会 2022年7月 松江

【総数：論文0件、学会発表5件、講演0件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

2022年10月15日(土) 日本医療機能評価機構 認定病院患者安全推進協議会 第1回 薬剤安全セミナー
「安全で効果的な投薬プロセス」

2023年2月3日(金) 日本医療機能評価機構 認定病院患者安全推進協議会 第2回 薬剤安全セミナー
「安全で効果的な投薬プロセス～配薬編～」

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育に関しては、令和4年度は前年度の内容に加え、クリニカルクラークシップで国際医療センターを訪れる医学生および初期研修医に対し、医療安全管理の考え方を実体験で教育し、限られた時間でより有効な意識付けができるよう努めた。内容的には種々の工夫を加えることにより学生の興味を引くなど、昨年度よりも充実させることができ、総合的な改善効果が得られたと考えている。

診療に関しては、更新を重ねる度に JCI の要求は高レベルとなるため、それに対応するためのポリシー更新作業や職員教育を行った。また、令和5年5月に予定された新電子カルテへの移行に関し、医療安全管理の面から最大限の支援を行い、高い安全水準を満たしながら作業を進めた。

研究に関しては、作年度の実績を保ちつつ、さらに前方視的な研究課題も加えたいと考えていた。これに関し、医療安全に関する学会が現地参加できるようになり、例年に近いレベルで参加し、演題発表も行うことができた。一方で、前方視的な研究には着手することができなかった。昨年度に引き続き、公益財団法人日本医療機能評価機構の認定病院患者安全推進協議会における広報部会、薬剤部会の活動は継続でき、広報部会での部会誌の発行、薬剤部会での薬剤安全セミナーはウェブ開催であったが二回開催することができ、その成果物も日本医療機能評価機構のHPに掲載することができた。

基本学科全体としては目標を達成することができたと評価するが、更なる改善の余地は残していると考えます。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

卒前教育に関しては、更にクリニカルクラークシップの場での教育時間を増やし、安全管理の基本行動を学生自らが行えるレベルまで到達できることを目標として取り組む。

卒後教育に関しては、チームステップスの実習やインシデントレポートの記載指導を通じ、研修医の段階で医療におけるチームワークの重要性を自覚させ、チーム医療の一員として自らの役割を自覚し、医療者としての模範的行動がとれるよう成長させることを目標とする。

研究に関しては、学会での積極的な演題発表、今年度以上の実績を挙げることを目標とする。さらに昨年度に着手できなかった前方視的な研究課題を加えたいと考える。

3. 35) がんゲノム医療科

1. 構成員

濱口哲弥 (HAMAGUCHI, Tetsuya) : 教授 : 診療部長 : 診療主任 : 指導教員 (大学院) : 消化器がん薬物療法 : 博士
牧野好倫 (MAKINO, Yoshinori) : 教授 : 研究員 : 指導教員 (大学院) : 臨床薬理学 : 博士
藤野 節 (FUJINO, Takashi) : 教授 : 研究員 : 大学院教員 (大学院) : 病理学 : 博士 (任期 : R4. 12. 31)
福島久代 (FUKUSHIMA, Hisayo) : 講師 : 教育主任 : 遺伝医学 : 博士
平崎正孝 (HIRASAKI, Masataka) : 講師 : 研究主任 : 分子生物学 : 博士
山崎 智 (YAMASAKI, Satoshi) : 助教 : 研究員 : 博士
高 丹 (GAO, Dan) : 助教 : 研究員 : 博士 (任期 : R4. 12. 31)

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

前年度の改善計画「がん遺伝子パネル検査の種類増加、症例数のさらなる増加が予想されており、またパネル検査の結果に基づく治療法の選択肢は日進月歩で進化しているため、当院では最新の情報に基づくエキスパートパネルを実施するために、常に情報のアップデートに努め、また関係者の指導、教育を行う。」に基づき、がんゲノムエキスパートパネル構成員を中心にがんゲノム医療に関する実践的教育を実施する。

卒前教育では、大学1年生を対象とした細胞生物学実習において、特別講義「細胞生物学からゲノム医療の最前線へ」を行い、実臨床の現場における基礎医学の知識の重要性について理解して貰う。また、大学2年生を対象とした機能系実習1では、赤血球の機能評価法を通じて、血液疾患の病態を理解して貰う。

大学院教育は、乳癌における Vimentin 等の病理学的所見と、次世代シーケンサーを用いた網羅的な遺伝子発現解析の結果の総合的な考察を促すことで、乳がんを多面的に理解するための一助として貰う。

2-2. 教育実績 (担当者)

がん遺伝子パネル検査、遺伝子情報に基づく治療法等の情報のアップデートのため、学会や関連する団体等が主催する各種セミナー、がんゲノム医療中核拠点病院のエキスパートパネル等に積極的に出席して情報を収集し、がんゲノム医療センター運営会議等において情報を共有した。また、エキスパートパネルにおいて、院内のエキスパートパネル構成員、がんゲノム医療連携病院、院内の医療従事者に対して、実際の症例に基づく指導、教育を行った。

卒前教育で講義を担当したのは、1年生「細胞生物学実習」：特別講義（平崎：12時間）、2年生「機能系実習1」：血算（平崎：12時間）

生化学教室の中野貴成先生を中心に「動脈硬化モデルマウスのゲノム解析」のタイトルで課外プロを行った（平崎：7時間）

<大学院教育> 一瀬友希：埼玉医科大学国際医療センター乳腺腫瘍科・大学院（平崎）

榎原彩花：埼玉医科大学国際医療センター乳腺腫瘍科・大学院（平崎）

2-3. 達成度評価

エキスパートパネルにおける検討のための治療法等の情報のアップデート、担当者の実践的教育に関して、おおむね達成され、エキスパートパネルのレベルが維持されている。

卒前教育の1年生を対象とした「細胞生物学実習」と2年生を対象とした「機能系実習1」は、COVID-19の影響により、対面とリモートのハイブリッドで実施された。ハイブリッドゆえの伝える難しさを感じ、次年度に改善点を多く残す結果となった。大学院教育は、週1回の研究ミーティングを通じて、がん組織の網羅的な遺伝子発現解析の結果を、分子生物学的な視点からの理解を促す事が出来ている。

2-4. 次年度改善計画

次年度は、新たながん遺伝子パネル検査の追加による臓器・領域の拡大と症例数のさらなる増加が予想されるため、引き続き、学会やセミナーに参加して最新の情報を収集に努めるとともに、治療薬や適応疾患に関する知識の拡充を図るためエキスパートパネルメンバー向けの勉強会を開催する。

卒前教育は、3年ぶりに対面での実習が計画されている。ハイブリッド形式では伝えにくかった、実習を通しての学びの重要性に気づけるように、少しでも伝え易く、より学習意欲を持ってもらえる様に努める。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

当診療科は、5FUなどの既存薬剤の投与後の予後を染色体DNAの一塩基バリエーションから予測するバイオマーカーの確立を目指している。また、大腸がんや乳がんの遺伝子発現パターンによる分類分けを試みており、その分類分けに応じた薬剤の有効性の検証に繋げていく予定である。この様に、研究活動を通じて、がんゲノム医療の有効性を高める事に努めている。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

埼玉医科大学国際医療センター（薬剤部・消化器腫瘍科・乳腺腫瘍科・頭頸部腫瘍科）、埼玉医科大学（生化学教室・ゲノム基礎医学）、日本医科大学（生理学教室）と共同研究を推進し、発がんの機序の解明やバイオマーカーの同等に取り組んでいる。

3-3. 達成度評価

本研究の研究成果は、学会発表および論文作成に示す通り、国内外での学会発表と原著論文にまとめる事により、広く研究成果を発信する事が出来た。

3-4. 次年度改善計画

概ね順調に進んでおり、次年度中もいくつか論文を発表する予定がある。

4. 診療

埼玉医科大学国際医療センターは、2018年4月からがん遺伝子パネル検査を開始し、また2019年9月からはがんゲノム医療拠点病院に指定され、がんゲノム医療科が主体となって、エキスパートパネルを開催している。2023年3月には継続して2期目の指定を受け、引き続き、国内32施設、埼玉県内では2施設しかない、がんゲノム医療拠点病院の一つとして、がんゲノム医療を実践する役割を果たしている。また、遺伝性腫瘍関連の遺伝学的検査、地域の医療機関からのパネル検査や遺伝カウンセリング連携の実施、紹介患者の受け入れも継続して実施している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

埼玉県がん対策協議会委員、埼玉県がん患者の就労等部会部会長、埼玉県生活習慣病検診管理指導協議会大腸がん部会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

Japanese Journal of Clinical Oncology の査読委員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本臨床腫瘍学会協議員・教育企画部会委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書 ※10件以内

<論文>

- ① Fujiwara Y, Makiyama R, Hase T, Hashimoto N, Naito T, Tsubata Y, Okuno T, Takahashi T, Kobayashi H, Shinno Y, Zenke Y, Ikeda T, Hosomi Y, Watanabe K, Kitazono S, Sakiyama N, Makino Y, Yamamoto N. Pharmacokinetic and dose-finding study of osimertinib in patients with impaired renal function and low body weight. *Cancer Sci.* 2023 Jan 26. doi: 10.1111/cas.15736. Online ahead of print.
- ② Ohuchi M, Yagishita S, Jo H, Akagi K, Inaba Higashiyama R, Masuda K, Shinno Y, Okuma Y, Yoshida T, Goto Y, Horinouchi H, Makino Y, Yamamoto N, Ohe Y, Hamada A. Early change in the clearance of pembrolizumab reflects the survival and therapeutic response: A population pharmacokinetic analysis in real-world non-small cell lung cancer patients. *Lung Cancer.* 2022 173:35-42.
- ③ Hibino H, Sakiyama N, Makino Y, Makiyama-Ando R, Horinouchi H, Fujiwara Y, Kanda S, Goto Y, Yoshida T, Okuma Y, Shinno Y, Murakami S, Hashimoto H, Akiyoshi T, Imaoka A, Ohe Y, Yamaguchi M, Ohtani H. Evaluation of hepatic CYP3A enzyme activity using endogenous markers in lung cancer patients treated with cisplatin, dexamethasone, and aprepitant. *Eur J Clin Pharmacol.* 2022 78:613-621.
- ④ Takenaka Y, Inoue I, Hirasaki M, Ikeda M, Kakinuma Y. 2023. Temporal inhibition of the electron transport chain attenuates stress-induced cellular senescence by prolonged disturbance of proteostasis in human fibroblasts. *The FEBS Journal.* <https://doi.org/10.1111/febs.16785>. (査読有)
- ⑤ Miyama Y, Kanao K, Uranishi K, Hirasaki M, Yasuda M. 2022. Complete response to pembrolizumab in a patient with recurrent and metastatic urothelial bladder carcinoma reflecting coexisting sarcomatoid subtype and glandular differentiation: a case report. *International Cancer Conference Journal.* doi:<https://doi.org/10.1007/s13691-022-00568-5>. (査読有)
- ⑥ Kagamu H, Yamasaki S, Kitano S, Yamaguchi O, Mouri A, Shiono A, Nishihara F, Miura Y, Hashimoto K, Imai H, Kaira K, Kobayashi K, Kanai Y, Shibata T, Horimoto K. Single-Cell Analysis Reveals a CD4+ T-cell Cluster That Correlates with PD-1 Blockade Efficacy. *Cancer Res.* 2022;82(24):4641-53. doi: 10.1158/0008-5472.CAN-22-0112.
- ⑦ Liu X, Sato N, Yabushita T, Li J, Jia Y, Tamura M, Asada S, Fujino T, Fukushima T, Yonezawa T, Tanaka Y, Fukuyama T, Tsuchiya A, Shikata S, Iwamura H, Kinouchi C, Komatsu K, Yamasaki S, Shibata T, Sasaki A. T, Schibler J, Wunderlich M, O'Brien E, Mizukawa B, Mulloy J. C, Sugiura Y, Takizawa H, Miyake K, Kitamura T, Goyama S. IMPDH inhibition activates TLR-VCAM1 pathway and suppresses the development of MLL-fusion leukemia. *EMBO Mol Med.* 2023;15(1):e15631. Epub 20221201. doi: 10.15252/emmm.202115631.

<学会発表>

- ① PTEN-induced kinase 1 gene single nucleotide variants as biomarkers in adjuvant chemotherapy for colorectal cancer
Masataka Hirasaki, Yoshiaki Mihara, Yosuke Horita, Takashi Fujino, Hisayo Fukushima, Yasuo Kamakura,

Kousuke Uranishi, Yasumitsu Hirano, Shomei Ryozaawa, Masanori Yasuda, Yoshinori Makino, Tetsuya Hamaguchi
第3回 埼玉医科大学研究の日 2022年11月5日

- ② 褐色細胞腫を発端に診断された多発性内分泌腫瘍2型症例における血縁者の遺伝カウンセリング, 福島久代, 西本 紘嗣郎, 濱口哲弥, 第28回日本遺伝性腫瘍学会学術集会, 2022年6月17日, 岡山市
- ③ マイクロサテライト不安定性検査からのリンチ症候群の拾い上げに関する検討, 福島久代, 高丹, 鎌倉靖夫, 三原 良明, 福元剛, 堀田洋介, 廣中秀一, 濱口哲弥, 日本人類遺伝学会第67回大会, 2022年12月15日, 横浜市
<講演> 該当なし

【総数：論文7件、学会発表3件、講演0件】

6-2. 獲得研究費

- 1. 科研費：基盤研究(C) 令和3～令和5年度 総額4,160(千円) (代表:平崎正孝)「Mbd3によるPrimed型多能性幹細胞の維持と分化の方向性の決定機構の解明」
- 2. 基盤研究(C) 令和3～令和5年度 総額500(千円) (代表:竹中康浩、分担:平崎正孝)「分裂終了細胞における新規な老化マーカーの探索とその機能の解析」
- 3. 令和4年度 日高研究プロジェクト 代表 総額2,000(千円)「Autophagy関連遺伝子のSNV(single nucleotide variant)を基に食道癌の術前補助化学療法の治療選択を可能とする」

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

「癌の補助化学療法の予後を予測する方法及びそれに使用される試薬」 平崎 正孝、三原 良明、堀田 洋介、濱口 哲弥、福元 剛、牧野 好倫、藤野 節、福島 久代、鎌倉 靖夫 特願2022-064611 2022/4/8

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度は、がんゲノム医療科として、教育、診療および研究面でバランス良く活動することができたが、診療面では、エキスパートパネル件数の増加に伴い、業務の効率化とレポートのクオリティの確保が課題となった。

今年度は、前年度に引き続き教育、研究活動を継続するとともに、診療においては、エキスパートパネル運用にかかる業務の効率化、安全なデータ管理体制の確保、エキスパートパネルの質の維持を図り、エキスパートパネル支援システムとアノテーションレポート作成サービスを導入し、新システムの運用体制を整備している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

前述のように、がんゲノム医療科として、教育、および研究面での活動を継続することができ、また診療面ではエキスパートパネル支援システムを導入し、その運用体制の確立を整備している。

2023年度は、新たながん遺伝子パネル検査が実用化される予定であり、さらなる検査件数の増加と適応疾患の拡大が予想される。よって今年(2023年)度は、診療では導入した支援システムの効率的な運用法を整備するとともに、引き続きゲノム医療全般に関する研究及び教育活動も継続していく。

3. 36) 地域医療科

1. 構成員

眞下由美 (MASHIMO, Yumi) : 教授 : 運営責任者、診療部長、研究主任 : 地域医療、消化器疾患 : 博士
齋木 実 (SAIKI, Minoru) : 教授 : 教育主任 : 地域医療、在宅医療、緩和医療 : 博士
古屋 大典 (FURUYA, Daisuke) : 非常勤医師 : 地域医療、在宅医療、神経疾患 : 博士
内田 望 (UCHIDA, Nozomu) : 非常勤医師 : 地域医療、在宅医療、緩和医療

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

前年度改善計画なし(本年度より新設されたため)

2-2. 教育実績(担当者)

- ・ 卒前教育については、地域医学推進室および医療人育成支援センター地域枠奨学金部門と連携しながら、地域枠奨学生の勉強会の開催にかかわった。当科教員のうち2名が医学教育センター地域医学推進室メンバーである(眞下、齋木)。また、地域枠奨学生のオリエンテーション、地域枠奨学生懇談会なども、当科教員がかかわり実施した(齋木)。
- ・ 卒後教育については、国際医療センター初期臨床研究プログラム責任者を当科教員が担い、研修管理、プログラムの検討、地域医療機関との研修目標および評価の共有などを行った(眞下)。これらを通じ、すべての研修医の到達目標が達成された。また、卒後臨床研修評価機構(JCEP)から更新認定された。
- ・ 消化器内科における医師の教育(医学生、研修医、修練医、ESD trainee)の中で、地域医療連携に関する教育も行った。(眞下)
- ・ 研修医に対して、在宅診療、終末期医療の教育を行った。(齋木)。

2-3. 達成度評価

卒前卒後教育ともにおおむね目標は達成した。

2-4. 次年度改善計画

- ・ 卒前地域医療教育については、現場での教育の重要性、必要性を改めて認識した。遠隔学習を、Covid-19 流行を鑑みながら現場学習へ移行していきたい。
- ・ 卒後教育については、地域医療機関とのさらなる密な連携構築、到達目標達成のための情報共有を行っていく。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

前年度改善計画なし(本年度より新設されたため)

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

- ・ 地域医療科として、地域医療機関、市町村、企業、大学機関と共同で高齢者の外出モチベーションが向上するシステム構築を研究している(眞下)。
- ・ ビタミンB1欠乏に関する精神腫瘍科との臨床研究からは下記の多くの論文発表ができた(内田)。

3-3. 達成度評価

兼務の医師の集団だが、研究については、おおむね達成できていると考える。

3-4. 次年度改善計画

地域医療に関連した研究の継続。

4. 診療

当科は本年度の新設科であり、専門分野や活動の場が異なる医師の集合体だが、医療スタッフと共に、前方・後方連携強化、電話対応による外来入院診療の補強、職員の健康管理、在宅医療・緩和、地域住民教育、福祉・介護・保健審査、専門医師間の橋渡し、地域医療機関からのご意見対応に至るまで、多方面で活動し、地域医療に貢献している。

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

毛呂山町・越生町・鳩山町 介護認定審査会 委員(齋木)

同 会長代理(齋木)

毛呂山町・越生町 在宅医療・介護連携推進委員会委員(齋木)

埼玉医科大学国際医療センター緩和ケア研修会講師(齋木)

埼玉県医師会 ACP(アドバンスケアプランニング)普及啓発人材バンク事業講師(齋木)

奥武蔵 がん患者病院前対応スキルアップ研修(PSCP)講師・インストラクター(齋木)

毛呂山町・越生町 在宅医療・介護連携推進委員会 出前講座講師(齋木)

全国国保診療施設協議会 地域ケア委員会委員(看護・介護部会長)(内田)

同 調査研究委員会委員(内田)

秩父郡医師会理事(内田)

ちちぶ医療協議会委員（内田）
ちちぶ圏域医師・医療関係者教育プログラム分科会委員（内田）
小鹿野町介護保険運営協議会会長（内田）
同 障害者計画等策定協議会委員（内田）
同 地域福祉計画策定協議会委員（内田）
埼玉県地域保健医療計画推進協議会 在宅医療部会員（内田）

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

BMJ Supportive & Palliative Care の査読委員（内田）。

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

なし

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

① Synergistic Effect of Motivation for the Elderly and Support for Going out.

Mashimo Y, Tsuchihashi S, Tsutsui K, Arai T, Tsuji Y, Numai T, Kameda K, Nishizawa K, Kovacs M, Tanaka S, Watanabe H, Naruse Y, Ohmura M, Ishida N, Iwasaki T, Hiruma G, Miyazaki N, Takemura R, Nagashima K, Sato Y, Ohtsu Y, Nakano T, Aida N, Iizuka I, Kato H, Kobayashi Y, Senbonmatsu T.
J Pers Med. 2022 Jul 30;12(8):1257.

② A case of Wernicke encephalopathy arising in the early stage after the start of hemodialysis.

Seto N, Ishida M, Hamano T, Onishi H, Uchida N.
CEN Case Rep. 2022 Aug;11(3):314-320.

③ Wernicke encephalopathy in a caregiver: A serious physical issue resulting from stress in a family member caring for an advanced cancer patient.

Ishida M, Uchida N, Yoshioka A, Sato I, Hamaguchi T, Horita Y, Mihara Y, Onishi H.
Palliat Support Care. 2022 Aug;20(4):600-602.

④ Clinical diagnosis, outcomes and treatment of thiamine deficiency in a tertiary hospital.

Onishi H, Uchida N, Yoshioka A, Sato I, Ishida M.
M.Clin Nutr. 2022 Sep;41(9):2052-2053.

⑤ Opioid withdrawal syndrome developing after long-term administration of naldemedine.

Ishida M, Uchida N, Yabuno A, Hasegawa K, Mizunuma N, Takahashi T, Onishi H.
Palliat Support Care. 2022 Dec;20(6):897-899.

⑥ Can depressed cancer patients with a borderline thiamine concentration develop deficiency within a short time period?

Uchida N, Ishida M, Yoshioka A, Sato I, Ito H, Onizawa N, Sato R, Mizunuma N, Onishi H.
Palliat Support Care. 2023 Jan 23:1-4.

⑦ 第35回日本総合病院精神医学会総会

「地域総合病院での心療内科（精神科）外来における老年期精神疾患の臨床的特徴」
新井久稔 高橋美紀 新田幸子 山寄昌子 内田望 松尾幸治
2022年10月28・29日 東京（かつしかシンフォニーヒルズ）

⑧ 第43回日本臨床薬理学会学術総会 2022. 12. 03

外出モチベーション向上による高齢者の健康寿命延伸の仕組みづくり
眞下由美 千本松孝明 新井智之 辻美隆 筒井健太 土橋佐紀
2022年12月3日 パシフィコ横浜

⑨ 第35回 高知県国保地域医療学会 特別講演

これからの地域包括医療・ケア ウィズコロナと地域医療－「コロナに振り回されつつも今をどう生きるか」
特別講演 内田望
2023年2月25日 高知城ホール

【総数：論文 6 件、学会発表 2 件、講演 1 件】

6-2. 獲得研究費

なし

6-3. 受賞

なし

6-4. 特許、実用新案

なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

埼玉医科大学国際医療センター地域医療連携懇話会 年4回開催(真下)

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度改善計画なし(本年度より新設されたため)

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

本年度の新設科であり、活動の場も異なる医師の集合体であるが、連携を合言葉に、当院のみでなく、毛呂、川越の地域医療科スタッフと共に活動し、当法人を中心とした、埼玉西部の地域医療構想を構築したいと考える。

1. 看護学科

1. 構成員

千田 みゆき (CHIDA, Miyuki) : 教授 : 学科長 : 代表指導教員(大学院) : 地域看護学 : 博士
栗生田 友子(AOHDA, Tomoko) : 教授 : 代表指導教員(大学院) : 成人看護学 : 博士
大賀 淳子 (OGA, Junko) : 教授 : 代表指導教員(大学院) : 精神看護学 : 博士
大森 智美 (OMORI, Tomomi) : 教授 : 大学院教員(大学院) : 母性看護学 : 修士
野田 智子 (NODA, Tomoko) : 教授 : 代表指導教員(大学院) : 小児看護学 : 博士
大澤 優子 (OSAWA, Yuko) : 准教授 : 大学院教員 (大学院) : 精神看護学 : 修士
金子 優子 (KANEKO, Yuko) : 准教授 : 大学院教員(大学院) : 神経生理学 : 博士
菊池 チトセ (KIKUCHI, Chitose) : 准教授 : 指導教員(大学院) : 地域看護学 : 修士
櫻庭 奈美(SAKURABA, Nami) : 准教授 : 指導教員(大学院) : 成人看護学 : 博士
藤村 博恵 (FUJIMURA, Hiroe) : 准教授 : 母性看護学 : 修士
本谷 久美子(MOTOYA, Kumiko) : 准教授 : 成人看護学 : 博士
山路 真佐子 (YAMAJI, Masako) : 准教授 : 指導教員(大学院) : 地域看護学 : 博士
横山 ひろみ (YOKOYAMA, Hiromi) : 准教授 : 代表指導教員 (大学院) : 基礎看護学 : 博士
青木 君恵 (AOKI, Kimie) : 講師 : 成人看護学 : 修士
大野 美佐子 (OONO, Misako) : 講師 : カウンセリング : 修士
加藤 巳佐子(KATO, Misako) : 講師 : 大学院教員 (大学院) : 老年看護学 : 修士
川合 美奈 (KAWAI, Mina) : 講師 : 修士
櫻井 繭子 (SAKURAI, Mayuko) : 講師 : 地域看護学 : 修士
関根 由紀子 (SEKINE, Yukiko) : 講師 : 基礎看護学 : 修士
西岡 ひとみ (NISHIOKA, Hitomi) : 講師 : 地域看護学 : 修士
松坂 充子 (MATSUXAKA, Atsuko) : 講師 : 母性看護学 : 修士
村田 美穂 (MURATA, Miho) : 講師 : 成人看護学 : 博士
内田 久子 (UCHIDA, Hisako) : 助教 : 修士
加古 幸子 (KAKO, Yukiko) : 助教 : 修士
梶原 貴宏 (KAJIWARA, Takahiro) : 助教 : 修士
工藤 岳夫 (KUDO, Takeo) : 助教 : 修士
齋藤 美奈子 (SAITO, Minako) : 助教 : 修士
塩見 直子 (SHIOMI, Naoko) : 助教 : 修士
鳥海 美穂子 (TORINOUMI, Mihoko) : 助教 : 修士
野田 万里 (NODA, Mari) : 助教 : 修士
原 明子(HARA, Akiko) : 助教 : 修士
森 麻希 (MORI, Maki) : 助教 : 修士
山本 久美子 (YAMAMOTO, Kumiko) : 助教 : 修士
川端 泰子 (KAWABATA, Taiko) : 助手
小久保 崇正(kokubo, yasumasa) : 助手 (5月より12月まで)
田代 ゆか (TASHIRO, Yuka) : 助手 (9月より)
松岡 志津香 (MATSUOKA, Shizuka) : 助手

2. 教育

2-1. 目的・目標

深い人間理解に基づき、看護に求められる社会的使命を遂行し生涯にわたり自らの人間性と看護実践の能力の研鑽に努めることができる人材を育成することを目的とする。看護専門職者としての基本的知識、技術、態度を体得させて、看護職としての資質の向上を図るとともに、正確な知識と技術に基づく実践力、柔軟な思考力、的確な判断力、豊かな創造力、深い洞察力を養い、人々の健康や福祉の向上に貢献できる看護実践者、あるいは看護教育者や看護研究者となるための基礎的能力を培う。各領域の目的・目標は以下の通りである。

基礎看護学領域：基礎看護学領域では、看護専門職者に必要な基本的知識として看護の概念や本質を追究し、科学的な看護実践の視点を身につけ、看護の対象者と看護職者との関係を考えつつ、生活行動援助技術の原理と実際を学ぶ。基礎看護学実習では、対象を生活者としてとらえ、健康上の問題によって対象の生活行動がどのように変化するか、また、対象が必要としている生活行動への援助を実施することで、対象の生活行動が拡大・変化することなど、看護独自の機能について理解を深めることを学習目標とする。

成人看護学領域：成人看護学概論では、現代社会に生きる成人の特徴および健康問題を全人的に理解し、看護援助に必要な基礎的知識の習得を目指す。成人看護学方法論はⅠからⅣまでに、慢性的な病いのある人とその家族への病とともに生きる支援、急性発症の病いや急性増悪、および手術を受ける人への支援、がんとともに生きる人あるいは終末期にある人とその家族への支援を学修し、さらには、実地で応用できる知識と技術を習得する。また、成人看護学実習ⅠからⅢにおいては、それらを援用してセルフケアやセルフマネジメント支援の実践、周手術期の支援を病棟実習で実践的に学習するとともに、地域での生活に基盤をおいた援助を展開する。これらをすべての科目を通して、成人期にある人の健康レベルや病期に沿って実践的な力を育成する。

老年看護学領域：老年看護学概論では、高齢期を生きる人々の状況を理解し、よりよい日常生活を送れるよう加齢や健康問題に伴う生活の変化、個別的な援助、家族を含めた援助の必要性を学ぶ。老年看護学活動論では、高齢期の心身の変化を踏まえ、高齢者を包括的にアセスメントできる能力を身につけ、虚弱な高齢者に対する個別性をふまえた看護援助について学ぶ。老年看護学実習Ⅰは、加齢による心理・身体・社会的な変化に高齢者がどのように日常生活を構築しているか理解する。老年看護学実習Ⅱは、主に認知症と健康障害を併せ持つ高齢者の特性を理解し、看護実践能力を養う。

小児看護学領域：小児看護学概論では、小児看護の理念と特徴および子どもをとりまく社会の状況、子どもの成長発達過程の特徴と成長発達を促すための看護について学ぶ。小児看護学活動論では、健康障害や入院が子どもと家族に及ぼす影響と、健康障害のある子どもと家族のウェルビーイングを目指した看護を学ぶ。小児看護学実習では、あらゆる成長発達・健康レベルにある子どもとその家族に適切な看護を実践するための基礎的能力を学ぶ。

母性看護学領域：母性看護の対象の理解、妊娠・分娩・産褥期(新生児も含む)の連関、各期の身体的・心理的特性と観察及び援助について、具体的・实际的に学習できるようにする。特に、看護学実習において、講義や学内演習が実際と結びつけられるように指導することを教育の目標とする。

精神看護学領域：精神看護学概論では、こころの健康やその発達についての理解をもとに、精神疾患の病態と治療の特徴を学ぶ。これに加えて、精神障害者をもつ家族への支援について考察を深める。精神看護学活動論では、精神看護学の対象と機能を踏まえ、精神科看護の対象となる人への治療的な関わりと基本的看護援助について具体的に学ぶ。精神看護学実習ではこれらの知識・技術を活用し、精神科医療施設および社会復帰施設において実践的に学び、様々なステージにおける支援のあり方について自らの課題を見出す。

地域看護領域：在宅看護学概論では、在宅看護の理念と意義、特徴、ケアマネジメント等について、在宅看護学活動論では在宅療養者と家族に対する生活支援技術、在宅に特有な状態別看護等を学修する。在宅看護学実習では在宅看護の実際を学び、受け持ち事例の看護過程の展開を通して、QOLの高い在宅療養生活の支援方法を学ぶ。公衆衛生看護学概論では目的、対象、方法、個人・集団・地域社会の健康と健康な地域づくり、公衆衛生看護学対象別活動論Ⅰ・Ⅱ、公衆衛生看護学活動展開論Ⅰ・Ⅱ、健康教育Ⅰ・Ⅱでは個人・家族・集団・地域社会の発達段階や健康レベルに応じた地域看護の活動方法と地域ケアシステムづくり、公衆衛生看護管理論では地域ケアシステムと地域における看護に必要な管理を学ぶ。地域診断論Ⅰ・Ⅱでは地域診断を演習し、公衆衛生看護学実習では地域の健康課題の解決のための実践を学ぶ。

2-2. 教育実績

【看護の対象としての人間の理解】

- ・ 病むことの心理：2年生,1単位 30時間 (大賀淳子)
- ・ 看護におけるコミュニケーション論：1年生,1単位 30時間 (野田智子,大賀淳子)
- ・ 看護学生のためのリテラシー：1年生,1単位 30時間 (千田みゆき,金子優子,関根由紀子)
- ・ 看護倫理：2年生,1単位 30時間 (松坂充子ほか)
- ・ 人体の構造と機能Ⅰ：1年生,1単位 30時間 (金子優子ほか)
- ・ 人体の構造と機能Ⅱ：1年生,2単位 60時間 (金子優子ほか)
- ・ 人体の構造と機能Ⅲ：1年生,2単位 60時間 (金子優子ほか)
- ・ 生活と健康：1年生,1単位 15時間 (藤村博恵, 菊池チトセ)
- ・ 看護関係法規：1年生,1単位 15時間 (加藤巳佐子) 令和4年改正カリキュラム
- ・ 看護関係法規：2年生,1単位 15時間 (加藤巳佐子)

- ・ 保健医療行政論：2年生，1単位15時間(加藤巳佐子)
 - ・ 医療の基本Ⅰ：1年生，1単位30時間(大野美佐子ほか)
 - ・ 医療の基本Ⅱ：3年生，1単位30時間(大野美佐子ほか)
- 【看護専門職者に必要な基本的知識，技術，態度の修得】
- ・ 看護学概論Ⅰ：1年生，2単位30時間(横山ひろみ)
 - ・ 看護技術論：1年生，1単位15時間(横山ひろみ，関根由紀子，塩見直子，鳥海美穂子，加古幸子)
 - ・ 基礎看護技術Ⅰ：1年生，1単位30時間(関根由紀子，横山ひろみ，塩見直子，鳥海美穂子，加古幸子)
 - ・ 基礎看護技術Ⅱ：1年生，1単位30時間(横山ひろみ，関根由紀子，塩見直子，鳥海美穂子，加古幸子，田代ゆか)
 - ・ 基礎看護技術Ⅲ：1年生，1単位30時間(関根由紀子，横山ひろみ，塩見直子，鳥海美穂子，加古幸子，田代ゆか)
 - ・ 基礎看護技術Ⅳ：2年生，1単位30時間(関根由紀子，横山ひろみ，塩見直子，鳥海美穂子，加古幸子)
 - ・ 基礎看護技術Ⅴ：2年生，1単位30時間(横山ひろみ，関根由紀子，塩見直子，鳥海美穂子，加古幸子)
 - ・ 看護方法演習Ⅰ：1年生，1単位30時間(横山ひろみ，関根由紀子，塩見直子，鳥海美穂子，加古幸子，田代ゆか)
 - ・ 看護方法演習：2年生，1単位30時間(横山ひろみ，関根由紀子，塩見直子，鳥海美穂子，加古幸子)
 - ・ 成人看護学概論：2年生，2単位30時間(栗生田友子，本谷久美子，櫻庭奈美，村田美穂)
 - ・ 成人看護学方法論Ⅰ：2年生，1単位30時間(栗生田友子，本谷久美子，村田美穂，原明子)
 - ・ 老年看護学概論：2年生，2単位30時間(加藤巳佐子)
 - ・ 小児看護学概論：2年生，2単位30時間(野田智子)
 - ・ 母性看護学概論：2年生，2単位30時間(大森智美)
 - ・ 精神看護学概論：2年生，2単位30時間(大賀淳子，大澤優子)
 - ・ 在宅看護学概論：2年生，2単位，30時間(千田みゆき)
 - ・ 公衆衛生看護学概論：2年生，2単位，30時間(千田みゆき)
 - ・ 家族看護学：2年生，1単位30時間(山路真佐子，野田智子，川合美奈)
 - ・ 母性看護学活動論：2年生，2単位60時間(大森智美，藤村博恵，松坂充子，山本久美子)
 - ・ 成人看護学方法論Ⅱ：3年生，1単位30時間(本谷久美子，青木君恵，工藤岳夫)
 - ・ 成人看護学方法論Ⅲ：3年生，1単位30時間(栗生田友子，櫻庭奈美，青木君恵，梶原貴宏)
 - ・ 成人看護学方法論Ⅳ：3年生，1単位30時間(栗生田友子，本谷久美子，櫻庭奈美，青木君恵，村田美穂，梶原貴宏，工藤岳夫，原明子)
 - ・ 老年看護学活動論：3年生，2単位60時間(加藤巳佐子，森麻希，松岡志津香)
 - ・ 小児看護学活動論：3年生，2単位60時間(野田智子，川合美奈，齋藤美奈子)
 - ・ 精神看護学活動論：3年生，2単位60時間(大賀淳子，大澤優子，小久保崇正)
 - ・ 在宅看護学活動論：3年生，2単位60時間(西岡ひとみ，千田みゆき，野田万里，内田久子，川端泰子)
 - ・ 公衆衛生看護学対象別活動論Ⅰ：3年生，2単位30時間(櫻井繭子，野田万里)
 - ・ 公衆衛生看護学対象別活動論Ⅱ：3年生，1単位30時間(山路真佐子，櫻井繭子，内田久子)
 - ・ 公衆衛生看護学活動展開論Ⅰ：3年生，1単位15時間(菊池チトセ)
 - ・ 公衆衛生看護学活動展開論Ⅱ：3年生，1単位30時間(菊池チトセ，山路真佐子，櫻井繭子，野田万里，内田久子，川端泰子)
 - ・ 健康教育論Ⅰ：3年生，1単位15時間(山路真佐子)
 - ・ 健康教育論Ⅱ：3年生，1単位30時間(山路真佐子，千田みゆき，菊池チトセ，櫻井繭子，野田万里，内田久子，川端泰子)
 - ・ 看護学概論Ⅱ：4年生，1単位15時間(横山ひろみ)
 - ・ 学校看護論：4年生，1単位8時間(野田智子ほか)
 - ・ 看護のマネジメント：4年生，1単位15時間(横山ひろみほか)
 - ・ 看護総合セミナー：4年生，1単位45時間(千田みゆき，金子優子，関根由紀子，塩見直子ほか)
 - ・ 基礎看護学実習Ⅰ：1年生，1単位45時間(横山ひろみ，関根由紀子，塩見直子，鳥海美穂子，加古幸子，田代ゆか)
 - ・ 基礎看護学実習Ⅱ：2年生，2単位90時間(横山ひろみ，関根由紀子，塩見直子，鳥海美穂子，加古幸子，田代ゆか)
 - ・ 成人看護学実習Ⅰ：3年生，3単位135時間(栗生田友子，本谷久美子，櫻庭奈美，青木君恵，村田美穂，梶原貴宏，工藤岳夫，原明子)
 - ・ 成人看護学実習Ⅱ：3年生，2単位90時間(栗生田友子，本谷久美子，櫻庭奈美，青木君恵，村田美穂，梶原貴宏，工藤岳夫，原明子)
 - ・ 成人看護学実習Ⅲ：3年生，1単位45時間(栗生田友子，本谷久美子，櫻庭奈美，青木君恵，村田美穂，梶原貴宏，工藤岳夫，原明子)

- ・ 老年看護学実習Ⅰ：2年生, 1単位 45時間 (加藤巳佐子, 森麻希, 松岡志津香)
- ・ 老年看護学実習Ⅱ：3・4年生, 3単位 135時間 (加藤巳佐子, 森麻希, 松岡志津香)
- ・ 小児看護学実習：3・4年生, 2単位 90時間 (野田智子, 川合美奈, 齋藤美奈子)
- ・ 母性看護学実習：3・4年生, 2単位 90時間 (大森智美, 藤村博恵, 松坂充子, 山本久美子)
- ・ 精神看護学実習：3年生, 2単位 90時間 (大賀淳子, 大澤優子, 小久保崇正)
- ・ 在宅看護学実習：4年生, 2単位 90時間 (千田みゆき, 西岡ひとみ, 櫻井繭子, 野田万里, 内田久子, 川端泰子)
- ・ 公衆衛生看護学実習：4年生, 5単位 225時間 (千田みゆき, 菊池チトセ, 山路真佐子, 櫻井繭子, 野田万里, 内田久子, 川端泰子)
- ・ 実践応用の看護学実習：4年生, 2単位 90時間 (千田みゆき, 大森智美, 栗生田友子, 野田智子, 大賀淳子, 菊池チトセ, 山路真佐子, 本谷久美, 大澤優子, 藤村博恵, 横山ひろみ, 櫻庭奈美, 関根由紀子, 川合美奈, 青木君恵, 村田美穂, 西岡ひとみ, 櫻井繭子, 加藤巳佐子, 松坂充子, 梶原貴宏, 野田万里, 森麻希, 塩見直子, 山本久美子, 齋藤美奈子, 内田久子, 工藤岳夫, 原明子, 鳥海美穂子, 加古幸子, 川端泰子, 松岡志津香, 小久保崇正, 田代ゆか)

【ケアの質向上のための看護学】

- ・ 看護過程論：2年生, 1単位 15時間 (大澤優子, 関根由紀子)
- ・ 生殖医療と看護：2年生, 1単位 15時間 (大森智美, 藤村博恵)
- ・ リハビリテーション看護：2年生, 1単位 30時間 (栗生田友子, 西岡ひとみ, 高倉保幸)
- ・ フিজカルアセスメント：2年生, 1単位 15時間 (本谷久美子, 野田智子ほか)
- ・ パリアティブケア論：4年生, 1単位 15時間 (栗生田友子, 櫻庭奈美, 青木君恵ほか)
- ・ 看護研究概論：3年生, 2単位 30時間 (千田みゆき)
- ・ 地域診断論Ⅰ：4年生, 1単位 15時間 (菊池チトセ)
- ・ 地域診断論Ⅱ：4年生, 1単位 30時間 (菊池チトセ, 千田みゆき, 山路真佐子, 櫻井繭子, 野田万里, 内田久子, 川端泰子)
- ・ 公衆衛生看護管理論：4年生, 1単位 15時間 (千田みゆき)
- ・ 看護研究セミナー：4年生, 2単位 90時間 (千田みゆき, 大森智美, 栗生田友子, 野田智子, 大賀淳子, 菊池チトセ, 山路真佐子, 大澤優子, 金子優子, 藤村博恵, 本谷久美子, 櫻庭奈美, 横山ひろみ, 大野美佐子, 加藤巳佐子, 櫻井繭子, 関根由紀子, 西岡ひとみ, 松坂充子, 青木君恵, 村田美穂, 川合美奈, 梶原貴宏, 齋藤美奈子, 塩見直子, 野田万里, 森麻希, 山本久美子, 内田久子, 工藤岳夫, 原明子, 鳥海美穂子, 加古幸子, 川端泰子, 松岡志津香, 小久保崇正, 田代ゆか)

【生活している人間の理解 (人文科学系)】

- ・ 心理学：1年生, 2単位 30時間 (大野美佐子)

(他学科での講義・演習)

- ・ 医療の基本Ⅰ (コミュニケーション／患者－医療人関係)：臨床検査学科1年生, 1単位 30時間 (大野美佐子ほか)
- ・ 医療の基本Ⅰ (コミュニケーション／患者－医療人関係)：臨床工学科1年生, 1単位 30時間 (大野美佐子ほか)
- ・ 社会の理解Ⅰ (コミュニケーション／患者－医療人関係)：理学療法学科1年生, 1単位 30時間 (大野美佐子ほか)
- ・ 医療の基本Ⅲ (医療安全管理とチーム医療)：理学療法学科3年生, 1単位 30時間 (大野美佐子ほか)
- ・ 医療の基本Ⅲ (医療安全管理とチーム医療)：臨床検査学科3年生, 1単位 30時間 (大野美佐子ほか)
- ・ 医療の基本Ⅲ (医療安全管理とチーム医療)：臨床工学科3年生, 1単位 30時間 (大野美佐子ほか)
- ・ 人体の構造と機能Ⅱ (生理学)：臨床検査学科1年生, 3単位 45時間 (金子優子ほか)
- ・ 人体の構造と機能Ⅱ (生理学実験)：臨床検査学科1年生A班, 1単位 45時間 (金子優子ほか)
- ・ 人体の構造と機能Ⅱ (生理学実験)：臨床検査学科1年生B班, 1単位 45時間 (金子優子ほか)
- ・ 人体の構造と機能Ⅰ (生理学)：臨床工学科1年生, 2単位 30時間 (金子優子ほか)
- ・ 人体の構造と機能演習Ⅰ (機能系)：理学療法学科1年生, 1単位 30時間 (金子優子ほか)
- ・ 人体の構造と機能演習Ⅱ (機能系)：理学療法学科1年生, 1単位 30時間 (金子優子ほか)
- ・ 人体の構造と機能実習 (機能系)：理学療法学科2年生, 1単位 45時間 (金子優子ほか)
- ・ 心理学：臨床検査学科1年生, 臨床工学科1年生, 2単位 30時間 (大野美佐子)

2-3. 達成度評価

基礎看護学領域：コロナ禍のため前期はWeb授業と対面授業での併用であったため、演習内容が一部制限されてしまった。しかし、演習は分散登校での実施となったため、教員が指導を担当する学生数が少なく、学生の技術習得の状況に合わせた指導を行うことができたと考える。後期は、全面対面で講義、演習を行った。今年度から、1年生が新カリキュラムとなり、看護方法演習Ⅰが新設された。看護方法演習Ⅰでは、対象の状態に基づいた看護援助を判断する力の育成を目指して、学習方法にアクティブ・ラーニングを取り入れた。教員が技術のデモンストレーションを実施して、学生がその技術を資料を基に体験するという今までの画一的な学習方法ではなく、その都度、患者の状況を設定し、ロール

プレイ、リフレクション、ワールドカフェ方式によるグループワークなどを用いた。学生が自ら患者に合わせた援助方法を考える学習方法を導入することにより演習を強化することができた。基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護学実習Ⅱについては、病棟で学生を受け入れる人数制限があるため、学内実習と臨地での実習を組み合わせた実習形態となった。臨地での実習の日数は制限されることとなったが、基礎看護学実習Ⅰ、Ⅱともに、患者を生活者としてとらえ、患者に合わせた日常生活行動の援助の必要性を考えることにより、看護師の役割や看護援助を行う意味を考えることができた。以上のことから、目標は7割程度達成できたと考える。

成人看護学領域：成人看護学の8科目の授業は、web授業でも、対面授業でも、学生が自ら主体的に学ぶ姿勢を培うことをねらいとして講義・演習を組み立てている。成人看護学概論では、成人看護の導入として、成人の健康を保持・増進する意義と看護の役割・機能について学習できた。成人看護学方法論Ⅰでは、慢性的な経過をたどる健康障害の特徴をふまえた生活療養支援の理解を深め、成人看護学方法論Ⅱでは、周手術期を中心とした健康障害の理解と具体的なアセスメント視点と支援の方法を学習し、成人看護学方法論Ⅲでは、がん患者・家族への看護の理解と支援の方法等、対象の健康障害のそれぞれの特性に関する理解を図るとともに、看護の方法を学習した。さらに、成人看護学方法論Ⅳでは、成人看護に必要な技術と知識の統合をはかり、学習目標は達成できた。とくに、成人看護学方法論Ⅰ-Ⅳでは、それぞれ、事例を多く取り入れながら理論や支援の方法を展開し、可能な限り双方向の授業となるように科目担当者全員で演習事例を精練し、受講者間でのグループワーク、ディスカッションを取り入れた。コロナ禍で対面授業のコマ数は少なく制限されたが、講義演習科目全体では、学習が深められ、達成度は8割程度であると考えている。実習3科目については、それぞれの目的・目標に照らしてⅠでは慢性期にある患者の看護を、Ⅱではおもに急性期の患者の看護を実践することができた。成人看護学実習Ⅲは、4年次前期に1週間で開講して3年目になるが、コロナ禍における実習内容の調整を図り、拡大する外来機能の一端を3種類の外来で体験し、学習を広げることができ、学修目標は8割程度達成できた。

老年看護学領域：3年次前期の老年看護学活動論は、看護過程の展開や認知症高齢者の理解を学ぶテーマでは対面授業を実施し、学生の理解や学びの進捗状況を知ることができた。看護技術演習の不足する内容は、後期の領域別実習の学内実習に位置づけ、教員が認知症の模擬患者となり学生ひとり一人に技術的な指導を行った。老年看護学概論では、高齢期を生きる人の特徴と高齢者の健康及び療養を支援する制度を示しながら授業を進め、学生は高齢者の特徴を踏まえた援助の必要性、支援に必要な制度を学習できた。対面授業により、学生同士の意見交換などを行うことができた。2年次前期の老年看護学実習Ⅰでは、コロナ禍のため受け入れが困難な実習施設が一部あり学内実習となったが、それ以外は一法人2施設において67名の学生を受け入れていただいた。学内実習では模擬デイサービスセンターの運営による演習及びロールプレイ、自宅学習を組合せ、高齢期を生きるということについて理解を深めることができた。老年看護学実習Ⅱでは、4年次前期、3年次後期ともに昨年に引き続き実習先の変更と臨地実習4日という制限があり、課題学習や学内実習により、学生は認知症と身体疾患を併せ持つ高齢者を理解し、個別性を踏まえた看護援助を導き出すことができたが、基盤となる学びの不十分さが明らかとなり、また、教員の指導力や指導方法の課題も明らかとなった。領域として目標は7割程度達成できた。

小児看護学領域：小児看護学概論は定型発達の子どもの成長発達の特徴と子どもを取り巻く社会状況を学習する科目である。続く小児看護学活動論の健康障害を抱える子どもと家族の看護につなぐため、今年度は各発達段階に特徴的な疾患の解説を講義内容に取り入れた。特に小児感染症については小児看護学活動論での時間確保が難しいため具体的な症状を示しながら解説を行った。コロナ禍前は概論にも離乳食や健康課題については演習を取り入れていたが、web授業でここ数年実施していなかった。今年度から対面授業となったものの感染拡大が懸念されるため、離乳食の試食は行わず、健康課題のグループワークは時間を短縮しての実施を試みた。時間的にはやや厳しい側面があった。小児看護学活動論では、健康障害を抱える子どもと家族への影響を理解し、健康障害を抱える子どもと家族に対するウェルビーイングを学習する。今年度もweb授業であったが、臨床看護師を講師に招き、入院患児の事例を用いながら具体的に講義を行っていただいた。看護過程の展開については、対面授業の時間をいただいたため、グループワークで各自が計画してきた看護計画の見直しや確認を行うことができた。小児看護学実習では、今年度も時間的拘束はあるものの、患児1名を受け持ち、看護過程の展開を通して、健康障害を抱える子どもと家族への看護を考えることができた。領域全体として、十分とはいえないが、目標は7～8割程度達成できたと考える。

母性看護学領域：今年度前期、母性看護学概論は新型コロナウイルス感染の影響によりオンラインで講義を行った。講義の感想を次の講義に盛り込んで学生との交流を図った。母性看護学活動論においては、演習ノートと称した冊子の配布とマイノート（自己学習用ノート）の作成を行った。演習ノートは学習の進度に合わせ、演習の振り返りができるように課題を作成し、口頭での助言やコメントの書き込みを行い学生との交流を行った。母性看護学実習では4箇所の実習施設で実習を行い、感染の影響で内容に制限もあったが、学内演習においてそれらを補充するように努めた。臨床側の多大な協力もあり、学生の反応から達成感のある実習となった。

精神看護学領域：「精神看護学概論」は全回にわたり Web 配信とした。昨年度に引き続き、「自殺」、「児童虐待」をはじめとする現代社会におけるこころの健康をめぐる複数の課題を取り上げ、最新の知見（情報）の提供と、3～4 人のスモールディスカッション（スマホなどの利用）を通じて、深く思考する姿勢を促した。また、看護師のメンタルヘルスについても十分に時間を割いて、自身の精神的健康の維持増進に寄与できるよう配慮した。「精神看護学活動論」は、看護過程の演習を除き、Web 配信とした。例年行っている当事者による 2 回の講義のうち 1 回は、当事者（精神障害者のご家族）の申し出により、当事者が出演している動画を視聴したうえで、スモールディスカッションをしたうえで、レポートを提出させた。また、これも昨年同様、アルコール依存者自助グループメンバーと教員とのディスカッションを動画撮影し、配信する手法をとった。ディスカッションでは、あらかじめ学生に提出させた「メンバーさんに尋ねてみたいこと」を教員が代弁した。ここでも配信授業の後にスモールディスカッションをしたうえで、レポートを提出させた。本企画は、当事者や教員にとっても得るものが多く、今後も工夫を重ねながら継続していきたい。「精神看護学実習」については、急性期病棟では多くの制限が課せられたが、自宅学習課題を加えて学びの内容が保証できるよう工夫した。慢性期病棟では例年に近い方法での実習を行うことができ、患者さんとのコミュニケーションを通して、自己のコミュニケーションの傾向を考えるとという実習目的を達成することができた。使用している「看護技術リスト」が実習目標の達成のために役立っている。昨年より学内日に教員が行う方法となった身体拘束のレクチャーは、順調に実施できた。4 年次の看護研究セミナーのテーマとして身体拘束を取り上げる学生が毎年のように存在しており、レクチャーの効果があらわれていると思われる。全体としての達成度は、8 割程度と考える。

地域看護学領域：在宅看護学概論はレジュメを穴埋め式にし、学生に好評であった。在宅看護学活動論の講義には特別講師を導入し臨場感ある内容とし、演習は最新の在宅医療機器を用いた体験学習、在宅での看取りを実施し学習効果を得た。公衆衛生看護学概論は最新の情報の提供に努め、公衆衛生看護学対象別看護論Ⅰ・Ⅱ、健康教育論Ⅰ・Ⅱ等は科目間の授業内容を整理した。公衆衛生看護学活動展開論Ⅰ・Ⅱと地域診断論Ⅰ・Ⅱは、新しい国家試験出題基準に対応できるように見直した。公衆衛生看護管理論は図表を使用し視覚的学習効果を工夫した。WebClass による遠隔授業は、わかりやすい授業を心掛け、対面授業で演習を増やして学生の学びを深めた。在宅看護学実習および公衆衛生看護学実習は、広範囲の地域に学生を配置するため、実習施設との連携・調整、学生へのオリエンテーションに努めた。学習到達度に対する学生の自己評価は高かったが、全体的には 80%程度の達成度と考える。

2-4. 次年度改善計画

基礎看護学領域：1 年次の看護方法演習Ⅰの学習内容を統合し結び付けられるように、2 年次の看護方法演習Ⅱの学習内容の精選、学習方法の検討を行い、演習をより強化していきたい。看護技術習得に向けては、自己学習の時間の確保を図り事前に学生に周知したうえで、計画的に技術習得に向けて技術指導を行っていきたい。また、基礎看護学実習Ⅰ、Ⅱの充実を図るためにも、学内実習と臨地での実習の関係性を考えるとともに、臨地実習指導者とも連携を取り合い、実習での学びが深まるようにしていきたい。

成人看護学領域：成人看護学概論、成人看護学方法論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳでは、生活習慣や労働・環境等に起因する成人期の健康障害の発生と病いによる生活への影響を基本的に理解し、生活者としての人をとらえる視点を強調し成人への看護を学習できるよう講義内容を構築する。5 つの成人看護学としての講義・演習科目が全体に関連し、実習における臨床での学習が展開できるよう内容を構成し、具体的な学習支援を組み入れて企画していく。年度・学年をまたいで開講する科目も含まれているのですべての成人看護学の学習科目を終えた時点で、変わりゆく臨床でのケアに対応できるよう、病態やケアのエビデンスを正確に押さえ、アセスメント力が培えるよう、講義・演習においては、事例やシミュレーションを援用し、アセスメント能力、計画立案能力の向上を図ることを目指す。成人看護学実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの臨地実習においては、更に学内と臨床との連携を強化したい。選択科目ではあるがパリアティブケア論は、開講時期が 4 年次にあるので、すべての成人看護学を統合ができるよう位置づけ、判断する力を強化したい。

老年看護学領域：老年看護学概論、老年看護学活動論においては、虚弱な高齢者の日常生活や高齢期の健康問題について学生の理解が進むように展開を工夫し、個別性をふまえた看護援助の実践につなげられるように授業を進める。老年看護学実習Ⅰ、老年看護学実習Ⅱでは、学生が高齢者を理解しようとする姿勢を養い、対象者の理解が深まるように学生の個々の学習の状況に基づく実習指導を実践したい。また、老年看護学実習Ⅰの経験を老年看護学概論へつなげる学びの構造を活かし、高齢期を生きる人の理解を強化したい。

小児看護学領域：次年度からの新カリキュラム導入に伴い、小児看護学概論が 2 年生前期へ、小児看護学活動論が 2 年生後期に開講となる。また、3 年生前期の小児看護学活動論は例年通りの開講となる。2 年生については、翌年より母子看護論も開講となるため、内容の精選が必要となる。しかし、少子化の昨今、学生が子どもと子どものいる家族の生活、そして健康障害を抱える子どもと家族のウェルビーイングを目指した看護について、具体的なイメージを持つことができるよう、授業の工夫をしていく必要がある。小児看護学実習については、臨床とのつながりもできてきた。今までで

上に臨床指導者との連携をとり、臨場感のある小児看護学実習となるよう、意見交換しながら指導を進めていきたい。母性看護学領域：全面对面の講義に戻るので、講義内容や資料を見直し、オンラインのよさも取り入れて工夫しながら実施していきたい。母性看護学活動論の中で使用している演習ノートも内容を整理し効果的なノートにできるようにしていく。母性看護学活動論では講義をより実習に結び付けていくために内容や方法を検討していく。実習においては、1つ1つの体験を大切に、その中から学べる最大限のものを学び取れるような実習を目指していきたい。可能であれば実習施設の指導者の協力を得て、母性看護でしか学べない生命誕生に直接的にも間接的にも携われる機会が持てるように調整をしていきたい。

精神看護学領域：これまでと同様に、「精神看護学概論」、「精神看護学活動論」、「精神看護学実習」の連続性を重要視した授業計画の作成、実施をすることで、「精神看護学実習」での学びを確実なものとする。コロナ禍における制限がある中で、他大学が行っている工夫（シミュレーション教育など）を参考にしつつ、新たな授業展開を模索していきたい。

地域看護学領域：在宅看護学概論や公衆衛生看護学概論は、教育媒体や試験内容を見直し学生の関心・理解を高める。在宅看護学活動論、及び公衆衛生看護学対象別活動論Ⅰ・Ⅱをはじめとする公衆衛生看護学関連科目は、国家試験出題基準に対応するよう授業内容を見直し、令和4年度カリキュラム改訂に向けて看護実践能力の育成にかかわる講義・演習・実習の繋がりと内容の充実を図り、看護技術到達度の見直し等の準備をする。次年度は、全面对面授業となるが引き続き感染予防対策を講じながら柔軟に対応し、学習態度の主体性向上のための工夫を続ける。また、実習時間や日数が制限されても、できるだけ授業と実習が結び付くよう、摘便モデル等を用いた体験型授業を増やすなど、演習の充実を図る。実習指導者や教員間の情報共有を密にし、実習前に修得しておくべき学習が修得できているよう、実習オリエンテーションの内容を検討する。

3. 研究

<看護関連科学領域>

3-1. 目的・目標

①網膜、イオンチャネルについて、基礎メカニズム解明のための研究を行う。特に情報処理等の機能に直結するメカニズムの解明に重点を置く。②教育現場でのカウンセリングの実践と改善を目的とする。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

①網膜に発現する多様な電位依存性Naチャネルの機能的意義の解明（金子優子）②教育現場でのカウンセリング（大野美佐子）

3-3. 達成度評価

①2022年度はWeb実習授業の準備など教育活動を中心に行った。達成度50% ②授業のほか学内でのカウンセリング業務の充実に向けて活動を行った。到達度50%

3-4. 次年度改善計画

①単一細胞RT-PCRの条件設定が難航しているが引き続き検討していく。②教育現場で必要とされるカウンセリングと学生支援について検討を進める。

<基礎看護学領域>

3-1. 目的・目標

研究活動とその発表を通じて、基礎看護学の発展に寄与することを目的とする。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

①私立看護系大学教員の離職意向の影響要因（横山ひろみ）②大学病院に勤務する看護師の職業的アイディティティとバーンアウトの影響要因（塩見直子）。③大学病院に勤務する看護師の感情調節・アサーティブネスがワーク・エンゲイジメントに及ぼす影響（加古幸子）

3-3. 達成度評価

①私立看護系大学教員の離職意向の影響要因について、研究を継続した。達成度60% ②大学病院に勤務する看護師の職業的アイディティティとバーンアウトの影響要因について、研究を継続した。達成度30% ③大学病院に勤務する看護師の感情調節・アサーティブネスがワーク・エンゲイジメントに及ぼす影響の基礎となる急性期病院に勤務する看護のワーク・エンゲイジメントの関連要因について学会発表を行った。達成度25%

3-4. 次年度改善計画

今後は、各教員が興味関心のある研究テーマに取り組み、研究力を高めていく。またプロジェクト研究費にも応募していきたい。

<成人看護学領域>

3-1. 目的・目標

研究活動とその発表を通じて、成人看護学の発展に寄与することを目的とする。成人看護学の広い分野の中で、成人看護学のアカデミックな探究を進めるために、それぞれが研究者として位置づけを明確にし、研究基盤を固め、基礎的な研究を積み上げていくことを目標とした。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

粟生田は、2022年度新規の科学研究費に基づく研究（札幌医科大学との共同研究2題）に参画し、さらに自ら研究者代表者として2021年度から獲得した科研費による研究を進めている。本谷は、前年度に獲得した所属学会研究助成による研究とともに、前々年度からの科研費に基づく研究を継続的に行った。櫻庭は、代表研究者として1題の科学研究費による研究を終了し、残り1題の研究継続をしている。村田は国際学会に共著で論文を投稿した。また、青木、原は新たに学部プロジェクト研究に申請し研究費を獲得して、本学での実践的な研究のフィールド確保に始動した。工藤は新たな研究の基盤固めを共同で進めている。

3-3. 達成度評価

粟生田は、2021年度採択された科学研究費（基盤研究C）において、高次脳機能障害者の健康増進プログラムについて研究をスタートしたが、コロナ禍にあり共同研究者との共同体制が十分に取れないためやや遅れている。しかし、これまで継続していた科研費が終了となり成果を発表し、学会優秀賞を得ることができた。そのほか科研費関連の研究2題を投稿し採択され発表にこぎつけた。科学研究費共同研究2題（札幌医大との共同研究は研究を開始したところである。以上、全体として達成度60%である。

本谷は、所属学会研究助成による研究成果を学術集会にて発表するとともに論文投稿し原著での採択が決定した。また、科研費の尺度開発についても学術集会での発表を終え、論文投稿中である。以上は、達成率70%である。

櫻庭は、共同研究支援グラントにおいて対面でのデータ収集が難しく、計画の修正が必要となったため、次年度に修正したものを進めていく予定である。科研費課題は、研究計画を修正し、現在、協力病棟のリクルートを行っている。以上、達成率60%である。

青木、原は、研究基盤を固めるべく場の開発を進め、年度末において機動力を発揮し研究を進めている。基盤づくりとしてはそれぞれ達成度60%である。

村田は、海外の学会でプロダクトを1件公表し、次年度に向けた準備に入っており、達成度は60%である。

工藤は、学位論文を兼ねて、海外の学会でプロダクトを1件公表し、研究基盤を固めている。

3-4. 次年度改善計画

領域としての教育、研究領域はかなり広範であり、人数が前年度によりやく定員を満たしたが、どの分野をだれが担うかについては検討を重ねている。合わせて、領域内の共同研究が進んでいない現状にある。多岐にわたる教育活動と研究活動を適時協働する体制を整えつつあるが、現体制でのさらなる基盤を着実に積み上げていきたい。

<老年看護学領域>

3-1. 目的・目標：

研究活動とその発表を通じて、老年看護学の発展に寄与することを目的とする。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

該当なし

3-3. 達成度評価

該当なし

3-4. 次年度改善計画

教育活動に重点を置きながら、高齢期を生きる人や支援機関等に関連する課題についての研究活動に取り組めるようにしたいと考えている。また、研究成果の学会発表や論文の投稿を目指したい。

<小児看護学領域>

3-1. 目的・目標

研究活動とその発表を通して、小児看護学の発展に寄与することを目的とする。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

メンバーそれぞれの研究グループにより研究活動をしている。①肢体不自由特別支援学校における栄養状態評価の充実に向けた評価シートの作成と提案（野田）②医療型重症心身障害児施設における保育士の職務継続支援や教育プログラムの検討（川合）③院内学級における教員と医療者との連携の現状～院内学級教員の語りから～（齋藤、野田）④病棟保育士のキャリアアップに関する実態調査（野田、川合、齋藤）

3-3. 達成度評価

昨年度より多く学会発表、論文投稿することができた。

3-4. 次年度改善計画

各メンバーが取り組んでいる研究をさらに発展させていきたい。

<母性看護学領域>

3-1. 目的・目標：母性看護学領域における看護の質の向上や現状の分析、教育活動の向上を目指し研究を行っている。今後は現在進めている研究をさらに継続、発展させていきたい。また実践現場と連携し共同研究を行っていききたいと考える。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

該当なし

3-3. 達成度評価

該当なし

3-4. 次年度改善計画

現在継続中の研究を発表の段階にまで持っていききたい。臨床現場との共同研究などもスタートできるように準備を行っていききたい。次年度は一人ひとりが自らのテーマについて研究活動に取り組めるようにしたい。プロジェクト研究費、学会発表など積極的に取り組んでいきたい。

<精神看護学領域>

3-1. 目的・目標

研究活動とその発表を通じて精神看護学の発展に寄与することを目的とする。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

①女性がん患者と医療サポーターが行う登山の効果（大賀淳子, 学外者）、②アディクション看護に関する研究（大澤優子, 学外者）

3-3. 達成度評価

①コロナ禍における女性がん患者に対する調査結果を関連学会で発表し、学会誌へ投稿した。達成度 100%。②論文発表を行った。達成度 100%

3-4. 次年度改善計画

①学会発表および論文投稿を予定している。コロナ感染状況が収束しつつあることから、登山再開をうけてあらたな研究テーマに取り組む。②アディクションにまつわる新たなテーマに取り組む。

<地域看護学領域>

3-1. 目的・目標

地域看護活動や保健師および訪問看護師のキャリアディベロップメントに関する研究、地域住民の健康の現状についての調査を継続し、研究のプロセスにおける地域との連携や研究成果が地域に貢献することをめざしている。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

①保健師の現任教育に関する新人保健師のニーズと現任教育体制の現状に関する研究（菊池チトセ, 千田みゆき, 山路真佐子）②こころの健康に関する研究—大都市近郊住民を対象として—（山路真佐子, 千田みゆき, 柴崎智美：継続）③「埼玉県西部地域における地域連携型新卒訪問看護師育成システムの構築」（西岡ひとみ, 千田みゆき：埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト）④日高市民の健康習慣に関する調査（千田みゆき, 菊池チトセ, 山路真佐子, 野田万里, 内田久子, 川端泰子）⑤地域における自殺対策の実態（山路真佐子, 野田万里：埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト）⑥埼玉県における新型コロナウイルス感染症が及ぼす看護職の職務にかかわる実態調査（澤登智子, 細谷美穂, 西岡ひとみ他）

3-3. 達成度評価

①報告書の作成と次の段階への研究テーマの検討中である。達成度 60% ②再度分析途中である。達成度 88% ③論文が完成し紙上発表を行った。達成度 100% ④倫理審査承認後、日高市と協議しながら質問紙配布・回収し、全数について解析し報告書を作成した。達成度 70% ⑤データを収集し、分析中である。達成度 40% ⑥報告書（冊子）を完成し各都道府県の看護協会会長宛てに郵送配布をした。達成度 100%

3-4. 次年度改善計画

①②今年度同様に継続する。③終了 ④倫理審査の承認を受け、アンケートを実施する。⑤分析の完了、及び学会発表を目指す。⑥終了

4. 診療

該当無し

5. その他

5-1. 自治体，政府関連委員の有無

埼玉県総合医局機構看護職員確保委員会委員（千田みゆき）、日高市健康づくり推進会議委員（千田みゆき）、日高市自殺対策推進連絡会委員（山路真佐子）、坂戸市自殺対策計画審議会委員（山路真佐子）、飯能市介護給付費等の支給に関する審査会委員（野田万里）、埼玉県ちちぶ地域医療介護連携研修会講師（加藤巳佐子）、埼玉県市町村総合相談支援体制構築アドバイザー（加藤巳佐子）、飯能市男女共同参画審議会会長（加藤巳佐子）、東京都保育士キャリアアップ研修会講師（野田智子）

5-2. 学術誌，編集委員，査読委員の有無

日本地域看護学会査読委員（千田みゆき）、聖路加看護学会査読委員（千田みゆき）、埼玉医科大学医学会編集委員（千田みゆき）、日本看護研究学会学術集会査読委員（千田みゆき）、「看護科学研究」査読委員（大賀淳子）、日本リハビリテーション看護学会学会誌編集委員（栗生田友子）、日本看護科学学会日本語論文査読委員（栗生田友子）、日本老年看護学会論文査読委員（栗生田友子）、日本リハビリテーション看護学会学術大会発表演題査読委員（栗生田友子）、日本老年看護学会学術大会発表演題査読委員（栗生田友子）、日本ニューロサイエンス看護学会第10回学術集会演題発表査読委員（栗生田友子）、医教編集部看護師国家試験対策問題「在宅看護論」監修委員（西岡ひとみ）、学研編集部看護師国家試験対策問題「在宅看護論」監修委員（西岡ひとみ）、メディカ出版看護師国試対策模擬試験問題監修委員（西岡ひとみ）、第32回日本産業衛生学会全国協議会ポスター表彰審査委員（櫻井繭子）、日本アディクション看護学会査読委員（大森智美，藤村博恵，大澤優子）

5-3. その他，社会あるいは医学貢献に関わる業務

【大学・大学院・その他の非常勤講師等】

札幌医科大学保健医療学部大学院老年看護学非常勤講師（栗生田友子）、獨協医科大学SDセンター認知症看護認定看護師教育課程非常勤講師（栗生田友子）、飯能看護専門学校非常勤講師（大賀淳子，大澤優子）、埼玉医科大学病院看護部教育委員会主催実習指導者研修講師（横山ひろみ）、埼玉医科大学認定看護管理者教育課程ファーストレベル非常勤講師（横山ひろみ）、埼玉医科大学主催実習指導者講習会講師（千田みゆき，野田智子，栗生田友子，大賀淳子，菊池チトセ，本谷久美子，西岡ひとみ，斎藤美奈子，塩見直子）比企准看護学校非常勤講師（梶原貴宏）、埼玉県介護支援専門員実務研修講師（加藤巳佐子）、埼玉県スクールカウンセラー（大野美佐子）、群馬パース大学非常勤講師（野田智子）、首都医校高度看護保健学科非常勤講師オンライン授業（西岡ひとみ）、千葉科学大学非常勤講師（青木君恵）

【学会役員・その他の学会関連】

日本看護研究学会評議員（千田みゆき）、埼玉医科大学医学会評議員（千田みゆき）、特定非営利活動法人日本健康教育士養成機構理事（野田智子）、日本循環器管理病予防学会評議員（菊池チトセ）、日本アディクション看護学会理事（大澤優子）、日本アディクション看護学会企画委員会委員長（大澤優子）、日本生理学会評議員（金子優子）、日本リハビリテーション看護学会 理事長（栗生田友子）、日本リハビリテーション看護学会 教育プロジェクト委員（栗生田友子）、日本リハビリテーション看護学会 将来構想プロジェクト委員長（栗生田友子）、日本看護科学学会代議員（栗生田友子）、日本看護管理学会代議員（栗生田友子）、日本老年看護学会代議員（栗生田友子）、日本リハビリテーション病院・施設協会理事（栗生田友子）、日本看護系大学協議会会員校災害連携教員（栗生田友子）、日本看護学教育学会広報・渉外・社会貢献委員（本谷久美子）、日本看護協会認定部認定看護師審査会構成員（櫻庭奈美）、NPO法人Cansur Linkaid 理事（櫻庭奈美）、日本災害看護学会教育委員会委員（村田美穂）、高知女子大学看護学会査読委員（村田美穂）、日本産業衛生学会産業看護部会幹事 研究担当リーダー（櫻井繭子）、日本産業衛生学会産業看護部会 研究活動費助成事業事務局（櫻井繭子）、第10回ニューロサイエンス看護学会学術集会実行委員（藤村博恵）

【その他】

日本看護協会 回復期・慢性期における看護の役割の明確化に係る調査検討委員会 委員長（栗生田友子）、厚生労働科学研究費補助金，がん対策推進総合研究事業，がんリハビリテーションの均てん化に資する効果的な研修プログラム策定のための研究：ライフプランニングセンターがんのリハビリテーション研修運営委員会，研究分担・協力（栗生田友子）、埼玉県看護協会埼玉県の看護を考える会委員（西岡ひとみ）、埼玉県看護協会「准看護師進学支援研修会および交流会」企画運営委員・講師（西岡ひとみ）、埼玉県看護協会「地域ケアシステム交流会」企画運営委員（西岡ひとみ）、埼玉県看護協会看護師職能委員会Iシンポジスト「コロナ禍における臨地実習の現状とこれからの新人教育」（西岡ひとみ）、埼玉県看護協会看護職のための心の保健室（新型コロナウイルス感染症拡大にかかわる看護職の心の健康支援事業）「あじさいルーム」開設準備室委員（西岡ひとみ）、NPO法人こころ相談員（櫻井繭子）、埼玉県看護協会災害看護対策委員会委員（加藤巳佐子）、埼玉県看護協会災害支援ナース養成研修企画運営（加藤巳佐子）、東京都保育士キャリアアップ研修エビペン講習（野田智子，斎藤美奈子）、日高市立高萩北小学校エビペン講習会講師（内田久子，菊池チトセ）、IHEAT 登録（千田みゆき，大森智美，野田智子，大澤優子，西岡ひとみ，加藤巳佐子，川合美奈，青木君恵，内田久子，塩見直子，山本久美子）、新型コロナウイルス感染症対策に係る狭山保健所支援業務（大賀淳子，野田智子，栗生田友子，菊池チトセ，

大澤優子,加藤巳佐子,川合美奈,塩見直子,山本久美子,原明子,小久保崇正,田代ゆか)、千葉科学大学 BLS プロバイダーコースインストラクター(青木君恵)、本学科研費アドバイザー制度科研費アドバイザー(栗生田友子) ASK 認定依存症予防教育アドバイザー(大澤優子)、埼玉医科大学がん専門医療人材(がんプロフェッショナル)養成プラン令和4年度埼玉医科大学包括的ライフステージサポート医療人養成コース(千田みゆき,野田智子,大賀淳子,大森智美,栗生田友子,菊池チトセ,山路真佐子,櫻庭奈美,横山ひろみ)

6. 業績

<看護関連科学領域>

6-1. 論文・学会発表・著書

①大野美佐子:ストレス対処の実感と若者が自分にかかる言葉に関する一考察,日本学校メンタルヘルス学会第26回大会,2022.3.4-5 (オンライン発表)

【総数:論文0件,著書0件,学会発表1件】

6-2. 獲得研究費:該当なし

6-3. 受賞:該当なし

6-4. 特許,実用新案:該当なし

6-5. 学会,研究会,セミナー等の開催実績

大野美佐子 埼玉県立川越女子高等学校保護者後援会(6/11) 教員研修会(12/22)

<基礎看護学領域>

6-1. 論文・学会発表・著書

①横山ひろみ,鳥海美穂子,関根由紀子,塩見直子,加古幸子,田代ゆか,宍戸裕子:新設科目「看護方法演習I」の狙いと特徴—学生の思考する力,判断する力を育てる学習方法の導入—,埼玉医科大学看護学科紀要,16(1),43-46,2023,3.

②Yukiko Kako,Eiko Suzuki:Factors Related to Work Engagement of Nurses Working in Acute-Care Hospitals,3rd Edition of Singapore Nursing Research Conference, March 16-18, 2023 | Singapore.

③久保田知念,富田幸江,宮寄祐子,横山ひろみ:大学病院における集中治療室に勤務する看護師の職業キャリア成熟とその関連要因,第42回日本看護科学学会,2022,12,広島.

④宮寄祐子,富田幸江,久保田知念,横山ひろみ:有床診療所に勤務する助産師のバーンアウトとその関連要因,第42回日本看護科学学会,2022,12,広島(オンライン開催).

⑤北島裕子,鈴木英子,美濃口真由美,横山ひろみ:勤務帯リーダー看護師のリーダーシップ行動への影響要因,第42回日本看護科学学会,2022,12,広島(オンライン開催).

【総数:論文1件,学会発表4件】

6-2. 獲得研究費:該当なし

6-3. 受賞:基礎看護技術Vベストティーチャー賞(演習部門)

6-4. 特許,実用新案:該当なし

6-5. 学会,研究会,セミナー等の開催実績:該当なし

<成人看護学領域>

①栗生田友子:共著:太田喜久子編:老年看護学—健康生活を支える高齢者理解と援助,第3版,第4章4節,5節,6節,7節,8節,9節,10節,第6章第1節を担当,医歯薬出版株式会社,2023.1.15,東京

②栗生田友子:特集 高齢者のせん妄を正しく理解して付き合う—たかがせん妄,されどせん妄—セミナー5 せん妄の看護・せん妄ケアにおける包括的な療養の視点,老年医学,60(9),803-807,2022,9

③栗生田友子:視機能看護分野に期待する「探究」—専門性のある「知」の構築のために,日本視機能看護学会誌,第7巻,1-4,2022.11.

④鳥谷めぐみ,長谷川真澄,栗生田友子ほか:医療機関におけるせん妄ケアの質評価のためのパイロットスタディ,札幌保健科学雑誌,第12号,29-35,2023.

⑤本谷久美子,荒木田美香子:「看護学実習における病態教授活動評価尺度(ESPE-NCP)」の開発—信頼性・妥当性の検証.第48回日本看護研究学会学術集会.2022/8/27~28.

⑥本谷久美子,齋藤美奈子,大工原慈仁,茂手木明美,藤村朗子:臨地実習指導者が求める周手術期領域の知識項目に関するミニマム・エッセンシャルズ—回答状況の分析—,日本看護学教育学会第32回学術集会,

2022/8/6～7.

⑦大工原慈仁, 本谷久美子, 藤村朗子, 齋藤美奈子, 茂手木明美: 臨地実習指導者が求める周手術期領域の知識項目に関するミニマム・エッセンシャルズ—自由記載の分析—, 日本看護学教育学会第 32 回学術集会, 2022/8/6～7.

⑧原明子, 栗生田友子: 自宅で生活する高次脳機能障害者のリハビリへのプロセス, 日本リハビリテーション看護学会第 34 回学術大会, 2022. 11.

⑨Hyeon Ju Lee, Miho Murata(2022) Qualitative Approaches to Investigating Health in Disaster: Cases from Nepal and Japan. In: Kanbara, S. et al(eds) Disaster Nursing, Primary Health Care and Communication in Uncertainty. Springer.

⑩Takeo Kudo, Eiko Suzuki: Factors related to the occupational commitment of nurses working in a university hospital in the Kanto area of Japan. International NURSING AND PUBLIC HEALTH CONFERENCE Singapore, 2023. 3

【総数: 論文 3 件, 著書 2 件, 学会発表 8 件, その他 1 件】

6-2. 獲得研究費

- ①栗生田友子(研究代表): 科学研究費助成金, 高次脳機能障害者への「健康関連アクティビティ」を維持・増進する介入方法の開発, 基盤研究(C), 2021-2024 年 (4 年総額 377 万円)
- ②栗生田友子(研究分担者): 科学研究費助成金, 鳥谷めぐみ代表, 高齢軽症脳卒中患者を対象とした再発予防を目指すデジタルヘルスシステムの構築, 基盤研究(C), 2022-2025
- ③栗生田友子(研究分担者): 科学研究費助成金, 長谷川真澄代表, 高齢者のせん妄及び身体拘束予防ケアの質向上を目指す包括的教育パッケージの開発, 基盤研究(C), 2022-2024
- ④本谷久美子(研究代表者): 科学研究費助成金, 科学研究費助成金, 看護学教師のコンピテンシーモデルに基づく病態教授活動自己評価尺度の開発, 基盤研究(C), 2020-2022.
- ⑤野村泰朗, 川合美奈, 櫻庭奈美: 臨床現場での看護学実習を代替および補充する訓練手法に関する研究, 令和 3 年度 埼玉大学との包括連携協定に基づく共同研究支援 Grant, 研究分担者 (2021 年 10 月～2024 年 9 月)
- ⑥櫻庭奈美: 認知症高齢がん患者に対する疼痛ケアプログラムの開発と有用性の検証, 基盤研究(C), 2019-2022. 期間延長.
- ⑦青木君恵: A 県のがん診療連携拠点病院におけるコロナ禍のがん看護の実態 (2021 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費 14.9 万円)
- ⑧原明子, 栗生田友子: 高次脳機能障害となった子を持つ親の経験 (2022 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費 29.1 万円)

6-3. 受賞

- ①日本老年看護学会最優秀賞受賞: 長谷川真澄, 栗生田友子, 道信良子, 鳥谷めぐみ, 木島輝美: (共著): せん妄リスクのある患者への看護実践後: 一般病院におけるエスノグラフィー研究, 日本老年看護学会誌, 26(1), 69-78, 原著, 2021. 8.
- ②最優秀発表賞: 原明子, 栗生田友子: 日本リハビリテーション看護学会第 34 回学術大会, 自宅で生活する高次脳機能障害者のリハビリへのプロセス. 2022. 11.

6-4. 特許, 実用新案: 該当なし

6-5. 学会, 研究会, セミナー等の開催実績

- ①栗生田友子: 第 10 回日本ニューロサイエンス看護学会学術集会大会長, 日本ニューロサイエンス看護学会
原明子: 同 実行委員, 2022 年—2023 年 3. 31
- ②栗生田友子, 原明子: 日本リハビリテーション看護学会第 34 回学術大会 学会企画交流集会「高次脳機能障害のある人の退院後の回復; 当事者と家族の体験を聞く」 2022. 11.

<老年看護学領域>

6-1. 論文・学会発表・著書

- ①太田喜久子編著, 加藤巳佐子: 老年看護学, 健康を支える高齢者理解と看護援助, 第 3 版, 6 章 2 節 (240-246), 第 7 章 (259-278), 医歯薬出版, 2023, 東京.

【総数: 論文 0 件, 学会発表 0 件, 著書 1 件】

6-2. 獲得研究費: 該当なし

6-3. 受賞: 老年看護学概論 Teacher of the Year Award (講義部門)、保健医療行政論 Subject of the Year Award (演

習部門)

6-4. 特許, 実用新案: 該当なし

6-5. 学会, 研究会, セミナー等の開催実績: 該当なし

<小児看護学領域>

6-1. 論文・学会発表・著書

①齋藤美奈子, 野田智子: 在宅で幼児期の重症心身障害児を育てる母親の育児ストレスとその関連要因, 埼玉医科大学看護学科紀要 16 巻, p 1-13, 2023, 3.

②野田智子, 齋藤美奈子: 肢体不自由特別支援学校における栄養評価シートの導入に関する検討, 埼玉医科大学看護学科紀要 16 巻, p15-26, 2023, 3.

③高橋梢, 野田智子: 小児領域に勤務する看護師の思いに関する文献検討, 埼玉医科大学看護学科紀要 16 巻, p 27-36, 2023, 3.

④Tomoko Noda: Nutritional assessment of children with severe mental and physical disabilities attending a special needs school for the physically disabled, 26th EAFONS, 2023, 3, 10-11, web 配信.

⑤本谷久美子, 齋藤美奈子, 大工原慈仁, 茂手木明美, 藤村朗子: 臨地実習指導者が求める周手術期領域の知識項目に関するミニマム・エッセンシャルズー回答状況の分析ー, 日本看護学教育学会第 32 回学術集会, 2022. 8. 6-8. 7, web 配信.

⑥大工原慈仁, 本谷久美子, 藤村朗子, 齋藤美奈子, 茂手木明美: 臨地実習指導者が求める周手術期領域の知識項目に関するミニマム・エッセンシャルズー自由記載の分析ー, 日本看護学教育学会第 32 回学術集会, 2022. 8. 6-8. 7, web 配信.

⑦茂手木明美, 本谷久美子, 大工原慈仁, 齋藤美奈子: 卒後 2 年目看護師の入職から 2 年間の経験とその意味づけ, 日本看護学教育学会第 32 回学術集会, 2022, 8, 6-8, 7, web 配信.

【総数: 論文 3 件, 学会発表 4 件, 著書 0 件, その他 0 件】

6-2. 獲得研究費:

①野田智子 (研究代表者): 肢体不自由特別支援学校における栄養状態評価の重質に向けた評価シートの作成と提案 (文部科学省科学研究費補助金, 基盤 C, 2019~2022).

②川合美奈 (研究代表者), 三国久美, 木浪智佳子: 医療型重症心身障害児入所施設における保育士の職務継続支援や教育プログラムの検討, (科学研究費助成, 基盤研究 C, 2019-2022).

③松坂充子, 川合美奈: コットで過ごす NICU/GCU の子どもへのおくるみ使用に関する実態調査, 2022 年度保健医療学部プロジェクト研究費助成.

6-4. 特許, 実用新案: 該当なし

6-5. 学会, 研究会, セミナー等の開催実績: 該当なし

<母性看護学領域>

6-1. 論文・学会発表・著書

①恵良真理子, 今村久美子, 青木智子, 藤村博恵, 大賀明子: 同期型オンラインを使用した育児支援活動を実践している助産師の活動に対する認識, 第 63 回日本母性衛生学会学術集会, 2022. 9, 神戸市.

【総数: 論文 0 件, 学会発表 1 件】

6-2. 獲得研究費:

①松坂充子, 川合美奈: コットで過ごす NICU/GCU の子どもへのおくるみ使用に関する実態調査, 2022 年度保健医療学部プロジェクト研究費助成.

6-3. 受賞: 該当なし

6-4. 特許, 実用新案: 該当なし

6-5. 学会, 研究会, セミナー等の開催実績: 該当なし

<精神看護学領域>

6-1. 論文・学会発表・著書

①大賀淳子: 学生のコミュニケーション能力向上を目指した授業の工夫, 看護人材育成, 2022 4・5 月号, 72-76. 2022.

②松下年子, 河口朝子, 原田美智, 神坂登世子, 米山和子, 小林一裕, 大澤優子, 渡邊裕見子, 渡部李菜: 新人看護師の入職時から 2 年目までの心的経験と悩んだ時の支え 縦断的調査, アディクション看護, 19 (1), 74-91, 2022. 3.

③滝本杏奈, 大賀淳子, 中澤温子, 佐藤久美子, 浦川陽子, 関千寿花, 橋本しをり, 女性がん体験者のコロナ禍における活動自粛による心身に变化と再開した山行の影響, 第42回日本登山医学会学術集会, 2022, 6月, 富山市.

【総数: 論文2件, 学会発表1件】

6-2. 獲得研究費: 該当なし

6-3. 受賞: 精神看護学概論 Teacher of the Year Award (講義部門), 病むことの心理 Teacher of the Year Award (演習部門), 看護過程論 Teacher of the Year Award, Best Effort of the Year Award (講義科目)

6-4. 特許, 実用新案: 該当なし

6-5. 学会, 研究会, セミナー等の開催実績: 大澤優子, 日本アディクション看護学会2022年度研修会セミナーの開催

<地域看護学領域>

6-1. 論文・学会発表・著書

①近藤恵子, 清水光子, 櫻井繭子, 田仲理江, 後藤理香: 都市部に居住する高齢者のうつ傾向とソーシャルキャピタルとの関連. 北海道公衆衛生学雑誌, 35(2), 81-88, 2022.

②千田みゆき: 特別企画 令和4年度カリキュラム改正の概要と本学科新カリキュラムの特徴, 埼玉医科大学看護学科紀要, 16(1), 39-42, 2023.

③千田みゆき, 菊池チトセ, 山路真佐子, 野田万里, 内田久子, 川端泰子: 令和4年度日高市健康づくり調査委託業務日高市健康習慣に関する調査報告書, 2023.

④千田みゆき, 菊池チトセ, 山路真佐子, 野田万里, 内田久子, 川端泰子: 令和4年度日高市健康づくり調査委託業務日高市健康習慣に関する調査報告書別冊一居住地別調査結果一, 2023.

⑤田中哲也, 千田みゆき: 在宅認知症高齢者の支援に関する地域包括支援センター看護職の困難感とその関連要因, 日本地域看護学会第25回学術集会, 2022. 8. 27-28. 富山.

⑥川端泰子, 千田みゆき, 山路真佐子, 菊池チトセ: 市町村保健師の職業的アイデンティティとその関連要因, オール埼玉医科大学研究の日, 2022. 11. 5. 埼玉医科大学毛呂山キャンパス.

【総数: 論文4件, 学会発表2件】

6-2. 獲得研究費: 該当なし

6-3. 受賞: 該当なし

6-4. 特許, 実用新案: 該当なし

6-5. 学会, 研究会, セミナー等の開催実績: 該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

今年度の目標に国家試験の全員合格を挙げたが、13回生の看護師国家試験の新卒合格率は100% (全国平均95.5%)、保健師国家試験の新卒合格率は95.5% (全国平均96.8%)であった。コロナ禍の中、前年同様、日数や人数等が制限され、あるいは突然中止となる臨地実習があり、学内で学んだことを十分に統合することができなかったと考える。

学内での授業は、前期は遠隔授業が中心であったが、後期はほとんど対面で授業を行うことができた。感染拡大の状況に応じて中止となった臨地実習は、実習施設と調整をしつつ学内実習に切り替えるなどの対応を迅速に行うことができた。看護学実習に関する意見交換会は、コロナ禍前のように集合形式で行うことができ、活発な意見交換や情報交換を行った。また、看護師等養成所指定規則の改定に伴って改正したカリキュラム改正の運用を開始したが、1年目は滞りなく運用することができた。

委員会活動は、コロナ禍にあっても概ねそれぞれの役割を果たすことができた。公開講座はZoomを使って開催した。看護学科FD及び看護学研究科FDは感染予防に努めつつ例年通り3月に実施した。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

感染症の状況にも配慮しつつ、継続して看護師国家試験の全員合格を目指す。4年次の領域別実習終了後からは学内での模擬試験や個別指導を行って学生支援体制を強化していく。編入生1名の入学があるので、なるべく多くの選択科目を受講できるよう時間割を調整する。今年度は、新カリキュラム2年目となるとともに、コロナ禍前に近い状態で対面授業が可能なので、指定規則改定の意図に沿って、感染対策を取りつつ、学内ではシミュレーション学習などの体験学習を取り入れていく。

引き続き、新カリキュラムの円滑な運営に努める。実習施設との連携・調整を密にし、教員の欠員については公募して補充を図る。新型コロナウイルス感染症の感染状況とそれに伴う行政等の動向に応じて感染防止に努め、大学の教育・研究・社会貢献の維持・向上に努める。

2. 臨床検査学科

1. 構成員

茅野 秀一 (KAYANO, Hidekazu) : 教授 : 学科長 : 指導教員 (大学院) : 人体病理学、分子病理学、医学教育学 : 博士
飯野 望 (IINO, Nozomi) : 教授 : 指導教員 (大学院) : 遺伝子検査学、血液学、臨床血液学 : 博士
小野川 傑 (ONOGAWA, Tsuyoshi) : 教授 : 指導教員 (大学院) : 免疫学、臨床免疫学、輸血移植学 : 博士
佐藤 正夫 (SATO, Masao) : 教授 : 指導教員 (大学院) : 微生物学、医動物学 : 博士
藤原 智徳 (FUJIWARA, Tomonori) : 教授 : 指導教員 (大学院) : 生理学、神経科学 : 博士
山岸 敏之 (YAMAGISHI, Toshiyuki) : 教授 : 指導教員 (大学院) : 解剖学、発生生物学 : 博士
小野 公嗣 (ONO, Koji) : 准教授 (4月) : 指導教員 (大学院) : 解剖学 : 博士
黒田 真代 (KURODA, Masayo) : 准教授 : 大学院教員 (大学院) : 細胞検査診断学 : 博士
野寺 誠 (NODERA, Makoto) : 准教授 : 指導教員 (大学院) : 衛生学、予防医学、産業保健学 : 博士
村本 良三 (MURAMOTO, Yoshimi) : 准教授 : 臨床化学
内田 康子 (UCHIDA, Yasuko) : 講師 : 臨床生理学 : 修士
大村 一之 (OHMURA, Kazuyuki) : 講師 (1月) : 臨床生理学 : 修士
小峰 伸一 (KOMINE, Shinichi) : 講師 : 臨床検査学 : 修士
高橋 祐介 (TAKAHASHI, Yusuke) : 講師 (8月) : 大学院教員 (大学院) : 臨床化学 : 博士
伴場 裕巳 (BAMBA, Hiromi) : 講師 : 指導教員 (大学院) : 生化学、栄養学、腫瘍学 : 博士
水谷 諭史 (MIZUTANI, Satoshi) : 講師 : 大学院教員 (大学院) : 生理学、臨床生理学、自律神経学 : 博士
山本 晃司 (YAMAMOTO, Koji) : 講師 : 指導教員 (大学院) : 免疫検査学、糖鎖生物学、腫瘍生物学 : 博士
山本 梓司 (YAMAMOTO, Shinji) : 講師 (4月) : 薬理学 : 博士
古川 敏基 (FURUKAWA, Toshiki) : 助教 : 修士
山賀 貴 (YAMAGA, Takashi) : 助教 : 大学院教員 (大学院) : 博士
川田 真衣 (KAWATA, Mai) : 助手
竹内 慶太 (TAKEUCHI, Keita) : 助手
鈴木 正彦 (SUZUKI, Masahiko) : 客員教授 : 薬理学、薬事関係法規 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標

学科名称を平成27年4月より「健康医療科学科」から「臨床検査学科」に改称したことが示す様に、本学科は「幅広い教養と生命の尊重を基盤とする高い倫理観と人を思いやる豊かな人間性を持ち、確かな医学知識と医療技術を修得して質の高い臨床検査技師を養成する」使命を第一の達成目標として掲げ、「働く場の衛生、環境保全あるいは食の安全などに関する幅広い知識と技術を修得して、卒業後は保健衛生活動を実践する行動力を備えた第一種衛生管理者、健康食品管理士を養成する」使命を第二の達成目標として掲げている。

臨床検査技師・健康食品管理士の受験資格、第一種衛生管理者の申請に必要な科目についてはアドミッションポリシーおよびディプロマポリシーと各科目の対応を示したカリキュラム・マップを作成し、相互の関連性を重視した時間割が構成されている。2022年度の新入生から臨床検査技師養成のカリキュラムが改定されたことにより、1年次科目から順次、改訂科目が開講されることとなった。臨床検査技師の国試合格率向上を目指し、1年次前期から臨床検査系科目を配し、早期に臨床検査学の一部を体験できるようになっている。本学科で開講している科目は科学的思考の基盤となる数学・自然科学系科目（数学、統計学、物理学・物理学実験、化学Ⅰ・Ⅱ・化学実験、生物学・生物学実験）と人間と生活の理解につながる人文科学・社会科学系科目（倫理学、哲学、文学、心理学、人間発達学、社会学、社会福祉論、法学、スポーツ科学）および外国語系科目（英語Ⅰ・Ⅱ、英会話、医学英語、ドイツ語、原書講読）を必修あるいは選択科目として配置して、基礎分野の各領域科目を偏りなく学習してもらうことを目標にした。また、基礎医学系の科目として、人体の構造と機能Ⅰ～Ⅲを開講し、ヒトの解剖学・生理学および生化学について学び、人体の正常な機能と構造の統合的な理解を深めた。さらに、専門基礎系科目（医療の基本Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、病理学、微生物学、血液学、免疫学、薬理学、公衆衛生学・実習、保健医療福祉総論、医用工学概論・実習、情報科学・実習、医動物学・実習）を開講し、臨床検査学分野の基礎的知識と技術を身につけるとともに、臨床検査系科目として、臨床病理学総論、臨床検査総論・実習、基礎臨床化学・実習、臨床生理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・実習、臨床検査概論、基礎検査技術、

病理組織細胞検査学・実習、臨床血液学・実習、臨床化学・実習、放射性同位元素検査学、臨床微生物学・実習、臨床免疫学・実習、輸血移植学・実習、遺伝子検査学、検査管理学、検体情報処理科学、検体採取処理技術などを開講して、幅広く充実した臨床検査医学教育を行うことを目標にした。加えて、臨地実習については学内施設並びに学外施設での実習をより充実させる一方、国家試験の資格要件科目としての検査学特論などを開講して、臨床検査技師国家試験に備える内容を充実させた。さらに、研究マインドを身につけ、研究意欲を高める目的で卒業研究を開講し幅広い医学的知識を習得することを目標とする。

2-2. 教育実績 (担当者)

【当学科講義・演習】

《入学前》

高大接続プログラム (学校型推薦入試および総合型選抜入試の合格者を対象) (茅野、山岸、小野、川田)

《1年生》

医療の基本Ⅰ (茅野)、人体の構造と機能Ⅰ (解剖学) (山岸・小野)・人体の構造と機能Ⅱ (生理学) (藤原・山本梓)、人体の構造と機能Ⅲ (生化学A) (伴場)、病理学 (茅野)、血液学 (飯野)、臨床検査概論 (小野川・村本・山本晃)、基礎臨床検査技術 (小野川・黒田・村本・内田・小峰・伴場・山本晃・大村・高橋・古川・山賀・川田)

《2年生》

医療の基本Ⅱ (茅野)、人体の構造と機能ⅡB (伴場)、微生物学 (佐藤)、薬理学 (山本梓)、病理組織細胞検査学 (茅野)、臨床血液学 (飯野)、臨床検査総論 (小峰)、基礎臨床化学 (村本)、免疫学 (小野川)、臨床免疫学 (山本晃)、臨床生理学Ⅰ (内田)、臨床生理学Ⅱ (内田・大村)

《3年生》

医療の基本Ⅲ (茅野)、公衆衛生学 (野寺・山賀)、臨床病理学総論 (茅野・黒田・川田)、病理細胞検査診断学 (黒田・茅野・川田)、臨床化学 (村本)、臨床微生物学 (佐藤)、輸血移植学 (小野川)、遺伝子検査学 (飯野)、臨床生理学Ⅲ (内田・大村)、検査管理学 (小峰)、検査情報処理科学 (水谷)、検体採取処理技術 (小峰・竹内・黒田・小野川)、環境保健学 (野寺・山賀)、衛生管理学 (野寺・山賀)、食品衛生学 (佐藤)、栄養学 (伴場)

《4年生》

検査学特論 (茅野・飯野・小野川・佐藤・山岸・小野・黒田・野寺・村本・内田・小峰・伴場・水谷・山本晃・大村・高橋・山賀・山本梓)、産業保健学 (野寺・山賀)、保健社会学 (野寺・山賀)

【当学科実習】

《1年生》

物理学実験 (水谷)、化学実験 (山本梓)、生物学実験 (山本晃・山賀)、人体の構造と機能Ⅱ (生理学実験) (藤原・山本梓・大村・山賀)、人体の構造と機能Ⅲ (生化学実験) (伴場・高橋・小峰・村本・古川)、情報科学実習 (水谷・茅野・竹内)

《2年生》

病理組織細胞検査学実習 (黒田・茅野・川田)、臨床血液学実習 (飯野・小峰・川田)、臨床検査総論実習 (小峰・山賀・古川)、医動物学実習 (佐藤・竹内)、基礎臨床化学実習 (村本・伴場・高橋・古川)、臨床生理学Ⅰ実習 (内田・大村)

《3年生》

公衆衛生学実習 (野寺・山賀)、臨床化学実習 (村本・伴場・高橋)、臨床微生物学実習 (佐藤・竹内)、臨床免疫学実習 (山本晃・小野川)、輸血移植学実習 (小野川・山本晃)、臨床生理学Ⅱ実習 (内田・大村)、臨床生理学Ⅲ実習 (内田・水谷・大村)、卒業研究 (茅野・飯野・小野川・佐藤・藤原・黒田・野寺・村本・内田・伴場・水谷・山本晃・大村・高橋・山賀・山本梓・川田)

《4年生》

臨地実習 (茅野・飯野・小野川・佐藤・藤原・山岸・小野・黒田・野寺・村本・内田・小峰・伴場・水谷・山本晃・大村・高橋・山賀・山本梓・川田・古川)

【他学科講義・実習等】

《看護学科》

情報リテラシー (茅野・水谷・大村・古川)、人体の構造機能Ⅰ (山岸・小野)、人体の構造機能Ⅱ (藤原・山岸・小野)、人体の構造機能Ⅲ (藤原・山岸・小野)、免疫学 (小野川)、公衆衛生学 (野寺・山賀)、公衆衛生学国試補講 (野寺・山賀)、食物・栄養学Ⅰ (伴場)、食物・栄養学Ⅱ (伴場)、病原微生物学 (佐藤)、看護総合セミナー (飯野)

《臨床工学科》

細胞生物学 (山岸・小野・藤原)、人体の構造と機能Ⅰ (藤原・山本梓)、人体の構造と機能Ⅱ (山岸・小野) 公衆衛生学 (野寺・山賀)、病理学総論 (茅野・黒田)

《理学療法学科》

情報科学演習 (茅野・水谷・大村)、ヒトの病気Ⅰ (茅野)、ヒトの病気Ⅱ (茅野)、医療の基本Ⅲ (茅野)、人体の構造と機能演習Ⅰ (藤原・山本梓)、人体の構造と機能演習Ⅱ (藤原・山本梓)、人体の構造と機能実習 (機能系) (藤原・山本梓)、人体の構造と機能 (構造系実習) (山岸・小野)、公衆衛生学 (野寺・山賀)、栄養学 (伴場)、病理・微生物学演習 (佐藤)

【本学医学部および法人関連学校の講義・実習等】

《医学部》

病理総論循環器（2年生）（茅野）、感覚器（4年生）（茅野）、診療の基本（3年生）（茅野）、地域医学（野寺）、薬理学実習（山本梓）

《短期大学》

人体の構造と機能Ⅰ、人体の構造と機能Ⅱ（内田）

《総合医療センター付属看護専門学校》

公衆衛生学（野寺・山賀）、公衆衛生学国試補講（野寺・山賀）、環境と人間（山賀）

【他大学等の講義・実習】

《群馬パース大学》臨床検査学総合演習Ⅰ、臨床検査学総合演習Ⅱ（小野川）、《湘央医学技術専門学校》臨床免疫学、免疫検査学特論（小野川）、《西武医学技術専門学校》輸血検査学（小野川）、免疫検査学Ⅱ（山本晃）、《杏林大学》病態生理学、病態生理学実習（藤原）、《東京慈恵会医科大学》産業保健学（野寺）、《桐蔭横浜大学》バイオサイエンスⅠ（村本）、《日本医療科学大学》生理検査学実習Ⅰ（生理学的検査）（内田）、《秩父看護専門学校》解剖生理学Ⅱ（内田）

《飯能看護専門学校》人体の機能（山本梓）

【大学院教育】

《埼玉医科大学大学院修士課程医学研究科》

病理学概論（茅野）、環境微生物学特論（佐藤）、病態生理学（藤原）、生体・病態医学特論（藤原）、生体機能形態学概論（山岸・小野）、環境衛生科学（野寺）、分析医科学（飯野）、臨床検査医学特論（小野川）、栄養学特論（伴場）、《埼玉医科大学大学院修士課程看護学研究科》

人体統合機能論（藤原）、病態生理（藤原）

2-3. 達成度評価

COVID-19の感染対策のため登校が制限されながらも可能な限り対面授業を取り入れた結果、配信授業は非常勤講師の担当科目に限られ、1年次の配信授業は文学・倫理学・法学のみ、2年次の配信授業はヒトの病気Ⅰ～Ⅳ、疫学、社会福祉総論のみとなり、3年次・4年次には配信授業はなくなった。3年次選択科目の企業実習は受け入れ先がなく開講できなかったが、卒業研究も感染対策を講じながら実施可能となった。臨地実習もおおむね通常通りに実施できた。授業評価を見る限り学生の一定の理解を得られたと考えている。面談などを通じて担当科目だけでなく学生の諸問題に対応すべく指導した。ただし、1年生で1名の留年と7名の退学、2年生で9名の留年と6名の退学、3年生で2名の留年と1名の退学、4年生で2名の留年があった。COVID-19の学修への影響は低学年ほど大きいと考えられた。臨床検査技師国家試験は昨年度の83.6%に比べ、新卒合格率は98.1%と大きく改善した（53名中52名）が、既卒者合格は16名中3名にとどまった。2年次では累積GPA値が大きく割り込み、我々の意図に反した結果となり、低学年からの指導強化が一層必要と考えられた。当学科の教育目標を達成する上で教員の相互理解と協力が重要であるのは論を待たない。

以下、教員のコメント

- a) 病理学分野では開講時に配布資料を一括して配布し、予習復習のしやすい環境を形成した。病理組織細胞検査学（2年）では定期試験問題案を学生に作成提出させることによって学修のポイントを理解させる工夫をした。臨床病理学総論（3年）では平成30年度からヒトの病理組織像の観察を主軸とし、バーチャルスライドを駆使した病理学総論の復習と実臨床で経験する機会が多い厳選された代表的疾患の病態理解とを結びつける工夫を行った。4年生では基本的画像をまず解説し、基本的事項を繰り返し解説した結果、国試の病理学領域の成績は向上した（茅野）。
- b) 臨床血液学実習では班ごとに課題に取り組みさせたことで、学生が互いに助け合って解決することを目標に指導した。概ね、予定通り行えたが、コミュニケーションが上手く取れない学生もおり、今後の課題となった。（飯野）
- c) 講義や実習で課す課題を通じて考える力を伸ばすことを重視してきたことで、考えようという姿勢が学生に見られるようになったと感じている。その効果は国家試験対策で実感できる。（小野川）
- d) 国家試験に必要なことは教えることができたが、臨地実習に必要な事も加えるよう検討したい。（佐藤）
- e) 新カリキュラムに伴い、講義時間数に変更があったが、混乱なく講義が実施でき、おおむねシラバス通りに行えた。（藤原）
- f) 講義に関してはシラバス通りにおこなえたが、組織実習に関しては内容に対して時間が不足していた。（山岸）
- g) R5年度入学予定者のうち希望者に対して、高大連携プログラムを行った。内容は、1年生の人体の構造と機能Ⅰの内容のうち骨学の講義・実習をダイジェスト版である。目的は、大学における講義・実習のスピード感を体験することを主とした。入学後実際に骨学の講義を受けた後の面談で、プログラムに参加して心構えができていてよかったと

いう感想を聞くことができた。(小野)

- h) 臨地実習前技能評価トライアルの内容をブラッシュアップできた。授業・実習はシラバス通りに実施できた。(黒田)
- i) 社会医学系科目については、各学科ともに国家試験に対応した教育が行えた。(野寺)
- j) 講義・実習・国家試験対策、いずれも創意工夫し学生のレベルアップに努めた。一定の成果が得られたと考える。(村本)
- k) 低学年から講義と実習の課題を通じてノート作りを課し、長期にわたる学習の一例を体験させることができた。まだ不十分な学生もいるが、一定の成果が得られたと考える。(内田)
- l) 講義・実習とも、おおむね納得できる達成度であったと思う。(小峰)
- m) 概ねシラバスに沿って遂行し、WebClass を用いた課題および feedback を充実することが出来た。(伴場)
- n) 概ねシラバス通り達成できた。(水谷)
- o) 課題をベースに学生の理解度を把握し、講義や実習、国家試験対策で活かすことが出来た。(山本晃)
- p) 概ねシラバス通り達成できた。(大村)
- q) 概ねシラバス通り遂行し、達成できた。(山本梓)
- r) 演習・実習では概ねシラバス通りに達成できた。(川田)
- s) 復習がしやすいように配布資料を工夫したことで、学生が自ら勉強するようになったと感じる。授業では、その知識に関連した問題を解かせることで、重要点の再確認を行った。(山賀)

【大学院教育】

- a) 2022 年度は担当科目の修士課程講義は開講されなかった。(茅野)
- b) 概ね目標を達成することが出来た。学位(修士)審査は主査1件を担当した。(飯野)
- c) 2022 年度は担当科目の講義は開講されなかった。(小野川)
- d) 概ね目標が達成できた。学位(修士)審査は副査3件を担当した。(藤原)
- e) 概ね目標を達成できた。学位審査は博士 副査1件、修士 主査1件を担当した。(山岸)
- f) 概ね目標が達成できた。学位(修士)審査は副査1件を担当した。(小野)
- g) 2022 年度は担当科目の修士課程講義は開講されなかった。(伴場)
- h) 概ね目標が達成できた。学位(修士)審査は副査1件を担当した。(山本晃)

2-4. 次年度改善計画

【各教員からの次年度計画について】(番号は2-3に対応)

- a) 配信授業がなくなり、対面授業の学修支援における強みを実感した。次年度以降も WebClass など学修支援システムを活かしつつ、試験問題作成管理も含めた包括的なカリキュラム運営を続けたい。(茅野)
- b) 基本的な知識の定着を図るため、課題の取り組みを早期に実施し、勉強する習慣を身に付けさせるよう工夫を図る。(飯野)
- c) 引き続き、講義資料や実習内容などの部分的手直しを実行しながら、免疫学とそれをベースにした輸血移植学に対する興味や関心につながる教育を目指していきたい。(小野川)
- d) 特論試験の成績が満足できないものだった。頻出問題を再確認させ、さらに対策を考えていきたい。(佐藤)
- e) 基礎的な項目をきちんと整理して理解させるように努める。特に用語の意味を正しく理解して、論理的な説明ができるように指導する。また、WebClass を使い、学生が自主的に学習に取り組める環境を作る。実習では、講義の成績を加味した班分けを行い、学生同士が互いに高めあえるような環境を作る。(藤原)
- f) 本年度より人体の構造と機能 I (解剖学)として独立した。理解度の向上を目的に、講義と実習を連続的に行っているが、実習時間が限られることから、その内容について検討したい。また機能系との関連についても言及していく。(山岸)
- g) 高大連携プログラムの実施についてその規模と内容を精査するとともに、今後も継続的にプログラム実施の効果

に

ついて検証を行っていきたい。(小野)

- h) 各学年のつながりを考え、学習内容が効率よく学べるように工夫したい。(黒田)
- i) 衛生管理者の必須科目については、内容をより実践的なものとし、本学独自の養成カリキュラムを確立することにより、「役に立つ衛生管理者」の育成を目指したい。(野寺)
- j) 生理検査学の初段階における講義と実習の時期を調整して、関心や理解が深まるよう工夫し、その後の学習意欲に繋がるよう心がける。(内田)
- k) 講義・実習ともに学生の興味や理解度が高まる様により一層の工夫をしていきたい。(小峰)
- l) 思考力を養いながら、講義や実習内容を簡潔にまとめさせるよう内容を絞った指導をしていきたい。(伴場)

- m) 学生が各々の考える力を導き出すことに注力した。次年度も考えて行動できる学士を育成する。(水谷)
- n) 課題や講義内容をブラッシュアップしながら、講義や実習において学生の弱点克服に努めていきたい。(山本晃)
- o) 学生が実習中に自主的に行動し、疑問点を解決できるように促した。引き続き学生の実習に臨む姿勢を強化するとともに、講義や実習で学んだ基礎知識からどのように臨床データを判読すれば良いか演習を通して理解を深められるよう努める。(大村)
- p) 講義毎の確認試験実施や、レポートのフィードバックを行うなどして論理的思考の育成に努める。(山本梓)
- q) 講義・演習で学んだことを実習につなげ、学生自身で疑問点を解決できる力を培えるように指導を行う。(川田)
- r) 実習を通して講義で学んだ原理を確認し、理解を深められる様な指導を行った。実習開始前に注意事項をスライドにて説明し、学生の理解向上に努める。(高橋)
- s) 公衆衛生学は出題範囲が広くて覚えることが多いため、なるべく授業内で覚えてもらえるよう、説明を身近な話題に置き換えることで理解力と記憶定着の工夫に努めたい。(山賀)
- t) 国家試験や臨地実習において必要な知識を伝え、学生自らが進んでまとめられるよう、理解し易い指導・資料作成に努める。(竹内)
- u) 講義での学びを実習の前知識として活かせるように工夫し、理解を深めてもらえるように努めていきたい。(古川)

【大学院教育】

- a) 2022 年度は担当科目の修士課程講義は開講されなかった。次年度以降も継続して開講されるよう期待する。(茅野)
- b) 近年の遺伝子・染色体解析の現場を取り巻く問題を提起したうえで、課題テーマについて調べて貰い、その内容を討議した。(飯野)
- c) 2022 年度は担当科目が開講されなかった。(小野川)
- d) 特定のテーマに焦点を絞り、レポートを提出させ、その内容について議論し、理解を深めるような講義を展開した。(藤原)
- e) 担当する講義時間数が変わったことから、講義内容を検討し、構成を少し変更した。(山岸)
- f) 教員・大学院生がそれぞれの研究内容について、初見のひとにどう説明するかについて全員で議論を行った。(小野)
- g) 2022 年度は担当科目の修士課程講義は開講されなかった。(伴場)

【学科全体としての自己評価と次年度計画について】

2022 年 8 月 18 日—19 日、第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会を日高キャンパスで開催した。それまで比較的落ち着いたコロナ禍であったが開催ひと月前から第 7 波に襲われ、対面開催を想定して進めていた大会準備はリモート開催と対面開催の併用を余儀なくされた。しかし、学会のリモート開催をひと月前からサポートしてくれる業者はなく、他学科の ZOOM アカウント全てを借用し、各教室の PC 端末を使用するなどして、学科教員が総出で汗をかき、何とか開催することができた。COVID-19 感染対策の状況下で、各教員は労苦を惜しまず学会運営を全うした。教育面においても学会同様にシラバス記載の授業目標を達成するために教育を遂行する努力を重ねたと評価できる。学生の授業評価を反省の材料に、学習効果を向上させる努力も見られた。一方、担任制度は、1 年生は基礎科目の教員を中心として固定し、2 年生および 3 年生の担任は臨床検査学系の教員を中心に持ち上がり制とし、さらに 4 年生については学生の自主性に期待して、学科長が代表担任として対応するが、個々の相談については、臨地実習・国家試験対策・進路相談・卒業研究の各作業班 (WG) があたることにした。これは学生の学習面および生活面での問題解決の上で効果的であったと思われる。当学科では、教育指導の質を高めるために、また生活上および学習上での悩みを早期に解決に導くために学生の動向を把握して各教員が誠意をもって対応しているが、臨床検査技師国家試験の受験を放棄せざるを得ず卒業を選ぶ学生たちの進路指導にはまだ改善の余地がある。4 年生の臨床検査技師国家試験対策については、手厚い補講対象者を増やす一方で、模擬試験結果などから浮かび上がった学生ごとに異なる苦手科目をそれぞれ 3 科目選び重点的に補強する方法をとり、新卒者の国試合格率は 98.1%と改善した。すでに 2 年生時の科目を中心とした基本的事項が身に着けていない学生が多かったことが我々の検討で判明しており、その最も効果的な対策は個々の学生の意識改革、モチベーションの維持であることは論を待たない。既卒者に対しては e-ラーニングを準備したが閲覧数が少なく、更なる改善が必要である。

本年度は 4 年生に各自就職活動を積極的に行うよう指導したが、自分で採用情報を収集し、履歴書を準備するといった基本的なことは身につけていない学生が見受けられた。将来の就職への見地を広げるため 2 年秋に就職活動のためのキックオフセミナーを実施し、さらに「履歴書の書き方・面接の受け方を指導した。卒業時の就職内定率向上を今後も目指したい。

2022 年度の新入生からの臨床検査技師養成カリキュラム改訂に伴い、大幅な講義・実習内容の見直し、教育機器・機

材など教育設備の充実を図る。これにより、学部生と大学院生の授業・教育満足度と学習意欲ならびに医療への関心をいっそう高めていきたい。また、多くの入試出願者が12月までに進学先を決定したいとのトレンドを受け、学校型推薦定員の増加や指定校の増加、高大接続プログラムの充実につなげて1年前期の理科学科目とのすり合わせも検討していきたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標

臨床検査学科の研究の目的・目標は、第1に、化学、生化学、生理学、解剖学、分子生物学などの基礎医学分野の研究や、微生物学や免疫学、医動物学、情報科学、医用工学、薬理学、公衆衛生学、病理学、臨床化学、輸血学、血液学、臨床生理学など臨床検査医学分野の幅広い研究を通じて、人間の健康に関わる種々の疾病や病態あるいは生体の機能と構造に関わる科学現象の解明に貢献する新たな知見を得ること、さらに迅速な診断業務に寄与する新たな医療技術を開発すること等にある。第2に、環境保健学、産業保健学、保健栄養学などの保健系の分野の研究を推進し、衛生・食品分野での新たな知見を得ることも研究の目的・目標にしている。また当学科では国家試験合格率を高める教育方法の探究も目標の一つに掲げている。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

【基礎医学系・臨床検査医学系・環境食品科学系】

- (1) 1) 肺腺癌における新規腫瘍マーカーの探索（山本晃、佐藤：保健医療学部プロジェクト研究）
 - 2) がんにおける糖鎖異常と哺乳類シアリダーゼの影響（山本晃：東北大学との共同研究）
 - 3) 多糖型シアリダーゼ阻害剤の開発（山本晃：九州大学との共同研究）
- 4) 膀胱癌における形質膜シアリダーゼ NEU3 の影響（山本晃：東北医科薬科大学 分子生体膜研究所、泌尿器科との共同研究）
 - 5) 抗ウイルスシアリダーゼ阻害薬 Zanamivir の抗腫瘍効果について（山本晃：Griffith University との共同研究）
 - 6) リソソーム蓄積症における NEU3 発現調節による治療への応用（山本晃：University of Oxford との共同研究）
- (2) 実験的敗血症侵襲下における低体温による臓器障害の亢進にかかわる key mediator の探索（小野川、黒田）
- (3) 骨髄赤芽球島・巨核球の観察：多重免疫蛍光染色法を用いて（茅野、黒田、川田）
- (4) 嗜好品の代謝に関与する遺伝子型の解析およびそれを用いた予防医学的教育への応用（飯野）
- (5) 長寿関連遺伝子を中心とした遺伝的背景と生活習慣との関連についての検討（佐藤）
- (6) 社会的認知に対する 5HT 神経系の関与に対する研究（藤原：保健医療学部プロジェクト研究）
- (7) 天然資源由来の新しい多発性硬化症治療薬の探索（山本梓、鈴木、吉川、岩佐）：保健医療学部プロジェクト研究）
- (8) 神経ペプチドによるサーカディアンリズムの変化に関する研究（水谷、藤原）：保健医療学部プロジェクト研究）
- (9) Papanicolaou 染色における組織診断への応用（川田、茅野、黒田：保健医療学部プロジェクト研究）
- (10) 絶食一再摂食における小腸粘膜の回復に関する研究（伴場、高橋）：保健医療学部プロジェクト研究）
- (11) 閉塞性睡眠時無呼吸症候群に対する持続陽圧呼吸療法アドヒアランス予測のための新たな検査指標の検討（大村）
- (12) 胚心臓の心内膜床形成での、ケモカイン CXCL12 の役割りを検討し、間葉の遊走に関係している可能性を得た（山岸、奥田、西本：保健医療学部プロジェクト研究）
- (13) マイクロプラスチック摂取による生殖器官の遺伝子発現変化に関する検討（山賀、山岸、伴場：保健医療学部プロジェクト研究）
- (14) マウスの自発活動量による 5HT 神経系の制御（古川、藤原：保健医療学部プロジェクト研究）
- (15) 脾臓発生過程における核内転写因子 NR5A1 の役割（小野、山岸：保健医療学部プロジェクト研究）
- (16) 脳内における D-アミノ酸代謝の生理学的意義（小野）

3-3. 達成度評価

【基礎医学系・臨床検査医学系・環境食品科学系】

- (1) 肺腺癌細胞において形質膜シアリダーゼ NEU3 が EGFR 変異を有する細胞で発現が上昇し、特に薬剤耐性株の細胞で発現が亢進していることが分かってきた。今後は、既存の分子標的薬と NEU3 の発現の関係についても詳細に解析を行い、他のシアリダーゼの発現分布についても更に検討を進めていく予定である。達成度：70%
- (2) 敗血症モデルマウスへの酵素阻害剤投与は血中に白血球を留め、組織障害が対照群よりも軽度である可能性が推測される。現在、引き続き血中マーカーおよび免疫組織化学染色を用いた肺組織の解析を続けている。達成度：70%
- (3) 赤芽球増殖を伴う骨髄異形成症候群、骨髄増殖性腫瘍における病理診断技法の向上を目的として研究を行い、その成果の一部を 2021 年度に続いて第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会で学生発表として提示できた。多様な血液疾患における骨髄赤芽球島の分布様式について検討した。免疫組織化学、多重免疫蛍光免疫染色など多様な手法での観察を試みた。日本病理学会の希少がん診断事業や特発性造血障害の中央診断委員として（骨髄病理）の対応

に追われた。達成度：70%

- (4) カフェインおよびアルコール代謝に関わる遺伝子型の解析方法が確立し、再現性のある一定の結果が得られた。
達成度：25%
- (5) 長寿関連遺伝子を中心にした遺伝的背景と生活習慣との関連の検討。達成度：50%
- (6) マウスの社会認知試験において、薬理学的手法を用いた解析を行い、社会行動の制御におけるドパミンとオキシトシンの相互作用について解析した。研究成果の一部を神経科学会で発表した。達成度：50%
- (7) 多発性硬化症の新規治療薬開発を目指し研究を進めている。本年度は、多発性硬化症モデルマウスに食用茸類を投与する実験を行い、4種の茸類に脱髄抑制効果および運動障害改善効果を有することを明らかとした。達成度：70%
- (8) ニューロペプチド Y およびオレキシン-A の行動におよぼす影響についてアンタゴニストを用いて明らかにした。今後は神経ペプチドの脳脊髄液中の日内変動と行動の関連を検討する。達成度：50%
- (9) Pap 染色での色素分布を解析する技法を確立させた。確立した解析法での再現性やデータの信頼性の向上、他臓器での解析を継続して行う予定である。達成度：60%
- (10) 再摂食による近位部での絨毛の変化を捉えることができた。しかし、その変化に関連する因子に関しては変動が見られなかった。達成度：40%
- (11) 持続陽圧呼吸療法におけるアドヒアランスの予測に鼻腔通気度検査から得られる指標が関連することを明らかとし、予備研究結果の論文が受理された。またこの結果から埼玉医科大学病院呼吸器内科病棟にて新たな検査手法を研究中。達成度：50%
- (12) 心内膜床形成で起こる上皮-間葉形質転換により形成された間葉の遊走に CXCL12 が関与している可能性を得た。
達成度：65%
- (13) オスのマウスに直径 50 μ m の MP を 4 週間投与し、精巣から RNA を抽出して遺伝子の発現変化を比較したが、代表的なストレス応答関連遺伝子に変化はみられなかった。粒径のサイズが異なると遺伝子発現の変化が起きるか検討できていない。また、メスのマウスでも検討を行いたい。達成度：25%
- (14) 社会的序列を形成させたマウスによる全脳の 5-HT 分泌や脳組織の含有量を調べ、社会認知機能と 5-HT 神経系の関係について検討した。研究成果の一部を学会で発表した。達成度：60%
- (15) 久留米大学からの遺伝子組換えマウスを導入し、脾臓における NR5A1 の発現を、多重蛍光免疫染色によって観察した。再現性良く観察できた。(小野、山岸：保健医療学部プロジェクト研究) 達成度：70%
- (16) 脈絡叢における、D-アミノ酸酸化酵素の発現を再現性よく検出することができた。(小野) 達成度：60%

3-4. 次年度改善計画

学科教員は当学科のみならず他学科の講義を受け持つなど、非常に多くの授業を担当しているため、教育における負担が大きいうという過密な環境下にあった。加えて令和 4 年度は、新型コロナウイルスによるいわゆる「コロナ禍」がなお続いたことによる負担もかなりあったと思われる。しかし、大学および学部プロジェクト研究を含む研究助成にも応募し、各教員は自身の専門分野の研究テーマに取り組む努力をしたと概ね評価される。また、複数の教員同士が共同で研究を推進するという連携もうまくとられていた。さらなる学会への積極的な参加も、実験結果が論文発表につながることも期待できると思われる。また研究設備が不十分なことや、コロナ禍やウクライナ情勢によると思われる試薬の値上がりや納品の遅れなどもあり、明確な結果を得ることができなかったテーマもみられた。学内での研究設備体制を積極的に整えつつ研究を継続させ、研究の達成度をより向上させていくとともに、当学科内の教員同士がいつもの連携を図り、要領よく実験を行えるシステムを構築しながら、学科内の共同研究を盛り上げていきたい。なお公的研究助成等へも、意欲的に応募をしていくように促していきたい。

以下、教員のコメント

- ・肺腺癌において発現が亢進する形質膜シアリダーゼ NEU3 が触媒作用により糖脂質糖鎖を切ることにより細胞膜に含有する糖脂質の組成を変化させることがわかった。次年度はその糖脂質を LC/MS により詳細に解析し定量分析を試みる。
- ・骨髄における赤芽球増殖が顕著な MDS や骨髄増殖性腫瘍例の症例収集に努めた。骨髄病理診断について日本病理学の希少がん診断支援事業、特発性造血障害中央診断に参画したほか、造血器腫瘍の WHO 分類第 5 版を受けて日本検査血液学会で教育講演を行った。詳細な赤芽球島や巨核球の形態評価の手法に有用な多重蛍光免疫染色法を駆使して今後さらに検討していきたい。
- ・長寿関連遺伝子を中心にした遺伝的背景と生活習慣との関連について、各調査データとの相関を検討し精査を進めた。
- ・心内膜床形成での CXCL12 受容体 (CXCR7) についても検討し、間葉の遊走と CXCL12-CXCR7 シグナルの関係を明らかにしたい。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無
該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

茅野秀一：日本リンパ網内系学会編集委員・Journal of Clinical and Experimental Hematology など査読 4 件

飯野望：埼玉県臨床検査技師会誌「埼臨技会誌」査読委員

藤原智徳：Behavioral Brain Research など査読 3 件

山岸敏之：Congenital Anomalies 編集部 編集幹事、Associate Editor, 編集委員

野寺誠：日本微量栄養学会査読委員（評議員兼任）

村本良三：日本医療検査学会査読委員・査読 3 件、埼玉県臨床検査技師会誌「埼臨技会誌」編集委員

山本梓司：Phytotherapy Research 査読 1 件

大村一之：日本臨床検査学教育協議会誌「臨床検査学教育」査読 1 件

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

茅野秀一：日本病理学会病理診断コンサルテーション委員、日本医学教育学会代議員、日本臨床検査学教育協議会評議員・第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会大会長、東京骨髄病理研究会世話人、厚生労働省特発性造血障害に関する調査研究班・骨髄異形成症候群中央診断委員（病理）、全国医学部国際交流協議会常任理事（財務）、LSI メディエンス（株）顧問、本学倫理審査委員、本学保健医療学部入試委員、本学保健医療学部入試実施小委員、本学保健医療学部学務委員、本学医学部同窓会常任委員・会計役員

飯野望：首都圏関東甲信地区遺伝子・染色体検査研究班世話人、埼玉県臨床検査技師会学術部員・生涯教育委員会委員・研究班運営委員会委員・精度保証施設認証委員会委員、埼玉県臨床検査技師会遺伝子染色体検査研究班副班長、日本臨床検査学教育協議会臨地実習前指導者講習会調整者（関東甲信地区）、本学保健医療学部学生部委員会委員、本学保健医療学部ハラスメント相談員

小野川傑：厚生労働省臨床検査技師国家試験出題基準改定検討会委員、日本臨床検査学教育協議会常務理事（事務局長）、本学保健医療学部学務委員会委員、杏林大学保健学部同窓会副会長

佐藤正夫：日本寄生虫学会評議員、本学医学研究センター（安全管理部門）感染分野兼任

藤原智徳：日本神経科学学会会員、本学保健医療学部学生部委員会委員

山岸敏之：日本先天異常学会評議員、日本先天異常学会編集委員、本学保健医療学部自己点検評価委員会委員、本学学部横断的カリキュラム検討委員会委員、本学アドミッションセンター運営委員会委員

黒田真代：本学保健医療学部自己点検評価委員会委員、本学保健医療学部入試委員会委員、本学保健医療学部入試実施小委員

野寺誠：日本産業衛生学会代議員、日本産業衛生学会関東地方会幹事、日本衛生学会評議員、日本微量元素学会評議員、日本微量栄養学会評議員、日本臨床検査教育協議会国家試験問題検討委員、埼玉県労働基準協会連合会講師、中央労働災害防止協会執筆委員、日本産業・医療ガス協会試験委員、本学医学研究センター（安全管理部門）廃液等環境分野担当委員、本学広報委員

村本良三：生物試料分析科学会 理事、日本臨床化学会 評議員、日本医療検査学会 評議員、埼玉県「埼臨技」編集委員、本学入試委員会委員

内田康子：本学保健医療学部学務委員会委員

伴場裕巳：本学ヒト幹細胞研究倫理審査専門部会部会員、本学保健医療学部図書委員会委員

山本晃司：埼玉県臨床検査技師会 免疫血清班副班長 精度管理解析実務委員（血清検査）、本学広報委員、本学麻薬及び向精神薬取り締り委員会委員

大村一之：埼玉県臨床検査技師会 臨床検査技師養成校連絡協議会委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

【代表的な当学科論文】

- ① Iwasa K, Yamagishi A, Yamamoto S, Haruta C, Maruyama K, Yoshikawa K. GPR137 Inhibits Cell Proliferation and Promotes Neuronal Differentiation in the Neuro2a Cells. Neurochemical Research. 2023, 48:996-1008.
- ② Miyagi T, Yamamoto K.. Sialidase NEU3 and its Pathological Significance. Glycoconjugate Journal, 2022, 39: 677-683.
- ③ Shima Y, Miyabayashi K, Mori T, Ono K, Kajimoto M, Cho HL, Tsuchida H7, Uenoyama Y, Tsukamura H, Suzuki K, Choi MH and Toida K. Intronic Enhancer Is Essential for Nr5a1 Expression in The Pituitary Gonadotrope

and for Postnatal Development of Male Reproductive Organs in a Mouse Model. International Journal of Molecular Sciences. 2023, 24, 192. doi.org/10.3390/ijms24010192

- ④ 菅野佳之、村本良三、伴場裕巳．災害および在宅医療現場を想定した環境がコバSB 101プラスのCRP測定性能に与える影響．医療検査と自動化 2023, 48: 68-74.

【代表的な当学科学会発表】

(A) 基礎医学系

- ① 小野川傑．臓器障害を伴う全身性炎症反応の重症化予測を目的とした IL6 レセプター測定の基礎的検討．第 50 回 日本救急医学会総会、東京、2022 年 10 月 19 日
- ② 古川 敏基、藤原 智徳．マウスの自発活動量でみられる社会的促進に対する 5HT 神経系の関与 Neuro2022 那覇 2022 年 7 月 2 日
- ③ 山岸 敏之．ニワトリ胚における心内膜床形成過程での Cxcl12 mRNA の局在．第 62 回日本先天異常学会学術集会、金沢、2022 年 7 月 29 日～31 日

(B) 臨床検査医学系

- ① 川村航生、仁平桃華、川田真衣、伴場裕巳、黒田真代、茅野秀一．鉄ヘマトキシリン液の保存温度と核の染色性の関係、第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会、埼玉、2022 年 8 月 19 日
- ② 諸熊啓人、内田祐花、塩川博司、大胡涼香、長久保夏音、大堀薫、飯野望．アルコールおよびカフェインの代謝に関与する遺伝子型の解析、第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会、埼玉、2022 年 8 月 19 日
- ③ 茂垣実里、内田康子、大村一之．腕時計型ウェアラブルデバイスを用いた血圧モニタリングの基礎的検討．第 58 回日臨技関甲信支部・首都圏支部医学検査学会、栃木、2022 年 10 月 2 日

【代表的な当学科著書】

該当なし

【総数：論文 7 件、学会発表 19 件、著書 0 件】

6-2. 獲得研究費

1. 山本晃司：文部科学省科学研究費 若手研究「シアリダーゼ NEU3 を標的とした肺腺癌に対する新規治療法の開発」(120 万円)
2. 山本晃司、佐藤正夫：2022 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「肺腺癌における新規腫瘍マーカーの探索」(35 万円)
3. 山本晃司：奨学研究費「がんにおける糖鎖異常と哺乳類シアリダーゼの影響」(200 万円)(東北大学との共同研究)
4. 山本梓司：若手研究(基金 21K15352)「2-カルバ環状ホスファチジン酸の薬理作用の解明」(2023 年度: 160 万円)
5. 山本梓司、鈴木正彦、吉川圭介、岩佐健介：2022 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「天然資源由来の新しい多発性硬化症治療薬の探索」(35 万円)
6. 藤原智徳、山本梓司：2022 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「社会的認知に対する 5HT 神経系の関与に対する研究」(36 万円)
7. 小野川傑：文部科学省科学研究費 基盤研究 C「実験的敗血症における低体温下での MMP, ADAM 活性阻害による肺保護の試み」(80 万円)
8. 小野川傑、黒田真代：2022 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「生体侵襲下において免疫系が受ける概日リズムの影響」(40 万円)
9. 伴場裕巳、高橋祐介：2022 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「絶食-再摂食における小腸粘膜の回復に関する研究」(25 万円)
10. 山岸敏之、奥田晶彦、西本正純：2022 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「胚心臓の心内膜床形成過程における CXCL12、CXCR7 の局在とその役割」(36 万円)
11. 山岸敏之、甲斐理武：日本学術振興会 基盤研究 (C)「ゼブラフィッシュ胚心臓における刺激伝導系細胞の可視化とその発生過程の発現情報収集」(80 万円)
12. 山賀貴、山岸敏之、伴場裕巳：2022 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「マイクロプラスチック摂取による生殖器官への影響は、遺伝子の発現変化が関与するか」(35 万円)
13. 古川敏基、藤原智徳：2022 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「マウスの自発活動量による 5HT 神経系の制御」(10 万円)
14. 小野公嗣、山岸敏之：2022 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「脾臓杆状内皮細胞における Ad4BP

発現と作用機序の解析」(40万円)

15. 川田真衣、茅野秀一、黒田真代：2022年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「Papanicolaou染色における組織診断への応用」(20万円)

16. 大村一之、内田康子：2022年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究費「閉塞性睡眠時無呼吸症候群に対する持続陽圧呼吸療法アドヒアランス予測のための新たな検査指標の検討」(48万円)

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

1. 茅野 秀一、佐藤 正夫、小野川 傑、山岸 敏之、黒田 真代、高橋 祐介、飯野 望、村本 良三、小野 公嗣、内田 康子、水谷 諭史、藤原 智徳、伴場 裕巳、野寺 誠、小峰 伸一、山本 晃司、山本 梓司、大村 一之、古川 敏基、山賀 貴、川田 真衣、竹内 慶太：日本臨床検査学教育学会、第16回日本臨床検査学教育学会学術大会 事務局 2022年8月18、19日

2. 飯野 望：埼玉県臨床検査技師会 遺伝子染色体検査研修会 「遺伝子検査を学ぶための最初の一步」講師 2022年11月25日

3. 山本 晃司：埼玉県臨床検査技師会 免疫血清研修会 (ア)「免疫測定法の原理と特徴」(イ)「免疫検査におけるピットフォール」2022年5月22日

4. 山本 晃司：埼玉県臨床検査技師会 免疫血清研修会 「亜鉛の有用性」2023年2月22日

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本学科のPlanは優れた臨床検査技師を養成するためのカリキュラムを構築し、支援体制を強化することである。Doについてはこの年報に記載してきた。Checkの項目である令和4年度の点検・評価結果を以下に述べる。

構成員について：2022年度、助教3名が講師へ昇格した(薬理学・一般検査学・臨床生理学)ことは慶事であった。一方本年度で定年を迎えた教員が4名おり(臨床化学・病理学・公衆衛生学・一般検査学)、2名が来年度も特任教授または特任講師として引き続き常勤教員を続けることになった。これに伴い教員を公募した結果、適切な採用ができたと考えているが、病理学の教授公募においては適切な人材の発掘に至らなかった。学内の兼担制度を利用して若手教員が臨床検査の現場に出る機会を設けており、教員や学生への刺激になっていると考えられる。臨床現場の経験者で教育や研究に意欲があっても学位が足かせとなり採用が困難な場合や、病院から学校への勤務シフトによる経済的不安など、教員の確保が難しい要因と考えられる。

教育・学生支援：COVID-19による学生の登校制限が徐々に緩和される中、各教員はシラバスに掲げたカリキュラムの実践と学生指導に総じて意欲的に取り組んだと評価できる。多くの教員は、他学科の授業も担当し、教育の負担が非常に大きく、過密な講義・実習・演習を担当する状況下でありながら、学生の教育満足度を向上させるべく努力を怠らなかった。コロナ禍において、特に若手教員の負担が大きく、非常勤講師の配信動画の作成支援、Vimeoの操作、学修管理システムWebClassの設定などに多大な時間を割いてきたが、配信授業を最大限減らすことで相当量の負担が軽減できたと考えている。これまで利用度の低かった学修管理システムWebClassリテラシーは急速に向上したと思われるので今後も利用したい。例年のことであるが当学科での累計GPAの推移をみると、1年生で2以上からあったものが学年を経るごとに低下する傾向が強い。今年の進級・卒業判定の結果(1年の留年1名・退学7名、2年の留年9名・退学6名、3年の留年2名・退学1名、4年の留年2名)から特に2年生の成績低下が顕著であることが分かる。学生の就職活動については、4年生から積極的に行ってもすでに遅く、少なくとも3年進級時から開始するよう指導した。また、低学年から社会に参画する意識を持たせるように求人情報を連絡することとした。また、3年後期から面接講座など就活準備のための学修機会を提供した。前年同月比で2022年3月における就職内定率は向上した。学生対応のトラブルも少数ながら認められ、前年度に引き続いて看護学科大野講師にFD講演をお願いし、学科教員の注意喚起、啓蒙を行ったが今後も続けたい。今年度から新カリキュラムが改訂され、1年生から順次新カリに沿った授業内容となっていく中で新カリの目玉ともいえる臨地実習前技能評価トライアルを3月末に実施した。今回は、医学部OSCEの運営に永年携わってきた医学教育センター荒閑講師・斎藤助教をアドバイザーとして2024年の正式実施に向

けてより実践的な運営を試みた。また本学の感染症医療人材養成事業に関連した PPE 着脱トレーニングや検体採取トレーニングの特別演習も併せ実施した。

研究・業績：教員が研究プロジェクトに取り組み、研究助成金を獲得しながら研究を継続して推進できた。しかしながら研究業績評価表および研究活動評価表を見ると改善の余地のある教員が散見される。その要因として考えられるのは自ら取得した研究費で研究を遂行し、研究成果を学会で発表するものの、業績としての学術論文としての公表はまだまだ限定的である点である。2020 年からの COVID-19 の影響による研究会や学会の開催制限は徐々に緩和されており、研究環境の整備と相まって研究活動の促進・支援が急務と考えられた。14 期生の卒業研究結果を「令和 4 年度卒業研究論文集 pdf, Vol. 13:2021 (デジタル版)」としてまとめられたことも成果であった。市民公開講座は開催できなかったことは残念であった。

7-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

臨床検査技師教育は大きな変革の時期を迎えた。2022 年度新入生から適応となる「臨床検査技師学校養成カリキュラム」では臨地実習の充実、とくに 7 単位から 12 単位への移行、実習前の学生評価の標準化が骨子であり、臨地実習受け入れ施設との協議や、臨地実習指導者講習会に参画している。また、学内教育内容に関しても各領域の再編や統合、あるいは名称変更を行い、必修科目も大幅に増やすなど、厚生労働省と新カリキュラムの協議を行い、学則改正も認められた。また臨床検査技師国家試験出題基準の令和 7 年改訂版が発表されたが、出題内容の変化が今後見込まれ、対応して授業内容もアップデートしていく必要がある。今後も学科一丸となり社会貢献できる臨床検査技師養成を目指したい。

PDCA サイクルの A 項目である令和 5 年度に向けての改善計画を以下に述べる。

構成員について：教員の補充は継続的な課題であるが、現在所属の若手教員が少しでも業績を伸ばし、昇任していける道筋をつけることが重要である。研究面の充実においても研究活動・特に論文執筆を奨励していく。また臨床現場を知る臨床検査技師が教員となって本学科の教育に参画することが理想であるので、本学兼担制度などを利用し、本学病院群の理解と協力のもとに、教育と臨床の「二足の草鞋を上手に履いた」教員養成を志向していきたい。評価可能な目標として、兼任教員の占有率、実務経験年数平均値の上昇などが考えられる。

教育・学生支援：新カリキュラムでは臨地実習が大きく変わり、必修項目とそうでないものは明文化される一方で、これまでにない検査項目の見学導入や検査部以外での見学が必修化されたので、実習先との連携が一層必要とされる。各作業部会（WG）を引き続き継続させたい。一方で低学年における成績不振者の増加に対しては、多くの教員が懸念するところである。本学入学前の学校型推薦・総合型選抜合格者に対して実施した「高大接続プログラム」は好評であり、入学後の学修にも好影響を与えていると考えられ今後も継続する。学校型推薦入試では指定校を倍増するとともに定員を増加し、出願者の確保に努めることとする。高大接続プログラムに関連させて、1 年前期の理科科目（生物・化学・物理）の見直しも今後の検討課題として視野にいれていきたい。卒業研究に関する作業部会も継続させて、中間発表会の開催等その効果的あり方等を検討していきたい。学生の就職活動については、低学年から社会に参画する意識を持たせるように求人情報のみならず、卒業生や教員の体験を伝えることによって医療人となるための下地を作っていく。また、3 年後期から実施している面接講座など就活準備のための学修機会も低学年に開放することを検討している。いろいろな対策を有機的に充実させ、種々の問題を解決できるように努めていきたい。臨地実習前技能評価トライアル・感染症医療人材養成事業に関連した特別演習も継続させたい。教員に対しては今後も学生対応・教職員対応に関する FD を継続していきたい。企業実習では学外施設への見学の再開、インターンシップの一部が体験できるような内容の改革を充実させていく。

評価可能な目標として、臨地実習における学生評価の向上、卒業研究参加学生数および提出論文数、12 月末時点での就職内定率や大学院進学者数などが考えられる。

研究・業績：これまで同様に、教育変革に対応するとともに教育の環境を改善させ国試合格率を高めていくと同時に、資格を得る大学としてのみならず、真に医科学の学問を追究できる教育および研究環境を備えた大学づくりがたいへん重要であると考えている。この観点では、文部科学省が求める大学教員としての適正な科目担当時間を十分考慮しつつ、全教員が平等に学問研究に専念できるように各教員の教育負担を均一化し、各教員が 1 年に少なくとも論文 1

編を出せるように研究の質を高めていくことがきわめて重要である。各種研究機器も老朽化が進んできているので、機器更新などの研究環境の整備も遅滞なく進めていく。

3. 臨床工学科

1. 構成員

下岡聡行 (SHIMOOKA、Toshiyuki) : 教授 : 学科長 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 生体工学 : 博士
小林直樹 (KOBAYASHI、Naoki) : 教授 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 生体信号処理、情報通信工学 : 博士
宮本 裕一 (MIYAMOTO、Yuichi) : 教授 : 指導教員 (大学院) : 医用光学、レギュラトリーサイエンス : 博士
山下芳久 (YAMASHITA、Yoshihisa) : 教授 : 血液浄化、呼吸療法
駒形英樹 (KOMAGATA、Hideki) : 准教授 : 情報工学、医用画像処理 : 博士
若山俊隆 (WAKAYAMA、Toshitaka) : 教授 : 指導教員 (大学院) : オプトメカトロニクス、応用光学 : 博士
石川雅浩 (ISHIKAWA、Masahiro) : 講師 : 教員 (大学院) : 画像処理、パターン認識 : 博士
奥村高広 (OKUMURA、Takahiro) : 講師 : 教員 (大学院) : 人工心肺、補助循環 : 修士
川邊 学 (KAWABE、Manabu) : 講師 : 教員 (大学院) : 医療機器安全管理、血液浄化、呼吸療法、生体情報モニタ : 修士
中島孔志 (NAKASHIMA、Koushi) : 講師 : 教員 (大学院) : 脳情報学、情報システム学 : 博士
脇田政嘉 (WAKITA、Masayoshi) : 講師 : 指導教員 (大学院) : 生化学、生物物理 : 博士
白石直子 (MARUYAMA、Naoko) : 講師 : 教員 (大学院) : 博士 : 体外循環、血液浄化
三輪泰之 (MIWA、Yasuyuki) : 助教 : 修士
本塚 旭 (MOTOZUKA、Akira) : 助教 : 修士
相澤康平 (KOUHEI、Aizawa) : 助教 : 修士
梅澤奈菜 (Nana、Umezawa) : 助教 : 修士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

今年度は国試合格者を全国平均以上に戻すこと、留年者数を半減させることを目標とした。成績下位者の学力向上が直接の課題となる。8割以上の科目は通常の対面に移行する予定であるので、実習・実験・演習でこまめに声をかけていくこと、早めに面談の機会を設けて、学業に対するモチベーションの維持、向上を目標とする。

大学院修士課程において、新型コロナウイルス感染症予防に一層留意してネット環境活用するとともに、十分な感染症対策のもとキャンパス内での、研究環境を充実させ、研究をできる限り推進する。さらに、入学者数は、在学生の進学が増加するとともに、社会人の希望者も一定レベルで定着するなど堅調に伸びており、今後も継続してゆく。加えて、博士課程の学位取得に向けては人材育成環境を一層充実させ、博士の学位を持つ臨床工学技士の輩出を目指す。

2-2. 教育実績(担当者)

《保健医療学部臨床工学科向け : 本学科所属教員担当分》

基礎講義科目 :

数学ⅠA(中島)、数学ⅠB(中島)、数学Ⅰ演習(中島、下岡、若山)、数学ⅡA(下岡)、数学ⅡB(下岡)、数学Ⅱ演習(下岡、若山)、数学ⅢA(中島)、数学ⅢB(中島、小林)、基礎統計学(脇田)、

専門基礎講義科目 :

力学(若山)、力学演習(若山、脇田)、電磁気学(駒形、石川)、電磁気学演習(駒形、石川)、電気回路(宮本、駒形)、電気回路演習(宮本、駒形)、情報と計算機(中島)、電子工学(駒形)、電子工学演習(駒形)、通信工学(小林)、計算機アーキテクチャ(小林)、機械工学(若山)、機械工学演習(若山)、生物化学(脇田)、細胞生物学(脇田)、システム制御(下岡)、デジタル信号処理(小林)、

専門講義科目 :

センサ・計測工学(宮本)、生体計測機器(宮本)、医用音響工学(下岡、宮本)、診断治療システム(奥村)、生体情報モニタリング(川邊)、医用画像機器(宮本)、医用材料学(脇田)、生体物性論(下岡)

臨床工学概論(山下、奥村、三輪、川邊、白石)、代謝機能代行機器(山下)、循環機能代行機器(奥村)、呼吸機能代行機器(山下)、医用機器安全管理学Ⅰ(川邊)、医用機器安全管理学Ⅱ(川邊)、医用情報処理工学(小林、石川、駒形、梅澤)、生体組織工学(下岡、脇田、中島)、臨床工学(山下、奥村、川邊)、医用光学(宮本、若山)

工学系専門実習、実験科目 :

情報リテラシー実習(中島、駒形)、プログラミング実習(小林、中島、駒形、石川)、電気・電子実験(宮本、駒形、石川、梅澤)、応用工学実験(小林、下岡、若山、石川、脇田、梅澤)

臨床工学系実習科目 :

機能代行機器実習Ⅰ(山下、奥村、川邊、三輪、白石、本塚)、機能代行機器実習Ⅱ(奥村、白石、本塚)、機能代行機器実習Ⅲ(山下、奥村、川邊、三輪、白石、本塚)、医用機器安全管理学実習(奥村、川邊、三輪、白石)、臨床実習(山下、奥村、川邊、三輪、白石、本塚)

総合演習・実習科目 :

生体工学総合演習Ⅰ(駒形、本塚、脇田、中島、石川、山下、宮本、三輪、小林)、生体工学総合演習Ⅱ(若山、三輪、宮本、駒形、奥村、石川、川邊)、生体工学総合演習Ⅲ(戸井田、奥村、宮本、若山、駒形、三輪、川邊、石川)、生体工学総合演習Ⅳ(奥村、小林、宮本、山下、若山、駒形、石川、川邊、中島、脇田、三輪、本塚)

生体工学実習(所属全教員)、

卒業論文(所属全教員)

《保健医療学部看護学科向け》

人体の科学（下岡、脇田）
《保健医療学部臨床検査学科向け》

医用工学概論（戸井田、宮本、石川、川邊）、医用工学実習（宮本、若山、石川、駒形）

2-3. 達成度評価

今年度の目標であった国家試験合格率の全国平均以上の回復、留年者の減少については、残念ながら達成できなかった。国家試験合格率は新卒の合格率が 83.9%で全国平均の 92.8%を大きく下回り、昨年度よりも差が開く結果に終わった。受験者に留年経験者が多かったため厳しくなる想定ではあったが、その留年経験者の合格率の低さが響いた結果となった。

留年者数についても過去最低レベルとなってしまった。2年生以上では例年並み以下に収まっていたが、1年生については元々の在籍者数が少ないところで、留年者数は過去最多となった。演習等での状況で、新学期早々から危機感を持って指導に努めていたが、結果を出すことはかなわなかった。

目標に対する達成度としては結果的に低くなってしまったが、教育活動自体は例年以上に活発に行っており、国試不合格者も合格ラインには届かなかったもののカリキュラム外の指導を熱心に行って学力自体は向上しており、評価をしている。

大学院（生体医工学）については、令和4年度は、修士課程において1年次が一般3名社会人1名であり、講義は履修生の状況に応じて対面あるいはオンラインで行われ、講義履修は計画通り遂行された。また、2年次は一般2名、社会人1名（うち長期履修生1名）であり、十分な感染症策を行って来校し研究を遂行してもらった。一方、年度末に1年生1名、2年生1名から一身上の都合により退学届けが提出され受理された。このため最終的には学位審査を合格して修士課程を修了した者は1名であった。一方、今年度は修士課程からも研究の日（11月5日）に発表を行い、生体医工学分野からも1名発表を行った。

博士課程では生体医工学として2名が博士課程に在籍し、学位取得に向けた講義の受講および研究を進めており、加えて博士課程（乙種）での学位取得者を1名輩出した。

2-4. 次年度改善計画

引き続き国試合格者を全国平均以上に戻すこと、留年者数を半減させることを目標に活動することとなる。次年度の新入学生は人数もより少なく、学力には今年度よりさらに不安がある。留年経験者もより多い状況で不安材料となっており、例年以上に成績下位者の学力向上が課題となる。実習・実験・演習でこまめに声をかけていくこと、早めに面談等の機会を設けること、教員間の情報共有をさらに進め、早期に成績不良となる兆候をつかんでコミュニケーションをとる機会を増やすこと念頭に学力の向上に努めていきたい。

大学院修士課程において、今年度は学部（生体医工学科）から修士課程に進学して入学した者3名が入学し、進学者数は堅調に推移してきていたが、年度末に1名の退学願いが提出され承認された。また、2年次の1名は効率的かつ十分な研究を進め、「研究の日」には生体医工学分野を代表して発表して高い評価を受けた。最終的には学位審査に合格し、修士課程を修了した。一方、1名は年度末に退学届けを申請し承認された。今後退学者が起きないようにするために、学部から大学院進学にあたって、大学院での研究の進め方、修学環境、卒業後のキャリアパスなど指導教員とよく相談して十分納得したうえで進学するように指導してゆく。また、今年度からwithコロナの環境のもと修士課程ではオンラインでの修学を減らし、従来の登校を基本とする形としたが、今後、院生の環境にも考慮してネット環境活用した講義や研究など多様な形式での修学可能にして、研究をできる限り推進する。さらに、入学者数は、在学生、社会人の希望者も一定レベルで伸びており、今後も継続してゆく。加えて、博士課程の学位取得に向けては人材育成環境を一層充実させ、博士の学位を持つ臨床工学技士の輩出を目指す。

3. 研究

3-1. 目的・目標（前年度に立てた改善計画）

今年度は、学会活動等々も対面に移行していくと思われる。まずは感染対策を徹底し、研究室を感染源としないよう活動することが第一の目標となる。また、昨年度は流通関係にもコロナの影響が出て機材の購入にも支障が出て研究の進捗が遅れることがあった。今年度は改善していくと思われるが、機材納入の遅れも見越して研究を計画的に進めることに留意したい。

3-2. 研究グループ（研究プロジェクト）と研究実績

1. 酪酸菌及び酪酸菌発酵エキスによる制御性T細胞の誘導能の評価（宮本、梅澤）

酪酸の産生効率が高い新規酪酸菌の継続培養に成功した企業より、当該酪酸菌及び酪酸エキス（以下、酪酸菌等とする）による制御性T細胞の誘導能の評価試験の委託を受けた。本試験研究では酪酸菌等を一定期間摂取させたマウスの全血、大腸及び脾臓を採取、各組織内の制御性T細胞を（1）フローサイトメトリーによる定量、（2）PCR法によるFoxp3遺伝子発現解析を行った。その結果、いずれも有意な傾向を得ることができた。これらの成果は学術雑誌に投稿中である。

2. 光線力学的酸化処置による抗がん剤耐性獲得細胞の耐性低減化に関する研究（宮本）

アドリアマイシン耐性獲得白血病細胞を用い、PDT（光線力学的処置）による耐性低減が可能かどうかをP糖タンパク質の基質蛍光物質を用いて検討した。その結果、PDTの光増感剤を細胞膜に局在させる接触プロトコルを用いることで、P糖タンパク質の薬剤排出機能を阻害し、耐性の低減が可能であることを定量的に示すという成果をあげた。

3. 深度センサによる非接触呼吸測定法の検討（駒形）

- 呼吸状態の測定は呼吸に関連する病態の早期発見に有効である。現在、呼吸状態は目視で測定する、または、心電図モニターなどで測定する方法があるが、前者は定性的であること、後者は電極装着が必要となるなどの問題点がある。そこで、距離画像センサを用いて呼吸状態を測定することができないか検討を行っている。
4. 360度カメラ画像を用いた画像認識および3次元形状復元に関する研究、駒形英樹（代表者）
360度カメラの多くは大きな歪みを伴う魚眼レンズを使用しているため、広範囲の情景の撮影が可能という利点があるにも関わらず、3次元形状計測や様々な画像処理センサーとしての使用は活発ではない。そこで、本研究ではこれらの歪みの影響下でも可能な画像認識法、および、3次元形状復元のための基礎技術について検討を行っている。
 5. シングルファイバーイメージングに関する研究（若山、学外共同研究）
直径100 μm の光ファイバーを用いた新しいイメージング技術の開発を目的とし、光拡散場の回復や微弱光イメージングなどの成果をあげた。（達成度：100%）
 6. 三次元内視鏡に関する研究（若山、学外共同研究）
極細径の構造光制御技術の開発を目的とし、キャリブレーションを行い、三次元内視鏡へ応用の成果をあげた。
 7. 新しい光学素子に関する研究（若山、相澤、学外共同研究）
虫の眼を模倣することで偏光と位相を制御する光学素子から偏光と波面を同時にイメージングできるカメラの開発を目的とし、独自技術のキャリブレーション法を提案し、偏光と波面を高精度に計測できる成果を上げている。
 8. 三次元組織作製に関する研究（脇田）
幹細胞から三次元組織を作製することを目的として、各種鋳型と高分子を併用することにより細胞一層からなる三次元腔組織および三次元管腔組織の作製法を確立する成果をあげた。
 9. 牛血を用いた体外循環の生体適合性の評価（白石）
研究内容と達成度人工心肺の開放型回路と閉鎖型回路を用いた体外循環において血液への侵襲に違いがあるか検証するために、牛血を用いて遊離ヘモグロビン濃度を測定し溶血の程度を比較した。
 10. 麻酔下ラットの海馬における記憶・学習と情報処理に関する研究（中島）
麻酔下ラットの脳を用いて、海馬における記憶機構及び情報処理機構を解明し、脳型記憶・情報処理システムを開発することを目標として遂行している。
 11. 医用テレメータの受信感度と干渉源電磁界分布からみた電磁障害対策に関する検討（川邊、本塚）
医療機関で使用される医用テレメータは電波を利用して患者生体情報をモニタリングする機器である。本研究において、受信機であるセントラルモニタの受信感度やノイズ上昇の原因となる電気機器の影響を定量的に計測し、医用テレメータの受信障害に対する基礎的なデータを得ることができた。
 12. ECMO人工肺排気部からの排液飛散の検証と対策（本塚）
ECMOの人工肺のウェットラングモデルを作成し、酸素ガス吹送時の排液の様子を検証した。その結果、排液はガスの出口のポートではなく、別に開口した部分から滴下することが分かった。今後は安全に廃液を回収する回収用具を検討していきたい。
 13. 自然言語処理による命題真偽の自動判定のための基礎研究（下岡）
国家試験の選択肢のような短文命題の学習データの蓄積のため、真の命題を偽の命題に自動変換する手法を検討した。Word2vecの公開モデルに対して臨床工学用語のファインチューニングを施して用語の交換候補を検出する手法が有力であることを示した。
 14. ダブルルーメンカテーテル形状の違いによる再循環への影響（山下）
各種ダブルルーメンカテーテル（DLC）の再循環を比較することで、物質除去特性への影響を解析した。再循環への影響が少ないDLCの選定が可能となった。
 15. 静脈側チャンバからの薬剤投与における各流量の投与完了時間の比較検討（山下）
透析回路静脈チャンバ形状および血流量の違いによる、薬剤投与時のチャンバでの薬剤滞留時間を測定した。薬剤を確実に投与する時間を解明することができた。
 16. 各透析療法における小分子物質除去の検討（三輪）
透析液を使用するon-line HDFでは補液流量によって拡散効率に影響を及ぼす。本研究ではHD、HFと比較し、on-line HDFでの小分子物質除去特性を解明することができた。
 17. 人工呼吸器回路のコンプレッションボリュームが換気量へ及ぼす影響（三輪）
人工呼吸器回路のコンプレッションボリュームが一回換気量にどの程度影響を及ぼすかを、VCVとPCVとにそれぞれ比較し解明した。
 18. 閉鎖型人工心肺回路と開放型人工心肺回路の血液への侵襲性の比較（奥村、白石）
本研究室で開発したバルブ式半閉鎖型体外循環法VACCの易操作性に加え、生体への低侵襲性を示すために、閉鎖型人工心肺と開放型人工心肺の模擬回路にてウシ血液の5時間循環による血液への影響を比較した。赤血球の損傷（溶血）、白血球数と血小板数の減少において、閉鎖型人工心肺の方が低侵襲であることを示唆する結果を得た。
 19. ローラーポンプの圧閉度の定量評価法の開発（奥村）
実臨床では行われていない人工心肺用ローラーポンプの定量評価の手法として、定流量注入圧法（FIP法）を開発した。今年度は実臨床で使用される機材を用いて、臨床工学技士による適正圧閉度調整後の圧閉度をFIP法（FIP曲線）で評価を行った。圧閉度調整法としてある3手法について特徴的なFIP曲線を得た。
 20. 多元計算解剖学における形態情報統合の基礎技術（小林、駒形、石川、篠田、九州大学との共同研究）
令和元年度まで研究してきた多元計算解剖学における形態情報統合の基礎技術（新学術領域研究）の成果をもとに、機械学習を用いた3次元情報として病理画像データ再構築を目的に、本学にて研究を継続し、次のステージの研究に取り組んでいる。
 21. 腎臓MRIにおける定量的解析支援（石川、小林、埼玉医科大学病院腎臓内科との共同研究）

腎臓 MRI における定量的解析支援（埼玉医科大学病院腎臓内科との共同研究）を目的に、MRI 画像を機械学習により解析することで腎機能をjしてするアルゴリズムの研究開発を行った。本検討結果は新たな評価指標として注目されており、今年度は論文を含む対外発表としての以下の成果をあげた。

22. マルチスペクトル画像による遠隔診断支援のフィジビリティ研究（小林、石川、埼玉メディカルセンターとの共同研究）

遠隔診療において、マルチスペクトルカメラによる診断支援方式および必要な生体情報の収集に必要な方式の基本検討を目的に、マルチスペクトルカメラを用いた検証を診断支援の検証を行った。その結果、精度の高い方式提案の実現性が占めあされ、成果として以下の発表を行った。

23. 操作者の運動要素を考慮した仮想現実（VR）映像における生体影響の研究（小林、石川）

従来行ってきた周辺照度と映像酔いの関係を求めることを目的に、主観評価（SSQ）、時系列主観評価および生体指標との関連については成果をまとめ、学術論文を発表した。また、操作者と VR 映像酔いの関係を求める検証実験用の VR 映像作成を行った。

24. ハイパースペクトル病理画像解析による病理診断支援の研究（小林、駒形、石川、東工大科学技術創成研究院との共同研究）

869 病理画像の染色に対する色補正の評価および 2 種類の線維細胞のハイパースペクトルを用いた分類を目的に、機械学習を用いた分類法の検討について研究を進めた。その今回の提案法による結果を以下の成果を発表した。

25. マルチスペクトルカメラを用いた遠隔マクロ病理診断支援の検討（小林、石川、埼玉医科大学病院病理学・皮膚科学および東工大科学技術創成研究院との共同研究）

マクロ病理の臓器画像を色精度よく再現および診断支援を目的に、埼玉医科大学病院病理学・皮膚科学および東工大との共同研究によりマクロ病理標本の撮影および画像解析を行った。得られた 6 検体を用いて解析手法の検討を行い、成果発表に結び付けた。

3-3. 達成度評価

コロナ禍の収束が予想よりも遅かったが、教員においては感染者は零ではなかったが、研究活動に支障をきたすことはなく、PC 関係の機材の高騰は相変わらずであったが致命的な影響は見られず、ほぼ目標は達成できていたと考える。

3-4. 次年度改善計画

次年度こそは、学会活動等々も正常化していくと期待される。今年度は論文等の数は微増したが、学会発表数は伸びなかった。低成績者対策による教育の負荷の増加、オープンキャンパスや高校訪問等の広報活動の本格的な再開も見込まれ、研究時間の確保が課題となることが予想される。諸活動のバランスをとって研究活動の時間を確保し、業績の増加を目指したい。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

無し。

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

1. 山下芳久 日本医工学治療学会（編集委員）
2. 山下芳久 日本急性血液浄化学会（編集委員）
3. 山下芳久 臨床透析（日本メディカルセンター）（編集委員）
4. 山下芳久 日本透析医学会（論文査読委員）
5. 山下芳久 日本集中治療医学会（編集協力委員、論文査読委員）
6. 山下芳久 日本臨床工学技士会（論文査読委員）
7. 若山俊隆 Precision Engineering, Reviewer
8. 若山俊隆 Applied Optics, Reviewer
9. 若山俊隆 Optica, Reviewer
10. 若山俊隆 Optics Express, Reviewer
11. 若山俊隆 Optical Review, Reviewer
12. 若山俊隆 Optics and Lasers in Engineering, Reviewer
13. 若山俊隆 Optics Continuum, Reviewer
14. 駒形英樹 画像電子学会査読委員
15. 駒形英樹 画像電子学会企画副委員長

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

1. 小林直樹 保健医療福祉情報安全管理適合性評価協会（HISPRO）（適合性評価委員会委員、技術委員会委員）
2. 小林直樹、画像電子学会（会長、企画委員、第 50 回画像電子学会年次大会副委員長）
3. 小林直樹 快適 HMD 委員会（委員） 4. 小林直樹 ISO/IEC JTC1 SC29/WG1 国内委員会（委員）
4. 小林直樹 日本遠隔医療学会（第 26 回日本遠隔医療学会学術大会 実行委員長）
5. 下岡聡行 ライフサポート学会（評議員）
6. 山下芳久 公益社団法人日本臨床工学技士会（副理事長、代議員、JACE Academy 学術員、規格検討委員会担当理

事、カリキュラム検討合同委員会担当理事、臨床実習小委員会担当理事、日本臨床工学技士教育研究会小委員会担当理事)

7. 山下芳久 公益社団法人埼玉県臨床工学技士会 (副理事長)
8. 山下芳久 日本急性血液浄化学会 (監事、評議員、安全管理・倫理委員会副委員長)
9. 山下芳久 日本医工学治療学会 (理事、評議員)
10. 山下芳久 日本血液浄化技術学会 (代議員、組織強化委員、他)
11. 山下芳久 日本集中治療医学会 (評議員、CE 検討委員会委員)
12. 山下芳久 埼玉透析医学会 (役員幹事)
13. 山下芳久 日本透析医学会 (評議員)
14. 山下芳久 関東甲信越臨床工学技士協議会 (理事長)
15. 山下芳久 日本腎代替療法医療専門職推進協会 (理事)
16. 山下芳久 日本腎不全合併症医学会 (評議員)
17. 山下芳久 独立行政法人医薬品医療機器総合機構 (PMDA) 医療機器・再生医療等製品安全使用対策検討会委員
18. 若山俊隆 精密工学会 (メカノフォトンクス専門委員会委員)
19. 若山俊隆 日本光学会 (偏光計測制御技術研究会, 庶務委員)
20. 川邊学 日本生体医工学 専門別研究会 医療・福祉における電磁環境研究会 (幹事)
21. 川邊学 総務省 電波の医療機器等への影響に関する調査の有識者会議 (委員)
22. 川邊学 電波環境協議会 電波利用推進委員会 作業部会 構成委員

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

- ① Y. Tanaka, T. Wakayama, "MCFBG curvature sensor using two-photon absorption process in Si-APD and its application to medical use," Proc. SPIE 12480, 124800J (2022).
- ② 若山俊隆, 柴田秀平, 海老澤瑞枝, "偏光科学が光学領域を突き抜ける," 光学 51 41-43 (2022).
- ③ T. Inoue, E. Kozawa, M. Ishikawa, N. Kobayashi, H. Okada. "The relationship between imaging features of diffusion-weighted imaging and prognosis of chronic kidney disease." Kidney international 101(5) 1083 May, 2022
- ④ E. Aloupogianni, M. Ishikawa, N. Kobayashi, T. Obi, "Hyperspectral and Multispectral Image Processing for Gross-level Tumor Detection in Skin Lesions: A Systematic Review", Journal of Biomedical Optics Vol.27, no.6, 060901-27 June 2022
- ⑤ Y. Hara, K. Nagawa, Y. Yamamoto, K. Inoue, K. Funakoshi, T. Inoue, H. Okada, M. Ishikawa, N. Kobayashi, E. Kozawa, "The utility of texture analysis of kidney MRI for evaluating renal dysfunction with multiclass classification model", Springer Nature Scientific Reports 12(1):14776, August 2022
- ⑥ E. Aloupogianni, T. Ichimura, M. Hamada, M. Ishikawa, T. Murakami, A. Sasaki, K. Nakamura, N. Kobayashi, T. Obi, "Hyperspectral imaging for tumor segmentation on pigmented skin lesions", jbo 2022
- ⑦ E. Aloupogianni, T. Ichimura, M. Hamada, M. Ishikawa, T. Murakami, A. Sasaki, K. Nakamura, N. Kobayashi, T. Obi, "Effects of dimension reduction of hyperspectral images in skin gross pathology", srt 2023
- ⑧ 松田恵介, 奥村高広, 畠山伸: バルブ式半閉鎖型体外循環法の臨床導入—経験に依存しない人工心肺を求めて—, 体外循環, 49(2); 117-123, 2022
- ⑨ 相澤康平, 根岸幹大, 奥村高広: バルブ式半閉鎖型体外循環における脱血管脱落時の air lock 現象の研究. 生体医工学, 60(6); 164-169, 2022.
- ⑩ 山下芳久, モニタリング評価の適応と意義、臨床透析、2022. 5. 10 : 439-445

【総数：論文・著書 17 件、学会発表 27 件、講演 6 件】

6-2. 獲得研究費

1. 若山俊隆 (研究分担), 超広帯域ベクトル光の単一ショット分光偏光検出による環境・産業用高感度光センシング (令和 4 年度科学研究費助成金 基盤研究(B)): 20 万円
2. 若山俊隆 (研究代表), 生体の形態検査と組織診断ができる直径 0.1mm 以下の光相関内視鏡技術の開発 (令和 4 年度科学研究費助成金 基盤研究 (B)): 420 万円
3. 若山俊隆 (研究代表), 次世代超薄膜の均一性を補償する革新的なシングルショット位相・偏光同時イメージング (令和 4 年度村田学術振興財団): 300 万円
4. 若山俊隆 (研究代表), アミロイドを無染色イメージングする体にやさしい内視鏡の開発 (令和 4 年度テルモ生命科学振興財団): 200 万円
5. 奥村高広 (研究代表), 人工心肺回路の新たな分類として定義したい「連続循環型」回路の開放型人工心肺回路に対する優位性について (日本体外循環技術医学会 2022 年度 JaSECT グラント): 20 万円

6-3. 受賞

1. 川邊学 電波環境協議会 2021 年度電波環境協議会表彰 (2022 年 7 月 5 日表彰)
2. 本塚旭 日本医療福祉設備協会 第 50 回日本医療福祉設備学会 一般演題優秀演題賞 (光学文字認識 (OCR) を利用した ECMO 遠隔監視システム)、2021 年 11 月発表、2022 年 6 月 16 日受賞

6-4. 特許、実用新案: 該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績：該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

教育面については2-1、2-3に記した。国試合格率を全国平均以上に戻すこと、留年者数を返照させることは達成できなかった。引き続き、成績下位者の学力向上が課題となる。

研究面に関しては、3-1、3-3に記した。教員の陽性判定は零にはできなかったが、研究活動は堅調であった。修士課程の研究活動も堅調であった。学部から大学院への進学について今年度3名と目標通りに増加したが、1名が1年で退学するなど課題も残り、学生定着に必要な改善が求められる。一方、博士号取得に結びつく研究活動の活発化を目指し、乙種での博士取得が本年度も昨年度に続き1名が取得した、博士号取得に向けての意識付けも修士に対して進めてきてきた。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

教育面については2-4に記した。次年度も国試合格率を全国平均以上に戻すこと、留年者数を半減させることを目標に成績下位者の学力向上が課題となる。ここ数戦で増えてしまった留年者の対応もここに含まれる。教員間の情報共有をより推進し、早めに面談の機会を設けて、学業に対するモチベーションの維持、向上を目標とする。教育面の不振のは、入試の受験者の大幅な減少、定員割れの影響が大きい。入試の定員の配分、生鮮入試の指定校の選定の見直しを行う予定である。これまで規制のかかっていた高校訪問も再開する予定である。現状よりもさらに教員に負担を強いることは遺憾であるが、何とか入試状況を改善したい。

研究面に関しては、3-4に記した。今年度よりも研究活動に割ける時間を減らさざるを得ない状況であるが、バランスをとって業績の増加を目指したい。博士課程の学位取得に向けては人材育成環境を一層充実させ、博士の学位を持つ臨床工学技士の輩出を目指す。大学院進学者は増加傾向にあるが、在籍している学生を定着させるため、指導教員による木目細かい指導が求められる。このため、大学院では対面と遠隔のバランスを取りながらの講義、研究指導を推進する、また、業績面では原著論文や博士号取得に結びつくような成果を目指して研究活動の活発化を目指していく今年度は教員が1名退職し、次年度は教授1名が定年を迎える。次々年度以降の教育体制を維持するため次年度中に教員の新規採用を決めることは必須である。年内に2名の新規採用の人選を終了させる計画である。

次年度からは養成校の指定規則の変更に基づき、新カリキュラムがスタートする。現行のカリキュラムと異なる点は多くはないが慎重に対応を進める。指定規則の変更で大きな問題点は、実習で内視鏡シミュレータが必須とされている点である。養成校である以上、購入せざるを得ないが高額であり、教育研究費で賄うことは不可能といえる。ぜひとも支援をお願いしたい。

4. 理学療法学科

1. 構成員

高倉保幸 (TAKAKURA, Yasuyuki) : 教授 : 学科長 : 教育主任 : 指導教員 (大学院) : 理学療法学 : 博士
藤田博暁 (FUJITA, Hiroaki) : 教授 : 副学科長 : 指導教員 (大学院) : 循環器理学療法学 : 博士
赤坂清和 (AKASAKA, Kiyokazu) : 教授 : 研究主任 : 代表指導教員 (大学院) : 筋骨格理学療法学 : 博士
乙戸崇寛 (OTSUDO, Takahiro) : 教授 : 指導教員 (大学院) : 筋骨格理学療法学 : 博士 (年度途中で退職)
國澤洋介 (KUNISAWA, Yosuke) : 准教授 : 神経理学療法学 : 博士
新井智之 (ARAI, Tomoyuki) : 准教授 : 大学院教員 (大学院) : 博士
澤田 豊 (SAWADA, Yutaka) : 講師 : 筋骨格理学療法学 : 修士
時田幸之輔 (TOKITA, Konosuke) : 講師 : 指導教員 (大学院) : 肉眼解剖学 : 博士
大久保雄 (OKUBO, Yu) : 講師 : 大学院教員 (大学院) : 筋骨格理学療法学 : 博士
金井欣秀 (KANAI, Yoshihide) : 講師 : 発達理学療法学 : 博士
小関要作 (KOSEKI, Yosaku) : 助教 : 神経理学療法学 : 修士
師岡祐輔 (MOROOKA, Yusuke) : 講師 : 神経理学療法学 : 修士
三浦佳代 (MIURA, Kayo) : 助教 : 地域理学療法学 : 博士
森田泰裕 (MORITA, Yasuhiro) : 助教 : 予防理学療法学 : 博士
服部寛 (HIROSHI, Hattori) : 助教 : 大学院教員 (大学院) : 筋骨格理学療法学 : 博士
姉帯沙織 (SAORI, Anetai) : 助教 : 基礎理学療法学 : 修士
清水夏生 (SHIMIZU, Natsuki) : 助教 : 神経理学療法学 : 博士

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

＜学部＞一昨年度から新カリキュラムが始まり、来年度の4年生は新たに新カリキュラムで実施される。新カリキュラムが円滑な遂行を促していくとともに、引き続き高い国家試験合格率の達成を目標とした。

＜大学院＞コロナ禍にあり、対面授業や理学療法現場での研究活動が困難になっているが、授業形態や研究方法を工夫することで質の高い学修効果を得ることを目標とした。

2-2. 教育実績(担当者)

1年次には基礎分野として哲学(ジリオ)、社会学(小川)、スポーツ科学(古泉)、英語Ⅰ～Ⅱ(間山)、ドイツ語(田中)、物理学(赤羽)、物理学実験(向田)、化学(村上)、細胞生物学(大間)、情報科学演習(是村)、社会の理解(嶋崎)、教育基礎セミナー(高倉)が、専門基礎分野として人体の構造と機能Ⅰ～Ⅱ演習(時田、藤原)、運動学(澤田)、人間発達学(金井)、リハビリテーション医学(池田)、栄養学(伴場)、公衆衛生学(野寺)が、専門科目として理学療法学概論(乙戸)、理学療法評価学入門(新井)、および臨床見学実習(國澤(洋))が配置されている。(1年次は新カリキュラム)

2年次には、専門基礎分野として、人体の構造と機能実習(構造系および機能系)(時田、藤原)、運動学演習(赤坂)、医療の基本Ⅰ(池田)、病理・微生物学演習(佐藤)、ヒトの病気Ⅰ～Ⅵ(加藤木)、骨・関節疾患(総論・各論)(宮島)、精神疾患(松岡)、臨床心理学演習(庄野)、保健医療福祉学(大久保)が、専門分野として、理学療法評価学Ⅰ～Ⅱ(新井)、物理療法学演習(大久保)、日常生活活動学演習(金井)、生活環境学(藤田)および検査・測定臨床実習(國澤洋)が配置されている。(2年次は新カリキュラム)

3年次には専門基礎分野として医療の基本Ⅲ(辻)、ヒトの病気Ⅶ(加藤木)、および運動学実習(藤田)が、専門分野として理学療法研究法(高倉)、臨床運動学(澤田)、職業倫理職場管理学(國澤(洋))、地域理学療法学(藤田)、発達理学療法演習Ⅰ&Ⅱ(金井)、筋骨格理学療法学演習Ⅰ&Ⅱ(赤坂)、神経筋理学療法学演習(小関)、中枢神経理学療法学演習Ⅰ&Ⅱ(高倉、師岡)、呼吸循環理学療法学演習(藤田)、義肢装具学演習(小関)、理学療法臨床入門(高倉)および総合臨床実習Ⅰ(國澤)が配置されている。(3年次は新カリキュラム)

4年次には専門基礎分野として精神保健学(松岡)、専門分野として理学療法機器技術学(大久保)、リハビリテーション工学(藤田)、運動療法学(高倉)、代謝系理学療法学(藤田)、スポーツ系理学療法学(赤坂)、保健科学統計学演習(高倉)、地域理学療法学実習(藤田)、高齢者理学療法学(新井)、生活環境学(藤田)、総合臨床実習Ⅰ～Ⅱ(時田)、卒業研究(時田)が配置されている。(4年次は旧カリキュラム)

2-3. 達成度評価

<学部>理学療法学科は、平成19年4月に学部に昇格し、令和5年3月には理学療法学科13期生42名を輩出することになった。国試合格率は100%と過去3度目の最高合格率となった。コロナ禍にあり、学生の学習状況は拡大する傾向にあったが、国試対策を十分に実施したことが影響したと考えている。学部教育は新カリキュラムに移行して3年目であったが順調に実施することができた。また、各教員の担当授業数の調整を図り、均てん化が進んだ。

<大学院>コロナ禍にあり、従来の対面授業の実施が困難となった科目もみられたが、大学院生は少人数教育で実施しているためZOOMなどを用いたオンライン授業を実施することで学生の通学の負担を減らす長所が活かされ、充実した学修が達成できたと評価した。

2-4. 次年度改善計画

<学部>新カリキュラムが始まり来年度の4年生は新たに新カリキュラムで実施される。3年生は専門分野の科目が多く演習が多く予定されている。コロナ禍が完全に収束していないが、感染予防策を充実させて新カリキュラムでの円滑な学習を促していくとともに、国家試験合格率の向上を目標としたい。

<大学院>コロナ禍にあり、対面授業や理学療法現場での研究活動が困難になっているが、授業形態や研究方法を工夫することで質の高い学修効果を得ることを目標としたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

昨年度に比べると原著論文の数が23論文から31論文へと増加し、学会発表は23件から38件、書籍執筆2件から9件と増加した。なお、講演は9件から6件と減少した。これらの成果は、コロナの影響が減少し学会開催数が回復してきたことに加えて、教員が蓄積してきたデータを丹念にまとめて研究成果を公表してきたことによると考えられる。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

運動器・スポーツ理学療法学領域は、英語雑誌に掲載される論文が増え、論文16件、書籍4件、学会発表10件、講演2件となった。神経・がん理学療法学領域では論文5件、著書3件、学会発表10件、講演2件となった。基礎理学療法学領域では論文5件、学会発表10件となり、予防理学療法学領域では、論文5件、書著5件、学会発表10件、講演4件であった。

3-3. 達成度評価

研究の実施については依然としてコロナの影響があり、データの収集には困難が伴っているが、論文、書籍、学会発表などの研究業績は、確実に増加してきていて、達成度は高く90点と判断する

3-4. 次年度改善計画

2023年度はコロナの影響がほぼ収束していくことが期待され、論文や書籍による発表は継続的に増加するとともに、学会発表数が増加することを期待したい。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

三浦佳代：毛呂山町介護保険運営審議会委員

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

高倉保幸：日本リハビリテーション医学会査読委員、日本理学療法士協会理学療法学査読委員、日本がん・リンパ浮腫理学療法研究会査読委員、日本理学療法科学学会査読委員、日本ヒューマンケア・ネットワーク学会編集委員、埼玉県包括的リハビリテーション研究会雑誌編集委員

藤田博暁：理学療法科学学会誌 編集委員、日本予防理学療法学会誌 編集委員

赤坂清和：徒手理学療法学 編集委員長、理学療法科学学会誌 編集委員、

澤田 豊：理学療法-臨床・研究・教育 編集委員

服部 寛：スポーツ理学療法学 編集委員

時田幸之輔：形態・機能 編集長 Anthropological Science 和文誌 編集委員

三浦佳代：地域理学療法学 査読委員

清水夏生：Annals of Physiotherapy & Occupational Therapy 編集委員、日本理学療法士協会雑誌 査読委員、日本理学療法士協会理学療法ハンドブック 編集部会員

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

高倉保幸：東京工科大学非常勤講師

赤坂清和：東京都立大学非常勤講師、国立リハビリテーションセンター学院非常勤講師、埼玉医療福祉専門学校非常勤講師

時田幸之輔：日本歯科大学新潟生命歯学部非常勤講師、東京都立大学非常勤講師、東京有明医療大学非常勤講師、飯能看護専門学校非常勤講師

姉帯沙織：飯能看護専門学校非常勤講師

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

【運動器・スポーツ理学療法領域】

- 1 Fujisaki K, Akasaka K, Otsudo T, Hattori H, Hasebe Y, Hall T. Risk Factors for Groin Pain in Male High School Soccer Players Undergoing an Injury Prevention Program: A Cluster Randomized Control trial. *Trauma Care*(Basel, Switzerland), 2022(2) 238-250 2022年5月
- 2 Hasebe Y, Akasaka K, Otsudo T, Hall T, Yamamoto M. Effects of Cross-Training on Motor Function and Length of Stay after Total Hip Arthroplasty: A Randomized Controlled Trial. *Journal of Back and Musculoskeletal Rehabilitation* in press 36(1) 163-171 2022年7月
- 3 Fujisaki K, Akasaka K, Otsudo T, Hattori H, Hasebe Y, Hall T. Effects of A Groin Pain Prevention Program in Male High School Soccer Players: A Cluster-Randomized Controlled Trial. *International Journal of Sports Physical Therapy* 17(5) 841-850 2022年8月
- 4 Mizoguchi Y, Akasaka K, Otsudo T, Shimada N, Naka H. Efficacy of Semi-Customized Exercises in Preventing Low Back Pain in High School Volleyball Players: A Randomized Controlled Trial. *Medicine* 101(36) 1-9 2022年9月
- 5 Mizoguchi Y, Suzuki K, Shimada N, Naka H, Kimura F, Akasaka K. Prevalence of Glenohumeral Internal Rotation Deficit and Sex Differences in Range of Motion of Adolescent Volleyball Players: A Case-Control Study. *Healthcare* (Basel, Switzerland), 10(11) 2263-2275 2022年11月
- 6 Suzuki K, Mizoguchi Y, Kimura F, Sawada Y, Akasaka K. Efficacy of Injury Prevention Using Functional Movement Screen Training in High-School Baseball Players: Secondary Outcomes of a Randomized Controlled Trial. *Healthcare* (Basel, Switzerland) 10(12) 2022年11月30日
- 7 Hattori H, Akasaka K, Otsudo T, Hall T, Sakaguchi K, Tachibana Y. Comparison of elbow valgus laxity and medial elbow stabilizer parameters during repetitive pitching between high school baseball players with and without a history of medial elbow injury. *Journal of Shoulder and Elbow Surgery* 31(12) 2602-2610 2022年12月
- 8 Hamada Y, Okubo Y, Hattori H, Nazuka T, Kikuchi Y, Akasaka K. Relationship between Isokinetic Trunk Muscle Strength and Return to Sports Competition after Conservative Therapy in Fresh Cases of Lumbar Spondylolysis: A Retrospective Observational Study. *Healthcare*(Basel, Switzerland), 2023(11) 625 2023年2月
- 9 Hattori H, Akasaka K, Otsudo T, Sawada Y, Hall T. Changes in Medial Elbow Joint Parameters Due to Selective Contraction of the Forearm Flexor-Pronator Muscles. *Healthcare*(Basel, Switzerland), 11(4) 586-586 2023年2月
- 10 Narita T, Okubo Y, Nomura T, Kaneoka K. Entry phase in men's backward dive pike: association between the shoulder joint and trunk angles. *J Sports Med Phys Fitness* 63(2):292-298, 2022年6月

【総数：論文 16 件、書籍 4 件、学会発表 10 件、講演 2 件】

【基礎理学療法学領域】

- ①Maki Hanami, Hidaka Anetai, Saori Anetai, Ryuhei Kojima, Kounosuke Tokita, Anatomical study of the cardiac conduction system in swine hearts. *Anat Histol Embryol*, 08 November 2022
- ②Sayaka Tojima, Hidaka Anetai, Kaito Koike, Saori Anetai, Kounosuke Tokita, Chris Leigh, Jaliya Kumaratilake. Gross anatomy of the gluteal and posterior thigh muscles in koalas based on their innervations. *Plos One*. 17(9). 2022.9.
- ③Anetai S, Tokita K, Anetai H, Kojima R, Aizawa Y, Kageyama I, Kumaki K, Hirasaki E, Endo H. Morphological significance of the medial brachial cutaneous nerve: An anatomical study of the brachial plexus in primates. *Primates*. 64. 261-272.2023.1
- ④間宮未来, 亀田翠, 時田幸之輔, 小島龍平, 相澤幸夫, 影山幾男, 熊木克治. 筋皮神経と橈骨神経由来の皮神経の分布域の関係. *形態機能* 21 巻 1 号 2022.8
- ⑤田所治, 矢野航, 宮脇佳子, 姉帯沙織, 吉井致, 鳥海拓, 小島龍平, 関谷伸一, 影山幾男. 解剖学特別勉強会. 形

態科学. 26(1). 21-49. 2023. 1

- ⑥時田幸之輔, 影山幾男. 第一肋骨短縮例における内側上腕皮神経・内側前腕皮神経構成分節. 日本解剖学会第 110 回関東支部学術集会. 2022. 10
- ⑦姉帯沙織, 小島龍平, 時田幸之輔, 平崎鋭矢, 遠藤秀紀. 霊長類比較解剖学から考えるヒト背側肩帯筋の形態学的特徴とその系統発生. 第 76 回日本人類学会大会・第 38 回日本霊長類学会大会 連合大会. 2022. 9
- ⑧大竹陽咲, 姉帯沙織, 小島龍平, 時田幸之輔. ブタ胎仔における正中神経と筋皮神経の関係 第 128 回日本解剖学会総会・全国学術集会. 2023. 3
- ⑨尾形愛実, 姉帯沙織, 小島龍平, 時田幸之輔. ブタ胎仔標本における橈骨神経を貫く肩甲下動脈の報告. 第 128 回日本解剖学会総会・全国学術集会. 2023. 3
- ⑩吉見菜々香, 姉帯沙織, 小島龍平, 時田幸之輔. ブタ胎仔標本における鎖骨下筋支配神経の観察. 第 128 回日本解剖学会総会・全国学術集会. 2023. 3

【総数：論文 5 件、学会発表 10 件、講演 0 件】

【神経・がん理学療法学領域】

- ①Shimizu N, Hashidate H, Ota T, Kawai Y. Physical activity according to sit-to-stand, standing, and stand-to-sit abilities in subacute stroke with walking difficulty: a cross-sectional study. *Physiother Theory Pract.* 2022 May 11:1-9.
- ②國澤洋介, 森本貴之, 大隈統, 國友淳子, 儀賀理暁, 小峰和美, 阿部恵美, 山本満. 生活機能の変化からみた緩和ケアチーム専任理学療法士の役割. *日本ヒューマンケア・ネットワーク学会誌.* 20(1) 91-97 2022 年 10 月
- ③小関要作, 高倉保幸, 師岡祐輔. デイサービス利用者における記憶機能と身体機能との関連. *日本ヒューマンケア・ネットワーク学会誌.* 20(1) 31-36 2022 年 10 月
- ④師岡祐輔, 國澤洋介, 山本満. 受傷後早期の不全頸髄損傷者における大腿直筋と中間広筋の筋厚の変化：予備的研究. *日脊障医誌* 35(1) 28-31 2022 年 7 月
- ⑤師岡祐輔, 國澤洋介, 大久保裕也, 山本満. 急性期不全頸髄損傷者の歩行自立に必要な膝関節伸展筋力. *理学療法科学* 38(1) 63-67 2023 年 2 月
- ⑥Shimizu N, Considering the physical activity management based on the characteristics of intensity-based physical activity according to gait ability in people hospitalized with subacute stroke, *World Brain Disorders and neuroscience Summit* 2022 Oct.
- ⑦師岡祐輔, 高倉保幸, 國澤洋介, 大久保裕也, 鈴木郁美, 荒木心太, 山本満. 不全頸髄損傷者に対する受傷後 48 時間以内の早期離床の効果. 第 59 回日本リハビリテーション医学会学術集会. 2022 年 6 月
- ⑧師岡祐輔, 國澤洋介, 大久保裕也, 鈴木郁美, 荒木心太, 山本満. 受傷後早期の不全頸髄損傷者に対する神経筋電気刺激の効果. 第 20 回日本神経理学療法学会学術大会. 2022 年 10 月
- ⑨清水夏生, 石垣智也, 金居督之, 尾川達也, 久保宏紀, 吉田啓志. 歩行困難な回復期脳卒中者における理学療法実施中の身体活動量計の測定精度 - 2021 年度 運動疫学会プロジェクト研究 -. 第 24 回日本運動疫学会学術総会. 2022 年 6 月
- ⑩清水夏生, 石垣智也, 尾川達也, 太田智裕. 回復期脳卒中者における入院後 1 か月間の連続した座位行動の改善に関連する日常生活活動能力：予備的検討. 第 1 回日本老年療法学会学術大会 2022 年 10 月

【総数：論文 5 件、著書 3 件、学会発表 8 件、講演 2 件】

【予防理学療法学領域】

- ①Tomoyuki Arai , Hiroaki Fujita , Kohei Maruya, Yasuhiro Morita, Ryoma Asahi, Hideaki Ishibasi : Loss of height predicts fall risk in elderly Japanese: a prospective cohort study, *Journal of Bone and Mineral Metabolism*, 41(1):88-94, 2022.
- ②Yumi Mashimo, Saki Tsuchihashi, Kenta Tsutsui, Tomoyuki Arai, Yoshitaka Tsuji, Toshiaki Numa, Kazuo Kameda, Kyoko Nishizawa, Mami Kovacs, Shukichi Tanaka, Hiroki Watanabe, Yasushi Naruse, Mitsuyo Ohmura, Noriyuki Ishida , Toshiki Iwasaki, Gaku Hiruma, Naoki Miyazaki, Ryo Takemura, Kengo Nagashima, Yasunori Sato, Yui Ohtsu, Takashi Nakano, Naomi Aida, Isao Iizuka, Hiromi Kato, Yoshiki Kobayashi, Takaaki Senbonmatsu: Synergistic Effect of Motivation for the Elderly and Support for Going out, *Journal of personalized medicine* 12(8):1257. 2022.
- ③藤田博暁, 森田泰裕：運動の分野でトピックとなっている論文のレビュー, *日本骨粗鬆症学会誌*, 8(4):615-618, 2022.

- ④藤田博暁, 森田泰裕: 骨粗鬆症診療のチームに医療における理学療法士の役割, 日本骨粗鬆症学会誌, 8(4):599-604, 2022.
- ⑤新井智之, 丸谷康平, 森田泰裕, 久喜啓誉, 山崎雄一郎, 神林宏太, 仲丸武, 藤田博暁: ロコモティブシンドロームと 体組成, 運動機能との関連-男女のロコモ度に関連する要因の違いの検討-, 第 62 回日本老年医学会学術集会 (ハイブリット学会), 2022. 6. 2
- ⑥森田泰裕, 新井智之, 丸谷康平, 藤田博暁: 地域在住高齢者におけるロコモティブシンドロームと精神的健康度との関連-男女別の要因の検討-, 第 33 回日本運動器科学会, 2022. 7. 9
- ⑦森田泰裕, 新井智之, 丸谷康平, 久喜啓誉, 山崎 雄一郎, 神林宏太, 仲丸武, 藤田博暁: 地域在住高齢者におけるロコモティブシンドローム及び社会的フレイルの該当による身体機能の特徴と関連, 第 24 回日本骨粗鬆症学会(web 開催), 2022. 9. 2
- ⑧新井智之, 藤田博暁, 丸谷康平, 森田泰裕, 山崎雄一郎, 久喜啓誉, 神林宏太, 仲丸武, 石橋英明: やせ型ロコモと肥満型ロコモの特徴, 第 24 回日本骨粗鬆症学会(web 開催), 2022. 9. 2.
- ⑨新井智之: 自治体と協働で進めるロコモ予防~ロコモコール講習会の実践と効果~, 第 7 回埼玉ロコモ OLS 研究会, 2022. 07, シンポジウム, シンポジスト.
- ⑩三浦佳代: 脳卒中者の社会的活動の促進に向けた行動変容型計画介入の試み, 第 1 回日本老年療法学会学術集会, 2022. 10. 1, シンポジウム, シンポジスト.

【総数: 論文 5 件, 書著 5 件, 学会発表 10 件, 講演 4 件】

6-2. 獲得研究費

- 1 高倉保幸 (研究分担者): がんりハビリテーションの均てん化に資する効果的な研修プログラム策定のための研究. 厚生労働省科研費.
- 2 赤坂清和 (研究代表者): 腹臥位股関節伸展運動時の筋活動解析. 2022 年度保健医療学部プロジェクト研究費. 200 千円
- 3 大久保雄 (研究代表者): マラソン前後における体組成変化. 2022 年度保健医療学部プロジェクト研究費. 190 千円
- 4 澤田豊 (研究代表者): 歩行における肩甲胸郭結合と肩甲上腕関節の運動解析. 2022 年度保健医療学部プロジェクト研究費. 200 千円
- 5 清水夏生 (研究代表者): 要介護高齢者の座位行動に関する行動要因を定量化する - 質問紙の開発 -. 文部科学省科研費(研究スタートアップ支援). 2860 千円
- 6 清水夏生 (研究代表者): 入院中の回復期脳卒中者における歩行能力に応じた座位行動パターンの特性と歩行能力の改善に連続する座位行動が及ぼす影響. 2022 年度保健医療学部プロジェクト研究費. 226 千円
- 7 三浦佳代 (研究代表者). 在宅脳卒中者の活動性向上を目的とした行動変容型計画介入の効果検証. (文部科学省科学研究費: 若手研究)
- 8 金井欣秀 (研究代表者): 医療的ケアのある重症心身障害児への機器による呼吸運動育成理学療法プロトコルの開発. 文部科学省科学研究費 (若手研究)
- 9 姉帯沙織 (研究代表者): ブタ胎仔背側肩帯筋の形態的特徴. 2022 年度保健医療学部プロジェクト研究費. 300 千円
- 10 時田幸之輔(研究代表者): ブタ心臓刺激伝導系の剖出と観察-医療技術者養成課程における構造系実習課題の開発を目指して-. 2022 年度保健医療学部プロジェクト研究費. 279 千円
- 11 森田泰裕 (研究代表者): 地域在住中高齢者の運動器に関する基礎的研究-ロコモティブシンドロームにおける筋肉量・下肢筋力及び運動能力との関連について-. 2022 年度保健医療学部プロジェクト研究費. 577 千円

6-3. 受賞

新井 智之, 藤田 博暁, 丸谷 康平, 森田 泰裕, 山崎 雄一郎, 久喜 啓誉, 神林 宏太, 仲丸 武, 石橋 英明: 第 24 回日本骨粗鬆症学会優秀ポスター (やせ型ロコモと肥満型ロコモの特徴, 第 24 回日本骨粗鬆症学会(web 開催), 2022. 9. 2)

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

- ①時田幸之輔, 影山幾男. 第 128 回日本解剖学会総会・学術集会シンポジウム 体幹-下肢形態の多様性を肉眼解剖学・発生学から再考する. 2022. 03
- ②時田幸之輔, 後藤遼佑, 小島龍平. 日本人類学会ヒト・霊長類比較解剖学分科会研究会(肉眼解剖学セミナー新潟と

の共催)「局所解剖学, 比較解剖学, 発生学からヒトの身体の特徴と基本構成を考える」 2022. 10

③清水夏生. 地域理学療法認定カリキュラム 在宅生活の充実と社会参加促進のための生活期理学療法, 2022. 11

④清水夏生. TherapsTV 脳卒中リハビリテーション サーキット・レビュー 講師 (シリーズ配信), 2022. 1~

⑤清水夏生. リハテックリンクス 地域理学療法学 要介護高齢者の座りっぱなしにトライする 一不活動な生活習慣の変容に向けた臨床実践一. 2023. 2

⑥清水夏生. 日本神経理学療法学会「第5回SIGs参加型フォーラム2023」, 身体活動量SIGファシリテーター. 2022. 3

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

国家試験合格率は100%となり、過去最高の結果となった。新カリキュラムへの移行は順調に進めることができ、目標については95%程度を達成できたと評価した。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

最重要目標は、引き続き国家試験合格率の向上と受験者の増大としたい。さらに、教育面では円滑な新カリキュラムへの移行、コロナ禍への対応として感染対策の充実、研究面では競争的研究費の獲得と新規研究論文の充実を図りたい。

5. 共通教育部門

1. 構成員

部門長 加藤木 利行 (KATOGLI, Toshiyuki):保健医療学部長:特任教授
副部門長 田邊 一郎 (TANABE, Ichirou):内科学、臨床工学科兼担:教授
部門員 辻 美隆 (TUJI, Yoshitaka):外科学、看護学科兼担:教授
部門員 間山 伸 (MAYAMA, Shin):英語、臨床検査学科兼担:教授
部門員 池田 将樹 (IKEDA, Masaki):内科学、理学療法学科兼担:教授
部門員 嶋崎 晴雄 (SHIMAZAKI, Haruo):内科学、看護学科兼担:教授
部門員 上滝 圭介 (KAMITAKI, Keisuke):英語、臨床検査学科兼担:講師
部門員 是村 利幸 (KOREMURA, Toshiyuki):ITセンター:講師

2. 目的・目標

本部門は共通教育の充実および円滑な運営を図ることを目的として、令和2年度より4学科から独立して設けられた。臨床医学および医の倫理を教える医師の教員と、語学の教員、リテラシー教育としてITを教える教員が所属している。これらの教員は4学科すべての教育に携わる。

3. 活動実績

新型コロナウイルスの影響が続き、前期はWEB配信授業が中心であったが、後期はほとんどが対面授業となった。医療の基本についても十分なグループワークが出来るようになった。また語学の授業も対面で出来るようになった。WEB配信授業のためにITセンターの業務が過大だったが、今年度はMM教室のコンピューター入れ替え、教室の古いコンピューターのメンテナンス、改修工事に伴う入れ替え等創立から15年以上を経過して対応するための業務が多かった。

業績

論文

- ① Koh K, Tsuchiya M, Ishiura H, Shimazaki H, Nakamura T, Hara H, Suzuyama K, Takahashi M, Tsuji S, Takiyama Y, JASPAC. Chédiak-Higashi syndrome presenting as a hereditary spastic paraplegia. J Hum Genet 2022 Feb;67(2):119-121.
- ② Koh K, Shimazaki H, Ogawa M, Takiyama Y. A heterozygous GRID2 mutation in autosomal dominant cerebellar ataxia. Human Genome Variation 9: 27, 2022.
- ③ Kasuga K, Kikuchi M, Tsukie T, Suzuki K, Ihara R, Iwata A, Hara N, Miyashita A, Kuwano R, Iwatsubo T, Ikeuchi T; Japanese Alzheimer's Disease Neuroimaging Initiative. Collaborative author: Masaki Ikeda. Different AT(N) profiles and clinical progression classified by two different N markers using total tau and neurofilament light chain in cerebrospinal fluid. BMJ Neurol Open. 2022 Aug 10;4(2): e000321.
- ④ Okamoto K, Amari M, Ikeda M, Fukuda T, Suzuki K, Takatama M. A comparison of cerebral amyloid angiopathy in the cerebellum and CAA-positive occipital lobe of 60 brains from routine autopsies. Neuropathology. 2022 Dec;42(6):483-487.

学会発表

- ① 嶋崎晴雄, 宮澤保晴, 橋本律夫. 歩行障害と下肢の筋クランプを主徴とした、遺伝性痙性対麻痺17型の一家系. 第63回日本神経学会学術大会. 2022年5月18日, 東京.
- ② 嶋崎晴雄. 発作性失調症状を呈した3症例に対する薬物療法の効果. 第40回日本神経治療学会学術集会, 2022年11月4日, 郡山.
- ③ 嶋崎晴雄. VPS13D遺伝子のミスセンスバリエントが同定された純粋型遺伝性痙性対麻痺の一家系. 日本人類遺伝学会第67回大会, 2022年12月16日, 横浜.
- ④ 池田将樹, 桑原武夫, 池田佳生. CSF NFL and YKL-40 increased in IBMPFD with VCP R155C mutation: a case report and literature review. 第63回日本神経学会学術大会. 2022年5月21日.
- ⑤ 池田将樹, 桑原武夫, 牧岡幸樹, 長嶋和明, 藤田行雄, 池田佳生. CSF NFL and YKL-40 increased in IBMPFD with VCP R155C mutation. 第41回日本認知症学会学術大会/第37回日本老年精神医学会 合同開催. 2022年11月26日.

総説

① 池田 将樹. カプグラ症候群を含む妄想性誤認症候群が強いレビー小体型認知症の高齢者【脳神経内科医の立場から対応と介入のあり方を考える】

BRAIN and NERVE 74(5) 692-699 2022 年 5 月

② 嶋崎晴雄. 小脳失調から見た遺伝性痙性対麻痺. 特集/遺伝性痙性対麻痺. 脳神経内科 97(3): 368-375, 2022.

【総数：論文 4 件，学会発表 5 件 総説 2 件】

6-2. 獲得研究費

① 池田将樹 (代表). 文部省科学研究費 基盤 C. 18K07491. 分子 PET 画像と CSF 分析による脳アミロイドアンギオパチーからタウ病理の解明. (50 万円以下)

4. 自己点検・評価

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

一昨年度から新たに共通教育部門として独立した。

医師の教員 5 名はヒトの病気および医療の基本（医の倫理とコミュニケーション）を担当している。

臨床医学については 3 病院の専門家の先生方に多大なご助力をいただいているが、ややもすると医学部レベルの授業や試験となる傾向がある。国家試験対策については常勤の教員による補講等が例年通り行われている。さらに各学科の必要とする状況に応じて対応を考えていく。

医の倫理の教育については IP 教育も含めて積極的に進めているが、医学部との合同ワークショップのためには土曜日の授業が必要で、学生・教員の負担となっている。

IT センター業務として配信授業は減少したが、設立 15 年を過ぎて、各部のコンピューターが老化し順次入れ替えの必要があり、その対策に追われている。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

臨床医学教育について、3 病院から授業に来られる先生方には、試験結果・正答率をお送りして、授業内容と試験問題についてお考えいただいている。保健医療学部のディプロマポリシーに合うようにさらに改善のお願いをしていきたい。常勤の教員による授業は以前よりも増加している。

医療の基本（医の倫理）の教育は、グループワークやディスカッションなどアクティブラーニングを多用しており、一部の教員の負担が大きい。これからは世代の交代を目指して、次世代の教員を育成したい。この科目では看護学科の大野美佐子先生（心理学）の貢献も大きい。

英語については会話能力の向上と医学英語に親しむことを目標としているが、Zoom に対する教員・学生の慣れの問題から困難であった。次年度は対面授業を増やす予定である。臨床場面での英会話は学生の要望に合っているようで評判が良い。

文科省からリテラシー教育としての AI や統計学の科目を強化することが奨励されていることもあり、医学部との同一カリキュラム作成の方向で、カリキュラムの改訂を検討している。IT 教育については、MM 教室のコンピューターが更新されたので、次年度からは効率の良いリテラシー教育が出来るものと期待している。

1. 教育主任部門

1. 構成員

部門長 森 茂久(MORI, Shigehisa):医学教育学, 教授, 副学長(任期:令和4年3月31日)

部門員 中平 健祐(NAKAHIRA, Kensuke):教養教育, 准教授

永島 雅文(NAGASHIMA, Masabumi):解剖学, 教授

三輪 尚史(MIWA Naohumi):生理学, 教授

魚住 尚紀(UOZUMI, Naonori):生化学, 准教授

前崎 繁文(MAESAKI, Shigefumi):大学病院感染症科・感染制御科, 教授

舟久保 ゆう(FUNAKUBO, Yu):大学病院リウマチ・膠原病科, 教授

大崎 昭彦(OSAKI, Akihiko):国際医療センター乳腺腫瘍科, 教授

丸山 敬(MARUYAMA, Kei):薬理学, 教授

佐々木 惇(SASAKI, Atsushi):病理学, 教授

森吉 美穂(MORIYOSHI, Miho):大学病院臨床検査医学, 准教授

野田 真永(NODA, Shinpei):国際医療センター放射線腫瘍科, 教授

根本 学(NEMOTO, Manabu):国際医療センター救急医学科, 教授

木崎 昌弘(KIZAKI, Masahiro):総合医療センター血液内科, 教授

岩永 史郎(IWANAGA, Shiro):国際医療センター心臓内科, 教授

仲村 秀俊(NAKAMURA Hidetoshi):大学病院呼吸器内科, 教授

中山 伸朗(NAKAYAMA, Nobuaki):大学病院消化器内科・肝臓内科, 准教授

池上 裕一(IKEGAMI, Yuichi):大学病院内分泌・糖尿病内科, 講師

岡田 浩一(OKADA, Hirokazu):大学病院腎臓内科, 教授

山内 秀雄(YAMANOUCHI, Hideo):大学病院小児科, 教授

亀井 良政(KAMEI Yoshimasa):大学病院産科・婦人科, 教授

松尾 幸治(MATSUO, Koji):大学病院神経精神科・心療内科, 教授

高橋 秀寿(TAKAHASHI, Hidetoshi):国際医療センターリハビリテーション科, 教授

宮野 恭平(MIYANO, Kyohei):大学病院皮膚科, 教授

高田 綾(TAKADA, Aya):法医学, 教授

中元 秀友(NAKAMOTO, Hidetomo):大学病院総合診療内科, 教授

2. 目的・目標

各基本学科の教育主任は、それぞれの基本学科が関わる卒前教育全般について調整・連絡を行う。さらに、教育領域毎に、教育主任の互選により代表教育主任が選任される。教育主任部門はこの代表教育主任により構成される。本部門は、教育領域間において教育担当者の意思疎通をはかり、大学全体の教育活動が円滑に行われるようにすることを目的とする。

今年度は、川越、日高 brunch の組織を規定上整備することを目標とする。

3. 活動実績

教育主任部門は、各領域の代表教育主任が卒前教育委員会に出席して、卒前教育の立案・決定の過程に参加し、情報を共有して、各基本学科における教育の実行などに携わった。

代表教育主任は、各領域の教育主任を代表する立場にある。総合試験、実力試験、卒業試験における問題の調整任務は試験連絡代表者/試験実務担当者に移行した。教育主任はそれぞれの基本学科が関わる卒前教育全般について、調整と連絡を行った。

卒前教育委員会は、代表教育主任は卒前教育委員会の正式メンバーとして参加し、卒前教育委員会の教育主任はオブザーバーとしての参加形態を継続した。新型コロナウイルスの感染対策として三密を避けるため、昨年度に引き続き対面と遠隔のハイブリッド形式とした。卒前教育委員のうち、発言予定者のみ会議場での参加とし、その他の委員は原則 Zoom システムからの参加、オブザーバーは学内 LAN での視聴とチャットシステムを用いた参加とした。

平成30年度より、川越キャンパス教育主任会議(月1回、基本的に第3木曜日17:30から1時間以内)、日高キャンパス教育主任会議(月1回、基本的に第2火曜日、卒前教育委員会開催日17:30から約30分)を正式実施し、その後参加者は徐々に増加した。川越キャンパス教育主任会議は昨年度に引き続き Zoom を用いた遠隔会議を開催した。毛呂山キャン

ンパスの教育主任は従来通り、卒前教育委員会に学内 LAN とチャットシステムを用いてオブザーバーとして参加する形を継続した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

基本学科の教育責任者である教育主任・代表教育主任と、基本学科横断的なコース・ユニットの責任者であるコースディレクター・ユニットディレクターの役割分担が明確に意識され、互いの意思疎通が密となり、各基本学科と各コース・ユニットの間の調整がより円滑になり、教育活動の向上に寄与していると考えられる。

教育主任への情報伝達の会議体参加として、毛呂山キャンパスでは、卒前教育委員会へのオブザーバー出席、川越キャンパスでは川越教育主任会議、日高キャンパスでは日高教育主任会議に移行した。川越キャンパス、日高キャンパスでそれぞれ独自に川越キャンパス教育主任会議、日高キャンパス教育主任会議が正式実施となり5年目に入り、川越、日高キャンパスの教育主任会議の出席率は増加しており、各会議では活発な質疑応答も行われ、情報伝達は年々向上していると考えられる。

また川越ランチ、日高ランチにおけるランチ長と副ランチ長の二人体制となり3年目に入り、両ランチ、特に川越ランチの活動が活発になった。

教育領域毎に教育主任の互選により代表教育主任が選任されることになっているが、今年度も短期間に教育主任の交代があり、代表教育主任の交代が遅れたケースがあった。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

今後も、確実な情報伝達のために、各教育主任の出席率を調査して、出席が極めて低い基本学科については出席可能な教員への交代、また教育副主任が出席するなどの対応策を検討する。

また教育関係の情報提供については、学内の医学教育センターHP欄の特設ページ設置、WebClassに教育主任が確認できる情報を載せているが、今後は教育主任向けのページを設置するなど、情報提供のさらなる充実を検討する。退職、異動等により代表教育主任の交代が必要になった場合には、早急に交代を検討することが重要である。今後、交代の情報を迅速に収集し、また後任の代表教育主任決定に時間がかかる場合には、教育領域毎に教育主任の互選を医学教育センター主導で調整し、代表教育主任が迅速に選任できる形を模索する。

代表教育主任の教育領域については、領域の重複、カバーされていない領域があるため、将来的に教育領域見直しが必要である。まずは実力試験、卒業試験における問題の調整役を考慮すると、臨床実習における診療科を軸に検討する方針である。

医師法改正に伴い、スチューデントドクターが法制化され、また医学教育分野別評価でも診療参加型臨床実習の充実が指摘されたことから、ますます病院群での臨床実習指導者による指導の重要性が高まっている。3病院のうち、総合医療センター、国際医療センターでは定期的に教育主任会議が開催され、情報の伝達、意見の集約が活発に行われているが、大学病院では該当する会議体がないため、情報の伝達、意見の集約が不足していることは否めない。先般の規則改正の中に、毛呂山ランチ長の設置の可能性を含めた規則としたことから、今後、大学病院内の臨床実習を統括するために、毛呂山キャンパスにもランチ長、副ランチ長を設置することを検討する。

2. 教養教育部門

1. 構成員

部門長 向田寿光 (MUKAIDA, Hisamitsu) : 教養教育 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
副部門長 鈴木 正 (SUZUKI, Sei) : 教養教育 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
種田佳紀 (OIDA, Yoshiki) : 教養教育 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)
藤森千尋 (FUJIMORI, Chihiro) : 教養教育 : 教授 (R4 年 4 月より 任期 : R6. 3. 31)

<物理学>

部門長 向田寿光 (MUKAIDA, Hisamitsu) : 教養教育 : 教授
副部門長 鈴木 正 (SUZUKI, Sei) : 教養教育 : 准教授
部門員 三島 智 (MISHIMA, Satoshi) : 教養教育 : 講師 (R5 年 3 月入職)
部門員 赤間啓一 (AKAMA, Keiichi) : 名誉教授
部門員 赤羽 明 (AKABANE, Akira) : 非常勤講師
部門員 勝浦一雄 (KATSUURA, Kazuo) : 非常勤講師

<化学>

部門員 森口 武史 (MORIGUCHI, Takeshi) : 教養教育 : 教授 (R4 年 11 月より)
部門員 土田 敦子 (TUCHIDA, Noriko) : 教養教育 : 講師
部門員 村上 元 (MURAKAMI, Gen) : 教養教育 : 講師

<生物学>

部門員 山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 教養教育 : 准教授
部門員 川村 勇樹 (KAWAMURA, Yuuki) : 教養教育 : 講師
部門員 大間 陽子 (OMA, Yoko) : 教養教育 : 講師

<英語>

副部門長 藤森千尋 (FUJIMORI, Chihiro) : 教養教育 : 教授
部門員 Chad Godfrey : 教養教育 : 准教授
副部門長 種田佳紀 (OIDA, Yoshiki) : 教養教育 : 講師
部門員 伊澤宜仁 (IZAWA, Yoshihito) : 教養教育 : 講師
部門員 池島宏子 (IKESHIMA, Hiroko) : 非常勤講師
部門員 稲川健太郎 (INAGAWA, Kentaro) : 非常勤講師
部門員 狩野緑 (KANO, Midori) : 非常勤講師
部門員 Martin Woodall : 非常勤講師
部門員 Stephen O' Toole 非常勤講師
部門員 Frances Gleeson : 非常勤講師
部門員 Steven Morris : 非常勤講師
部門員 Nathan Taylor : 非常勤講師
部門員 Lauren Anderson ; 非常勤講師
部門員 Jeremy Owen : 非常勤講師

<総合教育>

部門員 中平健祐 (NAKAHIRA, Kensuke) : 教養教育 : 准教授
部門員 菅理江 (SUGE, Rie) : 教養教育 : 准教授
部門員 米岡裕美 (YONEOKA, Yumi) : 教養教育 : 准教授
部門員 林禪之 (HAYASHI, Yoshiyuki) : 教養教育 : 助教

2. 目的・目標

教養教育部門は、医学生の基本的能力や素養として、言語リテラシー、生命科学理解のための科学的思考力、幅広い教養、などが重要との認識のもとに、導入教育において、少人数、積極的自主参加型グループ学習などにも柔軟に対応でき、専門性にとらわれることなく、臨機応変で機動性の高いチームワークを発揮することを目指して、2013 年 4 月、それまでの医学基礎基本学科を改組して医学教育センターに直属する部門として発足した。その後も、「医学教育の質保証改革」方針に根ざしたカリキュラム改革の先陣として、初年時学生への導入教育、リテラシー教育、など各科目にまたがって連携の必要な教育の立案、組織化と実施の基幹教員となるべく日々邁進している。さらに、医学英語や行動科学、OSCE のサポート、総合試験の試験監督等を通じ、高学年の教育にも尽力している。

医学教育センター下の教養教育部門としての活動と、基本学科としての教養教育の活動を明確に分けることは難しい。そこで以下では教養教育の「教育実績」を中心に報告し、「研究実績」については、基本学科内の「教養教育」において報告する。

教養教育部門は、大まかに「物理学」「化学」「生物学」「英語」「総合教育」の 5 つのグループに分かれている。

以下に、個々のグループに関する目的・目標を記載する。

<物理学>

医学生に対する物理学教育の目的は、これを学ぶことにより、幅広い判断力を培う教養の核とすると同時に、医学や他の諸科学を学ぶための基礎とすることにある。具体的には、主に「人体の基礎科学 1」および「人体の基礎科学 2」の各ユニットにおいて物理および数学領域を通して、人体を物理的に眺める手法や、自然現象を数理的に解析するための

基礎を習得することを目的とする。

<化学>

「人体の基礎科学1」および「人体の基礎科学2」の化学領域を主に担当しており、講義、実習、演習を通して化学現象の基本概念を学ぶことを目的として活動した。具体的に、「人体の基礎科学1」では、物質間の相互作用に関する基本法則を学び、専門科目の履修に必要な化学の基礎知識、特に物理化学分野の知識を身につけることを目的とし、「人体の基礎科学2」では、生命活動において必要な有機物の構造について学び、それらを化学的な根拠に基づいた説明ができるようになることを目的として活動した。選択必修科目を含む他の科目については、医師もしくは医療従事者としての一般的な教養を身につけることを目的として活動した。

<生物学>

生物学では、他の基本学科と連携した統合教育と、生物学独自の教育を担当した。前者では「細胞生物学コース」「医学英語」「選択必修」「医科学入門」「医科学の探索」「臨床推論」「臨床入門」を、後者では高校で生物学を履修しなかった学生に対する補習を意図した「自然科学の基礎（生物）」および「課外プロ」を行った。下記の項目にて、個々に概説するが、いずれも医学の学習に必要な生物学的知識および概念を学生が把握することを目的としている。

<英語>

建学の理念の柱の一つである「国際水準の医学・医療の実践」にもとづき、求められる医療人として、国際共通語としての英語力の必要性は益々重要となっている。そのような状況に対応した英語運用能力を身につけることを目標として、その基盤となる科学的思考力と言語表現力を合わせて養いつつ、医学・医療に関する専門的知識に対応する英語表現などを学習する機会を提供している。

英語カリキュラム上の基本的な方針としては、ESP (English for Specific Purposes) の考え方を採用し、医学・医療に関する英語学習を目的としたカリキュラムとなっている。医学英語ユニットは、それぞれ具体的な目的と目標をもった4つのサブユニットで構成されており、4技能をバランスよく統合的に高めるとともに、医療に従事する上で必要となる英語の知識と技能を伸長する自律的な学習習慣を育成することに重点を置いている。

<総合教育>

医師として生涯学び続ける基本姿勢を養い、医学生としての学びを支える基礎的技能を身につけることを目的としている。このために、初年次教育、コミュニケーション、および、他者との協働能力の養成に重点をおいている。

3. 活動実績

以下では各グループの活動報告を記載し、最後に部門全体の活動について報告する。

<物理学>

[リメディアル教育]

高校物理未履修者に対し、以下のユニットにおいて対面で講義を行った。

自然科学の基礎（鈴木、向田）高校で学ぶ物理の初歩

推薦入学者に対して、オンラインスクーリングとレポートの添削によって高校の物理と数学を復習させた（鈴木、向田、三島）。

[人体の基礎科学]

学生の基礎知識に配慮しつつ、以下のユニットにおいて講義および実習を行った。物理分野では、代謝、電気生理、感覚器を念頭にエネルギー変換、電磁気、音、光に関係する題材を多数用いた。数学分野では、自然科学への数学の応用を中心に題材を選んだ。

人体の基礎科学1 物理（鈴木、向田、勝浦、赤間、赤羽）力学、電磁気学

人体の基礎科学1 数学（鈴木、向田）微分積分、ベクトル

人体の基礎科学1 データサイエンス（鈴木）データサイエンス AI の導入、心得

人体の基礎科学2 物理（鈴木、向田、勝浦、赤間、赤羽）音、波動、光、放射線

人体の基礎科学2 数学（鈴木、向田）微分方程式

なお、全ての講義をオンラインで行い、実習は対面でを行った。

[選択必修]

次の選択必修のユニットにおいて、物理学及びその関連分野の指導を行った。

線形代数と曲面の数学（向田）

AI の基本を知ろう（鈴木）

[少人数教育、チーム基盤型学習]

以下のユニットにおいて、講義、チュータ等を担当した。

人体の科学入門1（鈴木、向田）チュータ、講義等

臨床推論（鈴木）チュータ、まとめの講義

[医学英語]（鈴木）

1年生医学英語1において、物理学を題材とした英文の読解を指導した。

[科学的思考と表現]（向田、鈴木）

科学的思考と表現において、科学レポートの書き方について、講義を行なった。

科学的思考と表現の中の深遠なる理解コースで「What is life?生命とは何か（ポール・ナース著、竹内薫訳）」の輪読を行った。（鈴木）

[OSCE]（鈴木、向田）

2021年7、12月に行われたOSCEの運営に携わった。

<化学>

[医科学の探索] (1年、土田)

テュータを担当した。

[人体の基礎科学1] (1年、土田・村上・森口担当)

酸塩基平衡、反応速度、エネルギーについて講義、実習(演示実験)、アドバンス講義を行った。アドバンス講義では、中平准教授、小谷准教授にご担当いただいた。定期試験、再試験を行い、総合的に評価を行った。

[人体の基礎科学2] (1年、森口・村上・土田担当)

生理活性物質、生体構成分子について講義(オンデマンド)、実習(対面形式)、アドバンス講義(オンデマンド)を行った。実習では、日詰講師、塚本講師、廣澤講師にもご担当いただき、実習のまとめと発表をZoomで実施した。アドバンス講義では、吉川准教授、魚住准教授にご担当いただいた。定期試験、再試験を行い、総合的に評価を行った。

[細胞生物学1] (1年、2時間、村上担当)

細胞生物学1コース運営教員の方針のもと、講義担当責任者及び講義担当教員として、教科書「エッセンシャル細胞生物学 第2章 細胞の化学成分」の講義を担当した。

[医学英語2] (1年、4時間、森口担当)

医学英語2のMedical Englishを担当した。

[科学的思考と表現] (1年、1時間、土田担当)

科学的思考と表現において、レポートの書き方についての講義を担当した。

[1年生 臨床入門/臨床推論] (1年、森口・村上担当)

Zoomを利用した動画配信による病院見学に参画した。

[選択必修「化合物命名法」] (1年、2年、森口担当)

IUPAC命名法に基づいた有機化合物の命名(英語名)のしかたについて、講義を行った。

[選択必修「ユニット折り紙で作る分子模型」] (1年、2年、土田担当)

分子模型を組み立てることで分子の形と性質を理解することを目的とする。フラーレン・ダイヤモンド結晶などの分子を題材に結合とは何か、該当構造であることの利点について講義・実習を行った。

[選択必修「実験からデータ解析、発表まで」] (1年、2年、村上担当)

英語で記述された実験法の読解から解析までを行った。

[機能系実習2] (2年、21時間、村上担当)

実習の指導を担当した。

[共用試験OSCE] (4年、村上・土田担当)

4年生の共用試験OSCEの設営および試験の進行・集計業務に携わった。

[臨床実習後OSCE] (6年、村上・土田担当)

6年生の共用試験OSCEの設営および試験の進行・監督業務に携わった。

[共用試験CBT] (4年、土田担当)

4年生の共用試験OSCEの設営および試験の進行业務に携わった。

<生物学>

1) 「細胞生物学コース」(担当者: 山崎芳仁、川村勇樹、大間陽子)

このコースは複数の基本学科による統合科目である。生物学では山崎がユニット1のUD、川村がユニット1のUD補佐、大間がユニット3のUD補佐となった。コロナ禍で2020年度から2021年度までオンライン講義が続いたが、2022年度は3年ぶりに一部の講義(序論の全体講義と4章から7章の2クラス制講義)で対面授業を行った。1章から3章およびまとめの講義はオンデマンド講義とした。また、体験学習も半数登校で対面実習を行った。2016年度から細胞生物学1ユニットの一部の講義(4章から7章まで)で入試生物選択者と非選択者の2クラスに分けて講義を行ってきた。これは「人体の構造と機能」および「細胞生物学」の不合格者には生物非選択者が多いので、学年の始めのうちは生物非選択者に対して、丁寧な授業を行うことで、生物非選択者が選択者と同様な生物学的考え方を早いうちに身につけられることを意図したものであった。山崎が1, 3, 4, 7章と複数章のまとめを担当した。川村が4, 7章を、大間が6章を担当した。体験学習は半数が登校して顕微鏡を使用した実習を行い、半数は、本来であれば学生が体験するはずだった実験を演示実験として動画で提供し、考察を提出させた。大間が提出された課題の点検を行った。細胞生物学2ユニット以降ではオンライン講義が継続された。山崎が9章、川村が17章と複数章のまとめ、大間が19章と複数章のまとめを受けもった。

ユニット1では、定期試験が対面で行えない場合の備えと、学生の日常的な学習習慣の動機付けとして、章ごとに○×式のテストをオンラインで提供し、全ての章で満点を獲得した場合に定期試験の5点分とすることにした。1章満点でないごとに1点減点とした。このため、定期試験はMCQ25点、穴埋め40点、記述30点の95点満点とした。1点減点が28(2021年度25名)、2点減点が7(2021年度3名)であった。複数回満点を取れない学生は少ないことから、学習習慣の涵養に効果があったのではないかと評価している。

2018年度に始まった細胞生物学2ユニットでのクラス分け授業が2022年度も継続された。補習クラスの対象者は7月の定期試験で不合格になった27名と追試験になった3名の合計30名であった。山崎、川村、大間が補習クラスの指導を担当した。補習クラス対象学生を3グループに分け、1グループを1人の教員が担当して、対話型で第1ユニットと第2ユニットの基本事項を指導した。第2ユニットの定期試験での口頭試問は行わなかった。

2) 「自然科学の基礎(生物)」(担当者: 山崎芳仁)

山崎はUDを務めた。この講義は入学までの生物の学習が不十分であった学生に「細胞生物学」コースおよび「人体の構造と機能」コースの学習に必要な概念を把握してもらうことを目的としている。物理、生物、化学のうちから学生が入学試験で選択していない科目を指定して4月に集中的に15時限の対面授業を行った。生物学では、高校生物学用の図録を用いて、講義と演習を行った。生物クラス70名、物理クラス63名であった。

3)「医学英語」(担当者:川村勇樹、大間陽子)

川村、大間は、1年生の「医学英語」の授業の一部をオンラインで担当した。

4)「良医への道1コース、選択必修ユニット」(担当者:川村勇樹)

「実験動物学入門1」の第5回「遺伝子操作動物とは」、第6回「遺伝子操作動物の作成と応用」の講義を担当した。

5)「医科学入門(人体の科学)」(担当者:大間陽子)

大間がテュータを担当した。

6)「医科学の探索」(担当者:大間陽子)

大間がテュータを担当し、調査、学習、2日にわたる合同発表会までを指導した。

7)「課外プロ」(担当者:山崎芳仁)

「生物の基礎をもう一度」というテーマで、2021年9月~2022年1月までZOOMを用いて指導を行った。実人数で22(2021年度42名)が参加した。

8)この他に、山崎、川村が1年生のオリエンテーション、山崎は1年生「臨床推論」「臨床入門」ユニットのUD補佐、川村は1~2年生「臨床入門」のUD補佐を務めた。また、川村、大間は4年生、6年生のOSCE試験業務にも協力した。学校推薦型選抜・帰国生選抜の合格者に対する課題(生物)添削を山崎、川村、大間が行った。

<英語>

(1)1年次「良医への道コース(医学英語ユニット)」

「医学英語」ユニット(医学英語1、「医学英語2」、「医学英語3」と学期ごとに設定)をReading、CLIL(Content and Language Integrated Learning 内容言語統合型英語学習と呼ばれる教授方法で、医療系の内容を英語で学ぶ形式)、Academic Writing、専門書読解の4つのサブユニットに分けて実施している。これらサブユニットは、英語4技能の領域における重点技能を明確にするとともに、内容を相互に関連づけることで、総合的な英語運用力の育成を目指している。各サブユニットは、リーダー主導のもとに効率よく運営され、密に協力・連携している。例年、4月当初にオリエンテーション及びTOEFLテストを実施している。各サブユニットでは、具体的には次のような学習活動を展開した。

・Academic Writing:担当者 伊澤宜仁、種田佳紀、Chad Godfrey、林禅之(総合教育)他 日本人・外国人非常勤講師学年を6つのクラスに分割し、日本人教員1名と外国人講師2名によるチーム・ティーチングの遠隔授業を行った。この授業では、論理的に筋道の通ったパラグラフ構成でまとめた文章を英語で書くことを目的とし、各自が選んだトピックで実際に書いた草稿に教員がフィードバックを与える活動を行った。サブユニットリーダーの伊澤が、遠隔授業の運営(授業計画、準備及び実施、評価の取りまとめ)をリードした。

・Reading:担当者 種田佳紀、伊澤宜仁、林禅之(総合教育)他 日本人非常勤講師

医療に関係する現代的なトピックを扱った教材をTIME誌などより選び、扱ったトピックについての知識を深め、それについて考え、自らの意見をまとめる、クリティカル・リーディングを行った。「臨床推論」ユニットにおけるテーマ(揺さぶられ症候群)と関連した記事を取り上げ、コアカリキュラムと連携した深く思考する英語学習を行った。サブユニットリーダーの種田が、遠隔授業の運営(授業計画、準備及び実施、評価の取りまとめ)をリードした。

・CLIL:Chad Godfrey 他 外国人非常勤講師

学生を12分割して少人数クラスで、5人の非常勤講師とともに、独自に編集したテキストを使用し、基礎的な医療や科学の知識を英語で理解し、各自の興味関心に応じて探究して英語でプレゼンテーションできる力を身に付けることを目標として、遠隔授業を行った。サブユニットリーダーのGodfreyが、遠隔授業の運営(授業計画、準備及び実施、評価の取りまとめ)をリードした。

・専門書読解:藤森千尋、伊澤宜仁

細胞生物学(川村勇樹、大間陽子)、基礎科学(鈴木正、森口武史)、解剖学(藤田恵子)との連携のもと、専門テキストを読解する遠隔授業を行い、専門的知識の復習と英語基礎学力の向上を図った。サブユニットリーダーの藤森が授業運営(授業計画、準備及び実施、評価の取りまとめ)をリードした。

・その他:各学期に医学英単語テストを実施し、基本的な医学・医療用の英単語の定着を図った。

(2)1年次「医科学への道コース(科学的思考と表現ユニット)」及び2年次「良医への道2コース(臨床入門ユニット)のプレゼンテーション」など言語系教員として、英語のみならず日本語における思考力や表現力を涵養するためのユニットにもサブユニットリーダーとして参画した。

(3)上記以外のコース・ユニット

・藤森は2年、3年、4年の「医学英語」ユニットの授業計画を行い、基礎科学系専門教員や医学系専門教員と連携して、具体的な授業運営を行った。遠隔授業がスムーズに進むよう、1年から4年までの医学英語カリキュラム全体の授業計画及び運営、非常勤講師の調整を行った。また、医学英語カリキュラム検討ワーキンググループの責任者として、医学部の医学英語カリキュラム全体像(正課と正課外の英語教育活動)について検討し、まとめた。

・Godfreyは、2年と3年の医学英語のサブユニットである会話・コミュニケーションのリーダーとしてシラバス作成及び授業運営に携わった。また遠隔授業が円滑に進むよう、外国人講師のスケジュール管理と調整、授業準備及び実施運営に携わった。国際交流センターにおける各種企画(English Cafe, 交換留学生セミナーなど)を実施した。他にFUSE(Fundamental Use of Surgical Energy)オンライン試験の試験責任者(本学は全国に2つのテストセンターがあるうちのひとつ)として、試験監督を行なった。

・種田は、「医科学の探索」のテュータ、選択必修2科目の開講、春季語学研修の運営にも携わった。また、本来の専門である倫理学に関連して、2年生の行動科学と医療倫理ユニットにおいて、ジェンダーや行動経済学についての講義を、3年生の行動科学と医療倫理ユニットにおいて臨床倫理に関連する講義、4年生で研究倫理に関連する講義、6年生の国家試験に向けての講義も担当した。Readingの遠隔授業の計画と準備、非常勤講師との連絡、授業運営を行った。

・伊澤は、1、2、3、4年医学英語の遠隔授業が円滑に進むようネット教育システム(WebClassやZOOM)の準備と管理を行った。選択必修1科目の運営も行った。Academic Writingの遠隔授業の計画と準備、非常勤講師との連絡、授業

運営を行った。その他、新入生オリエンテーション幹事として、学生・教員・事務と連携しつつ運営を行った。

・また、当教室の専任教員（藤森、Godfrey、種田、伊澤）は、「良医への道コース」の PBL・臨床入門のユニットに、テュータとして参加した。また、OSCE（4年～6年）や共用試験の試験監督業務にも携わった。

<総合教育>

中平は、1年生の導入教育プログラムである「医科学への道すじ」コースのコースディレクター、および、「医科学入門」のユニットディレクター、「医科学の探索」のユニットディレクター補佐、「科学的思考と表現」のユニットディレクター補佐として、企画・統括・担当をおこなった。また、1、2年生の「良医への道コース・臨床推論」のユニットディレクター補佐として課題作成と実施を担当した。その他に1年生では、「人体の基礎科学」コースのコースディレクター補佐、酸塩基平衡の講義担当者として企画・担当をおこなった。2年生では、「人体の構造と機能2」コースの「情報系」ユニットディレクターおよび、以下の講義・演習・実習を担当した。「エネルギー系」呼吸器、「調節系」酸塩基平衡、「情報系」情報伝達、「機能系実習」骨格筋の収縮。また、2年生の「医学英語」を担当した。

菅は、1～4年生の「行動科学と医療倫理」のユニットディレクターとして、企画・統括・担当を行った。1年生「医科学入門」「臨床推論（感染症）」にテュータとして参加。2年生「情報系」行動から考える学習・記憶・情動の講義を担当した。課外学習プログラム「論文をよんでみませんか」を開講した。また相互交換留学の再開にともない、担当大学であるリンシューピン大学（スウェーデン）へ留学する学生に同行し、視察および相手校スタッフと意見交換を行った。

米岡は、1年生の「科学的思考と表現」のユニットディレクターとして、企画・統括・担当を行った。また、1～4年生の「行動科学と医療倫理」、「地域医療とチーム医療」、1～3年生の「キャリアデザイン」、1～2年生の「臨床入門」、4年生「Pre-CC 2-1」のユニットディレクター補佐として、講義・演習・実習を担当した。他に、1、2年生合同の授業として、選択必修で「学校って何だろう？ 病院って何だろう？」を開講した。3年生では、「医学部保健医療学部合同 IPE（3年生 PreCC1-1 医療安全管理演習）において、事前の授業動画の作成及び合同演習当日の導入ワークを担当した。また、城西大学、埼玉県立大学、日本工業大学との合同での IPW 演習のファシリテータを担当した。講義以外では、OSCE の設営及び試験の進行に携わった。

林は、1年生「科学的思考と表現」（実践的技術コース、深遠な理解コース）のユニットディレクター補佐として、演習と毎回の課題添削を担当した。1年生「医学英語1～3」ユニットディレクター補佐として、授業の全体的な運営のサポートを行った。特に Reading サブユニットの授業を担当した。また、Academic Writing サブユニットで授業のサポートを行なった。「臨床入門（高齢者とのコミュニケーション）」の授業を一部担当した。「臨床推論」のテュータを担当した。2年生では、「臨床入門実習（プレゼンテーション技法）」を一部担当した。1、2年生共通で、選択必修「答えない医学1」「答えない医学2」を担当した。3年生、4年生では、「医学英語」ユニットディレクター補佐として、授業運営に参加した。また、6年生の OSCE の設営及び試験の進行に携わった。その他の試験監督業務に携わった。課外学習プログラム「科学哲学カフェ」を開講し、埼玉大学の学生2名とともに、文献購読のセミナーを行った。

<部門会議>

毎月（8月を除く）開催した。向田部門長が議事進行した。これに引き続き基本学科会議を開いた。

<1年生オリエンテーション>

1年生オリエンテーションの準備および業務を分担して担当した。

<オープンキャンパス>

受験生確保のための活動の一環として7月から WEB オープンキャンパスをオンラインで配信し、7月にオンライン相談会が開かれたが、それらの開催業務において中心的役割を担った。

<推薦・帰国生入学予定者に対する学習指導>

学校推薦型選抜および帰国生選抜における入学予定者に対するの入学前学習指導を行った。具体的には、担当ユニット毎に課題を作成し、提出された課題へ添削を行って入学後に返却した。また、2022年12月27日に行われたオンラインスクーリングに協力した。

<試験監督>

定期試験や卒前教育委員としての試験監督の他に、部門員で分担して6年生実力試験を10回、6年生卒業試験を12回、2年生総合試験を4回の試験監督業務を行った。

<関連学部等授業>

保健医療学部および関連学校等の教養教育の授業を担当した。以下に担当した授業を列挙する。

・保健医療学部

臨床検査学科 1年前期「数学」「物理学実験」「化学Ⅰ」「化学実験」「生物学」「生物学実験」

1年後期「化学Ⅱ」「人体の科学入門」

理学療法学科 1年前期「物理学」「細胞生物学」「英語Ⅰ」

1年後期「化学」「物理学実験」「英語Ⅱ」

・埼玉医科大学短期大学

看護学科 1年前後期「コミュニケーション英語Ⅰ」

1年前期「ヒトの生物学」

1年後期「化学の基礎」

2年前後期「英語Ⅱ」

4. 自己評価と次年度計画

以下ではグループごとの自己評価と次年度計画について記載する。

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

<物理学>

2022年度は前年度に引き続きオンライン授業を中心に授業が行われた。ただし、「自然科学の基礎」は新入生の初めての授業ということで、人間関係の形成を重要視して対面で行われた。一方、実習は実際に体験することが重要との観点から、手指消毒や手袋等の感染対策を実施した上で対面で行った。定期試験は全て対面で実施した。このように、2021年度は対面の授業を慎重に再開した年だった。幸い、対面授業が原因と見られる感染クラスターなどの事例はなく、無事に全ての授業を終えることができた。2022年度は人体の基礎科学の物理、数学において、成績不良の学生が例年になく多かった。これはオンライン授業の影響によるものと考えている。

<化学>

2021年度に引き続き、遠隔授業と対面授業を組み合わせて行った。講義はWebClassを最大限利用した授業を取り入れ、実習は対面形式で行い、Zoomによるスモールグループディスカッションや発表も導入した。学生の学習の遅れには綿密に対応するように努力した。定期試験の結果や学生へのポストアンケートを見る限りでは、十分な教育の成果が得られたと判断できたので、結果的には90%程度の達成度と考える。

<生物学>

1)「細胞生物学1」:山崎がUDを務めたユニット1定期試験では受験者133名、平均点77.1点、不合格者27名(2021年度は受験者137名、平均点70.4点、不合格者40名)であった。合格者は細胞に関する基本的な理解を得ることができたと思われる。平均点は2021年度から上昇し、100点が3名いた。細胞生物学ユニットで100点をとったものはコース始まって依頼3人ほどしかいない。多くの学生が努力したものと思われる。オンライン環境に適応しにくい学生が低得点になったのではないかとと思われる。追試験では対象3名が全員合格し、再試験では欠席した2名を除く25名が合格した。再試験の追試験で1名が合格し、1名は受験せず不合格となった。不合格者が少なかった理由として、細胞生物学2ユニットでの補習クラス授業、課外プロでの指導、オンラインでの教材提供などの多面的な学習支援の効果によるものではないかと考えている。また、第1ユニットでは不合格から再試験までの準備期間に余裕がある点もあろう。

2)「自然科学の基礎(生物)」:2022年度は2021年度と同様に対面授業であった。課題の提出状況と最後のコマでのテストによって成績を決定した。学生は良く対応し、全員合格となった。学生に対して効果的な指導ができたと評価している。

3)課外プロ「生物の基礎をもう一度」:ZOOMでの補習に教員、学生共とも慣れてきた。参加者が減少したが、簡便な指導ではなく、基本からの指導であることが受け入れられなかったのかもしれない。

4)「医学英語」:1年生の「医学英語」では「細胞生物学1」の教科書原著を題材として英文読解を指導した。学生は医学英語に馴染むことができたと同時に英語によって細胞生物学の復習ができたと思われる。

5)「選択必修」:「実験動物学入門1」の中の講義を、多くの学生が興味を持って聴講してくれた。また「細胞生物学」コースの内容を含む部分が多いのでそのことも強調して講義をした。

<英語>

ユニットを領域別のサブユニットに分け、学習の重点を明確にするとともに、総合的な英語基礎学力と運用能力の育成を図ることを前年同様に目標とした。専任教員4名が各サブユニットリーダーとなって授業運営を分担し、総合教育の林禅之先生や非常勤講師(日本人講師3名、外国人講師が7名)にご協力いただき、充実した指導を行うことができた。

「医学英語」ユニットは、前年度同様、遠隔授業を中心に行わざるを得なかったが、各サブユニットリーダーが中心となって前年度よりも効率的にスムーズな授業運営を行うことができた。また可能なところで対面授業を取り入れ、学習意欲の喚起や幅広い知的好奇心への誘い、学生と教員との人間関係形成などの機会を作った。英語基礎学力の低い学生に対してはZOOMで面談するなどして学習のアドバイスを行なった。

また「科学的思考と表現」ユニットでも、専任英語教員の3名(藤森、種田、伊澤)が授業を担当しており、学生の読解力やレポート作成力など総合的言語能力の向上に貢献した。

<総合教育>

「医科学入門」ユニットでは、感染拡大防止のため今年度も「測定」と「観察と記述」実習は実施せず、「人体の科学」実習は遠隔演習形式とした。新入生の「クラスの一員である」という意識を醸成するため、Zoomを用いてテュータによる少人数グループワークを実施した。

「科学的思考と表現」ユニットは、他ユニットとの連携による実験レポートの書き方の講義や毎回の添削による個別のフィードバックを行った。途中から3つのコースに分かれ、より学生のニーズに配慮した授業運営を行った。昨年度はすべて遠隔で実施したが、今年度は、コース別のオリエンテーション、読解の訓練及び主体的なレポートの執筆については対面で行い、学生の反応を見ながらきめ細かな対応を心掛けた。

「医科学の探索」ユニットは対面とオンラインの混合で実施し、発表会は対面にておこなった。

2年生の臨床入門実習の一環である「プレゼンテーション技法」を、表現の1つとしてのプレゼンテーション技法を教えるものとして位置づけ、科学的思考と表現ユニットに関わる総合教育及び英語科の教員で協力・分担して実施した。

「行動科学と医療倫理」ユニットでは、課題や定期試験について動画による教員からのフィードバックを細かく行った。また、定期試験・再試験前に対面でのオフィスアワーを実施し、学生たちの理解が不十分な状態を放置しないことを心がけた。3年生は対面での授業が再開され、オンラインの良さを残しつつ対面授業を活用して、学生の理解度を見ながら演習を行った。

その他の担当ユニットにおいても、講義演習を主にオンデマンドまたはオンラインとし、実習を極力対面にておこなうことで、おおむね目的を達成することができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

<物理学>

「人体の基礎科学1、2」は、基礎医学で学ぶ現象の物理的あるいは化学的背景を理解することを念頭に置いた統合科目

である。物理学の領域からは力学、電磁気学、波動、放射線に関連する内容を題材とした。また、数学領域では微分積分やベクトルを利用した自然現象の解析を題材とした。医学を意識した斬新な構成であるが、学生にとって十分に理解でき、高学年でも有用な内容になったと考えている。学生の反応を参考にしつつ、さらなる改善を進めていきたい。次年度は対面授業が再開する予定である。学生の反応を見ながら、成績不良者が減るように工夫して教育を行いたい。

<化学>

2023年度より対面授業を再開する。オンデマンド授業では成し得ない、ライブ感やインプレッションの高い授業になるように努めていきたい。授業後の学生からの質疑応答についてもできる限り対面に対応していきたいと考える。授業の資料については、引き続きWebClassにアップロードしたものを利用してもらう。実習については、昨年度と同様、マスク・ゴム手袋の着用や十分な換気などの感染対策を講じながら実施する。また、講義、実習の内容の一部見直しを行い、より質の高い教育内容にしたいと考える。

<生物学>

1)「細胞生物学1」: 2021年度は多くの講義と体験学習を対面で行えた。学生同士が教え合ったり、教員と対話できたことが定期試験の平均点向上に寄与した可能性がある。ただ、オンライン授業もあったので、環境に適応できない学生もいたと思われる。今年度は体験学習を半数登校で行い、指導教員も増員した。その結果、学生への指導がきめ細やかに行えた。質問も多くあり、今まで指導が追いついていなかった点も明らかになった。2023年度においても、半数登校として、丁寧な指導を行うこととした。2023年度は対面での授業が行われる予定なので、学生への働きかけを強化したい。また、オンライン教材の工夫も続けたい。

2)「自然科学の基礎(生物)」: このユニットを開講して以来、生物学未履修からの「人体の構造と機能」および「細胞生物学」についていけないという訴えは減少していると感じる。本講義が効果を及ぼしていると思われる。ただ、コア科目の定期試験不合格者に占める生物未履修者の割合は依然として高い。次年度も「細胞生物学1」と連携して、入学始めの時期における、生物学未履修者への援助をより手厚く行いたい。

<英語>

「医学英語」ユニットは、遠隔授業に対応すべく、各サブユニットリーダーが中心となって授業を計画運営し、対面授業と変わらない効果的な知識伝達ができたと評価している。学習意欲の喚起や幅広い知的好奇心への誘い、学生と教員との人間関係形成など対面授業に大きく頼っている部分について検討課題であったが、一部、対面授業が認められたところで上手く組み合わせるよう工夫できたと思う。しかし、特に英語基礎学力の低い学生に対する対応に関しては、よりきめ細かい個々の指導が大切であることを実感した。次年度は学力増進室とも連携して、更に考えていく必要がある。

全面的に対面授業が始まる次年度においては、1年次におけるCLIL、Reading、Academic Writing、および専門書読解などの各サブユニットリーダー間で、学生に関する情報交換と連携をより綿密に行い、英語基礎学力の低い学生の手当と、学習意欲や目的志向の高い学生には更なる情報提供や学習の機会を与えるなど、個々の学生に応じた指導を行い、学生が各自の学習方法を身につけて自律的学習を進められるよう支援を更に充実させたい。

<総合教育>

令和4年度の「医科学への道すじ」コースは引き続きコロナ感染症の拡大防止対策によって大きな影響を受けた。特に「医科学入門」ユニットの対面実施が制限されたため遠隔実施でも効果のある工夫をおこなってきた。次年度からは基本的に対面実施となるが、遠隔授業で開発した手法を組み合わせることで、大学での学びへの適応と学びを支える基礎的技能的涵養という目的に立ち返り、これを達成する方法を検討する

「科学的思考と表現」ユニットおよび2年生の臨床入門実習における「プレゼンテーション技法」では、対面授業を中心としながら、オンラインのメリットを生かしたより効果的な教育となるよう、他の担当教員と効果を検証しつつ、改善を進めていきたい。

「行動科学と医療倫理」ユニットでは、対面授業の再開によって学生が実際に手を動かし、相互に話し合う形の授業を積極的に取り入れることで、学生の不十分な理解や勘違いに早めに対応したい。各授業間の関連性を強調しながら、学生が自分の体験に引きつけた形で理解をすすめられるような教材・課題を導入することで、学生が自ら考える機会を増やしていきたい。

1・2年生の「行動科学と医療倫理」「地域医療とチーム医療」、3年生の「キャリアデザイン」などにおける演習では、数年ぶりとなる対面授業に対応しつつ、これまでの遠隔授業の経験を取り入れられるよう授業の形式や内容の改善に努める。

柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育学, 教授
魚住 尚紀 (UOZUMI, Naonori) : 生化学, 准教授
中谷 宣章 (NAKAYA, Nobuaki) : 大学病院総合診療内科, 講師
大西 京子 (OHNISHI, Kyoko) : 医学教育センター, 助手
齋藤 恵 (SAITOH, Megumi) 医学教育センター, 助手

<調査解析室>

室長: 椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IRセンター, 教授
室員: 松下 毅彦 (MATSUSHITA, Takehiko) : IRセンター, 教授
鈴木 智 (SUZUKI, Satoshi) : 医学教育センター, 助教
佐藤 義文 (SATO, Yoshifumi) : 医学教育センター, 助手

<学生支援室>

室長: 石橋 敬一郎 (ISHIBASHI, Keiichiro) : 医学教育学, 准教授
室員: 森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育学, 教授, 副学長
長坂 浩 (NAGASAKA, Hiroshi) : 大学病院麻酔科, 教授
富谷 智明 (TOMIYA, Tomoaki) : 教職員・学生健康推進センター, 教授
井上 郁夫 (INOUE, Ikuo) : 教職員・学生健康推進センター, 教授
向田 寿光 (MUKAIDA, Hisamitsu) : 教養教育, 教授
佐々木 惇 (SASAKI, Atsushi) : 病理学, 教授
門野 夕峰 (KADONO, Yuuho) : 大学病院整形外科・脊椎外科, 教授
村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 微生物学, 教授
松田 晃 (MATSUDA, Akira) : 医学教育学, 教授
柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育学, 教授
桑原 斉 (KUWAHARA, Hitoshi) : 大学病院神経精神科・心療内科, 教授
藤田 恵子 (FUJITA, Keiko) : 解剖学, 教授
鈴木 朋子 (SUZUKI, Tomoko) : 総合診療内科, 教授
森口 武史 (MORIGUCHI, Takeshi) : 教養教育, 教授
石澤 圭介 (ISIZAWA, Keisuke) : 病理学, 准教授
山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 教養教育, 准教授
中平 健祐 (NAKAHIRA, Kensuke) : 教養教育, 准教授
藤森 千尋 (FUJIMORI, Chihiro) : 教養教育, 准教授
太田 晶子 (Ohta, Akiko) : 疫学, 准教授
黒崎 亮 (KUROSAKI, Akira) : 国際医療センター産婦人科, 准教授
板澤 寿子 (ITAZAWA, Sumiko) : 大学病院, 小児科
高野 和敬 (TAKANO, Kazuhiro) : 解剖学, 講師
渡會 恵介 (WATARAI, Keisuke) : 大学病院整形外科・脊椎外科, 講師
廣澤 成美 (HIROSAWA, Narumi) : 中央研究施設・機能部門, 講師
川村 勇樹 (KAWAMURA, Yuuki) : 教養教育, 講師
池上 裕一 (IKEGAMI, Yuuichi) : 大学病院内分泌・糖尿病内科, 講師
中野 貴成 (NAKANO, Takanari) : 生化学, 講師
杉山 智江 (SUGIYAMA, Tomoe) : 医学教育センター, 助教
齋藤 恵 (SAITOH, Megumi) : 医学教育センター, 助手

オブザーバー: 村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 生化学, 教授, 医学部長

<学力増進室>

室長: 松田 晃 (MATSUDA, Akira) : 医学教育学, 教授
副室長: 中里 良彦 (NAKAZATO, Yoshihiko) : 大学病院神経内科, 教授
山崎 芳仁 (YAMAZAKI, Yoshihito) : 教養教育, 准教授
室員: 森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育学, 教授, 副学長
林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 国際医療センター神経内科・脳卒中内科, 教授
柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育学, 教授
井上 勉 (INOUE, Tsutomu) : 大学病院腎臓内科, 准教授

中谷 宣章 (NAKAYA, Nobuaki) : 大学病院総合診療内科, 講師
岩永 史郎 (IWANAGA, Shiro) : 国際医療センター心臓内科, 教授
石橋 敬一郎 (ISHIBASHI, Keiichiro) : 医学教育学, 准教授
渡會 恵介 (WATARAI, Keisuke) : 大学病院整形外科・脊椎外科, 講師
鈴木 正 (SUZUKI, Sei) : 教養教育, 准教授
米岡裕美 (YONEOKA, Yumi) : 教養教育, 准教授
土田 敦子 (TSUCHIDA, Noriko) : 教養教育, 講師
西脇 洋一 (NISHIWAKI, Yoichi) : 教養教育, 講師
伊澤 宜仁 (IZAWA, Yoshihito) : 教養教育, 講師
荒木 智之 (ARAKI, Tomoyuki) : 生化学, 講師

<研究マインド育成室>

室 長 : 村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 微生物学, 教授
室 員 : 佐々木 惇 (SASAKI, Atsushi) : 病理学 : 教授
三村 俊英 (MIMURA, Toshihide) : 大学病院リウマチ膠原病科 : 教授・副学長
三輪 尚史 (MIWA, Naohumi) : 生理学 : 教授
片桐 岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : ゲノム基礎医学 : 教授
小山 政史 (OYAMA, Masafumi) : 国際医療センター泌尿器科 : 教授
魚住 尚紀 (UOZUMI, Naonori) : 生化学 : 准教授

オブザーバー

森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育学 : 教授・副学長・医学部長
松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 免疫学 : 教授・副学長
村越 隆之 (MURAKOSHI, Takayuki) : 生化学・教授

<地域医学推進室>

室 長 : 柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育学, 教授
室 員 : 林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 国際医療センター総合診療内科, 教授
廣岡 伸隆 (HIROOKA, Nobutaka) : 地域医療科, 教授
岩瀬 哲 (IWASE, Satoru) : 大学病院緩和医療科, 教授
齋木 実 (SAIKI, Minoru) : 国際医療センター総合診療内科, 教授
儀賀 理暁 (GIKA, Masatoshi) : 総合医療センター緩和医療科, 教授
真下 由美 (MASHIMO, Yumi) : 国際医療センター総合診療内科, 准教授
石橋 敬一郎 (ISHIBASHI, Keiichiro) : 医学教育学, 准教授
金田 光平 (KANEDA, Kohei) : 医学教育学, 助教
森田 英生 (MORITA, Hideo) : 大学病院内分泌・糖尿病内科, 助教
加藤 寿 (KATO, Hisashi) : 非常勤講師, 秩父市立病院

2. 目的・目標

卒前医学教育部門は医学部学生を対象とした卒前医学教育の全般を運営する部門である。本学の建学理念、カリキュラムポリシーおよびディプロマポリシーに準拠し、社会的使命も考慮して卒前医学教育の方針を検討し、卒前教育委員会で審議して決定した事項を円滑に執行することを目的としている。

担当している医学部卒前医学教育の領域は以下の通りである。

- (1) カリキュラムに関すること
 - (2) 臨床実習に関すること
 - (3) 試験および進級、卒業の評価に関すること
 - (4) 教育に関する情報の集計、調査、解析に関すること
 - (5) 学生に対する全体的な支援、指導
 - (6) 学力向上の支援、補習の計画・実施に関すること
 - (7) 研究マインド育成、研究医学生教育に関すること
 - (8) 地域医学教育の推進、地域学生教育に関すること
- その他、卒前医学教育全般に関すること

3. 活動実績

卒前医学教育部門は、役割を分担して「カリキュラム室」、「臨床実習推進室」、「試験管理室」、「調査解析室」、「学生支援室」の5室に分かれて活動していたが、令和元年7月より新たに「学力増進室」、「研究マインド育成室」、「地域医学推進室」の3室が設置され、8室体制となった。卒前教育委員会の下部に位置付けられる委員会の中で、臨床実習の関連事項として、共用試験臨床実習前OSCEと卒業時OSCEに関しては「OSCE委員会」が、シミュレーション教育に関しては「シミュレーショントレーニングセンター運営委員会」が「臨床実習推進室」と連携して検討、運営を担当している。

3-1. カリキュラム室

シラバス、講義日程の作成、オリエンテーション、課外学習プログラムに関し、臨床実習推進室とも連携して令和4年度のカリキュラムを遂行すべく実務作業を担当し、さらにカリキュラム委員会と連携して、令和4年度の方針を検討した。

医学教育センターの専任教員、兼任教員がこれら業務を分担し、月1回の定例会議を開催して進捗状況を共有するとともに、問題点を整理し、カリキュラム室全体での意志統一を図っている。

1) シラバス、講義日程の作成：令和4年度のシラバスは前年度と同様に学内・学外ホームページ上で公表するとともに冊子体を作成した。シラバス編成時からCOVID-19対策として、対面授業と遠隔授業を混合して実施すること、状況に応じて実施形態の変更がありうることを念頭においた。変更点は学内ホームページやWebClass上でその都度を更新した版を掲示した。1,2年生の講義はオンデマンド形式を主体とした。3,4年生の講義は希望する学生は対面での受講を認めながら、YouTubeを介したライブ配信（学内での呼称、ハイブリッド講義）で年度を開始し、3年生では、11月よりライブ配信講義を廃止して対面講義に移行した。1-4年生の実習、演習については、内容を精選し、対面実施の場合には十分な感染予防策を講じた。同時に、遠隔実施の場合には、各ユニットの授業内容・形態に応じてZoom、WebClass、Google Slideなどを用い、双方向性の確保にも努めた。

2) 令和4年度の新入生オリエンテーションは対面と遠隔の併用でおこなった。学外での活動、グループでの活動は実施せず、健康管理、遠隔授業についての説明を丁寧に実施した。2~4年生の新学年のオリエンテーションは遠隔にて、合同オリエンテーション、学年オリエンテーションを実施した。2学期の開始にあたって、配信でオリエンテーションを実施した。令和5年度新入生オリエンテーションについては、対面と遠隔の併用で実施することを決定した。遠隔でのオリエンテーションは、遠隔授業が必要になったときの接続方法の確認の意味も込めている。

3) 課外学習プログラムは、令和3年度から引き続き、COVID-19対策のため、運用に制限がかかる形となった。関係者との協議を経て、臨床医学生が病院で学習するプログラム、学外の学生が基礎医学系研究室で実験をおこなうプログラムへの参加を認めるなど、感染状況の変化に合わせた運用範囲の拡大を年度内におこなった。133のプログラムが実施可能なものとして登録され、32プログラムに対して、のべ134名の学生が参加した(令和5年5月23日時点での集計)。第8回学生による研究発表会を研究マインド育成室との共催で11月5日に第3回オール埼玉医大研究の日の一部として開催した。優秀賞と敢闘賞は12月17日の教授・教員総会で表彰した。埼玉大学との課外学習プログラムでの交流は、大学間での提携にもとづいた正式運用に入った。埼玉大学からは、12プログラムが提示され、11プログラムに本学から学生12名、教員26名の参加があった。本学のプログラムに対しては、12プログラムに延べ17名が参加した。同様の大学間提携校である女子栄養大学からは学生7名が、本学の7プログラムに参加した。

4) 令和5年度のシラバス編成においては、コースディレクターによる相互点検を実施し、シラバスの質の向上を図った。学生へのフィードバック実施に関する記載、評価に関する記載の充実に重点をおき、コースとしてまとめて記載されるだけでなく、各ユニットでの記載においても明示されるように留意した。

5) 令和5年度から、3年生だけでなく、全ての学年の講義を対面実施に戻す準備を進めた。授業の在り方WGなどでの議論を踏まえて、安全、確実に実施できるよう手筈をととのえ、学生への情報提供も繰り返し丁寧に実施するよう心がけた。

3-2. 臨床実習推進室

令和4年度は、新カリキュラムは完成2年度目になり、新型コロナウイルス感染症の流行が続く中、4年次1月~5年時12月にはクリニカルクラークシップ(CC) Step1、5年次1月、2月のCC Step2、6年次4~6月のCC Step3を実施した。また3、4年生のPre-CC 1、2における診療科実習、地域医療実習、1、2年生の臨床入門の臨床系実習の実施方針なども検討した。学生に到達目標のチェック、日々の振り返り、経験した症候・疾患のログブック記載などを指導し、卒前教育委員会、川越キャンパスおよび日高キャンパス教育主任会議で情報を共有した。

- 1) 6年CC Step3は4月~6月に4週3クールの実習を実施し、3年振りに指定学外施設での実習も実施した。令和3年度の4年生CC Step1は、開始初めの3週間が全体的に中止となった期間の実習を令和4年度2023年1月に補習を実施し、ローテート予定の診療科を全てローテートした。

- 2) CC Step1 で、病院内感染の影響で自宅学習になった学生、体調不良等で欠席した学生の補習は、春期休暇中に適宜補習を行った。
- 3) 指定学外施設での実習では、初めて WebClass の修学カルテを用いた評価を実施し、全ての施設で評価が行われた。
- 4) 簡易版臨床能力評価 (mini-CEX) は総合診療内科での 5 年生 CC Step1 でほぼ定着し、基本的に全員に実施される形が整った。
- 5) CC step3 では国際医療センターにおいて看護師、患者による 360° 評価を実施したが、大学病院、総合医療センターでは COVID-19 の流行により看護師による 360° 評価は実施しなかった。
- 6) Pre-CC 1-1、2-1 の診療科実習では、4 年第 1 クールが新型コロナウイルス感染症流行により中止となったが、それ以外は予定した時期に実習を実施した。Pre-CC 2-1 地域医療実習の中で地域の病院・診療所での実習を 3 年振りに再開し、約 50 人の 4 年生が学外での実習を経験した。
- 7) 医師法改正に伴う医学生の実習実施、診療参加型臨床実習の実質化に向けて、手技・実技、経験疾患・症候の実態把握を目指し、修学カルテをカスタマイズについて検討した。
- 8) 文科省のウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業に選定され、遠隔医療実習を総合診療内科実習の中で実施した。また、ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業に選定され、CCstep1 の総合診療内科の実習期間内に、シナリオベースの感染対応臨床推論実習を導入した。また、3 年生の PreCC 1-1 では、保健医療学部学生と合同で RCA (Root Cause Analysis: 根本原因分析) を実施した。
- 9) 令和 4 年度のスチューデントドクター認定式は 1 月 21 日に、埼玉県医師会長金井忠男氏にご参加いただき、対面でスチューデントドクター認定式を開催した。
- 10) 昨年度中止した 5 年生学年集会「前期総合試験を終えて、臨床実習後期に向けて」は 10 月 8 日に Zoom を用いて遠隔で実施した。
- 11) 3 月の 5 年生対象の 6 年生に向けてのガイダンスは 3 月 31 日に対面で実施した。
- 12) 「臨床実習指定学外施設懇談会」は 7 月 23 日と 2 月 25 日に Zoom を用いてオンラインで開催した。
- 13) 特別演習は今年度もオンラインで、YouTube でのライブ配信、一部は動画収録をオンデマンド配信で実施した。特別演習終了後にはほぼ毎回 Zoom でのライブ配信で連絡会を実施した。

3-3. 試験管理室

卒業試験および総合試験の問題作成・実施・管理を行うと共に、各ユニット試験の実施も補助すること、国家試験成績の分析を通じて、医学部教育の方針への資料も提供すること、試験および学生評価の在り方について検討・提言することを目標に活動した。

1) 卒業試験および総合試験の問題作成 (ブラッシュアップ)

各部門から登録された問題を修正し、各試験に適したものとした。この際、各科教員 (試験管理室員以外) とともに協力した。

2) 試験の精度管理

各問題について、正答率、識別指数のデータを保存し、試験問題および試験全体の精度モニターを行った。このことを通じ、年度を越えての学力把握の一助とした。令和 4 年度 6 年生の卒業試験結果の解釈においては、キャリアレーション問題の過去の正答率比較を行い、卒業判定の検討材料の一つとした。

3) 卒業試験および総合試験の実施管理

新型コロナウイルス感染症流行状況に応じて、卒業試験をはじめ試験実施方法を検討した。また、新型コロナウイルス感染症の可能性が否定できない場合の追試験の取り扱いについて、検討し運用した。

4) 試験の在り方の検討

2 年生総合試験不合格で進級した学生の教育および試験合格認定について、その方法を検討した。令和 4 年度にはその該当者があらわれたため、令和 5 年度 4 月に 2 年生総合試験認定試験を計画した。

5) 国家試験報告会の共同開催

国家試験の結果分析し、FD 部門と協力して報告会を開催した。毛呂山会場のほか、川越および日高キャンパスにも中継会場を設置した。

6) 教職員に対する試験監督講習会の実施

試験監督を行う教職員を対象に講習を行った。

3-4. 調査解析室

平成 19 年度より継続して「学生による授業評価」を実施し、学生の出欠状況を把握するとともに、その結果を介して各教員の講義改善に役立つようにしている。また、各教員の教育に関する活動を評価することを目的として、「教育活動の実績登録システム」を構築している。

- 1) 令和 4 年度は令和 3 年度に引き続き新型コロナウイルス感染拡大により、講義はオンライン (ライブ配信またはオン

デマンド) となったため、授業中の小テストと終了後の授業評価を何れも WebClass とした。

- 2) 学生生活実態調査を全学年で実施した。
- 3) 臨床実習推進室と共同で、学生による臨床実習の各実習先についての調査 (CC 評価) を実施し、集計結果をカリキュラム評価委員会および卒前教育委員会に報告した。
- 3) 講義収録・配信システムに関して、教員の収録への同意率と学生の利用状況を調査した。また、同システムの利用に際して、学生を対象とした同意書、誓約書を作成した。
- 4) 令和 4 年度も臨床実習評価は WebClass で実施した。また、修学カルテのカスタマイズを実施した。
- 5) 教育活動実績登録システムを運用し、各種のデータを登録した。必要に応じて、登録対象項目を追加した。
- 6) 令和 3 年度における教員の教育実績登録をまとめて、各基本学科の運営責任者、医学教育センター役職者に送付した。
- 7) 令和 4 年度の医学部ベストティーチャー賞、ベストエフォート賞を選定した。
- 8) 令和元年度まで使用されていたクリッカーに替わる Web クリッカーシステムを開発し、全学年で使用できるようシステムを整備した。

3-5. 学生支援室

学生と教員の心の交流と相談窓口の機能を果たすアドバイザー制を円滑に運営すること、精神的問題を抱えた学生に対応するための心の相談室に相談すること、出席および成績などの問題がある学生の早期発見と対応などが主な業務である。支援活動は各学年の担当を中心とした連絡、打ち合わせは随時行う方針とし、全体の学生支援室活動会議は 3~4 ヶ月に 1 回開催して室全体の情報交換、意志統一を図りながら業務を遂行した。今年度前半は昨年度に引き続き COVID-19 感染に伴い主にオンラインによる授業が行われた。学生の登校がままならない状況で、Zoom 等による面談等を取り入れ支援活動が必要であった。登校開始となった後半は対面での面談を中心に、一部 Zoom を取り入れながら行った。また、学生の健康管理として、学生の SMUPASSPORT へおよび WebClass の健康状態の報告を毎日確認、体調不良者への電話面談、受診の相談等を行った。必要に応じて大学病院感染対策室、中央検査部へ PCR 検査の依頼も行った。

1) アドバイザー制は、1~4 年生は前年度までと同様に学生支援室がグループ分けし、5 年生は CC Step1 の組に応じたグループとして、各々のアドバイザーを決定した。一方、6 年生は学生の希望を優先してグループ分けを行い、それぞれのアドバイザーを決定した。1 年生は新入生オリエンテーション時に顔合わせ会を行った。2 年生以上は 4, 5 月に Zoom での顔合わせ会を行った。COVID-19 感染は終息しなかったため、飲食を伴うアドバイザー会は中止し、この 1 年は、主に Zoom 等によるアドバイザー会を開催した。

2) 心の相談室の臨床心理士によるカウンセリングは、原則毎週火、木、土曜日にカウンセリングを行った。今年度は対面だけでなく、電話によるカウンセリングも継続して行った。

3) 前年度の留年生、出席に問題のある学生、定期試験の成績が不良の学生を対象に対面または Zoom で個人面談を実施した。健康問題に関して、学生健康推進センターと連携して対応した。

4) 学生支援室では、高度の個人情報を扱うため、学生支援室員用の個人情報保護の同意・誓約書を作成した。署名された誓約書は全室員から提出された。

5) 学生支援室会議では、個々の学生の報告、検討など、学生支援の各論に費やす時間を減らして、学生支援の体制に関わる総論に割く時間を増やした。

6) 登校許可基準・出席停止・登校許可基準、学生体調不良時のフロー等素案作成など、感染対策のマニュアル類を大学病院感染対策室と密に連絡を取りながら作成した。

7) COVID-19 感染対策として、医学教育センターのコアメンバーが毎日の体調不良者への連絡、情報収集、濃厚接触者の疑いがある場合には大学病院感染対策室、中央検査部と密に連絡を取り COVID-19 の PCR 検査等への誘導などを行なった。

3-6. 学力増進室

学力増進室では「5、6 年担当」、「3、4 年担当」、「1、2 年担当」が設置されている。

1) 「5、6 年担当」

2022 年度もコロナ禍で授業、補講はオンデマンド、Zoom が主体となった。6 年生には 1 学期初めに国家試験対策の模試や補講などの 1 年間のスケジュールと目標を提示し計画的に勉強するように指導した。成績不良者に対しては、教授クラスの教員と若手卒業生がペアを組んだスペシャルサポーターがついて学習、生活、精神面でのきめ細かい指導を実施した。また、予備校での指導に精通した客員教授による学習についての個別指導、5、6 年 WG 教員による面談、卒業試験後留年決定者に対する DVD 補講を行った。さらに、夏休み、冬休みには予備校講師を招いた学内での通い合宿を行った。5 年生に対しては、総合試験前期下位者に対する予備校の映像授業 DVD 視聴、及び単元毎の確認テスト、模擬試験 (MEC 春模試、MEC 内科模試など) を行った。

2) 「3、4 年担当」

4年生では、4年1学期と夏季に前年度チューデントドクター（SD）非認定者と3年次成績不良者に対し、ZOOMによる補講を実施した。また、1月より臨床実習CC step1に参加が認められなかったSD非認定者に対するZOOMによる特別授業を実施した。また、予備校のCBT対策映像授業、生講義を提供した。3年生では、循環器、呼吸器、腎・泌尿器ユニットの再試験該当者に対し、循環器ユニットと呼吸器ユニットでは補講が行われた。腎・泌尿器ユニットでは再視聴すべき収録講義が選定され、その再視聴が課された。

3) 「1、2年担当」

2年生では、年度途中で2年生担当が決まり、ユニットが成績不良者に対して行う補講へのサポートを行った。また、年度末に「自主活動支援の時間」と称する学生同士の教え合いを主軸とした勉強会を実施した。1年生では細胞生物学、人体の基礎科学（物理学および化学）、医学英語および総合教育（科学的思考と表現、行動科学と医療倫理、など）の担当者が学力増進室員として活動を行った。1学期の間にも留年した学生や学習態度が心配な新生生に対して個別指導を行った。定期試験終了後には、それぞれのユニットの成績が振るわなかった学生に対して、個別面談、ZOOMによる集団指導、課題を与えての添削などの指導を行った。

3-7. 研究マインド育成室

研究マインド育成室は、学生が将来医師として医学の科学的な発展に参加できる能力を涵養するための活動を促進するために研究医養成プログラム学生（研究医学生）の教育とその研究活動支援を行った。

- 1) 医学部入学の早期（1年生）から研究紹介の機会を設け、教員8名および現プログラム履修生1名（4年生）から発表があった。これらの発表は動画収録し、学生全員がWebClassから視聴できるように公開した。
- 2) 第8回埼玉医科大学「学部学生による研究発表会」（令和4年11月5日）を第3回「オール埼玉医大 研究の日」のプログラムの一つとして開催した（一般発表3名、フラッシュトーク1名）。新型コロナウイルス感染拡大防止に配慮し、会場参加に加え学内LIVE配信およびZoom配信を行った。また一般発表者の中から優秀賞1名を学長表彰として推薦した。
- 3) 医学部2年生には研究マインド涵養の一環（授業）として上記「学部学生による研究発表会」への参加を義務付けた（録画視聴：病理総論ユニット「病理1・病理実習1」）。成果物として提出された感想文のうち6件が埼玉医科大学雑誌（令和5年3月：第49巻2号）に掲載された。
- 4) 研究医学生の募集支援として、医学部2年生を対象にした研究医養成プログラム説明会（令和4年11月22日）を実施し、最終的に同プログラムへの応募が2名あった。説明会ではプログラム履修生1期生からの奨励メッセージを紹介し、これらは全て動画収録しWebClassから視聴できるようにした。WebClassではプログラム履修生が全国規模の学会で発表したポスター内容が閲覧できるようにした。
- 5) 医学教育分野別評価への改善点への対応とともに本学の理念・実情に配慮した学生の研究室配属のあり方について検討がなされた。

3-8. 地域医療推進室

地域医学推進室の目的は、社会的視野を持ち、健康の保持増進、疾病の予防から社会復帰、さらに社会福祉に至る保健・医療全般に責任を有することを自覚し、地域の保健・医療に貢献できることを目指して、医師不足地域であり高齢化が急速に進む埼玉県内の医療事情の理解を深めることや地域で専門職や住民と連携するための方法を学ぶことを通して、将来一人ひとりが地域に根ざした医療を実践する力を身に付けるための教育プログラムを推進すること、特に埼玉県地域枠奨学生を対象に、埼玉県及び地域医療の理解を深めるためのプログラムを展開することである。また、令和4年度に採択されたポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業による教育プログラムの拡充に取り組んだ。これらの目的を達成するために、3病院ならびに医学教育センターの10人の室員と外部の地域病院の1人の室員で取り組んだ。

- 1) 課外学習プログラム「埼玉の医療」を主催した。今年度は、全て遠隔で7回実施した。指定診療科である救急、産婦人科の学内の医師、地域枠の先輩、指定地域である小鹿野中央病院の内田望病院長の講話を企画した。また、指定地域の7つの医療機関に参加いただき、各病院の医療について紹介していただいた。3月24日には、埼玉県医師会の共催を受けて埼玉県医師会常任理事の松山眞記子先生からの講演を行った。年間の学習会の参加者は、学生延べ107人、教職員36人、卒業生9人、医療人材課4人であった。12月26日には1年生16人が埼玉県庁に県知事を表敬訪問し、地域枠奨学生としての決意表明を行った。
- 2) 令和4年12月27日には令和5年度入学予定者19人を対象にスクーリングを実施し、地域医療に従事することについて意見を交換した。
- 3) 令和3年度からは1、2年選択必修「地域医学・医療学」において、コミュニティ・アズ・パートナーモデルを用いて地域で医師として仕事をするために地域を理解する意味、視点を学んだ。
- 4) 医療人育成支援センター地域枠奨学金部門と共同で、夏季・春季に指定地域医療機関の病院見学実習を実施した。
- 5) 令和4年度に採択されたポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業の中で卒前の地域枠奨学生に対する教育につ

いて検討を行い、令和5年度のカリキュラム、課外学習プログラムを検討した。

6) 埼玉県医師会主催事業として令和4年12月22日に令和4年度若手医師・医学生のための働き方講演会に学生5人、令和5年3月23日に埼玉県医師会女性医師支援検討委員会に学生3人が参加協力した。

3-9. OSCE 委員会

1) OSCE 委員会を12回、OSCE 実施委員会を2回開催した。

2) 7月9日に、カタロスタワー5・6階のOSCEセンターを中心に用いて、6年生の共用試験臨床実習後OSCE (Post-CC OSCE) を特例実施の形で実施した。機構課題2課題および大学独自課題2課題について6列で実施した。医療面接はノートパソコンを用いたZoomによる遠隔実施とし、身体診察については可能な範囲でシミュレータで代用した。学生全員が受験し、追試験は必要としなかった。

3) 12月10日に、カタロスタワー5・6階のOSCEセンターを中心に用いて、4年生の共用試験臨床実習前OSCE (Pre-CC OSCE) を特例実施の形で実施した。8課題について、医療面接は6列、その他の課題は4列で実施した。医療面接はノートパソコンを用いたZoomによる遠隔実施とし、身体診察については可能な範囲でシミュレータで代用した。学生全員が受験し、追試験は必要としなかった。

4) 共用試験臨床実習後OSCEの機構課題を担当する評価者には、内部評価者講習会を3キャンパス2回ずつ計6回行い、共用試験臨床実習後OSCEの概要の説明および機構課題の評価について標準化を図った。

5) 共用試験臨床実習前OSCEの評価者のうち認定評価者でない評価者を対象に内部評価者講習会を各キャンパスに講習会場を設けZoomを活用して6回実施した。

6) 埼玉医科大学SP会担当教員が共用試験実施評価機構主催の標準模擬患者養成担当者認定講習会を順次受講し、今年度まで認定取得者が6名となった。埼玉医科大学SP会の会員の方々に、認定標準模擬患者パフォーマンス評価を受験していただいた。1回目のパフォーマンス評価受験者が累計20名で、うち2回目のパフォーマンス評価受験修了者は5名となった。

3-10. シミュレーショントレーニングセンター運営委員会

1) 運営委員会を10回開催し、利用状況、講習会・研修会の開催状況、物品使用・貸出状況等について審議した。

2) COVID-19感染状況に照らし、昨年度同様に学外からの受講生は避け、従来の5割程度の規模を目安に、換気・手指消毒等の感染予防対策を徹底した上で講習会等を実施することを基本とした。利用件数は464件で過去最高の件数であった。利用者数は6361名でコロナ禍前の9割程度に回復した。医学部・保健医療学部・短期大学の卒前教育および大学院看護学研究科の授業・実習での利用者が約8割を占めていた。

3) 各種備品を購入・整備した。特に、感染症医療人材養成事業の関係で種々のシミュレータを購入した。

4) シミュレーション部門のホームページを更新し、現有している物品一覧および講習会、研修会などの情報、さらに昨年度の機器・備品等の使用状況を掲載した。

5) 川越ならびに日高キャンパスのスキルスラボ、シミュレーションセンターを含めて、3キャンパスの状況等について情報共有を図った。

4. 自己評価と次年度目標

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

医学教育センター医学部領域の卒前医学教育部門は8室からなる体制が確立しており、各々の役割分担を明確にして活動を行った。

(1) カリキュラム室

COVID-19対策を施した授業を、教職員、学生の協力を得ながら実行することができた。3年生での対面講義への移行は、1か月の告知期間をとり、大きな混乱を招くことなく実施できた。同時に、入学以来講義を対面で受けてこなかった学生への新たな習慣づけ、動機づけが重要である事が明らかになってきた。実習・演習においても、対面実施の範囲を徐々に回復させる方向性を示すことができた。場所の調整があらためて重要な課題となってきた。課外プロでは、COVID-19対策のため制限を徐々に緩めてゆく方向性を示すことができた。埼玉大学との連携では課外プロの正式運用の初年度からプログラムの相互提供、相互参加を実現することができた。

(2) 臨床実習推進室

1) 令和4年度の臨床実習は、引き続き、感染予防対策に入念な準備を施し、問題点については迅速に対応し、繰り返し注意喚起を行なうことで、5年生CC Step1、CC Step2、6年次CC Step3は、基本的に全期間実施され、一部の病棟、病院で短期間実習を中止した。補習を行うことでローテート予定の診療科を全てローテートすることができた。

2) 5年生CC Step1において病院内感染の影響で実習が中止となった学生の補習は、夏期休暇及びCC Step2 第1クール第1週を利用して実施した。感染により欠席した学生は、補修とレポート課題で欠席の補完を行うことができた。

- 3) 学外施設での実習を3年ぶりに実施して、学生が地域医療の現場で実習を行うことができた。また、指定学外施設の教員による実習評価がWebClassを用いて確実に実施されたことは実習の質の向上に寄与した。
 - 4) 簡易版臨床能力評価 (mini-CEX) を5年生 CC Step1 でほぼ学生全員に実施されたが、今後さらに多くの診療科で実施できる様検討する。
 - 5) 国際医療センター以外の2病院でもCC Step3での看護師による360° 評価を計画したが、院内感染の拡大傾向があり実施できなかった。
 - 6) Pre-CC 1-1、2-1の診療科実習とPre-CC 2-1地域医療実習の中で地域の病院・診療所での実習を3年振りに再開することができ、低学年からの現場での体験を確保することができた。
 - 7) 医師法改正に伴う医学生の医行為実施、診療参加型臨床実習の実質化に向けた修学カルテの検討の結果、令和5年度から、手技・実技、経験疾患・症候の記録を行えるようにカスタマイズが行われた。
 - 8) 文科省のウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業とポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業に選定され、学生の満足度の高い実習が拡充された。
 - 9) 令和4年度のスチューデントドクター認定式を対面で実施、学生の意欲の向上に寄与した。
 - 10) 5年生学年集会「前期総合試験を終えて、臨床実習後期に向けて」を遠隔で実施し、臨床実習中途での意識付けとキャリア教育を行うことができた。
 - 11) 昨年度実施を断念した5年生対象の6年生に向けてのガイダンスを対面で実施できた。
 - 12) 「臨床実習指定学外施設懇談会」は7月23日と令和5年2月20日に遠隔で開催した。
 - 13) 特別演習は5年生は12月まではオンラインで、4年生は令和5年1月～3月は対面に変更し演習を実施できた。
- (3) 試験管理室
- 1) 各試験問題の項目特性は適正範囲を維持できた。
 - 2) 試験全般の実施についても、問題なく厳密に行えた。
- (4) 調査解析室
- 1) 調査解析活動については、例年同様授業評価の結果を卒前教育委員会に提出したのに加え、CC評価の結果集計および解析を、IRセンターを通じてカリキュラム評価委員会に提出したことで、IRセンターとの連携に前進がみられた。
 - 2) 授業評価については昨年度と同様に実施し、各教員にフィードバックし、ベストティーチャー賞の選考も実施できた。臨床実習評価については、CC Step2 および3については、これまで臨床実習推進室が独自の調査を行っており、解析上不都合があったため、同一のシステムを用い調査内容を統一することについて検討を行った。
 - 3) 教育活動実績登録システムについては、昨年度と同様に運用し、人事考課における教育ポイントの算出、まとめの資料を対象者に送付できた。
 - 4) 以前使用されていたクリッカーに替わる Web クリッカーシステムを開発し、全学年で使用できるようシステムを整備した。
- (5) 学生支援室
- 定期試験不合格科目数の多い学生、試験成績の下位にある学生や、授業への参加状況や「アドバイザー」の面談報告を参考にして、問題を抱えた学生の指導を継続して行うことが求められる。特に問題行為が認められる学生に対しては、学生部委員会、毛呂山会などとも連携した対策の構築が必要である。
- 授業は対面で行えるようになったが、コロナ禍以前と比べて同級生同士の交流が充分行われていない。また、クラブ活動も開始したが、上下での交流も不十分な1年であった。コロナ禍の中で、従来の枠組みを超えて、学生の交流を活発化させる方策が必要である。
- また、体調不良者への対応も本来の担当部署である学生健康推進室に移行していく必要がある。
- (6) 学力増進室
- 1) 「5、5年担当」
年度初めに計画した補講、合宿や模擬試験は予定通りに実行できた。ただし、コロナ感染症蔓延の影響もあり多数の学生が参加したとは言い難い。とくに成績不良者の模擬試験参加率が悪かった。
 - 2) 「3、4年担当」
計画した、4年生特別授業、補講等、3年生の定期試験再試験該当者に対する手当（呼吸器ユニットでは補講とUDが選定した講義の再視聴、循環器ユニットについては補講、腎・泌尿器ユニットはUDが選定した講義の再視聴）は予定通りに実行できた。しかし、4年生の補講の出席率は良くなかった。CBTの本試験の不合格者は減少した。
 - 3) 「1、2年担当」
2年生は本件に該当しない（学力増進室2年生担当は2022年度途中に設置されたため）。1年生担当は、オンラインでの指導方法に慣れ、補習に参加した学生の成績には向上がみられた。学習意欲の向上にもつながったと思われる。補習

に参加しなかった学生もあり、今年度は1学年で10名が留年（昨年度は3名）したことは残念である。担当者だけでは人的資源が不足した面もあったと考える。

(7) 研究マインド育成室

令和4年度「学部学生による研究発表会」は、計画通り「オール埼玉医大研究の日」に同日開催され、リモート配信・録画配信も実現できた。学生と教員の双方からの研究発表がなされ、師弟同業の観点に配慮されたプログラム運営がなされた。医学部入学の早期から研究マインド涵養を図る企画を課外（昼休）に実施することができたが、ライブ参加の人数、WebClassからの視聴率も限定的であった。令和3年度に受審した医学教育分野別評価において、カリキュラムの一環として研究室配属の環境にないことが改善点として指摘され、本学の理念・実情に配慮した学生の研究室配属のあり方について検討を重ねた。カリキュラム委員会の下部組織として研究参画ワーキンググループ(WG)が組織され、当室員がWG構成員を兼務する構図をとり、追加候補の推薦があった。令和4年8月以降は研究参画WGを中心に活動したため、研究マインド育成室としての会議開催が難しくなった。

(8) 地域医学推進室

- 1) 課外学習プログラム「埼玉の医療」は、令和4年度1年生が概ね全てに参加し、また、選択必修「地域医学・医療学入門」については令和3年度入学生が1年生又は2年生で全員履修したことから、計画通り運営を行うことができた。
- 2) 彩の国連携力育成プロジェクトのIPW演習に3年生地域枠学生全員、IPW実習に4年生地域枠学生全員が参加した。
- 3) コロナ禍で中断していた、夏季・春季の指定地域医療機関の病院見学実習を再開することができた。
- 4) 令和4年度に採択されたポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業の中で、令和5年度の地域枠奨学生に対する教育について準備を進めることができた。
- 5) 埼玉県医師会からの要請を受け、医師会主催の講演会・委員会に参加し、学生も新たな学びを得る事ができた。

(9) OSCE委員会

コロナ禍の中、共用試験化された6年生臨床実習後OSCE (Post-CC OSCE) を特例実施の形で、学内・学外の評価者、埼玉医科大学SP会、OSCE実施委員会委員、大学事務部の協力のもと、大きな問題なく実施することができた。また同様に4年生の共用試験臨床実習前OSCEも、安全に実施することができた。両OSCEとも、試験後に感染の発生も無く、機構派遣監督者からの講評は概ね良好であった。

予算の関係でOSCEセンターに設置されてなかった天井設置式ビデオカメラなど収録システムを感染症医療人材養成事業の一環として追加設置できた。またウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業の遠隔医療教育で設置した天井設置式ビデオカメラもOSCEで利用可能となった。

(10) シミュレーショントレーニングセンター運営委員会

感染症医療人材養成事業の一環として購入・整備した各種シミュレータを卒前・卒後教育、医療人教育、学生の自主練習を含め有効に活用できた。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

来年度で新カリキュラムは最終学年の6年となることから、新カリキュラムを完成させる。しかし全国的には依然として低位置にあることより、新カリキュラムを上の方次に進めることとともに、来年度も国試の成績向上を目指して引き続き卒前医学教育全般の改善し、今後継続して良好な国試成績を収められるような体制整備が必要である。

(1) カリキュラム室：

- 1) COVID-19対策としての感染予防は継続するものの、授業の実施形態は対面授業に戻ってゆく方向性は明らかになってきた。この3年間に体得・整備したあらたなITスキルやシステムを対面授業においても活かしてゆくことが重要と考える。学生が登校して、集団として学習することの意義を実感できるカリキュラム運用を心がけたい。学生と接する機会が増えるので、学生のニーズや考えを聴取する機会も積極的に設けてゆきたい。
- 2) 対面での学修機会が増えてゆくことにあわせて、部屋の収容人員、実習室・演習室の運用、授業形態の在り方、など、今後のカリキュラム運営をハード・ソフト両面からの整備を進める。
- 3) 令和4年度版医学教育コアカリキュラムが、令和6年度の入学生から適応されることに備えた準備を進める。アウトカム基盤型教育についての理解が教職員、学生の双方で一層深まるように関係各方面と協議・協力する。
- 3) 課外学習プログラムについても、対面実施の範囲を拡大し、以前の状況に戻してゆく。実施にあたっては、プログラム担当者との連絡を密に取り、感染対策に留意することは欠かせないと考える。大学間の提携に基づく女子栄養大学、埼玉大学との課外学習プログラムでの交流をより一層充実させる。

(2) 臨床実習推進室：

- 1) これまでの経験を生かして、十分な感染予防対策を施して、臨床実習をできるだけ中断することなく1年間実施す

ることを目標とする。

- 2) 6年生 CC Step3 での教員評価を充実し、アウトカム評価を確実に実施する。
- 3) ルーブリック評価を見直して簡易化を進めることなど、現場に即した質の高い評価方法への改善を進める。
- 4) 6年生CC Step3で看護師による360° 評価を全面的な導入を検討する。
- 5) 簡易版臨床能力評価 (mini-CEX) の拡充を目指し、実施する診療科が増やすために、mini-CEX のFDを企画する。
- 6) アンプロフェッショナルなど、問題のある学生への対応方法の検討を継続する。
- 7) 文科省のウィズコロナ時代の医療人材養成事業における遠隔医療実習、ポトコロナ事業における感染症実習、特別演習の充実、指定学外施設での地域診断のプログラムを開発する。
- 8) PreCC1-1、2-1の診療科実習において学生の1診療科の実習期間を長くすることで実習の拡充を図る。また、PreCC1-3、2-3での実技系実習の充実、CC Step1のオリエンテーションの拡充を図る。
- 9) 医師法改正に伴う医学生の医行為実施、診療参加型臨床実習の実質化に向けて、実習病院における包括同意、個別同意の方針についての検討を行い、学生の安全な教育を目指す。
- 10) 透視装置を使用する手術室への学生の立ち入りについての対応策を検討する。
- 11) 川越キャンパスの学生寮の拡充について検討を継続する。
- 12) 3年生Pre-CC 1-1で、医学部、保健医療学部合同のIPE実習（医療安全管理演習）を十分な感染対策を講じて実施する。

(3) 試験管理室：

- 1) COVID-19 感染症が 5 類に移行することを受けて、試験実施方法について、一部変更を含め検討を継続する。
- 2) 試験の質維持のためのデータ蓄積と分析を継続する。

(4) 調査解析室：

- 1) IRセンターとの連携による調査解析活動の充実をさらに進める。
- 2) CC Step1～3 までで統一された CC 評価を行い、診療参加型実習の実施状況の分析などの各種解析を進める。
- 3) 授業評価をより実質的なものとするよう、Web クリッカーシステムの改修を検討する。
- 4) 教育活動実績登録システムのサーバの老朽化に伴い、を研究業績データベースシステムに組み込むことを検討する。

(5) 学生支援室：

- 1) さらに学生への支援が必要なことから学生支援室員、特に 3、4、5 年に対応する教員を増やしていく。
- 2) アドバイザーの活動をコロナ禍以前と同じように運用できるようにする。
- 3) 医学教育センターのコアメンバーが毎日の体調不良者への連絡、情報収集、濃厚接触者の疑いの対応などを行ってきたが、ポストコロナに向けて従来の体制に戻す。
- 4) 学生健康推進室、心の相談室、カウンセラーとの連携をさらに深めていく。

(6) 学力増進室

1) 「5、6年担当」

コロナ感染症が 5 類になったこともあり、補講（ナイトセッション）を企画し、対面での学生参加を促す。9 月施行の模擬試験を第 4 回実力試験として参加を義務付ける。学内への登校の機会を増やし、学生が孤立しないように配慮する。

2) 「3、4年担当」

UD が選定した 2022 年度 3 年生収録授業を CBT 対策として視聴を推奨する。成績下位者対策として 4 年生補講（1 学期、夏季）を行う。4 年生 3 学期特別授業を実施する。3 年生では呼吸器、循環器、腎・泌尿器ユニットの定期試験で再試験該当となった学生を対象とした手当（呼吸器ユニットでは補講と UD が選定した講義の再視聴、循環器ユニットについては補講、腎・泌尿器ユニットは UD が選定した講義の再視聴）を行う。

3) 「1、2年担当」

2 年生では、ユニット責任者との連携が不足している部分があり、補講に関して十分な役割を果たせなかった。次年度は関係各位と連絡を密にし、長期休暇等を利用した定期的な補講が行えるよう体制を改善する計画である。1 年生では補習についての広報を工夫するなどして、補習参加者を増やしたい。また、対面での指導が行える見込みなので、参加者増や指導の効率が上がることを期待している。

(7) 研究マインド育成室

令和 5 年度「学部学生による研究発表会」も「オール埼玉医大 研究の日」（第 4 回）との同時開催を計画している。研究マインドの涵養については、ライブ企画の負担を軽減し、ユーザーニーズや自由度が高いと思われる WebClass での収録動画の活用を推進したい。室員の退職等により構成員が少なくなりつつあり、研究参画 WG のメンバーから室員の補充を検討したい。本学の理念・実情に見合った研究室配属の実現に向け、更に検討を重ねていく。

(8) 地域医学推進室

- 1) 課外学習プログラム「埼玉の医療」を開講し、地域卒 1 年生のマインド育成に努める。

- 2) 彩の国連携力育成プロジェクトの IPW 実習に在学中に 1 回以上履修の義務化を継続する。
 - 3) 春季・夏季の特定地域指定医療機関見学実習、自治医科大学の夏季セミナーへの参加を計画する。
 - 4) 令和 4 年度に採択されたポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業の中で卒前の地域枠奨学生に対する教育について検討し、令和 5 年度のカリキュラム、課外学習プログラム（利根川プログラム）を実施する。また、選択必修「地域医学・医療学入門」を 1 年生で必修、「総合診療とプライマリケア」を 2 年生で必修とする。
 - 5) 卒後へのシームレスな移行を目指し、キャリアに関するアンケート、面談の実施を検討する。
- (9) OSCE 委員会
- 1) 来年度も 6 年生共用試験臨床実習後 OSCE、4 年生共用試験臨床実習前 OSCE を COVID-19 感染予防対策を徹底して実施する。
 - 2) 課題数増加に伴い試験室としても使用するカタロスタワー4 階シミュレーショントレーニングセンターの各部屋に OSCE センターの各試験室同様に天井設置式ビデオカメラなど収録システムを整備する。
 - 3) 共用試験臨床実習前 OSCE の公的化に伴い、評価者は基本的に認定評価者の資格を取得していることが必要となったが、課題分野ごとに必要となる認定評価者が不足している。特に頭頸部、胸部、バイタルサイン、基本的臨床手技、救急、新規課題分野の感染対策の担当者が不足しているため、新規講習会を受講していただける教員を増やす必要である。また現在の認定評価者も認定更新が必要なため、更新講習会を順次受講していただくように勧める。
- (10) シミュレーショントレーニングセンター運営委員会
- 1) 来年度も十分な感染対策を行い、安全にシミュレーション教育を実施できるようにする。
 - 2) 感染症医療人材養成事業で整備した新規のシミュレータについては、使用説明会を開催し、有効な活用がなされるようにする。
 - 3) 共用試験 OSCE の試験室として必要な天井設置式ビデオカメラなど収録システムをシミュレーショントレーニングセンターの各部屋に OSCE センターの各試験室同様に整備する。

4. 卒後医学教育部門

1. 構成員

- 部 門 長 三村俊英 (MIMURA, Toshihide) :
埼玉医科大学病院リウマチ膠原病科：教授
- 副部門長 林 健 (HAYASHI, Takeshi) :
国際医療センター総合診療内科（病院診療科）：教授
- 副部門長 山元 敏正 (YAMAMOTO, Toshimasa) :
埼玉医科大学病院神経内科・脳卒中内科：教授
- 副部門長 木崎 昌弘 (KIZAKI, Masahiro) :
総合医療センター血液内科：教授
- 部 門 員 根本 学 (NEMOUTO, Manabu) :
国際医療センター救命救急科：教授
- 辻 美隆 (TSUJI, Yoshitaka) :
医学教育センター：教授
- 村松俊裕 (MURAMATSU, Toshihiro) :
予防医学センター：特任教授
- 高平修二 (TAKAHIRA, Shuji) :
埼玉医科大学病院救急科：准教授
- 齋藤 恵 (SAITO, Megumi) :
医学教育センター：助手

※部門長・副部門長任期あり、部門員任期なし

2. 目的・目標

既設の卒後教育委員会、研修管理委員会と連携を取りながら、卒後臨床研修、中・後期の臨床研修、生涯教育、その他卒後医学教育に関する業務を行う。

3. 活動実績

指導医講習会時（2022年11月26-27日）に、卒前卒後教育連携会議を開催した。
その他は、「医学教育センター医学部領域卒後教育委員会」を参照のこと。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

前年度にも行った卒前卒後教育連携会議を、今年度も指導医講習会時に関係者を集めて開催し、卒前と3病院における卒後教育の連携を図るための話し合いを行った。前年度は3病院における臨床研修医希望者の減少に関して、多くの意見交換を行い、次年度に向けての取り組みを検討したが、今年度は3病院での研修希望者が過去最高に増加したことに関しての解析、それに伴う研修医アメニティーの危機の回避法など、3病院それぞれ具体的な課題を検討した。その他は、「医学教育センター医学部領域卒後教育委員会」を参照のこと。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

今年度の卒業生たちの3病院での臨床研修予定者数はやや減少した感があったが、3病院での医学部学生や臨床研修医に対するより良い教育体制を構築することが重要であると考えられた。また、学内外の学生たちに本学の教育や3病院の臨床研修プログラムの良さをアピールする方法を発展させる必要がある。その他は、「医学教育センター医学部領域卒後教育委員会」を参照のこと。

5. シミュレーション教育部門

1. 構成員

部門長 辻 美隆(TSUJI, Yoshitaka) : 保健医療学部共通教育部門、医学教育センター、総合医療センター消化管・一般外科、大学病院消化器一般外科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

副部門長 山田泰子(YAMADA, Yasuko) : 医学教育センター : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

部門員 森 茂久(MORI, Shigehisa) : 医学教育学 : 教授

長坂 浩(NAGASAKA, Hiroshi) : 大学病院麻酔科 : 教授

芳賀佳之(HAGA, Yoshiyuki) : 大学病院救急科 : 教授

高平修二(TAKAHIRA, Shuji) : 大学病院救急科 : 准教授

川村勇樹(KAWAMURA, Yuuki) : 教養教育 : 講師

2. 目的・目標

医学教育センター シミュレーション教育部門は、平成 16 年から始まった新臨床研修制度に伴い教育環境整備の一環として開設されたスキルスラボを卒前・卒後医学教育、生涯教育にわたって有効に活用するために、平成 21 年 4 月に新設された。スキルスラボは令和元年 9 月に完成したカタロスタワー4 階に「シミュレーショントレーニングセンター」として移設となり、それに伴い、令和 2 年 5 月 30 日付で「埼玉医科大学医学教育センター規程」、「埼玉医科大学シミュレーショントレーニングセンター管理運営規則」、「埼玉医科大学シミュレーショントレーニングセンター利用規則」が改正された。改正により、シミュレーション教育部門長は必要に応じて「シミュレーショントレーニングセンター運営委員会」を開催して、シミュレーショントレーニングセンターの利用、管理、運用に関する事項を審議すると変更された。

3. 活動実績

- ①第 1 回シミュレーション教育部門会議・シミュレーショントレーニングセンター運営委員会 (令和 4 年 4 月 26 日) 於 : カタロスタワー4 階シミュレーショントレーニングセンター (以下、STC と略す) Zoom 併用。(出席者 13 名 欠席者 2 名) 議事 : 部門員および委員の紹介。令和 3 年度の利用状況、講習会・研修会の開催状況、物品使用・貸出状況の報告。物品取得ならびに修理・整備状況の報告。令和 4 年度活動計画の検討。各部署に講習会・研修会等の開催の確認と実施の際に COVID-19 の感染状況を考慮した講習会等の開催の指針について確認した。各部署からの報告。ファイル共有サーバーに掲載する項目の確認。議事録有。
 - ②第 2 回シミュレーショントレーニングセンター運営委員会 (令和 4 年 5 月 31 日) 於 : カタロスタワー4 階 STC
出席 7 名 欠席 3 名。議事 : 4 月の利用状況、物品貸出・修理依頼の報告。生体臓器を用いるセミナーの開催に向けての検討。各部署からの報告。議事録有。
 - ③第 3 回シミュレーショントレーニングセンター運営委員会 (令和 4 年 6 月 27 日) 於 : カタロスタワー4 階 STC
出席 7 名 欠席 3 名。議事 : 5 月の利用状況、物品貸出・取得・修理等の報告。COVID-19 感染状況を鑑み NCPR 更新コースを再開したい等、各部署からの報告。議事録有。
 - ④第 4 回シミュレーショントレーニングセンター運営委員会 (令和 3 年 7 月 28 日) 於 : カタロスタワー4 階 STC
出席 6 名 欠席 4 名。議事 : 6 月の利用状況、物品貸出・取得・修理等の報告。COVID-19 感染増加に伴い中止となった CCstep1 の実習の補習を 8 月末に実施予定等の報告。議事録有。
 - ⑤第 5 回シミュレーショントレーニングセンター運営委員会 (令和 4 年 9 月 29 日) 於 : カタロスタワー4 階 STC
出席 10 名。議事 : 7、8 月の利用状況、物品貸出・取得・修理等の報告と検討。令和 2 年度「感染症医療人材養成事業」による機器の納期が遅延していた部品が一部納品された。「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点事業」の補助事業の一環として購入予定の機器の説明と、それに関連する報告があった。各部署からの報告・意見交換。議事録有。
 - ⑥第 6 回シミュレーショントレーニングセンター運営委員会 (令和 4 年 10 月 25 日) 於 : カタロスタワー4 階 STC
出席 8 名 欠席 2 名 議事 : 9 月の利用状況、物品貸出・取得・修理・移管の報告。各部署からの報告。議事録有。
 - ⑦第 7 回シミュレーショントレーニングセンター S 営委員会 (令和 4 年 12 月 23 日) 於 : カタロスタワー4 階 STC
出席 7 名 欠席 3 名 議事 : 10、11 月の利用状況、物品貸出・修理、移管等の報告・意見交換。各部署からの報告・意見交換。議事録有。
 - ⑧第 8 回シミュレーショントレーニングセンター運営委員会 (令和 5 年 1 月 26 日) 於 : カタロスタワー4 階 STC
出席 5 名 欠席 5 名 議事 : 12 月の利用状況、物品貸出・取得・移管等の報告。OSCE の実施に伴い他部署・メーカーから借用した機器備品の報告。各部署に次年度の講習会・研修会等開催予定の検討を依頼。議事録有。
 - ⑨第 9 回シミュレーショントレーニングセンター運営委員会 (令和 5 年 2 月 28 日) 於 : カタロスタワー4 階 STC
出席 8 名 欠席 2 名 議事 : 1 月の利用状況、物品貸出・取得・修理等の報告・意見交換。各部署からの報告・意見交換。令和 4 年度補正予算「医学部等教育・働き方改革支援事業」に選定されたとの報告があった。議事録有。
 - ⑩第 10 回シミュレーショントレーニングセンター運営委員会 (令和 5 年 3 月 20 日) 於 : カタロスタワー4 階 STC
出席 9 名 欠席 1 名 議事 : 2 月の利用状況、物品貸出・修理・移管等の報告。COVID-19 感染状況を考慮した STC での研修会・講習会等の外部受講者の受入れについて検討。令和 4 年度補正予算補助金による全室録画システム整備等の報告。新年度からの部門員・委員の交代の報告。各部署からの報告・意見交換。議事録有。
- ・令和 4 年度のシミュレーショントレーニングセンター利用状況報告
COVID-19 の感染状況に照らし、昨年と同様に学外からの受講生は避け、従来の 5 割程度の規模を目安に、換気・手指消毒等の感染予防対策を徹底した上で実施することを基本とした。

- ①利用日数は220日であり、年間を通じて6割程度の稼働状況であり、昨年度と同程度の利用日数を維持した。
- ②利用件数の総数464件、過去最高件数であった。内訳は、授業・実習等の年間予約の利用68件、臨床実習や研修医トレーニング、各種講習会・研修会等の単発の利用350件、物品の貸出は46件であった。
- ③利用者の総数は6361名、COVID-19感染以前の9割程度に回復した。学内利用者(6211名)が98%を占め、学外利用者は150名でそのほとんどが指導者であった。
- ④医学部、保健医療学部、短期大学を含めた卒前教育および大学院看護学研究科の授業のための利用は288件(授業・OSCE 98件、臨床実習190件)、利用者数は5182名(学生数4462名、指導者・スタッフ720名)、利用者総数の約8割を占めた。
- ⑤研修医のトレーニング目的での利用は22件、利用者数は122名(研修医114名、指導者・スタッフ57名)であった。内科専攻医のトレーニングや小児科・産婦人科医師の勉強会・縫合トレーニング、自主研修等、小人数での研修などによる利用は22件、利用者数は163名(受講生110名、指導者・スタッフ53名)と昨年度より増加した。
- ⑥その他の医療職者による卒後教育のための利用は、看護師による研修が10件であり、利用者数は80名(受講生45名、指導者・スタッフ35名)で、予定した時期に開催することができた。

・講習会等の開催

- ①日本救急医学会認定BLS講習会：毎週水曜日に学内者のみを対象に感染状況に応じて教育と連携して開催した。開催件数17件、受講者29名、指導者・スタッフ延べ46名であった。同時に大学病院認定のBLS更新コースを適宜開催し、開催数は22件、受講者74名、指導者・スタッフ延べ46名であった。
- ②日本救急医学会認定大規模BLS講習会：学内の新入職の研修医を対象に1件、看護師を対象に2件、その他の医療職・事務職員を対象に1件、開催した。受講者162名、指導者・スタッフ延べ44名であった。開催日：令和4年4月2、11、13日6月11日。
- ③日本救急医学会認定ICLS講習会：学内者のみを対象に8件開催した。受講者数72名、指導者・スタッフ延べ82名であった。開催日：令和4年8月3日、9月7日、17日、10月5日、11月16日、12月28日、令和5年1月18日、3月18日。
- ④日本内科学会認定内科救急ICLSコース(JMECC)：学内者のみを対象に3件開催した。受講者数30名、指導者・スタッフ延べ31名であった。開催日：令和4年7月16日、10月29日、令和5年1月28日。
- ⑤日本周産期・新生児医学会公認新生児蘇生法(A)コース：学内者のみを対象に3件開催し、更新コースを1回開催した。受講者数36名、指導者・スタッフ延べ39名であった。開催日：令和4年9月10日、10月8日、11月12日、令和5年3月4日。
- ⑥医療人育成支援センターと共催の実践セミナー「腹部超音波検査・消化器内視鏡検査の基本と実践」を埼玉医科大学病院群3病院の研修医を対象に1件開催した。受講者は7名、指導者・スタッフは8名であった。開催日：令和4年11月5日。
- ⑦小児BLS講習会：開催せず
- ⑧日本救急医学会認定ICLS指導者養成ワークショップ：開催せず。
- ⑨AHA認定BLS講習会：開催せず。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

令和4年度は、前年度に引き続きCOVID-19の感染状況に応じて、感染予防対策を徹底し、施設の広さに応じた人数制限をすることにより、前年度より実施件数を増加させることができた。

- 1) 卒前教育関係では、医学部の授業による利用は時期を集中させて実施することができた。臨床実習における各種シミュレータを用いた各科の実習は多少の日程変更があったが、継続的に実施でき、実施できなかったグループについては後日補習を行った。保健医療学部並びに短期大学の看護学科の母性看護学実習では、COVID-19の影響で学外診療施設での臨地実習が拒絶されたため、STC内での周産期シミュレータを用いた演習で補完することとなったが、予定のグループ数を実施することができた。
- 2) 4月早々に研修医オリエンテーションとBLS講習会を開催することができ、消化器内科・麻酔科等の研修医トレーニングは感染状況を考慮しながら、断続的に実施することができた。産婦人科・小児科の研修会や内科専攻医トレーニング、個人研修等の単発利用も実施することができた。
- 3) 看護部主催の新入職者対象のBLS講習会は4月に2日に分散して開催することができ、その後、その他の医療職者・事務職に対するBLS講習会も開催することができた。
- 4) 毎週開催している救急医学会認定BLS講習会は、学内者を対象に従来の5割程度の規模で5月から開催し、感染の増加により中止となる期間もあったが、大学病院認定の更新コースを並行して開催することができた。AHA主催BLS講習会は今年度も未開催であった。JMECCや新生児蘇生法のコースは7月以降予定通りに開催することができた。ICLS講習会は学内者を対象に、8月以降は少人数で月1回のペースで開催することができた。
- 5) 令和2年度文部科学省「感染症医療人材養成事業」補助金によるシミュレータを適宜活用することができ、特に、2年目となる産婦人科、保健医療学部・短期大学の母性看護学での活用は有意義であった。
- 6) 令和3年度の利用状況等の情報をもとに、シミュレーション教育部門のホームページを更新した。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

令和5年5月よりCOVID-19の分類が5類に変更となるが、感染状況を鑑み昨年度の感染対策を基本に、埼玉医科大学病院の基本方針に沿って対応する。STCでの利用方法・対策を諸関連部署と連携して修正し、利用の実施に尽力する。

- 1) 医学部の授業・実習等の卒前医学教育関係者の要望に可能な限り協力する。
- 2) 大学院・保健医療学部・短期大学のSTC利用の要望があれば、可能な限り対応できるように協力する。

- 3) 研修医・医師が必要としている研修内容を具体的に把握し、実施・支援できるように働きかける。
- 4) 看護師、理学療法士、臨床工学技士等の医療職者による研修が実施できるよう対応し、開催に向けての種々の調整を図り、実施を支援する。
- 5) 令和2年度「感染症医療人材養成事業」令和4年度「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」でのシミュレータ等の整備に加え、令和4年度「医学部等教育・働き方改革支援事業」よりシミュレーショントレーニングセンターの各室にビデオ収録システムが整備されることになった。それらを活用した学生教育・OSCEや研修等を計画・実施する。
- 6) 機器の作動状況を把握し、更新・新規購入が必要な場合は順次働きかける。補助金等で取得した機器・備品の整備・管理をしつつ、情報を速やかに関係部署に提供する。同時に、対応する診療科等と協力して実習や研修を具体的に計画し、機器・備品の利用を支援する。
- 7) 感染状況にも影響されるが、学内・外を対象としたシミュレーション教育部門主催もしくは共催の各種セミナー・講習会の開催の再開・新規開催を促進し、定期的な開催に向けて支援する。
- 8) 医学教育センター・ホームページの改訂に協力し、シミュレーション教育部門ホームページの更新を図る。

6. 教育情報部門

1. 構成員

部門長 椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IR センター : 教授 (任期 : R6.3.31)
部門員 鈴木 智 (SUZUKI, Satoshi) : 医学教育センター : 助教
佐藤 義文 (SATO, Yoshifumi) : 医学教育センター : 助手
大西 京子 (OHNISHI, Kyoko) : 医学教育センター : 助手
高橋 美穂 (TAKAHASHI, Miho) : 医学教育センター : 助手
齋藤 恵 (SAITO, Megumi) : 医学教育センター : 助手
新井 菜緒 (ARAI, Nao) : 大学事務部医学部事務室 : 事務員

2. 目的・目標

教育情報部門は、埼玉医科大学医学教育センター規程第7条に則り、教育水準を向上させるための、教育に関する情報の収集、作成、管理解析および教育資料の作成、情報環境の整備、その他教育情報に関する業務を行うことによって、本学の医学教育の発展に貢献することを目的としている。

3. 活動実績

- ・オンライン講義の支援
 - 各学年の講義のライブ配信 (YouTube)
 - 各学年の講義資料の収集と WebClass へのアップロード
 - 講義収録配信システムで収録した講義動画の vimeo と WebClass へのアップロード
- ・講堂の IT 機器の講義開始前の点検 (毎朝)、講義時の利用説明 (随時)、サポート (随時)
- ・学内で開催される医学教育に関係する講演会・研究会の広報
 - 主要個所へのポスターの掲載 (毎月)、ホームページへの掲載 (随時)
- ・電子シラバスシステムの運用、シラバスの作成
- ・WebClass による授業評価と小テストの運営
- ・WebClass による臨床実習評価の実施
- ・教育活動実績登録システムのデータ登録・処理
- ・講義収録・配信システムの運用
- ・試験問題作成システムの運用
 - 2 年生総合試験、共用試験 CBT、5 年生前期総合試験・後期総合試験、6 年生実力試験・卒業試験、試験監督者講習会、試験問題作成 FD などの支援
- ・講義資料の印刷
- ・医学教育センターニュースの発行 (第 86 号～第 89 号)
- ・医学教育ワークショップ、教授総会等の支援
 - 第 45 回埼玉医科大学医学教育ワークショップ
 - 第 21 回埼玉医科大学臨床研修指導者講習会
 - 令和 4 年度医学部教授・教員総会
 - 令和 4 年度医学部保健医療学部合同教授・教員総会
 - 第 12 回医学教育フォーラム
 - 日本の Mayo を目指す会
- ・臨床入門ユニットの模擬患者
- ・臨床推論ユニットの支援
- ・学生の担任面談・教育相談結果報告書のデータ処理
- ・学外向けホームページの運営
- ・課外学習プログラムのデータ整理・HP 掲載
- ・5 年生・6 年生 CC プログラムのデータ整理・HP 掲載
- ・入学試験 : 1 次試験監督、大学入学共通テスト試験監督
- ・入学試験のデータ処理
- ・共用試験 CBT 実施のサポート
- ・共用試験臨床実習前 OSCE 実施のサポート
- ・共用試験臨床実習後 OSCE 実施のサポート
- ・市民公開講座の支援
- ・教育資料作成の支援

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

令和 4 年度は新型コロナウイルス感染症感染拡大によるオンライン授業のため、上記のように非常に多くの支援を行った。これらの活動によって、教育情報部門の目的はほぼ達成できたものと自己評価している。医学教育センターの他部門や大学事務部との連携も十分に行われたものとする。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で学んだ情報通信技術のノウハウを活かし、ポストコロナにおける医学教育に貢献する。

7. Faculty Development 部門

1. 構成員

部門長	石橋敬一郎 (ISHIBASHI Keiichiro) : 医学教育学 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31) (医学教育センター・総合医療センター消化管一般外科兼任)
副部門長	米岡裕美 (YONEOKA Yumi) : 教養教育 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)
部門員	森 茂久 (MORI Shigehisa) : 医学教育学 : 教授 (医学教育センター・大学病院血液内科・総合医療センター血液内科兼任) 辻 美隆 (TSUJI Yoshitaka) : 保健医療学部 : 教授 (医学教育センター・総合医療センター消化管一般外科兼任) 側島久典 (SOBAJIMA Hisanori) : 総合医療センター新生児科 : 客員教授 村松俊裕 (MURAMATSU Toshihiro) : 国際医療センター心臓内科 : 教授 中山英人 (NAKAYAMA Hideto) : 大学病院 麻酔科 : 教授 松下毅彦 (MATSUSHITA Takehiko) IRセンター : 教授 小山政史 (OYAMA Masafumi) 国際医療センター泌尿器科 : 教授 廣岡伸隆 (HIROOKA Nobutaka) : 大学病院 地域医療科 : 教授 魚住尚紀 (UOZUMI Naonori) : 生化学 : 准教授 小川智也 (OGAWA Tomonari) : 総合医療センター腎・高血圧内科 : 教授 黒崎 亮 (KUROSAKI Akira) : 国際医療センター産婦人科 : 准教授
担当事務員	岡野 弘、川俣栄希、佐藤瀬奈、佐藤志音、鍋澤駿介

2. 目的・目標

学生および研修医をはじめとする医師が「埼玉医科大学の期待する医師像」に到達することを支援するために、卒前および卒後の医学教育カリキュラムのあり方を調査・研究し、適切なプログラムを実施するとともに、教育に関わる機関およびその構成員の能力開発に協力して、教育内容の充実を図る。

3. 活動実績

3-1. ワークショップ

① 第43回 埼玉医科大学医学部医学教育ワークショップ
開催日時 令和4年7月29日(金)～7月30日(土) 2日間 (実施時間 16時間25分)

主催者 学長、医学教育センター長

開催形態 オンライン (Zoom)

発信地 毛呂山キャンパス カタロスタワー6階 演習室

参加者 30名、スタッフ27名

タスクフォース 3名 (側島久典、辻 美隆、石橋敬一郎、米岡裕美)

内容 カリキュラム・プランニング、他

② 第21回 埼玉医科大学病院群臨床研修指導医講習会

開催日時 令和4年11月26日(土)11月27日(日) 2日間 (実施時間 16時間45分)

主催者 大学病院・総合医療センター・国際医療センター各病院長

開催形態 オンライン (Zoom)

発信地 毛呂山キャンパス カタロスタワー6階 演習室

参加者 32名、スタッフ48名

チーフタスクフォース 側島久典

タスクフォース 5名 (木下牧子、清水 貴子、辻 美隆、石橋敬一郎)

3-2. 講演会

① 第12回 埼玉医科大学医学部医学教育フォーラム

開催日時 令和4年9月10日(土) 14:00-16:15

開催場所 カタロスタワー7階 コンシリウムホール (学内LANによるライブ配信、Zoomを併用)

参加者 141名

内容

テーマ : ポストコロナに向けた地域医療教育

第1部 本学におけるポストコロナに向けた地域医療教育

講演1 埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成 (事業の概要) (柴崎智美 地域医学推進室長)

講演2 地域卒学生の教育—卒前・卒後の連携— (林 健 医療人育成支援センター地域枠奨学金部門長、副医学部長)

第2部 特別講演

「離島・地域医療 ～今の課題とその対策～」

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センター 大脇哲洋 教授

② 第116回医師国家試験報告会

開催日時 令和4年5月17日(火) 18:00-19:00

主催者 卒前医学教育部門試験管理室、FD部門 共催

開催場所 カタロスタワー1階 クロード・ベルナルホール(学内LANによるライブ配信)

参加者 156名

内容 講演1 第116回医師国家試験の特徴(荒関かやの 試験管理室副室長)

講演2 第116回医師国家試験の結果報告(林 健 試験管理室長)

講演3 第117回に向けての取り組み(中里良彦 学年小委員会6年委員長)

3-3. 研修会

① 医学部新任教員および講師昇格教員を対象とした研修会

開催日時 令和3年6月7日(火) 18:00-19:30

開催形態 (Zoomを併用) オンライン (Zoom)

発信地 カタロスタワー1階 クロード・ベルナルホール

参加者 56名

内容 講演1 大学の理念、全体の教員組織について(森 茂久 医学部長)

講演2 任期制と人事考課について(椎橋実智男 IRセンター長)

講演3 研究活動について(松下 祥 副学長(研究等担当))

講演4 大学院について(木崎昌弘 大学院医学研究科長、副学長(大学院等担当))

講演5 医学部卒前教育について(森 茂久 医学教育センター長、副学長(教育等担当))

講演6 ハラスメントの防止について(内田尚男 総務部 部長)

② 臨床推論1年新規テュータ講習会

開催日時 令和4年5月18日

開催場所 オンライン (Zoom)

主催者 卒前医学教育部門カリキュラム室、FD部門 共催

企画立案者 1年臨床推論ユニットディレクター

参加者計 5名

③ 6年生共用試験臨床実習後 OSCE 全体講習・課題別講習会

開催日時 令和4年6月23日～、1回1時間30分、計13回開催

開催方法 学内(毛呂山キャンパス、川越キャンパス、日高キャンパス)

主催者 医学教育センターOSCE委員会、FD部門 共催

参加者計 55名

④ 4年生共用試験 OSCE 全体講習・ステーション別講習会

開催日時 令和4年11月15日～、1回1時間30分、計13回開催

開催方法 学内(毛呂山キャンパス、川越キャンパス、日高キャンパス)

主催者 医学教育センターOSCE委員会、FD部門 共催

参加者計 143名

⑤ 臨床実習指定学外施設懇談会

開催日時 1回目 令和4年7月23日(土) 14:00-16:00

2回目 令和5年2月25日(土) 15:00-16:30

開催形態 オンライン (Zoom)

主催者 臨床実習推進室主催、FD部門 共催

参加者 1回目 21名 2回目 22名

3-4. 「教育力向上プログラム(導入編)」のeラーニング

第1部:両学部教員対象「講義の構成をあらためて考えてみる」

第2部:医学部教員対象「到達目標の視点から試験作成を考える」

開催期間:令和4年8月22日～9月30日

開催携帯 オンライン(eラーニング)

主催者:FD部門

参加者:全体 1285名/1409(91.2%)、毛呂山キャンパス 481/546(88.1%)、川越キャンパス 442/464(95.3%)

日高キャンパス 362/399(90.7%)

3-5. FD部門会議

第1回 令和4年4月6日(水)、出席者:石橋部門長、米岡副部門長、森、側島、松下、小山、辻、廣岡、魚住、黒崎、佐藤_瀬、鶴澤

第2回 令和4年6月15日(水)、出席者:石橋部門長、米岡副部門長、森、側島、松下、辻、小川、魚住、佐藤_志、鶴澤、佐藤_志

第3回 令和4年7月12日(水)、出席者:石橋部門長、森、側島、松下、辻、小川、魚住、黒崎、椎橋、川俣、佐藤_瀬、鶴澤、佐藤_志

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

恒例である医学教育ワークショップは、昨年度に引き続き7月下旬に2日間のオンラインワークショップを実施した。従来のように川越ビルに集合して、川越のホテルに1泊宿泊するという参加形態は取らず、作業に問題がなければ、どこからでも参加が可能な形態として、タスクフォース、コーディネータのベースキャンプを毛呂山キャンパス カタロスタワー6階 演習室に設置して、ZoomのBreakout機能、Google slideなどを利用して、従来のワークショップと比較しても大きく変わらず、大きな問題もなく実施することができた。昨年度の経験を元に充実した運営が出来たと考える。医学教育ワークショップの内容の中心は、カリキュラムプランニングであるが、本学の教育がプロセス基盤型教育からアウトカム基盤型教育にシフトしていることに合わせて、昨年度からカリキュラムプランニングで扱う内容にアウトカム基盤型教育の導入を開始した。今年度は導入3年目ということ、事前に検討を行い、アウトカム基盤型教育の導入を進めた。

臨床研修指導医講習会は、3病院の研修管理委員会主催 FD部門は共催という形で開催した。埼玉医科大学病院群主催に移行して10年目で、3病院の持ち回り担当は大学病院が担当となった。臨床研修指導医講習会も昨年度に引き続きオンライン実施とした。昨年度からのオンラインでの医学教育ワークショップ、臨床研修指導医講習会で得た貴重な経験を糧に、大きな問題なく実施することができた。医学教育フォーラムは、カタロスタワー7階を会場として、学内LAN配信にZoom併用（主に学外からの参加者用）して、会場参加とオンライン参加のハイブリッド方式での開催となった。テーマは「ポストコロナに向けた地域医療教育」ということで鹿児島大学大学院医歯学総合研究科離島へき地医療人育成センター 大脇哲洋教授に「離島・地域医療～今の課題とその対策～」に関する講演を行っていただいた。

臨床実習指定学外施設懇談会は、前期の7月、後期は2月にオンラインで実施した。診療参加型臨床実習、学生の医行為、評価に利用するWebclassの説明等も行った。

また大学評価でも求められている全常勤教員を対象とするFDとして、今年度も全学の常勤の教員（助手、助教、講師、准教授、教授）を対象にFD部門中心に企画して「教育力向上プログラム（導入編）」のeラーニングを第1部は両学部教員対象、第2部は医学部教員対象の形で、8月から9月にかけて実施した。

FD・SD統括委員会から諮問され、原案作成を行った令和3年度のFD活動に係る目標等（FDの定義、人材育成の目標、教員に求める資質・能力など）を元に修正を加えて、令和4年度版としてFD・SD統括委員会に提案した。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

医学教育ワークショップ、臨床研修指導医講習会ともオンラインワークショップ形式で3回目を実施することができた。来年度もコロナ禍が完全には無くならないことが予想されるので、オンライン形式の講演会、ワークショップを中心に計画する。

医学教育ワークショップの内容の中心はカリキュラムプランニングであるが、本学の教育がプロセス基盤型からアウトカム基盤型教育にシフトしていることに合わせて、令和2年度からアウトカム基盤型教育を導入し、今回は3回目に変更を加えた。来年度はさらにアウトカム基盤型教育の内容を充実させて、ワークショップの全体の内容を見直す計画である。

入試実施委員会主催の入試関係のワークショップは本年度は行われなかったが、今後はFD・SDの中で、さらに学習成果・教育成果の情報共有、課題分析、改善方策を検討する機会を増やす方針である。

教学マネジメントの指針の中で、組織的かつ体系的なFD・SDの実施の前提として「自学が目指す教育を提供するために必要な資質・能力を特定して望ましい教職員像を定義する必要がある」と明示されていることから、今後、本学全体、そして学部、学科と分けて、必要な資質・能力（コンピテンシー）を詳細に検討、設定し、経年で段階的に修得できるような仕組みを構築する必要がある。

将来のFD部門の活動を担う若い世代の教員を獲得するために、少しでも活動に興味のある教員に対しては積極的に勧誘を継続する。自主性を尊重しながら、FD部門員の養成を計る方針である。

8. 事務部門

1. 構成員

部門長 江口 幹也 (EGUCHI, Mikiya) : 大学事務部 : 副部長 (任期 : R6. 3. 31)
副部門長 岩澤 昌人 (IWASAWA, Masato) : 大学事務部医学部事務室学務課長 (任期 : R4. 6. 30)
副部門長 近藤 有寛 (KONDO, Arihiro) : 大学事務部医学部事務室学務課長 (任期 : R6. 3. 31)
部門員 武久 秀夫 (TAKEHISA, Hideo) : 国際医療センター事務部 : 部長代行
下田 裕子 (SHIMODA, Yuko) : 大学事務部医学部事務室庶務課長
村田 正樹 (MURATA, Masaki) : 大学事務部医学部事務室入試課長
新井 博志 (ARAI, Hiroshi) : 大学事務部医学部事務室庶務課
松浦 直樹 (MATSUURA, Naoki) : 大学事務部医学部事務室入試課
川俣 栄希 (KAWAMATA, Eiki) : 大学事務部医学部事務室学務課
河村 陽子 (KAWAMURA, Yoko) : 大学事務部医学部事務室入試課
吉山 美穂子 (YOSHIYAMA, Mihoko) : 大学事務部医学部事務室庶務課
馬場 菜穂 (BABA, Nao) : 大学事務部医学部事務室学務課
田村 萌恵 (TAMURA, Moe) : 大学事務部医学部事務室学務課
鳥海 佳代 (TORIUMI, Kayo) : 大学事務部医学部事務室庶務課
大塚 奈緒子 (OTSUKA, Naoko) : 大学事務部医学部事務室入試課
新井 菜緒 (ARAI, Nao) : 大学事務部医学部事務室庶務課
佐藤 瀬奈 (SATO, Sena) : 大学事務部医学部事務室学務課
菅沢 彩花 (SUGASAWA, Ayaka) : 大学事務部医学部事務室庶務課
中嶋 善寛 (NAKAJIMA, Yoshihiro) : 大学事務部医学部事務室学務課
細田 さなえ (HOSODA, Sanae) : 大学事務部医学部事務室庶務課
安齋 宰 (ANZAI, Tsukasa) : 大学事務部医学部事務室学務課
鴫澤 駿介 (TOKIZAWA, Shunsuke) : 大学事務部医学部事務室学務課
保坂 雄志郎 (HOSAKA, Yushiro) : 大学事務部医学部事務室学務課
佐藤 志音 (SATO, Shion) : 大学事務部医学部事務室学務課
城田 百花 (SHIROTA, Momoka) : 大学事務部医学部事務室学務課
佐國 真紀 (SAKUNI, Maki) : 大学事務部医学部事務室庶務課
高崎 美春 (TAKASAKI, Miharuru) : 大学事務部医学部事務室入試課
高野 美幸 (TAKANO, Miyuki) : 大学事務部医学部事務室入試課
峰晴 嘉政 (MINEHARU, Yoshimasa) : 大学事務部医学部事務室学務課
木樽 杏祐 (KOGURE, Kyosuke) : 大学事務部医学部事務室入試課

2. 目的・目標

医学教育センター医学部領域機能を支える部門として、各部門の円滑的な業務遂行のための事務的支援を行う。さらに、大学事務部との連携の下、卒前・卒後医学教育全般を通じて効果的かつ効率的な事務業務遂行を主たる目的とする。また、市民公開講座の所管部署としての役割を認識し、本学の教育研究の成果を広く社会に還元できるよう公開講座の運営に努める。

3. 活動実績

- ① 医学教育センター医学部領域各部門および各室の会議等開催に協力した。
- ② 市民公開講座は、対面形式と Zoom を併用してのハイブリット形式にて 5 回開催した。
- ③ 医学教育センターニュースを発行した (第 86 号～89 号)。
- ④ 医学教育センター医学部領域 FD 部門の各ワークショップ開催に協力した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

センター各部門の業務が円滑に運営されるよう支援を行い、個々の改善を折り込みながら支障なく遂行できたと判断す

る。外部資金の獲得については、ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業の選定等、戦略的な補助金の獲得に関与した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度以降もセンター各部門と協力し、教育環境等の変化に迅速に対応できるよう努める。また、総合医療センター、国際医療センター各ブランチ、医学部領域事務室との協力と連携の下に、医学教育センター医学部領域事務部門としてセンター運営の充実を図る。

1. 研究主任部門

1. 構成員

部門長	海老原康博 (EBIHARA Yasuhiro) : 国際医療センター中央検査部 : 教授 (任期 : R7. 3. 31)
副部門長	下岡聡行 (SHIMOOKA Toshiyuki) : 保健医療学部医用生体工学科 : 教授 (任期 : R7. 3. 31) 佐藤毅 (SATO Tsuyoshi) : 大学病院口腔外科 : 教授 (任期 : R7. 3. 31) 百瀬修二 (Momose Shuji) : 総合医療センター病理部 : 教授 (任期 : R7. 3. 31)
部門員	町田早苗 (MACHIDA Sanae) : 医学研究センター : 講師 医学部の全基本学科及び保健医療学部の各学科研究主任

2. 目的・目標

本部門は、埼玉医科大学医学研究センター規程第3条により構成され、第9条に則り、研究現場とセンターの密な連絡を保つための活動を行うこと業務としている。研究主任に対して、基本学科の研究の責任者であると同時に研究費を適正に管理・運用する責任者であることも自覚していただき、適正な運用を推進するよう指導する。研究者向けの情報を発信し、研究主任から各所属部署内での周知徹底を依頼する。学内での共同研究が推進できるよう体制整備に努め、支援活動を行う。学内グラント成果発表会を2回/年開催し、学内の研究推進を図る。

3. 活動実績

(1) 学内グラント受賞者成果発表会の企画・開催

ア 第24回学内グラント受賞者成果発表会

2022年7月15日(金曜日) 17:00~18:50

毛呂山キャンパス第3講堂

総合医療センター 管理棟2階 カンファレンス1(テレビシステム中継)

国際医療センター 教育研究棟 5階会議L-5-2(テレビシステム中継)

学内LANライブ配信

ビデオ収録配信

発表内容

演題1: 17:05 ~ 座長: 久保田 寧 (医学部 総合医療センター 輸血部)

百瀬 修二 (医学部 総合医療センター 病理部)

「D型サイクリンを標的とした高悪性度B細胞リンパ腫の分子基盤の解明と臨床応用」

演題2: 17:20 ~ 座長: 中山 伸朗 (医学部 埼玉医科大学病院 消化器内科・肝臓内科)

中野 貴成 (医学部 生化学)

「NPC1L1を介した腸上皮細胞内コレステロール輸送阻害と脂肪滴形成」

演題3: 17:35 ~ 座長: 佐藤 弘 (医学部 国際医療センター 消化器外科)

鈴木 啓介 (医学部 埼玉医科大学病院 小児外科)

「先天性食道閉鎖症に対する同所性生体内組織形成術(Orthotopic iBTA)を用いた一期的食道再生の研究」

演題4: 17:50 ~ 座長: 浅野 彩 (医学部 埼玉医科大学病院 乳腺腫瘍科)

川崎 朋範 (医学部 国際医療センター 病理診断科)

「Insulinoma-associated protein 1 (INSM1) expression in breast carcinomas with neuroendocrine morphologies: application and future perspectives」

参加人数: 合計91名

毛呂山キャンパス 27名

日高キャンパス 2名

川越キャンパス 4名

ライブ配信視聴者 49名

録画配信視聴者 9名

イ 第25回学内グラント受賞者成果発表会

2023年3月26日(金曜日) 17:00~18:10

毛呂山キャンパス 本部棟 第3講堂

川越キャンパス 管理棟4階 会議室2(テレビシステム中継)

日高キャンパス 教育研究棟2階 会議室1(テレビシステム中継)

学内LANライブ配信

ビデオ収録配信

発表内容

演題1: 17:05 ~ 座長: 井上 成一郎 (医学部 総合医療センター小児外科)

羽藤 泰 (医学部 総合医療センター 呼吸器外科)

「がん微小環境正常化を伴う強力な免疫療法後に手術を併施する意義の検証」

演題2: 17:20 ~ 座長: 周防 諭 (医学部 薬理学)

水野 由美 (中央研究施設 実験動物部門)

「精子形成におけるセルトリ細胞を中心とした細胞間コミュニケーションの解明」

演題3：17:35 ～ 座長：山岸 敏之（保健医療学部臨床検査学科）

鈴木 歩（医学部 基礎医学部門 ゲノム基礎医学）

「Max は生殖細胞に減数分裂開始能力を与えるか」

演題4：17:50 ～ 座長：梶原 健（医学部 埼玉医科大学病院 産婦人科）

平崎 正孝（医学部 国際医療センター がんゲノム診療科）

「Mbd3 によるエピプラスト幹細胞の幹細胞性維持と分化の方向性の決定機構の解明」

参加人数：合計 92 名

毛呂山キャンパス 29 名

日高キャンパス 4 名

川越キャンパス 6 名

ライブ配信視聴者 53 名

録画配信視聴者 名

(2) 埼玉医科大学雑誌 49 巻 1 号医学研究センター研究主任部門報告

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

本年度から、学内グラント受賞者成果発表会の発表者は学内グラント受賞により得た資金を使って、翌年以降に科研費を獲得できた発表者に限って発表を行なっている。内容・形式を改善し、科研費を獲得するために工夫した点も含めた発表にすることで、より多くの参加が得られ、活発な討論を展開できるように対策している。また、新型コロナウイルス感染拡大の対応により、会場での参加に加えて、ライブ配信を取り入れて学内グラント成果発表会に参加しやすい環境を取り入れた。この結果徐々に参加者が増加傾向にあると考えられる。また、毎月行われている医学研究センター運営会議議事録（抜粋）を各研究主任で送付して情報提供を行なっている。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

今後は、全学規模で行われて「オール埼玉医大研究の日」とも連携して、学内グラント受賞者成果発表会により多くの参加が得られるようにさらなる改善を行っていく。

医学研究センター運営会議議事録（抜粋）に限らず、研究主任を通して3キャンパス内で行われている研究の内容を学内研究者に情報提供し、共同研究・研究連携を推進する。

2. 共同利用施設運営部門

1. 構成員

部門長	坂本 安	(SAKAMOTO, Yasushi)	中央研究施設機能部門：教授（任期：R6.3.31）
副部門長	佐藤 毅	(SATO, Takeshi)	歯科・口腔外科：准教授（任期：R6.3.31）
部門員	一色 政志	(ISSHIKI, Masashi)	中央研究施設 RI 部門：教授（任期：R6.3.31）
部門員	椎橋 実智男	(SHIIBASHI, Michio)	情報技術支援推進センター：教授（任期：R6.3.31）
部門員	西本 正純	(NISHIMOTO, Masazumi)	中央研究施設日高ランチ RI 部門：准教授（任期：R6.3.31）
部門員	水野 洋介	(MIZUNO, Yousuke)	中央研究施設形態部門：准教授（任期：R6.3.31）
部門員	横尾 友隆	(YOKOO, Tomotaka)	中央研究施設日高ランチ実験動物部門：准教授（任期：R6.3.31）

2. 目的・目標

本部門は、埼玉医科大学医学研究センター規定第9条(2)に則り、全学的視点で研究体制を整備することを前提に、機器材料等の情報を管理し、主として学内における共同研究を推進することを目的とする。

本年度は、設置希望機器及び既に設置されている機器についてのテクニカルセミナーを開催し、施設を利用する研究者に対して研究機器の啓発することを目標として活動した。

3. 活動実績

【共同利用実験室利用の啓発と整備】

共同利用実験室は、実験室を持たない教員に対し最小限の機器を備えた実験場所を提供し、もって当該教員の研究活動のセットアップに資することを目的として、平成24(2012)年9月10日より運用が開始され、中央研究施設にて機器、設備を整備・管理している。現在、基礎医学棟3階並びにゲノム棟4階に整備されている。それぞれが、12区画の実験ベンチを管理しており、利用申請を行うことができる。またフェローステーションが併設されており、基礎棟に5つのデスク、ゲノム棟には9つのデスクが用意されている。利用者はデータ整理と休息のために使用することができる。

令和4(2022)年度の利用実績は、毛呂山キャンパス：感染症・感染制御科、小児科、腎臓内科、総合診療内科、耳鼻咽喉科麻酔科、薬剤部、アドミッションセンター、医学教育センター、医学研究センター、教養教育、免疫学、微生物学、RI部門、形態部門 計：登録基本講座14、利用登録者人数：23名。

日高キャンパス：リウマチ膠原病科、腎臓内科、微生物学、国際呼吸器内科、脳神経外科、乳腺腫瘍科、がんゲノム医療科、泌尿器腫瘍科、日高ランチ実験動物部門、保健/臨床検査学科、保健/臨床工学科、総合/産婦人科、計：基本講座12、リサーチパーク2社、利用登録者人数：36名。

【中央研究施設共同利用研究機器・設備整備】

令和4年度私学助成金「研究設備整備計画」が採択され、マトリックス支援レーザー脱離イオン化飛行時間型質量分析計 型式：MALDI-8030 令和5(2023)年3月中央研究施設機能部門に設置された。

令和4年度研究マインド支援グラント(共通部門)の採択により、以下の機器が整備され利用が開始された。

- ① 令和4(2022)年10月28日 ハムリー株式会社 SmartBox(安楽死システム) TT-8100：中央研究施設実験動物部門
- ② 令和4(2022)年12月23日 株式会社日立製作所 3H/14C サーベイメータ TPS-313：中央研究施設 RI 部門
- ③ 令和4(2022)年10月21日 株式会社ニコン 対物レンズ CFI Plan Apo Lambda D 100X oil：中央研究施設形態部門

【テクニカルセミナーの開催】

以下のテクニカルセミナーを開催し、機器の取り扱い及び新しい研究技術を紹介した。

- ① 令和4(2022)年5月24日 10:00-17:00 オンライン SH800Z オンライン取扱説明会
- ② 令和4(2022)年6月16日 18:00-19:30 オンライン キーエンス 蛍光顕微鏡 BZ-X700 オンラインセミナー
- ③ 令和4(2022)年7月26日 16:00-17:00 オンライン 「他にはない」横河電機の1細胞ソリューション web セミナー
- ④ 令和4(2022)年10月5日 13:30-14:30 オンライン 新型共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 オンラインセミナー
- ⑤ 令和4(2022)年10月24日 18:00-19:30 オンライン 「Bio-Rad QX200 AutoDG Droplet Digital PCR システム」セミナー(基礎セミナー編)
- ⑥ 令和4(2022)年10月25日 10:15-11:15 オンライン 新型共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 オンラインセミナー(その2)
- ⑦ 令和4(2022)年10月25日 13:00-16:00 ゲノム棟607 共通機器室 「Bio-Rad QX200 AutoDG Droplet Digital PCR システム」セミナー(実機操作説明会編)
- ⑧ 令和4(2022)年11月11日 14:00-15:00 オンライン 新型共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 オンラインセミナー(その3)
- ⑨ 令和4(2022)年11月16日 16:00-17:00 オンライン/基礎医学棟3階 10x Genomics 社 テクノロジーセミナー
- ⑩ 令和4(2022)年11月21日 10:00- 13:00- 15:00- (計3回) 基礎医学棟2階 Leica Microhub Mica 共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 デモンストレーション
- ⑪ 令和4(2022)年12月6日 10:00- 13:00- 15:00- (計3回) 基礎医学棟2階 エビデント(オリンパス) FV3000 共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 デモンストレーション

- ⑫ 令和4(2022)年12月9日 15:00-16:00 オンライン 新型共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 オンラインセミナー(その4)
- ⑬ 令和4(2022)年12月13日 10:30- 13:30- 15:30- (計3回) 基礎医学棟2階 Nikon AXR 共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 デモンストレーション
- ⑭ 令和4(2022)年12月22日 10:00- 13:00- 15:00- (計3回) 基礎医学棟2階 Zeiss LSM900Airyscan2 Multiplex 共焦点顕微鏡&超解像顕微鏡 デモンストレーション
- ⑮ 令和5(2023)年1月26日 18:00-18:40 オンライン 「キーエンス 蛍光顕微鏡 BZ-X700」ワンポイントセミナー

【委員会等】

- ① 第76回 中央研究施設運営委員会／共同利用施設運営部門合同会議
日時：令和4(2022)年6月2日(木) - 6月17日(金) メーリングリスト会議 出席23人

【議題】1. 埼玉医科大学中央研究施設規則の改正に関して

【議事】資料1_6-15 埼玉医科大学医学部中央研究施設規則(案)(改正後全文：総合企画部校閲済み)、埼玉医科大学中央研究施設規則新旧対照表に関して審議した。

(1)-1 (副施設長)第6条、(施設長補佐)第7条の追記に関して、坂本施設長より以下の説明がなされた。これらの追記の趣旨は、前回の本会議にて説明した「大学等における研究設備・機器の共用化のためのガイドライン」が文部科学省により提示され、「各機関による共用推進の取組を「機関全体の経営課題」として捉え、共用の取組を担う研究現場担当者がその推進を図る際の手引きとし、また、経営層においても活用されることを目的とする旨掲げられた。これに沿って施設の運営戦略を検討する必要があると判断された。ガイドラインにおける管理体制に関して、外部利用者も利用可能とし、利用料金等による機器の維持、あるいは新規購入機器の支援に充てる等の発想も盛り込まれた。現場としての中心組織となる中央研究施設では、各組織間のパイプ役としての人材が必要不可欠になると思われ、必要に応じて「副施設長、施設長補佐を置くことができる。」と追記した。

審議の結果追記事項が承認された。また、資料1_6-15 埼玉医科大学医学部中央研究施設規則(案)：第20条の2のタイプミスを修正した。

- ② 第77回 中央研究施設運営委員会／共同利用施設運営部門合同会議
日時：令和5(2023)年2月21日(木) 15:00-16:00 場所：Zoom 会議 出席18人 欠席5人

【議題】(1)医学研究センター共同利用施設運営部門、中央研究施設教員、中央研究施設運営委員会の新体制に関して(2)中央研究施設に提出されている設置希望機器に関して(3)令和3年度の中央研究施設の会計に関して(4)中央研究施設研究機器(利用)予約プログラム試用版に関して(5)その他：研究機器・備品の共用化に関するアンケート調査に関して

【議事】(1)中央研究施設長の退職に伴い、令和5(2023)年度からの医学研究センター共同利用施設運営部門と中央研究施設運営委員会の委員の体制について説明された。また、中央研究施設長、施設長補佐、各部門の部門長の交代に関して紹介と新任予定者の挨拶が成された。(2)中央研究施設設置希望機器リストの中から、島津製作所 MALDI-TOF-MS 8030 が私学助成金に内定した旨報告された。これに伴い、新規設置希望機器リストの更新に関して説明が有り承認された。また、千本松委員(日高ブラン長)より、中古機器の導入に関して意見があり、施設長より今後の検討が必要である旨回答された。更に、三谷委員よりリスト番号に関して質問され、番号は優先順位ではない旨補足された。

(3)中央研究施設の令和3(2021)年度の会計報告が行われ、承認された。(4)中央研究施設研究機器利用予約プログラムの試用版に関して、説明がなされた。令和5(2023)年度4月1日からの運用を予定している。(5)各基本学科で不要となった研究機器・備品の共用化(供出)に関する学内アンケート調査内容に関して、医学研究センター会議の議を経て調査を開始する旨説明された。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

「埼玉医科大学共同利用施設活用の手引き」は、令和2(2022)年3月に初版が発行された。その後、情報が古くなった為に内容を更新し令和4(2022)年度版を11月に再発行をした。活用の手引きは、冊子として各基本講座へ配布されたが、医学研究センターホームページ、共同利用施設運営部門ホームページ、中央研究施設ホームページ(学内・学外)からも閲覧可能とした。今後も情報を更新し、適切な時期に改訂版を発行する。また次年度は、「研究設備・機器の共用推進に向けたガイドライン～すべての研究者がいつでもアクセスできる共用システムの構築を目指して～」の策定に基づいた「チーム共用」組織の推進の為に、医学研究センター、共同利用施設運営部門、中央研究施設、RAセンター、各事務部門の連携を強化していく。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

今年度は私学助成金1件が採択され、中央研究施設に研究機器が設置された。近年、私学助成金申請による研究機器の整備が滞っていたが、本件が採択されたことで次年度の申請へ繋がったものと考えられる。現在、設置されている機器は、購入から10年以上経過している機器が多く経年劣化による故障・不具合が多発している。今後、助成金申請の採択に向けて慎重に機器の選定を検討する必要がある。中央研究施設の設置希望機器は原則として共用機器であり、中央研究施設に所属する専任教員により管理、運営がされ、運営委員会も設置されている。これは文部科学省の推進する「研究設備・機器の共用推進に向けたガイドライン」に非常に合致している。今後もガイドラインに基づいた運営を強みとして、共用化機器としての私学助成金「設備・装置整備計画」の採択に向け、共同利用施設運営部門、医学研究センター、各事務部門との連携体制を確立していく。

3. 安全管理部門

1. 構成員

部門長 三谷 幸之介 (MITANI, Kohnosuke) : 医学部ゲノム応用医学 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

感染分野

副部門長 村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 医学部微生物学 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

部門員 前田 卓哉 (MAEDA, Takuya) : 大学病院臨床検査医学 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

部門員 堀内 大 (HORIUCHI, Yutaka) : 医学部微生物学 : 講師 (任期 : R5. 3. 31)

部門員 森 隆 (MORI, Takashi) : 総合医療センター研究部 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

部門員 光武 耕太郎 (MITSUTAKE, Kohtaro) : 国際医療センター感染症科・感染制御科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

部門員 佐藤 正夫 (SATO, Masao) : 保健医療学部臨床検査学科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

部門員 河村 亨 (KAWAMURA, Ryo) : 大学病院中央検査部 : 係長 (任期 : R5. 3. 31)

部門員 池田 和博 (IKEDA, Kazuhiro) : 医学部ゲノム応用医学 : 准教授 (任期 : R5. 3. 31)

部門員 今井 孝 (IMAI, Takashi) : 医学部微生物学 : 講師 (任期 : R5. 3. 31) [R4. 9. 30 退職]

部門員 樽本 憲人 (TARUMOTO, Norihito) : 大学病院感染症科・感染制御科 : 准教授 (任期 : R4. 10. 1~R5. 3. 31)

薬物・廃液等環境分野

副部門長 奥田 晶彦 (OKUDA, Akihiko) : 医学部ゲノム基礎医学 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 森 隆 (MORI, Takashi) : 総合医療センター研究部 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 三島 和彦 (Mishima Kazuhiko) : 国際医療センター脳神経外科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 野寺 誠 (NODERA, Makoto) : 保健医療学部臨床検査学科 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 淡路 健雄 (AWAJI, Takao) : 医学部薬理学 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 西本 正純 (NISHIMOTO, Masazumi) : 中央研究施設日高ランチ RI 部門 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 齋藤 健一 (SAITO, Kenichi) : 総合医療センター薬剤部 : 課長 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 藤原 智徳 (FUJIWARA, Tomonori) : 保健医療学部臨床検査学科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

DNA 分野

部門長 三谷 幸之介 (MITANI, Kohnosuke) : 医学部ゲノム応用医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

副部門長 千本松 孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : RA センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

副部門長 村上 孝 (MURAKAMI, Takashi) : 医学部微生物学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

部門員 小谷 典弘 (KOTANI, Norihiro) : 医学研究センター : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

部門員 森 隆 (MORI, Takashi) : 総合医療センター研究部 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

部門員 海老原 康博 (EBIHARA, Yasuhiro) : 国際医療センター臨床検査医学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

部門員 米田 竜馬 (YONEDA, Ryoma) : 医学部ゲノム応用医学 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)

部門員 脇田 政嘉 (WAKITA, Masayoshi) : 保健医療学部臨床工学科 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)

部門員 菅原 哲雄 (SUGAHARA, Tetsuo) : RA センター知財担当 : 講師 (任期 : R6. 3. 31)

部門員 荒木 靖人 (ARAKI, Yasuto) : リウマチ膠原病科 : 准教授 (任期 : R6. 3. 31)

部門員 百瀬 修二 (MOMOSE, Syuji) : 総合医療センター病理部 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)

動物分野

副部門長 森 隆 (MORI, Takashi) : 総合医療センター研究部 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 坂本 安 (SAKAMOTO, Yasushi) : 中央研究施設長 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 小野川 傑 (ONOGAWA, Tsuyoshi) : 保健医療学部臨床検査学科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 横尾 友隆 (YOKOO, Tomotaka) : 中央研究施設日高ランチ実験動物部門 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)

RI 分野

副部門長 西本 正純 (NISHIMOTO, Masazumi) : 中央研究施設日高ランチ RI 部門 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 長谷川 幸清 (Hasegawa, Kosei) : 国際医療センター骨盤腫瘍科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 熊倉 嘉貴 (KUMAKURA, Yoshitaka) : 総合医療センター画像診断科・核医学科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

部門員 茅野 秀一 (KAYANO, Hidekazu) : 保健医療学部臨床検査学科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

2. 目的・目標

学校法人埼玉医科大学

学校法人埼玉医科大学組換え DNA 実験安全管理規程、RI 研究施設放射線障害予防規程、動物実験規程、病原体等安全管理規則、毒物・劇物管理規程に則り、大学における研究・教育・診療活動に必要な安全管理を徹底的に行う。そのために組換え DNA 実験安全委員会、RI 実験安全委員会、環境安全委員会、動物実験安全委員会、病原性微生物等管理委員会と協力して管理作業を行う。

3. 活動実績

研究活動における専門性を考慮して本部門は上記の6部門より成る。各部門別に活動を報告する。

感染分野

病原体等取扱申請書 19 件 (新規申請 3 件、継続申請 16 件)、病原体等移動 (受入) 申請書 3 件、指定実験室使用申請 4 件 (うち責任者変更 1 件・BSL3 指定実験室 1 件) が提出された。これらの申請に関して、病原性微生物等管理委員会で審議、修正された後、すべて承認された。R4 年度大学院実用実験医学講義 (第 3 回 : 令和 4 年 5 月 18 日実施にて「バイ

オセーフティとバイオテロの動向」を堀内委員（微生物学）が教育訓練を兼ねて担当した。また文部科学省から病原性微生物保有状況調査依頼に対応するため、研究主任部門から研究主任宛に各基本学科・部署への調査を実施した。また新型コロナウイルス等のBSL3臨床検体を安全に取り扱える施設がなかったため、今後の新興・再興感染症への研究施設について協議した。毛呂山キャンパス基礎医学棟3F・バイオセーフティー室BSL3区画（微生物学管理下）を運用可能な状態に再整備し、その運用方針を検討した。当面の上記施設運用ではBSL3微生物の培養は行わず、臨床試料（確定診断済み）からの核酸・タンパク質抽出に限定した運用を行うことに制限し、施設利用者希望者にはその都度研究対象に沿った運用マニュアルを病原性微生物等管理委員会に提出し審査・許可する方針とした。

薬物・廃液等環境分野

薬物についての主な活動は、化学物質リスクアセスメントに関する活動である。本学は、労働安全衛生法の改訂に伴って化学リスクアセスメント対象物質が大幅に増えたことを受けて、化学物質の具体的な管理の方法を明示し、かつ、各基本学科において化学物質への暴露が大きいと思われる一名について化学物質リスクアセスメントを実施するように定めたが、当該分野としては、リサーチアドミニストレーションセンターと協力して、化学物質管理の具体的な方法についての原案作成に携わった。加えて、化学物質管理やリスクアセスメント実施等、本学が策定した計画が、すべての基本学科において滞りなく実施されるように、それらの計画の全学的な周知徹底等に協力した。その他、麻薬・向精神薬を用いた研究についての調査に加えて、当該年度、研究用麻薬免許の更新が必要な研究者に対して更新のためのサポートを行った。廃液等の活動については、当該年度においても、各キャンパスにおける担当事務職員と随時連絡をとり、問題が起こっていないことを確認した。

DNA 分野

遺伝子組換え生物等の使用等における審査申請状況は次の通りである。第二種拡散防止措置申請書（承認28件）、内容変更（承認19件）、譲渡届（承認3件）、実験施設設置申請（承認1件）。また、教育訓練受講証明書発行（13件）を実施した。

文部科学省からの「遺伝子組換え生物等の使用等の規制による生物の多様性の確保に関する法律」の遵守の徹底について（文科省研究振興局ライフサイエンス課：4文科振第1308号：令和5年3月8日）について、教員代表者会議にて、医学研究センター長から研究主任に向け注意喚起した。また、適正な管理運営のために「第二種使用等拡散防止措置承認申請書」の様式を変更した。

動物分野

学内にて実施される全ての動物実験は、各キャンパスに設置されている動物実験小委員会そして埼玉医科大学の動物実験委員会により動物実験計画書の審査・承認が行われている。令和4年度、各キャンパスから提出された動物実験計画書228件〔注意を要する動物実験計画書：組換えDNA実験（P1A実験：74件、P2A実験：8件）、感染実験（ABSL1実験：4件、ABSL2実験：8件、毒物使用実験：16件、RI使用実験：8件）〕、動物実験中間報告書・自己点検票204件、動物実験結果報告書・自己点検票24件、動物実験計画（変更・追加）承認申請書40件、動物実験（終了・中止）報告書24件、実験室設置承認申請書32件について審査を行い承認した。さらに、随時メール審査を開催し、円滑に動物実験計画書、動物実験計画（変更・追加）承認申請書、実験室設置承認申請書の審査を行い承認した。様式8動物実験の自己点検票と様式9実験動物飼養保管状況の自己点検票により、令和4年度の動物実験そして飼養保管状況の自己点検を行った。遺伝子組換え生物等を使用した動物実験は、組換えDNA実験安全委員会により第二種使用等拡散防止措置承認申請書の審査・承認が行われた。また、動物実験等に関する情報公開を外部閲覧可能なホームページ（<http://www.saitama-med.ac.jp/medlinks/animal/index.html>）に行った。

RI 分野

中央研究施設RI部門業務従事者登録者に対する健康診断及び再教育訓練を行った。利用者の健康管理において、特に問題となる事例は認められず、安全な利用がなされていると判断された。また、本部門の利用促進を目的として、RI実験の有用性に関わる講習会を開催した。施設内の設備について点検を行い、多くの修理を要する箇所について修理を進めている。昨年度より、現利用者の利便性向上及び新規利用者のためのスペース確保を目的として、施設内の整理を進めている。ゲノム棟内動物用CTの利用者に対する健康診断も実施され、特に健康に関して問題となる事例はなかった。なお、中央研究施設RI部門及びゲノム棟内放射線管理（動物用CT）に係る法律で規定された書類の提出は、滞りなく行われた。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

- ・本年度も各分野は、分野間での各キャンパス（または研究施設）において順調に教育および管理活動することができた。また必要に応じて各分野同士で情報共有、連携を図り、本学における研究の安全管理を行った。
- ・安全管理部門ホームページで他の研究倫理関係の情報と併せることにより、新たに赴任された研究主任や研究者が研究を開始するにあたり必要な情報を載せることができた。

4-2. 今年度の事故点検・評価結果に基づく改善計画

研究活動の安全管理を推進するため、次の取り組みを行う。

- ・安全管理部門ホームページを改訂するなど情報発信を強化し、研究活動に伴う安全管理に関する理解を深め、各種申請を適切に提出するよう徹底する。
- ・各分野は、関連情報を収集し、必要な事項については本学規程・規則や管理手順を改正する。
- ・リサーチアドミニストレーションセンターと連携し、安全管理部門の業務を推進していく。

4. フェローシップ部門

1. 構成員

部門長	片桐岳信 (KATAGIRI, Takenobu) : ゲノム基礎医学 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
副部門長	高田綾 (TAKADA, Aya) : 法医学 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
副部門長	三輪尚史 (MIWA, Naofumi) : 生理学 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
部門員	森茂久 (MORI, Shigehisa) : 医学教育センター : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
部門員	名越澄子 (NAGOSHI, Sumiko) : 総合医療センター消化器・肝臓内科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
部門員	淡路健雄 (AWAJI, Takeo) : 薬理学 : 准教授 (任期 : R5. 3. 31)
部門員	小林直樹 (KOBAYASHI, Naoki) : 保健医療学部・臨床工学科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
部門員	井上勉 (INOUE, Tsutomu) : 大学病院腎臓内科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)
部門員	栗田浩樹 (KURITA, Hiroki) : 国際医療センター脳神経外科 : 教授 (任期 : R5. 3. 31)

2. 目的・目標

本部門は、学校法人埼玉医科大学医学研究センター規定第9条(4)に則り、大学院医学研究科委員会、および医学教育センターと連携のもと、教員以外の研究者の経済的・身分的支援について協議し答申することを活動の中心とする。本目的のために、大学院、リサーチフェロー、および学外からのフェローシップに関与する。

今年度は、「2022年度埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金」受給者の確認と、「2023年度埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金」の応募と選考、及び、その結果を医学研究センター運営会議に上程することを目標として活動した。

3. 活動実績

1) 部門会議

随時、メール会議を開き、迅速に対応した。

- (1) 第1回 部門会議 (令和4年4月1日(金)～令和4年4月6日(水)) : メール会議

出席9人 欠席0人

オブザーバー (松下副学長、庶務課)

議事 : 「令和3年度 大学年報原稿の確認」について

: 「新部門員の紹介と挨拶」について (議事録有, 運営会議報告)

- (2) 第2回 部門会議 (令和4年5月20日(金)～令和4年5月26日(木)) : メール会議

出席9人 欠席0人

オブザーバー (松下副学長、庶務課)

議事 : 「令和3年度 大学年報原稿の提出」について

: 「『2023年度 埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金』募集要項の確認」について (議事録有, 運営会議報告)

- (3) 第3回 部門会議 (令和4年6月21日(火)～令和4年6月25日(土)) : メール会議

出席9人 欠席0人

オブザーバー (松下副学長、庶務課)

議事 : 「『2022年度 埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金』条件付き候補者の入国資格の確認」について (議事録有, 運営会議報告)

- (4) 第4回 部門会議 (令和4年11月11日(金)～令和4年11月17日(木)) : メール会議

出席9人 欠席0人

オブザーバー (松下副学長、庶務課)

議事 : 「『2023年度埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金』の応募者」について

: 「応募者の選考前資格確認」について

: 「応募者の選考」について

: 「『2023年度埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金』の追加公募」について (議事録有, 運営会議報告)

- (5) 第5回 部門会議 (令和4年12月16日(金)～令和4年12月22日(木)) : メール会議

出席9人 欠席0人

オブザーバー (松下副学長、庶務課)

議事 : 「『2023年度埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金』の候補者の修正書類の確認」について

: 「『2023年度埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金』の追加募集結果」について (議事録有, 運営会議報告)

- (6) 第6回 部門会議 (令和5年2月21日(火)～令和5年2月24日(金)) : メール会議

出席9人 欠席0人

オブザーバー (松下副学長、庶務課)

議事 : 「2022年度、および2023年度の部門構成員の確認」について (議事録有, 運営会議報告)

2) 埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金の募集・選考について

「2023年度埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金」を令和4年11月1日～10日に募集した。応募者2名(継続外国人2名)の資格確認と選考を行った。応募者1名(新規外国人1名)は、2023年3月に来日予定であり、来日後に在留資格を確認し、本学の「専攻生」として登録することを条件とし、受給資格に該当する(条件付き該当)とした。支給対象者が規定上限の4名に達しないため、令和4年12月1日～12日に追加募集を行ったが、応募者はいなかった。以上の結果について、令和4年12月の医学研究センター運営会議に答申した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

前年度の改善計画に基づき、令和4年度も、「埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金」を募集し、厳正・公平な審査を行った。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

今年度も、「埼玉医科大学私費外国人留学生等奨学金」応募者を厳格に審査し、本奨学金が有効に利用できた。来年度も、引き続きこの体制が維持されるよう、早期に募集の準備を整えて厳格な審査を行う。

5. 研究評価部門

1. 構成員

部門長 椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : IRセンター : 教授 (任期 : R6.3.31)
副部門長 徳元 康人 (TOKUMOTO, Yasuhito) : アドミッションセンター : 講師 (任期 : R6.3.31)
部門員 別所 和博 (BESSHO, Kazuhiro) : 医学研究センター : 助教
新井 菜緒 (ARAI, Nao) : 大学事務部 : 事務員

2. 目的・目標

本部門は、埼玉医科大学医学研究センター規程第8条に則り、種々の研究評価を行うための研究業績データを集積し、提供する、学外からの人的経済的資源の確保をめざした広報活動を行う、ことを目的としている。

3. 活動実績

- 研究業績データベース
 - ・保健医療学部の教員に対する利用説明会の開催 (4月)
 - ・中央研究施設を利用した研究成果のデータの提出 (7月)
 - ・人事考課のための研究業績データダウンロードへの対応 (7月)
 - ・大学病院への研究業績の提出 (特定機能病院) (8月)
 - ・国際医療センターへの研究業績の提出 (JCI) (8月)
 - ・Researchmap とのデータ交換の実施 (4月から3月まで原則毎月実施)
- 医学研究センターホームページ
 - ・研究費公募関連情報の掲載
 - ・埼玉医科大学雑誌 (電子版) の掲載
 - ・その他関連情報の更新
- 研究活動実績登録システム
 - ・研究業績データベースシステムのカスタマイズ
競争的資金獲得の研究ポイントの細分化
 - ・データの集積、登録、分析
 - ・人事考課における研究活動実績 (研究ポイント) の運用

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

研究業績データベースの利用は徐々に定着してきており、部門の目標とする活動とその成果は達成できたものと自己評価している。また、今年度実施した競争的資金獲得の研究ポイントの細分化により、従来50万円当たり20ポイントであったものを5万円で2ポイントとすることによって、少額の研究費獲得も対象とできるようになった。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

IRセンターと連携した研究活動の質保証、利用率の低い臨床の助教の利用拡大にむけて努力を続ける。人事考課のための研究ポイントについては、保健医療学部からの要望も取り入れ、研究業績データベースをさらにカスタマイズする計画である。

6. 研究支援管理部門

1. 構成員

- 部門長 小谷 典弘(KOTANI Norihiro) : 教授 医学研究センター (生化学) (任期: R6. 3. 31)
副部門長 堀内 大(HORIUCHI Yutaka) : 講師 医学部 微生物学 (任期: R6. 3. 31)
部門員 森 隆(MORI Takashi) : 教授 総合医療センター 研究部
前田 智也(MAEDA Tomoya) : 准教授 国際医療センター 造血器腫瘍科
佐藤 毅(SATO Tsuyoshi) : 准教授 大学病院 歯科・口腔外科
駒形 英樹(KOMAGATA Hideki) : 准教授 保健医療学部 臨床工学科
町田 早苗(MACHIDA Sanae) : 講師 医学研究センター

2. 目的・目標

研究マインド醸成、学内グラント活用、学外研究費獲得の推進、研究成果の管理、リサーチアドミニストレーションセンターとの連携による研究倫理の順守呼びかけなどの活動を目的とし、学内研究者の研究活動の健全な実施をサポートすることを目標とする。

3. 活動実績

①学内グラントと研究奨励費の助成

2022年度学内グラント募集では、丸木記念特別賞5件、科研費申請支援グラント28件、計33件応募があった。分野別の複数選考委員による予備審査の後、グラント選考委員会が開催され、丸木記念特別賞1件、科研費申請支援グラント27件、計28件の研究テーマが採択された。さらに、学内グラント採択課題が翌年、翌々年度に科研費採択(研究テーマが直接関連していることが条件)の場合に対象となる研究奨励費(20万円、購買経路使用、経費報告書必要なし)が計2件助成された。

②科学研究費獲得状況の把握

2022年度の科研費採択結果は、申請総数191件に対して新規採択57件(採択率29.8%)、採択総額242,450千円であった。申請数・率、採択率いずれも去年より高い結果となった。

③剽窃検知ソフト iThenticate の運用

論文作成では意図せず剽窃とならないように注意が必要である。近年の論文デジタル化とインターネット普及を背景に平成25年施行の博士論文オープンアクセス化(公表義務)に伴って現在までに国内の半数近くの医学部を有する大学に導入されている剽窃検知ソフト iThenticate の運用を、研究マインド支援グラント(共通部門研究費)を用いて、平成29年度から30年度にかけて試験的に運用を始めた。現在は、リサーチアドミッションセンターからの申請により、大学経費からの支出で運用されている。なお、2019年度から大学院学位審査の際の学位論文の提出にあたって、本ソフトを使用した検知を実施することが義務化された。なお、剽窃とは、他の研究者のアイデア、情報や成果等を当該研究者の了解もしくは適切な引用なく発表することであり、このような研究不正が発覚すると著者個人だけでなく組織全体に信用失墜等の重大な影響が及ぶ。

④科研費アドバイザー制度

2020年度より、科研費採択率の向上を目指し、リサーチアドミニストレーションセンターとの共同で、科研費の全種目を対象とした新しい科研費アドバイザー制度を運用している。2022年度は、科研費審査委員や大型競争的研究資金獲得経験のある研究者を中心とした45名がアドバイザーとして登録され、利用者の研究計画調書を個別に添削した。利用件数は63件で、種目の内訳は若手研究25件、基盤研究(C)33件、基盤研究(B)2件、挑戦的研究(萌芽)1件、研究活動スタート支援2件であった。

さらに、片桐センター長を講師として、「2022年度 科研費研究計画調書の書き方に関する講習会」を企画し、8月22日に実施した。webinarの内容は限定公開でYouTube配信を行い、その視聴回数は149回であった。受講者アンケートでは、eラーニング・講習会は科研費アドバイザー制度の周知に役立ち、内容は判りやすく役に立ったとの回答を得た。

次年度以降も、より効果的で利用しやすいものを目指して「科研費アドバイザー制度」をブラッシュアップし、大学の科研費採択率向上につなげたい。

⑤悪徳雑誌（ハゲタカジャーナル）への対応

助成を受けた論文に無料アクセスできるようにするべきであるというプランS等の国際的な潮流に伴い、著者側が掲載料を支払い読者側は無料アクセスできるオープンアクセス誌が増加しているが、誤って悪徳雑誌（ハゲタカジャーナル）に投稿しないように注意が必要である（日本医学会から注意喚起の通達が発行され、日本学術会議において対応策が検討中である）。これに関して、各自確認するように注意喚起を行っている。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

学内グラントと研究奨励費の助成は、例年通り、問題なく実施された。科研費の申請総数・率、採択率、採択総額の向上を目指して、科研費申請支援グラントでは、助成に加えて科研費アドバイザーによる研究計画調書のブラッシュアップを行うようにした。また、2022年度科学研究費採択率は、過去最高となった。剽窃検知ソフト iThenticate の本格運用および学位論文等における正式な運用が開始され、使用数も増え、益々重要度が上がっている。悪徳雑誌（ハゲタカジャーナル）への対応については、本学の全教員がその存在を認識し投稿雑誌を再考するきっかけになったと考える。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

学内グラントに関しては、今後もグラント選考委員会と連携しながら、守秘義務を遵守して公正な選考が継続されるよう努めていきたい。剽窃検知ソフト iThenticate に関しては、大学組織・研究者個人の信用にかかわる重要な問題として、今後も啓蒙活動を継続する予定である。「科研費アドバイザー制度」に関しては、次年度もより効果的に利用しやすいものを目指してブラッシュアップし、本学の科研費採択率のさらなる向上につなげたい。

1. 国際交流センター

1. 構成員

センター長 藤巻高光 (FUJIMAKI, Takamitsu) : 脳神経外科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
 副センター長 魚住尚紀 (UOZUMI, Naonori) : 生化学 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)
 茅野秀一 (KAYANO, Hidekazu) : 保健医療学部臨床検査学科 : 教授 (兼担)
 千本松孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : リサーチアドミニストレーションセンター : 教授 (兼担)
 辻美隆 (TSUJI, Yoshitaka) : 保健医療学部共通教育部門 : 教授 (兼担)
 三村俊英 (MIMURA, Toshihide) : リウマチ膠原病科 : 教授 (兼担)
 ゴッドフリーチャド (GODFREY, Chad) : 教養教育 : 准教授 (兼担)
 菅理江 (SUGE, Rie) : 教養教育 : 准教授 (兼担)
 種田佳紀 (OIDA, Yoshiki) : 教養教育 : 講師 (兼担)
 斉藤雅子 (SAITO, Masako) : 事務員

2. 目的・目標

本センターは埼玉医科大学国際交流センター規程第2条に則り、本学と諸外国との学術、文化、教育、研究、診療等に関する交流を支援・推進することを目的とする。今年度は国際交流活動を円滑に再開できるように関係各所や提携校との連携を強め、充実した業務をおこなうこと、また、さまざまな事態に適切に対応することを目標として活動した。

3. 活動実績

3-1. 学生相互交換留学制度

20名を留学候補生として選考し、オンラインにて留学に備えた準備学習を提供した。夏の派遣は実現しなかったが、翌春のCCstep3として6名を3校に派遣することができた。7月には前年度の留学候補者13名への認定書授与式をおこなった。12月には次年度の交換留学参加希望者の募集、1月に選考会をおこなった。

3-2. 春季語学研修制度

新型コロナウイルス感染症蔓延後初めて現地での研修が実現し、20名をサンフランシスコへ派遣することができた。オンライン、対面あわせて6回の説明会をおこない学生の事前学修に力を入れたほか、担当教員が全日程引率するなどサポートをおこなった。

3-3. 教員短期留学制度

今年度枠の追加募集および次年度枠の募集をおこないそれぞれ選考委員会による選考をおこなった。今年度枠として教員5名の留学がおこなわれ、2月には昨年度の留学者の帰国報告会を開催した。また、交換留学協定による海外提携国からの教員の受け入れも再開した。

3-4. MOU提携校からの留学生の受け入れ

タイ・ランシット大学からの2名をMOUに基づく留学生として受け入れた。

3-5. English Cafe

課外プログラムとして全学生を対象とした英会話レッスンを計8回開催し、のべ40名の学生が参加した。前年度同様、全ての回をオンラインにて実施した。

3-6. 発行物

4月に「IETC News vol. 18」、12月に「IETC News vol. 19」を刊行した。

3-7. その他の活動

5月に卒後学術集会において提携校のジョーンズホプキンス大学のチャールズ・エバーハルト教授の講演会を開催した。7月京都府立医科大学大学主催の「第13回全国医学部国際交流協議会・講演会」に参加した。

学生相互交換留学制度 交換留学生一覧 ※の学生は選考されるも派遣されず

Linkoping University		高橋 遥奈	松浦 甲明	
Sammelweis University		遠藤 さくら	小笠原 睦	
University of Pecs		井上 勇	内野 杏那	
麻生 真由※	阿部 友紀※	伊藤 朱音※	加納 成優※	岸 宥希※
倉持 智仁※	河野 将宏※	齋藤 一基※	武田 裕功※	塚田 佑樹※
中村 幸範※	林 慧美理※	由良 順一※	野口 博史※	

春季語学研修参加者一覧

アメリカ・サンフランシスコ					
医学部	安晝 まお	長坂 素奈緒	藤原 万悠子	大谷 穂乃果	長谷川 広美
	谷口 和彦	津本 愛佳	大下 唯花	澤田 百花	西垣 綾音
	北垣 遼	小倉 遥佳	相良 知美	久保 遥香	高林 奈々
保健医療学部	高野 瑛蘭	磯 みのり	大出 雪姫奈	深町 侑那	芦沢 友梨

教員短期留学制度 留学者一覧

木村 武一郎	国際医療センター 形成外科	助教	ネッケル小児病院 (フランス)
榎木 祐一郎	国際医療センター 頭頸部腫瘍科	助教	ロイヤルプリズベン女子病院 (オーストラリア)
吉川 信一郎	国際医療センター 脳神経外科	講師	チューリッヒ大学 (スイス)
竹下 英毅	総合医療センター 泌尿器科	講師	スタンフォード大学医学部 (アメリカ)
本島 由紀子	総合医療センター 小児科	助教	モナッシュ大学 (オーストラリア)
Tamas Vass	センメルワイス大学 (ハンガリー)		総合医療センター 消化管・一般外科

その他の留学者・留学生受け入れ

Thatchai Lertvilaiivithaya	ランシット大学 (タイ)
Mookmada Cherngwiwatkij	ランシット大学 (タイ)

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本年は新型コロナウイルス感染症による約3年間の人的交流停止あと徐々に国際交流活動が再開され、関係各所や提携校との連携を強め、全学的な視野に立った活動をおこなうことができた。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

新型コロナウイルス感染症が感染症法上は第5類に変更されたとはいえ今年度も急な状況の変更も予測される。引き続き柔軟な対応を心がけ、反省項目や改善の余地があればそれを取り上げ、改良の方向に向かって討議をおこなっていく考えである。

1. アドミッションセンター

1. 構成員

別所 正美 (BESSHO, Masami) : センター長
森 茂久 (MORI, Shigehisa) : 副センター長, 医学部ブランチャ長
加藤木 利行 (KATOUGI, Toshiyuki) : 副センター長, 保健医療学部ブランチャ長
椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 調査・研究・解析部門長
山田 健人 (YAMADA, Taketo) : 入試問題統括部門長
茂木 明 (MOGI, Akira) : 広報部門長
内田 和利 (UCHIDA, Kazutoshi) : 事務部門長, 医学部入試事務室長
小室 秀樹 (KOMURO, Hideki) : アドミッション・オフィサー
徳元 康人 (TOKUMOTO, Yasuhito) : アドミッション・オフィサー
堀江 正人 (HORIE, Masato) : 保健医療学部入試事務室長
(他にアドミッションセンター特任講師6名、入学試験業務担当のため氏名非公表)

2. 目的・目標

本学法人の運営する医学部、保健医療学部、短期大学、総合医療センター附属看護専門学校と関連学校である埼玉医療福祉会看護専門学校が、教育目標を達成しうる学生を受け入れるための入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー）に即した入学者選抜システムの構築および円滑な入学者選抜の実施について、調査研究及び入学者選抜に関する業務の統括・支援を行うことを目的・目標とする。

3. 活動実績

1) アドミッションセンター拡大会議の開催

令和4年4月27日（水）、令和4年度アドミッションセンター拡大会議をメール会議形式で開催した。構成員の他に、センター長指名の各学校・ブランチャ責任者、試験問題科目責任者ならびにオブザーバーが参加した。招請した40名全員が出席した。森 茂之 医学部長が副センター長 兼 医学部ブランチャ長に就任する事と堀江 正人 保健医療学部事務室長が保健医療学部入試事務室長に就任することが発表された。各学校・ブランチャ等の入試責任者から、令和4年度入学者選抜結果や令和4年度入学者選抜に予定している入試科目や入試日程などの資料提出があった。

(2) 入学者選抜関連会議などへの出席

令和4年度も新型コロナウイルス感染症の流行が終息しなかったため、大学入学者選抜・教務関係事項連絡協議会（文科省主催）は令和3年度に引き続いて中止となった。全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（大学入試センター主催）は令和4年5月26～28日にZoomによるオンライン開催で行われ、アドミッション・オフィサーが参加した。アドミッション・オフィサーは医学部と保健医療学部の新型コロナウイルス対策などの情報共有と共に、入学者選抜の適切な実施に向けて、両学部の入試委員会に参加した。また、大学入学共通テストの女子栄養大学との共同実施に伴い、試験監督者及び運営要員の派遣人数の調整を行い、運営要員説明会及び試験監督者説明会にて情報共有を図り、連携して公正で公平な入学者選抜の実施に向けて取り組んだ。各部門（入試問題統括部門、調査・研究・解析部門、広報部門、事務部門）は、相互に連携をとり、各ブランチャの入試委員会等からの指示や要請を受けながら、アドミッションセンターの目的達成のため円滑的な業務遂行に努めた。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

令和5年度入学者選抜では新型コロナウイルス感染症のため受験が出来なかった受験生や、試験日当日に欠席した面接委員が発生したが、受験生については事前に追試験を設定しており、面接委員については事前に交代要員を待機させていたため混乱なく入試を実施することが出来た。アドミッションセンター特任講師は、各学校・ブランチャにおいて入試問題の作成・事前点検・校正・試験当日の待機など多くの入試関連業務を遂行し、目的の一つを達成できたと判断している。また、他大学の状況等の外部情報の収集と分析を行い、本学の体制強化に反映できたことは評価できる。文部科学省からの要請等についても、充分に対応できたと考えている。大学入学共通テストへの対応も女子栄養大学との緊密な連携の結果、遅滞なく遂行できたと評価している。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

新型コロナウイルス感染症は令和5年5月8日を以て2類相当から季節性インフルエンザ感染症と同じ5類へと感染症法上での位置付けが引き下げられる予定であるが、新型コロナウイルス自体の病原性が弱まったわけでもなく、ましてや国内の感染者数がゼロになったわけでもない。またWHOから新型コロナウイルス感染症パンデミックの終息宣言はまだ出されていない。このため令和6年度入学者選抜においても、過去4回のコロナウイルス対策で得た経験を生かし新型コロナウイルスや季節性インフルエンザウイルスへの防疫対策を緩めることなく関連学校の相互連携を一層強化し、情報交換等を図り、各学校の入学者選抜業務が円滑に実施できるよう、また各学校のアドミッションポリシーに即した学生を受け入れられるよう全学組織としての役割を担っていきたい。

1. 教職員・学生健康推進センター

1. 構成員

[教職員・学生健康推進センター（以下健康推進センター）]

富谷智明 (TOMIYA, Tomoaki) センター長、健康推進センター教授

井上郁夫 (INOUE, Ikuo) 健康推進センター教授

<毛呂山キャンパス>

富谷智明 (TOMIYA, Tomoaki)

井上郁夫 (INOUE, Ikuo)

丸山義明 (MARUYAMA, Yoshiaki) 予防医学センター客員教授 (兼担)

桑原斉 (KUWABARA, Hitoshi) 神経精神科・心療内科教授 (兼担)

山内洋子 (YAMANOUCI, Yoko) 予防医学センター准教授 (兼担) (2022. 6. 1～)

菅原通子 (SUGAWARA, Kayoko) 消化器内科・肝臓内科講師 (兼担)

小林清香 (KOBAYASHI, Sayaka) 総合医療センター神経精神科准教授 (兼担)

庄野伸幸 (SHOUNO, Nobuyuki) 臨床心理士 神経精神科・心療内科助教 (兼担)

木内恵子 (KEIKO, Kiuchi) 看護師 看護部副部長 (兼担)

・教職員健康推進室

茅島紫帆 (KAYASHIMA, Shiho) 保健師

八巻絵里奈 (YAMAKI, Erina) 保健師

飯塚恵 (IIZUKA, Megumi) 保健師

三矢寿子 (MIYA, Hisako) 事務員

・医学部学生健康推進室

磯部幸子 (ISOBE, Sachiko) 看護師 (非常勤)

杉田典子 (SUGITA, Noriko) 助産師 (非常勤)

星子智志 (HOSHIKO, Satoshi) 臨床心理士 (非常勤)

池田聡子 (IKEDA, Satoko) カウンセラー (非常勤) (2022. 5. 25～)

上田佐和 (UEDA, Sawa) 臨床心理士 (非常勤) (2022. 7. 1～)

相場美穂 (AIBA, Miho) 臨床心理士 (非常勤) (2023. 1. 28～)

・保健医療学部学生健康推進室 (含川角キャンパス)

白江ミツエ (SHIRAE, Mitsue) 看護師 (非常勤)

松本修子 (MATSUMOTO, Nobuko) 看護師 (非常勤)

三宅郁子 (MIYAKE, Ikuko) 看護師 (非常勤)

大野美佐子 (OONO, Misako) 臨床心理士 保健医療学部看護学科講師 (兼担)

・大学病院職員健康推進室

<川越キャンパス>

・総合医療センター健康推進室

伊藤博之 (ITO, Hiroyuki) 室長 総合医療センター健康管理科教授 (兼担)

宮島育子 (MIYAJIMA, Ikuko) 保健師

内田里美 (UCHIDA, Satomi) 保健師

畠山智子 (HATAKEYAMA, Tomoko) 事務

青木正康 (AOKI, Masayasu) 看護師 看護部副部長 (兼担)

<日高キャンパス>

・国際医療センター健康推進室

中島淑江 (NAKAJIMA, Yoshie) 室長 国際医療センター心臓内科准教授 (兼担)

眞下由美 (MASHIMO, Yumi) 副室長 国際医療センター地域医療科教授 (兼担)

相庭かおり (AIBA, Kaori) 保健師

久保田明日香 (KUBOTA, Asuka) 保健師

勝乗愛美 (KATSUNORI, Megumi) 保健師

市川洋子 (ICHIKAWA, Hiroko) 看護師 看護部副部長 (兼担)

2. 目的・目標

当センターは、学校法人埼玉医科大学に所属する全教職員、全学生の健康管理、health promotion を行うことを目的としている。従来の業務を正確かつ迅速に行った上で、更に精度速度ともにレベルを上げるために、健診結果表の作成、

送付の効率化と結果表の改善に向けての三キャンパス共通で互換性のある新しいシステムの導入を目指し、新システムの構築と関係各部署との調整を行うことを目標とした。

3. 活動実績

【教職員部門】

毛呂山キャンパス

1 健康診断

1) 雇入健康診断

2) 前期健康診断 対象者：全教職員

3) 後期健康診断

【対象者】 ＊深夜業務に月平均4回以上従事する教職員

＊特殊健康診断(電離放射線)対象の教職員

＊ホルムアルデヒドに暴露される業務に従事する教職員

＊エチレンオキシドを用いて行う滅菌作業に従事する職員

＊キシレンを用いて行う作業に従事する教職員

＊N,N-ジメチルホルムアミドを用いて行う作業に従事する教職員

2 メンタルヘルス対策

1) 教職員の心の健康づくり計画

更なるメンタルヘルス対策の周知と充実をはかった。

2) メンタル相談

(1) 相談窓口の整備

＊新入職者に対するオリエンテーションの実施

＊4月・5月に実施した雇入健康診断の際に「こころとからだの悩み相談室」ポスター配布

(2) メンタル相談者

3) ストレスチェック

実施方法： eラーニング

高ストレス者に該当した職員の内、希望者には産業医が面談

4) メンタルヘルスクエア研修

(1) 管理者研修

演題：管理者と精神科医がコンプライアンスの観点から考えるメンタルヘルスクエア

講師：神経精神科・心療内科教授 桑原 斉先生

日時：令和5年3月20日(月) 場所：オルコスホール4階 (川越・日高キャンパスへ同時配信)

3 過重労働対策

月45時間以上の時間外労働者名簿及び基礎情報シートが人事課から当センターへ報告され、判定の上必要者に面談

4 感染症対策

1) C型肝炎(HCV抗体)検査

新入職者

2) インフルエンザワクチン接種

対象者：埼玉医科大学及び埼玉医科大学病院の教職員(10~12月の新規採用者含む)

委託・派遣の教職員

3) 感染症発症報告書

報告書は【所属長→院内感染対策室→教職員・学生健康推進センター→人事課】で回覧、状況把握

4) ワクチン接種歴及び抗体検査報告書作成

5) 教職員健康カードの配布

配布者：新入職のうち、「入職時抗体検査及びワクチン接種歴報告書」提出者

及びB型肝炎抗体検査実施者

5 健康教育・啓発活動

1) 健康教育

(1) 労働安全衛生委員会講演会

演題：それでもたばこを吸い続けますか？

講師：呼吸器内科 講師 内田義孝先生

日時：令和4年11月1日（火） 場所：本部棟第3講堂（川越・日高キャンパスへ同時配信）

2) 啓発活動

- (1) 「教職員・学生健康推進センター便り」発行
- (2) ポスター作成
- (3) パンフレット作成

3) 職場巡視と労働安全衛生委員会への参加

川越キャンパス

1 健康診断

- 1) 雇入れ健康診断
- 2) 前期健康診断（定期）
- 3) 後期健康診断（特定業務従事者）

2 職場復帰面談

3 過重労働対策

45時間以上の時間外労働者の報告者数と事後処置

4 ストレスチェック

5 心理相談

臨床心理士、リエゾンナースの協力のもと、心理相談に対応している。

6 感染症対策

- 1) B型肝炎抗体価検査及びワクチン接種
- 2) C型肝炎検査
- 3) 4種抗体価検査及びワクチン接種
- 4) インフルエンザワクチン接種

対象者：当センター職員、カルガモの家職員、委託・派遣職員の接種希望者

5) 感染症発生報告書

7 針刺し・切創、血液・体液曝露フォロー

8 結核患者との接触後検診

9 郵送検診

10 健康SMC21

生活習慣改善キャンペーン

11 啓発活動

健康推進室だより発行

パンフレット作成

日高キャンパス

1 健康診断

- (1) 雇入れ時健康診断
- (2) 前期健康診断
- (3) 後期健康診断
- (4) 雇入れ（中途）・復職者健康診断
- (5) 電離放射線健康診断

2 メンタルヘルス

産業医、臨床心理士、保健師で面談を行い、必要であれば、院内外の精神科医へコンサルト

3 過重労働対策

45時間以上の時間外労働者に質問表、必要者に産業医面談

4 ストレスチェック

厚生労働省ストレスチェックに基づき実施（e-ラーニングで実施）

高ストレス者に該当した職員のうち、希望者には産業医が面談

5 感染症対策

- 1) B型肝炎抗体検査及びワクチン接種
- 2) C型肝炎（HCV抗体）検査

対象：新採用者・中途採用者、復職者で、以前に検査を受けていない者

- 3) 4種（麻疹・風疹・水痘・ムンプス）抗体検査及びワクチン接種
非常勤・委託業者・ボランティア含む
- 4) インフルエンザワクチン接種
- 5) 感染症報告

6 教職員への教育・啓発

- 1) 元気玉新聞の発行
- 2) 職場巡視

【学生部門】

医学部

- 1 定期健康診断
- 2 予防接種
- 1) 4種（麻疹・風疹・水痘・ムンプス）

対象者：1・3年生 抗体価が当大学の基準値未満で、2回以上のワクチン接種歴がない学生

- 2) B型肝炎
2年生：1年生の時に受診した定期健康診断時の抗体価検査にてHBs抗体陰性者
3年生：2022年度定期健康診断時の抗体価検査にてHBs抗体陰性者（2シリーズ目の推奨）
- 3) インフルエンザ

対象：全学年希望者

- 3 健康相談、休養、医療機関紹介等
心の相談：精神科医師面談、臨床心理士面談
- 4 診断書発行

保健医療学部

- 1 定期健康診断
- 2 予防接種
- 1) B型肝炎
- 2) インフルエンザ
- 3 健康相談、休養、医療機関紹介等
心の相談
- 4 診断書発行

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

健康推進のためには健康診断が必要不可欠であり、実施することが法令でも定められている。職員、学生ともに健康診断受診率を高率に維持することは、毎年必須の目標である。教職員、医学部学生、保健医療学部学生において特別な理由のあるものを除いて100%の受診率を維持することができた。健診を有効活用するためには、受診者に対する正確なフィードバックを全員に理解しやすい形で、速やかに行う必要がある。健診結果表の作成、送付の効率化、結果表の改善に向けて問題点を洗い出し、システムに反映すべく調査、作業を行い、その結果に基づいた新たなシステム導入が可能となった。職員健診においては、念願の三キャンパス統一したシステム導入であり、互換性があり、人事異動にも迅速に対応出来ると思われる。次年度、遅くとも次々年度には導入可能と思われるところまで進展した。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

学生に対してはより自動化したシステムを実際に用いて正確な健診結果の効率的かつ迅速な配布を行う。職員健診においては、新しい三キャンパス統一したシステム自体は決定済みなので、それを出来るだけ早期に導入すべく、内外との調節をより強力に進めたい。

1. 情報技術支援推進センター

1. 構成員

椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 教授 (兼任) : 運営責任者 : 教育主任 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : 医学教育 : 博士
鈴木 康文 (SUZUKI, Yasufumi) : 講師 : 教育員 : 研究員 : 医療情報
吉田 幸生 (YOSHIDA, Yukio) : 助手
向田 寿光 (MUKAIDA, Hisamitsu) 教授 (兼任)
高橋 美穂 (TAKAHASHI, Miho) : 助手 (兼任)
馬場 秀泰 (BABA, Hideyasu) : 係長 (兼任)

2. 教育

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

教育・研究のための情報機器およびネットワークの共同利用施設の立場から、本学の医学教育・医学研究に貢献する。
具体的な目的は、科目ごとに設定し、シラバスに記載した。

2-2. 教育実績 (担当者)

医学部 : 1年生の「医科学入門」(椎橋)、「人体の基礎科学1」(椎橋・鈴木・高橋・吉田)、「人体の基礎科学2」(椎橋)、2年生の「機能系実習2」(椎橋)、「選択必修」の「プログラミング言語 perl」(椎橋・鈴木・高橋・吉田)

保健医療学部 : 臨床検査学科1年生の「統計学」(椎橋)、「情報科学」(鈴木)、看護学科2年生の「医療情報学」(鈴木)

大学院 : 医学研究科博士課程の「統計情報解析特論」(椎橋)、医学研究科修士課程の「統計情報解析特論」(椎橋)、看護学研究科修士課程の「看護情報処理論」(椎橋)

他 : 埼玉医科大学附属総合医療センター看護専門学校「情報科学」(鈴木)

2-3. 達成度評価

医学部 : 1年生の「医科学入門」90%、「人体の基礎科学1」「人体の基礎科学2」90%、2年生の「機能系実習」95%、「選択必修」の「プログラミング言語 perl」90%

保健医療学部 : 健康医療科学科1年生の「統計学」90%、「情報科学」90%、2年生の「医用工学実習」70%、看護学科2年生の「医療情報学」90%

大学院 : 医学研究科博士課程の「統計情報解析特論」95%、医学研究科修士課程の「統計情報解析特論」85%、看護学研究科修士課程の「看護情報処理論」95%

椎橋は医学研究科博士課程の「統計情報解析特論」で令和元年度のベストティーチャー賞を受賞した。

他 : 埼玉医科大学附属総合医療センター看護専門学校「情報科学」90%

2-4. 次年度改善計画

知識の習得がゴールではなく、習得した知識を実際に用いることがゴールであること、それが医師として研究者として具体的にどのように役立つのかを今年度以上に明示し、教育効果を上げたい。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

moodle を応用して自己学習のためのマルチメディアを用いた医学教材を開発する。また、医学教育センターと連携して、医学教育を推進するためのネットワークシステムを開発する。また、大学院教育において、臨床と基礎の橋渡し研究の生物情報学的支援を行う。

3-2. 研究グループ(研究プロジェクト)と研究実績

moodle を応用した自己学習のためのマルチメディアを用いた医学教材の開発 (椎橋・鈴木・吉田・高橋)

3-3. 達成度評価

医学教育センターと連携し、学生による医学部臨床実習の評価、試験問題の評価をテーマに研究活動を行った。この研究活動を通じて、本学で実施している学生による臨床実習評価が各診療科における臨床実習の改善に寄与していることが示唆された。医学研究科博士課程の学位研究への積極的な支援を行った。

3-4. 次年度改善計画

学生による臨床実習の評価についてさらに効用を明らかにしていく計画である。また、試験問題の評価についても研究を行う計画である。

4. 診療

4-1. 診療科の特色と診療目的(目標)

該当なし

4-2. 診療実績データ

該当なし

4-3. 診療内容、治療成績

該当なし

4-4. 先進医療の開発

該当なし

- 4-5. 実施治験内容
該当なし
- 4-6. 自己評価と次年度目標
該当なし
- 4-7. 上記 4-1～4-6 の要約（大学年報用）
該当なし

5. その他

- 5-1. 自治体、政府関連委員の有無
該当なし
- 5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無
日本医学教育学会学術誌編集委員会委員（椎橋）
- 5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務
日本生理学会生理学エデュケーター認定制度委員会委員長（椎橋）
日本生理学会教育委員会委員（椎橋）
日本生理学会理事（椎橋）
日本生理学会評議員（椎橋）
日本医学教育学会広報・情報基盤委員会副委員長（椎橋）
日本医学教育学会医学教育専門家認定制度委員会委員（椎橋）
日本医学教育学会学習者評価部会委員（椎橋）
日本医学教育学会 ICT 教育部会部会長（椎橋）
日本医学教育学会理事（椎橋）
日本医学教育学会代議員（椎橋）
日本医学教育評価機構調査・解析委員会委員長（椎橋）
日本医学教育評価機構運営部会部会員（椎橋）
日本医学教育評価機構評価委員（椎橋）
医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 CBT 事後評価解析小委員会委員（椎橋）
医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 CBT 機構派遣監督者等講習会専門部会委員（椎橋）
医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE 合否判定基準検討委員会副委員長（椎橋）
医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 CBT 機構派遣監督者（椎橋）
群馬大学医学部カリキュラム評価委員会外部委員（椎橋）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

該当なし

学会発表

- ①鈴木智, 佐藤義文, 高橋美穂, 吉田幸生, 大西京子, 齋藤恵, 荒関かやの, 黒崎亮, 廣岡伸隆, 橋本正良, 辻美隆, 柴崎智美, 石橋敬一郎, 小山政史, 椎橋実智男, 森茂久, 臨床実習におけるラーニング・マネージメント・システムのカスタマイズについての取り組み第2報. 第54日本医学教育学会大会 2022.08.05; 前橋

著書

該当なし

【総数：論文 0 件、学会発表 1 件、講演 1 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

本年度は、当センターの目的を達成するために下記の活動を行った。

○主な活動

- ・ SINET との接続を 100Mbps から 1Gbps に増速
- ・ メールサーバーを Gmail に切り替え (Google Workspace)
- ・ Box の運用を大学全体として開始
- ・ Microsoft365 の運用を大学全体として開始
- ・ 各種ネットワークサーバーの運用管理

- ・教職員のネットワーク利用の支援
 - ・医学部等の各種システムの管理（WebClass、収録配信システム、シラバス管理システム）
 - ・学生用コンピュータの運用管理
 - ・学内・学外ホームページのコンテンツ管理
 - ・オンライン授業のための支援（ライブ配信、ビデオオンデマンド）
 - ・共用試験 CBT の支援
 - ・共用試験 OSCE の支援
 - ・医学教育ワークショップ、教授・教員総会等の支援
 - ・情報システム部との「情報基盤連絡会議」の定期的な開催
- 当センターの利用状況（令和4年4月1日から令和5年3月31日）
- ・利用登録者数 教職員等：5,323 ID, 学生：2,049名
 - ・施設内機器の利用
 - 延べ利用者数：255名, 延べ利用時間：146時間
 - 大型ポスター印刷枚数：704枚
 - ・SMSNET の利用
 - 電子メール利用数：34,560,351通
 - WWW 接続回数：3,940,957,447回（ファイルの転送回数）
 - 接続端末台数 約3,800台

当センター内の設備の利用、ネットワークの利用については、上記に示した通り十分に使命を果たせたものと自己評価している。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

次年度は、Google Workspace、Microsoft365 および Box の活用を進展させ、情報システム部とともに法人全体の DX、セキュリティーおよび教育への活用を中心に審議を行う。これらを通じて、IT 活用の医学教育・医学研究を一層充実させるべく努力を重ねていく。

1. 卒前部門

1. 構成員

部門長

森 茂久 (MORI Shigehisa) : 医学教育学 : 教授 (医学教育センター兼任)

2. 目的・目標

本学医学部卒業生のキャリア・デザインを支援するために、医学教育センターと連携して、卒前の段階で、学年に応じて医学生に、初期研修などの卒後教育、情報提供などを企画し、活動することを目的としている。また医学教育センターを通して、学生の動向、希望などの情報・傾向を収集して、医療人育成支援センターの企画、運営への助言を行う。

今年度はコロナ禍でも継続してキャリア・デザイン支援、3つの大学病院群での初期研修マッチングのための情報提供に協力することを目標とする。

3. 活動実績

学生へのキャリア・デザインに関する情報提供

初期研修部門等、他の部門の活動の立案に役立つように、以下の情報を、実施予定、実施報告などの情報を運営会議で提供した。

- ①昨年度復活した6年生対象の集会「マッチング対策、埼玉医科大学での卒後研修」は今年度は実施しなかった。
- ②5年生学年集会「前期総合試験を終えて、臨床実習後期に向けて」は10月8日にZoomを用いて遠隔で実施され、三村俊英センター長が「マッチング、初期研修、専門医研修」の講演を担当した。
- ③5年生臨床実習CC step2のオリエンテーションが1月7日にZoomを用いて遠隔で開催され、「初期臨床研修病院を選ぶ際の考え方」の講演を国際医療センター乳腺腫瘍科、一瀬友希先生が担当した。オリエンテーション終了後、臨床研修センター主催による臨床研修説明会を開催した。
- ④4年生臨床実習CC step1のオリエンテーションが令和4年1月21日にオンライン開催されたが、注意、伝達事項が多いためキャリア・デザインの情報提供は行わなかった。
- ⑤年度末の「6年生に向けて」というガイダンスは今年度も実施しなかった。

4. 評価と次年度目標

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

各学年、特に5年、6年の教育行事などの情報を中心に、事前に医療人育成支援センター会議に提供し、他の部門(初期研修部門等)の活動立案を支援するように努めた。

6年生対象のマッチング説明、及び3病院合同での初期研修説明会を5月6日、模擬試験終了後に対面で開催した。

5年生に対しては、前期総合試験終了後の10月8日に学年集会「前期総合試験を終えて」を開催し、卒業生にキャリアデザインに関する話をしてもらった。

初めて4年生に対してマッチング説明会を、試験的に12月12日、定期試験終了後に実施した。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

今後も学生へのキャリア・デザインに関する情報提供を継続する。特に高学年の学事等の予定を定期的に会議で案内し、病院群の卒後研修の説明会等の実施を支援し、卒後研修の紹介の在り方の検討を継続する。

6年生の集会については、病院群の卒後研修センターと相談して検討する。

5年生の集会は、10月に対面開催の形式で計画する。

5年生特別演習後の連絡会においても、キャリア・デザインに関する情報提供を行うことを検討する。

4年生に対するマッチング説明会を計画的に実施する。

現在卒前部門員が部門長1名のため、増員を検討する。

2. 病院群臨床研修センター

1. 構成員

統括責任者	棚橋 紀夫(TANAHASHI Norio)：丸木記念福祉メディカルセンター：病院長
統括実務責任者	三村 俊英(MIMURA Toshihide)：大学病院リウマチ膠原病科：教授
センター長	篠塚 望(SHINOZUKA Nozomi)：大学病院：病院長
センター長	堤 晴彦(TSUTSUMI Haruhiko)：総合医療センター：病院長（令和4年7月まで）
センター長	別宮 好文(BEKU Yoshifumi)：総合医療センター：病院長（令和4年8月から）
センター長	佐伯 俊昭(SAEKI Toshiaki)：国際医療センター：病院長
臨床研修責任者	山元 敏正(YAMAMOTO Toshimasa)：大学病院脳神経内科・脳卒中内科：教授
臨床研修責任者	木崎 昌弘(KIZAKI Masahiro)：総合医療センター血液内科：教授
臨床研修責任者	林 健(HAYASHI Takeshi)：国際医療センター脳卒中内科：教授
実務担当	中元 秀友(NAKAMOTO Hidetomo)：大学病院総合診療内科：教授
実務担当	松尾 幸治(MATSUO Kouji)：大学病院神経精神科・心療内科：教授
実務担当	名越 澄子(NAGOSHI Sumiko)：総合医療センター消化器・肝臓内科：教授：初期・後期担当
実務担当	岩永 史郎(IWANAGA Shirou)：国際医療センター心臓内科：教授：後期担当
実務担当	坂口 浩三(SAKAGUCHI Hirozou)：国際医療センター呼吸器外科：准教授：初期担当
事務	永島 松男(EISHIMA Matsuo)：病院群臨床研修センター：課長補佐
事務	野口 恵美子(NOGUCHI Emiko)：大学病院臨床研修センター：主任
事務	大澤 みゆき(OSAWA Miyuki)：大学病院臨床研修センター：主任
事務	川俣 栄希(KAWAMATA Eiki)：総合医療センター臨床研修センター：課長補佐（令和4年6月まで）
事務	北脇 丈博(KITAWAKI, Takehiro)：総合医療センター臨床研修センター：助教（令和4年7月から）
事務	若松 正子(WAKAMATSU Masako)：総合医療センター臨床研修センター
事務	松尾 有裕(MATSUO Arihiro)：国際医療センター臨床研修センター：参事
事務	池田 美土里(IKEDA Midori)：国際医療センター臨床研修センター：係長
事務	島田 祐里(SHIMADA Yuri)：国際医療センター臨床研修センター
事務	伊藤 美香(ITUO Mika)：国際医療センター臨床研修センター（令和5年1月から）

2. 目的・目標

本運営会議は、学校法人埼玉医科大学病院群臨床研修センター運営会議規則第2条1項に則り、埼玉医科大学病院群臨床研修センター統括の下、埼玉医科大学病院、埼玉医科大学総合医療センター、埼玉医科大学国際医療センターにおける卒後臨床研修に関し、それぞれの病院の特性を尊重し、病院群として協調および連携を図ることを目的とし、3病院での臨床研修の充実、質の向上を図ることを目的としている。

3. 活動実績

- ①第7回病院群臨床研修センター運営会議：令和4年6月6日から6月11日：於 メール会議 メール送信13名
議事：2022年度採用初期臨床研修医について、初期臨床研修医プログラム別在籍数について、2020年採用初期臨床研修医修了者の進路状況について、埼玉医科大学基礎研究医プログラムについて、2022年度採用専攻医について、2021年度6年生へのマッチングに関するアンケート結果報告書について、など
- ②第8回病院群臨床研修センター運営会議：令和5年3月14日開催：於 Zoom 会議 出席12名、欠席1名
議事：2023年度採用初期臨床研修医について、初期臨床研修医プログラム別在籍数について、2021年採用初期臨床研修医修了者の進路状況について、2023年度 専門研修プログラム採用（予定）専攻医について、埼玉医科大学基礎研究医プログラムについて、研修医の夏期休暇に関わる臨床研修センター希望調査対応について、など
- ③第21回臨床研修指導医講習会：令和4年11月26日（土）から11月27日（日）開催：於 Zoom 開催（本部会場：カタロスタワー6階） 受講者32名（3病院各10名、臨床研修協力施設2名）
- ④第23回JMECC ICLS コース開催：令和4年7月16日（土）開催：於 カタロスタワー4階 受講者15名
- ⑤第24回JMECC ICLS コース開催：令和4年10月29日（土）開催：於 カタロスタワー4階 受講者15名
- ⑥第25回JMECC ICLS コース開催：令和5年1月28日（土）開催：於 カタロスタワー4階 受講者14名
- ⑦腹部超音波・消化器内視鏡 実践セミナー：令和4年11月5日（土）開催：於 カタロスタワー4階 受講者7名

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

初期臨床研修医、後期研修医（専攻医）の採用に関する事項を主に検討した。病院群における広報活動としては、本学医学部6年生への医師臨床研修マッチング説明会及び3病院の初期臨床研修体制・プログラム概要説明会の実施、本学医学部4年生への医師臨床研修マッチング制度と全国の初期臨床研修病院（大学病院・市中病院）の特徴及び本学3病院の特徴と臨床研修プログラム概要説明の実施、全国の医学部学生対象の3病院合同の初期臨床研修Web説明会実施、レジナビフェア東京ビッグサイト（6月）への3病院合同の出展、全国の研修医対象の埼玉県主催臨床研修病院合同オンライン説明会（専門研修）に参加し、3病院の臨床研修体制等についてのPRを行った。特に初期研修医採用に関して、3病院による協力体制の下、連携の取れた広報活動を行うことが出来た。

令和5年度は初期研修医（医科）が99名（大学病院41名、総合医療センター44名、国際医療センター14名）、初期

研修医（歯科）が4名（大学病院2名、総合医療センター2名）入職した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度も、病院群としての広報活動等（Web 説明会等も含め）について協議検討し、3 病院協力の下で積極的に活動を行い、初期研修医、後期研修医の獲得と、研修プログラムの質の向上に努める。

2. 1) 初期臨床研修部門（大学病院）

1. 構成員

委員長	山元 敏正	(YAMAMOTO Toshimasa) : 脳神経内科 : 教授
副委員長	永田 真	(NAGATA Makoto) : 呼吸器内科 : 教授
副委員長	門野 夕峰	(KADONO Yuho) : 整形外科・脊椎外科 : 教授
委員	中元 秀友	(NAKAMOTO Hidetomo) : 総合診療内科 : 教授
	松尾 幸治	(MATSUO Kouji) : 神経精神科・心療内科 : 教授
	藤巻 高光	(FUJIMAKI Takamitsu) : 脳神経外科 : 教授
	今井 幸紀	(IMAI Yukinori) : 消化器内科・肝臓内科 : 准教授
	三村 俊英	(MIMURA Toshihide) : リウマチ膠原病科 : 教授
	梶原 健	(KAJIWARA Takeshi) : 産科・婦人科 : 教授
	佐藤 毅	(SATO Tsuyoshi) : 歯科・口腔外科 : 准教授
	島田 朗	(SHIMADA Akira) : 内分泌内科・糖尿病内科 : 教授
	照井 康仁	(TERUI Yasuhito) : 血液内科 : 教授
	友利 浩司	(TOMORI Kouji) : 腎臓内科 : 講師
	樽本 憲人	(TARUMOTO Norihito) : 感染症科・感染制御科 : 准教授
	浅野 博	(ASANO Hiroshi) : 消化器・一般外科 : 准教授
	三枝 勉	(MIEDA Tsutomu) : 麻酔科 : 准教授
	菊池 透	(KIKUCHI Toru) : 小児科 : 教授
	大島 一夫	(OSHIMA Kazuo) : 小児外科 : 助教
	佐藤 弘樹	(SATO Hiroki) : 形成外科・美容外科 : 助教
	倉林 均	(KURABAYASHI Hitoshi) : リハビリテーション科 : 教授
	加瀬 康弘	(KASE Yasuhiro) : 耳鼻咽喉科 : 教授
	庄司 拓平	(SHOJI Takuhei) : 眼科 : 准教授 (令和4年4月まで)
	渋谷 雅之	(SIBUYA Masayuki) : 眼科 : 講師 (令和4年5月から)
	常深 祐一郎	(TSUNEMI Yuichirou) : 皮膚科 : 教授
	篠島 利明	(SHINOSHIMA Toshiaki) : 泌尿器科 : 准教授
	芳賀 佳之	(HAGA Yoshiyuki) : 集中治療部 : 教授
	高平 修二	(TAKAHIRA Shuji) : 救急科 : 准教授
	井上 快児	(INOUE Kaiji) : 放射線科 : 講師 (令和4年7月から准教授)
	山田 健人	(YAMADA Taketo) : 中央病理診断部 : 教授
	森吉 美穂	(MORIYOSHI Miho) : 中央検査部 : 准教授
	柴崎 智美	(SHIBAZAKI Satomi) : 地域医学推進センター : 教授
	原嶋 弥生	(HARASHIMA Yayoi) : 看護部 : 看護部長
	椎橋 実智男	(SHIBASHI Michio) : 情報技術支援推進センター : 教授
	加門 紫乃	(KAMON Shino) : 医務部 : 課員
	内野 敏	(UCHINO Satoshi) : 総務部 : 課長 (令和4年7月から次長兼課長)

2. 目的・目標

本委員会は埼玉医科大学病院研修医委員会規則第2条1項に則り、当院における卒後医師臨床研修の充実を図ることを目的とする。

平成16年度から開始された新医師臨床研修制度は、診療に携わる全ての医師が必ず修めなければならないものであり、適切な研修環境と指導体制の下で、医師としての人格を涵養し、将来の専門性にかかわらず、医学・医療の社会ニーズを認識しつつ、日常診療で頻繁に遭遇する病気や病態に適切に対応できるよう、プライマリ・ケアの基本的な診療能力（態度、技能、知識）を身につける事を目的としている。

埼玉医科大学病院の研修プログラムは、医師免許取得後2年間の初期臨床研修において、この新制度の到達目標を達成するために用意されたものである。初期臨床研修の2年間は優れた臨床医として医師が一生を有意義に送るための土台となる極めて重要な時期であり、一人ひとりの研修医が本プログラムによって実り多い研修成果を達成し、臨床研修を修了できるようにすることを目的としている。

3. 活動実績

本年度は全11回の委員会を開催し、審議内容は診療部長会議において報告した。すべての議事録は整備されている。

- ①第209回研修医委員会：令和4年4月12日開催：於 本部棟2階会議室 出席32名（委任状含）、欠席2名
議事：令和4年度採用研修医代表者について、研修医委員会名簿・指導医名簿について、採用研修医名簿について、研修医ローテーションについて、保険医登録完了までの医行為について（導入研修時の医行為）、埼玉県総合医局機構臨床研修スタートセミナーの開催について、令和4年度採用試験等日程について、広報活動について、研修医のインシデント報告について、ローテーション変更申請について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、

- 感染症科・感染制御科ローテーションについて、ICLS、JMECC インストラクターについて、ランチョンセミナー実施について、CPCについて、研修医の年休取得、勤務時間について、事務職員の異動、など
- ②第210回研修医委員会：令和4年5月10日開催：於 本部棟地下1階第4講堂 出席30名（委任状含）、欠席4名
議事：研修医からの診療科および指導医評価表の集計について、研修医委員会名簿について、臨床研修説明会の開催について、研修医の休暇取得について、ローテーション診療科変更申請について、研修医のインシデント報告について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、プログラム責任者養成講習会について、研修医の顔写真の配布について、など
- ③第211回研修医委員会：令和4年6月7日開催：於 本部棟地下1階第4講堂 出席30名（委任状含）、欠席4名
議事：研修医の診療科における勤務管理について、1年目研修医の宿日直について、初期研修医採用試験面接官のご協力について、臨床研修説明会の開催、報告について、プログラム責任者面談会について、臨床研修指導医講習会受講者について、ローテーション診療科変更申請について、研修医のインシデント報告について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、など
- ④第212回研修医委員会：令和4年7月12日開催：於 本部棟2階会議室 出席31名（委任状含）、欠席3名
議事：初期研修医採用試験面接官について、初期研修医採用試験応募状況について、臨床研修説明会の開催、報告について、臨床研修指導医講習会受講者について、CPC開催日について、ローテーション診療科変更申請について、研修医のインシデント報告について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、2023年度初期臨床研修プログラムについて、など
- ⑤第213回研修医委員会：令和4年9月13日開催：於 本部棟2階会議室 出席33名、欠席1名
議事：初期研修医採用試験について（医科・歯科）、JAMEP 基本的臨床能力評価試験シンポジウム（Web開催）について、毛呂山後援会への研修医教育助成金収支報告および予算案について、2023年度研修医診療科受け入れ調査について、研修医のインシデント報告について、ローテーション診療科変更申請について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、第21回臨床研修指導医講習会（受講候補者・コーディネーター（案））について、腹部超音波・消化器内視鏡 実践セミナーについて、など
- ⑥第214回研修医委員会：令和4年10月11日開催：於 本部棟地下1階第4講堂 出席32名（委任状含）、欠席2名
議事：マッチング中間公表について、プログラム責任者面談会報告について、研修管理委員会メール会議開催について、基本的臨床能力評価試験、試験官について、2年目研修医進路調査について、専攻医採用について、研修医のインシデント報告について、ローテーション診療科変更申請について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、公益財団法人日米医学医療交流財団主催 医学医療交流セミナーについて、埼玉医科大学 JMECC 第24回コース開催について、など
- ⑦第215回研修医委員会：令和4年11月8日開催：於 本部棟地下1階第4講堂 出席31名（委任状含）、欠席3名
議事：マッチング結果（医科・歯科）について、二次募集採用試験について、2年目研修医進路調査について、研修医のインシデント報告について、ローテーション診療科変更申請について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、埼玉医科大学 JMECC 第24回コース・腹部超音波・消化器内視鏡実践セミナーについて、第21回病院群臨床研修指導医講習会について、埼玉県合同オンライン説明会（臨床研修プログラム）について、など
- ⑧第216回研修医委員会：令和4年12月6日開催：於 本部棟地下1階第4講堂 出席32名、欠席2名
議事：臨床研修指導医名簿について、2023年度臨床研修医採用状況（医科・歯科）について、2023年度専攻医募集スケジュールについて、プログラム責任者面談会実施について、研修医のインシデント報告について、ローテーション診療科変更申請について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、病院群 Web 説明会（Zoom）開催について、埼玉県合同オンライン説明会（臨床研修プログラム）について、基本的臨床能力評価試験、試験官について、研修医激励会について、初期臨床研修修了証授与式について、など
- ⑨第217回研修医委員会：令和5年1月10日開催：於 本部棟2階会議室 出席31名（委任状含）、欠席3名
議事：研修医の診療科における勤務管理について、2023年度研修医ランチョンセミナーについて、2023年度採用時オリエンテーションでのBLS講習会開催について、2024年度医科臨床研修プログラム定員について、ローテーション変更申請について、研修医のインシデント報告について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、埼玉県合同オンライン説明会（臨床研修プログラム）について、大学病院 Web 説明会（Zoom）開催について、2023年度（2024年度採用）研修医採用試験について、働き方改革について（勤務管理）、など
- ⑩第218回研修医委員会：令和5年2月14日開催：於 本部棟地下1階第4講堂 出席29名（委任状含）、欠席5名
議事：2021年度研修医修了判定について、プログラム責任者面談会報告について、2021年度研修医の進路について、2022年度研修医の2年次ローテーションについて、2022年度研修管理委員会の報告について、2023年度研修医委員会開催日について、2023年度ローテーション変更締切日一覧について、初期研修医採用時オリエンテーションについて、専攻医・シニアレジデント採用時オリエンテーションについて、研修医のインシデント報告について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、埼玉県病院合同オンライン説明会報告について、基本的臨床能力評価試験の報告について、CPCについて、内科専攻医の救急センター内科当直担当について、埼玉医科大学病院 Web 説明会について、2023年度（2024年度採用）研修医採用試験【一次】日程変更について、など
- ⑪第219回研修医委員会：令和5年3月14日開催：於 本部棟地下1階第4講堂 出席29名（委任状含）、欠席5名
議事：修了判定について、プログラム責任者面談会報告について、優秀者表彰について（優秀指導医・優秀研修医、ランチョンセミナー講義優秀講演賞）、基本的臨床能力評価試験結果について、研修医の休暇許可について、2022年度研修管理委員会（医科部会、歯科部会）報告について、2023年度オリエンテーションプログラムについて（初期、後期）、2023年度診療科別ローテーション人数一覧について、ランチョンセミナー日程について、研修医のインシデント報告について、電子カルテ研修医カルテの承認率について、研修医委員会委員の変更について、初期臨床研修修了証授与式について、2023年度臨床研修指導医講習会について、1年目研修医の保険医登録完了ま

での医行為について、研修医ローテーション結果報告書の署名・捺印の必要性について、など

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

臨床研修制度改正、研修評価システム変更、臨床研修の質の向上等について適時検討し対応した。臨床研修プログラム情報等についてはホームページを更新し、情報を分かり易く表示した。説明会等の募集活動は新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により、対面説明会（リアルイベント）の実施による参加者は非常に少なく非効率な結果となったが、Zoomを使用した臨床研修 Web 説明会の開催日数を増やし対応した。また、本学 6 年生への臨床研修の動画配信、3 病院合同による学内及び学外医学生に対する臨床研修 Web 説明会の開催日数を増やし積極的な募集を行った。その他、例年同様に本学 6 年生へ勉強会室訪問等の活動を行った。令和 5 年度は臨床研修医 43 名（医科が 41 名、歯科が 2 名）入職した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度は引き続き安全面（感染対策等）を考慮したうえで、様々な方法による広報活動を積極的に行い、学内はもとより他大学出身者の研修医確保を図る。特に、説明会等の募集活動は新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響により培った Zoom を使用した臨床研修 Web 説明会の開催実績や実施効果を考慮して、効果的に開催できる Zoom を使用した臨床研修 Web 説明会を中心に説明会を開催する。また、基本的臨床能力評価試験結果を踏まえた臨床研修向上ワーキンググループの定期的開催を含め、指導医、研修医の意見を基に臨床研修の質の向上、研修環境の整備に努めたい。その他、本学の学外向けホームページリニューアルに向けて臨床研修プログラムに関する情報等についての見直しを行い見やすく分かり易いサイト作りに努めたい。

2. 2) 初期臨床研修部門（総合医療センター）

1. 構成員

委員長	木崎 昌弘	(KIZAKI, Masahiro)：血液内科：教授（医科部会、歯科部会（委員））
委員長	金子 貴広	(KANEKO, Takahiro)：歯科・口腔外科：教授（歯科部会）
副委員長	岡 秀昭	(OKA, Hideaki)：総合診療内科：教授（医科部会）
委員	高橋 健夫	(TAKAHASHI, Takeo)：放射線腫瘍科：教授（医科部会）
委員	石田 秀行	(ISHIDA, Hideyuki)：消化管外科・一般外科：教授（医科部会）
委員	長谷川 元	(HASEGAWA, Hajime)：腎・高血圧内科：教授（医科部会）
委員	吉益 晴夫	(YOSHIMASU, Haruo)：メンタルクリニック：教授（医科部会）
委員	澤野 誠	(SAWANO, Makoto)：高度救命救急センター：教授（医科部会）
委員	加部 一彦	(KABE, Kazuhiko)：新生児科：教授（医科部会）
委員	小山 薫	(KOYAMA, Kaoru)：麻酔科：教授（医科部会）
委員	齋藤 正博	(SAITOU, Masahiro)：産科：教授（医科部会）
委員	名越 澄子	(NAGOSHI, Sumiko)：消化器・肝臓内科：教授（医科部会）
委員	王子 聡	(OUJI, Satoru)：神経内科：准教授（医科部会）
委員	那須 大介	(NASU, Daisuke)：歯科・口腔外科：講師（歯科部会）
委員	横田 成子	(YOKOTA, Seiko)：看護部：副部長（医科部会）
委員	津久井 一浩	(TSUKUI, Kazuhiro)：事務部：部長（医科部会）
委員	小川 英明	(OGAWA, Hideaki)：事務部総務課：課長補佐（医科部会、歯科部会）
外部委員	井上 晶子	(INOUE, Akiko)（医科部会）
外部委員	黒川 誠一	(KUROKAWA, Seiichi)（歯科部会）
委員	協力型病院・協力施設の研修責任者（医科部会、歯科部会）	
事務局	川俣 栄希	(KAWAMATA, Eiki)：臨床研修センター：課長補佐（医科部会、歯科部会）
事務局	北脇 文博	(KITAWAKI, Takehiro)：臨床研修センター：助教（医科部会、歯科部会）
事務局	若松 丈子	(WAKAMATSU, Masako)：臨床研修センター（医科部会、歯科部会）
事務局	後口 綾香	(USIROGUUCHI, Ayaka)：臨床研修センター（医科部会、歯科部会）

2. 目的・目標

本委員会は、埼玉医科大学総合医療センター研修管理委員会規則第2条1項に則り、当院における初期臨床研修の充実を図ることを目的として設置され、医科部会と歯科部会の2部会で構成される。
今年度は、研修医・研修歯科医の採用・研修終了に関する審議などの他、学外向けホームページの更新、コロナ禍に対応した募集・広報活動の充実等を目標とした。

3. 活動実績

今年度は、4回（医科部会2回、歯科部会2回）の委員会を開催し、審議内容等は診療部長会議に報告した。なお、すべての議事録は整備されている。

- ①第116回研修管理委員会（医科部会）（令和4年11月1日）於：メール会議
議事：1) 令和5年度採用研修医マッチング受験者数および結果について
- ②第23回研修管理委員会（歯科部会）（令和4年10月17日）於：メール会議
議事：1) 令和5年度採用研修歯科医マッチング順位登録について
- ③第117回研修管理委員会（医科部会）（令和5年3月15日）於：Zoom会議 出席25人 委任状出席18人
議事：1) 令和5年度採用研修医について
2) 令和4年度採用研修医2年次ローテーションについて
3) 総合医療センター研修医の動向
4) 意見交換及び質疑応答
- ④第21回研修管理委員会（歯科部会）（令和5年3月14日）於：管理棟2階カンファレンス3 出席2人 委任状出席4人
議事：1) 令和5年度採用研修歯科医について
2) 令和4年度研修歯科医（1年次）の修了認定について
3) 令和3年度研修歯科医（2年次）の進路について

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

研修管理委員会（医科部会）の下部組織である研修管理ワーキンググループを毎月開催することとし、初期研修医や専攻医の意見を取り入れ、より良い研修体制の構築に向けて検討を行った。広報活動はオンライン・対面の両方を行い、過去最高の面接者数が得られ、40名を超える研修医の採用（3病院自由選択プログラムフルマッチ）につながった（44名）。学外向けホームページの更新にも着手した。また卒前・卒後教育に関するFDを新たに年2回開催した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度は、新たに始めた卒前・卒後教育に関するFDの推進、研修医長会議の立ち上げ、研修医教育の充実等を活動目標とする。その上で情報共有推進のため、対面の会議開催を拡大する。教育の観点では研修医用ハンズオンセミナーなどの企画も行っていく、

2. 3) 初期臨床研修部門（国際医療センター）

1. 構成員

委員長	林 健	(HAYASHI Takeshi)	病院診療科：教授
副委員長	坂口 浩三	(SAKAGUCHI Hirozo)	呼吸器外科：准教授
副委員長	岩永 史郎	(IWANAGA Shiro)	心臓内科：教授
委員	古田島 太	(KOTAJIMA Futoshi)	集中治療科：教授
	眞下 由美	(MASHIMO Yumi)	地域医療科：教授
	辻田 美紀	(TSUJITA Miki)	麻酔科：准教授
	岡田 克也	(OKADA Katsuya)	消化器外科：講師
	鈴木 孝明	(SUZUKI Takaaki)	小児心臓外科：教授
	高橋 秀寿	(TAKAHASHI Hidetoshi)	運動・呼吸器リハビリテーション科：教授
	小山 政史	(OYAMA Masafumi)	泌尿器腫瘍科：教授
	川井 信孝	(KAWAI Nobutaka)	医療安全管理学：教授
	佐藤 次生	(SATO Tsugumi)	病理診断科：准教授
	黒崎 亮	(KUROSAKI Akira)	婦人科腫瘍科：准教授
	鈴木 海馬	(SUZUKI Kaimea)	脳卒中外科：講師
	山口 央	(YAMAGUCHI Ou)	呼吸器内科：講師
	井上 準	(INOUE Hitoshi)	頭頸部腫瘍科：助教（令和4年9月1日～）
	貫井 麻未	(NUKUI Asami)	乳腺腫瘍科：助教
	齋藤 哲	(SAITO Satoshi)	放射線腫瘍科：助教（～令和4年9月30日）
	龍野 康弘	(RYUNO Yasuhiro)	放射線腫瘍科：助教（令和4年10月1日～）
	近江 光	(OMI Hikari)	救命救急科：助教（専攻医）
	奈良 愛	(NARA Megu)	救命救急科：助教（専攻医）
	赤津 堯之	(AKATSU Takayuki)	心臓血管外科：助教（専攻医）
	田口 裕彦	(TAGUCHI Hirohiko)	看護部：看護師長（～令和4年9月30日）
	吉野 暁子	(YOSHINO Akiko)	看護部：副看護師長（令和4年10月1日～）
	坂本 寿博	(SAKAMOTO Toshihiro)	薬剤部：課長補佐
	五十嵐 利恵子	(IGARASHI Rieko)	中央検査部：係長
	武久 秀夫	(TAKEHISA Hideo)	事務部：部長代行
	松井 幹代	(MATSUI Mikiyo)	事務部：次長
	齋藤 菜子	(SAITO Nako)	臨床研修センター：臨床研修医
	井上 恵輔	(INOUE Keisuke)	臨床研修センター：臨床研修医
事務局	池田 美土里	(IKEDA Midori)	臨床研修センター：係長
	島田 祐里	(SHIMADA Yuri)	臨床研修センター
	伊藤 美香	(ITOU Mika)	臨床研修センター（令和5年1月1日～）

2. 目的・目標

本会は、埼玉医科大学国際医療センター卒後研修運営部会則第2条1項に則り、当院における卒後臨床研修の充実を図ることを目的として設置している。

臨床研修の基本理念では、「臨床研修は、医師が、医師としての人格をかん養し、将来専門とする分野にかかわらず、医学及び医療の果たすべき社会的役割を認識しつつ、一般的な診療において頻繁に関わる負傷又は疾病に適切に対応できるよう、基本的な診療能力を身に付けることのできるものでなければならない」としており、2年間の臨床研修において達成しなければならない到達目標も明確に定められている。

医師として最初の2年間できちんと医師としての人格を養い、且つ基本的な診療能力を身に付けられるように臨床研修プログラム内容を整備し、さらに到達目標が達成できるよう指導・助言を行いながら、充実した研修期間を過ごし、臨床研修を修了できるようにすることが活動目標である。

3. 活動実績

本年度は全12回会議を開催し、審議内容は診療部長会議において報告した。すべての議事録は整備されている。

① 第60回（令和4年4月20日（水）開催）

於：C棟3階プレゼンテーションルーム 出席23人、委任状出席4人、欠席1人

議事：1) 協力型臨床研修病院との相互連携解消の審議

2) 各委員会担当研修医の選考

3) 令和4年度研修医、研修管理委員長並びにプログラム責任者による1年次への面談実施予定、マッチングスケジュール、採用面接日程、臨床研修指導医講習会日程、CC Step3との懇談会予定、病院見学受入並びに予定、研修医カルテ記載に伴う上級医指導更新率、インシデントの報告

② 第61回（令和4年5月18日（水）開催）

於：C棟3階プレゼンテーションルーム 出席22人、委任状出席4人、欠席0人

議事：1) 令和4年度プログラム責任者養成講習会参加候補者、初期研修医採用面接員の選考

- 2) ローテーション変更の審議
 3) 年次報告並びにプログラム変更・新設届出提出、病院見学総括、満足度調査結果、外部説明会参加並びに参加予定、研修医カルテ記載に伴う上級医指導更新率、インシデントの報告
- ③ 第62回(令和4年6月15日(水)開催)
 於:C棟3階プレゼンテーションルーム 出席21人、委任状出席6人、欠席1人
 議事:1) 輸血の認証、研修医の研修日数と公休・年休取得の周知と共有
 2) ローテーション変更の審議
 3) 研修管理委員長並びにプログラム責任者による1年次への面談実施、病院群臨床研修プログラム説明会開催並びに予定、外部説明会参加並びに予定、病院見学受入予定、研修医カルテ記載に伴う上級医指導更新率、インシデントの報告
- ④ 第63回(令和4年7月20日(水)開催)
 於:C棟3階プレゼンテーションルーム 出席19人、委任状出席8人、欠席2人
 議事:1) ローテーション変更の審議
 2) 研修医の医行為と周知方法の検討
 3) 臨床研修指導医講習会受講者の選考
 4) 研修医採用面接応募状況、病院群臨床研修プログラム説明会開催、研修管理委員長並びにプログラム責任者による定期研修医面談実施予定、プログラム責任者養成講習会参加確定、外部説明会参加並びに予定、病院見学受入予定、研修医カルテ記載に伴う上級医指導更新率、インシデントの報告
- ⑤ 第64回(令和4年8月17日(水)メール報告)
 議事:研修医採用試験受験並びに応募状況、基本的臨床能力評価試験シンポジウム参加予定、病院見学受入並びに予定、外部説明会参加の報告
- ⑥ 第65回(令和4年9月21日(水)開催)
 於:C棟3階プレゼンテーションルーム 出席22人、委任状出席2人、欠席5人
 議事:1) 研修医採用試験受験者の可否並びにマッチング登録順位、毛呂山後援会研修医教育助成金予算申請、ローテーション変更の審議
 2) 臨床研修指導医講習会コーディネータの選考
 3) 毛呂山後援会研修医教育助成金使用状況、診療科における研修オリエンテーション並びに研修振り返り実施状況、基本的臨床能力評価試験シンポジウム参加、研修管理委員長並びにプログラム責任者による定期研修医面談結果、研修管理委員会(メール)開催予定、基本的臨床能力評価試験日程変更並びに試験監督決定、研修医カルテ記載に伴う上級医指導更新率、インシデントの報告
- ⑦ 第66回(令和4年10月19日(水)開催)
 於:C棟3階プレゼンテーションルーム 出席18人、委任状出席6人、欠席5人
 議事:1) 臨床研修の理念・基本方針、研修医の医行為の見直し
 2) 研修医マッチング中間公表結果、令和3年度研修医の到達目標達成状況、病院見学総括、満足度調査結果、外部説明会参加予定、臨床研修指導医講習会参加に伴う受講者への事前説明会開催予定、研修医カルテ記載に伴う上級医の指導更新率、インシデントの報告
- ⑧ 第67回(令和4年11月16日(水)開催)
 於:C棟3階プレゼンテーションルーム 出席17人、委任状出席8人、欠席4人
 議事:1) 臨床研修プログラム内容(募集定員、副プログラム責任者の変更、臨床研修病院群の追加・削除、一般外来研修)、研修医の医行為の見直し、剖検参加条件の見直し、ローテーション変更の審議
 2) 研修医マッチング結果、研修管理委員長並びにプログラム責任者による定期研修医面談実施予定、研修医長会議開催予定、研修管理委員会開催予定、専門研修プログラム統括責任者合同会議開催予定、修了認定式開催予定、初期研修医歓迎会開催予定、病院見学受入並びに予定、研修医カルテ記載に伴う上級医の指導更新率、インシデントの報告
- ⑨ 第68回(令和4年12月14日(水)メール報告)
 議事:1) ローテーション変更の審議
 2) 研修医採用予定、臨床研修指導医講習会開催、病院見学受入並びに予定の報告
- ⑩ 第69回(令和5年1月18日(水)開催)
 於:C棟3階プレゼンテーションルーム 出席21人、委任状出席5人、欠席3人
 議事:1) 臨床研修プログラム内容(救急必修)、研修医手帳の見直し、令和5年度オリエンテーション内容の審議
 2) 研修医採用予定、専攻医1次採用予定、令和3年度研修医の到達目標達成状況、第60回埼玉県医学会総会への研修医の参加予定、外部説明会参加予定、病院見学受入並びに予定、研修医カルテ記載に伴う上級医の指導更新率、インシデントの報告
- ⑪ 第70回(令和5年2月15日(水)開催)
 於:C棟3階プレゼンテーションルーム 出席19人、委任状出席8人、欠席2人
 議事:1) 令和4年度研修医2年次ローテーション、臨床研修プログラム内容(協力型臨床研修病院における担当研修分野)、研修医の医行為、研修医寮の貸し出しの審議
 2) 各委員会担当研修医の選考
 3) 専攻医採用予定、研修医採用面接日程及びマッチング順位判定会議日程、令和3年度研修医の到達目標達成状況、赤十字血液センター所長講義開催予定、研修管理委員会開催予定、外部説明会参加、病院見学受入並びに予定、研修医カルテ記載に伴う上級医の指導更新率、インシデントの報告

⑫ 第71回（令和5年3月15日（水）開催）

於：C棟3階プレゼンテーションルーム 出席16人、委任状出席9人、欠席4人

議事：1) 令和3年度採用研修医の研修修了、令和5年度採用研修医1年次ローテーション、令和5年度オリエンテーションの審議

2) 優秀研修医、優秀指導者、優秀上級医、優秀指導医の選考

3) 基本的臨床能力評価試験結果、病院群臨床研修プログラム説明会開催、埼玉県主催医学生臨床研修病院見学バスツアー受入予定、修了認定式開催予定、初期研修医歓迎会開催予定、病院見学受入並びに予定、研修医カルテ記載に伴う上級医の指導更新率、インシデントの報告

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

臨床研修を進めていくうえでの問題点（病歴要約の作成並びに基本手技の自己評価入力遅延、基本手技における指導医評価入力者と評価項目の齟齬等）が浮き彫りになった。

研修医長を中心としたオリエンテーションや振り返りの実施率や研修医による診療科評価結果を会議（診療部長会議、研修医長会議等）で示したこともあり、一部の診療科を除いて、研修開始時のオリエンテーション、終了時の振り返りが定着した。研修医は目標を定めて日々邁進することができ、指導医や上級医、指導者はその達成に向けて後押しができています。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

臨床研修評価システム（EPOC2）上では入力期間の設定ができない。研修最終週に評価入力（自己評価：25日、指導医評価：最終日）が完了するように、引き続き臨床研修センターから入力を促す他、定期面談において研修管理委員長・プログラム責任者より指導を行っていく。

3. キャリア形成支援部門

1. 構成員

- 部門長 三村 俊英 (MIMURA Toshihide) : 大学病院リウマチ膠原病科 : 教授
部門員 小川 智也 (OGAWA Tomonari) : 総合医療センター腎臓内科 : 教授 (令和4年4月1日より)
部門員 岩永 史郎 (IWANAGA Shiro) : 国際医療センター心臓内科 : 教授
部門員 坂口 浩三 (SAKAGUCHI Hirozo) : 国際医療センター呼吸器外科 : 准教授
部門員 山元 敏正 (YAMAMOTO Toshimasa) : 大学病院神経内科 : 教授 (令和2年8月1日より)
部門員 名越 澄子 (NAGOSHI Sumiko) : 総合医療センター消化器肝臓内科 : 教授

2. 目的・目標

本センターキャリア形成支援部門は、医療人育成支援センター運営規程第4条に則り、置かれるもので以下の事項を目的とする。

- 1) 当部門においては、卒前から卒後にかけて、そして初期臨床研修から後期臨床研修に亘り、さらに生涯教育に至るまでの、医療人のキャリア形成をサポートする。
- 2) 専門医制度に対する3病院の取り組みを支援する。
- 3) 若手医師や医学部学生に対して、キャリアの積み方、産業界講習会情報、およびどこの病院で専門医が取得出来るかなどの情報を提供する。
- 4) 埼玉県内の多くの病院やその他医療機関の医師募集情報などを伝える。
- 5) 将来の医師像を思い描く上での支援を行う。

3. 活動実績

- 1) 臨床研修指導医講習会の開催
- 2) 専門医制度に向けた周知の徹底、HP改善
- 3) UpToDateの更新およびその準備
- 4) 研修医海外派遣制度の推進

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

専門医制度の周知を図るため大学HPのさらなる改善を目指し、前年度の情報として募集方法や時期などを参考情報としてHPに記載するように改めた。

研修医海外派遣制度は、今年度も新型コロナウイルス感染の世界的拡大に歯止めがかからない状況で具体的な応募はなく、事実上中断されている。

本学の専攻医プログラムの説明と募集の情報発信を兼ねる「若き卒業生の集い」は、前年度に続き今年度も新型コロナウイルス感染拡大のため中止せざるを得なかった。それに代わって、本学出身者で学外にて臨床研修中の卒後2年目医師に3病院の専門研修プログラムの情報を郵送した。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

今年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響が大きい1年であった。専門研修制度の情報発信を進めたが、相変わらず専門医機構からの情報発信が遅く、来年度も本年度の募集時期を参考情報としてHPに記載するようにする。さらに、次年度にも3病院の専門研修プログラムの情報を本学出身者で学外にて臨床研修中の医師に郵便などを用いて周知する。外部企業による専門プログラム説明会(レジナビ)に病院群として出展して情報発信に努める。

4. 生涯学習部門

1. 構成員

部門長 稲葉宗通 (INABA, Munemichi) : 埼玉医科大学病院内分泌・糖尿病内科 : 客員教授

部門員 杉山 聡 (SUGIYAMA, Satoru) : 埼玉医科大学総合医療センター救命救急センター : 名誉教授
: 東松山市立市民病院 : 病院事業管理者

伊藤彰紀 (ITOH, Akinori) : 埼玉医科大学病院耳鼻咽喉科 (神経耳科) : 客員教授、名誉教授

鈴木将夫 (SUZUKI, Masao) : ゆずの木台クリニック : 院長

2. 目的・目標

近年医学の進歩はめざましく、医師は常に最新の知識、技術、態度の習得とその深化に努めなければならない。その習得手段として各学会への出席や講演会への出席、インターネットなどの講演会等の配信など様々で多様である。その主催者は各専門学会や各地域医師会であったり、製薬メーカー主催であったり医療情報配信会社であったりする。さらに学内においては各専門分野の講演会や若手医師の技術習得のためのシミュレーション実習など学ぶ機会が多く設けられている。しかしながら実地臨床医家にとって決して出席機会は多くなく、必要とする内容が必ずしも得られるとは限らない。特に技術の習得機会は少ない。

そこで、生涯学習部門では同窓会と連携して、広く学内の医療者のみならず全国の卒業生に対して、各自が必要とする学習内容を生涯に渡り継続学習できるようになるために、他部門と協力して学習しやすい環境の整備と機会を設ける。

3. 活動実績

- 1、埼玉医科大学医師会と医学部同窓会との共催にて、例年行っている産業医講習会を9月に2日間開催した。当初新型コロナウイルス感染症の拡大により中止になる事も危ぶまれたが、人数を制限し感染対策を充分行うことで実施することが出来た。参加者は、参加することにより産業医の取得あるいは更新に必要な単位14単位が取得できた。
- 2、医学部同窓会の支部総会に同窓会役員や学内に残る教員を派遣し、講演を通して大学の現状や専門領域の知識などを学ぶ機会を設けたが、新型コロナウイルス感染症拡大によりその機会は得られなかった。
- 3、卒業生の教授就任講演会を通して最新の知識を得る機会の開催を計画したが、新型コロナウイルス感染症のために延期となった。
- 4、長年懸案になってイルマンモグラフィ読影講習会の開催はコロナ禍のため準備にも至らなかった。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

今年度は、当部門の活動方針は従来から行ってきた内容と同様であったが、新型コロナウイルス感染症拡大のため多くの学習機会が中止となったのは残念であった。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

次年度は、本年度同様に産業医講習会の開催を始めとして活動予定である。さらに他部門との連携、学部間での連携、また学内、病院群との連携にも重点をおき活動していきたい。特に現在計画中の国際医療センターの協力のもとでマンモグラフィ読影講習会の開催を実現させたい。また卒業生とくに大学を離れた卒業生のためにも、卒業後のいま何を学びたいかを知ることも重要課題として検討していきたい。

この3年間で新型コロナウイルス感染症に伴い在宅でのインターネット環境が整備されてきたこともあり、各種講演会などの画像配信を行う事も検討していきたい。

5. 女性医師支援部門

1. 構成員

- 部門長 名越澄子 (NAGOSHI, Sumiko) : 総合医療センター消化器・肝臓内科 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)
- 委員 柴崎智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 埼玉医科大学社会医学 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)
- 高田栄子 (TAKADA, Eiko) : 総合医療センター小児科 : 講師 (任期 : R4. 3. 31)
- 真下由美 (MASHIMO, Yumi) : 国際医療センター消化器内科 : 准教授 (任期 : R4. 3. 31)
- 堀江公仁子 (HORIE, Kuniko) : ゲノム医学研究センター遺伝子情報制御部門 : 教授 (任期 : R4. 3. 31)

2. 目的・目標

本部門は、学校法人埼玉医科大学委員会運営規程第4条2項①に則り、埼玉医科大学、埼玉医科大学病院、総合医療センター、国際医療センター、ゲノム医学研究センターにおいて、女性医師のキャリア形成・維持・向上を支援することを目的とする。今年度は、女性医師就業継続支援窓口の相談件数を増やし、女性医師の就業の継続と復職を支援することを目標として活動した。

3. 活動実績

1) 医療人育成支援センター運営会議出席

2) 女性医師就業継続支援窓口

令和4年度の相談はなかった。

3) 埼玉県医師会との協働

例年、越華祭で開催されていた「医学生、研修医等をサポートするための会」(埼玉県医師会主催、埼玉医科大学・日本医師会共催)は新型コロナウイルス感染症蔓延のため開催できなかったが、令和4年12月22日に埼玉県医師会の女性医師支援委員会主催の働き方講演会に地域枠奨学生5名が参加し、フリーディスカッションが行われた。また、令和5年3月24日の地域枠奨学生1年生を主な対象とした学習会で、埼玉県医師会女性医師支援センターの女性医師による同センターの活動についての講演が行われた。

4) 働く女性医師応援プロジェクト

大学病院産婦人科の高橋幸子先生を中心とした「働く女性医師応援プロジェクト」で作成したポスターを3病院的臨床研修センター内研修医用掲示板に掲示した。埼玉県臨床研修病院ガイドブック2023の大学病院の女性医師支援コーナーにも同ポスターの一部を掲載し、女性研修医が産婦人科の受診を希望する場合に気軽に受診できるようなサポートが始まったことを周知した。令和4年度の相談は1件であった。また、日本婦人科腫瘍学会によるHPVワクチン接種および子宮頸がん検診の重要性を周知する目的のポスターも研修医用掲示板に掲載された。

5) 彩の国女性研究者ネットワーク

埼玉大学主催の彩の国女性研究者ネットワークのホームページのバナーを、埼玉医科大学地域医学推進センターのホームページに作成した。彩の国女性研究者ネットワーク主催・埼玉大学共催の第6回彩の国女性研究者ネットワークシンポジウムが令和4年11月18日に開催され、柴崎智美先生が第1部「医師を目指す若者の研究マインドの育成」で講演とパネルディスカッションに参加した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

今年度の女性医師就業継続支援窓口の相談はなく、「医学生、研修医等をサポートするための会」も開催できなかったが、「働く女性医師応援プロジェクト」は女性医師からの相談もあり、一定の成果が挙げられた。彩の国女性研究者ネットワークが主催するシンポジウムに本学からも積極的に参加し、本学の研究活動について県内女性・若手研究者向けに発信できたことは評価できる。

4-2. 今年度の自己点検・評価結果に基づく改善計画

これらを踏まえて、次年度こそ「医学生、研修医等をサポートするための会」を講演会と懇談会の形式で開催することを目標に掲げ、学生部委員会と連携を取り、埼玉県医師会とも十分に相談し準備を進める。また、「働く女性医師応援プロジェクト」など本学における女性医師支援の活動を本学学生に周知する活動を行っていく。

6. シミュレーション教育部門

1. 構成員

部門長 辻 美隆(TSUJI, Yoshitaka) : 保健医療学部共通教育部門, 医学教育センター, 総合医療センター消化管・一般外科, 大学病院消化器一般外科: 教授 (任期: R5. 3. 31)

部門員 北脇丈博(KITAWAKI, Takehiro) : 医療人育成支援センター川越ブランチ, 医学教育センター川越ブランチ: 助教

2. 目的・目標

医療人育成支援センター シミュレーション教育部門は、スキルスラボを活用した卒前・卒後から生涯教育にわたる各種シミュレーション教育を企画・運営することを目的に発足した。

医療の現場での技能修得は、旧来、もっぱら指導者・先輩の技能を観て真似するといった職人教育が中心であったが、近年ではシミュレータ等を用いた学修者・研修者主体の能動的なものへと変化してきた。本学でも、新臨床研修制度発足に合わせ2004年、スキルスラボが開設され、卒前・卒後の技能教育に活用されてきたが、平成元年9月に完成したカタロスタワー内にシミュレーショントレーニングセンターが設置され、従来のスキルスラボ機能に加え、模擬病室など、より実践的なトレーニングの場を提供できるようになった。

医療人育成支援センター シミュレーション教育部門では、このシミュレーショントレーニングセンターを活用した初期研修、後期研修、チーム医療、復職支援等に関する各種講習会や実践セミナー等を医学教育センター シミュレーション教育部門と協力し、企画、実施・運営する。

3. 活動実績

- ①大学病院初期臨床研修医の導入研修の一環としての基本的臨床手技のトレーニングおよび人工呼吸器の使い方の演習を実施した。
- ②医学教育センターと共催の実践セミナー「腹部超音波検査・消化器内視鏡検査の基本と実践」が1埼玉医科大学病院群3病院の研修医を対象に1件開催された。受講者は7名、指導者・スタッフは8名であった。開催日: 令和4年11月5日。
- ③その他の講習会の開催状況: 日本救急医学会認定BLS講習会17件・同更新コース22件、ICLS講習会8件、新生児蘇生法(A)講習会3件・同更新コース1件、日本内科学会認定内科救急ICLS講習会(JMECC)3件、新入職の研修医・看護師およびその他の医療職・事務職員を対象とした日本救急医学会認定大規模BLS講習会を4件実施した。例年実施されている小児BLS講習会、AHA認定BLS講習会、ICLS指導者養成ワークショップはCOVID-19の影響で開催されなかった。
- ④研修医や専攻医向けなどの各種トレーニングが44件実施された。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

- 1) COVID-19感染状況の影響で、AHA認定BLS講習会、ICLS指導者養成ワークショップなどが実施できなかった。
- 2) 各診療科による少人数での研修医トレーニング、内科専攻医トレーニングなどの継続利用等により、利用人数、利用件数ともに昨年度より増加した。
- 3) その他の講習会も対象者を学内関係者に限定し、参加者数を抑え、十分な感染対策を講じて実施した。
- 4) 令和4年度文部科学省「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」の一環として「ポストコロナ時代の地域感染症対応人材養成プログラム」が開始され、模擬病室での遠隔医療面接、診察、検体採取等を含む症例ベースのシミュレーション診療トレーニングを行った。
- 5) 令和2年度文部科学省「感染症医療人材養成事業」によるシミュレータ等を適宜活用することができ、とくに、産婦人科の研修医・学生教育、保健医療学部看護学科・短期大学の母性看護学での活用は有意義であった。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

- 1) COVID-19感染状況に応じ、各種講習会やセミナーに加え、生涯教育部門、女性医師部門と協力し、復職支援トレーニング等を企画する。
- 2) 令和2年度「感染症医療人材養成事業」令和4年度「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」でのシミュレータ等の整備に加え、令和4年度「医学部等教育・働き方改革支援事業」よりシミュレーショントレーニングセンターの各室にビデオ収録システムが整備されることになった。それらを活用し、学生教育・OSCEや職員のキャリアアップに貢献できるような研修等を、関係部署と協力し計画する。
- 3) 学内・外を対象とした主催もしくは共催の各種セミナー・講習会の開催を促進し、定期開催に向けて支援を継続する。
- 4) 模擬病室を活用し、シナリオベースドトレーニングによる多職種連携教育を企画・実施する。

7. 地域医学推進センター

1. 構成員

- センター長 柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育学 : 教授 (任期 : R6. 3. 31)
高橋 幸子 (TAKAHASHI, Sachiko) : 専任助教 (任期 : R6. 3. 31)
本橋 千恵美 (MOTOHASHI, Chiemi) : 社会医学 : 特任准教授 (任期 : R6. 3. 31)
富永 信子 (TOMINAGA, Nobuko) : 実験動物施設 : 助教 (任期 : R6. 3. 31)
植村 真喜子 (UEMURA, Makiko) : 社会医学 : 助手 (任期 : R6. 3. 31)
長島 公子 (NAGASHIMA, Kimiko) : 医学教育センター : 事務員 (任期 : R6. 3. 31)
鴫田 隆 (TOKITA, Takashi) : 事務員 (任期 : R6. 3. 31)

2. 目的・目標

目的 ; 医療人育成支援センター規程第4条、第7条に則り、地域貢献活動における外部との窓口となり、地域社会と連携し、本学における教育内容の充実を図るとともに、地域活性化・地域課題の解決への取り組み、公開講座、ボランティア等に関する業務を行う。

目標 ; 地域と連携した地域医療教育の充実、地域の様々な場面での教育支援、地域の健康増進対策に取り組むとともに、彩の国連携力育成プロジェクトを通して、埼玉県の子学生、専門職の連携力の育成・向上を図る。

3. 活動実績

① 彩の国連携力育成プロジェクト (SAIPE)

平成24～28年度に実施した文部科学省大学間連携共同教育推進事業、彩の国連携力育成プロジェクトは補助事業終了後も、埼玉県、埼玉県立大学、城西大学、日本工業大学、本学の5者で協定を締結し、学部教育としての彩の国連携科目の運営と現場の専門職の連携力育成のための事業に取り組んでいる。

彩の国連携科目は、本学では、1～4年良医への道コース地域医療とチーム医療ユニット、1年～2年良医への道コース臨床入門ユニット、臨床実習コース導入クリニカルクラークシップ1-2、2-1ユニット内で、5科目を運営した。IPW実習に関しては、県内の実習施設とを遠隔でつなぎ、医学部4年生29名が埼玉県立大学の学生とともに実習に参加した。現場の専門職の連携力育成の取り組みとして、令和4年11月6日に緩和医療多職種連携研修会をWeb会議システムを使用して開催した。令和4年5月19日と12月8日には埼玉県内職能団体との意見交換会をWeb会議システムで開催し、埼玉県医師会、歯科医師会、薬剤師会、看護協会、理学療法士会、社会福祉士会、介護支援専門員協会、栄養士会、公認心理師協会の専門職能団体に加え建築家にも参加いただき、埼玉県担当者を含めて、連携力育成についての情報交換、課題の共有、今後の方針の検討を行った。埼玉県立大学主催のWeb会議システムを使用したIPW総合課程についても共催し、ファシリテータとして協力した。また、令和4年4月、6月、8月、10月、12月、令和5年2月には現場の専門職と気軽に意見交換する機会として、Web会議システムを利用したIPWカフェを開催した。本事業の内容により、医学教育学の大学院生である医学教育センター金田光平助教が、学位(医学博士)を取得した。

② 埼玉医科大学感染症GISシステムの運用

近隣の小中学校の出席停止を報告する埼玉医科大学感染症情報収集システムを運用し、学校感染症の流行の動向を把握し毎週フィードバックする取り組みを継続している。新型コロナウイルス感染症の情報を週報として還元した。

③ 埼玉県がん検診統一集計結果報告書受託事業

「令和3年度がん検診結果統一集計結果報告」事業を受託し、県内がん検診受診の状況をまとめた報告書の作成、市町村担当者への研修講師、埼玉県生活習慣病検診管理指導協議会に参加するなど、埼玉県のがん検診の精度管理に取り組んだ。

④ 性教育活動・彩の国思春期研究会

専任教員の高橋幸子助教は、埼玉県内小中学校、高等学校、一般向け性教育講演会を合計120件行った。埼玉県産婦人科医会内の性教育委員会において、外部講師用の性教育共通スライドを作成し、産婦人科医の講演を全県的に開始することができた。女子栄養大学のサークルたんぼぼとHPVワクチンfor Meの活動を行い、HPVワクチン未接種者へのキャッチアップ接種を求める署名を集め厚生労働大臣に提出した結果、2022年4月よりキャッチアップ接種が開始となった。NHK性教育ドラマ「生理のおじさんとその娘」の医療監修を行う他、①ラジオ保健室10代の性悩み相談BOOK NHK出版、②365日機嫌のいいカラダでいたい 及川夕子著 Discovery21、③思春期の子どもたちに「性の学び」を届けたい！実践包括的性教育 樋上典子ら著 エイデル出版、④性の絵本 せいってなーんだ たきれい著、KADOKAWA、⑤はたらく細胞 Lady 10代女子が知っておきたい性の新知識 及川夕子著の医療監修を行った。また、①Q&A で学ぶジェネラリス

トのための女性診療 BASIC 編著井上真智子金芳堂、②ステップアップ思春期の診かた 中山明子ら編著 金芳堂の分担執筆を行った。

令和3年度厚生労働科学研究費補助金（女性の健康の包括的支援政策研究事業）「保健・医療・教育機関・産業等における女性の健康支援のための研究」研究班によりユネスコ国際セクシュアリティ教育ガイダンスに基づく包括的性教育プログラムの開発（荒田尚子）に分担者として関わり「まなBOOK2・3・4」を制作し、私立女子中学・高校で実証事業を行った。

⑤ その他

地域との連携では、毛呂山町教育委員会いじめ対策推進委員会、毛呂山町学校運営協議会、埼玉県がん対策推進委員会、がん教育部会等の委員や彩の国「新しい生活様式協議会」委員を通して地域の課題解決に取り組んだ。性教育活動に関しては、高橋助教が、埼玉県産婦人科医会性教育委員会委員、同性暴力対策委員会委員となり埼玉県の性教育の推進に取り組んだ。厚生労働省「健やか親子21（第2次）」幹事会構成員として活動を行った。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

彩の国連携力育成プロジェクトについては、①遠隔でのIPW実習に学内実習も含めて、埼玉県地域枠学生全員が埼玉県立大学とのIPW実習に参加した。連携実践のための評価指標の開発に取り組んだ。②職能団体との意見交換会を2回遠隔で実施し、ともに取り組む事業について検討を深めた。③本事業の成果として、IPW実習を学生時代に履修した卒業生が学位（医学博士）を取得したことは、本事業の成果とも考えられる。

地域課題の解決のための活動として①埼玉県がん検診統一集計結果報告書を引き続き作成した。②がん検診の過去のデータの分析は実施できなかった。③性教育、がん教育、いのちの教育など学校教育に対する専門的な支援を継続実施した。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、これらのニーズの高まりが見られ、全国でも専門家が少ない領域で精力的に活動を行った。④埼玉県、日本全国で、思春期をはじめとする女性の健康に関する支援活動を継続して実施した。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

次年度は、彩の国連携力育成プロジェクトについては、①学部教育の継続②職能団体との意見交換会の継続、現場の専門職の連携力向上のための取り組みの強化と、新たな連携実践のための評価尺度の開発を行う。地域課題の解決のための活動として②埼玉県がん検診統一集計結果報告書を受託し、市町村のがん検診受診率対策、精度管理に貢献する。③性教育、がん教育、生命（いのち）の安全教育、など学校教育に対する専門的な支援の継続、④埼玉県、日本全国で思春期をはじめとする女性の健康に関する支援活動、ユースクリニックなどを更に推進する。

8. 地域枠奨学金部門

1. 構成員

- 部門長 林 健 (HAYASHI, Takeshi) : 国際医療センター病院診療科 : 教授 (任期 : R5.3.31)
部門員 山元 敏正 (YAMAMOTO, Toshimasa) : 大学病院脳神経内科 : 教授 (任期 : R5.3.31)
部門員 高橋 健夫 (TAKAHASHI, Takeo) : 総合医療センター放射線腫瘍科 : 教授 (任期 : R5.3.31)
部門員 柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 医学教育学 : 教授 (任期 : R5.3.31)

2. 目的・目標

目的 ; 埼玉医科大学医療人育成支援センター規定および埼玉医科大学埼玉県地域枠医学生奨学金運営委員会規則に則り、埼玉県地域枠医学生奨学金受給医学生および卒業生の地域医療教育、卒後教育に貢献する。

目標 ; 地域枠医学生が埼玉県の地域医療に貢献し (=県内定着)、それぞれのキャリア形成に支障を生じないように環境整備を行う (=専門医取得等)。

3. 活動実績

- ①地域枠奨学生 1 年次学生に対する奨学金貸与制度の説明
 - ・ 5 月 20 日に教員および埼玉県医療人材課担当者による制度の説明会を行った。
- ②地域枠奨学生希望者との個別面談
 - ・ 教員による地域枠奨学生とキャリア形成相談を行った。2022 年度は希望する 5 名の地域枠奨学生と個別面談を行った。
- ③初期研修中の地域枠奨学生への制度説明と進路相談
 - ・ 研修 2 年目の地域枠奨学生への制度説明と進路相談を行った。
- ④専門研修中の地域枠卒業生の進路調査と専門医取得の相談
 - ・ 専門研修中の地域枠奨学生の指定地域医療機関勤務のための仲介を行った。具体的には、済生会加須病院や深谷赤十字病院への地域枠卒業生の専攻医受け入れの調整を行った。
- ⑤地域枠制度の全体説明会と懇談会
 - ・ 12 月 3 日に、全学年学生を対象とした、地域枠制度の全体説明会を開催した (Zoom 開催)。
- ⑥地域枠医学生の県知事表敬訪問
 - ・ 12 月 26 日に、地域枠奨学生 1 年次学生の県知事訪問を行った。
- ⑦その他会議等
 - ・ 9 月 10 日の医学教育フォーラムで、地域枠医学生の教育について報告した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

- ①制度の理解と地域医療への貢献意欲は改善できてきていると考えている。また、地域枠医師の先輩・後輩の一体感についても、少しずつ醸成できてきている。
- ②指定地域医療機関との連携の拡充については、一部の医療機関ではできている。多くの基本領域で専門研修施設として認定されていない施設 (小鹿野中央病院、秩父市立病院) には限界もあるが、従来比較的關係の乏しかった済生会加須病院との連携実績はできてきている。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

- ①地域枠卒業生を対象とした専門研修プログラム作成
指定地域医療機関勤務と専門医取得等のキャリア形成とが両立できるよう、各基本領域プログラムに地域枠卒業生のためのコースを作成いただくように働きかける。そのためには、指定地域医療機関との連携をより拡充していくことが望まれる。
- ②指定地域医療機関との連携の拡充
専門研修を指定地域医療機関と連携して行えるよう、プログラム責任者と連携施設責任者の間に入って関係を構築する。特に今まで関係性が希薄であった医療機関に働きかけていく。
- ③地域枠奨学生卒前学生の地域医療教育の拡充
地域医学推進室と協力して、卒前学生への個別面談を充実させていく。

9. 基礎医学部門

1. 構成員

部門長 村上 孝 (MURAKAMI Takashi) : 医学部微生物学 : 教授 (任期 : R5.3.31)

2. 目的・目標

本センター基礎医学部門は、医療人育成支援センター規定に則り、本学と地域医療を含む社会貢献に資する医学研究・基礎医学に従事する医療人の育成を推進し、その支援を図ることを目的とする。卒前・卒後教育を通じて基礎医学領域で活躍する医療人のキャリア形成に向けた支援と企画実施を行い、その体制整備に努める。

3. 活動実績

- 1) 入学後早期の医学部1年生を対象に研究マインド醸成(教員による30分程度のセミナー)の催しを企画、実施した。
- 2) 本学で研究医養成プログラムを履修した卒業生(令和2-3年度国試合格者)に対してリクルート案内を送付した。
- 3) 令和5(2023)年度埼玉医科大学基礎研修医プログラム申込に関する対応を行った。
- 4) 第3回「オール埼玉医大研究の日」(R4年11月5日)の休憩時間に3病院研修医のPR動画放映を企画・実施した。
- 5) 研究医養成プログラム応募対象となる医学部2年生にZoom説明会(R4年11月22日)を企画・実施した。モデルとなる先輩に体験談や質問コーナーを設けた。
- 6) 医学研究による社会貢献の意義を浸透させるため、卒前教育として学生の研究室配属の実現に向けて検討を開始した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価

当該部門はR4(2022)年度に新設されたため前年度の活動実績はない。初年度としては主に卒前教育における研究マインド醸成と卒後教育への橋渡しとしての研究医養成にかかわる活動を行った。現時点では卒前教育として学生の研究室配属の制度が整っていないため、研究を含めた学術活動が社会貢献という意識が薄い印象がある。また「オール埼玉医大研究の日」への卒後の先輩医療人の参加数が限られていることから、それらモデルケースとなる学術活動も伝わりにくい環境にあることが推察された。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

優れた医療人として研究活動や研究協力を通じて社会が豊かになることや学術活動による社会貢献の意識改革の機会を増やしていく必要がある。研究教育の一環として学生の研究室配属の実施を各所関連委員会と協力しながら検討を進め、部分的な実施環境の整備を進めながら卒後教育における上記事態の改善を試みる。

1. リサーチアドミニストレーションセンター

1. 構成員

センター長	松下 祥 (MATSUSHITA, Sho) : 副学長・センター長(～R4. 7. 31) 千本松 孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : 教授, シニアUR A (R4. 8. 1～)
副センター長	千本松 孝明 (SENBONMATSU, Takaaki) : 教授, シニアUR A (～R4. 7. 31)
顧問	棚橋 紀夫 (TANAHASHI, Norio) : 専務理事・RA センター顧問 小林 国彦 (KOBAYASI, Kunihiro) : 国際医療センター呼吸器内科・教授, シニアUR A 前田 智也 (MAEDA, Tomoya) : 国際医療センター造血管腫瘍科・准教授 (R4. 2. 1～) 菅原 哲雄 (SUGAHARA, Tetuo) : 講師、産学連携コーディネーター 佐藤 勝茂 (SATO, Katsushige) : 課長 浅見 文子 (ASAMI, Ayako) : 課長補佐 小野寺 晴美 (ONODERA, Harumi) : 係長 仲村 由紀子 (NAKAMURA, Yukiko) : 主任 (R4. 7. 1～) 福永 由佳 (FUKUNAGA, Yuka) : 課員 長田 佐絵 (NAGATA, Sae) : 課員 宿谷 学 (SYUKUYA, Manabu) : 課員 中島 奈月 (NAKAJIMA, Natsuki) : 課員 石川 友美 (ISHIKAWA, Tomomi) : 課員 大野 洋一 (OHNO, Youichi) : 客員教授, 統計アドバイザー 川崎 洋平 (KAWASAKI, Youhei) : 客員准教授, 統計アドバイザー 仕子 優樹 (SHIKO, Yuki) : 非常勤講師, 統計解析アドバイザー補助 豊田 浩一 (TOYODA, Kouichi) : 非常勤講師, 産学官連携アドバイザー 林 利藏 (HAYASHI, Toshizou) : 非常勤講師, 知財アドバイザー 川口 勉 (KAWAGUCHI, Tsutomu) : 非常勤講師, シニアUR A 山田 基司 (YAMADA, Motoshi) : 弁護士, 法律アドバイザー・非常勤講師 久保田晴久 (KUBOTA, Haruhisa) : 客員教授
兼務者 (特定臨床研究推進センター)	古木 一成 (FURUKI, Kazunari) : 大学病院臨床研究センター 原井 賢秀 (HARAI, Satohide) : 総合医療センター臨床研究支援センター 石井 正幸 (ISHII, Masayuki) : 国際医療センター臨床研究適正推進センター

2. 目的・目標

リサーチアドミニストレーションセンターは、国が定める「公的研究費の管理・監査のガイドライン」「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」が求める研究費適正使用・不正使用防止、研究不正行為防止対策の取組み、研究倫理教育・コンプライアンス推進責任体制の整備と研究活動の推進を目的に、平成 27 年 4 月に法人部門の組織として設置された。さらに大学の責務として基礎研究および臨床研究による多大な成果を社会へ還元していくため、研究活動を倫理的かつ科学的に適正なものとし、競争的資金獲得や産学官連携の積極的な推進が任務である。その活動は、学校法人埼玉医科大学リサーチアドミニストレーションセンター規程 第 2 条に定める業務を所管する。

- (1) 医学研究に係る諸規程等の整備その他医学研究の管理に関すること。
- (2) 埼玉医科大学倫理審査委員会に関すること。
- (3) 認定臨床研究審査委員会に関すること。
- (4) 埼玉医科大学COI管理委員会に関すること。
- (5) 研究不正の防止に関すること。
- (6) 研究費の適正使用に関すること。
- (7) 研究費の獲得に関すること。
- (8) 医学研究に係る診療組織との連携に関すること。
- (9) 医学研究に係る教育及びモニタリングに関すること。
- (10) 知的財産の管理に関すること。

- (11) リサーチパークに関すること。
- (12) 外国為替及び外国貿易法(昭和24年法律第228号)の適用を受ける研究用貨物及び技術に関すること。
- (13) その他医学研究等の推進及び管理に関すること。

3. 活動実績

3-1 RAセンター運営に関する事項

- 1) 新型コロナウイルス感染拡大による研究活動への影響を最小限に抑え、事業の継続を担保するために感染防止措置に引き続き取り組んだ。
- 2) RAセンターが担当する喫緊の課題、運営方針、年間スケジュールの確認を行い、職員のキャリアアップと情報収集のためにWEBセミナー等に参加した。
- 3) RAセンター運営会議(8月休会)を毎月開催し、研究公正の促進と産学官連携に取り組んだ。
- 4) RAセンター学内ホームページを更新、情報発信を強化した。
- 5) リサーチパークの利用拡大について検討すると共に、新規企業の利用開始、利用終了企業に対応した。
- 6) 私立医科大学協会 研究推進事務研究会の運営委員長及び正幹事校として委員会運営を担った。
- 7) 今後の基礎研究・臨床研究の支援体制の強化について検討を行った。
- 8) 諸規程の整備
次の規程・規則等の改正を行った。
 - ・ 研究倫理教育および競争的資金の管理監査の学内責任体制 改正(R4.5月)
 - ・ 学校法人埼玉医科大学臨床研究審査委員会規則 改正(R4.5月)
 - ・ 学校法人埼玉医科大学安全保障輸出管理規則 改正(R5.3月)
 - ・ 学校法人埼玉医科大学利益相反管理規程 改正(R5.3月)
 - ・ 学校法人埼玉医科大学利益相反マネジメントポリシー 改正(R5.3月)(内規)
 - ・ 埼玉医科大学クロスアポイントメント制度に関する要綱(新規R4.9月)
 - ・ 埼玉医科大学共同研究・受託研究取扱要綱(新規R4.9月)

3-2 公的研究費の獲得と研究公正の取り組みについて

- 1) 公的研究費の獲得について
 - ・ 医学研究センターと共催で「2022年度科研費 研究計画調書の書き方に関する講習会(ウェビナー)」を8月に開催し、当日に参加できない研究者対応としてYouTube限定配信を行った。また、科研費アドバイザーのコメント実例集、計画調書作成のためのヒント集・チェックリストなどのコンテンツをホームページで公開し、科研費応募の一助とした。
 - ・ 科学研究費公募に関する情報を周知し、新規公募申請が153件(前年度比▲29件)であった。
 - ・ 令和2年度から医学研究センターと連携し、経験豊かな教員の協力のもと、科研費アドバイザー制度を実施している。次年度応募にむけ科研費アドバイザー制度を利用した課題はのべ63件であり、そのうち14件が採択された。
- 2) 研究費の適正使用に関する事項
 - ・ 公的研究費に関する業務は年々処理量が増大している。かつ、複雑化・専門化の傾向にあり、3キャンパス間の業務標準化も喫緊の課題である。間接経費にて雇用した研究補助者にも、必要な教育を継続的に実施した。また、障害者雇用枠による非常勤職員の採用により、常勤職員が研究者支援に力を注げる体制の構築を進めた。
 - ・ 発注申請から支払申請までの紙伝票による処理をDigitalization化して効率化することを目的に、情報収集および検討を継続し、令和4年10月に法人が設置した管理業務DX推進WGに合流した。
 - ・ 「公的研究費の管理・監査のガイドライン」に基づき、「公的研究に係るコンプライアンス教育」をeラーニング形式により実施した。(R4.7月~12月)。対象者1,057名、受講者1,035名、受講率98%であった。未受講の研究者は公的研究費の応募資格を停止し、最終受講率は100%である。
 - ・ 研究公正に関するガバナンス強化のために、RAセンター事業計画書(3月理事会)・事業報告書等(5月理事会)を理事会資料(回覧)とし、学長から報告いただいた。
 - ・ 研究公正に関する構成員の意識向上及び不正が発生しない組織風土醸成のため、学長メッセージを配信してHPにも公開した。
 - ・ 内部監査室との定例会議を年4回開催し、公的研究費に関する通常監査、特別監査、リスクアプローチ監査およびRAセンター業務監査の実施に協力した。また今年度の監査結果及び監事を交えた三者会議の意見を反映した内容で、令和5年度監査計画の策定に協力した。

- ・ 文部科学省「公的研究費の管理・監査のガイドライン」の改訂に対応するための体制を整備し、体制整備等自己評価チェックリストを文部科学省および厚生労働省へ提出した。
- ・ 3)研究活動の不正行為防止に関する事項
- ・ 米国研究公正局へ本学の2022年研究不正防止体制および不正事案が無いことについて報告した。(R5.3月)
- ・ ラボノートの整備と保管状況に関する通知、論文プレプリント公開に関する注意喚起、文部科学省が公表した研究費不正・研究不正事案に関する資料配付など、研究公正に関する啓発活動に取り組んだ。
- ・ 医学研究センター管理の論文剽窃確認ソフト、研究画像不正防止ソフトの運営を支援した。
- ・ 文部科学省の「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」改訂に対応した体制を整備して取り組み状況に係わる自己評価チェックリストを提出した。
- ・ コンプライアンス教育(倫理教育含む)及び啓発活動実施計画を策定して実行した。
- ・ 各IRBと協議し、倫理審査申請時の必須教育として、APRIN及び臨床研究ICR-web eラーニングの履修管理を行った。
- ・ JST、AMED及びMedU-net等が開催する研究不正防止に関する研修会に参加し、効果的な教育の実施などに関する情報収集を行い学内に周知した。
- ・ 文部科学省科学研究費助成事業実地検査(11/15)に対応した。

3-3. 健全な研究活動の保持について

1) 倫理審査委員会の開催と支援

- ・ 大学倫理審査委員会を全11回開催し、新規27件、変更審査4件、再審査5件、迅速・報告等51件 合計87件、審査意見業務を行った。
- ・ 中央倫理審査委員会を全8回開催し、継続審査1件、変更審査5件、重篤な有害事象報告2件、実施状況報告2件、迅速・報告等3件 合計13件、審査意見業務を行った。
- ・ ヒトES細胞の使用する研究実施の変更申請1件、ヒトES細胞の樹立の胚提供に関する変更申請1件について、ヒト幹細胞研究審査専門部会で迅速審査し、倫理審査委員会に報告した。
- ・ 3病院IRBとの情報共有を目的に、倫理審査委員会連絡協議会を10月に開催した。主に統合倫理審査申請システム運用、倫理指針改訂対応について協議した。このほか事務局メール会議により統合倫理審査申請システムの運用改善を検討した。
- ・ 改正個人情報保護法に伴い「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」が改正された。各種研修会に参加、情報収集し、3病院IRBへ情報共有した。

2) 臨床研究法および再生医療等法への対応について

- ・ 小林教授を委員長として臨床研究審査委員会を年11回開催した。
- ・ 学内外からの臨床研究審査依頼 新規1件、継続審査2件、変更審査27件、報告等41件 合計71件、審査意見業務を行った。
- ・ 臨床研究法施行規則改正に対応するため、各種研修会へ参加し、情報収集を行った。

3) 利益相反状態等の把握・管理支援

- ・ 大学COI管理委員会を計4回開催し、経済的な利益相反管理143件、責務相反120件を審査した。
- ・ 利益相反Web申告システムを令和4年3月から本稼働し、大学、大学病院、総合医療センターがシステムによる自己申告に移行した。なお国際医療センターは現行の申告による調整のため、システム運用について検討中である。
- ・ システムによる自己申告に合わせ、総合医療センターCOI管理委員会と連携し、標準作業手順書を改正した。
- ・ 定期自己申告対象者の基準変更(2023年度から適用予定)および研究インテグリティの自律的な確保への対応に伴い、学校法人埼玉医科大学利益相反(COI)マネジメントポリシーおよび学校法人埼玉医科大学利益相反管理規程を改正した。

4) 組換えDNA使用実験を推進するための管理体制の確立

- ・ 組換えDNA実験安全委員会を計10回開催し、新規28件、変更申請19件、その他3件(譲渡3件)を審査した。P2実験施設を1件設置承認した。文部科学省からの「研究段階におけるゲノム編集技術の利用により得られた生物の使用等に係る留意事項についての通知」に関して学内に広く周知した。また、申請漏れを防止するために申請書類を見直して改正した。
- ・ 大学院共通科目「実用実験医学特別講義」を担当した。
- ・ 組換えDNA実験を行う研究者13名を対象に教育訓練を実施して受講証を発行した。
- ・ 名古屋議定書批准にともなう「遺伝資源の取得の機会及びその利用から生ずる利益の公正かつ衡平な配分に関する指針(ABS指針)」へ対応すべく情報収集を行った。

5) 安全保障輸出管理の周知と体制整備

- ・ 経済産業省 安全保障貿易管理体制チェックリストの提出
 - ・ 経済産業省安全保障貿易管理アドバイザー制度を利用して体制整備を推進した。
 - ・ 経済産業省および文部科学省が求める外国為替及び外国貿易法によるテロ防止を目的とした安全保障貿易管理に対応すべく学外の研修会などに参加して情報収集を行った。
 - ・ 安全保障貿易管理審査（留学生）1件について該否判定を実施した。
- 6) 向精神薬管理に関する事項
- ・ 研究用向精神薬について、研究施設現況調査に合わせ医学研究センター安全管理部門と連携し向精神薬の保有および保管状況について調査し、その結果を共有した。
- 7) 病原性微生物管理に関する事項
- ・ 文部科学省からの依頼に基づき、病原性微生物等の保管・管理の徹底について周知すると共に、法人全体としての調査結果を文部科学省へ報告した。
- 3-4. 知的財産戦略について
- 1) 知的財産権の保護
- ・ 医薬品、医療機器、診断薬などの分野から発明等届出が13件あり、14件の特許等出願を行い、17件が特許権成立した。
 - ・ 知的財産に関する規程を一部改正し、実施料収入があった際に基本学科に還元する割合を増やすことで、新たな発明を生み出しやすい環境を整備した。
- 2) 産学官連携の推進
- ・ 慶應義塾大学病院を中核とする「首都圏ARコンソーシアム」に参加し、各ワーキンググループ会議へ参加した。前年度に引き続き各構成機関の体制整備ワーキンググループ（WG1）のリーダーに千本松教授、臨床研究推進ワーキンググループ（WG4）のリーダーに小林教授として活動した。令和4年度からMARC 社団法人化に伴い、千本松教授を理事・社員として登録することとした。
 - ・ 埼玉大学との包括連携協定に基づく共同研究事業は新規申請8件、継続申請10件が採択された。
- 3-5. 知的財産の保護及び活用について
- ・ 特許等委員会を全11回開催した。
 - ・ 企業との受託研究12件、共同研究等15件、公的機関との研究16件、MTA22件の契約を締結した。
 - ・ 契約に関する知財条項を125件確認した。
 - ・ 埼玉大学との連携協定に基づく共同研究を18件行なった。
 - ・ 産学連携に関するセミナーへの参加、情報収集を行った。
 - ・ 共同研究に関する企業との面談95件、公社との面談47件を行った。
 - ・ 研究者との面談を71件行った。
 - ・ BioJapan2022（10/12-10/14）、オンライン彩の国ビジネスアリーナ 2023（2/8~2/9）など専門展覧会への出展を行った。
 - ・ 企業との共同研究推進のために、3病院合同ニーズマッチング会（2023年3月3日）を開催した。
 - ・ 知的財産の管理に関する業務を行った。
- 3-6. 研究活動の活性化の取組み
- 1) リサーチパークの運営
- ・ 中央研究施設日高ランチと連携して対応しており、令和5年3月末で1社が退去した。
 - ・ 第2期計画としてゲノム棟6階旧RI施設の運用について検討を開始した。
 - ・ リサーチパーク運営会議を開催し、入居企業1社の賃貸借契約更改および入居条件等について審議した。
- 2) 研究活動支援
- ・ 質の高い臨床研究の実施と活性化を目的に臨床研究コンサルティングを実施している。令和4年度は28研究課題（前年度比▲2件）について、特定臨床研究への該当性の判断や研究デザインについての相談を受け、さらにこのうち12件は客員教員の生物統計家によるアドバイス等を実施した。
 - ・ 大学病院における臨床研究の支援体制強化のために、部署連携を目的の整備策として、大学病院臨床研究センターとRAセンター相互の兼務発令連携に向けた準備を進め、承認いただいた。
 - ・ 生物統計家による2022統計関連セミナー「JMPを利用した統計の基礎」（全4回）を、ウェビナー開催した。また当セミナーは、埼玉大学においても参加者を募った。終了後には、各回の動画をYouTubeにて限定公開したところし、のべ650回を超える視聴があった。
 - ・ 「質的研究と量的研究に関するセミナー」を令和5年度に開催するための準備を進めた。

3) 外部資金獲得力の強化

- ・ 私立大学等改革総合支援事業タイプ4「社会実装の推進」に申請し、採択された。これにより、経常費補助金一般補助及び特別補助の増額に貢献した。
- ・ 経常費補助金特別補助「研究施設運営支援」に申請し、運営経費の約1/2に当たる金額の補助金を獲得した。

4) 研究部門を支える強固な体制

- ・ 令和3年度も新型コロナウイルス感染拡大下の研究活動支援を継続し、研究用 Zoom 共用アカウントを管理して研究者を支援した。
- ・ 統計解析ソフトウェア JMP 大学ライセンスを学内グラント（共有部門）により導入し、希望する研究者434名にライセンス付与した。
- ・ 研究者を支援し本学の学術研究の連携及び質的強化・活性化を図ることを目的として、URAを公募した。

4. 自己評価と次年度計画

4-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・自己評価

国のガイドラインに対応した管理体制において、研究費の適正使用、研究活動の不正行為防止への取り組みを実施した。また、臨床研究法や人を対象とした生命科学・医学研究に関わる倫理指針に基づく委員会の審査も順調であった。産学官連携では、リサーチパークにおいて1社の退去があったが、引き続き共同研究への発展が期待される。研究活動の促進は良好に推移している。関連部署との連携も円滑であり、事業計画の年度目標は概ね達成した。

補助金獲得の一環として、私立大学改革支援事業(タイプ4)「社会実装の推進」、経常費補助金特別補助「研究施設運営支援」に申請して採択されるなど補助金の確保に努めた。

4-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

1) 公的研究費の獲得と研究公正の取組みについて

(1) 公的研究費の獲得について

文部科学省科学研究費に代表される公的研究費は、本学の研究マインドを活性化するために必要な外部資金の一つである。申請件数の向上、採択につなげる活動として次の事業を行う。

① 公的研究費の採択率向上

- ・ 医学研究センターとの連携による科研費アドバイザー制度により、研究者にとっての申請のハードル解消に注力する。
- ・ 若手研究者の科研費応募件数底上げのための対策を検討する。
- ・ 各基本学科の研究主任との連携を強化し、各学科内の研究マインド向上を目論む。
- ・ 公的研究費の獲得が、教員の業績として極めて重要であることを周知していく。
- ・ 日本学術振興会が科研費新規採択課題採択率に関して毎年公表する「研究機関別採択率上位30機関」ランクインを目指す。

② 間接経費を活用した研究環境の整備

- ・ 文部科学省をはじめとする国、公的機関は間接経費の有効活用と、使徒の公表および透明化を求めている。
- ・ 研究マインド向上も鑑み、研究者から要望が強い共同利用のための研究施設設備・ソフトウェア導入、倫理的・科学的観点による臨床研究における審査の質の向上、および研究収支の改善や研究活動支援体制を、間接経費の一部を財源として整備していく。

(2) 研究費の適正使用に関する事項

文部科学省「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」に則した「学校法人埼玉医科大学 公的研究費の不正使用・不適切使用防止計画」に基づき、最高責任者・統括管理責任者・コンプライアンス推進責任者と連携し研究費適正使用の取組みを引き続き推進し、ガバナンスの維持・強化を図る。

① 研究費申請および実績管理業務の質の向上

公的研究費に関する業務は、年々処理量が増大し複雑・専門化しつつある。課員、各キャンパスの公的研究費担当者および各教室の研究支援者との情報共有・連携を密にしていくことが重要であり、次の取り組みを実施していく。

- ・ 研究者および事務担当者の研究費執行に掛かる事務負担を軽減するため、公的研究費事務処理要綱及び申請事務フローの見直しおよび電子化を検討する。
- ・ 研究者、研究支援者および研究補助者に対するコンプライアンス教育及び啓発活動等を通じ、研究費適正使用の理解を深化、公的研究費に関わる担当者の質向上に取り組む。

② 公的研究費に関わる説明会開催

コンプライアンス教育・啓発活動については具体的な計画を策定し実施する。具体的には、例年開催している公的研

究費に関わる説明会について、コンプライアンス教育としての目的をより明確にし、随時発信する啓発活動により補完することで、研究者および研究支援者に対して不正使用・不適切使用防止の取り組みを周知、不正防止に向けた意識の向上と浸透の徹底を図り、不正の防止に関する高い意識を持った組織風土を形成する。

③内部監査とモニタリングの充実

内部監査室・監事との連携を強化し、内部監査およびリスクに応じたモニタリングを実施し、その結果を本学の不正防止体制に反映することで、常に実態に即した実効性のある不正防止対策を実現していく。

(3)研究活動の不正行為防止に関する事項

研究活動における不正行為への対応等に関するガイドラインは、研究者のほか学部生、大学院生についても研究倫理教育の実施を求めている。本学における研究倫理教育を次の通り実施していく。

①APRIN e ラーニングの実施

APRIN e ラーニングにより研究倫理の基礎的教育を実施していく。公的研究費応募時、倫理審査申請時の必須教育に位置付けており、受講を徹底していく。

②定期的な研究倫理教育の実施

毎年開催している公的研究費に関する説明会のなかで、研究不正防止に係る事項も含め、随時発信する啓発活動で補完することにより、基礎的事項の振り返りのほか最新の留意点などを周知していく。

2)健全な研究活動の保持について

(1) 大学倫理審査委員会・中央倫理審査委員会の開催と支援

①倫理審査委員会の開催

- ・ WEB 会議システムを活用するなど新型コロナウイルス対策を行い、倫理審査委員会を原則毎月開催する。(大学倫理審査委員会は 8 月休会、中央倫理審査委員会は案件の都度開催)
- ・ 被験者保護の観点、倫理審査の質向上のため、委員および事務局員の教育のため、積極的に外部研修会への参加、学内講習を実施する。
- ・ ヒト幹細胞に関する指針等の対象となる臨床並びに基礎研究については、申請の都度、ヒト幹細胞研究倫理審査専門部会を招集し審査する。
- ・ 教育倫理審査ワーキンググループは、学生教育に関する研究発表、医学実習における人体試料を用いるなど医学教育における倫理的な側面を審査する専門部会であり、その運営を支援する。

②倫理審査基準の標準化と改善

- ・ 倫理審査委員会および各病院 IRB との連携を深め、倫理審査の質向上の取り組みのため、倫理委員会等事務局連絡協議会を開催していく。
- ・ 個人情報保護法令と 3 年度改正の令和 5 年 4 月施行に伴い、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」が改訂されるため、その情報収集と対応に当たる。

③人を対象とした医学研究の倫理教育の実施について

- ・ 「人を対象とする生命科学・医学系研究に関わる研究倫理指針」「臨床研究法」に則した総合的な研究倫理教育の実施について、各病院の臨床研究支援センターと連携し、施設契約した ICRweb e ラーニングを活用することとする。

④倫理審査業務に関するシステムの運用と改善

- ・ 令和 3 年度から運用開始した倫理審査申請システムについて、安定的な運用を図るとともに、データの利活用およびシステムの利便性改善について、各病院 IRB と連携し検討する。

(2) 臨床研究法および再生医療等法への対応について

特定臨床研究推進センターは、臨床研究法に基づく臨床研究の新規審査案件、変更審査、定期報告および疾病等報告への対応を確実なものとし、認定臨床研究審査委員会の安定的な運営を図る。

①認定臨床研究審査委員会の開催

- ・ 認定臨床研究審査委員会を年 7 回以上開催する。
- ・ 臨床研究法実施基準に基づく技術専門員による評価をうけ、委員会審査を行う。
- ・ 被験者保護の観点、審査の質向上のため、委員および事務局員の教育のため、積極的に外部研修会への参加、学内講習を実施する。

②認定臨床研究審査委員会電子申請システムのさらなる活用

- ・ 令和 2 年度に運用開始した臨床研究法対応の審査申請システムについて、安定的な運用を図るとともに、各病院 IRB における特定臨床研究の許可・報告業務への活用を促し、更なる業務効率化と迅速化を目論む。

③臨床研究コンサルティングの実施

- ・ 研究に協力する患者のリスクを低減し、質の高い臨床研究を実施していくため、また、学内における臨床研究の活性化に資する研究者支援を目的として、臨床研究コンサルティングを開催している。令和5年度は統計解析専門家による統計解析サポートを充実させる。この機能充実とともにリスクヘッジの観点も鑑み、プロトコル作成の支援部門の整備、その中核となる人材の育成を検討していく。

④再生医療等法への対応

- ・ 研究者から再生医療等に係る臨床研究について相談を受け付け、適切な認定再生医療等委員会を紹介していく。

(3) 利益相反状態等の把握・管理支援

①COI管理委員会の開催と質の向上

- ・ COI管理委員会による利益相反および責務相反に関する審査により、公正かつ適正な研究活動を推進していく。
- ・ 各COI管理委員会と連携し、研究インテグリティの自律的な確保の観点から産学連携活動における利益相反・責務相反管理を行っていく。併せて、令和5年度は定期的な利益相反申告を実効性のあるものとする。
- ・ 各COI委員会と、COI審査手順の標準化を検討していく。

②COI審査業務に関するシステムの導入

- ・ 令和3年度に導入した利益相反Web申告システムは各COI委員会と連携しテスト運用を進め、令和4年度から本稼働させることができた。より一層のCOI審査業務効率化を進める。

(4) 組換えDNA使用実験を推進するための管理体制の確立

①遺伝子組換え生物等の管理の徹底

- ・ カルタヘナ法が求める遺伝子組換え生物等の拡散防止の取組みのため、医学研究センター安全管理部門と連携し、組換えDNA実験安全委員会に事務局として運営に携わる。
- ・ 遺伝子組換え生物等を使用した研究課題の承認後の状況を把握、管理を徹底する必要がある。このため年度末報告書および研究の終了届を求めていく。
- ・ ホームページおよび各種申請様式により運用し、適切に改善していく。
- ・ 合理的な管理運営を検討して研究者・管理事務双方の負担軽減を目指す。
- ・ 全学レベルで組換えDNA実験室の査察・登録を完了する。
- ・ これらについて病原性微生物等管理委員会および実験動物委員会と連携し取り組んでいく。

②名古屋議定書に基づく遺伝資源の公正な利益配分（ABS）への対応

- ・ 遺伝資源ABSについては、制度実施から日が浅く研究者の理解および学内体制整備は不十分な状態である。医学研究センター安全管理部門と連携し個々の案件に対応していく。またABS関係の研修会参加、他機関の好事例など情報収集に努める。

(5) 安全保障輸出管理の周知と体制整備

経済産業省および文部科学省は、研究機関に対して、「外国為替及び外国貿易法」に基づく安全保障輸出管理を求めている。また令和4年5月から「みなし輸出管理」の明確化による徹底を求められており喫緊の課題である。本学の安全保障輸出管理について、次のとおり対応していく。

①該非判定組織の構築と運用

- ・ 経済産業省安全保障貿易管理アドバイザー派遣事業で得られた知見を活かし、管理体制を改善する。
- ・ 安全保障輸出管理に関する学内規程に基づき、医学研究センター安全管理部門、関係部署と連携し該非判定を実施していく。

②関係部署との協業関係の構築

- ・ 安全保障貿易管理は、大学全体の業務に関わる事項であり、実際に安全保障輸出管理が必要な業務に係る大学事務部、総務部人事課、経理部経理課、購買課、総合医療センター事務部、国際医療センター事務部など各部署が行う通常業務に安全保障貿易管理体制を組み込む必要がある。この点について協業関係し、本学の実態に即した管理体制を構築する。

③研究者および関係職員への啓蒙活動

- ・ 研究者へ安全保障輸出管理の対象となる物品および技術、行為を周知していく。
- ・ 窓口部署担当者へ安全保障貿易管理に関する情報提供と講習会参加を促して当事者意識及び関連知識の深化を行う。

3) 知的財産戦略について

優れた研究成果を知的財産権として保護し、実用化に向けた産学官連携を推進する。

(1) 知的財産権の保護

①知的財産保護の円滑な手続

- ・ 学校法人埼玉医科大学知的財産に関する規程（以下、知財規程という）に基づき、発明者から発明等届出書が提出された場合、特許事務所又は RA センターにて先行技術調査を行い、当該情報に基づき特許等委員会で出願の可否を判断していく。

- ・ これまで、医薬品、医療機器、診断薬などの分野から毎年 20 件程度発明が創出されており、過去の出願の中間処理、権利維持費などを考慮し、知的財産にかかる予算を毎年度確保し、特許出願を計画的に行なっていく。

②知財創造の支援

- ・ 知財規程により、特許権に基づいた実施許諾により収入があった場合、出願等の諸経費を差し引いた上で発明者や基本学科に研究費等として還元し、新たな研究を推進していく。

(2)産学官連携の推進

高度な医学知識と医療技術を身につけた研究者が、国や埼玉県、そして産業界と連携を図り、産学官の共同研究の成果を社会還元し、地域医療、地域産業の発展に寄与することを目的に産学官連携を推進する。従って、大学として重点課題とする研究分野は、医療・介護・福祉に関する研究となる。そのため重点分野以外の特許出願は、原則として行わない。

①特許出願後の実用化に向けた取り組み

- ・ 特許出願後の実用化に向けた取り組みとしては、大規模な展示会への出展や AMED ぶらっとを活用したシーズ情報の発信、技術仲介やコンサルティングを行っている企業による連携先の選定などを行い、産業界や公的機関との接点を広げ産学官連携を進めていく。

- ・ 企業出身の産学連携コーディネーターにより、産と学との間を繋いで本学の研究シーズを用いた商品・サービスの開発を推進する。

②研究シーズの把握

- ・ 学内全体の研究関連情報を一元化することで研究シーズの把握し、企業への共同研究、共同開発の提案などを通して産学官連携を進めていく。

- ・ 医学研究センター研究評価部門にて研究者の専門性に関するデータベースを構築しており、研究者と産業界とをマッチングするためのツールとして強化していく。

③社会実装への支援

- ・ 大学での研究成果に基づく大学発ベンチャーを設立する制度を設けており（学校法人埼玉医科大学学内発ベンチャー企業に関する規程）、起業を考えている研究者をサポートしている。

(3)体制整備

RA センターには理事と研究担当副学長のもとに教職員が配置され、組織的な連携体制の構築を進めている。研究関連の部署を一箇所に集めて部局横断的に連携を進めることで、産学連携を総合的に企画推進する体制を整備しようとしている。また、他機関との共同研究や受託研究に関わる情報、権限が一箇所に集約できる体制を段階的に構築する。

4) 知的財産の保護及び活用について

(1)発明の発掘

①知的財産権の啓発および発明の発掘

②出願後に発生する中間処理等の知財管理業務の円滑な実行

③知財をベースとした外部研究資金の獲得

過去 5 年間の発明等届出件数は 20 件から 27 件の間で推移しており、2023 年度も 20 件程度を目標として、科研費採択者を中心にヒアリングを行い、知的財産権の啓発や発明の発掘を行なう。その際に、発明を適切に保護するため、ラボノートの活用も啓蒙する。

(2)知的財産の管理

- ・ 出願後に発生する中間処理、特許権の維持などの法律に基づく期限管理を行い、権利化を測る。
- ・ JST 外国特許出願支援制度に申請し、外国出願費用の獲得を行う。

(3)知的財産の活用・産学官連携の推進

大学のシーズ、ニーズに基づき産業界での実用化を目指し、企業とのマッチングなどを通じて、実施許諾等の技術移転を積極的に行う。

①具体的な活動予定

大学のシーズやニーズに基づく産学連携を推進するため、以下の展示会、セミナーへの参加を予定している。

- ・ 協定に基づく金融機関との連携

りそなオープンイノベーションセミナーでの発表

- ・ 埼玉県産業振興公社との連携
 - 先端医療手術機器研究会の開催
 - ・ 大規模な展示会でのシーズ発表
 - BioJapan2023 へ出展
 - 彩の国ビジネスアリーナ 2024 への出展
 - ②埼玉大学との包括連携協定に基づく共同研究事業
 - 包括連携協定に基づき令和 3 年度に開始した包括共同研究事業は、埼玉大学との連携を深化、研究活動を促進し、新たな産学連携や公的研究費の獲得を目論む。
 - ③データベースを利用したシーズ発信
 - ・ AMED ぷらっとへの創薬シーズの掲載
 - ④技術移転の達成目標
 - ・ 技術移転等成功例の達成（目標 5 件）
 - 過去 5 年間では年間 3 件以上の実施権の許諾を行っており、2023 年度の年間目標を 5 件とする。
- 5) 研究活動の活性化の取組み
- (1) リサーチパークの運営
- リサーチパーク開設から 3 年が経過し、第 2 期としてパークの安定的運営と施設拡充の検討、本学研究者と企業との共同研究活動を支援すべく次の事業を行う。
- ① リサーチパーク整備の検討
- ・ ゲノム棟 6 階 旧 RI 研究施設跡をリサーチパークとして再整備し、研究推進と本学研究資産の利活用促進を検討する。
 - ・ リサーチパーク 5 階の将来構想スペース (506 号室) の利用促進策を検討する。
 - ② 企業の入居・活動支援
 - ・ リサーチパーク運営会議を開催し、リサーチパークの安定的な運営、産学官連携活動を推進するための施策、将来的な機能拡張等について検討する。
 - ・ 第 1 期入居企業が契約満了を迎えるにあたり、契約更新を含め入居企業との交渉にあたる。
 - ・ 中央研究施設と連携し、中央研究施設日高ランチの各種施設をリサーチパーク入居者および学内研究者が広く利用可能とするための体制を整える。
 - ・ 研究活動の活性化を目的に、学内への説明、BioJAPAN 等への出展、ホームページ設置などの広報活動により入居企業を募集する。
 - ・ 入居企業が研究活動を速やかに開始できるように、関係部署と連携し入居契約・共同契約手続等、インフラ整備の要望など各種支援体制を構築する。
 - ・ 企業のニーズに応じて、学内基本学科との共同研究による臨床サンプルを用いた研究のための倫理手続きの支援を行う。
 - ・ より高い productivity を有するリサーチパークとするために、企業やベンチャーへの新たな入居・活動支援を検討し、魅力ある産学連携の構築に努める。
 - ③ 各学科との連携促進
 - ・ 本学が所有する研究資源利活用を促進すべく、リサーチパーク入居企業と、本学の各学科との連携を橋渡しして行く。
- (2) 研究活動支援
- ① 臨床研究コンサルティングの拡大
- ・ 高度先進医療を継続的に提供していくためには、臨床研究による成果の積み重ねが必須である。広く臨床研究実施における相談を 3 病院所属研究者から受け付け、臨床研究シニア URA 小林教授、生物統計専門家である川崎客員准教授によりアドバイスを行う。
 - ・ 臨床研究の質を向上には、生物統計家の関与が必須である。生物統計家の客員教員によるセミナー開催など統計に関する教育活動等を実施する。
 - ② 大学発ベンチャー企業認定、寄附研究部門の設置・運営
 - ・ 寄附研究部門の設置・運営について審査する寄附研究部門設置委員会を運営していく。
 - ・ また大学発ベンチャー企業の認定については、特許委員会と連携して取り組んでいく。
 - ③ 研究活動に係る向精神薬・麻薬管理体制の構築
 - ・ 研究活動に係る向精神薬・麻薬管理について、各キャンパス担当部署および医学研究センター安全管理部門と連携し

適切に対応していく。

(2)外部資金獲得力の強化

- ・ 大学事務部と連携し、私立大学改革総合支援事業タイプ4に継続して採択される体制を整備することで、安定的に補助金確保することを目指す。
- ・ 中央研究施設と連携し、私立大学等経常費補助金特別補助 研究施設運営支援を申請し、補助金を獲得し、共同利用施設等研究環境の機能向上を目指し、大学全体の研究推進を促進する。
- ・ 関係部署と協力して研究に係る特別補助金の他、寄付金および受託研究費など外部資金および新規経常費補助金の獲得を目指す。

(3)研究部門を支える強固な体制

R Aセンター業務体制（研究公正部門、研究費管理部門、研究評価部門、産学官連携推進部門、臨床研究支援部門 ）により本学研究活動を更に促進していくべく、次の事項に取り組む。

①私立医科大学協会研究支援推進委員会の運営に関する事項

私立医科大学協会研究支援推進委員会の運営委員校として、他大学の研究公正、研究費獲得支援に関する情報を収集して、本学の研究に係る管理運営に反映することでより効果的かつ効率的な管理運営体制を検討する。

②研究の国際化への対応

研究の国際化が進み、海外研究機関との事務手続きや交渉などの研究管理業務が増加しつつある。国際化への対応は法人の方針でもあり、研究活動を支える事務部門の機能強化、多様な人材の育成と確保は必須と思料する。これを実現していくべく取り組んでいく。

③法人全体の研究関連業務の再編

研究関連事務は、大学事務部、各キャンパスの経理課、R Aセンターと分散している。現時点では各担当者により業務遂行しているが、人事異動などによりノウハウなどの継承が問題となる。また倫理審査・I R B、C O I 審査も同様である。限られた人材・資源を有効に活用できるよう、長期的な観点から業務再編・人員再配置などを提案していく。

④専門的知識を有する研究支援人材の確保

国等が求める適正な研究活動は年々必要要件が厳しくなっており、専門的知識を有する研究支援人材による対応が必要となってきた。本学においても令和5年度から研究応募支援や研究開発マネジメント強化等の研究マネジメントを専門的な知識により担うリサーチ・アドミニストレーター(U R A : University Research Administrator) の雇用が承認されたことを受け、研究活動支援をより強化する。

以上

1. IR センター

1. 構成員

椎橋 実智男 (SHIIBASHI, Michio) : 教授 : センター長・運営責任者 : 指導教員 (大学院) : IR・医学教育 : 博士
松下 毅彦 (MATSUSHITA, Takehiko) : 教授 : 教育主任 : 研究主任 : 指導教員 (大学院) : IR・医学教育 : 博士
小山 政史 (KOYAMA, Masafumi) : 教授 (兼担) : 副センター長 : 指導教員 (大学院) : 泌尿器 : 博士
柴崎 智美 (SHIBAZAKI, Satomi) : 教授 (兼担) : 副センター長 : 指導教員 (大学院) : 医学教育 : 博士
齋藤 恵 (SAITO, Megumi) : 助手 (兼担)
鈴木 実和 (SUZUKI, Miwa) : IR センター : 事務員

2. 教育

IR センターは、本学における教育・研究・大学運営に関して、データの調査・収集・分析を行うことを目的として設置されているが、この本務の他に、所属教員はそれぞれの専門性を活かし、多くのユニットの兼担になる等で、さまざまな学生教育を担当している。

2-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

各教員が担当する各教育プログラムにおいて、教育が効果的に機能し、学生が修得すべき学修成果を達成したかどうかを検証し、必要に応じたプログラムの改善を継続していく。

2-2. 教育実績 (担当者)

医学部 : 1年生の「医科学入門」(椎橋)、「人体の基礎科学1」(椎橋)、「人体の基礎科学2」(椎橋)、「医科学の探索」(松下)、2年生の「機能系実習2」(椎橋)、「選択必修」の「プログラミング言語 perl」(椎橋)、3年生の「Pre-CC 1-1」(松下)、「Pre-CC 1-3」(松下)、4年生の「Pre-CC 2-1」(松下)、「Pre-CC 2-3」(松下)、「特別演習」(松下)、5年生の「特別演習」(松下)

保健医療学部 : 臨床検査学科1年生の「統計学」(椎橋)

大学院 : 医学研究科博士課程の「統計情報解析特論」(椎橋)、医学研究科修士課程の「統計情報解析特論」(椎橋)、看護学研究科修士課程の「看護情報処理論」(椎橋)

2-3. 達成度評価

各教員が担当する教育プログラムについては、シラバスに記載した目標をおおむね達成できたものと自己評価している。

椎橋は医学研究科博士課程の「統計情報解析特論」で令和3年度のベストティーチャー賞を受賞した。

2-4. 次年度改善計画

各教員が担当する各教育プログラムにおいて、教育が効果的に機能し、学生が修得すべき学修成果を達成したかどうかを継続的に検証し、必要に応じたプログラムの改善を継続していく。

3. 研究

3-1. 目的・目標(前年度に立てた改善計画)

IR活動の効果的な実施方法について、引き続き研究を継続する。

試験の信頼性・妥当性の検証において、信頼性・妥当性を向上させる具体的な対応法を研究する。

遠隔授業における問題点の改善状況を調査し、改善によって、より効果的なものへと改善しているかを検証する。

医学研究科博士課程の学位研究に対して、引き続き積極的な支援を行っていく。

3-2. 研究グループ (研究プロジェクト) と研究実績

他大学より講演の招請を受け、IR活動を効果的なものとする方策に関するこれまでの研究結果についての講演を行った(松下) IRデータベースの構築にあたり、各種データを格納するためのデータテーブルを作成した。(松下)

医学部のほぼすべての定期試験について実施データを収集して分析を行い、結果をカリキュラム評価委員会および卒業前教育委員会に提出した。(松下)

講義を主な教育方法とするすべてのユニットについて、講義および試験に関する学生による調査(ユニット評価調査)を実施し、個々のユニットについての集計結果を各UDに送付するとともに、全体としての分析を行った(椎橋、松下)。

3-3. 達成度評価

医学部の試験の信頼性・妥当性の検証については、カリキュラム評価委員会の分科会との連携により、検討・分析を進める基盤を確立させた。

ユニット評価調査の分析結果をカリキュラム評価委員会に報告することで、講義や試験の改善を促し、また、昨年度カリキュラム評価委員会が行った提言に基づく改善の効果がみられたかどうかの検討を行った。

医学教育センターを中心とした電子ポートフォリオ(修学カルテ)の改訂作業を学術的に支援し、当初求められた機能を実装することができた。

医学研究科博士課程の学位研究への積極的な支援を行った。

3-4. 次年度改善計画

IR活動の効果的な実施方法について、引き続き研究を継続する。

試験の信頼性・妥当性の検証において、信頼性・妥当性を向上させる具体的な対応法を研究する。

遠隔授業における問題点の改善状況を調査し、改善によって、より効果的なものへと改善しているかを検証する。

医学研究科博士課程の学位研究に対して、引き続き積極的な支援を行っていく。

4. 診療

該当なし

5. その他

5-1. 自治体、政府関連委員の有無

該当なし

5-2. 学術誌、編集委員、査読委員の有無

日本医学教育学会学術誌編集委員会委員（椎橋）

5-3. その他、社会あるいは医学貢献に関わる業務

日本生理学会生理学エデュケーター認定制度委員会委員長（椎橋）

日本生理学会教育委員会委員（椎橋）

日本生理学会理事（椎橋）

日本生理学会評議員（椎橋）

日本医学教育学会広報・情報基盤委員会副委員長（椎橋）

日本医学教育学会医学教育専門家認定制度委員会委員（椎橋）

日本医学教育学会学習者評価部会委員（椎橋）

日本医学教育学会 ICT 教育部会会長（椎橋）

日本医学教育学会 ICT 教育部会委員（松下）

日本医学教育学会理事（椎橋）

日本医学教育学会代議員（椎橋）

日本医学教育学会代議員（松下）

日本医療教授システム学会評議員（社員）（松下）

日本医学教育評価機構調査・解析委員会委員長（椎橋）

日本医学教育評価機構運営部会部会員（椎橋）

日本医学教育評価機構評価委員（椎橋、松下）

医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 CBT 事後評価解析小委員会委員（椎橋）

医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 CBT 機構派遣監督者等講習会専門部会委員（椎橋）

医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE 合否判定基準検討委員会副委員長（椎橋）

医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 CBT 機構派遣監督者（椎橋）

群馬大学医学部カリキュラム評価委員会外部委員（椎橋）

6. 業績

6-1. 論文・学会発表・著書

論文

該当なし

学会発表

①鈴木智, 佐藤義文, 高橋美穂, 吉田幸生, 大西京子, 齋藤恵, 荒関かやの, 黒崎亮, 廣岡伸隆, 橋本正良, 辻美隆, 柴崎智美, 石橋敬一郎, 小山政史, 椎橋実智男, 森茂久, 臨床実習におけるラーニング・マネージメント・システムのカスタマイズについての取り組み第2報. 第54日本医学教育学会大会 2022.08.05; 前橋

②松下毅彦. 授業支援ツールとしてのWebクリッカーの開発. 第54回日本医学教育学会大会, 2022.08.06; 前橋

講演

①松下毅彦. 医学教育コンテンツが目指すべき未来を考える. 第84回MEDC医学教育セミナーとワークショップ, 2023.1.27; 遠隔開催

②松下毅彦. 教学IRの実際-IR活動を実効あるものとするために-. 鹿児島大学医学部FD講演会, 2023.2.21; 遠隔開催

著書

該当なし

【総数：論文 0 件、学会発表 2 件、講演 2 件】

6-2. 獲得研究費

該当なし

6-3. 受賞

該当なし

6-4. 特許、実用新案

該当なし

6-5. 学会、研究会、セミナー等の開催実績

該当なし

7. 自己点検・評価

7-1. 前年度の改善計画に対する今年度の点検・評価結果

・医学教育分野別評価受審後の対応

医学教育分野別評価の評価報告書に基づき、医学部自己点検評価委員会の傘下に発足した分野別評価受審準備小委員会を支援し、令和5年度から実施する年次報告書の作成と公開の準備を整えた。

- ・内部質保証の体制づくり

内部質保証の体制をより明瞭にするため、大学機関別認証評価については全学自己点検・評価委員会が、医学教育分野別評価については医学部自己点検・評価委員会が担当するよう、令和4年度に規則の改正を行った。

この規則の改正によって、全学自己点検・評価委員会の下に大学機関別認証評価受審小委員会が、医学部自己点検・評価委員会の下に医学教育分野別評価受審小委員会が、それぞれ設置された。

- ・アセスメント・ポリシーおよびアセスメント・プラン

アセスメント・ポリシーおよびアセスメント・プランを立案し、大学運営会議、医学部教員代表者会議および保健医療学部の承認を得て、令和5年度からこれらに基づいたデータ収集と分析を行う体制を整えた。

- ・IRデータベースの活用

IRデータベースの構築を進めている。データ格納用データテーブルはほぼ完成しているが、臨床実習における評価項目がまだ確定していないため、この部分のテーブルが作成できない状況であり、その完成を待って、データの取り込みを開始する。

- ・各種調査データの整理と活用

試験のデータシートおよびユニット評価調査の分析結果をカリキュラム評価委員会および卒前教育委員会に提出し、改善計画の立案を支援した。

7-2. 今年度の自己点検・評価に基づく改善計画

アセスメント・ポリシーおよびアセスメント・プランに基づいた、内部質保証のためのデータ収集と分析を実施する。それらの結果を責任ある委員会等に提供し、本学の質の向上に貢献する。

1. 1) 人事 (教員異動)

教員異動(令和4年4月1日～令和5年3月31日)

		採用	昇格	退職
基礎 医学部 門	教授		森口 武史 (教養教育)	佐々木 敦 (病理学) 坂本 安 (中央研究施設 (機能部門))
	准教授		吉川 圭介 (薬理学) 周防 論 (薬理学)	
	講師	市川 朝永 (薬理学) 三島 智 (教養教育)	宮崎 利明 (社会医学) 塚本 翔 (ゲノム基礎医学)	今井 孝 (微生物学) 田丸 文信 (生理学)
	助教		1	
	助手	1		1
医学 教育セ ンター 他	教授		小谷 典弘 (医学研究センター)	山田 泰子 (医学教育センター)
	准教授			
	講師			
	助教	1		
	助手			
大 学 病 院	教授	秋山 雄次 (リウマチ膠原病科)	廣岡 伸隆 (地域医療科) 井上 勉 (腎臓内科) 都築 義和 (消化管内科)	長坂 浩 (麻酔科)
	准教授	水野 卓 (消化器内科・肝臓内科) 沼倉 周彦 (ゲノム医療科) 松本 浩 (小児科)	山内 洋子 (予防医学センター) 井上 快児 (放射線科) 横田 和浩 (リウマチ膠原病科) 佐藤 智也 (形成外科・美容外科) 神山 哲男 (緩和医療科) 内田 義孝 (呼吸器内科) 渋谷 雅之 (眼科) 阿部 孝憲 (放射線科)	庄司 拓平 (眼科) 松木 盛行 (予防医学センター) 紫藤 明美 (麻酔科) 山口 智 (東洋医学診療科) 江村 隆起 (小児外科) 左 勝則 (産科・婦人科)
	講師	野中 崇央 (血管外科) 細川 悠 (耳鼻咽喉科) 上原 浩介 (整形外科・脊椎外科) 安部 涼平 (総合診療内科) 今井 一男 (臨床検査医学 (中央検査部)) 吉川 祐司 (眼科)	大澤 威一郎 (放射線科) 猿谷 真二 (放射線科) 浅野 彩 (乳腺腫瘍科) 古賀 健史 (小児科) 平田 幸子 (脳神経外科) 都築 琢 (リウマチ膠原病科)	杉山 聡宏 (整形外科・脊椎外科) 磯部 秀之 (東洋医学診療科) 關 智史 (放射線科) 新藤 晋 (耳鼻咽喉科) 中谷 宣章 (総合診療内科) 溝井 令一 (神経内科) 深野 敬之 (消化器・一般外科) 鈴木 裕之 (産科・婦人科) 猿谷 真二 (放射線科) 後藤 健 (整形外科・脊椎外科)
	助教	21		25
	助教 (フェ)			
	助教 (シ)(専)	59		27
	助手	1		1
総合 医療セ ンター	教授		東 守洋 (病理部) 小川 智也 (腎・高血圧内科) 牧 章 (肝胆膵外科・小児外科) 飯星 智史 (脳神経外科) 長井 智則 (産婦人科) 多林 孝之 (血液内科) 百瀬 修二 (病理部)	西岡 利彦 (心臓内科) 今中 和人 (心臓血管外科) 山本 満 (リハビリテーション科) 大野 秀明 (感染症科・感染制御科)) 木崎昌弘 (血液内科) 伊藤 博之 (健康管理科) 持木 彫人 (消化管外科・一般外科) 中島 勸 (医療安全管理学)

		採用	昇格	退職
総合医療センター	准教授	乾 洋 (整形外科) 重城 健太郎 (心臓内科) 浦橋 泰然 (肝胆膵外科・小児外科)	岡田 洋平 (泌尿器科) 石戸 博隆 (小児科) 日野 峻輔 (歯科・口腔外科) 森山 岳 (呼吸器内科)	寺木 祐一 (皮膚科) 二藤 隆春 (耳鼻咽喉科) 久村 正樹 (救急科 (ER))
	講師	小宮山 英徳 (心臓内科) 加賀谷 優 (形成外科・美容外科) 門間 一成 (脳神経内科)	加藤 崇央 (麻酔科) 青木 耕平 (呼吸器外科) 酒井 亮太 (リウマチ・膠原病内科) 高村 さおり (皮膚科) 村瀬 真 (高度救命救急センター) 木村 暁史 (肝胆膵外科・小児外科)	福元 剛 (腫瘍内科) 山火 秀明 (心臓血管外科) 中曾根 功 (整形外科・脊椎外科) 田口 博一 (救急科 (ER)) 大竹 啓之 (内分泌内科・糖尿病内科) 青木 耕平 (呼吸器外科) 畑中 星吾 (放射線科) 豊増 嘉高 (消化管外科・一般外科) 印東 雅大 (脳神経外科)
	助教	28		47
	助教 (フェ)	1		1
	助教 (シ)(専)	83		49
	助手			1
国際医療センター	教授	関 雅文 (感染症科・感染制御科) 荒井 隆秀 (心臓内科) 帆足 孝也 (小児心臓科 (小児心臓外科))	眞下 由美 (地域医療科) 合川 公康 (消化器外科) 石田 博徳 (呼吸器外科)	藤野 節 (がんゲノム医療科) 新井 栄一 (病理診断科) 牧田 茂 (リハビリテーション科)
	准教授	中尾 朋平 (小児腫瘍科) 木下 修 (心臓血管外科) 松岡 佐保子 (輸血・細胞移植科)	二反田 博之 (呼吸器外科) 黒崎 亮 (産婦人科 (婦人科腫瘍科)) 熊崎 祐 (放射線科 (放射線腫瘍科)) 谷坂 優樹 (消化器内科)	西本 紘嗣郎 (泌尿器科)
	講師	森 龍彦 (皮膚科 (皮膚腫瘍科)) 吉川 信一朗 (脳神経外科 (脳血管内治療科)) 小澤 達也 (脳神経外科 (脳脊髄腫瘍科))	渡辺 雄一郎 (消化器外科)	廣中 秀一 (腫瘍内科) 長田 高志 (神経内科・脳卒中内科) 渡辺 温子 (小児腫瘍科) 佐藤 大樹 (脳神経外科 (脳血管内治療科)) 大原 泰宏 (救急医学科)
	助教	19		18
	助教 (フェ)	11		10
	助教 (シ)(専)	45		34
かわごえクリニック	教授			
	准教授			
	講師			
	助教			
	助教 (シ)(専)			
	助手			
合計	297	49	265	

2022年度 退職教授の在職年数・在任年月

	氏名・所属	在職年数	在任年数
基礎系	坂本 安 (中央研究施設 (機能部門))	43年	教授 14年9ヶ月 准教授 9年 講師 5年6ヶ月
	佐々木 惇 (病理学)	14年	教授 14年
	山田 泰子 (医学教育センター)	18年	教授 18年
大学病院	長坂 浩 (麻酔科)	10年3ヶ月	教授 10年3ヶ月
総合医療センター	木崎 昌弘 (血液内科)	15年9ヶ月	教授 15年9ヶ月
	伊藤 博之 (健康管理科)	27年	教授 5年9ヶ月 准教授 12年5ヶ月 講師 8年10ヶ月
	西岡 利彦 (心臓内科)	20年9ヶ月	教授 11年 准教授 4年9ヶ月 講師 4年5ヶ月
	今中 和人 (心臓血管外科)	23年9ヶ月	教授 3年1ヶ月 准教授 12年10ヶ月 講師 7年10ヶ月
	大野 秀明 (感染症科・感染制御科)	8年8ヶ月	教授 8年8ヶ月
	山本 満 (リハビリテーション科)	19年9ヶ月	教授 12年8ヶ月 准教授 3年5ヶ月 講師 3年8ヶ月
	持木 彫人 (消化管外科・一般外科)	10年	教授 10年
	中島 勸 (医療安全管理学)	4年2ヶ月	教授 4年2ヶ月
国際医療センター	廣中 秀一 (腫瘍内科)	9ヶ月	教授 9ヶ月
	新井 栄一 (病理診断科)	41年9ヶ月	教授 11年11ヶ月 准教授 9年11ヶ月 講師 8年7ヶ月
	藤野 節 (がんゲノム医療科)	8年9ヶ月	教授 4年9ヶ月 准教授 4年
	牧田 茂 (リハビリテーション科)	24年	教授 13年 准教授 3年 講師 8年

教員異動(令和4年4月1日～令和5年3月31日)

		採 用	昇 格	退 職
保健医療学部	教授			乙戸 崇寛 (理学療法学科) 野田 智子 (看護学科) 茅野 秀一 (臨床検査学科) 田邊 一郎 (共通教育部門)
	准教授	小野 公嗣 (臨床検査学科)		野寺 誠(臨床検査学科) 村本 良三(臨床検査学科)
	講 師		山本 梓司 (臨床検査学科) 小関 要作 (理学療法学科) 師岡 祐輔 (理学療法学科) 高橋 祐介 (臨床検査学科) 白石 直子 (臨床工学科) 大村 一之 (臨床検査学科) 三輪 泰之 (臨床工学科)	加藤 巳佐子 (看護学科) 石川 雅浩 (臨床工学科) 小峰 伸一 (臨床工学科)
	助教	7	2	
	助手	3		2
合 計		11	9	10

2022年度 退職教授の在職年数・在任年月

	氏名・所属	在職年数	在任年数
保健医療学部	乙戸 崇寛 (理学療法学科)	13年	教授 3年 准教授 5年4ヶ月 講師 5年8ヶ月
	野田 智子 (看護学科)	8年	教授 8年
	茅野 秀一 (臨床検査学科)	38年10月	教授 7年 准教授 14年5ヶ月 講師 7年7ヶ月
	田邊 一郎 (共通教育部門)	17年	教授 8年 准教授 9年

1. 2) 人事 (教員名簿)

【学 長 別所 正美】

【副学長 松下 祥 木崎 昌弘 森 茂久 三村 俊英 竹内 勤】

医学部

【学部長 森 茂久】

基礎医学部門

基 本 学 科	教 授	准 教 授	講 師	助 教
教 養 教 育	向田 寿光 藤森 千尋 森口 武史	山崎 芳仁 中平 健祐 Chad L. Godfrey 菅 理江 鈴木 正 米岡 裕美	大間 陽子 土田 敦子 種田 佳紀 川村 勇樹 村上 元 伊澤 宜仁 三島 智	1
解 剖 学	永島 雅文 藤田 恵子		高野 和敬 栗崎 知浩	2
生 理 学	池田 正明 三輪 尚史 北澤 潤 (客)		伊丹 千晶 中尾 啓子 田丸 文信 佐藤 寛栄	1
生 化 学	村越 隆之 鷹合 秀輝 (客)	魚住 尚紀 中野 貴成	荒木 智之	2
薬 理 学	丸山 敬	淡路 健雄 周防 諭 吉川 圭介	柳下 南	
病 理 学	佐々木 惇 山田 健人 小森 隆司 (客)	石澤 圭介 山口 浩		2
微 生 物 学	村上 孝		堀内 大 市川 朝永	1
免 疫 学	松下 祥	川野 雅章	三輪 裕幸	1
社 会 医 学	亀井 美登里 平子 哲夫 (客) 林 剛司 (客) 大野 洋一 (客)	太田 晶子	高橋 美保子 宮崎 孝	1
法 医 学	高田 綾 齋藤 一之 (客)			
医 療 政 策 学	宮山 徳司 (特) 江利川 毅 (特) 佐藤 好美 (特)			
中央研究施設【施設長 坂本 安】				
毛 呂 山 C	形態部門	水野 洋介		
	実験動物部門	水野 由美		1
	RI部門	一色 政志	日詰 光治	
	機能部門	坂本 安	廣澤 成美	
日 高 C	実験動物部門	横尾 友隆		
	RI部門			
	機能部門			
医 学 教 育 学	森 茂久 松田 晃 柴崎 智美	石橋 敬一郎	荒関 かやの	
ゲノム基礎医学	奥田 晶彦 黒川 理樹 片桐 岳信		鈴木 歩 米田 竜馬 塚本 翔	2
ゲノム応用科学	堀江 公仁子 三谷 幸之介 井上 聡 (客)	池田 和博		1
計	25 (11)	21	26	15

医学教育センター・医学研究センター他

【医学教育センターセンター長 森 茂久 医学研究センターセンター長 片桐 岳信】

基本学科	教授	准教授	講師	助教
医学教育センター	山田 泰子 側島 久典 (客) 丸木 多恵子 (客) 田中 政彦 (客) 土屋 長二 (客) 鋤柄 稔 (客) 岡村 維摩 (客) 長堀 俊史 (客) 小林 良樹 (客) 増田 俊和 (客) 勅使河原 正敏 (客) 根津 良幸 (客) 大野 洋一 (客) 北澤 潤 (客)			4
医学研究センター	小谷 典弘		町田 早苗 徳元 康人	1
アドミッションセンター				
情報技術支援推進センター				
川越 ブランチ			鈴木 康文	
医療人育成支援センター				
地域医学推進センター				1
川越 ブランチ				1
リサーチアドミニ ストレーションセンター	千本松 孝明 小林 国彦 大野 洋一 (客) 川崎 洋平 (客) 藤原 恵一 (客) 西川 亮 (客)		菅原 哲雄	
I R センター	椎橋 実智男 松下 毅彦			
計	6 (17)	0	4	7

教職員・学生健康推進センター

【センター長 富谷 智明】

基本学科	教授	准教授	講師	助教
教職員・学生健康推進 センター	富谷 智明 井上 郁夫			
計	2	0	0	0

臨床医学部門
埼玉医科大学病院
【病院長 篠塚 望】

基本学科	教授	准教授	講師	助教	助教(フェロー)	助教(シニア・専攻医)
消化器内科・肝臓内科	持田 智 一瀬 雅夫 (客)	今井 幸紀 中山 伸朗 水野 卓	菅原 通子	15		3
消化管内科	今枝 博之 都築 義和		大庫 秀樹	1		
心臓内科	山本 啓二	飯田 慎一郎				
呼吸器内科	永田 真 仲村 俊秀 柚 知行 萩原 弘一 (客) 臼井 裕 (客) 倉光 薫 (客)	中込 一之 内田 義孝	白畑 亨	12		7
内分泌内科・糖尿病内科	島田 朗 稲葉 宗通 (客) 野田 光彦 (客)	及川 洋一	安田 重光 池上 裕一	7		9
血液内科	中村 裕一 宮川 義隆 照井 康仁 別所 正美 (特) 陣内 逸郎 (客) 脇本 直樹 (客)		伊藤 善啓 安部 涼平	4		
神経内科	山元 敏正 中里 良彦 荒木 信夫 (客) 丸木 雄一 (客) 坂井 文彦 (客) 高橋 一司 (客)	伊藤 康男	溝井 令一	5		6
リウマチ膠原病科	三村 俊英 舟久保 ゆう 秋山 雄次 佐藤 浩二郎 (客)	荒木 靖人 横田 和浩	梶山 浩 和田 琢	4		2
腎臓内科	岡田 浩一 井上 勉 菅原 壯一 (客)		友利 浩司	8		5
感染症科・感染制御科	前崎 繁文	樽本 憲人		1		
総合診療内科	中元 秀友 鈴木 朋子 日比 紀文 (客) 原 晋 (客) 木村 琢磨 (客)	小林 威仁	中谷 宣章	6		8
消化器・一般外科	篠塚 望 小川 展二 (客)	浅野 博	深野 敬之	4		2
乳腺腫瘍科			浅野 彩			
血管外科	松本 春信		野中 崇央			
小児外科	田中 裕次郎 尾花 和子 (客) 小室 広昭 (客) 高橋 茂樹 (客) 古村 眞 (客) 浅沼 宏 (客) 檜 顕成 (客)	江村 隆起		4		
整形外科・脊椎外科	門野 夕峰 鳥尾 哲矢 宮島 剛 立花 陽明 (客) 金 潤澤 (客)	釘宮 典孝 坂口 勝信	上原 浩介 渡會 恵介 伊澤 直広	11		3
脳神経外科	藤巻 高光 小林 正人 川合 謙介 (客)		平田 幸子	2		
形成外科・美容外科	市岡 滋 時岡 一幸	佐藤 智也		7		8
小児科 (小児科、新生児科)	山内 秀雄 國方 徹也	板澤 寿子 松本 浩	本多 正和 盛田 英司	15		8

	菊池 透 秋岡 祐子 雨宮 伸 (客) 徳山 研一 (客)		古賀 健史			
皮膚科	中村 晃一郎 常深 祐一郎 土田 哲也 (客)		宮野 恭平	8		8
泌尿器科	朝倉 博孝 矢内原 仁 岡田 弘 (客)	篠島 利明	中平 洋子	1		4
眼科	篠田 啓 米谷 新 (客) 新家 眞 (客) 村山 耕一郎 (客) 石川 弘 (客) 小島 孚允 (客) 松本 惣一 (客) 木村 至 (客) 庄司 拓平 (客)	蒔田 潤 渋谷 雅之	石川 聖 吉川 祐司	8		8
耳鼻咽喉科 (耳鼻咽喉科、神経耳科)	加瀬 康弘 池園 哲郎 伊藤 彰紀 (客) 上條 篤 (客) 善浪 弘善 (客) 福島 邦博 (客) 田山 二郎 (客)		中嶋 正人 松田 帆 細川 悠	4		1
産科・婦人科	亀井 良政 梶原 健 石原 理 (客) 關 博之 (客) 岡垣 竜吾 (客) 永田 一郎 (客)	高村 将司 田丸 俊輔 左 勝則	宮崎 加寿子 鈴木 裕之	7		4
歯科・口腔外科	依田 哲也 (客) 近藤 壽郎 (客)	佐藤 毅 伊藤 耕		4		1
リハビリテーション科	倉林 均 篠田 裕介			1		1
麻酔科	長坂 浩 岩瀬 良範 中山 英人 土井 克史 井手 康雄 (客) 丸山 晃一 (客) 蔵谷 紀文 (客) 風間 富栄 (客) 池田 みさ子 (客) 市原 靖子 (客) 山本 達郎 (客) 東 俊晴 (客) 輪嶋 善一郎 (客)	前山 昭彦 三枝 勉 紫藤 明美	西澤 秀哉 尾崎 道郎 納谷 一郎太	8		1
救急科	芳賀 佳之	高平 修二		2		1
東洋医学診療科		山口 智				
放射線科 (放射線科、放射線腫瘍科、核医学診療科)	新津 守 松成 一朗 小澤 栄人 田中 淳司 (客) 渡邊 環 (客)	井上 快児 阿部 孝憲	大澤 威一郎 猿谷 真二	8		4
神経精神科・心療内科	松尾 幸治 桑原 斉 太田 敏男 (客) 横山 富士男 (客) 関口 隆一 (客) 長尾 眞理子 (客)	渡邊 さつき 松岡 孝裕 新井 久稔	村田 佳子	12		7
緩和医療科	岩瀬 哲	神山 哲男	岩崎 由希子			1
臨床検査医学 (中央検査部)	前田 卓哉 池淵 研二 (客)	森吉 美徳	今井 一男			
輸血・細胞移植部			小林 清子			
予防管理センター	村松 俊裕 (特)	山内 洋子	後藤 誠一			

	丸山 義明 (客) 足立 雅樹 (客) 倉光 薫 (客)					
医療安全管理学						
ゲノム医療科	奥山 虎之 (特) 大竹 明 (特) 西村 玄 (客)	沼倉 周彦 難波 聡		3		1
臨床中毒科	上條 吉人 成瀬 暢也 (客)		喜屋武 玲子			
地域医療科	廣岡 伸隆					
内科ローテ(後期研修)						
外科ローテ(後期研修)						
計	60 (75)	42	42	172	0	103

総合医療センター

【病院長 別宮 好文】

基本学科	教授	准教授	講師	助教	助教(フェロー)	助教(シニア・専攻医)
消化器・肝臓内科	名越 澄子 岡 政志 屋嘉比 康治 (特) 和田 友則 (客) 西川 稿 (客)	加藤 真吾 松原 三郎 高林 英日己	山口 菜緒美	7		10
心臓内科	松蔭 崇 吉本 信雄 (特) 羽田 勝征 (客)	重城 健太郎	井上 芳郎 小宮山 英徳	2		3
呼吸器内科	植松 和嗣 小山 信之	森山 岳		8		4
内分泌・糖尿病内科	泉田 欣彦 松田 昌文 (客) 大村 榮治 (客) 中島 啓 (客) 古川 清 (客)		大竹 啓之	2		4
血液内科	木崎 昌弘 多林 孝之			2		5
神経内科	海田 賢一 野村 恭一 (客) 深浦 彦彰 (客) 市川 忠 (客)	傳法 倫久 王子 聡	門間 一成	3		1
リウマチ・膠原病内科	天野 宏一		近藤 恒夫 倉沢 隆彦 酒井 亮太 清水 泰輔	2		1
腎・高血圧内科	長谷川 元 前嶋 明人 小川 智也 御手洗 哲也 (客) 小野 祐子 (客) 深澤 瑞也 (客)			12		1
感染症科・感染制御科			小野 大輔	1		1
総合診療内科	岡 秀昭		三村 一行	1		5
消化管外科・一般外科	石田 秀行 持木 彫人	熊谷 洋一 松山 貴俊	石畝 亨 幡野 哲 豊増 嘉高	7		
肝胆膵外科・小児外科	別宮 好文 小高 明雄 牧 章	井上 成一郎 浦橋 泰然	木村 暁史	6		2
血管外科	出口 順夫 佐藤 紀 (客)	橋本 拓弥		2		
プレストケア科 (乳腺腫瘍科)	北條 隆 樋野 興夫 (客) 山口 拓洋 (客)		荒井 学 松田 正典	1		1
呼吸器外科	中山 光男 河野 光智		福田 佑樹 羽藤 泰 青木 耕平	3		
心臓血管外科				1		
整形外科	税田 和夫	星川 淳人 萩原 哲 乾 洋	中村 春彦	8		3
脳神経外科	大宅 宗一		印東 雅大	5		3

	飯星 智史 松居 徹 (客) 庄島 正明 (客)		花北 俊哉			
形成外科・美容外科	三鍋 俊春	大西 文夫	加賀谷 優	2		5
小児科	森脇 浩一 是松 聖悟 阪井 裕一 (客) 櫻井 淑男 増谷 聡 田村 正徳 (客) 加部 一彦 側島 久典 (客)	高田 栄子	奈倉 道明	10		8
総合周産期母子 医療C新生児科		石戸 博隆	長田 浩平 岩本 洋一			
小児心臓外科		難波 文彦 石黒 秋生 金井 雅代 宇野 吉雅	伊藤 加奈子	9		5
皮膚科	福田知雄	寺木 祐一	人見 勝博 高村 さおり	3		7
泌尿器科	川上 理 諸角 誠人 (客)	岡田 洋平 矢野 晶大	竹下 英毅	2		1
眼科	小幡 博人 山崎 厚志 河井 信一郎 (客)			5		5
耳鼻咽喉科	菊地 茂 坂田 英明 (客)	大木 雅文 二藤 隆春	田中 是	4		6
産婦人科	高井 泰 長井 智則 高木 健次郎 (客) 齋藤 正博 菊池 昭彦 關 博之 (客) 馬場 一憲 (客)	松永 茂剛		7		
総合周産期母子 医療C産科			江良 澄子 矢部 慎一郎	11		8
歯科・口腔外科	金子 貴広 堀江 憲夫 (客)	日野 峻輔	那須 大介 飯島 洋介	4		2
リハビリテーション科	大林 茂		藤本 幹雄			1
麻酔科	小山 薫 小幡 英章 宮尾 秀樹 (客) 川崎 洋平 (客)	鈴木 俊成	丸尾 俊彦 清水 健次 山家 陽児 加藤 崇央	13	1	10
産科麻酔科	照井 克生	松田 口典		3	2	
救急科 (ER)		久村 正樹				
高度救命救急C	澤野 誠 井口 浩一 堤 晴彦 (特) 間藤 卓 (客) 杉山 聡 (客) 金子 直之 (客) 熊井戸 邦佳 (客) 荒木 尚 (客) 輿水 健治 (客)	中田 一之	大河原 健人 上田 泰久 八幡 直志 森井 北斗 村瀬 真 安藤 陽児 中村 元洋	14		3
放射線科 画像診断科・核医学科	熊倉 嘉貴 宮崎 将也 土屋 一洋 (客) 荒井 保明 (客) 長田 久人 (客) 高橋 健夫		渡部 渉 清水 裕次	3		3
放射線腫瘍科		新保 宗史	山野 貴史 畑中 聖吾	2		2
神経精神科	吉益 晴夫 仙波 純一 (客) 堀川 直史 (客) 深津 亮 (客)	安田 貴昭 小林 清香	倉持 泉	3		5
緩和医療科	儀賀 理暁					
臨床検査医学	竹下 享典 三橋 知明 (客)					
病理部	東 守洋 百瀬 修二 糸山 進次 (客) 秋草 文四郎 (客) 田丸 淳一 (客) 黒住 昌史 (客)		山下 高久	9		3

輸血部 輸血細胞医療部 細胞移植療法部	山本 晃士 久保田 寧 前田 平生(客)					
健康管理科	伊藤 博之					
医療安全管理学	中島 勸					
ゲノム診療科			鈴木 興秀 母里 淑子			
研究部	森 隆		藤原 正和			
計	61 (51)	35	57	177	3	118

国際医療センター

【病院長 佐伯 俊昭】

基本学科	教授	准教授	講師	助教	助教(フェロー)	助教(シニア・専攻医)
消化器内科	良沢 昭銘 水出 雅文 後藤田 卓志(客)	谷坂 優樹	田島 知明 藤田 曜	2	3	3
心臓内科	岩永 史郎 加藤 律史 中埜 信太郎 荒井 隆秀 村松 俊裕(客) 清水 涉(客) 小宮山 伸之(客) 小泉 智三(客) 西村 重敬(客) 松本 万夫(客)	中島 淑江 池田 礼史	筒井 健太 森 仁	9		4
呼吸器内科	各務 博 解良 恭一 北野 滋久(客) 萩原 弘一(客) 堀本 勝久(客)	今井 久雄	毛利 篤人 山口 央	6		
内分泌・糖尿病内 造血管腫瘍科	塚崎 邦博 高橋 直樹 麻生 範雄(客)	栗原 進 前田 智也	石川 真穂 郡 美佳	1		1
神経内科・脳卒中内科	高橋 慎一 棚橋 紀夫(特) 高尾 昌樹(客)	加藤 裕司		1		2
腎臓内科 腫瘍内科 (原発不明、希少がん科)	畝川 芳彦 濱口 哲弥	渡邊 裕輔 堀田 洋介	三原 良明			
感染症科・感染制御科	光武 耕太郎 関 雅文					
総合診療内科 (地域医療科・病院診療科)	林 健			1		
消化器外科	櫻本 信一 岡本 光順 佐藤 弘 平能 康充 合川 公康 小山 勇(特) DIETMAR STEPHAN(客) 絹笠 祐介(客)	梶田 浩文	宮脇 豊 岡田 克也 出口 勝也 渡邊 幸博 渡辺 雄一郎	7	5	1
乳腺腫瘍科	佐伯 俊昭 大崎 昭彦 長谷部 孝裕 石黒 洋 田村 和夫(客)	松浦 一生	横川 秀樹	6		1
呼吸器外科	石田 博徳	二反田 博之 坂口 浩三		4		
心臓血管外科	朝倉 利久 中嶋 博之 吉武 明弘 西村 元延(客) 福嶋 教偉(客) 齋木 佳克(客) 小野 稔(客)	木下 修	中嶋 智美	4	1	1
小児外科 整形外科 (骨・軟部腫瘍科)	鳥越 知明 矢澤 康男(客)					1
脳神経外科 (脳卒中外科、脳血管内 科)	栗田 浩樹 三島 一彦	鈴木 智成	鈴木 海馬 白畑 充章	4	2	6

治療科、脳脊髄腫瘍科)	神山 信也 大井川 秀聡 西川 亮 (客) 柳澤 隆昭 (客) 竹田 理々子 (客)		佐藤 大樹 吉川 信一郎 小澤 達也			
形成外科	去川 俊二			1		2
小児心臓科	小林 俊樹	小島 拓朗	葭葉 茂樹	3		1
小児心臓外科	住友 直方 鈴木 孝明		保土田 健太郎	1		2
小児腫瘍科	帆足 孝也 田中 竜平	福島 敬 中尾 朋平		2		2
皮膚科 (皮膚腫瘍科)	中村 泰大		森 龍彦		2	1
泌尿器科	小山 政史	西本 紘嗣郎 城武 卓 金尾 健人	金子 剛			3
耳鼻咽喉科 (頭頸部腫瘍科)	中平 光彦 山崎 知子 蝦原 康宏 菅澤 正 (客)			4		4
産婦人科 (婦人科腫瘍科)	長谷川 幸清 吉田 裕之 藤原 恵一 (客) 長尾 昌二 (客) 宮木 泰成 (客)	黒崎 亮	藪野 彰	4	1	3
歯科・口腔外科		坂田 康彰		1		
リハビリテーション科	牧田 茂 高橋 秀寿		内田 龍制 丸山 元			
麻酔科 (麻酔科、集中治療科)	北村 晶 古田島 太 林田 眞和 (客) 武居 哲洋 (客) 西部 伸一 (客)	辻田 美紀 中川 秀之	釜田 峰都	8	1	4
救急医学科 (救命救急科、小児救命救急科、精神科救命救急科)	根本 学 小井土 雄一 (客) 齋藤 大蔵 (客)	枡岡 歩	吉川 淳 大谷 義孝 大原 泰宏	6		5
放射線科 画像診断科	岡田 吉隆 馬場 康貴 田島 廣之 (特) 内野 晃 (客)	中澤 賢	宇佐見 陽子	1		6
核医学科	久慈 一英 松田 博史 (客) 樋口 隆弘 (客)		瀬戸 陽 松坂 陽至	1		
放射線腫瘍科	加藤 眞吾 野田 眞永	熊崎 祐		6		2
精神科 (精神腫瘍科)	大西 秀樹	石田 真弓				
緩和医療科	高橋 孝郎		龍神 秀穂	1		
臨床検査医学	海老原 康博 小林 正幸 (客)					
病理診断科	安田 政実 川崎 朋徳	本間 琢	佐藤 次生 小路口 奈帆子	1	1	1
輸血・細胞移植科	石田 明	松岡 佐保子				
医療安全管理学	川井 信孝					
がんゲノム医療科	牧野 好倫		福島 久代 平崎 正孝	1		
地域医療科	眞下 由美					
計	67 (38)	31	40	86	16	56

かわごえクリニック

【院長 屋嘉比 康治】

基本学科	教授	准教授	講師	助教	助教(フェロー)	助教(シニアレジデント)
かわごえクリニック	屋嘉比 康治 (特) 佐々木 望 (客) 片山 茂裕 (客) 高橋 邦泰 (客) 横山 富士男 (客) 立花 陽明 (客) 馬場 一憲 (客) 島田 栄子 (客)		日野 創			
計	0 (7)	0	1	0	0	0

注) (特) … 特任教授
(客) … 客員教授
() = 特任教授・客員教授数 (内数)

保健医療学部

【学部長 加藤木 利行】

基本学科	教授	准教授	講師	助教
看護学科	加藤木 利行 (特) 栗生田 友子 (特) 千田 みゆき 辻 美隆 大森 智美 野田 智子 大賀 淳子 嶋崎 晴雄	菊池 千トセ 山路 真佐子 藤村 博恵 金子 優子 大澤 優子 本谷 久美子 横山 ひろみ 桜庭 奈美	西岡 ひとみ 関根 由紀子 加藤 巳佐子 松坂 充子 大野 美佐子 櫻井 繭子 川合 美奈 是村 利幸 青木 君恵 村田 美穂	11
臨床検査学科	茅野 秀一 佐藤 正夫 小野川 傑 藤原 智徳 間山 伸 飯野 望 山岸 敏之	野寺 誠 小野 公嗣 村本 良三 黒田 真代	小峰 伸一 伴場 裕巳 内田 康子 上滝 圭介 水谷 論史 山本 晃司 山本 梓司 高橋 祐介 大村 一之	2
臨床工学科	下岡 聡行 小林 直樹 田邊 一郎 山下 芳久 宮本 裕一 若山 俊隆 戸井田 昌宏 (客)	駒形 英樹 奥村 高広	中島 孔志 脇田 政嘉 石川 雅浩 川邊 学 白石 直子 三輪 泰之	3
理学療法学科	高倉 保幸 赤坂 清和 藤田 博暁 池田 将樹	國澤 洋介 新井 智之	澤田 豊 時田 幸之輔 小関 要作 大久保 雄 師岡 祐輔 金井 欣秀	5
計	23 (3)	16	31	21

注) (特) … 特任教授
(客) … 客員教授
() = 特任教授・客員教授数 (内数)

1. 法人事務局

事務局長 茂 木 明
 《総合企画部》
 部長 小山 格
 課長 井上 誠 人
 《広報室》
 室長 茂 木 明 (兼)
 課長補佐 柏 崎 修
 《秘書室》
 室長 茂 木 明 (兼)
 《内部監査室》
 室長 田 中 寿
 《RAセンター事務室》
 次長 岩 澤 昌 人
 課長 佐 藤 勝 茂
 課長補佐 浅 見 文 子

2. 大学事務局

事務局長 茂 木 明 (兼)
 《総務部》
 部長 内 田 尚 男
 副部長 内 笠 間 野 忍 敏
 次長 内 野 敏 (兼)
 課長 内 野 敏 (兼)
 課長 上 貴 幸 子
 課長 山 下 陽 子
 課長補佐 滝 井 藤 雅 彦
 課長補佐 加 内 野 昌 典
 課長補佐 石 井 淳 一 郎
 課長補佐 亀 井 洋 孝
 《施設部》
 部長 香 取 光 夫
 副部長 高 橋 秀 夫 (兼)
 環境整備課課長 高 橋 秀 夫 (兼)
 施設管理課課長 中 舘 利 和
 施設管理課課長 菅 野 俊 樹
 施設管理課課長補佐 中 川 敏 行
 施設管理課課長補佐 留 場 亮 夫
 《経理部》
 部長 池 和 田 忠 幸
 副部長 馬 場 賢 治
 次長 高 沢 信 也
 次長 岩 沢 憲 次
 次長 甲 田 和 博
 経理課課長 永 谷 芳 夫
 購買課課長補佐 中 島 正 博
 《情報システム部》
 部長 堀 江 稔 樹
 課長 佐 藤 巨 樹
 課長補佐 田 中 義 明
 課長補佐 黒 澤 洋 志
 課長補佐 馬 場 秀 泰
 《大学事務局》
 部長(学校群統括部長) 内 田 和 利
 副部長 江 口 幹 也
 課長 村 田 正 樹
 課長 下 田 裕 子
 課長 近 藤 有 寛
 課長補佐 新 井 博 志
 課長補佐 松 浦 直 樹
 課長補佐 川 俣 栄 希

保健医療学部事務室室長 堀 江 正 人
 保健医療学部事務室課長補佐 岡 田 一 観
 保健医療学部事務室川角分室室長 山 崎 豊 幸

3. 大学病院

《医務部》
 部長 池 澤 敏 幸 (兼)
 次長 吉 元 一 彰
 医務課課長 河 原 和 弘
 予防医学センター事務室課長 松 井 裕 行
 医務課課長補佐 中 川 泰 司
 《病院群臨床研修センター》
 室長 永 島 松 男

4. 附属図書館

事務長 内 田 和 利 (兼)
 課長補佐 田 口 宣 行

5. 総合医療センター事務部

部長 津 久 井 一 浩
 秘書室室長 津 久 井 一 浩 (兼)
 施設担当部長 上 原 修 勉
 副部長 皆 川 勉 志
 次長 大 日 向 秀 光
 次長 高 橋 光 鶴
 次長 山 田 勉 勉
 医務課課長 内 野 夏 江
 総務課課長 岡 根 雅 之 (兼)
 経理購買課課長 高 橋 光 鶴 (兼)
 総務課課長補佐 本 間 晶 子
 総務課課長補佐 小 川 英 明
 経理購買課課長 安 井 千 里
 経理購買課課長補佐 森 田 政 弘
 経理購買課課長補佐 黒 圖 賢 一
 施設課課長 山 田 勉 (兼)
 施設課課長補佐 風 間 信 治
 施設課課長補佐 加 藤 満 晴
 施設課課長補佐 麻 原 弘 行
 看護専門学校事務室室長 田 中 律 子

6. 川越ビル事務所事務室

室長 田 島 契 司 (兼)

7. かわごえクリニック

事務長 田 島 契 司

8. 国際医療センター事務部

部長(病院群統括部長) 池 澤 敏 幸
 部長代行 武 久 秀 夫
 次長 松 井 幹 代
 次長 福 島 正 代
 医務課長 松 井 幹 代 (兼)
 医務課課長補佐 藤 森 ほなみ
 医務課課長補佐 岡 野 直 美
 医務課課長補佐 大 倉 忠 則
 医務課課長補佐 大 宮 崎 直 樹
 総務課長 武 久 秀 夫 (兼)
 総務課長(経理担当) 大 野 由 紀 夫
 総務課長(購買担当) 吉 野 稔 夫
 総務課長(施設担当) 杉 田 昭 雄
 総務課課長補佐(施設担当) 関 根 真 吾

2. 競争的資金・産学連携資金の獲得状況

件数

	R04		R03	R02	R01	H30
	今期	前期比				
文部科学省科学研究費	238	8	230	203	182	169
厚生労働科学研究費	44	4	40	42	49	45
AMED 委託研究開発費	57	▲7	64	63	63	62
その他競争的資金等	26	▲1	27	22	21	26
競争的資金 計	365	4	361	330	315	302
研究受託契約 (産学連携資金)	22	▲12	34	36	40	30
計	387	▲8	395	366	355	332

金額 (単位：百万円)

	R04		R03	R02	R01	H30
	今期	前期比				
文部科学省科学研究費	258	22	236	227	205	219
厚生労働科学研究費	61	17	44	35	42	48
AMED 委託研究開発費	221	▲147	368	342	197	230
その他競争的資金等	38	▲7	45	31	29	34
競争的資金 計	578	▲115	693	635	473	531
研究受託契約 (産学連携資金)	214	96	118	89	149	46
計	792	▲19	811	724	622	577

3. 年譜

4月

- 1日 新任式
- 11日 入学式（医学部第51回，保健医療学部第17回）
- 11日 大学院入学式

5月

- 14日 埼玉医科大学創立50周年記念式典
- 14日 埼玉医科大学創立50周年記念サイト公開
- 20日 学校法人埼玉医科大学 常任理事会
- 20日 大学院博士課程研究発表会
- 21日 埼玉医科大学市民公開講座 「コロナの正しい知識とコロナ禍での身体運動のススメ」（対面とオンラインによるハイブリット形式）
- 28日 学校法人埼玉医科大学 決算理事会・評議員会、理事会

6月

- 7日 令和4年度医学部新任教員並びに講師昇格教員を対象とした研修会（FD）
- 11日 国際医療センター F棟（化学放射線治療棟）4階病棟稼働開始
- 17日 大学院博士課程研究発表会
- 19日 保健医療学部 web オープンキャンパス
- 22日 第42回埼玉医科大学・連携施設懇談会（web 配信）

7月

- 2日 埼玉医科大学市民公開講座 「下肢の潰瘍と血管障害」（対面とオンラインによるハイブリット形式）
- 4日 国際医療センター F棟1階外来稼働開始
- 15日 第24回学内グラント受賞者成果発表会
- 16日 教育・研究、診療連携会議（TV会議システム）
- 16日 医学部 教授・教員総会、名誉教授称号証授与式（TV会議システムによる中継、ライブ配信）
- 19日 国際医療センター F棟2階外来稼働開始
- 20日 国際医療センター 地域医療連携懇話会
- 24日 医学部 オープンキャンパス
- 24日 保健医療学部 web オープンキャンパス
- 29-30日 第43回医学教育ワークショップ（web 開催）
- 29日 医学部 オンライン個別相談会
- 30日 学校法人埼玉医科大学 臨時評議員会、常任理事会

8月

- 2日 医学部 受験生サイト公開
- 2-3日 保健医療学部 第29回医療人教育のためのワークショップ（新任）
- 21日 保健医療学部 オープンキャンパス
- 24-25日 保健医療学部 第30回医療人教育のためのワークショップ（アドバンスト・コース）
- 27日 大学院博士課程入試（令和4年度後期入学、令和5年度前期入学第1回）及び第81回語学試験
- 27日 大学院修士課程入試（第1回）
- 29日 納骨式
- 31日 大学病院 医療法第25条立入検査

9月

- 1日 総合医療センター 病院長 別宮好文（任期：2ヶ年）
- 10日 医学部 第12回医学教育フォーラム
- 16日 大学院博士課程研究発表会
- 17日 埼玉医科大学市民公開講座 「ホルモンの病気（更年期障害と甲状腺の病気）」（対面とオンラインによるハイブリット形式）
- 21日 国際医療センター 地域医療連携懇話会
- 24日 保健医療学部 看護学科3年次・臨床工学科2年次編入試験
- 24日 国際医療センター 第24回市民公開講座「みんなで話し合おう End of Life Careー人生の最終段階の治療ーより自分らしく生きるために」
- 25日 保健医療学部 web オープンキャンパス

10月

- 1日 医学部 日本医学教育評価機構より医学教育分野別評価認定
- 1日 保健医療学部 看護学科 領域別実習要件認定式（戴帽式）
- 1日 3病院 DMAT 内閣府主催「大規模地震時医療活動訓練」参加
- 7日 総合医療センター 医療法第25条立入検査
- 8日 解剖体慰霊祭
- 12日 第43回埼玉医科大学・連携施設懇談会（web 配信）
- 15-16日 大学祭 第15回越華祭（医学部、保健医療学部）（web 開催）
- 16日 保健医療学部 オープンキャンパス（web 配信）
- 21日 大学院博士課程研究発表会
- 22日 保健医療学部 来校型見学会
- 23日 埼玉医大AC女子駅伝部 「プリンセス駅伝 in 宗像・福津（第8回全日本実業団対抗女子駅伝競走大会予選会）」出場、21位

11月

- 3日 埼玉医大AC男子駅伝部 第63回東日本実業団対抗駅伝競走大会12位入賞、ニューイヤー駅伝出場決定（2年ぶり2度目）
- 4日 「埼玉・群馬の健康と医療を支える未来医療人の育成」事業協定締結式
- 5日 第3回「オール埼玉医大研究の日」
- 12日 大学院医学研究科（修士課程）研究発表会
- 18日 学校法人埼玉医科大学 常任理事会
- 19日 埼玉医科大学市民公開講座 「がんの在宅医療」（対面とオンラインによるハイブリット形式）
- 20日 丸木清浩先生の思い出を音楽とともに語る会
- 20日 医学部 学校推薦型選抜・帰国生選抜
- 26日 学校法人埼玉医科大学 評議員会、理事会
- 26-27日 第21回埼玉医科大学病院群臨床研修指導医講習会
- 27日 保健医療学部 学校推薦型選抜

12月

- 11日 保健医療学部 総合型選抜
- 17日 教育・研究、診療連携会議（TV会議システム）
- 17日 令和4年度医学部・保健医療学部合同教授・教員総会（TV会議システムによる中継、ライブ配信）
- 21日 国際医療センター 地域医療連携懇話会（web 開催）
- 26日 埼玉県地域枠医学生奨学金貸与者の埼玉県知事表敬訪問

1月

- 1日 埼玉医大AC男子駅伝部 ニューイヤー駅伝（第67回全日本実業団対抗駅伝競走大会）出場、30位
- 4日 新年拝賀式・永年勤続者表彰

- 6日 保健医療学部 一般選抜（前期）試験直前キャンパス見学会
- 7日 大学院博士課程入試（令和5年度前期入学第2回）及び第82回語学試験
- 7日 大学院修士課程入試（第2回募集）
- 14-15日 医学部 大学入学共通テスト利用選抜一次試験
- 20日 医学部 スチューデントドクター認定式
- 25日 国際医療センター 病院機能評価改善審査
- 28日 埼玉医科大学市民公開講座 「アレルギー」（対面とオンラインによるハイブリット形式）
- 31日 医学部 一般選抜（前期）一次試験

2月

- 1日 保健医療学部 一般選抜（前期）
- 4日 国際医療センター 第25回市民公開講座「脳と心臓の赤信号：危険な頭痛、命にかかわる胸痛」
- 4日 国際医療センター 第9回クリニカル・サイエンス・フォーラム
- 11日 医学部 一般選抜（前期）二次試験

3月

- 2日 保健医療学部 一般選抜（後期）試験
- 4日 医学部 一般選抜（後期）一次試験
- 11日 卒業式（医学部第46回、保健医療学部第14回）
- 12日 医学部 一般選抜（後期）二次試験、大学入学共通テスト利用選抜二次試験
- 16日 医学部 第117回医師国家試験合格発表 合格率93.2%（新卒）
- 17日 学校法人埼玉医科大学 常任理事会
- 23日 保健医療学部 第69回臨床検査技師国家試験合格発表 合格率98.1%（新卒）
- 23日 保健医療学部 第58回理学療法士国家試験合格発表 合格率100%（新卒）
- 24日 保健医療学部 第112回看護師国家試験合格発表 合格率100%（新卒）、第109回保健師国家試験合格発表 合格率95.5%（新卒）
- 24日 保健医療学部 第36回臨床工学技士国家試験合格発表 合格率83.9%（新卒）
- 25日 学校法人埼玉医科大学 評議員会、理事会
- 25日 大学院 令和4年度学位記授与式

編集後記

本年度（令和4年度）は、令和3年度に引き続き新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、令和3年度よりもさらに大きな第7波、第8波が押し寄せました。しかし、感染防止の徹底、ワクチン接種などにより、感染者数が増加している中でも社会活動が一定程度行われ、年度末には政府から5類への移行の方向性も示され、いわゆる「with コロナ」から「post コロナ」への転換期となりました。本学の教育・研究・診療活動についても、厳格な感染防止を行ったうえで、教育においては、臨床実習が学内のみではあるものの通年で実施され、基礎医学の実習・演習は可能な限り対面で、講義は学生も登校するハイブリッド形式も行われました。研究においては、令和2年度のような新型コロナウイルス関連以外の研究の抑制はなく、学会もオンライン形式の良いところを残しつつハイブリッドや対面形式へと戻りました。診療においては、「濃厚接触」による出勤停止でスタッフが不足する中、病院長をはじめスタッフ皆様のご努力で活動を継続していただき、年度末には平常の診療に近い形に戻していただきました。

上記のような状況であっても、本学においては、本年度も内部質保証を継続するために、弛まない努力が積み重ねられました。昨年度に医学部が受審した医学教育分野別評価（いわゆる国際認証）については、令和4年10月1日付で7年間の認定を受けることができました。この評価結果は、全国の医学部に比して大変良いものであり、これまでの本学医学部の医学教育の実践と内部質保証が高く評価されたものと認識しています。このような成果が得られたのは、日頃の努力の積み重ねの結果や総合力が認められたものであり、本学の医学教育にかかわるすべての教職員および学生の皆様にあらためて感謝申し上げます。

内部質保証のためのPDCAサイクルを回す上では、組織全体としての計画の立案、実行に加えて、年度毎の自己点検・評価が重要です。その中核となるのが、この年報であり、組織全体としての自己点検・評価ならびに各部署の活動の改善に利用されています。さらに、個人レベルでの自己点検・評価が教員人事考課（事務系は人事評価）であり、これも平成16年度から毎年度実施されて、還元面接で個人へのフィードバックも行われています。本学では、こういった各レベルでの自己点検・評価、実行が継続して行われ、大学全体の内部質保証を実現しています。

年報は、実績記録のみならず、過去1年間の活動を振り返って自己点検・評価し、次年度への改善に繋げるための報告書であり、大学評価の基礎をなすものです。編集においては、従来の形式を基本に、以下の方針で行いました。

- 1) 教育、研究、診療に分けて、目的・目標（前年度に立てた改善計画）、活動実績、達成度評価、次年度改善計画を記し、更に全体を通しての点検・評価結果および次年度改善計画を記す。ただし、診療部分の詳細は病院要覧に委ね、要約のみを記載する。学部と大学院は分けて記載する。
- 2) 業績としての論文・学会発表実績は、基本学科毎（保健医療学部は学科内の分野毎）に代表的なもの10編とし、全業績はデータベースに蓄積する。
- 3) 委員会報告も、年度目標、活動実績、自己評価、次年度計画を記す。
全体の構成として、大学院、医学部、保健医療学部の関係、および毛呂山キャンパス、川越キャンパス、日高キャンパスの関係が、明確となるような項目立てにいたしております。

令和4年度からは、このように作成された年報に基づいて、医学部、保健医療学部、医学研究科、看護学研究科の各自己点検・評価委員会による自己点検・評価を実施し、その結果を全学の自己点検・評価委員会で審議して大学の自己点検・評価とし、大学運営会議の承認を経て理事会に報告するという一連の手順を実施し、内部質保証を一層充実させました。

このように重要な自己点検・評価書である年報は、ホームページからいつでも閲覧できるようになっています。年報が、これからも本学の内部質保証に役立つことを願っています。

最後になりましたが、この年報作成に対する関係各位のご協力と大学事務部庶務課の皆様の大変なご努力に心より感謝いたします。

IRセンター長 椎橋 実智男